

Re. HUGっとジオウ！

yu—ki.S

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「私の名はウオズ。

この本によれば、仮面ライダージオウ。この物語は我が魔王と少女達が織り成す、波乱に満ちた激動の物語とある。それではご覧下さい……」

祝え！ 全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウ。

今、この地に生まれた新たな王の誕生を！

前書き

原作者であるユート氏が書いた原作『HUGつとジオウ!』はこちらでございます。
何なりとご覧ください。 <https://www.pixiv.net/novel>

／series／1360241

目次

設定集	1	ア！2016	141
第1章『ゲンキなプリキュアとマオウなライダー編』		第5話 夢を捨てた少女：二つのアナザ	
プロローグ：20XX	9	ザー 2011	179
第1話 誕生！元気な少女と最高最善の魔王のライダー！2018	21	第6話 舞え、新たな誕生！二つのレジェンドの意思！2003	225
第2話 未来から来たライダー！継承せよビルドの力！2017	64	第7話 王様が仕事体験!?社長は王?	276
第3話 幼馴染が天使に！アナザーライダーの謎 2018	101	第8話 花が咲く、本当の王の資質！	312
第4話 クリア出来ないゲームをクリ		ク！2013	355
		第10話 武者と魔法と夢 2012	402

第11話	ピクニックとゴースト：謎のライダー	2018	454	第2章『ふたりのプリキュアとミライのライダー編』		
第12話	GO!ゴーストタイムと未知のウオッチ！	2015	493	第15話	謎の訪問者とライダー	2
第13話	未来の自分、その名を：オーマジオウ	2068	543	第16話	凄い転校生と忍者！	202
第14話	目指す未来！新たな可能性への挑戦！	2018	592	第17話	保育バトル？クイズバトル	878
特別編	ジオウ&ビルド スーパー			？どっち？	2040	929
ターズ！	レジェンドForever!!?			第18話	本当の思いの結果	204
				0		964
				第19話	鏡の世界のライダーと少女	
HUGつとジオウ！	補完計画	その1	650	2018		1002
「クロスオーバーの誕生と再誕」			821	第20話	王の凱旋！二つを続ける王	

第26話	二人の誕生が叶うか？運命	1245	8	第25話	決意と意念	2018	1207	第24話	友情が奏でる音楽	201	1158	E	THE KING	2121	第23話	友情の言葉『WILL	1115	第22話	裏切りと正体	2121	1074	2018	第21話	出会う日、なにかが始まる	1036	2018		
第3章	『プリキュアオールスターとハイ	1651		「続編とイラストとサザエさん時空」	HUGっとジオウ！補完計画。その2	2	1547	ム!!？王の決まる日			1457	まる日	2018	特別編2	ライダータイム!!？王の決	1398	2018	第28話	みんなが目指すゴール!!？		1346	ズ、一か八かの賭け	2009	第27話	最強コンビ登場!!？黒ウオ	1298	の対決	2018

セイライダー編』

- | | | | | | |
|------------|-------|--------|-------------------|-------|-----------------------|
| 第29話 | 2018: | ナイトプール | 第35話 | 2018: | 先生の初めての子育て |
| ！夏休みスタート！ | — | — | 第36話 | 2018: | 希望を運ぶ和菓子 |
| 第30話 | 2068: | ハリーの秘密 | 第37話 | 2018: | 世界ツアーにレッツゴー！ |
| !? 呪われし力 | — | — | 第38話 | 2068: | クライアス社のライダー！目覚める新たな力 |
| 第31話 | 2001: | ツクヨミの力 | HUGつとジオウ！補完計画・その3 | — | 「彼らは何故、アクのライダーになったのか」 |
| ！黄金の戦士の帰還 | — | — | 第39話 | 2005: | 鬼が奏でる音楽の響き |
| 第32話 | 2001: | アギトの覚醒 | — | — | — |
| ！受け入れる力 | — | — | — | — | — |
| 第33話 | 2018: | 女優の覚悟 | — | — | — |
| 1818 | — | — | — | — | — |
| 第34話 | 2018: | ビビリタイム | — | — | — |
| ！ビビりを克服せよ！ | — | — | — | — | — |
| 1856 | — | — | — | — | — |

第40話	2018	：	祝い！受け継	
		—		
がれる鬼の魂！				2109
第41話	2068	：	真意！切り開	
		—		
く新たなフォーム！				2153
第42話	2008	：	まさかの初恋	
!!? 宇宙からのライダー！		—		2193
第43話	2018	：	初恋さよなら	
		—		
…ファイナリータイム！				2232
第44話	2018	：	闇の勧誘？響	
		—		
く二人の歌に立ち上がる！				2278
第45話	2018	：	秘密の調査開	
		—		
始！クライアス社超アップ!!?				2327
第46話	2006	：	プリキュアに	

		—	なりたい！	
第47話	2018	：	天の道へ…六	
		—		
人目、キュアアール誕生！				2405
第48話	2007	：	さあやの夢と	
		—		
最後のウオッチ！				2465
第49話	2018	：	揃った力!!?	
		—		
魔王の誕生!!? グランドタイム！				2515
特別編3	その1	：	変え	
		—		
られた世界！ジオウ対プリキュア!!?				2562
特別編3	その2	：	仲間	
		—		
集め！時の止まった瞬間、明かされる過				

去

特別編3 その3. 2018 : 全員

2612

集合!今こそ元の世界へ戻れ! | 2680

HUGつとジオウ!補完計画! その4

「新たな予告が始まる刻」 | 2759

第4章『プリキュアのキオクとライダー

のレキシ編』

第50話 2018 : ハロウィン祭

り!最凶のライダー! | 2777

第51話 2018 : 最後に最悪の

アナザールライダーの誕生! | 2818

第52話 2014 : 力を持つ意味

!Start Your Engine

!

第53話 2068 : みんなが繋が

2856

る!明日への力を! | 2913

第54話 2018 : ルールーのパ

パ!愛しき家族の絆 | 2958

第55話 2018 : エターナルタ

イム!迷えるえみるとゲイツの心

3001

第56話 2018 : 決めたマシエ

りとアムールの覚悟!運命を覆す救世主

の爆誕! | 3037

第57話 2018 : 響け、エールの

応援!奇跡の誕生! | 3092

第58話	2018 :	なりたい未来 を掴み取る!	3139
第59話	2018 :	母と娘の思い と、交わる二人の想い	3202
第60話	2018 :	クリスマスの 危機とスウォルトツの計画!!	3253
ウオツチ	—	—	3292
第61話	2068 :	光輝く、美しき 仮面ライダー!	3339
第62話	2018 :	決着!魔王と 破壊者の奇跡!	3401
特別編4	劇場版:	HUGつとジオウ !オールスターメモリーズ!	3401

HUGつとジオウ!補完計画	その5	「Dの真実/総集編で始まるモノ」	3544
最終章『ハグつとなドリーマーとオーマ のロード編』			
第63話	2019 :	ジオウ敗れる !?!最凶のライダー、マスタークライ!	3586
第64話	2019 :	明日をかける 最後の決戦!	3636
第65話	2019 :	二人の友情 アーマータイム!	3679
第66話	2019 :	本当に望んで	

いる自分 ————— 3716

第67話 2068 : トウモロータ

イム!約束した未来へ! ————— 3772

第68話 2068 : 最強のマザ

降臨!最後の対決、魔王VS魔王!

3808

最終回 2019 : 目指すは最高最

善の未来! ————— 3850

特別編5 劇場版 HUGつとジオウ

!Over Quarter! 前編

————— 3884

特別編5 劇場版 HUGつとジオウ

!Over Quarter! 後編

)

HUGつとジオウ!補完計画、その

「終焉」

————— 4066 6 3966

設定集

登場人物

●時見ソウゴ

仮面ライダージオウ

(イメージC.V. 入野自由)

4月からラヴェニール学園の中学二年生になる青年で、王様になるのが夢。

そんな時、偶然ブランクウオッチを拾い。それから夢で未来の自分の姿・オーマジオウを見て戸惑うが、ウオズからジクウドライバーを受け取り最高最善の魔王となると宣言し、仮面ライダージオウとなる。

幼馴染の薬師寺さあやとは仲はいい。

●野乃はな

キュアエール

(C.V. 引坂理恵)

新学期にラヴェニール学園に転校してきた中学二年生の女の子。

ひよんなことから元気のプリキュア・キュアエールに変身する事になり、時見ソウゴ

とその仲間達と共にクライアス社に立ち向かう。

●明導ゲイツ

仮面ライダーゲイツ

(イメージCV・梶裕貴)

未来で仲間のプリキュアらと共にクライアス社を止めよう戦っていた。

クライアス社の会長として君臨するオーマジオウに無すべなく倒れるも、ツクヨミと共に窮地に一生を逃れる。そこで、オーマジオウとなる過去のソウゴを倒し、未来を変えようと過去へと飛ぶ。

●ツクヨミ

仮面ライダーツクヨミ

(イメージCV・日笠陽子)

血気に逸るゲイツを追って2018年の世界にやってきた少女。

ソウゴの正義感と想像を超える力を認め、ハリーと共にソウゴが魔王にならないように導くことを選ぶ。

自身の記憶を失っていたが、後にその正体と本名が判明。そしてアナザーデイケイドとの戦いにおいて、遂に仮面ライダーとして変身を遂げる。

●ウオズ

仮面ライダーウオズ

(CV・渡邊圭祐)

ソウゴを「我が魔王」と呼び従う謎の預言者。

仮面ライダーの歴史が書かれた本「逢魔降臨暦」を手にしており、度々新たな力を得たジオウを祝福する。

後に白ウオズから仮面ライダーウオズの力を奪った事で、自らもクライアス社との戦いに参加することになる。

●薬師寺さあや

キュアアンジユ

(CV・本泉莉奈)

知恵のプリキュア・キュアアンジユに変身する、とても優しく穏やかな、まるで天使のような少女。

時見ソウゴとは幼馴染の関係である。

●輝木ほまれ

キュアエトワール

(CV・小倉唯)

力のプリキュア・キュアエトワールに変身する、天才と言われているフィギュアス

ケート選手。学園では不良と言われたりしているが、別にそんな事はありませんでした。

●愛崎えみる

キュアマシエリ

(C.V. 田村奈央)

野乃はなの妹であることりのクラスメイトであり友人。そして、歌とギターが得意である。

ルルールと共にキュアマシエリに変身する。

●ルルール・アムール

キュアアムール

(C.V. 田村ゆかり)

クライアス社に製造された人類管理用アンドロイド。

スパイ活動でソウゴ達と交流するうちに、知能回路にバグⅡ心が発生したことによりクライアス社を離反。

そして遂に愛を知り、キュアアムールに覚醒することになった。

●野乃ことり

キュアアアラ

(C.V. 佐藤亜美菜)

野乃はなの妹。落ち着いていて背伸びした印象を受ける。そして容姿やスタイルも姉のはなよりもずっと大人っぽいという皮肉。後にミライクリスタルを手にし、門矢土から貰ったプリハートを使ってキュアアールに変身した。

●はぐたん

(C.V. 多田このみ)

空から降ってきた不思議な赤ちゃん。「はぎゅ〜」という口癖がある。

その正体は、ゲイツ達と共にクライアス社と戦っていた未来のプリキュア、キュアトウモロローであった。

●ハリハム・ハリー

仮面ライダーハリー

(C.V. 野田順子《ハムスター形態》、福島純《人間態》)

はぐたんと一緒に空から降ってきた、関西弁で話すハムスター。

気が少々強く自信家な性格だが、責任感も強い。後に自らのトゲパワワとアスパワワ、自身の強い想いによって生まれたウォッチと、ウォズの持っていたドライバーを利用して仮面ライダーに変身した。

●時見順一郎

(イメージCV・山寺宏一)

ソウゴの大叔父で、時計屋「クジゴジ堂」の店主。

時計専門店なはずなのに、電化製品などの修理でも何でも引き受けてしまう程のお人好し。

王様になるというソウゴの将来を案じてはいるが、強制などはせず伸び伸びと生きるソウゴを優しく見守っている。

●オーマジオウ

(CV・小山力也)

圧倒的な力で2068年の世界を支配する「最低最悪の魔王」。クライアス社の会長でもあるが、本社の者たちからはいつか反逆されるのでは無いかと目の敵にされている。

ソウゴの未来の姿だというが……？

●ウール

(イメージCV・佐藤利奈)

クライアス社・タイムジャッカーチームの少年。魔王に代わる新たな王を生み出すため、各時代でアナザーライダーを生み出す。無邪気なところがあり、目的とは別に騒動を起こすことを楽しんでいる。

● オーラ

(イメージC.V. 千本木彩花)

クライアス社・タイムジャツカーチームの女性。ウールと共に新たな魔王を君臨させるために言葉巧みにアナザーライダーを生み出すが、ウールとは違いプライドが高く、冷徹に仕事をこなすクールビューティー。

● スウォールツ

(イメージC.V. 小西克幸)

クライアス社・タイムジャツカーチームのリーダーである男性。ウールやオーラよりも年上なのか、彼らを見下した態度を取っている。冷酷な性格で、目的のためなら手段を問わない。

新たな王の擁立以外にも目的があるようだが…？

● 過川飛流

アナザージオウ

(イメージC.V. 榎木淳弥)

過去の因縁によりソウゴを憎む青年。

アナザージオウとしてアナザーライダーの元変身者達からアナザーライダーの力を集め、ソウゴに襲いかかる。

● 門矢士

仮面ライダーディケイド

(C.V. 井上正大)

様々な世界を渡り歩いてきた「通りすがりの仮面ライダー」にして「世界の破壊者」。『HUGつとジオウ!の世界』の行く末を見極めるため、時にはソウゴ達の前に立ちはだかり、時には協力したりと独自の行動を取っている。

第1章 『ゲンキなプリキュアとマオウなライダー編』 プロローグ：20XX

今からはるか未来……

その未来では、この世界を支配しようとする組織がいた。

そして、それに立ち向かう者たちがいた。

『ぐわあああーっ?!』

しかし、立ち向かおうとした者達は皆、次々に倒れていった。

「無駄だ。貴様らでは私を倒すことはできない」

立ち向かっていった者達を倒した人物が、そこいた。

その姿は、肩に時計バンドの様な黄金のベルトをかけており。背中には時計の針二本がマントの様に装着。

顔は三つのクロノグラフがついたGショック時計風で、複眼には赤い字で『ライダー』と書かれている他、よく見ると黒い顔には小さい『王』の文字が無数に並んでいるのがわかる。

「オーマジオウ……」

その中で、立ち向かって行った人々の内の一人の目には、黄金に光り輝くドライバーが腰に装着されている姿が映っていた。

「私を倒すのは不可能だ。何故かわかるか？」

——私は、『生まれながらの王』である。ふうん！」

その人物は、自らを倒すことは不可能と宣言すると、手から強大すぎる衝撃波が放たれた。

この日を以て、世界から流れる時は完全に止まってしまった。

——最低最悪の魔王……オーマジオウによつて。

その頃、2018年。

ラヴェニール学園の、とある一学年教室。

「時見……時見！」

「は、はいッ！」

「追試中に寝るとはいいい度胸だな！」

答案用紙に涎を垂らしそうになっていた、ひとりの男子生徒——時見ソウゴ、ラヴェニール学園の一年生。

彼は現在、一年生最後のテスト——の追試を受けていた。

「出来ましたー!」

ソウゴはそう言つて答案用紙を担当教師に渡し、しばらくして答案が返つてきた。

「85点、ギリギリ合格だ」

「やったー!」

合格点を取り、喜びの声を上げる。

だが彼の追試を担当していた教師は、呆れた表情で痛みを感じる後頭部を搔く。

「喜んでる場合か、進級はできるが二年生になつて追試なんて許さないよ」

「は、はい……頑張ります」

つかの間の喜びがあつたという間に終わり、遠回しに「一応中学一年生だからとはいえ、勉強はもう少し頑張れよ」と正論を突き付けられたソウゴはペンをしまい、鞆を持って教室を後にしようとする。

教室を出て廊下を歩くと、何かが落ちていることに気づく。

「なんだこれ?」

それがなんなのかと思ひながら、廊下に落ちていた物を拾う。

「時計?」

落ちていた時計のような形状の物を見て、じつと見つめる。

——その時計のような物は、初めて見たはずなのに、何か知っているような感じがあつた。

そこに、ローブを着た一人の男性が通り過ぎる。

「それを手にした時、覇道への道が始まる。ただし赤色のロボットに注意するように」

「ッ、誰？」

いきなり耳元から囁かれて驚きながら背後を見ると、そこにはローブを着た男性——では無く、誰もいない廊下が広がっていた。

「…赤いロボット？」

幻覚か？と頭を押さえながら、先程耳で捉えた「赤いロボット」という台詞が何かと疑問を持つ。すると、窓の方から機械音のような音が聞こえた。

「な、何っ？？」

「何の音だろう」と思つて横を向いてみると、さっきの囁き声通りに赤いロボットがいきなり窓から現れ。未知のロボとの遭遇と囁き声の予言が当たった事、その二重の意味で驚いた。

「見つけたぞ……オーマジオウ！」

ロボット内部のコクピットでは、外のソウゴを見てオーマジオウと呼ぶその少年が、横から伸びる二本のコントロールグリップを操縦し襲いかかる。

「えええ!?? ちよつと何!??」

窓ガラスを割って自身を捕まえようとしていると感じたソウゴは急いで廊下を走り、学校の外へと出て赤いロボットから逃げる。

「逃がさん!」

赤いロボットに乗る少年は、友の仇を取らんと言わんばかりに睨みつけ、必死になって追いかけた。

一方のソウゴも必死に走って逃げるが、捕まるのは時間の問題だった。

「やばいよ、やばいよ——!」

「乗って!」

『タイムマシーン!』

そんな中、空の方から何者かの声が聞こえると、ソウゴの前に宙に浮くエアバイクの様な乗り物が現れた。

機体の下部にある入り口が開いたので、ソウゴはその乗り物に乗り込み。マシンはそのまま宙へと浮かび上がって、突如現れた六角形のゲートへと突入していった。

「はあ、はあ。あ、ありがとう……」

必死に逃げて息切れしていたが誰が操縦しているか気になった為、息を整えながら顔

を上げると、そこで操縦していたのは一人の少女だった。

「これ、拾ったらなんか急に……」

ソウゴは少女に廊下で拾った黒い時計のような物を取り出して、それを拾ってからのロボットの襲われ始めたと話す。

「それは、貴方にとってもない力を与える……」

少女は黒い時計を握ってるのを見て、そう伝える。

それを聞き、更に詳しい話を聞こうとすると、さっきの赤いロボットが追ってきた。

「あーあの赤いロボットー！」

「彼は仮面ライダーゲイツ！あなたが力を得る前に倒そうとしているのー！」

「力……？」

さっきから詳しい説明なしに力だの何だのどうの言っているので、未だに事態を呑み込めていないソウゴは正直、彼女が何を言ってるのかわからなかった。

そこへ赤いロボットがこっちに向かって体当たりをし、強引に破壊しようとする、ソウゴが乗っていた機体はゲートの中から追い出される。

「痛いーな！っつて、（こいこい）っ！」

ゲートから出ると、ソウゴはマシンから放り出される。

辺りを見ると先までいた場所と違い、若干雪が積もっていた。

「ブツッ!!」

後ろから変な物音と声が聞こえ、振り向くとルーペのような姿をした怪人がいた。

「えっ!?? なに、これ!??」

ソウゴは怪物を見て急いで起き上がり、逃げようとする。

「避ける!」

『ボルテックファイニッシュ!』

『ドラゴニックファイニッシュ!』

「えっ? うわあああああー!」

するといきなり何者かが、後ろから怪物に向かつて強烈なキックを繰り出し、怪物――スマツシユを倒した。

「おっ! 大丈夫か?」

仮面とアーマーを纏った二人がソウゴに近づくと、腰に巻いていたドライバーから何かを抜き取って人の姿になった。

見る限り、二人の年は三つか四つ年上という感じだった。

「俺は仮面ライダービルド。桐ヶ谷晴夜だ。それで、こいつは助手の……」

「助手じゃねえ! 仮面ライダークロース。上城龍牙だ」

「あ、俺は——うっ！」

「おい、どうした？——うっ^{!!}」

自己紹介をしようとしていた所で、何かが被弾すると同時にいきなり倒れ出したソウゴを介抱しようと近寄ると、晴夜と名乗った青年も倒れ出す。

「お、おい、晴夜！どうした！——あっ！」

二人に駆け寄ろうとした龍牙も、同じように倒れ出す。

後ろから先程の少女が現れた。

「ごめんなさい、過去への干渉はさせられない」

どうやらソウゴらを持っていた銃で撃ち、意識を失わせたようだ。

目が覚めたソウゴは、ひとり廊下に倒れていた。

「……夢」

周りを見回すと、そこには先程の青年たちの姿もなく。赤いロボットに追われる前に立っていた、元の学園の廊下だった。

余りにも非現実的な体験に、先のは夢だったのかな？と思ひ込む。

「おつかれ、ソウゴ君！」

昇降口を出ると、そこには青色の長髪少女——幼馴染である『薬師寺さあや』がいた。

彼は「一緒に帰ろ」と誘う彼女と一緒に自宅への帰路に立つ。

「追試どうだった？」

「当然、問題なし！」

「問題あるよ。追試なんだから」

ソウゴはさあやの言葉に返すことが出来なかった。

「じゃあ、ソウゴ君。また明日！」

「じゃあね！」

さあやと別れると、ソウゴがポケットに手を入れる。

「ん？なんだこれ……」

するとなにかゴツゴツとした感触があり、取り出そうとする。

「これ……夢じゃなかった……」

ポケットの中にあつたのは、あの時廊下で拾った黒い時計——ブランクライドウォッチだった。

——2017年。

公園でバスケットの練習をしていた青年がいた。

必死にフリースローの練習をしていると、スローが外れ道路の方へと出てしまう。

青年が道路に出てボールを拾うと、目の前から車が現れ、避ける暇なく轢かれてしまう。青年は間違いなくそう思った……

——その時、車が止まって窮地に一生を得た。

しかし止まったのは車だけじゃなく、道を歩く周りの人や、風になびく草の動きも止められていた。

何がどうなっているのだとパニックに陥っている青年の前に、チエーンのヘアバンドを額に斜めがけで身に付け、青いジャケツトを着た一人の少年が現れた。

「君は、ここでプレイヤーの選手生命を失う」

すると唐突に、少年が青年に向かって今後どうなるのかを宣告する。

「僕はクライアス社のタイムジャッカーチームの一人、ウールって言うんだ。ねえ、僕と契約しない？」

「契約……」

「そうすれば、君は最悪の未来から抜け出せるよ？」

青年は、未だに混乱から抜け出せていなかったが、不思議と頭は冴えていた。

——もし彼の言っていることが本当なら、自分は一生バスケができなくなる？

そんなの嫌だ！俺は、まだバスケがしたい！

そう思った青年は、目の前に居る悪魔の様な少年の取引に応じる決意を固めてしまった。

「——契約する……」

青年の口から契約の完了を確認したウールは起き上がり、時計のようなものを取り出す。

時計から絵柄が浮かびあがった。

『ビルド……！』

「今日から君が仮面ライダービルドだ。クライアス社の為によりしく」

赤と青の怪物の顔が浮かんだ時計：アナザーライドウォッチを片手に、青年に向かってウォッチを埋め込む。

それと同時に、青年の体に変化していく。

青年の姿は、仮面ライダーというには余りにも醜く歪んだ、怪人のような姿へと変化する。仮面ライダービルドとは、全く異なる姿へと変化していった。

——そして、これが長い戦いの始まりとなるだろうと、ウールは楽しそうにほくそ笑んでいた。

次回！Re. HUGっとジオウ！

第1話

誕生！元気な少女と最高最善の魔王のライダー！2018

第1話 誕生!元気な少女と最高最善の魔王のライダー

!2018

四月上旬。ソウゴは白いワイシャツにグレーのスボンが特徴であるラヴェエニール学園の制服に着替え、階段から降りてきた。

「おはよう〜」

ここは、ソウゴがお世話になっている時計店『クジゴジ堂』。

彼は幼い頃に両親を事故で失くして以来、この叔父にお世話になっている。

「おはよう!ソウゴ君!」

階段を降り、リビングのある部屋に入ると、朝食を用意してくれた叔父・時見順一郎がいた。

椅子に座ったソウゴは「いただきます!」と手を合わせると、朝食に手をつける。

「ソウゴ君。今日から二年生だけど大丈夫?」

「何が?」

「何がって、成績だよ!いつも、自分の得意科目しか良くないから。最後の方は、さあやちゃんにいつも助けてもらってるし……」

この前だつて、追試勉強の為にさあやちゃんに色々迷惑かけちゃつたでしょ？と言いかけるが、それでもソウゴは笑みを浮かべながら大丈夫だと判断していた。

何故なら――

「大丈夫だよ。だつて俺、王様になるから」

順一郎が自分の心配しているのに平然と問題ないように、王様になる事を目指しているのだから。

「そうだよね……王様になるんだよね……」

これが高校生とかだつたら普通に難儀を示したいと思えるのだが、目の前の甥はまだ中学生なので、イマイチそういう事を抱いていいのかと言う思いが順一郎の中にあつた。

「ソウゴ君〜！」

「あ、さあやちゃんがお迎えだよ」

「わかつた！」

幼馴染が来た事を知つたソウゴは急いで朝食を済ませると、椅子に置いた鞆を持ち、玄関へと向かう。

「叔父さん、行ってくるね！」

「順一郎さん行つてきます！」

二人は順一郎と沢山の時計に見守られながら、クジゴジ堂を出てラヴェニール学園へと向かう。

「行つてらっしやい!」

順一郎は二人を見送ると、色んな修理道具が置かれている仕事机に置いてある写真を見る。

「ソウゴ君、中学二年生になりましたよ。兄さん、義姉さん」

——それは、ソウゴの亡くなった両親の写真だった。

遺影の様に置かれた写真に手を合わせ、彼の成長を三人で噛み締めていた。

その頃、ソウゴとさあやは話をしながらラヴェニール学園へと登校していた。

「ソウゴ君、今日から二年生だけど大丈夫?」

「さあやまで、叔父さんと同じ事聞くの?」

二人は小さい頃の幼馴染。ソウゴがとある事故で両親を亡くし、『はぐぐみ市』に来たからはほとんど一緒にいることが多い。

とはいえ、そんな幼馴染にも叔父である順一郎と同じ事を言われたソウゴは、耳が痛くなつた様な錯覚に陥る。

「大丈夫だよ。勉強なら出来る限りやるって」

「そう言つて、この間追試だったよね？」

「うへえッ？」

その事を思い出し、追試になるまで碌に勉強してこなかったソウゴは返す言葉がなかった。

追試の為に幼馴染に迷惑をかけてしまった事にも結構罪悪感を感じていた為、余計に口を継ぐめにくかった。

まったくもうと思いつながらも、さあやはこの間先生が言っていた事を思い出し、その事を隣に居る幼馴染に話そうと思つた。

「そういえば、今日から転校生が来るって」

「転校生か、どんな子だろう」

登校をしている道中で会話しながら歩いていると、そこへローブを被つた男性が近づいてくる。

「明日は、君にとって特別な日となる日だ」

そしてソウゴに近づき、耳元で囁きかける。

「えっ？」

声が聞こえ、思わず足を止める。

さあやは突然足を止めた幼馴染に、どうしたのかと思いつながら同じく足を止めた。

「どうしたの?」

「えっ? いや、なんでもないよ」

なんでもないと言いつつ、先程自分に囁きかけてきたローブの男性がいると思われる方を見るが、その男性はいなかった。

前にもこんな事があったなと言う思いが一瞬浮かんだが、直ぐに気のせいだと思い、そのまま二人はラヴェニール学園へと向かう。

一方、数日前にこの家に引っ越してきた少女の新学期が今、始まろうとしていた。

薄紫の髪の少女は、一纏めにしてきた髪の毛のゴムを外して髪をとく。

「フレフレ! わたし!がんばれがんばれ! わたし!」

テンション全開で呟いており、その机にはイケてるお姉さんのファッション雑誌や自分で描いた“なりたい自分”や、自分の思い描く“大人っぽい前髪”の絵が置かれてい

る。
「フレフレ! わたし!がんばれがんばれ! オー!」

自分の部屋の鏡の前でハサミを手に持ち、何やら意気込んでいた。

「はな〜転校初日から遅刻よお〜！」

すると新学期の転校初日にいつまでたつても部屋から出てこない少女を、このままでは遅刻してしまうと心配した母親が名を呼んでいた。

「はな〜」

「この日のために伸ばしてきた前髪……バイバイ…… 子どももっぽい」 はな……」

だが名を呼ぶ声は少女には聞こえておらず、この日のために伸ばしてきた前髪を見て、子どももっぽい自分へと別れを告げる。

「大人っぽいイケてるお姉さんに……変身〜♪」

憧れている大人っぽいイケてるお姉さんに変身しようと、キラキラとした笑顔を浮かべて、かねてからの自分の思い描いていた事を叶えようとしていた。

少女は鏡を見ながら前髪を抑えて、ハサミを片手に前髪を切っていく。

「元気だけが取り柄の『オチャメな』 はなどは、もう言わせないんだからあ〜！」

そう言いながらチョコキチョコキと、自分の思い描く理想の髪形に近付こうと前髪を切っていく。

「…つて、あれ？ ここ、もうちよつとそろえる？」

しばらく前髪を切っている途中、少し前髪が可笑しくなっている事に気づいて鏡を見ながら慎重に切っていく。

「ウワッ!ズレた!!アア〜」

だがうつかり切るところからずれてしまい、少女は悔しげな声をあげる。

そんな中、カーテンが風に靡き、その風に少女の思い描いた「イケてるお姉さん」の髪型のページが捲れる。

「はあああ〜!!!前髪切りすぎたあ〜!!!?」

どうやら思うよりも前髪を切りすぎてしまったらしく、少女の驚きの悲鳴が部屋中に響き渡るのだった。

「ああ……書類がない……どこ?」

「古い鞆を見た?」

「それだ!ああ……今日歓迎会で遅くなるかも……夕御飯お願い!」

「オツケー! 大丈夫!」

そんな両親の会話を少女の妹が椅子に座りながら聞いていると、「ウウウ〜……」と頭……正確には前髪部分を抑えて唸り声をあげていた少女の姿が目に入り、姉の様子が可笑しい事に気づく。

「んん?どうしたのお姉ちゃん。その前髪?」

「わたしのほうが聞きたいよお……」

妹にそう聞かれた少女は、しょんぼりとした様子でそう呟いて顔を上げる。

「大人っぽいイケてるお姉さん計画があゝ……!!」

——少女の名前は『野乃 はな』。13歳の中学二年生。

片眼が隠れる程伸びていた髪を斜めぱつんにして、両サイドには緑色のヘアピンを付けて纏めている。

そして現在、彼女は新学期の登校初日の心機一転のデビューが失敗してしまい、額を晒しながら目をうるうるると潤ませて落ち込んでいた。

「はい！お待たせ！」

落ち込んでいる娘に、母が作ったオムレツを出す。

「んん？…はわあゝ♪オムレツゝゝ♪」

大好物のたまご料理のオムレツを見ると、先程まで落ち込んでいたのがウソのようにキラキラとした笑顔でオムレツを見つめる。

「プクク！ お姉ちゃんって本当にお子ちゃまね……」

「ムツ!!お子ちゃまって言うなあ！」

「そろそろ身長抜いちやいそうだけどおゝ」

「むうゝゝゝ!!」

お子ちゃまと言われたはなは膨れて妹のことりを睨むが、ことりは気にした様子を見

せず。立ち上がって姉の側によつていき、もうすぐ身長を抜いちやいそうだからかう。

「早く食べないと遅刻するよお」

更に頬を膨らませて睨みつけてくる姉を軽くあしらって、早く朝食を食べないと遅刻すると教える。

「はあっ!!いただきます!ハム!モグモグ!」

ことりに言われて、転校初日から遅刻するわけにはいかないと急いでオムレツを手にとってパクパクと食べ始める。

そして学校に行く準備を済ませ、鞆を背負うと靴を履く。

「はな、忘れ物ない?」

「だいじょうぶ!!」

「よし!それじゃあ…」

「ハグっ!!」

はなとすみれはお互いにスリよつて抱きつき、親子による愛のあるハグをする。

「はな。頑張つてね!」

「うん!フレフレ!ママもがんばれ♪」

頑張つてねと応援を貰ったはなも笑顔で頷いてフレフレと両手を上げて、笑顔で母親

を応援しながら微笑む。

「さあ！いつてらっしやい！」

「気をつけてね」

「行つてきまあす!!」

家族三人に見守られながら、勢いよく家を飛び出して学校へと向かい走り出す。

「えっさ！ほいさ！転校初日から遅刻はいやだあ〜！」

転校初日から遅刻は嫌だと、公園の入口を通りすぎる。

公園に立つ金色の鳥の形の時計は現在、7時50分を指している。

「ばっちり自己紹介きめちゃうんだからあ！」

転校初日の自己紹介をばっちり決めようと、決意して短くなった前髪を一撫でし：

「野乃はなです！よろしくお願いします！」

ウフフウ♪ みんな、はなちゃんの登場に話題騒然!! だいにんきく♪フレフレわ

たし!! がんばれがんばれ！オー!!」

良い声でビシッと自己紹介して、すっかりした自己紹介を聞いてクラスの話題になり

大人気になる…という自分の姿を想像して、嬉しさを頬を緩ませていた。

その時、ボールを打つ音が聞こえたかと思うと、横の公園の中にあるグラウンドの方

から野球ボールが飛んでくる。

ボールの進行方向上にいるお婆ちゃんはゆっくりとそつちを向き、はなもボールがこちらに飛んできてきている事に気づく。

「あぶない!!」

彼女はお婆ちゃんを庇おうと走り出し、体を張って守る為に前へ出ようとする。

「はぎゅ〜〜〜!!!!はぎゅ〜〜〜!!!!」

お婆ちゃんに向かって飛んできた野球ボールの前で手を広げると突如、空にピンクの光が照らされ、赤ちゃんのような声が響き渡った。

時計の秒針が7時51分で止まろうとした時、周りから色が無くなり、時間が止まる。その現象は、声と共に街中に広がっていく。

「止まって……?」

ボールがいつまでも来ない事に気がついたはなが目を開けると、ボールが宙で止まってる事に驚く。

次の瞬間。周りの色が戻り、時計の秒針が動き出すとボールも動きだし、はなの目と鼻の先に迫ってくる。

「めちよつく!!」

そのまま顔面でボールをキャッチしてしまい、お婆ちゃんに心配されながら、特徴的な悲鳴を上げて倒れ込んでしまった。

山頂付近にある、規模の大きい男女共学の私立中学校。ソウゴとさあやの通う『ラヴェニール学園』の授業開始のチャイムが鳴り響く。

「皆さんに転校生を紹介します……と、言いたいんですが……肝心の転校生がいません……」

教室には既に生徒が（約一名を除いて）揃っており。教師が黒板に新学期の今日に転校してくる生徒の名前を書いて転校生を紹介しようとするも、転校生が来ていない為に言葉が詰まっていた。

「転校初日からちこくう〜」

「なんでだよ！」

「フフ♪」

「面白そうな子みたいだね」

「楽しみ。ソウゴ君もでしょ」

「どうしたもんかなあ〜」

生徒たちがツツコみを入れ、さあやは右隣りの席にいるソウゴに話しかける中、教師

が困った様子で頭をかいていると……

「ごめんなさい!!遅れましたあ、あたしはののはりやりやぶしゅ……!!」

はなが慌てた様子で教室のドアを勢いよく開けて、遅刻した事を謝りながら教室へと入って行く。

…が、早く自己紹介しようと慌てすぎたのか、足をもつらせて派手にすつ転ぶ。

その様子を見たソウゴとさあやは、思わず啞然とした表情で見つめる。

「ウウ〜」

「野乃さん大丈夫?」

「ツツ!! 負けない!!」

呻き声をあげて倒れていると、教師から大丈夫かと訪ねられた彼女は目を見開いて、負けれないと呟いて勢いよく立ち上がる。

「野乃はな!13歳!将来の夢は、超イケてる大人っぽいお姉さんになることであ〜す!!」

腰に両手を当てて自己紹介をし、右手を高く上げて左手を握りしめながら将来の夢を高らかに語る転校生は、堂々とした姿勢で、一切の迷いなく夢を語っている様子をさあやは呆然とした表情で見つめている。

ソウゴもまた、「ふん!!」と満足そうな表情で構えている姿に、少しポカーンとしてい

た。

『ハハハハハ!!』

「すっげえ元気だな！」

「お茶目だねえ」

そんなはなの様子を見て、クラスのみんなは楽しげに笑っている。

「めちよつく……」

「野乃さん、自己紹介ありがとう。でも遅刻は駄目だよ？後で職員室ね」

だが、自分が思い描いていたちゃんとした自己紹介と違って失敗に終わってしまい。そして転校初日から遅刻してしまった為、後で職員室に来るように言われたはなは下を向いて落ち込むのだった。

職員室で教師に注意を受け、注意喚起を受け終えたはなが職員室から出てくる。

「転校初日から大失敗く〜ウウ〜」

転校初日から大失敗してしまった事に落ち込みタメ息をついていると、向こう側から片手で鞆を持った黄色い短髪の少女が、太陽に照らされた窓を見つめながら歩いて来ているのが目に入る。

その姿を目に焼き付けた彼女は、じっとその少女を見つめている。

「あつ、背高い…足長い…きれい……」

少女は背が高くて足も長く綺麗なため、思わず見惚れていた。

「フフ♪」

「ウウウ〜アア〜!!」

黄色の短髪少女は、そんな彼女に向けて微笑み掛け、はなは恥ずかしさで顔が赤くなる。

「おい!!輝木ほまれ!今来たのか?もうホームルーム終わったぞ!」

「……すいません」

「おい!! あつ…まったく……」

「美人に……笑われた……」

はなは短髪の少女——『輝木ほまれ』に笑われた事にショックを受けていた。

対するほまれと呼ばれた少女はジャージを着た教師と呼ばれ、外に出るとため息をついていた。

「前髪は失敗するし……自己紹介も失敗するし……大人デビュー大失敗……」

校舎の中にある噴水のある広場で、はなは水面に顔を写しながら、自分が思い描いた大人デビューが大失敗してしまった事を落ち込んでいた。

「でも負けない!!フレフレ!!わたし!!」

それでもめげずに、手を上げて自分を応援する。

「なにそれ、おまじない?」

「うわあ?!?」

突然男の子の声が聞こえ、驚いて振り向くと、後ろにはソウゴがいた。

「え、えつくと、同じクラスのこと……」

「ソウゴ、時見ソウゴ!よろしく!」

「よろしく、時見君!」

『はぎゅ〜!はぎゅ〜』

ソウゴが自己紹介するとはなの耳へ、また赤ちゃんの声が聞こえた。

「はっ!また? これって……赤ちゃんの声?」

ピンクの光が昼間にも関わらず星の如く輝かせる中、赤ちゃんの声が聞こえた方へ走っていった。

「どうしたんだ?」

そして突然走り出したはなを見て疑問に思うソウゴを他所に、彼女は声がさらに大き

く聞こえる所へと、その声へ導かれる様に屋上の扉を開ける。

「「あつ……」」

屋上に踏み入ると、現場にはさあやとほまれが立っていた。

『はぎゅ〜はぎゅ〜!』

はなが二人に見惚れていると、彼女たちは赤ちゃんの声に気づいて、そちらを向く。すると、空に浮かぶピンク色の十字の光が虹色のヴェールに包まれ、流星群のように空を流れ消えていった。

「野乃さん」

「あつ……う、うん……」

「探してたんだよ。学校、案内したかったんだ!」

「本当!?ありがとう!」

「わたし……薬師寺さあや。よろしくね」

「よろしく!」

さあやはよろしくと挨拶すると、はなもよろしくと笑顔で返す。

「あつ……あの!!」

そして彼女は、屋上から出ようとするほまれに話しかけた。

「ん……」

「うう……」

しかし何を話せば良いのか分からず、言い淀んでしまう。

「その前髪、イケてる!」

「えっ!」

「よく似合ってるんじゃない」

「……ありがとう!!」

少し——いや、予想外にも切りすぎた前髪をイケてると誉め、自分では失敗したと思った前髪を誉められよく似合ってると言われたはなは嬉しくて少女にお礼を言う。

「ほまれさーん。学校案内、一緒にどうかな?」

「うんうん!!」

「………んっ」

さあやは学校案内にほまれを誘い、はなも賛成と頷く。

だがほまれはしばらくはな達を見つめた後、一つ高い所にあるベンチに座り、両腕を枕にして空を見上げる。その様子を見た二人はお互いに見つめ合う。

「えと……それじゃ、ほまれさんは行かないみたいだし……野乃さん、学校案内に行きま

ししょう?」

「う、うん。ありがとう、薬師寺さん!!」

さあやがほまれたの様子を見て誘ったが行かないのだと納得すると、彼女を不思議そうに見ていたはなに学校を案内する為に声をかけた。

声をかけられ慌てて返事をするはなは、さあやと共に屋上から出ようと扉を開ける。

巨大なビルが建ち並ぶ、薄暗い都市。

その奥にある、屋上に巨大なアンテナのような物が設置された、一際巨大なビル。ビルの中からは、怒号が響き渡る。

「まだ見つからんのか〜!!」

男性の怒鳴り声が円柱型の部屋の中で反響する中、壁から突き出る形で設置されたデスクに座った数人が上から下まで螺旋階段みたいに並び、集まって会議していた。

「未来を作る力……『アスパワワ』。その結晶……『ミライクリスタル』」

一人の男性がそう言いながら指をくるりと回すと、ハートの形をした宝石が浮かび上がる。

「見つからねば! 我々は本社に帰れんのだぞ!」

「ああもう！ あの時、あいつを逃さなければ!」

ふくよかな男性がイラついた様子で怒鳴り、長髪の女性が何やら悔しがっていた。

「ボスと会長は……無事ノルマを達成した方に、昇進を約束すると……」

冷静な雰囲気の方がそう呟いたその時、一番上の光が差し込むところから邪悪な闇が現れ、目を赤くギラつかせる恐ろしい男の姿が浮かび上がる。

怒りに満ちた鬼の形相が現れた瞬間、その場にいた者達は怯えの感情を露にする。

「オレチャンがやってやるつす！ かるく奪ってやるつすよ!」

「君一人だと心配だから、僕も手を貸すよ!」

チャライ感じの男性と子供っぽい少年が立ち上がると、チャライ感じの男性の手に持っていた書類が消える。

「頼もしい………それでは……稟議、承認!!」

消えた書類は冷静な雰囲気の方が受けとり、中央にぱつと投げてそう宣言すると書類が大きくなる。

すると天上の巨大な闇の男が唸り声を上げて、大きく口を開けるとそこから印鑑のような物が出てきて書類へと押印され、紫のオーラと共にマークが書類に刻まれた。

『未来をなくせえ!! 必ず奪うのだ!! ミライクリスタル!!』

『クライアス社に栄光を!』

闇の組織の存在による計画が、始まろうとしていた――

その夜、はなは自身の部屋で自分のなりたいたい姿を絵に描いていた。

「なーんか色々あったけど、楽しかったな。…今日もいい日でした。大人っぽいはな

”

大人っぽくて、優しくて、カッコよくて…」

そう言いながらスケッチブックを閉じると、今日出会った人達…薬師寺さん、ほまれさん、時見君の姿を思い浮かべた。

「私だって…頭が良くて、運動も出来てイケてる。大人のお姉さんになりたい!」

彼女は部屋のカーテンを開けて、星の見える空を見上げる。

そして、外に出て自分のなりたいたい姿を想像していた。

「そのために頑張る!空からボールが降って来てこようと、何が降ってこようと。平気だもん!

何でもできる。何でも、なれる!」

そのまま手を合わせて、空に浮かぶ星に願いを唱える。

その時、不思議なことが起こった。

「は〜ぎゅ〜ぎゅ〜!!」

月からピンクの光が現れたかと思うと、学校で聞こえた赤ちゃんの声が再び木霊する。

「……えっ?」

何だろうと思いつつながら空を見上げると、何と月からピンクの光が降って来ていたのだ!

「は〜ぎゅ〜ぎゅ〜ぎゅ〜!!」

光がはなの家に向かって降って来ると、それに驚いたはなは思わず手を広げてしま

う。その光を無事にキャッチすると、光が弾き飛び、飛んできたものの正体が判明した。

「せ、せ、せ、セーフ!……って、あれ?」

自身の手を持ったものを見てみて、あまりの出来事に絶句してしま

「あ……あ……赤ちゃん!?!」

「は〜ぎゅ〜!」

その光の正体は、赤ちゃんだった。

「ううっ……」

クジゴジ堂の自分の部屋で寝ていたソウゴが、鮮明に映る夢にうなされていた。

——その夢には、自分の銅像が建てられており、それを19人の同じ姿をした仮面の人物の銅像が囲っていた。

『私は生まれながらの王だからだ』

——そして、そこに立っていた黄金の人物は、自分を襲ってきた全てを、たった一人で全てをなぎ払った。

「うわあ! ……夢か」

「あ、ソウゴ君起きたの?」

そんな夢を見て、ソファで寝ていたソウゴが目を覚ますと、彼の下へ順一郎が現れた。

「……うん、なんか悪い夢見ちゃて」

「悪い夢?」

「うん、俺が王様になって、世界から時を止めたって夢……」

「へえ、それはまた強烈な夢を見たね。」

——でも、夢は夢でも……人生はそんな甘いもんじゃない」

「えっ?」

「時計の針は止まるし、巻き戻す事だってできる。でも、人生は違う——」

その後の順一郎の言葉に、ソウゴは心を打たれる。

一方、空から降ってきた赤ちゃんをキャッチしたはなはと言うと：

「はくよかった〜」

空から降ってきた赤ちゃんに『はぐたん』と名付け、ミルクをはぐたんに飲ませ終えていた。

「お前、ちよつとは落ち着けや」

「落ち着けるか！…ってかお前じゃ無い！はなだもん！」

はなは自分のベットに立っている小さなネズミのような生き物——『ハリハム・ハリ』にツツコミを入れつつ「はなだもん」と答える。

「…じゃあ、はな。よおく聞けや」

ハリーは改まってそう言うのと、はなを指差した。

「はな！これはお前の未来の為やで！」

「…なんなの？」

正直、何言っているのか分かりませんね。そう言う気持ち彼女の中に広がった。

「分かったな？ほな、おやすみ〜」

言いたいことだけ言うと、ハリーはベットで横になる。

「全然わかんない！」

ほら、はなもこう言ってるでしょ?ちゃんと説明しなさい(b.y. 天の声)。

「てか、突然すぎるよ…いきなり赤ちゃん、なんで?」

どうなっているのか困惑していると、はぐたんが泣き出してしまった。

「つ!また!?ミルクあげたし、オムツじや無いし!えつと、えーと…そうだ!」

どうするか考えていると、とある考えがはなの頭に降りてきた。

「いないいないくばあぁ!」

そう、子供を持つ親御さんは一度はやったことがあるであろう子育ての基本、いないいないばあである。

「? はぎゅ〜!」

「笑ってくれた…」

取り敢えず泣き止んでくれたことに安堵していると、はぐたんがはなに向かって手を伸ばしてきた。

彼女はそれに答えようとするが…

「つ!…うちに住むのは…」

上げていた手を下げ、まだ中学生である自分がこの子を育てるのは難しいと考えていると…

「…違ったか」

「えっ?」

ハリーの眩きになんなのかと思っていると、部屋の外から「ちよつとく?」と言う声が聞こえてきた。

「お姉ちゃん何騒いているの〜?」

妹のことが来るのを察したはなは咄嗟に、はぐたとハリーをベットにクツシヨンに隠し…

「うるさいんだけど?」

「ごめん! ダンスの練習をしてて…」

マイケル●ヤクソンの真似をしながら「ふおう!」と言って、さつき聞こえていた音を誤魔化す。

「……なんでもいいけど、ごはんだよ…」

「すぐ行く!」

ことが行つたのを確認して、安心しつつベットを見るが…

「……あれ? 居ない…」

いつのまにか、はぐたとハリーは居なくなっていたのだった。

翌日ソウゴは、いつもならさあやと一緒に行くが、今日は珍しく一人で登校していた。

「それにしてもあの夢、あの人、何だったんだろう……」

昨日見た夢を思い出しながら、ポケットからこの間拾ったウォッチを取り出す。

「——おめでどう。今日は君にとつての、誕生の日となる」

「えっ?」

すると、またもやローブを被った謎の男がすれ違いざまに囁き、陽炎の様に姿を消した。

「なんだろう、誕生の日って……?」

その後、学園に着いても授業に集中出来ず、通りすがりの人が放った言葉の意味を考えていた。

「気に入らないなあ〜」

学校の中の時計塔の上には謎の男が立っていて、謎のメーターのような物を持って何かを計測していた

「学校、青春、明日への希望に満ちている……アア〜ヤダヤダ」

チャライ感じで浅黒い肌色と後ろ髪を伸ばした男は、メーターに計測された結果を見て、ヤダヤダとウンザリしていた。

「おっ!! 面白い子を見つけたよ」

すると、チャライ男の隣にいた少年『ウール』が一人の男子生徒を指す。

「内富士先生なんなんだよ……ちよつと提出遅れただけで、しめ切りしめ切りつて!!」

チャライ男が下を見ると、そこにはラヴェニール学園の男子生徒が不機嫌そうな顔で、先生に対する不満を言いながら歩いていった。

その男子生徒にメーターを向けると、先程と違いメーターが一気に大きいイガイガのような形の怒り顔のマークの方に脹れ上がり、赤く大きくなっていた。

「トゲパワワー！ 発見〜〜!!」

チャライ男はトゲパワワーという物を見つけたらしく、喜びながら怪しい笑みを浮かべる。

「明日への希望よ消えろ！ネガティブウエーブ!」

チャライ男は両手を重ねた後に顔の前で構えた後、交差するように開いてそう叫ぶと男の両手から何やら黒い不気味な波動——『ネガティブウエーブ』が放出されて、男子生徒を包むと黒い空間にイガイガのような物が浮かぶ。

男子生徒の前に巨大で怪しい闇が浮かび上がると、大量のイガイガが舞い上がる。

すると、突然の事態に驚いていたラヴェニール学園の生徒達が、次々に倒れて気を失い。倒れた生徒達から、紫のトゲトゲした何かが出てきて時計塔の方へ集まっていく。

「ミライクリスタルを持つてるのは知ってたよお〜!!早く現れる……プリキュアあ

!

トゲパワワが巨大な雲のように形成されて大きくなつていく光景を、チャライ男は怪しく笑いながら、目的の人物の出現に備えていた。

「どうしたの!!」

はなど一緒に居たさあやが突然倒れた生徒に駆け寄り、どうしたのと心配して声をかける。

「心がトゲトゲして……」

「なにもやる気がでない……」

二人の生徒はそう言つて体をぐったりとさせ、力なく地に伏せてしまった。

「なにが起こつてるの……」

はな達はお互いに顔を見合せて、突如発生した謎の現象に何が起こつてるのと不安になる。

同じ頃。他の場所にいたソウゴも、突然倒れこんだ他の生徒に駆け寄る。

「どうしたの?大丈夫?」

話しかけても誰も彼もがやる気がないような感じで、活力を失くしているように見え

た。

「何がどうなってんだよ！」

『あああああーっ！』

その時、近くにいた生徒が粒子のようなものになって、抵抗することも出来ぬままなにかに吸い込まれているのが見えた。

「——テニス、柔道。ベストマッチじゃない！」

吸い込まれていく方を見ると、そこには暗めな赤と青カラーのトゲトゲとした突起を生やした複数の弾痕付きの身体と、透けた複眼から鋭い眼球を覗かせながら鼻や牙をむき出した顔から分かるように、いかにも化け物つて感じの怪人が、白いボトルの様な物を持ちながらそこにいた。

「あれ、あれどこかで……はっ!?？」

怪人の姿を見たソウゴは何処かで見ただ様な感じだと、体の赤い部分に書かれた『BUILD』の文字を見て、姿こそ違うがウオッチを拾った時に夢で見た『あれ』に似ている事を思い出す。——赤と青の戦士、『仮面ライダービルド』に。

だがビルドの事を思い出している間に、ビルドそっくりの化け物が向かってくる。

「避けて！」

声を聞いたソウゴは急いで横へ転ぶように避けると、赤い光線がビルド?に向けて放

たれる。

「君は……」

そこに現れたのは、以前ソウゴを赤いロボットから助けた、白い服を着た少女だった。少女はビルドに向けて光線を放ち続けると、ビルド?の手からテニスラケットのようなエネルギー体が出現。テニスのサーブのように光弾を放つと、少女が持っていた銃に当たり、ビルド?は手から銃を落とした少女に近付いて彼女の首を絞める。

「やめろおおお!!?」

ソウゴがビルド?に向かっていくが、軽く払いのけられてしまう。思わず当てられたところを抑えるも、諦めずにビルド?へ掴みかかって行った。

『発注!!オシマイダ〜!!』

チャライ男は体を小刻みに揺らしながら独特のポーズを決めた後、チャライ男をライトが照らす。

空に広がって巨大な雲のようになったトゲパワワが下の時計搭に降り注ぎ、それが集まると、そこから赤く怪しい目が輝く何かの姿を現す。

「オシマイダ〜!!」

——それは時計搭に黒いボディが加わり、黄色の目に口の中にギザギザの歯と時計が

ある化物だった。

「さあ、来い！プリキュア！ゲイツ！」

チャライ男はこれで準備万端と言った様子で怪しく笑う。

はなとさあやは、ぐったりとした生徒を支えながら走っていた。そこへ……

「オシマイダ〜！！？」

謎の化物『オシマイダー』が、地面を踏み砕きながら現れる。

「あつ………！」

「逃げよう!!」

はなは化物に驚いて、恐怖のあまりに足を止めてしまう。

さあやは女子生徒の手を取って、逃げようと言って走り出し、はなも我に返って、続けて逃げようとしたその時……

「はぎゆ〜」

「あつ!!」

「はあぎゆ！はあぎゆ〜！」

聞き覚えのある声が聞こえた為、立ち止まってそつちを向く。

そこには昨日の赤ちゃん——はぐたんが化物に向かって、何やら言いたそうな様子で

立ち向かおうとしていた。

「はあぎゅ〜!!はあぎゅ!!」

「危ないってえ〜!!」

はぐたんが化物に向かおうとするのを、ハリーは足を掴んで必死に止めていた。

「アア? なんか文句あんのお?!!」

チャライ男は、はぐたんのその様子が気にさわったのか、オシマイダーに足を踏み鳴らして牽制させる。

その際に碎けた瓦礫が、はぐたんに向って飛んできた。

「危ない!!!」

その光景にはぐたんが危ないと察すると、慌ててはぐたんの元に走る。

「あつ、あぁ!!」

瓦礫がはなどはぐたんの間に落ちてその衝撃で土煙が舞い上がり、はなはしやがみこむ。だが土煙が晴れた後、はぐたんは何やらぐったりしていた。

「はあ…ぎゅ〜…」

「アカン!!アスパワワがどんどん無くなって…」

「あ、あぁあ…」

額のハートが水色から点滅させ始めたはぐたんの元気が無くなり、ハリーはアスパワ

ワという何かが少なくなつてると焦る。

そしてはなは、突然襲いかかった死の恐怖に汗を浮かべて、呆然としていた。

——無理もないだろう。あの岩がもしも自分に当たっていたら大怪我、運が悪ければ死んでいたかもしれないのだ。そんな始めての恐怖に、彼女の体は固まつてしまった。

「……………はあぎゅ〜…」

「はっ…はっは…うう……………」

必死に立ち上がろうとするが、足がすくんでしまい立てずにいた。

「…ぎゅう〜うう〜…………ウウ〜エウウ〜！」

「ツ！はぐたん!!…ぐっ!!」

しかし、はぐたんの泣き声にハツとなり。今にも泣き出しそうな顔で怯えるはぐたんの姿に、はなは拳をぎゅつと強く握りこむ。

「ハア…………フレフレ、わたし…………！」

フレフレと自分を応援して、恐怖で震える足に鞭を打って立ち上がる。

「オレちゃん、赤ん坊の鳴き声つて苦手なんだよねえ…………いけえー！」

「オシマイダ〜!!!」

チャライ男はそう指示し、オシマイダーがはぐたんに襲いかかる。

「ヤアアアア〜!!!」

「だめええ〜!!!」

はぐたんは迫りくる攻撃に目を瞑るが、はながはぐたんを守ろうと走りだし、体はつめて前へ出る。

突然出てきた少女にオシマイダーは動きを止めて、チャライ男は怪訝そうな表情で見つめる。

「おまえ!」

「ぎゆう……」

ハリーは強いまなざしでオシマイダーを睨みつけるはなを見つめ、攻撃が来なかった事に疑問を抱いたはぐたんは恐る恐る目を開ける。

「……どいてえ〜!」

「どかない!!」

チャライ男が退くように言うが、はなは退こうとしない。

「ドケエ!!」

「ぜったいにどかない!!!」

今度はさつきより強い口調で言うが、怯えずに退こうとする意志を見せなかった。

「うっぜえ…!!潰せえ!オシマイダー!!!」

「オシマイダ〜」

生意気な態度に気の触ったチャライ男はうぜえと呟き、潰すように指示されたオシマイダーがはな達に襲いかかる。

「なにしてんねん!!おまえ潰されるぞ!!」

「おまえじゃないもん!はなだもん!!」

「はあぎゅ〜…」

「ここで逃げたら、かつこ悪い…」

はぐたんはハリーの言う事に啖呵を切り、自分を守ってくれているはなに嬉しくて手を伸ばす。

そしてはなは向き直ると、ここで逃げたらかつこ悪いと言って笑顔ではぐたんを抱き抱える。

「そう……ツツ!わたしがなりたい…野乃はな、じゃない!!!」

抱いて一度瞳を閉じ、強く見開くと、自分の想いを言い放つ。

すると彼女の心から、強い想いに反応して、体がピンク色に強く輝き出す。

「アスパワワが!!……ツツ!グッ!ツグッ!」

「オシマイダー〜〜!!」

はなはその事実には驚き、チャライ男はその溢れ出す『アスパワワ』という力の強さに後退り、襲いかかろうとしたオシマイダーは吹っ飛んだ後に着地する。

「心があふれる……!!!」

「ばあ〜〜ばう〜〜!!!」

彼女は自身の力が高まり、心が溢れるのを感じていた。

そしてはぐたんの叫びに連動して、額のハートのアクセサリーがより一際強く輝き、はなの胸から出て来たハートマークが更に強い輝きをほとぼせる。

その光からハート型の金色の宝石のような形で中央部に星のような形、そこに延びる三条のラインのある何かが出てくる。

「ミライクリスタルが生まれた…」

ハート型の宝石のような物は、はなの手に落ちてくるとそれを掴む。

そしてハリーがはぐたんを乗せていたかばんが開いて、そこから何か出てくる。

「プリハートが反応した!!」

角に丸みを帯びたピンク色のスマートフォンのような形をして、ハートや色んな形の飾りがついている物が出てきて、はなはそれを掴んだ。

「はな!!おまえの気持ち!かましたれえ〜!!」

「いつくよお〜〜!!」

ハリーがそう叫ぶと、はなは強い眼差しで出てきたピンクの色のスマートフォンのような物を前に構えて叫ぶ。

『ミライクリスタル！ハートキラつと！』

一番上の金色に赤い宝石のような物が消え。そこに『ミライクリスタル』と言つていた宝石をセットすると画面に白い二重のハートが刻まれて、そして下の部分をスライドさせてハートの形にするとピンク色に輝く。

そのピンク色の光に体を包まれて、はなの髪が大きくなびいていく。

「はあぎゅ〜〜〜！」

ハートの下の角の部分の赤いハートをタツチして、胸元に寄せる。

そして手を広げると二重の白いハートが赤色に変わり、そこから光が溢れ出して、はなの回りを囲む。

光が晴れると、衣装が濃いピンク色のチアリーダーのような、おなかの部分が出たワンピースになり、腰に桜色の大きなリボンが付いたシースルーのピンク色のスカートにその上に緑色のフリルが出てくる。

更には両手首に小さな黄色のボンボンが出てきて、両足に白いニーソックスに両足首に黄色のボンボン、ピンク色のブーツが現れた。二の腕にもシースルーの袖カバーが着いている。

「ぎゅ〜〜〜！！」

またぎゅうとミライクリスタルを掴むと、今度は二重のハートが黄色になり。そこか

ら光が溢れて、はなの髪をウェーブのかかった薄いピンク色のロングヘアへと変え、サイドをまとめたシニヨンに赤いリボンに白い花が現れる。

「ぎゅー〜!」

再度ミライクリスタルをタッチすると、今度はハートが水色になって光が溢れ出すと、顔にメイクが施され。両耳に緑のクローバーイヤリングが、頭にピンクのハートのアクセサリーが、後ろの腰に大きい薄いピンクのリボンが装着される。

そしてミライクリスタルを腰に付いたポーチへと入れるとカバーが閉じる。

「輝く未来を〜抱きしめて!!みんなを応援♪元気のプリキュア!キュアエール!」

そして片足で着地すると右腕を天高く伸ばして、左腕を腰にすえて右足を左膝につけてポーズを決めてキュアエールと高らかに叫ぶ。

「プリキュア……ほんまになりおった……」

「はぎゅー……」

ハリーとはぐたんはプリキュアに変身したはなに呆然とした表情で見つめる。

「めっちゃイケてる!!」

——その頃、ビルドのような怪物に遭遇していたソウゴ。

その時、彼のポケットから落ちたウォッチを拾う。

「そのウオツチは捨てなさい！」

少女はソウゴの持つウオツチを捨てると叫ぶ。

「いえ、その力を使って王になって頂かねば」

すると今度はローブを被った男性が現れた。

「君、この間の……」

「はじめまして、我が魔王。私の名はウオズ」

ローブの男性は自らを『ウオズ』と名乗る。

「ジオウの力は史上最強、過去も未来も全て思うがままに」

「過去も未来も思うがままに……」

ウオズの言葉を聞いたソウゴは、ウオツチを見つめて胸に当てる。

その時、彼の脳裏にあの夢の光景を思い出させた。

その夢の中で出てきた人物は、人々を苦しめ、希望のない世界を創り出していた。

あの夢はきつと、俺と関係があるんだ。

もしかしたら、あの人が彼の言う、魔王の姿なのかもしれない。

ひよつとしたら、あれは俺なのかもしれない。

其処には根拠はないが、心でそうなのかもしれないと感じた。

しかし、目の前にいるビルドの様な怪物の姿を見た。

あの怪物は、人を襲っていた。

もし俺が止めなければ、あの怪物はこれからも人を襲い続けるだろう。

…やっぱり、王様になりたい。

世界を全部よくしたい、みんな幸せでいてほしい。

そう思ったら、王様にでもなるしかないじゃないか!

「——決めた!俺……魔王になる!」

「え!?」

それを聞いた少女は驚愕しており、ウオズは嬉しそうな表情になる。

「けど、俺が目指すのは普通の魔王じゃない!」

だが、次にその発言を聞いたウオズは、今度は怪訝そうな表情になった。

「は?何を言ってるんだい?」

「俺が目指すのは、最高最善の魔王だ!」

『ジオウ!』

そう宣言したソウゴが持っていたウオッチが白色の形となり、そこから『ジオウ』と響きわたる。

「——我が魔王」

ウオッチから音が鳴ったことに驚いていると、ウオズが紅いクッションに載せられた

ベルトのアンクルの様な物を差し出した。

「使い方はご存知のはずです」

ウオズに言われ、ソウゴは渡されたそれを腰にはめる。

『ジクウドライダー!』

そして、手に持っていたウオツチのリング部分『ウエイクベゼル』を回転させ、スイッチを押す。

『ジオウ!』

『ジオウライドウオツチ』をドライバーの左側にあるD、9スロットに差し込み。ドライバーのライドオンリニューザーを押してロックを外すと、後ろから時計のようなものが現れ、それに合わせてソウゴが構える。

「変身!」

ジクウドライダーを反時計回りに回すと、鐘の音と共に、世界が回った——
『ライダータイム!』

音声が鳴ると後ろの時計の文字盤に「ライダー」の文字が出現し、周りに無数の金属製腕時計のバンドの輪の様なエフェクトが現れ、それが回転。

更に文字盤の「ライダー」という文字が飛び出し、姿を変えたソウゴの顔にセットされた。

『仮面ライダージオーウ!』

その姿は金属製の腕時計の様で、鎧部分は黒で銀色の縁と時計のバンドの様な物——生体強化装置『ミッドバンドライナーM』が裝飾されており。スーツは黒で、額には「カメン」の文字のライダーズクレストがあり。時計の針の形をしたデータ収集装置——『バリオンハンドM』と『メソンハンドH』の下には、先程装着された複眼にあたる部分——『インジケーションアイ』はマゼンタの「ライダー」の文字になっている。

その姿を確認したウオズは自身の持つていた本を掲げ、高々と叫んだ。

「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者!その名も仮面ライダージオーウ!まさに生誕の瞬間である!」

「なんか、いける気がする!」

今この時を持って、未来を守るために戦う時の王者と元気な女子達の戦いが始まるうとしていた。

次回!Re. HUGつとジオーウ!

第2話 未来から来たライダー!継承せよビルドの力!2017

第2話 未来から来たライダー！継承せよビルドの力！

2017

仮面ライダージオウへと変身したソウゴは、ビルドそっくりの怪人に向かって走り出し、その怪人が掴んでいた少女を離す為にパンチを繰り出す。

「なんか、いける気がする！」

すぐ様ビルド？が少女を放したのを確認すると、敵に向かってもう一撃パンチを放ち、拳一発で吹っ飛ばす。

「おお……行けた！」

先程の生身の時とは違って、対抗出来るようになった事に驚きと喜びを噛み締めながら、ビルドの様な怪人が飛ばされた方へと行く。そこにはオシマイダーと戦っていたキュアエールの姿があった。

「君。大丈夫？」

「えっ？……その声、もしかして時見君？」

「……もしかして、野乃さん？！」

ジオウがエールに声を掛けたのを筆頭に、二人はお互いの声で誰かと気づく。

「ツウ〜調子に乗りやがって……いけ!オシマイダー!!」

「オシマイダー〜!!」

チャライ男は先程から攻撃を受け続けたことに怒り心頭でオシマイダーに命令すると、オシマイダーがエール以外にジオウの方にも襲いかかり、更に二人はビルド?が放ったバスケットボール状のエネルギー弾で反撃を受ける。

すると、ジオウのドライバーから“ケン”の文字が現れた。

『ジカンギレード!』

「これって……」

『ケン!』

ジオウは“ケン”という文字が刻まれた剣武器『ジカンギレード』を振り、オシマイダーとビルド?にダメージを与える。

攻撃を受けたビルド?は更にエネルギー状のバスケットボールを作り、ジャンプをしてダंकをかます体勢になる。

『フィニッシュタイム!』

それに対してジオウは、ベルトに差していたライドウオッチを外し、ジカンギレードの持ち手上部にあるスロットに装着した。

『ギリギリスラッシュ!』

紫に光る時計エフェクトと共に、攻撃をしてきたビルド？を切り裂いて撃破。過去に変身させられたバスケット選手が芝生の上に落っこちる。

「すっごくいい〜！」

エールが驚いていると、オシマイダーが攻撃を仕掛けて来た。

「いったれやあ〜！！キュアエール！！」

ハリーの言葉を聞いて、ピンク色のスマートフォン形状のアイテム『プリハート』をスライド回転させて、ハート型に変形させた物を掴むと、ハートの部分をタッチする。

それによりモニターに写った二重ハートが輝き、更にハートの全体を右手で流れるように下からなぞると同時にモニターも輝く。

辺りもピンク色に光り、たくさんのハートが浮かび上がって、彼女の両手首についている房飾りの装飾がポンポンに変わる。

『フレフレ！ハート！フォ〜ユ〜！！』

エールの前にハートの形状のエネルギー塊が浮かぶと、ポンポンを両手で左右斜めに“フレフレ！！”と振るたびにハートのエネルギー塊が輝く。

両手のポンポンで大きなハートマークを描き、更にポンポンを合わせてヒラヒラと揺らしながらハートのエネルギー塊の前に腕を突き出してそう唱えると、そこからハート型のピンク色の光線が発射される。

そして、ハート型の光線がオシマイダーに直撃した。

「ヤメサセテモライマア〜ス……」

周りにハートが浮かび上がり、オシマイダーは幸せそうな笑顔でそう言いながら、大きなハートに包まれて昇天していった。

「ツウ〜!!これは始末書物!!!変な奴も出てくるし……クソ!!」

チャラ男はそう悪態をついて、その場から引き上げていった。

同時に、オシマイダーが昇天したためか、学校を包んでいた不気味な黒雲が消えていく。

「はぐたん!ハリー!」

「ふえ〜はあぎゆはあぎゆはあぎゆ〜♪」

エールははぐたんに駆け寄って抱き上げると、抱き上げられたはぐたんは嬉しそうに笑っていた。

その様子を微笑みながら見つめているハリーの後ろでかばんが開くと、そこから光る何かが飛び出してくる。それは薄い紫色で、ハートの装飾とハートの宝石があしらわれたスプーンだった。

「うわあ……」

「何それ……?」

二人は突然出てきたスプーンを呆然と見つめていると、ハート型のアイテムから金色の装飾が付いた宝石が外れて、薄く輝きながらスプーンの上に乗る。

「うん！ミライクリスタルはアスパワワの結晶！ミライクリスタルからはぐたんにパワーをあげるんわ……プリキュアにしかできへん！大切なお仕事や!!」

スプーンを手にとったエールは説明を聞きながら、はぐたんの前に宝石の乗ったスプーンを近づける。

金色の宝石が光りだし、そこからキレイに輝く光が、はぐたんの額のハートのアクセサリーに吸い込まれていく。

「はあぎゅ〜♪!!キャハキャハ♪エヘ！エヘ！」

はぐたんは溢れる程に満面の笑顔で笑った。その笑顔は余程の捻くれ者か人の心を持たぬ者で無い限り、誰もが見惚れるものだった。

「よかったあ!!」

「はぐたんにアスパワワを与えても、まだミライクリスタルが光つとる!!」

そのエールとはぐたんの様子を見ていたハリーは、未だにミライクリスタルが浮かび上がり、光っている事に気づいて驚いていた。

「ふふふ♪よしよし!!」

「はあ〜ぎゅ♪はあぎゅ〜！」

(こいつの心には……どれだけのアスパワワがあるんや?)

これなら……ミライを!!)

そしてエールの心にある、アスパワワというパワーの多さに驚きながら、自分達の未来への希望を抱く。

「はぐたん……よろしくね♪」

「はあぎゅ〜♪エヘヘエ」

「野乃さん、俺も手伝うよ。なんかよくわからないけど……」

「いやあ、あつさんもすごかつ——あつ!?!?」

エールは笑顔で頬を擦り寄せ、はぐたんもご機嫌に擦り寄って笑顔を浮かべる。

どういう状況なのかまだ把握しきれていないジオウに顔を向けたハリーはそう褒めるが、エール達と一緒に戦っていたその人物が……『ライダー』文字の複眼と時計の針を模した触覚を持つ仮面が「ある男」と重なり——

「ごめん……ハリー……」

エールとジオウ、ハリーの前に白い服の少女——ツクヨミが現れた。

「ツクヨミ。まさか、こいつ……」

「ええ……この時代のジオウよ……」

「歴史は変えられなかったようだな」

「ゲイツ！」

二人が声の聞こえた方へ視線を向けると、『ゲイツ』と呼ばれた、赤の刺繍が施された黒の服にハーネスを身に着けた少年が現れる。

「お前……なんで魔王になる道なんか選んだ!!？」

「俺が選んだ道だ！いや…俺は生まれた時から決めていた気がする！」

「ッ……！」

『——お前たちに私を倒すのは不可能だ。何故か分かるか？

私は、生まれながらの……王である』

生まれながらの王。

その言葉が、未来でオーマジオウが言い放った言葉と重なった。

「そうか………それなら、俺は今ここでお前の道を終わらせるだけだ！」

「えっ？」

『ジクウドライバー！』

「あれ、時見君と同じ……」

ゲイツはジオウと同じジクウドライバーを装着すると、ジオウとは違う赤いライド

ウォッチを取り出し、ネジのようなデイトールが付いたウェイクベゼルを回す。

『ゲイツ!』

そして赤いライドウォッチ『ゲイツライドウォッチ』をドライバーのD'9スロットにセットして、握り拳でライドオンリユーズを押してロックを解除する。

すると後ろからジオウと違う、デジタルタイマーの様な時計が現れ、ゲイツは交差し
た両手で抱え込む様にドライバーを掴む。

「待って!」

「変身!」

ジオウの制止を遮るように叫ぶと同時に、腕を広げながらドライバーを回転させた。

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

後ろのデジタルタイマーエフェクトから「らいだー」の黄色いひらがな文字が現れる
と、無数の金属製腕時計のバンドの様なエフェクトが回転して、ゲイツにスーツと
アーマーを装着させる。最後にタイマーから飛び出た文字——『インジケーションバ
タフライ』が顔に刻まれ、ジオウとは違う、赤いアーマーとスーツを持った姿へと変身し
た。

「未来のためだ!お前には消えてもらおう!」

仮面ライダーゲイツは黄色い複眼からジオウの姿を睨みつけながらそう言って、今度は腕のホルダーから別のウォッチを取り出し、起動させる。

『ゴースト！』

ウエイクベゼル部分がオレンジで、ボディ外装“アウトリガーグリップ”部分が黒で構成されているウォッチ：ゴーストライドウォッチをドライバのD、3スロットへ装填し、再びドライバを回す。

『アーマータイム！』

すると後ろから眼球の形をしたものと一緒にオレンジのアーマーが現れる。

ゲイツが歩き出すと同時にアーマーが分離し、自動的に装着されていた。

『カイガン！ゴーストアイコン！』

そのアーマーは、黒とオレンジの頭部から角の様なものが伸びており、胸部には眼を模したデザインが刻まれ、複眼にはひらがなで「ごーすと」と描かれおり、両肩の装甲は眼球——『ゴーストアイコン』のような形状をしていた。

「うっ、なんか、やばい気がする」

ゲイツの肩にある『眼魂シオルダー』からパーカーゴースト四体が出て来て、思わず後退ったジオウへと向かってくる。

「行くぞ、オーマジオウ！」

「えっ……!? ちょ、ちよつと……!」

ジオウが『オーマジオウ』という名前に少し動揺していると、四体のパーカーゴーストが襲い掛かり、戦う気のないジオウを一方的にゲイツが攻め立てる。

「うわあああー!」

「時見君!」

いきなり攻撃を受けたジオウにエールが声を掛ける。

「この時代のお前に恨みはない。でも未来のためだ。消えてもらおう!」

『フィニッシュタイム!ゴースト!』

そう言うのと二つのウオッチに付いているボタンを押し、ドライバーを回した。

『オメガタイムバースト!』

ゲイツが跳ぶとパーカーゴーストを収束させて、そのエネルギーを右足に纏わせてジオウへ向けてのキックが襲い掛かる。

「待つてよ!」

だが突如、エールが前に出てジオウを庇おうとする。

「なっ!?」

ゲイツはキックをワザと逸らして空打ちさせると、着地してエールの方を睨み付けた。

「退け！プリキュアとは戦いたくない！」

「時見君は、早く逃げて」

「分かった。でも……バイク？」

ゲイツから逃げようとするジオウは、腕のライドウオッチホルダーに「バイク」と書かれたウオッチを発見した。

「バイク……なんか行けそうな気がする！」

「バイク」と書かれたウオッチを放り投げると、ウオッチはバイクへと姿を変えた。

「うおお、何これ、カッコいい！」

「めちよつく！カッコいい！」

ジオウとエールの二人がバイクを見てカッコいいと叫ぶと、ジオウは『ライドストライカー』に乗って逃げていく。

「おい！待て！」

ゲイツが制止の声をかけるも、ジオウは聞かず去って行ってしまった。

その頃、ウールがビルドになっていたバスケット選手へと近づく。

「ジオウが生まれてしまったか。まあ、いいや。ここまでは想定の内だ」

『ビルド……！』

気を失っているバスケット選手の目を覚まさせようと、ウールはドス黒いウオッチを取り出し再起動させる。

そして、バスケット選手へもう一度ウオッチを取り込む。

「うわあああああ!」

その人は苦痛の叫びを上げながら、またビルドにそっくりな怪人へと変わった。

「えらい目にあつた……」

一方、バイクで逃げて茂みに隠れると変身解除し、ソウゴは近くの公園のベンチでひと段落する。

「おめでとう、我が魔王」

「うわっ!」

そこにジクウドライダーを渡したウオズが不意に姿を現わし、思わず驚く。

「再びお目にかかれて光栄だよ。我が魔王」

「……つて言うか、お兄さん誰? ツクヨミとゲイツと…あの喋るネズミの仲間?」

「私の名はウオズ。ツクヨミ君やゲイツ君とハリー君と違い、私は君の協力者だ」

三人とは違いソウゴの協力者だと名乗ると、持っていた本のページを開く。

「この本によれば。君はこの先、時の王者に即位するため覇道を歩む」

そして本に書かれていた、これから起こるであろう出来事を読み上げる。

「しかしタイムジャッカーチーム……クライアス社という組織の者たちが君の即位を邪魔し、新たな王を擁立しようとしている」

「えっ？クライアス社……？それって、みんなで歴史を変えようとしてるの？」

クライアス社やタイムジャッカーとは何かわからなかったが、歴史を変えようとしているのはわかった。

「そう。正しい歴史を守ろうとしているのは私だけなんだ。

君が無事、魔王への道を辿れるよう、私が尽力する」

ウオズは跪きながら尽力すると誓う。

「そうそう、言い忘れてたけど、さっき君が倒したアナザービルドだけどね……」

「アナザービルド？」

「失礼。仮面ライダービルドと言うべきかな」

「仮面ライダービルド？」

仮面ライダービルドと聞き、一ヶ月前の事を思い浮かべた。

『俺は、仮面ライダービルド。桐ヶ谷晴夜だ』

以前、偶然にも会った桐ヶ谷晴夜の事を思い出した。

しかし、あのビルドはさっき対敵していたビルド?ほど生き物らしさはなかった。

「いや。あれはビルドに似てたけど、ビルドじゃないよ」

仮面ライダービルドと、さっき倒したビルドを比較しても、双方には決定的な違いがあった。

「クライアス社が歴史を変えた。今はあれがビルドなんだ」

「そんな……じゃあ、晴夜はどうなったの!」

「さあね。ちなみに、魔王の君でもビルドを倒す事はできない。今、まさにゲイツ君とあのプリキュアの子が戦闘中だけどね」

「何だって……?」

その頃ゲイツ達は…

「ねえ、なんで時見君を倒そうとしたの?」

「お前には関係ないことだ!」

「そんなことないもん!だって時見君は、私の友達だもん!」

「はな、ちいとは落ち着けや!……ゲイツ!お前もや!」

エールとゲイツが言い争いをしており、ハリーが二人の仲裁していると…

「ウウ〜……」

『!?!』

彼らの前にアナザービルドが現れ、それを見たエール達は驚愕していた。

「あれってさっきの！なんで?!? だつてさっき、時見君が倒したはずなのに……」

「………兎に角、やるしかないようだな」

再び襲いかかってきたアナザービルドに応戦する為、エールとゲイツは立ち向かっていった。

今のジオウの力でもアナザービルドは倒せないと聞き、ソウゴはどうすればいいかと考える。

「そうだ……あれがビルドなら、ビルドの力があれば……」

「流石だよ。我が魔王」

考えていると何かを閃き、ビルドの力があればと呟くと、ウオズが流石だと称賛する。

「アナザービルドを倒すには、ビルドの力が必要だよ」

「よし、じゃあ俺、今から晴夜に会いに行くよ!」

ソウゴが仮面ライダービルド、桐ヶ谷晴夜に会いに行こうと走り出す。

「待ちたまえ、我が魔王。私が送ってあげよう」

「うおおー!何?」

そう言うとうオズが首に掛けていたマフラーをソウゴに向けて放ち、彼を包み込んだ。

「あれ、()ど()?」

気が付いた時にソウゴが周りを見ると、先までいた『はぐくみ市』とは違う、知らない中学校の前にいた。

「()って……」

「ねえ、君()この生徒じゃないの?」

何者かに声をかけられ振り向くと、そこにはソウゴ達の通う学園の制服とは違う制服を着たピンクの髪をした少女がいた。

「違うの?じゃあ貴方も誰か待ち?」

もう一人の紫色の髪型の少女——剣崎真琴が、誰か待ちなのかと聞く。

「mana、お待たせ!」

するとそこに、学校の門から一人の男子生徒が現れる。

「あつ!晴夜!」

ピンクの髪の少女——相田manaがその男子生徒へ向けて晴夜と呼び、それを見てその

男子が晴夜だと気づく。

「あれ？お前……たしか、以前にも会った」

「うん、ソウゴ！覚えてる？」

「どうした、晴夜。あれ、お前……」

後ろから龍牙もやってきた。

「晴夜！龍牙！ビルドとクローズの力を貸してくれない？」

二人に力を貸してくれないかと頼む。

すると二人のポケットに入っていた何かが光り出し、晴夜はそれを取り出す。

それは、ソウゴが最初に持っていたブランクのウォッチだった。

「ウォッチ……なんで、二人が持っているの？」

『ビルド！』

『クローズ！』

どうしてブランクウォッチを持っているのだと聞いた瞬間、二人の持っていたウォッチが光り、ビルドとクローズの顔が描かれたウォッチへと姿を変えた。

「そう言う事か……」

それを見た晴夜はある事を思い出した。

それは、以前出会ったある人の言葉——その人物に、『それをいつか、ある奴に渡して

くれないか?』と言われた事を……

「これ、お前に渡す!」

「えっ?」

「ホラ、お前のも」

「はあ?……よくわかんねえけど」

晴夜と龍牙はソウゴへビルドとクローズのウオッチを渡す。

「——戦兔さんと龍我さんに、よろしくな」

「……戦兔?」

「……ねえ、困ってるならあたし達に何か出来ることはない?」

戦兔とは誰なのかと疑問に思っていたが、マナから何か手伝えることはないかと聞かれ、ソウゴはある事を思いついた。

その頃、復活したアナザービルドに苦戦するゲイツとキュアエールがそこにいた。

「どうなってるの……?さっきよりも力が上がってる」

ツクヨミが先程よりも力の上があったアナザービルドを見てみると、アナザービルドが取り込んだ野球選手の手で三人へ向けてエネルギー状のボールを投げ、攻撃してきた。

『ジカンギレード!』

そこへ間一髪でジオウが現れ、エネルギー球をジカンギレードで斬り払うと、ドライバーのロックを解除する。

『フイニツシユタイム！』

アナザービルドの周囲に無数の「キック」の文字を展開したジオウはジャンプをし、宙でジクウドライバーを回す。

『タイムブ레이크！』

12程あった「キック」文字をひとつに纏め、自身の足裏にその「キック」文字を集束。複眼とキックの文字を光らせながらライダーキックをアナザービルドへぶちかます。

「大丈夫？」

アナザービルドが爆発したのを確認すると一度変身解除し、みんなに駆け寄る。

「時見君、ありがとう」

（これが、あのオーマジオウ……？ 私達の知ってるオーマジオウ？）

（似てるけど……何か違う……）

「……」

エールがソウゴにお礼を言っている中、ゲイツ達三人はジオウが自分達の知っているオーマジオウとは違うと思いはじめた。

すると、後ろからまたアナザービルドが現れた。

「ダメか……ゲイツ!」

ソウゴはゲイツにクローズのウォッチを渡す。

「これは……」

「きつと俺達は、過去に行つて戦っているんだ。ビルドと一緒に……!」

「……2017年に行けば、アナザービルドを倒せるかもしれないという事か」

ゲイツはクローズのライドウォッチに刻まれた“2017”の数字を見て、2017年に行けばアナザービルドを倒せると考える。

「野乃さん!ここ任してもいい?」

「でも……わたしだけじゃ……」

「大丈夫……助っ人がいるから」

すると後ろから発砲音と共に弾丸が撃たれ、それを受けたアナザービルドが後ずさる。

そして更に二つの影が見えると、アナザービルドにダブルキックを繰り出した。

その内の一人である、ピンクのコスチュームで身を包んでいる金髪少女の姿は、どこかキュアエールと似ていた。

「みなぎる愛!キュアハート!」

「勇気の刃！キュアソード！」

彼らの前に現れたのは、『ドキドキ！プリキュア』のキュアハートとキュアソードの二人だった。

「愛を失くした悲しいビルドさん！このキュアハートが貴方のドキドキ、取り戻してみせるー！」

「別のプリキュアやお!?」

ハリーが二人を見て別のプリキュアだと驚き、エールも彼女達の登場に呆然とする。

「貴方達は……」

「大丈夫。あたしはキュアハート。よろしく♪」

「私はキュアソード」

二人が自己紹介すると、発砲が放たれた後ろから晴夜と龍牙が現れた。

「あの変なビルドはこっちで任せろ」

「ありがとう。晴夜」

礼を言うとソウゴとゲイツは走り出していく。

ソウゴ達が去ったのを見届けた二人はビルドドライバーを腰に装着。

晴夜はボトルを2本出し、龍牙はクローズドラゴンガジェットにボトルを差し込み、それぞれドライバーへと装填した。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

『ウエイクアップ!クローズドラゴン!』

二人はドライバールのレバーを回し、前後にランナーファクトリーが出現すると、ファクトリアパイプラインにスーツの原料となる液体『トランジエルソリット』が流れ、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

『変身!!』

そしてポーズを構えて叫ぶとスナップライドビルダーから生成されたアーマーが装着され、彼らの体から煙が吹き荒れる。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

『Wake up burning!Get CROSS-Z!DRAGON!Yeah!』

『じゃあ!行くぜ!』

『オーケー!』

『……仮面ライダービルド、キュアハート……ベスト、マッチ……?』

二人がビルドとクローズへと変身し、キュアハート達と共にアナザービルドの方へと走って行く。

その頃、ソウゴとゲイツはそれぞれタイムマジンへ乗り込む。

「時空転移システム……」

「起動！」

二人は2台のタイムマジンに2017年にセットし、アナザービルドが現れた時代へ向かい。タイムトラベルのため、時空空間へと入っていく。

——2017年。

その時代ではアナザービルドが誕生し、アナザービルドがスポーツ選手を襲っていた。

「水泳選手、弓道……ベストマッチ！」

そこへ、もう一人の仮面ライダービルドと仮面ライダークロース——『桐生戦兎』と『万丈龍我』が駆けつけた。

「おい、あれビルドか？」

「いやいや、ビルドは俺だし」

「アアア……俺、ビルド……お前、クロース……ベストマッチ」

アナザービルドが万丈へと抱きつくと、万丈はアナザービルドを振り払う。

「なんだよ、こいつ気持ち悪いな!」

「ちよつと妬けるな……」

「えっ?」

二人はボトルを出し、龍我はガジェットにボトルを差し込み、そして二人はドライバーへと装着する。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

『ウエイクアップ!クローズドラゴン!』

二人はドライバーのレバーを回し、前後からスナップライドビルダーが出現、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!」

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

『Wake up burning!Get CROSS-Z—DRAGON!Yeah!』

二人が構えて叫ぶ二人の体に装着され、体から煙が吹き荒れる。

「力が……安定しねえ。どうゆう事だよ!」

「わからないけど、とにかくやるしか……」

——だが、アナザービルドが誕生したため、本来のビルドやクローズの力を失いつつあるようだった。

アナザービルドは本物のラビットタンクフオームの能力である右足の無限軌道の回転によるキックをビルドへ、左足のバネによるジャンプ&キックをクローズへと繰り出す。

「まるでビルドじゃねえか!?」

するとアナザービルドはボトルを上には振り投げて飲み込み、ドライバーのレバーを回しはじめる。

「水泳選手、弓道、ベストマッチー!」

そう言ってアナザービルドはアスファルトの地面の中を泳ぎ翻弄し、飛び上がって二人に向けて矢を放ち攻撃、更に追撃の矢の攻撃を繰り出そうした。

『タイムマジンナー!』

そこへタイムマジンナーが現れ、アナザービルドを吹っ飛ばす。

「大丈夫!」

タイムマジンナーから出たソウゴが二人に近づこうとすると、突如何者が片手で制止したと思ったらビルドとクローズの動き…いや、時が止められていた。

「ジオウ。邪魔しないでくれるかな?」

そこへ、アナザービルドを作ったウールが現れた。

「僕達は新たな未来を擁立しようとしているだけだ」

「新たな未来……? ウオズが言ってたタイムジャッカー?」

「よく知ってるね!僕はクライアス社のタイムジャッカーチームのウール」

自身がクライアス社のタイムジャッカーチームだと答えると、アナザービルドの方を見る。

「あの男はさ、本当の歴史では事故に遭って選手としての道が絶たれるんだ。」

本来、彼の時間はここで止まる。その止まった時間を、僕が動かしてやったという訳さ」

「動かしてないよ」

自分のおかげで、今のアナザービルド…もとい、アナザービルドの契約者である青年の時間が動き出したと語るウールに、動かしてないよとソウゴが否定する。

「時計の針だったら、止めたり動かしたりできる。巻き戻す事だってできる。」

でも、人の人生は違う。自分が歩む未来は、自分で選ぶしかないんだ。

自分で動かさない時間は、動かないんだよ」

心の中へしっかりと刻まれていた叔父・順一郎の言葉を思い出しながら、反論の言葉を繋ぎ続けた。

「面白いことを言うね。若くてもさすがジオウだ。君がどんな未来を選ぶか、見せてもらおうよ」

ウールはここで姿を消し、再びビルド達の時が動き出した。

「行こう！」

『『ジクウドライバー！』』

『ジオウ！』

『ゲイツ！』

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

二人がジオウとゲイツに変身すると、四人が並びアナザービルドへと向かっていく。

四人が一齐にアナザービルドへと攻撃を仕掛け、最初は押していたが、ジリジリとビルドとクロローズの力は弱まっていた。

「どうやら、ここまでのようだ」

「後は頼んだぞ！」

そしてとうとう、二人の力もアナザービルドのせいで完全に失われてしまった。

「ビルドが消えた……」

2018年。現代で戦っていたビルドとクローズの方でも、同じ現象が起きていた。

「力が……」

「戦兎さんの力が消えようとしてるんだ……」

「晴夜!」

こっちのビルドとクローズの力も、アナザービルドの所為で維持できなくなっていた。

戻って2017年では、アナザービルドは再びアスファルトを液化化し潜ると、ジオウを液化化したアスファルトの中へと落とす。

「ええつ、何?」

ジオウがアスファルトの中で溺れそうになる。その隙にゲイツはゴーストウオッチを取り出す。

『ゴースト!』

『アーマータイム!カイガン!ゴースト!』

ゴーストアーマーを装着し宙へと浮かぶと、浮遊しながらアナザービルドの攻撃を避けつつ、ジオウの手を掴んで放り投げて救出した。

「何をぼけつと見てる！」

ゲイツが一人、アナザービルドへと向かっていくが、やはりあまり通じていない。

『ビルドの力がなければアナザービルドは倒すこと出来ない』

「そうか！」

その時、ウオズが言われた事を思い出したジオウはビルドウオッチを取り出す。

「それを使うと言う事は、君はビルドの全てを背負わなければならない」

「また出た!?…って、なんでここに!?ここ2017年なのに！」

「そんな事より、君はビルドの全てを背負える覚悟はあるか？」

ヌツと出て来たウオズがそう言うと、手元のビルドライドウオッチを見つめるが、彼はウオッチを前に向けて起動スイッチを押す。

『ビルド！』

「望むところだよ！」

ビルドウオッチをドライバーに装填しロックを解除、ドライバーを回す。

『アーマータイム！』

すると前から『ビルド』と文字が現れ、半透明のフルボトルと一緒にビルドのような

アーマーもポーズを決めながら出現。アーマーが分解されるとジオウの体へと装着される。

『ベストマッチ!ビル・ドール!』

ジオウの姿は、複眼には「ビルド」と描かれ、両肩は赤と青のフルボトルのような大型デバイスが装着されており、右腕には大型のドリルを装備していた。

「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え、過去と未来をしろしめす時の王者。

その名も、仮面ライダージオウ・ビルドアーマー。

まず一つ、ライダーの力を継承した瞬間である!」

ウオズがビルドの力を継承した事を喜ぶと、戦兔がジオウの隣へ近づき、耳打ちをする。

「勝利の法則は決まった!」

「決まったー!」

どうやら先程の耳打ちは「勝利の法則は決まった!」を同時にやろうとしたが、うまくいかなかった模様。

そのままジオウはアナザービルドへと向かっていく。

ビルドアーマーを装着したジオウの攻撃はアナザービルドに効いていた。やはり、ビルドの力がアナザービルドには有効なようだ。

それを見てゲイツはゴーストアーマーを解除すると、弓の形状をした赤い武器を出現させる。

『ジカンザックス！ You！ Me！』

ジカンザックスを構え、アナザービルドが潜ろうとした寸前にエネルギーの矢で攻撃し、潜らせないようにする。

「なんか、いける気がする！これを回せばいいんだよね！」

ジオウがビルドドライバーを回すモーションを取ると、白い文字で「方てい式」「よくわからない式」「理解不能」「ラッキーナンバー×ラッキーナンバー」「xとyがいつぱい」「1年生のときに習ったやつ」と書かれたもの出現した。

「…なんか、違くねえか？」

「最悪だ〜」

ビルドが必殺技を出す時に出る奴と違う事に龍我は小首を傾げ、戦兔は最悪だと呟く。

『フィニッシュタイム！』

そう言ってる間にドライバーを回すと、ゲイツもクローズのウォッチをジカンザックスに装填する。

『フィニッシュタイム！』

『ボルテック タイムブレーク!』

ジオウはグラフを出現させて滑走し、右腕の大型ドリル『ドリルクラツシャークラツシャー』でアナザービルドを打ち上げる。

『ギワギワシュート!』

ゲイツもジカンザックスによる攻撃を放ち、蒼い炎で造られた龍状のエネルギー体を空中で身動きが取れないアナザービルドへぶつける。

そこへ落ちてきたアナザービルドをドリルクラツシャークラツシャーで貫き、撃破。それによってアナザーウォッチも砕け散り消滅し、バスケツト選手も元に戻った。

「……なんだったんだ?」

目を覚ましたバスケ青年は本来の歴史とは異なり、事故には遭わずに済んだようだ。

「アア……ッ!?——」

その頃、現代でもアナザービルドは綻び始め、そして消滅した。

「戻った!」

「どうやら、倒せたみたいだな」

「時見君がやったんだ」

アナザービルドが消え、晴夜と龍牙の力もうまく維持できるように戻った。

2017年ではアナザービルドは消え、戦兎と龍我はソウゴから去ろうとしていた。

「なぜお前がビルドウオッチを持っていた？」

「晴夜達から貰ったんだ」

「でも、彼らは違う。違う奴がウオッチを持つてるはずがないだろう」

ゲイツの言う通り、持っていたのは晴夜と龍牙だが、一緒に戦ったビルドはまた違う。

「そうか……」

しかし、ソウゴは『戦兎さんよろしく』の意味が何かと察し、急いで戦兎と龍我に近づく。

「これ、持ってもらえるかな？ 戦兎」

そう言つて二人にブランクウオッチを渡す。だが戦兎は怪訝そうな顔でソウゴを見つめる。

「戦兎？ 僕は葛城巧だ。……このデバイスは何だ？ 背景技術は？ 非常に興味深い！」

「おい、巧！」

二人はブランクウオッチを受け取り去っていくが、二人の感じが先までと違って、事にソウゴは首を傾げた。

「おい、何がどうなってるんだ?」

「俺が分かるわけないだろ?」

「……でも、きつとあれが未来でビルドウォッチになるんだ。」

歴史が変わっても戦兔はビルドになる道を選ぶし、龍我はクローズになる道を選ぶ。

そして、あのウォッチが晴夜の元へ渡る。そんな気がする」

戦兔と龍我がいずれ再び仮面ライダーになり、晴夜の元へやってくると信じて彼等に
ブランクウォッチを手渡したのだった。

ソウゴとゲイツはタイムマジンに乗り、タイムマジンで戦兔らに手を振りながら、元の時代へと帰っていった。

現代に戻ったソウゴは、晴夜に戦兔に会ったことを話そうとする。

「戦兔さんには、会ったか?」

「うん。あの人にウォッチを渡したんだ」

そう言うのと晴夜に、ビルドとクローズのウォッチを返そうとする。

「それは、お前が使い。戦兔さんもお前に使って欲しいから俺に渡したんだ」

「……わかった。使わせて貰うよ」

ソウゴはビルドウォッチを託された。

「ええ〜!!? プリキュアって他にもいるの!」

一方はなは、マナから自分以外にも沢山プリキュアがいると教えられる。

「私……大丈夫かな……」

「大丈夫!なんとかなるよ!」

心配するはなに、大丈夫だとマナが励ましの言葉を投げ掛ける。

「……うん、私頑張ってみる!」

「うん!もし何にかあったら、また助っ人に来るよ!」

しばらくして晴夜達は帰っていき、二人が彼らを見送っていく。

その様子をゲイツ達三人は、ただ黙ってソウゴを見ていた。

「どうした?」

「あの時、ジオウが私達を守るなんて思いもしなかった」

「……なあ、ほんまにあんな奴が魔王になるんか?」

「奴はビルドウォッチを手に入れ、オーマジオウへと歴史が進んでいく」

「何処に行くんや?」

「俺達がやるべきは、ただ一つだ」

翌日、ラヴェニール学園。

はなとソウゴは昨日の事件の事は誰も覚えていない事と、アナザービルドに吸収された生徒も何事もなかったかのように雑談を繰り返していたのを見て、安心感に包まれていた。

「ビルドの力か……」

「ソウゴ君。それ何?」

「えっ?何でもないよ!」

ソウゴは横から覗き込んできたさあやにそう誤魔化し、ビルドウォッチをしまい込む。

「皆さん、おはようございます。え、この教室にまた二人、転校生がやってきます」

「転校生……」

教室に入ってきた先生から転校生と聞き、ソウゴは今度は誰かと思っていると、二人の生徒が入っていた。

「ああっ!!?」

入ってきた二人を見て、ソウゴとはなが驚く。

「ツクヨミです。宜しく!」

「明導ゲイツだ」

転校生の正体はゲイツとツクヨミだったのだ。

「かくして、ジオウはビルドの力を得た。彼の歩む覇道は始まったばかり。しかし、次なるレジェンドと出会う前に、また新たな誕生日が彼を待つ」

次回！Re・HUGつとジオウ！

第3話 幼馴染が天使に！アナザーライダーの謎

2018

第3話 幼馴染が天使に！アナザーライダーの謎 20

18

——とある場所で、一人の少年と一人の少女が対峙していた。

「だめだったみたいじゃない？ ウールが擁立しようとした、仮面ライダービルド」

「オーラ、なんで本部の君がここに？」

ウールの前には今、水色の服を着てホワイトピンクな羽飾りを黒い髪に着けた少女——
「オーラが腕を組みながら立っていた。」

「社長に頼まれたのよ。この時代に行けっつね」

「ちよつと、邪魔が入ってね」

「邪魔？ 誰に？」

「ジオウだ」

「わざわざ来たの？ほんと、めんどくさいジジイ！」

「そつちじゃない、若いジオウ。まだ化け物じみた強さじゃないけど気をつけるんだね、
オーラも新しい時の王者の候補を探してるんだろ？」

「ご心配なく。私は私で、とっておきを仕込み済みだから」

時は2016年。

そこには、一人の少年が担架で救急車へ運ばれ、それを心配そうな表情で付き添う父親の姿があった。

救急車へ少年が詰め込まれたとき、突如父親以外の時が止まる。

唐突な超常現象に困惑を極める父親の前に、オーラが姿を見せる。

「誰だあんた。何が起こってるんだ!」

「私はクライアス社タイムジャッカーチームのオーラ。あなたに、ちよつとだけ悪い知らせと、めちやくちやいい知らせがあるの!」

二人で何か取引のようなことを話すと、オーラは黒いウオッチを取り出しボタンを押す。

『エグゼイド……!』

彼女はそのまま、そのウオッチを父親の体に入れる。

すると父親の姿を心電図のような線が入ったゴーグルと、ピンク色の頭部を持った怪人へと変貌させられ、胸部には“EX-AID”と刻まれた。

「おめでとう。今日から貴方が仮面ライダーエグゼイドよ!」

現代、2018年。

ラヴェニール学園ではこの間の事件——プリキュアが怪物を倒した話が周りで騒がれていた。

「言いたくても……ああ〜ヒーローは辛いぜ!」

はなはハリーとの約束でプリキュアのことは言つてはいけなないと止められていたが、自慢したいという思いがいつぱいだった。

「元氣だな、野乃さんは……」

「時見君、大丈夫……?」

声のした方を向くと、席でぐったりしているソウゴがいた。

「大丈夫というより……視線が痛い」

「視線……? あっ」

チラッと見た方に目を向けると、教室のドアから彼をジッと見つめるゲイツとツクヨミの二人の姿があった。というより、今日一日、二人に行動を全て監視されソウゴはかなり疲れていた。

「あ〜……あつ、そうだ。薬師寺さん、図書室つてどこにあるの?」

はなはソウゴの隣の席に座る、薬師寺さあやに話しかける。

「案内しようか？」

「えっ、いいの？」

「もちろん」

「委員長。このプリント」

するときあやの前にクラスメイトのひなせが現れた。

「先生に提出するのね。後でクラス日誌を渡す時に一緒に渡しておくね」

「サンキュー、委員長！」

「どういたしまして」

プリントをさあやに渡して去っていく。

「薬師寺さんって本当優しいね」

「委員長には誰にも優しくして！」

「学園の天使と呼ばれているんです」

今度はクラスメイトの女子二人が現れ、さあやの良さを話す。

「そのうえ、かわいいい♪」

二人に煽てられたさあやは顔を赤くする。

「ソ、ソウゴ君も一緒に行く？」

「あ……ごめん。俺今日はちょっと用があるから、先帰るよ」

さあやを誘いを断り、ソウゴは鞆を持って教室を出て帰宅した。

その後、さあやははなに図書室の場所へと案内した。

「はあく」

道中、はながさあやの顔をジッと眺める。

「えっ?何?」

「確かに、かわいい」

「褒めないで……わたしそんな……」

彼女にも褒められ、さあやはまた顔を赤くする。

「後、薬師寺さんと時見君って仲いいんだね」

「えっ!?? あ……ソウゴ君とは幼馴染だから……」

「へえ〜」

図書室へと着くとはなも中に入るのは遠慮し、帰宅していった。

その頃、どこかへ向かおうとしていたソウゴの後を、ツクヨミとゲイツが着いていき
ていた。

矢張りずっと尾行されるのは気分が優れないので、話しかけて一緒に歩いてくれるよ
うにする。

「……まさか、おれと同じ学校に編入するとは思わなかったよ」

「本当に授業するわけないだろ、おめでたい奴だ」

「違うの？」

授業するわけでもないのに、どうして編入したのだと思っていると、ツクヨミがその理由を語る。

「あたしたちが未来から来たって言っても、ここでは説得力に欠けるでしょう。中学生ってことにしたいほうだが、活動しやすいと思つてね」

「忘れるな。俺はお前を消しに来たんだ。」

今はお前がオーマジオウとなる確信を掴むまで、見張つてるに過ぎない」

「そのために制服まで用意して……大変だね」

苦笑しながら言うと、ゲイツがソウゴの顔を掴む。

「今すぐ倒してやってもいいんだぞ？」

ソウゴに対するゲイツの敵視はまだ強いようだ。

そのままソウゴ達は、ハリーのいる大きな木樹の下へと到着した。

「はぐたん……!!?」

既にはなが来ており、はぐたんを抱きしめていた。

「お待たせ」

「はぐたん、今日も元気だね〜」

「きやあ!」

ソウゴもはぐたんの顔をこちよこちよとする。

はぐたんは笑顔が溢れており、それを見たはな達は思わず笑みを浮かべる。

「それで、ここは何するの?」

「フッフ〜ここはな、俺らの家や〜!」

「えっ?」

「ここが家……」

ここが家と言われても、木の太樹しかないここに? …と、二人は困惑した顔を出す。

「はな、ミライクリスタル出しや」

ハリーが持ってきたトランクを漁ると、はなにクリスタルを出してと言う。

しばらくして、ハリーのトランクからミニチュアのハウスが出てきた。それを放り投

げるとクリスタルが光り、ミニチュアが綺麗な一軒家と変わった。

「ミライクリスタルが、あればこんな事も出来るんや〜!」

ミニチュアのハウスがこんな立派なものになるなんて、とソウゴとはなは驚きのあま

り声を出せずにいた。

「それだけいやないで、ハリーイケメンチェン〜ジ！」

ハリーが叫ぶと、ルックスもかなりイケてるイケメン男性へと変わった。

「おお……」

「どうや」

「はあ、なんか驚き疲れたよ」

「ハリーって本当凄いな」

ハリーのチェンジに驚くがそれはさて置き、ソウゴ達はハウスの中へと入る。

「うおおお〜！ 広い!!？」

二人はハウスが見た目だけでなく中も広く、家具も綺麗な事に驚く。

「中々のもんやろ、ツクヨミとゲイツの部屋も用意してあるで」

「ありがとうハリー」

ハウスの中には、ゲイツとツクヨミの部屋も用意してあるようだ。すると、急にはぐたんがぐずりだした。

「よかった」

「やっぱり、おむつやったな」

「野乃さん、上手だね」

その後、はぐたんのぐずりも収まり静かに眠りについた。

「ねえ、ハリー質問。あの怪物は何なの?」

一息ついていると、この間の怪物がなんなのか気になったはなが質問を投げ掛ける。

「あれは、オシマイダー。クライアス社が生み出した化けもんや」

「クライアス社……?」

「それとハリー達が戦ってるの?」

「そうや。奴らが世界をめっちゃくちゃにした悪者や」

ハリーがそう答えると、ツクヨミがクライアス社の事について補足するように語る。

「奴らの狙いはミライクリスタル。それが奪われると世界から時が止まる」

「時が止まる……」

「それって、どういう事?」

時間が止まると聞いてもわからんって顔をする二人に、ハリーとツクヨミが呆れた表情になる。

「誕生日やクリスマス、お正月すら来ないんや」

「えっ!めっちゃつく!?!」

「そんなの俺やだよ!?!」

それを聞いて、時間が止まると楽しみが無くなるのだとようやく気づく。

「それに、はぐたんも大きくならんへん」

時間が止まると言うことは、人の成長も止まる事と同じ。それだけは絶対ダメだとハリーは強く思い出す。

「あ、俺も質問があるんだけど。あのアナザービルドって何なの？」

この間ソウゴの前に現れた、アナザービルド。

何故、あのライダーが現れると、戦兔と龍我が力を失ったのか気になっていた。

「それはな……」

「あれもクライアス社が作ったライダーだ」

離れた所で座っていたゲイツが、ソウゴの疑問に対して口を開き、立ち上がる。

「ゲイツ……」

「この世界には、プリキュアと違う存在、18人の仮面ライダーがいた。お前が会ったあの仮面ライダービルドも、その一人だ」

18人の仮面ライダー。

そんなにいるのだと知り、更に桐ヶ谷晴夜もその一人だと知って少し驚く。

「晴夜が……」

「でも、桐ヶ谷晴夜と桐生戦兔ではビルドの力の部分が違うから。多分、あなたは桐生戦兔の力を受け取ったんだと思う」

「そうなんだ……(だから、晴夜はビルドとしての記憶が失われなかったんだ)」

だがこの時代に戻った時、桐生戦兔がビルドの記憶を失ったにもかかわらず、桐ヶ谷晴夜はビルドの記憶を失われなかったのは、その為だったからだと気づく。

「話を続けるね……私達の未来、クライアス社の会長でもあるオーマジオウ……彼の持つウォッチを研究し、作り上げたウォッチ。それを使って生まれたのが、アナザーライダー」

「クライアス社は、オーマジオウが持つ18のライドウォッチからアナザーウォッチを作り出した」

「そしてアナザーウォッチを使って、あんな悍ましいもん……アナザーライダーにしてしまおうや」

「しかも、それだけじゃない。アナザーライダーが誕生すると、本来のライダー達はライダーの力も奪われ、次第にライダーとしての記憶も失くしていく」

「記憶が……」

「酷い……人の力を盗むなんて……」

アナザーライダーの誕生は、そのライダー達の力までもなく、彼らが生きてきた歴史すらも変えるものだと言われる。

「ねえ、ツクヨミさんが言う、そのオーマジオウって……」

「そいつだ」

三人の会話から出てきたオーマジオウが誰なのかと聞くはなにに対してゲイツは、そいつが「そう」だと示すように、ソウゴへ指を差す。

「えっ？時見君が」

「俺……」

「こいつはいずれ、最低最悪の魔王……オーマジオウになる。」

だから、俺はお前がオーマジオウへとなろうと思った瞬間……倒す」

いずれ最低最悪の魔王になると話し、ゲイツが怖い眼差しでソウゴを睨む。だが一方のソウゴは涼しい顔をしている。

「でも、やる事は決まってる」

「やる事だと？」

「そう。俺、どつちにしろ王様になるし♪」

「何……？」

彼は魔王になると言われても、王から離れる気はないようだ。

「でも、俺が目指す魔王は三人が言うのじゃない。最高最善の魔王になる！」

「王様……めちよっくかっこいい！」

「でしょ！王様ってやっぱりかっこいいよね♪」

王様になると宣言するソウゴに、はなも目を輝かしてカッコいいと言い、お互いに意気投合するような仲になる。

「そのためにも、ミライクリスタルとライドウオッチを集めるって事!」
「待て」

ミライクリスタルも、残りのライドウオッチも集める気ではいるようだが、それを聞いていたゲイツが声をあげて制止する。

「貴様のやるべき事がわかったが、俺はお前がジオウである限り、いずれオーマジオウへとなるのかもしれない」

「だから、三人は俺を監視するんでは。わかってるよ」

「……ふん、忘れるな。俺達はお前もクライアス社と同じ、標的としか思っていない」
「ちよつと、ゲイツ!」

そう言ってソウゴに近づいたゲイツがど突く様に彼を軽く押すと、ツクヨミの声も聞かずに何処かへ行ってしまった。

「すまん、ゲイツはちよつと気の短いところがあるんや」
「気にしてないよ」

「……ねえ、ゲイツ君はなんでそんなに、ジオウとクライアス社を?」

ハウスから出ていってしまったゲイツを見ていたはなは、どうしてそこまでクライア

ス社やオーマジオウを恨んでいるのかと聞く。

「私達の時代、あなた達から言えば50年くらい先の未来……私達はクライアス社の暴走を止めるために戦っていた」

ツクヨミは自分達の時代で起こった事を語り始める。

「私とゲイツに未来のプリキュア達は、レジスタンスのみんなと一緒に奴らと戦ってた。けど、クライアス社の罠に掛かって……私とゲイツ、ハリー以外は、みんなオーマジオウにやられた」

その時の事を語りながら彼女は、唇を噛み締めながら思い出す。クライアス社から逃げて、三人だけ生き残ってしまったことを……

「そこで、ゲイツはクライアス社から奪ったタイムマジンを使って、ジオウの誕生を防ごうとこの時代に来たの」

それを聞いたソウゴは、あの時ゲイツがタイムマジンで襲ったのは、その為だと考える。

「そうなんだ……じゃあ、俺は恨まれてしょうがないよね」

「でも、今のソウゴを見て私は、ソウゴは私達を知るオーマジオウになるのかわからなくなっただの……」

「せやな、今のソウゴがオーマジオウになるとはあんまり思わへんな」

「ありがとう」

しかし、この間の戦いでツクヨミとハリーは、オーマジオウとは何か重ならない所があったことを思い出し、今の所はオーマジオウにならないと判断していると語る。

「けど、ジオウのことはともかく……プリキュアならみんなの未来を守る」

「うん、クライアス社に対抗するためにもライドウオッチとクリスタルを集める必要があるわ」

「こっちはプリハートは三つ。まずは一緒に戦う仲間探しやな」

ハリーはそう言うと、テーブルにはプリハートが三つ置かれていた。

すると、はながはぐたんを抱いて立ち上がる。

「クリスタルとウオッチを集めるのは頑張るけど、プリキュアは私一人だけでいい。はぐたんは私が守る」

「なっ、何やて!」

「ちよつと!あなた一人であつて……」

いきなり自分一人でいいと言う彼女の言葉を聞いたハリーが驚き、またネズミへと戻ってしまつた。

「それに、一人の方がかつこいいじゃん!」

能転気な顔でグッジョブとしながらかつこいいからと宣い、二人はガクツとなる。

「大丈夫だよ。俺も居るし、ゲイツも居る。何とかなるよ!」

こっちもこっちもで能天気なグッジョブとサインを出す。

「なんとかって……不安しかないんだけど……」

「ホンマにこいつあの、オーマジオウになるんか……」

二人は今のソウゴを見て、本当にオーマジオウになるのかと想像ができないうた。

一方、ゲイツもハウスのベランダで自分のゲイツウオッチを見つめていた。

「トウモロ……みんな」

そしてウオッチを見ながら思い出す。自分が、みんなを助けられなかつた事を……

「必ず、クライアス社を……オーマジオウを倒してみせる!」

改めてオーマジオウを倒すと決意し、ウオッチを強く握る。

そして翌日。図書室でさあやが、メガネをかけながら何かを書いていた。

「うん」

「さあや」

そこにソウゴが現れ、さあやの書いているものを横から覗き込む。

「ソウゴ君、どうしたの?」

「ちよつと、寄り道」

「また、先生に呼ばれたんでしよう」

また先生に呼ばれたのかと言われて、そこは否定した。

「学校新聞か、今度はどんなネタを掴んだの?」

書いていたのは、学園に載せる学校新聞だった。

「…うん? 何これ?」

ソウゴが新聞を読んでいると、部活の紹介や学校の連絡の他に、違った記事が書かれていた事に気付いた。

「ああ、これ。最近噂にある『クリア出来ないゲーム』って話題なの」

「クリア出来ないゲーム?」

「うん。凄腕の人が何度も挑戦しても、中々クリア出来ないだつて」

「へえ…:…ん?この『天才ゲームM』って誰?」

「学園のみんなの話によるとね、世界的に凄いゲームの達人らしいの。でも、最近は姿が見えないんだつて」

「何やってるの?」

そこへはなも図書室へと現れ、さあやが学校新聞を書いている事に気づく。

「うん。プリキュアのことでも書こうかな?」

「いいねそれ！どんどん書こう！プリキュア！」

はなは自分の事を書いてくれると思いい、テンションが上がるが…

「野乃さん。ここあんまり騒ぐと」

「こらそこ！静かにしなさい！」

「すみません」

「だから言ったのに」

図書室の先生に怒られたはなは顔を机に置き、口をひし形にして落ち込み始める。

その様子を見たさあやは、彼女の姿がある生き物に見えた。

「野乃さん、マウテンブルーに似てる…」

「マウテンブルー？」

「マウテンブルーはスズメ目ツグミ科の鳥で……」

どんな色なんだそれ？ブルーっていうから青かな？という疑問が浮かんだソウゴの横で、そう思ったら吉日と言わんばかりに、さあやは手持ちのノートパソコンを操作し、マウテンブルーを検索する。

「あつた！」

目当てのものを見つけたさあやは、青い鳥であるマウテンブルーバードの画像を見せる。

「……似てる?」

「うん!すごくかわいいでしょ♪」

「パソコン得意なんだね」

「得意ってわけじゃないよ。さあやの場合は」

「うん。私は知らないことを探してわかるのが楽しいから」

「そういうの新聞で書いてみたら?」

「えっ?ダメだよ。みんな興味無いと思うし……」

はなの提案にさあやは、皆はこういった話に興味ないだろうから、と言うが…

「え〜?私は読みたいけどな」

「えっ、そう……?」

「いいんじゃない? さあやの良いところを、みんなに知ってもらおうのも」

「そうかな……」

「ねえ、もしプリキュアの事を書くならイラストで書いていい?」

はなが頼むとさあやも了承し、イラストを書いてさあやに見せる。

「できた〜♪」

「わあ〜上手!」

「野乃さん、絵が得意なんだ」

はなの書いたイラストを載せ、学校新聞は完成した。

場所が変わって巨大なビル、クライアス社では。

「早くミライクリスタルを手に入れるー！」

「はい。次こそ俺ちゃんやっちゃいますから」

そこにはこの間、学園でオシマイダーを生み出したチャラ男——チャラリートがおり、更にその上には上司らしき人がいた。

「それは頼もしいですね」

「ご心配なら、私がつきましよう」

「オーラ……」

チャラリートの後ろから、タイムジャッカーチームのオーラがあらわれた。

「頼もしい助っ人ですね。オーラ君頼みますよ」

「わかりました」

「…チツ。見てろ、プリキュアにジオウ」

クライアス社が再び動き出そうとしていた。

ハリーのハウスでは、はぐたんを抱いてはなが寝ていた。

だがその時、彼女は夢を見ていた。

みんなを守るために戦い。

そして、みんなが消えていく夢を――

「あつ……何、今の夢……?」

「はぎゅー!はぎゅー!」

「ああ、ごめんねはぐたんねちやつてた〜」

泣き出したはぐたんに慌てると、ドアが開く音が聞こえた。

「うん?野乃さん?」

ドアから現れたのはさあやだった。

それから事情を聞いたさあやは、はぐたんのお世話を一緒に手伝う。

「おおくすつごいいニコニコだ」

「はぐたん。フフフ……」

さあやに抱きしめられ、はぐたんも機嫌を取り戻した。

「はぎゅー!」

今度ははなが抱くと、また泣き始めた。

「なんで？」

自分が抱くと泣き始めることに戸惑う。その様子をネズミの姿のハリーが見ていた。

「あかん！なんとかせつと……よつと！」

ハリーはトランクから哺乳瓶とミルクの粉を取り出した。

「誰？ミルク？」

「ネズミ。グツジョブ！」

「ネズミ!?？」

哺乳瓶とミルクの粉が置かれていることに気づき、さらにネズミと聞きさあやが驚く。

「ああ……いやいや、なんでもないよ。だけど作り方がわからないね」

「わからない時は調べよう」

さあやがパッドを取り出し、ミルクの作り方を検索する。

「まずは哺乳瓶を熱湯で消毒して」

パッドで見たことを始め、ミルクを作り始める。

「はぐたんの事驚かないの？」

「信じてもらえないかもしれないけど」

実はさあやも1ヶ月くらい前。はながこの学校に転校してくると聞かされて先生に任された時、赤ちゃんの声が聞こえた瞬間、時間が止まった事があったらしい。

(同じだ…)

「よくわからないけど、声が聞こえたほうに行くと、いつも野乃さんに会うの」

さあやはよく声が聞こえていた方に行くとはなと会っていたと、彼女にその事を打ち明かす。

「はあ、やっと終わった。早くハリーの所に行かないと……」

同じ頃、ソウゴは日直の仕事の為に帰るが遅くなり。先生に日誌を渡した後、鞆を取りに行こうと教室へと向かっていた。

「青い鳥……プリキュア……イけるじゃん」

その道中、さあやが作った学校新聞に、一人の女子生徒…輝木ほまれがそう呟きながら目に留めていたのを見て、思わず笑みを浮かべていた

「…あれ、小和田?まだいたの」

「時見か」

教室に入ると、そこには同じクラスメイトの小和田がおり、机に足をのっけながらゲームをやっていた。

「お前、もう下校時間過ぎてるけど」

「これやってんだよ、まだ誰もクリアしたことのない無理ゲー！もう少しでクリアできるんだけど……」

「小和田、ゲーム得意なんだ。王室のコンピュータールームは、君に任せた！」

「お前まだそんな事言ってるのかよ」

小和田もソウゴの夢の事を知ってる為に、呆れた顔を浮かべながらそう言うと、ゲーム画面へと再び顔を向けた。

そのままソウゴは帰る支度をする、小和田のゲーム機から強烈な光が発生した。

「小和田……ッ！」

いきなりの閃光に、目を守ろうと瞼を閉じてしまう。

光が収まったのを感じて目を開けると、小和田が刺々しい装甲と皮膚の様な部位に発疹のような模様をまばらに持つピンクの怪人に抑えられているのが見え、小和田はそのまま倒れる。

「小和田に何をしたの？！」

ソウゴが怪人に殴り掛かるも、簡単に避けられる。

しかし怪人の姿を見て、アナザービルドと似ている事に気づく。

「アナザービルドの仲間か！」

『ジクウドライダー!』

ジクウドライダーを取り出し装着しようとするが、またゲーム機が光り出すと怪人の姿が消えていった。

「小和田!しつかりして!」

ソウゴは倒れていたクラスメイトの小和田を介抱する。

すると、ツクヨミとゲイツが教室のドアを開け入ってくる。

「ここにいたか!」

「どうしたの?」

「アナザーライダーだ……」

アナザーライダーに襲われた事を二人に話す。

その頃ハウスでは、ミルクを与えられたはぐたんが機嫌を取り戻していた。

「私にできないことがあなたにはできません。力を合わせれば素晴らしいことができるでしょう。」

尊敬している、マザー・テレサの言葉なの」

さあやははぐたんを抱きながら、はなにマザー・テレサの言葉を語る。

「野乃さんや……ソウゴ君は自由な発想があつて、なりたい未来があつて……私には何

もない」

「みんなに優しくできないじゃない」

「それくらいしかないの。野乃さんやソウゴ君みたいに、勇気が持てないの」

「薬師寺さん、いや……うーん」

「委員長でいいよ」

「委員長と話してるんじゃないよ」

委員長と呼んできいと言いが、はなは委員長としてのさあやではなく、一人の少女であるさあやと話していると返す。

「だって、誰かに優しくするなんて、すごく勇気がいることだもん。褒められたら『ありがとう』だよ」

「あつ……」

「未来は無人大だよ」

はなの言葉を聞いて、さあやは何かを感じる。

その時、外ではチャラリトとオーラがトゲパワワの計測機で何かを探していると、道路で車がぶつかって揉めてる会社員二人を見つけた

「フーン、トゲパワワ発見」

さあ、プリキュアあらわれる。ネガティブウエーブ!

チャラリートが変なポーズを取り、二人に向けてイガイガなオーラが放たれる。

「発注!!? オシマイダー!!?」

そこから会社員が付けるような社員証を首にぶら下げ、腕がクレーンの様になったオシマイダーが現れた。

——その数時間前。倒れた小和田を病院へと運んだソウゴは、病気の原因を医師から聞かされ、病室から出てきた。

「どうだった?」

病室の外ではゲイツとツクヨミの姿があった。

「……………最近でも小和田のような患者が増え続けるし、原因もわからないって……………」

小和田のようなケースの患者が後を断たないらしく、治療法もないらしい。

「あれは病気なんじゃない……………小和田も、他の患者さん達もあのアナザーライダーにやられたんだ! 早く探さないと次の被害者が出る!」

「探さないと……………どうやって?」

「手当たり次第、走り回ってでもやるしかない!」

「待て!」

アナザーライダーを探そうと足を動かすが、ゲイツに止められる。

「お前はこれ以上、この事件に関わるな。」

アナザーライダーを追えば、お前がジオウの力を使い、また過去のライダーから力を奪う可能性が出てくる」

「奪うなんて……そんなつもりは……」

「お前がビルドの力を得て、桐生戦兔のビルドが消え、オーマジオウへの道を歩み始めた。それが事実。とにかく関わるな」

「そういうわけにはいかないよ。眼の前の困っている人や友達を放っておけるわけないだろう？」

そういう気持ち、ゲイツにはないの？」

ゲイツはその言葉に、ソウゴの襟をつかみ、怒り交じりの震える声で答える。

「あるさ……感情を枯らす程にな……！」

その時、辛い記憶が脳裏をよぎった。

クライアス社の攻撃により、一緒に戦っているプリキユアが一人、また一人と倒れ、自分の額に押し当て泣く姿を――

すると空が怪しいピンク色へと染まり、不穏な空気が漂い始める。

「これって……」

「オシマイダーが現れた!」

辺りの様子が変わっていくのを感じた三人は、オシマイダーが現れた事を察し。急いで病院を出て、オシマイダーが現れたと思われる所へ向かった。

異変に気付いたはなとさあやは既に到着し、オシマイダーが暴れているのを目撃した。

「野乃さん!」

タイムングよくソウゴ達三人も到着した。

「時見君!ゲイツ君!」

「さあや!!? なんでここに!」

「ソウゴ君こそ、なんでここに!」

ソウゴは、はなと一緒にさあやがいる事に気づく。

「やはり、オシマイダー……」

「あつ!あれって……」

更にはオシマイダーの足元に、さつきソウゴの前に現れたアナザーライダーの姿もあつた。

「アナザーライダー……探す手間が省けた」

ゲイツが腕のホルダーにつけてあるゲイツウオッチを外した。

「……ツクヨミ、さあやを守ってあげて」

「わかった。こつちに……」

ツクヨミがさあやをここから離そうと誘導する。

「ソウゴ君は……」

「大丈夫、あいつは俺が止める。絶対に守るよ」

「あっ……」

「行くよ！」

『ジクウドライバー！』

ソウゴとゲイツがジクウドライバーを装着すると、はなも前へと出る。

「さあやちゃん。私、プリキュアなの！」

自分がプリキュアだと明かし、プリハートを取り出す。

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

ミライクリスタルをセットし、白い二重のハートが刻まれた画面の下の部分をスライドさせてハートの形にすると、ピンク色に輝き光が体を包んでいく。

「ぎゅう〜〜！」

髪を大きくなびかせながらミライクリスタルを掴むと、今度は二重のハートが黄色に

なり。そこから光が溢れてウェーブのかかった薄いピンク色のロングヘアへと変わり、サイドをまとめたシニヨンに赤いリボンに白い花が現れる。

「ぎゆう〜〜!」

ミライクリスタルをタッチすると、今度はハートが水色になり光が溢れ出し、メイクされ両耳に緑のクローバーのイヤリングが現れる。そして頭にピンクのハートのアクセサリー、後ろの腰に大きい薄いピンクのリボンが装着され、ミライクリスタルが装着されたプリハートを腰に付いたポーチへと入れるとカバーが閉じられる。

「輝く未来をく抱きしめて!!みんなを応援♪元気のプリキュア!キュアエール!」
最後に彼女はポーズを決めて、キュアエールと高らかに叫ぶ。

「野乃さん……」

さあやがキュアエールと変身した事に驚く。

そして、ソウゴとゲイツはウオッチを回し起動させる。

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

ウオッチをドライバーに装填してロックを解除すると、ソウゴの後ろからは時計が、ゲイツからデジタルタイマーが出現した。

「変身!」

その叫びと同時にドライバーを回転させる。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

仮面ライダーへと変身した二人は、ジカンギレードとジカンザックスを持ち、エールと共に向かっていく。

「ソウゴ君が……仮面、ライダー……」

エールがオシマイダーへと立ち向かう。

「あなた達に、未来は渡さない！」

そう言って攻撃しようとする、オシマイダーの腕がクレインのように伸び縮みをし、エールの攻撃が躲された。

そのまま両手で彼女を潰そうとするが、エールは手に力を溜め攻撃を止める。しかし、いつまで持つかは時間の問題だった。

「絶対、未来は守る！」

それでもエールは必死に抑える。

一方、ジオウとゲイツがアナザーライダーに向かうが、アナザーライダーには二人の攻撃が効いていなかった。

「効かない……」

「やはり、アナザーライダーか……」

どのライダーの力なのかわからないため、二人はアナザーライダーに苦戦を強いられる。

そしてさあやは、その光景を見ている事しか出来なかった。

『なんでもできる!なんでもなれる!未来は無限大だよ!フレー!フレー!さあやちゃん!』

「……なんでもできる、なんでもやれる」

だが彼女は、はなの言ったことを思い出す。

その時、抱いていたはぐたんから青い光が放たれ、さあやの手に置かれた。

「ミライクリスタルが生まれた!」

「今や、プリキュアになるんや!」

「ツ!?…私に、そんな事が出来るのかな……?」

ハリーからプリハートを渡されたさあやは、目の前で繰り広げられる戦いと、コレを手にした場合に体験であろう未知の世界に躊躇してしまふ。しかし…

「——ううん、できるよね……わたしの中にもきつと、勇気が……!」

巨大な怪物にも、不気味な怪人相手にも勇敢に立ち向かうはなやソウゴ達の姿。そして『未来は無限大だよ』という言葉により、彼女の決意は揺るぎないものへと変身した。

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

さあやがプリハートへミライクリスタルをセットすると、彼女の体が光り、服が変わり始める。

徐々に変化していく彼女の今の姿は、エールと同じくらいシースルーの袖があるが、エールのそれより丈が長く肘くらいまでである。

「ぎゅう〜」

ミライクリスタルを再度タッチすると、髪の毛のボリュームが増え、薄い水色のアップ髪に変わる。

「ぎゅう〜」

更にもう一度ミライクリスタルをタッチ。顔にメイクが施されると、ミライクリスタルの付いたプリハートを腰に付いたポーチへと入れるとカバーが閉じる。

「輝く未来を抱きしめて！みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュー！」

白と水色の服に、頭部や肩に羽の飾りがあしらわれる等、その名の通り天使を思わせるコスチュームへと変わったさあや…キュアアンジューが誕生した。

「変身できた……」

「キュアアンジュー！！？」

「さあや、なんかよくわからないけどすごい事だよ！」

「あの委員長……なったのか」

みんなはさあやが変身出来た事に驚く。

「フレ!フレ!ハート・フェザー!」

プリハートを操作したアンジユは唱えながら手を胸の前で組み、大きなハートを描いて青いバリアを放り、クレーン型のオシマイダーの攻撃からエールを守った。

その時、アナザーライダーがアンジユへと襲いかかるが、ジオウが前に現れてアンジユを守った。

「さあや、大丈夫!」

「ソウゴ君……ありがとう」

「ここは、俺に任せてあっちをお願い!」

「うん!」

アンジユはエールの方へと向かう。

「クレーンは重心が高いから、足元を狙えばバランスを崩すわ」

「へえ〜」

「なるほど、なら……」

ゲイツは腕につけてるホルダーからウオッチを取り出し、黒いウエイクベゼルと赤いアウトリガードグリップを持つウオッチを回転させる。

『ドライブ！』

ボタンを押して起動させた『ドライブライドウオッチ』を装填し、ドライバーを回転させる。

『アーマータイム！』

するとゲイツの後ろからアーマーが腰を落としたポーズを取りながら半透明のタイヤと共に現れ、それが分解してゲイツに装着されると、複眼部分に黄色い文字がセットされた。

『ドライブ！ドライバー！』

頭部にある複眼にはひらがなで「どらいぶ」と描かれてあり、両肩の装甲にはタイヤ——スピードタイヤシールド、両腕には赤い車——シフトスピードスピードの装填されたドライブアーマーが装着された。

「行くぞ」

ゲイツは三つのタイヤのエネルギー体を出現させ、オシマイダーの足元へと放つ。タイヤの攻撃を受けたオシマイダーはバランスを崩した。

そして、ゲイツウオッチとドライブライドウオッチのスイッチを押し、ドライバーのロックを解除して回転させる。

『フィニッシュタイム！ヒツサツタイムバースト！』

ゲイツは回転しながら高速移動し、連続攻撃の後にトドメの体当たりを炸裂させる。

「今や!エール!」

「フレフレ!ハート!フオ〜ユ〜!!」

最後にエールの放ったハート型の光線が、オシマイダーに直撃する。

「ヤメサセテモライマア〜ス〜」

オシマイダーは消滅し、残るはアナザーライダーだけとなった。

「よお〜し、俺も行くよ!」

ジオウはビルドウォッチを取り出し、起動させる。

『ビルド!』

ドライブバーに装填して回すと、前方にビルドのアーマーが出現してジオウの体へと装着される。

『アーマータイム!ベストマッチ!ビ・ル・ド!』

複眼には「ビルド」と描かれ、両肩は赤と青のフルボトルのような大型デバイス、右腕には大型のドリルを装備したビルドアーマーへとなる。

「凄い…」

ビルドアーマーへと変わった事にアンジユは驚いていると、そのままジオウ・ビルト

アーマーはドリルクラッシュシャークラッシュヤーでアナザライダーを圧倒する。

「決めるよー！」

二つのウオッチを起動させ、ドライバーを回転させる。

『フィニッシュタイム！ビルド！』

グラフの放物線が現れてアナザライダーを拘束すると、放物線へと乗り込み加速する。

『ボルテックタイムブ레이크！』

「オリヤヤヤヤヤヤ！」

そのままドリルクラッシュシャークラッシュヤーがアナザライダーに直撃。アナザライダーが倒れると姿が消え去り、周りも元の風景に戻った。

「——驚いたな。まさか、あのライダーを倒すなんて」

だがアナザライダーがいなくなると其処へ、白衣を纏った男性が現れた。

「そうか、ゲームの正体に気づいたんだ」

「ゲームの正体？」

「あの、あなた誰？」

「宝生永夢……悪いけど、これ以上はやらせない」

宝生永夢を名乗るその男性は、蛍光グリーンと蛍光ピンクを併せ持ったドライバーの

ようなものを取り出し腰へと装着すると、再び何かを取り出した。

『マイティアクションX!』

そのゲームのカセットの様にも見える何か——『マイティアクションXガシヤット』を起動させると、背後にゲームの画面の様なものが現れ、そこからチョコのブロックの様なものが次々と現れる。

「大変身!」

宝生永夢はモーションを取り、腰に付けたベルト『ゲーマドライブ』へと差し込む。

『ガシヤット!ガッチャーン!レベルアップ!』

ドライブのレバーを操作すると、周りからいくつものパネルが出現し、真ん中に現れたものを触る。

『マイティジャンプ!マイティキック!マイティマイティアクションX!』

その時。彼の姿は、マゼンタ色で逆立った髪の毛のような頭部とゲームコントロールの様な胸部アーマーが特徴な姿のライダーへと変わった。

「あれって……」

「仮面ライダー……エグゼイド」

「あれも18人の一人の、仮面ライダー……」

現れたのはゲイツ達が言う18人の仮面ライダーの一人、仮面ライダーエグゼイド

だった。

「エグゼイド……」

『ガシャコンブレイカー！』

ガシャコンブレイカーを持ったエグゼイドは、ジオウ達へ向かって走り出した。

次回！Re・HUGつとジオウ！

第4話 クリア出来ないゲームをクリア！2016

第4話 クリア出来ないゲームをクリア!2016

アナザーライダーとオシマイダーを倒したジオウ達の前に宝生永夢が現れ、仮面ライダーエグゼイドへ変身すると、なんとあろうことかジオウとゲイツに襲いかかってきた。

「なんでこっちをー!」

本来味方である筈の仮面ライダーである事と、なぜ自分達を攻撃してくるのか意図が分からず、ジオウは反撃に移る事ができなかった。

「どういう事なの……?あの人も仮面ライダーなのに……!」

「ソウゴ君!」

エールが困惑と心配をしながらその光景を見ており、アンジュが心配のあまりジオウの元へ向かおうとする。

『ゲキトツロボ!』

それを見たエグゼイドが先程使用したものと違う、赤いガシャットを取り出し起動させると、赤いロボットのようなのが現れて二人を妨げる。

『ガツチャン!ガツシャット!』

ゲームドライバーの開いたレバーを閉じ、ガシヤットを差し込む。

「大・大・大変身！」

『ガツチャーン！レベルアップ！』

『ぶっ飛ばせ！突撃！ゲキトツパンチ！ゲ・キ・ト・ツロボッツ！』

レバーを開くとエグゼイドの体にロボットが合体。頭部はロボットののような意匠となり、腕にはロケットアーム『ゲキトツスマッシュャー』が装着されているフォーム、ゲキトツロボットゲーマーになる。

「そんな事も出来るの……」

ジオウはエグゼイドのレベルアップに驚くと、そのままエグゼイドはロボットアームでジオウとゲイツを攻撃し続ける。

「ちっ……強いな……」

「でも、なんで……」

「この事件から離れてくれないなら、ここで決めるぜ」

エグゼイドはベルトの横にあるスロットにガシヤットを差し込み、そのスイッチを押す。

『キメワザ！』

エグゼイドのロボットアームにエネルギーが溜まると、もう一度スイッチを押す。

『ゲキトツクリティカルストライク!』

エグゼイドのロボットアームがロケットパンチの様に発射して二人に攻撃され、その後エグゼイドはロボットアームに追撃のパンチを叩き込むことで威力を高めた攻撃を繰り返す。直撃を受けたジオウとゲイツは変身が解けてしまう。

二人が変身解除を見て、エグゼイドもドライバーからガシャットを抜いて変身解除した。

「ごめんね。この事件から、手を引いてくれないか」

永夢は手を引いてとだけ言い残し、ソウゴ達の前から去る。

「時見君!ゲイツ君!」

「ソウゴ君!大丈夫!」

エールとアンジユが変身解除した二人に駆け寄る。

「あの人……」

一方、どこかの空間でオーラがアナザーライダーに変身していた男性を見下ろす。恐らくジオウの攻撃で元の姿に戻ったのだろう。

「煩わせないでよ。もう一回やり直すしかないじゃない」

そう呟きながら男性の体内からアナザーウォッチを取出し、スイッチを押す。

『エグゼイド……!』

再度、男性の体内に埋め込むと、男性の体はアナザーエグゼイドへと変わる。

同じ頃、永夢に異変が起こった。

「……? 僕は……」

アナザーエグゼイドの復活により、永夢からエグゼイドの力を奪われ、彼のライダーの記憶も失ってしまった。

ハリーハウスに戻ったソウゴ達は、エグゼイドの事を話していた。

「ねえ、あの仮面ライダー何なの?」

「あれは、仮面ライダーエグゼイド。18人の仮面ライダーの一人だ」

ゲイツが18人の一人だというエグゼイドの事を話す。

「あの……さつきから仮面ライダーとか、18人って、どういうことなんです?」

事情を知らないさあやは仮面ライダーの事を知らなかった為、仕方なくツクヨミが説明する。

「信じられないかもしれないけど、私とゲイツ、あそこにいるネズミのハリーは、あなた達より何十年も先の未来が来たの」

「ツクヨミ!俺はネズミやない!ハリハム・ハリーや!」

「ハリー!うるさい!」

ハリーは直ぐに訂正を求めるが、ツクヨミに突っ込まれて萎縮しながら黙る。

「未来から……」

三人が未来から来たと言われ、さあやも少し驚く。

「私達が知る限り、この世界にはソウゴのジオウとゲイツの他に18人の仮面ライダーがいる」

「18人……」

「でも、クライアス社が……さっきの怪物を作った奴らね」

先程アナザーライダーと一緒にいた怪物・オシマイダーもクライアス社が作ったと説明。

「彼らは、アナザーライダーって18人と同じ力を持つライダーを開発したの」

ツクヨミがアナザーライダーの誕生は、本来のライダー達から力と歴史を奪うことにもなると言うことまでも話すと、さあやは少し考え込む。

「その……ライダーだった人は最後はどうなるんですか?」

「わからない……」

元となったライダーは最終的にどうなるのだと聞かすが、そこまではツクヨミでもわか

らないようだ。

すると、ゲイツがソファから起き上がる。

「とにかく、俺は2016年に行く」

「なんで、2016年なの？」

「あの仮面ライダー……エグゼイドが誕生したのが2016年なの」

「そこで、アナザーライダーを倒せば全て済む」

「でも、どうやって過去へ？」

「『タイムマジン』ってのに乗れば行けるんだよ」

タイムマジンの事を話すと、エグゼイドが誕生した2016年へとゲイツが行こうとする。

「待ってよー！」

「ジオウ、これ以上首を突っ込むな」

「いや……あの、永夢って人から事情を聞けば何かわかるかも……」

オーマジオウとしての道を着々と進んでいる今、これ以上首を突っ込むと言われるが、ソウゴは永夢の言った事の方が気がなっていた。

「どちらにしても、2016年へ行かなければどうにもできんだろ」

アナザーライダーと永夢の関係
後々に発生した問題アナザーライダーの誕生よりも元となった問題を解決するのが手っ取り早いと判断した事

を話しながら、ハウスを出たゲイツはタイムマジーンを停車している方へと向かい乗り込む。

「時空転移システム、起動」

タイムマジーンの行き先を2016年にセットし、そのままタイムトンネルへと向かって行く。

「行つたみたいね」

「本当に過去へ行つたんですか？」

ツクヨミとさあやがゲイツを見送ると、はながゲーム機を持っているソウゴを見る。

「時見君。そのゲーム機……」

「うん、実は気になる事があつて……」

「気になる事？」

「あのアナザーライダーが現れると、決まってこのゲーム機がある」

クラスメイトの小和田が襲われた時、そして今回。全ての事件でアナザーライダーが現れると、決まってこのゲーム機が側に落ちていた。

「そのゲームをすれば、何かわかるかもしれない」

「よし、だつたら……」

「私も！」

アナザライダーの手掛かりを掴むべく、ソウゴとはながゲームをやり込みもうとする。

「でも、ソウゴ君たしか……」

さあやがあることを思い出している横で、二人がゲームをやり込み出し、しばらく経った頃……

「全然ダメだ……」

「めちよつく難しい……」

二人が交代でプレイしても結局、直ぐにゲームオーバーになってしまふ。ちなみにソウゴは現在、40回目のゲームオーバーを向かえた。

「もしかしてソウゴとはなつて……ゲーム苦手？」

ツクヨミはそう聞かすが、さあや的にはこれは苦手のレベルじゃないような気がしていた。

「そうだけどさあやもでしょ……ツクヨミは？」

「手を使うゲームなんてやったことない」

「未来スゲー……」

今の時代、²⁰¹⁸nintendo●switchやらプレステ●といった最新式でも手を使っていると言うのに、未来の人はゲームで手なんて使わないだと二人は感心する。

「それにそのゲームについて調べてみたら、それかなり難しいゲームよ」

ツクヨミは自身が持っていたパッドで、そのゲームについての記事を見せる。

『クリア出来ないゲーム』。それがそのゲームの通り名らしいわ」

「そのゲームの名前聞いた事がある」

記事の内容は、このゲームに何人もの挑戦者がいるが未だにクリア出来ず、クリアのチャンスになると画面が光るそうさ。

「それじゃあ……私達みたいな素人じゃ無理なわけだ……」

素人のソウゴ達では、こんな無理ゲーはクリア出来ないと思っていると……

「……出来る人がいるかもしれない」

「あつ!?? 天才ゲーマーM!!?」

ソウゴがさあやの書いた学校新聞にあった天才ゲーマーMの事を思い出し、同じく思い出したさあやはツクヨミからパッドを借りて天才ゲーマーMについて検索する。

「天才ゲーマーM……見つけた! どんな無理ゲーでもクリア出来そうな天才ゲーマー」

「はやっ!」

「ゲームの天才。ハンドルネーム“M”。本名不明。数々の大会に優勝。ただしコンタクトはとれない……」

パッドから天才ゲーマーMの事が書かれている記事を見せる。

「よし、じゃあその人を見つけてクリアに手を貸してもらおう！」

天才ゲーマーMを見つけるため、ソウゴ達は行動を開始した。

ソウゴはさあやとツクヨミ、はなど各地のゲームセンターへと行き、天才ゲーマーMの情報を集める。

「あゝあ……全然見つからない」

だが結局の所、何の情報も得られなかった。

「コンタクトが取れないもの……そう簡単には行かないわ」

ソウゴとさあやと分かれてゲームセンターに赴いていたツクヨミがそう言っていると、「ねえ、ツクヨミさん」とはなに呼び掛けられてどうしたのかと顔を向ける。

「ゲイツ君は、やっぱり時見君が憎いの……？」

「……ゲイツも、今のソウゴを憎んでいるわけじゃないの。

ただ、あたしもゲイツも、ハリーも助けたかった仲間がいた。

でも……助けられなかった」

ツクヨミは未来で、仲間を助けられなかった事を思い起こす。

「クライアス社とオーマジオウにやられて死んでいった仲間を思えば。今、目の前にいるソウゴはゲイツにとっては、倒すべき敵でしかない」

「じゃあ、ツクヨミさんも時見君を倒す敵と思っているの？」

「分からない……でも、少なくとも私とハリーは、今のソウゴが魔王にならないよう導きたい。そう思ってる」

ツクヨミとハリーは、ソウゴを魔王にならないように導きたいと語る。

「私も一緒に頑張るよ！時見君が道を間違えないように！」

「はな……ありがとう」

はなの笑顔を見て、ツクヨミも笑顔で返す。

その頃、他のゲームセンターで情報を集めていたソウゴとさあや。

「そんなの簡単に見つかるわけじゃないじゃないかあーっ！」

こっちも空振りでも何も情報は得られなかった。

二人はそのまま歩き続けると、近くで移動動物園がやっており、そこに居る動物達を目にした。

「おっ、移動動物園」

ソウゴとさあやは移動動物園で触れ合う子供達を、微笑ましそうに見ていた。

「みんな楽しそう」

「……ねえ、ソウゴ君」

「何？」

「ソウゴ君は、自分の未来の姿を言われても、まだ王様は諦めないの?」

オーマジオウの話の聞き、未来の支配者になると言われても尚、それでも王様になりたいかと聞く。

「うん。なりたい」

「そう……」

「でも、俺がなるのは最高最善の魔王!」

「ソウゴ君……」

「だから、心配しないでよ!」

心配しないでよと言うが、さあやはそんな彼の幼馴染だからこそ、心配な気持ちで一杯だった。

しかし、その言葉だけでは伝わらない気持ちをどう伝えれば良いのかと悩んでいると、彼女から流れる只ならぬ想いを少なからず察知したソウゴは続けて話し掛ける。

「もし、俺がその道から外れたら、さあやが俺を連れ戻して」

「……うん」

二人の約束が交わされたその時、ベンチの方から悲鳴が聞こえ、そこへと向かう。

「あれ……? さつきソウゴ君が倒した……」

そこに居たのは、さつきソウゴが倒した筈のアナザーライダー……アナザーエグゼイド

だった。

「やめろ!」

ソウゴがアナザーエグゼイドに向かっていくと、また強烈な光を放ち姿を消した。

「またか……」

「消えた……」

ソウゴがまた消えた事に顔を歪ませていると、さあやはアナザーエグゼイドが消えたことに驚く。

「大丈夫ですか!」

ソウゴはアナザーライダーに襲われた男性へと駆け寄る。

「元気そうでなによりだ!」

「また出た!?」

そこへ、ソウゴにジクウドライバーを渡したウオズが現れた。

「誰なのこの人?」

「初めまして、私の名はウオズ。以後お見知りおきを」

ウオズがさあやに自己紹介をする。

「ごめんけど、今は君にかまってる場合じゃないんだ! 病院……救急車!」

「病院か……」

病院と聞き、ウオズが本のページを開く。

「この本によれば、聖都大学付属病院に連れて行く事になっている」

「聖都大学付属病院……?」

「確か、有名な大学病院」

「そこに連絡しよう」

取り敢えずソウゴはケータイを操作し、そこへ連絡を入れた。

しばらくして、聖都大学付属病院へと到着し、そこでツクヨミやはたと合流した。

「また被害者が?」

「でも……なんでこの病院なんだろう?」

すると四人の近くを歩く、二人のナースのおしゃべりが聞こえてきた

「聞いた?あの新米先生今日も無断欠勤なんだって」

「まさかゲームのやり過ぎじゃないでしょうね。もの凄いゲーム好きだって言うじゃない、永夢先生」

永夢と聞き、もしかしてと思い、ソウゴはナースの二人に尋ねる。

「すいません。今、Mって言いましたよね?」

「永夢先生のこと?」

「「「もしかして天才ゲーマーM?」?」」」

「小児科医に何の用だ」

後ろから声が聞こえ振り向くと、後ろに何人もの医師を引き連れる医師がいた。

「キャー！鏡先生っ!!?」

「天才外科医鏡飛彩先生。かつこいいでしょ!?!」

ナースが天才外科医だという飛彩を見て騒ぐと、医師達を引き連れ去ろうとする。

「あの……私たち、クリアできないゲームつてのを追ってるんです!」

「何……?」

さあやがクリア出来ないゲームの事を言うと、飛彩はこつちへ振り向く。

その後、ソウゴ達は飛彩にある病室へ案内される。

そこには、アナザーエグゼイドに襲われた人と同じ被害者の患者が寝ていたのだ。

「……うちの病院にも、原因がわからず意識不明となった患者が何人も入院している」

多くの人がアナザーエグゼイドに被害を受けたのだと察する。

「小児科医も、その原因を追っていた」

飛彩が言う永夢もこの事件を追っていたと話す。

——それは、被害がはじめて間もない頃…

『クリア出来ないゲーム?』

『はい』

彼は永夢から、クリア出来ないゲームについての話を聞いていた。

『意識不明の患者達はみんなそのクリアできないゲームをプレイしてたんです』

『ゲームと症状に因果関係があるということか』

『わかりません。でもプレイしてみる価値はあると思います』

それ以降、永夢はそのゲームについて追っているらしい。

「そういえば、さっきの看護師さん、永夢先生は無断欠勤って言ってたよね？」

ソウゴ達は小児科の永夢のデスクへと案内されると、飛彩はデスクの上にあったメモを手取る。

「小児科医が行方不明になる前に残したメモだ。」

「このゲームの手掛かりかもしれん……使えるか？」

「くれるの？」

そう言つて飛彩はソウゴにメモを渡す。

「何故かは分からないが、お前達には協力をしなくてはいけない気がする」

「ありがとう」

飛彩から受け取った永夢のメモを見る為、外に出たソウゴ達はそのメモを読む。

「ウンテンウンテン オベンオベン……」

「これ何語?」

しかし、はなとソウゴはメモに書いている文字が解読できなかった。

「ドイツ語ね」

さあやがソウゴの横からメモを見て、ドイツ語だと答える。

「何で?」

「日本の医療の共通言語だった名残なの」

「どういう意味かわかるの?」

さあやは永夢の書いてあるメモを読む。

「下下上上右左右左……」

「これって……キーの操作だ!」

先ほどのゲームを始めるソウゴ。下下上上、右左右左とキーを操作する。

「最後に全部のキーを同時に押して……」

最後に全てのキーを押すと、ゲーム画面から光が放たれた。

その頃、ゲイツがタイムマジンでタイムトラベルし、2016年にやってきた。

そこでは仮面ライダーエグゼイドと仮面ライダーブレイドが、バグスターと交戦して

いた。

「仮面ライダーエグゼイド」

到着すると、エグゼイドとブレイブがキメワザを放ちバグスターを全滅させた。それを見てタイムマジーンを二人の前に着陸させる。

「何だこれは？」

二人はタイムマジーンが現れたことに驚くが、その後彼らは聖都大学病院へと戻る。

「えっ!!? 未来人!!?」

「お前から見たらな」

ゲイツがこの時代の永夢と飛彩に未来から来た事を話す。

「歴史を変えようとしている連中がいる。そのせいで、お前らの持つライダーの力が消えることになる」

「それを忠告しに来てくれたってこと……?」

「お前に異変があるまで待たせてもらうぞ。それがアナザーライダーが現れるサインだ」

「くだらない。未来だの歴史だの、馬鹿な話で俺の時間を無駄にさせるな」

馬鹿馬鹿しいと思い、飛彩は去っていった。

「……冷たい奴だな」

「あなたも、似たようなもんですけど……」

「……?」

同じ頃、救急車へ担架で運ばれる少年と見守る父親がいた。

「ケイスケ。大丈夫か?」

「苦しいよ……助けてお父さん……」

その時、少年の父親以外の時が止まる。

「え、何が起こってるんだ?」

何が起こったのかと驚くと、そこにオーラが現れた。

「私はタイムジャッカーのオーラ。あなたにちよつとだけ悪い知らせと、めちやくちやいい知らせがあるの」

彼女は男性に近づき、何かを伝えようとする。

「この子の心臓はもう長くは保たない。見たら分かるでしょ?」

「ケイスケが……?」

「これが、ちよつとだけ悪い知らせ。」

ただ、私と契約すれば、この子供の命は助けることができる。

これが、めちやくちやいい知らせ!……どうする?」

オーラの提案に、子供を助きたい父親は頷く。

「いい子」

それを見て笑みを浮かべた彼女は、一度ブランク状態のアナザーウオッチを父親の体内に入れ、そのまま取り出す。

するとアナザーウオッチはエグゼイドの力を宿したものに變化し、それを再度体内へ埋め込む。

「今日からあなたが仮面ライダーエグゼイドね」

そして子供の父親はアナザーライダー……アナザーエグゼイドへとなった。

「……なんだ？」

聖都大病院にいる永夢の体に、ノイズが走ったような現象が起こりだす。

おそらくアナザーエグゼイドが誕生し、エグゼイドの力が消え始めたからだ。

「始まったか」

永夢の体に異変が起こったのを察知し、ゲイツはアナザーライダーの元へと向かう。

その頃、ゲームをする青年のゲーム機が光り、アナザーエグゼイドが出現して一方的に襲っていた。

そこへゲイツがバイクに乗って現れ、ジクウドライバーとゲイツウオッチを取り出す。

『ゲイツ!』

ウオッチをドライバーにセットして握り拳でロックを解除すると、背後からタイマーが現れ、交差した両手で抱え込む。

「変身!」

叫ぶと同時にドライバーを持ち、腕を広げながら回転させた。

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

バイクに乗りながら仮面ライダーゲイツへと変身し、ドライバーを回す。

『フィニッシュタイム! タイムバースト!』

ライドストライカーに搭乗したまま回転し体当たりを数発ぶち込み、アナザーエグゼイドを撃破した。と思いきや……

「グオオ……!」

「なんだと……?」

アナザーエグゼイドは復活し、再び現れてゲイツに襲いかかる。

現代では、ソウゴ達を襲った宝生永夢がどこか違う場所で誰かを待っていた。

「もうやめてください。飯田さん」

そこに現れたのは、アナザーエグゼイドに変身したあの父親だった。

「目を覚ましてください。今、ケイスケくんが必要なのは、あなたがそばにいることなんです」

「じゃあ何か？ケイスケが死ぬのを、指をくわえて見ていろつて言うのか？！」

飯田が怒りに震えて白衣の襟を掴み、永夢を投げ飛ばす。

「医者が救ってくれないなら、俺が救うしかない。邪魔をするなー！」

するとそこに空間の歪みが現れ、そこからソウゴ達四人が現れた。

「イッタタ……」

「ここは……」

「もしかして、ゲームの世界……!?!」

四人は辺りを見渡し、先までと景色が違う、所々にドットの様なノイズが見える光景を見て、ゲームの世界に来たのだと考える。

「あの人……エグゼイドの」

ソウゴは倒れている永夢を見る。

「君たち……なんで……」

「もしかして……天才ゲームマーMって……」

ここに永夢がいるのを見て、ソウゴ達は永夢が探している天才ゲームMだと思いつく。

「こんなことしてる間に、ケイスケは死に近づいてる!あの子には時間がないんだ!」
「時間がない……」

飯田はそう言うとなナザーエグゼイドと変身した。

「アナザーライダー!」

「あの人が、変身してたの!?!」

アナザーエグゼイドが姿を消すと空間が崩壊し、病院の屋上へと場所が変わる。

「永夢、大丈夫?」

「ありがとう。よくわかったね」

「永夢さんの残したメモのおかげ!」

ソウゴに介抱されて起き上がる永夢に、はなは永夢が残したメモを見せる。

「今回の事件の被害者には、ゲーム以外にもう一つ、共通点があったんだ」

「共通点……?」

「あの人の息子と同じ、小柄な若者に限られていること。」

それはつまり、臓器のサイズが同じ人だけが選ばれてるってことを意味する」

ソウゴ達も病室の中のことを思い出すと、確かにみんな若い人でまだ未成年の人が

多かった。

「あの人の息子さんは『突発性拡張型心筋症』……せめてもう1年早くウチに転院してくれば、飛彩さんの鏡式バチスタ手術変法で直せたと思うんだ」

永夢がその息子のケースの今の状態のレポートを見せる。

それによれば、『突発性拡張型心筋症』とは心臓の筋肉の収縮する能力が低下するこ
とで、心臓の左心室という部分が拡張してしまう病氣らしい。

症状としては、軽い場合でも体のだるさや・息切れといったものが現れるが、重くなると酷い動悸や脈の乱れがある日突然起こったりして気を失う、或いは心臓が止まってしまうったりするという。

基本的に薬を投与することで症状が和らぐが、それでもダメな場合は心臓移植という最終手段がある。しかし……

「けど、ここまで病状が進行しては臓器移植すら困難な状況なんだ」

「あのアナザライダーの父親は、この子を助けるために……」

「なんか、わかる気がする」

「永夢さんは、あの子に生きる力を取り戻してもらうため、父親を連れ戻そうとしていたんですか？」

「うん……よく分かったね」

これで納得がいく。

何故あの時、永夢がソウゴ達に立ちはだかり、アナザーエグゼイドを守ろうとしていたのか。

「助けたい人を助けるために必死になってるのは、ここにいるみんなの共通点だから。だから、あの人の気持ちもわかる」

飯田の気持ちはソウゴ達にも痛い程伝わる。

「……でも、他の人を、犠牲にするのは違う！ 永夢が、全部を背負う必要はないよ！」
それでも、何でもかんでも一人で抱え込もうとするなと言うと永夢に近づき、彼の肩を叩く。

「患者を救うのは医者に任せた！アナザーライダーは、あの子の父親は俺に任せてくれ！俺、王様になりたいからさ」

「王様？」

「民を救うのって……王様の役目だろ!?？」

ソウゴが何でもないように言うと、永夢が微笑む。

「……そっか」

永夢は白衣のポケットから何かを取り出すと、それをソウゴの手の平に置く。

「……ライドウォッチ」

それはエグゼイドのライドウォッチだった。

「何で持っていたのか分からないんだ！」

でも、持ち主が現れたとき返そうと思つてた……多分、それが君だ。飯田さんを頼む」
「わかった」

ソウゴはエグゼイドライドウォッチを受け取り、そこに刻まれた2016年に向かうとタイムマジーンへと乗り込む。

「行くぞ」

自身の乗るタイムマジーンで時空移動しようとした瞬間、イグアナがモチーフのタイムマジーンに邪魔される。

「悪いけど、行かせないよ」

操縦していたのはウールだった。

「邪魔する気なら……」

ジクウドライバーを持ち、ジオウへ変身しようとする。

「時見君は行つて！」

「早く、あのお父さんを止めて！」

「何？うわあ！」

そこへ、エールとアンジユへと変身した二人が現れ、ウールの操縦するタイムマジーン

ンをソウゴのタイムマジンから離す。

「二人共……わかった! 時空転移システム起動!」

「行かせるかよ!」

2016年に向かったソウゴをウールは追おうとするが、エールとアンジュがダブルキックを放ち、追わせないように妨害する。

「この……!」

「行かせない!」

ウールはタイムマジンを幽霊船の様な姿にしてプリキュア達に攻撃をするが、アンジュはプリハートを取り出す。

「フレ!フレ!ハート・フェザー!」

プリハートを操作して手を胸の前で組み、大きなハートを描いて青いバリアで攻撃を無効し、衝撃を返されたタイムマジンは倒れる。

「エール!」

「フレフレ!ハート!フォウユウ!!」

倒れてる隙にハート型の光線がタイムマジンに直撃すると、タイムマジンは機能停止に追い込まれた。

「あゝ、くそッ!退くか!」

ウールはタイムマジーンでの戦いは諦め、その場を退いていくと、エールがアンジュに近づく。

「さあやちゃん！これからも一緒にプリキュアしよう！」

「うん！」

2016年。

そこにはアナザーエグゼイドに苦戦するゲイツがいた。

疲れが見え始めたゲイツに、アナザーエグゼイドがさらに攻めると、そこへソウゴが操縦するタイムマジーンが現れた。

タイムマジーンがアナザーエグゼイドを吹っ飛ばすと、中からソウゴが現れる。

「なぜ来た。首を突っ込むなど言っただろ。オーマジオウの道を行きたいのか？」

「いや、俺はそんな道は行かない！」

「俺の言ってることが信じられないのか!?!？」

「信じるよ！野乃さんもさあやも、ゲイツもツクヨミも」

「えっ……」

みんなを信じる。ゲイツがその言葉に驚くと、ソウゴはアナザーエグゼイドの方を向く。

「だからこそ……俺は戦う！」

『ジクウドライバー!』

ジクウドライバーを装着し、ジオウライドウオツチを取り出してウエイクベゼルを回すと、9，Dスロットの差し込み口に入れる。ドライバーの真ん中のロックを押し、後ろに時計が現れる。

「変身！」

ポーズを構えながらドライバーを回すと、音声 flowed。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

ジオウへと変身し、アナザーエグゼイドへと向かっていく。それを見てゲイツも共に向かう。

「ハッ！」

「フウ！」

二人は同時に攻撃を繰り出し、アナザーエグゼイドを追い詰める。すると、アナザーエグゼイドは何体ものバグスターを出現させる。

『ジカンギレード!』

『ジカンザックス!』

ジオウとゲイツは武器を持ち向かっていくと、そこへ2016年の永夢が駆けつけ

た。

「何だ……？ 僕の偽物？ とにかく僕も……！」

『マイティアクションX！』

ガシャットを起動させると、背後に出現したゲーム画面からブロックのようなものが次々と現れる。

「大変身！」

モーションを取り、ドライバーへと差し込む。

『ガシャット！ ガッチャーン！ レベルアップ！』

そしてドライバーを操作し、周りからいくつものパネルが出現させ、真ん中に現れたピンクのキャラが描かれたパネルを触る。

『マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティマイティアクションX！』

永夢はエグゼイドレベル2に変身し、ジオウらに加勢しアナザーエグゼイドを攻め立てる。

「……エグゼイドの攻撃が効いてる。アナザーエグゼイドには、エグゼイドの攻撃が有効なのか！」

「たどりついたか、我が魔王」

「うおーっ！ また出た！」

アナザービルドには仮面ライダービルドの力が有効だった事を思い出しながら、アナザーエグゼイドには仮面ライダーエグゼイドの力が有効であると分かると、そこにまともやウオズが現れた。

「覚えておく方がいい。ライダーにはライダーの力」

「ライダーの力……?」

バグスターウィルスと交戦するゲイツは一瞬手を止め、ウオズとジオウが接触しているのを目にする。

「あいつ……なぜ、ここに!」

一方、アナザーエグゼイドに攻め込むエグゼイドだが歴史改変の影響でその力が消えていく。

「ここまでか……」

そしてとうとう、歴史改変の影響にも耐えられずエグゼイドの変身が解けてしまった。

「よし、なら俺が!」

ジオウは現代の永夢から預かったエグゼイドのウオッチを取り出し、ウオッチを回す。

『エグゼイド!』

エグゼイドライドウオッチを起動させてドライブバーに装填すると、ロックを解除しドライブバーを回す。

そして前からエグゼイドのアーマーが出現した。

『アーマータイム！レベルアップ！エ・グ・ゼ・イー・ド！』

複眼にはカタカナで「エグゼイド」と描かれており。両肩の装甲はマイティアクシオンXガシャットのような形状で、両腕にはエグゼイドの武器・ガシャコンブレイカーを模した大型のハンマー『ガシャコンブレイカーブレイカー』が装備された。

「ジャンジャー！」

ジオウはアーマーを装着すると、屋根の方へとジャンプしてアナザーエグゼイドを見下ろす。

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え、過去と未来をしろしめす時の王者。

その名も仮面ライダージオウ・エグゼイドアーマー。また一つ、ライダーの力を継承した瞬間である！」

ウオズはビルドの時と同じようなことを言うと、ジオウは永夢の方へと近づく。

「ノーコンティニューで……」

「なんかクリアできる気がする！」

ジオウの攻撃はエグゼイドアーマーを装着した事で、アナザーエグゼイドへ次々に //

ヒット!”と文字が現れる。更に攻撃が当たると、その文字は多くなっていく。

一方のゲイツは弓から斧の形状に変えたジカンザックス・おのモードにライドウオツチを装填する。

『フィニッシュタイム!』

ジカンザックスの必殺技でバグスターウィルスを一掃する。

ジオウはブロックを利用し、エグゼイド同様のアクロバティックな攻撃を披露し、アナザーエグゼイドを追い詰める。

「キメワザを決めろ。キメワザ!」

永夢はゲームマドライバーでキメワザを発動する時の仕草を見せる。

「オーケー!」

永夢に言われ、ジオウはエグゼイドウォッチを押す。

『フィニッシュタイム!エグゼイド!』

ロックをまたも解除し、ドライバーを回す。

『クリティカルタイムブ레이크!』

ジオウは自身の周りに出現した「クリティカルタイムブ레이크」の文字を叩いて宙へと上ると、更に地面を叩き、衝撃波でアナザーエグゼイドも宙へと舞い上がらせる。

「最後はこれだ!」

エグゼイドアーマー自身も飛び上がり、アナザーエグゼイドを叩き落とす。
「そんなんじゃないんだけどな……」

永夢が苦笑いでツツコミを入れているのをよそに、
“クリティカルタイムブレイク”
の文字の最後にアナザーエグゼイドが固定。そこへジオウが突っこんでいき、アナザーエグゼイドは連打攻撃を浴び爆発した。

「どうよ〜!」

技が決まって喜ぶと、体外へ排出されたアナザーエグゼイドウオッチは破壊され、飯田は元の姿へと戻った。

「大丈夫ですか!」

永夢が飯田に駆け寄る。

「……どうしたんだ、俺は?」

「大丈夫。あなたも、息子さんも」

「…そうだ。あの子が!」

飯田が息子のケイスケの元へと向かおうとする。

「ちよつと待って!あなたに紹介したい人がいるんです!」

だがソウゴが飯田を静止すると、永夢に頼み込む。

「この人の息子さんが病気なんだ。永夢の病院で、お願いできるよね?天才外科医がい

るんだし」

それを聞いた永夢は、あの人が聞いたら「俺に切れないものはない」と言ってるだろうに違うなと思いついてた。

「うん。分かった」

「それと。これを持っていてほしいんだ」

ソウゴは永夢にブランクウォッチを渡す。

「これは？」

「未来で、おれと永夢を繋げてくれるものだ」

「未来……？わかった、預かっておくよ」

「うん！」

永夢にウォッチを渡したソウゴとゲイツは、現代へと帰っていく。

それから、しばらく経ったある日。ソウゴとはなとさあやが帰宅している時、ある光景を目にする。

——それは、飯田と元気になったケイスケだった。

「元気になったんだね」

「よかった」

「永夢達のお陰だね」

あの親子の幸せそうな姿を見て三人が微笑む。

夕方になり、ソウゴがお世話になっている『クジゴジ堂』へとみんながやってきた。
「じゃーん！」

叔父の順一郎がご馳走を作ってテーブルに置く。

「美味しそう！」

「順一郎さん。今日はご馳走になります」

「やっぱ、はりきりすぎだよ」

「え、ソウゴ君の友達が増えたんだから、これぐらいやらないと！あ、あともう一品作るから待っててね」

順一郎が台所へと向かうと、ゲイツがソウゴの前に現れる。

「……一つ聞かせろ。あの言葉の意味を」

あの時、信じられるという言葉の意味は何なのか問う。

「俺には、王様になりたいって夢がある。

だから、みんなには悪いけど、俺は自分が正しいと思う道に行く」

ソウゴは自分の道をこれからも貫くつもりのようにだ。

「でももし、俺が間違った道を選んで、ほんとにオーマジオウになると確信したら……その時は、いつでも倒してくれ！」

みんなの判断なら、俺は信じられるから！」

それを聞いたはなやゲイツ、ツクヨミ、ミライクリスタル・ブルーを乗つけたスプーンを持つてはぐたんにアスパワワを注いでいたさあやは、彼の決意満ちた言葉に頷いた。

——だがこれからの未来、ソウゴの道がどういった経路をたどるのか。

——そして、もしも彼がオーマジオウへと成った時、はな達は本当にソウゴを倒せるかどうか。

——今は未だ、誰にもわからない。

「斯くして、我が魔王はエグゼイドの力を手に入れた。歴史は着実にオーマジオウへと向かっている。

そしてまた、次のレジエンドとの出会いはすぐそこに……

それとも、新たな誕生が先か……」

次回！Re・HUGっとジオウ！

第5話 夢を捨てた少女：二つのアナザー

2011

第5話 夢を捨てた少女：二つのアナザー 2011

クライアス社あざばぶ支社にて。

チャラリートとオーラの前に、何処か小馬鹿にしている様な憎たらしい笑みを浮かべたウールが現れた。

「ジオウとプリキュアに一杯喰わされたって？チャラリート」

すると彼は、この間の作戦の失敗の事をチャラリートに意地悪く言い、次にオーラの方を見る。

「それに余裕綽々って感じだったのに、オーラも可愛いところあるね。フハハハ！」

「うるさいな！」

「あんたのそういうところが可愛くない！」

二人が苛々しながら言い返すと、そこへ猫耳風のシニョンを頭頂部に整え、黒と紫を基調としたスーツ衣装を着た暗い眼差し少女、ルールーが現れた。

「今回の仕事の失敗で、チャラリートさんとオーラさんはかなり減点へととなると連絡がありました」

「うそ〜〜！」

「ちよつと待つて！なんで私がそこまで減点されるのよう！ルールー！」
「相変わらずだな……」

彼女の通告を聞いたチャラリートは顔を押しえてシヨックを受け、オーラがルールーに文句垂れていると後ろから声が聞こえ、振り向くとそこから紫の服を着た力強そうな男が現れる。

「スウォルツ？」

スウォルツ。クライアス社のタイムジャッカーチームのリーダーである。

「スウォルツさん、タイムジャッカーチームリーダーのあなたが、こちらへ来ると言う連絡はうけていませんが？」

「社長からの指示だ。早急に若かりし日のジオウと、プリキュアを倒すように、な……」
「社長が……ですか？」

「社長の目的は、この時代のミライクリスタルの回収と、オーマジオウを排除する事だ」
自分が来たのは、社長からの連絡を伝える為だとスウォルツがルールーに伝える。

「我が社の会長である、オーマジオウ……」

だが、奴はいずれ、こちらへと牙を向く恐れがある……

その前に、この時代のまだ若いジオウを倒せ。これとクリスタルの回収が最重要との連絡だ」

「……わかりました。そのようにこちらの社の上の者に連絡します」

スウォルツの連絡を上へ伝えようと、ルルーはマントを揺らしながら去っていく。

「でも、ジオウは既にビルドとエグゼイドの力を手に入れてるわ」

「ここで断ち切れればいいだけだ。新たな時の王者を擁立するのが、我らの目的だ」

その頃、2011年。

一人の青年がとある建物内へ入り、部屋の中で横たわる女子生徒へ掌から何かの力を注ぎ始める。

「どうした……力が……無くなって……」

だが予想していた以上に注ぐ量が少なくなっている……否、ゼロに等しいのを見て、自身の持つあの力がなくなっていることに焦りを感じていた。

すると突如、青年以外の時が止まる。

「誰だ!?？」

「俺はタイムジャッカー、スウォルツというものだ」

「タイムジャッカー……」

タイムジャッカーという言葉聞いた青年は、その単語を既に聞いたことがあるのか、さつきまでの焦りと憤りは鳴りを潜め、むしろ何処か嬉しそうな雰囲気を出してい

た。

「お前に新しい体験をしてもらおう。意見は求めん」

『フォーゼ……！』

スウォルツの手にあるウオッチがアナザーライダーのウオッチへと変わった。

「断るわけないだろ。俺にはまだ力が必要なんだ！」

「そうか。ならば実験の開始だ」

スウォルツはそう言うのと青年の体内にウオッチを埋め込む。

「歴史は変わった。今よりお前は、仮面ライダーフォーゼだ」

そして現代、2018年の方では、ソウゴ達三人がクジゴジ堂に来ていた。

「ただいま」

「お邪魔します」

「順一郎さん、こんにちは」

中に入ると叔父の順一郎が電話中だった。

「……ですからうちは時計屋でして、オーディオの修理はやってないんですよ」

「どうやら、また時計以外の修理の依頼のようだ。」

「…はい、もちろん、オーディオでも時計はついてますけども。おそらくオーディオがメインであって時計はおまけみたいな部分…あ、やります。やらせて戴きます。取りに行きます。失礼します」

電話を切るとソウゴ達が帰ってきたことに気づく。

「あ、いらつしやい！」

「お客さんですか？」

「うん、古くなつたオーディオを直してほしいんだつて。うち、時計屋なんだけどね」

「また、時計以外の修理ですか？」

「叔父さんてさ、なんでいつもやりたくない修理引き受けちゃうの？」

「いや、決してやりたくないわけじゃないよ。本音を言えば時計の修理のほうが好きなんだけどね」

そう言うと順一郎は修理品を取りに行く準備をする。

「あ、そうだ」

ふと、なにかを思い出した順一郎がレジを取り出した。

「ソウゴ君、あのイケメン君とこに行くなんならこれ持っていてくれない？」

「レジ？」

「調子悪かったから直して欲しい頼まれたんだ」

「わかった」

順一郎に頼まれ、ソウゴとはなはレジをハリーのいるハウスへと向かう。さあやは何の用とかで一緒じゃないが。

「そういえば……時見君って、叔父さんと暮らしてるけど、お父さんとお母さんはどうしてるの？どこかの仕事に赴任とか？」

「ううん。俺、両親いないんだ」

「えっ？」

はなの質問にソウゴはいないと答える。

「9年前に事故で亡くなったんだ」

「……………ごめん」

「いいよ。今は叔父さんと楽しく暮らしているし、寂しくないよ」

話してる間にハリーのハウスへと到着し、中へと入る。

「ハリー。これ叔父さんが修理してくれたよ」

「おお、すまん。ソウゴ」

ソウゴがレジを机に置く。

「はぐたん！」

はながはぐたんを抱こうとしながら中を見ると、化粧品や服などを用意していたのが

見えた。

「ゲイツやツクヨミはまだ学校から帰ってないの？」

「さあな。まあ、遅いのはいつもの事や」

「そっか……」

「何してるの？」

なのでハリーが何をしているのか質問してみた。

「うん？こつちで暮らすためにも店開こうと思てな」

「ヘアメイク・ファッション！その他女子の憧れがまったシヨップ。その名も『ビュー

ティーハリー』や！」

「それいいね！俺も手伝うよ！」

「私もカリスマ定員になる！」

ソウゴとはなの二人も手伝う気満々のようだ。

「いや、はなはやる事あるやろ」

「えっ？」

「残りのプリキュア探しや」

「そっか」

「あと二人だけ……（俺も頑張つてウオッチを集めなきや！）」

残りのプリキユア探しの事を話しているのを横目にソウゴがウォッチの事を考えていると、はなは誰を仲間にするか考えていた。

「そうだ！」

「誰か思い当たる人がいたの……？」

翌日、はなが教室でさあやに昨日閃いたことを話す。

「スカウト？プリキユアを？」

「うん！この前のあの人！」

「あの人って？」

「輝木ほまれ、だって……」

輝木ほまれを次のプリキユアにしたいと話す時、二人は彼女の顔を思い浮かべる。

「めっちゃ美人だし、すごいオシャレだし！」

はなが彼女の事を尊敬しながら話すと、ふと気になったことをソウゴとさあやに聞く。

「どこに行けば会えるかな？」

「……」

二人が顔を合わせたその時、教室の扉が開く音が聞こえた。

「によほ〜！か、か、か、輝木ほまれさん!?？」

まさかのスカウト相手である輝木ほまれご本人が入ってきた。

だが、彼女が教室に入った途端に周りがざわめく中、はなの後ろの席へと座る。

「お、おはようございます」

「おはよ」

はなは緊張しながらほまれに挨拶する。

(綺麗な眉毛……)

ほまれの顔に見惚れていると、見られている事に気付いた彼女はクスツと笑う。

「……変な奴」

「はう！」

それからしばらく経った休み時間、三人はほまれの行動を陰から見ている。

「同じクラスだなんてこれはもう運命……何てお願いしよっかな」

「輝木ほまれには、気をつけた方がいいよ」

どうやってプリキュアにスカウトしようかと考えてたソウゴ達の後ろから、クラスメ

イトの女子二人が現れる。

「輝木ほまれには気をつけろ？」

「……なんで？」

外の中庭へと場所を変えると、二人に何故ほまれが危険なのかを聞く。

「不良だからよ」

「不良？…そういえば、たしか教室で見たのも今日がはじめてだな」

はなは自分が転校してきてから、確かに彼女が教室にいたことなかった事を思い出す。

「ほまれさん今年から、スポーツ特進クラスからうつってきたの」

「フィギュアスケートをやってたのよ」

「でも突然やめちゃって、学校にも全然来なくなつて」

「派手な人とつるんでるって噂だし」

「()わ()い」

「う()ん、そんな人には見えないけど」

二人が怯えながらそう言うも、はなは髪をいじりながら、そんな事は無いように感じていた。

「話してる最中だけどいい？」

そこにツクヨミとゲイツが現れ、クラスメイトの女子二人はゲイツを見た途端去つていった。

「なんだ……」

「ゲイツの顔が怖いから逃げたのよ？」

「……？」

ツクヨミはそう言うが、本人には自覚がないようだ。

「ねえ、さあや。頼みがあるんだけどいい？」

取り合えずゲイツの顔がどうのこうの話は置いておいて、ツクヨミがさあやに頼みがある」と話し掛ける。

「二人とも、今日は俺の見張り……良かったの？」

普段なら視線が痛い程ソウゴを監視してはるはずが、今日は監視がなかったから、その監視される筈の本人は気になってツクヨミとゲイツに尋ねる。

「ちよつとね」

「もしかしてアナザーライダー？」

ソウゴがそう言うのと二人が目を逸らす。どうやら当たりのようだ。

「お前は来——」

「来るな！ 行って言っても行くよ！」

ソウゴはゲイツの言う事は聞かず、一緒に行くつもりだ。

「で、それでどこに行くの？」

その頃、輝木ほまれは放課後の野球部員の練習を眺めていると、ジャージを着た先生が彼女の前に現れる。

「輝木、練習……顔だけでも出してみないか？もう足はいいんだろ？」

しかし先生へ何の答えも返さず、ほまれはそのまま帰っていく。

先生はそんな彼女を呼び止めることも出来ず、只々苦々しい表情を浮かべていた。

「女子生徒の連続失踪事件？」

一方のソウゴ達は、これからツクヨミとゲイツが行こうとしているところに向かっていった。

「うん。警察はまだ気づいてないんだけど、ここ数年に渡って起きてる。」

失踪した女子高生に不思議な共通点があつてね。天秤座生まれの18歳であること」

「そうか……アナザービルドもアナザーエグゼイドもターゲットに共通点があつたよね。確かにそんな妙な共通点、アナザライダーの仕業って考えるのが自然かも！」

ツクヨミの話聞いたソウゴは、これまでのアナザライダーの行動からして共通点があつた事に気づき、この事件もアナザライダー繋がりだと考えていた。

「で、なんでそこ行くのに、俺も一緒なんや……店の準備が……」

「ごめん、保護者が必要だから。順一郎さんは仕事で無理だから、頼めるのハリーしかないなかったの」

店の準備があつたのにと文句を言いながらも、ハリーもはぐたんを抱きながら保護者として付いてきてきてくれた。

しばらくして、青いブレザーの制服が目立つ学校へとやってきた一同。

「天ノ川学園……」

その学園は見るからに、ソウゴ達より年齢が高い人ばかりの居る高校の学校だった。

「ごめんね、さあや。色々面倒なことしてもらつて」

「ううん、高校の見学つて言えばアポが取れるから大丈夫」

ツクヨミがさあやに頼んだのは、この高校の見学のお願いだつたらしい。

「家出した女子生徒を捜索している情報を入手してね」

そう言つて、ツクヨミはソウゴ達にその生徒のチラシを見せる。

「彼女もまた天秤座の18歳だった」

「これまでの失踪事件は何年かおきだが、一つの学校で立て続けに起きている。ここでもまた同じことが起きる可能性がある」

「そうか。この学校で、天秤座生まれの18歳の娘を見張っていれば、アナザーライダーを捕えられるかもしれない！」

「そう言う事、じゃあ中に入りましょう」

ハリーは外で待つとして、ソウゴ達は学園の中へと入っていく。

そのままソウゴ達は見学をしたフリをしながら、色んな生徒から天秤座の生徒は誰かと尋ねる。

「ああ〜！見つからない！」

「めちよつく…見つからない」

——しかし、天秤座の生徒は中々見つからない。

「そもそも、友達の誕生日って仲の良い友達にしか話さないよね」

やはり、天秤座生まれの生徒を探すのはかなり難しい。

「大変そうだね。我が魔王」

「うおっ！また出た」

どうすれば天秤座の生徒を探せるのだろうかと考えていると、またしても、ソウゴの前にウオズが突如して現れた。

「いい加減慣れて欲しいな。我が魔王」

「誰？」

はなはウオズに会うのは初めてだったようで、怪しい恰好でソウゴに親しげに話し掛

ける男性を訝しげに見る。

「ソウゴ君にドライバーを渡した、ウオズさんって人」

「ご機嫌ようキュアアンジュ。それと初めましてキュアエール。私の名はウオズ、よろしく」

いつものように自己紹介すると、ソウゴはそういえばと思いつながらウオズの顔を見る。

「ウオズがここにいるということは、やっぱりアナザーライダーが女子生徒失踪事件に関連してるってことだね？」

毎回ウオズが現れるとアナザーライダー絡みで色々知つてたりする為、何か情報を得ているのかと聞く。

「確かに、この件にはタイムジャッカーが囁んでいる。でも情報が錯綜していて、私にもよく読み解けないんだ」

「なんだ……」

ウオズが大した情報を持ってない事に落胆したが……

「一つ教えられるのが、この件は『流れ星』から始まった」

「流れ星？それってどういう……？」

どういふ事かと思いつながら目を離すと、ウオズの姿はなかった。

「またいなくなつた……」

「進出鬼没だ……」

「そこのお前ら、どうした？」

いつもどうやって消えているのかと考えていたソウゴの耳に声が聞こえ、振り向くと一人、グレーのスーツ姿の男性がこつち近づいてくる。

「見たところ、天高の生徒じゃないな？」

口調からしてここの先生だと思われるが、頭のリーゼントで不良かもと思う部分もあつた。

「はい！ 私達ラヴェニール学園から来たんです」

「ラヴェニール学園って、中学のか？」

「はい。今日はここに高校見学に来たんです」

「へえ〜」

「ここの先生ですか？」

「ああ、如月弦太郎だ。よろしくな！」

ここの教師である男性は、『如月弦太郎』と名乗る。

「あ、そうだ。これ！」

何かを思い出した弦太郎が手に持っていたチラシをソウゴに渡す。

「!?？」

「これって……」

その貰ったチラシは、彼らが探していた行方不明事件の生徒のチラシだった。

「俺の生徒なんだ。なんかあったら教えてくれないか？」

「あのー！」

弦太郎が去ろうとするとソウゴが声をかける。

「うん? どうした?」

「この学校で、天秤座生まれの生徒知ってますか?」

教師である弦太郎なら何か知ってると思いき聞いてみたが、彼は顎に手を当てながら少し考える。

「天秤座……ちよつと待ってろ」

弦太郎に連れられ、ソウゴ達は職員室の前へと移動した。

「ほーいー！」

するとソウゴへ、一人の生徒の名前と誕生日が記載された紙を渡した。

「山吹カリン。うちの学校だと、天秤座生まれはこいつだけだ」

「この人が……」

「でも、おかしいよな。俺が探している生徒も天秤座生まれだからな。早く見つけてや

りてえ」

弦太郎は自分の生徒の事を心配する。

「見つかるよ、絶対に」

見つかるよ、と言うソウゴの顔から、彼は何かを感じる。

「そうだな。うい！」

すると弦太郎は笑みを浮かべながら、ソウゴの拳を数回打ち合わせる。

「何これ？」

「友達の印だ！よろしくな！」

「それ、すごくいい！」

はなは友達の印を見て、感激していた。

「でも、お前とは会ったことがあるんだよな」

弦太郎はソウゴに会ったことがあると言うが、本人は身に覚えがなかった。

「よくわからないけど、よろしく！俺、時見ソウゴ！」

「おっ！」

取り合えずソウゴは仲良くなった印として、弦太郎と握手を交わす。

それからしばらくして見学も終わり、ゲイツとツクヨミに弦太郎から貰った紙を渡

す。

「山吹カリン。こいつが次に狙われる可能性があるな……」

「そうね。明日からマークしておきましょう」

貰った紙を見ながら二人が話していた。

「う〜ん……」

「どうしたの、難しい顔をして?」

一方でソウゴは難しい顔をしていたはなにそう問いかけた。

「やつぱり、ほまれさんプリキュア似合うと思うけど」

はなは輝木ほまれにプリキュアになってももらえないかと考えていた。

「さあやちゃん反対なの?」

「そう言う訳じゃないんだけど……でも、誘われてなるもんじゃないと思うけど」

「そうだね。俺もさあやも、野乃も、なりたいたいと思ったから仮面ライダーやプリキュアになつたんじゃないかな?多分、俺達が会った晴夜やマナも同じじゃないかな?」

「たしかに。ではどう言えば……」

今までに会った仮面ライダーやプリキュアを見ても、誘われてなつた感じはなかった
と思ひ出す。

「行こう、もぐもぐ」

すると、通りすがりのペットショップから輝木ほまれが白い子犬を連れて出てきた。「によほほ〜！輝木ほまれさん！」

はながほまれの登場に又しても驚いていると、ゲイツはほまれを見て小首を傾げる。

「誰だ？」

「同じクラスの輝木ほまれよ。少しは覚えなさいよ」

ゲイツはまだクラスメイトの名前と顔を覚えてない様だ。

「なんでこんなところに……」

「帰りの途中や」

なんでクラスメイトがここに居るのだと思っっているほまれに、ハリーがそう言っている……

「はぎゅ〜」

「きゃ……きゃわたん♪」

彼女はハリーの腕の中に居るはぐたんを見て、デレッツデレに惹かれていた。

そのまま犬の散歩のために、一緒に付いてきてくれた。

「犬飼ってたんだ」

「拾っただけ。迷い犬なんだ。飼い主を探してる間だけ」

「もぐもぐって？」

「と……とりあえず今だけの名前」

犬の名前について問うと、ほまれは恥ずかしながら言う。

「不思議な出会いってどうか？」

「えっ？」

「不思議な出会い？」

ソウゴ達に「不思議な出会い」について聞かれたほまれ。

すると彼女は、もぐもぐが車に轢かれそうな所を助けた時、赤ちゃんの声が聞こえ、それと同時に時間が止まった事があったと話し始める。

「!?？」

「同じだ!?？」

それは、はなとさあやにも起こった現象と似ていた。

「出てけ！出てけ！」

「ここは、俺たちがつかうんだあっち行け！」

すると近くから声が聞こえ、一同がそっちへ顔を向けると、近くのバスケの公園で場所の取り合いが発生していた。

それを見たソウゴが「王様になる身としては、何とかした方が良いよな」と思っている、さつきまで近くにいた筈のはなの姿がなかった。

「コラー!!??」

「え?…あつ、いつの間に!」

そして気付いた時には、彼女がソウゴ達の予想を超えるスピードで公園へと仲裁に向かっていた。

「意地悪ダメ!」

「何だ? 生意気な小学生だな」

「小学生じゃない!」

「どうしたの?」

悪ガキ達に小学生じゃないと文句を言っていると、遅れてやって来たソウゴ達が少し離れた所にいた子供達から事情を聞く。

曰く、バスケしたいのに悪ガキ達が出て行けと言って、公園を独り占めしようとしているらしい。

「まあ、公園の独り占めは良くないよ」

「じゃあ、俺たちと試合しようぜ。負けたら出てやる!」

「バスケで? さあやちゃん、時見君、得意?」

「俺はまあ、なんとか……」

「球技はそこまでは……」

バスケの試合で決めようと言われるも、殆どのメンバーは経験が全然無い為かなり不利の様にも見えた。

だがほまれが後ろから現れると、子供が持っていたバスケットボールを取り、投げつける。

「3 on 3でいいよね」

「ああ、良いぜ。俺たちの相手じゃねえ」

「大丈夫、勝つから」

ほまれは心配そうに見詰める女の子の頭を撫でて、勝つから大丈夫だと言う。

「つたく、店の準備があるのに……」

ハリーがこの調子じゃあ店の準備が出来ないとブーたれながらもベンチに座り込み、ツクヨミとゲイツ、さあやは観戦へとまわる。

「さあやはいいの?」

「私は球技はちよつと……ゲイツ君は良かったの?」

「面倒事にいちいち首を突っ込みたくない」

興味なさそうな顔でソウゴを睨みつけるゲイツの視線を受けながら、ソウゴとはな、ほまれチームによる3対3の試合が始まる。

「デーフエンス! デーフエンス!」

「うわっ！」

だがいざ始まると、ディフェンスをするのはなは簡単に抜かれ。ソウゴも奮戦するが、向こうの方がずっと上手いのか、ドリブルしている最中でもあつさりと奪い取られてしまう。

「話ならねえ」

相手が強くないと知り、余裕をかます悪ガキの一人。

だがその時、ほまれが一瞬のうちに相手からボールを奪った。

「まぐれだ！」

相手がボールを奪いに行く。だが、ほまれは簡単にドリブルで抜ける。

「話ならねえな」

ほまれが相手が言っていたセリフを意趣返しに言い放つと、その凄まじい瞬発力でディフェンスにくる相手を余裕で躲す。

「流石、輝木さん」

「あの子すごい……」

「あの瞬発力、かなり鍛えられてるな」

ゲイツが感心した様子で観察していると、ほまれはそのままフリーでシュート体制に入る。

「っ——」

しかし、何かを思い出したのか、ほまれは急にシュートを打つのをやめ、はなにボールをパスした。

『えっ?』

「野乃! シュート!」

「えっ?!? えつと、えつと、ふえ〜い!」

はなはいきなりシュートと言われ、咄嗟の勢いでボールを投げる。

「あっ……」

すると偶然にも、彼女が投げたシュートはゴールへと入った。

それを見た悪ガキは「マジかよ……」と漏らしながら、初心者に負けた事実にはガツカリする。

(なんで……打つたなかったんだ?)

はなはシュートが入った事に腕を上げながら喜んでいるが、ソウゴはそれよりも何故さつきシュートを打たなかったのかが気になっていた。

「やった〜! ギゃっ!」

はながほまれに近づこうとすると、勢いよく転けて顔面からダイブする。

「大丈夫?」

「——じゃなかった。めちよつく！」

「……大丈夫？つてか、『めちよつく』つて？」

「『めちよつく！』は、めつちやショツクの略なのイケてるでしょ♪」

「何それ〜」

はなから『めちよつく』の意味を聞いてほまれが微笑する。

その時、悪ガキの一人がほまれの顔をジツと見てある事を思い出し、その顔を驚愕の色に染めた。

「思い出した！お前、天才スケート選手の輝木ほまれだろ！」

「なに？？？ 有名人か！」

「天才で有名人だと？」

「逃げる！有名人にはかなわねえ！」

「「チクショー！覚えてろ！」」

ほまれが天才スケート選手で有名人と思い出した悪ガキ三人組は、負け惜しみを言いながら走って逃げていった。

「行っちゃった……」

「なんだったんだらう？」

その後、子供達からお礼を言われ、しばらく一緒に遊んでいると夕方となった。

「ほまれさん、超カッコよかった!」

「あんたの方がイケてるよ」

プレーを見てカッコよかったと言うはなに、ほまれがそう言い返すと、ゲイツが彼女にある質問する。

「おい、何故あそこでシュートを打つのをやめた?」

「何となく……決められないと思っただから」

「違うな、お前は何かに怯えた。違うか?」

ゲイツが問い詰める様に言うとはまれが顔を下に向け、何かを思い出す。

「さあ……どうだろね」

ほまれは問いをはぐらかすと、もぐもぐを連れて去ろうとする。

「ほまれちゃん!」

「ちゃん……」

「私、ほまれちゃんと仲良くなりたいの!」

はなの言葉を聴いたほまれは大した反応を見せずに、そのまま去っていった。

その頃、クライアス社のビル内部。

社内は誰もいない中、ルूलーとチャラリート、オーラの姿があった。

「データの分析が完了しました」

「サンキューです」

ルूलーが何かのデータを二人に渡す。

「ルूलーちゃん。残業ゴメンね」

「問題ありません」

「感謝するわ。これで奴らも終わりね」

「対策はばっちり。ハプニングでもない限り大勝利」

「ハプニング？」

ハプニングとはどういうことだと首を傾げながら、ルूलーは疑問に思う。

「例えば、また新しいプリキュアがあらわれるとか？まさかね」

「こつちも、奴らがウオッチを手に入れなきゃ楽勝よ」

翌日、ハリーのハウスへと集まったソウゴ達は、ミライパッドで輝木ほまれについて調べていた。

「宙飛ぶ期待の星、天才輝木ほまれ……ジャンプ失敗のケガによる長期休養へ」

「…ケガしてたんだけ。バスケはあんなにすごかったのに、ほんとはまだ足が痛いのかな？」

「昨日のバスケのプレーではそんな感じには見えなかったけど…」

「痛いのはきつと足じゃなくて…」

「足じゃなくて…?」

「さあやなんでシュートを打たなかったのか察していると、ハウスの扉が開く音が聞こえた。」

「うん? 誰か来た?」

「はな達が扉の方へと行くと、そこには見覚えある人がいた。」

「あつ…」

「弦太郎さん」

「よう、また会ったな」

「昨日の高校で会った教師、如月弦太郎はソウゴ達に挨拶をすると、あのチラシを手に持って彼らに見えるように掲げる。」

「ここにもチラシ貼らしてくれねえか?」

「学校だけじゃないんですか?」

「以外と違う場所の方が、何か情報が掴めるかもしれないからな」

それを聞いたソウゴはハリーに許可を取りながらチラシを受け取り、ハウスの柱へと貼り付ける。

「まだ、見つからないようですね」

「ああ、中々見つからない」

彼曰く、自分の生徒が中々見つからないという。多分、弦太郎にも焦りがあるのだろう。

「でも、弦太郎さん凄いです！生徒の為にそんなに必死になれるなんて！」

生徒想いで凄い先生だとはなが言うと、弦太郎は笑いながら拳を胸に当てる。

「当たり前だろ。天高の生徒も他の先生は全員俺のダチだ。俺のダチは全員……俺が守る」

「なんかそれいい！王様になるのに必要な事！」

「王様？」

「うん、俺の夢なんだ！民を全員守る。なんか、カッコいいじゃん！」

「面白いやつだな」

王様になりたいと語るソウゴの言葉に、流石の弦太郎も微笑する。

「じゃあ……俺も」

すると何かを思い立ったソウゴは弦太郎のチラシを半分取る。

「一緒に探すよ！一人よりも二人の方が早いつて言うし！」

「じゃあ私も！」

「私も手伝います」

一緒に探すと言うと、はなとさあやも一緒に手伝うという。

「お前ら……サンキューな！」

三人は弦太郎と共にチラシ渡し、生徒探しの手伝いをする。

その頃、ゲイツとツクヨミは一人の女子高生を監視していた。

「あれが、山吹カリンか？」

「ええ」

監視していたのは、天ノ川学園の天秤座生まれの山吹カリンという少女だった。

「奴を狙いにアナザーライダーが来るかもしれない」

「そうだと良いけど……」

「どうした？」

ツクヨミは何か不満そうな顔をする。

「あの子のことを調べてみたけど、あの子事件があった学校から何度も転校している」
パッドに書かれた彼女のデータをゲイツに見せる。

「何……？　もしかたらあいつ、アナザーライダーと関わりがあるかもしれない
それを聞いたゲイツは、アナザーライダーとの関わりがあると睨む。」

「あれは……輝木ほまれ？」

ゲイツが双眼鏡から覗くと橋の方を歩いている輝木ほまれを見つけた。

「えっ？　本当だ……それに、うちの学校の先生？」

ゲイツ達が見ている事を知らないほまれは歩いていると、反対の方からラヴェニール
学園の教師……梅橋先生が現れ、彼女を見て足を止める。

「先生……」

「輝木……お前のスケートをはじめて見たとき、俺は感動した……」

お前の姿に、元気をもらった気がしたんだ……輝木ほまれ、お前はスターだ。

だから、もう一度頑張ってみないか？」

「やめて、もういいんだって」

「輝木……」

「もうほつといて……」

ほまれは梅橋先生から去っていくと、橋横の塔に着地していたチャラリートが先生か
らトゲパワワを発見する。

「明日への希望よ！消えろ！ネガティブウエーブ！

発注！オシマイダー！」

そして、梅橋先生からジャージ姿のオシマイダーが作られた。

「クライアス社！ツクヨミは彼女を保護しろ！俺はオシマイダーを！」

「わかった！任せて！」

ゲイツはオシマイダーの方、ツクヨミは山吹カリンの方の保護へとそれぞれ別れて向かう。

一方、ソウゴ達もその異変に気づいていた。

「これって、まさか……」

「オシマイダー！」

「あっちだ！」

「おい！どこ行くんだ！」

急いで発生した場所へと向かい、弦太郎も急に何処かへ行ってしまった三人の後を追う。

「何これ……先生！」

ほまれは急な異変に驚き、辺りを見回すと宙に先生が宙に浮いてるのに気づく。

「ほまれちゃん！」

「離れて、ここは危険だ！」

ソウゴ達三人が現場へとやってきた。

「なんだよ。あれ？」

ひとつ遅れてやって来た弦太郎は、初めて見た巨大な怪物に驚く。

「そんなことより先生が！」

ほまれの当惑を含んだ声を聞き、宙に浮いてる先生を確認した。

「どうすれば……」

「大丈夫。さあやちゃん！時見君！」

「うん！」

「ここは任せて！」

ほまれに大丈夫だと言って、はなはプリハートを取り出す。ソウゴとさあやもジクウドライバーとプリハートを取り出す。

「待て、奴を倒すのは俺だ」

「ゲイツ」

更にゲイツも現れ、ジクウドライバーを取り出しながらソウゴの横に立つ。

「行くよ!」

『ジクウドライバー!』

はなの掛け声と共に二人はジクウドライバーを装着し、ウオッチを取り出した。

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

ウオッチをドライバーに装填し、ドライバーのロックを解除すると、ソウゴの後ろから時計が、ゲイツからタイマーが出現した。

「変身!」

「ミライクリスタル!ハートキラッと!」

掛け声と共にソウゴとゲイツはドライバーを回し、はなとさあやはミライクリスタルをセツトし、姿を変える。

「輝く未来をく抱きしめて!みんなを応援♪元気のプリキュア!キュアエール!」

「輝く未来を抱きしめて!みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

変身を完了すると、四人はオシマイダーに構える。

「あのウオッチ……」

「やっちゃっていい！オシマイダー！」

弦太郎がウオツチを見て何かを感じると、オシマイダーが攻撃してきた。

「タアツ！」

それをエールとアンジュは腕を前に出して受け止め。その隙にゲイツがジカンザツクスを放つが、オシマイダーは飛び上がって避ける。

「何……」

「オシマイダー……！」

今度はバスケットボールをエールへと投げつけた。彼女はそれを避けたが、新しいボールを投げつけられ直撃してしまう。

「エール……！」

「だつたら……！」

『フィニッシュタイム！』

だつたらと、ジオウがドライバーのロックを解除。オシマイダーの周囲に「キック」の文字を展開されると、ジャンプしながらドライバーを回す。

『タイムブ레이크！』

そうして自身の足裏に文字を集束させ、ライダーキックをぶちかまそうとするが、簡単にじかれた。

「データはばっちりなんだよ」

チャラリートはジオウ達にデータのメモリーを見せて、余裕そうに言う。

「プリキュア!」

「あんた何か知ってるの?あの二人がプリキュアだって」

「はあ!?なんでばれとんねん!」

ハリーはほまれにプリキュアの正体がバレたことに驚愕していると、アンジュがプリートを操作する。

「フレ!フレ!ハート・フェザー!」

アンジュはハートフェザーをオシマイダーに放つが、今度はバットを出してハートフェザーを返され、アンジュとゲイツに直撃して倒れてしまう。

「もう終わりかよ。じゃあ、さっさとギブアップして」

「俺は……諦めない!俺は、みんなを守る!」

「お前……」

ジオウが起き上がる姿を見て、ゲイツは何かを思っていた。

「おっと!」

するとジオウの前に、白を基準にした複雑なモールドやコウモリに似た耳、パイプのような衣装の付いたアナザーライダー……アナザーフォーゼが現れた。

「アナザーライダー！」

アナザーフォーゼは頭をキュツと撫でると、右腕から半透明のロケットを出し攻撃に出る。

ジオウは対抗するが、アナザーフォーゼからロケットを投げつけられた際の爆発の勢いで吹っ飛ばされる。

「ソウゴ君！」

「私達……プリキュアも、諦めない！」

エールとアンジュが起き上ると、それを見たジオウもすぐさま起き上り、エグゼイドウオツチを取り出す。

「だったらこれで！」

『エグゼイド！』

ウオツチを起動させてドライバーに装填すると、ロックを解除しドライバーを回す。

『アーマータイム！レベルアップ！エ・グ・ゼ・イー・ド！』

（あいつ……本当に……）

少し離れた所で弦太郎が、複眼に「エグゼイド」と描かれたエグゼイドアーマーを装着したジオウを見て何かを思い出していると、ゲイツは落ちていたビルドウオツチを見つめる。

「借りるぞー！」

『ビルド！』

律儀にそう言ってビルドウォッチを装填し、ドライバーを回転させる。

『アーマータイム！ベストマッチ！ビル・ドー！』

複眼にはひらがなで「びるど」と描かれた物になり、ゲイツにビルドアーマーが装着された。

「はあー！」

「ゲイツ……！」

「勘違いするな、俺以外に倒されたくないだけだ」

そのままアナザーフォーゼへと向かい、ドリルクラッシュャークラッシュャーで攻撃する。

「2011年……ぐわあー！」

しかしアナザーフォーゼの左肩に記された日付を見て油断してしまい、アナザーフォーゼの攻撃を受けてしまう。

「ゲイツ！」

「ソウゴ！これ使え！」

「えっ？うお!!？」

彼らの様子を見ていた弦太郎が何かを投げると、その投げつけたものをジオウがキャッチする。

「これって……」

キャッチしたのは、アウトリガーグリップ部が白で、ウエイクベゼル部がオレンジ色のライドウオッチだった。

「それはお前のだろ！」

「よーし……」

弦太郎がウオッチを持っていたのを見て、「前にも会ったことがある」と言ったのはそういう事だったのかと腑に落ちながら、ウオッチを起動させようとする。

しかし、アナザーフォーゼはライドウオッチを使用させまいと攻め込んできた。

「はあ!?？」

「ソウゴ君！」

だが、ジオウへ殴りかかるアナザーフォーゼの拳を誰かが受け止める。

「ウオズ！」

なんと、ウオズが生身でアナザーフォーゼの攻撃を止めていた。

「——外道。お前如きが我が魔王の継承の儀を邪魔するなど、おこがましいにも程がある。下がれ！」

そう言うとうオズはアナザーフォーゼの拳を振り払う。

「さあ我が魔王。継承の儀を」

「う、うん……」

『フォーゼ！』

生身でアナザーフォーゼを振り払ったウオズに驚きながらも、フォーゼライドウオツチを起動させるとドライバーに装填し、ロックを解除してドライバーを回した。

『アーマータイム！ 3・2・1！ フォーゼ！』

背後から現れたアーマーを装着したジオウの姿は、複眼にはカタカナで「フォーゼ」と描かれており。両肩はロケットの先端部分が左右に分かれた形状をした可変装甲『フェアリングフラツパー』が装着。

両腕にはロケットモジュールを模した装置——『ブースターモジュール』があり、背中や脚部にもブースターが搭載されていた。

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え過去と未来をしろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウ・フォーゼアーマー！」

相変わらずのウオズの祝いの言葉を言うと、弦太郎がジオウの隣へと移動する。

「宇宙……キター……!!?」

「宇宙……行く……!!?」

「じゃあ、あとは頼むぜ」

揃って同じポーズを取ると弦太郎が離れる。その時、アナザーフォーゼがミサイルを撃ってくる。

「ほお！」

フォーゼアーマールのジオウは後方へジャンプし回避すると、両手のロケットでミサイルを撃ち落とす。

「なんか、いける気がする！」

そのままジオウは飛び回り、アナザーフォーゼを翻弄する。

その姿に、ほまれは目を奪われる。

「わたしも……わたしも……もう一度……」

フォーゼアーマールで飛び回る姿に何かを思い出していたその時、はぐたんから黄色い光が放たれ、ミライクリスタルが出現した。

「あれってミライクリスタル？」

「じゃあ、輝木さんが……！」

「——走れ！」

「えっ？」

「あれは、お前の未来や！」

「はぎゅー！」

ミライクリスタルを見たハリーが、ほまれへ走る様に叫ぶ。

「オシマイダー！アナザーライダー！奪え！」

チャラリートがオシマイダーとアナザーフォーゼに命令を出し、妨害しようとする。

「行かせないよ」

「いけ！ほまれちゃん！」

二人の援護でほまれは、クリスタルが光る場所へと走る。

「もう一度……」

そしてクリスタルの下へと辿り着いて、クリスタルに手を伸ばそうと、足に力を込めてジャンプをしようとする。

だが瞬間、彼女の頭に静寂と暗黒に包まれたスケートリングが、過去のトラウマが過った。

その時生まれた迷いは彼女の足を引っ張り、掴もうとしたその手はクリスタルに掠ることなく、代わりに何も無い虚無のみを掴んだ。

「あつ——」

彼女は翼を挽がれた鳥の様に地面へ落下し、そのまま転倒しようとしていた直前、弦太郎がクッションになってほまれを支えた。

「おい、大丈夫か？」

「……………あんたは」

「如月弦太郎。先生だ、よろしく」

助けてくれた弦太郎にお礼を言いかけたその時、宙に佇んでいたミライクリスタルは彼女を見捨てる様に消え去り、ほまれの表情が曇り始める。

「ツ——無理……………私…飛べない……………ツ！」

「——また、泣かせてしまった。俺はなんて、不甲斐ない教師なんだ……………」

未来を掴みとれず、己の限界を超えられなかった事に絶望した彼女の目から、涙が溢れる。

そんな彼女を見たオシマイダーの目からも涙が出ると、エールがエネルギーのポンポンを生み出した。

「フレフレほまれちゃん！フレフレ先生！」

ほまれとオシマイダーとなった先生にエールをかける。

「ほまれちゃん！わたし、まだなんだかよくわからないけど……………負けないで！負けちゃダメ〜！」

エールはそう言いながら走りながらジャンプと攻撃を繰り返して出し、オシマイダーを翻弄する。

「フレフレ！ハート！フォーユウ！！」

そしてプリハートを操作し、ハート型の光線がオシマイダーに直撃。

「ヤメサセテモライマア〜ス〜」

オシマイダーは消滅し、残るアナザーフォーゼはフォーゼアーマーを纏ったジオウが押ししていた。

『フィニッシュタイム！フォーゼ！』

「トドメだ！」

そう言うのと体がロケットに変形して突撃し、自分ごとアナザーフォーゼを宇宙まで飛ばした。そして、ドライバーを一回転させる。

『リミットタイムブ레이크！』

「宇宙ロケットきりもみキック！」

無重力状態で身動きが取れない相手に回転蹴りを放つと、アナザーフォーゼは大気圏を貫けて地面へ直撃。体は爆炎に包まれていた。

「何だ？今の技は」

「えっ？きりもみキック……」

宇宙から帰還したジオウは、さっきの技名についてゲイツに話す。

「お前ら?!? あのライダーまだ居るで！」

『えっ!!?』

だがハリーがまだアナザーフォーゼが動いていると言うので、全員がアナザーライダーの方を見る。

「何……あれ?」

「体が綻びてる……」

するとアナザーフォーゼの体が綻び、何かが出てくるように見えた。

『ファイズ……!』

「馬鹿な……」

「別のアナザーライダーが出てきた……!!」

まさか、一人の人間から、また違うアナザーライダーが現れたという事に、みんなは驚きを隠せずにいた。

次回! Re. HUGつとジオウ!

第6話 舞え、新たな誕生! 二つのレジェンドの意思 2003

第6話 舞え、新たな誕生!二つのレジェンドの意思!

2003

——輝木ほまれ、フィギュアスケート界では「天才」と呼ばれる程の大スターだった。現・二年の女子中学生。

スケーター時代の彼女はその日、難易度の高い技に挑戦し、それを華麗に決める……
筈だった。

そんな彼女を地に叩き落すかのように、ジャンプは大失敗に終わり、足には大怪我を負った。

足に大怪我を負った彼女を励まそうと多くの人が、彼女に優しくした。

しかし彼女にとってその優しさは、自分の挫折心を助長させるものだった。

何故なら彼女は、怪我の治療で休養している間に身長が急激に伸びてしまったからだった。

身長が伸びるのがそんなに悪いことなのか!身長が伸びない俺達への嫌がらせか!と思つた君たち、彼女は急に身長が伸びた事でバランス感覚が狂い、ジャンプのタイミングが掴むことが出来なくなっているのである。別に嫌がらせでいつているわけでは

ない。

——実際、身長が高くなるとそれに比例して体重も高くなるので、ジャンプを飛ぶのが難しくなり、フィギュアスケート界では高身長は一般的にハンデとなることが多いらしい。

それ故に、彼女はスケートのジャンプが出来なくなつたと、人々の期待に応えることが出来なくなつたと絶望し、元々長かつた髪をスケート界との縁と一緒に切り、他人との交流と共にスケートを遠ざけるようになった。

——これはある人が言っていた言葉だが、「夢」というのは「呪い」と同じであるという。

そして、その呪いを解くには、夢を叶えなければならぬ。

だが、ジャンプの失敗によって挫折し、スケート選手としての夢へ歩む事が出来なくなつた彼女は、どうなるのか？

——それは当然、彼女は「スケート選手になつて、未来へ飛び続ける」という夢を叶えることが出来ないうちは、一生呪われ続ける。

そしてまた、その呪いを解くことが出来るのは、皮肉にも彼女只一人だけであつた。

——だがもし、夢に向かつて飛ぶことが出来なくなつた彼女を、呪いから救うことが出来る方法を知っている者が居るとすれば。

それはきつと、『限界をぶつ壊すほどにドデカい友情』と『夢を守る者』だけが知っているに違いない。

爆炎の中で立ち上がったアナザーフォーゼのボディとフェイスが剥がれ落ち、内側に小さな目がある黄色い複眼を持ち、骸骨の様な身体には歪んだ赤いラインが走っているアナザーライダーへと変貌した。

「ウオオオオー!」

『ランチャー オン…』

そしてアナザーライダーが雄叫びを上げるとアナザーフォーゼの姿に戻り、足から現れた半透明のモジュールから一斉にミサイルを放って反撃に出る。

「くうー!」

『ゴースト!』

ジオウ達はミサイルの爆撃に巻き込まれるも、ゲイツがゴーストウォッチをドライブに装填。

『アーマータイム!カイガン!ゴースト!』

ゴーストアーマータイムを装着したゲイツは、パーカーゴーストを召喚して連続攻撃でアナ

ザーフオーゼを吹っ飛ばす。

「ウウウ……」

不利を察したアナザーフオーゼが逃げていったのを見て、四人は変身を解除した。

「なんなんだ。あのアナザライダー……」

アナザライダーは取り逃がしたが、オシマイダーが消えたことで周りは元通りに戻った。

だが、ミライクリスタルを掴むことの出来なかったほまれの顔は優れなかった。

「じゃあ、ここ……」

「フレフレツほまれちゃん！『やめて……っ！』…ツ！？」

はなは彼女を励まそうと応援するが、ほまれは大きい声で辞めてと叫び、我に帰った彼女は申し訳なさそうな顔になる。

「ごめん……今の私……」

「今はそつとしてやれ……」

ハリーははなにそつとしておくように言う。

「ほまれちゃん……また明日、また明日！」

「輝木さん！」

ソウゴがこの場から去ろうとするほまれに声をかける。

「次は届くよ!絶対!」

その頃ツクヨミは、アナザーライダーの標的となるかもしれない山吹カリンに接触を図る。

「山吹かりんさん……」

「あなた誰?」

「女子高生連続失踪事件って知ってる?」

「っ!?」

「あなたはその標的になってるの。変な怪物が、何人もの生徒を犠牲にしてきた。とりあえず、ここからは逃げたほうがいい。あたしたちのところへ来ない?」

「——その必要はない」

保護を目的に山吹カリンと一緒に来ないかと提案する。

するとツクヨミの後ろから、オリーブグリーンフードを被った男性が現る。

「誰? ……もしかして、この人を狙っているアナザーライダーの仲間?」

フードの男をアナザーライダーの仲間だと警戒したツクヨミは、懐から取り出した携帯武器・ファイズフォンXを『プラスターモード』にして銃口を向ける。

「この子には手は出させない」

「邪魔しなくてももらえるかな？」

男性がそう言って二人：否、カリンの方を睨みながら襲いかかろうすると、彼の背後から現れた長髪の男が止めに入った。

「——貴様は……乾……」

「久しぶりだな、草加」

「……乾、何のつもりだ？」

「見ればわかるだろう……お前を止めに来た！」

そう言って長髪の男——乾巧がフードの男——草加雅人に飛びかかり、ツクヨミとかりんに手を出させないよう妨害する。

「ちよつと！」

その混乱に乗じて逃げ出したカリンを見たツクヨミが後を追うも、既に彼女の姿はなかった。

「見失ったか……」

「草加！」

「乾……これはお前には関係ない話だ！」

巧の呼び止めに対して、草加はそう言い捨てて去っていく。

その場に取り残された巧は、カリンの姿はないかと思渡していたツクヨミへと顔を向

けた。

その頃ソウゴ達は、先の戦いの事を思い出しながらハリーのハウスへと向かっていった。

「どうして、クリスタルが届かなかったのかな?」

「簡単な事だ……あの女に覚悟が無かった。それだけだ」

はな達は何故あの時、ミライクリスタルに手が届かなかったのかを話していると、ほまれの手が届かなかった理由をゲイツはそう推測する。

「輝木さんは、そんな風に見えなかったけど……」

「クリスタルが届かなかったんだ。他に何かある?」

「……」

「さあや、どうしたの?」

「ほまれさん……もしかしたら、クリスタルが届かなかったのは、他の理由からだと思う」

ハリーハウスへと戻ってきたソウゴ達。

ソウゴがフォーゼウオッチを取り出し、カウンターに置かれたライドウオッチを保管するダイザーへとセットする。

「誰だ!?？」

すると部屋の中で男性の声が響く。其処には先程、ツクヨミと山吹カリンを助けた乾巧がいた。

「時見ソウゴですけど……」

「……明導ゲイツだ」

「野乃はなです……」

「薬師寺さあやと申します……」

「……そうか。まあ座れ」

自己紹介をしたソウゴ達が「この人だれ?」と思いながら座ると、巧は「西洋洗濯舗菊池」という文字の隣に「乾巧」と書かれた名刺を机に置き、彼らに渡す。

「乾巧だ。流しでクリーニングをやってる。世界中の洗濯物を真っ白にするのが、俺の夢だな」

「山吹カリンがアナザライダーとは別の男性に襲われてね。その時、助けてくれたの」「山吹カリンって、この間の……?」

奥から来たコーヒを持ってきたツクヨミが、先程この男性に自身とカリンを助けて貰った事を話していると、カリンの名を聞いたさあやは、弦太郎がくれた紙に書かれた天秤座生まれの女子生徒だと思ひ出す。

「そいつは何故山吹カリンを狙ってる。アナザーライダー、或いは怪物の仲間か?」
「さあな!」

そう言うのとコーヒーを飲もうとする。だが思ったより熱かったのか、一瞬間をしかめてコップを置く。それを見て猫舌なんだとソウゴは微笑すると、立ち上がった巧はダイザーに置かれたウォッチを見る。

「そつちはどうだったの?」

ソウゴ達はカリンの対応に当たっていたツクヨミに、新たなライドウォッチとほまれがクリスタルを出現させた事を話す。

「輝木ほまれがミライクリスタルを出現させた!」

「でも、掴みそうになった途端にバランスを崩して掴めなかった……」

「そしたら、クリスタルが消えちゃった……」

「……アナザーライダーの方は……?」

「逃げられた……」

「奴が生まれたのは2011年……仮面ライダーフォーゼのアナザーライダーかもしれない」
「ない」

「フォーゼ……?」

「仮面ライダーフォーゼ……2011年に誕生した、18人の仮面ライダーの一人だ」

「じゃあ、2011年に事件の鍵があるの?」

ツクヨミはフォーゼが誕生した2011年に事件の鍵があると考えるが、ゲイツは首を振って「いや…」と否定する。

「奴は、二つのライダーの力を持つてる可能性が高い」

「二つ?」

「ジオウがフォーゼオッチを使ってアナザーフォーゼを倒したがその時、奴の体から別のアナザーライダーが現れた」

ゲイツはジオウがアナザーフォーゼを倒した時に、中から別のアナザーライダーが出てきたことを話す。

「それって、この事件は2011年に始まったんじゃないかって、もつと前から始まってたってこと?」

「……おそらくな。また最初から調べ直しだな」

そう聞くソウゴに、この事件をもう一度、一から調べ直す必要があると語る。

「よし、俺が、もう一度天ノ川学園に行く」

「でも、ソウゴ君一人じゃ……」

「……俺も行く」

「待ちゃ!」

巧も一緒に行こうと言うと、ハリーが手を伸ばして勢い良く立ち上がる。

「何?」

「明日行く前に、お前らに手伝ってもらおう事があるで……」

翌日。輝木ほまれば放課後、はなとソウゴの二人と一緒に目的地へ向けて歩いていった。

『お願いあるんだ!』

『力を貸してくれないかな?』

学校の屋上で目を覚ました所に二人が現れ、そう頼み込まれてしまった事を思い出しながら、何で私に頼って来たのかと疑問に思っていると、湖の横に建てられた、金の石像が置かれている中国寺院門風の外見をした玄関を持つツリーハウスへと到着した。

はな達に連れられて中に入った彼女が辺りを見渡すと、中には回転ハンガーにかけられた毛皮の服や、金のシャンデリアや風神雷神の屏風といったインテリアがごちゃ混ぜに置かれていた。

「もうすぐお店オープンなんだけど……」

「どんな内装にすればいいのか分からなくて……」

『力を貸して〜!』

「うっ……」

みんなが頼む姿を見て断れなかったほまれは、彼らと一緒に店の準備を始めることにした。

「うくん……どんなお店にしたいの？」

「そら、ぎょうさんお客さんが来る店にしたいわな」

そう言うハリリーは色んなドレスや服を見せる。

「お子様からマダームまで——ビューティーハリリーが綺麗にまとめますでえ——」

「だったら、お店のイメージずれてると思う」

「なんでや〜〜！」

しかし、ほまれにあっさり否定された。唐草模様の椅子に座って彼らの話を聞いていた巧も「確かに少し趣味悪いな」と、店の内装を見ながらそう呟いていた。

「めっちゃセレブ感出してのになんでや!?？」

「どうせなら……」

ほまれの指示で、親しみやすく気軽に訪れそうな雰囲気へと改装された。

「こんな感じはどうかな？」

「わあ〜かわいい〜♪」

オシャレに改装された店は、はなとさあやの二人にも好評だった。

「じゃあ、俺達そろそろ行くよ」

「頑張れよ」

店の準備も終わり、ソウゴと巧は山吹カリンのいる天ノ川学園へと向かった。

「ねえ、お店の写真キュアスタにあげてもいい?」

キュアスタに載せてしばらく経った頃には、多くのお客さんがハウスへとやって来た。

「すごい宣伝力!」

「キュアスタすつごーい!」

「ウハハハハッ大盛況や!」

お店の大盛況だが、人混みは凄まじかった。

「でも、人を多すぎじゃない……?」

「いなくなるまでは、調べるのは無理だな……」

お客さんがいなくなるまでは調べられず、はぐたんが泣き出した。

「はぐたんがびつくりしちやっただうしよう〜」

「はな、そんな時はこれや!タンバリンや!」

そう言つてハリーが、銀で縁取られた大きめのハートと濃いピンクのハートの装飾が

付いているピンクのタンバリンを渡す。

はなが鳴らすとはぐたんは泣き止み、ハウスにもリズムよく客足が入って更に盛況も上がる。

天ノ川学園から下校中の山吹カリンの前に、待ち伏せしていたソウゴと巧が現れた。

「誰？」

「俺、時見ソウゴ。今日から俺と、その……」

「乾巧だ」

「そう。俺達で君を守るから」

「何であなた達が……？私と何も関係ないのに……」

「俺、王様になりたいからさ。王様って、別け隔てなく民を守るのが使命でしょ！」

「意味わかんない」

王様と聞いたカリンは、その年になって王様って…と、呆れ顔でそう呟き、学校の方へと逃げていく。

二人は彼女の後を追うように、尾行を始めたのだった。

クライアス社あざばぶ支社のビルでは、ライトに当てられたチャラリートが蒼い服を着た男性、リストルにしぼられていた。

「リストルさん、どうしてオレちゃんが罰を……」

「なぜ、報告を怠ったのです?」

「それは……」

「フフフ……新しいプリキュアと若いジオウに、あの負け犬のゲイツにやられているなんて、報告できないわねよね」

「どうやら、チャラリートが社に報告してなかった事がバレてしまったようだ。」

「組織運営において報告・連絡・相談は重要。罰せられるのは当然なこと」

「うう……」

「よくこんな失敗隠し続けたわね。ぶつとびー」

別のデスクの椅子に座っていた、セレブ感ありそうな女性が扇子を隠して嘲笑う。

「オレちゃんに、最後のチャンスをください!」

「——その言葉を信じよう」

「あざっす!」

このままではオレちゃんの立場が危うい……そう思ったチャラリートはすぐさま天井から自分達を覗いている人物へ土下座。天井から流れる許可の声に頭を下げる。

「失敗した時は……分かってますね」

「は、はい……」

「——困ってるようだな……」

「スウォールツさん……」

チャラリートは失敗した時の状況を思い浮かべ、危機感で脂汗を垂らしていると、後ろからアナザーフォーゼを生み出したスウォールツが現れた。

「そんなお前に、良いことを教えてやる」

スウォールツは何かを企んでいる様な笑みを浮かべると、チャラリートにこの危機を挽回する術を申しかける。

その頃、ハリーハウス改め『ビューティーハリー』。

「ダツハハハハハ〜！こない人が来るんやったら……値段倍にしといたらよかったわ
〜」

ようやく店が終わり、売り上げが好調だった事に大喜びするハリーの姿を横目に。ゲイツとツクヨミは、アナザライダーが起こした過去の事件を調べ直していた。

「これが2010年の失踪者……」

「やはり事件は2011年より前から始まっていた」

ゲイツの睨んだ通り、この事件は2011年より前に行われた。

「ねえ、ほまれちゃん。写真撮って!」

「えっ……?」

ゲイツ達がアナザーライダーの事件を調べている頃、はなから写真撮ってくれないかとお願いをされるほまれの姿があつた。

「ねっ、お願い、お願い!」

「分かつた、分かつた」

「ハリーやツクヨミさんも!」

ほまれが記念撮影の写真を撮る準備をしていると、はなはツクヨミとハリーに手招きしながら誘う。

「私達はいいわ」

「遠慮しとくわ、オレが入るとお前らが霞んでまうやろ。」

——まあ、でもどうしても言うなら『行くよ』ウニヤニヤ!ほんまにハブにすんなやー!」

ハリーが言ってる途中に彼女達は写真を撮り、キュアスタに載せた。

「今……何か変な生き物が……」

「ほくんとだ！キュアスタばえするいい写真！」

ハブられて急にネズミに戻ってしまったハリーの姿を視界に入れてしまったほまれが、今のは何なのかと聞こうとするも、はなが慌てて写真を見せながら誤魔化したおかげで、なんとかバレずに済んだ。（……本当に済んだのか？）

「なんか自分のこういう顔、久しぶりに見た……」

ほまれは写真に写った自分の素顔を見てそう溢すと、はなにずっと聞きたかった事を尋ね始める。

「ねえ……なんで今日、わたしのこと誘ってくれたの？わたし、プリキュアになれなかったんだよ……？」

「プリキュアとかプリキュアじゃないとか、関係ないよ。」

私、ほまれちゃんが好きだし、仲良くなりたいたんだ」

「……ごめん、ちよつとはぐたと散歩してくる」

自分を呼んだ理由を語るはなのシンプルな言葉に動揺したほまれが、はぐたんを抱えて立ち上がり、ハウスの外へと出て行ってしまった。

「そつとしてあげた方がいいよ」

「十分頑張つとる奴に、頑張れ言うなんて酷やで」

ツクヨミとハリーがそつとしておけと指摘。追いかけてやろうとしたはなは足を止める

が、さあやも同じように立ち上がって彼女の手をつないだ。

「人を応援するって、すごく難しい事だと思う。でも……このままじゃあ、いけない気がする。行こうはなちゃん!」

「さあやちゃん……うん!あんなほまれちゃん、やっぱりほつとけない!」

二人がほまれを追おうとしたその時。急にさあやが「あれ?」と呟き、ゲイツとツクヨミが調べていた写真を見て驚く。

「どうしたのさあやちゃん?」

「これ……」

「さあや、どうかしたの?」

「この写真、変じゃないかな?」

そう言って他のメンバーに、事件のあった2011年と2010年の写真を見せると、それを見て不可解な点があることに気付いたゲイツは驚愕する。

「どういうことだ。何年たつても、同じ姿をしてるとは……」

その写真には、山吹カリンの姿——しかも、今と全然変わっていない姿で映っていた。

「クライアス社……」

「……ここは、私とゲイツで大丈夫だから。二人は輝木ほまれの方に行つてあげて」

「うん!」

二人がほまれるの後を追った頃、ソウゴと巧は天ノ川学園高校の屋上にやってきたカリンを見守っていた。

「何かおかしい……」

「どうした？」

「あゝいや……俺達が彼女を見張ってから……もう4時間くらい。それなのに彼女、まだ1度もお手洗いに行っていない」

「いい加減にしてー!」

流石に今の発言はまずく、デリカシーの無さに彼女も怒る。

「ほおっておいてくんない!」

「あ、ちよつと!」

後を追おうとするソウゴと巧だが、ちよつと誰かとぶつかかる。

「あれ、ソウゴ!」

ぶつかつたのは、フォーゼライドウオッチをくれた如月弦太郎だった。

「ごめん、色々訳あつて18歳天秤座生まれの女子高生が大変なんだ」

「あつさり言うか? 普通……」

「色々か……なら、俺も協力するぜ!」

弦太郎も拳を向けて協力すると言ってくれた。

「今、この高校だと該当者は彼女一人だけで……」

「えっ? いや、二人だぞ」

「この前調べた時は、一人だったはずだけど……」

あの時、弦太郎から渡された資料では山吹カリン一人だけだった筈。

「ああ、言つてなかったな。俺とは違う教室を受け持つてる3年生のクラスに、天秤座生まれの奴がいたぞ。

そいつも10月の頭あたりで、18歳になるはずだ」

同じ頃、ハリーハウスでも新たな事実が発覚した。

「ちよつと、これ見て!」

「山吹カリンは……既に死んでいる?」

ツクヨミが見せた過去の記事、そこには山吹カリンは既に死んでる事が書かれていた。

「2003年10月25日、交通事故で死亡。翌日未明に遺体が行方不明となる。同日、同級生二名が失踪……」

更には事件が起こった日、二人の同級生が失踪していた。

これらの記事を見たゲイツは、ある事実気付いた。

「そうか……」

「どうしたの？」

「不思議だと思うことが、ようやくわかった……」

今までのアナザーライダーなら、直ぐに標的である存在を狙う。

だが、山吹カリンは違う。彼女はアナザーライダーに守られている」

「でも、なんでアナザーライダーが彼女を……」

「それはわからんが……アナザーライダーは女子生徒達を狙い、何らかの力で、山吹カリンを生かし続けたんだ。2003年から15年にも渡って、だ」

それからしばらく経った頃、ほまれがはぐたと一緒に公園のブランコに座っていた。

「なんでわたしこうなんだろう……」

「——輝木さん」

「っ。あんたは確か……仮面ライダーの」

「ソウゴ。時見ソウゴ」

そこにカリンを見逃したソウゴと巧がやってきた。

「……アンタなんで、仮面ライダーなんてやっての?」

「王様になりたいから」

「王様……何それ?」

「俺の夢なんだ」

「夢?」

王様になりたい語るソウゴの口から、それが自分の夢なんだと聞いたほまれは、ポカ
ンとした表情になる。

「俺は、困ってる人とかを助けられる、最高で最善の王になって、世界を救いたいんだ。
それが、俺の夢……」

「夢……」

「ソウゴ君」

ソウゴとほまれが話をしていると、はなとさあやもやってきた。

「みんな」

「ごめんね、来ちゃった」

「……ごめんね」

するとほまれがはなに謝った。謝られた本人は「えっ、何が?」と頭に“?”を浮か
べる。

「応援してくれたのにきついこと言っちゃった」

ほまれが謝罪した理由を語っていると、はなは眉を下げながら口を開く。

「……あの時は、何て言葉をかけていいか正直わからなかった。

もつとイケてる言葉言いたかったけど……心がうーってなってフレフレしかできなかったの。お子ちゃまだな、私」

「変なの、わたしあんたみたいになりたいのに……、

みんな、あんたみたいな子好きでしょ？」

「そんな事ないよ」

「……そう」

「おつちよこちよいだし、ぐいぐい行き過ぎて引かれちゃうこと多いし」

「はぎゆく、はぎゆく」

ほまれの言葉にそんな事はないと否定していると、抱いて欲しいようにねだるはぐたんをはなが抱きかかえる。

「全然、そんなみんなに好かれる子じゃないよ。

だけど……わたし、なりたいた野乃はながあるの、だから頑張るの」

「私、ほまれさんのこと好き、前よりもずっと好きになった。

私達きつと、すぐく仲良くなれる」

はなとさあやの二人が、自身達の気持ちを伝えると…

「その『ほまれちゃん』って言うの……なんか恥ずかしいやめて……」

『そこ!??!?』

どうやらその呼び方は恥ずかしかったため、やめて欲しいらしい。

「じゃあ、なんて呼べば?」

ソウゴの疑問に対し、ほまれの事をなんて呼べばいいのかと悩む。

「助けてええええええ!」

そこへ悲鳴のような声が聞こえると、天ノ川学園の女子生徒がアナザーフォーゼに追われている光景が映った。

「何なんだ?あの化けもんは!」

「アナザーライダー」

アナザーフォーゼを見て、驚きを隠せない(さつきまで黙ってソウゴ達の話聞いていた)巧と、ドライバーを取り出して女子生徒を助けようとするソウゴ。

「やめて、佐久間君!」

「カリン……」

そこへ山吹カリンが現れ、女子生徒を殺そうとしていたアナザーフォーゼは彼女を見て動きが止まった。

「こんなことしても、何にもならない……もう私のために、犠牲を出さないで！」

「——その通りだ、佐久間。お前の妄執は、俺が断ち切つてやる」

カリンがアナザーライダーを説得していると突如、草加が彼女を背後から捕えて手をかけようとする。

「草加……ッ！うわああああー！」

それを見たアナザーフォーゼは怒り出し、カリンから離して草加を一方的に痛めつけると、トドメに首を折ろうとする。

「草加ッ！」

それを見た巧が、ソウゴやはな達よりも早く走り出し、アナザーフォーゼを妨害することで草加を間一髪のところまで助けた。

「乾……何故……？」

「俺はお前が嫌いだ草加。だがな、お前は俺の仲間なんだよ。……悔しい事にな」

巧と草加が話し合っていると、そこへ遅れてゲイツとツクヨミも駆けつけてきた。「邪魔をするな。すべてはカリンのため……」

「アナザーフォーゼ発見！それに……輝木ほまれちゃんだよね」

更にそこへ、チャラリートも現れた。

彼はほまれとアナザーフォーゼを見つけると、ほまれに黒いリングを放ち拘束した。

「なっ!? ああっ!」

「ナンパしに来ました」

「ナンパ……ウツ!」

困惑するほまれを宙に浮かせて、そのまま何処かへと連れ去ろうとする。

「離せ!」

そんな彼女を助けに行こうと、巧がチャラリートに掴み掛る。

「おっさんは退いてろ!」

「ぐわあ!」

だが直ぐに払いのけられてしまい、ほまれとアナザーフォーゼを連れて行ってしまう。

「そんな……助けにいかない!」

「待て、ソウゴ」

起き上がった巧が彼女を助けに行こうとするソウゴを止めると、懐から黒と銀で構成されたライドウオッチを出した。

「以前からずつと持ってた。これはお前のもんだろ?」

「おいジオウ!」

そう言つてウオッチを渡すと、アナザーライダーの出現を聞きつけたゲイツが現場に

訪れた。

彼の姿を見たソウゴは「丁度よかった」と言わんばかりに口角を上げると、受け取ったばかりのライドウオッチをゲイツへ渡そうとする。

「何？」

目の前に居る敵である筈の男が自分のウオッチを渡してきたのを見て、何を考えているのだと疑問に思うゲイツの手を取り、半強制的にウオッチを渡した。

「頼んだ。アナザーライダーを止めてくれ。俺はクライアス社を止める」

「俺が？」

「うん！」

「……いいだろう」

ウオッチを託されたゲイツは彼の真意を察したのか、何も言わず振り向いて走っていった。

「時空転移システム……起動！」

そのままタイムマジンへと乗り込み。移動する時代を2003年へとセットし、過去へと向かった。

その頃、チャラリートはほまれをどこかのビルの壁へと連れ込む。

「そこからここまでジャンプしてみれば?」

ビルの外壁の狭い足場に立たされたほまれに、隣のビルへとジャンプしてみればと煽る。

だが高所に立たされ、恐怖心に囚われた彼女に、ジャンプをする勇氣を出すことは出来なかった。

「やっぱり無理!身長が伸びてから、一度もジャンプに成功してない。それが真実でしょう?」

「私は……もう飛べない……」

「——そう、もう二度と輝けない」

「——ッ!?」

その時、彼女から溢れ出るトゲパワワの量が最大へととなった。

「明日への希望よ!消えろ!ネガティブウエーブ!」

「アアアアアアアアーツ!」

「発注、オシマイダー!」

「私には……未来はない……」

絶望で心を包まれたほまれから、頭にポニーテールが生えた恐竜の様なオシマイダーが作られた。そしてオシマイダーの前に、アナザーフォーゼも現れた。

「さあ、アナザーフォーゼ。あれと融合しろ！」

チャラリートはアナザーフォーゼに、オシマイダーと融合しろと持ちかける。

「本当に、カリンに命を戻せるのか？」

「当然！約束は守ってやるようん！」

「カリン……これで……」

ニヤニヤ笑いながらそう言う彼の言葉を信じたアナザーフォーゼは、愛する少女を救うために迷わずオシマイダーの元へと行く。

「うおおおおおー！！？」

すると、アナザーフォーゼとほまれから作られたオシマイダーが一つになると、お互いに融合を始めた。

「思った通り。でっかい夢ほど、失った時の絶望がでっかいじゃん。

それと失った物を生かし続けるアナザーライダー……やはり合わさった。

いけエ！『オシマイフォーゼ』！」

「——もう、飛ベナイ……でも、助ける……かりん」

大きさは先より少し小さくなったが、オシマイダーとアナザーフォーゼが融合したことで、アナザーフォーゼの面影を残す。体のあちこちで血管の様に伸びた赤いラインが特徴的なオシマイダー……オシマイフォーゼへとなった。

「ほおこう、これは素晴らしい結果だな」

そしてビルの上から、スウォルツがその様子を見ていた。

かつて事件があった、2003年。

山吹カリンと佐久間、二人は流星群を見に行く予定だった。

だが雨が降りだし、流星群が見れなくなつたためなのか、待てども佐久間は来ずで、落ちしているカリンはその場から歩きだす。

だがそんな彼女を更なるどん底へ蹴り落とす様に、不運な事故に遭つてしまい亡くなつてしまう。

「僕が、約束に行かなかつたから……あああああーっ!!」

カリンの死に泣き続ける佐久間、すると彼の周りの時が止まつた。

「あなたに、ちよびつとだけ悪い知らせと、めちやくちやいい知らせがあるの」

そこに彼の周りの時間を止めた、タイムジャッカーチームのオーラが現れた。

「この後あなたは、一生自分を責め続ける。でも私と契約すれば、この娘を救うことができる」

彼女は毎度のように契約をもちかける。

「何でもする!頼むから……頼むからカリンを!」

「いい子ね」

『ファイズ……！』

オーラはファイズの力を宿したアナザーウオッチを、佐久間の体内へ入れた。そして、佐久間はアナザーファイズとなった。

「おめでとう。歴史が変わって、今日からあなたが仮面ライダーファイズよ」

「カリン……」

佐久間は怪物と化しても、やさしく愛する人の名を呼ぶ。

アナザーファイズとなった佐久間は、フラフラと歩いてると同級生の女子に声をかけられる。

「佐久間くん？」

「……坂本。お前、カリンと同じ、天秤座生まれだったよな」

その娘はカリンが亡くなった翌日、失踪した二人の娘だった。やはり彼女達がアナザーになった佐久間による、最初の犠牲者だった。

『ファイズ……！』

アナザーファイズになると、その女子高生を青い炎のような生体エネルギーに変換し、体内に吸収する。

「この力があれば……カリンに命を与えられる！」

「そうゆうこと」

アナザースライダーとしての力を与えたオーラが、思い描いたようになった事に満足する顔を浮かべた。

「なるほどな」

するとゲイツがこの時代へと現れ、それを見たオーラはゲイツ以外の時を止める。

「その男は、山吹カリンを生かす為、なんの関係もない女子生徒を襲い続ける……だがその力は、15年の歳月の中でやがて衰え。更に力を求め、もう一つのライダーの力を得た」

「まさか……スウォルツ」

現代、2018年。

草加がソウゴ達に、カリンと佐久間が起こした事件の内容を話していた。

「佐久間の犠牲者は、世間では家出として扱われていた。事件が明るみに出そうになるとカリンを転向させて、同じことを繰り返してんだ」

それを聞いていたはな達は、あの写真で山吹カリンが違う学校に姿があつた事を思い出した。

「……あんたは、何で彼女を狙ったの?」

ソウゴは草加がカリンを狙う理由を聞く。

「カリンも佐久間も、流星塾という養護施設の仲間だ。俺と同じくな」

「流星塾……」

流星塾という言葉から、ウオスが言ったことを思い出す。

『この件は『流れ星』から始まった』

「やっぱり、流れ星から始まったんだ！」

「化物になった佐久間を止められない。俺がカリンを葬り、カリンの骸を佐久間の元から離せば。そうカリンから頼まれてな」

今まで草加がカリンを襲っていたのは、単にカリン本人が頼んでいたものだと知る。

「仲間のために自分の人生を台無しにした訳か。バカなヤツだな……」

「そう言う巧もね」

巧が呆れた様子で呟くと、ソウゴが巧も草加と似たような事だと横槍を入れる。

「佐久間って人も、ここに居る皆も、自分を犠牲にしてまで仲間を救おうとしてる。でもこのままじゃ誰も救われない。この犠牲のサイクルから出るために、やるべきはただ一つだ！」

「お願い……佐久間君を止めて」

「うん!」

カリンのお願いを聞き入れたソウゴは、はなとさあやの顔を見て頷き合うと町の方へと走る。

三人が町の中へと着くと、町ではオシマイフォーゼが暴れていた。

「あれは……」

更にさあやが指を指す方を見ると、ビルの壁で十字架上に磔されたか様に拘束されているほまれを見つけた。

「助けなくちゃ!」

「うん!」

「行こう!二人を助けに!」

『ジクウドライバー!』

ソウゴはジクウドライバーを装着しジオウオッチを取り出すと、はなとさあやはプリハートにクリスタルをセットした。

『ジオウ!』

ウオッチをドライバーに装填しロックを解除すると、ソウゴの後ろから時計が出現。

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

掛け声共にドライブバーを回し、はなとさあやはプリハートを構えて、その姿を変える。

「輝く未来をく抱きしめて!!みんなを応援♪元気のプリキュア！キュアエール！」

「輝く未来を抱きしめて！みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

三人が変身すると、オシマイフオーゼへと向かっていく。

「ヤアア！」

『ガトリング オン…』

エールが攻撃しようとする、いきなりオシマイダーの足から銃弾が放たれた。

「エール！」

アンジュがバリアを張りエールを守ったが、オシマイフオーゼの猛攻は続く。

「くつ。この攻撃……どこかで？」

「エール！アンジュ！なんだ、あのオシマイダー……」

アンジュとジオウは暴れまわるオシマイダーを見て、その姿がアナザーフオーゼと同じ事に気付いた。

「苦戦してるね魔王」

「ウオズ」

またしてもいきなりウオズが現れた。

「あのオシマイダーは、アナザーフォーゼの力を取り込んだ」

「えっ!?」

「我が魔王。この試練を超られるか、見せてもらおうよ」

そのままアナザーフォーゼと融合した事を言い、期待する様な笑みを浮かべたまま去っていった。

「ほまれ!なんちゆうこつたや……」

ハリーとツクヨミ達が、ほまれがいるビルの壁へと到着した。

だが彼女は下を向いたまま、まるで死んだような表情で、返事を返すことも無かった。

その頃、2003年では…

「いいの?彼を倒せば彼女は死ぬ」

「山吹カリンは死んだ。その事実を変えることはできない!」

「へく…貴方は、誰も救わないんだ?」

「救うさ。仲間のために奴が投げ打った……15年の歳月をな!」

ゲイツの言葉を聞いたオーラは髪をかき上げると時間を動かし、アナザーファイズが

ゲイツを襲う。

アナザーファイズの攻撃を受け止め、腕のゲイツウオッチを掴む。

『ゲイツ！』

ゲイツウオッチを起動させ、アナザーファイズの攻撃を躲しながら、最後にアナザーファイズにキックを喰らわせつつ、ドライバに装填する。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

仮面ライダーゲイツへと変身したゲイツは、ファイズライドウオッチを起動させる。

『ファイズ！』

ファイズウオッチを装填したドライバのロックを解除。そのままドライバを回し、ファイズアーマーがゲイツの体へと装備される。

『アーマータイム！コンプリート！ファイズ！』

複眼には「ふあいず」の文字が刻まれた『アルティメットファインダーインジケーションバタフライ』、両肩には開いたファイズフォンを模した『フォンギアシールド』を装備している、仮面ライダーゲイツ・ファイズアーマーへとなった。

「ちっ！ファイズウオッチを手に入れたなんて……」

オーラはファイズウオッチを持つている事を知り舌打ちすると、この場から去ってい

く。

こうして、ゲイツ・ファイズアーマーとアナザーファイズの交戦が開始した。

現代、2018年。

ジオウ達は現在、オシマイフォーゼに苦戦を強いられている。

オシマイフォーゼによるアナザーフォーゼの力と、強力な回転攻撃に翻弄されているのだ。

「いけ!オシマイフォーゼ!ミライクリスタルをプリキュアから奪うじゃん!そして、ジオウを倒せ!」

「オシマイダ〜……救う……」

「ほまれちゃんの未来は!」

「プリキュアが取り戻す!」

「そして……もう犠牲を出させない!」

それでも、三人は必死になってオシマイフォーゼを止めようとする。

「もう未来はない……もう、飛べない……」

一方のほまれは、未来への希望を持たず、下を向いて顔に陰を作ったまま、壊れたレ

コーディネーターの様に眩き続ける。

「——おい！お前、夢はないのか？」

そこへ巧がほまれに声をかけ、夢はないかのかと聞く。

「夢……？」

「知ってるか？夢つてのは、時々すごく切なくなるけど、時々すごく熱くなるものらしいぜー！」

「熱くなる……」

すると、はぐたんから再び黄色いミライクリスタルが現れた。

「——そうだね。夢つて、必死に追いかけて熱くなるもんだつたね」

ほまれがそう眩くと拘束したリングが消え、出現したクリスタルに向けて思い切りジャンプ。今度は、掴めた。

「跳ぶのが怖い……応援されることも。」

——けど、もう自分から逃げない。

私は、私の心に勝つ！未来へ輝くツ！」

ほまれはプリハートを掴み、ミライクリスタルをセットした。

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

その瞬間、ほまれの身体が黄色く光り、服の姿が変わっていく。

「ぎゆう〜!」

もう一度ミライクリスタルをタッチすると髪が伸びていき、ポニーテールとなった。

「ぎゆう〜!」

更にミライクリスタルをタッチ。顔にメイクが施されると、ミライクリスタルが装填されたプリハートを腰に付いたポーチへと入れ、カバーが閉じる。

「輝く未来を抱きしめて!みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

髪が大幅に伸びてポニーテールとなり、シースルー服を多用した他の二人とは異なり、代わりにマントの様な布を羽織っていた。

「「キュアエトワール!」」

「お待たせ!」

キュアエトワールが、三人の前へと現れた。

「フレフレ!ハート・スター!」

エトワールがプリハートのハートパネルを押すと唱えな星を集め。ハート状にしたエネルギー体から大量の星を射出させ、それを受けたオシマイフォーゼの動きが制限される。

「この怪物は、私が倒す!」

「私達でしよ?」

「私達、仲間でしょ?」

「ここからは一緒に力を合わせて」

「あれと一緒に止めよ!」

エールとジオウが返すと、嬉しそうな表情となるエトワール。

「よし!」

『フォーゼ!』

状況がいい感じに進んで来た事を悟ったジオウはフォーゼウオッチを起動させ、ドライバーに装填してロックを解除し回す。

『アーマータイム! 3・2・1! フォーゼ!』

するとアーマーが上空から現れ、そのまま複眼にカタカナで「フォーゼ」と描かれたフォーゼアーマーが装着された。

そこへツクヨミ達が駆けつけ、一緒にいたカリンはオシマイフォーゼになった佐久間に向けて叫びかけた。

「私は他の人を犠牲にして生きるなんてできない。それに、これ以上佐久間君の人生まで犠牲にしたくない!」

「かりん。嫌々、俺はカリンヲ、絶対……!」

カリンの言葉を聞き入れず、エトワールを攻撃するオシマイフォーゼ。

だがジオウ・フォーゼアーマーに反撃される。

「あんたは彼女を救ってなんかない!だから……」

2003年の戦い。

ゲイツ・ファイズアーマーはファイズフォンXで銃撃を浴びせていくと、携帯モードへと戻す。

『レディー!ショットオン!』

ファイズフォンXを操作し、右手にファイズショット型のギア555——『ショット555』を召喚した。

「お前のやっている事は、彼女を苦しめているだけだ!だから……」

「だから……俺達がお前達を救う!!?」

現代と2003年。ジオウとゲイツの心が、時代を超えて繋がった。

「救ウ?フザケルナ!カリンヲ救ウのハおれダ!!」

徐々に口調と情緒が怪しくなっているオシマイフォーゼは、脚に半透明なドリルを装着すると、更に円錐状の赤黒いエネルギーを纏って宙に跳んだ。

「っ!?? フ、フレ!フレ!ハート・フェザー!」

それを見て危機感を感じたアンジュはハートフェザーを展開。同じく危機感を察知したジオウとエール、エトワールが彼女の背後に回った。

「おれガスクウ!オレがかりんヲ救ウダああアアああ!!」

咆哮を言い放つてオシマイフォーゼが跳び蹴りを放つと同時に、全体を覆う程に巨大化した円錐状のエネルギーを纏ったドリルは、圧倒的大回転を発生させる。

強大な螺旋を描いたドリルは、アンジュの張ったバリアを貫かんとしていた。

「うっ!?ツツツ!うう…!」

「な、なんて衝撃、なの…!??」

それでも貫かれないのは、エールとエトワールがプリハートを使ってアンジュに自身の力を注いでいるからだ。よく見るとバリアがヒビ割れて分解され始めており、今にも砕け散ろうとしていた。

「ハツハツハア!!イイじゃんこれ!このままドンドンやっちゃまえ!!」

新たなプリキュアの誕生で流星にヤバイと思っていたが、予想以上の善戦にチャラリートは喜びの声を上げる。

それでも彼女達は諦めずにエネルギーをアンジュに送り続け、三人の背後でジオウもまたロケットブースターから火を噴きながら押し続けていた。

「うう……確かに、凄いかもしれない……」

「それでも、俺たちは……絶対に……」

「諦めない!」

諦めないと決意を固めたエールとジオウの言葉と共に、アンジュが張っていたバリアの罅が徐々に修復されて行く。オシマイフォーゼはその光景に、思わず戸惑いの感情を出した。

「決めたんだ……みんなと、力を合わせて、貴方を救うって!」

「その為にも……! 私達は、絶対に……! 挫けちゃ、いけないから!」

更に、エトワールとアンジュの叫びと共に、遂にバリアがヒビ入る事が無くなった。

「ナ、ナンで……!」

今の最大出力の回転で放った攻撃が通じなくなっているという事実にも、オシマイフォーゼは困惑の表情を浮かべていると、エールが額から汗を流しながら、ジオウが仮面の下で、笑みを浮かべた。

「そんなの、簡単だよ!」

「だって、俺たちの、友情は……!」

『誰にも! 砕かせないからあああー!!』

彼ら、彼女らは、特別長く付き合っただけじゃ無いけれど、少なくとも四人の友

情は、この程度では碎ける事は無い。

その証拠と言わんばかりに、彼らの叫びと共に、オシマイフォーゼが纏っていた円錐状のエネルギールの方が先に碎け散ってしまった。

2003年。

ゲイツは突っこんで来たアナザーファイズをショット555で殴り飛ばした。

『レディー！ポインターオン！』

再びファイズフォンXの操作で、今度は足にファイズポインター型のギア555『ポインター555』が装着された。

そしてドライバーに付いている、ゲイツとファイズのウォッチを操作する。

『フィニッシュタイム！ファイズ！』

ドライバーを回したゲイツが高く飛躍した。

『エクシードタイムバースト！』

アナザーファイズがキックを喰らわせようとしたが、ポインターから放たれた円錐状のエネルギール体のアナザーファイズを拘束した。

そのままライダーキックを炸裂させ、着地した。

「ふん」

ゲイツが去っていくと、最後はアナザーファイズから“Φ”のマークが出て爆発した。

「うわあああああ!」

アナザーファイズは変身解除され、ウオッチも体内から出され破壊された。

そして現代でも…

オシマイフォーゼを三人のプリキュアとジオウ・フォーゼアーマーが押していた。

「跳べ!キュアエトワール!」

エールとアンジュに支えられ、エトワールは高く飛んでドロップキックをぶちかまし、オシマイフォーゼは倒れる。

「決めて時見!」

「あの人の心を!」

「取り戻して!」

三人の声に頷く様に、ジオウも二つのウオッチを起動させる。

『フィニッシュタイム!フォーゼ!』

「ああ!すごいける気がする!」

そう言いながら体をロケットに変形して突撃。そして、ドライバーを一回転させる。

『リミットタイムブ레이크!』

「ロケットきりもみキック!」

ジオウのフォーゼアーマーによるライダーキックが、エトワールのキックから何とか起き上がったオシマイフォーゼの体に直撃し、ビルよりも高い所まで飛びながら回転をかけ、そのまま突き抜けた。

オシマイフォーゼが空中で爆破すると、アナザーライダーとオシマイダーの二つに分離され、オシマイダーは消滅していく。

佐久間も元の姿に戻り、アナザーフォーゼとアナザーファイズのウオッチが二つ同時に消滅した。

「負けた……オレちゃんおしまいだ〜」

オシマイフォーゼがやられ、チャラリートはおしまいと言い消えていった。

そして、カリンが元に戻った佐久間へと近づく。

「かりん……ごめん……」

「佐久間君、私の分まで生きて——」

自分のせいで死なせてしまった事に、今まで己が行った罪を謝罪する佐久間へ、最後にそう言い残すとカリンは光の粒子となり、消えていった。

それを見て、何も言わず去ろうとする草加を巧が呼び止める。

「おいつー!」

だが草加は右手を挙げて巧を制止し、そのままどこかへと行ってしまった。

(仲間……)

そんな草加と巧を見つつ、笑顔を見せるソウゴは心の中でそう呟く。

「これでいいの?」

その一方、エトワールがスプーンにミライクリスタル・イエローを乗せ、はぐたんにアスパワワを与える。

「はあぎゅ〜♪キャハキャハ♪エへ!エへ!」

はぐたんの笑顔を見て、エトワールは満面の笑みを見せる。

「はぐたん、これからよろしくね」

「よかった……」

エトワールを見てよかったと呟くと、2018年に戻ってきたゲイツを見る。

「なんだ……」

「別に♪」

その後、巧と別れたソウゴ達はハウスへ戻って行った。

「それじゃ、また明日ほまれちゃん。じゃなくて……また明日ね。ほまれ!さあや!ソ

ウゴー！」

「ありがとう。ののはな」

「えっ、ののはな？」

「うん！ののはな！イケてる！」

「ほんとに？イケてる？！」

イケてると言われご機嫌になるはな。

「ねえ、さあや？」

「なに？」

「この際だし、俺の事を呼び捨てで呼んでよ」

「えっ?!? あ、あ……そ、ソウゴ……君」

結局さあやは、ソウゴを呼び捨てで言うことが出来なかった。

「ごめんなさい」

「いいよ、無理しなくても。はな！ほまれ！大丈夫？手伝おうか！」

そう言つて何故か川に落ちたはなを助けに向かうとすると、ツクヨミがある事を思い出した。

「ねえ、ソウゴ。フォーゼとファイズにウオッチ渡したの？」

「あああ——!!」

過去の二人にウオッチを渡すのをすっかり忘れていた。

その後ソウゴは、急いで2011年と2003年へとブランクウオッチを渡しに跳びに向かったのだった。

「かくして、我が魔王は二つのライダーを力を入れた。集めた力はいずれ、魔王へと繋がる。次なるレジェンドは——王」

次回! Re. HUGつとジオウ!

第7話 王様が仕事体験!!?社長は王?2016

第7話 王様が仕事体験!? 社長は王? 2016

——欲望、それは何かを欲しいと思う心。

七つの大罪のひとつとして数えられ、『強欲』^{グリード}という名で呼ばれる、最も重いとされる罪。

だからと言って、別に欲望を抱くな、という事では無い。

例えば赤ん坊。赤ん坊はお腹がすいたと思った時、泣く事で空腹を表して親にミルクや母乳やらをねだる。そしてミルクなどを飲んだ赤ん坊は、生きるのに必要な栄養を得る事が出来、それが出来なかつた者は飢えて死ぬ。

例えば病人。彼らは何かしらの病気にかかって最も死に近づいている時、大抵は死を恐れて生きたいと願う。そして最後まで病に抗って打ち勝つた者は生き続け、病に屈した者から死んでいく。

例えば正義のヒーロー。彼らは誰かの幸せと自由を守る為に戦い続ける。そして誰かの為に、自分の為に最後まで戦い続けた者は生き残り、正義という名の欲望が足りなかつた者から悪の手によって殺されていく。

——欲望、それは人間の殆どが抱く悪しき心であり、人が生きるのに最も必要な心な

のである。

そして此処にも、そんな欲を抱きながら、ある部屋で一人の男性がパソコンからあるデータを見た後、窓から外を見回していた。

「力を手に入れ、準備は整った——」

『オーズ……!』

男は昔の出来事をつつと思ひ出した瞬間、アナザーライダーへと姿を変えると、また元の姿へと戻った。

「——世界は私のものとなる」

そして黒い帽子を深く被り、“世界を我が物にする”という欲望に満ちた、下衆な笑みを浮かべながら舌をなめずるのだった。

「明日の土曜日、みんなでデートしよ!プリキュアが三人揃った記念と、ウオッチを四つ手に入れた記念!」

ほまれが仲間になって数日経った頃、みんなはハリーのハウスへと集まっていた。

そんな中、はなが記念にデートしようと呼かけかける。

「コラコラ!プリキュアは四人おるはずやで!」

しかし、ハリーが残り最後の一個のプリハートを見せて、もう一人のプリキュアを探

してくれと突っ込む。

「いきなり言われても……」

「はぎゆ？」

さあやもまた、突然入れられたおでかけの予定に難色を示しかけるも、はぐたんの笑みに思わず顔をほまれと一緒に仄かに赤くしながら、同じように笑みを浮かべた。

「はあく……はぐたんと一緒なら……」

「どこへでもまいります〜！」

「……お前ら、そんなノリが軽いとはしらんかったで……」

「私も、あんたがネズミとは知らなかった」

「ネズミちやうつちゆうねん！ハリハム・ハリーさんやー！」

はぐたんの笑顔に心を奪われながらじやれる二人に冷や汗を垂らすハリーは、ほまれにネズミと言われて訂正の言葉を叫ぶ。

その頃ソウゴは、男性の肖像画をにやけながら見ていた。

「誰それ。なんか偉そう」

「織田信長」

織田信長のことを知らないというツクヨミに、ソウゴが信長について教える。

「なんていうか、戦国時代の王様みたいな人。ていうか、日本を一つにまとめようとして

頑張った人。まあでも、この肖像画が信長本人かは、分からないけどね」

信長の偉業と、この肖像画が本物かどうかについて説明すると、それを聞いたツクヨミ達は感心した様子で彼を見る。

「ソウゴって本当、王様って着くものが好きだね」

「うん。でも、お陰でいつも歴史とかはいつもクラスで一番高いの」

「でも、ソウゴってなんで、王様になりたいの?」

「えっ? だって、俺がなりたくないからなるんだけど?」

なりたくないからなる、ほまれにそう言うと、彼の後ろからゲイツが現れた。

「こいつは『魔王』と呼ばれた……たくさんの人間を無慈悲に殺し、最後は部下に裏切られて死んだ」

ゲイツはソウゴが持っていた信長の肖像画を取って、信長の最期を話す。

それを聞いたソウゴは、少しムツとした表情でゲイツの顔を見る。

「そうゆう言い方ないんじゃない?」

「お前も欲望のままに民を支配し、いずれは同じ末路をたどる」

そしてオーマジオウの姿を思い出しながら、ソウゴの未来が信長と同じ末路を辿るのだと言う。

「俺はそうはならない。最高最善の魔王になるって、決めたからね!」

やはり、ソウゴは王様から離れるつもりはない様だ。

そんな彼の様子を見ながら、ほまれはツクヨミに近づく。

「ねえ、本当にソウゴが未来でそんな最悪な魔王になるの？」

先日、ツクヨミから未来のソウゴが最低最悪の魔王になると聞かされた事を思い出しながら、その話してくれた本人であるツクヨミに本当にオーマジオウになるのかと聞く。

「ええ、少なくとも私達の未来では最低最悪の魔王・オーマジオウになって世界から時を止めたの……」

「でも、私は今のソウゴからそんな感じには見えないけど……」

ほまれは今のソウゴの口調や雰囲気から、彼がオーマジオウになるとは到底思えなかった。

「そんな事より！ソウゴもゲイツも！明日一緒に行くこう！」

ソウゴとゲイツの間からはなが割り込むように現れ、明日の記念の為に一緒に行こうと誘うのだった。

その翌日、ソウゴ達は『HUGMAN』と書かれたホームセンターへ到着した。

「ホームセンター？」

「ここ、去年改築して大きくなったところね」

「なぜホームセンターなんだ？」

何故ここなのかと疑問に持つゲイツ。

「フフフツ……いざ店へ！ゴー！」

はなに誘われるがまま、一同はそのまま店の中へと入っていく。

「「わあ〜！」」

「ほら、ほら！服もアクセサリーもスポーツ用品も何だつて揃うんだよ！」

はなの言う通り、店の中は色々な物が用意されていた。

「すごい！充実のラインナップ！このフィット感、それに軽い！」

工具ドリルがラインナップされた工具コーナーへ高速で移動し、ボディが赤い電動ドリルを見て感心するさあやに、ハリーは額に汗を垂らしながら困惑する。

「……あいつ、趣味の範囲広いな」

「そう？さあやらしくていいと思うけど」

ソウゴがそう言っていると、いつの間にかはなが「ご自由に寝てみて下さい」と書かれたベットで寝転がっていた。

「自由に寝てみてだって、ふかふか〜」

「はな、ダイブはダメだと思うよ」

「そっかごめん」

するとツクヨミから注意を受ける。

「ああもう、ホームセンターやばくない？はぐたん楽しい？」

「は〜！は〜ぎゅ〜！」

はぐたんの気持ち良さそうな姿をみて、さあやとほまれは目がハートになる。

「きゃあわた……」

「ホームセンター……」

「いいんじゃない？」

「でしょ！でしょ！」

三人のテンションはいつも以上に上がっていた。

「ん？ツクヨミは楽しくないの？」

「そうじゃないけど……こういう所に来るの初めてだから……」

ツクヨミの反応を見て、以外だなどソウゴは思っていた。

「おっ、来たな、はな！」

「パパー！」

そこにながたいの凄い男性……はなの父、野乃森太郎が現れた。

「あ〜どうも、どうも」

「はぎゅ〜」

「やあ、はぐたん」

森太郎がはぐたんに挨拶するとソウゴ達にも気づく。

「やあ、ソウゴ君とさあやちゃん」

「こんにちは!」

「それと、ほまれちゃんとゲイツ君とツクヨミちゃんだね」

「えっ?」

「何故、名前を知ってる?」

「いつもはなから聞いているよ、ほまれちゃんはスケートが上手いだってね。」

それとゲイツ君とツクヨミちゃんは、なにか調べる事が好きだっけ」

森太郎が言うとはなが三人にピースする。

「パパ、ここの店長なんだ」

「あなたの未来をガッチリサポート! ホームセンター HUGMAN へ!」

お店のキャッチフレーズを言うと、近くのお花屋さんから声が聞こえ振り向く。

「咲田さん!」

「あつ、店長!」

「一人? バイトの子達は?」

「風邪で休んじやってるんです」

「一人じゃ大変だろう？」

「あつ！」

「どうしたの？」

「手伝おう！」

父と咲田の会話を聞いていたはなが、突然の様に手伝うと言い出す。

「困ってる人を放っておけないよ！」

「手伝うのはいいけど、この格好で？」

「ああ……」

ほまれの言う通り、流石に今の格好で手伝うのはちよつとキツイ。

すると、ミライパッドが光り出した。

「せや、せや！ミライパッドさんがあるやんか」

ハリーに言われ、はな達は非常階段へと場所を変える。

「花屋さんなら、ミライクリスタルピンク」

「どうやるの？」

「驚きたご焼きもんじゃ焼きや！」

そう言ってハリーは、ピンクのミライクリスタルをセットしたミライパッドをはなに

差し出す。

「ミライパッド・オープン!」

ハリリーの指示通りにはながそう言うのと、パッドから光が放たれて、パット内でドアが開くと、はな達の服装が変わりだした。

「お仕事スイッチ・オン!」

三人の姿が花屋さんの格好へと変わった。

「ミライパッド凄い!」

「お着替えしちやった! ミライパッドさん超イける!」

着替えが完了すると、そのままさっきの花屋へと向かった。

「お手伝いします!」

「ふつつか者ですが、頑張ります」

「でも……」

「単なるお手伝いということにすればいいだろう」

自身よりも年下の子達に手伝うと言われ、申し訳ない感じで咲田は言い淀んでいたが、森太郎の説得もあり、彼女達が手伝う事を許可した。

「「よろしくお願ひします!」」

そのままソウゴ達は花屋の仕事を手伝うことになった。

最初は商品の並び順から色々とい、仕事時間の昼休みとなった。

「何故、俺まで……」

「たまには文句言わずに手伝いなさいよ」

理由もなく手伝っていることに疑問なゲイツと、そんな彼に手伝う様に言うツクヨミ。

その一方でソウゴに、はなの父である森太郎が近づく。

「どうだい？」

「お花屋さんって難しいですね」

「でも、君も頑張ってるじゃないか？」

「咲田さんの教えが上手いからですよ」

と二人が話していると、そこへテレビから一本のニュースが流れる。

『前代未聞の事態です。有数の企業である壇ファウンデーションが、日本からの独立宣言を発表しました。これが記者会見の様相です』

「壇ファウンデーション？」

「この店から少し離れた場所にある会社だよ」

森太郎から壇ファウンデーションという会社の説明を聞きながら、ソウゴはニュースを見続ける。

『私が檀フアウンデーション社長、檀黎斗。』

檀黎斗改め……檀黎斗王だああああああ!!?』

金と黒の豪華絢爛な服装を身に纏ったままテレビ画面に出てきた檀黎斗という男性の口から出てきた「王」という言葉を聞いて、彼はすぐに反応した。

「檀黎斗王! すつごい! 王様だ!! この人も王様になろうとしてる!!」

「お前の仲間が現れたな」

ゲイツが呆れながら大はしやぎするソウゴの肩を叩く。

『皆の者、よく聞くがいい! 我が社はこの国からの独立を宣言する。異論は認めない。我が社の敷地は我が国土。日本の如何なる法律も通用しない! わかったかモルモット共オ!』

『そんな馬鹿な事が許されると思っているのかあ!』

マスコミらしき人が反論、それに同調する人々が「そうだ!」と後に続く。

『貴様。王に逆らうつもりか?』

黎斗王はそう呟くと、懐からメダルを取り出した。そして彼はそのメダルにキスし、先ほど反論した記者の一人にメダルを投げ込む。

すると、メダルを取り込まれた記者はミイラの様な怪人に変貌させられ、周囲の人々を襲い始める。

『見ろ！彼は私の忠実な僕となった！私に齒向かう者は皆こうなるのだああー!!？
ハーツハツハツハ！ハーハハハツ!!？』

『現場は混乱しております！なお、壇黎斗は国会議員も誘拐して人質にしている模様です!!』

そのニュースを、ソウゴがテレビに顔を近づけて感心するような目で見ていた。

「いるんだね、ソウゴくん以外にも王様になりたいって人……」

「でも、無茶苦茶じゃない……この社長さん……」

「すっごく興味深いよ！ちよつと行ってくる！」

ほまれ達が呆れていると、ソウゴはホームセンターを出て、急いで壇黎斗のいる壇ファンデーシヨンの本社へと向かった。

「ちよつと、ソウゴ君！」

さあやもソウゴの後を追いかける為に、彼の行く方へ一緒に向かった。

「これって……」

「間違いない、クラスアス社絡みだ。俺達も行くぞ」

壇黎斗の力を見てクライアス社絡みだとゲイツとツクヨミは睨み、二人も向かう。

その頃、ソウゴはホームセンターから少し離れた壇黎斗のいる城へと到着した。

「やつぱり。正面からは無理か」

「ソウゴ君!」

「さあや。こつち来て!」

黎斗の城へと着いたソウゴとさあやは正面からは無理だと判断し、裏山を上って侵入を試みる。

ソウゴとさあやが侵入すると、同じ制服を着た二人がさつきマスコミの人が変貌した怪物に襲われていた。

「怪物が人を襲ってる!この人達って、あの王様の民ってやつじゃないの?」

そこへゲイツ達も合流した。

「つまりアイツは魔王ってことだ」

「そんなこと言ってるんで、早く助けないと」

『ジクウドライバー!』

ツクヨミに助けてあげてと言われた二人はジクウドライバーを装着し、ウォッチを取り出した。

『ジオウ!フォーゼ!』

『ゲイツ!ファイズ!』

二つのウォッチをドライバーに装填し、ドライバーのロックを解除すると、後ろから

ソウゴには時計が、ゲイツからタイマーと二つのアーマーが出現した。

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

さあやと合流したはなとほまれはプリハートにミライクリスタルをセットし、三人がその姿を変える。

「輝く未来をく抱きしめて!!みんなを応援♪元気のプリキュア!キュアエール!」

「輝く未来を抱きしめて!みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「輝く未来を抱きしめて!みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!アーマータイム! 3・2・1! フォーゼ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!アーマータイム!コンプリート!ファイズ!』

五人はジオウ・フォーゼアーマー、ゲイツ・ファイズアーマー、キュアエール、キュアアンジュ、キュアエトワールへと変身した。

「フレ!フレ!ハート・フェザー!」

ハートフェザーをバリアとし、怪物に襲われた二人の周りにバリアを張り守った。

「早く逃げてください!」

『ジカンギレード! ケン!』

『ジカンザックス! Oh! No!』

その隙にジオウとゲイツの二人がジカンギレードとジカンザックスを手元に出現させて攻め込む。

「あれ?」

「効いていないのか?」

だが、二人の攻撃は決まっているにはいるが、何故か中々倒せない。

「こいつら、もしかして、不死身なの?」

「なんか、ゾンビみたい……」

エールは不死身のゾンビみたいだと言う。

『『フィニッシュタイム!』』

大技じゃないと倒せないと考えた二人がフォーゼとファイズのウオッチを武器にセツトし、怪物に向けて放つ。

『ストレスシューティング!』

『ザツカリカッター!』

ミサイルのように放たれたストレスシューティングと赤いエネルギーを纏ったザツカリカッターでとりあえず撃破に成功した。

「ソウゴ君！ゲイツ君！大丈夫!？」

襲われていた記者二人を安全な所まで逃したアンジュが二人に駆け寄る。

「うん！でも、やっぱり強いねゲイツ。君を俺の…王室直属の騎士団長に任命する!!？」
そしてソウゴはゲイツの強さを見て何かを思いつくと、彼の肩を叩いて騎士団長に任命すると言う。

「ふざけるなっ！」

それを聞いたゲイツは呆れてソウゴの腕を振り払う。

「騒がしいな。私の王道に立ち塞がる者がいる」

その時、城の天守閣から声が聞こえ。ソウゴ達が顔を上げると、そこに居たのは社長の壇黎斗だった。

「こいつが魔王か」

「魔王だと……? 私に向かって魔王とのたまうか、この愚か者めがっ!!？」

それを聞き。なんとまあ、凄い見下すような言い方をする社長だ。とはな達は思った。

「なんかこいつヤバイ」

「あんたが王様？」

ソウゴが王様と聞くと黎斗は舌を回しニヤける。

「おお、そうだ。私は壇黎斗。だが王の力を手に入れ、その名前は過去となった。

今の私は……檀黎斗王だあああああああはははーっ！

私が……王だあああああああ!!?」

『オース……!』

そう叫ぶと黎斗王の体が変貌し、頭部には鷹をモチーフとした羽、腕には虎モチーフの鍵爪、バツタの様な脚、そして胸部には横に並んだ“OOO”の様なマークが付いたアナザーライダーとなった。

「奇遇だね！俺も王様になりたいんだ！」

「王だと？ ゲツへへへへ……！笑止、笑止だ！戯言を！王は私で十分だア！」

アナザーライダーがソウゴ達に襲い掛かろうとする。

だがそこへ、ソウゴらの前を何者かが操作する鷹モチーフのロボ『タカウオッチロイド』が通り過ぎ、アナザーライダーへ攻撃した。

そのまアナザーライダーにウオッチロイドの火炎攻撃から、クチバシでの突き攻撃で、紫のライドウオッチを落とさせる。

「うう……鳥如きがあ!! 王を愚弄するつもりか！待てえー!!」

そう言うアナザーライダーはタカウオッチロイドを追いかけて行ってしまふ。

すると、ツクヨミがアナザーライダーの背中のプレートの年号を目にする。

「2016……?」

ゲイツは先程落ちたライドウオッチを拾う。

「見る。2016。これが、奴の生まれた年だ。この年に行つて、このライドウオッチの力で奴を……!」

「ソウゴは置いていくの?」

「あの魔王を片付けてしまえばいいだけのことだ。行くぞ」

ほまれにそう言うと、ライドウオッチを握りタイムマジンへと向かう。

その頃、アナザーライダーとなった黎斗王を探すソウゴだったが、思つてたよりも早かったのか見失つてしまった。

「あれ?どこ行つた?」

「王を僭称する者に、興味がお有りか」

何処にいますのだからと考えていると、そこにウオズが現れた。

「ゲイツがアイツの事を魔王と呼んだんだ。だからもつと観察してみようと思つて
ヤ」

「流石、我が魔王。やっと自覚が出てきたかな」

そう言うとソウゴはそのまま去つていった。追いかけていたはなとさあやが彼を見

つけた。

「ソウゴ君!一人じゃ!」

「二人共待つて!」

はなとさあやはソウゴの後を追い続ける。

その頃、ゲイツとツクヨミ、ほまれの三人はタイムマジン内で、解析した檀黎斗に
関するデータを読む。

「檀フアウンデーションは檀黎斗が自分の父親の死をきっかけに、2016年に設立後、
莫大な財力を元手に様々な企業を買収。総合企業としてわずか2年で急成長を遂げる」

「随分、周到に用意したようだね。それだけ王になりたかったってわけ?」

「さあな、とにかく行ってみればわかるだろ」

そう言つてゲイツは拾ったライドウオッチを取り出した。

「ねえ、このウオッチ。仮面ライダーエグゼイドに似てない?」

そのウオッチを見たツクヨミは、ゲイツが拾ったウオッチがエグゼイドウオッチに似
ているという。

「ソウゴがエグゼイドの力を手に入れて、アナザーエグゼイドを倒したの、確か2016
年……」

「それと何か関係があるの?」

このウオッチとエグゼイドとは、何か関係があると睨む。

「とにかくこいつには2016年って書かれてる。それは疑いようない事実だ。行くぞ」

ゲイツがタイムマジーンの年号をセットする。

「時空転移システム起動」

そのまま、タイムマジーンは2016年へタイムワープする。

2016年。

アナザライダーに変身していた黎斗が誰かを殺害していた。

「アーハハハ……! 思い知ったか! 今日からこの会社は私の物だ!!?」

そう叫びながら、机に置かれた城の図を手取る。

「王になるための輝かしい日々が始まる……!!?」

アナザライダーに変身した黎斗が高々と叫ぶ。そこへ社長室へタイムジャンプしたゲイツ達三人が現れた。

「何だ、お前らは?」

「俺は王様ってヤツが許せないんだよ」

『ゲイツ!』

「ゲイツ。私も手を貸すよ」

ほまれもプリハートを持つて構える。そのままゲイツはウォッチをドライバーにセツトして握り拳でロックを解除すると、「変身」と叫ぶと同時にドライバーを持ち、腕を広げながら回転させる。

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

「ミライクリスタル! ハートキラッと!」

ほまれの身体が黄色く光り、服の姿が変わっていく。

「ぎゅう〜!」

もう一度ミライクリスタルをタッチするとほまれの髪が伸びていき、ポニーテールと
なった。

「ぎゅう〜!」

更にもう一度ミライクリスタルをタッチし、顔にメイクが施されミライクリスタルを
腰に付いたポーチへと入れるとカバーが閉じる。

「みんな輝け! 力のプリキュア! キュアエトワール!」

「ああ……! 私が王となる道を邪魔すると言うなら容赦はしない」

変身したゲイツとエトワールがアナザーライダーへ向かって行く。

「そうか。お前らが奴が言つてた邪魔者か」

アナザーライダーがある人物に告げられた事を思い出した。

『歴史が代わつて、今日から君が仮面ライダーオーズだ』

『力が漲る……力が漲る……！素晴らしい力だ！私は神をも超える王となるのだ!!？』

『君なら邪魔者も目じやなさそうだ』

その邪魔者……それがゲイツ達のことだ。

その事を思い出したアナザーライダーはゲイツとエトワールの周囲に現代でも出現させた怪人を出現させる。

「我が家来よ、檀黎斗王の名において奴を葬れ！」

場面は戻り、2018年。

タカウオツチロイドを見失い、仕方なく城に戻った黎斗王は城内で二人の少女に採寸とデザインさせていた。

「光栄に思え。新たな衣装を作らせてやる。」

テーマはそうだな……ゾンビだ！私にこそふさわしい……」

黎斗王がそんなことを喋っていると、二人の少女は手を止めた。

「どうした……? 手が止まっているぞ!」

「出来ません。あなたのおかげでみんなが困ってるんです!」

「そうそう! あんたみたいな人に作る服なんてあるかーっ!」

二人の少女が黎斗王に本音をぶちかまし、それを聞いた黎斗王は目を細めながら彼女たちを見る。

「王に意見しようというのか? 名を聞こう」

「ここ服飾部門で体験で働いている、花咲つぼみです!」

「同じく体験の来海えりか!」

「体験……確か、中学生と聞いていたな……」

目の前にいる赤紫色のおさげをぶら下げる少女とウェーブのかかった青いセミロングヘアの少女二人を見た黎斗王は、確か体験の対象は中学生と聞いていた事を思い出した。

「あなたがやっていることは間違っています。今すぐこんなことは止めてください」
つぼみは黎斗王に今すぐやめるように訴える。

「…気に入った。貴様を我が妃にしてやる」

すると黎斗王はいきなりつぼみの肩を抱き、妃にしてやると言い出す。

「ちよつと!!? 何気安く触ってるの!」

えりかがつぼみから黎斗王を離すと、黎斗王はいきなり二人を思い切り叩く。

「ならば今ここで……死ぬがいい!」

黎斗王がつぼみとえりかにさらに手を振るおうとする。

「見つけた!」

突如現れたソウゴは、渾身の力で振り下ろされた手を受け止め、黎斗王の拳を握手へと変える。

「貴様はさっきの……!」

「会いたかった!」

「……何?」

再び2016年。

ゲイツとエトワールは、アナザーライダーが生み出した怪人と交戦していた。

「ほら!そこだ、行け!私のモルモット!」

アナザーライダーが怪人に指示を出す。

「ゲイツ!この怪人は任せて、アナザーライダーの方を!」

「わかった」

怪人をエトワールに任せたゲイツはアナザライダーへと向かい、拾ったウオッチを取り出す。

『ゲンム!』

「ゲンム」と流れたウオッチを起動させ装填した後、ロックを解除しドライバーを回す。

『アーマータイム! レベルアップ! ゲンムムウー!』

複眼にはひらがなで「げんむ」と描かれ、両肩の装甲はエグゼイドと同じガシヤットのような形状をしたもの——『プロトガシヤットシヨルダー』を装備した、仮面ライダージェイツ・ゲンムアーマーへと変わった。

一方のエトワールはプリハートにクリスタルをセットする。

「フレフレ! ハート・スター!」

プリハートのハートパネルを押すと唱えな星を集め、ハート状にしたエネルギー体から大量の星を射出し、全てを撃破した。

すると、物陰に隠れていたツクヨミがアナザライダーの背中のプレートを見て気付いた。

「2010年……もしかしてあのアナザライダー……仮面ライダーオーズ」

あのアナザライダーの背中のプレートを見て、仮面ライダーオーズの生まれた年代

の2010年だと気付いた。

『フィニッシュタイム！ゲムム！』

その間、ゲイツがゲムムのライドウオッチを押し、ドライバーを回す。

『クリティカルタイムバースト！』

ゲイツ・ゲムムアーマーが円を描くように敵の周囲を素早く動き回りながら連続で攻撃し、最後にトドメのライダーキックを炸裂させアナザーオーズを撃破した。

現代の方では……

「気安く王の手に触れるな！」

ソウゴの手を振り払うと、黎斗王の体が2016年でアナザーオーズを撃破した影響からか、体がブレ始めた。

「何？何が起こったのですか？」

「本当に頭がおかしくなったの？」

二人がそんなことを言っていると、ソウゴのフェイスブックフォンXから連絡が入った。

「ソウゴ？今、2016年でアナザーライダーを倒したの」

「そっちはどうなってる？」

ソウゴが黎斗王を見ると、彼からは先までの現象は無くなっていた。

「現代では……倒せてないみたいだよ」

そして、2016年でもアナザーオーズは復活した。

「ゲーへへへ！王は滅びぬのだ！」

「どういふことだ!?!」

再びゲイツとの交戦へと入った。

2018年、現代では。黎斗王が突如自分の前に現れたソウゴの姿を観察していた。

「貴様、私に会いたいと言ったな」

「うん」

「何故だ?」

黎斗王は何故自分に会いたいのかと聞く。

「あ……えつと……俺、王様になりたいから。王様を見て、勉強したい、させてください！」
ソウゴが理由を語りながら、頭を下げて黎斗王に頼み込む。

「勉強?」

「うん」

「残念だが、私がいる限り王になるのは無理だ」

無理だと言いきろうとすると、ある事を思いついた黎斗王はソウゴの顔を見る。

「——だが、私を見て諦めも付くはず。家来として使つてやる」

直ぐに諦めるだろうと軽く考え、意外とあっさり受け入れた。

「やった！家来になります」

家来になると聞き、ソウゴが黎斗王に敬礼する。

「あなた、あの人がどんな奴かわかつてるの？」

「俺もそれが知りたくてさ」

つぼみに言つてソウゴはそのまま黎斗王の元へと後を追う。

すると、ソウゴが居なくなるとミイラの怪人：屑ヤミーが二人を取り押さえる。

「その女を監禁しろ。我が妃となるのだからな。エへへへ……」

「何するんですか！」

「離せ！離せて言つてるでしょ！」

二人は抵抗するが、結果も虚しく屑ヤミーに連れて行かれてしまった。

ソウゴは見失つた黎斗王を探しているとはなとさあやに合流した。

「ソウゴ！」

「ソウゴ君。あの王様に会えたの?」

「うん!これから、その人の所で勉強させてもらおう所!」

「えっ?」

「あ、そうだ!」

ソウゴがフェイスフォンXを取り出し連絡を伝える。

「ツクヨミ、すぐこっちに戻ってきて」

「分かった。ゲイツ、エトワール、一旦戻ろう!ソウゴが何か掴んだみたい」

ゲイツはタイムマジンソンを呼び出し、エトワールとツクヨミと共に現代へと戻る。

「二人は花屋さんの仕事に戻っていいよ!」

「でも……」

「大丈夫!終わったならそっちに行くから!」

「……わかった。行こうはな」

「うん。ソウゴ、後でここでの仕事の話聞かせてよ!」

二人はそう言って、はぐマンホームセンターの仕事へと戻った。そこへ再びウオズがソウゴの前に現れた。

「あのアナザライダーは、仮面ライダーオーズの力なしでは倒せない。オーズの力を探さないのかい?」

「まあ、ウオズも見てて。これは俺が魔王になるために大事な気がするからさ」
ウオズには何を根拠に言ってるのかわからないが、そのまま彼は奥へ進んでいく。

そして、現代へと戻ったツクヨミとゲイツは、ほまれをはぐマンへと戻し、壇ファン
デーシヨンの前へと現れた。

「あのアナザーオーズが生まれたのは、多分2010年」

「奴を倒すには、新しいライドウオッチが必要か」

「二人とも、おかえり！」

二人が話しているところにソウゴが現れた。

「何だその格好は？」

ゲイツ達の前に現れたソウゴの格好は、どういいうわけか壇ファンデーシヨンの制服
だった。

「ああ、俺、あの王様のもとで勉強することにしたんだ。

だから、二人には黙って見ててほしいと思ってるさ」

黎斗王の側で勉強することにしたことを話し、見えて欲しいと二人に頼むと、ゲイ
ツが腕に装着していたウオッチを外した。

「つまり貴様は奴の軍門に下ったという訳か。」

なら話は早い、ここで貴様を倒すだけだ」

『ゲイツ!』

ゲイツが怒り心頭のままウォッチを起動し、ドライバーに装填した。

「やっぱそうなる?」

『ジオウ!』

こうなることがわかっていたのか、やむを得ないと言いながらジクウドライバーを着し、ジオウウォッチを起動させる。

「変身!」

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

先に仮面ライダーゲイツへと変身しそのまま、まだ変身していないソウゴに殴り掛かる。

「変身」

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

ソウゴもゲイツの攻撃をかわしつつ、ジオウへと変身した。

「話し合いで済めばよかったんだけど」

「何だと!?」

そう言うジオウはそのまま、パンチを繰り出しゲイツを圧倒する。

そして、ゲイツへの攻撃の手を緩めず、ビルドウォッチを取り出し起動させる。
『ビルド!』

ビルドライドウォッチをドライバーに装填しドライバーを回すと、前方にビルドの
アーマーが出現、ジオウの体へと装着される。

『アーマータイム!ベストマッチ!ビ・ル・ドー!』

ジオウがビルドアーマーを装着したのを見て、ゲイツは更に向かおうとする。

「魔王への道を歩き始めたって理解していいんだな?」

「ゲイツがそう思うんなら、そうなんじゃない?」

「貴様!」

怒りを爆発させながら向かっていくがビルドアーマーを装着したジオウにはゲイツ
の攻撃が効かず、逆にドリルクラッシュャークラッシュャーで突かれ、殴り飛ばされる。

「勝利の法則は決まった!……気がする」

『フィニッシュタイム!ビルド!』

ドライバーを回したジオウの前にグラフの放物線が現れるとゲイツを拘束し、ジオウ
は放物線へと乗り込み加速する。

『ボルテックタイムブ레이크!』

ジオウは容赦なしにボルテックタイムブ레이크を決め、ゲイツは強制変身解除へと追

い込まれた。

「ゲイツ!」

ゲイツを担いでツクヨミが連れて行き、ジオウから逃げる。

そのまま黎斗王の元へとソウゴは向かっていき…

「見ていたぞ。素晴らしいー! いや、実にいい働きだ。褒めてやる。貴様を我が王室直属の騎士団長に任命する!」

「ありがとう! 王様!」

黎斗王から感謝を頂いた。

『HUGMAN』のテレビ映像からは、壇ファンデーションのニュースが流れていた。

『依然として国会議員の救出の目処は立っておらず、政府は自衛隊の出勤を視野に入れて、救出の方法を検討しているとの事です』

「ソウゴ。あそこで勉強するって言うけど大丈夫かな…」

「ゲイツとツクヨミも近くにいるから大丈夫なんじゃない?」

「ソウゴ君、大丈夫かな…」

さあやはソウゴが無事かどうか心配だった。

その頃、壇ファンテーションでは。屑ヤミーによりつぼみとえりかは牢へ入れられる。

「もう、何なのあの王様社長！」

「私、堪忍袋の……」

「大丈夫？」

つぼみが言いかけると牢の中にいた一人の男性が、牢へ放り込まれたえりかとおぼみに駆け寄る。

「あなたは？」

「誰？」

彼女達の目に映ったその男性は、胸に議員バッチと赤い羽根をつけていた。

「火野映司。誘拐された、国会議員かな？」

それを聞いて、二人はこの人がニュースで誘拐された国会議員だと思った。

「この本によれば、この時代に王が並び立つとある。

だが、ひとつの時代に王はただ一人のみ。

真の王者となるのは誰か？

鍵を握るのは、新たなる……レジェンド」

次回! Re・HUGっとジオウ!
第8話 花が咲く、本当の王の資質! 2010

第8話 花が咲く、本当の王の資質！2010

日本からの独立を宣言した檀黎斗王のお城内では、黎斗の暴政を批判して彼の怒りを買い、地下室に監禁された 花咲つぼみ と 来海えりか。

そこには黎斗によって誘拐された国会議員 火野映司 も監禁されていた。

「名前は？」

「来海えりか」

「花咲つぼみっていいです。あなた……テレビで見たことある……国会議員さん？」

「火野映司。よろしく」

三人が自己紹介をすると映司が扉の前へ進む。

「とにかく、ここから出ないと……俺にはやることがある」

「……やること？」

「あの王様にあつて、すべて終わらせる」

そう言いながら牢の扉を押し続け、脱出しようと試みる。

「だったら、早くこんな所……！」

「もう……！こんな体験はこの前でこりこりだよ！」

「えりか、落ち着いて……」

つぼみはえりかを落ち着かせようとすると、映司が押し続けていた扉が開いた。

「開いた……」

「よくわからないけど、行こう!」

何故牢の扉が開いたのだという疑問はさておき、三人は牢から脱出した。

「案内します。ここは詳しいんです」

つぼみの案内により、映司は彼女達と一緒に黎斗王のもとへ向かう。

そこへ、たまたま彼らの近くを通りかかったソウゴと目を合わせる。

「もしかして……」

「つぼみ、早く!」

えりかにせがまれるも、つぼみ達はソウゴに何も言わず走っていった。

すると、彼の背後からウオズが現れる。

「あの男もまた、王の資格を持つもの」

「分かるよ。なんだろう、何か凄い力を感じる」

「さすがは我が魔王。あの力の正体は欲望」

「欲望……!」

一方、クライアス社のビルでは……

「俺ちゃんの机が……な〜い!」

「机は倉庫に移動済みです」

ルールーは机がないとショックを受けているチャラリートに、机は撤去されたと報告する。

「いつまでもあると思うな。机と仕事」

「か……課長!」

「せっかく俺が用意したオシマイライダーもやられた。その失敗をどう償うつもりだ」

「スウォルツさん……」

「今度は私が出る番よ。オーラ!」

チャラリートに課長と呼ばれた女性……パップルが呼ぶと、オーラが操縦するタイムマジンが現れた。

「プリキュアの出た所までぶっ飛び行ってくれる?」

「わかったわ」

「バイビー!」

二人はタイムマジンでソウゴ達がいる所へと向かう。

「オーラと課長……僕が擁立したオーズを守ってくれるかな……」

彼女らの様子を見て、デスクに座っていたウールが不安そうに呟いていた。

『HUGMAN』の花屋で手伝いに戻ったはな達三人は、午後の仕事への手伝いを始めた。

「もつと丁寧だね」

「は……はいー!」

「花は生きているの愛情を持って接してあげて、そうすれば花は必ず私達に笑顔をくれる」

花屋の店員である咲田は、花による大切さを二人に教える。

「すいません。予約した草間ですけど」

「いらつしやいませ」

さあやは直ぐに予約された花束を用意した。

「さあやちゃん。これをさつきのお客様に渡してくれる」

「わかりました」

咲田の指示でさあやは予約したお客さんの所へと持っていく。

「なんかあのさあやの姿、どこかで見た事あるような……」

はなは花束を持って歩く彼女の姿を見て、どこかで見たことがあると呟く。

「あ……くう……」

「みんな……」

「ゲイツ！ツクヨミ！」

そこへ先の戦闘でソウゴにやられたゲイツと、彼に肩を貸していたツクヨミが現れ、はなが二人に駆け寄ろうとする。

「あれ？うわあ！ああ、ああ！めちよつく！」

しかし床が濡れていたためそのままこけてしまった。

「これええな、店の前において花壇みたいにしよか」

倒れているはなを見て二人が駆け寄った一方、鉢花コーナーでハリーが鉢花を見ていた。

「ふぎやー！」

「ちよつと待つときや」

体制が苦しかったためはぐたんを商品の棚の上に置く。すると、そこに一人の少女がはぐたと目が合う。

「ど〜じよ」

「はぎゆ?」

はぐたんはもう少女が押ししてるカートへと乗りこみ、どこかへ行ってしまう。

「は〜ぐたん! あっ……はぐたん? ど……どこ行つたんや!!?」

品物に夢中になっていたハリーは、はぐたんがいなくなっているのに気づき、彼女を必死に探し始める。

檀黎斗王の城内部。

牢から脱出した映司達らは、黎斗王の社長室へとやってきた。

「あれ? あの社長さんいないよ?」

「ど〜に?」

だが社長室の中には誰の姿もなく、黎斗王は今どこにいるのだと辺りを見渡す。

「ようこそ議員」

すると、彼らの背後から黎斗王が現れた。

「君を止めに来た」

「命を駆けてまでか?」

映司が黎斗を止めに来たと言うと、黎斗王はそんな彼を嘲笑いながら屑ヤミーを呼び

出す。

「勿論。君がしていることで苦しむ人間がいるなら、何があっても止める」

映司は自身を囲う屑ヤミーに怯えることなく言い切ると、そこへソウゴもやつてくる。

「ねえ、聞いていい？王様は王様になってどんな国を作りたいの？」

「何？」

「みんな王様を止めるって言うけどさ、この人がいい王様じゃないって……何で分かるの？」

「[[[……]]」

「俺はまず、王様がどんな王様になりたいか、知りたいんだ」

「よからう。ならば教えてやろうか、ポチ」

映司たちが黙ってソウゴの話の聞いているのを傍らに、黎斗王は彼の顔を掴んで、自身の野望を話そうとする。

「私はやがてこの国の頂点に立つ。そして檀黎斗王改め、檀黎斗大王となるのだああああー!!？」

黎斗王がソウゴ達に言い聞かせる様に、そう高々と叫んだ。

「……………それだけ？」

ソウゴは眉を寄せながらそれだけかと訊くと、黎斗王は「なぜ今ので分からない？」と内心小馬鹿にしながら話を続ける。

「全ての民を私の元に跪かせてやる。それが私の真の目的だ」

「待つて下さい！そんなの酷すぎます！」

「跪かせるとかアンタ！いつの時代よ！」

「ああ、誰にも皆の自由を奪う権利なんて無い！」

彼の話を聞いた三人は黎斗王の考えを否定する。

「それが私にはあるんだな。何故なら私が檀黎斗王だからだ！」

「だか黎斗王は自分が王だから良いのだとたまに、彼らの言葉を一切耳に入れずに一蹴する。」

「こいつは私の王道を邪魔するもの。蹴散らせー！」

黎斗王の指示で屑ヤミーが襲ってきた。

映司はつぼみとえりかを守りつつ、屑ヤミーに応戦するが、生身で立ち向かうには限界があった。そして遂に映司は屑ヤミーに殴り飛ばされると、ソウゴが彼に縄をかける。

「王様。この人のことは任せて」

「任せただ、ポチ」

三人はソウゴに任せ、黎斗王は屑ヤミーともども引き上げる。

「…ねえ。あんたも王様になりたいの？」

「王様？」

縄をかけていたソウゴは、映司に自分も王様になりたいのかと尋ねる。

「まさか。俺はちよつとのお金と明日のパンツさえあればそれでいい」

「そっか」

その頃、『HUGMAN』ではソウゴにやられたゲイツの怪我の部分にツクヨミがタブレットを当て、そこから光線を出して治療していた。

「俺が甘かった！この時代に来て、もしかしたらアイツは魔王にならないかも知れない。そんな風に考え始めていた自分がいた！答えは出た！アイツは最凶最悪の魔王になる男だ！」

治療を終えたゲイツはそう言って、再びソウゴの元へと向かう。

「ソウゴが、本当に魔王に……」

ツクヨミが困惑した顔で呟くと、一人の少女がカートにはぐたんを入れて押してる姿が見えた。

「はぐたん……？」

「床が濡れているってどういうこと? すべったら危ないじゃないの!」

一方咲田は、先程はなが掃除中に濡らした床にクレームを言うお客に対応していた。

「こんな花屋じゃ花もかわいそうね! フン!」

クレームを言ったそのお客は帰っていった。

「……はぐたんとハリー、もう帰っちゃたかな?」

はなは二人がいなくなっていることに気づき、先に帰ったんだと思い呟くと、カートの中にいる赤ちゃんに目がいく。

「小さなお母さんね」

「はぎゆはぎゆ〜!」

「……えっ?」

「今のはぐたんの声?」

「あそこから!」

「はぎゆはぎゆ!」

「はぐたくん!」

カートの中にいるのがはぐたんだと知り急いで追いかける。

「ちよつと……!」

「知り合いの赤ちゃんが……このままだと迷子になるかも」

「ココはいいから行きなさい」

咲田は事情を聞き、三人を送り出す。

そのまま三人は店の中を走り回りはぐたんを探す。

「いた？」

「ううん」

結局、カートを押していた少女は見つからなかった。

そこへツクヨミが三人の前に歩み寄ってきた。

「みんな……」

「ツクヨミ」

「はぎゅー！」

「「はぐたん！」」

すると三人の目に、ツクヨミの腕にはぐたんが抱かれていたのが見えた。

「どこで見つかったの？」

「はぐたんと一緒にいた女の子に会って事情を説明したの」

「ツクヨミありがとう！」

ツクヨミにお礼を言ってはぐたんを抱く。

『野乃はな様。お連れ様がお待ちです。迷子センターまでおいでください』

だがそんな中、はなに向けた場内アナウンスが聞こえた。

「「「えっ?」」」

はぐたんはいるのに何故と思いながらも、四人は迷子センターへと向かう。

迷子センターに到着すると、そこには周りの子供にあやされていたハリーの姿があり、ツクヨミは思わず呆れた表情を浮かべる。

「迷子って、あんた……」

「だつてここにおると思つていたんや……うう……」

ハリーが泣いていると、はなの腕にはぐたんがいるのに気づく。

「赤ちゃんを連れて来るからにはしっかりと責任感を持ったなきやね」

そこにはなの父、森太郎も現れた。

「…あれ?ソウゴ君とゲイツ君は?」

「その……」

ソウゴとゲイツがいないことに気づかれたツクヨミが事情を説明しようとする、森太郎の携帯から15時からある新人バイト面接の連絡が流れる。

「面接の相手って、森太郎さんがやるんですか?」

「まあね。その人を出来るだけ知って、任せられるどうかを決めることだからね。人の

本質なんてのは、一面だけじゃ判断出来ないでしょ」

「一面だけじゃ、判断できない……」

『みんなの判断なら俺は信じられるから』

ツクヨミはあの時、二人に言ったソウゴの言葉を思い返す。

「……やっぱり、私は私の目で判断する。ありがとう」

森太郎の言葉を聞き、ツクヨミも何処かへ行ってしまう。

その頃、城で映司達三人を縛り上げるソウゴへ着信が入る。

「もしもし、あ、ゲイツ？……分かった、すぐ行く」

映司達を一度その場に放置すると、城を出てゲイツが指定した場所へと向かった。

しばらくしてソウゴが指定の場所に到着した頃には、既にゲイツがジクウドライバーを装着し準備していた。

「さつきは、やりすぎちゃってごめん」

ソウゴは先の戦闘でゲイツにやり過ぎたと謝る。

「詫びの言葉はいらん。俺はこれから、貴様を倒すのだからな。変身！」

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

だがゲイツは彼の言葉を一掃しながらウオッチをドライバーに装填し、仮面ライダーゲイツに変身。

すると屑ヤミーが現れ、ソウゴを守るかのようにゲイツを抑えにかかる。

「貴様はオーマジオウになる、俺はそう判断した!」

それに対してゲイツは屑ヤミーを払いながらジカンザックスを手に持ち、ソウゴへと向かっていく。

『ジオウ!』

「変身」

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

ソウゴもジオウに変身、ジカンギレードを手に持ち応戦する。

「どうして?」

「貴様が、あの魔王の軍門に下ったからだ!」

オーマジオウになると判断したゲイツにどうしてそう思ったんだい?と純粹に問いかけるソウゴと、あの傲慢な王の傘下に入ったことに怒りを感じているゲイツ。二人の武器がぶつかり合う。

「あいつに力を貸すつもりはないよ」

「だったら、今のこれは何だ!?？」

「知りたいんだ。いい魔王になるために、魔王つてもんがどんなものか……!?？」

飽くまでソウゴは黎斗王に従っているつもりはないと、ゲイツと交戦しながら語っているところへ、通りかかった作業員を襲う屑ヤミーの姿が目映る。

「やめろー！」

ジオウはゲイツを振り払い、襲われていた人々を守る。ゲイツの方には他の屑ヤミーが襲ってきた。

「俺の大事な民に何してくれるのー！」

ジカンギレードをジウウモードへと変え、ウオツチを装填する。

『フィニッシュタイム！ギリギリシユータイング！』

ジオウはジウウモードのジカンギレードで屑ヤミーを撃ちまくり、次々と片付けていく。ゲイツもジカンザックスにウオツチを装填する。

『フィニッシュタイム！ザックリ割り！』

ザックリカッティングで周囲の屑ヤミーを一掃する。

「ゲイツ！この人達のこと、お願い！」

そう言うとソウゴは去っていく。

「待て……！」

「ゲイツは追おうとしたが、まだソウゴとの戦闘で受けたダメージがあるらしく、追えなかった。」

「同じ頃、ツクヨミはタイムマジンで檀黎斗について調べていた。そこには父、正宗失踪の記事について書かれていた。」

「これがあの魔王の正体!?!?」

『HUGMAN』の屋上。そこにはクライアス社から来たパップルが現れていた。

「ちよつと、しもしも〜? 何なのよこは、アスパワワがぶっ飛ぶくらいあるじゃん!」
彼女はアスパワワの多さに「ご機嫌斜めの様子だった。」

「はあ……」

そこに先程のお客さんのクレームを受けシヨックを受けていた咲田が、荷台を押して歩いているのを見かけた。

「トゲパワ見つけた」

パップルは咲田から流れるトゲパワを察知した。

「明日への希望よ! 消えろ! ネガティブウエーブ!」

「しもしも〜発注! オシマイダー!」

オシマイダーが現れたことを察知したはな達三人は現場に赴き、プリハートを持ち変身をする。

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

はなとさあや、ほまれはミライクリスタルをセットし、姿を変える。

「輝く未来をく抱きしめて！みんなを応援♪元気のプリキュア！キュアエール！」

「輝く未来を抱きしめて！みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「輝く未来を抱きしめて！みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「これは……クライアス社」

「オシマイダーか……急がないと！」

城の中へ入ろうとしていたソウゴはオシマイダーが現れた事に気付き、急いで中に戻って映司達の縄をほどく。

「さつきはごめんね？」

映司達の縄を解き終えると、さつきまで三人を拘束した事を謝る。

「さあ、行こう」

「どうゆう事？貴方の事、信用出来る訳無いでしょ？？」

えりかは黎斗王の軍門に入っているソウゴは信用できないと言うが…

「待つてください。えりか」

「なんでさ?」

「この人は、私達を牢から出してくれたんですよ」

牢屋から脱出したあの時、自分達はソウゴと目を合わせた。

だが彼は、あそこに自分達が居たのに何もしなかった。

本当に彼の軍門に入っているのなら、あの対応は余りにも不自然だった。

「えっ?じゃあアンタ……」

「俺は、ここにいい魔王になるためにちょっと勉強中だけ」

ソウゴは黎斗王の軍門に下ったわけではなく、本当にただ勉強のためだったらしい。

「いい魔王……?君、王様になりたいの?」

「なりたいていうか……生まれた時から王様になる気がしてた」

彼は自分の心から決めている事を映司に話す。

「ハ……ハ………面白い人だなあ」

ソウゴの話を聞いて苦笑する映司は少し顔を引き締めると、彼に『王様、つまり人の上に立つ人間』になるのに必要なことを教える。

「王になりたいんだったら覚えておいた方がいい。一人じゃ出来ない事があるって事を」

「一人じゃ……出来ない事……?」

「どんなに誰かを助けたいと思っても、一人じゃ助けられない命がある」

「一人じゃ……助けられない……」

「だから俺は、沢山の人と手を繋ぐ事にした。それで政治家になった。いつかこの国の全ての人と手を繋いで見せる」

「私もです!」

映司の話を聞き、つぼみも映司と同じだと言う。

「私も、どうしても手を繋いだい人がいるんです!」

「つぼみね。宇宙に行くのを目指しているの!」

つぼみも手を繋いだい人がいると語ると、えりかが横から宇宙に行くことを目指していると言わす。

「アンタ達のこと、好きだな」

そんな彼らの話を聞いたソウゴは、三人のことが好きになっていく。

「貴様、裏切るつもりか?」

するとそこへ、黎斗王が僅かなる怒りを感じながら四人の前に現れた。

「王様。あんた、人と手を繋ぎたいって思う?」

ソウゴは黎斗王も、映司と同じ考えなのかと思ひ尋ねる。

「バカな。下等な人間など、私の手に触れる事すら許されん」

それに対する黎斗王の答えは、映司とは全く正反対の答えだった。

「それ、すつこいやな感じ」

それを聞いたソウゴは黎斗王のその考えを批判し、本格的に彼に対して反旗を翻した事を表した。

「そうだったら駄目なんだって分かった。魔王って呼ばれる人がどんな人間か知りたかっただけだからさ」

「私は魔王ではない。王だあああーっ!」

そう叫ぶと黎斗王はアナザーオーズに変身した。

それを見たソウゴは変身しようとしたが、アナザーオーズは彼のライドウオッチを叩き落として襲いかかる。

そこに映司がアナザーオーズに掴まってソウゴを助けるも、直ぐにアナザーオーズに突き飛ばされていまい。

「何の力も無いお前に何が出来るというのだ!!?」

「それでも、掴んだ手は絶対に離さない!」

しかし映司は、例え力の差があっても、諦めず立ち上がる。

「火野さん……私……もう、堪忍袋の尾が切れましたー! シプレー!」

「待つてましたですう〜！」

「妖精！」

彼女は映司の覚悟を聞き、黎斗王の今までの行動に対してそう叫ぶと、つぼみの後ろから一匹の妖精が現れた。

「コフレ！もう出てきていいよ！」

「わかつたですつ〜！」

「また……！」

えりかからもつぼみと同じ妖精が現れ、ジオウは驚きの声をあげた。

「プリキュアの種！いくですう〜！」

二人は変身アイテム・ココロパフォームを取り出し、二匹の妖精から光が放たれた。

「プリキュア オープンマイハート!!？」

二人が光に包まれて行き、そして…

「大地に咲く一輪の花！キュアプロツサム！」

「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！」

「ハートキャッチ！プリキュア！」

光が収まると、そこに立っていたのは花卉を模したピンクのコスチュームで身を包んだポニーテールの少女と、頭にティアラを載せて水色のコスチュームを着た鮮やかな口

ングヘアーの少女——キュアブロッサムとキュアマリンだった。

「えええーっ！君達、プリキュアだったの!？」

二人がプリキュアだと知り、ソウゴは驚いた。

そのままアナザーオーズが映司を攻撃しようとするが、ブロッサムはその前に立って守った。

「なんだそれは……!」

「これが、私のもう一つの姿……キュアブロッサムです!」

そう言うブロッサムはアナザーオーズの腕を掴み、ぶん回した。

ぶん投げられたアナザーオーズは、凄い勢いで城の窓を壁諸共突き破り、場外へふつとばされた。

「うそ……プリキュアって、キュアハートとソードだけじゃなかったのか……!」

「マナちゃんと真琴さんに会ったことがあるの?」

「あの二人は私達の後輩なの!」

「じゃあ、二人はあの二人の先輩なんだ!」

彼女達の話の聞き、この二人があの時会ったマナ達の先輩だと知る。

「みんな、大丈夫?」

映司が三人に駆け寄ってきた。

「二人共、その格好……」

「これが、私達のもう一つの姿なんです」

「そうか」

「やっぱり俺、あんたの事好きだ」

すると何を思ったのか、映司はポケットから何かを取り出す。

「これも君のだろうか？」

「これって……」

ポケットから出したのは赤と黄色と緑の三色と、全体が赤い、二つのライドウオッチだった。

「君なら本当の王になれるかもね」

「ありがとう。行ってくる」

ソウゴはウオッチを受け取り、急いでアナザーオーズの元へと向かう。

「あ、そうだ。二人にお願いがあるんだけど……」

ブロサツムとマリリンに頼みがあると尋ねたソウゴは城の外へと出て行くと、其処へ城外へ放り出されたアナザーオーズが現れた。

「おのれええーっ！」

「悪い魔王は倒さないとね。それがいい魔王の仕事」

『ジクウドライダー!』

「魔王ではないと言ったはずだっ!」

ドライバーを装着しているとアナザーオーズが襲い掛かってきたが、気にせずジオウライドウォッチを取り出す。そしてウォッチを回してD、9スロットに差し込み、ロックを解除してドライバーを回す。

「変身!」

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

ジオウへと変身し、アナザーオーズと戦闘に入る。

だがそこに、ドラゴンと城を合わせたようなロボットが一体現れた。

「手助けしてあげる、私達の王様」

それは、オーラが操縦するタイムマジンだった。

タイムマジンは変形し、口から火炎弾を何発も向け放つ。ジオウはタイムマジンの攻撃を避けるのが精一杯だった。

「手を焼いているようだな。ジオウ」

「ゲイツ!」

そこにゲイツが現れ、二つのウォッチを起動させる。

『ゲイツ！ゲムム！』

二つのウォッチをドライバーに装填し、ドライバーのロックを解除しドライバーを回す。

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！アーマータイム！レベルアップ！ゲインームウー！』

ゲイツ・ゲムムアーマーへと変身し、車輪状のエネルギー弾を飛ばしてオーラのタイムマジーンを攻撃し城へ叩きつける。

「ジオウ。お前は2010年に行け」

「えっ！手を貸してくれるの!?!？」

「どうあれ、お前が魔王と確信した事に変わりはない」

「俺はいい魔王になる！皆の自由を守る魔王になる！」

「……」

「それと、オシマイダーの方はよろしくね！」

ソウゴは例え魔王になったとしても、悪い魔王ではなく良い魔王になるとゲイツに言い切りながら、ついでにオシマイダーを任せると、そこにツクヨミがタイムマジーンを操縦して現れた。

「ソウゴ、乗って」

ジオウはタイムマジーンに乗り、オーラのタイムマジーンへと挑む。だが、ジオウのタイムマジーンが押されている。

「少しは楽しませてくれないかな」

空中からの火炎弾を受けてしまったジオウは、予想以上の猛攻に思わず脂汗を額に滲ませる。

「このまま、じゃあ……」

するとタカウオッチロイドが現れ、オーズライドウオッチを使いという動きを見せる。

「これを使いということか。よーし……」

『オーズ!』

オーズのライドウオッチをドライバーへと装填した。

『タカ! トラー! バッター! オーズ!』

音声が鳴ると腕部にトラクローが追加され、顔がオーズのウオッチへと変わった。

「顔が変わった……!」

オーズモードとなったジオウのタイムマジーン。そこへオーラタイムマジーンの花炎弾が放たれるが、タイムマジーンは腕のオーズのクロー『トラクロー』で薙ぎ払った。

そこへさらにクローで斬り裂き、打撃攻撃を追い込んでいく。

「まずい……」

そのままクロー攻撃で、オーラのタイムマジーンを吹っ飛ばす。

「空ならこいつだ！」

今度はもう一つの赤いオーズのライドウォッチを装填した。

『タカ・クジャク・コンドル！』

オーズ・タジャドルコンボモードとなったタイムマジーンは背中から赤い翼を広げると、空中戦でオーラのタイムマジーンを圧倒する。

『フィニッシュタイム！』

二つのウォッチを起動させドライバーを回転させる。

『ギガスキャンタイムブ레이크！』

タイムマジーンの脛部部位を猛禽の爪の如く変化させ、急降下しながら炎をまとった一撃を炸裂させ、オーラのタイムマジーンを退けさせる。

そのままジオウは2010年へとタイムワープしていった。

「さよならだ。ジオウ」

「あの小僧……どこだ……っ！」

タイムホールがあつた所を見ながら眩くと、アナザーオーズがゲイツの前へと現れた。

「お前の相手は俺だ」

ゲイツがアナザーオーズとの戦闘へ入った。

タイムマジン機内でツクヨミはタブレットで、黎斗が父：正宗を殺害している場面をソウゴへ見せる。

「檀黎斗はアナザーオーズになって父親を殺している」

「父親を……」

「檀黎斗の父親はただひたすら頂点を目指した。檀黎斗にも相当なプレッシャーをかけてみたい。でも力を手に入れたら結局……」

「父親と……同じことを……」

そして、2010年。檀コーポレーション内で事件は始まった。

「駄目だ駄目だ。このままではパパを見返す事が出来ないッ!」

そこには、まだアナザーオーズの力を手に入れていない檀黎斗が焦っていた。

「私ならできる。私なら別だ。私の神の才能に不可能はない。何故なら私は天才で、やがて檀黎斗神を名乗る男だからだあああーっ!」

もし彼が自身のインスピレーションを高ぶらせる『未知なるコンピューターウィル

ス』と出会っていれば、彼の言う『神の才能』を目覚めさせることが出来たのかもしれない。

だが『エグゼイドウォッチ』の影響で歴史が変わってしまったことによつて、彼は自信の才能に限界を感じてスランプに陥っていた。

しかし彼は、父親からのプレッシャーで精神をすり減らしながらも、自身ははずれ神になると黎斗が叫ぶ。

すると、彼以外の時が止まった。

「はっ……時間が止まった!? 私はずいに神に……!」

「違うよ。僕なら君を神より凄い存在にできる」

「なんだと……?」

そこに現れたのは、タイムジャッカーチームのウールだった。

「惜しいな。君の才能をゲームなんかに使うなんて。世界の王になってよ」

『オーズ……!』

ウールはアナザーオーズウォッチを起動させて契約のやりとりなしに、ウォッチを黎斗の中へ入れる。

「ぐわあああああ——!!?」

そのまま、黎斗はアナザーオーズへと変貌する。

「歴史が代わって、今日から君が仮面ライダーオーズだ」

「私は、神をも超える王となるのだ!」

「違うね。あんたじゃ王にはなれないよ」

タイムワープしてきたソウゴがアナザーオーズの前へと現れた。

「何だ、貴様は?」

「王様になるのは俺だからさ」

『ジクウドライダー!』

『ジオウ!』

ジクウドライダーを装着し、ジオウオオツチを取り出すとウェイクベゼルを回して、D、9スロットの差し込み口に入れる。ドライバーの真ん中を押してロックを外し、時計が現れるとソウゴが構える。

「変身!」

ドライバーのジクウサーキュラーを反時計回りで回すと、音声 flowed。

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

ジオウへと変身し、アナザーオーズとの戦闘に入った。

その頃、現代。

エール達三人がオシマイダーと戦闘を始めようとしていた。

「ちよつとストツピ！」瞬いい?」

そこへオシマイダーを作ったパツプルが現れた。

「何?」

「あんた誰?」

そう言つてパツプルは扇子でエトワールを指す。

「プリキュアだつて」

「そう言つたじゃない」

「ええく!??なんでプリキュアまた増えてんの?」

「あの……あなたは?」

「パツプル様よ!知らないの?」

「知らない!」

「己プリキュア!ぶつ飛びな!

……つたく!ホワイト以外にどんどんミライクリスタル増えてんじゃないの……

チャラリートのヤツ、『ほうれんそう』がなつていない!

「ほうれんそう?」

「報告・連絡・相談で『ほうれんそう』。仕事で一番大事なことでしょ?」

「仕事ですって?」

「そうよ。ミライクリスタル・ホワイトを手に入れること、明るい未来を消すこと、それが私らクライアス社のお・し・ご・と!」

ミライクリスタルを手に入れ、未来を消す事をパップルはクライアス社の仕事と明かす。その隙にエール達がオシマイダーの口に捕まってしまった。

「しまった!」

「何?これベタバタする」

「食虫植物よ。このままだと溶かされちゃう!」

オシマイダーの口の中でベタバタするモノ——溶解液が露出した肌に当たっていることに気付くと、その溶解液に触れた肌から僅かながらも熱を感じ、アンジユの言う様に溶かされ始めている事を察した三人が力を入れて脱出しようとする。その時……

「やあああああ——!」

突如、二人の同じような姿の少女のキツクがオシマイダーの口に決まった事で三人は脱出し、キツクを放った二人が目の前に着地した。

「えっ?」

「あなた達は?」

「初めまして、キュアブロッサムです」

「私はキュアマリン！先輩だよ。よろしく！」

「先輩って……」

「時見君に頼まれて来たの！」

「ソウゴ君に……」

「ソウゴはどうしたの？」

「頭がおかしい社長を止めにとっかに行っちゃた」

「だから、私達が助っ人に来ました！」

「めちよつくありがとう！」

三人も起き上がり、プロサツムとマリンの横に並ぶ。

「みんなと一緒ならいける！」

五人は再びオシマイダーへと向かっていく。

「オシマイダー！早くおやり！」

オシマイダーが彼女らを攻めるが、五人の動きに翻弄されていた。

そのまま彼女達はオシマイダーの口を広げ、投げ飛ばす。

「マリインタクト！」

マリンは自身の専用武器・マリインタクトを出現させると、アンジュとエトワールはプリアートにクリスタルをセットする。

「フレ!フレ!ハート・フェザー!」

「フレフレ!ハート・スター!」

「花よ煌け!プリキュア・ブルーフォルテウェイブ!」

三人の技が放たれオシマイダーは後ずさる。

「エール!」

「プロサツム!」

「OK!」

「一緒にやりましょう!」

「はい!」

「プロサツムタクト!」

プロサツムもマリン同様にタクトを出現させる。それを見てエールもプリハートにクリスタルをセットする。

「フレフレ!ハート!フォークス!!」

「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ!」

ハート型の光線とプロツサムタクトからピンクのエネルギー弾が同時に放たれ、オシマイダーは消滅した。

「そんな……オーラ!」

オーラが操縦するタイムマジーンが現れ、パップルがそれに乗り込む。

「帰るわよ！」

「わかったわ……」

そのままタイムマジーンへと乗り、逃げていく。

そして、2010年。

ジオウとアナザーオーズの戦いの舞台は、会社内から野外へと移っていた。

「私が王だ。私が頂点に立つ！」

アナザーオーズの言葉を聞いたその時、映司の言葉を思い出す。

『王になりたいんだったら覚えておいた方がいい。一人じゃできないことがあるってことを』

「あんたより、いい魔王になってみせる！」

『サンダーホーク！』

タカウオッチロイドがアナザーオーズに雷攻撃をした。

「小賢しい……」

その隙にオーズのウォッチを回転させて起動させる。

『オーズ!』

オーズのウォッチを装填すると、前からオーズのアーマーが、タカ・トラ・バッタを模した姿で出現し、ドライバーを回す。

『アーマータイム! タカ! トラ! バッタ! オーズ!』

アーマーが装着され、胸部のオーラングサークルを模した『スキヤニングブレスター』には、カタカナの「タカ」「トラ」「バッタ」の文字が描かれており、カラーリングは黒いボディに赤・黄・緑が入り、トラのクローを模した爪——『トラクローZ』を右手に装備した姿、ジオウ・オーズアーマーへと変わった。

「ハッピーバースデー! 祝え! 全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え、過去と未来をしろしめす時の王者。」

その名も仮面ライダージオウ・オーズアーマー! また一つ、王たるライダーの力を継承した瞬間である!」

そこへウォズが現れ、新たな力の継承に祝いの言葉を叫ぶ。

「なんか、いける気がする!」

オーズアーマーとなったジオウは、アナザーオーズへと向かって行く。

「同じ時代に、王は二人も要らない!」

オーズアーマーとなったジオウの攻撃が効いているのか、アナザーオーズはクロード斬りかかられた部位を押さえながら苦しみの籠った呻き声を漏らす。

「私が王だ！頂点に立つ存在だ！」

「それを選ぶのは……あんたじゃないっ！」

「ならば、誰だあーっ！」

「俺だっ！……って言いたいけど違う！」

ジオウの叫びと共に、オーズアーマーのクロードでアナザーオーズに攻め込む。

「ツクヨミやゲイツ、はなとさあやにほまれ、ハリーにはぐたん！この時代に生きるすべての民だあああーっ！」

映司の言う通り、王国はたった一人の王で築き上げているわけじゃない。

だからこそ王は、王国を繁栄させる為に多くの民、一人ひとりと共に力を合わせて初めて、国を治めることが出来る。

それが彼の言っていた、「一人じゃ出来ない事がある」ということだと感じていた。
だから――

『フィニッシュタイム！オーズ！』

自分ひとりの欲望を満たすために王になって、人々を支配する様なお前を、王にするわけにはいかない！

そんな思いを募らせながら二つのウォッチを起動させ、ドライバーを回転させる。

『スキヤニングタイムブ레이크!』

「せいやあああーっ!」

ジオウは空中に飛び、三つのメダル状のエネルギーを出現させ、それらをキックで通過し完成させるとともに爆散させアナザーオーズに直撃した。

そして黎斗の体は元に戻り、アナザーオーズウォッチも破壊された。

「私が…王だ…:ツ!そして…神をも超える…:壇黎斗王となるのだあああーっ!」

そう叫び、黎斗は力尽きて倒れるとウォズが現れた。

「祝福しよう、壇黎斗。お前は偉大なる魔王が生まれるための、偉大なる肥やしとなった」

「私は……」

最後にウォズの言葉を聞き、黎斗は気絶した。

その後、ソウゴはこの時代の火野映司へと会いにいき、blankウォッチを渡し現代へと帰って行った。

その頃、現代では映司がエール達の前に現れた。

「どうやら、やったようだね」

「あつ…!!? あの人の…：拐われた国会議員の…：」

「火野映司さん！」

「君達が、あの王様の友達？」

映司はエール達を見て、ソウゴの友達なのかと聞く。

「ありがとうございますました」

「俺は何もしてないよ。あいつと手をつないだつてことぐらいかな」

「王様になりたいったあの子にですか？」

プロサツムが言うのと映司は微笑で頷く。

「じゃあ行くよ。俺には俺のやらなきゃいけないことがある。もっとたくさんの人と手を繋ぐつていう大事な仕事だね」

そう言つて彼はそのまま、エール達の前から去つていった。

「じゃあ、私達もここでね」

「ありがとうございますました。先輩」

「先輩かくなにか照れるな」

「エール。これからも頑張つてね」

「うん。私達も先輩達に負けなくらい頑張る！」

エールとプロサツムは固い握手を交わす。

それからしばらくし、はな達は『HUGMAN』の花屋へと戻った。

「いろいろ回ったけど、ここの花が一番綺麗で元気だったわ」

先程、クレームを言ったお客さんが花を買いに戻ってきた。

「なんか、咲田さんいい笑顔だね」

ソウゴは咲田さんに笑顔がいいと言う。

「ところで、ソウゴ。あの王様の勉強はもういいの?」

「うん。もつと他に学ばなきゃならないことがあるって気付けたんだ。これをくれた人がそれを教えてくれた」

ソウゴは映司が貰ったオーズライドウオッチを見せる。

「新しいウオッチだ!」

「はな」

後ろから呼ぶ声が聞こえ振り向くと後ろに母：すみれがいた。

「はな達が来てるってきいてね。お仕事体験はどうだった?」

「うん、すごく大変だった。だけど!」

「だけど?」

「みんなの笑顔、最高だった」

花屋の仕事で出会った笑顔を思い出しながら答える。

「そう」

「みんなを笑顔にできるお仕事、もっと色々やってみたい」

「じゃあ、連載してみよっかな」

「何を？」

「はな達のお仕事体験ルポタウン誌にね」

「すっごーい！」

これにはソウゴ達も驚いた。

「すごいね。ねえ、ゲイツ……あれ？ゲイツは？」

ソウゴはゲイツがいないことに気づく。

「そういえば……」

「ゲイツがいない！」

はな達もゲイツがいなかった事に気付いた。

「さあやちゃん、これお願い」

「あ、はい」

さあやは包んだ花束を貰い、お客さんへと持つていく。

すると、さあやの後ろ姿が気になったすみれが呟く。

「あなた、ひよつとしてさあやちゃんじゃないの? 野菜少女の!」

「野菜少女?」

「言われてみれば覚えてる」

「それで見えた事あると思っただ。……うん? もしかして、ソウゴ知ってた!」

「あ…それは…その……」

「うっ、うう……」

ソウゴとさあやはお互いに顔を合わせる。

一方、ゲイツは荷物を持ってどこかを歩いていた。

「思い出せ。俺は奴の仲間でも何でも無い。俺はオーマジオウを倒すためにこの時代に来た」

ゲイツは自分がこの時代に来た理由を口にしながら自分に言い聞かせ、歩き続ける。

「かくして、我が魔王は新たにオーズの力を手に入れた。時代は着実にオーマジオウへと向かっている。」

そして…また、新たなレジェンドが彼の前に……」

次回！Re・HUGつとジオウ！
第9話 オンパレードと迷い：マジック！2013

第9話 オンパレードと迷い…マジック!2013

2013年、時計の針が12時を回った。

ダンスステージの上で、ジオウはアナザー鎧武と剣を交えていた。

「うおおおおおおお！」

アナザー鎧武の大剣を抑えつつ、そのまま攻撃を避け続けると、懐から鎧武ウオッチを取り出した。

「させるか！」

するとアナザー鎧武の攻撃によってウオッチを弾き飛ばされる。

「危ねえ！」

ジオウは間一髪でウオッチを掴み、ドライバーにウオッチを差し込み回す。

『アーマータイム!』

「えっ? うわあ! 何これ?」

するといきなり頭上に鎧武の頭部を模した鎧武アーマーが現れ、動揺するジオウの顔へと落下してきた。

「祝え! 全ライダーの力を受け継ぎ「ウオズ! 助けてよ!」

いつもの様に突然現れたウオズが祝辞を述べるが、アーマーを頭に被ったジオウは思わぬ重みに耐えられずひっくり返り、身動きが取れずにいた。

「…あ、戻った」

「……………時空を超え」

とりあえず自力でなんとか起き上がったのを見て、改めて祝辞を述べ続けるウオズ。

「開いた〜！」

それに続いて、ジオウの顔を覆うように落下したアーマーが開きだし、姿を変える。

「過去と未来をしらしめす時の王者、その名も仮面ライダージオウ・鎧武アーマー」

複眼のリバーサルインジケーションアイにはカタカナで「ガイム」と描かれ、頭が武将・伊達政宗の兜とオレンジが合わさった様な形となり、両肩はオレンジの錠前の形、胸部の装甲は鎧武の仮面を模した形状の装甲——『スカツシユプレスター』になっていた。

「また一つ、ライダーの力を継承した瞬間である」

「花道、オンパレードだあああーっ！」

歌舞伎の人が取るようなポーズを取り、アナザー鎧武へと向かっていく。

アナザー鎧武の巨大な太刀を受け止めながら、二本のオレンジの剣『大橙丸Z』を握りしめながら攻撃を繰り返す。

「今助けてやる、ゲイツ！」

『フィニッシュタイム! 鎧武!』

そう言つてアナザー鎧武を自身から斬り離し、ドライバーの二つのウォッチを押す。

「貴様ツ!」

『スカッシュタイムブ레이크!』

アナザー鎧武が止めようと武器を構えて向かつて来るが、既にドライバーを回し終えていたジオウはすれ違い様に切り裂き、やけに歪んだオレンジ型のエネルギーでアナザー鎧武を包み込みながら爆裂させ、撃破した。

「よしっ、これで——え? えええええええ!」

しかし突如、すぐ近くの空間が歪みだすと、直ぐ近くにいたジオウは歪みに飲み込まれて何処かへと流されていく。

「……………えっ!? 何これ——!!?」

それから変身解除されたソウゴが目を開けると、いろんな物が合わさったような現実離れした場所へと移っていた。

「——確かに奴を倒せば、君の大事な仲間を救うことができる。」

……………でも、それでいいのか?」

一体此処は何処なんだという疑問が浮かぶ前に、声の聞こえた方を振り向くと白い服

を着た男性が目の前に現れた。

「どうゆうこと？」

「君は王様になりたいんだろ。全部、独りで解決するのが、君の考える王様なのかい？」

「そんな……」

「それじゃあ、君の周りにいる人の、意味がなくなる」

男性が腕をあげると先までの風景が崩れ、暗い闇へと変わった。

「君が救おうとしているのは、そんなに弱い男なのか？」

ソウゴが助けようとしている彼——ゲイツはそんなに弱い男なのか？と聞く男の手に、一匹の青い蝶が留まる。

「信じてみるといい。その男の力を」

手に留まった青い蝶を向けると、その蝶が無数にも飛び散り、目の前が眩しく光り輝く。

『そして気がつくと、俺は元の場所にいた。』

……その人は、俺にライドウォッチを渡してくれた人に似ていた。

でも違う、それだけははっきりと分かった。だから俺は——』

それは、今から起こる事件の何日も前のことだった。

——事件が始まる5日前。

「にんじん兄さ〜ん!ネギ姉さ〜ん!野菜はわたしの家族なの〜!」

ソウゴ達四人は、ご機嫌なのはの歌声をBGMに、いつもの様に学園の通学路を歩いていた。

「懐かしいな、そのCMの歌」

「うん!さあやが出ていたCMよく覚えてるよ。まさか、あの野菜少女がこんな身近にいたなんて!」

「なんで教えてくれなかったの?」

「うっ……言うほどの事じゃないかなって思っ……」

「ええ〜!私だったら絶対自慢しまくちやうよ!」

「じゃあ、最近もCMとかにも出るの……?」

「あ……ツクヨミ。それは……」

今もTVに出ているのかと言うツクヨミの質問に、さあやの代わりに応えようとするソウゴを遮る様に「おーっほっほっほ!」と、何処からともなく高笑いがか聞こえ始めた。「薬師寺さあや!ここで会ったが百年目!」

声の主がそう言うと共に、木の茂みの方から一人のカチューシャを着けた茶髪少女が

現れた。

「一条蘭世でございます」

その少女は、自らを「一条蘭世」と名乗った。

「あのCMでさあやと共演してた？」

「でも、そんな子出てたっけ？」

「見せて貰ったけど、あなた出てなかったような……」

「出てますわよ！」

一条蘭世はパッドを取り出して操作すると、その時のCM映像を態々再生させて彼らに見せる。

「……ネギ」

ツクヨミが画面を凝視してみると、歌っているさあやの後ろには確かに、ニンジンの着ぐるみの子と一緒に蘭世がネギの被り物を着て出演していた。

「あのCMで、あなたは野菜少女としてお茶の間に親しまれた……なのに私はネギ！ただのネギ！」

「私は好きだよネギ」

何処か見当違いな返しをするさあやに「そういうことじゃありません！」と突っ込みをしつつ、悔しそうな表情を浮かべながらこぶしを握り締める蘭世。

「悔しかった……惨めだった……だからあの時誓ったの!いつかあなたをギャフンと言わせてやると!」

「ギャフンって……出れるだけでも凄いやな……」

「それに、ただの逆恨みのような……」

ソウゴ達には蘭世の言っていることが、どこかさあやへの逆恨みのように聞こえた。

「あなたには分からないでしょうね!大女優の母という後ろ盾を持つあなたには!」

「私はそんな……」

「ちよつと待って!さあやは別にお母さんが大女優だからって訳じゃ……」

ソウゴがさあやの前に出て仲裁に入ると、何処かで見た姿に気付いた蘭世は「ん?」と唸りながら、自身の記憶から該当する人物を挙げる。

「あなた確か…薬師寺さあやのデビューの時、松葉杖を付けていた子では?」

「えっ?何で知ってるの?」

「…つて、うん?大女優?」

「あら、ご存知なかったのですの?この子の母は、あの薬師寺れいらですわよ!」

「ええええ!薬師寺れいら!知ってる!知ってる!あのCMの綺麗な人!」

確かにさあやがデビューした時見学させて貰ったけど、むしろ何で覚えてるの?と驚

いていたソウゴの横で、彼女の話を聞いたはなは化粧品ＣＭに良く出ている女優を思
い出す。

「本当……？」

「…そうだよ。れいらさんはさあやのお母さんだよ」

ソウゴがそうだと言うと、確かにさあやと面影が似ているところがあることに気付く
ほまれ。

「サイン！サイン頂戴！」

さあやにサインを求めるはなの姿を見ながら、蘭世はぼつぼつと自分の身の内を語り
始める。

「一方、私は何のバックを持たないでどんな小さな役でも地道にやってきました……あ
なた今度、舞台のヒロイン役のオーディションを受けるのでしょうか？」

「えっ？一応そういう話はあるけど……」

陶醉してるなくと呑気に思っていたツクヨミが、「あ、そうなんだ」とさあやの方を見
ていると、「私も同じオーディションを受けることになっていますの」と語る蘭世。

「必ずやあなたを蹴落とし、役をゲットしてしてみせますわ！」

「えっ？私はそんな……」

「問答無用！叩き上げの上げの底力見せてあげますわ！オーホッホッホ！」

今度さあやも受けるというオーディションでヒロイン役の座を蹴落すと宣戦布告し、そのまま高々と声を上げて去っていった。

「なんじゃありや?」

『オーホッホッホ』ってほんとに言う人いるんだ」

今時、少し前の少女漫画や乙女ゲームでしか見ないような蘭世の強烈な登場に、ソウゴ達は驚いていた。

「でも、オーディションなんて凄いね!フレフレ!さあや!」

「うん……」

はなに応援されるさあやであったが、事情の知っているソウゴの目には、非常に複雑な感情に混じって、強い不安を感じていた。

三人と別れた後、ソウゴとさあやはクジゴジ堂へ到着した。

「じゃあ、さあや。また明日」

「うん。今日は練習するからみんなごめんって……」

「うん……その、頑張ってる」

「……ありがとう」

何処か不安そうな雰囲気を出している彼女に向って、ソウゴはエールを送る。

だがあまり晴れない表情で礼を言いながら帰っていくさあやを見ながら、「やつぱり、まだ不安なのかな……」と呟きながらクジゴジ堂へと入る。

「じゃあこれで」

「出来次第、ご連絡入れますから」

中には接客をしていた順一郎と、彼に修理する品を渡し去っていくお客さんの姿があった。

「叔父さん、何これ？」

「おお、ソウゴくんはビデオデッキなんか知らないか。またお客さんから修理頼まれちゃった。うち時計屋なんだけどね」

ビデオデッキに目を向けるソウゴに、時計屋なのに時計じゃない修理に不満な声を上げる。

「近所の御婦人たちが、『クジゴジ堂さんなら何だって直してくれる』って宣伝しちゃうてくれるからね、来るわ来るわ時計以外の依頼」

「TV、エアコン、冷蔵庫。叔父さんに直せないものはないからね」

「いやいやいやいや。この間なんかさ、割れた花瓶を傷もなく元通りに直してほしいという依頼があつたんだけど、さすがにそれは断った。」

わたしやね、ウィザード早瀬じゃないっつもの！」

「ウイザード早瀬?」

知らない名前を出されてわからなかったソウゴの様子を見て、順一郎は知らなかったのかと思っただ。

「あれ、知らない?今話題のマジシャン。マジックショーがウケてるんだって」
「へえ〜」

「こんどさあや達と見に行こうかな〜と考えながら、制服から着替えようと部屋へ向かう。」

「おつ、ソウゴ。さあやの話、はな達から聞いたで!」

しばらくして。ハリーのいるハウスへと向かったソウゴは、ハリーからさあやの話を聞きながら、ソファではぐたんと遊んでいるはなとほまれ、ツクヨミの姿を目にする。

しかしその光景に、ゲイツの姿だけがなかった。

「……ねえハリー、ゲイツは戻ってきた?」

「いや、あの日荷物まとめて出ていったから、ここには顔すら出してえへん」

「この前のアナザアーズの事件の後、姿を消したきり帰って来なかったらしい。」

「しかし、さあやがオーディション受けるとは驚きやな」

「今もTVとか出てるの?」

ハリーの言葉に頷きながらツクヨミがはなに聞くが、彼女は首を捻りながら「『さあ、最近テレビで見た記憶が無い事を思い出す。』」

「さあ……最近は見ないから……」

「さういえば、ソウゴは知ってたよね。さあやがCMにも出てたこと」

「うん……小さい頃にさあやのお父さんに連れて行ってもらったんだ」

「いいな〜！ソウゴが羨ましい〜！」

「その時のさあやの演技、なんか天使みたいですよ〜かったですんだ！」

「なら、まだやっぱりTVに出てるんか？」

「それは……」

TVに出るのかと聞かれ、何か訳ありなのかどうかは分からないが言葉に詰まっていると、はなはハートマークの付いたアクセサリー機で遊ぶはぐたんに目がいく。

「はぐたん上手！上手！」

「は〜ぎゅ〜！」

「これええやろ！可愛いハートのアクセが作れるんや！」

「……そうだ！これ！」

ハリーも絶賛するアクセサリーマシンで作られたハートアクセサリーを見て、はなが何かを閃く。

その頃、とあるビルの屋上。

「…何の用だ？」

「ジオウとプリキュア達のところを飛び出したみたいじゃない？オーマジオウの誕生を見過ぐすことにしたのかしら？」

はぐくみ市を一望する為にそこにいたゲイツへ、タイムジャッカーのオーラが接触してきた。

「ふざけるな。奴を倒すのは俺だ」

「では、私達と目的が同じということだ」

そこへさらにタイムジャッカーチームのリーダー、スウォルトツまでも現れた。

「誰だ？貴様は？」

「会えて嬉しいよ。仮面ライダーゲイツ」

「…クライアス社か？」

「俺はスウォルトツ。クライアス社、タイムジャッカーチームのリーダーだ」

それを聞き、ゲイツはライドウォッチを構える。

「ジオウは着実に力をつけている。現にお前は彼に負けた」

確かに、この前の戦いでゲイツは手も足も出ずに負けた。

ジオウを倒しに来たはずなのに、そのジオウに完膚なきまでにやられた本人は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「目的を果たすために手を取り合う。断れば……ふうん！」

手を開くとスウォルツは謎の力で、有無を言わずゲイツを屋上から押し出そうとする。

「断れば、このまま落とす。意見は求めん！」

そして有無を言わず、ゲイツが屋上から落とされた。

すると黒く長い布がゲイツを助け、非常階段へと移された。

「ウオズー！」

助けたのはソウゴの前によく現れる謎の男・ウオズだった。

「ほう、いつの間にか彼と手を組んでいたか。これは誤算だった。また次の機会にしよう」

ウオズの姿を見たスウォルツは去っていった。

スウォルツの姿が見えなくなると、ゲイツはウオズを仲間の仇と言わんばかりに睨みつけていた。

「何のつもりだ、ウオズ」

「昔のよしみで助けただけだよ。これを機に、私達も仲直りをしないかい？」

我が魔王に君みたいな仲間がいると、とても助かるんだ」

「黙れ!それ以上、俺を愚弄するなら、ここでお前を倒すぞ!」

「へへ、私がゲイツ君に負けた事あったかな?」

「俺達が元いた世界ではな。だが、此処ではお前の思い通りにはさせない!」

ゲイツは怒りに燃えながら殴りかかるが、ウオズは簡単にあしらいながら浮遊して屋上へ移動した。

「俺をジオウの仲間にするなど、もってのほかだ!」

「それは残念だ」

不敵な笑みを浮かべ、その場を去っていくゲイツを見届けるウオズは、これから彼をどうするかを思案するのだった。

翌日の放課後。

学園のチャイムが鳴ると、さあやは深刻そうな顔で教室から出ていった。

それを見ていたはなが彼女の名を呟くと、ソウゴが勢いよく教室を出ていく。

「ソウゴ、どこ行くの?」

「ゲイツを連れ戻そうと思って!」

はなの問いに対して、ゲイツを連れ戻すと言う。

「そういや、あいつこの前勝手に荷物まとめて出ていったもんね」

「うん、だから見つけて戻ってきて欲しいんだ」

「放っておくんだな」

声が聞こえ振り向くと、そこに昨日ゲイツを助けた筈のウオズが現れた。

「誰？」

「初めまして、キュアエトワール……輝木ほまれ。私の名はウオズ。我が魔王の家臣の一人でございます。以後お見知りおきを」

「ウオズ！なんか久しぶり、元気？」

「おかげさまで」

初対面のほまれに自己紹介をしていると、そこへ続いてツクヨミが教室から出て来て、ソウゴと会話をしていたウオズを見た途端顔を険しくしながら警戒をする。

「ウオズ……！」

「久しぶりだね。ツクヨミ君」

「えっ？ ツクヨミ、ウオズさんのことを知ってるの？」

「まあ、ちよつとした腐れ縁って奴だよ」

ウオズはゲイツだけでなく、ツクヨミとも何か関わりがあるようだ。

「我が魔王。あの男を連れ戻してどうするつもりだい？」

「どうするって…仲間がいなくなっただ。探すのは当たり前でしょ」

ゲイツを連れ戻しに行こうとするソウゴを、ウオズが本のページを見せ付ける様に開いて進行を止める。

「この本によれば、明導ゲイツなる人物は、君の覇道に何ら関与することはない。放つておいても問題はない」

「それでも、俺にはアイツが必要だ！俺がいい魔王になるためにもね」

それ聞いたみんなからホツとした表情を見せる。

「大丈夫。ちゃんと良い魔王になるから…心配しないで！」

ソウゴはそのまま一人でゲイツを探しに行った。

「………実に心配だ」

そんな調子で自身が望む魔王になれるのか、不服と不安を織り交ぜながらウオズが小声でそう呟いていると…

「あれ？」

「どうしたの、忘れ物？」

先出て行つたばかりのソウゴが教室に戻ってきた。

探すと言つておいて直ぐに戻ってくるなんてどうしたんだ？と疑問に思うはな達をそこに置いておき、そのまま彼は教室に置かれた社会雑誌を広げる。

「ダンスユニットの連続失踪事件」。これって、タイムジャッカーの仕業と思わない？」

『えっ？』

皆は何故そう思うのかと、再び疑問に思った。

「このメンバーのところに、ゲイツがいる。そんな気がするんだよね……行ってみよう。ツクヨミ」

「行ってみようって、何言ってるの？」

「大丈夫。今日の俺、すごい感が冴えてる。そんな気がする！」

ソウゴはまだ納得してないツクヨミを連れて何処かへ行ってしまった。

「どういう事……めっちゃつくなんだけど……」

「ソウゴ……さつきゲイツ探しに行ったよね……」

残されたはな達には、何がどうなってるんだかわからなかった。

その頃、とあるステージで本番前に準備に入っているダンスチーム『Baron』がいた。

しかし、その曲がり角で赤と黒を基準とした衣装を着たメンバーの二人が何か深刻な話をしていた。

「何かな本番前に、話なら後にしてくれないかな。もうすぐ収録の時間だ。集中したい」
「俺、見たんです。あなたが化け物になるところ……」

「…俺が？化け物に？何寝ぼけたこと言ってんだ？」

「ひよつとして、今までいなくなつたメンバーや他のチームのメンバーはあなたに……！」

そう言いかけると、化け物と疑われたメンバーは逆ギレしたのか、目の前にいる仲間の顔を鷲掴みにする。

「だつたら…どうだって言うんだよッ！」

『ガイム……』

チームバロンのメンバーの一人である青年・アスラは身体を変貌させ、刀が突き刺さつたかのような形状の頭部と枯木の様な鎧装甲を持つ落ち武者の様な姿の怪人——アナザー鎧武へと変わった。

そして腕を上げると空間に少し錆びたチャックのようなものが開き、不思議な森へと繋いだ。

アナザー鎧武は仲間である筈のメンバーの一人をそこへ放り込むと、そのままチャックを閉めてしまった。

連続失踪事件の犯行現場では、タイムジャッカーのスウォールツと共にゲイツの姿も

あった。

「己の野望を成し遂げるために、何の迷いもない。彼は仮面ライダー鎧武の力を使わずれ王になる。君と一緒にジオウを倒してもらおう……！」

そのままアナザー鎧武は見境なくスタツフやメンバーを襲おうとした。そこへゲイツは飛びこみ、彼らを助ける。

「何の真似だ？」

「やはり、お前らとは合わないようだ」

こいつらといればジオウを倒せるかもと少しでも思った俺がバカだったと思いながら、アナザー鎧武を止めようとウォッチを取り出そうとする。

「あ……！ほんとにいた」

そこへゲイツの後を追う様に、ソウゴとツクヨミが駆けつけてきた。

「ジオウ……」

ゲイツはソウゴの姿を見て、アナザー鎧武から視界を外した。その隙にアナザー鎧武はさつきと同様にチャックを開き、頭上から被さる様にゲイツを森の中へ送った。

「ゲイツー！」

ツクヨミが叫んだ頃にはチャックは消失し、ゲイツは既にこの世界から居なくなってしまった。

「明導ゲイツ。もう少し見どころのある男だと思ったが……残念だ」

スウォルツが心にもない事を言い残し、ゲイツを探すツクヨミ達の前から去っていく。

「ゲイツを助けないと……! 『祝福しよう』」

ツクヨミがゲイツを助けようと思っていると、突如そこにウオズが現れた。

「君の魔王への道を妨げる明導ゲイツが消えたことを」

「ウオズ!」

ウオズはゲイツが消えた事を祝福しようと言う。

「とにかくアナザー鎧武を追わないとね」

「ソウゴ………ん? ちょっと待って……アナザー鎧武? どうして奴の名前を?」

ツクヨミはアナザー鎧武と聞き、何故、あのアナザーライダーの名前を知ってるかとソウゴに聞く。

「……あつ、は……あく………えと、勘かな。奴の生まれた時間も分かったし、倒すのに必要なライドウオツチも手に入れた」

そう言つて懐から、2013年の文字が刻まれた鎧武のライドウオツチを取り出し見せる。

「いつの間に……?」

ウオズはいつに間にか鎧武ウオツチを持っていたことに驚く。

「嫌だな。この前祝つてくれたろ！」

「この前祝つた……？」

すぐに本を開き確認するが、そんな事はどこに書かれていない。

「記録がない……」

戸惑ったウオズはジオウを祝った記録がないと叫びながら、困惑を隠せずにいた。

「全然話が噛み合わない！」

「とにかく話を進めていいかな？アナザー鎧武のことで、俺の知ってることを説明したいんだ」

「分かった。分かった。とにかく聞くわ」

ツクヨミにはどうなってるのかわからないが、とにかく今は話を聞くことにした。

「事件の発端は5年前、2013年……」

当時人気が出る直前のダンスグループ、チームバロンを追い出されたアスラつて男にタイムジャッカーが接触したのが事件の発端だ……

それ以来、アスラつて男は邪魔者を『ヘルヘイム』つていう不思議な空間へ放り込んで自分がチームバロンのリーダーになった」

よく調べられたな、と思うような事をすらすらと語っていく。

「ねえ。何でそんなに詳しいの？まるで見てきたみたい」

「え、そりゃさ……いろいろ調べたからさ……」

だが調べたにしては知りすぎてる、まるで実際に見てきたかのような感じだった。これは何かあるのではないかと睨み、ツクヨミは彼の顔をジツと見つめる。

「絶対おかしい！何か隠してる？」

「あつ……俺、今日の買い出し行かなきゃ！先に戻って。俺、この人病院連れていくからちよつと行つてくる！」

「ちよつと待ちなさい！」

ソウゴは何かを誤魔化すかの様に倒れていたスタッフを病院に連れて行き、去っていった。

その頃、謎の空間の森『ヘルヘイム』へと送られたゲイツは辺りを見回す。

「ここは……」

「うわあああああ！」

声が聞こえると、そこにはここに送られた人達、先程メンバー……いや、そうじゃない人までもが、ずんぐりむっくりした灰色で二頭身の怪物『インベス』に襲われていた。

『ゲイツ！』

すぐさまゲイツライドウオッチを起動し、ドライバーに装填した。
「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『ジカンザックス！Oh！No！』

ドライバーを回すと仮面ライダーゲイツへと変身し、出現させたジカンザックスを振り回してインベスたちを切り裂き続け、人々を助ける。

一通り倒したのを感じて、武器を下ろし一息ついたその時：

「後ろだよ」

「何？！」

その声の知らせの通り後ろを振り向くと、後方にインベスがいて、咄嗟に攻撃を放ちインベスを倒した。

「あんたは……」

声が聞こえた森の奥から、あのダンスチームと同じ服を着た男性が現れた。
「駆紋戒斗」

ゲイツがヘルヘイムの森で駆紋戒斗と名乗る男と出会ったその頃。

はぐくみ市にある木々に囲まれた池の前でさあやは一人、台本を見ていた。

「さあや……」

「ソウゴ君? どうしてここに?」

「ゲイツを探してるんだ。でも、闇雲に探して中々見つからないんだ」

そこへ偶然、近くを通りかかったソウゴが彼女の姿を見つけてそう話しかけると、さあやの手に握られていた台本に気づく。

「もしかして…練習の邪魔だった……?」

申し訳なさそうに言うと、彼女は靴と靴下を脱ぎ、池の中を歩く。

「——私は誰?」

さあやはそう言うと、胸に手を置く。

「わからない……暗くて何も見えません……」

それでも、私の道は私が開かなければ——」

自分がオーディションで喋る台詞を言いながら演技を行う。

その姿は、まるで背中に羽が生えた天使のようだった。

「やっぱり、凄いや……」

「天使様……」

「あつ、はな! ほまれ!」

ソウゴが彼女の演技の姿に目を奪われていると、誰かの声が聞こえる。

振り向くとはなとほまれが其処にいた。

「ごめん、覗き見するつもりは……」

「今の何?!」 天使がほんといにいるかと思っただらさあやだったの! 天使がさあやでさあやが天使で……ああ! なんていうか!」

「背中に羽見えたっていうか!」

「ありがとう! 今度オーデイション! 地上に降りた天使の役なの」

「マジで! それ凄い!」

同じようにさあやの演技を見て、自分のスケートの演技に参考出来るとほまれは褒め続ける。

「ねえ、もう一回やって! ワンモア! ワンモア!」

はなにせがまれ、さあやはもう一度やろうとする。

「ココハドコ! ワタシハダレ! 暗クテ何も見エマセン……!」

「……やっぱり、まだダメか……」

ソウゴと彼女だけだった先までと違い、急にカタコトのような、演技というには余りにもワザとらしい、違和感のある喋りになった。

「……ソウゴ君ならまだ大丈夫だけど、他の人に見られてるところなるの……オーデイションは特にダメ」

「緊張するって事?」

「色々考え過ぎちゃうの……この人は私に何を求めてるんだろ……何が正解なんだろって……」

「でも、あのCMのさあやはそんな風に見えなかったけど……」

はまれの記憶では、CMに出ていたさあやは楽しくやっていた。

「確かに昔は何も考えず役になりきる事が出来たの。でも……」

周りの人達による期待、そして「薬師寺れいらの娘」と言う言葉がさあやにプレッシャーを与え、それ以降オーディションが上手くいかなくなってしまった。

「私は母のようにになりたいのかそれとも……段々色んな事が分からなくなっていて……」

——その内、女優になりたいという気持ちもわからなくなった。

「で……い……」

苦悩するさあやに、はなが水をかける。

「わあっ! つめたっ、何?」

「さあやがこくんな顔してたからさ」

はなは顔を目と口をいじり、変な顔を見せる。

「してません!」

「ほまれも！」

ほまれもやる気満々に池へやってきて、さあやに水をかける。

「…ねえ、さあやはどうしてオーデイション受け続けてるの？」

「……きつと、自分の気持ちが変わりたいからだと思う。」

答えが分からないまま諦めたくない！落ちてばっかだからカツコ悪いけどね…」

「なんで。それめっちゃカツコいい！」

「そんな、カツコ良くないよ……ずっと悩んでるだもん」

「悩めばいいじゃん」

岸に立っていたソウゴが、さあやにトコトン悩んで良いと喋りかける。

「自分がなりたいたいものを見つけるまで悩めば？」

「ソウゴ君……」

悩む事は別に悪い事じゃ無い。だから今すぐ答えは出なくてもいいから考えに考えて、その上で自分で決断出来れば全て良しと言い、くよくよ悩んでいるさあやを力づける。

「俺は前にさあやに元気を貰ったから。悩んでるなら、いくらでも付き合うよ」

「そうだよ。私達も側にいるから！」

「はな……ほまれ……」

さあやが眩くと、さつきまでの思いつめた表情から一変して二人に水をかけ返す。水を掛け合っている内に、さあやの顔から笑顔が戻った。それを見たソウゴもつられて、安心に満ちた笑顔になった。

「…うん? そういえば、なんでソウゴがここに居るの?」

水を滴らせまがらはなはふと、ゲイツを探しにダンスチームの所に行っていたはずのソウゴが、何故ここに居るのか気になった。

「えっ? それはゲイツを探したら、たまたまさあやに会って……」

「ダンスチームの所にゲイツが居るって、自分で言ってたじゃん!」

「ゲイツが? それ本当?」

自分がそんな事を言ったのかと不思議そうな顔をする。

「あれ? 病院に行ってたんじゃないの?」

そこに、ツクヨミが四人を見つけ近寄ってくる。

「え? いやく……ってか、ツクヨミこそ何処行ってたの? ゲイツ見つけた?」

「えっ?」

「そうだよな。俺も見つからなくてさ……」

「やっぱ闇雲に探しても駄目だよな。なんか作戦立てよう!」

「……………一体何なのよ。もうーっ!」

ツクヨミはさつきまでであった事をありのままに話した。ダンスチームにゲイツがいた事、アナザー鎧武と戦った事も。

「俺がゲイツの居場所を知ってる……？しかもアナザー鎧武と戦った？」

「アナザー鎧武を倒すためのライドウォッチも持つて言つてたでしょ？」

「持つてないし、知らないよ」

「だつてさつき……」

彼は持つていないと言うが、さつきまでは間違ひなく鎧武ウォッチを持っていた。

「夢でも見てたんじゃないの？」

ソウゴの言葉を聞いて、ツクヨミは本当に夢を見ていたかのように思い始めて来た。

「……………あつ！」

「どうしたの？」

すると彼女がある違和感に気付く。

「ソウゴの服！」

「服？……あつ！ソウゴの服……変わつてる！」

みんなはさつき学校で戻ってきたソウゴと、今此処にいるソウゴとは服が違う事に気付いた。

「ひよつとして……まさか……」

「な、何……」

ツクヨミは何か気づき、ソウゴを押し倒す。

「アンタ!!? ……アンタじゃないけど、何てことしてんのよっ!」

「俺、何もしてないよ……」

「とにかく明日あそこに行くわよ!」

「だから……何?」

何がどうなっているのか、何故押し倒されているのか、ソウゴにはわからなかった。

クライアス社では誰もいない中、ルールーが一人机で何かを調べていた。

「ルールーちゃん? 今日って暇だったりする?」

そこにパップルがルールーに近づく。

「何ですか?」

「実はジーカレに誘われちゃってさく今日の仕事代わってくれない? やっぱラブも大切じゃない?」

「……?」

「その辺、おなじ女子なら分かるでしょ? 彼氏よ彼氏」

「理解不能……」

「あーら、あんたにはまだ早かったかしら？ まっ、そう言う事だからよろしくちよんまげ〜」

そう煽りを混ぜながら言うと、ビルの中のタクシーへと乗りこみ去っていった。

「プリキュアとジオウ・ゲイツの分析は完了済み、排除成功確率99%」

何かの分析が完了されると、ルールーは99%の成功率を呟きながら、画面を明かりを消したのだった。

翌日、さあやは『地上に降りた天使たち（仮）』のオーデイションへと挑む。

「ここからは一人で大丈夫！」

「応援しとるで！」

「これ、はぐたんとみんなで作ったの」

はな達はそう言って、みんなで作ったハート型アクセサリーのブレスレットを、腕に着けた同じブレスレットを見せながらさあやに渡した。

「ありがとう」

「それと、これ…ソウゴから」

ほまれがソウゴからのメモを渡す。

「じゃあ、行つてくる!」

さあやは仲間達に見送られながら、オーディションを受ける部屋へと入る。

「…来ましたわね、薬師寺さあや」

「蘭世ちゃん」

「薬師寺れいらの娘だからって、遠慮はしませんわ!」

蘭世が「薬師寺れいらの娘だ」と言うと、他の受ける女の子達もさあやに注目する。

スタツフまでもが「どんな演技をしてくれるのか」と期待に満ちた目で注目し、それを受けたさあやは委縮してしまふ。

はな達の居るドア越しからも、会場のざわつきが聞こえる。

「ここそのままじゃ…」

はなは心配になり、ミライパッドを出す。

「待って!」

しかし、それをほまれが止める。

「ほまれ?」

「ソウゴに言われたの。ここはさあやが乗り越えなきゃならないって……」

さあやがオーディションへと挑む一方その頃。ソウゴはツクヨミに連れられ、あるダンスステージへと連れ来られた。

そこでは大勢のファンの中で踊っているチームバロンがいた。

「あの真ん中で踊ってるのがアナザー鎧武。アイツを倒して！」

ツクヨミは真ん中で踊っているアスラに指し、あいつがアナザーライダーだと言う。

「でもこの時代に倒しても無駄じゃんか。それに俺、アイツを倒せるライドウオツチ持っていないよ！」

「いいの！騒ぎが起こればアイツがきつと来る！」

「アイツって？？」

「いいからっ！」

ツクヨミがソウゴを押し出すと、実況席からマイクを取り出す。

「そこまでだ！」

鼻をつまんだ声でマイクに向かって叫ぶと、周りの注目は前に出たソウゴに行く。

「なんかデジャブー……」

「貴様は、昨日の……」

「初めましてなんだけど……アンタを倒させてもらおう！」

『ジクウドライバー！』

『ジオウ!』

ジクウドライバーを装着し、取り出したジオウオッチを回してD、9スロット側の差し込み口に入れる。ドライバーの真ん中のロックを押し、背後に時計が現れるとソウゴが構える。

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

ドライバーのジクウサーキュラーを反時計周りに回すと、音声の流れでジオウへと変身した。

「……邪魔ものはすべて排除する」

アスラも人目をはばからずアナザー鎧武へと変身。それを見たメンバー、観衆とも怪物の出現に慌てて逃げていく。

そのままジオウはアナザー鎧武と交戦に入った。

場面は戻り、オーディション会場では蘭世の審査が終わり、さあやへと回ろうとした。

(どうしよう……今になって……)

自分の出番に回ると緊張し、また失敗すると思い始める。

すると、手に握られたソウゴの紙のメモに気づく。

「いれ……」

さあやは彼からのメッセージが込められたメモを広げる。

『さあや。いつも通りやればいいよ。』

あの時、俺が事故で両親が居なくなつて暗くなつた時、さあやの演技が俺を助けてくれたんだ。

だから、失敗してもいいから楽しんでやってみて！

b y. 最高最善の魔王より！』

「ソウゴ君……うん！」

ソウゴからのメモを読み、彼女から緊張が解けた。

そして遂に自分の出番となり、はな達から貰つたブレスレットを着けながら審査員達の前に立つ。

「——分からない！暗くて何も見えません！私は私！私だけの道は、私が開く！」

すると彼女は、練習の時以上に完成度の高い、感動的な演技と台詞を放つ。

それを見ていた審査員も他の受験者も圧倒され、蘭世は「また彼女に負けるのか」と不満そうな顔をする。

そこへ、UFOに乗り込んだルーラーがオーディション会場の上空現れた。

「トゲパワワ発見」

彼女は画面の方を見ながら、蘭世から漏れ出るトゲパワワを発見した。

「明日への希望よ！消えろ！ネガティブウエーブ！」

ルーラーから放たれたネガティブウエーブが蘭世へと放たれた。

「あつ、蘭世ちゃんどうしたの？」

「もしかして……」

禍々しいオーラを放ちながら倒れ込んだ蘭世をみたさあやはオシマイダーが現れたと気づき、彼女は外で待っていたはなとほまれと一緒に外の方へと向かう。

そこには蘭世から現れた、パソコンの様なキーボードと画面が腹部に着けられ、マウスを模した腕を持ったオシマイダーがいた。

「みんな、行くよー！」

「「ミライクリスタル！ハートキラツと！」」

はなとさあや、ほまれはミライクリスタルをセツトし、姿を変える。

「輝く未来をく抱きしめて!!みんなを応援♪元気のプリキュア!キュアエール!」

「輝く未来を抱きしめて!みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「輝く未来を抱きしめて!みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

「現れましたね。プリキュア」

「ええ?! UFO!」

変身したエール達の前に、ルールーが乗るUFOが現れた。

それと同時に、彼女達の姿を見ながら現れた人物が、黒いオーラに包まれる。

三人が変身した頃、ジオウはアナザー鎧武と鏢迫り合いとなっていた。

「5年だ。俺は5年をかけて頂点に立った! 誰にも邪魔はさせない!」

アナザー鎧武がジオウを押し込もうとする。

「よく、わかないけど……あんたを止める!」

ジオウは振り払い、腕にあるオーズライドウォッチを掴む。

『オーズ!』

ウォッチを装填し、前からオーズのアーマーが出現すると、ドライバーを回す。

『アーマータイム! タカ! トラ! バッター! オーズ!』

オーズアーマーを装着し、アナザー鎧武へと向かっていく。

ジオウはオーズアーマーの腕に装着されているトラクローZで攻撃しながら攻める。

じわじわとアナザー鎧武を追い詰めていくジオウ。

だが突如爆風が起こり、ジオウの前にエール達三人が飛ばされて現れた。

「みんな………ッ!?」

みんなが現れた突如、ジオウの前から炎のような攻撃が飛んできた。

『ウイザード……!』

そこに現れたのは、顔が粉々に割れてしまった赤い宝石の様なものになっており、其処から見える目の部分はドクロのように落ち窪んでいるものの、その奥には瞳が見え。肩や胸にはドクロを意識した造形があり、赤色のローブを身につけたアナザーライダーだった。

「えっ?うそ……」

「アナザーライダーが、もう一人……」

アナザーライダーがもう一人いる事にジオウとエール達は驚いた。

「対象、ジオウを確認……」

「何のこれしき!」

エール達と戦っていたオシマイダーも現れ、エールが反撃に出る。

「あなたが達のデータは全て分析済みです」

エールがオシマイダーに突撃しようと何度も仕掛けるが、全て避けられた上にカウンターを受ける。

「キュアエール。あなたの動きは直線的で読みやすい」

「攻撃が読まれてる……」

それを見てエトワールが加勢に向かう。すると、オシマイダーがエトワールの前で足踏みをしみ埃を撒き散らす。

「キュアエトワール。あなたの身体能力は群も抜いている、だけど……」

エトワールは見えない隙を突かれ、オシマイダーに飛ばされた。

「思いがけない出来事に対して非常に脆い」

「エトワール！」

「そして、キュアアンジュ。あなたは戦闘能力はもつとも低く……」

「フレ！フレ！ハート・フェザー！」

ハートフェザーを展開しエトワールを守ろうとするが、オシマイダーの攻撃に簡単に碎けた。

「得意のバリアも、私のオシマイダーで破壊可能」

「みんな！くう……退いて！」

アナザライダー二体を払いのけ、ジオウはエグゼイドライドウオッチを起動させる。

『エグゼイド！』

「とどめです。オシマイダー」

とどめを刺すように指示を出し、オシマイダーは三人向かって攻撃を繰り返す。

「プリキュア排除完了……あっ……」

「させない……」

プリキュアを倒したと思ったルルーであったが、エグゼイドアーマーと変わったジオウがみんなを守った。だがそこにアナザーウィザードがジオウに攻撃して吹き飛ばす。

「理解不能……これが、あのジオウ……」

ルルーは三人を守ったジオウを見て理解不能と呟く。

「私も……」

ジオウが三人を守ったのを見てアンジュが起き上がる。

「もう諦めたらどうです」

「私も諦めない。なぜなら……みんなを守りたい気持ちは誰にも負けない!」

アンジュが自身の想いを言うと、彼女から青い光が放たれた。

すると、羽を二つ重ねたような形で、中心部には八芒星の文様を持つミライクリスタ

ル『ミライクリスタル・ネイビー』が誕生した。

「あっ……」

「アンジュが……あっ!?!」

「っ!?!? ソウゴ君!」

アンジュに気を取られている間にジオウがアナザー鎧武に捕まってしまう。
「貴様も、あの世界に送ってやる!」

アナザー鎧武が腐った果汁の様なオーラで拘束しながら、クラックを開いてジオウをヘルハイムに追放しようとする。

『スレスレシユーツェイング!』

すると、ジカングレードと同じ攻撃が放たれ、ジオウからアナザー鎧武を離した。

「えっ?」

「今の……」

砲撃が放たれた方を向くと、そこから現れたものに全員が酷く驚く。

「えっ? ええ!」

「マジ……?」

「こんなことが……理解不能……」

「お、俺……!」

なんと、そこに現れたのはもう一人のジオウだった。

「やっぱり来た」

「我が魔王? まさか……」

予想通りだと思ったツクヨミと、戦いの場に現れたウオズはこの光景を見て、二人に

何が起こったかある程度検討が付いた。

「こんにちは」

現れたもう一人のジオウが、今助けたジオウに挨拶する。

「えーっ!? …まあいいか」

もう一人ジオウが現れた事は一先ず置いて、アナザーライダー達の方に集中する。

「アンジュー!よくわからないけど、早くオシマイダーを!」

「う、うん!」

アンジューもオシマイダーに気持ちを切り替え、プリハートに新しく生まれたクリスタルをセツトする。

「フレ!フレ!ハート・フェザー!」

さらに強くなったハートフェザーがオシマイダーに向けて投げられ、それを受けたオシマイダーはバランスを崩し倒れる。それを見たエールもプリハートにクリスタルをセツトする。

「フレフレ!ハート!フォウユウ!!」

倒れている隙にハートフォウユウを放ち、消滅させた。

オシマイダーが消滅したのを確認したルールーが逃げていく。

そして二人のジオウによる連携で、二体のアナザーライダーを追い詰める。

「よし、一気に決めよう！」

『フィニッシュタイム！エグゼイド！』

フィニッシュタイムで一気に決めようとする。

「今はまだダメなんだ」

「えっ!？」

だが、もう一人のジオウが咄嗟にフィニッシュタイムを放とうとしたジオウを止める。

それを見てアナザーライダーが手からエネルギー弾を二人のジオウに放ち、それぞれ散っていく。

「逃げられた!」

爆炎が晴れた時にはアナザーライダーは見えなくなっていた。

ソウゴは変身解除し、もう一人のジオウへと近寄る。

「あんた……一体、誰？」

一体誰なのか聞くと、もう一人ジオウを変身を解除する。

「ええ!ソウゴが二人!？」

「何がどうなったの？」

「もしかして、ドツペルゲンガー!……」

目の前で変身解除し、現れたのは、ラーヴェル学園の制服を着たソウゴだった。

「俺?俺は……俺だよ」

「やっぱり!」

「何という事だ……」

二人のソウゴが対面。この状況にツクヨミは案の定とばかりに声を上げ、ウオズは頭を抱えそうになっていた。

その頃、ヘルヘイムの森。

ゲイツと偶然出会った駆紋戒斗と共に入り口を探す。

「何とかここを抜け出す方法は無いのか?」

「無いな。ここに来て5年ずっと探してる」

「何か手掛かりは……」

「…何故そんなに帰りたい?」

「俺にはやらなきゃならないことがある」

「ほぅ……何だ?」

「ジオウを……魔王をこの手で倒す」

ゲイツは拳を握りしめ、ジオウを…ソウゴを倒すと言う。

「フ……魔王？」

「何がおかしい？」

ジオウを倒す。そう言うゲイツに戒斗が微笑する。

「お前に迷いが見えるのは気のせいか？」

「俺が迷ってるだど？」

「運命を覆す強さなど、お前からは感じない！」

戒斗がゲイツには迷いがあるから何も感じないと強く叫ぶ。そう言われたゲイツが一人去ろうとする。

「待て……」

「なんだ……」

「出てこい」

物陰に誰かいるのを感じ出てこいと言うと、男性の一人が現れた。

「誰だ？」

「俺は操真晴人……ただの国安ゼロ課の人間だよ」

そこには黒いスーツを着た、警察手帳を見せる青年、操真晴人が二人の前に現れた。

「それと、偶然一緒にここに放り込まれた……」

「東せつな……」

そして、晴人の後ろから一人のゲイツと同じくらいの歳の子が現れた。

次回! Re・HUGつとジオウ!

第10話 武者と魔法と夢 2012

第10話 武者と魔法と夢 2012

オシマイダーを倒したが、アナザーライダーに逃げられてしまったソウゴ達。

「幻覚じゃないよね……」

「ソウゴ君が……二人……」

「俺……が、二人……どうゆうこと……?」

「何が、どうなつての……?」

だがそこに、もう一人のソウゴが現れた。エール達は目の前にいるもう一人のソウゴに戸惑っていた。

「すべての謎が解けた。我が魔王、君は未来からやつてきたんじゃないのかい?」

だが二人のソウゴを見て全てを察したウオズが、今のソウゴと服が違うソウゴは、未来から来たんじゃないかと推測する。

「未来から?」 本当なの……?!!」

「未来って言っても少しだけだよ。…五日くらい経った頃のね」

それを聞いたソウゴは、今から五日後の未来から来たのだと語るもう一人の自分の言葉に驚きの声を上げる。

「だから色々な事情を知ってたのね……!?？」

それを聞いたツクヨミは、何故に今までのソウゴがアナザー鎧武の事を知っていて、色々な事情も知っていたのかわかった。

「それで……」

ハリーは人間態になるとニコニコと笑いながら迫り、ツクヨミとウオズも未来のソウゴへと近づく。

「何で、早く言わなかったの?」

未来のソウゴは三人が近づいて来るのを見て「あ、ヤベ」と思ったのか、今のソウゴの後ろへと隠れる。

「だって……言ったら怒るじゃん!」

「「当たり前(だ・でしょ・やろ) ツ!」」

三人が同時にソウゴに怒鳴る。

「君がやっていることは、クライアス社のタイムジャッカーチームと何ら変わらない。とても王の所業とは思えぬ行為」

「一歩間違えば大変なことになるんや!」

「バカなことして分かって分かってる?」

「分かってるって!」

「分かってないっ！取り返しのつかないことになるかもしれないんだよ！場合によってはあなたの存在が消えるかもしれないっ！」

後ろに隠れているソウゴに、りつけるが、ツクヨミは目の前にいる今のソウゴに怒鳴っていた。

「……俺じゃないよ」

「ごめん……」

その隙に未来のソウゴは反対側へと避難していた。

「ねえ、未来のソウゴはどうしてこんな無茶なことをしたの？」

自分の存在が消えるかもしれない、なのに何故こんな危険な事をしたのかとエールが尋ねる。

「やらなきゃいけないことがあるんだ。王様として」

「どういうこと？？」

「王の考えは凡人には理解できない。それだけの事情があつたと？ご説明願おうか」
「もう一人の俺が必要なんだ……あいつを助けるために」

ウオズの問いに対し、未来のソウゴはこの時代のソウゴが必要だと答える。

ヘルヘイムの森では、ゲイツと駆紋戒斗が入り口を探す中、彼らは二人の男女……操

真晴人と東せつなと出会った。

「アンタ達もこつちに飛ばされたのか？」

「俺は、5年前からダンスチームのメンバーが消える事件を追ってね。

それで尻尾を突き止めたら、この子とこの世界に飛ばされたんだ」

「ごめんなさい。私を助けるために巻き込んでしまつて……」

「別に……それに早く、君を元の世界に連れ戻さないと」

自分のせいで此処に飛ばされてしまった事を謝罪するせつなに、晴人は君のせいじゃないと言つて励ましていると、どうやって此処から脱出しようかと考えこむ。

「残念だが、出口を探しても無駄だ。この世界に出口は存在しない」

「……マジで？」

だがしかし、戒斗が出口がないとすっぱりと言う。

「……聞きたいことがある。お前は俺に言つた先の言葉——」

ゲイツはさつき戒斗の言つていた言葉……『お前に迷いが見える。気のせいかな？ 運命を覆す強さなどお前からは感じない』という言葉を気にしていたのか、何故あんなことを？ と問いかけていた。

「気にしてるのか？ 自分の中の迷いを認めんな」

「俺は迷つてなどいない！ 俺は……俺達の運命を変えるために、この時代に来た！」

「だったら証明してみせろ！自分の力だな」

戒斗はそれだけ言うと、ゲイツを置いて前の方に歩み始めた。

その頃、現実の世界。

ハリーハウスの二階で、未来のソウゴの話を今のソウゴとツクヨミ、ウオズが聞いていた。

「それで……ゲイツのために時間を超えてきた」

未来のソウゴはゲイツを助けるためにこの時間に来たと話す。

「俺は異次元に送られたゲイツをアナザー鎧武を倒すことで助けようとした。

だけど……！」

未来のソウゴはアナザー鎧武によって異空間に送られたゲイツを救出する為に奮闘した。だが過去でアナザー鎧武を倒した時、ある男に『全部一人で解決するのが君が考える王様なのかい？』と、そうソウゴに告げられた事を話す。

「何それ？神様？」

「その人が言った。ゲイツの力を、信じろって」

「ゲイツの力を信じろ……」

ゲイツの力を信じろ。ツクヨミにはそれがどうい事かわからなかった。

「感心しないな。君は既に仮面ライダー鎧武の力を手に入れた。後は仮面ライダーウィザードの力を手に入れる。それでいいじゃないか」

ウオズは鎧武ウオツチを手にしたなら、次はウィザードのウオツチを入手すればそれでいいじゃないかと言うが：

「そうはいかないよ！」

すぐに同じ言葉が出ると二人が顔を合わせる。

「ゲイツは俺にとって必要な人間だ、いい魔王になるために」

またも同じ言葉を同時に放つ。

「さすが俺！」

「考えてることと同じだね」

流石は同じ人間、考えてることも同じだ。

ソウゴがそう感心していると、ウオズは手に持った本を見せながら呆れた様子で話しかける。

「それ自体間違ってるんだ。明導ゲイツは、君が魔王になるために必要な人間なんかじゃない。この本のどこにもそんな記述はない」

「ウオズは黙ってて！」

ツクヨミが言うとうオズは素直に黙り込む。

「分かった……ゲイツを助けよう」

「うん」

ツクヨミがゲイツを助けようと言うと、ソウゴ二人は同時に頷く。

「俺も俺に乗る。で、俺は何をすればいいの？」

「まずは君もこのライドウオッチを手に入れて」

未来のソウゴは鎧武ライドウオッチを見せ、このウオッチを手に入れてと言う。

「それで、仮面ライダーウィザードのウオッチはどこで……」

アナザー鎧武と戦っていたあの時、オシマイダーと共に突如現れたアナザーウィザード。彼を倒すにはウィザードウオッチが必要なのだが、ウィザードのウオッチはどうすれば手に入れられるのかと今のソウゴは問い掛ける。

「それは……」

「それは……」

ソウゴとツクヨミの顔が、未来のソウゴの顔に近づいていく。

「それは、わからない」

しかしわからないと言われ、二人がガクツとずっこけかける。

未来のソウゴは鎧武ライドウオッチは手に入れたが、ウィザードライドウオッチまでは手に入られてなかった様だ。

「じゃあ、どうすれば……」

ソウゴ達は何処にあるのかわからないという、ウィザードウオッチの入手に悩む。すると、下の方から声が聞こえた。その声の中には、ほまれの名が呼ばれていた。

「みんな、どうしたの？ って……誰？」

ソウゴが下に降りて外に出ると、そこには金髪の男の子がおり、彼ははたとさあやの前でほまれにハグをしていた。

そこからなんやかんやあってからしばらくし、さあやがさつきの子を調べていた。

「若宮アンリ君。中学三年生」

どうやら彼はソウゴ達より一つ年上だったらしい。

「すごい。フィギュアスケートで出場した大会は全部一位だ」

ソウゴはミライパッドで見た過去の成績を見てみると、そこには全て優勝と書かれていた。

「スケート界の新星！ 未来を約束された王子様！」

ハリーが叫ぶと試着室からレディースの服を着たアンリが出てきた。

「ちよつ！ それレディースやで」

「似合ってれば問題ないでしょ」

彼の言う通り、確かにレディースの服が似合っていた。

「うん、凄く素敵！女神様みたい」

「よく言われるよ」

「わあ〜！アンリ君の瞳きれい」

「瞳は父親から受け継いだもの、母親は日本人で父親はフランス人だから」

「じゃあ、君ハーフなんだ」

はなが目をキラキラと光らせている横でソウゴがハーフなのだというと、違うと否定の言葉を言われた。

「半分じゃない。大和撫子とパリジャンのダブルだからね」

「ごめん。なんか間違っちゃって……」

「アハハ、君って素直だね。…じゃあ、僕の頼みも聞いてくれる？」

「いいよ。頼みを聞くのもいい王様には必要だから」

ソウゴがそう言うと、アンリは目を鋭くさせて自身の要望を話し始めようとする。

「へえ〜、王様、ね……じゃあオウサマ、ほまれをここに縛るのはやめてくれないか？」

「縛る？」

「私達がほまれを？」

いきなりアンリがほまれを縛るなどと言うと、はな達はどうということだと首を傾げる。

「君達とほまれは、住んでる世界が違うって分かってる？」

「ちよつと……」

「ジャンプ、まだ飛べてないんでしょ？」

「っ……」

ほまれとソウゴ達とは住む世界が違うとも話すアンリに、ほまれが言い返そうとするが、彼にあの時からまだ飛べていない事が見抜かれた。

「僕達には時間がない。シニアデビュー……僕達が大人と並んで本格的にスケートを始める大事な時期はもうすぐだ。よく考えて」

アンリはそう告げると、只啞然としながら立っているはな達を残して去っていった。

その様子を二階から、未来のソウゴも見ていた。

「我が魔王。何故、そこまでゲイツ君にこだわる？」

「あいつが俺を魔王の道へ進むのに、必要だからかな……もちろん、ウオズもだけど！」

「はあ……好きにするがいい……」

ため息をついてウオズも去っていく。

とあるビルの屋上にて、アナザー鎧武のアスラが柵をたたく。

その上にはスウォルツの姿もあった。

「おい！どうしてくれんだよ！俺が化け物だつて事がバレた……これで全て台無しだつ！」

アナザー鎧武が自分である事と同時に今までの犯人であると知られた事で、これまでの苦勞が水の泡となったと顔を歪ませながら叫ぶ。

「志が低い。これは始まりだ。お前はすべてをその手中に収める王となる。そうすれば、お前は紛うことなきスターとなる」

自分から変身したんだから自業自得だろという言葉を喉の奥に押し込みながらも、スウォルツがそう言うのと、苛立ちを隠せていない表情を浮かべながらも一応は納得するとアスラは去っていった。

「お久しぶりです。スウォルツ」

入れ違いにウオズがスウォルツに接触する。

「フハハハ……ウオズ。お前から私に会いに来るなんて、どんな風の吹き回しだ」

「あなたと利害関係が一致する、こんなことがあるとは思いませんでした。助力させていただけませんか」

「お前が……？私に？」

ジオウの家臣が何様だと睨んでいると、ウオズはスウォルツに助力していただけないかと頼み込んできた。

その一方、あるハウスのステージで一人の男性にウールとオーラが近づく。

「ありがとう。あいつから奴を守ってくれて……ウイザード早瀬」

「君から貰った力の恩返しだ」

ウイザード早瀬——その男はアナザーウイザードの変身者だった。

「この力があれば……」

「その前に君にはすべきことを果たしなさい」

「俺のすべきことって……?」

「復讐……!」

「復讐……」

「そう。裏切られた辛さを知る王は、復讐を以て時代を統治する……」

二人が早瀬に復讐と吹きかけると、早瀬はある事を思い出した。

未来から来たソウゴはハリーのハウスで一夜を過ごすことになり、今のソウゴはさあやと一緒に帰っていた。

「えっ!? 落ちたの!」

「ごめんね。せつかく応援してくれたのに合格できなくて」

さあやはせっかく応援してくれたのに合格できなくてごめん、とソウゴに謝る。
「でも、オーディション受けてよかった」

だが、彼女はオーディションには受けてよかったと言う。

「女優になりたいかまだわからないけど……自分の心をきちんと見つめて頑張ろと思えるから、それでいい」

ソウゴの目に映ったさあやの顔からは、もう迷いはなかったように見えた。

「そっか。さあやが納得出来たんならいいんじゃない」

「ソウゴ君。これ」

それを確認したソウゴは安心した顔でそう言っているとさあやが、オーディションの時に貰ったメモを見せる。

「ソウゴ君がくれた。それを見たら、なんかあの時の楽しい気持ちが戻った感じがして、オーディションが怖くなかった」

「幼馴染なんだから、助けるのは当然だろ」

「幼馴染……」

「どうしたの？」

「ううん……なんでもない」

さあやが幼馴染と言われ一瞬沈むと、なんでもないと誤魔化す。

「明日はソウゴ君のウオツチ探し手伝うからねー！」

「ありがとう」

鎧武ライドウオツチを探すのを手伝うと言ってくれたその時：

「きやあああああー!!？」

近くの方から女性ののような悲鳴が聞こえた。

「今の……」

悲鳴が聞こえ、ソウゴとさあやはその場所へと向かう。

その場所では、アナザーウィザードの早瀬が一人の女性を襲っていた。

「何故……何故こんな仕打ちをー！」

『ウィザード……!』

早瀬はアナザーウィザードへと変身し、女性の首を絞める。

だがそこにジオウへと変身したソウゴと、キュアアンジュとなつたさあやが女性の窮地を救った。

「アナザーウィザード……アンジュはその人を」

「うん、大丈夫ですか？」

女性の方はアンジュに任せ、ジオウはアナザーウィザードを彼女から離そうとする。

「やめるんだ！」

「貴様……」

必死にアナザーウィザードの暴走を止めるジオウだが、アナザーウィザードは『グラビティ』という音声と共に周りのものを引き寄せ、投げつけられたジオウの動きを封じる。

「くう……！ だったら……」

『ビルド！』

ならばと思ったジオウは、腕に装着していたビルドライドウォッチを起動させ、ドライバーへと装填して回す。

『アーマータイム！ ベストマッチービル・ル・ドー！』

ビルドアーマータイムを装着しドラム缶やカラーコーン等を振り払うと、二つのウォッチを起動させる。

『フィニッシュタイム！ ビルド！』

再びドライバーを回し、グラフの放物線がアナザーウィザードを拘束すると、放物線へと乗り込み加速する。

『ボルテックタイムブ레이크！』

そのまま、ドリルクラッシュャークラッシュャーのボルテックタイムブ레이크を決める。

「邪魔を……」

だが『リキッド』という音声を唱えると液体状になったのか致命傷とはならず、アナザーウィザードは逃げていく。

「なんなんだ……あのアナザーライダー……」

何故、アナザーウィザードはこの人を襲ったのかわからなかった。

そして翌日。

ソウゴとさあや、ツクヨミは『フルーツパーラードルーパーズ』と書かれた飲食店へとへやってきた。

「……?」

「うん。このメモによれば、ここでライドウオッチを渡してくれた人に会ったって……」

未来のソウゴに書かれた場所へと着いた。だが、それらしき人物は何処にいるのだと思っていた。

「何処にいるっていうのよ。そんな都合よく……」

ツクヨミがそう言いかけると、三人の頭の上からオレンジが落ちて来た。

「……みかん」

「あつ、ゴメンゴメン!!? 怪我はない?」

さあや達が落ちてきたみかんを拾い、落ちて来た方を見ると一人の男性がいた。

「大丈夫（です）」

「そうか、よかった、おっと……！」

男性は上から飛び降り、ソウゴ達の前で着地する。

「ごめん。ちよつと待ってて！あつ、ここの店員の葛葉紘汰だ。よろしく」

自己紹介すると落ちた果物を拾う。

「あちゃー！こりやマスターに怒られんな……ああ、こつちも傷んでる！」

ソウゴは果物を拾っている姿を見ていると、葛葉紘汰を名乗った男性が腰にぶら下げているものに目を大きくする。

「それって……！」

紘汰がぶら下げているのは鎧武のライドウオッチと、もう一つはスイカの模様が描かれた緑のライドウオッチだった。

「あの！それ……！」

「見つけたぞ……！」

ソウゴがウオッチの事を聞こうとすると、そこへアナザー鎧武のアスラが現れた。

「そんなとこにいたのか。貴様らのせいだ、俺の5年は無駄になった。その責任はとつてもらおうぞ」

『鎧武……!』

アスラはアナザー鎧武に変身し襲いかかる。

「正確には俺のせいじゃないんだけどね……」

『ジクウドライバー!』

『ジオウ!』

ソウゴは困惑を含んだ表情を浮かべながらジクウドライバーを装着し、ジオウライドウオッチを取り出してウオッチのウェイクベゼルを回すと、左にあるD、9スロットの差し込み口に入れる。ドライバーの真ん中にあるロックを押し、時計が現れると構える。

「変身!」

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

ソウゴはドライバーのジクウサーキュラーを反時計周りで回すと、ジオウへと変身してアナザー鎧武へと応戦する。

「あのウオッチ……!」

突然現れた落ち武者の化け物に驚いていた紘汰だったが、「未来のソウゴの指示だから」と言いながらピンクのスマホを持っている青い服を着た少女と一緒にその場から少し離れる白い服を着た長髪の少女の姿を横目に、さつき自身に話しかけてきた少年が

ウォッチを使い変身したのを見て、所持しているウォッチを見つめる。

「そうか……」

ジオウがアナザー鎧武と交戦していると、アナザー鎧武が距離を取り、空間からクランクが開かれる。

「何、それ……」

するとヘルヘイムからインベスを投入させ、ジオウに攻める。

三対一となり、ジオウがやや押され始める。

「ちよつと、やばいかも……」

「おいー!」

鉦汰は所持する二つのライドウォッチをジオウへ投げ渡す。

「これは……」

「やるよ。お前が持ってた方が良さそうだからな」

「ありがとう!」

ジオウは鎧武ライドウォッチを受け取った。

それを見て、さあやを連れてその場を下がっていたツクヨミは未来のソウゴへ電話を入れる。

「ソウゴ!」

『何?』

「何?」

ツクヨミはソウゴの名前を言うと、二人同時に反応してしまった。

「面倒くさいっ!!?」

キレ気味にジオウを睨みつけると、すぐに未来のソウゴに伝える。

「こつちのソウゴも鎧武ウオッチを手に入れた。次はどうすればいい?」

『とりあえず、そのまま戦って』

「えっ……切った!」

未来ソウゴはそのまま戦ってとだけ言い、ツクヨミの電話を切ってしまう。

「まあまあ、取り敢えずこれ使ってみるからさ」

怒るツクヨミを宥めると、そのままジオウは鎧武ライドウオッチを使おうとする。

「そうはさせん」

すると背後からスウォルツが現れる。

「!?」

気配を感じたジオウは振り向き、ジカンギレードのモードを変えて銃撃を放つ。

「ふん!」

だが、スウォルツが手を挙げると時を止め、ジオウの放った銃弾を静止させた。

「返すぞ」

手をくるりとさせ、全弾をジオウへとはじき返される。

それによりソウゴが姿勢を崩した隙に放たれたアナザー鎧武の攻撃によつて、鎧武ウオツチが空中へはじかれてしまった。

そのとき、スウォルツが全ての時を静止させる。

「思い通りにはさせん」

スウォルツは鎧武ライドウオツチを強奪した。

「お前のやりたいことはお見通しだ。こいつが無くなれば……」

アナザー鎧武が開いたクラックに鎧武ウオツチを放り込もうとする。

すると、鉾汰から受け取ったもう一つのウオツチ——コダマライドウオツチが光を放ち、ロボへと変化し現れた

『コダマ！』

スウォルツは新たなウオツチロイドを見て警戒する。だが…

「小っちゃい…」

思ったよりも小さく、呆れたスウォルツは鎧武ウオツチをクラックへ投げ込む。

それを見て、コダマスイカアームズもウオツチを追ってヘルヘイムの森に向かってしまふ。

「あつ！ウオツチが!!?」

「どうして私達の作戦を!!?」

「さあ？何故だろうな」

そこへウオズが現れ、それを見たスウォルツとアナザー鎧武は退いていく。

「ウオズ！」

まさかと思つたツクヨミは、ウオズが作成をバラしたのではないのかと睨む。

「問題発生。鎧武ウオツチがヘルヘイムに……！」

『…』

ツクヨミの連絡を受けた未来のソウゴは予定変更で、乗り込んでいたタイムマジーンを降りる。

「どういうつもり!!?」

「一時王に不興を買おうとも、正しき道を選んで頂く。それが臣下の務めというもの」

ウオズは自分の務めだから、仕方なくした事だとサラツと答える。

「別に恨まないよ。ウオズはウオズのやりたいことをやったらいい」

だがソウゴはウオズのやった事を恨まないと言う。

すると、ボルタリングの所ではなとハリーがいるのを見つけ、鎧武ウオツチの喪失とウオズの裏切りにも捉えられる行動については後回しにして、ほまれの飼犬であるも

ぐもぐと上へ登つていた彼女の下へ歩み寄つた。

「はな、ハリー、何やつてるの?」

「あ! ソウゴ! さあや!」

「大丈夫——っ!」

はなに何をしているのかと聞くと、上の方に立っていたほまれと一緒に居たアンリがこちらと盗み聞きしていたらしいはなに気付いた。

「はな、ソウゴ、さあや……」

「立ち聞き? 君達いい趣味してるね」

「……なんかごめん。でも、ほまれ困つてそんな顔してるけど……」

ソウゴはアンリに立ち聞きした事を謝ると、今のほまれが困つてるように見えると聞く。

「じゃあ君達、ほまれのために何が出来るの?」

それじゃあと、アンリは彼女の為に何が出来るのかとソウゴ達に尋ねる。

「私、夢を応援するよ」

「……えっ?」

「フレフレほまれ! 頑張れ頑張れオッ!」

「……………ごめん、君つて無責任だね。頑張れつて言われても頑張るよ」

はなの台詞を聞いたアンリは少し笑みを浮かべると、呆れてそう呟く。

「応援なんて誰にでも出来る。」

その無責任な頑張れが、彼女の重荷になっていくんだよ」

「そうかな……？ 誰かに頑張って言われると何だか、重荷なる時もあるけど……それが友達からだと、勇気をもらえるものだと思うけどな……」

「たしかにそうかもね。でもみんながみんな、必ずそうなる訳じゃない。」

さあ、行こう。ほまれ……」

ソウゴは口を挟むが全く聞く耳を持たれず、アンリがほまれの手を握る。

それに対してほまれは、彼の手を握り返すと、同時に意気消沈していたはなの手を握った。

「ごめん、私、アンリとは一緒に行けない」

そう言つて、アンリの誘いを断った。

「見てほしいものがあるんだ」

ほまれはソウゴ達をいつも自身が使っているスケート練習場へ連れて行き、自分の今の滑りを見せようとする。

「何、見せたいものって？」

「——アンリの言う事は間違つてないよ。

私、頑張れって言われるたびにすごく辛かった……」

ジャンプが飛べなくなつたショックで、頑張れって言われる度にすごく辛かつたと明かす。

「みんなから応援される度に、そんな資格ないって……心がギユツとなつて……

私は1度逃げた」

「分かるよ、そんなほまれを救えるのは僕だけだ」

「確かにアンリと私は、同じ世界に生きているのかもしれない。けど……」

そう言いかけて彼女は、ソウゴとはな、さあや、ハリー、はぐたん、ツクヨミを見る。

「私に新しい世界を見せてくれたのは、はなとソウゴ、さあやにみんななの！」

「ほまれ……」

「はな！フレフレして！」

はなに手を振つて、応援してとお願ひする。

「フレフレほまれ！頑張れ頑張れオーツ！」

ほまれに応え、はなも応援する。

「私はもう1度、みんなの頑張れを背負つて、跳びたい！」

そして彼女の応援を受け、スケートリンクを楽しそうに滑り始める。

滑る中、ソウゴ達の目にはほまれの背中から羽が見えていた。

「あー……すごいー！」

「なんか、行けそうな気がする」

ソウゴ達がそんな彼女の姿を見ていてそう思った。

この調子でほまれはジャンプを繰り返すが、失敗した。

「私は諦めない！」

だが彼女は諦めることなく、再び滑り出した。

「わあ、ほまれキラキラしてる」

「うん！なんか、流れ星みたい」

その時のほまれの滑りが、夜空を駆ける流れ星のように見えた。

「もう一度、空に！」

「がんばれほまれー！」

その声と共に、ほまれは星々を描きながら高く飛び上がった。回転中も彼女からは笑顔が止まらない。

そして遂に、ジャンプが成功。

翼を挽がれて地に堕ちた黄色い鳥は、フィギュアスケート選手といて空へ羽ばたく為の翼を取り戻し、遂に蘇った。

「やった……」

「ほまれ！」

はながほまれに会いに行こうとしてリンクに入り、すぐに滑って転びながらもなんとか彼女の下に到達した。

「大丈夫？」

「良かった良かった」

「ほまれ、素敵だったよ」

「ちよつと、さあやまで……」

はたと遅れてやって来たさあやに抱き着かれたほまれが、顔を赤くして照れる。

その様子を見ていた先生が目から涙を流し、彼女の復活に目を奪われていたアンリが名前を呟いていた。

それを見届けると、ソウゴが上で見ていた未来の自分の方へと近寄る。

「ねえ。本当はライドウオツチ奪われるの分かってたでしょ？」

「あれ……バレてた？でもお陰で作戦成功！」

「作戦？」

未来のソウゴが言うには作戦が成功というが、今のソウゴには何が成功したのかわからなかった。

『コダマ!』

未来のソウゴがコダマのライドウォッチを起動させる。
すると、ソウゴ達の前に一つの映像が現れた。

その頃、ヘルヘイムではインベス達が飛ばされた人達を絶えず襲っていた。

「あれは……よし!チェインジ・プリキュア!ビートアップ!」

せつなの体が光り、姿を変える。

「真つ赤なハートは幸せの証!うれたてフレッシュユ、キュアパッション!」

すると彼女の姿が、黒いリボンと四つ葉のクローバーの刺繍が付いた赤いドレスの様なコスチュームと、ピンクの髪に装着された翼と宝石、ハートの髪飾りが特徴的なものへとなっていた。

「マジか……せつなちゃん」

突如違う姿に変身したせつなを見た晴人は、思わず驚愕してしまう。

「なんだあれは?」

「あいつ……キュアハートとソードと同じ別のプリキュアだったのか……」

『ゲイツ!』

パッションが戦っているのを見て、ゲイツもゲイツライドウォッチを起動し、ドライ

バーに装填した。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

「あれ…確か……」

ゲイツが使ったウオッチを見て、晴人はポケットの中を漁る。

そのままゲイツはパッションと共にインベスと交戦に入る。

「あなた、それって……」

パッションは仮面ライダーゲイツを見て、何かに似ていることに気づく。

「仮面ライダーゲイツだ」

「あなたも晴夜君と龍牙君と同じ仮面ライダー……」

「あの二人を知ってるのか……？」

「ええ、何度か助けて貰ったから」

「なるほど……とりあえずこいつらを倒すぞ！」

「ええ！」

ゲイツとパッションが協力し、周りのインベスを倒していく。

『フィニッシュタイム！ゲイツ！』

ゲイツがウオッチのスイッチを押し、ドライバーを回す。

『タイムバースト!』

そのままライダーキックを放ち、インベスを全て撃破した。

「おい。これ」

晴人がゲイツが何かを渡そうとする。

「これは……ライドウオッチ」

渡そうとしたのは、ウィザードのライドウオッチだった。

「いつから貰ったのか知らないけど、それお前のだろ?」

ゲイツはウィザードウオッチを受け取る。

するとゲイツの前に、先ほどスウォルトによりヘルヘイムへ投げ込まれた鎧武ライドウオッチとそれを追ったコダマスイカアームズが現れ、ゲイツへウオッチを投げ渡す。

「ライドウオッチ?」

鎧武ウオッチを見るとコダマウオッチがモニターとなり、向こう側にいるソウゴ達が映し出された。

「ジオウが二人? どういうことだ」

『ゲイツ! 聞こえる? 大丈夫?』

「お前らには関係無い」

ゲイツは相変わらず、愛想のない返しをする。

『関係あるよ！そのウオッチがないとアナザー鎧武倒せないもん。』

だから持って帰って来てくれるかな？』

「何で俺が!?？」

『俺が魔王になるのを阻止するんだろ？だから……持って帰って来て。頼んだよ』

これが未来のソウゴの狙いだったのか、ゲイツに笑顔でそう頼み込んだ。

「ゲイツのためにライドウオッチを……」

鎧武ウオッチを黙って奪わせたのは、ゲイツに帰る理由を作るためだとツクヨミは考えていたその時、『オシマイダ〜!』という声が聞こえ、窓の方を向くと踏切のようなオシマイダーが現れた。

「あれは!」

「ゲイツ頼むよ!」

コダマウオッチの接続を切り、ソウゴもはな達と共に外へと出る。

「おい!……オシマイダーか……」

ソウゴからの通信が切れたのを見て、オシマイダーが現れたのだとゲイツは察した。

「おい!」

すると戒斗がいきなり後ろから声をかける。

「出口になるかもしれない場所を教えてやる」

「何……」

この森を出るための出口と言い、ゲイツが反応する。

出口がない筈のこの世界にどうやって、と思いつながら。

一方、現実の世界。

「見つけたぞ……ッ！」

「この前はよくも邪魔したな……」

みんなが練習場から出ようとする、アナザー鎧武のアスラとアナザーウィザードの早瀬が現れた。

「ここは任せて、みんなはオシマイダーの方を……」

「でも、ウオッチがないと……」

「大丈夫。ゲイツを信じてるから」

二体のアナザラーライダーと相手取り、その内の一体は対応するウオッチがないため倒す事が出来ない為、無茶だと言いかける。

しかしソウゴは、ゲイツが来ると信じている。だからこそ、こんな無茶も出来るのだ

と語った。

「わかった。みんな行こう」

アナザーライダーはソウゴに任せ、はな達はオシマイダーへと向かう。

『ジクウドライダー！』

『ジオウ！』

ソウゴはジクウドライダーを装着し、ジオウウォッチを取り出しドライバーに装填。ロックを解除すると後ろから時計が出現。構えを取るとソウゴはドライバーを回す。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

仮面ライダージオウへと変身し、アナザーライダー二体に向かっていく。

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

そしてはなときあやとほまれは、プリハートにミライクリスタルをセットし、姿を変えらる。

「輝く未来をく抱きしめて!!みんなを応援♪元気のプリキュア!キュアエール!」

「輝く未来を抱きしめて!みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「輝く未来を抱きしめて!みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

三人がプリキュアとなり、こちらオシマイダーへと向かっていく。

その頃、戒斗がゲイツを森のある場所へと連れてくる。

「空間にヒビが……」

そこには雑につけたジツパーの様なものが浮いており、ゲイツはあのジツパーがアナザー鎧武が自身をヘルヘイムに放り込んだ時に出てきた物と似ている事を思い出す。

「あれを壊すことができれば、おそらく外に出られる」

戒斗はゲイツの持つバイクと書かれたウオッチを手に取り見せる。

「これなら届くかもな。但し、お前が運命を変える覚悟があれば、だ」

ゲイツは目を閉じ、戒斗、スウォルツ、自分、ソウゴの言葉を思い返す。

『運命を覆す強さなどお前には感じない』

『現にお前は彼に負けた』

『俺は最悪の未来を作り変えたいだけだ』

『だったら証明してみせろ、自分の力だな』

『俺が魔王になるの、阻止するんだろ。頼んだよ』

「——運命か。そんなものは俺が変えてやる！」

……あいつが魔王になるのは、この俺が止めてやる！」

『ゲイツ！』

ゲイツがゲイツウオッチを起動し、ドライバーに装填した。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

「あああああああーっ！ハアーツッ！」

展開したライドストライカーに乗ったゲイツは、フルスロットルで森を駆け抜け、空間のヒビ——クラックへ向けてジャンプすると空間へと激突し、次元の壁を破ろうとする。

「俺は……俺は、こんなところで……死ねるかあーっ!!？」

すると、ゲイツの腕にセットしてある鎧武ウオッチが力を貸すように光り輝く。

その一方、アナザーライダー二体と交戦していた今のジオウ。だが、この二体を倒すウオッチが無く苦戦を強いられていた。

「どうして邪魔をする……」

「あந்தの事は昨日、アンタが襲った人から聞いたよ。アンタ、あのウィザード早瀬なんでしょ」

昨日、ジオウとアンジュが助けた女性は、早瀬の事務所のオーナーだった。

「ああ！この力で俺は魔法を手に入れた！」

…けど、急に小屋を閉めるといった！俺がここまでやったのに！」

そう叫ぶとアナザーウィザードはジオウを炎で押し込もうとする。

「アンタの気持ちはわかるけど……あの人を襲った時点で、もうアンタの魔法は人を喜ばせる魔法じゃない！」

「だまれ！」

ジオウの言葉に感化され、更に炎の威力を上げる。

その時、アナザーライダーとジオウが戦う場で亀裂が入った。

そこから出現したバイクがアナザーライダー二体に突撃し、ジオウの前に次元の壁を破って来たゲイツが現れた。

「ゲイツ！」

ゲイツはジオウの姿を確認すると、彼に鎧武ウオッチを投げ渡す。

「約束は守ったぞ！」

「ありがとゲイツ。ここは俺達に任せて！アナザーウィザードの時代に行って！持つてるでしょ。ウィザードウオッチ」

ゲイツが「ああ、ここにある」と、ウィザードウオッチを見せる。

「頼むよ」

それに対し「いいだろう」とジオウの頼みを聞き入れると、ツクヨミがゲイツのタイムマージーンを操縦し、ゲイツの前へと現れゲイツは乗り込む。

「時空転移システム起動！」

2012年と年号をセットし、ゲイツとツクヨミはその時代へと向かう。

——2012年。

アナザーウィザードとなる前の早瀬の前に、ウールが接触する。

「僕はクライアス社のタイムジャツカーチームのウールって言うんだ。残念だけどここは後しばらくすれば閉鎖となる。ただ僕と契約すれば、君に歴史を変える力を与えられるんだ。どうする？」

「契約する。お嬢さんのために、俺がこの小屋を立て直す！」

契約を受け入れた早瀬に、ウールはアナザーウィザードウォッチを取り出す。

『ウィザード……！』

アナザーウィザードウォッチを早瀬の体へと埋め込む。

すると早瀬の体は変貌し、アナザーウィザードへと変わった。

「おめでとう。今日から君が仮面ライダーウィザードだ」

ウールの手によりアナザーウィザードへと変貌した。

そのままアナザーウィザードは外へ出てその力を試し、ビルや車を消滅させる。

「よし！この俺の力さえあれば！」

『タイムマジーン！』

さらに力を試そうと歓喜のまま町に向けようとするが、そこへゲイツのタイムマジーンが到着。魔法の悪用を防いだゲイツが、アナザーウィザードの前へと現れる。

「誰だ？」

「悪いがそれ以上、その力は使わせない」

『ウィザード！』

そう言うのと晴人から貰ったウィザードウォッチを起動し、ドライバーに装填。

そしてドライバーを回すと、ゲイツの後ろに現れた魔法陣が肩の高さで重なり、魔法陣そのものがアーマーに変形する。

『アーマータイム！プリーズ！ウィ・ザード！』

複眼にはひらがなで「ういぎード」と描かれ、肩にはウィザードの顔の形をした魔動力供給装甲『フレイムリングシールド』、赤と黒の魔法陣の様なマント『エンブレイブドカタリストア』と黒いロングコートを纏い。ゲイツ・ウィザードアーマーへの変身を完了させた。

一方、2013年。

『鎧武！』

未来のジオウがアナザー鎧武と交戦に入り、2013年と現代の2人のジオウは同時に鎧武ウォッチを起動させ、ドライバーへと装填する。

『アーマータイム！ソイヤツ！鎧武！』

アーマーを装着したジオウの複眼にはカタカナで「ガйм」と描かれ、両肩はオレンジの錠前の形で凱武の顔の様な胸部の装甲を纏い、過去に行った未来のジオウと今のジオウが同時に鎧武アーマーを身に着けられた。

すると、現代の方ではウオズが現れた。

「ねえ。いつもみたいに祝ってくれないの？」

ジオウはいつもの様に祝ってくれないのかと尋ねる。

「流石我が魔王。常に私ごときの予想の上に行く」

「……そいつはどうも」

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、過去と未来をしろしめす時の王者。」

その名も仮面ライダージオウ・鎧武アーマー！また一つ、ライダーの力を継承した瞬間である！」

ほんの少しだけ不満な表情を浮かべるも、いつものウオズの祝いの言葉を貰う。

「さあさあ！花道で、オンパレードだ〜！」

同時に同じ言葉を放ち、同じポーズを取る過去と今のジオウ・鎧武アーマーはオレンジの剣、大橙丸Zの二刀流で戦闘開始した。

一方、エール達もオシマイダーと交戦していた。

「さっさとプリキュアを片付けなさい！」

「プリキュア？」

パップルがプリキュアと叫んでいると、アンリが遠くからエール達を見かける。

「もう〜何やってのよ！遊んでる時間はないのよ！私に無駄な時間は許されないのよ！」

「無駄な時間なんかない！」

「はあ？無駄話は時間の無駄よ！」

「仲間と過ごす時間がとても愛おしい！アンジユ！」

エールは嬉しそうにアンジユを呼び、アンジユもそれに応える。

「フレ！フレ！ハート・フェザー！」

ハートフェザーが放たれ、それを足場としエトワールが高く回転しジャンプした。「友達と一緒に学校に行ける時間が好き。」

かわいいい赤ちゃんの温もりを感じる時間が好き。

二人と一緒に過ごす時間が、私の心を輝かすんだ！」

すると突如、エトワールが光りだし、中心には五稜星の文様がある星型のミライクリスタル『ミライクリスタル・オレンジ』が誕生した。

「あれはエトワールの！」

「二つ目のミライクリスタル！」

それを見て、エトワールはミライクリスタルをプリハートにセットする。

「フレフレ！ハート・スター！」

エトワールの手から更に強力になったハート・スターが放たれ、オシマイダーを拘束した。

「エール！」

「フレフレ！ハート！フォーユ〜ユ〜!!」

エールのハート・フォーユーが決まり、オシマイダーが消滅した。

そして鎧武アーマーを装備したジオウも、アナザーライダー達を圧倒する。

「秘技！みかん斬り！！？」

大橙丸乙でアナザーライダー二体を倒れさせると、アナザーウィザードはジオウを忌々しく睨みつける。

「この力さえあれば、全部うまくいくはずだったのに……！」

そう呟くと、アナザーウィザードは火炎放射を放つ。

だかジオウは炎の中から現れ、アナザーウィザードを押さえつける。

「そうかな。ライダーの力は、何かをうまくいかせるためのものじゃない。誰かのことを守るための力だ」

「だから俺は……お嬢さんのために……！」

「でも、いつしか自分の想いを実らせたくなくなった。あんた……あの人のこと好きなんだろう？」

「うるさーいっ！」

「目覚ませよっ！守りたかった人、襲ってさ……あんたが必要なのは魔法の力なんかじゃない。思いを伝える勇氣だろ！！？」

「！！？」

それを聞いたアナザーウィザードは、動揺したのか攻撃の手が止まる。

「アンタもだよ！自分の力を信じないで、他人から貰った力で頂点を取るなんて間違ってる！」

「うるさい！お前に何がわかる！」

アナザー鎧武はそのままジオウに攻めると、アナザーウィザードも再びジオウに向かっていく。

「だったら、俺がアンタ達二人を止める！」

2012年では、ゲイツがジカンザックスにウィザードライドウォッチを装填していた。

『フィニッシュタイム！』

振り回すたびにジカンザックスは巨大化し、アナザーウィザードへ炎を纏った斬撃をぶつける。

「ああ……あつ……」

既に戦意を喪失しかけているアナザーウィザードが倒れてる際に、ゲイツは二つのウォッチを起動させる。

『フィニッシュタイム！ウィザード！』

ウォッチを押し終えたドライバーを回し、高く飛躍する。

『ストライクタイムバースト!』

ゲイツは空中に浮きあがり、魔法陣に突っ込んだ右足を巨大化させたライダーキックが炸裂。アナザーウィザードを撃破した。

そして、現代と2013年。

「これで終わりだ!」

『ファイニッシュタイム! 鎧武!』

過去と現代、二人のジオウが同時にウオッチを起動させ、ドライバーを回す。

「細切れにしてやるぜー!」

『スカッシュタイムブ레이크!』

2013年のアナザー鎧武をすれ違いざまに斬り、身体を四分割にしながら撃破した。

そして現代でも、ジオウがアナザーライダー二体に向けて斬撃を飛ばし、怯ませた隙に近付き纏めて切り裂いた。

「…それ、輪切り」

ツクヨミに突っ込みを入れられるが、撃破された二人のアナザーライダーウオッチは破壊された。

その様子を、未来のソウゴに告げた男——始まりの男が見ていた。

「自分だけじゃない！仲間も信じる！それでこそ……王だ」

そう言つて、ソウゴが出会った葛葉紘汰と姿の似ている男の姿は、陽炎の様に消えていった。

2012年。

アナザーウィザードを倒したゲイツが変身解除し、倒れていた早瀬を見るとフェイスフォンXから着信音になる。

「誰だ？」

『俺、ソウゴ』

電話したのは現代のソウゴだった。

『そこにさ、早瀬さんいるよね。ちよつと変わつてくれないかな？』

そう言うソウゴは現代の早瀬へフェイスフォンXを渡す。

『俺か……？俺なのか？』

2012年の早瀬も、ゲイツからフェイスフォンXを借りて未来の自分と対話を行うおとす。

「え……？未来の……俺？」

『勇気を出せ。お嬢さんに思いを伝えるんだ……！』

「お嬢さんに？」

『きつと結果は変わらない。でも、お前の未来は必ず変わるから！』

過去の自分にメッセージを伝え切った早瀬は、複雑そうながらも、すつきりとした表情を浮かべていた。

その頃、アナザー鎧武によってヘルヘイムの森に送られていたダンスチームのメンバー達が、アナザー鎧武の消滅で無事に現実世界へと生還した。

「戒斗……！」

「失せろ！自分の力で頂点を掴み取る覚悟がない奴に、居場所なんてない」

アスラは帰還した戒斗へ縋るように呼び掛けるが、戒斗にバツサリとそう告げると、その場に崩れ落ちた弱者へ背を向けて去っていった。

「どうやら、この事件も終わったようだ」

「晴人さん、色々とありがとうございます」

「俺は、ただみんなの希望になろうしただけだよ。また、クローバーストリートに行くよ。あそこのドーナツ食べにね」

晴人はせつなにまたクローバーストリートに来ると告げ、自分の仕事へと戻った。

全てが終わったソウゴ達は、鉄橋の上へと集まっていた。

「負けたよ」

アンリは何かを話そうとしていたほまれよりも先に、負けたと言う。

「さっきのほまれのスケート、素晴らしかった。

昔の無駄のないスケートも好きだったけど、今のほまれの気持ち溢れるスケートも悪くない。けど……僕も負けてられないね」

アンリが握手を求め、ほまれはそれに応える。

「もぐもぐの散歩、練習大変な時は私がやる……って、うわー！うわあ、ちよつと！」

はなはそう意気込むが、いきなりもぐもぐに引つ張られて連れて枯れてしまう。

「あの子、本当に素直だね」

「イケてるんだよ、はなは」

「きつと素敵なレディになるよ。それと……」

アンリがはなの姿を陰ながらに評しつつ、ソウゴを見る。

「君、もしかしたら王様になれるかもね」

「なるじゃない。最初からそんな気がしたんだ」

それに対してソウゴは笑ってそう言い放ち、アンリと一緒に笑みを浮かべ合った。

「引つ張るのはノーサンキューだよ……」

その頃、もぐもぐに引つ張られるが、ようやく止まって立ち止まることの出来たはなが、息切れを起こしていた。

「応援つて、誰でもできる……か」

息を整えながら、はなはあの時、アンリに言われた事を気にする。

「ダメダメ気にしちゃー！ はなちゃんにははなちゃんにしかできない事がー」

鼓舞してると、またもぐもぐに連れていかれる。

その時、走るもぐもぐを止める様に人影が現れると、もぐもぐの頭を撫で始めた。

はなの目の前に現れた人影…癖の強い黒髪の男性は、足下に来た犬をなでる為にしゃがむと、持っていた分厚い本を落としてしまう。

「ごめんなさいー！」

はなは直ぐに落とした本を拾い、男性に手渡す。

本を受け取った男性の方へ視線を向けると、彼女は彼の持つ綺麗な装丁の本に思わず惹かれていた。

「綺麗な本……」

「——元気だね」

「へ？」

「とてもとても美しい物語なんだ」

本の表紙を見せながらそう語る男性に困惑しながらも、彼女は一時も目を離すことは無かった。

「その世界では皆が明日への希望に満ちていた。人はそこを楽園と呼んだ。

…しかし、永遠に続く煌きは存在しなかった」

「えっ？」

「美しい物語……じゃあね」

意味深なことを言った男性は、はなの前から去っていった。

夕日で陰をつくりながら立ち去る男性を、彼女は「大人の人だ」と溢しながら静かに見届けた。

「ただいま」

「お帰り、ソウゴ君」

クジゴジ堂へと戻ったソウゴはただいまを言うと、奥にあるリビングの方から順一郎が出てくる。

「実はね。入居者が二人来たんだよ」

「入居者って、上の空いてる部屋に？」

クジゴジ堂では叔父さんの優しきで部屋を貸すのも許可していた事を思い出ししていると、ソウゴは誰が入居してきたのか気になり始める。

「誰が？」

奥へと向かい、誰が来たのかと思いつきながら見てみると：

「ゲイツ！ツクヨミ！」

リビングで寛いでいた新たな入居者の正体は、ゲイツとツクヨミだった。

「ソウゴが本当に私達の知るオーマジオウになるか、もっと近くで見ると必要があると思つて」

「そうなんだ……」

ここでも監視かと思つていると、ゲイツの方を見ながら「まあいいか」と切り替える。

「ゲイツ！いらつしやい！」

「勘違いするな、俺はお前と馴れ合うつもりはない。

俺は覚悟を決めた。必ずお前を倒す。そのために、近くにいたほうがいいと思つただけだ」

「そう、でもよろしくね」

「まあ、新しい入居者が来たお祝いって事で今日は、唐揚げだ！唐揚げにしよう！」
「本当!? やった！叔父さん！俺も手伝うよ！」

ソウゴも勢いよく順一郎がいる台所へと向かっていき、とても活き活きとした表情で手伝いを始めるのだった。

「せっかく邪魔者を排除する機会だったというのに……」

しかし、あれこそが魔王の器なのかもしれないですね。利用できるものは、とことん利用し尽くす。排除するのはその後でいい」

ウオズが本のページを開くと、その本に異変が起こった。

「まさか……ゲイツ君の名前が……!?？」

いつも手に持っている、『逢魔降臨暦』と描かれた本。

そのページにゲイツの名が記録された事に、ウオズは動揺を隠す事が出来なかった。

その頃、巨大なビルの屋上では……

「また、この世界に来るとは……」

黒いジャケット、その中にマゼンタカラーのシャツを着た男性が立っていた。

男性は、首にぶら下げたマゼンタカラーの二眼レフカメラのシャッターを切る。

「さって。あの世界の様に、また魔王って奴を探すか……」

魔王を探す。そう呟くと彼の近くに灰色のカーテンが出現し、そのカーテンを潜り消えていった。

次回！ Re. HUGつとジオウ！

第11話 ピクニックとゴースト…謎のライダー 2018

第11話 ピクニツクとゴースト：謎のライダー 20

18

二体のアナザーライダーと戦い、さあやとほまれが新たなクリスタルを入手し、ゲイツとツクヨミがクジゴジ堂へと引越して来てから、ソウゴの日常はより騒がしくなつた。

「うわああああ!!?」

その証拠と言わんばかりに、ソウゴが追手から逃げる様に階段から転がり落ちてきた。

「もうく!!?しつこい!」

「逃がさん!はあ!」

追手の正体であるゲイツが勢いよく階段を駆け下り、彼へ向けてキックをする。

ソウゴが「うお!!?」と声を上げながら咄嗟に避けると、着地をしながら「何避けるんだ」と言わんばかりに睨みつけるゲイツ。

「何するんだよ!!?」

「言っただはずだ!俺がここに泊まったのは、お前を倒すためだとな!」

椅子を盾にして抵抗しながら文句を言うが、ゲイツは問答無用でソウゴを倒そうとする。

「覚悟しろ！」

「止めなさいっ！家が壊れる！」

そう叫びながらジクウドライバーを出し、ここで変身しようとする。

…が、ツクヨミが仲裁に入りゲイツを止める。

「おお？みんな朝から元気がいいね！お腹空いたでしょ」

三人の食事を用意してきた順一郎が来ると、朝食を食べるかと思う。

「…まずは先に飯だ」

とりあえずゲイツはソウゴを倒すのは後とし、朝食が置かれたリビングへと向かい、一緒に朝食を取る。

「そういえばさ、前から聞いてみたかったんだけど。ゲイツ、最初からゴーストとドライブのウオッチ持ってたよね。どうやって手に入れたの？」

ふとソウゴは、まだ仮面ライダーゴーストと仮面ライダードライブに会ってもいないのに、ゲイツが二人のウオッチを持っていた事について疑問に持っていた為、どこで入手したのだと聞きだそうとする。

「お前には関係ない話だ」

「クライアス社から逃げた時、オーマジオウから盗んだの」

関係ないと一掃したゲイツの代わりに答えたツクヨミによると、ゲイツの持ってたゴーストとドライブのウオッチは元々オーマジオウの物で、彼の所から盗んできたと言

る。
「えっ、じゃ元々俺のものってことじゃん！」

「今は俺のものだ」

「何々、朝っぱらから盗んだの盗まないって物騒な話だね……まあ、女の子の心を盗むつて、色っぽくていいけどね！」

順一郎は二人が来てから家が賑やかになって、よかったと感じているらしい。

その日の夜、一台の車が走っていると、道の真ん中に黒いフードを羽織った者が立っていた。

「うわあああああ！」

黒フードの人物は足で車を抑えつけ、車を抑えつけた怪物を目撃した運転手は恐怖に戦き逃げようとする。

「ば、化け物……あっ！」

だが逃走する相手へ顔を向ける黒フードは、胸に付いている目玉の紋章を光らせる

と、運転していた人が意識を奪われたかのように倒れこんだ。

「やめろ！」

そこへ二人組の男が、黒フードの人物の凶行を止めようと近付く。だが二人の前に、
またもや謎の人物が進路を塞ぐ様に現れた。

もう一人の人物は、首からマゼンタのトイカメラをぶら下げていた。

「誰だ？」

「通りすがりの仮面ライダーだ……」

その頃、クライアス社ビルにウオズが現れた。

「何しに来たの？」

「単刀直入に言います。私はあなた方に協力させて頂くことにした」

ウールの疑問に、クライアス社に協力すると返すウオズ。

「そうやって私達の事、はめるつもり？」

「時見ソウゴを見限ったというのか？」

「誤った道を進もうとする魔王を正すのも、臣下の務め」

オーラとスウォルツの問いには、これも主君たるソウゴの為だと答える。

「お前が俺達に何を与えられるかが問題だ！」

「我が魔王の最大の障害となる人物を。」

その男は全てを破壊し、歴史を変える者：

そのため、この世界へ再び訪れた」

世界の破壊者。それがソウゴにとつての障害となると話す。

そして翌日。

ゲイツ達は今日、はなの提案でのびのびヶ原ハイキングへと来ていた。

「やって来ましたハイキング！だーっ！」

掛け声と同時に、はぐたんを抱っこ紐で抱えたはなが右腕を上げる。

「大自然の中におると、日々の疲れが癒されるなあ〜」

「そういえば、ソウゴは……？」

ほまれの言う通り、ソウゴの姿がなかった。

「奴なら、まだ寝てるぞ」

「「はあ？」」

「起こしたんだけど、中々起きないから。後で来ると思うけど……」

「ゲイツとツクヨミが言うには、起こそうとしたが全く起きる気配がならず、しびれを切らして仕方なく置いて来たそうだ。」

「ソウゴ君、いつも早く起きるのが苦手だったから……」

「ホンマにあいつ魔王になるんか……」

とりま後で来るなら、先に行つて待つことにした。

「それじゃあ早速、しゅっぱ——！」

「ストーツプなのです！」

はなが足を進めようとして右足を上げると、誰かに呼び止められる。

「何?」

声のした方を向くと、そこに左右の髪を赤いリボンで結わえ、フリルが多めかつダイヤとハートの意匠が施されているワンピースドレスで身を包んでいる少女が立っていた。

「つてか、お主誰じゃ……?」

「石!」

少女ははなの右足の真下にある石を指差し、傍に移動して石を拾う。

「後一步で石につまずいて転んで、坂を転げ落ち、泥まみれになる所だったのです!」

「はあ?」

「親切ね」

「いや、心配し過ぎでしょ。小さな石に」

「流石につまづいて転がって泥まみれは無いと思うぞ」

「ハイキングは、とーつても危険なのです！」

「「えっ？」」

少女の優しさに感心するさあやを横目に、ほまれとゲイツは心配しすぎだろとツツコミを入れてみると、ハイキングは危険だと教える少女に何故と疑問の声が上がる。

「ハイキングに行きます。お弁当を食べます。」

そしたら、デザートのみかんが転がって、追いかけてる内に……！迷子になって、二度とお家に帰れなくなる。

そんな未来が待っている。なのです！」

少女は「なのです」を口癖に、赤い月が浮かぶ不気味な場所で独りぼっちになったはなの姿を浮かべながら、ありもしなそうな心配事を言い続ける。

「それにしても、大きい声やな〜」

ハリーの言う通り、彼女の声は山びこに響きそうなボリュウムだった。

「いやー、しかし……」

「な、何なのですか？」

はなが少女の傍に近付き、思わず警戒する少女の全身を見る。

「お人形さんみたい！かわゆいのお〜」

「離すのです……………」

人形みたいだと言つて少女を抱き締めるはな。それを見て初対面なのに仲良しね〜と心中で呟くツクヨミ。彼女の隣でジオウの叔父から貰ったお弁当の中身について考えるゲイツ。

「この子誰？」

「うーん……………」

ほまれとさあやは、いきなり現れたこの少女はどこから来たのかと思っていると、「えみるちゃん〜！」と名前を呼ぶような声が聞こえた。

「この子？」

はなの妹である野乃ことりが駆け足で現れ、少女の傍で足を止める。

「この子と知り合い？」

「うん。同じクラスの——」

「六年一組、愛崎えみるなのです」

少女は愛崎えみると言い、はな達は彼女がこたりのクラスメートだった事を知る。

「ことりは何で……………」

「クラスでハイキングに行く事になって……えみるちゃん、集合場所あつちだよ？」

「本当に行くのですか？ハイキングはとっても危険なのに」

「えみるちゃんは行きたく無いの？」

「その割には大つきいリュックだけど……」

ほまれはえみるの背負っているリュックを見てみると、ここにいるみんなの中で誰よりも大きかった事を指摘する。

「これは、危険に備えているのです」

そう言つて彼女はリュックを降ろし、中身を出す。

「緊急用のパラシュート」

「ぱ、パラシュート？」

「何かを砕く為のハンマー。迷子になった時にみんなで遊ぶ用のトランプ。それからそれから——」

「行きた無いんか楽しみなんか、どっちなんや？」

さらにリュックの中にはパラシュートとハンマーの他に、トランプ・スコップ・ロープ・薬・等々が入っていた。

「サバイバルか何かと間違えてるようだな……」

「ゲイツ！」

ツクヨミはゲイツの発言に突っ込んでいると、ことりが「無理しなくても大丈夫だよ？」と励ましの言葉を掛けていた。

「絶対楽しいと思うんだけどな……」

「あなた、信用ならないのです！」

「えっ、私？」

「発言に根拠が無い人は、信用出来ません！」

はなを指差して叫ぶと、はぐたんが自分の手をえみるの指に当て、笑顔を見せた。

「はぎゅ〜♪」

「か、かわ…可愛いのです……！」

はぐたんの笑顔を浴びたえみるは思わずメロメロになり、強張らせていた表情を和らげる。

「ほら、はぐたんも行こうって言ってるよ？」

はな達はえみる達を加え、ハイキングに向かう事になった。

川沿いでクラスメートの男子と水切りをし、それを近くで見る。

「はぐたんの可愛さは罪なのです……」

「えみるちゃんも一緒に遊ばない？」

「目を配って無いと、何が起こるか分からないのです！」

「風流なトコやなあ……」

ハリーがそう言うと同時に、はなが空腹の音を鳴らす。

「雰囲気台無しやがな！」

「仕方ない……おやつタイム！」

「えっ？もう？」

「だって、おやつバナナ楽しみなんでもーん」

そう言つてリュックからバナナを出そうとしたが、リュックから出したのは、何故かバナナでは無くキュウリだった。

「……って、何故キュウリだ？」

「お姉ちゃん寝ぼけて準備するから……」

「河童の呪いなのです！」

「河童……？」

ことりが姉の狼藉に呆れている横で、えみるはバナナがキュウリになつたのを河童の所為だと言う。

「のびのびヶ原には、河童伝説があるのです！」

「何それ？」

「ここにいて、河童の里に連れ去られ、河童にされてしまうのです……！」

「うえう……？水かきがあつて、頭にお皿があつて……！そんな野乃はな嫌だ〜っ！」
えみるの話を真に受けたはなは、河童になった自身の姿を想像した。

「かつ、かつ……河童……」

「ゲイツ？何震えてるの？」

一方、河童と聞いたゲイツは急に震え出した。

「私、一度でいいから河童見て見たかつたの！」

「マジで！！？」

そしてテンションを上げているさあやに驚くほまれ。

「とにかく、早く逃げるのです！」

「もうちよつとここで遊ぼ——」

「河童になりたいのですか！！？」

『えっ！！？』

「河童なりたくなーい！」

「ちよ！！？ どこ行くの！！？」

早く逃げるよう促すえみるに感化され、はながえみるを抱えて逃げ出す。

「何するのですかー!!？」

「嫌だー！河童は嫌だーっ！」

見よ！この恐怖に取り憑かれたヒロインの姿を！

これが伝説の戦士、プリキュアだと言われて誰が信じようか！

今の彼女にあるのは恐怖心！圧倒的恐怖心！！

「めちよつくー！」

パニックになったはなは石を跳び越えて進むが途中で滑り、川に落ちてしまい、手に持ってたキュウリもどこかへ飛んで行つた。幸い川は足が付く程の浅さなので、二人は濡れただけで済み、はぐたんははなに守られたおかげで濡れなかった。

「河童……来るなら来い……撃ち抜いてやる……」

『ブラスタ―モード！』

そしてゲイツはファイズフォンXを震えながら放とうする。

「なっ!?? ゲイツ！」

「そんなもん早くしまいな」

武者震い？をしながら構えるのを見て、ツクヨミとほまれが急いでゲイツを抑える。

「大変な事になったな……」

はなとゲイツが騒がしくなつて大変な事になつたと呟くハリー。

「ソウゴ君、まだかな……」

そんな彼らを他所に、さあやがまだかと、此処へ来ていないソウゴに向けて呟く。

そのソウゴは、ゲイツ達が出て行ってしばらくしてからようやく目が覚めたのか、今ようやくのびのびヶ原前のバス停から降りてきた。

「寝坊だ〜！急がないと！」

急いで到着したソウゴはのびのびヶ原へと向かう。

だが走る途中で息が切れ、顔を上げるとそこにはゴリラの像が立っていた。

「ゲイツみたい……」

ソウゴが公園で立ち尽くすゴリラの像を見て、ゲイツみたいと思想像した。

そこへ自転車、かなりのスピードで公園へ進入した。

暴走行為をする自転車青年から母親が慌てて、子供を事故に遭わないように守る。

「うわああああお!!?」

するとアナザーライダーが突如現れ、自転車に乗っている青年を叩いて転がす。

「アナザーライダー！」

アナザーライダーが現れたのを見て、ソウゴはすぐに向かう。

「守る……」

後頭部から生やした白髪を揺らしながら、黒いフードを身につけたアナザーライダーは自転車に乗っていた青年に近づき、何かの光を放った。それを受けた青年は体から何

かを吸い取られてしまい、その場に倒れてしまった。

「何したんだ!」

『ジクウドライダー!』

『ジオウ!』

ジクウドライダーを装着してウオッチを取り出すと、ウエイクベゼルを回してD，9スロット側の差し込み口に入れる。ドライバーの真ん中のロックを押し、背後に時計が現れると同時にソウゴが構える。

「変身!」

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

『ジカンギレード』

ドライバーを回し変身したジオウはジカンギレードで斬りつけるが、アナザーライダーが透明化した。

「嘘!?」

嘘みたいな方法で攻撃を躲かれた事に驚いていると、ジオウの背後に現れ攻撃してきた。

「何だ、こいつ……幽霊みたいだ!」

ジオウは幽霊の様なアナザーライダーとの戦いに苦戦を強いられる。

そこへ化けもんだと公園を逃げ出す人々の悲鳴を聞きつけたのか、現場に駆けつけ陰から戦いを見守る二人の姿がいた。

「ふうー！」

ある程度あしらったところで、アナザーライダーは透明化し消えていった。

「逃げた……大丈夫ですか？」

それを見て変身を解いたソウゴは、襲われた男性に近づく。

「ナリタ。捕まえるぞー！」

「はい！」

そこへ陰からソウゴを見ていた少年二人が縄を持って現れ、縄をソウゴへ向かって投げた。

「えっ!? 何ー！」

「捕まえたぞー！」

「何なの……」

ソウゴは訳のわからないまま、突如現れた二人に捕縛されてしまった。

その頃、クライアス社のバールームでタイムジャッカーの三人とルーラー、ウオズが屯している中、アナザーライダーが現れた。

「御苦労さま」

「次はどいつだ？」

「ルールー。次の奴調べて」

「わかりました」

オーラに言われるがままに、ルールーは何かを淡々と検索する。

「何処でどんな事故が起こるか、僕達には解かるもんね」

彼らは未来の新聞記事から情報を検索していた模様。

「お、これなんてよさそうだ。着いてきなよ」

ルールーの隣に移動していたウールが一つの記事を見つけ、アナザーライダーを連れて行く。

そこでふとオーラは、ウオズの言っていた『破壊者』はどうなったのかと思いついた。

「ねえ。あんたが言ってた破壊者は？何処行つたの？」

「どうも彼は気まぐれだね。我が魔王も動き出したことだし、呼んできてくれないか？」
オーラは仕方無さそうな顔し、ウオズが呼んで来たと言う破壊者を呼びに向かう。

その頃、二人の男に縛られてしまったソウゴは、『大天空寺』と書かれた寺へと連れて

こられた。

そこで二人の男…天空寺タケルとナリタから尋問を受けていた。

「ねえ、これほどいて欲しいんだけど」

「何言ってるんだよ。白状しちやえよ。ほんとは事件に関わってるんだろ？」

「事件？」

ソウゴはナリタの言っている「事件」について疑問に思っていると、そこに五人組の少女達がやってきた。

「みゆきちゃん！なおちゃん！みんな……」

「この子が怪人の仲間なんですか？」

みゆきと名乗る黄色いリボンをつけたピンク髪の少女がソウゴを見て、アナザーライダーの仲間なのかと聞く。

「えっ？ちよつと待ってよ！状況解らない。誰か説明してくれないかな？」

「はあ？あんたが仲間じゃないの……」

「違うって！」

「……違うのですか？」

タケルが否定を続けるソウゴに近づき、膝を折って今まで自分達が調べてきたことを説明する。

「俺達不可思議現象研究所は3年前から、一般の人が君と一緒にいた怪人に襲われてる事件を追ってるんだ」

「……クライアス社の仕業か」

それを聞いてソウゴは、この事件にクライアス社のタイムジャッカーが絡んでいると思う。

「この前、もう少しであの怪人を捕まえられそうになった……だけど、仮面ライダーつてやつに邪魔された」

「仮面ライダー……！（クライアス社に手を貸した仮面ライダーがいるのか……）」

「どうやらなおちゃんのお父さんの消えたお父さんと。あの怪人に関わりがあるみたいで……！」

「私、お父ちゃんを探してるんです」

「どうゆうこと？」

お父さんを探してる。それはどういうことなのかとソウゴはタケル達に尋ねる。

「実は……なおちゃんのお父さんが大工の仕事中に、大きな木材を支えていたワイヤーが切れて、その時下にいたなおちゃんを庇って……」

「でも気がついたら、木材の下敷きになったはずのお父ちゃん消えてて、代わりにあの怪人が……」

話を聞く限り、緑川源次という父親は数年前、長女であるなおと言ううさ耳リボン

つけた緑髪の少女を落ちて来た木材から守るために庇った。

そしたら、彼と入れ変わるようにあのアナザーライダーが現れたのだと語る。

「それが君だろ！君は怪人の仲間じゃないのか？」

「仲間？違うって！」

「でしたら、知ってることを教えてくれませんか」

「だから……」

俺はアナザーライダーの仲間じゃないと言いかけると、彼の持つ携帯から着信音が鳴る。

「ツクヨミか……出て、仲間だから」

ナリタが電話に出ると、「ソウゴ、今どこー」という彼女の大声がナリタの耳に突き刺さった。

『アナザーライダーが現れたの。今ゲイツ達が向かってる』

どうやらハイキングのコースにアナザーライダーが現れたらしく、「凄い偶然……」とソウゴは驚きを見せていた。

「あの怪人が現れた。俺に手伝わせて、きつと力になれるからさ」

「分かった。信用する」

「タケルさんちよつと待っててください……！」

「ありがとう。俺は時見ソウゴ。王様になりたい男だ」

「もつと信用できなくなった！」

ソウゴは王様になりたい男だと言うと、ナリタにいきなり突き飛ばされる。

「俺達だけで行こう」

「分かった……みゆきちちゃんお願い！」

ソウゴの縛ってる縄をみゆきに渡し、タケルとナリタ、なお、れいな四人はその場所へと向かう。

「ええ……そんなあ……！」

「ん？これ……！」

みゆきはソウゴが突き飛ばされた時に落としたらしい、畳の上に転がったジオウとビルドのライドウオツチを拾う。

「これ……ビルド？」

「えっ？ビルドを……もしかして晴夜を知ってるの？」

「晴夜って……仮面ライダービルドやないか」

後ろ髪を一本縛りにしているオレンジ色の髪を持つ少女・あかねが仮面ライダービルドである晴夜のことを言うと、みゆきがソウゴもライダーなのかと聞く。

「もしかしてあなたも……！」

「俺も仮面ライダーだよ。仮面ライダージオウ。そのウオツチ、晴夜から貰ったんだ」
「うそ！じゃああなたもヒーローなの！男のヒーローなの！？」

黄色い髪型をした少女・やよいが目を輝かせてソウゴを見る。

「ヒーロー……」

ヒーローと言われるが、ジオウはヒーローなのかとちよつと悩む。目指してるのは王様だけど、現状は一応魔王ではある訳だし。

「仮面ライダーなら信用出来る！行こう！」

みゆきがソウゴの縄を解き、タケル達の後を追う。

「ねえ、晴夜を知ってることは、君達もプリキュアなの？」

「せやで。晴夜とはドキドキプリキュアに初めて会った時に会ったんや！」

「それに晴夜君は何度も私達を助けてくれたの」

みゆき達はビルドの桐ヶ谷晴夜のことをよく知っていた。

「晴夜って……どんな戦いしてんだ……」

ソウゴは彼女らの話を聞いて、晴夜が今までどう言う戦いを繰り広げていたのかという疑問が浮かびながらも、四人は急いでアナザーライダーが現れたというハイキング会場へと向かう。

一方、クライアス社ビルの特別部屋にウオズが呼んだ「世界の破壊者」がくつろいで座っている、そこへオーラが現れた。

「……あんた、人の話聞いてんの？」

机に置かれたマゼンタ色のカメラを手に取り、男性が立ち上がった。

「ああ、この世界には来たことがある。大体分かった」

階段を降り何処かへ行ってしまった男性の態度に、オーラが（何、この感じ悪い男……）と心の中で呟いた。

その頃、のびのびヶ原ハイキングでは、アナザライダーが屋台の引火の事故を起こし、そのような人を次々と襲っていた。

「誰も……傷つけ……させない」

そのアナザライダー……アナザーゴーストを見た人々は逃げ惑う。

「もう随分魂を集めたね！それを解放してご覧。もつと力が手に入るよ！」

「かい……ほう？」

ウールの言われた通り、抜き取った魂を解放して力として取り込んでいた。

すると、アナザーゴーストが姿が変わった。

「力が……漲る！」

しかし力を取り込むと引火の原因の屋台の店主だけでなく、無差別に人を襲いはじめる。

そこへゲイツ達が現れた。

「アナザーライダー……」

「お前らは子供達を避難させろ。奴は俺が倒す」

『ゲイツ！』

ゲイツウォッチを腕のホルダーから外すとウォッチを起動させ、ドライバーに装填する。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

仮面ライダーゲイツとなりアナザーゴーストと戦闘に入る。

「貴様、何が狙いだ！」

「娘を……守る……うわああ！」

アナザーゴーストがそう叫ぶと同時に、彼の胸の紋章が光る。

すると、また別の怪人——“眼魔コマンド”が何体も現れゲイツを襲う。

「ゲイツ君！」

「私達も！」

さあやとほまれもプリハートにミライクリスタルをセットし、二人の体が光に包まれた。

「輝く未来を抱きしめて！みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュー！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「あれは……」

プリキュアへと変身した二人が眼魔コマンドに応戦していると、駆けつけたタケル達はゲイツの巻いているベルトを見て、ソウゴが持っていた物と同じものであることに気づく。

「みんな！」

そこへ遅れてソウゴも、みゆき達と一緒に現場に到着した。

「ソウゴ！」

「お前なんでここに！」

「ナリタさん大丈夫です。この子なら信用出来ます」

みゆきがナリタにソウゴは信用出来ると話す。

「あれ？はなは？」

アンジュとエトワールが戦っているのを見るが、キュアエールのはなの姿がなかった。

「実は……」

——遡る事、アナザーゴーストが現れる数時間前。

ゲイツ達がこの広場に到着すると、はな達のクラスメートである眼鏡男子 阿万野ひなせ がトランペットを吹いていた姿が映った。

「日生君！」

「野乃さん。来てたんだ」

「日生君もハイキング？」

「うん。こう言う開けた所で演奏するの、気持ちいいからね」

「吹奏楽部だもんね」

はぐたんが日生の持つトランペットに手を伸ばす。

「はぐたんも音楽好きだから」

『丘を越えて行こうよ』を演奏し、それに合わせてことり達が合唱する。

「よし！私も！」

はながそう言ってバックから、ピンク色の本体に銀で縁取られた大きめのハートを付

けた「メロディタンバリン」を持って叩きながら歌い、さあやとほまれも色とりどりなシンバルの音色に合わせて手拍子をする。

そんな中、えみるが木の裏に隠れて見ていたのに気付くはな。

「えみるも歌お？」

「歌わないのです！歌うと河童が来るのです！」

「えっ？河童が？」

傍に向かって誘うが、歌うと河童が来ると言つて歌おうとしない。

するとその時、木の上から何かが降つて来た。

「うわーっ！」

二人が驚いて倒れ、はなが手放したメロディタンバリンを猿がキャッチした。

先程木の上から降つて来たのは、猿だったのだ。

「あつ！タンバリン！」

猿が歌に合わせてタンバリンを叩く。

「お猿さん上手ね！」

「感心してる場合じゃ無いでしょ……」

「みんなの歌を聞いて、自分も混ざりたみたいね」

ほまれが感心するさあやにツツコミをいれていると、猿はメロディタンバリンを首元

に掛け、この場から去ってしまおう。

「ちよつと返して！」

「猿を刺激してはいけません！」

はなが猿の後を追いかけて、えみるは彼女の後を追って走り出す。

「ちよつと待って！はな！」

さあや達は二人の後を追って走り出す。

「はな！えみる！？」

「どこ行っちゃったんだろ……」

しかしさあや達の搜索も虚しく、はなとえみるは姿を消してしまった。

「それで、探していたら……アナザーライダーに遭遇したってわけ……」

「そう言う事ね……それじゃあ、あいつを倒してからはなを探そう！」

『ジクウドライダー！』

「みんな、行くよ！」

ソウゴがジクウドライダーを腰に装着する。

するとみゆきの掛け声と共に五人は、変身アイテム『スマイルパクト』を取り出す。

『レディー！』

「プリキュア！スマイルチャージ！」
『ゴーゴー！レッツゴー！』

みゆき達五人の体が光に包まれ、姿を変える。

「キラキラ輝く未来の光！キュアハッピー！」

「太陽サンサン熱血パワー！キュアサニー！」

「ぴかぴかぴかりんジャンケンポン！キュアピース！」

「勇気リンリン直球勝負！キュアマーチ！」

「しんしんと降り積もる清き心……！キュアビューティ！」

「……五つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア！」

五人が翼の羽飾りを髪や耳にあしらひ、胸元にリボンを付けたプリキュアへと変身を完了し、全員が名乗りをあげる。

「何だと……」

「また、別のプリキュア……」

「今度は五人も……」

ゲイツ達がスマイルプリキュアの登場に驚く。

「じゃあ、俺も！」

『ジオウ！』

そう言うとうオツチをドライバーに装填し、ドライバーのロックを解除する。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

「やっぱり！仮面ライダーだ！顔にライダーって書いてる！」

仮面ライダージオウへと変身すると、ヒーロー好きのピースが目を輝かせてジオウを見る。彼女の興奮した姿に少し困惑の声を漏らすジオウは、気を取り直してアナザーゴースト達へと視線を向ける。

「あの怪人は任せて！」

「お願いね。あの怪人にはマーチにお父さんの手掛かりなの！」

「わかった！」

スマイルプリキュアのメンバーはアンジュとエトワールと一緒に眼魔コマンドの応戦に入り、ジオウはゲイツと共にアナザーゴーストと交戦しながら、アナザーゴーストを抑える。

「あんた、力でおかしくなってるんだ、目を覚ませよ！みんな泣いてるぞ！」

「!?？」

「騙されるな！そいつは最強最悪の魔王になる男だ。沢山の命を奪う、つまり君の敵だ！」

「敵……うおおお！」

ジオウの言葉に動揺したアナザーゴーストはウールの言葉で、目の前にいる仮面の男を敵と認識して暴れ回る。

『鎧武！』

『ウイザード！』

二人は鎧武ウオッチとウイザードウオッチを起動させ、ドライバーへと装填する。

『アーマータイム！ソイヤツ！鎧武！』

『アーマータイム！プリーズ！ウイ・ザード！』

ジオウが鎧武アーマー、ゲイツがウイザードアーマーを装着し応戦を続ける。

「はあー！」

「ふうー！」

ジオウの橙々丸Zとゲイツが放つウイザードの魔法が、徐々にアナザーゴーストに対して優勢に戦いを進めていく。

「僕が手伝ってあげようか？」

『コダマー！』

「なんだ、こいつ……」

コダマウオッチがアナザーゴーストに援護しようとしたウールを止める。

その隙にジオウとゲイツはアナザーゴーストを圧倒していく。

「よし！一気に……」

「ジオウ！やつはゴーストだ。これを使え」

ゲイツはジオウへゴーストウォッチを手渡す。

「ゲイツ……ありがとう！」

『ゴースト！』

『アーマータイム！カイガン！ゴースト！』

ジオウがゲイツへお礼を言いながら、ゴーストアーマーを装着した。

「……ん？あれ、ウォズは？」

だがジオウが辺りを見渡すも、いつもならここで祝ってくれるウォズの姿がなかった。

「なんか、物足りないけど、まあいいか！」

ウォズがいけないことは置いといて、アナザーゴーストへと向かっていく。

「あれって……」

ゴーストアーマーを見たタケルはどこかしら嬉しそうに思いながら、何か懐かしさを感じていた。それと同時に、ジオウのゴーストアーマーの胸に描かれた目の紋章が光る。

そのままジオウ・ゴーストアーマーはアナザーゴーストを圧倒し、アナザーゴーストが倒れる。

「トドメだ！」

『『フィニッシュタイム！』』

二人が必殺技を発動する為に、ドライバーを回そうとする。

「いいのかな？そいつを倒したら大変な事になっちゃうんだよ？」

「!?？」

すると、いきなりウールがアナザーゴーストを倒せば変身者が大変なことになると言われ、二人は思わず動きを止める。

「ヤアー！」

「ぐわあー！」

その時、ジオウとゲイツの前に長剣が現れると、いきなり斬られた二人をそのまま吹き飛ばす。

「何者だ!?？」

斬られはしたが直ぐに立ち上がったゲイツの前に現れたのは、金のアーマーで、赤い複眼を持った顔には角が2本あり。更にマゼンタカラーに周りを黒と銀のカラーリングであしらったドライバーを付けた仮面ライダーだった。

「通りすがりの仮面ライダーだ」

『ドライブ！』

ゲイツはドライブのウオッチを装填し、ドライブバーを回転させる。

『アーマータイム！ドライブ！ドラーライブ！』

複眼にひらがなで「どらいぶ」と描かれたアーマー、ドライブアーマーを装着した。

「行くぞ！はあぁッ！」

しかし、アーマーを変えスピードも上げるが、そのライダーはゲイツ・ドライブアーマーのスピードを活かした攻撃を難なくかわしていく。

さらにゲイツ・ドライブアーマーが突っ込んできたところをカウンターパンチで吹っ飛ばす。

「なかなかできるな。だが、俺には及ばない……」

余裕そうな口調でそう語りながら二人に一枚のカードを見せ、ドライブバーへと差し込む。

『FINAL ATTACK RIDE！AG AG AG AGITO！』

すると足元から紋章のようなものが現れ、右足に収束されると仮面の角が開き、高く飛躍してそのままゲイツにキックを放った。

キックを喰らったゲイツは屋台の残骸に突っ込み、埃をまき散らしながら悶える。

「大丈夫？」

そこへ、2人の戦いを見ていたタケルがゲイツに駆け寄り、そう言つて攻撃を受けた部分を抑えるゲイツを介抱する。

「驚くのはまだ早い！」

アギトが一枚のカードを取り出し、ドライバへと差し込む。

『KAMEN RIDER! HIBIKI!』

「そんな……!?？」

「別のライダーになった!?？」

カードを差し込むと、アギトから紫の鬼のようなシルエットのライダー……響鬼へと変わった。

「何なの、あの仮面ライダー……」

「あれも18人の中の一人なの？」

「いや、多数のライダーに変身する仮面ライダーなんて、聞いたことがない……」
ゲイツやツクヨミも知らない未知の仮面ライダーだと話す。

「お前が魔王つてやつか。ちよつと遊ぼうか」

響鬼とアナザーゴーストの二対一となり、二人相手に苦戦するジオウ。

『FINAL ATTACK RIDER! HI HI HI HIBIKI!』

再び響鬼がドライバーにカードを差し込んで操作すると、ドライバーから出現した音撃鼓でジオウの動きを封じた。

「何だこれ……」

ジオウが戸惑っているのを余所に、響鬼が両手にバチを握る。

「受けてみる」

動きを封じこめたジオウに響鬼のバチの音を叩きこまれた。

すると爆発して吹っ飛ばし、ジオウは大ダメージを受け変身解除してしまった。

「何なの？あのライダー……」

「おいおい、魔王とはそんなもんか？やはり奴と同じガキか……」

「奴……？」

「さあ。チャンスだよゴースト」

ウールがそう促すとアナザーゴーストがソウゴの前に現れ、他の犠牲者と同じ様にソウゴの魂を吸収しようとする。

「いけない！はあ！」

するとタケルが気をソウゴへ向けて放つ、同時にソウゴがいきなり倒れる。

「なんだお前？そいつもやつちやええ！」

ウールは何かやったのかと睨み、命じられたアナザーゴーストはタケルにも攻撃しよ

うとする。

「プリキュアマーチシユート！」

そこへマーチがマーチシユートを放ち、アナザーゴーストをタケルから離す。

「待ちや！」

「これ以上はさせない！」

「タケルさんは下がってください」

スマイルプリキュアがタケルを守るために前に出る。

それを見て生意気だなと思いつながら更なる攻勢を行おうとする。

「やめとけ！帰るぞ、タイムジャッカー」

「ウールっていうんだけど……」

すると響鬼？はアナザーゴーストとウールを止め、その場を一度引こうとする。

ウールは不満げながらも、まあいいかと思いつながらアナザーゴーストを連れて去ろうとする。

「……………なお」

「えっ？」

そんな中、アナザーゴーストはマーチの名を呟くと、疑問を覚えたマーチを置いて三人は消えていった。

いなくなったのを見て、ソウゴへ駆け寄るツクヨミ。眼魔コマンドが消えた事で戦いを終えられたアンジユとエトワールも、倒れ込んだというソウゴの下へと集まった。

「ソウゴ！ソウゴ！……？」

「しつかりして……ソウゴ君！」

倒れているソウゴに違和感を感じたアンジユは彼の胸に耳をあてる。

「……ソウゴ君が、息してない……」

「何っ!?？」

「そんな……」

「ソウゴ君！ソウゴ君！目を覚まして！お願い！」

アンジユは必死にソウゴを呼びかけるが、ソウゴからは何の返事も帰ってこない。

一方、タケルはソウゴの魂が飛んで行った階段のほうへ駆けつける。

「ここにいた……」

「（…俺、どうしちゃったんだろう？）」

「怪人のせいで魂が抜けちゃったみたい。周りには見えない。幽霊みたいなもんだね」

「（嘘でしょ……俺が、幽霊……）」

幽霊になったと告げられ、ソウゴは驚いて声が出せなくなったかのような錯覚に陥った。

その頃、クライアス社のビルへと戻った謎の男性がソファアに座っていた。

「何故、トドメを刺さなかったの？」

「奴らのことは大体分かった、今はそれでいい……」

「気に入ったわ。あんたが王になるつもりなら手伝うけど？」

「王か……興味ないな。俺は通りすがりの仮面ライダー。世界の……破壊者だ」

この男はかつて、この世界へ二度現れたことがある。

彼は世界の破壊者こと、仮面ライダー・デイクイド・門矢士。

懐から出したその手には、ソウゴの持つウォッチとは変わった、少し大きめのマゼンタカラーのライドウォッチが握られていた。

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第12話 GO！ゴーストタイムと未知のウォッチ！2015

第12話 GO!ゴーストタイムと未知のウォッチ!2015

謎の仮面ライダーの妨害によりアナザーゴーストに肉体から魂が分断されたソウゴは、直ぐに近くの病院へと搬送された。

「ジオウはどうだ？」

「意識が戻らない……身体に異常はないそうだけど………」

「(それはその通り。ピンピンしてるからね!)」

ゲイツ達が死んだように眠っているソウゴを見て心配するその後ろで、アナザーゴーストにより幽霊となったソウゴの魂が元気に動いていた。

「ソウゴ君……」

しかし当然彼らは幽霊が見えるわけでないので、さあやは目を覚まさないソウゴを心配そうに見ていた。

「ここは、私達に任してさあや達ははなとえみるを探しに行つて」

「うん」

「ソウゴ君のことお願いね」

さあやとほまれの二人はいなくなつたはなを探しに、ハイキングのコースへもう一度向かう。

「俺は今のうちに、アナザーゴーストの生まれた2015年で、奴を倒すしかない……そうすればおそらく……」

おそらくアナザーゴーストを過去で倒せば、ソウゴを元に戻せる。ゲイツはそう思っている……

「……………行ってくる」

何で自分はこの魔王の心配をしているのだと心中で呟き、先程の考えを振り払いながら病室を後にして向かう。

「ちよつと待って!」

「(ゲイツ…………)」

すれ違うようにタケルとみゆき、あかね、やよいの三人が入ってきた。

「どうしたの?ゲイツが凄い顔して出て行ったけど……」

「なんかあつたんか?」

ゲイツを見て何かあつたのかと聞くタケルに、ツクヨミは「ちよつとね」と誤魔化している、少しの間ソウゴの様子を見て貰うことを思い付いた。

「タケル達お願い、ソウゴを見てて」

「わかった」

「俺じゃなくて、そっちの俺」

タケルは幽霊になったソウゴを見て頷く。その視線に気付いたソウゴは、見てて欲しいのは抜け殻となった自分の体の方だとタケル達に伝える。

だかそんな事は知る由もない為、そのままツクヨミはゲイツの後を追いかける。

「ソウゴ。そこにいるけど……」

みゆき達にもソウゴの幽霊が見えていたのか、幽霊になった方のソウゴを指さすが、それを教える前にツクヨミはすぐに見えなくなってしまう。

「(ねえ、みんなに説明してよ、俺がここにいてるって)」

「信じるとは思えない……それより、いい方法を準備もらっているからさー」

自分は此処にいるのだとさあや達に説明してほしいとソウゴは話し掛けるが、簡単には信じてくれないだろうと考えていたタケルはソウゴのために何かを準備していると話す。

「(なんで皆には見えないのに、タケル達には見えるの?)」

それよりも何故、ゲイツ達は見ることが出来てないのに、タケル達は幽霊となったソウゴを見ることが出来るのかと聞く。

「これのおかげかな」

対する答えとしてタケルが懐から何かを見せると、それは仮面ライダーゴーストのライドウオッチだった。

「いつの間にか持ってた。これを手にした時から、幽霊が見えるようになったんだ」
「私達もそれに触ったら幽霊が見えるようになったの」

タケルとみゆき達はこのゴーストウオッチに触れた影響で、幽霊となったソウゴが見える様になったと話す。

「ゴーストウオッチ……そうか……ゲイツが持ってたのは、元々はタケルのものってことか!」

「どういふこと?」

「(ううん、こつちの話。それより俺に協力してくれないかな?)」

「協力?」

「何をするの?」

「(過去に行つて欲しいんだ)」

「(過去?)」

ゴーストウオッチについての質問を誤魔化すと、ソウゴがタケル達に過去に行つてくれないかと頼む。

その頃外では、ゲイツがタイムマジンで過去へ向かうとすると、タイムマジンの前になおと青いストレートヘアの少女・れいかが現れた。

「なんだ……」

「一緒に連れてくれない?」

「私達も過去で何があったのか、知りたいです」

二人も2015年に何があったか知りたく、一緒に連れて欲しいと頼む。

「……ついてこい」

ゲイツはそれを受け入れ、共にタイムマジンへと乗りこみ2015年へとセットする。

「行くぞ。時空転移システム起動!」

タイムマジンとはタイムホールへ入り、2015年へと向かう。

同じ頃、猿にタンバリンを取られたはなとえみるが追いかけている途中、ひよんな事故で落ち葉の積もった穴へと落ちてしまっていた。

「こんな深い穴……出られる訳が無いのです……」

「ごめん……えみる……」

はなと彼女に抱きかかえられたはなとの方を向かず、嘆きながら体育座りで落ち込

むえみる。花を取ろうとして穴に落ちそうになったはぐたんを止めるためとはいえ、勢い余つてえみる諸共突き落とす結果にしてしまったはなが謝罪をする。

「馴れ馴れしいのです！呼び捨てにしないで下さい！」

馴れ馴れしいとはなにに向かって不機嫌な様子のえみる。

「やっぱり来なければ良かった……」

「えっ？」

「みんなに迷惑掛けてしまったのです……私はダメダメ人間なのです！」

気まずそうに困り顔を浮かべていると、えみるは誰かに迷惑をかけた自分を責め始め

る。

「えみる」

「だから馴れ馴れしいのは——！」

「みんなの為に頑張ってたじゃん」

「えっ？」

すると突如に「みんなの為に頑張ってた」と言われたえみるは、思わずポカンとなる。

「あの花に、トゲがあるって知ってたから、友達が怪我しないように守ってあげてたんだよ。友達の為に頑張れるえみるは凄いよ」

「…頭の中で、ハイキングのシミュレーションをすると、次から次へと危険が襲い掛かって来るのです。クラスみんなのハイキングを、最高の思い出にしたいくて……みんなを守りたかったのです……笑いたければ笑えばいいのです!」

「カッコいいね」

「えっ?」

「えみるは、隠れてみんなを守るヒーローなんだね」

「私が……ヒーロー……?」

カッコいいと言われてまたポカンとなつていると、はなからヒーローと言われた事に
えみるは照れ、両手で顔を隠す。

「照れてる。可愛い〜!」

「て、照れてなんか無いのです!」

反対側を向き、照れて無いと叫ぶ。

「ヒーローつてのは、誰にも知られず、人を助けるのみだからね。分かる分かる」

「あなた、ヒーローの気持ちに分かるのですか?」

「あなたじゃないよ。はなだよ」

えみるが立ち上がって尋ねると、はなは「あなたじゃなくてはなだ」と返す。

「はな……」

「うん」

「えみるからはなにに対する警戒心がなくなったのか、それ以上きつく当たることには無くなった。」

クライアス社の特別ルームで座っていた門矢士の前に、オーラが現れた。

「ゲイツが過去のゴーストのところに向かった。私達も行くわよ」

「過去の世界か……」

「黙ってついて来ればいいの。連れてってあげるから」

「わざわざ時間旅行しないと過去の世界に行けないのか？」

「それ以外にどんな方法があんのよ？」

「オーラがそう言うのと同時に、士が手を挙げると目の前に灰色のオーロラ状のカーテンが現れた。」

「じゃあ。行ってくるか」

「士はそのカーテンを潜り、口を開けて見つめるオーラを残してその場から消えていった。」

2015年。

三年前のなおの前に現れたアナザーゴーストが、木材を落下させた現場の作業員らを襲う。

「誰も……傷つけ……させない」

そこへタイムワープしてきたゲイツのタイムマジンが到着した。

「ここで、倒させてもらおう!」

『ゲイツ!』

ゲイツがゲイツウォッチを起動し、ドライバーに装填した。

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

『ジカンザックス!Oh!No!』

変身したゲイツはアナザーゴーストへ向かって行く。

「なお。私達も」

「うん!」

「プリキュア!スマイルチャージ!」

二人もキュアマーチとビューティーとなり、アナザーゴーストへと向かう。

「今度こそ仕留める、覚悟しろ」

『ゴースト!』

ゲイツがゴーストウオッチを装填し、ドライバーを回す。

『アーマータイム! カイガン! ゴースト!』

ゲイツはゴーストアーマーを装着した。

その時…

「ゲイツさん! 避けてください!」

「何!? うわあ!?」

いきなりゲイツに向かって炎が飛んできた。

「何……」

ゲイツは炎を避けると、炎が飛んできた方を見る。

そこにはこの前現れた仮面ライダーが装着していたマゼンタ色のベルトを身に付けた、赤い龍を模した仮面ライダー…仮面ライダー龍騎がいた。

「こいつを守れって言われてるんだ。悪いな」

「この前の仮面ライダーか」

「お前とやるならこいつのほうがよさそうだ!」

そう言うところを龍騎…いや、ディケイドは仮面ライダーゴーストのライダーカードを出

した。

「何……」

驚くゲイツの前で、そのカードをドライバーへと差し込む。

『KAMEN RIDER! GHOST!』

そしてデイクイドは仮面ライダー龍騎から仮面ライダーゴーストへと姿を変えた。

「ゴーストが3人。なかなか粋な計らいだろう」

『ガンガンセイバー!』

仮面ライダーゴーストの専用武器・ガンガンセイバーを出現させ、マーチとビューティーを見る。

「悪いがお前らの相手はこいつらだ。ふん!」

デイクイドゴーストがパーカーを着た幽霊……英雄の魂を出現させるとマーチとビューティーを襲い、二人を足止めする。

「貴様……邪魔をするな!」

ジカンザックスをゴーストに振る。だが、デイクイドゴーストはガンガンセイバーでそれを受け止めた。

「魔王とやらを助けたいという、お前の気持ちはそんなもんか!?」

「ツ!?!…俺がやつを助けたいだど……ふざけるなツ!」

その言葉に動揺したのか、無作為に向かつて行く。

だが、ゲイツはデイケイドゴーストのカウンターの斬撃を浴び、倒れこむ。

「ゲイツ！はあつ！！？」

マーチとビューティーもパーカーゴーストの攻撃を受け、ゲイツの所まで飛ばされた。

「これで終わりだ」

アナザーゴーストが隣に並び、デイケイドゴーストはまた違うカードを出しドライブへと差し込む。

『FINAL ATTACK RIDE！GH GH GH GHOST！』

二体のゴーストが宙に浮き足に力を溜め、ゲイツ達に向かつてライダーキックを放つた。

「ぐわああああああ！！？」

「ああああああ！！？」

仮面ライダーゴーストとアナザーゴーストのダブルキックをもろに浴びた三人は変身解除してしまい、ゲイツのホルダーからゴーストウオッチが外れてデイケイドゴーストの足下へ転がり、デイケイドゴーストがウオッチを拾う。

「返せ……」

「タイムジャツカーから聞いた。こいつがないと、アナザーライダーを倒せないんだってな? なら……」

そう言うのとデイケイドゴーストは手に力を込める。

すると、ウォッチから黒いオーラが出始める。

「やめろ!」

まさかと思つたゲイツはやめるように言うが、デイケイドはその言葉を無視。そのままゴーストウォッチは元のブランクウォッチに戻ってしまった。

「代わりにこいつをやるよ」

デイケイドゴーストはそう言つて、懐から普通のウォッチとは少し変わった形のウォッチをゲイツへ投げ落す。

「それと、あのアナザーライダーは下手に倒さん方がいいぞ」

「何故です……」

「何故なら、あのアナザーライダーはその緑の女の父親だから……」

「えっ!?」

デイケイドは三人に向かつて、あのアナザーライダーはなおの父親だと教える。

「あのアナザーライダーは、あの落下事故でお前を庇い死んだ。だが、アナザーライダーとなつて命を保っている」

「お父ちゃんが、死んだ……?」

「もし、アナザーライダーを普通に倒せば、直ぐに死ぬだろうな」

「そんな……」

「それじゃあな」

デイクイドゴーストはアナザーゴーストを守る役目を終え、去っていった。

「待て!」

ゲイツは謎のライダーを追うとするが、受けたダメージが高く、すぐには起き上がれなかった。

すると、謎のライダーが渡していたマゼンタカラーのライドウオッチを見つけ、直ぐに掴む。

「なお……」

「お父ちゃんが……死んだ……」

そして真実を聞かされたなおの心は、深い絶望感へと堕ちていた。

2018年。

ソウゴのタイムマジーンに幽霊状態のソウゴとタケルとみゆき、あかね、やよいが乗り込む。

「わああ!凄いい!タイムマシンだ!」

「これで過去に行けるか?」

「めっちゃやば!」

タイムマジーンのシステムに三人は興奮していた。

「目的地は、なおさんのお父さんがいなくなった日だよね?」

「(そう!2015年にセットして)」

「なおちゃんのためにもね」

「(うん)」

タケルは幽霊になったソウゴの代わりに、タイムマジーンの設定を2015年へとセットする。

「(よし!時空転移システム起動!)」

ソウゴのタイムマジーンも2015年へと向かう。

2015年に五人が到着すると、ソウゴ達は事件が起こる前の現場へと到着した。

「……………あそこ!」

そこには、事件が起こる前のなおと父親の姿があった。

「(もうすぐ事故が起るはずだ。だからその前に!)」

五人が見守る中、ついにその時が来た。

「ああつ………!?」

ワイヤーが切れた事で木材が落ちてきて、なおの前に落下してきた。

「危ない!」

「はあ!」

タケルが法力を放ち、木材の落下を一瞬止めた。

その隙にあかねが飛び込み、なおを救った。

「大丈夫?」

「もしかしてあなたが………!?」

これで彼女の父親がアナザーゴーストになる過去を変えた。

それは現代でも、歴史が変わった影響が現れた。

「よし」

アナザーゴーストが誕生するのを阻止した為、幽霊だったソウゴの魂が元に戻った。

「性懲りもない」

するといきなり、ウオズが呆れた様子でソウゴの前に現れた。

「ウオズ」

「いたずらに時間を変えてはいけないと、言ったはずだよ。我が魔王」

その頃、2015年ではなおを助けてくれた事に、なおの父からお礼を言われていた。

「ありがとうございますました」

「いえ」

タケルが対応していると、みゆき達がまだ小さいなおを見る。

「無事で良かったよ」

「じゃね」

「また、会おうで」

別れを告げ、未来へ帰ろうとする。

すると、タケル達の前にウールが現れた。

「僕の邪魔をしないで欲しいんだけどな」

「君がソウゴが言ってた、クライアス社か……」

「あの父親には王になってもらわなきや、困るんだよね」

「なんで……?」

「本来なら、あの子の父親はここで死んでたんだよ」

「「「えっ!?」」」

それを聞き、タケル達は驚きを隠せずに行った。

「そして、アナザーゴーストになって永遠に事故を起こす奴らを襲い、魂を奪って王になつてもらうんだよ」

そう言うと、ウールの持っていたウォッチがアナザーゴーストウォッチへと変わった。

「だから、邪魔しないでよ」

『ゴースト……!』

ウールはゴーストのアナザーウォッチを介して、複数の眼魔コマンドを召喚した。

「行くよ」

それを見たみゆき達三人がスマイルパクトを取り出した。

「プリキュア!スマイルチャージ!」

三人の体が光に包まれ、姿を変える。

「キラキラ輝く未来の光!キュアハッピー!」

「太陽サンサン熱血パワー!キュアサニー!」

「ぴかぴかぴかりんジャンケンポン!キュアピース!」

三人がプリキュアとなり眼魔コマンドに応戦していると、なおと彼女の父親にも襲いかかる。

「やめろ!」

タケルが生身で立ち向かう。

「タケル!」

だがそこに、タケルが兄と慕っている青年・深海マコトが現れた。

「フツ、ハツ! タケル、どうして変身しない!」

「え……?」

『ゴーストドライバー!』

するとタケルの腰からゴーストドライバーが出現し、それを見たタケルの記憶が次々と蘇る。

「そうだった……俺は仮面ライダーだ……仮面ライダーゴーストだ!」

自分が仮面ライダーゴーストである事を思い出した。

だが、思い出したのはタケルだけじゃなかった。

「そうだよ。タケルさん、仮面ライダーだった!」

「そうや、晴夜と始めて会った時、一緒に助けてくれたんや……」

「どうして……忘れたんだろう」

ハッピー達三人もゴーストドライバーの出現と同時に、タケルが以前とある事件で出会った仮面ライダーゴーストだと言う事を思い出した。

「マコト兄ちゃん。行こう！」

「ああ」

タケルとマコトがゴーストドライバーを開け、眼球の形をしたアイテム『ゴーストアイコン』を起動させる。

『アーイ！バッチリミナー！バッチリミナー！』

『アーイ！バッチリミロー！バッチリミロー！』

「変身！」

二人はオレゴーストアイコンとスペクターゴーストアイコンをドライバーに装填し、両腕の上にあげてレバーを引く。

『カイガン！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

『カイガン！スペクター！レディゴー！覚悟！ド・キ・ド・キ・ゴースト！』

「命！燃やすぜ！！？」

「俺の生き様。見せてやる！！？」

二人が仮面ライダーゴーストと仮面ライダースペクターへの変身を完了させると、眼魔コマンドとの応戦を開始する。

「プリキュア！サニーファイアー！」

「プリキュア！ピースサンダー！」

サニーとピースがサニーファイアとピースサンダーを放ち、眼魔コマンドを全滅させた。

スペクターもドライバーのレバーを引く。

『ダイカイガン!オメガドライブ!』

エネルギーを収束した片脚で回し蹴りを叩き込む。

そして、ゴーストとハッピーも決め技に入る。

「プリキュア!ハッピーシャワー!」

『ダイカイガン!オメガブレイク!』

ガンガンセイバーからのオレンジの斬撃とハッピーが放ったハッピーシャワーは、残りの眼魔コマンドを撃破した。

「よし!はああ!」

ゴーストはこれ以上の悪事を働かせんと、ウールへ向かっていく。

「ふん!」

だが、ウールが時間を停止させて攻撃の手を止める。すると、ウールの前にスウォルツが現れた。

「何をしている?早くウォッチを入れろ!」

「うるさいな!わかってるよ!」

ウールは時間停止の中、アナザーウォッチをなおの父親の体内に埋め込む。

「うわあああー！」

それによって、なおの父親はアナザーゴーストへと変貌してしまった。

「これで元どおりだ」

アナザーゴーストを予定通りに誕生させたスウォルツとウールがその場から立ち去り、時間が再び動き出す。

「あれ？」

「なんで、変身が……」

アナザーゴーストが誕生したため、仮面ライダーゴーストの歴史が無くなってゴーストとスペクターの変身が解けてしまった。

「タケルさん！記憶の方は……」

「…大丈夫。まだ、俺が仮面ライダーだって事は覚えてる……後はソウゴに任せよう」

そして現代。

アナザーゴーストの再びの誕生によって、ソウゴの体に異変が起こった。

「これって……どういふこと？」

「過去でもう一度、アナザーゴーストが生まれたようだね」

「何でそんなことを知ってる?」

「私があちら側についたからさ。我が魔王」

「どうして……」

ソウゴはウオズに理由を聞こうとするが、その事を聞けぬまま魂は抜け、ソウゴの体は倒れ込む。

再び2015年、工事現場付近。

何がどうなったのかと周りがざわつき始めていた。

「タケル。これはいったいどういうことだ?」

「あ……ちよつと複雑なんだけど」

マコトはさっきの眼魔コマンドを生み出していた少年と先程自分達と戦っていた少女達は何者なのかとタケルに聞くが、未来から来たという事を言っていないのかという思いと、説明しても信じてくれるのだろうかという不安で思わず言葉詰まってしまう。

そこへ、アナザーゴースト誕生という歴史が元に戻ったことで再び幽霊に戻ってしまったソウゴが現れた。

「(どう?)」

「ごめん。なおちゃんのお父さんは助けられなかった……」

なおの父親を助けられなかったと話す。

「マコト兄ちゃん。その娘を頼むよ！ああ、それと……こっちのタケルによろしく！」

「こっちの……タケル？」

そうマコトに告げて、タケル達はタイムマジーンのある場所へと向かい、未来へと戻っていった。

その頃、穴に落ちていたはなとえみるの間ではトラブルが発生した。

「ああ、もうすぐミルクの時間……」

はぐたんのミルクの時間となり、はぐたんを空腹にさせない為に直ぐにでも作らなくてはならない。

だがここではミルクが作れない為、はなは焦っていた。

「ヤバイ……！今ミルク無い……！」

ここではぐたんがお腹が空いてぐずり出し、泣き出してしまふ。

「はぐたん、泣かないで……」

「ストップ！なのです」

えみるがどうやって泣き止ませようかと慌て始めていたはなにストップと言い、焦りを見せていた彼女を止める。

「私達が慌てると、余計はぐたんが不安になるのです」

「でもどうすれば……」

するとえみるは、はぐたんをじっと見て微笑み、手でスカートを叩く。

「丘を越え行こうよ♪口笛ふきつつ 歌おう♪ほがらかに ともに手を取り ラララ
ララ ララ ララ♪あひるさん♪」

彼女は日生が演奏していた歌を歌い始め、その歌を隣で聞いていたはなは思わず聞き惚れていた。

そして彼女と共にえみるの歌を聞いたはぐたんは落ち着きを見せて泣き止み、笑顔を見せる。

『サンダーホーク!』

その歌が聞こえたこのか、はなとえみるを探していたタカウオツチロイドが二人を見つけた。

「はな!えみるちゃん!」

「大丈夫!」

タカウオツチロイドの案内で、さあやとほまれが穴に落ちた二人を見つけ、直ぐに救助した。

「助かった」

「随分と深い穴だね……」

「はぐたん、もう大丈夫なのです」

さあやからミルクを貰うはぐたんに、えみるはもう大丈夫と声を掛ける。

「ゲイツ！」

そこに2015年から帰ってきたゲイツ達がやってきた。

……だが、なおだけが沈んだ顔をしていた。

「どうだったの……」

「あのアナザーライダーは……この女が探していた父親だった」

「えっ!?」

「ええ！アナザーライダーが現れたの？」

何も知らなかったはなが驚きの声を上げる。それ以上に何も知らないえみるは、何の

話をするのかと疑問符を大量に浮かべていた。

「ああ。しかも、あのアナザーライダーを倒すとその父親は死んでしまう」

「そんな……」

「しかも、ゴーストウォッチも……」

ゴーストウォッチもあの仮面ライダーに破壊され、どちらにしても打つ手がない。

『タイムマジーン！』

するとソウゴのタイムマジーンがゲイツ達の前へと現れた。

「な、な、なんですか!?? あれは!??」

「ジオウのタイムマジーン……」

今倒れている筈のソウゴのタイムマジーンが現れた事でゲイツ達が驚き、タイムマジーンがみんなの前に着陸した。

「もしかして……ソウゴ君!」

ハッチが開く。だが、出てきたのはタケル達だった。

「何故、お前らが、タイムマジーンを……」

「それは、ソウゴに……」

「タケルさん!」

タケルが言いかけるとそこへ、後ろに何かを担いでいたナリタが現れた。

「準備できたんだね。じゃあ頼む!」

「アカリの特製不知火、行くよ!」

ナリタがタケルの言う通りに、ハンディタイプ送風機に似た装置から、何か金粉みたいなものを放ち続ける。

すると、幽霊だったソウゴの姿がじわじわと現れてきた。

「おおーほほほ……やっと思えるようになったあー!」

タケルの幼馴染兼仲間である月村アカリが作成した、靈魂可視化薬「不知火」により、ようやく透けてない自分の姿を見れるようになって、ソウゴはかなり喜んでいた。

「ソウゴ君！生きてる！」

「うん。でもお腹が空いてないけど……」

「だよね！」

それを聞いてタケルが嬉しそうな表情をする。

「ひ、人が出て来て……あつ」

だが誰もいない空虚からいきなり人が現れたことに驚いて、えみるが気絶してしまった。それを見たまゆきは「前の私となおちゃんみたいだなー」としみじみとしていた。

「どうゆうこと？」

「何がどうなつての？」

「お前から説明しろ！」

「ソウゴは体と魂が切り離された状態だった。俺の幼馴染が作った装置で見えてるんだ」

事情を知らないゲイツ達は何が起こったのかわからず困惑するも、タケルが今のソウゴの状態を話し、持ってきた装置のおかげで見えていると話す。

「あ、そうだ。ありがとうゲイツ。俺のために戦いに行ってくれて」

ソウゴは自身を助けるために、2015年へ行ってくれたことに礼を言う。

「ば、バカな事を言うな! 別にお前のために戦った訳じゃない!」

照れ隠しするゲイツにソウゴが微笑する。

「ふふ……まあそういう事しておくよ! 早く2015年に行つて、アナザーゴーストと決着をつけよう!」

「でも……アナザーゴーストを倒したら、なおさんのお父さんが……!」

「大丈夫。そのためにタケル達に過去に行つてもらったからね」

「うん。なおちゃんのお父さんは死んでいない」

「えっ?」

「うん。なおちゃんのお父さんはまだ生きてるよ!」

父親が生きてると聞き、なおが沈んでいた顔を上げる。

「お前らは……あの男を死なせない為に、過去へいったのか……」

「後は君に任せたよ。ソウゴ!」

タケルは懐からゴーストウォッチを取り出し、ソウゴへ渡す。

「ああ」

ゴーストウォッチを受け取ると、なおがソウゴに近づく。

「お願い。お父ちゃんを助けて」

「うん。絶対を助けるよ」

その頃、ハイキングコースの木の上にパップルが現れた。

「アスパワワに溢れてるじゃない。全然リフレッシュ出来ないわ」

木の上に立ったパップルが人々のアスパワワを見て、ご立腹そうに呟く。

するとタンバリンの音が聞こえて、その方を向くと、先程はなから奪ったハートのタンバリンを鳴らす猿が目に入る。

他の猿が近付き、タンバリンを手に取りとうとするが、その猿が阻止せざんとして腕を上げて威嚇する。

「トゲパワワ見つけたー！」

パップルが猿達から発せられたトゲパワワを発見した。

「煽って、煽って、フウツフウツ！明日への希望よ、消えろ！ネガティブウエーブ！」

彼女は扇を振りながらバブリーダンスを踊り、ネガティブウエーブを放出させる。

そして猿からのトゲパワワを取り出した。

「しもしも〜？発注。オシマイダー」

そこから河童オシマイダーが作り出された。

「か、河童？」

「オシマイダーや!」

「ここは、私達が!ソウゴとゲイツは早く!」

はな達はオシマイダーの方へ向かい、プリハートを構えてミライクリスタルをセットした。

「ミライクリスタル!ハートキラッと!」

「輝く未来をく抱きしめて!みんなを応援♪元気のプリキュア!キュアエール!」

「輝く未来を抱きしめて!みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「輝く未来を抱きしめて!みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

はなとさあや、ほまれはミライクリスタルをセットし、プリキュアへと姿を変える。

「私達も!」

みゆき達五人も同じく変身すべく、スマイルパクトを取り出した。

『レディー!』

「プリキュア!スマイルチャージ!」

『ゴーゴー!レッツゴー!』

五人の体が光に包まれ、姿を変える。

「キラキラ輝く未来の光!キュアハッピー!」

「太陽サンサン熱血パワー!キュアサニー!」

「ぴかぴかぴかりんジャンケンポン！キュアピース！」

「勇気リンリン直球勝負！キュアマーチ！」

「しんしんと降り積もる清き心……！キュアビューティ！」

「……五つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア！」

「えええ!!？みゆきさん達もプリキュア!!？」

「よろしく。キュアエール！」

「早くソウゴ達は過去に行つて！」

「ここは私達が！」

「わかった！行こうゲイツ！」

エールがみゆき達五人がプリキュアであったことに口を大きく開けて驚きながらも、アナザーゴーストになったなおの父親を助けるべく、ジオウ達二人は急いでタイムマジーンで2015年に向かう。

すると二台のタイムマジーンに、キャプテンゴースト型とキャツスルドラゴン型のタイムマジーンが攻撃を仕掛けてきた。

「タイムジャッカー……」

「いつも好き勝手に時間旅行してくれちゃつてさ」

「逃がさないんだから！」

操縦していたのは、ウールとオーラだった。

タイムジャッパカーである二人のタイムマジーンはビークルモードから二足歩行型のロボモードへ変形し、ソウゴとゲイツの邪魔をする。

「仕方ない!」

「行くよ!」

『ジクウドライバー!』

二人はジクウドライバーを装着し、ウォッチを取り出す。

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

ウォッチをドライバーに装填し、ドライバーのロックを解除した。

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

ドライバーを回転させた二人は変身し、タイムマジーンもジオウモード、ゲイツモードへとフェイスマジュールが変化した。

「ウォッチを変えよう!」

『エグゼイド!』

ジオウはエグゼイドウォッチを装填し、ドライバーを回す。

『レベルアップ！エ・グ・ゼ・イー・ド！』

エグゼイドウォッチを使用しジオウのタイムマジーンフェイスがエグゼイドモードへと変わった。

そのままジオウのタイムマジーンはエグゼイドのような動きを見せ、攻撃が当たると“HIT”のエフェクトが現れる。

「なんだこいつ……」

ウールはジオウのタイムマジーンに翻弄されていると、ゲイツは懐からゲンムのライドウォッチを取り出す。

「ならば……」

『ゲンム！』

そしてゲイツはゲンムウォッチをドライバーに装填し、ドライバーを回す。

『レベルアップ！ゲンムウォー！』

今度はゲイツがゲンムウォッチを使用し、フェイスがゲンムモードとなり、キャツスルにキックを浴びせると、土管を出してそこへ入って姿を消す。

「何処……!?？」

オーラがゲイツのタイムマジーンを見失っていると、サイドに土管が現れ、ゲンム

モードタイムマジーンが現れ、キャツスルロボヘキックを放つ。

「次はこれだ」

『クローズ!』

「ああ!」

『ビルド!』

今度はジオウはビルドウォッチをゲイツはクローズウォッチを装填した。

『ベストマッチ!ビル・ド!』

『Wake up burning!クローズ!』

ゲイツ機はクローズモード、ジオウ機はビルドモードへチェンジし、ウールとオーラのタイムマジーンを圧倒する。

そのままジオウとゲイツはタイムマジーンでダブルライダーキックを炸裂させ、機能停止させる。

「急ごう!」

その隙に、二機のタイムマジーンは2015年へと向かった。

2015年に到着すると、アナザーゴーストが工事現場の作業員達を襲っていたのが見えた。

「いたぞー！」

到着したソウゴとゲイツが現場に駆けつけ、ジクウドライバーを装着した。

「あんたを、なおさんのところに連れて帰るー！」

『ジオウー！』

『ゲイツー！』

ウオツチをドライバーに装填し、ドライバーのロックを解除した。

「変身ー！」

そして叫ぶと同時にドライバーを回転させる。

『ライダータイムー！仮面ライダージオウー！』

『ライダータイムー！仮面ライダーゲイツー！』

二人が再びライダーに変身し、襲われている人を逃がしながら応戦する。

「ううう……はあー！」

アナザーゴーストが複数の眼魔コマンドを出現させジオウとゲイツを襲わせる。そのまま二人は戦いの場所を変え、必死に応戦する。

「へえー、中々やるな」

その様子を現場の上で、門矢士が高みの見学をしていた。

「戦いには参加しないのかい?」

「あいつらのことは大体分かった。高見の見物といこうじゃないか」

ウオズと士が上からじつくり戦いを見ていた一方、数が多いのかジオウとゲイツは押されていた。

「ジオウ!これを使ってみる!」

ゲイツがあの時デイケイドが渡していたウォッチの事を思い出し、そのウォッチをジオウへと投げ渡す。

「何これ?」

「あのライダーが持っていたウォッチだ!」

「あのライダー……?よし」

とにかく使ってみようとウォッチを起動させる。

『デイケイド!デイケイド!』

ジオウは『デイケイド』と音声流れるライドウォッチをドライバーを装填した。

『ファイズ!』

それに続いて、ゲイツはファイズウォッチを装填した。

『アーマータイム!』

そして二人はドライバを回し、それぞれのアーマーを出現させる。

『コンプリート！ファイズ！』

『カメンライド！ワーオ！ デイクイド！デイクイド！ディーケーイーダー！』

ゲイツがファイズアーマーを装着すると、ジオウには九つの影が重なってマゼンタと銀のアーマーに覆われ。顔面はモニター状になっており、複眼が「デイクイド」の文字になった顔が『デイメイションフェイス』に表示され、右肩にもバーコード状の「デイクイド」の文字があり、胸部から左肩にかけてバーコードが刻まれた。

「祝えー全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者。その名も仮面ライダー・ジオウ・デイクイドアーマー！」

「お前……誰に向かって言ってるんだ？」

ウオズはいつもの祝いの言葉を土に突っ込まれ、微妙な表情になる。

『ライドヘイセイバー！』

ジオウ・デイクイドアーマーはドライバからライドヘイセイバーという新たな武器を出し、眼魔コマンドに斬撃を浴びせていく。

「えっ？もう一つウオッチを使えるって事？」

ジオウはデイクイドライドウオッチの『F・F・T・スロット』を見て、ウオッチがもう一つ使えることに気づく。

「ならこれをー！」

『ビルド!』

ジオウはデイケイドウォッチにあるスロットにビルドウォッチを重ねて装填した。

『ファイナルフォームタイム!ビ・ビ・ビルド!』

ビルドウォッチを装填するとバーコードの部分——『コードインディケーター』に『ビルドスパークリング』と表示され、ジオウの顔面のモニターと下半身がビルド・スパークリングフォームとなった。

「祝え!全ライダーのち…」

「くどい!」

祝いの言葉をくどいと言われながら、ウオズは土から本を奪われた。

そのままジオウはライドハイセイバーで向かってくる眼魔コマンドを倒し、アナザーゴーストと対峙する。

「あんたをなおさんの所に絶対連れ帰って見せる!」

「うっ!? うわああああ!」

だがジオウの言葉は届かず。アナザーゴーストは奪った魂を解放し、体内へ取り込み強化すると、より激しくなった攻撃を仕掛ける。

「仕方ない……」

ジオウはライドハイセイバーの時計の針『ハンドセレクトター』を動かす。
『ハイ！ビルド！ハイ！エグゼイド！』

ビルドのシルエットからエグゼイドのシルエットへと変わり、エグゼイドのライダーズクレストがライドハイセイバーに浮かんだ。

『エグゼイド！デュアルタイムブ레이크！』

ライドハイセイバーの斬撃がアナザーゴーストに当たると“HIT”の文字が浮かび、最後に“GRAB”の文字が具現化した。

『ハイ！ゴースト！ハイ！ドライブ！』

再び針を回すと、今度はドライブのシルエットが浮かぶ。

『ドライブ！デュアルタイムブ레이크！』

ライドハイセイバーを振るうとドライブの3種類のタイヤの攻撃がアナザーゴーストに命中し、アナザーゴーストが倒れる。

『ゴースト！』

倒れてる隙にデイクイドウオッチへゴーストウオッチを装填する。

『ファイナルフォームタイム！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

今度は『ゴーストグレイトフル』と刻まれ、顔面と下半身の姿もグレイトフル魂に変わった『デイクイドアーマー・ゴーストフォーム』へと変り、そのままアナザーゴース

トへと向かっていく。

それを見て、ウオズはある疑問を感じた。

「何故君のウォッチを？」

何故自分の力のウォッチをジオウに託したのかと門矢士に尋ねる。

「そりゃあ……あいつ同様に歯ごたえのない相手じゃないと、面白くないからな」

そう言うのと戦いを最後まで見届けず、士は去っていった。

2018年、現代。

エール達はスマイルプリキュアと協力し、オシマイダーと戦っていた。

「プリキュア！マーチシユートー！」

緑色のエネルギー球を受けたオシマイダーが後ずさり、その隙にアンジュがプリハートをセツトした。

「フレフレ！ハート・フェザー！」

アンジュがハート・フェザーを発動し、オシマイダーを上に乗せ上げる。

「フレフレ！ハート・スター！」

「プリキュア！ピースサンダー！」

エトワールとピースがハート・スターとピースサンダーでオシマイダーを巻き付けて

振り下ろし、池に叩き付ける。

エール達が池のすぐ傍で構えると、オシマイダーは池から出て顔を近付ける。

「カツパの弱点は、あのお皿だよ！」

「ならうちに任しとき！」

サニーがジャンプし、オシマイダーの頭を超えた。

「プリキュア！サニーファイア！」

サニーファイアが当たった事でオシマイダーの頭が燃え、オシマイダーが頭の皿を冷やそうと慌てて池へ逃げようとする。

「逃がしません！」

ビューティーが池の方を向き、スマイルパクトを構える。

「プリキュア！ビューティブリザード！」

ビューティーブリザードを池へ放ち、池を凍らせられた事で逃げられなくなったオシマイダー。

「行くよ！エール！」

「うん！」

二人が最後の足掻きに巨大キュウリを握り締めるオシマイダーの前へと構える。

「プリキュア！ハッピーシャワー！」

「フレフレ!ハート・フォー・ユー!」

エールとハッピーの技が同時に放たれ、オシマイダーが浄化された事で周りも元に戻った。

そして、2015年でも決着が付きそうだった。

『フィニッシュタイム!ファイズ!ザックリカッツティング!』

ジオウがアナザーゴーストと戦って間に、ゲイツ・ファイズアーマーが眼魔コマンドを殲滅した。

「今だ一気に決めろ!」

「命、燃やしちやってみるぜ!」

ゲイツから一気に決めろと言われながら、ジオウはライドハイセイバーにデイケイドライドウォッチを装着した。

『フィニッシュタイム!』

ライドハイセイバーの時計の針を三度回し、回し終わるとジオウは構える。

『ハイ、カメーンライダーズ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!ハイ!セイ!』

『デイデイデイデイケイド!平成ライダーズアルティメットタイムブ레이크!』

「おりやああああー!!?」

カード型エネルギーを出現させ、左右連続で敵を袈裟懸けに切り、最後に縦に斬り裂く一撃を放ち、アナザーゴーストを爆炎に包みながら撃破した。

それによってなおの父は元の姿に戻り、アナザーウオッチも砕け散った。

そして、アナザーゴーストの消滅により病室で寝ていたソウゴも魂も体へと戻り、目を覚ました。

「よかった、アナザーゴーストを倒したのね」

「どう? 体に戻った気分は」

「うーん……ちよつとお腹すいちゃった」

「だよね!」

タケルの笑顔に見守られながら、ソウゴは生きていると実感が湧いていた。

「生きて帰って来られたー!」

「奇跡の生還なのです」

しばらくしてタケルやみゆき達と別れたソウゴ達は、奇妙な心霊現象による気絶から目覚めていたえみるを連れてハイキングへと戻る

「えみるちゃん!」

「みんな!無事なのですか?」

「いや、迷子になってたのえみるちゃんだから……」

「ことり達のはな達の元に駆け寄る。」

「迷惑掛けてごめんなさい……」

「ことり達を見たえみるが前へ出ると、自分が迷子になったせいでみんなに迷惑をかけたことを謝る。」

「そう言えば、さつき歌ってた?」

「えっ?」

「綺麗な歌声が聞こえて、歌を頼りにしたら三人を見つけられたの」

「そうだったんだ。えみるのお陰で助かった!」

「はなはえみるのお陰で助かったと感謝していると、ソウゴが目を輝かせながらえみるの方を見始める。」

「えみるちゃん、歌上手いんだね!」

「いや……その……」

「えみるの歌、イケてんじゃない」

「うん!」

「やっぱりえみるはヒーローだね！」

「将来は俺の宮廷詩人になって貰おうかな」なんてことを考えていると、えみるがもじもじとしながらはなの方へ顔を向ける。

「どうしたの？」

「ハイキングは、ハプニングの連続でしたが……ありがとうございます。はな先輩」

彼女は笑みを浮かべながら、はなのことを「先輩」と呼んだ。

「はな先輩に会えて、良かったのです！」

「はな……先輩……？ハグっと……！」

「何するのですか……！離して下さい……！」

先輩と呼ばれた事に嬉しくなったのか、感激に震えながらえみるを抱き締める。

「ヒーローってどう言う事？」

「二人だけの秘密なんじゃない？」

ほまれとさあやがそんな会話を繰り返しながらも、えみる達と別れて帰り道を歩くソウゴ達。

「あれ……？何か忘れてるような……」

「あ……！タンバリン！」

「……ああ!!？」

タンバリンを忘れた事を思い出すと、メロディタンバリンを持って行った猿が現れ、申し訳なきそうにタンバリンを返す。

「返しに来てくれたんだね」

「分かればいい!」

はなが親指を立てて鳴き声を言うと、猿は一礼して去って行った。

「何か、通じ合ったみたい……」

困惑気味なほまれに抱っこ紐で抱えられたはぐたんが、池の方を向いて両腕を伸ばし、何かに呼び掛けていた事に気付く一同。

「どうしたの?」

「帰りたく無いのかな?」

「何も無いけど……」

もしかして誰かいるのかと思ったソウゴがはぐたんの目の先にある池へ目を向けるも、池の先には何もなかった、

「ねえ!今日叔父さんがご馳走作ってくれたからみんな来ない?」

「行く!」

「ありがとう。ソウゴ君」

「それいいね!」

ソウゴ達はクジゴジ堂へ向かう。

——だが、みんなは知らなかった。さつき振り向いた池に本当は何か居たことを。

それからしばらくし、ソウゴ達はクジゴジ堂へ到着した。

「叔父さん、お腹へった!」

「ああ、お腹すいた? 今ね、ソウゴ君にお客さんが来てて、そのお客さんがソウゴ君のご飯食べちゃった。すぐ作るから!」

「えっ?」

お客と聞いたソウゴ達は、奥のリビングへと向かう。

「うくん。うまい」

中に入ると、そこには一人の男性がソウゴの分のご飯を食べ終えていた。

「誰? ソウゴ知り合い?」

「いや? 知らないけど……」

「じゃあ、誰?」

「あの、どちら様ですか?」

さあやが男性に何者なのか聞くと、男性は彼女の方を一瞥して直ぐに視線を外した。

「門矢士。通りすがりの仮面ライダーだ」

その男性：…門矢士がソウゴ達にそう名乗り、机の置かれた二眼レフのトイカメラを手取る。

「お前ら三人が新しいプリキュアか」

「「えっ?」」

驚きの声を上げるはな達を自前の二眼レフカメラのレンズに写しながら、シャッターを切る。

「ごちそうさま。美味かった」

「あつ、お粗末様でした!またよろしくお願いします。……つて、うち時計屋なんだけど」

そのまま順一郎に礼を言いながら去ろうとすると、ソウゴが士を追いかける。

「待って!俺に用があつて来たんじゃないの!?!」

「…ああ、そうだった」

本来の用を思い出した様なジェスチャーをする士は、ソウゴの方を振り向く。

「お前、王様になりたいんだってな?」

「うん」

「だが無理だ。この世界は、俺に破壊されてしまうからな」

世界が破壊される。確かにそう言い残し、門矢士はクジゴジ堂を出ていく。

「この本によれば、例え彼らが歴史に小さな変化をもたらしたとしても、門矢士の登場によつて大いなる歴史の流れが始まる。

そう、私の思い通りに……」

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第13話 未来の自分、その名を…オーマジオウ 2068

第13話 未来の自分、その名を…オーマジオウ 20

68

——とある荒地にて、黒と金の和服っぽい衣服を着た一人の白髪の男性と、半袖シャツを着た一人の茶髪の青年が対峙していた。

「……まったく、いきなりこんな所に拉致して、君は何を考えているんだ……」

「まあまあ、そんなこと言わないでよ。あんただって一回は彼らに会ってみたいでしょ？」

「余計なお世話だ。大体、私は……」

「それに、久しぶりにあの子の姿も拝んだ方が良くないんじゃないの？特にあんたの場合、今のうちに……ね？」

「……」

少しイラついた様子を見せながら呟いていた高齢の男性は、青年のその言葉を聞くと途端に黙り込み、自身の胸辺りに手を当てる。

「それじゃあ、俺はあっちに行つてたこ焼きとか買ってくるよ。確かあっちじゃあ今、お祭りをやってたよね？……あつ、何か欲しいものあつたら言つて——」

「待て待て待て、お前あつちに行つて大丈夫なのか？彼らに見つかったら色々面倒な事が――」

「大丈夫、大丈夫！取り合えず帽子とサングラスをかけておけばバレないつて。それじゃあ！」

青年はそう言つて黒のニット帽とサングラスを身に着けると、彼の姿がこの世界から消えてしまった。

青年の姿が見えなくなったのを確認した男性は、頭痛のする頭を押さえながら溜息を漏らしていた。

「……………ハア…、まあいい。おい、カッシーン」

「はい、我が魔王」

男性が何者かを呼ぶと、彼の傍らに一体の機械兵が跪いていた。

「よく来てくれた、カッシーンよ。」

「……………よくここまで直ぐに駆けつけることができたな」

「はい、我が魔王がああ青年に飛ばされたこの場所から、貴方様のお屋敷まで然程離れていませんでしたから」

「そうか…：それはそうと、カッシーンよ。今からお前に命令を下す」

「はい、何なりとお申し付けください」

「——お前にはこれから、2018年に向って貰う。

そこで明導ゲイツとハリハム・ハリー、ツクヨミ、そしてプリキュアを、この世から抹殺せよ」

「御意」

機械兵はそう返すと、そのまま男性の前から消えていった。

そして、只一人荒地に残った男性は、自分と一緒に連れ飛ばされた御簾の中に入り、そこに設置されている椅子に座った。

「……やれやれ。あの男は一体、どういう考えを持っているというんだ……」

先程対峙していた、一人の青年の姿を思い浮かべながら——

2018年の春中頃。

今日は、はぐくみフードフェスティバルと言うイベントの開催日で、ソウゴ達は開場前の会場に来ていた。

「チキン……カレー……ラーメン……焼きそば……パフェにアイス！あちらには未体験のスイーツが……！」

色んな食べ物に興味津々のはなが、よだれを垂らしながら興奮していた。

「私達、今日食べに来たんじゃ無いでしょ?」

「そう。キラツとお仕事しChao。記念すべき第一号は、ここのウエイトレスさんよ。しっかりね」

「「はい!」」

すみれがタウン誌の企画ページを見せる。

今日は訪れたのはタウン誌のコーナーの仕事の為で、はな達はウエイトレスとして手伝う事になっているのだ。

「大人っぽい、イケてる私になる為に、頑張るぞーっ!」

「流石、張り切ってるね」

早速ソウゴ達は森の中に移動し、ミライパッドを取り出す。

「それじゃあ衣装チェンジ、行くよ」

ほまれがミライクリスタル・オレンジをミライパッドの上部にセットする。

「ミライパッド、オープン!」

画面から光が放たれ、パッド内でドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン!……えっ?」

「あら……!」

ミライクリスタルの力で、さあやとほまれは可愛らしいウエイトレス姿になったが、

はなだけ服装が違っていた。

「何で私だけタコ……?」

何故か頭に鉢巻きを巻いた法被と腹巻姿：要するにタコ焼き屋風の格好になってしまっていたのだ。

「何で、はなだけタコ焼き屋? さあやとほまれはウエイトレスなのに」

「私が知りたい……」

私服にエプロン姿のソウゴが首を傾げて尋ねると、はなは泣きながらこつちが知りたいたと嘆いた。

「その格好だと、タコ焼き屋に行くしか無いね」

それぞれの手伝う場所が決まり、フェスティバルが開かれた。

「おわー、盛況やな」

開催されたはぐくみフードフェスティバルに人々が沢山訪れる中、はぐたんを抱っこ紐で抱えたハリー、ゲイツとツクヨミが現れる。

「あの四人、きばつとるかいなー?」

ハリーは右手を額に当て、ソウゴ達を探す。

「七十八番のお客様、はぐくみソフトクリームのバナラとチョコ、お待たせしました」

ほまれがトレイに乗ったソフトクリームを、注文した人達のいるテーブルに置く。

「おおー」

「お待たせ致しました。ポロネーゼラーメンととろとろ卵のカレーライスです」

さあやも同様に、ラーメンとカレーライスをテーブルに置く。

「おおー！」

「焼きそばお待たせしました。また来てください」

ソウゴは『クジゴジ焼きそば』と書かれた屋台で、叔父の順一郎と焼きそばを作っていた。

「叔父さん。大盛況だね」

「そうだね……けど、時計の仕事がしたい……」

商売繁盛しているが、順一郎は相変わらず時計の仕事がしたいと拗ねる。

「ソウゴんところ。繁盛してるな」

「……」

「ゲイツ？ソウゴがどうかしたの？あれ、そういえば、はなは……ん？」

ツクヨミがはなを探すと、タコ焼き屋の傍で立ち尽し、口をタコのように形作つてたのを見つめる。

「何でやねん！」

ハリーがツツコむのと同時に、はぐたんもタコの口を作った。

「はぐたん！」

「おおい、イケメン店長もおるで」

ハリーがさあやとほまれの元に歩み寄る。

「何だ、ネズミも来てたの」

「誰がネズミや！ハリーハム・ハリーさんや！」

「飲食店の周りでネズミ連呼したらダメだよ？」

「あつ、はい」

「ゲイツもツクヨミもいらっしやっい♪」

さあやに注意されるハリーをスルーしながら、エプロンを着たままのソウゴも二人前の焼きそばを持って椅子に座ると、はなだけが違う格好になった事を話す。

「ほーん、はなだけが違う格好に……」

「そうなの……この格好じや、自動的にタコ焼き屋担当にされちゃって……」

はなはタコ焼きの担当になったことに落ち込む。

「でも、あの店のタコ焼き屋、めっちゃ美味いよ」

「毎年出店してるけど、他のお店の人気に押されて今一つなんだって」

ソウゴはそう言つて、前にあそこの店で買ったタコ焼きの味を思い出し、さあやも補

足するように口を開いた。

「あそこの親父さん、愛想無いもんな。タコ焼き一筋五十年！って感じや」

「他の店はそこそこ並んでるけど、あそこだけはさっぱりねえ…」

ハリーとツクヨミがしかめつ面でタコ焼き器に向って淡々と作業を続ける、角刈りの店主を見ながら。確かにずっとああいう態度では、いくら美味しいタコ焼きが作れても買いに行きづらいだろうなと思った。

「はい、ピッツアすき焼き風とラムネ、のびのび麦茶」

「おおきに」

ほまれがハリーの注文したピザとラムネ、はぐたん用の麦茶を運んで来る。

ハリーがピザを食べ、はぐたんが麦茶を飲んでいる姿を見ながら、さあやは「どうしてはなだけ、違う制服になったのかな……」と気にした様子で呟いた。

「私のクリスタルでウエイトレスの制服になるって言ったのに」

「ハリー、何でなの……?」

「そら何か、ミライパッドはんの考えがあるんかもしれへんな」

「ミライパッドの考え?」

はなの疑問に、ハリーはミライパッドに何か考えがあるかもしれないと話す。

「そんなのある訳?」

「ああ見えてもミライパッドはんは深いんや。深過ぎて俺も……」

「分らないのね」

「けど、はなと二人の、何か違いみたいなモンを感じてるんかもな」

「私と二人の違う所？」

ハリーの話を聞いたはなだが、彼女にはさあやとほまれと自分の間にあるという違う所が何かのかわからなかった。

「ゲイツ。今日はやけに静かだね」

その頃ソウゴは、いつもは積極的に倒そうとしてくるゲイツがいつにもなく静かだなと思いつながら話しかけると、ゲイツに割り箸を向けられる。

「やはり、今日ここで終わりにする」

箸をソウゴの首へと向けてそう言い出すゲイツだが、肝心の本人は落ち着いた様子で対応する。

「そんな、物騒だなあ。この前、俺のこと助けようとしてくれたろ？」

ソウゴはこの間、アナザーゴーストに魂を抜かれた時、ゲイツは必死になって自身を助けようとしてくれた事を思い出す。

「俺はお前によつてもたらされた、最低最悪の未来を防ぎにここに来た！だが状況は変わった」

それに対し、状況が変わったと話すゲイツ。

「門矢士というわけの分からん奴が現れた……奴にお前が倒される前に……俺がお前を……」

「どうするの?」

「……今からでも遅くはない。ベルトを捨てろ! そうすればお前がオーマジオウになることは無くなる」

どうやって止めるのだと聞かれたゲイツは、ジクウドライバーを捨てると、まるで説得するように言う。

「それはできない相談だよ。俺は最高最善の魔王になるって決めたんだからさ」

「お前!」

それに対しソウゴは、魔王になる為にジクウドライバーを捨てることは出来ないと断る。

頑なに王になる事をやめようとしないうソウゴに、ツクヨミは「どうして王様になるって決めたの?」と、単純だが核心に迫った質問を投げかける。

「ああ……いや、別に生まれた時から王様になる気がしてただけだよ……」

「だったら話してあげれば? あの夢の話」

「夢?」

はな達がさあやの言うソウゴの夢について聞こうとすると……

「わー、混んでる……」

「思ったより人が多い……」

「いかがなさいましたか？」

すぐ傍で二人の女子が困った表情を浮かべていた事にさあやが気付き、声を掛ける。

「急いでるんだけど、時間掛かりますか？」

「アメリカンドッグ、焼きそばでしたら二分程でご利用出来ます」

ミライパッドで料理の出来上がる時間を確認し、アメリカンドッグと焼きそばなら二分程で用意出来ると伝える。

「でも、せっかくだから人気メニュー食べたいよね？」

「うん」

「でしたら、はぐくみチャウダーはいかがでしょう？人気店ですが、ご利用まで三分二十秒程です」

「いいねそれ！」

「それにします！」

「「ありがとう！」」

二人の女子は適切な対応をしてくれたさあやにお礼を言い、教えられた店へ向かった。

「さあや凄いい……！」

「料理の調理時間を全部データにしておいたの」

「全部!?」

前もって料理の調理時間を全部データしたと聞き、はなは驚く。

「あつ！俺、そろそろ戻らないと。ごめんまた後で！」

昼時になって人も増えて混み出したため、ソウゴは叔父の元へと戻る。

「……………覚悟を決めなきゃいけないのは、俺のほうか」

「え……」

ゲイツは走っていくソウゴを見つめると、これまで共に戦ってきた仲間の一人にふと、自身の心の内を吐き出し始める。

「俺は戦士だ。この時代に来るまでは、どんな手を使ってでも最悪の未来を防ごうとしていた」

「今は違うの?」

「奴が最低最悪の魔王になるはずがない。そう考えだした自分がいた……だから、あんなに甘い態度をとってしまう」

さっきのように、ベルトを捨てろと言ってしまった事が甘い態度だったと反省する。

それからしばらくし、はながタコ焼き屋の方に戻るが、ここだけは行列が出来て無かった。少なくとも此処一時間は、先程タコ焼きを二つ程買っていったニット帽とグラサンを身に着けた青年以外に、誰かが買った様子は見当たらなかった。

「私も何かやんなきゃ!」

何かやらなきゃと思いつた彼女は、そう張り切りながら店の前に出る。

「さー、らっしやいらっしやい! タコ焼きいかが! 美味しいよ! 熱いよ! 丸くて熱いタコ焼き、一筋五十ねーん!」

「五十年だど!?」

はなが呼び込みに精を出している最中、店長がタコ焼き屋歴を勘違いした事に怒鳴る。

「六十年でしたか……?」

「四十九年だ」

「すみません……」

四十九年と伝えられ、はなが震えて委縮しながら頭を下げて謝る。

「呼び込みなんざいらねえ。こちとら、味で勝負の四十九年だ。静かにしてろ」

「は、はい……！」

その直後、サンドイッチ屋から料理が上がったのを聞き、少しでも名誉挽回しようとしてトレイを受け取って運びに向かう。

だがすぐ近くの列から子供が出て来た事に驚き、サンドイッチと飲み物の乗ったトレイを誤って飛ばしてしまい、転んでしまう。

「めちよつく……！」

地面に落ちそうになった所へ、ローラースケートを履いたほまれが右手でキャッチし、はなの方を向いてピースサインを送る。

「ほまれ……！……！ナイスキャッチ……！」

泣きながらそう言い、右手の親指を立てる。

「お待たせしました」

器用に滑り、注文したテーブルに運ぶと、周りの人達から拍手が湧いた。

「ほまれも凄いなあ……！」

「近くの観光ですね？タワールの後は、はぐくみ博物館がオススメです」

はなが表情を曇らせながら視線をずらすと、さあやがミライパッドを使って観光案内をしていていた。

「はあ……さあやとほまれは同じ歳なのに、何でこう違うんだろ……」

新しいミライクリスタルも、私だけ、無い……」

さあやとほまれは既に二つ目のミライクリスタルをゲットしたにも関わらず、自身だけゲット出来ない事を思い出し、徐々に自信を無くしてしまおう。

「元氣だしなよ」

「ありがと……」

ソウゴがベンチに座るはなに紙パックのジュースを差し出す。

「どうしたの？元氣無いね」

そこへさあやとほまれもやってきた。

「私……何も出来ない……」

「はな……」

「何言ってるの！人と自分を比べたってしょうがないじゃん！はなははなでしょ？」

「はなははなでも、何も出来ないはなだもん！」

そう叫ぶと走りだし、ソウゴ達の前から去っていった。

クライアス社の会議室では、社員全員が集められていた。

「新しいプリキュアが生まれてから、データに無いミライクリスタルが五つ出現。アス

パワワを著しく増加されると予測されます」

ルーラーが淡々と社員に報告を行う。

「その上、若き日の会長は力をどんどん上がっています。このままでは……」

「社長は非常にご立腹ですよ。プリキュアと若き日の会長の為に計画が一向に進まないとね」

リストルはパップルをチラツツと見ながらそう話した。

「ちよつと！あたしのせいだったの？」

「ミライクリスタルの奪取は、プリキュアと若き日の会長のせいで失敗続きだ」

「しもしも……！じゃなかった。そもそも、チャラリートが最初に失敗した上に、ちゃんと報告しなかったのが原因なの！」

パップルは計画が進まないのはチャラリートのせいだと責任転換を行っている、部長の椅子に座っていた、口髭と赤リボンで止めている三つ編みの顎鬚が特徴の男性……ダイガンが眼鏡を光らせる。

「どうやら、私が出張らねばないようだな」

「ちよつと部長！それって私も左遷部屋行きて事……？」

「既に先に行ってるチャラリートと似た者同士、仲良くする事だ」

「チーフ！冗談じゃないわよ！あの無能チャラ男と一緒にしないで！

見てらっしやい！あたしのブツ飛びな活躍を……」

スウォルツに反論するパップルは、ジオウとプリキュアを倒しに去っていく。

「大変だ！」

「どうしました。ウール君？」

すると彼女と入れ替わるように、ウールが会議室へと現れた。

リストルはウールの慌ただしい様子に眉を寄せながらも、落ち着いた様子で問いかける。

「ダ、ダ、ダイマジンが……ッ……？」

刹那、ダイマジンという言葉聞いた全員に、動揺の波が広がる。

「まさか、彼の方が動かれたのか……」

「………我々の狙いが読まれた……？」

「オーマジオウの奴。本気で世界を壊しちゃうつもりかな？」

「確かに本来の歴史よりまだ早過ぎる。私達の介入に気付き、あの日を早めるつもりか？」

「今のジオウはまだ若い……でもあいつがあれになったら……もう手がつけられない！」

社員全員が言う「あの日」、その時が予定よりも早く来る事を何よりも恐れているの

か、誰もが冷や汗を垂らした。

しかしその中でリストルは他の社員よりも冷静さを保ちながら、同じく冷静そうなスウォルツを一瞥しながら口を開いた。

「しかし、そのためにウォズが連れてきた男がいる」

「あれが全部魔王の仕業か」

同じ頃、特別室の窓からその様子を見ていた門矢士は、窓越しに巨大なロボットの様なものが動いている、外の様子を見ていた。

「全く……やばい奴だな。ほんとにあれがあつちで動き出したら、世界がぶっ壊れるのか?」

「いとも簡単に……あつけなくね」

ダイヤモンド……それが動く時、世界はあつという間に消すと、そのマシンについてオーラが説明する。

「俺が時見ソウゴを倒せばどうなる?」

「もちろん、最悪の事態は免れるわ」

「そうか……じゃあ、答えは簡単だ」

士はマゼンタ色のドライバーを取り出しながら、答えは簡単だと話す。

フェスティバルのイベント会場で、ラヴェニール学園吹奏楽部のコンサートが行われていた。

気分転換にコンサートの視聴をしに来たはなは、吹奏楽部所属でクラスメイトのひなせに猛烈な拍手を送っていた。

「凄い！もうガン！と来たよ！」

「ありがとう」

「みんなで一つの音楽を——」

彼女はそう称えかけるも、ひなせの後ろをほまれが通り過ぎるのを目にして、更にはさあやも視界に知れてしまった事で、言葉が出なくなってしまった。

「野乃さん？」

「…みんな輝く才能を持つてるのに、私には何も無い……」

何もないとシヨンボリする姿に、ひなせは何かあったのかと思いつながら言葉を繋いでいく。

「野乃さんにだってあるよ。輝く個性が」

「えっ？」

「——吹奏楽はね、色んな楽器でハーモニーを作るんだよ。」

一つの楽器だけじゃ無く、色んな楽器の音がある。楽器一つ一つの個性が合わさって、想像を超えた素敵な音が奏でられるんだ。

…野乃さんは、野乃さんしか出せない音を、思い切り奏でればいいんじゃないかな？」

「そんな難しい事言われても……」

はなはタコ焼き屋に戻ってからそう呟き、店長の方を向くと険しい顔でたこ焼きを焼く光景が映る。

「でも、何かやらなきゃ……」

一瞬ビクツとなって視線を逸らすも、ひなせの言葉を思い出しながら呼び込みを行う。

「らっしやいらっしやい！美味しいタコ焼き、いかがですかー!?？」

「おーい！」

「ツ！ また……すみません……」

「…食ってみろ。食いもしないで、何故美味しいと思う？」

怒鳴られてまた怯んだはなに、店長がタコ焼きの刺さった爪楊枝を差し出す。

「あ……私……」

「ほれ、冷めちまうだろ?」

「は、はい……」

爪楊枝を受け取ってタコ焼きに息を吹きかけて冷まし、口に入れる。

「美味ひーい!」

その瞬間。彼女はあまりの美味しさにテンションが上がり、毎踊りながらその美味しさを表現し始めた。

その時の行動を見た人達が、はなのオーバリアクションを見て笑っていた。

「ごめんなさい……!」

「あん?」

笑い声を聞いたはなは恥ずかしさで頬を赤くし、ごめんなさいと謝る。

しかし店長は彼女が突然謝りだした理由を一瞬理解することが出来ず、素っ頓狂な反応をしてしまう。

「笑われちゃいました?本当に……何も出来なくて……!」

謝罪しているうちに自分が情けなくなり、はなの目には涙が溜まる。

「つつ……!」

「お、おい!待て!」

そのまま泣きながら走っていくのを店長が止めるが、はなは止まらず去っていく。

空が赤みがかかるまで走り続け、少し疲れたのか悲しげな表情で埠頭付近のベンチに座ったはな。

そんな彼女の元に、はぐたんを抱っこ紐で抱えたハリーと、タコ焼き屋からいなくなった彼女が心配で探しに向かっていたソウゴが現れる。

「はなー？大丈夫？」

「はぐたん……ソウゴ……」

「ちよお！ワイはスルーか？！？ どないしてん？おつかしな顔しよつてからに」

「顔？」

「こないな顔しとるやんか」

自分だけスルーされた事にいつものツツコミをいれつつ、ハリーは手を頬に当てて変顔を作る。

「いつもはこないな顔やけどな」

今度はテンションの高い表情を作り、両腕を上下に動かす。

「私なんて……変顔しか出来ない……ダメダメなんだ……！」

それを見たはなは、いきなり自分をダメダメだと呟く。

重々しい雰囲気ハリーはふざけるのを辞めてソウゴと目を合わせ、何かあったのか

と問いかける。

「……………私ね、大きくなったら、何でも出来る、何にでもなれるって思ってたの…………」
「はな、まだお前は、大人の階段上る途中や。それはどう言う事かつちゅうと——」
「なのにも何も……………何も出来ないよ……………」

自己嫌悪に陥って聞く耳を持つことの出来ない彼女を見兼ねたソウゴは、今自分がかけることのできる言葉を話そうとする。

「そうかな…………？　何も出来ないなら、何でも頑張って挑戦することが大事じゃないかな？」

「挑戦…………」

これで少しは元気になればと願いながら励めますが、まだいつもの明るさが戻らない彼女の様子に、これは重症だなど困り顔になる。

打倒プリキュアとジオウの為、会場へ現れたパップル。

中に入ると、はなのリアクション効果もあって、昼間とは打って変わってタコ焼き屋には大行列が出来ていた。しかし彼女の視線は、タコ焼き屋の店長に行く。

「何も出来ねえって事は、これから何でも出来る可能性があるってこった。

何故、そう言ってやれねえんだ……………俺って奴は…………」

「超ラッキー！トゲパワワ見つけ」

女の子一人を慰めることさえ出来ない、自分の不器用さを恨んでいたタコ焼き屋の店長からトゲパワワを発見した。

「煽って、煽って、フウツフウツ！明日への希望よ、消えろ！ネガティブウエーブ！」
パツプルが扇を振りながらバブリーダンスを踊り、ネガティブウエーブを放出させる。

タコ焼き屋の店長からトゲパワワを取り出されていく。

「しもしも〜？発注。オシマイダー！」

暗黒の雲がタコ焼きに憑り付き、タコ焼き型オシマイダーが作り出された。

そこへオシマイダーの出現に気付いたソウゴ達が駆け付けた。

「クライアス社や！はな！ソウゴ！」

「うん！」

『ジクウドライバー！』

「ミライクリスタル！ハート、キラつと！」

ソウゴがドライバーを腰に装着した横で、はなはミライクリスタルをセットする。

…しかし、どういうわけか何も反応がなかった。

「——えっ？」

「はなー！」

「ハート、キラつとー！」

もう一度試すも、やはりプリハートが反応しない。

「どうして？？」

「しつかりしいやー！集中やー！」

「はなー！」

「さあや……ほまれ……」

プリハートの異変に困惑してい居ると、そこへ騒ぎを聞きつけたゲイツとさあやとほまれ、ツクヨミが駆け付ける。

「オシマイダーか……なら」

ゲイツがホルダーからゲイツウオッチを外そうとした。その時…

〈ドーンー！〉

突如、何かが落下した様な爆音を響かせながらソウゴ達の前に、銀色の機体で各所を血のように赤く光らせる巨大なロボットが現れた。

「ツ？？ あれは……」

そのロボットはいきなりオシマイダーに向かって強烈な光線を放ち、一瞬のうちにオシマイダーを塵にして倒してしまった。

「オシマイダーを、一撃で……」

「凄いパワー……」

そのロボットのパワーにはな達が驚いてると、ゲイツやハリー、ツクヨミは警戒心を強めていた。

「ダイマジン……!」

「なんで……ここに来たのよ!」

いきなりダイマジンが現れたのを見て、パップルは急いで去っていった。

「同じだ……夢で見たのと……」

何故ダイマジンが出現したのかと驚いていると、ソウゴの口から夢で見た物と同じ奴だと言う発言を耳にした一同。

「おい!夢で見たと言ったな。どうゆうことだ?」

「……子供の頃、不思議な夢を見たんだ」

何故、この光景を夢で見たのかとゲイツが問い。ソウゴがさつき言っていた、夢の話を見んなに話す。

「あいつが世界を破壊してた。みんながどんどん死んでいく……」

夢の中では、ダイマジンが世界を破壊していき、建物も人も、まるでゴミを掃除するかのようにな人を襲っていた。

「俺はただそれを……見てるだけしかできなかつた……」

そこに……不思議な男が現れて、俺に言ったんだ……

『少年よ。お前は生まれながらの王。お前には王となり、世界を破滅から救う使命がある』、つて……」

「ソウゴ君……」

「それから、繰り返し何度も何度も同じ夢を見た。

だから俺は、いつか王様になるんだつて……」

その夢は、子供が見るにしては、余りにも非現実的で非道的なモノ。

それがソウゴが見た、正に悪夢の様な夢……

しかしダイヤモンドは今にも、はな達の前で猛威を振るおうとしている。

ソウゴにとっては夢の中の絵空事であるはずの破壊兵器は、

ゲイツ達にとっては最低最悪の象徴である殺戮の巨人は、

今ここにいる人々に大災害を齎そうとしていた。

すると、目の前で時空の穴が開き始める。

「みんな！」

そして時空の穴から、マントを羽織った人型のロボットのようなのが三又槍を持って現れた。

「あかん！奴は？？」

「何なのあいつ…………？」

「こいつは…………」

ゲイツとハリー、ツクヨミがそのロボットを見て警戒する。

「クライアス社…………？」

「我はオーマジオウ様の忠実な僕、カッシーン」

カッシーンと名乗る謎のロボットは、自らをオーマジオウの僕と名乗る。

「我が魔王の命により。ゲイツ、ハリー、ツクヨミ、そしてプリキュアを抹殺する」

淡々と告げながら、カッシーンはゲイツ、ハリー、ツクヨミを殴り飛ばそうと襲いかかる。

「やめろ！」

襲い掛かってきたカッシーンを止めようとソウゴが前に出る。

「お下がりでください、我が魔王。貴方の命令にございます」

「えっ？」

「ソウゴの命令…………」

だがカッシーンは、ソウゴの命令だからゲイツ達を倒すと答える。

その様子を離れた所からウオズが見ていた。

「時は来た。時計はもう元には戻せない。もう後戻りはできないよ、我が魔王」
カッシーンの攻撃をゲイツは避けながらジクウドライバーを装着した。

『ゲイツ！』

腕のゲイツウオッチを外してウオッチを起動させ、ドライバーに装填する。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

仮面ライダーゲイツへと変身し、カッシーンを応戦する。

「あかん！ゲイツ一人じゃ危険や！」

「ほまれ！私達も！」

「うん！」

二人はプリハートとミライクリスタルを取り出した。

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

クリスタルをセットし、二人の体が光に包まれた。

「輝く未来を抱きしめて！みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「輝く未来を抱きしめて！みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

アンジュとエトワールも加わり三人でカッシーンと戦う。

「やめろ！ゲイツやアンジュ達は敵じゃない！」

「聞くことはできません。これはすべてあなたのため……」

ソウゴの制止の言葉を聞かず、カッシーンはゲイツ達の攻撃を止めようとはしない。それを見てソウゴはジオウオッチを起動させる。

『ジオウ!』

「このわからず屋! 変身!」

ウオッチを装填し、走り出すとドライバーを回す。

『ライダータイム! 仮面ライダー! ジオウ!』

カッシーンを止めようとジオウへ変身すると、ゲイツ達を助けようと駆け寄る。

だが、ジオウの前に門矢士が現れた。

「あんた……俺の飯を食った人か」

「俺がお前の相手をしてやる」

マゼンタカラーのドライバー……『ネオデイクイドライバー』を腰へ装着し、一枚のカードを見せる。

「変身!」

カードを腰に装着したドライバーに差し込み、真ん中の左右にあるレバーを操作した。

『KAMEN RIDER! DECADE!』

十九つの影がひとつになると上の方に数枚のプレートが現れ、その頭部を縦に貫きはめ込まれ、黒とマゼンタの仮面ライダーとなった。

デイケイドとなった仮面ライダーはジオウへと襲いかかり、ジオウもそれに応戦する。

「やめてくれ！俺はみんなを助けないと！」

「そうは行かないな」

「どうして邪魔をするんだ？？」

「何故だろうな？今、俺はその理由を探している」

ジオウを払いのけ、デイケイドは違うカードを見せる。

「それは……」

そのカードは仮面ライダービルドだった。デイケイドはそのカードをドライバーの真ん中へと差し込む。

『KAMEN RIDER！BUILD！鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

ドライバーから出現したチューブから形成されたアーマーが、デイケイドの体に重なった。

「ビルド……それなら！」

ビルドになったのを見て、ジオウはこの前手に入れたウォッチを取り出した。

『デイ・デイ・デイ・デイ・ケイド!』

デイ・ケイドウォッチを起動させ、ドライバーへと装填すると、襲いかかるビルドをベルトから出るカード型エネルギーで遠ざける。

『アー・マー・タイム! カメンライド! ワーオ! デイ・ケイド! デイ・ケイド! デイ・ケイド!』

「俺が渡したウォッチか」

ジオウがデイ・ケイド・アー・マーを装着し、さらにビルドウォッチを起動させる。

『ビルド!』

デイ・ケイドウォッチにビルドウォッチを装填した。

『ファイナルフォームタイム! ビ・ビ・ビルド!』

ビルドスパークリングへとフォームチェンジしたジオウはその後、自身の握るライドハイセイバーとビルド・デイ・ケイドの武器がお互いにぶつかり合う。

火花を散らし続ける攻防に、ジオウがパンチを繰り返す、ビルドを後ずさる。

するとビルド・デイ・ケイドはまたカードを取り出してドライバーに差し込み、それを見てジオウもドライバーを回す。

『FINAL ATTACK RIDE! BU BU BU BUILD!!?』

『ビルド！ビルド！ファイナルアタックタイムブ레이크！』

ビルドディケイドから現れた放物線とジオウから現れたワームホール。二人は跳躍し、お互いにライダーキックがぶつかる。

「オリヤヤヤヤヤ！！？」

ライダーキックの衝突はジオウが軍配があつた。

「なるほど……」

起き上がったビルドディケイドはドライバーを引き、ビルドのカードが消えた。

「だったら、こつちの姿の方がいいかな」

『KAMEN RIDER！DECADE！』

もう一度ディケイドのカードを見せると、再びディケイドとなり、ジオウとの戦闘を再開する。

さつきまで優先だったジオウだが、今度はディケイドの方がジオウを押ししていた。

「こいつ……強い」

「我が魔王よ！」

ジオウの苦戦を目の当たりにしたカッシーンは、ゲイツ達を振り払い、ジオウの援護へ向かう。

そのまま、ディケイドの攻撃からジオウを守った。

「何だ？そいつもお前の仲間か？」

「違うっ！」

「何が違うんだ？」

一度は否定するが、否定する言葉が出なかった。

「力を貸せ、門矢士。ここでジオウを終わりにする」

そこへカツシーンがジオウを庇つたのを見たゲイツが、デイケイドに共闘を持ちかける。

「ゲイツ！そいつはクライアス社の仲間よ！」

「ジオウを倒すためなら、敵の力だって借りてやる。はああああー!!？」

ジカンザックスでジオウに振りかかる。

「やめてくれ！俺はゲイツを助けたいだけだ！」

「お前に助けられる筋合いはない！」

ジカンザックスをジオウに押し込もうするも、またカツシーンが守った。

「邪魔をするな！」

「ゲイツ！」

ゲイツを助けようとするが、またしてもデイケイドがジオウの前に立ちはだかる。

「フレフレ！ハート・フェザー！」

「フレフレ！ハート・スター！」

アンジュがハート・フェザーを発動し、カツシンの攻撃を防ぐ。その隙にエトワールがハート・スターを放ち、カツシンを吹き飛ばした。

それを見て少し安心してしていると、ジオウを抑えていたデイケイドは時の魔王の姿を見据えながら言葉を発する。

「動揺してるみたいだな」

「動揺……？」

「分からないのか？お前の仲間はゲイツって奴でも、あのプリキュア達じゃない。魔王、あいつがお前の手下だ」

「!?……あんな奴、俺の手下なんかじゃない！」

ジオウは否定するが、デイケイドの言葉に一瞬言葉が詰まる。そこにウオズも現れた。

「我が魔王。そろそろ認めてくれないかな？」

自分が進む覇道を邪魔する者は誰一人許さない！それが私の知っている君だ」

「違う！俺がゲイツ達を抹殺したり、世界を無茶苦茶にしようなんて思うはずがないっ！」

「…そうか。じゃあ見てくるか？」

デイケイドが腕をあげると、ジオウの背後に灰色のオーロラカーテンが現れた。「会つてみるんだな。未来の自分を！ハア！」

そう言うや否やジオウを銃撃し、オーロラカーテンの向こうへ追いやる。

『ソウゴ！』

はな達も後を追ひ、カーテンの中へと入る。

「素晴らしい！我が魔王が我が魔王に出会う。歴史にどんな影響を与えるのか……！」

「ジオウが消えた……」

「奴なら2068年だ」

「ジオウが2068年に!?？」

2068年——つまり、オーマジオウがいる時代に送つたと聞き、ゲイツは驚きを隠せなかった。

「無実の罪と思ひながら死んでいくのは不憫だからな。現実を教えてやろうと思つたままで」

「君の配慮に感謝するよ。いつまで経つても、魔王たる自覚がなくてね」

「貴様の目的は何だ？ウオズ」

「私は私の望むままに行動しているだけだよ」

その頃、2068年へと送られたソウゴ達。

「う、うつ……ここは……」

皆が目を開けると、モノクロ写真の様に灰色へ染まった景色が、辺り一面を染めていた。

そして灰色に色あせた空に浮かぶ雲も、人も鳥も、石像のように止まっていた。

更に後ろを振り向くと、ソウゴ達はあるものに目を大きくして驚いた。

「これって……」

「ソウゴ君……?」

「……俺?」

そこには、ビルドやエグゼイド……それぞれ18人の仮面ライダーの像に囲まれた、自分の変身するポーズの像が立っていた。

「時見ソウゴ初変身の像……じゃあ、ここは……?」

「ここは、2068年……」

ソウゴ達の世界から50年後……あなたが魔王として君臨した世界よ」

ツクヨミ曰く。ここは、ゲイツやツクヨミ、ハリー達のいた未来だと語る。

「ここの人達は……」

「クライアス社がみんなからアスパワワを奪って、オーマジオウが時間を止めたんや

……」

「じゃあ今、動いている人間は……」

「私やゲイツ、ハリーだけ……」

「そんな……」

「本当に俺が……」

それを聞いたソウゴは、未来の自分が時間を止めたという事実を、未だに信じられずにいた。すると……

『ウウウウウウウウウ!!?』

鳴き声が聞こえ振り向くと、灰色の空から赤い龍が現れ、ソウゴ達を包囲するように囲む。

「なんだこれ……」

赤い龍はソウゴ達を何処かへ移動させて、役目を終えたのか彼らから離れて何処かへ去っていく。

辺りを見ると、さつきまでとは違う、荒れ地のような場所へと変わった。

「誰か……いる」

その時ソウゴの目に映った光景には、ポツンと置かれた御簾があった。

「——夢の話でしょう。私が若き日に見た夢の話だ」

すると、御簾の中で椅子に座っている影が動き出し、静かに語り始めた。

「えっ?」

「——異形の機械が、世界を破壊する」

「!?」

ソウゴは聞き覚えがある話に驚く。

「——皆が死んでいく……」

私は……立ち尽くすだけ……

そこに一人の男が現れた。そのものが幼き私に言った……

『お前は生まれながらの王。お前には王となり、世界を破滅から救う使命がある』、とな

「ソウゴ君が見た夢と同じ……?」

「つてことは……」

「今日の前にいる、この人……」

「俺?」

「そう、オーマジオウ……」

あの話を知っているのは自分と、先程その話を聞いたツクヨミ達だけのはず。

それを一寸の違いも無く知っている上で、はな達に語った話を全く同じ様に語ることが出来るのは、己自身だけという事になる。

それ故に、未来の自身について酷く樂觀視して来たソウゴは御簾の先にいるのが、未来の自分なのだと驚く。

「フフフフ……何を驚いている。若き日の私」

「……じゃあ、やつぱり俺がオーマジオウ？」

「まさか、今の今まで信じてた訳ではあるまいな。自分はオーマジオウにならないと」

「——嘘だ、嘘だ。嘘だあつ！」

どうやらソウゴは、未来の自分がオーマジオウになるとは本気で思っただけで、今日の前にいる男の言葉を大声で否定し続ける。

「嘘ではない。私は王になりたいと願い、世界を救った。未来のお前だ」

「俺はあんなことするわけではない！俺は……最高最善の魔王になるんだ！」

最高最善の魔王になる。

それを聞いた未来のソウゴは、口を大きく歪ませて笑い声を高々と上げる。

「ウハハハハハ……その通り。」

——私こそ、最高最善の魔王」

空が灰色になり、人も鳥が石像のように止まっていた。

希望も夢も、未来も無い。最低最悪同然の世界を見たソウゴに向かって、未来のソウゴは、自分こそが最高最善の魔王だと答える。

「だったらここで……お前を倒す！」

『ジクウドライバー！』

「ソウゴ！」

「どけっ！」

冷静を失ったソウゴを制止させようとしたツクヨミを払いのけると、彼は怒り心頭のままジオウウオッチを取り出す。

『ジオウ！』

ジクウドライバーを装着してウオッチのウェイクベゼルを回し、D、9スロット側の差し込み口に入れる。ドライバーのライドオンリユーズーザーを押してロックを外し、時計が背後に現れた。

「変身!!?!!?!!」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ジカンギレード！ジュウ！』

ジオウに変身し、ジカンギレードをジュウモードにすると、更にフォーゼライドウオッチを装填した。

『フィニッシュタイム！フォーゼ！』

ジカンギレードを未来の自分へと向ける。

「お前を倒して、俺は未来を救う！」

「……………」

『フォーゼ！スレスレシューティング！』

未来のソウゴが過去の自分を静視しながら腰に何かを装着すると同時に、ロケットモジュール型のエネルギー弾が御簾へと撃ちこまれた。

「やったの…………？」

確かに直撃したはず、少なくとも只では済まないと考えていた。

しかし、爆煙の中から人影が見えた。

「……………どうして？」

爆煙から何事も無かったかのように現れたその姿は、肩から黄金のベルトをかけ、背中には時計の針二本がマントの様になっていて、黄金に輝く豪華な時計の針の付いた顔には3つのクロノグラフがついたGショック時計風に、複眼には赤い字でジオウと同じく『ライダー』と書かれていた。

「あれが、オーマジオウ…………」

「——懐かしい。かつての私はそんなものだったか。ふうん！」

「うわあ！！？」

その黄金のライダー……オーマジオウは手をかざしただけで、ジオウを圧倒的な衝撃波

で後方へ吹っ飛ばす。

「そ、そんな……」

「安心するがいい。遠くない未来、お前もさらなる力を手に入れる。魔王にふさわしい力をな……」

「黙れえええーっ!」

『デイ・デイ・デイ・デイケイド!』

喚き散らすかのように、デイケイドウォッチをドライバーへと装填し、ドライバーを回す。

『アー・マー・タイム! カメンライド! ワーオ! デイケイド! デイケイド! デイ・ケイ・

イードー!』

『ライド・ハイセイバー!』

デイケイド・アー・マーを装着したジオウは、ライド・ハイセイバーを待ち構え、ライド・ハイセイバーの時計の針を回す。

『ハイ! クウガ!』

ライド・ハイセイバーからクウガと音声が鳴ると、オーマジオウはウォッチを取り出した。

『クウガ!』

『クウガ！デュアルタイムブ레이크！』

ジオウはライドハイセイバーから紋章を放つ。

しかし、オーマジオウはそれをあっさり受け止めた。

「そんな……!?」

そのまま、オーマジオウの足元に巨大な紋章が浮かび出し、そのエネルギーを右足に乗せて蹴りだしてジオウへぶつける。

「うわああ！」

直撃したジオウは吹き飛ばされるも、すぐに起き上がった。

「まだだ！」

「己の思いを曲げぬか。それこそ、王の証だ」

「うるさい！」

もう一度ライドハイセイバーの時計を回す。

『ハイ！キバ！』

「愚かな」

『キバ！』

ライドハイセイバーにキバのライダーズクレストが浮かぶと、それを見たオーマジオウは今度はキバのライドウォッチを起動させる。

『キバー！デュアルタイムブ레이크！』

ジオウはライドハイセイバーから無数のコウモリ状の攻撃波を放つ。

だが、オーマジオウはそれをかき消し、逆に黒い大量のコウモリで攻撃される。

「強すぎる……」

「もうヤメエ！今のお前じゃあ！かなわへん！」

「ヤダー！」

『ハイ！龍騎！』

ハリリーの忠告を無視し、ジオウは再び起き上がる。そしてライドハイセイバーの針を、また回した。

『龍騎！デュアルタイムブ레이크！』

ライドハイセイバーの刃に炎を纏わせ、オーマジオウに突進する。

「ソウゴー！」

『龍騎！』

オーマジオウが落ち着いた様子で龍騎ウオッチを起動させると、ジオウの前に巨大な赤い龍が現れた。

「さっきのドラゴン？？」

そのドラゴン——ドラグレッダーは巨大な尻尾を振り、ジオウを吹き飛ばした。

吹き飛ばされたジオウはそのまま変身解除してしまう。

「そんな……」

「ソウゴ！大丈夫!？」

はな達がソウゴに駆け寄ると、オーマジオウへと振り向く。

「だったら……」

ソウゴのピンチだと感じたはなが、現代で起こった事を受け入れられないまま、プリハートとミライクリスタルを取り出した。

「ミライクリスタル！ハート、キラっと！」

だがやはり、プリハートは反応はしない。

「ハート、キラっと!!」

何度も試すが、プリハートは変わらず反応しない。

まるで、未来を夢見ることの出来ない貧弱な奴に貸す力など無い、と言っているかのように。

「なれない……！私……プリキュアに……なれなくなっちゃったよ……！」

その事実で涙を流し、プリキュアになれなくなった事に、はなは膝をついた。

そんな絶望的な光景を、オーマジオウは「その程度の事で絶望するのか？」とでも言わんばかりに、ただ冷たく、目の前で醜く涙を流して生き恥をさらす小娘を、哀れに思

いながら見つめていた。

「…プリキュアになれないのなら邪魔だな。消えろ」

はなを邪魔に思ったオーマジオウは、氷よりも冷たい声で呟くと、呼び出したドラッグレットの炎の球をソウゴ達に向けて放った。

「アカン！逃げろ！」

「ソウゴ（君）！はな！」

炎の玉は徐々に近づき、アンジュとエトワールが盾になろうと前が出る。

そして紅い破壊の塊が四人に当たりそうになった、その時…

「はぎゅ〜！」

「!？」

ソウゴとはなの前にハート型のバリアが作られ、オーマジオウの攻撃がぶつかって止まった。

「はぐたん！」

二人がバリアを創造した光の元を辿ってハリーの方を向くと、身体を輝かせるはぐたんが両腕を出していた。

「アカン！はぐたん止めえ！はぐたんアカン！それ以上はもう……！」

ハリーの制止をも聞かないままはぐたんは力を振り絞り、額の飾りから光線を放って

オーマジオウの攻撃を相殺した。

「オーマジオウの攻撃を……」

「はぐたん凄い!?」

ツクヨミとはなの二人がはぐたん凄いと驚きの声を上げ、はぐたんの方を振り向く。

「はぐたん! はぐたん!」

だがそこには、只ならぬ雰囲気を出しながら、ハリーがはぐたんに呼び掛ける光景が目映っていた。

「どうしたの?」

「はぐたんが……目覚まさへん!」

「えっ? はぐたん?」

なんととはぐたんは、さっきので力を使い果たしてしまったのか、水色に輝いていた額の飾りをピンク色に点滅させ、目を覚まさなくなってしまったのだ。

「そんな……はぐたん……俺のせいだ……」

オーマジオウに手も足も出ず、拳げ句の果てにはぐたんに守ってもらい、皆に迷惑を掛けてしまった事に責任を感じ始める。

そんなソウゴを、必死に呼びかけるはなには目もくれずにハリーの腕中で眠るはぐた人を瞥見していたオーマジオウは、彼へ視線を移しながら口を開く。

「……………それほど魔王になるのが嫌だと言うなら、良い方法を教えよう。そのベルトを捨てろ！」

「ッ!?」

オーマジオウにジクウドライバーを捨てろと言われたソウゴは、自責で顔を歪ませる顔を上げる。

「そうすれば、お前が私になることはない」

「このベルトを……………捨てる……………」

ジクウドライバーを捨てる。そうすればオーマジオウとなる未来は回避出来るという。

——果たしてソウゴは、どちらを選ぶか…

次回! Re. HUGっとジオウ!

第14話 目指す未来! 新たな可能性への挑戦! 2018

第14話 目指す未来！新たな可能性への挑戦！201

8

2068年へと飛ばされたソウゴ達は、そこで未来のジオウ：オーマジオウに出会う。自分の未来の姿を信じられないソウゴが彼に戦いを挑むも、手も足も出ずに敗れてしまった。

そしてオーマジオウは、最悪な未来を回避したければソウゴにベルトを捨てろと言う。

「このベルトを……捨てる？」

「そのベルトを捨てれば、仮面ライダーの力がなくなる。」

すなわち、魔王にならない。世界の破滅を防ぐことができるぞ」

「……………それは……」

ベルトを捨てる。それは王への道を捨てると言うことでもある。

どうするべきかと迷っていると、オーマジオウが何かの映像を見せた。

その光景は、今ゲイツがカッシーンとの戦いで劣勢な状況であることを表していた。

「ゲイツ……」

「間もなく我が忠実な下僕が、お前の仲間を打ち倒す」

「そんな……」

「お前のいるべき時代に帰るがいい」

そう言うと、オーマジオウが過去へ戻るゲートを作り出した。

「はな。立って急ごう」

「……」

「…ソウゴ君も、行く?」

ツクヨミが虚ろな表情を浮かべながらはぐたんを見るはなを、優しく起き上がらせる。

アンジュもドライバーを握ったまま呆然とするソウゴを連れて、ゲートへと向かう。

「——久しぶり会えて良かった……さあや」

「——えっ?」

ゲートを潜ろうとすると、オーマジオウがアンジュの名を呼んだ。

さつきまでつららの様に鋭く冷たい言葉を吐いていた人物から放たれたとは思えない、情愛と物懐かしさに満ちた声にアンジュは振り向く。

だがソウゴ達全員を通過させたゲートは直ぐに消え、過去と未来を繋いでいた懸け橋が断たれた。

「……やはり、私の知る歴史と変わり始めているか…

若き日の私よ。お前がどのような未来を選ぶか楽しみだ」

2018年。

ゲートを通過し、現代へと戻ったソウゴ達。外ではダイマジンがまだ立っていた。

「はぐたんは？」

「まだ目が瞑ったままや……」

まだ目を覚まさないはぐたんに、ソウゴが悲痛な表情で近く。

「ごめん……はぐたん、俺を守るために……」

オーマジオウから守ってくれたはぐたんに謝ると、ダイマジンの姿を見上げた。

「ねえ。あれは後どれぐらいで動き出すの？世界の破滅まで、後どれぐらい？」

ダイマジンがいつ起動するのかとツクヨミに尋ねる。

「あれが現れてから、数ヶ月もかからなかったはず……」

「そうか……」

みんなは、先に戻って……俺はゲイツを助けに行く……」

「ソウゴ……」

はぐたんとはなをハリー達に任せると、ソウゴとツクヨミはゲイツを助けに行こうと

向かっていく。

その頃、ファイズアーマーを装着したゲイツは、今もカッシーンと戦闘中だった。

「くっ!」

だが、ゲイツはかなり苦戦を強いられていた。

「だったら……こいつで!」

『エグゼイド!』

エグゼイドウォッチを起動させ、ドライバーに装填した。

『アーマータイム!レベルアップ!エ・グ・ゼ・イー・ド!』

ファイズアーマーからエグゼイドアーマーへと変える。

それでも、状況は変わらなかった。

「オーマジオウの名において、貴様をここで葬る」

「ここまでか……」

このままでかと諦めた、その時…

「ゲイツ!」

ソウゴとツクヨミが現れ、ツクヨミのファイズフォンXでの銃撃がカッシーンを妨害し、ゲイツのピンチを救う。

「来るなジオウ！貴様の助けなどいらなと言ったはずだ！」

「あいつを差し向けたのは、俺だ」

「我が魔王」

「俺はオーマジオウなんだ……」

未来の自分を……オーマジオウを見たその瞬間から、自分が本当にあの姿へといつかなるんだと感じていた。

「……………だから俺は決めた……………」

何かを決意したソウゴは、ジクウドライバーを取り出す。

「ゲイツ、俺のベルト壊してくれ！」

「何だと!?？」

なんと彼は、いきなり自分のジクウドライバーを壊してくれと頼み込んだのだ。

「俺は……………王様になるの、止めるよ」

自分の夢を叶えるためのジクウドライバーを壊し、王への道を止めると言う。

それが最悪な未来を防ぐための最善の道だと、そう思っているが故に。

「……………そうか」

「いいからやってくれ、ゲイツ！」

ソウゴはジクウドライバーを掲げる。

それを見てゲイツも、ソウゴの覚悟を受け入れ立ち上がった。

『ジカンザックス! You! Me!』

ジカンザックスを弓モードで出現させ、ウイザードウオツチを装填した。

『フィニッシュタイム! ウイザード!』

「バカな真似はお止めください!」

ゲイツの破壊を止めようとカツシーンが急ぐ。

「うわあああーっ!」

だが既に時は遅く、ソウゴはドライバーを力強く投げ、ゲイツはジカンザックスのトリガーを離した。

『ウイザード! ギワギワシユート!』

ジカンザックスから放たれた氷の矢は、ソウゴのドライバーを凍らせ、次に放たれた炎の矢の熱がドライバーを粉碎した。

「ウワアアア……………」

ジクウドライバーがなくなった影響で未来に変わったようで、カツシーンは機能停止し、外に現れたダイマジンも同時に姿を消した。

そんな巨大ロボットが消えていく様子を、一人の青年が高台でたこ焼きを食べながら

見ていた。

「…あくあ、やっぱりそうなっちゃうか……」

「フハハハハ……」

同じ頃。未来でもジクウドライバーが無くなった影響で、オーマジオウと彼の住む館が消滅した。

そして現代では。ソウゴが自分で投げて碎けさせたジクウドライバーの残骸を見つめていた。

「これで、世界の破滅は免れたって事だよね？」

「ああ……最低最悪の魔王は生まれない。」

本当に、お前が魔王になることを諦めるならな」

「俺は世界を救いたいと思っただから、王様になりたかった……」

でも、俺が世界を破壊する張本人だとしたら、王様になる意味なんてない」

「ソウゴは、それでいいの？」

ツクヨミは自分の夢を捨てていいのかと尋ねる。するとソウゴは自虐的な笑みを浮

かべながら、ゲイツの顔を目に映す。

「……ゲイツ、感謝してほしいな。君がどうしても俺を倒せないから、仕方なく自分で決めたんだからさ」

「何だと……!?」

「じゃあね……あと、はぐたんにごめんねって言っというて……」

「ちよつと!ソウゴ!」

それだけを告げて、ゲイツとツクヨミの前から去っていった。

「これでいいんだ……」

そんなソウゴの姿を見ながら、ゲイツはこれで最悪な未来は来ない。これでよかったんだと自分に言い聞かせる。

「我が魔王……」

重い足取りで歩いているソウゴが上を向くと、非常階段の上にウオズがいた。

「ごめん。俺はもう君の魔王でも何でもない。じゃあ……」

しかしソウゴは覇気を失った顔で、もう魔王じゃないとウオズに謝って、そのまま何処かへ歩んでいった。

場面は変わり、クライアス社。

その特別ルームにいる門矢士の前にオーラが現れた。

「オーマジオウが消えた。あんたがあの子を未来に送り込んだの、正解だったみたいね」
オーマジオウが未来から消えた事を話すと、それを聞いた士は眉に皺を作つて溜め息をついた。

「何だ……もつとあいつのように骨のある奴だと思つたのに……俺の計画をどうしてくれる」

「……計画ってどういう事？」

門矢士の言う計画。それが何なのかと彼女は聞くが、本人は興味の無さそうに「どうだっていい」と一掃する。

「……それで、この会社。これからどうする？」

「我が社は新しい時の王者の擁立と、ミライクリスタルの回収を続けながら、ゲイツとプリキュアを倒すわ」

「そうか……」

同刻。先にビューティーハリーに戻っていたはな達ははぐたんを看病し、熱を出した

はぐたんはベッドで眠り続ける。

「熱は下がったけど……」

「苦しそう……」

さあやが体温を測ると、体温計には『36.5』の数字があった。

点滅していた額の宝石も水色に戻り、熱は下がったが、彼女は苦しそうな表情のまま眠りについていた。

「はぐたんのアスパワワ、あの時全部使ってしまうたんやな」

「あの時、オーマジオウの攻撃からソウゴとはなを守るために……」

ハリーとツクヨミはあの時、二人を守るために張ったバリアにはぐたんがアスパワワを使い切ってしまったのだと推測する。

「（私が、プリキュアになれなかったから……ソウゴを、守れなかったから……）」

ごめんねはぐたん……！私のアスパワワ全部あげるから、だから目を覚まして！お願い！

はなはそんなはぐたんを見ながら涙を浮かべ、抱きかかえるようにしてベッドに倒れ込み、そう叫ぶ。

「今は静かに寝かせてあげよう……」

ツクヨミがはなの肩を叩き、今は寝かせてあげようと言う。

「私のせいだ……ごめん、みんな……」

「はな……」

「私……プリキュアもう出来ない……!」

「えっ……?!?」

すると彼女はプリハートをベッドの上に置き、プリキュアはもう出来ないと告げる。

「もう、決めたから……ごめんね!」

「待て」

そう言っで立ち上がり、出て行こうとするが、ゲイツに手首を掴まれる。

「逃げるのか」

「だって……私のせいだもん!」

はぐたんにこんな苦しい想いをさせて……プリキュア失格だよ……!」

はぐたんから、いっぱい元気を貰ったの。嬉しそうな笑い声、ぷにぷにのほっぺ、ハグした時の温かさ。

なのに私、何も返せて無い!

私には……私には何も無い……」

「そんな事無いよ!」

「そんな事ある! 私は、さあやとほまれとは違うもん!」

だからプリキュアにもなれなくなっちゃったんだ!

きつと……もつとプリキュアにびつたりの子が他にいるんだよ。はぐたんをきちんと守れる子が……」

「それがお前のなりたい、野乃はななんか!」

ハリーが思わず妖精態に戻りながら、それがお前のなりたい姿なのかと呼び掛ける。

「ごめんね……」

しかしはなは悲しそうな作り笑顔を浮かべ、部屋を出て行った。

「どうして……」

「……あの、ゲイツ君……」

ソウゴ君本当に、王様になるのやめたの……?」

「……………ああ」

ソウゴは本当に王様の夢を諦めたのかと聞くさあやの質問に、ゲイツは頷く。

「奴は俺にベルトを壊してくれと頼み。俺が壊した」

「そんな……」

「でも……わかるよ。オーマジオウの力を見せられたら……」

未来で見たオーマジオウの力……その力にソウゴは、手も足も出ずに負けた。

そして、あれが未来のソウゴでもあることも、彼が王としての覇道の歩みを止めた理

由のひとつであった。

「…………ツ」

「さあや？」

いきなりさあやはビューティーハリーから出ていった。

同じ頃、クジゴジ堂へと戻ったソウゴは、ジオウライドウォッチを見つめていた。

「これでいいんだよな…………」

「ソウゴ君」

声が聞こえ、顔を上げるとそこにはさあやがいた。

「さあや…………」

「ソウゴ君…………なんで、諦めちゃうの？王様の夢…………」

「……………さあやも見たら、未来の俺を…………」

「…………でも、ソウゴ君がそんなこと…………」

「俺だって思ったよツ！」

「ツ…………？」

彼がオーマジオウになるという未来を必死に否定しようとするさあやに、ソウゴは怒鳴り散らす。

「……………けど、あいつは…オーマジオウは…俺かもしれない…」

だから、最悪な未来を防ぐためにこうするしかなかったんだ!」

最悪な未来を防ぐにはこうするしかなかったと、ジオウオッチを強く握り締める。

「ソウゴ君…諦めないで」

そんな彼の様子を見たさあやが、ソウゴに諦めないでと言う。

「はなだつて言つてたじゃん。なにだつてもなれる。なんでも出来るって…」

だから、ソウゴ君だつてオーマジオウ以外のものにだつてなれる」

「オーマジオウ以外になれる…」

「だから…」

するとさあやが、ソウゴが握るジオウオッチの手を優しく握る。

「みんなで一緒に目指そう。オーマジオウじゃない、新しい未来を」

「新しい…未来…」

さあやはソウゴの手を握って、新しい未来を目指そうと語り掛ける。

「…?」

ソウゴの手を握っていたさあやは何かに気づき、慌ててソウゴを離す。

「じゃあ、またね!」

顔を少し赤らめたさあやは慌ててクジゴジ堂から出ていった。

「ソウゴ君……さあやちゃんと何かあったの?」

順一郎は慌てて出ていったさあやを見て、何かあったのかと聞く。

「王様になるの、やめるって伝えたんだ……」

「うそ?!? あんなになりたがってたのに?」

何時も王様になる事を夢見ていたソウゴが王様をやめると言い、こちらも驚く。

「この際、レベルの高い高校に受験でも挑戦しようかな。叔父さん、どう思う?」

「あ………そうだな……」

どう返せばいいか言葉に詰まると、叔父が話を変える。

「………前にさ、おじさんにも夢が叶うチャンスがあったけど見送ったって話したこと

あったよね?」

「うん。覚えてる」

確か、一度だけその夢をかなえるチャンスにも出会ったけど、それには大きなリスクが伴っていたから、次のチャンスが来ることを期待して見送ったみたいだけど、結局そのチャンスが訪れることはなかったという話だった筈だ。

「あれ……嘘なんだ」

「嘘?」

しかし、その前に話してくれた事は嘘だと言う。

「嘘だけど……半分本当。」

叔父さんが掴みかけた夢ってというのは、海外の有名な時計屋さんで働くこと。その夢は諦めたけど、今はこうして時計の修理をしてる。

だから幸せなんだ」

だが、今の時計の修理をする仕事に、今の自分の生活は幸せだと語る。

「時間って、みんな同じ速度で進んでるように見えるけど、違うんだよ。」

時間の進み方は人それぞれ。

今は諦めたとしても、時間は夢に向かって進み続ける」

「夢に向かって……進み続ける……」

それ聞いて、ソウゴはジオウウオツチを見つめる。

その夜、はなは毛布を頭まで被ったが眠れず、ベッドの上でミライクリスタルをじつと見ていた。

「私のなりたい私……あーもう、何で……!?」

自己嫌悪に陥りながら枕の傍まで移動したその時、ノックの音が聞こえた。

「はな」

「ママ……?」

ノックをしたのは、母のすみれだった。

「どうしたの？眠れないの？」

すみれはドアを開け、夜中になっても目を開けている娘に眠れないのかと尋ねる。

「ママ……」

「なあに？」

二人がベッドの上に座り、はながほつほつと口を開く。

「どうして私は、さあやみたいに賢く無いし、ほまれみたいに運動出来ないんだろ……」

どうして私……何も持って無いんだろ……」

その話を聞いていたすみれが微笑み、はなの後ろ頭を撫でる。

「はなが産まれて来た時ね、パパとママは、とっても嬉しかったの。」

はなは笑うだけで、私達を幸せにしてくれた。

今もそう。はなの笑顔はどんな時だって、ママ達に幸せをくれる」

「ママ……！」

母の言葉を聞き、はなが泣きながらすみれに抱き着く。

「イケてるお姉さんになりたいのに、私、めっちゃカッコ悪いよ……！」

「こんな私、全然好きじゃ……無い……！」

「どうしたらいいか、もう分かんないよお……！」

「はなは、少し大人になったのね。フレフレ、はーな」

そう言いながら彼女は娘の手を掴み、エールを送る。

「前を向いて今を頑張れば、きつと素敵な未来がやって来る」

そして次に娘の耳元に手を当てて顔を近づけ、大丈夫だと囁きながらそう励ましの声をかける。

「未来……?」

「うん」

翌朝、靴を履いたはなが傍の鏡の方を向き、自分を見る。

「フレフレ、私……。頑張れ頑張れ……。うん！」

「行つてらっしゃい」

「行つて来ます！」

はなは母にいつてきますと言ってドアを開けて外に出ると、すぐそこにさあやとほまれがいた。

「さあや……。ほまれ……」

するとさあやははなに近付き、語りかける。

「いつでも頑張れ屋さん」

「えっ?」

「誰かの為に一生懸命になれる所。

失敗してもガッツで乗り越える所。

素直で表情がクルクル変わって、見ているだけで元気になれる所。

まだまだいっぱいあるよ。私が憧れた、はなの素敵な所。

だから、何も無いなんて言わないで!」

「さあや……」

あまりにも真剣な表情で言われた、自身にあるという素敵な一面を言われたはなが、面を喰らった顔で驚く。

「はな」

「ほまれ……」

ほまれがはなの名を呼んで、両腕を伸ばす。

はなは目に涙を溜め、ほまれに駆け寄って抱き付き、ほまれも優しく抱き締め返した。

それからしばらくし、はな達がビューティーハリーへと訪れた。

そこには、ゲイツやツクヨミ、ネズミ状態のハリーがはぐたんを看病しながら見ていた。

「これで良かったんやろか……?一緒に逃げて来たのに、またお前をこんな目に遭わせて……目を、覚ましてくれ」

ハリーがはぐたんの手に自身の手を当てる。

「ハリー……」

「……」

ツクヨミとゲイツがそんなハリーの様子を見ていると、ミライパッドの画面が光り出した。

「何や……?!?!?」

「ミライパッドが……!」

「「どうしたの?!?!?」」

「ミライパッドが、急に光ってな……」

画面には何か映し出されようとしていた。

「のびのびタワー?」

「はぐたんを元気にするヒントがあるのかも!」

画面には『のびのびタワー』が映っていた。

それが映ったという事は、何かしらの意味があると考えたさあやがそう伝える。

「はぐたん………行こう」

彼女の話聞いたはながぐたんを持ち上げ、プリハートを見つめる。はぐたんのために『のびのびタワー』へと向かう事を決めたはな達は、目的地に向けて歩みを進めた。

クライアス社のビル。

そこではかつて、ソウゴ達の前に敵として現れていたチャラリートが苦しんでいた。

「暗い……怖い……怖い……」

恐怖に怯えていると、自身の近くに寄って来たパップルの傍に擦り寄り、彼女の足に抱き付く。

「頼む……！ 助けてくれ……！」

「アンタには後が無い。今度こそプリキュアと、ジオウとゲイツを倒すのよ。」

……社長。この件、承認お願いします！」

天井のプレジデント・クライに承認を頼み、プレジデント・クライが頷く。

「稟議、承認！」

リストルが書類を投げ、天井からハンコが押されると同時に、謎のエネルギーが真下のチャラリートに直撃した。

「あくあく!チャラリート可愛そう!」

うなり声をあげる彼の様子を、窓越しからウールとスウォルツが見ていた。

「だが、我らの思うように事を進めるには、邪魔者は徹底的に叩き潰さねば」

スウォルツは密かに回収した、機能停止したままのカッシーンの方を見る。

「徹底的に?」

「時見ソウゴとプリキュアの息の根を止める」

スウォルツがカッシーンの頭に指を差し込むと、彼の手によってカッシーンが再起動した。

「わかったよ」

ソウゴの息の根を止めるべく、クライアス社が動き出す。

ミライパッドの導きにより、はな達は展望台に訪れる。

ここではラヴェニール学園の吹奏楽部の演奏会が開かれていた。

「ミライパッドが示したのは、ひなせ君の演奏会だったのね」

「けど、はぐたんは何も変わらない……」

「ひなせ君言ってた。楽器一つ一つの個性が合わさって、想像を超えた素敵な音が奏で

られるんだって」

「一つ一つ……」

はながはぐたんを自分の胸元に寄せ、心臓の音を聞かせる。

「はぐたん聞こえる……？ 私の心の音は……どんな感じかな……？」

そう語りかけながら、窓際の方へ歩く。

「聞いた人が、はぐたんが元気になるような音が鳴ってるかな？」

「私の音も聞こえるかな？」

「のびのびタワー、音楽、抱っこ。はぐたんの大好きなものばつかだ」

そしてさあやとほまれも一緒に寄り添い、立ち止まってから言葉を繋いでいく。

「私の大好きなものもいっぱいだ」

さあやとほまれがはぐたんに手を当て、三人が目を閉じて心臓の音を聞かせる。

——すると、三人の思いが通じたのか、はぐたんが目を開けた。

「はぐたん！」

「目が覚めたんか！」

一同は彼女の目覚めに歓喜で震えていると、はぐたんがミルクを欲しがると素振りを見せる。

「はぐたん！ ミルク欲しいんだね！」

「私、準備して来る!」

はぐたんをハリーに預け、ミルクを作りに向かったはな。

涙を拭いながら走ってる最中に、角からYシャツと黒いズボンの男性が出て来て、慌てて足を止める。

だが一步遅く、ぶつかって尻餅を付き、男性は持ってた本を落としてしまった。

「あいててて……大人の人の……」

はなは以前にもこの男性に会った事がある事を思い出す。

「……この物語は、君に運命を感じているのかもしれないね」

「えっ?」

その男性——ジョージは、本を拾ってからそう呟く。

「明日を失いつつある世界の為に、天は何も持たない少女を選んだ」

「何も持たない……?」

「そして少女は、勇気を胸に戦った。

何故少女は戦う事が出来たのか?

誰かの為に身を削ってまで……富の為?名声の為?」

「それは……」

その時、衝撃が生じ、外からは煙が上がった。

外を見ると、オシマイダーが暴れ回っていた。

「あれって……ソウゴ！」

「ねえ見て。ソウゴ、昨日の奴に襲われてる！」

「何？」

更に騒ぎを聞きつけたさあや達もタワーの外を見てみると、オシマイダーとカツシーンにソウゴが襲われていた。

——どうしてこうなったのか説明するにあたって、少し時間を遡る必要がある。

さあや達がここに来ていると連絡を貰い、更に『はぐたんに謝るなら、自分の口から謝ってね』とさあやからのメッセージも受け、ソウゴもタワーへとやってきた。

「はぐたん……うわあ！」

はぐたんの顔を思い出し、眩きながらタワーを見上げたその時、いきなり誰かに殴られた。

「ツッ!? なんでも……」

殴った犯人を見る為に顔を上げたソウゴだったが、目の前には昨日現れたカツシーンが無機質な目で睨みつけていた。

「驚いた？」

「クライアス社……」

「ちよつと貸してもらったんだよ。君を始末するためにね」

ウールがそう言うのと、カツシーンはそのまま過去の主君を階段から突き落とし、ソウ

ゴはそのまま転がって落ちていく。

「やめてくれ！俺は王様になるのやめたんだから！」

「そうはいかないわ」

後ろを振り返ると今度は、いつもより巨大なオシマイダーと共にパツプルが現れた。

「あんたがいると、オーマジオウになるかもしれないから」

「俺はもうベルトを捨てたんだ！」

ソウゴはベルトを捨てた事を言うが、向こうはやめるつもりなかった。

「仕方ないな、我が魔王。変わりのベルトがこちらに」

そこへ代わりのジクウドライバーを持ったウオズが現れた。

「俺は……俺はもう、魔王になるつもりなんてない！うわあ!!」

ジクウドライバーを使うのを断り、生身でクライアス社に立ち向かう。

だが、そのままソウゴはカツシーンに一方的に痛めつけられる。

「……うつ……うつ」

「このままでは死んでしまう。ベルトを取るんだ」

「嫌だ！」

ウオズはジクウドライバーを取るんだとソウゴに近づくも、やはり彼はジクウドライバーを使うのは拒否する。

「うわああーっ！」

再び起き上がりカッシーンへ立ち向かう。

「我が魔王！」

「君さ、僕達の味方じゃなかったっけ？」

ウールが一瞬時間を止め、ウオズの持っていたジクウドライバーを奪った。

「邪魔しないで、そこで見てなさい」

「私はこの本に従って行動するだけ。君こそ、邪魔しないでもらえないか」

「そう。でも、もう終わりだね」

カッシーンに痛めつけられるソウゴ。そこへオシマイダーが巨大な爪を振り上げ、彼を葬り去ろうとする。

「!?」

「避ける！」

タワーから出てきたゲイツ達が、ソウゴに避けろと言う。

だが、ソウゴは避けようしなかった。

『ソウゴ（君）！』

「あの馬鹿！」

ゲイツは咄嗟に近くにあった工事用の矢印看板を放り投げ、オシマイダーの攻撃からソウゴを守った。

「あつ！あれ！」

ほまれがソウゴの後ろを指すと、ソウゴの後ろには巻き込まれた子供達の姿があった。

「あの子を守るために……」

ソウゴが避けなかったのは子供達を守るためだった。

「俺は……俺の民を傷つける奴は絶対に許さない！」

みんなの幸せのためにできることがあるなら、命を懸けたって惜しくないっ！」

「ソウゴ君……」

「ソウゴ……変身できないのに……」

変身できないのに必死に子供を——自分の民を守るソウゴに、みんなは胸を打たれた。

するとカッシーンがソウゴに襲い掛かろうと、槍を振りかかる。

「くそー！」

『ゲイツ！』

腕のゲイツウオッチを外して起動させ、ドライバーに装填しながら走り出す。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

仮面ライダーゲイツへと変身し、カッシーンからソウゴを守る。

「戦う力もないのに何をしている！」

「ゲイツ。なんでここに……」

「たまたま、近くにいただけだ……それと、こいつをぶつ潰してやりたかった！」

ゲイツとカッシーンの戦闘が始まると、はなも一緒に戦おうと手に持ったプリハートを見る。

だが、昨日の変身出来なかった出来事がフラッシュバックし、変身を躊躇させる。

「出来るよ！」

「ほまれ……」

「きつと出来る」

「フレフレ、はな！」

「さあや……うん！でも出来る！何でもなれる！」

きつとなれる。2人にそう励まして貰えたはなはプリハートを強く握り、ミライクリ

スタルを取り出す。

「ミライクリスタル!ハートキラツと!」

はなは仲間の声に応えるべく、さあやとほまれと一緒にミライクリスタルをセットし、姿を変える。

「輝く未来をく抱きしめて!!みんなを応援♪元気のプリキュア!キュアエール!」

「輝く未来を抱きしめて!みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「輝く未来を抱きしめて!みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

今度こそ三人一緒に、変身することが出来た。

「やった!プリキュアになれた!」

「アスパワワが戻ったんだ」

「やっぱめっちゃイケてる!」

「——全部終わったかと思ったが、ずいぶん賑やかだな」

再びキュアエールになれて喜んでいると同時に、門矢士とオーラがこの場へ現れた。

「おい、俺はどっちの味方すればいい?」

「好きなほうにつけば?」

「なら……変身!」

マゼンタカラーのドライバーを腰へ装着し、一枚のカードを見せる様に取り出す。

カードを腰に装着したネオデイクイドライダーに差し込み、真ん中の部分を操作した。

『KAMEN RIDE! DECADE!』

士は黒とマゼンタカラーが特徴のライダー、仮面ライダーデイクイドとなった。

デイクイドはライドブツカーをソードモードにするとゲイツに振りかかり、彼を吹き飛ばす。

「こっちの味方をした方が面白そうだ」

「門矢士……」

デイクイドの介入により、ゲイツはさらに不利な状況となった。

『ウイザード!』

ゲイツはウイザードウォッチを起動し、ドライバーに装填する。

『アーマータム! プリーズ! ウィ・ザード!』

ドライバーを回すとウイザードアーマーを装着した。

「ならこっちも」

『KAMEN RIDE! WIZARD! フレイム! ヒー! ヒー! ヒー! ヒー! ヒー!!』

『?』

それを見て、デイクイドはウイザードのカードを取り出し、ドライバーに差し込む。

赤い魔法陣を潜ると、デイケイドは仮面ライダーウィザードへと変わった。そこへさらに一枚のカードを取り出した。

『FINAL ATTACKRIDE!WI WI WI WIZARD!』

デイケイドウィザードの左から巨大な魔法陣が発動し、ゲイツの方にも同じものが現れた。

そしてデイケイドウィザードがその巨大な魔法陣に腕を突っ込むと、ゲイツの方にある魔法陣から巨大な腕が現れ、ゲイツを吹き飛ばした。

「ぐわあああああ!!?」

吹き飛ばされたゲイツは変身解除してしまった。

「ゲイツ!」

「とんだ飛び入りだったけど、さっさと片付けてよ」

「トドメ刺しなさい」

ソウゴがゲイツの方を見ている間に、カッシーンがソウゴを攻撃してゲイツのところまで吹き飛ばした。

「排除…!」

「フレフレ!ハート・フェザー!」

カッシーンが二人にトドメを刺そうとする。

そこへアンジュが前に現れ、カッシーンの攻撃から二人を守る。

「やああ！」

エールがキックでカッシーンを二人から離す。

「大丈夫！」

「うん……」

今度はオシマイダーがソウゴに襲い掛かろうとする。

すると赤い光線が放たれ、オシマイダーはそつちを見る。

「ソウゴはやらさせない！」

「ツクヨミー！」

ツクヨミがファイズフォンXを使い、オシマイダーの注意を自分に引きつけている隙に、ゲイツは自らのドライバーを外す。

「ジオウ！こいつを……使え」

「えっ？」

ソウゴに自分のジクウドライバーを使えと言う。けどソウゴは一瞬驚きながらもそつぽを向き、ゲイツのドライバーの受け取りを拒否した。

「あいつらに好き勝手やらせるつもりか？」

「……………でも、それを使ったら、俺はオーマジオウに……」

それを使えばオーマジオウへとなってしまふ。だから受け取れないと言いかけると

…

「ソウゴ!なんでも出来る!なんでもなれる!

フレフレ!ソウゴ!フレフレ!ソウゴ!

「エール……」

エールがソウゴに応援の声を送ると、ゲイツがソウゴの腕を掴む。

「お前は最高最善の魔王になると、俺に言った!だったら問題ない」

「……でも」

「最低最悪の魔王になったら、俺が倒してやる!必ずな。」

俺を信じろ、ジオウ……ソウゴ!

初めて名前で呼んでくれた。そして、ゲイツの真剣な表情にソウゴの心が響いた。

「ゲイツ……分かった……」

ゲイツの言葉を信じ、ソウゴは彼のジクウドライバーを掴む。

「俺は魔王になる。魔王になって、世界を救ってみせる!」

『ジクウドライバー!』

『ジオウ!』

ジクウドライバーを装着すると、ジオウウオッチを起動してドライバースに装填。

ドライバーのロックを解除すると、後ろから時計が出現させながらドライバーを回す。

「変身！」

そして再び、世界が回った――

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

ソウゴは再び、王を目指し、ライダーの力を受け継ぐ時の王者：『仮面ライダージオウ』へと変身した。

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来を知ろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウ、まさに再誕の瞬間である」

相変わらずのようにウオズの祝いの言葉が告げられた。そのままジオウはカッシーンからの攻撃からアンジユを守る。

「ソウゴ君」

「ここは任して！あのオシマイダーを！」

『デイ・デイ・デイ・デイケイド！』

デイケイドウオッチを起動させドライバーへと装填すると、カード型エネルギーがジオウに重なる。

『アー・マー・タイム！ カメンライド！ワーオ！ デイケイド！デイケイド！デーケー

「イードー!」

「デイクイドアーマーが装着されると、ジオウはゴーストウオッチを取り出した。

『ゴースト!』

「デイクイドウオッチにゴーストウオッチを装填した。

『ファイナルフォームタイム!ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

「ジオウはゴースト・グレイトフル魂の姿へと変わったデイクイドアーマー・ゴーストフォームへとなり、カツシーンに応戦する。

「やつと面白くなってきたな」

「そこに仮面ライダーウィザードも参戦し、二対一となる。

「だが、数はこっちの方が多いで?」

「数の差によりデイクイドウィザードとカツシーンに押される。

「分かっているよ!だから……」

「ジオウはゴーストウオッチを押し、ウオッチからパーカーゴーストを出現させ、二人を自分から離れた。

「そのうち一体は、ウールへと向かっていた。

「ドライバー頂き!」

「ウールからジクウドライバーを奪い返した。パーカーゴーストは、ゲイツにドライバー

を渡した。

「ゲイツ！こつちの人手が足りないんだってさ！」

「人使いの荒い魔王だ」

『ゲイツ！』

手伝つてと頼むジオウに、ゲイツは腕のホルダーにあるウォッチを外して起動させ、ドライバーに装填する。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

仮面ライダーゲイツへと変身し、エグゼイドウォッチを取り出す。

『エグゼイド！』

エグゼイドウォッチを起動させ、ドライバーに装填した。

『アーマータイム！レベルアップ！エ・グ・ゼ・イー・ド！』

ゲイツもエグゼイドアーマーを装備し、ジオウと共にカッシーンとウイザードと戦う。

「やるな……だが……」

『FINAL ATTACKRIDE！WI WI WI WIZARD！』

ウイザードからチェーンが放たれ、ジオウとゲイツを拘束。

その隙にカッシーンが二人を飛ばす。

「同じ数になったって、しよせん互角だ」

向こうはまだまだ余裕なのようだ。

「だったらゲイツ、交換だ」

「よし」

お互いにゴーストウォッチとエグゼイドウォッチを投げ合い交換し、キャッチした。

『エグゼイド!』

『ゴースト!』

エグゼイドウォッチをデイケイドウォッチの隣へと装填し、ゲイツはゴーストウォッチをジクウドライバーへ差し込む。

『ファイナルフォームタイム!エ・エ・エ・エグゼイド!』

『アーマータイム!カイガン!ゴースト!』

ゲイツがゴーストアーマーを装備し、ジオウはエグゼイドウォッチを装填した途端、ジオウが二人に分かれ、ジオウの顔のモニターが変わり、コードインデイケイダーにはそれぞれ『エグゼイドダブルアクションXXR』、『エグゼイドダブルアクションXXL』と刻まれた。

『ライドハイセイバー!』

『ジカンギレード!』

「これなら! いける気がする!」

二人となったジオウは各二つの剣を持ち、デイケイドウィザードに攻撃を繰り出す。
「くう!」

数で優先に立ち、デイケイドウィザードを押ししていた。

「はあ!」

二人のジオウの同時攻撃に柱へと衝突した。

「…流石に分が悪いか。ここらが引き時だな」

「本当、気まぐれね」

「また、会おう……それと、桐ヶ谷晴夜によろしくなつてな」

「えっ? 晴夜に?」

デイケイドウィザードの後ろからジオウを未来へと飛ばしたカーテンが現れた。

「じゃあな」

「待つて!」

別れを告げながらカーテンに包まれた時、デイケイドウィザードの姿はなくなった。

「消えちゃった……」

デイケイドウィザードが消えると、オシマイダーが町を暴れ回っているのが見えた。

「みんな!」

「ここは俺とゲイツがやるから、オシマイダーを!」

「頼む!」

「ああ!」

カツシーンはジオウルとゲイツに任せ、ジオウルは急いでエール達が戦っているオシマイダーの元へと向かう。

その頃、オシマイダーが暴れ回っている町の中ではエール達が戦っていた。

「プリキュア……」

そのオシマイダー……いや、怪物へと成り果てたチャラリートが前転してカカト落としを繰り返して、跳んで避ける。

「フレフレ!ハート・スター!」

エトワールがハート・スターを放つが、オシマイダーはそれを左足で防いだ。

「ミライクリスタル……よこせ!よこせ!よこせエ!」

「フレフレ!ハート・フェザー!」

足を伸ばしてハート・スターを掻き消しながらビルにめり込ませ、伸びた右足を元の長さに戻してエール達を睨みながら、再度足を伸ばして蹴りを放つ。

アンジュはハート・フエザーを発動し、オシマイダーのキックを防いだ。だが余りの衝撃に、アンジュは苦痛に顔を歪ませた。

「……ッ！ 凄いパワー……！」

「いつものオシマイダーと違う……！」

「クリスタル、よこせ！」

「もう！ 何やってんのよアイツ！ さっさとやっちゃいな！」

ビルの屋上に、ルールーとオーラと共に立つたパップルが苛立った表情を見せる。

オシマイダーが跳んでビルの屋上を掴み、足を伸ばしてキックを繰り出す。

それをエール達は跳んで避け、オシマイダーの頬へ三人同時にキックを叩き込む。

「もう……さっさとプリキュアをやっちゃいなさい！」

パップルの指示を受けたオシマイダーが、エール達に狙いを定めて激しい攻撃を繰り出し。エトワールをビルに叩き付け、アンジュは踏み付けに、キックを受けて吹き飛ばされたエールはビルに叩き付けられた。

更にエールへ向かって跳び、キックを繰り出してビルを崩壊させる。

「あつ？ ことり！ えみるちゃん！」

巨大なビルの破片が、その下で逃げていたえみるとことりの元へ、二人の眼前まで落ちる。

『タイムマジーン!』

その時そこへ、ジオウの乗るタイムマジーンが現れ、二人の盾となった。

「あれは……あの時の……」

「二人共、大丈夫!?!」

えみるがああの時自分の前に現れたロボットの事を思い出していると、瓦礫を横に捨てたタイムマジーンからジオウが現れ、二人に大丈夫かと聞く。

「仮面、ライダー……?」

「早く逃げて」

そこへエールも駆け寄ってきた。

「その子と一緒に、ここから離れるんだ」

「あなた達は……?」

えみるが尋ねた直後、すぐ傍にオシマイダーが現れる。

「俺は戦うよ!世界をみんな守るために!うおおおお!」

ジオウはオシマイダーにライドヘイセイバーを持ち、立ち向かっていく。

「私も逃げない……」

私は……プリキュアだから!」

ジオウの姿を見たエールも戦う事を決意すると彼女の胸元が光り出し、タイムマジーン

ンが投げ捨てた破片を持ったまま跳ぶ。

「どうなってるの……!?!」

「やあああああああつ!」

チャラリートが跳びかかると同時に、エールは両腕を振り下ろして破片を叩き付けた。

その衝撃でエールはビルの屋上に叩き付けられ、オシマイダーは吹き飛びながらも体勢を整えて着地する。

「みんなの笑顔が好き……! みんなを……元気にしたい!」

フレ、フレ、みんな……フレ、フレ、私!」

エールが自分を応援するのと同時に、エールの胸元から花を二つ重ねたような形をした新たなミライクリスタル『ミライクリスタル・ローズ』が出て来た。

「新しいクリスタル!?」

するとそのミライクリスタルが、翼の形になっている鐔を持ち、虹色の刃を輝かせる剣に変化した。

「これは……」

「あれは……! まさか……!」

「プリキュアの剣や!」

「エール!」

エールの元にアンジュとエトワールが着地する。

(力が……みなぎって来る……!)

エールが剣を握ると、その剣から流れる強力な力を感じ取る。

すると、オシマイダーが跳びかかり、腕を振って生じた風圧で周囲のビルのガラスを割る。

エールは吹き飛ばされそうになるが、剣が光り出すと同時にオシマイダーが剣から出されたエネルギーで吹き飛び、地面に叩き付けられる。

「よし……これなら!」

「待って!」

ライドヘイセイバーで決めようとしたジオウを、エールは止めた。

「エール!どないしたんや!?」

「早くそのオシマイダーを!」

ハリーとツクヨミが駆け付け、アンジュとエトワールが着地する。

「違う……これは、私のなりたいプリキュアじゃない……!」

エールは今持っている剣を見ながら、これは自分がなりたいプリキュアじゃない、違うといいながらオシマイダーに近づく。

「苦しい……！苦しい……！心があ……！」

するとオシマイダーから闇のエネルギーが放出され、頭を抑えて苦しみ出す。

「うわっ！」

放出された時の衝撃でエールが吹き飛ぶが、ジオウが助ける。

「いつも中途半端……！」

何も出来ない……！

何にもなれない……！

何にも……頑張れない……！オシマイダー……！」

更に闇のエネルギーが放出され、オシマイダーの素体となったチャラリートが絶望に苛まれながら縮んでいく。

「オシマイダーが縮んでいく……！」

「俺には……何の才能も無い……！」

何で俺は……何も持って無いんだ……！オシマイダー……！」

人間サイズにまで縮んだオシマイダーから闇のエネルギーの放出が止まると同時に、エールがプリキュアの剣を落とす。

「エール!？」

エールがオシマイダーの元に駆け寄り、後ろから抱き締める。

「心が苦しいの……分かるよ……」

「おい……!離せ……ッ!」

オシマイダーがエールの腕を掴んで引き剥がそうとする。

「私も……そうだもん。私も、頑張れない時ある」

「頑張れないこともある。そう共感の言葉を続けるエールの体がピンクの光に包まれ、アスパワワが放出される。

「宿題サボっちゃった事あるし、ニンジンとグリーンピース避けた事あるし……」

「止めろ……ッッ!」

そう言って抱きしめ続けるエールを拒絶すると、ジオウRもヘイセイバーを地面に突き刺して、オシマイダーに近寄ってくる。

「……ねえ、おしまいって言うけど、まだおしまいじゃないと思うよ」

「何……」

そして、オシマイダーにまだおしまいじゃないと話し掛ける。

「だって、あなたの可能性はまだ消えてないから」

「——えっ?」

「俺も、あんたも、まだ時計の針が動いている。」

その針が動いて限り、俺たちの時間は終わりを迎えていない……

だから、まだおしまいじゃないよ！」

「俺ちゃんの……針……」

オシマイダーが、チャラリートが自分の胸に手を当てる。

「大丈夫だよ。その気持ち、私が抱き締めるから」

「ッ……止……めろ……」

オシマイダーの口から闇のエネルギーが放たれると、剣が浮かんでハグを続けるエールの傍に止まる。

その佇まいは、まるで「その同情は戦いの足風になる、早くやれ」と言っているようだった。

「違うよ。必要なのは剣じゃない」

プリキュアの剣がその柄に手を取られるのを待ち遠していると、エールはそう言つて、誰かを斬り伏せて傷つけることしかできない剣へ向けて拒否の意志を伝えた。

すると、剣がミライクリスタル・ローズに戻り、それがセットされた新たな姿へと生まれ変わった。

「これは……」

その影響は、アンジュとエトワールのネイビーとオレンジのミライクリスタルにも及び、彼女達のクリスタルからも同じものが作り出された。

「何やアレ!?」

「多分、あれが彼女達の剣なのよ」

ハリーがプリキュアの剣が形を変えたことに驚いていると、ツクヨミはあれが彼女達の剣なのだと推測する。

「これが私の応援。これが私のなりたいプリキュアだ!」

オシマイダーになったチャリートを倒すのではなく、暴走を止めて助けたいというエールの思いによって、ミライクリスタルと剣から新たなアイテムが現れた。

一方、ジオウLとゲイツがカッシーンとの戦いが決まろうとする。

「俺は俺の夢を信じる!みんなを救いたいって気持ちは変わらない!」

俺は、みんなを救う魔王になる!」

『ジカンザックス!You!Me!』

ジオウがそう言うのとゲイツがジカンザックスを出現させ、クローズウオッチを装填する。

『フィニッシュタイム!クローズ!ギワギワシユート!』

蒼い炎の龍状のエネルギー体をカッシーンへぶつけ、怯ませる。

「行けえ!ソウゴ!」

「ああー！」

ジオウルはジカンギレードにエグゼイドウオッチを装填。

『フィニッシュタイム！エグゼイド！』

ジオウルはそのままカッシーンのもとへと走る。

『ギリギリスラッシュユー！』

ジカンギレードの連撃がカッシーンに直撃して『HIT！』と浮かび続け、最後に『GREAT！』の文字が浮かび、カッシーンを倒した。

そしてオシマイダーの方も、ジオウルがライドハイセイバーにデイケイドライドウオッチを装着した。

『フィニッシュタイム！』

ライドハイセイバーの時計の針を三周回し、回し終わるとジオウルは構える。

『ハイ、カメーンライダーズ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！へへハイ！セイ！』

『デイデイデイデイケイド！平成ライダーズアルティメットタイムブレイク！』

「おりやああああー！！？」

『ハイセイ』の文字と描かれた20枚のカード型エネルギーを纏ったハイセイバーで、オ

シマイダーの口から放たれたエネルギーを切り裂き相殺し、オシマイダーの動きを止めた。

「今だ!みんな、あの人を!」

「「ミライクリスタル!」」

「エールタクト!」

「アンジュハープ!」

「エトワールフルート!」

三人が新たな武器『メロディソード』のボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出す。

「「心のトゲトゲ、飛んで行け!」

プリキュア!トリニティ・コンサート!」

対象に向かって虹色のエネルギーを飛ばす“トリニティ・コンサート”を放つ。

その技は、罪無き者に害なす悪人を滅殺する一撃でも、安っぽい同情から生まれた慈悲の恵みでもない。

それはまるで、その者の悪意の心だけを愛から産み出した音楽で浄化し、未来に絶望した人々を救済する、癒しの波動。

「心が温ったけえ……俺にも、未来が……」

命中と同時に巨大な木が作り出され、ピンク・水色・黄色の花が咲き誇ると、オシマイダーが浄化され、チャラリートの姿へと戻った。

「「HUGつとプリキュア！ エール・フォー・ユー！」」

「何なのよ……！」

「プリキュア……理解不能……！」

新たに生み出した未知なる技を見たパップル達が、困惑の念を抱きながら瞬間移動して引き上げる。

——その様子を、誰にも知られる事の無いまま、ただ静かに見守る者が居た。

「……それでいい。それでこそ、『ジオウ』の名に恥じぬ行動だ……！」

ビルとビルの間からジオウとエールがハイタッチする姿を見据えるその青年は、焼きそばが入っているビニール袋を持ちながら、また静かにこの世界から姿を消したのだった。

その頃、未来でも……

「——若き日の私よ。お前が夢を捨てられぬ事は知っていた。お前は、私だからだ……！」

ソウゴがベルトを再び手にしたため、50年後の未来にオーマジオウは復活していた。

そしてオーマジオウは、ソウゴが絶対夢を捨てられないことを読んでいたかのよう
に、ただ静かに過去の自分を見ていた。

そして、現代。

「はぐたん!」

はぐたんを抱っこするハリーの元にはなが駆け寄り、ハリーからはぐたんを受け取る。

「はぐたん、ごめんね。私、はぐたんがとつてもとつても大切だよ!」

はぐたんが笑ってくれると嬉しい。はぐたんの笑顔の為なら頑張れる!はぐたん、大好きだよ」

「まゝ、まゝ、まゝ、まゝまゝ!」

「ええっ!?!」

するとはぐたんがはなに「まゝ」という。

「ママ言うのとるで!」

「初めて喋ったね」

「まーまー！」

「確かにママって言ってる！」

「はな、良かったね！」

「うん！はぐたぐん！」

嬉しさの余りはぐたんに頬ずりする。

はぐたんから「ママ」と呼ばれ、はなもいつもの笑顔を取り戻したのだった。

そして、ソウゴも……

「ゲイツ、ありがとう」

ゲイツが渡したジクウドライバーを見せ、ありがとうとお礼を言う。

「別にお前のためにやったわけじゃ……」

「あ、そういうええ。初めて俺のことを名前で呼んだよね♪」

「!?? そんなつもりは……」

「照れないですよ。可愛いねゲイツ！」

「うるさい！」

仲良く痴話喧嘩を始めるとみんな笑顔で笑っていた。

そして、そんな光景はとても純粹だった。

「かくしてジオウは復活した。彼はより強固な意志をもつて、覇道を進んでいくことになる。全てのお膳立ては整い……ここから歴史の大きな転換点が始まる」

その頃、クライアス社 会議室。

「まさか、若き日の日のオーマジオウの復活……」

更には、プリキユアが新たな力……状況は最悪ですな……」

「それにこのままでは『あの日』が早く来るかもしれない……」

「だから……お前らは甘いんだよ」

スウォルツが『あの日』の事を思い浮かべながら呟いていると、彼らの前に一人の黒いローブを身に着けた男が現れた。

「何が言いたんですか？ ティード君？」

リストルが『ティード』と呼ばれた男に尋ねると、その男は暗い眼差しのまま話し続ける。

「プリキユアはどうにでもなるが、俺はジオウ……いや、仮面ライダーそのものの存在が気

に入らねえんだ……

ああゆう、間違った方へ力を使う奴らがな……」

「何が言いたいんだ……」

「だから、俺が全て仮面ライダーを消して……俺が、俺一人が仮面ライダーになればいい」

その手にはアナザーライドウォッチが握られていた。

「待ちなさい。それは流石に認められません。社長が許すわけ——」

目の前の男が何を企んでいるのか察知したのか、リストルがそう言いかけるとティードが手を広げ、二人の時間を止めた。

「俺の邪魔をするな」

すると、ティードの後ろからクロバーのマークが特徴的な、巨大な扉が現れた。

「さあ、始めようか……」

そしてティードは不敵な笑みを浮かべて、その扉の中へと入っていった。

次回予告!

はぐたんのためにとある丘へやってきたソウゴ達。

だがそこに現れた謎の敵に…

「ウオツチが…」

「プリハートも…」

「世界中を嘘で書き換えてやる!」

ウソバーツカと名乗る敵に、プリハートとウオツチが石にされてしまう。

そして、仮面ライダービルド・桐ヶ谷晴夜は謎の少年と遭遇した。

そこへさらに、謎の男も現れる。

「誰だお前……?」

「クライアス社のティード。お前じゃあ、俺に勝てない」

謎の敵により、世界も歴史も全てが偽物の嘘に変えられ、仲間も次々と消えていく。

ティード率いるアナザーライダーとウソバーツカの前になすべなく絶対絶命となる。

だがそんな彼らの前に現れたのは――

『サイクロン!ジョーカー!』

「オリヤヤヤヤヤ！」

「俺！参上！」

『平成』という名の伝説を作ったレジェンド達と先輩チームと共に、最悪にして、最強の敵との、世界の運命を賭けた戦いが始まる。

「行くぞ。ソウゴ！」

「ああ！行こう！晴夜！」

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ジオウ！』

「変身！！？」

特別編 ジオウ&ビルド スーパースターズ!レジェンドForever!!?

——仮面ライダーとプリキュアを、愛してくれた、あなたに……

特別編 ジオウ&ビルド スーパースターズ！レジェンドForever!!?

——時は1999年、『九郎ヶ岳遺跡』。

ここは、全ての歴史の始まりの場所でもある。

そして、この遺跡には一つの紋章が刻まれた棺桶がある。

古代の人が刻んだであろう、その紋章の意味は『戦士』。つまり大昔、人々をとある脅威から守護する為の存在が、この棺桶の中で永遠の眠りについているのだと予想できる。

だがそこへ一人の男性が戦士の眠りを妨げる様に現れ、棺桶の中にあるものに何かをかざす。

『クウガ……!』

男が持っていたのは、一つの黒いウオッチだった。

そのウオッチが紫色に変わると男の後ろから扉が現れ、棺桶の遺物を扉の奥へと入れた。

「そのキミ!!」そこで何をしているの!」

そこへ、冒険家のような姿をした男性がひとり現れた。

「お前は……丁度良い。これで完全に障害は消える」

男は笑みを浮かべて冒険家の男性の時を止めると、その人も扉の中へと放り込む。

「仮面ライダークウガから始まった……20人の仮面ライダーの全てが……今終わるの時を迎える……」

——九郎ヶ丘遺跡。全ての始まりであるこの場所が、全てを終わりを迎える序章になるのだと。

——当然この時はまだ、誰も思わなかった。

2018年、現代。

仮面ライダージオウである時見ソウゴとキュアエールである野乃はなが、一つの無人駅にてポツンと寂しく立っていた。

「みんな遅いね……」

「うん」

今日はみんなではぐたんのお花デビューをするために此処へやってきたのだが、この二人以外はまだ誰も来ていない。

それから二時間近く待つていると漸く列車がやってきて、そこにはさあや、ほまれ、ゲイツ、ツクヨミの姿があった。

「ホントごめん！」

花が咲いている場所へ歩く最中、ほまれが手を重ねて謝る。

「実はもう帰っちゃったかもって思ってたんだ」

「えっ？」

「だって二時間も遅れたし、雨も降ったし……」

「正直、もう帰ったかもって思ってたの……」

「電車が止まっていたりすれば仕方ないよ」

さあやとほまれにゲイツやツクヨミは、乗ろうとした電車が運転見合わせになってしまったら、乗り損ねたりとあり、先に来ていたはな達の元へ遅れて来たと言語る。

「文句タラタラ言う奴もいるし」

「何や？俺か？」

歩くハリーがほまれの方を向いて言う。

「私、約束は絶対絶対ぜーったいに守るよ！」

「はならしいね」

「ううん」

「なんだ、なんか破ったことがあるのか?」

「それが……小っちゃい頃、約束破っちゃった事があつてね。結局ごめんねも言えないまま、それつきりになっちゃった」

はなは苦笑し、幼い頃に約束を破ってしまった事を伝える。

「きつとあの子は、とつても傷付いたと思う。」

だから、約束は絶対守るって決めたんだ」

「そっか」

「そんなモン、どーせしょーもない約束なんやろ?」

「ハリー、言い方」

ツクヨミがハリーに注意すると、はぐたんが目の前の景色に両腕を伸ばす。

「おっ!なんか見えてきた気がする!」

ソウゴ達はその場所に向かって走り出す。

その先には、色とりどりの花が咲いた花畑があり、今日のはな達の目的地はここだった。

「すっごい……!凄いいい!」

はなが色とりどりの花畑に目を輝かせる。

「はぐたんより喜んどうるやないか」

「ウソバーツカ!!?」

そして扉が開き、その中から青い炎が不気味に燃える燭台の様な体を持ち、そこに仮面や手足を付けたような巨大怪物が現れ、怪物を見た人々は悲鳴を上げながら逃げ惑う。

「またクライアス社の!!?」

「何かいつものと違うみたい!」

「どっちでもいい!行くぞ」

巨大怪物——ウソバーツカが両手で顔を隠すと同時に、手甲から赤い光線が放たれ、その光線が当たった花が石に変わる。

「花が石に……!」

「はぐたんをお願い!」

「おう!」

「任せて!」

はながハリーにはぐたんを預け、ソウゴ達がウソバーツカに向かって走る。

「ジオウ!」

「うん!」

『ジクウドライバー!』

二人がジクウドライダーを装着し、ウオッチを取り出す。

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

「変身!」

そしてドライバーにライドウオッチを装着させ、ジクウドライダーを回転させる。

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

ウソバーツカが光線を放つと同時にプリキュアとジオウ、ゲイツに変身し、光線を避け向かっていく。

時同じ頃。とある町に一人の少年が現れた。

「来る……」

少年が誰かから必死に逃げようとしたその時、不気味な気配を感じさせる風が吹く。

その風は次第に強くなり、町の風の流れを変えた。

「なんだ……」

「風が強くなったな……」

その時偶然、この町に来ていた仮面ライダービルドの桐ヶ谷晴夜と仮面ライダーク

ローズの上城龍牙が、急に強い風が吹き始めたことに気づいた。

「うわあああああ!!?」

自身の耳に誰かの声が聞こえた二人が振り返って首を空の方に向けてみると、そこには巨大な竜巻が出来ており、その上から小さな子供が落ちて来るのが見えた。

「ツ!!——龍牙、いけえ!」

それを見た晴夜が龍牙を前に突き出す。

「うおおお!」

龍牙はなんとか降ってくる子供をキャッチした。

「うおおお!子供が降ってきた!?!」

「摂理高気圧によるプロツキング現象か?」

晴夜は竜巻の現象を推測する。

「科学者がぶってる場合かよ」

「天才物理科学者の次期弟子だ。大丈夫?」

龍牙のツツコミをスルーしながら、晴夜は降ってきた緑色の少年に駆け寄る。

「僕から離れて……」

晴夜が声をかけると、少年は龍牙を突き飛ばし離れる。

「あいつが来る……」

「あいつ?」

すると、また強い風が吹く。

その風は二人の前に小さな竜巻のような風となって現れ、その中から人影のような姿が見えた。

「フッフッフッフッフ…」

そこに現れたのは、体が緑と黒で左右対象な中心にツギハギがある怪人。そして左太腿、右太腿それぞれに『DOUBLE』『2010』と刻まれていた。

「さあ、お前の罪を数えろ…」

その怪人は晴夜と龍牙をトゲトゲした黒の右腕を上げて指差し、罪を数えろと言う。

「あいつって、あいつか?」

「ブロッキング現象ってわけではなさそうだな」

敵だと判断した二人は変身アイテム・ビルドドライバーを取り出し、腰へと装着すると晴夜は二本のフルボトル、龍牙はクローズドラゴンを差し込む。

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

『ウェイクアップ! クローズドラゴン!』

ドライバーを操作すると、二人の前後からスナップライドビルダーが現れる。

『Are you ready?』

「変身!」

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yea h!』

二人が構えて叫ぶと身体にビルダーが装着され、体から煙が吹き荒れる。

「じゃあ!」

「行きますか!」

変身を遂げたビルドが複眼のアンテナをなぞり上げると、謎の怪人へと向かっていく。

その頃、花畑でウソバツカと名乗る敵と戦っていたジオウ達。

「フレフレ!ハート・フォー・ユー!」

「偽り!」

エールのハート・フォー・ユーが、ウソバツカのチョップで掻き消される。

「ええっ!!?チョップで掻き消した!?!」

「嘘っぱち!」

ウソバツカの掌底をエールの前に出たエトワールが止める。

「エトワール！」

「もう一発来る！」

左側からの掌底を二人が避け、アンジュとゲイツが左腕を掴む。

「その勢いを利用して！」

「せいやーっ！」

勢いを利用し、二人でウソバーツカを投げ飛ばす。

「慣性の法則を使わせて頂きました」

「ジオウ！」

「わかった！」

ジオウが走り出しゲイツに向かって飛ぶと、ゲイツのジカンザックスに乗りさらに高く飛ぶ。

『フィニッシュタイム！ギリギリスラッシュ！』

「オリヤヤヤヤ！」

『フィニッシュタイム！ギワギワシュート！』

「ハア！」

ギリギリスラッシュで切り裂くとゲイツがギワギワシュートを放ち、ウソバーツカは花畑に叩き付けた。

「よっしやーっ!」

「油断しないで。まだ相手はいるわ!」

ツクヨミの言う通り、あれだけの攻撃ではまだやられていない。ジオウ達は反撃が来ると思い構える。

「ごめんなさいウソ……」

するとウソバーツカが突如謝りだした。

「えっ?」

「?」

「もう何もしないから、許してウソ……」

手を重ねてもう何もしないと伝える相手に、思わず一同は攻撃の手を止めた。

「嘘っばい……」

「そもそも語尾にウソが付いてるし……」

「その時点でもう説得力が無い」

だがゲイツ達三人は説得力の無い命乞いに、どうせ嘘だと睨む。

「本当に、もう何もしない?」

「しないウソ。約束だウソ」

「分かった。約束だよ!」

それでもジオウとエールは取り敢えず信じることにした。しかし…
「ウツソー！」

「「「!?」」」

嘘と明かしたウソバーツカが光線を放ち、アンジュとエトワールがエールの両手を掴み、ジオウとゲイツは走って避けた。

それを見たハリーはウソバーツカの行動に、困惑しながら突っ込みを入れる。

「うおい！約束はどないしたんじゃい！」

「約束？そんなの信じる方が悪いウソ！」

「「「な、何やて〜!?」」」

ウソバーツカの無茶苦茶な理屈に、騙されたこと以上に腹を立てるジオウ達。

「どう言う理屈よそれ！」

「酷っど〜い！」

「嘘を付いて開き直るなんて信じられない！」

「この卑怯モンが！」

「貴様！ふざけるな！」

「あんた！ちよつとどんな考えよ！」

「嘘だったら、最初から嘘なんて吐くなよ！」

「うるさいウソー！」

ジオウ達から説教されるとウソバーツカが逆ギレを起こし、地面を踏み付けながら叫ぶ。

「オイコラー！一体何なんやおどれは！」

「俺の名はウソバーツカ。約束なんて守らないし信じないウソ。この世界を嘘で固めて、ウソバーツカの世界にするウソー！」

そう叫ぶと光線をハリーに向けて放とうする。

「うおっ……！」

「危ない！」

ジオウ達は跳んで避けるが、はぐたんを抱えたハリーとツクヨミは危うく当たりそうになる。

「ハリーー！」

「ツクヨミー！」

「はぐたんー！」

「大丈夫！」

「おわーっ！どないなっせん？！」

ツクヨミは無事だったが、いつの間にかハリーが人間態から元の姿に戻ってしまう。

その上、再び人間態になろうにも、なる事が出来ない。

「アカーン！人間の姿になられへん！」

「ええっ!?!」

驚きの声を上げるジオウ達は、ウソバーツカのピンタを危うく受けそうになるが、二手に別れて避ける。

「必殺技、ウソ突きー！」

両手を合わせ、そこから指を伸ばすウソバーツカ。

避けたりパンチやキックで弾くが、次にどこから来るのか分からず、エール・アンジュ・エトワールが攻撃を受けて地面に落下し、変身が解けてしまう。

「みんなー！」

「ジオウ避けるー!ぐわあー！」

「ゲイツー!おわっ！」

気を取られたジオウとゲイツも、全方位からの攻撃を受けて地面に落下し、こちらも同様に変身が解けてしまった。

「アカン………!こらアカンて………!」

「みんなー！」

ツクヨミとハリーがすぐに倒れたみんなに駆け寄る。

「……っ！プリハートが……！石にされちゃった！」

なんと、セツトしていたミライクリスタルごと、三人のプリハートが石にされてしまっていたのだ。

「アスパワワが奪われたんや！」

「じゃあ、変身も出来ないの!?？」

「……っ！ジクウドライバーとウオッチが……！」

「バカな……」

「そんな……」

ソウゴとゲイツの二人が起き上がると、ジクウドライバーとジオウウオッチ、ゲイツウオッチまでもが石になっていた。

「マズい……！このままじゃ……！」

「ウソぶく〜！」

ウソバーツカが変身能力を失ったソウゴ達へ向けて、胸のクローバーの部分から泡を出す。

「はな！」

「ジオウ！」

さあやとほまれ、ゲイツがはなとソウゴを突き飛ばし、身代わりとなって泡に吞まれ

る。

「さあや！ほまれ！」

「ゲイツ！」

三人を呑んだ泡が、ウソバーツカの胸のクローバーの部分へ吸い込まれる様に入って行った。

「お前達はもうおしまいウソ」

そう言うのと、背後に扉を作り出す。

「待って！」

「三人を返して！」

ソウゴとはながウソバーツカに向かって跳びかかるが、ハリーとツクヨミに手首を掴まれて止められる。

「変身も出来ないのに無茶よ！」

「せや！行ってどないする気や！」

「だって……………」

「このままじゃあ……………」

「仮面ライダーにもプリキュアになられへんお前らに何が出来る！」

「でも……………」

「俺の邪魔をするプリキュアも仮面ライダーも、ウソバーツカの世界には必要無いウソ。」

これから仮面ライダーとプリキュアを、一組ずつ消しに行くウソ」

ウソバーツカはそう言うと、扉の中へ入る。

「待って!」

ソウゴは止めるが、そのままウソバーツカは扉の中に入り、閉じると同時に扉が霧のように消え。辺りには石と化した花畑の上で呆然と立ち尽くすソウゴ達だけがあった。

その一方、ビルドとクローズはアナザーライダーと戦っていた。

「ハア!」

「オラア!」

二人掛かりで攻撃を繰り返すが、アナザーライダーは二人の攻撃を何難なく受け流す。

「こいつ、強えな〜」

「けど、ここで止めるぞ!」

「おお!」

ビルドが先に攻撃しようと、パンチを繰り返そうとする。そこへ、アナザーライダーはカウンターパンチを放とうする。

「よつと！」

だかラビットの脚力で高く飛び上がって、カウンター攻撃を避ける。

「!?？」

「行くぜ！オラオラオラオラ！オラアア！」

そこに意表を突いたクローズが青い炎を拳に纏いながら連続でラッシュを繰り出し、アナザーライダーを怯ませる。

「タアア・ヤアア！」

さらに飛び上がり着地したビルドが左、右とキックを繰り出し、アナザーライダーを吹き飛ばす。

「くうー……出直しとしましょう」

アナザーライダーが自らの周囲に風を放ち、姿を消した。

それを見て、二人はとりあえず変身を解除した。

「逃げやがったか……」

「何が起こつてるんだ……あつ！」

「何だよ？」

龍牙はいきなり大声で言う晴夜に驚く。

「あの子!?？ さっきの緑色の髪の子！」

「えっ? あああ!!? あの小僧!」

さつき降ってきた子供を思い出しすぐに振り返るが、その子供はすでに視界の中にはいなかった。

「しまった!」

「おい! 晴夜! 待てよ!」

慌てて探しに向かった晴夜を、龍牙が追いかけようとする。

「うわあ!」

しかし運悪く、誰かにぶつかってしまふ。

「イテテ、悪い……」

ぶつかった相手である、パティシエの姿をした少女達に軽く謝りながら、晴夜を追いかけようと視線を外した。

「ちよつと、あんた! ちゃんと前を向いて歩きな!」

しかし、紅の短髪を伸ばした男性の様な女性に前を見ると注意されながら、腕を捕まれて歩みを止められてしまふ。

「これは、少しお仕置きが必要ね」

何がなんだかよく分かってない龍牙を見る紫色の女性が、どこか加虐心の籠った目で笑みを浮かべて呟く。

「悪いけど、俺……あああ!!？」

今にも連れて行かれそうな状況に助けを求めようとするも、既に相棒の姿はなかった。

「さあ、償ってもらいましょう。可愛い坊や」

女の子の団体に捕まってしまった龍牙は足を引き摺らせながら、死んだ目で宙を見ながら口を開いた。

「最悪だ……」

ウソバーツカにゲイツにさあや、ほまれを奪われたソウゴとはな。しかも、プリハートとウオッチまでも石となってしまった。

「どうしよう……」

「奴はプリキュアを一組ずつと、仮面ライダーを消すって言った。その事を伝えるに行こう」

「でも、他のプリキュアが居る場所もライダーの場所だつて……」

伝えに行こうにも、場所がわからなければ伝えに行けない。

「お困りのようだね。我が魔王」

「ウオズ」

途方に暮れていると、そこへウオズが現れた。

「ねえ、ウオズ。一体何が起きてるの? どうして、ウオッチとプリハートが石になっちゃったの?」

「残念だが、あのウソバーツカと名乗る敵については、私もまだ何もわからない」

「そうか……」

ウオズもまだ情報を掴んでいないと答える。それを知ったソウゴはがっかりとした顔で心を沈める。

「だが、今回は私も手を貸そう」

するといつもは助言だけ出して後は何も言わず立ち去ってしまうウオズが、珍しく手を貸してあげようと話す。

「本当ですか?」

「じゃあ、他のプリキュアがどこにいるかわからない?」

「そうだね。まずは……はな君達の先輩の、キラキラ☆プリキュアアラモードの元へ行くといい。キラパティと言う店に手がかりがあるはずだよ」

初めにキラキラ☆プリキュアアラモードの元へ行くことを勧められたソウゴ達は、ようやく見つけた光の道筋に顔を輝かせる。

「ありがとうございます」

「よし！その人達に会いに行こう！」

『タイムマジーン！』

ソウゴがタイムマジーンを呼び出す。

「……行きましょう」

「それしか無いな」

ソウゴ達は二機のタイムマジーンに乗り込み、キラキラ☆プリキュアアラモードを探しに向かった。

その頃、空から降ってきた緑色の髪をした子供が、ひとり寂しく町の中を歩いていた。

「やっと見つけた！」

そこへ、この子を探すために走ってきた晴夜が現れた。

「僕とは関わらない方がいいよ……」

少年はそっぽを向いて去ろうとすると、晴夜は先周りし、その子の前に出る。

「なあ、あの怪人はなんだ？なんで追われてるんだ？」

「……」

緑の髪の少年は晴夜の質問に黙り込み、沈黙が続いた。

「……………あ……君、名前は？」

話を変えて名前を聞くと、少年はジロツとした目で晴夜を睨む。

「……そつちから名乗るのが、先だと思うけど……」

「そうだね。俺は、桐ヶ谷晴夜。仮面ライダービルドだ」

「仮面ライダー……クウガと同じなの？」

「クウガ？（……って、確か。前に士さんがそんなのに……）」

それを聞いた晴夜は、前に巻き起こった戦いの際、一緒に戦った門矢士がそんな名前のライダーに変身したことを思い出す。

「探したぞ」

声が聞こえ、振り向くと男性が立っていた。

「なんだ……あんた？ 保護者って感じじゃないな」

冷たい目と暗い服装に怪しい感じが見え、晴夜は警戒している。

「邪魔をするな」

だが男性がそう言うや否や、手を広げると二人の時間が止まった。

「う、動かない……」

男性はそのまま晴夜の後ろにいる、怯えた様子の子供の方へと向かう。

「もう、逃げるなよ」

指を鳴らすと後ろから巨大な扉が現れ、男性はその子供を扉の中へと放り投げる。す

ると、再び時が動き出す。

「うわあ！動いた！」

動けるようになると晴夜はすぐに振り返るが、既に子供の姿がなかった。

「お前、あの子をどうした！」

晴夜が男性に殴りかかる。しかし一瞬のうちに避けられると、男性が晴夜の腕を掴む。

「誰だお前？」

「クライアス社のティード。お前じゃあ、俺に勝てない」

「クライアス社……!?？　じゃあ、お前ソウゴが言ってた連中か!?？」

クライアス社と聞き、すぐに敵と判断した晴夜はティードの腕を振り払い、ビルドドライバーを装着した。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

「変身！」

ライドビルダーが現れてビルドに変身しようしたその時、ティードが掌を上げタイムジャツカーのように晴夜だけの時を止めた。

「まだ、力を失ってなかったライダーがいたか……」

「まあいい……俺の道具になってもらうか……」

ティードが左手で片目に翳すと、掌に刻まれた紋章のような入れ墨が光り出し、円の中に目を浮かべながら晴夜に向けて衝撃波を放つ。

「……」

「さあつて……そろそろ奴も始末した頃か……」

ティードが晴夜に何か放ち終えると、晴夜はティードの後ろをついていく。

その頃、ソウゴやはな達はどこかの町の坂を必死に走っていた。

「はあ、はあ、はあ……な、長い……」

「この坂いつまで続くんや……」

「頑張つて、この坂の向こうだから……」

「ハリー、頑張つて……」

ウオズの言うとおりに、タイムマジーンでキラキラ☆プリキュアアラモードを探しに出て、まもなく町へと到着。ソウゴ達はタイムマジーンから降り、町の中を歩いて探していた。

「あくあ、きついく……」

「ちよつと、休憩……」

ソウゴ達は休憩のため、一度腰を置く。

「とにかく、はぐたんのミルクと…プリキュアさん…それと…」

「あ、そうだとはぐたんの…」

「はぎゆう〜!」

「…ん? ああああツ!!?」

はぐたんの声が聞こえ振り返ると、はぐたんが台車に乗って坂を走っていた。

「はぐたん!」

「待って!」

二人は急いではぐたんが乗った台車を追いかける。ツクヨミとハリーは疲れてすぐに追いかけれなかった。

「はぐたん! 駄目えええ!」

「はぐたん!」

二人は必死になって追いかけるが、台車は早く追いつけない。

「誰か止めて!」

はなが叫んだその時……

「えっ?」

二人の前にパティシエ姿の女の子が現れた。

「私が台車を止めるから!」

「俺もー!」

少女とソウゴの二人で左右に分かれ、台車の手すりに手を伸ばす。そのまま掴み台車は止まったが…

「ああ!!?」

止まった反動ではぐたんだけが放り飛ばされてしまった。

「なんの!」

なんとかはなが飛び込み、はぐたんをキャッチした。

しかし…

「と、止まらない〜〜!」

だが、飛び込んでキャッチしたのはいいが、そのせいでより加速してしまった。

「ええええええええ!!?」

急いで追いかけても間に合わないスピードで、そのまま海岸の方へ向かっていた。

「キラパティ!主張販売です!」

海岸の方ではキラパティと呼ばれる集団が、スイーツの主張販売していた。

「なんで、俺がこんな格好を…」

「責任を取ってもらうと言ったわよ?」

そこでは先程捕まった龍牙が、死んだ目でパティシエの姿と一緒に販売していた。
「誰か止めて〜!!?」

俺はなにをやってているんだと遠い目をしていると、海岸に居た全員がその声が聞こえ、坂を見るとはなが凄いい勢いで走っているのが見えた。

「止まれ!」

それを見て、三人が道路上の車を止めるようにしてもらおう。

はなはそのまま走って海岸のガードレールにぶつかりそうになるが、そこへ幕を使い反動で勢いを殺し、後ろで待機していた龍牙が支えた。

「おい〜大丈夫か?」

「は……はい……おかげさまで……」

はなは腰が抜けてへなへなと膝を折る。

「はな!大丈夫?」

台車を止めたソウゴと女の子がやってくる。

「うん〜……なかとか……」

「あつ!龍牙!」

「ん?あつ!お前……えつと……」

「俺だよ。ほら、ウオッチをくれた」

「ああ、あの時のな!!?」

龍牙は以前にクローズドウォッチをソウゴにあげた事を思い出す。

「……………でも、なんでそんな格好してるの?」

それはさておき、ソウゴは何故、龍牙がパティシエの格好をしているのか尋ねる。

「まあ、色々な…………」

「?」

それに対して言いづらそうな表情を浮かべる龍牙を疑問視していると、後ろからツクヨミとハリーもやってきた。

しばらくして、ソウゴ達はキラパティへと向かう。

「さあ出来た。ちゃんと人肌に冷ましてありますぞー」

少ししてからイチゴの髪飾りをつけた女の子——いちかがはなにミルクの入った哺乳瓶を差し出し、はぐたんがミルクを飲む。

「めちよつく……………いきなり完璧……………!」

「赤ちゃん用のスイーツを作りたくてさ。まずは基本のミルクの作り方から勉強してた所だったんだ」

「ありがとう、色々と助けてくれて。」

それにしても凄いね。こんな凄い店を持つているなんて♪」

「本当、普通のお店の数段凄い……」

キラパティイの中を見て、普通のスイーツショップの何倍も広さを見て感心する。

「あの、私、野乃はなっています」

「俺は時見ソウゴ。よろしく」

「ツクヨミ。よろしく」

「私、宇佐美いちか。よろしくね」

お互いに自己紹介をする。

「ところで、めちよつくって何ですか?」

茶髪の小柄な少女——ひまりははなに「めちよつく」の意味について聞き出す。

「ああそれは、めつちやシヨックの略なの! イケてるでしょ!」

「ええ……?」

「知らなかった……! 勉強になるわ……!」

「えっ、マジ?」

「覚えなくていいだろ……」

「めちよつく」をメモする金髪少女——シエルを、リボンを付けた青い髪の少女——

あおいと龍牙がツツコむ。

「ねえ、龍牙。晴夜はどうしたの?」

「晴夜? ……ああああああー!!?」

「うるさい」

短い赤髪の女性——あきらがいきなり叫んだ龍牙の頭を叩く。

「イツテエ……晴夜なら変な怪人と一緒に戦った後、空から降ってきた子供探しに行つて見失つちまつて……」

「子供?」

子供を追いかけに行つたと聞くと、紫の長い髪を持った女性——ゆかりがはぐたんの方へと話を変える。

「ねえ、普段はあなた達がその子のお世話をしてるの?」

「一応はねえ」

「でも、時々私の方がお世話されてるって言うか……さあやとほまれも……」

「たまにゲイツも手伝ってくれてるし……そうだ!」

「ここに来た目的をソウゴ達は思い出した。」

「私達は三人を助けたくて探してるんだ!プリキュアさんを!」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

いちか達、キラパティのメンバーが難しい表情となる。

「プリキュアさん……」

「うん。プリキュアと会える方法知らない？ここに来ればわかるって教えられたんだけど……」

「……………え、えつくと……」

「そうだ。晴夜と龍牙の知り合いの方は……？」

ソウゴは以前にアナザービルドの時、手を貸してくれたドキドキプリキュアの方はどうかと尋ねる。

「ああ……今一緒にやねえんだよな……」

「なんで、一緒にやねないの？」

ツクヨミがなぜ、今は一緒にやねないのかと尋ねたその時……

「怪物だ！」

外から怪物が現れたという騒ぎが聞こえた。

「まさか……」

急いで全員がその方へと出て行く。

「プリキュア！仮面ライダー！出て来るウソー……」

キラパティの外に出ると、ウソバーツカが現れ、町の中を暴れていた。

「あれは？」

「ウソバーツカです!」

「なんだよ。その如何にも嘘をつくような名前……」

「アイツが俺の友達をさらって、プリキュアと仮面ライダーを消すって……!」

はたとソウゴがそう伝えると、ウソバーツカが両手から光線を放って車を石にさせる。

「止めないと、みんな行くよ!」

いちか達がウソバーツカに向かって走っていくといちか達六人の体が光り、それぞれウサギ、リス、ライオン、猫、犬、ペガサスといった動物と色んな種類のスイーツを組み合わせた様なコスチュームへと姿を変える。

その姿は、はながキュアエールとなった時と同じだった。

「ええ!!? いちかちゃん達が!?!」

「あの人達、プリキュアだったんだ……!」

「そうペコ。伝説のパティシエ、プリキュアペコ」

突然出てきたキラキラ☆プリキュアアラモードの妖精・ペコリンが、彼女達こそがプリキュアだと話す。

「よし俺も!」

『スクラツシユドライバー!』

キラキラ☆プリキュアアラモードが戦っているのを見て、レンチが付いた青いドライバー、スクラツシユドライバーを装着し、ゼリー状の成分が入ったボトル——スクラツシユドラゴンゼリーを取り出し差し込んだ。

『ドラゴンゼリー!』

龍牙の周りに巨大なビーカーが出現し、龍牙は高々と叫ぶ。

「変身!」

レンチを下ろすとセットしていた袋が潰れ、龍牙の周囲に現れたビーカーに青い液体が注入されるとビーカーが割れ、姿が変わる。

『潰れる!流れる!溢れ出る!ドラゴンインクローズチャージャーブラア!』

スクラツシユドライバーで変身するライダー、クローズチャージへと変身した。

「お前ら離れてろ!」

クローズから離れるように言われ、ソウゴとはなは少し離れた。

「うおおおお!」

「龍牙君!?!」

「あんた、もしかして……」

「俺は、仮面ライダークローズだ!」

「青が被ってる」

「いや、青じゃねえぞ……多分?」

色被りについてジェラートとクローズが話していると、ウソバーツカがいきなり七人に攻撃してきた。

「てめえ!いきなりはねえだろ!」

『ツインブレイカー!ビームモード!』

クローズが左腕からツインブレイカーを出現させ、ビームモードでウソバーツカに放ち、怯ませた。

『アタックモード!』

『シングル!ツイン!』

さらにモードに変え、ウソバーツカに向かって走り出すと、ツインブレイカーに二本のボトルを差し込んだ。

『ツインブレイク!』

ツインブレイカーの攻撃がアッパーのように振り上げられ、ウソバーツカを上空へ飛ばす。

そこへホイップ達が一斉にクリームエネルギーを飛ばしてウソバーツカの両腕を縛り付け、両腕を交差させて海岸へ引つ張る。

「レインボーリボン!」

更にパルフェがレインボーリボンを回し、星の部分を動かす。

「行くよ！アン・ドウ・トレビアン！」

パフェの器を作つて操作し、ウソバーツカを閉じ込める。

「「「スィー！ツー！ワンダフルアラモード！」」」

そこへホイップ達がスィー・ツー・ワンダフル・アラモードを放ち、更にダメージを与えた。

「一気に行くぜ！」

その際にクローズが、ツインブレイカーにクローズドラゴンを差し込む。

『クローズドラゴン！Ready go！』

音声が響くと、クローズの背後に龍が出現し、ドライバーのレンチを下げる。

『レッツブレイク！』

「これで——」

「もう攻撃しないから……許してウソ」

「——えっ!?…つと、つと…はあ!?？」

ツインブレイカーの攻撃を放とうとした途端、ウソバーツカが泣く素振りを見せ、クローズやホイップ達の方を向いてそう伝える。

「本当？」

「お前、本当に何もしないか?」

「本当ウソ」

本当かと思う七人は、攻撃の手を緩めて思案を始める

「ダメええ!!?」

「騙されたらダメ!」

そんな彼らを見て、同じ手にやられたソウゴとはなが急いで、敵の嘘だと伝える。

「嘘泣き!」

だが時は遅く、ウソバーツカが嘘泣きだと言うと手から水を放ち。ホイップ達が呑まれ、うつ伏せに倒れると同時に変身が解けた。

「てめえ……汚えぞ!」

かろうじて躲したクローズが、ツインプレイカーを放とうした次の瞬間…

「ぐわあ!」

いきなり、横から斬撃の不意打ちを受ける。

「なんだてめえ……!」

クローズは何者がか攻撃してきた方を向くと、山羊の様な複眼とナマハゲのようなベルトを着けており、スカート状のアーマーの尻部分に“2007”、“DEN-O”の文字が刻まれている、何処か不吉さを見せる赤色の姿をした怪人がいた。

「俺……参上……」

「はぁ？ 何が参上だよ！」

起き上がったクローズはその怪人に向かっていく。だが、怪人の方がクローズを押し
ていた。

「あれは！」

「アナザーライダーだ！」

怪人を見て、ソウゴがすぐにアナザーライダーと叫ぶ。

「なんで、こんな時に……クライアス社……」

ツクヨミは最悪の状況だと考える、ウオッチが石となって使えないためにアナザーラ
イダーを倒すことが出来ないからだ。

そう思ってる間に、アナザーライダーはじわじわとクローズを追い詰める。

「はぁあ！」

「うわぁぁぁあ！」

アナザーライダーの剣の攻撃がクローズに直撃、そのまま強制変身解除となる。

「あ……あ……マジ、強え……」

龍牙が膝折ると、そのまま倒れこむ。

「ウソぶく〜！」

そこへウソバーツカが胸のクローバーの部分から泡を出す。

「いちかちゃん!」

「龍牙!」

ソウゴとはながいちかと龍牙の手首を掴んで引っ張り、泡に吞まれるのをやり過ぎす。

「約束を信じるなんておかしいウソ」

「そんな事無い!」

いちかが石になったスイーツパクトを握って叫ぶ。

「約束を守るなんて、どうせ誰も守らないウソ。だったら約束を破って、みんな嘘つきになればいいウソ!」

「!?」

「このヤロ〜……なっ!ドライバーが!?」

龍牙がもう一度変身しようとドライバーを握ると、スクラツシユドライバーが石に変えられていた事に気付く。

「ウソバーツカの世界には、プリキュアも仮面ライダーも必要無いウソ」

そう言うと、扉の中へ入る。

「待つて!うわあ!」

「ソウゴ！」

追いかけてようすると、アナザーライダーにいきなり殴り飛ばされる。

「仲間を返して欲しかったら、魔法界に来るウソ」

「魔法界!?!?」

「まさか……!」

ウソバーツカとアナザーライダーが扉の中に入り、閉じると同時に扉が消えた。

(緑の扉……あれは……!)

そんな中、クローバーの紋章が刻まれた扉を見たはなは、見覚えがあることを思い出す。

「いちか〜!」

泣いて飛んで来たペコリンをいちかが抱き締める。

「魔法界へ行こう! みらいちゃん達が危ない!」

「魔法界?」

「そこにもプリキュアがいるの?」

「ああ、魔法使いプリキュアがそこにいるんだ……」

龍牙といちかがそこにもプリキュアがいると言う。

「とにかく、その魔法界へ行こう!」

二機のタイムマジーンが置いてある場所へと向かい、魔法界へと向かう。

「はな。行こう!」

「う、うん……」

ソウゴが走るとはながキラパティを模したカバンを握り、タイムマジーンへと乗り込もうと魔法界へ向かう。

「何や……!偉い事になって来たな……!」

「こうなるなんて思わなかったよ……!」

「おいはな!聞いとるんか!?」

ハリーはそう言うが、はなにはハリーの声が聞こえて無かった。ソウゴ達は魔法界へと向かう為にタイムマジーンへと向かっていく。

ウソバーツカの亜空間に呑み込まれ、結界に入れられたひまり達は、何かにぶつかる。

「何?!(?!?)」

「何も無いよ……?」

「それより、何かぶつかった気がするんだけど……」

「はい、何かにぶつかったような……」

「あの一!すみませーん!」

「誰かしら？」

下を見るとそこには、先に捕まってしまったゲイツとさあやとほまれの三人がいた。

「あつ、もしかしてはなちゃんとソウゴ君のお友達ですか？」

「そうだけど……」

「なんだ……お前らは……」

「あの、皆さんは——あらら？」

ゲイツとほまれとさあやがひまり達から通り過ぎる。

「ボンジュール。私達もプリキュアよ」

「プリキュア？？」

「私達もプリキュアです！」

「知ってるわ」

「はなちゃんとソウゴが心配してたよ、君達の事。えつと……」

「私、薬師寺さあやと言います」

「輝木ほまれ。よろしく」

「明導ゲイツだ」

「さあやちゃんにほまれちゃんとゲイツか。よろしく」

軽く自己紹介を済ませると、辺りを見回す。

「こんな所で何も出来ませんが……」

「ホントに何も無いわね」

「とにかく、何とかして外へ出よう」

「よっしゃー!入り口に体当たりだーっ!」

「そんな事しても無駄だ」

「ここからは出られないよ」

体当たりをして出ようとするあおい達を、ゲイツとほまれが止める。

「何をー!」

「まあ。ネガティブね」

「何事もやって見ないと分かりません!」

「みんな、よくご覧なさい。彼女達の結界の表面。何か形が歪だと思わない?」

ゆかりに言われたひまり達がゲイツやさあやとほまれの結界を見ると、確かに形が歪になってた。

「ホントだ。結構歪んでる」

「つまり、私達が来る前に、既に二人は何度も入り口に体当たりし、結果その方法では出られないと分かっている」

ゆかりに凶星を突かれ、ゲイツが顔を逸らしほまれの顔が赤くなる。

「別に……」

「そんなんじや……!」

「何故隠すの?あの子を危険な目に遭わせたく無くても、必死だったんでしょ?素敵だわ」
そう言うと、ゲイツとほまれが更に顔を赤くする。

「あの!ほまれとゲイツくん素直じゃないだけなんです!本当は良い子で優しい人なんです!」

「さあや!」

「余計な事を……」

ひまり・あおい・シエルが目を輝かせてニヤニヤする。

「何だ、良い奴じやくん。輝木ほまれ!明導ゲイツ!」

「照れ屋さんなんですわね」

「トレビアくん。仲良くしましよ」

「近過ぎ……!離れて!」

「や、やめろ!」

ゲイツとほまれがひまり達から離れるが、三人が後を追った。

「でもどうする?このままジツとする訳には……」

「出る方法が見つかるまで、しばらくここに居るしか無いんだもの」

そう言うと、あきららをさあやの元へ突き飛ばす。

「あきらも新人さんと、親交を深めたら?」

「ゆかりったら……。酷いなきなり……。ごめんね。どこかぶつかなかった?」

(これが噂の……。壁ドン……。!?も、もし、そ、そ……)

微笑むあきらを見たさあやは顔を赤くし、心の中で呟いた。

その頃、此処は人間界と違った魔法界、魔法使いの世界である。

魔法界の空を魔法のホウキの上に魔法使いプリキュアの三人がホウキに乗って飛んでいた。

「甘い匂いがするモフ」

みらいの魔法のホウキに乗ったぬいぐるみの妖精・モフルンが甘い匂いを嗅ぎ取る。

「どこから?」

「あっちモフ」

モフルンは甘い匂いのする方向を手差しする。

『タイムマジーン!』

そこから二機のタイムマジーンが現れた。

「何あれ?」

「機械だよね？あれ？」

「行ってみよ！行ってみよ！」

みらい達はタイムマジーンが着陸した地点へと向かう。

その頃、タイムマジーンで現れたソウゴ達は、駆らしき場所へタイムマジーンを着陸させた。

「これが魔法界……」

「世の中色んなモンがあるんやな」

ツクヨミは辺りを見回す。

普段の世界からしたら、有り得ないものがいっぱい目に映る。

「？」

「どうした？」

ソウゴが空を見上げると、何か飛んで来ていることに気付く。

「何かがこつちへ来る？」

「みらいちゃん達だ！」

ソウゴの指差した方をはな達が見ると、みらい達がこちらに向かって来ていた。

はな達のすぐ傍で停まり、魔法のホウキから降りる。

「龍牙君、いちかちゃん!」

「みらいちゃん!」

「久しぶりだな。みらい、リコ、モフルン……つと、お前は……?」

「はーちゃんだよ!」

「はーちゃん……えええ!あの時の妖精!」

「はー!」

龍牙はみらいからはーちゃんだと聞いて、前に見た時とは違う姿を見た様な反応をした。

「マジか……」

「本当に久しぶりだわ。ところであなた達は?」

リコはソウゴ達を見て、何者なのか尋ねる。

「龍牙君やいちかちゃんと一緒にいるから、ひよつとしてプリキュア?仮面ライダー?」

「は、はい。野乃はなつて言います。キュアエールです」

「俺は、時見ソウゴ。仮面ライダージオウ」

「私はツクヨミ……私は仮面ライダーやプリキュアじゃないけど、みんなのサポートをしているの」

「そして、俺はー——」

「「可愛い〜！」」

「この子ははぐたんです」

ハリーが自己紹介しようとする、はぐたんを見たみらい達のはぐたんにメロメロになる。

「俺は——」

「まだ赤ちゃんだった頃のはーちゃんを思い出すわね！」

「はー！」

ハリーが自己紹介しようとするが、遮られる。

「私達もさ、はーちゃんのお世話したよね！」

「したした！すっごい大変だったわよね！」

「俺の自己紹介は……………」

スルーされ続けたハリーは一人、ツクヨミの肩の上で沈んでいた。

「俺、魔法使いに会うの初めて！」

魔法使いであるみらい達に感激するソウゴ。

「うん、ホウキで空飛んでるなんて凄い……………」

「分かるな、その気持ち。私もすっごく感動したもん。初めて魔法のホウキに乗った時」

「で、龍牙君、いちかちゃん達は何で魔法界に？」

「ああそうだ!」

「大変なんです!」

「実は……」

事情を言おうとすると、リコが何か足りないことに気づく。

「ん? そういえば、晴夜はどうしたの?」

「実は……変なガキを——」

その時、地響きが生じ、扉から出て来たウソバツカがこちらに向かって歩いて来た。

「扉の先まで、黒い炎が出とるで!」

更に扉の先まで、黒い炎が出ていた。

「何あれ!?」

「ウソバツカです! プリキュアと仮面ライダーを消しに来たんです!」

「この魔法界もゼーんぶ、嘘で固めてやるウソ!」

「そんな事させない!」

「うん!」

みらい達がウソバツカを止めようと向かおうすると、七人の前に男性が現れた。

「誰だてめえ!」

現れたのは、先程晴夜の前に現れたティードだった。

「まだ残っていたか……ジオウ、クローズ……」

「タイムジャッカー……?」

ティードがジオウの名を呼ぶのを見て、ソウゴがクライアス社のタイムジャッカーかと警戒する。

「お前らの相手はこいつだ」

指を鳴らすと、ティードの後ろから見覚えのある顔が現れた。

『晴夜（君・さん）!』

現れたのは桐ヶ谷晴夜だった。

「おい!晴夜どうした!」

龍牙が呼びかけるが、晴夜は返事を返さない。

「やれ」

ティードが命令すると、ハザードトリガーを取り出した。

『マックス!ハザードオン!』

トリガーをドライバーへと差し込むとフルフルラビットタンクボトルの栓を回す。

『タンク!』

「えっ?ちよつと晴夜待って……」

『タンク&タンク!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタン

ズタンー!」

「変身……」

『Are you ready? オーバーフロー!』

『鋼鉄のブルーウオーリア! タンクタンク! ヤベーイ! ツエーイ!』

「えっ? お、おい! 晴夜!」

晴夜はいきなりタンクタンクフオームと変身し、フルボトルバスターをソウゴ達に向けてける。

『!??!』

放たれたフルボトルバスターの光弾がソウゴ達に向けて放たれた。

だがビルドドライバーで変身したクローズと、サファイアの姿となったキュアミラクルとキュアマジカル、そしてキュアフェリーチェが、ソウゴ達の盾となりビルドの光弾を防いだ。

「晴夜、どうしたんだよ!」

「……」

「危ない!」

クローズが呼びかけるがビルドはフルボトルバスターの攻撃を止めようとしな

「もしかして、クライアス社が晴夜を……」

ソウゴがあそこにいるクライアス社の一員が、晴夜を操っていると睨む。

『フルフルマツチデース!』

そう思ってる間にビルドがフルフルラビットタンクボトルをフルボトルバスターに差し込み、巨大な青いエネルギー弾が今にも放たれようとしていた。

「おい晴夜、やめろ!」

「晴夜! いい加減にしなさい!」

「お願い! 晴夜君もうやめて!」

三人がビルドに呼びかける。だが、ビルドは迷わずフルボトルバスターのトリガーを引こうとした。その時…

『フルフルマツチブレイク!』

突然反転し、ティードとウソバーツカにフルボトルバスターを放った。

ウソバーツカの両手がティードを守ったがしかし、ウソバーツカはフルボトルバスターの攻撃に耐えれず後ずさった。

「やはり、洗脳されていたフリだったか……」

「どうよ。中々だったろ」

それを見てソウゴ達がビルドに近寄る。

「晴夜だよね……」

「ああ。奴らの動きを知りたくて、あえて操られたフリをしてんだ」

「ちよつと!それタチが悪いわよ!」

「名付けて、『敵を騙すなら味方から作戦』!」

「まんまじゃねえか!」

ビルドの作戦にクローズが突っ込むと、気を取り直しティードの方を振り向く。

「仕方ない、俺が潰してやる」

ティードがそう言うのと、懐から黒いウオッチを取り出した。

「あれって……」

『クウガ……!』

ティードはウオッチの起動スイッチを入れて、*“クウガ”*と鳴ったアナザーウオッチを起動させると、自分にそれを埋め込む。

「うわああああああああ!!?」

ウオッチを埋め込むとティードから黒い霧が彼の周囲に現れ、ティードの姿がどんどん巨大化していく。

「マジかよ……」

「自分からアナザーライダーに……」

霧が晴れると、ティードが巨大化して二本指の両腕と長い三本の角を持ったクワガタ

のような姿となって現れた。

「あああああツツ！——これだ！この力で俺が最強だ！」

彼自らアナザーライダーとなった事で全員が驚愕し、はぐたんはあまりの恐ろしさに泣き出してしまった。

「こいつは、俺と龍牙やる！ミラクル達はそっちを！」

フルボトルバスターでアナザークウガをミラクル達から離し、こちらへ引きつける。すると、アナザークウガが巨大な腕をビルドとクローズに向けて振る。

「ティード！お前は何がしたいんだ！」

フルボトルバスターでアナザークウガの腕の攻撃を止めながら、何が狙いなのだとい掛ける。

「知りたいか。いいだろう教えてやる！」

アナザークウガが目的を話そうとする。

「俺の狙いは、この世界から仮面ライダーを消すことだ！」

「なっ！！？」

「！！？ なんだって！」

「ライダーを消す……？」

アナザークウガもといティードの狙い。それは、仮面ライダーの存在を消すことだっ

た。

「仮面ライダークウガから始まった20人の仮面ライダーが誕生し、歴史を作った……

だが、その歴史は間違っていた」

「間違ってただと……? それじゃあ、俺やソウゴ、戦兔さん達が間違っていて、お前が正しいと言うのか! ふざけるな!」

ビルドはそのまま押し返そうする。だが、アナザークウガはさらに押し込もうとする。

「そうだ。お前達の存在は、間違ってるんだあああああー!」

アナザークウガが更に押し込もうしたその時……

『フルボトルブレード!』

ビルドはドライバーからフルボトルブレードを出現させ、アナザークウガを振り払う。

「間違ってた……そんなお前の理屈……俺がビルドする!」

ビルドはそう叫ぶとボトルを外し、もう一度フルボトルを振り、赤いランプの出した瞬間と共に栓を回した。

『ラビット!』

フルボトルを半分に割り、再びドライバーにボトルを差し込んだ。

『ラビット&ラビット！ビルドアップ！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『Are you ready?』

ハザードライドビルダーとラビットラビットアーマーが出現し、ラビットのユニットが空中へパージされた。

「ビルドアップ！」

ビルダーがビルドの体と重なり、金型が離れハザードフォームへと変身し、パージされたラビットユニットを飛びながら装着し、着地した。

『オーバーフロー！紅のスピーデージャンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハエーイ！』

ラビットラビットへとフォームチェンジを完了させ、フルボトルバスターとフルボトルブレードを持ちアナザークウガへ向かっていく。

一方、ウソバーツカが両手から光線を放ち、ミラクル達三人はそれを飛んで避ける。

「たああああああつ！」

ミラクル・マジカルがダブルキックを繰り出し、ウソバーツカが掌底で止める。

「うああつ！」

しかしそのまま押し出され、吹き飛んでしまう。

「プリキユア!エメラルド・リンカネーション!」

「ウソ出の小槌!」

フェリーチェがエメラルド・リンカネーションを放つが、ウソバーツカが具現化させたハンマーを振るい、エメラルド・リンカネーションが上に流される。

止められた事に驚くが、放つて来た光線をバックステップして避け続ける。

「プリキユア!サファイア・スマーティツシュ!」

「ウソ、寒い!」

ミラクルとマジカルがサファイア・スマーティツシュを放ち、ウソバーツカが両手から青い光線を放つ。

激しくぶつかり合うが、冷凍光線の方が威力は上で、徐々に押し出される。

「はっ!」

前に出たフェリーチェがピンクトルマリンのバリアで防ぐが、光線が拡散されて建物に当たる。

「今にこの魔法界も、冷たい世界にしてやるウソ!」

「!?」

はなはまた、幼い頃の事を思い出す。

拡散された光線により、建物が石にされて行く。

「どんだん石になっちゃう……！」

「これ、不味くねえか……？」

それ見てソウゴが立ち上がる。

「どなんした、ソウゴ？」

「もう我慢出来ない！」

ソウゴが急いで停めてあるタイムマジーンへと乗り込む。

「ちよつと！ソウゴ！」

ツクヨミは後を追いかけて、そのままゲイツのタイムマジーンへと乗り込む。

先に飛んだソウゴのタイムマジーンはアナザークウガの元へと飛び、ロボモードへと変わった。

「はあああああ！」

ロボットモードのタイムマジーンの腕がアナザークウガに突き刺さり、吹き飛ばした。

「あのロボット、ソウゴか……」

「晴夜！龍牙！俺も戦う！」

「気を付けろ！こいつは異常だ！」

「わかってる……でも……」

そう言いかけると、石にされていく魔法界で泣いてる人達に目に映る。

「こんなことをする、こいつは許せない!」

ソウゴが操作するタイムマジーンが、更にアナザークウガへ殴りかかる。

「ソウゴ!」

そこへゲイツのタイムマジーンを操作するツクヨミも、ロボモードで応援へと駆け付けた。

「タイムマジーン如きが邪魔をするな!」

しかしアナザークウガの叫びが強烈な衝撃波を放ち、タイムマジーンを怯ませる。

「うわああああああ!」

アナザークウガに二機のタイムマジーンが上空に吹き飛ばされる。

「そんなもんで、俺を止められるか!」

アナザークウガも飛び上がり、タイムマジーンの頭上を超え、タイムマジーンを地面へ叩きつけた。

「ソウゴ!」

「貴様らも邪魔だ!」

ビルドがソウゴとツクヨミに気を取られてる間にアナザークウガの攻撃を受けた。

「うわああああ！」

「くう……ぐわあああ！」

アナザークウガの攻撃を受け、ビルドが吹き飛ばされる。

その影響で強制変身解除され、二人のドライバーからボトルとハザードトリガーが外れた。

「っ!?……ドライバーとトリガーが……」

拾うと既に二人のビルドドライバー、ラビットとタンク、ドラゴンのフルボトルとハザードトリガーが石へと変えられていた。

「晴夜！大丈夫か!?」

倒れた晴夜に龍牙が駆け寄る。

「これで、戦える仮面ライダーは全て消えた。ウソバツカ、後は頼む」

「待て！」

ティードがアナザークウガから変身を解き、ウソバツカの扉の中へと入っていき消えていった。

「みんな！はぐたんをお願い！」

「はなちゃん!?」

いちかにはぐたんを預け、はながウソバツカに向かって走る。

「もう止めて!」

「ウソ?」

ウソバーツカははなの声に反応し、光線を止める。

「ねえ聞いて!あなたもしかして、クローバーって子を知ってるんじゃない?」
「はなはウソバーツカに、クローバーと言う子を知っているか尋ねる。

「あなたと同じ緑の瞳で、扉の中に住んでる子だよ!」

「緑色の瞳……それって……」

「クローバーの頃の記憶は大分忘れたウソ」

「えっ……?」

「分からないか?俺だよ。俺がそのクローバーだよ」

「……ツ!!?」

なんとウソバーツカが、そのクローバーという子の変わり果てた姿だと答える。

「随分変わったろ?お前が約束を破ったばかりに、こうなったんだウソ!」

「そんな……!」

「約束……?ひよつとして、花畑に行ってた時に言った……?」

「あの時……私は……」

「黙れ!嘘付きには、針千本!」

「はなちゃん！」

はなに向けて指から無数の針を飛ばし、いちかが跳びかかって難を逃れる。

「この、嘘付き！」

今度は指を伸ばし、戻って来たモフルンも加えてミラクル達が指を止める。

だが数は多く、直撃を受けたミラクル達は変身が解け、リンクルストーンもリンクルスマホンも石にされてしまった。

「リンクルストーンまで石に……！」

「変身が……！」

「ウソぶく〜！」

ウソバーツカが胸のクローバーの部分から泡を出す。

「みらい！後はお願い！」

「えっ!?？」

「晴夜！後を頼んだぞ！」

「お前……まさか！」

「キュアアップ・ラパパ！泡よ、こっちへ来なさい！」

前に出たリコとことはが魔法を唱えて泡を誘導し、上に跳ぶ。

「今の内に早く！」

「ここは私達が——！うわわわっ！」

「リコ！はーちゃん！」

「龍牙！」

三人が泡に吞まれる。

だが、龍牙とリコの目を見て、晴夜とみらいが決意して頷く。

「みらいちゃん！行こう！」

「ここで俺達まで捕まったら駄目だ！」

「分かってる！」

みらいの声と共に、全員が走る。

その直後に龍牙とリコとことは呑んだ泡が、ウソバーツカの胸のクローバーの部分に入って行った。

「とりあえず、元の世界に戻るぞ！」

「ツクヨミ！タイムマジーンは……！」

「ダメ、損傷が酷くてもう飛べないわ」

さっきのアナザークウガの戦闘で、タイムマジーンが二機とも操作不能にされた。これでは、飛んで逃げる事も出来ない。

「みんなついて来て！」

すると、みらいが魔法のホウキに乗り、ついて来てと言う。

それを見て、晴夜はビルドフォンとまだ無事だったライオンボトルを取り出し、差し込む。ソウゴもバイクライドウォッチを起動させる。

『ビルドチェンジ！』

マシンビルダーとライドストライカーを出現させ、晴夜とソウゴは急いで乗り込む。

「いちかさん！早く！」

「ツクヨミ！早く乗って！」

「はなちゃん！こっち！」

晴夜とソウゴはいちかかとツクヨミにヘルメットを渡すと二人は後ろへ座り、みらいははなを魔法のホウキに乗せ、急いでこの場から離れる。

「ウソバーツカの世界には、プリキュアも仮面ライダーも必要無いウソ！」

ウソバーツカは魔法界の全てを石に変えるため続けていた。

そのまま、六人は魔法界と人間界を繋ぐカタツムリニアの駅へと向かった。

「ラッキーカー！急行だ！」

駅に停まっていた急行のカタツムリニアに魔法のホウキを突っ込ませて乗り、晴夜とソウゴもアマシンビルダーとライドストライカーから飛び乗って着地する。

「急いで出発して！」

みらいがカタツムリニアに伝えると、カタツムリニアが発車する。

「いって……」

「これでもう諦め——」

一安心して座ったのもつかの間、ウソバーツカの放った光線が線路を破壊した。

「線路が……!」

「このままじゃ落ちちゃう!」

「アカン!」

「逃がさないウソ!」

更にウソバーツカが線路の上を走って追いかけて来た。

「まだ追って来る……!」

「このままだと、!」

「つ!そや!ライトで奇跡を起こすんや!はぐたん!頼む!」

ハリーに言われ、はぐたんがクローバーライトを振る。

しばらく振り続けると光り出し、新しい線路が出来た。

「新しい線路が出来た!」

カタツムリニアが新しい線路の上を走ってから、ウソバーツカが乗ると同時に電撃が生じ、線路が消えた。

「先ずは、ウソバーツカから逃げ切る事に成功したのだった。

「何とか振り切ったみたいだね」

「うん」

「向こうもこれ以上追って来る事は無いと思いたけど……」

ソウゴ達がウソバーツカから逃げ切れた事に安堵の表情を浮かべるが、はなは表情を曇らせた。

「はな、どうかした？」

「こんな事になっちゃったのは……私のせいなんです……」

「えっ？」

いきなり、こんなことになったのは自分のせいという。

「さつき、ウソバーツカの事をクローバーって言ってたけど、そのクローバーって子と何かあったの？」

「俺達にも、教えてくれないかな？そのクローバーの話」

はなはソウゴ達に、幼い頃の出来事を話す。

——それは、はながまだ幼い時の記憶。

両親とことりとはぐれた幼いはなが路地を抜けると、そこにはクローバーのマークがあり、六角形で六つのドアが付いた建物があった。

『あれ…?クローバーの、扉…?』

建物に近づき、正面の緑の扉に手を当てると、扉の隙間から光が出て来て、扉が開いた。

『えっ?ええ〜っ!?』

その光の中に吸い込まれて別の空間に飛ばされ、目の前の紋章から光が放たれてそれに包まれる。

目を開けるとそこは雪が降って、全ての木が焼かれたかのように枯れていた場所だった。

『パ。パ。……?ママ……?』

はなが両親を探して走り出すが、雪で滑って転ぶ。

膝を擦り剥き、泣きそうになるが首を横に振る。

『フレフレ……!私……!頑張れ私……!フレフレ!私!頑張れ私!』

両腕を上げて自分にエールを送る。

するとその時、少年の笑い声が聞こえた。

『家族とはぐれたの?』

『誰……?』

『僕はクローバー。君は?』

『はな!野乃はな!』

黄緑の肌に緑の服を着た少年・クローバーが現れて名乗り、はなも名乗る。

『はな、どこから来たの?』

『ダブリン!パパとママと旅行に行つてただけど……』

『……いいな』

『えっ?』

『こことは違う場所に行けて』

クローバーがそう言うつてから振り返つて歩き出し、はなが後を追う。

『違う場所?』

『僕は、この世界から出た事が無いんだ』

『うわあつ!』

突如、彼女の前に現れた黒い炎が触れられ、驚いて尻餅を付きそうになる。

その直後にクローバーの傍へ、黒い炎の塊が止まる。

『大丈夫かい?……僕はね、この炎から離れられない。離れると消えちゃうつて、炎が言うんだ』

はなに駆け寄ると、この炎の声に離れるなど言われ、ここから離れられないと話す。

『ここはね、昔は一面、クローバーが生えた美しい世界だったんだよ。』

でも今は、灰色の雪と雲に覆われて、色の無い世界になってしまったよ』

かつてのここは、一面にクローバーや色とりどりの花が咲いた美しい場所だった事がクローバーの口から語られる。

『ここにいると、世界は何て冷たいんだろうって思うんだ』

『そんな事無い……。みんな、とっても優しいよ!』

『……。どうかな』

寂しげな表情のままそう言ったクローバーに、幼いはながムツとする。

『私が色んな世界に連れてってあげる!』

『……。? 本当に……。?』

『うん! 約束する!』

『約束を破ったら、嘘つきになっちゃおうよ?』

『嘘じゃ無いのに……。』

釈然としなかったが、ある事を閃く。

『ねえ、小指出して』

『ハイ?』

はなが小指を出し、クローバーも小指を出す。

『ゆーびーきりげーんまん、嘘ついたら針千本のーます。指切った!』

そしてそのまま、指切りを交わした。

誇らしげに笑う幼いはなを見たクローバーが笑い、二人で笑い合う。

ここで鬼火が、はなの擦り剥いた両膝の方へ飛ぶ。

『怪我してる……』

『えっ?』

『一度帰ってまたおいで。お父さん達も心配してるよ』

『パ。パ……ママ……』

両親を思い出し、表情を曇らせる。

『おいで』

はながクローバーの手を繋ぎ、二人はすぐ傍の湖に近づく。

『湖に向かつて、会いたい人の事を強く思うんだ』

言われた通りに目をつぶって、両親の事を強く思うと、目の前にクローバーのマーク

が付いた緑の扉が現れた。

『この扉の向こうに、君のパパとママがいるよ』

『ありがとう、また明日。約束ね』

『うん。また明日』

クローバーから手を離すと同時に扉が開き、その中へ入り、クローバーに笑顔を見せる。

扉が閉じ、幼いはなは両親の元へ戻った。

「でも、次の日、あの不思議な六角形の館は、見つける事が出来なかったの……

そのまま日本に帰る日が来て、クローバーとは会えなかった……」

はなはその次の日、その建物を見つucker事が出来ず、クローバーとも会えずじまいになってしまったのだ。

「私が約束を破ったから……だからクローバーはあんな風に……」

自分が約束を破ったせいで、クローバーが変わり果ててしまった事への後悔で、拳を握り締めた。

「はな……」

ソウゴははなになんて声をかければ良いのか分からなかったが……

「そんな顔をしていると、その子も心配するよ」

「えっ?」

晴夜が言うと、抱いているはぐたんが心配した表情でいた。

「俺と龍牙にも一緒にいる赤ちゃんがいるんだ。アイちゃんって名前なんだけどね」

「アイちゃん……」

「赤ちゃんは俺達が深刻そうな顔をしてると、余計心配するんだよ」

晴夜がかつての思い出を廻らせながら、はぐたんの頭を優しく撫でる。

「晴夜……」

それからしばらくして、ソウゴ達は無人駅へと到着し、カタツムリニアから降りた。

「無人駅？」

「みんなで待ち合わせてた駅だよ」

この駅は、ウソバーツカの影響で石化した花畑の駅だった。

「アカン……石化が広がってる……」

「もうここまで影響があるなんて……」

しかし駅の周囲だけで無く、あちこちにも石化が広がっていた。

「このままじゃ、どんどん石化が広がって行って……」

「魔法界もナシマホウ界も、全部石に……」

「私が……私が、クローバーとの約束を破ったから……」

思い詰めた表情で自分を責めるはなに、いちかが駆け寄る。

「はなちゃん。はなちゃんはもうどうしたい?」

「私は……」

「このまま後悔し続けて、全ての世界が石化されるのを待つか?」

いちかがそう問いかけると、晴夜もこれからどうしたいのかを聞き出す。

「そんなの……嫌だよ!」

「なら、どうする?」

「……謝りたい!」

(そうだ……私のなりたい、野乃はなだつたら……!)

クローバーに、全力で謝らなくっちゃ!」

はなはクローバーに、全力で謝る事を決意し、覚悟を決めた彼女を見たいちか達は微笑んだ。

「……?」

「どうしたの mirai ちゃん?」

突如 mirai が、何かを思い出そうとする素振りを見せる。

「六角形の館って……どこかで聞いた事あるような……」

「えっ!? 何何!? 思い出してよ!」

六角形の館の事をどこかで聞いた事があると告げ、思い出す為に頭に人差し指を当て

て考え始める。

「また、お困りのようだね。我が魔王」

「ウオズ！」

またしてもいきなりウオズが現れた。

「誰？」

「ウオズさん。ソウゴ君の家臣かな？」

「家臣？」

何故、ソウゴの家臣なのかと晴夜達はわからなかった。

「ウオズ、六角形の館の場所ってわからない？」

ソウゴは六角形の館の場所がわかるかと尋ねる。

「人使いの荒い魔王だ……」

しかしその前に、あのティードという敵についてだが……」

「ティードについて何か知ってるのか？」

ティードについて何かわかるのかとウオズに問う。

「彼は19人の最初の仮面ライダー……仮面ライダークウガの力を手入れ、今は彼が仮面ライダークウガだ。」

「このままだと、いずれ歴史が大きく変わり、クウガ以降の仮面ライダーの誕生がな

「なくなってしまおうね」

「「えっ!?」」

「つまり、このままだと俺とソウゴも……いや他の仮面ライダーも全員が消えるってことか……」

晴夜が冷静に分析する。

「でも、一つまだ疑問にある事がある」

「疑問？」

「ティードが何故、そこまでして仮面ライダーを消そうとしてるのか？」

「ライダーに恨みがあるとか？」

ティードが仮面ライダーを消す理由がわからなかった。もし仮に、クライアス社の指示にしてはやり方が違い過ぎる。

「そこまでは私もわからないが、君達のドライバーに力が再び戻ればそれは回避出来る」

二人は石となったジクウドライバーとビルドドライバーを取り出す。

「それと、我が魔王これを……」

「ウオツチ……?」

「いざとなれば、それを使いたまえ」

ウオズはソウゴに謎のライドウオツチを渡した。

「さつて、それでは六角形の館について調べよう……」

ウオズがそういうと、一度ソウゴ達から少し離れる。

すると、ウオズの意識がもの凄い量の本棚がある場所——『星の本棚』へと移動した。

「キーワードは『六角形の館』」

本棚が高速で移動していき、本棚の数が絞られていく。

「まだ、絞れないか……キーワードを追加、『クローバー』」

とさらにキーワードを入力すると本棚はさらに絞られ、一冊の本が残った。ウオズはその本を手に取り、ページを開ける。

「……この本によれば。その館は、世界中の古い路地ならどこにでも現れる。六角形の館には、六つの不思議な扉があり、その中には時間を跳び越える時の扉があるらしい」

「時の扉？」

「ここから、その扉に近い街は、『風都』と呼ばれる町だそうだ」

「そこにその扉があるの？」

「おそらくね」

「じゃあ、その扉を越えれば……！」

「昔のクローバーに会える」

「約束を……果たせる……！」

「なら、俺達がこれからやるべき事は、古い路地を回ればいいって事だね」

「その風都って町に行って、古い路地を回ってみよう」

風都を目指し、ソウゴ達は魔法のホウキとマシビルダー、ライドストライカーに乗って向かった。

その頃、ウソバーツカの中では…

「キュアアップ・ラパパ!」

「私達を外へ出しなさい!」

リコとことはが魔法を唱えて外へ出ようとするが、結界で掻き消された。

「魔法でもダメかー……」

「困ったわね……魔法で脱出出来ると思って来たのに……」

魔法でも脱出が出来ないとがっかりすると、ことはのお腹が鳴き出した。

「そう言えばお腹空いたね」

「そういうえば、まだ昼食ってなかったな」

こことは言うのと周りのみんなもお腹が空いてきた。

「キュアアップ・ラパパ!イチゴメロンパン、出る!」

こことは魔法を唱え、イチゴメロンパンを出す。

「それは何？新しいスイーツ？」

「いいなく！あたしにも！」

あおいとシエルにもイチゴメロンパンを出す。

「結界の中に物呼び出すのは出来るのね」

リコがそう言うのと、目の前にイチゴメロンパンが出て来る。

「ねえはーちゃん、テレビとか出せない？」

「外の様子とか知りたいです」

「……本当に大丈夫か？」

「不安になってきた……」

緊張感のない様子を見ていたゲイツ達三人は、段々と不安になってきた。

「あなた達の友達の、ソウゴとはなちゃん？さつき会ったけど、とっても良い子ね。一生

懸命で二人の事なら大丈夫」

「みらいといちかもついてるし、晴夜もついてるもんね！」

「私達は仲間を信じてる。だからあなた達も信じて。ねっ？後で私の友達のみらいを紹介するわ。友達想いのすっごく良い子なの」

「うんうん」

「うんうん」

「あら、いちかだって良い子よ」

「そう。自分よりも周りの事ばかり考えててね」

「お節介で——」

「元気が有り余ってるの」

「晴夜だつてそうだけ。いつも誰かれ構わず、人助けするし、面倒なことにもいつも首を突っ込むけど、誰にでも敵とか味方とか関係なくあいつはいつも誰かのために何かをやつてる奴なんだ……」

まあ、科学バカだけだな」

龍牙達が晴夜にいちか、みらいの話を聞き大丈夫だと感じ、三人は少し落ち着きを取り戻した。

「……? おい、何か足おかしく無えか?」

ここでさあや達の足元を見た龍牙がそう告げる。

それを聞いて自分達の足元を見ると、足が石化されていた。

「これって……!」

「石化してるじゃない……!」

「ヤバツ……!」

「私達も石になっちゃうんじゃない……!」

「マジかよ!!?」

石化し、焦りを見せて亜空間のあちこちを撥ねる。

「ホントに信じていいのか……」

「大丈夫だって。多分……」

そんな龍牙達を見て、ゲイツ達は信じていいのかと疑問に思う。

風都へと着いたソウゴ達は、とりあえず古い町の角を走っていた。

だが、ひたすら探すが六角形の館の元へは到着しなかった。

「どこにあるんだ……」

ライドストライカーとマシンビルダーと魔法ホウキで走り回るが中々見つからない。

「全然見つからへんで？何か手掛かりは無いんか？」

「クローバーは、心で強く思えば現れるって……」

はなはかつて、クローバーの言っていたことを思い出していると……

「「それだ！」」

「「えっ？えっ？」」

急に叫んだ晴夜といちか、みらいの言葉に、ソウゴ達は驚く。

「よーし！みんなで強く思おう！」

「「おーっ！」」

とりあえず、みんなで強く思って扉を出そうとする。

「はぐたんも頼むで！ライトの力も貸してや！」

「それじゃあみんなで……！」

「六角形の館を強く想おう！」

はぐたんがミラクルクローバーライトを出し、一同が六角形の館を心で強く思うのと同時に、ライドストライカー、マシンビルダー、みらいの魔法のホウキが緑色の光に包まれ、スピードを上げた。

目の前に光が現れ、その中を通ると、六角形の館がある場所に辿り着いた。

「「やったあーっ！」」

「六角形の館だ！」

一同がライドストライカーとマシンビルダーから魔法のホウキから降り、六角形の館に向かって走る。

辿り着くと、クローバーの世界への扉だけ石になっていた。

「そんな……。クローバーの世界は……」

「はなちゃん！こつち！これが時の扉だよ」

みらいに呼ばれたはなが隣の扉の方へ向かうと、一同の目の前にある扉が時の扉と教える。

その直後に上空に緑の扉が現れて開き、ウソバツカが出て来た。

「クローバー!」

「アイツ、また……!」

ソウゴ達は現れたウソバツカに構える。

「残念ですが、あなた達はここで終わりです」

更にそこへ、白い服を身に纏った男性がやってきた。

「誰だ? あんた?」

「財団X・加頭順です。あなた達の命を貰います」

『W……!』

加頭順と名乗った男性がソウゴ達の命を貰うと言うと、アナザーWとなった。

「お前、あの時の……」

アナザーライダーも現れ、最悪な状況に落ちた。

「ウソ、800!」

「ハアツ!」

ウソバツカの周囲に800個の光弾が作り出されて一斉に放たれ、アナザーWの右側が黄色く変色したと思うと手足が変幻自在に伸びて鞭の様に放たれるが、ソウゴ達はギリギリ躲した。

はなが悲しげな表情でウソバーツカを見ると、いちか達が前に出る。

「みらいちゃん、いちかちゃんまで……!」

「はなちゃん」

「ここは、私達が何とかする」

「俺達が足止めしてる間に、時の扉に入ってクローバーに会いに行くんだ」

「でも……!」

「クローバーがウソバーツカになったのなら——」

「過去に戻って、彼を助けてあげなきゃ。はなちゃんがやりたい事は？」

「こうやって突っ立ってる事じゃないだろ」

いちかと晴夜が尋ね、一同がはなの方を向く。

「クローバーに謝る事!」

「そう言う事」

「ここは先輩にまっかせなさい!」

「はぐたんはモフルン達に任せるモフ」

「そうペコ」

そこに首を刺すようにアナザーライダーが現れ、二人に襲いかかる。

「させるか!」

咄嗟に晴夜が前に出て、ドリルクラッシュヤーと四コマ忍法刀でアナザーライダーの攻撃を防いだ。

「ここは任せて行けえッ！」

「晴夜……」

「ソウゴは行つて！早く！」

ツクヨミもファイズフォンXで晴夜を援護した。

「ねえ！晴夜聞かせて！」

そんな中、ソウゴが晴夜に一つの質問をする。

「晴夜は、もしこのまま仮面ライダーの力が消えても戦うの……？」

「……俺は、偽りのヒーロー、作られた存在……」

だから、消える消えないは関係ないよ。

ただ、守りたいものと愛と平和の為に俺は戦う」

「そうか……なら、俺はクローバーの笑顔を取り戻したい。」

それが俺が今、やるべきことな気がするから！」

「じゃあ、それを貫けよ。」

……後、はな。クローバーだけど多分、ウソバートッカになつてないと思うよ」

「えっ!?？」

すると何かを思った晴夜ははなに、クローバーはウソバツカにはなっていないと話す。

「だから、信じるんだ。その扉にいるクローバーは今と変わらず君を待つてるだって」

「晴夜君」

「信じよう。クローバーを」

二人は扉の前へと行く。

（お願い……もう一度、もう一度……クローバーに、会わせて！）

はなは願う、かつて友との約束を破ってしまったことを謝るために、今度こそ約束を守るために――

すると、時の扉が光り出すと同時に開き始めた。

「行こう」

「うん」

クローバーの世界で、中に入っていたソウゴとはながクローバーの元へ走って向かっていく頃。

枯れ木を背にして座るクローバーに、鬼火とティードが語りかける。

「あの子はもう来ないぜ。お前は約束を破られたんだ」

「そっか……」

「なあ、俺にいい考えがある。

この世界から出られないなら、全部をお前の世界に変えればいいんだ。冷たくて色の無い世界だ。

そうすれば全てが、お前の世界になる。

そして約束なんか破りまくりの、嘘ばーつかな世界にしてやるんだよ」
ティードはクローバーに、世界を嘘ばかりの世界にしようと提案する。

「何の為に……?」

「お前、クローバーの花言葉を知らないのか?」

一つは約束。

そして、約束が果たされなかった時の…復讐だ」

クローバーの花言葉を教える鬼火から、左右が別の仮面が出て来る。

「約束と……復讐……」

「そうだ。その心だ」

『電王……!』

ティードがアナザーライドウオッチを起動させ、クローバーの体内に入れる。

「っ！……これが、復讐……」

「…………？」

するとソウゴ達のいた場所が、巨大な駅のホームのような場所へと変わっていた。

「ウラああ！」

するといきなり後ろからアナザー電王が何者かに蹴られた。

「俺…………あ、こつちか。俺、参上！」

後ろから蹴ったのは、赤いアーマーで二つに割れた赤い桃を模した複眼を持ったライダー……仮面ライダー電王だった。

「よう、大丈夫かよ。お前、俺の癖に弱いじゃねえか〜」

「後ろからなんて、卑怯な……っ」

「はん！知らねえのかよ！俺は最初から最後まで、クライマックスなんだぜ！」

アナザー電王の文句をそう返す電王はデンガツシャーで、無茶苦茶な剣技を繰り出す。

「モモの字！お前のクライマックスは長いで！」

「うるせえ！クマ公！てめえ……！」

『アックス フォーム』

どこから聞こえる声に反応すると、電王の姿が変わった。

「俺の強さにお前が泣いた。ドスコイ！」

そのまま斧の様な仮面と金のアーマーを持った電王・アックスフォームとなり、力技でアナザー電王を圧倒する。

「ワイイ!クマちゃん次僕ね!」

「リュウタ、まだ早いぞ!」

『ガン フォーム』

また何かが体に入ると、電王の姿が再び変わった。

「お前、倒すけどいいよね。答えは聞いてない!」

龍を模した仮面と紫のアーマーを持つガンフォームとなった電王は、銃を放ち続けアナザー電王を怯ませる。

「リュウタ危ない!後ろに敵がいるよ!」

「えっ!?? どこどこどこ——うわあ!」

『ロッド フォーム』

「なんてね、言葉の裏には針千本、お前も僕に釣られてみる?」

今度は亀の甲羅の様な仮面を持つ青いアーマー姿の電王・ロッドフォームへ変わると、槍投げのような武器にしたデンガツシャーをアナザー電王に投げつける。

亀の甲羅のような六角形のマークが浮き出ると、アナザー電王の動きを封じられ、その隙に電王は高くジャンプをしながら飛び蹴りの姿勢を取った。

「はあああああああー!!?」

「うわあああああ!!?」

電王のライダーキックを受けたアナザー電王は、体内からアナザーライドウオッチが取り出されると破壊され、元のクローバーの姿に戻った。

「大丈夫?」

電王から変身を解除した男性の差し出された手を握り、クローバーが起き上がる。

「君は……」

「僕は野上良太郎。仮面ライダー電王」

良太郎は名を名乗ると、ソウゴとはなも駆け寄る。

「クローバー……」

「ねえ、ここは?」

「君達のいる時間とは、別の時間かな」

「あなたは?」

「仮面ライダー電王。簡単に言えば時空の流れを守るタイムパトロールかな?」

「時空を守る仮面ライダー電王。覚えておくよ!」

「じゃあ、よろしく」

そう告げるとソウゴとはな、クローバーの身体が光りだし、姿が一瞬のうちに消えて

しまった。

「おいおい、時空を守るって俺達なんか遠くねえか〜」

「そんなことないよ。僕からしたらそう思うけど」

そこへ、四人の怪人——イマジンが現れた。

「いいやないか〜時空を守る!俺の基本スタイルや!」

「どうせならよ!強すぎる仮面ライダー電王とかだろ!」

「ダサイ!モモタロスダサイ!」

「ぬわあああ〜!」

「しかし、最近の後輩のライダーあんな子供なんだね」

「まあ、お陰でこっちも急ぐなっちゃったがな!……つたく、俺達も忘れないぜ良太郎」

「うん、僕もだよモモタロス……みんな、行こう!」

その頃、外ではウソバツカが風都の町を石化を始めようとし、晴夜とツクヨミはアナザーWと生身で交戦していた。

『Ready go!』

ボトルを差し込みドリルクラッシュヤーを回転させ、そのままアナザーWに繰り出す。

「ふん!」

「なっ！うわああああ！」

だがアナザーWはドリルクラッシャーを掴み、そのまま晴夜を投げ飛ばす。

「大丈夫!？」

「ああ……」

「もう、この世界は終わります」

「この世界の色は奪ってやったウソ！と言う事は、俺の好物の心の闇が沢山あると言
う事ウソ！いったただつきまーす！」

周囲から竜巻が生じ、石化された人々の心の闇が竜巻に吸い込まれ、その竜巻をウソ
バーツカが吸収する。

「二人が戻って来るまで……!！」

「時の扉は、私達が守らなきや！」

「こんな所、引くわけに行かねえな」

晴夜達は諦めず立ち上がる。するとそこへ、ティードが現れた。

「力を失い、何故そこまでして戦う……」

そしてライダーの力を失つてもなお、何故戦うとか問いかけると、晴夜はドリルク
ラッシャーを支えとして立った。

「……そんなこと関係ない。俺はただ守りたいものの為に、最後まで戦う。そう決めた

から戦うんだ」

そう言つて再びドリルクラッシュヤーを構える。

「ですが、終わりですよ」

アナザーWが飛び上がり、晴夜達に向かつてキックを放とうする。

「オラアアアアアア!!?」

「!?!」

そこへ一台のバイクが現れ、アナザーWの攻撃を妨害した。

「大丈夫か?」

「あなたは……」

晴夜が尋ねると、バイク乗っていた人物はヘルメットを外し、黒の帽子を被る。

「左翔太郎。この町の顔さ」

「貴様は……左翔太郎!」

「その声……財団X、加頭順!」

「知ってるんですか?」

「あいつは、8年前に倒した筈だ……」

加頭順は翔太郎がかつて、仮面ライダーWとして最後の戦いの時に、相棒と共に倒した筈だと言う。

「ええ。一度はあなた方に敗れました。ですが……」

——それは8年前の戦いで仮面ライダーWに敗れた時。彼の持っていたユートピアメモリが砕けると同時に消滅したかのように見えたが、加頭順はまだ生きていた。

『まだ、私は……』

爆風から何とか耐えて手足でもがくが、死者蘇生兵士『NEVER』である彼の肉体は既に限界を超えており、いつ消滅してもおかしくなかった。

『まだ死ねないか?』

そこへティードが、加頭順を見下ろすように現れた。

『何ですかあなたは……』

『お前に力を与えに来た。そして、俺の為に動いてもらう』

『W……!』

ティードはアナザーWのウォッチを加頭順の体の体内に埋め込む。

『これで、お前が今から仮面ライダーWだ。幸いにも既にあの男はもうWにはなれない』

『これが……Wの力』

そして、8年前の戦いの後アナザーWへと変身し、命を保った。

「ここで、あの時の恨みを晴らしてあげましょう! 相棒もいないあなたなど、敵ではありません」

「やってみろよ」

翔太郎が相棒が最後に残したロスドライバーを装着し、黒のメモリのようなものを見せる。

『ジョーカー!』

「変身」

メモリの下部に付いている起動ボタンを押してドライバーに差し込むと、翔太郎は「変身」と言つてドライバーを操作する。

『ジョーカー!』

そしてドライバーから音声が鳴ると、翔太郎の体に黒いボディが纏われた。

「それは……」

「仮面ライダージョーカー!」

お互い走り出し、仮面ライダージョーカーとアナザーWの二人の拳がぶつかり、戦闘が始まる。

その頃、元の場所へと戻ったソウゴ達は、雪に覆われ、一本の枯れた大木のあるところへ行った。

「クローバー……遅くなってごめんなさい！」

どうしても、扉の場所が分からなくなつて……！」

はなはクローバーに頭を下げて謝り、来れなくなつた理由を話す。

「僕……ずっと待つてたんだよ……！」

「ごめんなさい……！」

もう……遅いかもしれないけど……

あなたとした約束を、守らせて欲しいの！

一緒に行こう。色んな世界に連れて行くつて、約束したでしょ

クローバーに手を差し伸べ、一緒に行こうと誘う。

「騙されるな。約束だど？ソイツは嘘をついているんだ」

すると鬼火がクローバーの眼前に出てそう言う。

「違う……！嘘なんかじゃない！」

「約束なんか信じるな！」

信じれば裏切られる！裏切られれば深く傷付くぞ！

お前の花言葉を忘れたか！」

「約束と、復讐……」

「残念だったな」

突然湧いてきたティードと、クローバーの隣で浮かぶ鬼火が勝ち誇るかのように嘲笑うと、黒い炎を燃え上がらせてクローバーをその炎で囲ませる。

「コイツはウソバーツカでもあると同時に、アナザーライダーになるんだ!」

「——そうなるとは限らない」

「何……?」

するとソウゴは、鬼火の言葉を否定する。

「それはお前達が言ってるだけで、本当にそうなるのを決めるのはクローバーだよ」

「クローバー!」

ティードと鬼火がソウゴに気を取られているうちに、はながクローバーに向かって走る。

「貴様……」

「行かせないよ!」

ソウゴはジカングレードを持って鬼火の邪魔をし、その隙にはなはクローバーの元へと着く。

「クローバー……!ごめんなさい……!」

私、あなたを傷付けた……！

だけど……！もう二度と、あなたの事、傷付けたりしない……！」

クローバーを強く抱き締めてそう伝えると、彼の目から涙が流れた。

「はな……」

はなの名を呼ぶと同時に、クローバーを囲ませてた闇の炎が掻き消された。

「はな……苦しいよ……」

そう言つて彼女から離れ、一息付くクローバー。

「クローバー……！」

はなの目から大量の涙が流れるのを見て、クローバーはふふつと笑う。

「君達つてずるいな」

「……」

立ち上がったクローバーが、はなに手を差し伸べる。

「連れて行つてくれるんだろ？」

「うん……」

彼女はうんと答え、クローバーの手を掴む。

すると湖から時の扉が現れ、はなとソウゴの手を繋いだままそこに向かつて歩く。

「待て！俺から離れると消えてしまうぞ！」

「……っ!」

「それでもいいのか?」

雪原に落ちた鬼火がクローバーに向かって叫び、クローバーが唇を噛み締める。

「大丈夫。私が全力で応援するよ」

「自分を信じろ。自分は消えないって思いがある。クローバーなら絶対消えない。俺は

そんな気がする」

「ソウゴ、はな……」

二人を信じ、クローバーは二人が来た道を歩む。

「消えてもいいのか……!」

「行こう」

ティードの言葉を見殺しにして、ソウゴとはながクローバーと共に時の扉をくぐる。

外では、仮面ライダージョーカーとアナザーWの戦闘が行われていた。しかし、アナザーWの方がジョーカーを追い込んでいた。

「どうしました。やはり一人ではその程度ですか?」

「くう……!」

『ジョーカー!マキシマムドライブ!』

「ライダーパンチ！」

ジョーカーメモリをスロットに入れ、ジョーカーがライダーパンチを放とうするが、アナザーWがカウンターパーパンチを放ち、その影響でジョーカーの変身が解除されてしまった。

「翔太郎さん！」

晴夜が倒れた翔太郎に駆け寄る。

「やはり、私こそ最強のWですよ」

「てめえ……」

「あなたはWじゃない！」

晴夜が翔太郎を倒して気分を良くするアナザーWに、Wじゃないと叫ぶ。

「お前……」

「Wって、二人で一人って意味ですよ。だがあんたは一人で強い気にいる、そんなのWじゃない！」

「…子供が生意気言うもんではありませんよ」

「俺、天才科学者の卵だけどもまだガキだぜ」

晴夜が言うのとティードが手を広げ、また晴夜達の時を止めた。

「戯言は終わりだ。その男と共に消えろ、桐ヶ谷晴夜」

ウソバーツカが目の前に現れ、晴夜達を呑み込もうとしたその時…

「ウソ……何?」

巨大化したウソバーツカが光に包まれると同時に、時の扉が開く。

「はなちゃん!」

「ソウゴ!」

扉からソウゴとはなとクローバーが出て来ると同時に、ウソバーツカの力がクローバーに流れる。

「お前……う、嘘から出た実……」

「ちっ……こうなったら……」

その言葉を最期にウソバーツカが消滅すると、ティードが姿を消し、アナザーWだけが残った。

「お帰り、はな、ソウゴ」

「その子がクローバー?」

晴夜達がソウゴとはなに駆け寄る。すると、アナザーライダーが近寄ってくる。

「予定外ですね。しかし、力のないあなた達など、敵ではありません」

アナザーWが巨大な竜巻を作り出し、ソウゴ達に向かって放つ。

「やらせるか!」

「翔太郎さん！」

翔太郎が前に出て背中中でソウゴ達を守ろうとする。

だが、その前に何か盾となって竜巻を相殺した。

「相殺された……」

竜巻が相殺されると、翔太郎は自身の後ろに何か浮いていた事に気付く。

「っ!?……エクストリームメモリ」

それは、かつて彼とともに消えた黒い鳥の様な姿をした自立行動型ガイアメモリ、エクストリームメモリだった。

そしてそのメモリから放たれた光が何かを構成し、人影のような姿が現れた。

「フィリップ……」

「やあ、久しぶりだね。翔太郎」

そう、彼こそが翔太郎の相棒にして、仮面ライダーWの片割れ——フィリップ。

「なんで……」

翔太郎は消えた筈のフィリップを見て、なんでいるのか疑問に思っていた。

「実は、若菜姉さんが僕に体をくれたんだ」

「えっ？」

——加頭順のユートピアドーパントとの戦いの後からすぐに真実を知った姉：若菜は、フィリップに自分の体をあげてことを決めていた。

「来人！」

「姉さん！」

「来人、私の体をあなたにあげる」

「えっ？」

「あなたの相棒の泣き顔、見てられなかつたんですもの。人類の未来のために地球を変えるのは園咲の使命。でも一番ふさわしいのは私じゃない。誰よりも優しいあなたよ、来人」

「でも、僕どうやって……」

「答えはそのうち見つかるわ。とりあえずこれから風都を見守る風で居なさい」

更に長女の冴子と父：琉兵衛と母：シユラウドが現れた。

「父さん、母さん、姉さん！」

琉兵衛は手で、走り寄るフィリップを制させる。

「来てはダメ」

「私たちは地球に選ばれた家族だからね。これからも、この地球の中からお前を見守つ

ているよ」

その言葉を最後にフィリップは、家族への最後の言葉を交わした。

「さようなら、ありがとう……」

家族と別れを受け入れ、そこから8年の時が経った。

「それから僕は、体の再構築をしながら君を見ていた」

「気のせいじゃなかったのか……」

翔太郎がずっと感じていた何か、近くにいた感覚は気のせいじゃなかったとわかった。

「あなたが翔太郎さんの相棒ですね」

「やあく桐ヶ谷晴夜君、宇佐見いちちゃんに朝日奈みらいちゃん。よく頑張ったね。僕達の仲間になれるよ」

フィリップが晴夜やいちか、みらいを見て言う。

「うおおー！フィリップ！」

そこへ翔太郎が感動の再開に号泣しながら、フィリップに絡み合い出す。

「流石、完成されたハーブポイルドだね」

「そんなもん!完成したくねよ!アツハハハハハハ!!?」

再会した相棒に二人が笑い合う様子を、晴夜達も笑って見ていた。

「笑っているのも束の間ですよ」

だが空気を悪くするように、アナザーWが彼らの間に乱入してきた。

「おっと、いけね忘れたぜ!

さあ、お仕事だ。行くぜ、フィリップ」

「ああ、ゾクゾクするね〜♪」

翔太郎がダブルドライバーを取り出し、腰へと装着すると、フィリップの方にもダブルドライバーが腰に装着した状態で現れた。

「お前ら、その子を連れて早く行け」

「翔太郎さん。フィリップさん。お願いします」

アナザーWは二人に任せ、ソウゴ達はクロバーを連れ森の方へと逃げて行く。

『サイクロン!』

『ジョーカー!』

ソウゴ達の姿が無くなった事を確認した二人は、変身アイテム・ガイアメモリを起動させ構える。

「変身!」

フィリップのメモリ『サイクロンメモリ』をドライバーに先に差し込むとメモリが翔太郎のドライバーの方へと移動し、フィリップが倒れた。そこへ今度は翔太郎の持つメモリ『ジョーカーメモリ』を差し込む。

『サイクロン！ジョーカー！』

そして翔太郎の周りを風が覆い、風都を守る、二人で一人の仮面ライダー…仮面ライダーWが復活した。

「行くぜ！」

Wは手首を回し、アナザーライダーの下へと走って行く。

『ルナ！』『トリガー！』

アナザーWに蹴りを喰らわせながら二つのメモリを起動させ、ドライバーに差し替える。

『ルナ！トリガー！』

サイクロンジョーカーから今度はルナトリガーへと変わり、手元に現れた専用武器『トリガーマグナム』を放つ。

『トリガー！マキシマムドライブ！』

『トリガー！フルバースト！』

更にマグナムにトリガーメモリを装填したWは、銃口から黄色と青の破壊光弾を多数

同時発射し、アナザーWを怯ませた。

『ヒート!』『メタル!』

『ヒート!メタル!』

今度はヒートメタルへと変わり、武器である鉄棒『メタルシャフト』での殴打を繰り返す。スロットにメタルメモリを差し出す。

『メタル!マキシマムドライブ!』

するとメタルシャフトの両先端が炎で覆われる。

「どんどん行くぜ!」

『メタルブライング!』

炎を吹き上げるメタルシャフトをアナザーWに叩き込む。

『サイクロン!ジョーカー!』

再びサイクロンジョーカーへと変わる。

『さあ、行くよ翔太郎』

「ああ、ハードボイルドに決めるぜ!」

『ジョーカー!マキシマムドライブ!』

Wはベルトのスロットにジョーカーメモリを差し込み、辺りに強力な風を巻き起こしながら高く飛び上がる。

「『ジョーカーエクストリーム!』」

すると身体を正中で分離させ、両半身によるライダーキック、*〴〵*ジョーカーエクストリーム〴〵を放った。

それを受けたアナザーWは倒され、アナザーWウオッチも破壊されると、Wは着地した。

『決め台詞は忘れてないよね。翔太郎〜♪』

「ああ、俺達の名を永遠と残る。あの言葉……」

そしてWは、再び手首を回すと……

「『さあ……お前の罪を数えろ!!?』」

二人の決め台詞を、加頭順に向けて叫ぶ。

「おのれ……仮面ライダーアアア……!」

アナザーWウオッチが破壊されると加頭順の体も綻び始め、かつては感情が無かったはずの彼は怒った様な声を出し、そのまま消滅していった。

おそらくウオッチが壊れた影響だろう。

「今度こそ、止めたぜ。財団X、加頭順」

『翔太郎。急いで彼らを追いかけよう』

「ああ、本当の勝負はここからだ」

Wはマシンを呼び出し、ソウゴ達を追いかける。

その頃、ソウゴ達はアナザークウガから離れる為に急いで逃げる。

すると、再びソウゴ達の前にティードと鬼火が現れた。

「ティード!」

彼らが再び現れたのを見て、ソウゴ達はクローバーを守るため構える。

「僕は消えなかつたよ。君は……一体何者なんだ?」

「俺か……俺は闇の、鬼火だ!」

「コイツはお前達への怒り、妬み、悲しみ。そんな心の闇を火種にして燃え上がるのさ」

ティードは親切に鬼火について解説をしてあげた。

「君達は……僕を利用して……!」

「お前はもう用無しだ。俺達はこの世界の闇を喰い尽くし、誰よりもデカく、燃え上がるんだ!」

『クウガ……!』

「見せてやる!俺達の力を!」

ティードが再びアナザークウガとなると、鬼火がアナザークウガが取り込まれる。

すると周りの岩がアナザークウガに集まり、徐々にその身体が巨大になっていく。

そしてアナザークウガの姿が、更に禍々しく歪めたような外見となり。ボディの所々に緑のヒビが追加されて全体的に黒く染まり、長い腕は2本から4本に増加している他、頭部の角も更に肥大化し、背中には紫に燃え上がる炎と巨大な翅が生成されていた。「これだ！この力とこの闇の力で俺は最強！俺だけが笑顔であればいい！」

ティードは、アナザライダーの力と闇の鬼火の力が融合した、言い換えればアナザークウガ鬼火へとなった。

「みんな！こつちへ！」

全員が走り出し、急いでここから離れる。

「はな、ソウゴ、まだ変身出来へんのか？」

「うん……」

「ごめん、まだ……」

取り出したミライクリスタル・ピンクとジクウドライバーはまだ石のままだった。

「明日への希望、アスパワワが消えたままや……」

「明日への希望……」

「キラキラもペコ……」

「リンクルストーンもモフ……」

「ウソバーツカが消えても、あれを倒さなきゃ元に戻らないのか……」

アナザークウガ鬼火を倒さない限りはソウゴ達は変身することができない。

逃げ続ける最中、突如クローバーが足を止める。

「クローバー?」

「僕のせいだ……」

ソウゴ達の変身できないは自分の所為と言う。

「私達は負けないよ。夢も希望も、明るい未来も取り戻してみせる!」

「なんとたつて俺達は、プリキュアと仮面ライダーだからね!」

「ソウゴ……はな……」

「ふん!変身も出来ない癖に何を言っている!」

「変身できる出来ないなんて関係ない!」

救いたいと思ったなら、なんだつて救う。そんな王様になりたいんだ!だから……今は

クローバーを救う!」

「そうだな。それができる俺達が今ここにいる。今ここにな……」

「うん」

晴夜とソウゴ、二人が並び立ったその時、二人のドライバーから石が剥がれていく。

「ドライバーが……」

「元に戻っていく……」

石となったジクウドライバーとビルドドライバが元に戻り、ウオッチにボトルも色が戻った。

それを見たアナザークウガ鬼火は、思わず狼狽える。

「馬鹿な……！何故……ッ！」

二人の想いに共鳴したのか、ドライバーが石から元の姿へと戻ったのを見て、二人は顔を合わせ頷く。

「行くぞ。ソウゴ」

「ああ！行くこう、晴夜！」

『ジクウドライバー！』

二人はドライバーを装着し、晴夜はボトルを、ソウゴはウオッチを握る。

『ラビット！タンク！ベストマツチ！』

『ジオウ！』

晴夜はビルドドライバに二本のボトルを、ソウゴはジクウドライバにジオウウオッチを差し込んだ。

そして二人は叫ぶ、己を変える言葉を――

「変身!!？」

その言葉が二人の姿を変えた。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

科学の力で戦う、仮面ライダービルド。

全ライダーの力を受け継ぐ、仮面ライダージオウが、今ここに復活した。

「仮面ライダーが復活した……」

「これが、仮面ライダー……」

並び立ったビルドとジオウに、クロバーは目を光らせる。

「だからなんだ!蘇ったのなら!今度こそ完全に消す!うおおおおお!!?」

「はああああああ!!?」

アナザークウガ鬼火に、二人は向かっていく。

「何故、何故お前達は、お前達は存在するんだ!間違った存在なのに!」

「お前の言う間違った存在……」

それが何なのかわからないけど。俺は、俺が知ってる仮面ライダーは自分が信じるものと人間の自由の為に戦う!それが仮面ライダーだ!」

「だから、仮面ライダーが戦ってきた歴史は、絶対に間違っていない!それを俺達が証明してみせる!」

ジオウとビルドはアナザークウガ鬼火へと戦闘を広げる。

一方、アナザークウガ鬼火の中の亜空間の方では。

「もつとです！この結界の中がいつぱいになる位に……！」

さあやに言われ、リコがさあやの結界の中に大量のイチゴメロンパンを作り出す。

「何してるのさあや？」

「さあや、結構食いしん坊……」

「そんなに腹減ってたのか？」

「違います！」

「結界の中をいつぱいにして、内側から破る作戦ですね！」

さあやの狙いは、結界を内側から破る事だった。

「全身石になってしまう前に、急ぎましょう！」

「はーちゃん先輩！こつちもお願い！」

「はーちゃん先輩……だって。はー！カッコいいー！」

「こつちも早くー！」

「はいっ！」

ほまれとゲイツの結界の中にも、大量のイチゴメロンパンを作り出す。

そのまま四人の結界が破れた。

「よっしやー!」

四人が出口である紋章の方へ向かう。

「キュアツプ・ラパパ! いーっばい!」

ひまり達の結界の中にも大量のイチゴメロンパンを作り出す。

「さあやちゃん待って下さい!」

「ほまれ!」

「私は、はなのお陰で救われたんだ! 今度は私が、はなを助けなきゃ!」

四人が紋章に体当たりを続けていると、ひまり達の結界も破れる。

「私ものです! 一人じゃ出来ない事も、二人なら出来るって、はなが教えてくれたんです

!」

「さあやちゃん」

あきらがさあやの肩を掴み、自身の方を向かせる。

「二人でも駄目な時は、どうすればいいと思う?」

「ここにも仲間がいるんだけど?」

「はなちゃん達を助けたいのは、私達も同じです」

「抜け駆けはノンノン」

「そう言う事」

彼女達も結界を抜け出し、ゲイツと龍牙、さあやとほまれと共に出口をこじ開けようとする。

森を出たジオウとビルドは、広い荒野に出る。

「ん？何だ？」

アナザークウガ鬼火にある胸元の紋章に衝撃が走り、紋章に視線を向ける。

「何かを叩き付ける音が聞こえる……」

「ひよつとしたら、捕まったみんなが、あそこから出ようとしてるんだー」

「みんな……！！」

「無駄な事を……」

アナザークウガ鬼火が右腕に緑の炎を纏わせ、はな達に向かってパンチを繰り出す。

「しまった！」

「みんな！」

パンチが当たったかに見えたが、前に出たクローバーがバリアを張ってみんなを守った。

「クローバーのもう一つの花言葉は、幸せ。僕の全ての力を、明日への希望に変える！」

「そうしたら……クローバーは、どうなるの……？」

「ジオウの質問に、クローバーは無言で悲しげな微笑みを浮かべる。

「駄目だよ……!私、まだ約束守れて無いよ!」

「ううん。守ってくれたよ」

首を横に振ったクローバーの足元に、紋章が浮かぶ。

「はなとソウゴの応援があれば、僕はどこにだって行ける気がする」

「クローバー!」

「それと、君もありがとう。僕を守る為に戦ってくれて」

クローバーがビルドの方を見る。

「クローバー……」

すると、光の柱が作られ、それが消えるとクローバーの姿は無かった。それを見てジオウとビルドは変身解除した。

「一緒に行くって……約束したのに……」

『連れて行ってよ。はな、ソウゴ、色んな世界に』

耳元にクローバーの声が響くと同時に、クローバー型のライトが光り出す。

同時にアナザークウガ鬼火の紋章にクローバーの花が巻かれ、結界の中にいたさあや達の石になった所にも巻かれる。

「何……?」

「…………？」

「これは…………？」

「クローバーの花だ」

更に外にいるはな達が持っているプリキュアの変身アイテムにも、花が巻かれています。

「僕のを……未来の希望へ…………！」

花が光り出し、その光が消えると、石化された所や変身アイテムが元に戻り出す。

その頃、亜空間の中でも龍牙とゲイツが、元に戻ったビートクローザーとジカンザックスを取り出す。

「離れてろ！」

ビートクローザーとジカンザックスで出口に亀裂を入れようと振るう。

「今よー！」

『せーのーはあーっ！』

リコ達が亀裂の入った所に体当たりを繰り返す。

しかし亀裂は大きくなったが、まだ脱出できるほどではなかった。

「くそー!」

「あともう少しパワーがあれば……」

あと少しなのに、まだ出口が開かない。

「——みんな、退いて」

『っ!?』

「オリヤヤヤヤヤ!」

突如、後ろから現れた男性の強烈なパンチが、クローバーの紋章を破壊した。

「この力は……」

「誰だ……」

ゲイツ達が後ろを振り返ると、その男は腰にバックルのような物——アークルを装着しており、赤いボディアーマーを纏っていた。

「さあ、行こう」

そのままクローバーが出した紋章が現れ、その下からゲイツ達が出て来た。

「「出れた!」」

「さあや! ほまれ!」

「ゲイツ!」

「龍牙!」

「リコ！はーちゃん！」

「ひまりん！あおちゃん！ゆかりさん！あきらさん！シエル！」

「その人は……」

はな達が仲間の再会に喜ぶと、ゲイツ達の後ろに男性がいた。

「2000の技を持つもの、五代雄介。よろしく！」

その男性——五代雄介は親指を立ててよろしくと言う。

「貴様は、五代雄介！仮面ライダークウガ！」

「えっ？じゃあ！この人が！」

「最初の仮面ライダー……クウガ！」

五代雄介。彼こそが19人の仮面ライダーの始まりのライダー、仮面ライダークウガだった。

「何故、貴様がクウガの力を！」

「お前に閉じ込められたあの時、俺はあの棺桶の中のベルトが俺の身体に取り付けられ、この力を手に入れた」

19年前。ティードに閉じ込められた時、棺桶に眠っていたベルトの力がそのまま雄介の身体へと移り、クウガとなったのだと語る。

そしてアークルに搭載されている霊石・アマダムで今日まで生きながらえ、今こ

ここで自身を閉じこめた張本人の前で立っている。

「貴様ら!!?」

怒ったアナザークウガ鬼火が黒い霧を放つと、そこから多くの怪人——ズ・ベ集団のグロンギ、NEWモルイマジン、マスカレードドーパント、屑ヤミー、グール、インベス、バグスターウイルス、スマッシュ、ガーディアン等と、歴代の仮面ライダーが今まで倒してきた怪人達が次々と現れた。

「ラスボスだけじゃねえのかよ!」

「なんで数だ……」

龍牙とゲイツはあまりの数に驚くと、怪人達が一斉に全員に襲い掛かる。

その時、巨大な車両と列車が現れた。車両の方——リボルギヤリーに乗っていたのは左翔太郎とフィリップ、列車——デンライナーからは良太郎とイマジンスが現れ、ソウゴ達の前に現れた。

「どうやら、取り戻せたみたいだね」

「やるね〜君達」

「やっぱ見どころある奴らだな〜」

「翔太郎さん。フィリップさん」

「野上良太郎……」

良太郎と翔太郎とフィリップが現れ、龍牙達が警戒する。

「晴夜、誰だよ？」

「俺達の先輩ライダーだよ。戦兔さん達と同じだ」

晴夜が言う。龍牙は納得した。

「鬼みたいのもいるけど……」

「俺は鬼じゃねえ！モモタロスだ！」

「先輩、そんな顔しちゃ逃げちゃうよ〜♪」

「なんだと亀公！」

イマジジン達がいきなり喧嘩を始めた。するとソウゴとはながみんなの方を振り向く。

「みんな！力を貸して！」

「私、クローバーに見せたい景色があるの！」

ソウゴとはなの願いを受け入れたいちかとみらい達のはなの隣に並び、変身アイテムを取り出す。

「龍牙！行くぞ！」

「はん！上等だ！」

「行くぜ、フィリップ。最後の仕事だ」

「ああ〜行こうか相棒」

「行くよ。みんな!」

「「「「おおう!」」」」

「俺もクウガだから戦わせてもらおうよ!」

更にソウゴの隣にゲイツから晴夜を始め、歴戦の仮面ライダーが並ぶ。

「「「「この世界の!」」」」

「「「「夢を!」」」

「「「「「希望を!」」」」」

「「「「明るい未来を!」」」

「「「「想いを!」」」

「「「「笑顔を!」」」

『「取り戻してみせる!」』

仮面ライダーとプリキュア。

とある世界では絶対に交わる事なかったはずの、全く違うヒーロー達が今、共通の敵を倒す為に、それぞれ覚悟を決めながら立ち並ぶ。

「それじゃあ、みんな行くこう!」

ソウゴの掛け声で全員がベルトと変身アイテムを取り出す。

「「「ミライクリスタル!」」」

「ハート！キラっと！」

「はぎゅ〜！」

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

はなとさあやとほまれの、みんなの未来を応援するプリキュア、HUGっと！プリキュア。

「「「「キュアラモード・デコレーション！」」」」

「ショートケーキ！元気と！笑顔を！」

「「「「レッツ・ら・まぜまぜ！」」」」

「キュアホイップ！出来上がり！」

「キュアカスタード！出来上がり！」

「キュアジェラート！出来上がり！」

「キュアマカロン！出来上がり！」

「キュアシヨコラ！出来上がり！」

「キュアパルフェ！出来上がり！」

「「「「キラキラ！プリキュアアラモード！」」」」

アニマルとスイーツの力でみんなの元気と笑顔を作るプリキュア、キラキラ☆プリキュアアラモード。

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!」

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ!」

「ふたりの奇跡!キュアマミラクル!」

「ふたりの魔法!キュアマジカル!」

「あまねく生命に祝福を!キュアフエリーチェ!」

「魔法つかいプリキュア!」

魔法で奇跡を生み出し、手を繋ぎ合うプリキュア、魔法使いプリキュア!

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

「変身!!?」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

ソウゴの全ライダーの力を受け継ぐ仮面ライダージオウ。

遠い未来から過去を変える為に来た仮面ライダーゲイツ。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

『Are you ready?』

「変身！」

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

『Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yea
h!』

晴夜は科学の力の仮面ライダービルド、龍牙はドラゴンがモチーフな仮面ライダークローズとなった。

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

「変身！」

『サイクロン！ジョーカー！』

翔太郎とフィリップ、二人で一人の仮面ライダーWへと変身した。

「変身！」

良太郎とイマジンズは電王ベルトにパスを当てると五人の体を纏う。

『ライナー フォーム』

『ソード フォーム』

『ロッド フォーム』

『アックス フォーム』

『ガン フォーム』

良太郎とイマジンは五つのフォームの電王へと変身した。

「変身」

雄介は自身の体に赤いボディアーマーを纏い、クウガに変身した。

ジオウ、ゲイツ、ビルド、クロース、W、電王、そして、最初のライダーであるクウガへと変身した。

今ここに、十三人のプリキュアと十二人の仮面ライダーが揃った。

「祝え!今まさに歴史を名を残したレジェンド達と我が魔王との夢のコラボレーション!」

そこにいつも祝いの言葉を言い、ウオズが現れた。

「あんなのいつもやってるのか?」

「まあね〜♪でも、なんか、ここにいるみんなとなら絶対にいける気がする!!?」

「そうだな。さあ、実験を始めようか!」

「みんな行くよ!」

アナザークウガ鬼火が生み出した敵に向かって、全員が走っていく。

「クローバーのお陰で、みんなプリキュアと仮面ライダーになれたで！」

はぐたんの持つミラクルクローバーライトが光ると同時に、ハリーとペコリンにもミラクルクローバーライトが現れる。

「ライトを振って応援や！フレ〜！フレ〜！プリキュア！ライダー！」

「頑張つてペコー！」

ハリー・はぐたん・ペコリンがミラクルクローバーライトを振って応援する。

まずは電王チームと魔法使いプリキュアが大量のNEWモールドイマジン達を応戦する。

「行くぜ！行くぜ！」

「えい！よっしょ！」

「ふっ！はっ！やあっ！」

「はあっ！」

向かって来るNEWモールドイマジンをミラクルがパンチやキックを叩き込み、電王・ソードフォームとライナーフォームがデンガツシャーを振り回し。フェリーチェがNEWモールドイマジンのパンチを左手で抑え、そのまま掴んで投げ飛ばし、応戦している。しかし……

「亀公！ てめえ、なにナンパしてんじやねえっ！ とつとと行くぞー！」

「先輩、そう大声出さなくなつて聞こえてるって」

「二人ともそう言うの後でみんな一緒に行くこう」

面白おかしく戦う電王チームと魔法使いプリキュアのメンバーだった。

その一方、Wとキラキラ☆プリキュアアラモードが大量のマスカレードドーパントを相手していた。

「はあ！やあ！オラアアアアア！」

「やつ！はっ！たあっ！」

「やああああああっ！」

「うりやりやりやりやあっ！」

Wとホイップ達は格闘戦でマスカレードドーパントに応戦し、キックやパンチを繰り返した。

「にゃ〜お」

マカロンはドーパントから放たれた砲撃を避けながら、自滅を誘いながら着地した。

「ふっ！ふっ！はっ！たあっ！シヨコラ・アロマーゼー！」

シヨコラはマスカレードドーパントを蹴飛ばして、シヨコラ・アロマーゼを放つ。

「やあっ!」

パルフェが上空からレインボーリボンを伸ばし、地上の小鬼火の軍団に巻き付けて振り上げて倒していくが、やはり数が多い。

『翔太郎!僕が行くよ!』

「なら、頼むぜ!」

一度二人が変身解除すると、フィリップはサイクロンメモリーを外し、何処からともなくやって来た恐竜をモチーフにしたガジェットのようなメモリ、ファングメモリが手に置かれる。

『ファング!』

「変身!」

『ファング!ジョーカー!』

「今度はフィリップさんの方が変身した!」

「中々いい格好だね」

そしてファングメモリをドライバーに差し込み、ファングジョーカーとなる。闘争心を剥き出しにした野獣のような戦い方を始めると、ファングメモリのレバーを一回下ろす。

『アームファング!』

すると腕の部分から、刃のようなものが現れた。

そのまま刃が生えた腕を使い、襲ってくるマスカレードドーパント達を切り裂く。すると、今度は二回下ろす。

『シヨルダーフアング！』

今度は肩から現れ、それを取りブーメランのように投げつけ、それに当たった敵は爆発し倒されていった。そして最後に、フアングメモリのレバーを三回押す。

『フアング！マキシマムドライブ！』

フアングサイドの脚に『マキシマムセイバー』を出現させた。

『フアングストライザー！』

ジャンプして回転蹴りをかまし、恐竜の頭部のようなオーラが現れ、マスカレードドーパントにF字の残光が浮かぶ。

ビルドとクローズは、ドリルクラッシュヤーとビートクローザーを振り回し、襲いかかるスマッシュとガーディアンを破壊していくと武器を一度捨て、同時にドライブバーのレバーを回す。

『Ready go！』

放物線がスマッシュ達を拘束し、ビルドとクローズが高く飛びライダーキックを構え

る。

『ボルテックファイニッシュ!』

『ドラゴニックファイニッシュ!』

「はああああああつ!」

「オリヤああああつ!」

ビルドとクローズがダブルキックを繰り出し、スマッシュに命中させ爆発させる。しかし、それでもまだ数が多い。

ビルドはスパークリングを取り出し、ビルドはドライバーにスパークリングを差し込む。

『ラビットタンクスパークリング!』

レバーを回し、ビルドのライダーズクレスト型のスナップライドビルダーが出現すると、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『シユワツと弾ける!ラビットタンクスパークリング!イエー!イエー!』

ラビットタンクスパークリングへとフォームチェンジすると、圧倒的なスピードでスマッシュとガーディアンの群れに飛び込み、両腕の大型のエネルギー斬撃を繰り出し全

て破壊した。

エール達三人とジオウとゲイツは、襲いかかる複数の敵に応戦する。

「フレ！フレ！ハートフェザー！」

アンジュがハートフェザーでジオウ達を守る。

「ジオウ！ライダーの力を見せてやるぞ！」

「ああ！」

ジオウとゲイツはオーズとエグゼイドのウォッチを取り出す。

『オーズ！』

『エグゼイド！』

起動させたウォッチをドライバーへと装填し、ドライバーを回す。

『アーマータイトム！タカ！トラ！バツタ！オーズ！』

『アーマータイトム！レベルアップ！エ・グ・ゼ・イー・ド！』

ジオウはオーズアーマーに、ゲイツはエグゼイドアーマーを装備した。

ジオウ・オーズアーマーのクローが屑ヤミー達に攻め込む。

『フィニッシュタイトム！オーズ！』

二つのウォッチを起動させ、ドライバーを回転させる。

『スキヤニングタイムブ레이크!』

「せいやあああーっ!」

空中に飛び、3つのメダル状のエネルギーを出現させ、それらをキックで通過し完成させるとともに爆散させる。

ゲイツもエグゼイドアーマーでアクロバティックな攻撃と腕のガツシヤコンブレイカーブレイカーでバグスターウィルスを押倒する。

『フィニッシュタイム!エグゼイド!』

ロックをまたも解除し、ドライバーを回す。

『クリティカルタイムバースト!』

「クリティカルタイムバースト」の文字を叩いて宙へを上げると、ゲイツはさらに地面を叩き、衝撃波でバグスターウィルスを宙へと上げる。

「エトワール!」

「フレフレ!ハート・スター!」

その隙にエトワールがハート・スターを放ち、バグスターウィルスを消滅させた。すると、今度はインベスとグールが向かってきた。

「次はこれだ!」

それを見て、二人は別のウォッチを取り出す。

『鎧武!』

『ウイザード!』

ウオッチを取り替え、再びドライバーを回す。

『アーマータイム!ソイヤツ!鎧武!』

『アーマータイム!プリーズ!ウイ・ザード!』

ジオウが鎧武アーマー、ゲイツがウイザードアーマーを装着し、インベスとグールに
応戦する。

「ソウゴ!退いて!」

エールに言われ、ジオウが離れる。

「フレフレ!ハート!フォクユク!!」

ハート型の光線、ハートフォーユーを放ちインベス達の動き止める。その隙にドライ
バーを回転させる。

『フィニッシュタイム!』

『スカッシュタイムブレーク!』

オレンジ型のエネルギーに包み、拘束すると二本の橙々丸Zでインベスを撃破した。

『ストライクタイムバースト!』

ゲイツは右足を巨大化させたライダーキックを炸裂させてグール達を撃破し、こちら

も一通り倒すことが出来た。

そして、クウガがグロンギの一団に向かっていく。

「はあ!たあ!」

得意の格闘術を使いグロンギ達を圧倒する。

「オリヤヤヤヤヤ!」

次に繰り出すパンチがグロンギを吹き飛ばした。だが、それでもすぐに起き上がった。

「なら、超変身!」

クウガはアーマーの色を青く変色させたドラゴンフォームとなり、ドラゴンロッドと中国武術の型を応用した戦闘スタイルで敵を寄せ付けないようにする。

鈴の様な音を鳴らしながらグロンギ達を薙ぎ払うと、そのまま一度距離を取る。

「超変身!」

今度は緑色のボディを持つペガサスフォームとなり、専用武器・ペガサスボウガンのスロットルを引く。

「はあ!」

封印エネルギーを込めた空気弾を放ち、グロンギを怯ませた。

「超変身!」

次は紫がメインカラーでパワー型のタイタンフォームとなり、巨大なロングブレード・タイタンソードを手に持ち、思い切り振り抜いて周りの敵を一撃で切り裂いた。

十三人のプリキュアと十二人の仮面ライダーにより、全ての敵は倒された。

「これで全部だね！」

「後はお前だけだ！」

「いいだろう！全員この俺が倒してやる！イヤアッ！」

アナザークウガ鬼火が両腕を地面に叩き付けて地割れを起こし、割れた地面から炎を噴出させる。

「翔太郎！エクストリームで行こう！」

『ああ！』

Wは再びサイクロンジョーカーへと戻るとエクストリームメモリがフィリップを吸収し、そのままダブルドライバーに差し込まれた。

『エクストリーム！』

ダブルの身体の真ん中が開くかのように新たなフォーム、サイクロンジョーカーエクストリームへと変わった。

「プリズムビッカー！」

すると体の中央のクリスタルの様に透き通る部分「クリスタルサーバー」から、専用

の武器・プリズムビツカーが現れた。

『プリズム!』

プリズムメモリを差し込むと、四つのメモリーを差し込む。

『CYCLONE! JOKER! HEAT! LUNA! マキシマムドライブ!』

するとプリズムビツカーの剣からエネルギーが溜まる。

「ビツカーチャージブレイク!」

引き抜いたプリズムソードに四色のエネルギーを纏わせ、アナザークウガ鬼火を斬り払う。

「みんな! 集まって! てんこ盛り行くよ!」

「よし、本家クライマックスと行くか!」

「仕方ないねえ」

「やっぱ締めはあれやなく!」

「やった! てんこ盛り!」

電王・ライナーフォームがケータロスを外し、ボタンを押し始める。

『モモ! ウラ! キン! リユウ!』

四つのボタンを押し終えると、再びベルトに取り付ける。

『クライマックス フォーム!』

四つの電王のフォームがライナーフォームの方へと集まる。

そのまま複眼が変わり身体にソード、ロッド、アックス、ガンと四つの顔が装備された。

「ワイワイ！久しぶり！でもやっぱり気持ち悪い！」

「うるせえ！一発で行くぜ！」

「よっしゃ！」

「いつでもいいよ」

クライマックスフォームになった電王は、デンガツシャーを手に持ちエネルギーを溜めていく。

「決めてやるぜ、必殺……俺達の必殺技！クライマックスバージョン！」

電王CMも高く飛び上がり、デンガツシャーでアナザークウガ鬼火に切りかかった。

「行くぞ！龍牙！」

「おお！」

『グレート！オールイエイ！ジーニアス！』

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

ジーニアスボトルとマグマナックルをドライバーに差すと、プラントライドビルダー

GNとマグマライドビルダーが出現した。

『Are you ready?』

『完全無欠のボトルヤロー!ビルドジーニアス!スゲーイ!モノスゲーイ!』

『極熱筋肉!クローズマグマ!アーチャチャチャチャチャチャチャアチャー!』

ビルドの体に60本のボトルが装填され、ビルドジーニアス。クローズはヴァリアブルマグマを頭上からぶちまけ、クローズマグマへと変身する。

『ワンサイド!逆サイド!オールサイド!』

『Ready go!』

『ジーニアスファイニッシュ!』

『ボルケニックファイニッシュ!』

今度は二人同時にライダーパンチを放ちアナザークウガ鬼火を吹き飛ばした。

「ゲイツ!」

「ああ!」

『デイデイデイ・デイケイド!』

ジオウはデイケイドウォッチを起動させ、ドライバーへと装填すると、カード型エネルギーギーが身体に重なる。

『アーマータム!カメンライド!ワーオ!デイケイド!デイケイド!デーケー

イードー！』

『ライドハイセイバー！』

ディケイドアーマーを装着し、ライドハイセイバーを出現させた。ゲイツはジカンザックスにゲイツウオッチを装填、ジオウはライドハイセイバーにディケイドウオッチを装着した。

『『フィニッシュタイム！』』

ジカンザックスを弓モードとし、ライドハイセイバーの時計の針を三周回し、回し終わるとジオウとゲイツは構える。

『ギリギリシユート！』

『ヘイ、カメーンライダーズ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘーヘイ！セイ！』

『ディケイドディケイド！平成ライダーズアルティメットタイムブ레이크！』

『おりやああああー!!？』

ゲイツがジカンザックスを放つと、ジオウが追い討ちを駆け寄るようにライドハイセイバーで決めにかかる。

「超変身！」

続いてクウガは、さつきまで赤だった装甲を全て黒く変色させ、両足にエネルギーを

溜め始める。

「オリヤヤヤヤヤ!」

そのまま高く飛び上がり、アメイジングマイティキックを繰り出した。

「そんな攻撃が効くか!」

しかし仮面ライダー達の攻撃を受けても尚、アナザークウガ鬼火はまた巨大な衝撃波を放ち、全員を怯ませる。

「俺に敵うわけないんだ!」

アナザークウガ鬼火がさらに火炎を撒き散らす。

「マジかよ……このままじゃ……」

「いいや!まだ、終わっていない!」

ビルドは諦めず立ち上がり、ビルドはロイヤルとシャドウの2本のボトルを取り出す。

『ロイヤル!シャドウ!ベストマッチ!』

ボトルから『R/S』と重なり浮かび上がるとドライバーのレバーを回し、ライドビルダーから白のアーマーと黒いアーマーが前後から出現した。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『光と闇は一つとなり！真の力へ！ マジエステイロード！イエー！イエー！』
形跡されたアーマーが重なり、ビルドの体に装着され煙が吹き上げる。

「勝利の法則は決まった！」

『フルボトルブレード！』

光と闇の暗夜だけのフォーム、マジエステイロードフォームへととなると、自身の手にフルボトルブレードを持つ。

そのままアナザークウガ鬼火の攻撃を避け続け、フルボトルブレードに斬りかかる。

「凄え〜暗夜！」

「我が魔王。私が渡したウオッチの力を今こそ……」

ジオウがマジエステイビルドに感激していると、後ろからウオズが現れた。

「ん？ あ、これ？」

あの時、ウオズに渡されたウオッチを取り出すと、ジオウはそれを起動させる。

『ミステリージオウ！』

すると後ろに翼があり、その手に二本剣を持ったアーマーが現れ、ドライバーを回転させる。

『アーマータイム！』

そのままジオウは、後ろに出現したアーマーをその身に纏った。

『歴史の全てを知る王々!仮面ライダージオウミステリウウ!フ・レ・アウ!』

ジオウが纏ったピンクゴールドのアーマーの後ろには、機械仕掛けの翼『ミステリアスウイング』があり、その手には二本の剣『フレアドラゴンバスター』を持つていた。

「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来を知らしめる時の王者!

その名も仮面ライダージオウミステリーフレアフォーム!まさに歴史の全てを知る瞬間である!」

ジオウはウオズが言うにミステリーフレアフォームと名付けられたアーマーを装着すると、今の自分の姿を見渡す。

「凄え〜!なんかいける気がする!」

ジオウは背中の翼で高く飛び上がり、ビルドの隣へと並ぶ。

「ソウゴ」

「晴夜、クローバーの夢を叶えよう!」

「ああ!」

「貴様ら……!」

アナザークウガ鬼火はドス黒い炎を二人に向けて放った。しかし、次の瞬間――

「はあ!」

ジオウがフレアドラゴンバスターを向けると炎が消えた。

「なっ!?？」

「残念だが、ジオウミステリーフレアフォームは、全ての攻撃を未来へと飛ばすことが出来るのだよ」

このジオウのアーマーは、攻撃を全て未来へと飛ばす能力を持っていた。それによりアナザークウガ鬼火の攻撃を未来へと飛ばし、既に終わらせたという。

『ラビット!フルボトルスラッシュユ!』

その隙にラビットボトルの力を加えたフルボトルブレードをアナザークウガ鬼火へと放つと、二人は同時に向かっていく。

「オリヤァー!」

「ハアアアアア!」

二人の持つ剣がアナザークウガ鬼火にダメージを与えた。

「馬鹿な!こんなことが!俺は……この世界の全ての闇を覆い尽くし、最強の闇となる……!」

なのに……!何でプリキュアとライダーにここまで……!」

アナザークウガ鬼火は、自身の身体に刻まれた無数の斬傷を見ながら、何故ここまで追い詰められているのだと叫ぶと、ジオウはそれに答える様に口を開く。

「最強の闇になる?何言ってるんだ?」

「あなたじゃ無理だよ」

ジオウがそう言うのと、ミラクルもそれに続く。

「この世の中にはな、てめえ以上の闇を持った存在がいるんだよ」

「あの時に比べれば、どうって事無いよ!」

Wはかつて戦ってきた敵を思い出しながらそう語ると、ホイップも強敵と戦ったその時の事を思い出しながら叫ぶ。

「それ比べたら、全然問題ねえよ!」

「晴夜の言う通りだぜ! プロトジコチューやエボルトに比べりゃ、お前なんて大したことねえんだよ!」

ビルドとクローズも、プロトジコチューとエボルトと比べたら、アナザークウガ鬼火なんて屁じゃないと叫んだ。

「こんなんじゃない! 俺のクライマックスが盛り上がりませんか!」

モモタロスはこの程度の事じゃ、クライマックスは盛り上がりませんか! と言います。

「そして、もしそれが最強の闇だとしても、俺ならその力でみんなの笑顔を守る!」

そしてクウガは、例えばどんなに強い敵でも、誰かの笑顔を守る為なら、自分は戦い続けられると語る。

「例えばどんな目に遭っても!」

「どんな困難にぶち当たっても！」

「絶対……絶対……！ぜーったいに……っ！」

「諦めない！」

ホイップが、ミラクルが、エールが、ここに居る全員が決意を決めた表情で叫ぶ。

そこへはぐたん達がミラクルクローバーライトを振る。

「フレフレ！プリキュア！ライダー！」

「頑張るペコー！」

ハリー達の応援に反応するかのようミラクルクローバーライトが更に光り出し、光に包まれたエール達が宙に浮かぶ。

「この光は……！」

「暖かい……っ！みんな！手を繋ごう！」

ホイップの掛け声と共に、プリキュア達が手を繋ぐ。

「ねえ、今からみんなで、絶対に破らない約束をしない？私達は、全ての世界の笑顔を守る！」

「うん！色々なスイーツを作って、キラキラルでみんなをいっぱい笑顔にする！」

「みんなを応援して、未来の笑顔を守る！」

「それが！」

『私達の約束!』

エール達プリキュアは、例えどんなことがあっても、絶対に破る事の出来ない約束を交わす。

「俺達も、その約束を守る!」

「ああ!一緒に笑顔を作って守ろうぜ!」

「俺もだぜ!」

「ああ!乗ったぜ!」

「みんなで、みんなの笑顔を守ろう!」

そのプリキュア達の約束に、仮面ライダー達も誓う。

「黙れ!」

アナザークウガ鬼火が口から光線を放って直撃させるが、いつの間にか展開された球状のバリアが光線を防いだ。

「何だ……!?」

ミラクルクローバーライトの力が、プリキュア達とライダー達に集まる。

「凄い、力がどんどん溢れて来る……」

「今なら、何でも出来ちゃいそうだよ……!」

「ありがとう。みんなの全力の応援、しっかり受け止めたよ!」

「くたばれプリキュア！ライダー！」

何かを放とうとしたプリキュアに対抗するため、アナザークウガ鬼火が口から巨大光線を放つ。

『プリキュア！クローバーフォーメーション！』

プリキュア達の前にクローバー状のエネルギーが作り出され、それを敵に向けて飛ばすクローバーフォーメーションを放つ。

クローバーフォーメーションと巨大光線がぶつかり合い、押され気味になる。

「仮面ライダー……プリキュア共……ッ！」

『プリズム！マキシマムドライブ！エクストリーム！マキシマムドライブ！』

そこへWが現れ、プリズムメモリをスロットに差し込み、エクストリームメモリを再度開閉すると高く飛び上がっていった。

「ダブルプリズムエクストリーム！」

連続のキックの連打をアナザークウガ鬼火に繰り出した。

「決めてやるぜ！」

『CHARGE AND UP！』

電王がパスをかざすと三つの仮面が足へと移動し、電王が高く飛び上がる。

「デリアアアアアアアア！」

電王CMのボイスターズキックをアナザークウガ鬼火の左側から放つ。

そこへアナザークウガ鬼火の上に、ゲイツとクロースが飛び上がった。

「晴夜、ばつかにいい格好させるかよ!」

「俺達がお前を倒す!」

二人がドライブを操作し、足に力を溜める。

『ボルケニックアタック!』

『タイムバースト!』

「はあああああ!!?」

頭上からゲイツとクロースのライダーキックを繰り出す。

そして、正面からジオウとビルド現れた。

「究極の闇よ。もう一度力を! はあッ!」

更にクウガは自身の黒いボディに金色のラインによる縁取りが施された、究極の闇の変身、アルティメットクウガへと変わった。

「はあ!」

再びクウガが両足にエネルギーを溜め、走り出し高く飛び上がった。

「オリヤヤヤヤ!」

アルティメットクウガの必殺キック、アルティメットキックをアナザークウガ鬼火の

後ろから放つ。

『Ready go!』

そこへ黒の白の放物線と数式、キックと書かれた文字がアナザークウガ鬼火を拘束した。

『マジエステイファイニッシュ!』

『ジオウミステリ〜タイムブ레이크!』

「はあ〜……はあああああアツツ!!?」

七人のライダーキックが衝突し、アナザークウガ鬼火から放たれた光線は消え、そのまま押し込まれていく。

「まだだ!俺の計画は——うわあああああ!」

そのまま全員の攻撃が貫かれた事でアナザークウガ鬼火は消滅し、アナザークウガウオッチは破壊され、ティードも爆風の中へと飲み込まれた。

「——まだだ……まだ、戦える……っ」

爆風が晴れると、そこへ鬼火がさっきの影響で小さくなったもののみまだ健在だった。

「もういいんだよ」

そんな鬼火の背後からクローバーの声が聞こえると、クローバーが現れて鬼火の真下に両手を近づける。

「心に闇を広げないで、誰かの優しさに触れてご覧」

「優しさ……だと……?」

「そう。僕にははなとソウゴが——君には、僕がいる」

「私達も、全力で応援する!」

現れたエールがクローバーの肩に手を当てて伝え、ホイップ達も後ろで見届ける。

「フレフレ、闇の鬼火さん」

「いつか、また会おう。今度は復讐なんかじゃない。優しいお前に」

「——行こう。君が僕にしてくれたように、今度は、僕が君と一緒にいるよ」

鬼火の目から一粒の涙が零れるのと同時に、鬼火の炎が金色に光り出す。

一筋の金色の光が上空で弾けると同時に、クローバーの入ったエネルギーが降り注ぎ。空が元に戻り、荒地地になっていた花畑も、石になった場所や人も元に戻った。

「——はな、ソウゴ、君達の言う通りだ。」

世界はとて優しいんだね。そして、こんなに美しい。ありがとう」

二人にお礼を言った直後、クローバーは消滅した。

「クローバー!」

『クローバーの花が散って、風に種を飛ばすように、僕の世界は広がって行く。』

だからいつか、僕もどこかの野の花になって、君に、会いに行くよ』

「うん……!」

エールが頷き、小指を前に出す。

「約束——」

『——約束』

そして彼女は、クローバーの幻影と指切りを交わすと、クローバーが口元に笑みを浮かべた直後、その幻影も消滅した。

エールははぐたんを両手で抱え、無邪気に笑うはぐたんを見て目に涙を流す。

「はな」

ソウゴとゲイツ、アンジュとエトワールが現れてはぐたんを見て、ハリーもツクヨミの肩に乗って見る。

笑い続けるはぐたんを見てエール達も微笑み、既に変身を解いてた晴夜達が後ろから見る。

「そうだ! みんなで一緒に、はぐたんのお花畑デビューしませんか?」

エールがそう尋ねると、いちか達が駆け寄り、エール達も変身を解いた。

「——ねえ君、そこで何しているの?」

僕が枯れ木を背にして一人でいると、目の前に見知らぬ男性が現れていた。

「……君には、関係ないことだろ……」

「そんなことないよ! だってこんな所で座っていたら風邪をひいちやうだろ? お家は何処だい?」

「……そんなの、僕には無いよ」

「………そっか」

目の前で立っている男性に冷たく接していると、どういう訳かその人は僕の隣に座ってきたのだ。

「………何してるの」

「ん? ……いや、二人で座っていれば少しは暖かくなるかな? って思ったから座ったんだけど、大丈夫だった?」

「………勝手にして」

「うん、わかった、勝手にする」

男性はそれだけ言うと、足下にある雪を手にとって丸く固めていき、雪玉を三つ程作るとジャグリングを始めた。

「あんたこそ、ここで何をしているの?」

「……えっ? 俺?」

……いや、実はさ、ある遺跡に行ったときに怪しい男を見つけてさ、その人に何を
しているんだって聞こうとしたらね？気づいたら突然、真つ暗いところに閉じ込められ
ちゃってさ。

それで俺、出口が何処か無いかと探してたら、なんか目の前に棺桶があつてね！何か
なうって近づいた時に、足下になんかのバックルの様なものを見つけて——」

彼の長い話を要約すると、そのバックルの様なものを腰につけてみるとバックルが腰
に吸収されて、そのあと彼の頭に何か別の記憶が流れ込んだというものだったらしい。

そして、試しに頭の中から見えた記憶通りに色々やっていると、彼の体に白いア
マーの様なものが纏われていったらしい。

「——それでね、その後気付いたらまた場所が変わったんだよ。そこじゃあ、なんか沢山
の人が怪物に襲われてて。俺、無我夢中になつてその人達を助けていたら、今度は体が
赤くなつたんだよ！そしたらその人たちが、俺を見てこう言つたんだ……

『仮面ライダークウガだ！』……って」

そして彼は、その赤いアマーを纏つて怪人たちと戦つて人々を守つた後、突如目の
前に大きな扉が現れ、気になつた男性がその扉を潜ると、今度は此処——僕の居る世界
に来たと語つた。

「……いや、それにしても何だつたんだらうね、あの扉。未だにどういうやつなのか分か

「らないし……」

「……多分それ、時の扉だよ」

「……え？君、知ってるの？」

「……まあ」

「じゃあさあ、教えてよ！あの扉について！」

「……」

あの扉を出現させる方法を知りたがっている男性に教えるように、僕はすぐ傍の湖を指さす。

「……湖に向かって、会いたい人の事を強く思うんだ」

「なるほど！すごく簡単じゃん！それじゃあ早速……ムムム」

そうやって男性は何かを祈る。

……しかし、どういう訳か何も出て来なかった。

「……あれ？おかしいな？想いが足りないのかな……？よし、もう一回——」

男性はそうやってもう一回祈るが、扉が出てくる気配すらなかった。

「うーん……やっぱり出てこないな……ねえ、これで本当に合ってる？」

「……少なくとも、あの時は出たよ」

小首をかしげている男性に、はたと出会った時の事を引き合いに出しながら語ると、

その男性は僕の話に興味があるのか、また隣に座ってきた。

「君はさ、あの女の子にまた会いたいって思ってるの？」

「……別に。それにどうせ嘘だし、あの後結局来なかったし……」

そういつて僕は、何日たつても、何か月たつても、何年たつても彼女が会いに来なかった事を思い出す。

すると男性は難しそうな表情を浮かべると、その後「それはないんじゃないかな？」と呟いた。

「たぶんその子、あの扉が見つからなかっただけじゃ無いかな？ さっき俺が祈つても扉が出てこなかったのもあるし、もしかしたらそれと同じ事があつたんだよ！」

「……さあ。それはどうかな」

「それに約束したんだろ？ また会いにくって」

「……」

「確かに、今はまだ来ないけれど、いつかは君に会いに来てくれるんじゃないかな？」

「……そんな事。あるわけないよ」

「だけど俺は信じるよ。あの子が約束を破りたくて破つて、此処に来なかったわけじゃないって」

「……信じる」

男性の言葉に、心のどこかで安心と希望を持つと、男性の目の前にクローバーの紋様が描かれた扉が出現した。

「おっ！扉が出てきた！よし、これで帰れるぞ！」

「そう、よかつたね」

「……ねえ君、此処から出たいと思ったことない？」

「えっ？」

「この機会に、あの子に直接会いに行ってみるのも良いんじゃないかな？そしたら、あの子の『また会おう』っていう約束も果たせるわけだし」

「……やめとくよ。それに僕は、この炎から離れられないんだ。離れると消えちゃうって、炎が言うから」

僕がそういうと同時に、僕の隣に黒く燃えさかる鬼火が出現した。

「だから僕は、此処から離れて遠くに行つたことが無いんだ。たとえその扉を潜つたとしても、この火から離れた僕は消えてしまう」

「……………」

「だから、君一人で行つて」

そう言う僕を見て男性は何処か辛そうな表情を浮かべるが、僕と言う人の命がかかっている為か、今度は残念そうな表情を浮かべた。

「……………そうか、わかった。

でももし、遠くに行きたいって思ったら、遠くに行けるようになったら、俺も一緒に
行つて良いかな？」

「……………好きにして」

「わかった、好きにするよ……………あつ、そうだ。まだ自己紹介して無かつたよね？」

——俺の名前は五代雄介、2000の技を持つ者。君の名は？」

「……………クローバー」

「そうか。それじゃあクローバー、また会おうね」

……………ああ、また約束か。どうせ守れるわけないのに。

——ねえ君、此処から出たいと思つたことない？

でももういいんだ。約束を破られるのは慣れてるから……………

——この機会に、あの子に直接会いに行つてみるのも良いんじゃないかな？

その男性…雄介は扉に近づくと、その扉を開けて此処から去ろうとする。

——だけど俺は信じるよ。あの子が約束を破つて此処に来なかつたわけじゃないつ
て。

——でももし、遠くに行きたいって思ったら、遠くに行けるようになったら、俺も一
緒に行つて良いかな？

……

その時僕は、どういう訳か鬼火から離れて、雄介と共に扉の中に入っていた。後ろから鬼火が焦った様な声を上げるが、僕はそれを無視して目の前で目を大きくして驚いている雄介の顔を見る。

「——ッは！はあ、はあ……やあ、雄介。また会ったね」

「?!?クローバー!! 何で?! だつてきつき、あの火から離れると消えちゃうつて——」
「——分からない、僕も何でこんなことしたのか……」

でも、何だか急にあの子に会いたくなつて……

今の行動は、絶対に間違っているはずなのに。もしあのまま、ずっとあの場所に居る位なら。

あの子に、はなに直接会いに行こうとして消えてやるつて……思っちゃった」

「……」

「馬鹿なことをしたと思ってる。

怖くないつて言ったら、嘘になる。

僕はきつと、この行動をずっと後悔するかもしれない。

それでも僕は、はなの約束を守りたいつて、彼女を信じたいつて、一瞬でも思つたら。

……ねえ、雄介。もし僕が消えなかったら、君と一緒に旅していいかな？」

「——良いよ、わかった！俺と一緒に、あの子に会いに行こう！」

雄介は満面の笑顔でそう言うと、拳を上げて親指を立てた。

「……うん！」

それにつられて、僕も親指を立てた。

そして、僕たちは扉の先へと向けて歩いていくのだった。

——その後、僕は消えることは無かった。

けれど、雄介だけはあの暗闇の世界に戻ってしまい。はなが居ると思われる世界に一人だけで赴いた僕は、鬼火の仲間であるデイド達に追われることになった。

そして捕まった僕は、彼によってその時の記憶と、あの日の出来事の記憶を消されてしまった。

だけど、あの行動は無駄じゃなかった。

僕があの時、晴夜に会ってなかったら、はなと再開出来てなかったかもしれない。

あの時雄介に会ってなかったら、ソウゴと出会えてなかったかもしれない。

一つでも運命の歯車が狂ったら、あの出来事は無かったかもしれない。

僕はそんな事を考えながら、鬼火と共に青空から彼らの様子を見守っていた。

みんなはお喋りしながらキラパティに移動した後、キッチンでケーキを作っていた。はたとソウゴが粉をふるい落とし、リコが魔法で卵を浮かべて割り、あきらの持つボウルに入れる。彼女の魔法を見たフィリップが、凄いと感心しながら卵を片手で割る。イマジンスがケーキの飾りつけをどうするかで揉め合うのを、ツクヨミが喝を入れて止めたりした。

クリームの泡立てはもっと優しくとひまりがゲイツと龍牙に注意し、同じくクリームを泡立てると晴夜とソウゴを見て笑いあった。

そして雄介は、「ようやく食べ物にありつけるよ、もう19年ぶりだな」といって、みんなに心配されたりした。

——雄介。君があの時来てくれたから、僕は彼らに出会うことが出来た。

——君が居たからこそ、あの時僕は挑戦する勇氣を持つことが出来た。

——君が僕に笑いかけてくれたからこそ、はたと笑って約束する事が出来た。

——だから、ありがとう。仮面ライダークウガ。

それからしばらくし、みらい達は魔法界へ、いちか達はいちご坂へ、良太郎達はデンライナーで時の中へと帰っていった。

するとふとソウゴは、懐から取り出したジオウミステリーライドウォッチを見つめる。

「一度だけのウォッチか……」

しかし、ジオウミステリーウォッチはただのブランクウォッチとなっていた。おそらく力を使いすぎた影響だろう。

「ソウゴ」

「僕達からプレゼントがあるんだ」

翔太郎とフィリップ、雄介の三人がソウゴに近づく。

「俺からも」

三人がソウゴに何かを渡そうとする。

「えっ？これ……」

三人がソウゴに渡そうとしたのはWとクウガのライドウォッチだった。

「でも……」

これを渡すことは、三人のライダーとしての力を受け継ぐということである。

「僕達が持つてるより、今は君が持っていた方がいいと思うからね」

「それに君になら、この力をきつとちゃんと使えると信じているよ」

「お前だって仮面ライダーだろ。なら大丈夫だ」

「わかった。約束するよ」

そしてソウゴは、Wとクウガのウォッチを受け取った。

「じゃあね〜」

「また、風都に来な。今度は案内してやるぜ」

「みんなの笑顔を、君が守り続けるんだよ!」

翔太郎とフィリップは風都へ、雄介はまた世界の旅へと足を踏み出し、みんなそれぞれがいるべき所へと向かう。

「晴夜!行くの?」

「ああ、そろそろ帰らないいけないから」

晴夜も今自分が待っているみんなの元へ帰ろうとする。

「ねえ、晴夜が仮面ライダーになった理由、教えてくれない?」

ソウゴが仮面ライダーなった理由を聞こうとすると、晴夜は笑顔で振り返る。

「そんなこと決まってるんだろ♪ラブ&ピースの為に決まってるでしょ!」

晴夜はピースサインを作りながら笑顔で言うと、ソウゴもつられて笑顔になる。

「へへっ、なんか晴夜らしい!でも、俺もそんな王様になってみせる!」

「王様?変わったな奴だな」

「あれ?言っただけ?」

「……よし、記憶しておくよ。あ、そうだ。士さんのこと」

ソウゴから門矢士がまたこの世界に現れたと聞き、ソウゴに士の事を話す。

「あの人はちよつと変わつてるけど、そんな悪い人じゃないよ。一緒に戦つて俺はそう思うんだ」

「そうか」…ねえ！晴夜！これだけ言わせて！

晴夜は、戦兔と同じ以上に最高の仮面ライダービルドだよ！」

「……そう思つてくれてありがとう」

ソウゴに別れを告げ、晴夜は龍牙が待っているマシンビルダーの元へと向かう。

「いいのかも？」

「ああ。さあ、行こうぜ」

「おお！」

ヘルメットを被り、晴夜がマシンビルダーのエンジンを掛け走り出す。

「なあ、お前のパティシエ姿。後でみんなに見せてみるか？」

「なっ！それに触れるんじゃねえ！」

「バカ揺らすな！折角作ったケーキが……」

いつもの痴話喧嘩をしながら、晴夜と龍牙は大貝町へと向かう。

「ソウゴ！タイムマジン直ったよ！」

「早く帰るぞ」

はなとゲイツの自分を呼ぶ声が聞こえ、ソウゴが振り向く。

「今いく!」

花畑に停まっている二機のタイムマジーンの下にいる、みんなの所へ走っていく。

「それじゃあ、みんな行くよ!」

ソウゴ達を乗せたタイムマジーンは浮き上がり、はくぐみ市へと向かって飛び立つた。

「かくして、我が魔王はライダーの歴史を守り、新たなライドウォッチを手に入れた。

これで更なる覇道の道を歩みだす。ここから歴史の新たなページが開きます」

おわり

——などど、そう思っていた君達の姿はお笑いだつたぜ……

「まだまだ、まだ終わらない……！」

あの攻撃を受けてアナザークウガの力を失ったが、ティードは今もなお生きていた。
「今度こそ、俺の計画を……」

——奴らは作られた、想像上の絵空事……現実の存在じゃないんだ。

……それなのに、何故俺は——

「残念だけど、君に今度はない」

するとそこに、白い服と帽子を被った男が立っていた。

ティードが眉をひそめているのを他所に、男は持っていたノートを開く。

「ティード、この場で倒される」

そしてノートにそれを書き込むと、突然余命宣告を受けたティードは動揺する。

「なんだ、貴様は……」

ティードの言葉を無視して懐から何かを取り出すと、腰にその何かを装着する。

『ビヨンドライバー！』

「?!?!?」

その男が持っていたのは、緑色のドライバーだった。

『ウオズ!』

ソウゴ達が使っているものとは形の違うライドウォッチを持って、そのウォッチのスイッチを押しして起動させる。

『アクション!』

『変身!』

『投影!フューチャータイム! スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ!』

ドライバーにウォッチを装填して操作を行うと、男が緑と白がメインカラーの仮面ライダーへと変身した。

「か、仮面ライダーだと……」

「名は伏せておくよ。君に知られるとクライアス社に見つかり、面倒なことになる」

「ふざけるな……」

口では強気な口調だが、目の前の男に危機感を覚えたティードは時を止めようとする。

「ティードは、既に力を失っていた」

「!?？」

だが、そのノートに書き込まれたことが現実となり、時は止まらなかつた。

「時間が惜しいので決めさせてもらおうよ」

『ビヨンド ザ タイム! タイムエクスプロージョン!』

白い仮面ライダーはそのまま、強力なキックをティードへ放つた。

「ああ……! こんな……! こんな所で……! いやああああああ……!」

キックをモロに受けたティードは、そのまま息を引き取つた。

「呆気ない最後だったものだ」

呆気ないと目の前にある亡骸に向けてそう見下しながら言い、ノートを閉じた。

「さつて、この時代にいる我が救世主を探すとしよう」

そして白い仮面ライダーは、救世主と呼ぶ誰かを探す為に動き出した。

次回! Re. HUGつとジオウ!

第15話 謎の訪問者とライダー 2018

HUGっとジオウ!補完計画、その1「クロスオーバーの誕生と再誕」

ここは、クジゴジ堂。俺達は今、ここに集まっていた。

ソウゴ「第一回くHUGっとジオウ!補完計画ウく」

一同『イエくくイ!!』

はな「ドンドンドンくパフパフパフく」

そんな感じの言葉と共に、俺達はおもむろに台本のような物を取り出し、1ページ1ページをしっかりと見ながら言葉を発する。

ソウゴ「えく、このコーナーでは、俺たちの出演する『Re. HUGっとジオウ』の世界観を補完するという、くくく。なんか、そう言う奴である!」

ゲイツ「なんかフワツとしていな」

ほまれ「補完する不破く♪」

ゲイツ「ちよwwwwwwそれって『スタートウインクル☆プリキュア』のフワってキャラの喋り方じゃん」

ハリー「というか語尾が「フワく」じゃなくて「不破く」ってなつとるやないかい!

不破じや『仮面ライダーゼロワン』の仮面ライダーバルカンを思い浮かべちゃうから!」
ソウゴ「その人はゴリラですか?」

さあや「ちよつとソウゴ君wwwwwwそれ仮面ライダーゼロワンの秘書・イズの台詞
じやんwwwwわかつてて言ってるよねそれ」

ウオズ「みんな、このままじゃ話が進まないからさつさと進めよう」

ほ・ハ・ソ・さ『ごめん』

ウオズ「では時を戻そう。この本によれば、この作品が生み出されたきっかけはひとりのpixivSS投稿者『ユート』氏が投稿した『HUGつとジオウ!』から始まったと言う。

彼は『仮面ライダービルド』と『ドキドキ!プリキュア』のクロスオーバー作品『ドキドキ&サイエンス』を書き続け、遂に『ドキドキ&サイエンス』が完結し、そこから更にユート氏の続編、『HUGつとジオウ!』が投稿された。そんなある日、このSSを一人の男が閲覧した。それがこのSSの作者『yuki.S』氏である。

当時作者は『HUGつとジオウ!』を始めて見た時、「へ〜仮面ライダージオウとHUGつと!プリキュアのクロスオーバー作品か、良いじゃん」ぐらいの感想だったが、第2話まで見ていたあたりから「アレ?そういえば仮面ライダービルドと仮面ライダークローズは戦兎と万丈の筈だけど、なんか違う奴も仮面ライダービルド、クローズになっ

てるじゃん、といふかなんでドキドキ・プリキュアのキャラと一緒におんねん？」と思つたそうだ。

そこからユート氏の『ドキドキ&サイエンス』を見始め、ストーリー等が気に入つたそう、そこからその作品のリメイク版『Re. ドキドキ&サイエンス』を書き始め、その後拙作『Re. HUGっとジオウ!』も書かれたそうだ」

はな「へ〜そんな感じであの作品とこの作品が生まれたんだね」

ソウゴ「それはわかつたけど、面白かつたならなんでリメイク版なんか作つたの？面白いならリメイク版なんか作らないよね？」

ウオズ「・・・それを知りたいならこのページを読んでくれ。『Re. ドキドキ&サイエンス』のプロローグの最後のページだ」

ツクヨミ「ん〜？どれどれ・・・」

『・・・というわけで原作者のユート氏から許可を頂いて、書かせていただきました。』

ユート氏の作品はストーリーなどは私的には面白いかったです、誤字脱字が多かつたので誠に勝手ながらやらせていただきましたあ〜！（ジョセフ並感）

ソウゴ「・・・どゆこと？」

ウオズ「要するに、原作者であるユート氏の作品の誤字脱字が酷かつたから作つた。ということだよ我が魔王」

ソウゴ「いや酷いのはアンタだよ作者!!」

はな「誤字脱字があるからっていう理由でリメイク版を作るなんて! 誤字脱字なんて p i x i v やハーメルンを見ればごまんと居るのに!」

ウオズ「二人の言う通り、〃誤字脱字が酷いから〃なんて理由でリメイク版を作るのはその作品の原作者であるユート氏に失礼だと思うよ。でも作者だってこんなことはやりたくなかった筈だよ?」

ほまれ「そうは言ってもね・・・」

ウオズ「では作者が思い浮かべる『ユート氏作品の良いところ』を述べていくとしよう」

ウオズはそう言つてホワイトボードを取り出した。

ウオズ「まず一つ目は『ストーリーが良かった』。

作者曰く、ユート氏の初作品『ドキドキ&サイエンス』は仮面ライダービルドのテーマの一つである『ラブ&ピース』やドキドキ!プリキュアのキャラを大事にしつつ、尚且つ原作・仮面ライダービルドのシリアスさを最低限緩和させた物語で読み易くなつており、そのまんまなコピペ展開だけでなく、オリ展開も入れてあるため。原作には無かつたオリジナルの物語として成り立っていた。と言つてるそうだ」

ほまれ「面白かつたつて言うのは嘘じゃなかった、ということだね」

ウオズ「二つ目は『ちゃんと完結させてる』。

ハーメルンなどでは物語の途中でエタツたりすることが多い中、この作品は最後まで描き切った。という点で評価が高い。とある」

ツクヨミ「エタツたやつでも面白い作品は沢山あるけどね」

ウオズ「三つ目は『キャラの絡みが良かった』。

もしこのキャラがこの作品に居たらこんな感じになるんだろうな、という想像がし易く、主人公も桐生戦兎という原作キャラでなく、桐ヶ谷晴夜のようなオリキャラを用意することで、この作品が仮面ライダービルドとは違うものだと言うことを読者に表現している。また、ドキドキ！プリキュアでは薄かった相田マナの恋愛模様を描いた、という点では二次創作作品としての評価が高かった。らしい」

ソウゴ「晴夜のキャラも戦兎のキャラを基準にしていたおかげで、たまにあるオリキャラにありがちな無駄に多いハーレム、極端な断罪・制裁・ザマア展開や、矛盾した信念や行動、マッチポンプが無かった、と言うのも評価の一つだった。って書いてあるね」

さあや「まあ、物語のベースがプリキュアだったから。と言うのもあるけどね」

ウオズ「さて、次にこの作品の悪い点について述べよう」

そう言つて、ホワイトボードの『良かった点』の横に『悪かった点』の欄を書いた。

「一つ目は『誤字脱字が酷い』。

二つ目は『誤字脱字が多い』。

三つ目は『文章がアレで読みにくい、というか残念な部分がある』。

——以上の三つだ」

ゲイツ「いや、ほぼ誤字脱字関係じゃないかアアアアア!!」

ほまれ「そんなに酷いの誤字脱字!」

ウオズ「例としては、『モチーフ』と書きたかったのか『持ち風』と書いたり、『天空の暴れん坊!』の部分を『天空の暴れ馬!』と書いたり、『割れる!食われる!砕け散る!』と一部命令口調の音声になってたり、『完全無欠のボトルヤロー!』が『完全無血のボトルヤロー!』だったり、『クロコダイルクラックボトル』を『デンジャーボトル』と書いてあったりしている」

ツクヨミ「最後はどっちかという誤字脱字じゃなくて、名称確認して無いだけじゃ無い?」

ウオズ「『HUGっとジオウ!』に至っては、私の冒頭の語り部で『オーマジオウ』という点が未だに『オーマージオウ』となっていたりしている。

いや、なんで冒頭ずっと『オーマージオウ』なんだ!?!本編じゃあちゃんと『オーマジオウ』なのに、何故こっちだけ『オーマージオウ』になってるんだ!!おかしいじゃ無い

か!!コピペしてるなら一回直したまえ!!!」

ゲイツ「オイ。途中から私怨になってるぞ」

ウオズ「・・・ん」んっ!失礼。この様に誤字脱字の多いユート氏だが、(作者的に)その中でも酷いのはこのシーンだ。はいドン!」

『翌朝、靴を履いたはなが傍の鏡の方を向き、自分を見る。』

はな「アレ?これってHUGっとジオウ!の14話だよな?」

ソウゴ「はながプリキュアに変身できなくなっ落ちて込む話だったよね」

ほまれ「あと、ソウゴがオーマジオウに会って夢を挫折してしまった回でもあるね」
ウオズ「その通り、では続きを見よう」

『はな「フレフレ、私・・・。頑張れ頑張れ・・・うん!」

すみれ「行ってらっしゃい」

はな「行って来ます!」

ドアを開けて外に出ると、すぐそこにさあやとほまれがいて、壁際には映司がいた。

』

一同『・・・ゑ?』

ウオズ「おわかりいただけただろうか・・・ではもう一度」

『ドアを開けて外に出ると、すぐそこにさあやとほまれがいて、壁際には映司がいた。』

一同『オエージイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!』

ハリー「オイイイイイイ!?なんでさあやとほまれと一緒に映司もおるんや!!お前の出番は8〜9話で終わりやろがあああアアアアアア!!!!何出しやばって来とるんやアアア!!」

ウオズ「・・・pixiv小説内で連載されている小説シリーズの一つに『オーズ×プリキュアシリーズ』という2011年9月9日より始まったものがある。

ちなみに原作者は『Syogo』氏で、かなり人気なシリーズであるが、読者との間に一悶着があったらしく、現在は打ち切りになっているようだ。

作者の予想では、『オーズ×HUGっと!プリキュア』というところからコピペして来たんじゃない?とのことだ」

ハリー「コピペするならせめてコピペしたつてことがバレへんように書けや!!」

はな「ちなみに作者はその『オーズ×プリキュアシリーズ』って見たの?」

ウオズ「えく作者曰く、『この作品の主人公がずつとオーズこと映司なのはいいけど(俺も好きだし)、作品数が無駄に多くて読む気が出ない、というか無駄に多い(4、5人以上の)ハイレムモノはあまり好きじゃ無い』とのことだ」

ゲイツ「結局面倒くさいだけじゃねーかアアア!!見てあげるよ!!!」

ソウゴ「ゲイツ、人にはそれぞれ好みというのがあるんだ。作者の場合、この作品には見るだけのモチベーションが生まれなかった、それだけだ。人が強制して見せるものじゃ無い」

ゲイツ「アツハイ」

ウオズ「まあ、ユート氏もドキドキ&サイエンスの一話で『誤字脱字があるかもしれないのでよろしくお願いします。』と前もっていつているし、誤字脱字が多いと言っている作者も何回か誤字脱字しているからこの話は一旦終わりにしよう」

ツクヨミ「あるかも。じゃなくて、普通にあるんだけどね誤字脱字」

ハリー「読者からもコメント欄から『所々で誤字、脱字が目立ちます。一度自分で読み返してみたほうがいいですよ。』とか『ベストマツチの名前を調べ直した方がいいですよ。』とか『脚本形式とかさういうの抜きにして読みにくいなと思いました。心理描写が皆無』、『不快になったらすいません。誤字、脱字がコメント欄に入りきれないほど大量

にあります。』なんて言われてるくらいやからな・・・」

ゲイツ「ヤメルオ!! ユート氏のライフはもうゼロだ!!」

さあや「p i x i v に誤字報告機能があれば楽なだけどね・・・」

ウオズ「終わりにしよう」

ツ・ハ・さ『ごめんなさい』

ウオズ「時を戻そう。えー、次は『Re. ドキドキ&サイエンス』と『Re. HUGつとジオウ!』の話をしよう」

ソウゴ「しつもん。なんでタイトルの頭に『Re.』が付いているんですかー」

ウオズ「答えましょう。この本によれば、「再」構築され、作者によって「再び語られた」物語という意味での『Re』、"remake"の『Re』を取って付けられているそうだ」

ツクヨミ「リメイク版の話では、誤字脱字の修正・編集を行う他、地の文や台詞の付け足し、原作の『ドキドキ&サイエンス』にはなかったあらすじ紹介や、終わりのおまけ編、台本形式の排除を行なってるのよね」

さあや「台本形式の排除は結構敬遠されがちで、しかも嫌われるために批判多めだから。というのが理由ってあるわね。今はなぜかわかれているけど」

はな「ギャグ時空だからギリギリセーフなんじゃ無いの?あと地の文を書かなくて済

むつてのものもあるのかな・・・」

ハリー「俺的には毎回の話の終わりに必ずあるおまけ編が気になるんやけど・・・」
ウオズ「作者曰く、『俺の趣味だ、良いだろ?』とのことだ」

ゲイツ「どこのプロセツサーだよ!」

ソウゴ「こんなしようもないパロネタばつか使っていて恥ずかしく無いのかな?」

ほまれ「言わないであげて・・・作者のライフもゼロになっちゃうから・・・」

ウオズ「所で我が魔王、作者からDVDが届いているよ」

ウオズはそう言つてソウゴにDVDディスクを手渡した。

ゲイツ「何故そこでDVD!?!」

ハリー「そして都合よく此処にDVDプレイヤーがあるので見てみよか」

そしてソウゴはDVDプレイヤーにDVDをセットした。

『——えー、これからyuki. S氏による謝罪会見が行われるそうです——』

はな「謝罪会見やるんだ・・・」

さあや「どこで撮影したのかな・・・」

『あつ!来ました!』

TVに映つたドクロ頭の男性はゆっくりと、そのまま記者たちの前に現れた。

『えー・・・本日は、えっと・・・お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございま

的に) こんなにも良い作品なのに! 誤字脱字が無ければ! もう少し地の文を増やせばもつとたくさんの人に好んで見てもらえるはずなのにイイイ!! ……あつ、いいねやブツクマークの数が50人以上いる時点で十分凄いです。 ……でもね! 皆さんに何がわかるって言うんですか!! 『スゲイ!』って気持ちだが、誤字脱字を見かけるたびに『……アレツ?』って気持ちになってしまう私の何がわかるって言うんですか!!』

ほまれ「何言ってるかわからないんだけど!」

『ですから! 私が此処から皆さんに伝えたいことは!! こんな感じでした”アアアアアアアア!!アア…』

一同『…』

『…これからも、Re. HUGっとジオウ!、Re. ドキドキ&サイエンス、ユート作品、そして仮面ライダーシリーズとプリキュアシリーズを、どうぞよろしくお願います』

『布教かよ!!』

その時! y u r k . S にパイプ椅子が直撃した!!

『まそつぷん!!』

一同『…』

ソウゴ「よし、そろそろ終わりにしようか！」

はな「そだね！」

ウオズ「それでは皆さん！これからも、『R e. H U G つとジオウ！』と『R e. ドキ
ドキ&サイエンス』、そしてユート氏作品をよろしく！」

ゲイツ「お前も布教かよ！」

終わり

第2章 『ふたりのプリキュアとミライのライダー編』

第15話 謎の訪問者とライダー 2018

アナザークウガ鬼火との戦いからしばらく経った頃、クジゴジ堂のソファでソウゴが寝ていた。

「ふわあ〜」

彼は欠伸をしながら目が覚めて起き上がると、飾っていたカレンダーに気付く。

「2022年……………？ えっ？？」

二度見をしながらカレンダーに2022年と書いてあることに驚き、急いでクジゴジ堂の外へと出て街へと向かう。

「嘘でしょ…………」

今居る街の中には、近未来のようなホログラム映像があり、2022年の電光掲示板やらポスターを目にする。

「ほんとに2022年だ「どうなってるんだ？」」

理由は分からないが、本当に2022年にいるのだと自覚する。

そこへいきなりソウゴの前に、黒ずくめの忍び装束で剣を手にした奴らが現れた。

「なんだこいつら?」

その黒ずくめ達は、訳のわからないままソウゴに襲いかかる。

「はあ! たあ!」

するとそこへ、ヘルメットをかぶった一人の男が立ち向かう。

「大丈夫か?」

「誰?」

「神蔵蓮太郎。影になりて力なき者を守る。誤った使い方をする者からな!」

男はヘルメットを取り、神蔵蓮太郎と名乗る。

そして、懐から取り出した瓢箪を開けると液体が腰に巻き付き、その液体がドライバーになり手裏剣型のプレート——メンキョカイデンプレートがセットされた。

「変身!」

掛け声と共に手裏剣——シユリケンスターターを回すと、背後に出現した巨大なガマガエル——クロガネオオガマガが防具を吐き出す。

『誰じゃ? 俺じゃ? 忍者! シノノビ! 見参!』

仮面に手裏剣の様なアンテナを付け、忍びのような姿をした紫色の仮面ライダーへとなった。

「忍びと書いて刃の心、仮面ライダー……シノビ!」

「仮面ライダー……シノビ」

そのままシノビは忍者らしい動きで黒ずくめの敵を圧倒した。さらに紫状の炎や竜巻を繰り出す。

『フィニッシュ忍法!!?』

紫色のオーラを纏ったまま素早く動き回り、黒ずくめの怪人を次々に攻撃し、最後に強力な回し蹴りを繰り出し倒していった。

「何か凄いの始まった気がする……!」

仮面ライダーシノビの戦いを見て、ソウゴは凄いと呟く。

「ソウギョ〜!ソウギョ〜!」

すると、何処からか自分を呼ぶ声が聞こえた。

「ん……あれ……?」

再び目を覚ますと、ソウゴの胸の上にはぐたんがいた。

「ソウギョ〜!ソウギョ〜!オキテ!」

「はぐたん……夢か……」

貼っていたカレンダーはまだ2018年であることに気付くと、胸の上にはぐたんとを抱えながらソファで寝ていたソウゴが起き上がる。

そして、机の上に置いてあった二つのライドウォッチを見つめる。

「でも、これは夢じゃない」

アナザークウガ鬼火との戦いの後、仮面ライダーWと仮面ライダークウガのライドウォッチを手に入れた。それだけは夢ではない。

「ねえ、はぐたん。今度晴夜が言ってたアイちゃんに会いに行かない?」

「はぎゆう〜!」

「そっか、なんか直ぐ友達になれる気がする〜♪」

二人はいつか、桐ヶ谷晴夜が言ってたアイちゃんに会いに行こうと約束する。

ソウゴとはぐたんがビューティーハリーで寝ていたその頃、はな達はスーパーで買い物をしていた。

「やっぱ卵は外せないよね!」

はなはそう言つて、卵を二パック、カゴに入れる。

「何や?今日はぎよーさん買い物するな」

「おおっ!あれは新発売のお菓子!」

次は新商品のお菓子を発見し、お菓子売り場の方に向かう。

「ええっ?私、食べないから」

「ええっ!？」

ほまれはお菓子は食べないと言うと、お菓子を大量に手に持ったはなは何故に!?!?と驚く。

「栄養のバランスを考えて管理しないと」

「スポーツ選手って大変だよな」

「相当本気でスケート打ち込んでるのね」

「無し!今日はそう言うの無し!だって、待ちに待ったパジャマパーティーなんだから!」

スケートの為に食事制限をしているほまれに、はなは今日はどういう事は考えなくて良いと話す。

何故なら今日、彼女達はパジャマパーティーをするという事で、みんなで買い物に出たのである。

——そして時は過ぎ、ビューティーハリ店内。

「わあ〜っ!さあやのパジャマ、可愛い!」

「ありがとう!デザインだけじゃないんだ。通気性がいいのに加えて、汗を吸収、すぐに蒸発させちゃう新素材!宇宙開発でも使用されてるの!」

ピンクのトップス系パジャマを着たはなど、水色のワンピースタイプのパジャマを着たさあやの二人がそんな話をしていると、カーディガン風の短パンパジャマに着替え終えたほまれが試着室から出て来る。

「ほまれイケてる!」

「はなもイケてんじゃない。でもやつぱり……はぐたんが一番きやわたん……!」

ほまれはそう言っつて、ナイトキャップを被ったはぐたんをカメラで撮る。

「何でパジャマ着なアカンねん!まだ四時やで!」

「気、早過ぎじゃないかな?」

同じくナイトキャップを被ったハリー（妖精態）が叫び、いつもの白い羽衣を着た。パジャマ姿のツクヨミが苦笑して言う。

彼らの言う通り、時刻はまだ四時で、パジャマパーティーには気が早かった。

「パジャマパーティーは早いに越した事無い!」

「気になってたんやけど、そのパジャマパーティーって何?」

「えっ?知らないの?」

「もしかして未来の世界には無いの?」

知らない様子の二人に、同じくパジャマを着たソウゴが未来ではパジャマパーティーは無いのかと驚く。

「いや、うん、まあな……」

「私もそう言うの知らないけど」

案の定、二人は知らないような様子だった。

「ゲイツ君は？」

「……一度だけ……ある」

ゲイツの方は恥ずかしそうに、一度だけあるとさあやへ答える。

「未来じゃ流行って無いのかな？」

ゲイツ達の応答を聞いたソウゴは、未来ではパジャマパーティーは流行って無いのかと思った。

その後、ハリーから店内でパジャマパーティーをやる事の許可も取ったはなが、店内でタコ焼きを器用に焼く。

「やるね」

「とつても上手！」

「うん！タコ焼き屋のおじさんに教えて貰ったんだ！」

チャラリートを浄化した翌日、はなはタコ焼き屋に行つて勝手にいなくなった事を店長に謝罪したが、店長は客が来るようになった礼として、はなにタコ焼きの作り方を教

えたのだ。

「さあ、召し上がれ！」

焼き上がったタコ焼きを差し出し、皆は息を吹きかけて冷まし、口に入れる。

「美味しい！」

「中々やるな………ん……？甘い……」

タコ焼きを食べているとハリーが、自分の食べているタコ焼きの味に違和感を覚えた。

「お客さん、分かります？タコの代わりに、チョコレートを入れてみました！」

「こっちはカレーか？」

ゲイツのタコ焼きからはカレーの味がした。

「その通り！何も入れて無いハズレもあります！」

彼女のタコ焼きにはたこ以外にも、チョコやカレーなどの変わり種や、何も入って無いのも作られていた。

「パーティーは、サプライズがあつてこそ盛り上がる！」

そんなこんなで盛り上がりながらタコ焼きを食べ続けると、ソウゴが今日見た夢の話始める。

「えっ………未来でライダーに会ったの？」

「うん。まあ、でも夢の中でだけどね」

「なんだ夢か……」

いつの間に未来へ行ってライダーに会ったのだと一度は驚くも、結局は夢の話かと呆れ、ツクヨミがタコ焼きを口に入れる。

「…にしても、夢の中で戦闘に出くわすなんて、全然休まらなかったんじゃない?」

「ううん、全然。むしろ面白かった。」

ゲイツもツクヨミも、ハリーも俺の知らないライダーたくさん知ってるんじゃない?」

他にも自分の知らない仮面ライダーをたくさん知ってるんじゃないかと聞くと、三人共苦い表情となる。

「生憎だが、そんなものは未来には存在しない」

「えっ?」

「今から少し先の未来、『オーマの日』と呼ばれる日が訪れる」

どうしてライダーが居ないのだと思っていたソウゴに、いきなりゲイツが近いうちに「オーマの日」が訪れると話す。

「そのオーマの日に、お前はオーマジオウとなり。それ以降、お前以外のライダーは歴史から姿を消す」

「オーマの日……」

ゲイツ達が知っている諸説によれば。その日が来ると、ソウゴはオーマジオウとなる。

しかし、それが本当かどうか、今のゲイツ達にはわからなかった。

「ソウゴ君……」

それを聞いて心配になるさあやがソウゴを見る。

「大丈夫だよ。はなとさあやが言ったろ？」

この間のオーマジオウとの戦いによつて、未来の自分が最悪の未来を作ってしまったという事実には、ソウゴは絶望し、一度はその夢を捨てたが……

『ソウゴ！なんでも出来る！なんでもなれる！フレフレ！ソウゴ！フレフレ！ソウゴ！』

『ソウゴ君だつて、オーマジオウ以外のものにだつてなれる』

二人のその言葉が、ソウゴを捨てた道から元に戻してくれた。

「俺は新しい未来を作る。最高最善の魔王の道！」

「……」

だから大丈夫だ。それを聞いてどこか安心したのか、ゲイツは黙つてタコ焼きを食べる。

「ミルク、全然飲んで無いやんか」

その直後、ハリーがはぐたんのミルクが減って無い事に気付く。

「どうしたのはぐたん?」

「まーま」

「またママだって。もう」

はぐたんがママと言っているのを聞き、はなが照れながら言う。

「まーま。ぱーぱ」

「えっ? 私もママ?」

「俺がパパ?」

今度はソウゴとさあやの方を向いて。パパとママと言い、言われた二人が嬉しそうな表情で自分を指さす。

「ぱーぱ! まーま!」

今度はゲイツとツクヨミ、ほまれの方を向き、手を振りながら言った。

「私の事ママって……!」

「はぐたん……どう言う事……?」

ほまれは赤く染まった頬に両手を当て、嬉しい表情を浮かべる。

その隣では、はなが自分だけでなく他の者に対しても。パパママ言い続けるはぐたんに、まさかと思いつながら目を向ける。

「まーま。まーま。ぱーぱ。ぱーぱ」

「めちよつく……!」

もはや人ですらないタコ焼きに対してもパパママと言いだし、はながショックを受ける。

「何でもママって言うんだね」

まだ認識力が足りない為か、何でもパパとママと言っていたらしい。

すると、はぐたんの目に完成したタコ焼きが映り、物欲しそう見つめる。

「はぐたんも食べたいんか?」

「食べると言っても……!」

まだ歯が生えていない状態で固形物を食べるのは難しいのでは?という考えがはなの頭に浮かび、ハリーやほまれと一緒に、はぐたんの口を見てみると、下顎の方から歯が生えていた事に気付く。

「歯が生えとる!」

「小つちやくてきやわたん……!」

ほまれがカメラではぐたんを撮る。

さあやも口元を見て、歯が生えてるのを確認する。

「ホントだ。じゃあ離乳食とかあげなきゃね」

「歯が生え始めたなら、離乳食にはバツチリのタイミングみたい」

はながさあやの指示を聞いて茹でた野菜を裏ごしし、離乳食を作る。

「はい、はぐたん。ご飯だよーあーん」

はながスプーンで掬い、食べさせようとするが拒否される。

「中々難しいもんだね……」

「イケメーン、チエンジ！貸してみ」

ハリーが人間態に変わり、はなど代わる。

「ほれ、あーん」

ハリーが口を開けるとはぐたんも口を開き、離乳食を食べ始める。

美味しかったのか、笑顔を見せて喜んだ。

「偉い偉い。よく食べたね」

ソウゴが微笑んではぐたんを撫でる。

「ハリー上手！」

「ぎよーさん食べえ」

この姿も欠かさずほまれは写真を撮っていた。

しかし、その姿には何処か寂しさが滲み出ている。

「ミルクを飲むはぐたん、めっちゃ可愛かったのに、いつか見られなくなるのかな。」

ちよつと寂しいな」

「それがエエンとちやうか？」

「えつ？」

「確かに、大きくなって出来なくなる事はぎよーさんある」

可愛い姿をもつと見たいというほまれの気持ちは分かる。

誰だつて子供は可愛いままでいてほしいと思うし、ずっとこのままでいたいと思う人だっている。

「けど、またそれ以上に出来る事が増えてくつてのが、エエンちやうかな」

しかし、可愛いだけでは生きていけない。

仮にどんなに望んでいなくても、子供はいつか成長するし、その内子供自身も成長する事を望むようになる：かもしれない。

それでも、人間は一人でも生きていける様、いつかは自立していく必要がある。

いつまでも、子供が親に甘えたままではいけないから。

そして親もまた、子供の成長を見届ける義務がある。

大きくなってから出来なくなることが多くなつても、親は子供を攻めてはいけない。だけどいずれ、彼ら彼女らがやらなくちゃいけないこと、出来る様にならなくちゃいけない時が来たら、精一杯サポートして、見守つていかなければいけない。

子供が悪いことしたら、必ず叱って、それがいけないことだと自覚させなければならぬ。

しかし、親が子供の自由を縛り付けるなど言語道断。

子育ては決して、遊びでも、暇つぶしの道具でもない。

子供を育てるとするのは、つまりそういう事なのだ。

「そうそう。出来る事が増える方が、嬉しいと思うよ」

だからこそ、小さい時には出来なかつた事が出来る様になつた姿を見れるだけ御の字だというハリーにソウゴが同意していると、この間にはぐたんは離乳食を全部食べ終えていた。

「はい、ごちそうさんでした」

ソウゴ達が楽しくパジャマパーティーしている一方その頃、クライアス社ではパップルとウールが幹部達に目をつけられていた。

「報告して貰おうか！計画の失敗について！」

「一言で報告を纏めると……ぶつとび……です」

「はあ？」

「そんなんで……許してくれるわけ……」

パップルのわけのわからない報告を聞いたウールが、小声で小さく呟く。

「まさか、あんなモンが出て来るなんて……!」

「それにジオウだって、まさかあの若さでここまで強くなるなって思ってたよ!」

この間の失態に関して二人は、メロディソードとジオウの復活によるものと反論を述べる。

「想定外。データにありません。」

例の物体の出現後、アスパワワの増加率は78%増。

その影響か、各地でトゲパワワが急激に減少しています」

「由々しき事態ですねえ。どう責任を取るおつもりで?」

ルーラーの報告を聞き、腕を組んだリストルがウールとパップル、オーラの方を向いて尋ねる。

「……ブツ飛ばします!」

「前回の失敗は、不甲斐ないあいつに任せただから……!」

「休日返上で、必ずプリキュアとジオウをブツ飛ばします!」

「本当にやれるのか?」

パップルが必ずプリキュアとジオウを倒すと宣言すると、後ろからスウォルツが現れ

た。

「スウォルツ、今まで何処にいたのさ？」

「スウォルツさん。こない間からの無断欠勤の報告をお願いします」

ルーラーがスウォルツを見て、珍蜜に何があったのか聞く。

「今から少し先の時間だ」

「……どうしたの。ただでさえ難しい顔が、より険しくなってるけど？」

スウォルツの顔を見たオーラが、いつもより険しい顔になっていることに気付く。

「我々の知ってる歴史が、変わりつつある……」

「どうしたの？我が社の望んでいるのはオーマジオウの歴史を変えることだろ。いいこ

とじゃん」

「とにかく、時の流れを我々の望む方向へ導く好機かもしれない」

すると、スウォルツはアナザーウオッチをウールへ渡す。

「なんだこれ？」

「お土産」

「……」

そのウオッチを渡したスウォルツは、これからの事を考えながら去っていった。

そして2018年、とある路地裏でチンピラに絡まれる男性がいた。

「やめろ！」

そこへソウゴの夢で出てきた、まだシノビになつてない神蔵蓮太郎が現れた

「誰だ？」

「神蔵蓮太郎。お前ら、力の使い方間違つてるだろ！」

「へえ、面白え！」

男性を庇い、蓮太郎はそのままチンピラに向かつていく。

「やりすぎだよ」

「つまんない、帰る」

しかし、アツサリと返り討ちにあつてしまった。

「大丈夫？蓮太郎」

「ああ……ごめん。俺に力があつたら……」

そう呟いたその時、蓮太郎以外全ての時が止まった。

「これは……」

「あるよ。僕と契約しない？そうすれば、君が望む力が手に入る」

すると、スウォルツからウォッチを渡されたウールが現れた。

『シノビ……!』

そのまま、蓮太郎にウールは無理矢理ウォッチを埋め込んでアナザーライダーを誕生させる。

ビューティーハリーの二階の部屋。

そこでははぐたんが赤ちゃん用のベッドで気持ちよく寝ていた。

「ぐつすりだね」

「さっ、はぐたんもねんねした事だし、大人の夜が始まるよ」

「大人の夜って……何を?」

はなが言うとりびングの方へと移動する。

「パジャマパーティーの醍醐味、映画鑑賞!」

「流石!」

「素敵!」

「待つてました!」

リビングに移動し、はなが借りて来たDVDを見せると、ソウゴとさあやとほまれが

拍手する。

「みんなでワイワイ、ポップコーンを片手にだね——めちよつく……!」

「どうしたの？」

「ポップコーン買い忘れた……ッ！」

ポップコーンを買った事を思い出して凹む。

「他にお菓子、いっぱいあるじゃん」

「これだけあれば問題ないだろ」

「ダメ！映画とポップコーンが大人の流儀なの！」

「流儀かな……」

ツクヨミが突っ込むと、ハリーがある事を思い出した。

「……！ハグッと閃いた！」

そう言ってソウゴとはなを連れて下に降りる。

「コレやコレ」

ハリーはそこにあつたポップコーンメーカーを見せる。

「コイツやったら、ポップコーンスナックがぎよーさん出来る！」

「やったあ！」

ポップコーンの準備を整え、リビングを暗くして映画鑑賞に入る。

——ちなみにその映画は、ホラー物だった。

「な、何やコレは!?？」

「パジャマパーティーと言えばホラー映画でしょ……」

「何でそうなるの……そんなの流行ってるの……?」

ビビリまくっているはなとソウゴとハリー。

「コレってワイヤーで吊ってるのね」

「CGでは無く、あえてアナログな作りをする事で、より怖い演出効果を狙ってる」

「冷静に分析しとる……!」

しかし、ツクヨミとさあやは怖がることなく、むしろ映画の撮影方法について冷静に分析してた。

『キヤアアアアアア!!』

「「ああああああツツ!!?」」

テレビから悲鳴が聞こえると同時に、ソウゴとはな、ハリーが驚きの叫び声を上げる。

「変えよう!他の映画にしようっ!」

ソウゴは直ぐにテレビを消し、電気を点ける。

「他のつて……えつと……恐怖の訪問者2、恐怖の訪問者完結編……んで、帰って来た恐怖の訪問者!」

「ホラーばっかじゃん!」

「何でシリーズ縛りで借りて来てんねん!」

他に借りて来たのは、同じシリーズのホラー物だけだった。

「ほまれ平気なんだ？」

「ゲイツも余裕だねえ〜」

二人は固まっていたゲイツとほまれに声を掛ける。

「ゲイツ……ゲイツ!？」

ソウゴが呼んでも反応の無いゲイツの肩を揺っていると、いきなりなんの抵抗もなく倒れ出した。

「ゲイツっ！」

「あ……あああ……っ」

「いえ……もう限界です……」

ゲイツはあまりの恐怖に失神してしまった。

そしてほまれは恐怖で表情が固まり、何故か高笑いもし出した。

「恐怖でキャラが変わつとる！」

ほまれは持っていたポップコーンをとにかく食べ、恐怖を誤魔化す。

「気絶する事と食べる事で恐怖から逃げとる……!」

どうやらゲイツとほまれはホラーやお化けの類が苦手だったらしく、二人で仲良くキャラ崩壊していた。

そんなやり取りのせいではぐたんが起きてしまい、全員は一度外に出て、人の姿へと変身したハリーが彼女をあやす。

「起こしてもてゴメンな」

「今日は、星が良く見えるね」

「せやな。綺麗や」

ソウゴ達が空を見上げていると、はぐたんをあやしていたハリーも一緒に見上げる。

「夜空はどこの世界も一緒や」

スプーンが出るのと同時に、はな達からローズ・ネイビー・オレンジのミライクリスタルが出て来た。そしてミライクリスタルを乗せたスプーンをはぐたんに近付け、アスパワワを額の飾りに差し出す。

「…ねえ、ハリーは今の俺をどう思う」

そんなはぐたんの様子を見ていたソウゴは急に、今の自分はどう思うと聞く。

「それって……今のお前が、オーマジオウかもしれないかどうか？」

「うん。また、魔王の道を選んだからな」

こんな時じゃないと、本音が聞けないから」

あの時、ゲイツに託されたジクウドライバー。それを使い、ソウゴは再び魔王としての道を歩み出した。

それについて、ハリーはどう思っているのか気になった為聞いてみた。

「……………少なくとも…俺はお前が、オーマジオウになるとは思えへん」

一度考えた後、ハリーはソウゴの問いに対し、オーマジオウになるとは思えないと答えた。

「今までのことだけやに、お前は人を絶対に守る強い気持ちがある。

それは、お前とオーマジオウとの違いや」

「ありがとう」

「でも、まだわからへんで？もしかしたら…………」

「大丈夫。その時はみんなが俺を止めてくれる」

それでもハリーは可能性はゼロではないと言いかけると、ソウゴがはな達の顔を見る。

それを見て思ったのだ、例えば自分が最低最悪の魔王になつたとしても、きっとみんなが止めてくれると…

「そっか…………」

もしオーマジオウになつた時の覚悟も、ソウゴは既に決めていた。

すると、ハリーは人差し指をはぐたんに近づけさせ、はぐたんが両手でそれを掴む。

「言うとかくけど、パジャマパーティーやから腹割つたんちゃうで」

「えっ?」

ふとそう話すと、さあや達がハリーの方を振り向く。

「メロディソード。プリキュアの剣が、あんな形になるとは思わなかった。」

あの姿を見て、心の底から思った。お前らなら、明るい未来を切り拓けられるって」

「とある少女」をも使っていたプリキュアの剣が変化して生まれた、メロディソード。

それが全く違う形になって現れた時の感想を述べながら、ハリーははな達にそう語りかける。

「プリキュアが四人必要って言うたやろ?」

俺はただ、四つの強い力が必要やと思てた。

一人より二人。二人より三人。そうなると、三人より四人の方が強いやろなーって具合に、数が多けりやエエ。そう思うてた……でもちやうかった」

「えっ?」

プリキュアは多ければ多いほどいいと考えたことを引き合いに出しながら、それは間違いだつたと語りながら、今度ははながどう言うことかと聞き返す。

「強さは数の話や無い。性格も個性も違うモン同士が、力を合わせた時にビックリするような力が生まれるんや」

「ビツクリする力……」

「お前らが奏でる音はそれぞれちやうけど、三人合わさったらエエメロディになりよる。みんなのお陰で、俺らも未来に近づけてる気するわ。」

クライアス社の連中やオーマジオウが来る前の、大好きなあの頃に」

ハリーが空に光る星を見ながら、楽しく、大好きだった頃を思い出しながらそう言う。
「お取り込みのところ失礼するよ」

『うおお!? ウォズ（さん）!!?』

するといきなりウォズが現れ、一同が一斉に驚いた。

「この前の事件以来だ。元気そうだね」

「貴様！あれだけかき回しておいて、よく平気な顔で俺達のもとに来られるな」

クライアス社に味方したりしてソウゴ達をかき乱したことを思い出しながら、ゲイツはウォズに殴りかかろうとする。

「待って！わざわざ来るぐらいなんだから、何か訳があるんでしょ？」

そんなゲイツを抑え、何か事情があるかとツクヨミが問う。

「さすがツクヨミ君、話が早くて助かるよ。アナザーライダーが現れたんだ」

いきなりアナザーライダーが現れたとソウゴ達に告げる。

「被害者は、火のない所で発火したり、建物の中で竜巻に遭ったり、水のない所で溺れた

りと様々だ」

ウオズはそのまま、そのアナザーライダーの特徴を話す。

「どの時代のライダーなの？ウオズならその本でわかるんだよね？」

「それが、私にもわからない。この本にも載っていない……」

ソウゴはウオズが持っている本ならどの時代のライダーがわかるはずだと思っていたが、今回はどんなライダーなのかどうか書かれていないと聞き、少し驚く。

すると、町の方から轟音と共に煙が生じた。

町ではアナザーライダーがチンピラのような人達を襲い、その近くではオシマイダーが暴れていた。

「どう。スウォルツさんが用意したアナザーライダーの方は？」

「うん、順調だね。そっちの方も順調だね」

スウォルツが用意したウオツチにより生み出されたアナザーライダーと、パップルが作り出したオシマイダー、両方とも順調だと話し合っていた。

「——ウール、突如交通事故にあった」

すると突如、一台の車がウールとパップルへ突っ込んできた。

「ッ!?」

ウールは慌てて両手で時を止め、車を止める。

「何よいきなり?」

「……っ!? お前は……」

そんなの知るか、という文句も言えないまま。ウールは聞き覚えのある声が聞こえた方へ振り向くと、そこには白い服と白いベレー帽を被ったウオズがいた。

「あなた……いきなり何のつもりよ?」

「私はさっきのアナザーライダーについて知りたいんだけどさ?」

「お前の相手、まともにすると思っう?」

「バカ言わないで欲しいわね」

アナザーライダーについて知りたいと話すウオズをあしらい、二人は白い服のウオズから去っていく。

「するさ。嫌でもね」

それを見た白い服のウオズがタブレットを開く。

「ウールとパップル、止めた時間が動き出し、危機に陥った」

その内容をタブレットに書きこむ。

すると、またもや車がウールとパツプルに突っ込んできた。

「ウール！早く止めなさい！」

「わかつてる！」

ウールは時を何度も止めるが、それが無効化され、車が迫ってくる。

「ッ!?」

万事休すというところで時間が止まり、二人はなんとか助かる。

「このまま時間を止め続けるか？それとも、私の質問に答えるか？」

そう言つて白い服を着たウオズが二人に近づく。

「あのアナザーライダーの事はよく知らないわ！」

「僕は、スウォルツにウオッチをもらっただけだ！」

「はっ……命拾ひしたね」

聞くだけ聴いて満足の行く答えが聞けたのか、或いは望んだ答えを獲られなかったかなのか、白い服のウオズはそのまま二人の前から去つていった。

ソウゴ達が煙の生じた所へ駆け付けると、パツプルの作り出した自販機オシマイダーとアナザーライダーがいた。

「みんな！」

『ジクウドライバー!』

ソウゴの掛け声でジクウドライバーとプリハート、ミライクリスタルを取り出す一
同。

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

「変身!」

「ミライクリスタル!ハート、キラっと!」

ジクウドライバーとミライクリスタルにより五人の姿が変わる。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

「輝く未来をく抱きしめて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

五人が変身を完了すると、クライアス社の二人が彼らの前へと現れた。

「やっと来たわねプリキュア。ジオウ、ゲイツ」

「ちよつと今ムカついているから丁度いい!」

「またあなた達!?」

「行きなさいオシマイダー！」

オシマイダーが両手のゴミ箱を重ね、投入口から缶型ミサイルを飛ばす。

ジオウ達は上に跳んで避けたり弾いたりしていると、そこから斬撃が飛んできた。

「今のは……」

ギリギリで躲すと、影の中から忍びの様な姿をした紫色の怪人が現れた。

「影の中を自由に行き来できる能力があるのか……う？」

そのままジオウ、ゲイツは格闘戦に入る。

だが、アナザーライダーの方が力が少し上だった為、二人は一旦離れる。

『スレスレシユート！』

『ギワギワシユート！』

二人がジカンギレードとジカンザックスを放つ。しかし、アナザーライダーは竜巻を起こし、それを弾き飛ばす。さらには水の攻撃で反撃してきた。

「ああ……ビツチャビツチャだし……あれがウオズの言ってた」

「ああ。火と水、竜巻……やつの話と合致する……」

ジオウ！あのアナザーライダーは俺がやる。貴様はあっちだ」

ゲイツは自分にアナザーライダーを任せ、ジオウにエール達の加勢に行けと言う。

「わかった……後、ゲイツ。いい加減ソウゴって呼んでよ」

「ふん」

「つたく、しようがないな」

相変わらずのゲイツに呆れながら、ジオウは体にかかった水を払いながらエール達の元へと行く。

その頃、オシマイダーの目が赤く光ると同時に、地面に落ちてたミサイルが爆発。エールが体勢を崩して吹き飛ぶが、アンジュとエトワールに助けられていた。

「動きの予測が出来ない……！」

「塵も積もれば何たらってね。ごちゃ混ぜにしたトゲパワワ、イケるじゃない」

そういつて彼女は、其処らかしらからトゲパワワをかき集めて発注したオシマイダーを見て、得意げに笑う。

「私達だって！」

「それぞれ違うけど！」

「違うからこそ！」

「合わさった力は強い！」

「エール……！みんな……！」

それならばと、エール達がメロディーソードを出して手に持つ。

「はいはい。ソイツは織り込み済み。オシマイダー!」

オシマイダーが両手のゴミ箱を重ね、投入口から缶型のミサイルを飛ばす。

「背中を合わせるの!」

アンジユがそう言い、エール達が背中を合わせる。

「これなら……!」

「どこから来ても問題無し!フラワーシユート!」

エールがメロディソードのピンクと赤のボタンを交互に押し、タクトのように振って花の力を先端のクリスタル部分にチャージ。

薔薇型のエネルギー弾を放つ “フラワーシユート” を放って、ミサイルを弾く。

「フェザーブラスト!」

次にアンジユがメロディソードをハープのように奏でると、自身の背中に水色の翼を生やし、その翼を無数の水色のエネルギー弾にして放つ “フェザーブラスト” を放ってミサイルを包み込み、消滅させる。

「スターストラッシュ!」

今度はエトワールがメロディソードをフルートのように吹いて回転し、星のエネルギーを先端のクリスタルに集めて黄色に輝かせる。

そしていくつものオレンジ色の星を作り出し、その内の一つに乗って突進する “ス

タースラッシュ”を放ってミサイルを弾く。

そんなこんなでミサイルを全て撃ち落とされ、更に発射しようとしたオシマイダーの胸のあたりに『売り切れ』という文字が光り出した。

「もう〜！だつたら突進しよー！」

缶型ミサイルを出せなくなったオシマイダーがエール達に突進を仕掛ける。

そこへジオウがキックを放ち、オシマイダーを転倒させた。

「ソウゴ（君）！」

「翔太郎、フィリップ。使わせて貰うよ」

『W！』

そのままオシマイダーの攻撃を防いだジオウはダブルウオッチを取り出し、ウオッチのウエイクベゼルを回転させるとスターターを押して起動させた。

すると、黒と緑の二人組アーマー『メモリドロイド』がジオウの左右から現れ、オシマイダーに攻撃する。

「おぉ〜！なんかいける気がする！」

それを見て感心しながらダブルライドウオッチをドライバーに差し込み、回転させた。

『アーマータイム！サイクロン！ジョーカー！ ダブル！』

ジオウの体に二本のガイアメモリが肩に装備されて『ガイアメモリシールド』となり、黒と緑のアーマー、仮面ライダージオウ・ダブルアーマーとなった。

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え過去と未来をしろしめす時の王者！その名も仮面ライダージオウ・Wアーマー！二人で一人のライダーの力を継承した瞬間である！」

そこへ、またしてもウオズが現れ、いつもの祝いの言葉を言う。

「さあ、お前の罪を……教えて？」

ジオウはオシマイダーに手を向け、指を指して問いかける。

「オシマイダー！」

「あれ？ちよつと違った？ まあ、いいか！」

言葉を聞かず突進してきたオシマイダーに首を傾げながら、取り敢えず何かしら違った事は一先ず置いておき、ジオウはオシマイダーに向かっていく。

ダブルアーマーの力で上がった格闘力と瞬発力で、オシマイダーを圧倒する。

「すごい！」

「これが二人で一人の」

「仮面ライダーWの力ね」

ジオウの繰り出した次の一発でオシマイダーが倒れたその隙に、ジクウドライバーを

回す。

『マキシマム タイムブレーク!』

ジオウはレフトサイクロンを使う事で風を纏って上昇し、アーマーが変形したメモリドロイドとジオウの開いた両足で「W」を描くトリプルキックを放つ。

「オリヤヤヤヤヤ!」

ジオウのタイムブレークを受けオシマイダーは爆発すると、浄化され消滅していた。

「どうよ〜♪」

ジオウが着地するとダブルの様に手首を回す。

「凄い〜!」

「凄いのはわかるけど、多分だけど……」

「なんか違う気がするで……」

さっきの必殺技、何故か分からないけどなんか違うと、少し離れた所で見っていたツクヨミとハリーが呟く。

「ゲイツ!」

一方、アナザライダーと戦うゲイツは苦戦していた。

『デイ・デイ・デイ・デイ・ケイド!』

それを見て、ジオウはデイ・ケイドウォッチを起動させドライバーに装填した。

『アーマータイム！カメンライド！ワーオ！ディケイド！ディケイド！ディケイド！ディケイド！』

『ライドハイセイバー！』

ジオウはディケイドアーマーを装着し、その手にライドハイセイバーを持ち、針を回す。

『ハイ！ブレイド！デュアルタイムブ레이크！』

ライドハイセイバーの刃が巨大な光の刃になり、斬撃を放つ。

「でつかくなつた！」

もう一度、ライドハイセイバーの時計の針を回す。

『ハイ！龍騎！デュアルタイムブ레이크！』

今度はライドハイセイバーの刃に炎を纏わせ、それをアナザーライダーへ放つ。

「ふんっ」

だが炎ごと竜巻で返され、反撃されてしまう。

「くそ……」

再びアナザーライダーに立ち向かう為に起き上がると、ゲイツの前に白いウオズが立っていた。

「貴様……」

「ウオズが、二人……?」

「めちよつく……どうなってるの?」

「白い服の……」

「ウオズ……」

「どうなってるんや……?」

「ウオズはここに……」

ツクヨミの言う通り、ウオズはツクヨミとハリーの隣にもいる。

「違う……あれはいつものウオズじゃない気がする」

「どういう意味?」

ジオウがああ白いウオズは、いつものウオズじゃないと呟く。

「私が何者か? ウオズ以上でも以下でもない。ウオズはウオズだよ」

「君は……何者だ?」

「やあやあ、お初にお目にかかるねえ。オーマジオウの従者である私」

白いウオズがこつちのウオズにオーマジオウの従者と言う。

「ウオズ、どうゆうこと?」

「……分かってるならもう説明しているよ、我が魔王。こう見えて、私も案外動揺しているね……」

口調だけはいつも通りだが、それでも流石のウオズも動揺しているのがわかる。

「何が目的だ!?？」

「今は1つだけ言っておこう。『アナザーシノビのウオッチを得る』」

「アナザーシノビ?」

アナザーシノビと言うと、白いウオズがゲイツの方を向く。

それを見て、ゲイツは構えるが：

「えっ…?」

すると、白いウオズはなんとゲイツに膝まづいた。

「はじめまして、我が救世主」

そして、いきなりゲイツの事を救世主と呼び始めた。

「この先のオーマの日、オーマジオウを葬り、歴史を変えたのは誰だろう…君だ!ゲイツ

リバイブ」

「ゲイツリバイブ…?」

ゲイツリバイブと聞き、困惑する一同。

「君の戦いを支えるため、私は2018年に参上した」

すると白いウオズの前に巨大なスマートウォッチが現れ、そこからドライバーが現れた。

『ビヨンドライバー！』

「ベルト……」

『ウオズ！』

そしてウオズ？は、通常のウォッチとは形の違うライドウォッチを持つてボタンを押し、ドライバーの『マッピングスロット』に装着する。

『アクシオン！』

「変身！」

『投影！フューチャータイム！』

そして、ウォッチのボタンを再度押してそのカバーを開くと、ビヨンドライバーの『克蘭クインハンドル』を前に向けた。

『スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

背後に現れたスマートウォッチの様なものから“ライダー”の文字が飛び出ると、バンドの様なエフェクトが現れる。アンダースーツが構成されると同時に、周りにアーマーが出現。それが装着されるとマスクに“ライダー”の文字の複眼が付けられた。

「我が名は仮面ライダーウオズ。未来の創造者である！」

「ウオズが……？」

「そんなバカな……」

「か、仮面ライダーになっちゃった……」

『ジカンドスピア!』

『ヤリスギ!』

仮面ライダーウオズは緑と黒で彩られた槍の様な武器、ジカンドスピア・ヤリモードでの素の攻撃でアナザーシノビを圧倒する。

すると、再びタブレットを取り出す。

「奮戦するアナザーシノビ。だが、ウオズのキックの前に爆発四散するのだった」

なんとウオズは戦闘中にも関わらず、タブレットに今喋った内容を書き込む。

その途端、その内容通り、ウオズのキックが当たるたびにシノビに爆発が起こりダメージを与える。

「これで終わりにしようか」

『ビヨンド ザ タイム!』

そう言うとうオズはドライバーを操作し、アナザーシノビの後ろに立方体のエネルギーを出現させる。

「はあ!」

そのままウオズは突っ込み、「キック」の文字を回転させる。

『タイムエクスプロージョン!』

回し蹴りを叩き込むと、エネルギーに蹴り飛ばされたアナザーシノビは時計のエフェクトと共に爆発する。アナザーシノビは倒され、変身解除していた。

「強い……」

現れた謎のウオズが変身した仮面ライダーウオズの力にジオウ達は驚愕し、ウオズが目の前へと着地し、ジオウ達に振り返る。

「さっき聞いたね？私は何者かと。」

私は君達の知る未来とは違う、もう一つの未来から来た」

「違う……未来？」

「ああ。オーマジオウの消えた未来だ」

「そういうことか。君は私達とは違う未来からこの時代に来た。違うかい？」

変身していないウオズが冷静にいう。

「オーマジオウが……消えた？」

「それって、ゲイツが……」

「ソウゴを未来で倒したって事……」

「そう！我が救世主。君がオーマジオウの歴史を消滅させ、新たな歴史が始まるんだ！」

「……俺が？」

「さて。それを望まない君達はどうする？」

フフフ…ハハハハ…！ハハハハ…！！」

「別の未来から来たと言う白いウオズ。

新たなライダーの誕生により、分岐点となる二つの未来。

ジオウが魔王になるか、ゲイツが救世主になるか。

彼らは今、どちらか一方の未来に導かれようとしていた」

次回！Re・HUGつとジオウ！

第16話 凄い転校生と忍者！2022

第16話 凄い転校生と忍者！2022

オシマイダーとアナザーライダーとの戦いから一夜が明け、ソウゴ達はビューティーハリイを出て、それぞれの自宅へと戻ろうとしていた。

「別の未来か……」

「オーマジオウがゲイツに倒された未来……」

そんな中、自宅までの経路を歩きながらソウゴ達は昨日のことが気になっていた。

——遡ること昨日の夜。

突如に現れた白いウオズが変身した仮面ライダーウオズにより、アナザーシノビは倒され、変身解除された。

「あ……ああ……」

だが倒れた蓮太郎の前にスウォルツが現れた。

「やはり現れたな、もう一人のウオズ。お前が求めているのは、この仮面ライダーシノビのウオツチ。そうだな？」

「さすがスウォルツ氏だね。察しが早い」

「だとしたら、貴様の手には渡さん。ふうん！」

白いウオズが変身したライダーへ向けてそういうと、スウォルツは蓮太郎の体内からアナザーシノビウオツチを取り出した。

『シノビ……!』

そしてアナザーシノビウオツチを再起動させ、埋め直す。

「ああああああ!!?」

蓮太郎はそのままアナザーシノビへと再び変身した。

そしてアナザーシノビは、忍術でその場を撤退する。

「ハハハ……逃げられちゃったね。」

それではまた早いうちにお会いできることを願っているよ、我が救世主。そして魔王、プリキュアの諸君ともう1人の私もね」

仮面ライダーウオズはそのままスウォルツ達のように去っていった。

そして、現在へと至るわけだが…

「もしかして……未来が変わろうとしているのかな……」

「それって、あのウオズが言ってた。オーマジオウが消えた未来?」

ほまれが未来が変わろうとしているのと呟くと、もしかしたらオーマジオウが消える

かもしれないと思う。

「待つてよ！それじゃあ、ソウゴ君は……」

たださあやの言う通り、その未来にはオーマジオウたるソウゴが存在しない。そういう事になる。

「そうかもね。でも、俺はそうならないと信じてる」

「ソウゴ君……」

「大丈夫だつて！」

ソウゴが大丈夫と言うとなんとなく大丈夫だと、みんながそう感じると、ソウゴ達はまた歩き出す。

「じゃあね！」

「また、明日！」

そのままソウゴ達ははなの家の前で別れた。

「ただいまー！」

みんなと別れたはなが野乃家に入るが、家族からの返事がなかった。

「あれ？誰もいないの？鍵も掛けないで、ダメだなあもう」

野乃家に入ってそう言いながら靴を脱ぎようとすると、いつの間にか母であるすみれが目の前に立っていた。

「お帰りなさい」

「……………? ただいま」

「突然なんだけどね、知り合いの娘さんを預かる事になって」

「えっ?」

何処か違和感を感じたはなだったが、次に語られた言葉を聞いて頭に疑問符を浮かべ。すみれが横に動くと、奥には頭頂部についたシニヨンが特徴的な淡い紫色のロングヘアを二つ結びにし、肩出しカットソーとショートパンツ、黒のニーハイソックスといった服装を身に着けた少女…クライアス社社員・ルールーがいた。

「よろしくお願ひします。野乃はなさん」

「私の名前……………?」

「お会いした事、ありますよね」

「え……………? え、えつと……………」

はなは当然会うのは初めてだったので、困惑してしまふ。

「久しぶり!」

取り合えずはなは靴を脱ぎ、ルールーに跳びかかるようにして抱き付く。

「さん付けじゃなくて、はなでいいよ! はなで! ナイストウミューチューキュー!」

一旦離れてからはなでいいと伝え、もう一度抱き付く。

「何ですか、これは？」

「えっ？」

「理解不能です」

だがルールーに真顔で理解不能と言われ、少しビツクリした。

「部屋は、はなの隣よ」

横からすみれがルールーの部屋は、はなの隣の部屋だと伝える。

「ダメだ……どこで会ったか、全然思い出せない！」

はなは部屋に入ってから頭を抱え、ベッドに向かって跳び込むと彼女と何処で会ったのか思い出そうとするが、一向に思い出せずにいた。

「こう言うトコ、私の悪いトコだ……！」

でも……外国の人を家が面倒を見るんだ。これって、ホームステイって奴だよね！ いっぱいおもてなししなきゃ！」

はなが浮かれている一方、隣の部屋でルールーが右腕を横に振り、ホログラムの様なキーボードを出して操作する。

「野乃はな、キュアエール。あなたの力の源、解明して見せます。

そして……」

はなとキュアエールの画像が映った画面を見ながらキーボードを操作すると、今度はソウゴとジオウの画像を映し出す。

「若き日の会長、あなたも私と知るものとは違うため、説明させて貰います」
ルルーの目的は、プリキュア達の力の源と、自分が知るオーマジオウことソウゴの違いを説明する事。その為に彼女は、はなに近付いたのである。

その頃、とある屋上にアナザーシノビの蓮太郎とスウォルツが話をしていた。

「俺の力は……」

「心配するな。たとえ倒れてもそのウオッチが動けば、お前の力が失われることはない」
一度消えたアナザーシノビの力が戻ったのかという問いに、スウォルツはウオッチが動けば問題ないと答える。

「その力は未来の貴様から奪ってきたもの」

「未来の俺?」

未来の蓮太郎から奪ったと話すと、蓮太郎が驚きを見せる。

「ジオウ達がお前を倒すには同様のライダー、シノビの力が必要となる。

しかし奴らは時間軸の違う未来に干渉できん。

この時代でシノビウオッチを作り出すことは不可能」

「でも……このままこの力を使って、ほんとに俺は弱い人達を守れるのか？」

「お前を倒すことをできる者はいない。いわば……無敵となったのだ。」

お前には王になつてもらおう。いいな」

「王……？」

スウォルツの狙いは蓮太郎を王へと擁立させることみたいだが、その会話を陰から聞いている者がいた。

そして翌日。

朝早くからクジゴジ堂のリビングで、ソウゴ達が白いウオズについて話していた。

「つまりあのウオズは、私達のいる2068年と違う未来から来た。そこには、オーマジオウが存在していない」

「その歴史はオーマの日に、ゲイツ君が我が魔王を倒したことによつて創られた……と
いうことのようなだ。何といつても『救世主』、だそうだ」

ウオズがゲイツの方をチラツと見て言う。

「ソウゴを倒すゲイツを支えるために来たの？あのウオズとはほんと正反対つていう感じ」

ツクヨミの言う通り、白いウオズと今いるこつちのウオズとはやはり違いがある。

「ね、提案なんだけどき。あのウオズとかこのウオズとか混乱するから呼び名を決めな
い。」

「呼び名?」

ソウゴが二人のウオズに呼び名を決めないかと持ちかける。

「このウオズは……黒ウオズ。で、あのウオズは……白ウオズ!どう?」

「私達はヤギじゃない」

「おい、黒ウオズ!」

「順応早っ!」

ソウゴの考えにすぐに順応したゲイツに、ツクヨミが突っ込む。

「ところで、あのおかしな本は何だ?」

ゲイツは白ウオズが持っていた、あのタブレットの様な白いタブレットノートについて尋ねる。確か、あのノートに書かれた事は現実に起こっていたはず。

「さあ……私の持つている本とは、まったく質が異なるようだ……」

あれは書き込んだ未来が、すべて現実になるという力を持つていること以外……」

「とにかく、白ウオズのことでもオーマジオウのこともあれだけど、今はアナザーライダーをどうするか、でしょ?」

ツクヨミの言う通り、今はアナザーシノビをどうするか考える必要がある為、白ウオ

ズのことは後で考えることにした。

それからしばらくし、ソウゴ達は学園へと到着した。

「えっ？はなの家にホームステイ？」

「うん！今日からここに転入するんだよ」

「へえ、どんなの子なの？」

「うん……落ち着いたお姉さんかな？」

はながルールーの事を話すと、ホームルームの時間となった。

「は、今日から転校生を紹介するわ」

「ルールー・アムールです」

転校生として来たルールーが黒板に『RURU AMOR』と書いて自己紹介する

と、ルールーはチラッと三人の顔を見た。

「(ジオウ……時見ソウゴ。明導ゲイツ……ツクヨミ……三人を確認)」

「ルールー、時見の席の隣に座って」

「はい」

先生の指示を受け、ルールーはソウゴの隣の席に座った。

「よろしく。俺は時見ソウゴ」

「ルーラーです。よろしくお願ひします」

お互いに自己紹介を済ませると、一限の国語の授業に入る。

「あれ? ルーラー、教科書は?」

「不要です」

「えっ?」

「既に、予習しています」

「はい?」

それを聞いたソウゴは「本当に大丈夫なのか?」と心配したが、ルーラーが先生に当てられると、本当に教科書を見ずにスラスラとその内容を答えた。勿論ソウゴは「マジで全部暗記してるの:~?」と驚きのあまり口をぽかんと

その後も体育のテニスではなを圧倒し、その上ボールが弾け飛んだりしていた。

容姿の事もあってか、昼休みには男子から告白されたりもした。(その時は拳でコンクリートの柱に罅を入れる程に突き合い、ドン引きさせ追っ払っていた)

野乃家での夕食時、はなが学校でのルーラーの事を家族に話す。

「もう、超イケてるんだよ! ルーラー! 天才だし、スポーツも万能だし、モテるし!」

「それは凄いな」

「でも、男子の告白はともかく、運動部のスカウトを断っちゃうのは勿体無かったかも」
「興味がありませんから」

「ルルーちゃん、何に興味があるの？」

「ことりがそう尋ねると、ルルーがはなをジッと見る。

「……？」

「ごちそう様でした」

結局ルルーはことりの質問には答えず、立ち上がって食器を流し台へ置きに向かった。

そんな彼女の後ろ姿を見ながら、はなはどうすればルルーと打ち解けられるのか考え始める。

次の日、みんなでビューティーハリーに集まった。

「えっ？ サプライズで？」

「うん。ルルーって何でも出来ちゃうから、中々おもてなし出来なくなってるさ」

ルルーが来てから一週間が経ち、はながサプライズでルルーをおもてなししたいと伝える。

「それにさ、いつもよく私というでしょ？」

「なるほどね」

「うん。どこ行っても離れないって言うか」

「それって、はなしか頼れないからって事かな？」

よく考えれば教室でも隣のソウゴじやなく、はなによく近づく事が多い。

「それは嬉しいけど、せつかく違う国に来たんだから、みんな仲良くした方が、もつと楽しいと思うんだよね」

「いいじゃん。分かった、協力する」

「ルールに気付かれないように、クラスのみんなには私が声を掛けておくね」
「はぐたんも乗り気みたいやし、飾り付けの材料はワイらが調達しといたるわ」

「ゲイツやツクヨミも協力してよ！」

「……まあ、いいだろ」

「珍しいねえ、ゲイツが協力するなんて」

ツクヨミは、いつもは周りに無愛想のゲイツが手伝うと聞き、疑問に思った。

「ただの気まぐれだ」

「あ？もしかして、ホラー映画で気絶したのみんなに黙って貰ったから？」

「……………ん……」

そこでソウゴは、この前のお泊まり会でゲイツが気絶したことは口止めしてくれたか

らと睨む。

「凶星だね」

「よっしやー！ありがとみんな！」

はなの指揮のもと、ルーラーのサプライズパーティーが開かれた。

その頃、ルーラーの部屋では…

「一週間、野乃はなど時見ソウゴを観察し続けた結果。学業、運動共に、特に優れた点は確認出来ませんでした」

ルーラーがキーボードを打ち、クライアス社への報告書を作っていた。

「しかしそれでは、あの強さと違いからでは理由が解明出来ません」

彼らの強さに疑問を覚えながらも、ルーラーは報告書を書き終え部屋から出ると。はなが自分の部屋から出て来て、コソコソと誰かに気付かれないようにことりの部屋へ向かう姿が目映された。

「ことり、首尾はどうじゃ？」

「万事滞り無く姉上」

はなとことりが何かについて話し合う。

「うむ、では私は、そろそろルーラーを……」

「私をどうする気ですか?」

「それは勿論——」

「うわああああああっ!!?」

ルーラーは何故自分の話をしているのかと思いつつ話し掛けると、すぐそこに彼女がいた事に、はなとことりが驚いて抱き合う。

「一体、何を企んでいるのです?」

「あ、えつと……」

「どうするお姉ちゃん……?」

「こ、こうなったら、結果オーライ!連れてっちゃえ!」

開き直った二人がルーラーを下の方へ連れて行く。

「何を、するのですか?」

二人に連れて来られた先はリビングで二人がドアを開けると、さあや達がクラッカーを鳴らした。

『ようこそ!はぐくみ市へ!』

野乃家やソウゴ達の他に、同じクラスメイトである阿万野ひなせと十倉じゅんな、百井あき、千瀬ふみともいた。

「これは何ですか?」

「ルーラーのサプライズ歓迎会だよ」

「歓迎会？」

「これがルーラーの歓迎会だった事に、当の本人は疑問を抱いた。

「食事の用意も出来たよ！」

「それは？」

「手巻き寿司だよ」

向かいのテーブルには、手巻き寿司の材料が乗っていた。

「こうするんだよ」

ソウゴはそう言うと、海苔にご飯とマグロ、卵などをのせて巻いた。

「ほら」

「やつほーっ！私もやる！」

「はな、キュウリも入れなさい」

「ヤダ、河童になる！」

「なる訳無いでしょ」

「まだ気にしてたの？」

「すみれが手本を見せてから、はな達もそれぞれの手巻き寿司を作る。

「ほらほら、ルーラーも。食事はみんなで食べた方が美味しいよ」

ソウゴは海苔を持ってルーラーに差し出し、そう伝える。

「さあさあ皆さん! ご注目やで!」

「よっ! 待ってました!」

ハリーの声が聞こえた方を向くと、抱っこ紐ではぐたんを抱え、何故かおでんの入った容器を持ったハリーが座布団の上で正座していた。

「今度は何です?」

「ハリーとはぐたんの二人羽織や」

はぐたんがフォークで大根を刺してハリーの顔に近付け、ハリーが食べようとして顔を動かす。

「はぐたん、頑張って!」

「あっつ……! これは、うまひ……! あっつ!」

何とか口の中に入れたが、余りの熱さに悶絶した。

「はい、お水」

「ふー、ありがとさん」

ハリーはツクヨミが用意してくれた水を飲んで落ち着く。

「あんさんも、やってみるか?」

「お断りします」

「ルールー？」

するとソウゴ達の様子を見ていたルールーが口を開く。

「どうして食べるのに、未成熟な赤ん坊の手を借りる必要があるのです？ 効率が悪過ぎます。理解不能です」

「めちよつく……！」

「いやでも、二人羽織はそう言う芸だからさ」

ソウゴは二人羽織の解説をするがルールーはそれをスルーし、今度は手巻き寿司の材料を見つめる。

「それに、この料理、未完成の物を出された上に、調理を食べる者にさせるなんて、非効率極まり無いです」

「「めちよつく……！」」

「それ使うの、はなだけじゃ無かったんだ」

はなの他に森太郎とすみれがそう言ったのを聞いて、はながよく言っている口癖は家族みんなも使ってるんだと気づくソウゴ。

「そもそも何故歓迎会を？ 挨拶なら、初日に済ませたハズです」

「ちよつとあなたね……そんな言い方、無いんじゃないの？」

「私は分かりやすく伝えているつもりですが」

「そうじゃなくて、気持ちの話なんだけど」

「気持ちですか? 理解不能です」

ツクヨミとほまれが言い過ぎじゃないかと問うが、それでもルールは理解不能だと言いつ切る。

それを見たはぐたんが竹輪をフォークで突き刺してルールに差し出すが、やはり理解不能と言われて目を丸くした。

「ごめんね。言い出しつぺ、私なんだ」

「はな……」

「謝る必要もありません。私は、私の意見を述べたまでですから。失礼します」

彼女はそう言い、ソウゴから貰った海苔を持ったまま部屋へ戻った。

「なんか、悪いことしたのかな……」

「世の中にはあんな奴もいるって事だ」

「片付けましょっか」

「じゃあちらし寿司にして、みんなのお土産にしよう!」

「グッドアイデアだな、はな」

「美味しいのにな」

すみれ達が手巻き寿司の残りをちらし寿司にしようとしている様子を横目に、ハリ

が手巻き寿司を食べながら呟く。

すると、ソウゴがルーラーの後を追うためリビングを出ていった。

「ルーラー！」

そしてソウゴは階段を登るルーラーを呼び止める。

「何ですか？」

「いや、あの……もしかして、気を悪くさせたなら謝るけど……

ルーラー、この町に来てから笑ってないよね？」

「だから何ですか？」

「はなもルーラーに笑ってほしいから、サプライズパーティーを開いたんだ」

「……（これが、オーマジオウ。やはり、私の知るものと違う）」

「……そうですか。では」

自分の心配でなく、他人の心配をしている目の前の少年が、矢張りオーマジオウになるとは思えないと考えたがしかし、ルーラーはそのまま自分の部屋へと戻っていく。

「伝わったかな……」

さっきの言葉が伝わったかと思うと、後ろからツクヨミが現れた。

「ねえ……なんか、ルーラーって口ポットみたいじゃない？片言しか言わないからそう思うだけだけど……」

「ロボット……」

その頃、クライアス社とある一室で、ソファーに座るパップルが呟く。

「破壊し損ねたミライクリスタル・ホワイトは、未だ見つからず。

新しく誕生したピンク、ブルー、イエロー、ローズ、ネイビー、オレンジの6つと10個以上のライドウオッチもジオウとプリキュアの手に入った。

お陰で毎日あたしは残業。あなたと会える時間も減るし、やんなっちゃう。

他の子と遊んじゃ嫌よ？」

そう言い、手を洗い続ける男性の方に視線を向ける。

「……と言つても、心が無い機械人形のルールーはあり得ないか」

翌日、ソウゴ達はラヴェニール学園の屋上で、昨日のサプライズパーティーでのルールーの事を話していた。

「そりゃ、勝手に歓迎会をしたのはこっただけど……」

「みんなでワイワイしたくない人もいるよね。でも、私達の事も嫌いって事も無いみた

「い

「一緒にいて疲れないの?」

「えっ?全然。何とかなるよ!」

ほまれの問いに、はなはなんとなく大丈夫だと答える。

「その根拠は?」

「それは……」

「とにかく、何とかなる!でしょ」

「ソウゴ。うん!」

「俺もまだルールーの事諦めてないから!」

ソウゴもルールーと仲良くするのはまだ諦めてないと話す。

その日の夕方、ソウゴとはながルールーと一緒に帰り道を歩き、はなが前を歩くルールーに向かって話す。

「ルールー、今日の小テストも満点だったね」

「内富士先生、次はもつと難しい問題にするって言ってたよ。

あー、それじゃ俺がやばいかもな」

そう言い、二人が苦笑を浮かべる。

すると、ルールーが立ち止まる。

「今日は、これまでと比べて、私に話しかける生徒の数が80%減りました」

「えっ?」

「理由は分かりませんが、おそらく、昨日の事が関係しているのでしょう」

冷静に昨日の事が関係していると推測している。どうやら理由そこわかっていないが、自覚はあるようだ。

「それは……」

「特に問題は無いのですが」

「そ、そうなんだ……」

問題ないと言うが、ソウゴとはなは心配で気になっていた。

その日の夜、ルールーがはなの部屋の方を向いて呟く。

「調査対象で無い相手に、どんな印象を持たれても影響は無い。」

しかし、野乃はなと時見ソウゴが私に話しかける回数も半減している……

私は、間違ったのでしょうか?」

「みんなー、ご飯よー!」

下からすみれがご飯だと伝える。

はなが部屋を出てからルールの部屋の方を見て、表情を曇らせて下に降りる。

「ルールーちゃんは？」

「すぐ降りて来ると思うけど……そうだパパ。今度、ルールーと一緒に出かけしない？」

「お出かけ？」

「うん！遊園地とか！昨日のは気に入って貰えなかったけど、それなら喜んで貰えるかもー！」

「はな、その頑張り方は、少し違うんじゃないかな」

お出掛けをすれば今度こそルールーと仲良くなれる、そう思い提案をしていると、森太郎からそう指摘される。

「えっ？　で、でも、うちはホストなんだから……！」

「ホストの前に、今、同じ屋根の下で暮らしてる僕らは何だい？」

「そっか……ルールーはゲストじゃないんだ……」

「分かったみたいだね」

「ルールー、呼んで来る！」

「階段は駆け上がっちゃダメだぞー！」

森太郎からアドバイスを受けたはなは、ルールーを呼びに階段を駆け上がった。

「ルールー?」

ルールーの部屋をノックするが、彼女は出て来ない。

「町の方に文房具買いに行くつて」

自分の部屋から出て来たことが、町の方に文房具を買いに行つたと伝えてドアを閉めた直後、プリハートに着信が入る。

「もしもし?……えっ!?」

ソウゴは一人、クジゴジ堂のリビングでルールーの事を考えていた。

「うーん、どうすれば……」

「お困りのようだね我が魔王」

そこへ黒ウオズが現れた。

「黒ウオズ……それとも白ウオズ?」

「わざとかい?」

「バレた?」

微笑してわかっついていてワザとやったと白状すると、黒ウオズがため息を吐く。

「それで、どうしたのかい?」

「うん。どうやったらルールーとみんなで仲良くなれるかなつて」

それを聞いたウオズは、クライアス社と手を組んでいた時に目にした彼女の事を思い浮かべる。

「……………そういう相手は放っておくべきだと思うが」

「なんで？」

「その子は、人と関わるのが苦手という意味だよ」

黒ウオズがクライアス社で見た彼女の印象と、ルーラーの性格をソウゴの口から聞いて、放っておくべきだと判断する。

「でも、俺はそう言うのやだな」

しかし、その黒ウオズの考えをソウゴは否定した。

「それじゃあ、差別してるみたいじゃん。それじゃあ王様失格だよ。」

俺はそんなの関係なく、誰にでも触れ合える。そんな王様になりたいんだ！」

ソウゴはルーラーとも、みんなと同じように友達になりたいようだ。

クライアス社の刺客かもしれない彼女と友達になりたいのかと複雑な心中で呟くウオズだったが、わざわざ言う必要も無いかと思ひ、ウオズは自身の得た情報だけをソウゴに伝えようとする。

「相変わらず、素晴らしい意見を言うね、我が魔王……………そんな君に伝えておく事がある」
「何？」

「アナザーシノビについてだよ」

それは、遡る事少し前。黒ウオズはウールに会いに行っていた。

「ウオズ……どつちだ？」

「黒い方……言っても君には分からないか」

黒ウオズはとりあえず、いつもの方だと伝える。

「いつものほうか。何の用だい？僕はもう一人の君のことは何も知らないよ」

「そうじゃない。あのアナザーシノビのことだ」

アナザーシノビについての情報はなかとウールに聞くと、彼はぼつぼつとアナザーシノビについて口に出し始める。

「よく分からないけど、絶対倒すことはできないらしい。」

彼は2022年では仮面ライダーシノビになった。もともと正義感の強い青年だったようだね」

やはり、あの変身者が仮面ライダーシノビになる未来があるのだとウオズは思った。

「僕がアナザライダーの契約をしたときも、絡まれていた友人を守ろうとしていたよ」

ウールはアナザーシノビとの契約の時のことを黒ウオズに話した。

ウールが蓮太郎と契約する為に近づいた時、あのチンピラ達から友達を守っていた光景を目にしていた。

『俺に力があつたら……』

蓮太郎が悔しそうにそう呟くが、そこへウールが時間を止め、彼の前に現れた。

『あるよ。僕と契約しない？ そうすれば君が望む力が手に入る』

『何を言ってるんだ？』

『シノビ……』

こうして、蓮太郎へウールが無理やりウオッチを埋め込んでアナザーシノビが誕生した。

ウールが話した事を、黒ウオズはソウゴに全てを話した。

「そうか……だから彼は、アナザーライダーになつたんだ」

「ああ。今ゲイツ君とツクヨミ君が2022年に向かつている。

向こうで仮面ライダーシノビに会えれば、シノビウオッチは創れる。それを持ち帰れば、アナザーシノビは倒せるはずだ」

ゲイツとツクヨミがウオッチをこっちに持ち帰れば、アナザーシノビを倒せると考える。

その時、ソウゴの携帯の着信音が鳴り出す。

「何?」

一方、二人は2022年へ降りようとするが謎の磁場にタイムマシンがはじき返される。

「どういうこと。2022年に降りられない!」

「2つの時間軸が揺れ動いてる今、未来には、干渉できないということか……!」

「これじゃあ仮面ライダーシノビには会えない。ということは……」

「アナザーシノビを倒せない!」

2022年に干渉出来ないため仮面ライダーシノビに会いに行くのは不可能に近い。つまり、ウオッチが創れない。

そんな事を知らないソウゴはハリーから連絡を受け、椅子から立ち上がる。

「……わかった!すぐ行くよ!」

携帯をしまい、ソウゴは出かけようとする。

「ウオズ。俺行かなきゃ!」

「止めたほうがいい。そこにはおそらくまたもう一人の私がいるはずだ」

ウオズはオシマイダーと一緒にアナザーシノビも現れると考え、このままでは白ウオズもそこに現れるだろうと睨む。

「……………だろうね。でも俺行くよ」

「……………君がこれ以上、仮面ライダーシノビに関わると本当に歴史が変わりかねない。それは君の魔王への道が閉ざされるということだ。そこまでは分かってくれるか？」

「半分ぐらい……………で、俺にどうしろって言うの？」

「彼らのもとへ行かなければそれでいい。君が行くと問題が解決してしまう」

「問題ないじゃん。それにアナザーシノビのあの彼には、誰かを守るために戦う資質がある」

「今はアナザーシノビの心配をする場合じゃ無いと思う」

「そんなことないよ。彼は本当に未来のライダーになれる気がするんだ」

「これからの未来の為にと思い忠告するウオズに、ソウゴは夢に出てきた蓮太郎の言葉を思い出す。

『神蔵蓮太郎。陰になりて力なき者を守る。誤った力の使い方をするものからな！』

「未来の俺の都合で、助けるべき人を放っておく事なんて出来ない。そんなんじゃ、いい

魔王になんてなれないよ」

「君らしい意見だ。でも君も分かるだろう?これが罨なんだとね……!」

「罨をかけて俺を待つてるなら、いつそのこと、こつちからかかってやればいい」

ソウゴは笑みを浮かべそう言うのと、クジゴジ堂の扉を開いて現場へと向かう。

「私には嫌な予感しかしないよ……我が魔王……」

黒ウオズは根拠のない自信に溢れているソウゴに対し、嫌な予感ばかりが募って仕方なかった。

その頃、オシマイダーとアナザーシノビがチンピラや関係ない街で暴れている様子が高いビルから見守っていたスウォルトツの元へ、白ウオズが現れた。

「やっかいなアナザーライダーを創り出してくれたね」

「このアナザーシノビを倒さねば、シノビウオッチは手に入らん」

しかし、アナザーシノビを倒すにはシノビウオッチが必要。

お前ではどうする事も出来まい」

「ならば魔王に変えさせる」

「何をだ?」

「時の流れと自らの命運を」

そう言うのと白ウオズは、持っていた未来ノートに「ジオウ、アナザーシノビのもとへ駆けつけた」と書きとめた。

同時刻。はなはオシマイダーが現れた事を聞き、町の方へ向かうとさあや達も来て、全員がその場で揃う。

「オシマイダーが出たって？」

「繁華街の方や！」

「ルールーもあつちに行つたつて！」

「はな！」

「行きましよう！」

三人は繁華街の方へ走りながら、プリハートとミライクリスタルを構える。

「「ミライクリスタル！ハート、キラっと！」」

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

駆け付けた繁華街では、ビル型オシマイダーが暴れていた。

「野乃はなに悪印象を持たれたのなら、これ以上の調査は不可能。いつもの手段でプリ

キュアとジオウの力を測るのみ」

その傍には、ルーラーの操縦するUFOが飛んでいた。

このビルオシマイダーは、ルーラーが作り出したものだった。

「たああああああつ!」

そこへエールが現れ、オシマイダーの腕にキックを叩き込む。

「ルーラー!どこ?!?ルーラー!」

「…何を言っているのです?」

「ふっ!はあつ!たあつ!」

エールが連続攻撃を繰り返して、オシマイダーを怯ませる。

「いつつもいつつも、人がいっぱいいる所で暴れて!迷惑掛けないの!フラワーシュー

ト!」

メロディソードを出してピンクと赤のボタンを交互に押し、フラワーシューを放

つ。

フラワーシューを受け、オシマイダーが倒れた直後にアンジュ達が駆け付ける。

「エール!」

「大丈夫?」

「まだや!」

ハリーが叫んだ直後、オシマイダーがビルからUFOに変形した。

「変形したーっ?」

「UFOっ?」

「ッ!来る!」

オシマイダーが回転して突進し、エール達が跳んで避ける。

するとオシマイダーは地面を擦り、急上昇する。

「罅が空かない……………」

「っ!エールがいないよ!」

アンジユがエールがいない事に気付くと、オシマイダーを掴んだエールを見つけた。

「あなたの相手をしてる暇無いの……………!ルールーを探さなきゃ……………!いけないんだから

……………」

「私を探しに?」

「ルールー……………!返事して……………ッ!」

「……………オシマイダー……………」

ルールーがボタンを押すと同時に、オシマイダーからエールが落下し、植物園の庭園に落ちた。

「エール!」

アンジュとエトワールが植物園に向かうと、そこからアナザーシノビが現れた。

「アナザーライダー!」

アナザーシノビが液体のようなものを放った。

その時、放物線が現れると液体を相殺し、アナザーシノビを拘束した。

『フィニッシュタイム! ボルテックタイムブ레이크!』

「ソウゴ(君)!」

放物線を滑りながら、ビルドアーマーを装着したジオウが現れた。

「オリヤヤヤヤ!」

そのままジオウのドリルクラッシュャークラッシュャーでアナザーシノビを攻撃し、アナザーシノビを変身解除させた。

「ははっ! 来たね!」

その様子を見た白ウオズが、書いた通りにジオウが現れた事に喜びの声を上げた。

「お前は……」

攻撃を受けて倒れた蓮太郎が起き上がると、ジオウがウオッチを外し変身解除した。

「やっぱりいた」

「一体何なんだ、お前は!?」

「あんたを止めに来たんだ!」

「…俺を？」

「あんた、弱い人を守りたかっただけなんだろう？それでアナザーライダーの力を手にしたんだよね？」

「そうだ！この力が俺を変えてくれたんだ。それで俺は王になるんだっ！」

蓮太郎は王になると叫ぶと、ソウゴ達の間を沈黙が走る。

「…それが、あんたの意志か？！」

「……」

本当の意思なのかと問うと蓮太郎は黙り込む。

「自分の意志でその未来を選ぶなら、俺は戦ってあんたを止めるだけだ！でも未来の自分を信じられるなら……」

ソウゴは思い出す。

未来の自分を信じ、魔王になると誓ったあの日を――

『俺は魔王になる。魔王になって、世界を救ってみせる』

そして思い出す。

一度捨てた力を、みんなに励まされ、もう一度力を持ち、覚悟を決めたあの日を――

「力を捨てる勇氣だつて持てるはずだ」

「……………うるさいっ!邪魔をしないでくれ!あああああーっ!」

動揺しながらも蓮太郎が叫ぶと、再びアナザーシノビへと変わった。

『ジオウ!』

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

アナザーシノビに再び変身したのを見て、ソウゴはジオウへともう一度変身した。

アナザーシノビは腕の爪でジオウに襲いかかる。

『ジカンギレード!ケン!』

ジオウはジカンギレードを出現させ、アナザーシノビの攻撃を止める。

「ここは任せて!エールの方へ行つて!」

「ソウゴ君!」

「アンジュ!ここはソウゴに任せて、エールの所へ行こう!」

「うん……」

アナザーシノビはジオウに任せ、二人はオシマイダーが飛んでいた植物園と向かう。

そのままジオウはアナザーシノビにジカンギレードを使い優先に立つ。

『フィニッシュタイム!』

「秘技ミカン斬り！」

『鎧武！ギリギリスラツシユ！』

鎧武ウオッチを装填し、オレンジのエネルギーを纏ったジカンギレードの剣撃を受けたアナザーシノビは爆発、元の姿へと戻った。

「愚かな。何度やつても変わらぬものを」

すると蓮太郎のもとへスウォルトが降りてきた。

「きりがいいな。お前の身を滅ぼすぞ」

そう言うのと蓮太郎の体内のアナザーシノビウオッチを取り出した。

『シノビ……！』

再起動したウオッチを再び埋め込み、アナザーシノビは復活した。

「やっぱ、復活しちゃうのか……」

「あ……あああ！」

アナザーシノビは両腕にはそれぞれ4本の鉤爪を装備し、ジオウに襲いかかる。

「しまった……」

鉤爪による攻撃によってジオウはジカンギレードを手から落とされてしまう。

「なんのー！」

だがジオウはアナザーシノビの手を掴み、頭突きを決めると、右のパンチで吹っ飛ば

す。

『フィニッシュタイム!』

「未来の自分を信じろよ!」

アナザーシノビにキックの文字が囲まれると、ジオウが宙に飛んだ。

『タイムブ레이크!』

ジオウのタイムブ레이크によるライダーキックを放ち、アナザーシノビへと放たれ再度変身解除させた。

「ふん。ジオウ、無駄だと言ったことがまだわからないのか?」

スウォルツが蓮太郎を再び変身させようと腕を出す。

「……………やめろ!」

しかし、蓮太郎は三度目の再起動を図ったスウォルツの手を掴み抵抗した。

「貴様……………何のつもりだ」

「やめろ……………俺の未来は、俺自身が切り開く!」

そう言つて蓮太郎はスウォルツの腕を振り払つた。

「確かに今は……………誰かを守る力なんてないけど……………」

でも俺は……………! 未来の自分に賭ける!!?」

蓮太郎は、今の自分じゃなく自分に賭ける事を決意した。

「(やつぱり、あの人も仮面ライダーだ)……なんか、いける気がする〜!」

今の蓮太郎を見て、夢で見た未来の仮面ライダーシノビとなっていた蓮太郎と重なって見えた。

「フフツ……」

不気味な笑いをした白ウオズは白い端末を開き、そこへ「シノビウオッチが生まれた」と書き込む。

『シノビ!』

すると、書かれた通りに白ウオズが持っていたブランクミライドウオッチが仮面ライダーシノビのライドウオッチへと変わった。

「フフツ……これでいい」

シノビミライドウオッチの誕生に喜び浸す。

「貴様の意見は求めん!」

『シノビ……!』

一方スウォルツにより、強引にまた蓮太郎をアナザーシノビに戻す。

「くっ……!」

「感謝するよ魔王」

ジオウが構えると白ウオズが現れ、感謝すると言い出した。

『ビヨンドライダー!』

『ウオズ!』

ビヨンドライダーを装着した白ウオズが仮面ライダーウオズのウオッチを起動させ、
ドライバーに装填した。

『アクシオン!』

「変身!」

『フューチャータイム!スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ!』

仮面ライダーウオズへと変身した白ウオズはアナザーシノビに向かって行こうとする。
る。

『ジカンデスピア!ヤリスギ!』

「待て!」

ジオウがアナザーシノビを守ろうとウオズの前へと出る。

「魔王。邪魔をするな!」

だかウオズはジカンデスピアでアナザーシノビを攻撃し、ジオウをついでに攻撃して
ぶっ飛ばし、アナザーシノビの前へと立つ。

「待っていたぞ。この時を」

アナザーシノビにシノビウオッチを見せる。

「ライドウオツチ」

「何？」

『シノビ！アクション！』

シノビミライドウオツチを起動させ、ウオズはドライバーのウオズのウオツチと切り替えた。

『投影！フューチャータイム！誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャーリングシノビ！シノビ！』

フューチャータイムが完了すると、複眼のスマートベゼルには「シノビ」と紫のカタカナで描かれ、アンテナ・胸部装甲・両肩の紋章には手裏剣の意匠を持ち、首元には紫色のマフラーを巻いていた。

「あれが、仮面ライダーシノビのウオツチ……」

「魔王、今回は礼を言うよ。君の代わりにアナザーシノビを倒してあげよう」

そのまま、アナザーシノビとウオズが戦闘：否、蹂躪が始まった。

フューチャーリングシノビとなったウオズは影移動で攻撃。アナザーシノビも影移動で対抗するが、力の差は歴然だった。

『フィニッシュ忍法！』

ウオズ・フューチャーリングシノビは札を舞うように出しながら、回し蹴りを放つ。

「そろそろ、終わりにするよ」

ジカンデスピアのタッチパネルにある鎌マークのアイコンを押す。

『カマシスギ!』

ジカンデスピアがカマモードとなり、打撃攻撃でアナザーシノビを追い込んでいく。

そして、再びノートの端末を開くと…

「仮面ライダーウオズ・フューチャーリングシノビの前に、崩れ去るアナザーシノビであつた」

またもや端末に文字を書き込む。

『ビヨンド ザ タイム!忍法時間縛りの術!』

「はああ!」

ジカンデスピアでアナザーシノビを空中へ突き上げ、空中で停止させる。

『カマシスギ!フィニッシュタイム!』

ジカンデスピアのパネル全体をスワイプする。

『一撃カマーン!』

するとウオズの分身体2体が出現し、交互にアナザーシノビへ攻撃した。

「はあああああ!」

最後に、本体のウオズ自身がジカンデスピアで薙ぎ払った。

そのままアナザーシノビは変身を解除され、アナザーシノビウオッチは砕け散った。「これでいいんだ……」

蓮太郎は傷つきながらも満足そうな笑みを浮かべていた。

「白ウオズ……」

変身解除したソウゴが白ウオズに近づく。

「間違えないでほしいな魔王。私は君が今戦う相手じゃないんだ」

そう言い残し、仮面ライダーウオズは立ち去っていく。

その頃、植物園の方ではエールが気絶して倒れていた。

「キュアエール。いいえ、野乃はな」

気絶してたエールが目を開けると、すぐ近くに私服のルールが立っていた。

「ルール……あつ……！ 正体……！」

——でも、無事で良かった」

エールは周囲の時が止まった空間の中で、花卉に囲まれながら彼女の無事に安堵していた。

「何故、私を探しに来たのです？」

「来たばかりの町で、こんな騒ぎに巻き込まれたんだもん。心配するよ」

「心配?」

エールがそう言うってから立ち上がると、ルールーはそんな彼女の言葉を聞いて顔を横に傾ける。

「そんな気持ちのせいで非効率な戦いをして、無駄に傷を負ったのですか?」
「無駄じゃないって。こうして話が出来たんだから。」

…私さ、折角来てくれたルールーを喜ばせたかったんだけど、変な感じになっちゃったよね。私、余計な気を回し過ぎて、逆にあなたに壁を作っちゃった。

それじゃあお互いの事なんて、分かる訳無いよね。

だからあなたの為に、特別な事をしようと思うのは止める。

今からはパパやママ、ことりと同じように——ルールー、家族になろっ

「家族に……?」

「うん!もつと気楽にさ、当たり前的事、何でも一緒にしてみようよ。」

私達タイプ全然違うし、ぶつかるとあるかもだけど、何とかなるって!」

「私と、あなたが? 何とかなる根拠があるのですか?」

「それは……」

「無いなら無理です」

「あー!タンマタンマ!ルールーが好きだから!」

それじゃ……駄目？」

表裏の無い、飾らないエールの言葉が、ルーラーの心に衝撃を与えた。

その直後。時が戻り、大量の花弁が落ちて来た事に驚いたエールが仰向けに倒れた。

「エール！」

「みんな……」

その直後にアンジュとエトワールが駆け付け、エールの身体を起こす。

「あれ？いない……夢でも見てたのかな？」

「夢？」

「うん……ルーラーと話してた気がするんだけど……夢だったのかな？」

「あんまり心配させないで」

「あははは……はい……」

エールが苦笑して後ろ頭を掻いて答えると、オシマイダーが三人に近付く。

「来るよ！」

「「ミライクリスタル！」」

「エールタクト！」

「アンジュハープ！」

「エトワールフルート！」

「心のトゲトゲ、飛んで行けー!プリキュア!トリニティ・コンサート!」

三人がメロディソードのボタンを押して演奏、虹色のエネルギーを作り出し、対象に向かって虹色のエネルギーを飛ばすトリニティ・コンサートを放つ。

「HUGっとプリキュア!エール・フォー・ユー!」

トリニティ・コンサートが命中し、巨大な木が作り出されてピンク・水色・黄色の花が咲き誇り、オシマイダーが浄化された。

「みんな!」

オシマイダーが消滅し、みんなが元の姿へと戻るとソウゴが現れた。

「ソウゴ君!」

「ソウゴ。アナザーライダーの方は」

「…うん。とりあえずなんとかあったよ」

なんとかあったと聞くと、とりあえず三人ともホツとした。

「あつ、ルールーを探さなきゃ」

「ここにいます」

はながルールーを探しに行こうとすると、ルールーが現れる。

「ルールー」

「用事は済みました。帰りましょう」

「うん！」

はながルーラーの後を追い、これを見たソウゴ達が微笑んだ。

ソウゴはそのままはな達と別れ、家へと帰っていた。

「我が魔王……」

そこへ、黒ウオズがソウゴを出迎えに現れた。

「その様子だと、もう一人の私の思うようになったようだね」

黒ウオズにはソウゴの考えがお見通しだったらしく、彼の予想通りに事が進んでしまったことに少し気まずそうな表情を浮かべる。

「でも、彼はきつと、未来で正しい力を手に入れるよ。自分の意志で……でも」

「その未来は、もう一人の私にとって都合の良い未来だ。君自身がそのきっかけを創り出した……」

「ごめん……ウオズの言ってた通りだったかもしれない」

「オーマジオウの歴史を変えようとしている……」

タイムジャッカーもツクヨミ君もゲイツ君も……そして、もう一人の私も……

そのことをどうかお忘れなきよう……」

その夜、ルールーがちらし寿司を食べるのを、はな達が見る。

「……………」

「喉に、痞えたのかい？」

「お酢、強かった？」

「ルールー、そう言う時はこう言うんだよ」

困惑した表情を浮かべるルールーに家族が心配を声をかけていると、はなが椅子から立ちあがり、ルールーの耳元で“ある言葉”を伝える。

「美味しいです」

「……でしょ……」

ルールーから美味しいと言う言葉を聞いて、はな達が微笑んで“でしょ”と叫んだ。

「今回は、プリキュアの力の源を解明出来ませんでした。

しばらくは、調査を続ける必要があります」

ルールーはベランダで報告書を作り、キーボードを消すと部屋に入る。

「あの時の痛みは一体……」

「怪我したの？」

彼女は胸元に手を当て、ベッドに座って呟くと、はなが布団から出て来た。尚……は、

はなの部屋ではなくルルーの部屋である。

「何でいるのですか？」

「朝までお喋りしよっ」

「出て行つて下さい」

「やーだー！」

はなが両腕を上げると、ルルーの頭に布団が被される。

「もつとルルーの事知りたいし！ねえ、今更だけど、私達つて、最初どこで会ったわけ？実は覚えて無くて」

「私は……」

横になったはながどこで会ったのかを尋ね、ルルーが答えようとした途端に、はなは眠ってしまった。

「寝たのですか？本当にあなたは、理解不能です。」

——私の正体を知っても、あなたは……何を言ってるのでしょうか、私は。
……………お休みなさい」

ルルーはベッドから立って部屋の電気を消し、眠りにつく。

はなの影響で、自分の中に起きた変化に疑問を抱きながら。

その一方、川を見ていたゲイツとツクヨミのもとに白ウオズが現れた。

「やあ我が救世主」

「……白ウオズ」

「この本によれば、2019年4月28日・オーマの日。」

この日、その時代には存在しないはずの3つのライドウオッチを収めし戦士。

オーマジオウの野望を打ち砕き、新たな時代を創る……とある」

白ウオズが自分の本に書かれていた未来を話す。

「このシノビウオッチがその1つだろう」

そう言うと、白ウオズはゲイツにシノビウオッチを見せる。

「君に託そう、我が救世主。オーマの日、君がジオウを倒すんだ」

そう言つて、シノビミライドウオッチをゲイツに渡そうとする。

「断る!」

「何と……!」

しかし、ゲイツはシノビウオッチを拒んだ。

「俺はお前を信用していない。俺は俺の力でジオウを倒す」

「アハハハ!なら良かった。大丈夫、君は私を信じるさ。」

それではまたね、我が救世主」

すると、白ウオスはシノビウオッチを起動すると、旋風を起し、消えていった。

「俺達の歴史には存在しないライダーのウオッチが今、この時代にある」

「新たな歴史が生まれ始めてる……」

「ああ、それはつまり俺達の知らない未来が近づいているということだ……覚悟は出来てるな」

「……うん。それを望んで、この時代に來たんだから」

オーマの日……

果たしてその日を境に未来を決めるのは、ソウゴか、ゲイツか、クライアス社か。

——どちらかの未来になるかは、その日で決まる。

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第17話 保育バトル？クイズバトル？どっち？2040

0 第17話 保育バトル?クイズバトル?どっち?204

ある大学で、研究が上手く行かず悩み続けていた男がいた。

「駄目だ……! 駄目だ駄目だ駄目だっ!」

痙攣を起こすように男はそう叫ぶと机上の試験管やピーカーを手で払う。

試験管やピーカーが床に落ちて粉々になろうとしたその時、彼以外の時間が止まる。

「あなたに、ちよつとだけ悪い知らせと、めちやくちやいい知らせがあるの!」

「誰だ!?」

狼狽える彼の前に現れたのは、クライアス社のオーラだった。

「このままじゃ、あなたの研究は一生上手くいかない。でも私と契約すればあなたは輝かしい未来を手にすることができる!」

『クイズ……!』

オーラの持っていたブランクウォッチが、アナザーウォッチへと変わった。

それからしばらく経った頃。男は図書室へやって来ると、その大学の教授らしき人物

に声をかけられる。

「やあ堂安くん。この間の論文はいいところまでいったみたいだね。実に惜しかったよ……堂安くん……?」

「あんたの知識をくれ」

『クイズ……!』

オーラと契約した堂安と呼ばれた男は、全身にクエスチョンマーク、胸部にはマルバツマークの模様があり、頭部と両肩には脳味噌の様なものを取り付けられた姿のアナザーライダーへと変身した。

そして、その大学教授を襲撃し、その知識を奪い取るのだった。

「もつとだ……もつと知識を……!」

しかし奪った知識だけでは足りないのか、そのアナザーライダーはそのまま図書室を出て、外へと現れた。

「知識……知識を……つ!」

外へ出たアナザーライダーは周りにいる学生、教授を襲いはじめようとする。

アナザーライダーは近くで怯えていた一人の教授を視界に入れると、彼を襲い始めた。

「知識……うっ!」

その時、横の方から放たれた銃撃を受け、アナザーライダーがその衝撃で倒れる。

「大丈夫ですか?」

「早く逃げて下さい!」

「ツクヨミ。連れて行け!」

そこへソウゴ達が現れ、ゲイツはツクヨミと共にその教授を遠くへ逃した。

「邪魔を……するな……」

「行くぞ」

『ジクウドライダー!』

ゲイツの掛け声でソウゴとゲイツはジクウドライダーを。はな、さあや、ほまれはプリハートとミライクリスタルを取り出す。

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

「変身!」

「ミライクリスタル!ハート、キラっと!」

ジクウドライダーとミライクリスタルにより五人の姿が変わる。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

五人が変身を完了すると、アナザーライダーはいきなり電撃のような攻撃を繰り出してきた。

「フレフレ！ハート・フェザー！」

アンジュがハート・フェザーでバリアを展開し、電撃からみんなを守る。

「はあ！」

そこからアナザーライダーにジオウとゲイツがダブルパンチを繰り出し、アナザーライダーが後ずさった。

「フレフレ・ハート・フォーユー！」

そこへエールがハート・フォーユーを放ちさらに追い討ちを掛けた。

「よし！」

「終わらせるぞ」

「わかった」

『スレスレシュート！』

『ギワギワシュート！』

「フレフレ!ハート・スター!」

ジオウ、ゲイツ、エトワールの技がアナザライダーに向かって放たれた。だがその時、ピタツと、アナザライダー以外の時間が止まった。

「まったく、邪魔しないで欲しいわね」

そこへオーラが現れ、アナザライダーの元に向かった。

「ここから逃げるわよ」

オーラがアナザライダーを助けるため、三人が放った攻撃から離す。

「ふん!」

ジオウ達から離れたその時、彼女は髪をさすって時間を動かした。

「あれ? いない!」

三人が放った攻撃は地面へと直撃し、周りを見渡すが既にアナザライダーの姿はなかった。それを見てジオウ達は変身を解除した。

「みんな!」

「大丈夫か?」

入れ替わるようにツクヨミとハリーがやって来た。

「……あのアナザライダーは何者なの?」

「わからん……だが、少なくとも19人の誰でもないのは確かだ」

ゲイツがあのアナザーライダーの攻撃を受け、19人の仮面ライダーとは違うと話す。

「おそらくまた未来から作ったライダーだね」

そこへ、黒ウオズが柱の陰から現れた。

「黒ウオズ？それとも白ウオズ？どっち」

「はあ……わざとやってないかい？我が魔王」

「うん。バレちゃった？」

「黒ウオズ、お前のその『本』とやらには何とある」

ゲイツが黒ウオズが持つ本にアナザーライダーの情報が載っているのではと思い、尋ねる。

「この本には載っていない。もう1人の私がいる別の時間軸のライダーであり、そして彼からあのアナザーライダーが生まれたと見て間違いないだろうね」

黒ウオズの本には載っていない。やはり、あれも未来からのライダーのようだ。

「よし、手分けして探そう！」

ソウゴの提案で一同は二手に分かれ、アナザーライダーを探しに行く。

二手に別れたゲイツ、ツクヨミ、ハリーは大学から離れた鉄橋へやってきた。

「やあやあやあ。我が救世主!」

すると、三人のもとに白ウオズが現れた。

「いい所で会った。教えろ、あの未来のライダー!……何故奴がこの時代にいる?」

「へえ、もうあのアナザーライダーが未来の存在だと気づいたんだね。」

「そうか、もう一人の私から聞いたのかな?彼は今、焦燥しているはずだ」

白ウオズはもう一人の自分の顔を思い浮かべ、笑みをこぼしながらゲイツに伝える。

別行動をしていたソウゴ達は、大学の近くの川の辺りを探索していた。

「ねえ、黒ウオズ。アナザーライダー何処か分からないの?」

「私をアナザーライダー探査機みたいに言うのはやめて欲しいな。この本に奴のことは書いてないと言っただろう」

「でも、黒ウオズさんは、アナザーライダーの場所知ってるじゃん」

今までのことを考えると、アナザーライダーが現れた時に黒ウオズが現れ、ソウゴ達にアドバイスをすることが多かったと話し掛ける。

「はな君。私とてそこまで完璧ではないのだよ」

「じゃあ何で手伝ってくれるの?ここまでしてくれるのって珍しくない?」

「……どうやら、君達は事の重大さが分かってないようだね」

「事の重大？」

黒ウオズが重大のことをわかっていないとソウゴ達に言う。

「あのライダーが存在していると言う事は、我々の望む歴史が変わりつつあると言う事だ」

黒ウオズがソウゴ達に説明している一方、白ウオズの方も：

「このまま時間が進めば、我が救世主、君がゲイツリバイブとなり世界を変える。

もう一人の私はそれを薄々、感じ始めている。奴は必ずこの流れを止めようとする。それならば……」

「私達のやるべき事は一つ」

「未来のライダーの力を奪う事」

「未来のライダーの存在を消滅させる事」

「そのためには……君があのだを倒すんだ」

——白ウオズと黒ウオズ、二人のウオズが放った言葉が、それぞれの場所で重なった。

「アナザーライダーを倒すには、その未来の仮面ライダーの力を奪わなければならない。そして、その力を奪われた時、どうなるか?」

「そいつは、ライダーとしての記憶はなくなる」

「ハハハ……よく分かつてるじゃないか!君は今後幾度となく慈悲無き選択を迫られる時が来る。そのためのレッスンだと思えばいいさ」

白ウオズはゲイツの肩に手を置き、最後の方は彼の耳元で囁いた。

「早く君が救世主になるのを私は待つてるよ。ハハハハ……」

ゲイツには期待をしていると言うような物言いで、白いウオズは笑いながらゲイツ達の前から去っていった。

「全然、いないね……」

「あのアナザーライダー、どこにいるんだろ……」

「う〜ん……」

ソウゴ達の方は……あれから一向にアナザーライダーが見つからず、4人仲良く難しく考える。

「後のことは私一人で何とかしよう。君達は帰りましたまえ」

「えっ？黒ウオズさんだけで……」

「問題ないよ。じゃあ」

黒ウオズは振り向いてそう言うのと、彼らの元から去っていった。

「事の重大か……」

ソウゴは黒ウオズが言った「事の重大」が気になっていたが、具体的にどのくらい重大なのかイマイチ実感がわけずにいた。

「——あつ……ああああああ!!？」

「何?!? いきなり?」

「めちよつく! 今日、ルーラーと買い物しなきゃ行けなかった!」

突然大声を出したのはなほルーラーと約束を思い出し、急いで野乃家へとダッシュする。

「…ルーラーとうまくやってるみたいだね」

「うん。あれ以来、はなとルーラー仲良いよね」

この間の事件以来、ルーラーとはなとの間には何か進展が見えてきていた。

その頃、はぐくみ市へ黒いジャケットと帽子を被った男がやってきた。

「……か……」

物珍しそうにあたり一面を見渡す男は、ポケットから一つの腕時計を出した。

「真実を聞き出す……」

持っていた時計は動かなかったが、気にせず男は歩き出した。

そして翌朝、クジゴジ堂ではパジャマ姿のソウゴが階段から降りて来ていた。

「ふわあ〜」

眠そうに欠伸を溢すソウゴが下の階に来ると、順一郎が修理の依頼を受けているのが見えた。

「はあくそれにしてもいい時計ですよコレは〜。随分前に止まったとなると直せるかどうか分かりませんがね」

「そうですか……とにかく、お願いします」

「はい、では修理が完了次第連絡します」

修理を引き受けると、男はそのままクジゴジ堂を後にした。

「おはよう〜」

「あ、おはようソウゴ君」

「めずらしく時計のお客さん?」

「そうなんだよ。もう、こんな珍しい時計で楽しみなんだよ」

順一郎がテンション高く修理を始めるとソウゴはリビングに向かい、既に朝食を食べていたゲイツ達と朝食を済ませる。

その頃野乃家では、はながまだ起きて無かった。

「ことり、はな起こした？」

「起こしたけど、『むにゃむにゃ……後五十分』……だつて」

「仕方ないな……ルルー、頼める？」

「分かりました」

「お姉ちゃん、手強いよ」

「いざとなつたら引きずり出しちゃっていいわよ」

ルルーは寝ているはなの部屋へとやってきた。

「――！」

「うげーっ！」

するとすみれに言われた通り、ルルーはベッドを持ち上げてはなを引きずり出す。

「はな。目、覚めましたか？」

「か、完璧で……ごわす……」

アグレッシブな方法で起こされた事にはなが驚いていると、すみれの声が下の階から聞こえてきた。

「はな!早くご飯食べて支度して!」

「あつ、そつか!今日はキラツとお仕事しChaoだっけ!」

「お仕事?」

「ルールもおおいでよ!絶対楽しいよ!」

はなはそう言つて、ルールも連れて行く。

しばらくし、はな達は今日の仕事体験の場所である“のびはぐ保育園”に着く。

今日は保育士の仕事体験をする日のだ。

「今日はお世話になります」

「「よろしくお願ひします!」」

ソウゴ達が一礼するのを見て、ルールも一礼する。

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

「ごめん、急な取材が入っちゃったの。後で話聞かせてね」

「うん」

「それじゃあ頑張つて」

すみれははな達を応援し、別の取材の方へ向かった。

「今日はうちのも、世話になりまっせ」

「まあ可愛い。お名前は？」

「ハリハム・ハリーですよ」

「いや、ハリーじゃなくてはぐたんの方だよ」

「ありやま……！」

「はぐたんです」

「はぐたんよろしくね」

自分の自己紹介をしたハリーを、ツクヨミが突っ込んでいる間にも、保育士の女性が膝を曲げてはぐたんに挨拶し、はぐたんが笑顔で返した。

その後、保育士達の案内を聞いたソウゴ達は職員室に入る。

「さあやどうしたの？目、赤いね。遅くまで起きてたの？」

自身の横の方を見て、さあやの目が赤い事に気付いたソウゴが尋ねる。

「昨夜保育士のテキスト読んで」

「勉強して来たの……!？」

「基本的な事だけは」

さあやが自分のカバンから本を出し、昨夜保育士のテキストを読んだ事を伝える

と、ソウゴは幼馴染が徹夜で勉強して来た事に驚く。

「凄い!よし、困ったらさあやに聞こう!」

「まず自分で考えなつて」

「あつ、ソウゴ、ルールー。ちよつとはぐたん見てて貰つていいかな?」

「はい」

「分かった」

「ありがとう!」

はなが二人にお礼を言い、さあやとほまれと一緒に職員室を出て準備に向かう。

その間にソウゴとゲイツ、ルールーがエプロンを着用していると、ルールーがさあやのカバンに入ってたテキストを取り出す。

「つー!ルールー、それさあやの……」

彼女はソウゴの言葉を聞かずテキストを開き、早いペースでページを開いていく。

「早いな……」

パラパラ読みをして把握していた所に、興味を持ったはぐたんが手を当てて止める。

ルールーがこちらをジツと見て、はぐたんは一瞬首を傾げるが、そのまま押すようにしてページをめくつた。

「あつ、ダメだよはぐたん。それはさあやのなんだから」

それを見たソウゴがはぐたんを持ち上げて止める。

その頃。はな達が保育園の裏の方に移動し、さあやがミライパッドを取り出す。

「それじゃあ、いい?」

「オッケー!」

さあやがミライクリスタル・ネイビーをミライパッドの上部にセットする。

「ミライパッド、オープン!」

そう言うと同時に画面から光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン!」

光が治ると、三人は可愛らしいエプロンを着けた保育士となった。

「準備できた?」

そこへエプロンをかけたツクヨミとルールーも到着し、五人は保育士の案内で体験する場所へと到着した。

「皆さんには、私達と一緒に一歳児の面倒を見て貰うわね」

「「はい!」」

はな達女子チームは一歳児の担当となる。

「あれソウゴやゲイツは?」

「彼には、四歳児の面倒を頼んだわ」

ソウゴとゲイツは四歳児の担当と言う事で、別の方へと行っていた。

「そっちの方が苦勞しない気がしますけど」

ほまれが苦勞しないと言うが、四歳児の部屋の方では――

「あくコラコラ喧嘩しちや駄目だよ」

小さい子のおもちやの取り合いにソウゴが翻弄にされていた。

「ワツハハハハハ！怪獸め！かくごー！」

「なんで、俺が怪獸なんだ……ぐふう！」

その近くに居るゲイツは子供達に怪獸役にされ、痛めつけられていた。

「ああ!!? 髪はやめろ！引っ張るなっ！」

「ああ……思ったより、大変かも……」

ソウゴとゲイツの男子チームは活発な子供達に振り回されていたが、勿論そんな事はな達は知らなかった。

「活発な子達ばかりで、こっちより大変よ」

保育士の言う通り、二人は今まさに戦っている時よりも奮闘中なのだ。

「みんなー、今日遊んでくれるお姉さん達ですよー」

「こーんにちはー」

一歳児のクラスに入って保育士の女性がこんにちはと言っていると、みんなが挨拶をする。

「「可愛いー！」」

はな達が可愛いと言っていると、はぐたんが手を振って挨拶した。

「ね、ね？可愛いよね、ルールー」

「…えっ？はい、可愛いです」

ほまれが女の子のオムツを替えようとすると、女の子が泣き出してしまう。

「あ、あれ？どうしたの？」

「ああ、ちいちゃんはね、オムツ替える時はこうやって……」

「おいっちに。おいっちに」

眼鏡をした保育士の女性が、女の子の両足を持ってゆっくりと動かす。

すると、女の子が喜んで笑い出す。

「へえ」

「で、ご機嫌になったら素早く」

その間に素早くオムツを替える。

「速っ……っ！」

あまりの早業にツクヨミは驚きを隠せなかった。

一方、さあやはミルクをあげ、はなはせいたろうと呼ばれている男の子とはぐたんの二人に頬を引つ張られる。

「はぐたんまで……!」

「おお、伸びる伸びる。はな凄いい」

「そのまま、伸ばして貰ったら?」

からかいながら二人が、引つ張られて顔が伸びているはなに笑みを浮かべる。

「見て無いでたしゆけてよ……!」

「フフツ」

「何言ってるか分からない」

「はな、そう言う時は——」

さあやがヒントを与えようとする途中でルールが動き、はな達の前で素早い手付きで折り鶴を作る。

更に折り鶴を作り、はぐたん達の興味を大量の折り鶴の方に向けさせ、手を離れた事ではなは解放された。

「ありがとう、ルールー」

「無理矢理止めさせるのでは無く、別の事に興味を持たせるのも一つの方法です。テキ

ストに書いてありました」

「テキスト読んで来たの？」

「はい。保育基本テキスト・抱き締めてベイビー。はぐくみフローラル出版社、第五十七版です」

「私と同じテキスト？」

「はい。(それもそうです。あなたのを見たんですから)」

ルーラーは、あのさあやのテキストを全部暗記していたのだった。

「あの栄養学のページ、凄く面白くなかった？」

「分析としては、やや浅く感じましたが」

「……そうかしら？」

「栄養とは、必要最低限のエネルギー補給の事です。もつと深く分析すべきだと思います」

ルーラーの言葉に反応したさあやが、トナカイのぬいぐるみで遊ぶ女の子の方に目を向ける。

「すずかちゃんは、あのピンクのぬいぐるみが好きみたい」

「正確には、ぬいぐるみの赤い鼻を気に入っています。目線を見れば分かります」

今度は子供達に絵本の読み聞かせを行う保育士の方に目を向ける。

「……ちいちゃんは、あの絵本を読んで貰うの、好きね」

「正確には、絵本を読んでいる保育士さんの表情が楽しいんです」

「いいえ、声のトーンですわ」

「せいたろう君、この格好すると喜びます」

「違つてよ!正確には、こう来て、こう来て、こう!の連続ですわ!」

「ルールが腕を動かし、さあやも違うパターンで腕を動かす。」

「そしてこう!ですわ!ガオ!ガオ!ガオ!」

更に腕を動かし、ライオンの鳴き声を発する。

「さあや……せいたろう君、ポカンとしてるよ……?」

「……少し黙つて下さる?」

「は、はい!」

「よろしくてよ」

口調の変わったさあやから笑顔で黙つて欲しいと言われ、はなは目を丸くして答える。

さあやとルールが、子供達と保育士達の前でお手玉を行う。

「おつかれ」

「あれ、ソウゴ。ゲイツ……つて、えっ!?」

「どうしたの？」

はな達がやってきたソウゴとゲイツの顔を見ると、二人の顔が“帰宅途中の社畜”の様になっており、既に限界だった。特に髪を引っ張られクシャクシャにされたゲイツが。

「今、休憩中……つてか、さあやなんか燃えてない？」

ソウゴはお手玉をしていたさあやを見て、燃えていた事に気付く。

「うん……どうしたんだろさあや……」

いつもと違う。言葉遣いも何か変……」

「あつ……ああ、いつものやつか……」

「なんだ、いつものやつとは？」

「もしかしてさ、さあやって物凄く負けず嫌いなんじゃないかな」

「うん、かなり……」

さあやは物凄く負けず嫌いだったと、ソウゴ以外初めて知った。

その時、はなの頭にとある疑問が浮かぶ。

「えっ？私、今までそんな風に思った事無いけど……」

「はなじゃ、自分に張り合うようなレベルに無かった、とか……」

「めちよつく……！」

さあやのレベルに届いていないと知り、はなは落ち込む。

「お取り込み中、失礼」

「黒ウオズ?」

「何のようだ……」

「つれないことを言わない欲しいな」

そこに黒ウオズが現れ、ゲイツが構える。

「それにしてもゲイツ君。中々似合ってるね、エプロン姿」

「!?……黙れ。ここで、お前を……」

「駄目だよ!ゲイツこんな所で!」

鼻で笑いながら馬鹿にする口調で語り掛けるウオズを見て、顔を赤くして変身しようとしたゲイツをソウゴが止める。

「仲間なんだからさ」

「仲間……!!?」

仲間と聞いたゲイツがソウゴの服の襟を掴む。

「ごめん、間違えた。同居人、同居人……」

威圧するゲイツをソウゴが抑える。

「まあ、落ち着きたまえ、面白いものをみつけてきた。これを見せてくれ」

ゲイツにそう言うと、黒ウオズがみんなに新聞記事を見せた。

それは、研究者連続失踪の記事だった。

「連続失踪事件……これって……」

「おそらく、あのアナザーライダーの仕業だろうね。多分また研究者を襲うだろうね」

「だったら、早く……」

「いや。俺達だけで行って確かめる」

「はなとほまれ、ツクヨミはここでさあやを見てて」

「でも……」

「放っておくともっと熱くなっちゃうから」

「…わかった」

「行こう」

ソウゴとゲイツはこの休憩時間を使い、幼稚園を出てアナザーライダーを探しに向かう。

「ソウゴって、さあやの事よく見てるね」

「幼馴染だから、よくわかるのよ。でも……」

「でも、なに……?」

「ソウゴとさあやって、釣り合わないっていうか、どうして幼馴染になれたのかなって

……」

ほまれが言うのと確かにと思い、考え込む。

「王様を目指すソウゴ、大女優の娘のさあや……確かに……」

「何がきつかけだろ……」

はなとツクヨミは、ソウゴとさあやがどんなきつかけで幼馴染になったんだろうと思
い始める。

その頃。昨日訪れた大学では、アナザーライダーが研究者達を襲っていた。

「知識を……知識をよこせ……」

アナザーライダーは研究者達の知識を奪う為、彼らの頭を掴もうとする。

「待て」

そこへ駆けつけたソウゴとゲイツが現れ、待てと言われたアナザーライダーがこちら
を振り向く。

「なんで、こんなことを？」

「俺達にやつの私情は関係ない。行くぞ！」

『ジクウドライダー！』

二人がジクウドライダーを装着し、ウォッチを取り出す。

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

「変身!」

二人はジクウドライダーを回転させる。

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

二人がジオウとゲイツが変身するとアナザーライダーへと向かっていき、アナザーライダーを大学の外へと放り出す。

「はあ!」

「ヤア!」

二人が攻撃する順番を切り替えるように繰り出し、アナザーライダーを追い詰める。

「このまま一気に行くぞ!」

『エグゼイド!』

「ああ!」

『オーズ! デイ・デイ・デイ・デイケイド!』

ジオウがオーズウォッチとデイケイドウォッチを起動させ、ゲイツはエグゼイドウォッチを起動させると二人はドライバーへと装填し、ドライバーを回転させる。

「朝、叔父さんに時計の修理。頼んだ人」

ジオウが今朝クジゴジ堂へと来たお客だと答える。

「その怪人は俺の獲物だ！」

「貴様、何者だ？」

ゲイツの問いに対し、男はニヤリをほほ笑むとペンダントに触れる。するとペンダントから強い輝きを放つ。

『ピリリン〜！』

同時に男の腰からドライバーが現れ、胸元からビツクリマークからクエスチョンマークの絵柄が描かれたモノへと変化したT型のモノ——クイズトツパーを出した。

「変身！」

男はクイズトツパーをクイズドライバーへと合わせる。

『ファッション！パッション！クエスチョン！クイズ！』

その音声が鳴ると、男の頭に着けられた仮面には複眼の様に並ぶ二つの黄色のクエスチョンマークと額に付けられたオレンジ色のクエスチョンマーク、胸には「○」と「×」の文字、さらに右半身に赤、左半身に青のクエスチョンマークが数多く描かれている姿へと変わった。

「また違う仮面ライダー？」

「そこをどいてくれないか?」

「どかないといたら……!」

「救えよ世界、答えよ正解!問題——俺はお前達とも戦う。○か×か?」

突如ジオウ達の前に現れたライダー、仮面ライダークイズはジオウ達にクイズを出題した。

「え……?」

「正解は……○だ!」

そう言つてクイズはジオウとゲイツに向かつて行き、二人は現れた仮面ライダーに応戦する。

「お前達の攻撃は決まる。○か×か?」

「ええ……?」

「○だ!」

ゲイツがクイズにパンチをするが、彼のパンチは避けられ空振りに終わった。

「正解は×だ」

すると二人はクイズの両手首に装着された放電装置から放たれた電撃をモロに浴びてしまう。

「ああああああ!!?」

電撃を受けた二人はそのまま膝を折るが、クイズは容赦なしに襲い掛かってくる。「俺の攻撃にふつとばされる。○か×か？」

咄嗟に攻撃を避けるジオウとゲイツだが……

「正解は○だ」

「またもや電撃を受けてしまう。」

「問題。この後、俺のキックは決まる。○か×か？」

「ええ……あの、×で、お願いします……」

「正解は……」

「そう言うくとクイズはビックリマークのクイズトツパーをドライバーに差し込む。」

『ファイナルクイズフラッシュユ！』

○と×のエフェクトが現れ、クイズが○から飛び出した。

「クエスチョンキック！」

ジオウとゲイツへキックを炸裂させ、そのダメージでジオウ、ゲイツは変身解除してしまふ。

「正解は○だ！そこで見てろ！」

「そう言つてアナザーライダーこと、アナザークイズへ歩み寄るクイズ。」

「やっとお前にクイズが出せるな」

クイズがアナザークイズに攻撃を仕掛けると、突如時が止まる。

「オリジナルが残ってるなんてね。ここはひとまず引くわよ……!」

するとオーラがいきなり何者かに吹っ飛ばされ、背を階段にぶつける。

「いったあーい!!?」

そこへ彼女を吹っ飛ばした犯人である、白ウオズまでもが現れた。

「悪いが君にも引っ込んでいて貰いたいな、クライアス社オーラ。今はレッスンの時間なんだ」

白ウオズがオーラにそう話しながら、レッスンの時間だと言つて顔を顰めるゲイツに顔を向ける。

「言つただろう我が救世主?君はこの後、慈悲なき選択を迫られる。なのに、なんだこの体たらくは」

「お前の指図は受けるつもりはない!」

「いや、受けてもらう。今のままでは君はジオウを倒せない。到底、救世主にはなれないということを自覚をしてもらおう」

『ビヨンドライバー!』

指示を受けないと答えるゲイツにそう話しながら、白ウオズがビヨンドライバーを腰へと装着した。

『ウオズ！アクシヨン！』

「変身！」

『フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

白ウオズが仮面ライダーウオズへと変身した。

「我が名は仮面ライダーウオズ、未来の創造者である」

『ジカンドレスピア！ヤリスギ！』

ウオズはジカンドレスピア・ヤリモードでアナザークイズを攻撃し、そのまま一方的に蹂躪する。

「抗うアナザークイズ。しかしウオズのフューチャリングシノビの前に、手も足も出なかった」

未来ノートへ書き込むとシノビウオッチを取り出した。

『シノビ！』

シノビウオッチを起動をさせてドライバーに装填し、再びレバーを開く。

『誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャリングシノビ！シノビ！』

ウオズはフューチャリングシノビへとフォームを変え、それを見たアナザークイズは猛然とフューチャリングシノビへと襲い掛かる。

アナザークイズの攻撃が命中したと思ったらフューチャリングシノビは煙を出し、

藁人形の替え玉に変わった。

「ハアアア!」

フューチャーリングシノビはあたりを見回すアナザークイズの頭上に現れ、蹴りをぶち込む。

「アナザークイズ、ウオズの必殺技の前に爆発四散する!」

『カマシスギ!フィニッシュタイム!』

未来ノートに向けそう言うと、ウオズはジカンデスピアのパネル全体をスワイプする。

『一撃カマーン!』

ウオズの分身体2体が出現し、交互にアナザークイズを攻撃した。

「はあああああ!」

ジカンデスピアの一撃でアナザークイズを頭上高く打ち上げ、落ちてくるところへ必殺技の一撃カマーンを放つ。

「!?」

アナザークイズの変身が解除されると、地面へと転がった腕時計を慌てて拾い握りしめる。まるで、大事なものであるかの様に伺える。

「あの時計……今日持ってきたのと同じ」

ソウゴが拾った時計を見て。今朝、修理に出したのと同じだと気づいた。

「さあ我が救世主、今度は君の番だ。仮面ライダークイズを倒せ」

ウオズに仮面ライダークイズを倒せと言われ、ゲイツがゲイツウオッチを再び握り、クイズに近づこうとする。

「ゲイツ！」

ソウゴの制止をも振り切り、ゲイツは仮面ライダークイズに近づく。

「そうゆうことか。どこまでも俺の邪魔を……！」

『ゲイツ！』

ゲイツウオッチを再び起動させ、ドライバーに装填する。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

そして仮面ライダーゲイツとなり、仮面ライダークイズへと走っていく。

「はああああ！」

「うおおおお！」

そのまま、両者の拳が衝突した。

次回！Re. HUGっとジオウ！

第18話 本当の思いの結果 2040

仮面ライダークイズの力を奪うためにと、ゲイツはクイズに戦いを仕掛ける。

「止めなよ！ ゲイツ…ッ！」

『ジオウ！』

ゲイツを止めるためにソウゴは、ウオッチをドライバーへと差し込んだ。

「邪魔はさせないよ。魔王！」

だが変身しようとするソウゴを、仮面ライダーウオズがジカンデスピアを首もとへ伸ばして妨害する為、ゲイツとクイズの戦いを見ることができなかつた。

一方二人の戦いでは、戦況はゲイツが優勢だった。

「黒ウオズ！出てきて！」

「何だい？我が魔王」

白ウオズの思い通りにさせまいと、ソウゴに出てきてくれと命じられた黒ウオズがその場に現れた。

「あのライダーを逃がしたいんだ！」

「仰せとあらば仕方ない。はあ！」

黒ウオズがマフラーでクイズとソウゴを包み込み、この場から消える。

「今のうちね」

「ぐわああああ！」

『クイズ……！』

その隙にオーラが男性の胸からアナザーウオッチを取り出し再起動させると、再度埋め込みアナザーライダーへと変える。

「行くわよ」

オーラは再変身したアナザークイズを連れ、退却して行った。

敵がいなくなったのを見たゲイツは、ウオッチを外し変身解除した。

「ハハハ……！……どいつもこいつも、まさに尻尾を巻いて逃げる犬じゃないか！なあ我が救世主。フフ……ハハハ……！」

白ウオズは誰も彼もが自身やゲイツの前から逃げていった事を笑うが、ゲイツは思い悩んだ表情で誰も居ない大学敷地内に立ち尽くしていた。

ソウゴとゲイツが抜けてからしばらく経った頃。はぐたんを先頭に、子供達が一列に並んでハイハイを行っていた。

「はぐたん、いつの間にかリーダーになっちゃったね」

「ハイハイ行進、可愛い〜!」

はなが子供達の大行列にメロメロになっている中、ほまれはほのぼのとした光景とは正反対の殺伐とした光景に目を向ける。

「あの体重移動から見て、まもなく右へ曲がりますわね」

「正確には右寄り。二十七度前向きに曲がります」

さあやとルールーがはぐたんがどう動くか予測していると、はぐたんが右に曲がる。

「やりますわね」

「あなたも」

うふふと笑う二人の間には見えない火花が散り、それをはなとほまれは引きつった表情で見っていた。

「…ん?」

「ツクヨミ」

二人が外を見るツクヨミに釣られて窓を見ると、砂場から黒ウオズがソウゴと一緒に現れた。

「ソウゴだ」

「あれ?ゲイツがないよ?」

何故か一緒にいた筈のゲイツはいなかったが、とにかくはな達は砂場へと向かう。

「いてえっ!」

黒ウオズによってソウゴは、はぐくみ幼稚園へと戻った。

すると一緒に此処へ移動した仮面ライダークイズの男は、黒ウオズを見て警戒している事に気付く。

「あんた……俺はまだ帰れないぞ!」

「帰れない?」

「ソウゴ!」

「みんな」

はな達が来ると、まだ帰れないという言葉の意味を考えていたソウゴが立ち上がった。

「誰?そいつ?」

「ああ、そうだ……ねえ?君は?」

そういえばまだ自己紹介してなかったなど反省しながら、ほまれに指をさされた仮面ライダークイズの男へ話しかける。

「俺は仮面ライダークイズ。2040年からこの時代に来た」

「2040年……」

「ウオズの事を知ってるの？」

「ああ。彼に誘われてこの時代に来たんだ」

「それは私じゃない。もう一人の私だ」

「もう一人？」

「どうやら彼は白ウオズによって連れて来れたようだ。」

「何の理由でこの時代に？さつきアナザーライダーと戦おうとしてたけど……」

「俺の名は堂安主水。ヤツは俺の父親だ」

「あのアナザーライダーが、お父さん……」

主水が云うには、あのアナザーライダーは自分の父親だと話す。

「母親の話では、俺の父親は才能は認められていたがなかなか結果が伴わず、評価に恵まれなかったらしい……」

そして、あのアナザーライダーの変身者のその後を語り出す。

「なるほどな。その歴史を変えようと思ってやな……」

ハリーは歴史を変える為に来たのだと推測するが、それを聞いた主水は何を言っているんだという顔で彼を見る。

「そんなことして何になる？歴史を変えるなんて、後ろ向きの人間のする事だ……」

俺の母は2040年の時代で病に伏せてる。母は自分が奴に愛されていなかったと

思っている……」

主水が自分の母親のことを話し、話を続ける。

「俺がここに来たのは若い日の奴に会い、本当のことを聞くため。歴史なんか変えても意味はない……」

でも、ほんとのことを知らない限り、母の時間は前には進まないと思つてな……」

ソウゴ達は主水の話をも言わず聞いていた。

「ん？」

すると、ツクヨミが門の所から人影が見え、近づく。

「ゲイツ」

門に居たのはゲイツだった。

その時、ソウゴが主水に声をかける。

「主水はさ……お母さんのために、お父さんの本当の気持ち知りたいんだよね？」

「そうだ」

「主水自身のためじゃないの？」

「別の奴との関係を改善したところで、俺は何も思わない」

「じゃあ、何であの時計をいつまで持つてるのさ」

ソウゴが主水の父親が落としたあの腕時計のことを聞く。

「あれ、お父さんの時計でしよう?」

「……」

クジゴジ堂へ持ってきた時、そして、あの父親が持っていた時計を見てソウゴは何かを感じた。

何も答えず黙っているのを見る限り、どうやら主水は、ソウゴに本当の気持ちを見透かされたようだ。

「ソウゴ」

そこへツクヨミが現れ、ソウゴに何かを渡した。

「これ……」

それは朝、修理に出した主水の父親の腕時計だった。

「さつきゲイツが戻って、順一郎さんから渡されたのを預かったって」

「ゲイツが?」

ソウゴは慌てて門へと走り、ゲイツがいるか周りを見回す。

「ゲイツ……」

だが、もうここにはゲイツはいなかった。

そのままみんなの方へと戻る。既にはな達は仕事へと戻っており、ツクヨミだけ立っていた。

「ねえツクヨミ。ゲイツならどうすると思う?」

「え……?」

「俺達はそのアナザーライダーを倒さなきゃなんないでしょ。そのためには、仮面ライダークイズのウオツチが必要……」

ゲイツならどんな行動を取るのか質問すると、彼女は急に笑い出す。

「え、えっ?何……?」

「ゲイツもおんなじ事聞いた!」

「へえ……」

そうやってツクヨミは、ソウゴ達が主水との話を聞いた時に交わしたゲイツとの会話を思い返す。

『ゲイツ、どうするつもりなの?』

『俺達はそのアナザーライダーを倒さねばならない。』

そのためには、仮面ライダークイズのウオツチが必要だ。

だがそうすれば……必然的に奴の記憶はなくなる……』

『あの人のお父さんの本当の気持ちを、確認できなくなるかもしれない』

『そうだ……そういう時、ジオウならどう動く?』

ゲイツは、ソウゴならどうするとツクヨミに問う。

『主水の気持ちを守ると思う』

ソウゴなら気持ちを守ると迷わず答えると、「なら争いは避けられんな」と呟き、自分の代わりにそう伝えて欲しいと頼む。

『それと、あいつに渡しとけ。修理は出来なかったと言つてたがな……』

飽くまでクイズの力を奪うつもりだと伝えつつ、腕時計を渡すとゲイツは去つていった。

「以前のゲイツなら、まずソウゴの行動なんて聞かなかつたよね。構わず主水に突撃してたと思う。ゲイツって、まっすぐすぎるから」

「そっか……ん？」

真っ直ぐすぎると聞き、何かを考え込んだ。

「どうしたの？」

「ううん……何だか分かつた気がする。ゲイツの気持ち」

「ソウゴにいちやくん！アソボ！」

ゲイツの考えが読めたと語るソウゴは、合点のいった笑みを浮かべる。

そこへ担当している四歳児達がソ遊ほと誘う。

「今いくよー待ってて！」

ソウゴは四歳児達の教室へと向かう。

その頃ゲイツは、近くの公園で遊んでいた親子の姿を見ていた。

(こんな光景を……守れるだけの力を……)

公園で遊ぶ子供達の姿を見て小さい頃、一緒に遊んでいた自分の姿を思い出す。

「やあ、我が救世主。君から私に積極的に連絡をくれるとは、少しは私のことを信頼してくれたかな？」

「……お前に頼みがある」

そこに白ウオズが現れ、ゲイツが彼に何かを頼み込もうとする。

「いいだろ、何かな？」

「そのノートで、仮面ライダークイズとアナザークイズを遭遇させる。そこに俺が割って入れば……」

「ハハハッ……！いいよ我が救世主。だいぶ策士になってきたじゃないか」

仮面ライダークイズの力を奪う作戦を考えた事を伝え、それを聞いた白ウオズが笑みを浮かべながらノートに書き込もうとする。

はぐくみ幼稚園。四歳児の教室で、主水が四歳でもわかるような簡単なクイズを出し盛り上がっていた。

「凄いねえ、また正解だよ！」

ソウゴも子供達と一緒に盛り上がっていると、彼の様子をルーラーがじつと見つめている。

「あの姿……人を信じる、優しい顔……どれも、オーマジオウとは該当しない」

ソウゴを見て、オーマジオウと重なるか検証していたようだが、それを見て該当しないと判断すると、ルーラーは持ち場に戻っていく。

「ん？ルーラー？」

その時、ソウゴは窓越しから去っていくルーラーを目にして、なにか用があったのかと思いつながら、男児に背中をよじ登られていた。

一方、一歳児の教室。

「みんな、お話聞いて……！」

さあやが子供達に囲んで絵本の読み聞かせをするが、子供達に髪を引っ張られる。「今、みんなの興味はさあやの髪の毛の毛のようです」

「にやんで私はいつもほっぺなのですか……」

ほまれとルーラーの後ろでは、はなが子供達にまた頬を引つ張られてた。

「待って、待って……!」

疲れてへ口へ口になったさあやの表情を見た子供達が笑う。

「これ?こんな顔?」

その顔を作って子供達に見せると、更に笑い出す。

そこへソウゴの観察から戻ってきたルーラーが、子供達が笑い始めた理由を推測し始める。

「どうやら、筋肉の緊張と弛緩が伴う表情の急激な変化に、驚きと興味を覚えているようです」

「こころかな?」

「こころかもしれません」

さあやとルーラーが色んな表情を子供達に見せた。

一方、はなとほまれが、ソウゴとツクヨミ、ハリーと共に廊下を歩きながら会話する。

「想像以上に大変」

「同感です……」

「精神的にも身体的にも、保育士って結構ハードだね」

そう語り合いながら一歳児の教室を覗いてみると、さあやとルーラーの面白い顔対決はまだ続いていた。

「又ハハハハハッ……！オモロ……！」

二人の変顔を見たはなとまはれは目を見開き、ツクヨミは目を逸らして笑いを堪え、ハリーが声を上げて爆笑した。

「さあやもルーラーも……負けず嫌いだね……」

ソウゴは笑いを堪えながら、二人とも負けず嫌いだなと呟いた。

他の保育士が子供達をカートに乗せて散歩に連れて行き、はな達は玄関先で保育園で残った子供達に高い高いをする。

「ワオ！それエエな！俺も俺も！」

「ハリー大人でしょ……？」

「大人かて飛びたい時はあるんや！俺も俺も！」

はなの言葉にそう返しながら、ハリーがカートへと走っていく。

「放つときなよ。冗談で言ってるんだから」

「そもそも身体の大きさもあるから難しいよ」

高い高いをしていたルーラーはハリーを見ると、はなに男の子を預け、ハリーの脇腹を掴む。

「おつ、おおきに。高いた——！」

ルールーはなんと、ハリーを上空へ投げ飛ばした。

「えええええええつ！！？」

「投げ飛ばした！！？」

宇宙まで向かった所から落下するも無事五体満足で戻り、ルールーがキャッチして地面に降ろした。

「子供の頃の夢は、宇宙飛行士やった……」

「一体どこまで飛ばされたの……？」

遠くを見つめるハリーを見てはな達は目を丸くしていたが、はぐたんを含んだ子供達は笑っていた。

そこへルールーがソウゴへと近づく。

「時見ソウゴ」

「ん？ルールー何？ あ、俺のことはソウゴって呼んでよ」

「では、ソウゴ。あなたの今の本音を教えてください」

「本音？」

「はい。(…それで、オーマジオウの本心と同じなら)」

このチャンスにソウゴの気持ちを探ろうとカマをかける。

「俺の今の気持ちは……」

もしここで変わらなず、最高最善の魔王になりたい、オーマジオウを倒したいと答えれば、彼はオーマジオウ同様、自己中心的で強欲な人物だとわかる。

そうルールーは考えていたが……

「主水と主水のお父さんとの心を繋ぎたい」

「……………何故、自分ではなく他人を……」

「なんでって？そんなの相手の気持ちが変わらないって、なんかいやじゃん」

「いや？」

「俺には父さんがもういないから、具体的にはわからないけど……主水と主水のお父さんの関係を、少しでも知るきっかけになりたいんだ」

「そうですか」

自分が思っていた解答ではなかった為、ルールーはソウゴから去ろうとする。

「でも、もう一つあるんだ」

「もう一つ？」

ソウゴはもう一つ、本音があると話す。

「ルールーと……友達になりたいんだ」

「私と？」

「うん。だって、いつもはなとだけっていうか……」

たまには俺やさあや、ゲイツにほまれやツクヨミにも頼って欲しいんだ。その友達として……ダメかな？」

髪をかき、苦笑しながらそう口にする。

「理解不能………ですが……」

対して理解不能と呟くが、ソウゴの言葉を聞いたルールーは、疑問に満ちた顔で胸に手を当てた。

その後、はなとほまれが調理室で子供達のおやつ用の意をし、ソウゴは自分の担当の場所へ戻って世話を続ける。

さあやとルールーは教室に戻ってたが、ルールーの方が子供達に囲まれ、さあやは勝負に負けたかのような表情で見っていた。

「おやつだよ」

「ルールーは高い高い以来、すっかり子供達のお気に入りになったみたいだね」

はなとほまれがおやつを運んで戻る。

「み、みんな！おやつよ、おやつ！」

さあやがカートの上に置いてあるおやつと牛乳を持って行くが、足元の積み木に引つ

掛かり、おやつも牛乳もこぼしてしまった。

「さあや!!?」

「大丈夫?」

「う、うん。ごめんなさい……!」

「大丈夫よ」

「何か拭く物持つてきます」

「お願いね。私は新しいおやつ取つて来る」

はなと保育士の女性がふきんとおやつを取りに向かう。

「もしかして、焦っちゃった?」

「えっ?」

すると、ツクヨミから焦ったのかどうか聞かれた。

「ルールの方がちよつと上手で」

「でもソウゴから聞いた時は意外だった。さあやにこんな負けず嫌いな所があつたなんて」

「何か……恥ずかしい……」

ほまれとツクヨミから負けず嫌いと言われたさあやが、顔を逸らして頬を赤くする。

「いいんじゃない? そう言うの、いいじゃん?」

「片付け終わったよ」

おやつが済み、はな達が片付けを終えて戻ると、はぐたんを含んだ子供達が一斉に泣き出してた。

「泣き声オーケストラだ……」

「どうしたんだろ……？ はぐたん、いつもはすぐ寝るのに……」

それを見ていた保育士達が子供達を抱っこさせて歌うと、はぐたんを含んだ子供達が泣き止んで眠った。

「眠ってしまいました……」

「はぐたんも、今日は新しいお友達が出来て、嬉しくて眠れなかったのよ」

「それ、分かります」

「赤ちゃんだって、十人いれば十通りの性格があるわ。テキスト通りには行かないものよ」

「何故ですか？ 何故泣いたり騒いだりするだけの赤ちゃんに、みんな必死になるんですか？」

ルールはどうして赤ん坊の為に必死になれるのか疑問に思い、問いかけた。

「だって可愛いもん」

「それだけですか？」

「ルールーは、可愛いと思わない?」

はなとほまれにそう言われ、ルールーが自分の膝の上で眠る女の子を見る。

それを見たさあやはルールーに話しかける。

「ルールーだって、可愛いと思ってる。きつと」

「えっ?」

「ルールーの表情、見てれば分かる」

自分の自覚してなかった表情を指摘されて面を喰らったのか、ルールーは口をあんどりと開けて驚いた。

ソウゴと主水は4歳児の教室で、昼寝している子供達を見ていた。

「ねえ、主水は、本音はお父さんと話がしたかった。違う?」

「……」

「これ。大事なものでしょう」

ソウゴがツクヨミから預かった主水のお父さんの腕時計を渡す。

「だから〜!うるさいの!」

すると玄関先から揉め事のような声が聞こえた。

「なんだ?」

ソウゴが玄関先へと向かうと、そこでは保育士達がデザイナーの吉見リタから、子供達の泣き声のせいでアイデアが消えると言うクレームに頭を下げて謝罪する光景が映っていた。

「トゲパワワ、発見」

リタからトゲパワワが溢れるのをルールが気付く。

「明日への希望よ、消えろ。ネガティブウェーブ」

ネガティブウェーブを放出させてリタと二人の保育士からトゲパワワを取り出し、暗黒の雲のようなエネルギーに変える。

「発注。オシマイダー」

暗黒の雲がカー트에憑り付き、カートオシマイダーが作り出された。

「あら、丁度いいわね」

そこへアナザークイズを連れたオーラまで現れた。

「ねえ、あれと融合すれば、もっと知識が手に入るわ」

「知識……うおおお！」

彼女の言葉を聞いたアナザークイズが、躊躇いもなくオシマイダーへと走っていく。

そのままオシマイダーから流れ出るトゲパワワと、アナザークイズが一つになろうとする。

「以前、フォーゼとオシマイダーとの合体に成功した例があった。

……名付けるなら、オシマイクイズ」

「オシマイクイズ！」

それによってカートのおシマイダーとアナザークイズが合体し、手足に付いたカートの車輪とコードの付いた脳味噌の様な頭部と肩部、そして頭部にある血走った目ん玉の様なものが付いたシルクハットが特徴的なオシマイダー……オシマイクイズへと姿を変えた。

オシマイクイズは周りを破壊しながら暴れまくる。

「クライアス社……！」

「赤ちゃんのお昼寝の時間に……！」

「子供達のいるここで、暴れさせる訳にはいかない！」

「行くよ！」

『ジクウドライバー！』

オシマイダーを見たソウゴと主水がドライバーを装着し、はな達はミライクリスタルとプリハートを構えた。

『ジオウ！』

『ピリリン〜！』

「変身ー!」

「ミライクリスタル! ハート、キラっと!」

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

『フアツション! パツション! クエスション! クイズ!』

「輝く未来をく抱き締めて! みんなを応援! 元気のプリキュア! キュアエール!」

「みんなを癒す! 知恵のプリキュア! キュアアンジュ!」

「みんな輝け! 力のプリキュア! キュアエトワール!」

ジオウ達がオシマイクイズに向かって走る。すると、目の前にゲイツが現れた。

「ゲイツ」

「さあ、我が救世主よ」

『ゲイツ!』

「変身!」

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

ゲイツが仮面ライダーゲイツへと変身し、ジオウ達の前に構える。

「主水!」

果敢に突っ込んでくるゲイツ。

「はああああ!」

だが彼は仮面ライダークイズでなく、オシマイクイズを攻撃した。
「俺が狙いじやなかったのか？」

「俺の使命は歴史を変える事。お前とは違うが……お前の意志を止める気などない」
クイズの意思を止めないと言い、ジカンザックスを使いオシマイクイズを交戦する。
だが、やはりゲイツの攻撃は効いていない。

「何言ってるんだ。君の責務はオーマジオウを倒す。そのためにゲイツリバイブへ進化することだ。赤の他人の意志を叶えることじゃない」

不服そうな表情を浮かべながら白ウオズがゲイツを止めようと近づく。

「ゲイツの邪魔はさせないよ」

しかし、ジオウが白ウオズの前へ現れ、ゲイツの邪魔をさせない様にする。

「ジオウ！……まさか、俺の考えを読んでいたのか？」

「うん。あの時……本来だったらあの場面、白ウオズと協力しに行ってた気がするんだよね。ほら、ゲイツって真っ直ぐ過ぎるから。」

だから何か違う狙いがあるんだって気付いた」

ジオウがゲイツの考えを話すと、白ウオズの方を向く。

「白ウオズは俺が止めるからさ。後は任せたまよ」

「ソウゴ君」

「主水のお父さんをお願い」

「任せて！行こう！」

エール達はオシマイクイズへと走っていく。

「さあ、始めようか」

「フハハ……私を止める？さすが魔王、面白いことを言うね。いいだろう」

「その前に、一つ聞かせて。どうして、この場所にアナザークイズを呼びさせたの」

「ほう、私がこのノートに書いたと読んだか？」

ジオウが白ウオズの未来ノートによって呼び寄せたものだと思む。

「二人を引き合わせるならもつと、別の場所でもよかつたんじゃない？」

ジオウの言う通り、本当ならば子供のいる幼稚園ではなく人気の無い場所の方が良い筈だ。

「そんな悠長なことなんて、どうでもいい。」

勝利には大きな犠牲が必要だからね。こんな場所で誰が居ようが居なくなろうが、関係ない」

『ビヨンドライバー！』

白ウオズがビヨンドライバーを腰へと装着した。

『ウオズ！アクション！』

「変身！」

『フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

白ウオズは仮面ライダーウオズへと変身した。

「我が名は仮面ライダーウオズ、未来の創造者である」

『ジカンデスピア！ヤリスギ！』

ウオズはヤリモードにしたジカンデスピアを取り出した。

「なんか、そう言うの許せないね。犠牲が必要だなんて」

『W！』

ジオウはダブルウオツチを起動させ、ジクウドライバーへと装填し回転させた。

『アーマータイム！サイクロン！ジョーカー！ダブル！』

ジオウの体に二本のガイアメモリが肩に装備され、黒と緑のアーマー、ダブルアー

マーを装備した。

「さあ、お前の罪を……教える？」

「……ふうー！」

「はあー！」

ジオウとウオズとの勝負が始まった。

そして、一方エール達はオシマイクイズと交戦を始めていた。

「はああああああつー！」

「はっー！」

エール達があらゆる方向から攻撃を繰り出し、ゲイツがジカンザックスを放って援護する。

しかし、戦闘音を聞いて子供達が起きてしまい、オシマイクイズを見て泣き出す。

「赤ちゃん達が………！」

「目を覚ましちやつた………！」

「怖がつてるんだ………！」

「大丈夫大丈夫。ほらベロベロ〜」

エールが男の子を持ち上げて笑わせようとするが、泣き止まない。

「ひよつとしてせいたろう君、オムツ………!?？」

「エール！」

「ごめん！オムツ替えるから、もう少し頑張つて！」

そこへオシマイクイズがカートの車輪を回転させて突風を起こし、アンジュとエトワールを怯ませる。

更にオシマイクイズが保育園の方に向けて、車輪を投げ飛ばす。

「くう……っ！」

「エトワール！」

エトワールが保育園の方へ走り、車輪を止める。

「みんなは子供達を！」

「子供を泣かせるな！」

二人が連続で攻撃を繰り返す。

「お手伝いします！」

アンジュも加わり、オシマイクイズに隙を与えないようにする。

「プリキュアは赤ちゃんが気になって、戦いに集中出来ない。ジオウも白いウオズの足止めで精一杯。ですが長くは……」

ルーラーが離れた所から、オーラと共に様子を見て冷静に分析していた。

「バイトちゃん、しつかりやつてるかしら？」

パップルが様子を見にタクシーで訪れる。

だがオシマイクイズはゲイツとクイズ、アンジュによって隙を与えられず、何も出来なかった。

「ジオウの方は……白ウオズの足止めが限界のようね」

「落ち着け……！落ち着け……っ！」

「大丈夫だよ」

「怖くない、怖くない」

エールとエトワールが泣きじやくる子供達を励ます。

「はぐたん……」

これまで寝てたはぐたんが起き、応援を送る。

「応援してくれてありがとう」

応援するはぐたんに反応した子供達が泣き止み、アスパワワを生み出す。

「アスパワワ……」

「守ってみせる！絶対に！」

「はあっ！」

ゲイツとクイズがダブルパンチを繰り出し、オシマイクイズを怯ませる。

「お待たせ！」

オムツを替え終えたエールとエトワールが駆け付けたが、その直後にオシマイクイズが保育園に向かって突進する。

「いけない！」

ツクヨミが保育園の方へと走る。

「ダメ……！」

だがその時、ルーラーが前に出て腕を広げた。

それを見たオシマイクイズが動揺し、動きを止める。

「赤ちゃん達をお願い！」

アンジユに言われ、ルーラーが頷く。

「あいつ、何やってるの？」

オーラにはルーラーの行動がわからなかった。

「オシマイダーの動きが止まった！」

「行くよ！」

「お前の研究の成果は認められる。○か×か？」

クイズはオシマイクイズに向けてクイズを出した。

「正解は×だ！」

電撃を受けるオシマイクイズへ、更にパンチを浴びせていく。しかも、仮面ライダークイズの攻撃に見られた。

「そうか……ウオッチがなくとも、仮面ライダークイズの攻撃であれば奴を倒せるかもしれない」

ゲイツはそれを見て仮面ライダークイズの力なら、あのオシマイクイズに有効だと気

づいた。

「よし、行くぞ！」

「ああ！」

『フィニッシュタイム！』

『ファイナルクイズフラッシュユ！』

それを見たオシマイクイズは何かヤバイと察知したのか、今度は電撃を纏った車輪を複数飛ばすが、ゲイツとクイズはそれを全て避けると、二人同時に高く飛び上がる。

『タイムバースト！』

ダブルライダーキックでオシマイダーとアナザークイズを分離させ、アナザークイズの方は変身解除された。

「今だ！オシマイダーを仕留めろ！」

「ミライクリスタル！」

「エールタクト！」

「アンジュハープ！」

「エトワールフルート！」

三人がメロディソードのボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出す。

「心のとげとげ、飛んで行けー！プリキュア！トリニティ・コンサート！」

対象に向かって虹色のエネルギーを飛ばすトリニティ・コンサートを放つ。
「ヤメサセテモライマース」

トリニティ・コンサートが命中し、巨大な木が作り出されてピンク・水色・黄色の花が咲き誇り、オシマイダーが浄化された。

「HUGつとプリキュア！エール・フォー・ユー！」

オシマイダーが浄化された一方、ジオウとウオズとの対決も激しくなった。

「どうやら、終わったようだね。君との遊びも終わらせよう」

「こっちのセリフ！」

『フィニッシュタイム！』

ジオウがウオツチを二つ押し、回転させると高く浮き上がる。

『マキシマムタイムブ레이크！』

「オリヤヤヤヤ！」

ジオウのタイムブ레이크をウオズへ仕掛ける。

「はあ！」

だがジカンデスピアで受け止められると、カウンターで弾き飛ばされ、ジオウはダメージで変身解除した。

「魔王。あまり自分の力を買いかぶらない方がいい」

ウオズはジオウを倒し、ゲイツの方へと近づく。

一方、オシマイダーが消滅し、アナザークイズから変身解除した保へと変身解除したゲイツと主水が近づく。

「何故だ……何故俺の邪魔を……お前一体誰なんだ!!？」

「俺は未来……2040年から来た……あんたの息子だ」

「主水？ふっ……まさか」

目の前にいる男が未来から来た自身の息子だと信じていない保に、主水は自分がつけている父の時計を見せる。

「それは……！」

それを見た保は、自分の腕の時計を見比べた。

「本当に主水なのか……!!？」

「問題を出す。一つだけ答えてくれ」

主水が父親である保に問題を出し、強引でも答えを求めろ。

「あんたの研究は上手く行かないかもしれない。」

家族と心が離れるかもしれない……

その上……早死にしまうかもしれない、

……でも、人生で誰かを愛したとしたら……それは誰だ？」

「……………お前の母さんだ」

「……………正解だと信じる」

保から答えを聞き、主水は満足そうな表情を見せる。

「ありがとな」

「いや、礼なら……………あいつだ」

主水はゲイツとエール達に礼を言う。

「メロドラマはそこまでにして」

再びオーラは保の胸からウオッチを取出した。

『クイズ……！』

再起動したアナザーウオッチを再び戻し、再び変身させた。

「くう……………」

二人が再び変身しようとする。だがそこへ仮面ライダーウオズが現れ、ゲイツの顔を殴る。

「何をする!?？」

ゲイツの言葉を無視して、主水を拘束するウオズ。

「君が私をまだ信じていないみたい、私もまだ君を信じていない。」

君のその甘さは、いずれ未来を苦しめるだろう」

そう言うや否や、主水の体からクイズミライドウォッチを生成した。

「これで用済みだ」

ウオズは用済みと言うと、主水を放り投げる。

「大丈夫？」

エール達の主水に駆け寄る。

『クイズ！』

ウオズは気にせずクイズミライドウォッチを使用し、ビョンドライバーへと装填した。

『投影！フューチャータイム！』

そしてカバーを開き、右手でビョンドライバーのハンドルを前に向けるとアーマーが装着される。

『ファッション！パッション！クエスション！フューチャーリングクイズ！クイズ！』

その姿は仮面ライダークイズを模しており、複眼のスマートベゼルには「クイズ」とカタカナで描かれ、両肩の『クイズシールドサークルサイド／クロスサイド』にはそれぞれ〇〇と××が絵描かれていた。

「問題、お前の論文は評価される○か×か？答えは×」

そう言うとアナザークイズの頭上に雷雲が現れ、落雷が落ちた。

「家族の心はお前から離れていく。○か×か？」

「……」

「○だ」

「またもや落雷を受けるアナザークイズ。」

『ジカンドеспピア！ツエスギ！』

更に追い詰める様に、ジカンドеспピア・ツエモードでの突き攻撃をアナザークイズに次々と決めていく。

「やめろ……」

「ソウゴ君」

ふらつきながらソウゴは現場へやってきて、アンジュは負傷したソウゴを介抱する。

「では、終わらせよう」

『フィニッシュタイム！不可思議マジック！』

するとジカンドеспピアを使って大量のクエスチョンマークが出現、そのままアナザークイズを縛り爆散させた。

アナザーウオッチも砕け散り、もう再起動はできないため、オーラは去っていく。

「大丈夫ですか？お父さん！」

ソウゴとアンジュは倒れた主水の父親に駆け寄り介抱する。

「これは君が持つておくといい」

白ウオズはゲイツへクイズウオッチを渡す。すると、ゲイツは主水へそれを渡そうとする。

「お前のもんだろ?」

「いや。それはお前が歴史を変えるために必要なんだろ?」

「しかし……」

「問題はちゃんと聞け。母の時間は動き出す。俺の時間もな」

——すると、それに呼応するように止まっていた腕時計が動き出した。

「だから、それはお前に託す」

主水はゲイツに自分のライダーの力を託した。

「親父を頼む。2040年に戻ろう」

白ウオズに元の時代に戻すように頼む。

「ちよつと待つててもらおう」

だがそう言うのと、白ウオズがゲイツに振り向く。

「いいかい我が救世主。君には使命がある。オーマジオウを倒すという……ね」

シノビウオッチをゲイツの手に渡すと、2つのウオッチが反応し合った。

その瞬間、ゲイツが見たのは、近い未来、自身が変身した今のゲイツとは違う、新しい自分の姿だった。

「これは……」

それを見てゲイツがふらつく。

「君はゲイツリバイブとなり、魔王を倒す。魔王退治に下手な感情は無用。そのことだけは覚えておくんだ」

そう言い残し白ウオズは主水を連れ、未来へ向かう。

「ゲイツー」

ソウゴが近づこうするとゲイツはふらつきながら、去っていく。

しばらくし、目を覚ました保育士達は急いで戻り、リタはアイデアが浮かんで上機嫌で去って行った。

夕方、子供達が親達に連れて帰られるのを見届け、今回のお仕事体験は終わった。そのままソウゴは、クジゴジ堂へ入った。

「……」

「我が魔王……」

「ウオズ」

「やあ」

黒ウオズがクジゴジ堂の階段から現れた。

「お帰りソウゴ君」

リビングから順一郎が現れた。ソウゴが階段を登り、自分の部屋に戻るとウオズが順一郎に近づく。

「今日は見てもらいたいものが……これを動かす事が出来るかな？」

「え〜と……何かなこれは？」

黒ウオズが順一郎に渡したのは、いつも違う形をしたジオウのウォッチだった。

「かくして、未来の仮面ライダーの力がまた一つ、この時代に現れてしまった。

歴史がオーマジオウの流れから外れ始めている。だが……」

次回！ Re. HUGつとジオウ！

第19話 鏡の世界のライダーと少女 2018

第19話 鏡の世界のライダーと少女 2018

静止した時間の中、ウールは鏡へ向けて石を投げつけ、鏡を割っていた。

「由々しき流れになっっている。あの新しく現れたウオズが時間の主導権を握り始めた」

すると、ウールは割れた鏡の時間を戻し修復した。

「このままでは、ジオウとゲイツがオーマの日に王位を争うことになる」

スウォルツが話している最中にウールはまたもや石を投げて鏡を割り、時間を戻し修復させる。

「・・・聞いているのか」

「大丈夫。僕が凄いや王様候補を手に入れてあげるよ」

そう答えながらウールは再度石を投げ、鏡を割る。

「キイイイイイイン…キイイイイイイン…」

すると割れた鏡から、不気味に感じさせる特殊な音が二人の耳へ響いた。

さらに彼らの視界には、鏡の中に映り込んだ男の姿が見えた。

「これは・・・？」

「数千回に一回鏡が割れる瞬間にだけ繋がる、失われた鏡の中の世界がある」って、あ

の門矢士が言ってたんだ」

仮面ライダーディケイド・・・門矢士からその事を聞いたウールは、その世界と繋げる為に鏡を割っていた。

「そして、そこには君がいるってね」

割れた鏡の中に居る男の姿を見据えながら、ウールは持っていたアナザーウォッチを起動させた。

『リュウガ・・・!』

「僕と契約するんだ。そうすれば、こつちの世界と繋げてあげるよ」

鏡の中の男はアナザーウォッチを受け取る。

——だが、その男の後ろには一人の女の子の姿があった事を、ここに居る誰も気づかなかった。

ある日、黒い龍の様な姿をしたアナザーライダーが工事現場の作業員を襲っていた。

「やめろ!」

そこへマジオウ達が駆けつけ、アナザーライダーを止める。

「大丈夫ですか?」

「早くここから離れて下さい!」

「急いで！」

エール達三人が作業員の人を外へと逃している間にジオウとゲイツはアナザーライダーと交戦に入る。

『ジカンギレード！ジユウ！』

『W！』

ジオウがジカンギレードをジユウモードにし、Wウオッチを装填した。

『フィニッシュタイム！W！スレスレシユーツェイニング！』

ジオウは小さい竜巻のようなスレスレシユーツェイニングをアナザーへ直撃させた。

「ふうー！」

するとアナザーライダーは空間に割れた鏡を召喚し、ジオウから受けた攻撃を威力そのままではね返してきた。

「うわああああ！」

はね返された攻撃はそのままジオウに直撃した。

「ソウゴ！大丈夫！」

エール達がジオウに駆け寄る。

「なら、コイツで！」

『ドライブ！』

ゲイツがドライブウオッチを起動し、ドライブバーに装填した。

『アーマータイム！ドライブ！ドライブ！』

ゲイツはドライブアーマーを装着し、アナザーライダーに突進をかける。

しかし、アナザーライダーの右腕にあるドラゴンのような手甲に吹っ飛ばされる。

「くっ……このお！」

『フィニッシュタイム！』

ゲイツはドライブウオッチとゲイツウオッチを押し、ドライブバーを回転させる。

『ヒッツサツタイムバースト！』

両肩のシオルダーから数種のタイヤを出現させてアナザーにぶつけていくが、アナ

ザーはまたもや空間に鏡を出現させ、攻撃を跳ね返してきた。

「フレ！フレ！ハート・フェザー！」

アンジュがハートフェザーでゲイツに跳ね返った攻撃からゲイツを守った。

「……あれ？」

跳ね返った攻撃が終わるとアナザーライダーの姿が無くなっていった。

「消えた……」

アナザーライダーが姿を消すとソウゴ達はビューティーハリーへと集まる。

「また同じアナザーライダーに逃げられたの?」

「今週で5件目やで!?」

実は今回のような事件をアナザーライダーが5回も起こしていた。しかし、相手は現れてもすぐ何処かへ消えてしまう。

「どこから現れてどこに消えるのか」

「全然分からないんだよね」

その上、アナザーライダーに関する情報もなく、ソウゴ達は既にお手上げの様子を見せていた。

「逃げ道なんか無いのにね」

「どうしても、何処かへ見失っちゃう・・・」

「神出鬼没か・・・」

彼らは神出鬼没のアナザーライダーに振り回され、同時に何処へ逃げているのだという疑問が彼らの頭を悩ませる。

「それも厄介だが、問題は奴の能力だ。こちらの攻撃がそのままの威力で跳ね返ってくる」

ゲイツの言う通り、あのアナザーライダーは攻撃をそのまま跳ね返してくる。

事実、さつきもアンジュのバリアが無かったら危険だった。

「どうすればいいんだろう．．．」

「こういう時に、何か知ってる奴は来ないもんね．．．」

ほまれがそう言う様に、こん時こそ黒ウオズの情報が必要であると感ずる。

「黒ウオズ．．．あの日以来、来ないね．．．」

だが前日、クジゴジ堂へ赴いて順一郎に何かを修理して欲しいものを渡したきり、彼はソウゴたちに姿を見せていなかった。

「放っておけ．．．とにかく、奴を倒すには同時に自分も倒される覚悟がいるのかもしれない」

「それって無理ゲーってやつじゃん」

ゲイツの考えが無理ゲーと言うとソウゴが椅子に座る。

「何でこう倒しづらいアナザーライダーが毎度毎度出てくるのかなあ．．．?」

はなの言う通り、最近現れるアナザーライダーは中々倒し辛いものばかり。しかも、白ウオズが都合の良いようにそのアナザーライダーを倒してきた。

「たぶん、クライアス社もオーマの日が狙い何だと思うな．．．」

「あのさ、そもそもオーマの曰って何なの?」

「私も気になる。三人が言っていたオーマの曰って何?」

「その日が来ると何が起こるの?」

ソウゴ達がゲイツとツクヨミ、ハリーからオーマの日について聞こうとすると、ゲイツがテーブルに置かれたチェスのキングの駒を取る。

「俺達の知ってる歴史では、お前がオーマジオウの力を手に入れて、いずれ世界を滅ぼす……」

そう言いながらキングの駒を『ドスン!』と強く叩く。

「それがオーマの日だ」

すると、ソウゴもチェスの駒を取る。

「白ウオズはその日にゲイツが俺のことを倒すって言ってなかった？それでゲイツが救世主になるって……」

ソウゴは白いナイトの駒で茶色のキングをひっくり返し、版の中央へその駒を置く。

「白ウオズは私達と違う未来から来た」

「オーマの日次第でどっちかの未来に向かうことになるってことや」

「だがクライアス社はそれともまた違う未来を描こうとしている。だから俺にもお前にも倒せないアナザーライダーを生み出しているんだ」

ツクヨミとハリーの話聞きながら、ゲイツは白のナイトの駒を転がし、茶色のビシヨップを置く。

「みんな、オーマの日を目標に動いてるってこと」

「その日に、世界の未来が決まる……」

ゲイツ達三人の説明を聞いた四人は、そのオーマの日によって世界の未来が決まるのかと少し驚きながら、クライアス社もそのオーマの日を指標に未来を支配して時を止めようとしているのかという考えが浮かんだ。

「三人はどんな未来にしたいの?」

ふとソウゴが、ゲイツ達三人はどんな未来にしたいのかと聞く。

「え……? 私は……」

「俺は……まだ、あんまはつきりとは……」

ツクヨミとハリーはまだどんな未来を望んでいるのかはつきりとしていなかったのか、ソウゴの問いに曖昧な感じで返す。

「ゲイツは? 白ウオズの言うとおりにする?」

「……奴の言うことなど信用できるか!」

ゲイツは白ウオズの言う未来を信用していなかったのか、声を荒げてそう答える。

「白ウオズもゲイツ達も俺が魔王になるのを阻止しに来たんでしょう。それってどんな未来?」

ソウゴの質問に対し、クライアス社とオーマジオウとなるソウゴを倒す為だけに戦い続けてきたゲイツ、ツクヨミ、ハリーは具体的な答えを導くことが出来ず、言葉が出て

こなかった。

「とにかく、今は例のアナザライダーを倒さないで！それと被害者の共通点を……」
「被害者の共通点は既に調査しました」

「ルールー!?」

後ろからいきなりルールーが現れ、ツクヨミが驚く。

「本当にもう調べたの？」

「はい。被害者は全員ある会社に共通点がありました」

ルールーがツクヨミが持っていたパッドを使い、被害者の共通点を見せた。

「OREジャーナル？」

「被害者のSNSを遡ると全員、OREジャーナルというニュースサイトをフォローしてた形跡がある」

「何それ、昔のサイト？聞いたことがない……」

「あっ！ここ！」

「はな知ってるの？」

「この編集者の人とママが知り合いつて聞いたことがある」

はなは自身の母、すみれがOREジャーナルの編集者の知り合いだと言う。

「現在は閉鎖されてるようですね」

しかしルルーによれば、OREジャーナルのホームページは既に閉鎖の知らせがあったらしい。

「あのアナザーライダーと関係してるってことか・・・」

「可能性はあると思う」

「手分けして関係者探してみようよ」

「私！ママにここの編集者さんが今どこにいるか聞いてみる！」

ソウゴ達が行動を開始する。

・・・が、その前にソウゴがルルーに近づく。

「何ですか？」

「ルルー！ありがとう！」

「・・・!?？」

ルルーにありがとうと言うと、ソウゴはクジゴジ堂を出ていった。

「また・・・何故、このような感覚が・・・」

ソウゴからありがとうと聞くと、ルルーが胸に手を当てる。

「・・・」

そして、その様子をさあやはじつと見ていた：

早速、ソウゴ達はアナザーライダーについて手がかりを得るために行動を開始した。「すいません。OREジャーナルって会社についてなんですけど・・・」

「OREジャーナルって知ってますか？」

ほまれとツクヨミは町の中でOREジャーナルの情報を集める。

「すいません。OREジャーナルの利用したことが・・・」

「そうですか。教えてくれておおきに」

そしてゲイツとハリーはOREジャーナルのチラシで、OREジャーナルの利用したことがあるのか聞き込みを始める。

その頃、ソウゴとさあややOREジャーナルがあつたビルにやってきていた。

「ここか・・・」

ソウゴは携帯でOREジャーナルのロゴと看板が貼られていた跡があつた壁と重ねてみる。

「ここみたいだね」

二人は中に入ろうと思うが、生憎『関係者以外、立ち入り禁止』名札が貼られていた為、中に入って確認することが出来そうになかった。

「中に入るのは無理か・・・」

「ねえソウゴ君」

「何・・・？」

「最近、ルールーと・・・」

ソウゴとルールーの関係に僅かながらの嫉妬心を抱いていたさあやが言いかけると、彼女のプリハートから着信音が流れた。

「はい。あつ、はな！」

『ママからOREジャーナルの編集長さんの場所わかったよ』

「本当!? はなのお母さんが編集長さんの場所がわかったて！」

「本当！よし、その人の所に行こう！」

はながOREジャーナルの編集長さんの場所がわかったと連絡を受け、直ぐにそこへ向かう。

しばらくし、はなと合流したソウゴときあやは釣り堀場へとやってきた。

「それで、はなが言ってた人は？」

「ああ・・・あの人だよ」

はなが指を指すとそこに老けたおじさんが釣りをしており、ソウゴ達はその人に近づ

「すいません。OREジャーナル編集長の大久保さんですか？」

ソウゴがその人に話しかける。

「え……？ま、元編集長だけどな……」

どうやらこの人がOREジャーナル編集長のようだ。

「お前は……誰だよ？」

「あ、俺は、時見ソウゴって言います」

「私は、野乃はなです」

「薬師寺さあやと申します」

「野乃……もしかして、お前すみれの……」

「はい！娘です！」

「そっか、大きくなつたねえ〜」

三人が自己紹介を済ませるとソウゴは本題に入り、OREジャーナルを閉鎖した理由を聞きだす。

「何で閉鎖しちゃったんですか？」

「OREジャーナルは読者からの情報を調査するのが売りだったんだよ。」

でも最近の読者つてのは何でもかんでも自分で発信しちゃうじゃない。まあ、時代と俺達のスタイルが合わなくなつたんだろうな……」

「俺達ってことは……もちろん他の人もいたんですよ」

「いたよ……熱い連中達だよ。特にあいつはな」

「あいつ……?」

「城戸真司っていう記者がいてな」

「城戸真司……」

ソウゴ達は久保が言う 城戸真司 へ会いにゲイツ達と合流し、城戸真司の住むアパートへやってきた。

「……か……」

ソウゴ達は二階にある城戸真司の部屋を訪れた。

〈ピンポーン!〉

「城戸さん!」

はながインターホンを鳴らしたが、返事はなかった。

「……留守みたい」

はな達は留守なのかと思っていると、ツクヨミがあるものを見て異変を感じた。

「待つて。何か変……」

よく見ると部屋の窓を閉めており、更に新聞紙で隠していた。

「どけ!」

ツクヨミの感じた違和感を聞いて、嫌な予感を察知したゲイツが無理やりドアをこじ開けた。

「!?」

すると中には倒れてる人の姿があり、窓とか鏡、ガラスには何故か新聞紙が貼られていた。

「まずい！ハリー！お前ははぐたと離れてろ！」

ハリーがはぐたんを抱え離れるとゲイツがチェーンロックも壊し、中へ入る。

「気をつけろ。一酸化炭素中毒の恐れがある！」

「!?」

それ聞いて慌ててソウゴとはなが口を塞ぐと、ツクヨミは急いで部屋のストーブを消した。

「ソウゴ！はな！窓を開けて！」

ツクヨミに言われソウゴとはなは新聞紙を剥がし、窓を開け換気を始める。

城戸は顔に光を浴び、意識を取り戻した。

「やめろ……はがすな……ヤツが来る……」

すると城戸は何かを伝え残し、再度意識を失った。

「城戸さん！城戸さん！」

「早く救急車を呼ばないと！」

急いで救急車を呼び、城戸真司を病院へと急いで運搬する。

しばらくし、ビューティーハリーにみんないるところにソウゴが帰ってきた。

「城戸真司は？」

城戸真司は病院へと運ばれ、さっきまでソウゴが病院へと医師から診断を聞いていた。

「命に別条はないって」

「よかった・・・」

「でも何だって部屋あんな風に・・・」

何故、城戸真司の部屋は新聞などで鏡で塞いでいたのか気になった。

「もう一度事件をさらってみた。あのアナザーライダーが現れた現場の映像」

ソウゴ達は現場の防犯カメラ映像が見る。すると、アナザーライダーが近くの鏡から現れていた。

「鏡から出入りしてたのか！」

「いや、鏡だけじゃない」

映像を見ると鏡だけでなく、車の窓にも入る姿があった。

「姿が映るものなら何でも出入りできるみたいだ」

「これじゃあ、どこから来るか予測出来っこないわね」

何処から出入りしているのかはわかった。だが、鏡からではいつ出てくるか予想が出来ないと悩む。

「そうだ・・・あの城戸真司って記者、何か手掛かり掴んでないかな？ほら、鏡のことに気づいてたんだし」

「彼にも予測できなかったから鏡を塞いだんだらう？」

「そっか・・・」

「そもそもどんな攻撃でも跳ね返すアナザーライダーなんて、どうやって倒したらいいの？」

ツクヨミの言う通り、あのアナザーライダーは攻撃を跳ね返してくる。どっちしても手の内ようがない。

「一つ方法がないでもないが」

「あるの？」

思い悩むソウゴ達に、ゲイツが手があると言う。

「ヤツが俺の攻撃を跳ね返す前に倒す。もちろんその後攻撃が跳ね返ってくるから俺も倒れるけどな」

「何だよ、やっぱ無理ゲーじゃん、それ。攻撃を跳ね返す前に倒せなかったらどうするのやっ。」

「……」

結局、アナザーライダーの事も城戸真司から何も解決せず、1日が過ぎようとしていた。

翌朝、クジゴジ堂の朝……

「おはよう……」

昨日の夜、寝付けなかったソウゴが早起きし、階段から降りリビングへと入る。

「あれ……？今日、ゲイツとツクヨミは？」

いつもなら先にいるゲイツとツクヨミがいなかった事に気付いたソウゴは、叔父に二人が何処に居るのか聞く。

「ああ……ソウゴ君と同じように寝付けなかったって早く出てったよ」

二人も寝付けなくて朝早くから出ていった伝える。

「そっか、ソウゴ君。今日はお友達に会う？あの……こんな……こんな……」

順一郎は黒ウオズの独特な髪型をゼスチャーで表現し、それを見たソウゴはなんとなく誰かわかった。

「いろんな物修理してきたけど、あんな変な物初めてでき。クリーニングしかできなかったんだ。これ」

順一郎がソウゴに黒ウオズから頼まれたものを渡した。

それを見て、ソウゴは目を大きくした。

「これ何なのか面白いといてくんない？お代いらないからさ」

「これは……」

順一郎が渡したのはジオウの絵柄のライドウオッチだった。

しかし、普通のジオウライドウオッチと似てるけど、少し配色が違っていた。

その後、ソウゴはビューティーハリーへとやってきた。

「お、ソウゴ来たか」

既にゲイツとツクヨミ以外はいた。

「それでどうするの？」

「城戸真司って人はまだ眠っているから何の手掛かりもない」

みんなアナザーライダーの対策についてが話していた。

「最初はOREジャーナルの関係者。鏡から出入りするアナザーライダー。攻撃を跳ね返す前に倒す……」

すると、ソウゴが一人ぶつぶつ言いながら考える。

その時、『カラ〜ン』という鈴の音と共にドアが開く音が聞こえた。

「いらしゃ・・・お前」

「黒ウオズ」

ビューティーハリーに黒ウオズが現れた。

「やあ、我が魔王。実にいい日だ」

「ごめん黒ウオズ。今、考え事してるから・・・!」

「つれないなあ。仮面ライダー龍騎と会った気分はどうだいと聞こうと思ったのに」

「仮面ライダー龍騎・・・もしかして城戸真司さんが?」

城戸真司が仮面ライダー龍騎だと知り、ソウゴ達は驚く。

「知らないで会っていたのか。まあ彼も記憶がないから致し方ないか」

「じゃあ、あのアナザーライダーは仮面ライダー龍騎の・・・」

「違う」

「違うって? あれは龍騎じゃないの?」

龍騎が関係しているのなら、あれはアナザー龍騎なのでは無いかと思ったのだが、どうやら違う様だった。

「事はそう簡単じゃない。この本によると、あのアナザーライダーは失われた鏡の中の

存在。まさに倒すことのできない敵と言える。しかし・・・」

「そうなん話だと、記憶が無いなら仮面ライダー龍騎の力は手に入らへんな」

ハリーの言う通り、最初から記憶が無いんじや、仮面ライダー龍騎の力を手に入れる事は出来ない。

「ソウゴ君？」

「どこ行くの？」

すると、ソウゴが椅子から立ち上がりビューティーハリーを出ようとす。

「我が魔王。話を聞かないのかい？」

「このウオツチを使えって言うんだろ？」

ソウゴがクジゴジ堂で預かった、ジオウウオツチと絵柄の同じウオツチを取り出す。

「よく分かったね。さりげなく渡したつもりだったのに」

「さりげなくね・・・」

「あのウオツチ、ウオズさんが用意したの？」

「ああ、それを使えば問題はすべて解決する」

「解決って・・・それでまさか・・・そのウオツチ!?」

「これは・・・俺がオーマジオウになるための・・・」

「!?」

「そうだ。本来なら君がオーマの日と呼ばれる日に使う物だ。オーマジオウになれば倒せない敵はない。だったら今使うべきじゃないか」

それを聞いたソウゴは黙ったまま、扉を開き進んでいく。

「もう一人の私とゲイツ君の企みに打ち勝とうじゃないか。我が魔王、君と私の逆襲の始まりだ」

黒ウオズが逆襲を始めようと言うが、ソウゴはそのまま黙って去っていった。

その頃、ゲイツとツクヨミは海岸の方へと来ていた。

「ゲイツ。あのアナザーライダーを倒す方法って？」

「俺にしかできない方法だ。俺も死ぬかもしれないが……」

「そんなのダメだよ。ソウゴも言ってたでしょ」

「……ひとつ聞かせろ。白ウオズ」

白ウオズと呼ぶと、白ウオズがゲイツとツクヨミの前に現れた。

「嬉しいね。私のことを待っていてくれたのかな？我が救世主」

「例えば、俺がお前の望み通り、オーマの日にジオウを倒すとする。そこにはどんな未来が待ってる。お前が求める世界は何だ？」

「何も変わらない。この時代と同じ世界さ。まるで時間が止まったかのような平穏。そ

れ以外に求めることはあるかい？」

白ウオズが言うところ、ゲイツとツクヨミは、遠くで遊んでいる穏やかな家族を見る。

「時間が止まったかのような平穏か……！」

時間が止まったと聞き、ゲイツは脳裏からあることを思い出す。

未来で一緒に戦った仲間がクライアス社に次々とやられ、世界から時が止まったこと

を――

「それで何か頼みがあるのかい？」

「あのアナザーライダーを倒したい。お前のノート力で」

「いや、このノートはいらないよ」

白ウオズは未来ノートを閉じ、このノートは必要ないと言う。

その頃、城戸真司がいる病院のベットで彼が目を覚ました。

「やっ！」

起き上がった真司は周りにある窓や鏡に怯える。

「あ……あああ……」

急いで起き上がった真司は病室から逃走を図り、鏡の無い階段へと走って行く。

「待ってたよ」

だが逃げる真司の前に白ウオズが現れた。

「君が城戸真司……だね」

白ウオズが真司の顔に手をかざし、手を振ると真司は階段から落ちる。

そのまま病院の外へ逃走する真司だが、突如椅子が自分によつて来て、それにぶつかりこけると、そこへゲイツも駆けつける

「待て！ どうゆうことだ？ 白ウオズ」

「君が言つたんだよ。アナザーライダーを倒したいと」

「こいつが契約者なのか？」

「いや、違う。あのアナザーライダーを倒すことはできない。だがこの男を倒せばアナザーライダーは消える」

「それでいいんじゃないか？」

『ビヨンドライバー！』

白ウオズがビヨンドライバーを腰へと装着した。

『ウオズ！ アクシオン！』

「変身！」

『フューチャータイム！ スゴイ！ ジダイ！ ミライ！ 仮面ライダーウオズ！ ウオズ！』

白ウオズは仮面ライダーウオズへと変身し、城戸真司に襲いかかり、首を締める。

「やめろ！」

『ゲイツ！』

ゲイツも真司を襲うのを見て、腕からゲイツウオッチを外し起動させる。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

ゲイツが仮面ライダーゲイツへと変身し、真司を助けウオズを止める。

「何のつもりだい？我が救世主」

「訳も分からず、罪も無い人間を倒させるか」

「甘いな！」

ウオズはゲイツにパンチを入れる。だが、ゲイツはそれでもウオズを抑える。

「行け！」

「・・・はいっ！」

ゲイツに助けられた城戸真司は急いでここから走って離れる。

「あまり私を失望させないでくれないか」

そのままウオズに攻め込まれるゲイツ。

その頃、ゲイツのおかげで逃走することができた真司がガラスに映った自分を見る。

『お前は今、お前を襲った奴を倒したいと思ってる。お前の願いは俺が叶えてやる。俺は……お前だからな』

鏡から聞こえる男の声がそう告げると、ガラスの中の真司に似た男は消え去る。

その頃、ウオズとゲイツの戦いはウオズが優勢だった。

「ぐわあ！」

「こんなものかい我が救世主」

その時、アナザーライダーが現れウオズを襲撃した。

「貴様は……はああ！」

ウオズがアナザーライダーに攻撃をしかけるがウオズの攻撃は有効ではなかった。

「お前には俺は倒せん。俺は仮面ライダーリュウガだからな」

「リュウガだと？……龍騎じゃないのか？」

「そうさ」

そこへホールが現れる。

「彼はかつて鏡の世界に存在したもう一人の城戸真司。すでに消えた異世界のライダー

さ」

もう一人の城戸真司。そう聞かされゲイツが驚く。

「どんなに時間を遡ろうとも失われた鏡の中に行けないだろう？だから君達にはウオッチも作れない。彼は絶対に倒せないよ」

そのアナザーライダーに対応したウオッチがなければ、アナザーライダーは倒せない。

つまり、リュウガライドウオッチを手にする事の出来ない今、彼らにアナザーリュウガは絶対に倒せないと自信満々に言う。しかし・・・

「どうかな。所詮鏡の中の存在」
ウオズは焦っている様子はなかった。その様子を見たゲイツはさっきの白ウオズの行動を思い出し、彼が余裕を失わない理由を知った。

「そうゆうことか」

「ああ、城戸真司本人を消せば消えるはずだ」

「フハハハ・・・そうはいかないと思うよ。だって世界が違うんだからね。ま、オーマの目を楽しみに待つてる」

ウールが去るとアナザーリュウガがウオズに右手のドラゴンクローを突きつける。ウオズは攻撃を躲すとクイズウオッチを起動させる。

『クイズ！』

クイズウオッチを差し込みドライバーに装填し、レバーを操作する。

『アクシオン！投影！フューチャータイム！ファッシュオン！パッシュオン！クエスチオン！フューチャーリンググクイズ！クイズ！』

ウオズがフューチャーリンググクイズへ変身した。

「君は倒せない敵だが、私は君を倒せる。○か×か？」

ウオズがアナザリユウガに問題を出した。すると、左肩のシオルダーにある×表示が開く。

その時、アナザリユウガの攻撃を受け吹っ飛ばされた。

「・・・×か」

シオルダーの答えから×だと教えられ、今のウオズでは倒せないと知る。やはり、ウオズでも倒すのは困難のようだ。

今度はゲイツが入れ替わるように挑みかかるが、やはり苦戦を強いられる。

「こうなったら・・・」

『フィンニツシユタイム！』

ゲイツは宙高くジャンプし、ライダーキックの体勢に入る。

『タイムバースト！』

ジクウドライバーを回し、タイムバーストをアナザリユウガに放とうした。

「ゲイツ！」

そこへジオウが飛び込んで、ゲイツのライダーキックを放つのを阻止する。

「ジオウ！」

「スタースラッシュ！」

そこへエール達も現れ、エトワールがスタースラッシュを放つ。

「!?？」

だが、またしてもアナザーリユウガが割れた鏡のようなものを生み出し、エトワールの攻撃を跳ね返した。

「危ない！」

「ソウゴ！エトワール！」

エールとアンジュが前に出てジオウ達を守り、攻撃を跳ね返すのは防げた。

「だめだよゲイツ！自分の命と引き替えに、奴を倒そうとしたよね!?？」

「・・・」

「そんなのは俺が許さない」

ジオウがエール達と前に出てアナザーリユウガを向く。

「それくらいだったら・・・」

黒ウオズが授かった新たなジオウになるウオツチを出す。

「そのウオツチは・・・？」

「ソウゴ！それ使ったら……」

「大丈夫……覚悟は……ある」

そう言つて、そのウオッチを起動させようとする。

しかし……

「……何も起きない？……ええっ？そんな……！」

どういうわけか、ウオッチは起動しなかった。

その隙にアナザーリュウガはその場を撤退しようとした。

「待て！」

それを追いかけてしようとしたジオウがアナザーリュウガと共に鏡の中の異世界に突入してしまう。

「!?ジオウ!!?ジオウ!!?」

「ソウゴ君!ソウゴ君!」

「ソウゴ!返事をして!」

ゲイツ達は鏡を叩いてジオウに呼びかける。

そして、鏡の中へと突入したジオウは……

「ん……ん……」

目を覚ますと変身が解除され、さっきいた場所にいた。

「あれ？アナザーライダーは……」

周りを見回すとアナザーライダーはいなかったがしかし、よく見てみると町の景色や文字が全部反対向きに見えた。

「何……」

「起きた……」

ソウゴが声の聞こえた横を見てみると、そこには一人の黒い服を着た女の子が立っていた。

「君は？格好がなんかプリキュアみたいだけど……」

「私は……のぞ……み」

「のぞみ？」

「私は……この世界でしか……生きれないプリキュア……」

少女はダークドリームと名乗る。

「ダーク……ドリーム。俺は時見ソウゴ。仮面ライダージオウって言うんだ。よろしく」

♪

ダークドリームと名乗る少女に、いつものようにソウゴは手を差し伸べる。

「なんか……あなた、あの子に似てるわね」

「あの子？よくわからないけど、ここどこかわかる？」

「ここは、あなたの世界とは反対の世界・・・いわゆる——」

「鏡の中の世界だ」

するとダークドリームが言ってる間に、別の声で鏡の世界と聞こえ、そちらを振り返る。

「俺？」

そこにはいつもよりふて腐れた感じのソウゴがいた。

「もしかして・・・」

「ちよつと、そいつは・・・」

ダークドリームが何かを言おうとしてるのにソウゴは聞かず、もう一人の自分に話しかける。

「ねえ、まさかまた5日後の俺とかじゃないよね？」

以前、自分より少し先の未来から来た自分と遭遇したことがあったので、今回もそれと同じと睨む。

「俺はお前だ。鏡の中のな」

暗い声でもう一人のソウゴが返す。

「まあ何でもいいや。とにかく君は俺って事ね。だったら協力してよ。アナザーライ

「ダー追うよ！」

もう一人の自分と一緒にアナザーライダーを倒そうと持ちかける。

「ん？」

すると、ソウゴの腕を振り解いた鏡の中のソウゴはソウゴを殴る。

「ええー？」

「だから、言ったでしょ。あいつは違うって……」

「どういう事……」

「お前は俺だ。だがお前は俺ではない」

『ジオウ！』

そう言うとき鏡の中のソウゴは左手で左右反転したジオウウオッチ起動して、ドライバーのD、3スロット側に差し込む。変身ポーズも自分のとは逆だった。

「変身」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

ドライバーを回すと、ジオウが変身する時とは違い、エコーの掛かった低い音声がその地に響いた。

そして鏡の中のソウゴは、マスクのライダーの文字とかも逆読みになった仮面ライダージオウへとなった。

「なんか違う気がする」

違和感があるジオウを見て、危険を感じたソウゴもジオウオウオッチを起動させる。

『ジオウ！』

「変身！」

ウオッチをドライバーへと装填し、そのまま回転させる。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

ソウゴはジオウへと変身した。

「はああ！」

「ふうん！」

そのまま両者はぶつかり合い、ジオウ同士の戦いが勃発した。

次回！Re・HUGっとジオウ！

第20話 王の凱旋！二つを統べる王 2018

第20話 王の凱旋！二つを統べる王 2018

「この世界に『不変』というものは存在しない。

そしてそれを望む者は、無知なる者かうつけしか居ない——」

豪華な壁紙と大理石の床、煌びやかなシャンデリアが吊るされた、寂しい位にだだっ広い部屋を中心に、純白のテーブルクロスが敷かれた机の上に置かれたアツプルパイを手を持ったフォークで切り分けながら、オーマジオウこと未来の時見ソウゴは対面の方で座っている茶髪の青年にそう語る。

「何故なら人は、どんな形だろうと必ず『変化する』生き物だからだ。

例えその者がどんなに望んでいなくても、その者がどんなに望んでいても、良い方向にも悪い方向にも変化していく。ただし、それはこの世界を生きる全ての生命体にも言えることだが……」

「うん、そうだね。勿論、俺とアンタもだけど」

「その通り。」

……だがしかし、問題は『その変化』に人が対応できるかどうかだ」

そうやって未来のソウゴは、フォークで刺したアツプルパイを口に運ぶと、手元に置

かれた紅茶の入ったテークアップを手に持ち、喉を潤しながらアップルパイを流し込む。「その変化に耐えることが出来た者には、これからの世を生きる為に必要な力を得ることが出来る。」

一方で、変化に耐えることの出来なかつた者は「時代」という名の波に飲まれ、いずれ滅びる。かの恐竜や古代文明などがそうであつたように……

……つまらぬ質問をするが、君は若かりし日の私がその「新たな変化」に対応出来ると思ふか？」

未来のソウゴにそう問いかけられた茶髪の青年は、殆ど食べられたアップルパイの残りを口の中に放り込み、紅茶を飲み干して息を吐くと「大丈夫なんじゃない？」と答えた。

「確かに彼は、この世界を制するには余りにも若すぎる。」

……でもね、彼には多くの仲間がいる。俺やアンタ以上の仲間が……」

そう言つて青年は椅子から降りて立ち上がると、この部屋の出口である扉へ向けて歩み始める。

「確かに彼があつた力を得たらきつと、何人かがその力に恐れ、彼の下を離れていくだろう……」

だけど彼が歩みを止めず、その困難の壁を乗り越えることが出来ればきつと、『仮面ラ

イダージオウ』としての器を——『仮面ライダージオウの世界』と『HUGつと！プリキュアの世界』が混ざり合った、この狂った世界を統制するに相応しい王になれると、俺は信じている」

それだけ言うと、青年は扉を閉めて未来のソウゴの視界から外れた。

そして残った未来のソウゴは、今どういう状況なのかを理解するために、若かりし日の自分の居る時代——2018年へと意識を集中させ始めた。

アナザーリュウガと戦っていたジオウは鏡の世界……ミラーワールドへと放り込まれ。そこでダークドリームを名乗る少女ともう一人の自分と会い、ミラーワールド内のステージ上で二人のジオウによる対決が始まった。

「くうー！」

二人のジカンギレードがぶつかり合う。

そして剣のぶつかり合いは鏡像のジオウが制し、彼の持つジカンギレードによる攻撃によってジオウが倒れる。

「使わないのか？ ウオズに貰ったろ。最強の力を！」

「……っ？？」

そう言われたジオウは、ウオズから渡されたオーマジオウになると言われるウオツチを取り出し、見つめる。

「ほらね。そういうところ、お前が聖人君子じゃない証だ」

「そんな事……俺は……」

ジオウは否定するが、オーマジオウの力に揺れ動く彼に対し、鏡像のジオウはそれを見ながら嘲笑う。

「最高最善の魔王になるか……本当のなりたいのか……?」

「……」

「最高最善の王になるなんて、お前には無理なんだよ。ハハハ……」

嘲笑う鏡像の自分に対し、ジオウは何をどう言葉を返せばいいか分からず、何も言えなかった。

「アナザーリユウガを倒すには、オーマジオウになるしか手はない!お前がどうするか、見せてもらう」

『フィンツシユタイム!』

そう言うともミラーワールドのジオウがジクウドライバーを回転させ、高く飛び上がるとジオウヘライダーキックを放った。

『タイムブ레이크!』

「うわああああ!!?」

鏡像の世界

ジオウのライダーキックを受けたジオウは、なすすべも無くステージの外へと吹き飛ばされた。

その頃現実世界の方では、城戸真司を病室へと戻したゲイツ達はビューティーハリへと戻っていた。

「ソウゴ、帰ってこないね……」

「私達もあの中に飛び込んでおけば……」

「ソウゴもだけど、あのアナザーライダーをどうにかしないと……」

「そのライダーを捕まえて、ソウゴを連れ戻させるのはどうや?」

「無理だよ。捕まえようにもあいつは鏡や映るものがあれば、それを使って逃げられるんだから」

「せやたな……」

「ソウゴ君……」

ハリーが自身の作戦ではソウゴを助けられないし、アナザリユウガは倒せないと落胆している横で、さあやはミラーワールドに飛び込んでいったソウゴの心配をしていた。

「ゲイツ?」

するとゲイツが椅子から立ち上がって、外のテラスへと向かう。

「ゲイツ、大丈夫?」

そこにツクヨミとはぐたんを抱えたハリーが付いてきた。

「俺は……ずっと、ジオウとクライアス社。倒すことを考えていた……」

しかし、その先の未来のことを想像していなかった……」

「確かに……私もそうだった……」

「俺もや……そんな事考えもしなかった……」

「敵を倒すためなら無辜の人間を犠牲にするのもありだと思った。一瞬な……」

『所詮、鏡の中の存在』

『そういうことか』

『ああ、城戸真司本人を消せば消えるはずだ』

その時、白ウオズが真司を襲った時のやりとりが、ゲイツの脳裏によぎらせ、彼の考えに賛同してしまった自分を思い出した。

「そんなことを考える人間には、平穏な未来を思い描く資格はない」

「ソウゴならばそんな風に考えへんわな」

「……ねえ、今だからこそ聞かせて。ゲイツはあのソウゴが、本当に私たちの知るオーマジオウになると思う？」

「俺は……あいつを……」

ゲイツは、ソウゴがオーマジオウになるか、ならないか、その答えを言おうとしていた。

その頃、ミラーワールドでは。

「うっ！ うっ……ここは……？」

鏡像のジオウによる攻撃を受け、気絶していたソウゴが目を覚ました。

「気がついた」

目を覚まして首を回すと、どこかの公園のベンチでダークドリームが看病してくれた事に気付く。

「ありがとう……助けてくれて」

「なんとなく助けただけよ……これも、あの子の影響かもね……」

ダークドリームが最後の方だけ小さく呟いていると、ベンチから起き上がったソウゴは黒ウオズから貰ったウオッチを取り出す。

「オーマジオウの力……」

「怖いのか?それを使うの」

「……………そうかもね」

ダークドリームがソウゴの持つウオッチを横から覗きながら聞くと、ウオッチを見ながら使うのが怖いと間接的に答える。

「…まあいいわ。それより、あなたは元の世界に戻りなさい」

「えっ?でも、どうやって……」

戻れと言われても、ソウゴにはどうやったたら戻れるのかわからなかった。

すると、ダークドリームが指を鳴らし、それと同時に近くの鏡から空間のようなものが開いた。

「これって……」

その頃、とある会社の女子化粧室。

「なんか最近、毛穴が開いてる気がするのよね」

「いい化粧水教えてあげる」

「食習慣、変えたほうがいいんだって。昔、OREジャーナルで読んだ。ブロッコリーとか……」

「何、OREジャーナルって？」

「古い！」

2人のOLは先に出て行く、残ったOREジャーナルの、元フォロワーだったOLは鏡を見る。

「えっ——きやあああああああ！」

すると鏡からアナザーリユウガが現れ、襲われてしまう。

そんなことを知らぬゲイツやはな達は、クジゴジ堂へやってきた。

「おかえり〜」

「ソウゴは？」

「まだ帰ってこないんだよ。今日忙しいからさ〜お使い頼もうと思つてただけど……あ、どっちか行つてくれる？」

順一郎はゲイツとツクヨミにお使いを頼もうとする。

〈キイイイイイイン…キイイイイイイン…〉

すると金属を金属で引つ掻いたような、あの独特の音声が鳴り響いた。

「何この音……」

はな達は独特の音が鳴るガラスの方を振り向く。

すると、飾り戸棚のガラスからソウゴが飛び出てきた。

「ソウゴ君!?」

「えっ、えっ……えええええ!?」 鏡から出てきた——!」

鏡から現れたことにはな達は驚いていると、順一郎はソウゴの姿を確認した。

「お帰りソウゴ君。で……どっから出てきたの?」

鏡から出てくるところを見てなかった順一郎がソウゴに近寄ると、どっから来たのだと聞く。

「鏡の世界かな……フッフ……」

「そうなんだあ。やっぱソウゴ君違うね。」

……じゃあ、仕方がないから叔父さん買い物行くね」

鏡の世界から来たと答えたソウゴを見て、順一郎は疲れているのだと思い、気分転換に自分でお使いに行くと言っていった。

すると、ルーラーが鏡の戸棚の前へ移動する。

(鏡から現れた……アナザーライダー……おそらく、門矢士から得た情報によるものと推定……)

ル鏡の戸棚とこれまでの情報により、門矢士が教えた事をしているのだと推測した。

(ウールの仕業ですね……)

彼女がそんなことを考えていると、ソウゴとゲイツがあのアナザーライダーとミラーワールドについて語り出した。

「鏡の中に別の世界が？」

「既に失われた異世界の仮面ライダー、それがやつの正体か……」

「それじゃ、絶対に倒せない……」

「ああ。リュウガウオッチを手に入れることはできない」

「そもそもあいつはどんな攻撃をしても、鏡みたいに跳ね返すしね」

アナザーリュウガを知るとますます攻略が難しいと頭を悩ませる。

「ねえ……ゲイツがやろうとした方法って何なの？」

ソウゴが何か手があるような事を言ってたのを思い出し、ゲイツに問う。

「俺のタイムバーストにはわずかだが、タイムラグが生じる。」

それを利用すれば、奴が攻撃を跳ね返す前に倒すことが出来るはずだ」

「そうゆうことか……」

僅かなズレならあのアナザーリュウガを倒せるかもしれないと思い始める。すると、ルールが近づいてくる。

「しかしそれは、結局は跳ね返って、あなたが同じ攻撃を受けるのでは？」

「他に方法がないなら、俺がやるしかない！」

ゲイツはそう言うと、クジゴジ堂を出て行きアナザーリユウガを探しに行く。

「ツクヨミ。何でゲイツはそこまでアナザーリユウガを倒そうとするの?」

普段のゲイツがあんなに必死になるのが珍しくツクヨミに尋ねる。

「自分を許せないからだと思う……」

「ゲイツが……?何で……?」

「白ウオズが、アナザーリユウガを倒すために城戸真司を犠牲にしようとした。ゲイツは一瞬でも、それに同調しまったから……」

「考えただけで、自分が許せないなんて……」

「多分……ソウゴの影響」

「俺の……?」

「以前のゲイツなら、敵を倒すための犠牲は仕方ないと思っただけでしょうね。」

でも、ソウゴはいっただってみんなを救おうとするでしょう?」

例えば自分が犠牲になったとしても。そんなソウゴに、知らず知らずにゲイツも感化されたんだと思う」

「俺は……」

「私もよ。あなたが最低最悪の王になるなんて思えない。」

私はオーマの日なんて心配してない。

ソウゴがオーマジオウになる日なんて、来るわけないから
そう言うのとツクヨミはゲイツの後を追いかける。

「ゲイツばかりに無理させないよ！」

「あたし達も行こう！他に手があるはずだよ！」

はな達もツクヨミを追おうと立ち上がる。

「ソウゴ君？」

すると、ソウゴが座ったままで動く気配がない事にさあやは気付く。

「ごめん……先に行つてくれる？」

「えっ……？わかった」

言われた通りにさあやも、はなとほまれを追つてクジゴジ堂を出る。

「…行かないのですか？」

クジゴジ堂に残つたルーラーが、ソウゴは行かないのかと尋ねる。

「……………俺は……」

彼女の問いに言い淀んでいるとそこへ、柵のガラスに鏡の中のソウゴが現れた。

『偽善者め……いつもみんなを救おうとしている？お前が？』

その声が、ソウゴの心に響きわたる。

「俺はいつも思つてるさ！すべての民を救いたいって……」

『お前はゲイツにアナザーライダーを倒す方法を話させ、そしてそれを実行させようと仕向けた!』

「違う!俺はゲイツを救いたいと思ってる…!」

突然耳を押さえながら叫び出したソウゴにルールーは驚き、誰の質問に応じたのかと辺りを見渡す。しかし彼女の視界には、何も映っていないかった。

『お前はそのためにもオーマジオウになるウオッチを使おうとしてるな?ゲイツをだしにしてオーマジオウになろうとしたんだ!』

「……違う」

その言葉を聞き動揺しながらも、必死に否定するが…

『お前の心と言葉は裏腹だ。口では綺麗ごとを言っているけど、心は真つ黒なんだよ!』
「違う……違う……!」

時計の鏡面にも写って出てくる鏡像のソウゴが、心の中でソウゴを精神的に追い詰めようと非難の言葉を語り続ける。

『違わない!お前はやはり、最低最悪の魔王になる男だ…!』

銀色のジオウライドウオッチから金色のウオッチが現れるが、一瞬の間に消えてしま
う。

『認めろ。お前は俺だ!』

あらゆる時計の鏡面に映りながら、それだけ言い残すと、鏡像のソウゴは消えていった。

「俺は……偽善者なのか……」

鏡の世界の自分に語り掛けられた言葉が、ソウゴの心に忌まわしい位に響いていた。

その頃、ゲイツはアナザーリユウガと戦っていた。

「クソ……」

しかし、ゲイツの攻撃を同じ威力で返され苦戦していた。

「ゲイツ！」

「お前ら……」

「私達も手を貸すよ！」

そこにはな達三人が現れ、プリハートとミライクリスタルを取り出した。

「「ミライクリスタル！ハート、キラっと！は〜ぎゆう〜」」

ミライクリスタルをセットし、三人の体を光が纏い姿をかえた。

「輝く未来を〜抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

三人が変身を完了し、アナザーリユウガへ同時に仕掛けるが、やはり攻撃は跳ね返され苦戦を強いられていた。

「厄介だな……」

「そいつも厄介だが、君も厄介だね。我が救世主」

そこへ白ウオズが現れた。

「またしても、私に頼っておきながら自分一人でそいつを倒そうとするとはね」

ゲイツは白ウオズのノートの力で、アナザーリユウガと遭遇させたようだ。

『ビヨンドライバー!』

『ウオズ! アクシオン!』

「変身」

『スゴイ! ジダイ! ミライ! 仮面ライダーウオズ! ウオズ!』

仮面ライダーウオズとなり、アナザーリユウガと交戦する。

「これでどうかな?」

『シノビー!』

ウオズがシノビウオツチをドライバーへと装填した。

『誰じゃ? 俺じゃ? 忍者! フューチャーリングシノビー! シノビー!』

ウオズはフューチャーリングシノビーへフォームチェンジし、そのまま飛んでの回し蹴

りを炸裂させる。

そのまま高く舞い上がり、エネルギー状の手裏剣攻撃を浴びせていた。

「アアアア！」

だがアナザーリュウガがウオズの放った手裏剣の攻撃を跳ね返し、宙にいたウオズに直撃し、ウオズが落下する。

「実に厄介だ！」

苦戦をしいられていたゲイツ達にツクヨミはソウゴへ連絡する。

「ソウゴ、すぐ来て！アナザーリュウガとの戦闘に入った！」

『…………いや、俺は城戸真司に会いに行くよ』

電話越しに城戸真司に会いに行くと言う。

「城戸真司…………どうして？」

『彼は無関係な被害者じゃない。仮面ライダー龍騎なんだから』

「えっ？」

「どうした？」

ソウゴの口から城戸真司が仮面ライダー龍騎だと聞き、ツクヨミが驚く。

その頃ソウゴは、城戸真司がいる病院へと来ていた。

「待ってください」

するとその後ろから、ルーラーが彼の下へと歩んできた。

「今、はな達が戦っているのにあなたは行かなくてもいいのですか?」

「…知りたいんだ。城戸真司はもう一人の自分をどう思っているのかを…」

彼女の疑問にそう答えたソウゴは病院へ入り、真司の病室へやって来た。

「城戸さん……」

「君は……」

「俺は時見ソウゴ……」

「あんなの……鏡の世界の自分を、どう思っているのかを聞きたいんだ」

ソウゴは直球的に、真司にもう一人の自分をどう思っているのかを尋ねる。

「俺は何もしていない!」

「……いや、そうとは言えないか」

真司は鏡を隠していたチラシ等の紙を剥がす。

「えっ?」

「これは……」

ソウゴとルーラーが鏡を見ると、真司の姿が映ってなかった。

「鏡の向こうの俺が怪物になって暴れまわってる」

「うん。そして彼が襲ってるのは、OREジャーナルのかつての読者たち。

……でもなんで読者を襲うの？」

「恨んでるからだろうな。あいつらがずっと支持してくれてれば、OREジャーナルは潰れなくて済んだって」

「それってただの逆恨みなんじゃ……」

「そう。俺にはそんな馬鹿な恨みなんかないよ、表向きはね。」

でも心のどこかでは、やっぱりそんな情けない考えを持ってしまっている

真司はもう一人の自分が、自分の情けない一面の全てだと話す。

「多分……鏡の向こうの俺が本当の俺なんだ。」

そんなの認めたくない。でもちゃんと認めなきゃ事件は終わらないし、俺も……一歩も先へ進めないだろうな。

そうしないと俺は……鏡にも映らない。空っぽのまんまだ」

「空っぽのまま……」

真司の話を聞いたその時、ソウゴはアナザークウガ鬼火との戦いの後で桐ヶ谷晴夜と話した事を思い出した。

『——ねえ、晴夜のあのマジエスティビルドってどうなつての？』

アナザークウガ鬼火で見せたマジエスティロードフォームを見て、何かと聞くと晴夜はロイヤルとシヤドウのボトルを見せた。

『このボトルは人の心の光と闇なんだ……』

『どういうこと?』

『ジコチューっていう敵と戦っていて思ったんだ。』

人には光と闇がある。誰もがその両方を持つてるんだ……』

『俺は闇なんかに負けないよ!絶対に』

『そうかもな……でも、その両方を受け入れて認め合う時、本当の強さが生まれるんだって、俺は思うんだ』

「——そういう事か……」

——そして今、その時のことを思い出したソウゴは、黒ウオズからのウオッチを見つめる。

「(晴夜は、確か自分の中にある光と闇を受け入れた……なら、俺は……) 認める覚悟……」

その様子を窓の鏡から鏡像のソウゴが、ウオッチを見つめるソウゴを見てニヤリ笑う。

「ヤアアアア！」

「アアアアア！」

エールがアナザーリユウガへ向けて、キックとパンチによる攻撃を仕掛ける。

だがアナザーリユウガは攻撃を受け流し、左手のドラゴンクローでエールを吹き飛ばした。

「エール！」

吹き飛ばされたエールにツクヨミが駆け寄る。

「スターストラッシュ！」

今度はエトワールがスターストラッシュを放った。

しかし、アナザーリユウガに星々が当たった次の瞬間、鏡の様な歪みからスターストラッシュが跳ね返ってきた。

「フレ・フレ・ハートフェザー！」

アンジュがバリアを張りスターストラッシュを防いだが、アナザーリユウガはバリアの後ろで怯んでいた二人に襲い掛かり、攻撃を仕掛けた。

「きやああああ!!？」

「アンジュ！エトワール！」

「……どんな攻撃もプリキュアの攻撃すら跳ね返すなら、この手はどうだ？分身の術！」

プリキュアの力でもアナザーリユウガに通用しなかった。

それを確認したウオズが6人へ分身し、一斉攻撃を放つ。

「アアアア！」

だがやはり、6人の分の攻撃が本体へと戻ったウオズへ跳ね返ってきた。

ウオズが倒れるとゲイツが起き上がった。

「こうなったら、あの手を使うしかない」

「まさか、我が救世主！」

「ゲイツ！ダメー！」

ツクヨミの静止も聞かず、ゲイツは奥の手を使おうとアナザーリユウガへ再度挑む。

その頃、ソウゴは近くのビルのガラスに写る自分を見ると、そこへ鏡像のソウゴが振り向く。

「何をする気ですか？」

ルールーは何をするのかわからずにいると、ソウゴはオーマジオウになるライドウオッチを掲げる。

『ようやく受け入れたか。最低最悪の魔王になる自分を』

「これは……」

鏡像のソウゴを見て、ルーラーが少し驚く。

「最低最悪の魔王なんて、なる気はないよ。俺は最高最善の魔王を目指すよ」

『また綺麗ごとで済ませるつもりか』

ソウゴの鏡像がまた綺麗ごとだと呆れると、ソウゴはさつきまでの苦々しい表情から一変し、少し複雑そうながらも笑顔で鏡像の自分を見つめる。

「そうじゃない。俺には最高最善の面もあるし、最低最悪の面もある。」

口で言う綺麗事も、それとは裏腹に、心で思ってる黒い事も、両方ほんとなんだ」

『何……?』

「君は俺だ。俺は君だ。それを認めなきや、未来なんてやってこない。そして、君を認め信じ合う事が必要なんだって」

ソウゴは真司の言葉と晴夜の言っていた事を聞き、自分の闇の部分も受け入れる覚悟を決めた。

『未来が怖くないのか? オーマの曰が……?』

「怖いさ。怖いからこそ、俺は未来の俺に賭けてみたい……」

それで、もしダメだったとしても……ゲイツがはなやさあや、ほまれ、ツクヨミにハリーが俺を止めてくれる!」

『仲間との信頼か……』

「仲間でもあるし、友達だから」

すると、鏡像のソウゴが金色のライドウォッチを作り出した。

『使え!』

金色のライドウォッチを鏡から出し、ソウゴへと渡した。

「これって……」

『——光と闇。過去と未来。』

2つの世界を統べるのが、真の王だ』

2つのウォッチが1つに合わさり、『ジオウライドウォッチⅡ』が完成した。

そして、共鳴するように鏡像のソウゴもソウゴと融合しようとした。

「これは……」

一方、アナザーリユウガと戦うゲイツは、必殺技を発動させようとジクウドライバーを回す。

『フィニッシュタイム!』

「やめてゲイツ!」

「あかんで!」

『タイムバースト!』

僅かにタイムラグ発生し、宙高く飛び、ライダーキックをアナザリユウガへ炸裂した。

しかし、アナザリユウガは立っていた。

「そんな……」

「効いていない」

「タイムラグでも、だめなんて……」

タイムバーストで大ダメージを与える事はできたようだが、それでも倒し切れていない。

そして、タイムバーストの攻撃がゲイツへと跳ね返された。

「うわああああ!!?」

タイムバーストの威力が、そのままにゲイツに直撃した。

「あ………みんな………ごめん………」

ダメージにより変身解除したゲイツから零れたゲイツウオッチが砕け散り、ゲイツが倒れる。

「ゲイツ!」

「我が救世主!」

ツクヨミ達は急いでゲイツに駆け寄り介抱する。

「ゲイツ!……ゲイツ!」

しかしツクヨミ達の介抱も虚しく、ゲイツは白目剥いて息だえる。

「ゲイツっ!ゲイツーッ!」

ゲイツが死んだ。その事実は、ハリーとツクヨミを絶望させ、エール達を放心状態にするには余りにも充分すぎた。

するとそこへ、後ろにルーラーを連れたソウゴが現れた。

「ソウゴ!ゲイツが……ッ!」

「——やっぱりこうなるよね」

だがゲイツが死んだというのに、ソウゴはすぐく落ち着いた。

「でも、これは俺がすでに見た未来だ」

そう言って、新たなジオウライドウオツチを掲げる。

——すると空間が割れ、全員の意識が飛んだ。

——そして、ゲイツがアナザーリュウガに向けてタイムバーストを放とうとしていた。

『フィニッシュタイム!』

「やめてゲイツ!——あれ?」

ゲイツを静止するツクヨミだったが、何かが可笑しいことに気付いた彼女は、余りの情報量の多さに思考を停止させた。

「これって、どういうこと……?」

「この場面、先も……」

「時間が、戻った……?」

エール達もデジャブだと思ったが、確かにこの光景はさつき見たものと全く同じだった。

『タイムバースト!』

そして此処も同じように、ゲイツがキックを放とうと飛び上がり、アナザーリュウガへキックを喰らわせようとする。

……違うことがあるとすれば。ゲイツのタイムバーストの特攻はキックの文字が消えことで、必殺技は失敗に終わった事だった。

「は……何だ、今のは?」

「まさか、時間が逆転したのか?」

仮面ライダーウオズは時間が逆転したと推測し、その事実を聞いた全員が驚く。

「見事だ！我が魔王……!!? これぞオーマジオウの力っ！」

そこへ黒ウオズが嬉しさを隠しきれない表情で現れ、仮面ライダーウオズが黒ウオズに近づきマフラーを掴む。

「お前の企みか？黒ウオズ!!?」

「……いや、俺の選択だ！」

そこへ、ソウゴとルールーが現れると、ソウゴが新たなウオッチを手に掲げる。

「それは……」

黒ウオズはそのウオッチを見て口元を緩めると、ソウゴはウオッチを起動させた。

『ジオウ！Ⅱ！』

「表と裏……」

ジオウウオッチⅡを見つめながら、ウオッチの側面にあるダイヤル——「スプリットリユーザー」を回すと、其々金と銀、二つのジオウの顔が現れた。

「過去と未来……二つの世界を統べるウオッチだ」

そう言つてウオッチを掲げると、ウオッチが二つに分かれ。それらをそれぞれ、ジクウドライバーの左右のライドウオッチ装填スロットに装填した。

すると、ソウゴの後ろから二つの時計のエフェクトが出現。

その時計はまるで、今を生きる時代現代と、最低最悪の魔王たるオーマジオウが存在する

時代^{未來}。その二つの時空を制しているかのようにも見えた。

「変身！」

『ライダータイム！』

ドライバーを回すと、二つの時計は左右対象に止まり、ソウゴの体を二つ分の時計バンドエフェクトが纏う。

『仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

「新しい、ジオウ……」

「ソウゴ君の、新しい姿……」

その姿は、頭部の針やバンドなどの時計のモチーフが2つ分になっており、『ラ』と『ダ』の複眼にはそれぞれ10時と2時を表す時計の針が左右対称的に設置され、太ももにまで伸びた二つの時計バンドは前垂れ状に、肩部や首回りにはオーマジオウを思わせる金色が追加されていた。

「善も悪も、光も闇も、全て受け入れる！」

その力で俺は、未来を切り開く！」

そう叫びながら、新たな姿になったジオウが歩み寄りながらアナザーリュウガへと向かう。

何やら危機感を感じたアナザーリュウガが、ジオウの下へと走ろうとする。

「——王の凱旋である!」

だが黒ウオズが二人の間に出てそう叫ぶとアナザールリュウガが静止した。

「祝え!全ライダーを凌駕し、時空を越え、過去と未来をしろしめす時の王者!

その名も仮面ライダージオウII!新たな歴史の幕が開きし瞬間である!」

「おお……ねね、久しぶりだね?ふふっ」

「……」

凶星かのように黒ウオズが黙り込むと、ジオウの下から少し離れる。

「では、我が魔王。存分に戦われよ」

「ああ!なんか行ける気がする!」

新たなジオウ——ジオウIIとなったソウゴはアナザールリュウガと戦闘を開始した。

最初にアナザールリュウガの攻撃を腕で受け止め、重厚感あるパンチで攻め立てる。

さらにジオウIIは、ドライバーからジオウの顔のついた新たな武器、『サイキョーギレード』を出した。

「はあ!」

サイキョーギレードの斬撃、アナザールリュウガへ突きで攻め立てる。

『ライダー!ライダー斬り!』

アナザールリュウガは跳ね返そうと鏡を出す、ジオウIIの攻撃によって鏡が粉碎して

しまう。

「凄い！」

「それだけじゃないよ」

「ソウゴの攻撃が跳ね返らない……」

「攻撃が強すぎて、跳ね返せないんだ」

「つまり、アナザーリユウガの力を超えてることや……！」

戦況はジオウが完全に押していた。

だが、アナザーリユウガはドラグクローにオーラを纏い、攻撃を仕掛けようとする。

すると、ジオウⅡのD，9スロット側にある金色のウオッチが光り、両目にかかる時

間の針——『バリオンプレゼンス』のアンテナ2本が回転した。

「お前の未来が見える」

針が回転していると、アナザーリユウガの次の行動が——未来が見えた。

ジオウⅡはあっさりアナザーリユウガの攻撃を回避し、カウンターの一撃を決める。

そして再び針が周り、再度アナザーリユウガの攻撃を未来予知。今度はアナザーが攻

撃を出す前に一撃を決める。

「仕方ない……」

アナザーリユウガが鏡のある方へと走る。

「逃さないよー!」

『ジオウサイキョウ!』

ジオウIIがサイキョーギレードの側面にあるスイッチを操作すると、サイキョーギレードのジオウのフェイスの文字が“ライダー”から“ジオウサイキョウ”へ変わった。

『霸王斬り!』

そのままガラスから鏡の世界への逃走を図るアナザリユウガに、強烈な一撃を与える。

その攻撃の余波で周囲のガラスが全て割れ、逃走できない状況へ追い込んだ。

『ジカンギレード!』

『サイキョーフィニッシュタイム!』

そして、ジカンギレードのケンモードとサイキョーギレードを合体させる。

「トドメだ!」

合体した二つのギレードの刀身にエネルギーが纏われていく。

『キングギリギリスラッシュ!』

「オリヤヤヤヤ!!?」

ギレードの刀身から伸びるエネルギー刃に『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上が

ると、そのまま振りおろしアナザリーユウガを両断した。

その攻撃はアナザリーユウガを変身解除させ、その影響でアナザールウォッチも砕け散り、鏡像の真司が倒れこむ。

「城戸真司は、あんたを受け入れてるよ。俺も裏の自分を受け止めた。後はあんたが、城戸真司を受け止める番だ」

「……」

ソウゴが近づくと、鏡像の真司に城戸真司は受け入れてくれると話す。

それからしばらく経つと、城戸真司が釣り堀で釣りをする大久保編集長の元を訪れる。

「どうですか、釣れますか」

「真司」

「編集長。お久しぶりです」

「俺あ、もう編集長じゃねえんだ。俺達は負けたんだ、時代に」

「俺達は負けた……」

真司は大久保の隣に座る。

「でも、それを受け止めれば、先に進めるんじゃないですか？」

その言葉を聞いて大久保は真司を見る。

「真司……ついてきてくれるか?」

「もちろんですよ!編集長!」

真司は大久保に手を差し出す。その手をがっちり握る大久保は椅子から立ち上がりお互い笑い出す。

「お前気づいてるか。今のお前、めちやくちやいい顔してるぞ!」

「ほんとですか?」

「ほんとだよ、見てみろ!」

真司は釣り堀の中にある水面を覗くと、そこにはいつもの自分の姿が映っていた。

「……いやいや。編集長もいい顔してますよ!」

「そうか?」

「ほらほら!」

二人が笑いながら話し合っている。

そんな彼らを、ソウゴがよかつたと呟きながら見守っていると、ソウゴは自身の姿が映る鏡を見る。

「ありがとう」

鏡に向かって礼を言うと、そこにはダークドリームが映っていた。

『鏡の自分を受け入れるなんて……あなた、覚悟は決まったの?』
「うん」

ソウゴは彼女にジオウオツチⅡを見せる。

『そう。じゃあ、私もこれで』

ダークドリームがその場から去ろうとする。

「ねえ。君の名前、本当はなんて言うの?」

『……夢原、のぞみ……その子の鏡よ……』

「夢原のぞみ……こっちいるその子に会ったら、伝えておくよ」

『……じゃあ……』

ダークドリームはそのまま、ソウゴと一緒に映っていた鏡から消えていった。

その夜、ビューティハリヘゲイツ、ツクヨミ、ハリがジオウⅡの力を手に入れたソウゴについて話していた。

「ソウゴが時空を超え始めた。あの強い力を私達は知っている。あれはオーマジオウの力よ」

あの時使ったジオウの力……オーマジオウと同じ「時を操る力」を目の当たりにしたツクヨミは危険視し始めていた。

「俺の責任だ。今度ばかりは俺が奴をオーマジオウの未来へと導いた」

「だとしても……時間や人の命を弄ぶことは許されることじゃない!」

「……」

「彼は自分自身を受け入れただけ。」

元々ソウゴにはオーマジオウになる素質はあった。そのことに変わりはない。哀しいけど、私達が取るべき選択は……見えたね」

——ソウゴはオーマジオウになるとは思えないとかいつてなかったっけ？

天の声はそう思ったが、口に出す訳にもいかないのです、直ぐに頭の隅に捨てて置いた。

「……俺はまだ、ソウゴを信じるで」

「ハリー……」

ツクヨミはソウゴを倒す決意を固めたが、ハリーはまだソウゴを信じると二人に話す。

「確かにソウゴがやったことは許せんことやが、結果的にはゲイツを助けたんちゃんうか?」

「……」

「悪いが俺はソウゴを……オーマジオウにならないと信じるで……」

その言葉を最後に、ハリーはビューティーハリーへと入る。

「ゲイツは……どうするの?」

「俺は……」

オーマジオウと近い力を手に入れたソウゴ。

それを見て未来から来たゲイツ、ツクヨミ、ハリーはソウゴを倒す必要があると考え始めていた。

それは、ソウゴが孤独への道を歩む未来への、一種のカウントダウンの様にも聞こえた。

その頃、野乃家のルーラーの部屋では。

「ジオウ……時見ソウゴの力……オーマジオウと同じと推定……オーマの日は近いと思われる。」

しかし、時見ソウゴに力以外の変化なし……

オーマジオウと思われる可能性は低い……」

淡々とクライアス社に、ジオウⅡの戦闘を報告書にまとめていた。

「かくして我が魔王は、真の覇道へと足を踏み入れた。

オーマの日は、着実に近づいている……」

次回! Re・HUGっとジオウ!
第21話 出会う日、なにかが始まる
2018

第21話 出会う日、なにかが始まる 2018

アナザーリュウガとの戦いで、ソウゴがジオウⅡの力を手に入れてから、数日が経った。

「ソウゴ君!」

「何、叔父さん?」

二階の部屋からソウゴが順一郎と呼ばれ、リビングに降りてきた。

「悪いけどソウゴ君、HUGMANまでちよつと買い物に行ってくれないかな? 卵さあ、すごくお得なんだ。僕、仕事で行けないからさ」

「は〜い」

そう言つて順一郎から買い物袋とHUGMANのチラシを貰うと、ソウゴはゲイツとツクヨミが居ないことを思いだす。

「ねえ、ゲイツとツクヨミは? 朝からいないけど……」

「ああ。二人共、今日はあのイケメン君のところへ手伝いに行くつて言つてたよ?」
「ハリーのところか……言つてくればよかつたのに……」

「まあ、いいや。行つてきます〜」

ゲイツとツクヨミの行方を聞いたソウゴはクジゴジ堂を出て行き、HUGMANへと赴く。

そしてソウゴが出て行ったのと同じ頃、野乃家でも…

「めちよつく……!」

HUGMANのチラシを見たはなが驚きの声を上げる。

「卵が一パック20円!? これは大ピンチの野乃家の家計を救う大チャンスだよママ!」

今日HUGMANでは、卵一パックが20円で売られるのだ。

「しかし先着二十名様限定! でもこんな日に限って私は取材が〜!」

「僕も昼休みまで動けない……! だがそれでは売り切れ必至……!」

「私は友達とお出かけ〜」

「私も今日ビューティーハリーのお手伝いが……!」

しかし全員予定が入っており、誰も行く事が出来ないでいた。

「ああ〜! このピンチを救ってくれる救世主はいないものか……!」

「めちよつく無念……! ノー卵、ノーライフ……!」

誰もがこのチャンスを諦めようとした、その時…

「私が行きましようか？」

「「いた〜っ！」」

そこへ特に予定の無かったルールーが行こうかと伝えると、はな達がルールーの方を向いて叫んだ。

そのまま、ルールーがHUGMANまで歩いて買い物へ向かう。

「命令された訳でも無いのに、私は、何故……」

その彼女は今、どうして野乃家の頼みを聞き入れてしまったのだと考えこんでいた。

そんな中、猫の鳴き声が聞こえて立ち止まると、自身の近くに猫が居ることに気付く。

「ストーツプ、なのです！」

声が聞こえると同時に、プリキュアのようなコスチュームを意識した格好の少女が走って現れ、ルールーの目の前で止まる——が、勢いが強過ぎて派手に転んでしまう。

「大丈夫ですか？」

「……………ええ」

ルールーに心配されながらも、少女はすぐに立ち上がる。

「良かったのです。とう！」

「あなたは？」

そして少女が上に跳ぶと同時にルーローが尋ねる。

「事故が起こる前に、みんなを守る！キュアえみくる！」

着地と同時に「え」の字を表現するポーズを取り、キュアえみくると名乗る。

その少女はことりのクラスメイトで、ソウゴ達が以前ハイキングで出会った少女・えみるだった。

「ッ！ 新たな……プリキュア……？」

「危ない所でした。もう少しでああなたは、危うくこの猫さんに激！とーっ！する所だったのです。私がお止めしなければ、あなたは猫さんを蹴飛ばし——」

言ってる途中で、無理な体制で立っていた影響かえみるの身体が震え出す。

「尻尾を踏んずけて、怒りを買う事に……！」

長時間のポーズに耐え切れず、派手に仰向けに転んだ。

「このポーズは大変なのです……」

その直後、通行止めされた事に腹を立てた猫が、えみるの顔を引っ掻いた。

「やはり危険だったのです……！」

「キュアえみくる」

「何でしょう！」

背後からルーローに呼ばれて振り向く。

その直後、ルーラーが引つ掻き傷のついたえみるに顔を近づけてジッと目元を見る。
「な……何ですか……?」

(おかしい……。確かに似ている……)

……でも、ミライクリスタルの気配は感じない)

えみるを分析すると、プリキュアの可能性が「87.56%」あると出て、姿もプリキュアに似ているが、ミライクリスタルの気配を感じない事に気付く。

「ルーラー！何してるの?」

そこへ偶然見かけたルーラーを見て、ソウゴが近づいてきた。

「時見……ソウゴ……」

「もう、ソウゴで良いつて。」

……えつと君は、確かえみるちゃんだっけ?」

「違います！私はキュアえみるなのです!」

「キュアえみる? (……もしかして、あの時助けた影響かな?)」

えみるがプリキュアの格好をしているのは以前、オシマイダーから助けた時、キュアエールを見た影響だと考える。

その直後、ルーラーが着けていた黒のヘアバンドに「9:50」を表す文字と音声流れる。

「時間がありません。任務を優先します」

ルーラーは買い物を優先してこの場を後にする。

「何ですか今の!?？」

「ねえ、それって何?」

「時計です」

「見辛くないそこ!?？」

二人のツツコミをスルーしながら歩み続けるルーラーの後を、ソウゴとえみるがついて行く。

「ストツプなのです!」

その時、何かを察知したえみるはそう言い、二人を制止する為に笛を鳴らす。

「公共の道を急ぐのは危険なのです。小石に躓いて転んで、坂をゴロゴロしてしまう危険があるのです……!」

「危険って……」

「その確率は、1.57%です」

ルーラーが確率を言うと、逆にえみるが足を引っかけて転がりながら伝える。

「だ、大丈夫?」

「頭上にも注意です!」

ソウゴがえみるを立たせると、彼女はすぐに起き上がりルルーを追う。

「風に飛ばされて買った買物袋に視界を遮られ、電柱にぶつかってしま——ぶっ！」

「あつ……ああ……」

「あり得ません」

今度は買物袋に視界を遮られ、電柱にぶつかってしまった。

「見て下さい今の私！少しでも危険があるのなら、キュアえみるは、あなたをお守りするのです！」

えみるは背後からルルーにすがるようにして抱き付き、引きずられながらもそう伝える。

（この人は何なのですか……？）

ルルーは自身にしがみ付いているえみるに疑問を抱き、心の中で呟いた。

「えみるちゃん、心配性なのかもしれないし、人を守りたいって思いは伝わるけど……」
そんな彼女をソウゴは、不安そうに呟きながら二人の後ろを歩く。

さあやとほまれの二人がビューティハリーに向かう途中、町中の丸型ベンチに座って会話をしていた。

「そう言えば、オーディションどうだった？」

「えっ、あ、う……そう言えば、ほまれこそ新しいスピ、調子どう？」

「う、うーん……簡単には行かないよね……」

「そうだね……」

二人は近況を話すが、互いに上手く行って無かったのか、言い淀んでいた。

「いけませくん！命が惜しく無いのですか!?!?」

「引き受けた任務はやり遂げなくてはなりません」

そこへ、ずつとルーラーに抱き付いたまま引きずられるえみるを見かける。

「まあ……！えみるちゃん、可愛いお衣装……!」

さあやが目を輝かせてそう言い、ほまれは目を丸くした。

「……あれ？二人の後ろにいるのソウゴじゃない？」

「えっ!?!?」

だが彼女らの背後の方に視線を向けたほまれがそう言うのと、今度はさあやが目を丸くした。

「ソウゴ君が……ルーラーと……」

彼女は二人……いや、ルーラーの後ろをついていくように歩くソウゴを、心にドロツとした感情を抱きながらじつと見つめる。

そして一同は目的地のHUGMANに到着すると、格安の卵をゲットする為に集まった主婦達の獣の様な眼光をいかくぐりながら、彼女らの先頭をルールーが猛スピードで走る。

卵争奪戦という名のバトルファイトを先に制したルールーは、目的の卵をあつさりと二パック分確保した。

「任務、完了」

こうして、ルールーのミッションは無事達成された。

「ふー、危なかった。主婦の力って凄まじいなあ」

少し後に、一パック確保して争奪戦から出たソウゴが一息付く。

(時見ソウゴ……………こうして確認すると、普通の少年と同じ…ですが……………)

ルールーがソウゴを見て分析しながら、彼がこれまでに手に入れた力の記録を見る。

(オーマジオウの、素質は92.4%……………非常にレベルが高い……………)

「…何?」

「いいえ」

「困ったねえ……………手が届かないねえ……………」

ルールーからの視線を感じ、小首を傾げてそう聞きだすソウゴにそう誤魔化すと、近くでお年寄りの女性が缶詰のタワーに手が届かない所に二人が気付く。

「このキュアえみくろがお手伝いします！」

「あら、どうも」

「ちよれい！」

えみるは背伸びして腕を伸ばすも一番上に届かず、仕方なく自分の手の届く所を取る。

「あつ、流石にそこは……！」

ソウゴが止めようとするが既に時は遅く、缶詰のタワーは崩れ落ちてしまい、えみるは落ちて来た缶詰に巻き込まれた。

「大丈夫？」

「ノープロブレムなのです……！」

ソウゴは手を差し伸べ、えみるがその手を掴んで立ち上がる。

「時見先輩。助けてくれてありがとうございます。」

キュアえみくろは、まだまだ困ってる人を助けに向かうのです！」

ソウゴの頭を下げてお礼を言い、えみるはまた人助けに向かう。

——だが、会計中に大根を忘れてた男性に大根を届けるがレンコンだったり、母親の持つ買い物袋を持つが重くて持ちきれなかったりと、失敗が続いた。

「キュアえみくろは……皆さんのお役に立てませんでした……！」

「そうでしょうか？」

「えっ……？」

丸型ベンチに座って凹みえみるに、ルールーが声を掛ける。

「あなたが声を掛けた人は皆、笑顔になっていました。」

それが何故なのか、理解出来ませんが」

「それは、えみるちゃんの優しさが、みんなに伝わっている証拠だよ」

ソウゴとルールーの言葉を聞いたえみるは、元気を取り戻して走る。

「あの一！」

「？」

「何ですか？」

するとソウゴとルールーを追い越し、目の前で止まる。

「あなた達と、もっとお話ししてみたいのです……！」

なので……もし、良かったら……私の家に……遊びに来ませんか……？」

えみるはもじもじしながら二人を家に誘う。

「いいですよ」

ルールーからいいと言われて、彼女は一瞬驚くが喜ぶ。

「俺も構わないけど……いいの？」

「時見先輩も、家に来て欲しいのです。先程助けてくれたお礼がしたいのです」
「いいよ。別にお礼なんて」

「ダメです！ちゃんとお礼をしなければいけないのです！」

「えみるは遠慮するソウゴの顔に近づけて叫ぶ。

「わ、分かった」

「こちらなのです……！」

先を歩くえみるの後を、ソウゴとルールが歩く。

（不可解な点が多い。しかし、あの時のアスパワ……プリキュアの可能性は、ゼロでは無い）

ビューティーハリーではな達がはぐたんをあやしていると、さあやがソウゴとルールと一緒に話した事を話し、えみるの服についても話す。

「プリキュアっぽかったね……」

「えっ？ そうかな……」

「何が？」

「さっきえみるちゃんを見かけたの」

「何か変わった格好しててね」

「変わった格好？」

「ほまえ」

「なあにはぐたん？でも本当、一体何を——」

「……ん？」

えみるの話をしていた三人だったが、突然聞こえた声に疑問に感じたはな達が一斉にはぐたんを見る。

「ほまえ」

「「喋った〜！」」

はぐたんが喋った事に、はな達は興奮した。

「い、今、ほまれて言ったよね！言った!!? 言いました!!?」

「はぐたん私は!!? 私は!!? 私!!?」

「しやあや」

「「また喋った〜！」」

更にはぐたんがさあやに、ほまれと同じ様に名前で呼んでくれた事に対して三人はより興奮した。

「昨日はハリー言うたで」

「つきよみく、げいつく」

「ありがとうはぐたん」

ツクヨミがはぐたんの顔を見て、ありがとうと言う。

「はぐたん私も私も！言って言って！はーなって！はーな！」

自身もはぐたんに名前を読んで欲しいと思ったはなはニヤニヤしながらしやがみ、はぐたんに顔を近づける。

「は……」

「は……？」

「は………」

「は……！」

「はぎゅー！」

この時ののはなの圧に恐怖を感じたのか、はぐたんは泣き出してしまった。

「ごめんねはぐたんー！」

すぐさま抱き締めて謝罪したのはなの光景を見ていたツクヨミは、意を決した顔を浮かべながら口を開き始める。

「ねえ、みんなと相談したい事があるの……」

「相談って？」

「ソウゴについてよ」

「「えっ?」」

「みんなも、この前のソウゴのあの力を見たでしょ」

ツクヨミはこの前のアナザーリュウガとの戦いで見せた、ソウゴの時間を逆転させる力とジオウIIによる圧倒的な力について話す。

「あれはオーマジオウと同じ力……」

だから、みんなには悪いけどもしかしたら、ソウゴは倒す必要があるかもしれない「つまり、私の望む未来を選ぶということかね」

すると後ろからウオズの声が聞こえ、見てみると白ウオズがドアの前に立っていた。

「白ウオズ……」

「我が救世主、既にオーマの日は近い。その最悪の未来を回避するには、君がゲイツリバイブになるしかない」

「……俺は……」

「君が選ぶ未来は一つしかない。ゲイツリバイブとなる未来しかね……」

「みんなはどうなの?」

「私は……」

ツクヨミにソウゴはオーマジオウになる可能性があると言われ、さあや迷う。

ツクヨミの話が本当なら、いつかゲイツがソウゴを倒してしまう。

自分はどうすればいいのか、本当にソウゴは未来で最悪の未来を作ってしまうのか、私は……

「私はソウゴを信じるよ!」

「はな……」

「ソウゴがもしオーマジオウになると決めたなら、ゲイツを助けなかったはずだよ!」

それに、ソウゴはあの力を使っても、いつもの優しいソウゴのままだったよ!」

「(……そうだね!) 私もソウゴ君を信じる! だって、約束したから!」

はなが信じると言ったのを聞いたさあやはあの時、一度は王になる夢を諦めたソウゴと交わした、新しい未来を作ると決めたあの日の約束を思い出す。

「はなとさあやが言うなら、私もソウゴを信じるよ。」

だって、仲間でしょ……?」

ほまれもソウゴがオーマジオウにならないと信じるようだ。

「みんな……」

「君達には呆れるよ。最悪な敵となると言う男を信じるなんて」

「白ウオズは、人を信じるとかないの?」

「そんなものは、必要ない。」

これで君達プリキュアとハリー君はジオウ側と言うことで、私とツクヨミ君、我が救

世主はジオウを倒す側と言うことになるね〜」

はなの問いに対し、白ウオズはそう言っただけで去っていった。

「白ウオズの考えなんか、気に入らない」

「せやな。なんか、やり方がクライアス社に似てる気がするんや」

ハリーがほまれの言葉に便乗すると、白ウオズのやり方がクライアス社に似てると話す。

「ゲイツとツクヨミは、白ウオズの未来に従うの？」

「それは……」

「……」

はなに白ウオズに従うのかと言われ、ツクヨミとゲイツが黙り込む。

「信じよう！ソウゴ君は絶対に、オーマジオウにならないって！」

さあやがソウゴはオーマジオウにならないと言うと、それを言われたゲイツは部屋から出て行くこうとする。

「ゲイツ……」

「悪い、一人にしてくれないか……」

心配するツクヨミにそう言いながら、ゲイツは一人外へと出ていく。

（俺は……どっちなんだ……）

ジオウを倒すか……それとも……)

自分のゲイツウオツチを見つめ、ソウゴを倒すか倒さないかで迷いながら、その手に持ったウオツチを強く握る。

その頃、ソウゴとルーラーの二人がえみるの案内で着いた先は、公園だった。

「公園？」

「これがあなたの家ですか？」

「違います！少し、待っていて貰えますか？」

えみるは二人にそう伝え、向かいのタコ型遊具の中に入る。

少しすると、タコの口からいつもの姿に着替えたえみるが出て来た。

「お待たせしました！」

「着替える為だったんだね」

「プリキュアの可能性、0.01%」

「私の秘密をお教えします。キュアえみるは、世を偲ぶ仮の姿。

実は私は……プリキュアでは無いのです！」

「そうですね」

「そうなんだ……(知ってたけど、黙っておこう)」

ルルーは知っていたかの様に答え、ソウゴは薄々気付いていたが黙っていることにした。

「本当は、愛崎えみると言います」

えみるは滑り台を滑りながら自己紹介する。

「私はルルー・アムールです。敬称はいりません」

「分かりました。ルルー……美しい名前ですね」

えみるから美しい名前と言われて、ルルーが一瞬反応する。

「二人にお願いがあります」

「はい」

「お願いって、何?」

「キュアえみくらの事、私の家族には秘密にしてくれませんか?」

「何故ですか?」

「全然いいけど、どうして?」

「ヒーローとは正体を隠すものなのです」

「そうだね（まあ、俺も叔父さんに隠してくるし……）」

「それに……家族に心配掛けたく無いので」

「それ俺にも分かるよ（俺も叔父さんに、心配をかけたくないし……）」

自身が行なっているプリキユア活動を隠し事にしたいと語るえみるを見て、ソウゴも順一郎にはジオウの事を隠している事を思い出す。

(アスパワワ、低下……)

そんなソウゴの横で、えみるのアスパワワが少なくなってる事にルーラーが気付く。

「さっ、行きましよう！」

そんな三人のやり取りを、公園の出入り口で眼鏡を掛けた一人の青年が見ていた。

一方、クライアス社の通路では、パップルが歩いていた。

「ルーラー？ 全く、どこまでブツ飛んでるのよ。」

下っ端がいないと、仕事が全部あたしに回って来るじゃない！ んもー！」

パップルが愚痴りながら通路を歩いてルーラーを探す。

会議室にあるルーラーの机には、『有給消化中』と書かれた紙が貼られてあった。

ソウゴとルーラーはえみるの案内で、とてつもなく大きな城へとやってきた。

「ここが、私の家なのです。お城のようだと、よく驚かれますが……」

「驚くどころじゃないよ……」

ここがえみるの愛崎家だと言うが、ソウゴの目に映るそこは城のような外観をしており、とても大きかった。

俺も将来王様になったらこういう所に住むことになるのかなーとか、でも掃除とか大変そうだなー等といった事を呑気に考えつつ、実際こういうお城みたいな建物に住んでいる人は初めて見たなどびつくりしていた。

「行きましよう」

対するルールーは驚く様子も無く、足を進める。

「ルールー。こんなお屋敷を見て驚かないんだ……」

「何をしているのですか?」

「今行くのです!」

えみるがルールーの方へ走り、ソウゴが歩いて後を追う。玄関の入り口へと着くと、えみるが扉を開く。

「お客様をお招きしました」

三人がエントラスホールに入ってえみるがそう伝えると、突如辺り一面の電気が消える。スポットライトが三人を照らし、奥の方にもライトが照らされる。

「ラララ、ようこそ〜♪」

「我が家、へ〜♪」

「どうぞぞ、ごゆっくり〜〜〜♪」

そこへえみるの父親の俳呑と母親の都が、何故かミュージカル調で挨拶を行う。

「なんか……凄いい両親だね」

「変わった両親だと思いでしようが……あまり……」

「でも、親がいるっていいね……」

「えっ？」

ソウゴの眩きを聞いて、えみるが彼の顔を見る。

——ソウゴには両親がいない。だから、彼には両親のいる素晴らしさを身をもって知っていた。

「お邪魔致します」

「あ、お邪魔します」

ルールーが挨拶して一礼し、ソウゴも挨拶して一礼する。

「えっ？ノリーアクション……!?？」

ノリーアクションのルールーを見てえみるが驚く。

「お友達かい？兄の正人です。よろしく」

「お兄様！」

別の方にスポットライトが照らされ、えみるの兄の正人が挨拶をする。

(あ、この人……一つ上の学年の……えみるちゃんのお兄さんだったんだ)

正人を見たソウゴは、彼がラヴェニール学園の生徒だということに気付いた。

「まだ友達と言う訳では……」

「ところでえみる、さつき町でお前を見かけた……」

「ルールーと時見先輩を案内しますので、これにてなのです!」

えみるがソウゴとルールーの手首を掴み、逃げる様に駆け足でこの場から離れて自身の部屋へと入る。

「……ふう、バタバタしてすみません。ここが私の部屋なのです。どうぞ、楽にしてお下
さい」

「部屋も大きいね」

二人が周りを見渡すと、一人部屋にしてはかなり広い部屋だった。

「あれは何ですか?」

ルールーがピアノと壁に掛かっているバイオリンを見て、これが何なのか尋ねる。

「ピアノとバイオリンですけど」

「何をする物なのですか?」

「えっ? そりゃ楽器なので、音楽を奏でる物ですが」

「テレビとかによく出てるやつだよ」

「その……音楽……とは、何ですか？」

「えっ？音楽を知らない？？」

ルーラーが音楽を知らないこと知り、ソウゴとえみるが驚く。

「なるほど……分かりました。それなら……お教えしましょう！」

そう言ってからえみるが指を鳴らす。

「私の最大の秘密と共に！」

部屋のカーテンが閉じて電気が消えると、窓際からギターが上がって来た。

「これは？」

「ギターだよね」

「そう。私が最も愛する楽器、ギターなのです！」

えみるはギターを掴み、音を鳴らす。

「何が違うのですか？」

「ギターは、自由なのです！ノれるのです！カッコいいのです！ギューーンとソウルがシャウトするのです！」

えみるは己が持つギターで、二人に自身の魂の響きと叫びを奏でまくる。

だが演奏と叫びで疲れ、ギターを床に置いてから両手と両膝を床に付ける。

「良く分かりません」

「では……こう言うのはどうでしょう？」

今のギター演奏を聞いてもよく分からないと答えるルーラーの為に、えみるは階段に座って先程とは違って、落ち着いた音調でギターを弾いて歌う。

(ハイキングの時も聞こえた。やっぱりえみるちゃん、歌上手いなあ)

ソウゴがえみるの歌を聞きながら心の中で眩き、ルーラーは突っ立って聞いてた。

歌い終えた直後、ルーラーがサクランボ型のクッションにへたり込むようにして倒れる。

「ルーラー？」

「何ですか……？その…不思議な音と声の組み合わせは……？」

「これが音楽。歌なのです」

「歌……」

「どうですか二人とも？」

「凄く上手だったよ。凄く優しく、心が安らぎを感じたよ！」

ソウゴがえみるの演奏を褒める。

「苦しいです……」

「えっ!!？」

「どういふこと?」

しかし、ルールーからは苦しいと言う答えが返って来た。

「その、歌と言う物が、私の中で響き続けていて……」

もつと……聞きたい」

だが、もつと聞きたいと言う答えも返って来た。

「えっ?」

「そう……思います」

「俺にも、もつと聞かせてくれるかな?」

「しよ、しようがないですね! 特別ですよ!」

えみるは二人からもつと聞きたいと言われて上機嫌になり、演奏しながら歌い、ソウゴとルールーは目を閉じて聞く。

だが歌い始めた直後、ノックの音が響いた。

「えみる」

「お兄様っ!?」 待って下さい!」

正人の声が聞こえ、えみるが慌ててギターをクローゼットに隠す。

「どうしたの?」

ソウゴは慌てて隠した事に疑問に思う。

「ど、どうぞ」

返事を聞いた正人がドアを開けて部屋に入る。

「ど、どうしました？」

「ギターの音が聞こえなかったかい？」

「き、気のせいなのです！」

気のせいと叫んだ直後、クローゼットからギターが出て来た。

「あっ……………」

「やっぱり……………止めたまえ。女の子がギターなんて……………」

女の子は女の子らしく、ピアノやバイオリンの方が似合っていると思うよ」

「はい……………」

呆れた様子を見せる正人の言葉に、ソウゴとルーラーが反応する。

「何故ですか？何故、ギターは駄目なのですか？」

「そう思う理由は一体何？」

「可愛いえみるには似合わないからさ」

「そんなの、理由にならないよ」

「基準が不明瞭です」

「由緒ある愛崎家の令嬢に、ギターは不釣り合いだと言っています」

それを聞いたソウゴはムツとしながら、正人の言葉に口を挟む。

「由緒ある？不釣り合い？」

そんなの関係ないよ。自分が好きな事を、誰かが否定する権利はないよ」

「何っ……?」

「あなたはえみるのマスターなのですか？」

今度はルールーが口を開く。

「ま、マス——?」

「マスターで無い者が、命令に従う義務は無いハズです」

ルールーが正人に近付き、鋭い目付きで伝える。

「あんたは、えみるちゃんに自分の価値観を押し付けてるだけじゃないの?」

「……ただの助言だ。邪魔したね」

ルールーの迫力とソウゴの言葉にたじろいで冷や汗をかいた正人が、逃げるようにして部屋から出た。

「何なのですかあの人は……!」

(「こんな、ルールー始めて見たな……」)

ルールーが頬を膨らませて怒ったことに、えみるだけで無くソウゴも驚き、心の中で
呟く。

「あなたは言いました。ギターは自由だと。カッコいいのだと。もつと愛する物だと。それをあのようになんて否定するなんて……！」

ルーラーの叫びを聞いたソウゴとえみるが、くすつと笑ってギターを拾う。

「何がおかしいのですか？」

「おかしいのは無く、嬉しいのです。」

ありがとう、ルーラー。それに時見先輩も怒ってくれて」

えみるの言葉が、ルーラーの心に衝撃を与えた。

「怒った……？」

「うん。ルーラー必死になって怒ってたよ」

「私が……？」

「ルーラーが怒るの、初めて見たよ。」

多分、みんなも見て無いんじゃないかな？」

「そうなのですか？」

「ルーラーって無愛想かと思ってたけど、全然そんな事無かった。普通の女の子だよ」

ソウゴがルーラーの方を向いて微笑み、「ごめんね、ルーラーのこと勘違いしてて」と今まで無愛想な子だと思っていた事を謝りながらそう言う。

「そうだ。えみるちゃんが秘密を教えてくれたから、俺もなりたいたいのを教えてあげる」

「なりたいものですか？」

「俺、王様になるのが夢なんだ」

「王様ですか？」

王様になりたいと聞き、えみるは口をあんどりと開けながら驚いた。

「うん！誰にでも手を差し伸べる。民を助ける。最善で最高の王になるのが夢なんだ」

「王様ですか……時見先輩ならなれる気がします！先輩は、私が倒れた時何度も助けてくれましたから！」

……ですが、何故王様なのです？」

「何故って言うか、俺は生まれた時から王様にならなきゃいけないって思ってるんだ。

そんな気がするんだ……」

（王様……やはり、時見ソウゴとオーマジオウは、同一人物……）

えみるに王様になりたい理由を語るソウゴの横で、ルールーは矢張りソウゴとオーマジオウは同一人物なのだと言確信した。

その時、外から衝撃が響いた。

「何だ今の音？」

「あれは……！」

ソウゴ達は窓から、町の方で煙が生じているのを見る。

「えみるが町の方でピアノオシマイダーが暴れているのを確認し、奥の部屋へ向かう。」

「えみる……」

「……」

「……」

ソウゴも町の方へ向かい、ルルーも後を追った。

その頃、ゲイツとはな達が先にオシマイダーが現れた場所に到着する。

「行くよ！」

「うん！」

『ゲイツ！』

「変身！」

「『ミライクリスタル！ハート！キラっと！はぎゅ〜！』」

変身アイテムが反応し、四人の身体に纏われる。

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

「輝く未来を！抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

変身完了した四人は、ピアノ鍵盤を腹巻の様に着けたオシマイダーへと走っていく。

「さあ、やっちゃって」

「こらーっ！」

エール達が線路を走って現れる。

「来たわね……あら？ジオウがない……」

なら好都合だわ。オシマイダー！」

オシマイダーに命令し、パップルは瞬間移動して姿を消す。

残されたオシマイダーが腕を振るい、エール達が跳んで避け、下の道路に着地する。

「はっ！」

エールがオシマイダーに向かって跳ぶ。

オシマイダーがマイクを持って叫ぶと、耳から超音波が放たれる。

「うわっ！」

超音波を受けてエールだけで無く、アンジュとエトワールも吹き飛ぶ。

「ならー！」

『ワイザード！』

ゲイツはワイザードウォッチをジカンザックスに装填し、弓を引く。

『フィニッシュタイム！ギワギワシユート！』

ウィザードウォッチの力で生成された炎と氷の二本の矢が同時に放たれた。

しかし、オシマイダーが再び超音波を放ち、ゲイツが放った攻撃を相殺した。

「バカな……！」

「いいわ！いいわ！ジオウのいない内に追い込みなさい！」

信号機の上に移動していたパップルが指示する。

そこへ遅れてきたソウゴとルールーが駆け付け、えみるがオシマイダーの方へ向かうとする。

「えみるちゃん！逃げて！」

「危険です。何故来たのですか？」

「キュアえみくるは、人々の平和を——」

「あなたは本物のプリキュアでは無いでしょうか？それに仮面ライダーでもない……」

本物のヒーローじゃない。その言葉を聞いた途端えみるが一気に足を止め、顔を下げた。

「ルールー……」

「……確かに私は、偽物なのです。」

でも……でも……っ！偽物でも、町の危機は放っておけないのです！」

そんな中、逃げ遅れて泣く子供がいるのに気付く。

オシマイダーもそれに気付いて子供に向けて超音波を放とうとし、えみるが走って子供の方へ向かう。

「くう！」

「時見ソウゴー！」

ソウゴがえみると子供のいる方へと走り、そのまま飛び込んで掴み、二人をオシマイダーの攻撃から躲した。

「時見先輩……」

「偽物なんかじゃないよ。えみるちゃんは……」

「えっ?」

「本物とか偽物とか、関係ないよ。」

えみるちゃんは自分が正しい思ったから、人を助けたいって思ったんでしょ?

なら、自信を持ってキュアえみるる」

「先輩……」

——例えプリキュアやライダーの様な力がなくても、誰かを助け居たいと本気で思っているだけで行動に移すことの出来た今のえみるは、十分ヒーローだよ。

それを聞いたえみるから涙が溢れそうになる。

すると、オシマイダーがこっちを向き、敵の視線を察知したソウゴがえみるとルーの前へと出る。

「えみるちゃん。俺の秘密を教えてあげる」

「先輩の秘密……」

『ジクウドライバー！』

「それは……」

ソウゴが付けたジクウドライバーを見て、見覚えがある物だと気づく。

『ジオウ！Ⅱ！』

取り出したジオウライドウォッチⅡを分割し、ドライバーの左右のスロットに差し込むと、ソウゴの後ろから二つの時計のエフェクトが現れた。

「変身！」

ドライバーを回すと二つの時計は左右対象に止まり、ソウゴの体を時計バンドのエフェクトが纏う。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

「時見先輩が……仮面ライダー……」

「ルー、えみるちゃん。その人をお願い」

ソウゴがジオウⅡへと変身を完了すると、そこへエール達も現れる。

「見てたよ」

「ありがとう」

「あなたもヒーローだね!」

エールが親指を立ててえみるを褒める。

「ここから先は任せて!」

ジオウがえみるにそう伝え、オシマイダーに向かって走っていった。

「私も……ヒーロー……!」

えみるはオシマイダーへと向かって行くジオウ達を見つめる。

「ハア!」

参戦したジオウはオシマイダーにキック、パンチと繰り出し押ししていく。

「ジオウ! 一つの間! オシマイダー!」

反撃に出ようとオシマイダーが攻撃にでる。

すると、ジクウドライバーの右側にある金色のジオウライドウォッチⅡが光り、両目にかかる時間の針のアンテナ2本が回転した。

「見えた! お前の未来!」

次のオシマイダーの未来の攻撃を読み、ジオウはオシマイダーの攻撃を躲す。そして、そのままカウンターパンチを加える。

「もう〜！何やってるのよ！」

ジオウⅡに手も足も出ないオシマイダーにイライラし始めるパップル。

『ジカンギレード！』

イライラしてる間にジオウがジカンギレードとサイキョーギレードを手に持つ。

『サイキョーフィニッシュタイム！』

ジカンギレード・ケンモードとサイキョーギレードを合体させると、剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『キングギリギリスラッシュ！』

「オリヤヤヤヤ！！？」

ジオウはサイキョージカンギレードを振り下ろし、オシマイダーに直撃させた。だが、オシマイダーはジオウを攻撃を耐えて立っていた。

「これで決める！」

『フィニッシュタイム！』

それを見たジオウはジクウドライバーを操作すると、ピンクと金色の『キック』のエフェクトがオシマイダーを囲む。

そしてジオウは高く飛び上がり、そのままオシマイダーへとキックの態勢になる。

『トウワイズタイムブ레이크！』

囲んでいたキックの文字がジオウの足へ集まり一つとなると、ジオウのトウワイズタイムブ레이크によるライダーキックが決まった。

「オシマイだ〜〜！」

ジオウの攻撃を受け続け、最後のライダーキックを受けたオシマイダーが消滅した。

「まるで二日酔いの気分だわ……！覚えてらっしやいジオウ……！」

頭を抑えたパップルがタクシーに乗り、この場から離れた。

えみるが母親と一緒に返って行く少年を見送ってから線路の方を向くと、線路に立っていたエール達が跳んで去る。

それを見てソウゴがウオッチを外し、変身を解除した。

その直後に気が抜けたか、えみるが地面にへたり込む。

「えみるちゃん」

「どうしたのですか？」

「私……何て危険な事を……」

ルーラーが尋ね、震える自分の右手を見て言う。

「でも、時見先輩はこんな危険な事をずっとしていたのですか？」

「まあ、ねえ。それとさっきのは他の人には……」

「大丈夫なのです。時見先輩が仮面ライダーということは黙っておくのです！」

「ありがとう」

ジオウの正体を黙ってもらっていると、えみるに感謝するソウゴ。

「私も、危険な事をしました」

「えっ？」

「私は何故、あんな事を……」

ルルーは以前の仕事体験で保育園に行った時、守るようにして立ち塞がったのを思い出す。

するとルルーは、えみるから手を握られたのに気付き、えみるの方を向くと、彼女は凄いいヤニヤニやっていた。

「アスパワワ、全開……」

ルルーの目に笑顔のえみるの姿が映ると、彼女から更にアスパワワも溢れていた事に気付いた。

「やはり、私とあなたは通じ合っているのです！ 運命なのです！

ルルー、私と一緒にプリキュアになりましょう！」

「私が……プリキュア……？ お断りします」

「いいんじゃない？ ルルーもなろうと思えば」

ルルーは二人に言われ一瞬驚くが、いつの間にかあった“X”の形をした頭の髪飾

りを見て断る。

「あなたは今日から、キュアラリルルールーなのです！」

「お断りします」

結局、ルールーは断る。

「ルールー！」

「ソウゴ君！」

そこへ、変身を解いたはな達がやってきた。

「お使いは？」

「問題ありません」

「お使い………あああ！買い物袋ッ！」

ソウゴはえみるの家にお邪魔した際に、卵が入った買い物袋を置いてきてしまった事を思い出した。

「大丈夫なのです。卵は家で預かってるのです」

「えっ？えみるん家で？」

「三人はどう言う関係なの？」

さあやはソウゴに近付いて問いかける。

「顔近いよ……俺達は偶然似合って友達になったんだよ。ねえ？」

「えっ？勿論——お、お、お、お友達なのです！」

「他人です」

「えっ……？もう友達ですよね？」

「他人です」

「友達……」

「他人です」

えみるが近づくと同時に、ルールーが距離を取る。

「他人です」

そんな二人のやり取りを見て、ソウゴ達は苦笑した。

「落とし物を取りに来てみれば……アイツ、何してんの？」

そして、扇子を取りに戻って来たパツプルが、えみるに身体を揺らされ続けるルールーを見て、そう呟く。

次回！Re. HUGつとジオウ！

第22話 裏切りと正体 2121

第22話 裏切りと正体 2121

とある休日、クジゴジ堂でゲイツが順一郎を手伝うために物置の整理を行っていた。

「ごめんね、ゲイツ君。手伝ってくれて」

「いや、別に……」

「でも、ゲイツ君とツクヨミちゃんが来てくれて、感謝してるよ」

「えっ？」

順一郎が自分達に感謝していると聞き、どうしてだと疑問に思う。

「だって、ソウゴ君が家において、あんなに明るくなったからね」

「……そうですか」

「おお、こんなところにあつたんだ」

ゲイツは曖昧な返事で返すと、順一郎が物置の陰からブリキロボのおもちゃを見つけた。

「なんだそれは？」

「随分前から直そう直そうと思ってたんだ。」

懐かしいな……これね、ソウゴ君がウチに来て初めて買ってあげたおもちゃなんだ」

ソウゴがクジゴジ堂へ来て最初に買ったおもちゃだと言うそのロボットの背中には、『WILL BE THE KING』と書かれていた。

その頃、ソウゴは自分の部屋で寝ていた。

「ん？あれ？……どこ？……？」

しかし、目を覚ましたソウゴが周りを見渡すと、何故か昔の馴染みの街へ移動していた。

少し歩いていると、懐かしい感じのする駄菓子屋の前へと到着した。

「これ子供の頃、見たことあるような気がする。」

「……すみません、これください」

「はいよ。」

「……あなた、機械かい？」

「それとも……人間かい？」

「え、人間……だと思っただけ」

「人間は破壊する！」

人間かどうかを質問をしてきた駄菓子屋のおばさんは突如、目を赤く光らせソウゴに

襲い掛かってきた。

おぼさんはかなりの手練れで、キック、パンチをソウゴに繰り出してくる。

「何なの！」

おぼさんから逃げると、逃げたソウゴの目の前におじさんが歩いてきた。

「おじさん。ここは危ない！逃げて！」

「君は……機械か？」

「え……嫌な予感」

「それとも……人間か？」

おじさんも目を赤く光らせ、ソウゴに襲い掛かってきた。

「どうなったの？」

先ほどのおぼさんも加わり2人がかりで襲われるソウゴ。

「待ちな」

「人間か？」

「いや……機械さ」

するとソウゴの前に、一人の青年が現れた。

その青年は腰から真つ黒なジクウドライバーに似た形状のものを具現化させ、スパナを投げ、再度手にすると――

「変身！」

金のスパナ——スパナーダとドライバー『スクリューダー』を組み合わせ、キカイドライバーへ装填された。

『デカイ！ハカイ！ゴークカイ！仮面ライダーキカイ！』

すると青年の姿が全体的に赤と白のラインの装飾が成された金色のアーマーに覆われたものになり、赤い複眼を持つ頭部にはスパナをクロスした様なものが取り付けられていた。

「鋼のボディに熱いハート……仮面ライダーキカイ！」

おばさん、おじさんはそのライダー……仮面ライダーキカイへ猛攻を仕掛ける

しかし、おじさんとおばさんは機械の体の様で、キカイの攻撃でショートしはじめる。

『キカイデハカイダー！』

脚部にエネルギーをチャージし、回し蹴りを放つ。

「……なんだよ、これ？」

その光景を目にしたソウゴからすれば、何がどうなっているのかわからなかった。

しかしその時……

〈ピュユルルルル!!?〉

彼の耳へ向けて、何らかの音が聞こえてきた。

自身の頭にまで響く音はまるで、自分を呼んでいるかのようで――

その音に気づき、ソウゴが目を覚ました。

「あつ……今の、夢か」

着信音の音で目を覚ましたソウゴが携帯を取る。

「はい……」

『いつまで寝てる!!? アナザーライダーが現れた! すぐに来い!!?』

「はい!」

ゲイツから連絡を受け、急いで外へと出向く。

ソウゴへの連絡を終えたゲイツは一人、木の枝と藁人形を組み合わせている様に見えるアナザーライダーと戦っていた。

「ゲイツ! あれ? あのアナザーライダー、夢で見た……」

そこへ駆けつけてきたソウゴだが、目の前にいるアナザーライダーを見ると変身する手を止め、夢で見たライダーと似ている事に気づく。

ソウゴがぼつと耄けていると、アナザーライダーが脚部にエネルギーを纏い、回し蹴りをゲイツに喰らわせる。

その光景が夢で見た仮面ライダーキカイが放った必殺技、
“キカイデハカイダー”と同じだと気づいた。

「なにぼつと突つ立ってる!?？」

「…っ!?? ごめん!」

気を取り直し、ソウゴはジオウⅡになる為にウオッチを起動させる。

『ジオウ!Ⅱ!』

ジオウウオッチⅡを分割してドライバーの左右に差し込むと、ソウゴの後ろから二つの時計のエフェクトが現れ、構える。

「変身!」

ドライバーを回し、二つの時計が左右対象に止まるとソウゴの体を纏う。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー!ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ!Ⅱ!』

ジオウⅡへと変身したソウゴは、ゲイツに加勢する。

「はあ!」

二人が同時にキックを繰り出し、お互いに攻撃する。

するとアナザーライダーは、上半身全体にチャージしたエネルギーで足先に氷柱を生成し、ライダーキックを二人に向かって放ってきた。

「危ない!」

ジオウが前に出てサイキョーギレードを出した。

『ライダー斬り!』

ジオウIIに返り討ちに合い、アナザーライダーは爆発し跡形も無くなった。

二人は変身解除し、爆炎が弱まりアナザーライダーが爆発した場所を確認する

「どういう事だ。アナザーライダーを倒したのに誰もいない。契約者はどこだ?」

「ま、倒したんだからいいんじゃない?」

とりあえず、アナザーライダーは倒したので、二人はクジゴジ堂へ帰ろうとする。

その光景を屋上から、クライアス社のタイムジャッカーのウールとオーラが見ていた
「あんな得体の知れないの出すなんて、ウール、アンタ何企んでるの?」

「知らないよ。アイツは僕の擁立したアナザーライダーじゃない。どういうこと? 僕達以外に誰がアナザーライダーを生み出すっていうの?」

自分達が作った覚ええないアナザーライダーにクライアス社も困惑していた。

その数分後、誰もいなくなったアナザーライダーの跡地にスウォルツが現れた。

「ほうく、面白いことになった」

スウォルツは笑みを浮かべながら、アナザーライダーの残骸のような角を拾い上げ

る。

そして翌日。

「おはよー！ほまれ！」

「うわっ！」

登校中、ソウゴとはなとさあやがほまれに挨拶し、はなが後ろからほまれに抱き付く。

「今日もイケてるのう……！」

「ちよつと……！」

「ツクヨミとゲイツ君は？」

「今日は日直だから先に行くって」

四人で学園へと向かっていると、「誰か〜！止、め、て〜！」という叫び声と一緒に、ローラースケートで走る百井あきが階段から跳ぶ。

そこから何とか着地するも、足のローラーの回転は止められず、更に先へ進む。

「どいてどいて〜！」

そこへ前にいた十倉じゅんながホイッスルを吹き、あきを両腕で支えるようにして止めた。

だが勢いが強過ぎて、そのまま転んでしまった。

「いってて……」

「きよ、教育的指導よ……」

「流石風紀委員……ありがとうじゅんな……」

「二人とも、大丈夫？」

はな達が二人に近寄り、ほまれが二人に手を差し伸べる。

「不良——！」

「輝木……ほまれさん……」

じゅんなが自身の口を塞ぎ、あきが恐る恐るほまれの手を掴んで立ち上がる。

「いえ……師匠！」

「「ええええええええつ!!?」「」」

あきがもう片方の手をほまれの手に当てて、師匠と叫ぶ。

「私を、弟子にして下さい！」

「はあ……?」

そして目を輝かせ、ほまれに弟子入りを申し込んだ。

その後一同は中庭のテーブル席で、ほまれの記事が載った雑誌のページを見る。

「あ、これ!!?」

「今月のはぐくむウーマン、輝木ほまれさん。氷上の流れ星」

「ママの記事だ」

「こんな子がクラスにいたなんて、灯台下クラス！」

「下暗しね」

あきの言葉にはなが頷くが、じゅんなが指摘した事で間違つてた事に気付く。

「それでね、私もスケート始めたの！」

「素敵！」

「あたし、アイススケートなんだけど……」

あきはローラーズスケートで滑りながら伝えるが、ほまれがやっているのはアイススケートである事を本人が呟く。

「つて言うか広い所で滑りなさいよ！また転ぶよ！」

「大丈夫。大丈夫——うわっ！」

「危ない！」

言つた側からあきが体勢を崩して倒れそうになるが、ほまれが手を掴み、左腕で支える。

「弟子に……して下さい……」

若干無理な体勢で再び弟子にして欲しいと志願するが、不機嫌そうな表情を浮かべた

じゅんながあきの制服の襟元を掴んで移動し、ほまれから距離を取る。

「ちよつと純奈！何なのよ！」

「なーにが弟子にして下さい、よ！泣く子も黙る輝木ほまれだよ？」

「聞こえてるんだけど……」

ほまれが彼女達の後ろでそう呟いているのを余所に、じゅんなは人差し指を立てて両手を頭に当て、鬼の表情を作る。

「純奈にアレコレ言われるの、筋子違いでしょ！」

「それを言うなら筋違い！亜希も不良になっちゃうよ！」

「師匠の事、何も知らないクセに！」

「そりゃアンタも同じでしょーが！この……唐変木！」

「唐変……？」

じゅんなが唐変木と叫ぶが、あきの方は唐変木がどう言う意味か分からずに首を傾け、はな達も首を傾げる。

「えつと……気が利かなくて捻くれてるって意味よ」

「ああ……何よソレ！」

「うがーっ！」

意味を納得してからあきはすぐ怒鳴る。

『まあまあ……』

「フーン！」

ソウゴ達が二人を宥めるが、そっぽを向いたのを見て、ため息を吐いた。

「あ！そういうえば時見、あんた先生が呼んでたよ。」

中間テストことでらしいよ……」

じゅんが思い出したのよう先生の伝言を伝えると、中間テストと聞いたソウゴがシリアスな表情になって顔を下に向ける。

「来てしまったか……」

「ソウゴ君。まさか、また……」

「大丈夫！俺には見えていた」

「何が見えてたの？」

「それは……数学の追試試験！」

追試試験と堂々と言い、四人がガクツと膝を折った。

そのまま学園へと到着したソウゴは職員室へと向かい、今日の放課後に補習授業を受ける事になった。

「——という事があってさ……」

「そんな事があったのね……ああ、それで……」

体育の時間。体育館でバスケットボールの授業を行っていたほまれは緑のビブスを着て、登校時に起こった話を同じチームのツクヨミに語っていた。(ちなみにソウゴやゲイツは、他の男子生徒たちと外の方でサッカーをしている)

それを聞いたツクヨミは、合点がいったという感じで視線をずらした。

「ふんっ！」

そこには同じチームのじゅんなどあきが、互いにそっぽを向いて唇を尖らせていた。

「同じチームなんだからさ……」

「まだ、ケンカ中なの？」

まだ彼女達が喧嘩していた事に呆れ顔を浮かべる二人。

二人の間にあるわだかまりが解消されぬまま、バスケの試合が始まった。

「どりゃーっ！ゴール頂きー！」

赤いビブスを着たはながボールを脇に持って、ゴールに向かって走る。

だがほまれにあっさり取られてしまう。

「めちよつく……」

「ドリブルしようよ……あとあれハンドだよ？」

落ち込むはなにツクヨミがフォローしていると、ほまれは左右別々に走るあきとじゅ

んなに気付いき、一瞬考えてから口元に笑みを浮かべる。

「あきー！」

そう言つてあきに向けてパスし、ボールをキャッチさせる。

「私にパスしてくれるなんて……！」

ウツトリとした顔で嬉しがつた直後、ルーラーを含んだ女子相手チーム三人が彼女の前に立ちはだかる。

「あきーほらじゅんなが空いてるー！」

ほまれはじゅんなを指さし、パスするよう促す。

「仕方ない……じゅんなー受ーけー取ーれーっ！」

そう叫んで彼女に向けて勢いよくボールを投げる。

だがそのボールは、取れないと判断してしゃがんだじゅんなの頭を掠り。受け手を失つたボールはそのままの威力でボール入れに命中した事で、中に入っていた複数のボールが散らばつてしまった。

「ちゃんと取つてよー！」

「取れるかー！」

また喧嘩が始まり、試合どころではなくなつた。

（ドリブルで抜けられたのに、亜希にパスしたのは何故？理解不能。

輝木ほまれ。薬師寺さあや。彼女達のデータとプリキュアのデータを照合すると、二人がプリキュアである確率は、100%）

ルーラーが心の中で呟き、散らばったボールを見た。

昼休み、ほまれは屋上にあるベンチに座り、空を見上げる。

「ここにいたんですね、師匠！」

「近くない……？」

「そうですか？」

あきの声が聞こえて向きを戻すと、すぐ目の前にいた。

「その師匠つての止めてよ……」

「じゃあ……輝木、殿？」

「ほまれでいいよ……」

着物を着て丁髷のかつらを被った自身の姿を思い浮かべられたのを感じたのか、名前呼びをお願いする。

「ほまれ……」

「…何で私に？スケート教えろって訳じゃ無さそうだし」

必死に弟子入りを希望する彼女に、ほまれはどうして弟子入りしたいのか尋ねる。

「私、中々物事決められなくて、柔道二段って言われるし」

「優柔不断ね……」

「ほまれは、憧れなんだ。自分の考え持つてて、大人っぽくて」

「……そんな事無いから」

「えっ?」

大人っぽいと褒められたほまれだったが、かつて自身がジャンプの失敗で怪我をした事によるトラウマで一度スケートを離れた時のことを思い出しながら、彼女の言葉を否定する。

事情を知らないあきはと言う事なのかと思ったが、それについて聞く前にほまれが口を開いた。

「じゅんなの方がよっぽどしつかりしてるよ。仲直りしないの?」

「……じゅんなとは、幼稚園からずっと一緒なんだよね。」

腐れ縁って奴? そのせいかあの子、いっつもお節介でさー。

だから、つい甘えちゃうんだ」

じゅんなへの想いを伝えた直後、チャイムが鳴る。

「やあつ、お昼休み終わり! ほまれも急がないと、授業遅れるぞー!」

ほまれに急がないと授業遅れると誤魔化す様に伝え、先に下へ降りていった。

その少し前、ソウゴが教室で眠っていた。

「こいつ……追試なのに……」

その姿をゲイツが呆れて見ていた。

「まあ、ソウゴ君はやれば出来る方だから……」

さあやがフオローしているのを横目に、気持ち良さそうに寝ているソウゴを、ゲイツ達はじつと見ていた。

「——あれ……ここ昨日の?」

夢の中で目を覚ましたソウゴは、昨日見た夢の街にいた事に気付いた。

「よお! また会えたな時見ソウゴ」

そこへ昨日助けてくれた仮面ライダーキカイの男性が現れた。

「俺のこと知ってるの?」

「俺の名前は真紀那レント。仮面ライダーキカイだ!」

「よろしく! ……これって、俺の夢だよね?」

「夢っちゃあ、夢だな」

「そうなんだ……」

そこへ子供たちがレントの元へ駆け寄ってきた。

「レント、またヒューマノイズが出たの？」

「ああ、もう心配すんな。みんなは大丈夫か？」

「大丈夫。大丈夫。レントこそエネルギー使ったんじゃない？」

「充電やってよ！」

「「「やってやって！充電！充電！充電！充電！」」」

充電とみんながレントにおねだりをする。

「仕方ないなあ！」

天に向け、両手を挙げて広げる。

すると、宇宙の衛星からエネルギーがレントへ照射される。

「えっ、えっ!?? 空から!??」

「太陽光発電衛星からのレーザー光で充電している」

「君、ほんとに機械だったんだ…」

「今は2121年。ソウゴは夢で未来を見ているからな」

「それじゃ、100年近い未来に来ちゃったってこと、俺？」

その割にはなんか……懐かしい雰囲気だね」

ソウゴが辺りを見渡すが、100年経ったというのに町並みは今と然程変わった様子

はなかった。

「…ていうか、さっき襲ってきたの、あれ何？」

「ヒューマノイズ。人間の形をした機械生命体だ」

「ヒューマノイズ？」

「世界はすでに機械に支配されている。ここは人間保護区。絶滅寸前の人間が暮らしやすいよう作られた安息地だったのだが、ヒューマノイズはそれすら許さない」

「それで君が、この子たちを守って旅してるんだね」

そこへ、人間達へ向けたラジオ放送が流れる。

「人間が集まって反撃しようとしている場所がある。俺はこいつらをそこへ連れていく」

『しかし諦めてはいけません！生き残ってる人間の皆さん、力を合わせましょう！集合ポイントはVS095』

ラジオから集合場所のポイントが発表された。

「この道をまっすぐ行けばそう遠くはないはずだ」

「偉いな。君だって機械なのに」

「それは……」

そこへ3人のヒューマノイズが出現した。

「機械が人間か？機械か人間か？」

襲ってきたヒューマノイズと交戦するレント。

レントは仮面ライダーキカイへと変身し立ち向かう。

『アルティメタルフィニッシュ！』

腕部にエネルギーをチャージし、パンチでヒューマノイズを凍結・爆散させる。さらにキカイは、上半身全体にチャージしたエネルギーを放出した。

「あれって……」

その技を見たソウゴは、昨日のアナザーライダーが使った技だと気づく。

「もしかして……あの、アナザーライダー……」

『フルメタル・ジ・エンド！』

ソウゴが考えている間にキカイは、キックでヒューマノイズを撃破した。

「ぼーっとするな！」

「え——？」

ソウゴはまだ残っていた女のヒューマノイズに襲われ、攻撃を喰らった。

「——あいたた……」

気づくとソウゴは椅子から床へ転げ落ちており、目を覚ました。

「……夢か」

また夢かと気づき、ソウゴが体を伸ばす。

「うん？ ルールー……？」

ふと横を見ると、休み時間も終わるのにルールーがどこかへ行こうとするのが見えた。

「もう。休み時間終わるのに」

その頃ルールーは、誰もいない階段へとやった来た。

「姿を見せないと思ったら、こんな所にいたなんて」

「パップル様……」

ルールーが影のある階段を上ると、この学校の制服姿のパップルがその上の階段に座っていた。

「どう？ この格好？」

「明らかに不審者。通報される確率、82%」

「いやにリアルな数字ね……でもまあ、あたしの色気は制服じや隠せないかもねん。

プリキュアとジオウにゲイツは、この学校にいるの？」

「詳しい報告は、調査が終了してから——」

「正体が分かったのなら、倒しちゃえば？」

「あくまでデータ収集が目的です」

「データなら先に集める物があるでしょ？」

プリキュア、ジオウとゲイツは、変身するのにアイテムを使う。まずはその力の正体を調べないとね」

「ルールー！授業遅れるよー！」

ルールーは下からのソウゴの声に反応して、その方を一瞬向き、階段の方に向きを戻すと、パツプルの姿はもう無かった。

「今行きます……」

だがソウゴはまだその時は知らなかった、ルールーの懐には既にソウゴのジクウドライバーがある事を……

そして放課後となり、誰もが帰宅準備をし終えた。

「じゃあ、俺補習に行くよ」

「ソウゴ！頑張つて！」

ソウゴが補習の教室へと向かうと、入れ替わるようにあきがはな達に声を掛ける。

「一緒に帰ろっ！」

「あなたは毎日、十倉じゅんなと帰宅するのでは？」

ルールーははな達と一緒に帰ろうとするあきに、じゅんなと帰るのではないのかと尋ねた。

「詳しいね」

「クラスメイトのデータは全て頭の中にあります」

「凄っ……………」

それを聞いたはなは驚きを隠せずにいた。

「一緒に帰ろう？」

「えっ……………でも……………」

じゅんなの机の方へ足を進めたほまれが、一緒に帰ろうと誘う。

「気にしなくていいよほまれ」

あきの言葉に苛立ったじゅんなが踏み付けるようにして歩き、ドアを勢いよく開けて走って行った。

「あつ、ちよつと……………」

「じゅんなさん……………」

「行こう、ほまれ」

「……………用事、思いだした」

「えっ?」

「ほまれ?」

「今日は先に帰るよ」

ほまれは二人にそう言い、教室を後にした。

そのまま彼女は、ビューティーハリーへ一人やつてきた。

「はぐぐぐたぐん。今日もきやわたぐん」

「何かあつたんか?」

はぐたんに頬ずりして甘えるほまれの隣にハリーが現れ、何かあつたのかどうか尋ねる。

「えっ?別に……」

「嘘つけ!いつもだつたら一緒に来るのに、今日は一人でおるから分かるわ。何かあつたんや?」

いつも一緒にいる筈のはなとさあやがないのを見て、何かあつたのか聞いたようだ。

「何も無いって言ってるじゃん」

「ホンマ頑固やな。ま、エエけど。」

その様子じゃ、学校辺りで何かあったみたいやな。

まあ、話したく無いなら、無理して言わなくええわ」

そういいながら彼は、冷蔵庫からアイスが入った容器を取り出した。

「スツキリせん時は、コイツに限る。チョコミントアイスや！」

ハリーがチョコミントアイスの蓋を開けてスプーンで掬い、ほまれの方に滑走させてからポーズを取る。

だが店内には、はぐたんしかいなかった。

「おらんやん……」

「いや、降って来ちゃった。ちよつと雨宿りさせて……」

「……何をしてる……?」

雨宿りに来たゲイツとすみれがハリーを見て、何をしているのだと尋ねた。

その頃、傘を忘れたはなとさあや、ツクヨミが、カバンを傘代わりにして外を走る。

「ほまれどこ行つたんだろ……ルールーまでいなくなっちゃうし……」

「とりあえず雨宿り出来る所、探そう」

「賛成……」

「もう！タイムマジーンが修理中じゃなかったから！」

走り続ける最中、はなはツツジ畑で傘も差さずに立ち尽す人影が見かけ、気になって走って向かう。

「ちよつと！どこ行くの！」

ツクヨミがそう言うが、はなは聞かずその男性に近づく。

「風邪、引いちやいますよ？」

すると男性は彼女に気が付き、振り返る。

「今日も元気だね」

「ツツジが……ですか？」

「雨は美しい花を咲かせて恵みとなる。

だが時には凍えるような寒さも与える。

不意に変わるあの空、どこかに似ていると思わないかい？心に……」

「心……あ、あれ？」

その人物はいつの間にかいなくなつてた。

——その頃、ソウゴは補習授業で追試試験を受けていた。

「見えてた……確かに見えてた……」

ジオウⅡの未来を予知する能力でテストの問題と答えを見ようとした事を思い出し、

そう呟きながら答案用紙を眺める。

「でも……でも、答えが見えないー!!?」

だが彼は追試の未来はわかっているにしても、答案用紙の答えは見えなかった。

じゆんなが、屋根のあるバス停のベンチに座って雨宿りする。

「いやー、参った」

そこへあきが雨宿りに来る。

「あつ……」

目が合ってしまった二人の間に、気まずい空気が漂い始める。

「座れば?」

「うん……」

じゆんなに促され、あきはベンチに座る。

ベンチに座る二人の間には、大きな距離があった。

「ねえ、どうして輝木さんなの?」

ふとじゆんは、何故ほまれに弟子入りしようとするのか問いかける。

「ほまれみたい、カッコよくなりたいたいから」

「ほまれほまれって……!」

「じゅんなは何も分かって無い！ 凄い良い子なのに！」

「そう言う事じゃない！ あきはそのままでもいいの！」

「あたしは……変わりたいんだもん……！」

ほまれのようにカッコよくなりたいあき。

そのまま変わらずいつものあきでいて欲しいと願うじゅんな。

——そんな二人の会話を、傘を差したパツプルが見ていた。

「イイ感じのトゲパワワ、発見」

彼女は二人のやり取りを見て、口元に笑みを浮かべる。

ほまれが公園の遊具で、仰向けになって雨宿りする。

「おい、何考えとるんや？」

「うわあつ!!? ど、どうして……!!?」

目を一度閉じてから開けると、目の前にハリーの顔が見え驚く。

「つたく、探したやないか」

「えっ? な、何? 何なの!」

ハリーにジッと見つめられ、段々と動揺する。

「アイス、溶けるやろ」

「アイス……?」

「ずーっと、楽しみにとつといたんや! 溶けるやろが!」

「はあ!?」 冷凍庫入れておけばいいでしょ!」

「お前が傘も差さんと出て行くから」

そう言つてから自分の持つてた傘を投げ、ほまれがキャッチする。

ハリリーの肩も足も濡れていたのに気付き、自分を探していた事を察する。

「つたく、先に帰るぞ。はなのママさんとゲイツに、はぐたんを見て貰つてるんや」

そう言い残し、ビューティーハリリーへ一人で戻つて行く。

「でも! 傘、一本しか……!」

傘を広げて伝えると、ハリリーの姿は見えなくなつていた。

そこでふと上の方を見上げると、ビニール傘越しに雨が止んで晴れた青空が見えた。

「雨………上がった……」

「発汗。瞳孔が開いている」

いつの間にか背後にいたルールーの声に驚き、滑り台から滑り落ちる。

「冷たつ……! い、いつから!?」

「心拍数上昇。150、151、152、153」

「何でも無いからっ!」

頬を赤くしたほまれが走り去る。

「…輝木ほまれ、集中力67%ダウン。」

お陰で、プリハートを奪えた。そして、ジクウッドライバーも——」

ルーラーの左手には、いつの間にか奪ったほまれのプリハートがあり。そして右手にはジクウッドライバーがあった。

「この計画は理にかなっている。正しい……選択」

だがクライアス社の社員として当然のことをした筈なのに、彼女の顔は優れていなかった。

夕方、ルーラーは橋の上でパップルにジクウッドライバーとプリハートを見せ、奪った事を報告する。

「やるじゃない」

パップルがジクウッドライバーとプリハートを取ろうとするが、ルーラーが遠ざける。

「解析出来次第、社に報告します」

「まあいいわ。それでジオウとプリキュアの一人は変身出来ない。」

あたしはその間に……残りプリキュアとゲイツを倒すから！」

そう叫ぶと、トゲパワワを放出しているあきとじゅんなが宙に浮かぶ。

「これは……」

「足りなきやこつちのモンでしょ！ネガティブウエーブ！」

パップルは制服を脱ぎ捨てて普段着に変わり、ネガティブウエーブを放出させて、二つの三つ編み特徴的な女子学生型オシマイダーを作り出した。

その頃、ぐったりとした姿で追試の結果を待つソウゴ。

「はあ……ん？……ッ？！」

その時、外の様子が変わっているのに気づいた。

「あつ！先生すいません！ちよつと！」

ソウゴはカバンを持って急いで教室を出る。

現場では既に、ゲイツとエールとアンジュがオシマイダーと交戦していた。

『フィニッシュタイム！タイムバースト！』

「はああああああつ！」

ゲイツとエールとアンジュのトリプルキックが頭部に命中し、川に落ちる。

「来たわねプリキュア！ゲイツ！オシマイダー！やっちゃって！」

パップルの指示を聞いたオシマイダーが片足で回転し、おさげ状の髪を伸ばす。

「速っ——うわっ！」

アンジユは跳んで避けるが、エールは直撃を受ける。

「エール！ ああっ！」

エールに気を取られたアンジユも直撃を受ける。

『ファイズ！』

それを見たゲイツはファイズウオッチを装填し、ドライバーを回す。

『アーマータイム！ コンプリート！ ファイズ！』

『レディー！ ショットオン！』

ファイズアーマーを装備すると、ファイズフォンXを操作し、右手にショット555を召喚させて装備する。

「はあああああ！」

ファイズショットを放つが、オシマイダーには効いてなかった。

「バカな？！——ぐう！」

驚いている隙に攻撃され、ゲイツまでも吹っ飛ばされた。

「エール！ アンジユ！」

「みんな！」

そこへはまれとソウゴにツクヨミ、両手に抱えたハリーが駆け付ける。

「イケイケでしょ？何たって、ブツ飛びなトゲパワワが手に入ったからね」

「あきちゃん！」

「じゅんなさん！」

「どうやら、あいつらから作ったオシマイダーのようだな！」

ソウゴ達は宙に浮かぶ二人を見て、彼女達がオシマイダーの素体になったのだと知った。

「早く、助けないと……！」

「急ごう！」

ソウゴがジクウドライバーを、ほまれもプリハートを取り出そうとする。

「嘘……っ!!?」

「ないッ!!?」

だがジクウドライバーとプリハートは、ルーラーの手にあった為、取り出すことは無かった。

「ないない？」

「何やと!!?」

「まさか、落とした？」

「そんなハズ無い！絶対ここにあったのに！」

「鞆の中にずつと……そんなはず」

その様子を橋の下で見ていたルーラーが、ジクウドライバーとプリハートを握り締める。

オシマイダーの髪による攻撃を三人が弾いて近づくが、回し蹴りを受けて吹き飛ばされる。

「近づけない……!」

オシマイダーが髪をソウゴ達三人に向けて飛ばす。

「アンジュー!ゲイツ!」

「ええ!」

「わかった!」

なんとかエール達が髪を止めた。だがその直後にオシマイダーが跳び、三人にパンチを叩き込んだ。

「エール!アンジュー!」

「ゲイツ!」

「ざまあプリキュア!ゲイツ!」

パップルが高々と笑い、勝利を確信する。

「みんな!」

「そのままじゃ無茶やー！」

オシマイダーに向かおうとするソウゴとほまれをハリーが止める。

「どうしよう……！」

変身もできない、どうしようもないと思いながら前を見ると、そこにはルーラーがいた。

「ルーラー……？何でここに……？」

「私には助けられない……！」

ソウゴはルーラーの手を見てみると、ほまれのプリハートと自身のジクウドライバーがある事に気付いた。

「俺のドライバーにプリハート？何で……？」

「だから……行きなさい！プリキュア！ジオウ！」

ソウゴとほまれはお互いの顔を見て頷き、ルーラーに向かって走り、彼女の持ってたジクウドライバーとプリハートを取る。

「ありがとう。ルーラー」

「あつ……！」

『ジオウ！Ⅱ！』

ソウゴは取り出したジオウライドウォッチⅡを分割し、ドライバーの左右に差し込

み、ほまれがプリハートにミライクリスタルをセットした。

「変身！」

「ミライクリスタル！ハート、キラつと！は〜ぎゅ〜！」

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！II！』

「輝く未来を、抱き締めて！みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「はあああああつ！」

ジオウとエトワールのダブルキックが、オシマイダーの腹部に命中させて吹き飛ばす。

二人はゲイツとエールとアンジュの前に着地する。

「お待たせ」

「もう、二人して遅いよ！」

「ごめんごめん」

ジクウ達は遅れてきたことを謝る。

「何で……っ!? アイツまさか……何してくれてんのよ！」

パップルがルーラーに愚痴を吐くと、起き上がったオシマイダーが二人に向けて髪を伸ばす。そこへジオウがサイキョーギレードを出した。

「メロディソード！スタースラッシュユ！」

更にエトワールがスタースラッシュを放つ。その時にジオウがサイキョーギレードのフェイスを回す。

「逃さないよ！」

『ジオウサイキョウ！』

サイキョーギレードのジオウのフェイスの文字が “ジオウサイキョウ” へ変わった。

『霸王斬り！』

さらにジオウが繰り出した斬撃がオシマイダーを後退させた。

「何よ何よ！…こんなの反則よ！」

「エトワール！二人を！」

「うん！」

ジオウからあきとじゅんなを助ける様に言われ、エトワールが走る。

「今度……こそ！一緒に帰ろう！」

その隙にエトワールが、二人に向かって手を伸ばした。

「——この人……どこかで……」

「——何か、必死……」

あきとじゅんなが屋根付きバス停の下で、手を伸ばすエトワールを見て眩く。

「あのさ……ごめん……」

私、輝木さんに嫉妬してたかも……」

「私こそ、ごめんね……」

じゅんなに迷惑掛けてばっかだから、しつかりしようと思って、ほまれに弟子入りしたんだけど……」

「私さ、あきはそのままで良いと思ってた。おっちょこちよいで楽しいし」

「何よそれ」

「でも、それがあきの挑戦を邪魔してたのかも……」

だから私、応援するよ！あきがなりたい自分になれるように！」

じゅんなはなりたい自分になれるように応援するとあきに伝え、笑顔を作る。

「じゅんな……」

「さっ、早く帰ろっ。明日も学校なんだから」

「流石風紀委員」

じゅんなの差し伸べた手を、あきが掴む。

二人の間には、もう既にわだかまりは存在してなかった。

——二人からトゲパワワが消え、アスパワワが溢れ出て来る。

手を伸ばしたエトワールの隣に、ジオウが現れる。

「仲直りできたみたい?」

「そうみたい。エール! アンジュ!」

「うん!」

「ええ!」

「決めるよ!」

「なら、俺に任せて!」

『ジカンギレード!』

ジオウがジカンギレードをドライバーから召喚し、それとサイキョーギレードを手に持つ。

『サイキョーフィンツシュタイム!』

ジカンギレードのケンモードとサイキョーギレードを合体させると、剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『キングギリギリスラッシュ!』

「オリヤヤヤヤヤ!!?」

ジオウはサイキョージカンギレードを振り下ろし、オシマイダーを三つ編みの髪の毛の毛
諸共斬り裂き、動きを止めた。

「今だ!」

「「ミライクリスタル!」」

「エールタクト!」

「アンジュハープ!」

「エトワールフルート!」

三人がメロディースードのボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出す。

「「心のトゲトゲ、飛んで行け!プリキュア!トリニティ・コンサート!」」

対象に向かって虹色のエネルギーを飛ばすトリニティ・コンサートを放ち、オシマイ
ダーに命中した。

「「HUGっとプリキュア!エール・フォー・ユー!」」

巨大な木が作り出されてピンク・水色・黄色の花が咲き誇り、オシマイダーが浄化さ
れた。

じゅんなどあきは元に戻り、とりあえず一安心した。

だが気になることがあり、ジオウ達はルールの方を見る。

「で、どう言うこつちや?」

「どうして……あなたが?」

「ルールー……」

ここにいるみんなが、ルールーが何故プリハートとジクウドライバーを持っていたのか問い詰める。ただ一人を除いて。

「見つけてくれたんでしょ!」

『えっ!?』

そのただ一人であるジオウが、ドライバーとプリハートを見つけてくれたと聞く。

「俺とエトワールが落としたから、ルールーが拾ってくれたんでしょ?」

「私は……」

自身を庇っている様に聞こえるジオウの言葉に、思わず戸惑うルールー。

「ツ!?」

その時、ジオウIIの仮面の二本の針が回り始める。

そして見てしまった、エールが謎の光に当たる瞬間を――

「はっ!? エール危ない! 避けて!」

「えっ?」

ジオウが叫ぶと、突如ルールーの目が見開き、エールを突き飛ばす。

エールが尻餅を付いた直後、上から赤黒い光線が放たれ、ルーラーに直撃した。

「何だ!?？」

「何なの、今の光……」

「いやー!」

光線を受けたルーラーが両膝を付くと、『ガシャン!』という金属機械音が響く。

「この音……っ!まさか、アンドロイド……!?？」

「!?!」

「アンドロイドって……」

「人に似せて作られたロボットって事……?」

「あの音からして間違い無い……!」

ツクヨミとゲイツ曰く、ルーラーは人間では無く、アンドロイドだったことがわかり、皆はあまりのことに驚愕を隠せずにいた。

ルーラーが機能停止した直後、上からパツプルが現れて着地する。

「出来損ないの機械人形が、あたしの邪魔をするなんて。調整し直しね」

そう言うってから指で押すと、ルーラーが事切れた死体の様に抵抗できないまま横に倒れる。

「ルーラー!」

エールがルーラーの元へ走るが、パップルが扇子を振って竜巻を起こす。

「ぶっちゃけ、切羽詰まってんのよ」

「待って……!」

竜巻が消えると、ルーラーとパップルはいなくなつた。

「そんな……!」

「ルーラー……!」

「ルーラー……!」

「ルーラー!」

「ルーラー……!?!」

ルーラーがクライアス社の一員でアンドロイドだった事を知つたのもつかの間、パップルに機能停止させられ、クライアス社に連れ戻された。

——その現実を、ソウゴ達は受け入れられなかつた。

次回! Re. HUGつとジオウ!

第23話 友情の言葉『WILL BE THE KING』2121

第23話 友情の言葉 『WILL BE THE KING』 2121

ルーラーがアンドロイドだと知ったソウゴ達。

そして、そのルーラーが連れ去られてから丸一日が経った頃。彼女は今、クライアス社の中にあるカプセルにいた。

「ルーラーが裏切ったと?」

「そつ。キュアエールの所に潜入したまでは良かったんだけどね」

パップルが爪をヤスリで削りながら、ルーラーについてリストルに報告する。

「ミイラ取りがミイラになっちゃったみたい」

「クライアス社の優秀な製品に、何故そのような不具合が……」

「知らないわよ。とりあえず今、知らないデータは削除してるわ」

そう報告しながらパップルが端末を出し、ルーラーの記憶データを削除する。

「ふむ、失礼」

彼女の横からリストルが端末を取り、何やら別のプログラムを組み始めていた。

「プログラムを戦闘用に変えてみましょうか。それに、試作品のアンドロイド専用パ

ワードスーツも」

「俺からも加えて置く点が」

そこへスウォルツまでも現れた。

「これも加えて置こう」

スウォルツが端末を操作し、何かをルーラーの体内に移植した。

「えっ？ いや、そこまでいじる気は無かったんだけど……」

「機械人形は機械人形らしく、役に立って貰った方がいいでしょう」

少し驚いているパップルに、リストルは端末を操作しながら言う。

「ですが……」

「貴様の意見など求めていない」

「はい……」

リストルは戦闘用にプログラムを書き換えながら試作品のパワードスーツを装着させ、スウォルツはルーラーに何かを細工し始めた。

一日経ち。ビューティーハリーへとソウゴ達はやってきた。

「待ちいや自分らー！」

ハリーとツクヨミがルールを探しに行こうとするソウゴ達を止めるが、彼らの意志は二人の意志より強いのか、ハリーはおろかツクヨミですら引きずられている。

「待てつたら……!」

「止めないでよハリー! ツクヨミ!」

「私達行かないと!」

「ちったあ落ち着け!」

「落ち着ける訳無いじゃん!」

「早くしなきゃルールが……!」

「アイツはスパイヤで!」

『?!』

スパイと聞いてソウゴ達が言葉を失っていると、ようやく歩みを止めた彼らにハリー達はルールについて今わかる事を推測も兼ねながら話し始める。

「あのタイプは初めて見たから、俺も気付けへんかったけど、間違い無い」

「ルールは未来の技術で作られた、クライアス社のアンドロイドよ」

「ああ、以前聞いたことがある。クライアス社には独自に開発できる技術者がいるとな」
ゲイツ達はルールがクライアス社のアンドロイドだと話すと、ソウゴ達は「そんな筈はない!」という現実逃避の思いと、「まさか、彼女が……」という真実を受け入れられ

ずにいる心が交差し、反論の言葉も出なかった。

「そんな奴が、偶然にはな家に潜り込んで来る訳ない。

きつと狙いは、俺達だったはずだ……」

「そうとも知らず、俺らはまんまと騙されたんや」

騙されていた。そう聞かれたソウゴとはなは、激情的な表情を浮かべながら口を開く。

「騙されて無い……!」

「騙されたろう!」

「騙されて無いって!」

「騙されたんや!」

「騙されて無いつたら無い!」

「自分らムキになつとるだけやろ!」

「騙されて無いです……!」

「いい加減にして!」

ソウゴとゲイツ、はなとハリーが意地を張り続けてたその時、横からツクヨミが仲裁に入る。

「喧嘩しないで。はぐたんが泣いちゃうでしょ」

ハリーに抱っこ紐で抱えられたはぐたんが、三人の意地の張り合いを見て泣きそうになる。

「はぐたん、大丈夫やで……！」

「ただのスキンシップだよ……！」

「ごめんね。俺達が悪かったよ……！」

はぐたんの泣き顔を見て慌てた二人が、スキンシップと誤魔化す。

「なかよし。よちよち」

「「はぐたん……！」」

泣き止んだはぐたんがそう言い、取り敢えず安心する。

「とにかく、意地の張り合いはそこまでにして、これからどうするか……」

「俺はルールーに会いたい！会って話がしたいんだ！」

「私もルールーとお話したい！話して本当の気持ちを知りたい！」

「私もソウゴ君とはなの意見に賛成だよ」

「私も最初は狙いがあったのかもしれないけど、あの子、ソウゴと私にドライバーとプリハートを返した時、『行きなさいプリキュア。ジオウ』って言ったんだ」

ツクヨミがこれからどうするかと話す時、ソウゴ達はルールーと話がしたいと語る。

「ハリーとツクヨミもその時、すぐ近くにいて聞いたよね？」

「確かにそうやな」

「うん……」

「最後まで騙す気なら、私達を庇ったりしないハズだよな？」

それを聞いたハリーが椅子に座り、頬杖を当てる。

「自分からお人好し過ぎるやろ……けど、万が一そうやとしても、クライアス社は裏切り者を許すような組織や無いで」

「ハリー、随分詳しいね？」

「!?？」

クライアス社について詳しいハリー。さあやが疑問に思うと、ゲイツとツクヨミまで驚き、動揺し始める。

「わ、悪者つてのは、そう言うモンや」

「だったら余計に、ルールを助けなきや！」

「賛成！」

「みんなでルールを取り戻そう！」

「ホンマ、お人好しばっかやな」

「あーい！」

ハリーの誤魔化しにも聞こえる言葉を聞きながらも、ルールを助けたというソウ

ゴ達の気持ちも決まり、彼女を探しに出かける。

とりあえず、ソウゴ達は別れて探しに行く事にした。

「待て。ジオウ」

そこへゲイツがソウゴに呼びかける。

「二つ聞く。もし、あのアンドロイドがお前らに牙を向けたらどうする？」

「それは……」

その質問は、ソウゴがルールーと戦えるのかどうか、そして最悪の場合は彼女を破壊殺害する覚悟があるのかどうかを意味していた。

「その時は、俺が奴を破壊する」

「ッ!?? ダメだよー!」

もしルールーが自分達に敵対したら、ゲイツは彼女を破壊すると言うと、ダメだとソウゴが叫ぶ。

「ルールーは確かにアンドロイドだったかもしれない……でも、心は俺達と変わらない!人間と同じだ」

彼は知ってる。あのえみるの家であった言い争いでルールーがえみるを守った事を、保育園での体験の事を。

敵であるにも関わらず、ジクウドライバーを渡したあの時を知ってるからこそ、彼は

彼女が人間だとはつきりと言える。

「ルールーは破壊させない。」

もしゲイツが破壊するなら、俺がゲイツを止める」

「ツッ？」

そう言つて強く睨みつけるソウゴの威圧に、ゲイツが思わず後ずさる。

「ルールーとはトコトン話し合う。だから……お願い」

それだけ言つてゲイツを残して一人走り、ルールーを探す。

「なぜ……なぜ、奴が……」

「おいおい、我が救世主」

自身がソウゴに押されたという事実には動揺しているゲイツが振り返ると、そこにはいつの間にか白ウオズがいた。

「魔王にあしらわれるとは、君も困った人だね」

「白ウオズ……」

「まあいい。あのアンドロイドよりも、君はあのアナザーライダーの力を手に入れる事が優先だ」

白ウオズがゲイツの方に手を置く。

「あのライダーの力を手に入れば。君は最強の力、ゲイツリバイブの力が手に入るのだ」

から」

「ジオウを倒す力……」

す。
クライアス社のカプセルの中で調整を受けるルーラーが、未来の世界の事を思い出

記憶の中にある未来の姿は、世界がモノクロ写真の様に静止していたが、そこに映る人々の顔には幸せそうな表情が浮かんでいた。

（これは未来の世界。

私は未来を奪われた人間を管理する為に作られたアンドロイド。

人々は時間を忘れ、何も望まず静かに人生を終える。

そこには、痛みも苦しみも無い。

これが正しい世界。これが正しい世界……)

保育園での仕事体験を思い出して、目を開けると同時に、カプセルから出て来る。

「プリキュア……ジオウ……」

その時、クライアス社の会議室で警報が鳴る。

「何事？」

『RUR—9500、ルーラーが出撃しました。』

「困った機械人形ですね。パップルさん、後はお願ひしますよ」

「えっ？あたし？」

暗に様子を見に行つてこいというリストルの発言に驚いたパップルだが、それを見たスウォルツも口を開く。

「調整を始めたのは貴様だからな」

「ブツ飛び〜！」

その頃、ツクヨミが一人、クジゴジ堂へと戻つていた。

「ツクヨミちゃん帰つて来てくれてほんと嬉しいよ！もう、どっか行つちやつたと思つて心配してたんだ」

「何も言わずすいません。実は私もゲイツも……ここを出て行かなくちや行けなつくて……」

「あ、そうなんだ。フフ……えっ……？出ていくの？」

二人が出て行くと聞き、順一郎はツクヨミの方を二度見しながら驚く。

「今まで、ありがとうございました」

「あ、いやいや……あは……いやいや、こっちがお礼を言いたいくらいだよ」

「お礼？」

「ソウゴ君、君達が来てくれてから、凄く楽しそうだったから」

「ソウゴが……？」

「子供の頃からねえ、王様になりたいなんて言う子だったから。ちよつと変わってるっていうか、お友達もさあやちゃんくらいしかいなかった」

「そうだったんですか？」

あんなにコミュ力高いのに友達がさあやしかいなかったのかという思いがツクヨミの頭を過つたが、幼い頃から王様になりたいと言っていたとすれば、まあ妥当……むしろ彼女が友達で居たこと自体が奇跡なのかも、と結構酷いことを考えていると……

「こんなロボットも友達だったぐらいだから」

順一郎はそう言つて、見つけたブリキロボを見せる。

「そんなソウゴ君が、同世代の仲間とこれだけ仲良く過ごせたんだ。絶対嬉しかったと思うよ」

ロボを手取るツクヨミは、ロボの裏にマジックで書かれた文字を目にする。

「WILL BE THE KING……」

しばらくすると、ツクヨミのファイズフォンXが鳴り出す。

ソウゴと合流したはな達が土手沿いを走って移動する。

「どこ探す!?？」

「分からないけど、手あたり次第探そう！」

「るー！」

「っ!?? あれ！」

はぐたんとソウゴが声を上げると、公園に見覚えのある誰かが立っていた。

「ルールーだ！」

SFラノベ系ロボットアニメで見えるようなメカニックびっちりスーツを着ているが、それがまぎれもなくルールーであると気づき、ソウゴ達は彼女の下に駆け寄る。

「どこ行つてたの!? 探したよー良か——！」

ソウゴがルールーの手を取ろうとするが、振り払われる。

「ルールー……どうしたの……」

「プリキュア……ジオウ——倒す！」

ソウゴとはな達を敵意に満ちた目で見据えながら倒すと言うやいなや。ルールーの真上からこれまたSFラノベに出てくるような、何故かルールーの姿と結構似ている大

きめのワードスーツが降って来る。

ルールーが宙に浮かぶと同時にワードスーツが分離され、彼女と合体する。

「だああああああっ！」

「危ない！」

人間態のハリーがソウゴ達を抱えて跳ぶと同時に、ルールーのパンチが地面に命中する。

「ハリー！」

遅れてやってきたゲイツ。彼女が放った攻撃は凄まじく、圧倒的風圧に吹き飛ばされるが、直撃は避けられた。

「ハリー！」

「大丈夫や！」

「ルールー！止めて！」

「プリキュア……倒す」

はながやめるように言うが、ルールーからソウゴ達に向ける目は明らかに敵として見てる。

「そんな……」

「変身するよ！」

「でも……」

「このままじゃ、話も出来ないでしょ！」

「ほまれの言う通りだ。覚悟を決めろ！」

「……うん」

「……分かった」

ソウゴとはなも決意し、五人は覚悟を決める。

『ジクウドライバー！』

『ジオウ！』

『ゲイツ！』

「変身！」

「ミライクリスタル！ハート、キラッと！はるぎゅう！」

五人はウオッチとミライクリスタルを手に持ち、ジクウドライバー、プリハートへと装填し、姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダージェイツ！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

五人が変身を完了し、ルールの前へと現れる。

「プリキュア……ジオウ！」

ルールのパワードスーツからミサイルが放たれた。

五人は一斉に避けると、ルールがゲイツの前へと現れた。

「ゲイツ……対象問題なし！」

そのまま巨大なアームが、驚愕するゲイツに直撃。薙ぎ払われたゲイツはパワードスーツの性能を表すかの様に、遠くに飛ばされながら転がり倒れる。

「ゲイツ！」

「大丈夫か！」

ハリーが急いでゲイツを介保する。

「ルール……」

「まず一人とは、いい感じね」

そこへパップルが木の上に現れる。

「パップル……」

「あなたがルールの記憶を消したの……？」

「そつ。あたしはアンタ達と遊んでたルールの記憶を消したの。今のルールは、ア

ンタらと出会う前の機械人形よ」

「なら戻してよ！」

「お願い返して！消したの返して！」

「無茶言わないでくれる？一度ゴミ箱にポイしたデータは戻りませ〜ん。

でも消して無いものもあるわよ。アンタ達の戦闘データ」

これまでの生活のデータを消しても、戦闘データは消して無かったと話す。

ルールが両脚のブースターを噴射して飛び、最初にアンジュとエトワールに体当たりを繰り返す。それに対して二人が跳び、体当たりを避けて着地する。

「エトワールはフィギュアスケートのスポーツ特待生。身のこなしが早く、ジャンプ能力に優れている」

ルールは冷静にエトワールの戦闘データを分析しながら、もう一度体当たりを繰り返す。エトワールがそれを何とか避ける。

「けれど、その動きは正確なだけ。予測可能」

「きやああああああつ！」

だがそのつかの間、右肩のビームマシンガンから連射されたビームの直撃を受ける。

「エトワール！」

アンジュがエトワールの落下予測地点に向かって跳ぶ。

「アンジュは人を助けようとする余り——」

ルルーが後ろからアンジュに不意打ちを仕掛ける。

「アンジュ！」

『鎧武！』

「隙が生まれる」

「ッ!??!」

アンジュが攻撃を受ける寸前、ジオウが鎧武アーマーとなつて大橙丸Zの二刀流で受け止めた。

「ああああッツ!??!」

「ジオウは仲間を…特に幼馴染を助けようと、庇おうとする傾向が多くみられる」

しかし、背後からのラリアットを受け止め切れず、二人は地面に小さいクレーターを作りながら攻撃を受けてしまい、ジオウも鎧武アーマーが解けた。

そして、次にエールの方へと向かう。

「エール……特に取り柄は無い。スペックはこちらが圧倒している」

一撃一撃が重いラッシュを繰り返し、それを受けているエールは腕で防ぐだけで精一杯だった。

「エール！」

「はあっ!」

「やあっ!」

「はあっ!」

エールを助ける為に放ったアンジュとエトワール、二人のキックがルーラーに命中し、後から繰り出したエールのキックも命中する。

だが反撃にパンチを叩き込まれ、エールは両腕でガードするも、余りに強力な衝撃で彼女は両腕の骨に僅かな痺れを生じさせながら後ずさる。

『ダイダイダイ・ダイケイド!』

ルーラーが三人に気を取られているその隙に、ジオウはダイケイドウオッチをドライブバーへと装填し回す。

『アーマータイム! カメンライド! ワーオ! ダイケイド! ダイケイド! デイーケーイードー!』

『ライドハイセイバー!』

ダイケイドアーマーを纏ったジオウがルーラーの下に走り、ルーラーも腕をドリルに変えてジオウのライドハイセイバーとぶつかる。

町ではルーラーとの戦いが遠くで煙が生じ、えみるが愛崎家で双眼鏡を使つて確認す

る。

「あれは……プリキュアと時見先輩！何だか凄いのと戦ってるのです！」
エール達が戦っている事に気付き、そこへ向かう。

ルーラーが左肩のミサイルポッドからミサイルを飛ばし、ジオウ達は避ける。

「イイ感じじゃない。後でルーラーからプリキュアの正体を聞くつもりだったけど、その必要も無さそうね。まずはプリキュア達から終わらせちゃいな！」

ルーラーが両手を重ねて振り下ろし、四人で止める。

「本当にこれでいいの!??!」

「思い出して！」

「ルーラー！」

「本当の思いを取り戻して！ルーラー……!!?」

「出力アップ……!!」

だがルーラーは無慈悲にも出力を上げ、四人の両膝を曲げさせる。

「何してんのルーラー！しっかりしなさい！」

パップルが叫んでから一旦距離を取る。

「十分ダメージは与えたはず。まだこんなに力が残っているのは想定外。」

もっと分析する必要あり。もっとデータを……データを……！」

そう言うところルルーはエトワールを掴み、彼女の分析を行う。

「輝木ほまれ。4月8日生まれ。身長163cm……！」

——その時、公園での出来事を思い出し、掴む手が緩む。

その隙に彼女は抜け出して、エールとアンジュの方へ戻る。

「薬師寺さあや。6月10日生まれ。頭脳明晰」

アンジュに狙いを変え、パンチを繰り出す。

——今度は保育園での出来事を思い出して直撃する寸前で止まり、アンジュは分かっていたかのような表情を浮かべた。

「何してんの！」

「ルルー……？」

「野乃はな。1月20日生まれ。家族構成は——」

エールの顔を見ながら言っていた途中で、初めて野乃家に来た時の夜に、はなと話した事を思い出す。

「時見ソウゴ。9月29日生まれ。オーマ——」

次にジオウを見ながらオーマジオウと言いかけると、彼女は今までソウゴを見てきた事を思い出す。

自身が今まで見てきたソウゴの優しさを、未来で聞いたオーマジオウとは違う事を――

そして突如、彼女は胸を抑えて苦しみ出した。

「ルールー？」

「声が届いているの？」

「ルールー、はなだよ！」

「さあやだよ！」

「ほまれだよ！」

「ソウゴだよ！思い出して！」

苦しむルールーの頭部から電流が流れ、あちこちからも流れ始める。

「ううう……ッ！うあああああああつ！」

ルールーは更に苦しみ出し、両膝をつく。

「どうしたの？？」

「これは……」

見ていたパップルとゲイツは驚いていた。

「さあや……！ほまれ……！はな……！つ！ソウゴ……！つ！」

「思い出したの？？」

「そんな訳無い！」

ルーリーの記憶はちゃんと消した筈だ、今更思い出すはずが無いと考えるパップル。ならば今のルーリーの不具合は一体なんなのか、彼女にはその原因が分からなかった。

「考えられるとしたら、ルーリーが消す事を拒否したとか……！」

それに対してアンジュは、ルーリーは記憶を消す事を拒否した為に、自分たちの思い出を思い出し、苦しんでいるのだと推測する。

「行くよ！」

「ええ！」

アンジュとエトワールがメロディソードを出現させる。

「フェザーブラスト！」

「スターストラッシュ！」

向かって来るルーリーに、アンジュとエトワールがフェザーブラストとスターストラッシュを放ち、命中させる。

「よし、今なら！」

最後にジオウは、ライドヘイセイバーにデイケイドライドウオッチを装着した。

『フィニッシュタイム！』

ライドハイセイバーの時計の針を三周回し、回し終わるとジオウは構える。

『ハイ、カメーンライダーズ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！ハイ！セイ！』

『ディディディディケイド！平成ライダーズアルティメットタイムブ레이크！』

「おりやああああー!!?」

カード型エネルギーを出現させながら、彼女の装甲を斬り裂く様な一撃を放つと、パワードスーツにヒビが生じて砕け散り、ルールーが中から出て来た。

「みんな！ルールー……やったの？」

「そうらしい……」

遅れてツクヨミが現れ、ルールーがパワードスーツから解放された。

それを見て安堵を浮かべたジオウがウォッチを外した。

「ルールー……?」

「元に戻ったの……?」

「はい……」

「そんな……!」

ルールーの記憶が戻った事にエール達は喜び、パップルは驚く。

「皆さん……私は……うああああああつ!」

「ルルー?」

しかしルルーは、言ってた途中で、胸を抑えて苦しみ出す。

「どうしたの?」

「痛い……胸が……痛い……ッ!」

「これは……!」

「何……?」

突然の事にハリーとツクヨミにも、何が起こっているのかわからなかった。

「苦しい……ッ! 苦しい……ッ!」

「ルルー!」

「何、これ……本体の破損箇所は無いのに……胸が張り裂けそう……ッ!」

すると突如、ルルーの胸から植物の根、或いは枯れた木の枝の様なものが飛び出してきた。

そのままルルーの体が、まるで彼女を束縛するかのようにな植物に纏われ、姿を変えていく。

『キカイ……!』

「ルルー!」

ソウゴ達が苦しみ続けるルルーに駆け寄ると、ルルーの胸から植物の根と一緒に

木で出来た蟲の様なものが出て来ると、寄生しようとしているかの如く彼女の顔に張り付き、先日ソウゴとゲイツの前に現れたアナザーライダー：アナザーキカイとなった。

「もしかして……………」

「私に近付かないで！」

「ぐぶう!？」

頭部にある隙間の様な窪みからソウゴの姿を見たアナザーキカイの攻撃が、彼に直撃した。

「ソウゴ！」

「ソウゴしつかりするんや！」

アナザーキカイの攻撃を生身で受けた事で、倒れ込んだソウゴが気絶してしまった。

「これは好奇だ」

ツクヨミとハリーに心配されるソウゴの姿を見て、好奇だと言いながら白ウオズが現れた。

「白ウオズ……………」

「魔王が倒れ、あのアナザーライダーも現れた。全てに置いて、我が救世主の都合がいい！」

『ビヨンドライダー！』

『ウオズ!』

ビヨンドライダーを装着した白ウオズが仮面ライダーウオズのウオッチを起動させ、ドライバーに装填した。

『アクション!』

「変身!」

『フューチャータイム! スゴイ! ジダイ! ミライ! 仮面ライダーウオズ! ウオズ!』

仮面ライダーウオズへと変身した白ウオズはアナザーキカイに向かって行こうとする。

『ジカンデスピア! ヤリスギ!』

「やめて!」

エールとアンジュが立ちはだかるが、白ウオズはなんの迷いもなくジカンデスピアを振る。

へパシツ!」

「ゲイツ君!」

だがゲイツが前に出て、エール達の代わりにジカンデスピアを受け止めた。

「なんのつもりだい。我が救世主?」

「お前らはルールをなんとかしろ。俺はこいつを止める」

「ゲイツ……うん！」

エール達は急いでアナザーキカイにされたルーラーへ向かう。

「お前はあのアンドロイドを破壊して、アナザライダーの力を手に入れる気だろ？」

「そうだと言えば？」

「そんな事は俺がさせない」

ゲイツがルーラーを破壊しようとするウオズを止める。

その頃、気絶したソウゴはまた夢を見ていた。

「ソウゴ。ソウゴ。ソウゴ。ソウゴソウゴ！」

「おおお……」

レントから名前を連続で呼ばれ、夢の中で目を覚ます。

「よかった……無事だったか……」

ソウゴが無事と安心すると、レントはふらつき膝をつく。

「大丈夫？」

「エネルギーが切れただけだ」

心配するソウゴへエネルギー切れと教え、衛星からエネルギーを照射してもらうため

天へ手を広げる。

すると衛星から警告音のようなサイレンが鳴り、赤い光線がレントへ降り注がれる。その時、レントが苦しみ出す。

「「「レント!?!」」」

レントの様子を見て、心配する子供達。

「レントー!」

「うあああああーっ!」

苦しむレントは変身動作をしてないのに、仮面ライダーキカイへと変身してしまう。

「レントオオオオーッ!」

「お前、機械か……?それとも……人間かあー!」

暴走する仮面ライダーキカイはソウゴに襲い掛かり、殴り付ける。

「どうしたんだよ!レント!」

ソウゴはキカイの攻撃を紙一重で躲した。

「うわあああああああ!」

キカイは身体中に電流を流しながら何処かへ行ってしまった。

「レント……」

「お兄ちゃん、大丈夫?」

攻撃を避け地面をついていたソウゴに呼びかける少年。

「ありがとう。え〜つと、君は……」

「俺はマルコ」

マルコの手を握り、ソウゴが起き上がった。

「レントを探しに行かなくちゃ!」

「ダメだつ!」

マルコ達を行かせるのをソウゴが止める。

「今のレントに近づいちゃいけない。多分、敵が衛星からレントの頭脳を書き換えるか何かしたんだ、レントが機械だから」

「機械じゃないよ」

「え……?」

「レントは機械じゃない!友達だ!」

「元々レントはヒューマノイズだった。」

俺達は人間、レントは機械。狙われる側と狙う側でさ。

でも……友達になった」

「友達……」

友達だと言うマルコ達の言葉を聞いた時、ソウゴの脳裏にルーラーとツクヨミとゲイツがよぎる。

「…レントを探そう」

ソウゴは子供達と一緒にレントを探しに行く事を決めた。

現実の方では、エール達がアナザーキカイへと変身したルーラーを止めようと必死に応戦していた。

「来ないで！」

苦しみながらアナザーキカイはエールに攻撃する。

「そんなの、無理！」

「くどい！」

アナザーキカイが手からビームを連射して近づけなくさせるが、その一発が倒れているソウゴ、ツクヨミ、ハリーとはぐたんに向かう。

「フレフレ！ハート・フェザー！」

三人を守るために前に出たアンジユがハート・フェザーを発動し、ビームを防ぐ。

「フレフレ！ハート・スター！」

そこへエトワールがハート・スターを放ち、ビームに命中させて掻き消す。その直後はぐたんが泣き出す。

「どう言う事!?？」

「分らない……!」

その頃、夢の中。レントを探すソウゴとマルコら子供達は、生き残っている人間達が流しているラジオを流してる場所へ向かう。

『生き残っている人間の皆さん、力を合わせましょう。集合ポイントは、V X 0 9 5』
「……か……誰かいますか?」

するとテントから3人のお兄さん達が出迎える。

「生き残った人間の皆さんですか?」

「うん。レント来てない?」

「それとも……機械の皆さんですか?」

「つ!?? みんな逃げて!」

すると三人が目を赤く光らせる。ソウゴはそれを見て、三人——いや、三体がヒューマノイズだと気づいた。

「ヒューマノイズ! みんな逃げろ!」

『ジクウドライバー!』

ソウゴは子供達を背後へ逃がしつつジクウドライバーを装着し、ジオウウオッチIIを取り出した。

『ジオウⅡ!』

「変身!」

ウオツチを装填し、ドライバーを回転させた。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー!ジオウ・ジオウ・ジオウ!Ⅱ!』

ジオウⅡへと変身し、子供達を守る。

ジオウⅡの力の差は歴然で、ヒューマノイズ3体を瞬殺した。

「「「うわあああああ!」」」

すると後ろから仮面ライダーキカイが現れ、マルコ達に襲いかかる。

「レント!やめろ!」

ジオウが助けに入り、マルコ達からキカイを引き離す。

キカイはジオウへと標的を変え攻撃を仕掛けるが、ジオウの方がキカイを押し切った。

『ライダーフィニッシュタイム!』

ジオウがウオツチを起動させると、キカイも必殺技を仕掛けようとする。

「レント!目を覚ませ!」

『トウワイズタイムブ레이크!』

キカイのパンチを交わし、ジオウの左腕にエネルギーを集めたライダーパンチが炸

裂。胸部へ直撃したジオウのパンチにより、キカイは機能停止した。

「レント……」

キカイを止めたソウゴは変身を解除し、マルコ達の元へと戻った。

「大丈夫？」

「やっぱりレントはただの機械だったのかな？」

レントは敵だったと子供達が落胆する。それを聞いたソウゴは彼らに話しかける。

「俺もさ、ずっと一緒にいた友達と……今、対立してるんだよね。」

「だけど、まだ仲間になれるって信じてる。」

「マルコもみんなも、レントを信じなきゃだめだ」

それを聞いて、マルコ達から笑顔を見せた。

「WILL BE THE BFFだね？」

「BFF……？何それ」

「レントが言ってたおまじない。BEST FRIEND FOREVERになろうって意味！」

その言葉を聞いていると、ソウゴは誰かの戦っている声が聞こえた。

「……そうかあ！」

声が溢れたソウゴが、現実で目を覚ました。

「ソウゴ……!!」

「気がついたか!」

アナザーキカイへ攻撃を受け、気絶していたソウゴが起き上がった。

「ツクヨミ。機械に、パスワードってあるよね?」

「そうね、起動する時とかシャットダウンする時とか」

「アナザーキカイだって機械だ。必ずパスワードがある。」

『WILL BE THE BFF』、これがそれだと思う!!?」

そう言うソウゴはアナザーキカイへ走って行く。

「WILL BE THE?」

ツクヨミが疑問に思っているのを他所に、ソウゴは再びアナザーキカイの前へと現れた。

「うっ……」

「ルルー……待ってて、今解放する!」

『ジクウドライバー!』

「そ、ソウゴ……」

『ジオウ!II!』

ジオウライドウオッチⅡを分割し、ドライバーの左右に差し込んだソウゴの後ろから二つの時計のエフェクトが現れ構える。

「変身！」

ドライバーを回し、二つの時計は左右対象に止まるとソウゴの体を纏う。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

「ゲイツ」

ジオウⅡに変身したソウゴは、ゲイツに近付いて自身が考えた作戦を伝えようとする。

「何だ……」

「俺がルーラーの動きを止める。その時にルーラーの…アナザーキカイのパスワードを入力して、『W I L L B E T H E B F F』って」

「何……？」

ゲイツは何故ソウゴがパスワードを知っているのか驚く。

「白ウオズも、あのライダーの力が手に入るなら、ルーラーを破壊しないって約束して！」

「……いいだろう、その取引に乗ろう。ウオッチが手に入れば私は十分。ルーラー君にも手を出さない」

「よし、行こう！」

ウオズが戦闘から離れ、ジオウとゲイツが走りながらアナザーキカイと戦っている。エールの元へ向かう。

「来るなど言っている！」

「そんなの無理だよ！」

「来るなっ！」

アナザーキカイは発狂する様に来るなど叫び、竜巻を作り出す。

「フェザーブラスト！」

「スタースラッシュ！」

それを見たアンジュとエトワールがフェザーブラストとスタースラッシュを放って、光の鳥を作る。

「エール！ソウゴ君！」

「任せた！」

「うん！」

「任せて！」

ジオウとエールが鳥の上に乗し、竜巻の中に突っ込む。

竜巻の中に入って着地した二人が、アナザーキカイであるルーラーと対面する。

彼女は歯を噛み締めてから、ジオウとエールにラツシュを繰り出す。

「もう分かっているのでしょう!？」

私はクライアス社製のアンドロイドRRR-9500、ルールー・アムール!

あなた達の未来を奪いに来た!

邪魔なプリキュアとジオウの力を調べる為に、キュアエール:あなたの母に偽物の記憶を植え付けて潜入した!

嘘をついて、あなた達に近付いた!

——私は、あなたの家族を!学校みんなを!町の人々を騙した!」

アナザーキカイ——いや、ルールーは自分を責め続けながら攻撃を続ける。

「まさか、自分を責めとるんか!?!」

「そんな事って……」

「騙されてなんか、無い!」

エールのパンチとアナザーキカイのパンチがぶつかり、ジオウがジカンギレードを振りアナザーキカイの攻撃を受け止めた。

「俺達がそう思っただけから!そうなんだ!」

その時、アナザーキカイの全身から電流が走り、胸を抑えて苦しみ出す。

「止めて……ッ。本当に……痛い……」

「その痛みから解放するー！」

ジオウがジカンギレードを離し、その隙に周りを取りアナザーキカイを抑えた。

「ゲイツ！今だ！」

「よし！」

『フイニツシユタイム！』

アナザーキカイを止めてるうちに、ゲイツにパスワードを打つよう叫んだ。

『タイムバースト！』

「はあアアアッ!!」

タイムバーストで台風を突っ切ったゲイツが、アナザーキカイに駆け寄って腹部を触り、そこからパスワードの入力キーボードと映像を出現させた。

ゲイツはジオウが言ったように、キーボードを操作して、WILL BE THE BFF”と入力した。

『ERROR!』

「何？ ぐっ！」

パスワードが誤っていた事にゲイツが戸惑っている間にアナザーキカイは、足を使ってゲイツを遠くへ蹴り飛ばす。

「そんな！」

「パズワードが違う！」

「じゃあ、他のパズワードって事……!?!」

パズワードが違う、ダメかと思われたその時、ツクヨミがソウゴの昔持っていた口ポットを思い出した。

「もしかして！」

もしかしてと思いながら、ツクヨミがゲイツの元へと走る。

「ツクヨミ！何する気や！」

ハリーが止めようとするが、ツクヨミは急いで彼の元へと行く。

「ゲイツ！こう入れてみて。 W I L L B E T H E ……K I N G !」

ツクヨミが暴風を超える様に叫び伝えた新たな解除パズワードを聞き、それを入力しようとして再び向かう。

「……俺は、このウオッチを」

行くのかと思いい、ゲイツが走り出した途端に躊躇して足を止める。

自分は本当に、あのアナザーライダーのライドウオッチを手に入れるべきなのかどうかを迷いながら……

「何をしている我が救世主！」

「ゲイツ！」

痺れを切らせたツクヨミは、自らパスワードを打ち込もうと駆け出す。

「うわああああッ！」

その時、アナザーキカイがジオウを振り切り、ミサイルを周囲に放った。

「きやああああッ！」

悲鳴の上げ、動けぬツクヨミにミサイルが襲いかかる。

「ツクヨミーーー!!？」

そして、アナザーキカイから放たれたミサイルが爆発し、ツクヨミはそれに巻き込まれてしまった、その時…

〈ドオオーーン!〉

空間が割れるような音が響き渡った。

「——っ!!？」

「ゲイツ! こう入れてみて。 W I L L B E T H E …… K I N G !」

「これは……」

先と同じ会話を聞いたゲイツは、時間が逆転していた事に気づく。

「ゲイツ! 俺が戻したんだ!

分かったでしょ。ゲイツが躊躇したら、あの未来に辿り着いてしまう!」

ジオウIIの力で時を逆転させたことに気づき、あの未来を回避する方法を知った。

「……分かった」

ゲイツは再び、パースワードを打ちこみに向かう。

「これでいいんだ……」

現れたキーボードに今度は『W I L L B E T H E K I N G』と入力すると、ア
ナザーキカイの攻撃が四人を囲っていた暴風と共に止まった。

「うわあああああ！」

『キカイ！』

すると、ウオズの持つブランクウオッチからミライドウオッチが生成され、同時にア
ナザーキカイとルールーが分断された。

「ルールー！」

倒れたかけたルールーをジオウが支える。

「素晴らしい、我が救世主。これぞ私達が求めていたものだ」

『キカイ！アクション！』

仮面ライダーウオズが歓喜しながら、キカイミライドウオッチをドライバースタックに装填し
た。

『投影！フューチャータイム！デカイ！ハカイ！ゴーカイ！フューチャーリングキカイ
！キカイ！』

キカイウオツチを使った事により、頭部にスパナ型のアンテナ『クロックブレードSキカイ』、額にはマイナストライバー型の『ウオーシングナル・キカイ』があり。胸部の『キカイアーマライナー』にはロボットを連想させる意匠が、両肩には交差したスパナとドライバーが描かれた『キカイシヨルダー』を装着した仮面ライダーウオズ・フューチャーリングキカイへと変わった。

「行くぞ」

フューチャーリングキカイとなったウオズは、まずはアナザーキカイを格闘戦で攻め込む。既に仮面ライダーキカイの力を手に入れたウオズは、宿主を失って弱体化したアナザーキカイを押ししていた。

『ジカンデスパア！ヤリスギ！』

次にジカンデスパアの一突きで、アナザーキカイを数十メートル先へ吹っ飛ばす。

「終わらせよう」

『ビヨンド ザ タイム！フルメタルブレイク！』

両肩からカギ付チェーンを出し、アナザーキカイの肩に引っかけ引き寄せる。

『爆裂DEランス！』

ジカンデスパア・ヤリモードで引き寄せられたアナザーキカイを突き刺し、そのままアナザーキカイは爆散。アナザーキカイの本体である蟲の様な角部分も消滅した。

「凄い……」

「——ソウゴ……」

「ルールー！気がついた？！」

エールも彼女とジオウの前に現れ、ルールーが力なく座り込んだまま起き上がった。

「何故許そうとするのです……？もう優しくしないで……！」

これ以上あなたと、あなた達と触れ合うと……この痛みが、私の中の正しい世界を、壊して行く……」

「ルールー……」

「分かっているのです……あなた達の力の源は心……」

それが私の回路にバグを作った……

こんな痛みにも苦しむ位なら、記憶は消されたままが良かった……！！」

「苦しいのは、私も一緒だよ！」

苦しいと叫ぶルールーに、エールも同じくらい苦しいと話す。

「えっ……？」

「もう、ルールーと戦いたく無い！さつきから……身体よりも、胸の奥の方がずっと痛いんだよ……ッ！」

「何故……？」

伸ばしたルールーの手を、涙目のエールが両手で包み込むようにして掴む。

「ルールーの事が、好きだもん……！今更、嫌いになんてなれない……！」

アンジュとエトワールも、ジオウとエールに駆け寄る。

「あつ……はぐたん」

ジオウが駆け寄って来た二人の方へ顔を向けると、いつの間にか泣き止んでたはぐたんも、ルールーのすぐ傍に寄って来ていた。

「よちよち」

そしてルールーの頭を、ポンポン触れるようにして撫でる。

はぐたんを見たルールーの目に光が宿ると同時に、涙が溜まる。

「うあああああああん……っ！」

彼女は声を上げて、子供のように泣きじゃくった。

その姿は、自身がしてきた罪を懺悔している様にも、この世で産声を上げている様にも見えていた。

「な、何泣いてんのよ！さっさと命令を果たしな——！」

パツプルが叫んでた途中で、ルールーが腕を変換させビームを放った。

「去りなさい……！私のプログラムは上書きされました。

もう従順な機械人形ではありませんッ！」

「ルールー……あんた……」

パップルが仕掛けようとする、そこへジオウが前に出る。

「ルールーは渡さない」

「時見……ソウゴ」

「ルールーは俺達の友達、もうクライアス社の手先じゃない！

それでも、ルールーを連れて行くなら……俺が彼女を守る！

例え、相手がオーマジオウでも……！」

ジオウの強い意志にエールとアンジュ、エトワールも感化され、ルールーの前に出る。

「ソウゴだけじゃない！ルールーは家族だから、私が守る！」

「私も！ルールーを守る！」

「私も！」

パップルは、四人のルールーを守る決意に押される。

「っ？……帰るわよ！」

パップルが悔しげに叫んでから、瞬間移動して姿を消した。それを見てジオウが変身を解いた。

「あっ……？？」

「ソウゴ君！」

「大丈夫……」

アンジュはフラついたソウゴを支える。やはり、起き上がった時のダメージがまだ体に残っていたらしい。

そんな傷ついたソウゴを、ゲイツとツクヨミは見ている事しか出来なかった。

「行こう。我が救世主。ツクヨミ君」

「……ええ。ゲイツ、行こう」

「……」

白ウオズの後をツクヨミとゲイツは付いていき、ソウゴ達から離れて行く。

「ゲイツ……ツクヨミ……」

「ソウゴ……」

それを見届けたソウゴは、二人の選んだ道——自分を倒す事を選んだのだと悟った。

しばらく経った後、ソウゴとはなとルーラーが公園の椅子に座り、さあや達はすぐ傍で立ってルーラーを見る。

「まだ痛いか？」

「いいえ……むしろ温かいです」

「そっか」

それを聞いたハリーは、はぐたんと安心した様子で笑みを浮かべた。

「ですが、バグを抱えたままでは支障があります。どこか、修理出来る所はありませんか？」

「その必要は無いと思うよ」

「それは、きつとバグじゃ無いから」

「えっ？」

「それは、私達と同じ心だよ」

「心……これが……」

「俺達と同じで泣いたり、笑ったり、食べたり、悲しんだり、俺達も持つてるそんな感じ。」

つまりは、俺達と同じだったって事！

「同じ……私が……」

「それに、ルーラーは俺達の大事な友達！ W I L L B E T H E F R I E N Dだよ！」

笑みを浮かべたソウゴがそう言って、はな達も笑顔を浮かべる。

「ありがとう……みんな……」

ルーラーが涙を流し、ハンカチを受け取って涙を拭く。

（何故でしょうか……？）

先程から時見ソウゴ……いえ、ソウゴを思うと不思議な感情が……

これも、バグなのでしょうか……?でも、嫌ではありません)

立ち上がったはなが両腕を広げて抱擁の体勢を取ると、泣き止んで涙を拭い終わったルールーが彼女に抱き付く。

「お帰り、ルールー」

「ただいま」

ルールーが夕日で照らされた顔を更に赤らめた笑顔を見せ、ソウゴとはなも笑顔を見せた。

「……そういえば、なんでソウゴが言ったパスワードが違って、ツクヨミが言ったのは当てたんだろ?」

最初にソウゴが言った『WILL BE THE FRIEND』は違い、ツクヨミが言った『WILL BE THE KING』が当てているのは何故かと思う。

「WILL BE THE KING……あれ?なんか聞いた覚えがあるような……?」

『WILL BE THE KING』。自分が小さい頃に書いていたブリキロボのこ
とだという事は、すっかり忘れていた。

「はな先輩達が……プリキュア……!?」

そんな中、ここへ駆け付けたえみるが一部始終を見ていて、はな達がプリキュアという事を知ってしまったのだった。

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第24話 友情が奏でる音楽 2018

第24話 友情が奏でる音楽 2018

ルーラーとの戦いを終えてしばらく経ち、時計の針は六時前となった為、ソウゴ達は歩きながら公園を後にする。

「しつつかし、クライアス社のメンバーがこっちに就いたとは。」

何か、アイツらの情報を教えてや」

クライアス社のメンバーの一人が仲間になった事に驚きながらも、ハリーは敵の情報について何か知っている事は無いかと問いかける。

「クライアス社の社長はプレジデント・クライと、会長であるオーマジオウ……」

ある時彼らは強大な力を手に入れ、未来の時間を止め、人々から明日を奪いました」

「プレジデント・クライとオーマジオウ……」

「それは知つとる。他には？」

「思い出せません」

「何やと!?？」

ハリーはトップの名前以外のメンバー名などを知ろうとするが、ルーラーはそれ以上の情報を思い出せず、はな達は柱時計のすぐ傍で足を止める。

「パップルの調整を受けた時、機密情報を全て消されてしまいました」
彼女曰く、調整を受けた際、クライアス社に関する機密情報は全て消去されてしまったのだと語る。

「マジか〜……」

「まあまあ」

「それも大事だけど、敵のトップを知れたじゃん」

「それもそやな……」

「とにかく、帰って来てくれて良かった!」

「うん!」

ポジティブに捉えるソウゴ達はルーラーが帰ってきた事を喜ぶのに対し、ルーラーは表情を曇らせている。

「やはり私は……帰れません」

「何で?」

「私はあなたの母、野乃すみれの記憶を操作して家に潜入しました」

「はなのお母さんの記憶を……」

「勿論、記憶は元に戻します。」

しかしその結果、私は100%野乃家を追い出されるでしょう」

「そんな事……!」

「はな!」

「ルールーちゃん!」

追い出されるだろうとルールーが表情を曇らせながら話していると、すみれとことりの声が聞こえ、はな達はその方向に顔を向ける。

そこには二人だけで無く、森太郎もいた。

「みんな!」

「無事だったのね……!良かった……!」

「……」

「ほおらく、呼んでるよ」

ルールーが目を逸らした直後、ソウゴが背中を押すと、はなが彼女の手首を掴む。

「行くよ」

「えっ?ちよつと、はな……」

そのまますみれ達の元へ駆け足で向かう。

「心配したのよ」

「あははは……ごめんさい。ルールー」

はなに名前を呼ばれてから、ルールーはすみれに視線を向け、彼女への記憶操作を解

除させた。

解除されたことで、すみれは全て思い出した。

あの日、ルールーが自分に何をしたのかどうかも。

「あれ……？私………そっか、全部思い出した」

「ごめんなさい………本当に、私………」

「ママ！ルールーは………！」

だがすみれは、何も言わずに二人を抱き締めた。

「怪我は無い？ルールー」

「はい………」

「そう。良かった」

偽りの記憶が消え、本来の記憶が戻っても、彼女はルールーを温かく迎えた。

「じゃ、帰りましょ。さあ、今夜はカレーよ！」

「やったあ！」

「カレーだカレーだ！」

はなとことりは今日の夕食がカレーと言う事に喜んだ。

「帰る家、あつて良かったね。ルールー」

ルールーの姿を見て、ソウゴが良かったと言う。

「……………いいよな。心配してくれる家族がいて」

それと同時に、野乃家の家族とルールーを包んでいる温もりを見て、ソウゴは矢張り家族はいいもんだと呟く。

そのまま、はなとルールーは野乃家と共に帰って行き、ソウゴ達はクジゴジ堂へと向かった。

「ただいま〜」

「お帰り〜ソウゴ君。あつ、いつらしゃい、さあやちゃんにほまれちゃん、ハリー君も」
そこには何かを直している順一郎がいた。

「あれ?それって?」

「あつ!そのロボット」

「懐かしいからね。直して見たんだ」

順一郎がソウゴに、その修理を終えたブリキロボのおもちやを渡した。

「懐かしいな……………ん? 『W I L L B E T H E K I N G』? これ…」

ロボットを懐かしんでいると、あの時ツクヨミが言ったパスワードの文字が、このロボットの背中の部分に刻まれていた事に気付く。

それによく見てみると、ロボの顔には仮面ライダーキカイと同じく、レンチとマイナ

ストライバーを模した意匠があった。

「……叔父さん、ゲイツとツクヨミは……」

「少し前に、荷物を纏めて出ていったよ」

「そっか……みんな、じゃあ。明日学校で……」

ロボットについては取り敢えず頭の隅に置いて、ゲイツとツクヨミがクジゴジ堂を出て行った事を確認したソウゴは渋々と階段を登っていく。

「ソウゴ君……」

「辛そうな感じだね。ソウゴ」

やはり、二人がいなくなった事はソウゴにとって辛いものなのだと、三人はハッキリと感じていた。

その頃、クジゴジ堂を出ていったゲイツらは神社にいた。

「何故奴のパスワードがわかったんだ」

「ソウゴが子供の頃遊んでたロボットに書いてあったのよ」

「ロボットだと?」

ツクヨミはロボトと言い、ゲイツは順一郎の手伝いの際に聞いていた、ソウゴが昔遊んでいたというブリキロボを思い出した。

「あのアナザーキカイ、契約者もいなかったのにどこから来たと思う？」

「それは……」

「ソウゴの力は、未来を予知するなんて生易しいものじゃない……」

もしかしたら……自分の思った未来を創り出してしまおうという力……」

それを聞いたゲイツは、まさかそんなことがと否定しようと思つたが、あの時アナザライダーに打ち込んだパスワードは、ソウゴが昔書いたと思われる言葉である『WILL BE THE KING』：

——そして、その意味は「俺は王様になるんだ」。

結局は間違つてはいたが、最初にパスワードの存在に気付いたのもソウゴだった。それはなぜか？それはきつと、彼が夢の中で仮面ライダーキカイに出会ったから。最初に出会った仮面ライダーシノビも、元は彼が見たとする夢の中が起点だった。ツクヨミが導き出した仮説も、一言に違つとも言えなくもない。

「ジオウは予知夢を見ていたんじゃないやなくて、あいつが見た夢がそのまま未来となり、この時代にアナザライダーを生み出したという事か……」

「ゲイツ……私、怖い……」

日に日に力を増していくソウゴに怯えを感じ始めるツクヨミ。

そこへ白ウオズが、3つのミライドウオツチを手にし現れた。

「我が救世主。オーマの日が近づいている」

3つのミライドウオッチを近づけると、それらが宙に上がりピラミッドを形成。その中心部に何かが生成されると、それはゲイツの手の中へ落ちていく。

「君のその手にゲイツリバイブの力を」

今ここに、三つのライドウオッチから砂時計のような形をした、ブランク状態のライドウオッチが誕生した。

一方、野乃家のリビングでは夕食が始まっていた。

「「「いただきまーす！」」」

夕食のカレーをはな達が食べる。

「これこれ！」

「ソーセージ、ブロッコリー、キャベツ、カブ……」

「ちよつと変わってるよね」

野乃家のカレーは、カレーには余り使わない具材ばかりだった。

「前にポトフを作ろうとして失敗しちゃって……」

でも、とっさの思い付きでカレーに作り直したの」

すみれは失敗した事を苦笑しながら、以前ポトフを作ろうとした時に失敗し、カレー

ルーを投入してカレーにした事で、このカレーが出来たのだと話す。

「名付けて！ママの復活カレー！なんてね」

ルールーがスプーンでカレーを掬い、口に入れる。

「……っ！美味しい……！」

「「でしよー！」」

「大抵の事はやり直せる。私はそう思うわ」

すみれはそう言い、ルールーに向けて優しく微笑んだ。

夕食後、はなとルールーがベランダに出て星空を見上げる。

「想定外です。どうして私を受け入れたのでしょうか？」

「そんなの、ルールーが好きだからに決まってるじゃん。ホント、良かった」

「私には……まだ良く分かりません」

そう言った直後、彼女達の頭上に流れ星が流れた。

同じ頃、愛崎家のえみるの部屋では、ベッドで横になるえみるが――

「な……何と言う事でしょう……！」

はな先輩が、プリ……プリ……プリキュアあああゝ!?？」

ネズミのぬいぐるみを引っ張って叫んでいた。

次の日、ソウゴとさあやが学校に来た。

しかし教室を見ても、ゲイツとツクヨミの姿はなかった。

「来てないか……ん？」

やっぱりあの二人は来てなかったかと残念な思いを浮かべるソウゴは、はなの席に何か置いてあるのが見えた。

「おはようー！」

しばらくして、はなとルールーが学校に来ると、彼女達も机に名前が書かれた紙が置かれていたことに気付く。

「えっ!!? 何……これ……!」

「果たし状？」

果たし状かと思つたソウゴ達。それからしばらくし、昼休みに彼らは中庭で内容を確認する。

「お昼休み……中庭にて待つのです……?」

「待つのです?まさか……」

その紙には『お昼休み 中庭で待つのです』と書かれてあり、さあやとほまれにも渡っていた。横から内容を見ていたソウゴは、見覚えのある口癖に察しが付きつつあった。

「うーん……」

「果たし状では？」

「ええっ!!？」

そこへ生徒達のざわめく声が聞こえ、その方向を向く。

「いらつしやいましたね！」

「ええっ!!？」

上の方にキュアえみくるの格好をしたえみるが、花の形をした杖の先端を向けていた。

「えみる……」

「なんで、その姿なの？」

「何、その恰好……?」

「私は見えてしまったのです! お三方の秘密を！」

「秘密……!!？」

「それって……!」

「言っちゃダメっつ!」

「あなた達は、プリ——！」

「えみるちゃん！ストップ——」

ソウゴ達が止めようとしたその直後、ルーラーが跳び、すぐさまえみるの後ろを取つて口を塞いだ。

「し、失礼しました〜！」

「ごめんなさい！」

はな達はえみるを連れて、この場から走り去つた。

ソウゴ達はビューティーハリーに避難してくる。

「えみるちゃん……とりあえず」

「分かりました」

ルーラーがバツテン印のテープを剥がす。

「ホントに見ちやつたの？」

「見たのです！三人がプリキュアから戻る所を！後、このネズミがベラベラ喋れた事も！」

「誰がネズミやねん！俺は——！ハム？」

「もう遅いよ」

「ぬあつ……!」

ハリーが目を輝かせて鳴き声を発するが、ほまれからもう手遅れと言われてショックを受ける。

「とにかく!絶対言うたらアカンで!正体を隠し、みんなの為に戦う!それが——!」

「ヒーローなのです!」

「わ、分かつとるやないか」

「はい!みんなを守り!強くて!カッコ良くて!更に可愛くて、綺麗で、たおやかで……!」

プリキュアと仮面ライダーはヒーローなのです!

「可愛くて、綺麗で、たおやかは。俺には当てはまらないけど……」

色んなポーズを取る彼女を見ながら、前半の三つは兎も角、後半の三つは当てはまらないとソウゴが苦笑する。

「はっはくん、照れるぜ……」

「まあ、憧れのプリキュアがはな先輩だった事はショックですが……」

「めちよつく……!」

だがえみるは反対側を向き、頬を人差し指で掻きながらはながプリキュアだった事はショックだと言い、そう言われたはなはショックを受ける。

「皆さん！お願いがあるのです！」

すぐさまソウゴ達の方を向いて、頭を下げて頼み事をする。

「ごめん。俺、放課後に今日用事があつて……」

「あつ……！」

ソウゴが用事があると言うと、さあやはそれがなんの用事なのか察した。

放課後、えみるがルールと共に、スケート場でほまれの練習を見る。

「はあー！」

ほまれがジャンプに挑戦し、飛び上がり着地に成功した。

「これがプリキュアに選ばれし者の華麗な日常……！凄いです……！」

えみるはほまれの練習に目を輝かせて見入る。

今度は池の方で、さあやの演技の練習を見る。

「風が歌い、温かな愛を運んで来るの。私の、心に……！」

「さあやさんが女優だったなんて……！やっぱりヒーローになれる人は違うのです！」

「そんな……」

「こちらも目を輝かせて見入り、さあやが照れる。

「心……」

ルルーが胸元に手を当てて呟く。

「しっかし驚いたのです。ルルーが先にプリキユア修行を始めていたとは」

「何の事です……?」

「ルルーの事は全てお見通しなのです。隠しても無駄なのですよ。

な・ぜ・な・ら……私はルルーの親友なのです!」

「そうなんですか……?」

「そこを真顔で返されると……」

ルルーが真顔で子首を傾げるのを見て、えみるは地味にショックを受ける。

「ああっつ! どうしようっつ!」

そこへ焦りを浮かべるはなが駆け足で現れるが、足を引っかけ転んでしまう。

「めちよつく……!」

「はな……」

「何ですか急に……?」

「みんな手伝って……!」

……ん? ソウゴ?」

顔を起こしたのはなが手伝って欲しいと頼んでいると、花を持ったソウゴが一人歩いて

るのが見えた。

「ソウゴ……」

「ひよつとして、時見先輩が王様なるための必要な事でしょうか〜！」

えみるが目を輝かせて、歩くソウゴを見る。

「……………そうじゃないの」

「ん？ さあや、何か知ってるの？」

さあやが何か知ってるのかと思い、どういう事かとはなが聞く。

花の購入を終えたソウゴは一人、墓標へとやってきた。

そのまま歩み続けると、そこにある一つのお墓の石の前へと止まる。

「ただいま。お父さん。お母さん」

そこには『時見家』と書かれていて、ソウゴは墓石の左右に花を添えた。

「父さん、母さん。俺……………今、叔父さんに隠している事があるんだ」

自身がライダーであることを天に居るであろう両親に報告するかのようになり、ソウゴはジオウウオッチを取り出した。

すると、背後から石を蹴る音が聞こえた。

「……………みんな」

振り返るとそこにはな、さあや、えみる、ルールーがいた。

「あはは……」

はなが苦笑して誤魔化す。

「時見先輩……ここって」

「ごめん、なんかストーリーみたいいな事して……今日は大事な日なのに……」

「ううん。別にいいよ」

さあやは気まずそうに謝るが、ソウゴは気にしていなかった。

「ソウゴ、ここは……?」

「俺の両親のお墓」

「ここは、事故で亡くなったソウゴの両親の墓だった。

「確か、ソウゴのお父さんとお母さんって……」

「以前に両親の話を、彼の口から聞いたことがあるはなはすぐに察した。

「うん、俺が五歳の時に事故で二人共死んじやたんだ」

ソウゴが話すと、はな達がお墓の前へと出る。

「初めてまして!私!野乃はなです!」

「私、愛崎えみるなのです!」

二人が自己紹介を始める。

「ソウゴの両親とは、どんな方々でしたか？」

「俺は小さかったからあまり覚えてないけど、毎日笑顔で事故の日も何もなくて当たり前の日常だったんだ」

「ソウゴ君……」

「ごめんね。しみりするような話をしちゃって」

ソウゴはそう笑いながら言う。

だが、ソウゴの話を聞いて普段たまにソウゴが他人の家族の事を呟くと、はなとえみは家族の大きさをよく知っているのかがわかった。

「そういえば、はな。何か手伝って欲しいことがあったのでは？」

「…あつ、あああああ!!? めちよつく! そうだあああ!」

そんな中、ルーラーの言葉ではながみんなに手伝って欲しいことを思い出した。

ラヴェニール学園へと戻ったはな達は、音楽室へやってきた。

「おかこえいこうよう……」

えみるの弾くピアノの音に合わせ、はなが歌う。

「ああ、来週歌のテストか」

「うん」

練習を終えたほまれが現れ、来週歌のテストがあつたことを思い出す。

「歌……」

「音が外れてます」

「ええ!?」

えみるから音が外れてると言われ、はなは驚きの表情を浮かべる。

「そこはミですミ」

「共に〜!」

「外れてます!」

「ええー!?」

「……どうやらえみるは、絶対音感があるようですね」

「えっ?」

えみるは絶対音感の持ち主だったらしく、はな達は驚きを隠せなかった。

「じゃ、じゃあこれは?」

「ド。正確では無いですが」

「凄い……!」

はながペンでコップを叩き、えみるが音程を答える。

「えみる小さい時から音楽やってたの……?」

「はい！音楽は心を、自由に羽ばたかせる事が出来るのです！」
「心を……自由に……」

ルーラーの表情を見てソウゴが話しかける。

「ねえ、ルーラーも一緒に練習しよう」

「私ですか？」

「ねえ、いいじゃん！やってみよ！」

「やってみるのです！」

みんなに言われるまま、今度はルーラーが歌う。

「おかを・こえ・いこうよ・くち……」

ルーラーの歌を聞いているが、どこも間違いはなかった。

けど、ソウゴ達は難しい顔で首を傾げる。

「ルーラー……音程はとても正確です。」

ですが、その……心に響かないと言うか……」

えみるは困った顔で、ルーラーの歌は音程こそ正確だが、心には響かないと告げる。

「ごめんなさい……。やっぱり私には無理です……」

そう言った直後、身体に異変が生じる。

「私には……分からない……」

「ルールー？」

「心……………分からない、分からない……………！」

「どうしたの？」

「システムエラー」

『ルールー！』

システムエラーが生じたルールーは、機能停止してその場に倒れた。

「何をやっているのだ！」

その頃、プレジデント・クライの叱責が響き渡るクライアス社の会議室に、役員が集まっていた。

「RUR-9500、通称ルールーは我が社の大切な製品。それをプリキユアと若き日のジオウに奪われるとは……………」

「とんだ時間の無駄だ！私なら五分で終わるぞ！五分で！」

「どう責任を取るつもりだ」

ルールーを取り返せなかったパップルがプレジデント・クライだけで無く、リストルとダイカン、スウォルツから叱りを受ける。

「ルールーは私の部下……！この始末は、必ず私が……！」

「大丈夫なのあんた一人で？」

「やってみせるわよ！」

そんなやり取りを、奥の方で一人の女性が見ていた。

「いよいよ。こいつの出番か？」

一方で、そう呟くスウォルツは、懐から一つのアナザーライドウオッチを取り出した。

——そこには、菌莖を？き出しにした人体模型の様な顔の上に、『2019』と『Z1—0』という白い文字が書かれていた。

ラヴェニール学園の保健室では、ベッドで眠るルールーの傍に座るえみるがいた。

「アンドロイド……」

先程ソウゴ達からルールーは未来から来たアンドロイドと聞いた時の事を思い出した直後、ルールーが目を覚ます。

「ルールー……！良かったのです……！大丈夫ですか？」

「はい」

えみるが大丈夫かと尋ねるとルールーははいと答え、上半身を起こす。

ルルーに自分とプリキュアを目指そうと持ち掛ける。

「ルルーは綺麗でカッコよくて、強い心を持っているのです。」

きつとルルーは、プリキュアになれるのです！一緒に頑張りましょう！」

「無理です！」

「えっ……？」

「私は……アンドロイドです。」

きつと……プリキュアになれるのは、あなたのような人です」

悲しい表情でルルーがえみるの方がなれると言う。

「私は……」生懸命な可愛らしい心を持っているあなたが——とても、羨ましい」

二人の会話を、保健室の外でソウゴ達が聞き耳を立てていた。

「はあく……」

「どうする？」

「うーん……」

えみるが自宅に戻ってから、ベッドの上で横になって考える。

すると、ソウゴとルルーに歌を聞かせた事を思い出し、クローゼットを開けて中に隠していたギターを取ろうとする。

「えみる?」

「はい!お兄様!」

兄の正人の声が聞こえ、慌ててクローゼットを閉じる。

「?」

「な、何でも無いのです!」

「ケーキがあるんだ。お茶淹れて」

「はい……」

苦い表情を浮かべながらも、えみるは兄の為に紅茶を作ろうとする。

翌日、えみるがビューティーハリーでギターを弾き、はな達に聞かせる。

「センキュウ!」

「イケてるえみる!」

「そ、それ程でも……」

弾き終えるとはなに褒められ、照れながら後ろ頭を掻く。

「確かにむっちゃ上手いけど、家でやれ。家で」

「家でギターはダメなのです。お兄様が嫌がるので……」

「?」

ハリーはえみるの兄がギターを嫌がる事に疑問を抱いた。

「ギターは、女の子が弾くには相応しく無いと言われて……」

「ふーん……随分と遅れとるな」

「ギター、好きなんだね」

「はい。ギターは自由でカッコいいのです」

「にしても、反対されてるのに、何でまたギター弾きたくなつたんや？」

「ルールーに、元氣を出して貰いたくて」

「そっか」

横に座るほまれがえみるの頭に手を乗せる。

「でも……上手く行くか分からないのです……」

だから、皆さんの意見を聞かせて欲しいのです！

私……私……っ！

懇願するえみるの目には涙が溜まる。それを見たはなは口を開く。

「大事なのはえみるの気持ちでしょ？」

「えっ……？」

「ダメなら、その時また考えればいいじゃん。」

私はその気持ちを応援するよ。

フレー！フレー！えみる！おーっ！」

「ふえー！ふえー！えみるー！」

そう言つてえみるを応援し、はぐたんもはなの動きを真似て応援する。

「もう…適当なのです…でも、頑張つてみるのです！」

はなどはぐたんに応援してもらつたえみるは涙を拭い、笑顔を見せた。

一方外の池では、さあやとソウゴがルールーを歌を聞いていた。

「…どうしたの？」

しかし途中で止めた事に気付いたさあやが、彼女へどうしたのかと尋ねる。

「ダメです…心が籠らない……」

「……私も、考え過ぎて、良いお芝居が出来なくなるの。」

でも上手く出来た時は、何も考えなくても、胸の奥から想いが湧き出して来る」

思い通りに歌う事ができないと呟くルールーを見たさあやはその場にしゃがみ、水を掬つてそう語ると、ルールーもしゃがんで水を掬う。

「無理しなくていい。止めようとしても、溢れて来るのが心だから」

「心……わからない」

「難しく考えることないと思うよ」

人の心が分からないと話すルールに、ソウゴが難しく考える必要ないと答える。

「難しく考えるなら、まずは心のままに動いてみたら、いいんじゃないかな？」

「心のままに？」

「うん。自分が思った事があるならそれを信じて動く。それでいいと思う」

「自分が思った事？……っ！あれは……」

自分が思ったこととは……

そんなことを考えていると、ルールが何かを察知し、繁華街の方から出て来たトゲパワワに気付く。

繁華街の時計のある広場に到着すると、ビルの屋上に立つパップルと赤いドレスを纏ったモデルオシマイダーに気付く。

「オシマイダー！」

「みんな！」

「止めるよ！」

四人がジクウドライバー、プリハートを構える。

『ジオウ！』

ソウゴがウォッチを、はな、さあや、ほまれはクリスタルをセットした。

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

ソウゴがジオウオウオッチで、はなとさあやとほまれはミライクリスタルをセットし、姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

「輝く未来をく抱きしめて!!みんなを応援♪元気のプリキュア！キュアエール！」

「輝く未来を抱きしめて！みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「輝く未来を抱きしめて！みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

四人が変身を完了すると、オシマイダーへと向かっていく。その様子をルーラーとえみるが離れて見ていた。

「あーら、すっかりヒーローぶっちゃって。ルーラーちゃん」

「パップル……」

「さあ行け！オシマイダー！」

オシマイダーがビルから飛び降り、エール達が上に跳ぶ。

「うりゃあつ！」

『ジカンギレード！』

「はあ！」

エールがオシマイダーの指を掴んで投げ飛ばし、ジオウがジカンギレードを振るって宙を飛ぶ敵に攻撃を行った。

「フェザーブラスト！」

「スタースラッシュ！」

「お着替えよ！」

アンジュとエトワールが追い打ちにと、フェザーブラストとスタースラッシュを放つ。だがパップルの命令と同時に、ビルから出て来たオシマイダーが全身を回転し、丸い姿に変える。

その直後、フェザーブラストとスタースラッシュが命中する。

「凄いです！」

「目標、温度上昇中」

ルーラーがオシマイダーの温度が上がっている事に気付く。

「マズい！避けて！」

そう叫んだ直後、オシマイダーの腹部からフェザーブラストとスタースラッシュのエネルギーを吸収した光線が放たれる。

「フレ！フレ！ハート・フェザー！」

アンジュがハート・フェザーで防ぐが、打ち破られて直撃してしまい、二人は地面に

落下する。

「アンジュ！エトワール！うわあ！」

ジオウはアンジュとエトワールを助けに向かおうとするが、いきなり何者かに不意打ちを受けてしまった。

「誰？ ……お前は…アナザービルド！」

「ぐうう！」

不意打ちをしたのは、以前倒した筈のアナザービルドだった。

「そんな……どうして……」

一度倒した相手であるアナザービルドが現れて困惑すると、アナザービルドは集中的にジオウを攻撃してきた。

「くう！」

「ソウゴ……いや、アンジュとエトワールを！」

アナザービルドに阻まれアンジュとエトワールの助けに行けないジオウを助けようとしたエールだったが、彼よりもアンジュとエトワールの方が心配になったので二人の元へ向かう。しかしオシマイダーが三人を潰さんとして落下する。

「っ！しまった！」

「はっ？！？ させない！」

『デイ・デイ・デイ・デイ・ケイド!』

アナザービルドを払うとデイ・ケイドウオッチを起動させ、エール達の元へと走る。そのままジオウは、エール達と共に潰されてしまった。

「そんな……!」

えみるはジオウ達が潰されてしまったと思い、決して軽くない絶望を味わった。

「残念ねえ、仲間を守れなくて。」

てか、仲間って何? 笑わせないで。本気でヒーローになれるとでも?

所詮アンタはこっち側の人間。夢見てんじゃないわよ! 心の無い、機械人形のクセに」

パップルの言葉に、ルーラーが拳を握り締めて悔しがる。

「あるのです!」

「はあ?」

そんな俯き黙って耐えることしかできなかった彼女の苦悩を打ち破る様に、えみるが反論の声を上げた。

「ルーラーには、心があるのです!」

心があるから、悩んでいるのです!

心があるから、音楽は素敵だと言って下さいました!

心があるから……！私達は親友なのです！」

「えみる……」

そう叫び、ルーラーの手を握るえみるに、ルーラーが嬉し涙を流す。

「オシマイダー！コイツらも潰しちゃって！」

「ルーラーをちゃんと見て無いお前に、分かる訳が無い！」

「!?？」

オシマイダーの足からジオウの声が聞こえると、九つの影が現れオシマイダーを跳ね返した。

『アーマータイム！ カメンライド！ワーオ！ デイケイド！デイケイド！デーケー

イードー！！』

オシマイダーが居た所にはデイケイドアーマーを纏ったジオウと、咄嗟に踏みつぶしを踏ん張って耐えたおかげで五体満足だったエール達三人が立っていた。

「ブツ飛びく!?？」

「これくらい問題ないよ！」

「友情の邪魔……するなっつ！」

エールのアッパーパンチと共に、落下してきたオシマイダーが更に上へ吹き飛ばす。

「みんな、オシマイダーをお願い！俺はアナザービルドを倒す！」

「うん！」

「任せて！」

「そつちを頼むよ！」

「うん！行くぞ」

『ビルド！』

ジオウがアナザービルドの下へと走り、再び対峙する。そしてデイケイドウオツチにビルドウオツチを重ねて装填した。

『ファイナルフォームタイム！ビ・ビ・ビ・ビルド！』

デイケイドアーマー・ビルドスパークリングフォームへと変わり、アナザービルドと戦闘を開始した頃、焦ったパップルがこの場から離れた直後、オシマイダーが時計の上
に落下した。

「行くよ！」

「「ミライクリスタル！」」

「エールタクト！」

「アンジュハープ！」

「エトワールフルート！」

三人がメロディソードのボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出す。

「心のトゲトゲ、飛んで行けー！プリキュア！トリニティ・コンサート！」

オシマイダーに向かって虹色のエネルギーを飛ばすトリニティ・コンサートを放ち、そのままトリニティ・コンサートが命中。巨大な木が作り出されてピンク・水色・黄色の花が咲き誇り、オシマイダーが浄化された。

「HUGっとプリキュア！エール・フォー・ユー！」

オシマイダーを片付けていると、ジオウはアナザービルドを押ししていた。やはり、アナザービルドはビルドの力が効いている。

「はああ！」

ジオウはライドヘイセイバーを振るい、どんどん優先に立つ。

「これでどうだ！」

『フィニッシュタイム！』

ドライバーのロックを解除し、ドライバーを回す。

『ビ ビ ビ ビルド！ファイナルアタックタイムブ레이크！』

ジオウからワームホールが作られ、アナザービルドを拘束すると、そのままライダークックの放とうとする。

「オリヤヤ！！？」

ジオウのキックが決まり、アナザービルドは壁へと吹き飛ばされた。

「ウウウ……」

だがジオウの攻撃を受けても尚、アナザービルドは起き上がった。

すると、アナザービルドの体が剥がれ出した。

「アナザーエグゼイド……」

アナザービルドの体が全て剥がれると、今度は別のアナザーライダーが現れた。

そこに立っていたのは、アナザービルドと同じくジオウが倒した筈のアナザーエグゼイドだったのだ。

「時見……ソウゴ」

「えっ?」

「次こそは……ふう!」

ジオウの名前を呟くと、アナザーエグゼイドはジオウから逃走していった。

「待って!」

アナザーエグゼイドを追おうとするが、既に遅かった。

「なんで、俺の事を……」

何故、ジオウは自身の事を知ってるのかと疑問が残った。

「やっぱり……プリキュアもジオウもカッコいいのです」

「えみるも」

「えっ?」

「何でもありません」

自分の事を友達だとパツプルに言ったあの一言は、ルールーにとつてはジオウやプリキユアにも負けない程かつこよかった。少なくとも、ここにいるみんなはそう感じていた。

次の日、ビューティーハリリーの真上にある建物の外にえみるとルールーが座り、彼女はえみるの作った曲『キミとともだち』の歌詞を見る。

「これは……」

「前に聞かせた曲に、歌詞を付けてみたのです。一緒に歌いませんか?」

「私と……?でも……」

「ルールーと歌いたいのです」

ルールーに微笑んでからそう言い、目を閉じてギターを弾き、歌い出す。

えみるの歌がルールーの心に染み入り、ルールーが涙を流す。

「えみる……」

「さあ、一緒に」

ルールーが歌い出し、えみるも歌い、二人で音を合わせる。

ソウゴ達は下の方で、ルーローとえみるの歌を聞く。

「優しい歌声」

「良い歌だ。癒される」

「二人の心が、溢れ出す……！」

二人の奏でる歌声はソウゴ達の心に響き渡り、癒されるような感覚に浸っていたのだった。

そして、そんな二人の姿を見ていた人がいた。

「悪く無いね」

かつてビューティーハリーに訪れた少年、アンリがスマホで二人の歌う姿を写真に撮り、そう呟く。

えみるとルーローの歌声は、みんなの心に染み入っていた。

次回！Re. HUGつとジオウ！

第25話 決意と意念 2018

第25話 決意と意念 2018

ある日ビュートイーハリーに、ほまれのスケート仲間である 若宮アンリ がやってきた。

「ファッションショーに出演して欲しい？」

「リタ・ヨシミンって知ってる？」

アンリが此処へ来たのは、「リタ・ヨシミン」と言うブランドのファッションショーに出演して欲しいと頼みをしに来たからだだった。

「知ってる知ってる。キュアスタで、めっちゃイイね付いてるブランド」

「お母さんがよく、ドラマの撮影の時に着てる」

「スケートの衣装を頼んだ縁で、僕も今回特別にモデルとして出演するんだ」

「相変わらず嫌味な程の女神感やな」

「ハハッ、よく言われる。でも僕が出るだけじゃ当たり前過ぎるでしょ？もつと面白くする為に、ちよつとノイズを立てたいと思ってるね」

「ノイズ？」

「新しい才能」

「才能？」

ソウゴはアンリの言うノイズと才能とはどういうモノなのか疑問に思った。その横では、話を聞いていたはなが体を振るわせていた。

「遂に来ちゃったか……！」

「何が来たの？」

「はなちゃんの時代！遂に来ちゃったーっ！謹んで、お受け——！」

「君じゃないよ」

「めちよつく……！」

自分もファツションショーに参加できると思い込んだのもつかの間、アンリに君じゃないと即答で言われて凹んだ。

「君と君。えみるとルールーだっけ？」

えみるとルールーの方を向いて、ノイズ——新しい才能として参加して欲しい事を伝える。

「ええっ!?？」

「私達……ですか？」

「凄く良い歌だったし、君達の凸凹感、素敵だなんて思ってたね」

「確かに……」

「ランウェイを歩けるなんて、中々無い経験だよ」

「ら、ランウェイ……」

「やってみたら？」

「無理なのです！」

「えっ？」

みんなはファッションショーに出ることを勧めてくるが、えみるは無理だと叫ぶ。

「レックスもして無いのに、ランウェイでウォーキングしたら……スッテンコロリン転んで、客席に落ちて、そのままファッションの都、パリまで転がって行く事になるのです！」

「ば、パリ？」

「えみる、パリまで転がって行く事は出来ません。海がありますから」

「それに行けるとしたら飛行機と船だけだよ？」

「け、けど、砂浜までは行く可能性はあるのです！砂まみれは嫌なのです！」

「えみる、その確率は……」

「やっぱり二人、面白い！」

アンリはえみるの明後日の方向にぶっ飛んだ心配思考を聞いて面白く感じ、やはり自分の目は間違ってたと思う。

「何とかなるって」

「やってみなきやわからないよ」

「はな先輩と時見先輩まで……!」

「けーれどーハート、ハーグ重ねたらー、まーるくオツケーだよー。でしょ?」

「はい」

はながえみるとルールの歌う写真を見せ、『キミとともだち』の一部分を歌い、ルールが微笑んで「はい」と答える。

「友達か……」

その横でソウゴは友達と聞き、ここにいないゲイツの姿を思い出す。

その頃、とある神社。

「タイムジャツカーと契約した者たちが狙われる?」

「それだけじゃない。アナザービルドの姿も目撃されている」

「複数のアナザーライダーが出現したということか」

「それは分らない」

「これ以上、被害が拡大する前になんとかするしかないか」

ツクヨミからアナザーライダーだった者達が襲われるという事件を聞くと、それを解

決しようとして、ゲイツは出ようとする。

「ゲイツ！」

その時、ツクヨミはゲイツを呼び止める。

「事件を追えば、多分ソウゴが現れる。」

信じていいんだよね。あなたがジオウを倒してくれるって……」

「……………ああ」

何か不満があるようにゲイツが応える。

——暗くなった夜の下で、ジオウⅡとゲイツが戦っていた。

「ゲイツ……」

——ジオウⅡが彼の名を呟くが、ゲイツはジオウの知らない姿と知らない武器を持つて立ち向かってくる。

——互いの武器がぶつかり合い、火花を散らしながら、二人は交戦する。

——ジオウⅡとゲイツの戦いは、激しく行われていた。

——互いが互いの理想を求め、ぶつかり合う魔王と救世主の戦い。

——そんな二人が織り成す戦いを、強く輝く星座がまるで見守る様に照らしていた。

「はあ……？ ……夢か……」

ふと目が覚めたソウゴは、起き上がりながらビューティーハリーの中を見渡した。

「ソウギョー！ゲンキ〜？」

「はぐたん……うん、大丈夫」

夢を見ていたソウゴが、自身を心配するはぐたんを抱えて大丈夫と語り掛ける。

「無理せんでもええんで？」

「えっ？」

「気になるんやろ。ゲイツとツクヨミの事……」

ハリーに二人の事を指摘されたソウゴは黙り込み、はぐたんをソファに座らせる。

「俺、そろそろ帰るよ。またね、はぐたん」

さよならを言つて誤魔化し、帰るためにビューティーハリーのドアを開いた。

「はあく……無理しすぎやで」

ハリーの言葉を聞いて一度足が止まるが、そのまま一人クジゴジ堂へと帰つていった。

その頃、野乃家に戻つたルーラーはえみるを自身の部屋に招待。

えみるがヘッドマウントディスプレイを使い、パソコンから送られたファッション

ショーの動画を見る。

「ストツプなのです！」

えみるからストツプと声が出て、ルールーが再生を止める。

「やっぱり無理です。あんな大勢の前に立つなんて……」

「えみる、本当にやりたくないのですか？」

「興味があります。アンリさんが歌を褒めてくれたのは、心が飛び出る程嬉しかったのです」

「なら……」

「ルールーは大丈夫です。モデルさんみたいに綺麗ですから。」

やっぱり、ほまれさんかさあやさんに代わって貰うのです」

そう言つて小学生体型の自分とモデル体型のルールーを見比べ、女優をしているさあやかスケート選手のほまれに変わつて貰おうかと考えていると……

「えみる、私はえみると一緒だから、チャレンジしようと思つたんです」

「えっ？」

「私はえみるを応援すると決めました。」

私は信じています。えみるなら何でも出来る。何でもなれる」

「ルールー……」

「フレフレ、えみる」

ルーローはそうやって肘を曲げ、腕を上下に動かしてえみるを応援する。「きつとあなたは、プリキュアにもなれます」

翌日、ラヴェニール学園の教室の廊下で、はながアンリと話していた。

「はい！きつと新しい経験をする事は、健全な青少年である我らにとつてかけがえの無い財産になるのであります！」

「財産？」

「デザイナーさんとお話する事とか」

彼女は真剣な口調で、アンリに強い想いを語る。

「ふーん……」

「あと……お手伝いが上手く行ったらご褒美に、私達もファッションショーに出して貰えるかも！なんつってー……」

「……」

「お願いしますだ〜……！お願いしますだ〜……！」

どうしてもファッションショーのお手伝いに行きたいのか、頭を下げてアンリに頼み込む。

「いいんじゃない？」

「えっ!?? あっさりオツケー!??」

すると彼から、良いんじゃないかと意外な返事が返って来た。

「君のそう言う素直な所、嫌いじゃ無い」

「褒められると参る……」

「それに、君達がプリキュアだつて事を話したら驚いて、更にいいアイデアが出るかもしれないし」

「ちよ……!それは内緒……!」

「何で?面白いのに」

「やっぱり……私達がプリキュアだつて完全に思つてる……」

前の事件で、自分達がプリキュアだと思つているアンリに、はなはどうすればいいの
か悩む。実際、はな達がプリキュアである事は当たつているので余計に夕チが悪い。

「若宮君」

「何?」

そこへ通り掛かった正人がアンリに声を掛ける。

「いつも注意してるけど、制服、きちんとネクタイ結びなよ」

「そんな校則、あつたつけ?」

「女子みたいだよ。君の格好。男子の中で浮いてるのが心配なんだ」

ムツとしたはなが割り込もうとするが、アンリが右腕を広げて止める。
「考えとくよ」

そう言つてこの場を後にし、はなも後を追つた。

「あの人、嫌な感じ！何で言い返さないの!?!」

「話しても分からない人達を説得するのは、時間の無駄」

「でも……」

納得ができないはなはアンリの歩く後を見ていた。

一人寂しく、屋上で下を見つめていた。そんなソウゴの元にウオズが近づく。

「暗そうだね我が魔王」

「ウオズ……どうしたの?」

「ゲイツ君とツクヨミ君がいなくなるのも考え物だな。私が伝令役を担わなければならぬのだから」

「また夢を見たんだ。ゲイツと俺が戦う……」

昨日、ジオウⅡとなった自分とゲイツが戦う夢を見たと話す。

「また予知夢だろう。やはり、君とゲイツ君は戦いを避けられないようだね」

「でも何だか妙に穏やかだった気がする。1つだけ強く輝いた星がとっても綺麗でさ」

……」

「獅子座のレグルスかな」

「……レグルス？」

黒ウオズがレグルスとその星座について説明する。

『『王の星』という意味だ。オーマの日には、その星が最も強く輝いた……本にはそう書かれてあるね』

「ふ〜ん」

レグルスと言う星座の説明を聞いても、ソウゴにはあまりピンとはこなかったようだ。

「あつ、それよりさ、昨日のアナザービルドだけど。倒したらアナザーエグゼイドに変わったよね？あれって何？」

「残念だが、私もそこまでは何もわかっていない」

謎のアナザーライダーについて問いかけるも、黒ウオズにもそこまではわからなかった。

「もしかして、前の契約者の人を襲って力を吸収したとか？」

「まさか。彼らにライダーの力が残っている訳が……」

黒ウオズはソウゴの質問に初めは否定するも、少し黙り込み始める。

「いや、そうとも言い切れないか……」

君だって、歴史が変わっても数々のライダーの力を奪ってきたしね」

「そういう言い方ないんじゃない？」

ウオズの言い方が気に入らず文句を言うが、彼は内心「君がどう思おうが、事実であることは変わりないんだけどね……」と心配そうに呟く。

しかし主君の気分を悪くしたままでは家臣としての沽券に関わるので、とりあえず自分のデリカシーの無い発言については謝罪することにした。

「気を悪くしたのなら謝るよ。」

だが、どちらにせよ過去にタイムジャッカーと契約した者がまた狙われかもしれない
「い」

「……ねえ、ここから、近い場所にいる人わかる？」

天文台から、以前アナザーフォーゼ・ファイズになった佐久間が出てきて、電話中に謎の青年に襲われる。

「お前はアナザーフォーゼだった。そしてアナザーファイズでもあった。間違いないな？」

「何のことだ？」

「やっぱり記憶はないか。俺は構わないよ？俺が必要なのは、お前自身じゃないからさ」
『エグゼイド……!』

その言うのと、青年はアナザーエグゼイドへと変身した。

「お前の力を貰う」

アナザーエグゼイドはブランクウオッチを佐久間に押し付け、アナザーファイズウオッチ、アナザーフォーゼウオッチを入手した。

「貴様！何をしている!」

そこへ、現場に駆けつけたゲイツが現れた。

『ゲイツ!』

ゲイツは腕のホルダーにあるゲイツウオッチを外すとウオッチを起動させ、ドライバーに装填する。

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

仮面ライダーゲイツへと変身し、アナザーエグゼイドと交戦を始める。

「一足遅かった……」

更にそこへ、黒ウオズから情報をもたらったソウゴも現れた。

だが来た時にはゲイツが押されており、アナザーエグゼイドに蹴られて後退したゲイ

ツだが、そこへソウゴがいることに気づいた。

「エグゼイドウオッチはあるか？」

「あるけど。でも、こいつは……」

「いいから貸せ！」

『エグゼイド！』

ソウゴが持つてきたエグゼイドウオッチを奪うとウオッチを起動させ、ドライバーに装填した。

『アーマータイム！レベルアップ！エ・グ・ゼ・イー・ド！』

ゲイツもエグゼイドアーマーを装備し、再びアナザーエグゼイドへと走る。

「はああ！」

エグゼイドアーマーを纏ったゲイツはアナザーエグゼイドに優勢に立った。

『フィニッシュタイム！エグゼイド！』

『クリティカルタイムバースト！』

そしてドライバーを回し、必殺技をアナザーエグゼイドに放とうとする。

「何……？？」

これで決まったと思うゲイツの前に“MISS”というエフェクト文字が現れ、攻撃が失敗に終わった。

「何故だ……?」

対応するウオッチで戦ったのに効果が無かった事に戸惑っている間にアナザーエグゼイドに捕まり、放り投げられたゲイツは変身解除してしまった。

「どう言う事だ!説明しろ!」

「あいつには、普通のライドウオッチは効かないって言おうとしたのに……」

「だったらそれを先に言え!」

「先に言えって……だってゲイツが勝手に……」

二人が言い争いをしていると、アナザーエグゼイドが迫ってきた。

「茶番は終わりだ」

アナザーエグゼイドが二人に攻撃をしようとしたその時、アナザーエグゼイドは攻撃を止めた。

「我が救世主に向かって茶番とは許せないな」

そこへ仮面ライダーウオズが現れ、二人のピンチを救ったのだ。

『キカイ!』

現れたウオズはキカイミライウオッチをビヨンドライバーに装填した。

『投影!フューチャータイム!デカイ!ハカイ!ゴーカー!フューチャーリングキカイ!キカイ!』

そのままビヨンドライバーを操作して、ウオズ・フューチャーリングキカイへと
なつた。

「行くぞ」

フューチャーリングキカイとなったウオズはアナザーエグゼイドを攻め込む。

『ビヨンド ザ タイム！フルメタルブレイク！』

ウオズが周りの機械を操作し、天文台屋上のパラボラを利用してアナザーエグゼイド
に対し一斉ビーム攻撃し、アナザーエグゼイドを怯ませた。

『ジカンデスパア！ヤリスギ！』

今度はジカンデスパアを出現させる。

『フィニッシュタイム！爆裂DEランス！』

ジカンデスパア・ヤリモードで引き寄せられたアナザーエグゼイドを突き刺し、その
ままアナザーエグゼイドは爆散した。

「ぐうう……」

「バカな……」

爆発し炎に包まれたアナザーエグゼイド。

すると、アナザーエグゼイドの体がみるみる剥がれていく。

『ファイズ……！』

現れたのは以前、佐久間が契約したアナザーファイズの姿だった。

「アナザーファイズになっちゃった……」

「君は何者だ？」

するとアナザーファイズはあっさり変身を解き、姿を現した。

「——俺は過川飛流だ。時見ソウゴ、お前とは何度も交差する運命にある。またすぐ会うだろう」

死んだ目でありながら、ソウゴに対して深い憎しみを滲ませて睨みつけながらそう言う。と、青年・加川飛流はその場から立ち去っていった。

「知り合いか？」

「えっ、いや……誰だっけ？」

ソウゴは自身にも知らない人だと言う。

「行こう、我が救世主」

「……」

「ゲイツ……」

ソウゴに何も言わず、ゲイツは白ウオズと去っていく。

その様子を、陰から黒ウオズが見ていた。

「過川飛流……我が魔王と繋がりがあるか、調べておく必要があるようだ」

黒ウオズも過川飛流が気になり、調べ始めるためにここから離れた。

ツクヨミの待つ神社へ戻ったゲイツと白ウオズが、過川飛流について話していた。

「ソウゴの知り合い？」

「ジオウの関係者と契約してくるとは。今までになかったタイプのアナザーライダーだ」

「同じライダーのウオッチは、魔王のディケイドウオッチがないと通用しないとは厄介だが、ゲイツリバイブの力を使えば問題ない」

ゲイツはブランク状態のゲイツリバイブライドウオッチを眺める。

「君がその力を持てば、どんなアナザーライダーも倒せる。」

だが、本来それは魔王を倒すためのものだ。君にその気持ちが必要なければ発動しない。ソウゴを倒す気持ちがない限り、このウオッチは使えないと白ウオズが伝えた。

「任せたよ？我が救世主」

白ウオズはそう言うのと、この場から出ていく。

だが、ゲイツには気にしていることがあるのか表情が硬い。

「ゲイツ、何を気にしているの？」

「いや……」

「過川飛流のことが気になるの？なら調べようか？」

「ああ……」

過川飛流のことはツクヨミに任せ、自分はソウゴをどうするかを考える。

翌日。ソウゴ達はアンリの紹介で、ファッション会場であるホールの準備室に訪れる。

「で、デザイナーさんはどこなのですか？」

「みんな待つてたわよー！」

「この人確か……そうだ。この前幼稚園に来た……」

見覚えがある顔だなと思っていたソウゴは、幼稚園へクレームを言っていた人だと思いつ出した。

「私が最高で最強のNo.1デザイナー！吉見リタよ！」

「す、凄いエネルギー……」

「どうしたの？こないだまでスランプだったのに」

「アイデアが湧いて止まらなくい！逆に間に合うか心配な位！」

「大丈夫。この子達が助けてくれるよ。だって、プリキュアだ——」

「あああああ!!？」

アンリの口を慌ててほまれが手で塞ぐ。

「プリキュア？」

「あああ、あの……ですね。その、なんというか……」

「あの……私達、プリキュアの大ファンなんです！」

さあやは自分達がプリキュアのファンだと言って誤魔化す。

「ファンって……」

「さあや……」

「しようがないじゃない……！」

「大丈夫かな……」

「私もプリキュア好きよ！」

あ、大丈夫そうだな。ソウゴは彼女の言葉を聞いてそう思った。

「プリキュアはアンビリーバボーなヒーローだもの！トゲトゲした気分が大暴れした後

のようにスツキリ！」

「そうだったん」

「女の子だって、カいっぱい活躍出来るのよ！」

シヨ一のタイトルも決めたわ！リタ・ヨシミン、オータムウィンターコレクション！

女の子もヒーローになれる！どやっ！」

リタは人差し指を立ててドヤ顔を作る。

「女の子も、ヒーローになれる……」

「さあ、働いて貰うわよ」

「わ、分かりました……!」

近付いて来たリタの迫力にたしろいだはなが、苦笑して答えた。

はなはミライクリスタル・ローズをミライパッドの上部にセットする。

「ミライパッド、オープン!」

画面から光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン!」

三人は筆とパレットを持った芸術家となった。はな達が頼まれた仕事は、看板作りの製作だった。

作業中の最中、はぐたんが絵の具に手を漬け、手を看板のあちこちに付ける。

「はぐたん、ダメです」

「ダメダメ! ストーツプ!」

「ダメじゃない。いいよ、はぐたん」

えみるとルーラーが止めようとするが、はなは笑顔で良いと褒める。

「お花みたいだね!」

「カラフルで綺麗だ」

「カリヤフル！」

「そうだね。何だかみんなの色を表してるみたいだ」

はぐたんの付けた手の跡は花のように見え、使った色からはな達を表しているようにも見えた。

「よーし、私達も！」

「やりますかー！」

ソウゴ達もペンキを手に着け、看板に手の跡を付ける。

それを見て大丈夫なのかとえみるは思ったが、ほまれ曰く、元々口に入っても大丈夫な絵の具使ってるらしく、それを聞いて少し安心した。

「二人もやったら？」

「何でもダメと止めてはダメなのですね……っ！またダメと……！」

「難しいです……」

「えみりゆ」

「なあに？はぐたん？」

えみるがはぐたんに呼ばれて顔を近づけると、はぐたんは彼女の頬に手を当てる。

「りゅー！」

今度はルーラーにも手を当てる。

二人の頬に、赤と紫のはぐたんの手の跡が付いた。

「はぐたん……」

「イケてんじゃない」

「よーし！二人も一緒に、芸術は爆発だーっ！」

「はい！」

はな達が看板に手の跡を付け、看板を彩らせて行く。

「カリヤフルー！」

「うん！」

看板は花々で彩られて完成し、後は当日を待つだけとなった。

クジゴジ堂にソウゴの留守中、ツクヨミが尋ねて来ていた。

「いや、こうやってたまに遊びに来てくれると嬉しいよ」

「急にお邪魔してすいません」

「いや、全然全然！うち、あんまりお客さん来ないし。」

あつ、それでえつと……過川飛流くんだっけ？」

「はい。心当たりありませんか？」

ツクヨミはソウゴの叔父の順一郎なら何か知ってると思い、ここへ訪ねてきたのだ。

「うくん、どうだろうなあ。ソウゴ君、うちにあんまり友達連れてくるタイプじゃなかったから……」

「どうやら彼はここには来たこともなく、順一郎も知らないのだと知った。」

「まあ、うちに来る前はどうか知らないけど……」

「ここに来る前？ソウゴ、ずっとここに住んでたんじゃ？」

「ううん。9年前までソウゴ君、両親と暮らしてたんだ」

「そう言えば、ソウゴの両親のこと何も聞いたことなかった……今、どこにいます？」

「それが、もう……いないんだ」

「えっ？」

ソウゴの両親がいない事を初めて知り、順一郎からソウゴの両親が亡くなったある事故の話始めた。

「アンリからレクチャーも受けましたし、何とかかなりそうです」

その夜、ルールーが自分の部屋で、アンリから教えて貰ったことを早速試すべく、鏡を見てポージングする。

「私はえみるを応援する。プリキュアになって欲しいから。それが、私に出来る事」

そう呟きながら、明日の本番に向けて精を出していた。

「スマイル！えみるだよ！」

同じ頃、えみるは鏡の前で笑顔の練習をしていた。

「緊張するのです……！」

鏡向けて笑顔でニッコリと笑っていたが、恥ずかしさと緊張で顔を赤くする。

「けれど、ルールと一緒に、頑張るのです！」

自分に言い聞かせ、笑顔の練習を続ける。

その様子を扉の間から正人が覗き見し、更にスマホの画面へ視線を落とす。

（女の子もヒーローになれる……）

画面には、リタのファッションショーの情報が映っていた。

そして日には、ファッションショー当日へとやってきた。

「アンリ、あなたがコレクションのラストルックよ！」

「光栄だね」

「全てを超越する女神のイメージ、きつとあなたに良く似合う」

リタがアンリに着て貰う白いドレスを見せ、満足そうな彼の姿を見届けながら説明が

終わると部屋を後にした。

「リタさん！会場にお客さんが集まってきました」

そこへ、会場の準備をする為にメンズタイプの衣装を着たソウゴが、彼女へ会場の状態を報告した。

「そう。これで後は早瀬さんがくれば……」

「早瀬さん？もしかして、マジシャンの早瀬さんですか？」

ソウゴは早瀬と聞き。以前、アナザーウィザードとなった人だと思い、リタに尋ねる。

「そうよ。最初の演出にやってもらおうつもりだったけど……まだ、来ていないの……予定ではもう来てもおかしくないのに」

そう言っ腕時計で時間を確認した。

「早瀬さんは、アナザーウィザードだった……まさか……!?!?」

「ちよつと、時見君！」

何か嫌な予感を感じ、ソウゴが走り出した。

神社へ戻ったツクヨミは順一郎から聞いた話をゲイツへ報告しつつ、タブレットで調べていた。

「順一郎さんの話だとね、9年前に大きなバス事故があつて、ソウゴとソウゴの家族が巻

き込まれたんだって」

「ジオウの親は、そのとき他界したんだな」

「あつた、これだ！」

2009年4月24日に起きた事故。生存者は時見ソウゴ君5歳と……過川飛流君8歳!? 二人が繋がった！」

その時の記事をゲイツに見せ、この事件に小さい頃のソウゴと飛流の名前があつた事を確認する。

「二人は同じ事故の生還者だった、って事か」

「詳しく調べなきゃ！」

「頼む」

ツクヨミに事件の記録を任せゲイツが出ると、そこには白ウオズが待っていた。

「白ウオズ……」

「我が救世主。例のアナザーライダーが現れたようだが、どうする?」

一方、ファッション会場の廊下では、着替えを終えたえみるとルーラーが、時間まで待っていた。

だがえみるはソワソワしてて、落ち着いて無かった。

「えみる、心拍数が上がっています」

「き、緊張なんかしてないのです！」

「大丈夫。一緒です」

ルールーが不安に包まれて緊張するえみるを抱き、大丈夫と伝える。

「うん。ルールーと一緒になら、きつと大丈夫。ガンバルンバなので——」

気合を入れて言いかけると全速力で走るソウゴが見えた。

「ソウゴ? どうしたのです。そんなに慌てて」

ルールーに声をかけられたソウゴは足を止める。

「ルールー、えみるちゃん。実は……」

「えみる、何してるの?」

理由を話そうとした途中、三人の前に正人が現れた。

「えつくと、確かあんたはえみるちゃんの……」

「お、お兄様……」

この間えみるの家で会ったお兄さんだと思い出していると、兄の姿を見たえみるが動揺を見せる。

「ビックリしたよ。ファッションショーに出るなんて」

「ええ……その、これは……」

「帰ろう。えみる」

「えっ?」

「何これ?女の子もヒーローになれる?おかしいよね」

えみるに今日のファッションショーの情報が載ったスマホの画面を見せる。

「ヒーローって、男の為の言葉だよ。女の子は守られる側だよ。言葉は正しく使わなきゃ」

「そ、それは……」

「女の子はヒーローにはなれない」

「……ちよつと待ってよ」

釘を刺した直後、ソウゴがえみるの手を掴もうとした正人の手首を掴む。

それを見て不快感を露にしながら、「それはこちらの台詞ですよ……!」と言い返して振り払おうをするも、強く握られた手は掴んで離さなかった。

「なんで、ヒーローになれないって決めつけるの?」

「女の子だからに決まってるだろ?」

女の子がヒーローになれるわけがない。そう言う正人にソウゴが反論した。

「そんなの関係ない。ヒーローに男女関係なんて無い」

「そうだよ!」

そこへ会話を聞いていたはなが慌ててやって来た。

「誰の心にだつて、ヒーローはいるんだよ！人の心を縛るな！」

正人に向かって叫ぶ彼女に、正人は不満そうに顔を歪める。

「最悪だな、えみる……友達は選べつて、おじい様からも言われてるだろ？」

「お兄様……」

「お兄ちゃん……？」

はなは正人がえみるの兄だと聞いて驚く。

「離せ……！僕は兄としてえみるの為を思つて……！」

「何でそんなに、えみるちゃんから選ぶ権利を奪うの？」

自身の手首を掴む手を引つ張る正人に何故、えみるから選ぶ権利を奪うのかと問う。

「何かやりたいと思うことがあるなら、それに挑戦したい。」

そう言うのは、誰かに縛られなきやいけないのかな？」

「……」

「そうです！」

「ソウゴの言う通りだ。それに相変わらず君、つまらない事言うね」

着替えを終えたアンリが控え室から出て、正人に向かって言う。

アンリの姿を見た正人は思わず苦笑する。

「若宮君……?何、その恰好……?」

「ドレスだよ」

「それは分かるよ。何でそれを君が着ているのかって聞いてるんだよ」

「凄く素敵だつて思ったからだ」

「君、男だろ?」

「だから何?僕は、自分のしたい格好をする」

「はあ……?!?」

自分で自分を縛ることはしないし、それを他者に縛られるつもりもない。

彼の言うことは要するに、そういうことだった。

今まで家や学校のルールを規律良く守つて来た、頑固に見える位に生真面目な性格を持つ正人からすれば、アンリのやつていることと今の恰好は、理解の範囲外にあった。

「自分で自分の心に制約を掛ける。それこそ違う。人生の無駄。さあ、行くよ」

アンリはえみるとルールーに伝えると、ルールーと一緒にステージに向かう。

「はな。えみるちゃんとルールーをお願い!」

「えっ!!? ソウゴ!アシスタント!」

「その前に気になることを片付けてくる」

はなに二人を任せて、ソウゴは急いで会場の外へと走っていく。

「えみる……」

「ごめんなさいお兄様。私……」

えみるが二人の後を追って歩く。

それを正人は、悔しそうな顔で見るとしか出来なかった。

一方会場の外では、早瀬が過川飛流に迫られていた。

「お前はアナザーウィザードだった。間違いないな？」

「……何だよ、お前」

「貰うぞ。お前の力」

飛流が有無を言わず、早瀬の体にブランクウオッチを当てた。

すると早瀬の体内からアナザーウィザードの残った力が集まっていき、ウオッチが姿を変える。

『ウィザード……!』

「やめろ!」

「来たか」

ソウゴが現れたのを見て、飛流は早瀬を解放したが、早瀬は力なく倒れてしまった。

「早瀬さん、しっかりして!」

駆け寄って声を掛けるも、気を失っているようで反応がなかった。

「なんでこんな事するんだ！ 一体、何の目的だ？ どうしてあの人達を狙うの!?」

「あいつらの中に残るアナザーライダーの力が欲しいだけだ。お前を倒すためにな」

「俺を？」

何の為に彼らを狙うのだと問いたですと、飛流はアナザーライダーだった彼らを狙っていたのは自分を倒すためだと答える。

「それにしても、いい服を着てるな。ますます気に入らない」

今の服装を見て気に入らないと呟き、飛流はソウゴに敵意を向けた。

「とにかく、あの人達はもうタイムジャッカーともアナザーライダーとも関係ない！ お前の好きにさせるか」

「そつちから来てくれるなら、それに越したことはないな」

『鎧武……!』

アナザー鎧武ウオッチを見たソウゴはジクウドライバーを装着した。

『ジオウ！Ⅱ!』

ジオウライドウオッチⅡを取り出すと分割し、ドライバーの左右に差し込み、後ろから二つの時計のエフェクトが現れると構える。

「変身！」

ドライバーを回すと、二つの時計は左右対象に止まりソウゴの体を纏う。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！II！』

ソウゴがジオウIIへ、飛流がアナザー鎧武へと変身し、両者の剣がぶつかりあった。

遂にファッション会場が開場され、はぐたんを抱っこ紐で抱えたハリーが最前列で待つ。

「トップバッター、よろしくね」

「はい……」

「はい」

ステージ裏でアンリがえみるの肩にギターを掛ける。えみるとルールーはトップバッターだった。

はな達は廊下の方に待機し、「ルールー、えみる、頑張れ！」と応援していた。

「でも、ソウゴどうしたんだろ？」

「気になることがあるからって？」

「そういえば、今日の演出してくれる早瀬さんって人来てないね？もしかして……」

「ソウゴ、一人で戦ってるんじゃない！」

ソウゴがここに居ない事に違和感を抱いた三人は、彼が一人で誰かと戦っているのだ

と睨む。

「何なんだよえみる……！何であんな楽しそうに……っ！」

一方、正人は会場を後にしながら悔しげに呟いていた。

「若宮アンリ……！それにあのソウゴって奴も……！」

「はあ、君」

アンリとソウゴの顔を思い浮かべ苛立ちを覚えていると、路地裏から現れた一人の女性から声を掛けられる。

「とつてもナイスな顔してるわね。I get your トゲパワワ！」

明日への希望よ、消えろ！ネガティブウエーブ！」

ボブカットに赤いメッシュを入れた女性は手でハートマークを作り、ネガティブウエーブを放出させる。

正人から取り出されたトゲパワワが、暗黒の雲のようなエネルギーに変える。

「発注。オシマイダー」

女性は黄色のロングコートをはためかせながら、暗黒の雲から眼鏡をかけたサラリーマンの様なオシマイダーを作り出した。

時間となり、トップバッターのえみるとルルーがステージに現れる。

「ルルー・アムール！」

「愛崎えみる！」

「私達の歌を、聞くのです！」

えみるが叫んだ直後、オシマイダーが現れ、会場から悲鳴が聞こえた。

ソウゴが気になる三人にもその声が聞こえた。

「この声……！」

「オシマイダー！」

「行こう！」

オシマイダーを見て、三人がプリハートとミライクリスタルを取り出した。

「「ミライクリスタル！ハート、キラっと！はくぎゅ〜！」」

プリハートが反応し、三人の身体に光が纏われる。

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

三人がプリキュアになりオシマイダーを応戦していた頃、会場の騒ぎに気づいたジオ

ウが戻ろうと試みる

「まさか！オシマイダー！」

「逃げるな！」

アナザー鎧武が必要にジオウに攻撃し、逃そうとしない。

「あそこには大事な友達がいるんだ！」

「ほう……なら、そいつらも始末する！」

「えっ？なんで！！ 目的は俺だろ！みんなは関係ない筈だ！」

「俺はお前に関わる者全てを消す！俺の苦しみをお前に与える！」

「そんなこと……」

押し返そうとするが、アナザー鎧武も負けじと力を入れて邪魔をするため、ジオウは会場へと助けに行けなかった。

そこへ、アナザー鎧武が現れた事を知ったゲイツと白ウオズが現れた。

「ジオウ……何をしている」

戦っているジオウを見て、ゲイツと白ウオズがウオツチを起動させる。

『ゲイツ！』

『ウオズ！』

二人はドライバーにウオツチを装填した。

『アクション！投影！』

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

ゲイツとウオズが変身を完了した。

二人は同時にアナザー鎧武へと不意打ちをかけ、ジオウから離れた。

「邪魔だ！」

「ゲイツ……白ウオズ」

「またお前らか……」

「ジオウを倒すのはお前じゃない……この俺だ」

「ゲイツ……」

「今回は見逃してやる。早くオシマイダーを倒せ！」

「わかった。ありがとう！ゲイツ！」

「ふん！」

ゲイツとウオズの介入により、隙ができたジオウは会場へと戻った。

「君と並び立て戦えるなんて、嬉しいよ我が救世主」

「どうでもいい。奴を倒すぞ！はああ！」

「ふう！」

ゲイツとウオズが同時にアナザー鎧武へ走り攻め込む。

オシマイダーが出現した会場内ではエール達三人が奮闘しているが、会場は既にめちゃくちゃだった。

「危ない！」

天井から崩れた破片がえみるとルールの方へ落ちるも、アンリが跳びかかって二人を助ける。

そこへオシマイダーがアンリを掴み、持ち上げた直後にエール達が現れる。

「アンリ！」

「遅いよヒーロー。これ僕、お姫様ポジションになっちゃってない……？」

「いいんだよ！男の子だって、お姫様になれる！」

女の子がヒーローになる事だってできるならば、男の子がお姫様になる事だって出来る。

例え真実が一つしかなかったとしても、答えは一つじゃない。

エールがそう叫びながらオシマイダーの眼前に跳ぶ。

「メロディソード！フラワーシユート！」

そしてメロディソードを出現させるとフラワーシユートを放ち、それに対してオシマ

イダーが左腕で防ぐ。

「凄いトゲパワワの量や!」

ハリーは今までにないくらい高いトゲパワワを感じた。

「はああ!」

そこへ、ゲイツとウオズによつて戻つてきたジオウがサイキョーギレードを振りかかり、オシマイダーの腕を切つてアンリを救つた。

「ソウゴ……!」

「大丈夫?」

「ああ、ありがとう」

ジオウはアンリが無事かどうか駆け寄る。

「あれは……」

「えみるちゃんの……」

二人が天井に開いた穴を見上げると、トゲパワワを出し続ける正人が浮いてたのを気付く。

「隠れてて」

「任せるよ、ヒーロー。いや、王様」

アンリが戦いから離れると、ジオウ達はオシマイダーを迎撃する。

「はあっ!」

エトワールが壁を使って跳び、パンチを繰り出す。

「やあっ!」

後ろからアンジュが両足蹴りを肩に叩き込む。

「だあああっ!」

更にエールが跳び、パンチを叩き込む。

「よし!」

『ジカンギレード!』

ジオウがジカンギレードを出現させ、サイキョーギレードと共に手に持つ。

『サイキョーフィニッシュタイム!』

そして、ジカンギレードのケンモードとサイキョーギレードを合体させると、剣から

『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『キングギリギリストラッシュ!』

「オリヤヤヤヤ!!?」

サイキョージカンギレードを振り下し、そのままオシマイダーを仰向けに倒れさせた。

「オシマイダー!」

「まだ……アンリ？」

だがすぐに立ち上がったのを見て、ジオウがトドメを刺すためにドライバーを回そうすると、アンリが近づく。

「そうか……君も、苦しいのか」

オシマイダーが苦しんでいる事に気付いたアンリがオシマイダーの方へ向かい、足元に抱きついた。

「えっ？」

「オシマイダーを……ハグ……」

「ごめんね。けど……僕は君の為に、僕を変える事は出来ない」

オシマイダーはそれが気に食わないのか、アンリをもう一度掴み上げる。

「アンリさん！」

エールがアンリの名を叫ぶが、本人は自身の体から嫌な音が鳴ったとしても、その眼は決して萎えることは無い。

今の彼は、そのくらいに強い意志を持っていた。

「誰に何を言われたって構わない。僕の人生は僕のものだ！」

僕は僕の心を大切にす。

だって、これが僕、若宮アンリだから！

君も君の心をもっと、愛して」

「自分を……愛する？」

動揺したオシマイダーが手から離れた事でアンリが落下するが、エールに助けられる。

「後は頼むよ……ヒーローと王様」

彼はエールとジオウにそう言い終えると、極度の緊張から解放されたからなのか、安らかな顔で気を失った。

「みんな、行くよ！」

『フィニッシュタイム！』

ジオウが叫び、ドライバーを回すとそのまま高く飛び上がった。

「『ミライクリスタル！』」

「エールタクト！」

「アンジュハープ！」

「エトワールフルート！」

三人がメロディーソードのボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出し、更にジオウからキックの文字がオシマイダーへと集まっていく。

「『心のトゲトゲ、飛んで行けー！プリキュア！トリニティ・コンサート！』」

トリニティ・コンサートを放って命中させ、ジオウがキツクの構えに入った。

『トウワイズタイムブ레이크!』

「オリヤヤヤヤ!」

囲んでいたキツクの文字がジオウの足へ集まり一つとなると、ジオウのトウワイズタイムブ레이크によるライダーキックも命中した。

「HUGつとプリキュア&ジオウ! エール・フォー・ユー!」

巨大な木が作り出されてピンク・水色・黄色の花が咲き誇り、最後に巨大なキツクの文字が浮かぶとジオウが三人の前に着地し、オシマイダーが浄化された。

その直後ドアが開き、オシマイダーを作り出した女性が現れた。

「オーケー。ナイスファイトよ」

「あなたは……?」

「誰だ?」

「マイネームイズ、ジェロス。通り掛かりよ。友情とか愛情とかそう言うの、吐き気がする程嫌いなね」

その女性はジェロスと名乗り、友情や愛情が嫌いだと話す。

「次はお前が相手か?」

「おっと、今はノーセンキュー。オーマジオウとやるには、本番はまだまだこれから」

ジオウがサイキョージカンギレードを構えるが、ジェロスに戦う気は無かった。

「グッバイ。素敵な悪夢を見てね。キスキス」

別れの挨拶をして姿を消した直後、ドアが閉まった。

「ジェロス……？クライアス社にそんな社員は……」

「ここお願い！俺はアナザーライダーを止めてくる！」

「ソウゴ君！」

急いで戦っているゲイツの元へ走る中。会場の外では、ゲイツとウオズがアナザー鎧武と戦闘を繰り広げられていた。

「我が救世主。ここは私が」

『クイズ！』

ウオズはクイズミライドウオツチを使用し、ビヨンドライバーへと装填した。

『ファツション！パツション！クエスション！フューチャーリングクイズ！クイズ！』

フューチャーリングクイズとなると、ゲイツがアナザー鎧武の斬撃で吹っ飛ばされた所に入れ替わる様に交戦へ入った。

『ジカンデスピア！ツエスギ！』

ジカンデスピア・ツエモードでの突き攻撃をアナザー鎧武に次々と決めていく。

「問題。トマトは野菜だが、フルーツトマトはフルーツである。○か×か？」
『フィニツシユタイム！不可思議マジック！』

更にジカンデスパアから出した多量のクエスチョンマークで、アナザー鎧武を縛り、後は○か×か答えを待つのみ。

『ゴースト……！』

「ぐうう……！」

だが、アナザー鎧武がアナザーゴーストに変身。

ウオズが放ったクエスチョンマークの拘束を打ち破り、パーカーゴーストにより吹っ飛ばされる。

「しまった……○でも×でもない、永遠に論争が続く問題を出してしまった」

「仕方ない……行くぞ」

出した問題がダメだったとウオズが反省する。

起き上がったゲイツはゲイツリバイブウオッチをしようとして、起動スイッチを押した。
「？……何故だツ？！」

だが、ウオッチはブランクのままに起動しなかった。アナザーゴーストはゲイツとウオズに迫ってきた。

「くそー！」

「はああー！」

ゲイツはウオッチを起動できなかつた事に動揺しながらも、ウオズと二人がかりでアナザーゴーストへとパンチを繰り出す。

「ふ、どうした？」

だがウオズとゲイツ、二人ががりの攻撃も受け止められた。

「うるさい奴らだ……！」

『ジオウ……！』

アナザーゴーストは取り出した別のアナザーウオッチを腰へと向け、その体をメタルバンド型のサークルに包まれながら変化させていく。

——変化を終えた姿は、彼らにとって見覚えのある姿だった。

「……ジオウ……？」

「何……？」

そのアナザライダーは白目を向き、歯茎が剥き出しとなっていて、時計の針を模したアンテナ部は途中で折れ曲がっているという独特な特徴を持ち。両目の下部には“Zi-O”と“2019”の文字が刻まれていた。

遅れて会場から出てきたジオウも、その姿に驚いた。

「そんな……」

心なしかマツシブな体つきをしているが、まさに仮面ライダージオウ…いや、アナザージオウと言った方が正しいだろう。

「邪魔をする奴らは消す！」

アナザージオウは時計の針を模した二本の剣での一撃で、ゲイツとウォズを同時に変身解除へ追い込む。

「終わりだ…」

「待て！」

トドメを刺そうとするアナザージオウの前に、サイキョーギレードとアナザージオウの剣が重なった事によって生じた甲高い金属音を響かせながら、ジオウが立ちふさがり二人を守った。

「お前……」

「戻ってきたか……この時を待っていた！」

「あんたの相手は俺だろ。ゲイツは関係ない」

「俺はどっちでもいい。はああ！」

アナザージオウがジオウに向かって走り双剣を向ける。ジオウもサイキョージカンギレードで迎え撃つ。

「ジオウ……」

「我が救世主。ここは一度撤退しよう」

「……わかった」

アナザージオウはジオウに任せ、白ウオズの提案でゲイツは撤退していった。

残された両者の戦いは、一步も譲らない戦いを繰り広げる。

「くうーはあー！」

ドライバーのD、9スロット側にある金色のジオウライドウオツチIIが光り、両目にかかる長針、バリオンプレセデンスのアンテナ2本が回転した。

「見えた、お前の未来！」

アナザージオウの次の攻撃の未来を見た。するとアナザージオウの方も、額にある時間の針が回った。

「フン……お前の未来も見える」

なんとアナザージオウも未来予知を行い、二本の剣を合体させて槍にして技を繰り出そうした。

『サイキョーファイニッシュタイム！』

ジオウもジカンギレード・ケンモードとサイキョーギレードを再び合体させ、『ジオウサイキョウ』の文字を浮かび上がらせる。

『キングギリギリスラッシュ！』

「はあああああ！」

お互いに走り出し、同時に攻撃がぶつかった。

「うわああああ!!？」

必殺技は両者決まらず互角の勝負を繰り広げていたが、両者変身解除となった。

「ソウゴ！」

「ソウゴ君！」

そこへマジオウが気になっていたが為に、追い掛けていたエール達がやってきた。

「大丈夫……」

アンジユに支えられ、ソウゴがなんとか起き上がった。

「時見ソウゴ！次は必ず倒す！」

起き上がった過川飛流もそう叫んで去っていった。

「あいつ誰？」

「わかんないけど、少なくとも俺が狙いみたい」

「ソウゴ君を……」

自分が狙いだとみんなに教えるソウゴ。

だが彼は、何故そこまで自分を狙うのか、その理由を理解する事はなかった。

その後、無事にショーは始まり、二人は完璧にモデルをこなした。

「夢を見たんだ」

「エエ夢だったみたいやな」

「最悪だよ。けど、綺麗だったな」

目を覚ました正人に、ハリーが隣に座って語りかけ、彼は何処かすつきりとした顔でそう返した。

「女の子だつてヒーローになれる。私はやっぱり、プリキュアになりたい。ルールと一緒に。二人なら、出来ます！」

「はい」

そんな中、ルールとえみるは手を繋ぎ合いながら、プリキュアになる決意を固めた。

ショーが終わると、みんなはビューティーハリーへと戻った。

「ファツションショー！ だーい成功ー！ お洋服、いっぱい貰えたし！」

「ビューティーハリーにだけどね」

はなの後ろには、リタから貰った洋服が掛かっていた。

「こんなに安く仕入れさせて貰えて、毎度おおきに！ 大繁盛や！」

「良かったね。ハリー」

大盛況のファッションショーはビューティーハリーにも更に盛況を促すようだ。

「はな先輩！時見先輩！私達決めました！」

後ろからえみるとルールーが現れた。

「私達、二人でプリキュアになれるように頑張ります！」

「二人で？」

「はい！」

「ふたりはプリキュア！」

背中を向け合いながらポーズを取るえみるとルールーに、さあやとほまれは思わず笑みを浮かべる。

「まあ素敵！」

「イイじゃんイイじゃん！きつと二人ならなれるよ！」

勿論、私達先輩を蔑ろにせず、もっと敬って——」

「どうしたの？」

先輩風を吹かせるはなを横目に、ハリーの表情が曇ってる事にソウゴが気付く。

「…そう言えば。確か、プリハートって後一個だったハズじゃ……」

「えっ？」

「ソウゴの言う通りや……プリハート、残り一個しかあらへん……」

ハリーが残り一つのプリハートを出す。

残ったプリハートは後一個。つまり、一人しかプリキュアになれないのだ。

「ええ〜っ!？」

「いっしょー! えみりゅー! りゅー!」

「かくして、えみる君とルールー君はプリキュアになる決意を固めた。

しかしプリハートは、残り一個しか無かったのだった。

そして、我が魔王とアナザージオウの関係は一体…」

次回! Re. HUGっとジオウ!

第26話 二人の誕生が叶うか? 運命の対決 2018

第26話 二人の誕生が叶うか？運命の対決 2018

フアクションショーが終わり、ソウゴ達はビユーティーハリーに戻ると、えみるとルーがプリキュアになると決意を固めた。しかし……

「残り……」

「一個……」

えみるとルーが、テーブルの上に置かれた残り一つのプリハートを見て呟く。

「全部で四個だったっけ……」

「そう言うこつちや……」

はなとハリーが表情を曇らせて言い合う。

「それじゃあ……」

「プリキュアになれるのは後一人だけ……」

「何とか……！二つにゃないの？！」

何とかしようとしたはながテーブルの上のプリハートを両手で掴み、二つに割ろうとする。

「何しとるんやー！」

それを見たハリーが慌ててプリハートを奪うようにして取り上げる。

「プリハートはんはごつつ大切なんや!」

「だって……!」

まさか、ここに来てプリハートが足りない事に悩まされるなんて、はな達は思ってもいなかった。

「えみりゅー! るー! いっしょー!」

「何とかならないの?」

「奇跡でも起きん限り無理や……」

「奇跡よー! カモンカモンカモン!」

「奇跡……」

はぐたんとプリハートを見ながらそう呟くルールーと落ち込むえみるを、ソウゴ達は見つめることしか出来なかった。

その後も何の解決が出来ないまま、えみるとルールーがビューティーハリーを後にした。

「あの……」

交差点で足を止めて互いの方を向いて声を掛ける。

「ルールは、あっちですね」

「えみるはそっちですね。では」

「はい」

彼女らは別の方向に分かれて歩くが、すぐに足を止めて互いの方を向く。

「また、明日」

「また明日」

「はい」

別れの挨拶を交わし、二人は帰っていった。

一方ビューティーハリーでは、眼鏡を着けたさあやがパソコンとミライパッドでプリハートを調べる。

「プリハート増やせそう?」

「分らない……」

「だよね……!どっかに売ってるのか?」

「はぐたんとハリー達は、未来から来たって言った」

「うん」

「つまり、プリハートは今の時代にはまだ無いのかも!」

「そっかー……めちよつく……」

プリハートもだけど。あのアナザーライダーの人……なんでソウゴを狙うの?」

新しいプリハートを手に入れられないと分かり落胆しているのは、あのアナザーライダーが何故必要にソウゴを狙うのかを尋ねる。

「会った事がないし、わからないよ」

それについてはわからないとみんなに言うと、ソウゴは時計の時間を見た。

「ごめん。俺そろそろ……」

ビューティーハリーを出ると、入り口の前に黒ウオズが立っていた。

「黒ウオズ……」

「体は大丈夫かい?」

「うん。なんとか……」

「アナザージオウ。あれはなかなか厄介だね。ライダーにはライダーの力……しかし、それは敵にも言える。」

君のジオウⅡの力は最強だが、あのアナザージオウに関しては滅法弱いようだ」

「それ先に言つてよ……そうだ!」

アナザージオウと自分は相性が悪いと知ったソウゴの脳裏に、ある事が閃いた。

「ねえ、ウオズはプリハート持ってない?」

以前に予備のジクウドライバーを持っていたので、もしかたらと思ひ、黒ウオズに問う。

「残念だが、我が魔王。私は持っていない。

あれは特殊でね、そう簡単には手に入らない」

「そうか……」

だが結局、無駄な期待に終わった。

その頃、ほまれとハリーははぐたんを連れて、HUGMANで買い物をしていた。

「ねえ、どうしていつも大切な事を誤魔化するの？」

「えーっと、ミルクとオムツと……」

「他にも私達に隠してる事、あるんじゃないの？」

「別に隠してた訳や無い」

ハリーが言い終えた直後、はぐたんが持ってたオモチヤが手から離れ、床に跳ねて男性の足元に落ちた。

「ああ、エライすんません」

その男性は、はなの前によく現れる男性——ジョージだった。

ジョージはオモチヤを拾ってハリーの元へ歩く。

「可愛い赤ちゃんですね」

「ホンマ宇宙一ですわ!」

ハリーにオモチャを返したジョージがはぐたんの頭に手を当てると、はぐたんが何故か大人しくなる。

「お兄さんとお姉さんと、仲良くね」

彼は微笑んでそう言い、この場から歩き去った。

ハリーとほまれは立ち去る男性の後姿を、警戒心を浮かべた顔で見届ける。

その頃、神社へと戻ったゲイツに白ウオズが現れた。

「君にはがっかりだよ。我が救世主」

すると白ウオズが、ゲイツにがっかりだと話す。

「魔王倒す。その気持ちが君にはないのだね」

ソウゴを倒す気が無い。そう言われたゲイツは、白ウオズの服を掴む。

「そんなわけがあるか」

「ゲイツリバイブウオッチが反応しなかった事が、何よりの証拠だ。」

そのウオッチは魔王倒すためのものだ」

白ウオズの言う事を否定するが、ゲイツリバイブウオッチを取り出し、まだブランク

なのが証拠だと話しつつ。ゲイツリバイブについて説明し始める。

「それは君の気持ちと連動していると言つても過言ではない。今の君は牙を抜かれた獣と同じだ。自分の使命を思い出すことだ。」

このままでは、ツクヨミ君に顔向けできないよ」

そう言つて白ウオズは、ソウゴを倒す意思が弱い事を自覚し始めたゲイツの下から去つていった。

クライアス社の会議室では、幹部が集まっていた。

「また敗北か！私なら五分で終わる！」

ダイガンが傘でゴルフの素振りしながらパップルに向けて叫ぶ。

「あれは、あたしが発注したオシマイダーじゃ——」

「言い訳は、聞き飽きた！私は結果を求めているのだ！」

天井にプレジデント・クライが映し出され、前回のジオウとプリキュア達の戦いでオシマイダーを発注したのは自分じゃないと否定しようとしたパップルに向けて叫ぶ。

「社長のおっしゃる通りです」

「全くだな！」

「挽回すべく、全力を尽くします!」

「その言葉、嘘は無いな!?!」

「はい……!」

「必ずプリキュアと若き日のジオウを倒し、ミライクリスタルを手に入れるのだ!」

パップルがプレゼデント・クライに向けてプリキュアとジオウを倒して挽回すると答えているその間、リストルは端末を操作していた。

キーボードの上に映っている画面には、どういう訳かプレゼデント・クライの顔が描かれていた。

「パップル!次からそいつを連れて行け」

スウォルツがそう言うと、入り口から一人の青年が出てきた。

「よく来たな。過川飛流」

「時見ソウゴを倒すのに、この力をくれた事に感謝する。

だが、時見ソウゴを倒すのを邪魔をするな」

そう言い残して青年・過川飛流はクライアス社の会議室から出ていった。

「ふん。好きすればいい……」

小馬鹿にする様に冷笑しながら飛流へ目を向けていると、ウールがスウォルツに近づ

「スウォルツ！どういふ事!?? なんぞアナザージオウを作った!??」
「えっ!?? まさか……」

飛流にアナザージオウの力を与えたと知り、リストル以外の社員全員が驚く。

「スウォルツさん！何故そんな事を……」

「それには心配ありません。それに関しては、社長からの許可は取っております」

「「「えっ!??」」」

「全てのアナザーライダーの力を統べし、裏のライダーの王だ……」

我が社にとっては素晴らしいアナザーライダーだろ」

そう言つて笑いながらスウォルツが出て行く。

「どう言つつもりだよ。スウォルツの奴……」

オーマジオウを倒し、新たな王を擁立する事を拘っているウールには、ジオウであるソウゴと同じくオーマジオウになりかねない危険性を持つアナザージオウを生み出したスウォルツの考えが理解出来なかつた。

翌朝、野乃家のリビングでは、朝から楽しいげな声が聞こえていた。

「明太ポテトチーズトースト！昨日残っちゃつたポテトサラダが、だーいへーんしーん

！」

「凄い！奇跡が起きた！」

「お気軽な奇跡だね」

「いいでしょ！奇跡はいつでもすぐ傍にあるのよ！」

「奇跡はすぐ傍に……」

ルルーが呟いた直後、はなの階段から降りる足音が聞こえ、その方を向く。

「おはよう……」

はなの顔は熱を出しているのか、真っ赤だった。

「どうしたのですか……？」

「いや……何だかちよつと熱っぽいかもなく……なんて……」

でも……きつと大した事無いよ……

みんな、おは——」

はなが家族とルルーに言い終わる直前、床に倒れる。

「はな——」

「お姉ちゃん！」

「えみる……ルルー……」

目を回し、顔が先程よりも真っ赤になってはなが倒れた。

その日、ラヴェニール学園に登校したソウゴが見たのは、クラスのみんなが、いつも元気なはなが教室にいない事を驚く光景だった。

「ええっ!!? はなが風邪でお休み!!?」

ルールーからはなが風邪で休んだ事を聞いたあきとじゅんなが驚く。

「元気が取り柄の……」

「あのはなが……?」

「野乃でも風邪引いたりするんだな」

「大丈夫かな……」

「お医者さんには行ったの?」

「はい……」

「一体何をやって風邪を引いたんだか……」

「心配だよね……」

昼休み、屋上でほまれがスピンの練習し、体勢を崩すも何とか着地する。

「ええっ!!?」

その直後、はなとプリハートで連絡してたさあやが驚きの声を上げる。

「それじゃあ……」

『うん……。流れ星にお願いしようと思ってたら、いつのまにか寝ちゃって……』

はなが風邪引いたのは、えみるとルールーがプリキュアになれるよう流れ星にお願いしようとしてベランダで待っていたら、いつの間にか寝てしまったのが原因だった。

「えみるちゃんとルールーの為に?」

『あと、さあやも今週末CMのオーディションだし、ほまれも予選会でしょ……?』

さあやとほまれは週末にCMのオーディションと予選会があり、それもお願いしようとしていた。

『それと、ゲイツとツクヨミが帰ってきてと、ソウゴは絶対オーマジオウにならないって

……』

「はな……」

『だって……ソウゴ。ゲイツとツクヨミが居なくなってから、なんか元気がなかったから……早く戻ってきて欲しいって……』

「ごめん。心配かけて、でも、ありがとう」

「うん……ありがとう」

「はな、早く良くなってるね」

三人がそう伝えてから、プリハートからの通信を切った。

「はなつたら……」

「えみるとルールーに、何も出来ないのが悔しい」

「出来るよ。二人の心を元氣付ける事は出来る。プリハートは作れなかったけど」

「作ろうとしたんだ……」

さあやがプリハートを作ろうとしたのかとほまれが驚くのであった。

その頃、野乃家では風邪をひいたはなの口に、はぐたんが体温計を入れる。

「ありがとう……何でこんな時に……」

はぐたん……私のアスパワワ、消えて無い……?」

風邪をひいてしまった事を後悔している彼女の額に付いた冷却シートを剥がし、新しいのを貼らせる妖精形態のハリー。

「えみるとルールーの心は……アスパワワでいっぱいなんだよ……」

さあやとほまれも……ソウゴやゲイツ、ツクヨミも……だから私……みんなで……」
うわ言を呟く口の体温計から音が鳴り、これを取ったハリーが画面を見てため息を吐く。

「いっしょ。いっしょ」

「ほんなら、早よ治さんとな……」

はぐたんが眠りについたはなの頭を撫でて一緒と呟き、早く風邪が治る様にハリーは看病を続けるのだった。

放課後になると、えみるがスケート場で練習するほまれの姿を見学していた。

「おお……凄いです……」

えみるがほまれの練習を見入る。

「えみるもやってみる?」

「えっ!!? えっ!!? えっ!!?」

そんなえみるを見たほまれが、一緒にやってみないかと誘う。

「おいで」

「えっ? ええっ?!!?」

すると彼女は困り顔のえみるの傍まで滑り、手を掴む。

「いやいやいやいや!無理無理無理!」

結局やる事になったが、ほまれが支えてくれたお陰で滑る事が出来た。

「出来たでしょ?」

「はい!夢みたいなのです!」

そう言い終えた直後、ほまれはえみるの手を離す。

一瞬慌てたが、転ぶ事無く滑れた。

「——私、一度スケート諦めたんだ。」

けど、はなとさあやに出会えたから、氷の上に戻れた。

二人に出会えた事が、私の奇跡」

えみるが天使の羽の幻影を生やしたほまれに見惚れてた最中、バランスを崩して転びそうになるが、ほまれが手を握り支える。

「ありがとう……」

「奇跡って、目に見えないから。けど、だからこそ信じるんだよ」

「信じる……」

一方、池の中に立って演技するさあやをルーラーが見学していた。

「目を凝らして。ほら、見えるでしょ？愛はあなたのですぐ前に……」

「オーデイションと言うのは、大勢で一つの役を取り合うものですよね？」

ふと掛けられたルーラーの質問にさあやが無言で頷く。

「さあや、私はえみるが大好きです。とても可愛いのです。彼女の傷付く顔を見たく無い」
「い」

ルーラーはえみるの悲しむ顔を見たくないと吐露する。

「でも、私も……」

「負けたく無い。諦めたく無い」

「嫌なアンドロイドです。私は……」

「当たり前だよ。そんな簡単に、諦められないよ。夢なんだもん」

自虐的な眩きを放つルーラーに、さあやはそう励ますように説いた。

「その気持ちは、抑えられない……!」

全力でぶつかったライバルは、きつと親友にもなれる!」

白い羽の幻影を見つめながらも、彼女の言葉を聞いて、どうえみると接すればいいかわかったような気がした。

その日の夕方、えみるが自分の部屋でギターを弾く最中、ノックの音が聞こえた。

「えみる」

「お兄様……」

「もう、ギターを隠さないんだね」

「はい。私は……」

正人がドアを開けて部屋に入り、えみるの持つギターを見つめる。

「私は……!」

これからもギターを弾き続けたい。そう言おうとしているえみるに対して正人は何も言わず、三枚のチケットを出す。

「これは……ライブのチケット?!?」

そのチケットは週末、はぐくみ市の野外ステージで行われるライブのチケットだった。

「ルールーとソウゴ君と一緒に行っておいで」

「お兄様……?はい……!」

えみるは嬉しそうにそう答え、正人からライブのチケットを受け取った。

翌日、校庭で練習するアンリの元に正人が現れる。

「渡せた?チケット」

「うん」

「なら良かった」

「若宮君……あの、これまでの事……ごめん……僕は……」

「えみるの才能は本物だ。信じて」

「ああ……」

「後、アンリでいいよ」

アンリは手を振ってそう言い、この場を後にした。

放課後。丘の上で青葉をさざめかせる木の下に座るルーラーの元に、ギターを背負ったえみるが駆け足で現れた。

「ルーラー！」

「えみる……！」

えみるはルーラーに抱き付き、原っぱの上に倒れる。

「見て下さいルーラー！これ、ライブのチケットなのです！」

「ライブ……？」

興奮した様子のえみるの顔をキョトンとした顔で見つめるルーラーにチケットをお披露目する。

「お兄様がくれたのです！」

これからは……お家でギター弾いてもいいって……！お兄様が……！」

そして、家でもギターを弾いて良い事を嬉し涙を流しながら伝える。

「諦めなくて良かった……！ずっとギターを……音楽を好きで良かった……！」

「良かったですね……えみる……！」

ルーラーも嬉し涙を流し、えみるを抱き締めた。

それから二人は木を背にして座り、会話をする。

「一番にルールーに伝えたくて」

「ありがとうございます」

「私は、ルールーが優しく笑う顔が好きなのです。」

ルールーと友達になって、私はちよつとだけ自分を好きになりました」

「私もです」

ルールーも胸に手を抑えて、えみると同じだと溢す。

「私も、えみるといると制御不能。でも、それが温かい」

そう言いながら目を閉じて胸に手を当てる。

ルールーが言い終えた後、えみるがギターを弾く。

「綺麗な音楽」

「ルールー、私の曲に詩を書いてくれませんか？」

「私？」

「メロデーは私の心。そこにルールーの心が重なれば……」

「最強無敵！」

ハイタッチを交わし、互いの顔を見て笑い合った。

「二人の曲は、もっとノリノリアゲアゲで行くのです！」

「ノリノリアゲアゲとは？」

「今の気持ちなのです」

「大変よく分かりました」

「ルールーの笑顔は、私が守るのです！」

「えみる……」

「あ、そうです！このチケット、後一枚あるので時見先輩を呼びましょう！」

えみるはそう言って、兄から貰ったチケットの内の一枚をルールーに渡す。

「ソウゴにですか？」

「ルールーが渡してください！」

「私ですか？」

「私！これからお兄様達に、私の音楽を届けるのです！一緒に行きたのですが、お願いな

のです！」

「……」

えみるに頼まれ、残り一枚のチケットを渡しにルールーは動いた。

「……ソウゴに、チケットを……」

そして彼女は、久しぶりにクジゴジ堂の前にやってきた。

「ルールー？」

「ソウゴ^{!!}？」

ルールーがクジゴジ堂に立っていると、横からソウゴが現れた。

「どうしたの？」

「あの、これを……」

「ん？ライブチケット？」

遊びに来たのかなーと思っていたソウゴは、ルールーからライブのチケットを受け取った。

「えみると一緒に行くので……ソウゴも来てくださいー！」

「でも、せっかく二人なのに……」

えみるとルールーの邪魔じゃないかと思い、二人きりで楽しんでほしいと言おうとするが……

「……………それに、最近は何か悩みすぎてるようなので……」

「えっ？」

悩んでいると言われ驚いた。

ルールーの言う通り、過川飛流の事もだが、一番はゲイツとツクヨミの事でずっと悩んでいたのは事実だった。

「……うん。いいよ。一緒に行こう」

「あーはいー!」

チケットを受け取って貰ったルールーは、笑顔で軽い足取りを歩んでいった。

2009年。

ツクヨミはタイムマジンでソウゴと過川飛流との関係に何があったのかを調べる為、過去に行つて事故から数日経つた病院へと来ていた。

「時見ソウゴの病室ってわかりますか?」

受付に幼い日のソウゴの病室がどこか尋ねる。

「へえ……ソウゴ君、王様になるんだ」

すると聞き覚えのある声が聞こえた。

振り向くと、松葉杖を使っている幼い日のソウゴと順一郎がいた。

「うん。夢を見て俺、王様にならないといけない気がするんだ……」

でも、パパもママも……死んじゃったし……」

両親の死に、涙目になるソウゴに順一郎が声をかける。

「ソウゴ君。退院したらうちに来て一緒に暮らさない?はぐくみ市で!」

「えっ?いいの!」

一緒に暮らさないと順一郎が持ちかけて貰ったソウゴから笑顔が戻った。

「うん！近くにソウゴ君と同じくらしいの女の子もいるんだ。すぐに仲良くなれるよ！」

「本当！」

そのソウゴと順一郎の会話を、後ろの病室から見ている者がいた。

「飛流君！ダメじゃないちゃんと寝ないと！」

それは幼い日の過川飛流だった。

「あいつがソウゴなの……」

「そう。飛流君と同じバスに乗っていた子よ」

「あいつの所為だ……あいつの所為だ……!!？」

飛流はソウゴの所為だと叫び、ベットに潜り込む。

「飛流……過川飛流」

その様子を見ていたツクヨミが病室の表札を見てみると、過川飛流の札があった。

（事故の日に行けば……何かわかるかもしれない！）

病院を出て、外に止めてあるタイムマジンへと向かい、事件当日の日へと向かう。

一方現代、2018年。

既に週末となり、さあやはオーディション、ほまれは予選会を迎える。

そしてはなはまだ、ハリーに看病して貰っていた。

「応援、行きたかったな……」

「アカンアカン。熱が下がったばっかやのに」

はなは熱も下がり、大分体調は良くなったが、まだ完治はしてなかった。

「えみるとルールーにソウゴ……どうしたかな……?」

そのソウゴとえみるとルールーは、ライブ会場である屋外ステージ場に来て、『HILL S H A R K』というバンドのライブが始まるのを後ろの客席で座って待ってた。

「わぁ、いっぱい来てるね」

「凄い人なのです」

「楽しみですね」

「うん」

ライブが始まるのを、えみるが一番楽しみしていた。

だが楽屋の方では、ライブするバンドのメンバーとマネージャーが言い合いをしていた。

「ブツ飛びな音楽を奏でなさい」

そこへパップルが現れ、楽屋からトゲパワワが発生した。

そんな事とは知らず、会場の方ではライブを今か今かと待ち浴びていた。

「そろそろでしようか」

「ワクワクなのです！」

「そうだね」

ソウゴ達も、もうじき開演を迎えると思うと楽しみではない。そう思っていた。

「随分と楽しそうだな。時見ソウゴ」

だがソウゴの名前を呼ぶ声が聞こえ、三人が振り返る。

「あんたは……」

後ろにいたのはソウゴを狙う過川飛流だった。

「ここでは、止めよう」

「関係ない。こんなライブ、俺にはどうでもいい」

流石に無関係な者達を巻き込めないと此処から離れるように要求するが、飛流はここで戦おうとしていた。

「なんで、そうまでして俺を狙うの？」

「そうだな。何も知らないまま、俺に倒されるのもな……いいよ。教えてやる」

どうして自分を狙うのだと疑問視するソウゴに、自分との意念を教えようとしてい

た。

「俺の両親はお前の所為で死んだ。9年前のバスの事故でな」

「俺が?9年前!?」

9年前のバス事故だと聞き、自分の両親の死因と同じだと気付いた。

「今でも覚えてる。俺の近くでお前の名を叫んだ。白い服の女が銃声を放つたのをな

……」

「白い服の女?」

「聞けば、お前は魔王とかになるんだろ。それを聞いて危険視した奴が、お前を消そうとしたんだろ」

すると飛流は椅子から立ち上がり、アナザージオウウオッチを見せる。

「俺の家族はお前の所為で死んで……俺も人生がめちゃくちゃになった……」

全てのお前の所為でええええーッ!」

『ジオウ……!』

怒りに満ちた叫びを上げながらアナザージオウウオッチを腰へと向けると、そのまま飛流の体が黒い霧の様なものに包まれる。

「アナザーライダー!」

「何ですの!?」

『ジオウ……!』

えみるが驚いている間にも飛流はアナザージオウになり、ソウゴ達の前に現れた。

「うおおおおお!」

アナザージオウが現れたことで周りのお客は逃げ出していくが、アナザージオウはソウゴに攻撃しようと周りの人間お構いなしに襲いかかる。

「ソウゴ!」

「時見先輩!」

「逃げて!」

ソウゴはアナザージオウの攻撃を避けながら、えみるとルルーに避けろと言う。

「よくわからないけど、俺が憎いだけで……いる人達を巻き込むなんて違うだろ!」

「お前のせいだ!お前が……!」

憎しみに包まれたアナザージオウの攻撃が更に激しくなる。

「ソウゴ!」

「みんなを避難させて!」

『ジクウドライバー!』

ソウゴはアナザージオウの攻撃を避けながらジクウドライバーを装備した。

『ジオウ!Ⅱ!』

取り出したジオウライドウォッチⅡを分割し、ドライバーの左右に差し込むと、後ろから二つの時計のエフェクトが現れる。

「変身!」

ドライバーを回すと二つの時計は左右対象に止まり、ソウゴの体を纏う。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ!Ⅱ!』

ジオウⅡへ変身すると飛流はアナザー鎧武へと変身し、両者の剣がぶつかりあった。その時、ライブ会場から振動が起こる。

「何でしょう?」

ルールがそう言ったその時、ステージ裏からギタリストオシマイダーが現れた。

同じ頃、野乃家でも……

「……!」

「どないしたんや?」

「ハリー……あれ……」

はなに言われてハリーがテレビを見ると、オシマイダーが暴れていると言う臨時ニュースがやっていた。

「オシマイダー!」

「あれは……!!」

「ソウゴ！えみる！ルルー！」

更に屋外ステージ場で、えみるとルルーと、アナザージオウと戦っていたジオウIIがいた事に気付く。

現場では、ジオウがアナザージオウに押されていた。

「くうー！」

「お前さえ……お前さえいなければー！」

アナザージオウの猛攻に苦戦を強いられていた。

「お前じゃ！俺は倒せない！」

「あんただって……俺を倒せない！」

『ジオウサイキョウ！』

サイキョーギレードのジオウのフェイスの文字を “ジオウサイキョウ” へ変えた。
『霸王斬り！』

ジオウの攻撃がアナザージオウに直撃した。

「効いてる……やっぱり、こっちの攻撃も効いてるんだ！」

「まだだ……お前を倒すまでは倒れない！」

アナザージオウの執念がジオウへと向けられる。

一方ゲイツもタイムマジンで、事件が起こった2009年へとやってきた。

「事件が起こったのが偶然じゃなかった……あれか?」

事件は偶然ではなく、必然的に起こったのだと考えていたゲイツ。

変な運転をしているバスを見つけ、あれが事故が起こるバスだと思い接近。

タイムマジンでバスの乗客の状況を確認すると、そこには驚きの光景が見えた。

「ツクヨミ!」

そこにはファイズフォンXを構えるツクヨミがいた。

『ソウゴ!』

ソウゴの名前を言い、ツクヨミが発砲した。

そのままバスから火が燃え上がるとそのまま制御不能となり、トンネルの中へと入る。

そしてバスはトンネル内の壁に追突し、爆発が起こった。

「ツクヨミ……!!?」

バスは勢いよく追突した事で見ても無惨な姿になり、炎が燃え上がる。

「ああああ……」

その光景を見たゲイツは仲間をまた失ったと後悔に包まれ、下を向く。
「俺の……使命……それは……」

2018年。

ステージをオシマイダーが暴れ続けるが、ジオウはアナザージオウに妨害され、オシマイダーまで相手には出来なかった。

「さあ！開演よ！」

パップルの掛け声と共に、オシマイダーがギター先端にある火炎放射器をえみるとルルーに向けて放つ。

「ルルー……えみるちゃん！」

ギリギリのところでルルーがえみるを抱きかかえて跳び、何とか避けるが、背中から椅子にぶつかる。

「大丈夫ですか？ ルルー！」

「はい……」

「あーら、裏切り者のルルーちゃん」

屋根の上に現れたパップルが言った言葉を聞いたえみるが睨む。

「えみる……」

すると彼女は立ち上がり、ルールーの前で両腕を広げる。

「カッコいい事。オシマイダー! やっちゃいなさい!」

パップルはオシマイダーに命令して、ギターを弾いてルールー達に攻撃しようとする。

「さあやさんとほまれさんの為に……」

「まだ風邪の治っていないはなの為に……プリキュアは諦めない……! ソウゴも一緒に……!」

「頑張れ! 頑張れ!」

「フレ! フレ! ソウゴ!」

えみるとルールーがジオウを応援した。

するとアナザージオウに押され気味だったジオウは、徐々にアナザージオウの持つ剣を押し返し始めた。

「負けるか……!」

「何……」

「ここには、ライブを楽しみに来た人達がいる。

それを……俺への恨みや復讐の為に、関係ない人を巻き込むなんて許せない!」

『サイキョーフィニッシュタイム!』

ジカンギレード・ケンモードを手に持っていたサイキョーギレードと合体させ、アナザージオウの力の押し込みを跳ね除けた。

『キングギリギリスラツシユ!』

「オリヤヤヤヤヤ!!?」

『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がり、そのままオシマイダーへと振りおろして、オシマイダーを倒れさせる。

「ソウゴ!」

「時見先輩!」

その時、二人の胸元から赤と紫の光が放たれた。

「心が、溢れる!」

二人が叫んだ直後、はなとはぐたんを抱っこ紐で抱えたハリーが現れる。

「あれは……!」

ハリーが二人の傍へ近づいて足を止めると、プリハートが二人の前に現れ、同時にはぐたんが額の飾りから光を放つ。

「これは……」

その光に反応し、えみるからはミライクリスタル・レッド、ルールーからはミライクリスタル・パープルが出て来る。

「えみるとルールーから……!」

「ミライクリスタルが二つも!けど……!」

「ミライクリスタルが私の心から……!」

そう言った直後、えみるの持ってたプリハートが上に浮かぶ。

「えみる、早くプリキュアに!」

するとえみるがプリハートを取り、ルールーにずいと近付けた。

「えっ……?」

「さあ、ルールー!プリキュアになるのです!」

「何を言っているんですか!えみるの夢は——!」

「ルールーの夢も同じなのです!」

ルールーはえみるの夢を優先させようとするが、ルールーの夢も同じだとえみるが強く叫ぶ。

「今、時見先輩に力を貸せるのは、ルールーなのです!」

えみるはルールーにプリハートを差し出そうとする。

「それに言ったでしょう?私は、ルールーの笑顔が、本当に本当に大好きなのです!さ

あ、急ぐので——!」

彼女がそう言ってた途中で、ルールーがえみるを抱き締める。

「プリキュアは諦めない……!!」

「ルルー……」

「どれだけ計算しても、答えが出ない……!!分析不能……!!」

でも、信じる。奇跡を!

私は、えみると一緒にプリキュアになりたい!」

「私も……私もルルーと一緒にプリキュアになりたい!」

「お願い!」

「あっはっはっはっ!アンドロイドが神頼み?」

互いが互いに信じ合い、プリキュアになりたいとえみると一緒に叫ぶルルーを、パップルは神頼みだと嘲笑う。

——その時、周囲の色が変わった。

「なんだ……?」

「これ……」

同時にプリハートが光り出し、幻のように二つに見えると、そこから女神らしき幻も現れた。

「プリハートがもう一つ……!!(それに今は……)」

「えみる——!る——!いっしょ——!」

その黄金の女神の幻が、二人を抱き締めた直後に消滅する。

「消えた……!」

「何なのですか今の……?」

「奇跡が……起こった……!」

一つしか無かった筈のプリハートは、幻のように現れた二つ目のプリハートが実体化したことで、実物となった。

「プリハートが出来た!これって本当の奇跡だよ!」

「プリキュア!」

「あなたを愛し、私を愛する!」

思いが重なった二人は、プリハートを構えた。

「ミライクリスタル!ハート、キラっと!はるぎゅ〜!」

二人は現れたミライクリスタルとプリハートをセットし、はな達と同じ手順を取る。するとエール達三人のように服が変わり、髪が伸びると色も変わり、姿を変える。

「輝く未来を、抱き締めて!みんな大好き!愛のプリキュア!」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

えみるとルールーが、四人目と五人目のプリキュア——赤いアイドル衣装風のコス

チユームを身に着けて大ボリユームのクリーム色のツインテールを揺らすキュアマシエリと、肩を出した紫のネクタイ付きアイドル風衣装を着て左右をリボン状に小さくまとめた紫がかつた銀髪をたなびかせるキュアマールへ変身を遂げ。二人が手を繋ぎながら背中を重ねて歌う。

「キュアマシエリ……！アムール……！」

「凄い……！二人一緒に誕生するなんて……！」

「なになに……!? どう言う事!?？」

歩きながら離れてポーズを取り、オシマイダーに向かって走る。

「よーしー！私もー！」

「よせー！まだお前は無理やろー！」

はなも変身しようとするが、治りかけだったのでハリーが止める。

マシエリとアムールと一緒に跳び、オシマイダーを踏み付ける。

二人は歌いながら宙返りして距離を取り、客席に着地。オシマイダーに向かって跳び、オシマイダーがギターをシンバルに変化させて潰そうとするが、当たる寸前で左右に跳んで避ける。

再び客席に着地してからもう一度跳び、そのまま跳び蹴りを繰り返してシンバルを顔面に叩き付けて破壊する。

「アーユーレディ！」

「行きます！」

「フレフレ！ハート・ソング！」

「フレフレ！ハート・ダンス！」

マシエリとアムールがプリハートのハート部分をタッチして手を画面にかざし、プリハートから赤と紫のハート型エネルギーを敵にぶつけて浄化する。ハート・ソング”とハート・ダンス”を放つ。

ハート・ソングとハート・ダンスが巨大なハートとなつて直撃すると、オシマイダーが浄化された。

「よっしやー！」

「凄え！ルールー！えみるちゃん！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「ふたりはプリキュア！」

マシエリとアムールが手を繋ぎ、ポーズを取った。

「嘘……!?? そんなの聞いて無ーい！」

パツプルが突然出現した二人のプリキュア誕生に狼狽し、瞬間移動して引き上げる。

「ちっ……」

「はあああああー！」

パツプルが引き上げるとジオウがサイキョージカンギレードで反撃へと出ると、攻撃が直撃したアナザージオウが飛ばされる。

「もういいだろ。これ以上は意味ないよ」

「うるさい！俺はお前を……うおおおおー！」

アナザージオウが槍を回しながらジオウに襲いかかろうとした。

その時……

「はあー！」

「くうー！」

いきなりゲイツが現れるとアナザージオウを殴り、痛みは左程無いとは言え突然殴られたアナザージオウは怯む。

「ゲイツー！」

突然のゲイツの登場にジオウが驚く。

「また貴様か……どけ！時見ソウゴは俺が倒す！お前は邪魔だああ!!？」

アナザージオウがゲイツに向かって邪魔だと叫ぶ。

「違う……」

よく見てみるとゲイツの拳が血が滲んでいて、更にその手にはブランクウォッチ状態のゲイツリバイブが握られていた。

「こいつを倒すのはお前じゃない……………この俺だ」

ゲイツがジオウに体を向けるとジクウドライバーを取り出し、腕のホルダーからゲイツウォッチを外す。

『ゲイツ!』

ジクウドライバーにゲイツウォッチを装填し、腰へと装着した。

そして、殴った手に握られていたブランクウォッチが光り出した。

「ウォッチが!」

「何が起こるんや……………」

その様子を見ていたはなとハリーは、これから何が起こるのかわからなかったが、ゲイツの今の様子から放たれる嫌な予感だけは酷く感じ取っていた。

そして手から砂時計のような形をしたウォッチに色が宿り、新たなる力が誕生すると、彼は迷わずそのウォッチを発動させた。

『ゲイツリバイブ!剛烈!』

そのウォッチ——『ゲイツリバイブライドウォッチ』をドライバ―へと装填し、ドライバ―のロックを解除。手でドライバ―を包む。

「変……身」

ドライバーを回し、後ろからデジタルタイムマーと砂時計を組み合わせたかのようなエフェクトが現れると、普段のゲイツとは違う姿を纏っていく。

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！リ・バ・イ・ブ 剛烈！ 剛烈！』

そこにいたのは、顔の「らいだー」の文字のサイズが大きく、尖ったような形状になっており。また、顔や胸部には砂時計の意匠、全体的なカラーリングは赤く、腹筋が割れているような形状の胸部のアーマー『リバイブアーマー 剛烈』を纏い、より重装甲な姿へと変った仮面ライダーゲイツだった。

「祝えー！」

聞き慣れた台詞が聞こえ、ジオウ達が振り返ると会場の上から白ウオズがいた。

「巨悪を駆逐し、新たな未来へ我等を導くイル・サルバトーレ！」

その名も仮面ライダーゲイツリバイブ！ 真の救世主がこの地に降り立った瞬間である！ハハハハ……！」

突如現れた白ウオズの祝いの言葉をバツクに、新たなゲイツの姿・ゲイツリバイブが今、ここに誕生した。

「うわあ……白ウオズもやるんだ……」

ジオウが白ウオズも黒ウオズのように祝うのかと呆れていると、ゲイツがジオウへと

迫る。

「させるかー!!?」

奴を倒すのは俺だと、アナザージオウがゲイツの下へと走る。

それに気づいたゲイツは、新たな武器『ジカンジャクロー』で反撃に出た。

「何があったか知らないが、素晴らしいよ我が救世主!今こそゲイツリバイブの力を解放する時だ!」

どういった経緯で変身する覚悟を得たのかは知らないが、ゲイツリバイブの力を覚醒させた事に喜びながら、白ウオズはゲイツの前から去っていった。

『パワードのこー!』

そう音声で鳴ると、ジカンジャクローのナックルガードに付いている電動丸鋸が回転し、アナザージオウへと当てる。

『のこ切斬!』

「うおおおお!!?」

トリガーを引くと更に回転を強め、一撃だけでアナザージオウを彼方まで吹っ飛ばしてした。

「あああああ!!?」

アナザージオウはゲイツの攻撃を受けた部分を抑え、苦しみに悶えながら声を上げ

る。

だがゲイツはジカンジクロウを回し、さらに斬撃を飛ばした。

「はあ!?」

アナザージオウがもうダメかと思ったその時、時が止まった。

「残念だが、今日はここまでだ」

時間を止めたのはスウォルツだった。

「ジオウ、ゲイツ。そして、プリキュア……また、会おう」

そう言ってスウォルツはアナザージオウを連れ、消えていった。

スウォルツが消えて時が動くと、斬撃が誰もいない壁へと直撃して終わった。

「いない……逃げたか」

「……ゲイツ、何があつたの『話すことはない』……えっ?」

「俺はお前を倒す……それが、俺達の進む未来だ」

「……ゲイツ」

「待つて欲しいのです!」

はな、アムールとマシエリが前に出てゲイツを止める。

「時見先輩と戦う理由はないはずです!」

「そうだよ!なんで!」

「どけ。もう決めたんだ」

「まだソウゴはオーマジオウには……」

「いいよ」

必死にゲイツを説得しようとする三人にもういいよと言うと、ジオウが前に出る。

「ソウゴ」

「ゲイツがそう決めたなら、俺はゲイツと戦う。」

だから……みんなを手は出さないで」

「ですが……」

「大丈夫だから、ハリーお願い！」

「わかった……」

ハリーに連れられ、三人はジオウとゲイツから離れる。

「行くぞ」

「うん」

ジオウのサイキョージカングレードとゲイツのジカンジャクロー、両者互いに武器を向け合う。

「うおおおおお!!?」

両者の武器が火花を散らし、遂にどちらかの未来が決まる戦いが始まってしまった。

「はあああああ！」

サイキョージカンギレードがゲイツに決まった。

しかし、ゲイツリバイブ剛烈の硬いボディには傷一つ付かないどころかビクともせず、カウンターを受け続ける。

「強いのです……」

「ソウゴが72・8%押されています」

「何で、こんな戦いしなきゃいけないの……」

見ているだけで辛い戦いを、はな達は見てることしか出来なかった。

「うおおおおお！」

「ふうー！」

ジオウはゲイツのジカンジャクローを紙一重で躲した。

「はああ……」

サイキョージカンギレードを構え、ドライバーの右側にある金色のジオウライドウオッチIIを光らせると、両目にかかる時間の針のアンテナ2本が回転した。

「見えた、ゲイツの未来！」

自身がゲイツの攻撃を受け、カウンターでサイキョージカンを受けるゲイツの姿を見た。

「はああ!」

ゲイツの攻撃を受け流しながら、次にカウンターでゲイツにダメージを与えた。「行ける!」

このままだければゲイツを止められると、未来の通りに次の一撃で決めにかかる。すると、それを見たゲイツがゲイツリバイブウオッチに触った。

——それは、たった数秒の出来事だった。

ジオウにサイキョーギレードを向けられた時、ゲイツは直ぐさまゲイツリバイブウオッチを回した。

『スピードタイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ疾風!疾風!』

その時、ゲイツリバイブから装甲が展開して姿が変わると、音速並のスピードでジオウの背後につき、一瞬にのうちに後ろへと回って反撃に出た。

——その間、たった5秒ツツ!!

「なんで……」

「お前が未来を予知しても、俺はその先へ行く……!」

ジオウが今のゲイツの姿を見ると、赤色の重装甲は青色の軽装甲になっており、ゲイツリバイブ剛烈の展開された胸部アーマーが翼のような姿になっていた。

『スピードクロー!』

二本の青いクローを伸ばした籠手へとモードの変わったジカンジャクローを持ち、ジオウに近づく。

「ジオウ。お前を倒す」

圧倒的にゲイツリパイブの方がジオウⅡのパワーもスピードも上回り、ジオウⅡ最大の力である予知すらも超える力を持っていた。

とあるバス会社。黒ウオズが社員を眠らせ、社内の資料室から過去のソウゴのバスの事故の資料を見ていた。

「やはり、我が魔王と過川飛流とは繋がりがあつたか……」

資料にある被害者のリストのページをめくる。

「!? 何故、我が魔王の事件に門矢士の名前が!?」

そこには、運転手として仮面ライダーディケイド『門矢士』の名前まで記録されていた。

生きている人間の名前に、あの破壊者の名がある事に黒ウオズが驚く。

次回! Re. HUGっとジオウ!

第27話 最強コンビ登場!!? 黒ウオズ、一か八かの賭け 2009

第27話 最強コンビ登場!!? 黒ウオズ、一か八かの賭 け 2009

オシマイダーとアナザージオウを退いたジオウ達。

だが、ゲイツリバイブとなったゲイツとジオウIIの対決が遂に始まってしまった。

ゲイツリバイブは剛烈と疾風の力で、ジオウIIとなったジオウを翻弄させていた。

「強い……ならー!」

『フイニツシユタイム!』

ジクウドライバーを操作し、ピンクと金色の『キツク』のエフェクトがゲイツを囲むと、ジオウは高く飛び上がる。

『トウワイズタイムブ레이크!』

囲んでいたキツクの文字がジオウの足へ集まり一つとなると、トウワイズタイムブ레이크によるライダーキツクが放たれた。

『のこ切斬!』

対するゲイツは丸鋸モードへと変化させたジカンジャクローで反撃に出た。

「うおおおおおー！」

「はああああああ!!?」

二人の技が衝突し、お互いに一步も譲らない激闘が繰り広げられた。

「うわああああー!!?」

だが決着が付かず相殺され、二人とも吹き飛ばされた。

「あつ……………くうー！」

「うつ……………ううう」

だが、ジオウとゲイツの衝撃はかなりのダメージを互いに与えた。

「二」ソウゴ（時見先輩！）！ゲイツ（さん！）！「二」

「まだだ……………ジオウ……………！」

飛ばされたゲイツはジカンジャクローを拾い、起き上がる。

「ゲイツ……………」

「待つんだ！我が魔王、そしてゲイツ君」

そこに黒ウオズが現れ、仲裁に入った。

「こんなところで君達に決着をつけられては、もう一人の私が喜ぶだけなんでね。ハ

リー君達、我が魔王を頼む」

ソウゴをはな達に任せると、黒ウオズがマフラーをゲイツに向けて放ち、二人は何処

かへ消えた。

「はあ、はあ……あ……」

二人が消えるとジオウが膝を折り、変身が解かれるとソウゴが倒れた。

「ソウゴ!!?」

「時見先輩!!」

倒れたソウゴにはな達が急いで駆け寄る。

その頃、黒ウオズに場所を移動させられたゲイツは、とあるビルの屋上にいた。

「何のつもりだ!?」 黒ウオズ

「君のためさ」

「俺の為? 誤魔化しを……」

「気づいてないのかい?」

「……ッ!?」

すると、地面へと落ちる赤い水滴が見えた。

それはゲイツから流れる鼻血だった。

「確かに君のゲイツリバイブの力は最強だ。だが…その分リスクもある」

「リスクだと……?」

黒ウオズがゲイツリバイブにリスクがあると話し出す。

「剛烈のパワーも疾風のスピードも、君のウオッチが時間を圧縮したり引き延ばしたりすることで生み出されているようだ」

それを聞くゲイツはただ黙り込んで、ウオズの顔を睨みつける。

「そのことは君の身体に大きなダメージを与える。」

君は自分の命を削って戦っているんだ。そこまでして我が魔王を倒したいとでも？」

黒ウオズから助言を受け、しばらく沈黙が続くとゲイツが口を開く。

「この時代に来た時から、俺にはジオウを倒す道しかない」

「そうかな……？ 私からすると、君は我が魔王に友情を感じているようだった……」

「……」

「そんな君が何故、唐突に我が魔王を倒そうという気になったんだい？」

「……俺は見た。ツクヨミが子供の頃のジオウを襲う瞬間をな」

ゲイツはあの事件当日のバスの中で、ツクヨミがソウゴに向けて発砲した姿を思い出す。

「俺がグズグズしていたばかりに、ツクヨミが自分の手を汚すことに……」

そして……ツクヨミは……」

過去へ向かった時、トンネル内で彼女も乗っていたバスが爆発した事も思い出す。

「ジオウを倒すのは俺の使命だ！友情など感じるはずがない」

『ゲイツリバイブ 剛烈！』

「変身！」

『パワードタイム！リ・バ・イ・ブ！剛烈！剛烈！』

再びゲイツリバイブ 剛烈へと変身し、ジカンジャクローを黒ウオズに向ける。

「私がゲイツ君に負けたことがないのを忘れたのかい？」

「過去の話だ」

変身したゲイツに流石の黒ウオズも警戒し、『逢魔降臨暦』の本を開く。

「はあー！」

黒ウオズが逢魔降臨暦を投げるとそれが巨大化し、ゲイツを閉じ込める。

「ふん」

ゲイツを閉じ込めたことで黒ウオズが笑みを浮かべた。しかし：

「はああああ！！？」

「っ！！？ はあー！」

ジカンジャクローで閉じ込められた本ごとぶち破られ、今度はマフラーで包み込もうとする。

しかしジカンジャクローでそれをもはじかれてしまい、そのまま彼は黒ウオズへと走

る。

「はあ!」

黒ウオズはゲイツリバイブの後方へうまく欺いて移動し、マントで今度こそ包み込む。

『スピードタイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!疾風!』

だが疾風にフォームチェンジしたゲイツにあっさり破られてしまう。

「なんと、ここまでか」

マフラーで自分を包み、黒ウオズはこの場から撤退する為に別の場所の屋上へと移動した。

「逃げ切ったつもりか」

しかし、ゲイツは既にそこへ現れていた。

「俺はジオウIIの予知を上回れる。お前のスピードで逃げ切れると思うな!」

疾風のスピードから逃げるのは困難だと知らしめられ、黒ウオズが焦り始める。

「はあ!!?」

「うわああああ!!?」

生身の黒ウオズにジカンジャクローに容赦なく攻撃を入れ、吹き飛ばされた黒ウオズ

は下の方へと墜落した。

「ふん」

飛び散った本のページの中に倒れる黒ウオズを見て、ゲイツは去っていった。

「もう一人の私め……恐ろしいものを生み出してくれたな。何とかしなければ……」

何とか助かったが、ゲイツリバイブの力を実感した黒ウオズは何か手がないかと探る。

その頃、ゲイツの前に白ウオズが姿を見せる。

「我が救世主」

「俺はお前の救世主になるつもりはない。黙って見てろ。」

この力で、必ずジオウを倒す！」

そう言うと、ゲイツは白ウオズの元から去る。

「いや、君はまさに救世主だよ。ただし、私達にとっては、だけどね。」

へへへ……ハハハ……ハハハ……！」

私達と言う白ウオズ……

彼の口調はまるでゲイツを使って、何かを企んでいる様だった。

はな達はゲイツとの戦いに倒れたソウゴを、クジゴジ堂へと連れて行っていた。

「…………ごめん…………迷惑かけて」

目を覚ましたソウゴは、クジゴジ堂の自分の部屋で寝ていた事に気付く。

「怪我也擦り傷だけやし、まあ、大した事なくてよかったわ」

ハリーがクジゴジ堂にあった救急箱から取り出していた絆創膏や薬を仕舞う。

「ソウギョー!ゲンキー!ゲンキー!」

「うん!ありがとう。はぐたん!」

元氣付けるはぐたんを見て、ソウゴが頭を撫でる。

「しかし、ゲイツリバイブ…………あれはとんでもないな…………」

「…………うん。それに、ゲイツは本気で俺を倒そうとした」

あの時のゲイツの目、あれは完全にソウゴへ敵意を向け、倒す気持ちでいた。

「黒ウオズがいなかったら…………俺は間違いなくやられてた…………次は、俺も覚悟を決めな
いと…………」

ソウゴも次は、本気でゲイツを倒さなければならぬと感じていた。

「めちよつく!」

リビングの方から、はなの何か慌ただしい声が聞こえた。

「何!??」

ベットから起き上がったソウゴとハリーがすぐにリビングへと走る。

「みんな！何やっての？」

リビングではなとえみる、ルールーが何か作っている様だが、何か大変なことなっていた。

「ど、ど、ど、どうしましょう！」

「えみる。落ち着いて下さい」

「あ、あ、あ、どうしよう！どうしよう！」

叔父の順一郎がいないから代わりに何か作っているようだが、ソウゴはなんだかヤバそうだなと不安そうに感じながら見ていた。

「大丈夫かな……」

翌日、ビューティーハリ。

さあやはオーディションに合格して、ほまれは予選会で一位となりやってきた。

「改めまして！キュアマシエリになりました愛崎えみるなのです！まだまだプリキュアとして至らない事もあるのですが、先輩の皆様、ご指導よろしくお願い致します！」

えみるが改めてはな達に自己紹介し、頭を下げる。

「やったね！」

「頑張ろうね!」

「よろしく」

はな達が笑顔で拍手を送る。

「ほら、ルールーも」

「あつ、はい」

えみるに自己紹介をする様に言われ、ルールーがソファから立つ。

「キュアアムールのルールーです。よろしくお願い致します」

軽く頭を下げて改めて自己紹介する。

「…それだけ!?」

「ダメですか?」

しかしえみるはルールーの自己紹介が気に入らなかった様で、これだけでは駄目なのかと不思議そうにする。

「第一印象が感心なのです!もつとこう、プリキュアとしての決意表明とか、私達二人の溢れるやる気とヒーロー魂が止まらないと言うアピールをしないと!」

えみるがルールーに詰め寄って強く説得。

「大丈夫だよ」

「十分熱意は伝わってるから」

「エエなあ。ホンマ初々しいわ！」

「ういういー！」

「先輩！プリキュアとして大切なものは何なのでしょう？」

えみるにそう問われたはな達は腕を組み考える。

「うーん……やっぱ……パシ！ビシ！ポワーン！って事かな」

「意味分らないのです」

「解析不能です」

「めちよつく……！」

ルールーとえみるには、はなの言ってる事が擬音ばかりでさっぱりわからなかった。

「信頼関係かな？」

「そう！それが言いたかったの！」

「ホンマかいな？」

「なるほど……信頼関係ですか……」

さあやのフォローに便乗するはなとツツコミを入れるハリーを横目に、えみるがメモを取る。そこへはまれがお茶を持って来た。

「そういえばこの前、ソウゴが一人で戦ったのは？」

「私のオーディションやほまれの予選会の事、氣遣つてくれたんだよね？」

「うん。みんな、二人の夢を本当に応援してるから」

「ありがとう。お陰で全力でやれたよ」

「私も。ありがとうはな」

「いやー、あの時私も戦おうと思っただけけど……」

はなが苦笑してそう言い、後ろ頭を掻く。あの時は、治りかけだったからハリーに止められたが。

「ガシ……」

「ビシ……」

「パワー……」

「ガシ！ビシ！パワー！」

「ホンマかいな……」

「素敵です！ルールー！私達もガシ！ビシ！パワー！になりましたよーね！」

「はい」

えみるとルールーは、はなの言っていた言葉を頭ではなく心で理解した。

クライアス社の会議室。パップルはこれまでの失敗続きに、幹部から呆らされていた。

「今日から新たな幹部社員が配属される事となった」

「新しい幹部……？」

背後から靴音が聞こえて振り向くと、ジェロスが会議室へと歩いて現れる。

「ごきげんよう。ジェロスです」

「聞いて無いわよ」

「パップル先輩ね。ご活躍は聞いてますわ。ミライクリスタルの奪還。プリキュアと若き日のジオウとゲイツの攻略に日々挑戦されているとか」

「ま、私なら五分で終わるがな」

ダイガンが余裕でそう答える一方、パップルがジェロスを強く睨む。

「そんなに睨まないで。こう見えて私、先輩の事とっても尊敬してますの」

「光栄ね」

「失敗続きでもまだここに座っていられる神経の太さ、称賛に値するわ」

「ブツ飛びでムカつくわね……！」

苛立つてそう言い終えてから、リストルが端末を操作すると、天井にクライが映し出される。

「私は結果を求めている!」

「社長!今度こそ私が……!」

リストルが再度端末を操作する。

「必ずプリキュアと若き日のジオウ、ゲイツを倒し、ミライクリスタルを手に入れるのだ!」

「は、はい……!」

クライが叫んでから雄叫びを上げ、パプルが頭を下げてはいと答える。

その頃。はぐくみ市のとある廃虚のビルに、オーラとウールがいた。

「何のつもり?よく私達の前に、のこのこ姿を見せられるわね」

「その節は、実に申し訳なかった」

二人の前に現れた黒ウオズは以前、手を貸したのに裏切った事を謝った。顔は一ミリも反省の色が見えないが。

「あんたが普通に謝るの気味悪いんだけど」

オーラに気に入らない、そう言われると黒ウオズが用件を話す。

「このままではゲイツ君が我が魔王を倒し、もう一人の私が望む通りになるだろう。

それだけじゃない。あの過川飛流と我が魔王が遭遇した過去の事故には、謎が秘めら

れている」

彼は名簿にあつた門矢士の名が気になり、過去の事件に何かあると考えていた。

「もはや私一人では手におえない。君達の協力が欲しい」

「どの口が言つてるの？ あんたは何だかんだ私達を利用したいだけでしよう。魂胆見え見え。とつとと消えて」

オーラに拒否されると、仕方なく黒ウオズは二人のもとから去つていく。

だがウールは何か気になつて居るのか、彼の後姿を見つめていた。

歩いてきたゲイツの前に、今度は飛流が立ちはだかる。

「過川飛流。貴様に用はない」

「お前になくても俺にはある。時見ソウゴを消すのは……俺だ！」

『ジオウ……！』

そう言つて彼はアナザーウオッチを使い、アナザージオウへ変身した。それを見てゲイツはジクウドライバーを装備する。

『ゲイツ！』

『ゲイツリバイブ！疾風！』

ゲイツウオッチを差し込み、更にゲイツリバイブウオッチを装填した。

「変身」

後ろから砂時計のエフェクトが現れ、ドライバーを回す。

『ライダータイム！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！
疾風！』

ゲイツリバイブ疾風へと変身し、ジカンジャクローを使い圧倒的なスピードでアナザージオウを押し込む。

「くう……」

さっきの戦いの焼き直しの如く追い込まれるアナザージオウが、頭部の針を回し未来を見る。

「はああ!!?」

「今だ！」

アナザージオウはゲイツが突っ込んでくるところをタイミングを合わせ攻撃する。

「うわああああ!!?」

だがゲイツの攻撃の方が先に急所が決まり、衝撃で吹っ飛んだアナザージオウを変身解除させた。

それを見てゲイツは変身解除する。

「ジオウを倒すのは俺だ。お前は引っ込んでろ」

飛流にそう言うのと去っていくと、ゲイツリバイブの反動で今度は耳から出血の滴が出ている。

しかし、そんな事を気にせずゲイツは歩いていく。

「うわあああーっ！」

ゲイツに負けた悔しさと叫ぶ飛流だったが、そこへホールが現れた

「まだ、君の力じゃ足りないみたいだね」

「何だお前は？」

「スウォルトの仲間であるクライアス社の社員だ。と言つても、あいつが何を考えて、君にアナザージオウの力を与えたのかは知らないけど」

「俺は……俺は時見ソウゴを倒したいだけだ」

「でもこのままじゃ、君はジオウⅡにもゲイツリバイブにも敵わないだろうね」

「どうすればいい！教えてくれ」

飛流はどうすれば二人を倒せるのか問う。

「ゲイツの他に、もう一人未来のライダーがいる。そいつの力を奪えば……」

もう一人から来たライダー、白ウオズの仮面ライダーウオズの力を奪えば良いと話し、飛流にブランクウオッチを渡した。

ウールはしばらくすると、廃工場へとやってきた。

「これでいいの?」

「ああ」

そこには黒ウオズがおり、窓越しでウールは彼と会話を始める。

——それは、今から少し前の事。

黒ウオズがオーラに協力を断られた後、スウォルツに不信感を出し始めたウールは彼の頼みを受け入れていた。

『待てよ……いいよ、協力する。僕も知りたいんだ。僕らの過去や現在にほんとは何があるのか、この先の未来に何が待っているのか……』

『私に考えがある』

黒ウオズは自身の作戦の考えを伝え、ウールはそれに従い、飛流に会いに行った。

「でも上手くいくかな、こんな作戦」

「一か八かの掛けだ。だが……これしか道はない」

黒ウオズの作戦は、一か八かの作戦で成功するかどうかはわからないが、それが成功

すればゲイツを止めることができるかもしれない。彼はそう考えていた。

そんな事を知らないはな達は、ビューティーハリーに客が訪れ、ハリーの仕事にさあや・ほまれ・ルールーも手伝っていた。

はなははぐたんの面倒を見ており、彼女の元へ歩くはぐたんに、はな達だけで無く客達もメロメロになって癒されていた。

そんな中、えみるは立ち尽して周囲を見渡す。

「ほーら、さつきから何ガン飛ばしてんねん？」

「わ、私は、何か異常は無いかと……」

「そーね。君の目が異常に怖いわ」

「すみません……」

ハリーに注意されて照れ、顔を手で崩し表情を変える。

「ん、可愛い可愛い」

「恐縮です……」

そんな中、代金を支払おうとした女性客が声を上げた。

「どうしまし——」

「早く逃げてー！」

えみるが駆け足でその客の方へ向かい、持ってたバッグを手で払って宙に上げる。

「ルルー!」

「は、はい!」

ルルーが宙を浮かぶバッグを確保して着地。

「さあ来なさい! 怪しいカバン!」

「ちよつと……!」

プリハートを構えて叫ぶと、ほまれが手でプリハートを隠す。

「どうされました?」

「カバンの中に入れたハズの財布が無くって……」

「財布……?」

ルルーが熱感知システムを起動し、ポケットの中に財布らしき物があると確認。

「スカートのポケットにあるのでは?」

「えっ?」

女性客がルルーに言われてポケットを確認すると、財布が入ってた。

「あらやだ私ったら。ごめんなさいね」

女性客は照れ笑いを浮かべるが、えみるは勘違いした恥ずかしさの余り、その女性客よりも頬を赤くする。

「ドンマイ、えみる」

「ドンマイ」

「買い出し頼むわ。はぐたんのミルク、オムツ、エトセトラ」

「やはり私が騒ぎを起こしたから、お邪魔なのですね……」

ハリーが買い出しメモを励ましの言葉を掛けられていたえみるに差し出すと、彼女は自分がお邪魔だと思い落ち込む。

「ああ、ちやうがな」

それを見たハリーはそう言い、手招きする。

「これは町中のパトロールも兼ねてるんや」

「パトロール……ッ!?」

耳元でパトロールも兼ねてると伝え、これを聞いたえみるの表情が明るくなる。

「頼むで。プリキュア」

「了解です！行って来ます！」

ハリーのフォローのおかげで上機嫌にビューティーハリーを出て、買い物へ向かった。

「あの、私も……」

「うん。ここは任せて」

ルールーがえみるの後を追ってビューティーハリーから出る。

そこへ彼女と入れ代わるように、ソウゴが玄関前まで入ってきた。

「おっ！ソウゴ！」

「うん……」

ハリーに手を振り返しながら賑やかな店内を見てみると、ケータイから着信音が鳴り、ゲイツからのメールが入った事を確信した。

『決着を付けよう。はぐくみパーキングで待つ』

それを見て、ここに来る前にあつたクジゴジ堂での出来事を思い出した。

「ソウゴ君、どこ行くの？」

——その時、ビューティーハリーへ行く為にクジゴジ堂を出発しようとした際、叔父である順一郎に呼び止められていた。

「ああ……うん、ちよつと行かなきゃいけない所があつて」

彼は順一郎にそう言つて、場所も言わず出かけようとする。

「ああ……そうなんだ……」

いや、言うべきか言わないべきか分かんないけど。言うよ？」

「?……うん」

「ただ何か言いたいことがあるのかと思ひ、歩もうとしていた足を止める。」

「叔父さんね、ソウゴ君と一緒に暮らしてて、1つだけ後悔してることがあるんだ」

「後悔……？ 何？」

「叔父さん、ソウゴ君を叱ったこと一度もなかったよね」

「そういえば……」

「……確かに叔父さんは、自分がここに来てから一度も叱つてくれたことはなかった。」

「しかしそのことを、叔父さんはずっと後悔していたらしい。」

「ちゃんと叱つておくべきだったんだよ。自分の勇気の無さが情けない……」

「……」

「正直ね、ずっとどうすればいいか分からなかったんだ。」

「両親を亡くして一人残されたソウゴ君に、どう接していいのか。どこまで踏み込んで

いいのか……」

「……そうだったんだ」

「ソウゴはこの時、順一郎がずっと、両親が死んで一人残ってしまった自分の事を氣遣つてくれていたんだと知る。」

「——だが順一郎は順一郎で、彼の親じやない。ただの親戚でしかない自分では、ソウゴを見守る事しか出来ないと思つていた。」

だから、彼はずっと逃げていた。

優しく見守っているだけで、本当の意味で彼に寄り添って無かった。

下手に彼の心の領域に踏み込んで、親を失ったトラウマをぶり返させないだろうかという心配が。

お節介だと言われて、距離を取られないだろうかという不安が。

兄と義姉が精一杯に育てた子供が、自分のせいでグレたりして他人に迷惑をかけたかもしれないだろうかというありもしない妄想が、順一郎の頭に何度も過った。

始めて家に来た時も、両親を失って寂しそうに泣いていたソウゴに、知り合いの子を合わせたり、自分も優しく寄り添ったりしたから大丈夫だと。

それから彼が王様になりたいと言って、それが原因で友達が出来なくて寂しそうにしていた時も、さあやちゃんがいるから大丈夫だと。

最近は沢山友達が出来たから、もう心配することないだろうと。

そう樂觀視して、自分に言い聞かせていた節があった。

その為に、此処最近のソウゴが何処か間違った方向へ歩んでいく姿を目にしても、今日までずっと黙って見ていることしかできなかった。

「だけど……二人がいなくなった今こそ、勇気を出すチャンスかもしれない。

だから……叱らせてもらおうよ？」

——だが同居人であったゲイツとツクヨミが居なくなつた今、誰にも頼らずに何かを一人で抱え込んでいる甥に向け、順一郎が初めてソウゴを叱ろうとする。

「寂しいんだろう？ゲイツ君とツクヨミちゃんがなくなつて……」

寂しい時くらい、大丈夫なんて言わないで、ちゃんと寂しいって言いなさいっ！」

「……叔父さん」

「寂しい時に寂しいって言えない人間なんて、人の痛みの分からない王様になっちゃうぞ！」

それを聞いたソウゴは、思った。

ようやく、本当の意味で叔父との間にあつた壁が消えて、真の意味で順一郎と家族になれたのだと——

そしてあの日、ゲイツとツクヨミがクジゴジ堂から出て行つた時から狂っていた自分の歯車が、ようやく噛み合った様に感じた。

「フフ……ありがとう。行つてくる」

（みんな……これで最後かも……）

そのうち来るかもしれないと考えていたゲイツとの決着の前に、どうしてもみんなの顔が見たくてここへやって来ていたソウゴは、微笑みながら彼女達を見守っていた。

(さあや……オーディションおめでとう)

そして幼馴染に向け、静かに祝福の言葉を述べた。

ソウゴがビューティーハリーへ訪れていた頃、ルールーがえみるの後を追いかける。

「えみる」

「ルールー……!」

えみるを見つけたルールーが声を掛け、傍で足を止める。

「私も一緒に行きます」

「プリキュアとして、二人の初任務なのです!頑張りましょう!」

「はい」

「ああっ!」

道路沿いに出ると、老婆が車が近付いているのに歩道を渡ろうとしていたのを気付く。

「おばあちゃん!危ない!」

「えみる!」

プリハートを構えて走るえみるを、ルールーが肩を掴んで止める。

「ルールー?」

「赤です」

車の信号機は赤で、歩道の方は青だった。そのことを証明するように、近づいてきていた車は道路交通法を守って停止していた。

「ゆつくりでいいですよ」

「すみませんねえ」

ルールーが手を上げて並んで歩き、えみるはガックシと崩れ落ちた。

二人はハリリーに頼まれたHUGMANに到着し、買い物をする。

「えーっと、オムツとミルクと……」

「おしまいだー!!」

「オシマイダーですルールー!!」

「はい!!」

店員の言葉にえみるとルールーが反応する。

「えみる」

「ルールー、変身です!!」

声のした所まで近付き、えみるがプリハートを取り出す。

そこでは、サラダ油が安売りされていた。

「ええっ!!?」

先程の店員の「おしまいだ」と言うのは、サラダ油の安売りの宣伝だった。

えみるは突進して来る主婦達に巻き込まれそうになるが、間一髪でルーラーが助けた。

「大丈夫ですか？」

「は、はい……オシマイダーより強そうですね……！」

サラダ油を取り合う主婦達を見て、彼女は全身を恐怖でガクガク震わせた。

二人が買物物を終えて公園に移ると、屋根のあるコンクリートベンチに座りギターを弾き始める。

「今日のギター、随分と暗いですね」

「ギターの音色は、心を表すのです……」

「心……」

えみるの弾くギター音が暗い事に気付いて、それを伝えると彼女はギターの音は今の自分の心と同じだと答える。

「どうして、心が暗いのです？」

「私の夢は……プリキュアになる事でした。」

だから……夢を叶えた私は、夢に向かって頑張ってる先輩達の分まで、プリキュアとして頑張ろうって思ったのです」

「素敵です」

ルーラーは素敵だと褒めるが、えみるはギターをベンチに置き、この場から走り去ってしまおう。

「えみる！」

「来ないで下ささい！」

小さな背中を更に小さくして立ち去るえみるを、ただ立ち尽して見るしか出来なかった。

「ただいま戻りました」

「お帰り」

えみるのギターが入ったバッグを背負い、頼まれてた物を持ったルーラーがビューティーハリーに戻る。

「あれ？えみるちゃんは？」

「それが……」

店内にいたはなとさあやとソウゴから姿が見えないえみると何があったのかと聞かれ、事情を話す。

「俺、えみるちゃんのとこ見てくるよ」

ビューティーハリーを出てえみるの元へと向かったソウゴを見届け、レジ近くのソファに座りなおしてルールーの話を思い出しながら会話を続けようとする。

「そっか、えみるが……」

「張り切ってた分、自分が不甲斐無く思えちゃったのね」

「私は、えみると一緒にプリキュアになった事が嬉しかった。なのに……」

「大丈夫。えみるもすぐに頭冷えるって」

「私は、混乱して、悲しくて、えみるに少し、怒りを覚えました」

「ルールー……」

「何故でしょう? えみるは敵では無い。私の親友のハズなのに……」

えみるの事を考えると、悲しいのに怒りが……」

わからない感情に悩まされるルールーを、二人は薄く微笑みながらも真剣な顔で耳を傾ける。

「でも戦いたいとか、そう言う事では無いんです。」

私は、えみるの敵になってしまったのでしょうか?」

「逆だよ」

「えっ?」

はなの一言に、ルールーは思わず聞き返してしまった。

「ルールはね、えみるの事だーい好きなんだよ」

「だからこそ、腹も立ってるんだよ」

「分かりません」

「だって、えみるの事考えてたでしょ？ずっと」

「その怒りはルールの、えみるちゃんへの心が溢れ出ている証拠だよ」

「えみるへの……心が……」

それを聞いた彼女は胸元に手を当てて握り締める。

一方えみるは、公園の遊具の中で体育座りしていた。

「おい」

そこへえみるを探しに向かったソウゴが遊具の中を覗き見し、誰が来たのかと顔を上げる彼女を発見した。

「あー、やっと見つけた。ねええみるちゃん、言いたくないなら言わなくてもいいんだけど……ルールとなにかあったの？」

ソウゴは一息つきながら声を掛けると、えみるは近くの手すりに腰を置く。

「ルールに……八つ当たりしてしまいました。」

私には……プリキュアの資格が無いのです」

ルーラーに八つ当たりした事を話し、やっぱり自分にはプリキュアは向いていないのだと、罪悪感で顔を深くうずめる。

「資格か……」

「やっぱり……やっぱり、プリキュアには、ルーラーひとりかなるべきだったのです。」

私は……ルーラーのお陰でプリキュアになったようなものなのです……」

八つ当たりした事、ルーラーを傷つけた事を酷く後悔していたえみるに、ソウゴは彼女の近くに腰を下ろして、少し考えながら話し掛ける。

「嬉しかった?」

「えっ……?」

「自分がプリキュアになれた事と、ルーラーと二人一緒にプリキュアになれた事」

「それは……」

自分がプリキュアになれた事と、ルーラーとプリキュアになれた事のどっちが嬉しかったかを尋ねる。

「俺もさ……一度資格がないと思ったんだ。王様になる資格が、ね……」

それは、2068年で見えた未来の自分——オーマジオウの事だった。

「それは、オーマジオウの事ですか?」

「聞いたんだ」

「はな先輩達から教えて貰いました」

「えみるは既に、はな達からソウゴが未来で最低最悪の魔王・オーマジオウになると聞かされていた。」

「オーマジオウを見た時は、本当にもう王様になるのをやめようと思ったさ。でも……」
始めてオーマジオウの話を聞いたソウゴは、自分はそんなものにはならないと、根拠のない自信に満ち溢れていた。

しかし、いざオーマジオウ本人に会った瞬間、そんな根拠のない自信は余りにも呆気なく砕け散った。

ずっと信じ続けていた夢が、最高最善の王になるという夢が霧の様に消え去り、流石にあの時は王になる事を挫折しかけた。

だがソウゴは、今も最高最善の魔王を目指している。

それはなぜかと言う疑問に答えるために、その時の事を思い出す。

「さあやとゲイツの言葉がもう一度、自分を信じる力をくれた事を——もう一度自分の未来の可能性を信じる事を選ばせてくれた時の事を。」

「……それでも、なりたいですか？」

「うん。でも、なるのは最低最悪じゃない。最高最善の魔王になる。」

その上でもう一度聞かせて。自分がプリキュアになれた事と、ルールとプリキュア

「なれた事、どっちが嬉しかった？」

「……一緒に……なれた事です」

話を聞いたえみるは自分の気持ちを素直に話し、それを聞いてソウゴは口角を上げて安堵の表情となる。

「きつとルールも、そう思ってるよ」

「時見先輩……」

その話をしていると、買い物に出かけていたハリーとはぐたんを抱えたほまれが現れた。

「ハリー……ほまれ」

「ごめんね、盗み聞きしてるみたいになっちゃって。でも……」

「あの時あんさん、プリハートをルールに渡そうとしたやろ？」

あの心は、プリキュアそのものや」

ハリーがルールに渡そうとした行動は、プリキュアそのものだと話す。

「あんさんには十分プリキュアの資格がある。俺はそう思うで」

「ネズミさん……!」

「誰がネズミや! ハリハム・ハリーさんや!」

えみるからネズミと呼ばれた事にハリーが怒鳴る。

「ま、おきばりやつしや。キュアマシエリ」

そう言つて手を差し伸べられたえみるは手を掴み、ハリーが遊具の外へと引つ張つて立ち上がらせる。

「えみるー！きゅあましえー！」

「はぐたん、ありがとうなのです」

「はぐたん、最近凄いいね。よく喋るし、歩くようになったね」

「日に日に成長してゐるって感じ」

「せやな」

成長を感じる二人だが、ハリーは何か暗い表情に変わった。

(けど、ミライクリスタルが八個集まったのに、元の姿に……)

はぐたんを見ながら表情を変え、心の中で呟いた。

今から遡る事、2009年4月24日……

ソウゴ一家、飛流一家の乗るバスにツクヨミが乗り込んでいた。

「このバスで何か起こるはず……一体何が……？」

「出発します」

一見、何が起こるのか様子が見られない。

その間、運転手が出発すると乗客へ伝え、バスは発進した。

「……何も起きない」

ソウゴと飛流を監視しながらツクヨミは見ていたが、事故が起こる様子はなく。それどころか、みんな到着を楽しみにしていた。

そこへ帽子を被った黒ずくめの男が走るバスの前に現れ、バスは停止しようとする。

すると、急には止まらない筈のバスが、男が時間を止めた為か、急停止したように止まった。

そしてその男は、一瞬間の間にバスに乗り込んできた。

「私の招待に応じて、よくぞ来てくれた。王の候補者達」

それは、黒い服を着ていたクライアス社のスウォルツだった。

「スウォルツ……い何で？」

何故、ここにスウォルツが現れたのかとツクヨミが戸惑う。

スウォルツはそのまま後ろの席へと座る。

「時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者。」

お前達2000年代の生まれの子供達の中に、その資格を持つ物がいる」

スウォルツの力により再びバスが動き出す。只ならぬ雰囲気を感じた運転手はブレーキを踏むが、まったく効かない。

「死を賭けた試練を受けてもらおう」

蛇行するバスを運転手はハンドルを握り、まっすぐ走らせようとしてブレーキを踏むが、制御不能でエンジンを更に吹かせる。

「何なんだ、あんたは！」

「うちの子に何を——」

子供達の保護者、中にはソウゴと飛流の父親も、スウォルツを止めようとする。

「お前達の意見は求めん」

だが彼は手をかざすと力を放ってソウゴの父親らを吹っ飛ばすと、子供達以外、保護者全員が動けなくなる。

「っ!!??」

「お前何をしたんだよ!!?? おい!!??」

ソウゴが遅しく歯向かう。しかし、スウォルツはソウゴの胸倉をつかみ立ち上がる。

「離しなさい!」

ツクヨミが椅子から立ち、ファイズフォンXを構え。ソウゴを助けようとスウォルツに発砲した。

「ふん」

スウォルツはそれを帽子ではじいて、その流れ弾が飛流の近くで被弾し爆発した。

「この時代で何をしようとしているの!?!?」

「お前、時間を移動してきた介入者だな?だが邪魔はさせん!」

スウォルツはさつき放った同じ力で彼女に手を向けると、ツクヨミが吹っ飛ばされる。

「ふん」

今度は子供達だけ光の球の中へ攫い、バス後部を破壊してそこから飛び出て子供達と共に消えていった。

一方、ツクヨミはバスを止めようと運転手の元へと走る。

「危ないっ!」

トンネル内に入りぶつかりそうになったその時、運転手とツクヨミはバスが爆破する直前にオーロラカーテンを通り、姿が消えた。

一方、目覚めたソウゴ達が顔を上げると、フェンスのある道路上にいた。

その時ソウゴらが見たのは、ダイヤモンドが街を破壊する光景だった。

「ソウゴ……ダイヤモンド!」

カーテンを潜り、運転手と共に来たツクヨミがダイヤモンドを見て、ツクヨミはここが未来だと察した。

街を破壊するダイヤモンドの姿を幼いソウゴは、その光景を目に焼き付けられていた。

現代、2018年。

「ううう……!!?」

白ウオズの背後から、アナザー鎧武とアナザーゴーストが襲い掛かってきた

「何のようだ!」

問いに答えず、アナザーライダー達は白ウオズに攻撃する。

『ウオズ! アクシオン!』

ビヨンドライダーを装着した白ウオズがウオズのウオッチを起動させ、ドライバーに装填した。

「変身!」

『フューチャータイム! スゴイ! ジダイ! ミライ! 仮面ライダーウオズ! ウオズ!』

『ジカンデスピア! ヤリスギ!』

仮面ライダーウオズへと変身した白ウオズはアナザーライダーに向かって応戦。ジカンデスピアを駆使し、二体を圧倒していく。

「はああああ!」

攻め込もうとするウオズに一瞬の隙を突いて、背後から飛流が現れた。

「もらうぞ。貴様の力」

「何だと……………」

飛流の持つブランクウオツチへウオズの力が吸収されていく。

「な…………ツ!?」

ウオツチに仮面ライダーウオズの力が吸収され、力を奪われた白ウオズが変身解除してしまう。

「何故だ……………」

「仮面ライダーウオズの力は…………もらったよ!」

「少年……………」

そこへウルも現れ、彼を見た白ウオズは彼の所為だと睨む。

「いいザマだ。力を失った君をいたぶってあげる」

アナザーライダーも起き上がり、白ウオズもここまでと思われる。

「させるか!」

——仮面ライダーウオズの力、ウオズの元へ戻った」

だが白ウオズはすぐさま自身の持つ未来ノートを開き、その内容を書き込む。

その時、飛流も持つウオツチから仮面ライダーウオズの力が飛び出して、白ウオズの

方へ向かう。

「はあ!!」

「ッ!?!」

白ウオズが手にしようとした瞬間、黒ウオズが現れ、白ウオズに戻る筈のウオツチを奪い取る。

「仮面ライダーウオズの力、確かにウオズの元に来た」

「何故、君が……!」

「ウオズが君一人だと思うな」

そう、これが黒ウオズの作戦だった。力を奪われたなら、必ず未来ノートで力を取り戻すと踏んで。しかし『白ウオズの元へと』と書かれるかが賭けだった。

だが、その賭けは見事成功した。

「うわあああああーっ!」

悔しさで叫ぶ白ウオズ。顔を上げると既に黒ウオズやウールらは撤退していた。

さつきまでえみると一緒に居た公園へ戻ったルールーが、コンクリートのベンチの上でえみるのギターを弾いて歌う。

慣れない演奏に苦戦していると、左から足音が聞こえ、首を横へ動かすとえみるが

立っていた。

「えみる……」

「下手ですね」

「ギターは心を表すんです」

言葉をお互いしながら二人でベンチに座り、『キミとともだち』を歌い、互いの顔を見て微笑んだ。

その直後、清掃員オシマイダーが現れ、ホウキを振るって公園を荒らし始めた。

「あれは……!」

「ルールー!」

「はい!」

オシマイダーを見た二人はプリハートを構えた。

「ミライクリスタル! ハート、キラっと! はるぎゆく!」

ミライクリスタルとプリハートをセットし、手順を取ると二人の姿が変わる。

「輝く未来を、抱き締めて! みんな大好き! 愛のプリキュア!」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

オシマイダーがマシエリとアムールに気付き、二人が跳ぶ。

「ふんっ！」

ダブルパンチを繰り出し、オシマイダーを吹き飛ばす。

「はあっ！」

オシマイダーが地面を跳ねてからマシエリが跳び、カカト落としを叩き込む。

その時生じた土煙の中をアムールが走り、土煙に映った影に気付いたオシマイダーがホウキを振り下ろす。

「えいっ！」

それに対してマシエリがホウキを抑え、アムールがパンチを繰り出して吹き飛ばす。

「やられてんじゃないわよ……！」

「早くもピンチ？」

劣勢に陥るオシマイダーに不満げなパップルの元にジエロスが現れる。

「アンタ……！」

「先輩の仕事ぶり見学に来ました。でも苦戦中かしら？」

「まだ……これからよ！」

煽られたパップルが扇子を振ると同時にトゲパワワが放たれ、オシマイダーがそれを吸収してパワーアップする。

「うわあっ！」

左手を振って平手打ちを繰り返して出し、マシエリとアムールを吹き飛ばす。

その時、アムールがえみるのギターに気付いて安全な所へ移動させようと手を伸ばすも、オシマイダーが彼女に向けてホウキを振り下ろす。

「アムール！」

マシエリがアムールを抱えて跳び、ホウキからの攻撃を何とか避ける。

だが代わりにギターに命中し、ネック部分を真っ二つにして壊れてしまった。

「ああっ……っ！」

「いいわよ！終わりにしちゃって！」

そう言うってからジエロスの方を向くが、無反応だった。

ここで、二人から連絡を受けていたソウゴ達が駆け付ける。

「おっ！」

「あれがキュアマシエリとキュアマムール……っ！」

「私達も負けてられないね！」

「行くよ！」

「ええ！」

「うん！」

マシエリとアムールが戦っているのを見て、ソウゴがジクウドライバーを、はなとさ

あや、ほまれはプリハートを構える。

『ジオウ！Ⅱ！』

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

ジオウライドウオッチⅡをジクウドライバーに差し込み。三人はミライクリスタルをプリハートにセットし、姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

「輝く未来をく抱きしめて！！みんなを応援♪元気のプリキュア！キュアエール！」

「輝く未来を抱きしめて！みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「やあっ！」

変身を完了させたエール・アンジュ・エトワールのトリプルキックが命中する。

「たあっ！」

そこへマシエリとアムールがダブルキックを叩き込み、上空へ吹き飛ばす。

「はっ！」

その次にジオウがオシマイダーの真下に移動し、ジカンギレードとサイキョーギレードで足を攻撃しバランスを崩した。

「マシエリ!アムール!」

「はい!」

「アークレディ!」

「行きます!」

「フレフレ!ハート・ソング!」

「フレフレ!ハート・ダンス!」

マシエリとアムールがプリハートのハート部分をタッチして手を画面にかざし、プリハートから赤と紫のハート型エネルギーを敵にぶつけて浄化するハート・ソングとハート・ダンスを放ち、オシマイダーの動きを封じる。

「皆さん!」

「うん!」

「ミライクリスタル!」

「エールタクト!」

「アンジュハープ!」

「エトワールフルート!」

三人がメロディーソードのボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出す。

「心のトゲトゲ、飛んで行け!プリキュア!トリニティ・コンサート!」

対象に向かって虹色のエネルギーを飛ばすトリニティ・コンサートを放ち、命中した。
「HUGっとプリキュア！エール・フォー・ユー！」

巨大な木が作り出されてピンク・水色・黄色の花が咲き誇り、オシマイダーが浄化された。

「参考になりましたわ、先輩。シーユー」

ジエロスが歩きながら手を振ってこの場を後にし、パップルは悔しさを噛み締めて扇子を握り潰した。

「私の……私のせいで、えみるの大切なギターが……」

アムールが壊れたえみるのギターを持って、申し訳無い表情を浮かべる。

「いいのです。アムールを守れたのですから、気にしないのです」

「エエ話や……！」

「茶化さない」

「ちやーさない」

ハリーが感動してそう言うと、エトワールとはぐたんから茶化さないと注意される。

「先輩！」

「はい？」

「もうギターはありません。でも、私達にメロディソードがあれば、またピンチの時にア

ムールを守れます！

えいえいつ！やあつ！とにかくください！」

メロディソードを求めるマシエリが、エールに向けて両腕を伸ばす。

「いや、でもあれ私達のだし……」

「ハリー……」

「急に言われても困るがな！」

「は〜ぎゅ〜！」

困ったハリーを見たはぐたんが、両腕を伸ばして叫ぶ。

するとはぐたんの全身が光り、ピンク色の光が上空に向けて放たれる。

はぐたんの力でギターが直るのかと思いきや、上空から光のゲートが現れ、そこから

二人の人影が落下する。

「うわああああああ!!?」

二人が悲鳴を上げて落ちるが、着地すると同時に土煙が起こる。

「ハハハ……どハハハ」

土煙が晴れてから、黒い服装の少女と白い服装の少女の二人が膝を伸ばした。

それは、初代プリキュアのキュアブラック、キュアホワイトだった。

ブラックがここはどこかと言って首を傾げる。

「あなたは……誰？」

エールもブラックを見て首を傾げる。

「どこ〜!?？」

「誰〜!?？」

「もしや……メロディソードを授けに来てくれた、天の使いですね!?？」

ブラックとホワイトを天の使いと勘違いしたマシエリが目を輝かせ、二人に顔を近づける。

「ください」

そう言い、両腕を伸ばして両手を広げる。

「てゆうか……どこどこなの〜!?？」

「まあまあ。落ち着いて」

「これが落ち着いてられますか!」

ホワイトが宥めるが、エール・マシエリ・ブラックがホワイトに顔を近づけて叫ぶ。

「あれ!?？」

「どうしたの?」

「ソウゴ（君）がいない!」

エール達がブラックとホワイトに気を取られている間に、ジオウに変身していたソウ

ゴがいなくなっていた事に気付き、エールとアンジュが叫ぶ。

「ゲイツ……待ってる!」

黙って離れたソウゴは一人、ライドストライカーを走らせ、ゲイツと交わした約束の場所へと向かう。

一方のゲイツも約束の場所へと向かう。ソウゴを呼び出した、あの場所へと――

「またお前か……黒ウオズ」

そこへ、黒ウオズが現れた。

「言っただよ。君と我が魔王を戦わせるわけにはいかないかね」

「俺も言っただよ。俺がお前に勝てなかったのは、過去の話だとな」

ゲイツリバイブウオッチを取り出し、起動スイッチを押す。

『ゲイツリバイブ!疾風!』

既に装着されたジクウドライバーにゲイツリバイブウオッチを装填する。

「変身」

『ライダータイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!疾風

! 疾風!』

ドライバーを回し、ゲイツリバイブ疾風となりジカンジャクローを構える。
だがウオズは慌てた様子を見せず、ドライバーを腰に装着する。

『ビヨンドドライバー！』

「何？？」

ゲイツは白ウオズが持っている筈のビヨンドドライバーを見て、一瞬だけ驚く。

『ウオズ！』

ビヨンドドライバーを装着した黒ウオズがミライドウオッチを起動させ、ドライバーに
装填した。

『アクシオン！』

腕を掲げる黒ウオズの後ろから逢魔降臨曆が映し出されたスマートウオッチのエ
フェクトが現れ、右腕を大きく一周させると右手でビヨンドドライバーのハンドルを前に
向け、構える。

「変身！」

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ
！』

そして黒ウオズは、白ウオズが変身する仮面ライダーウオズとなり、腕のホルダーに
は三つのミライドウオッチを付けていた。

「祝え！過去と未来を読み解き、正しき歴史を導く預言者！

その名も仮面ライダーウオズ！新たな歴史の1ページである！」

自身がライダーになっても尚、相変わらず祝いの言葉を放った。

「行くぞ！ゲイツ君！」

そのまま、仮面ライダーウオズとなった黒ウオズがゲイツリバイブを止める為、戦闘に入る。

次回！Re・HUGつとジオウ！

第28話 みんなで目指すゴール!!? 2018

第28話　みんなが目指すゴール!!?　2018

過去に飛んだツクヨミは事件の日。そこでスウォルツによりソウゴ等の子供達が狙われた事を知り、更に未来の世界へ連れて行かれてダイマジンに荒らされている姿を見せられる。

「さあ、王の候補者たちよ。生き残れ……」

瓦礫が崩れ落ち、それによって我に帰った幼いソウゴらは悲鳴を上げ、逃げ惑う。

「ソウゴ!」

ツクヨミは助けに行こうとするが、瓦礫に行く手を阻まれ、その場から移動できずにいた。

すると、まだ気絶したままの幼い飛流の上に瓦礫が落ちて来るのが見えた。

「危ない!」

同じ頃、ツクヨミと同じ光景を見ていたソウゴがとつさに叫ぶと、頭から『アブナイ』の文字が実体化した。それに連動したのか、時が止まったように瓦礫が静止した。

それに気付いたのか、ダイマジンがソウゴに手を伸ばしてきた。

「うっ
!!?」

ソウゴは強く視線を向けると、彼からオーラが放たれた。それを受けたダイヤモンドは塵となり、崩れ落ちていく。

「——現れたか」

その力を見たスウォルツがソウゴに近寄って来る。

「少年よ。お前は生まれながらの王。お前には王となり、世界を破滅から救う使命がある」

ツクヨミの耳に微かに届いたその言葉は、かつてソウゴの夢に出てきた男が言ったという台詞と同じだった。

「お前……名前は？」

「時見……ソウゴ」

「そうか」

スウォルツはソウゴの額に手をかざし何かを注ぎ始め、それが終わるとスウォルツが消えていった。

「何あれ……?」

「……」

すると止まっていた時間が動きだし、瓦礫が倒れている飛流に向かって落ちるのを、ソウゴが体を張り守る。

「ソウゴツ！」

落ちる瓦礫を見て叫ぶと、ツクヨミはまた運転手と共にオーロラのカーテンに潜り、その場から消えてしまった。

現代、2018年。

黒ウオズが仮面ライダーウオズとなり、ゲイツを止めるため戦っていた。

「黒ウオズ。貴様が変身しようと俺のスピードには敵わない」

「これならどうかな」

『シノビ！』

シノビミライドウオツチを起動させ、ウオズはドライバーのウオズミライドウオツチと切り替えた。

『アクシヨン！投影！フューチャータイム！誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャーリングシノビ！シノビ！』

フューチャーリングシノビとなったウオズは巧みな忍法を使い、出たり消えたり繰り返してゲイツを攪乱する。

「無駄だ」

だが、ゲイツリバイブ疾風の前にはシノビのスピードは通用せず、スピードもゲイツ

リバイブの方が圧倒的だった。

『パワードタイムーリ・バ・イ・ブ 剛烈!』

ウオズの攻撃が終わり、油断している隙にゲイツが剛烈へと変わる。

『のこ切斬!』

剛烈となったジカンジャクローでウオズを吹き飛ばし、ウオズを強制変身解除させた。

「あつ!??.....あああ.....」

倒れた黒ウオズを見て、ゲイツは変身解除した。

「言ったはずだ。俺がジオウを倒す。お前に俺を止めることはできない.....」

「.....そうかな」

「.....ツ!??」

するとゲイツは両目から血を出し、膝をつく。

「私は言ったはずだよ。ゲイツリバイブの力にはリスクが有ると。戦えば戦うほど、身体にダメージが重なっていく。今の君に、我が魔王と戦う力が残っているかな?」

「時間稼ぎがお前の狙いか.....!」

「体力の回復を勧めるよ。君の健康のためにもね」

もしゲイツが少しずつ、ゲイツリバイブの負荷をならしていったのなら話は違ったか

もしれないが、慣れていない段階でジオウⅡ、アナザージオウ、ウオズという強敵と戦ってきた事で、彼の体には大きな負担がかかっていた。

そして、連続でゲイツリバイブの力を使い続けた彼に向かって黒ウオズが休むように助言する。

だが、ふら付きながらも決闘の場所へ向かうために歩き出す。

「ゲイツ君！」

「約束したんだ。決着をつける……！ 奴との約束を破るわけにはいかない！」

黒ウオズの静止も聞かず、己の身体が疲労と溜まった負荷でフラフラになりながらも、ゲイツはただひたすら歩き続ける。

ゲイツと黒ウオズが戦いを終えた一方、ビューティーハリーには突如して現れたプリキュアの二人を連れてきた。

「自己紹介がまだだったね。あたしは美墨なぎさ。キュアブラックだよ」

「キュアホワイトの雪城ほのかよ。よろしくね」

「メツプルメポ」

「ミツプルミポ」

二人と二匹の妖精が自己紹介すると、はなが二匹の妖精を見る。

「へえ、これが二人の妖精さんですか?」

「前に会ったいちちゃんやみらいちゃんのとまた違うね」

「そもそも、プリキュアっていっぱい会ってきたけど、まだいるの?」

「うん。多分まだいると思うよ」

「私達も正確に何人いるか分からなくて」

二人の話では、まだはな達が会っていないプリキュアがいるみたいだ。そう考える達は察した。

「それで、みんなの言うソウゴ君とゲイツ君って子が仮面ライダーなの?」

「はい」

「へえ。晴夜君や龍牙君以外に、私達と同じ歳で仮面ライダーの子がいるなんて」

「やっぱり、晴夜君達の事知ってるんですね」

前にウソバーツカとの事件で会った桐ヶ谷晴夜と上城龍牙の名が出て、会ったことがあるかと聞く。

「うん。前に何度か晴夜君と龍牙君には助けて貰ったから」

「どうやら、二人も彼らに会ったことがあるようだ。」

「それよりも、ソウゴ君。どこに行ったんだろ」

「もしかして、二人で決着を着けるんじゃない?」

「だったら、早く止めなくちゃ！」

はな達が急いでソウゴとゲイツを止めようと話し合う。

「そもそも、白ウオズが来てからなんだか、二人の間に壁ができた感じがするよね」

ほまれが言うとは、確かに白ウオズが現れたあの日から、ソウゴとゲイツの間には敵という壁が現れ始めていたことを思い出す。

その頃、えみるが壊れた部分をガムテープで補強したギターの弦を弾くが、矢張り音は出なかった。

「もう音が出せないのですね……私のせいで……すみません」

ギターが壊れたのは自分のせいと思い、ルールーがえみるに謝る。

「ルールーが無事なら良いのです。全然、平気なのです」

「大切なギターが壊れたのに……」

「もう終わった事ですから」

「……壊れたから終わりなのですか？」

えみるの眩きに対してルールーは、目の前に座っている彼女にギターが壊れたら終わりなのだと尋ねる。

「ギターを諦めなくて良かったと喜んでいたのも、えみるでは無かったですか？」

ルーラーの言葉に、えみるは表情を暗くする。

「理解不能です。私にも分かるように説明を——」

「ルーラーには言いたく無いのです！」

腹の底から声を発したかのような言葉に今度はルーラーが表情を暗くし、えみるがハッと気付く。

「そこまでや」

二人の間に気まずい雰囲気が始めたところでハリーが仲裁に入る。すると、はぐたんの目が涙目になっているのが見えた。

「はぐたん、そろそろオムツ替えとこか」

「おむつ……」

「ああ、私がやるのです！はぐたん、行きましよう！」

えみるがはぐたんを抱え、この場から離れるようにしてはぐたんのオムツの取り替えに向かった。

「何故えみるは嘘をつくのでしょう……」

「優しい嘘じゃないかな」

「優しい嘘……?」

明らかに嘘だと分かるような発言に疑問を抱くルーラーに、ハリーと一緒に入って来

たほまれがそう言うのと、続けてさあやも口を開く。

「ルーラーが気にしないように、平気だって言ってるんだよ」

「でも、気になります」

「だよね」

「私は、どうすれば……」

「難しい事だとは思うけど——大事なのは、あなたがどうしたいかって事だと思うの」

「私が……」

えみるとの接し方に悩むルーラーに、ほのかがアドバイスをする。

「何これ……」

すると、なぎさがテーブルの下に何か紙が落ちていたのを見つけた。

『みんなへ、

俺はゲイツと決着を付ける。

……って、思ってたけど、本当はゲイツともう一度会って話がしたいだけなんだ……友達としてかな？

みんなには迷惑はかけないから安心して。』

手に取って広げて見たそれは、ソウゴがはな達に向けて残した手紙だった。

「ソウゴ君……」

「どうして、ソウゴはゲイツと戦わなければならないの……」

ルーラーはソウゴとゲイツが何故戦うのかわからなかったが、そんな彼女になぎさとほのかが口を開く。

「ソウゴ君はきつと、ゲイツ君の事を友達だと感じてからだと思うの」

「友達……」

「ソウゴ君とゲイツ君は、二人だけで解決したいじゃないのかな？」

「なら、二人を信じよう」

二人を信じようと言うなぎさの言葉にルーラーは不安があるが、はな達は信じられる気がした。

その頃、えみるが部屋ではぐたんのオムツを取り替える。

「すつきりしましたか？」

はぐたんのオムツを替え終えたえみるがはぐたんを持ち上げる。

「えみりゅ、よちよち」

えみるの顔を見たはぐたんが、えみるの額を撫でるようにして触れる。

「平気なのです……」

平気でない、ルーラーを傷付けてしまうのです」

はぐたんの優しさに涙が溜まるが、我慢して微笑んで伝える。

「本当にそれでいいの？」

そこへなぎさが入って、本当にそれでいいのかと尋ねる。

「無理し過ぎて無い？」

「ルールは親友なのです。」

傷付けたく無いし、喧嘩したく無いので……」

「喧嘩したっていいじゃん」

「えっ?」

なぎさは二人の傍に近寄ってしゃがみ、喧嘩したっていいと伝える。

「たまにはぶつかって、怒ったり泣いたりするのもアリだと思うよ」

そういう彼女の脳裏には、時に激しく言い合い、時に涙を流し、それでも尚壊れることとの無かった、ほのかとの友情物語が浮かんだ。

「もつと自分に正直になっても、いいんじゃないかな。本音をぶつちやけられるって、親友だからこそでしょ?」

「しんゆうー!」

「……」

なぎさの言葉を聞いた後、えみるははな達のいる所に移動し、何かを作り出した。

「ルーラーにプレゼントしたいのです」

「いいじゃん！」

えみるがルーラーに送る為のブレスレットを作りながら、向かいに座るはなに伝える。

「オススメのプレゼント雑貨、色々あるで！」

「ありがとうございます。でも、手作りがいいんです。

ずっと思ってたのです。お揃いでいいなあって。みんなと同じように、私とルーラーも」

プレゼントを贈りたいと言うえみるだが、それはルーラーも同じだった。

さあやの部屋で、ルーラーが鉄板を指で溶断する。

「壊れた物は、元通りにはなりません。でも、何とかこの手で、えみるのギターを」

どうやら彼女はえみるの為に新しいギターを作って送る事を決めたらしく、ギター設計はほのかとさあやが担当してくれた。

「こうしていると、ルーラーさんがアンドロイドって事、つい忘れてしまう。私も、科学についてもっともっと勉強しなきゃ」

ほのかが指から火花が散っている様子を遠目にそう眩きながら、えみるとルールーの為に新しいギターを設計する。

「素敵なギターを作りましょう」

「えみるちゃんに驚くようなギターを」

「ありがとうございます。実は、もう一つお願いが——」

ルールーが手伝ってくれている二人に、もう一つお願いがあると言う。

その頃、過川飛流は通学途中の高校生を捕まえていた。

『オーズ……！』

そしてアナザーオーズウォッチを埋め込み、アナザーオーズを誕生させる。

彼は既に数体もの人間をアナザーライダーへと変えているのか、周りにはアナザーライダーが何体か居た。

「協力してくれたお返しだ。早く、君の軍団を作ろう」

ウールはさらにアナザーライダーのウォッチを飛流へと渡した。

「時見ソウゴは、俺が消す」

ソウゴを消すと言い、飛流はウールからウォッチを貰い去っていく。

飛流が去ると、ウールがふと空を見上げる。

「レグルスが……」

今は昼の空で、本来なら太陽の光で星なんか輝いていない筈なのだが、そこにひとつだけ太陽の輝きにも勝る位に星の輝きが増していた事に気付いた。

その時、背後から近づいた白ウオズがウールを転がし、背中を踏みつける。

「ああああ……ツ!!？」

「一杯食わしてくれたね……少年。誰と通じてる？ 差し詰め、黒いほうの私というところか」

黒い自分にしてやられた事を忌々しく思い出しながら白ウオズはそう言うのと、彼を踏みつける足に力を入れる。

「で、黒いほうは何を企んでいるんだい？」

白ウオズが体を反対に変えて彼の顔に蹴りを入れると、ウールは鼻を蹴られたのかおもわず手で抑える。

「ふうん！」

「あああ!!？」

苛つきを紛らわす様に、さらにウールの腹を白ウオズは踏みつける。

「知るもんか！ オーマの日とかいう日に、王様が決まるんじゃないのかよ！

なんで、ジオウとゲイツの決戦とかいう話になるんだ！ お前も、スウォルツも、リス

トルも何を考えているんだ……!?？」

「……所詮、君はスウォルツ氏やリストル氏の使い走りということか」

戸惑いの色を見せながらそう叫ぶと、白ウオズはウールから足を退かす。

「……ま、今更、君達が何をしても問題ない。」

ゲイツリバイブが魔王を倒す。

魔王がゲイツリバイブを倒す。

あるいは、アナザージオウが両方を倒す。

どう転んでも、私達の計画に支障はない」

支障はないと言うと、白ウオズはウールから去っていく。

「『私達』って……どういう事だよ?」

ウールは白ウオズの発言から、彼と自分の知らない誰かがグルだと思い込む。

クライアス社の中で、既に後の無いパップルが、ある部屋の前で立ち止まる。

「私には……あの人がいる……!」

ドアの隙間から部屋を見ると、奥にあるベッドの傍で立つ一人の男性の人影が見えた。

その人影を見たパップルが中に入る。

「The Crane of Gratitude.」

「……!」

その時、ベッドのカーテンの向こうで声が聞こえた。

「決して覗かないで下さいね。娘はそう言つて機織りを始めました」

今度は、女性の声が聞こえる。

「しかし、お婆さんは戸の隙間から——」

パップルはベッドのカーテンを勢いよく動かすと、ベッドの上にはジェロスが座つていた。

「あら、見ちゃつたのね」

「何でアンタがここに……っ!」

「ホワイ? 何でだと思ふ?」

彼女が向いた方にあつた窓のすぐ傍で、先程の人影の男性が外を見ていた。

それを見たパップルは何があつたのか察し、悲しい表情で部屋を駆け足で出て行つた。

二眼レフのトイカメラで破壊されたビルを写真に収めるバスの運転手の近くで、気を失っていたツクヨミが目を覚ます。

「気がついたか……」

「あなたは？」

「門矢士だ」

「……仮面ライダーディケイド」

バスの運転手が門矢士と聞き、仮面ライダーディケイドだと思い出したツクヨミは警戒する。

しかし、士は気にする様子を見せずに、今まで彼女が見てきた出来事を要約するようにつらつらと語りだす。

「見ただろ。あれがお前たちが追っていた魔王の誕生した瞬間だ。

ソウゴの両親が亡くなった事故は、スウォルツが仕組んだ。

この未来に連れてきて、王になる素質のある子供を選ぶテストをするために。

そのテストに合格したのが、あの常磐——いや……時見ソウゴだったというわけだ」

さっきの文字を具現化させたり、ダイヤモンドを塵の様にして消した、あの不思議な力。

あれを使ったソウゴを見て、スウォルツは幼い頃のソウゴに近づいたんだと再確認で

きた。

「さっき、スウォルツは何をしたの？まるで何か、力を注いだような……」

それにもしかして、ソウゴの両親の事件にはクライアス社が関係しての？」

「……………わからん」

士はソウゴについて心当たりがあるのか無いのか聞かれ、一瞬黙り込むと、すぐにわからんと答える。

「ソウゴ達は……………」

「スウォルツによつて、2009年に戻された。あの事故現場にな」

既にソウゴと飛流はあの事故現場へと戻されていたと知り、ほんの少しだけ安堵する。

「どうしてあなたがここに？」

彼女はふと。何故、関係ない筈の士がここにいるのだとツクヨミが問う。すると、士が歩き出した。

「俺は、この世界をライダーを見て、破壊すべきか否かを見極めようとしている」

「えっ？」

世界の破壊と聞き、ツクヨミは思わず驚く。

「以前、桐ヶ谷晴夜を見極め、破壊はしなかったが……時見ソウゴを新たに見極める必要

になった。

時見ソウゴが魔王になる未来しか見えないのなら、結論は既に出ている。

しかし……」

「そうじゃない道もあるということ？」

「……さあな」

彼の言葉を信じるとすれば、もしソウゴが魔王になるのが確定的ならば、すでにこの世界は彼によって破壊されているはず。

それが今も尚存命しているという事は、まだソウゴは魔王になるとは決まっていない事になる。

この世に、絶対というものは存在しない。

それ故、ソウゴがいつかは最低最悪の魔王になるとも言えるし、そうでないとも言える。

今はそんな曖昧な状況だが、彼の話聞き、違う未来を作る可能性が見えたツクヨミ。そうすればソウゴとゲイツが戦わずに済む未来も、彼がオーマジオウになることもない未来も作れると感じ始める。

2018年。

ソウゴはライドストライカーに乗り、ゲイツとの決着の地へ向かう。

だか突然、彼はライドストライカーを止めた。

それはソウゴの前に、飛流がアナザーライダー軍団を率いて立ちふさがっているからだ。

「過川飛流……」

ライドストライカーから降りてジクウドライダーを装着した。

「決着の時だ。時見ソウゴ」

「待ってくれ。俺には約束がある。ゲイツの所へ行かなきゃいけないんだ！」

「俺が……お前の息の根を止める！」

『ジオウ……！』

約束の地に行かなければならないとソウゴは言うが、その言葉を一切聞き入れていない飛流はアナザージオウとなり、後ろの連なるアナザーライダーの軍団がソウゴに襲いかかる。

『ジオウII！』

それを見たソウゴはジオウライドウォッチIIを取り出し、ジクウドライダーへと装填した。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ジオウ・ジオウ・ジオウ・ジオウ！』

ジオウⅡへと変身するとアナザーライダーの軍団に対抗し、サイキョーギレードで寄せ付けない。

『ジオウサイキョウ！』

サイキョーギレードのジオウのフェイスの文字が“ジオウサイキョウ”へ変える。

『霸王斬り！』

『霸王斬り』でアナザービルド、アナザーエグゼイドを倒した。

「「「ううう……」」」

だが、アナザーライダーの軍団はジオウを取り囲む。

「離して！俺には……約束が……ッ」

必死に振り払い、ゲイツの元へと向かおうと必死にアナザーライダーから振り切ろうとする。

ソウゴがアナザーライダーに囲まれる数時間前、埠頭付近にえみるとルーラーが向かい合って立ち、はな達は埠頭から少し離れた所にある植木の裏から様子を見ていた。

『ルーラーには言いたく無いのです』

……あれはどう言う意味ですか？」

「それは、言いにくいと言う事です」

「理解不能です」

「ルールはすぐそう言うのです！分かって貰えないんだって、嫌な気持ちになるのです！」

「えみるが説明しないからです」

「全部私のせいなのですか！？少しは考えるのです！」

「嘘をつかれるのだって、嫌な気持ちになります！ギターが壊れて、全部平気じゃないクセに！」

互いに口喧嘩しながら頬を引つ張り合う。

「……本当に後悔はしていません。」

「だって、ギターの代わりはあっても、ルールの代わりはないでしょう？」

「……っ！」

「私は何度だってあなたを助けます！大切な親友なのですから！」

「私も、えみるが大切だからです！」

えみるの悲しい事も、辛い事も教えて欲しい。

きちんと知って、えみるの力になりたいのです！」

「ルーラー……」

「何か懐かしいような……あたし達もこんな事あったっけ」

「もう、なぎさったら」

少し離れた所でなぎさとほのかが二人を見ながら、そんな会話をしていた。

しばらくし、えみるとルーラーがはな達の元へ戻り、ルーラーが手製のギターを差し出す。

「それは？」

「さあやとほのかさんに手伝って貰って、私が作ったギターです」

「ルーラーが？」

「心の中で密かに思っていました。えみるの好きなギターを、私も一緒に弾いてみたいと」

「私も心の中で思っていました。ルーラーと、もつともつと仲良くなりたいて」

えみるが受け取ったルーラーお手製のギターを抱き締め、目を閉じて言う。

そして、えみるもお手製の赤と紫のハートのブレスレットを、ルーラーの手首に付ける。

一方、クライアス社から出ていったパップルが、はぐくみタワーの最上部にトゲパワ
ワを持って立っていた。

(あの人は、止めに来てくれる……馬鹿な事をするなど……)

あたしは愛してるのに……!)

「愛されなかった……ッ!」

彼女はそう言ってから涙を流し、手に持ったトゲパワワを自分の中に入れた。

「ああああああああ!!?」

悲鳴と共にパップルの体に変化していき、みるみる大きくなるとタワーが崩壊してい
く。

ソウゴとゲイツを探しに行こうとしたはな達の耳に、はぐくみタワーの方から崩れる
音が聞こえた。

「あれって!」

「オシマイダー!」

「こんな時に!」

仕方なくはな達のはぐくみタワーの方を向くと、自分自身をオシマイダーにさせた
パップルが最上部に立っていた。

「「「ミライクリスタル！ハートキラツと！」「」」

五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取り姿を変える。

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「「「HUGつと！プリキュア！」「」」

五人が初めて同時に名乗り、チーム名を叫んだ。

五人はオシマイダーとなったパップルを止めに向かう。

パップルがオシマイダーとして現れる少し前、ゲイツはふらつきながらもはぐくみパーキングへ到着した。

しかし、周りを見渡すがソウゴの姿がなかった。

「ふっ……そんなもんか」

来るはずないかと思ひ、ゲイツは地面に座る。だが……

「ハア……はあ、はあ……っ」

アナザーライダーの軍団を切り抜き、それによつて傷だらけのソウゴが、フラフラしながらも約束の場所へやってきた。

「ゲイツ……遅れちゃったかな」

「ボロボロだな……ジオウ」

「ゲイツだつて……」

「そんなザマになつてまで、何故来た」

「来るしかないだろ……約束したから」

それに今の俺、ゲイツに会うには……こしかないから」

「何……」

「俺さ、ゲイツに会うまで男の友達いなかったんだ」

友達と言うと、ゲイツがソウゴの胸倉を掴む。

「ふざけるな！俺達は友達じゃない。これから決着を付けるんだぞ！」

「それでもいいさ。以前言つたよね」

ゲイツの怒りの言葉を聞きながらも、ソウゴは気にした様子を見せずに、かつて交わした約束を思い出しながらそう語る。

『でももし、俺が間違つた道を選んでほんとにオーマジオウになると確信したら……その時はいつでも倒してくれ！みんなの判断なら、俺は信じられるから！』

——その言葉は、ソウゴとゲイツがまだ会つて間もない頃に約束したものだつた。

「……ッ」

その時の事は、ゲイツも覚えていた。

「俺はみんなを……ゲイツを信じたんだ。」

俺がオーマジオウになるつてゲイツが確信したなら、倒されたつていい」

「……」

ソウゴの信頼の言葉を聞き、ゲイツは思わず彼を倒す事を躊躇してしまふ。

「うわあ！！？」

「！！？」

そこへ何者かにソウゴは顔を叩かれ、地面へ転がる。

「逃さないぞ時見ソウゴ」

アナザージオウが現れ、ソウゴを不意打ちで殴つたのだ。

「お前はそこで見ている。俺が時見ソウゴを倒す瞬間をな」

アナザージオウはソウゴの胸倉をつかみ起こして、パンチを放とうとする。だがその瞬間、ゲイツがアナザージオウの腕をつかみ止める。

「何？」

「ジオウに……ソウゴに手を出すな！」

必死にゲイツがアナザージオウを止める。

それを見たアナザージオウは、ジオウの敵だと思っていた奴がジオウを助ける様子を見て、彼がさつきまでの理念と矛盾している行動を取っている事実に気付く。

「こいつはお前にとって敵じゃないのか!? 魔王になる男だぞ!!？」

「ジオウが……ソウゴが魔王になるだど? そんな訳があるか?!!？」

こいつは誰より優しく、誰より頼りになる男だつ!!？」

そして……ソウゴは、俺の友達だ！」

「ゲイツ……!!！」

「そんな……ソウゴに比べ、貴様はただ過去に甘えているだけだ!!？」

「うるさい！」

過去に甘えていると言われ怒ったのか、アナザージオウがゲイツを殴り飛ばした。

「ゲイツ！」

「何をボサツとしている。俺以外に倒されるなんて許さんぞ！」

「うん！」

彼の声に押されたソウゴは起き上がり、二人でジクウドライバーを装着する。

『ジクウドライバー！』

『ジオウ！』

『ゲイツ！』

「変身！」

彼らはジオウとゲイツのウオッチを装填し、ドライバーを回す。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

二人が揃って仮面ライダージオウ、仮面ライダーゲイツへと変身を完了した。

「やれ！」

そしてアナザージオウの命令で、二人に向かってアナザーライダー軍団が攻めて来た。

その頃、オシマイダーとなったパップルがエールに向かって跳びかかって右手から攻撃を繰り出し、エールが避けてパンチを繰り出すが、反撃を受ける。

「フェザーブラスト！」

アンジユがフェザーブラストを放つが、手で受け止められて掻き消され、回し蹴りを受けて吹き飛ぶ。

「スタースラッシュユ！」

今度はエトワールがスタースラッシュユを放って命中させるも余り効かず、反撃を受けて吹き飛ばされる。

マシエリとアムールが跳んでダブルパンチを繰り出すが、パップルのキックで砂浜に叩き付けられる。さらに追い打ちとして再度光線を放った。

『っ!?』

みんなが防ごうと構えたその時、小さな光がパップルのオシマイダーの動きを鈍くさせた。

「デュアル・オーロラ・ウェーブ！」

その光は、なぎさとほのかが変身する光からだった。二人は光の中に包まれ、姿が変わって現れた。

「光の使者！キュアブラック！」

「光の使者！キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア！」

黒とピンクを基準としたコスチュームと白と水色を基準としたコスチュームへの変

身を終え、二人は名乗りを上げる。

「闇の力のしもべ達よ！」

「とつととお家に帰りなさい！」

そうオシマイダーに向けて決め台詞を言うと、二人はオシマイダーの下へと走る。

「だあつ！」

オシマイダーがパンチを繰り出すと同時に、ブラックがアッパーを繰り出して打ち勝つ。

「だあーっ！」

ホワイトが太陽を背にして跳ぶと、全身を回転させてキックを彼女に頭部に叩き込む。

ブラックとホワイトが海岸に着地した直後、オシマイダーが海から出て来る。

「だだだだだだだつ！」

「やああああああつ！」

そこへブラックがパンチ、ホワイトがキックによるラッシュを繰り出し、攻撃の隙すら与えない様にする。

オシマイダーが距離を取ってすぐさまブラックにキックを繰り出すが防がれ、バク宙して近付いたホワイトに両足跳び蹴りを叩き込まれる。

「だああああああっ！」

ブラックとホワイトが跳んでオシマイダーの手首を掴み、回転させて海に叩き落した。

「凄い……！」

「今まで会ったプリキュアより強い……」

エール達は二人が今までに会ってきたプリキュアよりも強いという事に、驚きを隠せなかった。

ブラックとホワイトが海岸に着地した直後、オシマイダーになったパップルが海から出て来ると、彼女は「おしまいだ」と叫びだし、両手で顔を隠して泣き崩れた。

「パップル……？」

「えっ？」

「あのオシマイダーは、私の上司だった人です」

あのオシマイダーがパップルだと気づいたマシエリとアムールが、パップルに向かって跳ぶ。

「胸に響いて来るのです。痛い程の嘆きが……」

私に行かせて下さい！

「私達に行かせて下さい！」

マシエリとアムールがパップルの元へ行かせて欲しいと頼む。

「あたしは信じるよ」

「今の二人なら、何でも出来そうな気がするわ」

「うん。行けー！マシエリ！アムール！」

みんなに声援を送られマシエリとアムールが手を繋ぎ、パップルの中に入った。

二人の入ったパップルの中は、白くて何も無い空間だった。

ジオウとゲイツは、アナザージオウ率いるアナザーライダー軍団と戦闘を繰り広げる。

『ファイズ！』

ゲイツはファイズウオッチを起動させるとドライバーに装填し、ドライバーを回す。

『アーマータイム！ファイズ！』

ゲイツはアナザーファイズと応戦しつつ、ファイズアーマーとなった。

『フィニッシュタイム！ファイズ！』

ドライバーを回し、ゲイツが高く飛躍した。

『エクシードタイムバースト！』

アナザーファイズをポインターが捉え、ゲイツのキックが決まってアナザーファイズ

は倒され、変身させられた人の変身を解除させた。

『鎧武!』

ジオウも鎧武ウオッチを装填し、ドライバーを回す。

『アーマータイム!ソイヤツ!鎧武!』

ジオウは鎧武アーマーとなり、二本の橙々丸Zでアナザーライダーに応戦する。

『フィンイツシユタイム!鎧武!スカツシユタイムブ레이크!』

オレンジ色のエネルギーがアナザー鎧武を捕らえ、そのまま橙々丸Zですれ違いざまに斬撃を放つ。

アナザーライダーを減らしているが、まだ数は多い。

「相性悪いな!」

「交換しようか!」

二人が別のウオッチを互いに見せ合う。

『フォーゼ!』

『ウィザード!』

見せ合った二人はドライバーに装填し、再びドライバーを回す。

『アーマータイム!プリーズ!ウィ・ザード!』

『アーマータイム! 3・2・1! フォーゼ!』

ジオウはフォーゼアーマーに、ゲイツはウィザードアーマーへと変わった。

『フィニッシュタイム！フォーゼ！リミットタイムブ레이크！』

「ロケットきりもみキック！」

『フィニッシュタイム！ウィザード！ストライクタイムバースト！』

ジオウの回転キックとゲイツの巨大化したキックが炸裂し、アナザーフォーゼ、アナザウィザードを倒した。

次にアナザアーマーとアナザゴーストが二人に攻めてきた。

『オーズ！』

『ゴースト！』

二人は今度はオーズとゴーストのウオッチを装填した。

『アーマータイム！タカ！トラ！バツタ！オーズ！』

『アーマータイム！カイガン！ゴー・ス・トー！』

ジオウはオーズアーマーに、ゲイツはゴーストアーマーへと変わる。

「はああッ！」

「いけエッ！」

ジオウのトラクローZの攻撃とゲイツのパーカーゴーストの攻撃により二人が一緒になると、同時にドライバーを回す。

『フィニッシュタイム!オーズ!』

『フィニッシュタイム!ゴースト!』

二人は高く飛び上がり、お互いにキックの態勢を取る。

『スキヤニングタイムブ레이크!』

『オメガタイムバースト!』

ジオウのスキヤニングタイムブ레이크、ゲイツのオメガタイムバーストのダブルライダーキックでアナザーオーズ、アナザーゴーストを同時撃破した。

「うおおおおお!!?」

アナザーライダーを二人倒すと、そこへ槍を回しながらアナザージオウが現れ、二人に攻撃を仕掛ける。

一方、アムールとマシエリがころろの中に入りしばらく歩くと、虚無の様な白い空間の中で泣きじやくるパップルの姿が目に入る。

「愛してたのに……捨てられた……!もうおしまいだ……!」

「おしまいではありません」

「……!」

「あなたには、未来があります」

「うるさいー！」

アムールとマシエリの姿を見たパップルが叫ぶと同時にトゲパワワが飛ぶが、二人に大したダメージは無かった。

此処にいる者の中で一番傷ついているのは、パップル…彼女の心。

だから、この程度の攻撃で大きくダメージを受けては、彼女を救うことなど夢のまた夢。

「お前なんかには、私の気持ちが分かってたまるか……！心の無い機械人形のクセに……！」

「私もそう思っていました。アンドロイドには、人の心が分からないと。でも……！」

アムールは思い浮かべる、只の無機物から生まれた存在である自分でも、はなやソウゴと共に過ごしていくことで芽生え、そして生まれた人の心。

それを手にすることが出来たからこそ、自分はここに居られる。

「私にはもう何も無い……！何もかもオシマイなんだ……！」

彼女がそう叫ぶと更にトゲパワワが増え、二人に向かつて飛んで行く。

「それでも！それでも未来はあるのです！」

だがトゲパワワを弾き飛ばしたマシエリが、未来はあると叫ぶ。

最初はプリキュアの真似事と隠れて弾き続けた不自由キターから始まり、それでも諦めきれ

ずに、友達と共にがむしゃらに頑張った末に手にした、未来を手にする力と自由を奏でる為の唄。

彼女は歩み続けることが出来たからこそ、自分はここに居ることが出来る。

「私はあなたの事が好きではありません。いつもルーラーに酷い事ばかり……でも！」
ルーラーにやってきた酷いことを思い出しながらも、マシエリはパップルの元へ歩きながら言葉を出す。

「あなただつて何でも出来る！何でもなれる！何もかも失つたつて、それでも未来に奇跡を起こすのです！」

「嘘だ！でたらめだ！」

パップルが立ち上がり、トゲパワワの竜巻を起こす。

「私には……嘘と言う物が良く分かりません。」

ただ分かるのは、あなたは、そんなに苦しむ程に人を愛したと言う事です！」

アムールが竜巻に耐えながらパップルに近付き、自分の思ったことを喋り続ける。

「そこに嘘は無いハズです！」

アンドロイドらしくバツサリと言い切ったアムールの言葉にパップルが反応すると同時に、彼女の周りで壁を作るように発生していた竜巻が収まる。

「あなたは、全てを失った訳ではありません。」

あなたには、まだ人を愛する心があります」

「愛しても愛しても、どうにもならない事だつて……」

「愛する心を持ち続けければ、必ず誰かに届きます。愛は無敵なのです！」

その言葉は、余りにも綺麗事だったが、二人は信じていた。

例え愛されていなくても、誰かを愛し続ける限り、その愛は絶対に絶えることは無いと。

「綺麗事ね……愛したつて報われるとは限らない……」

……でも、届いたわ……ブツ飛び……」

そんな二人の言葉が届いたのか、パップルの心にアスパワワが芽生える。

「あなたの愛……」

「私達が、抱き締めます」

マシエリとアムールがパップルを優しく抱き締める。

すると、真っ白な空間が星空のような青空が広がる空間に変わった。

その光景は、まるで虚無しか感じられぬ純白のキャンパスが、星の様に遠くで輝く無数の未来で塗りつぶされ、「まだ貴女の道は続いているよ」と言っているようだった。

「ああ……暖かい……」

「あれは……!」

動かなくなったパップルの胸元から光が放たれ、消えると同時にマシエリとアムールが出て来る。

そして、新しい二つのミライクリスタル・ルージュとバイオレット、ギター型の武器・ツインラブギターが誕生した。

「これは……?」

「一緒に弾いてくれますか?」

「勿論なのです!」

「ツインラブギター! ミライクリスタル!」

アムールとマシエリが顔を合わせようと、ツインラブギターにルージュとバイオレットのミライクリスタルをセットする。

「アーユーレディ!」

「行くのです!」

ツインラブギターを使い、二人が弦を弾き演奏を始める。

「届け! 私達の愛の歌!」

「心のトゲトゲ!」

「ズッキュン撃ち抜く!」

「ツインラブ・ロックビート！」

マシエリとアムールがツインラブギターを持ち替え、二人同時に赤と紫のハート型エネルギーを放つ。ツインラブ・ロックビート”を放つ。

その一撃は、邪悪に染まった心を浄化するものであり。その魂にまで響く唄は、未来へ歩む事が出来なくなった者に送る“応援歌”の様でもあった。

（私の恋は終わった……）

でも、それで全てが終わる訳じゃない……

私も……もう一度……（……）

ツインラブ・ロックビートが命中し、オシマイダーとなったパップルが浄化された。

「愛してるー！」

「センキューー！」

二人が決めポーズを取ると、パップルは二人の前から去っていった。

「やったあああ！！？」

「凄いね二人共！！？」

オシマイダーを浄化させた二人にエール達が駆け寄る。

すると、爆発音のような轟音が遠くから聞こえだした。

「あそこー！」

エール達が何処から聞こえたのか見渡していると、音が聞こえた場所を察知してそっちの方へ振り向いたエールが指を指す。

「あれって……もしかして、ゲイツ!」

彼女の指さした方を見たエトワールは、アナザーライダーと戦うゲイツがゴーストアーマーで宙に高く飛んでライダーキックを放つのが見えた。

「ソウゴ君!」

「ソウゴ!」

さらに、同じくオーズアーマーの驚異的なジャンプ力で宙に高く飛んでいたジオウが剣で応戦しているのも見えた。

「行きましよう!」

「急ごう!」

エール達は急いでジオウとゲイツがいる場所へダッシュで向かっていく。

ジオウとゲイツは連続アーマータイムでアナザーライダー軍団を全滅させ、残るはアナザージオウのみとなった。

「うおおおおお!!?」

彼らはアナザージオウの攻撃を躲すと、ジオウIIとゲイツリバイブのウォッチを起動

させる。

『ジオウ！Ⅱ！』

『ゲイツリバイブ！剛烈！』

二人がウオッチをドライバースに装填し、後ろから二人の変身エフェクトが現れるとドライバースを回す。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！ 剛烈！』

ジオウⅡとゲイツリバイブ 剛烈へとフォームチェンジした。

「はああああー！」

「くうー！」

アナザージオウの槍による攻撃を受け止め、ジオウⅡがサイキョーギレードで斬撃を放つ。

「うおおおおお！！？」

続いてゲイツリバイブ 剛烈がジカンジャックローでの打撃を浴びせる。

ジオウが更にアナザージオウへ攻撃を加えて走ろうとすると、ゲイツが胸を押さえ膝をつく。

「ゲイツ！！？」

「気にするな!」

心配になったジオウは、アナザージオウをゲイツから遠ざけるように攻撃する。

アナザージオウは二人の攻撃を受け続け、彼らから離れる。それを見てジオウの針が回った。

「見える!お前の未来が……!」

ジオウが見たのはアナザージオウが高く飛び上がり、上から二人に向かって攻撃すると言う未来だった。

「ゲイツ!上だ!」

「わかった」

『スピードタイム!』

ジオウに上と言われ、ゲイツはリバイブウオッチを回転させる。

『リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!疾風!疾風!』

アナザージオウはすぐさま飛び上がり、未来を見たように上から攻撃しようとする。

だがゲイツが疾風へと変わり、即座にアナザージオウの真横へ移動した。

『スピードクロー!』

スピードクローとなったジカンジャクローで攻撃を浴びせ、アナザージオウが怯む。

「!のおおお!」

アナザージオウは槍を振り回し攻撃するが、ゲイツはアナザージオウの攻撃を疾風のスピードで避け続ける。

『パワーダタイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！』

避け続けるゲイツが剛烈にチェンジし、アナザージオウの槍の攻撃を受け止めた。

「決める！ソウゴ！」

「よし！」

ジオウがジカンギレードとサイキョーギレードを手に持ち、ジカンギレード・ケンモードとサイキョーギレードを合体させる。

『サイキョーフィニッシュタイム！』

それと同時に、剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『のこ切斬！』

ゲイツがジカンジャクローのアップでアナザージオウを上空へと吹き飛ばす。

『キングギリギリスラッシュ！』

「オリヤヤヤヤ！！？」

ジオウはサイキョージカンギレードを振り下ろし、アナザージオウに直撃させた。

サイキョージカンギレードで切り裂かれたアナザージオウは変身解除し、アナザージオウオッチも飛流の元から離れて転がる。

「あッ……あああ……まだまだ！」

「……」

戦いに敗れても尚諦めない飛流へ、変身解除したソウゴが歩み寄る。

「お前さえ、お前さえいなかったら……！」

「俺がいなかったら、事故がなくなつて、家族は生き残つてた？」

「……」

「そうかもしれない。でも……ごめん」

責任があるのだと思い、ソウゴが飛流に謝罪した。

「俺にはどうする事も出来ない」

しかし消えた命はどうする事も出来ない。

それはわかつているが、ソウゴはそれでも飛流に伝える。

「ただ……思うんだ。きつと俺と飛流なら乗り越えられるって。あの過去の日から」

それを聞いた飛流は目から涙が溢れる。

「だから、過去の為じゃなく……今」のために生きようよ」

「う……ううう……わああああああ!!？」

その言葉を聞いた飛流は、ソウゴが支える手を強引に払いながらも、その場で涙を流す事しかできなかつた。

一方、残っていたアナザージオウオッチも粉々に砕け散った。

——しかし、アナザージオウオッチが砕け散った状態から時間が巻き戻るかのよう
に一瞬で修復された。その事實は、まだ誰も知らない。

過川飛流は、何も告げずソウゴとゲイツの前から去っていった。

『ソウゴ（君！）！ゲイツ（君！）！』

入れ替わるかのようにエール達が二人の前にやってきた。

「みんな……」

「見つかったか……」

みんなが現れたソウゴは、ゲイツの方へ駆け寄り肩を貸す。

「大丈夫ゲイツ？」

「ああ、余計な邪魔が入って、力を使い過ぎたようだ」

ソウゴはゲイツに肩を貸し、寄り添いながら起き上がった。

「だが、俺達は決着を付けるしかない」

「……そうだね」

二人は離れ、一定の距離を取る。

「本当に戦わなきゃ行けないの!？」

「戦わなくても！もしかたら……」

エールとアンジュが、ソウゴとゲイツに他の方法があるのではないかと言うが……

「それは俺も望むが……これは、俺とソウゴの約束なんだ」

そう言うのとゲイツがウオツチを取り出す。

「約束……」

「こんなの事しなくても……」

「二人が戦うのはおかしいのです……!」

エール達は二人の問題でも、やはり戦うのは違うと止めようとする。

「ゲイツが望むなら……俺も……」

だが、ソウゴはジオウオツチを取り出す。

「行くぞ!」

「ちよつと待って!」

ゲイツはゲイツウオツチを起動させようとする。

しかし、ソウゴが戦う前に待ってと止める。

「ゲイツ、頼みがあるんだ」

「往生際が悪いぞ!ソウゴ!」

往生際が悪いとゲイツが言うと、次の言葉に驚かされる。

「クジゴジ堂に帰って来てくれない!?」

「何?」

『えっ!!?』

ゲイツに帰ってきて欲しいとソウゴが頼む。

「あそこはもうゲイツの家なんだ。ゲイツやツクヨミのいないクジゴジ堂なんて、寂しいんだよねっ!!」

だから……帰ってきて欲しい!」

「ソウゴ君……」

「いいな。帰れたらいい。帰れるものなら……」

だがツクヨミは……もう……」

ゲイツはツクヨミが過去で事故に合い、もういない事を思い出す。

すると、ソウゴ達の前にオーロラカーテンが出現した。

『ツクヨミ!!』

そこから、死んだと思っていたツクヨミが現れた。

「ソウゴ!ゲイツ!やめてっ!二人が戦う必要なんてないかもしれないの!」

いきなり現れたツクヨミに、ソウゴ達が駆け寄る。

「まだ何も分かってないけど、これには深いわけがあつて、だから……」

「プっ……アツハツハツハツハツハ!!?」

「「アハハハハ!!?」」

ソウゴ達は顔を見合わせて、突然笑いだす。

「え? 何? 何なの?」

事情を知らないツクヨミには、なんでみんなが笑うのかわからなかった。

「私達の役目はここまでかな」

なぎささとのほかがここまでだと言うと、二人は顔を見て頷く。

「それじゃ、帰ろっかほのか」

「ええ」

「あつ……! よく考えたら財布も無いんだつ……!」

ここに来たのもはぐたんのおかげなので、帰りの事は考えてなかった。

「よかったなら、俺達を送ろうか?」

「本当!!?」

ソウゴがタイムマジーンで二人を送ろうと提案する。

「は〜ぎゅ〜!」

するとはぐたんの全身が光り、その光を上空に向けて放ち、光のゲートを作り出す。

「えっ!!? えっ!!?」

「お別れみたいね。皆さんお元気で」

なぎさとほのかが浮かび、光のゲートへ飛んで行く。

「行っちゃった」

「そういえば、あの人達って何番目のプリキュアだったの？」

『あつ!?』

そういえば、アナザージオウやルールー、えみるのことで気を取られ、彼女たちの事を聞くのを忘れていた事を思い出した。

「……まあ、いいや！みんな帰ろう！」

『うん！（おお・はい！）』

まあでも、またそのうち会えるだろうから、その時に聞けばいいやと判断し、ソウゴ達はみんなで一緒に帰っていく。

——その時はみんな笑っていて、ギクシャクしていた感じも、ソウゴとゲイツとの間にあつた壁もなくなっていた。

なぎさとほのかと別れたソウゴ達は、みんなでクジゴジ堂へ戻った。

「ただいま〜！」

「あ！ソウゴ君！おかえり！それにみんなもいらっしやい！」

「「「「こんばんわ」」」」

後ろからはな達も現れ、みんな順一郎に挨拶する。

「ねえおじさん。上の部屋を借りたっていう人がいるんだ」

「ええ？」

「しかも2人」

ソウゴ達の後ろからゲイツとツクヨミが入ってくる。

「……またご厄介になってもいいですか？」

ツクヨミが順一郎にもう一度と頼み頭を下げる。

「ほら、ゲイツも」

「また、よろしく……お願いします」

ツクヨミに言われゲイツも頭を下げる。

「どうかな？」

「いや、こんなに嬉しい事はないよ！これでますます賑やかになるな！」

『——え、ますます……？』

「はぎゅく？」

ますますと言われ一瞬、全員が体を僅かに強張らせながら驚く。

「うん。入居者ね、先約決まってるのよ」

順一郎が言うのと階段から誰かが降りてきた。

「よろしく」

階段を下りてきたのは、なんと黒ウオズだった。

「何だと!?？」

「黒ウオズ」

黒ウオズが現れたのを見たゲイツ、ルールー、ハリーは警戒する。

「男子はもう、相部屋でいいよね! 2人仲いいもんね!」

だがそんな空気を読まずに、順一郎がゲイツと黒ウオズを仲良くするかのよう近づけさせる。

「「ええ……」」

相部屋と言われ、露骨に嫌な顔になる二人。

「よし! とにかく今日は2人が戻ってきたお祝いだ! みんなですき焼きだ!」

「すき焼き! えっ、すき焼きだって! やった!!?」

「めちよつく! すき焼き!」

「私も手伝うのです!」

すき焼きと聞いたソウゴ、はな、えみるは順一郎がいるキッチンへと向かう。

「すき焼きは……」

「時期がおかしいと思います……」

「ええやないか。御馳走になりましょう」

「ハリーは食べただけでしょ……」

もうじき夏が始まるであろうこの季節に時期外れのすき焼きだが、まあいいかと思
い、さあや達も手伝いに向かう。

「ツクヨミ。前に俺に聞いたな」

みんながすき焼きの準備をしている光景を目にしながら、ゲイツはかつて、ツクヨミ
が言った言葉を思い出す。

『——あのソウゴが、本当に私達の知るオーマジオウになると思う?』

あの時は答えが出なかったが、今はハッキリと答えが言える。

「ソウゴは魔王になどならん。俺達がさせない」

「うん」

それを聞いたツクヨミ、ハリーも頷く。

「黒ウオズ。お前はソウゴを魔王に仕立て上げようとしているみたいだが、それは俺達
が撃ち砕く」

「つれない事を言うね。兎にも角にも、これで私達は仮初めのチームになったというの
に」

横からやってきて三人を囲み、チームだと黒ウオズが言う。

「誰がチームだ。それにお前が今までしてきた仕打ち、無視出来る訳ないだろう」
ゲイツ達が黒ウオズを振り払い、信用できないと睨みつける。

そこへ、道具と材料を持ったソウゴ達が現れた。

「黒ウオズ、謝っちゃいな。今なら大丈夫」

「黒ウオズさん謝って！」

「謝れば全て良しと言いますよ！」

「何があつた知らないけど謝れば」

みんなに謝れと言われ、黙り込む黒ウオズ。

「ウオジュー！アヤマツテ!!？」

そこへ更に、レッドとパープルのミライクリスタルのアスパワワを注ぎ終え、ルー
ジユとバイオレットのミライクリスタルのアスパワワを注ぐ準備をしていたハリーの
腕の中からはぐたんから笑顔で謝つてと言われ、黒ウオズは仕方ないといった顔にな
る。

「……ごめんね？」

そしてまったく感情のこもっていない声と顔で謝罪を行う。

「それで謝つたつもりかあッ！」

それを震えながら聞いていたゲイツは、全く反省していない黒ウオズに向けて飛びつ

く。

「ちよつと、ゲイツ！落ち着いて！」

みんなで黒ウオズとゲイツの喧嘩を仲裁しようとするが、みんな面白半分で二人の喧嘩を見ていた。

暗くなった空の下、白ウオズがひとり見上げていた。

「レグルス……」

「お前のもたらそうとしたオーマの日は、回避されたようだな」

夜空に浮かぶその星を見ていると、そこへスウォルツが現れた。

「お手上げだよスウォルツ氏。どうやら、君達の言う通りにしか事は進まないらしい。

後は君に従おう」

「最初からそのつもりだ。お前の意見は求めん」

スウォルツはそう言って、白ウオズに二つのアナザーライドウォッチを見せる。

その頃、ビルの上から夜の街を眺める青い銃を持つ男が現れた。

「まだこの世界にはお宝があるみたいだね。この世界のお宝を、独り占めにはさせない

よっ！士」

——彼の名は海東大樹。又の名を、仮面ライダーディエンド。

彼の登場がソウゴ達をかき乱す事になる訳だが。その出来事は未だ、神のみぞ知る。

——予告編——

ある日、ソウゴ達はある事件についての情報を耳にした。

それは、世界中にいるプリキュアがアナザーライダーに狙われ昏睡状態にある、という事件であった。

「この本によればこの事件は、あるプリキュア……キュアミラージュと名乗る少女が、意識不明の重体になった日を境に、アナザーライダーが生まれた時から始まったらしい」
だが彼らの敵は、鏡から現れるアナザー龍騎だけではない。

アナザーブレイド「皆さん」…皆さん！」

さらに始と名乗る人を探すアナザーブレイドも現れ、彼らは混乱となる。

ソウゴ「この事件をみんなで止めよう。現実と鏡の世界に分かれて！」

プリキュア5とハピネスチャージプリキュアと共に、ジオウ達は二つの世界に分かれて行動を開始する。

しかし、鏡の世界では……

「お前らが……祭りの相手か……」

「面白いゲームになるね」

「俺の占いは当たる」

「変身!!?」

そこでは、仁義なきライダーバトルが行われる。

そして、現実世界では……

始「剣崎……」

剣崎「始……運命は避けられないのか……」

ゲイツ「どういう事だ……」

黒ウオズ「会ってならぬ。二人が出会ってしまった……」

「運命に争う、二人の再会……」

オーマの目。それは時間の止まる世界に……

それでも、ジオウは諦めない。

ジオウ「行くぞ!ゲイツ!ウオズ!」

ジオウの起こす奇跡が、二つの世界を救う。

特別編 2

ライダータイム！王の決まる日！！

2018

特別編2 ライダータイム!! ? 王の決まる日 2018

——それは、誰なのかわからない。

誰かが俺の事を待っているようで、俺もそいつの事を知っている。

だが、夕陽が当たり、そいつの顔が影になって見えない。

「敵襲だ!!?」

その声で廃ビルの中から目が覚めて、一人の男性が起き上がった。

「起きろ! 城戸!」

「手塚! 敵は?」

「あそこだ!」

一緒にいる木村が指を指すと、そこから三人の仮面ライダーが現れた。

「見つけた……」

そこには、西洋甲冑のような外観とサイの角の様な左肩アーマーを持つライダー・仮面ライダーガイ、

メタリックオレンジでカニモチーフのライダー・仮面ライダーシーザス、

基本カラーが銀と青で、虎の爪にも髭にも見える仮面を付けたライダー・仮面ライ

ダータイガの三人がいた。

「迎え撃つぞー！」

四人はカードデッキを取り出す。

「変身!!?」

カードデッキを鏡に向けると、鏡が重なるように四人の体が纏われる。

左腕にエイを模した様な盾型の召喚機を持つピンク色のライダー・仮面ライダーライア、

明るいメタリックグリーンでカメレオンの目を模した様な仮面を持つライダー・仮面ライダーベルデ、

ガゼルの様な角を頭部に付けた茶色のライダー・仮面ライダーインペラー、

そして、赤い龍を模した姿を持つライダー・仮面ライダー龍騎へと変身した。

「しゃあー！」

四人は外に出て、襲ってきた三人を応戦する。

——彼らは、たった一人しか勝ち残れない。

彼らは、鏡の世界で行われているバトルロワイヤル——ライダーバトルをしていた。

『ハカランダ』。この店で働く一人の女性……

「ねえ、もう落ち着いた？天音ちゃん」

「え……？全然大丈夫ですよ」

彼女は栗原天音。このハカランダの一人娘である。

「よかった。いなくなつた男のことなんて早く忘れなよ」

「男つて……私、あの人はそんなじゃないですから。あんなおじさん……」

天音はそう言うのと、カウンターに飾られた写真立てに目を向ける。

そこには、母親と以前ここに同居していた人の写真が飾られていた。

「足長おじさんてタイプじゃなかったしね」

そして夜になり店をクローズすると、テーブルを拭く手を止め考え事をする。

「始さん……」

写真にいる一人の男性、相川始…

彼女の心は、彼のことでいっぱいになっていた。

その事を考えていると、扉が開く音が聞こえた。

「すみません。もう閉店なんです」

「私は客ではない。君に力を与えるものだ」

現れたのは白ウオズだった。

「私に力を……？」

『ブレイド……!』

アナザーウオッチを起動させた白ウオズは、いきなりアナザーウオッチを天音の胸へ突っ込んだ。

「うわああああー!」

「君の本当の心を剥き出しにすればいい」

すると、天音の体はアナザーウオッチの力に包まれ、忌々しき姿を纏っていく。

「始さあああーん!」

アナザーライダーの力を手に入れてアナザーブレイドとなった天音は、始の名前を声が裂ける程に叫んだ。

そして、誰もそんな事を知らないまま、四日が経った。

はくぐみ市では通り雨が降り続く中、はなは走り続け、屋根付きの休憩場を見つける。

「大丈夫?」

「ありがとうございます。傘忘れちゃって……」

「僕もだ」

到着した直後、そこで雨宿りをしていた男性、ジョージからハンカチを差し出され、これを受け取った彼女は顔やカバンを拭く。

「傘は嫌いなんだ。息苦しい」

「空が……見えないから?」

「そうかもしれないね。周りからは、大人なんだからそう言う所はしつかりしろと言われるけど」

「そうかも」

ジョージの言葉に、はなが笑う。

すると彼女はジョージの隣に並んで座り、スケッチブックを広げる。

「大人か……」

「上手だね。君の夢?」

「うん。お花屋さんもいいし、デザイナーも気になるし、決められなくて」

「はなはジョージに、自分の描いた絵を見せながらどんな夢がいいか悩んでいることを話す。」

「僕も夢があるんだ」

「大人も夢を見るの?」

「うん。理想の王国。」

「そこでは皆が心穏やかに微笑みを絶やささない、花が咲き乱れる美しい国」

「その夢、めっちゃイケてる!」

自身の友達に、王様になりたいという少年がいることを思い出しながら、彼の夢に感
激する。

「そう?」

「私も、そんな未来作りたくないな」

「君は、素敵な女の子だね」

「えっ……?」

ジョージから素敵な女性だと言われ、はなは頬を赤くする。

「あーっ! 虹! ねえ……!」

話してた間に雨が上がり、晴れた空に虹が出来ていたのを見てジョージに声を掛ける。

「あれ……?」

だがいつの間にかジョージは、この場からいなくなっていた。

「あの人……不思議な大人……でも、また会えるといいな。フレフレ私」

はながビューティーハリーが目に見える所で立ち止まり、ジョージから渡されたハンカチを見て笑みを浮かべる。

その頃、ビューティーハリーへみんなが集まっていた。

「後はソウゴとさあやだけ？」

「俺達はタイムマジーンの準備があつたから先に来たからな」

外では二台のタイムマジーンが用意していた。

「みんな、おはよう！」

「お待たせ！」

そこへソウゴとさあやが現れ、大きな弁当箱を持つてきた。

「わあ、これを順一郎さんが作つたんですか？」

「うん。朝から張り切つてねえ！」

「流石は我が魔王の叔父、素晴らしい」

珍しく、黒ウオズも一緒である。

「よし、みんなで今日はピクニックを楽しむぞー!!？」

「「「おおー!!？」」」

はなのノリに合わせ、みんなも叫ぶ。

「じゃあ、ゲイツ！行こうか！」

「ああ！」

みんなで外に止まっているタイムマジーンへと向かい、ソウゴとゲイツが分かれて縦の準備する。

「あの……さあや、ルール……そこだと操縦しづらいけど……」
ソウゴは横に座るさあやとルールに戸惑う。

「ごめんなさい。こつちがいいかと」

「私もです。申し訳ございません」

そう言う二人が後ろの方へ移動する。

「二人共どうしたんだろ〜?」

「さあ〜?」

何が何だかわからないはなとツクヨミの二人は、何故と疑問に思う顔になる。

一方、ゲイツの操縦するタイムマジンでは……

「何故、私がゲイツ君のほうを……」

「嫌なら、降りろ!」

出発前からゲイツとウオズが揉めていた。

「くじ引きで引いたんだから諦めなよ」

「アキラメ!アキラメ!」

「はあ〜仕方ない……」

「行くぞ」

「出発なのです!」

二機のタイムマジンンは浮かび上がり、ピクニックへと出発した。

ソウゴの乗るタイムマジンンでは、はなとツクヨミがお菓子を食べながらニュースを見ていた。

「あ! そうそう! これ見て!」

ツクヨミがタブレットを操作し、ある記事を見つけた。

「横浜に巨大怪獣の出現……それをプリキュアが撃退し、街を救った」

それははな達がプリキュアになる前の記事だった。

「やっぱり、私達以外にもプリキュアっているんだね」

「そうみたい。それにこの記事だけじゃないの。世界中には、私達の知らないプリキュアも居るみたい」

更に、世界の各地で活躍するプリキュアの記事を見せた。

「こんなにいっぱいプリキュアがいるなら、全員に会ってみたいなく」

記事のページを飛ばすはな。すると、一つの記事に指を止める。

「あれ?」

「どうしたのですか?」

「鏡を操るプリキュア……キュアミラーージュ。彼女は鏡の能力を使い敵を倒す……しかし、今は意識不明の重体……」

「鏡つて……アナザーリユウガみたいなプリキュアもいるんだ」

以前、鏡から現れるアナザーリユウガとの戦った事を話し、その時の攻撃と同じと話す。

「早く元気になるといいね」

「まあ、これだけいっぱい会っているんだし、会える思うよ」

「確かに、そしたらめちよつく幸せ！」

「はならしいね〜♪」

「私もえみるも会ってみたいです」

世界で活躍するプリキュアに会いたいと思うはな達に、ソウゴも嬉しそうに見ていた。

「ソウゴ君。そろそろ一回降りない？」

「う〜ん、そうだね。一回着陸しようか？ツクヨミー！ゲイツに伝えて！」

「わかったわ」

休憩のためタイムマジーンは着陸態勢をとり、人通りのない公園の広場へ着陸する。

「う〜ん!!? 空気がおいしい！」

「いい街に降りたね」

タイムマジンから降りたソウゴ達は軽く体に伸びを入れほぐす。

「ぴかりが丘?この街の名前か?」

ソウゴ達はぴかりが丘と言う地名の街に降りていた。

「ねえ、せっかくだしみんなで街の方に行ってみない?」

「それいいかも!俺も行きたい!」

「私もなのです!」

ソウゴとはな、えみるの三人が走って町の方へ行く。

「ソウゴ君!待って!」

「つたく、テンションの高い子供かよ……」

走って行く三人をさあやとゲイツも後を追いかける。

「みんな早いつてば!」

「ちよつと待ってよ!」

ツクヨミに生まれ、ルールも後を追ひ、更にその後ろを黒ウオズとはぐたんを抱えたハリーが追いかける。

「いや、みんないい顔していいな。はぐたん!」

「はぎゆう」

はぐたんの機嫌も最高長、楽しいピクニックになると感じていたソウゴ達は、早速ぴかりが丘の町の方へやってきた。

「めちよつく楽しいぞー！」

「面白い店がいっぱいあるのです〜！」

はなとえみるの二人がダッシュユで色んなお店を見て回り始める。

「これ狙ってみよう」

「いいね取れそうじゃん！」

ほまれとツクヨミはゲームセンターでクレイソングゲームに挑戦しようとし、黒ウオズは本屋に入り歴史の本を読んでいた。

「わあくこの靴、とてもブランド質が高くって有名な……」

さあやも珍しい商品を見て目を輝かせていた。

「ん？ルールーどうしたの？」

一軒の店を見ていたルールーにソウゴが近寄る。

「いえ、その気になったというか……」

ルールーが見てたのはクレイプ屋だった。

「ああ……なるほどね。待ってて！」

ソウゴが一人、クレイプ屋に入って行ってしばらくすると、クレイプを二つ持って現

れた。

「はい！お待たせ！」

「えっ？」

ソウゴは二つあるうちのひとつを彼女へ渡す。

「まあまあ、食べてみようよ♪」

美味しそうにクレープを食べるソウゴを見て、ルーラーもつられて食べる。

「——っ!!??」

「美味しいねこれ！」

「はい！」

二人が美味しそうに食べていると、そこへ一人の男性がソウゴにぶつかってきた。

「うおおっ!!??」

「ソウゴ！」

「ごめんね。少年君」

髪を金髪に染めた男性は、ぶつかった衝撃でクレープのクリームを顔に着けながら転んだソウゴに謝って去っていった。

「大丈夫ですか？」

「うん。ありがとう」

ルールーにクリームを取って貰いながら、氣遣われたソウゴが起き上がる。
「ソウゴ！」

そこへ焦った様子のゲイツとハリーが現れた。

「どうしたの？ゲイツ？」

「ウオッチが無いんだ……」

「はあ？誰のウオッチ？」

「俺のゲイツウオッチだ!!？」

「へえ………つて、えええええ!!??？」

仮面ライダーに変身するのに必要なウオッチが無くなったと知り、ソウゴは驚愕のあまりシャウトしてしまう。

——どうしてそんな事になったのか、それを知るには時を数分前にまで遡る必要がある。

その時ゲイツとハリーは、スポーツ用品店でトレーニング器具を見ていた。

「う〜ん、迷うな」

「ゲイツ………ここにきてそれ買うんか……」

あつちでも買えるであろうものに悩んでいる様子に呆れるハリーが呟くと、ゲイツの

後ろから男性がぶつかった。

「ごめんね〜」

男性は軽く謝って去っていった。

「よし……これで……ない!」

買おうとした時、たまたま自分の腕を見ると先まであったウオツチが無くなっていたことに気づく。

——そして、時は今に至るわけだが…

「マジで……」

「ソウゴ。そういえばあなたもぶつかったような」

「っ!?」

ルールの言葉で思い出したソウゴも、急いで鞆の中にある筈のジオウウオツチを探そうとする。

「ない! ジオウウオツチも、ジオウウオツチIIもない!」

「「ええええええ!」」

ソウゴまで自分のウオツチを失くしていたという事実には、皆は驚きを隠せずいた。

「さっきの人だ! ゲイツ!」

「ああ！」

「ハリー！みんなよろしく！」

「任せときー！」

ソウゴとゲイツは急いでさっきの男性を探す。

「ん？我が魔王とゲイツ君？」

偶然二人を見かけた黒ウオズは、彼らの様子が気になりながら二人を見る。

その頃、ソウゴとゲイツはぶつかってきた男性を探していた。

「はあ、はあ……あつ！いた！」

ソウゴとゲイツがようやくその男性を見つけた。

「待て！貴様、一体何者だ？！」

二人が問いかけると、男性は銃のようなものを取り出し、いきなり二人の足元へ銃撃した。

「まあ、落ち着きたまえ」

「落ち着けるわけじゃないじゃん！ウオッチを返して！」

「このことかな？」

ソウゴがウオッチを返してというと、男性は二人のウオッチを見せる。

「やはり盗んだのは貴様か!」

「それと、これも頂いたよ♪」

更にソウゴ達が集めてきたライダーのウォッチまで持っていたのか、二人にそのウォッチを見せる。

「他のライダーのウォッチまで……」

「何やら大変なことになったようだね」

そこへ気になって見に来た黒ウオズが現れた。

「黒ウオズ。あいつ一体何なの?」

「確か彼は仮面ライダーディエンド、仮面ライダーディケイドの仲間。という解釈でいいのかな?」

黒ウオズが彼は仮面ライダーディケイドの仲間だと話す。

「フツ……土とは面識があるんだったね」

門矢士の事を言われ、海東は笑みを浮かべる。

「黒ウオズ。奴からウォッチを奪い返せ」

「なんで私が?」

「いいから取り返してよ。ウォッチがなかったらウオズも困るだろ!」

ソウゴに前の方へ押し出され、黒ウオズが少し面倒そうな表情になる。

「全く……人使いの荒い魔王だ」

仕方なく黒ウオズはウオズミライドウオツチを取り出す。

『ウオズ！アクシヨン！』

ビヨンドライダーを装着した黒ウオズがミライドウオツチを起動させ、ドライバーに装填した。

「変身！」

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

仮面ライダーウオズへと変身した黒ウオズを見て、海東は一枚のカードを見せる。

「そっちが来るなら仕方ないね」

銃を一回転させ、青いライダーの様な絵柄のついたカードを取り出す。

『KAMEN RIDE！』

手に持っていたシアン色の銃にライダーカードを差し込んでデイヴアインフォアエンドを前の方にスライドさせると、銃を空の方へと向けた。

「変身！」

海東が叫ぶと同時にトリガーを引いた。

『DIEND！』

トリガーを引くと銃口から紋章を浮かばせて、3色のシルエツトを体に重ねるとスーツに変化させた。

そして宙に浮かんでいた10枚のプレートが頭部に装着されると、デイケイド以上にバーコードが強調された頭部やボディーマーを持つシアン色のライダー、仮面ライダーデイエンドへと変身した。

『ジカンデスピア!ヤリスギ!』

「はああ!」

ウオズのジカンデスピアとデイエンドのネオデイエンドライバーの狙撃がぶつかり、戦闘が行われる。

だが、鏑迫り合いのうちウオズが背中を向け、デイエンドはその隙を逃さず銃を放つ。

『キカイ!』

ウオズはデイエンドの銃撃を背中中で浴びながらもキカイウオッチをドライブバーへセツトし、キカイミライドウオッチを装填した状態でビヨンドドライブバーを操作した。

『投影!フューチャータイム!デカイ!ハカイ!ゴーカー!フューチャーリングキカイ!キカイ!』

フューチャーリングキカイに変身したウオズは、デイエンドに重いパンチの一撃を浴びせ宙へ吹っ飛ばす。

「よし今なら！」

ウオズ・フューチャーリングキカイはデイエンドから零れ落ちたウオッチを回収する。

「君がもう一人のウオズか、面白い！なら……」

デイエンドはウオッチをいくつか回収されると、違うカードを取り出して差し込む。

『KAMEN RIDE！ BALON！』

トリガーを引くと三色の影が重なり、バナナがモチーフのライダー……仮面ライダーバロンを呼び、ウオズと戦わせた。

「ライダーを呼んだ」

「門矢士とは違うということか……」

「その程度のお宝なら、くれてあげるよ！」

『ATTACK RIDE！ INVISIBLE！』

デイエンドがウオズを足止めさせている間に、半透明な自身の絵が描かれたライダーカードを入れて消えていくと、足止めさせていたバロンも姿を消した。

「消えた……」

デイエンドの気配も消えた事から、デイエンドはこの場から逃げたようだ。

しばらくし、ソウゴ達ははな達と合流した。

「みんな!」

「ウオッチ取り戻せた!?」

ウオッチを取り戻せたかと聞くと、ソウゴの手にウオッチはあるがあまり浮かない顔をする。

「うん……でも……」

「でもなんや?」

ソウゴ達は近くのベンチに座り、ウオッチをみんなに見せる。

「ジオウウオッチIIとゲイツリバイブウオッチ……あと、ゲイツウオッチが無いんだ……」

置いてあるのは継承されたレジェンドライダーウオッチとジオウウオッチしかなく、此処にはジオウライドウオッチIIとゲイツリバイブライドウオッチ、ゲイツライドウオッチが無かった。

「何故俺のウオッチがない。奴から奪い返せと言っただろう!?」

当のゲイツは、何故自分のウオッチが無いのかとウオズに文句を言う。

「どうしてゲイツ君の言う事を聞かねばならないんだ?昔は君が私の指示を受ける側だっただろ?」

「昔の話をこの時代に持ちこむな!」

また、いつものように二人が揉め合う。

「昔、昔つてさつきから言ってるけど、それって未来の話じゃないの？」

「ややこしくなるから、黙つててもらえないか我が魔王」

仲裁するソウゴだが、ややこしくなるだけだった。

「どうするの？」

「とりあえず、あの人をもう一度見つけないと……」

もう一度海東からウオッチを取り返せないと考えるソウゴ達、すると……

『ああああああつ!!?!』

近くから悲鳴が聞こえた。

「今のつて……行こう！」

ソウゴ達は急いで悲鳴が聞こえた方へと走る。

悲鳴が聞こえたのは、シヨツピングモールの近くにある巨大な写真館からだった。

「何処にいる?!?!」

そこには肩や太もも等が太く、アンバランスかつ大型の体型をしており。胸から腹部にかけて並んでるハート型の装甲、三葉虫とカブト虫を足した様な頭部を持つアナザーライダーがおり、スタッフの胸倉を掴んで何処とスタッフに問う。

その様子を見るに、誰かを探している様に見えた。

「やめなさい!」

そこへ六人の少女と三人の青年が現れた。

「みんな!」

「[[[Yes!]]]」

六人の少女は携帯型のアイテムを取り出した。

「[[[プリキュア!メタモルフオーゼ!]]]」

「[[[スカイローズ!トランススレイト!]]]」

すると六人がはな達に近い手順を取り、姿を変えていく。

「大いなる希望の力!キュアドリーム!」

「情熱の赤い炎!キュアルージュ!」

「弾けるレモンの香り!キュアレモネード!」

「安らぎの緑の大地!キュアミント!」

「知性の青き泉!キュアアクア!」

「青い薔薇は秘密の印!ミルキイローズ!」

そのうちの五人の姿が、胸元に蝶のブローチの様な装飾品を襟付きジャケットに装備し、薔薇をモチーフとした髪飾りを付けた姿へと変身。紫の髪色をしたツインテールの

少女は、胸元に青薔薇をモチーフとしたブローチを付けていた。

『希望の力と未来の光！華麗に羽ばたく5つの心！YES！プリキュア5！』

彼女らが名乗り上げて命名を叫ぶと、六人——Yes！プリキュア5はアナザーライダーの下へと走り攻撃を仕掛けるが、簡単に弾かれてしまった。

「何なのこれ……」

「なんか、暗夜さんの仮面ライダーみたいですね」

「でも、敵であることに変わり無いわ！」

六人がアナザーライダーに翻弄されていると、アナザーライダーが回転鋸の様なデザインが付いた巨大な剣を出現させて、地面に向けて刺し込むと彼女達へ電流を放つ。

「ココ様！ナツ様！」

「シロップ！」

ミルキイローズとキュアレモネードの二人が電流の攻撃から、彼女たちの戦いを見守っていた青年三人を守ったが、電流で体が麻痺してしまう。

「二人共！プリキュア！ファイヤー・ストライク！」

キュアルージュは炎の塊のようなものをサッカーボールの様に蹴り、アナザーライダーに向けて放つが、アナザーライダーはその攻撃を手に持った大剣で切り裂いた。

「そんな……」

「攻撃を切った……っ!?」

翻弄される六人だったが、しばらく後からソウゴ達がやってきた。

「アナザーライダー……あれって!」

「プリキュア!?」

「また、他のプリキュアなのですか!?」

また初めて見るプリキュアと出会った事にソウゴ達は驚くと、その次にアナザーライダーに目を向ける。

「あのアナザーライダーは、クライアス社の仕業である確率が高いです」

「だったら、止めよう!」

「うん!」

「みんな!」

ソウゴの声で、皆はそれぞれジクウドライダーとプリハートを構える。

『ジクウドライダー!』

『ジオウ!』

「変身!」

「「ミライクリスタル!ハートキラッと!」」

ソウゴがジオウウオッチを装填して、ドライバーを回し。はな達五人が揃ってプリ

ハートにミライクリスタルをセットし、手順を取り姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「[[[[HUGと！プリキュア！]]]]」

六人が変身を完了し、急いで向かう。

「はああああ！」

ジオウがジカンギレードでアナザーライダーに振るい応戦する。

『仮面ライダー！？』

六人の前に現れたジオウに驚き、彼女らは仮面ライダーと叫ぶ。

「う……ああああああ！？！」

アナザーライダーがまた電流を放ってきた。今度は一点集中させてジオウ目掛けてだ。

「フレ！フレ！ハート・フェザー！」

アンジュがハートフェザーを展開し、電流を防ぐ。

「剣ならこつちも！」

『鎧武！』

ジオウは鎧武ウオッチを装填し、ドライバーを回す。

『アーマータイム！ソイヤツ！鎧武！』

「変わった……」

「行くぞ！」

ジオウは鎧武アーマーとなり、二本の大橙丸Zでアナザーライダーに応戦する。

「はああああ！」

ジオウとアナザーライダーの攻撃は火花を散らし続ける。

ジオウが更に攻めもうとした、その時……

「うおおおおお！」

「ツッ？！」

いきなり後ろから中華風の鎧のような装甲で赤い龍の姿をした、別のアナザーライダーが現れ、ジオウの後ろにいるプリキュア達を狙う。

「みんな！うわあ！」

いきなり現れたアナザーライダーに気を取られてしまい、もう一方のアナザーライダーの反撃を受ける。

その時、黒ウオズがアナザーライダーの後ろにある『BLADE』という文字と年号、さらに突如現れたアナザーライダーの胸部の装甲に書かれている『RYUKI』の文字の右側にある年号に驚いた。

そこには、等しく『2018』という数字が刻まれていた。

「おい！あのライダー。アナザーリュウガに似てないか？」

ツクヨミと戦いを見ていたゲイツはいきなり現れたアナザーライダーが、以前倒したアナザーリュウガと似ていることに気づく。

「確かに似てはいますが、色が違います」

アムールが冷静に別のアナザーライダーの観測する。

そして、いきなり現れたアナザーライダーは必要にプリキュアを狙う。

「プリキュア……プリキュア……ッ！」

プリキュア達はアナザーライダーの振る剣の攻撃を避け続ける。

「プリキュア！サファイア・アローー！」

キュアアクアが反撃の為、アナザーライダーに向けて水の矢を放った。

「かあー！」

するとアナザーライダーが鏡のようなエネルギー体を作り出し、それが水の矢を擦り抜け跳ね返ってきた。

「っ!?」

「プリキュア! エメラルド・ソーサー!」

跳ね返ってきた攻撃をキュアミントが円盤状のバリアを展開し、攻撃を防いだ。

「ありがとう。ミント」

「攻撃が跳ね返るなんて……」

それを見たゲイツ達は見覚えのある攻撃だと気づく。

「あの攻撃……」

「あの時のアナザーライダーと同じ……」

「奴もアナザーリキュウガと同じ、鏡の世界のライダーか……」

彼らはアナザーリキュウガと同じ鏡を使って跳ね返す力を持っていると気づき、攻撃が返されると知ったプリキュア達は迂闊に技が出せなくなつた。

「あいつ……みんなばかり集中的に狙ってる。なら……」

ジオウがアナザーブレイドを振り払い、鎧武ウオッチを外した。

「これで!」

『デイ・デイ・デイ・デイ・ケイド!』

「デイケイドウオツチを起動させ、ドライバーへと装填すると、カード型エネルギーがジオウに重なる。」

『アーマータイム！カメンライド！ワーオ！ デイケイド！デイケイド！デイケイド！デイーケーイードー！』

「デイケイドアーマーが装着され、エグゼイドウオツチを取り出した。」

『エグゼイド！』

「エグゼイドウオツチをデイケイドウオツチの隣へと装填した。」

『ファイナルフォームタイム！エ・エ・エ・エグゼイド！』

「ジオウはエグゼイドウオツチを装填し、ジオウが二人に分かれると、顔のダイヤモンドフェイズが変わり、コードインディケーターには『エグゼイドダブルアクションXXXR(L)』と刻まれた。」

『ライドハイセイバー！』

『ジカンギレード！』

「二人で一気に決める!!？」

「何あれ？一人だったのに、二人に……」

「二人になったジオウに驚くプリキュア5。」

「すると何を思ったのか、アナザーライダーの一人がドラゴンの腕を地面へ放った。」

『うわああああ!!??』

アナザーライダーは地面を爆破させ、爆風で煙幕を放った。

「……………!!??」

「待って!」

爆風の中走るジオウシだが、スタジオからアナザーライダーの姿はなかった。

「消えた……………」

ジオウRも辺りを見回すが、既に二体のアナザーライダーの姿はなかった。

すると階段を降りる音が聞こえ、ジオウ達が振り向くと今度は四人のプリキュアらしきメンバーが現れた。

「いないわ!」

「遅かったか……………」

「また逃げられた……………ドリームさん!」

「ラプリー!」

プリキュア5の六人が四人組のプリキュア——ハピネスチャージプリキュア!に駆け寄る。

「もしかして……………」

「あの方々も……………」

「プリキュアなのですか！」

マシエリが間に現れ、プリキュアなのですかと叫ぶ。

「マシエリ。落ち着いて下さい」

「とりあえず、あのアナザーライダーについて何か知ってるようだな」

ゲイツが何か知ってるかと思ひ尋ねると、ジオウが変身解除し近づく。

「ところで、皆さんはプリキュアでいいのかな？」

「貴方達もプリキュアで、君は仮面ライダー？」

「はい！私達HUGとプリキュアっています！」

「そっだよ」

「ええええ!!? 君も晴夜と同じ仮面ライダーなの！」

ラブリーはソウゴが仮面ライダーと聞き、顔を近づける。

「うん。俺は仮面ライダージオウ。」

後、そのゲイツとウオズも仮面ライダーなんだ」

それを聞いてゲイツと黒ウオズにも関心する。

「とにかく、ここでは状況が整理出来ない。何処か話し合う所でお互いの情報を交換しよう」

黒ウオズの提案で、ソウゴ達はタイムマージンを停めた広場へと戻った。

「これがタイムマシン……」

「思ってたイメージなんか違うね……」

初めてタイムマシンを見た彼女らには、自分たちのイメージと違っていたようだ。

「じゃあ、改めて自己紹介からだね。私、夢原のぞみ！よろしく！」

「私は愛乃めぐみ！めぐみって呼んで！」

「おお！なんか先輩って感じ……私！キュアエール！野乃はなです！よろしくお願いします！」

はな、のぞみ、めぐみの三人がライダーとして自己紹介を始める。

「あの、うららさんって！テレビによく出てる春日野うららさんですよね！」

さあやが春日野うららを見て、テレビに出ている本人と思いつき話しかける。

「ええ！貴方も知ってますよ。薬師寺れいらさんの娘さんの薬師寺さあやさんですよ」

「はい。こうしてお話し出来て嬉しいです！」

お互い女優として頑張っているもの同士、気が合うようだ。

「それでは、自己紹介も済んだ所で本題に入ろうか……」

黒ウオズが今の状況を説明する。

「まず、あのアナザーライダーはおそらく、仮面ライダー龍騎と仮面ライダーブレイドに

よるもので、2002年と2004年に誕生したライダーだ」

二人の仮面ライダーの誕生を解説すると、ソウゴ達は彼らが何の目的で行動しているのか語り合う事にした。

「アナザーブレイドは狙いがわかんないけど、あのアナザー龍騎…なんだか執拗にプリキュアのみんなを狙ってなかった？」

「そうです！」

めぐみ達のいる方から二匹の妖精がソウゴ達の前に現れ、ソウゴ達は驚く。

「うおお!!? もしかして……妖精？」

「妖精のリボンです！」

「俺はぐらさんだ！」

「へえ、よろしく！」

「私もよろしく！」

ソウゴ達は大きなリボンを付けた妖精と頭にサングラスをかけた妖精二匹と握手する。

「それより、アナザー龍騎の狙いは知ってるのか？」

「これを見て」

ゲイツはアナザー龍騎を探していたと思わしき行動を取っていたためめぐみ達に何か

知っているのかと聞きだすと、いおなはとある記事を何個も見せる。

「プリキュアが昏睡状態……」

その記事を見たはな達は、先程タイムマジーンの中でも見た内容である事を思い出した。

「世界各地にいるプリキュアが謎の怪人に次々と襲われ、やられたプリキュアは意識を失っている」

「やはり、あのアナザーライダーの仕業か……」

「ねえ、さつきから聞いているアナザーライダー？それって何？」

「ライダーって事は、仮面ライダーと関係してるのよね」

アナザーライダーを知らないのぞみ達とめぐみ達にツクヨミとルールーが説明する。

「この世界には、18人歴史を残した仮面ライダーがいるの……」

アナザーライダーは私達の未来、オーマジオウが持つ18個のライドウオッチ、今ソウゴ達が持つてるのね」

「これがそうだよ」と言わんばかりにソウゴがジオウのライドウオッチを見せる。

「そのウオッチを研究し、同じ力を持つ戦士、アナザーライダーを作り出したのがクライアス社なのです」

「未来って事はツクヨミさん達は未来から来たの？」

「私とゲイツ、ルーラーとハリー、そして、ウオズは未来から来た」

「つて事は……本物の未来人!?？」

のぞみ達が未来から来たというゲイツ達に注目する。

「黒ウオズ。あのアナザーライダーの過去に行けば、事件は解決するの?」

ソウゴが2002年と2004年に行けばいいのかと聞く。

しかし、黒ウオズは手を顔に当てながら自身が感じた違和感を語る。

「いや、おかしな点が一つある。

本来アナザーライダーが誕生するのは、そのライダーが誕生した時代……

だが、今回現れたアナザーライダーの年代は2018年……今だ」

本来、アナザーライダーのボディには、共通して英語表記のライダー名と西暦が刻まれている。

しかし今回、彼らのボディには元となったライダーの活躍していた年代……

つまり、"2002"と"2004"ではなく、"2018"と言う数字が刻まれている。

「それじゃあ、過去に行っても何も無いつて事?」

「そういう事だね。倒すならこの時代だ」

「どうしますか?二人を探すのは困難だと思いますが?」

ルルーはアナザーライダーを探すのは困難だと言う。

「となると、分かれて探そう!」

『えっ?分かれて?』

「うん!二手に分かれて探すんだ!」

するとソウゴが、分かれてアナザーライダーを探そうと提案する。

「ソウゴ。分かれるのはいいが、どう分かれるんだ。そこら辺は決めているのか?」

「それをこれから決めるんだよ♪」

『ガクツ』と全員が転げ、ソウゴがノープランだと知り呆れる。

「我が魔王、アナザーブレイドなら探せるかもしれないが、アナザー龍騎はおそらく、以

前のアナザーリユウガのように鏡の世界……ミラーワールドだ」

「そうだよ!どうやって行くの?」

「鏡の世界には、前みたいに行くのは……」

あの時はアナザーリユウガに入れられたから行けた。しかし、自力で行くには困難

だ。

「だいぶ困ってるようだな……」

行く手段に悩むソウゴ達。すると声が聞こえ、振り向くと見覚えのある人に会った。

「あんた……」

「門矢……もやし！」

「士だ」

「ああ……そうだった。すみません」

めぐみが名前を間違えた為、士は直ぐさま訂正させた。

「どうして、あなたがここに？」

「なあと、ミラーワールドに行きたそうな話をしていたからな……」

そう言いながら二枚のカードを見る。それは、仮面ライダー龍騎と仮面ライダーブレイドのライダーカードだった。

「ミラーワールドへの行き方は特別に教えやる。以前の飯のお礼だ」

以前、勝手にソウゴの晩ご飯を食べた礼だと話す。

「とりあえず、行き方教えてくれるんだね」

「ああ」

冷たい態度でコージに教えてやるとぶつきらぼうに答える士。その態度に顔をムツとさせたくるみが士に突つかかる。

「ちよつとあんた、その態度は何よ！ここにいるココ様は、パルミエ王国の王様ですよ！」

「くるみ……」

「王様っ!」

くるみの口から王様と聞き、目を輝かせたソウゴはコージに顔を近づける。

「な、何……?」

「あんた王様なんだ!」

「ま、まあ……」

「俺も目指してるんだ!よろしく!」

「う、うん……よろしく」

王様と聞いたソウゴがコージと握手すると、のぞみはどうして王様になりたいと言っているのだと気になりだす。

「ソウゴはなんで王様になりたいの?」

「なりたいて言うか……生まれた時から王様にならなきゃ行けない。そう思うんだよね……」

夢で見た事を話すと、それを聞いたかりんやいなおは「なんじゃそれ」と唾然とし、ゆうこやこまちは「へ〜」と感心した表情でソウゴの顔を見つめていた。

「王様……」

「面白い子だね」

「そうね」

「いや、そうじゃなくて……」

「王様って……目指すものなの？」

今まで何人かの仮面ライダーに会った事がある彼女らも、王様になりたいという言葉は意外で驚く。

「ソウゴは王様になるの夢なんだって、小さい頃、夢でそう言われたからって本人が言ってたけど」

「……」

はながソウゴの横に来て補足するが、ツクヨミは知っている。あの時過去で見たソウゴの夢は、夢ではなく小さい頃にあった本当の出来事で、スウォルツの企みによるものだという事を。

「ツクヨミさん？」

「……えっ？ ああ、ごめん」

えみるの呼びかけで我に返ったツクヨミは、その時の事を考えていて話を聞いてなかった事を謝る。土はそれを黙って彼女を見ていた。

「さって、行く方法が見つかった所でどうメンバーを分ける、我が魔王？」

黒ウオズがどのようにしてメンバーを分けるかと聞く。

「それなら決まってるよ」

メンバーはもう決めてるとソウゴが言う。

「ミラーワールドには、俺が行くよ」

「私もソウゴ君一人は危険だよ！」

「私も行きます！」

「私も行くよ！」

「あんた一人でなんて危険だわ。私も行くわ！」

「世界中のプリキユアを助けなら私も！」

「めぐみ……だったら私も！」

それぞれ、さあや、ルールー、のぞみ、りん、めぐみ、ひめの六人がソウゴに歩いて行くという。

「俺も行こう」

「いや、ゲイツは黒ウオズとこっちに残ってあの仮面ライダーディエンドとアナザーライダーを頼むよ」

「ゲイツ君と……」

「黒ウオズで……」

「うん。よし！任せたよ！」

「ソウゴ……」

ゲイツと黒ウオズを一緒にしようとする、ハリーとツクヨミがソウゴに話しかけ、少しみんなから離れた。

「ちよつと、待つてソウゴ！どう考えてもあの2人が協力し合えるわけない！」

「分かつてるよ。でも同じ家で暮らすことになったんだ。強引にでも状況を作つてあげなきゃ」

わかつていながらソウゴは、ゲイツと黒ウオズを一緒にさせようとする。

「うまくいくとは思えないけど……」

「……ねえ、前から思つてただけどき。あの2人に何があつたの？」

ソウゴは二人に何があつたのとツクヨミが尋ねる。

「……ウオズは、私達とクライアス社を止めようとした時に一緒にいたの」

ツクヨミが未来で起こつた話を始める。

「ウオズはクライアス社を止める、私達のチームのリーダーだつたの」

未来では黒ウオズはゲイツやツクヨミ達と一緒にだつたと話す。

当時、ツクヨミ達はウオズが考えた作戦を聞いていた。

『救出作戦を決めた。私がクライアス社に潜入し、みんなを脱出ルートを作り、クライアス社長とオーマジオウに隙を作り、奴らを仕留める』

『オーマジオウを罠にかけるということか』

『そんな危険な任務……一体誰が……?』

『もちろん私が行く。君達は私からの情報を待つて動いてくれ』

その後ウオズは、一人でクライアス社に潜入した。

「でも……私達にウオズがもたらしたのは……偽りの情報だった」

その時は、自分たちの動きがクライアス社に読まれ、ゲイツ達は窮地に追い込まれたと話す。

「ウオズとクライアス社の間に、何があつたのかは分からない。」

でも私達の仲間の命を奪つたのは、ウオズの情報がきつかけだつたのは事実」

未来の仲間のみんなを助けられなかったのは、黒ウオズが裏切つたからだとかツクヨミとハリーは感じていた。

「……そうだったんだ」

「ソウゴの気持ちも分かるけどゲイツがウオズを仲間として受け容れるとは、到底思えない」

ツクヨミとハリーは、ゲイツがウオズを仲間としては受け入れないと考えていた。

「そっか……」

「それより、アナザー龍騎はまあ、わかったさかい。アナザーブレイドはどうすんや？」
「えっ？あつ……2人を協力させることばかり気にしてて、そっちは考えてなかったあ……」

「ハア……だ〜めだこりや……!」

「ゲイチユ〜!ウオジユ〜!一緒!」

アナザーブレイドの方は何も考えておらず、ツクヨミとハリーは呆れる。はぐたんはゲイツとウオズは一緒と笑って言う。

とにかく、話し合いの結果、分かれるメンバーが決まる。

ミラーワールドには、ソウゴ、はな、さあや、のぞみ、りん、くるみ、めぐみ、ひめの八人。

現実世界は、ゲイツ、ウオズ、ほまれ、ルールー、えみる、うらら、こまち、かれん、ゆうこ、いおなの十人と別れた。

ツクヨミやハリーらは、ここで二つの情報を得るために待つてもらおう事になった。

「とにかく、俺は俺のウオッチとお前のジオウウオッチIIを取り返す」

「頼むよゲイツ。みんな」

アナザーブレイドを探すチームは全員が頷き、行動を開始した。

ゲイツ達はまずは、ぴかりヶ丘にいるかもしれないアナザーブレイドと仮面ライダー
ディエンドの探索を始める。

そして、残ったソウゴ達は士の前にやってきた。

「このメンバーが行くのか？」

「そうだよ」

「……いいだろう」

士はソウゴ達の前に、オーロラカーテンを作り出した。

「何それ？」

「行ってみて、その目で見てみる」

突然出現した灰色のオーロラにソウゴ達が驚くと、オーロラカーテンはソウゴ達に向
かって迫ってきた。

『えっ？えっ？うわああああ!!?』

士の手によってソウゴ達は鏡の中の世界、ミラーワールドへと向かった。

「さっさと、どうなるかな……」

「ねえ、あなたはソウゴをどうしたいの？」

ツクヨミは士はソウゴをどう思っているのかと聞く。

「さあ？試している……とだけ言っておくか？」

士はそのままソウゴを試していると答え、去っていった。

その頃、ミラーワールドの中では……アナザー龍騎が変身解除をし、少年の姿に戻った。

「どうして、どうしてまだ……」

「まだ、蘇る命が足りないようだな」

そこへフードを被った男性がやって来た。

「なんで！なんでだよ！プリキュアの命のエネルギーがあれば助かるんだろ！」

「もつと多くのプリキュアの命が必要だ。」

それに都合が良い事に、プリキュアがこのミラーワールドに現れた」

「それで助かるのか？ミラージュが……サラが！」

「ああ」

それを聞いてアナザー龍騎の少年は走り出し、ミラーワールドに現れたプリキュア達を探す。

「もつと集める……そうすれば、俺の望みも果たされる」

フードの男は何かのアナザー龍騎が集める命で、何かが果たされると企む。

その頃、とある病院である少女が医療器具をつけられ昏睡状態でした。

「やめて……もう……やめて……タツヤ……」

心の中でタツヤと呟きながら、少女は何かを止めるよう訴えていた。

ミラーワールドの、とある公園。

三人の敵ライダーから逃れた龍騎、インペラー、ベルデの三人は公園へと逃げ込み、変身を解いていた。

「乾杯〜!」

真司は一人呑気にビールで乾杯と声を上げるが、木村と石田の二人は乗り気ではなかった。

「おい!なんだよ!ノリ悪いな!せっかく生き残ったんだからさあ!パアアつと!行くこころよ!」

そう言ってノリ良くビールを飲む。

「おつまみもさ!こんないっぱいあるだからさ!」

真司はベンチに置いてあるおつまみを取るが、他のメンバーは暗い顔で彼の顔を睨む。

「そんな気分じゃねえツつの」

「えっ？」

「城戸、お前は能天気でいいよな……」

「僕達はこのミラーワールドから……地獄から抜け出せないでいるんですよ……」

そう、彼らは此処……ミラーワールドから出ることが出来ず、ライダーバトルを続けていたのだ。

「それは……俺だって不安だよ。」

俺達には記憶がないし、覚えてるのは名前くらいで……なんでここに呼ばれたのかわからない……

でも……だからこそ、楽しくしようとしてるじゃないか……いけないのかよ？」

真司の言う通り、この世界では孤独が付き纏う。真司の言ってることも強ち間違いないと二人は思い始めた。

「遅いな手塚さん……まさか、逃げ遅れたんじゃ……」

ふとその時、仮面ライダーライア……手塚海之がまだ戻っていない事に、石田は心配を感じる。

「大丈夫！あいつはそう簡単にやられるような奴じゃない」

真司は大丈夫だと信頼していた。

「つてかさ、お前いつもいつも、手塚、手塚だな」

「……だって、僕達のリーダーは手塚さんですし……」

「リーダー!?? そんないつ決めたんだよ?」

「確かにな」

石田の言う事もそうだ。手塚のおかげで彼らはうまくチームとしてやって来れている。
る。

ただし、それも一時凌ぎに過ぎない。

「だが、このバトルの勝者は一人だけってルールだがな……」

このライダーバトルに残れるのはたったの一人だけだ。

「それは、そうだけどさ……あの子の事を信用できるのか?」

何故あの子は俺達を呼んで、こんなゲームを仕組んだのか?」

「でも、それにかけるのが最後の希望なんだ……」

女の子……全てはその子によって引き起こされたもので。何故、こうなったのかを物語る。
る。

全ての始まりは、四日前……

「目覚めなさい。かつての戦士達……」

その日、真司達十一人は鏡に覆われた大部屋で目を覚ました。

「ここは、人間が存在してはならない世界……ミラーワールド」

彼女が十一人をこの世界へと導いたと思われる。

「俺は誰だ？」

その時、全員が過去の記憶を無くしていた。

「戦つて下さい……再び。」

そうすれば、記憶は戻ります。

そして、約束します。

この戦いの最後の勝者が……この世界から解放し。再び、現実世界へ戻し、本当の人

生を過ごさせる事を約束します」

「本当の人生……どう言う意味だ」

彼女はこの戦いの勝者に本当の人生を取り戻せると約束する。

「ミラーワールドが脱出し……現実世界に戻る事が出来る……」

期間は七日、それまでに決着をつけて下さい」

それだけを伝えてると大部屋の鏡が割れ、街中の広場へと移っていた。

そして、外には十一匹のミラーモンスターが集まって彼らと契約しようとしていた。

「嬉しいぜ、また祭りが楽しめるなんて……」

一人の男性がカードデッキを掲げる。すると、ベルトのようなものが巻きついて装着された。

「変身！」

男性はベルトの真ん中へと差し込む。そして、幾つもの影と重なりその身を纏う。

「ハツハツ……ああ、久しぶりだな」

それを見た真司も、同じように竜の絵柄のデッキを取り出す。

「俺も前に確か……変身した事が……」

真司は最初に変身した男性と同じようにデッキを掲げる。

「変身！」

右腕を斜めに上げ叫び、デッキを差し込む。

すると同じように影が重なり、変身を完了させた。

「じゃあ……あれ？」

だが真司は見覚えのある癖を出し、一瞬戸惑う。

それから四日経ち、現在に至る。

あれから何人ライダーが消えたかわからないが、ライダーバトルは今もなお続いていた。

「一体、何者なんだ？あの子は？」

「きつと、神様かなんかさ？信じる者は救われるってな？」

その女の子を信じ、真司達は戦いを続けていた。

「俺には会いたい人がいる……いや、会わなきゃいけない人がいる」

急に真司が会いたい人がいると語り出す。

「ほお、彼女か？」

「いや、男だ……そいつは、いつも夢に現れて、そいつに会うために俺は戦ってるんだってな」

きつと自分はそいつと何か関わりがあると思いつつながら、真司はそう話す。

「みんなさ！」

「手塚！心配したじゃねえか！」

そこへ、モンスターから逃れた手塚がようやく合流した。

「芝浦純達と話をつけてきた。あいつらも俺達と協力したいと」

「マジで！それめっちゃいいじゃん！」

「でも、大丈夫かな？あいつら、どうも信用出来ないような……」

さつきまで戦っていた相手な為、信用も出来ない者もいた。

「心配ない」

手塚がコイントスを始めると、その時に手に置かれたコインの向きは裏だった。

「俺の占いは当たる」

「俺の占いは当たる……乗った！」

真司は手塚の占いを信じ、芝浦純達との共闘に乗った。

「とりあえず、話し合うためにみんなのデッキを預けてくれないか？」

しかしその問いに、三人はすぐに答えられなかった。デッキを預けることは、自分の身を守る術を失うも同然なのだから。

「大丈夫だ……奴らのデッキも預かっている」

それを見た手塚は真司達を安心させる為か、あの三人のライダーデッキを見せる。

「じゃあ……」

デッキがあるなら攻撃はないと思い、真司達は手塚にデッキを預ける。

ミラーワールドの、真司達が居た所とは別の場所。一台のバイクが走る前に一人の男性が現れ、運転していた男性はブレーキをかける。

「俺と遊ぼうぜ……秋山」

「浅倉武……だったか。俺もお前の名前を知っている。ということは、過去で会ったことがあろうだな」

「ああ、他の奴らと違い俺は全て覚えてる。仲良かったぜエ俺達……殺し合うほどにな
！」

コブラのデザインが成された紫のカードデッキを取り出した浅倉が、バイクに乗って
いた男性・秋山蓮に向かって走って来ると、蓮も蝙蝠の絵柄が刻まれたカードデッキを
腰のバックルに装填する。

「変身!!?」

蝙蝠と騎士のモチーフのライダー・仮面ライダーナイトと、

蛇のような容姿で、紫という毒を持ってそうなカラーを持つライダー・仮面ライダー
王蛇へと変身し、両者戦闘が始まる。

『SWORD VENT!』

手に持った剣と杖。お互いにカードを挿入し、剣を出現させた。

「はあああああ!」

「あああああ!」

両者の剣はぶつかり火花を散らし、お互いに譲らない攻防を繰り返す。

すると、何体ものミラーモンスターが現れ、ナイトと王蛇の戦いを妨害する。

「ハイハイ……」

ミラーモンスター達は標的を王蛇とし、次々と襲いかかる。

「なにが……ぐわあ!」

その時、いきなり剣が飛び込んできて、ナイトは不意打ちを受けた。

「貴様はここで脱落だ!」

不意打ちをしたのはサメの様な姿をした水色のライダー・仮面ライダーアビスだった。

「ちっ!」

ナイトの相手が、王蛇から不意打ちを仕掛けた仮面ライダーアビスへ変わった。

妨害を受けた王蛇は、ミラーモンスター達を相手にしていた。

「いっつら……」

王蛇はミラーモンスターを邪魔に感じていた。

だがいきなり『ドカアアアーン!』という衝撃と爆音と共に横から放たれた一撃が王蛇を救い、ミラーモンスターを倒した。

「あん?」

振り返ると、そこに居たのは巨大な銃器を持った緑色のカラーリングのライダー・仮面ライダーゾルダだった。

「お前は……北岡かア……あああああアアアア!!?」

ゾルダを見ていきなり王蛇が攻撃をしようとしたその時、ゾルダが変身を自ら解い

た。

「お前は……北岡の助手……」

ゾルダの変身者は王蛇の知る北岡の助手、由良五郎だった。それを見て王蛇も変身を解いた。

「先生……やつと会えました」

「先生？お前……ミラーワールドに来て頭おかしくなったのか！」

先生と言う五郎を、浅倉は困惑しながら蹴り飛ばした。

「お願いです！先生の側に居させて下さい！」

「離せ！気色悪い！」

「嫌っす！嫌っす！嫌っす！」

蹴り飛ばされても先生と浅倉を呼び、五郎は必死に泣きつきながらも側に居させてと頼む。

一方、乱入してきた仮面ライダーアビスにナイトは押されていた。
「くう！」

追い込まれるナイト。しかし…

『NASTY VENT!』

ダークバイザーを使い、ナイトの契約モンスター『ダークウイング』を召喚させ？と、

超音波を放ってアビスを怯ませた。

「はあー!」

その隙にナイトは攻撃を繰り出し、アビスを自分から離す。

『FINAL VENT!』

蝙蝠の絵柄が描かれたカードをダークバイザーに装着してアビスへと目掛けて走ると、ダークウイングがマントとなり、ナイトの体を包んで黒い錐のような姿に変えて激しくドリルのように回転する。

「はあ〜…はああああ!」

そのままアビスを貫き、アビスを変身解除とさせた。

「あ……あああああー!!?」

変身が解けた男性は、まるで消滅したのかように消えていった。

それを見て蓮は変身を解除し、自分の手を見つめる。

「はあ、はあ、あああああああー!!?」

倒してしまった…いや、殺してしまったと自分を責める蓮は、叫びを上げる。

門矢士にカーテンを潜ったソウゴ達は、ミラーワールドへとやってきた。

やってきたのは、とある廃虚のビルの屋上だった。

「なんとかか……来れたみたい」

「ここがミラーワールド？」

「うおお……本当に逆だ」

ひめの言う通り、まわりの看板やビルの形が左右対象逆だった

「うわあ、鏡の世界に来るのこれで二度目……」

「鏡……あああッ！」

ソウゴが鏡という単語を聞き、更にのぞみを見て、ある事を思い出した。

「どうしたの？」

「ねえ。のぞみはダークドリームって知ってる？」

「えっ………？」

「ちよつと、ソウゴがなんでそいつを知ってるの？」

「いや、この間にここに放り込まれた時、助けてくれたから」

「何処にいるの？？」

のぞみが慌ててソウゴにダークドリームがどこにいるのかと聞く。

「ごめん、場所まではわかんない……」

でも、「この世界のどこにいますか」と思う

「そんな……」

ダークドリームのことを話すと、ソウゴはのぞみと彼女の間に何かあるのかと思う。

「のぞみさん……」

「ねえ、どうやってアナザーライダーを見つけるの？」

「そうだよね。まずは……」

ひめがアナザー龍騎を探す事を考えるが、のぞみが一人で駆け出した。

「のぞみさん！」

「ちよつと！のぞみ！どこ行くの！」

「あの子を探す！」

のぞみはソウゴからダークドリームがここにいると知り、彼女に会い向かう。

「ちよつと……ん？何あれ？」

「モンスター……」

偶然何かを見かけたソウゴがその方向を向くと、何匹ものモンスターがある場所に集まっていた。

「みんなは、のぞみをよろしく！俺はあっちに行く」

「えっ？ソウゴ君、一人じゃ……」

「大丈夫！無茶はしないから」

「でも……」

大丈夫と言うがさあやは不安だった。だが、ソウゴはジクウドライバーを装着した。
『ジオウ！フォーゼ！』

ジオウとフォーゼのウオッチを回し起動させると、二つのウオッチを装填したドライバーのロックを解除する。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！ 3・2・1！フォーゼ！』
「宇宙キターーーーッ!!? とお！」

ジオウフォーゼアーマーの変身を完了したジオウは、両腕のロケットを点火させ、急いでそこへ向かって飛んで行く。

「飛んだ……」

「凄い……」

「ソウゴ君……」

「大丈夫！ソウゴならね！」

「はな……うん！」

「あたし達はのぞみを追うよ！」

はな達はソウゴは大丈夫だと判断し、ダークドリームを探しに行ったのぞみを追いかける。

ジオウが向かっていた場所は、真司達四人が芝浦達との共闘の対談のために約束場所だった。

「おっ、芝浦の奴ら遅くねえか？」

芝浦達三人がまだ姿を見せなかった。

「なあ？あいつら本当に俺らに付く気あるのか？」

本当に協力するのか怪しくなってきた。

「手塚さん。俺なんか不安で……」

「心配するな、俺を信じろ」

信じろと言う手塚を、三人は信じる。

「よう〜！」

そこへ、芝浦達三人が現れた。

「お待たせ！」

「おう！芝浦！手塚から話は聞いた」

真司が芝浦達三人に駆け寄る。

「短い間だけどね」

「えっ？」

彼らを発見をすると、手塚は三人から預かったライダーデッキを芝浦達に投げ渡し、芝浦達の手に戻った。

「「!?」」

「手塚さん! どう言うことですか? まさか……」

「「変身!!」」

三人は仮面ライダーガイ、シザース、タイガへと変身した。

「変身!」

手塚も仮面ライダーライアへと変身した。

なんと手塚は芝浦達と結託し、変身も出来ない真司達を一網打尽にしよう計画していた様だ。

「あああああ!」

そこへ、ライアの契約モンスター『エビルダイバー』が現れると、そのまま石田へと襲う。

「手塚さん! 手塚さんっ! ああああああーっ!!」

エビルダイバーに捕食されながら、石田は苦痛の断末魔をあげて消滅した。

「石田……! 手塚! なんでっ!」

「別に? 普通の事さ」

「ふざけるな！お前ッ！」

真司が生身でライアに立ち向かうする。

「お前！デツキを返せ！」

「ふん！」

しかし、生身では力が及ばず、簡単にあしらわれた。

「いつてえ……あつ!!？」

「終わりだ」

目の前に現れたタイガが巨大な爪で真司に攻撃しようとした。

「ロケット切り込みキック！」

そこへ、白いロケットの様なものが強烈なキックを繰り出し、タイガを吹っ飛ばした。

「えっ?」

「よっと！」

着地して現れたのはジオウだった。それを見たライア達も驚く。

「仮面ライダー?」

「仮面ライダー……あんた！」

ジオウは真司を見てジオウウオッチを外し、変身を解除する。

「子供?」

「あんた……城戸真司！」

「お前……なんで俺の名前を……」

「えっ？俺だよ。ソウゴ！……って、なんであなたがここに？」

ソウゴが真司の事に気にかけていると…

「お前……ガキのくせにさつきは！」

そこへさつき吹き飛ばされたタイガが、その怒りをソウゴに向けていた。

「なんか……やばそうかも……」

『FINAL VENT!』

「ああああああ!!?」

だが突如して王蛇のヴェノムクラッシュャーがタイガに向けて放たれた。攻撃を受けたタイガはそのまま吹き飛ばされ、変身解除と共に消滅した。

「消えた……」

「ああ……ガキも参加か？」

「また、仮面ライダー……」

「見ていたが、強そうだなア。遊んでくれよ、ああ!？」

咄嗟にソウゴは王蛇の攻撃を躲した。

「よくわからないけど、やるしかないみたい！」

『ジオウ!』

ジオウウオツチを装填し、ソウゴは構える。

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

再びジオウへと変身し、ジカンギレードで王蛇に応戦する。

その時、シザースが真司を捕らえた。

「真司!」

真司にシザースのクローが振りかかろうとしていた。ジオウは王蛇を相手にしている為、すぐにかばいに向かえなかった。

だがその時、黒い影がシザースの攻撃を剣で受け止め、真司を守った。

「ツ!?? お前……」

真司を守ったのは、仮面ライダーナイトだった。

「逃げる!」

そのままナイトは真司を庇いながらシザース、ライアの二人を応戦する。

「あの仮面ライダー……真司を守ってる。よし……!」

無事であるのを見たジオウは王蛇を振り払い、ダブルウオツチを取り出す。

『W!』

ウオッチのウエイクベゼルを回転させると二人組のUSBメモリ状のアーマーが現れ、王蛇に攻撃し、その隙にダブルウオッチをドライバーに差し込み回転させた。

『アーマータイム！サイクロン！ジョーカー！ ダブル！』

ジオウの体に二本のガイアメモリが肩に装備され、黒と緑のアーマー、ダブルアーマーを装備した。

「さあ、お前の罪を……教えて？」

「罪だと……？そうだな……数えたことないなあ……ああああ!!？」

王蛇はダブルアーマーを纏ったジオウに攻撃し、ジオウも王蛇の攻撃を避けながらパンチやキックを繰り返す。

戦いは激しくなり、それを見ているゾルダが機召銃・マグナバイザーにカードを差し込む。

『FINAL VENT!』

ゾルダは牛の様な角を持つロボットの様な契約モンスター『マグナギガ』を召喚した。そのままゾルダはマグナバイザーをマグナギガの背中へと装着すると、マグナギアガの全砲門が開いた。

「何あれ？」

「ッ!?？」

それを見た王蛇はジオウから離れる。

それを見ていたライア達も危機感を察知したのかその場から逃げ、残るライダーはジオウ、ナイト、真司だけだった。

「そのガキのライダー！早く逃げろ！」

「えっ？」

わからなかったジオウはすぐにゾルダから離れようと走る。

「はあ!!」

そしてゾルダはバイザーのトリガーを引き、マグナギガの全砲門から放たれた攻撃『エンドオブワールド』が放たれ、その圧倒的な火力がジオウ達に襲いかかる。

「「うわああああああ!!?」「」

その攻撃を受け、周りのものは全員吹き飛ばされた。

「あれ!!?」

ダークドリームを探すのぞみを見つける為に、はな達がミラーワールドの中を走っていると、エンドオブワールドの爆発が見えたひめが指をさす。

「ソウゴ君……」

「大丈夫よ。ソウゴが仮面ライダーなら、簡単にやられないわよ」

「そうそう！だいたいソウゴはいつも大丈夫だよ！」

「うん」

心配しながらソウゴが気になるさあや。

(さあやからソウゴへの愛を感じる〜♪)

さあやがソウゴを心配するのを見て、めぐみが心の中で呟く。

一人で先に行ったのぞみは、ミラーワールドを走りながら周りを見回すが、ダークドリームの様子はなかった。

「どこ……どこ……どこ……っ！」

周囲を回すと、のぞみの後ろにある鏡がぶれ始める。

「ふわああああ！」

「!?？」

不意打ちするようにアナザー龍騎から後ろから現れ、のぞみに襲い掛かろうとした。

「はあー！」

そこへ、キュアドリームと同じような姿をし、黒い服を着た女の子がのぞみを庇い、アナザー龍騎の攻撃を躲した。

「はっ!?？ あなた……」

「相変わらず、そそっかしい子ね」

のぞみを助けたのはダークドリームだった。

「本当に、あなたなの？」

「ソウゴから聞いたんじゃないの？」

「よかった……………」

かつて、自身を庇って死んだダークドリームとの再会で、のぞみの目から涙が溢れる。

「のぞみさん！」

はな達もようやく追いつき、のぞみ達と合流した。

「あああ！あんた、本当に居たの!?!」

「こうよく見ると、のぞみさんとそっくり……………」

ダークドリームがいる事にりんとくるみが驚くと、はながダークドリームとのぞみを見る比べる。

「プリキュア…………プリキュア…………命…………よこせ」

のぞみとダークドリームが感動的な再開を果たしていると、アナザー龍騎の殺意がはな達に突き刺さる。

「みんな！」

はなの掛け声で全員が変身アイテムを取り出す。

「ミライクリスタル！ハートキラツと！は〜ぎゅ〜！」

「プリキュア・メタモルフオーゼ！」

「スカイローズ！トランススレイト！」

「プリキュア！くるりんミラーチェンジ！」

「輝く未来を〜抱きしめて！！みんなを応援♪元気のプリキュア！キュアエール！」

「輝く未来を抱きしめて！みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

「情熱の赤い炎！キュアルージュ！」

「青い薔薇は秘密の印！ミルキイローズ！」

「世界に広がるビッグな愛！キュアラブリー！」

「天空に舞う蒼き風！キュアプリンセス！」

七人が変身完了し、ダークドリームを加えたメンバーでアナザー龍騎を迎え撃とうする。

「来い！」

アナザー龍騎が鏡から大量のミラーモンスターを出現させ、自分に従えさせる。

「何か出てきたけど……」

「やるしかないよ！」

みんながミラーモンスターに対応する。

「ラブリー！パンチングパンチ！」

ラブリーがパンチングパンチを連続で繰り出して怯ませた所に、拳から大きな一撃を放つ。

「プリンセスカッター！」

プリンセスがプリンセスカッターを放ち、ミラーモンスターを斬り裂く。

「フレフレ！ハート・フォーユー！」

そこへエールがハート・フォーユーを放ち、二人が倒したミラーモンスターを消滅させた。

そして、ルージュにミラーモンスターが攻めてきた。

「フレフレ！ハート・フェザー！」

アンジュが前に出てハートフェザーでルージュを守った。

「今です！」

「プリキュア！ファイヤーストライク！」

追い討ちにファイヤーストライクを放ち、ミラーモンスターを怯ませた。

「邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！ミルキイローズ・ブリザード！」

ミルキイローズがそれを大きな氷の青いバラの形にしてミラーモンスターを包み込み凍らせると、一瞬で粉碎する。

「プリキュア！ シューティングスター！」

最後にドリームがシューティングスターが突進してミラーモンスターを貫き、ミラーモンスターを全滅させた。

残るはアナザー龍騎だけが…

「後は……………」

「アナザー龍騎…」

「でも、アナザー龍騎は攻撃を跳ね返してくる」

アナザー龍騎の攻撃を跳ね返す力は、跳ね返し能力を打ち破れる火力を持つジオウIIとゲイツリバイブではないと倒せない。

すると、強烈な光が周囲に光りだし、アナザー龍騎の目を眩ませた。

「こつちへ……………」

声が聞こえたプリキュア達は、その声が聞こえた方へと逃げる。

光が無くなると、その場にいたプリキュア達は居なくなっていた。

「どこだ！ どこだ！？ プリキュア！！」

アナザー龍騎は必死になってプリキュアを探す。

その頃、強烈な光に助けられたエール達はある廃虚の施設に移動していた。

「ここは？」

「ねえ？あなたは……」

「あつ！この子、確か……」

「私の名前は……キュアミラージュ」

エール達の前に現れたのは現在、意識不明のプリキュア……キュアミラージュだった。

仮面ライダーナイトのおかげで仮面ライダーゾルダの一斉攻撃をなんとか逃れたソウゴと真司は、どこかの地下の駐車場へと逃げ込んだ。

「はあ、はあ、助かった……ありがとう！」

「サンキューな……」

二人が仮面ライダーナイトの変身者にお礼を言うと、その男は壁に付き腕を組む。

「お前……確か、城戸真司だったな……」

「お前は……秋山……ろんか！」

「蓮だ」

「ああ、そうだった……蓮だ」

「ねえ？なんであんた達は、このミラーワールドにいるの？」

ソウゴは何故、ミラーワールドにいるのか、こんなライダーバトルをしているのかを二人に聞くと、謎の女の子とその影響で記憶がないことを教えた。

「その所為で、俺達は過去の記憶を失った……」

「記憶……（そうか、だから真司は俺の事を覚えてないんだ）」

何故、真司がソウゴを覚えていないのも納得がいく。

「それより、これ！」

真司が蓮に缶ビールを渡すと、ソウゴにはオレンジジュースを渡した。

「ジュース？」

ツツコミ所に困るソウゴと蓮だった。

「こんなもん。御所大事に持っていたのか？」

蓮は真司から貰った缶ビールを真司に向けて返した。

「二人共なんか仲いいね♪」

「そんなわけ……あつ……！俺達、絶対過去になんかあつただろ！」

「それは間違いないな……過去と言えば浅倉武。」

奴は俺達の過去について、何か知っているようだぞ……」

「浅倉武？」

「さつきお前を襲った仮面ライダー王蛇だ」

「あいつか……」

ソウゴはいきなり襲いかかってきた紫色のライダー、仮面ライダー王蛇を思い出す。

どう見ても戦闘狂な男っぽいので、正直会うのに戸惑いを感じる。

「よくし、とりあえず会ってみようぜ浅倉に！」

三人は浅倉を探そうと行動を始める。

一方、現実世界。白ウオズのもとへ海東がやってきた。

「君か」

「君の言う通りだったよ。なかなかの宝庫だった」

海東はジオウウオッチⅡとゲイツリバイブウオッチを白ウオズに渡す。

「……私のウオッチがないようだか？」

白ウオズは自分のウオズミライドウオッチがないと海東に文句を言う。

「僕は自分が欲しいお宝のために動くだけさ。君が必要な物があるなら、君自身で調達したまえ」

海東は白ウオズにミライドウオッチは自分で調達しろと言うと、未来ノートのページ

を開く。

「やむを得ないな」

そして未来ノートへ『黒ウオズ、仮面ライダーディエンドと再び戦った』と書き込む。

そんな事も知らず、ゲイツ達現実世界組は、アナザーブレイドを探すのに必死だった。

「中々、見つかりませんね」

「アナザーブレイドの痕跡は一切ないですね」

「やはり、そう簡単には行かないか？」

ゲイツ達はアナザーブレイドを探すがやはり見つからない。

「っ!!?」

すると黒ウオズは、まるで糸で引つ張られる様に、急に引き返し始めた。

「おい！何処へ行く!!?」

「分からない。何故か突き動かされる感じがするんだ」

「……白ウオズのあの本か」

「ゲイツさん！」

「俺はウオズを追う。後で合流する」

ゲイツは黒ウオズを追いかける。それを見てかれん達におな達が見るとルー

ルーに近寄る。

「さつきから気になってたけど、あなた達はウオズさんの事を気にしてない?」

「……」

「お互いに信頼していないように見える」

みんなにもゲイツとウオズはお互いに信頼し敢えていないように見えていた。

その頃、海東の前に黒ウオズが現れた。

「ふくん……やっぱり来るんだ」

「あいにく、私の意思じゃなさそうだね」

「あの未来ノートの力だね」

「とりあえず、今回ばかりはもう1人の私に感謝するしかないようだ。君からウオッチを奪い返すのが、我が魔王のお申し出だね」

黒ウオズはビヨンドライダーを装着し、海東もディエンドのライダーカードをネオディエンドライダーに差し込む。

『ウオズ!』

『KAMEN RIDER!』

両者、ドライバーに装填し、構える。

「変身！」

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

『DIEND！』

ウオズとデイエンドは再度変身し、再び対決が始まった。

そこへゲイツも遅れて現れた。

「やはり、白ウオズか」

そこへ、高みの見物をする白ウオズと対峙する。

「お前達も繋がっていたのか」

「私もなりふりかまっていられなくなっただね。オーマの日は近い」

「その割にはアナザーライダーを二つも出し、何を狙っている？」

「私と来るなら、その理由も話そう。」

今一度、君に問う。私とともに来ないか？我が救世主として、歴史に革命を起こすんだ！」

白ウオズの誘いを受けるゲイツ。しかしゲイツの答えは…

「お前の救世主とやらに、なるつもりはない」

拒否の言葉だった。それを聞いた白ウオズは、期待はずれだと言わんばかりにガツカ

リとした表情で溜め息を吐く。

「実に残念だ……私の描く未来がなくなれば、世界を時を止め、破滅させるしかない」
 そう言うと、白ウオズはゲイツの元から去る。

ウオズとデイエンドの方は、お互いに互角の勝負を繰り広げていた。

「やるね。ならば」

『シノビー!』

シノビミライドウオッチを起動させたウオズは、ドライバーのウオズのウオッチと切り替えた。

『アクション! 投影! フューチャータイム! 誰じゃ? 俺じゃ? 忍者! フューチャーリングシノビー! シノビー!』

フューチャーリングシノビーとなると、シノビの高い瞬発力でデイエンドを攪乱し、翻弄する。

「なかなかの機動力だね」

ウオズはスピードをさらに上げ、その隙にデイエンドを拘束する。

「今だゲイツ君! ウオッチを取り返すんだ!」

「……」

ウオッチを取り返すと言うが、ゲイツはまったく動こうとしなかった。

そのままゲイツが何もしない間に、ディエンドに拘束を振りほどかれてしまう。

「機動力ならこいつらでどうだい？」

『KAMEN RIDE! ACCEL!』

『KAMEN RIDE! BIRTH!』

ディエンドライダーにより、二人の仮面ライダー…仮面ライダーアクセルと仮面ライダーバースが現れた。

三対一となったことで、スピードで押していたウオズも、数の差には流石に対抗しきれなかった。

ディエンドが高速移動での攻撃、更にアクセルがバイクフォームでの体当たり、バースがバースバスターでのセルエネルギー弾を受け、ウオズは吹っ飛ばされた。

「うわああああ！」

『FINAL ATTACK RIDE! DIEND!』

吹っ飛ばされたウオズに、ディエンドは無数の青緑色のエネルギーカードがディエンドライダーの銃口から渦を巻くように伸びてウオズをロックオンし、追い討ちをかけるように青いエネルギーの濁流が放たれた。

「ああああああ!!？」

攻撃を受けたウオズは苦痛の断末魔を上げ、地面を転がりながら倒れた。

「冷たい男だね。仲間を見殺しにするなんて」

「そいつは仲間じゃない。」

それと、もう1つ言っておく。そいつは嘘が得意だ」

「……っ!?」

デイエンドが倒れたウオズを見ると、いつの間にか藁人形になってた。

「はああ!」

ウオズはデイエンドの背後へ現れ、ジカンデスピアを一閃を放った。

その時、ウオズはこぼれ落ちたゲイツウオッチを手に取り、取り返すことに成功した。

「よく分かったねゲイツ君。ここまでが私の戦略だったと」

「違う。お前は俺を囮にするつもりだった」

「ほう。そこまで読んでいるとは流石だよ」

二人は仲はかなり悪いが、仲が悪いなりにお互いの考えは読めていたようだ。

「成る程。なかなかいい仲間っぷりのようだね」

「言ったはずだ。こいつは仲間じゃない。同居人だ」

『ゲイツ!』

デイエンドの言葉を訂正しながら、ゲイツウオッチを起動しドライバーに装填した。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『ジカンザックス！Oh！No！』

仮面ライダーゲイツへと変身し、ジカンザックスを出現させ、ウオズと共にテイエンド達三人に向かって走る。

ゲイツのジカンザックスとテイエンドのテイエンドライバーの射撃の打ち合いとなり、ウオズはアクセルとバースを相手に難なく押ししていた。

『フィニッシュタイム！』

『ビヨンド ザ タイム！忍法・時間縛りの術！』

ウオズは分身し、アクセルとバースをジカンデスピアの一撃で空中へ撃ちあげる。

『タイムバースト！』

そこへゲイツがライダーキックを放ち、アクセル、バースを消滅させる。

「しつこいな。まだ来るのか？」

「当然だ。ジオウウオッチⅡとゲイツリバイブウオッチを返してもらおう」

「それならあいにく、もう渡したよ」

「何……」

「君達の相手も、ここまでだ……」

『ATTACK RIDE! INVISIBLE!』

ディエンドはまたディエンドライバーにインビジブルのライダーカードを差し込むと、再びゲイツ達の前から消えていった。

「黒ウオズ……急いで戻るぞ!」

「ああ!」

その頃、ジオウオッチIIとゲイツリバイブウオッチを持った白ウオズに異変が現れた。

「これは……」

突如ジオウオッチIIとゲイツリバイブウオッチが光りだし、白ウオズの胸から出た光が、三角形のループを作り出していた。

アナザーブレイドを探す一行は、目標の相手が中々見つからず、公園で一息吐く。

「はあく、中々見つかりませんね」

「アナザーライダーが、何を狙っているのかわかれば……」

うららが疲労で溜め息をついている近くでこまちがそう呟くが、かれんは「それがわかれば苦労はしないわ」と言い返す。

「手がかりがあればな……」

「手がかりつて言えば、さっきの写真のスタジオくらいしかないわね」

ゆうこの疑問に返すいおなの言葉通り、アナザーブレイドは写真屋で誰かを探していた様子であった。

しかし、その探している者がわからないため、どっちにしろ探しようが無い。

悩む彼女達に、えみるのプリハートから連絡が流れた。

「はいなのです」

『えみるか！すぐにきい！アナザーライダーがいたで！いまエトワールが一人で戦ってる！』

ハリーからの連絡を受け、すぐに状況を察した。

「わかったのです！皆さん！」

「「うん！」「」」

「「プリキュア！メタモルフオーゼ！」」

「「プリキュア！くるりんミラーチェンジ！」」

「「プリキュア！きらりんスターシンフォニー！」」

「「ミライクリスタル！ハート、キラッと！はくぎゅく！」」

七人が変身すると、すぐにエトワールの元へと向かう。

写真スタジオの外では、アナザーブレイドとエトワールが戦闘を繰り広げていた。

「スタースラッシュユ！」

エトワールがメロディソードを出現させ、アナザーブレイドにスタースラッシュを放つ。

「どうやー！」

スタースラッシュが直撃したのを見てやったかと思うハリー。しかし：

「うううう……」

スタースラッシュを受けても、やはりアナザーブレイドには効いていない。

エール達との合体技レベルに火力の高い攻撃ならまだ希望はあったが、アナザーブレイドの分厚い装甲の前では、エトワールの数で押し切るタイプの攻撃は効果が薄いようだ。

——まあ、どのみちアナザーライダーを撃破する能力や圧倒的物量の無い今のエトワールでは、倒すことは絶対に不可能であるわけだが。

「やっぱり効かない……」

『エトワール！』

そこへ、アムールやマシエリ達も現れた。

「みんな……よろし、一気に……」

「待て！」

全員でアナザーブレイドを止めようとして行こうとした時、ブロンドカラーのコートを着た男性が現れた。

「誰ですか？」

「始さん！」

ミントが誰なのかと聞くと、その質問に答えるようにその男性を見たアナザーブレイドが始と呼ぶ。

「その子に手を出すな」

そう言うと始の腰から、ハートの形をしたバックルのようなもの——カリスラウザーが出現した。

「ベルト？」

「カード？」

「変身」

アムールとフォーチュンがそれぞれベルトとカードに目を向けていると、始は取り出した『A』の文字と赤いハートの中にカマキリのイラストが描かれたカード……『チェンジマンティス』のラウズカードをベルトの真ん中にスラッシュした。

『CHANGE!』

すると始の姿が黒い液体のような姿へと変化し、液体らしきのもが弾けると、ハート型の複眼と2本の鋭い触角を持ち、胸部アーマーの真ん中にハートのシルエットが付いた仮面ライダー…仮面ライダーカリスに変身した。

「仮面ライダー……」

「はあああああ!」

いきなり現れた仮面ライダーカリスは醒弓カリスアローを出現させ、プリキュア達を攻撃し、アナザーブレイドを守る。

「どうして仮面ライダーが!?」

「わからないけど、なんで……!?!」

迷ってる間にカリスはベルトの側面にあるカードデッキからカードを取り出し、カリスアローにスラッシュした。

『VAIO!』

するとカリスアローから茨の様な触手が現れ、フォーチュンとハニーを拘束した。

「何これ!?」

「ぬ、抜けない……」

二人は力を入れるが、抜け出す事が出来なかった。

その隙にカリスは新たにカードを取り出し、スラッシュさせる。

『DRILL! FLOT! TORNADO!』

三枚スラッシュさせたカリスが回転しながら宙に浮いていき、竜巻のようなものを纏っていく。

『SPINNING DANCE!』

「プリキュア! エメラルド・ソーサ!」

ミントがシールドを展開するが、カリスのスピニングダンスはそれがなんだと言わんばかりにシールドを簡単に貫いた。

そのままカリスのキックはレモネード、ミント、アクアの三人を吹き飛ばした。

「強い……」

「かなりの強敵と推定……」

カリスに圧されるプリキュア達……

「始!」

突如、カリスを呼ぶ声が聞こえた。

「剣崎……」

そこへカリスに剣崎と呼ばれた、ボロボロの服を着た若い青年が現れた。

「誰ですか……」

「あの方のお知り合いでしょうか？」

「どうして力を使った！俺はお前のために離れた！」

なのに、お前が力を使った……」

すると、劍崎はどこからか飛んで来たバックルのようなものを手に取り、カリスと同じカード……『チェンジビートル』のラウズカードを差し込み、腰へとかざす。

「何故なんだ……始！」

カードを重ねたようなベルト帯が巻き付いてベルトへと変わったバックル——ブレイバックルから待機音が流れ、劍崎は右腕をあげると、友が変身した事への怒りと『ジョーカー』としての本能のままに叫ぶ。

「変身！」

『TURN UP!』

ベルトのレバーを引き、目の前に現れたカブトムシの絵が描かれた青い畳の様な形状のエネルギースクリーン——オリハルコンエレメントを潜ると、劍崎の体にアーマーが纏われた。

「あれって……」

「仮面ライダーブレイド……」

偽物であるアナザーブレイドではなく、本物の仮面ライダー……仮面ライダーブレイ

ドが現れた。

「俺達は、再び出会ってしまった……運命は避けられないのか！」

ブレイドは腰から醒剣ブレイラウザーを抜くと、カリスとの交戦を始めてしまった。

次回！ Re. HUGつとジオウ！

特別編2 2018：ライダータイム!!？王の決まる日

特別編2 2018： ライダータイム!!?王の決まる日

現代でブレイドとカリスが衝突し合っているその頃、クライアス社の会議室で、ダイガンが他の社員達に話をしていた。

「チャラリートに続き、パップルまでも……！」

「どいつもこいつも、なつとらん！私が行けば五分で終わる事を！」

「その言葉に嘘は無いな！」

天井にプレジデント・クライが映り、ダイカンに向かって叫ぶ。

「ダイカン部長のお仕事、チュートリアルをお願いしたいわ」

「必ずプリキュアを倒し、ミライクリスタルを手に入れるのだ！」

「分かりました社長。このダイカンが出撃すれば、必ず五分で終わる！」

「お手並拝見だな。ダイカン」

「実に頼もしい」

一瞬「え、ホントに行くの？」とあっけにとられるも、すぐ気を取り直して自信満々に答えるダイカンを見据えながら、リストル達は不気味な笑顔をしていた。

ミラーワールドでエール達を助けたキュアミラージュ……
それを見たラブリー、プリンセスは警戒していた。

「あなたは誰?!?」　　なんで、ミラージュさんの姿をしてるの!」

「ミラージュ?」

ラブリーが問うとミラージュは変身を解いて、姿を変える。

そこに居た彼女の変身前の姿は、真司達にライダーバトルを仕掛けてた少女だった。

「あなたは誰なんですか?」

「わたしの名前はサラ……本当のミラージュから力を奪ったことは謝ります。

ですが、私には止めたい人がいるんです!」

「止めたい人?」

「加納タツヤ……私の大事な人です。彼のゲームを止めたいの!」

「それって、あのアナザーライダーの奴?」

ダークドリームがアナザー龍騎がその加納タツヤかと尋ねると、サラは頷く。

「詳しく教えて、あなたとその加納タツヤ君について」

二人の間に何があったのか、アナザー龍騎が何故必要にまでプリキュアを狙うのかを

聞く。

一方現実世界では、ブレイドとカリスが戦鬪を繰り広げていた。

「はあ!」

二人の武器はぶつかり合い、距離を取るとブレイドはブレイラウザーのカードトレイを開き、三枚のカードを選ぶ。

『KICK! THUNDER! MACH!』

「はああ……ウエ!」

刃の側面にあるスラッシュする部分にラウズカードを三枚ラウズすると、三枚のカードの力がブレイドに集まり、ブレイドはブレイラウザーを地面に突き刺す。

『LIGHTNING SONIC!』

三枚のカードがブレイドの足へと集中し、カリスに繰り出される。

「はあああああああ!」

ブレイドのキックを見て、カリスはすぐさまアナザーブレイドの盾になろうとする。

「あああああああ!!?」

ライトニングソニックを受け、カリスとアナザーブレイドは吹き飛ばされ、アナザーブレイドの方は変身解除となった。

「天音ちゃん！」

「天音ちゃん？」

アナザーブレイドの変身者を見て、二人は戦いを止めた。

「始さん……」

「……」

カリスは無言で一人去っていった。

「待って！」

天音もカリスを追いかけて去っていった。

「……」

「おい！どういふことだこれは……」

そこへディエンドからウオツチを取り戻したゲイツとウオズが現れた。

「彼は剣崎一真、仮面ライダーブレイド……」

そして、もう一人のジョーカー……で、いいのかな」

ウオズが彼の名前と仮面ライダーブレイドと言い、ジョーカーとも彼の事を呼ぶ。

ミラーワールドで真司達からデツキを奪った手塚に芝浦達は、ある一軒家でバーベキューをしていた。

「惜しかったなく、あのガキの邪魔がなかったら城戸達を全滅出来のによ」

「だが奴らのデツキはここにあるどうする事も出来ない」

「いいね！生身の奴らをぶっ倒すの今度はあのガキも可愛がってやろうぜ！」

石橋と手塚が、再びソウゴと真司を狙ってやろうと話しながら食事をしていた。

「コショウ取って」

「ああ」

「コショウを手塚が取ろうとしたその時……」

「ふん！」

「があ!？」

手塚が石橋の胸をナイフで突き刺し、そのまま平然と椅子に座り肉を口にすする。

「お前……芝浦……」

「さわんなよ」

芝浦も同様に胸にナイフを突き刺す。そのまま石橋は息を引き取り、体は消滅した。

それを見ても二人は平然とし、食事を続けた。

最初から手塚と芝浦は、後の二人も始末するつもりだったようだ。

ミラーワールド、北岡法律事務所。

浅倉はテーブルに置かれた餃子とご飯の入った茶碗を持ち食事をしており、隣には料理を準備した五郎が立っていた。

「どうすか？先生？」

「ああ！美味しいぜ！最高だ。」

しかし……まさか、本当に俺に尽くすとは、北岡も浮かばれないぜ」

「お戯れを」

浅倉は水の入ったコップを取る。

「俺は……北岡が嫌いじゃなかった……あいつは、俺を憎んでいたからな……憎しみて奴は、信用できる」

そう語っていると、五郎が誰かがここに来るのに気づいた。

入ってきたのはソウゴ、真司、蓮の三人だった。

「何の用だ。戦いに来たのか？」

「それは、二人の話を聞いてからな？」

浅倉に睨まれたソウゴは、真司と蓮に後を任せた。

「なんだア、俺と遊びたいんじゃないのか？」

「い、いやや、違うから。」

俺達は……そう戦いを止めに来たんだ。それで俺達の知つてることがあるなら、話し

てくれないかな?」

真司が知ってる事があるなら教えてくれないかと聞くと、五郎はテーブルに勢いよく紅茶の入ったティーカップを置く。

「お茶つす」

「どうも……」

五郎は怖い顔で言うが、ソウゴはとりあえずお札を言う。

「俺達にライダーバトルを持ちかけた、あの女の言葉が信用出来ない。例え勝ても、ミラーワールドから抜け出せないかもしれない」

蓮が用件を伝えると、浅倉は笑い出した。

「ハッハッハッハッハッハッハッ!!?」

すると浅倉は立ち上がり、窓を開けた。

「お前らの過去だと? いいだろ、教えてやる。」

俺達は戦っていた、永遠に戦っていた! このミラーワールドでな……それが、俺達の運命なんだよ」

この戦いは運命だと、王蛇のカードデッキを見せて言い放つ。

アナザーブレイドと交戦した現代組はタイムマジンンへと集まって、劍崎一真から相

川始との関係を尋ねる。

「とりあえず、劍崎さんでいいんですか？」

「ああ、劍崎一真だ」

「こちらのライダー、ブレイドと仮面ライダーカリス。2人はジョーカーと呼ばれる存在だそうだ」

「ジョーカー？」

「ジョーカーって、トランプと同じ切り札？」

「うららとこまちには、劍崎とあの始と言う男性がジョーカーと名乗る意味がわからなかった。

「ジョーカーは互いに引かれ合い、遭遇すると戦うしかない。さっきの俺達みたいに……」

「だから俺は、始と二度と会わないようにしていたんだ」

「戦うとどうなるの？」

「戦いに決着がつき、ジョーカーが一体になった時、世界は滅びる」

「ゲイツはその言葉に、白ウオズが言った『実に残念だ。私の描く未来がなくなれば世界を時を止め破滅させるしかない』という言葉を重ね、その意味を理解した。

「でも、なんであなたはジョーカーに……」

「見た目は人間のようだが」

「……俺は元は人間だ。」

だが、14年前のバトルフアイトに始が……ジョーカーが勝った……

それにより、世界の崩壊が始まった……」

アンデットによる戦いバトルフアイト。それは、地球の種族を決める戦い。

その中のジョーカー、それはどの種族にも属さない。

ジョーカーが生き残れば世界の破滅が始まり、バトルフアイトはリセットされる。

「でも、世界は崩壊していない……どうしてなんですか？」

「それは、俺がジョーカーになったからだ」

それは14年前の戦い。アンデットとライダーの壮絶な戦いの中、ジョーカーである相川始が残った事で、世界のリセットが始まった。

それを防ぐために剣崎は、自身の高い融合係数を利用して十三体のアンデットを取り込む『キングフォーム』を長時間に使い続けて自らアンデット……54体目のアンデットとなった。

……だがその事を剣崎は打ち明けなかった。

「アナザーブレイド……あの女性は誰なのですか？」

ルールーがアナザーブレイドだったあの女性は誰かと聞く。

「栗原天音……始が、仮面ライダーカリスがずっと守ってきた少女だ」

「その天音って人に何かあったの？」

「仮面ライダーカリスが動くなんて。そしたらあなたも引き寄せられて、2人は戦ってしまう」

「それが敵の狙いか……」

黒ウオズは栗原天音を使い、ブレイドとカリスを出会わせるのが狙いだと言う。

「これは俺達の問題なんだ！俺と始の……」

だがこれは自分と彼、二人の問題だと言い、剣崎はみんなの前から去っていった。

場所が変わりミラーワールド。

一軒家を二人で過ぎた手塚と芝浦は、ベットで横たわる芝浦に手塚は質問する。

「なあ、一緒に死んでくれっていたらどうする？」

「どう言う意味？」

「俺達が勝ち残ったら、俺達は戦わなければならない……」

俺には出来ない……だったら……」

「ハッハッハッハッ……」

手塚の深刻な質問に芝浦は笑っていた。

「なんだよ……」

「いやいや。だつてさ、殺し合いながらつて、凄い愛情表現じゃない?」

二人が戦うことが愛情表現だと芝浦は笑つて言う。

「本気で言つてのかわ?」

「……冗談だよ。俺だつてやだもんあんたとは戦うの」

一瞬、手塚に白けたような表情となるが笑つて冗談だと言う。

そのまま手塚は洗面所の方へと行き、鏡の自分を見る。

「いいのかわ……このままでと……」

「このまま信用していいか、か?」

すると声が聞こえ、手塚が声の聞こえた方を振り向くとそこに居た人物に驚いた。

「城戸……」

「別に怒つていないさ……ライダーバトルに、騙し討ちなんて合つて当然だ」

突如現れた真司?はそう言つて、手塚の肩に腕を置く。

「それより、お前も気付いているんだろ。芝浦の奴は信用できないつてな」

「それは……」

手塚が言い淀んだその時、真司の姿が消えた。

しばらく経った頃、テーブルに着いた二人は、お互いに警戒し合う。

二人の間に短い時が流れ、お互いにテーブルから立ち上がり、隣のテーブルに置いていたカードデッキを取る。

「変身!!?」

両者は変身し、外へ出てライアとガイとしての戦闘が始まった。

「やっぱり裏切ったか!」

「お互い様だろ」

『STRIKE VENT!』

ガイがメタルホーンを召喚し、腕に装備した。

そのままメタルホーンを使いライアに反撃する。

『COPY VENT!』

ライアはコピーベントを使い同じようにメタルホーンを召喚し、同じ武器がぶつかる。

しかし、ライアの方が優先だった。

『FINAL VENT!』

ライアはファイナルベントのカードを挿入し、エビルダイバーの背中に乗りガイに体当たりしようとする。

『CONFINE VENT!』

だがガイは、ライアのファイナルベントをコンファインベントの力で無効化にした。

「何……」

『FINAL VENT!』

ガイはメタルガラスを召喚すると、肩に乗り突進攻撃をライアに繰り出し、ライアを吹き飛ばした。

「うわああああああ!!?」

吹き飛ばされたライアはカードデッキを破壊され、変身を解除された。

そのショックで、手塚は過去の記憶を思い出す。

——それは真司や蓮と共に戦ってきた、過去の記憶だった。

「城戸……お前……」

手塚は力を振り絞り起き上がる。

「城戸……秋山……」

龍騎のデッキを持ち、手塚は真司の元へと向かう。

いきなり変身した浅倉から逃げてきたソウゴ達は、真司達が寝ぐらに使っていた廃虚ビルに戻ってきていた。

「はあ、はあ……危なかった」

「浅倉……強い上に、とんでもない」

「奴に期待したのは、間違えだったようだな……」

疲労で呼吸を乱しながら、息を整えていたソウゴ達。

すると耳鳴りのような音が、三人の近くから聞こえてきた。

「なんだ……」

「ソウゴ君！」

「みんな……」

そこへ、エール達プリキュアも偶然にやってきた。

「ソウゴの知り合い？」

「うん！」

「コスチュームかあれは？」

「ちよつと！何がコスチュームよ！」

「私達はプリキュアよ！」

「プリキュア？」

蓮の小声が聞こえたのかミルキイとプリンセスが蓮を睨む。

「あっ……」

「また会ったわね。時見ソウゴ」

「のぞみに会えてよかったね♪」

ダークドリームを見て、のぞみと会えてよかったねと言うとダークドリームが顔を逸らす。

「私も、あなたとまた会えて嬉しい!」

「……そう」

照れ臭そうに見えてソウゴは微笑む。

「その子は?」

彼女らの後ろにいたサラにソウゴが気付くと、真司と蓮も彼女に気づき、二人は警戒する。

「君は……」

「お前……俺達をこのミラーワールドでライダーバトルをさせて、何がしたい?」

蓮は何故ライダーバトルを起こすのかとサラに問う。

「私はゲームを終わらせる為に、このゲームを始めたんです」

『えっ?』

彼女はとあるゲームを終わらせるために、このライダーバトルを始めたと言った。

「私の大切な人が……たった一人で……今、プリキュアに向けてゲームを行なっていま

す……私の命を蘇らせるために」

「それって、昏睡状態の世界中のプリキュアと関係あるの？」

「彼はプリキュアの命を集めれば、私を復活できると言われたから……」

「プリキュアの命……」

「ちよつと待つて！なんで、そいつはそんな事をするのよ！」

ルージュは何故プリキュアの命を集めるのかわからず、サラに問いかける。

「プリキュアは強い女の子がなれるもの……みんなの強い力と命が吹き込まれば……」

「復活できる……でも、そんなの違うと思う」

サラの話聞き、ふとソウゴは口を開く。

「どんな理由でも、生きている人の命を奪って生き返らせるなんて……間違ってる」

「私もです。私もタツヤを止めたい……」

でも、私には何も出来ない。

だから……このライダーバトルを始めたんです。

そのために……キュアミラージュの力を貰ったんです。ミラージュさんから……」

「ミラージュさんが！」

キュアミラージュ。彼女は、アナザー龍騎の最初の犠牲者だった。

鏡の世界にいるサラは、そこからアナザー龍騎を止めるためにどうすればいいか悩んでいた。

『タツヤ……やめて……』

鏡から呼び止めても、彼女の声はタツヤには届かなかった。

『私の力を貸すわ、それであなたの出来る事をやって、彼を救って』

するとサラの隣にミラーージュが現れ、自身の力を貸すと言う。

『あなたは……』

『私はキュアミラーージュ……プリキュアよ。』

私の力を貸してあげる。それで、止めてあげて』

『ありがとうございます……』

ミラーージュはサラにプリキュアとしての力を与え、このミラーワールドの中での行動が可能になった。その力で彼女はアナザー龍騎になったタクヤの前に現れて、彼を説得しようとした。

——だが彼女は、タクヤの覚悟を甘く見ていた。

『待っててくれサラ……いや、今はミラーージュか……必ずお前を生き返らせる』

『違うのタクヤ！お願いやめて！これ以上、私のために彼女たちの命を奪わないで！』

『……ごめんサラ……君の願いでも、それは出来ない』

彼は彼女の説得にも耳を貸さず、サラを必ず生き返らせらんと言わんばかりにプリキュアの命を奪い続けた。

それでも彼女は彼を説得しようとするが、そんな彼女の前に阻む様に黒いフードの男が現れた。

『これ以上、彼の邪魔をしないでくれ』

『あ……貴方は……』

『……そうだな……彼に、君を蘇らせる為の方法を教えた者……かな？』

そう言うとその男は、タクヤを連れてミラージユの前から消えてしまった。だがそれを聞いていた彼女は、彼がタクヤにプリキュアの命を奪うように言った男なのだと察していた。

それから彼女がタクヤを説得しようとする、必ず肝心な所であるフードの男に阻まれ、ミラージユの前から消えてしまう様になった。

だがフードの男がそんな事をしなくても、タクヤはプリキュアの命を奪い続けるであろう。例え、彼女が望んでなくとも……

だから、彼女は真司達を集めてアナザー龍騎を止められる人材を探そうとした。

「そうか……ミラーージュさんが」

「だが、それで本当にお前は生き返れるのか？」

「少なくとも……タツヤはそう信じています」

「ありがとう。話してくれて」

「でも、そのタツヤにプリキュアの命を奪うように言った男って……」

「なんでその男の人は、プリキュアを知ってたんだろ？」

「ねえ、タツヤにプリキュアの命を狙うように話した男って、どんな感じだったの？」

ソウゴがサラに、タツヤにプリキュアの命を狙うように話した男について尋ねると、

サラの体が光に包まれ消えた。

「消えた……」

すると、後ろから近づいてくる足音が聞こえた。

「手塚！」

現れたのはガイにやられ、ボロボロの手塚だった。

「はあ………城戸、これを……」

手塚は血がついた龍騎のデツキを真司へ返す。

「お前………芝浦に……」

「城戸………お前は、お前らしくいればいい！」

「手塚……なんだよ。俺らしくて……」

「それと……もう一人の……お前に気を付け……」

手塚が何かを言い残し、その場で倒れてしまう。

「手塚……おい……手塚ああああー!!？」

真司が倒れた手塚に声をかけるが、手塚は静かに目を瞑った。

「もう一人の真司って……まさか……」

「ツ!!? その人から離れて!」

真司の近くから何かを感じ取ったダークドリームは、直ぐに手塚から離れるように叫ぶ。

すると、手塚の体が消え、そこから同じ姿をした真司が現れた。

「——この時を待っていた」

もう一人の真司が真司を掴み、顔を近づける。

「ようやくだ。俺を受け入れる。最強になるために……」

もう一人の真司、鏡像の真司が凄い威圧で真司を見ると、真司は体を震わせながら怯え出す。

「やだ……」

「俺達で、このゲームを終わらせよう」

「やだ……やだあああああ!!?」

真司鏡像が真司を誘惑する様に囁く。

すると二人の体が光り出し、辺りに黒いオーラが放たれた。それは部屋の中のガラスを全て破壊した。

「城戸……」

そこには、さっきまでいたもう一人の真司が消えていた。

「よるな……」

「えっ?」

「今の……俺に近づかないでくれ!」

「城戸……」

啞然とする連を置いて、真司は慌ててソウゴ達の前から去っていく。

「真司!」

「見つけた!」

ソウゴ達は真司を追いかけようとすると、そこにアナザー龍騎が現れた。

「プリキュア……」

「フラワーシュート!」

「フェザーブラスト!」

二人がメロディソードを放ち、油断していたアナザー龍騎に決まった。
「エール！アンジユ！」

エールとアンジユのおかげでソウゴと蓮は真司を追いかける。

その一方で、手塚が死んだ事も知らず芝浦は手塚を探していた。

「どこだよ……手塚……俺の愛を受け止めてくれよ……そうすれば……俺だけになる」
気が狂ったかのように芝浦は手塚を探す。そこへ、真司が現れた。

「城戸？」

「手塚は、死んだよ……代わりに俺が愛してやる」

龍騎のカードデッキを向けると、デッキが光り出し、違うデッキへと変わった。

「変身」

デッキをベルトに差し込むと真司の体が黒い影に覆われ、黒い龍騎…仮面ライダーリュウガへと変身した。

「お前の愛なんかいらねえよ……変身！」

芝浦も仮面ライダーガイへと変身した。

『STRIKE VENT!』

近づいてくるリュウガにガイはメタルホーンを装備する。

「うおおおおおー!」

メタルホーンで攻撃するが、リュウガはガイの攻撃を難なく躲す。そのまま攻撃を続けるがガイの攻撃は当たらない。

「かあー!」

その後、リュウガはカウンターでガイを追い詰めると、ガイはリュウガに歯が立たず攻撃を受け続ける。

そこへ、真司が気になって来たソウゴ、蓮が追いかけてきた。

「真司……」

『FINAL VENT!』

リュウガはファイナルベントのカードをブラックドラグバイザーへと差し込み、浮かび上がると、黒いドラグレッター…『ドラグブラックカー』が現れた。

「はあー!」

ドス黒いリュウガのライダーキックがガイへと決まった。

「はあ、はあ……ああああ!」

リュウガは既に立つことも出来ないガイを踏みつける。ガイは変身解除され、リュウガに向けて叫び続け消滅した。

「そんな……」

「次はお前達だ……」

リュウガがソウゴ達に迫ってくる。それを見てソウゴはジクウドライバーを装着する。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

ソウゴはジオウへとなり、リュウガに応戦する。

「やめろ！」

蓮が止めようとリュウガを抑えるが、簡単に振り払われ蓮は地面に転がる。

「!?」

その時、頭を打った衝撃によるものなのか、蓮の脳裏にあらゆる記憶が溢れてきた。

「何……」

その時、蓮の頭から聞き覚えがあるような声が聞こえてくる。

『待ってくれよ、みんな！こんな事して、何になるんだよ！』

『俺、決めたからな……ライダーの戦いを止めるって』

——己に、戦いを繰り広げる者達に向かって、真っ直ぐな声で放たれた、戦いを止めようとする声が、蓮の耳に聞こえて来た。

「城戸……お前だったのか……」

それにより、蓮は全てを思い出した。過去であった真司との関係も、全てを思い出した。

『フィニッシュタイム！ギリギリスラッシュー！』

「はああああー！」

その間にジオウがジカンギレードとリュウガのドラグセイバーが激突、両者引き分けに終わると、リュウガは去っていった。ジオウは変身を解き、頭を押さえる蓮の元へと寄る。

「蓮！大丈夫？」

「ソウゴ……お前は行け」

「えっ？」

「城戸は俺が何とかする……アナザーライダーとやらを止めに行け」

「わかった……」

リュウガとなった真司を蓮に任せ、ソウゴ達は急いでアナザー龍騎を追いかける。

その時、ソウゴのポケットが光り出した。

「これ……」

取り出すと、ポケットの中にあつたブランクウォッチが光っていた。

『龍騎！』

するとブランクウォッチが、龍騎ライドウォッチに変化した。

「龍騎……そうか、真司が別のライダーになったからか……蓮！」

ソウゴは龍騎のウォッチを蓮に投げ渡した。

「これは……」

「真司が元に戻ったら、そのウォッチを押しして！」

龍騎のウォッチを渡し、ソウゴはアナザー龍騎と戦うみんなの元へ走る。

その頃、ソウゴ達を探している王蛇が、物に当たりながら暴れていた。

「どこだ！俺の遊び相手はどこだッ！」

「先生……」

「お前か……誰でもいい！俺と戦え！誰か連れて来い！それとも……お前かあああ！」

浅倉はそう叫び、五郎を投げ飛ばす。

「遊んでやるぜ！」

そこへ、リュウガとなった真司が現れた。

「たつぷりとなア〜」

リュウガのカードデッキを向け、ベルトに差し込み、リュウガへと変身した。

「嬉しいぜ……城戸オ……変身！」

浅倉も王蛇のカードデッキを向けベルトに差し込む。

「あゝあゝ……」

王蛇となり、リュウガへと先に攻撃を繰り出す。

だが王蛇の攻撃はリュウガには簡単に避けられ、リュウガの方が王蛇を圧倒していた。しかし王蛇は苛立つどころか、何処か満足げにしながら戦いを続けていた。

「いいぞ……これだ！」

「はあー！」

「ぐわあー！」

突如としてナイトが現れ、王蛇を妨害した。

「お前が出る幕ではない……城戸の相手は、俺がする！」

「面白い……ああー！」

王蛇がベノサーベルでナイトを攻撃するが、ナイトはウイングランサーで王蛇の攻撃を受け止める。

「気付いてるか、浅倉……お前は死を望んでいる」

「……ああああ！！？」

『FINAL VENET!』

ナイトが振り払うと、ダークバイザーにファイナルベントのカードを挿入し、ナイト

のライダーキック『飛翔斬』を繰り出し、王蛇を吹き飛ばした。

「……城戸」

残るはナイトとリュウガの二人だけとなった。

その頃、ソウゴに真司を追わせる為、彼女らがアナザー龍騎と戦っていた。

「やああー！」

ドリームとダークドリームのダブルパンチを繰り出す、剣で簡単に受け流された。

「たあああああー!!？」

何度も二人で息の合ったラツシユを繰り出す、アナザー龍騎は腕でガードする。

「二人共退いて！プリキュア！ファイアストライク！」

二人が離れ、ルージュがファイアストライクを放つが、アナザー龍騎は鏡を作り簡単に跳ね返された。

「フレ！フレ！ハート！フェザー！」

跳ね返されたファイアストライクをアンジュがハートフェザーで防ぐ。

「たあああああ!!？」

今度はエールとラブリー、プリンセスがトリプルキックで奇襲を掛ける。

「はああー！」

アナザー龍騎のドラグクローとぶつかり合い、両者、引き分けて吹っ飛ぶ。

「エール!」

「大丈夫……」

アンジュがエールを心配するが、彼女は大丈夫だと言う。

「でも、あいつこの人数でも、まだ余裕みたい」

「手強いわね……」

「ええ……厄介だね」

プリンセス、ミルキイ、ルージユの三人も敵が強力だと呟く。

「それだけ、サラちゃんのことを思ってる事……」

「でも、人の命を奪うなんて間違ってる」

ラブリーとドリームがそんな呟きをしていると、それを見たアナザー龍騎は、ドラグ

クローに炎を集める。

「ウウ……うおお!」

アナザー龍騎のドラグクローから炎が放たれた。

咄嗟に守りの態勢に彼女達は入る。

すると鏡のフィールドが現れ、彼女達をアナザー龍騎の攻撃から守った。

「ミラージュ」

それは、サラが変身したキュアミラージュの力だった。

「皆さんは、元の世界へ戻って下さい」

ミラージュのおかげで守られているが、アナザー龍騎の執念がプリキュアを苦戦させる。

「やめろ！」

そこへ、真司を追いかけて戻ってきたソウゴが現れた。

「お前は……」

「加納タツヤ……君を止める」

「俺は……サラを……救う」

現れたソウゴにアナザー龍騎が襲いかかる。

「やるしかないか……」

『ジオウ！ デイ！ デイ！ デイ！ デイ！ ケイド！』

ジオウとデイケイドのウオッチをドライバーへと差し込み、ソウゴが構える。

「変身！」

『ライダータイム！ 仮面ライダー！ ジオウ！』

アーマータイム！ カメンライド！ ワーオ！ デイケイド！ デイケイド！ デイ

ケイードー！』

そしてドライバーを回し、ジオウ・デイケイドアーマーへと変身した。

「みんなは先に現実世界に戻って！」

狙いはみんなだ。だから、みんなは早く元の世界に戻るんだ」

「でも、あんた一人じゃ……」

「大丈夫……真司と蓮がいる」

「ソウゴ君……」

アンジュがジオウを心配していると、そこへキュアミラージュとなったサラが現れた。

「皆さん！早く！」

「早く！」

「私……みんな！」

「ソウゴ達を信じよう！」

「ソウゴ！」

「大丈夫！俺も後で戻るよ」

「ソウゴ君……必ずだよ」

「うん」

「また……会おうね……私」

「また、会えるわよ。私……」

アンジュ達がソウゴは戻ると信じ、ダークドリームとドリームはまた会おうと約束し、ミラージュが作り出した鏡が現れると、エール達は鏡へと入り現実世界へと戻った。

「貴様……」

「行かせないよ」

ジオウがアナザー龍騎を向かわせないようにする。

「私も……」

「こつちのぞみは、蓮の方をお願い！」

「……わかったわ」

ダークドリームはジオウの指示で、真司を止めに行った蓮を手助けしに向かう。

「ここから、俺が相手だ」

『ライドハイセイバー！』

「うおおおおお！」

アナザー龍騎の剣とジオウのライドハイセイバーがぶつかり合い戦闘が始まった。

その一方で、ナイトに邪魔された王蛇は地下の駐車場へと足を運ぶ。

「はあ、はあ………あああ！」

ナイトの攻撃で王蛇は既にボロボロになり、柱に背中を着く。

「先生……」

そこへ、心配になってやってきた五郎がやってきた。

だがなんと、五郎はゾルダのバイザーを王蛇に向けて放ち、無防備の王蛇はバイザーの狙撃を全て直撃された。

「お前……何故……」

「……この時を待ってたぞ……浅倉ああああ!!?」

五郎の態度が今までのものから急変し、王蛇へ向けて怨念の籠った叫びをあげる。

「お前……記憶を失っていなかったのか……」

「ずっと、この時を待っていたんですよ」

そう言うと五郎はゾルダのカードデッキを取り出す。

「北岡先生は……お前を倒そうとしていた……先生の意思是、俺が継ぐつす!」

王蛇に向かって怒りの感情を放ちながら、五郎はゾルダのカードデッキを前に向け、ベルトが巻かれると構える。

「変身!」

カードデッキをベルトの真ん中に差し込み、仮面ライダーゾルダへと変身した。

『SHOOT VENT!』

バイザーから巨大な銃・ギガランチャーを出現させ、王蛇へと向ける。
「貴様……」

『SWORD VENT!』

王蛇もソードベントのカードを使い、ベノサーベルを出現させる。

「ああああああ!!?」

「はあ!」

王蛇が走り出すと、ゾルダはギガランチャーを放った。

攻撃は、王蛇に直撃し爆炎が纏われた。だが…

「ああああああ!!?」

攻撃の爆炎から炎を纏い、王蛇は現れた。そのまま王蛇のベノサーベルはゾルダの胸を貫いた。

「ああ……」

ゾルダに剣が貫くと王蛇の方もベルトのデッキが壊れ、両者変身が解かれた。

「まだ……まだあああああ!」

だがそれでも浅倉はベノサーベルを拾い、歩き出した。

「先生……やりました……」

過去で仕えていた北岡秀一の名を呟き、やりましたと微笑みながら五郎は目を閉じ

た。

それによってゾルダのデツキは消え、五郎も一緒に消滅した。

ミラーワールドに残る二人のライダーが、決着をつけようとしていた。

「城戸、覚えているか。俺の中で、誰かの声が響いていると……」

「あれは、お前の言葉だった……」

「俺の中の真司に語りかけているつもりか……だが、無駄だ。奴はもういない」

自身に語りかけている蓮を見ながら鏡像の真司は、話しかけても無駄だと言う。

「目を覚ませ！ 城戸！ さもなければ、俺の手で……」

「ふん」

両者、カードデツキを向け構える。

「変身！」

そして二人は仮面ライダーリユウガ、仮面ライダーナイトへと変身した。

『SWORD VENT!』

両者の契約モンスターから渡された剣が手に渡った。

「はあああ！」

両者の剣がぶつかり火花を散らす。何度も何度も、二人の剣がぶつかり合う。

『GUARD VENT!』

リュウガはナイトのバイザーとウォッチランサーをドラグシールドで防いだ。

「あああああ!」

「ぐわあ!」

隙を突かれたナイトは、カウンターでリュウガの攻撃を受ける。

『STRIKE VENT!』

その隙にドラグクローでリュウガが黒い炎を放ち、ナイトに直撃させた。

『GUARD VENT!』

だが、ナイトは背中にマントを模したウイングウォールを装着し、リュウガの攻撃を耐えた。

『ADVENT!』

今度は二人の契約モンスター、ダークウイングとドラグブラッカーが現れた。

そして二人は、二枚のカードをお互いに取り出す。

『FINAL VENT!』

両者が浮かび上がり同時にライダーキックを放ち、ぶつかり合った。

「うわあああ!」

ぶつかり合ったキックはリュウガが勝利し、ナイトは負けて地面に倒れた。

「くう……」

「これで、俺の勝ちだ!」

リュウガがドラグセイバーをナイトに向けて振ろうとした途端、リュウガの攻撃が寸前で止まった。

「何故……まさか、俺の中の真司が……」

「それが、俺と城戸の絆だ!」

『FINAL VENT!』

「かああああああ!!?」

もう一度、ナイトのファイルベント『飛翔撃』がリュウガに向けて放たれ、リュウガは何も出来ず攻撃を受けた。

「ぐわああああああ!!?」

ナイトの攻撃を受け、リュウガの変身が解除され真司の姿に戻った。

「ああああ……あああ!!?」

——その時、ナイトの攻撃が真司に過去の記憶を呼び起こす。

蓮や多くのライダーと一緒に戦い、敵として戦い、蓮と共に過ごした日々を。

そして、ライダーバトルで一度は死んだ事も……

「俺は……蓮……」

「城戸……戻ったのか……」

ナイトも変身を解き、真司に近づく。

「はあ!!？」

だが真司はいきなりドラグセイバーを取り出し斬りかかると、咄嗟に蓮もダークバイザーで攻撃を止めた。

「奴はもういない……」

どうやら真司の中には、まだ鏡像の真司がいる様だ。

「あああああああー!!？」

「!!??」

そこへ、ベノサーベルを持った浅倉が二人の間に現れ、二人は咄嗟に避ける。

「あああ……!ああああ”あ”!」

浅倉は闇雲に振るうかのように、ベノサーベルで真司と蓮に振りかかる。

「あつ!」

真司の持ったドラグセイバーが手から離れた。それを見た浅倉は、真司に突き刺そうする。

「城戸おおおお!!？」

真司に振りかかる攻撃を見た蓮が、咄嗟に真司の前に出た。

「があっ……………」

そして、ベノサーベルは蓮の胸の下を貫いた。

「ツッ!?」

真司が驚愕している前で血を纏ったベノサーベルを浅倉が抜くと…

「!?……………まだだ!もつと……………もつとおおツッ!」

戦いに狂った様な叫びをその場に響かせるが、浅倉の体はこの世界で維持できなくなり、消滅していった。

真司は倒れる蓮を急いで庇う。

「おい……………蓮、目を開けろよ……………」

「……………ハツハツハツ……………」

やはり……………記憶が……………戻っていたか……………」

微かにだが蓮には意識がまだあった。

「わざと俺にやられるために……………下手な演技を……………」

なんと、鏡像の真司がいる様に見えたのは、本物の真司の演技だったのだ。

「蓮……………おいッ!」

「前の戦いでは……………お前が先に死んだ……………」

16年前の戦い、仮面ライダー龍騎の原点となる戦い。

その時のライダーバトルでは、真司はモンスターから女の子を庇い、死んだ事を話す。

「今度は……俺か……」

「おい……死ぬなよ……っ」

「城戸……あの時……言えなかった事を言わせてくれ……」

「なんだよ……」

「正直に言う……俺には……友と呼べる奴がいなかった……」

だが、お前は……唯一の……友と、言えるかもしれない……」

「ああ……友達だよ……俺達は……だから、生きろよ！」

「はあ、はあ。相変わらず……バカだな、お前は……」

「死ぬなよ……蓮……」

真司は目を瞑ろうとする蓮を必死に揺する。

すると、ダークドリームが二人の前に現れた。

「君は……」

「あなたは生きなきやだめ。だから……私の命を渡す……」

「えっ？」

ダークドリームが蓮の貫かれた傷の場所に手を当てるとダークドリームの体が光り、蓮の傷口が塞がっていく。

そして、同時に血が止まっていった。

「蓮!」

「城戸……」

傷口が塞がると、蓮は戸惑いながらも目を覚ました。

「あつ……」

「おい!大丈夫か!」

そして、突然倒れたダークドリームを真司が支える。

「どうして、蓮に命を……」

「……さあ?　なんか、あんた達は死んだらいけないような気がしたからかな……」

「お前……」

「向こうに行ったら、あの子………伝えて……」

また……別の鏡の世界に行くから………そこで、また、会おうねって……」

そう言っただークドリームは体が綻んでいく。

「お願いね………」

そのまま、のぞみへの伝言を伝えて、彼女は笑って消滅していった。

すると、二人の前にサラが現れた。

「戦いは終わり、勝者はあなたです」

一度死にかけてから復活した蓮はライダーバトルから外れたため、残る真司がこのバトルの勝利者となった。

「では、私の命を与えます」

サラの体が光り、真司へと光が集まっていく。

「これであなただ達二人は、現実に戻る事が出来ます。

ですが、私のわがままを聞いて貰えますか……タツヤを止めてください……

そして、タツヤに力を与えたあの男を……ゲームを……」

「わかった……」

「お前の願い俺達が叶えて見せる」

二人はサラの願いを受け入れた。

「ありがとうございます。そして……本当に……あなた達に……多くのプリキュアに

……私のせいで……ごめんなさい！」

泣きながら謝り、サラは真司と蓮の前から消えた。

「城戸」

蓮はソウゴから預かった龍騎ウオッチを渡した。

『龍騎！』

ウオッチは龍騎のカードデッキへと姿を変えた。それを見た二人は顔をお互いに向

けて頷く。

「変身!!?」

カードデッキを向け、デッキをベルトへと差し込むと二人の体は重なり、仮面ライダー龍騎、仮面ライダーナイトへと変身した。

「しゃあ!」

二人は変身を完了し、アナザー龍騎を止めに向かう。

（——龍騎、ナイト……本当に、ありがとう……）

タツヤ……ごめん——）

——そして、現実の病院の医務室で眠るサラの心拍数、脈拍数の数字が、ゼロとなった。

その一方、今戦っているジオウ達は……

「うわああああああ!!?」

アナザー龍騎の反射する攻撃にジオウは苦戦していた。

「邪魔させない」

ジオウはライドハイセイバーの針を龍騎へと回す。

『ヘイ！龍騎！ 龍騎！デュアルタイムブ레이크！』

炎を纏ったライドハイセイバーの攻撃を放ち、アナザー龍騎へと放つとアナザー龍騎は返せなかった。

「効いてる……よし」

「俺は……サラを……救う」

ジオウの攻撃を受けてもなお、アナザー龍騎は起き上がる。

「……こんな事をして、サラさんは喜ばないよ！」

「うるさい！サラを救うためなら！」

アナザー龍騎が説得しようとするジオウに振りかかる。

「無駄なことするな」

そこへフードを被った男性が現れた。

「今は外にいる、プリキュア全員の命を奪うのが先だ」

「……」

フードの男にこれ以上無駄な戦いをするなど言外に言われ、アナザー龍騎は鏡へと向かう。

「っ!? やめろ！ぐわあ！」

向かおうすると、突如ジオウに攻撃が放たれ、変身解除してしまった。

「どこから……」

起き上がるとアナザー龍騎とフードの男は消えていた。

「大変だ。早く行かないと」

すぐに向かおうと鏡を見るが、やはり鏡に近づいても何も起こらない。

「ダメか……」

コレでは現実世界に行けず、ダメかと思つたソウゴ。そこへ……

「ソウゴー」

龍騎とナイトが現れ、二人は変身解除した。

「真司！元に戻つたんだね」

「ああ、それより早く現実世界に戻ろう」

「どうやって？」

「この世界の出口、俺達が最初に集められた場所へだ」

真司と蓮の案内で四日前に集められたライダーバトルの始まりの場所へと向かった。

その頃、現実世界でタイムマジンが置かれた広場では……

「「うわあああああ!!?」」

鏡にいたソウゴを除くメンバーが戻ってきた。

「はな！ さあや！」

「のぞみ！ くるみ！ かれん！」

「めぐみ！ ひめ！」

倒れて現れたみんなにツクヨミ達が駆け寄る。

「ソウゴはどうした？」

「まだ、鏡の中……」

「一人でアナザーライダーを止めようと……」

「そんな……どうやって戻るのよ」

「みんなは……」

「アナザーブレイドの目的がわかったから、その男をみんなで探している」

あの後、相川始について調べると、彼は『真崎剣一』の名前でカメラマンをしている事を知り、写真スタジオから情報得て彼の居場所を探している。

ゲイツ、ほまれ、ハリーは違う写真スタジオへと向かう。

「真崎剣一とカメラマンを知ってますか？」

「ああ、真崎君ね。何年か前まで、ここでカメラマンしてもらったんだ」

「今、何処にいるかわかりますか？」

「いや、素性はあまり……」

うらら、かれん、こまち、いおな、ゆうこは、写真週刊誌の事務所に立ち寄る。

「真崎剣一さんのこと知ってますか？」

「真崎君ね。彼凄く良い写真撮るだよ。本当……ずっと居て欲しかったよ」

その時載せられた、週刊誌での風景写真を見せる。

「綺麗〜」

「写真から優しさが伝わる〜」

「それで、どこに住んでいるとか聞いてますか？」

「ああ……確か……」

黒ウオズとえみるとルールーは、相川始の住んでいる場所を探していた。そこへルールーに連絡が入る

「分かりました」

「栗原天音は自分を庇護してくれたカリスを忘れられずにいる。そんな弱さを敵に付け込まれた。」

困ったものだね、過去の関係をずっと引きずるとは……」

「それは、ウオズとゲイツも一緒だと思います」

「えっ？」

「二人は過去でも、ここではそれは未来だと思っています」

「……」

相川始は山の中にある、山小屋らしき場所に居を構えていた。

栗原家とハカランダで撮った思い出の写真を眺めると、ドアが開く音が聞こえた。

「天音ちゃん……」

そこへ天音が入ってきた。

「始さん……どうしてハカランダから出ていったの？」

「どうして……私の……」

すると、机に置かれた風景写真に目を惹かれる。

「はあ……綺麗……!」

その写真は綺麗で、人間らしさを感じられる写真だった。

「この写真が……始さんが撮りたかった世界なんだ!」

「これが……本当の俺なんだ。」

俺がずっとそばにいたら、天音ちゃんは本当の天音ちゃんにならない。だから俺は

……」

「始!」

外から始を呼ぶ剣崎の声が聞こえ、始は外に出る。

「剣崎……どうしてここに?」

始は目の前にいる彼の姿を見て、どうしてここに剣崎がいるのだと思ひ驚く。

それを離れた所から、未来ノートを開いた白ウオズが立って見ていた。

自身の思惑通りにことが進んでいる事実を確認しながら、自身が未来ノートに書いた文字を見る。

『剣崎一真、相川始のもとに現れ戦い始める』

白ウオズが未来ノートにそう書き込み、二人を出会わせたのだ。

「やはり俺達は……戦う運命か」

二人はラウズカードを取り出し構える。

「変身!」

『TURN UP!』

『CHANGE!』

二人はブレイドとカリスが再び変身し、戦闘を始めてしまう。

「止めて! 2人とも争わないで!」

「天音ちゃん」

「それが剥き出しの君の心だったか」

二人を止めるように訴えると、白ウオズが天音の前に現れた。

「!?——私が……私が始さんを追いかけたのが間違いだった」

「だがもう遅い」

白ウオズが手を挙げ、天音の胸に埋め込まれたアナザーウオッチが起動する。

『ブレイド……!』

白ウオズは天音を無理やりアナザーブレイドに再変身させる。

「うわあああああ——っ!」

ゲイツ達は他の全員と合流し、相川始のいる山へと到着した。

「相川始はこの上だ」

「我が魔王は?」

「ごめん、まだあつちに……」

すると、山の天辺から爆発が起こった。

「爆発?!?!」

「上で何かあったのかな?」

「急ぐぞー!」

ゲイツ達は山を登り、相川始の元へと向かう。

それを白ウオズが見ていた。

「我が救世主。いや、もう救世主じゃない。君は世界を救えない」

世界を救えないと言い放ちながら、白ウオズはゲイツ達を見つめる。

その頃、再びアナザーブレイドとなった天音を相手に苦戦するブレイドとカリス。

「止めるんだ! 天音ちゃん!」

「天音ちゃん!」

「私は……うわあああああー!」

二人は彼女に呼びかけるが、アナザーブレイドの全身からオーラが放出された。

「あああああー!!?」

ブレイド、カリスに大剣を一振りし、一閃を放った。

「うわああああ!!?」

爆発が巻き起こり、崖からブレイドとカリスが吹っ飛ぶ。

「ああああ……」

「…天音ちゃん……」

「ふうん！」

すると、アナザーブレイドは変身解除された剣崎と始の体から緑色のオーラの様な何かを吸い込んでいく。

吸い込みが終わると、剣崎と始はある異変に気付いた。

「ジョーカーの力が……」

「消えた……」

彼らから流れていた緑色の血が赤くなったのを証拠に、二人の持つジョーカーの力がアナザーブレイドへと吸収され、アナザーブレイドの右胸に赤いハートの紋章、左胸に緑色のジョーカーの紋章という、新たなマークが足された。

そこへ、山を登ってきたゲイツ達が到着した。

「遅かったか……!」

「大丈夫ですか?」

ゆうこうとうららが駆け寄り、剣崎と始に駆け寄る。

『ゲイツ!』

『ウオズ!』

「ミライクリスタル! ハートキラッと!」

「プリキュア! メタモルフオーゼ!」

「スカイローズ! トランススレイト!」

「プリキュア! くるりんミラーチェンジ!」

「プリキュア! きらりんスターシンフォニー!」

ゲイツとウオズ、はな達はそれぞれの変身アイテムを使い、仮面ライダーとプリキュアに変身した。

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

『投影! フューチャータイム! スゴイ! ジダイ! ミライ! 仮面ライダーウオズ! ウオズ!』

「輝く未来をく抱き締めて! みんなを応援! 元気のプリキュア! キュアエール!」

「みんなを癒す! 知恵のプリキュア! キュアアンジュ!」

「みんな輝け! 力のプリキュア! キュアエトワール!」

「みんな大好き! 愛のプリキュア!」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

「HUGっと! プリキュア!」

「大いなる希望の力! キュアドリーム!」

「情熱の赤い炎! キュアルージュ!」

「弾けるレモンの香り！キュアレモネード！」

「安らぎの緑の大地！キュアミント！」

「知性の青き泉！キュアアクア！」

「青い薔薇は秘密の印！ミルキイローズ！」

「希望の力と未来の光！華麗に羽ばたく5つの心！YES！プリキュア5！」

「世界に広がるビッグな愛！キュアラブリー！」

「天空に舞う蒼き風！キュアプリンセス！」

「大地に実る命の光！キュアハニー！」

「夜空にきらめく希望の星！キュアフォーチュン！」

「ハピネス注入！」

「幸せチャージ！」

ラブリーとプリンセス、ハニー、フォーチュンは二人一組となって、声をそろえる。

「ハピネスチャージプリキュア！」

「剣崎！俺たちも行くぞ！」

「ああ！」

ゲイツ達が変わ身したのを見た剣崎と始も、もう一度ラウズカードを取り出し構える。

「変身！」

『TURN UP!』

『CHANGE!』

二人はブレイド——頭部のマスク部を保護するクリアシールド・スペードシールドが薄い金色から銀色へと変化、及び元に戻っていた——とカリスに再び変身した。

全員が変身完了し、アナザーブレイドの上に現れた、バトルファイトの統制者の意志を伝えると言われている捻じれた黒い石板——モノリスに構える。

「来たなプリキュア。ゲイツ、ウオズ」

そこへ、クライアス社のダイガンが骸骨型のオシマイダーを連れて現れた。

「誰?」

「あの人は……」

「私の名前はダイガン。今までの雑魚社員とは一味違うぞ。」

私が登場したからには、五分で——いぎやああああああつ!」

その時、背後から光弾がダイガンに直撃した。

『ツッ?』

「な、何が起きたのです?」

「後ろからの攻撃……!? 一体誰が……!」

「いやあ、宣言通りとは恐れ入る。本当に、五分で終わったね」

するとダイガンの後ろから、シルクハットを被った壮年の男性が現れる。

「いや、五秒だったかな？」

「ドクター……トラウム……何故……アンタもクライアス社の……」

壮年の男性は、ダイガンと同じクライアス社の一員だった。

「どう言う事……？仲間なの……？」

「仲間だつてのは確かみたいだけど……こんなあつさり……！」

アンジユが倒れたダイガンに駆け寄ってしゃがむ。

「しっかりして……！」

そしてプリハートから光の球を出し、その光でダイガンを癒す。

「ありがとう……とても楽になった……」

私も……もう一度……」

その言葉を最期に、ダイガンが消滅した。

「まさか宿敵であるプリキュアに癒されて退場とは、全く羨ましい……じゃなかった。何ともけしからん奴だ」

「仲間じゃ……無かったの……!?？」

「えっ？ お嬢さん、三十過ぎた大人にはそんなの存在しないんだよ」

「同じ会社で働いてたんでしょ！」

「彼は我が社のお荷物だったんだ」

「お荷物……!??!?」

「人を物扱いするな!」

エールとドリーム、ラブリーが叫ぶが、トラウムに何も感じなかったかのように次の行動を開始した。

「今週の、ビックリドンドンメ〜カ〜!」

トラウムは自分の顔を模したメカに『猛』と書かれたチップを注入する。

「発注! 猛オシマイダー!」

小型のオシマイダーと社交ダンスを踊り、メカにダイカンのオシマイダーを挿入させる。

「ピコつとね〜」

小型オシマイダーの持つスイッチを押し、ダイカンのオシマイダーを強化させた『猛オシマイダー』を作り出した。

「オシマイダーが……パワーアップした……!」

「何て禍々しい……!」

そこへ、フードを被った男性とアナザー龍騎が現れた。

「邪魔はさせない」

フードの男はプリキュア達にカードデッキを向けた。

「あれって……」

「真司と蓮と同じデッキ……」

「まさか……」

「変身」

フードの男はデッキをベルトに差し込むと影が体に重なり、不死鳥をモチーフにした姿をした黄金の仮面ライダー……仮面ライダーオーデインが現れた。

「あれに飛び込め……そうすれば、願いは叶う」

「サラ……」

オーデインの指示で、アナザー龍騎は猛オシマイダーへ飛び込んだ。

すると猛オシマイダーとアナザー龍騎が融合し、猛オシマイダーの左手に巨大なドラグクロー、右手にドラグセイバーを持ち、頭部がドラゴンの頭蓋骨の様になった。

「名付けるなら、『猛オシマイ龍騎』の誕生！」

トラウムが作り出した猛オシマイダーとアナザー龍騎が交わった事で、猛オシマイ龍騎が誕生した。

彼から放たれた邪悪なオーラは、今までのオシマイライダーとは計り知れない威圧感があつた。

「寄越せープリキュアの命ー！」

猛オシマイ龍騎がアナザー龍騎の剣を振り、戦闘が行われた。

ミラーワールドでは。ソウゴが真司と蓮の案内で、鏡に覆われた部屋へやってきた。

「ここが……」

「俺達が集められた最初の場所……」

「おそらく、ここに元に戻るヒントがあるはず……」

すると一枚の鏡が光り出し、その鏡は映像化するように変わった。

「みんなー！」

そこには、猛オシマイライダーとアナザーライダー、そして奴らと戦うみんなの姿が映し出されていた。

「あれを潜れば……」

「よしー！」

「せーのー！！？」

三人は鏡へ飛び込むと、鏡に吸い込まれる。

「うわああああー！」

そして三人は、なんとか現実の世界へと戻ることが出来た。

「ここは……」

ソウゴ達は相川始の住む家の山の中、その入り口へとやってきた。

「急がないとまずいんじゃないのか……」

「うん！」

ソウゴ達もみんなのいる場所へと向かう。すると……

「白ウオズ……」

白ウオズがソウゴ達の前へ現れた。

「敵か？」

「さあ……」

白ウオズは後ろにいる真司と蓮を見る。

「(ライダーバトルが終わったか……) もはや、無駄だ。

ジョーカーの力が今一つになり。バトルファイトは終わり、滅びが始まる」

白ウオズの狙いはやはりジョーカー同士を合わせ、最後にジョーカーを一人にさせるのが狙いだった。

「先に行つてて。俺は白ウオズと話すことがある」

「なんで君が？」

「いいから行って」

「…分かった」

ソウゴを残し、真司と蓮は先へ進む。

「魔王。君と話すことなどないよ」

「白ウオズはさ、白ウオズが目指す未来にしたかったんじゃないの？それが今は世界を終わらせようとしている…どうして？」

「私の望んだ未来は訪れない。ならば…未来などいらナイ」

「諦めんなよ…！勝手に未来を決めつけるなって、言ってるんだよ！決められた未来なんてない。今を生きてる俺達が創りだすのが未来なんだ！」

「魔王。分かっているかな？私は君の敵だよ」

「分かっているよ。だから最後の最後までもがいて、俺達を苦しめればいいじゃん。俺は…俺達は白ウオズに負けないように戦うからさ」

ソウゴの言葉を聞いた白ウオズは何も言えなかった。

その頃、上の方では…

アナザーブレイドが呼び出したモノリスから現れた黒い蟲の姿をした怪生物・ダークローチに、ジョーカーの力を奪われたブレイドとカリス、その二人に加勢したゲイツ、

ウオズが応戦していた。

「始！どうすれば！」

「天音ちゃんを元に戻せ！そうすれば……」

「わかった！」

必死にダークローチを倒し続け、アナザーブレイドと向かう。

『SLASH! THUNDER! LIGHTNING SLASH!』

『DRILL! TORNADO! SPRINTING ATTACK!』

『フィニッシュタイム！ギワギワシユート！』

ゲイツ、ブレイド、カリスの三人が技を放ち、現れたダークローチは全滅した。

「はあ！」

するとオーデインが二人の後ろに現れ、ブレイドとカリスを攻撃した。

「うわああああ！」

オーデインの攻撃にブレイドとカリスは遠くにぶっ飛ばされる。

やはり、ジョーカーの力を奪われた影響で適合率が下がったのか、二人は少なからず弱体化してしまっている様だ。

次にゲイツとウオズは仮面ライダーオーデインに戦いを挑む。

「はああああ！えっ？うわあ！」

「うおお！何!? ああああ！」

しかし、ジカンザックスとジカンデスピアの攻撃は簡単に避けられ、何度もカウンターを受ける。

「その程度は相手にならない！」

『SWORD VENT!』

オーデインが繰り出した二本の剣がゲイツとウオズを襲う。

「うわああああ！」

ゲイツとウオズは仮面ライダーオーデインのスピードとパワーに圧倒され、変身解除となった。

「くう……なんて力だ……」

「私達の力が……通用しない……」

「私には勝てない、このサブライブカードがある限り……」

そう言つて、オーデインバイザーから三枚の『SURVIVE』と書かれたカードを見せる。

「あのカードの力か……」

その時、オーデインのバイザーにあった二枚の羽の描かれたサブライブのカードが消えた。

「何ッ!?」

「どうやら、そのカードは俺達を選んだようだな……」

「まあ、返してもらった。が正しいか」

「一枚のサバイブのカードは、やってきた真司と蓮の元へと移動していた。」

「城戸さん!」

「蓮さんも!」

真司と蓮はゲイツ達に駆け寄る。

「ソウゴの仲間でしょ」

「ソウゴは……」

「安心しろ……こっちに戻っている。」

今、下にいる白いその男と話をしている」

「もう一人の私と……」

「ここは、俺達に任せて」

ソウゴは白ウオズと話している事を話すと、真司と蓮はオーデインに近づく。

「もうやめよう。神崎……」

「神崎……」

「記憶が戻ったか……」

オーデインが変身を解き、変身者であるフードの男がフードを挙げる。

「久しぶりだな……」

フードの男、神崎士郎は真司と蓮に久しぶりだな、と言う。

「貴様が加納タツヤに力を渡し、そいつを使い優衣を蘇らせる」

「本当の狙いは、加納タツヤの望みを叶えるためじゃない。優衣ちゃんを生き返らせる為だろ」

神崎優衣。それは、神崎士郎の妹の名前である。

彼が妹のために加納タツヤを利用していると睨むと、神崎は再びオーデインとなる。

「その通りだ」

オーデインは二人の推理を肯定すると、光の玉——プリキュアの生命エネルギーを見せる。

「クライアス社の資料から、プリキュアの命なら優衣の命となる可能性がある」と知った。だから利用した」

やはり、妹の復活が神崎の真の目的だった。

「お前のゲームはもう終わらせる」

「神崎……これでライダーバトルを終わらせる！」

真司と蓮はデッキを向けベルトを纏う。

「変身!!?」

デッキを差し込み、二人は再び仮面ライダー龍騎、仮面ライダーナイトへと変身した。そして、二人はサバイブのカードを見せると、二人のバイザーは姿を変えた。

その時、炎と疾風が周囲から放たれた。

『SURVIVE!』

新たなバイザー・ドラグバイザーツバイとダークバイザーツバイにサバイブのカードを差し込む。

そして、二人は炎と風を纏い姿を変え、龍騎サバイブ、ナイトサバイブへフォームチェンジした。

『ADVENT!』

サバイブの力で強化されたドラグランザー、ダークレイダーが現れた。

『ADVENT!』

オーデインも契約モンスター『ゴルドフェニクス』を召喚した。

ゴルドフェニクスとドラグランザー、ダークレイダーがぶつかり合う。

「俺達も協力する」

「先の戦いを続けよう」

ブレイドとカリスも加わり、四人はオーデインへと立ち向かう。

一方、必要にプリキュアを狙う猛オシマイ龍騎がプリキュア達を襲う。

猛オシマイ龍騎が突進し、エール達がそれを跳んで避けると、クローから火球を放ち、左右からアンジュとアムールが突っ込む。だがパンチとクローからの火炎放射を受ける。

「うああああああっ！」

そして二人に気を取られてたエトワールとマシエリの背後に突如現れ、パンチを叩き込まれる。

「はああああああっ！だだだだだだだだっ！」

エールがラツシユを繰り返すが効かず、パンチを受けて吹き飛ぶ。そして彼女が体勢を整えた直後に猛オシマイ龍騎が目の前に現れ、エールに向かって火炎が放たれる。

エールは火炎を避け続けるも再度また放たれ、直撃して地面に叩き付けられた。

「プリキュアー！」

「ふいきゅあ〜！」

やられるエール達を見たはぐたんが泣き出す。

「何て……パワー……！」

エール達五人は猛オシマイ龍騎に苦戦する。

「ここは、私達任せて」

「先輩としての底力見せてあげる！」

今度はプリキュア5とハピネスチャージプリキュアが猛オシマイ龍騎に挑む。

「うおお！」

猛オシマイ龍騎は火炎の攻撃を玉のように放つ。

「プリキュア！エメラルド・シールド！」

ミントがバリアを展開し、火炎の攻撃を無効にした。

「プリキュア！プリズムチェーン！」

まず、レモネードがプリズムチェーンで動きを止めた。

「今です！」

そこへ、ルージュとハニーが現れた。

「プリキュア！ファイアストライク！」

「プリキュア！ハニースーパースニックスパーク！」

二人が炎の球とクローバー型のエネルギー弾を放ち、鏡を展開出来ない猛オシマイ龍騎が怯む。

「フォーチュン！」

「ええ！」

「プリキュア! サファイアアロー!」

「プリキュア! フォーチュンスターバースト!」

アクア、フォーチュンの二人が同時に放った技が猛オシマイ龍騎が宙に浮き上がられた。

「「いやあああああ!!?」「」」

宙に上がった猛オシマイ龍騎を、ドリーム、ミント、ラブリ、プリンセスの四人が同時に地面に向けてキックを放ち、地面に衝突した。

「先輩達に負けてなんか……いられない……!」

エールが立ち上がろうとすると、近くに立っていた人物に気付く。

そこに立ってた男性は、ジョージだった。

「危ない!今の内に逃げて!」

立ち上がったエールがジョージの前に止まり、逃げるよう促す。

「——君は、本当に素敵な女の子だね」

「えっ……?」

「あの本は……!」

「……遅いぞ社長」

「社長……?」

トラウムが社長と言うと、ジョージの持ってた本が、青白く光り出す。

「離れる！ エールツ！ ソイツは……！」

「クライアス社の社長、ジョージ・クライ！」

何とそこにいる男性は、クライアス社の社長であるプレゼント・クライこと、ジョージ・クライだった。

この場にクライアス社の社長がいた事に、エールだけでなく全員が驚愕する。

エールはすぐにジョージから距離を取ろうと走り出した直後、プリハートが飛んで行き、ミライクリスタルが外れてジョージの元へ飛んで行く。

更に技を放つ時用のミライクリスタルも飛んで行き、上に掲げたジョージの右手の真上に、時計回りに回転し出す。

「この時を……待っていた」

そう言うと同時に、エール達の変身が解けた。

「君達がミライクリスタルを生み出し、アスパワワを集めてくれると、信じていたよ」
「ミライクリスタルを……！ 明日への希望を……！ 返して！」

ほまれがジョージに向かって跳ぶが、その手は届かなかった。

「ドクター」

トラウムが懐から先端に赤い物体が付いた棒を取り出して投げ、ジョージがキャッチ

する。

「明日への希望よ、消えろ!」

そう叫ぶと同時に手から棒が散らばり、ミライクリスタルに当たる。

そしてその赤い物体がミライクリスタルを覆うと、ミライクリスタルが黒く染まる。

「はぐたん……!」

更にはぐたんの額の飾りも、連動するかの様に点滅し出した。

下にいるソウゴも白ウオズとの話が終わり、ゲイツ達の下に向かおうとする。

「じゃあ、俺行くね」

「待つんだ、魔王」

白ウオズの肩をそっと叩いて進み始めるソウゴを白ウオズが止め、奪ったジオウウオッチIIとゲイツリバイブウオッチを見せる。

「これを」

ジオウウオッチIIとゲイツリバイブウオッチ、そして白ウオズからトライアングルのように力が集まり、融合しようとしていた。

それはソウゴの手へと移動した。

『トリニティ!』

「うわ！凄いの出た！」

三つのウオッチから新たなウオッチが作り出されると、ソウゴの手へと置かれた。

「もし、君がこれを使えば、私も認めよう」

「……？ 何を？」

白ウオズが認めると言うが、どう認めるのかソウゴにはわからなかった。

「行け。魔王よ」

そう言って、ジオウライドウオッチⅡとゲイツリバイブライドウオッチもソウゴへ返す。

「うん！ありがとう！」

白ウオズからウオッチを受け取り、みんなの元へと走る。

上の方では。突然のクライアス社の登場に、全員の動きが止まり、宙にあるクリスタルを見つめる。

「想定通りだ。大きな希望程、破れた時の負の力が凄まじい」

「どうして……？ 夢があるって……みんなが笑顔の国を作るって……話して……」

「新たな苦しみが無ければ、皆笑顔でいられるだろう？」

だから、時間を止める。

皆が笑顔のまままで暮らせるように。共に終わらぬ、永遠を……!」
はなの問いにジョージがそう答えると、はな達がいた場所を中心にトゲパワワが放出された。

『ツ!?——』

——それにより、世界の時が止ってしまった。

町も人も虫も、そして風や気温さえ、感じ無くなった。

「もう何も生まれない。永遠の幸せの始まりだ」

「うわあああああぁぁぁん!!?」

「……!」

ジョージの耳に泣き声が聞こえて下を向くと、はぐたんが泣いていたのが見えた。

「時が止まった中で動けるとは……」

「はぐたん!」

ようやくソウゴも現れ、はぐたんを抱っこした。

「大丈夫だよ。はぐたん」

「ソウギョ〜!ソウギョ〜!」

ソウゴを見てはぐたんも落ち着きを取り戻した。

「ゲイツ!ウオズ!」

ソウゴはゲイツと黒ウオズに駆け寄る。

「ソウゴ……遅いぞ」

「良くぞ来てくれた……我が魔王」

二人を介抱しながらゲイツにゲイツリバイブウオッチを渡すと、改めて周りの状況に驚く。

「何これ……はな！ さあや！ ほまれ！ ルールー！ えみるちゃん！ のぞみ！ めぐみ！ 真司！ 蓮！」

「ハリー！ ツクヨミ！ まさか……」

「時間が止まった……」

動けるのはソウゴ、ゲイツ、ウオズ、はぐたんとクライアス社達だけだった。

「でも、なんで俺達は動けるの？」

「君達が動けるのは、そのウオッチのおかげのようだね」

ジョージはジオウⅡとゲイツリバイブ、ミライドウオッチのおかげでソウゴ達三人は動けると推測する。

「あんたは？」

ソウゴがその人物を見ると、どこかで見たことがあるような顔だった事に気付く。

「クライアス社の社長……プレジデント・クライだ」

「えっ?この人が……」

「こうして話すのは初めてだね。時見ソウゴ……いや、オーマジオウ……」

「どうだい?君達、クライアス社に来ないか?」

「えっ?」

「どういうことだ?」

「ジョージはソウゴ達にクライアス社に入らないかと誘う。」

「君が……オーマジオウになり、我々のために力を使う。そうすれば……」

「ごめん……俺は、オーマジオウになる気はない」

それに対してソウゴはクライの誘いを断り、更にオーマジオウにはならないと答える。

「ほう……王にはなりたくない?」

「いいや。俺はみんなの為に、尽くせる最高最善の魔王になる!」

「無駄と言つても?」

「俺は未来を……信じる!どんな事でも、俺達なら変えられるそんな気がするから!」

「っ!」

ソウゴは新たなウオッチを見せると、それを見たジョージが少し表情が変わった。

それを見てゲイツとウオズは起き上がる。

「ゲイツ君。私を許せないのは分かる。しかし……」

「今はそんな話をしている場合じゃないだろう！」

「だが……これで世界が終わるかも知れないからね」

「だったら言わせろ！俺はお前が気に入らん！」

「だろうね……」

「しかし、いつまでも過去に拘る自分も気に入らん」

「……」

「だから……ソウゴ達と共に、まだ知らない未来を作るのも悪くない。

奴と俺達とでな……お前も見てみたくはないか？」

「確かに……興味深くは……ある……」

ウオズも、ソウゴやゲイツ達と共に新しい未来を見たいという。

「とりあえず……クライアス社を倒さないことには未来はない」

「そうだね。私もクライアス社を倒すことには賛成だ」

「行こう！ゲイツ！ウオズ！」

「おお！」

「ああ！」

『『ジクウドライバー！』』

『ビヨンドライダー!!』

『ジオウ!!』

『ゲイツ!!』

『ウオズ! アクシオン!!』

三人はウオツチをドライバーに装填し、構える。

「「変身!!?」」

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!!』

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!!』

『投影! フューチャータイム! スゴイ! ジダイ! ミライ! 仮面ライダーウオズ! ウオズ

!!』

三人がそれぞれ、仮面ライダージオウ、ゲイツ、ウオズへ変身を完了した。

「はぐたん!!」

ジオウがはぐたんを抱える。

「少し痛い目に遭って貰うよ」

ジョージは人差し指を立て、そこから出たトゲパワワから、黒い無数の光線が放たれ

た。

「くっ……!! (思うように戦えない……!!)」

「ソウゴ！」

「我が魔王！」

助けに行こうにもゲイツはオーデインを、ウオズは猛オシマイ龍騎が邪魔し、助けにも行けない。ジオウは右手にはぐたんを抱えている為、ジョージに対しての攻撃がほとんど出来ず、攻撃を避けるだけで精一杯だった。

「おわっ！」

足を攻撃された事で体勢を崩されて吹き飛び、はぐたんが腕から離れてしまう。

「しまったー！」

「まずは君からだ。おいで」

はぐたんが闇の球体に入れられ、泣き叫びながらジョージの元へ引き寄せられる。

「(このままじゃはぐたんが……!) ……だったら……これで！」

『ジオウトリニテイ！』

そのウオツチが起動されると、止まった空の一部が欠けて元の青い空へと戻り、そこから一番強く光る星が輝く。

「あれは……」

「レグルス」

その星はレグルス……

この星の誕生により、オーマの日が決まろうとしていた。

『ジオウ!』

ジオウはウオッチをドライバーにセットすると、そこからジオウの顔が出てくる。

『ゲイツ!』

更に横にあるダイアル——『ユナイトリユーザー』を回し、ゲイツの顔が現れるとレグルスから光が放たれ、ゲイツを包む。

『ウオズ!』

今度はウオズにも光が放たれ、包まれる。

「これは……」

「私達を導こうしているのか……」

そしてジオウは、セグメント部が一つの時計を模した彫刻に覆われたジクウドライバーを回す。

『ライダータイム! 仮面ライダー! ジオウ!』

するとジオウにも光が包まれ、同じく光に包まれていたゲイツとウオズの体が腕時計のような姿に変わり、ジオウの下に集まる。

「うええええ!!? 何、何、何、何ッ!!?」

そのまま二人がジオウの体にはめ込まれると、彼の身体も変化をし始め、ジオウの仮

面が中央へと移動する。

『トリニティタイム！三つの力、仮面ライダージオーウ！ゲイツ！ウオズ！』

トリーニティー！トリニティ！！』

ジオーウが新たな姿になろうすると、レグルスの光に反応したはぐたんが叫ぶ。

「ソウギョ〜！ゲイチュ〜！ウオジユ〜！ほまえ〜！しゃあや〜！えみゆ〜！ル〜ル〜

！ま〜ま〜！」

はぐたんの泣き声を聞いたはなの手が、一瞬動き出す。

——その時、転校する前の記憶が、彼女の頭によぎる。

かつて彼女が通っていた前の学校で、いじめられていたクラスメイトを庇い、

その子を庇った影響でいじめの対象が自分に向けられた時の記憶を……

——私、間違ってたのかな……

はなは、そんな自分が嫌で、惨めで、嫌いだった。

けど、そんな後悔と絶望の海に溺れかけた時に、彼女は母の言葉に助けられた。

そして母が、『はなは、間違っていない』と慰めてくれた言葉を、今も私は——

「はぐたんーん！」

動けるようになったはながはぐたんの名を力強く叫ぶと、ミライクリスタル・ピンクを覆ってたトゲパワワが消えた。

そしてプリハートと共にはなの手元へ戻り、エールへ再度変身した。

「はぐたんを……泣かせるなッ!」

エールはジョージに向かって跳び、パンチを繰り出す。

その攻撃は避けられるが、はぐたんを抱きかかえへ着地する。

「はぐたん……」

「まま……!」

エールを中心にして時が戻り、エールのアスパワワがミライクリスタルを覆ったトゲパワワを消し、さあや達を再度プリキュアにさせ、みんなも動けるように戻った。

「新しいジオウ……」

「あのような姿は、資料にはありません」

「それに、ゲイツ君とウオズさんも一緒……」

「未来が、変わった……」

そして動けるようになったアンジュ達がジオウを見ると、ゲイツの仮面は右肩、ウオズの仮面は左肩へと装着され、ジオウの頭部が胸の方にあり、頭部には三人の色と交わっている『ライダー』と刻まれた『インジケーシヨントリニティアイ』が装着されて

いた。

「なんか凄い事になっちゃった!?？」

「な、何だこれは!?？」

「私たちが一つになるとは……」

「ゲイツもウオズもいるって事〜!？」

その姿になると彼らの意識も三人共有となり、三人しかいない意識の空間——『ク
ロックオブザラウンド』が作られていた。

「どうなってるんだ……」

「とりあえず……やらねば!」

空間にある針の時計がソウゴからゲイツを回り、黒ウオズを指した。

「祝え! どうやら3人のライダーの力が結集し!

多分、未来を創出する時の王者。

その名も『仮面ライダージオウトリニティ』!

きつと、新たな歴史が創成された瞬間である」

『……』

黒ウオズの祝いの言葉に全員が沈黙する。

「ねえ……それって本当に祝ってる?」

空間の時計の針がソウゴを指し、ソウゴが困惑しながら呟くと、みんなが「それな」といった感じで思う。

「はああああ!」

ジオウ、ゲイツ、ウオズ、この三人によって完成された新たなフォーム・ジオウトリニティがアナザーブレイドへと向かっていく。

「ドクター、後は頼むよ」

「全く、人使いが荒い社長だ」

ジョージは本を閉じ、トラウムに後を頼ませる。

「待つて!」

「また会えるよ」

ジョージはエール達の前から去っていった。

そして、動けるようになった龍騎とナイトはオーディンと再度挑むが、サバイブが二枚無くしてもオーディンは強敵である事には変わりなく。彼の前に二人のサバイブが解かれてしまい、絶対絶命となる。

「例え、カードが無くとも……お前達を倒すことなど造作もない」

「それは、どうかনা?」

オーディンが地に伏せる龍騎とナイトに向かつてそう言うが、そこへデイケイドが彼

の言葉を否定するかのようになんて答えながら現れた。

「デイケイド……」

「安心しろ……奴を倒したらすぐに出て行く」

警戒するブレイドにそう言いながら、デイケイドが一人オーデインに近づいて行く
と、ナイトとカリスがデッキからカードを取り出す。

「城戸！」

「劍崎！」

ナイトとカリスが龍騎とブレイドにカードを投げるように渡すと、デイケイドもライ
ドブツカードからカードを取り出す。

「行くぞ。龍騎、ブレイド」

デイケイドの指示で三人が三方向へとオーデインを囲む。

「無駄な足掻きを」

『FINAL VENT!』

オーデインはファイナルペンで三人を倒そうとする。

だが、三人は気にせずカードをセットした。

『ATTACK RIDE! REFLECT!』

『REFLECT!』

『REFLECT VENT!』

「滅びよ」

オーデインは黄金のエネルギーを纏ったゴルトフェニックスを三人に向けて放った。

しかし、彼らが入れたカードの力は鏡となり、三人の前に現れた。展開した鏡はリフレクターにより弾き返され、オーデインのゴルドバイザーが手から落ちた。

「なっ!」

それを見た三人はカードを取り出す。

『FINAL VENT!』

「はあ………ツとお!」

龍騎がファイナルベントのアドベントカードを入れ、ドラグレッツターと共に高く飛び上がると、ブレイドはオーブントレイから二枚のラウズカードを取り出す。

『KICK!THUNDER!』

「はああ!うえ!」

『LIGHTENING BLAST!』

ブレイドもブレイラウザーを地面に突き刺し、飛び上がる。

そしてディケイドもネオディケイドライバーに、ファイナルアタックライド デイケイドのライダーカードを入れる。

『FINAL ATTACK RIDE! DE DE DECADE!』

「はあ! ヤアアアア!」

ドラグレッターの吐いた炎に包まれながらキックを決める“ドラゴンライダーキック”、電撃を纏った右足で跳び蹴りを放つ“ライトニングブラスト”、ずらりと並んだカードの中を通り過ぎながらエネルギーを蓄えて蹴りを放つ“デイメンションキック”。三人が三方から放つライダーキックを為すべく受けると、オーデインはデツキケースを破壊され、神崎士郎の姿へと戻った。

「はあ、ハア……優衣……優衣」

妹の優衣の姿を思い浮かべながら、神崎は破壊されたデツキケースを拾い集めようとする。

「もういいだろ! 神崎! 優衣ちゃんは……こんな、お前に会いたくないはずだ……」

「うるさい……俺は……優衣を……」

「優衣ちゃんとの約束を思い出せよ!」

「っ!?」

それを聞いて、神崎は過去の記憶を振り返る。

『いつか、ミラーワールドなんてない、優しい世界に一緒に暮らそうね、お兄ちゃん』

「優衣……俺は、また……」

神崎は涙を流し、同じ過ちをしていた事に気づく。

「……優衣に、また会えるか……」

「会えるよ……絶対。俺と蓮が会えたようにな」

「城戸……」

「そうか……」

神崎は笑って消滅していった。

それを見た真司と蓮は、これで大事な人の元へ行けたのだと感じる。

一方、猛オシマイ龍騎と交戦するプリキュア達は苦戦を強いられていた。

「このままじゃ！危ないココ!!」

「ココーやるナツ！」

ココとナツは上空から王冠を出現させて、頭に被ると両手を上げた。

「プリキュアに力を!!」

「ミルキイローズに力を!!」

ココの叫び声と共にバラの光を発すると、プリキュア5人に剣の形をしたキュアフルーレが握られると、五人は構えた。

「クリスタルフルーレ！希望の光！」

「ファイヤーフルーレ！情熱の光！」

「シャイニングフルーレ！弾ける光！」

「プロテクトフルーレ！安らぎの光！」

「トルネードフルーレ！知性の光！」

「5つの光に！」

「「「勇氣を乗せて！」」」

五人はフルーレを重ねて叫び、天に突き上げた。

「「「プリキュア！レインボーローズ・エクスペローション！」」」

フルーレを一気に突き出すと5つのバラを出現させ、巨大な虹色のバラへと束ねると一気に向かった。

そしてナッツの叫び声と共に光がミルキイパレットに集まると、ミルキイミラーに変化させたミルキイローズが構えた。

「邪悪な力を包み込む、煌めくバラを咲かせましょう！」

ミルキイパレットからは鉄紺色の巨大な薔薇が姿を現わした。

「ミルキイローズ・メタルブリザード！」

巨大な鉄紺色の薔薇を出現させると、ミルキイミラーを振って鉄紺色のバラの花吹雪を散らせ、鏡を出して防御・攻撃反射をしようとした猛オシマイ龍騎の動きを止めた。

それと同時に五人の放った“レインボーローズ・エクスプロージョン”が直撃し、猛オシマイ龍騎は大ダメージを負った。

——本来アナザーライダーには、そのアナザーライダーの撃破能力を持っていないプリキュアの技は碌に効かない。

：筈なのだが、猛オシマイ龍騎——オシマイライダーはその力をトゲパワワによって激しくブーストさせる代わりに、オシマイダーと融合した影響でアナザーライダー特融の不死性が不完全なものになっている。

なので、今の猛オシマイ龍騎はYes！プリキュアの大技を受けた事でトゲパワワが著しく減少して弱体化している為に、対応したライドウオッチや特殊機能が無くても、ゲイツリバイブの様力に力のごり押しで撃破できるのだ。

そんな感じで、弱まり始めた猛オシマイ龍騎を見てか、更に追い打ちをかけるようにハピネスチャージプリキュアの四人は光を纏い、イノセントモードへとなる。

「集まれ！ハピネスな気持ち！」

「高まれ！イノセントな思い！」

「**「**輝け！シャイニングメイクドレッサー！**」**」

召喚した化粧筆をイノセントハーモニーマイクに変え、ラブリーがマイクを使って∞のマークを描いてドレッサーの中に込める。

「プリキュア！イノセントプリファイクション！」

歌い終わってからパースナルカラーの光を纏った四人が突撃し、イノセントプリファイクションを放った。

ハピネスチャージプリキュアの攻撃によって猛オシマイ龍騎がさらに弱りだし、すでに鏡を作り出す力も残っていないかった。

「ミライクリスタル！」

「エールタクト！」

「アンジュハープ！」

「エトワールフルート！」

「ツインラブギター！ミライクリスタル！」

「アークユーレディ！」

「行くのです！」

エール、アンジュ、エトワールの三人がメロディソードのボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出し。アムールとマシエリの二人はミライクリスタルをセットしてツインラブギターを使い、弦を弾き演奏を始める。

「届け！私達の愛の歌！」

「心のトゲトゲ！」

「ズツキュン撃ち抜く!」

「心のトゲトゲ、飛んで行け!プリキュア!トリニティ・コンサート!」

「ツインラブ・ロックビート!」

猛オシマイ龍騎に向かって虹色のエネルギーを飛ばすトリニティ・コンサートとツインラブ・ロックビートを放つと、そのままトリニティ・コンサートとツインラブ・ロックビートが命中。

巨大な木が作り出されてピンク・水色・黄色の花が咲き誇り、猛オシマイ龍騎が浄化された。

「HUGつとプリキュア!エール・フォー・ユー!」

「愛してる!」

「センキュウ!」

プリキュア達の技を受け続けたことで猛オシマイ龍騎も消滅し、加納タツヤが解放され、アナザー龍騎のウオッチも破壊された。

「年寄りを労る気持ちは無いのかね!」

トラウムが悔しがつてそう叫び、瞬間移動して引き上げた。

残された驚異であるアナザーブレイドに、三人が合体したジオウトリニティが立ち向

かう。

『ジカンザックス！Oh！No！』

ゲイツのジカンザックスを出現させ、アナザーブレイドに叩き込む。

『ジカンデスピア！ヤリスギ！』

更にウオズのジカンデスピアで突きながら攻撃し、アナザーブレイドの剣を手から落とした。

『サイキョーフィニッシュタイム！』

ジオウのサイキョージカンギレードが現れ、『ジオウサイキョウ』と浮かび上がる。

『キングギリギリスラッシュ！』

サイキョージカンギレードがアナザーブレイドに振りかかり、岩石へと激突させた。

「行くぞ！ゲイツ！ウオズ！」

「おお！」

「ああ！」

『フィニッシュタイム！』

ウオツチを起動させ、ドライバーを回転させる。

高く飛び上がるアナザーブレイドに三人のライダーキックのエフェクトが敵を取り囲み、ジオウ、ゲイツ、ウオズの幻影が現れた。

『トリニティタイムブ레이크バーストエクスペローション!』

幻影がジオウトリニティに重なったライダーキックを放ち、三人のエフェクトに包まれたアナザーブレイドは爆散。

そのまま天音の姿に戻り、アナザーブレイドのウオッチが破壊された。

それを見たジオウトリニティはウオッチを外し変身解除した。

「天音ちゃん!」

すぐに始が天音に駆け寄り、彼女を介抱する。

「加納タツヤ……」

ソウゴがアナザー龍騎から変身解除された加納タツヤに近寄る。

「サラ……救う……」

タツヤはずっと目を覚まさず眠りにについているサラを救おうと、執念のままに起き上がる。

「俺の命は……サラちゃんから貰ったんだ」

「ツ……?」

そんなタツヤに、真司はサラから命を貰った事を話す。

そしてタツヤは察した、サラはもうこの世にいないことを……

「サラちゃんが言ってたよ。君を止めて欲しい。人の命を奪うのはやめて欲しいって

！」

「サラ……ううう……」

「辛いかもしれないが、前を向いて歩け」

蓮が失意に沈んだタツヤを立たせる。

「辛かったら、俺達を頼ってくれ。力になるよ」

泣いているタツヤを慰めながら、真司と蓮はタツヤの力になろうと接すると、蓮が真司に何かを渡し、真司がソウゴの方を向く。

「ソウゴ」

「お前に渡すものがある」

それは、龍騎とナイトのライドウォッチだった。

「ウォッチ……」

「お前が必要なものだろ。だからお前に預ける」

「なるんだろ。王様に！」

真司はソウゴに龍騎とナイトのライドウォッチを渡す。

「なってみてよ。最高最善の王に！」

「うん！大事に使わせてもらおうよ！」

ソウゴは真司と蓮から、龍騎とナイトのウォッチを託された。

「あんた達、二人には返した方がいいかもな」

ゲイツがアナザーブレイドウオッチと共に排出された、ブレイドとカリスのライダーウオッチを二人に返そうとする。

「……君達が持っていてくれ」

だが剣崎はゲイツの肩に手を置き、持っていてくれという。

「そのウオッチとやらに、ジョーカーの力も封印されたのなら、それでいい」
「これで、俺と始は前に進める」

始の方を向くと天音と一緒に笑っている姿を見て、剣崎も笑って返す。

「それに……あの子が王になるのを見たくなくなった」

剣崎はソウゴを見て、彼が王になるのを見たいと言う。

「ああ。ソウゴなら……オーマジオウの運命を変えられるはずだ」

「守ってやれよ。お前達が」

「ああ」

ゲイツは剣崎からブレイドとカリスのウオッチを託された。

——この戦いでソウゴ達は、新たな四つのウオッチを手に入れ、19人の仮面ライダーのウオッチは、全部で13個となった。

その日、夕暮れの空に輝くレグルスを見つめる白ウオズのもとへ黒ウオズがやってくる。

「今この時が、新しいオーマの日となったようだね」

「ああ。私も君も知らない歴史が始まる」

ジオウトリニティの誕生がオーマの日となったと言い、二人のウオズも知らない歴史が始まろうとしていた。

「オーマの日。私と君、どちらかが存在しなくなる。だが君は君自身ではなく私を選んだ。何故だ？」

「私は、仲間を作れなかった。今の君のように」

「私に仲間が……?」

白ウオズは仲間が作れなかったが、黒ウオズにはソウゴ達——仲間がいると白ウオズが言う。

「気に入ったよ、あの魔王……」

彼……いや、彼らなら、面白い未来を作れそうだ。大事にするんだね」

白ウオズがソウゴの姿を脳裏に浮かべ、笑みを見せながら黒ウオズにソウゴ達を大事にしろと念をかける。

「それと、クライアス社には気をつけろ。」

彼らは君達が考えているより、底知れぬ野望を抱いている」

すると彼は警告するように、クライアス社には気を付けろと告げた。

「時間が来たようだ……君の未来が、闇に包まれぬことを祈る……」

そして遂に、自身のいた未来を守るために尽力してきた白ウオズは、自らが救世主のゲイツ、未来の魔王たるソウゴ、そしてその魔王に仕えるもう一人の自分に未来を託し、消えていったのだった。

タイムマジーンのある広場では、のぞみ達とめぐみ達とお別れの時間となった。

「じゃあね」

「頑張ってね」

「うん！」

「ありがとう！」

「頑張って王様になつてね！」

「ソウゴが王様になったら会いに行くね。決定……!!?」

彼らは王様になると約束し、そして未来を救うと誓い。また会おうと話し、みんなはそれぞれの場所へと帰る。

ソウゴ達もタイムマジーンに乗り込みはぐくみ市へ飛び立った。

それを、ビルの屋上から門矢士が見上げていた。

「時間が止まっても……あの赤ん坊は動けた……何かあるのか、あの赤ん坊……」

彼はあの時、ジオウトリニテイが誕生したことよりも、それにより新たな未来が出来た事よりも、クライアス社によって時が止まった中、ウオッチも無かつたのにはぐたん
が動けたことが気になっていた。

クライアス社本社ビルの社長室に、リストル以外のスウォルツら幹部が集められていた。

「お帰りなさい」

「クライアス社代表取締役社長、プレジデント・クライ」

ジョージはスウォルツ達に近づいてくる。

「いかがでしたか？」

スウォルツがそう尋ねると、ジョージが笑い出す。

「面白くなって来た……!」

そう言う彼の前に映し出された画面に、エールとジオウトリニテイが映し出される。

「計画は上方修正だ。世界にはまだアスパワワが溢れている。

未来へ向かう物語……その道筋を描くのに正しいのは僕か……君達か」

同じ頃、リストルが本社の地下にある場所に着く。

「やつと……来てくれた」

そこは牢屋で、その前の牢には、全身を拘束された少年……ビシンが入っていた。

「ビシン、お前の出番だ」

「いいの？僕、全部壊しちゃうよ？」

「頼もしい」

今ここに、クライアス社の新たな幹部が、ソウゴ達の前に現れようしていた。

はぐくみ市へと戻ったソウゴ達。

ビューティーハリーの外の階段に、ハリーが座って手に乗せたある物を見ていた。

「ミライクリスタル・ホワイト……何で力が戻らんのや……」

未来っちゆうのは、思う通りにならんモンやな……

けど、良かったんかもな……そのお陰で、クライアス社からも見つからへん」

ハリーの手に乗っていたのは、白いミライクリスタルだった。

「これが……力を取り戻したら……」

「……大丈夫？」

「いいっけ？」

買い物から戻ったほまれが大丈夫かと尋ね、驚いたハリーは直ぐにミライクリスタル・ホワイトをポケットに隠す。

「何やお前……！ ビックリさせるなや……！」

「はあ？ 何なの？ 心配してたのに」

「えっ？」

「何かアンタ、最近元気無いつて言うか……その……」

「大丈夫や。ありがとうさん」

ほまれが言っていた途中で、立ち上がったハリーがほまれの頭を撫でる。

「無理矢理は聞かない。けど、マジでキツイ時は、一人で抱え込まないで。それだけは約束して」

そう言ってから小指を立てる。

「分かった」

ハリーはそう言い、ほまれと指切りを交わした。

一方、ビューティーハリーの中では今日の出来事と、今後どうなるか話し合っていた。「クライアス社は、これからもミライクリスタルを狙い、この世界のアスパワワを奪いに来ると思われます」

「今回みたいなアナザーライダーも、また現れると思う」

「きつとどんどん敵も強くなる……」

「私達はどうすれば……」

今回みたいに強化されたアナザーライダーにオシマイダーと戦わなければならないと、さあや達は不安になる。

「これまで通りだよー」

立ち上がったのはなが、タンバリンを叩いてそう言う。

「はな先輩?」

「私の十三歳の夏は、一回だけなんでもん!」

はぐたんと一緒に、新しい楽しい事、いーっぱいする!

キュアスタを想い出で、いーっぱいにする!

クライアス社なんかには負けない! 私達のアスパワワは、無限大! だーっ!

「だーっ!」

「はぐたん……」

はぐたんも反応してタンバリンを叩く。

「そうだね！うん！」

「これまで通りにクライアス社に立ち向かう。それだけだ！」

「うん！止めよう。みんなで。クライアス社を……ジョージ・クライを止めよう！」

ソウゴが言うともんな頷く。そして、外からほまれとハリーが戻って笑っているソウゴ達を見つめる。

（ホンマ凄いな……お前らは……）

皆はこれからを不安に思っていたが、いつもの笑顔を取り戻した。

「そういえば、黒ウオズどこ行ったんだらうね」

「知るか！」

ソウゴは黒ウオズがない事に気づき、ゲイツに聞くと機嫌を悪くしながら叫ぶ。

すると、ビューティーハリーの扉が開いた。

「へえ、中々いいお店だね♪」

なんとビューティーハリーに、ソウゴ達からウオツチを盗んだ海東大樹が入ってきた。

「うおっ！また出た！」

「待て。そのノートは……！」

ゲイツの指差した方をソウゴ達を見ると、海東の手には白ウオズの未来ノートが握られていた。

「お陰でこの世界のお宝は手に入れた。君達も中々良いお宝を手に入れたようだね。祝電が届いてるよ」

海東が士のようにオーロラカーテンを出現させると、その向こうには見覚えがある姿が見えた。

「——龍騎ウオッチとブレイドウオッチを手に入れたか、若き日の私よ」

そこに現れたのは、オーマジオウだった。

「オーマジオウ」

「……」

「ソウゴ君……」

オーマジオウを見て、全員が警戒する。

「お前が手に入れていない力は、あと六つ」

そんな彼らの姿を何事もないかのように見据えながら、オーマジオウはまだソウゴが持っていない六つのライドウオッチを出現させた。

「全てのウオッチを集めるのが王への道。霸道へと繋がる道標だ」

そんなオーマジオウの言葉を、ソウゴ達は険しい表情で見つめる。

あと六つのウオツチが集まり、それがソウゴの手に渡った時、何かが起こるのか、彼らには、まだわからなかった。

「かくして、我が魔王は新たな未来の形……ジオウトリニティが誕生した。彼らは残るウオツチを集め、新たな未来を作ろうとする。

ここから、我が魔王達とクライアス社の本当の戦いが始まる」

次回！Re・HUGつとジオウ！

第29話 2018： ナイトプール！夏休みスタート！

HUGっとジオウ!補完計画。その2 「続編とイラストとサザエさん時空」

空は青く、太陽はサンサンと輝き、とある冒険家が何処かで青空になったり、天の道を行く男が何処かで豆腐を買っている頃、ソウゴ達はビューティーハリーに集まっていた。

ソウゴ「いやゝ、大変だったねゝ今回の収録は」

はな「ほんとにねゝまさか彼処でクライアス社の社長が出てくるなんてねゝ」

ウオズ「そして未来の我が魔王がジョージ・クライの前に現れて、『ハアーイ、ジョージィ:』って言いながら風船を渡したのは非常に驚いたねゝ」

ゲイツ「いや、なかったぞそんな事。デタラメ言うなウオズ」

えみる「そして風船を掴んだ瞬間にオーマジオウがプレジデント・クライに叩固めを行なったことにも驚いたのです!」

ハリー「だから無かったで!?!そんな事!」

さあや「そしてトドメに未来のソウゴ君がジョージさんにキン肉バスターを決めたところは特に凄く熱かったね!」

ツクヨミ「無いわよ!」

ルーラー「そして残ったアナザーライダーを先輩プリキュアと、ゲイツとウオズとフュージョンしたソウゴが倒したのもかつこよかったです」

ほまれ「いやそれは——あつたけど!」

ウオズ「まあ、茶番はここまでにして、第二回目のHUGつとジオウ!補完計画、を
行うとするかな?」

一同『イエーイ!』

ウオズ「今日は特別ゲストも呼んでコーナーを盛り上げるよ」

ウオズがそう言うと、ビューティーハリーに二人の男女が入ってきた。

晴夜「やあみんな!てえんさい科学者の卵で、未来のてえんさい物理科学者・桐ヶ谷
晴夜だ!」

マナ「そしてあたしは大貝第一中学校生徒会長、相田マナだよ!」

今日はドキドキ&サイエンスから、晴夜とマナを呼んでこのコーナーを進めるよう
だ。

そんなこんなで台本を手にとった一同は話を続けた。

ウオズ「まずはRe・ドキドキ&サイエンス!last science!について
話し合おう」

晴夜「オーケーわかった。えーつと、『Re. ドキドキ&サイエンス!last science!』はRe. ドキドキ&サイエンスの続編で、ストーリーのベースは仮面ライダービルドの劇場版『Be The One』となっており、ここでは原作で仮面ライダービルドこと桐生戦兔を苦しめ、仮面ライダークロースこと万丈龍牙を洗脳した仮面ライダーブラット率いるブラット族だけでなく、突如マナ達の前に現れた仮面ライダーパルロやブロス兄弟も、俺たちの敵として登場します」

はな「時系列的には『NEWSTAGE3』の後らしいね」
マナ「そう言う事。ざつとまとめるとこんな感じ」

ドキドキ&サイエンス 本編

←

NEWSTAGE3

←

ドキドキ&サイエンス!last science!↑ココ

←

(多分) HUGっとジオウ!

ソウゴ「質問!さっき言ってた仮面ライダーパルロって、仮面ライダービルドに登場してたっけ?」

晴夜「してないよ？ 仮面ライダーパルコはドキドキ&サイエンス！last scene! のオリジナル仮面ライダーで、元ネタはpixivにて『ラルク・シエル』氏の描いたこのイラストからだそうです」

はな「実際にpixivでそのイラストを見に行ったけど、二匹のサソリのアーマーを身につけた様な姿の仮面ライダーだったな」

晴夜「ちなみにこのSSの作者もこの仮面ライダーパルコのリメイク作を描いたらしいよ？」

ルルー「また懲りずに人の作品をパクったそうですねあの駄作者は・・・」

ハリー「パクってへんから！リメイク作品ってゆうたよな!？」

ソウゴ「うーん・・・やっぱりレドル氏やオトカム氏とかと比べちゃうと、ね・・・」

ゲイツ「だからそれと比べるなよ!!」

ソウゴ「もう一つしつもん!・・・させてもらう前に、この文章を見てくれる?」

くく

「痛いくなーって、(ハハ)どハハ」

ゲートから出るとマシンから放り出される。

辺りを見ると先までいた場所と違い、季節も冬って感じがした。

「ブツッ!!」

後ろから変な物音と声が聞こえ、後ろを振り向くとルーペのような姿をした怪人がいた。

「えっ!?なに、これ!?」

ソウゴは怪物を見て急いで起き上がり、逃げようとする。

「避ける!」

『ボルテックファイニッシュ!』

『ドラゴニックファイニッシュ!』

「えっ?うわああああー!」

いきなり何者かが、後ろから怪物に向かって強烈なキックを繰り出し、怪物一瞬マッシュを倒した。

「おっ!大丈夫か?」

仮面とアーマーを纏った二人がソウゴに近づく。二人が腰に巻いていたドライバーから何かを抜き取ると人の姿になった。

見る限り、二人の年は三つか四つ年上という感じだった。

くく

マナ「ん?コレって、晴夜とソウゴ君が初めてあった時の話だよな?」

はな「確か、Re・HUGっとジオウのプロローグの部分だった筈……」

ソウゴ「うん、そうなんだけどさ……問題はココなんだよ」

『見る限り、二人の年は三つか四つ年上という感じだった。』

ソウゴ「この文章を見る限り、晴夜達の年齢って多分14+3+4で17か18歳だつてことになるじゃん？」

晴夜「……………うん」

ウオズ「……………そうだね」

ソウゴ「それでさ、第2話の時、次に晴夜達に会った時の場面がこれなんだけど……」
~~~~~

「あれ、……(ど?)」

周りを見ると先までいた『はぐくみ市』とは違い、知らない中学校の前にいた。

「……って……………」

「ねえ、君……この生徒じゃないの？」

声をかけられ振り向くと、違う制服を着たピンクの髪をした少女がいた。

「違うの?じゃあ貴方も誰か待ち?」

もう一人の紫の髪型の少女がソウゴも誰か待ちなのかと言う。

「マナ、お待たせ!」

そこに学校の門から一人の男子生徒が現れる。

「あつー!晴夜ー!」

少女ー! マナが晴夜と言い。それを見てソウゴはその男子が晴夜だと気づく。

「あれ? お前・・・たしか、以前にも会った」

~~~~~

ソウゴ「晴夜と同じ年のマナ達が中学校の門から出て来たって事は、この時の晴夜って多分中学生あたりなんだよね?そして俺の事を知っていると言う事は、俺が初めて出会ったのは未来とかじゃなくて過去の晴夜だって事でしょ?」

晴夜「・・・・・・・・」

ウオズ「・・・・・・・・」

ソウゴ「それじゃあ、聞かせてもらうよ?」

晴夜と龍牙、なんか若返ってない?」

はな達『!?!』

晴夜「・・・・君みたいな勘のいい奴は嫌いだよ.....」

ウオズ「・・・・このSSを見ているであろう頭の弱い読者の諸君、やっと能天気な君達でも飲み込めたであろうね.....全ては我が魔王の言う通りだ。我が魔王が初めて出

会ったビルド達が高校生くらいであるのに対して、再び出会った時には彼らの年齢はマナ君達と同じ中学生……つまり14〜15歳あたりであるとこは明確だ」

ゲイツ「…原作者のユート氏め、奴はとんでもない間違いを犯してしまったようだな」
ウオズ「かあん違いするなよゲイツ君、ユート氏はうっかりであんな表現を書いたわけでないのだよ」

ゲイツ「ダニイ!?それはどう言う事だ!教えろウオズ!」

ウオズ「それについて知るためには、サザエさん時空について知る必要がある、少し長くなるぞ?」

ハリー「……手短かに頼むで」

ウオズ「ああ、それでは……この本によれば。まず初めにサザエさん時空とは、端的に言えば『時間の経過の概念はあるが、キャラクターが年を取らない』状態のことだ。

プリキュアの世界では、最終回あたりでは彼女達は大人になっていることがあるが、あれはプリキュアの物語が終わりを迎えたからこそ向かう事が出来るようになった出来事で、プリキュアの物語が終わりを迎えていないプリキュアオールスター、つまり劇場版では彼女の年は全くといいほど取っていない。つまり彼女達が居る時空も、サザエさん時空の一つだと言うことが言える」

晴夜「そして、ドキドキ&サイエンスの物語は最終回を迎えた事で、年を取ることが

出来るようになった。しかし、続編で俺が仮面ライダービルドの歴史：ビルドライドウオツチを受け取ったことで話が変わった。戦兔さんの居る『ビルドの世界』と俺とマナの居る『ドキドキ！プリキュアとビルドの世界』が『HUGっとジオウの世界』に融合したことで、時空の歪みが発生した。それによって俺たちが歩んで来た歴史が変わり、再びサザエさん時空が発生したことで俺達は若返り、ドキドキ！プリキュアの歴史である2013年から仮面ライダービルドの歴史である2017年になるように修正されたことで起きたのが、あの現象だ」

ウオズ「つまり、我が魔王が会った晴夜達は、ビルドの歴史に修正される前に『ドキドキ&サイエンスの世界』の時間軸……要するに2013年から成長して2017年になって18歳になった晴夜達だと言うわけだ。わかってくれたかな？」

ソウゴ「成る程、だいたいわかった気がする」

はな「時空の歪みって言う設定、すごく便利だなあ……」

ウオズ「わかってくれたようで良かったよ。だからあの表現は、この出来事の伏線のために書いたわけで、決して原作者であるユート氏が自分でつけた設定のくせに、たった2話で忘れたとかそのような事は無いのだよ」

ゲイツ「言い方に悪意があるんだが」

ウオズ「そんなこんなで今回の補完計画はこんな感じで終わるが、この本によれば近

「うちにハリー君が仮面ライダーに変身するらしい」

ハリー「なんやて!? ホンマかいなクドー!!」

ウオズ「工藤ちやうわ」

晴夜「どんなデザインのかな・・・」

ウオズ「そんな晴夜君に、p i x i vにて掲載されている作者の描いたイラストを見ることをオススメするよ」

ハリー「どれどれ・・・おおおお!!コレが『仮面ライダーハリー』かあ!!」

ソウゴ「そんな訳で、そのイラストが見たい人はp i x i vにいつてy u | k i . Sの所に行つて目にしてください。ついでにブックマークといいねの奴を——」

ゲイツ「布教と数稼ぎを要求するなよこの場で!はい終わり!!」

終わり

第3章『プリキュアオールスターとヘイセイライダー編』 第29話 2018： ナイトプール!夏休みスタート

!

「遂に迎えたね、『オーマの日』を……」

「ああ……」

2068年。とある館にて、一人の青年と高齢の男性がチェスを行っていた。

「……ねえ、そういえば前から気になっていたけど。あのジョージ・クライつて人、いるじゃん?」

「ジョージ……ああ、アイツか」

クライアス社の社長である男の名前を聞いた高齢の男性——未来の時見ソウゴは、露骨に不機嫌そうな表情を浮かべ、ポーンと白駒を動かす。

「俺、あの人の事イマイチ良くわかっていないんだけどさ……なんであの人、若い頃のアンタにこだわっているの?」

オーマジオウの力が欲しいなら、既に此処に居るつてのに、態々若い頃のアンタを

オーマジオウにしようとしてき……

「アンタなら、あの人が何を考えているかわかるんじゃない？」

青年はジョージがどういった理由で、若かりし日の時見ソウゴをオーマジオウにしようとしているのかが理解出来ずにいた。

自分の考えとしては、此処に居るオーマジオウが反抗してきたら自分達ではどうすることも出来ないから、若い頃のソウゴにオーマジオウになってもらう事で、オーマジオウを完全なる形で仲間にするのかなと思っていた。

しかし、此処にいる未来の時見ソウゴと若かりし日の時見ソウゴが同じ人間でも、時空が違えばもはや別人。

未来の時見ソウゴをオーマジオウにして自分達の仲間にしたとしても、此処に居るオーマジオウも都合よくこちらの仲間になる訳ではない。

「……………私的には、アイツの考えなど金輪際考えたくは無いのだが……」

アイツにとって重要なのは、オーマジオウの力ではなく、オーマジオウの変身者そのものだ」

「……………それって、あの人が欲しいのは『オーマジオウそのもの』じゃなくて『時見ソウゴの方』だってこと？」

青年はそう言いながらキングの黒駒を動かし、ポーンの白駒を取る。

「正しくは『若かりし日の私自身』だ。

あの頃の私……つまり第二次成長期辺りの少年少女は、精神的に一番不安定な時期。アイツは、そう言った心が不安定な頃について、自分の考えに賛同的な駒を作ろうとして……

私から見たアイツの行動は、そういうモノだ」

そういうと未来の時見ソウゴは白いポーンを動かし、ピジヨップの黒駒を取る。

「………なんとというか、結構タチの悪い勧誘商法みたいだね」

青年は眉を顰めると、クイーンの黒駒を動かしてナイトの白駒の近くに置く。

「その上、アイツは『人類救済』だとか思ってもいない事をほざくから余計にタチが悪い。

……まあ相手は、私がクライアス社に協力的でない事を分かっているからな……」

そう吐き捨てながら、未来のソウゴはルークの白駒を動かしてクイーンの黒駒を取る。

「ふーん……じゃあさ、アンタはどんな理由でクライアス社に入ったの?……あ、やべ」

黒のキングを動かしながら青年がそう問うと、未来のソウゴは少し笑みを浮かべる。

「フツ……理由は二つ。一つは若かりし日の私の、成長の糧になってもらう為。

そしてもう一つは——」

そう言いかけるとキングの白駒を動かし、黒のキングを場外に弾き飛ばす。

「この館を手に入れる為。それ以外の理由で、この私が『アレ』に手を貸すわけがないだろ？」

傲慢な態度で笑いながら、自身の駒を見せつけるかの様に勢い良くボードへと叩きつけた。

2018年。

オーマの日から三日経ち、遂にソウゴ達の夏休みが始まった。

そんなある日、はながビュートイーハリーの店内に貼られたあるポスターを見て、目をギラギラ輝かせていた。

「うお〜っ！これは……！流石我が町内会……！良く分かっていらっしやる！」

夏休みの初日、掴みのイベントに……！ナイトプールを持つて来るとは！」

そのポスターは、夏休みの初日に行われるナイトプールのお知らせだった。

「夜に開かれるプールやる？」

「そう！それは夜、日が落ちてから始まる、大人のイベント！」

ライトアップされた空間で、一緒に写真を撮ったり、大人の会話を楽しんだり！それがナイトプール！」

はながナイトプールをハリー達に力強く説明する。

「楽しみだね」

「プールかく、みんなで行くの初めてだもんね」

「浮かれるはなを見て、ソウゴ達も楽しみだと溢す。

「我が魔王、君が夜の世界にデビューするのなら……私も」

「お前は、うるさいから留守番しとけ」

「私を犬扱いしないでくれ、君の方が犬みたいにうるさいと思うけど」

「なんだと……!」

ゲイツとウオズが顔を近づけ揉め合うのを見て、また喧嘩が始まったと感じる。

「ちなみですが……」

「ナイトプールって何?普通のプールとどう違うの?」

「えっ?」

ナイトプールを知らないルールとツクヨミが、みんなにナイトプールとは何かと聞く。

「ナイトプールってね。夜にプールに行くって意味だけど、昼間とは感じが違うの」

「さあやがミライパッドでナイトプールの様子を二人に説明する。

「へえ、なんか楽しそう」

「理解しました。これがナイトプールなのです」

「煌びやかで素敵なのです！」

「くっ！増々楽しみになって来たーっ！」

はなは更にテンションが上がり、大はしやぎする。

だが、このナイトプールのポスターを見た何人かは不安な様子だった。

『『ハグツ！納涼だらけの町内トプール』……』

「このネーミングセンス……」

「不安しか無い……」

ほまれとルルー、ツクヨミがポスターのデザインと、イベント名のネーミングセンスに不安しか出て来なかった。

翌日、ソウゴ達は学園から離れた場所にあるナイトプールの会場を訪れるが、目の前の会場を見たはなは口を大きく広げて啞然としていた。

——この時の彼女の様子を、ウオズは「はな君の外れた顎がコンクリートの床を破壊する、そんな幻覚が見えたよ」と語っていた。

「あ……あ、あああ……」

「これはまた……」

「違う……!違う……!違う……!つ!違あうつ!!」

会場には『大漁』と書かれた看板があつたり、何故か鯉のぼりが飾つてあつたり、櫓も置いてあつたりした。おまけにウクレレを弾き合うおつちゃん二人が飲み合いをしており、彼女の思い描いていたシャレオツなナイトプールのイメージからドンドンかけ離れていく。

「関係ないものがあり過ぎて、滅茶苦茶じゃないか……」

「こんなの、ナイトプールじゃなーいっ!」

「おお、ビュートイーハリーのご主人達!」

「町内会長はん」

はながナイトプール会場を見てシャウトしていると、町内会長がソウゴ達を見かけて声を掛ける。

「当日が待ち切れなくて来た口だね?」

「…はい。とても楽しみです」

ソウゴ達は楽しみなのかと尋ねられ、馬鹿正直に申し上げるのもアレなので微妙な顔でそう答えるしかなかった。

「準備は大変だよ。ナイトプールつちゆうモンはセンスが試されるからね」

「センス……?!?」

「な、何かな……?」

「センスっ!? センスッ!?」

只ならぬ雰囲気で見寄せられた町内会長がたじろぎながらも尋ねると、はなが看板や鯉のぼりを指差して、お世辞的にも、どう見てもセンスが良いとは言えない。と言つてる感じで何度も叫ぶ。

「そ、そうだ! 君達にもアドバイス頂こうかな! 主役は君達ヤングだからね!」

「アドバイス……」

「予算はたっぷりあるから、思いつ切りやろう」

「はい!」

危機を察知した町内会長から、ナイトプールの準備の手伝いを持ち掛けられたソウゴ達。

さつきまでの凄まじい形相から一変したはなが元氣よく引き受けると、残りのメンバーも手伝うのに協力する事になった。

まず、ステージの飾り付けセッティングはツクヨミとルーラーが行っており、電球のセッティングから調整まで幅広く行われていた。

「ルーラー、そっちの配列繋いで」

「わかりました」

ツクヨミの指示に従い、ルールーは配列を繋げると何色もある電球が光る。
「問題ないようですね」

「ふふっ……普段のタイムマジーンの調整に比べたら朝飯前よ!」

二人が笑いながら準備すると、ステージの上にいるウオズに気づく。

「祝え!我が魔王のナイトデビュー、より華やかに行こうではないか♪」

「……相変わらずですね。ウオズは……」

「はあく……なんか、あつちも趣旨が違う」

無駄にノリノリな様子で祝いの練習をしているウオズに、あの町内会長達と考えが同じなのかと呆れ果てていた。

一方、ソウゴ達はプール内の掃除と中に入れる水の用意をしていた。

「オリヤオリヤオリヤオリヤオリヤ!」

そんな中、はなはモップで磨きながらプール内を駆け回っていた。

「はなだよね」

「ん?」

その様子を見ていたはなは、同じくモップを持ったハリーにそう伝える。

「この間まで、色んな事があったのに笑ってて。はなだよね」

この間の騒動で、クリスタルが黒く染まったり、アナザライダーやクライアス社の社長が現れ、色々と大変だったのに、彼女はいつも通り笑顔で何かに取り組んでいる。

「うん。何があつても明るくて、まっすぐなはなを見ると――」

「私達も、笑顔でいなきゃって」

「なのです！」

「それがはなの良いところだ」

「そやな。今を思いつ切り楽しむ事が、アスパワワをぎよーさん出す事になるんやな」

ハリー達のはなから元気を貰っていたその頃、クライアス社の会議室。

社長のクライが社長椅子に座り、リストルを始め、スウォルツ、ジェロスらの姿があつた。

「リストル」

「ハッ。では全体会議を執り行います。

本日より、クライアス社は新体制となる」

リストルが司会となつて会議が始まり、彼の口からクライアス社は新体制に入ると宣

言された。

「ジェネラルマネージャー、ジェロスと。カスタマースペシャリストのビシンが着任致します。

そして、タイムジャツカーチームリーダー、会社のスタッフチーフ担当にスウォルツ。社長秘書は引き続き私リストルが、プレジデント・クライ、トラウム相談役の元で努めて参ります。

プレジデント・クライ。お言葉を」

リストルに言われ、クライが椅子から立ち上がる。

「新体制の発足は承知の通り。対象との接触による所が大きい。万事順調。君達にはより一層の活躍を期待している」

「「ハッ!」」

それを下の方から、ウールとオーラが不快感を露にしながら見ていた。

「なんだよ、リストルの奴!」

「私達は下つ端扱い。気に入らない」

今までいた二人の席もリストルの新体制により、彼らはタイムジャツカーチームでも会社内の下つ端にされてしまった。

「すぐにも帰り咲いてやる!」

この状況を打破するために、ウールが会議室から出て行く。
「見てなさい……絶対に……」

オーラも彼に続くように会議室から去って行った。

会場準備を行っていたソウゴ達の方は、あれからしばらくして会場が完成。
夕方になると、水着などを持参した人々が集まる。

「おおっ！ オシャン！ オシャン！ オシャンだねー！」

昼間のとほ違い、煌びやかなライトや風船などで彩られていた。

「さっすがヤングだ！」

「いや〜！」

「もうみんなも待つてるし——」

「ナイトプール——！」

「！！！！盛り上がってこー！！！！」

ソウゴ達が体操着を脱ぎ、水着姿でプールに飛び込む。

そのままナイトプールが開かれ、日が落ちて暗くなつてからも、子供も大人も等しく楽しんでいた。

「ぷはあく気持ち〜!」

ソウゴとゲイツは大盛況するプールの中を気持ち良さそうに泳いでいると、はぐたんを抱きかかえたほまれの下へ、はなが泳いで現れる。

「ほまれ大人〜」

「スタイル抜群で、一人だけステージ違うのです」

えみるも現れてそう言うのと、ほまれが「あ、ありがと……」と照れる。

「でもはぐたんが一番、超きやわたん」

ほまれはそう言い、水着を着たはぐたんに頬を当てる。

「確かに可愛いねはぐたん。水着似合ってるよ」

ソウゴも泳ぎ寄ってはぐたんに似合っていると頭を撫でるとはぐたんは笑い、ハリーから「お前さんも楽しんで来いや」と言われ、遊んでいた。

「ウオズ!早く着替えて泳ごうよ!」

ソウゴはまだ着替えていないウオズに声をかける。

「いや、私は遠慮するよ……」

だがウオズが遠慮すると言い、入ろうとしない。

「何を言うのですか。ウオズさんも楽しみましょう!」

「いや……その……」

「お前……まさか、泳げないのか？」

ゲイツに凶星をつかれたか、ウオズの顔が『ギクツ』という擬音が似合う引き攣った表情になる。

「マジで……？」

「ウオズ、泳げないの？」

「……」

はなに泳げないのかと言われたが、ウオズは目線を逸らしたまま何も言い返さなかった。

「プツ………ハツハツハツハツハツハツ!!? あんな上から目線で言う癖に、泳げないのか

く?ハツハツハツハツハツハツ!!?」

泳げないのかとゲイツが今まで受けた鬱憤を晴らすように笑い、ソウゴ達も少し笑ってしまいそうになり顔を抑える。

「ゲイツ君……この私をバカにするとは……覚悟は出来てるかい?」

その時ソウゴ達は、ゲイツに馬鹿にされたウオズの背後に怒りの炎が燃え上がるのが見えた。

「ほくう、やってみろよ!」

「泳げない癖に何が出来るのか」と驕り高ぶりながら、受けて立とうとゲイツが挑発す

る。

「ゲイツもウオズも少し落ち着いて……」

「我が魔王、これは私とゲイツ君の争い。邪魔しないでくれるかい」

「は、はい……」

ウオズに威圧され、二人の争いを制止しようとしていたソウゴは身を引く。

「ゲイツ君、楽しみに待っていたまえ……フッフ……」

「……なんか、変な予感がする……」

不敵な笑みのまま、全速力で何かを取りに走って向かうウオズ。

既になんか嫌な予感を感じているソウゴ達だったが、取り敢えずスルーして考えるの

やめた。

「おーい!」

「あきー!じゅんな!」

そこへ、じゅんなと一緒に来ていたあきが声を掛ける。

「はな達も来てたんだね!」

「来ていたと言うか、このナイトプールは私達の努力と汗の結晶なのです!」

「お姉ちゃーん!えみるちゃーん!」

「よう!」

「盛り上がってるわね！」

更にことり達も現れ、野乃家が揃う。

「内富士せんせーい！」

「おお、野乃さん」

続いてはな達のクラス担任の内富士とその妻である由香を見かけて、声を掛ける。

「ご夫婦で来たんですか？」

「まあね。どうしても来たいって言うから」

「大丈夫だって言うのに」

「だって、心配で心配で……」

「もしかして……赤ちゃんですか!?!?」

「ああ」

なんと由香は妊娠してて、もうじき臨月だった。

「おめでとうございまーす！」

「ありがとう」

「さっ、冷えるから行くよ」

「じゃあね」

二人はこの場を後にし、はなは微笑んで手を振って見送った。

一方、ハリーは屋台の方でポップコーンを複数の女性客相手に売っており、土手の上ではほまれが頬を赤らめながら見ていた。

「パない人気」

「えっ?」

突如背後から海パン姿の男性に声を掛けられ、ツクヨミは距離を取って誰なのか確認する。

「えっ?ええっ?」

「よっ」

「チャラリート……!」

その男性は、かつてエール達に浄化された筈のチャラリートだった。

「アンタ……!」

「おっと、俺ちゃん、長話する暇は無いんだ。」

何たって俺は、ネット動画のニューイケメンカマーだから!」

彼はそう叫び、スマホの画面を見せる。

どうやら今は動画配信者として活動してゐらしく、かつてクライアス社に入社していた時よりも生き生きとしていた。

「昨日なんて、自己記録更新!再生回数、283回っス!」

「その通りよ」

ツクヨミ達の前で意気揚々と語っていると、今度は水着姿のパップルが現れる。

「パップル……！」

「えつと……アタシ達、もう次のステージに進んでるから、アンタ達に用は無いの」

「そうそう。アイツに言つとけよ。イケメン人気No. 1は俺だ。再生回数283回だつてな」

「ハリーの事？」

「行くよ」

「ハイハイ」

そう言うと、パップルとチャラリートがこの場を後にする。

「あいつら、いなくなつたんじゃないのか……」

「とにかく、元気そうで何よりだね」

しばらくしてソウゴ達は一旦散らばり、それぞれでプール内を周る。

はなが口元に笑みを浮かべて周囲を見回すと、みんながプールを、今の時間を楽しみ、笑顔で溢れていた。

——時間を止めよう。皆が笑顔のまま暮らせるように、共に終わらぬ永遠を……

この場から移動し始めたその時、クライの言葉が彼女の頭に響く。

それを思い出してしまったのはあの身体が震え、目に涙が溜まる。

「頑張らないと……みんなが、笑顔でいられるように……フレフレ!私!」

恐怖を抑えてから自分を鼓舞し、プールの中に潜る。涙が水と一緒に流れてから顔を出し、そのまま泳ぎ出す。

そんななをすみれば、その場に立ったまま見ていた。

「ウオズ……来ないね」

ソウゴはゲイツとプールの中を歩いていると、そういえばウオズが何処かへ消えたまま姿を見せていない事を思い出す。

「まあ、あいつが何をやる気なのか知らないが……泳げないようでは俺の勝ちだ」
「どうか……」

そんな余裕を見せていて良いのかと、ゲイツを見て思っていると……

「ぶううっ?!」

いきなり、ゲイツの後ろから水が飛んできた。

「ゲイツ?!? 大丈夫!?!」

「誰だ?!? あっ……ウオズ!」

二人が振り返ると、プールの上には大きな水鉄砲を持ったウオズがいた。

「やあ、ゲイツ君。どうか、私から水のプレゼントはく？」

「貴様……許さん！」

ゲイツも後頭部から水を滴らせながらプールから出ると、すぐに水鉄砲を用意して構える。

「喰らえ！」

水鉄砲を憎たらしい程に下衆な笑みを浮かべる顔面に向けて放つが、ウオズは難無く躲す。

「ゲイツ君。射撃の腕が落ちたね。それでは、私を——ふうふうう!!？」

ゲイツを挑発していたウオズの顔に、水鉄砲の水が直撃した。

「バカめ、二つ用意しているんだよ」

そう言ってもう片方の手に持った同じ水鉄砲を見せつける。

「やるじゃないか……ふうん！」

「当たるかつ！」

二人は水鉄砲の勝負は、周りを巻き込むかのように激しく行われていた。

「ゲイツ……ウオズ……程々にね」

程々にしておくように言つて、ソウゴが二人を見つめる。

その後、プールから出て周囲を見回しながら、みんなが楽しそうに遊んでいるのを微

笑みながら歩いていった。

「さあや」

「ソウゴ君」

そこへプールサイドで休むさあやを見かけ、声を掛ける。

「みんなは?」

「ほまれははぐたんと一緒にハリリーの所に行つて、ルーラーとえみるちゃん、ツクヨミはちよつと用事があるつて言つてどっか行つちやつた」

「ゲイツもあつちでウオズと水鉄砲で勝負中で、入る余地無くつて」

ソウゴもさあやの隣に座りながら、今も仲良く喧嘩しているだろう二人の姿を思い浮かべる。

「楽しんでる?」

「うん、とっても楽しい。ソウゴ君は?」

「楽しいよ!」

楽しいと返しあつた二人は、互いに笑顔で返し。空を見上げ、夜空に輝く星を見ながら会話を続ける。

「初めてだな。こんな風にみんなとプールに来るなんて……」

「私もだよ。」

…ねえ、ソウゴ君。未来は変わった？」

「わかんない……」

この間の戦いで現れたジオウトリニティの誕生によって、未来が変わった。

さあやがそれについてどう思うのかとソウゴに聞くが、本人はまだわからないと答える。

「でも、俺は今を……この時間を、大事にみんなと過ごしたいかな？」

「うん。私も、今のこの時間を大事にしたい」

二人が話していると、さあやがまたプールの中に入る。

「だったら、もっと楽しまないと、行こう！」

「うわっ！」

手を掴んださあやがそのままプールの中へ入ると、ソウゴは顔からプールに突っ込まれる。

「ぶはっ……！……ちよつとさあや……！」

ソウゴはプールから顔を出すと、さあやが笑っているのが見えた。

「フフツ……それ！」

「うわあ………だったら、こっちも！それ！」

楽しそうに水を掛け合いをするさあやとソウゴの表情は、笑顔で溢れていた。

一方、プールサイドを走ってた少年二人がじゅんなから注意を受け、丘を上がった所にトゲパワワが放出される。

「素敵なトゲパワワ、発ー見」

建物の上で、二人の部下の肩の上に乗ったジェロスが、そのトゲパワワを見つける。

二人の少年からトゲパワワが出て倒れ、そのトゲパワワが彼女の手へ渡る。

「さっ、夢も希望も無くなったトゲトゲパーティーの始まりよ」

「頼むわ。後輩君」

ジェロスはそう言って、自身の後輩であるジンジンとタクミに命令を下した。

「始末書上等!」

「残業歓迎!」

「かしこまり!」

その頃。えみるとルール、ツクヨミが、ライトアップされた木の裏に隠れる。

「さあ、思いつ切り楽しい事をするのです」

「私達にピッタリのお仕事で!」

えみるがミライクリスタル・レッドをミライパッドの上部にセットさせると、画面か

ら光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン！」

えみるとルルーはギターを持った可愛らしい衣装を着たアイドルとなった。

「じゃあ、ツクヨミお願いします」

「オーケー！」

ツクヨミがステージの電球を操作し、プール内の照明を消した。

何も知らない人達は突如照明が消えた事に困惑していると、セットされた音楽がナイトプール中に流れ、中央のステージからライトが照らされ、ツクヨミの操作でスモークも噴射される。

歌声が聞こえ出し、スモークが消えるのと同時にえみるとルルーが姿を見せる。

「ツインラブ！」

二人が『LOVE & LOVE』を歌い、会場を更に盛り上げさせる。

だがそんな場を壊そうと、ジェロスがソウゴ達の元に現れる。

「見つけたよルルー……プリキュアもオーマジオウにゲイツ、ウオズも終いさ！」

「明日への希望よ、消えろ！ネガティブウエーブ！」

ジェロスは手でハートマークを作り、ネガティブウエーブを放出させる。

「発注！猛オシマイダー！」

水の上を滑り、ジンジンとタクミの傍で停まってから名刺を差し出す。

トゲパワワの竜巻が消えると同時に、スイカ猛オシマイダーが生み出された。

そして、現れた猛オシマイダーの放つトゲパワワが会場一帯を覆う。

「トゲパワワがこんなに……!」

「怯えろ! 震えろ! その心を、トゲパワワで埋め尽くすのよ!」

彼女はそう叫んでから投げキッスする。

「ツ!!」

はなが会場一帯を覆うトゲパワワを見たその時、彼女の脳裏に浮かぶのはジョージ・クライの言い放ったあの言葉。

その言葉が、はなの心の奥底に潜む恐怖を引き出した。

「はな!」

「震えてる……?」

ソウゴ達のはなの元に駆け付け、はなの身体が震えてる事に気付く。

「ディスクがあふれる♪ミライを描こう♪大切な夢と一緒に♪」

だが震えるのはなの耳に、えみるとルールの歌声が聞こえて来た。

「愛おしい想いを音に乗せ刻む♪かき鳴らせいつだって♪シンキングトウ
ギャーザー!」

二人からアスパワワが放出され、そのアスパワワがみんなのトゲパワワを掻き消し、巨大なハートが形作られる。

そのハートは周囲のトゲパワワも掻き消し、次々に証明が点いてアスパワワが降り注いだ。

「何だつて……!?!」

アスパワワが戻っていき、それを見たジエロスは驚く。

「まだまだー!」

ツクヨミがさらにステージのライトを光り輝かせ、二人をより輝かせて見せる。

「慈しむココロはくく透明な温度で誰にでも優しく宿るくく♪

途切れてしまってもくく♪また始めればいいくく♪

奏でようくく♪何度でもくく♪愛くくアイラビユくく♪」

ルールーとえみる。二人の歌がみんなにアスパワワを取り戻させてくれた。

「みんなに笑顔が……アスパワワが……」

笑顔を守るだけじゃない……

笑顔が、みんなのアスパワワが、力をくれる!」

そしてえみるとルールーが歌い終わる直前に跳び上がり、ツクヨミが最後に仕掛けた花火も上がり、ステージは最高潮に盛り上がった。

「あーあ、アスパワワなんか出しちゃって。気持ち悪い」

歌い終わったえみるとルルーの元にはな達が現れる。

「二人とも凄いやよ!」

「カッコ良かった!」

「最高のステージだよ!」

「いやあ〜……」

「浮かれるのも今更よ。お子ちゃま達」

えみるが照れると同時に、目の前にジェロスが現れてそう言い、建物の上に戻る。

すると猛オシマイダーが膨れ上がって、更にトゲパワワを放出させた。それを見た

人々が逃げ惑う。

「邪魔だ!」

そこへ、水鉄砲を放ったゲイツとウオズが現れた。

「お前達、行くぞ!」

「諸君、準備はいいか?」

「さあ!はな先輩!」

「うん!」

「じゃあ、行こうか!」

猛オシマイダーが顔に水鉄砲を喰らって怯んでいる隙に、ソウゴ達が準備に入ると、ツクヨミはみんなから離れる。

『ジクウドライバー！』

『ビヨンドライバー！』

『ジオウ！』

『ゲイツ！』

『ウオズ！アクション！』

ソウゴ達はウオッチをドライバーに装填し、三人が構えると、はな達五人はプリハートを取り出す。

「変身!!?」

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

ソウゴ達三人がドライバーを操作し、アーマーが体に纏われ、はな達五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、揃っていつもの手順を取り、姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ

！』

「輝く未来をく抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

「みんな大好き!愛のプリキュア!」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

「[[[[HUGつと!プリキュア!]]]]」

変身を完了すると、ツクヨミの仕掛けたスモークが噴出され、ステージの上に八人が現れた。

ステージの上に左からアムール、マシエリ、ゲイツ、エール、ジオウ、アンジュ、ウオズ、エトワールが並ぶ。

「プリキュアだ!」

「もう一方のは……」

プリキュアを知っている人々が居ても、ジオウ達仮面ライダーを見るのは初めての人が多かった。

「祝え!」

そこへ、ウオズがいつもの『祝え!』という祝辞が叫ばれる。

「今、プリキュアと共にいるこの方は、全ライダーを統べる王者！仮面ライダージオウ！まさに夜の世界に現れた時の王……仮面ライダーだ！」

「仮面ライダージオウ……」

「仮面ライダー……カッコいい！」

ウオズの祝福の言葉を聞き、人々は仮面ライダージオウの存在を知った。

「あいつは、あれがないとダメなのか？」

「でも、なんか行ける気がする！」

すると、猛オシマイダーがジオウ達に向かって体当たりする。

だがマシエリ・アムール・ウオズが全身を回転させて土手に着地し、エール・アンジュ・

エトワールが猛オシマイダーを喰い止める。

「これが……！」

「えみるとルールの……！」

「プールに集まったみんなの……！」

「「笑顔がくれた力！」」

エールとアンジュ、エトワールの叫びと共に、アスパワワの光に包まれる。

「「やああああああっ！」」

三人のトリプルパンチが繰り出され、吹き飛ばされた猛オシマイダーが落ちてくる所

にジオウとゲイツが先回りし、ジカンギレードとジカンザックスを構える。

『フィニツシユタイム!ギリギリスラツシユ!』

「オリヤヤ! ゲイツ!」

ジカンギレードで上空へと上げると、弓モードにしたジカンザックスの射出口が猛オシマイダーを標的として向けられる。

『フィニツシユタイム!ギワギワシユート!』

「ウオズ!」

エネルギーの矢が直撃し、ダメージを与えらえた猛オシマイダーの落下地点にウオズがジカンデスピア・カマモードを持って待ち構える。

「はあ!」

『カマシスギー!フィニツシユタイム!』

ジカンデスピアのパネル全体をスワイプし、落下の直前まで引き付けると、ジカンデスピアでそのまま猛オシマイダーを吹き飛ばした。

「マシエリ!」

「はい!マシエリポップン!」

ツインラブギターを短く弾き、赤色のハートの上を跳んで大きな赤いハートを作り出し、ウインクしてから対象に向かってハートを放って攻撃するマシエリポップンを放

つ。

「アムールロックロンロール！」

次にアムールがツインラブギターを短く弾き、回転しながら紫色の大量の小型のハートを作り出すと、ウインクしてからハートを放って攻撃する。アムールロックロンロールを猛オシマイダーに直撃させる。

「よし！ゲイツ！これを使おう！」

マシエリポップとアムールロックロンロールが猛オシマイダーを抑え、弱体化させるのを確認したジオウが龍騎ウオッチを掲げる。

「ああー！」

ゲイツもブレイドウオッチを腕のホルダーから外すと、ジオウはまずデイケイドウオッチを起動させる。

『デイケイドイ・デイケイド！』

デイケイドウオッチを起動させ、ドライバーへと装填すると、カード型エネルギーがジオウに重なる。

『アーマータイム！ カメンライド！ワーオ！ デイケイド！デイケイド！デーケーイーダーー！』

デイケイドアーマーが装着されると、龍騎ウオッチの起動スイッチを押す。

『龍騎!』

『ブレイド!』

F. F. T. スロットに龍騎ウォッチを装填し、ゲイツもブレイドウォッチをD，3
スロットに装着する。

『ファイナルフォームタイム!龍・龍・龍・龍騎!』

『アーマータム!ターンアップ!ブレイド!』

バーコードの部分が『サバイブ』と表示され、ジオウの顔面のモニターと下半身から
龍騎サバイブとなり。

複眼の中にひらがなで「ぶれいど」と描かれ、両肩の装甲にはオーブントレイを開い
たブレイドウォッチを模したショルダーが装着されたゲイツ・ブレイドアーマーとなっ
た。

「決めるよゲイツ!」

「おお!」

『フィニッシュタイム!ブレイド!』

二人はライドウォッチを押し、二人は飛び上がる。

『龍 龍 龍騎!ファイナルアタックタイムブ레이크!』

『ライトニングタイムバースト!』

「はあああああああ！」

ジオウの炎を纏ったライダーキックとゲイツの雷を纏ったライダーキックが同時に猛オシマイダーを貫き、浄化させることに成功した。

「やったな」

「うん！」

「二人共！」

アンジユに言われ、ジオウ達は猛オシマイダーを消滅したのを見て、ここからとりあえず離れ。ジェロス達も瞬間移動して姿を消した。

しばらくし、変身解除したソウゴ達が戻って再びプールに入り、先程のえみるとルーのステージの事で会話をする。

「ホント、素敵なステージだった！すっごく元気出た！」

「ええ！感動したわ！」

「ぱ、パップル……！」

えみるとルーの背後にパップルが現れ、二人に抱き付く。

「大事な話があるのよ」

「ほい」

パップルが二人に大事な話があると言うと、チャラリートが名刺を差し出す。

「芸能事務所……まえむきあしたエージェンシー……?」

「そう。そしてあなた達が、所属タレント第一号よ」

「えっ!?!」

なんと、パツプルとチャラリートは芸能事務所を設立していた。

「芸能事務所を設立していたのね……」

「ツクヨミも、アシスタントとしてウチに来ない?」

「ほいツクヨミちゃん」

「えっ?」

チャラリートが更にツクヨミにも名刺を差し出す。

「あのステージ!ツクヨミがセッティングしたんでしょ!

だから、その腕を買う、わ!」

えみるとルールーだけで無く、アシスタントとしてツクヨミもスカウトしようとしていた。

「一緒に動画作ろうぜツクヨミちゃん……!」

チャラリートがツクヨミの肩を組み、動画を作ろうと誘う。

「遅くなった!」

「遅ーい!給料減らすよ?」

更にそこへ現れたのは、なんと消滅したハズのダイガンで、彼もまえむきあしたエー
ジェンシーの一員となっていた。

「生きてた!?」

「あなたは……!」

「誰だ?」

ソウゴは初めて見るようで、誰なのか尋ねる。

「おお、あの時の娘」

「さあやです」

「ダイガンだ。その節はありがとう。五分間感謝したぞ」

ダイガンはさあやに癒してくれた時のお礼を言う。

「五分だけ……」

「良かった……!無事で……!」

さあやが喜びの笑顔を浮かべ、それを見たはなも微笑む。

そして、はなの様子を見にきたすみれも――

「良い笑顔ね、はな」

しばらくすると、はながカメラを持ちソウゴ達はステージ付近に集まり、カメラを
セツトし撮る態勢になる。

その時撮られた写真には、パップルとチャリート、ダイガンが割り込んで入っていた。

それでも、そこにはみんなの顔には笑顔が映っていた。

次回! Re・HUGつとジオウ!

第30話 2068： ハリーの秘密!! 呪われし力

第30話 2068： ハリーの秘密!? 呪われし力

ナイトプールで起こったクライアス社の戦いから三日ほど経つと、パップルら三人が
えみる、ルルー、ツクヨミに接触してきた。

「あなた達には才能がある！」

「五分で国民的アイドルになれる！」

「動画一千万再生だって夢じゃない！」

「「是非！うちの事務所に！」」

「お断りします」

「これから大事な用事があるので、それどころでは無いのです」

「じゃあ、そういう事で」

公園でチャリリートとパップルとダイガンが改めてスカウトする。

しかしルルーとえみる、ツクヨミは直ぐに断り、大事な用事があると言ってこの場
を後にする。

「諦めないわよ……！」

だがパップル達は諦めては無かった。いずれ彼女達を雇ってやると、三人は意気込ん

だ。

日が少し沈んで空が橙色へと変わった頃。クジゴジ堂では、ソウゴ達三人が出かける準備をしていた。

「行くぞ」

「うん」

ソウゴは靴紐を結び、既にドアの前にいるゲイツと共に出かけようとする。

「あつ！ちよつと待って！」

「我が魔王。忘れ物だ」

何かを思い出し引き返そうとすると、ウオズがソウゴのジクウドライバーを持って現れた。

「ごめん、ごめん」

「気をつけてくれたまえ、ドライバーの予備はもうそんなにないからねえ」

「予備？まだあるの？」

ソウゴがまだあるのかと聞くと、ウオズは懐から二個のジクウドライバーを見せる。

「もしもの時のために二つ残してある。」

だが、予備だけにもしもの時のために取っておきたい」

「ふくん。まあ、でも気をつけるよ。さあ、行こう！」

「ああ！」

「承知しました。我が魔王」

ソウゴ達はクジゴジ堂を出て、約束の場所へと向かう。

その頃、輝木家では。ほまれが祖母に浴衣を合わせて貰っていた。

「はい、出来た」

「ありがとう、お祖母ちゃん」

祖母のちよが浴衣を着させ終える。

「昔を思い出すわ。この浴衣を着て、おじいさんとお祭り行ってたのよ」

「えっ？そんなの？」

ほまれの着てる浴衣は、昔ちよが着ていた物だったらしい。

「ふああ……おはよう……」

「お母さん」

そこへほまれの母親が、両腕の上に伸ばしながら入る。

「これからお仕事？」

「うん。駅前の建築現場。お母さん今日もクレーンで、ガンガンビル建てちゃうよー」

母親は建設会社でクレーンの操縦士をしているらしく、これから仕事だった。

「いい……………！可愛いわほまれちゃん……………！」

「そ、そうかな……………」

浴衣姿のほまれを見て可愛いと褒めると、ほまれが照れる。

「あつ、ちよつと待って」

一度その場を離れてからしばらくして、母親がやってくるるとほまれに星型の髪飾りを付ける。

「これでもつと可愛くなった！」

「ありがとう」

今日のはぐくみ神社の夏祭りの日。その日はみんなで行く事になっているのである。

「ほまれー！！」

「ここだよー！！」

ほまれが待ち合わせ場所の階段に来ると、先に来ていた浴衣姿のはなとさあやが呼び掛ける。

「あつ、いたいた」

「全員集合やな」

えみるとルルー、ツクヨミとはぐたんを抱っこ紐で抱えたハリーも浴衣姿で来ていた。

「はぐたん、浴衣きやわたん……!」

「みんなもエエ感じやで!」

「ビューティーハリーが、浴衣レンタルを始めてくれたお陰です」

「こちらこそ、毎度ハリーやで」

「おまたせ!」

五人がビューティーハリーのレンタル浴衣を着て来たと話し合っていると、ソウゴ達三人も遅れて合流する。

「遅れた?」

「大丈夫。ほまれもさつき来たばかりだから」

さあやが大丈夫と話すと、ハリーがほまれの浴衣を見て気づく。

「何ふざけてんの?」

「おつ? ほまれ、その浴衣……」

「言つたでしょ? 私は家にあるの着て来るつて」

「ごつつエエ感じやん。髪飾りもよお似おうとる。中々のコーディネートやで」

「な、何それ!!? みんな行くよ!」

「よーし！それじゃ夏祭り……！」

「思い切りに……！」

「みんなで楽しみましょう！」

「おーっ！」

ほまれが呼び掛けてから、ソウゴ達が階段を上がる。

「おいおい……！」

ハリーがみんなが上がるのを見て呟く。

「はぐたん……！」

はぐたんが笑いながら、ハリーのチエーン状のネックレスに触れる。

ハリーも自身のネックレスに触り、昔の事を思い出す。

「ハリー？」

「おお、すまん……！今行く……！」

ソウゴの呼びかけに反応し、二人も彼ら彼女らの後を追って階段を上がった。

クライアス社の通路にて、ドクター・トラウムが歩いていた。

「ドクター・トラウム」

「ビシン」

通路を歩くトラウムに、ビシンが呼び掛けて足を止めさせる。

「ちよつとお出かけしていいかな?」

ビシンはトラウムに現代に行つてもいいか尋ねる。

「彼に会いに行くのかな?」

「ッ……」

それに対して発したトラウムの言葉に、ビシンは悲しげな表情を浮かべた。

神社の階段を上がり終えたソウゴ達の目に、様々な屋台が映る。

「沢山あるな」

「はぐくみ神社の夏祭りは、花火が名物なんですよね?」

「うん。この祭りではそれがメインなんだ」

「日が暮れたら打ち上がるから、それまでに出店回っておこう」

さあやの提案で店を回ってから花火を見ようと予定を立てる一同。

「どれから行く?」

「お嬢ちゃん達〜! くじ引きやってかな〜い?」

「パップル……!??!?」

すぐ傍のくじ引きの屋台から、パップルが呼び掛ける。

「何してるのですか?」

「事務所の資金稼ぎよ」

彼女から資金稼ぎの為に屋台を開いていると聞かされていると、はぐたんがある物を指差して声を上げる。

「はぐたん?」

はぐたんが指差してたのは、ピンクの熊のぬいぐるみだった。

「あのぬいぐるみが欲しいの?」

「はぎゆう〜♪」

「これかーっ! 狙うは一等のクマさん人形!」

はなはぬいぐるみを狙うため、クジの箱に手を入れる。

「とりやーっ!」

勢いよくはながクジ箱に手を突っ込む。

「来い来い来い来ーいっ!」

そう叫びながら、一等であるぬいぐるみを当てようとクジを引く。

「あ……」

だが、出したクジの結果はハズレだった。

「ハズレようだね」

「めちよつく……!」

「はい残念賞」

パップルは残念賞のティッシュをはなに渡す。

「もう一丁!」

しかしはなは諦められず、はぐたんの為に再びチャレンジするも…

「大丈夫? もう五回連続残念賞だよ?」

「お小遣い使い切る気?」

「いつ……!」

これまで五回行ったが、全部残念賞だった。

「えみるちゃんとルールー、ツクヨミちゃんがウチの事務所に所属してくれたら、いくらでもあげちゃうんだけどなー」

パップルがえみるとルールー、ツクヨミにそう伝え、彼女の言葉を聞いたその三人は複雑な表情を浮かべる。

「僕にやらせて下さい!」

「お前、それ全財産……!」

「ひなせ君……いふみと君……い！」

そこへひなせとふみとが現れ、ひなせが自分がやると言つて五百円玉を出す。

「来い……い！」

彼は己の全財産使つてクジを引く。取り出された五つのクジの中には、一つだけ一等が入つてた。

「い、一等大当たり〜！」

「どうぞ……い！」

「でもこれ、日生君の……」

ひなせは当てた熊のぬいぐるみを、はなに差し出す。

「僕の気持ち……だから……」

「ありがとう。」

ほら、お兄ちゃんがはぐたんの欲しかった人形、取つてくれたよ」

はなが微笑んでぬいぐるみを受け取り、ひなせが喜んだその直後、背後のはぐたんに熊のぬいぐるみを見せて渡した。

「えっ……うあ、そう言う事……」

「ドンマイ」

パップルが何気無くひなせを『ドンマイ』と慰めながら囁く。

「記念にみんなで撮るよーっ！お願いします」

カメラをチャラリートに渡し、さあや達の元に行く。

「はい、チャラリーズ」

チャラリートがこの場にいた全員の写真を撮る。

「次の出店行ってみよー！」

次は射的に向かい、さあやとルールー、ツクヨミがゲーム機に狙いを定める。

「景品を当てられるものなら当ててみる！」

この店を出していたダイガンが笑いながら煽っていると、三人の眼光が鋭くなった。

「弾の威力と空気抵抗を踏まえて、最適な発射角度を算出……」

「三十五度ね」

「後は、狙いを定めて……」

「「撃つ！」」

三人が三十五度の角度に合わせて、同時に弾を放って、これまた同時に命中させてゲーム機を倒した。

「おおっ」

「何と……！」

『やったあ！』

「ここでも写真を撮ってから、次の店へ向かう。

今度はチャラリートの出してた型抜きを訪れる。

「型抜きどうつスカー!」

「みんなで競争するのです!」

みんなで型抜きをすることになり、爪楊枝を構えて挑戦する。

「割れちゃったのです……!」

「私もです……」

しかし、えみるとルールの型が割れてしまい、失敗してしまう。

「私（俺）も……!」

その前にソウゴ達も失敗していた。

「後ちよつと……!」

「負けへんで……!」

「それは、こちらのセリフだ……!」

まだ失敗していないほまれとハリー、ウオズが続ける。

「三人とも頑張つて!」

「フレー! フレー!」

横からハリーの顔を一瞬見たほまれが手を止める。

「よっしや！俺の勝ちや！」

「いや！私の方が早かった！」

ほまれが手を止めてた間に、ウオズとハリーが成功して先に終えた。

「今の無し！」

一方ゲイツはまだ型抜きを続けていた。

しかし彼の横には、何枚もの失敗した型の残骸が置かれていた。

「よし……あつ！」

いける気がしたのも束の間、またしても割れてしまった。

「ちよつと、ゲイツ。何回やる気だ……」

流星に困惑の汗を垂らし始めたチャラリートの言う通り、既に十回失敗しているのも関わらずまだ続けていた。

「ゲイツ……まだ、やるの？」

「不器用なゲイツ君には無理だよ」

「だまれっつ！」

ゲイツはウオズに負けないと意地になって型を続ける。

「えみるも来てたのか」

そこへ、えみる達を見かけた正人が声を掛ける。

「お兄様……!」

「アンリ……」

その傍には正人と同じ綿あめを手にしたアンリも一緒だった。

「楽しそうだな」

「はい」

「もう一回勝負するか?」

「勿論……!」

正人とえみるが話をしているのを横目に、ハリーともう一度勝負しようとするほまれを見たアンリがフフツと笑う。

「何?」

「いや、いいんじゃない?」

そう言うと、正人とこの場を後にした。

しばらくしてから日も傾き、暗くなり始める。

「大分日が落ちて来たね」

「そろそろ花火の場所取りする?」

「いい場所取るなら今が丁度良いね」

ソウゴ達は場所の確保へ向かおうとするが、ウオズとルーラーが足を止める。

「困りました……」

「どうしたの？」

「私、私……まだまだ出店を堪能し切れていません……!」

「私も……これだけでは……」

「それでもまだ足りないの?!?」

「お前ら食いしん坊か!」

出店を堪能しきれてないと言うが、二人は綿あめの他に、タコ焼きやりんご飴、焼きそばなど食べ物が入った袋などを持っており、まだ食べるのかとみんなは驚いた。

「私も同感です、ルールー」

「私ももうちよつと何か食べたいし」

「私ももつと食べたいー!」

えみるとツクヨミ、はなももつと出店を楽しみたいと言う。

「んじゃ、俺とはぐたんが先場所取つとくわ。この上が見晴らしエエやろ」

ハリーが自分が場所を取っておくと言い、上を指差す。

「良さそう。私もお腹いっぱいだから、一緒に行くよ」

ほまれもハリーと場所取りに行くことになった。

「じゃあお店行こう。えみる。ルールー。ツクヨミ。ウオズ」

「「はいー」」

「助かるよ」

「俺も行く。お前らじゃあ心配だからな」

はな、ゲイツ、えみる、ルールー、ツクヨミ、ウオズが下へ降りて出店へ向かう。

「俺ももう少し回ろう」

「ソウゴ君…その…一緒に回らない？」

「いいよ。行こう♪」

「うん」

ソウゴはさあやと共に、もう少し回るために向かう。

「じゃあハリー、ほまれ、場所取り任せだよ」

「おう」

ソウゴとさあやは下に降り、出店へ向かった。

彼らを見届けたほまれとハリーが階段を上る。

「長い階段やなー。疲れたら言えよ」

「大丈夫。鍛えてるから」

二人が会話をしているとはぐたんがぐずり出し、ハリーが足を止める。

「お？虫刺されか？」

虫刺されだと確認し、塗り薬をはぐたんの腕に塗る。

「…前から思ってたけど、ハリーって結構、赤ちゃん慣れしてるよね」

「ん？まあ、昔沢山子供の面倒見とったからな」

「親の代わりに？」

「俺、両親の顔知らんねん」

「えっ？」

「ソウゴとは違うけど、物心ついた時には、一人やった。

いわゆる、孤児って奴やな」

ハリーはほまれに、両親の顔を知らない孤児だったという。

「しばらく未来の町の隅っこで、同じ境遇の仲間と暮らしたんや。その日その日を生きてくだけで、精一杯やったな」

空を見上げて、その時の事を振り返るように思い出す。

「子供達は毎日元気でイタズラばかりしておって、楽しかったな」

「そうなんだ……守ってくれる人がいるって、マジありがたいつて思うよ」

「？」

「あまり言つて無いんだけど。家、私が小さい頃に両親が離婚してて、ずっとお母さんの実家で暮らしてるんだ」

「そうなんか……」

ほまれの両親は彼女が小さい頃に離婚し、ほまれは母親に引き取られた後、祖母の実家で暮らしていることを語る。

「お父さんがいた時に好きになったスケートを、続けていいってお母さんが言ってくれたんだ。

練習を休んでいた時も、何も聞かずにいてくれた。

今はスポーツ特待生で、学校にリンクもあるけど……

だからこそ、早く試合で結果を出して、安心させてあげたい。

私は……私を支えてくれる人の為にも、私のなりたい私になるって決めてるんだ」

「大したモンや」

「そんな事無いよ……」

「そんな事ある。俺な……実は……」

「見つけた」

ハリーが真剣な表情で大事な事を話そうとしたその時、上から声が聞こえた。

ほまれとハリーが上を見ると、ビシンが階段に座ってそこにいた。

「お前は……!」

「久しぶり、ハリー……」

階段から立ち上がってハリーに久しぶりと言ひ、何か関係があるのかと思う様な口振りで話しかける。

「迎えに来たよ、ハリー」

「ビシン……」

「知り合い？」

「はぐたんを頼む」

「えっ……!?？」

ハリーは知り合いなのかと聞き出したほまれに、はぐたんを預ける。

「これは……俺の問題や」

そう言つて、ほまれから急いで離れる。

「お前の目的は俺やろ！来い！」

「追いかけてこかい？ハリー」

ビシンに向かつてそう叫び、妖精に戻つて横の森に入ると、ビシンは笑つて宙に浮かび上がり、木から木へ跳んでハリーを追う。

「ハリー！」

ほまれもハリーとビシンのあとを追つた。

その時屋台を回っていたはな達だが、ルールーが異変に気づいた。

「トゲパワワです!」

「本当か?!」

「急ぐのです!」

ルールーが山の上から発せられているトゲパワワに気付き、急いでと向かう。

「ちよつと持つてて!」

途中ではなが持つてたリング飴をひなせに預け、三人が移動する最中にソウゴとさあやを見つけ、二人のすぐ傍で足を止める。

「どうしたの?」

「山の方でトゲパワワが出現した。我が魔王……!」

「つ?!? 急ごう! ほまれとハリーが危ない!」

ソウゴ達は急いでハリーとほまれのいるトゲパワワの発生した場所へ向かう。

一方、ハリーとビシンの追いかけてくがが続く。

「待つてよ、ハリー!」

腕に巻かれた包帯をなびかせ、笑って跳びながら腕を振ってエネルギー刃を飛ばす。

ハリーは走りながら避け続けるが、運悪く当たってしまい、吹き飛んで倒れる。

「ハリー！」

「ほまれ……！」

「いた！」

前の方にほまれが現れ、反対側からソウゴ達が現れる。

「何で来たんや！」

「ハリー！」

ソウゴが駆け寄ろうとするが、その前にすぐ傍にビシンが着地してハリーを掴み上げる。

「君！ハリーを離して！」

「へえ、君が若い時のオーマジオウかあ〜」

「クライアス社」

「せっかく僕を彼女達から引き離そうとしたのに、無駄だったねハリー」

ビシンはハリーを吊し上げて、引き離そうとして逃げたのは無駄だったと煽りを入れる。

「大体何で、プリキュアとオーマジオウやゲイツ達なんかと一緒にいるのさ。こんな奴ら早く倒しちゃえばいいのに」

「何を言ってるの……？」

「誰が、そないな事……!」

ハリーが叫んだ直後、ビシンがハリーを強く握る。

「そうしたら、クライアス社も、裏切ったハリーを許してくれるでしょ?」

「クライアス社……!?」

「どう言う事……!?」

「ハリーがクライアス社の……」

どうゆう事なのゲイツ! ツクヨミ!

ソウゴはどういうことなのか問いかけると、ゲイツとツクヨミは顔を逸らす。それを見て、二人は最初から知っていた事を察した。

「ハリーから何も聞いて無いの?」

そりやそうか。プリキュアとオーマジオウに言える訳無いよね。いいよ、教えてあげる」

「その前に、君は誰だい?」

「僕はビシン。僕とハリーは、未来で一緒に暮らしていた仲間なんだ」

ビシンが自身の名をソウゴ達に名乗り、ハリーとはかつて未来で一緒に暮らしてた仲間だと言うことを告げる。

「まさかアンタ……! ハリーの言ってた……!」

「そして僕らは、プレジデント・クライにスカウトされた」

「それって、ハリーが……!」

「クライアス社の……!」

「そう。クライアス社の社員だったって事さ」

なんとハリーは、クライアス社の元社員だったのだ。

「う、嘘なのです!」

「嘘なんかついてどうするのさ?」

それにしても、知らない内に随分腑抜けになったね。ハリー?

その首輪、未来じゃしてなかったよね」

ビシンはハリーの首に付いた鎖型の首輪に気付き、人差し指を向けてトゲパワワを放

つ。

「やめろ!」

「えっ?」

やめろとゲイツが言うがすでに遅く。首輪が碎け、ハリーがビシンの手から離れて地

面に落ちる。

「ハリー!」

ほまれが近寄ろうとしたその時、ハリーからトゲパワワが放たれる。

「トゲパワワ……?!?!?!」

大量のトゲパワワが放出されると同時に、ハリーが巨大な姿へと変貌。薄い山引色の毛色はブルーグレーへととなり、鋭い牙の間からうなり声を漏らす彼から理性が見えることは無かった。

「これは……!」

「ハリーに何をしたの!」

「本当の姿に戻しただけさ」

「えっ……!?!」

「あの首輪は、ハリーのトゲパワワを抑える為の物だったのか……!」

実はハリーはかつて、クライアス社に改造手術を受けられ、今現在の狂暴な怪物の姿にされていたのだ。

いつも身につけていた首輪は、それを抑えるために付けたものである。

「クライアス社は凄いな。一回手術を受けただけで、食べ物も寝る所も凄い力も全部くれたんだよ!」

「凄い力って……!」

「改造されたのですか……?!?!」

「聞いたことはあったがまさか、本当だったのか……!」

ハリーがクライアス社に改造手術を受けた存在だと、ある者から噂を聞いていたウォズも、初めて知ったソウゴ達も驚く。

「そうだよ。さあハリー、手土産にプリキユアとオーマジオウにゲイツ達を倒して帰ろう！」

ハリーが赤く染まった眼光を光らせながらソウゴ達に向かって跳びかかり、右の前足に生え揃った鋭い爪を振り下ろす。

「これが、ハリー……」

「我が魔王……これはこちらも、本気でいく必要がある」

「わかった……」

「ハリー……待ってろ」

ソウゴはジオウウォッチⅡを取り出し、ゲイツもゲイツリバイブウォッチを取り出し、ウォズはシノビウォッチを取り出す。

「ツクヨミ、はぐたんをお願い」

「任せて」

ほまれははぐたんをツクヨミに預け、はな達も覚悟を決める。

『『ジクウドライバー！』』

『『ビヨンドライバー！』』

『ジオウ！！！』

『ゲイツリバイブ！剛烈！』

『シノビ！ アクシヨン！』

三人はウオツチをドライバーに装填し構えると、はな達五人がプリハートを取り出す。

「「変身!!?」」

「「ミライクリスタル！ハートキラッと！」」

ソウゴ達三人がドライバーを操作し、アーマーが体に纏われ。はな達五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの変身手順を取り、姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！！！』

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ剛烈！ 剛烈！』

『投影！フューチャータイム！誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャーリングシノビ！シノビ！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「「みんな大好き！愛のプリキュア！」」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「『「HUGつと！プリキュア！』』』』」

「ガアアアアアー！！？」

八人が変身を完了し構えると、いきなりハリーが爪で攻撃してくる。

「ハリー！」

ジオウはハリーに声を掛けるが、叫びを上げるだけで聞こえない。

「アツハツハツハツ！いいよ！ハリー！もっとやって〜！」

「ソウゴ！お前からでハリーを止めろ！俺とウオズで奴を……！」

「わかった！」

ジオウとエール達は暴走するハリーを止めようと試みる。

「行くぞ。ウオズ」

「体に負担をかけ過ぎて、足を引つ張らないでねゲイツ君」

「70%位まで抑えているから大丈夫だ。お前も足を引つ張るなよ」

ゲイツとウオズはお互いに走り出し、ピシンに攻撃を仕掛ける。

「ふん！はああああ！」

先にゲイツがジカンジャクローで攻撃するが、ピシンは上に飛び上がり躲した。

「当たらないよ」

「どうかな?」

シノビのスピードで先回りしたウオズが、ジカンデスピアを繰り出す。

それに対してビシンは舌打ちを漏らしながらエネルギー刃を作り、ジカンデスピアの攻撃を防御した。

「やるね。じゃあ、少し本気でやろうかな」

ビシンもゲイツとウオズに反撃に転じようと仕掛ける一方、ジオウとHUGつとプリキュアは巨大化したハリーを止めようと奮闘する。

「ウガアアアアア!!?」

「ぐう……ハリー、ちょっと我慢して!」

ハリーの鋭い爪をサイキョーギレードを盾とし防御しつつ、サイキョーギレードのフェイイスのモードを変える。

『霸王切り!』

霸王切りを放ち、とりあえずハリーを離す。

「どうすれば……」

「どうやれば、ハリーを助けられる」

今みたいに離す程度の攻撃では無理だ。かといって、必殺技を使えばハリーを傷つけ

てしまう。

それを見たビシンがジオウに目を向ける。

「耳障りなんだよ！オーマジオウ！」

殺意の込められた声で怒鳴って右腕を振り下ろし、ジオウに向けてエネルギー刃を飛ばす。

「フレフレ！ハート・フェザー！」

ジオウの前に出たアンジュがハート・フェザーを発動し、エネルギー刃を防ぐ。

「ハリー！」

「正気に戻って下さい！」

「だったら……！」

エール達がハリーに呼び掛けているのを見たビシンはゲイツとウオズを振り抜くと、頭を抑えながら跳び、今度は上からエール達に向けてエネルギー刃を飛ばす。

「ツッ？！」

『キングギリギリスラッシュュ！』

咄嗟にサイキョージカングレードでギリギリスラッシュュを放ち、今度はジオウがみんなを守った。

「やるね。流星はオーマジオウ！」

『スピードクロー!』

ジオウを感心しながら見ていると、リバイブ疾風となったゲイツがビシンの前に現れた。

「くっ……!」

「そこだ!」

ゲイツリバイブ疾風がジカンジャクローでビシンの背後へと回り、攻撃を決めた。攻撃を受けたビシンは態勢を崩しながらも地面へと降りると、ゲイツも着地した。

「浅かったか……」

僅かながらのダメージを与えたが、直撃は避けられた。

「やるね、クライアス社に乗り込んだ時のデータじゃ参考にならないね」

「ふん。ハリーは絶対に渡さない!あいつは俺達の仲間だ!」

ゲイツがハリーは仲間だと叫ぶと、ビシンがハリーを見つめる。

「ハリー……!君がクライアス社を裏切ったのは、一時の気の迷いのハズでしょ……!」

だって君は、僕と一緒にいた方がいいに決まってるもの……!」

そう語ってる間にエトワールがハリーに向かって歩き、すぐ傍で立ち止まる。

「何してんの……?これがアンタが、今まで隠して来た事……?」

クライアス社の社員だったから?!? 改造されたから?!?

その程度で、私達が離れると思ったのツ!?!?

そんな訳……! 無いでしょ!」

「黙れよ……! お前!」

ハリーが苦しみながらも、エトワールに向けて口から光線を放ち命中させるが、エトワールから放出されるアスパワワが防いだ。

ハリーは光線を止められた事に驚愕すると、彼女はハリーに歩み寄る。

「何が俺の問題なの……? 私達の問題でしょ!」

約束したじゃん……一緒に、やってこうよ」

いつもの姿から大きく変わり果ててしまったハリーに手を差し伸べる。

そんなエトワールの姿を見たハリーは、未来での事を思い出し、エトワールに手を差し伸べて触れる。

その時、二人の指先からアスパワワが放出され、ハリーからトゲパワワも放出される。

「どうしたの、ハリー……!」

「ハリーの中で、アスパワワとトゲパワワがぶつかり合っています!」

「不味いな。このままだとハリー君とエトワールの身が危険だ」

「そんな……」

二人が危ないと知り、どうすればと悩むとジオウが咄嗟にあることを閃いた。

「そうだ。ライドウオッチなら……」

腕にあるブランクウオッチを外し、ハリーの顔を見る。

「（これなら、ハリーの力を……）エトワール！これをかざして！」

そう言つてエトワールに向けてブランクウオッチを投げ渡した。

「わかった！」

ウオッチを掴んだエトワールがブランクウオッチを自身とハリーの間に重ねる。

すると、アスパワワとトゲパワワがウオッチに吸収されていき、そのままハリーの姿が小さくなっていく。

「ハリー！」

吸収が終わるとハリーが元の姿に戻つて落下するが、エトワールが両手に乗せるようにしてキャッチする。

「戻ったか……」

みんなが駆け寄るとハリーが目を覚まし、安堵の表情を浮かべる。

「ハリー！大丈夫！」

「うううう……ソウゴ……みんな……すまん……」

「ハリーから離れるよ！」

ビシンがエトワールに向けてエネルギー刃を飛ばす。

ハリーが立ち上がり、自分のアスパワワを放出させて防ぐ。
「どうしてハリー……？ 僕と一緒にクライアス社に帰ろうよ！」

君がクライアス社を裏切ったのは、一時の気の迷いのハズでしょ！

だって君は、僕と一緒にいた方がいいに決まってるもの……！」

「帰らへん！」

「えっ……？」

ビシンは懸命に帰ってくるように言うが、ハリーは帰らないと拒絶の意思を見せる。

「ビシン。俺な、プリキュアとソウゴにゲイツ達と一緒に、クライアス社と戦うって決め
たんや！」

ハリーは自身の決意を叫ぶと。それと同時に放出されたアスパワワが首輪が作り、更
にハリーの力を吸収したブランクウオッチが光り出す。

『ハリー！』

そして、エトワールの手に吸収されたブランクウオッチがライドウオッチへ姿を変え
た。

「これ……」

「もしかして、ハリーの……ウオズ！」

「なるほど、これの出番か」

ウオズがジクウドライバーを取り出す。

「ハリー君！使いたまえ！」

ハリーに向けてジクウドライバーを投げ。ハリーはエトワールから離れて人間の姿となり、ドライバーを掴む。

「……俺が……」

「ハリー！なれるよ！」

「今のハリーならいける！」

エールとエトワールの言葉でハリーは決意し、ジクウドライバーを腰へと装着する。

『ジクウドライバー！』

『ハリー！』

ハリーライドウォッチの赤味がかつたオレンジのウェイクベゼルを回し、ライドウォッチをジクウドライバーのD'9スロットに装填し、ロックを解除する。

すると後ろから小さな歯車が多く付いた時計のエフェクトが現れ、右腕を上に向けて構える。

「変身！」

ドライバーを下に押すように回すと、時計の針がそれぞれ2時と50分を指し、紫の時計バンドの様なエフェクトがハリーの体に纏われる。

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！』

バンドが彼の下から離れると、紫色のボディを持って左右のシヨルダーには赤い歯車、胸に愛用の金色の鎖が付けられ、複眼に赤味がかったオレンジでライダーと刻まれた。

「ハリー……仮面ライダーに……」

「凄いです！ハリー！」

「ハリーから強いアスパワワを感じます！」

「ライダー〜！ライダー〜！」

新たな仮面ライダーとなったハリーに、全員が口元を緩めながら見つめる。

「これが……仮面ライダー……」

「なったんだ。ならやる事は一つだろ」

「ゲイツ……ああ！せやな！」

ハリーはゲイツと並ぶと、ウオズが隣へ現れた。

「これは……私のプライドを揺さぶる……祝え！」

お決まりのウオズの「祝福の儀」が叫びわたる。

「呪われし力を解き放ち！新たな力へと変えた戦士の誕生！

その名も仮面ライダーハリー！まさに、奇跡のライダーの誕生の聖誕である！」

「ウオズ……」

「どうかね。ハリー君？」

「うくん。まあまあやなく」

さっきの自身に対する祝いにまあまあやなど答える。

「じゃあ、行こう！ハリー！」

「ああ！行くで！ソウゴ！」

二人がビシンに挑もうと試みる。すると、ビシンが顔を抑え下を向く。

「あはははははっ！またまた……」

………僕は君を諦めないよ。また来るからね、ハリー」

ビシンは声を上げて笑い、諦めないと伝えてから森の方へと向かい、姿を消した。

姿を消したのを確認した直後、仮面ライダーへと変身したハリーとジオウへ、エール

達が駆け寄る。

「大丈夫ですか？ハリー？」

「大丈夫や……ごめんな、みんな……」

「何で謝るの？」

「そっだよハリー」

「まあ、色々聞いた時は驚いたけどね」

ジオウがそう言った直後、花火が上がる。

「もうこんな時間か……行こう」

上の本殿に移動してから変身を解き、そこでみんなで綺麗な花火を見たのだった。

それからしばらくして、ソウゴとハリーは二人で話をしていた。

「じゃあ、ハリーの話は本当だったんだ」

「ああ……俺はクライアス社の社員だったんや。後はピシンが話していた通りな」

ハリーから事情を聞き、ピシンが言っていたのは事実だと言う。

「でも、クライアス社は間違ってるって気づいたからゲイツ達の仲間になったんでしょ」

「そう気づかせてくれた奴が……教えてくれたんだ」

「そうか……ありがとう話してくれて」

辛そうなハリーを見て、それ以上は詮索しなかった。

「それより、これから頼むよ。仮面ライダーハリー！」

そう言つて、ソウゴが手を差し出す。

「……おお！こつちこそ頼むで！」

ハリーもソウゴの手を掴み、握手する。

「せやけど、仮面ライダーハリーって名前は……」

「いいじゃん！仮面ライダーハリーで！」

「そ、そうか……」

本人は名前に不安があるようだが、とりあえず仮面ライダーハリーが誕生し、四人目の仮面ライダーとなった。

次回！Re・HUGつとジオウ！

第31話 2001： ツクヨミの力！黄金の戦士の帰還

第31話 2001：ツクヨミの力！黄金の戦士の帰還

とある警視庁の地下にある演習場で、青いアーマースーツを纏った二人が現れた。

「G3システム起動！G3マヌーバースタート！」

班長である 尾室隆弘 の指示により出てくると、二体の青いアーマースーツ『G3』は発砲を開始し、的を確実に撃ち抜いていく。

「G3……10年以上前に開発された旧式だろ」

「最新型のG3-Xはどうしたんだ？」

何人かがガラスの向こうにいるG3の訓練光景を見てみると、最新型の開発を最優先させたのか、上官の一人が最新型であるG3-Xの資料を見せる。

「現在研究は続けています。ですが、まず優先すべきは全国配備というのが私の考えです。こなれた技術のほうが、量産に向きま……」

それに対して尾室が言いかけると、急に警報機が辺り一面に鳴り響く。

「なんだあれは？」

そこへ、一体の緑色つばいアナザーライダーが襲撃してきた。

すぐに訓練中のG3が応戦に入るが、アナザーライダーは楽々とG3を圧倒しており、そのままG3の足を掴むと、力任せに放り投げて強化ガラスに叩きつけた。

「……バカな」

旧式とは言え、何度か改良を繰り返して人の何倍もの力を持つG3が全く歯が立たず、尾室がその事実には驚く。

未だそんな事変をも知らないソウゴ達は、クジゴジ堂で今まで継承したウオッチを並べていた。

「みんな、俺はすべてのウオッチを集めようと思う」

そんな中、ソウゴが残りのウオッチを集めると宣言した。

「本気ですか?」

「残りのウオッチを集めるの?」

さあや達はソウゴがウオッチを集める事に対して不満に思っていた。

「素晴らしい。我が魔王はオーマの日を迎え、着実に覇道を歩みだした」

一名、嬉しそうに言う者が此処にいるわけだが。

「オーマジオウの言いなりになるつもりか?」

ゲイツ達はこの間、海東が祝電のために見せたという、オーロラカーテン越しでオー

マジオウに言われた言葉を思い返す。

『お前が手に入れてない力は後6つ。すべてのウオッチを集めるのが王への道』

その時にオーマジオウが掲げていた、残り六つのウオッチを集めるように言われていた。

「どの道、今の俺の力じゃ、まだオーマジオウには歯が立たない。

せめてオーマジオウと肩を並べるくらいの力を持たないと……そうすれば、クライアス社にも対抗できる」

「せやな。あの力があれば、クライアス社を止めることが出来るな」

ソウゴとハリーの言う通り、確かにオーマジオウの力があればクライアス社を止められる筈だと考え始める。

はなとゲイツ達は取り合えず、ソウゴがオーマジオウそのものにならない様にしようと気を引き締めていると……

「でもウオッチを集めるって……どうするの？」

「確かにな。気づけばこれだけ集まっていた」

「本当……知らない間にこんな」

「偶然集められたみたいなものだもんね」

ソウゴ達は今までウオッチを集まったのは、ほぼ偶然の様なものだったと呟く。

「偶然ではないよ！我が魔王。これは必然というんだ。君は今まで通りドーンと構えていればそれでいい」

それに対しウオズはドーンと構えればいいと言うが、ソウゴはどうにもそんな気分にはなれない。

「これが集まると、どうなるの?」

「時見先輩がオーマジオウになるのですか?」

「さあ……」

はなの言う通り、残り六つのライドウオッチが集まると何が起こるのかどうかは何も知らない。

…が、えみるが言う様に残りのウオッチを集めた場合、ソウゴがオーマジオウになる可能性が今よりも高くなる可能性だってあるのだ。

その場合は集めなければ良いだけなのだが、ウオッチを集めて力を付けていかなければクライアス社が今よりも強くなった場合に対抗する術が無くなってしまう可能性もある為、集めないという選択肢を除外せざる負えない。

ウオッチが全て集まったその時、ソウゴがどうなるのかと悩んでいると、外出していた順一郎が帰ってきた。

「あ、君達もウオッチした?物騒なことが起きてるみたいだよ」

「えっ?」

騒ぎと聞き何事かと思ったソウゴは、すぐにテレビの電源をつける。

『速報です。警視庁の特殊チームによるG3訓練室に謎の生命体が出現。警察はすぐに対応に…』

そこにはなんと、先ほどG3ユニット演習場の襲撃した模様が、TVニュースになっていたのだ。

「これって……」

「え?」

「アナザーライダー……」

「誰?」

「みんな」

ソウゴはみんなに呼びかけて、直ぐにクジゴジ堂を出て急いで現場へと向かう。

フランスの店にいる一人の男性が、メールでG3ユニットが怪物に襲われたことを知る。

「翔一?」

その店のオーナーが只ならぬ雰囲気を感じたのか、男性を“翔一”と呼びかける。

「ごめん。昔の仲間がピンチなんだ」

海の向こうに居る昔の仲間が大変なことになっていると伝え、翔一は店を出て日本へと向かう。

この男性……津上翔一がソウゴ達との関わり合いになるであろう事は、この時はまだ誰も知らなかった。

クライアス社の休憩ルームでウールとオーラが、今自分たちのいる会社で起こっている“変化”についての話をしていた。

「スウォルツにリストルの奴らも、何考えてんだ……!」

「確かに……社長が来てから最近、訳分かんないわね」

「お前たちの意見は聞くつもりはない」

「……スウォルツ」

ウールとオーラが振り向くと、そこにはスウォルツがいた。

「今、お前の顔見たくないんだけど……」

「オーマの日を迎え、時見ソウゴはオーマジオウになろうとしている。」

「これ以上、ウォッチを集めさせては、取り返しのつかないことになる」

「それは……面白くないけど……」

「すでに作戦は動き出した」

不敵な笑みを浮かべ、スウォルツは既に作戦は動き出していると語る。

ソウゴ達は事件のあったとされる警察庁へと向かっていた。

「G3ユニットの演習場？」

「調べてみたらここの所、G3ユニットとアナザーライダーが連続して戦ってるの」

ツクヨミはミライパッドを操作し、G3とアナザーライダーが戦闘を行った記録を調べた。

「G3ユニット……この時代の警察の特殊部隊だろうか？アナザーライダーと戦闘しても何もおかしくないだろう」

「でも、事件現場も警察の施設内なの」

「どうゆうこと？」

「犯人の所に警察が駆けつけるのではなく、犯人のほうから警察に駆けつけてるってわけですね」

「なるほど。そういうことなのですね」

「もしそうなら、アナザーライダーを待ち伏せることが出来る。昔からそうだが、実に冴えてるじゃないか。ツクヨミ君」

「ツクヨミ!めちよつく凄いや!」

「ありがとう」

ツクヨミのおかげでアナザーライダーと接触できる方法もわかった。しかしふと、ほまれはある事が気になり始める。

「そういえばさ、この前ウオズとゲイツにハリーの話は聞いたけど……未来にいた頃、ツクヨミってどんな感じだったの?」

「私?」

「気になるなって」

「そういえば、ツクヨミに関しては何も聞いてなかったね」

「……」

はな達が彼女の過去を聞こうとすると、彼女は少し辛そうな表情で黙り込む。

「ツクヨミさん?」

「興味深い話がある。ツクヨミ君はクライアス社を止める戦いに参加した時、記憶を失っていた」

「え……それって記憶喪失ってこと?」

ウオズ曰く、ツクヨミにはクライアス社を止める戦い以降の記憶が無いらしい。

「ええ……そう。未来でゲイツ達に会う前までの記憶がまったくないの」

「ツクヨミが……」

「その名前もコードネームみたいなものね。本名も分からない」

「そうだったんだ……」

「あんまり気にしてないけどね」

「ごめん。やな事聞いちやって」

「うんうん。私は今が一番だから大丈夫」

ツクヨミの過去には触れず進み続けていると、銃が発砲したような音が聞こえた。

「あれって……」

「ビンゴだ」

「アナザーライダー」

発砲音を辿って走り抜けると、何かしらの演習が行われてるであろう訓練場が広がっている場所に到着。そこでは警視庁の未確認生命体対策班『G3ユニット』がアナザーライダーに襲撃されていた。

「助けよう！」

「ツクヨミ！はぐたんを頼む！」

「任せて」

ハリーがはぐたんをツクヨミに預けると、ソウゴ達がアナザーライダーのもとへ駆け出す。

「君達、危ないから下がってろ!」

「大丈夫です。私達に任せて!」

ツクヨミは応戦していた警官達をソウゴ達から離し、それを見てソウゴ達は変身アイテムを取り出す。

『『ジクウドライバー!』』

『『ビヨンドライバー!』』

『『ジオウ!』』

『『ゲイツ!』』

『『ウオズ! アクシオン!』』

『『ハリー!』』

四人はウオッチをドライバーに装填し構えると、はな達五人がプリハートを取り出す。

「『変身!!?』」

「『ミライクリスタル!ハートキラッと!』」

四人がドライバーを操作し、体にアーマーが纏われ。五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセツトし、いつもの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！』

ソウゴ達は変身を完了し、G3と戦う人達と共に、頭部の黄色のツノの様なものが特徴のバツタやイナゴ似のアナザーライダーに応戦する。

「はああ！」

エールのパンチが決まる。だが、すぐに起き上がる。

「効かない？」

「と言うかこいつなんか変じゃない？」

エトワールの言う通り、攻撃を受けたのに向かってこない。

「あ……アギ……アギオメガ？」

ジオウはアナザーライダーの左胸に書いてある『AGITΩ』という赤文字に気づく。

「アギトだ！恐らくあれは仮面ライダーアギトのアナザーライダー」

ウオズがアナザーライダーについて推測すると、アナザーアギトは倒れたG3を装着していた警察官に向かって押さえつけ、装甲を無理矢理剥がすと捕食を始める。

「た、た、食べているのですか……ッ?」

「大丈夫ですか、マシエリ」

アナザーアギトがG3装着者を襲い、噛みつき始めた様子を見て、マシエリが動揺して怯える。

「G3……が、アナザーアギトに!?」

すると警察官はアナザーアギト化し、更にそのアナザーアギトは他の警察官を襲った。そしてその人も、アナザーアギトへと変貌した。

「アギトは1人じゃない」

そこへ、その様子をスウォルツが見に来て、そう呟いていた。

「どうしよう!」

「増えるんじや、どうしようもないよ!」

「これやばいかも……」

少し押され気味になるジオウ達に、1体のアナザーアギトが尾室へ飛びかかる。

「危ない!」

ツクヨミが尾室を突き飛ばし、自分が盾になるう前へ出た。

そして思わず叫び声を漏らしながら掌を向ける様にして顔を隠したその時、アナザーアギトが宙に浮いたまま静止した状態になった。

「ええ……っ?」

「……」

「今のは……」

それを目撃したウオズとハリーは酷く驚き、隠れて見ていたスウォルツも驚きを隠せない様子だった。

ツクヨミが離れると時が動き出し、落ちてくるアナザーアギトの背後をウオズとハリーが攻撃する。

「ぐうう……」

そのままアナザーアギト達は何処かへ逃げ出した。

「逃げた……」

戸惑うツクヨミを横で、ウオズとハリーが彼女を見つめる。

しばらくすると、クジゴジ堂へ戻ってアナザーアギトについて話し合っていた。

「まさか増殖するなんて」

「変だと思わないか? まったく俺達を相手にせず、G3だけを狙ってた……」

戦闘中、ソウゴ達はアナザーアギトに攻撃を続けたが、アナザーアギト一向はソウゴ達には興味がないのか攻めてこなかった。

「これまでのアナザーライダーとはタイプが違うのですか？」

「おそらくね……スウォルツも何を考えているやら……」

「前から、スウォルツに関しては理解不能な点がありましたし、今回も……」

元社員のルーラーや手を組んでいた時にクライアス社に訪れたりして会った事のあ
るウオズ曰く、クライアス社にいた時からスウォルツの行動は理解不能だと聞き、彼の
狙いが読めず苦悩する。

「ひとまず、仮面ライダーアギトに接触してみようか」

するとソウゴが本物の仮面ライダーアギトを探そうと言い出す。

「居場所を知ってるのですか？」

「知らない」

「やはりね」

相変わらずのすぐの思いつきだが、肝心の計画性がない。

「ネットで検索したら出てきたりして……」

「そんな事が……」

「出てきた！」

「マジ……」

まさかネット検索したら即出てくるとは、はなもゲイツも想定外だった。

さあやが検索したミライパッドが出された結果を見ると、『AGITΩ』と書かれた洋風レストランの画像が出された。

「レストランじゃん」

「でも何か関係あるかも。行ってみよう！」

「まあ……でこうしていても仕方ないか」

とりあえずレストラン『AGITΩ』へと向かう事にした。

「ツクヨミ。行こう」

「あつ……後で……」

ソウゴはツクヨミと一緒に行こうとするが、本人は後でいくと言う。

「お前らだけで行き、大勢で行くのは迷惑や」

「私も残るよ。ハリーやウオズだけじゃ不安だし」

「私も少しアナザーアギトについて調べてみます」

「そう」

ソウゴ、ゲイツ、はな、さあや、えみるがレストラン『AGITΩ』へと向かう。

ソウゴ達がいなくなったのを見て、ウオズがツクヨミに話しかける。

「元氣ないじゃないか。さっきの事を気にしてるのかい？」

「……見てたの？」

「はつきりと……君が時間を止めたのをね」

「ツクヨミが……」

「私が……時間を止めた……」

自分が時間を止めたと聞かされ、ツクヨミは動揺を隠せなかった。

「ツクヨミ……」

「……」

ハリーとルーラーがそんな彼女を見つめる。

クライアス社の社員控え室で、ウールとオーラがアナザーアギトについて話していた。
た。

「増殖するアナザーライダーって、何だ……？」

「それがスウォルツの作戦みたい。でもジオウたちとは戦わずに、G3つてのだけ襲つてる」

「スウォルツのやつ、何考えてるんだ」

「またなんかまだろっこしいことでも考えてるんじゃないの」

「手伝ってやろうか」

「冗談じゃないわ!」

「分かせてやるんだよ。僕達がいないと、何も出来ないって事をね」

ウールが何かを企もうと思いつ。

その頃スウォルツは会議室の自分の椅子で、ツクヨミが時を止めた時のことが気になっていたのか、彼女について色々と考えていた。

「どうなさいました。スウォルツさん?」

それを見たりストルは何があつたのか彼に話しかける。

「いや……」

(あの力は……確かめてみる必要があるな……!)

ソウゴ達はバスを降り、夕風町にあるレストラン・AGITΩへ向かう。

「AGITΩと言う店はわかるのか?」

「えっと……」

さあやはミライパッドで道を調べるが、なかなか見つからなかった。

「あつ!あの二人に聞こう」

ソウゴがベンチで絵を描いている二人の少女に話しかける。

「ねえ、ちよつと!」

「何?」

「この先にAGITΩって名前のレストラン知らない?」

「AGITΩ……ああ!知ってますよ。教えましょうか?」

「お願いしてもいいかな?」

「いいですよ」

二人組の少女の案内により、ソウゴ達はAGITΩと書かれた店へと向かう。

「見ない顔だけど、この町は初めて?」

「うん。俺達はぐくみ市から来ました」

「そんな遠い所から来たの?」

「俺は時見ソウゴ。ラヴィエール学園の二年なんだ」

「私は野乃はな。私も二年なんだ。よろしく♪」

「薬師寺さあやです」

「愛崎えみる!小学六年なのです」

「明導ゲイツだ」

「私は日向咲。よろしく」

「美翔舞です。よろしく」

しばらくし、ソウゴ達は自己紹介をしながらレストラン『AGITΩ』へと向かう。

「ここがレストランAGITΩだよ」

咲と舞に案内のおかげでレストラン『AGITΩ』へと到着した。

「ここか」

「行こう！」

ソウゴ達はレストラン『AGITΩ』の中へと入っていた。

「いらつしやいませ！」

「真魚さん！こんにちは！」

「咲ちゃん。舞ちゃん。いらつしやい」

そこでは真魚を名乗る店員の女性が開店準備をしていた。すると、ソウゴが勢いよく彼女の下に近づく。

「俺、時見ソウゴって言います。仮面ライダーアギトさんはいますか！」

「え……？」

「仮面ライダーアギトさんどこですか！」

はなも一緒にアギトとは何処と尋ねる。

「ソウゴ君…はな……」

「ああっ……！そんな聞き方があるか」

さあやとゲイツは小声でソウゴとはなへ叱責する。

「俺、王様になるために、アギトに会わなきゃいけないんです！」

「ああ……っ！すいません。こいつは少し変わった奴でして……」

それでも話しかけ続けるソウゴを、ゲイツがなんとかフォローしようとする。

「「仮面ライダー……」」

「アギトって、翔一君のこと？」

咲と舞が仮面ライダーという言葉聞いて思考していると、真魚の口から翔一という名前を聞き、ソウゴ達はその人がアギトと感ずる。

「その翔一って人がアギトなんですか？会いたいですけど！」

翔一に会いたいとソウゴが頼む。しかし、それを聞いた女性は苦笑しながら翔一という人物について語り出す。

「あ、ごめんなさい。今海外で修行していて、日本にいないの」

「そんな……」

「仕方ない……行くぞ」

アギトがいないと知り、ソウゴ達はレストランから出て行く。するとソウゴ達が店を出た後すぐに、レストランの連絡用の電話が鳴る。

「はい。レストランアギトです……翔一君！」

『ただいま、真魚ちゃん』

電話の相手は、海外から帰ってきた津上翔一だった。

「帰ってくるなら、連絡くらいしてよ」

『真魚ちゃんが連絡くれたから帰ってきたんだって。G3ユニットが大変なんだって？』

彼は彼女のメールを見て、気になって帰ってきたのだ。

「アンノウンみたいなのに襲われてるみたい」

『今、尾室さんが隊長なんだっけ。助けないと』

「あつ……あと、お店に、“王様になりたいからアギトに会いたい”とかいう、変な子が来た」

『王様になりたい？』

翔一は王様になりたいと言う少年が気になっていた。

その頃、アギトに会えず残念がるソウゴ達が海を見つめる。

「せっかくアギトに会えそうだったのにね」

「海外か」

「タイムマジーンで飛んで行くか」

「おお!それいいね!」

タイムマジーンで海外へ行こうと計画していると、咲と舞がお互いに見つめソウゴに尋ねようとする。

「ねえ、あなたもしかして……」

「仮面ライダーなの?」

「えっ?」

仮面ライダーなのかと尋ねると、ソウゴは思わず勢いよく彼女たちの顔を見つめる。

「何故俺達が仮面ライダーと知っている?まさか、お前ら……ぶう!」

ゲイツが言いかけると、はなとえみるが押しつけて尋ねる。

「もしかして、二人はプリキュアですか!?!」

「お前ら、俺が言いおうと……」

先に言われ少し困り顔になるゲイツ。

「じゃあ、君達も……」

「プリキュアチョピ?!?!」

「妖精!?？」

二匹の妖精——フラツピとチョツピを見て、二人がプリキュアだと知りソウゴ達が驚く。

「お取り込み中失礼？」

そこへ、ウオズが現れた。

「我が魔王。G3ユニットのリーダーから連絡が来た。またアナザーアギトが出現したらしい」

アナザーアギトが現れたと知ったソウゴ達が現場へと向かっていた頃、ツクヨミはベソに座って水辺を眺めていた。

「大丈夫？」

「うん……でも、私が時間を止めたなんて……」

「偶然かも知れないので、あまり気になさないで下さい」

「せやで、ツクヨミはクライアス社じゃない、俺らの仲間や」

「……」

ほまれやルール、ハリーに慰められるツクヨミだが、彼女の顔は優れない。

「自分の力に戸惑っていると云ったところか」

そこへ聞き覚えのある声に驚き、振り向くとスウォルツが現れた。

四人は構え、ツクヨミが銃を向ける。

「スウォルツ……!?」

「あんたには関係ないでしょ!」

「ツクヨミに何の用です!」

「ルールー。しばらく見ない間に随分と変わったな……まあいい」

スウォルツはルールーを見てそう呟くが、すぐに興味を無くしたのかツクヨミに顔を向ける。

「私がここに来たという事。即ち私が関係しているという事だ」

戸惑う彼女に顔を向けながらそう言うと、指を鳴らす。

「がああああ!!?」

突如その時、彼女達の前にアナザーアギトが現れた。

「アナザーアギト!」

「ツクヨミ!はぐたん連れて逃げるんや!」

『ジクウドライバー!』

はぐたんを抱えたツクヨミがハリー達から距離を取る。

『ハリー!』

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

三人が変身してアナザーアギトに応戦しつつ、ツクヨミを護る。

「さあ、力を見せてみる」

「私に力なんてない！」

「お前の意見は求めん」

アナザーアギトはツクヨミを狙い、ハリー、エトワール、アムールはツクヨミを守ろうと必死に戦う。

その時、離れていた所にいた津上翔一が何かを察知した。

「この感じは……」

何か覚えがあるような力を捉え、その場所へと向かう。

連絡を受けたソウゴ達が、G3ユニットがアナザーアギトの増殖個体らと戦闘を繰り広げていた所へソウゴ達が駆けつけた。

「いくよー！」

ソウゴ達はドライバーとライドウオッチ、プリハート、ミライクリスタルを取り出す。

『ジクウドライバー!』

『ビヨンドライバー!』

『ジオウ!』

『ゲイツリバイブ!疾風!』

『クイズ! アクシヨン!』

三人はウオッチをドライバーに装填し構えると、三人がプリハートを取り出す。

「変身!!?」

「ミライクリスタル!ハートキラッと!」

三人がドライバーを操作し、体にアーマーが纏われ。はな達が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、三人が揃っていつもの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ!』

『ライダータイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!疾風!疾風!』

『投影!フューチャータイム!デカイ!ハカイ!ゴーカー!フューチャーリングキカイ!キカイ!』

ソウゴ達が変身を完了すると、咲と舞は妖精のフラッピとチョッピを外へ出す。

「フラッピ!」

「チョッピ！」

フラツピとチョッピはクリスタルコミュニケーションへと姿を変えると、咲と舞の手の上に乗った。

「いくよ！舞！」

「ええ！」

「デュアル・スピリチュアル・パワー！」

二人が手を繋ぐとコミュニケーションを重ね、コミュニケーションから光のが放たれると咲と舞を包み込んだ。

光は二人を舞い上がらせ、オーロラが伸びた。伸びたオーロラに沿って二人は飛び上がり、光はやがて金の花びらと銀の羽根をモチーフにしたコスチュームへと変わる。二人の体を覆った光は髪型も変化させ、耳にはハートの形をしたイヤリングを輝かせながら装着された。

「輝く金の花！キュアブルーム！」

「煌めく銀の翼！キュアイーグレット！」

二人が降り立つと背景には花びら開き、大きな翼を舞上げた。

「ふたりはプリキュア！」

ふたりは両手をクロスさせ、寄り添った。

「聖なる泉を汚す者よ!」

「アコギなマネはおやめなさい!」

決め台詞を叫び、アナザーアギトに向かって叫ぶ。

「おおくなんか……」

「物凄く先輩感がある……」

「我が魔王。見惚れる前にアナザーライダーを」

「えっ? ああ……うん!」

アナザーアギトはG3や警察官ばかりを狙っている為、ジオウ達はそれぞれ散らばり、G3や警察官を守りながらアナザーアギトに応戦する。

「はあああ!!?」

サイキョーギレードの攻撃が決まってアナザーアギトが地に伏すと、もう一体のアナザーアギトが後ろの警察に目掛けて向かう。

「フレフレ! ハート! フェザー!」

アンジュがハートフェザーでバリアを作り、警官達を守る。

「はあああ!」

ゲイツはジカンジャクローをクローモードして、アナザーアギトを上空へと切り飛ばした。

「エール！マシエリ！」

エールとマシエリがプリハートを持ち構える。

「フレフレ！ハート！ソング！」

「フレフレ！ハート！フオーユー！」

二人が同時に技を放ちアナザーアギトに直撃し、アナザーアギトが地面に伏す。

一方、もう一体のアナザーアギトはブルームとイーグレットが警察官を守りながら応戦する。

「イーグレット！」

「うん！」

二人がアイコンタクトをするように頷き、二人が高く飛び上がる。

「ヤアアアアア！！？」

ダブルキックをかまし、後ろに吹き飛びながらアナザーアギトが倒れる。

「これで、どうなの……」

これだけの攻撃を受ければと思うが、やはりアナザーアギト達はジオウ達に襲いかからず、G3にししか向かって行かなかった。

「またか……！」

「みんなを守るよ！」

それでも警察官達を守ろうと必死に抵抗する。

「問題。G3を守ればウオツチにたどり着ける……○か×か」

フューチャーリングクイズにフューチャータイムしたウオズがアナザーアギトに問題を出す。

「ええつくと……」

「答えは……」

ブルームとエールが答えに悩む。

「そいつは×だ」

ゲイツが即答でバツだと答える。

「離れろ!」

G3に噛みつきこうとし、さらに増殖しようとするアナザーアギトの足を引つ張り阻止する。

「あー!もう、三人バラバラじゃ、ラチがあかない!一つになるよ!」

ジオウがそう言うのと、ジオウトリニティウオツチを取り出す。

「え?今かい?」

「逆じゃないのか」

敵の数多いのに、あれになると人数減らすではないかとウオズ、ゲイツも驚く。

『ジオウトリニティ！ジオウ！ゲイツ！ウオズ！』

ジオウトリニティウオツチを起動し、ウオツチを回す。

すると三人が光が包まれ、包まれていたゲイツとウオズの体が腕時計のように変わってジオウの体にはめ込まれ、ジオウの身体も変化を始めると、彼の仮面が中央へと移動する。

『トリニティタイム！三つの力、仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウオズ！トリーニティ！トリーニティ！！？』

オーマの日に誕生した今のジオウ、ゲイツ、ウオズの合体した姿。ジオウトリニティへと変身した。

「よしー！」

「待ちたまえ」

アナザーアギトに向かおうとしたジオウだが、その前にウオズの仮面が動き、ジオウを止める。

「何だよウオズ」

「戦いの前にやっておきたい事がある」

『ウオズ！』

「ひれ伏せ！我こそは仮面ライダージオウトリニティ。大魔王たるジオウとその家臣ゲ

イツ、ウオズ。三位一体となって未来を創出する時の王者である！」

『…』

ウオズが祝いの言葉を叫ぶと、周りに沈黙が続いた。

「めっちよく……」

「ダサイ」

ダサイとブルームが小声で言うと、流石のウオズもみんな黙り込むことに違和感を感じる。

「ん……?」

『カマシスギ!!?』

「……である!」

「ちよつと!」

主導権がウオズからジオウへと戻った。

「ウオズ、何なの?」

「何……とは?」

「大体誰が家臣だ?」

ジオウとゲイツは今の名乗りに不満があるようだった。当たり前だのクラツカーだ
が。

「静かにしてくれないか？この姿こそ我が魔王の覇道の証し。世に喧伝しなければなら
ない」

「えー？恥ずかしいよ……」

ウオズの恥ずかしい口上により、とりあえずジオウトリニティはアナザーアギトを迎
え撃つ。

その頃、現れたアナザーアギトを前に、ハリー達三人がツクヨミとはぐたんを守ろう
と戦う。

「みんな……」

みんなの心配をするツクヨミだが、そんな彼女の前にスウォルツが出てくる。

「ツクヨミというのは偽名だな。本名は何だ？」

「知らない！」

「さては記憶を失っている、ということだな」

「あなた、何か知っているの？」

「スウォルツ！あなたは……！」

スウォルツに気をとられたエトワールが、アナザーアギトに殴られてしまう。

「アムール！エトワール！」

ツクヨミが駆け寄ると、アナザーアギトが追撃をかける。

「やめんか!」

『ジカンチエーン!』

ハリーの出した自身の専用武器、ジカンチエーンがアナザーアギトを拘束し動きを止める。

「忘れているなら思い出さない方が幸せだ」

知らない方が幸せと言うスウォルツの発言を聞いて、何かを知っているような話し方だと察する。

すると、アナザーアギトはジカンチエーンを振り解く。

「ぐほお!」

アナザーアギトがハリーの腹を殴りハリーのバランスが崩れる。

「ハリー!!?」

「くう……」

抑えるハリーに駆け寄りアナザーアギトに苦戦する三人。

その時、太く低い鼓動の様な風声と共に、遠くから何かがどんどん近づいて来る音が聞こえ始める。

「なんや……」

「あそこー！」

振り向くと、そこに誰かが近づいていくる事に気付いた。

そこから現れた人物は、ベルトを纏った津上翔一だった。

「がああーツ!!?」

アナザーアギトは翔一の姿に気付いたのか、彼に狙いを定めて唸り声を上げながら襲い掛かろうとする。

〈ブオオオオオーン!!?〉

ベルトから激しく吹く風の様な音を響かせながら、翔一はアナザーアギトを払いのけ、仮面ライダーアギトへと変身した。

「あなたは……!」

「来たか……」

仮面ライダーアギトが現れて四人のピンチを救うと、スウォルツは不適な笑みを浮かべる。

アナザーアギトの増殖と戦っていたジオウ達。

ジオウトリニティにより決着が見え始め、アナザーアギトを追い詰める。

「我が魔王?今こそ王たる資質を見せる時」

「分かった!ゲイツ、ウオズ。一気に行くよ!」

『パワードのこ!』

「よし!」

「ああ!」

『ジカンデスピア!ヤリスギ!』

のこ切斬の衝撃波にジカンデスピア・ヤリモードのエネルギーを合体させての大技を1体のアナザーアギトへぶち込む。

すると、アナザーアギト化した警察官が元へ戻る。

「やったー!」

「アナザーライダーから元に戻れた」

「よし、他の奴らも!……え? いない……」

「どういうことだ?」

気づくと他のアナザーアギト達が居なくなっていた。

「逃げちゃった?」

「私達に恐れをなつたんだよ!」

「そうか!」

エールとブルームが一緒にアナザーアギトは逃げたと思ひ込む。だが、アンジュと

イーグレットは変に思っていた。

「それにしても、なんか変？」

「うん。なんか誘導されたような？」

二人は何か時間稼ぎか、誘導する為にここに来たのかと推測し合う。

「まさか……！」

「え？」

ウオズが何かに気づいた頃、四人を救った翔一がアギトに変身し、アナザーアギトを攻め立てる仮面ライダーアギトがアナザーアギトを追い詰める。

「ん？なんだ？」

そこへジオウ達と戦っていた増殖個体が、次々とアギトの前に現れた。

「なんでここに……！」

「もしかして……！」

「本物の仮面ライダーアギトを誘き出すための……！」

「罠だったの……？」

エトワール達はアギトの前にアナザーアギトが大勢現れたのを見て、これはクライアス社の罠だと気づく。

「まんまと現れてくれたな仮面ライダーアギト。

このアナザーライダーを創り出したのは、お前をおびき寄せさせるため。お前の持つアギトの力を手に入れるためだ」

「アギトの力……!?」

「力づくで奪い取る」

スウォルツが翔一をここまでおびき寄せたのは、アギトの力を奪うためだと宣言した。

そしてアナザーアギトは翔一からアギトの力を奪うべく、彼のもとへ殺到した。

Re・HUGつとジオウ!

第32話 2001： アギトの覚醒!受け入れる力

第32話 2001：アギトの覚醒！受け入れる力

——さて、此処でとある青年の話をしよう。

とある公園にて、20代後半の青年——ここでは仮に『A』と呼ばせて貰おう——が、そのベンチにて不貞腐れていた。

青年Aは、警視庁で開発されているG3ユニット——別名『仮面ライダーG3』の装着者として立候補していた。

このG3は、一般市民や普通の警察官では太刀打ちできない怪物・怪人などの問題と対峙する事態を想定して運用がなされている。

しかし仮面ライダーG3は元々、特殊な部隊で訓練された選ばれし人間しか装着出来ない装着型ライダー。

今でこそ、その選ばれし人間は増えているが、当然全員というわけではない。

青年Aも、その選ばれなかった内の一人。ただそれだけの話だった。

「よっ！随分不貞腐れているなお前」

「……先輩」

そこへ、青年Aの先輩らしき人物がコーヒーの缶を片手にやってきた。

「……まあ、お前の気持ちは分からんでもないぜ? 一生懸命やったつてのに、結局選ばれなかつたんだからな……俺だつたらヤケ酒飲んで二日酔いでぶつ倒れるな!」

「……先輩。プリキュアつて知つてますよね?」

アハハと笑いながらコーヒーを飲んでいると、青年Aがプリキュアについて問いかけてきた。

青年Aの先輩はG3の話から突然プリキュアの話に飛躍したことに驚くも、とりあえず話に合わせてよう口を開く。

「うん……まあ、そうだな……此処最近の若い奴らで、知らない奴はいないんじゃないやねえか? 俺の娘も、なんかその子らの話になると目をキラキラさせながら話していたが……」
「先輩は、悔しくないんですか? あんな誰かも分からない女子供に、もつと訳の分からない怪物を任せて」

悔しくないのか? という問いを聞いた先輩は、青年Aの言おうとしている事を察した。

「……そりゃあ、人を守る俺たちが、あんなドデカい怪物に対抗することも出来ず、年相応……なのかもわからねえ女の子達にまかせつきりつてのは、少し複雑な心境だがよ……俺たち警察だけで、あのドデカい怪物を倒せるか? つて言われたら、俺だつたら『NO』つて答えるね。確実に……」

ようは「相性」ってやつの問題なのよ」

「……………G3さえあれば、あの怪物どもを駆逐することが出来るって思ってたんですけど……………」

はあ……………上手くないですね……………」

「……………お前は、あの化け物どもになんか恨みでもあるのか?」

「いえ、そういう訳じゃ無いですけど……………ああゆう化け物が俺たちの生活を脅かすって考えたら、いない方が良いじゃないですか。それに……………」

「それに?」

「俺が子供の頃、人を襲う怪物に襲われた…様な記憶があつて。それで俺、大きくなったら、怪物を人々から守るって決めてたんです」

「はあく……………怪物ねえ……………」

襲われた様な記憶つてのも気になるが、その怪物つてのは、今『はぐくみ市』を中心に暴れている『おしまいだー』って叫んでいる化け物と関係あるのか?」

「……………いえ、たぶん全然関係ないと思います。」

姿もあの……………ギザギザな口の付いたデカい化け物みたいなのじゃなくて、もつと小さい……………人間サイズの怪物で、動物を擬人化させたような姿をしていたハズです」

「ほーん……………お前、よくその怪物つてのに襲われて無事でいられたな」

「ええ、まあ……あの時は、仮面の人に助けられた気がするので……」

「仮面の人……仮面の人ってのは、最近プリキュアと一緒にいるっていう『仮面ライダー』ってやつか？」

「はい、多分……」

「なんだい多分多分……さっきからハッキリしねえなお前！」

子供の頃の記憶だからって、怪物に襲われて仮面ライダーに助けられたってなら、もう少し記憶に留めておけよ！」

「……すみません」

「まあ、いいや。取り合えず気が済んだら戻って来いよ。有給は無限じゃねえんだぞ？」

「はい……ありがとうございました。話を聞いてくれて」

「いいってことよ。そんじやな」

青年Aの先輩はそう言って、近くに泊めていた車に乗って公園から去っていった。

「……はあ……仮面ライダーねえ……」

また会えるかな……」

青年Aは、正直言ってその時の記憶は、まるで夢でも見てたんじやないかという位に、曖昧だった。

だけどそのライダー……黒と金アーマーで身を包み、金の角が生えた姿だけは覚えて

いた。そして自分は、それに憧れてG3ユニットを身に着けたいと思っていた。ただ逆に言えば、それしか覚えて……いや、それしか知らなかった。

あのライダーが何なのか、結局何者だったのか、今は何処で何をしているのか。

また会えるなら、もう一度姿を見せてほしいという気持ちだが、青年の心にあった。

そうすれば、このモヤモヤした心が、少しは晴れると思うから――

「――だったら、お望み通り合わせてやる。仮面ライダーアギトにな……!?!」

その時、突如聞こえた男の声に青年Aは驚き、直ぐに後ろを向いた。

『アギト……!』

「ガア!!」

「無論、異論は認めん」

すると青年の胸にナニカが埋め込まれ、青年Aは自身の頭に流れ込んできた異物に苦しんだ。

(な……何だこれ?!　なんか、俺が、俺じゃなくなるような……)

……でも、力が漲つて来る……悪くないカモ)

その時すでに、青年Aの姿は生物的な外見を持った、イナゴ或いはバッタの様な怪物

――アナザーアギトになっていた。

その姿を見た紫色の衣装を着た男性は、何処か満足そうな表情を浮かべた。

「……さて、まず手始めにG3の演習場に赴こう」

(…アア、良いダロウ。もうG3なんて目じやナイ。

ミンナモ、このチカラを持つべきナンだ……

モウコレデ、アノばけものどもニオビヤカサレルコトもナイ…

だつてもウ——)

アギトは、ヒトリじゃない。

——この出来事は、警視庁でG3ユニットが襲撃される、数刻前の出来事だった。

スウォルツにより、アギトの力を奪うために集まったアナザーアギトとその増殖個体。
それに対し、仮面ライダーアギトはジオウ達の下から移動して来たアナザーアギトの増殖個体と戦う。

「はあー」

アギトはベルトの横を触り、アギトの左肩とアーマーが青色になった「超越精神の青」の力を持つ形態、ストームフォームへと変わった。

「変わった……」

「ヤアアア！」

そのままオルタリングから出した専用武器のストームハルバードで、数体の増殖個体を撃破する。

「はあー！」

さらに再びベルトに触り、アーマーと右肩が赤くなった「超越感覚の赤」の力を持つ形態・フレイムフォームへチェンジし、フレイムセイバーを出現させる。

「また、変わった……」

フレイムフォームとなったアギトはフレイムセイバーを振るい、次々と増殖個体を倒していく。

「強い……」

「私達も……」

三人が加勢に行こうとしたその時、彼女達の時が止まった。

「残念でした」

オーラに一瞬の内に時を止められると、彼女によってツクヨミのファイズフォンを奪われ、ツクヨミとエトワールとアムールの後ろへと回って銃を突きつける。

「そこまでよ。この子供達がどうなってもいいの？」

「っ!?? ああ!」

「なっ!?? ぐう!」

アギトとハリーが動きを止めたところ、増殖個体に攻撃を受け、アギトはグラウンドフォームへ戻ってしまふ。

「いい子だ」

「余計な手出しを」

「強がつてないで。あんたがぐずぐずしてるからよ」

そこへソウゴ達が駆けつけてきた。

「私の勘が当たったか」

「あれは仮面ライダーアギト」

「エトワール!アムール!ツクヨミ!」

「みんな!」

「動かないで!」

オーラが三人の後ろでファイズフォンを構えおり、変身しようとしたソウゴ達は手を止める。

「あれが、ソウゴ達の敵なの?」

「クライアス社のタイムジャッカーだよ……」

「タイムジャツカー……時を盗むって事？」

「正確に言えばそうなるね」

「隙を見て、三人を助けるぞ……」

咲と舞にタイムジャツカーの解説をしながら隙を伺おうとする。しかし、今度はウールが時間を止めた。

「君の力を貰うよ」

ウールがアギトに近づき、ブランクウオッチをかざす。

『アギト！』

アギトから力を奪い、アギトのライドウオッチを生成された事で、仮面ライダーアギトが津上翔一の姿に戻ると時間が動く。

「っ!? ライドウオッチを創った！」

そこへアナザーアギトは変身が解かれた翔一に襲いかかろうとする。

「危ない！」

ツクヨミが叫び手を広げると、ソウゴ達やアナザーアギトだけでなくタイムジャツカーのスウォルツ、ウール、オーラの動きを止めた。

「え……？」

驚いたツクヨミだが、手を下ろすと急に時が動き出した。

「誰が止めたの?」

「やはりお前は……」

時を止めたツクヨミを見て、スウォルツは何かとすぐに気づいた。

「まあいいや。こいつがなければ、時見ソウゴはオーマジオウの力を手にすることはできない」

ウールはそう言うと、アギトのライドウオッチをアナザーアギト本体に埋め込んだ。

「がああああ!」

ライドウオッチを埋め込まれたアナザーアギトが、仮面ライダーアギトの姿に変貌した。

「アギトに……!」

そのままアギトになったアナザーアギトは逃亡していった。

「あいつは僕が使う」

「……お手並み拝見と行こう」

後を追ったウールにアナザーアギトを任せ、スウォルツとオーラがソウゴ達の前から去ろうとする。

「待って!あなたは何を知っているの?私のことを……!」

ツクヨミは何か知っているのだと思い、スウォルツを呼び止める。

だが彼は何も語らず、そのまま去っていく。

「みんな、大丈夫！」

はながすぐに解放されたエトワールとアムールに駆け寄る。

「うん。大丈夫」

「ですが、アギトの力が……」

「すまん。すぐに気付けば……」

「仕方ないよ。とりあえず、家に戻ろう」

ソウゴ達はここを離れクジゴジ堂へと戻ると同時に、翔一、咲、舞も一緒にクジゴジ堂へ招く。

「「「いただきまーす！」」」

「緊張するな……プロのシェフの御眼鏡にかなうかな？」

順一郎が腕によりを奮った料理を翔一達に食べてもらい、三人が口にする。

「……うん、美味しい」

「美味しい〜♪」

「本当ですか〜！」

順一郎はその言葉に舞い上がる。

「シンプルだけど奥深い!」

「ほんとですか? いやあ……」

「そうだ。今度うちの店にも遊びに来てくださいよ。腕奮いますから」

「ぜひ。ハハハ……プロのシェフに褒められちゃった。スカウトされるかも……」

でもね。僕はこう見えて時計屋としてのプライドがあるんだ」

翔一らに自分の料理の腕を買われ、スカウトされると期待を膨らせる。

「すいません。スカウトに關してはちよつと考えさせてください。……あれ?」

しかし振り向くと、既に翔一達はいなくなっており、綺麗になつた食器だけが残されていた。

その頃ソウゴ達は、ビューティーハリーへと場所を変えた。

「じゃあ、なぎささんやほのかさんにみんなには会つてきたんだ」

「はい! 咲さんや舞さんも私達の先輩なんですよね!」

「まあ、そんな所かな」

「また、プリキュアの先輩に会えてとても光栄なのです」

はなとえみるが咲と舞と話していると、ソウゴは翔一にライドウオツチについて説明していた。

「へえ、君は王様になるためにあの時計が必要だったんだね」

翔一はあの時見たアギトのライドウォッチを思い出す。

「うん。最高最善の魔王になるためにどうしても」

「ごめん。ライダーの力っていうの盗られちゃった」

クライアス社にアギトの力を奪われた事を謝る。

「ごめんなさい……私のせいで……」

「ツクヨミだけのせいじゃないよ」

「私達も背後を取られ、クライアス社の都合の良い方へ動いてしまいました」

ツクヨミとほまれ、ルーラーの三人がアギトの力を奪われたのは自分達が悪いと謝る。

「大丈夫。私達が必ず取り戻す」

「……」

はながそう言うが、ツクヨミがあまり浮かない顔をしていた。

「あ、それより、さつきスウォルツに何聞こうとしたの？」

「ツクヨミの過去に関係があるのか？」

「それってツクヨミさんの……」

「放っておいて……」

過去のことを聞かれたツクヨミは部屋から出て行ってしまう。だがソウゴ達には、今のツクヨミに何も声をかけられなかった。

しばらくし、ツクヨミは見晴らしのいい公園の高台にいた。

「あんなにソウゴを責めてたのに……私にも時間を操る力があつたなんて……」

自分にタイムジャッカーと同じ力があると知り、ツクヨミは混乱していた。

そこから遠くでソウゴ達彼女を見守っていた。

「やつぱり、あれはツクヨミが時間を止めたのかな?」

「間違いない。本人もよく分かってないようだが」

ウオズが時間を止めたのはツクヨミだと言う。

「どうゆうことだ?」

「どうして、ツクヨミにそんな力が……」

「彼女の失われた記憶に関係あるのかもしれない」

「記憶かあ!心配?」

ゲイツとさあやが、何故彼女に時を止める力があるのか考えていると、翔一がソウゴ達に心配なのかと問う。

「そりゃあ、今まで一緒に戦ってきた仲間だから」

「じゃあ、これからも一緒にいてあげればいいよ。

過去より、君達がいる未来のほうが彼女にとって大切なんじゃないかな」

翔一も記憶喪失を体験したことがあり、彼はその失くした記憶によつて、かなり辛い出来事も怖い出来事もあったという自分の経験を踏まえていた。

そこへ翔一の携帯に連絡が入る。

「もしもしー!」

『よかつたあ。やつぱり津上さんじゃないんですね』

電話の相手はG3のチーム班長の尾室だった。

「どうゆうこと?」

『アギトが街で暴れてるんです』

「アギトが……?」

それを聞いたソウゴ達は、クライアス社の仕業だとすぐに気づいた。

「俺達が行くよ」

「翔一さんにアギトの力を取り返してみせる!」

「じゃあ、彼女は俺に任せて!」

「翔一さん。私達も」

「いいですか?」

「二人共、お願いしてもいいですか?」

「頼むぞ」

翔一、咲、舞の三人にツクヨミを任せ、ソウゴ達は現場へと向かう。

「まさか……ツクヨミ君が……」

「ウオズ?どなんした?」

するとウオズがツクヨミの事で何かを思い出て足を止め、ハリーも彼の異変に気付いて足を止めた。

その頃、ソウゴ達は現場へ駆けつけると、町中の人間達が次々とアナザーアギト化させられるという光景に驚愕した。

「みんな!」

『ジクウドライバー!』

『ジオウ!II!』

『ゲイツリバイブ!剛烈!』

ソウゴ達二人はウオッチをドライバーに装填し構えると、はな達五人がプリハートを取り出す。

「変身!!?」

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

二人がドライブバーを操作し、アーマーが体に纏われ。五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！ 剛烈！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「HUGつと！プリキュア！」

変身完了した七人はすぐに分かれて、アナザーアギトに応戦する。

「はあ！ヤア！」

ジオウはサイキョーギレードでアナザーアギトを斬りかかる。

「うおおお！タア！」

ゲイツはジカンジャクローでアナザーアギトを寄せつけない。

「タアアアア!!?」

「ヤアアアアアア!!?」

エールがラツシユを繰り出すと、アンジュとエトワールがダブルキックを繰り出し、アナザーアギトを地に伏せさせる。

そこへ、マシエリとアムールが前に出る。

「アユーレデイ!」

「行きます!」

「フレフレ!ハート!ソング!」

「フレフレ!ハート!ダンス!」

プリハートから赤と紫のハート型エネルギーをアナザーアギトへと放ち、何体か浄化させた。

「フェザースラツシユ!」

『パワーのこ!のこ切斬!』

アンジュがフェザースラツシユを放つとゲイツがジカンジャクローを回して、さらに斬撃を飛ばし、アナザーアギトを数体を撃破した。

「スターズラツシユ!」

『霸王切り!』

「オリヤヤヤヤ!!?」

ジオウとエトワールも技を繰り出し一通り倒したと誰もが思った……しかし、またもや凄いい数のアナザーアギトが襲いかかってきた。

「ダメ!いくらなんでも多すぎる!」

「これじゃ、キリがない」

倒しても倒してもアナザーアギトは減らない、ただジオウ達に疲労を与えるだけだ。

その光景を、ビルの上から本体のアナザーアギトである仮面ライダーアギトとウールが見ていた。

「いいじゃん、これ。もっとペースあげてみようか」

ウールがペースを上げようと、アギトと共に更にアナザーアギトを増やそうと行動に出る。

ジオウ達は必死にアナザーアギトに抵抗を続ける。

「フラワーシユート!」

『トウワイズタイムブ레이크!』

フラワーシユートとトウワイズタイムブ레이크のライダーキックが決まり、アナザーアギトを倒し続ける。

「これじゃあ……!!?」

アナザーアギトを倒し続けるとその時、ジオウⅡは未来予知を行った。

それによると、あと数時間も経てばこの辺りにおぞましい数のアナザーアギトが現れる様だ。

「まずい。このままだと、俺達でも倒しきれない数になる」

「こんな時に、ウオズとハリーは何処行った!?!」

大量のアナザーアギトが現れる前に決着を着けたいが、ウオズとハリーがいない為、戦力不足だった。

離れた所にいたスウォルツの元へ、ウオズとハリーが現れた。

「お前らか。何の用だ?」

「ツクヨミ君のことさ。君は彼女をタイムジャッカーにしようとしているのか?」

「俺は何もしていない」

「嘘をつくな。あの力は、お前しか与えられないはずや」

「その通りだ」

スウォルツは何もしていないと言うが、ハリーとウオズはそんな事はないと否定する。

「君がツクヨミ君に力を分け与えてないとしたら……」

「あの女が……俺と同じだということになるな……」

「同じ……まさか……」

「……バカな。彼女がああ……!?」

何か思い当たる事を思うハリーとウオズは、スウォルツとツクヨミが同じ“何か”だと聞きかされる。

その頃、ツクヨミは未だに公園から動こうとしなかった。

「本当の私は……誰……?」

ツクヨミは自分の力を知った事で、本当の自身が何なのか悩んでいた……

「ムプ?」

「フプ?」

すると二匹の妖精がツクヨミの膝下へ現れ、そのまま座り込む。

「妖精?」

「二人に気に入られたみたいね」

「二人もあなたが好きみたいね」

「やあ!」

彼女を見守っていた三人がツクヨミに話しかける。

「津上さん……!」

「ちよつと、来てくれない?」

翔一はツクヨミを自分の経営している店、レストラン「AGITΩ」へ連れてきて料理を振る舞う。

「はいはいはい、お待たせしました。どうぞ、俺の料理」

「津上さんの?」

翔一は自分が作った「ラタトゥイユ」という、夏野菜を煮込んで作った料理をツクヨミに馳走する。

「ああ……それ、ほんととは違うんだよね。」

「本当の名前は……沢木哲也」

「え……?」

「俺も記憶を無くしたことがあったんだ。そして気づいたら、凄いい力を手に入れた」
十年以上の前のことでも、翔一にはついこの間の事のように思い出していた。

「それでどうしたんですか?」

「一生懸命暮らしたかな。料理したり……」

「おかしいでしょ?今と全然かわんない」

真魚が翔一の隣に来て、今と変わっていないと語る。

「だって記憶とか力とかあってもなくても、俺は俺だから。」

君だって、そうやって生きてきたんじゃないの？」

「私は……」

翔一の話聞いて、ツクヨミも翔一のように確かにそうやって生きていた事を思い出す。

「ほらほら、元気だして！」

「冷めないうちに食べて。ほら！」

咲と舞の二人に勧められ、ツクヨミは翔一の料理を口にする。

「おいしい……！」

「その笑顔、みんなにも見せてあげてよ」

「みんな？」

「君のおいしそうな顔が見たくて、料理を作ってくれる人がいるじゃない？」

あの仲間達だって、君が君でいるから仲間になったんだよ」

それを聞いて、彼女は振り返る。

ツクヨミは仲間を……ソウゴ、ゲイツ、ハリー、はな、さあや、ほまれ、えみる、ルー、ウオズ……

いつも一緒にいる、みんなの顔を思い浮かべる。

「私が……私でいるから……」

ジオウ達はようやく、その場にいた多数のアナザーアギトを撃破し、変身を解除する。
「どうする……このままでは……」

しかし、このままではさつきよりも多くのアナザーアギトがやって来てしまう。さつきの戦いで疲労困憊状態のみんなはそれを思い出し、気が遠くなっていた。

「ソウゴー!」

そこへツクヨミ、咲、舞が駆けつける。

「ツクヨミ……!」

「みんな……ごめんなさい。私……」

するとツクヨミの言葉を遮るように、ソウゴが話し出した。

「あのさ、ツクヨミ。ツクヨミは世界を良くしたいと思って、戦ってきたんでしょ?それで、この時代に来た?」

「うん」

「俺も少しでも世界を良くしたい。だから俺は王様になる!」

みんながいるからこそ、最高最善の魔王になれる。そう思うんだ」

それを聞いて、先まで辛かったみんなの顔から笑顔が溢れる。

「うん。私も世界を良くしたい。」

過去に何があっても、私が本当は誰でも関係ない。

だつて私は私だから！」

ツクヨミも悩みから吹っ切れたように笑顔を見せられた。

『お帰り！ツクヨミ』

「ただいま。みんな！」

ただいまとツクヨミが笑つて言うと、そこへウオズとハリーが合流した。

「我が魔王、諸君。アギトとは戦わないほうがいい。これは罠だ」

「どうゆうことだ？」

「罠とは？」

「1人が目覚めれば、次々目覚めるのがアギトの力らしい」

「つまりウールは、君達でも倒しきれないほどのアナザーアギトを創りだして待ちうけ

ている。スウォルツからそう聞いた」

「でも……何でスウォルツは、そんな事を教えるの？」

ツクヨミは何故、スウォルツがそんな事を教えてくれたのか疑問に思っていたが……

「罠でもいいさ。それは俺がすでに予知した未来だ。それに戦わなきゃ、アギトの力は

取り戻せない。だろ？」

ソウゴの言葉を聞き、全員が頷く。

「敵の居場所も分かっている。行くよ!」

『ああ（うん・はい）!』

こうしてソウゴ達は現場へ向かう。

現場へ駆けつけたソウゴ達を待ち受けていたのは、倒し切れないほどにまで増殖したアナザーアギト達だった。

「なんて数だ……!」

「これほどとは……」

「君達が倒しても倒しても、何度でも産み出せるよ」

そこへハウールが現れ、数体程度アナザーアギトを倒してもすぐに追加でアナザーアギトを生み出せると語る。

「でもそれって、君にアギトの力があるからだよね」

「それを俺達に取り戻せばいいだけの話だ」

『『ジクウドライバー!』』

『『ビヨンドライバー!』』

『『ジオウ!II!』』

『『ゲイツリバイブ!剛烈!』』

『キカイ！ アクシヨン！』

『ハリー！』

四人はウオッチをドライバーに装填し、構えると。はな達が五人がプリハートを取り出す。更に咲と舞の手の上に、クリスタルコミュニケーションを乗せられる。

「「変身!!?」」

「「ミライクリスタル！ハートキラツと！」」

「「デュアル・スピリチュアル・パワー！」」

ドライバーを操作し、アーマーが体に纏われ。はな達が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、揃ったの手順を取って姿を変える。二人も手を繋ぐとコミュニケーションを重ね、姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！II！』

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！ 剛烈！』

『投影！フューチャータイム！デカイ！ハカイ！ゴーカー！フューチャーリングキカイ！キカイ！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

「みんな大好き!愛のプリキュア!」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

「[[[[HUGつと!プリキュア!]]]]」

「輝く金の花!キュアブルーム!」

「煌めく銀の翼!キュアイーグレット!」

ブルームとイーグレットの二人が降り立つと、背景には花びら開き、大きな翼を舞上げた。

「ふたりはプリキュア!」

ふたりは両手をクロスさせると寄り添った。

「聖なる泉を汚す者よ!」

「アコギなマネはおやめなさい!」

全員が変身完了し、名乗りを上げると全員が戦闘に構える。

「行くよ!」

一斉に散らばり、アナザーアギトが率いるアナザーアギト軍団にジオウ達が挑む。

「ハア!ヤア!」

「ヤアアア!!?」

「タアアア!!?」

ジオウとエール、エトワールが中心でアナザーアギトと交戦を繰り広げる。すると大量のアナザーアギトが、一斉に襲いかかってきた。

「フレフレ!ハート!フェザー!」

そこへアンジュがハートフェザーを展開し、アナザーアギト達を全て跳ね返した。

「やっぱ……多い。でも、やるしかない!」

数が多いがジオウ達は諦めず、立ち向かい続ける。

そして右側では、ハリーとアムールとマシエリがアナザーアギト達と交戦している。

「そら!どうや!」

ハリーはジカンチェーンを飛ばして動き止めながらアナザーアギトと交戦しており、アムールとマシエリはお互いにカバーし合いながら戦っている。

「マシエリ!」

「はい!」

アムールがマシエリを投げ飛ばし、マシエリがその勢いでキックを繰り出しアナザーアギトを怯ませた。

そして左側ではブルームとイーグレットが、アナザーアギトと交戦している。

「ヤアアアア!」

「タアアアアアアア!」

ブルームとイーグレットは連携しながらアナザーアギト達をぶっ飛ばしていた。

「イーグレット!」

「うん!」

更に二人が同時に力を入れたパンチを放ち、長年のコンビネーションでアナザーアギトを攪乱するような戦い方で翻弄する。

一方後ろ側では、ゲイツとウオズが互いに肩を寄せ合い後ろを守りながら戦っていると、ゲイツがウオズに話しかける。

「ウオズ。お前のシノビと俺の疾風、どちらが早いか勝負しないか?」

「フツ、面白い」

ゲイツはスピード勝負をしないかと持ちかけるとウオズが了承した。

『シノビ!』

『スピードタイム!』

ゲイツがゲイツリバイブウオツチを回し、ウオズがシノビウオツチを起動させドライブに装填した。

『リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイブ疾風!疾風!』

『投影！フューチャータイム！誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャーリングシノビ！シノビ！』

二人がフォームチェンジを完了し、ゲイツリバイブ疾風は得意の速さで空中を飛び、次々とアナザーアギトをなぎ倒していく。

ゲイツはジカンジヤックロー・つめモードのエネルギー波を浴びせていく。

「はあー！」

ウオズはフューチャーリングシノビの力で煙幕を出しながらアナザーアギトを攪乱、次々とジカンデスピアの斬撃で倒していく。

『つめ連斬ー！』

ゲイツは必殺技で無数の爪を雨のように爆撃する攻撃、つめ連斬を繰り返し、さらにスピードを上げアナザーアギトへと向かう。

「はああー！」

『カマシスギ！フィニッシュタイム！』

そしてウオズはジカンデスピアのパネル全体をスワイプする。

『一撃カマーン！』

「ヤアアア！！？」

無数の分身を出してからの一撃カマーンで、相当数のアナザーアギトを撃破する。

「こいつら……行け！」

アナザーアギトがかなり減り焦ったのか、ウールは仮面ライダーアギトに変身していた個体にジオウへの攻撃を仕掛けさせる。

「アギトの力を返してもらおう」

「返す？君達の手じゃないじゃないか」

「君の力でもないよね！」

その一言が聞こえると、何者かがいきなり狙撃を行い、「ドオオオン!!？」と言う爆音と共にアナザーアギトを怯ませた。

「あれって？」

狙撃をしたのはG3だった。しかし、今までG3とは装備が違った。

「G3の改良型のG3-Xだよ！君はアギトを！」

「分かった！」

ジオウはアギトへと向かっていく。

するとG3-Xはアナザーアギトに吹っ飛ばされ、マスクが外れる。

「あれは……」

「津上翔一だったのか」

「津上さん！」

ツクヨミは手をかざし、アナザーアギトの動きを止める。

「ヤアアアアアア!!？」

その間にブルームとイーグレットが、翔一の周りのアナザーアギトを倒す。

「ありがとう」

お礼を言われたツクヨミがうれしそうに頷く。

その頃、サイキョーギレードとジカンギレードの二刀流でアギトと交戦するジオウ。

「はあああー！」

二刀流でアギトに変身していたアナザーアギトに斬撃を決めていく。

「があああああー！」

すると、その個体の体内からアギトのライドウォッチが零れ落ち、アギトがアナザーアギトへと戻る。

「今だー！」

アギトライドウォッチをジオウがすぐさま拾う。

「これをー！」

そのままジオウは津上翔一へアギトのライドウォッチを投げ渡し、翔一は受け取る。

「ほら。ポチッとーポチッとー！」

ライドウォッチのスイッチを押してと伝えると、ジオウを信じた翔一がウォッチのポ

タンを押す。

『アギト!』

するとライドウオッチが消滅し、本来の持ち主であるアギトの力が翔一へ戻っていき、腰に変身ベルト・オルタリングが出現した。

「ふっ!」

翔一が腰にあるベルトの出現を見て、構える。

オルタリングからまるで風が吹いているかのような低い音声が響き、腕を上げて構える。

「変身!」

ベルトの左右にあるスイッチに手を置くと翔一の体が光を纏い、仮面ライダーアギト・グランドフォームへ変身した。

「ハッ!」

アギトの力を取り戻した翔一は、そのままアナザーアギトに向かっていく。

「ねえ、俺達も行くよ!」

『ジオウトリニティ!ジオウ!ゲイツ!ウオズ!』

ジオウはジオウトリニティウオッチを起動し、ウオッチを回す。

三人が光が包まれ、包まれていたゲイツとウオズの体が腕時計のように変わってジオ

ウの体にはめ込まれ、ジオウも仮面が中央へと移動して身体も変化を始める。

『トリニティタイム！三つの力、仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウオズ！トリーニティー！トリニティ！』

「こちらもジオウトリニティへと変身を完了した。

「ひれ伏せ！我こそは仮面ライダージオウ・トリニティ。大魔王たるジオウとその家臣、ゲイツ、ウオズ、三位一体となって未来を創出する時の王者である」

「いい加減はずかしいから止めろ！」

「うるさいな右肩」

「誰が右肩だ」

「ちよつと、喧嘩しないでよ！」

「本当に面白いね。君の仲間」

「いつもやってるわけじゃないんですけど……」

ゲイツとウオズが言い争っているのをジオウが止めている様子を見て、アギトが仲が良さそうだと思うが、ツクヨミはそうじゃないと呟く。

「俺も負けられないな！」

アギトもベルトを操作し構えるとアギトの体が光り、アギトの肩が青のストームフォームと赤のフレームフォームに変化し、アーマーは金色のグランドフォームへと

なった。

三つのフォームを同時に兼ね備えたフォーム、アギトトリニティフォームである。

「これは……！言わねばなるまいっ！」

「えっ？ちよつとウオズ！」

アギト・トリニティフォームを見て、ウオズの左肩が勝手に動きアギトに近寄る。

「祝え！ジオウ・トリニティとアギトトリニティフォーム……」

再び祝えからウオズが始まる。

『はあく……』

まだやるのかとみんながため息をつく。

「三位一体と、三位一体。合わせて六位一体の力が……もういいからっ！」

ジオウがウオズを静止させ、主導権を取り戻した。

「とにかく、これならいける気がする！」

「行くぞ！」

二人のトリニティが並び立つと、プリキュアの彼女らも共に並び立つ。

「ソウゴ達は本体を！」

「私達が周りのアナザーアギトを止めます」

「その隙に本体をお願いします」

「よし！みんな頼むよ！」

『うん！』

「ムープ！」

「フープ！」

ブルームとイーグレット、二人の前に二匹の妖精ムープとフープが現れ、二人はパレット中へと入り二人に力を送ろうとする。

「月の力！」

「風の色！」

「スプラッシュターン!!」

パレットから放たれた光がブルームの腹部に星型のベルトへ、イーグレットの左手に星型のプレスレットとなったプリキュア・スパイラルリングが装着される。

「精霊の光よ、命の輝きよ！」

「希望に導け、二つの心！」

「プリキュア!!」

二人が腕を回すのにあわせるように、水のようなエネルギーが固まっていく。それを、前方へと押し出すようにたたき出す。

「スパイラルハート、スプラアアッシュ!!」

ブルームとイーグレットが放つ二つのエネルギーが、アナザーアギトへと放たれた。二人が放たれたスパイラルハートスプラッシュは前方にいたアナザーアギト達を浄化させた。

「私達も!」

エネルギー達もそれに続くこうと、ミライクリスタルを取り出す。

「「ミライクリスタル!」」

「エネルギー!」

「アンジュハープ!」

「エトワールフルート!」

「「ツインラブギター!ミライクリスタル!」」

「アークユーレディ!」

「行くのです!」

三人がメロディソードのボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出し。ミライクリスタルをセットしツインラブギターを使い、二人が弦を弾き演奏を始める。

「「届け!私達の愛の歌!」」

「心のとげとげ!」

「ズッキュン撃ち抜く!」

「心のトゲトゲ、飛んで行けー！プリキュア！トリニティ・コンサート！」
「ツインラブ・ロックビート！」

アナザーアギト達に向かって虹色のエネルギーを飛ばすトリニティ・コンサートとツインラブ・ロックビートを放ち、そのままトリニティ・コンサート、ツインラブ・ロックビートが命中。

巨大な木が作り出されてピンク・水色・黄色の花が咲き誇り、アナザーアギトが浄化された。

「HUGっとプリキュア！エール・フォー・ユーー！」

「愛してる！」

「センキュウ！」

プリキュア達から放たれた技により、アナザーアギトの分身個体は全てが浄化され、元の人間に戻っていく。

すると、最後に残るアナザーアギトの本体が近寄ってくる。

「があー！」

そこへハリーがジカンチェーンを出して、アナザーアギトを拘束した。

「今やー！」

それを見てジオウトリニティとアギトが頷く。

「行くよ!ゲイツ!ウオズ!翔一!」

「ああ!!?」

『フィニッシュタイム!』

「はあ……」

ジオウトリニティがドライバーのロックを、アギトは6本角を横したエネルギーを地面に発生させ、二人の両足に力が留められる。

「はあ!」

二人が高く飛び上がり、拘束されたアナザーアギトへと向かってキックの態勢へと持ち込む。

『トリニティタイムブ레이크バーストエクスプロージョン!』

「はああああああー!!?」

ジオウトリニティとアギトは同時にライダーキックを放ち、三つのエフェクトに包まれながらアナザーアギトへと向かって一直線にライダーキックを放った。

「はああああああツツ!!?」

そのまま地面を擦り続けて二人が貫き着地すると、アンザーアギトは爆破して撃破され、アナザーライドウォッチも破壊された。

「くそ……」

アナザーアギトの敗北を見て、ウールはすぐにこの場から離れる。

「——い、起きろ。起きろ！おーきーろ！」

アナザーアギトの変身者——青年Aが目を開けると、目の前で自身の先輩が自分の顔をのぞいていた。

「……………んっ…ん？先輩？何してるんですか？」

「何してるんですか、じゃないんだよ！こつちが怪物騒ぎでてんやわんやしている時に、なーに寝ているんだよ！」

先輩の話聞いた青年Aが辺りを見渡すと、さつきまで居たはずの公園ではなく、何処かの広場だった。そして自分は、何故か広場の端っかで寝ていた。

「……………あれ？なんで此処に居るんだ俺……………」

「何で此処に居るんだって？なーに寝ぼけたこと言ってるんだ！誰かに運ばれて此処に来たっていうのかよお前は！そんなことある訳ないだろ!!」

「えっ、ええと、すみません……………」

「……………まあいいや。説教はもういいとして、早くいくぞ！仕事の時間だぞ！」

「ちよ、先輩!?俺、有給取ってるんですけど……………」

「休日出勤だよ!!言っとくけどな！これは俺の命令じゃなくて上司の命令だからな!!」

ケータイ見てねえのか?!!」

それを聞いた青年Aがケータイを取り出して電源を入れると、上司からのメールがびっしりと届いていた。

「……まじかよ」

「マジだぞ。あの人カンカンに起こっているぞ? ほれ、行くぞ! 今日の有給はまた今度に回してもらおうからよ!」

「は、ハイ!」

青年Aは起き上がって走り出すと、「あのクソ上司、マジで覚えてろよ……」という恨み言が浮かんだが、不思議と心は爽やかな感じがした。

「…………お前、やけに晴れた顔をしてんな。なんかあつたか?」

「いえ、別に…………ただ、少しだけ良い夢を見た気がするんです」

「夢?」

「昔助けて貰ったライダーに、また会った夢なんです」

「…………そうか、よかつたな」

「ハイ!」

そういつて笑いかけてくる先輩にそう返し、青年Aは仮面ライダー…仮面ライダーアギトに心の中でお礼を言いながら、その場を後にしたのだった。

その日の夕方、翔一はライドウォッチをソウゴに渡していた。

「いいの？」

「王様になつてよ。王様つて人、俺会つたことないからさ」

「ありがとう」

ソウゴは翔一からライドウォッチを託された。

「津上さん！」

ツクヨミは立ち去ろうとする翔一を追い、呼び止める。

「あのっ………！私、どんな過去でも、ちゃんと受け止めてみせます」

彼女は翔一に過去を受け入れると約束する。

「俺も、新しい料理作つて待つてるよ」

「頑張つてね。ツクヨミ」

「辛くなつたらまた、会いに来ていつでも相談に乗るから」

「私もだよ！ツクヨミ！相談なら私なんでも聞くから！」

はな達の優しさを感じ、ツクヨミの顔から笑顔が見えた。

「はなに相談すると、逆にはなが私に何か相談するんじゃない？」

「めちよつく！」

それを聞いたみんなが、面白いように純粹に笑い合っている。だが、これであと集める仮面ライダーのライドウォッチは五つとなった。

「かくして我々は、再び1つとなった。だが、また新たな秘密が生まれました。しかしこのことはまだ、私とハリー君の胸に留めておくことにしましょう。そして、残るウォッチは後5つ」

次回! Re・HUGつとジオウ!

第33話 2018： 女優の覚悟

第33話 2018： 女優の覚悟

晴天の日の下。HUGMANの屋上に置かれたデジタルサインージに、さあやの出演する炭酸飲料のCMが映り、はな達は近くのテーブルに集まってそれを見ていた。

「しゃあやー！ いっぱーい！」

「あつちもこつちも、さあやさあややな」

「人気絶頂中だね。さあや君は」

ハリーとウオズがそう言いながら辺りを見渡すと、柱の方には彼女のポスターも貼られていた。

「オーデイション頑張った甲斐あつたね」

「応援した私達も嬉しいね」

「さあやさん凄いのです」

「このまま行けばスターも夢じゃないかもね」

はな達が話していると、その炭酸飲料を買って来たルーラーが戻ってきた。

「さあやと一緒にシユワシユワしようと思ったのですが、さあやはどこですか？」

「あそこだ」

さあやがどこなのかを尋ねると、ゲイツの向いた方向を向く。

「サイン下さい」

「握手お願いします」

「皆さん……順番に……」

そこには、さあやを囲んで写真などを頼み込む客達の姿があった。

「CM効果で大人気だね」

「我が魔王の幼馴染。流石だよ」

だが、肝心の幼馴染であるソウゴがここにはいなかった。何故なら…

「はあく……」

「はい。時見。数学は合格だ」

「やった……っ」

「後は、英語だな」

「うっ！まだあるのく!?!」

現在、ソウゴは夏休み前に行われた期末テストの追試を受けていた。原因は解答欄の記入ミスと言う勿体ない話である。それを知った時、ゲイツとウオズにかなり絞られた。

そして午後になると、ビューティーハリーにみんなが集まった。

「はあく……ようやく解放された」

「ソウゴ。お疲れ様です」

追試でぐったりしているソウゴに、ルールーがCMの炭酸飲料を渡す。

「ふう……」

「お疲れ様」

さあやもソファアーに座って一息付き、ほまれに劳いの言葉を掛けられる。

「さあやさん有名人なのです」

「来てくれた全員のお願い引き受けるなんて、サービス精神凄いね」

「いいなあ……」

「えっ？」

えみる達からも労って貰っていると、突如はなが羨ましがる様な発言をし、一息ついていたさあやはどうしたのかと思つた。

「既に女優へと大きな一歩を踏み出したさあや、ソウゴは王様、ほまれはスケート、ツクヨミは機械のセッティング、ゲイツとウオズはソウゴの家臣、えみるとルールーはギター」

「待て、俺は家臣じゃ……」

「私だけ何も決まって無い……」

ゲイツは突っ込もうとするが、はなが話を続けるので否定するのをやめた。

「登山家、パティシエ、バスガイド……」

やりたい事はいっぱいあるけど……私まだまだ、ただの野乃はな！」

「早口言葉か」

「めちよつく……!」

「でも、私まだ、女優になるって決めた訳じゃないよ」

「ええっ? 何で?」

女優になるとは決まってないとさあやの口から明かされ、ほまれは何故なのかと思いを問いかける。

「何か悩む理由があるの?」

「うん……お母さん、どう思うかなって」

「どうって……」

「子供が自分と同じ道に進むのって、どうなんだろう……」

今まで特に何も言われなかったけど……でももし、困らせてたら嫌だなって」

「優しいのだねさあや君は」

「そら、聞かんと分からへんのとちやうか？」

「お母さん、いつも忙しくて、そんな話した事無かったから」

「では、直接聞きに行きましよう」

「良い考え！」

ならばと思ったルールーが直接聞きに行こうと提案し、はなはいい考えだと立ち上がる。

「不安なら私達もついて行くからさ。フレフレ！さあや！」

「うん」

ということではな達は、さあやの母親がいると言う撮影スタジオを訪れる。

「で、何故ドラマの撮影所に？」

「さあや君のお母さんはアシスタントが何か？」

「ああ、知らなかったっけ」

ゲイツとウオズはどうして母親に会うのに、撮影所に来るのかとみんなに問う。

あの時ゲイツは家出をされていていなかった為、彼がさあやの母親が女優だと知らなかった。

「あれ見て。あれがさあやのお母さんだよ」

ツクヨミが近くの建物を指差し、一同がその方向を向く。

そこには、さあやの母親である麗羅が主演のドラマ『女王のキッチン』の宣伝ポスターが貼られていた。

「ええっ!? あの人か!?」

「薬師寺麗羅。連続ドラマ、『女王のキッチン』の主人公」

「大鍋亮子を演じている方だね」

「詳しいね」

なるほど、彼女がさあやの母親なのか。と感心しているウオズに、ほまれは詳しいんだねと話しかける。

「料理のドラマと言う事で見始めたのです」

「物語や人物の描写も非常に興味深く、毎週欠かさず見ているのだよ」

そう言うルールとウオズの口からは、よだれが出ていた。料理メインで見ている事間違いなしである。

「そ、そうなんだ……」

「ホームページにその時の料理のレシピが載ってるから、叔父さんに作ってもらおうよ」

「では今度、ご馳走になってもよろしいですか?」

「いいよ」

ルルーがソウゴに顔を近づけて頼み、ソウゴは笑顔でいいよと伝えた。
「ありがとうございます」

「では、我が魔王今日にでも！」

「ウオズ。気が早いよ」

ソウゴ達が話していると一人の男性が近寄ってきた。

「やあ、お待たせ。さあやの父です」

「こんにちは」

「やあ、ソウゴ君。久しぶり。君達もよろしく」

「」「よろしくお願いします！」「」

「ましゅー！」

さあやの父親の薬師寺修司が現れると声を掛け、はな達が挨拶する

「急にごめんね」

「いやいや、丁度麗羅さんのお弁当が出来た所だったから」

「えっ？パパさんがお弁当を？」

「うん。僕、料理が大好きなんだ。まあ、順一郎さんには劣るけどね」

そう言うと、麗羅の弁当を見せる。

「それに今日はちよつと用事もあつてね。それじゃ、行こうか」

はな達は修司の案内で、撮影スタジオに入る。

「おおうっ！本物だ！」

「落ち着いて下さい」

「僕、監督に挨拶して来るから、見学しててね」

「はい！」

修司が監督に挨拶しに向かった。

すると、はながスタジオの中を見回す。

「ふふーん、撮影所なら有名人沢山いるよね。サインサイン」

そう言うってから彼女は懐から、有名人にサインしてもらおう為の色紙を出す。

「ホンマはそれが目的なんちゃうか？」

「ち、違うよ！」

「有名人をお探しですか？とう！」

ハリーの言葉にはなが否定していると、どこからか声が聞こえ。セットの上から誰かの人影が見えると、その人影はそこから跳んで着地する。

「一条蘭世でございませす！」

ネギのかんざしと鉢巻きを付けてドラマの衣装を着たその女性は、さあやと同一年の女優・一条蘭世だった。

「えっと……」

「誰だっけ……?」

「ほら、アナザー鎧武の事件の前に会った……」

ツクヨミが小声で伝えると、ソウゴ達は手を叩いて思い出した。

確かアナザー鎧武が現れる前、さあやへ向けてオーデインシオンに挑戦してきた子だった。

「この一条蘭世のサインが欲しい? いいですわ。特別ですわよ!」

はなの色紙全てを奪い取るようにして取り、サインを書く。

「めちよつく……」

当然、欲しいと言っていないのに全ての色紙にほぼ無理矢理サインを書かされたはなは地味にシヨックを受ける。善意で書いてくれたので余計にタチが悪い。

「蘭世ちゃん久しぶり!」

「薬師寺さあや、CMが評判のようですわね」

「蘭世ちゃんこそ、このドラマに出るんですよ? 凄いね!」

「そうですわ! ゲストだけど、存在感のある役よ!」

蘭世はこの回のゲストのネギ農家役での出演が決まっていた。

「更に成長した私を、存分に見せて差し上げますわ! おーっほっほっほ!」

そう言うのと高笑いし出し、その高笑いに驚いたはぐたんが泣いてしまう。

「ああ、大丈夫やではぐたん！」

「ビツクリしちゃったんだね」

さあや達は泣いてしまうはぐたんをあやそうとする。

「シーだよシー……！」

「ご、ごめんさい！」

蘭世がはな達に謝罪をしつつ、オロオロしながらもはぐたんをあやしているとそこに、ドラマの衣装を着た麗羅がスタジオに入った。

「お母さん！」

「麗羅さん」

「大丈夫。大丈夫よ。怖くないわ。良い子ね」

麗羅ははぐたと目を合わせて優しい声で大丈夫と伝えようと、はぐたんが泣き止み、彼女ははぐたんに微笑んで褒める。

「凄。優しく伝えただけで」

「完全に見惚れています」

「泣く子も黙る女優オーラなのです」

「偉いスンマヘン。邪魔したらアカンから、お散歩行って来ますわ」

「おしゃんぼ、おしゃんぼー！」

ツクヨミ達は麗羅の女優オーラに感激していると、ハリーがはぐたんを連れて散歩に向かう。

「すみません、すみません……！」

「騒がしくしてごめんなさい……！」

「本当にごめんなさい……！」

蘭世とソウゴ、さあやが謝るが、麗羅はあまり気にしている様子ではなかった。

「子供は泣いて当たり前。あなた達が謝る必要は無いわ」

そう言つてスタジオへと堂々と向かう。

「あ、はい。ありがとうございます……！」

「カッコいい……！」

「流石の貫禄だね」

「大女優なだけあるなあ」

「じゃ、軽くりハ行つてみますか」

『お願いしまーす』

まず最初にリハーサルの撮影が始まる。

『食材はまだか!??』

『お待たせ!ネギ持つてきやした!』

『きたか。他の食材は?』

『あん!テヤンデイ!うちはネギオンリーだで!』

料理人と蘭世扮する農家の女性の会話——の演技を見ていたソウゴ達はふと、あのCMを思い出した。

「ネギだね」

「またネギなんだ」

「だからあの格好……」

「ネギ好きだね」

リハーサルを見ていたはな達が、蘭世の格好に納得する。

「どう言う事だ?」

「野菜少女のCMと一緒に出了事があるんだ」

あの時のCMでもネギの着ぐるみを着ていた彼女の事をゲイツに話す。

「で、その時してたのがネギの着ぐるみなんだ」

「相当ネギに愛されてかもね彼女」

はな達が話していると、リハーサルの様子を見ている一同は次のシーンに心を惹かれ

始めた。

〈バタツ！〉

『りよ、亮子……』

ドアが開く音と共に亮子役の麗羅が入ってくるシーンへ移ると、彼女はそのままネギを取り、なんと手に取ったネギを生で齧ったのだ。

それを見たソウゴ達は驚く。

『いいネギだ。これだけで十分』

『そんな、無茶な……』

『やるさ。作ってやるさ。ネギのブルーコースを！』

その台詞を放ちながら演技を続ける麗羅に、ソウゴ達は感銘を受けていた。

「オーケー！そこまで！」

「——辛〜い！」

リハーサルが終わった直後、麗羅は表情を歪めて辛いと叫ぶ。リハーサル終わりまで表情を変えずに我慢しているあたり、正に本物の女優って感じである。

「いきなりネギを齧るとは、凄いアドリブだな麗羅」

「亮子なら、素材は生で味見すると思って……」

今彼女が生でネギを食べたのは、演じている亮子と言うキャラクターの性格を考えた

上での行動で、アドリブでもあった。

「あれアドリブだったんだ」

「本番もその調子で頼むぞ」

「これが、一流の女優……」

「プロだ……」

「じゃ、本番行こっか」

今度は本番の撮影が行われる。

その演技には、まるで本当にその場で起こっているかのようなリアリティーのある台詞で、一つ一つの行動に魂が込められているかのようにソウゴ達は感じた。

「麗羅さん。本当に凄い……さあや？」

「凄い……」

母親の演技を見入るさあやに、ほまれが肘で小突く。

「見惚れてちゃ駄目じゃん。目的、忘れてるよ」

「あつ、そっか」

昼休憩に入り、麗羅が椅子に座って台本を見直している横から、目的を思い出したさあやが来ると、後ろでソウゴが二人を見つめる。

「麗羅さん。どうも」

「ソウゴ君。久しぶりね」

ソウゴと麗羅が軽く挨拶を済ませるとさあやが近寄る。

「…あの、お母さん」

「何？」

「CM、見た？」

「ええ、好評なようね。それがどうかしたの？」

それを聞いて、さあやはここですぐ傍のテーブルに弁当と自分が出演していたCMの炭酸飲料のボトルが置かれていた事に気付く。

「迷惑とか、掛かって無い？」

「迷惑って？」

「その……お母さんの、仕事の邪魔になってたりしてないかな……って」

「あなたはどうかなの？」

「えっ？」

邪魔になっっていないかと心配している娘に向け、麗羅はどう思っているのかと問い返す。

「例え実力で搦んだ仕事でも、薬師寺麗羅の娘だから。親の七光りだから。そう言う人は必ずいるわ。この先もずっとね」

「……っ！」

「その覚悟はある？」

「……分らない……」

「決して女優だけが、あなたの道じゃないわ」

立ち上がったからそう言い、この場を後にした。

「……………ッ」

「さあや……」

ソウゴは外に出ていったさあやを追いかける。

外に出たソウゴが建物の周りを走っていると、悄然と空を見上げるさあやを見つけて駆け寄る。

「さあや……もしかして、自分が麗羅さんに迷惑かけているって思っているの？」

「うん……やつぱり、迷惑だったのかな……」

彼女は複雑そうな笑みを溢しながら太陽を見つめ、そう呟く。

「いいじゃないの。迷惑掛けたって」

「えっ？」

「さあやちゃん」

すると監督が現れ、腕を広げてさあやに近付く。

「はぎゆ」

「ぎやああああああつ?!?!」

「ちよ、ちよつと何してるんですか?!?!」

いきなり抱き付かれ、さあやは思わず悲鳴を上げる。

急いでソウゴは彼女に抱きついた腕を解き、救出する。

「あだつ!」

「年頃の女子にいきなり抱き付くんじゃない!」

「ごめんね。ビックリさせちゃって」

年配の女性スタッフが「やめなさい!」とプリントされた緑のスリッパで監督の頭を叩き、別の女性スタッフがさあやに謝る。

「いきなり抱き付かれれば、そりやあ驚くわよ」

「いやー、でもこんなに大きくなつて」

「えっ?」

「元氣そうで嬉しいねえ。麗羅ちゃんそつくり」

「えっ?!」

「もしかして俺の事、覚えて無い……?」

監督はさあやの反応を見て、自分の事を覚えていないのかと考える。

「当たり前でしょ」

「君はまだ、赤ちゃんだったからね」

今度は年配の男性スタッフが現れ、そう告げる。

「あなた、よくここに來てたのよ」

「えっ…」

「そうなんですか？」

「ミルクあげたり、オムツ替えたりしたんだから」

「昔の事だよ。懐かしい話さ」

詳しく聞きたい為室内に移動し、監督がさあやとソウゴだけで無くはな達にも昔の事を話す。

それは、麗羅が今よりも若かった頃まで遡る。

『私！どうしてもこの役をしたいんです！』

さあやが産まれてからしばらくして、麗羅が演じたい役があると言つて監督に頼み込む。

最初は子持ちでは無理だと考えていたが…

『みんなで力を合わせれば何とかなるだろ』

スタッフと協力する事を麗羅と修司に伝え、その役を麗羅は演じたのだ。

「それから、アイツは凄く頑張ったよ。」

女優の仕事も、お母さんも。勿論修司も、そして俺達も、みんなで頑張った。

だから、アイツは最大限輝けたし、君もこんなに大きくなった」

「そんな事が……」

「皆さんもさあや達にとって大切な家の家族なんですな」

監督を含んだここにいる人達は、昔から薬師寺家と家族同然に接しているのだと知った。

「何か、すみません……!」

「だからいいんだってば」

「子供はそうやって、大きくなって行く」

「それが当たり前なのさ。俺達は、君達親子を応援したいだけ」

「応援……」

「だってアイツは、今でも頑張っているからね」

「えっ?」

「修司、見せてやれよ。こっそりさ」

監督の案内で歩いている間にはな達と合流した一同は外から、給湯室でネギを切る麗羅を見る。

「ネギ切ってるね」

「あれ、何してるんですか？」

「包丁の練習だよ。麗羅さん、昔から料理はちよつと苦手だね。役作りの為に、休憩中はいつもああやって練習しているんだよ」

「キッチンの女王が……」

「意外です。そんな一面があつたなんて」

ウオズとルールーが大女優にそんな一面があつたことに驚いていると、えみるはさあやの様子が変わったことに気付く。

「ん？」

「そうだった……何で、忘れてたんだろ……」

さあやが壁に背中をつけてある事を思い出した。

「お母さんは昔から、ちよつと不器用で、でもすつごく頑張り屋で——

一緒にいられる時間は少なかったかもしれないけど、その分いっぱい遊んで、笑って、抱き締めてくれた」

その時間は短ったけど、一生のものできあやにとつてかけがえのない時間だった。

「だから、私いつもテレビに出てるお母さんを見ながら、応援してたんだ。凄い。頑張ってた。お母さんが、凄く素敵だったから！」

それは同時に、さあやがどうして女優になりたかったかを思い出させた。

「さあやのお母さんは、カッコいいんだね」

「うん！」

（そっか。私、お母さんのいる向こう側に行ってみたくて、だから……）」

その頃、裏の流しに置かれたネギを休憩中の蘭世が見つめていた。

「これ……撮影後みんなで食べるんですわよね……？」

（私、あれがトラウマで……実はネギが……苦手なのですわ……）」

流しの辺りに置かれたネギを見て、昔CMでの事を思い出し呟くと、心の中で呟いた蘭世から小さなトゲパワワが放出される。

するとそこに、ジンジンとタクミを連れたジエロスが現れた。

「リトルなトゲパワワでも、ビッグにしちゃえば、イケるわよね？」

「も、勿論！大小など関係ありません！」

「もうちよつと頑張つてよね」

「か、かしこまり！」

「明日への希望よ、消えろ！ネガティブウエーブ！」

ジェロスは手でハートマークを作り、ネガティブウエーブを放出させる。

蘭世からトゲパワワを取り出し、暗黒の雲のようなエネルギーに変える。

「発注！猛オシマイダー！」

暗黒の雲がビデオカメラに憑り付き、ビデオカメラ猛オシマイダーが生み出された。

「それじゃあ、そろそろ本番——おい、特撮はここじゃなくて隣の——」

猛オシマイダーが特撮用の小道具と勘違いした監督達からトゲパワワが放出され、そのまま倒れて気絶する。

「な、何これ？」

練習から戻った麗羅が猛オシマイダーを見て驚く。

「あら、美人。しかも凄いアスパワワ。私の嫌いなタイプ」

ジェロスが指を鳴らすと同時に、麗羅からトゲパワワが放出され、倒れて気絶する。

「お母さん！」

異変に気付いたソウゴ達は、急いでジクウドライバーとプリハートを取り出す。

『ジクウドライバー！』

『ビヨンドライバー！』

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

『ウオズ! アクシオン!』

『ハリー!』

四人はウオッチをドライバーに装填して構えると、はな達五人もプリハートを取り出す。

「「変身!!?」」

「「ミライクリスタル!ハートキラツと!」」

四人がドライバーを操作し、アーマーとスーツが体に纏われ。五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

『投影!フューチャータイム!スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ!』

『ライダータイム!仮面ライダーハ・リー!』

「輝く未来をく抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「[[[[HUGつと！プリキュア！]]]]」

ジオウ達が変身を完了すると、最初にゲイツとエールが突撃する。

「たああああああつ！」

「はああああああつ！」

エールとゲイツが猛オシマイダーに向かって跳び、パンチとジカンザックスからの突きを放って後ずさせる。

「お母さん！」

アンジュが麗羅の元へ駆け寄り、倒れている監督達にも気付く。

「ぐわあ！」

ウオズとハリーが猛オシマイダーの攻撃を受けて吹き飛び、エトワールも吹き飛びながらも体勢を整えて着地するが、パワーが大きかったのか思わず地面を擦りながら後ずさる。

更に左右からマシエリとアムールが猛オシマイダーに向かって跳ぶ。

「うあああつ！」

すると、猛オシマイダーは上半身を勢いよく回転させ、二人を吹き飛ばした。

「みんな！」

「後はアンタ達だけ。さっさとやっちゃいな」

「勿論です。やれ！」

猛オシマイダーが両腕を振り下ろして、アンジュとジオウに叩き付ける。

「ふん！」

だがジカンギレードを支えに攻撃を受け止める。

「ソウゴ君！」

「絶対に……壊させない……！」

ここは、アンジュの……さあやの思い出が詰まった、大切な場所だからッ！」

ジカンギレードを振り上げて猛オシマイダーを跳ね返すと、ジオウライドウオッチIIを起動させる。

『ジオウ！II！』

ウオッチを分割してドライバーの左右に差し込み、二つの時計のエフェクトが現れるとジオウはドライバーを回し、二つの時計が左右対象に止まる。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！II！』

ジオウⅡへと変身を完了させると、サイキョーギレードを出現させる。

『サイキョーフィニッシュタイム!』

更にジカンギレード・ケンモードとサイキョーギレードを合体させ、『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がらせる。

『キングギリギリスラッシュ!』

「オリヤヤヤヤヤヤ!!?」

ジオウが放ったキングギリギリスラッシュは直撃し、そのまま猛オシマイダーは倒れ伏した。

「ソウゴ君……ここは、お母さん達の大切な場所! 帰って!」

ジオウが自身の思い出の場所を守る為に猛オシマイダーをぶつ飛ばしたのを見て、アンジユも帰ってくれと言う。

「ドラマなんて所詮は作り話。それが何だって言うの?……ウザッ。そのイキった口、塞いでやんな!」

ジェロスの指示で起き上がった猛オシマイダーが足のローラーで、二人に向かって体当たりを繰り返そうとした。

「!?!?」

「マシエリ! ポップ!」

だが危ない所にマシエリが技を放ち、ジオウとアンジュを守った。

「マシエリ！ありがとう！」

「ちっ！猛オシマイダー！」

体勢を立て直した猛オシマイダーがもう一度体当たりをしようとする。

しかし、アンジュがメロディーソードからエネルギーのロープを放って足に巻き付ける。

「ここには、沢山の人達の想いが詰まってる！私もそれを、応援したい！」

そして……！いつか私も、ここに来たい！」

そう叫んでメロディーソードを勢いよく振り下ろし、猛オシマイダーを地面に叩き付けた。

「アンジュ！俺も続かなきゃ……」

ジオウが加勢しようとしたその時、彼の腕にあるブランクウオッチが光り出した。

「えっ？」

ブランクウオッチは姿を変え、ライドウオッチへとなろうした。

「これ……!?」

そのブランクウオッチは、かつてアナザークウガ鬼火との戦いの後に消えた筈のジオウミステリーウオッチの元のウオッチだった。

「……………どうして……………よし！」

『ジオウ！ジオウミステリー！』

ジオウⅡのウオツチを外し、ジオウとジオウミステリーのウオツチを両側に差し込む。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

元のジオウへ戻ると前の方から後ろに羽があり、その手には二本剣を持ったアーマーが現れ、ドライバーを回転させる。

『アーマータイム！歴史の全てを知る王々！仮面ライダージオウミステリ〜！フ・レ・ア〜！』

「ソウゴ、そのアーマーは……………」

「あん時の……………」

エール達はアナザークウガ鬼火との最終決戦で使ったジオウミステリーフレアフォームになったことに、驚きを隠せなかった。

「これは……………祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来を知らしめる時の王者！その名も仮面ライダージオウ・ミステリーフレアフォーム！まさに復活の瞬間である！」

「なんか……………いける気がする！」

「何なのあれ？猛オシマイダー！」

猛オシマイダーがジオウに突撃を仕掛ける。だが、ジオウは翼を広げ宙へと飛び躲した。

「オシマイダー！」

再度、猛オシマイダーはジオウのいる宙へと飛んで攻撃を仕掛ける。

「ふうん！」

だが、ジオウの攻撃はすり抜けたかのように躲された。

「何ですって!?？」

「はああ!!??！」

そのままジオウのフレアドラゴンバスターの斬撃が繰り出され、背中から攻撃を食らった猛オシマイダーは地面へと叩きつけられた。

「これで終わりだ！」

『フィンニツシュタイム!』

そういうと、両方のウオッチを同時に起動。

ドライバーを回すと、両肩に装備してある特殊大型デバイス装甲・ギアクロニクルシヨルダーの機能で特殊エネルギー『エピタフレア』を高速生成し、ジオウが両方の剣を向けてエピタフレアのエネルギーを蓄積させ、猛オシマイダーへと構える。

『ジオウミステリー〜タイムブ레이크!』

「はあく……はあああああー!!?」

ジオウの持つ両方の剣が砲撃となって、放たれたエネルギーは猛オシマイダーに直撃した。

「ふう〜」

攻撃を受け、浄化されたのを見てジオウが地面へと降りる。

「やられちゃいました……」

「あのジオウの活躍、もう少し見たかったですけどね」

「アンタら……帰ったら反省会よ」

ジェロス達が瞬間移動して姿を消した。

その時、ドライバーに装填されたジオウミステリーウオッチが再び元のブランクウオッチへと戻った。

「あれ?また、ブランクウオッチに?」

ブランクウオッチになった為、ジオウミステリーから元のジオウへと戻った。

「凄かったです!時見先輩!」

「そのアーマーは相手の攻撃をすり抜けたかのように見えたのですが?」

「ジオウミステリーフレアフォームは、相手の攻撃を未来へ飛ばす事ができるからね」

ジオウミステリーフレアフォームは相手の攻撃を未来へと飛ばし、無効にする事が出来るのである。

「そんな事もできるのですか!?!?」

「でもなんで、そのウォッチがまた使えるようになったの?」

「それって、クロバーの時のアナザライダーを倒してから使えなくなっただけじゃ?」

「そうなんだよね……」

アナザークウガ鬼火を倒した後、このウォッチはただのブランクウォッチに戻った。

だけど、今回またブランクウォッチから一回だけ復活した。

「ライドウォッチがお前の心に反応したから、今回復活したのかもな?」

「俺の心に?」

するとゲイツが、ライドウォッチがソウゴの心に反応したからではないかと推測する。

「クライアス社の話やつと、時より強い想いにウォッチが応えるって聞いたことがあるんや」

「強い思い……」

あの時思ったのは、さあやとさあやの家族達の思い出が詰まったこの場所を守りたいそう願った。丁度その時、ウォッチに光が宿り出した。

「ソウゴ君。ありがとう」

「どういたしまして」

あの時のジオウの言葉にお礼を言うアンジュに、ジオウも優しく答えた。

それからしばらく経った後に撮影が再開され、無事に収録を終えることが出来た。

「ホントカッコいい」

「これで、大鍋亮子」

「ところでこの料理は一体誰が……撮影用にしては本格的過ぎるのでは？」

「確かに。誰が作ったんだろ？」

ルールー達が感激していると、ウオズとツクヨミは撮影に使ったネギ料理に疑問を浮かべる。

「僕だよ。どうせなら、ちゃんと美味しく食べられる物をね」

「どうやらこのネギ料理は、修司が作った物だったらしい。」

「まさか、用事ってこれだったのですか？」

「あはは」

「えみるが尋ねると、微笑んでピースサインを作る。」

「ウチの夫、凄いでしょ♪」

「では、これまでの回に出た料理も、レシピの監修もあなたが？」
「そうだよ」

テーブルに置かれたネギ料理を見てソウゴ達は席に着く。
『いただきまーす！』

しばらくしてから、修司の作ったネギ料理を堪能する。

「うん！美味しい！」

「美味しい……！」

「ネギしか無いのにこのバリエーション……！」

「ネギだけとは思えない旨さだ」

「うん！この味いける！」

「これが……ネギ？？」

少し離れた場所で食べる麗羅と修司の元に、さあやが来る。

「ねえ、お母さん」

「どうしたの？」

「うん。あのね……私、本当に女優になりたいのかはまだ分からない。でも、一つ目標が
出来たの。」

——いつか、お母さんと共演したい。

それが今の私の夢。どうかかな？」

「私の居るこの高みまで、登って来られるかしら？」

「登ってみせるよ！絶対！」

女優として母親と共演したい。さあやのその夢を麗羅は微笑んで応援し、さあやも笑顔で返事したのだった。

「ところでさあやちゃん。一つ聞いていい？」

「？…何ですか？」

すると、年配の女性スタッフ二人がさあやの傍に寄る。

「今あそこにいるソウゴ君はさあやちゃんの彼氏？」

「ふえっ！！？」

奥の席ではな達とネギ料理を食べ続けてるソウゴを指差して尋ねると、さあやが顔を赤くして驚く。

「さつきもさあやちゃんがピンチの時すぐに助けてくれたし、何より小さい頃から一緒にいる事多いし」

「さあやちゃんとソウゴ君、お似合いだわ」

お似合いだと言われると、頭からオーバーヒートした機械みたいに『ボンっ』と湯気が出て、彼女の顔が赤くなった。

「そ、ソウゴ君とはその……お、幼馴染……いや、その……！」

赤面塗れのさあやは必死になって彼との関係を言おうとする。

「僕もソウゴ君なら、安心してさあやを任せられそうだよ」

「お、お父さんまで……！」

「ソウゴ君と交際したいなら、彼の夢の王様の隣に立てる女優として、キャリアを確保しなさい」

「お母さんも……！」

お父さんとお母さんにも、彼との外堀を埋めるかのような発言を言われて恥ずかしくなっている……

「俺がどうかしたの？」

「ツ……？」

料理を食べていていたソウゴが自分の事を話していると知り、さあやに尋ねる。

「え……っ、その……えつと……！」

「顔を赤いけど？大丈夫？」

顔が赤いと指摘されたさあやがあたふたする。

「し、失礼しました！」

「ちよ、ちよつとさあや？」

遂に羞恥心に限界が来た彼女は、この場から逃げるようにして出て行く。

「どうしたんだろ？」

ソウゴがみんなに聞くと、はなやゲイツ達は何故かわからなかったが、大人達は直ぐに察した。

「いいね、さあやちゃん青春してるね」

二人の姿を見た監督は、笑いながら両手の人差し指と親指で四角の枠を作り、その枠に二人を入れて呷く。

その夜、さあやが自分の部屋でずっとベッドに籠っていた。

「あ、どうしよう……」

彼女はソウゴの事を思い出し、ずっと赤面したままだった。

ベッドの中で悶えていると、玄関の方からインターホンが鳴った。

「あつ！お父さんまだ帰っていないんだつた」

父がいないことに気づき、すぐにさあやは部屋を出てすぐに玄関を開ける。

「あつ、さあや。いた」

「そ、そ、ソウゴ君！」

しかし、現れたのは父親でなくソウゴだった。その為に彼女の顔がまた赤くなった。

「うわあ!!?」

「危ない!」

「あっ……」

突然ソウゴが現れて驚いたさあやは足を躓き、倒れかけると咄嗟にソウゴが彼女を支えた。

「ご、ごめんなさい!!?」

すぐに我に帰り彼から離れる。

「ど、どうしたの?」

「これ、忘れ物」

ソウゴの手にはさあやのミライクリスタルがあった。どうやら、走った時に落としたようで、彼がそれを拾ってくれたようだ。

「……ありがとう」

「じゃあね♪」

「あっ!待って!」

さあやが咄嗟にソウゴの服を掴む。

「ん?何?」

「その……あの……そ、ソウゴ君は……わ……」

「わ?。」

「わ、わ、私達の前からいなくならない!?!……あれ?。」

思っている事とは違うことを言ってしまったさあや。

けれど、それを聞いたソウゴは笑って答えた。

「何言ってるんだよ。いなくならないわけないでしょ。」

みんなでクライアス社を止めてオーマジオウを止める。そして、俺は最高最善の魔王になるって、約束したじゃん」

「……うん♪」

笑ってそう言う彼を見て、さあやは笑みを浮かべる。

「じゃあね♪」

「うん。また明日!」

（——いつか、伝えてみる。ソウゴ君に……）」

さあやが手を振って見送る。

そしていつか、自身の気持ちをソウゴに伝えようと心に決めた。

次回! Re. HUGつとジオウ!

第34話 2018：ビビリタイム! ビビりを克服せよ!

第34話 2018：ビビリタイム！ビビりを克服せ

よ！

この物語は、ほんの些細な出来事から起こった出来事だった。

当時の事は、彼——時見ソウゴもよく覚えている。

「えー、その時の事は俺もよく覚えているます。あの時、俺たちは悪ふざけ半分、彼らの恐怖心の克服に貢献しようとして、肝試しを行いました。あの時の彼らの顔は非常に面白く、その日を非常に楽しく過ごしました」

「……そう思っていた時期が、俺にもありましたよ……」

あの出来事は、今も忘れる事が出来ない、根深い記憶を植えつけました。

「当時の俺たちは、まさかあんな出来事に発展するなんて。全く思いもしませんでした……」

そう、あれは。ソウゴ達がさあやのお母さんの撮影の見学に伺い、数日が経った時の事だった……

「ん……？」

スズメの囀りと共に、朝になった外の光がソウゴに射し込まれ、彼の目が覚める。

「んっ……あれ?」

起きて視線をずらすと、下の方にはボードゲームやお菓子のカスが散らばっており。

床の上ではな、えみる、ツクヨミ、ウオズが毛布をかけられながら寝ていた。

(ああ……そういえば、みんなであちでお泊まり会やってゲームしてその後……あっ!)

夏休みにクジゴジ堂でお泊まり会となり、昨日はゲームやビデオを見て盛り上がったが、何故かそのまま寝た事を思い出した。

「あれ?ゲイツとほまれは?」

ゲイツとほまれがいない事に気づき起き上がると、二つの手が自身の両腕に触れた感触に気づく。

「んっ……ええ!?」

その正体に気づくと少し声が漏れてしまう。

何故なら、ソウゴが寝ていたベットのの中にさあやとルールがいたからだ。

「んっ……」

「……ん……」

再び外から響くスズメの囀りと一緒に、綺麗な寝顔で寝ていた二人の声が聞こえ、起きてしまったのかと動揺する。

「……なんで？」

取り敢えずさあやとルーラーが起きなかったのを確認すると、なんで二人が自分の隣で寝ているのかと思ひ驚く。

「とにかく……」

静かに起き上がってベッドから降りると、部屋を後にするため、部屋の扉をゆっくりと開き部屋を出た。

「なんで、二人が隣にいたんだろ……？」

何故二人が隣で寝ていたのだと考えながら、下のリビングへと向かおうとする。

「ソウゴ」

「!!?」

「どなんした？急に水鉄砲を浴びたような顔して」

声をかけられて振り向くと、そこに居たのはハリーと彼に抱えられたはぐたんだった。

「ハリーか……ん？何も無いよ？」

「ソウギョー！オハヨー！」

「おはよう。はぐたん」

ソウゴはハリーとはぐたんと共に下へと降りる。

「おはよう。叔父さん」

そこには、いつも通り朝食の準備をしていた叔父さんがいた。

「おはよう、珍しく今日は早いね。3番目だけど……」

「3番目……ゲイツ!ほまれ!」

三番目と聞き、リビングの方を振り向くと、既に椅子に座っていたゲイツとほまれが其処にいた。

「おはよう………」

「お……おはよう」

「……どうしたの二人共?」

だがしかし、何か二人からいつも元気を感ずることが出来ない。

しかもよく見てみると、二人の目下には凄い隈が出来ていた。

「おはよう〜!」

「おはよう〜!あれ、ソウゴ早いわね」

何でそんなに寝不足なのかと二人に聞こうとする前に、はな達もリビングへとやってきた。

「みんな、おはよう!」

「おはようございませす!」

「ツツツ??」

首だけを回してみんなにおはようと云おうとしたソウゴは、はなやウオズの後ろに居たさあやとルールーを見て、額だけでなく項からも冷や汗を吹き出しながら勢いよく胴体を回して振り向く。

「…ソウゴ君、どうしたの?」

「体調が悪いのですか?」

「…ん?…いや、別に?」

耳をわずかに赤くして少し動揺するも、どうやら彼女らは今朝のトラブルは覚えなかつたみたいで、少しホツとする。

……心なしか二人の肌が僅かにツヤツヤに見えたのだが、ゲイツとほまれの肌荒れがいつもよりも酷すぎて対象的にそう見えただけで、流石にそれは気のせいだろう。

「さあ、みんな朝食を取ろう」

ウオズが言うのと、いつもより広いテーブルでソウゴ達は椅子へと座り、茶碗にご飯と汁を入れる。

『いただきます〜!!?』

ソウゴ達は朝食を手に取り、ご飯を食べ始めるが、ゲイツとほまれは一度も箸を取らず、ただぼくと座っていた。

「ほまれさんにゲイツさん。大丈夫ですか?」

「二人共凄いやだよ」

はな達が二人の顔を見るとウオズの言う通り、ゲイツとほまれの目には酷いやが出来ていた事に気付く。

「もしかして寝不足?」

はなは寝不足では無いのかと思い、二人に声をかける。

「ん……」

「そんな所だ……」

二人が肯定すると、まだ眠いのか目をこする。

「ひよつとして昨日見たこれのせい?」

ツクヨミが昨日の夜、ゲーム中にみんなで見えた学校の幽霊に関するホラー映画のD V Dを二人に見せた。

「ツク?」

そのパッケージを見た二人は、見るからに大きい動揺を見せた。

「い、いや〜そんなわけ!」

「無いでしょ!」

僅かに体を振動させる二人は椅子から立ち上がり、リビングから急いで上へと登る。

「…いや、間違いなく怯えてたね」

「あの様子じゃ、気になって寝れなかったみたいだね」

「おそらく、寝れても精々一時間くらいでしょ……」

「ホラー映画であんなになるなんて」

ツクヨミがホラー映画くらいで眠れなくなるなんて、と呆れていると、ウオズの頭に電球が光りながら浮かび上がった。

「それならいい考えがある」

「いい考え？」

ウオズがみんなに耳打ちをしたい為、ソウゴ達へ顔を寄せ話を聞かせる。

「面白そう！」

「やってみるのです！」

「いいね。なんかビビる気がする〜！」

影で邪悪な笑みを浮かべたウオズによって、ゲイツとほまれに行く良い方法をやるために行動を開始する。

その夜……暗い保健室に、ゲイツとほまれが寝かされていた。

「ん……ふわあ……あれ？」

「ほわあく〜!……何これ?」

二人が目覚めて起き上がると、見覚えのない場所だとすぐに気づいた。

「どこだ?ここは?」

「何なのここ?」

すると彼らの耳にアナウンス音が流れ始める。

『おはよう、明導ゲイツ君。輝木ほまれ君!』

「誰だ?」

いきなり二人の名を呼ぶ声が聞こえ、両者は警戒心を高める。

『生き残りたければ今夜中に、ここから脱出する事だ』

「なんだと」

「ここから脱出って?」

『健闘を祈るよ』

それを最後にメロディが流れ、アナウンスが終わった。

「なんだと……」

ゲイツとほまれは起き上がり、すぐに部屋から出ようとする。

「ッ!?」

ドアを開こうとすると、そこにある人体模型を見て足止める。

「ヘツ……いい体してるね」

「ゲイツ……それ、人体模型だけど」

「うるさい！」

ほまれは人体模型にいい体してるねと言ったゲイツにツツコミを入れると、二人は保健室を出た。

「学園では無いのは確か……」

「ねえ……ここから脱出ってどうすれば……？」

「と、と、とにかく、行くぞ……」

とりあえず、二人はここから脱出するために外へと向かう。

その頃クジゴジ堂では、ソウゴ達が数台ものテレビからゲイツとほまれの様子を観察していた。

「ゲイツとほまれ。起きたみたい」

これを見ている読者はもうお分りいただけただろうか。そう、これはソウゴ達が仕掛けたものなのだ。

彼らは愛崎家の力で今は使われていない学校を見つけ、そこを肝試しの会場へと選んだ。そして、夜までに寝ている二人を連れて行き、準備を行なっていた。

「ねえ、ウオズ！起きたよ。起きたよ」

はなが二人が起きたのを報告すると、ウオズがアナウンスのマイクを取る。

「おはよう。明導ゲイツ君。輝木ほまれ君！」

先のアナウンスの声の主はウオズだったようだ。

『誰?!?』

「生き残りたければ今夜中に、ここから脱出する事だ」

そこからセリフ通りに進み、今の状況に至る。

『なんだと』

『ここから脱出って?』

ソウゴ達はモニターを見ながら、二人が人体模型に驚く様子を見る。

『へッ……いい体してるね』

その発言を聞いたソウゴ達は笑いを堪える。

『ゲイツ……それ、人体模型だけど』

『うるさい!』

『ねえ……ここから脱出ってどうすれば……?』

『と、と、とにかく、行くぞ……』

モニターから二人が保健室から出ていくのを見た。

「オーケー！よし！本番行くよ！」

いよいよ、二人を驚かす為にソウゴ達の計画が始まる。

廃校の中を歩くゲイツとほまれは、此処から脱出するために進み続ける。

「ねえ、此処どこなの？」

「おそらくは、俺達も知らない場所のようだ……」

二人が何も知らず歩いてると、一つの標識が見えた。

「こつち？」

「こつちに來い？」

矢印の描かれた看板を見た二人は、知らず知らずに矢印の方へ向かう。

それでは皆さんお待ちかね…仕掛けまでのカウントダウン。

『5……4……3……2……1……ゼロタイム……！』

〈ドンー！ドンー！〉

「……」

いきなり物を叩くような音が聞こえ、ゲイツとほまれは振り向く。

「と、と、トイレ……」

音が聞こえたのはトイレからだった。

「ま、ま、まさか……………トイレのお化けの花子さん……………」

「ほ、ほ、ほまれ……………そんな、お化けがいるわけ……………」

〈ドン!!ドン!!〉

トイレから聞こえた音を聞いた二人がまさかと思っていると、更に強い力で叩く音が聞こえた。

「こつちだよ。来てよ〜!」

「!?!」

するとトイレから声が聞こえて来て、二人のビビリ度がさらに上がる。

「まさか……………」

「本当に……………」

二人がトイレの前に立ち止まっていると…

〈ドカアアアアアアアー————ツツツツ!!!!〉

「どわああああああああアー————!!?!」

いきなり壁の方から物凄い音が炸裂し、立ち止まっていたゲイツとほまれが慌てて転がる。

「なんだ……………敵襲か?!?」

「なんでもいいから逃げよ!」

るといふものである。

ぶっちゃけ、この作戦は二人への悪意がマシマシである。

「次は、我が魔王とえみる君の番だ」

「うん!」

「飛びっ切りなの行くのです!」

「二人共!頑張って!」

「任してといて!」

ソウゴとえみるは仕掛けの準備へと向かう。

全力で走って息を切らしたゲイツとほまれは、困惑と動揺を隠しきれぬまま歩き続ける。

「さっきの……アナザーライダーか……?」

「まさか……だけど……ほ、本当に幽霊……」

「ば、馬鹿のことを言うな……ゆ、幽霊が……いるわけ……」

面白いくらいにガタガタと体を震わせながら、幽霊がいるのかと考え初めている二人。

そこへ、また矢印が現れた。

矢印が指していた所には『生物実験室』と書かれており、それを見た二人は足が止まり、目を大きくして驚かせる。

「失礼します……」

それでも二人はこの場から脱出する為に、体をバイブレーションさせながら実験室の中へと入る。

「来ました〜」

「オーケー」

実験室の中では既にソウゴとえみるが待機していた。

一方、ゲイツとほまれは二人が最初に仕掛けた紐に引っかかる。

「すみません！……つて、脅かさないですよ……」

何もないと安心するゲイツとほまれ……

だが、ソウゴとえみるの二人が待機していて、何も無いわけがない。それでは皆さんおまちかね、カウントダウンの時間です。

『5……4……3……2……1……ゼロタイム……！』

二人が目の前に置かれた骨の模型に背中を向ける。

すると、模型の腕が動いて二人の頭を触る。

「何すんのよー！」

「ムッフッフッフー!!?」

二人のビビリの姿に、ツクヨミときあや、ルーラーの笑いが止まらない。

一方の二人は模型にビビりに逃げようとするが腰に力が入らず、すぐに逃げられなかった。

「追うな! 追うな!」

「来ないで! 来ないで!」

何とか起き上がり、目の前にいる骨模型から逃げようとする時、

いきなり床から炎が吹き上がり、ゲイツとほまれはびっくりして飛び上がってしまった。

「ああああああー!!?」

「つっ!!?」

「もう、つまずきすぎいい!」

「お願いだから許して!」

二人は恐怖のあまり、すぐに生物実験室を出て行く。

それを見て隠れていたソウゴとえみるが、困惑を含めた真顔のまま顔を出す。

「……」

「時見先輩……?あれって……」

「いや、俺じゃないよ……」

何故か二人は、きっきの仕掛けに関して疑問があるような様子だった。

しばらくして、二人はクジゴジ堂へ戻ってきた。

「ただいま(なのです)……」

「お疲れ様!ソウゴ!えみる!」

「流石は我が魔王にえみる君。ゲイツ君とほまれ君。腰が砕けていたよ」

ウオズがソウゴとえみるを褒めるが、当の二人はあまり浮かない顔だった。

「あの……」

「最後、炎吹き出した、あれ。あんなの仕掛けていないんだよね……」

「えっ?」

「何……」

炎を吹き出した仕掛けはしていないと聞き、はなとウオズは驚く。

「それって……」

「もしかしたら……」

「本物の幽霊の〜作業かもね〜……」

階段から次の仕掛けの為に、本当の幽霊のようなコスチュームへと着替えた三人が現れた。

『うわああああーッッッ!!?!?』

よりリアルさのある姿にソウゴ達は驚く。正直おっかない。

「な、なん、なんや……」

「ツ、ツ、ツクヨミ……」

「ル、ルール……」

「さ、さあや……」

その姿は、まんま映画に出てくる幽霊に見えた。

「あの学校、本当に心霊スポットらしいよ」

『えっ!!?!?』

「あの学校を調べた所、あの学校には仲良しの兄弟がいたらしいのです」

「でもある日、その兄弟がいなくなっちゃって」

「それ以来、夜な夜な学校に現れて遊び相手を探しているんだって」

それを聞いて、その学校について教えた三人以外は腕が震え出した。

「それは……もちろん作り話だよね……?」

「ううん。本当の話だよ」

本当だと知り、先の仕掛けはまさか…と思い始める。

「じゃあ、先程のは……」

「か、か、考え過ぎだよ……えみる君。ぐ、偶然だよ……」

「そ、そ、そうだよ……」

ソウゴは震えながらコップにお茶を入れて、僅かなお茶の水飛沫を発生させながらすすする。

「もしかして、五人共怖がつてるの?面白そうじゃん!」

「本物の幽霊に会える〜!」

「とても、感激です。幽霊の存在を知ることが出来ます〜!」

だがこの三人は幽霊に会えると思い、興味深々だった。この三人、本気でノリノリである。

「う、うそ……」

「な、なんで、う、嬉しそうなのですか……」

はなとえみるは震えながらコップに入れたお茶を、少し溢しながら飲み続ける。

「「じゃあ、行つてきます!」」

三人が楽しそうにゲイツとほまれを驚かすために向かっていく。

それを見てソウゴ達はモニターを見ようと、お茶で口元が僅かに濡れた顔を合わせ

る。

『……………あああああーッツッ!!』

先の話聞いたソウゴ達は顔を見合わせただけで大声で驚く。やはり、さっきの話がソウゴ達に恐怖を与えていた。

何も知らないゲイツとほまれは、既に精神的な限界が見えた。

「もう、もう、何時になったら……」

「おい……………出口もうすぐだ……………」

二人が死んだ目で前を向くと、そこに『出口はこちだよ』と書かれた文字と矢印を見つけた。

「本当……………ムカつくような……………矢印し……………」

「だが……………勝利まで……………はあ、はあ……………」

「はあ、はあ、後少し……………」

「行くぞ……………フレフレ！俺！（私！）」

勇気を振り絞り、ゴールへ行こうとする二人に声が囁かれた。

『こつち、こつち……………』

「なんだ？」

突如声が聞こえ、二人は振り向くがそこには誰もいなかった。

「…あれ？矢印こつちだったか？」

「まあいい……行くぞ……」

なんだか矢印が変わったような気がした…と思ったが、早くここを脱出したい二人は気にせずそこへ移動する。

…だが二人はまだ知らなかった、確かにその方向にあるのはゴールである。

——ただし、絶望までのゴールがなあ…！

数分程歩くと、ゲイツとほまれは音楽室へ到着した。

「音楽室……」

二人は音楽室の中へと入る。

「さつきは変な声も聞こえたし、何なの……」

〈ドオオoooooooooooo!!?〉

「なっ!?」

するといきなり音が聞こえたが、音楽室には誰もいなかった。

「ビククリした…なんもないような……」

ほまれが何が起こっているのかと思っていた。すると…

へタララ〜ララ〜タララ〜ララ〜♪

突如として、ピアノの伴奏が流れた。

「えっ？」

幻聴か？ いや、違う！これは明らかに誰かがピアノの伴奏をしている音だ！

二人はそんなことを考えながら、ここに自分達以外の人物がいるのかと思ひ、ピアノがある方へ顔を向ける。

・
・
・

…ダレもいない、ただのピアノのようだ。

「おい〜？聞こえてる〜？」

「聞こえてるよね……ピアノ鳴ってるよね……鳴ってるよね」

その時、彼らの脳裏に浮かんだ世にも恐ろしい想像が、二人の体中に襲いかかる。

それを解消する為、気休め程度の試しに、ピアノの椅子に誰が座っているのか呼び掛けてみた。

・
・
・

…へんじがない、ただのイスのようだ。

「うそ……あ……ああああ……！！？」

「鳴ってる！」

誰もいない筈なのにピアノが鳴っているという事実に体が震え、すぐに逃げようとする。

「ウオツチウオツチ！」

逃げようとするがウオツチを落とし、すぐに拾ったゲイツとほまれは音楽室から逃げる。

その頃、クジゴジ堂のモニターから流れる映像を見て、ソウゴ達も驚く。

「ピアノが鳴った……」

「誰……?」

「ねえ、まさか……この学校……」

「ほ、本当に……の、呪われて……」

「まさか……そ、そんなはずは……」

「あの〜」

『ツッ?』

するとドアが開く音が聞こえ、そこにはきつき仕掛けに向かった三人が現れた。

『あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”ああああツツツ!!?』

「こないんだけど〜」

「ゲイツとほまれが全然来ないんだけど〜」

三人の表情がわからない為、ソウゴ達の顔には怯えが見える。

「あ、あの、お、音楽室に……い、い、行かれましたけど……」

「はあ?!? どう言う事!」

ツクヨミがモニターを巻き戻し、二人が居た音楽室の様子を見る。

そしてツクヨミ達が見たものとは――

『ツエスギ!』

「ご理解いただけだろうか……」

そう、そこにいたのは二人分の人型のナニカであった…

「よし! いた! 本物幽霊!」

「感激! 幽霊がいたんだ♪」

「とても、興味深いです!」

「だから……そんなに嬉しそうなのですか……?」

えみるは無駄にテンションの高い三人を見て、何でそんなに嬉しそうなのだと戦慄し始める。

「あれ? ちょっと見て?」

すると何かに気付いたツクヨミはミライパッドを操作し、映像を拡大化すると、そこ

には制服姿をした見覚えのある顔が居たのだった。

「これは、ウールとオーラ?」

それは、タイムジャッカーチームのウールとオーラで、その二人の後ろにはゲイツとほまれがいなくなった途端にアナザーゴーストが現れた。

「まさか、クライアス社? だったら、ゲイツとほまれが危ない! ハリーはここで待機ね!」

「おー!」

クライアス社が絡んでいると思い、ソウゴ達はツクヨミ、さあや、ルールー、ハリーを残し急いで肝試しの会場へと赴く。

教室にアナザーゴーストが現れた為にゲイツとほまれは変身し、アナザーゴーストと戦闘に入る。

「やはり、クライアス社の仕業!」

「今日は、絶対に許さないだから!」

実際にはウオズ達のせいなのだが、それを知らないゲイツとエトワールはアナザーライダーに攻め込もうする。

「あそぼう〜……」

「ツ！……か、か、顔が……」

だがしかし、見慣れている顔なのに、ここまで二人を襲った恐怖で二人の足がすくむ。すると、何者かがゲイツの肩を叩いて呼びかける。

「今！取り込み中だ！……えっ？」

「あそぼう〜……」

「あああああー！！？」

肩を叩いていたのはアナザーウィザードだった。それを見てゲイツとエトワールは、あまりの恐怖に変身解除してしまった。

「来ないで！ね、お願い！来ないで！」

「助けて——！！！」

すると二人の前に新たな影が出て来る。

「あ……そ……ぼう……」

「どわあああああああ！！？」

今度はアナザー鎧武までも現れ、ゲイツとほまれは必死に逃げ続ける。

「来たー！！？」

ゲイツが後ろを振り向くとアナザーライダー達が追ってきた。

「来ないで！来ないで！」

二人は出口に繋がる扉を見つけ、直ぐに扉へと急ぎ、ほまれが即刻ドアノブを回す。
「あ、あ、開かない!」

だが鍵がかかっているのか、ドアノブが回らない。

「あ、開かない!開かない!」

「どけ!タイムバースト!せやああ!」

ゲイツがドライバーを回すモーションを取りキックをぶちかます。

…が、何も起きなかった。

「ダメじゃん!」

「な〜に〜!」

「「あ〜そ〜ぼ〜……あ〜そ〜ぼ〜……あ〜そ〜ぼ〜……」」

ゲイツとほまれがシャウトしていると、もうすぐ側までアナザーライダー達が迫ってきていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

「もう……許して……許してください……」

見たまえ!彼らの顔を!彼らがかつて戦った相手に命乞いを行なっている、その情けない顔を!あまりの恐怖に、二人は体力的にも精神的にも限界だった。

それでは、ここで二人の心境を察しつつ一句(唐突)。

恐怖心 キミの心に 恐怖心 ゲイツとほまれ、心の俳句。

もうダメだ、オシマイダーと思つたその時、後ろのドアのノブが回つた。

「ゲイツ！ほまれ！大丈夫！」

「いやあああああー!!？」

ソウゴ達が現れると、直ぐにゲイツはソウゴに、ほまれはなに抱きつく。

「ちよ、ちよつと……」

「お二人共落ち着くのです！」

「ゲイツ！俺だよ！ソウゴ！」

「ソウゴ……」

「ほまれ！大丈夫!？」

「はな……はなの……?？」

「そうだよ」

もはや彼らはいつものクールキャラでは無い、これでもかという位のキャラ崩壊である。ヘタレ化である。圧倒的幼児化である。

「行こうか？諸君」

「ああ！」

『ジクウドライバー！』

『ビヨンドライダー!』

ソウゴとウオズはドライバーを装着して、ウオツチを構え。はなとえみるはプリハートとミライクリスタルを取り出す。

『ジオウ!Ⅱ!』

『シノビ!』

「変身!!?」

「ミライクスリタル!ハート!キラツと!はぎゅ〜!」

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ!Ⅱ!』

『投影!フューチャータイム!誰じゃ?俺じゃ?忍者!フューチャーリングシノビ!シ

ノビ!』

「行けえ!」

「うわあ!?!」

四人が変身を完了し、アナザーライダーに応戦するために走ろうとすると、ゲイツとほまれに足を掴まれ転倒する。

「ゲイツ!ほまれ!」

「めん」

二人に腕を離してもらい、四人はアナザーライダーと戦闘を始める。

「ゲイツ！ほまれ！ちよつと待つてて！」

「おお！」

「わ、わかつた……でも、早くして〜！」

二人はジオウ達から離れ、戦闘を見つめる。

「はあ！」

「やあ！」

ジオウとウオズは、サイキョーギレードとジカンデスピアをアナザーライダーに繰り出す。

「やったー！」

エールは二人の様々なアナザーライダーを倒していったその一撃を見て、アナザーライダー達を倒したと思った。しかし、アナザーライダー達は何も無かつたかのように起き上がった。

「バカな……」

「だつたら……フラワーシユート！」

エールがメロディソードから放ち、アナザーライダー達が地に伏せるが……

「「あそぼう〜あそぼう〜」」

メロディソードの攻撃でも簡単に起き上がった。

「そんな〜」

「めちよつく!」

「効かない!」

「「あそぼう〜あそぼう〜」」

アナザーライダー達が攻撃するために仕掛けようとする。

「我が魔王!危ない!」

「エール!」

「「「うわああああ!!?」」」

ウオズとマシエリが二人を庇うために前に出たが結局巻き込んでしまい、アナザーライダー達の攻撃が直撃し、四人の変身が解除されてしまった。

「このままじゃ……」

「待つて!」

「無茶だよゲイツ、ほまれ、怖がりのくせに」

「確かに怖い。だが……」

「やるしかないでしょ」

二人が勇敢にアナザーライダーに挑もうとするが……

「いや、足震えてるじゃん!」

ガタガタガタキリバと、足がビビリまくり震えていた。

「ダメ」

「ごめん、やっぱ無理……」

「わ、私も……」

「「「ええええ……」」」

ソウゴ達がさっきの威勢はどこに行ったんだよと呆れた。

「ほお!? ああああああああー!!?」

ゲイツとほまれはアナザーライダーに触られビククリする。すると、ソウゴ達は全速力で走り屋上へとやってきた。

「ゲイツ! ほまれ! 頼んだよ! ごめん!」

「無理! 無理! 無理!……!」

ソウゴ達は、体を寄せ合いながら震えながらゲイツとほまれに戦いを任せる。

「ごめん! ゲイツ! あとお願い!」

だがほまれは走ってソウゴ達の元へと行き、ゲイツだけアナザーライダーと戦うためになってしまった。

これがプリキュアの姿か……?」

本来、どんな困難であろうと果敢に立ち向かうのが、彼女たちの姿である筈。

だがこの時、彼女の身には恐怖心が蝕み、勇気を忘れ、困難に立ち向かうことの出来ぬ醜さだけがあつた。ほまれ、最低です。

「やってやる……」

ゲイツは震えながらゴーストウオッチを取り出す。

「お、おとおおお前……こ、こ、これで……」

『ビビル!』

するとゴーストライドウオッチがオレンジカラーから、真つ青なカラーに変化した。

それに気づかないまま、ウオッチを起動させドライバーに装填する。

「変身!」

ドライバーを回転し、ゲイツが仮面ライダーゲイツへと変身する。

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!ビビルタイム!びびるう〜び・び・ル!』

前から出現したゴーストアーマーになったアーマーが現れ、ゲイツの体に装着される。

すると、ゲイツの体に変化が現れた。

「あれ?赤いゲイツが真つ青になっちゃった?」

いつも赤いハズのゲイツの装甲が、どういう訳か青くなっていた。それに装着されたのはゴーストアーマーはずだが、複眼は『びびる』となっており、肩にあるアイコンの

部分に白とオレンジでカラーリングされた目が見つけられていた。

「ライドウオッチがゲイツ君のビビリが反応したのか？」

ウオズがゴーストウオッチがゲイツのビビリに反応したと分析する。

「青い！なんで、青いよ!!？」　ウワアアアアアアアア!!」

叫びながらもゲイツはアナザーライダーに立ち向かう。

『ビビルゲイツ！』

ゲイツはアナザー鎧武の攻撃を紙一重で躲した。そのまま足を掴み、アナザー鎧武を転けさせる。

「倒した……」

次にアナザーゴーストが仕掛ける。そこへ、タイル缶が倒れる音が響く。

「どわああああああ!!？」

『ビビルゲイツ！』

缶からガスが噴射すると、ゲイツがそれに驚き、あの時炎が吹き上がり飛び上がったかのようなポーズでアナザーゴーストに体当たりした。

ビビリながらも戦うゲイツだが、思ったよりもアナザーライダー達を翻弄し、アナザーライダー達もゲイツの動きが読めずいた。

「めちよつく……凄……」

「ビ、ビ、ビビルゲイツ?」

そんな感じで戦っていると、ゲイツの顔にビニール袋が引っ付く。

「なんか付いた?!? ねえ!なんか付いた?!?」

袋が引いつけられてもとりあえず、ゲイツは攻撃を続ける。

「なんか付いた?!? 出を!ねえウオズ!えみるでもいい!取って!」

そのまま子供が暴れるように、走り回りながら攻撃を続ける。

「ビビリの力をそのまま攻撃力に変えたのか?凄まじい力だ。

仮面ライダーゲイツ、ビビルアーマー!」

ビビルアーマーを装着したゲイツは背筋に冷や風が当たって「ふおあつ?!」などとい

う奇声を発しながらも、ライダー達を押ししていた。

「なんか倒せている?」

尚、当のゲイツは何が起こっているのかわからず、生き恥をさらしながら戦っていた。

「最強フォームの誕生!ということか!」

「最・恐だね(ですね)」

ウオズに対して四人がビビルゲイツは最恐だと言うと、アナザーライダー達との戦い

に決着が着く様子を見せていた。

「これで……」

ゲイツがドライバーのロックを解除し、技を放つ準備をする。

「決まってくださいい！」

『フィニッシュタイム！』

そしてドライバーを回し、技を放とうとする。

すると、屋上のゴミ箱が倒れて音が響く。

「ぐあああああああ！」

音に驚いたゲイツが足を曲げて、ポップコーンが弾けるかのように飛び上がる。

これぞ正しく生き恥ポップコーン（違）。

『ビビツタイムバースト！』

人魂の炎の様な青いオーラを纏ったゲイツの突撃を受け、アナザーライダー達がそれぞれ飛ばされて倒れていった。

「はあ、はあ、もう無理……」

しかしゲイツはもう限界で、無残にも膝を折り変身解除となる。

「……ねえ、ゲイツとほまれも…俺達、友達何だから。そういう怖がりのところも隠さな
いで素直になつてよ。一人じゃあ怖くても、みんな一緒なら怖くないでしょ？」

「うん……」

「いや、ソウゴ……」

「みんなで行っても怖かったよ……」

ソウゴは二人にそれとなく良いことを言って、その場を纏めようとしていると……

「「あ……あ……そ……ぼう……」」

『ツッ?』

すると、ビビルゲイツの攻撃を受けたアナザーライダー達が起き上がった。

「まだ来んの?」

「もうやめて……」

二人の様子的に、流石にこれ以上戦うのは精神的に限界だ。

「何?あれなんかの儀式……」

「「わかった……」」

『ツッ?』

振り向くと髪を伸ばした幽霊?がソウゴ達に接近しているのに気付いた。

『ああああああああああ!!?』

あまりの怖さにゲイツとほまれが気を失ってしまう。

「ゲイツ君!ゲイツ君!」

「ほまれさん!ほまれさん!しっかりするのです!」

「さあや!ルールー!ツクヨミ!」

その幽霊の正体はさあやとルールー、ツクヨミの三人だった。

「普通に出て来てよ！」

「これが普通よ！」

「実は先ほど、いなくなつた兄弟の顔がわかつたです」

「……つて事は」

「アツハツハツハツ……」

笑い声が聞こえソウゴ達が振り向くと、そこには写真に写つていた二人の兄弟が現れた。その兄弟はソウゴ達に迫ってくる。

「やだ！やだ！」

「来ないでよ！」

「ウオズ！来てよ！」

「ウオズ！頼んだよ！」

「いやだ！」

「お願いします！」

「やめて！」

何とかしてとお願いするソウゴとはな、えみると嫌がるウオズの下に幽霊の兄弟が迫ってくると兄弟はソウゴ達の体を擦り抜けた。

『!?』

擦り抜けたのを見て、後から来た三人は嬉しそうな表情だった。

兄弟はそのままアナザーライダー元へと向かう。

「「あそぼう!あそぼう!……あそぼう」」

「遊んでくれてありがとう」

「楽しかったわ」

二人の兄弟とアナザーライダー達は遊んでくれてありがとうと微笑みながら消滅していった。

それを見てさあや、ルール、ツクヨミは感激した様子だったのに対し、ソウゴ達は……

「あ、あの……わ、わ、私達が戦っていたのは……」

「ウールとオーラに似ていただけで……」

「ほ、本当は……本物の……幽霊……」

「「「あつ……つ!?」」」

「ちよつと、ソウゴ君!はな!」

「えみる!ウオズ!」

四人は戦っていたのが幽霊だと知り、シヨックのあまり気を失う。

「もう!六人共だらしなないんだから!」

結果、この三人以外は全員がビビリだと気付かされた事になり、三人以外は気を失なつたまま一日を過ごした。

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第35話 2018：先生の初めての子育て

第35話 2018：先生の初めての子育て

肝試しのあつた日から数日が経ったソウゴ達は、今は楽しく夏休みを過ごしていた。

そんな時、HUGMANの植物コーナーで、ソウゴ達の学園の教師である内富士先生が来ており、そこで彼は何かを探していた。

「あれ……!?」

彼はフラフラと歩きながら、何かを勘違いしてしまった様な挙動をしていた。

「何かお探ですか?」

「はい……!」

「あつ、内富士先生じゃないですか?」

「えつ? はい……」

声を掛けた森太郎が、娘の通っている学校の教師である内富士だと気付く。

「パー!」

「やあ、はな。ルールー」

更に娘の声が聞こえた方を向くと、はなとルールーが現れる。

「あれ? 先生!」

「こんにちは」

「パパ……？」

「はい。野乃はなの父です。いつも娘がお世話になっております」

「いえ……こちらこそ」

森太郎が自身の生徒の父親だと気付くと、内富士は返事を返す。

「そう言えば何かお探しだったのでは？」

「ああっ！あの……えっと……紙オムツを……！」

どうやら内富士先生は紙オムツを探していたようだが、場所が分からず歩き続けていると、巡り巡って植物コーナーの方に彷徨っていたのだ。

「ベビー用品でしたらこの上のフロアになります」

「ありがとうございます——す！」

上のフロアと教えて貰ってからすぐに向かうが、つまずいて転んでしまう。

「先生！」

「ごめんよ……よしよし……泣かない……」

「先生、それ肥料の袋です」

何故か肥料の袋をなだめる内富士に、ルールが肥料の袋とツツコむ。

肥料の袋と気付いた直後に近くで赤ちゃんの泣き声が聞こえ、森太郎さんがその赤

「ちゃんの父親と母親である夫婦の元へ向かう。

「おやおや。これはミルクかな？」

「確かに、お腹が空いた時の声かも……ありがとうございます」

「赤ちゃんの母親が森太郎にお礼を言い、夫婦でミルクをあげに向かった。

「パパ凄いい！」

「はなが赤ちゃんの頃にもよくあつたからね」

「立派に育つて……」

「何すかいきなり……」

「急に感傷に浸る様な顔でそう言う内富士に、はなは何なのだと戸惑う。

「私は、良い父親になれるでしょうか？」

「森太郎に顔を近づけると、内富士先生が良い父親になれるかと相談する。

「実は！もうすぐ子供が産まれるんです」

「奥の方に場所を変え、座った内富士がもうすぐ子供が産まれる事を話す。

「それは……！」

「おめでとうございます！」

「ありがとうございます」

喜んだのもつかの間、内富士がその事を聞かれ表情を曇らせる。

「何か心配事が？」

「はい……妻は、すっかりと母親になる心構えが感じられるんです。

しかし私は、父親として、何をしたらいいのか……

どうしたら！あなたのような父親になれるのでしょうか？！」

「私は別に……」

内富士は森太郎の方に顔を近づけ、叫ぶようにして尋ねる。

「立派に野乃さんの父親をされているじゃないですか！」

「いやー、照れますなあ」

「はなを立派と言っているのでは無いです」

「めちよつく……！」

ルールーに正論を指摘されて口癖を呟く。

「父親になる覚悟を教えてください！修行させて下さい！何でもしますから！」

「修行ですか……」

内富士が腹部を机に乗せ、森太郎の脇腹を抱えて頼み込むが、当の本人は困惑して考え込む。

「パパお願い！助けてあげて！」

目の前で泣き付いている教師を見て、居た堪れなくなつたはなも一緒に頼み込む。

「分かりました。では明日、開店前にここへ来て下さい」

「はい！」

はなの頼みと内富士の本気の顔を見た森太郎は、明日『HUGMAN』で修行させる事を決めた。

翌日、ソウゴ達がビューティーハリーに集まり、はなから昨日の話を聞く。

「あの内富士先生がそんなに悩んでいるなんて……」

「で、今日HUGMANで父親修行を？」

「うん！」

「一体何するんや？」

「そりやあ……修行だから……滝行？」

はなが滝行に打たれながら耐える内富士先生を思い浮かべる。

「何でやねん！」

「HUGMANに滝なんて無いでしょ」

二人と叫ぶと、彼女はそうでしたと気づく。

「もつと実的な事じゃない？」

「オムツの替え方とか、ミルクのあげ方とか」

「あやしかたとか？」

実用的な修行だときあやとほまれ、ゲイツの三人が考えると、ソウゴ達もそうかもと思いはじめる。

「あつ、そつかそつか。滝行しながらあげるんだ」

またして滝行を受けながらさあや達の言つてたのをしているのだと想像する。

「だから滝から離れい！」

「はな君の修行のイメージは、滝に打たれるというテレビによくあるのかしか無いのかい？」

「えへへへ……」

「一応言うけど褒めて無いからね」

苦笑しながらはなが笑うと、彼女は大事な事を思い出す。

「それでね今日、内富士先生が一日HUGMANに行くから、奥さん大変かなと思って、先生の家に手伝いに行く事になったんだけど……」

「あつ、だったら私も行くよ」

「私も！」

「うん！」

内富士の家に行ってお手伝いをする事になったと話すと、さあやとほまれも一緒に行くと言する。

「じゃ、店番は俺達でやろう」

「まあ、私も今日は特に無いし」

「任せろ」

「分かりました」

「ツクヨミさんもルールーがいますから、それ程でも無いでしょうけど、ネズミにコキ使われておくのです」

「ネズミちやうわ！ハリハム・ハリーさんや！いつまでこのネタやらせんねーん！」

「飽きるまで……かな？」

「それいつやー！」

はなとさあやとほまれは三人は内富士先生の奥さんの手伝い、ソウゴ達はビューティーハリーの店番をする事になった。

一方、開店前のHUGMANの方では。

森太郎の。パパ修行をする事になった内富士が、重そうな荷物を軽々と持ち上げる森太郎と背後の大量の荷物に驚いていた。

「では！荷物運びから行きましようか！」

「ええつ？？」

運ぶと言われ目を大きくして驚く。

「さつ、産まれる赤ちゃんの為に」

「はい！」

「チーっす！」

内富士が返事をした直後、二人の元にチャラリートが現れる。

「今日入荷のチャラリンクスのキャップが欲しいんだけど」

そう言うときチャラリートはスマホで欲しい商品を森太郎に見せる。

「申し訳ありません。まだ開店前で」

「ええつ……？？」

チャラリートの目的は今日入荷する帽子の購入だったが、森太郎からまだ開店前と言われて驚く。

「困るよ！急ぐよ！午前中にチャラリンクス被つてチョビOK！イケてる動画アップ！スピードアップ！何でもしちゃうよ！イエア！」

だがそれでも待ち切れず、ラップ調で頼み込む。

「そうですか。では、その商品これから運び込みますので、ご一緒に」

「ええっ……っ？」

「トウギヤザー……っ？」

ひよんな事から、チャラリートも手伝う事になった。

その頃はな達三人は、内富士先生と奥さんが暮らしているマンションを訪れる。

「はい」

インターホンが鳴り、先生の奥さんである由香がドアを開ける。

「「おはようございまーす！」「」

「おはよう。夏休みなのにごめんね」

「何でも手伝います！」

「ありがとう」

はな達三人が掃除や洗濯など手伝いを代わりに行い始める。

HUGMANではチャラリートと内富士が店内へ荷物を運んだり、掃除を行い、開店してからは陳列などを行っていた。

「な、何かお探でしょうか？」

赤ちゃんを抱っこ紐で抱えた母親に内富士が声を掛けるが、その声に驚いたのか、赤

ちゃんが泣いてしまう。

「ごめんなさい！うるさいですか？」

「そう言う訳では……！」

「うるせえなあ。これだから赤ん坊は嫌いだよ……」

「すみませーん、あれ見せて欲しいですけど」

「はい、喜んで！」

チャラリートは自身の耳に響く赤ちゃんの泣き声に不機嫌になっていると、別の母親に声を掛けられたので笑顔へ切り替えて返事する。

「へいー！」

そのまま彼は梯子を使って登り、赤ちゃん用のおしり拭きを差し出す。

「俺ちゃん、芸域が広がって来て無い？」

「ありがとうございます」

その母親はお礼を言つて受け取り、この場を後にする。

「野乃さん。こんにちは」

「儲かりまつか？」

「まつかー？」

HUGMANに買い物に来て様子を見に来たソウゴとゲイツ、ハリーとはぐたんが森

太郎に声を掛ける。

「ソウゴ君。ゲイツ君。ハリー。はぐたん」

「パパさん、今日のオススメ弁当何でっか？」

「でっかー！」

「見て。イケメンなお父さんね」

「な、にー?!?」

地獄耳で聞き取ったチャラリートが、ハリーの傍に駆け寄り、彼の全身を見回す。

「お前より俺の方がモテるんだからな」

「なっ……! フツ、あらへんあらへん。俺の圧勝や」

チャラリートの言葉に腹を立てるが、すぐさま冷静に言い返す。

「ちよつと、ハリーー！」

「お前らしい加減に……」

「うるさいー！」

ゲイツが二人を仲裁していると……

「あの喧嘩を止めてる子、中々な子ね」

仲裁の真ん中にいたゲイツが周りの母親達に褒められており、その耳が二人に入る。

「お前より俺の方がイケメンやー！」

「あ、あん!？」

二人がゲイツに向かって叫ぶと、三人の瞳から火花を散らした。

「はあ〜……」

その様子を見ていたソウゴとはぐたんは、ため息を吐き呆れていた。

一方、ビューティーハリーにいるえみるがお腹を鳴らせる。

「遅い!」

「ハリーお昼買つて来るって言つて、全然帰つて来ないのです」

「道草の可能性、100%」

「ああく……遅い。これなら私が行つた方が良かった〜」

ツクヨミは空腹のあまりに苛立ちがMAXになり掛け、ウオズの方もお腹が減り、既に限界の様子だった。

「その方が良かったのです……お腹空いた……」

ビューティーハリーの店番をしていた四人は空腹で限界だった。

その頃HUGMANでは、三人の暑苦しい戦いが続いていた。

「何でお前が先やねん!」

「テメーがチンタラしてっからだよ！」

「俺の方が早かったぞ！」

ゲイツとハリーとチャラリートが仕事で意地を張り合い、その様子をはぐたんを抱えたソウゴと森太郎と内富士が見る。

「仲悪いのに、息が合ってるな」

「仲良きことは美しかなくて言いますしね」

「おっ！上手いこと言うね〜」

「店長、ちよつとお願ひします」

「はい」

ソウゴと森太郎がたわいも無い話で盛り上がっていると、森太郎が店員に呼ばれ、店員と共に何処へ行ってしまった。

「先生どうですか？修行の方は？」

「さあ〜…上手く行ってるのか……」

内富士は不安げな表情でソウゴに返すと、何かを思い付いたのか彼に提案をする。

「先生、はぐたんを抱いて見ませんか？」

「ええっ!? あ、私にはその……!」

はぐたんを渡されて困惑していると、それを見て不安になったはぐたんが泣き出しそ

うになる。

「え、えつと〜……」

「うつつ……うわあああ〜ん!!?」

何とか笑わせようとしたが、遂に泣いてしまった。

「何で〜?!?」

「うるさいっての」

「そんな事言われても〜!」

内富士がなんとかあやそうとするが、慣れて無いからあたふたする。

「お、お願いします!」

「俺は赤ん坊とか……!」

内富士から頼まれ、嫌がりながらもチャラリートがはぐたんを両腕に抱える。

「うるさく……無い?」

するとはぐたんはチャラリートを見て泣き止み、はぐたんが笑い出した。

「何で……?!?」

「抱っこは、腰で抱くと言われています」

戻った森太郎が抱っこは腰で抱くと伝える。

「腰?」

「彼はダンスをやっているようですから、腰が安定していて、はぐたんも安心するんでしよう」

「安心……」

「さつすが俺ちゃん！俺のステップに惚れるなよ！YO！YO！YO！YO！」

「よーよーよー！」

それを聞いたチャラリートは嬉しくなり、はぐたんを両手で抱えたまま、ステップしたりする。

「悪く無いじゃんよ……！」

はぐたんの笑顔に、チャラリートも内富士もメロメロになった。

一方、はな達も由香の手伝いを続けていた。

「何だか悪いわね」

「いえいえ」

洗濯物を持ったはなが納戸を開ける。

「えっ!?」

すると納戸の中には大量の紙オムツが入っていた。

「何すかこれ……!?!」

目の前の紙オムツを出すと、奥にもあつた。

「奥まで全部……!」

「紙オムツで埋まつてる……っ!」

「そうなのよ。足りないんじゃないかって……」

「あははは……!」

「この前なんて、離乳食買おうとして——」

由香が話をしていると途中で、突如お腹を抑えて苦しみ出す。

「由香さん!」

苦しみ出したのは、赤ちゃんが産まれる時に始まる陣痛が始まったからだだった。

「じゃ、お願いね」

HUGMANでは内富士の修行は続いていたがそんな時、ソウゴは誰かに電話していた。

電話を切ると内富士の元へと戻る。

「先生」

「で、でも……!私では……!」

ハリーが両手で抱えたはぐたんを内富士に近付ける。

「怖がってたら、ずーっと抱っこ出来ませんよ」

「先生！頑張ってください！」

二人にそう言われて抱っこさせるが、泣き出しそうになってしまう。

「ああ……！やっぱり……！」

「踊ってみ！踊ってみ！」

チャラリートに言われて足元を躍らせるが、体勢を崩してしまう。

「危ない！」

背後の商品棚にぶつかって尻餅を付き、その衝撃で商品が落ちて頭に当たった。

「大丈夫ですか!?？」

「はぐたん！」

「マイベイビー！」

「良かった……」

無事だったはぐたんを見て安堵すると、はぐたんが笑う。

「笑った……笑ってくれた……っ！」

「抱き締めて、まっすぐ向き合ってあげる。まずはそこからですよ。」

何をすればいいのか、全部赤ちゃんが教えてくれます。

先生、今日は何でもやっただでしょうか？力仕事、掃除も、接客も、産まれて来る赤ちゃん

んの為にと」

「つ！それを教える為に、今日色々私に仕事を……」

今日行っていた仕事は、これを教えるためだったと内富士が気付くと、森太郎が微笑んで話を続ける。

「不安があつてもいい。それは赤ちゃんもお母さんも一緒です。みんな、始めるんです」

「はいー！」

するとここで、内富士先生のスマホに着信が入る。

「もしもし？……由香が!?？」

電話に出ると、ほまれから由香の陣痛が始まった事を伝えられる。

一方その頃。さあやが由香に付き添い、タクシーに乗って病院へ向かっていた。

「私達も、後から病院に向かいます。それと、正面の出入り口へ向かって下さい」

「フレフレ！由香さん！フレフレ！赤ちゃん！」

「大丈夫ですか……!?？」

タクシーの中でさあやが由香さんの手を両手で握って声を掛ける。

「辛いけど……嬉しい……赤ちゃんが、頑張ってる。」

私達に、会いに来る……」

それを聞いて内富士先生がソウゴ達と一緒に正面出入り口へ出る。

「待っていたよ。諸君」

そこへウオズがライドストライカーに乗って駆けつけた。

「ウオズ！」

「君は確か、ナイトプールでいた……」

内富士はソウゴ達とずっと一緒にいた男性であるウオズを思い出す。

「事情は聞いてます、乗って下さい。病院まで私が送ります！」

そう言い、ヘルメットを持って前に出す。

「急いで下さい！」

「は、はい……！」

「行きますよ！」

内富士はヘルメットを被ってからライドストライカーの後部座席に乗り、ウオズの運転であさばぶ総合病院の産婦人科へ向かった。

「頼んだよー！」

「俺達も行くぞー！」

ゲイツ達の下にゲイツ機の赤いタイムマシンが現れ、ソウゴ達もあさばぶ総合病院へ向かう。

あさばぶ総合病院に、さあやと由香を乗せたタクシーが産婦人科に到着。さあやに支えられながら由香が通路を進む。

「由香さん……………」

「内富士さん！こちらへ！」

「先生…………赤ちゃん……………」

現れた産婦人科医の先生が、二人の元へ駆け寄る。

「大丈夫大丈夫。焦らずに行こう」

「でも……………こんなに苦しそうです……………」

「そうね。苦しいよ。でも、私も助産師さんも、一緒に戦うからね！赤ちゃんも、ママに会う為に頑張ってるよ！」

「由香！由香！大丈夫か!?？」

産婦人科医の先生が由香を勇気づけていると、そこへ内富士が駆け付ける。

「騒がない。どっしりする」

「は、はい」

「ゆつくりで大丈夫だよ」

さあやに代わって内富士と産婦人科の先生が由香を支え、分娩室に入る。

「間に合ったみたいだね」

「ウオズさん。ありがとうございます」

「いや、我が魔王の頼みを聞いたただだよ」

「ソウゴ君の？」

「我が魔王やゲイツ君が、ライドストライカーを使うのは流石に不味いからね」

「あつ……」

ソウゴ達がタイムマシンやライドストライカーを操縦すると、空飛ぶ未知な乗り物や無免許運転など何かと問題になる恐れがある。それを考えソウゴがウオズに迎えを頼んだのだ。

「さあや！ウオズ！」

少ししてから、はな達も到着する。ソウゴを通じて事情を聞いたツクヨミとルーローとえみるも途中で合流し、一緒に来た。

「二人は？」

「分娩室に入った所だよ」

由香の出産が始まり、はな達は通路の方で待つ。

「どうしたの？」

「由香さん……凄いい力だった」

自分の手を見つめるさあやにソウゴが尋ねると、凄いい力で握っていたと答える。

「相当辛いんですね……」

「ううん。感じたのは辛さじゃなくて、お母さんの強さ……」

「母さんの強さ……」

母さんと聞いたソウゴは、自分は顔をあまり覚えていない母親の事を考えていた。母さんも俺を産んだとき、そうだったのかな、と。

その間も出産は続き、はな達も場所を変えて待つ。

その間、誰も喋る事は無く。赤ちゃんが産まれるのをじつと待っていた。

「うわああああくん！うわああああくん！」

しばらく待つてから、赤ちゃんの産声が聞こえ、ソウゴ達が立ち上がる。

「やったあ……」

「良かった……」

内富士と由香の赤ちゃんは、無事に産まれた。

「ふーっ」

分娩室から出た真木先生が一息付き、通路で待ってたソウゴ達の元へ歩く。

「命が産まれるって、凄いでしょ」

「はい！」

「真木先生！603号室の服部さん！」

「あいよ！そろそろだね」

真木先生は休む間も無く、次の患者の分娩に向かう。

「大変ですね」

「大変だよ。でも、この仕事最高だよ！」

笑ってそう言うのと、次の病室へと向かう。それを見たさあやは真木先生を見つめる。

ソウゴ達がマスクして由香の分娩室に入り、内富士が赤ちゃんを抱きかかえる。

「凄い……じっと見ていると分かる。ちゃんと息してる……」

俺が……父さんか……！」

内富士はポロポロと涙を流し、父親になった事を実感する。

「ずっと守ってやるから、安心しろ……」

すると三人から、暖かく優しいアスパワワが溢れ出す。

「頑張って下さいね。新人パパさん」

その大量のアスパワワが溢れる病院の屋上に、トラウムが立つ。

「何とまあ、アスパワワに満ちている場所だ」

すると、下にいる宅配員の女性からトゲパワワが出ている事に気付き、口元に笑みを浮かべる。

「今週の、ビツクリドンドンメ〜カ〜!」

自分の顔を模したメカに『猛』と書かれたチップを注入し、女性からトゲパワワを取り出す。

「発注! 猛オシマイダー!」

小型のオシマイダーと社交ダンスを踊り、メカにカラーコーンに挿入させる。

「ピコつとね〜」

小型オシマイダーの持つスイッチを押し、カラーコーン猛オシマイダーを作り出した。

「これ……」

ソウゴ達を外を見ると、雰囲気が変わったことに気づいた。

「クライアス社……!」

「ツクヨミ! はぐたんと先生達をお願い!」

「わかった!」

ツクヨミとはぐたんを残して急いで病院の外へ走り、ソウゴ達が変身アイテムを構え

る。

『『ジクウドライバー!』』』』

『ビヨンドドライバー!』

『ジオウ!Ⅱ!』

『ゲイツリバイブ!疾風!』

『ウオズ!』

『ハリー!』

四人はウオツチをドライバーに装填し構えると、はな達五人はプリハートを取り出す。

『アクシヨン!』

『『変身!!?』』』』

『『ミライクリスタル!ハートキラツと!』』』

ドライバーを操作した事でアーマーが体に纏われ。プリハートにミライクリスタルをセットした五人が揃って手順を取り、姿を変える。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ!Ⅱ!』

『ライダータイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイブ疾風!疾風!』!

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「[[[[HUGつと！プリキュア！]]]]」

九人が変身を完了し、猛オシマイダーに構える。

「来たねプリキュア。オーマジオウにその家臣共。ああ、年甲斐も無く気分が高揚しているよー！」

「オシマイダー!!?」

トラウムの命令で猛オシマイダーがジオウ達に攻め込む。

「静かにして…ッ！」

するとアンジュが静かにしてと、トラウムとオシマイダーに言う。

「赤ちゃん達がいるの!」

「赤ちゃん達の人生は、始まったばかりなの!」

「邪魔はさせません!」

「だから……!」

「みんなも静かに……!」

『はい……』

「またもアンジュに注意され、ジオウ達は大人しく黙る。

「行つてらっしゃい!」

「「「はああああああつ!」」」

「猛オシマイダーが跳び、ジオウ達ライダー組は避けるとエール達も跳ぶ。

「静かに……っ!」

『はい……』

「そのまま四人がキックを繰り返して吹き飛ばすが威力が低く、体勢を整えて着地される。

「ははは〜!その程度のキック〜!」

「静かに!」

「調子狂っちゃうなもう……」

調子が狂うもトラウムは指を鳴らす。同時に猛オシマイダーの目が光り、巨大ドリルミサイルを構える。

『静かに……ッ!』

「……ちなみにそのドリル、ホントは回転すんのね。でも音が大きくなるから、今日は回転無し。発射!」

ミサイルに付いているドリルについて説明すると、ミサイルをエール達に向けて放つ。

「お気遣いどーも……!はっ!」

エトワールが跳んでカカト落としを繰り出し、ミサイルを落とす。

「回っていけば簡単に落とされないのに……!」

「はあああああああ……!」

エールが前に跳んでパンチを繰り出し、猛オシマイダーを吹き飛ばす。

それを見てジオウがある事に気づく。

「ゲイツ、ハリー、ウオズ、静かに倒せる方法があるんだ」

「それは、本当に行けるのかい?我が魔王」

「うん。凄く行ける気がする」

それを聞いた三人はジオウを信じて行動を行おうとする。

「お前がそれを言う時は、大体大丈夫だ」

「付き合おう我が魔王」

「俺もいいで！」

「じゃあ、よろしく！」

ジオウの考えた作戦を開始し、四人はそれぞれに分かれる。

「みんな。下がって！ここからは俺達が…」

「ソウゴ君。静かに…っ！」

「ごめん……」

アンジユの注意を受けると、ジオウがライダー達の作戦を伝える。

「わかった。お願いね」

作戦の内容を知り、エール達が離れる。

「よし…！じゃあ、赤ちゃん達がうるさく無いように…！」

「行くぞ…！」

ジオウとゲイツがジオウIIとゲイツリバイブのウオッチを外す。

『ジオウ！フォーゼ！』

『ビルド！』

ジオウはジオウとフォーゼのウオッチを、ゲイツはビルドウオッチを使用する。

ウオッチを起動させドライバーに装填し、ロックを解除すると、ドライバーを回す。

『アーマータイム！ 3・2・1！フォーゼ！』

『アーマータイム！ベストマッチ！ビ・ル・ドゥー！』

ジオウがフォーゼアーマーに、ゲイツがビルドアーマーへフォームチェンジした。

「はあ！」

最初にハリーがジカンチェーンを出現させ、猛オシマイダーの動きを止めた。

「ウオズ！」

「ああ！」

ハリーが動きを止めると、今度はウオズがジカンデスピアを持って出現させる。

「はあ！」

『カマシスギ！フィニッシュタイム！』

ジカンデスピアのパネル全体をスワイプし、ジカンデスピアを振るってそのまま猛オシマイダーを宙へ上げる。

「行くよゲイツ！」

「ああ！」

ゲイツがジオウに捕まると、ジオウがロケットの火を燃やし猛オシマイダーを追う。

「今だ！」

ジオウを踏み台としゲイツが助走を掛け飛び上がるとドライバーを回す。

『フィニッシュタイム！ビルド！』

放物線が猛オシマイダーを捕らえる。

『ボルテックタイムバースト！』

「うおおお！！？」

放物線に乗り、ゲイツが一直線で猛オシマイダーにドリルを向ける。そのままオシマイダーの胸に直撃し、そのまま回転をかけ貫いた。

「ゲイツ！」

落下するゲイツを掴み、ジオウと共に地上へと降りる。宙に残るオシマイダーはそのまま浄化され、宙で花火となった。

「オシマイダーが……花火に……」

「俺とゲイツから、生まれてきて赤ちゃん達のプレゼントだよ」

「子供……」

トラウムが子供と聞くと、一人の少女の顔を思い出した。

「ツッ？……オーマジオウ。次はこうはいかないよ〜！」

トラウムはオシマイダーが消えたのを確認すると、すぐに去っていった。

その後、変身解除したソウゴ達が新生児室の窓の外から、新生児達を見つめる。

「ほれはぐたーん。友達いっぱいやなー」

「お待たせ」

「先生……その腕どうしたの……？」

内富士が戻るが、両腕が赤ちやんを抱っこさせる状態となつてた。

「いや、息子を抱っこしてたら、緊張してたのかな……ガチガチになつて戻らないんだよ」

それを聞き、ソウゴ達は笑い合う。

ソウゴ達は新たな命の誕生を守ることと、その産まれた瞬間を目撃した日となつた。

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第36話 2018： 希望を運ぶ和菓子

第36話 2018： 希望を運ぶ和菓子

夏休みも残り半分近くになろうとしている中、ソウゴ達のはなの案内であさばぶ商店街を歩いていていた。

「みんなーっ！こっちこっちー！」

あさばぶ商店街にある店の傍に立つはなが、手を振りながらソウゴ達を呼ぶ。

「はなが連れて行きたい所って……どこ？」

「うん！」

「エエ感じの店やん」

「和菓子屋さんかい」

みんなを連れてやって来たのは、*“たんぽぽ堂”* と言う和菓子屋さんだった。

「うおおおおおおお〜っ!!？」

「どうしたの？」

えみるがカウンターの方にある何かを見て指差し、はな達がその方向を向く。

するとカウンターの奥にいたその何かは、雲のような形をしており、左右に動いていた。

「何!!? あのフワフワした物体!!?」

「敵か!!?」

「このお店で飼つてるペットかな?」

「地球を侵略しに来た宇宙人なのです! 地球が乗っ取られてしまうのです!」

敵かと思ひ、ゲイツとほまれば戦闘態勢に構える。

「いや、あれは……」

「あれ?」

はなの声に反応した何かが彼女の方を向くと、その正体はお年寄りの女性だった事が判明した。

「はな!」

「お祖母ちゃん!」

「「お祖母ちゃん!!?」」

その人物はたんぽぽ堂の店長であり、はなの祖母でもある庵野たんぽぽであった。

その後、ソウゴ達がたんぽぽ堂の調理場に入つて中を見回り、たんぽぽは生地をどら焼き器に注ぎ込んでどら焼きの生地を作る。

コンテナに並べられた鮮やかな和菓子や、ツクヨミとウオズ、ルールーとえみるが見

入る。

「中々美味しそうな和菓子が多いね」

「はなのお祖母ちゃんは、和菓子屋さんだったのですね」

「うん。たんぽぽ堂の和菓子、すつごく美味しいから、みんなに食べて欲しくて連れて来たんだ」

はなが美味しいと話すと、ウオズとルールーは食べてみたいという思いが表情に現れ始める。

「それにしても、凄い髪型……」

「最初見た時は、この店のペットかと……」

お店に入った時にペットと疑った事を、ほまれ達は申し訳なく思う。

「はなが友達を連れて来るって言うから、頑張つてオシャレしたんだけど、どうかね？」

「めっちゃイケてる！」

「ちよつと頑張り過ぎなんじゃ……」

「流石、はな先輩のお祖母ちゃんなのです……」

たんぽぽのわたあめの様なヘアースタイルを見て、ほまれとえみるはそう呟いた

「それじゃあ行くよ！」

「何ですかそれ？」

「これを、こうして……ほいつ！」

たんぼぼはどら焼きの生地にあんこを塗り、生地を重ねて入れる。

「どら焼きだ〜！」

「どんどん行つくよ〜！」

彼女がどら焼きを作り続ける光景を、一同が等しく見入る。

「ほいつ！完成！出来立てが一番美味しいよ。どうぞ」

「やったーっ！」

「いただきます〜！」

作り立てのどら焼きを頂いたソウゴ達は、みんなで先ずは一口と口に入れる。

「美味し〜い！」

「ああ！いける味ですよ！」

「フワフワなのです！」

「甘いものがこんな美味しいなんて〜！」

「どら焼きの宝石箱や〜！」

どら焼きの美味しさに心を惹かれるソウゴ達。

「おかわり下さい！！？」

ウオズとルールーがおかわりを求めると、たんぼぼが余ったどら焼きを半分にして

ウオズとルーラーにあげ、それをいただいた二人はとても喜んでいた。

「お祖母ちゃん、流石だね！」

はなが親指を立てて称賛し、それを見たたんぽぽも喜ぶ。

「さて、お店の準備をしなきゃね」

「お手伝いするよ」

「俺達も手伝います」

はな達は自分達も手伝うと志願する。

「うん。ありがとう」

「よし！頑張るぞーっ！」

手伝ってくれる事への感謝の言葉を聞いて張り切るはな達を見て、たんぽぽは微笑む。

「さつて……ん？？」

だが蒸籠を持ち上げたその時、彼女は表情を歪めた。

その後、ソウゴ達は店の手伝いを行う事に。

ソウゴとはな、ツクヨミ、さあやは客引きを行い。中ではゲイツとウオズが出来たものを運び入れる。レジにはほまれ、ハリー、ルーラー、えみるがいた。

手伝っていた最中、外にあるベンチに座ったお客さんのおばあさんがどら焼きを食べる。

「美味しく無いねえ……」

「え？」

その時美味しいと言おう声が聞こえ、ソウゴがそのおばあさんの方へ振り向く。

「みんな、調子はどうだい？」

「たんぼぼさん、味が落ちたんじゃないかい？」

この口調からして、常連らしきお客のおばあさんがたんぼぼ堂のどら焼きを食べた感想を彼女に言う。それによると、あんこの味が落ちたのではないかと語る。

「あんこが固すぎるよ……！こんな店の出すのかい？」

たんぼぼ堂のあんこはこんな物じゃなかっただろ？ほら、昔はさ——」

「文句があるなら帰つとくれ！」

「こんな和菓子じゃ、たんぼぼ堂もおしまいだね！」

たんぼぼに帰つてくれと言われたおばあさんはそう言うベンチから立ち上がり、この場から去った。

「？……どうかした？」

店からツクヨミとルーラーとえみるが顔を出す。

「何者なのですか……?」

「うちの常連のヨネさんだよ……」

「どら焼き……美味しいのに……」

「うん。悪くなかったよね」

はたとソウゴの言う通り、ソウゴ達がどら焼きを食べた時は別にそんな不味くはなかつた筈だが……

「常連にしか分からない事だつてあるんだよ。我が魔王、はな君」

「どう言う事?」

「今日初めて食べた私達は味の深みまでは知らない。」

だが、常連にはそう言う違いが直ぐにわかる。そういうことだよ」

ウオズが常連にしかわからない味があるのだと説明すると、たんぼぼは眉間にしわを寄せながら店の中へと戻る。

「あたしや、まだまだ頑張れるよ!」

たんぼぼが両頬を叩いてからそう叫び、駆け足で店内にある調理場に戻つてから、どら焼きの生地をどら焼き器に注ぎ込んで焼く。

だがその生地は普通のどら焼きサイズでは無く、どら焼き数十個分の大きさだった。

「えええつ?!?それ何?!?」

「巨大どら焼きだよ……!!」

「巨大どら焼き?」

ルールーはそれを聞き、両腕を使ってようやく持ち上げられる位に巨大などら焼きを思い浮かべた。

「目玉商品を作つて、たんぼぼ堂をもつともつと盛り上げるんだ!」

「それ楽しそう!」

「でも、たんぼぼさん流石に余り無理をしない方が……」

ツクヨミの言う通り、そのどら焼きの生地は見る限り重そうに見えた。

「あのか?よかつたら俺が……」

「大丈夫!まあ!見てな!てやあーっ!」

たんぼぼが生地を巨大ターナーで裏返そうとその時、腰から鈍い音が響き、彼女は動かなくなった。

「お祖母ちゃん……!?」

「今、腰から変な音が……」

「まさか、腰やつちやつたんじゃ……!」

ゲイツはまさかかと思っていると、たんぼぼの顔が明らかに悪くなっているのがわかった。

「こ、腰が……」

「きゅ、救急車……!」

張り切り過ぎたのとヨネを見返す為に無茶をした結果、彼女は腰を痛めてしまった。その結果、入院する事にもなってしまった。

「大丈夫ですか……?」

「お祖母ちゃん、腰、痛い……?」

病院に場所を移したソウゴ達はたんぼぼの容体を案じていると…

「出て行つとくれ……」

「……っ!? 何で……!?」

彼女は病室のベッドのシーツで顔を覆ったまま、はな達に出て行くよう告げる。

「こんな情けない姿、はなに見せたく無いんだよ」

「でも……!」

「少し、出てようか」

ほまれがはなの肩に手を当て、そう伝える。

はな達が病室を出てから、たんぼぼがロケットペンダントを握る。

「もう、限界なのかねえ……」

そう言つて彼女はロケットペンダントを開けた。

「年を取るつて言うのは、嫌な事だよ……あなた……」

そこには、亡くなった自身の夫の写真が写つていた。

クライアス社の会議室にトラウムの前に、ジエロス達三人が現れた。

「わざわざすまないねえ。えつと、ゼネ……」

「ジエネラルマネージャーよ。ドクター・トラウム」

「ああそうだった。歳を取ると物覚えが悪くて」

「今日はお説教かしら？」

「ふーむ、若者は察しがいいねえ」

「だけど今の段階で結果を求めるのは、ベターじゃないと思うわ」

ジエロスが余裕の顔で話すと、トラウムの顔つきが変わる。

「ペラペラ喋る暇があるなら、さつさとミライクリスタルを奪うか若いオーマジオウを倒して来い」

トラウムはそう言つと、笑いながらスキップしてこの場から去つた。

「オールドメンは頭が固くて嫌になつちやう。年だけは取りたくないわ。明日なんて、

来なければいいのよ」

そう呟いて、ジエロスはソウゴ達を倒そうと向かう。

ソウゴ達が病院からの帰り道を歩きながら、たんぼぼの悲しい表情を思い出す。

「あんな元気の無いお祖母ちゃん、初めて見た……」

「さつきは悪かったねえ」

一同が声が聞こえた方を向くと、近くの米屋からヨネが手を振っていた。

「ヨネさん」

ソウゴ達は店内に入って座り、ヨネから事情を聞く。

「どうも最近、たんぼぼ堂の味が落ちてる事が気になってね」

「えっ？」

「そうなんですか？」

「……最近、たんぼぼ堂の味が落ちてしていると聞き、ソウゴ達が驚く。

「もしかしたら体力的に辛くて、思うように和菓子が作れなかったのかも……」

「考えられるとしたらそれだろうな」

「おそらく、それも一人で全部やってるんじゃないや尚更だ」

一人でやつてる分、体力的に限界なのが原因だとほまれ達は想像する。

「そんな……!」

「昔は何でも美味しかった。お団子も、どら焼きも、希望まんじゅうも……」

「希望まんじゅう?」

「なんですか? その希望まんじゅうって?」

彼女の孫であるはなも知らない。『希望まんじゅう』と聞き、それが何かとヨネに尋ねる。

「昔、お爺さんが居た頃は売ってたんだよ」

「はなは知らないの?」

「うん。お祖父ちゃん、私が赤ちゃんの頃に亡くなったから、覚えて無いんだ」

はなの祖父は彼女が赤ちゃんの頃に亡くなったので、当然希望まんじゅうの事は知らなかった。

「小さなお饅頭なんだけど、優しい甘さでね。食べると何だか、元氣が出て来る。」

美味しかったけど、最近は作って無いみたいだねえ。他のお饅頭は作ってるのにねえ

……」

知らないと分かったヨネは、たんぽぽは夫であるはなの祖父が亡くなってからは一度も作っていないと話す。

「よしー！」

それを聞いていたはなが何かを決意して、椅子から立ち上がる。

「お祖母ちゃんに希望まんじゅうを作ってあげよう！」

「希望まんじゅうを？」

「作る？」

そして、ソウゴ達に希望まんじゅうを作ると宣言する。

「うん！希望まんじゅうって名前だよ！食べたら元気になるんだよ！これはもう、作るっきゃないでしょ！」

はなの作りたいという気持ちに惹かれ、ソウゴ達も同調する。

「賛成！」

「いいねー！」

「きぼーまんじゅうー！」

「やってみましょう！」

たんぼぼの為に、希望まんじゅうを作る事を決める。

「よしー！みんなで作ってみー！」

「で、どうやって作るのですか？」

「レシピとか無いのかい？」

えみるにどうやって作るのかと言われ、ウオズにはそもそもレシピはあるのかと聞かれると、はなは一瞬にして黙り込んだ。

「わ、分からない……」

だが案の定、希望まんじゅうを作ろうにも、どうやって作るかも、そもそもレシピがあるかも分からなかった。

「店の中にあるんじゃないのか？」

「それ！」

一同はたんぼぼ堂に戻り、とりあえずレシピらしいノートかメモを探そうと試みる。すると探す前にはなが仏壇に手を当てる。

「お祖父ちゃん！可愛い孫のお願いです！希望まんじゅうの作り方、教えて下さい！お願いしますだー！」

手を合わせて仏壇に拝みながら探してと頼む。

「このような方法で、レシピが分かるのでしょうか？」

「さあ……」

拜んで見つければ苦労はしないとさあやとルールーは思う。

「あえ！あえ！」

するとはぐたんが何かを見つけ、教えようとしていた。

「?…どうしたの?」

ソウゴがはぐたんが仏壇の上にあった何かに気付くと、それに手を伸ばし掴む。

「これって……」

それは、古ぼけた小さなノートだった。ソウゴはそれをはなに渡し、彼女はノートを掴んで中身を見る。

「こ、これは……希望まんじゅうのレシピだ!」

そのノートにはなんと、希望まんじゅうのレシピが書かれていた。

「本当……?!?」

「うん、書いてあるから間違い無い」

「まさか、仏壇の上にあったとはね」

ウオズは仏壇の上にレシピがあったのは盲点だったと考えていると、はなとえみるがはぐたんを褒めていた。

「はぐたんよく見つけたね!」

「お手柄なのです!」

「えっへん!」

レシピを見つけてくれたはぐたんをみんなで撫でる。

「よーし!早速作ろう!」

『おーっ!』

一同は調理場に入り、材料と道具を揃えて希望まんじゅうを作り始める。

「サツマイモは熱い内に、砂糖を混ぜて下さい」

ルールーがノートを解析し、それを読みながら作り始める。

「ん、分かった」

ソウゴがすり鉢に入ったサツマイモに砂糖を入れて混ぜ、さあやとほまれがすり鉢を支える。

「ふう」

「変わるよ」

ソウゴは額の汗を拭ってからはなと交代する。

「和菓子作りって、大変なんだね」

「おばあちゃん、これを毎日一人で……」

ほまれの言葉を聞いたはなは、一人で和菓子作りを行うたんぼの姿を思い浮かべる。

「よーし!頑張るぞーっ!重くても!辛くても!お祖母ちゃんは毎日頑張ってたんだよ!だから、私も、頑……張る!」

その後も、はな達による希望まんじゅうを作る作業は続いた。

翌日、腰が回復してベッドの上に座る窓の外を見つめるたんぼぼの病室に、ヨネが訪れる。

「ヨネさん……」

「少し、言い過ぎたと思って……」

ヨネはたんぼぼの隣に座り、少し言い過ぎたと謝罪する。

「そんな事無いよ」

「えっ？」

「本当の事だもの。身体が言う事を聞かなくて、昔のように和菓子が作れない。味が落ちたって言うのも分かってる」

「たんぼぼさん……」

「たんぼぼ堂は、もう……」

その時、病室のドアが勢いよく開き、二人はビクツとする。

「お祖母ちゃん！」

来たのは髪の毛や服が粉で白くなったソウゴ達で、はなは小振りの蒸籠を持ってた。

「これ！食べて！」

蒸籠を開けると、その中にははな達の作った希望まんじゅうが入ってた。

「これは……?」

「希望まんじゅう! お祖母ちゃんに元気になって貰いたくて作ったんだ!」

「形を整えるの、結構大変でした。けど、みんなのおかげでなんとか……」

「でも、味は大丈夫です! みんなで何度も味見したので」

ソウゴ達がそう話しているその時、希望まんじゅうを見たたんぽぽが自身の旦那である草介の事を思い出し、涙を流す。

「えっ?!? どうしたの?!?」

「昔の事を思い出してね……」

「昔の事……?」

はながそう呟くと、たんぽぽは昔のこと——旦那とお店を始めた時の事を語り出した。

「お爺ちゃんとお店を始めた頃、失敗ばかりでね。小豆を買うお金も無くて、サツマイモで餡を作つて、そしたら……」

「出来たのが、希望まんじゅうって事ですね」

ソウゴがそう言うと、たんぽぽが頷く。

「でも、どうして今まで希望まんじゅうを作つて無かったのですか?」

「思い出が詰まつてるから」

「えっ?」

「お爺さんの事を、思い出しちゃうからですか?」

はながどういう事なのかと思っていると、ツクヨミはお爺さんのことを思い出してしまふからと言う自身の推測を彼女に確認する。

「ええ。希望まんじゅうを作ると、お爺ちゃんとの思い出が溢れて来て……このお饅頭だけは、味を落としたく無くて作れなかった……」

「ご、ごめん!」

「もしかして、俺達、余計な事しちゃった……!?!」

ソウゴ達が祖父との思い出させるような余計な事したと謝る。

だが、たんぼぼは首を横に振ってからはな達が作った希望まんじゅうを食べる。

「でも……やっぱり美味しい……!」

甘くてホカホカの……このおまんじゅうを食べると、心が希望でいっぱいになる。はな、みんな。ありがとう……!」

そして、たんぼぼは微笑みながらソウゴ達にお礼を言う。

「でも、まだまだだね」

「中々難しく……」

「力配分が難しく、ゲイツ君の力の入れ過ぎたのが……」

「お前だって、砂糖の配分を何度も間違えだろ！」

ウオズとゲイツの二人がお互いに顔を引っ張り合い揉め合う。

「ちよつと、二人とも……」

「あんた達やめなさいよ！」

ツクヨミとほまれが彼らを仲裁しようと阻む。だが、ソウゴ達とたんぽぽは面白そうに見ていた。

「よし！一緒に希望まんじゅうを作ろう！」

「本当!?？」

「よかったね。はな」

祖母と一緒に作れると聞き、はなの心は喜びに満ちる。

一方その頃、商店街にクライアス社のジェロス・ジンジン・タクミが現れた。

「ワオ。まるでオールドタウンね。辛気臭くて気絶しそう」

「だがしかし」

「アスパワワが溢れている」

ジンジンとタクミがアスパワワが溢れていると報告すると、ジェロスは顔を顰める。

「明日への希望なんか抱いても意味無いわ」

だがジェロスが近くの酒屋で年配の夫婦が口論しているのを気付くと、主人の方からトゲパワワが溢れ出し、舐めようとした飴玉が彼女の足元に転がる。

「後輩君、よろしく頼むわよ！」

そして、ジンジンとタクミにオシマイダーの生成を命ずる。

「始末書上等！」

「残業歓迎！」

「かしこまり！」

ソウゴ達はたんぽぽと一緒にたんぽぽ堂へ戻り、調理場で希望まんじゅうを作る。

「こうやって、ほいっ」

するとその時、振動が生じ、ハリーとウオズが調理場に入る。

「猛オシマイダーや！」

「この辺りに来てる！」

「ツクヨミ！ちよつとお願い！」

「わかった」

「たんぽぽさん、ヨネさん。ここから出ないで下さい」

「はな、みんな！」

ツクヨミにはぐたんを託し、二人に待機してくれる様に言ったソウゴ達が店の外に出ると、向かい側に猛オシマイダーが立っていた。

『ジクウドライバー!』

『ビヨンドライバー!』

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

『ウオズ! アクシオン!』

『ハリー!』

四人はウオッチをドライバースタルに装填して構えると、はな達五人もプリハートを取り出す。

「「変身!!?」」

「「ミライクリスタル!ハートキラツと!」」

ソウゴ達がドライバースタルを操作し、アーマーが体に纏われ。はな達が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

『投影!フューチャータイム!スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ

！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「！！！！HUGつと！プリキュア！！！！」

ジオウ達が猛オシマイダーに向かって跳び、すぐ傍に着地する。

「プリキュア？オーマジオウ？」

「丁度いい、デリートしてやる」

猛オシマイダーが指の間に挟んだ飴玉型の弾丸を飛ばし、エール達が避ける。

「はあっ！」

エトワールが跳び蹴りを繰り返すが防がれ、反撃を受けて吹き飛ばされる。だが、ハ

リーがすぐに救出した。

「はああああああっ！」

エールとアンジュが跳んで攻撃を繰り返すが、吹き飛ばされてエールは建物に叩き付けられる。

「オシマイだ〜！」

猛オシマイダーが上に跳んで弾丸を飛ばした。

「行けない！」

「撃ち落とすぞ！」

『ジカンザックス！ You！ Me！』

「わかった！」

『ジカンギレード！ ジュウ！』

ジオウとゲイツがジカンギレードとジカンザックスを銃モードと弓モードで出現させた。

『フォーゼ！』

『ウイザード！』

ウオッチを起動させ、ジカンギレードとジカンザックスにウオッチを装填した。

『『フィニッシュタイム！』』

『フォーゼスレスレシユーツーティング！』

『ウイザード！ギワギワシユート！』

ロケットモジュール型のエネルギー弾と炎と氷の矢を放ち撃ち落としに行く。だが、その一発がたんぽぽ堂へ向かう。

「ッ！お祖母ちゃん！」

「危ない！」

エールがたんぽぽ堂に向かって走ると、店からたんぽぽが出て来る。

それを見たツクヨミはすぐに、彼女へ向けて逃げる様に叫ぶ。

「ッ!? 逃げてください！」

「てい！やーっ！」

だがたんぽぽはなんと、弾丸をバットののように構えた巨大ターナーで打ち返し、猛オシマイダーに命中させた。

「うそー！」

「打った!?？」

あれを打ち返したのを見てジオウ達は驚く。

「ちよつと！」

「何してくれてんの！」

ジンジンとタクミはたんぽぽに文句を言うが、彼女は全く怯まなかった。

「それはこっちの台詞だよ！たんぽぽ堂は私の大切な宝物なんだ！誰にも壊させやしない」

「いよー！」

たんぼぼが両腕を広げ、店を守ると叫ぶ。

「アンビリーバボー。さっさと片付けてくれる？後輩君」

「猛オシマイダー！」

「クラツシユだ！」

タクミとジンジンの指示で猛オシマイダーが全身を回転させ、たんぼぼ堂へ向かう。

「大好きなお祖母ちゃんを、傷つけたら！許さないんだからーっ！」

だがエールが前に跳び、強烈なパンチを叩き込んで猛オシマイダーを吹き飛ばす。

「はな……？？」

たんぼぼは、今のエールの姿を見て何となくはなだと察する。

「起きろー！」

「反撃だ！」

猛オシマイダーは起き上がり、再び弾丸を放つ。

「悪いけどこれ以上はさせない！」

『オーズ！デイデイデイ・デイケイド！』

『エグゼイド！』

ジオウがオーズウオッチとデイケイドウオッチを起動させ、ゲイツはエグゼイド

ウオッチを起動させ二人はドライバーへと装填させ、ドライバーを回転させる。

『アーマータイム！ カメンライド！ワーオ！ デイクライド！デイクライド！ディーケーイードー！ファイナルフォームタイム！オ・オ・オ・オ・オーズ！』

『アーマータイム！レベルアップ！エ・グ・ゼ・イー・ド！』

ジオウはデイクライドアーマーオーズフォーム、ゲイツはエグゼイドアーマーを装着した。

「おお！アーマータイム来た！」

「来たじゃないわよ！面倒ね！」

タクミとジンジンのテンションが高まっているのを見たジエロスが突っ込みを入れている間に、猛オシマイダーが向かって来るジオウとゲイツに向けて弾丸を投げ飛ばす。

「はあく…はああ！」

ジオウはオースタジャドルの背中の翼を広げ、翼からそれよりも多くの弾丸を飛ばす。

「ハア！」

そこへブロックを足場として、ゲイツが飛びながらガツシャコンブレイカーで殴り続ける。

『ライドヘイセイバー!』

ゲイツに翻弄されているオシマイダーを見てジオウがライドヘイセイバーを出現させる。

『ヘイ!ゴースト!ヘイ!ドライブ!』

ライドヘイセイバーの針を回しドライブのシルエットが出現させる。

『ドライブ!デュアルタイムブレーク!』

ライドヘイセイバーを振るうとドライブの3種類のタイヤの攻撃を飛ばし猛オシマイダーが怯む。

「ソラア!」

「はああ!」

ゲイツの両腕のガツシャコンブレイカーとジオウと格闘技でさらにオシマイダーを追い詰める。

「凄い〜」

「これがあのオーマジオウ……」

未来のオーマジオウとは違いがあると二人が思いながら、アーマータイムの凄さに感心する。

一通り攻撃が終わり猛オシマイダーから離れると、アンジュとエトワールがエールの

元へ駆け付ける。

「今だよ！」

ジオウが合図を出すと三人が頷く。

「ミライクリスタル！」

「エールタクト！」

「アンジュハープ！」

「エトワールフルート！」

三人はメロディーソードのボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出す。

「心のトゲトゲ、飛んで行けー！プリキュア！トリニティ・コンサート！」

対象に向かって虹色のエネルギーを飛ばすトリニティ・コンサートを放つ。

トリニティ・コンサートが命中し、巨大な木が作り出されてピンク・水色・黄色の花が咲き誇り、猛オシマイダーが浄化された。

「これ以上戦うのはベターじゃないわね」

「凄かったな」

「ああ。凄かった」

先にジェロスが退き、凄いと褒めてからジンジンとタクミも退いた。

「ありがとう、プリキュア。仮面ライダーも」

たんぼぼが九人にお礼を言うのとジオウ達はここから一度離れた。

しばらくして、変身を解いたソウゴ達はたんぼぼ堂へと戻り。新しく作った希望まんじゅうを、ヨネも加えてみんなで食べる。

「美味しい……」

「最高です……」

ルールとウオズが幸せそうな顔で満足そうにまんじゅうを頬張っていた。

「そう、この味だ……!」

「お爺ちゃんにも食べさせてあげたい出来だねえ」

「また手伝いに来るよ」

「そんなに迷惑掛けられないよ。これからは一人で——っ……!」

たんぼぼがそう言つて立ち上がった直後、また腰を痛めてしまう。

「だ、大丈夫ですか……」

ソウゴとゲイツが寄り添つて介抱する。

「一人で作るのは無理そう……」

「作るの、結構キツかったからね……」

ツクヨミは昨晚の事を思い浮かべ、和菓子作りのキツさを思い出す。

「あたしで良ければ、手伝おうか？」

ヨネが手伝おうかと尋ねてから右肘を曲げて力を籠めると、右腕が凄い筋肉質になる。

『ええええええつ!?』

「す、凄い筋肉だ……!」

「ゲイツ君より凄いのでは……」

「……」

確かに普段から鍛えている筈のゲイツよりも凄かった。

「毎日米俵運んでるからね。それにここの和菓子が食べられなくなったら困るんだよ」

「ありがとう、ヨネさん」

「良かったね、お祖母ちゃん!」

「ああ。年を取るのも、中々いいもんだ」

「えっ?」

「辛い事も悲しい事もあったけど、こんなに楽しい日が待ってるんだからね」

はな達を見ながらそう答えると、ソウゴ達はそれに微笑みで返した。

「私もいつか、お祖母ちゃんみたいなめっちゃイケてるお祖母ちゃんになりたい!」

「はなならなれる!だって、私のめっちゃイケてる孫だからね!」

二人はお互いに顔を見合わせて笑い合い、はながはぐたんを高い高いさせる。

「自分の未来が楽しみ過ぎる！ねっ、はぐたん？」

「は〜ぎゅ〜！」

たんぽぽ堂はヨネが手伝う事になり、はなはいつか自分も、祖母のようになりたいと思っただった。

次回！Re・HUGつとジオウ！

第35話 2018：世界ツアーにレッツゴー！

第37話 2018： 世界ツアーにレッツゴー!

夏休みもいよいよ残りわずかかへとなつたこの日、ソウゴ達は飛行機に乗つて空の上をいた。

「おおっ!」

「雲が下にあるよ〜!」

「お姉ちゃん記念撮影!」

「パパとママにも見せないと!」

ハリーとはなと一緒に窓から外の景色を眺めている中。同じく飛行機に搭乗していたはなの妹・ことりに写真を要求されたはなは、妹の姿を横目にカメラを取り出して構える。

「ことりが空に羽ばたきました!」

彼女が空の景色と一緒に腕を広げることりの写真を撮る一方で、ハリーとツクヨミ、はぐたんも飛行機から見える景色に目を光らせていた。

「もしかしてみんな飛行機初めて?」

「せや!」

「ええ！」

「はぎゆ！」

三人供飛行機に乗るのは初めてだったようだ。

「へえ、タイムマジーンは何度も乗ってるのに——んんん？」

タイムマジーンと口になると、ゲイツがソウゴの口を塞ぐ。

「タイムマジーン？」

「バカ！はなの妹に余計な事を言うな！」

「ゲイツ君、少し落ち着きたまえ。子供っぽ過ぎるよ」

小声で注意されたソウゴが頷いたのを確認してひとまず彼の口を離す様子を見て、ウオズは呆れた口調で話しかける。

「何。お前だつて、離陸した時……」

——うおお！飛行機に乗れるなんて久しぶりで心が躍るよ！

「子供のようになんてテンション上がったよな」

そう言つて、ゲイツは飛行機に乗って飛ぶ瞬間、ウオズはこの場に居た誰よりもテンションが高かつた事を思い出す。その時の事をからかうと、ウオズが椅子から立ち上がる。

「やる気かい、ゲイツ君？」

「上等だ〜」

ゲイツも立ち上がり、両者やる気満々の表情を浮かべる。

「うおおおおおー！」

「やめなさい！」

二人の喧嘩が勃発しようとした瞬間、ツクヨミは二人の顔を掴むと窓に突きつけて仲裁した。

「二人共、ことりちゃんより子供よ！」

『ツクヨミ凄いい……』

(かっこいい……！)

ソウゴ達がツクヨミの姿に戦慄し、ことりがゲイツとウオズを止めた姿を見て惹かれると、彼女はツクヨミに話しかける。

「ねえツクヨミお姉さん、一緒に撮ろっ」

「写真。いいよ、ことりちゃん」

ことりに一緒に写真を撮ろうと誘われたツクヨミはそれに承諾する。

「お姉ちゃんお願い」

「任された！」

はながカメラを構え、ことりとツクヨミの二人が並んだ写真を撮る。

「ことりちゃんとかツクヨミ、仲良いね」

「うん」

さあやとほまれはツクヨミとこたりの仲良い姿を見て、二人共いい笑顔だった事に気付く。

「これが……空の旅……」

一方、ハリー達程ではないがルールーも窓から景色を眺めて呟く。

「ルールーも?」

ルールーも乗るのが初めてだと知った。

「はい、クライアス社で禁じられていました。アンドロイドの私は、金属探知機で引っ掛かるので」

「アンドロイド?」

「その点、うちのプライベートジェットだったら大丈夫なのです!」

「「うんうん」」

今現在ソウゴ達に乗っているこの飛行機は愛崎家の持つプライベートジェットで、空の旅に出ている。

「ねえ、アンドロイドって?」

「えっ?」

「それはね……その……」

アンドロイドと聞いたことりの疑問に対し、ソウゴ達はどう誤魔化せば良いのかと悩むと……

「アン・ドウ・トロワや! ルールーは搭乗ゲートで踊り出す癖が……な?」

「は、はい……」

ハリーが咄嗟に思いつき踊って何とか誤魔化す。それを見て、何名か無茶苦茶な説明だと少し引く。

「このように。アン・ドウ・トロワ。アン・ドウ・トロワ」

とりあえずここは合わせてルールーがタンバリンを持って踊る。

「変わってるね……」

「はい……!」

少々無理があるが、何とかルールーがアンドロイドだった事を誤魔化せる事に成功した。

「あ、さあや! あれ渡そう」

「わかった。みんな、こちらをどうぞ」

ソウゴとさあやがはな達に何かを渡す。

「あれ?」

「愛崎家プライベートジェットで巡る、世界七都市の旅……」

「旅のしおりだよ」

配布したのは今回の旅行プランのしおりだった。

「残りの夏休み、思いつ切り楽しもう！」

「よーし！楽しむぞーっ！」

もうお察しの方もいるだろうが。今ソウゴ達は、夏休みも終盤に差し掛かり、最後の思ひ出作りと言う事で世界一周旅行をする事になっているのである。

日も傾きかけた所で、はな達が奥の方に移動する。

奥の部屋へとツクヨミとことりを除いた女性メンバーが集まり、ほまれがミライクリスタル・イエローをミライパッドの上部にセットする。

「ミライパッド、オープン！」

画面から光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン！」

五人はそれぞれのパーソナルカラーのキャビンアテンダントとなった。

「アテンション、プリーズ！」

「キャビンアテンダントさん！」

「かぁいいー!」

「中々似合ってるで」

「みんな良く似合ってるよ」

ソウゴ達はキャビンアテンダントの姿になったはな達をそれぞれ褒める。

「ありがとう……お飲み物はいかがですか?」

さあやはソウゴ達に飲み物は何にするか尋ねる。

「じゃあオレンジジュース」

「私も!」

「俺も!」

こことりとツクヨミ、ハリーはオレンジジュースを注文する。

「俺はコーラーで!」

「私はコーヒーを頼むよ」

そしてソウゴとウオズはコーラを注文。

「スポーツドリンク」

「そんなもの無いよ」

だが最後のゲイツが注文したスポーツドリンクは無いと、ほまれにツツコマまれた。

「機内食はいかがですかー? ビー——」

「ビーフオアチキン？」

はなが言つてた途中で、えみるがはなの前に出て横取りする。

「ノーツ！私のビーフオアチキン盗つたーっ！」

絶叫するはなをスルーしつつ、ハリーとゲイツはえみるに注文を行う。

「ビーフで」

「俺も」

「私チキン。ツクヨミお姉ちゃんは？」

「じゃあ、私もことりちゃんと同じで」

「ちきちきー！」

「どうぞお召し上がり下さい」

えみるは彼らのテーブルにそれぞれ頼んだ機内食を置く。

「こうなつたらソウゴとウオズの方に——！」

はながソウゴとウオズの方に向かおうとする。

「ビーフオアチキン？」

「ビーフで」

「チキンで頼むよ」

「めちよっく！」

だがしかし、既にルーラーが二人の注文を受けていた。
「どうぞ」

二人の机にもそれぞれ頼んだ機内食を置く。

「お飲み物はいかがですか？」

今度はさあやがジュースとアイスコーヒーを差し出す。

「毛布はいかがですかー？」

「後にするわ。これからご飯やし」

「ビーフオアチキン!!？」

「もうビーフ来てるて！」

「ジュースのおかわりは？」

「まだあります！」

「ちよつと！キャビンアテンダントさんが多過ぎるよ！」

はな達はいつの間にか暴走をし始め、付き合ったソウゴ達はぐったりした。

飛行機に丸一日乗って、最初に訪れたのはハワイだった。

「アローハー！ハワイー！まずは、記念の一枚！」

はなは飛行機に降りて記念写真を撮る。

「はぐたんきやわたん！」

次にハワイの流行であるレイという装飾品を首に掛けたはぐたんを撮る。

「ハワイと言えば……パンケーキ、ロコモコ……」

「私も今日はこの本で……」

ルルーがパンケーキとロコモコを思い浮かべ、ウオズがこの日のために用意した外国のグルメ雑誌を開く。

「はい！そろそろ出発しまーす！」

『ええっ？』

するとさあやからもう出発すると言われ、はな達が驚く。

「もう行くの？」

「まだこの国の！食事をしてないのだよ！」

「世界を満喫する為には、もう出発しないと」

『ええっ？』

何も楽しめず景色だけのハワイは終わり、ソウゴ達は飛行機に乗り込みわずか数分でハワイを後にし、次の国へ向かう。

飛行機が次に向かったのはアメリカだった。

「ハロー！アメリカ〜！」

飛行機から降りたソウゴが叫ぶ。

アメリカではあちこち見て回ったハリウッドでゲイツとはなとえみるが写真を撮る。

「行くよ」

「「イエーイ!!？」」

ことりがカメラのシャッターを切ると三人の写真を撮した。

「ツクヨミお姉ちゃん。一緒に撮ろう」

「構わないよ」

「お姉ちゃん！」

今度ははなにカメラを渡し、ツクヨミとことりが写真を撮る。

その頃、自由の女神でソウゴとさあやとルールーが少し近過ぎる距離で写真を撮る。

「ねえ、二人共近くない？」

「そんな事ないよ」

「問題ないはずですよ……」

「いや……問題はああると思うけど……」

問題あるような話をしていたがとりあえず、写真を撮ることは出来た。

その後、ウオズとルールーはホットドッグを堪能する。

「素晴らしい〜！流石は本番だよ！」

二人とも満足そうな表情で食していた一方、ハリーとほまれは、はぐたんと共に行動していた。

「セクシーできやわたん……！」

はぐたんでとある映画のワンシーンを再現させて撮った。

一時間経つとソウゴ達は再び飛行機に乗り込み、次の国へと出発する。

その次はケニアで、野生動物を見物する。

「イェーイ！」

離れた位置から百獣の王の動物・ライオンをソウゴが写真を撮った。

更にその次はフランスへ飛び、さあやとほまれがエッフェル塔を支える写真を撮ったり、ソウゴとルーラーがミルフィーユを堪能する。

ここでははぐたんは気品のある女王の格好をさせて、写真を撮った。

その次はイタリアで、はながピサの斜塔を支える写真を撮ったりする。

「ガリレオきやわたん……！」

「渋過ぎ……!」

「ここでははぐたんはガリレオの格好をし、ハリーが渋過ぎとツッコんだ。

一方、ソウゴ、ゲイツ、ウオズ、えみる、ルーラーの五名は本場のピザを堪能していた。

「美味しい〜!」

「このチーズの絶妙な香りがたまらないね〜!」

「このトロトロ感が素晴らしいです〜!」

ピザを食べてこちらは幸せのようだ。

その次は中国で万里の長城を撮り、はぐたんはパンダの着ぐるみをし、パンダの格好をし、ウオズとルーラーは肉まんを堪能した。

更に移動中の間は、はな達がキャビンアテンダントの仕事体験ばかりをしていた為、巻き込まれたソウゴ達は振り回された。

ソウゴ達が楽しく世界ツアーを楽しんでいる一方で、クライアス社の会議室に幹部達

が集まっていた。

「調査の結果、プリキュアと若きジオウは海外旅行中らしい」

「海外……!?？」

リストルからジオウ達が海外旅行に行つてると知り、ジェロスは目を丸くさせる。

「広い世界から探し出すのは困難を極めます。と言う事で、今回は特別に私が出張を――

――」

「ノー・プロブレム！海外でしたらイングリッシュがベリーウエルな私が――！」

「いやいや、このリストルが――」

「社長秘書は社長についてないと――」

「いーね！海外出張……胸が躍るねえ！行つて来ます」

どっちが行くか二人が言い争っている横でトラウムがそう言うのと、彼は会議室から出

て行くとする。

「あ、そうだ。例のもの、もうすぐ出来るよ、楽しみにしていてね！」

ふとトラウムが「例のもの」とリストルに伝え、ご機嫌よく現地へ向かう。

一方、ソウゴ達は中国を後にしてから日本に戻り、竹林の中を歩いていた。

「……」

「はい。この旅最後の目的地、温泉宿ですー」

世界旅行最後の目的地は、日本の温泉宿だった。

「まさか最後が熱海とは……」

「ルールーたつての希望なのです」

熱海の温泉はルールーのリクエストした場所でもあった。

「二度、来てみたかったのです。温泉の硫黄成分は、アンドロイドには良く無いと止められていたので。」

「アンドロイド……?」

再び聞こえた『アンドロイド』と言う言葉に、ことりがまた疑問に思う。

「温泉に入れないの?」

「いいえ、後で判明しました。私の代わりに、温泉出張に行きたい社員がでつち上げた嘘だったと」

「それ、自分達行きたいからでしょ……」

「ねえ、アンドロイドって?」

ソウゴはチャラリートやパップル達の事を思い浮かべると、こつりの発言にはな達が反応する。

「あ、あんどーナツや!」

「あんドーナツ食べながら温泉入ろうとしたら止められたらしいんだ！」
「ふーん……」

ルルーにツツコみを入れ、はたと笑いながら誤魔化すが、ことりは疑ったままだった。

「あつ！見てアレ！足湯があるよ！」

はなの指差した方を向くと、そこには足湯があつた。

そして一同が足湯に足を入れる。

「ほへー……気持ちいい……」

「疲れた足に効くのです……」

「温泉……これが……疲労度、毎分8.5%の割合で減少。素晴らしい……！」

「良かったのです。温泉で心も身体もリラック——」

えみるが言つてた途中で、近くからカラスの鳴き声が聞こえ、ビクツと驚く。

「意外と近くで鳴いたね」

「何か気味悪いのです……」

「言われてみれば……妖怪でも出て来そうな……」

「「ツツク？」」

妖怪。その一言がゲイツとほまれの脳裏から、あの時体験した幽霊達の記憶をよぎら

せた。

「ちよちよちよ!ちよつと止めて下さい!」

「そそそそうだよ!変な事言わないで……!」

「よよよよよ妖怪なんて………いるわけ……」

すると近くの灯笼から、和傘を持った人影が出て来て近づいて来る。

「で、出た〜っ!唐笠お化け〜っ!」

「でたわああああああ!!?」

ゲイツとほまれが恐怖のあまりに叫びながら驚き、ソウゴとはな、ウオズ、えみるも驚く。さあやのツクヨミは目を輝かせ、ルールーはジツと見て、はぐたんは変わらぬ表情だった。

「いらっしやいませ……」

「えっ?」

突如挨拶し、ソウゴ達が目を丸くする。

「もしかして、この温泉宿の人ですか?」

「はい。温泉宿天狗館の主人でございます」

挨拶したのはこの温泉宿・天狗館の主人だった。

「100%の確率で人間」

主人に案内されて天狗館に入り、宿泊する部屋に入る。

「すみません、驚かせてしまつて」

「こちらこそ、唐笠お化けなんて……」

「いる訳無いよな。あり得えな。本当にすみませんでした」

「ええ、ええ。天狗なら分かりますけど」

「ですよ。天狗なら——」

天狗と聞いたその時、彼らは驚愕のあまり絶句した。

「て、天狗!?」

「で、出るんですか!?」 天狗!?」

ソウゴが言うとうオズとえみるの横からゲイツとほまれに抱き付いて主人に尋ねる。

「聞いた話ですが……昔、うちの温泉に来たつて話です。」

天狗つて言うのは、青っ白くて、冷え性で困つてたらしいんですが、うちの熱い温泉

で天狗はのぼせて真っ赤な顔にそんなもつて、八手の葉の団扇を持つようになったと」

主人は天狗の掛け軸を見て説明する。

「皆さんご存知の天狗スタイルが確立したのは、うちの温泉だなんて伝説があるんです

よ」

「へえ」

「へえ〜……………」

ゲイツとほまれを除くメンバーが関心し、ツクヨミとさあやは目を輝かせる。

「…とは言え伝説ですよ。私も見た事ありません」

『なんだ…………』

何名かは安堵するが、さあやとツクヨミは残念がる。

「さて、どうなさいます？まずお食事に——」

「温泉で」

「私も……………」

ルーラーとウオズが主人に顔を近づけて伝える。

「食いモンより温泉選びよった……………」

「珍しい……………」

というわけで温泉へ入る事となった一同は、男性陣と女性陣に分かれて温泉を堪能する。

「あ〜温泉なんて久しぶり〜！」

「日々の疲れが取れるわ〜」

ソウゴとネズミに戻ったハリーが温泉で気持ち良く過ごしていた。

「ウオズ！いちいち俺に泡を飛ばすな！」

「わざとでは無いよ。それにゲイツ君もそんな温泉で怒鳴らない方がいい。のぼせるよ」

「何〜!!?」

またしても二人の間から火花が散らされる。

「またやつてる〜やつぱり仲良いね!ゲイツとウオズ」

「仲が良いんか……?」

不安気に見るハリーに対してソウゴは面白そうに見ていた。

「いや〜極楽〜極楽〜!」

一方、男湯の外にある露天風呂ではトラウムが浸かっていたが、ソウゴ達は気づかなかった。

先に温泉から上がったはな達は、風呂上りの牛乳を堪能する。

「美味しい〜!」

「おいしーい!」

「きゃわたん……!」

特注の浴衣を着たはぐたんをほまれがカメラで撮る。

「おっ、もう上がっつったんか」

「みんな、早いね」

ソウゴとハリーが男湯から出て来る。

「ソウゴもハリーも遅いよ!」

「ゲイツとウオズはどうしたのですか?」

ゲイツとウオズの姿がない事にほまれが気づくと、ソウゴとハリーが顔を合わせて言いつらそうなる顔になる。

「ああ……実は……」

その頃、男湯のサウナルームでは、首からタオルを下げたゲイツとサウナハットを被ったウオズがいた。

二人はどちらが長くサウナに耐えられるのか、勝負の真つ最中だった。

「ウオズ………ハア、ハア……もう出てもいいぞ」

「ゲイツ君。私は君より、年上なのだよ………まだまだ……」

お互いに汗を流し、息を乱しながら、早く出る様に指示を出す。

（早く出ろおおおッ!）

（早く出たまえええッ!）

だか意地を張って一向に出ようとしない相手に、二人は心の中でシャウトしながら、この時間が早く終わることを願った。

「というわけで今、サウナで我慢勝負しとるんや……」

「はあく……まったく……」

また、あきらまれるような勝負をしているのかとツクヨミは溜息を漏らす。

「ルールー?」

「温泉の効能……余りに気持ち良すぎて測定を忘れました……」

初めての温泉を堪能したルールーはぼーっとし、肌がツヤツヤになってた。

「ルールー満足したようだね」

「ねえ! キュアスタ映えする写真撮れたよ!」

「素敵ですね……!」

記念写真を撮って貰い、はながえみるに写真を見せる。

だがその時えみるは、ここで背後から何かの気配を感じ取り、ビクツと怯える。

「どうしたの?」

「て、て、天狗……?」

「風だよ」

「えっ……?でも……」

風だと思ひ諦めて行くと天井から一つの影が見えた。

そして温泉の次は、夕食を堪能する事に。ちなみにゲイツとウオズは……

「あ……バカ……」

「早く出ればよかつたものを……」

二人はサウナに長く浴びすぎた所為でのぼせてしまい、食事どころではなかつた。

「美味しいです!」

「ありがとうございます」

「しかし、えらい広いな」

「来てるのは俺達だけって訳じゃないけど……」

ハリーの言う通り、今ソウゴ達のいる広間は相当の広さだつた。

「近頃はプールがある大型ホテルに、お客を取られちゃいました……」

「何でも、キュアスタ映えするとかで……」

「この旅館でも、いっぱい良い写真撮れてます!」

「喜んで頂けて良かった」

微笑んだはなからそう言われ、主人は安堵して微笑んだ。

その後もみんなの写真を撮り続ける。

「どれもキュアスタ映えする写真！」

「ルーラーのお陰だね」

「うん！」

「私こそ、夢が叶いました」

「私も、こんなに楽しい夏休み、初めてなのです。」

「いつも一人だったから……今までで楽しい夏休みでした！」

「えみる……」

楽しかった思い出に浸りながら会話していると風鈴の音色が聞こえ、一同がその風鈴のある方向を向く。

「夏休みが終わるの、寂しいのです……」

「まだまだ！夏休みは終わって無い！」

「えっ？」

えみるが感傷に浸っていると、はなが立ち上がってそう叫ぶ。

「キュアスタを、もっと夏休みの思い出でいっぱいにしよう！」

「はい！そうですね！ここは一つ！」

ルーラーがミライクリスタル・パープルをミライパッドの上部にセットする。

「ミライパッド、オープン！」

画面から光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン!」

えみるとルルーはギターを持ち、前にナイトプールで身に着けた時とは違う衣装を着て旅館のステージへと立つ。

「行くよ!」

ツクヨミがセットを操作し、きらびらかな演出を行いBGMを流す。

「ディスクがあふれる♪ミライを描こう♪大切な夢と一緒に♪」

えみるとルルーの歌声が旅館中に聞こえた。

「愛おしい想いを音に乗せ刻む♪かき鳴らせいつだって♪シンギングトウギャーザー!」

歌い終えると同時にソウゴ達が拍手を行い、はなの横でアンコールを言う者も出て来る。

はな達が横を向くと、そこにはトラウムがいた事に気付く。

「あーっ!」

「えっ? 誰?」

「何であなたが……!」

「と言うかいつの間……!」

「あれ？アンコールはいいの？じゃあ今度はこっちの出し物を。

今週の、ビツクリドンドンメ〜カ〜！」

トラウムはそう言うと、自分の顔を模したメカに『猛』と書かれたチップを注入する。

「発注！猛オシマイダー！」

小型のオシマイダーと社交ダンスを踊り、メカに天狗の像を挿入させる。

「ピコつとね〜」

小型オシマイダーの持つスイッチを押し、浴衣を着た天狗の猛オシマイダーを作り出した。

「なーっ！天狗だーっ！」

「天狗！」

「ちやう！猛オシマイダーや！」

「なんだ……」

「ふう〜……」

えみるとゲイツは天狗が現れたと思い狼狽えるが、オシマイダーだとわかり一安心する。

「なんだじゃなーいっ！一安心するなーっ！猛オシマイダー！」

猛オシマイダーが暴れ出し、中は無茶苦茶になった。

「くそ……体が動かん……」

「我が魔王……私達も……」

しかしサウナに長くいた所為で、ゲイツとウオズの二人は体が全然動かなかった。

「二人は無茶しないで。ここで休んでて」

「ことりはここにいて！ツクヨミみんなをお願い！」

「わかつた！ことりちゃん戻ってくるまでは、絶対にここから出ちゃ駄目だよ！ゲイツ、ウオズ」

まずは、動けないゲイツとウオズを安全な所へとツクヨミは連れて行き、ことりにはぐたんを預ける。

「お、お姉ちゃん!?」

ことりに此処へいるよう伝え、はな達は猛オシマイダーを遠ざける為に宿から出る。

「ソウゴお兄ちゃんにさあやさん達にまで……！一体、何がどうなってるの……?」

ソウゴ達が竹林の中の道を走り続けると、猛オシマイダーが目の前に着地する。

「ここならもう大丈夫か……!」

「みんな!」

『ジクウドライバー!』

『ジオウ!』

『ハリー!』

ソウゴとハリーはウォッチをドライバーに装填し、二人が構えると、はな達五人がプリハートを取り出す。

「変身!!?」

「ミライクリスタル!ハートキラッと!」

二人がドライバーを操作し、体にアーマーが纏われ。五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、何時もの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダー!ハ・リー!』

「輝く未来をく抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

「みんな大好き!愛のプリキュア!」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

「HUGっと!プリキュア!」

一同はゲイツとウオズを除いて変身完了し、ジオウ達は旅館を守るため猛オシマイダーへと挑む。

「楽しい夏休みを邪魔するなんて……!」

「邪魔なんかしてないよ? なっ、猛オシマイダー?」

猛オシマイダーがエール達に向かって跳ぶ。

「アテンションプリーズ!」

三人が一列に並んで突進するが、猛オシマイダーが団扇を振って起こした突風で吹き飛ばす。

「はあっ!」

何とか着地した所にマシエリとアムールが両手を重ねて振り下ろすが桶で防がれ、落下するが着地する。

「やあ!」

今度はジオウがジカングレードで反撃に出るため、飛び上がったって斬りかかる。

「オシマイダー!」

オシマイダーはすぐさま突風を放ち、ジオウが跳ね返されると地面に転がり変身解除となる。

「そんなの……あり……」

天狗姿の猛オシマイダーに苦戦する。

その時、竹林の陰からこそりと旅館を抜け出し、みんなが戦っているのを見ていた。

「あれ……!」

『ジオウ・II!』

ソウゴはジオウウオツチIIを分割し、ドライバーの左右に差し込み、後ろから二つの時計のエフェクトが現れた。

「変身!」

ドライバーを回したソウゴの体が時計バンドのエフェクトで覆われ、アーマーが纏われる。

『ライダータイム! 仮面ライダー! ライダー! ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ! II!』

「ソウゴお兄ちゃんが……変身した……」

じゃあ、あの時助けてくれたの……」

それを見たことは以前、はぐくみ市でビルが崩れた時に瓦礫に押し潰されそうになった時、大きなロボットに乗って助けてくれたジオウが、ソウゴだと知り驚く。

一方、ジオウはジカンギレードとサイキョーギレードを構える。猛オシマイダーは再び巨大な突風を作り出しジオウ達に放つ。

『フィニッシュタイム!W!』

Wウオッチをジカンギレードに装填し、ジカンギレードに風の力を纏う。

『W!ギリギリスラッシュユ!』

「ヤアアア!」

Wの力を纏ったジカンギレードで突風を切った。そしてサイキョーギレードでさらに追い討ちをかける。

「バカな……」

「もう、やめない?俺達、最後の夏休みを楽しみたいんだ」

ジオウがトラウムに止めるように訴える。

「…そんなに夏休みが楽しいならさ、永遠の夏休みなんてどう?時間を止めれば楽しい時間は永遠に続くよ」

「それじゃあ、何も続かないよ」

「何?」

「続くのです!ずっと!エールは言ったのです!キュアスタには、沢山の思い出があるのです!」

「はい?あのさ、話がかみ合って無いんだけど」

「思い出こそが永遠。写真は、楽しい時間を一生一瞬切り取った物」

「そうなのです！写真を見る度に、みんなとの楽しい夏休みを思い出す事でしょう。どんなに時が過ぎてても、思い出は心の中にあるのです！永遠に！」

ジオウとマシエリ、アムールの三人が言うと、トラウムは笑い出す。

「こりや面白い事を言う。そう来たか。でもそれつてさ、お前さん達がいてこそでしょ」
「えっ……？」

エール達が気を取られてた所に猛オシマイダーが急降下して来るが、何とか跳んで避ける。

「お前さん達がいなくなれば、思い出もなーんも消えちやうでしょ？いい湯だったんでしょうけど残念だけど……温泉宿ごと吹き飛んじやえ！」

「止めるのです！」

「マシエリ！」

猛オシマイダーが団扇を振って突風を起こそうとし、マシエリが止めに向かう。

するとその時、どこからか謎の突風が生じて猛オシマイダーを吹き飛ばし、地面に叩き付けた。

「何だ？？」

「風……？？」

急な風が猛オシマイダーの動きを鈍らせた。

「よし……今なら」

『サイキョーフィニッシュタイム!』

その隙を見てケンモードにしたジカンギレードとサイキョーギレードを合体させ、剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がらせる。

『キングギリギリスラッシュ!』

「オリヤヤヤヤ!!?」

振り下ろされたサイキョージカンギレードは猛オシマイダーに直撃し、猛オシマイダーが倒れる。

「よし! ハリー! 決めるよ!」

「おお!」

ジオウとハリーがウオッチを押し、ドライバーのロックを解除させて一回転させる。

『『フィニッシュタイム!』』

「はあ!」

猛オシマイダーの周りにピンクと金色の“キック”の文字エフェクトが囲われると、二人が高く飛び上がりキックの態勢に入る。

『トウワイズタイムブ레이크!』

『タイムフィニッシュ!』

「はああああ!!?」

ジオウは足の裏にキックの文字を収束させ、ハリーの前に「ライダー」と「キック」の文字が敵に向かつて大量にレールのように現れると、それを辿るように飛び蹴りを放つ。

「ヤメサセテ〜モライマス〜!」

二人のライダーキックを受け、猛オシマイダーは爆散して浄化されていく。

「やった! 凄い!」

「ま、温泉も楽しめたし、面白い物も見れたし、良しとするかな」

陰でオシマイダーが倒されたのを見てことりが喜んでいると、トラウムはそう言い、瞬間移動して姿を消した。

いなくなったのを見てソウゴ達は変身を解除した。

「さっ、戻らなきゃ」

「俺、お腹減ったからもう一度ご飯食べたい」

全員が変身を解き元の姿へと戻ると、それを目撃してしまったことりは更に目を大きくした。

「えっ……!!? お、お姉ちゃん……ッ!!?」

それに、さあやさんもほまれさんもルルールも、えみるちゃんも……!!? ソウゴお

兄ちゃんとハリーさんも、仮面ライダーだった？もしかして、ゲイツお兄ちゃんにウオズさんも……!」

プリキュアと仮面ライダーの正体が自分の姉や友達と知り、彼女は驚くことしか出来なかった。

「ことりちゃん!」

そこへ、ツクヨミがいなくなったことりを探しに現れた。

(……も、戻らなきゃ……っ!)

戻らなきゃいけない事に気付き、すぐに天狗館へ戻った。

翌日、一同はチェツクアウトを終えて天狗館を後にする。

「よし!キュアスタ、夏休みの思い出いっぱい!ホント、楽しい夏休みになったなあ」

(間違い無いよね……。あれは、お姉ちゃん達だった……)

プリキュアと仮面ライダーの正体が、お姉ちゃん達だったなんて……)

はながミライパッドを持って思い出がたくさん出来た事に喜んでる横で、プリキュアと仮面ライダーの正体を知ったことりは複雑な表情を浮かべながら心の中で呟く。

「どうしたの……ことり?楽しく無かった?」

「う、ううん！楽しかったよとつても！」

思いつめた様な表情のこつとりを気に掛けたはなが尋ねるが、慌てながら首を横に振つて楽しかったと返事を返す。

「？」

「どないしたんや？」

考え込むルルーを見てハリーが尋ねる。

「私達を救つてくれたあの風、ゲイツリバイブ疾風やシノビではなかった。気象条件から計算しても不自然。おそらく、人工的な物」

「それつてもしかして……」

『天狗!？』

あの時自分達を助けてくれた風は天狗によつて起こされたものではないかと思ひ驚くが、さあやは直ぐに訂正を行う。

「でも、旅館のご主人は言つてたよ。伝説だつて」

「そ、そうなのです！ただの伝説なのです！」

「そ、そうだ……で、伝説だ……」

「てんぐ！てんぐ！」

そんな中はぐたんが、竹の上に乗る天狗の様な人影に気付き、呼び掛ける。

「おおそうか、手拭くか。宿の手ぬぐいなら貰うたで。はぐたんの分もあるで」

「ちやう!ちやーう!」

「違うみたい」

はぐたんの指す竹林、そこには本当の天狗がいたのだが、その事をソウゴ達は知らなかった。

「さあ、家に帰るまでが旅行!早く帰って、明日からの新学期の準備をしないと!」

「明日から学校なんだよね」

「みんな宿題は終わらせたのかい?」

「うん」

「勿論なのです」

「ソウゴ。お前も確か終わった……」

ふとゲイツは、ここに居るメンバーの中で二人だけ喋って無い事に気づき、一同がその方向を向く。

「ソウゴ?はな?」

「どうして目を逸らすんだ……まさか……」

一同の視線の先に映っていたのは、冷や汗を掻き続けるソウゴとはなだった。

「まさか、終わって無いって言わないよね?」

「……………せん……………終わって……………ません……………！宿題終わって無い！」

「お姉ちゃん……………ソウゴお兄ちゃん」

明日から学校なのに、なんとこの二人はまだ宿題を終わらせて無かった。

はなは半分以上残っていたが、ソウゴは苦手な数学、自由研究と美術の絵の宿題を残していた。

「そうだ、飛行機で外国へ……………！」

「逃げる気？」

「高飛びする気かい！」

「どうしよ〜っ！」

「もうやるしか無いな」

ウオズ達が無慈悲に現実を叩きつけると、二人が両手と両膝を地面に付けて凹んだ。

その後、ソウゴとはなは戻ってから宿題を行い、みんなの協力もあつてギリギリで終わらせる事が出来たのだった。

次回！Re. HUGつとジオウ！

第36話 2068 : クライアス社のライダー！目覚める新たな力

第38話 2068： クライアス社のライダー!目覚める新たな力

——やめて!なんでそんなことするの!! すごく恰好悪いよ!

どうして、こうなっちゃったのかな……

——何よ貴女、何様のつもり?

私はただ、友達を助けたかっただけなのに……

——アイツ、ホントうざいよね

——前から思ってたけど、アナタ目障りなのよ。

——ほんと、消えてほしい。

——さっさとしないで。

どうして、こうなったの?

ねえ、誰か教えて。

………

……■ちゃん、どうしてこっちむいてくれないの……?

待って■ちゃん!お願い!なんか言って!

『どうして貴女はそんなにウザいの？』『土下座して謝れ』『なんで此処にいるの？』『ホラ、あんたが代わりに掃除しなさいよ』『あんたが悪い、何もかもアナタが悪い』『可哀そうね、あなた』『この偽善者が！』『一度精神科に行つたら？』『ざまあないわね』『ほんととなさげなく』『ねえ知ってる？あの子あの先生と付き会ってるんだって』『ええ』『マジ？』『教師と付き合ってるなんて、どう考えても媚び売ってるんじゃない？』『ねえ、黙つてないでなんか言つたらどう？』『地獄に堕ちろ』

や、やめて！もう、やめて！お願い。やめて……！

……お願い、たすけて、エリちゃん！

『貴女の友達は、アナタを捨てたのよ。まあ、嫌われて当然だけどね』

……ああ、そうか。

……私のやったことって、全部余計なお節介だったのか——

……ごめんね、エリちゃん——

世界一周旅行から帰ってきたソウゴとはなの二人は、残った夏休みの宿題をみんなと協力してなんとか無事に終え、新学期を迎えた。

「おはよう〜！ソウゴ！ゲイツ！ツクヨミ！」

「おはよう!はな!ルールー!」

はなとルールーが教室に入ると、そこには久しぶりに来るみんなの姿があった。

そのままHRとなると、担任の教師が生徒たちに向けて語り掛けようとしていた。

「え、急だが、このクラスに新たに副担任の先生を紹介します」

「新しい先生……」

「誰だろ?」

「楽しみ!」

先生の口から副担任の教師が来ると聞き、みんなは騒つく。

すると教室の扉が開き、そこから新しい副担任の教師が入ってきた。

『あっ!』

教壇の横に立つのは、いつも身に付けているマフラーと黒い服とは違い、カッターシャツにネクタイをつけ、黒いズボンを着て黒いチョキを纏い眼鏡をかけているウオズだった。

「今日からこのクラスの副担任になりました、黒田ウオズです。よろしく頼むよ」

『ウオズ!?!』

なんとウオズが、ソウゴ達が居るクラスの副担任としてやってきたのだ。

放課後、ソウゴ達はラヴェニール学園の中庭に集まる。

「何故！貴様がこの学園に来た！しかも教師だと……」

「ゲイツ君。私は教師だよ。聞くときは『何故こちらへ来たのですか？ウオズ先生』ではないかなあ？」

「貴様……！」

「どうしてきたのウオズ先生？」

直ぐに順応したソウゴがそう尋ねると、教師としてやって来たウオズはその理由を語る。

「クライアント社はより一層攻めてくるかもしれない。ならば、君達の近くにいた方がいい」

「なるほど」

「だからって、ウオズが教師……」

「問題ない」

ほまれ達は本当に教師なんて出来るのかと疑うが、ちゃんと教育免許を取得していたのか、彼は懐から教育免許証を取り出して皆に見せつける。

「まあ、よろしく頼むよ」

「なら、眼鏡はやめろ！」

改めて教師としてよろしくと言い。そんなウオズに対してゲイツが眼鏡を奪い取り、彼は涼しい顔で奪い返す。

「何故だい？中々似合うと思っていたが……」

「お前が眼鏡を掛けるているのを見てると……ムカつく!」

これからは学校でも二人の痴話喧嘩を目にするのかとソウゴ達が苦笑していると、はながミライパッドで夏休みの思い出を見つめる。

「ぶーる!はなび!」

「夏休み、楽しかったね〜!」

ミライパッドの画面を操作し、目の前の写真を見たはぐたんがその時の出来事を言う。

「みんなでいっぱい遊んだね!」

「はい。綿あめ、船盛り、甘美な味。後——」

「お祖母ちゃんからみんなにだって」

「希望まんじゅう!大好きなのです!」

えみると共に中庭へ来たことが、みんなの前に希望まんじゅうをテーブルに置く。

「ハリーさん、ウオズさんその節はありがとうございました」

そこへ、内富士先生が現れた。

「いやー、そんな。お互い様ですわ」

「私もそこまで事はしていません。」

とりあえず、同じ教師としてよろしく頼みます」

内富士があの時送ってくれたウオズと一緒に働いたハリーにお礼を言うと、ウオズが同じ教師として挨拶する。

「もううちのこうちゃん、ホントに可愛くて……！」

「わあ……きやわたん……！」

カメラに映った息子のこの写真を見せる。

「アイドル発見！サインちようだーい！」

今度は亜希達がルーラーとえみるに詰め寄り、それを見たことりは驚く。

「ルーラーもえみるちゃんも人気……！」

「盛り上がりつとるな。ホンマに楽しい夏休みやったもんな」

「うん！夏休み明けも、全力で頑張るぞーっ！フレ！フレ！みんな！フレ！フレ！私！」
夏休みが終わってもみんなは絶好調だった。

そんな様子にソウゴは嬉しそうに見つめ、それを見たゲイツは「何を笑っている」と尋ねる。

「この笑顔でみんなとずっといたいなあ〜って」

「ふん……そうだな。ソウゴ」

変わらないこんな風景を、ずっと見たいとソウゴが呟く。

同じ頃。別の学校の体育館で、ポニーテールの少女がスマホの画面に映ったはなを見ていた。

「野乃たん……」

その写真を悲痛そうな表情を浮かべながら見ている少女は、はなのことを知っていた。

放課後。ソウゴ達は学園を後にし、はながルーラーとえみるのサインを見る。

「随分シンプルだね……」

「可愛い。とつてもお上手」

さあやの持つえみるのサインは可愛らしく、ほまれの持つルーラーのサインはシンプルだった。

「えみる、いっぱい練習した成果が出ていますね」

「それは内緒と言ったのです……！」

「でも、うまいよえみる」

ミライパッドの画面を見たはなが、むふふと笑う。

「はな？」

「どうしたの、何か面白い記事があったの？」

「見て見て！ここ！私も映ってる！」

さあや達に見せたミライパッドの画面には、『新人アイドル温泉繁盛記！』と書かれた見出しにルールとえみると一緒に自分の写真が映ってあった。

「もしかして、誰かがはなちゃんの魅力に気付いてくれて、スカウトに来ちゃうかも！」

「これはたまたまだと思うけど……」

「第一、はなは客の多いステージで歌えるのか？」

「めちよつくー！」

はなはゲイツにツッコまれて口癖を叫ぶとみんなが笑い合う。

「ハハッ……んん？」

「どうした？」

偶然振り向いたソウゴが、はなの背後に立つ制服姿の少女に気付く。

「……っ！」

はなが振り向いて少女を見ると、表情を強張らせながらその少女に反応する。

「野乃……野乃……」

「ええっ?もしかして本当に……」

「スカウト?」

「いや、違うと思うが……」

「知り合い?」

「あつ、うん……前の学校の……」

「そういえば、はなつて一学期の頃に、ラヴェニールに転校して来たんだね。わざわざはなに会いにきてくれたの?」

えみる達のはなにスカウトしに来たのかと思つているところをゲイツが突っ込んでいる横であの少女と知り合いだと答えるはなに、ソウゴは彼女がこの春に転校してきた事を思い出す。

「お友達ですか?」

だが少女は何も言わず、この場から走り去ってしまった。

「……ツ!!?」

「あつ!エリちゃん!」

「行っちゃった……いいの?」

「追いかけますか?」

「……大丈夫!さあ!ビューティーハリーに行こーつ!」

心配するルーラー達にはなは作り笑顔を見せ、ビューティーハリーに向かって歩き出す。

「はな、そちらは逆方向です」

「学校に戻るぞ」

「めちよつく……！あははは……！失礼しました……っ！」

すぐさま向きを変え、カチコチの状態で前を歩く。

「なんだろう？いつものはならしくない」

しばらくしてビューティーハリーに帰ると、はながぼつとしてキッチンに立っていた。

「ちよつと!? 何か焦げてるよ!?」

「……!?!? めちよつく……！」

鍋が焦げ始め、ツクヨミから焦げ臭いと言われてから慌てて火を止める。

「疲れとるなら言わなアカンで」

「うん……ごめん……」

その様子をキツチンの外から、ソウゴ達が様子を見る。

「やはりはなの様子がおかしいです」

「エリさん。あの子なにかあったのかな……」

「おそらく、はな君の前にいた学校の子じゃないかな?」

「95%の可能性でそうでしょう」

「我が魔王達は、はな君の前いた学校で何かあったか知らないかい?」

ウオズは自分よりも多く彼女と一緒にいるソウゴ達に、彼女が前にいた学校で何かあったのかと尋ねる。

「いえ……」

「私も聞いて無いな……」

「考えたら俺達、はなの過去については何も知らないんだよね……」

友達なのに、はなの昔のことをソウゴ達は何も知らなかった。

「エリちゃん……その子に会って聞いてみるしか無いかな」

「なら、調べてみるか……」

「よし!」

ソウゴ達は、はなの過去と彼女の関係を調べる事にした。

クライアス社の社長室に、ジェロス達三人が現れる。

「社長、私の部下、タクミとジンジンの事なのですが」

ジェロスがクライにジンジンとタクミの事を話す。

「もしかしてポーナスか？」

「いや、昇進か？」

その二人は現在、外で彼らの話をこっそり聞いていた。

「そろそろクビにしようかと」

だが、出て来た話は彼らをクビにすると言うものだった。

「クビ……っ!？」

「ミスばかりの部下は、このジェロスに相応しくありません」

「好きにすればいい。君には君の物語があるんだろう？」

「はい。私には時間が無いので」

「そんなに焦らなくていいんじゃないの？まだ若いんだし」

「それ、セクハラです」

「オーララ……!」

ジェロスにセクハラだと言われたトラウムが胸元を抑え、苦しげな表情を見せる。

「一気にこちらが有利になる発明、持って来たのにね」

そう言うのと、彼は懐からタンブラーらしき物を出す。

「まだ試作品だが、遊びには十分使えるぞ」

彼女が受け取ってから蓋を開けると、中のエネルギーが緑色に光る装置が入っていた。

「時を止め、皆で美しい世界へ」

「それと、社長。例のもの三台ほど完成しましたよ」

「完成したのかい」

トラウムが下からトランクを出し、開放する。

「我が社、専用のジクウドライバーです」

それは、ソウゴ達が使っているジクウドライバーそのものだった。

「奴らの戦闘データもあれば造作もなかったよ。さつて、誰か使うかい？」

「では、私が早速」

「僕にも貸してよ」

リストルとビシンがジクウドライバーを掴む。

「はいこれね」

トラウムはリストルとビシン専用のライドウォッチを渡す。

「スウォルツ氏、あなたは？」

残るは一台、リストルはスウォルツにドライバーは使わないのかと尋ねる。

「いや、俺はいらぬ」

スウォルツが彼らの提案を断り、その場から離れると、懐から取り出した数枚の写真を見つめる。

（――生憎だが、俺には狙っている力があるんだよ）

スウォルツはその写真を見て、心中で呟く。

写真に写っているのは、時見ソウゴ……そして、門矢士だった。

そして翌日、クジゴジ堂。

ソウゴとゲイツはウオズのおかげで、はなの去年までいた学校を知った。

「シャインヒル学園。はな君は去年までここにいた」

その学園のパンフレットを机に置くと、ソウゴとゲイツがパンフレットを開き、学校内の姿を見る。

「別に問題ない学校だよ」

「至って問題があるようにはないが……」

ソウゴとゲイツが見ているパンフレットからには何か問題があるようには見えなかった。

しかし、ウォズは何処か険しい表情を浮かべていた。

「……あくまで、私が他の先生方から聞いた話では、その学園ではいじめがあったらしい」

「えっ?」

「いじめだと……」

「あくまで噂だが、昨日のはな君のあの様子からでは、もしかしたら……」

あの時ののはなの表情から、この学校でいじめがあったのでは無いかと推測される。

「本当の事は、あのエリって子が知ってるはずだよ」

ソウゴが椅子から立ちあがり、クジゴジ堂を出る。

一方、ほまれのスケートの練習に付き添っていたさあやが、ほまれと一緒にスポーツジムから出てくる。

「付き合ってくれてありがとうね」

「ううん。ダンスってお芝居の参考になるって思ってたから」

「……ねえ、この後時間ある?ちよつと話したくて」

「私も、そう思ってたの。やっぱりあの時ののはなの顔、気になって」

二人も昨日の普段見せないのはなの表情が気になっていた。

「今日も誘ったけど来なかったし、けど、深く聞——」

ほまれが言いかけると、向かいから来てたエリに気付き、エリも彼女達に気付いたのかさあや達の前から逃げる。

「待って！」

エリが走り去ろうとしたその時、ソウゴが現れる。

「君……」

「ごめん！けど、教えてくれない？前の学校で、はなに何があったのか……」

ソウゴの背後からゲイツとウオズも現れ、さあやとほまれも追いつく。

「話聞いてくれる……！！？」

「えっ？」

「やはり、何かあったようだね」

エリが涙声で話を聞いて欲しいと頼み、ソウゴ達は驚いた。

「何があったの？はなと君に……？」

何があったのかと思ひ、そう問い掛けたソウゴに、エリはソウゴ達に全てを打ち明けた。

ビューティーハリーでは、はなははぐたと夏休みの写真をミライパッドで見返して

いた。

「はぐたん、覚えてる?これ、初めて掴まり立ちした頃の写真」

「はぐたん!はぐたん!」

はながはぐたんに初めて掴まり立ちした時の写真を見せると、それを見たハリーも深く感心した。

「ホンマにはぐたん、大きゆうなつたな」

「ホントだね」

「ちよつと、寂しいけどな。こうやって瞬きしてる間にも時間は過ぎて行く」

「……ハリー」

「ん?」

急に改まって話しかけられたハリーはどうしたのかとはなに聞く。

「過ぎて行った時間は、どうなるの?」

「時間は戻せへん。だから、今を大切にせんとな」

「……うん」

ハリーの答えに、はなは難しい表情で頷く。

一方、ソウゴ達はエリを連れ、スポーツジムのすぐ隣にあるカフェのテーブル席に座

る。

「それで話は……」

話を聞こうとすると、エリはまた表情を険しく暗くなる。

「怒ってる……?」

「えっ? 私?」

「俺か?」

ソウゴ達が自分達が彼女に怒っているのかと思ひこむ。

「違う……」

「ゆっくりでいいから」

「とりあえず、話してみて」

一旦呼吸を取り、エリが落ち着いてからソウゴ達に全てを打ち明けた。

「野乃たん、怒ってるかなって……」

「野乃たんって、はなの事?」

ほまれが尋ねると、エリが頷く。

「私……酷い事しちゃったから……」

「……?」

「酷い事……?」

「はなに酷い事したのか?」

ソウゴはエリがはなに酷いことをしたのかと尋ねると首を縦に振る。

「野乃たんは私を助けてくれた……」

エリの話では、彼女はチアリーディング部に所属しており、当時エリはチアのダンサーのセンターに選ばれた。

しかし、何人かはエリがセンターになる事に納得がいかずエリを責めた。

——その時、助けてくれたのがはなだった。

「でも、そうしたら……」

はながエリを助けると、エリをいじめていた子達は、はなへと対象を変えた。

「今度は野乃たんが狙われるようになった……」

はなが自分を庇った事で虐めを受けるようになった事を話すと、彼女の脳裏にいじめっ子達に脅されてはなを助ける事が出来なかった時の思い出が過ぎった。

「そのまま、野乃たんは転校しちゃって……いつも助けてくれたのに、私は……自分の事が大切で、野乃たんを守れなかった……」

「どうして、はなに会いに来たの?」

「ごめん……って言いたいの」

先程、はな自身が見ていた『新人アイドル温泉繁盛記!』の記事を見て、はなに会い

たくなつて謝りに来たと話す。

「じゃあ、伝えなよ。君の気持ち」

「えっ?」

そんなエリに、ソウゴが彼女に自身の気持ちを伝える様に話す。

「なんでもなれる!なんでもできる!…はなの言葉だよ」

「野乃さんの……」

「なんでもできるなら伝わるよ。君の気持ちも絶対に!」

「……本当に?」

「うん」

エリがソウゴに説得を受けているその頃。丘の上の木の傍で、えみるとルーラーが座つてギターを弾き、ツクヨミが機械弄りをしていた。

だが、えみるの調子はイマイチだった。

「えみる、どうかしました?」

「…はな先輩が元気が無いと、調子が狂うのです。昨日のはな先輩は、はな先輩らしく無いのです」

「そうでしょうか?」

「ルールーはそう思わないのですか?心とは、晴れの日もあれば雨の日もある。日々移り行く空の色のような物だと私は感じます」

「笑顔も……涙も……」

「私達の表情が曇った時、はながくれた物……」

ルールーとツクヨミがえみるの胸元に手を当て、えみるもルールーの手に触れる。

「今度は、私達がはな先輩にエールを送るのです」

「はい」

「うん」

エリから話を聞いたソウゴ達は、ビューティーハリーへやってきた。

「あつ、ダンスレッツスンどうだった?私も行けば良か——うわあつー」

ビューティーハリーに訪れたさあやとほまれが、横から突如はなを抱き締める。

「どうしたの?ああ、私がいなくて寂しかったんでしょ」

「そうだよ」

「なかよしー!」

「せやな」

「えっ?何いきなり?」

ビューティーハリリーに入ったソウゴとゲイツがはなを褒め、突然褒められたはなは困惑した。

そしてソウゴ達はテラス側に移動し、一枚のチラシをはなの目の前にあるテーブルに置く。

そのチラシは、明日行われるシャインヒル学園のチアリーディング部の発表会のお知らせだった。

「これ……エリちゃんが……」

はなはチラシを見て、自身が前の学校で知り合った友の顔を思い浮かべた。

「はなに、謝りたいんだって」

「はなに何があったのか、全部エリちゃんから聞いたよ」

「本当に……大変だったんだな」

「ぶつちやけてもいい？ 私は、無理して会わない方がいいと思う」

「嫌なら、行かない方がいい……」

さあやとほまれ、ゲイツが行きたく無いのなら、無理に行かなくても良いと話すが……

「その前にちよつといい？」

「何……？」

「昨日、誤魔化してごめん! やっぱ、カッコ悪いなって思ったから……」

「カッコ悪くなんて無い!」

俯いてそう話したのはなに向かってはまれがそう叫ぶと、ゲイツとさあや、ソウゴが彼女に寄り添う。

「はながやった事、絶対間違ってる。誰かを庇うのに間違いはない」

「カッコ悪いのは、誰かの心を傷付ける人達!」

「はなは、正しい事をしただけだよ」

「ありがとう……私、ずっとエリちゃんに嫌われちゃったんじゃないかと思ってたんだ」

「えっ……?」

「私のした事、お節介だったんじゃないかって。」

「だから……何か……顔を合わせると、言葉が出なくなっちゃって……」

「エリちゃんも同じ事言ってたよ」

「えっ……?」

はなはあの時、自身の行動が余計なお節介だったんじゃないかと、そのせいで嫌われてしまったのだと思って後悔している事を呟くと、さあやは彼女もはなと同じことを喋っていたと語る。

「勇気を出してもう一度エリちゃんの心に触れたとしても、上手く行くかどうかは分か

らない。けど、はなには私達がいる！」

「うん。だって私達……はなの事、大好きだからさ」

「さあや……ほまれ……」

「はな君。私も今は、君の学園の教師の立場である。相談くらいなら私も聞くよ」

「俺達に頼れよ。友達ならなんでも聞いてやるよ」

「なんでもなれる！なんでもできる！でしょ？はな！俺達は友達だから！」

「ソウゴ……ゲイツ……ウオズさん」

「ノツてるかーいっ！」

「イエーイッ！」

するとはな達の前に、ギターを肩に掛けたえみるとルールーとツクヨミが現れ、腕を上げる。

「どうしたの三人とも!?？」

「私達からプレゼント！」

「はな先輩にフレフレをお届けしに来ましたのです！」

「はなに贈る、スペシャルライブです」

そう言うとはなに向けて、新しいバージョンでの『キミともだち』を歌う。

「みなさんも」

えみるに誘われたソウゴ達も立ち上がり、みんなで歌う。

「ありがとう……！……みんな……！」

私、みんなに会えて良かった!!？」

はなは涙を拭ってから両腕を広げ、みんなに会えて良かったと力強く告げた。

翌日、はな達は会場に訪れる。

控え室の前で緊張するはなの手をさあやとほまれが握り、えみるとルールー、ツクヨミが肩に手を当て、後ろの列に座るゲイツ、ウオズ、ハリーが見つめる。

「よし、まずチアの舞台を見て、終わったなら挨拶する心の準備をして——エリちゃん、久しぶり！よし、よし！」

はなは心の準備を構え、控え室の扉を開けようとする。

「ええ〜っ!!?どう言う事なの!!? 車が止まって、メイクに来れないって……！」
だがしかし、はな達が向かおうとしたその時、近くで女性の声が聞こえた。

その女性曰く、チアリーディング部のメイクの担当者が、車が止まって来れないと言
う事を聞いた。

「トラブル……?？」

「らしいな」

「車が渋滞か何かに巻き込まれたのか？」

交通の渋滞か何かと思うとはなが咄嗟にある事を閃いた。

「ルルー！ミライクリスタル貸して！」

「えっ？」

はながミライクリスタル・バイオレットをミライパッドの上部にセットする。

「ミライパッド、オープン！」

画面から光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン！」

はな達はメイクアップアーティストになった。

その頃、寝坊していたソウゴが全速力で走りながら会場へと向かう。

「やばい！やばい！」

ようやく会場前へと到着し、ステージへと向かう。

「はあ、はあ、着いた……みんな待つてるかな……」

ソウゴは辺りを見回し、はな達が居るであろう控え室の場所を探す。

「君が時見ソウゴ君かい？」

「えっ？」

自分の名前を呼ぶ声が聞こえ振り向くと、そこには一人の男性がいた。

「あの……?どちら様で?」

「クライアス社だよ」

また声が聞こえて振り向くと、反対側にビシンがいた。

「久しぶりだね。オーマジオウ」

「ビシン……じゃあ、こつちも……」

「ご紹介が遅れた。私の名はリストル。クライアス社プレジメント・クライの秘書、

まあ、副社長といったところだよ」

「………何の用なの。ここにはみんなはいないよ」

「そのようだね。だが、今回は彼女らに用があるんじゃない。君と話をしに来たんだ」

「話……」

はな達のミライクリスタルが狙いじゃ無い。しかも狙いは自身にあると言うリストルの発言に、ソウゴは疑問を浮かべる。

「何故君は、オーマジオウを受け入れない」

リストルがソウゴに、何故オーマジオウの力を受け入れないのかと聞く。

「あの力があれば、君は最強の力を手に入れた事になるんだよ」

「………そんなものじゃない」

ソウゴはオーマジオウの力はいらないと言う。

「へえ、要らないんだ。なんで？」

「あの力は人を救えない。俺が目指す王様はあんなじゃない！」

ビシンの問いに、オーマジオウの力は自分の理想とは違うからだと答える。

「俺はどんな民を救える最高最善の魔王になる！だから、俺はオーマジオウもアンタ達も止めて、新しい未来を作る！」

ソウゴが強く叫び、新しい未来を作ると語る。

「そうですか……私達としては、君にはオーマジオウ是非ともなつて欲しいのですが……仕方ありませんね。実力行使といきましょう」

「そうだね」

『ジクウドライバー！』

「ジクウドライバー……なんで……」

ソウゴはジクウドライバーを装着した二人に驚くと、二人がライドウォッチを取り出し、ウォッチのウェイクベゼルを回転させて起動する。

『リストル！』

『ビシン！』

そしてドライバにウォッチを装填し、ドライバのロックを解除する。

すると後ろからゲイツのようなタイマー型のエフェクトが、それぞれ明るい茶色と藍色の二色となって現れる。

「変・身」

「変身!」

ドライバーを回すとビシンとリストルの体が時計バンドのエフェクトに包まれ、新たな姿へと纏われる。

『ライダータイム!仮面ライダーリストル!』

『ライダータイム!仮面ライダービ・シ・ン!』

彼らはそれぞれ、胸部の所に茶色の革ベルトが付け、首元にスカーフ——『スカービーストアクセレーター』を付けており、アーマーカラーは茶色と灰色、複眼のライダー文字は明るい茶色となっている灰色の仮面ライダー・仮面ライダービシンと。胸部にデジタル腕時計のGショックのベルトとなっているものを装着した青藍色の仮面ライダー・仮面ライダーリストルに変身した。

「仮面ライダー……」

「仮面ライダービシンだよ」

「仮面ライダーリストル……さあ、変身したまえ……オーマジオウ」

二人がソウゴにジリジリと迫ってくる。

『ジクウドライバー!』

それを見てソウゴはジクウドライバーを装着する。

「やるしかないみたいだね……」

『ジオウ!II!』

ジオウオツチIIを分割しドライバーの左右に差し込むと、後ろから二つの時計のエフェクトが現れた。

「変身!」

ドライバーを回したソウゴの背後で二つの時計は左右対象に止まり、彼の体を時計バンドのエフェクトが纏う。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ!II!』

ソウゴはジオウIIへと変身を完了する。

「これがジオウII……」

「へへッ……さあ、楽しもうよ〜」

『ジカントッド!Rod!』

『ジカントンファアガン!』

リストルとピシンはそれぞれ、グリップの上に四角いブロックが付いている杖のような形をした武器と、銃口が付いたトンファアのような武器を出現させた。

「…………ツ」

ジオウはサイキョーギレードとライドハイセイバーを構え、両者戦闘態勢に入る。

「はああ!」

ライドハイセイバーでジオウが先に仕掛ける。しかし、リストルに攻撃を防がれる。

「…………くっ!」

「後ろがガラ空きだよ」

「ぐわあああ!」

リストルに攻撃を防がれると、後ろからビシンに攻撃を受ける。スピード特化のビシンとバランスの取れたリストルにジオウは翻弄される。

ソウゴが戦っている事を知らないはな達は、ステージ裏の楽屋へと来ていた。

「メイク、手伝いに来たよ」

「えっ…………?の、野乃たん…………」

「えっ?もしかして野乃さん?」

「何でいるの?てか、どうしたのその前髪…………」

他の部員は、あのはながここにいる事に驚きを見せる。

「めっちゃイケてるでしょ?」

はな達はメイクセットを取り、エリ達のメイクを始める。

「エリちゃん、めっちゃイケてるお姉さんにメイクしてあげるからね」

「野乃たん……」

さあや達が部員にメイクを施し始め、はながエリにメイクを施し始めると、エリが涙を流す。

「あらあら、美人が台無しよー?」

はながそう言うと、エリは涙を拭いながら呟き始める。

「ごめん……野乃たん……ごめん……」

「……私、謝って欲しいなんて思ってた無いよ。」

許すとか、許さないとかそう言うのじゃない。

ただ、私エリちゃんの事、やっぱ好きだからさ。

また、友達になりに来たんだ」

「野乃たん……ありがとう——!」

はなとエリが仲直りしたその時、突如外からエネルギーが飛んで来た。

「エリちゃん!」

謎のエネルギーが彼女達の元に着弾し、はな達はミライクリスタルの力で難を逃れるが、エリ達は動かなくなってしまった。

「時間が……!」

「止まった……!」

「まさか……」

「クライアス社や!」

ハリーが窓の外からクライアス社を確認する。

「これは……」

「ゲイツ君。我が魔王は……」

「俺が探してくる。ここを頼むぞ!」

ゲイツはソウゴを探すために急いで向かう。

そして、はな達は外へ出る。

「諸君!」

「せっかく私達の時間、動き出したのに……!みんな!」

『ジクウドライダー!』

『ビヨンドライダー!』

ウオズとハリーはウオッチをドライバーに装填して構えると、はな達五人がプリハートを取り出す。

『クイズ!』

『ハリー！』

二人はドライバーを操作し、体にアーマーが纏われ。五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取って姿を変える。

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

『投影！フューチャータイム！ファッシュョン！パッシュョン！クエスチョン！フューチャーリングクイズ！クイズ！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「HUGっと！プリキュア！」

七人が変身を完了する。

一方、後のないジンジンとタクミが装置からエネルギーを放ち続け、逃げ惑う人達の動きを止める。

「凄いなこの機械!力が漲って来る!」

「この力があれば俺達、もしかしたらジェロスさんよりも……!」

『止めなさい!』

前からエール達の声が聞こえて前を向くと、ステージにエール達が立っていた。

「アイツら確か……ジェロスの取り巻きの……」

「もうお前達なんて怖く無いぞ!」

「この力があれば俺達は……!」

するとその時、装置が暴走し始めた。

「生まれ!生まれっば……!」

タクミが止めようとするが一向に止まらない。

「何なのですか!?」

「トゲパワワが……!」

「暴走を始めた……」

装置の暴走は止まらず、そのまま暴走がより悪化した。

「うわああああああっ!」

ジンジンとタクミが暴走した装置のトゲパワワと融合し、融合体オシマイダーへ変貌した。

「合体……いや、融合した……?!?!」

「何なのです……?!?!あのパワー……!」

「分析不能……!トゲパワワの暴走……!」

「厄介だね……これは、少々手荒になるかもね……」

エール達も本気で挑まないと危ないと考えていたその時、彼女らの近くにジェロスが現れた。

「残念だったわね。それはまだパーフェクトじゃないの」

するとジェロスが融合体オシマイダーにそう告げる。

「ジェロスさん、助けて……!ジェロスさん、苦しい……!」

「勝手な事をした罰よ!」

「俺達、仲間じゃ……!」

「そう、私達は仲間。カンパニー。だから最後まで、私の役に立ちなさい!」

ジェロスにそう言われたオシマイダーに向かってエール達が跳ぶ。

「暴れちゃ駄目!」

「落ち着いて!」

オシマイダーのパンチをエトワールが全身を回転させて避け、腕を掴む。

更にオシマイダーはもう一つの腕からパンチを繰り出すが、アンジュがキックで止めて掴む。そのまま地面に叩き付けた直後、もう片方の腕から同時にパンチが二人に向けて繰り出される。

だがマシエリとアムールが掴み、地面に叩き付けた。

「これって……」

リストルとビシンとの戦闘を行っていたジオウは、周りの時間が止まっている事に気づき、急いでみんなの元へと向かおうと試みる。

「早く行かないと……」

「逃がさないよ。オーマジオウ」

「くう!」

トンファアの攻撃をライドヘイセイバーで受け止める。

『GUN!』

身動きが取れないジオウにリストルがロッドを二つ折りにしてモードをガンモードへ変え、スナイパーガンの様な姿になったジカンロッドでジオウに銃弾を放つ。

「つ!? あああ!」

ガンモードにしたジカンロッドの弾は、ジオウに直撃した。

「くう……」

ジオウはライドヘイセイバーの針を回そうとする。

『FISHING!』

それを見たリストールはジカンロッドの四角い部分を回すと、今度はロッドの先端部分から尖った棒が20cm程せり出て竿の様な形へと変わり、ロッドの先端部分から出たエネルギー状の糸がジオウのライドヘイセイバーの腕を抑える。

「何これ……動かない!」

ジオウは腕を抑えられた事で、ヘイセイバーの針を回せなくなってしまった。

「ハハッハハッ! そらそら、こんもんなの!」

動けない隙にビシンがジオウをトンファーで滅多打ちにするように放ち、吹き飛ばした。

「ううう……」

倒れるとソウゴは重なったダメージによって強制変身解除した。

「これで終わりですか?」

リストールとビシンがトドメを刺すためソウゴの下に歩み始めるとそこへ、二人に向けて赤い光線が放たれた。

「貴様ら!ソウゴ!」

ソウゴを探していたゲイツが現れ、倒れているソウゴに駆け寄る。

「ソウゴ!」

「ゲイツ……どうして」

「友達を助けるのは当たり前だろ」

「ゲイツ。ありがとう」

ゲイツに支えられながらソウゴが起き上がる。

「これはこれは、懐かしい顔だね」

「なんだ、あの仮面ライダーは……」

「一人は前にハリーの前に現れたビシント、クライアス社の副社長だったてき」

「何……」

ソウゴから初めて見たライダーについての説明を聞いたゲイツは、あのビシントとクライアス社の副社長であるリストルが変身しているのだと知り、驚愕する。

「久しぶりだね。明導ゲイツ君。クライアス社に進入してきた以来かね」

「リストル。俺をあの時の俺と思うなよ。行くぞソウゴ!」

「ああ!」

ゲイツはリバイブウォッチを取り出し、ジオウも再びジオウIIのウォッチを起動させ

る。

『ジオウ！Ⅱ！』

『ゲイツリバイブ！剛烈！』

「変身！」

二人がドライバ―に装填し、後ろから二人の変身エフェクトが現れるとドライバ―を回す。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！ 剛烈！』

ソウゴは再びジオウⅡへと、ゲイツはゲイツリバイブ剛烈へ変身を完了する。

「第二ラウンドと行きましょう」

再びビシンとリストルに挑む。

「ビシンは任せろ。お前はリストルを」

「ああ！」

二人は二手に分かれ、ジオウはリストルに、ゲイツはビシンへと勝負を挑む。

「はああ！」

ジオウのサイキョーギレードとリストルのジカンロッドがぶつかり、鏖迫り合いとなる。

「何故、そうまで明日に拘る」

「何故って……」

「明日など来ても何を求める。今日よりも悪くなるかもしれない。ならば、明日などなんの意味はない」

一方ゲイツは剛烈のパワーで挑むが、ビシンのスピードに翻弄される。そして、突進するトンファアの攻撃を防御する。

「未来に何があるの?そんなもん来なくても、今が幸せならそれでいいだろう!」

「くう!」

「そうは思わないか?」

ゲイツに攻撃を行うビシンを横目に、リストルはロッドに力を押し込み、ジオウに膝をつかせる。

「……そんな事はない!」

『ジカンギレード!』

ジオウIIはジカンギレードを出現させ、リストルを離れた。

「明日があるから、人は未来に……前に進めるんだ!」

「未来……?」

「確かに明日は今日より良くなるとは限らない。

でも……絶対に良くなる！明日が来れば、今日以上の思い出と巡り合える！」

そう叫びながらジオウがジカンギレードとサイキョーギレードを合体させ、ジカンサイキョーギレードを構える。

「俺はそれを信じる！」

『サイキョーフィニッシュタイム！』

剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『キングギリギリスラッシュ！』

キングギリギリスラッシュを放ち、リストルは耐えようとするがジオウの方が押ししていた。

「はあああああー！！？」

「くうー！」

そのままリストルの防御を打ち砕くと直撃し、リストルは転がり倒れる。

ゲイツとビシンの戦闘も、ビシンのスピードとトンファーに押されていたゲイツ。

「このまま、終わりだね。所詮は君達では僕達には何も出来ない。仲間のプリキュアのように！」

「っ！！？………貴様！」

それを聞いたゲイツがゲイツリバイブウォッチを回した。それを見たビシンはゲイ

ツから離れる。

『スピードタイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!疾風!』

ゲイツが剛烈から疾風へとフォームチェンジした。

「はあ!」

「やああ!」

ゲイツとビシンはスピード勝負でお互いに攻撃を繰り返す。ゲイツのジカンジャクローとビシンのジカントンファアが何度もぶつかり合う。

『つめ連斬!』

ゲイツが何十の数のつめ連斬を放つ。

「……………はあ!」

ビシンはトンファアを回し、ゲイツのつめ連斬を地面へと受け流す。

「はああああ!」

そこへ、つめ連斬に紛れていたゲイツがビシンの後ろを取り。ジカンジャクローでビシンの背後を叩きつけ地面へ激突させる。

「お前に未来での、みんなの事は言わせん!」

「ちつ……………お前……………」

「俺達は必ず、未来の明日を取り戻す！それがあいつの願いだ！それを必ず果たす！」
ある人物の約束を思い出しながら、ジカンジャクローを構えたゲイツが優勢に立つ。
「ちっ！そう言うのがハリーを狂わせるんだよな！」

『ガン……！』

ビシンはジカントンフアーガンを持ち替えてモードをガンモードに変えると、ゲイツに向けてエネルギー弾を連射する。

『パワードタイムーリ・バ・イ・ブ剛烈！』

それを見たゲイツは再びパイブ剛烈へと変わり、トンフアーガンから放たれた弾は剛烈のボディに防がれた。

「っ!!? くそっ！まだだ！」

『トンフアー……！』

ビシンがジカントンフアーガンを元のトンフアーモードに変えると、まだジオウとゲイツに挑もうとする。

「やめなさい」

しかし、リストルが彼の腕を掴みビシンを止める。

「何するんだよりリストル！」

「私達はまだ仮面ライダーの力に慣れていません。流石にここまでです……今日はここで

退きましよう。

ですが、次は覚悟を。オーマジオウ、明導ゲイツ」

リストルとビシンは一瞬にして消え、ジオウとゲイツの前から去っていった。

「はあ、はあ、大丈夫?」

「ああ……だが、厄介な。ライダーが生まれたな」

ゲイツの言う通り、今回は向こうはライダーの力に慣れていないから何とかなった。

「でも、俺は……いける感じがすると思ってるよ」

いけるといふジオウが口元を緩めながらゲイツに振り向く。

「俺にはみんながいるから♪」

「ふん。お前らしいなソウゴ」

全く根拠のない言葉であるが、ゲイツは彼が言うとお真に行けると思い込んでしま
う。

「急ごう。みんなが心配だ」

「ああ!」

ジオウとゲイツは急いでステージ会場へと向かう。

ステージ会場の方では、エール達は融合型オシマイダーに苦戦を強いられていた。

「大人しくしいや!」

ジカンチェーンで動きを止めようと試みるが簡単に解けてしまう。

「強い……」

「みんな!」

そこへ、ようやくジオウとゲイツが駆けつけた。

『ソウゴ(君)!』

「我が魔王!」

「行くよ!ゲイツ!ウオズ!」

「えっ?」

『ジオウトリニティ!』

ジオウトリニティウオツチを起動し、ドライバーへと装填しウオツチを回した。

『ジオウ!ゲイツ!ウオズ!』

三人が光が包まれると、包まれていたゲイツとウオズの体が腕時計のように変わってジオウの体にはめ込まれたことでジオウの身体も変化を始め、ジオウの仮面が中央へと移動する。

『トリニティタイム!三つの力、仮面ライダージオウ!ゲイツ!ウオズ!トリーニティー!トリニティ!!?』

そしてジオウトリニティへと変身を完了した。

「ウオズ!いつもの!」

「流石は我が魔王。では、ひれ伏せ!我こそは仮面ライダー・ジオウ・トリニティ。大魔王たるジオウとその家臣、ゲイツ、ウオズ、三位一体となつて未来を創出する時の王者である」

「相変わらずだな」

「でも、なんか行ける気がする!」

ジオウトリニティが融合化オシマイダーに向かって走る。

「行くぞ!」

『ジカンザックス!Oh!No!』

ゲイツのジカンザックスを出現させ、オシマイダーに叩き込む。

『フィニッシュタイム!ギワギワシユート!』

最後にエネルギーの矢を放ちオシマイダーが怯む。

「次は私が行こう!」

今度はウオズへと変わり、ジカンデスピアを出現させる。

『ジカンデスピア!ヤリスギ!』

さらにジカンデスピアで突きながら攻撃する。

「はああ！」

ジカンデスピアでオシマイダーが弱りだす。

「はああっ！」

そこへエールが真上から跳び蹴りを叩き込み、地面に叩き付けた。

「仲間って……そう言うものじゃないでしょ……！」

「友達って、そうじゃない……！」

「みんなと一緒にだから……！」

「強くなれる！」

「よくある決まり文句ね」

エトワールとアンジユ、マシエリにアムールの言葉を聞いたジェロスは呆れ顔でそう言うが、エールはすぐさまその発言に反論する。

「そうかもね。けど、これが私達なの！」

みんながいてくれたから、私は今日、前に進めたんだから！」

その時、ステージでツクヨミに抱き抱えられたはぐたんが、両手を広げて両腕を前に出す。

「これ……！」

「……これが、私達の今！」

更にエール達が手を上空に翳すと、全体的に花をかたどった様なデザインの新たなミライクリスタル・チアフルが降って来て、エールが掴んだ。

「新しいミライクリスタル……!?」

「チアフルー!」

はぐたんがそう叫ぶと共にミライパッドが飛び、エールの手に渡る。

「ミライクリスタル!チアフル!」

ミライパッドの上部にミライクリスタル・チアフルをセットする。

するとその時、ミライパッドから今まで以上の力とオーラを溢れ出てきた。

「これって……」

「どう言う事だ!?」

「まさか、ミライパッドはんの真実の力を、プリキュアが目覚めさせたんか!」

「史上最高……!何てパワーなの……!」

それを見たジオウトリニティとハリー、ジェロスは驚きのあまり絶句してしまった。

「私達のメモリー!」

「「私達の絆!」」

「本当の仲間とは、何かを教えてください!」

「限界なんて無いと思わせてくれた事!」

「ありのままの私を、見てくれる事！」

「自分でも知らなかった自分に、気付かせてくれた事！」

「一緒に過ごした時間が、今を作る！今を頑張つて、輝く未来を！」

エール達の胸元から出たそれぞれのパーソナルカラーのハート型エネルギーが、ミライパッドへ向かう。

「何これ……」

「はぐつとー！」

はぐたんの胸元からも、白いハート型のエネルギーが生まれ、ミライパッドへ向かう。

「『メモリアルキュアクロック！チアフル！』」

ミライパッドが時計型アイテム・メモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「『ミライパッド！オーブン！』」

六人がそれぞれ右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

「『プリキュア！チアフルスタイル！』」

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達五人の姿に変化が起る。

「「「メモリアルパワー!フルチャージ!」」」

五人の姿が変わり、ボールを包み服装も変化した。

五人がパワーを送りメモリアルキュアクロックのエネルギーを集める。

「「「プリキュア!チアフルアタック!」」」

六色の五つ葉のクローバー型エネルギー弾を発射されると、それはオシマイダーへと向かって直撃した。

「ジェロスさん……」

「俺達にも、思い出が……」

「——もう、辞めさせて貰いまーす」

紫、赤、黄色、水色、ピンクのハートとオシマイダーにぶつかり、最後にはぐたんがハグするポーズをするとオシマイダーを虹色のハートに包み込み、オシマイダーを浄化した。

「チアフルスタイル……?」

「これ程の力とは、私も驚いたよ」

「俺が知る限りあれば、未来でもこれ程の力だ」

「こんな温かくて力強い力、今まで感じた事あらへん……!何ちゆうデツカい奇跡をお前らは見せてくれるんや……!」

オシマイダーが浄化された事で、動きを止められた人達が元に戻った。
「仲間なんて……!」

オシマイダーが浄化されたのを見届けたジェロスはそう言うのと、この場から歩き去った。

その後、チアの発表会は無事行われ、成功に終わった。

夕方になりビューティーハリーへとソウゴ達は戻ると、ミライクリスタル・チアフルのアスパワワが、はぐたん額の飾りに入る。

「まーまー! ありがと!」

「ミライクリスタル・チアフル……」

「きらきらからふるー!」

はな達がチアフルのミライクリスタルを見ていると、ハリーはその力についての推測を話す。

「チアフルは、これまでお前らが育んだ友情が生み出した、絆のミライクリスタルやな」

「ねえ、それってジオウトリニティも同じじゃないかな?」

「えっ?」

それを聞いたソウゴがジオウトリニティもミライクリスタル・チアフルと同じじゃない

いかと言う。

「俺とゲイツ、ウオズの仮面ライダーの絆からこれが生まれたじゃないかな。そのチアフルと同じで」

「ちよつと待って!」

「何?」

「俺との絆はどうしたんや!」

ハリーとの絆は何かとソウゴに尋ねる。

「えっ?その……ハリーとの絆は、そのライドウオッチじゃないかな?」

ハリーウオッチがソウゴ達の絆と言うが、本人は納得出来ない表情だった。

「なんや!ちよつと酷くないか!」

ネズミとなり少々タダをこねる。それを見たツクヨミは話を変えようとする。

「でも、クライアス社が仮面ライダーを生み出すなんて」

「ああ、かなり厄介な相手だ」

「しかもリストルとビシンが変身するとは……」

「……」

クライアス社の仮面ライダー。話を聞くとクライアス社も今回のオシマイダーのように本気になって潰しに掛かろうとしている。

「ねえ、みんなで写真撮らない？」

その時はなはみんなと写真を撮ろうと提案する。それ聞いたさあやとほまれも賛成する。

「私もそう思ってた！」

「さあ、みんなもつとぎゅーつと！」

「ゲイツ君！」

「何でも無い写真。けど、今この瞬間はもう二度と無いから」

「みんな！行つくよーっ！せのー！」

みんなが笑顔を作り、カメラのシャッターを切ってソウゴ達十人の記念となる写真を撮った。

——クライアス社のライダーの誕生にも負けず、ソウゴ達はこれからも戦い続けるであらう。

「こうして、はな君はかつて友達と和解し、プリキュアの彼女らは新たなミライクリスタル、チアフルを手にした。

そして、我が魔王にも試練が訪れる」

次回! Re・HUGつとジオウ!
第37話 2005： 鬼が奏でる音楽の響き

HUGつとジオウ！補完計画。その3「彼らは何故、アク
のライダーになつたのか」

前略、愛しの君へ。

私の計画は、今もなお順調に進んでいます。もうすぐこの世界は永遠の平和を続ける
事が可能になります。あとは、アレをこうしてコレをああすれば、私の計画は完璧なも
のに――

へドガアアアアアアン!!!

ジョージ「what!?!」

その時！特に意味のない破壊行為がクライアス社を襲う！

オーマジオウ「――ハアア、ジョージイ：調子良い？」

ジョージ「：んなわけ無いだろ！なんで社内の壁をぶち壊して出てきたんだ！普通に
ドアから入って来いよ！」

オーマジオウ「何で壁をぶち壊して来たか？決まってるだろ、お前に嫌がらせをする
為だ……」

ジョージ「なんて奴だ……」

オーマジオウ「罪悪感無し！」

スウォルツ「おい、なんだ今の音は！」

すると、会議室の破壊音を聞きつけたスウォルツとリストル、ビシンが駆けつけて来た。
た。

オーマジオウ「ん：スウォルツとリストル、ビシンか・・・」

リストル「ッ!? オーマジオウ! 何故未来に居るはずのあなたが此処に：ッ！」

ビシン（まさか、僕たちの若かりし頃のオーマジオウを倒そうとする計画がバレた!!
?）

オーマジオウ「何故私が此処に居るのか気になっているようだな・・・ウオズ！」

ウオズ「ただ今参りました我が魔王：」

ビシン「ウオズ!?! どっから出て来たんだ！」

ウオズ「その我が魔王が開けた穴から堂々として来たんだよ」

ジョージ「リストル! 今すぐ壁を直すようにほかの社員に伝えろ！」

リストル「はい! 今すぐ！」

ウオズ「それでは我が魔王と私が来た理由だが、その前にコレを君達に渡さなければ
ならない」

スウォルツ「・・・これは、台本か？」

ウオズ「台本が回ったところで、第三回目のHUGつとジオウ！補完計画、を行うと
するかな？」

オーマジオウ「イエーイ！」

リストル「ノリノリだなこの魔王」

ビシン「何故未来からあんたが来たのかの理由、まだ聞いてないんだけど・・・」

オーマジオウ「それを知りたかったら、仮面ライダーの歴史全てを知る必要がある。
少々時間はかかるが構わんか？」

ビシン「・・・丁重にお断りするよ」

オーマジオウ「そうか、まあそんな事はどうでも良い。ウオズ、始めるぞ」

ウオズ「了解しました」

そんなこんなで、台本を手を取った一同は話を続けることになった。

オーマジオウ「ウオズよ、そういえばハリーに続いてビシンとリストルがライダーになっ
たのだが、何故彼らはライダーになったのだ？」

ウオズ「それについては作者の考察が入りますが、恐らく我が魔王サイドとクライア
ス社サイドのパワーバランスを保つ為でしょう。元々我が魔王サイドのジオウチーム
はチートの集まりのようなものですから、多分クライアス社もアナザーライダーやオシ
マイライダーだけじゃキツイんですよ。それに敵サイドもある程度パワーアップさせ

ておかないと、この小説がクソなろう小説並みのワンサイド系ヌルゲーになりますからね」

リストル「ちなみに我が社の社長であるプレジデント・クライも・・・おっと、此処から先は皆さんにとつて未来の出来事でしたね・・・」

ウオズ「・・・リストル君、私のセリフをパクらないでくれないかね？」

ビシン「そんなこと言ったら、この小説を書いている y u k i . S だつてユートの小説をパクつて書いているじゃないか」

オーマジオウ「パクつてなんか無い、ちゃんとユート氏には許可を取つて掲載している。それにこれはリメイク版だと言っているだろ」

リストル「そう言えば、あの時スウォルト氏はドクタートラウムにジクウドライバーを託されそうになったが、何故断つたんだ？あのまま行けば仮面ライダージオウでは登場しなかった仮面ライダースウォルトが実現したのでは？」

スウォルト「いや、あのまま私がライダーになつたらこの物語が変な方向に行くだろ。

・・・まあ、確かにライダーになりたかつたのは事実だが・・・」

ジョージ「ならなればよかつたじゃ無いか小も・・・スウォルト」

スウォルト「オイ、今小物つて言おうとしただろ」

オーマジオウ「まあまあ落ち着けよ寿司」

スウォルトツ「いや待て、寿司って何だよ!? 私か? 私のことか!」

ウオズ「我が魔王、貴方に向けておたよりが来ているよ。正しくは若かりし頃の我が魔王に向けてですが、同じ人物ですから良いでしょう」

ビシン「いや待て、おたよりって何だよ」

スウォルトツ「オイ! オーマジオウウウオオオオオオオオ!? 私の質問に答えてもらってないぞ!? 寿司って何だ!」

オーマジオウ「スウォルトツ、お前は物事を焦りすぎだ。ウオズ、おたよりを読んでくれ」

ウオズ「それでは……『オツス! オラ、仮面ライダージオウ大好き少年だ! 質問なのですが、時見ソウゴさんはあの時から小学生の頃から王様になりたいと言つてののでしょうか? だとしたら、はなちゃんのようにじめられていたりしたのでしょうか?』……との事でしたが、どうなんですか我が魔王」

オーマジオウ「おいおい、私はその程度の事でいじめていたという者達に仕返しをすると思つているのか? だとしたら随分と野蛮だな」

ビシン「いやそこまで聞いてないだろ。なんで仕返しをする前提で話進んでるの」

オーマジオウ「まあ、似た様な事があつた時は。手始めにそいつらのメインコンピュータを破壊したかな?」

スウォルツ「メインコンピューターあ!？」

オーマジオウ「その次は、そいつらの家の車のガソリンタンクに砂糖を入れた」

リストル「やる事がエグいなオイ」

オーマジオウ「最後にそいつらの家の周りに水堀を作ってピラニアを投入したな」

ビシン「むごい…」

ジョージ「と言うか思いっきり仕返ししているじゃないかお前」

オーマジオウ「ふふつ…半分は当たっているな、耳が痛い。だがこの程度では仕返しとは言えないぞ?」

ウオズ「どういうことだい我が魔王?」

オーマジオウ「本来なら王の無礼は万死に値するが、私の慈悲でこの程度ですませてあげてやったのだぞ? 具体的にはそいつの家を街ごと粉碎するくらいはやるつもりだったのだぞ?」

スウォルツ「あんた本当に魔王だな! 本当に元主人公だったのか!？」

オーマジオウ「何を言っているごとき氏、我元主人公にして最高最善の魔王ぞ!」

ジョージ「お前の様な主人公が居てたまるか」

スウォルツ「あと、ごとき氏って何だ、ごとき氏って」

ウオズ「そういえば。若かりし日の我が魔王もはな君がいじめられていたことを知っ

た時、いじめた子達の個人情報やネットに流出させようとしていたね……」

ビシン「そっちもそっちでえげつないな！本当に主人公かアイツ!?」

ウオズ「まあ、その時ははな君本人の要望で未遂になったけどね……そのかわり我が魔王はその子達に匿名で『未来になったら覚えてるよ』というチェーンメールを週二で送る様になっているようだが」

ビシン「こえーよ!!? もはや呪いのメールじゃんか!」

オーマジオウ「さてと、このSSもあと数分の命だ」

リストル「何?もう終わりか?いつもより短くないか?」

ウオズ「この本によれば、作者はこれ以上の話が思いつかなかったから、もう終わりにしたいそうだ」

ジョージ「ああ、そうか……」

ウオズ「そしてこの本によれば、作者はこの話の良いオチが思いつかなかったから、ジョージ・クライに我が魔王によるお手軽な岩盤オチを提供するそうだ」

ジョージ「ああ、そう……待て、岩盤オチってなん——ふおおっ!!」

——キーン!ドカーン!!

社員一同『社長ウウウウウオオオオオオオオ!!!』

ウオズ「我が魔王とプレジデント・クライが共演したばかりにこの始末☆

はてさて、現代の我が魔王とはな君達はこの先、どうなりますことやら……」
終わり

第39話 2005： 鬼が奏でる音楽の響き

ソウゴ達がチアフルのミライクリスタルを手に入れた、そんな出来事から少し前の時間。

ある町で、少年が塞ぎ込んでいた。

「さつきから泣いてばっかだね」

そこへウールが現れ、少年に話しかける。

「関係ねえ。話かけんな！」

「南野奏太。響鬼の弟子だろ？」

響鬼の弟子と言われた奏太と名乗る少年は、弟子という言葉を聞くと深刻そうな顔になる。

「弟子はもうやめたんだよ」

奏太はそう言つて、ウールの前から去ろうとする。

「響鬼を誘き出すために協力してくれないかな？ 君の鬼になりたいっていう夢、叶えてあげるよ」

しかし、ウールが奏太の前に来て道を塞ぐと、懐からブランクウォッチを取り出す。

『響鬼……！』

そしてウオツチがアナザー響鬼ウオツチへ変わると、ウールは有無を言わせず奏太の体へ入れる

「うわあああーっ！」

そのまま奏太の体は黒いオーラと紫の炎を纏うと共に変貌し、一気にその姿を変えた。

そんな事があつたとは知らず、ビューティーハリーではソウゴを除いたメンバーが集まってなにやら準備していた。

「はな。そっち引っ張って」

「うん」

「ゲイツ。そっちお願い」

「ああ」

大きな弾幕を引っ張り、そこに文字や絵を描くはなとほまれとはぐたん。ゲイツとツクヨミは飾り付けの準備をしていた。

キッチンでは叔父の順一郎が赴き、さあやと何かを作っていた。

「さあやちゃん。力を入れずに優しく混ぜて」

「はい」

そこでさあやは泡立て機を回し生クリームを作っており、いつにもなく真剣な表情だった。

そしてルルーとえみるはギターを持ち、曲の準備をしていた。

「えみる。ここをこうしてはどうでしょう？」

「ルルー、気合いが入り過ぎです」

「はい。どうしても今日は、いつにもなく気持ちが上がっているので……」

ルルーがいつにもなく真剣な表情で曲を考える。

一方、カレンダーを見ながら歩くウオズ。

「ついに運命の日がやってきた。私はこの日に、自らの存在意義を賭けなければならぬ」

ウオズが深刻な顔で悩んでいるのを見たゲイツとツクヨミは、彼に呆れた様な表情で話しかけた。

「大袈裟な」

「今日はソウゴの誕生日ってだけでしょう？」

そう、今日は9月28日。時見ソウゴ、14歳の誕生日だった。

そのお祝いを、みんなはビューティーハリーで内密に計画していた。

「たかが誕生日……ではない。されど誕生日でもある。」

我が魔王に相応しい、盛大な祝福をしなければならぬ！

……今、私はそれで悩んでいるんだ」

そしてウオズは一人、この誕生日は自分の意義を成すための日だと浮かれていた。

その頃主役のソウゴは、ハリーと一緒にビューティーハリーに服の注文を受け、はぐくみ市から離れた加音町へと来ていた。

「毎度おきに〜！」

お客さんに商品を渡し、ソウゴとハリーは後にする。

「すまんな。手伝ってもらって」

「別に大丈夫だよ」

何故ソウゴがハリーと居るのかというと、ハリーがソウゴをビューティーハリーから離すためにワザと一緒に来させたからだだった。

「それより、この町モロそうやから見ていかんか？」

「そうだね。俺もこの町に来てなんか見てみたいと思った」

この町は音楽に溢れた町で、町の人は色んな楽器を持ち音楽を奏でていた。

「この町って、本当にみんな音楽が好きなんだね」

ソウゴは町の中で音楽を奏でる人達を眺めていると、ハリーは前にゲイツ達と調べた
“ある仮面ライダー”について思い浮かべる。

「そういや、“仮面ライダー響鬼”ちゅう18人の内の一人も、音楽関連やつてるときい
た事があるで」

「響鬼って、確か……」

仮面ライダー響鬼。それはソウゴが集めている、残る四つのウオッチの一つだ。

「こういう所に響鬼がいるのかな〜？」

「そんな、偶然が……」

ハリーが言いかけると、突如二人の前に仁王像の様な羽衣や下着を身に付け、鬼瓦の
様な肩と赤い縁取りを付けており、鋭い牙を生やした鬼の様なアナザーライダーが現れ
た。

「ううう……」

現れたアナザーライダーを見て周りは逃げ出し、アナザーライダーがソウゴとハリー
に襲い掛かってきた。

「!?？」

咄嗟に躲した二人。すると、胸の中央に縦書きで“H I B I K I”という文字が刻ま

れていたのが見えた。

「ヒビキ……アナザーライダーや！」

「どうして、クライアス社がこの町に……」

「とにかく、連絡や！」

ハリーがビューティーハリーにいるゲイツ達に連絡を入れる。

「ハッピーバースデイ、我が魔王！」

ビューティーハリーでは、完成した試作品のケーキをテーブルに置き、ウオズが誕生日の時に言う祝福のリハーサルをしていた。

「…ダメだ、ダメだ。ダメだ！…こんなありきたりな祝福では我が魔王にはふさわしくない」

…だがしかし、納得が行かずウオズが苦悩していた。

その近くでソウゴ達からアナザーライダーが現れたという連絡を受け、ゲイツ達は現地へ向かおうとする。

「わかった。すぐに行く」

「ウオズさん！行きますよ」

「私はそれどころでは……」

「行くよ！」

連絡を受けたゲイツ達は準備したものを二階へと隠し、ほまれとツクヨミは苦悩していたウオズを強引にでも連れて行き、ゲイツ達もソウゴとハリーの応援に向かう。

場面は戻り加音町では、アナザー響鬼の攻撃を避け続けながら、ソウゴとハリーがジクウドライバーを装着する。

「行くよ！ハリー！」

「おお！」

ソウゴとハリーがウオッチを構えようとした、その時……

「見つけた！」

「えっ？」

声が聞こえ二人が振り向くと、こっちにソウゴやはな達と同一年の女の子が三人と一人年下の子が向かってくる。

「なんや……」

ハリーが誰なのかと疑問に思っていると、女の子達はモジューレのような形をしたものを取り出すのが見えた。

「行くよ！」

そしてクリスタルの妖精を、彼女達の手を持つモジューレに取り付けられる。

「もしかして、妖精……？ ってことは……」

顔のようなものが付いたクリスタル——フェアリートーンを見たソウゴは妖精かと思いい、もしかしてと考えていると……

「二レツツプレイ！プリキュア・モジューレション！二二」

その掛け声と共に、四人は光に包まれる。やがて光が消えると、四人はプリキュアへとなっていた。

「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

「爪弾くは女神の調べ！キュアミューズ！」

四人のプリキュア——スイートプリキュアが現れ、アナザー響鬼の下へと走っていく。

「ヤアアア！」

先にボリューミーなピンクのツインテールを三つ編みで纏め、マゼンタカラーのコスチュームで身を包んでいるプリキュア・キュアメロディがパンチを繰り出し、そのまま連続でラッシュを繰り出し続ける。

「はああー！」

そこへ金髪ポニーテールとパスフリーズの袖、ピンクのリボンが付いている白いコスチュームが特徴のプリキュア・キュアリスムも加わり、メロディと共にカチューシャについているリボンを揺らしながらラッシュを続ける。

「はあああー！！？」

最後に二人同時にパンチを繰り出し、アナザー響鬼を押し込む。

「たあああ！！？」

今度は羽が付いたハートの髪飾りで紫のサイドテールを留めている青いコスチュームを着たキュアビートと、額にハートのティアラを付けて肌の露出の少ない黄色いコスチュームを着ているオレンジヘアのキュアミューズがダブルキックを放ち、アナザー響鬼は一度倒れるが、すぐに起き上がってプリキュアに向かっていく。

今のところ、四人がかりでアナザー響鬼と互角の戦いを繰り広げていた。

「あれもプリキュアかな……？」

「そうニヤン！」

あれもプリキュアかとソウゴが呟くと、後ろにいた白い子猫がそうだと喋った。

「ね、猫が喋ったー！！？」

「ハミイニヤー！よろしくニヤー！」

「ホンマに喋っとる！」

「いや、ハリーもネズミでしょ……」

「ネズミちやうわ！俺は……」

ソウゴの突っ込みに対してハリーが反論を言いかけると、スイートプリキュアの四人がアナザー響鬼に苦戦しているのに気づき、四人とも吹き飛ばされた。

「なんか押され始めてる……行くよハリー！」

『ジオウ！』

「……まあええわ、わかった！」

『ハリー！』

プリキュアが押されているのを見て、気を取り直しライドウォッチを起動させる。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！』

二人が変身を終わるとすぐにアナザー響鬼へと走る。

「はああ！」

「仮面ライダー！」

ジオウがメロディの横を回り込むかのように現れると、アナザー響鬼に攻撃を繰り出

し、彼女達から離そうとする。

「あなた一体……」

「俺は仮面ライダージオウ！こいつは俺達がなんとかするから、君達は離れてて！」

『ジカンギレード！ケン！』

ビートの問いにそう答えると、ジオウはジカンギレードを手元に召喚した。

「はああ！」

ジカンギレードの斬撃を連続に繰り出し、アナザー響鬼を怯ませる。

「があ……！」

するとアナザー響鬼は、口からいきなり火を吹き始めた。

「おおお！ちよつと！」

ジオウは驚くも、反射神経でギリギリで躲けた。しかし、そのまま火を吹き続けられ

ジオウは攻撃に移れなかった。

「火を吹くの！反則でしょ！」

火を吹くアナザー響鬼にジオウは避け続けるしかなかった。

『ジカンチェーン！』

「そおらー！」

そこへハリーがジカンチェーンでアナザー響鬼の口を塞ぎ、火を吐かせないようにす

る。

「ちよつとは大人しくせや!」

「うううう……!!」

しかし、アナザー響鬼は強引に力でチェーンを剥がそうともがく。

「今や!ソウゴ!」

「よし!」

ジオウはジカンギレードを構え、反撃に転じる。

しかし、アナザー響鬼に当たる直前にジカンギレードが止められた。

「また、仮面ライダー!」

「リストル!!?」

そこへ、仮面ライダーへと変身していたリストルが現れ、ジオウの攻撃を止めた。

「残念ですが、君に彼を倒してもらおうと色々と困るのでね。はあ!」

「うわあ!!?」

リストルのジカンロッドがジカンギレードを受け流し、反撃に転じられたジオウがバランスを崩してしまい、その隙にリストルはハリーのジカンチェーンで動けなかったアナザー響鬼の拘束を解く。

「うう……」

「大丈夫!?？」

「うん……」

リストルから攻撃は受けたがジオウとハリーは起き上がる。

「ここからは、私が相手をしよう。ジオウ、ハリー君」

ジカンロッドを構え、アナザー響鬼の前にリストルが立ちほだかる。

戦うジオウ達を、柱の影からウールが見ていた。

「ちっ！リストルの奴……まあいい、僕の目的に問題はない。

さあ、早く出てこいよ、響鬼」

どうやらウールは、アナザー響鬼を餌に本物の仮面ライダー響鬼が来るのを狙っていた様だ。

そしてリストルにはジオウとハリーが二人掛かりで応戦し、スイートプリキュアはアナザー響鬼を止めようと戦う。

『FISHING!』

「はあー!」

「くう……」

ジカンロッドのエネルギー系がジオウのジカンギレードを拘束し、ジオウの手から落とした。

「どうした。君の実力はこの程度かい？」

「やるね……だったら！」

ジオウはクウガのライドウォッチを取り出す。

「雄介。借りるよ！」

『クウガ！』

クウガウォッチを起動し、ドライバーに装填しドライバーのロックを解除すると、ドライバーを回す。

『アーマータイム！クウガ〜！』

ジオウはクワガタがモチーフの赤色アーマーを纏い、複眼には『クウガ』と刻まれたクウガアーマーへとフォームチェンジした。

「行くぞー！」

ジオウはリストルのもとに走り、肉弾戦を仕掛ける。リストルに武器を取られたジオウはクウガの格闘技で勝負する。

「面倒な……」

クウガの力で上がったジオウの格闘技にリストルが翻弄される。

「はああー！」

そして彼の放ったパンチがリストルの顔に決まり、リストルが地に伏した。

「ほう……これが最初のライダー……クウガの力……」

「ソウゴ！ハリー！」

ソウゴ達を応援に駆けつけてきたゲイツ達が、アナザーライダーと戦闘しているのを目撃する。

「流石に数に分がありますか？」

数に差があると思ひ、リストルがアナザー響鬼を連れ退こうと思ひ立つ。

「そこまでだー！」

すると何者かが突如現れ、ギター型の剣でアナザー響鬼に一撃を放つ。

「えっ?」

いきなり事にジオウ達が驚くと、彼らの前に現れたのはかなり年を取った男性だった事に気付く。そして、その男性はジオウ達を見てこう言う。

「鬼の不始末は、鬼がつけるっす」

不始末を付ける。とはどういう事だとジオウ達は思っていると、男性は腕にあるブレスレットに手を当てる。

「はあく……はあああー！」

ブレスレットから弦楽器の音が鳴ると、それを顔に近づけ天に掲げる。すると、男性の下に雷が落ちた。

「ええ!!?か、雷が……」

男性がいきなり雷に撃たれ、ヤバイと誰もが思った。

しかし、雷の落雷によつて生まれた稲妻が消えると、男性が緑の体色で縁取りされ、腕が銀色で、一本の角を持った仮面ライダーへと変身を遂げた。

「仮面ライダー……」

「覚悟しろ!」

いきなり現れた仮面ライダーはアナザー響鬼の口火攻撃をもともせず突進し、ギターの様な剣武器・音撃弦 烈雷での打撃攻撃で攻め立てる。

「なんや、鬼みたいなのライダーやな……」

「鬼……てことは響鬼……?」

ジオウはあの仮面ライダーが残る力である響鬼だとそう思ってる間に、そのライダーはアナザー響鬼を追い詰める。

「お前のやつてることは、鬼の師に泥を塗る行為だ!この俺が引導を渡す!」

そう言うのと、持っていた音撃弦 烈雷をアナザー響鬼に突き刺した。

「音撃斬!雷電激震!」

ギターを引きながら、清めの音をアナザー響鬼に直接流し込んで行く。
「らあ！」

だがリストールが攻撃を邪魔し、攻撃は失敗に終わる。

「何のつもりだ？！」

「失礼だが、ここで退かせてもらう」

それだけを言うと、リストールとアナザー響鬼は一瞬にして姿を消した。

「待て！」

鬼の仮面ライダーは、逃げ出したリストールとアナザー響鬼の後を追う。

それを見てソウゴとハリーは変身を解き、元の姿へ戻る。

「今のつてどうゆうこと？響鬼がアナザーライダーを倒そうとしたの？」

「分からない」

さっきの仮面ライダー響鬼？がアナザー響鬼を倒そうとした。ソウゴ達にはそうに

は見えたが、何か違和感があった。

「ソウゴ！ハリー！」

そこへ遅れてやってきたはな達が二人に叫びかけると、その近くで未だに変身解除せずにいるスイートプリキュアが二人の下に近寄ってきている姿を目撃した。

「ねえ、アナザーライダーって何？何か知ってるの？」

「知ってるなら教えて！」

アナザライダーのことを知りたいのか、そういつて彼女らはソウゴ達に近寄る。

「あの？聞きたいのですが？あなた達はひよつとして……」

「プリキュアですか？」

「知ってるの!?!」

「私達もプリキュアなんです！」

はな達はスイートプリキュアの姿を目に焼き付けながら、彼女らにプリハートを見せる。

「あなた達もプリキュアなの？」

ビートの問いに、はな達は素直に頷く。

「それで、君達は仮面ライダーなの？」

「うん。そうだよ」

お互いに情報を整理しようと話し合うとすると……

「あいつは響鬼じゃない。轟鬼だ！」

突如声が聞こえ、振り向くと一人の男性が近づき、ソウゴ達にさっきの仮面ライダーは轟鬼だと言う。

「お前、誰だ？」

ゲイツはいきなり現れた男性に警戒心を張る。

「俺か？俺は桐谷京介。響鬼だ！」

「響鬼!?？」

自らを響鬼と名乗る男性。この男性が、ソウゴ達が探していた仮面ライダー響鬼だと知る。

「あのまがい物の鬼、お前達何か知ってんだろ？詳しく聞かせてもらおう」

京介はソウゴ達にアナザー響鬼について詳しく聞かせると尋ねる。

「私も、弟がああ怪物に関わってかもしれないの！」

「弟……勿論。俺達もあんたに聞きたいことがあるんだ」

「いいだろう。話を聞いてやる」

ソウゴ達は場所を変えるために移動する。

その後、京介とソウゴ達はスイートプリキュアの彼女達に誘われ、調べの館へと招かれる。

「じゃあ、とりあえず、私は北条響！キュアメロディ。よろしくね！」

「私は南野奏。キュアリズム」

「黒川エレン。キュアビートよ。よろしくね」

「調野アコ。キュアミューズだわ。よろしく」

「初めてまして。野乃はなです！キュアエールです！」

「俺は仮面ライダージオウ。時見ソウゴ。よろしく」

それからさあやとゲイツ達も自己紹介をし、何故アナザーライダーを追っていたのか尋ねる。

「ねえ、さつき言ってた弟って？」

「うん……数日くらい前なんだけど……」

今から数日前……

奏の家である日、外にいたはずの彼女の弟である南野奏太が行方不明になった。

その日、彼はあまり元気がなくて気分が沈んでいたらしく、姉である奏は何か思い当たる事がないかと他の三人と話し合っている間に、奏太が奏の家からもいなくなってしまった。

それと同時にあのアナザー響鬼が町に現れては、そのたびに町で暴れるようになった。

「それで、あのアナザーライダーを追っていたのか？」

「うん。でも、全然あいつ倒せなかった」

アコ曰く、彼女達は何度かアナザー響鬼と戦ったらしい。

「早く見つけないと、奏太が……」

「……」

「アコ……」

焦るアコを見て、ソウゴがアコに近づく。

「見つかるよ。絶対に……だから、信じよう。君の友達は無事だって」

ソウゴがアコの頭を撫でて大丈夫だと慰める。

「君が大丈夫だって信じなきゃいけないよ」

「うん……」

少しアコに落ち着いた表情が戻った。

「それで、アナザーライダー？あいつはお前らの敵に操られてるってわけか？」

「おそらくあなたを誘き出して響鬼のライドウォッチを手に入れたいんだと思う」

「ライドウォッチ……？」

「こようゆの」

ソウゴが自分が持つジオウのライドウォッチを京介に見せる。

「どうですか？」

「残念だが見たこともないな」

京介は響鬼のウォッチを見た事ないと話す。

「お前らもこいつを集めてるのか？」

「……うん」

「もし手に入ったら、お前達に預けてやってもいい」

「ほんとに……!?」

「だが、条件がある」

「条件？」

「お前達が鬼としてふさわしいか、確かめる必要がある」

「鬼として……?」

鬼として相応しいか確かめる。それをゲイツはどう言うことなのかと疑問に思った。

「そうだ。鬼の力は代々、鍛えた人間だけが引き継ぐものだからな。お前らには特訓をしてもらう」

「え……?」

ソウゴ達は何故か鬼の特訓を受ける羽目になってしまった。

「まずは手始めに太鼓の練習だ」

「太鼓……?」

「そうだ。俺達、鬼は太鼓を使って、地を清め邪気を払い、すべての生命を祝福する」

「祝福!?」

「どうやってソウゴをどうやって祝おうか離れたところで悩んでいたウオズは、その言葉に反応した。」

「俺達をバカにしてんのか？」

「ほお、止めるの？」

「我が魔王、やろう！」

反応したウオズがいち早く前に出た。

「祝福にかけては誰にも譲る気はない！完璧にマスターしてみせよう！」

「お前、誰だ？！」

「祝福の……鬼だ！」

祝福の鬼だとマジマジと本気で言うウオズに、ツクヨミ以外が笑いを堪える。

「はあく……じゃあ、さっきのトドロキって人探してみる」

「一緒に行くよ」

「私も行くよ……」

「あたしも行く」

「奏さん。行きませんか？」

「ええ、行きましょう」

ツクヨミの提案で、笑い堪えるはなとほまれ、アコ、さあや、奏を加えた六人は修行

には参加せずさつききの轟鬼を探しに向かう。

一方、残るソウゴ達はウオズが祝福の鬼だと言った一言に笑いをこらえる。

「祝福の鬼だって……フフ……」

彼らは調べの館を出て、桐谷京介の元でソウゴ達は太鼓の修行を開始する事になる。

ソウゴ、ゲイツ、ウオズは上の方で構えると、えみる、ルールー、響、エレンは下で構える。

「ねえ、エレンのその格好……」

頭にハチマキを巻き、袴天を羽織って足袋を履くエレンが構える。

「もちろん！音吉さんから貰った本よ！」

「音吉さん……」

相変わらずだなと、響が少し呆れる。だが、ルールーも太鼓を真剣に見つめる。

「太鼓とは身を極める日本の伝統文化です」

「本当にやるのですか？ルールー？」

「はい！これなら新しい曲のイメージが湧くと思うのです！」

「は、はいなのです！」

ルーラーが新しい曲のアイデアが浮かぶと思ひ、えみると一緒にやろうとする。

そんなこんなで、全員が太鼓にバチを構え、ハリーははぐたとハミイと一緒に太鼓を叩くソウゴ達を見る。

「みんな！きばりや！」

「みんな！がんばるにやー！」

「始めろ」

京介の掛け声と共にソウゴ達は太鼓を鳴らし出し、そのままソウゴ達は太鼓を鳴らし続ける。

そんな中、ウオズは叩きながら何かを感じる。

（これは素晴らしい。我が魔王の生誕を祝うに相応しい出し物になるはずだ）

（この太鼓から流れる音……このリズム何か、何か私の心に強く響きます！）

（感じる……太鼓を叩きながら流れる、私の心のビート……もう止まらない！）

ウオズにルーラーとエレンを加えた三人の目が生き生きとしていた。

「うっ……らあああああ！」

するとウオズがソウゴの叩く、真ん中の太鼓をソウゴを押しつけて叩き始めた

「え……ウオズ？ルーラーもどうしたの、怖いよ」

「エレンも中々生き生きしてない……？」

三人が何故かいつにもなく真剣な表情で太鼓に勤しみ、ソウゴ達の場所まで奪ってしまふ。まるで取り憑かれたようだ。

「ほっとけ」

三人はわき目も振らずに太鼓を叩き続ける。

そんな中、京介は手帳から写真を取り出す。それには、響鬼と若い時の京介の写真が写っており、その背後にはもう一枚写真があつた。

(何で出ていつちまつたんだ……奏太)

その写真は、奏の弟である南野奏太と一緒に撮つた姿だつた。

その頃、はな達はトドロキの居場所を突き止めた。

「へえ、アコつてお姫様なんだ」

「いいなくアコちゃんにはお姫様、奏はケーキ屋になるのが夢だもん」

「きつと、はなにもなりたい夢が見つかる筈だよ」

はなとほまれがアコが話しているとさあやが奏に話しかける。

「あの、奏さん私にケーキの作り方を教えてください」

さあやが奏にケーキ作りを教える欲しいと頼む。

「どうしても今日のソウゴ君の……」

今日のソウゴの誕生日のために心から喜んで貰えるようなケーキを作りたいと思い、奏に美味しいケーキの作り方を頼む。

「わかった。一緒に作ろう」

「うん」

はな達が歩き続けると、とある滝のある場所へとやってきた。

「あつ、いた」

ほまれはそこで川で釣りをしていたトドロキを見つけた。

「トドロキさんー」

みんなはすぐにトドロキに近づく。

「ああ、君達はさっきの……!」

「お邪魔してすいません。あのアナザーライダーの正体を知りたいんですけど……教え

てくれませんか?」

「アナザーライダー……? 魔化魍まかもうってわけじゃないんですね」

「まかもう?」

はな達は魔化魍などと知らない名を聞かれても、それが何なのかはわからなかったが、トドロキはアナザー響鬼が魔化魍なのだと思い、攻撃したと話す。

「あれになったのは鬼の修行中の身の子。鬼の不始末は本来、その師匠がけじめをつけ

なきやいけないんすけど」

「師匠って……?」

「桐谷京介って男っすよ」

「……あの響鬼って言ってた人」

「京介が自分でそう言ったんすか?」

桐谷京介が響鬼だと話すと、トドロキがおかしいと思わせるように叫ぶ。

「騙されたらダメっすよ」

『えっ?』

はな達は騙されたら駄目と聞き、どう言うことだと思っていると、その時…

「オシマイダー!」

突如、街の方から太鼓型の猛オシマイダーが現れた。

「何あれ〜?」

「もしかして、ネガトーン——」

「違います」

「あれはオシマイダー!クライアス社だよ!」

「クライアス社?なんすかその会社?」

「クライアス社は、この世界から明日を無くそうとしてるんです」

「よくわからないですが、止めに行くっす！」

トドロキがブレスレットを再び起動させ、自らに雷を放ち轟鬼へと変身した。

「みんな！」

はなの掛け声でみんなはプリハートとモジューレを構える。

「「ミライクリスタル！ハートキラッと！」」

「「レッツプレイ！プリキュア・モジューレション！」」

はな達と響達はそれぞれ光に包まれ、やがて光が消えるとプリキュアへと変わった。

「輝く未来をく抱きしめて！みんなを応援♪元気のプリキュア！キュアエール！」

「輝く未来を抱きしめて！みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「輝く未来を抱きしめて！みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

「爪弾くは女神の調べ！キュアミューズ！」

プリキュアに変身完了し、轟鬼と共に街に現れた猛オシマイダーを止めるために急ぐ。

京介の修行をしていたソウゴ達は…

「祝え！」

「はあー！」

ウオズとルーラーとエレンの三人は、とりつかれたように太鼓を叩き続ける。しかし、三人のタイミングはバツチリできていた。

一方、太鼓から離れていたソウゴとゲイツ、響とえみるは、筋力トレーニングの道具を使いトレーニングをさせられていた。

「ああ〜もう無理……！」

「はあ、はあ、はあ……！」

「流石のあたしも〜……もう無理……！」

「私もなのです〜……！」

「大丈夫か？お前ら？」

「ソウギョ？えみゆる？ゲイチユ？大丈夫〜？」

「う、うん、なんとか……！」

まだ小中の学生であるソウゴ達に、しかも初めてこの鬼の特訓は体の限界だった。

「何だ、情けない。そんなんで根を挙げてちゃ、鬼として認められないな。ウオツチとやらを手に入れても、渡すわけにはいかない」

「ええ〜……！」

この特訓が出来ないとウオツチは渡さないと言われると、ソウゴ達はもう一度特訓を

始める。

「ねえ、そんなに欲しいものなの？そのウォッチって？」

響がソウゴにそんなにウォッチが欲しいのと尋ねる。

「うん。どうしても俺には必要なんだ」

「そいつを集めるとどうなる？」

「王様になれる。俺の夢なんだ」

「王様……？」

「時見先輩の夢なのです。王様になる事が」

ソウゴとえみるから王様と聞き、響はちよつと驚くが京介は笑い出す。

「フハハ……変な奴だな。そんなもの本気でなれると思ってるのか？」

「……」

「出来もしない夢なんで見ない方がいい。叶えられなくて絶望するだけだ」

「俺は出来るって信じているよ」

「どうして、王様なんてなるの？」

響から王様に何故になりたいのだと聞かれると、ソウゴは素直に答えた。

「夢で言われたんだ……」

「夢……」

ソウゴは幼い頃に見た夢で、『お前は生まれながらの王だ』と言われたことを話す。それを聞いた京介は苦笑する。

「夢で言われたから王様か？つまりお前は夢で言われたからなりたいか？」

「そうじゃないよ。俺はみんなを助きたい！民を救える最高最善の魔王になる。それが夢なんだ！」

その夢は一緒にいるみんななら出来る！そんな気がする！」

「……」

『——俺も、ヒビキさんのように遅い鬼になりたい！』

本気でそう話すソウゴの表情を見て、京介の頭から一人の子供がそう言ってくれたを思い出す。

「みんな！」

そこへみんなのもとにツクヨミが駆けつけてきた

「ソウゴ。アナザーライダーとリストルが現れた。今、轟さんとはな達が戦ってる」

「ルールー！ウオズ！」

「エレン！」

「はい？」

ルールーとエレンは太鼓から離れたが、ウオズだけが未だに太鼓を叩き続けていた。

「ツクヨミ。ウオズを連れて後で来て」

「わかった」

ソウゴ達はウオズはツクヨミに任せ、戦っているエール達の元へと急ぐ。

町の方での戦いで轟鬼はアナザー響鬼と戦い。エール達五人は猛オシマイダーと戦っていた。

「ヤアアア！」

ミューズのドロップキックが決まり、オシマイダーが地面へと倒れる。

「スタースラッシュユ！」

そこへ、エトワールがスタースラッシュユを放つ。

「オシマイダー~~~~！」

倒れながらオシマイダーが太鼓を叩く。

すると衝撃波らしきものが発生し、その衝撃波と衝突したスタースラッシュユが相殺された。

「えっ?」

エトワールは技が相殺され驚くと、その隙にオシマイダーは起き上がっていた。

「オシマイダー~~~~！」

また太鼓を叩くと、心臓にまで響くくらいの衝撃と共に、五人がいきなり後ろへと吹き飛ばされた。

「ど、どうして……」

「多分、音波だと思う！」

「音波……？」

「あの太鼓よ。それで強烈な音波を放って技を無効にしてるの」

「そんな……」

身体に残る違和感と共になんで相殺されたのだとエールが疑問に思っていると、アンジュとリズムの推測では、太鼓を叩く音から放たれる音波がみんなの技を無力化させられていたと考えられた。

一方、轟鬼の方はアナザー響鬼を追い詰めていく。

「お前の師匠に変わって、この俺が成敗する」

烈雷を弾き、アナザー響鬼へ向けて清めのオーラを纏わせた烈雷を撃ちこむ。

「終わりだ！」

決めにかかろうとしたその時、轟鬼の時間が止まった。そして、時を止めたウールが轟鬼の前へと現れた。

「君には引っ込んでもらいたくないんだけど」

烈雷の向きを轟鬼へ向ける。そして、時止めを解除された轟鬼は自らの技を受けてしまふ。

「うわあー……うう……」

モロに技を受けた轟鬼は変身解除してしまう。

「轟さん！」

アンジュ達は助けに行こうとするが、猛オシマイダーを相手にしているために助けに行けない。

「響鬼。轟鬼にとどめ刺してあげれば？」

ウールに言われ、アナザー響鬼がトドロキに止めを刺そうとする。

『タイムマジーン！』

そこへ危機一髪、ソウゴのタイムマジーンが現れトドロキの危機を救った。

「みんな！」

タイムマジーンの中からソウゴ達が駆けつけてきた。

「大丈夫ですか?!？」

「俺は大丈夫です」

ソウゴがトドロキの無事を確認するとみんなで前が出る。

「あれ……響鬼は一緒じゃないんだ？」

京介がいない事に気づいたウールが呆れる。

「お前達にライドウオッチは渡さない」

『『ジクウドライバー！』』』

『ジオウ！エグゼイド！』

『ゲイツ！ゲイツリバイブ 剛烈！』

『ハリー！』

『『変身！』』

『『ミライクリスタル！ハート、キラッと！はくぎゅく！』』

「 『レッツプレイ！プリキュア・モジューレション！』 』」

ジオウとゲイツ、ハリーがドライバーを回してアーマーを身にまとい、そこに三人のライダーが現れ。

えみるとルールーがミライクリスタルとプリハートをセットして手順を取ると姿が変わっていき。

響と奏の二人はフェアリートーンである『ドリー』と『レリー』をモジューレにセットして構えると光に包まれ、やがて光が消えると四人はプリキュアへと変わった。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！レベルアップ！エ・グ・ゼ・イー・ド！』

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！ 剛烈！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！』

「輝く未来を、抱き締めて！みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

ソウゴ達も変身を完了して構える。

「ソウゴ。俺とアナザーライダーを止めるぞ！」

「わかった。ハリーはみんなとオシマイダーの方をお願い」

「おお！」

ジオウとゲイツが轟鬼が倒すはずだったアナザー響鬼を引き継ぎで戦い。ハリー、メロディ、ビート、アムール、マシエリは猛オシマイダーへと応戦する。

「はああ！」

ジオウ達が敵と戦っている頃、ウオズは今だに太鼓を叩き続けている。

「ウオズ！ウオズ！」

ツクヨミの声が届かないのか、ウオズはまったく反応せず太鼓をたたき続ける。

「もう〜！」

ツクヨミは足下に落ちている石を軽く投げてウオズに当てる。

「邪魔しないでくれないか！」

「アナザライダーが現れたの。あなたも合流して！」

「我が魔王にはゲイツ君もついてるだろ？なら問題ない。

今、私にはやらなければならないことがある」

「は？」

「我が魔王の誕生に相応しい祝福だ！」

「はあ……完全に間違ってる」

「…何が間違っている？」

ツクヨミの言ったことが癪に障ったのか、ウオズは彼女にそう聞き返す。

「そんなことしても絶対にソウゴは喜ばない」

「ツ!?……………そんなバカな」

「ウオズは人を祝うことが何にも分かってない、そんなのあなたが楽しいだけ。もうい

い！」

呆れた口調でそう語ると、ツクヨミはウオズを置いて皆のもとに行ってしまった。

それを聞いたウオズは愕然となり、口を大きく開けてシヨックを受けた。

その感覚は、まるで体中に電撃が走ったような感覚だった。

「私が人を祝うことを、分かっていないだと……」

ツクヨミの言葉を聞いたウオズは、手から太鼓のバチを落とす。

「そんなことが……私と言え……祝いではないのか……？」

自身のアイデンティティが揺らぎ始めたウオズ。そのままシヨックのあまり倒れ込み、苦悩してしまう。

エール達は猛オシマイダーの音波からの攻撃に、苦戦を強いられていた。

「そおらー！」

ハリーがジカンチェーンを放つも、音波がチェーンを無効にする。

「オシマイダー！」

オシマイダーはさらに強烈な音波を彼女達に放った。

「ラブギターロッド！」

それを見たビートが咄嗟にラブギターロッドを展開する。

「ビートバリア！」

ラブギターロッドにフェアリートーン・ラリーがセットされた状態で弾くとバリアが

作られ、それによって音波を無効にして返した。その影響でオシマイダーの動きが悪くなり始める。

それを見たアムールとマシエリは、ビートと一緒にトドメを刺そう提案する。

「ビート！ここは一緒に行きましょう！」

「ええ！行くわよ！」

「はい！」

「チェンジ！ソウルロッド！」

「ツインラブギター！ミライクリスタル！」

ビートはラブギターロッドをソウルロッドへと変えると、マシエリとアムールはツインラブギターにルージュとバイオレットのミライクリスタルをセットする。

「アーユーレディ！」

「行くのです！」

ミライクリスタルをセットしてツインラブギターを使い、二人が弦を弾き演奏を始める。

「届け！私達の愛の歌！」

「駆け巡れ！トーンのリング！」

「心のトゲトゲ！」

「ズッキュン撃ち抜く！」

「プリキュア！ハートフルビートロック！」

「ツインラブ・ロックビート！」

ビートがハートフルビートロック、マシエリとアムールがツインラブ・ロックビート。

三人同時に赤と紫のエネルギーを放つ。

「三拍子！1！2！3！」

「愛してる！」

「センキュウ！」

「ファイナーレ！」

三人の掛け声と共にポーズを取り、太鼓型の猛オシマイダーは浄化された。

「ありがとうね。二人共」

「はい！」

「ギターの勝利なのです！」

三人が軽くハイタッチをする。

一方、ジオウとゲイツはアナザー響鬼と戦いを繰り広げる。

『のこ切斬！』

「はああー！」

ゲイツのジカンジャクローの『のこ切斬』をもアナザー響鬼は持ちこたえる。

だが、アナザー響鬼にも着実にダメージを与えている。

「よし、行ける気がする」

「一気に決めるぞ」

『ジオウ！Ⅱ！』

『ゲイツリバイブ！疾風！』

二人がドライバーに装填し、後ろから二人の変身エフェクトが現れると、ドライバーを回す。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

『スピードタイム！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイブ疾風

！ 疾風！』

ゲイツはリバイブ疾風、ジオウエグゼイドアーマーからジオウⅡへチェンジした。

流星に危険と思い、アナザー響鬼が逃走を図ろうとする。

「逃がさん」

ゲイツリバイブ疾風のスピードでアナザー響鬼の前へ回り込み、ジカンジャクローで攻撃を繰り出す。

「ぐうう……」

攻撃を受けたアナザー響鬼は二つの棍に炎を纏わせて反撃してくる。

「はあー！」

それに対して、ゲイツはゲイツリバイブ疾風のスピードで攻撃を避けた。

「はああー！」

ジオウはサイキョーギレードで攻撃を繰り返し、アナザー響鬼が怯んだ。

「行くよゲイツー！」

「ああー！」

二人はドライバーのロックを解除し、キックの文字がアナザー響鬼の周囲を囲む。

『『フィニッシュタイム！』』

ジオウが飛び上がると先にゲイツが無数のキックの文字からスピードで攪乱しながら連続キックを繰り返している。

『百烈タイムバースト！』

『トウワイズタイムブ레이크！』

「はあああー！！？」

ゲイツに振り回されそこへ、ジオウのトウワイズタイムブ레이크が決まり、アナザー響鬼に直撃し、アナザー響鬼が吹き飛んだ。

「うっ……」

倒れたアナザー響鬼からウオツチから抽出され、変身解除させることに成功した。

「え……子供？」

ジオウは変身解除されたアナザー響鬼を見て、その正体が自分達よりも年下の男の子の子供だと驚いた。

「っ!!? 奏太!」

「何? いなくなっていたお前の弟か?」

その子は何と、リズムが探していた弟の南野奏太だった。

「どうして……奏太!」

いち早くミュージズが倒れた奏太に駆け寄る。

「奏太……しっかりして」

「うっ、うっ……」

意識を取り戻した奏太が目を開ける。

「……その声……お前アコなのか?」

「っ!!?……うん。どうして奏太が?」

ミュージズにどうしてと聞かれると、奏太は言いづらそうな表情になる。

「とにかく話を聞くから」

ジオウが駆け寄り、奏太を抱き起そうとする。

だがその時、ジオウ達の時が止まる。

「まだ仕事は終わってないよ」

ウールはジオウの攻撃でも破壊されなかったアナザー響鬼ウオツチを拾う。

『響鬼……』

ウオツチを再起動し奏太へ埋め込むと、ウールは奏太から離れる。

「うわあああああ……!!?」

奏太がアナザー響鬼へと再変身させられると、時間が動き出す。

「奏太!」

「がああ!」

「いやあ!」

再変身したアナザー響鬼はいきなりミュージズの顔を叩いた。

「奏太……」

「ミュージズ!」

アナザー響鬼はミュージズに更なる攻撃しようと仕掛ける。

「やめろ!」

そこへ、京介がようやくやく現れた。しかし、京介はアナザー響鬼にやめろと言う。

「…………ツ」

京介は懐から音叉を取り出し、一度近くの木に当てる。

〈ピィィー……ン！〉

音叉が鳴り出すと、京介はそれを額に近づける。

すると京介の体を紫の炎が纏い、姿を変える。

「うっ…………はあ！」

炎を払うと京介が響鬼となった。

——しかし、その姿はどこかが違っていた。

「えっ?」

変身した京介はアナザー響鬼を庇う。

「何?」

響鬼?はアナザー響鬼を庇い、ゲイツへと攻撃を仕掛ける。

「何だ貴様!?」

「ゲイツ!」

ゲイツが攻撃を受け、ハリーがゲイツの助けに入ろうとする。

「あれ…………?前に見た響鬼と何か違う気がする」

以前、門矢士が仮面ライダー響鬼となったのを見ていたので、ジオウ達はなんとなく

響鬼の姿は覚えていた。

だが、今の京介の響鬼は何か違う。

「あの時は、確か……紫だったわ」

「でも、白って……もしかして、あれも響鬼……？」

「違うっす」

アンジュとエトワールがそう呟くと、トドロキがあれは響鬼とは違うという。

「あいつは響鬼でも何でもない。響鬼を襲名できなかった……ただの鬼だ」

「……ただの鬼？」

ただの鬼……即ち、響鬼ではないのだと話す。

「何だよ。あいつ響鬼じゃないのか」

響鬼ではない事を知り、ウールはこの場から去って行った。

そして、本当の響鬼ではないことを知ったソウゴ達は、ウオツチを継承できない事を知ってしまった。

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第40話 2018： 祝い！受け継がれる鬼の魂！

第40話 2018： 祝え!受け継がれる鬼の魂!

上記のあらすじからお察しする通り、ウオズはツクヨミに自身の祝福を否定され、太鼓の訓練も投げ出し、地にうつ伏せてる状態だった。

ジオウとゲイツは二人かがりてアナザー響鬼と戦っていたが、そこへ彼らの妨害をすめるかのように桐谷京介が乱入して来た。

「響鬼じゃない……」

「ただの鬼……」

しかしアナザー響鬼の一撃により、京介は変身解除に追い込まれる。

変身解除された京介を助けようと、ジオウ達が彼の下に向かおうとする。

「待つて欲しいっす」

「えっ?」

だがそんな中、トドロキが手を上げてジオウを止める。

しかし、アナザー響鬼は問答無用と言わんばかりに京介へ襲いかかる。

「奏太！いい加減にして！」

「っ？？」

だがリズムが前に出て止めようとすると、アナザー響鬼は姉であるリズムの呼びかけに反応したのか、攻撃の手を止める。

「はああー！」

その隙に、ゲイツが高速移動で繰り出したジカンジャクローの強烈な一撃を放ち、アナザー響鬼を京介から離す。

「響鬼ウオッチを手に入れようと思ったのに……響鬼じゃないならとんだ無駄骨だ。行くぞ」

「待って！奏太！」

「……」

「ミューズの声に一度は止まるが、ウールはアナザー響鬼を連れてこの場を撤退して行ってしまった。」

「ねえ、奏太君って……」

「リズムの……奏の弟だよ」

「でも、どうしてその子がアナザーライダーになったの？」

何故リズムの弟がアナザーライダーになったのか、ソウゴ達にはその理由がわからな

かった。

「ねえ……」

「京介!」

変身解除したソウゴが京介に問かけようとすると、トドロキが代わりに京介の前に現れて語り掛ける。

「鬼の掟を忘れたのか?自分の弟子の不始末は師匠がつける。それが鬼の掟だ」

「お前に言われなくても分かってる」

「このままだと吉野から鬼払いが来るぞ。その甘さが、お前が響鬼を襲名できない理由なんじゃないか?」

「うるさいなっ!……ほっといてくれ」

「お前ができないなら、俺がやるだけだ……それじゃな」

無責任ともとれる京介の言葉に呆れたのか、トドロキがソウゴ達の前から去っていくと、入れ替わるように今度はソウゴが話しかける。

「ねえ。あんたと奏太って子とは、どういう関係なのか教えてくれない?」

京介と奏太との間に何があったのかを知ろうとしたその頃、ウオズはというと……

「私は、私は……人を……祝うとは……わかってないのか……」

未だに太鼓の特訓場所からシヨックの影響から動けずにいた。

〈プウォ〜！タタラ〜！……♪〉

するとウオズの耳に、どこからか流れてくる音色が聴こえてきた。

「これは……」

何らかの楽器を使つて奏でている演奏曲が聴こえたウオズは起き上がり、その音色に導かれるがままに歩く。

「この……音色どこから……」

歩き続けるとウオズは調べの館へと戻つていた。

「あの、オルガンから……」

ウオズが館から聞こえるパイプオルガンの前へとやつてきた。

「なんて、美しい音色だ……」

「ほう……この音の良さがわかるのかい？」

近くでパイプオルガンの演奏を聞き、こんなに良い音色を奏でるオルガンがあるのかと感激しているウオズの耳に見知らぬ声が聞こえ、振り向くとそこには眼鏡をかけた老人がいた。

「あなたは？」

「私は音吉。君は？」

「私は、ウオズです」

名乗るとウオズはパイプオルガンを見つめる。

「このパイプオルガンは、私が調整をしてるのだよ」

「あなたが？」

「ある目的のために、これを作り上げたのだよ」

「…目的？」

「今はこの町を奏でる、この街の象徴とも言えるものかな」

「象徴……」

「お主、何やら迷っているようだな？」

「えっ？」

音吉はウオズの表情を見て、何か悩みがあると気づく。

「何を迷っているのだ？」

悩みがあるなら言ってみなさいと言われたウオズは、自分の悩みを音吉に打ち明けた。

「私は……人を祝うという事が……わからなくなったのです……」

「祝う？」

「私の……祝うは、自分が喜ぶためのものに過ぎない……そう言われ……私は祝うをわ

かっっていないのか……」

「深く考えすぎでは無いか？」

「えっ？」

「自分が楽しむ為の祝いでは、確かに相手には伝わらないかもしれないが、祝うのには正解はない。

君なりの祝いを見つければ良いのでは無いか？」

「私なりの祝い……」

確かに、音吉の言う正解のない、自分なりの祝いを見つけることが出来れば……と、ウオズは考える。

「あれ？ウオズ、ここにいたの？」

そこにアナザー響鬼との戦いからソウゴ達が戻ってきた。

調べの館に戻ってきたソウゴ達は京介に事情を聞こうとするが、京介は響鬼のことに関しては何も話さなかった。

「いつまで黙ってたんだ。俺達にあんな修行までさせておいて響鬼じゃないってどうゆうことだ？」

「答える義理はないな。プライベートの詮索はよしてもらおうか」

「彼の師匠のヒビキって、あんたのことだよね」

「ノーコメントだ」

「埒があかないな」

何を聞いても黙秘を続ける京介に、ゲイツは呆れた表情を見せていた。

「そうだ。トドロキさんなら何か知ってるかも」

その様子を見ていたさあやは、トドロキなら何か知っているのではないかと提案する。

「みんな、この人のこと、任せてもいい？」

「あ……分かった」

「ねえ、ウオズも一緒に行かない？」

「私は、今は……」

「いいから〜いいから〜!ほらあ!行くよ!」

ソウゴとツクヨミ、ハリー、はな、さあや、ほまれ、ウオズはトドロキにもう一度会う為にトドロキの居るあの滝へと向かった。

しかし、ウオズの表情は未だ暗いままで、ずっと音吉の言っていた「正解のない祝い」について考えていた。

「どうしたの?ウオズ。今日普通じゃないじゃん」

「なんか相談のれることあったら聞くよ」

「……………相談できるわけないわよね……………」

「どうゆうこと？」

「ほおつておいてくれないか、我が魔王。」

「これは己との戦い。私はこの戦いに打ち勝たなければならない。それを！今日中に！」

「うん！わかった……………」

「何かあったの？」

「まあ、色々とね……………」

はな達がソウゴに誕生日の事を伏せながらそう誤魔化していると、ソウゴ達はトドロキのいる滝のあるテントへとやってきた。そこにいるトドロキに、響鬼について教えて貰う事になった。

「あの、響鬼について教えてくれませんか？」

「……………響鬼つてのは、襲名制なんすよ」

「襲名制？」

「京介はヒビキさんの弟子で、ヒビキの襲名を目的で修行を積んでいたんすよ」

「じゃあ、京介さんの言っていた自分はヒビキだって、あながち嘘じゃないんですね」

さあやはそう言うが、トドロキは直ぐに首を横に振った。

「それはダメっすよ。襲名もしてないのにヒビキを名乗るなんて、あまつさえ弟子をとるなんて……ありえないっすよ」

「トドロキさんには弟子はいないんまっか?」

「俺には、そこまでの覚悟はないから……」

弟子は取らないのかというハリーの質問に対し、トドロキは昔の事を思い出しながら弟子は取らないと答えた。

「そうゆうもんなんだ……」

「鬼って言うのは生き方なんすよ。己を鍛え、己に打ち勝つ。それが鬼ってもんなんすよ」

「己に打ち勝つ……? そうだ!」

己に打ち勝つと言うトドロキの言葉に、ソウゴは何かを閃いた。

「ウオズ。1日だけトドロキさんの弟子にしてみらったら?」

「我が魔王、何を言いだすんだい?」

「いやいや、俺は弟子をとるつもりはないっすよ」

トドロキに弟子入りしてもらおう様にウオズへ話すソウゴに当の本人はそう言うが、ソウゴはそれをスルーしてハリーにも目を向けた。

「あつ！ハリーもやったら？」

「はあ？何で俺が？」

「ウオズ一人じゃかわいそうでしょ。お願い」

「ソウゴ……」

「大丈夫。はぐたんは任せて」

「ちよ……」

『よろしくお願いします！』

ひよんな事に、ウオズとハリーはソウゴの凶らいによつてトドロキの弟子とされ、ソウゴ達は颯爽と去っていった。

「……」

そんなわけでウオズとハリーは、トドロキの一日弟子となった。

その頃、調べの館にいるゲイツ達は…

「……」

「中々話してくれないね」

「あの、奏太とはいつから……？」

奏は弟とはいつから知り合つたのか聞くが、京介はそれを無視して立ち上がり、何処

かへ向かおうとする。

「何処へ行くのです?」

「お前達の知ったことじゃない」

「ちよつと!」

アコの制止も無視した京介は、何も告げぬまま調べの館から出ていった。

「俺が行く!何かあったら連絡する」

放つて置けないと考えたゲイツは一人、京介を追いかけた。

ソウゴ達はウオズとハリーをトドロキの所に置いて、京介の修行場所である太鼓の所へとやってきた。

「いいの?ウオズさんを置いて来ちゃって……」

「ウオズの悩みも晴れるといいなく」

「はあく……そんな大した悩みじゃないけどね」

ウオズについて考えているソウゴにツクヨミがそう言いかけると、彼女の持つファイズフォンXから着信が入った。

「ゲイツから……」

電話の相手はゲイツからだった。

「みんな！ゲイツ達が……！」

その頃、京介が気になって追いかけたゲイツはアナザー響鬼を見つけ、すぐさまアナザー響鬼に応戦していた。

「やめろ！手を出すな！」

だが鬼に変身した京介は、再度アナザー響鬼と交戦するゲイツの邪魔をする。

「目を覚ませ奏太。鬼としての誇りを思い出すんだ！」

「俺に任せろ！」

ゲイツと京介変身態が揉めていたその隙に、アナザー響鬼の二つの棍に炎を纏わせた一撃を受けたゲイツと京介変身態は階段から転げ落ちる。

「ゲイツ！」

二人が衝撃で肺から息を漏らしている所へソウゴ達が現れ、ジオウオツチⅡを起動させる。

『ジオウⅡ！』

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

ソウゴがジオウⅡへと変身すると戦闘に加入し、ゲイツ達と共にアナザー響鬼を止め

ようと試みる。

「やめろ!俺の弟子に手を出すな!」

「この子は苦しんでる!だからすぐに助けなさい!」

『ジオウサイキョウ!』

手を出すなど命ずる京介変身態にジオウはそう答えると、サイキョーギレードのプレート回転させエネルギーを蓄積させた。

『霸王斬り!』

そのままアナザー響鬼に霸王斬りを放とうとしたが、その時:

「ぐわああああ!!?」

突如京介変身態が前に出て、ジオウが放った霸王斬りからアナザー響鬼を庇った。

「あつ……」

「……!!?」

ジオウが動揺しているその隙に、アナザー響鬼はその場から逃走した。

しばらくして、ソウゴ達は再び調べの館へと戻った。

「皆さん!どうしたのですか!!?」

「心配するな。大した問題はない」

ゲイツは問題ないと言う。

「大丈夫ですか？」

ジオウの攻撃をモロに受けて、怪我はないかと思つたツクヨミが京介に声をかける。

「大丈夫なわけねーだろ」

怪我こそはなかったが大丈夫ではないと怒鳴る。

「……………めん」

「謝る必要はない。悪いのはコイツだ」

「もう、放っておいてくれ」

ソウゴ達にそう言うのと京介は背を向け、歩き出す。

「君は、自分だけの力で解決しようとしてないか……………」

すると音吉が現れ、京介に自身だけで問題を解決するつもりなのかと告げると足を止

めた。

「君の事情はともかく、私の孫にとってあの子は、大切な存在なんだ。教えてくれないか？」

「おじいちゃん……………」

音吉とアコの様子を見たソウゴがもう一度京介に話しかける。

「奏太君を助けたいんだよね？俺達も手伝うよ」

「……」

「教えて下さい!私は姉なんです!」

奏からソウゴ達に奏太の事について話して欲しいと言われ、京介はようやく口を開く。

「俺が……初めて、この町に来た時だ……」

——それは、一年くらい前のことになる。

師匠であるヒビキに響鬼を襲名してもらう為、京介は修行を続けていた。そして、この町を修行の場所として拵えていた。

「はあ!」

京介は真剣に太鼓を叩き、響鬼に近づく為に修行をしていた。

そんなある日……

「凄え……」

「……?」

いつも通り太鼓を叩いていた時。偶然、自身の奏でる太鼓の音を聞きつけた子供が彼の下にやってきた。

「ねえ!それ俺にも教えて!」

そう、その太鼓の音を聞きつけてやって来た子供。それが奏太だった。その時の彼は、京介に憧れを抱いていた。

『こうか！』

京介は奏太に棒を渡し、太鼓を叩かせた。

そんな太鼓を叩く奏太を見て、京介はかつてヒビキの弟子として必死に修行に取り組んでいたかつての自分と重なった。

『お兄さん！名前なんて言うの？』

『俺は……桐谷京介……響鬼だ』

京介は自分は響鬼だと嘘を付き、奏太を弟子にした。

しかしある時、自分が響鬼を襲名していないと知った奏太は、京介の前から出ていった。

「それが、奏太との出会いだっんだ」

「ですが何故、嘘をまで言い自分を響鬼と言ったのですか？」

確かに京介に憧れていたのなら、自分が響鬼だと嘘を言う必要なかった。

しかし京介は、奏太に嘘をついて弟子入りを認めてしまった。

「俺は……ただの鬼。弟子なんて本当は取ってはいけないんだ……」

ただの鬼だから弟子は取ってはいけない。だから、自分を響鬼だと嘘を言ったのだと京介は自白した。

「ねえ。どうして響鬼を襲名できなかったの?」

「聞きにくい事をズケズケと……」

「……めん」

「…俺は師匠のヒビキさんのようにはなれなかった……それだけだ」

「どんな人なの?」

ソウゴに自身の師匠について教えて欲しいと言われた京介は、自身ともう一人の弟子と共に師匠と修行をしていた時、そして色んな魔化魍と戦っていた師匠の姿を思い浮かべた。

「ヒビキさんは、何があっても諦めない人だった。男らしくて、強くて。俺の憧れだった」

京介の言うヒビキさん。話を聞いているだけでも、ソウゴ達は京介がその人をどれだけ慕っているのかが伝わって来た。

「だけど、俺は襲名も出来ず奏太に自分が響鬼だと……」

京介は奏太に、自分が響鬼だと嘘を言った事を機に病むが、ソウゴは「そんな事ないと思うよ」と励ます。

「何?」

「奏太にとつてはあんたは響鬼なんだよ。本物とか偽物なんて関係ない、あんたに憧れたからきつと奏太も鬼になりたいと思っただよ」

「奏太……」

「助けよ。みんなと一緒に!」

ソウゴがみんなへと振り向くと全員頷き、京介も立ち上がって頷く。

そこへ、ツクヨミからアナザーライダーの情報を教えられた。

「ソウゴ!アナザー響鬼の目撃情報が入った!」

「行こう」

ソウゴ達はアナザー響鬼が現れた現場へと急ぐ。

その頃、ウオズとハリーはドロキの1日弟子入りをしていた。

「お、重い……」

ハリーは重い薪を担いでおり。

「何故私が洗濯を……」

そしてウオズは愚痴を呟きながら川で洗濯をしていたが、途中で手にあつたふんどしに驚いて背中から川へ転がり落ちる場面があつた。

「ああ。竈作るから石集めて来てください」

しばらくし、ウオズはトドロキに言われた通りに石を重たそうに運んで来た。

「ウオズ。大丈夫か……」

「はあ、はあ……こんな事をしている場合ではないのに……」

「じゃあ何がしたいんですか?」

「私は……祝福がしたい」

トドロキに何がしたいのかと言われたウオズは、今自分が一番したいことを打ち明けた。

「……でも、どうやったらいいか分からなくなってしまった」

「簡単なことじゃないすか」

「簡単って……」

「我が魔王の生誕にふさわしい祝福が、簡単であるはずがない」

「俺の師匠は、死んでまで俺のそばにいてくれようとしたんすよ」

トドロキの師匠……それは、斬鬼と言う男だった。

彼はトドロキのために死を覚悟で、弟子であるトドロキのために、最期まで必死に師匠として弟子に自分の意思を貫いた。

「今でも思うんすよ、師匠がいてくれたら、なんて言うかって。力になってほしいって」

「それと何の関係が……」

「そばにいるって、それだけで凄いことじゃないすか」

「そばにいる？」

「君の存在が、祝福そのものつすよ」

それを聞いて、ウオズはいつも楽しく日々を過ごしていたソウゴ達の笑顔を思い出す。

「そうか。ありがとう。鬼よ、大切な事を学ばせてもらった」

ウオズはそう言うのと立ち上がって、「おい！ウオズ！どなんしたんや！」と声を掛けるハリーを置き去りにして立ち去る。

「あれ？喰わないんすか飯！」

そのままウオズは悩んでいたのが？のように、全速力で走っていった。

「お、おい！ウオズ！」

ハリーは直ぐに出ていったウオズを追いかけようとする。

「待つて欲しいっす！これ！」

トドロキがハリーを止め、何かを渡そうとする。

アナザー響鬼が工場で作業員を襲っていたところに、ソウゴ達が駆けつけてきた。

ソウゴ達はドライバーを構え、変身しようと試みる。

「ちよつと待ってくれ!」

だが京介は、変身しようとするソウゴ達を止める。

「奏太! いるんだろう!」

京介が近くにいるはずのアナザー響鬼に向けて叫ぶ。

「俺は渋々、お前を弟子にしたんだ」

「!?……ふざけるなっ!」

隠れているアナザー響鬼が京介の言葉に叫ぶ。

「だけど……お前の存在が俺を支えてくれた。お前が俺を……一人前の鬼にしてくれたんだ!」

「だ!」

「っ!?」

アナザー響鬼は京介の言葉を、黙って倉庫の入り口で、それを聞いている。

「だから絶対に、お前を救って見せる!」

そう叫ぶとアナザー響鬼がソウゴ達の前に現れた。

すると、小さな鳥のような形をしたディスクが現れてアナザー響鬼に衝突し、アナ

ザー響鬼を混乱させた。

「何あれ?」

「あの、ディスクは……」

「ようやく。答えが出たな京介」

すると後ろから、優しい顔のかなり鍛えられた体付きをしたおじさんが現れた。

「誰？」

「ヒビキさん……」

「ヒビキ……この男が仮面ライダー響鬼か……」

ゲイツの言う通り、この男性が仮面ライダー響鬼であり、京介の師匠のヒビキだった。

「ヒビキさん、何故ここに？」

「ずっと、見てただけだな。お前とお前の弟子の修行も」

「えっ？」

「鬼としての覚悟が見えたいま、これをお前に渡す」

そう話すとヒビキは京介の腕を掴み、その手に何かを渡す。

「今日から、お前が響鬼だ」

それは京介の使う、音叉の部分だけ違う色をしていた音角を託した。

「ヒビキさん。ありがとうございます！」

京介は響鬼の音叉を受け取り、アナザー響鬼の前に出た。

「行くぞ！奏太！」

京介は響鬼の音叉を展開し、指に当て音叉を鳴らす。

〈ピィーーン!〉

響き渡る音叉の音が京介の額に鬼の紋章らしきものを浮かび上がらせ、紫の炎をその体を纏う。

「ふう〜〜〜〜……はあッ!」

腕でその身体に纏った紫の炎を力強く払い、現れたその姿は、紫色と鬼のようなシルエットのライダー。

間違いない、今度こそ本当の仮面ライダー響鬼となった。

「じゃあな、京介。シュツ!」

薬指と小指を若干曲げた状態で、手首をスナツプを利かせて一回まわした後、前に軽く振るとヒビキは去っていった。

「ヒビキさん。あなたの意思……引き継ぎます!行くぞ奏太!」

響鬼がアナザー響鬼へと戦いに挑む。

「祝え!……新たな響鬼の誕生を!」

「ウオズ……」

そこへタイミングよくウオズが現れ、響鬼に祝えと叫ぶ。

「我が魔王。私らしくない姿を見せてすまない!」

「もう悩みはいいの?」

「悩み?そんなものはもう捨てた」

「どうやらトドロキの特訓でウオズの悩みは晴れたようだ、ソウゴは安心の笑みを浮かべた。

一方の響鬼は、音撃棒でアナザー響鬼を圧倒。しかしアナザー響鬼も、二つの棍に炎を纏わせて反撃に出ようとする。

「奏太……」

「俺達も……」

「お待ちを」

ソウゴ達も参戦しようとする中、突如として仮面ライダーリストルが現れ、アナザー響鬼を捕まえると後ろから既に用意した前回と同じ太鼓型の猛オシマイダーが出現した。

「さあ、融合するのだ!」

そのままリストルはアナザー響鬼を放り投げると、アナザー響鬼が猛オシマイダーに取り込まれた。

すると猛オシマイダーの顔が響鬼のような赤い隈取りと闘牛の様に巨大な角が付いたものになり、背中には羽衣、腹部には直径2 m程の大太鼓が設置され、全体的にア

ナザー響鬼が巨大化したかの様な姿へと変わった。

『猛オシマイ響鬼』の誕生!」

リストルが作り出した猛オシマイダーとアナザー響鬼が融合した事で、猛オシマイ響鬼が誕生した。

「オシマイダー響鬼〜!」

オシマイダーは両手に金棒の様なバチを持つとそこに炎を纏って、火炎玉のようなものを響鬼へと放つ。

「奏太!」

響鬼はオシマイ響鬼の変身者である奏太の名を叫ぶと、その攻撃を転がりながら躲けていく。

「何あれ?」

「オシマイダーとアナザーライダーが融合したんだ!」

アナザー響鬼が猛オシマイライダーとなり、リストルまでも現れた為ソウゴ達は直ぐに動き出す。

「みんな!行こう!」

「「「ミライクリスタル!ハートキラツと!はぎゅ〜!」」」

「「「レッツプレイ!プリキュア・モジューレション!」」」

プリハートとモジュールにミライクリスタルとフェアリートーンをセットし、九人が揃っていつもの手順を取り姿を変える。

九人は光に包まれ、やがて光が消えると彼女達はプリキュアへと変わった。

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「[[[[HUGつと！プリキュア！]]]]」

「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

「爪弾くは女神の調べ！キュアミューズ！」

彼女達が変身完了すると、ソウゴとゲイツはジクウドライバーを装着し、ウオズはビヨンドライバーを取り出す。

「では、我々も行くこう」

「うん!三人で行くよ!」

『ジオウトリニティ!』

「えっ?また!」

ソウゴはジオウトリニティウオッチを起動し、ドライバーへと装填してウオッチを回す。

『ジオウ!ゲイツ!ウオズ!』

三人が光が包まれ、包まれていたゲイツとウオズの体が腕時計のように変わってジオウの体にはめ込まれ、ジオウの身体も変化を始めて仮面が中央へと移動する。

『トリニティタイム!三つの力、仮面ライダージオウ!ゲイツ!ウオズ!トリーニティー!トリニティ!!?』

ジオウトリニティへと変身を完了した。

「ひれ伏せ!我こそは仮面ライダージオウ・トリニティ!大魔王たるジオウとその家臣、ゲイツ、ウオズ、三位一体となって未来を創出する時の王者である」

ウオズがいつもの口上を済ませると、響鬼とプリキュアのみなどと並び立つ。

「それやらないと駄目なのか?」

「もちろん『違う!』」

所有権がジオウに戻り、違うと叫ぶ。

「もう！駄目って訳じゃないけど……」

「どうでもいいだろ!!？」

それを見ていたスイートプリキュアは、ジオウトリニティのこの光景にデジャヴを感じた。

「なんか、同じような……」

「おなじ?」

「この光景、晴夜と龍牙に似ている」

「晴夜さん?」

「龍牙とは、誰ですか?」

「そうか、二人はまだ会ってなかったよね」

「晴夜と龍牙は、ソウゴ達と同じ仮面ライダーなんだよ」

マシエリとアムールにビルドとクローズである晴夜と龍牙のことを話す。

「そういえば、あの二人も一緒に変身すると、よく喧嘩するよね」

リズム達が何度か見た二人が変身した姿、クローズビルド。あれになると二人はよく喧嘩しているのを思い出し、ジオウトリニティもそれによく似ていた事を思い浮かべた。

「ライダーって、一緒に変身するのやな癖に結局一緒に変身するって、オネなの?」

『!?!?』

「「違う!!?」」

ソウゴ達が痴話喧嘩していると猛オシマイダーが口や棒から火の玉を放つ。ジオウ達は一齐にその攻撃を避けた。

「とにかく、リストールは任せて!みんなで鬼退治をお願い!」

「ああ!待つてろ奏太!」

「「行こう!!?」」

響鬼とエールとメロディ達は猛オシマイ響鬼を止めようと向かう。

「じゃあ、こっちも」

ジオウトリニティもリストールに体を向ける。

「見せてもらう。ジオウトリニティの力を!」

リストールがジカンロッドを構える。

「時間が惜しい。最速で片付けよう」

「うん!」

「ああ!」

対するジオウトリニティはジカンデスピアを構える。

「はああ!」

ジオウトリニティのジカンデスピアとリストルのジカンロッドが何度もぶつかり合
い、お互いに一步も引かない戦いが始まった。

「ウオズ！ 変われ！」

するとゲイツに主導権が移り、一度リストルから離れる。

『ジカンザックス！ You！ Me！』

ジカンザックスにゲイツウオッチを装填し、ジカンザックスの弦を弾く。

「はあ！」

ジカンザックスから放つ攻撃はリストルに避けられてしまった。しかし…

「はああ！」

『ライダー斬り！』

リストルが射撃に気を取られた隙にジオウによるサイキョーギレードの攻撃が決
まった。

「…ツ！」

「行くよ！ ゲイツ！ ウオズ！」

「おお！」

「ああ！」

ウオッチを起動させ、ドライバーを回転させるとジオウトリニティは高く飛び上が

る。

『フィニッシュタイム!』

「!?? なっ……」

『トリニティタイムブ레이크バーストエクスプロージョン!』

「ぐわあああ!」

キックの文字が重なり、ジオウトリニティのライダーキックがリストルの胸に決まるとリストルが倒れる。

「ふう……」

ジオウトリニティが着地すると、リストルが攻撃を受けた部位を抑えながら起き上がる。

「これが……ジオウトリニティ。これが今の君の力というわけか?」

「俺だけの力じゃない。俺達みんなが望んだ未来に向かう為の力だ」

「……（どうやら、我々の計画に少し修正が必要なようですね……）」

リストルは小声で呟くと、ジオウトリニティの前から瞬間移動ですぐに去っていった。

一方、プリキュアと響鬼は猛オシマイダ響鬼に苦戦していた。

「ヤアアア！」

エールとメロデイがパンチを繰り出し、そのまま連続でラッシユを繰り出し続ける。
「はああー！」

今度はスイッチでアムールとリズムがラッシユを繰り出す。猛オシマイ響鬼は反撃の為に火の玉を彼女達に放った。

「ビートバリア！」

「フレフレ！ハート！フェザー！」

アンジュとビートがバリアを展開し、二人が同時に作り出したバリアは火の玉を弾く。

「スター！スラッシユ！」

そこへスタースラッシユを受け、猛オシマイ響鬼が怯んだ。

「はあああー！！？」

最後にマシエリとミューズにダブルキックを繰り出し、猛オシマイ響鬼のバランスを崩す。

「ツ……オシマイ……ダッ！」

怒りに満ちた様な咆哮を上げると、腹部に設置していた大太鼓を二つの棍に炎を纏わせながら連続で叩き始めた。

すると今度は、腹の太鼓を叩いて力を溜めていたのか、口元で溜め込んだ巨大な火の玉を一気に放ち、再び反撃に出る。

「はあくく……はあ!」

すると響鬼は音撃棒・烈火の炎を放ち、猛オシマイ響鬼の放った火の玉を相殺させた。
「よし!」

響鬼は高く飛び上がり、巨大な火の玉発射で体力を使って動きを鈍らせていた猛オシマイ響鬼の頭に乗る。

「はあ!」

——音撃打・猛火怒濤——

響鬼はそのままベルトのバックル部分に装着されている音撃鼓・火炎鼓を頭部に埋め込むと、音撃棒で清めの音を頭上から叩き、清めの音をオシマイ響鬼に直接流しこんで行く。

「奏太。待つてろ!もう少しだ!」

するとエール達は、猛オシマイダ響鬼からトゲパワワが急激に落ちていくのを感じた。

「みんな!」

響鬼くれたチャンスを彼女達は無駄にしない為に、直ぐにトドメを刺すための準備を

行う。

「「「メモリアルキュアクロック！チアフル！」」」

「「「出でよ、全ての音の源よ！」」」

ミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出し。メロディ達はフェアリートーン達の力を注ぎ、クレツシエンドトーンを召喚する。

「「「ミライパッド！オーブン！」」」

エール達が右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

「「「届けましょう、奇跡のシンフォニー！」」」

メロディ達四人は両腕をクロスし、クレツシエンドトーンの金色の光の炎と一体化する。

「「「プリキュア！チアフルスタイル！」」」

メモリアルクロックの扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がチアフルスタイルに変身する。

「「「メモリアルパワー！フルチャージ！」」」

そのままエール達はパワーをメモリアルキュアクロックに集める。

「プリキュア！スイートセツション・アンサンブル！クレッシェンド！」

スイートプリキュアは猛オシマイ響鬼に向かってスイートセツション・アンサンブル・クレッシェンドを放つ。

「プリキュア！チアフルアターック！」

さらに六色のクローバー型エネルギーのチアフル・アターックを放った。

二つの大技を見た猛オシマイ響鬼は、最後の力を振り絞って腹太鼓を我武者羅に叩き音波を出して技を相殺しようとしたが、彼女たちの放った技は全くと言っていいほど威力を殺せてなかった。

「ファイナーレ！」

紫、赤、黄色、水色、ピンクのハートの順に猛オシマイ響鬼にぶつかり、最後にはぐたんがハグするポーズをして虹色のハートに包み込み、猛オシマイ響鬼を浄化した。

それと同時に奏太も解放され、罅の入ったアナザー響鬼ウオッチも摘出された。

「ん……師匠」

「奏太……すまなかつたな」

「いや……心配かけてごめんなさい」

奏太も自分がやっていった事を反省しているようだ。

「奏太！」

「姉ちゃん、アコ……」

「ばか……」

ミュージズが奏太に泣きながら抱きつき、それを見て良かったと全員感じる。

それからソウゴ以外のみんなはこの後大事な用があるといい、さつき帰っていった。

「ほら」

京介は響鬼ライドウオッチをソウゴへ渡す。

「いいの？だって、せっかく響鬼になれたのに」

「かまわない。俺は俺の道を行く。そして、ヒビキさんみたいな鬼になる。だからお前も、魔王とやらになってみせろ」

「もちろん。頑張ればできないこともない。もちろん奏太もね！」

「京介さん！もう一度俺を弟子にして下さい！」

奏太は京介にもう一度弟子にして欲しいと頭を下げた。

「ああ、一緒に頑張ろ奏太」

京介は優しく奏太の肩に手を置く。

「はい！俺、絶対にもう諦めない。今度こそ本当の鬼になって見せる！京介さん！俺、絶対にあんたから響鬼を襲名して見せます！」

「ふっ。響鬼を襲名するのは辛いぞ！」

「臨むところだ！」

師弟愛が戻り、それを見たソウゴは嬉しいそうに見つめる。

「よかったね。じゃあ、俺は……」

「ソウゴ兄ちゃん！」

奏太が帰ろうとしていたソウゴに話しかける。

「俺が響鬼を襲名出来たら、今度は一緒に戦ってくれるか！」

もし同じ仮面ライダーになれば共に戦おうと言う意味でソウゴに言う。

「うん。立派な鬼なつてよ！俺も最高の王様になるから！」

「俺も立派な鬼なるぜ！」

二人は己の夢を語り合うと、ソウゴは奏太は互いに熱い握手した。

しばらくし、ソウゴはビューティーハリーへとやってきた。

「あれ？誰もいないのか？」

いつもならビューティーハリーにはみんながいるはず。だが部屋の中は真っ暗で、人のいる気配すら感じない。

「みんな！どこ！」

ソウゴが中を歩き続けリビングへと入る。

すると、突如してリビングの電気が付いて、ソウゴの前から皆んながクラツカーを持って現れた。

「うおお！」

「「「ハッピーバースデー!!!」」」

クラツカーの破裂音と共に響く「いえーい！」というはな達の歓声をBGMに、いきなり事でソウゴが驚いていると、壁に『HAPPY BIRTHDAY!ソウゴ!』と描かれた幕が貼られていた事に気付く。

「そっかー、忘れてた。俺、今日誕生日か！」

「お前に知られないように朝からみんなで、用意してたんだ」

「みんな……ありがとう♪」

「おめでとう!ソウゴ!」

「いや〜めでたいな!ソウゴ!」

「ソウゴが今日から14歳!」

14歳の誕生日をみんな祝ってくれる。ソウゴにとって、こんなに祝ってくれたのは初めての経験だった。

「そーや!これ貰ったで!」

するとハリーが何かを取り出した。

「どうやー!」

「それ……」

なんと、ハリーが持っていたのは轟鬼のライドウオッチだった。

「トドロキはんから貰ったんや」

あの後、トドロキの特訓を続けていたハリーはトドロキからウオッチを託された様だ。

「そうか、響鬼ウオッチが出来たから……」

「いやー今日はいい事が多いな」

初めてのウオッチゲットにハリーはご機嫌だ。

そして、リビングから台車に乗った大きな誕生日ケーキが出てきた。

「凄えー!このケーキ!」

ケーキには、ライドウオッチの形をしたクッキーが置かれ、てっぺんにはジオウのチョコがあつた。

「そのケーキ。奏さんの家でさあやが一生懸命作ったんだよ」

戦いの後、みんなは急いでケーキ作りの準備をし、ソウゴが帰ってくる前になんとか作り上げたのだ。

「ありがとう！さあや！」

「うん……」

ソウゴが笑顔でお礼を言うと、顔を赤くしてさあやが照れる。

「時見先輩！聞いてください！」

「私達からの誕生日ソングです！」

えみるとルールーの二人がギターを部屋中に響かせ、ソウゴへ送る誕生日ソングを歌う。

曲は『HAPPY BERTHDAY!』。

「内緒のまま好きなくあなたの誕生日……♪」

「空は青く晴れて涙がこぼれたの♪プレゼントを抱えく友達が集まる……♪」

「ハッピーバースデー！マイフレンド〜！」

「えみる！ルールー！ありがとう！」

二人の誕生日ソングが終わり、最後を飾るのは……

「祝え！まさに14年前の今日、我が魔王はこの世に生まれ落ちた！」

ウオズの祝福が始まった。

この日の為にウオズは、数日前から祝福のイメージトレーニングを続けてきていた。

「花よ！咲き乱れよ——」

しかし、いくらウオズが祝福の鬼を自称しようと、絶え間なく祝儀の言葉を言い続けるのは不可能。何故なら人は言葉を言い放つ際に、必ず呼吸を行うからだ。

特にウオズの場合、この祝福に全身全霊をかけている状態でもある。今の彼には息継ぎをする暇など無いのだ。

「鳥よー歌え——」

だからウオズは、その不可能を可能にすべく、特殊な『呼吸法』を生み出した。

この呼吸法は、実はアナザー響鬼の事件の間に行った太鼓演奏からその片鱗を見せていた。

この時のウオズは祝福の亡霊に取りつかれたのではないか?と思うくらいに熱中していた。とはいえ、彼にも体力に限りがある。体力があり限り、いつかはその熱量も終わりの時を迎える。

だがそうはならなかった。実際にツクヨミが止めなければ、ウオズはあのまま太鼓を叩き続けただろう。

何故なら彼はこの時すでに、その特殊な呼吸法をある程度にまで確立していたからだ。

この呼吸法は一度に大量の空気を吸うことで、肺に空気が残ってる限り祝儀の言葉を息継ぎなしで言い放つことが出来。体中に大量の酸素を送り込むことで、どんなにも激

しい動きにも対応できるようにするのだ。

これはソウゴ達は勿論、ウオズも詳しくは知らなかった事だが、オーマジオウのドライバーには無尽蔵かつ膨大なエネルギーを生体エネルギーに変換し、己の身体能力を遥かに超える戦闘でも半永久的に続行可能とする機能がある。(68歳という高齢でも激しく動くことが出来るのもこれのおかげなのだ)

要するにこの呼吸法は、ほんの短時間限定にだが、その力を疑似的に再現できるのだ。
「生きとし生ける全ての者達よ——！」

そして、音吉とトドロキのアドバイスを聞き、なんで自分がソウゴを祝いたいと思つたのかという原点を思い出した時、彼は遂にその境地にたどり着くことが出来たのだ。

祝いの意味を悟り、祝福を極めた、ウオズが送るオーマジオウの、^{時見}オーマジオウによる、^{時見}オーマジオウの為にだけに生み出された、その呼吸法の名前は——

「その全身全霊をもって祝福するがいい！我が魔王の生誕の日を！」

—— 祝の呼吸くオーマジオウ神楽く ——

「え？魔王？王様でしょ？」

「そう！王様！間違いです」

圧倒的熱量の籠った祝儀の言葉を言い放つて充実感に満ちた顔でいるウオズの近くで、彼の言葉の中から魔王と聞いた順一郎に、ハリーがうまくごまかしていた。

「ウオズ!ありがとう」

「ウオズ面白かったわよ!どうやって祝ったらいいか、ずーっと悩んでたんだから!」
「ウオズく!それで暗かったの?もう!」

ソウゴは笑いながらウオズを見ると、本人は額から流れる汗を拭いながら、清々しい笑みを浮かべながら口を開く。

「初めから悩む必要などなかった。私が我が魔王の側にいる事が、何よりの祝福なのだから」

音吉やトドロキの助言により、自分がやりたい祝福を改めて感じる事が出来た事を。

「はあ……何かよく分からないけど……みんなありがとう!」

取り敢えず、ウオズの悩みが晴れた事でソウゴはケーキに刺されたろうそくの灯を消す。

『おめでとう!』

一同、ソウゴへ拍手する。拍手が終わると、順一郎がみんなにお皿を配った。

「さ、みんな食べて食べて!今日は腕によりをかけて作ったんだから!」

『いただきますー!ー!!?』

みんながお皿を取り、ケーキや料理を取ってご馳走にありつく。

今日は修行や襲名や継承。色々であった一日だったが、ソウゴは14歳最高の誕生日をみんなと祝えて満足だった。

「かくして、また一つのウオッチが我が魔王の元へ。

残るウオッチはあと4つ。

次に力を受け継ぐべき仮面ライダーは——」

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第41話 2068：真意！切り開く新たなフォーム！

第41話 2068： 真意!切り開く新たなフォーム

!

アナザー響鬼の事件から数日が経ち、その間にほまれがスケート大会で優勝した。

そして今日はビュートイーハリーで、皆がほまれのスケート大会の優勝を祝う事になった。

「優勝おめでとーっ!」

ソウゴ達はクラツカーを『パーン!』と鳴らし、ほまれを祝う。

「祝え!ここにスケート界に輝木ほまれの新たなページが開かれた!」

あれからウオズはソウゴ以外の人物にも祝うようになった。短いけど。

「ありがとう」

「ほまれさんの演技、感動したのです!」

「うん、凄かった!」

最近行われた大会には、はな達も観に来ていた様だ。

「情熱的で、切なくて——!」

「ニュースでも、表現力の向上が凄いつて言われてたけど、本当にその通りだと思う!」

「美しいと言葉の意味を教えてくださいました」

「褒め過ぎ……」

「輝木選手！ズバリ好調のきっかけは？」

「えっ……？」

はながおもちゃのマイクを近づけて尋ねると、さあや達に褒められて赤くしていたほまれは頬を更に赤くし、別の方向を向く。

ほまれの向いた先には、アイスを作るハリーとそれを笑顔で見るはぐたんがいた。

「まだまだだって。こんなんじや、世界には通用しないよ」

「やはり世界を目指すのか？」

ふと、世界を目指すのかとゲイツが尋ねる。

「当然。この先もいっぱい壁はあると思うけどさ、全部飛び越えて行けるように頑張るよ」

「応援するよ！」

「俺も！ハリハム・ハリー特製、お祝いと頑張れのシャーベットや」

ソウゴが応援すると言うと、ハリーは自作のシャーベットをほまれに差し出す。

「ありがとう……」

ほまれはシャーベットを受け取り、一口食べる。

「酸っぱい……でも美味しい……」

「せやろ? 身体動かした後は、酸っぱいモンに限るで。せやったらチョコミントアイスもあるでー」

その様子を見たはなとソウゴは首を傾げていたが、さあや達は微笑ましい表情で二人を見ていた。

クライアス社にある、トラウムの研究ラボにて。

「ようやく、出来たね」

そこにはトラウムが作り上げたライドウォッチがいくつか置かれた。

「後は、こいつが出来れば……」

そして、いくつかあるライドウォッチの中に一つ、歯車型のライドウォッチがあった。

しかし、まだブランク状態で完成していなかった。

「おや、お悩み相談かね?」

そこへビシンがトラウムのラボに現れた。

「ずっと考えても分からないんだ……ハリーはどうして戻って来ないの……?」

ラボでトラウムがビシンの話を聞くと、ハリーについての話だったので、トラウムは

少し考えた後に自身の考えを口に出して説明する。

「それはズバリ、本人の心を除くしか無いね」

「心を……？」

トラウムがそう助言すると、ゴーグル型の装置をビシンに渡す。

「昔遊びで作った発明品だ。相手の深層心理をバーチャル空間に変える事が出来る。エ
ネルギーは勿論……」

「トゲパワワか」

「ああそれと、これも持って行くといい。最近完成したんだ」

トラウムはビシンに二つのライドウオッチと、歯車型のブランクウオッチも渡す。

しかし、ライドウオッチと一緒に受け取ったブランク状態のウオッチを見たビシンは
不満そうな顔になる。

「これブランクウオッチじゃん……」

「まあ、君が使えばウオッチなるだろう」

「まあいいや、ありがとうドクター。ありがたく使わせて貰うよ」

トラウムから貰った発明品を持ち、ビシンが動き出した。

スケート場では、ほまれが次の大会に向けての特訓を始める。

「新プログラムか」

「次の大会に向けて、四回転ジャンプを取り入れたいんです」

ほまれはコーチの梅橋先生に四回転ジャンプを取り入れたい事を伝える。

「四回転……?!? 世界でも飛べる選手はほんの一握りだぞ……!」

「だから挑戦するんです!」

ほまれは四回転のジャンプに挑戦する為、その意思を貫こうと訴えると梅橋先生も頷く。

「分かった。練習メニューは考えておく。演目は輝木が決める」

「はい!」

その後、練習を終えたほまれはスケート場を後にし、学園の図書館を歩く。

「絵本でも参考にするか」

演目を決める為絵本を参考にすることにし、色んな絵本を手にとって机に置く。

「読むのは幼稚園以来だな」

そう言いながらほまれは、絵本『人魚姫』のページをめくる。

「——昔々、海の底の国に、人魚のお姫様が暮らしていました。」

ある日、お姫様は海に落ちた王子と出会い、恋に落ちました」

人魚姫を読んでいる途中で王子の姿がハリーと重なり、頬を赤くして顔を隠す。

「ちよつと……恥ずかしいかも……」

そう呟くと、外から轟音が響いた。

「……っ！」

彼女は窓の外を見ると、外から煙が上がっていた事に気付く。

ほまれは急いで繁華街の方に向かうと、既にソウゴ達が到着しており、街灯の上にはビシンとゴーグルを着けた猛オシマイダーがいた。

「ビシン！」

「いい加減にしいや！」

「待ってたよハリー」

「行くよ！」

ほまれの掛け声でソウゴ達は変身アイテムを取り出し、ツクヨミはぐたんを抱え離れる。

『『『ジクウドライバー！』『』』』

『ビヨンドライバー！』

『ジオウ!』

『ゲイツ!』

『ウオズ!』

『ハリー!』

四人はウオツチをドライバーに装填して構えると、はな達五人がプリハートを取り出す。

『アクション!』

「変身!!?」

「ミライクリスタル!ハートキラツと!」

四人がドライバーを操作した事で体にアーマーが纏われ、五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットしていつもの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

『投影!フューチャータイム!スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ!』

『ライダータイム!仮面ライダーハ・リー!』

「輝く未来をく抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「「「HUGつと！プリキュア！」」」

全員が変身を完了すると、いきなり猛オシマイダーがジオウ達に突撃してきたが、咄嗟に躲す事が出来た。

「諸君、この猛オシマイダーはモーションキャプチャーを着けてるみたいようだね」

「モーションキャプチャー？」

「人間や物の動きを記録する技術だよ」

「スポーツ選手の身体の動きのデータ収集や、ゲームのキャラクターなどによく使われています」

「未来ではよく使われていたものだ」

「へえ」

「説明はそこまでや！来るで！」

ジオウがアンジュとアムール、ゲイツの解説を聞いて感心していると、今度は猛オシ

マイダーが右手の球体から光線を飛ばす。

ジオウ達は光線を掻い潜って避け、パンチやキックを叩き込む。

「そんなに大した事無いみたいだね」

大した攻撃力もない為、案外余裕だった。

「プリキュアとオーマジオウやゲイツにウオズに用は無い。僕の狙いは君だ、ハリー」

そう言うのと、ビシンが装置にトゲパワを籠める。

すると猛オシマイダーが無数の四角いエネルギー体となり、ハリーに向かって来た。

「何や!!?どわっ!」

ハリーは避け続けるが、体勢を崩して倒れる。

「ハリー!」

エトワールがハリーに駆け寄ると、猛オシマイダーが竜巻を起こして、その中に二人を閉じ込めた。

竜巻が消えると、頭部に角を生やしたドームのような姿になった。

「余計な奴が入ったか……」

ビシンは舌打ちをして、ハリーと一緒に閉じ込められてしまったエトワールに不快感を浮かべた。

そして、ドームの中に閉じこめられ、変身を解除させてしまったほまれは……

「……姫？……姫……人魚姫！」

女性の声に反応し、ほまれが目を開ける。

「起きたのね」

そこには二人の女性がいた。

「人魚姫……つて……」

「あなたの事よ」

「えっ……!?？」

目の前にいた女性に人魚姫と言われたほまれは今の自分の姿を見て驚く。

「ええっ……!?？ 本物……っ!?？」

なんとほまれの足が魚の下半分になっており、その姿が人魚姫となっていたのだ。

「みんな待ってるわ」

「私達は先に行ってるから」

そう言うのと、ピンクのポニーテールと紫のロングヘアの人魚がこの場を後にする。

「ちよつと……!」

追いかけてやうとするが、慣れない足にうまく泳げなかった。

「陸に近づいては駄目よ」

「人間に捕まってしまおうから!」

二人の人魚はそう告げ、今度こそこの場を後にした。

「何なの……………これ……………?」

ほまれがそう呟いたその時、海から一人の男性が落ちて来た。

「あれは……………」

男性の方に泳いで向かい、両腕で抱えてから顔を見る。

「ハリー……………?!?」

その男性はなんと、王子の格好をしたハリーだった。

ほまれはハリーを抱き抱え、地上に出る。

「ハリー…しっかりして!」

ハリーを地面に降ろし、両手で揺さぶりながら呼び掛けると、ハリーが意識を取り戻す。

「——君は……………誰……………?」

「…えっ? 冗談止めてよね。マジ……………なの……………?」

だがしかし、ハリーは記憶を失っており。ほまれはその事実にはショックを受けた。

「……………っ! あれは!」

男性の声が聞こえ、その方向を向くと、一隻の船が現れた。

「ハリーは……大丈夫だよね……」

ほまれはハリーを見てそう呟き、海に戻った。

「王子様……！王子様……！ああ、（無事で良かった……！」

「王子……？（こつて、もしかして……」

海からその光景を見ていたほまれは、どこか見覚えがあつた事に気付く。

「絵本の世界……？」

どうやらほまれとハリーは、猛オシマイダーが作り出した人魚姫の世界に入り込んでいたようだ。

「ハリーだけで良かったのに……！」

一方、その様子を見ていたビシンが爪を噛み締めて呟く。

「仕方ない！こじ開ける！」

「何とかするのです！」

「駄目です！」

ゲイツとマシエリがジカンザックスとツインラブギターを出すが、アムールに止められる。

「何故なのです!!？」

「あのドームは、エトワールとハリーの心を取り込んでいるようです。二人に影響が出るかもしれません」

「じゃあ、迂闊に手は出せ無いな……」

「猛オシマイダー、僕も入れろ」

そう命令すると猛オシマイダーが後頭部に入口を作り出し、ピシンがその中に入る。

「あつ!ズルい!」

「待つて!」

ジオウがその隙に入ろうと試みるが、ピシンを入れると入り口はまたもや塞がれてしまった。

その頃、人魚姫の世界では……

「きつと、猛オシマイダーのせいだ……人魚姫は、私が読んでたからだよね……」

ほまれはこの世界が猛オシマイダーに作り出された事と、図書館で人魚姫の絵本を読んだからこの世界になったと察する。

「でも何でハリーが王子?私のせいか……」

あの時、絵本に出ていた王子がハリーと似ていたからと思ったからだと推測した。

「私の事も忘れてるみたいだし……とにかく早く元に戻して、この世界から抜け出さな

きやー！」

この世界から抜け出るためにまずは、話の内容通りに進めるしかない。

そう考えたほまれは――

「「人間のお城に!?」」

「王子に会いに行かなきゃいけないの。このままじゃ会えないから、人間になる方法教えてくれない?」

人魚達の拠点に移動し、人間になる方法を黄緑のシヨートヘアの人魚を加えた三人の人魚に尋ねる。

「何で王子に?」

「あなたまさか……!」

「恋してしまったのね!」

「してない!」

「じゃあ会いに行かなくても……」

「そうよね……」

「何でも良いから人間にしてっ!」

ほまれは頬を赤くし、そう告げる。

その様子を見た三人の人魚が下の方へ移動し、瓶に入った薬をほまれに見せる。

「確かに人間になる薬はあるけど……」

「王子の一番の存在になれなかったら、あなたは泡になってしまうわ」

「それでもいいの?」

「うん」

ほまれが頷き、薬を受け取って飲む。そこから後は意識が飛んでしまい、彼女の目の前がブラックアウトした。

「……おい!おい!良かった……!」

少し経ってから、ハリーの呼びかけに反応したほまれが目を開ける。

自分の脚を見ると、人間の足になっていた。

「ちよ、ちよっと……!」

だが気付くとハリーにお姫様だっこされ、城に運ばれている事に驚く。

「人魚姫……か。もう少し様子を見ようかな」

その時、崖の上で魔女の姿をしたピシンがそう呟き、クスクスと笑った。

城に案内されたほまれは、部屋の中で座って待つ。

「落ち着かない……」

「だだっ広い部屋を見渡しながらそう呟いているとドアを開く音が聞こえ、ドアの方を向く。」

「いやー、大事無くて何よりや。自分、前も砂浜で会ったな」

そこからハリーが入って来て、ほまれにも会った事を話した。

「本当に私に分からないの？」

「せや、名前聞いとらんかったな」

「ほまれ」

「ほまれか」

(…王子の一番の存在……とにかく、ハリーに私の事を思い出して貰わないと)

ほまれは人魚達に言われた事を思い出しながら、どうすればハリーに自分達の事を思い出してもらえるのか考えていると…

「ほまれ」

「？」

「せつかくお城に来たんやし、オシヤレせえへんか？」

「えっ……？」

ハリーがほまれにそう告げると、服を持ったメイド達が現れる。

色々なドレスに着替えさせられるが、最終的に黄色のドレスに落ち着いた。

「うん。良い感じや。黄色がよお似合っとる」

一方ジオウ達は、猛オシマイダーの前にいるだけで何も出来ないままでした。

「エトワール!ハリー!」

「二人とも大丈夫かな……」

「分かりません」

「すごい怖い夢とか見させられてるかも……!」

「お化け……?!?お化けなのですか……っ?!?」

「おば、おば、お化け……」

「おばけ、やー!」

マシエリのお化けというワードでゲイツとはぐたんが怯えを見せた。

「それより、中の状況は気がかりだ。もし空気が減っているのなら……」

「ツ?!? ハリー!」

「エトワール!」

「返事をして欲しいのです!」

ジオウとエールとマシエリとはぐたんが、オシマイダーのドームに向かってポカポカ殴り付ける。

「叩くのは止めておいた方が……」

「しかし、二人の状態がいつまでも無事とは限らない」

「逆に敢えて少し刺激を与えたら、二人を起こせるかも」

「一理ありますね」

そう考えたアンジュ達は、全員がオシマイダーを叩きながら中にいる二人に呼びかける。

その時、殴られ続けられて怒った猛オシマイダーが、頭部の角から光線を放ってジオウ達に浴びせた。

すると、ジオウ達の姿が変わった。

「これは……赤ずきん……？」

「不思議の国のアリス……？」

「シンデレラ……？」

「桃太郎……？」

「花咲爺さん……？」

「かぐや姫……？」

ライダーのゲイツとウオズは変身が解かれ、ゲイツは桃太郎、アンジュはシンデレラ、ウオズは花咲爺さん、マシエリは不思議の国のアリス、ツクヨミはかぐや姫、アムール

は赤ずきんちゃんに格好に変わる。

「めちよつくじやのう……」

「なんだー！ー！これはー！ー！？」

ソウゴは自身の姿を見て驚きながら叫び、エールは老いた声となっていた。

「浦島太郎なのです！」

エールは老人にされた浦島太郎の格好だった。

「そう言えばソウゴ君は……！！？」

ソウゴも変身が解け、頭には冠、背中にマントをつけていた。

しかし、その格好は……

「ソウゴ……それ……」

全身はパンツだけの素っ裸……童話の裸の王様だった。

「！！！！！！」

ソウゴの姿を見て女性の皆さんはソウゴから目を逸らす。

「裸の……王様だな……」

「我が魔王……」

「王様は嬉しいけどー！なんでコレなのー！」

王様にされたのは良かったが、ソウゴは裸の王様にされて恥ずかしくてマントで体を

隠し動けなかった。

ほまれとハリーは、城で開かれる舞踏会の会場へ移動していた。

「何これ……?」

「舞踏会やで」

ハリーはそう言い、ほまれに手を差し伸べる。

「まあ、いいけど」

ほまれがハリーの手を掴むと、ハリーがリードして踊りを始めた。

「上手いじゃん、ダンス」

「王子やかからな」

「でも私も得意なんだよね」

「オモロイなあ自分!」

ほまれは踊りながらこれまでのハリーとのやり取りを思い出すと、胸の鼓動が高鳴り始める。

「ハリー……」

「何や?」

「……何でも無い」

「おかしなやつぢやな」

するとハリーに身体を密着させられ、更に胸の鼓動が激しくなる。

「ハリー……」

「だから何やって?」

彼女が想いを伝えようとしたその時。音楽が止まり、この会場にいた人達が消滅すると、周囲の空間も変わった。

「えっ……!?!」

二人の前から、薄いピンクのドレスにベールで顔を隠した女性が現れた。

「……ッ!」

その姿に気付いたハリーが、女性の元へ向かう。

「誰……?」

「王子の一番大切な人だよ」

「えっ……?」

ほまれの後ろに突如現れたビシンがそう告げる。

「人魚姫の物語の結末、知ってるでしょ?」

「また会えて……良かった……」

ハリーが安堵の表情を浮かべると、女性に向けてそう言う。

「王子様には別の想い人がいました！恋に破れた人魚姫は、海の泡となって消えるのでした！」

「っ!?？」

「僕も驚いたよ……ハリーもいたって事だね……一番の相手がさ」

それを聞いたほまれは、もしも、この本の結末と王子の心が彼と一緒になら、ハリーには心に思っていた相手がいた事になるという事実気付く。

「この世界は、猛オシマイダーの作り物でしょ……？」

「お前とハリーの心の世界さ」

だがほまれが所詮は自身の心から汲み取ったオシマイダーの世界だと言うと、ビシンはほまれだけじゃなく、ハリーのイメージ世界でもあると語る。

「二人の気持ちが登場人物と重ならなきゃ、この世界にはならない。ハリーは最初から王子役にハマり過ぎて、君の事も忘れてたみたい」

つまり、この世界はほまれのイメージではなく、ほまれとハリーの心がこの話と重なったから、人魚姫の物語となったという。

「ねえ、さつきハリーに何言おうとしたの？ねえつたら！」

「うるさい……！」

「あつははははっ！ハリーがお前なんかを好きになる訳無いだろ！さつきと泡になっ

「ちやえぼー!」

ビシンはさつきまでの彼女の行動と姿を思い出しながら笑い声を上げ、ほまれにそう告げる。

「誰がなるか……!」

「痩せ我慢して無いで早く壊れるよ!前からお前が気に入らなかつたんだ!もう限界なんだろ……!」

ほまれが泣きそうになると足元にヒビが生じ、崩れると周囲の空間が変わり、深海の風景となっていく。

そして遂に足元が崩れ落ち、ほまれは海の中へ落ちて行った。だがほまれほまれは、腕からノイズが生じて消滅されそうになりながらも、ハリーに向けて腕を伸ばす。

「想いを捨てなさい」

「全部、無かつた事にすればいい」

「そうすれば、あなたの心は守られる」

すると三人の人魚が、ほまれを更に海の底へ沈めさせてそう伝える。

「邪魔者が一人消えた」

ビシンがそう言うのと、時の止まったハリーと女性の元へ歩く。

(僕が一番じゃ無かつたんだね……)

しかしビシンは二人の傍で立ち止まり、持った杖で女性のペールを動かす。
「やっぱりお前か……」

——ビシンは目の前に居る女性の事を知っていたのか、苛立ちを隠さずにその女性を睨みつける。

「もういないクセに、僕からハリーを奪い、ずっと心の中に居座る気か！」

爪を伸ばして女性に突き刺そうとしたその時、外から衝撃が生じた。

「ハリー！」

「エトワール！」

一方、外からソウゴ達が猛オシマイダーをポカポカと殴り付ける。ソウゴはツクヨミから羽織を借り、とりあえず素っ裸な身体を隠している。

すると、猛オシマイダーが光線を飛ばして来て、ソウゴ達はそれを何とか避ける。

「もうそれには当たらない——！」

エールが逃げながらそう言うと、腰に痛みが生じて倒れる。

「腰が……！」

「え、エール……」

「大丈夫!?？」

彼女から腰が折れる音が聞こえたソウゴとアンジユはエールに駆け寄る。

「何のこれしき! エトワール!」

エールは大丈夫だと答えると立ち上がり、猛オシマイダーへ向かう。

「クライアス社にやられてる場合じゃないよ! 世界、目指すんでしょ! こんな壁なんて、飛び越えて行くんでしょ!」

「ほまれは、自分の夢を叶えるためにまた飛んだでしょ! ハリーも仮面ライダーなら早くそこから出てよ!」

二人が中にいるほまれとハリーに叫ぶ。

「人の気も知らないで……!」

二人の声は無事に中へ届いていたが、ほまれはエールの叫びに呆れながら呟く。

「でも……自分で言ったんだから、やるしかないか……!」

だが彼女は底まで落ちてからそう呟くと、胸元から光が生じ、再びエトワールに変身。回転しながら海の底から出て来た。

そして周囲の床が凍ると同時に、エトワールのヒールにスケート用のブレードが作り出され、その上を滑る。

「どうして……?」

「沈んだ分、高く跳ばなきゃね！」

「ふぎけるな！」

ビシンがそう吐き捨てるとロープを脱ぎ捨て、ジクウドライバーを取り出す。

『ジクウドライバー！』

『ビシン！』

「変身！」

ジクウドライバーを装着し、ビシンウオッチを装填するとドライバーを回した。

『ライダータイム！仮面ライダービ・シ・ン！』

仮面ライダービシンとなり、エトワールに敵意を向ける。

『ジカントンファアガン！』

そしてエトワールに向かってトンファアを振り回し攻撃を繰り出すと、エトワールは

ジャンプで躲しながら避ける。

「何で！心の痛みに潰れない！痛みを抱えて行くつもりかよ！そんなの、辛過ぎるだろ

！」

「……そうだね」

ビシンが跳びかかってエトワールに攻撃を行うが、避けられる。しかもエトワールの繰り出したキックが、ビシンが身に付けていた装置に叩き込まれて破壊された。

「アンタと私は似てる。嫌になる位にね」

「ふぎけるな……………」

「ハリー……………何も聞かないよ。」

こんなやり方、フェアじゃないから。

その代わり、私の気持ちをもう少しだけ内緒にさせて」

エトワールがハリーに向けて微笑むと同時に、空間が崩壊した。

すると、外の猛オシマイダーから光が放出された。

「光が……………」

ソウゴ達が煙に包まれて元の姿に戻る。

「よかった〜！元に戻った〜！でも、王冠とマントは残したかった……………」

元に戻れたのはいいが、王様と言う地位に立ってたのは事実だから、少々勿体なかったとソウゴは感じた。

すると上空から、ハリーの肩を抱き支えながらエトワールが出て来た。

「ハリー!」

「エトワール!」

「ありがとう。声が聞こえたよ」

「うん！」

エトワールがエール達にお礼を言っていると猛オシマイダーが小さくなり、元の姿に戻る。

「ハリーをお願い」

「わかった」

エトワールはソウゴにハリーを預け、肩を貸してライダー組はみんなから距離を取る。

「一気に行くよ」

「「「メモリアルキュアクロック！チアフル！」」」

ミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「「「ミライパッド！オーブン！」」」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

「「「プリキュア！チアフルスタイル！」」」

そして扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がチアフルスタイルに変身する。

「「「メモリアルパワー!フルチャージ!」」」

チアフルスタイルに変身した五人はパワーをメモリアルキュアクロックに集める。

「「「プリキュア!チアフルアタック!」」」

六色の五つ葉のクローバー型エネルギー弾を発射するチアフル・アタックを放つ。

紫、赤、黄色、水色、ピンクのハートの順に猛オシマイダーにぶつかり、最後にはぐ

たんがハグするポーズをして虹色のハートに包み込み、猛オシマイダーを浄化させた。

「う……うう……ソウゴ……」

「ハリー、眼が覚めたんだ」

オシマイダーが浄化されたのと同時にハリーが目を覚ました。

「何終わった気になってんの?」

浄化されると今度はビシンが現れ、ソウゴ達の前へと降りた。

「ゲイツ、ウオズ……ハリーをお願い」

ハリーを地面に座らせると、ソウゴがビシンの前に出る。

「邪魔しないでよ。オーマジオウ」

「ハリーは渡さない。絶対に!」

『ジオウ!II!』

ジオウウオッチIIを分割しドライバーの左右に差し込み、ソウゴの後ろから二つの時

計のエフェクトが現れる。

「変身！」

ドライバーを回すと二つの時計は左右対象に止まり、ソウゴの体をアーマーが纏う。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

「ふん！ハリーの前に、君達に見せてあげるよ。僕の新しい姿を」

ジオウⅡへと変身したのを見たビシンは、トラウムから預かったライドウォッチを腕のホルダーから取り出す。

『G4！』

「ライドウォッチ？？」

『アーマータイム！〈ブウウ〜ン！〉G4！』

ジクウドライバーのD、3スロットに“G4ライドウォッチ”を差し込み、時計回りに回すと前方に白いボディスーツのようなアーマーがビシンの体に取り付けられ、仮面ライダービシン・G4アーマーとなる。

「なんだあれは？」

「あれは、仮面ライダーG4。仮面ライダーアギトの時代に現れたダークライダーだ」

「ダークライダー？」

「簡単に言えば、我々の知る仮面ライダー達とは対をなす邪悪なライダー達だ」

「そんな奴らの力を……」

「恐らくドクタートラウムが、ダークライダー達の歴史に介入したと思われ……」

ダークライダーの説明をするウオズの話を聞いたアムールが彼の事を思い出ししていると、ダークライダーの力を得たビシンはジオウⅡへと戦いを挑む。

「はああ!」

「くう……」

アーマータイムでパワーの上があった腕力でトンファーをサイキョーギレードで受け止め、両者共攻撃を繰り返し続ける。

「これならどうだい」

ビシンがジオウから距離を取る。

『フィニッシュタイム!G4!』

ウオツチのボタンを押し、ロックを解除したドライバーを回すと、巨大なランチャーを出現させ、ジオウに向ける。

「えッ!?」

『ギガントタイムデストロイ!』

強力なランチャーからミサイルがジオウにむけて放たれた。

ミサイルはジオウの周囲に直撃、ジオウが爆風に吹き飛ばされた。

「うわあああ！」

「まだまだだよ！オーマジオウ！」

『オーガ！』

また違うウオッチを取り出すと、そのウオッチをドライバーへと装填した。

『アーマータイム！コンプリート…オーガ！』

今度は黒と金色の線が刻まれたアーマーを纏い、腰から下半身にかけてコート of 裾のようなローブが付いている仮面ライダービシン・オーガアーマーに変身した。

「今度は仮面ライダーオーガか……」

「オーガって……」

「あれは、ファイズの時代のダークライダーだ……」

『フィニッシュタイム！』

ウオズがオーガについての説明をしていると、オーガアーマーとなったビシンが再びドライバーを回す。

「なんの！」

『フィニッシュタイム！』

ジオウもジクウドライバーを操作し、ピンクと金色の『キック』のエフェクトがビシンを囲むと、ジオウは高く飛び上がりキックの態勢になる。

『トウワイズタイムブ레이크!』

『エクシードタイムデストロイ!』

ジオウの放ったトウワイズタイムブ레이크が、黒と金色のエネルギーを右足から放つビシンのキックとぶつかる。

「くう……」

そしてキックのぶつかりが終わると二人共着地するが、ジオウはバランスを崩してしまふ。

「凄いよ。このダークライダーの力! そうだ! これも!」

ビシンはこの調子のまま、トラウムから貰ったまだブランクな歯車型のウォッチを取り出す。

「っ!?」

「エトワール!」

「はああ!」

するといきなりエトワールが飛び上がり、ブランクウォッチを装填しようとしたビシンの手からウォッチを奪った。

「お前……!」

「エトワール!!?」

「ハリー！使つて見て！」

エトワールが奪つたウオッチをハリーに渡す。

「せやけど……これは……」

このウオッチはクライアス社が作ったウオッチ。普通のウオッチとは違う。

「ハリー！想うんだよ！そのウオッチで何をしたいのかを願うんだ！」

ジオウは以前、自身が使用していたミステリーフレアウオッチが復活した時のように、強い思いにウオッチが応えることを思い出しながら叫ぶ。

「せやな……やってやる！」

その言葉を思い出すと、ハリーはウオッチを握りながら見つめる。

（俺に……はぐたんを……ほまれやソウゴ達を……助ける力を！）

そう願うと、ハリーの握っていたウオッチが光り出した。

そして、ブランクウオッチから黒いものが錆びの様に剥がれ落ち、黒から青と紫の混じった混合色のカラーとなったウオッチが生まれた。

「新しいウオッチだ！」

「ハリー！」

「おお！」

エトワールに返事を返すと、ハリーはドライバーを腰に装着し、自身のウオッチを差

し込む。

『ハリー!』

「変身!」

そのままドライバーを回し、背後の時計の針がそれぞれ2時と50分を指すとアーマーがハリーの体に纏われる。

『ライダータイム! 仮面ライダーハ・リー!』

仮面ライダーハリーへと変身すると、次にハリーは歯車のギアの形をしたウエイクベルを一回転させる。すると、真ん中がライダーの顔となり、すぐさまスイッチを押す。

『ギアジェット!』

「ギアジェット?」

ジオウがウォッチから流れた音声に疑問を浮かべているうちに、ハリーは“ギアジェットライドウォッチ”を装填する。

すると、ハリーの周囲にブースターが武装されているアーマーが現れ、ドライバーを回すとハリーに装着される。

『ジェットタイム! 導け! 切り開く世界! ハリー! ギア! ジェット!』

ハリーの姿が、背中には二本のブースター、足にはローラが取り付けられ、アーマーカラーが青のモノへと変わった。

「ハリー……」

「ハリーの新しいフォームなのです！」

「凄い……」

「ハリー！ スゴギョイ！ スゴギョイ！」

「これは……私のプライドに掛けて、祝え！ 運命の歯車が回り！ 導く未来を目指し！ 新たな世界へと切り開くライダー！ その名も仮面ライダーハリー・ギアジェット！ まさに新たな1ページが開いた瞬間である！」

ウオズがいつもの祝いを叫ぶと、ビシンの方に身体を向けながらハリーが構える。

「どうして、どうしてなんだよ！」

ビシンはジオウからハリーへと向かっていく。

「ッ……」

それを見たハリーの背中に装着されたジェットが火を吹き、ビシンへと飛ぶ。

「なんでさー！ なんでなの！ ハリー！」

ビシンがラツシユを繰り出すと、ハリーもラツシユで応戦する。

「ビシン……」

「なんで僕じゃなくて！ あいつなんだよ！」

「っ!?？」

ビシンのその言葉で、ハリーは一人の少女の存在を思い出す。

「俺は決めたんや! 未来を信じてな!」

ハリーはビシンから離れると地面へ降りる。

『フィニッシュタイム!』

ウオッチのボタンを押した状態でドライバーを回すと、ハリーが腰を低く構える。

『ジェットタイムフィニッシュ!』

そしてローラで地面へ滑り加速すると、ジェットが火を吹き突撃する。

「うおおおおお!」

「グフウツ!」

その加速を利用し、ハリーのライダーパンチがビシンに決まるとビシンは変身解除となる。

「くう……ハリー……」

「ビシン……もうやめへえんか」

ハリーも変身解除し、もうやめようと言う。

「ツッ……ハリー、いつか君を救けるよ。」

そして、僕だけの物してあげる。待っててね」

ハリーにそう告げて、ビシンは去っていった。

「ビシン……」

「ハリー……」

その時エトワールは、ハリーの顔がとても悲しそうな顔になっている事に気付くが、彼女は何も言わず、彼の後ろ姿と、さっきまでビシンが立っていた場所を見届けるのだった。

クライアス社の会議室へとビシンが帰還すると、ジクウドライバーを見つめながら、ハリーと同じネズミの姿に変わる。

「これなら行ける……これさえあればハリーを……！そして、アイツも……！」

ダーククライダーウォッチを見て、ビシンはこの力があれば行けると思う。

「ビシン」

するとビシンの下にリストルが現れ、彼もネズミの姿に戻る。

——リストルも、ハリーとビシンと同様の存在だったのだ。

そしてビシンがリストルの胸元へ移動し、リストルは何も言わずに彼を優しく抱き締めめた。

ソウゴ達は公園に集まり、猛オシマイダーの中で何があったのかと話し合う。

「ソウゴ……裸の王様になったの?」

「うん……格好はともかく、王冠とマントは残したかった〜!」

ソウゴは格好よりも王冠とマントだけは残しかったという。

「それよりも、中で何があったのですか?」

「右に同じ」

えみる達はそう質問するが、ハリーは人魚姫の世界での出来事を覚えて無かった。

「そうなんだ」

何もなかったと言うと、ほまれがハリーに近づく。

「私の前では、しばらくその姿でいなくてくれる?大会に集中したいから」

「へっ……?」

ハリーの両頬を掴み、そう伝える。

はまれは自分の想いを今は胸に秘めたまま、次の大会でも頑張る事を誓うのだった。

そしてハリーは守りたいものを守るために、新たにギアジェットライドウオッチを手に入れた。

次回! Re・HUGっとジオウ!

第42話

2008:

まさかの初恋!!? 宇宙からのライダー!

第42話 2008： まさかの初恋!? 宇宙からのラ

イダー!

此処は、とある刑務所。

そこで収監されている女性と面会する男性がそこにいた。

「服の趣味が変わったわね……」

フウ……ハア……香水の香り……ティファニーね。

それから……ワインの匂い……ロマネサンヴィヴァンでしょう? 奮発したわね。

かわいい彼女のために……でしょ?」

鼻がいいのかと思うような発言をすると、女性の表情は変貌した。

「私は冤罪よ。無実なのよ。自分だけ……幸せになるつもり?」

「……」

そう言われると男性は、彼女に何も言い返す言葉がなかったのか、黙っていることしか出来なかった。

「責めてないわ、いいのよ。仕方がないことなのよ」

「すまない……」

男性は申し訳ないように謝る。

しかしその女性の目は、言葉とは裏腹に、憤怒と嫉妬心に満ちたどす黒い目をしていった。

男性との面会が終わると、女性は牢屋で叫び散らしていた。

「私はやってない……やってないの！無実なの……無実だああーっ!!」
「素敵よ。あなたのその怒り」

無実なのだど泣き叫ぶ彼女の下へ、クライアス社のオーラが現れた。

「誰？、あなた」

「あなたを……あなた自身を解放しなさい」

『キバ……!』

オーラはアナザーキバウオツチを起動し、彼女へ埋め込んだ。

「うわあああああー!!?」

悲鳴を上げると、女性の体の変貌していった。

——懐かしい思い出を見ていた。

それは小学三年の春……叔父さんを仕事の関係で待っている間、この神社で迎えが来るのを待っていた。

「遅いな……叔父さん」

だが叔父さんが中々迎えに来ないので、神社からちよつと外へ出ようとする。

「あ……」

その時、扉の間から見えた桜の下で、桜の花を見ていた女の子がいた。

青い晴着に、髪を結んだ女の子がいた。

顔は見えなかったけど、桜を優しく見るその子に、何かを感じた。

しかし、それが結局誰なのかは、彼にはわからなかった。

——いや、思い出せない。というのが、正しいのかもしれない。

「ソウゴ……ソウゴ……」

その時、自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

「おい！起きろ！」

「ん……ゲイツ……ふわあゝ」

ソウゴは机から顔を離し、欠伸をしながら声のした方を見るとそこにはゲイツがおり、既に次の授業に使う教材を持っていた。

「いつまで寝てるんだ。休み時間終わるぞ」

「うん……ごめん」

そう言つて机から離れると立ち上がり、授業の準備をする。

「急げ、遅れるぞ」

「うん……」

二人が教室を出て行くと、ふと窓の外を見つめる。

（懐かしい夢だったな……）

その時窓から見えた木が、うろ覚えな昔の記憶と重なった様な気がした。

放課後、ソウゴ達はクジゴジ堂へと来ていた。

『いただきます!!??』

今日は叔父の順一郎が自作でアップルパイを用意してくれたので、一同はそれを口にする。

「どうかな？初めて作ったアップルパイ？」

「うまい！」

「ほんと美味しい！」

「この皮のサクサクがいい〜！」

「ああ、イケる。しかし珍しいな。激辛好きのツクヨミが……!」

「うん。これなら全然OK!」

「本当!?」 口についてるよー」

ソウゴときあや、はな、ゲイツが絶賛している近くで順一郎がツクヨミの口にアップルパイのカスが付いていることを指摘すると、彼女は顔を少し赤くしながらふき取る。

「ついにスイーツまで手を出しましたか。出来ればおかわりを」

「私もお願ひします!」

「俺も!」

「もちろん! どんどん食べて」

ウオズとルールー、ハリーの要望で、順一郎はお皿に追加のアップルパイを乗せる。

「この生地ของさ、さくつと感がイケてるでしょう?」

何しろね、この生地作るのに3日かかっているから! 一睡もしてないよ」

彼の言う通り、順一郎の目の下にはクマが出来ていた。

すると、ソウゴがアップルパイを深く見つめていた事にはなが気付く。

「ソウゴどうしたの?」

「この甘ずっぱい感じ……なんていうか……そう、初恋の味?」

『ふうっ!』

彼の口から初恋という言葉を聞き、全員が口を押さえ咽せた。

「初恋だと……!?」 お前、恋を知ってるのか？」

「当たり前だろ、失礼だな。俺だって恋ぐらいするよ」

(初恋……)

さあやが少し複雑そうな顔になっている横でルールーは、初恋というキーワードがどういうものなのか気になっていた。

「失礼ですが……初恋とは？」

「初恋とは、初めての恋！多くの人のにとって、一生涯忘れられない恋なのです！」

「それは、どんな気分なのですか？」

ルールーはえみるにそう尋ねるが、これと言った恋をした事のない本人は具体的な説明が出来ず。多分こう言った感覚なんじゃないか？という考えの下、感情論で教えようとする。

「えっ？えつくと、ですね、胸がドキドキする感覚なのです！」

「ドキドキ……」

それを聞いたルールーは、前にもソウゴに対して、何度か同じ感覚を感じた事があつた事を思い出す。

「初恋か……」

一方、初恋と聞いたほまれはハリーをチラッと見つめる。

「ちよつと意外だなく。ソウゴってなんていうか子供っぽいついていうか……」

以外だなと思つたツクヨミは、彼の初恋に少し驚いていた。

「それでどんな人だったの?」

「私も興味があるのです!」

「フツ……あれは俺が小学生の頃だった……」

「話すのか……?」

ソウゴが初恋のことを話し始める。

「俺、公園で泣いてたんだ。その時は一人で遊んでただけど、膝を擦り剥いちやつて

……」

当時、膝を擦りむいて木の陰で泣いていたあの時を思い返す。

「そしたら通りかかった女の子が絆創膏貼ってくれてさ、『大丈夫?』って……それから一緒に遊んでくれて……」

女の子が膝に絆創膏を貼って貰い、その子と遊んでいたことをとても楽しかったのだと、みんなは聞いていて思った。

「そうして別れ際に……『さようなら。かわいい子』。そう言いながら、俺の顎の下を撫でてくれてさ……」

「お前は猫か……」

顎を撫でてたその子を思い出しながら、溢れんばかりの笑顔で自分の顎を撫でていた。ゲイツはその姿を見ながら、女性がゴロゴロ鳴く猫を優しく撫でる光景を思い浮かべる。

「そうだな。今のはちよつと恋とはいえないかにや?」

「そうかな? 普通に良いと思うけど」

「ええ。とても良い話だと思いますが?」

横で聞いていた順一郎は猫の様な語尾でそう話すが、えみるは頭にハテナマークを浮かべるソウゴの意見に同意した。

「でしょ! それに俺の心の中にはあの子の面影が! それに他にも……」

「もういい!」

「そう?」

「うん」

他にもあるのかと思ひ、ゲイツとハリーが呆れ気味にお断りする。

「焦らずとも、いずれあなたの元には多くの女性が津波のように押し寄せてくるよ。我が魔王」

ウオズがフォローする様に、そのうち彼の下に女性がいつぱい来ると言う。

「ソウゴ君の……初恋……」

だが、初恋の話を聞かされたさあやは浮かない顔をしていた。

「初恋……胸が……ドキドキ……あの時と似ている……」

一方のルーラーは初恋は何かと考えていた。

そんな時、クジゴジ堂のドアが開く音が聞こえる。

「すいません。あ、時計の修理をお願いしたいのですが……こちらは喫茶店ですか？」

男性はアップルパイを食べてるソウゴ達を見て、ここは喫茶店だったのかと思いつむ。

「いえいえ、とんでもないやあ。どうぞどうぞ、どうぞこちらへ」

順一郎は寝不足の影響なのか、呂律の回らない感じで男性をカウンターへと誘導し、仕事内容を伺う。

「はあくこれはいい時計ですね！鳥肌もんだあく！何か云われのある品ですか？」

「ええ。私が初めて勝った裁判の記念に購入したものでして」

「へく、弁護士さんですか？じゃあ、法を守る正義の味方ってことですね」

「いや、凄いなあ。とてもかつこいい仕事ですね！」

ソウゴとはなが弁護士だという男性を褒めるが、男性の顔は優れなかった。

「いえいえ、そんなかつこいいものじゃありませんよ。無実と信じていた被告を守れな

かったこともある」

男性の言う通り、今の日本の裁判で弁護士を雇ったからと言って、簡単に勝てるわけではない。特に日本では、刑事裁判の有罪率は大体99.9%であると言われている。

——ただし、検察官が起訴する事件の割合は37%位だとも言われおり。99.9%という数字は、刑事事件の中で決定的な証拠が挙げられた場合などで行われた裁判での有罪率である。

「冤罪ですか……それは辛いですね」

「裁判とはそういうものだ。仕方ない」

だがしかし、起訴率37%の壁を不運にも乗り越えてしまい、もしそういった裁判に起訴されてしまったら無罪になるのはかなり難しい……とされている事は、あながち間違ではないのかもしれない。

「難しいですよね。裁判に勝つのは」

「裁判じゃ、弁護側が勝つには不利な事が多い時がありますからね……」

「そうなんだ……」

「まあね。あんな綺麗な娘さんが、今も刑務所にいると思うと……」

男性がそう言いながら、当時助けられなかった女性の事を気に病む。

「じゃあ、完了しだいご連絡します」

「よろしくお願いします」

修理する品を預け、男性は去っていった。

すると、ソウゴが男性の忘れ物を見つけた。

「あれ? 忘れ物かな? 俺もっていくよ!」

そう言つてクジゴジ堂を出て、男性へ忘れ物を返しに向かう。

その頃、男性は車で何処かへ向かおうとしていた。

だがその前に誰かが立ちをはだかり、そこから見えた女性は腕を組んだ状態で、ハイヒールを履いた左足で車のボンネットを押さえる。

「何なんだ君は! 危ないじゃないか!」

「いい暮らしをしているな。スーツはオーダーメイド、生地はイタリア製か。昨日は寿司を食べたようね。しかもこの匂い、近海本マグロのトロばかり」

その女性の口調から、男性はその人物が誰なのか思い立った。

「君は北島ユウコ……?」

「思い出したか。お前の下手な弁護のせいで、私は無実の罪を背負った」

確か彼女は刑務所にいた筈……なのに何故ここにいいのか疑問に思っていると、ユウコと呼ばれた女性は男性に近づく。

「何故……何故ここに君が!?？」

「お前に判決を言い渡す。有罪!!？」

ユウコが指を突き刺し、男性に有罪と宣言した。

『キバ……!』

その瞬間、ユウコの体に埋め込まれたアナザーウオッチが反応し。体を覆っているステンドグラス状の器官、頭部から生えているコウモリの翼的な触角が特徴的なアナザーライダーへと変えた。

「えつくと?どこに?」

「うわああああ……ッ!!?」

そこへ、男性への忘れ物を渡しに来たソウゴが現れた。

叫びが聞こえ振り向くと、さっきの男性を見つけた。

「アナザーライダー!やめろ!」

『ジクウドライバー!』

アナザーライダーを見つけたのでジクウドライバーを装着し、ウオッチを取り出す。

『ジオウ!』

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

走りながらジオウへと変身し、アナザーライダーから弁護士の男性を助けに入った。
「大丈夫ですか?」

男性の前へと出て、ジオウがアナザーライダーに構える。

「何だ、お前は?」 私はいずれこの世の女王となる身。 跪け」

「女王……? あ、逃げてください」

「は、はい」

ジオウのおかげで男性は逃げる事が出来た。

「出番よ」

ひび割れたステンドグラスの様な顔から露出した、緑色に発光する瞳でジオウを見据えながらアナザーライダーが指を鳴らす。

「「ガウウ……」」

「なんか、カラフルなの来た……」

いきなり三匹の怪人が現れ、アナザーライダーのしもべとしてジオウに立ちはだかる。

まず、三匹はジオウを取り囲むかのように攻撃を繰り返され続ける。

「ツ……」

三匹に振り回されているジオウは苦戦を強いられる。

すると、フランケンシュタインの様な姿をした紫色の怪人がアナザーライダーに引き寄せられ、ハンマーへと変えられた。

「はあ！」

「うわあ！」

それをアナザーキバが手にし、ジオウへ重い打撃攻撃を打ちこむ。

「ふん！」

ハンマーから怪人に戻すと、次は狼型の青い怪人がアナザーライダーに引き寄せられて剣へと変わり、それを使いジオウへ斬撃を放った。

三匹の連携と武器に変えるアナザーライダーに、ジオウは苦戦を強いられた。

「女王に歯向かう貴様は、ただではおかん！」

アナザーライダーはジオウにそう告げながらジリジリと近寄ってくる。

「見つけたぞ！」

そこへ、背丈の高い男性が現れた。

「脱獄犯の北島ユウコ！貴様を逮捕する！」

男性はアナザーライダーの名を呼ぶと、ベルトのようなものを取り出し、そのまま腰へ巻きつけた。

懐からナツクルのような機械を取り出し、それを手に当てる。すると……

『レ・ディ・ー』

という電子コールが流れ、警告音の様な音を辺りに響かせながらそのナックルをベルトに装着する。

『フィ・ス・ト・オ・ン』

再び電子コールが流れると、それと共に男性の前からアーマースーツが現れ、それが男性の身体に纏われた。

「その命……神に返しなさい!」

顔面部のシールドが展開し、熱を含んだ風圧を生み出しながら赤い刀身が伸びる剣型の武器・イクサカリバーを出現させ、アナザーライダーに戦いを挑む。

「仮面ライダー……!」

アナザーライダーと突如現れたライダー・仮面ライダーイクサが戦っていると、三匹の怪人が襲い掛かってきた。仕方なくジオウは三人の怪人を引き受けることになる。

「三対一じゃ……これで!」

『ディディディ・ディケイド!』

ディケイドウォッチを起動させ、ドライバーへと装填し回転させると、カード型エネルギーがジオウに重なる。

『アーマータイム!カメンライド!ワーオ!ディケイド!ディケイド!ディーケーイー

ドー!!」

デイケイドアーマーが装着され、更にビルドウォッチを起動させる。

『ビルド!』

『ファイナルフォームタイム! ビ・ビ・ビ・ビルド!』

デイケイドウォッチにビルドウォッチを装填して、ビルドスパークリングへとフォームチェンジ。三人の怪人にジオウが挑んでいる間に、イクサとアナザーライダーは戦いを続けていた。

「ふん!」

アナザーライダーが狼の怪人を引き寄せ剣へと変える。

すると、イクサがベルトのホルダーから青と黒のフェッスルのようなもの——『ガルフフェイクフェッスル』を取り出し、ベルトに差し込む。

『ガ・ル・ル! フェイク!』

するとアナザーライダーが持っていた剣はイクサへと移った。

「何?!?」

「はあ!」

イクサはそれを使って斬撃を放ち、アナザーライダーにダメージを与えた。

「貴様ら……この女王に楯突くとは……有罪だ!」

アナザーライダーはイクサへ恨みをぶつけるかのように怒鳴ると、半魚人らしき緑色の怪人がアナザーライダーへと引き寄せられ銃へと変わった。

「っ!?? 危ない!」

アナザーライダーから放たれた泡の銃がイクサに放たれると、ジオウが前に出てジカングレードを盾にして防ごうとするが、防ぎきれずジオウに直撃した。

「あつ……ああ……」

攻撃が終わるとジオウが膝を折り、変身解除させられた。

「君!??」

「くう……」

それを見てアナザーライダーが変身を解いた。

「ほう……中々の度胸。かわいい子」

「えっ?」

それは、ソウゴが小学生だった頃に遊んでくれたの少女と同じ言葉だった。

そう言い残した女性は、ソウゴの前から去っていった。

「なんで……」

「大丈夫か?」

「うん……なんとか?」

ソウゴがイクサに声をかけられ起き上がる。

その場を立ち去ったアナザーライダーの北島ユウコの元へオーラが現れた。

「女王か……それでいいのよ。やはりあなたは話が早い」

「馴れ馴れしいなお前。お前は私の下僕に過ぎん。わきまえろ」

王女を自称するユウコを感心するが、当の本人は力を与えてくれたオーラに対して大きな態度を取る。

「何？お前、誰のお陰でライダーの力を……」

ユウコは文句を言いながら自身の手を掴んだオーラに対し、平手打ちをしようとする。

だがオーラは時を止めて避けた。

「貴様、この女王の手をかわすとは！」

すると、逆上してマンホールの蓋を持ち上げ、オーラへ向けて投げつけた。マンホールはオーラの頬に傷をつけた。

「私の力は、女王たる運命が引き寄せたもの。お前はただの使いっ走りだ」

オーラにきつく言うとユウコは去っていった。

その様子を、アイスを食べながらスウォルトとウール、ピシンが見ていた。

「相当だなあ、あの女」

「とても、トゲパワワに満ちているね」

「ああ。面白い女だ」

愉快そうな顔で見ている三人を余所に、オーラは険しい表情で、ユウコが去っていく後ろ姿を見つめていた。

一方、みんなはクジゴジ堂へ中々戻らないソウゴが気になってしょうがなかった。

「遅いなく、ソウゴ?」

「ちよつと見てきた方がいいかも」

「よし、俺が行って……」

ゲイツがソウゴを探しに行こうとすると、クジゴジ堂のドアが開く音が聞こえた。

「ソウゴ(君)！」

はな達がドアの方を見ると、男性に腕を支えられて少しヘトヘトの姿になったソウゴが戻ってきた事に気付き、さあやとルールーは咄嗟に彼の下へ駆け寄る。

「ここが、君の家か?」

「うん、ありがとう……」

「どうしたの? ソウゴ!」

「もしかして、アナザーライダーかい？」

「まあね……」

とりあえずソウゴを座らせ、何があつたのかを聞く。

「どうぞで」

「ありがとうございます」

順一郎がアップルパイを男性の前のテーブルに置く。

「それで、あなたは？」

「私は名護啓介。素晴らしき青空の戦士だ」

その男性——名護啓介は自己紹介すると、「素晴らしき青空」という単語を聞いたはなが、それがどういう組織なのか気になった。

「素晴らしき青空？ つてなんですか？」

「戦士というには、何と戦つていたんだ」

「我々は人々を守り、ある敵を倒すために結成された組織だったが、今や危険な人物の調査と逮捕に全力を注いでいる」

「へえ、そんな組織があつたんだ」

「興味があるなら、これを読みなさい」

名護はみんなに何かの本を渡す。

「素晴らしき青空への道……」

「753つて……」

『素晴らしき青空への道』というタイトルで書かれた本を渡されたゲイツ達は、表紙の下に書かれた『753』という著書を見て怪訝そうな顔になる。

「なんやこれ?」

「この本は、私が今までの戦いの日々を物語ったものであり、平和を導いた話だ!そしてこの本には、訓練に最適なイクササイズも収録している!」

名護がハイテンションに本を説明しているのを見ると、なんとなく……いや、かなり自分に酔っているのだと想像出来た。

「それで、あなたはそのアナザーライダーを追っていたのは?」

ルルーがハイテンションの名護に言うと、本人は直ぐに我に戻って、新聞のとある記事を見せる。

「昨夜、永夜刑務所に収監中の囚人が脱走したんだ。脱走したのは北島ユウコ容疑者だ」
その話を聞いたツクヨミがミライパッドを操作して、当時の事件について調べた。

「……見て、この裁判記録」

「被告は北島ユウコ、18歳。罪状はノーブル学園の女子生徒を狙った殺人未遂容疑」

ほまれがパッドによる情報を読むと、名護は自身の仮説と調べたことについて語る。

「おそらく、自分を冤罪に追い込んだ関係者を襲ってるのかもしれない。それを見て、俺は彼女を追っていた……」

それに気がかりなのは、彼女には戸籍がない」

「戸籍がないだど?!? つまりそいつは存在しないという事か?」

「それを調べる為に彼女を追っていた。しかも、あの奇妙な力……君達、何があつたらここへ連絡して欲しい」

ゲイツ達に名刺を渡し、名護はアップルパイを食べてクジゴジ堂を出ていった。

「復讐やな……自分を冤罪にしたことへのなら……」

「でも、気持ちには分からないでもないよ。冤罪なんだから……彼女はきつとやってない」

「なんで、わかるんや?」

「だって……俺の初恋の人だから」

『えっ!?!』

『はあ!?!』

ソウゴは先程、名護を攻撃から庇った時に、アナザーキバの変身者だった女性に言われた事が思い出の初恋の人と重なっていたことをみんなに話す。

「またお前が猫だった頃の話か! どうでもいい!!?」

「よくない!」

「大体、お前のそんな子供の頃のあやふやな記憶が、当てになるのかニヤ!?」

「それは……」

「ソウゴ君の初恋……」

「初恋……」

ゲイツにそう言われると本当に初恋の人なのか不安になるソウゴに、初恋と呟きながらさあやとルルーはソウゴを見つめる。

とあるコーヒーカフェにて、一人の男性がコーヒーを飲んでいた。

「以前、この店では世界一美味しいコーヒーが飲めた。」

だが経営者が変わった悲劇……今では世界一不味いコーヒーになった……」

「その割には良く来て下さいますよね?」

「君が目当てさ。もうすぐ世界が終わる。それまではなるべく、美しい物を見ていたい」

「終わる……?世界が?」

「ああ見たんだ。昔、時の扉を開けた時、未来のビジョンを……」

いや……気にしないでくれ。はぐれ狼の戯言だ」

店員にそう言ったその男性が鏡に写ると、その姿が人からかけ離れた青い狼になった。

翌日、ラヴェニール学園の教室で……

「はあく……」

ソウゴが外を眺めながら、あのユウコなる女性の事を考えていた。

「今朝からずつとよく」

少し遠くでツクヨミが、今朝からこんな調子である事をみんなに説明すると、はなが自身の考えを伝える。

「うくん、ソウゴの初恋ならみんなで応援する！」

「相手は脱獄犯だろ」

「めちよつく！ そうだった……」

「それに本当にソウゴの初恋なのその人？」

「本人が言うには確かじゃないの？」

「……」

「ねえ、そのソウゴの初恋の人、本当に殺人犯なのか調べてみない？」

さあやとルールーが黙ってソウゴを見ていると、はながユウコという女性が本当に殺人犯なのか調べようとする。

「だって、本人はやってないって言ってるんだから。本当なら冤罪じゃないかもって

……」

「そうだよ。そうすれば何故アナザーライダーになったのかもわかるかも……」
女性陣はアナザーライダーの裁判の事を調べようとする。

放課後になると、ソウゴは教室を出て一人で先に帰った。

「おい、ソウゴ……ダメか」

「あの様子では、しばらく一人の方がいいかもね……」

「ソウゴ君……」

心配しながらみんなは彼を見つめる。

そんなソウゴは、学校を出ると当てもなくただ歩き続ける。初恋かもしれないユウコの事を考えながら。

(あの人が俺の初恋の人……でも、どうすれば、会えるだろ……)

もう一度会って、本当に初恋の人なのかを知りたいと考えていると……

〈プウゥゥン☒トウウゥゥン♪〉

「えっ? 音楽?」

突然、森の方から音楽が聞こえた。

その音楽は、とても心地の良い響きだった。

「どこから……」

気になって林のある茂みの方へとソウゴは歩き続けると、音の聞こえる元へ近づいて来る。

「(ハハ)は……」

林を出ると大きな湖があった。

「こんな所に湖になんて……」

見覚えのない湖に疑問を覚えながらも周りを見回していると、バイオリンを弾く男性が立っていたことに気づき、ソウゴは近寄る。

「どうした？ 俺の音楽に魅了されたか？」

「えっ？ いや、その……いい音だなんて」

「…そうか」

ソウゴの発言を聞いた男性はバイオリンを仕舞い込む。

「あの、あなたは？」

「俺は紅音也！ とても偉い人だ〜！」

「偉い人……それって王様だった！」

普通の人ならば、今のソウゴの発言で苦笑するか、真顔で「何言ってるんだお前」と言うところだが、今日の前にいるこの男は普通では無かった。

「そうだな……確かに俺は王だった……いや! 無敵だった!

俺の持つ、愛の戦士としての力で敵を倒し! さらに三匹の怪物を従え、世界中の女性を救ってきた! LOVE & PEACEの為に♪」

この男性——紅音也はかなりの自信家であるのか、自画自賛しながらそう答える。それを聞いたソウゴは思わず笑みを浮かべる。

「へえ、実は俺も王様になるのが夢なんだ!」

「ほう、ガキの癖に王様か……けど、お前には悩みがあるな」

「えっ?」

「それは……恋の悩みだ」

「ツ!?? それは……」

確かに自分は初恋かもしてない女性に出会った事で悩んでおり、凶星を突かれてソウゴが黙り込む。

「まあ、俺なら女性を全員同時に愛してやるがな!」

「へえ……全員……」

「けど、結局は最後に愛するのは一人だ……」

そいつの事を絶対に守りたいと思うからこそ、心から好きになる。それが恋だ」

「……本当の好き……」

それを聞いたソウゴは、本当に好きな想いが何なのか、それを考える。「あれ？いない？」

顔を上げると先までそこにいた筈の紅音也は、既にいなくなっていた。すると携帯電話が着信音が聞こえた。

「ゲイツ？何？」

取り敢えず先程のことは頭の隅に移動させ、ゲイツから連絡を受けたのだった。

その頃、釣りをしていた男性の前に北島ユウコが現れた。

「すさんだ暮らしをしているな。」

昨日は泥酔してスーツのまま寝たか？生地がしわだらけだ。最近猫を飼いだしたのは、家族に捨てられて寂しいせいかな？裾に猫の毛が着いている。だがその猫もお前に懐いていない。手の引っかけ傷がその証拠」

「何だ君は！失礼な！」

「お前に判決を言い渡す。有罪！」

「待て！」

そこへソウゴとゲイツが駆けつけてきた。

「またお前か！言ったはずだ。私は女王、邪魔は許さん！」

「あれがソウゴの初恋の人？」

「なんか、わがままのように思うけど……」

（あの人が……ソウゴ君の……）

「続けてやってきたはな達はユウコを見て、第一印象としてわがままなのかも思っ
た。」

「二つだけ、聞かせてほしい……何故あなたは、女王になりたいの」

「この世界の法を正すため。冤罪に泣く人々をなくすため。そのために私が女王とな
り、正しき法を制定する！」

「じゃあ……人々を救うために……」

「何を感心している!? だからといって、人を襲っていいはずがない! この女のしてい
る事は、ただの復讐だ!」

感激しているソウゴに向かって、ゲイツがユウコに指をさしながら叱りつける。

「お前……女王に指をさすとは……」

しかしゲイツに指をさされたのが逆鱗に触れたのか、ユウコが彼に向けて敵意を向け
る。その時、彼らの前に憤慨するオーラが現れた。

「お前は失敗作よ! 私の……この顔に傷を付けるとは!!?」

オーラが怒りを露わにししながらユウコにエネルギー弾を放つが、ユウコはオーラの攻

撃を咄嗟に、たまたま近くにあったマンホールの蓋で防ぐ。

「お前たちはみんな……有罪だ！」

『キバ……！』

ユウコがアナザーキバへと変身し、再び三匹の怪人も出現させる。

「行くよ！」

「うん！」

ゲイツがジクウドライバーを装着し、はなとさあや、ほまれはプリハートにミライクリスタルをセットする。

『ゲイツ！』

「変身！」

「「ミライクリスタル！ハート！キラっと！はくぎゅく！」」

それぞれの変身アイテムが反応し、四人の身体に纏われる。

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

四人が変身を完了し、アナザーライダーへと向かって行く。

ソウゴのタイムマジンでツクヨミ、ルールー、えみる、ハリーがノーブル学園へとやってきた。

「ここみたいね」

「なあ、ここって確か名門な学校じゃ……」

ハリーの言う通り、ノーブル学園はラヴェニール学園と違いかなり名門な学校だった。

「こんな学校で事件があったなんて、信じられないです」

「とにかく、事件の場所へと行ってみましょう」

四人は学園の中へと入り、調査を始める。

「ん?」

「どうしました?」

ツクヨミがふと空を見ると、そこから歪みのようなものが見えた。

「何か……来る?」

彼女は空を見上げ、異変を感じ取る。

同じ時刻、スウォルツも閉じていた目を見開く。

「……」

「どうしたの？」

スウォルツも見上げると、ツクヨミが見たものと同じものが見えた。

同じ頃、アナザライダーと戦っていたソウゴ達もその現象にソウゴ達が驚く。

「なんだ……」

「隕石……？」

空間からワームホールが発生し、そこから出てきた隕石のようなものがはくぐみ市から離れた山の方へと墜落した。

「我が魔王！」

そこへウオズが現れ、マフラーを使ってソウゴ達を現場へと移動させる。オーラも追いかけるように向かった。

そのままソウゴ達は、突如として現れた青いエネルギー体のようなものが山にはさまっていたのを発見した。

「これは……」

「隕石？」

「違う。あれは……」

「生きてる……」

エトワール達が眩いていると、隕石の様に見えるいた青いエネルギー体がまばゆく輝きながら出てきた。

それは、明るい紫色で惑星の様な装飾がなされ、スーツには宇宙に浮かぶ星々の絵が描かれており、金の複眼を輝かせる頭部が何処かフォーゼアーマーに類似しており、何より腰に地球を模した様なものを付けたベルトを巻いていたのが特徴的だった。

「……仮面ライダーギンガ」

「何……? 仮面ライダーギンガ?」

「ふん!」

マントを纏った仮面ライダー・仮面ライダーギンガは問答無用で小さな太陽のようなエネルギーの塊を作り、ソウゴ達に攻撃を仕掛けてきた。

「フレ!フレ!ハート・フェザー!」

アンジュは咄嗟にハートフェザーを展開し、攻撃を耐えようとする。

しかしハートフェザーは破られ、ソウゴ達を庇うように代わりに攻撃を受けたエール達は吹っ飛ばされ、はな達の変身が解けてしまった。

「みんな!」

「う……」

ソウゴがさあやに駆け寄り、彼女を介抱する。

「大丈夫か！」

「うん……」

「なんとか……」

「鎮まれ。私はこの世を統べる唯一の法律——」

突如、アナザーキバが巨大なコウモリのエネルギーの群れを出しギンガに攻撃する。

だが、ギンガには通用しなかった。

「私は宇宙の者。この世界の法律は通用しない。全宇宙を支配する不変の法はただ一つ」

ギンガは彼女の言葉に反論すると、アナザーキバにも問答無用で攻撃した。

「うわあああ！」

アナザーキバも爆風に飲み込まれた。

今の攻撃を見ただけで、あまりにもギンガは強すぎる力を持っていた事を察した。

「強すぎる……」

「ゲイツ！ウオズ！行くよ！」

ソウゴはジオウトリニティウオッチを取り出す。

『ジオウトリニティ!』

ジオウトリニティウオッチを起動し、ドライバーへと装填したソウゴはウオッチのダイヤルを回した。

『ジオウ!ゲイツ!ウオズ!』

「だから……お前はいつも勝手に……」

「や……や、やめて……」

三人が光が包まれ、ゲイツとウオズはやめてほしいと言うが、ソウゴはそれをスルーして問答無用でドライバーを回した。

「変身!」

『トリニティタイム!三つの力、仮面ライダージオウ!ゲイツ!ウオズ!トリーニティ!……トリニティ!!?』

「すべての者は滅びゆく——」

ジオウトリニティへ変身した三人は交戦するが、ギンガが手から生成した半透明な球状物に阻まれているおかげで攻撃は掠りとも当たらず、逆に手をかざしただけで吹っ飛ばされた。

「強いな……おい!あれをやるぞ!」

「おう!……って、アレって何?」

「だからアレはアレだ!!?」

「だからアレって何?」

「アレでは分からない」

「ふっ!」

「ぐえッ!?!」

三人がふわつとした言葉で混乱してる間に、ギンガが近づいてきて蹴り飛ばされた。

「はあく……駄目だこりゃ」

ジオウトリニティでもダメだと思ひ込みたくなる状況を見て、はな達は思わずそう呟いた。

「ゲイツ、ノープランだつて!」

「そんな事は!」

ジオウトリニティはやみくもにパンチ、キックで攻撃を仕掛けるが、まったくギンガへは当たらない。

「効かねえな……」

「俺に任せて」

今度はジオウトリニティがサイキョーギレードを出現させた。

「さすが我が魔王」

サイキョーギレードでギンガに攻撃をしようとする。

——が、またして当たらない。

そしてギンガはサイキョーギレードの刃を掴み、光弾を至近距離で放とうする。

「えっ……あつ!? ちよつと待つてください! 待つて待つて!」

「待つて! 待つて!」

「待ちたまえー!」

ジオウ達は冷や汗をかきながら待つてほしいと頼むが、ギンガにガン無視されてエネルギー弾を押し当てられ吹っ飛ばされる。

「全然効いてないじゃないか!」

「ゲイツだつて!!」

「はあく……では私が!」

『ジカンデスピア! ヤリスギ!』

ウオズへと主導権が変わりジカンデスピアを繰り出す。

しかし、ジカンデスピアでの攻撃も、やはりあっさり防がれてしまう。

「やるじゃないか!」

次にジカンデスピアをカマモードにして降りかかろうとするが、ギンガはその攻撃を避けるとジカンデスピアが地面に突き刺さり、ギンガがスピアに足を乗つける。

「えっ？ちよつとウオズ！」

「ばか！何やつてる早く抜け！」

三人が言い争いをしながらジカンドレスピアを抜こうと奮闘している間に、またしても光弾を受けて吹き飛ばされる。

「なぜ抜かない！」

「すまない……」

トリニティの力はギンガにまったく歯が立たなかつた。

「——それが唯一の、絶対の法」

ギンガがジオウトリニティへ向けて放つた強烈なエネルギー弾は地面に着弾し、彼らを巻き込んで大きな爆発を起こした。

『ぐあつ……ッ！』

「ソウゴ君！」

「ゲイツ！」

「ウオズさん！」

それによりジオウトリニティの変身が解除され、地面に伏せた三人に更なる追撃を行うとギンガが歩み寄っていると、はな達三人が彼らに駆け寄って救出しようとする。

「三人とも大丈夫!？」

「あ……うん、なんとかか……」

「とにかく早く逃げないと……」

……えつと……あ、あつ、ああーっ! あれはああーっ!?!」

「……………」

はなのワザとらしい叫びに反応したギンガが彼女の指をさした方へと顔を逸らした隙に、さあやがソウゴを背負って、ほまれはゲイツに肩を貸して、はなはウオズをお姫様抱っこしてその場から逃げて行つた。

ノーブル学園へとやってきたツクヨミ達は、事件の現場へとやってきた。

「……見たいね」

「あの?」

そこへ、眼鏡を掛けた女子生徒と赤髪の女子生徒が現れた。

「あなたは……」

「七瀬ゆいといいます」

「私は紅城トワと申します」

ノーブル学園の生徒である二人と会ったツクヨミ達。

そこで彼らは、ユウコの事件の真相を知ることになる。

第43話

2018:

初恋さよなら：ファイナリータ

イム!

ソウゴ達がアナザーキバを止めようと戦っていた頃、突如地球へ飛来してきた仮面ライダーギンガが問答無用で攻撃を仕掛けてきた。

ソウゴはジオウトリニティとなり応戦するが敗退し、今はギンガから逃れるため、はな達に運ばれる形で地下へと逃げていた。

「何なんだよ、あのギンガとかいうライダーは!?」

「あの強さ、俺達とは次元が違う」

「強すぎるなんてレベルじゃないよ……」

「宇宙から来たみたいだけど、ウオズ、何か知らない?」

「考えられるのは、時空の歪みからこの世界に迷い込んだ異物」

はなの問いに対して、この世界に迷い込んだ者だとウオズが推測する。

「そう。まるで正体が分からない」

声が聞こえ振り向くと、そこにはスウォルツラクライアス社が現れた。

「お前達にも……?」

「俺が見たところ、あれはただの力。純粹な力だ」

「純粹な力……」

純粹な力と聞き、実際に戦ったソウゴ達は確かに強かったと互いに頷き合う。

「その力が今、人類を滅びの道に導こうとしている。」

ひとつはつきりしているのは、お互いに奴の存在は好ましくないということ」

「手を組む、ということでもいいのでしょうか？」

さあやが端的にそう言うのと、スウォルツは頷く。

「奴を倒すにはそれしかない。」

（そして……あのギンガとかとやらの力も……）」

「……」

ソウゴ達はクライアス社と手を組む方向に話は進むが、スウォルツは裏でギンガの力を狙おうと企てる。

そんな彼の様子を、ウオズは黙って見ていた。

「アナザーキバはどうするの？」

「キバは強い。もちろん奴の力も必要だ」

ソウゴがアナザーキバはどうするのだと聞くと、スウォルツはキバの力も必要だと答える。

ノーブル学園へと来ていたツクヨミ達は、二人の女子生徒へと出会った。

「トワちゃん！ゆいちゃん！」

そこへ、栗色の髪をお団子ヘアにまとめている一人の女子生徒が来た。

「はるかちゃん」

「あなた方、見たところ学園の人ではありませんね」

「ええ、私達ラヴェニール学園から来たの」

「ラヴェニール学園？」

「ラヴェニール学園って、結構遠くからじゃないですか!?!」

「あの、ここには……」

「その子かわいい！」

ルールーが言いかけると、はるかと呼ばれた少女はハリーが抱いているはぐたんに目が光る。

「はぐたんって言うんや。よろしゅくな！」

「はぎゅ〜♪」

「はぐたん！私のはるか、よろしくね♪」

はるかのはぐたんのかわいいさに気を取られてしまう。

「あの、私達少し気になる事があったので、ここに来たんです」
気を取り直してルーラーが目的を話す。

「去年のここで事件について調べに来たのです」

「「っ!?」」

去年の事件について聞くと、突如三人が言葉に詰まる。

「何か知ってるの?」

「あなた方まさか……あの方の仲間ですか?」

「えっ?」

トワがツクヨミ達が誰かの仲間だと思われてしまった。

「心配はない。彼女達は違う」

その時、聞き覚えのある声が聞こえた。

彼女達の下へ来たのは、この前ソウゴを助けてくれた素晴らしき青空の会の戦士、名護啓介だった。

「名護さん」

「名護さんはどうしてこちらへ?」

「おそらく、また北島ユウコはここへ来るかもしれない。だから、この学園で待ち伏せしているのだ」

「……」

「教えてくれない？この学園の子と北島ユウコとの間に、何があつたのか。私達も力になりたいの！」

ツクヨミが自身の思いを告げると、はるかは辛そうな表情を浮かべるが、意を決したかの様に前に出た。

「その……私なんです……」

『えっ？』

「私なんです。襲われたの……」

春野はるか。その少女こそが、北島ユウコによる殺人未遂事件、あの時に襲われた被害者だと打ち明けた。

その頃、ソウゴ達はアナザーキバであるユウコに力を貸して貰うべく、彼女との接触を図る。

「こんな時に美容室か。何を考えている？」

美容院からユウコが現れると、クライアス社達我先に接触してきた。

「私はこの世界の女王となる身。いついかなる時も美しくなくてはならない」

背後からソウゴ達も現れた。

「まさに女王様に相応しい美しさ。輝くようでございます」

「ほくう……分かつてるようだね」

スウォルツのお世辞にユウコは気分を良くする。

「女王様。実はお願いがございます」

「苦しゅうない。言ってみろ」

「ギンガなるものを倒すべく、ぜひお力添えを」

「いいだろう。ただし条件がある。全員私の前に跪け」

「わかりました。ふん！」

スウォルツが力づくで後ろにいるオーラやウール、ビシン達を膝間尽かせる。

「何故……おい！」

はなとほまれがゲイツの頭をを無理矢理さげさせる。

「今は我慢だよ」

「とりあえず、今はお願い」

とりあえずソウゴ達も跪く。

「これでご満足いただけましたか？」

「ああ、満足した。じゃあな」

この光景を見たユウコは満足そうな顔でそう告げるとソウゴ達に背を向け、去って行

こうとする。

「待て！何処へ？」

「気が変わった。女王たる私が、お前らのような有象無象と手を生むのは品位に関わるからな」

「貴様！状況が分かっているのか？！」

「お前の意見など求めていない」

スウォルツは自らの口癖で一蹴され、それを聞いたウールは思わず吹きだす。

「ギンガとか言ったか。奴のことはなかったことにする」

「そんな……」

「なかったことに……現実逃避か？」

「意味が分かんない」

「魔女王だな」

「待ってください！」

ゲイツとほまれが文句を垂れ、ウオズがそう呟いていると、さあやがユウコの前に出る。

「なんだ、この娘？」

「女王様なら、困っている人を見過ごすんですか！冤罪に泣く人を助けて、今そこに苦し

んでいる人は助けませんか!」

「私は女王だ。だが、状況判断する事も必要。だから、ギンガをなかつた事にした」

さあやの言葉でも彼女は、ギンガの事はなかつたことにしようとする。

「あなたは……」

「あのっ……!」

さあやはそんなユウコに更に声を掛けようとするが、今度はソウゴが前へと出る。

「ユウコさん。俺のこと覚えていませんか?」

「えっ?」

いきなり、小さい頃に会った女性だと思い尋ねた。

「お前……こんな時に何言う……」

さすがに子供の時に、しかも会ったのが1回だけだし、その時の事も話さずに覚えてるわけが……

そうゲイツは思っていると……

「……………ああ、思い出した。お前か」

「ええ……?」

ユウコの口からは、ソウゴとは会ったことがあると口にした。

しばらくして、ソウゴ達はクジゴジ堂へ戻った。

「一体何を考えているあの女は!!?全然理解出来ん!!?」

「本当だよ!どこまでわがままな女なのよ!」

「はあく……全く……出来れば関わりたくないが……」

ゲイツ達はユウコの自己主義にイライラしていた。

「やつぱりなく。あの人が、あの時の女の子だったんだ。また会えるなんて感動つてい
うか……」

「…待って。あの時の女の子ってまさか?」

「俺さ。心の中でずっと名前を付けてたんだ。昔遊んでくれた女の子だったから」

はなの質問に対し、ソウゴは恥ずかしげも無く答えるとゲイツは思わず呆れる。

「恥ずかしくないのかお前!!?」

「全然」

初恋の人がユウコだと知り、ソウゴは浮かれていた。

そんな浮かれたソウゴに対しさあやは少し暗い表情になっていた。

そこへ順一郎が現れ、甥っ子の「初恋の人」と言う言葉に反応する。

「ちよつとソウゴ君。まさか例の初恋の人に会ったの?」

「うん」

「それは奇跡だよ！運命の出会いかも知れないね！今日はご馳走だ！ハハッ！初恋はどんな味かニヤア〜！」

順一郎も浮かれだし、キッチンへと急ぐ。

「でも北島ユウコは今、冤罪の復讐をしようとしているわけだし、本当に冤罪なのか？」

「もしそうなら真犯人は誰なのか？」

「そういえば、ツクヨミ達何か掴んだのかな？」

はなは事件のあったノーブル学園にいたツクヨミ達が、何か掴んだのかなと思っ
た。

「どちらしろ事件の真相が分からなければ、手を組むも組まないもない」

「よし、俺が過去に飛ばう」

「私も行くよ。もしかしたらこともあるし」

「わかった」

「確か、ノーブル学園で起こった事件。その時の状況を見た方がいい」

「よし！行くぞ！」

「うん！」

ゲイツは自分のタイムマジンへと向かい、ほまれと共にノーブル学園の事件の起きた当日へと設定する。

「時空転移システム。起動！」
年号を指定し、タイムマジーンは過去へと飛ぶ。

その頃、北島ユウコはランニングをしている男性の前へと現れた。

「判事の及川順一だな。お前に判決を言い渡す。有罪！」

アナザーキバへと変身して判事だった男性を襲っていたその少し離れた所で、ギンガが街へと現れて街の人を襲撃していた。

「この〜！」

既にビシンとタイムジャッカー達がギンガと戦闘を行なっていた。

『オーガ！』

ビシンはオーガのライドウオッチを取り出し、そのウオッチをドライバーへと装填した。

『アーマータイム！コンプリート…オーガ！』

「これならどうかな〜」

オーガアーマーとなったビシンはギンガへと立ち向かい、ジカントンファーとタイムジャッカー達の衝撃波で攻撃しようとする。

しかし、ジオウトリニテイの時のようにギンガの周りに展開された壁のようなもので

守られていた。

「ふん！」

「うわあああああ」

「邪魔だ！」

ウールとオーラを吹き飛ばし、先に吹き飛ばされたビシンは変身解除となる。

「ギンガだ……」

ようやくソウゴ達がギンガの現れた現場へと到着した。

「行くよ！」

『ジクウドライバー』

『ビヨンドライバー！』

はなの掛け声と共に二人はドライバーを装着し、ソウゴとウオズもウオッチを取り出した。

『ジオウ！』

『ウオズ！』

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

掛け声共にソウゴとウオズはドライバーを回し、はなとさあやはミライクリスタルを

セツトし、姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダージオーウ！』

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

今度は入れ替わるようにジオウ達がギンガへと挑む。

「はあ！」

「はあああ！」

ジカンギレードとジカンデスピアで攻撃を繰り返す。しかし、これもまたギンガの放っている壁に阻まれ阻止される。

「くう！」

「やはり、至近距離では無理か……」

「フラワーシユート！」

「フェザーブラスト！」

今度はエールとアンジュのメロディソードで、フラワーシユートとフェザーブラストを同時に放った。

「無駄だ」

「これもギンガの張る壁がそれを防ぐ。」

「そんな……」

「遠くからでもダメなの……」

「愚か者ども!」

「エール! アンジユ!」

そこへ、判事の男性を追っていたアナザーキバが、ギンガと戦うジオウ達を見かける。

「ふん」

ユウコはアナザーキバから変身解除すると、ジオウ達が戦う姿を見ず立ち去ろうとする。

その時、ギンガの攻撃の矛先がユウコへ向けられた。

「危ない!」

「ソウゴ! ダメ!」

ジオウはギンガの攻撃の方を見ると、ユウコへと放たれると見て咄嗟に前に出た。

「うわああああ!!?」

咄嗟に彼女を庇ったジオウは吹っ飛ばされた。

「ソウゴ君……!!?」

「二人は我が魔王を!」

「はい!」

ウオズ一人を残し、エールとアンジュはジオウの元へと急ぐ。

『カマシスギー！フィニッシュタイム！』

ジカンデスピアのパネル全体をスワイプさせてエネルギーを蓄積させ、スウォルツも衝撃波を放った。

「ツ……」

ウオズとスウォルツの同時攻撃炸裂し、ギンガに効いた様子で動きが止まる。

「まだまだ……キバって……」

ギンガは反撃しようとするが、ちょうどその時太陽が隠れ、空は真っ暗になる。雷鳴が響きだすと、ギンガは石の様になり停止した。

「やったのか？」

「いや。まだだ……」

過去へと飛んだゲイツとほまれは、事件が起こるノーブル学園の中へと入っていた。

「事件まであと何分？」

「あと十分だ。急ぐぞ！」

二人は現場へと急いで向かう。

一方、現代でギンガに飛ばされたソウゴは目を覚ました。

「……………ん……………」

目を開けると、ソウゴの前には庇ったユウコがいた。そして彼女は、ケガをしたソウゴの腕に包帯を巻いてくれた。

(同じだ。あの時と……………)

それは、過去で一緒に遊んでくれた女の子が膝に絆創膏を貼ってくれたあの子の行動と同じだった。

「ありがとう」

「気にするな。お前は私を庇った。忠実な下僕は大事にしないと」

「あの、あの時の女の子さんと呼んでいいですか？」

「断る」

「……………じゃあユウコさんで……………」

とりあえず、名前で呼ぶ事は了承してくれた。

「あの……………実は俺、王様になるのが夢なんです」

「ほう、私と一緒だな」

同じ目標だと話すと、ユウコが立ち上がる。

「お前が王様で私が女王。2人でこの世界を支配するか？」

「え…………？それって…………結婚?!？」

「私達の子供で全世界を埋め尽くす」

「子供…………?!？」 いやいや冗談ばっか！俺はまだ中学生ですし…………」

流石に結婚は中学生にはまだ早すぎるように思えたし、子供と言われても流石にと、ソウゴが狼狽していると…

「それよりお願いします。もう復讐はやめて下さい。ユウコさんには似合いませんよ」

ソウゴは話を変える為、裁判で関わった人達への復讐をやめて下さいと頼む。

「……………そうだな。分かった」

「ほんと?!？」

「ああ…………」

ユウコは止めると約束し、ソウゴの下から去っていった。

「よかった…………」

「あの女は止めておけ」

もう復讐はしないと知りホツとしていると、階段を降りてくる音が聞こえた。

振り向くと、そこからサングラスを掛けた男性が現れた。

「あの女に気を許すな」

「…どうしてそんなことを言うの?」

「俺はキバの僕として、その女を守ってきた。だから分かる、あの女は腐っている」
「腐っている……?」

「そして、お前は近いうち深く傷つくだろう」

「えっ?」

「だがそれもいい。男は傷つく事で磨かれる……」

それでもわからない時は会いに行け、本物にな」

「本物の?」

サングラスの男性はそれだけを言い残して、ソウゴの前から去っていく。

「ソウゴ(君)！」

そして入れ替わるように、はなとさあやがやってきた。

ノーブル学園にいたツクヨミ達は、はるかやトワから事件の内容に聞かされた。

「北島ユウコは……この世界の人間じゃない?」

「どう言う意味なのです?」

「彼女はホープキングダムから来た人間です」

えみるの疑問にトワが、ユウコはホープキングダムから来たと話す。

「ホープキングダムとは？何という国です？」

「それって、こつちの世界じゃない。別の世界。そう言うところかしら？」

「そんなところですよ」

以前に行つた魔法界。それと同じものだと思い、ツクヨミが耳を傾ける。

「その……アナザライダー、ですか？彼女は私の兄の元婚約者なるはずだった方なのです」

「元婚約者？」

彼女曰く北島ユウコは、トワの兄の元婚約者だったらしい。

「はい。ですが、私の兄ははるかとの結婚を約束していて、婚約者との結婚は破綻になったのですが……」

「その元婚約者は、その子に手を掛けようした……」

「北島ユウコ……彼女はこちらの世界の人間ではなく、ホープキングダムと呼ばれる世界からきた人間だと」

それをつクヨミ達と話を聞いていた名護は、彼女に戸籍がなかった理由を理解した。

「もしそうなら、裁判に関わつた関係者だけじゃなくて、はるかさんも狙つてい……」

その話が本当なら、北島ユウコは必ずここにも現れる。

「でも、今度はちゃんと話をしたいです」

「話をですか?」

するとはるかば、次会った際は彼女に謝りたいと話した。

「あの時は……私いきなりで何も言えなかつたんです。プリンセスとして……」

今から数年前、過去で事件のあつた場所へゲイツとほまれやつてきた。

「あれか」

二人が雨に打たれながら近づこうと試みていると、過去の北島ユウコを目撃した。

だがその時、彼女はマンホールの蓋を引きづつてきており、そこにいる傘をさした誰かに振りかざさんと持ちあげる。

「よせっ!」

「ダメ!」

二人が叫んだ時には遅く、北島ユウコは呆気にとられていた少女の持っていた傘をへし折りながら、彼女を殺さんとマンホールを振り回し続ける。

「フハハハ……」

そのときの彼女は、相手を苦しめている事を喜ぶかのように、そして狂った様に笑っていた。

その後、彼女が振り回したマンホールは少女には直撃しなかったが、警備員に抑えられ警察へと送られた。

現代では雨が降ってる中、アナザーキバに襲われた裁判関係者の三人が集まっていた。

「やはり、我々の恨んで……」

「おそらくそうでしょう……」

「三人一緒とは都合がいい」

突然、話し合っている三人の前にユウゴが現れてアナザーキバに変身した。

「仲良く裁きを受けろ!」

まとめて捕縛すると、自身の爪を鞭のようにして彼らの胸へと刺し、ステンドグラス状にして砕き、殺害する。

そこへソウゴとはなとさあやが駆けつけてきた。

「っ!?」

「ユウゴさん!なんで……さつき約束してくれたじゃないですか!!復讐はやめるって!」

「この世界の法を、改正したまでのこと」

辺り一面に散らばった色とりどりのガラス片——さつきまで人だったものを見て、声を漏らして驚愕する三人。

そしてソウゴとの約束を破ったことに対して、ユウコは悪びれることなくそう答える。

「そんな……そんなの間違ってます!」

「ユウコさん……」

「……なあソウゴ。なぜ私が、こんな私だか分かるか……雨のせいなんだ」

間違っていると叫ぶはなを無視し、驚愕するソウゴに向けてそう言うと、ユウコが振り続ける雨を見上げる。

「死んだ母が言っていた。私を産んだ時は酷い雨だったと。

それ以来ずっと雨なんだ。ずっと……」

「なら俺が……俺がユウコさんの傘になる!だから……」

そこへヘゲイツとほまれ、ハリーが駆けつけて来た。

「ソウゴ!その女から離れて!!?」

「冤罪というのは、その女の嘘だ!」

「嘘……?」

「どう言う事なの!? 嘘って……」

「そいつは、自分の婚約が破綻となり、ノーブル学園にいたその生徒を襲ったんや！」
真実を知ったソウゴ達は、ユウコに疑いを感じ始める。

その時。停止していたギンガに太陽の光が当てられ、再び動き出した。

「何!?？」

「そうか。奴は太陽の力で動くのか」

ギンガが動くのは太陽から放たれるエネルギーによるものだと知ると、ウオズは再び動き出したギンガに応戦する。

「ギンガか！」

ウオズが戦っている姿を見かけるとソウゴ、ゲイツ、ハリーはギンガの元へと向かう。

『ジオウ！Ⅱ！』

『ゲイツリバイブ！疾風！』

『ギアジェット！』

「「変身!!？」」

三人はドライバーにウオッチを装填し、ドライバーを回す。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！』 ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

『ライダータイム！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイブ疾風

「疾風!」

『ライダータイム!ハ・リ・ー!ジエツトタイム!導け!切り開く世界!ハリー!ギア!ジエツト!』

ソウゴ達も変身を完了し、四人でギンガへと勝負を挑む。

「はああ!」

ジオウがパンチを繰り出すがやはり防がれる。次にハリーがジエツトの加速でキックを繰り出す。

「くう!」

これも壁に阻まれ跳ね返された。次にゲイツがジャッククローを繰り出す。

「ぐわああああ!」

ジャッククローが手から離れ、ゲイツが飛ばされる。

四人がかりで挑んでもギンガには通用しない。

「さらばだ!」

『ギガンテックギンガ!』

ギンガは手からエネルギーの弾を作り出し、ジオウへエネルギー弾が放たれた。

「ソウゴ!!?」

その時、ユウコがジオウの前へと現れ、手に持ったマンホールでギンガの攻撃からジ

オウを守った。

「ユウコさん!!?」

「女王様の気まぐれだ」

「ありがとう」

『キバ……!』

無駄に頑丈だったマンホールを投げ捨て、ユウコがアナザーキバへと変身する。

「おいで!」

アナザーキバが二匹の怪人——バツシャーとドツカを出現させ、ジオウ達と変わってギンガへと応戦する。

「どう言うことや?」

「とにかく、奴がアナザーライダーが気を取られている内に仕掛けるぞ!」

「ああ!」

ギンガがアナザーキバに気を取られたところにウオズ、ゲイツがジカンドスピアとジカンジャックローを投げつける。

当然この攻撃も受け止められるが、ジオウが投げたサイキョーギレードはギンガの両手が塞がっていたためかバリアが張れずに見事直撃した。

「ぐうおおお!!?」

「今やー!」

その隙にハリーがジカンチェーンを放ち、ギンガの動きを拘束した。

「行くよー!みんな!」

ジオウの合図で四人がドライバーを操作する。

『『『ファイニッシュタイム!』』』』

『ビヨンド ザ タイム!』

四人が同時に飛び上がる。

『トウワイズタイムブ레이크!』

『百烈タイムバースト!』

『タイムエクスプローション!』

『ジエツトタイムファイニッシュ!』

四人が同時にライダーキックを放ち、ギンガは身動きが出来ないまま彼らのキックが直撃。ジカンデスピアとジカンジャックローとサイキョーギレードがギンガの体を貫通した。

「ギャラクシイイイーっ!!?」

そして独特の断末魔を残してギンガは爆発し、ジオウ達が着地した。

ギンガが爆散した後、残骸から現れた白いエネルギーが宇宙に向けて放出された。

だがその力は、スウォルツの持っていたブランクウォッチに宿った。

「これで…」

笑みを浮かべるスウォルツだったが次の瞬間、黒いマフラーが彼の持っていたウォッチを奪取した。

「何?」

ウオズが意表を突いてスウォルツからウォッチを奪ったのだ。

「残念だったね。君の思惑ぐらい読めていたよ」

スウォルツにそう言うと言おうとソウゴ達をマフラーで囲い、スウォルツの前から去っていく。

ノーブル学園ではプリンセスというはるかか言葉に、ツクヨミ達が反応する。

「プリンセスか……なんかソウゴ似ているね」

「ソウゴ?」

「似てるって?」

「ソウゴとは、どなたですか?」

はるかかゆい、トワの三人は知らない名前が出てきたことに疑問を抱き、誰なのかと問う。

「ソウゴは私達の……」

「友達なのです！時見先輩も王様になるといつも言ってるのです！」

「でも、なんで王様？」

「言っていたのです！民を救う最善最高の王になると！」

えみるがソウゴの夢を話すと、王と聞いた名護が昔をふつと思ひ出す。

「王か……私も、王であつた子を知っている」

「えっ？王様とお知り合いなのですか？」

「ああ、それで大事な人を彼は救つた。彼の名は……紅渡」

「紅渡……」

はるかかのプリンセスとソウゴの王様になる夢、どちらも似ている。そして名護の知る『紅渡』という人物の事を口にしていた。その時……

「いい女だな」

女性の声が聞こえ振り向くと、そこには赤いドレスを着た北島ユウコがいた。

「女王としての足りないものを磨き、よりさらに歩み。真つ直ぐなその気持ち。」

そんなお前だからこそ、カナタは惹かれた……お前は有罪だ！」

彼女は殺意の込められた視線を突き刺しながら、はるかに指さして有罪と叫ぶ。

「待つてください！結婚がどう言うものかわかりません。」

「あなたが言っているのは、ただのはるかへの嫉みからではないですか？」
みんなははるかの前と出て、ユウコに立ち塞がる。

「うるさい！邪魔をするな！有罪！」

『キバ……！』

ルーラーの言葉に感化されたのか怒鳴り出し、彼女はアナザーキバへと変身した。

「北島ユウコ。これ以上はやらせない！その命、神に返しなさい！」

名護はイクサナツクルを取り出し、手に当てる。

『レ・ディ……』

ナツクルから『ready』という電子コールが流れ、ベルトに装着する。

「変身！」

『フィ・ス・ト・オ・ン』

前方に白いアーマースーツが形成されると、名護はそれを自身の体に纏い、仮面ライ
ダーイクサに変身する。

更にイクサは口元からケータイの様な端末機——『イクサライザー』を取り出し、コ
ンソールのキーを「1」「9」「3」の順に押す。

『ラ・イ・ジ・ン・グ』

通話ボタンを押すと再び電子コールが流れ、それと共に胸部装甲が展開し、アーマー

が一瞬のうちにパージされた。そのまま顔面のシールドが変形し、青く変わったライジングイクサへと変身した。

「私も闘います!」

「はるか!あなたは……」

「あの人は、向き合わなきや行けないんだ!」

はるか達は彼女達自身の力の源であるアイテム、『プリンセスパヒューム』と『ドレスアップキー』を取り出し構えた。

「プリキュア!プリンセスエンゲージ!」

何度も行ってきた変身フェーズを繰り返し、彼女達の力をモデルとした光が二人を覆っていき、その姿を変えていく。

「咲きほこる花のプリンセス!キュアフローラ!」

「深紅の炎のプリンセス!キュアスカーレット!」

「冷たい檻に閉ざされた夢…返していただきますわ!お覚悟は、よろしくて?」

二人がドレスの様なコスチュームを身にまとったプリキュア—プリンセスプリキュアへと変身した。

「プリキュア……やはり、プリキュアの先輩にお会い出来たのです!」

えみるはまた先輩プリキュアに会えて、テンションが上がりそうになる。

「えみる！私達も！」

「あつ、そうでした。ルーラー！」

「はい！」

えみるとルーラーの二人はプリハートを構えた。

「ミライクリスタル！ハート、キラつと！はゞぎゅゝ！」

ミライクリスタルとプリハートをセットし、手順を取ると二人の姿が変わる。

「輝く未来を、抱き締めて！みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

二人も名乗りを上げ、変身を完了した。

「プリキュア……その力を持つているあなた達はみんな……有罪！出なさい！」

アナザーキバが命ずると、バツシャーとドツカが出現した。

だが今回はこの二匹だけじゃなく、ルーク、ビシヨップといったチエツクメイトの幹

部ファンガイアまでも出現させた。

「ビシヨップ！」

イクサは自身と因縁のあるファンガイアが出現したことに驚き、アンジュは聞いていた数よりも多いことに驚愕した。

「なんなのです!」

「アナザーライダーの力が強くなったのです。あの人の心が、力を強くさせた」

「行きなさい!」

四体の怪人は五人に襲いかかる。

「くう!」

イクサはイクサカリバーで白鳥のような装飾とアゲハ蝶を彷彿させる姿のファンガイア、ビシヨップこと『スワローテイルファンガイア』の持つ剣と何度もぶつかり火花を散らす。

「なるほど、力は同じというわけ……」

やはり過去に何度か戦ったことのある相手と同じ実力だとわかり、イクサは苦戦を強いられている。

スカーレットはライオン型のファンガイア、ルークこと『ライオンファンガイア』と戦闘していた。

「これでは……フローラが……」

パワー自慢のルークにスカーレットは足止めされ、フローラを助けにも行けない。

そこへ、扉を開く音が聞こえた。

「やはり遅かったか!?」

「早く止めるんや！」

ギンガを倒し、ツクヨミから連絡を受けたゲイツ達が駆けつけた。

「みんなー！」

「みんな行くよー！」

はなの掛け声に、ゲイツ達はウオッチとクリスタルを取り出す。

『ゲイツリバイブ！剛烈！』

『シノビ！ アクシヨン！』

『ギアジェット！』

ウオッチをドライバ―に装填し構えると、はな達三人もプリハートを取り出す。

「「変身!!?」」

「「ミライクリスタル！ハートキラツと！」」

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！ 剛烈！』

『投影！フューチャータイム！誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャーリングシノビ！シ

ノビー！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハ

リー！ギア！ジェット！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

変身を完了させ、全員が散らばり応戦する。

「やめて!」

エールがフローラとアナザーキバの間に割って入り、フローラに加勢する。

「あなた……プリキュア?」

「私はキュアエール!助けに来たよ」

「キュアエール……私、キュアフローラです」

お互いに自己紹介を済ませると、アナザーキバがこちらを向くと、二人は構える。

「一緒に止めよう!」

「ええ!」

二人がかりでアナザーキバに立ち向かう。

「はああ!」

『のこ切斬!』

ゲイツはアムールとマシエリと共にドツカに反撃に出る。

「はああ!」

「オリヤ!」

離れた所でバツシャーはウオズとハリーが応戦。

アンジュはイクサの元へと現れた。

「フレフレ！ハート！フェザー！」

ハートフェザーのバリアを開き、ピシヨップの剣を防ぐ。

「君は……」

「名護さん！」

「……ああ！」

アンジュが現れた事に少し驚いたが、イクサは直ぐに気を取り直し戦闘に目を向けると、攻撃を止めているうちにイクサは飛び上がる。

「イクサ……爆言！」

宙で一回転し、ピシヨップにイクサカリバーを繰り出した。

「あああ……」

スカレットはルークのパワーに押されており、ルークはさらに力で押し込もうとする。

「はああ！」

そこへエトワールが現れ、キックでルークのバランスを崩させた。

「あなた……」

「キュアエトワール。よろしく」

自己紹介すると、ルークは起き上がり迫ってくる。

「……タフさだけは凄いね。でも……」

エトワールは一直線に向かい、ルークにラッシュを繰り出す。

「私も負けてられませんわ」

スカレットは立ち上がり、エトワールと共にラッシュを繰り出し反撃に転じる。

「ヤアアア!!?」

エトワールとスカレットのダブルパンチが、ルークに炸裂した。

「行きますわよ!」

「うん!」

そしてアナザーキバは、エールとフローラと戦っていた。

フローラはアナザーキバの攻撃を鮮やかに防御しながら受け流している。

「はああ!」

アナザーキバの攻撃が終わると、エールが攻撃を仕掛ける。

「行くよ!」

「フレフレ!ハート!フォウユウ!!」

エールはプリハートにクリスタルをセットし、放たれたハートフォーユーがアナザー

キバの動きを止める。

「フローラー！」

「任せて！」

エールの合図でフローラーがドレスアップキーを取り出す。

「エクステンション！モードエレガント！」

ドレスアップキーを差し込み、モードエレガントへと姿を変える。

「舞え！花よ！プリキュア！フローラル・トルビヨン！」

両手に集めた花びらを花吹雪のように放つ、フローラル・トルビヨンを放った。

「ぎげんよう」

これで倒せたと思ったその時…

「っ！！？」

赤黒い蝙蝠の群れが現れ、フローラーを囲む。

すると蝙蝠が彼女に一齐に攻撃し、攻撃を終えるとそこからアナザーキバが現れた。

「あああ…」

「フローラー！」

エールは膝を折るフローラーに駆け寄る。すると、アナザーキバが二人の前に現れる。

「待って！」

アナザーキバがフローラへ攻撃をしようとするその前にソウゴが現れ、アナザーキバに待つてと呼びかける。

「どけ! その女は有罪だ!」

「もうやめて! こんな事しても何もならない!」

「許せないんだ! 私から、私の相手を奪ったこの女がツ!!」

「ユウコさん! 私が憎いのはわかります!」

でも……もうやめて下さい! 恨みなら私が……」

「うるさい!」

フローラは彼女に謝罪をするが、それでもアナザーキバのフローラへの恨みは強く。その憎しみに満ちた声を聞いたソウゴにも、彼女の憎しみと悲しみが強く、そして痛いくらいに伝わってきた。

「……その子を傷つけて、それで本当にユウコさんの心は癒せるの?」

「私の相手を奪ったこいつを消せれば、私の心は癒せる!」

「そんな……」

「わかったなら……どけ! 下僕が! 女王の命令だ!」

アナザーキバはソウゴに退けというがソウゴは退かない。

「できない……俺は王様として、仮面ライダーとして……俺がユウコさんを止める!」

『ジオウ！Ⅱ！』

そう叫ぶと、ソウゴは取り出したジオウオツチⅡを分割して、ドライバーの左右に差し込み、後ろから二つの時計のエフェクトが現れた。

「変身！」

ドライバーを回すと二つの時計は左右対象に止まり、ソウゴの体をアーマーが纏う。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

ジオウⅡへと変身し戦闘を始めるが、ジオウはアナザーキバの攻撃を受けるだけで攻撃に転じる事が出来ずにいた。

「もう、やめて！こんなの、ユウコさんが傷つくだけだよ！」

「女王に意見をするな！」

攻撃を受け続けるジオウがアナザーキバに押し込まれそうになる。

『ジカンギレード！』

だがジカンギレードを出現させ、アナザーキバを自分から離して。そのままジカンギレードとサイキョーギレードを手を持つ。

『サイキョーフィニッシュタイム！』

そして、ジカンギレードケンモードとサイキョーギレードを合体させながら構える。

「……………」

「何をしている！やれ！ソウゴ！」

「はあ！」

「うわあああ！」

初恋の相手に攻撃するのを躊躇している間に、ジオウはアナザーキバから不意打ちを受ける。

「我が魔王！ハリー君！ここを！」

「任せろ！」

ハリーにバツシャアの相手を任せると、ウオズはジオウの加勢へと向かう。

すると、アナザーキバは蝙蝠のようなエネルギー体を作り出し、ジオウに向けて放った。

「ソウゴ君！」

「ソウゴ！」

アンジュとアムールが前に出てジオウを庇う。

「ハート……フェザー！」

アンジュはハートフェザーを展開し、蝙蝠の群れを跳ね返した。

「アムールロックロンロール！」

アムールもツインラブギターを短く弾き、回転しながら紫色の大量の小型のハートを

作り出し、ウインクしてからハートを放ちアナザーキバを怯ませる。

「アンジュ、大丈夫ですか!?？」

「うん……ソウゴ君は……私が守るッ！」

「アンジュ……」

「この女……」

「我が魔王！」

バッシュャーを振り切ったウオズがアナザーキバの前に現れると、スウォルトツから奪い取ったギンガのライドウオッチを取り出して、ウオッチのダイヤルを回す。

『ギンガ!』

「ギンガ」と音声がかえるとウオズはドライバーに装填し、レバーを引く。

『投影! ファイナリータイム! ギンギンギラギラギヤラクシー! 宇宙の彼方のファンタジー! ウオズギンガファイナリー! ファイナリー!』

太陽系をイメージした様なエフェクトがウオズを纏うと、彼の姿が仮面ライダーギンガを模したかのような姿になり。背中にはマント『ギンガセイル』が装着され、胸部にはエクスパンションパンドライナーとインストールシヨルダーが融合した『クロスアーマライナー』を装備。インジケーションアイの表示は「ギンガ」となった。

「祝え! 宇宙最強、ギンガファイナリー!」

……緊急時につき、短縮版である」

「以上か?」

アナザーキバがウオズに向かってくるが、ギンガファイナリーとなったウオズは、アナザーキバの攻撃を見極めながら受け流していく。そして、右手からの衝撃波でアナザーキバを吹っ飛ばした。

アナザーキバは複数のエネルギー体のコウモリで攻撃するが、それをあえて受ける。

「おいきなさい」

これで決まったと思いい込んだアナザーキバ。

しかし、ウオズギンガは太陽光から取り出した「ピュアパワー」で体に纏っていたすべてのコウモリを吹っ飛ばした。

『ファイナリービヨンド ザ タイム!』

アナザーキバが驚いている隙にウオズがドライバーを操作すると、ギンガセイルの機能でアナザーキバごと異空間に引き込んだことで、ウオズの周りがいきなり宇宙空間へと風景を変える。

それにアナザーキバは戸惑いを見せ、その間にウオズはピュアパワーを足へと集約させる。

『超ギンガエクスプロージョン!』

「はあああああ!!??」

溜めこんだライダーキックをアナザーキバへ叩き込んだ。

アナザーキバはウオズの“超ギンガエクスプロージョン”のライダーキックが決まり、壁へと激突するとユウコの体からアナザーライダーウオッチが摘出された。

「ユウコさん!」

ソウゴとアンジユが駆け寄り、ソウゴがユウコを抱きかかえる。

「ソウゴ、私に傘は要らない。全人類の傘になれ……」

「えっ?」

「それから……さあや、と言ったか……」

お前が……ソウゴを——」

アンジユに何かを伝えようとしたその時、ユウコの心臓に透明なエネルギーの刃が突き刺さった。

「——えっ」

「ユウコさん?!」

辺りにまき散らされた血しぶきと自身のコスチュームにかかった血痕を見て、余りにも突然の出来事にアンジユは啞然としていて、自身の顔に彼女の胸から迸った血が降りかかった事にも気付いていないソウゴは悲痛の叫びを上げる。

そして刃が放たれた方には、柱に隠れているオーラがいた。

「ふん！力のないなら、もう用済みよ！」

今までの恨みを晴らすべく、その報復としてエネルギー刃を放ったオーラは、誰にも悟られる事の無いまま去っていった。

「ユウコさん！しっかりとッ！」

ソウゴは必死にユウコへと声をかけながら、隣にいるアンジュに救急車と応急処置を心願しようとするが、そんな彼の姿を軽れ始めた目で映したユウコはソウゴの肩を掴んだ。

「ソウゴ……すまなかつた……」

「……えっ?」

「だが、お前の言う事はわかる……」

だが、それでも……私は……じよ、女王に……冤罪を……」

謝罪と一緒に何かを伝えようとするユウコだったが、彼女の手がソウゴの肩から滑り落ち、そのまま息を引き取った。

「……ユウコさん!! ユウコさん————つ!!?うわあああああああツツツ

!!」

「そ、ソウゴ君……」

冷たくなっていく彼女を抱きしめて、顔に残った血を涙で洗い流しながら、声が割れる程の大きな悲しみを胸に込めながら、叫び続けた。

そしてアンジュは、震え続ける手と足を押さえながら、そんなソウゴを黙って見ていることしか出来なかった。

それからしばらくすると、名護の指示によりユウコの遺体は素晴らしき青空の会へと運ばれるため、輸送車に移された。

「ソウゴ君……」

「ソウゴ……」

そこには、初恋の人だった人を目の前で殺されたショックで、ソウゴが暗く沈んでいた。

「ソウゴ……しつかりしろ。帰るぞ」

「ソウギョ……」

はぐたんがソウゴの顔に手を当てる。

「はぐたん……ごめん……」

俺……はぐたんの前なのに……ぐっ、ぐう……」

はぐたんに顔を触れられると、先まで抑えていた涙がまた溢れる。

ゲイツとハリーに支えられてソウゴは顔を下に向けながらここから去る。

「あの人……大丈夫なのですか？」

「わかんない……」

「初めて見た、あんなに落ち込んでるの……」

「時見先輩なら大丈夫です！きつといつもの感じに……」

「そうね。ソウゴは大丈夫だね」

——アナザーキバを止めることは出来た。

だが、彼女の心を救う事は出来なかった。

そんなソウゴの心には、大きな溝が出来たかのような感じがあったのだった。

「こうして私はギンガの力を手に入れた。

だが……時見ソウゴの心の傷は大きかった……」

次回！Re・HUGつとジオウ！

第44話 2018：闇の勧誘？響く二人の歌に立ち上がる！

第44話 2018： 闇の勧誘？響く二人の歌に立ち上がる！

——あれから…アナザーキバとの戦いから数日が経った。

はな達は当たり前のように授業を受けているが、ソウゴはずっと辛そうな顔で窓を見つめていた。

「……」

「ソウゴ君……」

その様子を心配そうな顔をしながら、隣の席のさあやと後ろ席のルールーが見ていた。

放課後となり、ソウゴ達は帰り支度をする。

「ソウゴ！ハリーの所行こう！」

「今日はえみるとルールーがテレビ出るから一緒に見よ」

「うん……」

はなやツクヨミに誘われると、ソウゴはみんなの前ではなんとか笑顔を見せようとす

る。

「……まだ無理しているな」

「ええ、見てて私も感じます」

それを見ていたゲイツとルーラーは、笑顔で振る舞っていてもソウゴはまだ傷が癒えていないのだと感じる。だがそれは、みんなもわかっていてる。故に気を遣って、それ以上は何も言えなかった。

そして、ソウゴ達がビューティーハリーの部屋にあるテレビに映る情報番組で、ツインラブの特集を見る。

「テレビで紹介なんて凄すご〜い!」

「大分人気も出て来たね」

ツインラブはかなりの注目で取り上げられていた。

「二人の頑張りだね」

「ツクヨミも手伝ってくれているおかげです」

ツインラブの演出を考えているのはツクヨミなので、えみるはツクヨミにお礼を言う。

「大勢の人に歌を聞いて貰えるのは嬉しいですね」

「もつと頑張つて、色々な人に曲を——」

『ツインラブ？そんなに良いですかあ？』

しかしTVの出演者の女性タレントの言葉に、テレビのすぐ傍にいたソウゴ達が固まる。

『彼女達の曲は、アイドルなのかロックなのか、何か中途半端ですよね』

更に中途半端と言われてえみるが凹む。

「そんな事無いと思うけど」

「うん」

「私の曲は……中途半端……」

「気にするな。他人がそうでも、俺達はそうは思っていない」

凹んでいるえみるをゲイツ達が慰める。

「ごめん、俺そろそろ……」

「ツインラブに、若宮アンリ密着取材のお仕事よ〜！」

ソウゴが一人帰ろうとすると、突如パップルが入って来る。

パップルの手には、アンリの密着取材の企画書が握られていた。

「みんな、じゃあ……」

気を取り直し、ソウゴは一人で先に帰っていく。

「あら、ジオウどうしたの?いつももの明るさがないわね」

パップルは自身の近くを横切ったソウゴが、いつも通りじゃないと気づく。

町中で歩き続けるソウゴは、今もなおユウコの事を気にしていた。

「ユウコさん……」

彼女の名を呟きながら、その表情に影を落としながら自身の手を見る。

彼女を抱きかかえていた時、その身体が徐々に冷たくなっていくあの感触は、今でも振り返ってしまうくらいトラウマとして刻まれていた。

『ソウゴ、私に傘は要らない。全人類の傘になれ……』

「無理だよ。俺は傘には……」

『全人類の傘になれ』と言う、彼女が最期に残した言葉。

だがソウゴは、目の前に居た女性の命も救う事が出来なかった自分では人々の傘にはなれないと、そう思っていた。

「俺……王様向いてないかも……」

そして遂には、自分には王様は向いていないときえ考え始めてしまう。

「ん?」

そんなネガティブな感情を出しながら歩いていると、公園の方のベンチに一人の青年

がいたのが見えた。

だが奇妙な事に、その青年はベンチに座らずただ触っていた。

「何やつてるんだろ？」

ソウゴが変だと思い、近づいて声をかける。

「あの〜……」

「えっ？うわああ！」

いきなりソウゴが現れたのに驚いて、下の方に潜り込んでいた青年はベンチに頭をぶつけた。

「だ、大丈夫？」

慌ててソウゴはベンチに座らせ、持っていたハンカチを水で濡らし青年に渡した。

「ありがとう」

青年は礼を言いながらおでこに借りたハンカチを当てる。

「……何やつてたの？先からずっと、ベンチに触ってたけど……」

何故ベンチをずっと触っていたのか気になっていたソウゴはそう尋ねると、青年はベンチを撫でながら口を開く。

「ああ、バイオリンの材料にならないかなって思つて……」

「バイオリン？お兄さん、バイオリン作っているの？」

「まあね。いつか父さんのようなバイオリンを作りたいんだ」

「父さんか……」

ソウゴは父さんと聞き、なんか羨ましいと感じていると……

「なんか辛そうな顔してるね」

「えっ?」

青年は目の前にいる少年が辛そう表情をしていると見抜く。

「何かあったの?」

「その……」

「……言い辛そうなら、明日教えてくれない?」

その気があったら、僕の家に来てくれる?これ、場所だから」

青年はそう言つて名刺らしきものをソウゴに渡す。

「紅バイオリン工房……紅渡」

「そう、僕の名前。君は?」

「俺は時見ソウゴ」

「ソウゴ君。じゃあね」

ソウゴはされるがままに、バイオリンを作っている青年——紅渡に明日会う約束をしてしまった。

「俺が辛そう……」

自分が辛そうな気持ちを隠していたはずなのに、それが表に出ていたのを紅渡によって自覚したソウゴは、顔を触りながら仲間にも悟られていたのでは無いかと思いはじめ

る。

翌日、ソウゴ一人を除いたメンバーがスケート場に集まると、スケート場の裏ではえみるがミライクリスタル・ルージユをミライパッドにセットしていた。

「ミライパッド、オープン！」

画面から光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン！」

えみるとルーラーはレポーターになった。

しかし、昨日のテレビの発言の事が気になっているのか、えみるは昨日からずっと凹んだままだった。

「めちよつく……！このテンションでアナウンサー出来る……!?？」

「笑って……！スマイルよ……！」

「アイドルは……スマイルなのです……！」

パップルのアドバイスでえみるは無理して笑顔を作るが、矢張りぎこちなかった。

それを見ていたはなは少しだけしゃがんででえみるの目線に合わせると、彼女の肩に手を置く。

「無理して笑わないでいいよ」

「えっ?」

「そう言う時、私もあるもん」

えみるとはなが話していると、パップルがゲイツに近づく。

「ねえ、ジオウはどうしたの? 昨日から変だったけど……」

「あいつなら、今日は約束した人に会う為に紅バイオリン工房と言う場所にいたぞ」

「バイオリン?!?!」

何故かジオウがバイオリン工房に行っていると知り、何故バイオリンに?とパップルは驚く。

クライアス社の会議室で、ビシンが荒れていた。

「どうして……! ハリーに……僕の気持ちは届かないの……ッ!」

ビシンはクッションに八つ当たりしながら叫ぶ。

「ビシン、少し休んだ方がいい」

「リストルに僕の気持ちは分からない！一番に故郷を、ハリハリ地区を捨てたアンタにはね！」

現れたリストルが少し休んだ方が良いと提案するが、ビシンに自分の気持ちは分からないと言われてしまう。

一方のソウゴとは言うのと、渡から貰った名刺を頼りに紅バイオリン工房へと向かっていた。

電車から乗り換えた後に歩いて数時間、ようやく見えてきた。

「あそこか……」

名刺の住所の方に目を向けていたソウゴが顔を上げると、そこには二階建ての洋館が広がっていた。

鉄製の扉を潜って工房の前に到着すると、扉の横にあるインターホンを鳴らす。

「はい」

『ピンポン』と言う音が鳴ると、工房から女性の方が現れた。

「あの……」

「もしかして、時見ソウゴ君？」

「えっ?」

「渡から聞いてるからさあ、入って」

「はい」

現れた女性・静香に案内され、ソウゴはバイオリン工房の中へと入っていく。

「わあ〜……」

作業場にある道具や既に来たバイオリンなどを見て、ソウゴはその光景に惹かれていく。

「ん?」

その際ソウゴは偶然、記念のように立てかけられたバイオリンに目を惹かれる。

「綺麗……あれ?この人……」

そのバイオリンを見ると、下に置かれた写真に見覚えのある人物が映っている事に気付く。

「いらっしやい」

確かあの時湖で出会った男性に似ている、とソウゴが思考していると、別の部屋から渡が出てきた。

「あ、お邪魔しています……」

挨拶をするソウゴに駆け寄ると、渡はソウゴと共にガラスの向こうに飾られたバイオ

リンに顔を向ける。

「へえ、これ渡が作ったの？」

「このバイオリンは『ブラッティローズ』。父さんが作った、世界最高のバイオリンなんだ」

「これを、渡のお父さんが……」

「このバイオリンを超えるのが、今の僕の目標なんだ」

ソウゴは渡から目の前にあるバイオリンの説明を聞きながら、二人でブラッティローズを見つめる。

「そうだ！一緒にバイオリン作ってみない？」

「えっ？俺が？」

すると突如、渡がソウゴに向けて一緒にバイオリンを作ろうと持ちかける。

一方スケート場では……

練習を行うほまれが、先日のハリーとの出来事を思い出して笑顔を見せると、滑るのを一旦止め、客席の方を向く。

奥の客席では、ウオズとハリーが座ってはぐたんを笑わせていた。

そんなハリーを見つめ続けるほまれを、一緒に練習していたアンリが見ていた。

「本日は期待のスケート選手、若宮アンリさんの練習風景に密着します!」
「輝木ほまれ選手との合同練習——」

「楽しみですね!」

えみるとルーラーの代わりに、はなとさあやがりポーターを担当する。

「中々はな君もさあや君も出来てるようだね」

「パップルちゃん!良いタレント揃ってるじゃない!」

「おーっほっほっほっ! (二人ともイケるじゃない……!)」

アフロのディレクターがパップルの方を向いてそう言う。

「はな……さあや……ごめんなさい」

「本当は私達のお仕事なのに……」

パップルが内心で彼女達を褒めていると、ルーラーとえみるは自分たちの代わりにやってくれている二人に不甲斐なさを感じながら謝っていた。

「いいのよ。こう言う時は助け合い」

「そうそう。それに、やってみたかったんだよね。アナウンサーって、知的なわたくしにピッタリと思いませんか?」

「はいはい。似合ってる似合ってる」

「かぁいいね!」

「よし！ノリノリで行つくぞーっ！」

はぐたんに可愛いと言われ、はなのテンションが上がった。

引き続き、客席でアンリの練習光景を見る。

「おおっ！」

「今のは、トリプルトゥループ」

「詳しいんですね」

さあやの横から荷物を持った正人が現れ、先程アンリがしたのはトリプルトゥループと説明する。

「力に……なりたいと思うから」

「だからアンリのマネージャーを始めたって訳か」

ゲイツの言う通り、正人は夏休み中にアンリのマネージャーを始めていた。

「次は頑張らなきゃ行けないのです。私はアイドル……ツイインラブ……！」

(力に……なりたい……)

えみるは頑張らなきゃと気合いを入れるが、ルールーは表情を曇らせ、力になりたいと心の中で呟いた。

ほまれとアンリのインタビュウが再開される。

「アンリと滑っていると、いつも刺激を受けます」

「性別が違ってても、僕達はライバルだから」

「それでは、今後の目標は？」

はながアンリにマイクを近づけて尋ねる。

「まずは、フィギュアスケートワールドジュニアカップ。

そして、その後も——僕は、勝ち続けたい」

「勝ち……続ける……」

その時、アンリの言った『勝ち続けたい』と言う台詞が、えみるの心に響いた。

「自分を貫く為には、勝ち続けなくてはならない」

「アンタの気持ちは分かるわ。けどね、人気者になるって事は、こう言う事なのよ」

「私は……ツインラブとしてもっと歌を届けたい。自分を貫く為に」

アンリとパップルの言葉を聞いたえみるがそう言うと、自分の頬を叩く。

「決めたのです！愛崎えみるは、強くなるのです！」

ドレス姿のアンリが撮影されている所に、レポーターになったえみるとルールーが

ひよこっつと現れる。

「続いては、リタ・ヨシリンのモデルとしても活躍される若宮選手の撮影現場に——！

お邪魔しちゃいます！」

えみるとルールーが跳びはねてポーズを取る。

「元気になった……?」

「でも何か……」

「空元気と言うか何と言うか……」

「いつものえみる君じゃないね」

はな達が今のえみるに違和感を感じて首を傾げていた頃、ソウゴは渡と一緒にバイオリンを作っていた。

「えつくと……」

「力を入れずに優しくするの」

今ソウゴが行っている作業は、バイオリンの音程・音質を決定付ける重要な工程である『表板と裏板を削る』作業だった。

彼らはバイオリンの本体を構成する板を大鉋で大雑把に削った後、表板と裏板にそれぞれ専用のノミで細かい所を削り、全体的にアーチを作りながら厚さを調整しているのだ。

初めて作るバイオリン作りに戸惑いながらも、渡にサポートして貰いながら作業していた。

だが一緒に作業していると、何故かソウゴの顔からは笑顔が戻っていた。

「それで……」

「えっ?」

「何を悩んでいたの?」

突然、渡に何を悩んでいたのかを言われ、ソウゴはノミを持っていた手を止める。

「……俺にとつての、初恋の人が……死んだんだ……」

「初恋……」

「その人は、本当は優しい人だった筈なんだ。

でも、その人の心から支える人がいなかった。

だから、あの人の傘になろうとしたんだ……」

その時の事を思い出したソウゴは、あの時ユウコの傘になれなかった事を無力だったと感じていた。

「それで、俺には人を支えられないんだって思った……」

「そんな事はないと思うよ」

「えっ?」

「その人はきつと、ソウゴがしてくれた事を感謝してるんだよ」

「ユウコさんが……」

「…僕にも、似た経験があるんだ」

「渡にも……?」

「うん。今でも彼女の事は思い浮かべるよ」

「その人は?」

「死んだ。僕のせいだね」

当時、自身がとある王として変身していた時の事を思い出しながら、渡が顔を見上げる。

「だから、僕は自分を消そうとした……」

でも、そんな僕に生きて良いって言ってくれた人がいるんだ」

そう言つて、渡は父が作ったバイオリンである、ブラッティローズの方を見つめる。

「だから、その人分まで必死に生きるって決めたんだ」

「その人分まで生きる……」

それを聞いてソウゴは、最期にユウコが言った『全人類の傘になれ』と言う言葉の意味がわかったような気がした。

（——ユウコさん……俺、やってみるよ）

ソウゴは何かを誓い、渡に頭を下げる。

「ありがとう。なんか、前に向ける気がする!」

「少しは相談になれたかな」

ソウゴの吹っ切れた顔を見た渡は、ポケットに手を入れる。

「ソウゴ君。これ」

渡が出したものがソウゴの手に置かれた。

「ライドウォッチ^{ワッチ}??」

それはウエイクベゼル部が黄色で、アウトリガー部が黒のライドウォッチだった。

そして、そのウォッチにはコウモリのような紋章が絵描かれたライダーズクレストと、『K I V A』と言う文字が記されていた。

「一週間くらい前に僕の手元にあつたんだ」

一週間となると、ユウコが死んだ日と同じ日だったはず。

（そうか……渡がキバなんだ。

あの人が言っていた本物の……この事なんだ）

あの時、サングラスをかけた男性から言われた『本物に会え』。ソウゴはようやく、その言葉の意味がわかった気がした。

「さあ、もう少し頑張ろ」

「うん！」

二人でバイオリンの完成に取り掛かろうとする。

それからしばらく一緒に作業をすると、バイオリンの型が出来てきた。

スケート場ではアンリは休憩に入り、ハリーに抱っこ紐で抱えられたはぐたんに抱っこをせがまれたアンリが抱っこさせる。

「アンリー！おつかれー！だっこしてー！」

「可愛いね、はぐたん」

アンリは笑顔でそう言うのと、はぐたんを優しく抱き締める。

「若宮選手の魅力は——」

「それは私が説明しましょう！」

ルールーが言いかけると、カメラの視線が、スポットライトに当たるリタに向けられる。

「吉見リタさん！」

「アンリの魅力はね……！男、女、そんな事は関係無い！彼の美しさは全てを凌駕するの！ボーダーレス！アンビリーバボー！ファンタスティック！」

アンリが着替えてから客席に座ると、横からルールーが現れる。

「人は、強くならなければならぬのですか？多くの人に、歌を届けたい。その為には、柔らかい心にアーマーを着けて隠す」

「それは、必要な事でしょうか？」

「結局、人は分かり合えないのさ」

「痛っ……。髪が引っ掛かって……」

「じつとして」

それに対してルーラーは何かを言おうとするが、髪がチョーカーに引っ掛かり、アンリが直す。

そこへ、出入り口の辺りでディレクターとカメラマンがその様子を撮影していた。

「スクープ……。こう言う刺激的のを待ってたんだ……」

熱愛……。若宮アンリと人気アイドルのルーラー……。――

ディレクターはアンリとルーラーとの関係をデタラメな内容で考えると、思わず笑みを浮かべる。

「うくん……。これは上も喜ぶぞっ!」

「うえ!? 何をやっているのですか!」

「二人はただの友人です! でっちは上げは止めて下さい!」

「何だ君達は……!」

見かけたえみると正人がディレクターに抗議する。

「君、アンリ君のお友達? だったら詳しく話聞きたいなあ。彼って、色々噂あるから……」

ディレクターは二人からもアンリの事を聞こうとする。

「止めて下さい」

「アンリ……」

正人が眼鏡を掛け直した所で、アンリが二人の前に出る。

「プライベートまで覗き見される趣味は、僕には無い」

アンリはディレクターにそう言うのと、この場を後にする。

「みんなアンリ君の普段の様子を知りたがってるんだよ！」

「あなた達が望むストーリーを、僕は生きられない」

「アンリ……！」

「ごめん、一人にさせて」

正人にそう言つて、アンリは一人スケート場から去っていく。

「アンリさん……」

今の彼の不安定な状態から心配になり、えみるはアンリを見つめる。

アンリは外に出ると、赤と群青の二色に染まる空を見て眩く。

「どっち付かずだな……夕焼けの赤なのか、夜が迫る群青か。それとも……」

すると突然、突風が生じた。

「若宮アンリ君だね」

アンリが声の聞こえた方を見ると、背後にリストルがいつの間にか現れていた。

「あなたは……?」

「クライアス社の者です。君を、スカウトしに来ました」

リストルはアンリをクライアス社に勧誘する為、トゲパワワの出る名刺を渡す。

「クライアス社?」

「明日を消し去り、時を止め、皆を安らぎに導く会社です」

「…何で僕を?」

「君の心の奥に隠している気持ち、時間を止めたい。その想いを……」

「やめてほしいな。リストル」

そこへ、偶然に彼らの話を聞いていたウオズが二人に近づく。

「彼は私の勤める学園の生徒。教師の立場としては見過ごせない。それでもと言うのなら……」

ウオズはビヨンドドライバーを見せる。

「ウオズ。まあいい……いつでも(ご)連絡を」

再度突風が生じると、いつの間にかリストルの姿は無かった。

「ウオズさん!アンリさん!」

二人に今度はえみみるが駆け寄る。

「どうやら、逃げたようだね」

「誘われるなら、プリキュアだと思ってたな」

「アンリさんがプリキュアに!?」

驚いてるえみるがそう叫び、困惑して足を引っかけて転んだ。

「立ち聞き、良く無いよ」

アンリはそう言つて、えみるに手を差し伸べた。

一方、中にいるはな達はというと……

「ルールー?」

「どうかしたのか?」

客席に座るルールーに、はなとゲイツが声を掛ける。

「私は、えみるのように曲を作れない。才能ある彼女の悩みに寄り添うのは、どうすれば……」

声をかけられたルールーは、えみると寄り添うにはどうすればいいのかわからないと二人に打ち明ける。

「…みんなだつて、凄く高い所目指してるんだ。悩みを理解出来るつて言ったら、嘘になっちゃう。」

でもね、私は手を離さない。みんなが苦しい時は、傍にいたいんだ」

それに対し、はなは腕を伸ばしてルールーにそう伝える。

するとルールーの隣にツクヨミが座った。

「傍にいてくれるだけでも、十分安心出来ると思うよ」

「傍に……いる……」

ツクヨミの言葉を聞いたルールーはそう呟き、自身のプリハートを握り締める。

「クライアス社の言葉に耳を傾けては駄目なのです!」

その頃えみるは『え』の字を表現するポーズを取り、アンリに自分に相談するよう伝える。

「悩みがあるならこの、愛崎えみるに相談するのです!」

「じゃあ相談。僕って何者?」

「えっ……?」

アンリは何者なのか。想像の斜め上の方向を行った質問に、えみるは言葉を失った。

「色々な噂、カテゴライズ。そこに真実があればいいのに……全てを超越した存在……でも、声も低くなつたし、背もどんどん伸びてる。」

生き辛い時代だね。みんな、他人の事を気にしてる」

辛そうな表情で、アンリがえみるとウオズに自分の苦悩を話す。

「一人になれば、何も気にしないで済むのかな……?」

「…私は、お兄様を抱き締めてくれたアンリさんに、とても感謝しています」

「正人……?」

「みんなに期待されると、心がギューっとなる時があります。けど、私は……」

えみるは言葉を止め、自身のプリハートを取り出す。

「誰かと一緒にいたいのです。誰かの為に、歌を……フレフレ! みんな! フレフレ!

私っ!」

両腕を上へ上げ、アンリにエールを送る。

「私は、はな先輩のこの言葉が大好きなのです」

「みんな頑張れ……僕も頑張れば……」

「アンリさんにも、教えて貰った事があります。それは、自分を愛する事です」

「僕のじゃなくて、自分の悩み解決してない?」

「あつ……! そうとも言えなく無いのです……」

アンリよりも先に、自分の悩みが解決してしまつたえみるを見たアンリが声を上げて

笑うと、ルーラーと正人が現れる。

「アンリ! えみる!」

「迎えに来てくれたのですね!——ぬわっ!」

突如、えみるはルールーに抱き締められて驚く。

「もうルールー!驚きましたよ!」

「表情が柔らかくなりました」

「…私、大切な事を忘れていました」

えみるがそう言い、ルールーを抱き締める。

「ルールーが好きと言ってくれば、それだけで無敵なのです」

えみるとルールーは、互いの顔を見て微笑んだ。

そして翌日、アンリのアイスショー当日を迎え、観客席には既にゲイツ達が来ていた。

「いいよね」

「アンリの状態も万全のようだし楽しみだね」

ツクヨミとウオズが話していると、ルールーが一つ空席を見つめる。

「時見先輩……今日も来ないです」

えみるの言う通り、ソウゴは今日も来ていなかった。心配するはな達にゲイツは今のソウゴについて教える。

「あいつなら、昨日は帰れないと連絡を貰って、用が済んだらすぐ来ると言っていたぞ」

「用って、あいつまだ立ち直れてないんや……」

「ソウゴ……」

ルルーは心配している目でソウゴの席を見つめる。
すると、えみるがルルーの手を握る。

「えみる……」

「先輩は来ますよ。いつもの先輩が」

「はい」

ルルー達がソウゴは来ると信じていると、会場にてスケートの演技が始まろうとしていた。

その頃、リンクの通路にアンリと正人がいた。

「何があっても、たった一人の友達が分かってくれるなら、それでいい。か」

通路でアンリがそう言うと、正人が手を繋ぐ。

「君は出来る」

そしてアンリの方を向き、君は出来ると伝える。

「……ああ。僕は氷上の王子。今日もパーフェクトに勝つ！」

勝つと心に決めたアンリはリンクに向かう。

そして遂に演技がスタートし、アンリは音楽に合わせ、リンクを滑る。

「綺麗……」

「はい。すごいのです……」

一方で、はなとさあやはアナウンサー、ほまれは解説として解説席の方に座ってた。アンリの演技は順調な出たしで、次々と演技を決める。

(……っ！足が……！)

アンリは滑ってる最中、足に違和感を感じた。

だが、それを見ていた昨日のディレクターが嬉しくない様子だった。

「刺激が無いなら……作ればいいだけだ……！」

ディレクターがそう言うと、通路のスイッチを操作する。

すると、突然音楽が止まった。

「えっ?」

「何?どうして……」

「音楽が止まった……?」

「もしかして音響トラブル……?!?」

「このままやとショーが……!」

「アンリ……!」

アンリだけで無く観客達も困惑した所に、歌声が聞こえた。

アンリが歌声が聞こえた方を向くと、えみるが立って歌いだしていた。

「奇跡を信じる♪君のそばで応援できる！自分が嬉しくって！」

そしてルールも立ち上がって、彼女と一緒に歌い出した。

「ふたりでだから生まれるパワー！HUGっと！抱きしめて！強くなれるの大丈夫！」

二人の歌を聞いたアンリが手拍子を促して、観客達も手拍子を始めた。

「ツインラブとアンリ君のコラボ！」

「成功のようね」

ツインラブとアンリのコラボは成功だとみんなが思う。

「良い画、撮れましたよディレクター……あれ？」

そんな彼女達の様子を撮っていたカメラマンは、良い画が撮れたとディレクターに見

せようと振り返り伝えるが、この場にはいなかった。

「これじゃ駄目だ……これじゃあ上に……！」

遠く離れた場所ですう言うディレクターから、トゲパワワが放出される。

「……アンタは俺が最も嫌うタイプなんだが……そのトゲパワワは頂くぞ」

すると背後からリストルが現れ、ディレクターのトゲパワワから猛オシマイダーを作り出した。

そして、二人が歌い終わってアンリが滑り終えた直後、スケート場の壁が破壊され、そこから猛オシマイダーが現れる。

「!?…ハリー! 観客を逃せ!」

「おお! ツクヨミ! はぐたんを!」

「わかったわ!」

「みんな! オシマイダーは頼む!」

『うん!』

ゲイツやハリーは会場の観客を逃がそうとみんなを誘導する。

すると猛オシマイダーはアンリを掴み、この場から飛び去った。

「アンリ……!」

「みんな!」

『ハートキラツと!』

五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、五人が揃っていつもの手順を取り姿を変える。

「輝く未来をく抱き締めて! みんなを応援! 元気のプリキュア! キュアエール!」

「みんなを癒す! 知恵のプリキュア! キュアアンジュ!」

「みんな輝け! 力のプリキュア! キュアエトワール!」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「「「HUGつと！プリキュア！」」」

五人は変身を完了させると、囚われたアンリを救出するために猛オシマイダーの下へ向かう。

「はああああああつ！」

エールのドロップキックが猛オシマイダーに直撃し、地面に向かって急降下する。

「アンリ！」

「僕、またこのポジションなんだけど……」

エトワールがスタースラッシュで猛オシマイダーに向かう。

だが、全身を回転させて繰り出した攻撃を受けて吹き飛ばす。

「はああああああつ！うあつ！」

アンジュが両手を重ねて叩き付けようとするが、捕まってしまう。

「はああああああつ！」

そこにマシエリとアムールのダブルパンチが命中し、地面に叩き付けられた。

そして、ここではウオズとリストルが互いに構える。

「ウオズ。君の相手は私だ」

リストルはジクウドライバーを装着した。

「いいだろう」

ウオズもビヨンドドライバーを装着し、ギンガミライドウオッチを取り出す。

『リストル!』

『ギンガ!』

ギンガミライドウオッチを起動し、ウオズはドライバーに装填した。

『アクシヨン! 投影!』

「変身!」

『ファイナリータイム! ギンギンギラギラギャラクシー! 宇宙の彼方のファンタジー

! ウオズギンガファイナリー! ファイナリー!』

『ライダータイム! 仮面ライダーリストル!』

ウオズはギンガファイナリーへ、リストルは仮面ライダーリストルへと変身した。

その頃、観客達を逃したゲイツとハリーは…

「これで全員だな」

「じゃあ、俺らも……」

エール達に加勢しようと、二人が彼女達の下へ向かおうとする。

「ハリ〜」

「ビシン〜！」

だが邪魔をするかの様に、既に変身していたビシンがゲイツとハリーの前に現れた。

「さあ、僕のもとに来てよ〜！」

ゲイツとハリーはジクウドライバーを装着し、二つウォッチを取り出す。

「負け犬のライダーは邪魔するなよ」

「貴様が邪魔をするな〜！」

二人はウォッチを起動させる。

『ゲイツ！ファイズ〜！』

『ハリー〜カリス〜！』

それぞれのウォッチをドライバに装填し、構える。

「変身！！？」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！アーマータイム！コンプリート！ファイズ〜！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ〜リー！アーマータイム！チェンジ！カ〜リ〜ス〜！』

ゲイツはファイズアーマー、ハリーはカリスアーマーへと変身した。

ビシンは二人が変身したを見て、トンファアークガンを構える。

そして外でオシマイダーと戦っているエール達の近くで、ウオズとリストルは互いに肉弾戦での攻撃を繰り返している。

「……」

「流星は副社長……そう簡単には行かないね」

スベックならギンガファイナリーの方が優っている筈のウオズだが、仮面ライダーリストルの装甲に埋め込まれている二つの特殊デバイス『ツインアイズブレイク』の効果で、今までの戦闘データと前回のトリニティとの戦いでウオズの戦い方をラーニングしていた上に、高い実力を持つリストルに手を焼いていた為、五人の助けに行けなかった。そこへ解放されたアンリに向けて、無数の棒が飛ばされる。

「アンリさんー！」

アンジュが叫ぶが、棒は何かアンリには当たらなかった。

「アンリ君。スカウトの件、考えて頂けましたか？」

するとリストルがウオズギンガと戦いながら、スカウトの件についての答えを聞こうとする。

「スカウト……!?？」

「なぜアンリ君なんだい……!?？」

「我々には時間が無い。君と同じようにね。返事は……?」

ウオズの言葉をスルーしながら、リストルからの返事にアンリは答えを出した。

「断る」

アンリは、リストルのスカウトを蹴った。

「確かに、生きる事が辛い時はある……」

僕は捻くれてるし、誰かの為に頑張るなんて出来ない。

でも……フレフレ!プリキュア!輝く未来を、僕達に!」

「そうですね……なら、オシマイダー!」

アンリの答えを聞いたリストルの命令で猛オシマイダーは動き出し、攻撃を再開する。

「まずは、裏切り者から」

猛オシマイダーはアムールへと攻撃を繰り出した。

アムールがオシマイダーの攻撃を避けられなかったその時、何者かがアムールに飛び込んで体を掴み、攻撃から躲した。

「『ソウゴ(君・時見先輩)！』」

「我が魔王!」

間一髪、ソウゴが飛び込んでアムールを助けた。

「アムール。大丈夫?」

「……はい」

掴まれたといっても抱きしめられていた為、アムールは驚きの表情だった。

「時見先輩!アムール!大丈夫ですか?」

「よかった、間に合って」

ソウゴのいつもの優しい表情を見て、アムールは顔を少し赤くなった。

「二人は離れてて」

アムールをマシエリが連れ、ソウゴから離れる。

『ジクウドライバー!』

『ジオウ!』

ジクウドライバーを腰に装着し、ジオウウオッチを起動させるとドライバーに装填。

そしてドライバーのロックを解除すると、後ろから時計が出現した。

「変身!」

初恋の死と後悔を乗り越えたソウゴは、その掛け声でドライバーを回す。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

時計バンド状のエフェクトに覆われながら、ソウゴはジオウへと変身した。

『ジカンギレード！ケン！』

ジカンギレードを持ち、猛オシマイダーへと走る。

「はああ！」

ジカンギレードを繰り出し、ジオウの攻撃で猛オシマイダーが怯んだ。

「ソウゴ君！」

「ごめん！遅れちゃった！」

「……ジオウか。オシマイダー！ジオウを先です！」

ジオウがアンジュに謝罪している近くで、オシマイダーはプリキュアからジオウへと対象を変えてジオウに攻撃を繰り出した。

「あぶつな！」

ジオウはオシマイダーの攻撃を地面を回って避けると、ソウゴはキバのウォッチを使う。

「渡。使わして貰うよ！」

『キバ！』

キバのウォッチを起動させ、ドライバーに装填し、回転させた。

『アーマータイム！ガブツ！キバ！』

前方に現れた、複眼にはカタカナで「キバ」と描かれた黄色のアーマーがジオウの体

に纏われ、両肩の装甲は蝙蝠の羽のようなものが左右に分割されており、そこにはカテナが巻かれていた。

「我が魔王!どきたまえッ!」

リストルを払い退けると、ウオズのいつものスイッチが入る。

「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え、過去と未来をしろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウキバアーマー!まさに王としての風格を継承した瞬間である!」

祝えとウオズが叫びいつも通りの口上を言う。

「ウオズ!ありがとう!なんか行ける気がする!」

仮面ライダージオウ・キバアーマーが猛オシマイダーへ挑む。

「はああ!」

ジオウは身軽くになったかのように、小回りのある戦いを見せる。

「凄え、体が思った以上に軽い……」

使ってる本人もかなり驚いている。

ジオウはキバアーマーで猛オシマイダーを攪乱し続けると、ジオウウオッチIIを起動させる。

『ジオウ!II!』

ジオウウオツチⅡを分割させると、ドライバーの左右に差し込み、ジオウの後ろから二つの時計のエフェクトが現れる。

ドライバーを回し、二つの時計が左右対象に止まると、アーマーがジオウを纏う。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

ジオウⅡへと変わったのを見て、反撃に出ようと猛オシマイダーが攻撃にでる。

その瞬間、金色のジオウウオツチⅡが光り、両目にかかる時間の針のアンテナ2本が回転した。

「見えた！お前の未来！」

未来の攻撃を読み、ジオウはオシマイダーの攻撃を躲す。

『サイキョーフィニッシュタイム！』

サイキョーギレードをジカンギレードに合体させると、剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『キングギリギリスラッシュ！』

「オリヤヤヤヤヤ！！？」

ジオウはサイキョージカンギレードを振り下ろし、オシマイダーを吹き飛ばした。

「これで決める！」

サイキョージカンギレードを投げ捨て、ジオウがドライバーのロックを解除する。

『フィニッシュタイム!』

ジクウドライバーを操作し、ピンクと金色の『キック』のエフェクトがオシマイダーを囲むとジオウは高く飛び上がり、そのままオシマイダーへとキックの態勢になる。

『トウワイズタイムブ레이크!』

囲んでいたキックの文字がジオウの足へ集まり一つとなると、ジオウのトウワイズタイムブ레이크によるライダーキックが決まった。

「オシマイダー〜!」

タイムブ레이크を受け、猛オシマイダーが消滅した。

「……今回はこれで退きます。またいずれ」

リストルはウオズを振り払い一瞬に去る。

一方、ビシンと戦うゲイツとハリーも……

「はああ!」

ビシンのトンファアの攻撃を掴み。ゲイツがそのまま背中へと回りビシンを捕まえた。

「ハリー!」

「おお!」

ドライバーを回し、ハリーの体を竜巻が纏う。

『フィニツシユタイム！カリス！スピニングタイムフィニツシユ！』

ハリーが宙へと浮かぶ。それを見たゲイツはファイズフォンXを使い、シヨット555を出現させる。

『シヨットオン！』

「はああ！」

シヨット555でビシンを宙へと上げると、ハリーのフィニツシユタイムのキックがビシンへと直撃した。

「ハリー……ゲイツ……くっ！」

変身解除されたビシンは痛みを抑え、去っていった。

その後、ソウゴの前にみんながやってきた。

「ごめん！」

「「「えっ？」」」

突然、ソウゴがみんなの前で謝った。

「俺……ユウコさんの事で頭が一杯だった。そのせいで、みんなに迷惑かけてごめん！」
「そんな謝らなくても」

「そうだよ。それよりもソウゴが、みんなの前でいつも姿に戻れたのが嬉しいよ」

「みんな……」

はな達がソウゴを励ますと、ゲイツがソウゴの肩に手を置く。

「少しは俺達を頼れよ……俺達は友達だろ……」

「ゲイツ……」

最後の方は恥ずかしくて声が小さかったけど、ゲイツの言葉は嬉しかった。

(ユウコさん。俺一人じゃ、みんなの傘になれないけど、みんなとなら多くの人に傘になれるように頑張るよ。ありがとう。ユウコさん、渡！)

「ソウゴ君……よかった」

「ソウギョー!ソウギョー!」

「はぐたん。ただいま!」

さあやはソウゴがはぐたんを抱っこするのを見て、ソウゴからいつもの笑顔が戻っていた事に安堵するのだった。

その後ショーは再開され、アンリは最後のインタビュを迎える。

「若宮選手、最後に一言お願いします」

「僕が伝えたいのは、誰もが思う通りに、自由に生きられる時代が来て欲しいと言う事。

その為には応援が必要です」

アンリははぐたんを抱きかかえてインタビュウを受ける。

「よろしく頼むよ、プリキュ——」

「わ——っ！」

途中ではなが遮るかのように叫び声を上げる。

「えっ？」

「今のカットカット！」

「絶対わざとでしょ……」

狼狽えるはな達を見て、アンリは声を上げて笑った。それを客として見ていたソウゴ達も、同じ様に笑ってみていた。

その後、ソウゴ達は家へと帰路を歩く。

「あのソウゴ。それは？」

ルールーはソウゴが持っていた手提げケースに気づく。

「あ……これ？」

ソウゴはケースを開く。中に入っていたのはバイオリンだった。

「バイオリンなのです！」

「どうしたのそれ?」

「へへっ……作ったんだ」

『作った!』

ソウゴが作ったと知るとみんな驚く。

「まさか、お前が言っていたバイオリン工房でか……」

「まあね、でも、完成にするに時間が掛かったんだ」

「でも弾けるの?」

ほまれの言う通り、確かにバイオリンがあつても、弾けなければ意味がない。

「ちよつと見てね……」

ソウゴはバイオリンを肩に乗せると、弦を弾く。

〈プウ~~~~ン♪トウウ~~~~ン♪〉

『あつ……』

ソウゴはバイオリンを弾き始める。所々はまだ荒いが、それでも彼が何とか弾けてい
る。

だがそれでも、それを聞いていたはな達は思わず聞き惚れてしまう。

〈タララ~~~~♪トウン!〉

「どうかなの?」

「す、凄い！」

「本当にソウゴ……?」

「もしかして……また未来のソウゴ?」

「我が魔王。本当に我が魔王なのですか?」

「先輩すごいのです!」

まさかのバイオリンを弾けた事に、みんなは驚く。

「いやいや、弾けるのこれだけだから!それに……!」

「あっ!」

すると、ゲイツが突然声を上げる。

「どうしたの?」

「そういえば、俺とウオズが今日の買い出しを……」

「っ!? しまった!」

「急ぐぞ!」

「あつ! 今日はお得意さんに仕事が……!」

「は、ハリー……ちよつと……」

ゲイツとウオズは買い出しを、ハリーとほまれは仕事を、それぞれソウゴの音楽で思い出した。

まるで、ソウゴのバイオリンには忘れた事を思い出す性質があるかのように。

「みんな大変だな……」

ソウゴがみんなの忙しそうな姿を見てみると、えみるがある決意を固める。

「私、分かりました！私は私の未来を信じ、愛するのです！」

「うんうん。アイドルでもロックでも無い。それがツインラブでしょ！」

「応援するよ。二人なら最高の歌を届けられるよ」

「はい！ツインラブの音楽で、世界を目指すのです！ルールー！」

「？」

名前を呼ばれたルールーがえみるの方を向くと、えみるがルールーの手を繋ぐ。

「いつまでも一緒ですよ」

「はい。ずっとえみるの傍にいます」

二人はお互いの顔を見て笑い合う。

えみるもまた、改めて夢に向かって進む事を心に誓ったのだった。

しばらくすると、ソウゴはクジゴジ堂へ帰宅した。

「ただいま！」

ただいまと言うが、中に入ると誰もいなかったので、仕方なくソウゴはバイオリン

ケースを階段に置き、部屋の電気を付ける。

すると、ドアの方から『ガラ〜ン!』という音が響いて来た。

「あつ、いらつ……ルールー!」

ドアの開いた音が聞こえ、ソウゴがそっちに向かうと、そこには珍しくルールーが一人でやって来ていた。

「申し訳ありません。こんな時間に……」

「ううん。誰もいないし大丈夫だよ」

「あの、ソウゴ……まだ、お礼を言っただけだったので……」

「お礼? ああ……あの時?」

お礼と言われたソウゴはあの時、咄嗟にルールーを助けた事のお礼だと気づく。

「そんな、お礼なんて……俺の方がみんなに迷惑かけてたし」

「いいえ……私はソウゴに助けられてばかりなので……」

「大丈夫だよ」

「でしたら、せめて……」

ルールーはゆらりとソウゴの胸に体を寄せる。

「えっ……ルールー?」

ソウゴが突然の事に困惑していると、ルールーはソウゴの胸に抱きつき、顔を赤くし

て呟く。

「ソウゴ……今回のような事がまたあったなら、私がソウゴの傘になります……」

「えっ?」

その時ルーラーは、ソウゴの胸から流れる、アンドロイドである筈の自分でも温かいと感じられる鼓動を感じる。

しばらくすると、ルーラーはソウゴから離れた。

「では、また学校で……」

そう言っ、ルーラーはクジゴジ堂を去っていく。

「ルーラー……」

ルーラーに当てられた胸をソウゴは手を当てる。

彼女がクジゴジ堂を出ると、丁度同じ頃にクジゴジ堂の前にさあやが来ていた。

「ルーラー?」

さあやはクジゴジ堂を出るルーラーを見かけられながら、そのままルーラーは走って帰っていた。

その頃、ショーが終わったアンリが違和感を持つ足を見る。

「くっ……もう少しだけでも……」

通路で苦しげな表情を浮かべていた。

するとアンリの目の前に、リストルの名刺が浮かぶ。

「アンリ」

「……！」

しかし正人に呼ばれ、アンリは正気に戻る。

「打ち上げの準備出来たよ。アンリ……？」

「すぐ行くよ。楽しみだ」

——そう言ったアンリの足元には、僅かながらもトゲパワワが飛んでいた。

「こうして、我が魔王は心の傷から立ち上がり、キバのウオッチを継承した。

これで残るウオッチはあと三つ……」

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第45話 2018： 秘密の調査開始！クライアス社超アップ!!？

第45話 2018： 秘密の調査開始!クライアス社

超アップ!?!?

ある日の夜、ことりがリビングでノートパソコンを開いていた。

(お姉ちゃん達が行く所には、プリキュアと仮面ライダーが現れる……)

そういえば、お姉ちゃん達とプリキュアに仮面ライダーが一緒にいる所を見た事なんて一度も無かった……)

姉であるはなやその友達であるソウゴ達の正体を知った旅行の時から、ことりはその確固たる証拠を掴もうとしていた。

その為にもネットサーフィンを行なっているのだが、その途中で手を止める。

(無い……)

ネットを使いプリキュアと仮面ライダーの動画や静止画などを探し、みんなが戦うシーンはちゃんとあることを確認することはできた。

しかし、肝心の変身した手掛かりは一つも見当たらなかった。

「こうなったら、お姉ちゃん達を完全にマークして、完璧な証拠を見つける!」
ことりは椅子から立ち上がってそう叫び、拳を握り締めた。

一方、二階のはなの部屋では、当の本人はそんな事も知らぬままはぐたと寝言を言
いながら一緒に寝ていた。

そして翌朝、森太郎がキッチンでオムレツを作っていた。

「ハリー、卵二つでいいかな？」

「はいー！いつもご馳走になってもらってスンマセン！」

「いいのいいの。みんなで食べた方が楽しいもんね」

「オムレツー！オムレツー！」

ハリーがすみれ達にお礼を言っている横で、はながオムレツに目を光らせていた。

「はぐたん。どうぞ召し上がれ」

ルルーがはぐたんにおにぎりを差し出す。

「いただきますーすー！」

「いただきますーしゅー！」

朝食のオムレツを嬉しいそうに子供みたいな食べ方で食べるはなを、ことりはジツと
見つめる。

(やつぱり思えないなあ……キュアエールがお姉ちゃんだなんて……)

改めて見ると、やはりはながキュアエールだなんて信じられなく、自分の目を疑い始

めていた。

「ことり? どうかしましたか?」

ずつとはなだけ見つめることりにルルーが話しかける。

「いや、別に……(ルルーは……キュアアムールだっけ)」

彼女の顔を見てルルーがキュアアムールだというのは、わかるような気がした。

「私の顔に何か付いてますか?」

「あ、ううん。付いて無いよ」

「あげないよ!これは私のオムレツだから!」

はなはそう言って皿を遠ざけると足が滑ってしまい、更に壁に当たってオムレツが皿から離れて飛んで行く。

だがハリーが口でキャッチし、そのまま食べてしまった。

「めちよつく……!」

(ハリーさんはあの紫の仮面ライダーで、鎖みたいの使ってた……)

ハリーが仮面ライダーになった時の戦いも見ていたことりは、金色の鎖を利用して化物を拘束している姿を思い浮かべる。

(こうして見ると……みんな、あの化け物と戦ってるんだ)

エール達が自分を始めて助けてくれた時とあの旅行での戦いを思い出しながら、はな

にルーラー、ハリーを見ていつも危ない事をしているのだと思っていた。

「返して……！返して……！」

ことりがそんな思想している近くで、はなはすぐさまハリーに食べたられたオムレツを返すようせがむ。

「(これで、キュアエールって……)」

お姉ちゃんって……本当にお子ちゃまね……」

そんなはなを見て呆れ、キュアエールの時と雰囲気が違うと思いつつそう心中で呟いた。

それからことり達は学園へと向かい、授業が始まってしばらくして放課後となった。

「はい。どうぞ」

中庭でソウゴ達が集まると、今日はソウゴがアップルパイを持ってきた。

「やっぱり何度食べても美味しい！」

「この皮のサクサクがたまりません〜！」

皆んながアップルパイを美味しそうに食べていると、ソウゴがルーラーをチラ見する。

——私がソウゴの傘になります…

(何で、そんな事言ったんだろ……)

あの時に言われた事を振り返るソウゴの様子を、柱の影からずつとことりが調査していた。

(さあやさんがキュアアンジュで、ほまれさんがキュアエトワール。これも分かる……
そして……)

アンジュとエトワールの二人も似ている事に気づく中、ことりがソウゴをジッと見る。

(時見さんが……仮面ライダージオウ……)

ジオウは、ことりが危なかった時に何度か助けてくれた。そして同時に、ソウゴだけ旅行の時にジオウに変身したのを見ている。

(こうして見ると全然見えない。ただの王様、王様って言ってる変な人なのに)

案の定と言うべきか、ことりはソウゴの事を王様と言ってる変な人だと思っていたのだ。

「ことりちゃん？」

「何をやってるのですか？」

「……プリキュア……!?!」

「うええ!?!」

「たまたま声をかけたことりがいきなりプリキュアと言い出し、ツクヨミとえみるは上擦った声を出しながら驚く。」

「ツクヨミお姉ちゃんにえみるちゃん……」

二人が現れて、ことりが二人もみんなと同じだと気づく。

（…えみるちゃんもプリキュアで、最近よくお姉ちゃん達といるようになったのもわかる。それに、ツクヨミお姉ちゃんもいつも一緒だからみんなと同じ）

「な、な、な、何の事……？プリキュアがどうしたのです……？」

「（えみる……落ち着いて）」

でもツクヨミはプリキュアでもライダーでも無かったから、はな達のサポーター的な役割なのかな？と考えていることりを前に、ツクヨミは小声で狼狽えているえみるにフオローするように言う。

「あ、えつと、その……（流石にこんな所で言う訳にも行かないし……）」

ツクヨミとえみるとことりがグラウンドの辺りに場所を変え、ベンチに座る。

「こんな所に来てどうしたの？」

「えみるちゃんとツクヨミお姉ちゃん、ちょっと聞いてもいい？」

「な、何をですか？」

ことりは真剣な表情でツクヨミとえみるに尋ね、二人はその迫力に冷や汗を垂らす。

「キュアエールの正体って——」

「キュアエールだあ!?!」

ことが二人にキュアエールについて聞こうとしたが突如、ソウゴ達と同じクラスの男子・郁人が走りながらこちらに向かって来て、三人とすれ違った直後に足を止めて踵を返す。

「キュアエールさんがいるのか!?!? どこにいるんだ!?!?」

「何者なのですか!?!?」

「俺?俺はキュアエールさんファンクラブの会長!千世郁人だ!」

郁人は『キュアエールさん命』と書かれた帽子を被りながら自己紹介する。

「キュアエールさんファンクラブ……?」

「いつの間に来たのよ。それ……」

「郁人、待つてよ。プリキュアはこんな所にいないよ」

今度は日生が現れ、郁人にそう告げる。

「日生君……」

「ことりちゃん」

「何だ、知り合いか?」

「忘れちゃったの?野乃さんの妹さんだよ。ルールーさんの歓迎会の時もいたじゃない

か」

「ああそうか、野乃の家でやったもんな。野乃の妹も、キュアエールさんのファンなんだな」

「はい……?」

「ファン!?」

郁人が両手でことりの手を掴んでそう言い、えみるとツクヨミの二人が目を見開く。

「その気持ちは分かるぜ。あの日から、俺はキュアエールさんに心を——」

「助けて貰った恩人だもんな」

その時はオシマイダーが最初に現れ、はながエールに初めて変身した日の事で。ちなみに丁度、ソウゴもジオウへと初めて変身したのもこの日だった。

「そうなんだよ。それでさ——」

今度は夕焼けの中で、エールがクールに去る光景を浮かべる。

「何かキャラが違うのです」

「むしろそんな事は……」

キュアエールの正体を知るツクヨミとえみるは、彼女はそんなキャラではない……ましてや、はなだからと思っていた。

「そんなシーンあったかな?」

「いいんだよ!とにかく俺は、カッコ良くて可愛くて、最強のキュアエールさんに会いた
いんだよ!」

郁人がその場に踏みとどまり、周囲を見回す。

「何なのですか?」

「またか……」

「えっ?」

「またって何?」

ツクヨミが日生に今の言葉の意味を聞こうとすると…

「プリキュアの気配がする!」

「は?」

「でええっ!?!?」

「何で分かるの?」

「行くぞ!」

日生の言葉を無視し、プリキュアの気配を感じ取った郁人が、ことりとツクヨミの手
を掴んで走り出す。

「キュアエールさんファンクラブ会員三号!四号!」

「はいっ!?!?」

「いつ会員に〜!?？」

ことりは突然彼のファンクラブに入っていた事に驚き、混乱していた。ツクヨミに関してはとんだ迷惑だった。

「待つてよ!てか会員二号つて僕!?？」

日生がことりとツクヨミを無理矢理連れて行つた郁人の後を追う。

「意味が分からないのです……」

一人取り残されたえみるは、意味が分からないと呟いていた。

クライアス社のトラウムが居る研究室へ、リストルとビシンが赴いていた。

「来たね。例のものなら進んでいるよ〜」

二人が来たのを確認すると、トラウムが上機嫌にガラスケースにあるものを取り出し、手にかざした。

「二人のライダーとなったデータを基にして君達二人にあつた新型ウオッチだよ」

ビシンはハリーが使用しているギアジェットウオッチと形が類似したウオッチを見つめる。

「ねえ、ドクター。これさえあれば、ハリーも取り戻せるし、負け犬のゲイツも倒せる?」

「まあ、君次第に使いこなせばいけるだろう」

「そうか……」

ビシンは新型ウォッチの完成に待ち焦がれる。

「完成はどれほどでしょうか？」

「そうね。次回に君達が向かう時には完成させておくよ」

「我々には時間がないので早く」

リストルに軽く返事しながら、トラウムは今自身が開発しているリストルとビシンの専用新型ウォッチを見て、これが完成すればジオウ達を追い詰めるものになるかもしれない。そう思考していた。

同じ頃、クライアス社のジェロスの部屋のベッドの上で、ジェロスが膝を崩す。

「リトルバイリトル……誰も来ない……」

彼女は何やら、ベッドの上で何か沈んだ顔で呟いていた。

「私の元から……みんな去って行く……ホワイ……？何故戻って来ないの……？私から美しさが、失われているから……？」

部下の二人も彼女から離れ、彼女は心が既に孤独に苛まれていた。

「時と共に、私の能力が……輝かしい私が曇って行く……！」

自己嫌悪に陥った彼女は端末を時計に向けて投げ、時計を壊す。

「何で……戻らないの……戻って来なさい……!あの時よ……ツ!輝かしい私の……時間……!」

その時、悲しみから溢れるジェロスから巨大なトゲパワワが発生した。

キュアエールクラブの四人が来たのは、公園にあるたこ焼き屋だった。

その隣には、クライアス社を辞めたタクミが焼き芋屋をしていた。

「はいらっしやい!」

「タコ焼き……あの、プリキュアは?」

「はあく……(キュアエールと全然関係ないじゃん)」

ツクヨミは良かったような気がするが、全く当てにならない郁人のプリキュア気配察知に呆れていた。

「感じたのは、プリキュアの気配じゃなくて、ソースの匂いだったのか」

「お腹空いてたんですね。てか、どうしてこんな事に……」

「まあよくある事だ」

「よく……!?」

「それってダメじゃん……」

「心配すんな」

郁人はそう言うのと、ツクヨミとことりと日生に帽子を被せる。

「ファンクラブが力を合わせれば、必ずキュアエールさんに会える。なつ、日生」

「いや……だから僕はいつから会員に……?」

「会員三号、四号。タコ焼き奢ってやる。入会祝いだ」

「いや。私は、会員じゃ……んん……」

ツクヨミは否定したが、郁人のテンションじゃ断るのは難しいと感じていた。

「ありがとうございます。けど、割り勘で結構です。今計算します」

「えっ? いいよいいよ」

「ヘッポコの野乃の妹なのに、しつかりしてんな。お前のお姉ちゃんって、本当におつ

ちよこちよい——」

「だーれがヘッポコだあ!」

郁人の発言に反応したのか、四人の前に突如現れたはなが叫ぶ。

「だああっ!?!野乃……!?!?」

「また野乃さんがタコ焼き屋に?」

「はな、なんでここにいるの?」

「たまに手伝ってくれてんだよ」

以前に行われたはぐくみフードフェスティバル以来、はなはたまにこのタコ焼き屋の手伝いをしていた。

「まだまだ修行中だけだな。ま、頑張ってるのは良い事だ」

「野乃さんの焼いたタコ焼き、食べてみたいな」

「丁度焼いたのあるよ」

「ありがとう」

はなは日生にタコ焼きを渡すと、郁人にも自分の焼いたタコ焼きを渡そうとする。

「俺は親父さんので」

「ああん……!!?」

「キュアエールさんに会いたいのに、何で野乃が……う?」

「めっちゃ失礼!てかその帽子何!!?」

「キュアエールさんファンクラブの証だつてさ」

郁人にガンを飛ばすはなにツクヨミが小声で伝えると、はなの顔から笑みが出る。

「ファンクラブ? 照れますなあ」

「ちよつと……顔に出さないで……」

顔に出ると正体がバレる可能性がある事を心配するツクヨミ。

「何で野乃が照れるんだよ?」

「だか小首を傾げながらそう呟く郁人を見て、気づいてなくて良かったとホツとした。
(そりやまあ、照れるよね……)」

「なぜ姉が照れているのか気付いていたことりは、ホント単純だなーと呆れていた。
「じゃ、みんなの分」

「毎度」

郁人が四人分のタコ焼き代を支払う。

「この音……プリキュア!?!?」

「「えっ?」」

「行くぞ!」

何かの音を聞き取った郁人が走り、ことりが後を追う。

「一緒に行くから、心配しないで!」

「あ、うん」

日生がはなにそう伝え、二人の後を追った。

「プリキュア探し?けど、何でことりも一緒に?」

「まあ、成り行きの感じだけど……とにかくバレないように私が見とくから」

「お願いね。ツクヨミ」

ツクヨミが監視役という形で、ことり達の後を追いかける。

次に訪れたのは工事現場だった。因みにここではジンジンが工事のバイトしていた。

「何だ工事の音かよ……」

「全然プリキュアじゃないじゃん!」

(さつきいたけどね……)

ツクヨミが先程キュアエールであるはなど出会った事を思い出していると、四人は池のほとりのベンチに座り、タコ焼きを食べ始める。

「キュアエールさん、どこにいるんだよ……」

「………やつぱり、簡単には会えないよね……」

キュアエールの正体を薄々お察していることりは微妙な顔で答えると、ツクヨミはさつきから気になっていたりしたことを問い掛ける。

「ことりちゃんは、どうしてキュアエールに会いたいなの?」

「証拠が欲しくて……」

「証拠?」

「……あの、キュアエールがお姉ちゃんと似てるって言ったら、どう思いますか?」

ツクヨミがことりの発言を聞き、キュアエールの正体がバレたかと驚きながら危機感

を感じ出す。

「キュアエールさんと野乃が?無い無い。全然似て無いって」

だが郁人は野乃はながキュアエールではないかと聞き、絶対無い——それどころか、100%通り越して1000%あり得ないと話す。

「——やつぱり、そうだよね……」

うちのお姉ちゃん、昔からおつちよこちよいだから……

バナナの皮があれば必ず転ぶし、池があれば必ず落ちるし、いつもお騒がせして……」
それを聞いたことは、もし自分も「姉がキュアエールである」という前情報が無ければ、姉がプリキュアである訳が無いと考える所か、あの化け物が姉のせいでは何だかの理由で生成され、それでプリキュア達に迷惑を掛けていたのではないかという考えが浮かんでいたのでは?とすら思っていた。

「はあ……」

やつぱりあの光景は見間違いだっただのかなと徐々に思い始めたことろを見て、またしてもツクヨミがエールの正体がバレずに済んだことにホッとしたような顔になった。

「僕は、似てるって思う。」

それと、君のお姉さんは凄く素敵だと思う」

「えっ?」

しかし、日生はキュアエールとはなは似ていると話し、更に素敵な女の子だと思つて
いることを語る。

「いつも笑顔で、いつも元気に。それに、いつも誰かの為に頑張つてる。それが野乃さ
ん。」

それつて、誰でも出来る事じゃないし、凄い事だと思ふ。

キュアエールも、きつとそうだよ」

「日生……急にどうしたんだ？」

「あ、いや、その……」

「ぶくく……もしかして……あつ！」

ことりが日生から何かを察したその時、突風が起こり、こどりの帽子が飛ばされてし
まう。

「待つてー！」

彼女は帽子を追うが、帽子は池の中に落ち、ことりも池に落ちそうになつてどうにか
止まろうとするが、足元が崩れてしまう。

「ことりー！うわっ！」

その時。はながすぐさま駆け付けるが、落ちてたバナナの皮で滑り、そのまま池に落
ちる。

なおことりは踏みとどまった為、落ちる事はなかった。

「はな!」

「野乃さん……!」

「何でアイツいきなり……!?!」

「ことり、大丈夫?」

「お姉ちゃんこそ大丈夫?」

「めちよつく……」

「もう、びしょ濡れじゃん……」

ことりがびしょ濡れの姉に呆れていると…

「でも良かった」

「えっ?何で?」

「ことりが無事だったから」

「おーい、どないしたんや?」

「あっ!みんなー!」

妹が池に落ちなかつた事にはなは安堵しているとソウゴ達が現れ、見掛けたはなが手を振る。

「何やってんのはな?どこに行ったと思つたら……」

「ここで水浴びですか？理解不能」

「ずぶ濡れだけど、大丈夫……？」

ソウゴがずぶ濡れになっているのはなを心配していると、はなは濡れてしまった事で気分が落ち込んでいた。

「せつかく遊びに来たのに……」

「あそぼ！あそぼ！」

「どうしよう……拭かなきゃ」

「と言っても、タオル持って来て無いしな……」

「本当に……お姉ちゃんって……」

ことりはそう言うのと、駆け足でタオルを買いに向かう。

「ことりちゃん？」

「タオル、買って来ます！」

「待って！僕も行くよ！」

日生はことりの後を追う。

「お前ら……しようがねえな」

郁人も二人の後を追ひ、三人でタオルを買いに向かった。

その様子を見届けたソウゴは、ツクヨミに何故ことり達と一緒にいたのか問いかけ

る。

「ねえ、ツクヨミなんで一緒だったの?」

「まあ、その場の流れで言うか……」

「しかし、お前が他の奴と一緒にいるのは珍しくていいがな」

「ちよつとゲイツ。茶化さないで」

ツクヨミがゲイツに茶化されて、みんなが笑いあっていた。

その頃ことりはコンビニ二へ向かう中、はなの事を考えていた。

(お姉ちゃんが……キュアエール。

考えてみれば、キュアエールはお姉ちゃんのように、誰かの為に頑張っている)

日生の言ったことを考えると、本当にキュアエールが姉であると感じだす。

そのまま三人がコンビニに訪れるとその直後、砂時計猛オシマイダーが現れ、地面に拳を叩き付ける。

その時の爆音は、離れていたソウゴ達にも聞こえた。

「猛オシマイダーや!」

「あつちは確か、ことりちゃん達の行った……!」

「ことり……!」

ことりが危ないと感じたソウゴ達が変身アイテムを取り出ししていた頃、砂時計の猛オシマイダーは街の中を暴れていた。

「早く逃げよう!」

猛オシマイダーから三人が逃げるが、ことりが足を崩す。

「怖くて……足が……!」

「心配すんな!ここは俺が引き付ける!」

「でも……!」

郁人だけではあの怪物をどうにかするのは無理だ、とことりが言いかけるが…

「キュアエールさんなら絶対に助けに来てくれる!それを信じて、頑張つて走るんだ!」

郁人が猛オシマイダーの引き付けに向かう。

「おーい!こつちだ!やーいやーい!へっへーんだ!」

郁人が猛オシマイダーを誘い込む。

「郁人……よし……!こつちに来るんだ!」

誘い込ませている間に、ことりと日生が逃げようと試みる。

『フィニッシュタイム!ギリギリスラッシュ!』

その時ジオウが現れ、ジカンギレードでオシマイダーに斬りかかり。

「たああ!」

エールが最後にキックを放ち、猛オシマイダーが倒れると二人の前に着地したエールがことりに帽子を被せ、その直後にジオウが着地する。

「キュアエール……」

「仮面ライダージオウ……」

「危ないから下がってて」

『オーズ!』

ジオウはオーズのライドウオッチをD、3スロットに装填すると、前からオーズのアーマーが出現し、ドライバーを回す。

『アーマータイム!タカ!トラ!バツタ!オーズ!』

オーズアーマーを装着し、猛オシマイダーへと向かっていく。

すると、エールがことりの方を向く。

「どこにいても、助けるから」

「えっ……?」

エールのこの言葉に、ことりがある事を思い出す。

——それは小さかった頃、雨の降る中で公園の遊具の下で雷に怖がっていた所に、はなが傘も差さずに来てくれた時の記憶だった。

「お姉ちゃん……」

（やっぱり、キュアエールは……）

こころは今の台詞を聞き、エールの正体が、はなと言う完璧な証拠を見つけた。砂時計猛オシマイダーが突進して来ると同時に、エールが跳ぶ。

「フェザーブラスト！」

「スタースラッシュ！」

アンジュとエトワールの放ったフェザーブラストとスタースラッシュが命中し、砂時計猛オシマイダーが倒れる。

「はああああああつ！」

エールがアッパーを叩き込んだまま上に跳ぶ。

猛オシマイダーが地面に落下してから、エールが着地する。

「キュアエール……」

「いつも、誰かの為に頑張って……」

「頑張ったって何なるのよ。結果が全て！」

そこへ、今までと変貌したジェロスが現れ、彼女が手を叩くと猛オシマイダーは起き上がった。

「オシマイダー〜!」

猛オシマイダーは回転し出し、砂の塊のような物をジオウ達に繰り出した。

「「「うわあああ!」」」

「はああ!みんな!」

トラクローズでジオウは砂塊を防いだが、他のみんなは直撃だった。

「オシマイダー!ジオウを早く倒しなさい!」

オシマイダーは残ったジオウへと突撃をかける。

『タイムマジーン!』

するとジオウのタイムマジーンが現れ、猛オシマイダーにキックを放った。

「ソウゴ!大丈夫!」

「ツクヨミ!ありがとう!」

どうやら、ツクヨミがタイムマジーンを操縦していたようだ。その後、ツクヨミははぐたとタイムマジーンを降りてジオウと変わる。

「よし!」

ジオウは操縦レバーを握り、タイムマジーンを戦闘モードへと変形する。

「行くぞー！」

ジオウフェイスモードに変わり、ジオウのタイムマジンがパンチとキックを連続に繰り出し続ける。

「オシマイダー！そんなロボットに何を手こずってるのー！」

ジェロスのトゲパワワが伝わったのか、猛オシマイダーが今度はタイムマジンに攻め込む。

「うっ……」

形成逆転したのかのようにジオウが押され出し、次にまたさつきと同じ砂の塊がタイムマジンを襲う。

「うわあああー！」

「ソウゴー！」

ジオウのタイムマジンが倒れると、猛オシマイダーに踏まれ続ける。

「やばいよ……逃げよ……」

押されているのを見て、日生はこどりに逃げようと言う。

「逃げないー！」

しかし、こどりは逃げないと叫ぶ。

「プリキュアと仮面ライダーが……私達の為に戦ってくれている！だから……私達も逃

げちゃだめ!」

ことりには、あそこで戦っている姉や友人達を置いて逃げる事なんて出来なかった。

「私はいつか……いつか、お姉ちゃんみたいに強くてカッコいい人になりたいだから!」

そう叫ぶことりの体から、小さな光が出てきた。

「野乃さん……」

それに影響し、日生や郁人も同じような現象が起こった。

「何これ……」

あまりのことにジエロスは動揺しだす。

するとことり達に感化されたのか、ジオウがタイムマジーンのレバーを握る。

「負けるか……」

ジオウのタイムマジンが押し込まれていた状態から起き上がりオシマイダーを跳

ね除けた。

『エグゼイド!』

オーズのウォッチを外したジオウはエグゼイドウォッチを装填し、ドライバーを回す。

『レベルアップ!エ・グ・ゼ・イー・ド!』

エグゼイドウォッチを使用した事で、ジオウのタイムマジーンのプロセスがエグゼイ

ドモードへと変わると、そのままジオウのタイムマジンにはエグゼイドのような動きを見せ、オシマイダーに攻撃が当たると「ヒット」のエフェクトが現れる。

「私達も……みんなの明日を守るために負けない！」

それを見ていたエール達も起き上がる。

「俺達も……絶対に守る！俺達の未来を！」

ゲイツ達ライダーも三人共起き上がり、ウォッチを取る。

『ゲイツリバイブ！疾風！』

『ギンガ！』

『ギアジェット！』

三人はウォッチを装填しゲイツとハリードライバーを回し、ウォズはレバーを引く。

『ライダータイム！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイブ疾風

！疾風！』

『投影！ファイナリータイム！ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファン

タジー！ウォズギンガファイナリー！ファイナリー！』

『ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジェット〜！』

三人が強化フォームへとフォームチェンジすると飛び上がる。

『『フィニッシュタイム！』』

『ファイナリービヨンド ザ タイム!』

ドライバーを操作した三人がキックの態勢に入る。

『百烈タイムバースト!』

『超ギンガエクスプロージョン!』

『ジェットタイムファイニッシュ!』

三人が同時にライダーキックを放つと、猛オシマイダーは身動きが出来ない為そのまま直撃し、三人のライダーキックを受けた事で猛オシマイダーの動きが止まった。

「「「メモリアルキュアクロック!チアフル!」」」

エール達五人が叫ぶと、ミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「「「ミライパッド!オーブン!」」」

エール達の右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

「「「プリキュア!チアフルスタイル!」」」

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がチアフルスタイルに変身する。

「「「メモリアルパワー!フルチャージ!」」」

そして、パワーをメモリアルキュアクロックに集める。

「[[[[プリキュア！チアフルアターック！]]]]」

六色の五つ葉のクローバー型エネルギー弾を発射するチアフル・アターックを放つ。

紫、赤、黄色、水色、ピンクのハートの順に猛オシマイダーにぶつかり、最後にはぐたんがハグするポーズをして虹色のハートに包み込み、猛オシマイダーを浄化した。

「……あなた達にも、いづれ分かるわ！」

ジェロスは猛オシマイダーが消滅したのを見て去っていった。

その後、ことり達があの時の公園の遊具の方に着くと、はなが何故か上から転がり落ちる。

「お姉ちゃん!?？」

「おおい、野乃！」

「大丈夫!?？ 怪我して無い!?？」

「うん、私は大丈夫」

「良かった」

「！ 見てよコレ……」

はながそう言うと、紐の切れた草履を見せる。

「ビックリした……急に切れちゃって……タコ焼き屋さんで張り切りすぎたかな……ま、おっちゃん喜んでたからいつか……」

笑顔でそう言うはなを見つめる日生の頬が赤くなる。

「? ……どうかした?」

「あいや、あの……」

「ぶくく」

「どうした?」

「?」

「みんな無事で良かったのです」

今度はえみるが降りて来る。

「キュアエールが助けてくれたから」

「えっへへ……」

ことりの言葉を聞いたはなは、思わず笑みを浮かべる。それを見た郁人は頭に『?』を浮かべる。

「何で野乃が照れるんだよ? お前いつつも落ち着き無いよな。少しはキュアエールさんを見習ったらどうなんだよ?」

「うるさいなー! いいでしょ別に!」

「けど……俺もキュアエールさんのカツコいい所見たかったぜ……！キュアエールさん！カムバック！」

郁人が空に向かって叫び、そんな郁人をはな達は苦笑して見ていた。

（これで、キュアエールは本当にお姉ちゃんだつて分かった。後は……）

翌日ことりは、はなを追ってクジゴジ堂の前へと来ていた。

（今日お姉ちゃん達はここに集まるって言ってた。他のみんなも一緒なはず……よし……！）

ことりは姉達から真実を聞く決意をし、ドアを開ける。

「いらつしや……つて、ことりちゃん？」

「ことり？どうしたの？」

（……うん、いるのは私達だけだね）

ことりはクジゴジ堂の中を周囲を見回し、ソウゴ達しかいない事を確認する。

「みんなに聞きたい事があるの」

「聞きたい事？」

「私達もですか？」

「うん。ちゃんと答えて」

「いいよ。なんでも答えるよ」

ソウゴの言葉を聞いたことりが深呼吸し、真剣な表情をはな達に向ける。

「お姉ちゃんも、さあやさんも、ほまれさんも、ルールーも、えみるちゃんも——プリキュアなんでしょ? 時見さんとハリーさんは仮面ライダー……ゲイツさんやウオズ先生もですよ?」

『ツ!!?』

「ことりからプリキュアとライダーだと尋ねられ、全員が一気に正体がバレたことに驚く。

「な、何言ってるの? 私達がプリキュアと仮面ライダーだなんて——」

「とぼけないで!」

はなは何とかして誤魔化そうとするが、ことりの気迫に満ちた言葉にはなが驚く。

「みんな温泉に行ったあの日、お姉ちゃん達私に温泉で待つるように言ってたよ?」

「う、うん」

「私、気になってコツソリについて行ったの。そうしたら時見さんが仮面ライダーに変身したの見たの」

「……………えっ?」

みんなの目が一気にソウゴに向けられた。

「その後もプリキュアと仮面ライダーが、怪物と戦っているのを見て、やつつける所も見たの。その時にお姉ちゃん達に戻るのを……」

「見てたのですね……」

「だからあの時、ことりちゃんの様子がおかしかったんだ……」

さあやは温泉から帰る時のことりの様子を思い出し、その時の疑念が晴れる。

「……それでもまだ、完璧な証拠が無かったから疑心暗鬼だったけど、昨日でようやくお姉ちゃんがキュアエールだって分かった。

私達を助けた時に言ったキュアエールのあの言葉は、間違い無くお姉ちゃんだった」

そうまで言われると、ソウゴ達は流石に否定する事は出来なかった。

「私も、プリキュアになりたい！ねえ……どうやったならなるの！教えて！」

ことりははなに詰め寄り、プリキュアにはどうやってなるのかを尋ねる。

それを見ていたハリーは、言いづらそうにしながら、彼女に今の状況を話した。

「無理なんや……」

「えっ……？」

「もう、プリハートは無いんや……」

「かくしてことり君は、はな君達の力になる為にプリキュアになりたいと願った。
しかし、もうプリハートは残って無いという事が、ハリー君の口から告げられたの
だった」

次回! Re. HUGつとジオウ!

第45話 2006： プリキュアになりたい!

第46話 2006：プリキュアになりたい！

クライアス社にて、リストルとビシンの新型ウォッチが完成された。

「お待たせ。完成したよ、君達の新型ウォッチ」

トラウムの手には二つのウォッチが用意されており、一つはリストルのウォッチ……ウエイクベゼル部が黒い四角い形状となっているクラレットライドウォッチ。

もう一つはビシンのウォッチで、ハリーのギアジェットウォッチと同型のギアファングライドウォッチである。

「ご苦労でした。ドクタートラウム」

「いやいや、こっちは中々面白いものが完成したよ」

「これで、ハリーを僕のものに……」

新型ウォッチを見て、ビシンはこれならハリーを連れ戻せると思い込む。

「そう簡単には行かないかもしれない」

「なんでだよ……」

「君の望みを果たそうにも、プリキュアやオーマジオウがいる。そう簡単に行かない」
「……」

「だったら、手を貸してあげようか？」

ビシンがリストルに簡単にはいかないと言われ顔を歪ませていると、入り口の前にウールが立っており、そのまま研究所に入ってきた。

「君に何が出来るの？」

「おもしろい奴を連れてきたんだよ。入ってきなよ」

ウールがドアの向こうにいる人物を呼ぼうとする。

その時、轟音を響かせながら勢いよく扉を蹴り飛ばして、暗い顔した男性が入ってきた。

「あゝゝ………今、俺を笑ったか……」

足から『チャリ…チャリ…』という金属音を鳴らしながら、男性は笑ったかと問い掛ける。

同じ頃、一人の男が暗い洞窟から現れた。

「新しい………地獄が始まる……」

その男は空を見上げながら、もうじき地獄が始まると告げる。

クジゴジ堂では、ことりがみんなの正体を知っている事を告白すると、自分もプリキュアになりたいと話した。しかし…

「もう、無い……?」

「俺が持つて来たプリハートは全部で四つだけで、後はもう無いんや」

「でも、五つあるよ……?」

「えみるとルールーがプリキュアになろうとした際に、もう一個出てきたんや」

ハリーが当時のことを思い出しながら、えみるとルールーのような同じ事が二度おこるのは難しいと語る。

「じゃあ……プリキュアになる事は出来ないの……?」

「スマン……」

「そんな……」

「ことりの気持ちは嬉しいかったよ。」

「だけど、これからお姉ちゃん達に任せなさい!」

プリキュアになれないと知りショックを受けていることりに向け、はなは胸を手に当てて任せなさいと言う。

「……バカ……」

「ん?」

小声だからうまく聞き取れなかったが、ソウゴの耳にはバカと聞こえた。

「お姉ちゃんのバカ!!?」

ことり姉にバカと叫んで、クジゴジ堂を飛び出していった。

「ことり!」

はなもことりを追いかけようとする。

するとその時、『ボウウーーン!』という巨大な物が落ちてきたかのような爆発音と共に、いきなり地震の様な震動が起こった。

「なんですか?!? この揺れは?」

えみるがどうなっているのかと驚いていると、テレビから臨時ニュースが放送された。

『臨時ニュースをお伝えします!』

たった今、小規模の隕石が地球に落下しました——』

「隕石が地球に落ちてきたって……」

「隕石?!?」

ソウゴ達が外を見ると、たった今ことりの走っていた方にその隕石が落ちた筈だ。

「ことり……ッ!」

「急ごう!」

ソウゴ達は直ぐに隕石の落ちた方へ走る。

その頃、隕石の落ちた方では……

「……………ん……………」

隕石が落ちた風圧により、一瞬気を失っていたことりが倒れていた。

しかし彼女が起き上がったとき、目の前の光景に驚愕した。

「わた、し……………」

ことりが——自分自身の姿がもう一人、目の前に立っていたのだ。

「……………ニヤツ」

そしてことりを見て、不敵な笑みをもう一人のことりは見せた。

するといきなり、もう一人のことりの体が光り出すと、まるで幼虫のような緑色の怪

人となって現れた。

「ツッ？……………あ、あああ……………」

突如現れた怪人に、ことりは腰が抜けて動けなかった。

しかし、怪人は無慈悲にも腕を上げてことりに降りかかろうとした。

「ことりちゃん！逃げて！」

だがその前にツクヨミがファイズフォンXで銃撃し、怪人を怯ませた。

「ツクヨミお姉ちゃん……」

「ううっ!!?」

ソウゴが怪人にタツクルし、怪人をことりから離れた。

「大丈夫?」

「はい……」

「ことりっ!……よかつた」

「お姉ちゃん……」

ことりが無事だった事に、はなはホツとした表情となる。しかし怪人達はさ更現れ、ソウゴ達に迫る。

するといきなり轟音が鳴り響き、怪人に何処からともなく飛んで来た砲撃が炸裂した。

「えっ?」

何があつたのかと思い、ソウゴ達は砲撃が放たれた方を見る。

「仮面ライダー?」

そこには、厚い装甲を付け、蛹のような形の青い仮面ライダーがいた。

そのライダーは肩に砲撃のような武器が取り付けられており、腰のベルトにはクワガタのような機械が取り付けられていた。

「フーン！」

現れた仮面ライダーの両肩につけられたバルカン砲が火を吹き、現れた怪人に撃ち続ける。

その隙にソウゴとはなはことりを連れて怪人から離れ、みんなの方へと戻る。

「あの生き物はなんなのですか？」

「あれはワーム。人間に擬態する地球外生命体だ」

ウオズが本を開いて、あの幼虫の様な怪人…ワームについて説明する。

「地球外生命体って……宇宙人ですか!?？」

「この本によれば、かつて仮面ライダーカブトが戦っていたという」

「仮面ライダーカブト？」

仮面ライダーカブトは、あと三つのウオツチのうちのひとつだ。

「そして、あれは仮面ライダーガタック……仮面ライダーカブトのライバルというところかな」

「奴らと闘う事で、カブトウオツチを手に入れる手掛かりになるかもしれんな」

その話を聞いたゲイツは、ガタックと共にワームと戦う事がカブトに繋がると思う。

「それよりもこいつらをなんとかしないと！みんな行くよ！」

『『ジクウドライバー！』』

『ビヨンドドライバー!』

ソウゴ達四人はそれぞれジクウドドライバーとビヨンドドライバーを腰へと装着した。

「ツクヨミ。ことりちゃんと離れてて」

「わかった」

ツクヨミははぐたんを抱えながら、ことりを連れてソウゴ達から離れる。

それに計らってソウゴ達はウオッチを取り出し、はな達はプリハートを取り出しミライクリスタルをセットする。

『ジオウ! W!』

『ゲイツ! ファイズ!』

『キカイ!』

『ハリー! カリス!』

四人はウオッチをドライバーに装填し構え、はな達五人はプリハートを取り出す。

『アクシオン!』

「「「変身!!?」」」

「「「ミライクリスタル! ハートキラッと!」」」

四人がドライバーを操作し、アーマーが体に纏われる。

五人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、揃っていつもの手順を取り

姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！サイクロン！ジョーカー！ダブル！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！アーマータイム！コンプリート！ファイズ！』

『投影！フューチャータイム！デカイ！ハカイ！ゴーカイ！フューチャーリングキカイ！キカイ！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！アーマータイム！チェンジ！カ・リ・ス〜！』
 「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「[[[[HUGつと！プリキュア！]]]]」

全員が変身を完了する。

「プリキュア！」

「ことりちゃんはこっちー!」

ツクヨミが手を引き、ことりを連れて行く。

ジオウ達は敵の数が多いため、二手に分かれてワームと戦闘を行っていた。

「はぁぁ!」

ゲイツとハリーはドライバーを回し、飛び上がる。

『フィニッシュタイム! ファイズ! エクシードタイムバースト!』

『フィニッシュタイム! カリス! スピニングタイムフィニッシュ!』

ゲイツとハリーのライダーキックが決まり、ワームは爆発して跡形もなくなった。

「こいつら大した強さじゃないな?」

「一気に決めるよ!」

ゲイツとエトワールが攻め込む。

「甘くない方がいい。まず彼らは……」

すると、数体のワームの体が蒸発し出し、そのまま虫が脱皮するかの様にその姿が変

わった。

「脱皮した……」

「……成虫に進化する」

「まんまん虫やないか?!?」

「ふん。姿を変えたところで……」

ゲイツとエトワールが攻撃を仕掛けようとする。

「うわあああ!!?」

しかし、攻撃を受けたのはゲイツとエトワールだった。

「ゲイツ君! エトワール! どうして?」

先に仕掛けた筈の二人が攻撃を受けた事にジオウ達は疑問に思う。

「彼らは成虫に進化するとクロックアップし、高速で動けるんだ」

説明しよう! ワームが進化し成虫態になると、『タキオン粒子』をその身に駆け巡らせる事が可能になり、高速で動けるかの如く時間流を自在に活動できる『クロックアップ』を発動した事で、ゲイツとエトワールを高速の世界で攻撃を繰り返したのだ。

「それを早く言え!」

二人がクロックアップについて言わなかったウオズを怒鳴る。

「速さなら大好物だ!」

「俺も付き合おうで!」

『ゲイツリバイブ! 疾風!』

『シノビ!』

『ギアジェット!』

三人がゲイツリバイブ、シノビ、ギアジェットの三つのウォッチを起動し、ドライバ―に装填。ドライバ―を操作しフオームチェンジする。

『ライダータイム！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！疾風！疾風！』

『投影！フューチャータイム！誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャーリングシノビ！シノビ！』

『ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジェット〜！』

フオームチェンジした三人はクロックアップするワームに張り合おうと、高速での戦闘を繰り広げる。

「エトワール！私達はまだ成虫になっていない方を！」

「ええー！」

アンジュとエトワールはまだクロックアップの出来ない幼虫のワームへと向かい、メロディソードを構える。

「フェザーブラスト！」

「スタースラッシュ！」

アンジュとエトワールの放ったフェザーブラストとスタースラッシュが命中し、幼虫ワームが倒れて爆発した。

一方、ジオウ、エール、マシエリ、アムールはガタツクと共に、ジオウはWアーマーで奮闘していた。

『フィニッシュタイム!』

ドライバーを回すと風を纏い、ジオウが上昇する。

『マキシマムタイムブ레이크!』

風を纏ったまま、アーマーが変形したメモリドロイドとジオウの開いた両足に取り付けられ「W」を描くトリプルキックを放つ。

「オリヤヤヤヤヤ!」

ジオウのタイムブ레이크を受けワームは爆発した。

「どうよ〜♪」

ジオウが着地すると、Wの癖で手首を回す。

「凄……」

隠れて見ていたことが、そんなみんなの戦う姿に見惚れていた。自分にもみんなの力があれば、と思うようになる位に。

「うわあああ!」

だがほっとしたのもつかの間、いきなり何者かにジオウが襲われる。

「ソウゴ!大丈夫!」

「うん……今のは……?」

現れたのは、又しても仮面ライダーだった。

しかし腰の方には、ガタツクとは違うバッタのようなものが装備されていた。

「影山か!」

「フン」

現れたのは薄暗い茶色の姿をし、ガタツクと同じZECT製のベルトに茶色いバッタのような機械がベルトの真ん中に置かれており、利き手にはバッタの脚の形をした特殊兵装アンカージャッキが装備されているライダー、仮面ライダーパンチホッパーだった。

「なんですか?あの暗い感じの仮面ライダーは……」

「あの仮面ライダーからは、かなりのトゲパワワが感じられます」

アムールが影山という人が変身している仮面ライダーからトゲパワワが感じられると話す。

「クロックアップ」

パンチホッパーは腰に装着したベルトのバックルの上の方にある『トレーススイッチ』に触れると、またしても高速に移動し始めた。

「キャストオフ!」

それを見たガタツクがベルトに装着してあるガタツクゼクターの角を反対へと変える。

『Cast Off! CHANGE Stag Beetle!』

すると、ガタツクの体から両肩のバルカンや頭部などが一斉にパージされた事で体が軽量化。

頭部左右に倒れていたガタツクホーンが起立し側頭部の定位置に収まった事で、頭部がクロガタの角へと変わった。

「姿が変わった……」

「クロックアップ!」

『CLOCK UP!』

ガタツクも腰横にある『スラップスイッチ』を押し、クロックアップシステムを使ってパンチホッパーとの高速戦闘を繰り広げた。

「速っ……っ?」

やはりと言うべきか、そのスピードにはジオウ達の目では追いきれない。

しかし、二人のスピードが速いせい、ビルにぶつかり破片が飛び散る。その破片の一部が、下にいる逃げ遅れた親子に降りかかろうとしていた。

「ッ!? 危ない!」

ツクヨミが咄嗟に手を開き、岩に向けた。

すると、瓦礫のところだけの時間を止めた。

「ツクヨミお姉ちゃん……?」

ツクヨミの力を初めて見たことは驚いたが、一方のツクヨミは時間を止める力を見て、その力が翔一の時よりも力が上がっていたことを感じた。

「!?」

その時、ツクヨミにはある光景が見えた。

そこは、暖炉のある部屋だった。

そこにはソファアアがあつた。

そこには笑っている父のような男性。

そこにはまだ幼い自分を腕で包んでくれる母親。

そしてもう一人、黒い帽子を被ってこつちを見つめる男の子がいた。

「今の……」

脳裏から見えた昔の記憶に戸惑い、それと同時にツクヨミの止めていた瓦礫の時間が動いた。

一方、ジオウ達はパンチホッパーのクロックアップからの攻撃に苦戦していた。

「そうか……あればゲイツリバイブと同じ。だったら……」

ジオウはカブトの力が無くとも出来るクロックアップの対応を思いつき、ジオウオツチⅡを起動させる。

『ジオウ！Ⅱ！』

ジオウオツチⅡを分割しドライバーの左右に差し込むと、後ろから二つの時計のエフェクトが現れる。

そしてドライバーを回し、二つの時計は左右対象に止まって時計バンドのエフェクトとアーマーが纏う。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

ジオウⅡへとフォームチェンジし、金色のジオウオツチⅡが光ると、両目にかかる長針のアンテナ2本が回転した。

「見えた！」

未来を見たジオウはサイキョーギレードで構える。

「1……2……3！」

カウントを取っていると、パンチホッパーはタイミングよくジオウに突撃してきた。

「はああ！」

ジオウはすぐにサイキョーギレードで反撃に転じ、パンチホッパーに攻撃を直撃させ

て、動きを止めた。

「よし！」

「アムール！」

「はい！」

「ツインラブギター！ミライクリスタル！」

パンチホッパーの動き止まっている内に、アムールとマシエリの二人はツインラブギターにルージュとバイオレットのミライクリスタルをセットする。

「アユーレディ！」

「行くのです！」

ツインラブギターを使い、二人が弦を弾き演奏を始める。

「届け！私達の愛の歌！」

「心のトゲトゲ！」

「ズッキュン撃ち抜く！」

「ツインラブ・ロックビート！」

マシエリとアムールがツインラブギターを持ち替え、二人同時に赤と紫のハート型エネルギーを放つツインラブ・ロックビートをパンチホッパーへと放った。

「!?？」

「ああー！」

突如、パンチホツパーの前に何者か現れ、マシエリとアムールのツインラブ・ロツクビートを相殺した。

「あゝあ……いい光だな……」

パンチホツパーの前に現れたのは、各部に昆虫の脚を思わせる意匠と顔から胸にかけて目の中に手の指が入り込んだ腕のような意匠があり。右肩には角、左肩には装甲状のパーツ、そして頭部には大型化した角を生やしたカブトムシの様な赤いアナザーライダーだった。

「アナザー……カブト」

「矢車……」

「……加賀美。お前はいいよなあ……」

「兄貴」

アナザーカブトは加賀美を見据えて恨み言を呟くとそのまま、パンチホツパーと共に高速で去っていった。

その一方で、ツクヨミは自分の力を気にしていた。

（また……この力が……）

前よりも力が強くなっている事に気付いてはいるが、ツクヨミは自分の力の正体にま

だ気づいていない。

そんな動揺している彼女の様子を、ビルの屋上からスウォルツが見ていた。

「力は強くなっているようだな。完全に覚醒するのも時間の問題か」

「その覚醒ってやつをするとどうなる?」

背後から先のスウォルツの言葉に対して質問する声が聞こえた。

「門矢……士」

士はスウォルツの背後に気配を悟られずに現れると、ツクヨミについて問い掛けた。

「その女とお前は関係がある……ってところまでは調べがついている」

「なら自分で調べれば良からう。調べられる物ならな」

「フツ、ならそうさせてもらおうか」

そう言うと士は階段を降り、スウォルツの前から去る。

「……さって、こいつは……どうするかな?」

歩いている途中で、士は自身のポケットに入れている、ある物を見てどうするかと呟く。

しばらくしてソウゴ達は、仮面ライダーガタックだった男性をクジゴジ堂へと連れて

行き事情を聞く。

「加賀美新。仮面ライダーガタツクか」

「ねえ？あのアナザーカブトの正体知ってたみたいだけど、誰なの？」

「あのカブトもどきの正体はおそらく、矢車想。俺と同じく、元々ZECTのメンバーだった男だ」

「ゼクト？」

「何なのですか？そのゼクトとは？」

ルルーがゼクトというのは何なのかと聞くと、ソウゴの質問を終えた加賀美は次に彼女の質問に答える。

「ワームの侵略から人類を守るための組織だよ」

「そのような組織のあったとは、初めて知ったのです」

「元は裏の組織だからね。あまり外部には漏れないようにしてるんだ」

「それで、あのライダー何なの？」

はなは先程、アナザーカブトと行動を共にしていた茶色のバッタの様なライダーを思い浮かべながら話しかける。

「さっきのライダーはパンチホッパー、影山瞬。矢車と影山はコンビなんだ。地獄兄弟
とってね」

「この人達は兄弟なの?」

「兄弟じゃない」

「えっ?」

地獄兄弟と言っているからあの二人は兄弟だと思っていたのに、兄弟じゃないと返されたのは、じゃあ何で兄弟と呼ばれているのかと困惑する。

「訳が分からないな。で……君の目的は?」

地獄兄弟の話題を切ったウオズは何故、加賀美がこの町に来たのかの理由を尋ねる。

「俺は影山を追っている。奴はワームの擬態だ」

「何故、そう言い切れる?」

「影山は、既に死んでいる」

「死んだ人にまで擬態するなんて……」

「そうして矢車を騙している」

ワームが死んだ人間にまで擬態できるという事実を知ったさあやが戦慄していると、ソウゴがさっきの加賀美のセリフで疑問に思ったことを口に出す。

「ねえ、加賀美さんはカブトもどきって言ったよね。だったら本物カブトは今どこにいるか知ってるの?」

アナザーカブトに変身している矢車と言う男性をカブトもどきと言うのなら、本物カ

プトを知っているのかと尋ねる。

「あ……あいつなら……豆腐を買いに行ってる……」

「豆腐？」

加賀美の言葉を聞いて、「豆腐を買いに行っているってどう言う事だ、とソウゴ達は首を傾げる。

「とにかく、俺は影山を倒す。君達も奴の情報を掴んだら連絡してほしい」

「分かった」

ソウゴ達にも協力してもらおうと頼み込むと、加賀美はクジゴジ堂を出ようとする。

「………とここで、渋谷はいつ復興が終わったんだ？」

『……』

「ッ!?」

すると加賀美はふと立ち止まって、いきなり渋谷の復興と聞かれるが、一体何のことだとソウゴ達は首を傾げる。

しかし、それを聞いたウオズは血相を変えた表情で加賀美を見る。

「復興？」

「復興なんてあったけ？」

渋谷の復興と言われても、彼らには復興なんてあったような記憶がない。

「1999年。隕石が落ちて渋谷は壊滅しただろう」

「そうなの？」

「ごめん。俺達、その時まで生まれてないから……」

「そうか……」

「……」

確かにそんな前ではソウゴ達を知るわけがない。加賀美はしようがないと思っ
た。

ただ、ウオズは不審な表情で加賀美を気にしていた。

その頃、高台で町を見ながらことりが座っていた。

「ことりちゃん」

そこへツクヨミが現れ、ことりの隣に座る。

「やっぱいいいわね。この町は……」

「うん」

二人ではくぐみ市を高台から眺める。

「……実はね、ことりちゃん。私、この時代の人じゃないの」

「えっ？」

正体を知られたならと思いい、ツクヨミは未来から来たことを打ち明けた。

「私だけじゃないの、ゲイツもルールー、ハリーにはぐたん、ウオズも何十年も先の未来からこの時代に来たの」

「ルールーもはぐたんも……!?」

「私達のいた未来の世界は、クライアス社の会長であるオーマジオウに時間を止められているの」

「オーマジオウ?」

「その正体はね、未来のソウゴなの。」

私達は、この時代のソウゴを倒して、クライアス社の未来を変えようとしたの……」

ツクヨミはそれから、ソウゴが未来でオーマジオウとなり、仲間やそこにいる人達から時を奪った事を話続けた。ことりはそれ聞いて、体に震えが走った。

「ツクヨミお姉ちゃん達は、今も時見さんを消そうしているの?」

「ううん、今は違う。ソウゴは私達にとって大切な友達。」

だから、ソウゴがクライアス社にもオーマジオウにもならない。新しい未来を作ろうって決めたの」

「新しい未来……」

「どうしてもプリキュアになりたいの?」

話を变えて、ツクヨミがことりにどうしてプリキュアになりたいのかと聞くと、ことは頷く。

「うん……お姉ちゃんの力になりたいの……」

だって、お姉ちゃんって子供っぽいし、おつちよこちよいの上すぐにドジちゃうし」
はなの事を話していることりを見て、ツクヨミは苦笑しながらも彼女の事が心配なんだと感じる。

「私にも兄弟か姉妹がいれば、そんな風だったかな……」

「ツクヨミお姉ちゃんにも、誰かいたの?」

「…わからないの」

「えっ? わからないって?」

「私は、ゲイツ達と会うまでの記憶がないの」

「それって記憶喪失?」

「まあね。でも……」

最近は使っていないが、日々に思うことがある。

ツクヨミの持つ、タイムジャッカー達と同じ時間を止める力。それが昔の記憶と関わっているのだと……

「ツクヨミ」

自身の過去について深く考え込んでみると、ツクヨミとことりのもとへゲイツとハリーが足を運ぶ。

「またあの力、使ったんだってな」

「うん。前より強くなっているみたい……」

それより、この力を使った瞬間、記憶が……」

「思い出したんか？自分の過去のこと」

ハリーにそう言われたツクヨミは頷くと、過去の記憶が見えた事をゲイツ達に打ち明けた。

「お父さんと、お母さんがいた……それに、誰か男の人……」

「それって、ツクヨミお姉ちゃんのお兄さんとか？」

「わからない……」

「その秘密、その目で確かめてみるつもりはあるか？」

ツクヨミは自分が何者なのかと悩んでいると、土がゲイツ達の前へ現れた。

それを見てゲイツとハリーは警戒し、ことりは突如知らない人が現れた事に困惑していた。

「誰この人……」

「門矢士……仮面ライダーデイケイドだ」

「どうやら、だいぶ時空が歪み出している」

「時空が歪んでる? どうゆうことや?」

「:俺もその答えを探している」

士がハリーの質問を軽くあしらっていると、ツクヨミが士に近寄る。

「その時空の歪みと、私が関係しているってこと?」

「さあな。どうする? 乗るか?」

士がツクヨミに、先の話に乗るか乗らないかと問う。

「お願い。知りたいの、自分のこと」

「私もついていっていいですか?」

「ことりちゃん……」

ツクヨミは士の誘いに乗ると、ことりもついて行くと言う。

「そうは行きません」

声が聞こえ振り返ると、そこにはリストルとビシンが既に変身した姿で立っていた。

「ハリ〜! 今日こそ君を連れ戻すよ。僕の新しい力でね!」

ビシンがハリーを連れ戻すと言うと、二人がジリジリと近づいていく。

「ツクヨミ。ことり。はぐたんも一緒に頼む」

ハリーがツクヨミにはぐたんを渡す。

「お前らは早く行け！」

「……わかった。お願い」

「……」

はぐたんを託されたツクヨミを見ると、土は灰色のオーロラカーテンを出現させた。

土がカーテンを潜るとツクヨミとはぐたん、ことりも続けてカーテンを潜る。

「よしー！」

「スウォルツ氏に止めるように頼まれたのですが、これでは仕方ありませんね。新型ウオッチだけ試みましょう」

「行くよー！ハリーー！」

リストルとビシンはトラウムが作った新型ウオッチを取り出し、ウオッチのウエイクベゼルを回した。

『クラレット！』

『ギアフアング！』

ウオッチから鳴り出した音声と共に、二人はウオッチをジクウドライバーのスロットに装填した。すると二人の周囲にそれぞれ黒と赤のアーマーが浮かび上がり、それを見てドライバーを回す。

『クラレットタイム！唯我独尊！絶対の力を！リストル…クラレット！』

『フアングタイム！導け！完全なる力を我が手に！ビシン！ギアフアング〜！』

ドライバーを回すのと同時にアーマーが次々と二人の体に付けられていき、フォームチェンジを完了した。

「新しいウオッチか……」

「ドクタートラウム……また厄介なもん作りやがったんやな……」

リストルのアーマーが黒っぽくとなっており、背中にはボロボロの傷だらけのマントをつけている。

ビシンの方はアーマーが赤へと変色し、左手に巨大なトラのようなクロウを装備している。

「ハリー……こっちも全力で行くぞ」

「おお」

二人はジクウドライバーを装着し、ゲイツウオッチとハリーウオッチ。更にゲイツリバイブ、ギアジェットを取り出す。

『ゲイツ！ゲイツリバイブ！剛烈！』

『ハリー！ギアジェット！』

二人がゲイツリバイブとギアジェットを起動し、ドライバーに装填して構える。

「変身!!？」

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！剛烈！』

『ライダータイム！ハ・リ・ー！ジエットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジエット〜！』

ドライバーを一回転させ、こちらもゲイツリバイブ、ギアジエットへと変身し、リステルとビシンの新フォームへと応戦する。

街の方へと出向いたソウゴ達は、地獄兄弟の手がかりはないかと歩いていた。

「ねえ、なんで兄弟じゃないのに地獄兄弟って呼ばれてるの？」

はなは加賀美が言っていた地獄兄弟。矢車と影山は血の繋がった兄弟では無いのに、何故兄弟なのかと気になっており、そう呟く。

「それ俺も気になってた。あの二人は兄弟なのに兄弟じゃないって」

「それは、俺達は同じ地獄を見たからさ」

ソウゴの疑問に答える様に声が聞こえ、ソウゴ達は振り返る。

「影山瞬！」

ソウゴ達は加賀美から貰った写真と見比べると、少し容姿は違う気がしたが、影山瞬本人に間違いない。そうとわかると、ウオズは影山に何故自分たちの前に現れたのか問いかける。

「何故、君の方から現れる？」

「手伝ってほしいんだ。俺はどうしても兄貴を助けない」

「兄貴とは、矢車想のことか」

「加賀美さんが言ってたよ。あんた、ワームなんじゃないの？」

「そうだ。でも、人間としての記憶はそのままだ」

「どうして記憶があるんですか？」

「ワームはコピーした人間の記憶を持つ特性がある」

「さあやの疑問に対してウオズの解説でワームの特徴を理解すると、影山は話を続ける。」

「だから、兄貴があんな怪物になっちゃったことが辛い。俺達は地獄を見すぎた。これ以上、地獄は見たくない」

「矢車を助けたいという影山の返信に、ソウゴはすぐに答えた。

「分かった」

「一緒に矢車を止めることに協力を受け入れた。だがそれにルールーは直ぐに待ったをかける。」

「待ってください。これは向こうの罠かもしれません」

「でも、少しは人を信じなくちゃ。矢車を助けたいのは、俺達だって同じだろ？」

彼女の言う通り畏かもしれないが、ソウゴ達は彼を信じて影山に矢車の元へと案内してもらおう。

こうして影山に案内されたソウゴ達は、とある町にある廃工場へ連れてこられた。

「なんか君が悪いのです」

「こんな所に？」

「ここに矢車想がいるの？」

「ああ。この奥だ」

さあやとソウゴの疑問に答えながら影山はソウゴの背後を歩く。すると、一番後ろにいるソウゴの首へ手を伸ばす。

「影山！」

その時突如、加賀美が影山にタックルし、ソウゴを守った。

「……加賀美」

「後を付けさせてもらった。君達は人が良すぎる。君をハメるための罠だったんだよ！

これは……」

「フハハハハハハ……！確かに罠だ。でも狙いはそいつじゃない。加賀美、お前だ」

「何？」

「お人よしは誰だよ。他人を助けてる場合じゃない」

加賀美が影山の発言に困惑していると、アナザーカブトまでもが現れた。それを見た加賀美の元にガタツクゼクターが現れた。

「変身!」

ガタツクゼクターをドライバーにセットした。

『HENSHEIN!』

「キャストオフ!」

『Cast Off! CHANGE Stag Beetle!』

ガタツクへととなると、すかさずマクスドフォームからライダーフォームへと変わる。

するとパンチホッパーゼクターが現れ、飛び跳ねながら影山の手には置かれた。

「変身!」

『CHANGE Punch Hopper!』

影山がパンチホッパーへ変身すると、後ろから何匹かワームを出現させた。

「お前達の記憶貰った!」

パンチホッパーとワームの集団は、一齐にソウゴ達に向かって攻撃を仕掛ける。

〈スウウウーーン!〉

だが突如、パンチホッパーとワーム達の頭上に小銀河が現れた。するとパンチホッ

パーが重力で叩き落されたかのように動きが取れなくなる。

「何??？」

「相棒!」

「……こうなるとは思いたくなかったけど……」

「やれやれ、さすがは我が魔王。敵の罠まで利用するとは」

そこへギンガファイナリーへと既に変身していたウオズが、ソウゴに感心しながら現れた。

「そんなんじゃないよ、半分は信じてたんだ。それに矢車想を連れてきてもらえたし、あとは2人を止めるだけだ」

はな達はそれを聞いて、ソウゴが影山達の罠を見抜いた上で逆に利用していた事を知り戦慄している横で、当の本人は何事もないかの様にそう淡々と答えながら、懐からジオウウオツチーイを取り出す。

「ん?」

その時、工場の窓から見えた空の黒い物体が目に入ったソウゴ達が倉庫に外へ出てみると、空から大きな隕石が飛来してきているのを目撃した。

「え、でつかツ!」

「……我が魔王はあの隕石を。……は私達に任せろ」

「頼むよ！みんな！」

ソウゴは走り出し、隕石を止めに向かう。

「みんな行くよ！」

ソウゴが隕石を止めに向かったのを見届けると、はな達五人はプリハートを取り出した。

「「「ミライクリスタル！ハートキラッと！」」」

揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取り姿を変える。

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「「みんな大好き！愛のプリキュア！」」

「キュアマシェリ！」

「キュアアムール！」

「「「HUGっと！プリキュア！」」」

五人が変身を完了すると、ウオズと共に工場にいるサナギ態ワームへと迎え撃つ。

同じタイミングで、ソウゴもウオッチを取り出した。

『ジオウ！フォーゼ！』

二つのウオッチを装填し、ドライバーのロックを解除する。
「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！ 3・2・1！フォーゼ！』
ジオウフォーゼアーマーで変身を完了した。

「宇宙キターーーーッ!!?とお！」

両腕のブースターモジュールを点火し、ジオウは急いで隕石を止めるため、宇宙へと飛び立って行く。

工場の中では既にウオズがアナザーカブト、ガタツクはパンチホッパーを相手に戦っていた。

「矢車、よせ！こいつは影山じゃない！ワームの擬態だ！」

「それがどうした。どうせ俺なんか……」

呟くとアナザーカブトはガタツクの胸を蹴る。

「ワームしか相手にしてくれない！弟は俺が守る」

パンチホッパーである影山がワームの擬態であることは承知して尚、アナザーカブトはパンチホッパーを守っていた。

それを聞いて、エールが止まる。

「エール?」

「なんかわかる気がする……」

アナザーカブト……矢車の気持ち、自身にもわかるような気がしていた。

「私もことが危ない目に遭ったら、必死で守りたいもん!」

もし自身が矢車と同じ立場だったら……

もし妹のことがワームだとしたら、もしかしたら自分も彼と同じ行動を取るだろうと、そう思っていた。

一方、アナザーカブトのクロックアップを駆使している事で、ウオズは苦戦に強い。「なるほど……これがカブトの力か。だが……!」

ウオズはドライバーからギンガミライドウォッチを外す。

そしてウォッチのレボリユートセレクターを操作して、ダイヤルを回す。

『ワクセイ!』

センドプロジェクターに映るギンガミライドウォッチの顔が変わり、再びウォッチをドライバーに装填し、レバーを引く。

『投影! ファイナリータイム! 水金地火木土天海! 宇宙にやこんなにあるんかい! ワクワク! ワクセイ! ギンガワクセイ!』

その姿はギンガファイナリーのまま、額のクレストが土星を象つたものになり、ウオ

ズの複眼の表示が「ワクセイ」に、インジケーションアイの色が黄色から青色へと変わった。

そのままウオズはレバーを引く。

『ファイナリービヨンド ザ タイム!』

するとアナザーカブトの頭上からエネルギー球——疑似惑星弾『エナジープラネット』がいくつも生成されていく。

『水金地火木土天海エクスプロージョン!』

そのままエネルギー球が雨のように降り注ぎ、それを見たアナザーカブトはクロックアップで避ける。

「ぐう……………」

だが全ては避けきれずにアナザーカブトの身体にエネルギー弾が直撃し、連鎖する様に周囲に爆煙が広がる。

「カブトの力は宇宙の力。宇宙の力で私に敵うと思うな」

指を天へと掲げ、ウオズがアナザーカブトに向けてそう言い放つ。

「ウオズ……………あなたがそんな事を言う……………」

「カッコつけにしか見えないけど……………」

「……………ゴホン!」

アムールとエトワールに突っ込まれると、ウオズはワザと咳き込む。すると、アナザーカブトの周囲に燃え上がる炎の中から、アナザーカブトとは違う姿が見えた。

「どうせ俺には宇宙の力なんて……ない。地獄の力だけだ!」

炎の中から聞こえた声の正体は、アナザーカブトの変身者であるやはり矢車だった。

しかし、その姿はアナザーカブトではなく、何処かパンチホッパーと似ていた。

それは矢車の本当の姿である仮面ライダー……キックホッパーだった。

『RIDER JUMP!』

キックホッパーはベルトに装着してあるホッパーゼクターを操作し、飛び上がる。

「ライダーキック!」

『RIDER KICK!』

「!?」

キックホッパーのキックを見て、咄嗟にウオズは左腕で防御した。

「ッ……」

受け止める事は出来たが、キックを終えたキックホッパーはクロックアップで直ぐに去っていった。

「クッ……」

しかし、キックを受けたウオズが腕を抑える。

「ウオズ。大丈夫ですか？」

「私は大丈夫。それよりも加賀美新の方を……」

「はい。マシエリはここにいて！」

「はい！」

ウオズとマシエリを中に残し、エール達は外にいるガタツクの元へ向かう。

しかし、外に出るとガタツクの姿はおろか、パンチホツパーの姿もなかった。

「加賀美さんー！」

エール達が加賀美の名を叫び周りを探すが、やはり加賀美の姿は無く、影山の姿もいなかった。

「皆さんあれをー！」

エール達がアムールの指を指した方を見ると、そこには『地獄ラーメン』と書かれたカップ麺が置かれていた。

更にその下にある置き手紙には、デカデカと『地獄』と書かれていた。

その頃、宇宙へと飛んだジオウは成層圏を抜けて宇宙へと出ていた。

「よぉーし！何か行ける気が……しない……でっけえええーっ!？」

間近で見た隕石は、地球で見た時よりもずっと大きかった。

「でもやるしかないっ!」

『フィニッシュタイム!フォーゼ!リミットタイムブ레이크!』

ジオウがドライバーを解除し、ドライバーを一回転させる。それによりロケットが変形して、隕石に向かって突撃して行く。

「宇宙ロケットキリモキック!」

ジオウはドリルのように回転しながら、そのまま隕石へ突っ込んだ。

「うわああああーっ!」

隕石の中で回転し続けながら、隕石を貫こうと回り続ける。

「いけえー!」

そのままジオウの攻撃が隕石を貫通して回転し終わると、隕石は木っ端微塵に砕かれた。

「やったあー!」

砕かれた隕石はそのまま地球の大气圏へと向かい、塵となって燃えていった。

「よし!あとは……」

一安心したジオウは地球に戻ろうとすると、急に彼の後ろが暗くなった。

「ん?」

何故か暗くなった背後が気になり振り向くと、それを見て驚愕した。

「え……えっ……えええーっ!? ……嘘だろ」

ジオウが先程破壊した隕石の後ろには、さらに巨大な隕石があったのだ。

灰色のカーテンを潜り抜け、門矢士と一緒にツクヨミとことりが未来の世界へ到着した。

「……は？」

「……は2062年の世界。お前がまだ幼い頃の世界だ」

「これが……未来……」

すると、士のポケットにある何かが、初めて来た未来を光景を見て唾然としていることりに反応していた。

「……なるほど、大体わかった」

ことりを見て大体わかったと眩きながら、士はツクヨミとことりがある場所へと歩き出す。

次回! Re. HUGつとジオウ!

第47話 2018: 天の道へ…六人目、キュアアール誕生!

第47話 2018： 天の道へ…六人目、キュアアール誕生!

ジオウ達が地獄兄弟と隕石落下を喰い止めようと戦っている一方で、ゲイツとハリーは新フォームへ変身したリストルとピシンとの戦闘を行っていた。

「はあ!」

ゲイツのジカンジャックローとリストルのクライソードがぶつかり合う。

『のこ切斬!』

ゲイツはジカンジャックローを回し、さらに斬撃を飛ばした。

「ふん」

『フィニッシュタイム!』

それに対し、リストルはジクウドライバーを回してクライソードにエネルギーを貯めて放った。

『クラレットタイムインパクト!』

ゲイツの放った斬撃をクライソードでリストルも斬撃を放ち、相殺された。

「(っ)っ……」

剛烈のパワーを全開に使っているのにリストルから一度も隙が作れず、決定的な一撃を繰り出されないうでいた。

そして一方で、ハリーはビシンと戦闘を行なっていた。

「はあー！」

ハリーはジェットで飛びながら何度もパンチやキックを繰り出し続けるが、ビシンのフアングクローに攻撃を阻まれ続ける。

「はあ、はあ……」

防がれ続けたハリーからは、流石に疲れが見え始めてた。

「どうしたのハリ〜。もつと楽しもうよ！」

「かあ!!?」

「ほらあくハリ〜！」

疲労を見せた隙にビシンにフアングクローに殴られハリーは大きなダメージを受けた。

ギアフアングのパワーにギアジェットの力を持つハリーでも苦戦を強いられる。

「ツ……」

『フィニッシュタイム！』

一発逆転の為にドライバーを回し、ハリーが腰を低く構える。

するとビシンもドライバーを回す。

『フィニッシュタイム!』

ハリーはローラで地面へ滑り加速すると、ジェットが火を吹き宙へと飛び上がりビシンに突撃する。

『ジェットタイムファイニッシュ!』

『フアングタイムデストロイ!』

ハリーがジェットの加速の勢いを利用してライダーパンチを放つと、ビシンもクローに貯めたエネルギーを解放。

二人の技は衝突した。

「あああああー!!?」

しかし結果は、ハリーのライダーパンチがビシンのクローに打ち負けたというものだった。

「ハリー!」

打ち負けたハリーは吹き飛ばされ、そのまま変身解除となってネズミの姿へと戻ってしまった。

「さあ、ハリー……」

ビシンがネズミ状態のハリーへと迫ってくる。

「クツ……どけええええ!!?」

『スピードタイム!』

ハリーの危機を察したゲイツがゲイツリバイブウオッチを回し、それを見てリストルは離れた。

『リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイブ疾風!疾風!』

ゲイツリバイブ疾風へと変わり、ジカンジャックローのエネルギーを溜め込みトリガーを引く。

『つめ連斬!』

ゲイツはつめ連斬の無数なエネルギーの雨をリストル繰り出す。

「ツ……」

リストルが防御を取り動けない隙にハリーの元へ、さらにスピードを上げへと向かう。

『フィニッシュタイム!百烈タイムバースト!』

「はああ!」

「ツ!!?」

スピードを上げながら、ゲイツはピシンに向かってタイムバーストによるライダーキックを放った。

「うわあああ!!?」

不意を突かれたビシンは飛ばされ、ハリーから離された。

「ハリー!行くぞ!」

ネズミとなり変身解除となったハリーを連れてゲイツは疾風のスピードですぐに去っていった。

「チツ……逃げられましたか」

追えないと思いいリストルはウオッチを外し変身解除した。

しかし、ビシンは変身解除せず、地面を殴り続ける。

「クソ!クソ!クソ!あの負け犬!邪魔しやがって!」

ハリーを連れ戻そうとしたビシンはゲイツに邪魔をされ、その上ダメージも与えられた事で怒りを爆発していた。

地面に大きな罅が入っているのを視界に入れながら、リストルはビシンの肩に手を置く。

「ビシン、戻りますよ。今回はこれ以上の戦闘は行いません」

「なんでだよ……」

何故これ以上の戦闘をしないのかとビシンが問う。

それに対してリストルは、その問いに答える様に上を向き、落ちてくる隕石を見つめ

る。

リストルとビシンから逃れたゲイツとハリーは、橋の上で休息を取っていた。

「ハア……はあ、はあ……ハリー。大丈夫か？」

「ああ。何とかな……」

ネズミ状態のハリーはゲイツの肩に乗って大丈夫と言う。

「しかし、あいつらとんでもない力を手に入れたな……」

ゲイツの言う通り、リストルクラレット、ビシンギアファング。どちらも二人では苦戦を強いられた。

「今……誰か俺を笑ったか？」

その時、ゲイツとハリーの耳に声が聞こえ川を目にする。

そこにはウオズ達から逃れ、ボロボロの状態でふらつきながら凄まじい形相で歩く矢車だった。

「あの男……」

「ソウゴから来ていた。矢車という男か……」

橋の上から発見した矢車に、二人は接近を試みる。

一方、宇宙ではジオウがフォーゼアーマーで隕石を破壊したが、目の前にさらに破壊した隕石よりも巨大な隕石が現れた。

「うええええーっ!!? さっきの10倍……いや、100倍はある。あんなのが地球にぶつかつたら……!」

もし万が一でもこの隕石が地球にぶつかれば、地球への被害は計り知れない。

……それどころか、もしこの隕石に大量のワームがいたら地球がワームに侵略される。

その時、ジオウのもとへ連絡が入る。

「もしもしウオズ」

『我が魔王、一度戻って欲しい。作戦を立て直そう』

「わかった」

ウオズから連絡を受けたジオウは一度地球へと帰還し、作戦を考え直す事にした。

地球に戻ったソウゴはビューティーハリーへとみんなが集まり、隕石への対抗策を話し合っていた。

「本当デカイ隕石……」

「この中には、あのワームがいっぱいいるんだよね」

ほまれの言う通り、この隕石には大量のワームが詰まっているのは間違いない。

「それで、あの隕石をどう破壊するのですか？」

ルールーが隕石の対処はどうするかと聞くと、ウオズが考えた作戦をイラストで書いていた。

「簡単に言えば、我が魔王のフォーゼの力で私と共に宇宙に向かい。そのまま隕石内部に突入する」

イラストでは、ソウゴがフォーゼの力でウオズと共に宇宙へと向かい。さらに隕石内部へと潜入すると言う方法が描かれていた。

「ここまで私を連れて行ってもらおう」

「そこからはウオズさんはどうするんですか？」

さあやがそう聞くと、ウオズは自身の持つギンガウオッチを掲げて見せる。

「内部へ潜れたのなら、私のギンガファイナリーのタイヨウモードで隕石を中から焼き尽くす」

ソウゴ達は取り敢えず、ウオズの一通りの作戦は理解した。

「分かった……あれ？　そういや加賀美さん何処行つたの？」

事情の知らないソウゴが周りを見ると、どこにも加賀美新の姿がなかった事に気づく。

「それが……居なくなった」

「は……?」

「影山に捕まったのかもしれない。こんな書置きがあつた」

「地獄……」

ウオズから渡された書置きの手紙をソウゴが読み上げる。

「加賀美新を返してほしければ……全然捕まってじゃん!」

隕石と同じくらいに大変なことがまた一つ増えてしまった。

ビューティーハリーへと戻る途中で矢車を見つけたゲイツとハリーは、彼が川の中から上がってきた所を呼び止める。

「矢車だな」

「お前……なるほど、さっきの連中の仲間か……」

矢車はフラフラで歩きながらゲイツの横を通り過ぎようとする。

「待ってや! あんさ何処へ行く?」

「弟の所だ! 影山は俺が守る」

ハリーが呼び止めるが、矢車は影山の元へと行くと言う。

「待て。その影山はもう……」

「ワームだったら何だっというんだ!!? 俺の……かわいい弟だ」

「…何故そんなに影山に固執する」

「笑えよ。どうしても倒さなきゃならなくなったら、俺がやる。もう一度、この手でな……」

——それは、今でも矢車にとっては忘れられない記憶、一番矢車の心に傷をつけた記憶。

それが、弟である影山をこの手に掛けた事だった。

それはまだ自身の隣に、本物の弟がいた頃の記憶。

当時、影山は自身が所属していたZECTから配布されたと言う、緑の石が付いたネックレスをいくつか持ってきていて。そんな影山の様子を見ながら、矢車は弟ともう一度光を掴むべく、闇の中でも輝き続ける世界へ旅立とうと計画していた。

しかしそれは、永遠に叶わない計画となった。

何故なら、影山が持ってきたそのネックレスが、本当の地獄への片道切符だったからだ。

実はそのネックレス、人間をネイティブと言うワームと類似した化け物へと変える品物であり。影山は複数装着していたため、その影響から早くもネイティブになりかけた

事で絶望し、兄である矢車に自身を倒すように懇願したのだ。

『さよならだ……兄貴』

『相棒！』

その時、弟であった影山を自らトドメを刺した事を、昨日のように矢車は思い出す。

「——自分で殺したんか……」

「ああ……」

それを聞いたゲイツは矢車がそうしたことに対し、自らもソウゴが最低最悪の魔王になったら倒すと誓った時のことを思い返す。

『最低最悪の魔王になったら、俺が倒してやる！必ずな。』

俺を信じる。ジオウ……ソウゴ！』

その事を思い返し、自分も矢車と同じようにもしソウゴがオーマジオウとなった時は、本当にソウゴを倒せるのかと考え込む。

そこへ、ゲイツの携帯に着信が入る。

「何……影山瞬が……わかった」

ゲイツが電話を切り、ソウゴ達と合流しようとかかうおうとする。

しかしその時、ゲイツの背後から気配を感じた。

「せあー！」

「かあー！」

「ゲイツ!?!」

いきなり矢車がゲイツを蹴り飛ばし、反応しきれなかったゲイツは壁に激突された。

「……矢車……お前……」

矢車の蹴りでゲイツは気を失ってしまった。

「弟……」

影山の姿を思い浮かべたその時、矢車の体に埋め込まれたアナザーライドウオッチが反応した。

『カブト……!』

アナザーカブトへと変身し、クロックアップですぐ様、影山の元へと向かった。

加賀美を人質にした影山の指定した場所へ、ソウゴとウオズ、さあやとほまれの四人がやってきた。

「加賀美さん!」

そこには柱で鎖で縛りづけられた加賀美がいた。

「お前らの持っている宇宙の力を俺によこせ」

「これのこと?」

ソウゴとウオズは、フォーゼとギンガのライドウオッチを取り出し、影山に確認させる。

2人は影山の数メートルの場所へウオッチを投げる。影山は慌てて、ウオッチを奪おうと駆け出す。

「アムール君! マシエリ君! 今だ!」

「マシエリポップン!」

「アムールロックロンロール!」

マシエリとアムールに変身していた二人が必殺技を放ち、影山の周囲を攪乱させる。

「ッ……」

咄嗟のことに影山は直ぐに動けず、足止めに成功した。

「加賀美さん。大丈夫ですか?」

影山が身動き取れない隙に、エールが加賀美を縛る鎖を強引に引き千切る。

「ありがとう。えつくと……」

「キュアエールです」

エールにお礼を言うのと加賀美の元にガタツクゼクターが現れ、加賀美が掴み取る。

「変身!」

ガタツクゼクターをドライバーにセットした。

『HENS HIN!』

「キャストオフ!」

『Cast Off! CHANGE Stag Beetle!』

ガタツクへと変身すると、すかさずライダーフォームへと変わる。

「クロックアップ!」

クロックアップを発動させ、身動きの取れない影山に攻撃を仕掛けようとする。

「セラー!」

「ぐわあ!」

ガタツクが仕掛けようとした時、アナザーカブトが駆けつけ、ガタツクにカウンターキックを放った。

「フツ!」

追い討ちをかけるようにアナザーカブトはクロックアップしたまま、今度はマシエリ、アムールと一撃ずつキックを繰り返した。

「ツ!?? みんな!」

クロックアップが終わり、ソウゴは三人が倒れているのを見て投げたウオッチを取り戻そうとする。

しかしフォーゼウォッチとギンガミライドウォッチは既に、影山に拾われてしまっていた。

「しまった……」

「助かったぜ」

「お前は俺が守る」

そこへホッパーゼクターが影山の元へ現れ、彼の手に置かれた。

「変身!」

『CHANGE Punch Hopper!』

影山はベルトにホッパーゼクターをセットしてパンチホッパーへ変身し、アナザーカブトと並び立つ。

『CLOCK UP!』

「くっ!」

アナザーカブトとパンチホッパーがクロックアップすると、ガタツクもクロックアップを発動し、応戦する。

しかし、ソウゴ達はクロックアップ中では変身も出来ず助けにも行けない為、ガタツクは1対2の戦いで苦戦する。

「ライダージャンプ!」

『RIDER JUMP!』

ホッパーゼクターを上上げてパンチホッパーが飛び上がる。

「ライダーパンチ!」

『RIDER PUNCH!』

「ぐう……」

「セラアアア!」

ガタツクはパンチホッパーのライダーパンチを何とか耐えたが、次にアナザーカブトから繰り出されたキツクに追い討ちを受けガタツクが倒れた。

「つ!!……ああ……ツ!」

攻撃を受けすぎたガタツクが変身解除してしまった。

「加賀美さん!大丈夫ですか!」

エールが倒れた加賀美に駆け寄り介抱する。

「こいつがなかったら隕石は阻止できない」

そう言ってアナザーカブトとパンチホッパーは、フォーゼとギンガのウオッチを持って去っていった。

「そんな……」

こうして、隕石を破壊する唯一の対抗手段であるフォーゼとギンガのウオッチが、敵

の影山の手に落ちてしまった。

しばらくしてから、ソウゴ達はビューティーハリーへと向かい。今後の作戦をしている近くでは、ビシンに傷付けられたハリーをほまれが看病していた。

「イテ……もうちよつと優しく頼むで」

「ほら。動かないで」

ほまれがハリーに包帯や絆創膏を貼っている様子を横目に、ツクヨミとことりの今の行方についてゲイツが説明していた。

「ことりがツクヨミと未来に！」

「ああ、あの子もせめて俺達の力になりだろ」

「ことり……」

ツクヨミが一緒とはいえ、はなは妹のことりが心配だった。

「どうするのですか？」

「策はまだありますか……？」

「いいや、流石に万事休すだな……」

えみるとルルーに他に方法は無いのかと聞くが、ウオズは首を横に振ってそれに答える。

「フォーゼとギンガのウオッチがないんじゃない……ハリーもこんな状態じゃ……」
宇宙に行くためにはフォーゼとギンガのウオッチの力が必要不可欠。しかもハリーがこの怪我では、戦力はかなり落ちてている。

「すまない。俺のせいだ……」

加賀美はウオッチを取られたのは自分の所為だと責める。

「いや……」

「加賀美さんの所為じゃないですよ」

ソウゴとさあやが加賀美を慰めていると、ゲイツは自身の気になっていたことを呟く。

「しかし、クライアス社は何を考えている?」

ワームに侵略されるのはクライアス社も嫌な筈。クライアス社がワームと手を組んでいるとは思えない。

「地球を狙っている主犯はワームだ」

「じゃあ、クライアス社の狙いは何?」

「…推測だが、加賀美君と我々の時間が混ざり合っているようだ」

ウオズは加賀美の言っていた渋谷隕石の事を思い出しながら、カプトの時空とこの時空が複雑に混ざりつつある事を説明する。

「混ざってるって、どういうことなの?」

「それは、わからないが、クライアス社としての本当の狙いはカブトの力を奪うのが目的だったはずだ」

ウオズの言葉から、ゲイツは士の言っていた『どうやらだいたい時空が歪みだしている』と言う発言を思い出す。

「門矢士もそんなことを言っていた……」

時空の歪み。それと何か関係しているかもしれない。

「カブト……」

そしてカブトと聞き、加賀美は過去の事を思い出す。

それはかつて自身がまだライダーでなかった頃、俺は弟がワームに襲われ行方不明になったことを契機にワームを憎み、全てのワームを倒すことを誓いZECTに入隊していた。

しかし、俺はワームを倒せなかった。憎くて憎くて仕方なかったワームを倒せなかった。

それが悔しく思いながらも、俺はZECTで行動をし続けていた。

そして、遂に転機が訪れた。

仮面ライダーカブトの力さえ手にすることができれば、ワームを倒すことが出来る。そう思いながら俺はベルト片手に、カブトゼクターを自身の手にする事を願った。

『さあ来い。カブトゼクター!』

——だが自分は、カブトゼクターに認められなかった。

そして、カブトの真の変身者とは何度かぶつかり合うも、その度に何度も打ち負かされ、遂に自分は彼に勝てなかった。

だが、カブトとの間にある信頼もある。それが一番、自身の胸に引つ掛かっていた。

外では雨が降りしきる中、とある倉庫で地獄兄弟が雨宿りした。

「……影山。お前、地球を滅ぼそうとしてるのか?」

「ああ。もつと地獄にして見せる。兄貴は反対かい?」

「いや、俺はお前さえいればそれでいい。俺達はずつと一緒だ」

矢車はそう答えると、二人はタイル缶の上に置いてあるカップラーメンを取る。

「この地獄で生き続ける」

二人が二人がカップラーメンを口にしようとした。

だがその時、地獄兄弟二人の時間の流れが止まった。

「美しい兄弟愛っていうやつ?」

傘をさして止まっている二人の前にウールが現れた。そう、二人の時を止めたのも彼だ。

「地獄もいいけど、地球を滅ぼされちゃ困るんだよ」

ウールはティール缶の上に置かれているソウゴとウオズのウオッチを回収し、その場から去っていく。

それからしばらく歩くと、スウォルツと合流した。

「ウール。そのウオッチをどうする気だ」

「悔しいけど、こいつをウオズ達に渡すしかない。このままじゃ隕石が……」

ウールが言いかけると、スウォルツは彼の回収したウオッチを取って背を向けた。

「スウォルツ！何処行くんだよ？」

「お前が知る必要はない」

スウォルツの背を向けて歩いていくのを見て、ウールは苦々しい表情で彼を睨みつける。

2062年。

門矢士に案内されたツクヨミとことりが、ある邸宅の前へと着いた。

「(イ)(イ)は……」

「おそらく、お前の住んでいた場所だ」

「ここがツクヨミお姉ちゃんの家……」

士に案内されるまま、三人は邸宅の中へ入る。

中はツクヨミが見たビジョンと同じだった。だが、中には人のいるような気配をあまり感じられなかった。

「あの……気になってたんだけど？」

「なんでそんな格好してるのよ!?？」

その道中で二人はこの世界に来てから、士の服装がコツクの姿へと変わっている事に気になっていたことを指摘する。

「今、俺はこの家のコツクになってるらしい」

士はこの世界での役割のような姿だからコツクだと言い、三人は階段を上がり二階へとやつてきた。

「誰？」

二階へと着くと、その邸宅の住人と鉢合わせた。

「あなたは……」

「ツクヨミお姉ちゃん……」

そこにいたのはまだ小さいけど、長い黒髪に白い服装という、確かに面影がある姿を

持つ、幼い頃のツクヨミだった。

「あなた達、介入者ね。時間を超えて来た……」

「えっ? (なんで、わかるの?)」

幼いツクヨミは、三人が時を超えて来たことを知っていた。それを聞いたことりはどうして知っているのだと疑問に思った。

「私は……!」

「近寄らないで!」

ツクヨミが若かり日の自身に近付こうとすると、少女のツクヨミは手をかざし三人の時を止めた。

(う、動かない……)

(これって……)

三人が時を止められ動けないしていると、帽子を被った少年が現れた。

「お兄ちゃん」

(……え?)

(お兄ちゃん?)

若いツクヨミの口からお兄ちゃんという言葉が出てきた事で、ツクヨミに兄がいると事実を知ったツクヨミとことり。

兄と呼ばれたその少年は、冷たい眼差しでツクヨミとことり、士を見る。

「行こう」

「うん」

しかし帽子の少年は自分らには危害がないと悟ったのか、妹であるツクヨミを連れ、部屋の方に行つてしまふ。二人が去ると三人の時が動いた。

「動けた……ツクヨミお姉ちゃん……」

ことりは話しかけようとするが、ツクヨミはさっきの少年の事を考えていた。

「まさか……あの顔に……あの感じ、もしかして……」

「……ツクヨミ？」

「ツクヨミをここに連れてくるとはな」

その時、階段の方からスウォルツが現れた。

「……まずいものでも見られたか？」

士もあの二人から何かに感づいたかの様子だった。

「お前の意見は聞いていない！」

スウォルツは士に襲いかかり、三人を外へと移動させた。

「つー……大丈夫？」

「ツクヨミ。ここに居る時間はないぞ」

スウォルツはフォーゼとギンガのウォッチをツクヨミへ投げ渡す。

「これ……」

「時見さん達の……」

ソウゴの持っていたフォーゼウォッチとウォズの持っていたギンガウォッチを見た二人は、どうしてこれをスウォルツが持っているのか気になった。

「そいつをやつらに返してやれ。奴らは隕石を止めようとしているが無理だ。お前の力がなくてはな」

「隕石？」

「どうゆうこと？」

ツクヨミはそう問い掛けるが、スウォルツはそのまま立ち去ろうとする。

「じゃあな」

「待って!!？」

ツクヨミが止めるも結局、スウォルツは何も言わず三人の前から去っていった。

「俺達も帰るか」

土が灰色のオーロラカーテンを作ると三人はそれを通り、現代へ戻った。

カーテンを潜ると三人はどこかの屋上へと戻っていた。

そして、ことりは空を見て驚く。

「何、あれ……?」

空を見上げて見ると隕石が太陽に被さっていた。

「スウォルツの言っていた隕石だろ?」

「!?…早くこれを届けないと!」

ツクヨミは急いでフォーゼとギンガのウォッチを届けようとする。

とあるビルの屋上では、地獄兄弟が隕石を見上げていた。

「兄貴。いよいよだよ」

影山は笑みを浮かべて隕石を見上げる。

「あそこには俺の仲間が沢山いる!最高の地獄があるんだ!」

「相棒……」

「そんな事はさせない」

そこへ、ゲイツ、ウォズにえみる、ルーラーが現れた。

「隕石は必ず破壊する!お前の野望は俺達が止める!行くぞ!」

『ゲイツ!』

『ウォズ!』

二人はウォッチを起動し、もう二人がプリハートを取り出し、それぞれドライバーとプリハートにウォッチとミライクリスタルをセットした。

『アクション!』

「変身!!?」

「ミライクリスタル!ハートキラツと!」

二人がドライバーを操作した事でアーマーが体に纏われ、ルーラーとえみるが揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

『投影!フューチャータイム!スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ

!』

「みんな大好き!愛のプリキュア!」

「キュアマシェリ!」

「キュアアムール!」

変身を完了すると、矢車が前へと出てくる。

「消えろ……」

『カブト……!』

矢車の体内のアナザーカブトウォッチが反応し、アナザーカブトへと変身した。

その頃、加賀美がはぐくみ市の『のびのびタワー』を見つめ、その後ろをソウゴとはなにさあやとほまれが見守っていた。ハリーはソウゴの肩にネズミの姿で乗っていた。「似ているな……」

加賀美は『のびのびタワー』を、自分のいつも見かける東京タワーと似てるなど呟く。「俺はカプトゼクターに俺は選ばれなかった。」

それからは俺はカプトに……あいつに勝ったことはない」「加賀美はんにとって、カプトどんな人だったの?」

ハリーにそう聞かれると、加賀美は自虐気味に笑いながら、仮面ライダーカプトについて語り出す。

「あいつは……何でも一人でこなせる完璧な奴だった。」

そんなあいつをいつか超える目標になったんだ。

でも、俺は一度も勝て無かった」

やはり俺はカプトには勝てないのだと弱音を吐いている加賀美を見たソウゴは、彼に話しかけて慰めようとする。

「勝てるよ、絶対! あんたは立派な戦士だ。」

俺が王様になったら、みんなを守る大事な仕事に就いてくれないかな?」

「……フフツ……ハハハ！王様かあ！」

あいつもそこまでは言わなかった！フハハハ……！」

「……そこまでつて、カブトはどんな感じだったの？」

「言うなれば、俺様系かな」

ほまれにカブトの事を話していると、加賀美からどこか吹っ切れたかのような笑みが
見えた。

「ソウゴ！みんな！」

そこへツクヨミとことりが駆け寄ってきた。

「……とり！」

妹の姿を見たはながことりに走って抱きしめた。

「お姉ちゃん!?」

「よかった！……とりが無事で本当によかった！」

……とりが安心して戻ってきたのを見て、はなは安心してしばらくとりを抱きしめ
た。

「姉妹か……」

加賀美は野乃姉妹を見て、自分も既に亡き弟の事を思い出していた。結局、自分は弟
にちゃんとした別れを言う事はなかったなという後悔を交えながら。

「ソウゴ―……これ」

ツクヨミは奪われた二つのウォッチを渡すと、ソウゴはそれを受け取り、みんなの居る方を振り返る。

「行こう」

ソウゴ達は隕石を止めるために行動を開始した。

ビルの屋上では。ゲイツとウオズ、アムール、マシエリがアナザーカプト、パンチホッパーと戦闘を繰り広げていた。

「どうしてなのです！地球が滅びるんですよ！」

マシエリがアナザーカプトに、地球が滅びるかもしれないのに、どうしてワームを守り、手を組んでいるのだと聞き出す。

「地球なんて……どうせ俺達にとっては、地獄だ！」

「地獄だと……」

「なあ相棒」

パンチホッパーとアナザーカプトは腕と足に力を収束し始めた。

『フィニッシュタイム！タイムバースト！』

『ビヨンド ザ タイム！タイムエクスプロージョン！』

ゲイツとウオズもドライバーを操作し、必殺技を発動する。

アナザーカブトのライダーキックに対しウオズもキックで、パンチホッパーのライダーパンチに対しゲイツもパンチで迎え撃つ。

「「うわあああああ!!?」「」」

ぶつかり合った両者の技は相殺され、四人共吹っ飛び、ゲイツとウオズは変身解除となる。

「ゲイツ。ウオズ。大丈夫ですか?」

「ああ……」

アムールとマシエリに支えられ、二人が起き上がる。

「あの隕石には、俺の仲間がわんさか乗っている!この星は俺達のものになる」

隕石を見て一度変身を解除した影山が叫ぶと、矢車を説得しようとゲイツが叫ぶ。

「目を覚ませ矢車!この影山はお前を利用していただけだ!」

「いいんだよ。俺は相棒さえ居れば」

そこへソウゴ、加賀美、ツクヨミ、はな達が駆けつけてきた。

「ウオズ、これを」

ソウゴは取り返したギンガミライドウオツチをウオズに渡す。

「さすが我が魔王」

「俺じゃあないんだけどね」

「急いで。隕石を阻止できるリミットはギリギリよ！」

「加賀美さん。あいつらのこと、頼めるよね」

「もちろんだ……王様」

加賀美がガタツクゼクターを掴み、任せろと言うとソウゴ達もウオッチを取り出す。

一方の地獄兄弟はホッパーゼクターを構えた。

「変身」

「変身」

『CHANGE Punch Hopper!』

『CHANGE Kick Hopper!』

地獄兄弟がキックホッパー、パンチホッパーへと変身を完了すると、ソウゴ達はウオッチとミライクリスタルをセットする。

『ジオウ！フォーゼ！』

『ゲイツリバイブ剛烈！』

『ギンガ！』

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ! アーマータイム! 3・2・1! フォーゼ!』

『ライダータイム! リ・バ・イ・ブ 剛烈! 剛烈!』

『投影! ファイナリータイム! ギンギンギラギラギャラクシー! 宇宙の彼方のファンタジー! ウオズギンガファイナリー! ファイナリー!』

『HENSHIN!』

「輝く未来をく抱きしめて! みんなを応援♪ 元気のプリキュア! キュアエール!」

「輝く未来を抱きしめて! みんなを癒す! 知恵のプリキュア! キュアアンジュ!」

「輝く未来を抱きしめて! みんな輝け! 力のプリキュア! キュアエトワール!」

「キャストオフ!」

『Cast Off! CHANGE Stag Beetle!』

みんなが変身を完了すると、ガタツクがキャストオフし、ライダーフォームへとフォームチェンジし、両者の変身が完了した。

「隕石は止めさせない!」

パンチホッパーの背後から生き残ったワーム達が現れ、隕石の元へ行かせないと阻もうとする。

「お前たちの相手は俺達だ!」

「ソウゴとウオズの邪魔させない!」

プリキュア達はワームを、ゲイツはパンチホッパー、ガタツクはキックホッパーを相手取る。

「ソウゴ君とウオズさんは早く隕石を！」

「みんなお願い！行こうウオズ！」

「ああ」

ウオズがジオウにしがみ付くと、ジオウがその姿をロケットへと形態を変えた。

「宇宙……」

「行くううううー！」

ジオウの腕のロケットが火を吹き、そのまま上空をグングンと登っていく。

「凄い……」

その光景にことりは驚いた。

ジオウはそのまま勢いよく飛び続け、成層圏を超えていき宇宙空間へ到達した。

そして隕石の目の前で、ジオウとウオズは対峙した。

「では、突っ込もうじゃないか、我が魔王」

「うんー！」

『ビルドー！』

一度フォーゼウォッチを外したジオウはビルドウォッチをドライバーに装填し回すと、前方にビルドのアーマーが出現、彼の体へと装着される。

『アーマータイム！ベストマッチ！ビル・ドール！』

ビルドアーマーを装着したジオウは、ウォッチを押しドライバーを回す。

『フィニッシュタイム！ボルトックタイムブ레이크！』

右手のドリルクラッシュシャークラッシュシャーで穴を掘りながら隕石内へ突入していき、ウォズもジオウの後ろを突いて一緒に向かう。

「はあ！」

二人は隕石内部へと潜入に成功した。

「これは……」

ジオウがその中を見ると、隕石内部には気持ち悪いくらいに居る大量のワームが保管されていた。

「ここからは私の仕事だ」

ウォズはドライバーからギンガミライライドウォッチを外す。そして、ウォッチのダイヤルを回す。

『タイヨウ！』

ギンガミライドウォッチの顔が変わり再びウォッチをドライバーに装填し、レバーを

引く。

『投影！ファイナリータイム！灼熱バーニング！激熱ファイティング！ハイヨー！タイヨウ！ギンガタイヨウ！』

ギンガファイナリーのままウオズの額の模様が太陽を模したものに、複眼が『タイヨウ』という文字で炎の様な赤色へと変わり、ウオズの周囲に炎が燃え上がる。

「うおつと、熱い、ウオズ、熱いよ……！」

とても熱くて近くに入れないジオウはウオズから離れる。

ギンガタイヨウへと変わったウオズは胸前に小型太陽を出現させ、それを放つと、それが膨れ上がり高熱エネルギーがワームを次々襲いかかっていく。

一方地上では。ワームはプリキュアとガタツクとキックホッパー。ゲイツはパンチホッパーと戦闘を繰り広げる。

「フェザーブラスト！」

「スタースラッシュ！」

アンジュとエトワールの放ったフェザーブラストとスタースラッシュを放つ。

「「はああああああつ！」」

エールとマシエリ、アムールが同時にパンチを叩き込み、ワームは全て爆発して消

滅した。

「はああー!」

「せあー!」

その近くでは、ガタツクのパンチとキックホッパーのキックが何度もぶつかり合っていた。

その一方で、ゲイツは剛烈の力でパンチホッパーをパワーで押ししていた。

「くっ……」

パンチホッパーは隕石を気にしているのか、うまく力を出せないでいた。

「お前が……余計なことを!」

パンチホッパーはウオッチを返したツクヨミを睨む。

「お前があああ!!?」

パンチホッパーはゲイツを振り切り、ツクヨミとことりの方へと向かっていくと、そのまま二人に攻撃しようとする。

「危ない!」

咄嗟にエールが二人の前に現れ、クロスさせた腕でパンチホッパーの攻撃から二人を守った。

「ッ……!」

「お姉ちゃん!?」

攻撃を受けたエールが膝を折り、パンチホツパーは更に追撃しようとした。

だがゲイツがパンチホツパーにジカンジャックローで攻撃し、パンチホツパーをエールから離した。

「エール！大丈夫か？」

「うん」

「お姉ちゃん」

エールはゲイツに大丈夫だと言うと、ことりがエールに駆け寄る。

「大丈夫。お姉ちゃんがことりを守るよ」

ことりの不安そうな顔を見たエールは、妹に向かって笑顔で守るよと言う。

しかし、ことりは…

「嫌だ……」

「ことり……?」

「嫌だよ……私も……私もお姉ちゃんと一緒にいたい。」

私も、お姉ちゃん達と並んで歩きたい!!」

ことりがそう叫んだその時、彼女の胸元から緑の光が放たれた。

「な、何ッ!?」

「これって……!」

「ことりちゃん、まさか……!」

その時、ことりを見たはぐたんが額の飾りから光を放つ。

その光に反応し、ことりから鳥の羽を模した装飾の付いた緑色のミライクリスタル、ミライクリスタル・エメラルドが誕生した。

「ことり……!?」

「けど、プリハートはもう……」

ツクヨミの肩にいたハリーは新しいクリスタルが生まれたことに驚くも、クリスタルがあっても肝心のプリハートがなければ変身など出来ない事に落胆する。

「おい」

すると士がことりの背後に現れ、士はポケットからあるものを取り出した。

「そらあ」

士はそれをことりへと投げ、ことりはそれを受け取った。

「これ……」

なんと、士がことりに渡したのはプリハートだった。

「必要なものなんだろう?使ってみろ」

受け取ったプリハートを使い、ことりはミライクリスタル・エメラルドをセットした。

「ミライクリスタル！ハート！キラッと！」

そう叫ぶとことりの体が光り、彼女の服が変わり始めた。

「はぎゅ〜！」

光に包み込まれると、ことりの髪の色が明るいピンクに、髪型はツインテールへと変わり、緑のリボン付きのカチューシャが付けられた。さらに緑と白のアイドル風のコスチュームを纏い、背中に白いマントのような布を羽織る。

その光景はさながら、卵を割って小鳥が翼を広げながら産まれるかのように見え、蛹から美しい蝶々が羽化しようとしている様にも見えた。

「輝く未来を抱きしめて！みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアラー！」

そして遂に変身を完了し、ことりは——いや、キュアアラーは高々と名乗りあげた。

「「キュアアラー！」」

「ことり……」

「ことりさんが、なっちゃったのです！」

だがしかし、変身した姿に驚いたのは彼女達だけじゃない、本人も同じ事だった。

「私も……プリキュアになれた……！」

今の自分の姿を見たキュアアラーは喜びを見せる。

「なれたね、プリキュアに」

「うん……!」

ツクヨミの言葉を聞いたアールの目から涙が一粒溢れる。

「それがどうした!」

『RIDER JUMP!』

虚仮威しだと言いながらパンチホッパーはベルトのホッパーゼクターの足を上げて、パンチホッパーが飛び上がる。

「ライダーパンチ!」

『RIDER PUNCH!』

パンチホッパーがアールにライダーパンチを放とうとすると、アールはプリハートのハート部分をタッチして手を画面にかざす。

「フレフレ!ハート!ウインド!」

「ツ!」

プリハートから緑の風の形作り、自分の周りに広げる。

そのままアールはライダーパンチを放とうとした。パンチホッパーに放った緑の風を直撃させ、ライダーパンチを失敗させた。

「やった!」

技が決まってアールが驚く。

「凄いよ！ことり！」

技を見ていたエールも驚きながらも、感動のあまりアーラに飛びつく。

「相棒！……お前エ……ライダージャンプ！」

『RIDER JUMP！』

キックホッパーはゼクターを操作し、飛び上がる。

「ライダーキック！」

『RIDER KICK！』

キックホッパーがアーラとエールにライダーキックを放とうとする。

「!?？」

「矢車！」

不意を突かれて動けないアーラを守るため、ガタツクはガタツクゼクターのフルスロットを三回押す。

『1……2……3……』

「ライダーキック！」

『RIDER KICK！』

ゼクターホーンを位置を戻し、もう一度開き足をに力を貯めると、キックホッパー向かって飛び上がり、ガタツクとキックホッパーのライダーキックがぶつかった。

「ぐわああー!」

ガタツクのライダーキックが打ち勝ちキックホッパーを吹っ飛ばし、そのままキックホッパーが倒れ込む。

「どうせ……俺なんか……!」

『カプト……!』

ライダーキックを受けて起き上がると、キックホッパーからアナザーカプトへと変身した。

「ああああ……!」

アナザーカプトへと変身すると、すぐにガタツクへ襲いかかる。

「ツ……」

アナザーカプトの攻撃にガタツクは押され始め、アナザーカプトとの一撃一撃に強烈な攻撃がガタツクに次々と決まる。

「せあ!」

「ぐわああー!」

アナザーカプトの右足から放たれた強烈な一撃を受けて、ガタツクが倒れると変身解除してしまった。

「ガア!!?」

「加賀美……お前の負けだ」

そう言いながらアナザーカブトは倒れている加賀美を踏みつける。

「はあ、はあ………負けるか……俺は、あいつ以外には負けない！」

負けなと言う加賀美だが、ワームとパンチホッパーに集中している為ゲイツ達も助けに行けない。まさに絶対絶滅だった。

その時、懐かしい口調が加賀美の耳に聞こえた。

「——おばあちゃんが言っていた……」

声が聞こえると、時が静止したかの様に、全員の動きが止まった。

「どこからなのですか？」

「男の声だよね」

その時。アナザーカブトに何かがぶつかり、加賀美から離れた。

そしてみんなの前に現れたそれは、加賀美のガタツクゼクターと違うゼクターだった。

「カブトゼクター……」

それは赤いカブトムシのゼクター、カブトゼクターだった。

これが現れたという事は、彼も居る。加賀美にはその答えに直ぐに気づいた。

「世の中で覚えておかなければならない名前がただ一つ……」

天の道を歩き全てを司る男……」

この加賀美が何度も聞き、このよく知る口調。

声はどんどんここへと近づいてくる。

——その時、巨大隕石によって日食の如く隠れていた太陽が動き、その場に光を神々しく照らす。

「皆さん！あそこを！」

そして、そこに一人の男がゆつくりと歩き、全員がその男に注目する。

「俺の名は……天道……総司」

その男——天道総司は、太陽に向かって人差し指を上げ、自身の名を名乗る。

「天道……」

「久々に日本に帰ったら。何やら騒がしいな……」

天道はアナザーカブトとパンチホッパーに振り向く。

そして、カブトセクターが天道の方へと向かい、彼はそれを掴む。

「天道……」

「矢車……お前にカブトは似合わない……変身」

『H E N S H I N !』

カブトゼクターを腰に巻かれたベルトに装填すると、天道の体をアーマーが一瞬にして纏われた。

ガタツクとは違う、赤いメタリックカラーの入っているマスクドフォームへと変身すると、カブトゼクターのホーンをあげる。

それにより、マスクドフォームのカブトの体の鎧が浮かぶ。

「キャスト……オフ」

『Cast Off!』

キャストオフと宣言し、ホーンを動かしたその時、マスクドフォームのアーマーが飛び散った。

『CHANGE Beetle!』

その姿は、まさにカブトだった。

赤いライダーフォームに、複眼には特徴的なカブトのホーンを立たせていた。

「俺も付き合おう」

『スピードタイム!』

ゲイツがカブトとの隣に立つとゲイツリバイブウオッチを回す。

『リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイブ疾風！疾風!』

ゲイツリバイブ疾風へとフォームチェンジした。

「ああ……天道……」

今……お前も俺のバカにしたのか……

笑えよ……ああああ”あ”あ” ツツツ!!」

カブトの姿を見て、怨嗟の声を上げながらアナザーカブトがクロックアップした。対するカブトも……

「クロックアップ!」

ベルトの横にあるスイッチを押してクロックアップを発動。アナザーカブトとクロックアップの世界で戦闘を始める。

「クロックアップ」

「はああ!」

パンチホッパーもクロックアップを発動、ゲイツは疾風のスピードでパンチホッパーについていく。

そのまま、四人がクロックアップの世界での戦闘を繰り広げる。

だがしかし、カブトがアナザーカブト、ゲイツがパンチホッパー相手に優勢な戦いを見せる。

しかもカブトはアナザーカブトの攻撃を綺麗に捌き続け、一度もアナザーカブトの攻撃を受けていなかった。

「はあ!」

「くう!」

カブトのキックが決まり、アナザーカブトが怯んだ。

対するゲイツもパンチホツパーのジカンジャックローの攻撃を繰り返し、パンチホツパーを圧倒すると、アナザーカブトの方へと向かった。

「矢車。万が一の時は、お前が影山を倒すと言っていたな」

「俺達は、永遠に2人で……地獄を……彷徨うんだ……」

「そうか……」

『フィニッシュタイム! 百烈タイムバースト!』

「うわああああ!!?」

アナザーカブトの言葉を聞いたゲイツは、パンチホツパーにジカンジャックローで強烈な一撃を放った。

それを受けたパンチホツパーは変身解除となった。

「相棒おとおおおー!!?」

「……」

影山が倒れたのを見て自棄になったのか、アナザーカブトが怒り心頭のままカブトに突撃する。

それを見て、カブトは後ろを振り向く。

『1……………2……………3……………』

するとカブトは後ろを向いたまま、カブトゼクターのフルスロットルのスイッチを三回押し、ホーンを戻す。

「ライダー……………キック!」

『R I D E R K I C K!』

「はああ!」

「ぐうお!!?」

ホーンを回したカブトは、右足に収束されたエネルギーを一気に爆発させ、強烈な回し蹴りを自身に向かって突撃するアナザーカブトへと放った。

キックが決まると、カブトは再び人差し指を天へと向かって上げる。

「ああああああ……………」

カブトのライダーキックを受けて、アナザーカブトは変身解除となった。

完全敗北した矢車の体内から排出されたアナザーカブトウオツチも、破壊された。

その頃、隕石を破壊しようと宇宙へと昇ったジオウとウオズは……………

「ウオズ!これじゃあ間に合わない!」

フォーゼアーマーとなった宇宙空間に出ていたジオウだが、隕石はまだ破壊出来ていなかった。

「これでフルパワーだ！」

内部にいるウオズもタイヨウの力を最大限に使っているが、まだ全てを燃やし切れていない。

「このままじゃ……」

このままでは間違いなく隕石は地球に落下する。

地球で隕石が落下してくるのを見て、ツクヨミがスウォルツの言った事を思い出す。

『やつらは隕石を止めようとしているが無理だ。お前の力がなくてはな』

「お願い、もう少し時間を！」

ツクヨミが時を止める力を天に向け放つ。

するとツクヨミの思いが通じたのか、隕石が止まった。

「隕石の動きが……止まった？」

「今だ！」

『バーニングサンエクスプロージョン！』

隕石の動きが止まったのを好機と思ったウオズは手から高熱を発し、さらに周囲を溶かしていく。そのまま内部のワームは全て燃え尽くした。

「我が魔王！」

「よし！行くよ！ゲイツ！ウオズ！」

『ジオウトリニティ！』

ワームが全滅したのを確認したジオウがジオウトリニティウオッチを起動し、ドライバーへと装填しウオッチを回し。

『ジオウ！ゲイツ！ウオズ！』

地球にいるゲイツと隕石内部のウオズの体が腕時計へと変わり、隕石の前にいるジオウの元へ集まってジオウの体にはめ込まれ、ジオウの身体も変化を始める。

『トリニティタイム！三つの力、仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウオズ！トリーニティー！トリニティ！！？』

「ゲイツ。ウオズ、一気に決めるぞ！」

「ああ！」

ジオウトリニティへとなり、急いでドライバーを回す。

『フィニッシュタイム！トリニティタイムブレークバーストエクスプロージョン！』

ジオウトリニティのライダーキックを放つと、そのまま隕石内部を突き抜けていき巨

大隕石を粉碎した。

「やったー!!？」

粉々となった隕石はそのまま地球の大气圏で燃え尽きていく。

それを地球で見た影山は、悔しがる表情で見届けた。

「俺の……仲間が……」

仲間のワームがやられたのを見て落ち込む影山に、矢車は声をかける。

「影山……もう一度、兄貴って呼んでくれよ……」

兄貴と呼んで欲しいと頼む矢車。しかし……

「俺は……俺は、影山じゃない。」

お前は俺の……兄貴なんかじゃない……」

影山はコウロギの様なワームの姿へとなるが、エールとアールの姿を思い出すと、再びワームから影山の姿へと変わった。

「でも……また、さよならだ。兄貴……」

最期に兄貴と言い残し、影山のワームは笑って爆裂霧散した。

しばらくして、ジオウトリニティが地球へと帰還し、みんなの前へと降りた。

「ソウゴ！ゲイツ！ウオズさん！」

「やったのです！地球は救われたのです！」

「ううん、みんなが力を貸してくれたから隕石が止めれたんだ」

ソウゴがみんなにお礼を言うと、他の皆も笑って返してくれた。

「それと、ことりちゃん。なれたね、プリキュアに！」

「うん！」

「あ、そうだ！ハリー、あれ出して」

「ん？…ああ、わかった」

ツクヨミの肩に乗っていたハリーがはなにスプーンを渡すと、彼女は妹にそのスプーンを手渡してミライクリスタルをそこに乗せてはぐたんに近づけるようにさせる。

ことりは姉の言われるがままに、ツクヨミが抱き抱えるはぐたんにミライクリスタル・エメラルドを乗せたスプーンを近付けると、ミライクリスタル・エメラルドのアスパワワが、はぐたんの額の飾りに入ってしまった。

「うん。ことり！ありがとう！」

「…これが、アスパワワ？」

「そう。ミライクリスタルはアスパワワで出来た結晶なんだよ」

「これで、はぐたんを育ててたんだね」

「…………では、私からも……………祝え！」

突如ウオズが祝えと叫び出し、それを初めて見たことりは驚く。

「今ここに六人目のプリキュアが誕生を！その名もキュアアール！キュアエールの妹であり！姉妹プリキュアの誕生の瞬間である！」

ウオズがキュアアールの誕生を祝福する。

「あの……………ありがとうございます……………」

とりあえずお礼を言うが、ことりは驚きのあまり顔が少し引きつっていた。

それを後ろの方で聞いていた天道と加賀美は少し引いていた。

「……………おい、あんな事をいつもやるのか？」

「まあ、あれは奴のお決まりのようなものだ」

すると後ろにいた矢車が、この場から立ち去ろうとする。

「矢車さん！」

そんな矢車の様子を見かねたはなが、矢車を呼び止める。

「……………笑いたいのか……………」

「影山さんは生きてますよ！矢車さんが思っている限りずっと！矢車さんの中で生きて

ますよ！」

はなが矢車に、影山はずっと心の中っていると話す。

すると、矢車から少しだけ笑みが見えた。

「……フツ。お前も、妹は大事に守れ」

妹を守れとはなに言っていると、矢車は赤く光る夕日に向かって歩き出す。

「…変われるのかな。矢車は？」

「さあな……だが、また奴の完全調和の姿は見られたと思うがな」

「パーフェクトハーモニーか……」

かつて彼自身が掲げていた信念の言葉を思い出しながら、矢車を見つめる天道と加賀美。

その時、二人のゼクターが変化し始めた。

『カプト!』

『ガタック!』

二人のゼクターは、カプトとガタックのライドウォッチへと変わった。

「これは……」

「なるほど」

ふたつがウォッチとなったのを見て、二人はソウゴと近づきウォッチを渡す。

「これはお前に必要なものようだな」

「カプトウォッチ……」

ソウゴは二人からウオッチを受け取る。

「おぼあちやんが言っていた。継ぐ者が現れた時、それに掛けてみるのも面白いと……」
「それに、君が王様になるために必要なだろうか？」

「わかった。大切に使用してもらおうよ」

天道と加賀美からカプトとガタツクのウオッチを受け取った。

「これで、あとふたつ」

「いよいよ、継承するウオッチもあと僅かですね」

「うん……」

さあやとルールの言う通り、これで残るウオッチはあとふたつとなった。

その様子を屋上の階段から見ていた士も、その場から去ろうとした。そんな彼の姿を見掛けたことりが士に駆け寄る。

「あの門矢さん……これ」

ことりは士にプリハートを返そうとする。

「それはお前にやる。いいものを見せてくれた礼だ」

それに対し、そう言っただけで士が去ろうとすると、士がことりに振り向いた。

「おい、確かお前キュアエールの妹なんだったってな」

「はい」

「姉とは仲良くやれよ」

はななどは仲良くやれ、それだけを伝えた。

更にそこへ、ツクヨミも彼のもとへ駆け寄った。

「あなた。どうして……」

どうして士がプリハートを持っていたのとツクヨミが問う。

「以前、奴らに協力した時に偶然に拝借したのさ」

それに対して士は最初に現れたあの時、クライアス社に手を貸した時にクライアス社に残っていたプリハートを奪ったと語る。

「ねえ、あなたは敵なの？それとも、味方なの？」

「俺は、ただの通りすがりの仮面ライダー」。

面白いと思う方に手を貸すだけだ」

「あの……」

ツクヨミにそう言っていると、ことりがまた士を呼び止めた。

「ありがとうございます！」

ことりが頭を下げてお礼を述べ、手を出して後ろ向きで振ると士は歩き出し去っていった。

その夜、はなが寝る準備してた最中に、背後から気配を感じて振り向くと、ドアの辺りにことりが立っていた。

「どうしたの？」

「えつと……」

「ははーん、さては一緒に寝たいんでしょ。ほらほら」

「ええつ……？」

はなはニマニマしながら、布団を上げてことりを誘う。

「甘えちゃって」

「そ、そう言う訳じゃ……」

ことりはそう言ってから視線を一瞬逸らす。再度はなの方に視線を向けると、いつの間にか寝てしまった。

「ええつ……？お姉ちゃんって、本当にお子ちゃまね」

微笑んでからそう言い、電気を消してから仕方なくベッドの中に入る。

「ねえ……お姉ちゃん」

「……ん？」

自身を呼ぶ声が聞こえたのか、はなが眠そうに瞼を開きながら妹の顔を見る。

「私、立派なプリキュアになれるかな?」

ことりは不安そうな声で、立派にプリキュアになれるのかなと、はなに尋ねる。

「立派なプリキュアね……」

私達以外に先輩のプリキュアがいるけど、みんな自分の守りたいもの為に戦う。それが立派なプリキュアだと思うよ」

「私の守りたいもの……」

ことりにとって守りたいもの。それを考えていると、はなはことりの手を握る。

「私達と一緒に、プリキュア頑張ろうね!」

「……うん!」

そのまま二人は幸せそうな寝顔で、手を繋ぎ合って一緒に眠る。

かくして、キュアアールとキュアアールと姉妹のプリキュアが結成したのだった。

その頃。クジゴジ堂のソウゴの部屋で、ソウゴは自身の持っている18個のライドウオッチを見ていた。

「後は一つ……後一つでウオッチが揃う」

ビルド、エグゼイド、ゴースト、ドライブ、鎧武、ウイザード、フォーゼ、オーズ、W、ディケイド、キバ、カブト、響鬼、ブレイド、ファイズ、龍騎、アギト、クウガ……数々

のライダーの力を継承したソウゴ。

残る最後のウオツチは……仮面ライダー電王のライドウオツチ。

このウオツチで、全てのライドウオツチが揃う。

「かくして、六人目のプリキュア……キュアアールが誕生し、我が魔王はカブトとガタツクのウオツチを手に入れた。

継承するべき、残るウオツチは後二つ。

そして、我が魔王は……いよいよ魔王としての真価が試されます」

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第48話 2007： さあやの夢と最後のウオツチ！

第48話 2007： さあやの夢と最後のウオッチ!

その場所は、一言で言えば誰もいない、只の草原だった。

——私は、いつも夢見ていたんだ。

——だが目の前に映っている遠くの光景には、城の様に聳え立つ大樹が、青空に照らされていた。

——しかし、今の私では決して叶えられぬ夢なんだ。

——そしてその背後には、どういう訳か赤い空に照らされる49本の十字架が立っていた。

——だから私は、過去の私であるお前に、その夢を託すことにした。

——そして複数本の十字架の中心には、一人の高齢の男性が立っていた。

——若かりし日の私よ…私の夢は……

「——んんっ……んあ……またこの夢?」

朝日が顔に照らされ目を覚ましたソウゴは、さつきまで夢を見ていた事を思い浮かべていた。

誰かが、俺に語り掛けてきている夢を見ていた。

しかし、それがどういった話だったのかは、あまり覚えていない。

ただ、初めてジオウになった日も、新しいライドウオッチを集めた日も、この夢を見ていたような記憶が残っていた。

今日あの夢を見たのも、多分これのせいなのかもしれないと思いながら、昨日受け取ったカブトライドウオッチを手に取ってみる。

……だが今の自分には関係ないと思ったので、気にしないことにしている。

なので俺は、朝ご飯を食べるために下の階へ降りることにした。

——ソウゴが天道と加賀美からカブトウオッチとガタックウオッチを受け取り、ことりも六人目のプリキュア——キュアアールとなってから、最初の一日が過ぎようとしていた。

更に翌日、彼らはビューティーハリーへと集まっていた。

「はーい。ハートリ」

はなは机から離れると、ことりにアクセサリー機で自作したブレスレットをプレゼントした。

「ありがとう♪」

ことりは喜びながら、そのブレスレットを左手に付けてもらう。

「それじゃあ、ことりに話すね。私達に今までであった事を……」

その後、ソウゴ達はことりにライドウォッチの事やクライアス社の目的、今までに会って来た仮面ライダーやプリキュア達の事を今までの事を全て話した。

「でも、会ってみたいな。お姉ちゃん達の先輩のプリキュアの人達に!」

「いちかちゃんやみらいちゃんに紹介するよ」

「俺も晴夜、龍牙の事を紹介するよ」

ことりにいつか出会ったみんなを紹介すると話すと、ことりは笑顔で楽しみだと言
う。

「せやけど……何でこんなおにぎりがあるんや!」

ずっと気になっていたのか、ハリーがテーブルにおにぎりの山があった事を指摘し
た。

「あつ……実は……」

ソウゴは二日前のアナザーカブトの事件が解決し、ウォッチを手に入れてすぐの事を
語る。

あの後、ソウゴがクジゴジ堂に帰ると、リビングのテーブルには大量のおにぎりがあったのだ。

『お、叔父さん……』

『いや、ね、隕石が落ちてくるってニュースを見て、疎外用におにぎり作ったんだけど……』

隕石の落下はソウゴ達が食い止め地球は救われたために、順一郎が作った大量のおにぎりは無駄となってしまった。

『ソウゴ君、明日みんなと一緒に食べてくれないかな？』

『いや……この数は……』

ソウゴがサラッと見ただけでも、おにぎりの数は間違いなくお米一ヶ月分くらいはあると思われる。

そんなわけで、みんなで順一郎が作ったおにぎりの残飯処理をすることになった。

『凄い量なのです……』

『まあ、とりあえず食べよう』

みんなはビニールシートを剥がし、おにぎりを口にする。

『っ！ 美味しいっ！』

おにぎりを口にすると美味しいとみんなが叫ぶ。

「塩加減が丁度よく。握りの強さもそんなになくとても食べやすいです!」

「こんな美味しいおにぎり初めて〜!」

「でしょ! ソウゴの叔父さんは料理はいつも美味しいの〜」

ルールーがおにぎりの感想を言い、はなが順一郎の事について妹へ話していると、ウオズとハリー、えみるがおにぎりのおかわりをいただこうとする。

「我が魔王! もう一つ頂けるかな!」

「俺も!」

「私もなのです!」

みんなはおにぎりを堪能して食していた。

その後、ミライパッドではな達がさあやの出演するドラマを見る。

「感動だよ〜!」

「お姉ちゃん、汚いから拭いて」

余りに感動したはなが涙を流しながら、ことりから貰ったティッシュで鼻をかむ。

「いつもとまるで別人なのです」

「本当。テレビと日常じゃ比較できないわ」

「ありがとう……」

えみるとツクヨミからそう言われてたさあやが、照れながらお礼を言う。

「巨大タワーから生まれた女の子って、凄い設定だよな」

「完全にSF作品だが、さあや君の演技がSFを感じさせない。感動ものが伝わるよ」
「現代のかぐや姫を狙ったドラマですから、大ヒット中なのです！」

「もうすぐ新しいドラマの撮影があるんだよね？」

「うん」

ツクヨミの言う通り、近いうちに“ドクターハイスクール”という新しいドラマの撮影があり、さあやもそれに出るらしい。

「昼間はごく普通の女子高生、放課後は天才のお話なんですよね？」

「うん。実は、その役作りの為にすみれさんをお願いしたい事があって」

「ママに？」

「どんな事ですか？」

はなとことりの姉妹は何を頼みたいのか思い、二人がお互いに顔を見る。
〈ポウウウ〜ン！〉

するとその時、何かの汽笛のような音が外から聞こえた。

「何ですかこの音……」

「……あれ？この音どこかで……」

「煙だしてる……」

ほまれの言う通り、デンライナーの車両のあちこちから煙が吹き上がっていた。すると、デンライナーから誰か降りて来た。

「ひでえ目にあつたぜええー!!」

「よく言うよね先輩は。自分のせいなのに」

「何だところのー!？」

「慣れもせん運転するからや!」

「お前は寝てただろ!」

「モモタロス、馬鹿じゃないの!」

現れたのは電王の仲間である四人のイマジンだった。

「モモタロス!」

ソウゴとはな、さあや、ほまれはクロバーの事件の際に一緒に戦った事があり、すぐに彼らの元に駆け寄った。

「おう!ソウゴ!はな!久しぶりだな」

モモタロスもソウゴ達の事を覚えていた。

「あの化け物みたいいな人は?」

「彼らは仮面ライダー電王の仲間。イマジンと言う存在だよ」

ウォズがえみる、ルーラー、ことりにイマジンの事を説明する。

「野上良太郎は?」

ソウゴは仮面ライダー電王である野上良太郎は何処かと尋ねると、ウラタロスが彼の行方を説明する。

「良太郎はね。今オーナーと一緒にキングライナーにいるんだ」

「キングライナー?」

ソウゴはキングライナーと言われてもわからないが、とにかく野上良太郎はここにはいないと教えられた。

「それより、デンライナーなんでこんな酷い状態なの?」

「何かトラブルでも?」

「モモの字が下手な運転したせいで!デンライナーの操作がおかしくなったんや!」

「なんだとクマ公!」

モモタロスの所為だと言う中、イマジン達は喧嘩を始めた。どうすれば喧嘩を止められるのかを考えているのか、一々関わるのに面倒を感じたのか、ソウゴ達はイマジン達の喧嘩を制止するわけでもなく、只静かに見守っていた。

「ねえ、ねえ、この時間で一番の修理屋って誰か知らない?」

「そいつにデンライナーを直して貰いたいんや」

『一番の修理屋……』

この時代で一番の修理屋と言われると、ソウゴ達の頭からは一人、思い当たる人物が浮かび上がる。

「あれ？女の子が増えたかな？」

ウラタロスがえみるとルールとことりに気づき、声をかける。

「どう君達？僕に釣られてみない——」

「亀公！てめえ！中学生をナンパするな！」

モモタロスがナンパしようとしたウラタロスを叱る。

それからしばらくして、ソウゴ達は叔父の順一郎さんをビューティーハリーへと招く。

「で、僕に何の用かな？」

順一郎はイマジン達に何が用と尋ねる。するとモモタロスが前に現れ、彼に向かって手を合わせる。

「おっさん！頼む。デンライナーを直してくれ！」

「デンライナー？」

「今、外に止まっているあの電車なんだけど……」

ソウゴが順一郎に、外に止まっているデンライナーに指を指して言う。

「え、電車?あのうち……うち時計屋だよ?いくらなんでも電車は……」

「大丈夫。電車ついても時計みたいなもんだから」

「あんたがこの時間の一番の修理屋、いやないか」

「あらそう?そこまで言われると断れないなあ」

イマジン達から一番の修理屋と煽てられ、順一郎はあの電車を直してあげようかと思いは始める。

「答えは聞いてない……それ!」

だが痺れを切らしたのか、リュウタロスが順一郎へ憑依した。

「イエー!」

「叔父さん!?!」

ソウゴが驚くと、叔父の姿がいきなり瞳の色と頭の髪色が紫色と変わり、帽子も被ってテンションが上がっていた。

「デンライナーにゴー!ゴー!デンライナーにゴー!ゴー!」

リュウタロスに憑依された順一郎がテンションアゲアゲでイマジン達と共にデンライナーへと向かって行き、ビューティーハリーを出て行く。

「我が魔王。彼らは新たなウォッチを手に入れる鍵かもしれません」

「そんなことより、叔父さんが心配だよ〜ああ〜……」

「ソウゴ君……」

ソウゴ達はハリーとウオズを残し、デンライナーへと向かう。

その一方、クライアス社の会議室。

誰もいない会議室では、オーラとウールが話していた。

「ジオウが次のウオッチを手に入れるのも時間の問題ね。残るウオッチは後2つ」

「とんとん拍子過ぎない？あいつには仮面ライダーを引き寄せる何かがあるのかな？」

「どうでもいいわ。手が付けられなくなる前に阻止する」

「君達に出来るの〜？」

そこへビシンが現れ、二人を煽る。

「アンタの力を借りなくても、もう対策は練ってあるわよ！」

「ふん〜……なら、面白そうだから手伝ってあげるよ」

そう言つて彼女は今度こそジオウを倒すと意気込むと、珍しくビシンがオーラに手を貸すと声をかけた。

遠藤家と書かれたお墓に手を合わせる男性。

そこへ一人の青年が歩み寄る。

「ここへ来るなど言っただはずだ！」

すると歩み寄って来た青年が、墓石に向って手を合わせていた男性にそう言っただけで怒鳴り散らす。

「お前のせいで姉ちゃんは……二度と来るな。いいな」

そう言っただけで青年は、墓参りをしていた男性に向けて彼が持参してきた花を叩きつけ追いつ返す。

その時、青年の後ろからオーラとビシンが現れた。

「何だよお前ら……？」

「君に力を渡して来たんだよ」

「あの男に恨みがあるみたいね。めちやくちやいい知らせ。私ならあなたの恨みを晴らしてあげられると思うんだけど？」

オーラがブランクウォッチを取り出すと、ウォッチは黒いオーラを取り込みながらアナザースライドウォッチへと変わった。

『電王……！』

アナザーライドウォッチを起動すると、青年の体内に埋め込む。
「うわあああ……!」

オーラは青年にアナザーウォッチを埋め込めると、青年の体がウォッチの力で変貌。ナマハゲのようなベルトを付け、赤色の姿をし、スカート状のアーマーの尻部分に『DEN-O』と言う文字が刻まれ、ローブ部分に『2007』——ではなく、『2018』と言う文字が刻まれたアナザーライダー・アナザー電王に変身した。

「っ!?」

追い返された男性は振り向き、目の前に居た怪物に驚く。

「どうすればいい?」

「時の列車を奪い取るの。ついて来なさい」

オーラ達はアナザー電王を連れて、デンライナーの元へ向かおうとする。

「タクヤ君が化け物に!」

驚いた男性は腰がひけて、すぐに起き上がれなかった。

しかしその時、動けない男性に光の玉のようなものが体に入っていた。

ソウゴ達はデンライナーの運転席へと入っていた。

「うわあ〜」

「凄いのです」

「作りからして、かなりの高度な技術が施されています。何よりこの列車の運転を、このバイクで行っているのですね」

デンライナーの運転席の中を探索することりとえみるとルーラーの三人。

一方、デンライナーの車両の中へは、はなとさあや、ほまれ、ゲイツがいた。

「はい、デンライナーからのサービスです」

客室乗務員のナオミが四人にお茶を用意した。

「あの～……」

「これは……」

「コーヒーです……」

コップに注がれていたのはコーヒーと言うが、ほまれ達の目にはとてもコーヒーには見えなかった。

「とりあえず、飲んでみよ」

さあやに勧められ、ナオミが用意してくれたコーヒーを四人は飲んでみた。

『つ……?』

ゲイツとほまれは少々咽せてしまった。

「どうですか～♪」

「こ、こ、個性的な味だね……」

「えっ？ 私は意外と好きだけど？」

「「えっ？」」

まさかのさあやは、ナオミの入れたコーヒーが意外と好きだと言う。

その頃運転席では、順一郎が辺りを見て破損箇所が何処か調べる。

「おい、どうだ、おっさん。何とかなりそうか？」

「なるほどな。確かにこれは大きな時計みたいなもんだな」

「はっ……？？全然違うじゃん」

「これは時計じゃ……」

どっからどう見ても時計じゃないのに、どうやって直すのだとソウゴが思っていると

…

「みんな！ 叔父さんを舐めちゃいけないよ。任しとけ！ この時間で一番の修理屋だよ！
時計屋だけどー！」

「さすが！」

「おお！ 凄い自信！」

「順一郎さん！ ファイトなのです！」

「ふぁいとー！ふぁいとー！」

運転席のシートに座っているはぐたんも、えみると一緒にファイトと順一郎に向けてエールを送る。

しかしその時、爆発音と共にデンライナーから振動が走った。それも、何があったような衝撃だった。

「これは……まさか。叔父さん！はぐたんを見てて！」

ソウゴ達はデンライナーの外へと出ると、既に外では、アナザー電王がデンライナーを奪うために攻撃を行っていた。

「ソウゴ君！あのアナザーライダー！」

「アナザー電王……みんな！ことりちゃん！」

「は、はい……」

かつてアナザークウガ鬼火の事件で電王が倒した筈のアナザー電王の登場に驚きながらも、ソウゴ達はドライバーを装着。はな達はプリハートを取り出してミライクリスタルをセットする。

『ジオウトリニティ！』

ソウゴはジオウトリニティウォッチを装填し、ウォッチのダイヤルを回す。

『ジオウ！ゲイツ！ウォズ！』

『ハリー！ギアジェット！』

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

ジオウとハリーへと変身し、ジオウの体に腕時計となったゲイツとウオズが装着される。はな達六人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、六人が揃っていつもの手順を取り姿を変える。

『トリニティタイム！三つの力、仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウオズ！トリーニティ！トリニティ！！？』

『ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジェット！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアーラ！」

「HUGっと！プリキュア！」

ジオウトリニティ、ハリーギアジェットへと変身し、プリキュア六人で初めて同時に名乗り、チーム名を叫んだ。

「ハリ〜」

そこへ、アナザー電王の隣にギアファンングフォームになったビシンも現れた。

「ゲイツ……あれが」

「ああ、ビシンの強化フォームだ」

「なんや！また勝負に来たか!?」

「いいや〜。今日はハリーじゃないんだ。今日は……」

ビシンはジオウトリニティへと目を向ける。すると、ジオウトリニティへと突撃してくる。

「負け犬の方だー!!」

右腕のクローを構えながらジオウトリニティへと突撃しようとした、その時……

へムウウウウウ〜ン!

今度は牛の鳴き声の様な汽笛を鳴らしながら、彼らの前にデンライナーとは違う列車が現れた。

「うわあ〜!何!?」

ジオウ達がいきなり現れた列車に驚いていると、牛の頭部を模した緑色の列車が通り

過ぎると共に二人の人影が現れた。

「時見ソウゴ。お前が魔王だな」

「あんた……桐谷京介?」

現れたのは仮面ライダー響鬼の継承で出逢った仮面ライダー響鬼を継承した桐谷京介だった。

「誰だ、それ?」

しかし彼は桐谷京介ではなかった。どうやら只のそっくりさんのようだ。

「いやいやいや誰って……えっ?忘れちゃったの?」

「馴れ馴れしく話しかけるな。俺はお前が作った最低最悪の未来を止めるために来た」

京介そっくりな男はそう言うのと、以前見た電王のベルトと似たようなベルトを装着した。

「変身!」

『アルティル フォーム』

そして緑色のカードを挿入すると、電王とは違うプラットフォームへと変身した。

すると音声と共に緑のオーラアーマーが現れて全身を包こみ、顔には二頭の牛が合わさったような仮面が変形しながら覆われる。

「最初に言っておく!俺はかーなり強い!」

「仮面ライダー……」

「なんだ。あの仮面ライダーは……」

「仮面ライダーゼロノス、時を守るライダーだね」

「時を……」

「そこのお前、邪魔するな!」

ウォズが突如現れたライダー・仮面ライダーゼロノスの解説をしていると、ビシンが現れたゼロノスに襲いかかる。

「ふん!!?」

だが背後にいたゼロノスのイマジン、デネブが手から放った銃撃でビシンを近づけさせない様にする。

「デネブ。分かってるな」

「了解」

ゼロノスがジオウトリニティに突っ込んで行く。

そこへデネブが援護弾をジオウトリニティへ浴びせていく

「くう!」

「正面から当たっても勝てない?」

「そういう事だ!」

ジオウトリニティに攻め込むゼロノス。しかし…

「フラワーシュート！」

「ッ……」

「侑斗！」

「フェザーブラスト！」

エールとアンジュがメロディソードで技を放ち、ゼロノスとデネブの連携を封じた。

「はああ！」

ジオウトリニティがジカンドスピアでゼロノスへ反撃に出る。

「あいつ……」

「させへんで！」

ハリーがビシンをジオウの元へ行かせないように前が出る。

「スター斯拉ッシュ！」

エトワールがスター斯拉ッシュを放ち、ビシンを怯ませる。

「何だ？でも助かった、この隙にあの列車を……！」

「行かせません！」

「（こ）は、私達が！」

「は、はい！」

アナザー電王がこの隙にと思いいデンライナーを奪おうと試みるが、マシエリとアムールとアーラが立ち塞がる。

「ツインラブギター!」

「リコーダーステツキ!」

マシエリとアムールはツインラブギターを、アーラは羽の装飾が付いたリコーダー型の杖・リコーダーステツキを出現させた。

「ウイングシャワー!」

アーラがリコーダーステツキのボタンを押したまま口につけて吹くと、無数の羽が発生させた。それはアナザー電王の目くらましになった。

「アムール!」

「はい!」

「ツインラブギター!ミライクリスタル!」

アナザー電王の動き止まっている内に、二人はツインラブギターにルージュとバイオレットのミライクリスタルをセットする。

「アークレディ!」

「行くのです!」

ツインラブギターを使い、二人が弦を弾き演奏を始める。

「届け！ 私達の愛の歌！」

「心のトゲトゲ！」

「ズツキュン撃ち抜く！」

「ツインラブ・ロックビート！」

マシエリとアムールがツインラブギターを持ち替え、二人同時に赤と紫のハート型エネルギーを放つツインラブ・ロックビートをアナザー電王へと放った。

「ッ!?？」

ツインラブロックビートを受けて、アナザー電王の変身が解けて元の人間の姿に戻った。

変身が解かれた人の下へオーラが現れ、時間を止める。

「こんなところで諦めてもらっちゃ困るんだけど」

オーラが時を止めたアナザー電王を連れて、ビシンと共に一度撤退した。

その後、ビューティーハリーへゼロノスの変身者である桜井侑斗とデネブを招き、彼らから話を聞く。

「俺はデネブ！こちらは桜井侑斗！侑斗をよろしく！」

デネブが頭を下げて自己紹介すると、みんなにキャンディを渡す。

「これ、お近づきの印ね」

「ありがとうございます」

とりあえずみんなはキャンディを受けとる。

「時を守ってるって聞いたんだけど？」

「まあな」

「あの、どうしてソウゴ君を？」

はなとえみるがキャンディを食べている横で、さあやがどうしてソウゴを襲ったのだと聞くと、自身が見た未来の事を思い出し、侑斗はソウゴを見ながら語り出す。

「俺は、お前の未来ってやつを見ただけだ……」

「……そこでは我が魔王が最低最悪の未来をつくっていた、と」

「まさにそれだ。そいつはオーマジオウとなって、いずれは世界から時を止めた」

侑斗の言う事は正しかった。

実際、ゲイツ達の未来ではソウゴはオーマジオウとなって時間を止めた。

「ソウゴに限ってそんな事にはならない。仮にそうなたとしても、俺が止めて見せる」

それに対してゲイツが机を叩いて、もしもの時はソウゴは自分が止めるという。

「第一に止めるのはソウゴよりも、クライアス社を止めるべきでしょ！」

「だが、そいつが最強の力を手に入れても、同じ事が言えるか？」

「最強の力……」

ソウゴが最強の力を手にすると言われると、ゲイツは自分でも倒せるかどうか解らす言い淀んでしまう。

「そのガキの魔王はこの先、誰も手の届かない力を手に入れる。時の王者として君臨する。そうなれば、もう誰もそいつを止めることはできない」

「……俺は最低最悪の未来なんか作らないよ。最高最善の魔王になる」

「口では何とでも言える……俺はお前を必ず倒す!」

最高最善の魔王になると語るソウゴに便乗するように、そうだとルールがキャンディを口の中で転がしながら頷いている。侑斗はそれを一掃すると椅子から立ち上がり、ビューティーハリーから出て行く。

「ああ、あんな事言っちゃって!ごめんね、ごめんなさい!気を悪くした?あの……侑斗を宜しくまたね!んじゃ!」

デネブが侑斗のフォローをしながらも、侑斗をよろしくと言いながら去っていった。「なんやあいつ……」

その様子を見てそう呟いたハリーは、デネブから貰ったキャンディを口に入れる。

ソウゴ達はそれぞれの帰路へと向かう。ゲイツとツクヨミはイマジン達の監視の為

に今日はビューティーハリーへと止まることにしたらしあ。

「あのさ……もし、俺が本当に最低最悪の魔王になったら……みんな、俺の事は倒してくれてくれても構わない」

ソウゴが侑斗の話しを聞き、仮にも自分がオーマジオウになったらかと少し不安になっっていた。

「そんな事はさせません。私をクライアス社から救ってくれた時のように今度は私達がソウゴ助けます!」

「そうそう! 最善最高の魔王に〜! フレフレ〜! フレフレ〜! ソ〜ウ〜ゴオー!」

「それに、本当にソウゴが暴走した時は私達が止めるよ」

「私もなのです!」

「私もソウゴさんの力になります!」

「みんな……ありがとう」

ルーラーが、はなが、ほまれが、えみるが、ことりがそう言っているのを聞き、信頼できる仲間がいる事を再確認。

それがあるなら絶対にオーマジオウにはならない、ソウゴはそう感じていた。

その後は、みんなと別れさあやと二人で同じ道を帰る。

「あの、ソウゴ君……」

「何?」

「あのさ、聞きたいんだけど……」

さあやがソウゴに聞きたい事があると言う。

「ソウゴ君は、テレビに出てる私と、そうじゃないいつもの私……どっちがいい?」
「えっ? どうしたのいきなり?」

「今は少しでも早くお母さんと共演したい。それを目標に頑張ってる。」

「だけど……もし、それが叶っても、まだ今みたいに頑張れるかなって……」
自身の今の目標は母と共演する事。

しかしそれが叶った時、それで満足してしまい、演技を続けることが、頑張る事が出来なくなるかもしれない。

さあやがそんな自分の未来に不安を抱いていると、ソウゴは直ぐに彼女に向かって自身の答えを言う。

「それは、さあやが決める事だよ」

「えっ?」

「俺は、TVに出てるさあやも、いつもさあやどつちもいいと思ってる。さあやは自分のやりたい事、目標にしている事をガムシヤラに頑張っている。それで、いつかは答えは見つかるとよ」

「私の答え……」

「じゃあ、俺はここで……また明日ね！」

「うん！」

お互いに手を振ってソウゴはクジゴジ堂へと向かい。さあやは自分の家のマンションへと帰って行く。

そして次の日、ビューティーハリで順一郎さんはデンライナーの修繕に全力を尽くしているその一方で、ソウゴ達は今回の仕事体験の場所であるあさばぶ総合病院に着く。

「到ちやーくー！」

「思い出すよね。内富士先生の赤ちゃんが産まれた時の事」

「うん。あの時の先生に、お話を聞いてみたくて」

ここに来たのは、内富士先生の奥さんの出産を担当した真木先生から医者についての話を聞きたいと、さあやが頼んだからだった。電話してすぐに承の返事を貰えた。

「病院は静かにして下さい」

すると後ろから、注意する声が聞こえてはな達が振り向く。

そこには、本を抱き抱えた一人の少女が立っていた。

「病院は……静かにして下さい」

「は、はい。ごめんなさい……」

はなが謝つてから少女は一礼し、この場から早足で後にした。

「あんな小さい子にも注意されるなんて、お姉ちゃんつて本当にお子ちゃまね」

「めちよつく……」

その後、ソウゴ達はあさばぶ総合病院の診察室へとやつて来た。そこに居られたのは内富士先生の時にあつた真木先生がいた。

「すみれさんから窺つてるよ、話が聞きたいと。」

でも、それだけでいいのかい？」

真木が仕事しながら語り、区切りを付けてからソウゴ達の方を向いてそれだけでいいのかと尋ねる。

「えっ？」

「命の生まれる現場に、遊び半分で来た訳じゃないだろう？」

「も、勿論です！」

さあやは真剣な表情で、勿論ですと答える。

「なら、さつさと支度しておいで。産婦人科以外の診療科も研修出来るよう、話を通してあげるから」

「あの、私は整形外科を見てみたいです」

「俺も整形科に行きたい」

「じゃあ私は小児科でお願いします!」

「私も同じなのです!」

「私もいいですか?」

「私は外科医を見に行きたい」

はなとえみるとことりは小児科を希望し、ゲイツとほまれは整形外科を、ツクヨミは外科医を希望する。

「オツケー。君はどうするの?」

真木はソウゴはどうするかと尋ねる。

「俺は……」

ソウゴ達が病院の仕事体験をしている一方、ビューティーハリーに停車しているデンライナーの方は……

「これだけ直し甲斐のある時計は初めてだ。でもこれ……ほんとに時計なのかな?」

「そこは考えちゃダメ」

流石に順一郎はこの機械が時計では無いのでは?と思っていたが、ウラタロスが深く

考えないでと言う。

「まいつか！」

こちらは面白いおかしく楽しんでデンライナーの修理を行なっていた。

はな達が病院の裏に移動し、さあやがミライパッドを取り出す。

「じゃあ、行くよ」

「「うん！」」

「はい」

「?…これから何が始まるの?」

初めての事でことりが首を傾げて尋ねる。わかりやすいようにさあやがことりに見せながらミライクリスタル・ブルーをミライパッドの上部にセットする。

「ミライパッド、オープン！」

画面から光が放たれ、ドアが開く。

「「「お仕事スイッチ、オン！」」」

はな達は白衣を着た医者となった。

「ミライクリスタルって、こんな事も出来るんだ…」

ことりが今の自分の姿を見ながらそう呟く。

「ことりは知らなかったっけね」

「ナイトプールの時の衣装も、温泉に行った時の衣装も、ミライクリスタルを使って着たものです」

「じゃあ、私のは何になれるのかな？」

ことりはポケットからミライクリスタル・エメラルドを出して手の平に乗せる。

「じゃあ、今回もお仕事頑張ろう！」

はな達は病院の中へと戻る。

「あつ、来た来た」

中に戻ると、私服の上に白衣を着たソウゴとゲイツがはな達に気付いて声を出す。

「ソウゴ君似合ってるね♪」

「そうかな？まあ、なんかちよつと偉くなった感じするな」

「ことりちゃんは初めてだったね。職業体験」

「はい。緊張してるけど、楽しみ」

挨拶をしてから、はなとえみるとことりは小児科、さあやとルールーは産婦人科、ゲイツとほまれは整形外科へ向かい、ツクヨミは外科医の仕事を手伝ったり見学し、体験をしたりする。

妊婦体験の手伝いで、そこにはハリーとはぐたんも一緒だった。

「よいしょつと……妊娠してるお母さんって大変……」

妊婦体験ジャケツトを着たさあやがそう言う。

「こんなに重いとは……母親は凄いですね」

ルールーも妊婦体験ジャケツトを着て話す。

「どれ……うおつ……重つ……」

同じく妊婦体験ジャケツトを着たハリーが椅子から立ち上がると、体勢を崩して転びそうになる。

「きばりやつしやー!」

はぐたんが応援し、この光景を見て他の参加者達も笑い合う。

その頃ソウゴは、医者の方が患者の人と話している様子を後ろから見学していた。

「我が魔王」

その後ろをウオズがソウゴの名を呼びながら現れた。

「精神科とは、意外だね。我が魔王」

ソウゴがあさばぶ総合病院の精神科の体験を受けていた事に、ウオズは意外性を覚えていると……

「何故、精神科に？」

何故、精神科なのかとソウゴに聞く。

「俺の両親が事故で亡くなったって知ってるよね……」

「……」

我が魔王の両親が死んでいる……という話を聞き、ウォズは以前にアナザージオウ事変の時に、調べた事がある事を思い出す。

「あの時の俺みたいな人がいるなら……そんな人達の力になりたいたんだ」

過去に起こった自分の辛い体験があるソウゴは、自分と同じ体験をした人達の力になりたいと言う。

「そんな人達の心の支えとなるのも、王様になるのに必要でしょう♪ほら、民の心を知るのが必要みたいな」

「流石は我が魔王だね。人の心に寄り添うまさに王としての器だ」

「……ねえ、昨日の桜井侑斗が言ってた事って、ウォッチを集めたら、最強の力が手に入るって事だよね?」

「桜井侑斗の言葉通りなら、誰も我が魔王にかなわなくなるようだね」

「……オーマジオウにも勝てる?」

以前、門矢士に未来へ送り込まれ、オーマジオウと対峙し戦った時、オーマジオウに完膚なきまでに負けた記憶がソウゴの脳裏をよぎる。

『全てのウオッチを集めるのが、王への道』

そうオーマジオウ告げられたソウゴは、残るウオッチを必死に集めて来た。

「そうじゃなきゃ、オーマジオウの口車に乗ったりなんかしない」

「無論。オーマジオウの力を手に入れれば、対等に戦える。それは我が魔王をおいて、他にいない」

「だったら何も迷わない。その力、手に入れてみせる」

ウオズにそう語りながらソウゴは精神科を出ると、そこへ先程の少女が立ち止まって見ている、表情を曇らせながら歩き去った。

(あの子、さっきの……)

さあやとルールーが、通路の方で真木と椅子に座る不安気な表情の妊婦達を見て会話をする。

「産科のお仕事って、産まれる時だけじゃないんですね」

「お腹に赤ちゃんが出来た時から、お母さんは始まつてる。

お母さん達には分からない事が沢山あるの。

だから、十ヶ月掛けてお母さんになる準備をして行く」

「良く、分かりません。赤ちゃんを愛しいと思う気持ちは分かります。でも、まだ見えな

い赤ちゃんを愛おしく思えるのは……」

「お母さんはね、赤ちゃんをいつも全身で感じているのよ」

正面口で一組の家族を見届けてから、さあやが先程の少女に気付く。

「こんにちは」

さあやが少女に近寄り、その少女に挨拶をする。

「どうしたのかな? 一人で。」

……あつ、ごめんね。私は薬師寺さあや、お医者さんのお手伝いをしているの」

「川上あや」

「あやちゃんって言うんだ」

「真木先生!」

「あやちゃん」

少女は川上あやと名乗ってから、真木の傍に駆け寄る。

「今日はお母さん、よろしくお願ひします」

「分かりました。あやちゃん」

「真木先生にお願ひしたの」

「そうか」

そこへあやの父親が現れ、あやが真木にお願ひした事を伝える。

「ママの部屋に行くね」

父親にそう伝え、母親の病室へ向かう。

「彼女のお母さん、今日何かあるのですか？」

「はい。帝王切開で、赤ちゃんを産むんです。あやちゃんの弟を」

「帝王切開……手術をするんですね」

手術の話を聞いた後、検査室で真木があやの母親にエコー検査を行い、さあや達もモニターでお腹の中を確認する。

「凄い……」

「お母さんはこの赤ちゃんを全身全霊で感じてるんですね」

「昨夜は眠れた？」

「あんまり……」

「不安もあるだろうけど、頑張りましょうね」

「はい……」

「おお……！動いた……！」

赤ちゃんが動いた事にモニターを見ないで本を見ていたあやも一瞬反応するが、本に向きを戻す。

「本、逆さまだよ」

「あっ……」

さあやがあやに本が逆さまと伝えると、あやは耳をほのかに赤くしながら本の向きを戻す。

「あやちゃん、赤ちゃん楽しみだね」

「うん……」

「ママを応援してあげようね」

「うん……あや、お姉ちゃんになるから」

「うん」

一方、小児科に行ったはなは子供達に弄ばれ、えみるとことりは子供達に絵本を読ませていた。

「えみるとことりはお姉ちゃんなのに……私は……」

「はなー！はなー！」

えみるとことりは子供達にお姉ちゃんと呼ばれていたが、何故かはなだけ呼び捨てだった。

外科医にいるツクヨミは、手中治療室にいる患者と接している医者を見ていた。

整形外科に行ったほまれは、リハビリ室で患者のリハビリを手伝う。

「大丈夫。焦らないで」

「きばりやつしやー！ほまえ！きばりやつしやー！」

ハリーに抱き抱えられたはぐたんがほまれを応援し、この場を和ませた。

「よし、あと三回……」

その時、手伝っていたゲイツの背後に赤い光の球が現れ、ゲイツの中に入り込んだ。

「あつ……!!??」

その時、ハリーの目にゲイツの体から砂が溢れるのが見えた。

「ゲイツ？」

「どうしたの？」

「ようー！」

ほまれがどうしたのかと尋ねると、ゲイツの瞳が赤くなって髪が逆立ち出し、白衣を脱ぎ捨てた。

「俺だ俺！デンライナーの修理は順調にいつてるぜ!!??」

「もしかして、モモはんか!!??」

「俺がお前達を手伝いに来たってわけだ！」

「手伝うって？」

「あの偽電王、俺が倒してやるって言うてんだよ！しかも、この近くに来てやるがるぜ！行くぜ行くぜ行くぜー！」

「ちよつと待つてゲイツ！」

ゲイツが出て行くと、ほまれとハリーがはぐたんを抱っこして追いかける。

デンライナーを奪うべく街中を移動していたアナザー電王が、そこにいた。

「どこだ……どこだ……」

そこへ、モモタロスに憑依されたゲイツとハリーとほまれが駆けつけた。

「待ちやがれ!!? 偽物野郎！」

モモタロスはアナザー電王を今度こそ逃がさんと、懐からジクウドライバーとゲイツウォッチ、ゲイツリバイウォッチを取り出す。しかし…

「……………これどうやって使うんだ？」

モモタロスにはウォッチの使い方が分からなかったのか、ハリーとほまれにどう使うのか問いかける。

「もうっ！」

二人がモモタロスに憑依されたゲイツの手からウォッチを取り、ゲイツウォッチとゲイツリバイウォッチを起動させる。

『ゲイツ！ゲイツリバイブ 剛烈！』

起動させたウオッチをドライバーのスロットへと装填した。

「はい！変身！」

「おお……変身！」

後ろから現れた砂時計のエフェクトが現れると、モモタロスがドライバーを勢い良く回す。

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！リ・バ・イ・ブ 剛烈！ 剛烈！』

二人の甲斐あつてゲイツリバイブ 剛烈へと変身出来た。

「なるほど？……俺、参上！」

いつもの電王になった時のポーズを取ると、ジカンジャックローを構えアナザー電王へと走って行く。

「行くぜ行くぜ行くぜええ！」

ゲイツリバイブになったモモタロスはこのモードのジカンジャックローで攻撃を繰り出す。

「へえ、意外と使いやすいな」

攻め込むゲイツだが、そこへ誰かが現れるとアナザー電王を攻撃した。

「な、何だこいつ……？イマジンか……！」

現れたのは、モグラ型のイマジン・モールイマジンだった。

「俺の契約者はコイツを助けたいってさー！」

「ユキヒロ……お前……！」

そこへ、ハリーからの連絡を受けたソウゴとウォズ、はな、えみる、ことりも現場へとやって来た。

「これってどういう事……？あれ何？アナザー電王と戦ってる、ってことは、味方つてこと？」

「それはどうかかな？」

「とにかく俺も……みんなは離れて」

『ジオウ！』

はな達は少しソウゴ達から離れると、ジオウウォッチを起動させる。

「言っただけだ。俺はお前を止めると」

だが変身しようとするソウゴの前に、ゼロノスとデネブが立ちはだかる。

「ごめん。ここで止まる訳にはいかないんだ。最高最善の魔王になって、未来を変えるために」

『ジオウトリニテイー！』

そう言っただけでソウゴはジオウトリニテイウォッチを起動し、ドライバーへと装填すると

ウオツチを回した。

『ジオウ！ゲイツ！ウオズ！』

三人が光が包まれ、光に包まれたゲイツとウオズの体が腕時計のように変わり、ジオウの体にはめ込まれると、ジオウの身体も変化を始め、ジオウの仮面が中央へと移動する。

『トリニティタイム！三つの力、仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウオズ！トーーーニーーティーー！トリニティ！！？』

ジオウはジオウトリニティへと変身を完了した。

「つたく、いい所だったのによ！どうなってんだこれ！！？」

「どうしてあんたがここに！！？」

しかし、ゲイツに憑依したモモタロスがそのまま合体し、ジオウトリニティの三人の意識空間にまでいた。肝心のゲイツはいるにはいるが、白目を向いて意識を失っていた。

「これ何だよ？てんこ盛りみたいなものか？」

「おそらく君がゲイツ君に憑依したからだね。ゲイツ君は意識を失ってる」

「そんなことより……行くぜ行くぜ行くぜーッ！」

「うわっ！ちよつとこら、勝手に！」

モモタロスに引つ張られてジオウトリニティが向かって行き、一方的にモモタロスが暴れにいった。

そのままモモタロス主導でゼロノスとデネブに攻撃を仕掛ける。

「あ、ああ、ちよつと……」

「デネブ、邪魔だ!」

ゼロノスに突き飛ばされるデネブ。

「おい侑斗!邪魔すんじゃねえよ!!?」

「野上のイマジン!!? 仕方ない。デネブ!来い!」

「分かった!」

ジオウトリニティからモモタロスの声が聞こえ、彼がジオウの中にいる事を察したゼロノスはデネブにこっちに來いと指示、デネブはゼロノスの背後に周る。

そしてゼロノスは、カードの向きを黄色い模様が描かれている方へと裏返す。

『ベガ フォーム』

デネブが両手をゼロノスの肩に置き、入り込んだかと思うと、胸部がデネブの顔になり、頭部が星を模した形状に。ベルトのバックルには黄色のVの文字があり、背部に漆黒のデネブローブを纏っていた。更に両肩には、デネブの両手がキャノン砲として装備された。

「最初に言っておく！侑斗をよろしく」

「魔王によりしく言うな！」

「あ、ゴメン！」

侑斗がデネブにツツコミを入れながらも、ベガフォームとなつたゼロノスは両肩のキャノンを放ち、ジオウトリニテイをアナザー電王の元へ行かせない様にする。

その間、戦いの場に現れたユキヒロがアナザー電王に近づき、彼に何をするつもりなのだと聞く。

「タクヤ君。何をするつもりだ!?」

「お前のせいでお姉ちゃんは死んだ！俺は姉ちゃんを守る！」

アナザー電王は山羊の角の様な複眼でユキヒロを睨みつけながら、死んだ姉を守ると言う。その時、戦いの場に汽笛が鳴り響く。

「デンライナー、修理できたよお！」

なんと、修理を終えたデンライナーがジオウ達の前に現れたのだ。

『この時見順一郎に、直せぬ時計などない！』

順一郎は見事、デンライナーの修繕に成功したらしい。

ちなみに先ほどの台詞は、ここに来る少し前に順一郎がデンライナーのバイクに乗りながら発した言葉で、ハイテンションで直せぬ時計はないと言ったのだった。

しかし、今現れたのは都合が悪すぎる。

「今あれが来るとまずいんじゃないか?」

「え、どうゆうこと?」

「アナザー電王はデンライナーを狙っていたのでは?」

「ツ!?」

ウオズの言葉を聞いたジオウは、このままではアナザー電王にデンライナーが奪われるのは間違いないと感じる。

「止めないと……! ウオズ、ゲイツ——あつ……モモタロス……一気に決めるぞ!」

ジオウトリニティはゼロノスを退そうと、ドライバーを回す。

『フィニッシュタイム! トリニティタイムブレークバーストエクスペローション!』

ゼロノスのジオウトリニティのライダーキックを放つてゼロノスを退き、アナザー電王へと急ぐ。

しかしその爆風に紛れて、アナザー電王とビシンがデンライナーに乗り込んだ。

「しまった……」

最悪の展開を迎えてしまった。そのままアナザー電王とビシンはラウンジにいるイマジン達を占領する。

「この電車は俺が頂いた!!?」

「え……嘘く!?」

「させるか!」

キンタロスがアナザー電王に突進しようとする。しかし、ビシンがクローを喉元に向ける。

「変なことはしないほうがいいよ」

ビシンがいる為に結局は、反抗も出来ないままデンライナーはクライアス社の手に落ちた。

「待っててくれ、姉ちゃん!」

アナザー電王によりデンライナーは乗っ取られ、そのまま彼の目的のある過去へ飛んで行ってしまう。

「タクヤ君!」

「いやっはあ! 契約完了だあ」

「えっ?」

「お前が助けたかったタクヤは自分の望みを達成したあ! ハハハ……」

モールイマジンはユキヒロの契約を叶えたと言うと、ユキヒロの体を二つに分け、モールイマジンはその中へ飛び込んだ。

「えっ……?」

「過去に飛ばれたか?」

それを見て全員が変身解除した。変身を解くとモモタロスからの憑依を受けたゲイツも意識を取り戻した。

「お前よくも俺の体を!!」

「なんだよ!」

ゲイツがモモタロスの角を掴み、モモタロスがゲイツの頭を押さえる。

「今のは何なの?」

「イマジンが過去に飛んだんだ……」

「どの時間に?」

「分かる訳がない。電王ウォッチがあれば別かもしれないがな」

ほまれが何処の時間に行ったのだと聞くと、ウォズはそこまではわからないと答える。

「ウォッチって……これの事か?」

「それっ!」

ソウゴがモモタロスを見ると、何とモモタロスの手にあったのは、最後のウォッチの電王のライドウォッチだった。

「必要ならやるよ」

投げ渡すとソウゴは電王ウオッチを受け取る。

「ありがとう」

『電王！』

すると、ソウゴの手の中で電王ウオッチが白く輝く。

「これは……」

その輝きに連動して、クジゴジ堂の部屋に保管していた18個のライドウオッチが光を放った。

ウオッチは飛び立ち、次々とソウゴのもとへ集まって行く。

「すげえ……」

集まったウオッチは、電王ウオッチと共にソウゴの手で姿を変えようとする。

「これが……魔王の……」

『グランドジオウ！』

今ここに、ソウゴの手に集まったウオッチが一つとなり、金色の形をした大型ウオッチ——グランドジオウライドウオッチが誕生した。

次回！Re・HUGつとジオウ！

第49話 2018：揃った力!?？魔王の誕生!?？グランドタイム！

第49話 2018： 揃った力!? ?魔王の誕生!? ?グランドタイム!

モモタロスからソウゴへ電王ウオッチを託された事で、全てのライダーのライドウオッチが合体して『グランドジオウライドウオッチ』が誕生した。

「これが……」

ソウゴは自身の手にある魔王の力を持つというウオッチを見つめていると……

「そいつを渡したらダメだ。そいつは世界を滅ぼす魔王なんだ」

「そうだ」

「魔王……? ?おい、俺を騙しやがったなあ!返せ!コラ、離せ!」

侑斗とデネブにソウゴが魔王になると教えられたモモタロスにより、電王ウオッチを無理やり取り返えされてしまった。

すると、ソウゴの手に持っていたグランドジオウライドウオッチは消滅した。

「えっ?」

「ウオッチが消えた……」

どうやらグランドジオウライドウオッチは、全てのウオッチがソウゴの元に無いと現

れないウオッチのようだ。

「やっぱ、コイツは渡せねえな！」

「お願いです！時見先輩を信じて下さい！」

「ソウゴは絶対に魔王になっても、ソウゴはソウゴのままだから！」

「……」

えみるとはなの説得も虚しく、モモタロスは自分のウオッチを渡そうとしなかった。

その間に侑斗は手に持ったチケットをユキヒロにかざす。

「2013年4月5日。」

……この件は俺が解決する、お前たちは手を出すな。行くぞデネブ」

「よく覚えといてください」

侑斗とデネブはゼロライナーで2013年4月5日へと向かう。

その後、ソウゴ達は病院のホールの休憩室でユキヒロから事情を聴く。ちなみにモモタロスは病院にあつた着ぐるみに姿を隠させた。

「どうして、イマジンと契約を？」

「見たんだ……タクヤ君が化け物になるのを……」

タクヤは自分の姉の墓参りに来ていたユキヒロを追い返した後、そこに現れたオーラ

にアナザー電王ウォッチを埋め込まれてアナザー電王に変身したのを目撃していた。

「そのタクヤって人は……?」

「病気で死んだ俺の恋人、遠藤サユリの弟で……」

「2013年4月5日。この日付に心あたりは?」

ウォズは侑斗が向かった時代の事を話し、その時代に何があったのかと聞く。

「俺がサユリを病院から連れ出した日だ……その後、すぐ容体が急変して……」

この日、彼の姉であるサユリを連れ出したが、彼女の容態が急変してしまった。

その後、間もなくして亡くなってしまい、その日からずっとタクヤに恨まれるようになった。

「タクヤ君は、俺のことを恨んでる」

「そいつはその日に行くためにアナザー電王になり、デンライナーを盗んだわけか。イマジンもその日に……」

「桜井侑斗が解決してくれるって」

「アイツになんか任せられるか!俺がその時間に行って、デンライナーを取り戻す!」

「あの、デンライナーなしでどう行くのですか?」

えみるはデンライナー無しでどうやって過去に行くのだと聞くと、モモタロスは頭を抑えて叫び出した。

「ダメじゃねえか！デンライナーがないんじや、時を渡れねエッ！」

「それでもない。アナザー電王を野放しには出来ん。2013年に行くぞ」

「おうっ！……で、どうやって行くん？」

「黙ってついてこい」

ゲイツはアナザー電王を追う為にタイムマジーンを呼ぼうとする。

デンライナーを乗っ取ったアナザー電王はウラタロス、キンタロス、リュウタロスを縛り拘束していた。

「邪魔をしなければお前達に危害は加えない。

あの日、あいつが姉ちゃんを連れ出さなければ……！」

一方のゲイツはタイムマジーンでウオズ、モモタロスとともに2013年へ向かう。だが、中の様子はかなり狭苦しいようだ。

「狭いじゃないかゲイツ君！」

「もうちよつとそつち行け！トゲトゲ刺さってるよ！」

「何ちんたら走ってるんだ！」

気の短いモモタロスがゲイツから無理矢理操縦を変えろうとする。

「ソウゴは何故来ない!」

ソウゴはまだ現代に居るために、タイムマシン一台で行く羽目になった事にゲイツは不満を溢す。そのソウゴは、まだやらなきやいけないことがあると言い、後から向かうらしい。

そして、2013年4月5日。

そこには2013年のユキヒロの体を抜け、この時代へワープしてきたモールイマジンが現れた。

同時にデンライナーもこの時代へ到着し、アナザー電王とピシンが飛び降りる。

「姉ちゃん……」

モールイマジンとアナザー電王が病院内へ侵入した。

そして、彼らの姿を見た病院にいる人々は逃げ惑い、院内では何やら騒然とする声に反応した二人がいた。

「タクヤ、何かあったのかな?」

そこには過去でまだ生きているサユリと、アナザー電王になる前の過去のタクヤがいた。

「姉ちゃんはじつとしてろ。ちょっと見てくる」

まだ高校生くらいの過去のタクヤが様子を見に向かうと、1人になったサユリは飾つてある写真を見つめる。

その頃、病院の前にはゲイツ達が到着した。

「ここにも怪物だ！」

モモタロスを見てみんな怪物だと騒ぐ。

「誰が怪物だコノヤロウ!!」

「ここにも……ということは奴らが中に……」

「え、確かに匂うぜ。イマジンの匂いだ！」

「待て！ 大体お前は目立ちすぎる！」

「だったら……よっ!!?」

イマジンの姿では目立ちすぎると申告されると、モモタロスはゲイツの体に入った時のように光の球となった。

「させるか！」

「なっ!!?」

何をされるのか察したのか、咄嗟にゲイツはウオズを盾にする。モモタロスはそのままウオズの体へと入ってしまった。

「これで文句ねえだろう」

モモタロスはウオズへ憑依し、そのままウオズの体で病院の中へと入る。

「叫け! 叫け!」

「見つけたぜ!」

そこで院内で暴れるモールイマジンを見つけた。

「おい! 楽しそうだな?」

モモタロスが憑依したウオズはビヨンドライバーを装着する。

「なんだあゝ? 人が気持よく暴れてるつてのによおー!」

「ヘッ! 俺も暴れてやるよ。お前を倒すためにな」

『ギンガ!』

モモタロスはギンガミライドウォッチを起動し、ドライバースに装填すると、レバーを引く。

「変身!」

レバーを引くと同時に走り出す。

『投影! ファイナリータイム! ギンギンギラギラギャラクシー! 宇宙の彼方のファンタジー! ウオズギンガファイナリー! ファイナリー!』

ギンガファイナリーへと変身すると、モールイマジンを屋上へと移動させる。

「俺、参上!」

いつものポーズを取ると、モモタロスは背中のマントを気にする。

「なんじゃこりや？ま、いいか」

マントの事は一先ずさて置き、モールイマジンへと向かう。

「行くぜ行くぜ行くぜ！」

モモタロスがウオズスの体でそう叫びながら、モールイマジンと戦闘を開始する。

その頃、変身しているアナザー電王は過去の自分を襲っていた。

「姉ちゃんは俺が守る」

過去の自分を殴って気絶させると、アナザー電王は姉の病室へやってきた。

「キャアアー！」

「姉ちゃんは俺が守る。俺が……」

未来の弟は知らないとはいえ、アナザー電王は怯える姉に近づこうとする。

「待て！お前の相手は俺だ！」

そこへゲイツが現れるとジクウドライバーを装着し、ゲイツウオッチとゲイツリバイ

ブを取り出す。

『ゲイツ！ゲイツリバイブ！剛烈！』

二人がゲイツリバイブを起動し、ドライバーに装填して構える。

「変身!!?」

『ライダータイム!リ・バ・イ・ブ 剛烈! 剛烈!』

ゲイツリバイブ 剛烈へと変身し、ゲイツはアナザー電王を外の広場へと出す。

「邪魔をするな!」

「それはこっちの台詞だ!」

ゲイツがアナザー電王に攻撃を繰り出そうとする。

「待ってたよ」

すると、アナザー電王の前にビシンが現れた。

「ビシン」

「負け犬。今日こそお前を倒してあげる!」

ビシンのファンググローが繰り出され、ゲイツはジカンジャックローで受け止める。

「くっ……!」

「この間の借りを返してあげる!」

ゲイツはビシンとアナザー電王の二対一と戦う事となり、かなり苦戦していた。

屋上で戦っているウオズは、モールイマジンを圧倒していた。

「俺に迷いねえ。最初から最後までクライマックスだぜ!」

『ファイナリービヨンド ザ タイム!』

そう言つてレバーを引き、必殺技を繰り出そうとする。

「な、何だ……体が動かかぬ……」

だが再度レバーを引こうとした突如、ウオズの動きが止まってしまふ。

「今のうちに!」

勝てないと踏み、モールイマジンは撤退した。

モールイマジンが撤退すると、ウオズも変身解除となる。解除すると、ウオズの体からモモタロスが出てきた。

「いててて……何すんだ!」

「ウオツチは欲しいが、二度と体を奪うのはやめてもらえないか」

「あ、あ!?」

「台詞が恥ずかしすぎてね。口が腐る」

「てめえもういつペン言ってみろ!」

どうやら、ウオズは憑依されている間のモモタロスの言動や戦い方がかなり嫌だったようだ。

クライアス社の会議室では、ジェロスが一人深刻な表情で呟っていた。

「まだ……まだ大丈夫……！……まだ……ッ！」

ジェロスが自分の机で自分にそう言い聞かせるも、彼女からは大きく動揺を見せていた。

「ありや駄目だ。私が行くしか無いね」

ドアから見ていたトラウムがそんなジェロスの様子をみて、自分で行くことにした。

「と言う訳で、今週も私、ビックリドンドン出撃！今日でHUGつとジオウ最終回！来週からバグつとトラウム、スタート！」

そう言つて、トラウムはプリキユア達の下へ向かおうとする。

……尚、先程彼が言った事は全て嘘なので絶対に信じないで下さい。

あざば。ぶ病院の外で、はなとさあやがベンチに座つて会話する。

「ネットの情報が全てじゃない……か」

「うん……私、全然だ……」

もつと患者さんの気持ちを分かつてあげないといけないのに……」

お仕事を体験して、今までネットで何でも調べていた事が全て思っていたさあやが、

ネットの情報が全てではないと知った。

「ねえ、はなのお母さんはことりちゃんが生まれる時にはどうだった？不安そうだった？」

「えっ？うーん、覚えて無いな……」

「まあ、そうだよね」

「でも、私がお姉ちゃんになるんだーって、知らない人にまで自慢して困らせたみたい……」

「お姉ちゃんになる……」

さあやははなの言葉に反応するとその時、あやも言っていた事を思い出し、そこからあはる事に気付いてベンチから立ち上がる。

「さあや？」

さあやが花壇の方にあやがいたのを確認し、あやの元へ向かう。すると……

「あやちゃんだよね」

「お兄ちゃんは？」

「俺は時見ソウゴ。よろしく」

「ソウゴ君」

さあやが来る前に、ソウゴもあやの前に現れた。

病室にいるあやの母親は、担当医の真木先生と検査を受けながら話していた。

「あやは、初めての子で……私、ちゃんと子育てしなきゃって力が入り過ぎて、逆に失敗ばかりしてしまつて……」

彼女は、母親として力を入れ過ぎて失敗していた事を話し、後悔していたを真木先生に打ち明けた。

「あやには申し訳無くつて……」。

だから次の子には、完璧な子育てをしよう……

なのに……最初からつまずいて……」

「帝王切開はつまづきじゃないわ、立派なお産よ。」

大丈夫、自分を信じて」

「はい……」

真木先生が母親に信じてと元氣付ける。

一方さあやとあやが手を繋ぎ、ソウゴと一緒に病院の敷地内を歩く。

「凄いいよね、あやちゃんのママって。」

産まれて来る赤ちゃんの為に、とつても頑張ってる。

素敵だし、尊敬する」

「えっ……？」

ソウゴ達はしばらく歩いてからベンチに座り、会話を続ける。

「ねえ、あやちゃんのママってどんな人？」

「ママは……いつも失敗してる」

「えっ？」

「失敗って……」

さあやとソウゴが失敗しているとはどう言う事だと思っていると、あやは自身の母親のことについて二人に語り出す。

「お料理でオムレツ焦がしちゃうし、お洗濯の靴下がバラバラだったりするし、お買い物でお財布忘れちゃったりするし」

「そう……なんだ」

あやから母親の失敗談を聞き、さあやは冷や汗を垂らす。

「でも、そんなお母さんが好きなんですよ！」

しかしソウゴがそう言うのと、あやはベンチから跳び下り、ソウゴとさあやの向かいに移動する。

「うん！ママは遊園地に連れて行ってくれるし、漫画が大好きなんだよ。そしてね、か

けっこはすっごく速いんだ！保育園の運動会で、一番だつたんだから！」

今度は母親の好きな所を話す。

「他のママ達を、びゅーんって追い抜いてくの！じゃーん！」

そう言つて走り出し、足を止めてから振り返り、両腕を上げて両手の人差し指を立てる。

「ママが大好きなんだね」

「うん！」

だがその直後に、表情を曇らせて両腕を降ろした。

「……？」

「あやちゃん？」

「あやは……ママが好き……ママは……ぎゅっとしてくれるの……」

そう言うと、あやの目に涙が溜まりはじめた。

「だけど……あやはもうお姉ちゃんになるから……ママはもう、あやのママじゃなくなつて……赤ちゃんのママになるから！」

自分の想いを吐露してからその場で泣き崩れ、さあやが駆け寄つて抱き締める。

「弟なんていらない！弟が産まれなければ……ママは……あやのママでいられるのに……！」

産まれて来る弟に母親を取られるみたいで本当は寂しかったが、お姉ちゃんになるからと我慢していたそうだ。

「そんな事ないよ」

しかしソウゴはあやの肩に手を置き、そんな事ないよと言葉をかける。

「弟が出来ても、あやちゃんのお母さんはずっとあやちゃんというよ」

「えっ?」

「何年経つてもあやちゃんとお母さんはずっと親子なんだよ。そして、弟はこれからあやちゃんと同じ家族の一員になるんだ」

「家族……」

「そうだよ。そして、あやちゃんがその子を守ってあげるもう一人のお姉ちゃんになる時でもあるんだ」

「お姉ちゃん……でも」

本当にお姉ちゃんになれるかと不安に思うと、さあやが不安そうなあやの頭を優しく撫でる。

「大丈夫だよ。大丈夫。ママはいつだって、あやちゃんが大好きなママだよ。」

あやちゃんが産まれた時も、ママは取っても頑張ったんだと思う。早くあやちゃんに会いたいって。

今は、赤ちゃんに会う為にママは頑張ってる。あやちゃんも頑張ってる。もうすっかりお姉ちゃんだと思う。でも、悲しくなるまで我慢する事無いんだよ」

「あや……」

そんな彼らの様子を見ていた父親が、あやの元へ向かおうとする。

「なかない。なかない」

はぐたんがそう言いながらソウゴとさあやとあやの元へ歩く。

「可愛い〜!」

泣き止んだあやがはぐたんの元へ駆け寄り、両手を繋ぐ。

はぐたとあやはすぐに仲良しになった。

「あやちゃん」

「。パ。パ」

「そろそろママの手術が始まるよ」

「行こう、あやちゃん。ママに素直な気持ちを伝えよう」

「うん!」

さあやがあやの手を繋いで言い、あやがうんと返事する。

「じゃあ、俺行くよ」

ソウゴがここに残っていたのは、病院で見かけたあやちゃんがとても思い詰めた表情

をしていた事が気になっていたからだだった。

そしてあやちゃんの心を知ることが出来たため、ソウゴもタイムマジンで2013年へと向おうとする。

「ソウゴ君」

「何？」

するとソウゴの背後からさあやの声が聞こえ、どうしたのかと思い振り返る。

「……後でね」

「うん！行ってくるよー」

ソウゴは近くへ来ているタイムマジンへと向かってそのまま乗り込むと、年号をゲイツ達に向かった年号に合わせる。

「時空転移システム……起動！」

タイムマジンは浮かび上がってタイムトンネルを潜り、ソウゴは2013年へと飛び立った。

「行ってらっしゃい。ソウゴ君」

そしてさあやは、ソウゴの乗っているタイムマジンが飛んでいった姿を静かに見届けた。

その後さあやとあやは、手術に向かおうとする母親の元に駆け付ける。

「ママー・ママ……ぎゅっとして。ママ……」

母親があやを抱き締め、抱かれたあやは喜ぶ。

「あや……我慢させちゃったんだね……ごめんね。」

「ママ……頑張るね……」

「あやちゃんを見れば、あなたの子育ては失敗なんかしてないって良く分かる。頑張り
ましよ」

「はい」

母親は看護師に支えられ、帝王切開の手術を受けに向かった。

2013年。

そこでゲイツは、ビシンとアナザー電王との戦闘を続けていた。

そして、ソウゴの乗るタイムマシンもこの時代に到着した一方で、アナザー電王に
気絶させられた過去のタクヤが目覚めます。すると、ユキヒロが姉サユリを連れ出すの
を目撃した。

「姉ちゃんを何処へ連れていくつもりだ?」

「タクヤ君……」

タクヤに何処かへ行こうとしていた見つかったサユリとユキヒロは、彼に訳を説明し

ようとせずつに行つてしまふ。

「待て！」

追いかけてようとするが、身体に受けたダメージがまだ身体から抜けておらず、ふらつく。

「危ない」

そこへソウゴが現れ、倒れるタクヤを支える。

「タクヤさん……だね？」

そのままタクヤの姉・サユリとユキヒロが院外へ出る。その様子をアナザー電王が見かける。

「はっ………待て！」

アナザー電王は二人を追いかけてようとする。

「そうはさせるか！」

『スピードタイム！』

『リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！疾風！疾風！』

『スピードクロー！』

ゲイツリバイブ疾風にフォームチェンジし、超高速移動でアナザー電王の前に回り込むと、ジカンジャッククローでアナザー電王を吹き飛ばす。

「どけー！」

「お前の相手はこの俺だと言っただろ」

アナザー電王を抑えると横からビシンがクロードで振り掛かる。

「君の相手は僕だよ！」

「ッ」……

ゲイツは一度距離を取ると、ジカンジャックローのエネルギーを溜め込みトリガーを引く。

『つめ連斬！』

ゲイツはつめ連斬の無数なエネルギーの雨を繰り出す。

だが突如デンライナーが現れ、アナザー電王に放ったゲイツのつめ連斬の攻撃の盾となつた。

「何!??!？」

「こいつら強エーぞ！手を組もうぜえ！」

デンライナーを操縦していたのは、ウオズから逃れたモールイマジンだった。アナザー電王はデンライナーに乗り込んだ。

「喰らえ！」

モールイマジンはデンライナーの車両の武装を展開し、ゲイツを攻撃する。

「……しまった」

ゲイツはデンライナーの攻撃を疾風のスピードで躲したが、避けた時には既にデンライナーもおらず、ビシンの姿も無くなっていた。

到着したソウゴはウオズとモモタロスと合流し、過去のタクヤにアナザー電王は未来のタクヤだと打ち明けた。

「さっきのは……未来の俺？」

「うん。未来のタクヤさんは、ユキヒロさんを恨んでるんだ」

「許せるわけがない！あいつが姉ちゃんを連れ出したせいで様態を悪化させるなんて……」

この後、状態が悪化するのだと知りユキヒロへ怒りが込み上がる。

「聞いたんだ……ユキヒロさんに」

しかしソウゴは、ゲイツ達がこつちに来てすぐ後に、はな達と現代で聞いた事を語る。

『もうサユリは助からなかった。でもサユリはそのことを弟のタクヤ君には言えなかった』

『それじゃあ、あなたが恨まれ損じゃないですか？』

『何でタクヤさんに言わないの? 本当のこと』

『言ったって、タクヤ君の心に開いた穴は埋まらない。タクヤ君も辛いんだ。』

俺のせいにして、恨む相手がいたほうが、タクヤ君はまだ楽になれるかもしれないじゃないか』

ユキヒロはタクヤの為に、何も言わず敢えて憎まれる事を選んだのだ。

その事を話すと、過去のタクヤはすぐには言葉が出なかった。

「あの人……そんなことを?」

「ユキヒロさんがサユリさんを連れだしたのは、何か理由がある。きっと、サユリさんに取って大事な事なんだ。」

それを未来のタクヤさんが邪魔しようとしてる」

「俺が……姉ちゃんの邪魔を……?」

「うん」

「………止めてくれ! 未来の俺を」

「分かった」

未来のタクヤを止めるとソウゴは過去のタクヤと約束する。それを見たモモタロスが声をかける。

「ソウゴ……なかなか格好いいじゃねえか」

「へへ……あれ？ユキヒロさんたちが何処へ行ったのか？分かんないな。思い出の場所とは言ってたんだけど……」

「へ、ハハ……そこは聞くだらう普通、ええ？なんで聞いとかなかったんだよ！てめえは!!？」

モモタロスがソウゴの顔をつねる。

「うるさいな、忘れてたんだよ!!？」

ソウゴもモモタロスの顔を引っ張る。すると、立てかけてある写真をに気づいたウオズが手に取る。

「手掛かりなら……ある」

ウオズがその写真を二人に見せる。その写真には後ろに神社と綺麗な桜の木があった。

「あれ？」

「どうしたんだよ？」

「あ、いや……なんか見たことある風景だなんて……」

その写真を見たソウゴは、何処かで見たことがあるかのような風景と桜があった事に気づく。

その様子を離れた所から、侑斗と白衣を着たデネブが見ていた。

「侑斗！侑斗！世界を滅ぼす魔王っていい奴だね！」

「デネブ……バカ!! すぐ信用すんな！ あれが魔王の手口だ」

侑斗がデネブにヘッドロックする。

「何だ、その格好は？」

「ドクターですけど……」

デネブが自分の姿に突っ込みを入れる。

その頃、現代では。トラウムが病院の外の駐車場で車を擦った男性からトゲパワワを取り出す。

「純なトゲパワワがこんなに手に入るなんてラッキーです。

後は……今週の、ビックリドンドンメ〜カ〜！」

自分の顔を模したメカに『猛』と書かれたチップを注入する。

「発注！猛オシマイダー！」

小型のオシマイダーと社交ダンスを踊り、メカにカラーコーンに挿入させる。

「ピコっとな〜」

小型オシマイダーの持つスイッチを押し、以前のと違うカラーコーン猛オシマイダーを作り出した。

その時、外の変化にはな達は気づいた。

「これって……」

「オシマイダー！」

急いで、はな達は病院の外へと出る。

「クライアス社……」

「あの人……温泉で見た……」

こころはトラウムを見て旅行で見た男性と同じと気づく。

「みんな！」

はな達六人とハリーは、それぞれプリハートとジクウッドライバーを取り出し、ハリーはジクウッドライバーを装着した。

『ハリー！ギアジェット！』

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

はな達六人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、揃っていつもの手順

を取り姿を変える。

『ジエツトタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジエツト〜！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアーラ！」

「[[[[HUGと！プリキュア！]]]]」

六人が決めポーズを取っていると、トラウムがいつの間にか一人増えていることに驚く。

「いつの間に六人目が……」

「また騒ぎを起こしに来たのね！」

「君達こそ、何でいるの！」

「それはこっちの台詞！」

「つて言うか今回、私ちゃんと考えてる！こ言う事もあるうかと」

そう言うのと、手に持った装置の下部のスイッチを押す。

すると猛オシマイダーの胴体と両腕のドリルが回り出すが、音が出て無かった。

「んん？」

「音が出て無い……？」

「猛オシマイダー騒音対策仕様です。せつかくこう言うメカ用意して来たのに、こんなに離れてちゃ意味無いじゃないですか！」

前回の戦いの反省として無音でもドリルが回る様にしたそうだが。以前と違って今回は病院から結構離れたので、余り意味は無かった。

「それより今日はジオウがいないみたいね！猛オシマイダー！」

「オシマイダー〜！」

猛オシマイダーがエール達の前へと襲いかかる。

2013年。

思い出の地に、ユキヒロとサユリがやってきた。

「ユキヒロ……お前のせいで姉ちゃんは！」

そこへ、デンライナーからアナザー電王とモールイマジンが現れた。

「待て！」

更にソウゴとモモタロスが現れ、アナザー電王を止めようとする。

「タクヤさんやめよう! あれはサユリさんのためなんだ!」

「お前に何が分かる!」

アナザー電王、モールイマジンがソウゴ、モモタロスへ襲いかかってきた。

二人は攻撃を避けるが、モールイマジンの数が何十人にも増えている事に気付いた。

「こつちにはデンライナーがあるんだ。少し前の俺自身をいっっぱい連れて来てやっただぜ!」

モールイマジンはデンライナーを使い、それぞれの時間にいる自分を何人も連れてきていた様だ。

「このモグラ野郎! 地面に潜ってやがれ!」

流石に二人では、アナザー電王とこの何十人もいるモールイマジンは辛い。

「ウオッチを渡してやれ」

そこへ侑斗が駆けつけてきて、電王ウオッチを渡せと言う。

「侑斗……! いいのかよ?」

モモタロスは本当に渡して良いのかと聞きながら、電王のライドウオッチを取り出す。

「俺のこと信じてくれるの?」

「信用したわけじゃない。だが……認めてやってもいい」

「相変わらず……へへっ、めんどくさいヤツだぜ！ほらよっ！」

モモタロスは笑いながら、ソウゴへ電王のライドウオッチを投げる。ソウゴはそのウオッチを掴んだ。

「ありがとう！」

「イマジンは任せろ！変身！」

侑斗はベルトを巻き付け装着し、ゼロノスの変身カードを取り出す。

「変身！」

『アルタイル フォーム』

カードを挿入すると、始めにプラットフォームへと変身。音声と共に緑のオーラアーマーが現れて全身を包こみ、顔には二頭の牛が合わさったような仮面が覆う。

「最初に言っておく。俺はかーなり強い！」

ゼロノスがモールイマジンへとゼロガツシャーを振り付け応戦する。

そして、ソウゴの手には再び19個のライドウオッチが集まった。

『電王！』

電王ウオッチが光り出し、現代にあるクジゴジ堂で保管されていたウオッチが飛んできて集まる。

そして、再度グランドジオウライドウオッチが生成された。

「……」

ソウゴはグランドジオウウオッチとジオウを前に向けた。

『ジオウ！グランドジオウ！』

そしてジオウウオッチとグランドジオウウオッチを起動させる。

ウエイクベゼルを回転させるジオウウオッチと違い、グランドジオウウオッチは起動すると左右に平成ライダーの顔が描かれたパーツがせり出し、そのままソウゴは二つのウオッチをスロットへと装填した。

『ポオオーン！パアアアア！』アドベント！COMPLUTE！ターンアップ！
 へいイン！〜CHANGE BEE TLE！ソードフォーム！ウエイクアップ！カメ
 ンライド！サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バツタ！3・2・1！シャバドウビ
 タッチヘンション！ソイヤツ！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！
 ライダータイム……！』

ドライバーのロックを解除すると、地中から巨大な黄金の時計台が後ろに現れ。更にその周りには歴代ライダーの石像が出現した。

だが各ライダーの変身音が鳴り続けると、歴代ライダー象の表層が剥がれ、20の仮面ライダーたちの姿が現れる。

「変身!!」

『グランドタイム!』

ソウゴがジクウドライダーを回転させると、ライダー達が黄金のフレームに取り込まれ、ジオウの身体に張り付くように装着されてアーマーが形成されていく。

『クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド!響鬼・カブト・電王!キバ・ディケイド!ダブル!オーズ!フォーゼ!ウイザード!鎧武・ドラーイーブ!ゴースト!エグゼイド!ビ・ル・ドー!』

開いたフレームからライダー達が現れると、それぞれの決めポーズをとってジオウの全身に固定された。

『祝え!仮面ライダー!!?グ・ラ・ン・ド!ジオウ!』

最後に頭頂部にジオウが固定されると、『ライダー』のインジケーションアイがセットされ、ソウゴの変身が完了した。

「祝え! いや……もはや言葉は不要。ただこの瞬間を味わうがいい!」

そこへウオズが現れ、ジオウがグランドジオウとなったこの時を待っていたかのように祝福の声を上げる。

グランドジオウへと変身したジオウは、アナザー電王へと体を向ける。

「まずは……」

ジオウは手始めにビルドのレリーフを触る。

『ビルド!』

「はああ!」

『ボルテックファイニッシュ!』

「はああ!」

空中に“2017”の文字とともに金のゲートからビルドラビットタンクフォームが現れ、放物線に流れるままボルテックファイニッシュをアナザー電王へ撃ちこんだ。

『クウガ!』

今度はクウガのレリーフに触る。すると、空中に“2000”の文字が出現した。

「おりやいや!」

またしても金のゲートからクウガマイティフォームが現れ、マイティキックを放つた。

「あああ……」

二つライダーキックを受けてアナザー電王は転がる。

『クウガ!』

ジクウは再びクウガのレリーフに触れる。すると今度は、クウガのレリーフからクウガの武器・タイタンソードが現れた。

「はああー！」

ジオウはタイタンソードを持ち、アナザー電王に攻撃を仕掛けるとアナザー電王に直撃させて吹き飛ばす。

「次はこれ！」

『オーズ！』

オーズのレリーフを触ると“2010”という文字がゲートと共に現れ、仮面ライダーオーズが現れると柱とともにタトバコンボのタトバキックが炸裂した。

「うわああああ」

オーズのキックを受けて、アナザーライダーが吹き飛ばされる。

「時間よ戻れ！」

そう言うと、ジオウの頭部にあるレリーフが動き、オーズの必殺技を放った時間を戻した。

「!?」

『ビルド！フルボトルバスター！』

アナザー電王が時間が戻った事に驚く中、ジオウはビルドの武器・フルボトルバスターを出現させた。

『フルフルマッチデース！フルフルマッチブレイク！』

フルボトルバスターから放たれた青い光弾が放たれ、アナザー電王に直撃。時間を動かし、再度オーズのタトバキックも炸裂させた。

『鎧武!』

さらにレリーフを触り、"2013"の文字とゲートから仮面ライダー鎧武・オレンジアームズが召喚された。無双セイバーと橙々丸から放たれたナギナタ無双スライサーを炸裂させる。

「これが……魔王の力……」

グランドジオウの力に凄さに、ジオウ本人までもが驚いた。

「だったら俺も! 変身……ッ!」

モモタロスがパスを腰に通して電王へと変身しようとする。

「あれ……? あれ……ありやりやりや……?」

しかし、電王に変身する事が出来なかった。

「君は電王の力を我が魔王に渡した。変身する力は失われているようだね」

「なるほどな……ああって、なんだよそりや! ええ? どうなってやがんだ! そりやねえだろ!」

モモタロスは今になってウオツチを渡した事を後悔した。

「あ、ちよつと。だったらこれに!」

それを見ていたジオウが電王のレリーフに触れる。

『電王！』

そこから「2007」とゲートが浮かび、ソードフォームの電王が現れた。

「俺……参上……」

「つー……そういう事ね！」

ジオウの意図を察したモモタロスが、現れた電王に憑依した。

「本当の俺！参上！こっちも行くぜ！」

そう叫ぶと、ケータロスを取り出しボタンを押す。

『モモ！ウラ！キン！リユウ！』

四つのボタンを押すとベルトに取り付ける。

『クライマックス フォーム』

四つの電王のフォームが集まる。そのまま複眼が変わり、電王の身体にソード、ロツド、アックス、ガンと四つの顔が装備された。

「ワイワイ！久しぶり！でもやっぱり気持ち悪い！」

「キンちゃん！押さないで！」

「狭いやからしようがないやろ！」

「うるせえ！一気に行くぜ！」

電王クライマックスフォームへと変身し、モールイマジンへと走っていく。

「行くぜ行くぜ行くぜ！」

電王はモールイマジンを殴り蹴飛ばしと無茶苦茶な攻撃を繰り返す。

「あ！皆ばっかりズルイ」

「デネブ！来い！」

「分かった！」

デネブはゼロノスの背後に周る。そして、ゼロノスはカードの向きを裏へと変える。

『ベガ フォーム』

ゼロノスもベガフォームへと変わった。

「最初に言っておく！侑斗をよろしく」

「もういいんだよ！」

ベガフォームになったゼロノスはモールイマジンを圧倒する。

一方、猛オシマイダーが現れた現代では、プリキュアとハリーが戦闘を行っていた。猛オシマイダーはアンジュに狙いを定めて右腕を突き出すが、アンジュが全身を九十九度回転させて避ける。

「はあああああああつ！」

アンジュがパンチを繰り出し、猛オシマイダーを吹き飛ばす。

「何のこれしき……！」

猛オシマイダーが体勢を整え、今度は全身をドリルの様に回転させて突進する。

「あやちゃん達の……邪魔はさせない！」

アンジュがメロディソードを構える。

「フェザーブラスト！」

アンジュはフェザーブラストを放ち、猛オシマイダーの突撃を防ぎ攻撃を止めた。

『フィニッシュタイム！』

その隙にハリーがジェットスの火を吹き、猛オシマイダーの上を取った。

『ジェットタイムフィニッシュ！』

頭上から勢いよくキックを喰らわせ、頭に攻撃を受けた猛オシマイダーは意識を朦朧

とさせながら倒れた。

「今や！」

「「「メモリアルキュアクロック！チアフル！」」」

ミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーツナルカラーのハートが飛び出す。

「「「ミライパッド！オーブーン！」」」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

「プリキュア！チアフルスタイル！」

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がチアフルスタイルに変身する。

「メモリアルパワー！フルチャージ！」

六人はパワーをメモリアルキュアクロックに集める。

「プリキュア！チアフルアタック！」

六色の五つ葉のクローバー型エネルギー弾を発射するチアフル・アタックを放つ。

紫、赤、黄色、水色、緑、ピンクのハートの順に猛オシマイダーにぶつかり、最後にはぐたんがハグするポーズをして虹色のハートに包み込み、猛オシマイダーを浄化した。

「強いね……いつそ君らと魔王が戦って、潰しあってくれたら私だって……あつ、閃いちやった。」

「プリキュア諸君！ごつきげんよう！」

「帰るんかい！」

何かを閃いたトラウムは、手を振って姿を消した。

そして2013年でも、決着が着こうとしていた。

『CHARGE AND UP!』

電王はパスをベルトに当て、デンガツシャーにエネルギーを貯める。

「俺達の必殺技……クライマックスバージョン!」

電王から放たれた攻撃は、モールイマジン全てに直撃し、全て爆発した。

そして、ゼロノスもゼロガツシャーにカードを差し込む。

『FULL CHARGE!』

ゼロノスのデネブの肩から放たれた攻撃でモールイマジンを吹き飛ばすと、ゼロガツシャーの斬撃を放ち、こちらもモールイマジンを全て倒した。

残るは、ジオウと対峙するアナザー電王。

「これで最後だ!」

ジクウドライバーのロックを解除し、ドライバーを回す。

『フィニッシュタイム! オールトゥエンティタイムブ레이크!』

ドライバーを回すと上空からビルド・ジーニアスフォーム、鎧武・スイカアームズ、クウガ・ペガサスフォーム、オーズ・ガタキリパコンボが召喚された。

しかし、召喚後に一旦時間停止して、グランドジオウはサイキョーギレードを出現さ

せ――

「はああ!」

サイキョーギレードでアナザー電王を攻撃した。

『ジオウサイキョウ!』

更にギレードキャリバーのフェイスモードを変える。

『霸王斬り!』

ジオウは霸王斬りでアナザー電王を空中へ斬り上げた。

「行つけええー!」

ジオウのレリーフが動き指示を出すと、止めていた四人の仮面ライダーが動き出す。

『ジーニアスフィニッシュ!』

『スイカスカッシュ!』

『スキヤニングチャージ!』

ビルドのジーニアスフィニッシュとオーズ・ガタキリバコンボのライダーキック、鎧

武のスイカアームズによる斬撃。最後にクウガペガサスフォームから放たれた砲撃が

アナザー電王に直撃した。

「うわああああ!!?」

全ての攻撃を受けたアナザー電王は倒れ、アナザー電王ウォッチが体内から放出され

た。

同時にアナザー電王は変身解除し、アナザー電王ウオッチは破壊された。

その後現代では。無事にあやの弟が生まれ、病室ではあやが指でつついたりして可愛がった。はな達の仕事体験が終わり、正面口で真木と話す。

「勉強になりました。医者は、お母さんや患者さんに寄り添う事が大切なんだって。

愛情や想いが、家族からお母さんに伝わって、その子供から新しい命に伝わって行くんですね」

「ええ。あなたがあやちゃんに向けた思いやりもね」

「えっ?」

そこへドアが開き、あやがさあや達を見て真木の後ろに隠れる。

「あやちゃん」

「さあや先生!」

「えっ? 先生? あっ、違うの違うの。私はね——」

「さあや先生! 遊んでくれてありがとう!」

あやがそう言うのと両手を差し出し、さあやも両手で握手する。

「またね! ソウゴ先生にもありがとうって!」

「またね」

二人は互いに微笑み、またねと言った。そこへ、はながさあやに駆け寄る。

「さあや?」

「お医者さんって、素敵なお仕事だね」

そしてさあやは、はな達の顔を見ながら、笑顔でそう言ったのであった。

過去にいるソウゴ達もデンライナーを無事に取り戻し、未来のタクヤに真実を話し、タクヤはこの時間のユキヒロにお礼を言った。

「デンライナーは無事だ。安心しろ」

「へへへ」

すると、侑斗がソウゴに近づく。

「なあ。お前は本当に時見ソウゴなのか?」

「えっ? そうだけど。どうして?」

「いや……行くぞ。デネブ」

「ああ、ちよつと……そんなわけでよろしく!」

侑斗とデネブはソウゴを信用したのか、それ以上何も言わずに去っていった。

「あれ? こいつ?」

侑斗達を見送ったソウゴだったが、今になって気づいたこの場所は、ソウゴがもう一人の初恋をした場所だった。

そして、その神社の中にはまだ幼いソウゴがいた。

「あれは俺……？」

ソウゴはその方向を見ていた。桜の木にいる女の子の方へと向かう。そこには、青い晴着に髪を結んだ女の子がいた。

そしてソウゴは、彼女の顔を見た。

「……………？」

その顔は、見覚えのある顔だった。

——いや、ずっと知っていた子だった。

「そうか……」

その子を見て、ソウゴは心の中である事を確信した。

「おい」

するとモモタロスがソウゴに声をかける。

「俺は気に入ったぜ？ 大したヤツだ」

そう言われたソウゴは、彼に向かい笑って返した。

「ま、良太郎ほどじゃねえけどな！」

モモタロスがソウゴに向けて言うが、本人からの返事がなかった。

「あれ?どこ行つた?……あれ?」

不審に思つたモモタロスが振り向くと、いつのまにかソウゴがいなくなつていた。

その頃、ソウゴとは言う……

「えっ?……は……」

ふと気づくと、辺りがとても印象深い雰囲気のある場所へと変わつていた。

そこは灰色の空に人も鳥が石のように止まつており、荒れ地のような場所だった。

「俺なんでグランドジオウに……」

その上、ソウゴが気づくと、自身が既にグランドジオウへと変身していた。

「ついにライダーの力を集めたか……若き日の私よ」

声が聞こえて振り返ると、そこにいたのは、忘れもしないあの姿。

そこに居る彼こそ、最低最悪の魔王であり、クライアス社の会長でもある男・オーマジオウだった。

「オーマジオウ……」

「だが、まだ私には及ばない」

「どうかな？今の俺は、あの時の俺じゃない！」

オーマジオウと対峙するジオウは、全てのライダーの力を集めたグランドジオウなら行けると感じていた。

「……いけるはずだ……このグランドジオウなら……」

「来るがいい！はあー！」

「うおおおお！！？」

グランドジオウがオーマジオウへと向かって走っていく。

果たして、今のオーマジオウに、グランドジオウは通用するのか…

次回予告！

グランドジオウへと進化を遂げ、オーマジオウと戦ったソウゴ。

だが、元の世界へと戻ると衝撃な出来事があつた。

「君は誰？」

「えっ？」

変えられた世界……誰もソウゴの事を覚えていない。

しかも、ジオウへと変身すると、全員が敵と思われ襲いかかってくる。

「きさまに王の資格があるか、見極めてやる」

『ジオウ…Ⅱ!』

現れたのはアナザージオウⅡ。

彼により時間を変えられソウゴの存在が世界から消されてしまった。それでも…

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ…」

「ソウゴ…：…実験を始めようか?」

「俺は…：…俺はみんなを信じる!」

『グランドジオウ!』

グランドジオウの力で、アナザージオウⅡによって変えられた世界を元へと戻す為に奮闘する。

特別編3 その1. 2018： 変えられた世界!ジオウ対プリキュア!??

特別編3 その1. 2018 : 変えられた世界！ジオウ対プリキュア!??

全ての平成ライダーのライドウオッチを集め終え、遂にグランドジオウとなったソウゴは50年後のオーマジオウの力でタイムワープさせられ、ソウゴを呼び出した張本人であるオーマジオウとの対決を始めた。

「ふんー」

まず手始めにと、オーマジオウは巨大なラウズカード型のエネルギーと強烈な竜巻をジオウへと放った。

「うおおー！」

ジオウはオーマジオウの繰り出す攻撃を走りながら防ぎ、走り続けながら拳を繰り出した。

「ほーう…」

ジオウとオーマジオウ、二人同時に繰り出されたパンチが同時にぶつかり合い、これまた同時に両者共に後ずさる。

「フッー！」

『ビルド!』

「フーン!」

『クウガ!』

ジオウがレリーフを触り、ビルドを召喚。

それに対抗し、オーマジオウはクウガを召喚した。

召喚されたビルドとクウガはお互いに戦闘を始める。

オーマジオウは浮かび上がると、一瞬にしてジオウの前へと移動した。

「ツ……」

ジオウは迫ってくるオーマジオウに先制攻撃を仕掛ける。

攻撃を続けるジオウだが、オーマジオウに繰り出した攻撃は幾度も裁かれてしまい、一度も当たらない。

その一方で、召喚されたビルドとクウガは両者ライダーキックを放ち、両者共消滅した。

ジオウはオーマジオウに腕を掴まれ、関節技を受けて動けずにいた。

「今日ここで決着を付ける!ハッ!」

ジオウはオーマジオウの腕を振りほどき、キックで攻撃して自分から離れた。

「愚かな。お前は私。それがまだわからんとは……」

「うるさいー！」

オーマジオウが未だに現実を見ようとしめないジオウを見て呆れかえっていると、オーマジオウという姿は、未来の自分が望んだものではない。ジオウはその思いを叫ぶ。

『ドライブ！』

ジオウに召喚されたドライブはオーマジオウへ向かって行く。

「…返してもらおう」

——だがオーマジオウがそう呟くと、ドライブに手をかざす。

するとドライブは踵を返し、ジオウを攻撃してきた。

「ツッ…何をした!?？」

オーマジオウが手を掲げただけで、ドライブは彼の僕となってしまった。その事に驚くジオウだったが、そのままドライブはシフトレバーを引いた。

『トライドロン！』

ジオウの周りをトライドロンの高速移動で囲み、ジオウに連続キックを喰らわせる。

「うわあああああー！」

ドライブの必殺技『スピードロップ』を受け、ジオウの変身が強制解除となった。

「うっ…うっ…うっ…ああっ…！」

必死に起き上がるとするソウゴ。そこへ、時空の歪みが発生した。

「我が魔王!」

二人が戦っていた戦場に現れたのはウオズだった。ウオズは倒れているソウゴに駆け寄る。

「我が魔王、大丈夫か?」

「……どうして?」

ウオズはソウゴを心配するが、それよりもソウゴはドライブがオーマジオウの方に従った事の方が気になっていた。

「何故お前が及ばないか?それはお前が、すべてのライダーの力を集めたわけではないからだ」

まだ全てのライダーの力を集めた訳ではない。その事を聞いて、ウオズがオーマジオウの言った事を思い出した。

「そうか……仮面ライダードライブ、あのウオッチはゲイツ君がオーマジオウから手に入れたもの」

確かにソウゴは19個のウオッチを手入れた。

だがしかし、ドライブのウオッチだけはオーマジオウ本人から奪ったゲイツから貰ったもの——つまり、正式にドライブのウオッチを継承していない事になる。

「それがどうした!?」

だがそんなの関係ないと言わんばかりにソウゴは起き上がり、再びオーマジオウに挑もうとする。

「まだ戦うというのか？」

「当たり前だ！こんな世界を止めたお前を倒して！未来を救う！」

「…愚か者。ハアアア！」

オーマジオウによりソウゴの周りが爆発し、ソウゴはその爆発に巻き込まれようとしていた。

「我が魔王！」

その瞬間、ウオズがマフラーを伸ばしソウゴを救出した。

「さすがはウオズ。懸命な判断だ」

「恐れ入ります」

ソウゴが何処かに飛ばされたことを確認すると、ウオズがオーマジオウに跪き、恐れ入りますと言う。

その時、場に一瞬だけオーロラのようなモノが通り過ぎた。

「これは……」

「…何者かが、時間の流れを変えた」

ウオズが何が起こったのか疑問に思うと、誰かが時間を変えたとオーマジオウが語

る。

今までにない位の時空の歪みを前にするも、一体何が起こったのかは、オーマジオウとウオズにもわからなかった。

——いや、オーマジオウならば、本当は何が起こったのか知っていたのかもしれないが、ウオズにはその真相は分からなかった。

その頃、オーマジオウに敗れ、ウオズによりどこかへ飛ばされたソウゴは目を覚ます。

「……は……」

目を覚ましたソウゴがいたのは……

「学校……」

ラヴェニール学園中庭のベンチだった。しかもよく見てみると、服がラヴェニール学園の制服へと変わっていた。

「あれ……俺、確か……」

オーマジオウに飛ばされそのまま挑んだけど、まだ継承を終えてないとウオズに言われ、それでも立ち向かおうとした事は覚えていた。

「!? そういえば、……はいっ?」

ソウゴは起き上がり、学校の入り口に貼られているカレンダーを確かめる。日時はみ

んなと体験に行つた日から一日経っている。

「よかつた……今の時代だ」

とりあえず未来や過去ではなく今の時間に戻つてこれたようだ。

「とりあえず、ビューティーハリ―へ行つてみんなに帰つた事を言おう」

ソウゴはビューティーハリ―へと向かい、みんなに帰つた事を伝えに向かう。

——そのソウゴが向かう姿を、何者かが首にぶら下げた二眼レフカメラでシャッターを切つた。

「この変えられた世界の中、どう動く？時見ソウゴ」

そこには、教師の姿をした門矢士がいた。

ソウゴはビューティーハリ―へと向かう為、いつもの通りを歩き続ける。

「オーマジオウ……」

彼は歩きながら、ランドジオウの力でオーマジオウと戦つて今回も勝てなかつた事を悩んでいた。

「どうしたら……オーマジオウに勝てるんだ」

ソウゴはランドジオウオウオッチを取り出し、そのウオッチを見つめる。

「まだ、ドライブの力を継承しなかつたからか……本当に全部を継承すれば……」

継承すれば今度はオーマジオウにも負けないと考える。

実際にオーマジオウと戦ってみてわかった事だが、グランドジオウでは前にみたいにも出来ず負けることはなかった。

だがしかし、本当にドライブの力を手に入れて、奴に挑んで勝てるかどうかまではわからない。

「ドライブの事、みんなと一緒に調べてみよう」

次にオーマジオウに勝てる方法を考えながらソウゴは歩き続けると、いつの間にかビューティーハリーの前へと到着した。

「みんな。心配してるだろうな」

ソウゴはビューティーハリーへと走っていくと、ビューティーハリーの扉を開く。

「いつらしゃい〜!」

中に入るとビューティーハリーのレジにいつものようにハリーがいた。

「ハリー! たいま」

ソウゴはいつものように笑って、昨日戻らなかったからただいまと声をかけた。

「——誰や? お前?」

「えっ?」

しかしハリーから帰って来た言葉は、まさに初対面の人に対する応対そのもので、そ

れを聞いたソウゴは驚く。

「えっ？俺だよ？ソウゴ」

「ソウゴ？あんさの制服。もしかして、ラヴェニール学園の生徒はんか？」

「ちよつと何言ってるの？」

何を当たり前のことを言ってるのかと思ってるのと…

「ハリーどうしたの？」

「みんな！」

ダイニングにいたはな達に駆け寄り、さあやを見てほつとした顔で足を止める。

「さあや……ねえ、みんな。ハリーが……」

「——あなた、誰なの？」

「えっ？」

ソウゴはそう言っただけで彼女に駆け寄るが、さあやは不思議そうな顔で、まるで初めて会ったかのような対応した。

「初めて見るけど？」

「うちの生徒？」

「私の記録ではこのような生徒は存在しないはずですよ」

「じゃあ、転校生の方でしょうか？」

「転校生にしては馴れ馴れしい過ぎるけど……」

それどころか、みんなから返った言葉もソウゴを知らないような発言だった。

「そんな……俺だつて、ソウゴ!」

自分の名前を叫ぶが、矢張りみんなはソウゴの事を覚えてないような表情だった。

「ねえ!何?! 今日はいエイプリルフルじゃないよ!」

ソウゴが必死に本当に覚えてないのかと問う。すると…

「はぎゅ〜!はぎゅ〜!」

「どうしたのはぐたん?」

はなが抱えていたはぐたんがソウゴを見て反応した。

「そうぎよ〜!そうぎよ〜!」

「はぐたん……」

はぐたんは彼の顔を見ながら名前を呼ぶ。

「はぐたんが名前を知ってる……やっぱり、どこかで会ったことあるのかな?」

「だから……」

はぐたんの反応を見て安堵していたソウゴがいい加減にワザと忘れたフリはやめると言おうとすると、はなのプリハートから着信音が聞こえた。

「どうしたのツクヨミ?」

「ツクヨミ?」

『みんな! クライアス社がアナザーライダーと一緒に現れたわ! 今ゲイツが向かってい
るわ!』

彼女の持つプリハートから漏れてきた声を聞いたソウゴは、ツクヨミからの連絡はク
ライアス社が攻めて来たといつもの事だと思つたが、アナザーライダーと聞いた時は少
し驚いた。

「みんな!」

「[[[[うん!]]]]」

はな達はビューティーハリーを出て、ツクヨミから連絡を受けた場所へ向かう。

「ちよつと!」

ソウゴも遅れてみんなの後ろを追いかける。

「もう! 何がどうなつてんだよ!」

此処にいる誰もが自分の事を覚えていないようで、何が起こっているのかソウゴには
さっぱりわからなかった。

はぐくみ市の商店通りでは、アナザーライダーが街の中を暴れていた。

そこへいち早く、ゲイツとツクヨミが駆けつけてきた。

「ツクヨミ。みんなを避難させろ」

「分かった」

既に変身していたゲイツがアナザーライダーと応戦する。現れたアナザーライダーはアナザーキバ、アナザー響鬼、アナザーウィザードの三体だ。

「はあ!やああ!」

ゲイツは三体と応戦していた。しかし、三体はゲイツに圧力を掛けるように次々と技を放ち、攻撃へと転じられない様になっていた。

「ゲイツ!」

「みんな!」

はな達が到着すると、はな達六人はプリハートを、ハリーはジクウドライバーを取り出す。

「みんな!」

六人とハリーはプリハートとジクウドライバーを取り出し、ハリーはジクウドライバーを腰に装着した。

『ハリー!ギアジェット!』

「変身!」

「「「ミライクリスタル!ハートキラッと!」」」

はな達六人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、ハリーはハリーライドウオツチとギアジェットウオツチをドライバーのスロットに差し込み、いつもの手順を取り姿を変える。

『ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジェット！』

「輝く未来を！抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアール！」

「HUGっと！プリキュア！」

全員が変身を完了すると、彼女達はアナザーライダーに応戦する。

「たああああああつ！」

「はああああああつ！」

エールとゲイツがアナザー響鬼に向かって跳び、パンチとジカンザックスからの突きを放って後ずさせる。

『ジカンチェーン!』

その近くではハリーがジカンチェーンを使い、アナザーウィザードを拘束した。

「エトワール!アムール!」

「アムールロックロンロール!」

「フレフレ!ハート!スター!」

ハリーの合図により、アナザーウィザードが動けない隙にエトワールとアムールが技を放ち、アナザーウィザードを吹き飛ばした。

「アーラ!一緒に!」

「うん!」

「はああ!」

マシエリとアーラは一度後ずさると、助走をつけたままアナザー響鬼へ向けて同時にキックを放つ。

「ぐうう……」

アナザー響鬼は反撃に出ようと、二つの棍に炎を纏わせた一撃を二人に放った。

「フレフレ!ハートフェザー!」

だがアンジュがハートフェザーを展開し、二人を守った。

しかし背後からアナザーキバが現れ、不意討ち気味にアンジュを襲う。

「あつ!?」

「アンジユ!危ない!」

「ちよつと!」

ソウゴはツクヨミの静止を聞かず飛び込んで、アンジユを庇ってアナザーキバの攻撃から逃れた。

「君……」

「大丈夫?怪我とかしてない?」

「アンジユ、大丈夫?君もありがとう」

「あのさ、エール。そろそろそう言うのやめてくれない?」

ソウゴは他人行儀な対応を今もなお行うエールに文句を言っていると、ゲイツが三人の下に近寄る。

「おい!何してる、はやく逃げろ!」

「逃げろ……?何で?」

「あなた死にたいのですか?早く行ってください!」

「もう!みんな、いい加減にしてよ!」

ソウゴはみんなの忘れたような素振りにもう飽き飽きし、痺れを切らしながらジオウに変身しようとする。

『ジクウドライダー!』

『……ジクウドライダー?』

ソウゴがジクウドライダーを装着すると、みんなは驚いた。

『ジオウ!Ⅱ!』

気にせずにソウゴは取り出したジオウオツチⅡを分割し、ドライバーの左右に差し込みポーズを構えると、ソウゴの後ろから二つの時計のエフェクトが現れた。

「変身!」

そしてドライバーを回すと、二つの時計は左右対象に止まりソウゴの体を纏う。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ!Ⅱ!』

『ジオウ!』

「もうくやっぱみんな覚えてるじゃん!」

さっきのはやっぱり演技だと知ってモヤが晴れると、ジオウはアナザーライダー三体に挑む。

「はああ!ハツ!」

アナザー響鬼にキックを繰り返し、アキラとマシエリから離れた。次のパンチでアナザー響鬼が倒れると、サイキョーギレードを出現させる。

『ジオウサイキョウ!』

サイキョーギレードのジオウのフェイスの文字を『ジオウサイキョウ』へ変え、刃にエネルギーを溜める。

『霸王斬り！』

霸王斬りを放ち、アナザー響鬼に直撃すると爆発し、倒す事が出来た。

そして今度はジカンギレードを出現させ、ジカンギレードとサイキョーギレードを手を持つ。

『サイキョーフィニッシュタイム！』

ジカンギレードのケンモードとサイキョーギレードを合体させると、剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

「エトワール！ハリー！避けて！」

「[?..?..]」

『キングギリギリスラッシュ！』

「オリヤヤヤヤヤ！！？」

ジオウはサイキョージカンギレードを振り下ろし、咄嗟に避けろと言われたハリーとエトワールが避けると、その場に残るアナザーウィザードに直撃して吹っ飛ばされてこれも爆発した。残るはアナザーキバ、ただ一人。

「これで決める！」

『ライダーファイニッシュタイム!』

ジクウドライバーを操作し、ピンクと金色の『キック』のエフェクトがアナザーキバを囲むと、ジオウは右足にエネルギーを貯める。

『トウワイズタイムブ레이크!』

囲んでいたキックの文字がジオウの足へ集まって一つとなると、ジオウのトウワイズタイムブ레이크によるライダーキックが決まり、最後のアナザーライダーも倒した。

「ふう〜」

ジオウの介入でアナザーライダーは全て倒した…が、それを見ていたエール達は驚いていた。

「ジオウが……私達を……」

「とりあえず、一件落……」

ジオウは取り敢えずひと段落したと思い、エール達にさっきの自分を忘れたかのような反応は何なのだと聞こうとすると…

「スター斯拉ッシュ!」

「マシエリポップ!」

「えっ? うわあああ!!?」

一安心していたジオウ目掛けて、いきなりスター斯拉ッシュとマシエリポップがジオ

ウに向けて放たれた。

「エトワール！マシエリ！何するの!？」

「それはこっちの台詞！」

「どうして！あなたがここにいます！」

「はあ？」

どうしてと言われても、ジオウはただ仲間を助けたためにアナザーライダーを攻撃し、みんなを助ける為だと答えようとする。

「姿を現したなジオウ。ここで貴様を倒す！」

「俺を倒す……？」

ジオウはゲイツの言葉を聞き、いきなり何を言い出すのかと思っていると…

「ウイングシャワー！」

アーラの放ったウイングシャワーがジオウの目を眩ませ、ゲイツが殴りかかって来た。

チカチカする目で無理矢理、初めて出来た男友達の姿を見ながら、ジオウは混乱しながら声をかける。

「どうして!?!？」

「クライアス社の大魔王ジオウを倒して、今と未来を救う!!？それが俺達の悲願だ」

ジオウから離れたゲイツがそう言いながら、ゲイツリバイブウオッチを取り出す。

『ゲイツリバイブ! 剛烈!』

ゲイツリバイブウオッチを装填し、ドライバーを回す。

『ライダータイム! リ・バ・イ・ブ 剛烈! 剛烈!』

『パワードのこ!』

『はああ!』

『うわああああ!!?!』

ゲイツのジカンジャックローを受けてジオウが転がり倒れると、ジオウの変身が強制解除となった。

「大魔王とかなんとか…俺のこと、みんな本当に忘れちゃったの!」

「気安く呼ぶな!」

「あなたもジオウなんでしょ?!?!」

「沢山の人を何度も、アナザーライダーで襲わせたでしょ!」

「それでも嘘を言うのですか?!?!」

「町のみんなにだつて襲つたわ!」

ゲイツ達がソウゴがジオウでアナザーライダーに命令し、はぐくみ市の人達を襲わせた、クライアス社の大魔王だと叫ぶが、ソウゴにとっては全く見覚えもない事ばかり

だった。

「全然、訳わかんないよ！ちゃんと説明してよっ！」

「黙れ！」

「ああ!!?」

「はっ!!?」

生身のソウゴにゲイツジカンジャックローのノコで攻撃を受けたその影響で、ソウゴは腕と顔に傷を負った。

「ああ……っ！」

咄嗟に後ろにジャンプしてダメージを軽減させたものの、決して浅くない傷口を負ってしまい、血が噴き出す患部を抑えるソウゴだが、ゲイツは容赦しなかった。

「貴様の話を聞くつもりはない」

そのまま、ゲイツはジカンジャックローでトドメを刺そうとする。

思わず目を瞑ったソウゴだったがその時、周りの時が止まった。

「ここは逃げる事をおすすめするよ。こいつにやられたくないならね」

ウールが現れたのを見たソウゴは、自分以外の時間を止めた様だと察する。

何故助けたのだという疑問は残るが、逃げる様に言われたソウゴはボロボロになりながらもこの場から去っていく。

「いい気味だー!」

出来る限り遠くへ、ゲイツ達から逃げるように去る様子を見届けると、ウールは愉快そうに口角を上げながら時間を動かした。

「タイムジャッカー!」

「君達にジオウを倒してもらっちゃ困るんだよ」

ウールはゲイツ達にそれだけを言って、すぐに去っていった。

「くそ!逃したか!」

「……ねえ、本当に今のがジオウ?」

「なんか、おかしくないか?性格が違いすぎなような…?」

ゲイツはジオウを倒せなかった事に顔を歪めるが、エールとハリーは、さっきのソウゴが自分達の知るジオウとは何か違うと話し出す。

「どちらにせよ、奴はジオウだ。クライアス社のタイムジャッカーチームが奴を助けた。クライアス社と関わっているのに違いはない!」

「それに、罠の可能性もあります!」

「罠って?」

「いい人そうに見せて、私達に隙を作ると言う作戦です」

「それでしたら何故、あそこでハリーとエトワールに避けると言ったのですか?」

「そういえば……」

マシエリの言う様に自分達を消すつもりだったなら、確かに罠なら普通避けろなど言わない。あのまま二人を巻き込んで技を放つことだって出来た筈だ。

そう考えていると、エールは何かを考えている様子のアンジュに気付く。

「アンジュ？」

「あの子、必死になって私を助けてくれた……」

あの時、アナザーライダーに後ろから襲われそうになった時、ソウゴは自分を助けてくれた。アンジュはその事を思い出す。

とあるビルの上上に、クライアス社のスウォルツ、リストル、ビシン、オーラがいた。そこへソウゴを助けたウールも戻ってきた。

「どうだった。元魔王は？」

「楽しかったなあ！ジオウの焦った顔、見せてやりたかったよ」

やはり、クライアス社はソウゴを知っている。

その上で、この現象も彼らが起こした事だという事も伺えた。

「やるじゃないスウォルツ」

「時見ソウゴは既に強大な力を手に入れた。こちらにも強硬手段に出る以外にはないとい

う事だ。オーラ。新たな魔王はお前に任せる」

「命令しないでよ」

「ところで、ドクタートラウムの方は？」

スウォルツがリストルにドクタートラウムの研究の方はどうかと聞く。

「明日には第二作戦開始とのことです」

「そうか」

第二作戦。それが明日にもクライアス社によって行われる様だ。

それがどう言ったものなのかは、此処にいるもの以外、今は誰もわからない。

その頃、ゲイツから逃れたソウゴは町中の噴水の前へとやってきた。

「はあ、はあ……」

傷ついた身体で歩みながら、ゲイツから受けた傷口を押さえていると、噴水の前にウオズの姿があつた事に気付く。

「ウオズ！」

ソウゴはウオズに急いで駆け寄る。

「ウオズ。無事だったの？」

「ああ……」

「よかった……」

ウオズの無事と自分の事を覚えている。その事にホツとした。

「大変なんだ！みんな俺のこと忘れてて……」

ソウゴはウオズにみんなが忘れていた事、自分がクライアス社の大魔王と言うことになつてしまった事を説明する。

「随分……心細い思いをしたようだね」

「早く原因を突き止めないと……」

どうしてこんな事になつたのか、原因を調べようとする……

「——過川飛流」

「えっ？」

過川飛流。確かその男は、かつてアナザージオウとなつて自分に戦いを挑んだ男だと、ソウゴは記憶の中から掬い取る。

「君に紹介したい方がいる」

「紹介したい人？」

「連れてきたよ」

どういふ事だとウオズに問おうとするソウゴの前に、クライアス社のビシンとオーラが現れた。

「クライアス社……」

「君に紹介しなければならぬ人物が居る。

新たな我が魔王だ!」

クライアス社が現れたのを見て、ソウゴが痛む身体に鞭を打って警戒する。

しかしウオズがクライアス社の方へ移動したという事実には気づくと、三人の後ろから黒い服に黄金のネックレスを見に纏っていた人物が立っていた事に気付く。

「久しぶりだな。時見ソウゴ」

その人物は、かつてソウゴの前に現れ、憎悪に突き動かされる様に襲い掛かってきた青年・過川飛流だった。

「飛流……ウオズ、これって……」

「私は新たな魔王に使えることにした」

「……どうゆうこと?」

「君がオーマジオウになる未来は、この本から消えてしまった、という事だ」

「えっ?」

ウオズの本……『逢魔降臨暦』の本から、未来のソウゴが描く未来が消えたと言う。

それを聞いたソウゴは、ウオズはオーマジオウにならないソウゴに仕える気がなくなつたと察し、シヨックの顔を隠せなかった。

「いい顔だなあ……お前のそんな顔を見たかったんだよ」

「飛流……どうして!?」

「どうして……? お前に味わされた屈辱を返すために決まってるだろ!」

「屈辱……」

飛流にとつての屈辱。

それは、ジオウⅡとゲイツリバイブのソウゴとゲイツに負けた時にかげられた、ソウゴの一言だった。

『きつと……俺と飛流なら乗り越えられるって。』

だから……過去のためじゃなく、今のために生きようよ』

その時の言葉は、ソウゴにとつては、彼への慰めと未来への希望を持って欲しいという願いの元で言った言葉だった。

しかし飛流にとつては、ソウゴへの憎悪をさらに増す言葉だったようで、ずっと彼を憎んでいた。

「今のために生きろだど? ——ふざけるな!」

憤怒の感情を露わにしながら飛流はソウゴを殴り、噴水の中へと飛ばした。

「お前は何にも分かっちゃいない! 選ばれなかった者の悲劇を!」

だから試してやるんだ。お前から全部を奪って、同じ事が言えるかどうかをな……」

飛流はソウゴから大切な仲間の絆も記憶も思い出も奪い、ソウゴへの仕返しをする為にこのような行動を取ったのだった。

『ジオウ…!!』

飛流は今此処に復讐を遂げる為、アナザーウオッチを起動する。

そのウオッチは、以前使っていたアナザージオウとは違う、新しいアナザージオウのウオッチだった。

『ジオウ…!!』

そして時計バンドの様な帯が彼の周りで回転し、それが弾けると同時に姿を変える。

その姿は以前変身したアナザージオウと違う、以前はむき出しだった人体模型のような顔は金属のマスクに覆われ、身体には金色の配色が増えており、以前の顔が見える部分は目の周囲のみであった。

飛流はジオウIIのアナザーライダーとなった、アナザージオウIIへと変身した。

「どうした? かかってこい」

アナザージオウIIは噴水の中で座るソウゴを挑発する。

ソウゴは濡れになりながらも起き上がり、ジクウドライバーを装着してジオウウオッチとブランドジオウウオッチを取り出した。

『ジオウーブランドジオウー!』

そして、ジオウウォッチとグランドジオウウォッチをドライバーに装着する。

『へポオオン！パアアア！』アドベント！COMPLETE！ターンアップ！
へピイン！』CHANGE BEETLE！ソードフォーム！ウエイクアップ！カメ
ンライド！サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！3・2・1！シャバドゥビ
タッチヘンシーン！ソイヤット！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！
ライダータイム……！』

ドライバーのロックを解除すると、地中から巨大な黄金の時計台と歴代ライダーの石像が出現した。やがて全てのライダー像の表層が剥がれ、仮面ライダーたちの姿が現れる。

「変身!!？」

『グランドタイム！』

クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド！響鬼・カブト・電王！キバ・ディケ
イド！ダブル！オーズ！フォーゼ！ウイザード！鎧武・ドラーイーブ！ゴースト！エ
グゼイド！ビ・ル・ドー！

祝え！仮面ライダー!!？グ・ラ・ン・ド！ジオーウ！』

ソウゴもグランドジオウへと変身を完了した。

「うおおおおお！」

変身を完了してたジオウはアナザージオウⅡへ目掛けて走り、両者戦闘を開始した。戦いが始まると、ジオウとアナザージオウⅡはお互いに攻撃を繰り返していたが、ジオウの方がアナザージオウⅡへと攻撃が次々と決まっていた。

「こいつらで遊んでやる」

アナザージオウⅡがジオウから一旦離れると、アナザーアギトとアナザー鎧武、アナザー電王といった、計三体のアナザーライダーが召喚された。

「こんな戦い!」

『電王!』

『鎧武!』

「終わらせてやる!」

『アギト!』

ジオウは鎧武と電王を召喚し、更にアギトの武器であるフレイムセイバーを手元に召喚し、ジオウがそれを持つ。

召喚された電王と鎧武がアナザー電王、アナザー鎧武と応戦し、ジオウはアナザーアギトと応戦する。

「オリヤヤー!」

「ハア!」

電王のデンガツシャーと鎧武の無双セイバーに貯められたエネルギーがアナザーライダー二体に放たれ、アナザーライダー達を倒した。

「はああああー！」

ジオウもフレイムセイバーで十字切りしたかのように剣撃を放ってアナザーアギトも倒し、アナザージオウIIが召喚したアナザーライダーを全て倒した。

「フン。無駄だ」

アナザーライダー達が倒される光景を落ち着いた態度で見ていたアナザージオウIIは、ジオウII同様に仮面の時計の針型アンテナを回転させる。

すると、辺りが急に夜となり、倒したはずのアナザーライダーが復活した。

「どうして……？倒したはずなのに」

倒したアナザーライダーが一瞬にして復活した事に驚きを隠せないでいると、アナザージオウIIは愉快そうに笑い出す。

「ハハハ……歴史を書き換えたのさ。俺には時間を思うがままに書き換える力がある」

なんとアナザージオウIIには、歴史を改竄させる能力を持っていた。

時間改変によって『ジオウに倒されなかった』事にする事で蘇ったアナザー電王とアナザー鎧武は電王、鎧武をすぐさま攻撃し、電王と鎧武を消滅させたのだ。

「そんな……」

1対3となるとアナザーライダー達はジオウを囲み、ジオウは苦戦する事となる。

それを見てヤバいと感じたジオウは、ジカンギレードとサイキョーギレードを取り出す。

『サイキョーファイニッシュタイム!』

サイキョージカンギレードに合体させ、剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『キングギリギリスラッシュ!』

「オリヤヤヤヤ!!?」

ジオウはサイキョージカンギレードを振り下ろしてアナザーライダーを吹き飛ばし、もう一度三体のアナザーを撃破した。

「無駄だ」

またもや時間改変するアナザージオウII、再度倒したはずのアナザーライダー達が復活した。

「またか……」

「この力があればお前なんか!」

このままでは、ジオウの方が先に限界を迎えてしまい、倒されるのは時間の問題だ。

そう思っていたその時……

『ラビット！フルボトルスラッシュ！』

「えっ？」

突然、場違いな音声が辺りに響き渡る。

「頭を下げる！」

その声に従いジオウが頭を下げた。それと同時に鞭の様に伸びた赤く光る剣がアナザージオウⅡ達に直撃し、四人共倒れた。

「何？？ 誰だ？？」

アナザージオウⅡが叫ぶと、その人物がジオウの前に現れた。

その者はボディに黄金のラインが刻まれ、後ろには白いマントを纏っていた。

「貴様か……」

「悪いけど。あんたの相手をしてる暇はない」

『隠れ身の術！』

刀の様な武器を握っていたその人物により煙幕のようなものが周囲に放たれ、アナザライダー達は目を眩ませる。

「来い！」

その人物はジオウを連れてそのまま去っていく。

そのまま煙幕が晴れると、二人は既に姿はなかった。

「くっ……探せ!」

アナザージオウⅡの命令により、三体のアナザーライダーはジオウともう一人を探しに向かう。

その頃、アナザーライダー達から逃れた二人は地下の駐車場へとやってきた。

「はあ、はあ、はあ……」

息を切らしたソウゴが地面に横たわる。

「大丈夫か?ソウゴ」

その時、ソウゴは自身を助けた人が腰に巻いていた、ひとつのビルドドライバーに目を引かれるのだった。

「ビルド……しかも、その声って……」

聞き覚えがある声を発するビルドは、ドライバーからボトルを外した。

変身を解くと、少し大きいトレンチコートと、中にはパーカー、下はジーンズを着ていた少年が其処にいた。

「久しぶりだな。ソウゴ」

ソウゴを助けたのは、自分と同じようにプリキュアと一緒に戦っている仮面ライダー

…もう一人のビルドである、桐ヶ谷晴夜だった。

「っ!?! 晴夜……俺を覚えてるの?」

そう晴夜が自身の名前を言った事を改めて聴くと、ソウゴはみんなが忘れ去られていた中で彼が自身の事を覚えていた事に驚く。

「アナザージオウだけ、奴の効力は俺には影響ないよ。この人のおかげでね」

晴夜が柱の方を振り向く。すると、柱から現れたのは見覚えのある顔の人物だった。

「門矢士……」

「久しぶりだな。魔王」

ソウゴの前に度々現れる、通りすがりの仮面ライダーと名乗る人物：門矢士だった。

「晴夜には影響ないってどういうこと?」

「俺は以前、士さんに平行世界に飛ばされた事があるんだ」

「平行世界?」

「こことは、違う世界……パワレルワールドがあるんだ。」

その時、パワレルワールドに何度か行った影響で、俺には時間の流れによる影響を受けなくなっただんだ」

以前、桐生戦兎と出会った時、晴夜は士によって世界を渡った。その時、世界を渡った影響によるもので、晴夜は今回のアナザージオウIIによる歴史介入が影響されなかつ

た。

「そうなんだ……」

「それよりも……自体は深刻だよ。アナザージオウⅡ、奴を止めないともっと大変なことになる」

「でも……」

アナザージオウを止めなければならぬ事は分かったが、それと同時にソウゴは思った。

いつもなら一緒に戦うみんながいる。彼らとなら、どんな事でもいける気がする気持ちになれる。

しかし……

「王様になりたいとか言ってた時の威勢はどうした?」

「……」

「こんな所でへこたれるなんて甘いな」

「士さん!」

「あんたに何が分かる?」

晴夜は言い過ぎだと思ひ彼の肩を掴むが、ソウゴは顔を下に向けながら、何が分かるのだと問う。

「……お前のことなら大体分かっているつもりだが」

それに対して、土がソウゴの事を大体わかっていると答える。

「ゲイツもさあやにはなも俺のこと忘れてた……しかもウオズは……」

「お前を見限って新しい魔王のもとへ……」

「俺がオーマジオウに負けたから。俺じゃ王になる資格がないって、そう思ったから

……！」

「知るか、そんなこと」

みんな、ソウゴの前から去っていた。

今のソウゴは一人ぼっち。

昔のように、ジオウになる前のあの頃に……いや、それ以上に過酷な境遇になったように感じていた。

だか士はそんなソウゴを払いのけ、今起こっている事実を淡々と告げる。

「どちらにせよ、言えるのはこの世界の歴史は変えられた、ってことだ。

防ぎたかつたら、お前が過川飛流を倒して元の世界に戻すんだな」

「みんながいけないのに、どうしたら……」

迷いを見せるソウゴの姿を見た士は、ため息を吐きながら彼の胸倉をつかみ立ち上がらせる。

「士さん!」

晴夜が止めようとするがしかし、士は気にせずソウゴに告げる。

「お前。あいつらが側にいたから王様になりたいと思ったのか?」

「……」

「順序が逆だろ。お前が王様になりたいと思った……ただし、魔王だけだな。そこにあいつらが現れた。違うか?」

「……」

「それとも、魔王になるのを諦めるか?」

諦める……

——確かに魔王になる事を諦めた事はあった。

でも、諦めないでこれたのはみんながいたからだ。

そして、魔王になりたいと思ったのは……

「俺は……諦めない!俺は最善最高に魔王になる!それは俺が決めた道だ!」

ソウゴは諦めないと強く叫ぶ。それを聞いた二人は少しフツと笑う。

そこへさっすきのアナザーライダー3体が現れ、ソウゴ達が発見された。

「来たか……まずはさっすきを倒せ。話はそれからだ」

「うん」

士の説教を受け、弱みを捨てたソウゴはジクウッドライダーを装着した。

「晴夜。お前は手を出すな」

「でも……」

「これは奴がやらなきゃダメだ」

晴夜は士に手を出すなど言われ、ビルドドライバーにボトルを差さずにソウゴから離れた。

ソウゴは一人で三体のアナザーライダーに立ち向かう。

『ジオウ・グランジジオウ!』

二つのウオッチを起動させ、ドライバーをスロットへ装填する。

『へポオオーン! パアアア!』アドベント! COMPLETE! ターンアップ!
へピイン! CHANGEBEETLE! ソードフォーム! ウェイクアップ! カメ
ンライド! サイクロン! ジョーカー! タカ・トラ・バッタ! 3・2・1! シャバドウビ
タッチヘンション! ソイヤッ! ドライブ! カイガン! レベルアップ! ベストマッチ!
ライダータイム……!』

ドライバーのロックを解除し、地中から巨大な黄金の時計台と歴代ライダーの石像が出現した。

そしてライダー像の表層が剥がれ、仮面ライダーたちの姿が現れる。

「変身!!?」

『グランドタイム!クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド!響鬼・カブト・電王!
!キバ・デイケイド!ダブル!オーズ!フォーゼ!ウイザード!鎧武・ドラーイーブ
!ゴースト!エグゼイド!ビル・ドール!』

「祝え!仮面ライダー!!?グ・ラ・ン・ド!ジオウ!」

ソウゴは再度グランドジオウへと変身したソウゴは、アナザーライダー達へ向かっていく。

「うおおおおお!」

ジオウは勢いよくパンチを繰り出し、アナザーアギトをぶつ飛ばした。

「はああ!」

今度はアナザー電王とアナザー鎧武に一撃ずつ、キックを喰らわせる。

「ッ……」

『電王!鎧武!』

鎧武と電王のレリーフを触り、鎧武の大橙丸と電王のデンガツシャーを召喚した。

「はあ!」

ジオウはその二刀で再度起き上がったアナザー電王とアナザー鎧武に応戦し、その二刀で吹き飛ばした。

「はああく……はああ！」

二刀にエネルギーを纏いアナザー鎧武、アナザー電王に斬撃を放ち二体を撃破した。

「ぐうう……」

『アギト！』

ジオウはアギトのレリーフを触り、"2001"と現れると仮面ライダーアギト・グランドフォームが現れ、それを見たアナザーアギトはライダーキックを放つ。

『フイニツシュタイム！』

ジオウも対抗するためにジクウドライダーを回してアギトと共に飛び上がり、二人の動きがシンクロした。

『オールトウエンティタイムブ레이크！』

「はあく……だあああああああ！」

アギトと重なったジオウは、アギトの必殺技ライダーキックがアナザーアギトのライダーキックに炸裂、敵のライダーキックを打ち破ったジオウはアナザーアギトを倒した。

「ほお、やるじゃないか。ガキ王様」

「これが、ジオウの力……」

グランドジオウの力でアナザーライダー達を全て倒す事が出来た。

「見つけたぞー!」

「「?」」

三人が振り向くとそこに、ゲイツ達とHUGつとプリキュアの面々が現れた。

「ジオウ。お前を倒して俺がこの世界を救う」

『ゲイツ!ゲイツリバイブ!疾風!』

ゲイツとゲイツリバイブをジクウドライバーのスロットに装填し、ドライバーを回す。

『ライダータイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ疾風!疾風!』

ゲイツがゲイツリバイブ疾風へと変身した。そのままジオウへと向かって近づく。

「行くぞ……ジオウ!」

ジカンジャックローをジオウへと振りかかる。

「待って!」

だが突如として晴夜が現れ、ゲイツのジカンジャックローを持つ腕を掴む。

「貴様は……桐ヶ谷晴夜」

ゲイツは晴夜に止められると、彼に掴まれた腕を振り払う。

「何故邪魔をする!貴様も仮面ライダーならわかるはずだろ!こいつは……」

「ソウゴは敵じゃない。士さんから聞いた話だが、彼が敵なら、何故君達を庇った」
「それは、俺達を畏に……」

「もし畏にはめる作戦なら、何故もつと圧力をかけなかった。最初に君達と戦ったとき、何故クライアス社はもつと早く加勢に入らなかった」

「それは……」

畏ならあそこでジオウは更にアナザーライダーの加勢をし、クライアス社はもつと早くジオウを守った筈だと伝える。

「少なくとも彼は敵じゃない。俺を信じろ」

「……」

「私も彼を信じたい！」

「アンジュ……」

ゲイツは晴夜とアンジュからソウゴを信じたいと言われ、ドライバーからウオツチを外し変身を解く。

「いいだろう」

ゲイツが変身解除を見て、ソウゴもジオウウオツチを外し変身解除した。

「はあ、はあ……ああ……」

「あっ!?？」

「ソウゴ―」

アンジュが倒れかけたソウゴを見て咄嗟に助けようとしたが、その前に晴夜がソウゴを支えソウゴの肩を担ぐ。

「大丈夫か?」

「ありがとう……ちよつと気が抜けちゃって……」

それを聞いた晴夜は無理もないと思つた。

ソウゴは怪我をしてる上にグラランドジオウへ二度も変身し、あれだけの力を使った。流石の彼も体力の限界だったと感じる。

「ゲイツ―」

ソウゴはゲイツに呼びかける。

「俺はもう、ゲイツと戦う気はないから」

「何だと!??」

「ゲイツ……君は俺に約束してくれた」

ソウゴは彼の姿を見据えながら、一度は王の道を諦めた時の事を思い出す。

『最低最悪の魔王になったら……俺が倒してやる。必ずな……俺を信じろ。ジオウ

……ソウゴ!』

その時言ってくれた、ゲイツの一言が、ソウゴを再び王への道を歩き出させてくれた

事を思い浮かべると、みんなに向けてソウゴは語り続ける。

「俺のことを倒したいと思うなら倒せばいい。」

みんなが俺と戦う時は、俺が最低最悪の魔王になったってことだから」

ソウゴが自身の気持ちを言うのと、変身を解いたみんなからも答えが返ってきた。

「私も、君とは戦いたくない」

「私もなんか、あんたと戦うの、なんかあまり気分が良くないんだよね」

「私もです。あなたと戦うのは、何故か私の気持ちがいけないと聞こえます」

「私もそんな気持ちなのです。あの先程は攻撃して、すみませんでした」

「私もごめんなさい！」

「…なんか、悪かったな……」

「私もあなたの事、信じてみたい」

「みんな……」

「おい」

はな達が信用してくれると言ってもらえたソウゴは安堵すると、ゲイツがソウゴに声をかける。

「明日、ビューティーハリーへ来い。お前の話を聞かせろ」

「うん」

自身の話を聞いてくれると聞き、ソウゴから笑顔が戻った。

そのままゲイツ達は去っていったが、問題はソウゴだと晴夜は考えた。

この状況では恐らく叔父である順一郎もソウゴの事を忘れている可能性があり、今のソウゴを連れてクジゴジ堂には戻れない。

「とりあえず、俺の知り合いのここに行こう」

「ごめん……お世話になるよ」

晴夜はソウゴの肩を担ぐと、まずはビルドフォンで連絡を入れる。

「あの……」

「ん?」

「私も……いいですか?」

晴夜は声が聞こえた為に後ろを向くと、さあやと一緒に来たいと言ってきた。

しばらくしてソウゴとさあやは、桐ヶ谷晴夜と門矢士に大貝町へやってきた。

そこで『ソリティア』と書かれたアクセサリーショップへソウゴを連れて行く。

「うっ……」

「ごめんなさい。もしかして痛かった?」

「大丈夫。ちよつと傷に滲みただけ」

ソウゴの傷の手当てを、青い髪の女の子である菱川六花がしてくれていた。彼女はキュアダイヤモンドだ。

「無理しないで、痛い時は痛って言ったほうがいいよ」

「アイ〜！」

近くに座っているもう一人の子は相田マナ。彼女はキュアハートだ。そして、彼女が抱えているのは赤ちゃんのアイちゃん。

「ごめんね。二人に迷惑かけて」

「ううん。晴夜の頼みならあたしは何だって聞くよ」

「怪我の治療じゃ、私も必要でしょ。はい。これでいいわよ」

「ありがとう」

ソウゴの怪我の処置が終わると、晴夜が彼に近づく。

「悪いな。俺の家だとここからだとかかなり遠くって」

今住んでいる晴夜の家は横浜辺りで、ここからだとかかなり距離がある。彼はソウゴの怪我を考え、はぐくみ市から近いこの町へとやってきたのだ。

「いいよ。休めるだけで十分だよ」

「ほう〜い、お待たせ！」

調理場から晴夜達と同じ歳頃の少年が皿を持ってソウゴの前に置く。

「かずやん特製のクリームパスタだ」

「わあく!いただきます!」

ソウゴはフォークを手に取り、パスタを口に入れる。

「うくん!美味しい!」

「だろ!」

「中々いけるな。俺には負けるが……」

「あんたには聞いてねえよ!」

近くのテーブルで門矢士が一人勝手に食べていた事に少年は突っ込むが、最後に味は負けてると不要な発言を呟っていた。

「自己紹介が遅れたな。俺は沢田和也。晴夜と同じ仮面ライダー。 그리스だ」

「俺は時見ソウゴ。仮面ライダージオウ。王様になるのが夢なんだよろしく!」

「王様……」

「俺が王様になったら、和也を俺の専属のシェフにするね」

「はあく」

王様と聞いて、ぶっ飛んだ事を言ってるなど和也は思う。

その後、晴夜達は一度ソリティアから出て行き、ソウゴとさあやをその場に残す。

そしてソリティアに残るさあやが、ソウゴに彼自身が知っている自分の事を尋ねる。
「ねえ、君が知ってる私とどうだったの?」

「俺の知る世界だとさあやは、俺の幼馴染なんだ。今のさあやと同じでお母さんと共演するのを目標として、自分の夢を探していた」

「そうなんだ……」

「まあ、信じて貰えないかもしれないけど……」

今の状況では、流石に信じて貰えないかとソウゴが卑下していると……

「——信じるよ」

「えっ?」

「君が……時見君なら、信じられる。そんな気がする」

「ソウゴでいいよ。いつも見たいにソウゴで」

「じゃあ……ソウゴ君で。えっ?」

いつものようにソウゴ君と呼ぶと、ソウゴがさあやの肩に乗かる。

「すうっ……すう」

ソウゴは寝てしまった。

流石に今日は色々とあり疲れてしまい、安心して休める所に来たので気が抜けたようだ。

「あ、あの……ソ、ソウゴ君……」

「んっ……すう……」

流星に恥ずかしいと感じるさあやだが、ソウゴの寝顔を見て彼女も目を瞑り、ソウゴをそのままにして一緒に眠った。

その日は、色々とおつた一日だった。

ソウゴには辛い事があつたが、世界を戻す為にアナザージオウIIと戦う決意もでき、再び仲間の信頼を取り戻す。

——だが、本当の戦いはここから始まった。

次回! Re. HUGとジオウ!

特別編3 その2. 2018: 仲間集め! 時の止まった瞬間、明かされる過去

特別編3 その2・2018：仲間集め！時の止まった瞬間、明かされる過去

アナザージオウⅡの力で、この世界での歴史の時間を変えられた事で皆から忘れ去られてしまったソウゴ。

ジオウになるとゲイツ達から一方的に攻撃を受けたが、桐ヶ谷晴夜と門矢士により難を逃れた。そして晴夜の説得で、とりあえず話だけ聞いてくれることになった。

その翌日、とあるビルに一人の男性が現れた。

「こんな世界になつてしまうなんて……」

そこにいた人物は、ソウゴ達が龍騎とブレイドの事件の時に現れた男性——
「また、いいお宝が手に入りそうじゃないか」

——仮面ライダーディエンド、海東大樹だった。

ソウゴは土にさあや、晴夜達四人の仮面ライダーと一緒にビューティーハリーへとやって来るとリビングに集まり説明に入るが、その前に……

「とりあえず、初めて会う人もいるから紹介するな」

えみるとルルー、ことりの三人は晴夜達とは初対面だからとりあえず自己紹介する。

「俺は桐ヶ谷晴夜、仮面ライダービルド、よろしく。」

…あ、そこに居るこいつは筋肉バカの上城龍牙とドルオタのかずやん、それと小学生ナスビライダーの幻冬……」

「いや待てやあああッツ!!」

晴夜が龍牙達を適当に紹介すると、三人が一斉に晴夜を怒鳴る。

「俺は筋肉バカじゃねえ!プロテインの貴公子にして剣崎真琴の時期マネージャー、上城龍牙だ!」

「そして俺はドルオタじゃねえ!まこぴー命に心火を燃やす!熱血!爆裂!不滅の仮面ライダー!沢田和也様だあ!」

「僕だってまだ四年生ですけど、これから強くなるんです!…と言うか、ナスビライダーってなんですか!?髪ですか!髪の色ですか!確かにちよつと紫色っぽいとは思ってはいましたけど!!」

「わ、わかった。わかったから!…それとかずやん、一般的にそれをドルオタっていうんだよ」

ふざけた自己紹介を行った晴夜達だったが、はなは先程聞こえたまこぴーという言葉に反応する。

「ねえ、まこぴーって？もしかして、剣崎真琴こと？」

「そうだけど」

「えっ!? あのアイドルの!?？」

「ちなみに真琴さんは、プリキュアですよ。キュアソードって名前の」

「それは、是非とも会ってみたいのです！」

アイドルがプリキュアと知り会ってみたいと話すと、いよいよと本題に入る。

「では、桐ヶ谷晴夜。今の状況の説明を」

「ああ」

晴夜は実際に今起きている事を話した。

今現在、正しい歴史を知っているのはソウゴと晴夜、士の三人。だがソウゴと士では説得力に欠けるため晴夜が説明する。

「簡単にいえばこう？」

晴夜は今の状況を簡単に説明する為に、二つの人形を取り出す。

一つはジオウ、もう一つはアナザージオウのお面をつけた人形だ。

「まずは、本来この世界のソウゴが変身したジオウの誕生が、アナザージオウによって変

わった。それはクライアス社が飛流という男をアナザージオウに変えたからだ。

「ここまではアナザライダーの誕生により起こる現象だ」

「うん。それは知ってる」

継承したライダー達もアナザライダーの誕生で記憶を失っていた事を思い返す。

「でも、そこが問題じゃないんだ」

「どう言う事?」

「時間が書き換えられているんだ。この世界ではみんなとソウゴが出会った全てが変えられているんだ」

「時間を書き換えられた?」

「うん。その歴史で俺はみんなと…あとウオズと一緒に戦ってたんだ」

「ウオズ? そんな奴知らんな」

「それよりクライアス社だけと戦ってたの?」

「えつと……」

「魔王か?」

「いや……魔王っていうか……」

「魔王と戦う訳ないだろ。ゆくゆくはコイツ自身が魔王になるんだから」

「えつ?」

「士さん！なんでそんな事を言うんですか！」

「頼むから余計なこと言わないで」

言わなくてもいい事を士が言ったために、その場が少々混乱した。

「とにかく、俺は過川飛流を倒して、この世界を元に戻さなきゃいけないんだ。

その為に、みんなの力を貸して欲しいんだ……！」

ソウゴは一緒に飛流と戦ってくれないかとはな達に頭を下げる。

「何のために？お前が魔王になるためか？」

魔王になるためと言われると、ソウゴは咄嗟に言い返す言葉が思いつかなかった。

「話にならないな。俺達の敵はジオウ。それが過川飛流であっても、お前であってもな。

両方とも倒す。それだけだ」

ゲイツは立ち上がり、去ろうとした。

「ねえ、一つに気になってただけだ。なんで晴夜はその時間の書き換え……だっけ？

その影響がないの？」

はなが先程から疑問に思っていた事を聞く。

何故晴夜だけは、アナザージオウIIによる影響を受けなかったのか。

「これのおかげだよ」

晴夜は自分が使っているビルドドライバーを出した。

「ソウゴには言ったかもしれないけど、俺はそこにいる門矢士さんに平行世界に飛ばされた事があるんだ」

「平行世界?」

「…つてなんですか?」

「それは一種のパワレルワールドのようなものですか?」

「まあ、そんなところかな」

その説明をする為に、ブラッド帝国との戦いの時まで遡る。

晴夜は、ブラッドに自分のビルドドライバーを奪われたが、門矢士に助けられたその後、彼によってそのまま平行世界へと飛ばされた。

その時、ある人からこのドライバーを新たに受け取った。

「この俺が使っているビルドドライバーは、その並行世界ものだ」

『えっ?』

それを聞いた面々は、士と龍牙、和也、幻冬以外が驚く。

「この世界ものではない。つまり、別の世界からの異物がある。それに触れている自分にも影響を及ぼす。だから、俺には時間の書き換えの影響がないんだ」

つまりは、この世界ではないビルドドライバーを持つ晴夜には、時間の書き換えの影響を伏せていた。

「でも、それ。誰から貰ったの？」

誰から貰ったと聞かれると、晴夜は答える。

「…俺が一番尊敬しているだよ♪」

「それじゃ！わからへんやろ！」

わざわざいう必要もないと考えたのか、それとも後からわかる事だからと思ったのか。

結局晴夜は、このビルドドライバーをくれた人の名前を明かさなかった。

——だがソウゴと士だけは、それはきつと戦鬼の事を言っているのだと察していた。

クライアス社ビルの中で新たに設置された、過川飛流の部屋にウオズが現れた。

「新たな我が魔王、ご覧あれ。これが未来の時見ソウゴの姿です」

玉座に座る過川飛流にウオズは自分の本を開き、オーマジオウの姿を見せる。

「最低最悪の魔王、オーマジオウと呼ばれているもの」

「…最低最悪の魔王か。だったら時見ソウゴからオーマジオウになる未来を奪ってやろう」

「でも、王様の呼び出したアナザーライダーはやられたけどね」

「まだ手始めさ。あれくらいで死なれては気が済まないからな、もつと奴を苦しめない
と。この時間を書き換える力を使ってな……」

飛流はアナザージオウIIライドウォッチを見つめ、これでソウゴを心の奥底まで苦し
めて絶望させてやれると、愉悅に浸りながらそう呟く。

するとその時、部屋の天上の上に設置されているシャンデリアが銃撃され、部屋の明
かりが消えた。

「なんだ!?」

「時間を書き換えるなんて、凄いいお宝だね。欲しくなっちゃったじゃないか」

現れたのは海東大樹だった。彼はネオデイエンドライダーを一回転させ、デイエンド
のライダーカードを取り出す。

『KAMEN RIDER!』

そしてネオデイエンドライダーにカードを差し込んで、それを空の方へと向けた。

「変身!」

『DIEND!』

トリガーを引くと銃口から紋章を浮かばせて、3色のシルエツトを体に重ねるとスー
ツに変化させた。最後に10枚のプレートが頭部に装着されると、海東は仮面ライダー
デイエンドへと変身した。

「行け！」

配下のアナザーエグゼイドとアナザーゴーストをデイエンドへ差し向ける。それに対してデイエンドは二枚のカードを差し込む。

『KAMEN RIDE! BRAVE! SPECTER!』

ネオデイエンドライダーの力で仮面ライダーブレイド、仮面ライダースペクターの二体を出現させる。

「行つてらしゃい！」

スペクター、ブレイドをそれぞれアナザーゴースト、アナザーエグゼイドへぶつけさせて戦闘を始めると、それを見ていた飛流はアナザーライドウォッチを向ける。

『ATTACK RIDE! BLAST!』

アナザージオウⅡへ変身する前にネオデイエンドライダーから放たれた攻撃により、デイエンドが飛流の手からウォッチを強奪した。

「このお宝は僕が頂いたよ。じゃあね〜」

デイエンドが逃げるとアナザーライダーもデイエンドの召喚したスペクターとブレイドによって倒されていた。

そのまま部屋から出て行くデイエンドだが、突如として彼の時が止まった。

既に部屋の外に設置してあったソファにスウォルツが座っており、デイエンドの時を

止めていたのだ。

「返してもらおう」

スウォルツはデイエンドが持っていたアナザージオウIIウォッチを取り返した。

「スウォルツ。よくやった」

そこへ、追ってきた飛流が現れた。

「時見ソウゴを倒すのがあなたの悲願。後は私にお任せを」

「頼む」

スウォルツに「デイエンドの対応を任せ、飛流は奥の部屋へと戻っていく。

「さて」

飛流が部屋へ戻ると、スウォルツは「デイエンドを止めたまま壁に叩きつけて変身解除に追い込む。

「ツ！ああああ……」

変身解除されて倒れる海東に、スウォルツが海東の頭を掴む。

「お宝が欲しいなら俺がいい物をやる。ただし俺の役に立て」

「何だつて……?」

「意見を求めるつもりはない」

スウォルツは海東の頭を鷲掴みにすると、謎の力を注ぎこむ。

「うわあああああー……！」

その様子を、柱の影からウオズが見ていた。

一方、ベランダにいるゲイツは空を見ながらソウゴのことを考えていた。

(時見ソウゴ……何なんだ、あの男は……?)

どうしてこんなにも胸がざわつく……！俺は知っているのか？あいつのことを……)

彼は、ソウゴから感じる胸のざわつきに苛立っていた。

「……ん？なんだ？」

ゲイツがふと空を見ると、何か空が歪んだように見えた。

「はぎゅ〜！」

「どうしたのはぐたん……？」

突然はぐたんが光り出して叫び声を上げると、空が光り出した。

何が起こっているのかを確認する為、ソウゴ達が外に出る。

「何……あれ？」

「複数の生体反応あり。あそこからです」

ルールーが指差した雲の切れ間から、光の球が現れる。

「何あれ……?」

その光の球が消えると、そこから人の影が見え、こつちに向かって降ってくるように見えた。

「人が降って来た!?」

「あれって……!」

そこから降ってくるのは、アナザークウガの事件で一緒に戦ったプリキュア、キラキラ・プリキュアアラモードのいちか達だった。

「うわああああつ!」

いちかがはなと額からぶつかって互いに倒れ、ルールーがひまりを両腕で抱える。

「あ、ありがとうございます」

あおいとあきら、シエルは普通に着地した。

「どわあぎやつ!」

ペコリンと長老はハリーの顔面に落下し、仰向けに倒れると同時に妖精の姿に戻った。

「はぐたん、大きくなったジャバね」

「はなちゃん!」

「いちかちゃん!」

長老がはぐたんの成長した姿を見てそう言っている横で、はなといちかが額をさすつてから顔を見合い、再会を喜ぶ。

「お姉ちゃんの知り合いみたいだけど……」

「この方々はどなた……?」

初対面のことりとえみるがひまりに手差しして尋ねる。

「そもそも、なんで上から……」

「おい、なんか来るぞ!」

するとその時、空からクライアス社製のパワードスーツが現れた。

「おい、あれなんか誰か乗ってるぞ!」

「あれは、ドクター・トラウム……!」

着地点にははなといちかがいて、巻き込まれそうになったが、着地する寸前に突然宙に浮かび、離れた場所に着地した。

「みんな、大丈夫?」

「みらいちゃん!リコちゃん!」

上空には、魔法のホウキに乗ったみらいとリコがいた。

「モフー!」

「モフルン!」

みらいのポシエットの中にいたモフルンが手を振り、ペコリンも手を振った。

「魔法つかいプリキュアか…」

「魔法……?」

「プリキュアって……」

「もしかしてあなた達も……!?」

「観念なさい!」

ルルーとえみるとことりの三人が、あの二人もプリキュアなのだ驚いていると、リコがパワードスーツを装着したトラウムに向かつて観念しろと叫ぶ。

「得意の魔法も科学の前では無力だよ。実はとんでもない発明をしてしまっただよ。それには敵わないだろうなあ。いくら君達でも」

だが彼は有無を言わず、右腕のキャノン砲をみらい達に向けてエネルギーを溜めていた。

「リバース・ザ・タイム!」

トラウムのパワードスーツからキャノン砲がみらいとリコにそれが放たれた。

「はー!」

そこへことはが突進し、キャノン砲に体当たりして光線を止めた。

「はーちゃん!」

「今のつて……」

「惜しかったね、これが当たれば君達を小さく出来るのに」

「そんな事が!?」

「どうでしょ。これが科学によるものだよ」

トラウムがそう言っていると、晴夜は拳を握りしめる。

「晴夜……」

その時ソウゴは、彼の顔から怒りを感じた。

普段は誰でも構わず人助けする位にお人好しの晴夜にも、一番許せない事がある。

それが、科学を悪用しようとする事だ。

「科学は……そんな事にある為にあるんじゃない！」

科学は人に笑顔をもたらすことが出来る！

それが出来ないものは科学なんかじゃねエ！」

人を幼くする。それは確かに凄いでも、それは人を喜ばせるためではなく、人を傷つけるものだ」と知ると晴夜はトラウムから怒りを感じる。

「流石の天才君も、やはり中身は子供だね」

だがその叫びを聞いたトラウムは晴夜の戯言はそこまでとして、彼の乗るパワードスーツは戦闘態勢で構える。

「行くよみんな!」

プリキュア達が変身アイテムを構える。

「[[[[ミライクリスタル!ハートキラツと!]]]]」

「輝く未来をく抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

「[[[[みんな大好き!愛のプリキュア!]]]]」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

「みんな舞い上がれ!希望のプリキュア!キュアアール!」

「[[[[HUGつと!プリキュア!]]]]」

「[[[[キュアラモード・デコレーション!]]]]」

「[[[[シヨートケーキ!元気と!笑顔を!]]]]」

「[[[[レツツ・ら・まぜまぜ!]]]]」

「キュアホイップ!出来上がり!」

「キュアカスタード!出来上がり!」

「キュアジェラート!出来上がり!」

「キュアマカロン！出来上がり！」

「キュアシヨコラ！出来上がり！」

「キュアパールフェエ！出来上がり！」

「[[[[キュラキラ！プリキュアアラモード！]]]]」

「[[[[ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！]]]]」

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

「ふたりの奇跡！キュアマラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「あまねく生命に祝福を！キュアフェリーチェ！」

「[[[[魔法つかいプリキュア！]]]]」

プリキュア達に変身を完了すると、ソウゴ、ゲイツ、ハリーはジクウドライバーを取り出す。

「ゲイツ。ありがとう」

「ふん。お前の為ではない…」

ゲイツはそう言うが、ソウゴは一緒に戦ってくれるだけで嬉しかった。

『[[[[ジクウドライバー！]]]]』

『ジオウ！』

『ゲイツ!』

『ハリー!』

三人がウオッチを起動し、ドライバーのスロットにセットし、ロックを解除して構える。

「[「変身!」]」

その掛け声と共に、三人は一斉にドライバーを回す。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

『ライダータイム!仮面ライダーハ・リー!』

ソウゴ達はジオウ、ゲイツ、ハリーへと変身を完了した。

「じゃあ、俺たちも……」

「久々にやりますか」

「四人で戦うなんて久しぶりですね!」

「さあ、実験を始めようか?」

晴夜達、ビルドチームもドライバーを取り出すと、晴夜と龍牙はビルドドライバーを装着、和也と幻冬は青いレンチ型のドライバー・スクラッシュドライブを装着した。

『ラビット!タンク!ベストマツチ!』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

『ロボットゼリー！』

『デンジャー！クロコダイル！』

四人がドライバーを差し込むと晴夜と龍牙から『スナップライドビルダー』が現れ、その後からアーマーが形成。和也と幻冬の周りからは巨大なビーカーと特殊加工容器『ケミカライドビルダー』が出現した。

『Are you ready?』

「変身！」

晴夜と龍牙は形成されたアーマーが重なり、和也と幻冬はビーカーが割れると『ヴァリアブルゼリー』が放出され、それがボディや頭部のパーツ等になり、装着された。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yeah—!』

『流れる！潰れる！溢れ出る！ロボットイングリス！ブラア！』

『割れる！食われる！砕け散る！クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！』

ビルド、クローズ、グリス、ローグと四人の仮面ライダーが久しぶりに四人での同時変身を完了した。

「よーしー！それじゃあ行くぞー！」

全員が変身したのを確認したトラウムが両足のブースターを噴射させて突進する。

「「はああああああつー！」」

エールとホイップとミラクルが跳び、パンチを叩き込む。

「ふうー！」

グリスとローグがトラウムの動きが止まっている隙に、ツインブレイカーとネビュラスチームガンを放つ。しかし、彼には何のダメージもなかった。

「ならこれだ！」

グリスがクマボトルを取り出し、スクラッシュユドライバーに差し込む。

『クマー！チャージボトル！潰れな〜い！チャージクラッシュユー！』

レバーを下ろすと、グリスの腕がクマのような手が液化化して現れた。

「何あの手？」

「クマみたい」

アーラとフェリーチェが驚いていると、グリスの巨大化したクマの腕はトラウムのパスワードスーツに繰り出す。

「それぐらい」

トラウムのパスワードスーツは腕を出してグリスの腕を抑える。

「残念だったね〜」

「そいつはどうかな」

『ジカンチエーン!』

「でやあ!!?」

ハリーがジカンチエーンの鎖を繰り出し、ワードスーツの足を拘束した。

「なに!!?」

「幻冬はん!」

既に後方ではローグがスチームガンを構えていた。

「はい!」

『クロコダイル!フアンキーショット!』

トリガーを引き、紫のエネルギー弾が炸裂した。ワードスーツはそのまま飛ばされるが、なんとか踏み止まる。

「今だよ!」

「「「たあああああつ!」」」

そこへ、エトワール、マカロン、シヨコラ、フェリーチェが跳び蹴りを叩き込む。

「それくらい!」

トラウムのワードスーツはこれでも起き上がった。

「だあああつー!」

そこへマジカルがキックを繰り返すが吹き飛ばされ頭が当たった。

「お前大丈夫か?」

「全然!計算通りだから」

ゲイツは大丈夫かと聞くと、マジカルは少々強がっていた。

そのままホイップ達が光線を避けながら、キャンディロッドからクリームエネルギーを飛ばして当てる。

『ビートクローザー!』

『ジカンザックス!Oh!No!』

それを見たゲイツとクローズが、ジカンザックスとビートクローザーを召喚し、二人はそれぞれウオッチとボトルをセットする。

『スペシャルチューン!』

『フィニッシュタイム!』

ジカンザックスとビートクローザーのグリップを引っ張り、エネルギーを蓄積させる。

『ヒッパレー!ヒッパレー!ミリオンスマッシュ!』

『ゲイツ!ザックリカッティング!』

「はあーっ！」

ビートクローザーとジカンザックスを振り抜き、パワードスーツを宙へと上げる。

「「はああああああつ！」」

その次がアンジュとカスタードとジェラート、マジカルも跳び蹴りを叩き込み、地面へと落とした。そのまま勢いよく地面へと激突した。

「やっぱり強いねえ……！」

それでも尚、トラウムのパワードスーツはまだ起き上がる。

「行きましよう、私達も」

「はい！」

「「はああああああつ！」」

マシエリ、アムール、アラがパワードスーツの左足に跳び蹴りを叩き込む。体勢が崩れてよろける。

「今だ！ソウゴ！」

「うん！」

ジオウとビルドがジカンギレードとドリルクラッシュャーを構えると、ウオッチとポトルを差し込む。

『Ready goo!』

『フィニッシュタイム!』

ジオウとビルドは同時に飛び上がる。

『ボルテックブレイク!』

『ギリギリスラッシュ!』

「はああ!」

二人同時に技を放ち、ギリギリスラッシュとボルテックブレイクが直撃した事で、トラウムのパワードスーツは腕と足を分断させられる。そして背中から地面に叩き付けられると、そのまま地面を転がるように倒れる。

「スーツが無ければ跡形も無く吹き飛んでた!」

完全には破壊出来無かったが、パワードスーツを大破させることは出来た。

「スーツの機動力、ー99%」

パワードスーツの方もボロボロになり、機動力が99%ダウンした事がアムールの口から告げられる。

「戦闘不能。もう止めましょう、ドクター・トラウム」

「とんだ計算ミスだな、ルールー」

「……?」

「リバース・ザ・タイム!」

トラウムはアムールにそう言い放つと、右腕のキャノン砲を自身に突き付け、リバー・ス・ザ・タイムを発動させて光線を放つ。

全身がエネルギーで覆われると、パワードスーツが修復し始めた。

「何っ……………?!?!」

「時間が戻っている……………?!?!」

そして、完全に修復されてしまった。

——いや、時間が戻ってしまった、というべきか。修復された様に見えた様は、逆再生するかの様に戻っていったかの様に見え、まるでアナザージオウⅡによる力と同じだと思えた。

「どう? アナザージオウⅡの力を、このパワードスーツにも取り入れたんだ」

それを聞いたジオウは、アナザージオウⅡと同じ力と驚く。

「どんなに壊れようとも完全回復。時を操るこの装置があれば無敵!」

「そんな……………!」

エール達が動揺したその時、何かの落ちる音が聞こえた。

「……………」

「ネジ?」

それは、トラウムが装着しているパワードスーツのネジだった。

「あつ……ああああああつ!？」

それから間もない内に、ワードスーツが崩れ落ちた。

「は、はあ……!?？」

「えっ?どうして?」

「いやん……!」

予想外の状況に、ジオウ達は目を丸くした。

「時間を戻し過ぎた!組み立て前に戻ってしまった……!」

「どうやら時間を戻し過ぎて、ワードスーツの組み立て前までに戻ってしまったようだ。」

「アイツ……ただのアホか……ッ!」

「お前が言えるのかよ……」

「夜なべして造ったのに……!一旦出直しだ!それじゃ」

「そう呟くクローズに、グリスが突っ込んでいるのを他所に、トラウムがそう言うと、ワードスーツの部品ごと退いた。」

「私達プリキュアの勝利だ!」

「「やったあ!」」

「メールとホイップとミラクルがハイタッチして喜び合う。」

「勝利……なのかな？」

だがアンジュは、勝利したのかと思いたいが、運良く退いてくれたが正しい様に思えた。

「なんなのあれ？」

トラウムが去ると全員変身を解除するが、さっきのソウゴの戦いを見てゲイツは彼を見つめていた。

「喜んでる場合じゃないでしょ……」

「っ！ そうだ！ いちご山を戻さないと！」

「魔法界も……」

「さっきも、時間を操る機械で……」

とりあえず、ソウゴ達はみんなから何があったのかを尋ねる。

「一体何があったの？」

「いちご山の時間が、トラウムに止められちゃったの」

「魔法界もそう」

「いちご山と魔法界の時間が止まったなんて……」

「いつものように開店の準備をしようと思ったら、トラウムが現れて、いちご山の時間を止めたの」

「魔法界で水晶のお告げを聞きに行ったの」

『偽の力を持つ者により伝説の少女達の時が奪われ、世界の時も止まる』って」

「伝説の少女達はプリキュア」

「だから、みんなに伝えに行こうとしたら、トラウムが現れて魔法界の時を止めたの」

いちか達とみらい達のいるいちご山と魔法界は、彼によって時間を止められたと聞かされた。

「そんな……」

「プリキュアのいる場所が……他のプリキュアの助けに行こう。もしかしたら、狙われているかもしれない」

プリキュアの住む場所の時間が止められた。

もしかしたら、他のプリキュアのいる場所も時間を止められるかもしれないと晴夜は推測する。

「でも、晴夜は他のプリキュアがどこに居るか知ってるの?」

「何度か行った事があるんだ。ここからだど四つ葉町とサンクルミエール市が近いか」

その二つの町には、プリキュア5とフレッシュプリキュアがいる筈だ。

「龍牙、四つ葉町にいるラブさん達にこの事を伝えて欲しいだ」

「よし、任せろ」

「じゃあ、和也と幻冬君は大貝町にいるマナ達にこの事を伝えて欲しい」
「わかった」

三人が了解すると、和也が晴夜の肩に手を置く。

「お前の一番愛している彼女は幼馴染の俺が守ってやるよ」

「!?？」

そう言われると晴夜の顔が一気に赤くなった。

「彼女? って誰のこと?」

「あれ? 知らないですか? 晴夜さんの彼女はマナさんなんですよ」

「ええ! マナと晴夜付き合ってたの!?？」

昨日よく一緒にいる姿を見たソウゴには、ようやく二人が何故あんなに一緒だったのかわかった。

「へえ、君中々やるんだね」

「可愛坊やね。恋話とか話してくれる?」

「ねえねえ、どっちが先に告ったの?」

「私も興味あるのです! 仮面ライダーとプリキュアの恋を!」

あきらとゆかり、ことは、えみるは晴夜の恋事情に興味やいじりで聞こうと話しかける。

「教えてやろうか?」

「!?」

「確か、助けようとした時、『なぜなら、俺は……相田マナが好きだから!』って言うてたなく♪」

「!? つ、つ、土さーろーん!」

告白を土にカミングアウトされると何人か晴夜は冷やかす。ちなみにこれを言ったことのある晴夜は、しばらく赤面となった。

(彼女か……)

「……」

彼女と聞いたソウゴはチラッと、此処にいる一人の女子を見てしまった。

ちなみにこの時、ほまれはハリーをチラッと見ていた。

クライアス社本社ビルの社長室にリストルが経過報告として、プレゼメント・クライの前に現れた。

「トラウム相談役が時を操る装置を完成させました」

「時を……?」

「はい。アスパワワをトゲパワワに変換させて思いのままに」
「で、相談役は？」

「手始めにアスパワワが溢れるエリアを……」

「つまり、プリキュアの地」

「左様で。既に魔法界、妖精達が住むいちご山からアスパワワが消え、時が停止しております」

リストールは時を止めた地を二つ報告した。

「しかし、流石はプリキュア。逃げおおせた後、二元魔王のジオウとキュアエール達と合流。現在、三手に分かれ、他のプリキュアを捜索中」

「ほう〜」

それを聞いたクライは、三手に分かれたプリキュア達に何か対策を打とうとする。

四つ葉町に行く事になったメンバーが、みらいとリコ、ことはの魔法のホウキにえみる、ルルーと妖精達とはぐたんを抱くほまれがいた。そして龍牙はクローズチャージへと変身し、タカボトルの力で飛んでいた。

「あっちモフ」

「匂いで探せるとは、実に興味深い」

「はな先輩達と分かれて良かったのでしょうか?」

ルールーがモフルンに感心していると、リコの魔法のホウキに乗るえみるが表情を曇らせて呟く。

「いいの。こつちで。みーんなきやわたんだから……!」

はぐたん、ペコリン、モフルンは満足げな表情のほまれに抱き抱えられていた。

そのまま四つ葉町に着くと、人影が見えた。

「おっ!あれは!」

「みらいちゃん!リコちゃん!龍牙君!」

「あっ!ラブちゃんだ!」

「おーい!」

そこにいたのはキュアピーチの桃園ラブだった。

そして、大貝町へと戻った和也と幻冬がソリティアへと戻った。

「みんな!」

「かずやん!おかえり!」

「実は大変なんです!」

「どうしたのですか？」

焦っている二人を見て、六花達は何があったのかを聞こうとする。

「それより！晴夜は！晴夜どこなの！」

マナが勢いよく現れ、和也に晴夜は何処と聞く。

「せ、晴夜なら、今サンクミエールに行っただけ……」

「のぞみさん達に……」

和也が晴夜の行き先を伝えている一方で。サンクミエール市に着いたソウゴ達は、プリキュア5のいる学園の方へ向かうためにソウゴ達は徒歩で移動してた。

「この町にのぞみ達がいるの？」

「うん。この先のサンクミエール学園にいるはずだと思うけどね、プリキュア5は」

「プリキュア5……？」

プリキュア5と言う言葉に、上の方で杖を持った金髪オールバックの男性が反応する。

「何か……食べ物をお願いします……！」

するとその男性は、ソウゴ達に食べ物を求めて現れた。

——実はこの人物、プリキュア5と何度も戦った、ナイトメアやエターナルの一員で

もあつた男…ブンビーだった。

ソウゴ達はプリキュア5の情報を知る為に、キラキラパティへとブンビーを連れてきた。

「クジヤクパフェの出来上がり!」

いちか達が作ったクジヤクパフェをブンビーの目の前に置く。

「彩りにこだわってみたの」

「特に羽のデコレーションは——」

シエルといちかの二人が説明する途中で、ブンビーはあつと言う間にクジヤクパフェを食べ切った。

「食べるのはやつ……」

「三日間、何も食べて無かったから……」

「金無いの?」

「聞くも涙語るも涙のお話よ……」

ブンビーはソウゴの質問を無視し、彼らに紙芝居を出して、どうして自分がこうなったのかという説明を始める。

「俺さ、ナイトメアもビックリな超ブラック企業に引き抜かれちゃって、着の身着のまま

に逃げて来たのよ……こんな感じ」

紙芝居が終わると、ゲイツが「そんなことはどうでもいい」と切り捨てて本題を聞く。「プリキュアを知っているんですか？」

「俺様といい勝負をしたからな。プリキュア5は」

「じゃあ、さっそくだけで……」

「待った……！お代わり頂戴……！」

だがブンビーはプリキュア5の説明を聞こうとしたソウゴの言葉を切つて突然立ち上がり、泣きながらお代わりをせがんだ。

「はあく」

「最悪だ……」

ソウゴと晴夜の二人がため息を吐き、中々知りたい情報の本題に話が進まない事に頭を痛める。

四つ葉町でラブと会った龍牙達。広場でラブとルーラーが音楽に合わせて踊る。

「ロボットダンス？80年代に流行ったダンススタイルだね」

「パッパルに教わりました」

二人が踊っていると、タルトとハリーがお互いの苦勞の日々を語り合っていた。

「分かるわー。夜泣きとか参るわなー」

「何日も寝不足が続いたわー」

ハリーとタルトは同じく子育てしている中で、息が合うようだ。

「はーちゃんが小さい頃もそうだった」

「みらいが赤ちゃんの時もモフ」

「モフルンふわふわー!」

はぐたんがモフルンに抱き付いて頬ずりする。

「こっちは育児トークに華を咲かせているのです!……って、まったりしてる場合は無いのです!」

「!……ついペースに乗ってしまつて……」

「右に同じく」

えみるの叫びで、リコとルールーはようやくここに来た目的を思い出した。

「ダンスの大会明日だから、練習しなくっちゃ!」

「時間が止まるかもしれないこの一大事に……!!?」

「止まらないよ。そんな事、あたし達が絶対に許さないから。だから、練習するんだ」

ダンスを止めたラブがえみるにそう言い、微笑みを浮かべた。

「心配すんなよ」

龍牙が不安そうなえみるの様子を察したのか、彼女に声をかける。

「そんな事させねえ為に、一緒に俺達がいるんだろ？」

「はいなのです！」

龍牙に言われ、えみるから焦りが無くなった。

一方、ソウゴ、ゲイツ、晴夜と分かれたはな、さあや、ことり、あきは、プリキュア5を探しに町を回ってた。

ブンビーはまだキラパティにいる為に、いちか、シエル、ツクヨミの三人に任せた。

「プリキュア5……！プリキュア5どこ〜!?？」

「そんな闇雲に探しても見つからないって……」

「まるで落とし物を探してるみたいだね」

「はなは熱心なんです」

「天使のシユワシユワウオーター！」

ことりとあきらがはなに突っ込んでいると、さあやの出演したCMの商品の名前を、前から誰かが叫んでいたのを発見する。

はな達が声のした方を向くと、そこにはキュアドリームの夢原のぞみがいた。

「あなた、CMの子でしょ？」

「はい」

「うららが歌ってるの!」

「春日野うららさんのお友達……!?」

「うん!」

「うららさんは、憧れの女優さんなんです!うららさんの演技で、何度感動した事か……!」

「めっちゃテンション上がってる!」

「さあやがいつもよりもテンションが上がっているのを見たはなは、驚きを隠せなかった。」

「嬉しいな。うららをずっと応援して来て良かった」

「応援?」

「ああ、私、野乃はな!」

「あたし、夢原のぞみ」

「よろしく!」

二人は名乗ってから互いに頭を下げると、勢いあまって額をぶつけてしまった。

だが、一度会ってる筈なのに、どうして二人は互いの事を覚えてないのだ。…と思っ
ているその諸君。

その理由は、アナザージオウIIによる時間の書き換えにより、アナザー龍騎とアナザーブレイドの事件で出会っていた記憶が書き換えられていたからだ。

「いったく……！」

「夢を応援か……何だか、はなと似てるなあ」

「そうですね。雰囲気も似てますし」

はななどのぞみはお互いの顔を見合い、笑顔を浮かべた。

別行動で探していたソウゴ、ゲイツ、晴夜はプリキュア5のメンバーを探していた。

「のぞみさん。何処にいるんだ？」

「晴夜は、のぞみにも会った事あるの？」

「まあ、とりあえず一緒に戦った事があるから」

そんな感じで話しているソウゴと晴夜の二人を、ゲイツは後ろからジツとソウゴを観察していた。

「それに他のプリキュアとも協力すれば過川飛竜だつて止めれると思うよ」

「——そうはいかない」

その時、ソウゴ達の耳に聞き覚えのある男の声が聞こえると、三人の前に過川飛流が現れた。

「過川飛流……」

「時見ソウゴ。世界に王は二人もいない。お前の代わりに、俺が最低最悪の魔王になってやる」

「元々俺は最低最悪の魔王になるつもりはない。お前を倒して、この世界を元に戻す」
そう言うと、ソウゴと晴夜はジクウドライバーとビルドドライバーを装着した。

「ふん」

『ジオウ…!!』

飛流がアナザージオウIIへと変身すると、ソウゴと晴夜はジオウウオッチIIとハザードトリガーを取り出す。

『マックスハザードオン!』

『ジオウ…!!』

ソウゴがジオウウオッチIIを二つに分けると、晴夜はハザードトリガーを起動してビルドドライバーの『BLDライドポート』に差し込み、フルフルラビットタンクボトルを振る。

『ラビット!ラビット&ラビット!』

そして二人はドライバーにウオッチとボトルを差し込む。

「変身!」

ソウゴの背後に現れた二つの時計が左右対象に止まって時計バンドのエフェクトがソウゴの体を纏い。晴夜の身体が『ハザードライドビルダー』と重なりハザードフォームへと変身すると、現れたラビットラビットアーマーを装着する。

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

『オーバーフロー！紅のスピージェイジャンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハエーイ！』

二人がジオウⅡ、ビルドラビットラビットフォームへと変身を完了すると、アナザージオウⅡに向かって行く。

「はぁぁー！」

ジオウがアナザージオウⅡに向けて先に攻撃を繰り出した。

「ぶん」

アナザージオウⅡはジオウの攻撃を防ぐとカウンターで返し、ジオウはその攻撃を受ける。だが、直ぐに起き上がり再度攻撃に出る。

その後しばらく鏝迫り合いとなるが、徐々にアナザージオウⅡの方がジオウを押し始めた。

「ソウゴー！」

ビルドが足を伸ばしてキックを繰り出し、アナザージオウⅡを離す。

「また、お前か!」

「はあ!」

今度はビルドがアナザージオウIIに挑む。

「ちっ!」

ビルドはラビットラビットの特徴である素早さで攪乱させる。しかし、アナザージオウIIは仮面の時計の針を回す。

「そこだ」

「くう!」

未来の時を見たアナザージオウIIは槍の攻撃を繰り返す。ビルドは咄嗟にフルボトルバスターで防いだ。

「晴夜! だったらこれで!」

ジオウがグランドジオウライドウォッチを取り出す。

「——なるほどね。いいお宝じゃない」

だが突如、その背後に海東大樹が現れた。

「海東大樹」

「どうして、ここに!」

「覚えていてくれて光栄だよ、時見ソウゴ君。それと久しぶりだね、桐ヶ谷晴夜君。つい

でに僕の新しい力も覚えてくれないか？」

「新しい力？」

「そう。こうゆう力だ！」

海東が手を向けるとその時、『ピタッ！』っとジオウ達の時間が止まった。

「どうしてあいつが、タイムジャッカーの力を……？」

それを離れたところから見ていたオーラは、タイムジャッカーにしかない力をなぜ持っているのだと驚く。

そのまま、海東はジオウの持つグランドジオウオッチを奪い取る。

「こんなに楽にお宝が手に入るのは初めてだよ。またね」

グランドジオウオッチを奪うと去り際に指を鳴らし、彼らの時を動かした。

「待て！」

「お前の相手はこの俺だ！」

グランドジオウオッチを取られた事に気付いて動揺していると、アナザージオウIIが槍でジオウに攻撃を行う。

「ソウゴーうわあ！」

ビルドがジオウを気にしていると、いきなり背後から攻撃を受けた。

「お前は……」

現れたのは仮面ライダーリストル・クラレットフォームだった。

「初めまして、桐ヶ谷晴夜君。私はリストル」

「リストル……なるほどクライアス社の……」

「あなたと門矢士には、少々困っているのですよ。コソコソと調べられているのが」

「へえ、知ってたんだ……」

「だけど、ここでやられる訳にはいかない」

フルフルラビットタンクボトルを外すと、再びフルフルラビットタンクボトルを振る。

『タンク!』

プレス音の様な音が鳴るまで数回振ると栓を回し、フルフルラビットタンクボトルをもう一度差し込む。

『タンク&タンク!ビルドアップ!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

レバーを回すのと同時に小型のタンクユニットが現れ、ビルドの周囲を囲みながらリストルに攻撃を行うと、タンクユニットは宙に浮かぶ。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

ラビットユニットがパージされ、ハザードフォームへと戻ると宙へ飛び、浮かぶタンクユニットをビルドが装着する。

『オーバーフロー！鋼鉄のブルーウォーリア！タンクタンク！ヤベー！ツエー！』
「ふう！」

ビルドは青いボディに纏ったタンクタンクフォームへとフォームチェンジすると、フルボトルバスターのモードを砲撃へと変え、青い光弾をリストルへ放った。

「あなた達が何を知っているのかは、後々わかることでしょう。今は彼女らの地を攻めるのが優先ですからね」

「彼女ら……お前達は、みんなのいる町で何をする気だ！」

『フルフルマツチブレイク！』

ビルドがリストルに何をするのかを問いながら、フルボトルバスターの青い光弾を放つ。

『フィニッシュタイム！クラレットタイムインパクト！』

しかし、リストルはクライソードに黒いエネルギーを纏い、ビルドの放った光弾を切り裂いた。

そのままビルドへ突撃し、クライソードで攻撃を繰り返す。

「うわああああ！」

リストルの攻撃はビルドと直撃し、吹き飛ばされる。

「答える必要はありません」

「ッ……」

アナザージオウⅡにジオウが苦戦、ビルドはリストルに阻まれジオウの援護にも行けない。

「チッ!」

『ゲイツ!ゲイツリバイブ!疾風!』

その様子を見ていたゲイツは、ゲイツウオッチとゲイツリバイブをジクウドライバーのスロットに装填し、ドライバを回す。

「変身!」

『ライダータイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ疾風!疾風!』

ゲイツはゲイツリバイブ疾風に変身し乱入した。

『フィニッシュタイム!百烈タイムバースト!』

「はああ!」

ゲイツはライダーキックを放ち、リストルをビルドから離れた。

「ジオウ!」

ゲイツはすぐ様アナザージオウⅡにジカンジャックローで攻撃し、ジオウを救った。「行くぞー！」

そのままゲイツはジオウとビルドを連れ、その場から退却した。

「ジオウに負けたようですね」

スウォルツが現れると飛流は変身を解除した。

「負けただと？逃げられたただけだ」

「……逃げられただけですか」

スウォルツは不適な笑みを浮かべる。

一方で、ゲイツのおかげで逃れる事が出来た三人は、近くの屋上へとやってきた。

「ここまで来れば大丈夫だろ」

ジオウ達は一安心すると、一度変身を解除した。

「ありがとう。ゲイツ」

「ソウゴを信じてくれる気になったか？」

ソウゴと晴夜がゲイツにそう聞くが、本人はそっぽを向く。

「俺はただ、貴様ら二人の情けない戦闘で見過ごせなかった。それだけだ」

「だとしてもありがとう。ゲイツはやっぱり俺の知ってるゲイツのままだ」

時間が変わっても、ゲイツはソウゴの知るゲイツのまま、それを再確認したソウゴは思わず笑みを浮かべる。

「お前の知ってる俺は……どんなやつだ？」

「どんなヤツ？んー、初めて会ったとき、ゲイツにいきなり襲われた。何を言っても全然聞いてくれなくて、事あるごとに俺達は戦った……」

でも、そのたびに……俺達の絆は強くなった」

「絆だと……？」

ゲイツとは何度も衝突し、お互いの気持ちをぶつけ合った。

だけど、お互いに目指すものが重なったから、彼らは仲間として一緒に戦った。

「俺もゲイツも、世界を救いたいっていう気持ちは一緒だったんだ。だから今は……信頼出来る仲間だ」

「お前の知るの俺は、お前を信頼してたというのか？」

「多分ね。あ、でもウオズに俺の家臣って言われるのは嫌がってたかもしれない」

「あ？何故俺がお前の家臣にならなければならない！」

「ほら、そんな風にさ」

いつもの知るゲイツの顔になったのを見て、ソウゴから笑顔が戻った。それを見た晴夜はソウゴとゲイツはいいコンビだなと見ていた。

その頃キラキラパーティでは、そろそろブンビーから情報を聞こうと試みる。

「そろそろよろしいでしょうか……？ 私達もう行かないと……」

「ふー、ごちそうさん。食後のデザートが欲しい所だけど、もう行かないとヤバイよ？」
キラパーティに残りたいちか達は、ここまでずつとブンビーの食事を作らされていた。

「ねえ！早く教えてよ！トラウムがいつ動くか……」

「トラウム？何でその名前を？」

ツクヨミがトラウムについて何か知っているなら教えて欲しいと言っていると、ブンビーは知っている人物の名前を聞き、少なからず驚く。

「知ってるの？」

「俺が引き抜かれた先のトコの上司だったからな」

そのまま彼は、クライアス社で知っている事を語り始める。

「俺が引き抜かれたのはクライアス社ってトコでな、トラウムって奴の部署に配属されて——とんでもねー物作らされるのを手伝わされてたんだ。あれはヤバイ。もう声も出ない。あーヤバイ。」

「そのものって何なの？」

「いやもうヤバイとしか——」

「早く言いなさい!」

シエルの問いに同じ様な答えしか返さない彼に痺れを切らしたのか、ツクヨミがテールを叩いてブンビーを怒鳴る。

「わ、分かんないんだよ!相当ヤバイモンだっつのは分かってるんだけど!」
それだけ言うと、ブンビーは慌ててキラパティイから出て行く。

「二人共、早く行つてこのことを!」

「うん!」

急いでいちかとシエルははな達と合流する為に向かう。

ツクヨミも後を追おうと急ぐ。しかし…

「グウウウ」

突如として、アナザライダーがツクヨミの前に現れた。

四つ葉町の商店街に、オシマイダーが二体とビシンが現れた。

「ハリ〜決着付けようよ〜」

ハリーを連れて行こうとビシンが迫ってくる。しかし、ハリーの前に龍牙が出る。

「お前の相手は俺だ」

「龍牙はん」

「なあゝに、久々の強敵に燃えてんだよ」

「君の相手はハリーの後だよ！」

突然自身の前に現れた男に文句を言いながらビシンはジクウドライバーを装着し、二つのウオッチを起動する。

『ビシン！ギアファング！』

そのままウオッチをスロットに装填し、ドライバーを回す。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダービ・シ・ン！ファングタイム！導け！完全なる力を我が手に！ビシン！ギアファング！』

仮面ライダービシンへと変身すると、赤い虎のようなアーマーを纏い右腕に巨大なクローを装備したギアファングへと変身した。

「リコ！」

「ええ！」

「キュアアップ・ラパパ！ダイヤ！」

みらいとリコが変身しようと手を掴むが、それははぐたんの手だった。

「モフルンはこっちモフ！」

「あっ」

「たあっ!」

そこへ既に変身したエトワールとマシエリとアムールが現れ、オシマイダーにパンチを叩き込むが、両腕を交差させて防がれる。

これを見たラブはリンクルンを構える。

「チェインジ・プリキュア!ビートアップ!」

「キュアアップ・ラパパ!ダイヤ!ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!」

彼女らが光が纏われると、龍牙は黒いボトルとオレンジ色の形のしたナツクル・マグマナツクルを取り出した。

「ビシン!お前にプリキュアはやらさへん!」

『ボトルバーン!』

『ハリー!ギアジェット!』

龍牙はナツクルのグリップを上と上げ、そのままドライバーに差し込む。

『クローズマグマ!』

ナツクルを差し込み、ドライバーのレバーを操作すると後ろから巨大なナツクルの形状をしたマグマライドビルダーが作れていき、後ろへ完成された。

『Are you ready?』

音声が届り響くと、龍牙は拳を手に当ててハリーと共に叫ぶ。

「変身！」

そこから流れ出た溶岩・ヴァリアブルマグマが龍牙の体に掛かり、流れ出た溶岩からヤマタノオロチのような八体の龍が現れ固まる。そのままナツクルが前へ動き固まった溶岩は砕け、そこに変身し現れた。

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャア！』

『ジエツトタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジエツト！』

ラブがピーチに変身し、みらいとリコはプリキュアに変身する。

ハリーは仮面ライダーハリー・ギアジエツトに変身し、龍牙は全身がマグマのようにオレンジ色な姿に肩には龍のようなモチーフの装甲と後ろに羽が装着されたフォーム、仮面ライダークローズマグマとなった。

そして、大貝町にもオシマイダーが二体現れた。

「あれがオシマイダー……」

「ジコチューとは違うようですね」

「龍牙からの連絡だと、今何体も復活してらしい」

「みんな！行くよ！」

マナの声とともに、ドキドキプリキュアのメンバーと和也と幻冬が構える。

「プリキュア! プリキュア! ラブリンク!」

「プリキュア! ドレスアップ!」

ラブリーコミュオンとラブアイズパレットを操作すると彼女達の体が光り輝き出し、姿を変えようとする。

「みなぎる愛! キュアハート!」

「英知の光! キュアダイヤモンド!」

「ひだまりポカポカ! キュアロゼッタ!」

「勇気の刃! キュアソード!」

「愛の切り札! キュアエース!」

「運命の切り札! キュアジョーカー!」

『響け! 愛の鼓動! ドキドキプリキュア!』

ハート達全員が名乗ると、和也と幻冬はスクラッシュゼリーとクラックボトルをスクラッシュドライバーへと差し込む。

「変身!」

『流れる! 潰れる! 溢れ出る! ロボットイングリッド! ブラア!』

『割れる! 食われる! 砕け散る! クロコダイルインローグ! オラア! ヘキヤー!』

こちららも変身完了し、戦闘準備は完了だ。

そしてはな達の方にもオシマイダーが現れ、更にトラウムも現れる。

「時を戻し、復活させたオシマイダーだよ」

トラウムの言う通り、彼女達の前に現れたオシマイダーは、以前エール達が戦った事のあるオシマイダーだった。

「プリキュア！メタモルフォーゼ！」

それを見たのぞみは変身アイテムを操作し、キュアドリームに変身する。

「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

「私達も行くこう！」

「ミライクリスタル！ハート、キラっと！はくぎゅ〜！」

「キュアラモード・デコレーション！」

はな達もプリキュアへと変身し、ドリームと共にオシマイダーと戦う。

いちか達を追いかけようとしたツクヨミだったが、アナザーライダー達に拘束されてしまった。そこへ飛流も現れた。

「来てもらおうか」

「何故私が……」

「お前には時見ソウゴを誘き寄せる餌になってもらう。行くぞ」

ツクヨミを連れていこうとしたその時、そこへアナザーカブト、アナザービルドの背に銃撃が放たれた。

「ハッ」

銃撃したのは士だった。そのまま士は2体のアナザーライダーに回し蹴りを炸裂させた。

「あなた……」

「俺の推測どおりなら、お前らにそいつらを渡す訳にはいかない」

「なんだお前？」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

「ほくう、面白い」

その言葉を聞いた飛流はウオッチを取り出す。

「変身！」

それに対抗する為、士はカードを腰に装着したドライバーに差し込み、真ん中の部分进行操作した。

『KAMEN RIDER! DECADE!』

いくつもの影が一人となり数枚のプレートが現れ、その頭部に向けて縦に貫きはめ込まれると、黒とマゼンタの仮面ライダーデイケイドとなった。

「逃げろ」

逃げろと言われたツクヨミは、直ぐにここから逃げた。

「追えー！」

逃げるツクヨミを、アナザービルドとアナザーカブトが飛流の命令で追いかける。

そこへ、ソウゴ達も駆け付けつけた。

「あのピンクのは誰だ」

「門矢士だよ。あとマゼンダね」

ソウゴはデイケイドの色に関してツッコミを入れながらゲイツに紹介する。

「行くぞ。桐ヶ谷、ソウゴ」

「え？」

「お前…」

ようやく信じてくれたゲイツにソウゴは笑みを浮かべる。

「ぼやぼやするな」

「ありがとう」

ソウゴは信じてくれた事に礼を言うと、三人はジクウドライバーとビルドドライバー

を装着した。

『ジオウ!Ⅱ!』

『ゲイツ!ゲイツリバイブ!剛烈!』

『グレイト!オールイエイ!ジーニアス!』

三人がドライバーにそれぞれウオッチとボトルを差し込むと、ソウゴとゲイツにはそれぞれ二つの時計と砂時計の付いたタイマーが背後に出現し、晴夜の後ろには加工設備プラントが作られていき、何本ものボトルが晴夜の後ろを囲む。

『Are you ready?』

ソウゴがポーズを構え、ゲイツがドライバーを掴み、晴夜が人差し指を頭の上に当てると、三人は叫ぶ。

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ!Ⅱ!』

『ライダータイム!リ・バ・イ・ブ 剛烈! 剛烈!』

『完全無欠のボトルヤロー!ビルドジーニアス!スゲイ!モノスゲイ!』

三人が変身を完了すると、デイケイドに加勢しアナザージオウⅡに戦いを挑む。

「ツクヨミは!?」

「アナザーライダーに追われている!」

「ソウゴ、ここは俺に任せろ！」

「お前はツクヨミの元へ行け！」

「分かった」

ビルドとゲイツはジオウにアナザージャイダー達を任せ、ツクヨミの元へ向かう。

「ちよつとは手伝う気になったか」

「お前が手伝うんだ！」

ゲイツとデイケイドが話していると、ビルドがアナザージャオウⅡと戦っていた。

「過川飛流！あんたソウゴだけじゃなくて、関係ないプリキュアのみんなも襲う理由はないだろー！」

「あの女達は時見ソウゴと関わっている。奴らが消えれば時見ソウゴはさらに追い詰められる」

アナザージャオウⅡはジオウが傷つける事ができるのならば、自身はプリキュアすらも狙うのだと語る。

「——あんた、可哀想だな」

「…なんだと。可哀想だと？」

可哀想だとビルドは告げると、アナザージャオウⅡはどう言う事だと問い掛ける。

「あんたがやっているのは、ただのソウゴへの嫉妬だ」

「嫉妬だと……?」

「ソウゴはあんたにないものを持っている。それが悔しいだろ」

「そんな事は……ッ!」

「そんな理由で時間を変えるだなんて、お前はまるで他人が持っているものを無理矢理奪うような、幼過ぎる子供の同じだ!」

「うるさい!」

アナザージオウⅡがビルドに憤怒しながら拳を振り上げる。

しかし、ビルドはその拳を掴んだ。

「さあ………実験を始めようか?」

そのまま掴んだままドライバーのレバーを回すと、ビルドの右側の装填されたボトルが光り出した。

『ワン サイド!』

光り出したボトルのエネルギーは右腕に収束されていく。

『Ready go! ジーニアス アタック!』

ビルドのライダーパンチが決まり、ビルドの拳からアナザージオウⅡにエネルギーが注入される。

「くう!」

危機感を察知したアナザージオウⅡは直ぐに離れたが、そこへゲイツが突撃した。

「はぁぁー！」

「ふん！ デイヤアアアア！」

ゲイツが動けない隙に攻撃すると、デイケイドがライドブツカーで攻撃し、アナザージオウⅡが飛ばされる。

「貴様ら……！」

アナザージオウⅡを三人の仮面ライダーは圧していた。

その頃ツクヨミは、アナザーライダー2体に追い詰められた。

「ツ……！」

ツクヨミは咄嗟にアナザーライダーの時を止めると、その間に逃げようとする。

だがそこへウールが現れ、時を動かす。

「どこで覚えた力か知らないけど、時間を止めるのは僕達の専売特許だよ」

それを見たツクヨミはウールに向け、フェイスフォンを放つ。だが、ウールはすぐに銃弾の時を止めた。

「危ないな」

「ツクヨミー！」

ウールはツクヨミからファイズフォンXを奪うと、そこへツクヨミを助けに来たジオウがその場に到着すると、そこへウオズが立ちはだかる。

「ウオズ!?」

「ここは私が」

「助かるよ」

ウールはツクヨミを拘束すると、彼女を連れ去って行ってしまった。

「ウオズ……何で? どうして?」

「言っただろう。私は新たな魔王に使えることにした。かつての我が魔王引いてくれ。さもなければ……」

ウオズはギンガミライドウオツチを出し、変身して戦つても阻止すると警告する。

「君とは戦いたくない」

「それは私も同じ事。私の成すべき事。それは今も昔も変わらない」

二人はお互いに戦いたくないという気持ちを伝えるが、彼らの間には緊迫とした空気が漂っていた。

「はああああああつ!」

町の方では、エールとドリームがオシマイダーに向かって跳び、ダブルパンチを叩き

込んで仰向けに倒す。

「やるね、エール！」

「ドリームも！」

「オシマイダーはただ復活した訳では無い。私の偉大な発明品なのだ。ストップ・ザ・シヨウタイム！」

彼女達の戦いを観察していたトラウムの叫びと同時に、パワードスーツから大量のトゲパワワが溢れ出す。

立ち上がったオシマイダーが目を光らせると、トゲパワワの竜巻となってエール達へと向かう。

「はあっ！」

「やあっ！」

エール達の前にホイップとパルフェが現れると、そのままクリームエネルギーとりボンでバリアを作る。

四つ葉町では、オシマイダーとハリーやエトワール達が戦い、クローズはビシンと戦っていた。

「君、中々やるじゃない。でも……」

『フィニッシュタイム!ファンクタイムデストロイ!』

ビシンはドライバーを回し、クローに貯めたエネルギーを解放するとクローズに向けて放つ。

「僕の敵じゃない!」

対抗するようにクローズがナツクルを外し、もう一度ボトルを差し込み。

『ボトルバーン!』

「力がみなぎる!魂が燃える!俺のマグマがほとばしる……ッ!」

クローズは叫びながらナツクルに手を当てると、ナツクルからオレンジに輝く炎が噴き出していた。

「もう……誰にも、止められねえ!」

『ボルケニツクナツクル!アチャー!』

「ぐっ!!?……ぐわあああ!」

クローズのマグマの炎を纏ったナツクルがビシンの攻撃を避けてカウンターとして放ち、ビシンを吹き飛ばした。

その時、こちらものオシマイダーも同様に目を光らせる。

「あぶないー!」

「えっ?」

危機を察知したはぐたんが、あぶないと告げてミラクルの足に抱き付く。

こちらのオシマイダーも同様にトゲパワワの竜巻となり、ミラクル達へ向かった。

「ヤバそうね……！みんなこっちに来て！」

全員が一旦マジカルに固まる。

「リンクル！アクアマリン！」

マジカルがリンクルステッキにアクアマリンをセットし、周囲に氷のドームを作る。

アナザージオウⅡと戦っていた三人にも、この町にいるオシマイダーの竜巻が襲ってきた。

「二人ともこっちに！」

アナザージオウⅡから一旦離れ、ビルドにあつまる。

「はあ！」

ビルドはジーニアスポトルの力から作られたバリアで、デイケイドとゲイツを包む。

そしてジオウとウオズにも、その竜巻が襲う。

「あつ！！？」

「ツ！！？」

ウオズは咄嗟にマフラーを伸ばし、ジオウを竜巻から守るように囲む。
「うわああ!」

その後、バリアが消えてからエール達が周囲を確認すると、空が暗雲で覆われていたが、その暗雲は動いて無かった。

「オシマイダーが時間を……?」

「そんな……」

どうやらトラウムとオシマイダーの力によって、地球の時間が止まってしまったようだ。

「オシマイダーをあちらこちらに放ってね、一斉に時を止めた。」

よくまあ、凄いだな……だが、残りはプリキュアと仮面ライダーだ」

「そんな事無い!プリキュアは、まだいる!絶対に!」

トラウムは言外に諦めろと言うが、エールはまだ仲間はいると信じている事を叫びながら伝える。

その頃、クライアス社へと戻った海東の前にオーラが現れた。

「聞きたいことがあるんだけど……」

「何を聞きたいんだい？」

「あなたが使った力のことよ」

オーラはあの時の海東が使った力が気になっていた。

「貰ったんだよ。あんたの仲間、スウォルツにね」

不信感を募らせていた彼女の質問に対し、平然と海東はスウォルツから貰ったと打ち明ける。

ウールがツクヨミを連れてクライアス社へ入ると、そこには既にスウォルツがいた。

「連れてきたよ」

「よく来たな。ツクヨミ」

「何のつもり？」

ツクヨミが目の前にいる男に向かって強気に言い放つが、スウォルツはその様子を悠々とした態度で見ながら口を開く。

「聞きたい事があれば教えてやる。我が……妹よ」

「妹……私が……？」

スウォルツの口からツクヨミと自身は兄弟だと聞かされ、ツクヨミはもちろん、その

場で彼女を拘束していたウールも、驚きのあまり思わず絶句してしまうのだった。

次回! Re・HUGつとジオウ!

特別編3 その3. 2018: 全員集合!今こそ元の世界へ戻れ!

特別編3 その3. 2018 : 全員集合！今こそ元の 世界へ戻れ！

ドクター・トラウムにより倒したオシマイダー達がプリキュアのいる場所で蘇り、ソウゴ達はプリキュア達のいる場所へと応援に向かう。

しかし、トラウムはオシマイダーを使い、地球上のすべての時を止めてしまった。

「これは……」

ジオウもあたりを見渡すと、未来で見た光景と同じ光景が目映った。

竜巻が現れたあの時、ウオズが咄嗟にマフラーで自身を囲んだおかげで助かったが、その代償としてウールにツクヨミを連れ去られてしまい。気付くとウオズもいなくなっていた。

「はああー！」

「ッ……」

立ちすくんでいるジオウの下に、アナザージオウⅡと戦っていたデイケイド、ビルド、ゲイツの三人が流れ込んできた。今はアナザージオウⅡが振り回す槍に対し、ビルドがフルボトルバスターで応戦している。

「っ!?? みんな!」

それを見たジオウがサイキョーギレードを繰り返し出し、アナザージオウIIをビルドから離した。

「ジオウ、ツクヨミはどうした?」

「クライアス社に連れて行かれた」

「何だと、貴様!」

「ごめん……」

「仲間を救うこともできなかつたか。無様だな、時見ソウゴ」

仲間割れを始めた彼らの様子を見て嘲笑いながら、アナザージオウIIはジオウの霸王斬りを模した技を繰り返した。

「させるか!」

ビルドがダイヤモンドの盾を作り、攻撃を防御しようとする。

だがアナザージオウIIの攻撃を受け止めきれず、形成されたダイヤモンドは破壊されて四人に直撃した。

「ちっ……一旦引くぞ」

デイケイドがオーロラカーテンを作り出し、三人と共にこの場を一度撤退した。

「時見ソウゴ……次に会う時が、お前の最後だ」

ジオウ達が別の場所で戦っていた一方、町で今もお戦っているエール達は：

「全ての力をトゲパワワに変換して時を止める、最高傑作のビツクリドンドンメカ。堪能して頂けたかな！」

「町が……」

「やああああああつ！」

エール達が驚く中、ドリームがトラウムに向かって跳ぶ。

「は!!?」

トラウムは突然の攻撃に一瞬戸惑うも、ドリームから繰り出されたパンチを両腕を交差させて防ぐ。

「絶対、町を元に戻すんだから！」

「ドリーム！」

「はああああああつ！」

屋根の上に立ったホイップが巨大クリームエネルギーを放ち、トラウムを背後の時計塔に叩き付けて身動きを取れなくする。

「デコレーション!!?」

トラウムがふと時計塔を見ると、クリームエネルギーが当たった時計塔の上部には、

ケーキの様なデコレーションが施されていた。

「プリキュア! シューティング・スター!」

その隙にドリームがシューティング・スターを放ち、直撃させた。

「やった!」

ドリームが着地し、右腕を戻してからピースサインを作り、エール達と喜び合った。

一方、四つ葉町にいるハリーやクローズにミラクル達。

「今のは一体……」

「何が起きたの?」

はぐたんの声で咄嗟にだが、マジカルが氷のドームを作った事で竜巻を防ぐ事ができなかった。

ドームを消すと、彼女らは目の前に広がる周りの光景に驚いた。

「急に静かになったペコ……」

「どうなってんだよ……これ……」

ビシンはいなくなっていたが、その場に居た人も、宙を飛ぶ鳥も、忙しく動いていた筈の物も、全てが人形やフュギアのように固定されており、周りの時間が止められている事がうかがえる。

「まさか……時間が止められた……？」

「そんな事出来るの？」

「これ程のモンはクライアス社の社長のジョージ・クライしか出来へんが……トラウムも……までやれたんか……？」

そこへオシマイダーが現れ、攻撃を繰り返す。

「やあーっ！」

すぐさまピーチが跳び蹴りを叩き込む。

「だらっしやあっ！」

ハリーがギアジェットの加速を利用しパンチを叩き込み、オシマイダーの体勢を崩す。

「マシエリポップ！」

「アムールロックンロール！」

怯んだ隙にマシエリとアムールがマシエリポップとアムールロックンロールを放ち、オシマイダーを吹き飛ばす。

「スタースラッシュ！」

エトワールのスタースラッシュに乗ったエトワール・ミラクル・ピーチが跳ぶと、スタースラッシュがオシマイダーに向かって行き命中する。

「トリプルプリキュアキック!」

『Ready go! ボルケニックブレイク!』

「はあく…おりややや!」

そのままトリプルキックを叩き込むと、クロースはドライバーを二度回し、彼の右手からマグマのドラゴンが放たれ、更にオシマイダーを吹き飛ばして地面に叩き付けた。

「ミラクル!」

「オツケー!」

「リンクル! アクアマリン!」

マジカルがリンクルステッキにアクアマリンをセットし、冷気を放ってオシマイダーを凍らせる。

「リンクル! ペリドット!」

次にミラクルがリンクルステッキにペリドットをセットし、木の葉の竜巻を作って上空へ吹き飛ばした。

吹き飛ばされたオシマイダーはそのまま消滅した。

「助かったのです……」

「でも……ホントに時間が止まってる……」

「他のみんなも心配だね……」

「ま〜ま……」

不安気な表情のはぐたんを見た妖精のシフォンが、何かを決める。

大貝町では。竜巻が発生した時、ドキドキプリキュアは三種神器の一つであるミラクルラブリーパーツの力でバリアを作り竜巻を防いだ。

「なんだろうこれ……」

「これが晴夜くんが言ってた、クライアス社の時を止める力……」

「なんて事を……許せませんわ」

「オシマイダ〜！」

クライアス社に怒りを感じていると、いきなりオシマイダーが拳を振り上げてパンチを仕掛ける。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

「プリキュア！スパークルソード！」

だがロゼッタがロゼッタリフレクションを展開して防いでいる間に、横からソードがスパークルソードを放った。

「プリキュア！スピニングウインド！」

『ツインブレイカー！』

ジョーカーが竜巻を作ってオシマイダーの動ける範囲を狭め、そこへダブルツインプレイカーを出現させた。グリスが突っ込んだ。

「激昂!」

怒涛の声を叫びながら、ツインプレイカーによる攻撃を行う。

「激烈!」

更にダブルツインプレイカーにボトルを合計四本差し込む。

「激襲!誰が俺を満たしてくれるんだ!コラッ!」

『『シングル!ツイーン!ツインプレイク!ツイーンフィンッシュ!』』

グリスのダブルツインプレイカーが命中し、オシマイダーが怯むのを確認したローグはドライバーのレバーを下ろす。

『クラックアップフィンッシュ!』

足からワニの口のようなエネルギーが出現し、オシマイダーを掴みながら何度も地面に叩きつけ、そのまま吹き飛ばした。

「ハート、今です!」

最後にハートがラビーズをラブハートアローにセットする。

「プリキュア!ハートシュート!」

弓を放つかのように引くと、目の前に巨大なハートが現れる。

それをウインクしてから手を離すとハートが放たれ、オシマイダーに直撃し浄化された。

「やったね！ハート！」

「うん！でも……」

ダイヤモンドがオシマイダーが浄化された事を喜ぶが、ハートは時の止まった大貝町を見てとても悲しい表情を浮かべた。

「晴夜、大丈夫かな……」

彼女は、己にとって一番大事な人でもある晴夜に不安を感じていた。

クライアス社に捕らわれたツクヨミは、スウォルツによって会議室へと連れてこられる。

「私があなたの妹って……嘘でしょ」

そんな中、スウォルツの妹と聞かされた彼女は動揺しながらも、彼の言うことが信じられなかった。

「驚くのも無理はない。だがお前はやはり、父がお前に継承した力に目覚めたはずだ」

「それって、時間を停める力……？」

「その力は、我が一族で認められたものが与えられた特別な力だ」

いつの間にか身につけていた時間停止能力が、元々自分が持っていたものだとは知らされ、手のひらを見つめながら同様する。

そして彼女の横で話を聞いていたウールは、スウォルトツの話の主旨を掴めないでいた。

「ちよつと待つて……そんな話、聞いてないんだけど……」

「話す必要がなかったからな……」

「は……? おかしくない? 僕達の目的は明日を奪つて、オーマジオウに代わる新たな王を擁立することだろ!!?」

それじゃ、スウォルトツが王様になりたいみたいじゃないか——」

そう言うのと、スウォルトツはいきなり手からオーラを放ち、ウールを吹っ飛ばす。

「ツ!!? ……何すんだ!」

いきなり攻撃された事に混乱していると、海東と一緒にオーラが現れ、スウォルトツに向けて自身が聞いた情報を問い詰める。

「凶星みたいね……この海東つて男、タイムジャツカーの力を使った。力をあなたからもらつたつて聞いたわ」

「何だつて……」

海東が持っている力とウールとオーラが持つ時止め能力は、同じくスウォルトツによつ

て与えられたものだと言われたウールは混乱する。

「あれ。それって言っちゃまずいことだった？」

「ちゃんと説明してもらえるかしら」

「——いいだろう。こういうことだ」

スウォルツはオーラの頭を掴むと、彼女の力を奪い始める。

「うう……?!?うああ……うう……」

「オーラ！」

「力を失ったことを感じるか？お前達に力を与えたのは、俺。与えられるということは、いつでも奪えるということだ……」

それを聞いたウールはスウォルツに、ツクヨミから奪ったファイズフォンXを発射するが、腕を上げるだけであっさりと防がれてしまう。

「このお！」

このままでは不味いと思った彼は時間を停止し、この場からオーラを連れ逃走した。

「海東、やつらはもう不要だ。始末しろ」

「分かった。約束のお宝、期待しているよ」

海東が二人を追いかけける為この場からいなくなると同時に、スウォルツはツクヨミの拘束を解く。

「さて、何から話をしようか……妹よ」

スウォルトツとツクヨミの関係。時間を止める力。

そしてスウォルトツの語る一族とはどう言う事なのか、ツクヨミはただただ困惑する事しか出来なかった。

サンクルミエール市にいるエール達は、トラウムのパスワードスーツを時計塔へ突きつけていた。

「ほーう、これがプリキュアか……」

そこへ飛流が現れ、時が止まった中で何事も無く歩き寄る青年の姿に彼女達は用心する。

「あなた誰？」

「あの人は過川飛流。クライアス社の魔王です」

「魔王？」

アンジュがドリームに飛流の説明をしていると、彼はアナザージオウIIウオッチを取り出し起動させ、腰の位置へと移動させる。

『ジオウ……II!』

「ふん！」

アナザージオウⅡへと変身して腕を掲げると、トラウムのパワーダースーツが時間を戻す能力で修復されていく。

「復活！」

「あつ！時間戻した！」

「えっ!?? 何それ!??」

ドリームがアナザージオウⅡの力に驚いていると、トラウムのパワーダースーツが完全に元通りの姿へと戻る。

「ダメージを受けても元通り」

「プリキュア……時見ソウゴの仲間は全て消す！」

ソウゴの仲間であるプリキュアを始末する為、アナザージオウⅡによってソウゴ達が今まで戦ってきたアナザーライダー達がこの地に召喚された。

「今度は何？」

「なんかとても変な集団……」

「アナザーライダーです！」

「アナザーライダー？」

「クライアス社が作った、仮面ライダーの力を奪ったライダーなんです」

アーラとアンジュが説明していると、アナザーライダー達はエール達を取り囲む。

「キュアキュア——!」

「?」

「プリプ〜!」

突如として聞こえた声と同時に、時計塔の真上からゲートらしき物が作り出される。

「トリプルプリキュアキック!」

そのゲートからエトワール・ミラクル・ピーチが出てトリプルキックを叩き込み、トラウムを地面に叩き付けた。

「ヤア!」

すぐ後にマシエリ・アムール・マジカルも現れ、一斉に着地すると、アナザーライダーに一撃与え陣形を崩した。

「なんだこれは?」

『フィニッシュタイム!』

『Ready go!』

『ジェットタイムフィニッシュ!』

『ボルケニックアタック!』

「おりややや!」

アナザージオウIIがプリキュアに気を取られる隙に、ハリーとクローズのライダー

キックが決まった。

「ツ……あ、あ、ああああ……ツ！一体どう言う事だ……」

攻撃を受けたアナザージオウⅡが苛立ちを募らせて起き上がると、現れたタルトが一体どういう事かの解説を行う。

「どや！シフォンのテレポーションやで！」

「プリプ〜！」

更にモフルンやペコリン等といった妖精達も現れ、シフォンの力でゆつくりと降りて来た。

「ドリーム！」

「ピーチ！久しぶりー！」

ピーチとドリームがハイタッチを交わして再会を喜ぶ。

「はぐたん！」

ペコリンに抱えられたはぐたんがエールの前で笑顔を見せる。

「まだ残っていたとは……！」

トラウムが再び増えたプリキュアを見ながらそう叫んで起き上がる。

「そう簡単には、やられないよー！」

「くっ……やれ！」

アナザージオウIIの命令で倒れていたアナザーライダー軍団が起き上がり、一斉にプリキュアに襲いかかる。

「きゅぴらっば〜!」

「この声!?」

またしても声が聞こえると、その声にクロースは気づいた。

「プリキュア!ダイヤモンドシャワー!」

いきなりの吹雪により、前に出たアナザーライダー達の足を凍らせた。

「ときめきなさい!エースショット!ばきゅくん!」

更に、キュアエースの放ったエースショットが、キュアダイヤモンドによって凍らせたアナザーライダー達に直撃する。

「みんな!お待たせ!」

「ハート!」

アイちゃんの力で、ドキドキ!プリキュアのメンバーもここへ来ることが出来た。

「また、プリキュアだと!どこまで邪魔をする気だ!」

「オラア!」

「…ツ!?」

アナザージオウIIが新たなプリキュアが現れた事に憤怒していると、そこへグリスが

現れ、ツインブレイカーで攻撃してきた。

『デイスチャージボトル！潰れなさい！デイスチャージクラッシュユー！』

そこへダイヤモンドボトルの力で礫ダイヤモンドをローグが放ち、アナザージオウIIを膝をつかせた。

「俺たちもいるぜ！コラっ！」

「また……仮面ライダー……」

アナザージオウIIの前にはクローズ、グリス、ローグ、ハリーの四人が現れた。

「仮面ライダー……選ばれた奴らが……うわああああ！」

叫びながら槍を振り回して四人に反撃するが、四人はすぐさま回避する。

クライアス社から逃げていったウールとオーラは身を隠し、ウールはカーテン越しに追手がいないか確認していた

「あいつら、ずっと騙してたんだ……王を擁立しようとか言って、自分が王になるために僕達を利用した……！」

今までずっとスウォルツに騙されていだと知り、彼は壁に拳を当てる。

「落ち着きなさい」

「落ち着いてられるかよ！」

オーラが制止するも、ウールはそう叫ぶとテーブルを蹴飛ばす。

「絶対に仕返ししなきゃ気が済まない」

スウォルツに反撃したいと試みる。しかし、今の彼には隙がない。

「やめた方がいいよ」

何か策を練らないと思わしている中、聞き慣れた声を掛けられた二人が振り向いた。

「下手に逆らえば、君まで力を奪われるだけだろうね」

彼らの前に海東大樹が現れると、ウールはスウォルツの差し金と思い、ファイズフォ

ンXを向ける。

「待って。君達と戦うつもりはないよ?彼には始末しろって言われたけどね」

「何だって?」

戦うつもりはないと聞くと、ファイズフォンXを下ろした。

「僕はお宝が手に入ればそれでいい。だからって、誰かの言いなりになるのは気に食わない」

そう言って海東はポケットから何かを取り出し、それをオーラへ投げ渡す。

それは海東が先程ソウゴから奪った、グランドジオウライドウオツチだった。

「これは……」

「好きに使っていいよ」

彼はウオツチを渡し、二人の下から去ろうとする。

「……あ、そうだ。変に勘ぐられるのも勘弁だから、仕事はさせてもらおうかな」

……が、思い出したかのように足を止めると、海東はカーテンを開いて扉を開ける。

「おい、ここにいたぞ」

扉の向こうには二体のアナザーライダー達がいた。

「!?……お前ええ……っ！」

「悪いね」

ウールは襲いかかってきたアナザーファイズとアナザーWに向けて銃撃し、怯んだところを彼女を連れてすぐさま逃げた。

一方で、士のおかげでアナザージオウIIから逃れたソウゴ達は近くの廃虚の建物へと場所を変え、ソウゴは海東にランドジオウウオツチが盗まれた話を話す。

「海東が時間を止めた……」

そして、それを聞いた士は顔を歪ませながら聞いていた。

「元からあんな力を使ったのか？」

「……いや。そんな芸当はできなかつたはずだ……おかしなやつではあるけどな」

海東にランドジオウウオツチを奪われた話を聞いていた晴夜はまさかと思い、士に

話しかける。

「士さん。もしかして、例のスウォルツが?」

「スウォルツ?それって、タイムジャッカーチームのリーダーのあいつが?」

「晴夜がスウォルツが関わっていると推測すると、ソウゴは少し驚いた。」

「ん?あれ?」

「晴夜達はソウゴに言われ窓の外を見ると、ここまでアナザーライダー達に追われて逃げるウールとオーラを目撃した。」

「クライアス社がアナザーライダーに……」

「助けるよゲイツ、晴夜」

「ゲイツはタイムジャッカーである二人がアナザーライダーに襲われている光景を目にしていると、彼らを助けようとするソウゴを睨みつける。」

「馬鹿言うな。あれは罠だ」

「だとしても放っておけないじゃん」

「確かに何かを聞き出せるかもしれない」

「……仕方ない」

『ジクウドライダー!』

士を残して三人はドライバーを装着すると、建物の外に出ると、ウールとオーラの前

に現れた。

『ジオウ！W！』

『ゲイツ！ファイズ！』

『ラビットタンクスパークリング！』

三人がウオッチとボトルを装填し、ドライバーを操作する。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！アーマータイム！サイクロン！ジョーカー！』

ダブル！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！アーマータイム！コンプリート！ファイズ！』

『シュワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

三人が変身を完了すると、アナザーライダーに応戦する。

ジオウとビルドはアナザーダブルを相手取り、ゲイツはアナザーファイズと交戦に入る。

『フィンツシュタイム！』

『Ready go！』

風を纏ったジオウが上昇し、ビルドは右手に泡を噴出させながらエネルギーを纏う。

『マキシマムタイムブ레이크！』

『スパークリングファイニッシュ!』

同時にライダーキックとライダーパンチを放ち、アナザーWを倒した。

「はああ!」

ゲイツもドライバーを回し、飛び上がる。

『ファイニッシュタイム!ファイズ!エクシードタイムバースト!』

そのままアナザーファイズにライダーキックを炸裂させ、着地すると、アナザーファイズはその場で爆破した。

「どうして君達が襲われてるの?」

アナザーライダーが消えると、ジオウがウールとオーラから事情を聞こうとする。

「余計な事を……君達には関係ないだろ。行こう」

しかしウールは話す気はなく、ジオウ達の前から去ろうとする。

「待って……頼みたい事がある」

「えっ?」

だがオーラはウールを止めると、ジオウ達に頼みたい事があると言う。

一方で、ツクヨミはスウォルトの言ったことに戸惑いを感じていたが、彼女はスウォルトに自身が疑問に思っていた事を問う。

「私とあなたが一族だつていうの?」

「そうだ。俺達はこの世界とは別の世界からやってきた。そして時間を操る力は、我が王家の継承されたのみ引き継がれてきた」

「王家?」

「王家では兄である私が継ぐのがふさわしい。」

だが……次の王に選ばれたのは、妹のお前だった」

「私が……?」

スウォルツの口から、ツクヨミが一族の新たな王に選ばれたと聞かされると、そのまま彼は忌々しいと言わんばかりの表情を浮かべながら語り続ける。

「到底承伏できない決定。だから私はお前の記憶を奪い、あの世界へと追放した」

スウォルツの言う事が本当なら、自身が記憶を失っていた事に合点が着く。

しかし、ツクヨミがいなくなったのなら、その世界はどうなったのかという疑問が残る。

「私達の両親は……」

「認められない決定をした親など、私が葬った」

「えっ——」

なんとスウォルツは、ツクヨミの親であり自分の親でもある両親を、自分の手で葬つ

たと語り出したのだった。

「そして私は、父の持つ力の全てを、私が奪った」

「そんな……」

「しかし、生きているとは思わなかったがな。

…だが、今となっては好都合だ」

今度は笑みを浮かべながら語ると、スウォルツがツクヨミに向けて手を上げる。

「私の力は失いかけている。だから、お前の力を頂く。意見は求めん」

そう言うスウォルツは手から放たれたオーラにより、ツクヨミから力を奪い始める。

「うわあああーっ!?!」

ツクヨミが悲鳴を上げると、そこへウオズが現れた。

「ツクヨミ君!」

ウオズがマフラーを放ってスウォルツの妨害をすると、彼女へ近づこうとする。

「邪魔だ」

「ツ……!?」

しかしスウォルツがウオズへ不気味なオーラを放ち、壁に叩きつける。

「ああ……ツ!」

「貴様が私の行動を探るために潜り込んでいたのは承知している」

「分かっていて全てを明かすとは、随分気前がいいじゃないか」

「この力が手に入れば、もう誰も私を止める事は出来ないからな」

そう告げるとスウォルツは更にツクヨミから力を奪う。

「うう……うう……あああああ……ううっ!!」

「クツ……はあ!」

ウオズは再びマフラーを伸ばし、失神したツクヨミを連れてクライアス社から脱走した。

「フ、ハハハ……素晴らしい力だ……」

二人がいなくなったのを確認したスウォルツは高笑いをし、ツクヨミから力を完全に奪った事で上機嫌になる。

「後は奴の力だ」

だがスウォルツは、まだ必要な力を狙っている模様だった。

オーラに頼まれたソウゴ達は、彼女らから事情を聞く。

「あいつに一泡吹かせてやりたいの」

「あいつって?」

「スウォルトだ。僕達はあいつに利用されてた」

「……………どういふことだ」

リーダーである筈のスウォルトツに一泡吹かせてやりたいと言う二人にゲイツが疑問を抱くと、晴夜はウールに近づくと、

「あのさ、スウォルトツは『こことは別の世界から来たんだ』…と打ち明けたのか?」

「つ?」? なんて、お前が知っているの?」

晴夜がスウォルトツの正体に気付いていた事を知ると、ウール達はどのように知っているのだと彼の顔を見ながら問う。

「調べたのは、あの人だけだな」

それに対して晴夜は、土の方を振り向くことで彼らの疑問に応える。

「門矢士……………」

門矢士が調べたのだと聞かされると、オーラはソウゴに近づくと、

「あんた、これであいつを倒せる?」

オーラは海東から預かったグランドジオウオッチを見せる。

「グランドジオウオッチ……………どうしてそれを?」

「できるかできないか聞いているの」

オーラに出来るか出来ないかを問われると、ソウゴは彼女からウオッチを手取る。

「分かった。約束する」

グランドジオウオツチを受け取り、二人に約束する。

「約束を破つたら許さないから」

ウールとオーラはソウゴにグランドウオツチを託すと、直ぐにソウゴ達の前から去っていった。

「ねえ、スウォルツが違う世界からだって、門矢士はいつ知ったの？」

「それに関しては俺は聞いていないから」

士が晴夜に教えたのはスウォルツの正体だけだった。

「我が魔王。ゲイツ君」

するとそこへ聞き覚えのある声が聞こえた。

「ツクヨミ……」

ソウゴ達の前に現れたのはスウォルツから逃れたウオズと、彼の肩に担がれているツクヨミだった。

「ツクヨミ。大丈夫か？」

「うん。でも……力がスウォルツに……」

時を止める力はスウォルツに奪われてしまった事を話すと、ソウゴ達はとりあえず休ませるためにツクヨミを座らせる。

「我が魔王、許してくれ。私はクライアス社達の不穏な動きを探るために、過川飛流に
いていたんだ」

ウオズは今までの行動はクライアス社を探るためだったと語り、ソウゴに今までの非
礼を詫げる。

「俺は信じてたよウオズ。君の行動には必ず意味があると」

「ありがとう」

だがソウゴにとっては、ウオズが戻ってきた事の方が嬉しかった。

「ゲイツ……あたし……スウォルツの……」

「何も言うな」

「……あたし、もしスウォルツが本当にあたしの兄だったとしても、世界を自由にしような
んて許せない」

それを聞いてゲイツは黙ってうなずく。すると、ゲイツは土と晴夜に近づく。

「ツクヨミが別の世界の存在ってどういう事だ?」

ツクヨミがスウォルツと同じ、平行世界から来たのだと二人から問おうとする。

「大体分かった」

「ほんとか?説明しろ」

「大体は大体だ。それにクライアス社はスウォルツと同じようにリストルとビシン……」

プレジデント・クライも今回の事に関わっている」

ウオズからの情報を聞いた晴夜は、顎を抑えながら今の状況に危機感を覚え始める。

「確かにこのままだと、クライアス社があつた過川飛流を使って、この世界も未来すらも完全に奪うかもしれない」

「未来は誰にも渡さない。スウォルツにも、過川飛流にも、プレジデント・クライにも。クライアス社にも絶対にも！」

ソウゴの口からそう語られると、ウオズはそれを満足そうに見ながら彼に近づく。

「問題はこれからどうするかだ。我が魔王」

「まずは過川飛流。あいつを倒して、この世界を元に戻そう。」

そして、クライアス社のビシンにリストル、スウォルツ、プレジデント・クライを止めて未来を取り返し。その先にいるオーマジオウを止める！」

ソウゴが強く自分の意思を言うと、ゲイツ、ツクヨミはその思い頷く。

その頃、動けるプリキュア達と仮面ライダーの四人が集まり、アナザーライダー軍団、トラウムのパワードスーツに応戦した。

「はあ！オラア！」

「ヤア！」

「チツ……」

クローズ達が攻撃を繰り返し、槍を盾としているアナザージオウⅡに攻撃の隙を与えない。

アナザーライダー軍団とはプリキュア達が応戦しており、アナザーアギト、アナザーブレイド、アナザーカブトにアムール、ソード、マカロン、マジカルが応戦していた。

「たああああ!」

アムールとマカロンのダブルキックが決まる。

「リンクル!アクアマリン」

マジカルが凍結魔法でアナザーライダー達の足を凍らせた。

「スパークルソード!」

ソードがアナザーライダー達にスパークルソードを放った。

さらにアナザーフォーゼ、アナザー響鬼、アナザー鎧武にエトワール、ロゼッタ、カスタードが対応。

「プリキュア!ロゼッタリフレクション!」

ロゼッタがロゼッタリフレクションを展開、三体のアナザーライダーの攻撃を防御する。

「カスタード!イリユージュオン!」

「スターズラッシュユ！」

防いでいる上からエトワールとカスタードが無数に放ち続けてアナザーライダーに直撃、アナザーライダー達が転がり倒れる。

アナザーウィザード、アナザーゴースト、アナザーキバにはアンジュとダイヤモンドとジェラートと交戦しており、アナザーライダー達はパーカーゴーストと蝙蝠の群れを彼女らに放つ。

「ダイヤモンドスワークル！」

それを見たダイヤモンドのマジカルラプリーパットから放った水流により、アナザーライダー達が放ったものを流した。

「プリキュア！ダブルパンチ！」

アンジュとジェラートがゴーストとキバにダブルパンチを繰り出す。

しかし、そこへアナザーウィザードが火炎攻撃を飛ばす。

「フレ！フレ！ハートフェザー！」

アンジュはハートフェザーを展開し、アナザーウィザードの火炎攻撃からみんなを守る。

「絶対に負けない。ソウゴ君との記憶を取り戻す」

「ジェラートシエイク！」

アンジュが守ったおかげでジェラートが大きな氷を作り出す事ができ、パンチの連打で粉々に砕いた氷の弾丸をアナザーウィザードめがけて飛ばす。

アナザー龍騎、アナザーファイズ、アナザー電王にマシエリ、エース、マカロンが対応していた。

「マシエリポップ!」

マシエリが技を放つがしかし、アナザー龍騎が鏡で技を跳ね返してマシエリへと放つ。

「跳ね返されたのです!」

「エースミラーフラッシュユ!」

しかし、エースが展開したエースミラーフラッシュユがさらに跳ね返し、アナザー龍騎とアナザーファイズを吹き飛ばした。

「シヨコラ・アロマーゼ!」

シヨコラは残るアナザー電王を蹴飛ばして、シヨコラ・アロマーゼを放つ。

アナザーW、アナザーオーズにはアール、ジョーカー、パルフェ、フェリーチェが対応。

「もうしつこい!」

「攻撃が早くて隙が作れない」

アナザーWとアナザーオーズの攻撃ペースは早く、中々技が出せない事に思わず顔を歪ませる。

「だったら、リコーダーステツキ!」

ならばと思い、アーラがりコーダーステツキを出現させる。

「ウイングシャワー!」

リコーダーステツキのボタンを押したまま口につけて吹くと、彼女の周りから無数の羽を発生させた。それはアナザーライダー達の目くらましとなった。

「今です!」

アーラが隙を作り、三人が頷く。

「プリキュア! ドラゴンズウインド!」

「プリキュア! エメラルドリンカネーション!」

「パルフェエトワール!」

パルフェがパーフェクトリボンで拘束すると、ジョーカーが竜巻でさらに逃げ場を失くさせて、フェニーチェが花魔法により二人を浄化するかのよう包む。

「や、やった……」

「あんた中々やるじゃん!」

「コングラチュレーション!」

「ナイスアシストだったわ」

「は、はい!」

三人がアールに近寄り、彼女のおかげだと褒め称える。

そして、アナザークウガとアナザーエグゼイドとアナザービルドにはエール、ハート、ドリーム、ピーチ、ミラクル、ホイップが戦っていた。

「はああ!」

ホイップはアナザークウガの巨大な体をキャンデイロッドから放つクリームで拘束する。

「ヤアアア!」

ミラクルがアナザークウガにパンチを放ち、攻撃が直撃したアナザークウガは倒れる。

ドリームとピーチはアナザーエグゼイドと交戦していた。

「ヤアアア!」

ドリームがラッシュでアナザーエグゼイドに繰り出して宙へ上げる。

「はあああああ!」

そこへピーチが更にパンチを繰り出し、アナザーエグゼイドを吹き飛ばした。

そしてアナザービルドとはエールとハートが戦っていた。

アナザービルドがジャンプしながら二人に攻撃しようとするが、ハートはまるで端からわかっているかのように行動パターンを読んでいた。

「——わかってたよ。その動き」

ハートはカウンターキックを放ち、アナザービルドに直撃させる。

「凄い。攻撃がわかっている」

「同じビルドでも、晴夜も比べたら……全然問題ない！」

流石はビルドの特性を知っているハート、彼女はビルドの戦い方を熟知していた。

「エール！」

「うん！」

後はエールに任せ、ハートは一旦退く。

「フレフレ！ハート！フォークス！！」

最後にハート型の光線がアナザービルドに直撃し、プリキュア達により全てのアナザーライダーは倒れた。

『今だよ！』

「「「メモリアルキュアクロック！チアフル！」」」

ハート達の掛け声でエール達の持つミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「ミライパッド!オーブン!」

彼女らが右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

「プリキュア!チアフルスタイル!」

扉が開くと中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がチアフルスタイルに変身する。

「メモリアルパワー!フルチャージ!」

六人はパワーをメモリアルキュアクロックに集める。

「プリキュア!チアフルアタック!」

六色の五つ葉のクロバー型エネルギー弾を発射するチアフル・アタックを放ち、そのままトラウムのパワードスーツに直撃した。

「無駄無駄!」

しかし、パワードスーツは無傷だった。

「リバースザタイム!……あれ?」

リバースザタイムを発動しようとするが、気付くとパワードスーツの右腕のリバースザタイムの発射口を破壊されていた。

「もう、あなたが力を戻す事は出来ません」

アナザージオウⅡも仮面ライダーが足止めしているため、時間を戻す暇がない。勝負はあつたとアムールは言う。

「甘い！ここには大量のトゲパワワがある！」

パワードスーツの背中から砲門が四つ現れると同時に、地面から出たアスパワワをトゲパワワに変換させる。

「何？何が起きてるの？」

周囲のトゲパワワを吸い取ったパワードスーツが膨れ上がるようにして変形し、無数の闇のエネルギーの手が現れて地面に触れる。

「手が沢山出て来た！」

「お前達のアスパワワも、トゲパワワに変えてやる！」

トラウムが突進すると同時に、闇のエネルギー手がエール達に向かって伸びる。

みんなは一齐に逃げたり宙へ浮かんで逃げるなど、様々な方法で避ける。

「ツ！はぐたん！」

そこへ、はぐたんに闇のエネルギーの腕が襲いかかる様子を目撃したエールが、はぐたんを助けようとはぐたんを抱っこした。

「エール！」

だがその代わりに、トラウムの出現させた手が彼女を拘束した。

「終わりだね」

トラウムがキュアエールの終わりを確信したその時、謎の二人のパンチとキックによつて、トラウムが地面に叩き付けられ、エールとはぐたんを捕まえた闇のエネルギーの手が消滅した。

すぐさま二人が時計塔の石柱に足を当て、トラウムに向かって勢いよく跳んだ。

「あれは……」

その二人は、ブラックとホワイトだった。

「だだだだだだだだっ!」

「はあああああああっ!」

闇のエネルギーの手が向かって来るが、二人は攻撃しながら掻い潜って行く。

「あの二人は……!」

「待ってましたー!」

「ふぬあっ!」

これを見てやばいと思ったのか、トラウムは巨大な闇のエネルギー球を作り出し、これを投げ飛ばす。

「だあーっ!」

「やあーっ!」

だがブラックのパンチとホワイトの放ったキックが、一瞬でエネルギー球を消滅させる。

「ルミナス！ハーティエル・アंकクション！」

「あら？！ 身体が……！」

彼女らに気を取られていたトラウムの真上に現れたルミナスがハーティエル・アंकクションを発動し、彼の動きを止める。

「だああああつ！」

ブラックのパンチとホワイトのキックが命中し、勢いよく吹き飛んで地面に叩き付けられた。

「光の使者！キュアブラック！」

「光の使者！キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア！」

「闇の力のしもべ達よ！」

「とつととお家に帰りなさい！」

「ブラック！ホワイト！」

「輝く生命！シャイニールミナス！光の心と光の意思、全てを一つにする為に！」

初代プリキュアであるキュアブラック、キュアホワイト、シャイニールミナスの三人

が、エール達の前に着地した。

「プリキュア……どこまで邪魔をするために現れるんだ……」

「はあ!」

ローグがネビュラスチームガンを放ち、新たなるプリキュアの登場で苛つきを露わにしていたアナザージオウIIは銃撃を受けて態勢を崩した。

「はあ!」

クローズとハリーがクロスでキックを繰り出しアナザージオウIIを蹴り飛ばしたが、アナザージオウIIはとりあえず持ち堪えた。

「選ばれた奴らが……」

「選ばれた? 何って言ってんだお前?」

「お前達は選ばれた者だ。選ばれなかった者は……」

アナザージオウIIは、仮面ライダーやプリキュアは選ばれた者達と言い出し、嫉妬と憎悪の感情を剥き出しにした。

「何もわかってねえな」

だがそれを聞いたクローズは、彼の発言には何もわかっていないと答える。

「俺達は選ばれたから、戦ってんじやねえ!」

「選んだんだよ。仮面ライダーになる事を! みんなだって、プリキュアになる事をな!」

「僕達は自分で選んだんです。戦う事をそれでみんなを守るって！」

「きつい道やけど、俺達は自分で進んで進んできたんや！」

「俺をコケにするか……」

クローズ達はそう言うが、それを聞いたアナザージオウⅡからすれば、彼らの言葉は皆から認められ、多くの大切な人や居場所を持つている、いわば「選ばれた者」の言葉でしかなく。自分やあの時の事故で理不尽に死んで逝った者たちのような「選ばれなかった者」からすれば、その言葉は侮辱以外のなものでもなかった。

「違う。てめエは、自分の道すらも他人に判断を委ねる！」

ただ自分から前に進むことすらも逃げてるだけだ！」

しかし、クローズにそう言われたアナザージオウⅡは、体を震わせながら下に顔を向けて叫ぶ。

「うるさい……うるさい！ 黙れ！ 黙れええええええええええ！！？」

アナザージオウⅡが叫ぶと同時に、彼の身体から黒いトゲパワワが溢れ出した。

同時に倒れていたトラウムが起き上がり、腕を伸ばして上に移動したのと同じに、パワードスーツがトゲパワワで覆われる。

「プリキュア……！」

「なにになに!?？」

「大量のトゲパワワ反応を確認。ドクター・トラウム自身のトゲパワワと、アナザージオウIIである過川飛流のトゲパワワで、力を増しています。」

しかし、これは……暴走!?!?」

その光景を見たアムールによって、アナザージオウIIとトラウムは暴走したと判断され、同調するかのように二人の力は混ざり合い、融合していく。

「うわあああああツツ!」

その姿は黒く染まり、アナザージオウIIの複眼がオシマイダーの目となり、オシマイダーとしての体がさらに綻んだような姿へと変わった。

名付けるなら、『オシマイジオウII』。

「未来なんていらん!過去が……過去こそが全てだ!」

オシマイジオウIIはその雄叫びとともに、地球全体をトゲパワワで覆った。

『うわあああああツツ!!?!』

その力は、エール達プリキュア、仮面ライダーをも巻き込ませた。

「な……何やアレ……!」

「マナ……!」

「は……ぎゅ……!」

シフォンの力によって影響を受けなかった妖精達はテレポートされるが、周囲の光景

はどんどんと姿を変えて行った。

『タイムマジーン！』

そこへソウゴのタイムマジーンとゲイツのタイムマジーンが、タイムトンネルからここへワープして現れた。

「これは！」

「あれを見ろ」

トゲパワワの嵐が収まると、周囲は荒野となっていた。タイムマジーンは着陸すると、ソウゴ達はタイムマジーンから降りる。

「アイちゃん！」

「せいやー！」

「ごめんね。怖かったね」

晴夜は泣き出しそうなアイちゃんを抱っこする。

「っ!?みんな！」

すぐ傍にはトゲパワワで出来た巨大な球体があり、その中にプリキュア達と龍牙、和也、幻冬、ハリーが閉じ込められてた。

「マナ！龍牙！まこびー！」

「ハリー！えみる！ルールー！」

「はなにさあや、ほまれ……」

「よく来たな……」

「もしかして、過川飛流……」

ソウゴ達の前にはオシマイジオウIIが現れた。

「逃げずに来た事は褒めてやる……時見ソウゴ。」

お前のせいで俺の人生は無茶苦茶になった……

俺が、お前の存在そのものを消してやろう」

「……ごめん、傷付けたんなら謝る。」

だけど、その為にみんなの時間を書き換えたり、関係ないさあや達を傷つけるなんて

間違ってる!

だから俺は、君を倒して元の時間を取り戻す」

「御託はいい」

オシマイジオウIIは同じように黒い霧を充満させ、そこからオシマイダーとアナザー

ライダーが融合したオシマイライダーが複数現れた。

「タルト。アイちゃんをお願い」

「任せとき」

晴夜はタルトにアイちゃんを預け、去り際に彼女の頭を撫でると、ソウゴ達に近づき

ビルドドライバーを装着した。

そして握り締めたラビットボトルを金色へと変える。

「みんな……行くこう！」

四人はドライバーを装着し、それぞれの変身アイテムを取り出す。ソウゴはジオウライドウオッチとグランドジオウライドウオッチ、ゲイツはゲイツライドウオッチとゲイツリバイブライドウオッチ、ウオズはギンガミライドウオッチ、

晴夜はロイヤルボトルとゴールデンラビットボトルの栓を回し、士はディケイドのライダーカードを掲げ、変身体勢に入る。

『ジオウ！グランドジオウ！』

『ゲイツ！ゲイツリバイブ！疾風！』

『ギンガ！』

『ロイヤル！ラビット！ベストマッチ！』

『KAMEN RIDER！』

「……変身！？……」

そして五人がドライバーに装填し、高々と叫ぶ。

『グラントタイム！クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイード！響鬼・カブト・電王

「キバ・デイケイード!ダブル!オーズ!フォーゼ!ウイザード!鎧武・ドラーイーブ!
!ゴースト!エグゼイド!ビ・ル・ドー!」

「祝え!仮面ライダー!!?グ・ラ・ン・ド!ジョーウ!」

「ライダータイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!
リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!
疾風!」

「投影!ファイナリータイム! ギンギンギラギラギャラクシー!宇宙の彼方のファン
タジー! ウォズギンガファイナリー!ファイナリー!」

「光輝くスピーディウオリアー!ロイヤルラビット!イエーイ!」

「DECADE!」

「グラントジオウ、ゲイツリバイブ疾風、ウォズギンガファイナリー、ビルドロイヤル
ラビット、デイケイドへと変身完了し、五人が並び立つと向かって行こうとする。

「——祝え!」

「「:えつ?」」

するとそこで、『祝え』というウォズの祝儀の言葉が叫ばれる。

「我が魔王が偽の魔王を打ち倒し、時の王者としての資質を証明する瞬間を!!?」

「相変わらずアレをやるのか?」

「はあ?あんな事いつもやってんのか?」

「知らねえのか」

ウオズのことを忘れていたゲイツに、デイケイドはそう答えると、晴夜は頭を仮面越しにかきはじめる

「まあ、やりたかったならしようがないな」

「へへへ、なんか行ける気がする!」

気を取り直し、五人は一斉にオシマイライダー軍団へと走る。

オシマイライダーが数人とジオウが交戦に入り、ライドハイセイバーとサイキョーギレードで応戦。そこへオシマイジオウIIが乱入し、仮面の針を回して未来を見た。

「見えた、お前の未来!」

未来を見たオシマイジオウIIが腕を振り上げ、攻撃を仕掛けてきた。

「っ!」

手で叩き潰そうとした時、ジオウが光の粒子となって消えた。

「何ッ!?」

「はああ!」

消えたジオウが突如としてオシマイジオウIIの顔へと現れ、二本の剣を同時に放つ。

「これが俺の力だ!」

ジオウはグラウンドジオウの力を全開でオシマイジオウIIに迎え撃つ。

一方で、デイケイドとビルドが三体のオシマイライダーと交戦していた。

『ATTACK RIDE!BLAST!』

別のカードを差し込み、ライドブッカーをガンモードと変えると銃口を分身させ、発射された弾丸のエネルギー弾の掃射を浴びたオシマイフォーゼが消滅した。

ビルドの方は、『ツインアイラビットRRRR』の高められた反応速度と索敵精度が、狼の様な耳と尻尾を生やして青い炎状の体毛をたなびかせるオシマイファイズと、右腕についた三叉槍を向けながら脇にある複数の節足を不気味に動かすオシマイカブトが、驚異的なスピードで周囲を動き回っている姿を捉えた。

『タンク・フルボトルスラッシュ!』

それに対してタンクのパワーを得たフルボトルブレードを構え。超高速で詰め寄って来たオシマイファイズとオシマイカブトに、『RGRラッシュアーム』の極限まで底上げされた敏捷性を駆使したフルボトルブレードの斬撃をすれ違いざまに放って、二体を切り裂き消滅させた。

「ふん……ぐわあ!」

「土さん……?」

その時、デイケイドの背中に銃撃を受ける。

振り向くとそこにいたのはデイエンド、リストル・クラレット、ビシン・ギアファン

グだった。

「リストル……」

「海東大樹、門矢士の方は頼むよ」

「ああ。士の事は任せてよ」

「では……はあ！」

リストルとビシンは二人かがりでビルドに襲いかかる。

「ッ……」

リストルとビシンにより、デイケイドと分断されると、忍者とコミックのフルボトルを取り出す。

「分断されたか……なら……」

『忍者！コミック！ベストマッチスラッシュ！』

ビルドが二人に分身し、リストルとビシンに応戦する。

「へえ、君中々やるね。あのドラゴンの奴と同じくらいだ」

「君はここで倒させて貰うよ」

「そう簡単には行かないよ」

ビルドは不利な状況ではあるが、リストルとビシンに奮戦している。

そして、デイケイドは、デイエンドは戦闘開始の雰囲気だった。

「また会えて嬉しいよ、士。君の相手はこの僕だ」

「……」

両者が睨み合いをしているその頃、オシマイジオウⅡによってトゲパワワで出来た空間に入れられたみんなは、動く事も喋る事も出来なかった。

(力が……入らない……)

(これで……終わりなのかな……)

そんな中、はなのブレスレットが光り出す。

「それは……ちよつと……やだな」

フレ……フレ……私……

フレ……フレ……みんな……っ!」

自分を鼓舞するのはなの声に、さあや達が反応する。

「聞こえた……」

「はなちゃんの声……」

だが聞こえるのは、はなの声だけではない。

「ふえ……ふえ……プリキュア……!」

「みんな……みんなを……助ける!俺は王様だから!」

みんなを応援する声、みんなを助けようと戦っている声が彼女達の心にまで響いた。

「はなちゃんだけじゃ……無い……!」

「みんなの……声……!」

「フレ……!フレ……!私……っ!」

はな達が足元に手を当てると、そこからアスパワワが溢れ出し、更に立ち上がる。すると球体から、一筋の光が漏れた。

「もつとペコ!」

『フレ!フレ!プリキュア!』

妖精達が応援するだけで無く、はな達も自分達を鼓舞して立ち上がる。

「ここで諦めたら……ま……!」

「……またあの時みたいな事に……!」

「もう二度と……あんな想いはしたく無い……!」

「行かないと……外で晴夜が戦っているのに」

「みんなを……助けるんだ……!」

「こんなのが何だ!私達は——!」

「プリキュアだあーっ!!」

真上から一筋の光が出ると同時にトゲパワワの球体が消滅した。

『!?!』

それに気づいたジオウ達が見上げる。

「「うわああああ〜〜!」」

そこからアスパワワで出来た虹色の光が出て来ると、一緒にエール達も出て来た。それを見たジオウ達は彼女達の下に近づく。

「ば、ば、馬鹿な……」

「みんな!無事だった!」

「みんな!お待たせ!」

「き、さ、ま、ら〜〜ツツ!!?」

するとオシマイジオウIIから、オシマイダーの他にこれまでプリキュア達が戦った敵達が数え切れない程現れ。更にはオシマイライダー十三体が詰め寄って来た。

「これは……!」

「多過ぎだよ……!」

オシマイダーとアナザーライダーがエール達に向かって突進する。

「大丈夫。私達は……負けない!フレ!フレ!私!フレ!フレ!プリキュア!」

すると、何かが空を突き破って降って来て、オシマイダーを吹き飛ばした。

そこにいたのは、プリンセスプリキュアの四人だった。

「はあああああつ!」

フローラの強烈な跳び蹴りを筆頭に、マーメイド、トウインクル、スカーレットが水流や星型のエネルギーや炎で攻撃を繰り出した。

「冷たい檻に閉ざされた夢、返して頂きますわ！お覚悟は、よろしくて！」

「フローラ！」

ホイップとミラクルがフローラの登場を喜んでいると：

「私だけじゃないよ！」

「ラブリービーム！」

上空から放たれた二つのビームが、オシマイダーを纏めて吹き飛ばす。

「あれは……！！！」

「お待たせ！」

マジカルが上を見上げると、ハピネスチャージプリキュアの四人が現れた。

「ラブリー！」

それだけじゃないスイートプリキュア、ハートキャッチプリキュア、スプラッシュスターも駆け付ける。

「みんな！」

残りのプリキュア5とフレッシュプリキュアのメンバーが駆けつけた。

「ハア！」

「ダアシャー!」

「オラア!」

「ヤア!」

更に取り込まれていた四人の仮面ライダーも、ハリー・ギアジェット、クリア・クリスタルクローズ、グリスブリザード、プライムローグとなって現れた。

「凄い!プリキュアがこんなに!よし!だったら!俺も!」

プリキュアの大集合を目にしたジオウが、ライダーのレリーフに触る。

『クウガ!アギト!龍騎!ファイズ!ブレイド!響鬼!カブト!電王!キバ!ダブル!オーズ!フォーゼ!ウイザード!鎧武!ドライブ!ゴースト!エグゼイド!』

ジオウの力でデイケイド、ビルドを除く17人の仮面ライダーが召喚された。

「プリキュアが……仮面ライダーが……こんなに……ありえない。時間を変えたはずだ……こんな事が……」

その光景はオシマイジオウIIだけでなく、それをクライアス社で見ていたクライも、驚きを隠せなかった。

「こんな事が……起きるとは……」

彼の目には、全てのプリキュアと全ての仮面ライダーが並び立っていた。

「ありえるんだよ！これが、みんなの思いが合わさって出来た——！奇跡だ！」

「みんな！行くよ！」

ジオウ達仮面ライダーとエール達プリキュアが一斉に走り出し、ジオウによって呼び出された平成ライダー達と共に散らばり、それぞれオシマイダーとアナザーライダーへと挑み、応戦していく。

「だあつ！」

まず手始めにと、ブラックがオシマイダーにアッパーを叩き込んで体勢を崩させる。

「はああああああつ！」

次に上空からホワイトが回転しながら降下し、キックを叩き込んで纏めて吹き飛ばす。

「オリヤヤ！」

更にクウガも加わり、エネルギーを纏ったライダーパンチを繰り出してオシマイダーを吹っ飛ばした。

「！！はあああああつ！！！！」

頭から地面に着地したオシマイダーがクウガの封印エネルギーによって爆破した所では、ジェラートとマーメイドとダイヤモンドにマリリン、アクアが氷や水を使った技を

放ち、オシマイダー達を凍らせる。

「ウエエー!」

「はあ!ヤア!」

「久々、俺の必殺技!パート2!」

そのままブレイドがブレイラウザー、鎧武が無双セイバーと橙々丸、電王がデンガツシャーにエネルギーを貯めて、オシマイダー達をその斬撃で氷諸共粉碎した。

「スターバースト!」

「シャイニングサークル!」

細かい氷の粒子が数体のオシマイダーとドラゴンの様な体と蝙蝠の様な翼を持つオシマイキバの視界に入ると、フォーチュンが急降下してフォーチュンスターバーストを叩き込んで一斉に吹き飛ばし、ミューズがシャイニングサークルで動きを封じる。

「はあ!ヤア!」

「はああ!」

そこへアギトとキバがそれぞれ腕から伸びた光の刃と鎖のエフェクトをオシマイキバに纏わせると、囲んでいるオシマイダーに放ち、全て爆発させて消滅した。

その様子を顔にある巨大な眼球でギロつと睨みつけるオシマイゴーストが、オシマイダーと共にゴーストに向かってくる。

「はああ！」

しかしゴーストは竜巻を作り出すと、オシマイダー達を包み上空へとあげた。

「ファイアストライク！」

「サニーファイア！」

「マーチシュート！」

竜巻によって空へと上げられたオシマイダー達とオシマイゴーストを一掃する。

だがそこへオシマイダーと、モノアイ顔が付いた胸部装甲を持つ巨大ロボットの様なアーマーを纏ったオシマイエグゼイドが四人に向かって光線を放つ。

「危ない！」

「させません！」

アンジュ、ロゼッタ、サンシャイン、ミント、ルミナスがバリアを展開して防ぐ。

「うおお！」

「シューティングスター！」

「ハッピーシャワー！」

「ヤアアア！」

マキシマムマイティXのエグゼイドとドリームとハッピーとエールが現れて敵を吹き飛ばして、そのまま全て倒して着地する。だがこの時、ハッピーのみ着地に失敗した。

「ホイップ・デコレーション!」

それを見て、巨大な双刃薙刀を手に持ったオシマイ鎧武がハッピーを細切れにしよう
と突っ込んでいくが、ホイップがホイップ・デコレーションでオシマイ鎧武の動きを封
じこめた。

『start up!』

『Clock up!』

『フォーミュラ!』

ファイズアクセル、カブトのクロックアップ、ドライブ・タイプフォーミュラ。高速
で動く三人の仮面ライダーが放つ攻撃で追い込むと、拘束したまま宙へとあげる。

「フローラル!トルビヨン!」

「ピンクフォルテウェイブ!」

「ごきげんよう」

フローラとブロッサムのフローラル・トルビヨンとピンクフォルテウェイブが命中
し、宙に上げられたオシマイ鎧武は浄化された。

「みんな!行くよ!」

赤い宝石の鱗を輝かせるドラゴン姿のオシマイウィザードとアナザー電王を模した
列車の両脇から機械式の腕を伸ばしたオシマイ電王、プロミネンスを起こす程に燃え盛

る溶岩の様な装甲を纏ったオシマイアギトとオシマイ響鬼がそれぞれ口から火炎放射を放つ中。ミラクルとマジカル、ラブリーとプリンセス、ブルームとイーグレット。W、オーズ、フォーゼが飛び込む。

『フアング！ジョーカー！』

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドルウ〜！』

『ロケット！ロケットオン！』

そしてミラクルとマジカルはルビースタイルになり。ラブリーはチェリーフラメンコ、プリンセスはシャーベットバレエへ。ブルームとイーグレットはそれぞれキュアブライトとキュアウィンディに変身。Wはフアングジョーカー、オーズはタジャルコンボ、フォーゼはロケットステイツへとフォームチェンジした。

『フアング！マキシマムドライブ！』

『スキヤニングチャージ！』

『リミットブレイク！』

『フアングストライザー！』

『セイヤアアアア！』

『ライダーきりもみクラッシュャー！』

『「はあああああ！」』

全員でキックを放ち、オシマイライダーを全て貫いて消滅。

別の場所では、ウイザードのアクロバットの攻撃と龍騎の振るうドラゴンソードと響鬼の棍で攻撃を繰り返して、敵を一か所に集めた。

「みんな行くよ!」

ビートと掛け声でマシエリ、アムール、スカレット、パッションが構えると、ウイザードがドライバーにリングを掲げ、龍騎はドラグクローを召喚、響鬼も二つの棍に炎を纏わせる。

「「「いけええええ!」」」

『チョーイイネ! スペシャル! サイコー!』

「くらえ!」

「アアアアア!」

中心にハートが描かれた音のエネルギー弾を作り出して飛ばし。そして放ったところにウイザード、響鬼、龍騎が火炎で追い打ちをかけて敵を一掃した。

「「「タアアアア!」」」

最後にクウガとブラック、ホワイトのトリプルパンチが決まり、オシマイダーやオシマイWを消滅させた。

オシマイダー達が消えると、ジオウが召喚した仮面ライダー達が消えた。

一方で、ビシンとリストル二人を相手に戦っていたビルドは…

「はあ！」

フルボトルバスターで二人の連携攻撃で対応していた。

『ロイヤル！フルボトルスラッシュユ！』

ビルドはフルボトルブレードにロイヤルボトルを差し込み、フルボトルブレードから白いエネルギー体を放った。

『海賊！電車！ベストマツチスラッシュユ！』

今度はフルボトルバスターから電気を纏った水を放ち、リストルに向けて放つ。

「クツ……」

電気を横した水に触れた為に、リストルの身体が麻痺を起こした。

「悪いけど、あんた達じゃ俺は倒せないよ！」

彼は二人よりも、もっと強い奴らとずっと戦っていた。その経験のあるビルドの方が、何枚も上手だった。

「勝利の法則は決まった！」

『ロイヤル！シャドウ！マジエステイ！』

フルボトルブレードが光と闇を纏い、リストルとビシンに向けて放とうとした。

その時……

「ふんー!」

「——えっ?」

いきなりフルボトルブレードを放とうとしたその時、ビルドの動きが止まった。

「なんだこれは……う、動かない……!!」

ビルドの動きが止まった様は、まるでタイムジャッカーに時を止められたような感じだった。

その時、リストルとビシンの後ろから誰かが現れた。

その人物は、全身が黒と白のカラーで、背中には金色の懐中時計が付いており、マスクには赤で『ライダー』と刻まれ、腰にはジクウドライバーが巻かれていた。

「か、仮面……ライダー……」

「君は……無意味な行動だった」

ビルドは現れた仮面ライダーの持つ大剣を、防御も出来ず攻撃を受けた。

「くうー!」

攻撃を受けると体がようやく動けてた事に気付く。ビルドが起き上がると、フルボトルブレードにボトルを差し込む。

『ラビット!フルボトルスラッシュ!』

剣を伸ばして遠距離からフルボトルブレードを放つ。

それを見た謎の仮面ライダーは静かに手を挙げると、フルボトルブレードの動きが止まった。

「こ、これは……」

『フィニッシュタイム!』

謎のライダーはビルドに一気に詰め寄ると、ドライバーを回した。

『タイムエンド!』

すると白と黒のエネルギーが右足に集められ、強烈なキックをビルドに打ちかました。

「あ、あつ……!」

「流石だよ。やはり君を倒すのはこれかな?」

攻撃を受けたが、なんとか踏み止まったビルド。

だが自身の攻撃を耐え切った事を確認すると、そのライダーが何かを取り出した。

『エボル!』

それは、仮面ライダーエボルのライドウォッチだった。

「ツ!?? エボル!??」

ライダーはそのウォッチをドライバーへと装填し、ドライバーを回す。

『アーマータイム! エボリユーション! エボル!』

そのアーマーを纏うと、それはジオウのビルドアーマーと少し似ていたが、両肩のシオルダーがコブラエボルボトルとライダーエボルボトルとなっていて、ワインレッドと金色のアーマーを纏い、マスクには『エボル』と刻まれていた。

「どうして、エボルの力を……」

「ふん!」

ビルドの疑問は解消されることの無いまま、エボルが得意とする高速移動の攻撃が繰り出された。

覚えている攻撃だったが、そのパワーはあの時の比ではなかった。

「くっ……」

ビルドはなんとか耐えているが、ビルドは攻撃に移れない。

『フィニッシュタイム!エボルテックタイムエンド!』

その時、高速移動でワインレッドのエネルギーを纏った連続のライダーキックを受けしてしまう。

「あああ……っ」

攻撃を受け続け、とうとう強制変身解除へと追い込まれてしまい、晴夜の姿へと戻った。

「ッ……誰だ……」

「仮面ライダー……クライ」

「……クライ……くっ」

晴夜は立ち上がるとするが、体から伝わる痛みにより立つのか困難だった。

だが、ビシンは倒れている晴夜にフッキングクロウを構える。

「手間を取らせてくれたね」

クロウが晴夜に目掛けて一直線に襲い掛かる。

「やめろ！」

そこへクロウズが現れ、ビシンの攻撃から晴夜を救った。

「り、龍……牙」

「行くぞ！晴夜！」

クロウズは晴夜を連れて、この場から素早く退いていく。

「仮面ライダー……プリキュア……君達のやっている事は、無意味な事だよ」

クライと名乗ったライダーがそう告げている一方で、デイケイドとデイエンドの対決は決着が着きそうだった。

デイエンドライダーから放たれた攻撃を受けながらも、デイケイドが持つソードモードにしたライドブッカーがデイエンドを吹き飛ばした。

「残念だったな、俺の勝ちだ」

そう言つてファイナルアタックライドのカードを差し込もうとする。

「そうかな!」

デイケイドが決めに掛かろうとしたその時、デイエンドはスウォルツから貰った時を止める力でデイケイドの時を止めた。

「悪いね。これでいいのかな?」

「ご苦労」

スウォルツが現れると、ブランク状態のウオツチを懐から出してきた。

「貰うぞ。お前の力」

スウォルツはそう言うと、ウオツチをデイケイドにかざす。

「うわああああ!」

ウオツチにデイケイドの力がどんどん吸い寄せていき、そのままウオツチはアナザーライドウオツチへと姿を変えた。

『デイケイド……!』

そして遂に、アナザーデイケイドウオツチの完成した。力を奪われたデイケイドは土へと戻り、倒れてしまった。

「じゃあね。土」

デイエンドとスウォルトツは力を無くした土の前から去っていく。

残るオシマイライダーとオシマイライダー達を、ゲイツとウオズとハリー、グリスとローグの5人が戦っていた。

「オラア！どうした！こんなもんか！」

『シングルアイス！』

グリスはドライバーのレバーを一回転させ、ロボットアームをオシマイオーズに向ける。

『グレイシャルアタック！バリーーン！』

巨大化した左腕のアームで捕まえたオシマイオーズを地面に叩きつけると、そのまま宙に放り投げる。

「大義のための犠牲となれ！」

『Ready go！』

そう叫んでドライバーのレバーを回したローグは高く飛躍し、ライダーキックの態勢に入ろうとする。

『プライムスクラップブレイク！』

ローグがオシマイオーズに噛み付くように両脚で挟み蹴りを繰り出す。そのまま噛

み付いた足で掘り投げ、オシマイオーズを爆発させた。

「おい！俺達は時間が書き換わる前、お前とも手を組んでいたのか!?」

「ああ、ゲイツ君、ハリー君。君達は私の忠実な部下として、我が魔王のために戦っていた」

「マジか!?」

「……嘘だな。適当なことを言うな！」

「嘘かい！」

ウオズの発言はハリーを騙したが、ゲイツには嘘だとバレていた。

「何故バレる?」

『『フィンツシユタイム!』』

『ファイナリービヨンド ザ タイム!』

ドライバーを操作し、三人が技を放つ。

『百烈タイムバースト!』

『超ギンガエクスペロージョン!』

『ジエツトタイムフィンツシユ!』

ゲイツは百烈タイムバーストで連続キックを放ち。ウオズが超ギンガエクスペロージョンで炎を纏った隕石の雨を降らせ、残ったオシマイクウガにハリーがライダーパン

チを放ち、オシマイライダーを全て倒した。

そして、ジオウにはオシマイジオウⅡと群れるオシマイダーが攻めてくる。

『サイキョーファイニッシュタイム!』

サイキョージカンギレードに合体させ、剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『キングギリギリスラッシュ!』

『オリヤヤヤヤ!!?』

ジオウはサイキョージカンギレードを振り下ろし、オシマイダーを吹き飛ばした。

「はああああ!!?」

さらに続け様にキングギリギリスラッシュをオシマイジオウⅡへと放って直撃させると、地面に倒れる。

「何故ダ……何故、俺は奴ニ敵わナイ!？」

劣勢に陥ったオシマイジオウⅡは、何故ジオウに勝てないのだと問うと、ジオウはその理由を語り始める。

「それは、お前が過去のことしか見てないからだ!」

「どこマデも偉ソウに……ッ!」

オシマイジオウⅡがジオウへと向かって来たが、鋭い一閃でサイキョージカンギレ

ドを放つ。

「そして俺は、みんなと一緒に未来を作るために戦う!」

「未来……ソナもノ……イラナイ!」

オシマイジオウⅡが雄叫びのように叫ぶと怒りで巨大化し、地球を超える大きさとなった。

「飛流……」

「………こんなの……どうすれば……」

その光景を見たジオウは驚愕し、エールはあまりの光景に思わず弱腰になってしま
う。

「大丈夫。自分を信じて、仲間を信じて!」

だがそんなエールにブラックはそう声をかけ、エールは自分達がなんなのかを思い出
す。

「そうだよ……。私達は、プリキュアだもん……!」

「こんな時だって私達は——」

「絶対に諦めない!」

「諦めない……」

エールが右の拳を胸元に当てると、手首から光の輪っかが出て来る。

「そう！笑顔を作る大好きな気持ち！」

「笑顔と……大好き……」

ホイップの言葉を聞いたアンジュも右の拳を胸元に当て、手首から光の輪っかを出す。

「手を取り合つて、奏でる想い！」

「奏でる……想い……」

エトワールもミラクルの言葉を聞くと右の拳を胸元に当て、手首から光の輪っかを出す。

「愛する心と！幸せの花！」

「愛と……」

「幸せ……」

ピーチの言葉がマシエリとアムールの胸に響くと、彼女らは右の拳を胸元に当て、手首から光の輪っかを出す。

「夢に向かつて——」

「羽ばたく強さ！」

「夢へ……羽ばたく……！」

アーラもフローラとドリームという言葉を聞くと右の拳を胸元に当て、手首から光の輪っ

かを出す。

「そして!」

「希望!」

「プリキュアの!美しき魂が!」

「邪悪な心を、打ち砕く!」

「そして!輝く未来を切り拓く!」

最後にエールがそう叫ぶと、6人のブレスレットが『プリキュアミライブレス』へ変化した。

「みんな!行くぞ!」

ジオウがドライバーを回し、エール達はブレスレットを掲げる。

『フィニッシュタイム!』

「プリキュア!ミライブレス!」

ジオウが飛び上がると彼の背後から次々と仮面ライダーが召喚されていき、エール達はプリキュア達の力を集めていく。

「繋がる絆!私達の未来!プリキュア!オール・フォー・ユー!」

『オールトウエンティタイムブ레이크!』

「はあく…だあああああッ!」

プリキュアミライブレスに手を翳してから右腕を振り回して突き出し、大量のアスパワワを放つオール・フォー・ユーと二十人の仮面ライダーが一斉にライダーキックを放つ。

その時、ジオウ達七人は技を放つと、何かを感じる。

「感じる……………」

「沢山の……………」

「思いが……………」

「希望が……………」

「溢れて来る……………」

「ここにいるみんなじゃない。地球にいる人達の……………」

「みんなが望む明日が……………！うおおおおお！」

「「はあああああああ！！？」」「」」

全員がさらに力を込めて、技を放ち続ける。

「ウワアアアアアアアあああああああ！」

すると、オシマイジオウⅡからトゲパワワがどんどん放出され、浄化されていく体から光が放たれる。

それは、改竄された歴史が、本当の時間に戻る兆候であった。

その時、アナザージオウⅡとトラウムが二人に戻る。

トラウムが目を開けると、目の前に映ったのは自分と起動したばかりのルールーがいた。

「これは……過ぎ去った時の……」

トラウムが今いるのは、ルールーが起動してすぐの心の中だった。

「戻りたいものだ……」

「時は戻りません。ですが……明日は来ます」

背後からルールーが現れ、彼にそう伝える。

「そうだな」

トラウムが振り返り、ルールーと目を合わせて返事する。

「——すまなかった」

「いつかまた、お会いしましょう」

トラウムが涙を堪えて微笑むと同時に、オシマイライダー達も微笑んで消滅し、アナザーライダー達も全て消滅していく。

光が消えると、ソウゴ達はサンクルミエール市に戻っていた。

ソウゴが振り向くと、そこには最初からここにいたみんながいた。他のみんなはそれぞれの場所へと戻っていたかもしれない。

「『ソウゴ（君・さん・時見先輩）！』」

「みんな……」

自分の名前を呼ぶ声が聞こえ、ソウゴは振り返り笑って言った。

「ただいま！」

『おかえり！ソウゴ！』

ソウゴはようやくわかった、本当の意味で自分の居るべき場所へ帰ってきたのだと。

「これで元通りだ」

「ああ」

「俺のことみんな思い出した？」

ソウゴが笑いながらそう聞くと、みんなは頷いた。

「過川飛流は？」

ウオズが聞くとソウゴが時計塔の方を見る。

そこにはアナザージオウⅡウオッチが摘出され、元の姿へとなって倒れている過川飛流がいた。

「ッ……まだ……」

倒れていた飛流は意識を取り戻すと、目の前に転がっていたアナザージオウIIウオッチに手を伸ばす。

「このお宝は僕が頂いていくよ」

だが海東が現れ、アナザージオウIIウオッチを奪った。

「ああ。くれてやろう」

「またね」

スウォルツが持つていくことを許可すると、海東はアナザージオウIIウオッチを奪い去っていく。

「それは俺のもんだ。返せ!」

海東に奪われたウオッチを取り返そうと手を伸ばす飛流の前に、スウォルツが彼の前に出て無慈悲に現実を言い放つ。

「お前の役目はもう終わりだ、お前に王たる資格など無い。一時の夢を見られただけでもありがたいと思え」

「そんな……」

それを聞いた飛流は、クライアス社に都合の良い操り人形として動かされ、見捨てられたことを悟った。

「待て……」

そこへ、龍牙に支えられたボロボロの晴夜が現れた。

「晴夜。その怪我……」

「スウォルツ……お前、この世界で何が狙いだ」

「貴様の意見に答えん。また会おう、デイケイドの力はもらった」

スウォルツは晴夜の問いには答えずに去っていく。

そして、彼が去ったほうを見ると士が倒れていた。

「士さん……あ” ああ……」

士が倒れているのに気付いて近づこうとすると、体からまた激しい痛みが走り、晴夜が倒れてしまう。

「晴夜！ 晴夜！」

マナが倒れる晴夜に必死に声をかける。

アナザージオウⅡの戦いから、数日が経った。

あの後、晴夜は直ぐに病院に運ばれた。命には別状はないが、怪我が酷く治るには時間がかかるそうだ。一方の士は……

「というわけで、しばらく厄介になるな」

デイケイドの力を取り戻すために、当面ははぐくみ市でビューティーハリーの居候と

なった。

「何故、貴様がここにいるんだ」

「スウォルツから力を取り戻すには、この町がいるのが得策だ」

「しかし、桐ヶ谷晴夜をあそこまで倒したとなると、我が魔王。諸君らもこれからの戦いはとてもつもなく厳しいものだろ。覚悟はあるのかい？」

ウオズがこれからクライアス社のプレジデント・クライ達はより厳しい戦いになると話すと、ソウゴは固い決意を刻んだ目でそれに応える。

「頑張ります！」

「望むところなのです！」

「可能性は低いですが、みんなとなら……」

「負けないよ！絶対に！」

「プリキュアの先輩達も、このような試練を乗り越えてきたんです！」

「絶対に未来を助けるんだ！フレ！フレ！私達！フレ！フレ！オー……！」

はな達はどんな困難があろうと、友がいれば乗り越えられると語ると、ソウゴも立ち上がって手を伸ばす。

「ここにいるみんなが行ける気がする！だから、負けないよ。」

俺達の手で守るんだ。今も、未来も！」

『うん!』

ソウゴ達は手を重ね合わせ、今と未来を守ると誓うのだった。

「こうして、我が魔王達は決意を新たにしながら、友情を深めていったのだった。

——しかしこの出来事は、これから巻き起こる最終章の始まりに過ぎなかった……」

次回! Re. HUGつとジオウ!

第50話 2018: ハロウィン祭り! 最凶のライダー!!

HUGっとジオウ!補完計画. その4 「新たな予告が始まる刻」

——改竄された世界を元に戻すために、アナザージオウⅡとドクター・トラウムと戦ったソウゴ達。

だが彼らの前に、新たな別の事件が発生した。

「あんた……もしかして火野映司?」

「君……俺を知っているの?」

ソウゴ達の前に現れた火野映司。

だか彼は、ソウゴの知っている映司ではなかった。

「奴は只の仮面ライダーオーズじゃない……『オーズ×プリキュアの世界』の、仮面ライダーオーズだ」

困惑するソウゴ達は、プリキュアの意味を名乗る女性から話を聞く。

『私の所為なんです……私が余計なことをしたばかりに、プリキュアワールドが……ッ!』

そして、新たに現れたタイムジャッカー。

「俺の名前は『ジン』。又の名を……新世界の……神ッ!」

『オーズ：プトテイラ!』

彼は『オーズ×プリキュアの世界』のオーズの力を奪い、アナザーオーズプトテイラとなつてソウゴ達と対峙する。

絶体絶命の危機に陥つたジオウ達の前に、宇宙一ゴーカйна奴らが登場する!?

「久しぶりだな・・・デイケイド!」

「お前は・・・マーベラス?」

ジオウとエール達は世界を守る為、別世界のプリキュアを助ける為、宇宙をかけた戦いに挑む!

『お願い……私の代わりに、この世界を救つて!』

「いくよ・・・みんな!変身!」

「変身!」

『ミライクリスタル!ハートキラツと!』

『ゴーカイチェンジ!』

『仮面ライダージオウ!』

『タートーバ!タトバタ・ト・バ!』

『HUGつと!プリキュア!』

『ゴーカイジャー!』

Re. HUGっとジオウ!特別編X!『MOVIE大戦000』

ゲイツ「はいストップ」

ソウゴ「……えっ?何ゲイツ?」

ゲイツ「……まあ、色々言いたいことがあるが、まずはこれだけ言わせてくれ。

なんだこの予告!?!絶対ガゼじやないか!!」

皆さんこんにちは、ウオズです。

先程は我が魔王が勝手に次回予告的な奴を出しましたが、このような話は絶対に出ません。

ですので、海賊戦隊ゴーカイジャーはおろか、『オーズ×プリキュアの世界』の仮面ライダーオーズも一切登場しません。

はな「てゆうか、なんで急に予告なんで出したの?」

ソウゴ「なんでって、宣伝だよ。このSSの」

さあや「どうゆう事?ソウゴ君」

ソウゴ「だってこのSSの評価バー見てみてよ、全ツツ然色付いてないじゃん!だからこんな感じで読者の興味を引かないと閲覧者も増えないよ!!」

ほまれ「いや、評価バーに色付かないの、作者の技量不足だからってだけじゃないの？」

ルルー「もしくはリメイク版だから、では？」

ハリー「『オリジナルを超えるリメイクは生まれない』って、誰かが言っとつたしな・・・」

ソウゴ「シャラップ!!俺はこの問題を解決する為に、嘘でもなんでもいいから予告を出して評価する人を増やしていかないと!」

えみる「頑張る方向性が間違っている気がするのです・・・」

ツクヨミ「というか、もう嘘予告って言ってるし」

ソウゴ「そういう訳で、嘘予告三銃士を連れてきたよ」バーン!

はな「嘘予告三銃士!」

ソウゴ「まず一人目!銀河を股にかける宇宙一バカな侍、仮面ライダーギンガ!」

ギンガ「いちごパフェ大盛り持ってこい」

ソウゴ「二人目!美しい花にも毒はある!紅きバッドガール、キュアエース!」

エース「前金として酔昆布1ダースよこせヨロシ」

ソウゴ「三人目!眼鏡のない新八はただの眼鏡かけ器だ!ファイリッブ!」

ファイリッブ「オィィィィィ!?!何だよその紹介!もつと良い紹介しろよ!!」

ギンガ「犬の散歩から爆弾処理まで承ります!俺たち——」

ギ・エ・フィ『万事屋ギンちゃん!』

ゲイツ「オイイイイイイイ!!名前と見た目変えただけで、完全にコイツら『銀魂』の万事屋銀ちゃんメンバーじゃねーか!!出して良いのかよ!このSS、仮面ライダーとプリキュアのクロスSSなのに!?多重クロスオーバーSSじゃ無いのに出して良いのかこれ!」

ハリー「イヤ、今更やる。今までおまけ編とかで散々パロネタをブチ込みまくったんやから」

ツクヨミ「というか、SSだから見た目が変わっているのすぐわかりづらいし」

ギンガ「うるせーなこのヤロー、しよーがねーだろ作者の無茶振りでこんな格好する羽目になったんだからよ」

はな「無茶振り?どういう事ですか?」

ギンガ「いやー・・・それはアレだよ。プリキュアと仮面ライダーの意思的な奴からの助言で他作品キャラを出すと世界がヤバい感じにフュージョンしちゃうから、ライダーキャラとプリキュアキャラに扮して来い……的な事を言われたんだよ」

ハリー「いやフワツとすぎイイイイイ!!何やねんプリキュアと仮面ライダーの意思って!?!『オーズ×プリキュアの世界』の設定引っ張って来んなや!!」

エース「此処の駄作者の事アル。どうせ、他作品キャラを出すとタグに多重クロスって付けてなくちゃいけないから、それを面倒くさがって『取り敢えずライダーとプリキュアのキャラとして出しとこ』って感じで中の人ネタのコスプレさせたに決まっているアル」

フィリップ「そういう裏話止めろよ！此処の作者の評判下がるから!!」

エース「うるせえアル眼鏡なしクソ眼鏡。実写版で菅●将暉に演じて貰ったからって調子に乗ってんじやねえヨ！」

フィリップ「乗ってねえし!?!? ……ていうか、眼鏡なしクソ眼鏡ってそれただのクソじやねえかアアア!?!」

ギンガ「うるせーぞお前ら。まあ、要するにアレだろ。このSSの予告作って宣伝しようって話だろ？」

エース「そういう事なら私達にお任せアル！バッチリ良い感じの予告を用意するアル！」

フィリップ「いや、不安しかないんですけど？あつちでまともな予告とか口クに出ませんでしたよね？」

ギンガ「でえじょうぶだあ、なんとなかっぞ」

フィリップ「此処で悟空のモノマネやめろよ！地味にイラつくから!!」

ソウゴ「なんでも良いけど早く考えてくれる? 尺が無くなっちゃうから」

ゲイツ「いや、SSに尺もクソも無いだろ」

ギンガ「わーたよ、考えれば良いんだろ? 考えれば」

そんなこんなで万事屋に予告のアイディア提供をしてもらった事になった我が魔王たち。

はてさて、どんな予告が出来上がるか楽しみです、マル。……アレ? 作文?

ギンガ「いいから、このSSに足りないのはミステリーだ。この作品には伏線が貼ってあったりしているが、原作ジオウとHUGっと!プリキュアがとつくの昔に完結し、この作品自体がリメイク版である以上、この先の話を知っている人が殆どだ。だからミステリーをつける事でこの先に何が起こるのかと言うワクワクを醸し出せるようにしなきゃいねえ」

ルールー「例えば、どの様な予告にするのですか?」

ギンガ「そうだな……例えばこんな感じだ」

「コナン映画の最初あたりとかで良く聞くBGM」

俺は普通の高校生・時見ソウゴ!

幼馴染の薬師寺さあやと遊園地に行つて遊んでいる時、小さい穴が沢山空いたカツコ

いいのかよく分からない服装をした人物の取引現場を目撃した。

取引を見るのに夢中になっていた俺は背後から近づく大男に気付かなかった。

俺はその男に毒薬を飲まされ、目が覚めたら・・・

ブロリーになったヨ☆

フィリップ「なんでだアアアアアアアアア!」

はな「なんで体が縮むとかじゃなくて伝説の超サイヤ人になるんですか!それ事件解決するどころか現場を破壊しそうなんですけど!!」
「どうか体の細胞変わりすぎじゃ無いですか!?!」

ギンガ「このSSの作者にミステリーやトリックを書けるような頭脳があると思うか?」

事件は会議室で怒るんじゃない、自分の手で起こすものだ!」

さあや「それなんてマツチポンプ!？」

ギンガ「見た目はこんな最低、頭脳はお笑い、その名は名探偵ブロリー!」

ほまれ「それもはや名探偵じゃなくて迷探偵じゃん!？」

エース「やつぱりギンちゃんはあてにならないネ、こうなったら私が考えるアルヨ。

このSSに必要なのは恋愛ネ!でも男女が巻き起こすイチャラブや、近所のホテルのベットの所でオツパじまるプロレスごっこはもう時代遅れアル。今の恋愛業界は『かぐや様は告らせたい』の様な頭脳戦アル!こんな感じで……」

——どんな恋人達にも、力関係が存在する。

恋愛は戦、告白した方が負けなのである!

ヤベーイくらいにエリートな奴らが集う学校には、二人の天才が居た。

てえんさい科学者の卵、桐ヶ谷晴夜!

生徒会長、相田マナ!

惹かれ合う二人。

今此処に、究極の頭脳戦が、幕を開けるツツツ!!

マナ「好きですツツ！だから付き合つてあげる！」

晴夜「俺も好きだツツ！だから付き合つてやる！」

両者、自分の思いに正直すぎて勝負にすらなつて無かつた。

終わり！

フィリップ「終わるの早すぎだろオオオオオオ!?」

ツクヨミ「なんでよりによつてこの人達をチョイスしたの!?完全に人選ミスでしょこれ！始まつたと思つたらとつくに終わつてるじゃん!!これの何処が頭脳戦なのよ!」

エース「此処の駄作者に頭脳戦を書き続けるだけの頭脳が有るとおもつてるアルか。

それにどうせ、此処に来る奴らは皆んなイチャラブに飢えてる恋愛脳と萌え豚共アル。テキトーにイチャラブさせときや評価なんてあつと言う間に集まるアル」

フィリップ「さつきと言っている事が違いすぎだろうがアアアアア!!」

エース「さつきからうるせえアルヨクソ眼鏡!だつたらお前も何か考えるアル!」

フィリップ「ツ!……わかつたよ、考えるよ!」

こういうのって、王道的な奴の方が良いと思うんだよ。こんな感じで……

〔BGM：前前前世〕

——知らない間に入れ替わっていた。

——夢の中で入れ替わっていた。

——ずっと誰かを探している。

——君の名前が、どうしても思い出せない。

——思い出そうとしても、君の名前が思い出せない。

「君は誰なんだ!」

「お前は誰なんだ!」

君の名は

ソウゴ「……君の、名は——」

ユウコ「私は女王じゃアアアアアアアアア!!」

「ファイリツプ「誰エエエエエエエ!?」

「ちよつと!?今出てきた人誰!?てか、いきなり女王とかヤバいんだけど!」

ソウゴ「ユウコさん!!」

ファイリツプ（知り合いだったアアアアアア!?）

ゲイツ「北島ユウコ!?お前は確かオーラに殺された筈だぞ…ッ!」

ファイリツプ（しかも故人だったアアアアアア!?）

ギンガ「ばばばバツバツバツバツ馬鹿言つてんじゃねえよお前。死んだ人間が、此処に現れるわけねえだろ!」

ルールー「…貴方今、面白いくらいに震えてるんですけど?」

ギンガ「武者震いだっつーの!!」

ユウコ「何故私ここに居るのかって?それは私の足元を見ればわかるわ」

ソウゴ「えっ?足元を…あつ、透けてる」

さあや「ついでに頭に三角巾付けてる……」

ユウコ「この私があ程度の程度の出番で満足するわけ無いだろ!というわけで地獄から舞い戻ってきたぞ!」

ギ・ゲ・ほ「」

ハリー「……コイツら、気絶しとる……立つたまま気絶しとる……」

えみる「誰かアアアアア!? だれかエクスシストとか僧侶とか呼んできてくださああい!!」

ユウコ「フハハハハハッ! その程度でこの私が成仏などされるか!!」

ブロリー? 『などど、その気になってたお前の姿はお笑いだったぜ』

フィリッパ「なんかブロリー出てきたアアアアアア!」

ユウコ「クソ! 地獄からの使者がもう来たか!!」

地獄からの使者『お前が地獄に戻る意思を見せなければ、俺はお前を消滅させるだけだあ』

ユウコ「おのれ! やっぱり私の出番、これだけか!! ……あつ、ソウゴとさあやよ。これから色々辛いことがあるだろうが、頑張りたまえ。サラバ!!」

地獄からの使者『フハハハハハハ!! この俺から逃げられると思っっているのか? 血祭りに上げてやる!』

エース「……行っちゃったアル」

ツクヨミ「……これどうするの? 予告考えてくれる人の内、一名が話しできなくなっただけだ」

ソウゴ「……なんかもう、どうでもよくなっちゃった。ていうか、予告作っちゃった

この作品の評価が上がるわけじゃないし」

エース「じゃあ私達がやってきたことはなんだったアルかアアアア!?ここに来てもうやらなくていいってふざけんじゃねえヨ!!」

ソウゴ「だって此処の駄作者、この話書くの面倒くさく思い始めてんだもん」

フィリップ「だからそういう裏話やめろよ!微妙に生々しいから!!」

ソウゴ「でも、これだけで終わるのもアレだし、取り敢えず昭和なネタ出しておく?」
フィリップ「何故そこで昭和ネタ!?!」

ハリー「と言うかそれ、今の若者でわかる人おらんやろ」

はな「というか、出て来るって例えばどんなネタが出るの?」

ソウゴ「えっ?・・・えーっと、おそ松くんとか天才バカボンとか?」

フィリップ「赤塚不二夫先生かよ!それだったらおそ松さんとか深夜の天才バカボンの方がいいんじゃないの?ジェネレーション的に」

エース「『シエー!!?』とか『これでいいのだ』とかアルか?」

ツクヨミ「いや、それは昭和の時からあるやつだから」

ソウゴ「ん、昭和ネタを使うとしたら、例えばこんな感じかな?」

あの八つ子達が、帰ってきた!

ソウゴ「おーーーーーい!大変だぞおーーーーい!

ゲイ松!ツク松!はな松!さや松!ほま松!ルル松!えみ松!

一同『どうしたの?ジオ松兄さん?』

ソウゴ「大変なんだよ!俺たちの物語がノベライズ版になることが決定したんだよ!」

一同『急急急急急急急急急急ッッッ!』

はな「それ本当なのジオ松兄さん!」

ソウゴ「本当だよ!というかもうやってる!ホラ!!」

一同『えっ?・・・あああああ!!』

えみる「ほんとうなのです!」

ほまれ「私達、ノベライズになってる!!」

一同『イエーイ!フウウーーーーー!!やったやったアアアアア!』

ゲイツ「・・・心配だなあ」

ソウゴ「?どうしたのゲイ松」

ゲイツ「だって俺たち昭和のキャラクターだよ?今更人気が出るかどうか・・・」

ソウゴ「大丈夫だよ!」

一同『大丈夫、大丈夫!』

ソウゴ「これが俺たちだろ？せつかく始まつたて言うのに、そんなこと言われたら……
ひじよくにキビシ〜！」

ゲイツ「大丈夫それ！古すぎない!？」

ツクヨミ「なんだバカヤロー！文句あるか！何見てんだよ！」

ゲイツ「は？」

はな「どうもすいません」

さあや「ガチョーン！」

ほまれ「アイーン！」

ルールー「お呼びでない、お呼びでない」

えみる「コリヤまた失礼しました！」

一同『ズコーー!』

ゲイツ「オイイイイイイ!?!こんなの人気出るわけないだろオオオオオオオ!!」

完

ソウゴ「……みたいな？」

フィリップ「いやコレ、おそ松さんの伝説の第1話の冒頭の丸パクリじゃねえ
かアアアアア!?!」

ソウゴ「パクリじゃないよ、オマージユだよ」

ギンガ「こうしてしてみると、ギャグの元ネタが何なのか分かんねえな・・・」

ウオズ「というか、私とハリー君がハブられてないか？」

はな「あつ、ギンさん復活している」

エース「というかウオズ、居たアルか。冒頭から地の文しかセリフが無いから、今回は出番ないと思ってたアル」

ソウゴ「ウオズとハリーはどっちかというと保護者枠だからね、気になるなら二人のどっちかが『シエー!』をやってみたら?もしくははあらすじで『コニヤニヤチワ』って言う?」

ウオズ「丁重にお断りするよ」

ハリー「やめとくわ」

ソウゴ「じゃあ、間を取って『こんなジオ松さんは嫌だ』」

ゲイツ「はあ!?!待て!何だそのフリップは!!」

ツクヨミ「あつ、ゲイツも復活した」

フィリップ「・・・というか、どう間を取ればそうなるんだ!?!」

ソウゴ「こんなジオ松さんは嫌だ、『奇跡の世代である。』」

ハリー「俺らバスケでもするんか!?!」

ソウゴ「というか、『二等分の花婿と六等分の花嫁である。』
さあや「圧倒的に男女比が合っていない！」

ソウゴ「というか、『タイムレンジャーである。』」

はな「何故そこで戦隊モノ!?!」

ソウゴ「というか・・・」

フィリップ「もういいだろ！色々と収集つかなくなってきたし!!」

ギンガ「ハイじゃあ、今回は終わり!!」

ウオズ「それでは皆さん、また次回も見てね☆」

ことり「アレ？私の出番は？」

終わり

第4章 『プリキュアのキオクとライダーのレキシ編』

第50話 2018： ハロウィン祭り!最凶のライ

ダー!

アナザージオウIIとの戦いから何日か経ったそんなある日、ソウゴはタイムマジンで大貝町の病院へとやってきた。

「桐ヶ谷晴夜君の病室ってわかりますか?」

この前の事件で協力してくれた晴夜に会いに来たソウゴは、看護婦から晴夜の病室を訪ねる。

「……か……」

その病室はワンルームの個室部屋だった。看護婦曰く、どうやら四葉財閥が手配したらしい。

だがそんな事よりも、ソウゴは病室へと入る。

「晴夜?大丈夫?」

「よう、ソウゴ」

病室に入ると、そこにはベットにいる晴夜と隣で座ってりんごを剥いている相田マナがいた。

「怪我大丈夫？」

「つたく、心配しすぎだよ。これくらい……ッ!?」

晴夜が肩を回そうとすると、身体から痛みが走り出す。

「もう〜！無茶しないでよ」

「ごめん……」

無理して身体を動かした事を謝ると、マナが剥いたリングを皿に置いて晴夜に渡した。

「でも、誰にやられたの？」

アナザージオウⅡ相手に善戦していた晴夜を、ここまで酷使させた人物は誰なのかと、ソウゴは気になっていた。それを聞かれた晴夜は、苦渋の表情を浮かべながら語り出す。

「……プレジデント・クライだよ」

「クライ!?」

晴夜の口から、彼をここまでさせたのはクライアス社の社長……プレジデント・クライだと聞かされ、ソウゴは思わず驚いた。

「しかも、仮面ライダーに変身した」

「ドクター・トラウムか……」

それを聞き、ビシンやリストルの様にトラウムが彼にドライバーとウオッチを用意したんだと推測した。

「でも、晴夜はその人と戦って何か感じたんでしょ?」

「何かあって?」

そう考えていたソウゴの耳にマナの言葉が聴こえると、晴夜に何を感じたんだと問う。

「……土さんと一緒に色々調べてみて、あのプレジデント・クライには……とても悲しい思いが伝わったんだ。」

実際に戦ってみて、その深さをより感じたんだ」

「悲しみ……」

皆の時間を止めて未来を奪う存在である筈のプレジデント・クライから伝わる、悲しみ。

それがどんなものか、今のソウゴには想像もつかなかった。

はぐくみ市はビューティーハリーのすぐ近くで、月末に行われるハロウィンのイベン

トの準備が執り行われていた。

「これがハロウィンつちゆうモンか」

「かぼちやいっばーい！」

買い物帰りのゲイツ、ハリーと抱っこ紐で抱えられたはぐたんが、足元や周囲のカボチャを見て呟く。

「おつ、ママさんにパパさん……と商店街のおつちゃん達か」

奥の方で準備に関しての話をするすみれと森太郎の他に、町内会長達を見掛ける。

そのまま三人はビューティハリーへと向かう。

「ただい——ま?！」

ドアを開けて中に入ると、はなが擬音を声に出しながらポスターを描いていた。

「こつちも何やつてるんや……?」

「おえかき? みゅー!」

はぐたんがはなの元へ駆け寄り、後ろからポスターを見る。

「ぎえ〜つ!」

「つ? どうしたのはぐたん?」

はぐたんは悲鳴を上げ、驚いたはなが振り返る。

「いや〜つ!」

恐怖ではなの足元にはぐたんが縋り付く。

しばらくすると、ビューティーハリーにゲイツ達が集まる。

「月末のハロウィンイベント……あれ、HUGMANとママの勤めてるタウン誌が主催だから、何か応援出来ないかなって……」

床に正座したはなが説明し、説明を終えてから両腕をカクつと降ろす。

「去年はパレード盛り上がったよね」

「商店街にも、ズラツと出店が並んでね」

「そうなのか」

ゲイツがさあやとほまれるの去年のハロウィンについて聞いていると、椅子に座っていたウオズもハロウィンに興味を示し始める。

「是非とも興味あるね。ハロウィンとは世界における伝統のようなものだからね」

「そこで！今年は去年以上のものにすべく、野乃はな画伯が告知ポスターで応援を！」

はながそう告げながら、先程描いたポスターを広げる。しかし、それを見たえみることりは思わず顔を顰める。

「ですがこれでは、恐怖で盛り下がること間違い無いのです」

「小さい子も見るんだから、ちゃんと考えて描きなよ」

「も、も、もう少し……抑えた方が……」

良い子のみんなが見たら思わず泣いてしまってもおかしくないポスターの絵を見ながら二人がそう言うのと、ゲイツもやはりお化け関連は体に恐怖が走る。

「めちよつく……！だ、だから皆さんにも参加をお願いしたい次第で……！メインイベントの仮装ダンスパーティーに是非！」

はなはそう言うてから、ポスターの仮装ダンスパーティーの告知を指差す。

「ダンスパーティー？」

「です！可愛い仮装必須！テーマは夢！なんと参加費無料！」

「仮装ね……ちよつと恥ずかしいな」

仮装と聞き、ほまれはこの歳でコスプレは流石に少し恥ずかしいと感じる。

「自分が好きな物の仮装をすれば楽しいよ！」

「好きな物……巨大メカとか!?？」

「うんうん！」

「私は大怪獣に惹かれます！がおーっ！」

「メカに怪獣……なんか違うような……」

さあやとえみるの願望を聞いたゲイツは、ハロウインの仮装にしては変だと思いだす。

「いいじゃん!みんなでやろうよ仮装!さもないとイタズラするよーっ!」

はなはテンションを上げながら一緒に仮装しようと提案する。

「全然オツケーだよ!」

「あの……一つ質問があります」

「ハロウィンって、こう言う事なの?」

ルールが手を上げてツクヨミが質問し、自身のハロウィンに関する結論を告げた。

彼女らが想像するに、ハロウィンとは怪獣やロボットが暴れ回ったり、魔女やミイラがカボチャを持ち歩いたりしてると言うものだった。

「ただいま〜」

「」「えええつ」「?」「」

「ツ?」「?」 どうしたの?」

ソウゴがお見舞いから戻るといきなりみんなが叫び出し、ソウゴはそれに驚いた。

しばらくして、ソウゴ達はHUGMANに移動し、店内を回りながらルールと未来からのメンバーにハロウィンについての説明する。

「ハロウィンって言うのは、仮装もそうだけど、カボチャとかコウモリとか、お化けとか骸骨とか、後……あと——お菓子!」

「仮装した子供達が、トリックオアトリートって言ってお菓子を貰いに行くんだよ」
「そうなの？」

「他にもね。古代ケルトでは、10月31日の夜に、先祖の霊が家族に会いに戻って来る日と考えられているって説もあるんだ！」

「流石は、我が魔王」

流石、歴史に関しては強いソウゴだとウオズは賞賛する。

「へえー、そうなんだ！」

「知らんのかい！」

「素敵なのです！」

「会えなくなった人に会えるかもしれない日……」

ハリーがはなに突っ込み、えみるが感激している近くで、ソウゴの話を聞いていたツクヨミはふと、兄であるスウォルツに殺されたと聞かされた、自分の死んだ家族のことを思いだす。

「名称はデータにはありますが、既に廃れた風習だと」

「廃れた風習？」

ルールが検索すると、ソウゴの言った事は廃れた風習だと語る。それを聞いたさあやは彼女達の時代にはそう言う風習は無いのかと考え始める。

「ルーラー達の時代には存在しないの?」

「はい。全く」

「ホントに? だったら、余計楽しんで貰わなきゃだよ!」

その後、生地とかを購入してからビューティーハリーに戻り、デザインや製作を行う。

「ツクヨミお姉ちゃんはどんな風の作るの?」

「うーん、どうかな?」

「あつ! なんか閃いた!」

彼女らは楽しそうにみんなで仮装用のデザイン画を描いていた。

「さあや、ルーラー……これは……」

「アツハツハ……」

途中からさあやとルーラーがミシンで競い合ったり、試着したりして盛り上がる。

「ハロウィン! ハロウィン!」

両手にハートと星のステッキを持ってはしゃぐはぐたんに、はなが魔女の帽子を被せる。

「はぐたんは、何になりたい?」

「はぎゅ?」

「着たいドレスやなりたい格好、何でもやっていいんだよ」
はしゃぐはぐたんを見て、はなは微笑みを浮かべた。

会場付近のキッチンカーで、ダイガンが蛇の形をしたチュロスの頭に、接着用のチョコクリームを搾つてごく僅かに乗せる作業を行つた。

次に頭に乗せる花を模した飴を、ピンセットに挟んで慎重に動かし、頭に乗せる。そしてようやく飴が乗つたのもつかの間、一瞬で落ちてしまう。

「もう一丁……！」

もう一度行うが、結果は同じだった。

「こんなつまらない事にも明日を夢見て、希望を抱く」

「……？」

「愚かだと思いませんか？ダイガン」

ダイガンが声の聞こえた背後を見ると、いつの間にかリストルとスウォルツがいた。二人は背中をもたれダイガンに向かってそう告げる。

「どうでもいい話だ。今の私は、M A A社の総務係長」

どうでもいいと切り捨てて再度行すが、また落ちる。それを見たスウォルツはため息を吐きながら眩き始める。

「かつて、剛腕で鳴らしたダイガンが情けない事だな。パップルの部下に落ちぶれてるとは……」

「部下では無い! 適材適所と言つて貰おうか! そつちこそ情けなく無いのか? 昔の仲間、今更何の用だ?」

「過去に別れた者達が再び出会うハロウィンとやら……あなたもクライアス社に戻る事を考えてみませんか?」

リストルがダイガンの目の前に移動し、再びクライアス社に戻ろうないかと話す。

「ば、馬鹿にするな!」

「特別室長のポジジョンを与えましょう」

「と、特別……?……?……っ! いかんいかん……!」

ダイガンは思わず誘惑に乗せられそうになるが、慌てて首を横に振つて否定する。

「今の待遇に満足出来なくなった時は、是非こちらに連絡を」

「五分で決めるとは言わんが、早く決める事だ。意見を求めん!」

リストルとスウォルツが名刺を置いてからそう告げ、この場から姿を消した。

「特別室長……」

「なーにサボつてんのよ!」

「うわわわわっ!」

チャラリートと一緒に戻ったパップルの声に驚き、ダイガンは慌ててリストルの名刺を隠す。

「お、お帰り……！」

「チラシ、配って来ましたよー。」

……つて、終わって無いじゃないスカ！」

「ご、五分！あと五分で終わる所だったんだ！ちよつと待つてろ！」

そう言い訳しながらダイガンがポケットに名刺を隠したのを、パップルが気付く。

「ホントに終わるんスカ？」

「大丈夫！任せとけ！」

そう言つて誤魔化すために、ダイガンは仕事に戻った。

翌日。イベント当日を迎え、会場には仮装をした大勢の人達で溢れていた。

「みんな楽しそうやな。はぐたん」

ハリーとはぐたんとツクヨミが先に祭りの中を歩いて賑やかな様子を見てみると、はぐたんが笑顔で周りの会場を見渡す。

「ハロウイン！ハロウイン！」

「そや。ハロウインやな」

ハリーがはぐたんをあやしていると、ツクヨミの顔が目に見えて思い悩んでいる事に気付く。

「この笑顔を守るかな……」

「ツクヨミ……」

ツクヨミはスウォルツに自身の力を奪われ、これからあの力で襲って来ると思うと、本当にここにいるみんなを守るのかと思ひ始め、一瞬空を見上げる。

はぐたんも、どこか寂し気な表情で彼女を見つめる。

「あつ、いた」

「おーい！ハリー！ツクヨミー！」

魔女の衣装をしたはなと、騎士の格好にマントと冠を身につけて騎士王に扮したソウゴが会場に現れたのをハリーを見つけると、二人に声を掛けて駆け寄る。

するとハリーがその場で切ない表情を浮かべ、はぐたんを抱き締めた。

「……………」

「おお、ソウゴー！はなー！」

ソウゴとはなが足を止めた直後にハリーが気付き、手を振って呼び掛ける。

「もう準備出来たんか？」

「う、うん。イケてるでしょ？」

「エエ感じやんか」

「でしょ？」

「ハリーとツクヨミもはぐたんも、早く着替えないとダンスパーティーが始まっちゃうよ？」

「そうか。ほな、急いで戻らんな」

ビューティーハリーに向かうハリーとツクヨミを、ソウゴとはなは不安げな表情で見ながら後を追う。

「……はな。ソウゴ」

するとハリーはビューティーハリーの前で足を突然止めると、二人の方に振り返る。

「？」

「何？」

「今日、むっっちゃ楽しみな」

「……うん！」

はなが頷くとソウゴ達はビューティハリーへと入る。

「お待たせー！」

「おおっ！」

ビューティーハリーに戻ったハリーは、さあや達の衣装を見て声を上げる。

ゲイツは侍風の格好、さあやは小悪魔、ほまればカウボーイ、えみるとルーラーは海賊、ことりははなどは異なる白い服での魔法使いだった。

「…ねえ、ウオズ?なんでウオズは着替え無いの?」

ウオズだけがいつもの普段着のままだったことに気付くと、ソウゴはなんで着替ええないのだと聞く。

「私まで仮装すると、見ている人が驚くのでね? (まあ、わかる人はわかると思うが)」「誰に?…まあいいけど」

最後の小声は聞こえなかったが、ウオズが着替えないのはさて置き、ソウゴは次の仮装に入る。

「さつ、はぐたんもお着替えしましょうねー」

はなが着替えの為にはぐたんを持ち上げ、タオルの上に乗せる。

「さあ、まずは……」

さあや達も加わり、はぐたんを蜂やインゲン豆、天使の衣装に着替えさせる。

「次はこちらを」

「何ぼ作つとるんや!?」

「……!はぐたんの疲労度が78%にアップ……!このままではむずがっつてしまいます……!」

『やばたん……!』

「はぎゆ……」

ルーラーがはぐたんの状況を説明すると、はぐたんは疲れてその場に倒れ込んだ。

「はぐたん。大丈夫……?」

「はぎゆ……」

「ごめん……! 私、はぐたんのなりたいたいのをちやんと聞いて無かった……ごめんね。

はぐたん……」

はなははぐたんを持ち上げ、後ろ頭を撫でて謝る。

「はぐたんは、何になりたい?」

ソウゴがはなに抱き抱えられたはぐたんにどんな仮装をしたいのかと聞く。

「えつと……じいおう! ぷいきゅあ!」

『えつ?』

「じいおう! ぷいきゅあ!」

『ジオウ? プリキュア?』

はぐたんはジオウとプリキュアを合わせた仮装をリクエストする。

「はぐたん、ジオウとプリキュアになりたいんだ!」

「はぎゆ!」

はぐたんは彼女の問いに対し、笑顔を作って肯定する。

「そっか、そうだよね」

「何で気付かなかったんだろ」

「今からお衣装を作り始めるのです!」

「今から作って間に合うのか?」

新しく衣装を作ろうとするほまれやさあや達にゲイツが間に合うのかと聞くと、今の時間を確認したルールが残り時間を話す。

「パーティー開始まで、後一時間と十三分」

「みんながいるからパーティーには間に合うよ!」

「それじゃみんな!やるよ!」

『おーっ!』

はなの掛け声で皆は手を重ね合わせ、腕を上げる。

はな達は大急ぎで、はぐたん用のジオウとプリキュアを合わせた仮装を作り始めた。

その頃、会場入り口付近のキッチンカー。パップル達が自分達の今日の仕事を説明する。

「アタシはチラシの配布と客の呼び込み。チャラリートはウチの事務所に向いてそうな

子のスカウト」

「オツケーです！」

「ダイガンは店で調理アーンド接客！」

「分かった……！」

三人は昨日と同様の作業をしながら返事する。

「それじゃあ各々……頑張るのよー！事務所の為に稼ぐわよー！」

パップルとチャラリートが移動し、ダイガンは作業を続けた。

しかし、昨日と同様に飴を落としてしまい、遂に彼のストレスが爆発してしまった。

「だあああああーっ！やってられるかこんな仕事………ん？」

やってられるかと激高した直後、近くにいた女性が靴擦れした事で放出されたトゲパワに気付き、ポケットに入れたリストルの名刺を手元に出す。

「クライアス社……やっとな私の価値が分かったか……」

明日への希望よ、消えろ！ネガティブウエーブ！」

ストレスによって魔が差したダイガンは両手からネガティブウエーブを放出させると、女性からトゲパワワを取り出し、暗黒の雲のようなエネルギーに変える。

「発注！猛オシマイダー！」

暗黒の雲がお化けのぬいぐるみに憑り付き、お化け猛オシマイダーが作り出された。

「よし!それじゃあ……」

『オシマイダ〜!』

「っ。今のは……」

外の声に気付いたツクヨミを筆頭にソウゴ達が外に出て、逃げ惑う人々と猛オシマイダーを確認する。

「やはりか……!」

「こんな人が多い所で……!」

「楽しいハズのイベントなのに……!」

さあややえみるがそう呟いていると、それを見ていたはながなにかを思いつく。

「っ、閃いた!だったら、みんなで楽しんじゃおうよ!」

「あっ!そういう事か!みんな!」

はなの閃いた内容がわかると、ソウゴ達はジクウッドライダー、ピヨンドライダーを。

はな達はプリハートを取り出し、ソウゴ達はドライバーを装着した。

『ジオウ!グランドジオウ!』

『ゲイツ!ゲイツリバイブ!疾風!』

『ギンガ!』

『ハリー！ギアジェット！』

「「「ミライクリスタル！ハートキラッと！」」」

『グランドタイム！祝え！仮面ライダー！グ・ラ・ン・ド！ジオーウ！』

『ライダータイム！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！
疾風！』

『投影！ファイナリータイム！ ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファン
タジー！ ウォズギンガファイナリー！ファイナリー！』

『ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジェットく！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアラー！」

「「「HUGつと！プリキュア！」」」

全員が変身を完了すると、会場のステージを使い仮面ライダー四人とプリキュア六人

が並び立った。

「キュアエールだ!」

「仮面ライダージオウ!でも、あれ?金ピカになってる?」

「他にも新しい仮面ライダーとプリキュアがいる」

会場にきている殆どはこの前のナイトプールに来ていた人もいる為、みんなの新しい姿に目を光らせる。

「祝え!この、ハロウィンの地に新たな力を手入れて降臨した時の王者!その名も仮面ライダーグランドジオウ。まさに覇道の道を歩み続け、身につけた姿である!」

「グランドジオウ!かっこいい!」

「あの新しいプリキュアの子も可愛い!」

ウオズがいつもよく祝えと叫び、場を盛り上げさせる。

どうやらジオウ達は、この会場をハロウィンのヒーローショーに利用しようと考えている様だ。

「あ、あれは……ジオウが全てのライダーの力を手入れたのか?」

ダイガンはジオウが既に19個の力を手入れ、グランドジオウへとなった事を知らなかった為、酷く動揺する。

「やれ!オシマイダー!特にジオウを早く!」

「オシマイダ〜！」

お化けオシマイダーは動き出し攻撃を仕掛ける。しかし、全員難なく余裕で回避した。

「よ〜し、それなら〜！」

ジオウがライダーのレリーフを触る。

『アギト！カブト！キバ！ゴースト！エグゼイド！』

「みんな使って〜！」

ライダーのレリーフから音声が鳴ると同時に、次々と武器を召喚する。エールにはゴーストのガンガンセイバーを、アンジユにアギトのストームハルバード、カブトのカブトクナイガンのエトワールに、アーラにはキバのバツシヤーマグナムを、マシエリ、アムールはそれぞれエグゼイドのガシヤコンブレイカー、ガシヤコンキースラツシヤールを掴む。

「ヤアアア〜！」

エールがガンガンセイバーを振るい、オシマイダーに斬撃が決まった。

「はああ〜！」

その横からアンジユがストームハルバードを振り抜き、オシマイダーを怯ませる。

「はあ〜！」

「えいー！」

怯んだ所にエトワールがスピードでカブトガンクナイで連続で攻撃し、エトワールに気を取られる隙にアーラがバツシャーマグナムから放たれた泡の弾を放ち続ける。

「アムール！一緒に！」

「行きますよ！マシエリ！」

マシエリとアムールが並び、ガツシャコンブレイカーとガツシャコンキースラッシュャーを構えエネルギーを蓄積させる。

「ヤアアア！」

そのまま二人が二つの武器を同時に斬撃を放った。斬撃は猛オシマイダーに直撃し、そのままオシマイダーが倒れた。

「くう〜ジオウめ〜！」

ジオウがエール達にライダーの武器を渡している事で、いつものプリキュアとは違う戦術でダイガンは苦戦していた。

「いーぞー！」

「凄い！ジオウ！手品みたい！」

みんなジオウの召喚能力に声を上げていた。

「よしー！これで……！」

決めにかかろうとジオウがジクウドライバーを回そうとした。

だがその時。突如として灰色のカーテンが現れ、ジオウを包んだ。

「「ソウゴ（我が魔王・時見先輩）!?!」」

ジオウがカーテンに包まれた事にエール達が気付くが、既にジオウの姿はそこにはなかった。

それを陰から、スウォルツとリストルが見ていた。

「社長、後はご自由に……」

スウォルツが奪ったデイケイドの力でジオウは別空間へ移動させたらしく、彼はそう言うとその場から離れて行った。

その頃、ジオウは周りが採石場のような場所へと移っていた。

「()は？」

「ここは、スウォルツがデイケイドの力で用意した空間だよ」

「っ!?」

何もなかった真つ暗な空を見上げていたジオウの耳に自分の名前を呼ぶ声が聞こえ。振り向くと、そこにはプレジデント・クライが現れていた。

「久しぶりだね。時見ソウゴ君……」

プレゼジデント・クライは今のジオウの姿を見て、不適に笑う。

「それが、全てのライダー達の力を得た姿かい？」

「クライ……よくも、晴夜を……」

「桐ヶ谷晴夜君の事か。彼には無意味な行動だと思い、やめさせるためには仕方なかった」

「無意味……?」

「そう。彼のような仮面ライダーはね……」

晴夜のやっている事が無意味と言われ、ジオウはクライを許せなかった。

「晴夜は、無意味な事をしていない。晴夜はみんなの為に必死に戦っている。だから無意味なんかじゃない！」

ジオウがそう叫ぶと、クライは一息吐く。

「……矢張り君とは、これで決める必要があるようだね」

クライはトラウムが用意した、三本目のジクウドライバーを取り出した。

『ジクウドライバー!』

クライがジクウドライバーを腰に装着するとそのまま、ライドウォッチを起動させる。

『クライ!』

ウオッチを起動させるとドライバースロットに装填した。すると、背後から金色の懐中時計のエフェクトが出現して、左手に本を持って、右手を上げる。

「変……身」

クライはそう呟くと、右手でジクウドライバーを回転させる。

『ライダータイム！仮面ライダークライ！』

黒い時計バンドのエフェクトがクライの周りを囲むと、黒と白のカラーに背中に金色の懐中時計が付いたアーマーを装着し、マスクには赤で『ライダー』と刻まれたインジケーションフレアイをセットしたライダー、仮面ライダークライへと変身した。

「……」

「……」

ジオウが変身完了したクライを、クライはグラウンドジオウになっているジオウを見て、二人は同時に睨み合っていると、ジオウが先に走り出した。

「うおおおー！はあッ！」

ジオウが先にパンチを仕掛ける。しかし、クライは腕を上げて攻撃を防ぐ。

「ふうー！」

「ッ……」

咄嗟にクライがカウンター攻撃をし、ジオウはその攻撃を防いだ。

「はあー!」

攻撃を防ぐと、ジオウはクライの腕を振り払う。

「はあー!やあー!」

「む……」

ジオウとクライは互いに攻撃を繰り返し防御すると、攻撃を繰り返すという、お互い格闘戦は互角の勝負を見せる。

だがジオウとクライの格闘戦は決着が付かず、一度離れる。ジオウはサイキョーギレードを召喚した。

『ジカンセイバーショット!』

対するクライは大剣のような武器、ジカンセイバーショットを出現させた。

「はああー!」

ジオウのサイキョーギレードとクライのジカンセイバーショットが何度もぶつかり、剣を互いに振り回し、火花を散らす。

その間、ジオウは晴夜の言っていた事を思い浮かべる。

『あのプレジデント・クライには……とても悲しい思いが伝わったんだ。』

実際に戦ってみて、その深さをより感じたんだ』

晴夜はクライと戦った際、彼から深い悲しみを感じたと語っていた。しかし……
（……なんだろう、この感じ……）

クライの攻撃……心が空っぽのような、変な感じがする）

彼と戦っていて気付いたが、クライの攻撃には気持ち……心がないように思えた。
今まで戦っていた相手は、攻撃に気持ちに乗せていた。

あのオーマジオウですら、何かの気持ちに乗せていた様に感じていた。

だけどクライには、そのような感情が無いように感じた。

なのに、全然こっちの攻撃が決まらない。

「だったらー！」

一度ジオウはクライから距離を取る。

『ファイズ！』

ファイズのレリーフを触り、ジオウは仮面ライダーファイズ・アクセルフォームを召喚した。

『start up』

「ヤアアア！」

ファイズがアクセルの高速のスピードでクライに一直線に向かう。

「ぶんー！」

しかしクライは慌てた様子を見せず、手を広げるとその時、ファイズの動きが止まった。

「えっ?」

「こんな事では、僕は倒せないよ」

そう告げるとクライはドライバーを回した。

『フィニッシュタイム!タイムエンド!』

「ふん!」

ドライバーから音声が鳴ると、白と黒のエネルギーがクライの右足に集められ、強烈なキックをファイズに打ち込んだ。

「わあああああ!」

それを受けたファイズは消滅した。

「時間を止めた……」

クライもタイムジャツカーのように時間を止める力を見て、ジオウは驚く。

だが、これならあの晴夜が何も出来なかった事も領ける。

「……これを使おうか?」

『ネガ電王!』

クライは腕のライドウォッチホルダーからウォッチを取り出し、
“ネガ電王”と鳴つ

たそのウオッチを装填し、ドライバーを回す。

『アーマータイム！ネガフォーム！ネガ電王！』

すると、クライの前に両肩がデンライナーに類似したネガデンライナーとなっているアーマーが出現。アーマーを装着するとクライのカラーが白と紫となり、マスクのライダー文字が『ネガデンオウ』と刻まれた。

「それなら……」

ジオウは電王のレリーフを触る。

『電王！』

その音声と共にデンカメンソードを召喚すると、それを掴みクライに向かっていく。

オシマイダーと戦っていたプリキュアとゲイツ達は、オシマイダーに攻撃を繰り返す続ける。

ゲイツはジカンジャックローのエネルギーを溜め込み、トリガーを引く。

「はあー！」

ゲイツが疾風のスピードでオシマイダーを攪乱を続け、何度も攻撃を繰り返す続ける。

「行くぞー！」

ジカンジャッククロウにエネルギーを蓄積させると、ハリーがドライバーを回す。

『つめ連斬!』

『ジェットタイムフィニッシュ!』

ゲイツはつめ連斬の無数なエネルギーの雨を繰り出す。

「いたあ〜!」

その雨の中、ハリーが勢いよくパンチを喰らわせ、攻撃を受けた猛オシマイダーは倒れた。

「[[[[メモリアルキュアクロック!チアフル!]]]]」

それを見たエール達は好機と思い、ミライパッドをメモリアルキュアクロックに変化させる。すると、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「[[[[ミライパッド!オーブン!]]]]」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

「[[[[プリキュア!チアフルスタイル!]]]]」

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がチアフルスタイルに変身する。

「『メモリアルパワー！フルチャージ！』」

エール達はパワーをメモリアルキュアクロックに集める。

「『プリキュア！チアフルアタック！』」

六色の五つ葉のクローバー型エネルギー弾を発射するチアフル・アタックを放ち、猛オシマイダーを浄化させる。

そしてジオウとクライの異空間での戦いの方は、デンカメンソードとジカンシヨットセイバーがぶつかり合っていた。

「ッ……」

「……」

ジオウはデンカメンソードを捨てて、ジカンギレードとサイキョーギレードを出現させる。

『サイキョウファイニツシユタイム！』

『電王！』

サイキョージカンギレードに合体させるともう一度電王のレリーフに触り、今度は電王ライナーフォームを召喚した。

そして、二人は同時にドライバーを操作する。

『『フィニッシュタイム!』』

ジオウは電王の後ろへと回り、電王が出現させた線路に乗り込み、クライに突撃する。それに対し、クライはガンブレードの刀身から紫のエネルギーを纏う。

『オールトウエンティタイムブ레이크!』

『俺のタイムエンド!』

「名付けて電車切り!」

ジオウと電王が繰り出したタイムブ레이크とクライのタイムエンドがぶつかり合った。

「ぐうううう……」

「っ!?」

「うわああああ!」

「くう……」

二人の放った技はそのまま衝撃で相殺に終わり、二人は吹き飛ばされ地面に倒れる。

「うっ……強い」

「まだ、オーマジオウではないのに、これ程の力とは……」

互いの強さに驚きながらも、倒れていた二人が起き上がった。

「我が魔王!」

そこへウオズが現れた。

「ウオズ。オシマイダーは？」

「問題ない。既に片付いた。とりあえず、ここから出よう」

「うん」

「……ソウゴ君。一つ言っておく」

「？」

クライの言葉が聞こえると、ジオウは頭にクエスチョンマークを浮かべながらそつちに顔を向ける。

「君と僕はよく似ている」

「えっ？」

そう告げられると、ジオウはウオズと共にこの空間から脱出した。

クライはジオウが去っていくと、ドライバーからクライライドウオツチを外した。

「時見ソウゴ君。君は運命から逃れられないよ……」

そして彼はジオウがいた場所を見ながら、運命から逃れられないと呟く。

元の世界に戻ると会場ではダンスイベントの時間となり、人々が踊り始めた。

その一方で、浄化された際に吹き飛ばされ、会場の離れで満足な表情を浮かべて倒れ

てたダイガンが、パツプルに扇子で頭を叩かれる。

「なーにやってんのよ!」

「す、すみませんでした……!」

ダイガンはパツプルに猛オシマイダーを作った事を謝罪した。

「つたく……アンタの作ったお菓子、子供にだーい人気よ」

「えっ……?」

「アンタがチマチマ乗せてたお花が、可愛いんだって」

「っ、次は……五分で乗せてみせる……!」

「それでこそ、我がまえむきあしたエージエンシーのメンバーよ」

どうやら、ダイガンはパツプルが見なかったことに片付けた。

——その後、ダイガンは自身の給料がかなり減額された事を知るのは、まだ先の事だった。

はぐたんの着替えが終わるまで、ビューティーハリーの階段にそれぞれ狼男とドラキュラの衣装をしたハリーとツクヨミが座り、その傍ではソウゴ、ゲイツ、ウオズが立って待ちながら、ダンスイベントを見る。

そこへソウゴとはなが出て来て、ハリーの隣に立つ。

「ハリー、ツクヨミ、元氣無いね……」

「えっ？」

「そうかな？」

ツクヨミがそうなのかと聞き出すと、はなは苦笑いをする。

「あ、うん。そんな感じがしたって言うか」

「そうか？いつも通りやで」

「私もだよ」

「もしかして、無理してる？」

「もしかしてハロウイン、嫌だった？頑張って付き合ってくれてる？」

ソウゴとはなが嫌だったにもかかわらず、頑張って付き合ってたのかと尋ねる。

「ちやうちやう。全然嫌ちやうで」

「その、何か…色々考えてて……」

「色々？」

二人の言葉を否定すると、色々と考えていた事を告白する。

「クライアス社はオーマジオウが時を止めて未来を奪う。

そしたら、夢とか希望を抱いても無駄になる。そんな事はさせたらアカン。

それにな、明日が来いへんかったら、思い出がいつまで経っても思い出にならへん。

昨日はいつまで経っても昨日のままや。

失くしたモンは失くしたまま……取り戻す事も出来へん。

忘れようにも諦めようにも、時間が動けへんかったらどうしようも無いなって」

ハリーが話すと、ソウゴがツクヨミの方を尋ねる。

「ツクヨミはもしかして、スウォルツのこと?」

ツクヨミはスウォルツの事を考えているのかと訪ねると、彼女は重く頷く。

「うん。スウォルツは私の兄で、私達がこことは別の世界から来たって……」

もしかしたら、私も……みんなにこの世界に迷惑をかけているんじゃないかなって

……」

これを聞いたはなが立ち上がり、階段を降りて少し進んでから立ち止まる。

「ねえ、ハリー! ツクヨミ!」

「?」

「大丈夫だよ。ハリーとツクヨミには、私達がいるよ」

そう言うソウゴが口を開いて二人に言う。

「絶対に未来を奪わせたりしない! 新しい明日と未来を、みんなで迎えよっ! ねっ?」

「ナハハハッ。そうやな。俺も、お前らと未来を奪わせない為に戦つとる訳やからな」

「うん!」

「お待たせしましたー！」

「遅くなつてごめんね」

するとドアが開き、さあや達が姿を現す。

「じゃじゃーん！」

「はぐたんお着替え完了です」

ジオウとプリキュアを合わせた衣装を着させたはぐたんをソウゴ達に見せる。

「名付けてキュアジオウ！」

今のはぐたんの服装は、白と黒のプリキュアのコスチュームに、頭の方には10時10分を指すような針の形をした飾りを付けている。

「凄いやみな！」

「どう？きやわたんでしょ？」

「きやわたーん！」

はぐたんが笑いながらそう言うのと、ハリーは思わず笑顔を浮かべる。

「おお、カッコええやんはぐたん」

「はぐたんとても、良く似合ってるよ」

「私達みんなで作ったんだよ！」

「凄いじゃない！」

「これでみんな、準備が整ったね！」

「良かった〜」

そんなはぐたんを見て、ハリーははぐたんから何かを思った。

「……?」

その時。はなに抱かえられるはぐたんを見たハリーの目に、一人の女性の幻が映り、その幻が微笑みを見せる。

「ハリー?」

「……?」

はなに声を掛けられるとハリーは我に帰り、それを見たほまれはどうしたのかと思っ
た。

「ボーつとしてどうしたの?」

「はぐたんがどうかしたの?」

「あ、いや、スマン……」

はぐたんの方を見ながらぼうつとしていたからそれに関係しているのかとソウゴが
思っていると、ハリーはなんでも無いと誤魔化す。

「どうした?別に謝る程の事じゃないだろ」

ハリーがはぐたんを見て何を思ったのかは、今のみんなにはわからなかったが、ウオ

ズは気を取り直してパーティーに行こうと提案する。

「諸君、そろそろ行こうか？」

「夜はまだまだこれからなのです！」

「はい」

えみるとルルーが共にパーティーを楽しもうとし、

「よっしゃ！今日は踊るで！」

「行くか？」

「うん」

ハリーやゲイツ、ほまれもそれに続く。

「お姉ちゃん！ツクヨミお姉ちゃん！行こう！」

「うん。ことりちゃん」

「行こう！」

「ソウゴ君。一緒に踊ってくれる？」

「うん。いいよ」

そのままソウゴ達はダンスパーティーへ向かい、改めてハロウインを楽しんだのだった。

クライアス社の会議室では、スウォルツが笑みを浮かべながら何かを握っていた。

「今のうちに笑っているんだな。次は俺が面白いものを見せてやる」

不適に笑うスウォルツがその手が持っているのは、ディケイドのアナザーライドウオッチ。

果たして彼の持つウオッチが、この物語にどう影響するのか。

次回! Re. HUGつとジオウ!

第51話 2018： 最後に最悪のアナザーライダーの誕生!

第51話 2018： 最後に最悪のアナザークライダーの誕生！

アナザークライダーの事件からクライアス社を脱走したウールとオーラは、クライアス社の追手から逃れるために逃げ続けていた。

そんなあの日、はぐくみ市の階段をウールが駆け上がった登り切ろうとした時、彼の目に自身と同世代の子達と一緒に歩いているのが見えた。

「……僕には、関係ない」

その光景に嫉妬と孤独感が混ざった様な、複雑そうな心境を浮かべる彼はそう呟きながら、そのまま階段を登りきる。

〈プウウウ……ン！〉

その途端、何やら衝撃波のようなものが放たれると、彼の時が止まり、動けなくなる。——いや、動きが凄く遅くなった様に感じた。

「これは、重加速か!?」

動けない原因を察すると、ウールはその中で動いている者に目に入る。

『ドライブ……!』

その者は全身のボディが赤く染まった、車のような姿。

しかし、その姿はまるで廃車の様で。腰には飛び出た赤いコードと泥や埃を被ったメーター、身体中にはスクラップ部品の様なものが露出しており。左腕に装備してある車のドアのような武器の表面には『KEEP OUT』のテープが貼られ、それぞれ左胸に『DRIVE』、左肩には『2018』という名前と年号が描かれていた。

「やつぱり……アナザードライブ……!」

そのアナザードライダーは、アナザードライブだった。

「カー!」

体が思うように動かないウールはアナザードライブに殴られる。

「くう……」

「グウウ……」

「止まれ!」

ウールはなんとか時間停止能力を使い、アナザードライブの攻撃を止める。

「くそ……」

この隙にアナザードライブからウールは逃げる。

だがしばらくすると、アナザードライブはウールが去った後に自力で能力を解除し

た。

ウールがアナザードライブから逃げると、今一緒に隠れているオーラの元へと戻ってきた。

「どうしたのよ？」

息を切らしているウールにオーラが話しかける。

「アナザードライダーに……襲われた」

「アナザードライダーに……ジオウがグランドジオウになったんだから……すべてのライダーの力は、あいつの手にあるんでしょ？ アナザードライダーがいるなんておかしいじゃない？」

「僕が知るかよ」

「まさか……スウォルツがあたしたちを消すために……！」

「冗談じゃない！このままやられてたまるか」

ウールが叫ぶと壁に向けて手で叩く。

「じゃあどうするのよ？ あたしは力を奪われたままだし。あんた何とかできんの？」

「……」

オーラの言う通り、自分は時を止める力を残しているが、いつまでも凌げるわけではない。このままだと、二人共やられるのは時間の問題だった。

その頃、ハロウィンイベントを終えた翌日。

ソウゴ達は学園の中庭で、ソウゴがあの時クライと戦っていた事を話していた。

「仮面ライダークライか……」

「クライアス社の社長も、仮面ライダーに……」

「あの人か……」

はなはクライが変身したと聞くと、何度も彼と会った事を彼女は振り返る。

「それで、ソウゴはクライアス社の社長と戦ってみてどうだったの?」

「……強かった」

ソウゴが戦って感じたのは、グランドジオウと仮面ライダークライとの実力はそんなには差はなかった。

「ただどクライは、時間を止める力とダークライターのウオッチを使いこなしてしていた。」

「勝つ見込みはあるか?」

「わからない……でも、クライと戦うと凄く変な感じがしたんだ」

「変な感じ？」

それを聞いたゲイツは、それはどう言う事だと思いつく。

「うん……クライの攻撃には、その何て言えばいいかな……気持ちがないように感じたんだ」

「気持ちがない？」

「今までの相手はこう……攻撃に感情が籠っているような感じがしたんだ。

でも、クライからは何も感じられなかったんだ。

まるであの人が、自分で感情を無くしているような感じだったんだ……」

（感情がない……）

それを聞くと、彼と数度会ったことあるはなもそんな感じの事を経験をした。

しかし同時に、クライから悲し過ぎる感情を感じた事もあった。

「ルールは何か知らない？クライについて？」

クライアス社にいたルールならプレジデント・クライにどう思っていたか分かると思い、尋ねる。

「その……私は社長にはあまり会ったことが無いため……」

「そっか……ごめんね」

「そういえば、ツクヨミは？」

ほまれがそう言うと、いつもならいるはずのツクヨミが、教室を出てからツクヨミの姿がなかった事に気付く。

ラヴェニール学園初等部の入り口から、えみるとことりが出てきた。

「日直の仕事に時間が掛かってしまったのです〜!」

「早くお姉ちゃん達のところに行こう!」

二人はいつもの中庭にいるソウゴ達に会いに行こうとしていた。

「ん?」

「どうしたのですか?」

いきなりことりが足を止めると、えみるが振り返る。

ことりが見ていたところを見るとそこには、校門前で話しているツクヨミがいた。

「ツクヨミお姉ちゃん?」

「話しているのは、門矢さんでは?」

話をしている相手は門矢士だった。

そして、校門にいるツクヨミと士はスウォルツの事を話していた。

「あなたと晴夜は知ってたのね? スウォルツが……私の兄だって」

ツクヨミは士と一緒に行動していた桐ヶ谷晴夜は、ツクヨミとスウォルツの関係を知っていた。

「……………俺も晴夜も、気づいたのはちよつと前だけだな」

「教えて。スウォルツは……………兄は何を企んでるの？私は一切何者……………？」

ツクヨミは士にスウォルツの計画と自分は何者だと尋ねる。

「お前は……………俺と同じだ……………」

「えっ？」

士から返った言葉は『同じ』という台詞だった。

「俺は本来、この世界の人間じゃない。」

「俺が来たのは、時空の歪みが生じている原因を探るためだ」

「それがスウォルツのせい？」

「どうかな？」

「えっ？どうゆう事…………？」

「俺はやはり、魔王のせいだと踏んでいるがな。」

そして、スウォルツが——いや、クライアス社はそれを利用しているんじゃないか、とな

以前のバス事故の後、スウォルツがソウゴの額に手をあて、何かしたことを士は思い

浮かべる。

「クライアス社が、ソウゴを？」

「どうあれ、結論はじきに出る。この世界を破壊すべきかどうか……」

「破壊するって。あなたデイクイドの力、奪われたじゃない」

「そんなことは大した問題じゃない。一番はお前の方と、あの赤ん坊が問題だ」

「私とはぐたん？」

「お前にだけ教えてやる。あのはぐたんという赤ん坊は、時間が止められても動けていた」

「えっ？はぐたんが!!？」

士はそう告げて、学園から去ろうとする。

「お前がここにいること自体が、時空の歪みそのものだからな。お前は这个世界にいやいけないんだ。俺と同じく……な」

最後にそう言って、士は歩いて去っていく。

「私の……」

「ツクヨミお姉ちゃん！」

そこへ、ツクヨミが気になって駆け寄ってきたことりとえみるが現れた。

「ことりちゃん、えみる……」

「門矢さんと何を話しているのですか？」

「その……」

えみるに聞かれるとツクヨミはどう答えればいいかわからず、言い淀んでしまう。

「おい」

その時、何者かに声をかけられた三人は、その方向に振り向いた。

「あ、あなた方は……」

「どうして……」

現れた人物を見たツクヨミ、ことり、えみるの三人は、何故だという感じで驚く。

「はぎゅ〜！」

「……」

ビューティハリーへと戻ってきた士がソファの方を見ると、はぐたんが元気よくタンバリンを鳴らしていた。

「はぎゅ〜？」

自分を見つめている士に、はぐたんは何故と思うような表情を浮かべた。

「門矢はん？はぐたんがどうかしたんか？」

そこへ、人の姿のハリーが現れた。

「おいネズミ」

「ネズミちやうわ！俺はハリハム・ハリーや！」

ネズミと士にも言われ、ハリーが同じ台詞を叫ぶ。

「この赤ん坊の本当の姿を知ってるんだろ？」

「ツツ!!?.....なんであんさがその事を……」

はぐたんの本当の姿と士が問いかけると、ハリーの表情から焦りが見え始める。

「クライアス社やツクヨミの事を調べていた中で、何よりこの赤ん坊の事が気になつてな」

士はクライアス社とスウォルツとツクヨミの事を調べている中で、はぐたんの事も調べていた事を話す。

「まさか、晴夜も……」

調べていたとなると、行動を共にしていたという晴夜も知っていることになる。

この子の正体を、晴夜経由でソウゴ達はもう知っているのではと、はぐたんを見ながら思っている、士はそれを察したのか、それは無いと伝える。

「奴も知っているが、その事は絶対に伝えるなどとは言つてある。魔王達にはバレていない」

「それよかつた……」

まだ、ソウゴ達には本当の事は伝わって無くてホツとした。

「クライアス社に、はぐたんの正体を知られてはあかんのや」

そう言い、ハリーがはぐたんを抱っこする。

「おそらくだが、その赤ん坊が持つものこそ……この世界を救う鍵かもな」

はぐたんの持つもの。それがなんなのかは、土とハリーにしかわからない。

そして、それがどんな奇跡を呼ぶかは、まだ誰もわからない。

「みんな……」

まだ学校にいたソウゴ達の下へ、ツクヨミ達三人が集まった。

「三人共遅かったね？」

「何かあったの？」

来るのが以外と遅かったので、はな達は気になってそう尋ねた。

「その、私達に会いたって人達が……」

「俺達に？」

「このお二方なのです……」

三人が後ろにいる二人をみんなに紹介した。

それを見てみると、その二人はソウゴ達によく知る人物だった。

「ウール、オーラ………」

「何故あなた方が？」

「久しぶりだね。ルール………」

クライアス社のタイムジャッカーチームであるウールとオーラだった事に驚いてみると、ゲイツとウオズがみんなの前に出て警戒を始める。

「一体何の用だ?!？」

「君達から訪ねてくるなんて、珍しいこともあるもんだね」

「単刀直入に言う。僕達を匿ってほしい」

「匿う?」

「まさか、クライアス社を裏切ったのですか?」

「ウール。こいつらなんかに頼るの?」

オーラはソウゴ達に頼るのは乗り気ではなかったのか、ウールに大丈夫なのかと問い詰める。

「待って」

ウールがオーラを止めると、ソウゴの方を見ながら口を開き始める。

「約束したろ?彼らがスウォルツを倒す。それまでの間だ」

「随分、虫がいいな。スウォルツに見放されたから手のひら返しか?俺達がどれだけ敵

対してきたと思ってる。今すぐ帰れ」

スウォルツを倒すまで協力するというウールに、ゲイツは反対の意見を述べる。
「帰るわよ」

そんな彼らの様子から、これ以上は時間の無駄だと感じたオーラが帰ろうとする。

「ちよつと待って」

はながオーラを呼び止めると、ソウゴは二人に近づく。

「ゲイツ。今の言い方は、少しキツイんじゃない？」

「何？」

「彼らだって、ゲイツやハリー、ルールー、ツクヨミと同じなんだから」

「同じだと……？」

ソウゴは今のウールとオーラはゲイツ達と同じだと話す。

しばらくしてソウゴ達は学園を出ると、クジゴジ堂へとウールとオーラを連れてきた。
「ソウゴ君。今日は知らない友達が来てるね？」

「叔父さん？この二人をちよつと間、泊めて貰っていいかな？」

「うん。じゃあ、今日はお好み焼きにしようか？みんなもどう？」

「お好み焼き！私も食べます！」

「私も頂いてよろしいでしょうか？」

「よし！じゃあ手伝って！」

「はい！」

「私もお好み焼きを作るのは初めてなので一緒にやるのです！」

「はい！みんなも早く！」

ソウゴ、はな、さあや、えみる、ルールーは順一郎と共に夕飯のお好み焼きの準備を始める。

「もう、お姉ちゃん……」

「……いつもこんな感じなの？」

呆れた様子のごとりを見たウールは、ほまれにソウゴ達の日常がこんなに賑やかなのかと尋ねる。

「まあね。でも、こんな風だから私達は友達になれたんだと思うの」

「……」

「ほおら、一緒に行こう！」

「ちよ、ちよつと……」

ごとりがウールの手首を掴んで一緒に調理場へと向かうと、ほまれとツクヨミもその

後ろをついていく。

「お前達はスウォルトツ達を倒したらどうする?」

ずっとソウゴやはな達を見ていたオーラにゲイツが話しかける。

「別に……今はスウォルトツに仕返しする事しか考えていないわ」

「クライアス社には戻らないのか?」

「……力のない私は、クライアス社じゃ……もう用済みよ」

「そうか……」

オーラは今の所、クライアス社に戻る気は今はないようだ。

「二人共!早く一緒に手伝つてよ!」

ソウゴがゲイツとオーラにも呼びかける。

それからしばらくして、彼らはリビングで好み焼きの調理を開始した。

「ほお!」

「えい!」

ウオズとえみるがお好み焼きをひっくり返した。

「よし! そういう事!!? 二人共センスあるね! いいね!」

「ありがとうございます!」

順一郎がウオズとえみるを褒めると、オーラのやり方を見て口を開く。

「あ、お嬢さん。あ、触らない。チクチクしない、チクチク」

順一郎はオーラの作り方の指導を始めた。

「はあく、もう……」

だがオーラは普段慣れない事で疲れていた。

「美味しい〜!」

「はい!自分で作るとより美味しさが感じられます!」

近くのテーブルでは、はなとルールが満足そうにお好み焼きを食べている。

「ねえ、それ本当に美味しいの?」

ほまれはさあやとツクヨミのお好み焼きにかけているソースに驚く。

「中々いけるわよ!」

「ほまれもかける?この唐辛子風味ソース!」

「えっ、え、遠慮しとくよ……」

さあやとツクヨミはかなり辛いソースをお好み焼きにかけて満足そうに食べていた。

「なんで私がこんな事しないといけないの!?!? もー!ウールはどこ行ったのよー!」

「?」

オーラが叫ぶと、それを聞いたことりはクジゴジ堂にソウゴとウールの姿がなかった事に気付いた。

その二人は、クジゴジ堂の近くにある川沿いの道で話をしていた。

「滑稽だろ？」

「滑稽？なんで？」

ウールがいきなり滑稽と言い出し、ソウゴは何故と思ひ尋ねる。

「僕達は未来の時間を支配してる気がしてた。君達の事も見下してた……でも、今ではこうやって助けを求めてる」

「いいじゃん。にぎやかで楽しいよ」

ウール達がしてきた事をソウゴは気にしていない様子で、それを感じ取ったウールは怪訝そうな顔をする。

「は？お前ただのバカか。それとも、王の器があるって事か」

「何それ？」

「僕達は敵だろ？何で君達はすんなり受け入れてんだよ？ルーラーやパツプル、チャラリートの時もそうだ……どうして？」

ウールはどうして、ソウゴ達はそんなにも敵だった奴らを受け入れるんだと尋ねると、ソウゴは苦笑いをしながら口を開く。

「確かに、クライアス社だった君達が散々俺の民をいじめてくれた事は許してないよ

……

でも君達は君達なりに、未来を創ろうとしてたのは分かる」

「それも、クライアス社に踊らされてただけだった……」

僕もオーラも、そのためだけにクライアス社に連れてこられたんだ、スウォルツにね」
二人共もクライアス社に利用されていたただけだったと知ると、ソウゴはウールからゲイツ達とは違う何かを感じた。

「君達とゲイツ達は同じと思ってたけど、やっぱり違うかな……ゲイツ達には帰る所がある。君達には……ない」

「……」

「この町を居場所だと思って、クジゴジ堂を家だと思っていいんだよ?」

「はっ?」

「よし!じゃあ、俺達が今やるべき事は、お好み焼きを食べる事だ!ゴー!!?」

「ちよつと……!」

ソウゴは気を取り直す様に、ウールを無理やりクジゴジ堂へ向けて連れて走っている。
そんな2人のやりとりを、ゲイツはこっそりとクジゴジ堂の柱の陰から聞いていた。

クライアス社の本社ビルで、スウォルツの前にリストルが現れた。

「スウォルツ。いかがですか？」

「準備は出来た。いつでもいい？」

スウォルツは不適な笑みを浮かべ、ウオッチを掴み続ける。

「ウールとオーラの処分はいかがなさるおつもりで？」

「それに関しては、既に手を打ってある」

リストルは同じメンバーだった彼らはどうするのだと聞くと、スウォルツはウールとオーラすら、もはや用済みだと答える。

その翌日、朝早くからウールが一人クジゴジ堂から現れると、ウールはそのまま一人町を歩いていていた。

「……」

まだ朝は早いのに、はくぐみ市にいる人達はみんな、朝から生き生きとしていた。

そんな町の人々の姿は、ウールにとっては眩しく見えた。

(みんな……凄く生き生きしている……僕は……)

「あれ？何やってるの？」

そこへジャージを着たことりが、自虐的な表情を浮かべていたウールの前に現れた。

「キュアアール……君こそ、こんな早く何やってるの？」

「鍛えてるんだ。お姉ちゃんに負けないために」

「お姉ちゃん？……ああ、キュアエールか」

理由を知るとウールはことりに背中を向けた。

「……なんで、プリキュアになつたんだお前？」

「お前じゃなくて、野乃ことりだつてば」

歩きながらそう言うと、ことりはウールの隣に並ぶ。

「お姉ちゃん達を助けたいと思ったからかな？」

「助けない？」

「うん。実はね、お姉ちゃん……」

「——ダークフォルテウエーブ」

「ツッ？ 避ける！」

いきなり黒く纏われたエネルギー体がかことりに向けて放たれ、咄嗟に気付いたウールが彼女と一緒に体を低くして躲した。

「ウール君！」

「なんだ、今の？」

ウールとことりが放たれた方を見ると、そこに黒いコスチュームに髪が緑に片目を塞いでるような女性が二人の前に現れた。

——だが、二人はその姿は見覚えのあった。

「プリキュア？」

そう、プリキュアだった。

だがことりが会った先輩プリキュア達と違う様に感じられるのは、とてつも無いくらいの恐ろしさが体の奥底まで伝わっていた事だった。

「我が名はダークプリキュア。全てのプリキュアを消すものだ」

「ダークプリキュア？」

「ウール君は、危ないから下がって！」

「……」

ことりに下がってと言われ、ウールはすぐに後ろへ下がる。

それを見て、ことりはプリハートとミライクリスタル・エメラルドを取り出した。

「貴様が、スウォルツとやらが言っていた。六人目のプリキュアか？」

「スウォルツ?!? お前、スウォルツとどう言う関係……」

「とにかく、クライアス社ならあなたを止める！」

ウールはダークプリキュアを名乗る女性とスウォルツの関係が気になるも、ことりはクライアス社に対抗するためにミライクリスタル・エメラルドをセツトした。

「ミライクリスタル！ハート！キラッと！」

すると掛け声と共にことりの体が光り、服が変わった。

「はぎゅ〜！」

髪の色が明るいピンクで髪型はツインテールへと変わり、緑のリボン付きのカチューシャが付けられた。最後に緑と白のアイドル風のコスチュームを纏い、背中に白いマントのような布を羽織る。

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアラー！」

「……プリキュア……」

アラーへと変身したことりに、ウールが一瞬目が惹かれた。

「はあああああ！」

「ふうん！」

アラーが飛び込んでパンチを繰り出すと、ダークプリキュアはそれを難なく受け止めた。

「ヤアアア！」

「ツ……」

そこへ、アーラがキツクを放ちダークプリキュアに辛うじて決まる。そのまま、ダークプリキュアから離れた。

クジゴジ堂では、ゲイツが窓の向こうを流れる川を見ながら、昨日のソウゴとウールの会話を振り返る。

確かにゲイツ達には未来へ帰る場所がある。

だがその言葉はいずれ、ゲイツ達は未来へ帰らなければならないという事実もあった。

(帰る場所……)

その時、ゲイツはフツと未来で過ごした時間を思い浮かべる。

『ゲイツ！早く行こう！』

『今日の試合は負けないから！』

『ゲイツ！』

それは同じ学校で笑う、一人の女の子と一緒に戦ったプリキュア達との思い出。

自分の中で生き続ける思い出、その全てを振り返る。

(みんな……)

確かに、未来から来たゲイツにとっては、ここは過去の世界だ。けど……

『最低最悪の魔王になったら、俺が倒してやる!必ずな。』

俺を信じろ。ジオウ……ソウゴ!』

『ジオウが……ソウゴが魔王になるだど?そんな訳があるかつ!!?こいつは誰より優しく、誰より頼りになる男だっ!!?』

そして……ソウゴは俺の友達だ……!』

『クジゴジ堂に帰って来てくれない?』

この世界で、ソウゴに出会い、ゲイツは初めて人の友情を感じた。

この世界では、あいつから教わった事が多かった。

——だからかもしれない。ここも、俺の帰る場所だと感じるようになったのも。

(俺は……帰りたいかないのかもしれない……)

「ゲイツ!」

そこへ、ゲイツを探しにソウゴが現れた。

「こんな所で何してるの!」

「いや……」

ゲイツはさつきまで考えていた事を話さないようにしていた。

「……なあ。もし、ウールとオーラがこれからも居場所がなかったら。お前は どうする？」

ゲイツはソウゴに、これから二人をどうするのかと聞く。

「もちろん。クジゴジ堂をウール達の居場所にする！」

「敵だった奴らをか？」

「そうだね。敵だったけど、俺は敵でも分かり合えたいいな！」

ソウゴはウールとオーラと分かり合いたいと言いだした。

「俺の目指す王は、誰とでもわかり合いたい。」

それが俺の目指す、最高最善の魔王の一つだと思っただ！」

「……そうか」

ゲイツが少しだけ笑みを浮かべながら言うと、橋から声が聞こえた。

「ソウゴ〜！ゲイツ〜！」

そこには、はなとルールーがいた。

「どうしたの？」

「ことり知らない？」

「ことりがどうした？」

「朝から居られないのです。何処に行くか聞いてませんか？」

「さあ〜？」

ことりの行き先がわからないと悩んでいるとその時、ソウゴ達の先から爆発音が聞こえた。

「今のは……」

ソウゴ達は聞こえた方へ向かう。

広場の方ではアーラが一人、ダークプリキュアと戦闘を繰り返していた。

「ヤアアア！」

アーラがダークプリキュアにラツシユのようにパンチを繰り返している。しかし、ダークプリキュアは落ち着いて攻撃を受け流していた。

「はああー！」

「ああ……！！？」

ダークプリキュアがアーラの攻撃の間を見てパンチを繰り返している。アーラを吹き飛ばした。

「あ……！！？」

「うっ……」

パンチを受けた部分を押しやるアーラにダークプリキュアが近づくと、彼女はため息

を吐きながらアールを見下ろす。

「この程度か？ 弱いな貴様」

「っ！！？」

「チツ……………」

ダークプリキュアの一言を受けたアール。それを見てウールが時間を止めようとする。

〈プウウウ……………ン！〉

「これは……………」

その時、重加速が発生した。

「アナザードライブ……………」

ウールの背後から、重加速を発生させたアナザードライブが現れた。

「これって……………ウール！！？」

プリキュアになつていたアールにはミライクリスタルの効果で重加速は問題無いが、ウールは何も出来ず無防備な状態だった。

「く、くそ……………」

「ふうん！」

アナザードライブは動けないウールに攻撃しようとした。

だがその時。一台の車が現れ、そのままアナザードライブに突撃してウールから離れた。

「えっ?」

「何?」

いきなり現れた車により三人が驚き、アナザードライブが倒れると重加速が解除された。

「君達、大丈夫かい?」

車からスーツ姿の男性が現れ、アーラに駆け寄る。

「あなたは?」

「俺は泊進之介。警察官だ」

「警察?」

「警察官がなんで?」

「重加速について調べていたんだ」

その男性…泊進之介は重加速が発生しているところからの指示を受け、重加速が頻繁に起こっているこの町へとやってきたと語る。

「話は終わったか?」

「グウウ……」

自己紹介すると、そこへダークプリキュアとアナザードライブが迫ってきた。

「させるか！」

進之介は青いドライバー『マツハドライダー炎』を装着し、鍵のような形をしたものを取り出した。

『シグナルバイク！シフトカー！』

ドライバーにそのキー……『トライドロンキー』を差し込み、ドライバーを操作した。

「変身!!?」

『ライダー！超！デットヒート！』

進之介の姿がメカメカしいボディを基調としつつ、右側が赤いのに対し、左半分が黒く機械パーツが露出している頭部という、まるでジャンク品を寄せ集めた様な外見をしているライダーに変身した。

「はああ！」

そのライダー・仮面ライダー超デットヒートドライブはアナザードライブとダークプリキュアに立ち向かう。

「仮面ライダー……」

「アール！ウール！」

そこへ、こもりを探していたソウゴ、ゲイツ、はな、ルールーが駆け寄ってきた。

「大丈夫だった?」

「うん……」

「アナザーライダーと……あれは?」

ルールーがアナザーライダーを確認すると、そこには黒いプリキュアとそれを同時に相手にしている仮面ライダーがいた。

「黒いプリキュアはともかく、あのアナザーライダーはアナザードライブか……? 何故だ、すべてのウオッチは手に入れたはずじゃ……!」

「でもない。ドライブウオッチは……」

『お前がすべてのライダーの力を集めたわけではないからだ』

あの時のオーマジオウが言っていた通り、まだ全てのライダーの力を集めた訳ではない。

「そうか。まだ本当の意味では手に入れてない。行くぞ!」

ソウゴとゲイツはジクウドライバーを装着し、はなとルールーはプリハートにミライクリスタルをセットした。

『ジオウ! グランドジオウ!』

『ゲイツ! ゲイツリバイブ! 疾風!』

「変身!」

「うわああああ!」

「エール!アムール!」

「終わりだ。ダークフォルテウエーブ!」

ダークプリキュアはエール達三人に向けて、技を放とうした。

「フェザーブラスト!」

「スターストラッシュ!」

「っ!?」

だがダークフォルテウエーブを放とうしたその時、フェザーブラストとスターストラッシュが放たれ、ダークフォルテウエーブを相殺した。

「はああ!」

「っ……」

そこへマシエリが飛び込んで、ダークプリキュアにパンチを繰り出した。

「大丈夫!」

「遅れてごめん!」

「アンジュ!エトワール!」

「マシエリ!」

「ちっ……」

そこへ、アナザードライブが舌打ちをしながらタイヤのエネルギー体を作り、プリキュア達に放とうする。

だが、ウールが時間を止めてアナザードライブの動きを止めた。

「ウール？」

「助けられっぱなしも癪だからさ」

『ドライブ！』

それを見たジオウはドライブのレリーフを触り、ドライブの武器『ハンドル剣』を召喚させた。

「ハンドル剣？？」

近くで戦っていたドライブは、かつて自分が使っていたその武器を見て驚いた。

「みんな！行くよ！」

「「「メモリアルキュアクロック！チアフル！」」」

ミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「「「ミライパッド！オーブン！」」」

彼女達が右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

「[[[[プリキュア！チアフルスタイル！]]]]」

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がチアフルスタイルに変身する。

「[[[[メモリアルパワー！フルチャージ！]]]]」

そして、パワーをメモリアルキュアクロックに集める。

「[[[[プリキュア！チアフルアタック！]]]]」

六色の五つ葉のクローバー型エネルギー弾を発射するチアフル・アタックを放った。

「くっ……」

チアフル・アタックを受けたダークプリキュアは、その力に思わず膝を折る。

「出直すとしよう」

これ以上は危険だと察したダークプリキュアは、一瞬にして去っていった。

さらに、ジオウとゲイツはドライバーを回そうとする。

「行くぞ、ゲイツ！」

「ああ……」

『『フィニッシュタイム！』』

ドライバーのロックを解除し、二人はドライバーを回す。

『オールトウエンティタイムブ레이크！』

『百烈タイムバースト!』

グランドジオウが持つハンドル剣の一撃とゲイツリバイブ疾風の百烈タイムバーストによる同時攻撃で、アナザードライブは爆発した。

これで終わりと思ったジオウ達だったが、その爆炎の中から現れた人影に再び警戒を始める。

だが爆煙が晴れたその時、ウールは目を大きく開かせながら驚愕する。

「オーラ……」

「何?」

アナザードライブに変身していたのは、オーラだった。

「オーラ!」

ウールは動揺しながらも、変身解除しているオーラに近づこうとする。

「よう。随分と仲良くなったウール」

しかしそこへ、スウォルツが立ち塞がった。

「スウォルツ……」

「だめじゃないか、ウール。いたずらをしては。はあ!」

「うわああああ!」

スウォルツが暗いオーラをウールに放ち、それを受けたウールが吹き飛ばされ、地面

を勢いよく倒れる。

「ウール!」

アールが倒れたウールに急いで駆け寄る。

「ねえ!大丈夫!ねえ!ねえたら!」

アールは必死にウールを揺すって起こそうとする。

「スウォルツ!」

スウォルツの行動に怒りを覚えたジオウが睨みつけるが、本人はジオウを何事も無いかのように見ると、鼻で笑いだす。

「オーマジオウもどきが、俺に何かできると思うか?」

「えっ?」

「見せてやろう、俺の手に入れた力を……」

そう語るスウォルツは、懐からアナザーライドウォッチを取り出した。

『ディケイド……!』

そして、起動させたウォッチをそのまま自らの体内に埋め込んだ。

『ディケイド……!』

スウォルツが変身したアナザーライダーの姿は、正しく『悪魔』を連想させるものだった。

頭部はディケイドのライダーズクレストのごとく、横に張り出す形で大きなツノのような突起が伸びており、バーコード状にプレートが突き刺さっている。

さらに、腰のベルト部分は白色でカメラを連想させる様でもあるが、血走った眼球にも見える生物的な意匠も見られた。

「アナザー……ディケイド……」

胸部右側に『DECADE』『2018』と刻まれ、醜悪な人面と化した顔から見える黒い目でジオウ達を見据えながら、そのアナザーライダー……いや、アナザーディケイドが今ここに誕生した。

「見るがいい……ふうん！」

アナザーディケイドが手を挙げると、背後から灰色のカーテンが現れた。

そのカーテンからは、四人の影が見えた。

「俺が手を下すまでもない」

オーロラカーテンを通して仮面ライダーG4、仮面ライダーレイ、仮面ライダーダークゴースト、仮面ライダー風魔、4体のダークライダーが召喚された。

「仮面ライダーが四人も！」

「ダークライダーか……」

「やれ」

アナザーディケイドの指示で、ダークライダー達は一斉に攻撃を仕掛けてきたのだ
た。

次回! Re. HUGつとジオウ!

第52話 2014：力を持つ意味! Start Your Engine!

第52話 2014： 力を持つ意味！ S t a r t Y o u r E n g i n e !

アナザードライブとダークプリキュアを退けさせたソウゴ達。

しかし、デイケイドの力を奪ったスウォルトツが自らアナザーライダー…アナザーデイケイドとなつて立ちはだかり、その力で四体のダークライダーを召喚した。

「はあ！」

「タアア！」

そしてジオウと超デットヒートドライブが黒いパーカーと白い仮面が特徴的な仮面ライダーダークゴーストとお互いに格闘戦を繰り広げ、ゲイツは忍者の様な姿の仮面ライダー風魔と熾烈なスピード勝負を行なっていた。

「タア！」

エール、アンジュ、エトワールの三人は胸のあたりが白くモコモコしている鍵爪の様な肩装甲を持つ仮面ライダーレイと戦闘を行なっていた。

「ふうん！」

レイが掌から冷気の様なものを繰り出すと、それにより三人の足を凍らせた。

「あつ!!?」

「足が……」

「エール！」

「皆さん！」

G4と戦っていたアムールとマシエリはエール達に気を取られ、その隙にG4の持つ銃の攻撃を受けてしまった。

「みんな!!?——あつ!!?」

その時、G4が巨大なミサイルが装填されている『ギカント』を取り出し、そのままギガントのミサイルが放たれた。

「[[[!!?]]」

放たれたミサイルの数は多く、とても避けきれぬ数ではない。

『超ギンガエクスペロージョン！』

絶体絶命のピンチだったがその時、ミサイルの上から多数の炎を纏った隕石の雨が降り注ぎ、ミサイルを上空で爆破させる。

「これは……」

『ジカンチェーン！』

さらにそこへ、ミサイルが破壊され隙できたところに鎖が放たれ、四人のダークライ

ダーを覆い囲むように拘束した。

「させへんで！」

「無事かい。諸君！」

そこへ、今ジカンチエーンで拘束している仮面ライダーハリーとなったハリーと、隕石でミサイルを撃ち落としたギンガファイナリーのウオズが現れた。

「ハリー！ウオズ！」

「ソウゴ！早くやるんや！」

「わかった！」

『カブト！』

ジオウはカブトのレリーフに触り、カブトの武器『パーフェクトゼクター』を召喚すると、それには既に四体のゼクターが装着されていた。

『カブト！ザビー！ドレイク！サソード！パワー！オールゼクターコンバイン！』

パーフェクトゼクターの四つのボタンを押したジオウが構えると、パーフェクトゼクターからエネルギーが蓄積される。

「はあ！」

『マキシマムハイパーサイクロン！』

トリガーを引くとパーフェクトゼクターの銃口から竜巻状のエネルギーを放たれ、そ

のエネルギーはダークライダー四人に直撃した。

「「ぬわああああ!」」

ダークライダーの四人は共にその攻撃を受けると、背後から現れたときと同様にオーロラカーテンが現れ、その場から消滅していった。

「中々やるな……今日はこの辺りで切り上げるとしよう」

アナザーデイケイドは再びオーロラのカーテンを作り、そのまま消えていった。

「はあ、はあ……あつ!? ウールは!?」

ジオウがスウォルツによって気絶させられたウールに駆け寄る。

すぐにアンジユがウールの心臓の鼓動を確かめる。

「大丈夫……?」

「大丈夫みたい。心臓も動いてるし、脈もある。気絶してだけみたい」

「よかった……」

ウールは無事と聞き、アアラが一安心する。

「事情が詳しいようだね」

変身解除した進之介がジオウ達に近づくと、事情に詳しいと睨み、彼らに声をかける。

「あのドライブは何か、教えてくれないか?」

進之介はジオウ達にアナザードライブについての話を聞こうとする。

それからしばらくすると、ソウゴ達は泊進之介を連れてビューティーハリート一度集まる。

「泊進之介。仮面ライダードライブだった。で、いいかな？」

「ドライブだった？じゃあ、もうドライブには……」

「もうベルトは無いんだ。今は、この博士のくれたマツハドライバーとトライドロンのキーで変身する、半端ものにはかなれないんだ」

「そうなんだ」

となると、今の進之介からドライブウォッチを貰うことは出来ないと思っ
た。

「警察の方なのですか？」

さあやが聞くと、進之介は自分の警察手帳をみせる。

「どうして、この町に来たんですか？」

進之介はここの警察署に配属されている刑事ではないのに、何故この町に来ているのかとはなが問うと、警察手帳をしまいながら理由を語る。

「実は、重加速について調べているんだ」

「重加速？」

アンドロイドという証拠を見せられ、進之介は驚きの余りに声を上げた。

「驚かせてごめんなさい」

「大丈夫……大丈夫だから……」

彼が少し腰を抜けて驚いたのを見て、まあ、初めて見ると驚くのはしょうがないとソウゴ達は感じた。

「ねえ、ウールの方は？」

「今、上の部屋で寝かせてる」

ウールはビューティハリーの二階の部屋へと寝かせてるとほまれが言うと、ルーラーは先程スウォルツが見せたアナザーデイケイドの力を思い出す。

「しかし、あのスウォルツの力……」

「うん。あんなにライダー達も呼び出せるなんて……」

「あれがスウォルツの……アナザーデイケイドの力……!」

門矢士からデイケイドの力を奪って手に入れたスウォルツの力に、ソウゴ達はかなり驚いていた。しかし、ウオズとはある疑問を皆の前で口に出す。

「しかし、実に奇怪でおかしいことだね……」

「おかしい、とはどういことですか？」

「君達が戦ったダークライダーは、既に倒されているはずの存在だ……」

「「「えっ?」」」

「この本によれば、あのライダー達は……既に様々な時代で仮面ライダーによって倒されたライダー達のはず……」

ウオズの話聞いて、もうこの世にはいない者達の出現だった事に耳を疑う。

そして彼の言葉が本当なら、戦った相手は既に存在しないという事にもなり、何故彼らが存在しているのだという疑問が新たに出現する。

その一方で、ことりがウールの寝ている部屋の前へと現れた。

「よし……」

ことりはミライクリスタル・エメラルドを取り出し、ことりはミライパッドにクリスタルをセットする。

「ミライパッド、オープン!」

すると画面から光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン!」

ことりは看護婦の姿へと変わった。

「凄い……これがこのクリスタルの衣装……」

ミライクリスタル・エメラルドの持っていた力は、どうやら看護婦の衣装へと変える

力なのだど驚き、自身の衣装を見渡す。

「あつ、そんな事より……」

本来の目的を思い出すと、ことりはウールの部屋へと入る。

そこでは、ウールがベッドの上で眠っていた。

そのウールは眠っている時、嫌な思い出を振り返っていた。

それは、彼にとつては、とても辛い記憶だった。

何処かはわからないが、街にある施設にウールは一人でポツンといた。

『ツ……』

そんなウールに、施設の子によっていきなり石を投げつけられた。

その後は、まさに辛いものだった。

ウールの事が気に入らない子達は、徹底してウールを痛めつける。

『弱いくせにいい気軽な！』

その子が最後にそう言うのと、ウールの腹を蹴つて去っていく。

その時、ウールは何も出来ず。ただ、無力に悪意のある暴力を受けていた。

だが彼はその時、ある一つのことを望んでいた。

『力が……力が欲しい！』

誰にも負けない力を、もうこんな苦しい思いをしないぐらいの力…

とにかく彼は、力を求めていた。

『お前……』

そこへ、倒れているウールの前にスウォルツが現れた。

『力が欲しくないか……?』

そう、この時スウォルツに連れられ、クライアス社で力を目覚めさせた。

そしてウールはスウォルツに、僕には時を止める力が眠っていたと教えられ、

それを信じたウールは僕だけの力だと疑わなかった。

しかし…

『タイムジャッカーの力は、あなたからもらったって聞いたわ』

オーラがスウォルツに問い詰めていた時に発した言葉で結局、自分は力なんか最初から持っていなかった事を知った。

彼はその事実を、なんの力もないという事実を、受け入れざる負えなかった。

「ふわあ?」——はあ、はあ……」

その夢を見ていたウールが慌てて起き上がった。

「あ、起きた?」

彼が横を見ると、自身のそばには看護婦姿のことりがいた。

「キュアアアラ……ここは？」

「ビューティーハリーの部屋だよ。あなた、気絶させられてたんだよ」

ことりがウールが倒れていた間の事を話す。

「お前……なんで、僕を……」

何故、敵だった自分を助けたのかとこりに問う。

「ほっとけなかったから」

「えっ？」

「目の前で人が倒れているなんてほっとけないでしょ」

「僕達は敵だろ……」

「そうだよ。でも、私は君が敵でも、困ってるなら助けたい……」

「……お節介だね。お前……」

「えへへ……あ、お腹空いたでしょ。よかつたら食べて」

ことりがウールにトレイに乗せてあるクリームスープの入った皿を渡す。

「別にへギユル……」

断ろうとすると、ウールのお腹の虫が鳴り出した。

「お腹空いているんですよ、食べてよ」

「……わかったよ」

ウールはトレーに置かれていたスプーンを取り、スプーンを口にします。

「……っ」

「どうかかな?」

「……うまい」

ウールは素つ気なく『美味しい』と言うと、そのまま口にスプーンを入れ続ける。それを見ていたことりは、嬉しそうに笑っていた。

「おい……」

そこへ部屋の前にゲイツが現れ、その後ろにはソウゴとえみるがいた。

ゲイツはそのまま部屋の中へと入り、ウールに近寄る。

「貴様……!やはり俺達を騙していたな!」

「何のことだよ……」

「アナザードライブの正体はオーラだった!」

アナザードライブの正体がオーラだった。

その事でゲイツは、ウールが自分達を騙していたと叫ぶ。

「そんなの、僕も知らなかった」

「今更そんな言い逃れ、信じると思うか!?!」

「待つてゲイツさん！ウール君はアナザードライブに襲われてたんです！本当に知らなかったはずですよ！」

ことりはゲイツの前に立つと、ウールを庇うようにそう言う。

「お前……」

「まあいい……ケガが治ったのならここを立ち去れ！俺がお前を倒さないうちにな」

「……わかったよ」

ウールはベットから出ると、立てかけてあつた青い上着を取り、部屋から出て行くこうとする。

「ゲイツさん！なんで!?ウール君はまだ起き上がったばかりなんですよ！」

ことりはゲイツのウールに対して言った言葉が許せなかった。

「ゲイツさん……ひどいです」

ゲイツに酷いと告げ、ことりも部屋から出ていった。

「あつ、ことり……?」

妹が気になって上の階へと上がっていたはながことりに声をかけるが、はなの声を聞かずことりはウールを追いかける。

「ゲイツさん！さっきの言い過ぎなのです！」

「……」

「ゲイツ。ウールも本当に知らなかったんじゃないかな?」

えみるとソウゴも、さっきのゲイツのウールに対しての言葉はやりすぎだと言う。

「今まで罪なき人間を利用してきたような奴だぞ」

「そうだけど……ルールと同じで、ウールも変わったって思わない?」

「私もウールが変わったと思います。もし彼が敵だったら、あの場ならことりさんが狙われていたはずなのです!」

ソウゴとえみるがそう言うのと、えみるをひと睨みした後ゲイツはソウゴの胸倉を掴んだ。

「いいか。ルールーやパップル達みたいにそんなに簡単には変わらない時もある!」

「じゃ、ゲイツはここに来て何も変わらなかったの?」

「何……?」

ソウゴはゲイツに、この時代に来て何も変わらなかったのかと問う。

「少なくとも、俺はそう思っていない!」

ソウゴはみんな変わったと信じている。

はなは過去の出来事と向き合い。さあやも目指すものを見つけた。ほまれも、もう一度飛べる事が出来た。えみるはお兄さんと和解して、ルールーも自分の本当の心を受け入れ、前に進んだ。

「人は変われる！変わる時こそ未来を作れるんだ！人が変わらないなら、より良い未来なんか作れるわけない！」

ソウゴは人は変われると強く試聴する。するとゲイツは…

「——その未来をお前が壊した。お前がオーマジオウになって、お前が最低最悪の未来を作ったんだろっ！」

ゲイツがソウゴを壁にぶつけて、自分の思いを強く叫ぶ。

「ソウゴ（時見先輩）！」「」

三人が心配して仲裁しようとする。

「やめてよ！二人とも！」

「ッ……」

はなが止めるも、ゲイツはそれを聞かずにソウゴの胸倉をさらに強くにぎる。

「ごめん。でも……未来ならこれから変えられるだろう？」

「何が分かる？その時代を生きた俺達の気持ちがお前に分かってたまるかっ！」

ゲイツはソウゴの胸倉を掴んだまま、投げ飛ばした。

「ゲイツ……」

そのままゲイツは背を向け、階段を降りて行ってしまふ。

「おい！ゲイツ！どなんした！」

「ゲイチユ〜?」

ビューティーハリーを出て行くこうするゲイツに、ハリーがどうしたと止める。

「すまん。一人にしてくれ……」

彼はそれだけを告げると一人、ビューティーハリーを去っていった。

その頃、ビューティーハリーから出て行ったウールだったが：

「ウール君!」

そこへウールを追いかけてきたことりが追いついた。

「はあ、はあ……」

「なんで、付いてくるんだよ!」

「だって、ウール君まだ怪我してじゃん!」

「いい加減にしろよ! 僕は君達の敵なんだよ!」

ウールがことりに向かってそう叫ぶと、彼女は顔を横に振って否定する。

「私は、ウール君の敵じゃないよ」

「えっ?」

「だって、ウール君。本当は優しいでしょ?」

ことりはウールの顔を見ながら、本当は優しいのだと言う。

彼女がそれを感じたのは、彼を看病していた時、ことりが用意したスープを美味しいと言ってくれた時だった。

「それだけだろ」

「それでも、私はウールを信じたい」

そこへ、ことりとウールの前にオーラが現れた。

「何しよげんでんのよ?」

「オーラさん……」

「オーラ……お前、アナザーライダーだったのかよ?」

オーラを見た二人はアナザードライブと思い、警戒する。

「はあ?何言ってるの?」

「えっ?」

「もしかしたら、あのアナザーライダー……お前に化けてるのかも?」

「あたしに化ける……?何で?」

「オーラの顔で僕を油断させる作戦かもしれない。スウォルツが僕を消すために放った

刺客だから!」

「ウール。あんた神経過敏になりすぎ!」

「近づくな。お前がアナザーライダーかもしれない」

ウールはオーラがアナザードライブかもしれないため、近づけさせない為に叫ぶ。

「行くぞ」

「あ、ちよつと!」

ウールがオーラから去ろうとすると、ことりを誘い一緒に連れて行く。

それを見ていたオーラは、何か気に入らない表情をしていた。

その一方で、ビューティーハリーから出ていったゲイツはグジゴジ堂へ戻っていた。

「……」

クジゴジ堂でゲイツは、ソウゴの言った一言を思い返す。

『人は変われる! 変わる時こそ未来を作れるんだ! 人が変わらないなら、より良い未来なんか作れるわけない!』

確かにその言葉は間違っていない。

でも…ゲイツの味わった未来では、クライアス社の攻撃に次々と立ち向かっていた。

『はあ、はあ……ッ!』

『フィニッシュタイム! タイムバースト!』

『はああああ！』

ゲイツの繰り出したタイムバーストのライダーキックが、オシマイダーに直撃した。
『ノノノオオオ！』

オシマイダーはゲイツのキックを受けて、オシマイダーを浄化させた。

『はあ、はあ……みんな！』

ゲイツは一緒に戦っているプリキュアに声をかける。

だが、仲間のプリキュアはキュアトウモロ以外はみんなボロボロだった。

『ゲイツ！トウモロー！』

『二人は逃げて！』

『そんな事……できるわけ……』

『早く！あなた達はまだここでやられちゃいけない！』

仲間のプリキュアがそう言う。しかし、そこに奴が現れた。

『まだ、倒れていなかったか……』

そう、これが未来のソウゴ——いや、オーマジオウとの初対面だった。

『はああ！』

『うわああああ！』

そのままオーマジオウの放たれたエネルギー波が、一緒にいたプリキュアと共に向け

て放たれた。

『うっ……あつ!みんな!!?』

気がついてゲイツが顔を上げると、周りにはゲイツだけしかいなかった。

『みんなは……トウモロローは……』

『ゲイツ!みんなは?』

そこにツクヨミも現れるが、みんなの姿はなかった。

ただ一人、そこに奴がいただけだった。

『オーマジオウ……』

『私を倒すのは不可能だ。何故かわかるか?』

——私は、生まれながらの……王である』

そしてゲイツはこの日から誓った。

必ずオーマジオウを、クライアス社を倒すと。

その為にまずは、この時代で若いソウゴを倒そうとこの時代に来た。

「俺は……俺は……トウモロロー……」

ゲイツはゲイツウオッチを見て、自分の未来の事を思い出す。

「あら？ゲイツ君早いね？」

そこへ順一郎が現れ、ゲイツにお茶を入れるとそれを渡す。

「どうしたの？一人でいるなんて？」

「あ、いや……」

「もしかして、ソウゴ君と喧嘩した？」

「そういうわけじゃ……」

喧嘩したと言われるとゲイツは、まあ、喧嘩に近いことだったと思い返す。

「でも、ソウゴ君も変わったね。他人と喧嘩だなんて」

「えっ？」

ソウゴが変わったと聞き、ゲイツの表情が少し変わった。

「いやあく、ソウゴ君ね。人と喧嘩するなんてこれまで全くなかったんだよ」

「そうなんですか？」

「本当にゲイツ君達が来てからソウゴ君は本当に変わった。ありがとうね。ゲイツ君」

ソウゴが今より明るくなって変わったのは、ゲイツ達のおかげだと順一郎はお礼を言

う。

「変わる……あの、俺も変わるでしょか？」

「変わるの自分の意思だよ。変わろうと思えば人は変えられるよ」

「……自分の意思」

順一郎の言葉を聞いて、ゲイツは自分も変われる事ができるのかと考え始める。

オーラの前から去ったことりとウールは、一緒に町を歩き続けていた。

「……」

「どうしたの？ウール君？」

ウールが歩きながらはくぐみ市にいる人達を見て、みんな笑顔だったのを見ていて思
い出す。

「この町って、こんなに賑やかだったんだ」

「そうだけど、知らなかった？」

「……うん」

いつもはアナザライダーやオシマイダーに人を襲わせていたから気付かなかった
が、こうやって改めて見ると、自分のしてきた事に罪悪感を感じ出した。

「あら？見覚えのある顔だと思ったらウールじゃない？」

「パップル……」

そこへウールを見かけて近づくのは、以前までクライアス社で一緒だったパップル
だった。

「あんだ、こんなところで何やって……まさか……」

「違います。今のウール君は……私の友達です」

「お前……」

「へえ、あのウールが友達ね、やるじゃない」

ことりの言葉を聞いたパップルが、ウールの肩を叩いてことに感心する。

「じゃあ、バイビ〜♪」

パップルはウールがクライアス社と関係ないと知ると、そのまま去っていく。

「お前、僕と友達って……」

「ごめんなさい……」

ことりは咄嗟に言ったとはいえ、流石に気に障ったのだと思う。

「いや……別に……」

しかしウールは気にはしていなかったようで、そう聞いた彼女は少しホツとした。

「ねえ、聞いてもいいかな？」

「何？」

「お前は どうして、プリキュアになったんだ？」

ウールは何故ことりはプリキュアになる事を決めたんだと、改めて聞く。

「お姉ちゃんを助けたかったから……」

ことりは姉であるはなを助けたいからだと話す。

「実はね……お姉ちゃん。この町に来る前の学校でいじめに遭ったんだ……」

「えっ?」

その時の事は、ことりの記憶に鮮明に残っている。

当時の姉は、友達を助ける為に仲裁に入ろうとした。それなのに、今度ははなが対象となり酷い事になった。

「あの時……私はただ、見ているだけで何もしなかった……」

そして、あの時のことりは、暗い顔で俯く姉を見ているだけで、声をかけてあげる事も、励ましてあげる事も出来なかった。

「だから、今度こそ……お姉ちゃんを支えたい! お姉ちゃんを守りたいの!」

ことりはそんな何も出来なかった己を変える為、自分の意思を強く叫ぶ。

その頃、ことりの後ろでは気になって付いてきたはな達が隠れて聞いており、聞いていたはなの目から涙が溢れる。

「ことり……」

「はな……」

「ままあ〜ふいて〜」

さあやとはぐたんがはなを慰めると、ハンカチを持ってはなに渡す。

「ありがとう。はぐたん」

「ことりちゃん。ずっと、はなの為に頑張ろとしてたんだ」

「ことりは、はなの事をずっと思っていたのですね」

「はい！とても感動したのです！」

「ことりちゃんは、はなにとつて最高の妹だね」

「うん！」

はなもことりは最高の自分の妹だと頷く。

その一方で、ことりとウールは話を続け、今度はことりがウールに質問した。

「ウール君は、なんでタイムジャッカーになったの？」

「…僕は……」

ウールは彼女になら話していいかと思いつき、口を開きかけるが…

「話は終わったか？」

『っ!』

聞き覚えのある声が耳に入り。二人が振り向くと…

「ダークプリキュア……」

ダークプリキュアがことりとウールの前に現れていた。

「ほお……これが、プリキュアの少女かね？」

更にそこへ、ロボットとベルトのバックルのようなものが、彼女の後ろから現れた。「非常に興味深いね、データを取らせて貰うよ」

そのバックルはダークプリキアの後ろにいたロボット：ロイミュードに取り付けられ、ベルトとして巻かれると、ロイミュードがベルトのキーのようなものを回す。

「変身!」

ベルトから音声がかえり、そのままベルトから出現したアーマーがその体に装着されていく。

「仮面ライダー……」

その姿は、以前ソウゴが召喚した仮面ライダードライブと似ていた。

だがボディの色が金色で、複眼や体に取り付けられたタイヤからは何やら不快な感じがした。

「まずは自己紹介しようか。私の名は蛮野天十郎。そして、この姿は仮面ライダーを超えた姿……ゴールドドライブだ!」

ゴールドドライブと名乗るライダーの腕から光る触手のようなものが現れ、ことりへと放たれた。

「クツ……」

咄嗟にウールがことりと一緒に頭を下げた。

「大丈夫？」

「うん。ありがとう」

「ことり！」

ダークプリキュアとゴールドドライブが現れたのを見て、はな達も出てきた。

「お姉ちゃん……ウール君は逃げて！」

「……わかった……」

ことりに言われつつクヨミがはぐたんを抱えると、ウールを連れてここから離れた。

「みんな！」

ことりの掛け声で、はな達と一緒に居たウオズとハリーはビヨンドライバーとジクウドライバーを装着し、ことり達はプリハートにミライクリスタルを取り出す。

『ギンガ！』

『ハリー！ギアジェット！』

「『ミライクリスタル！ハートキラッと！』」

『投影！ファイナリータイム！ ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファンタジー！ ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

『ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジェット！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す! 知恵のプリキュア! キュアアンジュ!」

「みんな輝け! 力のプリキュア! キュアエトワール!」

「みんな大好き! 愛のプリキュア!」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

「みんな舞い上がれ! 希望のプリキュア! キュアアラー!」

「[[[[HUGつと! プリキュア!]]]]」

「いいね、多くのデータが取れる」

「行くぞ」

変身完了すると、プリキュア達はダークプリキュアを、ウオズとハリーはゴルドドライブへ向かっていく。

その少し前。場所が変わり、ビューティーハリーの近くの川沿いではソウゴが一人風景を見ながら、ゲイツの言った事を考えていた。

「隣いかな?」

そこへ、進之介が現れソウゴの隣に並ぶ。

「ゲイツの事が気になっているのか?」

「……うん、ちよつとゲイツに言い過ぎたかなって……」

ソウゴもさつきはゲイツにきつく言い過ぎたのかと思う。

「人は簡単には変わらない……ゲイツの言う通りかも」

人は変わらない……ゲイツの言ってる事も間違つてはいないとソウゴは感じていた。

「確かに、人は簡単には変わらない」

「だよね……」

「でも、人は変われるはずだよ……」

「えっ?」

「俺も『ロイミュード』との戦いで、自分を変えれた」

進之介はロイミュードとの戦いで変わったと話す。

自分はある事件で同僚に怪我をさせて以来、進之介はやる気すら失った。

だが、そこでドライブへと変身し、前に向かってもう一度走れたと、ソウゴに語る。

「人は変われるよ。それはロイミュードだってそうだ」

そして、進之介はそのロイミュードの事を浮かべる。

仲間として一緒に戦った、無愛想だけど人間を守るために戦っていた。

敵だったが、最後にはロイミュードとしての友達になれた存在だった。

「その、ロイミュードは……」

「……」

「ごめん……」

ソウゴはそのロイミュードはどうしているのだと聞くが、進之介が黙っているのを見て、そのロイミュードの結末を察して謝る。

「でも、俺はあいつらは戻ってこるって信じている」

「どういう事?」

「今、俺の仲間が必死に蘇らせようとしている。だから、俺は信じているんだ。あいつは帰ってくるってな」

「そのロイミュードの名前は?」

「チエイスだ。俺達の仲間で、『仮面ライダーチエイサー』だ!」

「チエイスカ……会ってみたいな」

「中々、無愛想だから怖いかもよ」

二人は話していると、ソウゴの顔つきがいつもの様子に戻っていた。それに進之介の話聞いて、人は変わるその事を深く感じた。

ダークプリキュアとエール達五人は、戦闘を繰り広げていた。

「ヤアアア!」

エールに向かって跳びかかって右手から攻撃を繰り出し、エールが避けてパンチを繰り出す。反撃を受ける。

「うわああああ！」

「お姉ちゃん!?」

アールが後ろへ回り、エールを支える。

「ダークタクト」

ダークプリキュアは『ダークタクト』と名乗る武器を出現させ、タクトに黒いオーラを纏う。

「ダークフォルテウエーブ！」

ダークプリキュアはエールとアールにダークフォルテウエーブを放つ。

「フェザーブラスト！」

「スターストラッシュ！」

アンジュとエトワールが咄嗟にメロディソードから技を放ち、ダークフォルテウエーブに対抗する。しかし：

「うわああああ！」

アンジュとエトワールの技はダークフォルテウエーブに対抗しきれず、打ち消されるとそのまま四人共吹き飛ばされた。

「この程度か……」

「皆さん大丈夫ですか?」

「うん。大丈夫」

「しかし、あのプリキュアの力は厄介です」

ダークプリキュアのパワーに、エール達は大苦戦を強いられていた。

その一方で、ウオズとハリーがゴールドドライブに応戦していた。

「このお!」

ハリーがジカンチェーンが繰り出した。

「ふうん!」

それを見たゴールドドライブがチェーンに向けて手を掲げる。すると、ハリーのジカンチェーンがゴールドドライブではなく、ハリーとウオズを拘束した。

「なっ!!?」

「ハリー君!!?」

ジカンチェーンがゴールドドライブの意のままに操作された事に、ハリーは酷く驚いた。

「アツハツハツハツハ……どうした?」

「なんで、チェーンが……」

「そうか、確かゴールドドライブは相手の武器を奪える能力を持っていたね……」
「そんな事、なんで今言うんや！」

ウオズとハリーは拘束され、身動きすら取れない。

「あいつら……」

「みんな……あなた!?」

「オーラ……」

みんなが苦戦している所にオーラが現れた。

「本物か?それとも……!」

ウールはオーラがアナザードライブと警戒し、本物かどうかを問う。

「あなたにちよつとだけ悪い知らせがあるの」

現れたオーラはそう言うのと、アナザードライブウオッチを見せる。

『ドライブ……!』

オーラがアナザードライブウオッチを起動させると、体内へ埋め込んだ。

『ドライブ……!』

するとオーラの全身のボディが、赤に染まった車がまるで廃車のようなになった姿になり、左腕の武器の表面には『KEEP OUT』のテープが貼られ、名前と年号はそれぞれ左胸に『DRIVE』、左肩に『2018』と描かれているアナザードライブ……アナ

ザードドライブへと変身した。

「お前は……」

「ウール!」

そこへ、またしてもオーラが現れた。

「オーラが二人……」

「どう言うことなのですか?」

二人のオーラが現れた事にエール達が驚いていると、アナザードドライブは半分剥き出しになった顔をオーラに向ける。

「やつと会えた。私」

アナザードドライブはウールからオーラへと狙いを変える。

「……!?」

すぐ様オーラは手を広げて、アナザードドライブに向ける。

「うああー!」

オーラは時間停止能力を使おうとするが、スウォルツに力を奪い返されたため、やはり使えず、そのままアナザードドライブにより締め上げられる。

「う……あ……あ……何なのよあんな!?!」

アナザードドライブは彼女を締め上げながら、再びオーラの姿に戻った。

「私は蛮野様が作って頂いた。108……パラドックスロイミュード。機械生命体」
アナザードライブのオーラの正体は、オーラの姿をコピーしていたロイミュードだった。

「もうすぐあなたは消えて、私が本物になる。めちやくちやいい知らせよね。力を失ったあなたには、もう何の存在価値もないんだから」

「オーラ……!」

「ああ……っ」

アナザードライブはさらにオーラの首を締め付けようとする。

『ウィザード!』

「イヤアアア!」

その時、2012年の年号があるゲートから仮面ライダーウィザード・フレイムドラゴンが現れ、炎を纏ったライダーキックをアナザードライブに喰らわせ、オーラを離れた。

『鎧武!』

「はああ!」

今度はゴルドドライブの前に仮面ライダー鎧武・シンバーレモンアームズが現れ、『ソニックアロー』から放たれたエネルギー波がゴルドドライブに直撃、操っていたジカン

チェーンからウオズとハリーの拘束を解いた。

「何!?」

「みんな!」

そこへ、グラウンドジオウへと変身したジオウと進之介が現れ、みんなの前で現れるとジオウは一度変身を解き、同時にウィザードと鎧武は消えた。

「蛮野……108……」

「久しぶりだね。泊進之介」

「会えて嬉しいよ」

「何故、消滅したお前達がいるんだ!」

「えっ? 消滅した?」

そう、ゴールドドライブとアナザードライブことパラドックスロイミュードは、過去にドライブとその仲間が倒した敵だったはずなのだ。

「そう、私は剛に倒された。しかし、あのスウォルツが私を甦らせた。あの男には感謝しているよ」

「スウォルツが……」

スウォルツがこのゴールドドライブを甦らせたと聞かされ、ソウゴは驚いた。

「しかし、甦ったからには為せなければならぬ事がある……君と剛への復讐だ」

「復讐……」

「貴様らは……私の計画を打ち壊した！」

それだけじゃなく、あの時の剛に負けた屈辱くツツ！実に腹ただしい！」

ゴルドドライブは地面を思い切り叩き、怒りを露わにさせる。

「その手始めとして、この108を復活させた」

「なんだって!?？」

ゴルドドライブはアナザードライブのロイミュードは自身が復活させたと話す。

「さらに、いずれは全てのロイミュードを復活させる。今度こそ私の完全の手駒としてね！アツハツハツハツハツハツハーハー！」

「全てのロイミュードが、あなたの手駒なんかじゃない！」

「何……」

「ソウゴ……」

高々と笑うゴルドドライブの発言に、ソウゴは否定した。

「ロイミュード……ロボットは俺達人間と同じだ！人の感情があつて心があるんだ！それをあなたの計画や復讐なんかで持つて遊ぶな！」

ソウゴはゴルドドライブに強く叫ぶと、ゴルドドライブはソウゴを忌々しく睨みつける。

「ええ!!? ベルトが喋った!!?」

「めちよつく!」

トライドロンからベルトのようなものが現れると、そのベルトは進之介の元へ飛んできた。そのベルトが喋ったことに、ソウゴとエールが驚いた。

『ナイスキャッチ! 進之介!』

「ベルトさん。なんで?」

『ロイミュードの反応を感じてね。気になって出てみれば、ナイスタイミングだったね
〜♪』

「ベルトさん! 相変わらずイケすかない人だな!」

『フツフツ〜…言ってくれるね!』

「それが進之介の相棒のクリム? 俺は時見ソウゴ」

『よろしく。ソウゴ。君の発言はとても良かったよ』

「王様だから、当然だよ」

『王様?』

「クリムウウ〜ツ!」

クリムがソウゴの発言に疑問を抱くが、二人の会話にゴルドドライブの声が聞こえ、二人は振り向く。

『蛮野……進之介、エンジンの調子はどうかだい?』

「ああ、トップギアだ。行くぞ、ベルトさん……久々にひとつ走り付き合えよ!」

『オーケー!』

進之介はドライブドライバーを巻き付け装備した。そして、進之介は赤い車のアイテム、シフトスピードのシフトカーを手に掴む。

「ソウゴ! 行くぞ!」

「うん!」

『ジオウ! グランドジオウ!』

ソウゴがジオウオウオッチとグランドジオウオウオッチをジクウドライバーに装填し、進之介はブレス型のアイテム『シフトブレスレット』にシフトカーを想定した。

「変身!!?」

ソウゴはジクウドライバーを回し、進之介はシフトブレスのレバーを引く。

『ドライブ! タイプスピード!』

『祝え! 仮面ライダー!!? グ・ラ・ン・ド! ジオーウ!』

二人がドライブバーを操作し、ジオウは二十人のライダーのレリーフが装着されて黄金に纏われたジオウ、仮面ライダーグランドジオウに。

進之介はボディのカラーが赤く、頭部が1つの車を模しており。複眼はライトの白に

胸部のブレストカウルにはタイヤがたすき掛けに装着、体背面は車の裏側のようなディテールが施されたライダー…仮面ライダードライブ・タイプスピードへと変身した。

「あれが……」

「進之介さんの……本当の姿……」

「俺は……俺達は、仮面ライダードライブ！行くぞ！ベルトさん！」

『オーケー！start your engine！』

「なんか、行ける気がする！」

「決着を付けるぞ！泊進之介！クリーム！」

「うおおおお！」

ジオウとドライブはゴールドドライブとアナザードライブに走っていき、二人が攻撃を繰り返して戦闘を開始した。

その一方で、ウールがオーラに近寄って彼女を介抱した。

「大丈夫？」

「ええ……ちよつとヤバかったかも」

「でもこのままじゃ……」

ウールはアナザードライブとゴールドドライブ、ダークプリキュアを見ながら、このままではジオウ達の助けありきでも自分とオーラがスウォルツの手にかかる危険があり、

これからどうすればいいかと悩んでいると…

「じゃあ……楽しんであげる」

「え?」

ウールがそばに来たその時、オーラは手から赤いエネルギーのようなものを作り出し、ウールの腹部を貫いた。

『えっ?』

オーラの行動に全員が驚愕した。

「ウール君!?!」

すぐ様、オーラがウールの元へと急ぐ。それを見てオーラはウールの額に飾られていたアクセサリーを奪うと、ウールの腹部から手を引く。

「あ……あああ……っ」

オーラは倒れるウールを直ぐに支えた。

「ウール君! ウール君!」

「ううう……」

「どうして……どうして、ウール君にこんな事をするんですか!?!」

オーラが手に少しいいた血を払っているオーラに向けて、どうしてこんな事をするのだと叫ぶが…

「二人揃って生き残るわけないでしょう」

「そんな……」

「ウール。あんたの力は私が使うわ」

オーラがウールのアクセサリーを見せて、淡々とそう言う。

「お、オーラ……」

「じゃあね……」

オーラはウールから時を止める力を奪い、そのまま彼らの前から去っていった。

「があ!!?」

「ウール君!!?」 しっかりして!」

オーラは周りに出来た血の池から漂う鉄の匂いに吐き気を催しながらも、腹部から血を流して瀕死の状態のウールに必死に声をかける。

「はあ、はあ……まだ、言ってなかったね……」

「えっ?」

「ぼ、僕が力を……欲しかったのは……誰にも……負けない力……欲しかったんだ……!」

ウールは自分が力を欲しがっていた理由を、自身の喉に詰まりかけた血を吐き出しつつも、最期の力を振り絞りながらオーラに語ろうとする。

「力が……あれば……誰も……僕を……認めてくれる……」

でも……間違ってた……」

ウールは、はぐくみ市にいる街の人達を見て、自分がしていた事が間違ってたかもしれないと感じていた。同時に力を求めていた自分が、とても愚かな存在に感じていた。

「これで……罪……滅ぼしになるかな……ゲフっ……!」

後悔の言葉に血飛沫を出しながら呟くウールの目がどんだんかすれていく様を見て、アールは自身の体が血で塗られる事も気にせずウールを抱く。

「だめ……ダメだよ……っ!」

「キュア……アール……」

(お願い。私にウールを助ける力を、お願い!)

アールの顔が絶望と涙とウールの血で濡れ、このまま彼女の目の前でひとつの命が散ろうとしていたその時、彼女の胸が光り出した。

「何……」

「もしかして……」

アールから現れたのは、新たなミライクリスタルだった。

彼女から産まれた鳥型のミライクリスタルは、今までのエメラルドなミライクリスタルとは違う形状で、色がライムグリーンだった。

「二つ目のクリスタル……」

そのクリスタルは光り出し、そこから無数なる小型の鳥が現れた。

その鳥はウールの傷口を塞ごうとしていた。

「傷が治っていく……」

クリスタルから現れた鳥達は、ウールの傷を治していった。

「……ううう……僕は……」

「ウール君!!?」

傷が完全に塞がり、出血も治り、アーラは意識を取り戻したウールの無事を喜んで、泣きながら抱きついた。

「僕は……生きてるのか……」

「うん!生きてるよ!ちゃんと生きてる!」

アーラが生きていると告げ、泣きながら歓喜する。

「バカな……何故……!?」

「はあ!」

無様にくたばると思っていたウールが息を吹き返した事にアナザードライブが動揺すると、そこへゲイツが現れた。

「ゲイツ!」

「すまん。遅れたな」

『ゲイツ!ゲイツリバイブ!剛烈!』

ゲイツはゲイツリバイブをジクウドライバーのスロットに装填し、ドライバーを回す。

『リ・バ・イ・ブ 剛烈! 剛烈!』

『パワードのこ!』

ゲイツがジカンジャックローでアナザードライブに繰り出す。

「アナザードライバーは任せろ。あの金ピカのドライブを倒せ」

「わかった!」

ジオウは再びゴールドドライブへと向かっていく。

「ゲイツ!? 助けてくれるのか!?」

「お前に助けられればなしも癪なんだな」

『スピードタイム!』

ゲイツがそう言うと、ゲイツリバイブウォッチを回す。

『リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ疾風!疾風!』

ゲイツリバイブ疾風へと変わり、ジカンジャックローのエネルギーを溜め込みトリガーを引く。

『つめ連斬!』

ゲイツはつめ連斬の無数なエネルギーの雨をアナザードライブに繰り出す。

「ちっ、お前……」

「ウール!」

ゲイツはウールと声を上げると後ろを向いたまま語る。

「俺は、今までの事を許せない」

やはり、ゲイツはウールのこれまでのことは許せなかった。だが…

「だが、お前は変わった」

「えっ?」

「だから、俺はお前を信じることにした。ソウゴがお前を信じたようにな」

「ゲイツ……」

「ウール君。こつちにツクヨミお姉ちゃん!」

「任せて!」

ツクヨミにウールを預けるとアールはエール達のもとへ戻る。

「行くぞ!」

そのまま、ゲイツは疾風のスピードでアナザードライブを翻弄しながら、攻撃を繰り出し続ける。アナザードライブが地面に倒れると、何かを呼び出す素振りを見せた。

〈ブルウウウウウウウウ!!〉

「ッ!」

するとゲイツに向かって、複数のロケットブースターが装備された改造車が突進してくる。

ゲイツはその禍々しい形状をした改造車——アナザートライドロンを疾風のスピードで避けるが、アナザートライドロンは急転回すると再びゲイツに向かって突進して来る。

「おりゃアアア!!」

だがしかし、ハリーがアナザートライドロンにジカンチェーンを繰り出して巻きつけると、チェーンを肩に担ぎ、背負い投げを行おうとする。

だがアナザートライドロンも負けじとロケットブースターに火を吹かせ、ハリーを引きずろうとする。

〈ブルウウウウウウウウ!ブルウウウウウウ!ブルウウウウウウ!!〉

「ぐうう……うう……ッッ!」

ハリーとアナザートライドロンによる力任せの綱引きが始まり、ハリーのジェットとアナザートライドロンのブースターから共に轟音を響かせる。そして…

「だアアアアアアアアアア!!」

最後にハリーが雄叫びを放つと彼のジェットから吹き出る火が先程より大きくなり、ハリーはその運動量を利用して、チエーンを大きく引つ張り上げる。それと同時にアナザートライドロンが宙に浮かび、それを見たウオズはすぐさまギンガミライドウオッチを操作する。

『タイヨウ！』

ギンガミライドウオッチの顔が変わると、再びレバーを引く。

『投影！ファイナリータイム！灼熱バーニング！激熱ファイティング！ハイヨー！タイヨウ！ギンガタイヨウ！』

「廃車になった車は、焼却処理しないとね」

ギンガタイヨウにフォームチェンジしたウオズはそう軽口を言っていると、そのまま一度レバーを引く。

『バーニングサンエクスプロージョン！』

ウオズは手から灼熱の火焰を放って、宙に浮いたアナザートライドロンを焼き溶かしていき、最後に爆発させる。

「なん……だと……!?」

アナザードライブは自身が召喚したアナザートライドロンが早くにも破壊され驚いていると、ゲイツリバイブがアナザードライブに向かっていく。

「行くぞー!」

「私も付き合うよ。ゲイツ君」

「俺もやで!」

ハリーとギンガファイナリーに戻ったウオズがゲイツの横に並ぶ。

「お前ら……行くぞー!」

『『フィニッシュタイム!』』

『ファイナリービヨンド ザ タイム!』

ドライバーを操作し、三人がキックの態勢を取るために高く跳び上がる。

『百烈タイムバースト!』

『超ギンガエクスペローション!』

『ジェットタイムフィニッシュ!』

三人が同時に放ったライダーキックはアナザードライブに直撃し、三人のライダーキックをモロに受けた。

「うわああああ!」

最期はアナザードライブからオーラ、ロイミュードの姿に戻って爆散すると、108のコアに分離し、そのまま消滅した。

その一方でダークプリキュアと戦っているプリキュア達は、ダークプリキュアの戦闘

力に苦戦していた。

「どうした。もう終わりか？」

「はああ！」

「っ!!？」

そこへ、アールがダークプリキュアへ突っ込んだ。

「アール！」

アールはダークプリキュアにラッシュを繰り返して続ける。

「なんだこれは……」

「私はみんなを守る！」

「弱い貴様がか？」

「っ……!!？」

「アールは弱くなんかない!!」

ダークプリキュアに弱いと言われたアールがその勢いを殺してしまうと、そこへエールも加勢し、アールと一緒に攻撃を繰り返す。

「アールは優しく、誰かの力になろうと必死だった！傷ついたウールの力になろうとしました！弱い私と一緒に戦ってくれる勇気がある！だから、アールは強いのだ!!」

そう叫ぶエールの繰り返すパンチに、ダークプリキュアが後ずさった。

「お姉ちゃん……」

「行こう。ことり！」

「っ!!?…うん！」

そのままエールとアーラは二人で攻撃を繰り出した。二人が一緒に繰り出された攻撃に、ダークプリキュアは徐々に押されはじめた。

「はああ！」

最後にダークプリキュアにエールとアーラのダブルパンチが炸裂した。

「貴様ら……」

「フラワーシユート！」

意表を突いてエールがフラワーシユートを放った。

「今だよ！」

「リコーダー・ステッキ！ミライクリスタル！」

リコーダーステッキを召喚したアーラは、新たな生まれたミライクリスタル・ライムグリーンをセットした。

「心のトゲトゲ、吹き飛んであげる！」

ボタンを押して吹くと、彼女の周りから無数の緑色の小鳥を生み出していく。

「プリキュア！バードアタック！」

ダークプリキュアに向けて放ち、ダークプリキュアを包むとハート型を作った。そのまま鳥達が花火のように爆発した。

「やった！」

「やりましたよ！アール！」

「っ!? 待って下さい！」

しかしアールの技を受けた場所から、体が綻び始めたダークプリキュアが立っていた。

「まだだ。まだ奴を……キュアムーンライトを……」

だがキュアムーンライトの名を告げると、綻び続けたダークプリキュアは消滅した。

残るは、ゴルドドライブのみ。ジオウとドライブはお互いにコンビネーション攻撃を繰り出し続けた。

「はああ！」

「はあ！」

二人は同時にパンチを繰り出し、ゴルドドライブを吹き飛ばした。

「くう……」

「行くよ！」

「ああ！」

『フィニッシュタイム!』

『ヒツサーツ!フルスロットル!』

ジオウがドライバーを回し、ドライブがシフトレバーを引くと、トライドロンが現れて勢いよく、ゴールドドライブの周囲を囲む。

『スピード!』

『オールトウエンティタイムブ레이크!』

「はあ!」

二人はトライドロンが囲んだ中へと飛び込む。

そして飛び込んだ二人は、ゴールドドライブの周りを高速移動するトライドロンの壁面を蹴りながら連続キックを喰らわせる。

「ヤアアアアア!」

「うわああああああ!?」

最後に二人が前後から同時にキックを繰り出し、そのままゴールドドライブに直撃させた。

「ば、バカな……こんな……ぬわあああ!」

断末魔の叫びを上げ、ゴールドドライブが倒れると最後は爆発して逝った。

それを見て、二人はジオウウオッチ、シフトカーを外した。

『二人共、ナイスドライブ♪』

「へへっ〜！」

「アツハツハ〜！」

クリムにナイスドライブと言われると、ソウゴと進之介は高々とハイタッチをした。すると、進之介の握るシフトカーが光り出した。

「これは……」

シフトカーがドライブウォッチへと変わった。

「これは君が必要なものなんだろう？」

「ドライブウォッチ……」

それを見た進之介は、ドライブウォッチをソウゴに渡そうとする。

『いや、待っててくれないか？』

「ベルトさん？」

『ソウゴ。君にそれを渡すのはもう少し先でもいいかい？』

クリムはウォッチを渡すのを先にしてくれないかと頼む。

「構わないけど？なんで？」

『近々、私を狙っているもの達がいる。そのためにまだ、ドライブの力は残しておきたいのだよ』

「ベルトさんを狙っている?」

『うむ。まだ相手は何者かもわからないのだが、いいかな?』

「わかったよ。じゃあ、その時を待つてるよ。必要なら俺達も力を貸すよ」

『すまないね』

とりあえず、今はドライブウォッチは渡して貰えなかったが、ドライブの継承は形だけが出来た。

それからしばらくすると、進之介はソウゴ達と別れ、クリムはトライドロンの下へと眠りつく事になった。

「ウール君! 何処へ行くの?」

そして新たなミライクリスタル・ライムグリーンのアスパワワをはぐたんに注いでいたそんな中、ことりはウールはみんなの前から去ろうとしていた所を引き留めていた。

「わからない…」

「だったら、うちに来ない?」

はなが野乃家に来ないかとウールを誘う。

「でも……」

「行こう。ウール君!」

ことりはウールの腕を掴み、一緒に家に行こうとする。

「あのさ、いちいち君付けやめてよ……ウールって呼んでいいよ……ことり」

「うん♪ウール♪」

今夜は野乃家でウールを泊めてあげることになった。

そして、ことりは新たなクリスタル・ミライクリスタルライムグリーンを手に入れた。

「ついに我が魔王は、残るライダーの力を揃える時が来ました。

最後のウオッチが揃った時、時見ソウゴは魔王として君臨する。その時が、この本のページが終わる時を意味します」

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第53話 2068： みんなが繋がる！明日への力を！

第53話 2068： みんなが繋がる！明日への力を

！

アナザードライブを倒し、仮面ライダードライブの力を貰える約束をしたソウゴ達。クライアス社を抜けたウールは、今は野乃家の居候となっている。

その事をルールーが今、ソウゴに話していた。

「へえ、ウール。今は野乃家のみんなと仲良くやつてるんだ」

「はい。最近は家の掃除や洗濯物も手伝ってくれています。それに、ことりという時はよく笑っています」

「そつかく、よかった！ウールも楽しそうで！」

「何故、ソウゴが喜ぶですか？」

ルールーはソウゴが何故、家族でも何でもないウールが楽しそうと聞いて喜ぶのかわからなかった。

「だって、ウールはもう俺の民の一人なんだよ。民が笑顔だと俺だって嬉しくなるよ」

「そういうものなんですか？ソウゴは本当に優しいですね」

「そうかな？俺は別に普通だと思うけど」

「普通ですか……」

他人を心配する事は普通だというソウゴに、ルールーは少し疑問に思った。

「俺なんか間違ってた？」

「いいえ、ソウゴらしいと思います」

だがソウゴの言葉を聞いた彼女はこう思った。

そう、これがソウゴなんだと。あの時も私がアナザーライダーとされた時も必死になつて止めようとしていた。他にも、町の人が傷つけられた時、身を挺して人を守ろうとする。

「さつて、そろそろ帰るよ。ウールに伝えて。また、クジゴジ堂にご飯に食べに来てよつてね」

「はい」

ウールへの伝言を伝えるとソウゴは去っていく。そんなソウゴを見てルールーは胸に手を当てて何かを感じる。

(またしても、この感情……ソウゴから感じる、この感覚……)

その感覚はなんなのか、今の彼女にはわからなかった。

その翌日、ソウゴ達はビュートイーハリーの店内で、はぐたんが躍りながらメロディ

タンバリンを叩いていた。

「はぐたんが……!」

「ダンスしてる……!」

「ついこの前歩けるようになったばかりなのに……!」

「さんきゅー!」

「上手だったよはぐたん!」

はな達のはぐたんの成長に驚いていると、上手に出来たはぐたんにソウゴが拍手する。

「毎日、はぐたんは大きくなつとる。みんなのお陰や」

「どうしたの?急に改まって」

急に改まっていたハリーにほまれが驚くと、キッチンからツクヨミ、えみる、ルーラーが現れた。

「おやつ時間なのです!」

「ホットケーキです」

えみるとルーラー、ツクヨミが巨大ホットケーキの乗った皿をテーブルに置く。

それを見たゲイツとほまれは眉間に軽くシワを寄せる。

「デカすぎないか?」

「私の知ってるホットケーキと違う……」

「レシピ通り作ったのですが……」

「レシピ通りにしては、少々大きいね……」

ウオズも流石にこれだけ巨大なホットケーキには驚く。

「そんな事ないよ。ルールー！」

ソウゴがフォークを取り、ホットケーキを取る。

「大きくても！みんなのために美味しく作ったんだって伝わるよ！」

「はい！ありがとうソウゴ！」

「とりあえず、みんな食べてみよう！」

「いただきます！」

ソウゴと一緒に同じくフォークを手に取ったはなが、先にホットケーキを口に入れる。

「めちよつく！」

二人がホットケーキを口に入れた途端、体から電流が走るかのような衝撃が走った。

その時、周囲にノイズの混じった異変が生じた。

「異常発生……！」

「えっ!? まさかコレのせいなのですか!?」

「大きいだけで普通のホットケーキだよ!?」

ツクヨミが巨大ホットケーキを指差して尋ねるが、そのままソウゴ達の周囲がノイズで覆われて見えなくなった。

そのまましばらくして、ようやくノイズのような感じが消えた。

すると、ソウゴ達がいたのはビューティーハリリーでは無く、どこにでもあるような空き地だった。

「ここは……どこなんだろう……?」

「見た所空き地ようだが……」

「でも、こんな風景何処かで?」

さあやとウオズはそう口を揃えるが、ツクヨミはあたりの風景に何か懐かしさを感じていた。

「どう言う事や……?」

「ハリリー、どうしました?」

ハリリーがあるものを見て動揺していた。

「あそこにお家のような形をしたミニチュアがあるようだが?」

ウオズがハリーの見た方を指すと、確かにミニチュアサイズの家があった。

「ハリー、知ってるみたいだけど……」

ソウゴは何か知ってる様子のハリーにこの場所を聞くと、ハリーは口を開く。

「ああ……ここは……俺の故郷、ハリハリ地区や……」

「ここがハリーの故郷……」

今ソウゴ達がいるこの場所は、ハリーの故郷のハリハリ地区だった。どういうわけか、彼らはビューティーハリからいつの間にかここに移されてた。

「俺達は、飛ばされたって事……?」

未来に飛ばされたことに気づいたソウゴ達は周りを見回す。

「っ!?? 誰だ!」

するとゲイツが人の気配のようなものを感じ、ソウゴ達は警戒する。

「「「ハリー兄ちゃん!」」」

『きやわたくん!』

だが家からハリーと同じネズミの様な妖精達ハリハリ族の子供が現れ、ハリーの名を呼んだ。

「可愛い〜!可愛い〜!」

「かーいいい!」

「わあ！人間だ！」

ハリハリ族はソウゴ達を見てテンションを上げていると、ハリハリ族の何人かがお腹を鳴らせた。

「良かったらどうぞ」

「えみると一緒に転送されたホットケーキを差し出すと、ハリハリ族はそれを口にした。」

「メガめちよつく！」

それを口にするとハリハリ族は体から何やら電流なものを感じた。

「そんな！」

「なんでよ！」

ハリハリ族にも三人実作のホットケーキは不評だった。

そのままソウゴ、はな、えみる、ことがハリハリ族の相手をしている中、ゲイツ達が離れた場所で様子を見る。

「ゲイツにハリー達は未来から来たんだよね？」

「と言う事はまさか、ここは未来？」

ほまれとさあやの推測を聞いたルーラーは小首を傾げながら、まだわかりませんと呟く。

「分析が必要。未来は、クライアス社に時間を停止されているハズ」

「じゃあ、ここはクライアス社の手から逃れた……」

「それは考えられへん」

「えっ？」

ツクヨミの逃れたと言う考えを、ハリーは否定した。

「奴らは世界中のトゲパワワを利用し、オーマジオウが世界から時を止めた筈だ」

「その通り、あれだけの力を逃れる事なんて出来ないはずだ」

「じゃあ……これって……」

完全に逃れられないなら、今ここにいるハリハリ族が動けるのはおかしいとほまれは考えた。

クライアス社本社のクライの寝室では……

「夜風はお体に障ります」

リストルがクライの肩に毛布を掛け、この場を後にする。

「リストル、僕が憎いかい？」

「忠誠を誓った日から変わりません。私の全ては、クライアス社の物」

足を止めてクライの方へ振り返り、そう告げるとリストルは社長室から立ち去って行く。

その頃、ハリハリ地区にソウゴ達は遊び相手をしながら、この不穏な空気をどうすればいいかを考えていた。

「これは、クライアス社の新たな攻撃では？」

「その可能性は高いね。だが、彼らには意思があるように思える」

「じゃあ、彼らは本当に……」

ツクヨミの言う通り不可解なことだらけだが、否定するには証拠が少ない。

「ハリー兄ちゃんおんぶー！」

「だっこしてー！！」

ハリハリ族の子供達がハリーにかまってほしいとせがむ。

「よっしや行くでー！！」

ハリーが走り出し、ハリハリ族の子供達が後を追う。

「ハリー、やっぱ子供と遊ぶの上手」

「ホントだね」

その様子を見ながらほまれがそう言うと、はなが子供に頬を引つ張られながらそうだ

ねと頷く。

そんな中、一人の子供が地面に両膝を付いて咳き込む。

「大丈夫か？」

ハリーが駆け寄って背中をさする。

「ハリー……」

「ビシン……!?？」

その子供は、妖精態のビシンだった。

「大丈夫や！すぐにお医者さんが来てくれる！」

「それって……ドクター・トラウム……？」

「……！」

ドクター・トラウム……其奴は、クライアス社に所属していた科学者の名前。

その名前を聞いて顔を歪ませるハリーの背後で、他の子供達が倒れて咳き込み出す。

「クライアス社が、僕達を助けてくれるんだもんね……」

「違うんや……ビシン……それは……！」

ハリーがビシンに話しかけようとしたその時、何者か『パチン！』と指を鳴らし、その直後に彼らの前で竜巻が生じた。

「何や!?？」

「あれは……みんな!」

それを見たソウゴ達はジクウドライバー、ビヨンドライバーを腰に装着し。はな達はプリハートを取り出した。

『ジオウ!Ⅱ!』

『ゲイツ!ゲイツリバイブ!剛烈!』

『ギンガ!』

「「「ミライクリスタル!ハートキラッと!はぎゅ〜!」」」

ソウゴ達はドライバーを操作し、仮面ライダーへと変身する為にアーマを身体に纏う。はな達は揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、六人がいつもの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー!ジオウ!ジオウ!ジオウ!Ⅱ!』

『ライダータイム!リ・バ・イ・ブ 剛烈! 剛烈!』

『投影!ファイナリータイム! ギンギンギラギラギャラクシー!宇宙の彼方のファンタジー! ウオズギンガファイナリー!ファイナリー!』

「輝く未来をく抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアラー！」

「[[[[HUGつと！プリキュア！]]]]」

全員が変身を完了すると、ジオウ達は竜巻を受け止めようと構える。

「何だこれは……」

「凄いパワーなのです……！」

「でも、ここで退く訳には……！」

『うわああああ!!?』

竜巻をどうにか耐えるも、勢いが強まり、そのまま周囲を覆った。

それからしばらくは全てが暗くなり、何も見えなかった。

「ハリー！ハリー！いたいのいたいのとんでけー！」

その時、この場に残って気を失っていたハリーの耳にはぐたんの声が聞こえ、ハリーの頬をはぐたんが引つ張る。

「……！」

「良かった……！」

ハリーが目を覚まし、その近くに居たツクヨミも身体を起こす。

「っ!?? みんなは……」

「目が覚めましたか」

「!?」

他の皆は何処にいるのだと目を動かそうとすると背後から声が聞こえ、その声に聞き覚えのある二人が頬から汗を一粒流しながら振り向く。

「リストル……!」

そこにいたのはクライアス社のリストルだった。

「プリキュアとソウゴにゲイツ、ウオズはどうした!?」

ハリーはこの場所には居なくなつた他の仲間達は何処だと問う。

同じ頃、気を失つてたエールが起き上がった直後、体勢を崩して落ちる。

「ここは……うわっ!?」

床まですぐ傍だった為、大したダメージは無かつたものの急に回り出し、慌てながら両手両足で移動する。

「何じゃこりゃ!?」

エールがいたのは、ハムスターの運動に良く使われる回し車だった。

「違う！エトワール登るの！」

「分かってる……！でも、登っても登っても登れないの！」

アンジュとエトワールは、無限階段の上にあった。

「マシエリ！こつちです！」

「アムール！こつちなのです！」

マシエリとアムールは、数字の8の形をした床を上下別々に移動してた。

「マシエリ！」

「アムール！このままだと一生一人ぼっちなのです〜！」

「みんなー！諦めちゃ駄目ー！うわっ！」

エールが走り続けながらそう呼び掛けるも、躓いて転ぶ。

「めちよっくー！」

そのままされるがままの状態で転がり続け、口癖を叫んだ。

「アーラ！上の方に出口とかなかった？？」

「ありません……！私達、閉じ込められたの……？」

アーラが飛びながら上の方を探すが出口のようなものは一つもなかった。

「ツ？？ ソウゴ君は！」

「ゲイツもウオズもない！」

アンジュがジオウ達の姿を探すが、この空間にはジオウ、ゲイツ、ウオズの姿がなかった。

「三人共何処にいるんだろ?」

みんなはここにいない三人の事が気になっていた。

そして、ジオウが今何処にいるのかと言うと……

「……は……?」

ジオウは何もないようなビルの中のような空間に、ただ一人立っていた。

「やあ、元氣そうだね」

「クライ……」

此処は何処だと思っていたジオウの前に、挨拶をしながら仮面ライダークライが現れる。

一方のゲイツとウオズの方は……

「ここは、何処だ?」

「おそらく、クライアス社が用意した空間……と言った所かな?」

「どう脱出する?」

「さあね。彼に聞いてみるか？」

「彼ら？」

ゲイツがウオズが指を指した方を振り向くと、そこには何体も同じ様な仮面ライダーがいた。

「なんだ奴らは仮面ライダーか？」

ゲイツはウオズに眼の前にいる仮面ライダーについて聞き出しながらその数をざつと数えると、その数は優に二十体はいた。

「彼らはライオトルーパー。言うなら仮面ライダーの量産型の様なものだね」

彼らは仮面ライダーファイズの時代に存在する、兵隊のような仮面ライダーの量産型『ライオトルーパー』だとゲイツに解説する。

「『排除開始！』」

ライオトルーパー隊はゲイツとウオズに突撃をかける。

「やるしかないようだな。行くぞ！」

「ゲイツ君の意見には同意だね。君達の相手をしてる暇は無く、早く我が魔王やエール君達を救う必要がある」

ゲイツとウオズはライオトルーパーに向かうと、一人で十人のライオトルーパーへと応戦する。

「はああー！」

ジカンジャクローでライオトルーパーに繰り出す。いくら数が多くても、ゲイツリバイブの剛烈のパワーが圧倒していた。

『のこ切斬！』

ゲイツはジカンジャクローを回しさらに斬撃を飛ばし、ライオトルーパーを全て倒した。

「手取り早く行こう」

ウオズはドライバーからギンガミライドウオッチを外す。そして、ウオッチのダイヤルを回す。

『タイヨウ！』

ギンガミライドウオッチの顔が変わると再びウオッチをドライバーに装填し、レバーを引く。

『投影！ファイナリータイム！灼熱バーニング！激熱ファイティング！ハイヨー！タイヨウ！ギンガタイヨウ！』

ウオズの複眼が赤色へと変化し、ギンガタイヨウフォームへと変わった。

『ファイナリービヨンド ザ タイム！バーニングサンエクスプロージョン！』

ビヨンドライバーのレバー操作を行ったウオズがライオトルーパー隊に灼熱の火焰

を放ち、ライオトルーパーを焼き尽くそうとする。火焰を食らったライオトルーパーはそのまま爆発四散した。

ゲイツとウオズによりライオトルーパー隊が全滅した事を確認した二人は、ソウゴ達の安否を確かめる為にこの場から離れようとする。

「よし」

「では、ここから——」

すると、ゲイツとウオズの周囲から灰色のカーテンが現れ、そこから今度は灰色の四十もの数が居るライオトルーパー隊が現れた。

「何!?」

「これは、スウォルツの仕業……」

ライオトルーパー隊の再びの出現に、ウオズはスウォルツの仕業と睨む。

ハリハリ地区に残されたハリー達は、リストルがジオウ達の現状を話した。

「ドクター・トラウム特製の無限迷路とスウォルツによって作った空間で、彼らは戦って

るよ」

「何やとー!」

「少々ファンシーになってしまったのは彼の趣味です」

リストルが、ジオウ達を閉じ込めたのはトラウムが作った無限迷路と、スウォルツがアナザーディケイドの力で作り出した空間を説明する。

「お前、一体何を……！」

「ハリー、これ以上クライアス社に逆らう事は止めなさい」

そう言うと、リストルはハリーと同じように妖精態に変わって着地する。

「ハリーと同じ……!?？」

「強大な力に抗つても無意味。お前も良く知っているだろ……！ミライクリスタル・ホワイトを渡せ」

「嫌や！俺は、諦めへん！」

「あきらめない！」

「私も諦めない！」

「聞き分けの無い……！」

「それはこっちの台詞や！」

ハリーとリストルが互いに向かって跳ぶ。

そして二人は宙に浮かんだまま殴り合いを行い、着地と同時にまた殴り合いを行う。

「未来を、取り戻すんや！」

「戯言を！」

リストルがハリーを蹴飛ばして人間態に変わり、ハリーも人間態に変わって着地する。

「リストル！話を聞け！」

パンチを繰り出すも左手で受け止められて流され、180度回転したリストルが叩き込む。

だがハリーは寸前の所で後ろに下がり、ダメージを抑える。

そのまま、二人は地面へと着地する。二人はジクウドライバーを装着した。

『ジクウドライバー！』

『ハリー！ギアジェット！』

『リストル！クラレット！』

二人は二つのウオッチを起動してドライバーに装填すると、ドライバーを回す。

「変身！」

『ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジェット！』

『クラレットタイム！唯我独尊！絶対の力を！リストル・・・クラレット！』

「はああ！」

二人は仮面ライダーに変身するとお互いに戦闘を再開し、地面を蹴ってクレーター状の罅と土煙を作りながら拳を繰り出し両者が衝突した。

「!?？」

二人がぶつかり終わると、その後はお互いに攻撃を繰り返し続ける。

「ヤアアア！」

「ふうん！」

ハリーとリストルはお互いに譲らずに攻撃を繰り返せば防御し、それを交互に行うかのように繰り返す。

「チツ……ならば！」

『ジカンロッド！』

「テエアアア！」

『ジカンチェーン！』

「ツ……」

リストルがジカンロッドで攻撃しようとする、咄嗟にハリーはジカンチェーンでリストルの攻撃を受け止めた。

「話聞け、言うとするやろ！」

ハリーはジカンチェーンを振り上げ、リストルを自分から離れた。

ジオウはクライのいる空間では、未だに戦闘を行なっていないかった。

…というより、ジオウを見てクライはウォッチを外し変身を解いた。
「少し話をしないか？」

クライはジオウに話をしないかと聞く。すると、ジオウはウォッチを外しこちらにも変身解除する。

「ハハハハ。」

「僕の部屋といったところかな？」

「ここは自身の部屋、要するにクライアス社の社長室であると語る。

「僕に聞きたいことがあるみたいだね」

「……あの時、言葉の意味は何？」

ジオウはハロウインの時にクライが最後に言った、『君と僕はよく似ている』と言う言葉について尋ねる。

「俺とあんたが似てるねって…どういこと？」

ソウゴとクライは似ている。確かにそう彼はソウゴに告げた。

「この町を見てくらん」

「えっ？」

ソウゴは窓越しから外の様子を見る。

「えっ？、この町……そんな……」

窓越しからクライアス社から見据えた街を見て、ソウゴは驚愕した。

その頃、無限迷宮にいるエール達はここから脱出しようと色々と試すがやはり、迷宮には傷一つもつかない。

「はあ、はあ……早くしないとはぐたんがハリー、ソウゴが……」

エールはそう言いながらここから出ようと必死に足掻くが、やはり効果は見られない。

ハリハリ地区で戦闘を行っていたハリーとリストルは互いに攻防を繰り返す。

ハリーのジカンチェーンとリストルのジカンロッドが何度もぶつかり合う。

「このおー！」

『クラレットタイムインパクト！』

ドライブバーを回しジカンロッドに蓄積させたエネルギーを放ち、ハリーに直撃した。

「ハリーー！」

「ハリ……みんな！ま……ま……！」

その時、はぐたんの持つメロディタンバリンが変化を促した。そのまま彼女はメロディタンバリンを振る。

「これは、みんな！」

はぐたんが振ったメロディタンバリンの力でエール達の無限迷宮、ゲイツとウオズのいる空間が割れた。

「何？？」

「空間が開いた」

すぐ様エール達は割れた空間から出て行き、そのまま彼女達はハリハリ地区に戻る事が出来た。

「はぐたん！」

「ままー！」

エールはツクヨミが抱いているはぐたんに抱きついて、居なくなってしまった事を謝る。

「あの迷宮から……」

『スピードタイム！』

『リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！疾風！疾風！』

さらにそこへ疾風へと化したゲイツが現れ、ジカンジャクローを放ちリストルにダメージを与え、ハリリーの元へ現れた。

「すまん。遅れたな」

「よく持ち堪えたね。ハリー君」

ゲイツとウオズが現れ、ハリーの前に立つ。

「何故……!」

あの迷宮と空間から脱出してきたエール達にリストルが驚いていると、ソウゴがまだここにいない事にエール達は気付いた。

「あれ?ソウゴ君は?!?」

「リストル!ソウゴはどこですか?!?」

ソウゴはどこだとアンジュとアムールがリストルに訴える。

「それを答えるつもりはない。それに戦う前に、あなた方に真実を教えましょう」

リストルが指を鳴らすと同時に、周囲の景色が変わる。

すると空は曇天で覆われ、周囲に荒れ地や崩れ落ちた建物が見られた。

「あれ……のびのびタワー……?!?」

アールが指すとそこには、はぐくみ市のシンボル『のびのびタワー』があった。初めは見間違いと思ったが、別物にしてはあまりにも似過ぎていた。

「ここは……まさか……はぐくみ市……?!?」

「それも未来……?!?」

そう、この崩壊した未来の光景……ここは、未来のはぐくみ市だった。

「これが、あなた達が守ろうとしている未来ですよ」

「これが……私達の未来……!?」

「みんな……止まっているのです……」

エール達はこの未来の今自分達が住むはくぐみ市の惨状に、絶句するしかなかった。

その一方で、その真実を先に目撃したソウゴも驚いていた。

「ここが……未来の俺達の町……」

「驚いたかな……」

動揺するソウゴに、クライは同じように窓を見て語り出す。

ソウゴとクライ、二人が似ている理由を……

「君は人を正しい未来に、世界を良くしたいと願っているはずだ。僕と同じで」

「同じ……?」

「僕も世界を良くしたいと思うさ。だが、そのためには明日を消さなければならない」

「どうして……明日を消すの?」

「こんな悲しい惨状を変えたいのはわかる。だがしかし、ソウゴは何故その為に明日を消すのだと問う。」

「皆が永遠の時間、永遠の幸せを過ごす為には、明日は必要ない」

永遠の時間、永遠の幸せ…

確かにそうすれば、みんなはずっと幸せでいられるかもしれない。でも…

「でも、そうとは限らないよ」

「……」

「明日があるから、みんな昨日の自分とは違う自分にならなくてなれるし、新しい出会いだつてある。そう、時間は前に進まないんだ！」

「……そうか……では、それで最悪な未来を迎えてもかい？」

クライがソウゴに最悪な未来を迎えても良いのかと問い掛ける。

「確かに、これも未来かもしれない……でも、俺達の未来はまだ決まっていない！」

そう言うソウゴはジクウドライバーを装着し、ジオウオッチとグラントジオウオッチを取り出した。

『ジオウ！グラントジオウ！』

『へポオオン！パアアア！～アドベント！COMPLETE！ターンアップ！』

『ペイイン！～CHANGE BEETLE！ソードフォーム！ウエイクアップ！カメラライド！サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！3・2・1！シャバドゥビタッチヘンシーン！ソイヤッ！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！ライダータイム……！』

ウオッチを装着し、ドライバーのロックを解除すると、地中から巨大な黄金の時計台と歴代ライダーの石像が出現した。そして表層が剥がれ、仮面ライダーたちの姿が現れる。

「変身!!?」

『グランドタイム!クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド!響鬼・カブト・電王!キバ・ディケイド!ダブル!オーズ!フォーゼ!ウイザード!鎧武・ドラーイーブ!ゴースト!エグゼイド!ビル・ドール!』

祝え!仮面ライダー!!?グ・ラ・ン・ド!ジオウ!

ソウゴはグランドジオウへと変身を完了すると、クライは何故だと言わんばかりにジオウを見据える。

「……君は、こんな姿を見てまだ明日を求めるのかい?」

「もちろん。俺は王様だから……世界の明日を守る!」

ジオウが明日を守ると宣言したその時、クライアス社の社長の空間が割れた。

「これは……みんな!」

「……までようだね。君と話せてよかったよ、じゃあね」

クライは戦うことはせず、社長室から去っていった。

ジオウはクライの行動は読めなかったが、そんな事よりもエール達の事が心配になっ

た為、思考を切り替えるとそのまま、彼は割れた空間へ飛び込んだ。

その頃、ツクヨミに抱き抱えられたはぐたんの額の飾りが点滅し、衰弱して行く。

「はぐたん……!」

「トゲパワワが……!」

「どうしてみんなの未来を奪うの?!?」

「あなたが思う未来は存在しません。発注!猛オシマイダー!」

エールの問いにそう答えたりストルはトゲパワワを作り、ジカンロットを振り回して魔法陣を作ると、その中から猛オシマイダーを呼び出した。

突如現れた猛オシマイダーのパンチをエールが跳んで避けた後に回し蹴りを繰り返すも、左腕で防がれる。

「パワーが増しています!」

「未来を包むトゲパワワが、それ程大きいんだ……!」

アンジュ達がこの地に蔓延る、あまりにも強大なトゲパワワに驚愕していると、オシマイダーはエール達に向かって攻撃を繰り返そうとした。

「はあああああ!」

『ソウゴ(君・さん)!』

そこへ、サイキョージカンギレードで攻撃を繰り出したジオウが現れた。

「遅れてごめん！」

「オシマイダー！」

攻撃を受けたオシマイダーはすぐに反撃を行うと、ジオウはオシマイダーが繰り出したパンチの攻撃を避ける。

『ブレイド！フォーゼ！』

パンチを避けたジオウはすぐ様ブレイドとフォーゼのレリーフを触り、ブレイド・ジャックフォーム、フォーゼ・ロケットステイツを召喚した。

「はああー！」

「オラアアアアー！」

空中を得意とするジャックフォームとロケットステイツによる攻撃で、猛オシマイダーに着実にダメージを与える。

『SLASSE！THUNDER！LIGHTNING SLASSE！』

『Limit Blake！』

ブレイドの電撃を纏ったブレイラウザーからの攻撃とフォーゼの回転突撃により、猛オシマイダーが膝をついた。

『キバー！』

そして今度はキバのレリーフを触り、キバ・エンペラーフォームを召喚した。

「はあく……はあああああ！」

ジオウのサイキョーギレードとキバの持つザンバットソードから放たれた斬撃により、猛オシマイダーが倒れた。

リストルがゲイツ達三人に引けを取らぬまま攻撃を繰り返し続けた。

ゲイツとウオズを離すとジカノンロッドをハリリーに向ける。

「まだ分からないのかハリリー……！ 強大な力の前では、我々は無力なんだ！」

「ハリリー！」

ジオウが現れ、サイキョーギレードで受け流すと振り払い、リストルをハリリーから離れた。

「ジオウ……君は……ハリリー！ お前は本当は知っているはずだ！ 小さな力を必死に合わせたとしても、強大な力に勝つ事は出来ない！ いずれ潰されるのみだ！」

その時、リストルは過去を振り返った。

ハリハリ族の仲間が一人、また一人と倒れて行く。

そんな姿をみて、彼らはドクター・トラウムに助けを求めた。

——しかし、ハリハリ族の住むハリハリ地区は炎へと包まれた。

その光景をリストルは、ハリーとドクター・トラウムと共に見ていた事を思い出す。

「そんな夢が叶うなら——俺達の故郷が滅びる事は無かった……！」

「そうかもしれない……！」

ハリーは起き上がり、ジオウの隣に並ぶ。

「確かに俺は、クライアス社に手を貸した……その結果、ハリハリ地区を、アイツらを……！」

そう言つてハリーが、当時の事を思い出して彼の心に浮かべた感情はたった一つ、ずっと彼の中で蝕み続けた記憶——それは後悔だった。

確かにあの時、自分がクライアス社に手を貸した事で、自分の仲間を傷つけてしまった。

「けどな、俺は未来を信じるって決めた！」

それにな、どんなに苦しくても、辛くても、生き続けるモンを俺は沢山見た！」

プリキュアとしてクライアス社から明日を取り戻そうと必死に戦っているはな、さあや、ほまれ、えみる、ルールー、ことり。

未来からここまで共に戦ってきたゲイツ、ツクヨミ、ウオズ。

オーマジオウの運命を変えようと、必死に前に進むソウゴ。

それだけじゃない。一緒に戦った晴夜、いちか、みらい、なぎさ、ほのかなど、他の

「あいつ、何をやる気だ！」

「まさか、オシマイライダーに!?？」

アーラは仮面ライダーとオシマイライダーが融合したオシマイライダー。それに自らなるうとするのかと思った。

「……いや、様子がおかしい」

ウオズの言う通り、オシマイライダーにしては、あまりにも姿が違っていた。

オシマイライダーから四本の足のような、言うなれば馬のような形が現れる。

そして、その上に何やら巨大な姿をした人型の様な物体までもが現れ初め、みるみるとその姿を変えていく。

「うおおおおオオオオオオオオオ！」

「これは……」

「リストル……」

しばらくして形状変化が終わり、その姿をジオウ達の目に焼き付けようとしていた。

『見よ！これぞ！オシマイライダー究極の姿！オシマイガイザーだ！』

馬のような形をした猛オシマイライダーと、その上に黒い鎧と蝙蝠の羽のようなマントを背中に装着したリストルの様な者。その名を、『オシマイガイザー』。

『うおおおお！』

オシマイガイザーはあらかじめ手に持っていた槍：ガイゼースピアを持ち、ジオウ達に攻撃を始める。

「「「うあああああああつ！」「」」」

余りのパワーによって凄まじい衝撃が生じ、その余波で攻撃を避けた筈のジオウ達は吹き飛んでしまう。

「くう！はああ！」

ゲイツが疾風のスピードで、空中から目にも止まらない速さでジカンジャクローの攻撃を繰り出し続ける。

『効かん！』

「うわあ！」

だがゲイツの繰り出す攻撃はビクともせず、オシマイガイザーはガイゼースピアでゲイツを振り払った。

「ゲイツ！」

『龍騎！』

ゲイツが飛ばされたのを見て、ジオウは龍騎のプレートに触れる。そこから仮面ライダー龍騎サバイブと共に、サバイブの力で強化された赤い龍——ドラグランザーが現れた。

『SHOOT VENT!』

ジオウがジカンギレードをジユウモードにして、龍騎のドラグバイザーツバイと構える。

「はあ!」

そのままトリガーを弾くと、ドラグランザーと共に赤い炎の球を放ち、オシマイガイザーを後ずらさせた。

「貴様ツ!!」

攻撃を受けたオシマイガイザーは黒い仮面から覗く目を黄色く光らせながら、ランスをジオウに向けて放った。

「やらせない!」

だがアンジュがジオウの前に出ると、ハート・フェザーを展開させて防ぐ。

「はあああつ!」

そこへエトワールがスタースラッシュを放って命中させる。

「うあああつ!」

こちらも全く効かず、ランスの攻撃を受けて吹き飛ばす。

「ウイングシャワー!」

今度はアーラがウイングシャワーを放ち、無数の羽が発生させると。その攻撃でオシ

マイガイザーの目くらましにしようとする。

「マシエリポップ!」

「アムールロックンロール!」

今度は、マシエリとアムールがマシエリポップとアムールロックンロールを放って命中させるも、後ずさりもしない。

「全く効いて無いのです……!」

「少しも怯んだ様子がありません……!」

オシマイガイザーはランスで周囲の瓦礫を彼女らに向けて放ち、二人に直撃させて吹き飛ばす。

「うああああああっ!」

「何ちゆうパワーや!」

『お前達の望むような未来は……どう足掻いても来はしない……!』

リストルはそう言葉を突き付けながらスピアを振り上げると、そのままプリキュアに向けて振り抜こうとする。

「くう!」

間一髪、ジオウがサイキョージカンギレードを盾とし、みんなを守った。

『ジオウ!お前の未来とて決まっている!』

貴様はオーマジオウとなり、世界から時を奪う！そして最低最悪の魔王となるんだ！」

「俺は、俺は、最低最悪の魔王にはならない！俺は最高最善の魔王になるんだ！」

その時、サイキョージカンギレードから『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『キンググリギリスラツシユ！』

「オリヤヤヤヤ！！？」

そのままジオウがオシマイガイザーを振り払った。

「それに、未来を決めるのはあんたじゃない！未来を決めるのは、俺達だ！」

「そうだよ……やってみなくちゃ分からないよ……！」

エールがよろけながらも立ち上がり、そう告げる。

『子供が分かったような事を……！』

「大人とか子供とか関係無い！あなたにも、明日はある！」

「だから俺達は明日を、未来を求めるんや！」

エールとハリーの言葉を聞くも、オシマイガイザーは言葉に憤怒を含ませながら叫び続ける。

『俺は……明日などいらぬ！ただ絶望するだけの未来など、不要だ！』

「そうだね……だから、未来は素敵なものにしくちやね……」

はぐたんがダンスを出来るようになったり、大きくなってお喋りする事が増えたり――それが未来……………！

だから……………！」

そう言い続けるエールの胸元に、どんどんアスパワワが集まっていった。

「未来は、とつても愛おしいものなんだよ！」

「は〜ぎゅ〜！」

その時、エールの思い応えたかのようにはぐたんの額の飾りのクリスタルが光り出す。

『ミライクリスタル・ホワイト……………？！？！』

リストルの目に映ったそのクリスタルは、自分達が探し続けたモノ……………ミライクリスタル・ホワイトだった。その光が広がり、女性の姿が形作られる。

『あれは……………！マザー……………ッ！』

「マザー……………」

その時、ジオウの目に焼き付いたその女性は、 “マザー” と呼ばれる存在だった。

「はぎゅー！」

するとミライクリスタル・ホワイトが、ホワイトピンクの宝石の中心に濃いめのピンクで彩られたハート型宝石が付いたミライクリスタル『ミライクリスタル・マザーハート』

ト』へと変化する。

「ミライクリスタルが……！」

「「「メモリアルクロック！マザーハート！」」」

それと同時にミライパッドが、緑のハートが加わったメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「「「ミライパッド！オーブン！」」」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「「「HUGつとプリキュア！今ここに！」」」

「ワン・フォー・オール！」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」

「プリー、キュアー！」

「明日に！」

「エールを！」

マザーを召喚してメモリアルキユアクロックを囲む形で手を翳し、アムール、マシエリ、エトワール、アンジュ、アール、エールの順にエネルギーを集める。

「「「ゴー、ファイ！みんなでトウモロー！」」」

六人は手を掲げ、マザーの力を解放して光線『みんなでトウモロー』を放つ。

命中したオシマイガイザーがハートに包み込まれ、オシマイダーとリストルに分かれる。

「ヤメサセテモライマ〜ス」

分かれたオシマイダーはそう言い残して浄化され、リストルの方は強制変身解除となりポロポロの姿になっていた。

「俺の願う……明日は……」

これを見たりリストルがそう呟き、瞬間移動で姿を消す。

「あったかい……」

「これが……ミライクリスタル・ホワイト……」

ジオウ達がマザーを見上げ、エールが胸元に両手を当てて、ジオウは流れる光を見て、そう呟いた。

「キュアエール……仮面ライダージオウ……」

とある空間で、ジオウとエールが、何者かの呼び掛けに気付く。

そこにいたのは、プリキュアのようなコスチュームを見に纏い、額にハートの飾りが付いた少女だった。

「あなたは……」

「お願い……救って……未来を……」

少女はエールに未来を救ってと頼み、抱き締める。

「未来……?」

エールが未来と呟いてから、目を閉じた。

「君は一体……」

「ジオウ……あなたの力は、きっと……みんなを救える」

「救える……?」

その子はそれだけ言うと、ジオウの手を握って何かを渡した。

「お願い。未来を、みんなを助けて……」

そう言うと、ジオウとエールの前から消えていた。

「これは……」

ジオウは握られた手を見ると、その手にあったのは、まだブランクのままだが、それ

は確かに今まで自身が使って来たウォッチだった。

舞台は再び、クライアス社本社へと戻る。

クライは自身の寝室へと戻ると、プリキュアのあの姿を振り返る。

「驚いたね。まさかミライクリスタル・ホワイトが、マザーハートへと姿を変えた。マザーが、遂に……」

ボロボロになって戻ったリストルが、クライの襟元を掴む。

「何か、話したい事でもあるのかな？」

「俺は、俺は……お前が……嫌い……ッ」

その言葉を最後に、リストルは気を失ってしまった。

「おやすみ、リストル」

クライはリストルの肩に毛布を掛けると、彼の耳元で静かにそう呟いた。

ソウゴ達は現代のビューティーハリーに戻る。

「戻って来られたのです！」

「たあーいまー!」

「来たか……」

「あんた……」

ビューティーハリーへと戻ると、そこには門矢士が待っていた。

「ハリー、大丈夫?」

浮かない顔をしていたハリーにほまれが話しかける。

「そろそろ話してやる時じゃないのか?」

「ああ……俺は、お前らに話さんといけない事がある。あのな……」

ハリーが言いかけると、ビューティーハリーの扉を開く音が聞こえた。

「いらつしやいませ……あつ!」

「呼ばれて無いけどジャジャジャジャーン! みんなお待ちせ。噂の天才科学者、ドク

ター・トラウムだよ」

『はい?』

ビューティーハリーに来たのは、なんとトラウムだった。

いきなり事に、ソウゴ達は図らずも啞然としてしまった。

次回! Re・HUGつとジオウ!

第54話

2018：

ルールーのパパ!愛しき家族の絆

第54話 2018： ルールーのパパ！愛しき家族の 絆

ハリハリ族の住むハリハリ地区に移動されたソウゴ達。だがそれは、クライアス社の罠だった。

リストールから告げた未来のはぐみ市の姿を見て驚愕を露わにしたが、ソウゴ達は改めて未来を取り戻すと誓い、プリキユア達ははぐたんから作られたミライクリスタル・ホワイトをミライクリスタル・マザーハートへと進化させた。

そしてリストールを退けたソウゴ達は現代へと戻った。

しかしビューティーハリーには、クライアス社のドクター・トラウムの姿があった。

「どうして、あんたがここに？」

「何の用です？」

ソウゴとルールーが何故ここにいるのかと問う。

「ルールー、君に会いに来たんだ」

「ルールーに？」

それに対してトラウムは、ルーラーに会いにきたんだと話す。

「ルーラーちゃん!お父さんだよーん!」

すると腕を広げて抱き締めんと言わんばかりにルーラーの下へ向かう。

「ふう!」

だがすぐさまルーラーに頭部を殴られ、トラウムは床に伏せられた。

「お父さん?!?」

「ドクター・トラウムがルーラーのお父さん?」

「確かにルーラーを開発したんは……」

「理解不能です。何故……」

いきなり、ドクター・トラウムがルーラーの父親と聞かされソウゴ達は驚くが、ハリーは確かにルーラーはドクター・トラウムから作られた筈だと思いつく。

「あなたが、私達を未来へ?」

「テストは合格だ。戻ってきたら話そうと思って……未来で起きた、全ての悲劇を」

「悲劇……」

そう言うのと、懐から自身を模したかのような映写装置を出してテーブルに置く。

「何それ!可愛い〜!」

「えっ?」

「マジで……?」

さあやがトラウムの映写機を見て可愛いと言ったのをツクヨミとほまれが耳を疑いながら二度見していると、トラウムが劇の準備を終えた。

「では始めよう!三分で分かる未来劇場〜!」

「はじまりはじまりー!」

はぐたんが手をパチパチすると、トラウムが自身に良く似ている機械のパペットを左腕に着けてそう告げると同時に、映写装置から映像が映し出される。

「クライアス社の目的は未来を無くす事。

その為、世界にトゲパワワを蔓延させた……が、そこに現れたのが四人のプリキュアと仮面ライダーゲイツだ!」

「……」

四人のプリキュアの影に、真ん中には仮面ライダーゲイツに変身したゲイツが映し出された。その時、ゲイツの顔は少し辛い表情へと変わった。

「このままでは時を止める事は叶わない。そこでプレジデント・クライは、未来を育む女神マザー、その力を宿す少女・キュアトウモロロー。彼女を消し去る事で、時を止める事にした!」

「キュア……トウモロロー……」

「それって、あの子……」

はたとソウゴはここに戻る直前の出来事を思い出し、ソウゴは懐に手を当てる。

そこには確かに、彼女から貰ったウオッチがあった。

「しかし、また番狂わせが起きる!」

「番狂わせ?」

「ここからは俺が話す!いや……話させてくれ」

突然、ハリリーがみんなに自ら話させてくれと頼む。

「あれは、ハリハリ地区が滅びてすぐの事やった——」

トラウムと入れ替わるようにして、今度はハリリーが語り始める。

それは、彼があの夏祭りの時の様な、未来で暴走した姿へと変わった時だった。

『もう……明日なんかいるもんか!未来なんか!』

ハリリーは故郷を滅びてしまった事による絶望と怒り、後悔のままに暴れ回り、明日を未来を否定し、駆け回るように叫び続けた。

そのまま暴走して手が付けられなくなった事で、クライアス社に拘束されたハリリーの前に、彼女が現れた。

『お前は……プリキュア!』

『トゲトゲ……心が痛い痛いつて泣いている』

胸に手を当てるキュアトウモロロー。彼女は拘束されているハリーへと近づく。

『ごめんね、過去は返してあげられない……』

だけど、明日を一緒に作ることは出来る』

トウモロローはハリーに手を差し伸べると、その手をハリーは握ろうとした。

その時、トウモロローの光が暴走した姿となったハリーを元へと戻した。

『一緒に未来を……』

『一緒に……』

ハリーがトウモロローに心を許し始めたと同時に、ハリーの胸にあの鎖がつけられたのだ。

「そんな事が……」

「感動の出会い。しかし……」

その後の出来事は、ゲイツにとっても一番辛い記憶でもあった。

そう、その出来事こそ。プリキュア達と共に立ち向かっていった者達が、最低最悪の魔王——オーマジオウによって、その多くの命を散らしていった、あの惨劇だった。

『ゲイツ!トウモロ!』

『二人は逃げて!』

『そんな事……できるわけ……』

『早く!あなた達は、まだここでやられちゃいけない!』

仲間のプリキュアがゲイツとトウモロの二人にそう言う。しかし、そこへオーマジオウが現れた。

『まだ、倒れていなかったか……はああ!』

オーマジオウの手から放たれたエネルギー波が、ゲイツと一緒にいたプリキュアに向けられた。

『うわあああああ!』

その時、トウモロは辛うじて無事だったがしかし、既に背後にはオシマイダーがいた。

そのまま彼女はオシマイダーに捕まってしまった。

そして、ゲイツが目を覚ました時には彼女はもう既にいなかった。

「未来と言うものは、思い通りにならないものだ」

「プリキュア達は負けた。そして、アイツも捕まってもうた」

「それに関しては俺の責任だ」

「ゲイツ……」

「あの時、俺がみんなを守れなかった」

ゲイツが経験したあの時の事は、忘れたくても忘れる事が出来ない記憶として残り続けた。

その後クライアス社は世界の時を止め、これで世界に安らぎが来ると確信した。

そんな中、ハリーは捕まったトゥモローに声をかける。

『ほんまに、未来が輝くて信じてるんか？』

『うん』

『仲間を失ってもか……』

『仲間はまだいる。ゲイツとツクヨミが……』

それに、約束したから。

プリキュアと仮面ライダーは絶対に諦めないって……』

『……』

その言葉に胸を打たれたハリーはある決心をした。

それは、トゥモローを解放し、クライアス社から脱走する事だった。

トウモロローを解放したハリーは、クライアス社から脱出しようとして試みる。

だがそこへ、オーマジオウの部下であるカツシーンが現れた。

『キュアトウモロロー、確認』

その時、赤い光線がカツシーンに放たれた。

『ゲイツ!』

そこに現れたのはゲイツだった。

『トウモロロー、遅れてすまない。ここから脱出ルートを渡す』

ゲイツがトウモロローに駆け寄ると、脱出ルートが書かれたメモを彼女へと渡した。

『俺は奴を退けさせ、俺とツクヨミは過去へ飛ぶ』

『えっ?過去に!??』

『奴らのタイムマジンを使う。それでジオウの誕生を防ぐ!そうすれば未来は変わる

!行けえ!』

『ジクウドライバー!』

ゲイツはそう言いながらジクウドライバーを装着すると、ゲイツライドウオッチを取り出し、ウオッチを回す。

『ゲイツ』

ウオッチをドライバーにセットして握り拳でロックを解除しボタンを押し、交差した

両手で抱え込む様にする。

『変身！』

叫ぶと同時にドライバーを持ち、腕を広げながら回転させる。

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『はああ！』

仮面ライダーゲイツへと変身し、カッシーンと戦闘に入った。

『こつちや！』

ハリーは彼女を連れ、ここから急いで逃げる。

『ハリー！逃さないよ！』

脱走しようと全力で走る中、ビシンに見つかってしまった。

ビシンを見たハリーは妖精へ戻り、首輪の鎖を解こうとした。

『ダメ！』

『でも…』

『マザー！お願い！あたしに力を！』

鎖を解こうとしたハリーを静止したトゥモローが、ミライクリスタルの力でマザーを召喚した。

マザーから放たれた強力な光がトゥモローとハリーを呑み込み、この場から姿を消し

た。

そして、彼女はクリスタルに『プリキュアの元へ』と、願いを込めた。

その時、ハリーは懸命にトウモロローの手を握った。

この未来で起こった出来事が、ここにいるソウゴ達の運命を動かした瞬間でもあった。

ソウゴはウオッチを手を拾い、はな、さあや、ほまれ、えみる、ことりは赤ん坊の声を心の奥底にまで響かせた。

そして、マザーの力でこの時代へハリーと共にきたはずのトウモロローは、赤ん坊へと姿を変えてしまった。

ここまで言えば、皆もお分かり頂けたであろう。

そう、トウモロローの正体は…

『ええ〜っ!?』

「はぐたんが……!」

「もしかして……」

「ぶいきゅあー!」

「キュアトウモロー……」

ここに居るはぐたんの本当の正体、それこそが未来を守る為に戦い続けたプリキュア・キュアトウモローだったのだ。

「お前が……トウモロー……だったのか……」

その真実を知らなかったゲイツは彼女の正体を知った事で驚き、はぐたんの顔を見つめる。

「俺と晴夜が調べたところだと、そのプリキュアはマザーとやらの力を使い過ぎたせいで、今の赤ん坊の姿になったらしい……」

「あんたと晴夜は、ずっと知ってたの……?」

それを聞いたソウゴは、士と晴夜が以前からはぐたんの正体を知っていたのかと問いかける。

「その赤ん坊は時が止まった中でも動いていた。それで気になって調べていたんだ。」

そんな時にその赤ん坊には、そのマザーとやらの力があるのだと知ったが、確信には至らなかった。

だが、あの過川飛流の改変。その赤ん坊はお前を覚えていた。

それで、結論に至った。こいつはそのマザーを持っているとな」

「スマンかった」

それに対して土がソウゴを指差しながらそう語ると、ハリーがはぐたんをソファアの上に乘せてから妖精態に戻り、その上に着地する。

「ハリー!何故、早く言わなかった!俺は……未来でトウモロウを……」

「スマンかった……マザーが力を取り戻すまで、言わんようにしよう決めてたんや……」

「ゲイツ。ハリーの気持ちもわかってあげよ」

ソウゴがゲイツの肩に手を置いて、そう言うとゲイツは椅子へ座る。

「いいよ」

「話してくれてありがとう」

「はな……ソウゴ」

二人がハリーに近付きそう言うと、彼は目を潤せながら二人の名を呟いた。

「ハリーは、はぐたんを守るって約束したんだもんね」

「その約束をずっとハリーは守ってきた。違う?」

「ああ」

だがこの時、ほまれ表情が曇ってた事を、さあやだけが気付く。

「私もソウゴも頼まれたんだ。未来を助けてって。ねっ、はぐたん?」

「はぎゅー!」

「約束は守るって決めた！」

「プリキュアと仮面ライダーにお任せなのです！」

「そうだよ！それにソウゴさんは全てライダーの力を集めたんだよ。負けないよ！」

「それはどうだろうね？お嬢さん達」

「むむ……！」

トラウムがネガティブな発言をした事でえみるとことりに睨まれてしまいが、彼は特に気にした様子を見せずにハットをいじる。

「この子がマザーの力を秘めてる事が分かった今、クライアス社は……」

ソファーから立ち上がったトラウムがはぐたんを両手で抱えて持ち上げ、顔を近づけて呟く。

「まあ、確実に狙うだろうな……」

その近くで士はビューティーハリーにあつたレーズンパンのレーズンを箸りながら、クライアス社は確実にはぐたんを狙うだろうと告げた。

——クライアス社本社の社長室。

そこには、スウォルツ、ジェロス、ピシンの三人の姿があつた。

「マザーが遂に目覚めた。未来を司る輝きの力が、明日を望まぬ絶望に染まった時、どれだけ強大な力となるか知りたい」

そう語るクライの背後の画面に、満面の笑みを浮かべるはぐたんが映し出される。

「無邪気な顔……気に入らないわ」

「コイツがいなくなったら、ハリーはどんな顔するんだろ……」

（こいつがいなくなれば……俺の力に敵うやつはいない……）

ジェロスとビシンのはぐたんの顔を見ながらそう呟くと、スウォルツがはぐたんを見て不気味な笑みを浮かべる。

「必ず手に入れるのだ！時間を止めよう！皆が笑顔のまま暮らせるように！共に終わらぬ永遠を！」

士の言う通り、マザーを持つはぐたんをクライアス社は本気で標的とした。

「ここからは彼らも本気だ。私のようにファンシーな連中では無いからね……いいいいいい……」

トラウムがそう告げると、駄々をこね始めたはぐたんに横髪を引っ張られて痛がる。

「はぐたんは絶対に守るよ！」

「はぐたんは、私達の未来だから」

ソウゴが言うと、はながはぐたんを抱き抱えてそう告げる。

「「うん！」」

「はい！」

「我が魔王の命なら、私も協力しよう」

「……」

「みんな……あんがとな」

ソウゴ達はクライアス社からはぐたんを守ると誓い合う。

その時、ルールーがトラウムにある質問をした。

「質問があります」

「何だね？」

「何故、私達に今の話を伝えに来たのですか？」

ドクター・トラウムはクライアス社でずっとソウゴ達と戦ってきた。

それが何故今になってその事を話したのか、ルールーには彼の意図がわからなかった。

「マザーの力を目覚めさせた君達なら、クライを止められると思ったんだ」

「……分からない。あなたも時を止めたいと思っていたのでしょうか？」

「ああ……」

「なのに、何故……」

「それは……」

「何故です!」

ルーラーがトラウムに問い詰めると、彼は視線を下へと向けながら口を開く。

「人間とは、そう言う矛盾した者なんだよ」

「矛盾……? 私の父と名乗るのも、その矛盾からですか?」

「ルーラー……」

「何故……何故今更……! あなたは私を不要物とみなし、捨てたと分析します!」

鋭い目付きでそう告げると、トラウムが冷や汗を垂らしてたじろぐ。

「理解不能……!」

彼女はそう言い残すと、ビューティーハリーのドアを開けて出て行った。

「ルーラー!」

ソウゴが呼び止めるがルーラーは聞かず、そのままビューティーハリーから去っていった。

「……やはり、私が間違ったのかな……」

父親と言っても、ルーラーの傷つけられた心の傷は、そう簡単には消えなかったのかとトラウムは思うが……

「そんな事ないよ」

「ジオウ……」

「あんたがルールーの父親なら、ルールーとしつかり向き合おうよ。ルールーと話をしてお互い気持ちを知らないと……って、経験ない俺が言っても説得力ないけど……」

「ソウゴ君……」

父親を早くに亡くしたソウゴには、わからない事かもしれない。

それでも、彼がルールーの為に力になろうとしているのは伝わった。

「みんなトラウムを見てて！俺がルールーを連れて戻してくるよ！」

「私も行く！」

「ル〜ル〜！いつしょ！」

「うん」

はぐたんを抱いたはなとソウゴはルールーの後を追う為にビューティーハリーを出て行き、ルールーを追いかける。

「………!?」

ゲイツはその時、ビューティーハリーを出て行くはなに抱かれたはぐたんを見て、はぐたんをキュアトウモロ〜と重なって見えた。

「ゲイツ、大丈夫……」

「あ、いや……その……一人にしてくれるか……」

ゲイツはどこか気の抜けたの感じで歩きながら、ビューティーハリーから出て行く。「ゲイツさん。もしかして、はぐたんの事で……」

「多分ね……」

ことりにゲイツの事を聞かれたツクヨミは、無理もないと考えた。

彼女を守るためとはいえ、彼は彼女の事を何も知らなかった。

あの時、守れなかった友達が最初からずっと近くにいた事に気づかなかった。

そして、真実を聞かされた事で、ゲイツは混乱しているのだ。

飛び出したルーラーは一人、町を歩いていた。

「どうして……」

すると、そこへ二人の人物が歩いているのが見えた。

その二人は家族のようで、父親と一緒に居る小さな女の子は楽しそうに歩いていた。

「お父さん……」

「ルーラー!」

そこへ、ルーラーを探していたソウゴが彼女を見つけると、そのままルーラーのもとへ駆け寄る。

「ソウゴ……どうして……」

「トラウムの所に行こう。まだ、ビューティーハリーに……」

「嫌です……」

ソウゴはビューティーハリーに戻ろうと提案するが、彼女はトラウムの元へ行くのを断った。

「ルールー……」

その時、ソウゴが彼女の顔を見ると、ルールーの顔がとても辛い表情だった事に気付く。

「……ルールー。お腹空かない？」

「えっ？」

「何か食べる所……あつ！あれにしよう！」

ソウゴは近くに屋台を出しているたこ焼き屋を見つけた。

「行こう」

「あの……」

ソウゴはルールーの手を握り、たこ焼き屋へと向かった。

「すいません。たこ焼き二つ……あれ？」

「はい。わか……ジオウ！ルールー！」

「ウール」

近くにあるたこ焼き屋に出向くとそこにはウールがおり、その事にソウゴとルーラーは驚く。

その一方で、ビューティーハリーにいるトラウムがソファに座り、ずっと難しい表情でいた。

「アンタも、そんな顔するんやな」

ハリーがコーヒーをトラウムの傍に置く。

「ルーラーが自分を受け入れない事は分かっていた。

だが……あの子に、心が芽生えるとは……」

そう言いながらコーヒーにミルクを入れる。

「それはアンタもやろ。ごつつ心配やって顔してるで」

「ネズミが何を偉そうに……」

「誰がネズミやねん!コーヒー返せ!」

「出されたのなら私の物だ!」

二人は痴話喧嘩が始まり、ほまれ達はその様子を呆れて見ていた。

「二人して大人気無さ過ぎでしょ」

「ですぬ」

たこ焼き屋へと赴いたソウゴとルールー。そこには偶然ウールがおり、ソウゴが彼に声をかけた。

「まさか、ウールがこんなところにいるなんて……」

「ここのりのお母さんに頼まれたんだよ……」

照れ隠しをするかのように言うウールに、ソウゴは笑って頷いた。

「それより……あいつなんで、あんなに不機嫌なの？」

ウールがルールーの方を見ると、不機嫌そうな表情でたこ焼きをヤケ食いしていたのが見えた。

「まあ、少しあつて……ごめん。仕事の邪魔しちゃつて……」

ソウゴは彼にそれだけ言うと、ルールーの方へと駆け寄る。

「何故……何故……理解不能……っ！何がお父さんですか……ッ！」

「ルールー……」

ソウゴもベンチでたこ焼きを食べているルールーの隣に座る。

「ソウゴ……」

ルールーがたこ焼きを食べるのを辞めると、彼女はソウゴの手を握った。

「ルーラー?」

「あの、少しだけどころさせて貰えませんか?」

「はいよ」

ソウゴは気にせずルーラーの手を握った。

「……あのままトラウムと向き合っていると、システムエラーが起きそうで……」

「それはシステムじゃないよ。心でしょ」

そう言われたルーラーは目を大きく開きながらソウゴを見るが、直ぐに目を外すと、

自分の思いをぼつぼつと語り始める。

「私は、ずっと分からなかった。

開発者が何故、私に高性能のAIを着けたのか。

たこ焼きを美味しいと思う。

涙を流す。

はぐたんを、みんなを愛おしいと思う気持ち……

アンドロイドとして、自分には必要な物では無いかと」

どうして自身のAIに心が宿ったのかという疑問を打ち明けながら、自分の胸に手を

当ててルーラーが告げる。

「この痛みも、心があるから……」

「不要な物なんてないよ。心があるから、人が人でいられるんだ」
「……」

「ルーラー・アムールってき、良い名前だよね」

突然、ソウゴがルーラーの名前がいい名前だと言う。

「えっ?」

「俺は、自分の名前の意味を聞いた事ないからわからないけど、ルーラーのアムールは『愛』って意味だよな? はながそう言ってたんだ」

結構前にはなから聞いた話を引き合いに出しながら語ると、ルーラーはそれに頷いて答える。

「はい……」

「きつと、トラウム……お父さんはその名前に何か意味を込めんだよ。そうじゃなきゃ、アムールなんて付けないよ」

「私の名前に意味が……」

そこへ、はなとはぐたんが現れた。

「ルーラー!」

二人がソウゴ達の前に現れようとしたその時、地響きが起こった。

「何あれ!?」

「ルーラーちゃん！どこ？!?」

トラウムが、二足歩行ロボに乗って現れた。

「何ですか……！あれは……！」

それをルーラーは少々、呆れた表情でトラウムを見つめるのだった。

「聞いてみよ。ルーラーに付けられたアムールの意味を……」

「……でしたら……お願いがあります」

「？」

「その……一緒に……居て貰えないでしょうか……」

「えっ?」

ルーラーと一緒に来て欲しいと、ソウゴに少し顔を赤くして頼む。

しばらくして、ルーラーはトラウムと話をするために、いつもえみると練習している木の大神の元へトラウムを連れてきた。

「……」

娘であるルーラーに呼ばれて来たトラウムであったが、ただ一つ気になることがあった。

何故、ルーラーの後ろにソウゴがいるのか、と…

「いつまで沈黙を続けるのですか？」

これまでずっとトラウムは黙ったままで、業を煮やしたルーラーが口を開ける。

「ゴメンなさい……！いやその、いざこうやって話そうとすると、中々言葉が出ないものだねえ……！」

トラウムは何度も頭を下げながらそう言う。

「いつも、ペラペラと良く話すのに」

「……そうだ。私はいつも、矛盾の中で生きている。

君を作ったのも、そう言う矛盾した気持ちの中だった。

君は中々、ヤンチャなアンドロイドでね」

「そんな……事は……」

恥ずかしさで照れたルーラーが目を逸らす。

あの時の事は、トラウムはまるで昨日の出来事のように、鮮明に覚えていた。

掃除をやらせても、どこかやり過ぎたこともあるし、ハグをすると、いつも力が強過ぎていて、ぎこちないこともあった。

「身体は今のままだが、中身はまるで子供だった。何も知らない……そして、私は君の

データを全て消し、君から離れた」

「私が……失敗作だからですね」

「違う……！君が失敗作なのでは無い……」

まっすぐ君と向き合えなかった私の失敗……これでは君に、心を芽生えさせる事は出来ないと悟ったのだ……！」

「心……」

「プリキュアに、最初は嫉妬したよ。

何故、天才の私に出来ない事が彼女達に出来たのか……

……が、今なら分かる」

それは、自身があの歴史改変を行ったアナザージオウⅡと融合し、オシマイジオウⅡとなった時の事。

「彼女達にとつて君は、ただ一人のルーラー・アムールだったんだね」

「うん。ルーラーは俺達にとつて大切な友達だよ。これからずっと！」

ソウゴはそう言うと、トラウムは微笑みを見せた。

「ルーラー！時見先輩！」

そこへ、えみるが全速力で走ってソウゴ達の元へ現れた。

「私が来たからにはもう大丈夫なのです！ジャキーン！」

そう言いながら、えみるが二人の愛用のギターを見せた。

「言葉で分かり合えない事も、ギターがあれば！」

「もう言葉で説明されました」

「何ですと!?？」

彼女はギターを構えてそう告げるが、ルールーから既に言葉で説明されたと言われて驚く。

「三十秒程遅かったです」

「一生の不覚なのです……」

凹むえみるを見て、ルールーが声を上げて笑う。

「えみる、心配してくれたのですね。ありがとう」

「当たり前なのです！私達は親友なのですから！」

「親友か……」

友達と聞いたトラウムは感慨深そうな顔で聞いていると、ルールーはえみるの持つている自身のギターに向けて手を伸ばす。

「えみる、ギターを」

「勿論なのです！」

えみるとルールーがギターを弾きながら、トラウムに向けて『キミとともだち』を歌

う。

「届けたいことがあるんだ……♪君の事が好きなんだ……♪」

「止めてくれないかね……?泣きそうになる……」

「黙って聞きなさい」

トラウムが帽子で目尻を隠してそう言うと、ルーラーが黙って聞きなさいと告げる。

「二人のハートリボンを結んで、友達になろう♪」

「笑顔」

「笑顔」

「涙」

「きゅつとする……胸の奥……!」

「そこにココロ煌く……!」

それを聞いたトラウムは、とても嬉しそうな表情となった。

「良い曲だ……思い出すな、君と初めて出会った日の事を……」

何故、アムールと言う名を、君に付けたのか……これが、君の心か」

そしてトラウムは今、ルーラーの心を始めて知ったように感じた。

「ルーラー・アムール、君は君だ。他の誰でも無い、君だけの心を——」

「はい。愛します」

「それで良いんだ」

トラウムは後ろに居たソウゴに目を向けた。

「ジオウ君達には、礼をいなければならぬ……ルルーが変われたのは、君のおかげだよ」

トラウムが礼を言うのとソウゴは首を横に振る。

「ううん。今のルルーがあるのは、ルルー本人の意思だよ」

「ソウゴ……」

それを聞いたルルーも、嬉しい表情でソウゴを見た。

「実はね、私は君にもクライを止められると期待しているんだ」

「俺が？」

「君は、この前の私とアナザージオウⅡの歴史改変。さらにオーマの日、君は幾度もなく運命を変えた」

トラウムはソウゴ達が起こした、今までの奇跡を思い返す。

仲間との絆を断ち切られても、彼は諦めずにアナザージオウⅡを止めた。

そして前回、オーマジオウとなる筈のオーマの日を、ジオウトリニテイへと変えた奇跡へと変えた。

「君なら……もしかしたら、クライだけじゃなく、オーマジオウだって止められると思っ

「ただ」

その時、地響きと轟音が生じた。

振り向くとそこには、香水型の姿となった猛オシマイダーがいた。

「ソウゴ!えみる!ルーラー!」

はな達が現れるとソウゴ達はジクウドライバー、ビヨンドライバーを装着し、はな達はプリハートを取り出した。

『ジオウ!グランドジオウ!』

『ゲイツ!ゲイツリバイブ!疾風!』

『ギンガ!』

『ハリー!ギアジェット!』

「[[[[ミライクリスタル!ハートキラツと!]]]]」

『グランドタイム!祝え!仮面ライダー!グ・ラ・ン・ド!ジオウ!』

『ライダータイム!!リ・バ・イ・ブ 剛烈!剛烈!』

『投影!ファイナリータイム! ギンギンギラギラギャラクシー!宇宙の彼方のファンタジー! ウォズギンガファイナリー!ファイナリー!』

『ジェットタイム!導け!切り開く世界!ハリー!ギア!ジェット!』

「輝く未来をく抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアール！」

「HUGっと！プリキュア！」

「来たわねプリキュア！ライダー！後……！」

そこへ、スウォルツ、ピシン、ジェロスが現れ、ツクヨミに抱き抱えられたはぐたんに視線を向ける。

「その赤ん坊をこちらへ渡せ、意見は求めん！」

『デイケイド……！』

『ピシン！ギアファング！』

「変身！」

『デイケイド……！』

『ライダータイム！仮面ライダー・シン！ファングタイム！導け！完全なる力を我が手に！ピシン！ギアファング……！』

スウォルツとビシンがそれぞれ、アナザーデイケイド、ビシギアファンクへと変身した。

そして、ジェロスの生み出した猛オシマイダーがジオウ達に迫る。

「はぐたんは俺達が守る!」

『ブレイド!』

ブレイドのレリーフを触り、ブレイドの武器『重醒剣キングラウザー』を召喚し、それを掴む。

ジオウはアナザーデイケイド、ゲイツとウオズはビシン。ハリーとエール達は猛オシマイダーへと突撃した。

「だあああああ!」

エールとアアラの二人で猛オシマイダーにラッシュを繰り返して、猛オシマイダーを怯ませた。

「はああああああつ!」

アンジュとエトワールが猛オシマイダーの足に両足蹴りを叩き込んで後ずさせ、うつ伏せに倒す。すると猛オシマイダーの上部にあったポンプが増え、それをエール達に向けて伸ばし、エール達が避けてから、ポンプを支えにして立ち上がる。

その頃、ゲイツとウオズは二人がかりでビシンへと立ち向かっていた。優先に立つの

はゲイツとウオズ。しかし、ゲイツは様子が何やら変だった。

「くうー！」

ゲイツだけいつにもなく動きがぎこちなく、攻撃が単調過ぎてビシンには通用していない。

「ゲイツ君？」

「おらおら！どうした！負け犬！今日は大したことないね！」

「……黙れ！」

『フィニッシュタイム！ファンクタイムデストロイ！』

クローに貯めたエネルギーを解放し、強烈な一撃がゲイツに炸裂した。

「うわああああ！」

それを受けたゲイツは強制変身解除となった。

「ううう……」

「ゲイツ！」

「げいちゅー！」

倒れたゲイツを見たツクヨミとはぐたんの二人が叫ぶと、ウオズはゲイツの下に行き、どうしたのだと問う。

「ゲイツ君。どうした。君らしくない」

「はあ、はあ……」

「次はウオズ、君だよ」

「おもしろい!はああ!」

今度はウオズが一人でビシンへと向かっていく。

(何故だ……どうして……)

何故、思ったように力が出せないか、ゲイツには理解出来なかった。

一方、ジオウはアナザーデイケイドに重醒剣キングラウザーを振るう。

しかし、アナザーデイケイドはジオウの攻撃を余裕で躲した。

「くう……!」

そのまま避けられ続けると、アナザーデイケイドから攻撃を受ける。

「どうした?それで終わりか?」

「まだだ!」

そう叫ぶとジオウはキングラウザーを投げ捨てた。

『鎧武!』

今度は鎧武のレリーフを触り、鎧武の武器『火縄大大DJ銃』を召喚した。

「はあ!」

そしてアナザーデイケイドに向けて、火縄大大DJ銃からの光弾を放った。

「ふうん！」

ジオウから放たれた光弾はアナザーデイケイドが灰色のカーテンを出現させ、それを呑み込んだ。

「えっ？うわあ！」

その時、背後からカーテンが現れ、ジオウに光弾が放たれた。

「くう……どうして……」

「この程度か？」

「まだまだ！」

ジオウは起き上がり、今度は格闘戦に入ろうとし、アナザーデイケイドへと走っていく。

そのまま格闘戦に入るが、アナザーデイケイドが僅かにジオウを押していた。

猛オシマイダーの方は、ハリーがパンチを繰り返して出し、猛オシマイダーのバランスを崩した。

「行くのです！」

「はい！」

マシエリとアムールが跳ぶ。

「たあっ！」

「やあっ!」

ポンプによる攻撃を掻い潜りながら、ポンプを弾き飛ばす。

そして六人がポンプを掴んで引っぱり、猛オシマイダーの身動きを封じると、猛オシマイダーが上部の噴射口から煙幕を放ち、エール達を吹き飛ばした。

「身体が……痺れる……!」

どうにか着地するが、先程の煙幕によって全身が痺れてしまう。

猛オシマイダーがアムールに狙いを定め、ポンプを向ける。

「アムール!」

「!?」

『エグゼイド!響鬼!』

それを見たジオウは咄嗟にエグゼイドと響鬼のレリーフを触り、マキシマムマイティX、響鬼紅が召喚された。

「はああ!」

「オリヤヤ!」

〈HIT! HIT! CRITICAL! PERFECT!〉

「ぬうお!」

不意打ちによって現れた二体のライダーにアナザーデイケイドが後ずさった。その

隙にジオウはアムールの元へ急ぐ。

「アムール！」

「チャンスよ！猛オシマイダー！」

ポンプがアムールに向かったその時、二足歩行ロボに乗ったトラウムが前に出て、展開したシールドで攻撃を防いだ。

「トラウム……………」

「ドクター・トラウム！何をクレイジーな事を！」

「娘を守って、何がおかしい！」

「裏切り者を潰せ！」

ジェロスの命令で猛オシマイダーは力を上げ、トラウムのシールドが破壊された。

「やめろ！」

『キングギリギリスラッシュユ！』

「オリヤヤヤヤヤ！！？」

サイキョージカンギレードを使い、ジオウが猛オシマイダーに当たって吹き飛ばす。

「ジオウ……………」

「ソウゴ……………」

「ハア、ハア…………大丈夫…………俺はみんなを守る。」

それが、俺の目指す魔王だから」

その姿を見たトラウムは、確かに感じた。

彼ならもしかして、自分の想像を超えられるかもしれないと。

「マザー！私達に力を貸して！」

「「「メモリアルクロック！マザーハート！」」」

オシマイダーを隙を見つけたエール達はミライパッドを掲げると、ミライパッドが緑のハートの加わったメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパソナルカラーのハートが飛び出す。

「「「ミライパッド！オーブン！」」」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「「「HUGつとプリキュア！今ここに！」」」

「ワン・フォー・オール！」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」

「プリー、キュアー！」

「明日に！」

「エールを！」

エール達はマザーを召喚すると、メモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エールギーを集める。

「一二三！ゴー、ファイ！みんなでトウモロロー！」

手を掲げ、マザーの力を解放して光線を放つ『みんなでトウモロロー』を放つ。命中したオシマイダーがハートに包み込まれ、浄化された。

「くう……」

猛オシマイダーが消えたの見て、ジェロスは引き上げた。

「厄介だな。また違う手を取るか……」

アナザーディケイドも二体のライダーとプリキュアの力を見て潮時と思い、オーロラカーテンを出現させ、カーテンを潜ってここから去った。

「ちっ、終わりか。ウオズ君の相手はまた今度ね」

ピシンもジェロスと同じように去っていった。

それを見てみんなは変身解除し、元の姿へと戻った。

「それでは、そろそろ失礼するよ」

「エエんか？」

「伝えたい事は伝えられたんでね」

もういいのかと聞くハリーにトラウムがそう言うのと、背中を向けて歩き出す。

「ねえ、一つ聞いても良いかな？」

「何かね？」

ソウゴがトラウムを制止すると、一番聞きたかった事を問い掛ける。

「オーマジオウは、本当に俺なの？」

未来で最低最悪の魔王として君臨する、オーマジオウ。

ソウゴは本当にあれが未来の自分なのかと聞く。

「さあね……」

「さあつて、オーマジオウはクライアス社の会長なんでしょ！だったら……」

「実はね、未来のオーマジオウの正体は、社長しか知らないんだよ」

「クライだけ……」

トラウムの口から、あのオーマジオウの変身前の姿は、社長のクライしか知らないのだと聞かされた。

「もう良いかな？なら今度こそ失礼するよ」

驚きと疑問を抱くソウゴ達に向けてトラウムがそう言うのと、背中を向けて歩き出す。

「待つて！」

ルールーがそう告げると、足を止める。

「あなたの全てを受け入れた訳では無い……」

「だけど、だけど……今度、一緒にご飯を食べましょう！」

ルールーはトラウムといつか、一緒にご飯を食べようとトラウムを誘う。

それで彼女は、野乃家のみんなとご飯を食べた事で心の繋がりができた。

だから、トラウムとも……

「きつとそうすれば、きつと……また、いつか……」

「ルールーちゃん！ありがとう！」

帽子を脱いでお礼を言い、ルールーに近付く。

「やっぱりやっぱり、お父さんって呼んでも良いんだよ？！」

「お断りします」

だがトラウムが近づいた直後にルールーが離れる。

「お父さん！」

「お断りします」

「お父——！」

「お断りします」

「ルーラーちゃん照れ屋さん」

「残念な人ですね本当に……」

二人を見てみると、二人は本当の親子のようにソウゴ達は思えてきた。

「よかった。ルーラーとトラウム」

一緒に彼らの様子を見ていたソウゴは、お互いに自分の気持ちが伝わったのだと感じた。

「何とかなったね」

「何とかなってるのアレ……?」

「みんなでルーラーの心に寄り添おう」

「はい。みんなで支え合えば、きつと未来は……」

「うん。未来を守ろう」

「そして、はぐたんを未来へ帰してあげなくちゃ」

「未来……そうか……はぐたん、未来へ帰っちゃおう……」

ほまれがそう言うてからハリーの方を向く。

「あーっ!」

「どうしたのえみるちゃん?」

「はぐたんが未来へ帰っちゃうって事は……」

ルルーもゲイツさんも、ウオズさんもツクヨミさんにハリーも未来に帰ると言う事ですか!?」

『ッ!』

「……」

「どうしました?」

「ルルー……ルルー……未来……よよよ!」

はぐたんが未来へ帰ると言う事は、ルルー達も未来へ帰ることだと気付いたえみりは、涙目で悲鳴を上げたのだった。

次回! Re・HUGつとジオウ!

第55話 2018: エターナルタイム! 迷えるえみりとゲイツの心

第55話 2018： エターナルタイム!迷えるえみるとゲイツの心

トラウムが自らをルーラーの父親と言い、彼女へ会いに来た。

衝突し合ったものの、二人はお互いに気持ちを理解し合うことが出来、更に現れた猛オシマイダーとアナザーデイケイドを退く事が出来た。

しかし、えみる達は重大な事を思い出してしまった。

いずれ来るであろう、未来から来たゲイツやルーラーとの別れを…

その時、ソウゴ達の居るその場に強い震動が響いた。

「な、何……」

「あ、あれ!」

何かに気づいたさあやが空を指差すと、そこからタイムトンネルが出現した。

そこから現れたのはソウゴとゲイツの使うタイムマジーンとは違う、少し古いタイプのタイムマジーンの様だった。

「タイムマジーン……」

「2050年代の初期型だね」

青いカラーに単眼の様な頭部を持つタイムマジーンを見たウォズが、2050年の機体だと推測した。

するとそのタイムマジーンのハッチが開き、そこから全身が青色姿の仮面ライダーが現れた。

「仮面ライダー？」

ゲイツが警戒すると、青いライダーは変身を解除した。

変身前の姿は青い服装で、髪に青いメッシュがある年上の男性だった。

「君が明導ゲイツ……だよね？」

「そうだが……お前は？」

「俺は仮面ライダーアクア、湊ミハル。君を迎えに来たんだ」

「迎えにだと？」

「ゲイツ、君は未来へ帰るんだ」

「何……？」

ミハルはゲイツに未来へ帰るんだと忠告した。

そのままミハルを連れ込み、ビューティーハリーの店内が淀んだ空気の中にソウゴ達はいた。

「湊ミハル……仮面ライダーアクア。この本によれば確かに、君も未来から来たライダーのようだね」

「そうだよ」

ウオズがミハルの正体を話す。

しかしそんな事よりも、ソウゴ達は未来に帰るはぐたん達の事で頭が一杯だった。

「いつかは……未来に帰っちゃおう……」

「はぐたんも……ハリーも……」

「ゲイツ……」

「ツクヨミお姉ちゃんも……ウオズさん……」

いずれ未来へ帰る事には気付いた事で、店内の空気は重かった。

「確かにはぐたんを……いや、トウモロークを未来には返さなければならぬ。それは私達が、未来へ戻るとも繋がる」

ウオズは啞然とするはな達に落ち着いた口調で、冷静に事を話す。

「で、でも！時々こちらに遊びに来れば良いのです！」

「それは……難しいやろな」

「によへ!?」

「ごつちに来るには、ごつつい量のアスパワワが必要や。何度も出来る事やあらへん」

「…あつ!? タイムマジーン! あれがあれば……」

「それはダメだよ」

「えっ?」

ハリーにタイムトラベルは難しいと言われたえみるがタイムマジーンを使えば良いと言おうとするが、ソウゴ達の話を黙って聞いていたミハルがダメだと戒める。

「未来から来た人間が、理由もなく無闇に過去に介入しちやいけないんだ……」

「そんな……」

「特に最初にそれ行ったゲイツ。きみのやっていることは、過去を変えようとしている」
ミハルにそう言われたゲイツは立ち上がり、彼に向かって怒りを含んだ叫び声を上げた。

「何も知らないくせに偉そうな。それをやっているのはクライアス社だ」

「クライアス社も君達も同じだよ。未来からやってきて、過去でやりたい放題してるんだから」

「何だと……」

ゲイツ達のしている事はクライアス社と同じと咎められ、ゲイツは否定しようにもミハルの言う事はあまりにも正論であるが為に、どう返せばいいかわからずぐんでしま

「じゃ、じゃあ、未来へ帰らないと言うのはどうですか!?!?」

ならばと、えみるは未来に帰らないと提案する。

「えみるちゃん……」

「ずっと、ここで皆さんと……」

えみるはルーラー達に帰って欲しくなかった。だから彼女は、出来る限りの案を必死に出し続けた。

「えみる、私は未来へ帰ります」

「ルーラー……」

だがルーラーは、未来へ帰ると決めていた。

それを見ていたハリー、ツクヨミも、口には出さないが、いずれは戻らなければいけないのだとミハルの言葉を聞いて感じていた。

「……仕方ありませんね!」

「えみるちゃん……」

「私達はヒーローなのです!はぐたんを未来へ返さないといけません!ハッハッハッハッ!」

切り替えたかのように笑顔を見せると、えみるが笑いながらそう言う。

しかし、彼女の心の奥底には、『帰らないで』と言う想いが、深く根付いていた……

その夜、えみるは自分の部屋でずっとルルーとの事を思い返した。

(ルルーが未来へ帰る……居なくなってしまう……)

ベッドで眠るえみるが心の中で眩きながらミライクリスタル・レッドを見つめ、眩き
終えてから握り締めた。

クライアス社本社の実験室。そこにビシンが訪れた。

「嘘つき。何でみんな、僕から離れて行くんだ……」

ビシンが培養液の中で眠るリストルを見て眩く。

「リストルも！ハリーも！何で！」

「だから時を止めるんだ」

ビシンが叫ぶと、そこへクライが現れた。

「プレジデント・クライ……」

「そうすれば、皆ずっと一緒にいられる」

現れたクライがそう告げ、ビシンを抱き締める。

「ずっと……一緒に……」

そんな姿を、後ろからスウォルツが様子を見ていた。

その翌日、野乃家では。

昨日の事でことりがあまり寝られず、不安な顔で部屋から出てきた。

「何、元氣ない顔してんだよ？」

「ウール……あのさ、ウールは……いつか未来に帰るの？」

ウールが目の前に現れると、ことりは彼へ未来に帰るのかと尋ねる。

「……さあね」

しばらく沈黙が続いて、分からないと呟く。

「別に僕は、未来で待っている人もいなければ、帰る場所もない……」

だから……まだ、ここにいても良いかな……？」

「えっ？」

ウールの言葉を聞いてことりは何処か嬉しかったように感じた。ウールの方も、この家での生活が案外気に入っていたようだ。

「うん！いいよ」

「……なんだよ……ほら、早く朝ごはん食べよう」

「うん」

ことりが笑って言うのと、ウールは照れ臭そうに言う。

そのまま支度が終わると、ことりは学校へ登校する。

しかし、まだえみるの方が不安で、彼女の表情からは未だに不安の色が浮かんでいた。

（えみるちゃん、大丈夫かな……）

心の中で呟いてからすぐに、えみるを乗せた車が停まり、彼女が降りる。

「おはよう、えみるちゃん」

「ゴキゲンヨウことりサン」

「……………はい？」

だがことりはえみるの顔を見て、驚きの表情を浮かべる。

「早く学校二行カナイト、遅レマスヨ」

「え、えみるちゃん!?」

「ハイ？」

振り返ったえみるは、何故か猫目になってカタコトになっていた。

しかも、いつも口癖である『…なのです』がなかった。

「何か……………変……………」

今日のえみるはいつももなく変だった。

そのまま昼休みとなり、中庭にいたはなとさあやにこの事を話す。

「えみるの様子がおかしい？」

「なのですって言わなくなっちゃったし、後飛んで来た買い物袋が顔に付いたまま学校に入っちゃったの！」

「「ええっ!?」」

「昨日の事があつたからなのは間違い無いけど……!変でしょ!?」

「ことりちゃん！」

「あつ、はい!出来る限り様子は見るから、お姉ちゃん達もえみるちゃんの様子を見て!」

そう二人に伝えてから、ことりは自分を呼んだクラスメイトの元へ向かった。

「やっぱ、ルーラーの事だよね」

「うん。考えて無かった訳じゃないけど、いざ向き合おうと、私も……未来を救う……助け。それは叶えたい事。けどそうすると……」

「ルーラー、ゲイツ、ハリー、ツクヨミ、ウオズ、はぐたんとお別れ……」

はながミライパッドの画面に写る、いつかみんなで撮った写真を見て、そう呟いた。

ラヴェニール学園の廊下を、ほまれとアンリが歩いていたが、アンリは何か思い詰めた様子ほまれに違和感を感じていた。

「何かあった？」

「？」

「心ここに在らずって感じ。練習中も、今も」

「……別に。アンリこそどうしたの？ ジャンプの踏み切り、何で変えたの？」

「僕に隠し事なんて無理だよ。いつから一緒にいると思ってるの？」

「相談しても、どうにもならない事なんだ」

アンリは全身を90度回転させてほまれの方を向いて尋ねるが、ほまれは暗い表情でそう告げる。

「……………辛い」

「ほまれ……………」

二人の間に重い空気が漂っていると、えみるが二人の前に現れた。

「ゴキゲンヨウ」

「え、えみる……………」

「キャラ変わってない……………」

カタコトで挨拶して来た猫目のえみるを見た二人が、驚きの余り距離を取る。

「ソナナ事アリマセン。ウツフフフ……」

そう告げてから、不気味な笑い方をしてこの場を後にした。

同じ頃、ソウゴは教室の自分の席から一人外を見つめていた。

「未来に帰る……」

ゲイツ達はいずれ、元いた時代に、2068年という未来に帰る。

だがソウゴはなんとなく……いや、もしかしたら、ずっと前からわかっていたのかもしれない。

その上で、己はその事実を知らないふりをしていた。

いつかはゲイツ、はぐたん、ルールー、ツクヨミ、ハリー。みんなとお別れをしなければならぬ事を。

（わかっている……ゲイツ達には、帰らなければならぬ場所がある……でも……）
心では、わかっている。

でも、彼らとはクジゴジ堂でこの一年近く一緒に暮らし、共に戦ってきた。

だからソウゴは、ゲイツ達にはここにずっと居て欲しいとも思っていた。

「時見！」

物思いに耽っていたソウゴの下に、クラスメイトの小和田がソウゴに声をかけた。

彼は以前、アナザーエグゼイドの時の被害者だった少年である。

当時彼はアナザーエグゼイドによって昏睡状態に陥っていたが、ソウゴがアナザーエグゼイドを倒したために歴史が変わって、アナザーエグゼイドに襲われたという事実が無かったことになり、今も無事にソウゴの前で元気に声をかけている。

「珍しいな。お前が委員長や野乃達と一緒にじゃないなんて……」

「うん……ちよつとね」

「なあ、久しぶりに付き合えよ。今日のゲームの大会にでるんだ。一緒に行こうぜ」

「あ……まあ、いいか。行こう」

ソウゴはゲーム大会と聞き、気持ちを紛らすにはいいかもと思い、彼の誘いを承諾した。

公園のコンクリートのベンチでは、ルールーがギターを弾いていた。

「未来に帰る……けれど……私の心……えみるの心は……そして……」

いずれ未来に帰らなければいけないという事実を思い浮かべ、えみるの事を心残りにしていたルールーは、もう一つ気になる心があった。

それは、いつも自身が危なくなると危険を顧みず、自分を、みんなを助けてくれる彼を……ソウゴの事を、ミライクリスタル・パールを見つめ、彼の事を想いながらそう

呟いた。

「えみると違う心……この私の心をより強くさせるこの感じ……ソウゴ」

ソウゴの事を考えると、胸が張り裂けそうな気持ちになる。

それがなんなのか、未だルールにはわからなかった。

そんな一方で、はくぐみ市にある巨大企業、愛崎コンツェルン本社の会長室。

そこにいるのはえみるの祖父、愛崎猯兎である。

「何度も言わせるな!」

「そうか。クライアス社とは業務提携を考えてないのかと」

スウォルツがソファアールから立ち上がってそう言い、愛崎コンツェルン会長であり、えみると正人の祖父である猯兎にビシンが近寄る。

「由緒ある愛崎コンツェルンが——ん?」

「この子、あなたのお孫さんでしょ?」

「!?」

ビシンは猯兎にツイインラブのポスターを見せ、そこに写っている二人組の片翼を指差しながらそう告げた。

その頃、ゲイツは学校の屋上で一人で考え事をしていた。

「……」

「何を考えているんだい。ゲイツ君？」

そこへウオズが現れて、何か思い悩んでいる様子のゲイツに話しかけると、本人は目を下に向けながら口をぽつぽつと開き始める。

「俺のやっていた事は、間違っていたのか……」

「ゲイツ君……」

昨日、ミハルが言っていた事がゲイツは心に強く響いていた。

クライアス社を倒し、過去でオーマジオウになる前のソウゴを倒して未来を救う。そのためこの時代に来た。

——だが、その行動は根本的に間違っていると言われた。

「俺は、この時代に来るべきじゃなかったのか……」

「さあね。まあ、私は君と違いこの本の通りに歴史を歩んでいるけどね」

そう告げてウオズはゲイツの前から去っていく。

(それに俺は……トウモロローを……)

あの時俺は、クライアス社に捕まった彼女を助けに行つた。

なのに、彼女の消息は途絶え、その後ずっと死んだとばかり思っていた。

しかし、彼女は生きていた。

それも直ぐ近くの身近な所で、何故かハリーと一緒にいた不思議な赤ん坊だと思っていたはぐたんこそが、トウモロウである事にも気づかないで。

俺は、その事を信じる事が出来なかった。

昨日の戦闘でも、その事が脳裏へ振り返りずつと後悔していた。

同じ頃、ツクヨミがミハルと学園の裏で話をしていた。

「私を迎えに来た？」

「うん。そうだよアルピナ」

「アル…ピナ？」

ミハルはツクヨミの事をアルピナと呼ぶと、ツクヨミは何故その名で呼ぶのだと思う。

「ああ、えつと…君の本当の名前。自分が時を司る一族の末裔で後継者だつてことは覚えてる？」

ミハルがその事を話すとツクヨミはあの改変事件で、スウォルツが語ったことを思い返す。

『その力は、我が一族で認められたものが与えられた特別な力だ』

認められたものが与えられる力だと、スウォルトツはツクヨミに打ち明けていた。

「過去に介入しようなんて、君がもつともやつちやいけない事だ。今すぐ帰ろう。俺と一緒に。君もゲイツも」

ツクヨミは以前、ソウゴに誓ったことを思い返す。

『魔王にならないよう導きたい、そう思ってる』

『奴は魔王になどならん。俺達がさせない』

自分とゲイツは、今までずっと彼がオーマジオウにならない様に監視し、交流し、そして対立した。

今ではソウゴと自分の間には、大切な関係が築かれていた。

だが、今ここで戻ったらソウゴは……

「私達が帰ったら、ソウゴがオーマジオウになってしまう。そうしたら……みんなと……」

ここで戻れば、もしソウゴがオーマジオウとなった時、ソウゴがはな達プリキュアと戦う事になってしまう。それだけは、絶対に避けなければならない。

「ううん。逆なんだ」

「——え？」

だがそれを聞いていたミハルに逆だと言われ、ツクヨミは思わず自分の耳を疑う。

「君達はオーマジオウのいる未来からやってきた。

そんな君達がここにいたら、時見ソウゴがオーマジオウになる未来が決定つてことになっちゃうんだ。

分かるかな?それに、ほら、君は世界が違うから」

ツクヨミはこの時、スウォルツと土が言っていた言葉を思い出す。

『俺達はこの世界とは別の世界。平行世界からやってきた』

『お前がここにいること自体が、時空の歪みそのものだからな』

「だから帰ろうって言ってるんだ。君のその力と一緒に」

自分達兄妹がこの時代にいること自体が問題だと、改めて自覚して心揺れるツクヨミに、ミハルは今すぐにも未来に帰らなければならぬと語るが…

「それは無理……私の力はスウォルツに……兄に奪われてしまったから」

「はあ……そうなんだ……えええー!?」

ツクヨミが既にスウォルツに力が奪われていた事に驚き、ミハルは絶叫した。

いつにもなく様子のおかしいえみるが、ビューティーハリーへと一人でソファに座りはぐたんを抱いていた。

「ゴキゲンヨウはぐたん」

「えみりゆ……へん……」

えみるに抱き抱えられたはぐたんが不安そうに眩く。

「どうしたんや……えみる」

「いつもと違うね」

「いつの間に……!?!」

「えみる……!」

「えみる兄までおるんかい……!」

いつの間にかアンリと正人も来てて、正人に至っては涙を流してた。

「やっぱ、シヨックだったんだやな……」

ルルーの事……どうなんしたら……」

ルルーの事がやはりシヨックだったと思うのだが、どう今のえみるに声をかけるべ

きかハリーは悩む。

すると、突然河童の格好をしたはなとことりが現れ、三人が驚く。

「えみるちゃん! 笑顔になってカッパ〜!」

「ハイ?」

「えみるちゃんは河童が好きでしょ? 河童〜!」

「別ニ好キジャ無イデス」

「めちよカッパ……」

「だから止めようって言ったのに……」

はなの河童作戦は大失敗に終わった。

「次は私達が！」

今度はさあやとほまれが挑戦する。

「さあ！この熱々のおでんを食べますよ！」

今度はさあやとほまれが二人場織を行う。

「さあやの女優魂見せて！」

「よくつてよ！」

さあやが女優魂を見せながらおでんの大根を食べる。

「……」

しかし、これにも反応を見せなかった。

「「ええええつ……!?」」

「普通に食べた方が良いでしょう」

「正論ですわ……！」

「ハリーの嘘つき！二人場織は絶対ウケるって言ってたじゃん！」

「ルールの歓迎会でスベリ倒した所、お前も見えてたやろ！」

結局、誰もえみるから笑顔が戻らず、いつも違う変な様子の表情だった。

「これは、お兄ちゃんの出番でしょ」

「僕……!?」

ピンチヒッターに今度はえみるの兄の正人がえみるに挑む。

「えつと……えと……布団が、吹っ飛んだ!」

面白いと思いいギャグを言ってみたが、正人のギャグに周囲の空気が冷え、えみるも反応を見せなかった。

「そっか。正人の中では、それが面白いんだね」

「止めろ……! 一番傷付くよ……っ!」

アンリが微笑み、正人の肩に手を当ててそう声をかけた。

「皆サンドウシタンデスカ? オカシナ——」

「おかしいのは君でしょ。どうして心の扉を閉じているの?」

「ソナナ……」

アンリの言葉に反応したえみるは、そんな事はないと言いかけるが…

「えみる」

そこへ、えみるの事が心配になったルールーが現れた。

「ルールー……」

「えみるの心を、見せて下さい」

ルルーが自分のミライクリスタル・パープルを見せる。

「私の……心……」

同じ様にミライクリスタル・レッドを取り出したえみるの目が戻る。

「私達は親友。隠し事は無しと約束したじゃないですか」

「私……私は……ッ!」

えみるが思いを告げようとしたその時、二人の手に持っていたミライクリスタルが突如として消えてしまった。

「何だ……?!?」

「ミライクリスタルが……!」

「消えちゃった……!」

「……」

ハリー達が驚いたのもつかの間、クリスタルが消えると同時にえみるが気を失って倒れてしまった。

「えみる……!」

「大丈夫か?!?」

「っ!……」

正人が駆け寄ってからすぐ、幸いにも薄っすらと意識の残っていたえみるが口をパクパクと開きながら何かを話すも、はな達の耳には彼女の声が聞こえなかった。

「えみる……？ 声が……！」

「出ないの……？」

「えみる……ッ！」

ルールー達が未来に帰る事とミライクリスタルが消えた事にショックでえみるは、声も出なくなってしまうた。

「えみるの声が出なくなった？ うん。分かったわ」

その連絡を受けたパップルが事情を聞く。

「今はゆっくり休ませてあげて。お大事に……」

（あの二人の心は、いつも一緒なのね。二人で愛のプリキュアなんだもの）」

電話を切ったパップルがツインラブのポスターを見つめ、心の中でそう呟いた。

ソウゴはそんな事を知らず、クラスメイトと共にはくぐみ市にあるゲームセンターで開かれている、格闘ゲームの大会を観戦していた。

「くそお！」

クラスメイトの友人は決勝まで進んだが結局最後は負けてしまった。

「ああ……」

見ていたソウゴも少し残念だった。

そのままクラスメイトの小和田とゲームセンターから出て行く。

「元氣出せよ。次勝てば……」

「うるせー!」

負けたことで機嫌が悪く、ソウゴに少し八つ当たり気味の様子だった。

小和田はそのままソウゴを置いて一人で帰ろうとする。

「おい」

なんとその時、そこにスウォルツが現れた。

「スウォルツ!」

「俺がお前の世界を作ってやろう」

スウォルツが腕を振り上げる。すると彼の前に小さな灰色のカーテンが現れ、そのま

まクラスメイトの小和田を包み込んだ。

「小和田!?!? スウォルツ!何をしたっ!」

「お前には、お前に相応しいゲームがある」

スウォルツが不適な笑みを浮かべる。

すると、先までいた小和田の場所へ灰色のカーテンが出現すると、そこから黒いジャケットを着た青いメッシュの男性が現れた。

「またか……いい加減、きちんと死ねたと思ったんだがな……」

「誰？」

「フツ……死神の名前か。地獄に言ったらこの名を告げる」

その男性は、何かのスロットが一つだけ付いた赤いドライバーのようなものを見せた。

ソウゴはそのドライバーを見て、見覚えがあった事を思い出す。確か、以前のアナザークウガ鬼火の事件で出会った左翔太郎が仮面ライダージョーカーになる為に巻いていた『ロストドライバー』だった筈。

『エターナル！』

そして彼がその手に持っていたのは、翔太郎とフィリップと同じタイプのガイアメモリだった。

「変身！」

『E』のアルファベットが刻まれた白っぽいガイアメモリを差し込み、ドライバーのスロットを展開させる。

『エターナル！』

すると、一瞬の内に白いライダースーツが覆われる。

そして背中に黒いマントを纏い、両手には青い炎のグラデーションが入った純白のボディと、頭部にはEを横倒しにした三つ角を持ったライダーがそこに立って、黄色の複眼でソウゴを見つめていた。

「仮面ライダー……」

『ジクウドライダー!』

『ジオウ!』

ソウゴはジクウドライダーを装着し、ジオウウォッチを起動するとドライバーに装填、ドライバーのロックを解除すると後ろから時計が出現した。

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

ソウゴもジオウへと変身を完了し、目の前のライダー…仮面ライダーエターナルとの戦闘を開始する。

その頃、まだ話を続けていたツクヨミとミハルは…

「お願いミハル。もう少し時間をくれない……?」

あなたが言っていることは正しいと思う。

でも私達は、ソウゴを絶対にオーマジオウにさせたくないの……！だから……」

ツクヨミはまだこの時代、この世界に残りソウゴの運命を変えたいと頼む。

「でも、その未来は時見ソウゴ達のものなんだよ！」

「……それでも、今ここで帰るわけにいかないわ……」

「……アルピナ」

まだ帰るわけには行かないと言うツクヨミの強い意志に、ミハルはすぐに答えを言えず、言い淀んでしまう。しかしそこへ……

「ジオウ……」

「ソウゴ！」

偶然、二人は仮面ライダーエターナルと戦闘していたジオウを見かけた。

（あれが……ジオウ。俺の知ってるジオウと、何かが違う？）

ミハルはジオウの戦い方を見て、自分の知るオーマジオウのジオウとは違うのかと疑問に持ち始める。

「俺の力を使うと、そんな芸当も出来るのか？」

そして、その戦いを見守り不適な笑み出し続けるスウォルツの前に土が現れ、柱からジオウの戦いを観戦していた。

「門矢士。お前の力は俺が奪った。手出しは出来んぞ」

「そうか？」

スウォルツは余裕の表情でそう話すが、対する士は顔色一つ変えず落ち着いた表情だった。

「あいにく俺の力つてのは、俺の存在そのものなだけだな？」

士が手を額の方へと持ってくる。

すると、ジオウの前にオーロラカーテンが出現し、そのまま自身とジオウを伴い消えた。

「何……」

「チツ……」

エターナルはジオウがいなくなったことに驚き、スウォルツは舌打ちをして機嫌を悪くした。

「ソウゴ！」

ツクヨミとミハルがいなくなったジオウの場所へと現れた。

「妹よ……何しにきた」

「スウォルツ……」

スウォルツが迫ってくると、ミハルがツクヨミの前に出る。

「僕に任せて」

「ミハル……?」

「それと、スウォルトツから隙が出来たら、スウォルトツから力を取り戻すんだ」

「えっ?」

「いいね」

ミハルは仮面ライダーアクアと変身する為にアクアドライバーを取り出し、腰に据えるベルトとなつて巻かれた。

「……ああ、ちよつと待つて。今、勇気出すから」

だが彼は変身する前に、ポケットから何かを取り出す。

——それはなんと……パンツだった。

「パンツ……」

「あ、ああ、明日のパンツだよ」

そのカラフルなパンツはミハルにとって、かけがえのないもので、とても尊敬する人から貰つたもの。

…なのだが、何も知らない人から見れば意味不明なものでしかなかった。

「よし」

パンツを仕舞うとミハルはベルトを起動させ構えた。

「変……身」

そのままミハルの体を水しぶきのように覆い、姿を変える。

そして、仮面ライダーアクアへと変身した。

「はああ!」

アクアとなったミハルはジオウの代わりにエターナルへ戦いを挑む。

士によりオーロラカーテンへ取り込まれたジオウだったが、気づくと変身が解除されていた。

「何だこゝ?」

「スウォルツが創った世界らしいな」

「スウォルツの……でも、これ……」

スウォルツが創った世界だと聞かれるが、ソウゴはこの世界の風景にはすぐく見覚えがあるように思った。

「やったー!」

「……小和田?」

その光景は、先の大会中のものだ。しかし、おかしな点が見えた。

「時見!見ててくれたか?ほら俺勝ったぞ!これで次の大会に行ける!」

クラスメイトがゲーム大会で勝っている世界へとなっていたのだ。

「何言つてんだよ。小和田、お前負けたんだよ」

「あ？何言つてんだよ。俺は勝つたんだよ！王者になるんだあ！」

「違う、違うよ小和田。これは！」

「違うと言おうとしたその時……」

「——やったー！時見！見ててくれたか？ほら俺勝つたぞ！これで次の大会に行ける
！」

「……えっ？」

さっきまでの出来事をビデオで巻き戻したかのように、またしても同じ事を繰り返す言う。一体に何が起きているのかソウゴにはわからなかったが、士は察しが付いていた。

「そうゆうことか」

「どうゆうこと？」

「ここはありえなかつた世界。失われた可能性の世界と言つてもいい。さしずめ……アナザーワールドと言つたところか」

「アナザーワールド……」

士はこの世界はアナザーワールドと答えた。

「お前の友人には勝つ可能性があった。スウォルツはそれを利用し、この世界を創つた」

「何のために?」

「ダークライダーを蘇らせるために……かもな」

「そうなるよ、今まで現れたダークライダーも、こんな風にスウォルトツが色んな人達をこの世界に取り込んだことになる。」

「お前がさつき戦った仮面ライダーエターナル。」

「あいつは昔、Wによって倒された……」

「いや、このアナザーワールドでは勝つたことになってるらしい」

「仮面ライダーエターナル。彼はかつて、翔太郎とフィリップの変身する仮面ライダーWによって倒された仮面ライダーだと土は語る。」

「帰るぞ。カラクリは分かった。ここがゴールのはずはない。この先に何かあるはず」

「ちよつと待って。小和田を助けないと」

「それは無理だな。ここはあいつの世界。この世界を破壊しない限り、あいつは救えない」

「そんな……」

「そんな事よりも……お前はまずキュアマシエリの元へ行かなくていいのか?」

「えみるちゃんか?何かあったの……」

「ネズミから聞いたが、キュアマシエリが倒れたそう。ついでにアムールと一緒にク

リスタルの方も消えたとき」

「えっ?」

それを聞いたソウゴは、最初は自分の耳を疑った。

現実の世界では、エターナルにアクアが応戦していた。

「くっ……」

戦闘はエターナルがアクアを押ししていた。

「踊りな。死神のパーティータイムだ!」

「俺が君を相手にしてると思ってた!?!」

アクアはそう言って水圧でエターナルを突き放す。

するとアクアは振り向き、スウォルツを水の力で捕縛する。

「何?!?!」

「ツクヨミ!今だ!」

「うわああああああ……!」

潜んでいたツクヨミが背後に現れ、スウォルツから力を取り返し始めた。

「スウォルツ!」

「これを……狙っていたのか!」

「ここで終止符を打つ!」

ツクヨミは更にスウォルツから奪われた力を取り戻そうとする。

「パーティーに水を差してくれたな!」

アクアはエターナルを掴んだまま、海へ落ちた。いや、引き込んだと言うべきか。

そのまま水中戦へ移ったが、水の中はアクアの持ち場、水中を早い動きでエターナルを攻撃し、形成逆転へとなった。

「俺は未来から来た!君なんか過去の亡霊だ!」

「だが結局、未来も過去になるんだ」

エターナルはそう反論すると水中で竜巻を作り出し、渦潮を発生させた。

「うわああああ!」

それにより、アクアを地上へ放り出した。

「ミハル!」

『ディケイド……!』

ツクヨミは力を取り戻したようだが、アクアが押され出した事で気を取られてしまった。

その僅かの隙をつかれ、スウォルツがアナザーディケイドへ変身し、そのオーラで吹っ飛ばされる。

「フフフハハハ……」

「しまった……」

立場が逆転し、スウォルツはアナザーデイケイドとなつて倒れているツクヨミに迫る。

「残念だったな……少々、取り戻されたがお前を葬るのなんの問題もない」

アナザーデイケイドは右腕にエネルギーを蓄積させ、ツクヨミにトドメを刺そうとする。

「さらばだ。妹よー」

「ツクヨミ?」

「ツクヨミー!」

アナザーデイケイドの腕がツクヨミに振り掛かろうとした。

「はああ!」

その時、ツクヨミの前に鋭い爪の攻撃が現れ、ツクヨミを守った。

「させるか!」

「ゲイツ……」

ゲイツリバイブ疾風へと変身したゲイツがツクヨミの前へと現れ、彼女を守った。

「どうして……」

「えみるが倒れた。その連絡を受けて、お前とソウゴを探していたんだ」

はなから連絡を受けたゲイツがツクヨミを探していた最中に、ここで戦っている音が聞こえた為、二人の場所がわかった。

「ツクヨミ君、大丈夫かい？」

「お待たせ！」

ウオズとアーラも現れ、三人はアナザーデイケイドとエターナルに構える。

「やはり来たな。ゲイツ。思った通りだ」

「なんだと」

スウォルツはゲイツが現れるのを待っていたかのような口調だった。

「俺がお前の世界を創ろう」

「何？」

そう言ってアナザーデイケイドが腕を上げる。すると、ゲイツの周囲からモザイクが掛かったかみたいに現れ、ゲイツを拘束した。

「うわああああ！」

拘束されたゲイツはそのままオーロラカーテンに包まれ、アナザーワールドに飲み込まられてしまった。

「ゲイツ！」

「ハッハッハッハッハッハッ！」

その時、ゲイツが消えたオーロラカーテンの向こうから聞き慣れた笑い声が聞こえた。

「ハハハハ……」

そしてオーロラカーテンが消えると、白い服と白いベレー帽を被ったウオズがツクヨミ達の目に映った。

「そんな……」

「白いウオズさん……」

「白ウオズ」

「いや〜久しぶりだね。ツクヨミ君、黒い私……そして、はじめましてキュアアアラ……」

そこに現れたのは、あのオーマの日、ソウゴにジオウトリニティウオッチを渡し、自ら消滅した筈の白ウオズだった。

次回！ Re. HUGつとジオウ！

第56話 2018： 決めたマシエリとアムールの覚悟！ 運命を覆す救世主の爆誕！

第56話 2018： 決めたマシエリとアムールの覚悟!運命を覆す救世主の爆誕!

スウォルツのアナザーデイケイドの力により、ゲイツはアナザーワールドに囚われてしまった。そこへ入れ替わるように、かつて消滅した筈の白ウオズがウオズ達の前に現れた。

「白ウオズ……」

「久しぶりだね。ツクヨミ君」

「白ウオズ……ここは一度引き上げよう」

『タイヨウ!』

ウオズはギンガミライドウオツチの顔を変えて再びドライバーに装填し、レバーを引く。

『投影!ファイナリータイム!灼熱バーニング!激熱ファイティング!ハイヨー!タイヨウ!ギンガタイヨウ!』

ウオズの複眼が赤色へとなり、ギンガタイヨウフォームへと変わった。

『ファイナリービヨンド ザ タイム!バーニングサンエクスプロージョン!』

太陽型疑似惑星の力を使い、眩い光とともに、ツクヨミとアーラとアクアを連れ撤退する。

ゲイツがアナザーワールドに取り込まれる少し前、倒れたえみるを愛崎家へと連れ込んでソファアールの上に寝かせ、彼女が起きるのをはな達は待っていた。

「えみりゅ……」

「私が……いえ、私達が未来に帰らなければ……でも……」

ルールーはそう呟きながら、えみるの手に触れる。

「はあ、はあ……えみるちゃん……」

「ソウゴ君」

「あんた、今まで何やってたの？」

「ごめん……それでえみるちゃんは？」

ほまれにごめんと言いながら、ソウゴはソファで眠るえみるを見て、続けて心配する表情のルールーへ視線を向ける。

「えみる……!」

「ルールー……」

ルールーが心配そうに手を握っていたその時、えみるの目が開かれた。

「えみるちゃん。よかった」

一同は目を覚ましたえみるを見て安堵していると、彼女は口を開いて何かを伝えようとする。

「……………」

「えみるちゃん……………声が……………」

だがいくら口を開閉させても、未だに彼女から声が出る事はなかった。

それを察したソウゴはその事に衝撃を受けたが、えみるはそのままパクパクと口を動かし、何かを伝えようとする。

「ご、め、ん、な、さ、い……………」

「何で謝るの……………」

「謝るのは私です。私のせいで……………」

読唇術で彼女が言おうとしている事を知ったルーラーは、涙が零れ出そうになりながら謝罪する。だがえみるは、そんなことは無いと言わんばかりに首を横に振った。

その直後、ドアが勢いよく開いた。

「えみる!」

「何や?!」

そこへ焦った表情をしたえみるの祖父…愛崎コンツエルン会長・愛崎猿兎が部屋へ

入って来た。

「お爺様……！待って下さい……！」

「儂に指図するな！」

正人は必死に羽交い絞めで止めるが、怒りに震える猿狷は彼の腕を振り払う。

「へえ、この人が噂の……」

「お父様お待ち下さい。今、えみるは体調が〜♪」

「うるさい！」

怒りに震える父を止めようと妻と共に部屋へ来た俳呑に文句を言うと、そのままえみるのいるソファへと向かう。

「ああ……声が出なくなるなんて……何て可哀想なえみる……ずっと心配していたのだ……お前らのせいだぞ。何だこれは！」

猿狷がえみるを抱き締めながら呟いていると、いきなりソウゴ達の方を睨みつけると、彼らの所為だと怒りを露わにして叫び出した。

「俺達の所為……」

「そうだ！それがこれだ！」

言葉を失っていた彼らにそう告げると、ツインラブのポスターを突き付ける。

「ああ〜！お父様はネット社会に疎いから〜♪」

「大丈夫だと思っただけなのに♪」

「普通に喋れ！」

えみるの両親に普通に喋れと一喝し、話を戻すためにえみるを見る。

「ギターは止めろと言っただろ！」

「そんな、えみるちゃんはギターが……」

「お前らが、えみるをそそのかしたのか！」

「そそのかした……!?？」

さあやの言葉を遮って忌々しく見詰めながら、えみるを唆したのかと言われたほまれは啞然とする。

「えみる、もう良く分かったね。お前はずつと、愛崎家の中で暮らして行けば良いんだ。そうすれば、こんな目に遭わないで済むんだよ」

「みんな……」

遅れて愛崎家に到着したツクヨミ達は、今がどういふ状況なのか直ぐに理解するところには出来ずにいた。

だがえみるに優しく囁き掛ける猿狻の姿は、まるで愛玩人形を愛でているかのような、余りにも歪な愛情が垣間見えていた。

「そんなのおかしいです！」

「これは愛崎家の問題だ！ 僕は、えみるの為を思つて言っているのだ」
「えみるの為……？？」

えみるの為だというが、途中から来たツクヨミは勿論、ずっとこの部屋にいたはな達にも、彼が本当の意味で彼女の為に言っているとは到底思えなかつた。

「えみる……僕は困らせないでおくれ。早く素直で可愛いえみるに戻つておくれ……」
困惑のあまり言葉を失つていたソウゴはそれを聞いて、その表情を変えた。

「そんなのえみるの為じゃなくて、あなたの——！」

ソウゴが文句を言いかけたはなの前に腕を伸ばして制止し、代わりに猿発の前に出ると、「なんで、あんたが決めるの？」と投げかける。

「なんだと？」

「なんで、あんたが決めるんだって言ってるんだ！」

言葉の意味を掴めず聞き返した猿発に向けて、今にも胸倉に掴みかかりそうな勢いで、真剣になつて叫んだ。

対して猿発は「由緒ある愛崎家に、ギターなど似合わん」と、何の疑問も持たずに言い放つた。

「だから私は、そんな事にならないよえみるを……」

「それは、あんたがえみるちゃんに自分の考えを押しつけてるだけだよ！」

それにギターだって、ピアノやバイオリンにも負けない楽器だよ。

それよりもえみるちゃんは……ギターが好きなんだよ!」

「ソウゴ君……」

「ソウゴ……」

(時見先輩……)

「好きなことをするのが、なんでダメなの!」

どうして好きな事をやっては駄目何だと、必死に叫び続ける。

その言葉に獏発は言い返そうとしようとするが、彼の気迫に押されて思わず息を呑んだ。

「聞いて見て下さい。えみるとルーラーの音楽を……」

二人のギターは、自由で!ノレって!カッコよくて!ギューンとソウルがシャウトするんだよ!」

「……」

「……先……輩……」

「えみる……」

その時、微かにだがえみるから声が出たような気がしてルーラーが振り返る。

——すると突如として、灰色のカーテンが現れ、えみるを包んだ。

それに気付いたソウゴ達が彼女の名を叫ぶも、気づいた時にはえみるの姿はソファから消えていた。

「もしかして、スウォルツ……」

「つ？ もしかして……アナザーワールドに……」

消えた原因はスウォルツによるものだと、ソウゴはすぐに察知した。

「スウォルツの仕業なら、早よせんと！」

「行こう！早く助けに行かないかと！」

「はい！」

「「うん！」」

ソウゴ達は急いで部屋から出て行き、アナザーワールドに捕らえられたゲイツとえみるを助けに向かおうと外へと出る。

しかし、何も知らないえみるの両親やアンリに正人は猥発には、何がどうなっているのかわからなかった。

「えみるくが♪」

「消えたく♪」

「一体何が……えみるがいきなり……」

（もしかして……クライアス社……）

「貴様ら……えみるをどうした!」

アンリがクライアス社の所為だと察していると、猥発は部屋から出て行くソウゴ達にきつく叫びながら追いかけてようとする。

「お爺さま!」

だが正人が猥発の腕を掴み、追いかけてさせないようにする。

「こら! 離せ! 離せ!」

「彼らを…ソウゴ君達を信じましょう!」

「お年寄りは待っていきましょう」

アンリも加わり、一緒に猥発を抑える。

「時見君! ルールーさん!」

「?」

「えみるに伝えて欲しいんだ。『声を出して良いんだ! 自分の思った事を、叫んで良いんだ! ギュイーンとソウルがシャウトするのです』って! 頼む!」

正人との頼みを聞き入れたソウゴとルールーは頷き、そのまま愛崎家から出て行く。

対策を練るためにソウゴ達はその後、作戦とアナザーワールドについて門矢士から貰った情報を話した。

「あつたかもしれない可能性の世界……」

「アナザーワールド……」

「そこに、えみるがいるんですか」

「うん。ゲイツもアナザーワールドにいるはずだよ……」

「どうすれば、その世界に行けるんですか？」

「こつりがアナザーワールドへの行き方を聞こうとするが、ソウゴは言葉を喉に詰まらせてしまう。」

「そう、彼らを救出する上で浮上する一番の問題はそこだ。今のソウゴ達では、アナザーワールドに行くことすら出来ないのである。」

「スウォルツが創りだした世界……ディケイドかディエンドなら行けるかもしれないが、彼らはあてにならない」

「ウオズはディケイドとディエンドの名前を出す、ディケイドはスウォルツに力を奪われ、ディエンドはクライアス社と手を組んでいる為に信用ならない。」

「そんな……」

「それに門矢士も言つてた。アナザーワールドに捕らわれた人は、その世界を破壊しないと救えない」

「壊すって……どうやれば、その世界を壊せるの……」

アナザーワールドを壊すと言っても、どうすれば壊せるのかもわからない。

このままでは、ゲイツやえみるだけでなく、他の人達もアナザーワールドから助ける事が出来ない。

「私がスウォールツの罠にはまったから……」

「ツクヨミお姉ちゃん……」

「ツキヨミ! ゲンキ! ゲンキ!」

「ありがとう。はぐたん」

励ましてくれるはぐたんにツクヨミはお礼を言う。

「君のせいじゃないよ。俺の……勇気が足りなかったから……」

ミハルも自分が勇気がなかったと自分を責める。

「何かゲイツとえみるちゃんを助ける、いい手はないかな?」

助ける手段にソウゴ達は頭を悩ませると……

「流石に悩んでいるようだね」

聞き覚えのある声が聞こえ、ソウゴ達が振り返る。

「久しぶりだね。魔王。プリキュア諸君」

そこへ現れたのは、白ウオズだった。黒い方のウオズは白ウオズの前に出て、もう一人の自分を警戒する。

「まさか、君が復活するとはね」

「久しぶりじゃないか。もう一人の私」

だが白ウオズが現れたのを見て、ソウゴの脳裏にはいくつかの推測が生まれた。

(白ウオズは、アナザーワールドから現れた。)

もしかしたら……アナザーワールドに……)

彼ならばアナザーワールドの仕組みも行く方法も知ってるのかもと思い、白ウオズに尋ねる。

「白ウオズ。手を貸してくれ。ゲイツとえみるちゃんを助けたんだ」

「私が素直にいう事を聞くとでも?」

ゲイツとえみるを助けるために協力して欲しいと頼むと、白ウオズは呆れた様子でシニカルに笑う。

「どうしても聞いてもらおう」

「ダメなら……」

実力行使も覚悟でベルトをソウゴ、黒ウオズ、ハリー、ミハルの四人がベルトを掲げる。

さらにはな、さあや、ほまれ、ことりもプリハートを取り出す。

「そんな脅し、私には効かない」

すると白ウオズは、既に黒ウオズへと所有権が移ってしまった筈のビヨンドライバーを出してきた。

「君までベルトを……」

「アナザーワールドは、失われた可能性の世界だからね」

アナザーワールドの影響により力を失われなかった世界から連れてこられ、仮面ライダーウオズの力を再度手に入れる事が出来たと言う事だと語る。

「……だが、我が救世主を助けたのは私も同じこと」

「えっ?」

しかし白ウオズはゲイツを助けたのは同じと話し、ソウゴ達はホツとしたのかベルトを下ろした。

「我が救世主やキュアマシエリをアナザーワールドから救うには、ここにいる全員が危ない橋を渡ることになる」

彼はかつて、ゲイツにゲイツリバイブのデメリットを説明せずにその力を渡したが、今度は警告した上で二人を助ける為の提案を言い渡す。

「覚悟はできてる」

「えみるを救うためなら! 私も覚悟あります!」

「うん! みんなでえみるとゲイツを助けよう!」

「私も覚悟はあります！」

「当然！」

「私も頑張ります！」

「俺だつて勇気だすよ」

ソウゴ達は危険を覚悟でゲイツとえみるを救うために、アナザーワールドに乗り込もうとする気持ちを訴える。

「どうかな？ 白い私」

「……いいだろう。では作戦スタートと行こうじゃないか」

白ウオズはアナザーワールドから新たに取り戻したミライノートのページを開き書き込むと、作戦が始まった。

まず、白ウオズは『湊ミハル、仮面ライダーエターナルと戦った』といった内容をノートに書き込んだ。

その戦いの場所は、はくぐみ市の広場へと変わり。ミハルがいたそこへ、仮面ライダーエターナルが迫ってきた。

「フフフ……」

ノートに書かれた通りに目の前にやって来たのを見て、ミハルは貰った明日のパンツ

を広げ勇気をもらおう。

「死神のパーティータイムだ。死ぬまで踊れ!」

「変…身!」

ミハルはアクアに変身し、エターナルと交戦に入った。

「よし!」

茂みからソウゴ、はな、さあや、ほまれ、ルールーがエターナルの方へ向かう。

ハリーははぐたんとルールーを守るために、現在も茂みに隠れている。

『ジオウ!』

「変身!」

「「ミライクリスタル!ハートキラツと!」」

ジオウとプリキュアに変身し、アクア共にエターナルへ応戦。

「……ジオウとエターナルが戦闘に入ったか。しかし、プリキュアは邪魔だな」

様子を見に来たスウォルツが腕を振り上げると、マフラーの色が銀色で、額には宝石をくわえた髑髏と骨の形のV字アンテナが付いた仮面ライダー幽汽。

そしてえみるのアナザーワールドによって誕生した、左右非対称の緑と赤と金色の派手なカラーリングをした戦鬼・仮面ライダー歌舞鬼が現れた。

そのままエターナルに加勢した幽汽と歌舞鬼がプリキュアに攻撃を繰り返す。

「いいね」

「待つてもらおう」

白ウオズもこの場へ現れ、続くように黒ウオズが立ちはだかる。

「私達ダークライダーを舐めないでもらいたい」

「君の相手は私だ。ウオズVSウオズで行こうじゃないか」

二人のウオズはビョンドライバーを装着し、二人共ウオッチを起動させる。

『ギンガ!』

『ウオズ!』

『『アクシオン!』』

「変身!」

『投影!ファイナリータイム! ギンギンギラギラギャラクシー!宇宙の彼方のファン

タジー! ウオズギンガファイナリー!ファイナリー!』

『投影!フューチャータイム!スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ

!』

黒ウオズはギンガファイナリーへ、白ウオズは通常フォームの仮面ライダーウオズへと変身するとそのまま、両者共に戦闘を開始した。

白ウオズは黒ウオズの攻撃を軽々と防ぐが、やはりギンガファイナリーの力を持つ黒

ウオズが優先だった。

『ビヨンド ザ タイム!』

『ファイナリービヨンド ザ タイム!』

『タイムエクスプロージョン!』

『超ギンガエクスプロージョン!』

そのまま、お互いにビヨンドライダーを操作しライダーキックを繰り返した。結果はギンガファイナリーのウオズが打ち勝ち、白ウオズを消滅させた。

その時、黒ウオズは作戦が始まる前に交わした、彼との会話を思い返す。

『君は容赦なく私を倒せ!』

『君を……?』

『芝居だとぼれたら終わる。本当の勝負はその後だ』

白ウオズは最初から倒されるのが目的だったが、そうとも知らないスウォルツはウオズを鼻で笑いながら顔を向ける。

「面白い見世物を見せてもらった。おかわりと行こう」

スウォルツの手をかざした先にオーロラカーテンが現れ、倒したはずの白ウオズが現れた。

「さあ、さあ、さあ、第二ラウンドだ」

そこへツクヨミとルールーが現れる。

「そうはさせない！」

ツクヨミは時間停止能力を白ウオズへかける。しかし、あっさり解けてしまう。

「残念。力が足りないようだね」

やはり、ツクヨミはスウォルツから力を全部は取り戻せてなかったようだ。

「では、さよならだ」

白ウオズはオーロラカーテンをウオズ、ツクヨミへ向けると2人は消えてしまう。

「君もだよ」

「ルールー！」

今度はオーロラカーテンをルールーに向けて放つとそこへ、アーラが庇うために飛び込んだ。しかし、そのままルールーとアーラはカーテンに取り込まれてしまった。

「アナザーワールドに送り込んでやったよ」

「ツクヨミ！ウオズ！ルールー！アーラ！」

ジオウはスウォルツへ斬りかかる。しかし、エターナルが阻止されてしまった。

「諦めろ。もう奴らには会えない。永遠にな」

「永遠にだ？いい言葉だっ！」

エターナルがスウォルツの言葉を聞いてそう言うと、エターナルエッジのスロットに

エターナルメモリを装填した。

『エターナル! マキシマムドライブ!』

手に持ったコンバットナイフ型の専用武器を振るうと青い炎の斬撃が放たれ、ジオウはそれを諸に浴びてしまった。

「ソウゴ君!」

「大丈夫」

「ここまでは何とか上手くいった」

「うん。後は……」

「一か八かだね」

そう、これが白ウオズの作戦。

その最初はエターナルを呼びよせ、次にゲイツとえみるのアナザーワールドへと潜入する。ここまでは予定通りだが、後はソウゴ、ゲイツ、ウオズの三人の一か八かが上手く行くかどうかで、その結果が変わる。

その頃、先にアナザーワールドへと侵入した黒ウオズとツクヨミは…

「(ハハ)はっ?」

「アナザーワールド。ゲイツ君の世界だね」

ゲイツのアナザーワールド。カレンダーを見ると、日時はアナザードライブと遭遇した日となっており。ツクヨミが見渡すと、ゲイツがソウゴを壁に当てながら声を荒らげる場面が見えた。

「お前がオーマジオウになって、お前が最低最悪の未来を創ったんだろうっ！」

この辺りは、現実でもソウゴに向けて言った事だ。

しかし、ゲイツは続けて話をしていた。

「だが俺は……そんな未来から逃げ、この時代に来た。

帰らなきゃいけないのは分かってる……

でも俺は！この時代で生きていきたいんだ！

お前と一緒に！新しい未来を創っていきたいんだよ！」

「……これが、ゲイツ君が実現したかった可能性……」

「ゲイツ……」

——この時代に、ソウゴと一緒に生きたい。

これが、ゲイツの本心だったと黒ウオズとツクヨミは知った。

ルルーとことりの方も、白ウオズによって別のアナザーワールドへとやってきた。

「(ハ)は……」

「えみるのアナザーワールド」

えみるのアナザーワールド。それは、昨日の未来へ帰ると話していた時の時間だった。

「ずっと、ここで皆さんと……」

えみるはルーラー達に帰って欲しくなかった。

だから必死に、出来る限りの案を出し続けるが上手くいかず、ルーラーから「えみる、私は未来へ帰ります」と告げられた時……

「ルーラー……私はまだ、ルーラーの皆さんと一緒に居て欲しいのです!ここにずっと居てみんなといつものように過ごして!ルーラーと『ツインラブ』で歌いたいです!」

「えみる……」

「これがえみるちゃんの失われた可能性……」

えみるの失われた可能性。

彼女はあの時、自分の本音をあの時言えていれば、違う結果あったかもしれないと思っていたのだと、ルーラーとことりは知った。

現実世界に残されたジオウ達は、エターナルと幽汽と戦いを続けていた。

力の差はエターナルがジオウとアクアを押ししており、ジオウがエターナルから離れる

と腕のWウオッチを取り外した。

「君はダブルに倒されたんだよね」

『W!』

ジオウはダブルウオッチを起動させ、ジクウドライバーへと装填し、ドライバーを回転させた。

『アーマータイム！サイクロン！ジョーカー！　ダブル!』

ジオウの体に二本のガイアメモリが肩に装備され、黒と緑のアーマー、ダブルアーマーを装備した。

「さあ、お前の罪を……教える?」

ダブルアーマーを纏ったジオウはジョーカーのオーラを纏った左キック、サイクロンのオーラを纏った右回し蹴りをエターナルへ撃ちこみ、反撃に出た。

「くう……教えてやる。俺は負けてはいない。たまたま風が吹いただけだ!」

エターナルは背中を纏っていたマントを外し放り投げる。

すると、違うガイアメモリを起動させる。

『ゾーン!』

「Z」の文字が描かれたメモリを起動させると、ロストドライバーのマキシマムスロットにそれを装填した。

『ゾーン!マキシマムドライブ!』

すると、エターナルの周りにガイアメモリが集まってきた。

『ACCCEL!BIRD!CYCLONE!DUMMY!ETERNAL!FANG!
GENE!HEAT!ICEAGE!JOKER!KEY!LUNA!METAL!
NASCAL!OCEAN!PUPPETEER!OUEEN!ROCKET!SKU
LL!TRIGGER!UNICORN!VIOLENCE!WEATHER!XT
REME!YESTERDAY!ZONE!』

24本のガイアメモリをゾーンメモリの物体移動能力で呼び寄せ、エターナルの全身のマキシマムスロットに装填された。

「地獄を……楽しむな!」

『エターナル!マキシマムドライブ!』

そう言いながら、エターナルの青い炎を纏ったライダークックがジオウ達に向かって放たれ、ジオウは防御するように腕を交差させながら構えて受け止める。

「ぐうう……もう少し……」

必死に耐え続けるジオウ。その時彼は、懐からジオウトリニティウオッチを取り出す。

実はこの作戦が始まる前に、アナザーワールドからみんなを助ける作戦には、ジオウ

トリニティウオッチが必要不可欠だったことが白ウオズの口から語られていた。

『魔王には、エターナルのマキシナムドライブを耐え抜いてもらう』

『わかった』

『でもソウゴが危険なんじゃ…』

『大丈夫。耐えるだけなんとなかなるよ』

ソウゴがそう言うが、耐えるだけとはいえさあやの胸の内には不安が詰まっていた。

『せやけど、エターナルに何をさせるんや?』

『エターナルメモリは、世界の1つや2つ永遠に破壊出来る。』

だが、そのためにはエターナルをアナザーワールドに引き入れなければならない』

『確かにトリニティウオッチには、ゲイツとウオズを呼び寄せる力はあるけど、世界の壁まで超えられる?』

ジオウトリニティにアナザーワールドにいるゲイツと、助けに行くウオズ。そして、現実でエターナルを抑えるソウゴ。

この三人が別の世界からでもジオウトリニティになれるのか、という不安要素があった。

『正直、賭けだね。でも私は、トリニティの力はそうゆうものじゃないと見込んでるんだ。それと……我が救世主にこれを渡す』

白ウオズはゲイツに渡す為の、少し大きめなブランクウォッチを見せる。

そしてここまでは白ウオズの計画通り、エターナルはマキシマムドライブを放った。後は本当に一か八か掛けだ。

「行くぞ……ゲイツ! ウオズ!」

『ジオウトリニティ!』

ジオウは片腕を使ってWウォッチを外し、ジオウトリニティウォッチをスロットに装填した。

『ジオウ! ゲイツ!』

更にダイヤルを回し、ジオウの仮面と一緒にゲイツの仮面の絵柄が映し出された。

『だが……俺はそんな未来……』

その時、ジオウトリニティウォッチが操作されたのと同時に、アナザーワールドのゲイツが変身し、腕時計に変形していく。

『ウオズ!』

同様にウオズも強制変身し、腕時計に変形した。

「いけええええ!」

その時、ジオウの周囲が光に包まれ、同時にエターナルと共にその場から消えた。それを目にしたアクアと白ウオズは成功したと睨み、スウォルツは何が起こったのかと疑問を抱く。

『トリニティタイム！三つの力、仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウオズ！トリーニティー！トリニティ！！？』

ジオウトリニティへの変身のために引き寄せられる形で空間転移し、アナザーワールドへエターナルごと侵入成功させたジオウは、ゲイツのいるアナザーワールドへ移っていた。

そのままゲイツとウオズの腕時計が体にはめ込まれ、同じように変化を始めたジオウの仮面が中央へと移動する。

「うつつ……はあ！」

ジオウトリニティへと変身を遂げ、エターナルの攻撃を逸らした。

そのままエターナルメモリの力で辺り一面に亀裂が入っていき、アナザーワールドが次々と崩壊していく。

するとオーロラカーテンが現れ、そこからソウゴ達や囚われたゲイツとえみるが戻っ

てきた。

「俺は……」

「私は……」

「成功したな!」

「ゲイツ君、えみるちゃん、お帰り」

ゲイツとえみるが戻ってきて、みんなは嬉しく思っていると、その影響で幽汽と歌舞鬼も消滅した。やはり、アナザーワールドが彼らの存在を保っていたようだ。

「ツクヨミ。はぐたんとみんなを!」

「うん。みんな逃げて!」

ツクヨミがはぐたんを抱いて、アナザーワールドから解放された人達を逃げるように促がす。

すると、一緒に戻ってきたエターナルは変身を解くが、彼の誕生したアナザーワールドが消えた為の影響か、彼の体が少しずつ綻び始めた。

「面白い風を吹かせるじゃないか」

「君の力を利用してもらった。ごめん……」

「いや、お陰で俺は、俺だけを蘇らせた世界を壊すことができた。これで、仲間のもとに行ける」

大道克巳は満足そうな表情で親指を上げ、消滅していった。

「ソウゴ……俺は……！」

ゲイツが何かを言いかけようとしたその時、ゲイツの顔をソウゴが殴った。

「ソウゴ!?？」

「ソウゴ君……人を殴った」

初めて見た光景に、さあやは驚いた。

「お前……」

「はあ、はあ……なんで、本当の気持ちを言ってくれなかったんだよ！」

ソウゴはゲイツの胸倉を掴み、本当の事を言ってくれなかった事に怒りを露わにする。

「どうして！言ってくれなかったんだよ！」

「お前には……関係『あるよ!』……」

「友達だろ……不安があるなら、いくらでも聞くよ！」

初めて男の子の友達になれたゲイツに、親友として彼の悩みに気付けなかった事を後悔していた。だからこそ彼は今、ゲイツの本音を知りたい事を告げた。

「……」

「じゃあ、俺の本音を言うよ……」

俺はゲイツやルーラー……ツクヨミ、はぐたん、ハリー……

みんなにずっと居て欲しい!」

あつけにとられるゲイツに対し、ソウゴは先に自分の本音を打ち明けた。

「俺は、みんなに会えたから今の俺があるんだ」

今のソウゴが間違えない道を歩めるのは、ゲイツ達のおかげだと感じていた。

オーマジオウの未来を見て王になるのを諦めた時、彼は自分の事を親友だと言ってくれた。

アナザージオウⅡに記憶を変えられても、みんなは自分を信じてくれた。

「ゲイツ達と会って、一緒に過ぐして、一緒に戦って……」

そのかけがえない時間を……これからの未来を一緒に生きたい。

でも、みんなには帰るべき場所が……未来がある。

だから、今の俺の望みは……今を生きる俺達の未来。

未来に帰るゲイツ達の未来を、最高最善のものにしたいツ!」

そう強く叫ぶソウゴに心の奥まで響いたのか、ゲイツも続いて口を開き始める。

「俺も……俺もこれからもずっとお前と生きたい。親友として……」

だが俺には、帰らなければならない未来がある。

だから……俺は、僅かな時間でもいい!

お前と……お前達と一緒に生きたい！

そしてお前を、最高最善の王に導きたい！

それが、俺の今の気持ちだッ！」

自分の本音を打ち明け、それを聞いたソウゴは笑みを浮かべた。

そのままゲイツはソウゴの手を掴み、返事を返す様にソウゴはゲイツを起き上がらせた。

「ありがとう。ゲイツ」

「俺もだ。ソウゴ」

改めて、一緒に戦うために、残り僅かな時かもしれないが、覚悟と目標を決めた二人は、互いに固く握手を交わした。

すると、黒ウオズが白ウオズに近づく。

「何故、君は君自身が消える作戦を立てたのか？」

ゲイツのアナザーワールドが消えれば白ウオズは消滅してしまう。

それなのに何故だと聞くと、白ウオズは笑いながら言葉を繋いでいく。

「言っただろう。私は我が救世主を助け、新たな未来を見ていたくなった。

それが私の『失われた可能性』……だからね」

「白ウオズ……お前……」

「だが、気を付けた方がいい。クライアス社の狙いは……あつー!」

何かを言いかけようとしたとき、何か刃物のようなエネルギー刃が白ウオズの腹部を貫いた。

「白ウオズ!」

「大丈夫!?」

ソウゴとはな、ゲイツが白ウオズに駆け寄る。

「スウォルツ……」

振り向くとその攻撃を放ったスウォルツがいた。

「やってくれる……だが全てのアナザーワールドを消したと思うな」

スウォルツの背後から何人かの仮面ライダー……グレイブ、ソーサラー、ガオウ、武神
鎧武といった、四人のダークライダーが現れた。

「ハリー君!みんな!あいつらをスウォルツから切り離す!」

「わかった!」

「「はい!」」

『ギンガ!』

『ハリー!ギアジェット!』

「変身!」

「二」ミライクリスタル！ハートキラツと！「二」

『投影！ファイナリータイム！　ギンギンガラガララクシー！宇宙の彼方のファンタジー！　ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

『ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジェット〜！』

「輝く未来を、く抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアール！」

ウオズとハリーはギンガファイナリー、ギアジェットへ。はな達四人がプリキュアへと変身すると四人のダークライダーへと向かっていき、スウォルツから白ウオズを離す。

「ルールー、えみるちゃん。白ウオズと離れて……」

「わかりました」

ルールーが白ウオズを連れて、ソウゴとゲイツから離れようとする。

「待つて欲しい」

だが白ウオズは彼女へ待つて欲しいと制止させ、ミライノートのページを開いた。

そして、そのページに『我が救世主に！魔王と並び立てる力を！』と、そう書き込む。

それによって白ウオズの持つていたブランドクウォッチに19個もの光が注がれ、その姿を変えた。

「これは……」

「それが、魔王と並び立てる力……『ゲイツマジエステイ』だ……」

「ゲイツマジエステイ……」

そのウォッチは、ソウゴの持つブランドジオウライドウォッチと形状が似ていた。

しかし色はゲイツウォッチの色と同じ赤となっており、ゲイツは白ウオズが誕生させたウォッチ、『ゲイツマジエステイライドウォッチ』をその手に掴む。

「白ウオズ……」

「これが私の望んだ。失われた可能性……魔王と救世主。

二人が共に歩むことの出来る世界……それが、私の求めた失われた可能性……

未来を変えて見せろ。我が救世主……魔王」

体が消滅し始めるも、白ウオズは遺言のように吐露していく。

「お前……」

「叶えて見せるよ。白ウオズの望んだ世界……」

「……楽しみにしてるよ……」

そう言って微笑み、最後にたった一言告げて消滅した。

「白ウオズ……ありがとう」

「……」

ソウゴは白ウオズにお礼を言い、ゲイツは託されたウオツチを強く握りしめる。

「決着をつけようか？時見ソウゴ」

「スウォルツ……」

ソウゴがスウォルツを睨み付けると、ゲイツがソウゴの隣に立つ。

「スウォルツ。お前を倒すのはソウゴではない。」

俺とソウゴの二人が、お前を倒す！」

「無駄だ」

アナザーディケイドウオツチを起動すると、スウォルツは自らの体内に埋め込んだ。

『ディケイド……！』

アナザーディケイドへ変身したのを見てソウゴとゲイツはジクウドライバーを装着した。

「行こう。ゲイツ！」

「ああ！」

二人は二つのウオツチを共に掲げた。

『ジオウ！グランドジオウ！』

『ゲイツ！ゲイツマジエステイ！』

起動させたウォッチを二人はジクウドライバーの左右のスロットへ装填した。

そのまま二人はドライバーのロックを解除し、構える。

『へポオオン！パアアアア！』アドベント！COMPLETE！ターンアップ！
『エイイン！』CHANGE BEETLE！ソードフォーム！ウェイクアップ！カメ
ンライド！サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！3・2・1！シャバドゥビ
タッチヘンション！ソイヤツ！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！
ライダータイム……！』

ソウゴの背後に地中から、巨大な黄金の時計台と歴代ライダーの石像が出現。表層が
剥がれ、仮面ライダーたちの姿が現れた。

そしてゲイツは金色の円周に包まれ、19個のライドウォッチが彼の周囲に現れた。

「変身！」

『グランドタイム！』

『マジエステイタイム！』

ポーズを決めた二人は同時に叫び、ドライバーを回した。

『クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド！響鬼・カブト・電王！キバ・ディケイ
ド！ダブル！オーズ！フォーゼ！ウィザード！鎧武・ドラーイーブ！ゴースト！エグゼ

イド！ビ・ル・ドー！

祝え！仮面ライダー！！？グ・ラ・ン・ド！ジオーウ！』

『G3・ナイト・カイザ・ギャレン・威吹鬼・ガ・タ・ツ・ク！ゼロノス・イクサ・ディ
エンド・ア・ク・セ・ル！　バース・メーターオ・ビースト・バロン！　マツハ・スー
ペクター・ブレイブ！　クーローズ！

仮面ライダー！Ah！ゲイツ！マジエースーティー！』

ライダー達が黄金のフレームに取り込まれ、ジオウの身体に張り付くように装着され
てアーマーが形成、開いたフレームからライダー達が現れるとそれぞれの決めポーズを
とって固定され、最後に頭頂部にジオウが固定されると『ライダー』のインジケーショ
ンアイがセットされ、グランドジオウへ。

そしてゲイツは仮面ライダーゲイツへと変身すると、普段の姿から赤と金のライダー
スーツが纏われ、背中にはマントを装着。更に2号ライダーのライドウオッチが全身に
装着されており、頭部にはゲイツウオッチが。胸部にはイクサ、ディエンド、ブレイブ、
クローズのライドウオッチが装着され、右肩にナイト、G3、カイザのライドウオッチ
が装着。左肩はアクセル、バース、メテオが装着された。続いて右ホルダーにギャレン、
威吹鬼。左ホルダーにビースト、バロンさらに右腿にゼロノス、ガタツク、左腿にはス
ペクター、マツハ。

合計で19個のライドウォッチが装着された、ゲイツマジエステイへと変身した。

「なんだこれは……」

アナザーディケイドはゲイツマジエステイへと変身したゲイツに戸惑った。

「新しいゲイツ……」

「ゲイチユクレイ〜!」

エール達も新しいゲイツの姿・ゲイツマジエステイに驚いていると、ダークライダーの戦っていたウオズはダークライダーを振り払い、何やらうずうずしていた。

「祝いたくはないが……私のプライドにかけて!」

ゲイツを祝いたくはないと思っていた様だが、何かを決したウオズは一步踏み出し、天に響く位に高々と叫んだ。

「祝え!闇に苦しむ人々を救い、未来に光を取り戻す真の救世主!その名も仮面ライダーゲイツマジエステイ!まさに生誕の瞬間である!」

「……あの、ウオズさん」

「無理に言わられても、多分嬉しくないよ」

「祝いたくないなら、尚更そっちがいいよ」

アンジュ達に無理に祝わなくても良いと言われた。まあ、ウオズのプライドが許さなかつたんだろう。

「行くぞ！ソウゴ！」

「ああ！」

ジオウとゲイツが二人同時にアナザーデイケイドへ走り出し、そのまま二人は同時にアナザーデイケイドに拳を繰り出した。

（これがゲイツの答え……もしかしたら……彼なら、ジオウの……時見ソウゴの運命も変えられる）

それを見ていたアクアは、ゲイツマジエスティとなったゲイツなら、ソウゴのオーマジオウへの運命を変えることが出来るのかと思う。

その姿にえみるも、自分もルーラーに想いを、今伝えるべきなのかと思い始める。

（ゲイツさん……）

「えみる。私はまだあなたの気持ちを聞いていません」

「……」

えみるがルーラーに気持ちを言おうと思った、その時……

「オシマイダー！」

突如として、タコのような足に白髪のと、背中には豪邸のような感じのオブジェクトを付けた猛オシマイダーが現れた。

「えみる」

そのオシマイダーはえみるとルルーに向けて足で攻撃をしてき、そのまま二人は吹き飛ばされてしまった。

「「ルルー!」」

吹き飛ばされたルルーはえみるを庇ったために、体から電流が流れ出した。

「大丈夫です。私は……アンドロイドですから……」

「あ……」

えみるはルルーのその痛々しい姿を見て言葉を漏らす、その様子を見ていたアナザーディケイドはルルーを見下しながら高々と笑い出す。

「ハツハツハツハツ……!流石はアンドロイド。」

だが、貴様のようなガラクタはもはや邪魔だ」

その言葉は、ジオウの心に強く怒りを感じさせた。

「ルルーは……ガラクタなんかじゃない!」

ジオウのパンチが決まり、アナザーディケイドを離す。

「ルルーはただのアンドロイドじゃない。」

音楽が好きで、えみるちゃんと一緒に歌うの好きな。一人の女の子だ!」

「ふん。女とはいえ、所詮はロボットに過ぎん」

「俺は違う。俺達にとってルルーは友達で、俺達と同じ心がある人間だ!人の心を理

解もしない、お前なんかよりな！」

「黙れ！」

アナザーデイケイドの怒りに触れたかジオウに光弾を放つ。

そこへ、ゲイツが前に出てクローズの武器『ビートクロザー』で光弾を切った。

「スウォルツ、お前に教えやる。」

心の強い奴は、どんなピンチを跳ね除けるってな！」

『ナイト！』

今度はナイトのライドウォッチを起動し、仮面ライダーナイトの武器、『ウイングランサー』を召喚した。

『龍騎！』

ジオウも龍騎のレリーフを触り、仮面ライダー龍騎の武器・ドラグセイバーを装備した。

「見せてやる！俺達の思いを！」

ジオウとゲイツはドラグセイバーとウイングランサーでアナザーデイケイドに反撃へと出た。

「えみるちゃん！」

「ルールーに気持ちをお届けして！」

「ルールー……ルールー」

えみるは倒れているルールーを介抱し、自分の気持ちを話す。

「困らせても良いですか？」

「はい」

「ヒーロー。資格だと言われるかもしれないけど……けど……」

ここから先を言おうとすると、えみるの目が潤い始める。それでもー

「けど……私も時見先輩やゲイツさんと同じで、ルールーとずっと一緒に……ずっと一緒にいたいのです！ 未来に帰って欲しくないのです！

ずっと！ずっと……あああああああつ！」

ルールーの手を握り自分の気持ちを打ち明けたえみるはルールーを抱いて、悲しみの涙を流す。その叫びを聞いていたルールーは、自分のために彼女は、ずっと堪えていたのだと感じた。

「えみる……私はえみるとソウゴと出会ったから、未来を信じようと思ったのです」

「なら、ずっと一緒に……」

えみるは一緒に居たいと言うと、ルールーは首を横に振った。

「未来には歌が……音楽がないんです」

「っ！」

「私は未来の人達に、私達の歌を、私達の愛を届けたい」

「未来に愛を……」

「誰かを愛する心。大切にする気持ち。」

素晴らしいことなんだと伝えたい。

「これがあなたとソウゴやみんなと出会って見つけた、私の二つのうちの一つの夢です」

「ルールの……夢……もう一つは……？」

「それは……いずれ話します」

ルールはもう一つの夢は伏せたままにした。

そして、えみるを優しく抱きしめる。

「未来で待っています」

「あっ……」

「私達は、ずっと親友！」

「はい……」

えみるもルールを優しく抱きしめると、二人の胸から光が灯された。

それはまるで、初めてクリスタルが誕生した光と同じだった。

その時、二人の元に消えたミライクリスタル、レッドとパープルが復活した。

「あなたを愛し!私を愛する!」

えみるとルールはプリハートをお互いに取り出し、ミライクリスタルをセットした。

「ミライクリスタル!ハート、キラっと!はぎゅ〜!」

二人は再び現れたミライクリスタルとプリハートをセットし、はな達と同じ手順を取る。

すると服が変わり、髪が伸び、色も変わり姿を変える。

「輝く未来を、抱き締めて!みんな大好き!愛のプリキュア!」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

ミライクリスタルが戻った事で、キュアマシエリ、キュアアムールが復活した。

エール達は再びプリキュアに変身できた二人に近寄って笑みを浮かべる。

「マシエリ!アムール!」

「ご心配をおかけしました」

「私達の愛を届けます!」

「何が愛だ……ぬわあ!」

「お前の相手は俺達だ!」

プリキュアの前に立つジオウとゲイツが、アナザーデイケイドの前へと立ちはだかる。

二人はそれぞれ電王のレリーフとゼロノスのライドウオッチに触れる。

『ゼロノス！』

『電王！』

二人は電王のデンガツシャー、ゼロノスのゼロガツシャーを召喚した。

「ふん！」

先にボウガンモードのゼロガツシャーを放ち、アナザーデイケイドを怯ませた。そこへジオウがデンガツシャーへ追い討ちをかけた。

「くう……おのれ」

「みんなの邪魔はさせない！」

プリキュアの邪魔はさせないという気迫に押され、ジオウとゲイツにアナザーデイケイドは苦戦された。

一方、アナザーデイケイドによって呼び出されたダークライダー達はウオズ、ハリー、アクアによって決着がつけられようとしていた。

『ファイナリービヨンド ザ タイム！超ギンガエクスプロージョン！』

ウオズが超ギンガエキスプローションで炎を纏った隕石の雨を降らせ、ソーサラ、グレイブに直撃させ、二人を消滅させた。

武神鎧武とガオウの方は、ハリーとアクアが二人をいか所へと集めた。

『フィニッシュタイム!』

「はあ〜!」

ハリーがドライバーを回し、背中のジェットが火を吹く。アクアは足に水しぶきを上げると二人は高く飛び上がる。

『ジェットタイムフィニッシュ!』

「はああああ!」

二人が同時にライダーキックを放ち、武神鎧武とガオウに直撃。こちらも二人もライダーキックを受けると消滅した。

「ギューーインとソウルがシャウトするのです!」

「マシエリポップ!」

「アムールロックンロール!」

今度は、マシエリとアムールがマシエリポップとアムールロックンロールを放って命中させ猛オシマイダーが倒れた。

「行くよ!」

「「「メモリアルクロック！マザーハート！」」」

エール達はミライパッドをメモリアルキュアクロックに変化させ、エール達とはぐた
んからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「「「ミライパッド！オーブン！」」」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはま
る。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザー
ハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライプレスが着けられる。

「「「HUGっとプリキュア！今ここに！」」」

「ワン・フォー・オール！」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」

「プリー、キュアー！」

「明日に！」

「エールを！」

マザーを召喚してメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集め
る。

「「「ゴー、ファイ! みんなでトウモロ〜!」」」

手を掲げ、マザーの力を解放して光線を放つ。『みんなでトウモロ〜』を放つ。命中した猛オシマイダーがハートに包み込まれた。

「モウ〜ヤメササテモライマス〜!」

オシマイダーが浄化された様子を、木の上から見ていたビシンが悔しそうな表情で直ぐ様去っていった。

残るはジオウとゲイツが戦っているアナザーデイケイドのみ。

グランドジオウとゲイツマジエステイの力は、アナザーデイケイドを圧倒させた。

「行くぞ! ソウゴ!」

「ああ!」

二人はドライバーのロックを解除した。

『『フィニッシュタイム!』』

二人の背後から仮面ライダー達の影が現れた。ジオウにはクウガからジオウを含む20人の陰が、ゲイツは自分を含めウオッチと同じ二号ライダー達19人の姿が映し出されていた。

『オールトウエンティタイムブ레이크!』

『エル・サルバトーレタイムバースト!』

「はあああああーッツッ！」

そのまま現れたライダー達と共に、ジオウとゲイツはライダーキックをアナザーデイクイドへと向けて放った。

「ぐう……こんなバカな……」

二人の力に耐えられずアナザーデイクイドは吹き飛ばされ、地面を勢いよく転がり込む。

「これが王の……力……」

「違う。これが俺とゲイツの……いや……俺達、仲間の力だ！」

ジオウが仲間の力と主張すると、アナザーデイクイドは腹部を抑え起き上がった。

「時見ソウゴ。やはりお前は生まれながらの王。お前には王となり、世界を破滅から救う使命がある」

「……それって……」

——お前は生まれながらの王。お前には王となり、世界を破滅から救う使命がある。

そのセリフを聞いたジオウは、ずっと夢の中でソウゴに言いづけた男と同じ台詞だと気付いた。

「どうして……」

「また会おう。だが、お前の持つライダーの力は、いつか俺が必ず貫う」

そう告げてアナザーデイケイドは去っていった。

それを見て、ゲイツはゲイツマジエスティウオッチを外して変身を解除した。

(白ウオズ……お前の言った可能性の世界。実現出来るかわからないが、やってみる)

ゲイツは「とある決意」を固めながら、ゲイツマジエスティウオッチを強く握り締め
た。

そして翌日。ツインラプラーのコンサートが無事に開かれた。

ライブ会場はえみるとルूलールのファンで一杯だった。客席からだが、ソウゴとは
な、はぐたんが必死に応援していた。

そしてミハルも帰る前に、えみるとルूलールのライブを見ていた。

「ごめんね。君の事悪く言って」

「いや、お前は間違っていない」

ミハルはゲイツに言い過ぎたと謝罪するが、ゲイツは何も間違っていないと言って気
にするなど話す。

「君を見て、今の時見ソウゴを見て思ったよ。今の彼があるのは、君達がいるからだつ
ね」

ミハルは自分の知るソウゴが違うのは、ゲイツ達のおかげなのかと話す。

「…決めたよ。ゲイツ、君達を帰らせるのは辞めたよ」
「えっ？」

「オーマジオウの歴史から来た君達なら、時見ソウゴがオーマジオウとなるのも回避出来るかもしれない」

ミハルは昨日のゲイツマジエステイへととなったゲイツなら大丈夫と思ったのか、彼らを直ぐにでも帰らせるのはやめたと話す。

「わかった。だが、俺達はいずれ帰る。それだけは信じてくれ」
「わかったよ」

ミハルはゲイツ達がいずれは未来へ帰るといふゲイツの言葉を信じることにすると、彼はソウゴ達の顔を見つめながら口を開く。

「ソウゴ。みんな」

『?』

「君達なら運命を変えられる。先の未来からだけど信じてる」

「うん。必ず救って見せる。未来を」

「うん」

そのままミハルはライブ会場を後へとし、自身はタイムマジーンの置かれた場所へと向かい、自分の時代へと戻った。

その頃、愛崎コンツェルトのビルの方でも…

「お爺様。えみる、今ライブ中です」

「勝手にしろ」

会長室で正人がスマホに映るツインラブの動画を猿奔に見せるが、彼は少し不機嫌そうなる顔で目を逸らした。

（ゆっくりでいい。いつかお爺様も……）

正人はかつて自分がそうであった様に、いつかはえみるの気持ちが変わってくれと信じる事にした。

ライブが終わり、控え室にいるえみるとルーラーの所へ向かう時、ソウゴにゲイツは話しかけた。

「ソウゴ」

「ん？なに？」

「俺は……俺達はいずれ未来へ帰ることに決めた」

「そうか……」

やはり、未来へ帰るのか。ソウゴはそれが頭ではわかっているけど、やはりゲイツ達

と別れるのは辛かった。

「それと、俺は夢を見つけた」

「夢？」

「俺は……救世主になる」

「救世主……」

ゲイツの言葉から救世主と言われ、少し驚いた。

「お前のように誰かの心を知り尊重し、誰かの助けになる。そんな救世主になりたいんだ」

「なれるよ。ゲイツは優しいから」

ソウゴも、ゲイツなら未来の救世主になれると称賛した。

「お前の王様とどっちが先に叶えるか競争だ！」

「負けないよ！ゲイツ！」

二人はお互いの夢を叶えるために握手を交わした。

ソウゴとゲイツが外で話している中、控室の方では既にはな達がいた。

「良いライブだったね」

「二人共中々カッコ良かったよ」

「はい!ツインラブとして、私達は全力で愛を届けます!」

「はい。ずっと……ずっと」

「ルールー?よちよち」

ルールーがはぐたんを見つめ、はぐたんが微笑んでそう告げる。すると、ルールーの目に涙が溜まり、そのまま泣き出した。

「ルールー?」

そんなルールーを見たはなも、目に涙を溜める。

「あれ……?おかしいな……?何で……」

「かなちいの……?」

「はぐたん……!」

目に涙を溜めたさあやが、はなとルールーを横から抱き締める。

「もう……皆さんまで……」

「まだ……お別れする訳じゃないのに……」

目に涙を溜めたほまれと同じく、目に涙を溜めたえみるの頭を撫でた直後、えみるが声を上げて泣き出し、ことりとツクヨミも泣き出す。

「みんなが未来に帰る時は、笑顔でお別れするから……!だから今は……!」

未来に帰る時は、笑顔でお別れする。はな達はそう誓ってから、はぐたんを除いた一

同が、声を上げて泣き続けたのだった。

その様子を部屋の外から見ていたソウゴとゲイツも、同じように少し涙を流した。

その日の夜、何時もえみるとルルールが練習している木の場所に、ソウゴが一人で来た。

「ソウゴ……」

そこにはルルールが一人立っていて、連絡を受けたソウゴは彼女の下へやってきた。

「話って何？」

「未来へ帰る前に、あなたには伝えたい事があったのです」

ルルールが胸に手を当てて、ソウゴに話す。

「あなたには、色々と助けて貰いました。

私がクライアス社に利用され、アナザーライダーとされても、私を必死になって助けてくれました」

「そんなの、友達なら当たり前だよ」

「いえ、私はその後のあなたを見て、あなたはえみるとは違う、何か違う心が芽生えたよ
うな……」

そして、その心が今わかりました」

ルルーはソウゴに向けて、大切な一言を伝えた。

「ソウゴ。私は、私は……あなたが好きです」

「えっ……」

ルルーから出た言葉に、ソウゴは驚きのあまり、直ぐには答えが出なかった。

次回! Re. HUGつとジオウ!

第57話 2018： 響け、エールの応援! 奇跡の誕生!

第57話 2018：響け、エールの応援！奇跡の誕生

！

ドイツとえみるをアナザーワールドから連れ戻したソウゴ達。

えみるとルルーは再びミライクリスタルを取り戻し、白ウオズのミライノートの力によりドイツはドイツマジエステイの力を手に入れたのだった。

その日、ソウゴがクジゴジ堂から出ていってからしばらくして帰って来ると、ウオズが出迎える。

「ただいま」

「こんな時間までどこに行っていたんだ。我が魔王」

「えっ？うん……ちよつとね」

「？」

どこかソウゴの様子が変ではないかとウオズは気にするが、本人はそれとなく誤魔化す。

「あ〜……俺、部屋いくね。課題まだ終わってなかったから……」

そう言うソウゴは一人、階段を登って自分の部屋へ向かう。

そこへゲイツとツクヨミが現れ、ツクヨミはソウゴから感じた違和感についてウオズから聞き出そうとする。

「どうしたの、ソウゴ。帰ってきたんじや…?」

「何やら、考えておられるかもしれない?」

「考えて?」

「今後のことではないかな? クライアス社とか…」

ウオズとツクヨミがソウゴが何やら考え事をしているのかと睨み、何を考えているのかと議論し合う。

「……」

しかしゲイツはソウゴが気になっているのか、階段の方をチラッと見上げる。

部屋に入ったソウゴはベットに転がり、ずっと天井を見続けていた。

「……」

天井をぼうっと見ていると、彼の心からある言葉が聞こえて来た。

『ソウゴ。私は、私は……あなたが好きです』

「ツク!? ……つつつつ!」

ルールーに言われたその言葉が、ソウゴの額の頬を赤くさせる。

その時、部屋のドアから誰かが叩く音が響き渡る。

「は、はい！」

「どうした？」

ソウゴがビックリしながら返事をする、ゲイツはいつになく挙動不審なソウゴの様子を疑問に思いながらドアから顔を出す。

「えっ？い、いや。別に……」

「そうか。ほら」

「おっと。ありがとう」

ゲイツが部屋に入ってくると、そのままゲイツは持っていた缶ジュースを一つ、ソウゴへと投げ渡した。

「お前、どうした。帰ってきてから変だぞ」

「あーいや、そんな……」

「聞いてやるよ。俺とお前は友達なんだろう」

「ゲイツ……その……」

ゲイツならいいと思い、ソウゴは先のことをゲイツに打ち明けた。

ルールーの告白の事を細かく説明すると、それを聞いたゲイツは口を大きく開けて唾

然とした。

「つと、そんな感じで……」

「なにいいいいー……」

「どうしたのゲイツ!!?」

「敵かい?」

いきなり大声でびつくりしたツクヨミとウオズが駆け足で現れた。

「…あ、いや、すまん。こいつがまた試験を落とらしくてな」

「はあ……そんな事で大きな声出さないでよ。迷惑だしビツクリするから」

「ゲイツ君も我が魔王と仲良くするのは構わないが、声くらい落ち着きたまえ」

「貴様に言われなくてもわかってる!」

「我が魔王。そろそろ夕食だそうだ」

「わかった。ゲイツと後で行くよ」

「そうかい。じゃあ」

そう言うと、ウオズとツクヨミはソウゴの部屋を後にした。

二人が部屋からいなくなったところを見て、ソウゴとゲイツは近づき小声で話し始める。

「本当か、ルールーがお前に異性として好きと言ったのか?」

「うん。告白されました」

「ついで？」

まさか、いつもいつも王様と言っており、計画性があまりないソウゴが告白されたこと知り、ゲイツは驚いた。しかも、あのアンドロイドのルールーに。

「お前、それで答えは？ルールーに返事はしたのか……」

「その……何と言いますか……」

いつにもなく言いづらそうな雰囲気を出し、ルールーへの返事はどうしたのかと聞いたゲイツは小首を傾げながら耳を傾ける。

「待ってと……言いました」

「……待って？」

「はい……」

ソウゴは、その時の事を一時間前に遡って状況を語り出す

その時、木の下でルールーから告白を受けたソウゴは、直ぐに返事が出せなかった。

『それって……ルールーは俺の事が……』

『はい。私は、あなたに好意を抱いたのです。ダメでしょか……』

『いや、ダメというか……その、今はその……ルールーが俺のことが好きなの嬉しいよ』

……

ただ、その……待つてくれないかな……』

ソウゴは返事を出すのは待つてくれないかなと頼む。

『待つ?』

『今は、まだ答えが出せないんだ。それに……』

言葉に詰まるとソウゴはふと、幼い時に見かけた女の子が頭をよぎらせた。

『…わかりました』

ルールーはソウゴの要望を受け入れてくれると、ルールーはソウゴに抱きつく。

『えっ?』

『それに私は、あなたに思いを伝えられただけで十分です』

『ルールー……』

ルールーはソウゴに自分の想いを伝えられただけで十分だったと語る。

『ソウゴ。私は未来に帰ります。そこで、ドクター・トラウムと……』

『お父さんでしょ?』

『はい。一緒に暮らし、そこで私が未来の人達に音楽を伝えていきたいです』

未来に帰った後にやりたい事を話して貰い、それを聞いていたソウゴは、ルールーはトラウムの事を家族と思っている事が分かり、嬉しかった。

『そうか、応援するよ。それにルールーならいける気がする!』
ソウゴは抱きしめながらルールーにエールを送ったその後、彼女を野乃家まで送ってあげた。

——そして、今の状況に至る訳だが。

「…で、どうするんだ」

取り敢えず一通り聞いたゲイツは、結局ルールーの返事はどうするのだとソウゴに尋ねる。

「……………今はまだ……………でも、答えは出すよ」

「だが、何故待つ? お前、まだあのアナザーキバだったユウコという女の事をまだ気にしているのか……………」

「……………」

ユウコさん——彼女はソウゴの初恋の人で、心の傘になってあげられなかった人物。ソウゴ的には、別にいつまでもというわけでもない。

……………ただ、忘れられないというのは事実だった。

「……………とりあえずは、お前が思っている事をルールーに伝える。いつものようにな」
ゲイツはそれだけ言うと、ソウゴの部屋の扉を開き出て行く。

「俺の思っている……」

思いを伝えろと言われたソウゴの心は、大きく揺れ動いていた。

幼い日の頃に見た女の子、初めて告白を受けたルーラー。

この二人に浮かべたあの特別な感情は、あの時のユウコさん以上だった。

野乃家のはなの部屋。 はながミライクリスタル・ローズをミライパッドの上部にセットする。

「ミライパッド、オープン!」

画面から光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン!」

画家の姿になったはなが自分の部屋でスケッチブックを開くと、今度の大会でのアンのステージ衣装を描く。

部屋にははぐたんが応援用の団扇を持って応援の練習をし、ベッドの上にはハリーが立ってた。

「次の大会は、アンリ君とほまれにとって大事な試合だから」

「二人共、優勝間違い無しって言われとるもんな」

実は数日後に『ワールドジュニアカップ』というスケートの大会が行われ、ほまれと

突如アンリが笑い、詰め寄って来たはなに額に人差し指を当てる。

「君も僕に詳しくなってきたね。これが若宮アンリなんだ。よろしく。」

僕の事考えてくれたのは嬉しいよ。ワールドジュニアカップ、頑張らないとね

「うん! 私、応援する!」

はながそう言った直後、女子達がアンリに駆け寄って花を差し出す。

「待つて待つて! 押さないで!」

そこへ正人が割って入る。

「愛崎君、何でもいつも邪魔するの?」

「アンリは今、試合前の大切な時期で——」

「良いよ。みんないつもありがとう」

アンリは正人の肩に手を当てるから前に出て、花を受け取る。

「大会、頑張るよ」

彼は微笑んでそう告げると、女子達からの黄色い声援が湧いた。

「全く、アンリは優しいんだから」

「何か、暖かいな」

はなはアンリの姿を観て、何か暖かいに気持ちを感じた。

その頃。ゲイツ、ツクヨミ、ルールー、ウオズが屋上におり、この間の事件について話していた。

「どうしたのゲイツ？話って？」

「ああ……これは、未来から来た俺達ならわかるかもしれない事なんだ」

「私達ですが？」

「ああ。白ウオズが言おうとしたスウォルツの狙い」

ゲイツは自身がゲイツマジエステイの力を受け取る前に言った白ウオズのスウォルツの狙いが気になっていた。

「確かに不可解よね。私の力なんかいつでも奪えたのに……」

「それでしたら、私もリストルとスウォルツに不可解を感じました」

「それは？」

ツクヨミが何故だと疑問に思っていると、ウオズがルールーにどう不可解に思ったのかと聞く。

「ジオウのソウゴを倒すのが緩いように思えたのです」

「緩い？」

「はい。クライアス社がソウゴをオーマジオウにさせず、新たな王を擁立させるのなら、ソウゴがジオウになる前にゲイツの様に行動すべきだと……」

それを聞いた一同は、ルーラーの言う事は最もな意見であると思つた。

確かに本気でジオウを排除するならもつと早く……いや、ジオウの力を得る前に、ソウゴを消すべきのはずだった。

「…もしかしたら、クライアス社は最初から我が魔王を倒す気などなかった」

「「えっ?」」

ウオズの口から最初からジオウを倒す気などなかったと言う。

「そういえば、ソウゴがグランドジオウになってから、クライアス社はソウゴに積極的に攻めてきた」

ツクヨミの言う通り、ソウゴがグランドジオウの力を得てからクライアス社は、アナザージオウIIによる改変、仮面ライダークライの接触、アナザーディケイド、仲間のタイムジャッカーを襲わせ、更に未来のはくぐみ市を見せた。

「そして、俺とえみるをアナザーワールドに捕縛」

これらのことからバラバラではあるが、そこには共通点となる人物がいる。

そうなれば、クライアス社の狙いははぐたんだけではなく、もう一つある様に思えた。

「まさか、クライアス社はソウゴがグランドジオウとなるのを待っていた……」

「全ての力が集まるのを待っていたってこと……」

「となると、クライアス社は……ソウゴも狙っていた」

そうなれば、クライアス社はソウゴがここまで来るのを見越し、計画していたことになる。

だが、彼らにはそれが本当なのかはまだわからない。

その肝心なソウゴはと言うと：彼は中庭のベンチで座りながら、この間未来へ戻る際にキュアトウモローから託されたウオッチを見ていた。

(……どうして、まだブランクなんだろう?)

だが肝心のウオッチは、受け取ってからというものの何も反応を見せず、一向にブランクのままだった。

(はぐたん……)

「ソウゴ君?」

そこへ一人でいるソウゴが気になって、さあやが彼のもとへ駆け寄った。

「さあや。何?」

「その、ウオッチをずっと見ていたから、何かなって……?」

「うん。ちよつとね……」

ソウゴはウオッチを見つめる。

「このウオッチ。トウモロー……ううん、はぐたんから貰ったんだ」

「はぐたんから!?」

「うん。このウオッチを渡す時に俺に言ったんだ、『お願い。未来をみんなを助けて』って」

ソウゴはその時の事を語り、ウオッチを見ながら思った。

このウオッチには、未来を救える力があると。それを信じている。

「けど、俺がもし間違えたら……」

しかし同時に、不安もあつた。

もしもこの力を間違えて使ったらどうなるのかと、一度オーマジオウの力を見て、その不安で少し手が震える。

「ソウゴ君……んー!」

そんな彼の不安そうな顔を見たさあやは、ウオッチを持って震えているソウゴの手を掴む。

「大丈夫。ソウゴ君は間違えない」

「さあや……」

「ソウゴ君は、みんなの為に守る為に戦う、最高最善の魔王になるんですよ。それに間違えたら、私達がソウゴ君を正しい道に戻す」

彼女にそう言われると、ソウゴから震えが無くなった。

「うん。ありがとう」

笑顔でお礼を言われたさあやは顔を赤くして手を離れた。

「さあ、教室に戻ろう」

「あの子……」

「？」

するとソウゴが、教室に戻ろうとするさあやを呼び止めた。

「さあや……その……ごめん、やっぱりいいや！」

だか彼は言うのをやめて教室へと走って行く。さあやはどうしたのかと思いつつも、ソウゴの後を追う。

そのまま学校は放課後へとなり、ほまれとアンリがスケート場で練習を始めていた。

「……」

スケート場で滑るほまれが、ハリーの事を思い浮かべる。

「やっぱり、心ここに在らずって感じ？」

「アンリ……」

アンリが滑りながらほまれにそう尋ねる。

「いつものほまれと違うスケートだけれど、悪いとは言い切れない。不思議だね」

彼はそう言うってからスピンをを行い、リンクの上に着地する。

「アンリ……」

「ん？」

「スケート変わったの、アンリの方だよ」

ほまれはアンリの滑りを見て、何か違いがあるのを気づいた事を話す。

「ねえ、どこか痛めてるの？」

「大丈夫だよ」

「駄目!もし故障してるなら、大会に出るのは——!」

「止めないでくれ!僕には時間が無い……」

「アンリ……」

ほまれはいつもの自信と笑顔に満ちた姿で無く、顔を歪ませて何処か陰のある様子を見せるアンリに唾然としてしまう。

するとアンリは何を思ったのか、ほまれに向かってぽつぽつと口を開き始める。

「これが、僕の最後の大会になると思う」

「えっ……?」

「…何度か手術もしてる。けど、選手としてスケートを続ける事は難しいと言われてる」
実はアンリは左足を何度も手術を受け、選手としてスケートを続ける事は難しいと医

者に言われていたのだ。

「この大会だけは出たいんだ」

アンリはほまれを振り向き、彼女の肩を掴む。

「頼むよほまれ。僕を最後まで、若宮アンリでいさせてくれ……！」

そして強い眼差しをほまれに向け、叫んだ。次の大会を、最後までやりたいと。

クライアス社の中にあるカプセルが開き、そこで眠ってたリストルが身体を起こす。

「おはよう、リストル」

クライが現れると、リストルにジクウドライバーと彼の使うライドウォッチを渡す。

「世界には絶望しか無い。君は知っているハズだ」

「はい。プレジデント・クライ」

傍に居たクライが挨拶し、持っていた本のページを見せる。

「この苦しみから我々が救われるには、未来を消すしか無い」

「運命からは……逃れられない」

リストルはそう呟くが、そこに居る彼の様子には、何処か違いがあった。

だがそれを指摘する者は、どこにも居なかった。

その頃、埠頭付近のベンチにはなが座る。

「フレ、フレ、アンリ君。私は、どんな応援が出来るのかな?」

自身の描いたアンリにエールを送り、そう尋ねる。

「あれ? チャンはなじやん!」

「チャンはな?!?」

「イケてる呼び方っしょ? んでどしたの? 何かお悩み?」

偶々彼女の近くを通り掛かったチャラリートが声を掛け、悩みでもあるのか尋ねる。

「いや、もうすっごく頑張ってる人、その人にどんな応援が出来るのかなって……」

「何でもいいんじゃない?」

「……えっ?」

はなはアンリにどうやって応援すればいいのかと思いついて、悩んでいることを告白すると、チャラリートはなんでも良いと言い、それを聞いた彼女は思わず目を丸くする。

「ファンレターも嬉しいし、プレゼントもそりゃ嬉しいし!」

けど、小っちゃいコメントでも頑張れって言われると、俺ちゃんは嬉しいの!」

「本当?!?」

「どんなに頑張ってる人も、頑張れない時はあるからさー。そんな時に、今まで貰った頑張りが効くのよ!」

チャラリートが空を指差してそう言い、はなにに向けて口元に笑みを浮かべた表情を見せる。

「チャンはなに貰った頑張れも、俺ちゃんのハートに残ってっから」

「えっ?」

今度ははなの胸元を親指で指差して、笑顔で言う。

「その節は、センキューです! あ、ジオウにもセンキューかな!」

それは、自身がオシマイダーへと変貌した時、エールとジオウの言葉がチャラリートの心に触れて、彼の本当の心呼び覚ました時のお礼だった。

「あの時は、私もソウゴも無我夢中で……」

「チャンはなイケてる応援出来んだから、自信持てっつて! なっ?」

「うん!」

「あ、魔王——いや……ソウゴツちに会ったら、あん時はサンキューと言つといてく

!」

「わかった。伝えとくよ!」

チャラリートに励まされはなは、明日のアンリの応援に向けて自信を取り戻した。

ジュニアアワードカップ当日を迎え、会場のHUGMANアリーナに人々が集まる。
(やっぱ……放つとけない……)

外ではアンリの事が気になったほまれが彼に向けて電話を掛けるが、どういうわけか本人は一向に出なかった。

そして車に乗ったアンリは、ほまれからの連絡に出ようとしなかった。

「ごめん、ほまれ。でも、僕はもう決めたんだ」

彼はここに居ない彼女に向かってそう呟き、着信を切る。

「最後までもう一度だけ、氷上の王子、若宮アンリとして勝つー」

最期まで全力で滑り、若宮アンリとして優勝する。そう誓ったその時、反対側からトラックがアンリの乗る車に向かって来た。

「!?!」

トラックがぶつかろうとしたその直前、アンリ以外の時が止まった。

「……………? これは、一体……………!」

「こんにちは。若宮アンリ」

驚愕するアンリの隣の席に、この間ワールから力を奪って去っていったオーラが突然

現れ、座ったまま挨拶する。

「誰だ……!?」

「私はタイムジャッカーチームのオーラよ」

「まさか君も……クライアス社の……!?」

「ええ」

オーラが肯定すると、彼女は席に座るアンリに詰め寄る。

「まさかこれも、君が……?」

「そう、私の力。若宮アンリ、あなたには悪い知らせと、とてもいい知らせがあるわ……」

「えっ?」

「悪い方は、あなたはこのまま事故に遭って大会で滑れなくなるわ。そして、選手生命も終わる」

「っ!?」

選手生命が終わると知られたアンリは深く動揺した。

それは、自分の大事なスケートが二度と出来なくなると言う宣告でもあった。

「でも、あなたが私と契約を交わせば……あなたは助かる」

「……」

オーラが持ち出した二つの選択肢に、アンリは答えを言わず黙り込む。

「それで、どうするの? 出来る事なら、今すぐ言つて」

「……分かった。大会で滑れるなら……」

「ありがとう。でもそれが出来るのは、まずはジオウ達が倒してスウォルトツに仕返しをしてからよ」

「……!」

「明日への希望なんて消えなさい! ネガティブウエーブ!」

なんとオーラは、アンリに向けてネガティブウエーブを放出させる。

「発注! 猛オシマイダー!」

放出したトゲパワワで、百合の花を纏つて両手に棒を持った猛オシマイダーを生み出した。

一方でジュニアワールドカップは進み、後はアンリを残すのみだったが、当の本人が来てなかった。

「そろそろラスト……アンリ君の出番のハズなのに……」

「まだ会場入りして無いつて……」

「おかしいのです」

「何か……あつたのでは」

「あの人、遅刻するような人じゃないし……」

会場に入ってたはな達も不思議がる。

「渋滞か……事故に遭ったとか？」

「でも、そう言う記事は見当たらないです」

ゲイツが事故に遭ったのではないかと口にするが、ミライパッドを操作するさあやがそう伝える。

「俺がタイムマジーンで迎えに行くよ」

ソウゴがタイムマジーンを呼び出し迎えに行くと言うと、彼は会場の外へ出向く。

だがその前に、『ドカアアアア!!』と言う轟音が、辺り一面に響き渡り、猛オシマイダーが会場へと現れた。

「オシマイダー!!」

「こんな所に……」

「みんな!」

オシマイダーが現れた事を察知したほまれが合流すると、ソウゴ達はジクウドライブを装着してウオッチを取り出し、はな達はプリハートとミライクリスタルを取り出した。

『ジオウ!Ⅱ!』

『ゲイツリバイブ!疾風!』

『ギンガ!』

『ギアジェット!』

「「変身!!?」」

「「「ミライクリスタル!ハートキラツと!はぎゅ〜!」」」

ソウゴ達はドライバーを操作して仮面ライダーへと変身。

はな達はプリハートにミライクリスタルをセットし、揃っていつもの手順を取り姿を
変える。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ!II!』

『ライダータイム!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイ!リバイブ疾風

!疾風!』

『投影!ファイナリータイム! ギンギンギラギラギャラクシー!宇宙の彼方のファン
タジー! ウオズギンガファイナリー!ファイナリー!』

『ライダータイム!仮面ライダーハ・リー!ジェットタイム!導け!切り開く世界!ハ
リー!ギア!ジェット〜!』

「輝く未来をく抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアラー！」

「[[[[HUGつと！プリキュア！]]]]」

全員が変身完了し、猛オシマイダーに構える。

「来たわね。やりなさい猛オシマイダー！」

オーラの指示により猛オシマイダーはジオウ達に攻撃を繰り返す、ジオウ達はすぐさま飛んで躲した。

「この大事な時に、なんで！」

「早くアンリ君を探しに行かないと！」

ジオウとエールは早く猛オシマイダーを倒して、アンリを探しに行こうとした。

すると、オーラが不適に笑い出した。

「あんた達にすごく悪い知らせがあるわ」

彼女はそう言うと、隣に氷のような結晶に捕らえられたアンリの姿があった事に気付いたジオウ達が驚愕する。

「アンリ……」

「もしかして、この猛オシマイダーは……」

「アンリ君……」

このユリの姿をした猛オシマイダーは、アンリから生まれたものだどエール達を知ると、ジオウはオーラを睨みつけながら叫ぶ。

「どうして……今日はアンリにとって大事な日なのに!」

「大事な日……そうね。でも、私がいなかったから彼は大怪我をしていたのよ?」

「大怪我?」

「本来なら、彼はここに来る途中で交通事故に遭い、大会に出れなかった。そしてそのまま、滑れずに終わった」

「そんな……」

アンリはこの大会に全力で臨んでいた。

だがそれが、交通事故によって阻まれたと知った時のアンリの心情は、一緒にスケートをやって来たエトワールにとってはわからなくもない気がした。

「これはこれは、オーラ君にしては珍しいですね」

そこへリストル、ビシン、スウォルツの三人が現れた。

「リストル!」

「ビシン」

現れたリストル達を見て、ゲイツ達はより一層警戒する。

すると、オーラが冷たい眼差しをスウォルツに向けて見ると、スウォルツもオーラを見る。

「オーラ。どうやら、ウールの力を奪ったようだな」

彼は今のオーラの力を見て、ウールから力を取り戻したとすぐに推測した。

「スウォルツ……ねえ、私をクライアス社に戻してくれない？」

オーラはスウォルツへの憎悪を心の奥へ押し込むと、クライアス社に戻してくれないと頼む。

それを聞いたスウォルツがリストルの方を向くと、それにリストルが頷きスウォルツは了承した。

「いいだろう。お前が戻るのを受け入れよう」

「ふん。猛オシマイダー！」

オーラはクライアス社に戻る契約を交わし、猛オシマイダーによる攻撃を再開させる。

すると、リストルとビシンはジクウドライバーを装着し、スウォルツがアナザーデイクライド ウオッチを起動させる。

『リストル! クラレット!』

『ビシン! ギアファング!』

「変身!」

ジクウドライバーを回転させ、スウォルツはアナザーデイケイドウオツチを体内へ埋め込む。

『クラレットタイム! 唯我独尊! 絶対の力を! リストル! クラレット!』

『ファングタイム! 導け! 完全なる力を我が手に! ビシン! ギアファング!』

『デイケイド!』

「さて、今日はこいつらだ」

アナザーデイケイドは灰色のカーテンを出現させると、そこから三人の影が見えた。

一人は、白い仮面ライダーに後ろの背中にはバックパック『フライングアタッカー』を備えた仮面ライダーサイガ。

金のリングをモチーフとした姿で、その手に剣『ソードブリンガー』と盾『アップルリフレクター』の2つのウエポンを装備している仮面ライダーマルス。

カブトと同じ形状だが、その姿は胸部装甲に金色っぽい基盤の紋様が刻まれた黒いカブト…仮面ライダーダークカブトが現れた。

「行け」

アナザーデイケイドに呼ばれたダークライダー達が、ジオウ達に向かってきた。

「エール達でオシマイダーを、アンリお願い！」

「うん！」

エール達は猛オシマイダーからダークライダーを離すために応戦する。

しかしダークライダー達の猛攻に、ジオウ達仮面ライダー達はクライアス社のライダー達に足止めされ、エール達の援護も出来ない。

ジオウはアナザーデイケイドとアナザーデイケイドが呼んだ仮面ライダーマルスとの戦闘を繰り広げていた。

「はぁぁ！」

ジオウのサイキョーギレードとマルスのソードプリンガーがぶつかり、火花を散らす。

「ふうん！」

「うわぁぁ！」

背後からアナザーデイケイドが光弾のようなものを放ち、ジオウが態勢を崩した。

「はぁ！」

その隙にマルスのソードプリンガーに攻撃し、ジオウを吹き飛ばした。

「ううう……」

アナザーディケイドとマルスにジオウはかなりのダメージを受け、不利な状況であると感じ始めた。

「だったら、これで!」

『グランドジオウ!』

グランドジオウウオツチを起動すると、ジオウウオツチIIを外し、ジオウウオツチとグランドジオウウオツチを装填した。

『へポオオン! パアアア!』アドベント! COMPLETE! ターンアップ……グラ
ンドタイム! 祝え! 仮面ライダー!!? グ・ラ・ン・ド! ジオウ!』

ジオウはドライバーを回し、グランドジオウへ変身を完了した。

『鎧武!』

鎧武のレリーフを触り、そこから仮面ライダー鎧武・カチドキフォームを召喚。ジオウはアナザーディケイドへ、鎧武はマルスへと走って行く。

対するゲイツは、ビシンとダークカブトに苦戦していた。

疾風のスピードでビシンに決めにかかるも、ダークカブトがクロックアップにて対応されるのだ。

「アッハッハ……」

「ハッ……」

疾風のスピードの攻撃は防がれ、止められるとビシンから攻撃を受ける。ゲイツの攻撃はダークカブトによって防がれていた。

「おらおら！負け犬！」

「チツ！」

ゲイツはビシン、さらにアナザーデイケイドによって召喚されたダークカブトに翻弄されていた。

「ならば！」

『ゲイツマジエステイ！』

これ以上は不利と察したゲイツはゲイツマジエステイを起動させ、ドライバーに装填してドライバーを回す。

『マジエステイタイム！仮面ライダー！Ah〜！ゲイツ！マジエースー
ティー！』

『カイザ！ガタック！』

ゲイツマジエステイへと変身し、カイザとガタックのウオツチに触り、カイザの武器・カイザブレイガンと仮面ライダーガタックを召喚した。

一方のウオズとハリーはリストル、サイガに手を焼いていた。

ハリーとサイガは空中でお互いに一歩も譲らない戦いを繰り広げ、地上にいるウオズ

がリストルのジカンロットを攻撃を避け続け、その隙にカウンターで攻撃を繰り出した。

「どうしたのかな? この間みたいにな、気持ち全開ではないね? リストル」

「なんのことだ? そもそも貴様と話すのは初めのはずだ」

「……何?」

『フィニッシュタイム! ジェットタイムフィニッシュ!』

ウオズがリストルの言語に違和感を抱いていると、ハリーがライダーパンチを繰り出し、サイガを地面へと叩きつけた。サイガがそのまま消滅すると、ハリーはリストルの元へ向かう。

「リストル!」

「貴様も何者だ」

「っ!? お前、まさか記憶が……」

「記憶を消されたのか……」

リストルの言動から見て、ハリーは彼がクライアス社から今までのソウゴ達との記憶を消されたのだと感じた。

そしてアンリは、氷の中で悲しい表情を浮かべていた。

(僕にはもう……未来なんて必要無い……!)

僕は……僕自身の未来を壊す……！」

そんなアンリの想いを察したジオウがアナザーデイケイドと応戦しながら、彼に向かつて語りかける。

「アンリ……確かに未来は何かがあるかわからないし、不安だね。

でも、そこから受け入れて進まないといけないんだ」

アンリの気持ちは、ジオウにもわかる気がする。

彼が自身の生き甲斐とも言えるスケートを出来なくなつた様に、ジオウ——いや、ソウゴは自身の成長を見届けてくれる両親を事故で亡くしている。

そして今のアンリのようになつた時期が、未来に不安を抱いた時期が、ソウゴにもあつた。しかし——

「でも、アンリの未来もこれからだよ。

もし、この先滑れなくてもアンリには、えみるお兄さんや俺達が、アンリといえる！」
「っ……っ！」

その時、アンリの心に届いたのかオシマイダーの動きが鈍り出した。

「アンリ君は最初、否定から入るよね……！」

でも私、知ってるよ！きちんと向き合えば、アンリ君は色んな思いを抱き締めてくれる！」

ジオウとの対話を聞いていたエールも、必死にアンリに語りかける。

「ちよつと、何やってんのよ! 猛オシマイダー!」

離れた猛オシマイダーがオーラの指示でエールに向けて棒を振り下ろし、エールとアナザーディケイドと応戦しているジオウに攻撃するが、二人はバックステップして避ける。

「あなたを愛し!」

「私を愛する!」

次にマシエリとアムールがプリキュアミライブレスを呼び出し、猛オシマイダーにダブルパンチを繰り出す。

「凄く今、辛いと思う! けど……! けど!」

プリキュアミライブレスを呼び出したエトワールが連続パンチを繰り出し、猛オシマイダーが棒で防ぐも体勢を崩し、リンクの上に倒れる。

「自分の未来を壊したいなんて、言わないで!」

「未来は、一つじゃ無いんです!」

プリキュアミライブレスを呼び出したアンジュとアラが、急降下しながらダブルパンチを叩き込む。

「うっうっ……」

するとその時、猛オシマイダーが苦しみ始める。

それを見た彼女達はプリキュアミライブレスを召喚し、腕につける。

「プリキュアの絆！」

「「ミライブレス！私達に、力を！」」

四人はプリキュアミライブレスからエネルギーを飛ばす。

「はあああつ！」

エトワールもエネルギーを飛ばす。

「やああああああつ！」

エールのプリキュアミライブレスに五つのエネルギーが集まり、自身のも含んだエネルギーを飛ばす。

「エール……頼む……！僕に、応援を！」

アンリは結晶の中から右手を伸ばし、エールに応援を頼む。

「フレ！フレ！アンリ君！」

「「フレ！フレ！アンリ（君）（さん）！」」

エールが手を掴んで応援し、アンジュ達も応援する。

「目を覚ませアンリ！」

「頑張りたまえアンリ君！」

「気張れや!」

「アンリ!」

そしてゲイツも、ウオズも、ハリーも、ジオウも、続けて彼の応援を行う。

そして――

「うおおああああああっ!」

彼は遂に、自身を閉じ込めていた氷の監獄を突き破り、エールの手を力強く掴んだ。

「うおおっ!」

すると彼らの周囲から光の衝撃波の様なものが放たれ、アナザーデイケイドとビシンが吹き飛び、リンクの上に倒れる。

更に、アンリの全身が光に包まれ出した。

「なんなの……!」

離れたところでオーラがそれを見ていたが、その光がなんなのかわからなかった。

「何でも出来る!」

「何でもなれる!」

「悲しい時も……迷う時も……みんなを励まし、未来へ輝く!」

そっ……それが……プリキュアだッ!

そしてアンリから放たれた輝きが収まり始めると、アンリの姿がはなの描いたステー

ジ衣装と同じ姿になった。

「キュアアンファイニ！それが、僕の名前かな」

アンリは自らをキュアアンファイニと名乗り、そう呟いた。

「キュアアンファイニ……！」

そう、まさかのアンリがプリキュアへと変身したのだった。

「嘘でしょ……こんなこと……」

オーラはオシマイダーの呪縛から打ち払い、アンリがプリキュアとなったことに足を折って驚いた。

「バカな……」

「これが本当のアンリだよ」

アナザーディケイドが驚いている姿を見ながらジオウが呟くと、その後ろでジオウが召喚した鎧武が仮面ライダーマルスを倒していた。それを見て、ジオウはドライバーを回す。

『ファイニッシュタイム！』

ジオウが飛び上がると、ジオウの背後から次々と仮面ライダーが召喚されていき、ライダーキックの態勢に入る。

『オールトウエンティタイムブ레이크！』

「はあくだあああああああ!」

「ツ!ぐううく……」

ライダーキックを放ち、アナザーデイクライドが腕を構えて防ぐ。

そのままジオウの攻撃を受け流し、直撃は躲された。

「くう……」

だがアナザーデイクライドは、ジオウのライダーキックを耐えて受けた腕を抑える。

そして、ビシンもキュアアアンフィニに気を取られていた。

「どうして……」

「はあ!」

キュアアアンフィニに気を取られていると、ゲイツがガタツクと共にダークカブトを既に倒しており、ガタツクは役目は終わったかのようにその場から消えた。

「ビシン。お前の相手は俺のはずだ」

『フィニッシュタイム!』

ドライバーを回すと、ゲイツが右腕に力を溜める。

『エル・サルバトーレタイムバースト!』

「はあああああ!」

ゲイツのライダーパンチを繰り出し、ビシンを吹き飛ばした。

「うわああああ！」

ゲイツのライダーパンチを受けたビシンは腹部を抑え、変身解除となった。

「くう……くそ」

「ここまでですね。退きましよう」

リストルとビシン、アナザーデイケイドはそのまま瞬間移動で撤退して行く。

一方のアンフィニは、自分の負の気持ちから生まれた猛オシマイダーを止めようと戦っていた。

「奇跡……そんなもの、凄く……ありえない！」

「まあ、僕も奇跡とか信じるのは柄じゃ無いけど……！」

狼狽えるオーラに向かってそう言うと、アンフィニはリンクの上を滑り始め、スピンをを行う。

「この夢を、みんなで楽しもう！」

「止めなさい！猛オシマイダー！」

猛オシマイダーがアンフィニに襲い掛かるが、アンフィニは猛オシマイダーを翻弄して転倒させる。

「そんな簡単に止められないよ！」

そう告げてから投げキッスを送り、これを受けた猛オシマイダーが頬を赤らめる。

「だって僕は、若宮アンリだから!」

滑り続けるアンフィニに観客達からアスパワワが沸き上がり、応援を始める。

『フレ!フレ!アンリ君!』

「ありがとう!これは僕からの、エールのお返し!」

「はあっ!」

アンフィニは羽を広げて飛び、会場に無数のユリの花びらを舞い散らせた。

「さあ!みんなで未来へ!」

「みんな!」

「!!!メモリアルクロック!マザーハート!」!!!

メモリアルキュアクロックに変化させ、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「!!!ミライパッド!オーブン!」!!!

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかぎすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「「「 HUGつとプリキュア！今ここに！」「」」」

「ワン・フォー・オール！」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」

「プリー、キュアー！」

「明日に！」

「エールを！」

マザーを召喚してメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集める。

「「「ゴー、ファイ！みんなでトウモロ！」」」

腕を掲げた六人がマザーの力を解放して光線を放つ “みんなでトウモロ” が放たれ、命中した猛オシマイダーがハートに包み込まれた。

「モウ々ヤメササテモライマス！」

オシマイダーが浄化され、周囲のアスパワフが消えると同時に、アンフィニの姿がアンリへ元に戻って重力に引っ張られるがままに落下する。

「っ！」

「アンリ！」

アンリが目を閉じた直後、正人が落下地点に駆け寄り、両腕でアンリを抱えた。

「正人……」

「素敵だったよ、アンリ」

それを見てアンジュとエトワールがエールの肩に手を当て、頬をエールの頬に付けた。

それから翌日、アンリは足のことの原因で病院へ入院することが決まり、手術を受けることになった。今日ソウゴ達は、そのお見舞いに来ていた。

「僕の足は、もう限界なんだ。何度か手術もして、医者からも選手としてスケートを続ける事は難しいって言われてる」

アンリは左足に触れながらそう告げると、正人がベッドの手すりに掴んで声を張って怒り出す。

「どうしてそれを黙ってたんだ! 何で……!」

「話したりしたら、正人も止めるでしょ?」

「当たり前だ!」

「ごめん。心配をかけたくなかったんだ」

足のことを黙っていたことを謝罪した。

「……でも、昨日の君は最高だった。若宮アンリの最高の勇姿だったよ」

「ありがとう。有終の美も飾れて、僕は本当に満足だ。」

これで氷上の王子、若宮アンリとはさよならだ」

アンリは名残惜しそうな気持ちを見せるが、満足はしている様子だった。

「そう言えばさ、アンフィンってどう言う意味なの？」

「アンフィンには、フランス語で無限って意味なんだ」

ソウゴの疑問にそう答えると、それを一緒に聞いていたほまれは感心をする。

「さっすが。アンリのお父さんってパリジャンだもんね」

「その名前に負けないように、僕はもう一度、自分のなりたい自分を探すよ。時間は掛かるかもしれないけど……」

例えば、若宮アンリの身体でも、若宮アンリの心を縛る事は出来ないんだ」

「無限の未来……新しい世界でなりたい自分を探す……」

「でもまずは、また歩けるようになる事からかな。」

「……けど面白いね」

「「？」」

アンリははな達プリキュアを見ながらそう言い、はな達はこういう事だと思っただが、次の彼の言葉でそれは解消した。

「君達は、翼のプリキュアなんだね。」

空を舞うキュアエトワール。天使のキュアアンジュ。翼を持つキュアアール」

「いやー……私だけは違うって言うか……」

はなが自身だけ違うと、自分を指差して苦笑する。

「何言ってるの。エールって、フランス語で翼だよ」

「えっ!?」

「応援はみんなの心に翼を生やす事。新しい世界へ飛び立つ事への出来る翼を。違うの？」

「……うん! 違わない! 私、そう言う応援がしたい! みんなの心をフレフレしたい!」

「頑張り。野乃はな」

「うん!」

はなとアンリが握手を交わす。

「それと、ソウゴ」

「ん?」

「昨日の君が言ってくれた言葉、響いたよ」

オシマイダーに変えられた時、ソウゴがアンリにかけてた言葉は心に響き、あの一言から自分を救ってくれた。

「王様になつてみせてよ」

「うん。頑張るよ」

アンリはソウゴとも握手を交わした。

「私のなりたい……輝木ほまれ……」

それを見ていたほまれは、今の自分になりたいものが何なのかわからなかつた。

ただ、彼女が悩むといつも、ハリーのことを思い浮かべていた。

「——矢張り、直ぐには現実を受け入れる事は出来なかつたか……」

とあるビルの屋上にて、クライがアンリが入院している病院を静かに見ていた。

今クライの心情を占めているのは、アンリへの落胆の思いだつた。

あの時オーラが時を止めてこれから起こる未来を教えなければ、彼は交通事故に遭つて左足の感覚を完全に失い。一切動かすことができなくなると言う事実には絶望し、クライアス社の社員としてスカウト出来る筈だつた。

それを彼女は、「スウォルツを見返してやる」という安直な理由でアンリが永遠なる幸

福を得る機会を奪い、彼は辛い現実にも目を背けて未来へと歩み出そうとしている。

…しかしまあ、オーラに関してはまだクライアス社に戻って来たから不問としよう。

「……だが、君達も直ぐにわかるよ。」

現実と言うモノが、どれ程理不尽で悪意に満ちているのか……」

現実から目を背け、逃避し続ける者達を見てそう言いながら、彼は懐からブランクウオッチを取り出す。

すると、何処からともなく飛んできた紫色に怪しく光り輝く三つの光の球がウオッチに入っていた。

そのウオッチは一瞬だけ形を変えるも、直ぐに元のブランクウオッチに戻ってしまった。

「……まだ足りない様だね。彼にはこれからも頑張って貰わねば……」

しかし、未来は既に私の手の中……

誰もが笑顔でいられる、幸福の理想郷の誕生まで、後もう少し……」

それでもウオッチは今も尚、新たな力を抱いて産声をあげようと、理想郷を司る牙を研ぎ続けている。

金と黒のオーラを忌々しく纏うウオッチを見ながら、クライはその場から去っていった。

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第58話 2068： なりたい未来を掴み取る！

第58話 2018： なりたい未来を掴み取る！

アンリがスケート界の引退を表明してから数日が経ち、次はほまれの大会が近づいて来た。

そしてソウゴ達は本番に向けて、ほまれの応援用の道具を作っていた。

「いよいよほまれ勝負の日だね」

「ほまれ！頑張ってるね！」

「イケイケゴーゴーなのです！」

「ほまれさんなら優勝も確実です！」

「みんなで応援するよ！」

「フアイトです」

「応援は嬉しいんだけど……何で虎？」

ほまれを応援する為にはな達が作った応援旗には、何故か虎の姿が刺繍されてた。

「めちよつく！何か違った？！」

「もしかして、ほまれ可愛いのが良かった？」

「そうじゃないけど……」

「エエやんエエやん。よお吠えるし、お前に似おうてる」

テーブルに座るハリーが花紙で花を作りながら言い、同じく花紙で花を作ってたツクヨミとことりもくすくす笑う。

「ネズミの癖に生意気」

「ネズミ言うな！つてか、ムニーつてすんなムニーつて！」

ムツとしたほまれがハリーの両頬を引っ張つて生意気だと言い、ハリーが引っ張られながらも反論する。

「ねずみー！」

「はぐたんならひゃーない……」

今度ははぐたんに両頬を引っ張られるが、ハリーは抵抗せずに大人しく引っ張られる。

『目指せ優勝！』

「なのです！」

「頑張つてねほまれ」

「落ち着いてやれよ」

「教師立場の私も応援しているよほまれ君」

はな達に続いてソウゴとゲイツ、ウオズも続いて彼女を応援する。

「うん。ありがとうねみんな——」

ほまれがお礼を言つてた途中で、後ろから人間の姿になったハリーに両頬を引っ張られる。

これを見たはな達は笑うが、引っ張られた当のほまれは顔を赤くする。

「な、な、な……！」

「お返しや」

ほまれがすぐさま離れ、ハリーがイタズラじみた笑みを浮かべてそう伝える。

「頑張れよ。客席で応援するからな」

「ネズミの癖に、生意気……！」

「せやから、ネズミちやうて」

ほまれはそっぽを向いてそう告げるが、ハリーが顔を近づけて反論する。

「ツ!？」

ハリーの顔が近い事に驚きと照れが混じり、彼女はそのまま外に出て行ってしまった。

「……何やアイツ？」

「はぎゅ……？」

何が何だか分からないハリーとはぐたんは何故と思い、首を傾ける。

しばらく経ってから公園のベンチで、はな・えみる・ルールー・ことり・ツクヨミはぐたんの六人がパップルと話す。

その近くの道路では、チャラリートが軽トラックに乗って焼き芋の宣伝をしてた。

「ふーん……それは、恋ね」

「「恋?」」

ハリーに対するほまれの気持ちをはな達から聞いたパップルは、恋と教える。

「そつ。お子ちやまのアンタ達には分からないかもね」

「ほまれが恋……?」

「はっ?」

「ネズミさんに恋……」

「ハリーに恋って……」

はな達はほまれがハリーに恋と言われても、誰一人あまりピンとは来なかった。えみるとツクヨミに至っては、ハリーのどこに恋しているのだという疑問が残っていた。

実際問題、ここに居る彼女達が突如に異性の恋と言われても、一人を除いては不慣れであるのだから、しようがないと言えましょうがないのではあるが……

「恋はするものじゃない、落ちてしまうものだから。自分じゃどうにも出来ないのよ

……」

「それが恋……?」

「そうよ」

「私にも分かります。好きになってしまったら、もう止める事は出来ません」

はながパップルの言葉に小首を傾げている横で、ルルーが胸元に両手を当て、目を閉じて言う。

そんないつもと違う彼女の様子にいち早く気付いたパップルは、疑念に満ちた表情でルルーの顔を見る。

「…えっ?分かるの? って言うかいの?」

「はい。この間、私はソウゴに告白しました」

「へえ……?」

「時見先輩……時見先輩に?!?」

「ふーん、ソウゴ……ソウゴに?!?」

「ソウゴに!?!」

「ソウゴさんに!?!」

「ジオウに?!?」

ルルーが堂々とソウゴに告白したと暴露し、それを聞いた一同は一斉に驚いた。

「あんた、ジオウにいつ告白したの!?？」

「えみるとゲイツを取り返した後にです」

「それって……」

それを聞いたツクヨミが思い返して見れば、あの後出かけてから戻ってからソウゴは明らかに様子が変わった。恐らく、ルールーの言った事は本当なのだろう。

「でも、ソウゴに告白って……」

「そ、そ、それで、どうだったのですか!?？」

「ソウゴさんは、オーケーを出したんですか!?？」

「どうなの?ルールー!」

「言いなさい!ルールー!」

はな達はルールーに迫って、ソウゴからの返事はどうなったのだと尋ねる。

「……待つて欲しいと言われました」

『……………えっ?』

「はい。ソウゴは答えを出すのを待つて欲しいと言われました」

「待つて欲しい?」

はながそう反復すると、ルールーは頷く。

「はい。ですが、私はソウゴに思いを伝えられただけで十分です」

ルールーは胸に手を当てて十分だと呟く。

「あのさ、ソウゴさんのどこに惚れたの？」

「ソウゴって、いつも王様、王様言ってるから、どこに惚れたの？」

ことりとツクヨミはルールーに、ソウゴのどこに惚れたのかを疑念に満ちた顔で問う。

「全部です」

「全部？」

それに対し、ルールーはソウゴの全部に惚れたと語る。

「はい。ソウゴは私がクライアス社のスパイにあるにも関わらず、私を信じ手を差し伸べもらいました。

アナザーライダーへとされた時も、必死になって助けてくれた。危ない時は危険を顧みず助けてくれた。

そして、心が何なのか教えてくれた。

そんなソウゴに、私は恋をしたのです」

「ルールー……頑張つて下さい！私はルールーを応援するのです！」

「ありがとう。えみる」

ルールーがソウゴに惚れた事を話すと、聞いていたはな達も納得できるような気がし

た。

そしてはなは、そのルーラーの話を聞いていると、ほまれもそんな感じなのかと思いつつながら空を見上げる。

「ほまれもそんな感じなのかな？」

ほまれにもハリリーに惚れて、今のルーラーと同じ様な一面があつたのかと思いつくと、ルーラーはハリリーと一緒にいた時のほまれの状態を話す。

「ハリリーという時、ほまれは心拍数、体温共に上昇します」

「ほまれさん、大会に集中出来るのでしょうか……」

「さあ、そんな事より——みんな、お芋売るの手伝つて」

「「「ええっ?」」」

「事務所の為に!」

焼き芋を食べ終えたポップルが立ち上がり、はな達に焼き芋売るの手伝つて欲しいと頼む。

「「「お断りします」」」

「「めちよつく!」」

だがあつさり断られ、チャラリートと共にめちよつくと叫んだ。

埠頭付近ではほまれが佇み、右手に持ったミライクリスタル・イエローを見つめる。

「ミライクリスタルは私達の心。ほまれの心は、キラキラ輝いてる」

すると突然、背後から現れたさあやがほまれに向かってそう言う。

「どうかな……普通にしようと思うのに、ハリーにはいつもキツくなっちゃう……イケてない……」

「好きな人の事を考えて、いつも心配してるほまれは可愛いよ」

そう言う彼女は、ほまれの頭に優しく手を当てる。

「いや……好きとか……バレバレ……？」

「ごめんね。黙ってようと思ってたけど、最近ほまれ悩んでるから」

「ありがとう……」

さあやは彼女がハリーの事を好きだと言うのを前から知ってたらしいが、気を使って黙っててくれていたようで、それを知ったほまれはさあやにお礼を言う。

「さあやはそう言うのどうなの？」

「えっ？」

「ソウゴの事……」

「っ……？」

ほまれの口からソウゴの名前が出されると、彼女は一気に赤面した。

「えっ？あ、いや……ソウゴ君とは……その……」

「一緒に寝たんでしょ」

「えっ？何で知ってるの？」

「これ」

「ッ!?？」

ほまれの携帯の写真を見せると、そこにはアナザージオウの事件の時、桐ヶ谷晴夜に匿って貰った場所で、ソファでさあやの肩にすがり一緒に寝ていたソウゴとさあやの写真が写っていた。

「これ、晴夜が送ってくれたの」

実はあの時、ソリティアへと戻った晴夜が寝ている二人がとてもいい画だったので、写真を撮っていたらしく、その次の日……

『ねえ、あの魔王とさあやはあの後どうなったの？』

『ああ、二人共気持ち良さそうに寝てたよ』

晴夜がその時、撮った写真をほまれに見せると、それを見た彼女はとってもいい雰囲気にも思えた。それでその後、ほまれの携帯にその写真を送ったらしい。

「せ、晴夜君……」

何て余計な事をしてくれたんだ、と言う表情で晴夜の顔を思い出す。

「それで、どうなのソウゴに？」

ほまれは気を取り直し、さあやにソウゴの事をどう思っているのかと聞く。

「……好きだよ。ソウゴ君の事」

さあやはソウゴが好きだとほまれに打ち明けると、ほまれはいつから好きなのかという疑問を投げ掛けた。

「……初めて、会った時からかな……」

そのままさあやは、ソウゴが初めてこの町に来た時のことを語り出す——

彼との最初の出会いは。あの日彼女が偶然、父親と一緒にクジゴジ堂へ時計の修理の為に行った時の事だった。

『さあやちゃん。実は紹介したい子がいるんだ』

順一郎さんが紹介したい子がいると言い、その子と呼んだ。

その子は足に包帯を巻かれ、松葉杖を使っていた自身と同年の子だった。

『僕の甥っ子のソウゴ君。挨拶』

『時見ソウゴ。よろしく』

『さあや……薬師寺さあやです。よろしくお願ひします』

これが、ソウゴとさあやの出会いだった。

その後ソウゴは、さあやと同じ幼稚園へと入園した。

だが入園したばかりのソウゴは知らない他人と交流する事なく、まるで「自分は君達と遊ぶ様な者ではない」と言わんばかりに一人でいる事が多かった。

そんなある日の事だった：

その時、たまたまソウゴが外でさあやを見て、彼女が何かを歌っている様子を見かけた。

『何歌っているの?』

『……今度、テレビで歌うの、その練習……』

『凄いな。テレビに出て歌うなんて!』

さあやがテレビに出て歌うと聞いて凄いとソウゴが目を輝かせながら言うが、その時

『テレビに出てもお前、歌えないだろ?』

『どうせ、恥かくだけだよ』

揶揄うように数人の男の子がさあやに言っていると、ソウゴがその男の子の前に立つ。

『なんで、そんな事言うの？必死に練習してるのに、それも知らないで失敗するって決めつけるな！』

さあやが必死に練習しているのに、それを冷やかすような言い方に怒ったソウゴが頭突きをして、その男の子を倒した。

『……ソウゴ君』

その後ソウゴは、このことを知った幼稚園の先生から「暴力はよくない」と怒られてしまった。(一応、子供同士の喧嘩だからと大事にはならず済んだ。)

しかしその時のさあやは、自身を守ってくれたソウゴの姿に、いつしか心を惹かれていた。

——そして、今は仮面ライダーとしてみんなを守るために戦う姿を見て、その想いはあの時より強くなった。

「……へえ、それがソウゴとの出会いだったんだ」

「うん……ほまれは告白、しないの？」

さあやがほまれはハリーに告白しないのかと聞くと、ほまれの表情が暗くなった。

「アイツ、未来に帰っちゃうじゃん……」

「……そうだね」

ハリーはいつか、未来へ帰らなければならぬ。

仮に告白して付き合ったとしても、別れる時が来れば辛くなるだけだ。

それを知っていたさあやは、そんなジレンマに悩まされる彼女の気持ちだが、わかるような気がした。

「それに……」

「ほまれ……」

ほまれはあの時、ピシンの作った猛オシマイダーの“人魚姫の物語の世界”での事を思い出すと、ハリーが心から思っているあの女の子を思い浮かべ、更に表情を曇らせる。

「何話しとんのや?」

「はっ?」

横からハリーの声が聞こえ、二人が慌てて距離を取る。

「いや、驚き過ぎやろ自分ら」

「あああああの……!大変……!つ!用事を思い出した!またね!ごゆっくり!」

さあやが焦りながら、この場から駆け足で離れる。

「ちよーちよつとさあや……!」

慌ててさあやを追おうとするが、ハリーに手を掴まれる。

「何か最近、顔暗いな」

「そんな……」

「俺が体験した事の無い緊張なんやろなー、大会前って。けど、リラックスも必要やで？」

……せや、アイスでも買うてくか」

「優しくしないで……！」

ハリーは彼女の頭に手を当ててそう言うが、ほまれはハリーの手を振り払う。

「大会が終わるまで、ハリーには会いたく無い……！」

「……そうか」

「……ごめん……」

悪気が無いのは分かっていたが、ほまれはハリーに一言謝ってから、その場から走り去った。

そクライアス社の何もない部屋に、ピシンとリストルがいた。

「ねえリストル……これで僕達は、ずっと一緒にいられるんだよね？」

クライアス社の床に座るピシンが傍に立つリストルにそう尋ねるが、当のリストルは振り返る事もせず、何も答えない。

「悲しいのも寂しいのも嫌……！僕を大切して、永遠に傍にいてくれたら……！ハリーの心なんて、どうでもいい……！」

それでもビシンは、己の寂しさを紛らわせんと言わんばかりに爪を噛みながらリストルに話しかけ続ける。

はくぐみ市の商店街に、ソウゴが順一郎に頼まれ買い出しをしていた。

「はあく……どうしよう……！」

歩きながらソウゴはルーラーの告白の答えをどう言えればいいか悩んでいるとその時、上を見上げると鉄橋の上にはなとことりがいるを確認した。

その一方で、ソウゴに気付いていない二人は鉄橋の下を眺めていた。

「恋か……どう応援したら良いんだろ……ことりは、どうすればいいと思う？」
「私も体験した事無いから分かんないよ……でも……！」

ことりがほまれるの恋の道筋をどう導けば良いのかと悩むはなにそう言ったその時、彼女の脳裏にはウールの顔が浮かんだ。

以前にアーラの力で助けた彼を必死に抱きしめていた事を思い出し、今思うと結構恥

ずかしい事をしていたと思い返した。

「ことり？」

「えっ!? ううん！何でもない！」

急に黙った妹の心配をするはなにことりはなんでもないと誤魔化すとその時、彼女達の下に一筋の風が吹いた。

「また会えたね」

直後、二人の背後にクライが突如現れる。

「ジョージ・クライ……っ！」

はなが振り返ってからすぐにポケットからプリハートを出す、クライに手首を掴まれる。

「ミライクリスタルは渡さない……っ！」

「君に会いに来たんだよ」

「は……!?」

「……？」

「はな！ことりちゃん！」

そこへ、二人を見かけたのでその場に来たソウゴがクライを見て、ジクウドライバーを装着するとジオウウォッチIIを起動させる。

『ジオウ！Ⅱ！』

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

ソウゴがジオウⅡへと変身し、クライへと走る。

はながジオウに気を取られたクライの手を振り払ってことりの両肩を掴み、後ろに下がって距離を取る。

「……仕方ないね」

『ジクウドライバー！』

クライはジクウドライバーを装着すると、そのままライドウォッチを起動させる。

『クライ！』

ウォッチを起動させるとドライバーのスロットに装填。背後から金色の懐中時計のエフェクトが出現すると、左手に本を持ったまま右手を上げる。

「変…身」

そしてそう言うと、彼は右手でジクウドライバーを回転させる。

『ライダータイム！仮面ライダークライ！』

『ジカンショットセイバー！』

クライも仮面ライダークライへと変身し、ジカンショットセイバーでジオウに迎え撃

つ。

「くうー！」

ジオウのサイキョーギレードとクライのジカンシヨットセイバーがぶつかり合い、一閃すると彼らは一度離れ、ジオウははなとことりの前に出る。

「クライ！何でここに来た！」

「今日は、君と話に来たんじゃない」

クライはジオウに向かってそう言うと、はなの方を見つめる。

「野乃はなの周りには、奇跡が満ちている」

「それは、みんなが頑張ってるから……もう分かったでしょ？時間を止めるなんて止めてー！」

「希望とはすぐに絶望に変わるものだ。君達は気付いていない」

「それは……」

はながクライの言葉に思わず言い淀んでしまうが、ジオウが彼女の代わりに反論をした。

「絶望かどうかなんては、わからないよ。」

絶望からだって、新しい希望は作れる！」

「ソウゴ……うん！」

はながジオウと共にクライを見据えると、クライは仮面の下でため息を吐きながらはなとジオウを見つめる。

「君は本当に素敵な女の子だ。」

それと、時見ソウゴ君。君は本当に、絶望を希望に変えられるのかい？」

「……」

クライがそう言うと同時に突風が吹き、三人は思わず目を瞑る。

突風が収まって目を開けると、そこにはもうクライの姿は無かった。

それを見たジオウは変身を解除し、どこに行つたのだと辺りを見渡す。

「あれ……？？？いない……」

「お姉ちゃん、ソウゴさん。今の人誰……？」

「……クライアス社の社長だよ」

「あの人……!?!」

ことりが先程までいた男性がクライアス社の社長と初めて知って驚いていたその頃、誰もいないリンクの上で、ほまれが一人練習を行う。

彼女は懸命にスピンを行うが、その時にハリーの事が頭に浮かび、その影響で体勢を崩して転びそうになるも、何とか立て直す。

「やっぱり悩んでるね」

もう一度滑ろうとすると、車椅子に乗ったアンリが現れてそう告げる。

「全然集中出来て無い。自分の心から目を逸らしてる」

自身の心を見透かされたほまれは、アンリに自分がハリーに恋をしている事を話した。

「そうか、でも恋をしてるほまれ、僕は好きだけだな」

「今はスケートに集中したいの……！お母さんを安心させたいし、アンリの為にも頑張りたいの……！恋は、スケートの邪魔だもん……！」

「スケートを言い訳にしないでくれ」

練習に戻ろうとしたほまれにアンリがそう告げると、彼はほまれに近づいて微笑みながら今彼女に必要だと思われる言葉を捧げる。

「誰の為でも無く、ほまれの為に滑れば良い。100%の輝木ほまれを見せてくれ。それが、僕達の笑顔になる」

その日の夜、はなは自宅のベランダで、かつてクライから貰ったハンカチをじつと見つめていた。

「はな」

「……っ！ルールー……！！」

「風邪を引きますよ」

「だよね！いけないいけない……！！明日はほまれの応援！頑張ろうね！」

「はい」

彼女はハンカチを仕舞い、二人は部屋の中へ入って行く。

愛崎家のえみるも、部屋で寝ほけながらほまれの顔を思い浮かべる。

「フレ……フレ……ほまれさん……」

例え相手はネズミでも、愛が勝つのです……」

寝ぼけたえみるがそう呟きながら、左腕を上に掲げる。

同じ頃、店内のソファーにハリーが座り、首を後ろに傾けて窓の外の星空を見つめる。

「星……か。」

「……そや」

そう言うのと立ち上がり、ある物を作り始める。

「何をしている？」

「門矢士……明日、大会のあるほまれの為にな」

「ほお……」

そんなやり取りをしてから、士は寝室に戻り、ハリーは必死に作業を続けた。

ほまれはハリーの事で寝付けず、自宅の縁側に座り込む。

すると、母親のちとせがほまれの肩に半纏を掛ける。

「珍しいね。大会前は早く寝るのに。何か気になる事あるの？」

「もしかして男の子の事だったりして」

「!?？」

「……あれ？凶星？ゴメンゴメン……」

冗談で言ったがほまれの様子を見て、本当の事と察して謝る。

「多分……上手く行かないんだ。でも……」

そう言ってほまれが兎のぬいぐるみを抱き締めると、ちとせは少し困った表情を顔に出しながらほまれの横に移動する。

「恋は難しいよね。告白しても、絶対付き合える訳じゃないし。一度くっついてても、別れちゃう事もある」

「お母さん……」

「けどお母さんは、お父さんの事好きになって良かった」

「えっ……?」

「一緒にいて傷付く事もあつたけど、沢山の宝物もくれた。勿論一番の宝物は、可愛いほまれちゃん!」

そう言いながら彼女は、自分の肩を娘のほまれの肩に当てる。

「ほまれちゃん、良く笑うようになった」

「うん」

「もし傷付いても、その笑顔をくれた友達に涙を吹き飛ばしてくれる。ほまれちゃん頑張れ!」

「いたたたっ……!ちよ、お母さん……!」

そう言うとはまれを抱き締め、激しいスキンシップを行ったのだった。

クライアス社本社の社長室にビシンが訪れると、そこには既に社長のクライとスウオルツがいた。

「社長、話って一体……」

「ビシン。君に仮面ライダーの力は、宝の持ち腐れだと思うんだ」

目の前の社長に呼び出されたビシンがそう尋ねると、突如クライが彼に向けてそう告

げる。

「っ!??!?……いきなり何を……!!」

「お前はゲイツとハリーに執着する余り、せつかく得た力を活かせず、一人も倒せない」
ビシンが目を見開いて驚いていると、スウォルツが今の彼の戦況を伝える。

「突然呼び出しといて……そんな嫌味を聞かせたいだけ?」

「君が拘っているのは分かるが、すぐにでも排除すべきだ」

「け、けど……!!」

「お前の意見は求めん!」

スウォルツが弁論をしようとするビシンに一喝すると、クライは机に両肘を立てて寄りかかりながら彼を睨みつける。

「二度と彼を連れ戻そうと考えるんじゃない。」

それではいつまで経っても、君は以前のままで。

君は僕の言った事をすればいいだけで、それ以外は何もしなくていい。分かったかい?」

「……分かりました」

「奴を倒すには、他にも何かの迷いを抱かせればいいんじゃないかと思うんだ。何か、心当たりは無いかい?」

「心当たり……それなら……！」

スウォルツの質問を聞き、あの時見たハリーの夢の世界でのほまれを思いだすと、ビシンはさつきまでの苦々しい表情から一変して、口元に笑みを浮かべた。

「ねえ、今回は僕の指示に従ってよ」

ビシンはクライとスウォルツに今回は自身の指示に従ってと言い出し、それを聞いた二人は眉を寄せる。

大会当日、会場では既に多くの人たちが集まっていた。

「いよいよです」

「心から応援するのです！」

「ほまれさんのために！」

応援旗を取り付けながら、応援準備完了の態勢でえみる、ルーラー、ことが待機していた。

「ほえ……」

「どうした？ハリー君寝不足かい？」

「ああ……ちよつとな……」

ハリーの目元には隈が出来ており、それを指摘したウオズは寝不足なのだと思った。

控え室では、ほまれが出番が来るまで柔軟しており、本番に向けて準備していた。

「あく緊張する〜！」

「はぎゅ〜！」

同じく控え室にはなと抱かれたはぐたん、さあやとツクヨミが、ほまれにエールを送りに来ていた。

「はな。落ち着いて」

「はなが焦ったら」

焦っているはなを落ち着かせようとすると、ほまれは立ち上がった。

「はな！フレフレして！さあやもツクヨミもはぐたんも！」

ほまれが三人にフレフレして欲しいと頼む。

「今から私のハート、100%マジあげするから！」

ほまれの頼みを聞き、三人は頷いた。

「フレフレほまれ！フレフレほまれ！」

「ふえふえほまえ！ふえふえほまえ！」

「サンキュー」

はな達からのエールを貰いお礼を言うと、ほまれはある決意をした。

しばらくして、応援席にいるルーラーに連絡が入った。

「了解しました」

「さあ、行くのです！」

「どこへ？」

連絡を受け取てルーラーとえみる、ことりがはなに言われた場所へハリーを強引に連れて行く。

その頃、ソウゴとゲイツが会場へと到着した。

「もうくなんで置いていたの!?？」

「お前が寝坊したからだろ！」

「ゲイツもでしょ！」

ソウゴとゲイツは寝坊して会場入りするのに遅れてしまった事を言い争いしながら、ほまれのスケートの応援に向かっていく。

ほまれが会場の通路立っていると、そこに強引に連れて来られたハリーが現れ、二人が向かい合って立つ。

「ドキドキなのです！」

「ほまれ心拍数が上昇中」

「ほまれさん頑張つて！」

三人が後ろの柱に隠れると、ほまれを応援していた。

「はいはい」

「邪魔しなさい」

「二人だけにしてあげよう」

「私達は部外者だ。離れていよう」

邪魔しないようにその後ろにいるはな達に言われ、えみるとルールー、ことりは見るのをやめた。

一方で、遅れてきたソウゴとゲイツがハリーの後ろの方に現れた。

「どうしたんだろ？」

「……よせ。俺達は邪魔だ」

ほまれとハリーの様子を見て何かを察したゲイツにそう言われたソウゴは、二人を守るためにゲイツと後ろの方で隠れた。

その後、しばらく二人はお互いに黙り込む。

「あつ……」

「俺……お前に謝らんといかんよな」

「えっ？」

ほまれが何かを言おうとすると、その前にハリーがほまれに謝らないといけないと言
い、不意を突かれた彼女は驚いた。

「真剣に頑張つとるときに茶化するような事を言つて、悪かった。ごめんな」

「……ほんとに鈍感」

「はあ？」

「ギャグつままないし、すぐふけるし、大事な事隠すし、ネズミだし」

下を向きながら言いほまれは顔を上げると、頬が赤くなつていた。

「アンタといると、全然上手く喋れないし、ケンカしちやったり、そんなのばっか……な
のに……」

この場の空気を変えるように、ほまれが口を開ける。

「——アンタが……好き。」

輝木ほまれは、ハリーの事が大好きです！

彼女は目に涙を溜め、ハリーに好きと自分の思いを改めて告げる。

それからすぐに涙を零し、ハリーが右手で涙を拭おうとするも、腕を下げる。

「……俺も、気持ち伝えたいと思つてる奴がおる。」

それを有耶無耶にしたまま、お前の気持ちに応えられへん」

「ごめんな……」

ほまれが拳をハリーの胸元に叩き付けるが、その力は弱かった。

「ありがとう。スツキリした」

ほまれはそう言つて微笑み、涙を流す。

「……（俺も有耶無耶じゃダメなのかもしれない……）」

ハリーの言つた事を影で聞いていたソウゴも、自分もルーラーに対しての返事を答えを出す事を有耶無耶にしてしまっている事に責任を感じていた。

「……俺も答え出さないと」

「未来とは、やはり思い通りにならないね」

「!?？」

この聞き慣れた声が入り、まさかと思ひ二人は振り返る。

だがその時、ソウゴとゲイツに灰色のカーテンが現れ、そのまま彼らを包み込んだ。

二人が消えると、同時にそこからスウォルツとビシンが現れた。

「これで、いいのか?」

「ありがとう。スウォルツ。これで……後は」

ビシンが会場の方を見て、不適な笑みを浮かべた。

オーロラカーテンに飲み込まれたソウゴとゲイツは、スウォルツによって何処かへ送り込まれた。

「()は……」

「この場所……」

「君は、ここに来るのは二度目だね」

「ツ!? ……プレジデント・クライ……」

「貴様……」

「君と話すのは初めてだね。明導ゲイツ君」

ソウゴとゲイツが振り返ると、クライが本を開きながら二人の後ろに立っていた。

どうやらここは、以前にソウゴも来た事のあるクライアス社の社長室だった。

「貴様……よくも……よくも……未来のみんなを！」

クライを見てゲイツが殴りかかる。だが、あっけなく避けられた。

「くう……」

「ゲイツ！」

「君は中々野蛮だね……ゲイツ君」

「なんだと……」

「どうして、ここに呼んだの……」

ソウゴがゲイツの横に並びながら、何故ここに呼んだのかとクライに問う。しかし、クライは何も言わず上を見上げる。

「未来とは思いつ通りにならないものとは、思ったことはないかい？」

「それは……」

「……何が言いたい」

ゲイツが質問に答えずに問い掛けると、クライは本を閉じて話を続ける。

「未来は思うようにはならない。」

ならばこそ、苦しまないようずっと永遠にいるのがいいのではないか？」

誰も苦しめない——ソウゴは彼の考えを聞くと、さっきのほまれも苦しかったのではないかと思つた。

でも……

「それは、未来から逃げてるだけじゃないのか」

ゲイツが口を開くと、逃げてるだけだとクライに告げた。

「俺も初めは、ソウゴがいつオーマジオウに目覚めるのかと怖かつた……」

いつかソウゴが魔王として目覚め、その力でいつ世界を支配し、時を奪う力……

ゲイツはずっと、彼がその力をいつに手にするのかと不安だった。

「だが、今はこいつが俺達の知る未来からどんどん変わっていく。だから、明日はどんな違ったソウゴになれるのかと楽しみでもある」

「ゲイツ……クライ。確かに未来は怖いさ。」

でも、決められた未来は一つもない。勇気を持って前に進む！それだけで未来はいいものにだってなれる！」

ゲイツの想いを聞いたソウゴが迷いを振り切ると、クライに向けてそう言ったその時

「何故、そんな不要なものを……」

「えっ?」

クライの目つきが変わり、悲しみと怒りの混じった表情へと変わった。

「教えてあげるよ。そんなものは幻想だと!」

クライはジクウドライバーを見せた。それを見てソウゴとゲイツもジクウドライバーを取り出す。

「ゲイツ!」

「ああ!」

二人はジクウドライバーを装着し、二人はウォッチを取り出すと、クライに向けて起

動させる。

『ジオウ！グランドジオウ！』

『ゲイツ！ゲイツマジエスティ！』

起動させたウオッチを二人はジクウドライバーの左右のスロットへ装填した。

そのまま二人はドライバールのロックを解除し、構える。

『へポオオーン！パアアアア！』アドベント！COMPLUTE！ターンアップ！

へピイーン！〜CHANGE BEETLE！ソードフォーム！ウエイクアップ！カメ

ンライド！サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！3・2・1！シャバドゥビ

タッチヘンション！ソイヤツ！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！

ライダータイム……！』

「変身！」

同時に叫び、二人がドライバールを回した。

『グランドタイム！クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド！響鬼・カブト・電王

！キバ・ディケイド！ダブル！オーズ！フォーゼ！ウイザード！鎧武・ドラーイーブ

！ゴースト！エグゼイド！ビル・ドール！

祝え！仮面ライダー！！？グ・ラ・ン・ド！ジオウ！』

『マジエスティタイム！G3・ナイト・カイザ・ギャレン・威吹鬼・ガ・タ・ツ・ク！ゼ

ロノス・イクサ・デイエンド・ア・ク・セ・ル！　バース・メーターオ・ビースト・バロン！　マツハ・スーペクター・ブレイブ！　クーローズ！

仮面ラーライダー！　Ah！　ゲイツ！　マジエースター！　』

グランドジオウ、ゲイツマジエステイへ二人が変身を完了した。

「それが、ゲイツマジエステイ……だが……」

『ジクウドライダー！』

クライもジクウドライダーを装着して、そのままライドウォッチを起動させる。

「僕には勝てない」

『クライ！』

ウォッチを起動させるとドライバーのスロットに装填。背後から金色の懐中時計のエフェクトが出現すると、左手に本を持ちながら右手を上げる。

「変……身」

右手でジクウドライダーを回転させる。

『ライダータイム！　仮面ライダーダーククライ！』

黒と白のカラーで背中に金色の懐中時計が付いたアーマーが装着され、マスクには赤で『ライダー』と刻まれたインジケーションフレアイがセットされ、仮面ライダークライの姿へと変身すると、三人の仮面ライダーが構える。

その少し前、結果を聞いて涙目になったはなが腕を広げ、ほまれの名を呼ぶ。

「ほまれ……！」

限界を迎えたほまれが声を上げながら泣き、はな達の元へ向かい、はなに抱きつく。

はながほまれを抱き締めると、更に声を上げて泣いた。

そんなほまれをはなだけで無く、ウオズ以外のメンバーも涙を流して見ていた。

「……よし。星を掴む為に、私は……飛ぶ」

「うん！」

泣き止んだほまれがそう告げると、はなは微笑んで返事した。

だがその時、会場からものすごい震度が響いた。

「な、何？？」

何事かと思いつながら、はな達は急いで会場へ入る。

すると、スケートリンク場には普通のサイズであり得ないくらい大型の仮面ライダーが立っていた。

「何あの大きさ……！」

「あれも仮面ライダー何ですか？」

「この本によればあれば、仮面ライダーアーク。あれもダークライダーの一人だ。かつて仮面ライダーキバが倒したはずだが、おそらくスウォルツの仕業……」

ウオズがスウォルツの仕業と思われる事を説明すると、現れた仮面ライダーアークは周りで暴れ出してリンクを破壊する。

「みんな！」

はなの掛け声でウオズとハリーはビヨンドライバーを取り出して腰へ装着すると、はな達はプリハートにミライクリスタルを取り出して構える。

『ギンガ！』

『ハリー！ギアジェット！』

「[[[[ミライクリスタル！ハートキラツと！]]]]」

『投影！ファイナリータイム！ ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファンタジー！ ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

『ジェットタイム！導け！切り開く世界！ハリー！ギア！ジェットく！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアラー！」

「「「HUGっと！プリキュア！」」」

七人が変身を完了し、エール達がアークへ飛び込んでいき、同時にパンチを繰り出しアークを会場の外へ放り出す。

「現れたか……」

「待ってたよ」

外には既にアナザーデイケイド、ビシン・ギアファンングフォームがいた。

クライアス社の社長室では、ジオウとゲイツがクライに戦いを挑んでいた。

「はああ！」

ジオウはクライにパンチを繰り出し続けるが、そのパンチは難なく防がれる。

『バロン！』

「はああ！」

ジオウが横へ避けるとバナスピアを持ったゲイツがクライに放ち、バナスピアーが直

撃したクライは二人から離れた。

『鎧武!』

「いざ、二刀流ってね!」

鎧武のレリーフを触って無双セイバーと橙々丸を持ち、そのままクライに追い討ちをかけた。そして、今度はドライブのレリーフを触る。

『ドライブ!』

「はあ!」

「ぐうおお!」

ドライブの武器・トレーラー砲を召喚すると、そこから放たれた光弾によりクライが吹き飛ばされた。

「クライ。降参して」

「今の俺とソウゴの力ならお前を倒せる。今すぐ、みんなを元に戻してクライアス社を解散しろ!」

ジオウとゲイツはクライに降参するように促す。

「フツ……君達はわかっていないよ。自分達がいかに無意味な事をしているんだとね」
だが起き上がったクライは降参する様子のない口調で語り出す。

「どうしても、まだやるの……」

「……時見ソウゴ。君こそ、なぜオーマジオウの道を選ばない」

するとクライは目の前で構えるジオウに、何故オーマジオウにならないのだと問う。
「それは……」

彼の問い掛けに対し、ジオウは掌を見るとあの時、さあやと交わした約束を思い出す。

『みんなで一緒に目指そう。オーマジオウじゃない。新しい未来を』

『新しい……未来……』

さあやがソウゴを手を握って、新しい未来を目指そうと言ってくれた。

それを信じて、自分は今ここにいます。

「俺達は、新しい未来を作る！それは、オーマジオウ未来じゃない！俺達が目指す！最高最善の未来を！」

「ああ！未来には可能性がある！それは諦めなければ！何でもできる！何でなれるんだ！」

「……ゲイツ。それ、はなの言葉だよね」

「間違ってるか？」

ゲイツがはなの言葉を真似して言ったので、ジオウは仮面の下で微笑した。

「……わかった。なら、見せて欲しいね、その未来を」

クライがそう言った次の瞬間、ジオウとゲイツの前に灰色のカーテンが現れた。

「!??!」

オーロラカーテンがジオウとゲイツを包みこむと、そのまま二人は姿を消した。

「これでいいのかい?」

そこに現れたのは、仮面ライダーディエンドの海東大樹だった。

「ああ。十分だよ」

「まあ、お宝くれたお礼をしてあげないと」

海東が前回、過川飛流から奪ったアナザージオウIIウオッチを見せる。

「手伝ってあげたお礼に聞かせてくれない? いつまで、スウォルツ達で彼らを遊ばせるの?」

「……さあ。何のことかな?」

海東大樹のいつまでスウォルツでソウゴ達を泳がせるのだと言う質問に答えず、クライはそのまま社長室から出ていった。

「……何を考えるんだろ、あの社長」

海東はアナザージオウIIウオッチを持ちながら、クライが何かを狙っているのだと睨む。

ジオウとゲイツが海東大樹によって未来に送り込まれ、まだクライと戦っていた頃、エール達は会場の外で戦っていた。

「ヤアアア！」

エールがアークにパンチを繰り出したが、アークは巨大な手でエールを振り払った。

「お姉ちゃん！」

そのままアークは、エールにパンチを繰り出す。それを見たアークはプリハートのハート部分をタッチして手を画面にかざす。

「フレフレ！ハート！ウインド！」

プリハートから緑の風の形作り、自分の周りに広げアークに向けて放った。

その影響でアークのパンチが逸れると、その隙に左右からマシエリとアムールがアークに向かって跳び反撃に出る。

「うあああつ！」

しかしアークは闇雲に腕を回し、マシエリとアムールはそれに対応出来ず、アークの腕に吹き飛ばされた。

「スタースラッシュ！」

マシエリとアムールに気を取られたアークにスタースラッシュを放ち、アークをマシエリとアムールから離れた。

「二人共大丈夫？」

「はい」

「助かりました」

今度はエトワールがアークに一人立ち向かっていく。

その頃、ウオズがアナザーデイケイドを抑えており、ハリーはビシンと戦闘を行なっていた。

「はあー！」

ハリーはジェットで飛びながら何度もパンチやキックを繰り返し続けるが、ビシンのフアングクローに攻撃を阻まれ続ける。

「はあ、はあ……」

「どうしたのハリ〜？その程度なの！」

『フィニッシュタイム！』

ドライバーを回しハリーが腰を低く構える。すると、ビシンもドライバーを回す。

『フィニッシュタイム！』

ハリーはローラで地面へ滑り加速すると、ジェットが火を吹き宙へと飛び上がりビシンに突撃する。

『ジェットタイムフィニッシュ！』

『フアングタイムデストロイ！』

ハリーがジェットトの加速の勢いを利用し、ライダーパンチを放つとビシンもクローに貯めたエネルギーを解放し、二人の技は衝突した。

「あああああー！！？」

だが結果、ビシンがハリーのライダーパンチを圧倒した。

やはり、ギアフアングのビシンの方がパワーでハリーを上回っていた。

「あつ！！？ ハリーー！」

エトワールがハリーが膝をついているのを見て、気を取られてしまったその隙を見たアークは彼女を捕まえた。

「くうう……」

「エトワールー！」

掴まれたエトワールを見て助けに行こうと、ハリーがジェットトに火をつけてアークに向かう。

「離せや！うわあ」

その時、背後からビシンが現れ、ハリーを攻撃した。

「ハリー」

「いい加減にしろよ。ハリーはお前のことなんか……」

「知ってるよ！もう伝えたから！」

「アツハツハ！あれだけ教えてやったのにバカなヤツ！」

エトワールが自分の想いを伝えたと言うと、少し驚くとビシンはエトワールを馬鹿にするように高々と笑った。それを見たエール達は、腕を上げてミライブレスを召喚した。

「勇気を出して行動した人を」

「バカにする権利なんて」

「誰にもない！」

「強がるなよ！お前はもう明日なんていらなと思うてるんだろ？」

「エトワール……」

それを聞いたハリーは、さっきの自分はエトワールの……いや、ほまれの告白に伝えてやれなかったのではないかと思ひ、後悔をし始めた。

「私は、自分の大好きな人の幸せを輝く未来を願っている……だから、時間を止めたいなんてイケてないこと思わない！」

だがエトワールがそう言うのと彼女のミライブレスが光り出し、アークの手から脱出した。

「だから、ハリー！あんたの掴みたい未来に飛んで！」

エトワールが言うと倒れたハリーが力を振り絞って起き上がる。

「俺が掴みたい未来は……みんながなりたい夢を全力で守ることや！」

その時、ハリーのドライバーのギアジェットウォッチが、エトワールのミライブレスの光に共鳴するかのように光り出したのだった。

「何だよこれ……」

「ウォッチとミライブレスが……」

「お互いに共鳴している」

共鳴し合う二つに、エトワールのミライブレスから一線の光がギアジェットウォッチに注いでいく。

「なんや、ウォッチの色が……」

ミライブレスの光が注がれギアジェットウォッチの色が変わっていく。そして、ウォッチから強烈な光が放たれた。

「うおおお！」

眩い光が放たれハリーが目を開けると、ハリーの手にはいつものギアジェットと違う、青から白となった歯車型のウエイクベゼルで、真ん中のレジエンダリーフェイスを囲む円のフレームが黄色へと変わった。

「新しいウォッチ!?？」

「何だと!?？」

突如起こった謎の現象に、エール達だけでなく、アナザーデイケイドまでもが驚く。

「ハリー！」

「ようわからんが、使ってみるか!?？」

新たなギアジェットウオッチの白い歯車のギアを一回転で回す。すると、真ん中に記されているライダーの顔が白へ変わり、ハリーは迷わずスイッチを押す。

『ギアヘリテージ！』

そうウオッチはギアヘリテージと音声を発声し、ハリーはそのウオッチを左のスロットに装填、ドライバーのロックを解除して、ドライバーを回す。

すると、ハリーの体のライダースーツがひび割れ出し、そこから違う姿が現れると、ドライバーが音声が流れた。

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！』

ヘリテージタイム！導け！心に望む未来へ！ハリーギアヘリテージ！』

ギアジェットに装着されていた両足のローラーが無くなり、新たに肩へ装備された三日月型の歯車と頭部の『ライダー』と刻まれたインジケーションパタフライも黄色になり、その上には黄色いV字の触角が取り付けれていた。

「ギアジェットが変わった!?？」

「ハリー〜！かわった〜！かわった〜！」

「これは……祝え！運命を超え！心に望む世界を導き出す奇跡のライダー！その名も仮面ライダーハリー・ギアヘリテージ！まさに未来を掴み取った瞬間である！」

ウオズはハリーの新たなフォーム……いや、ギアジェットが進化した姿。仮面ライダーハリー・ギアヘリテージフォームの誕生を祝った。

「ギアヘリテージ……」

「ハリーさんの新しい姿……」

「イケてんじゃない。ハリー！」

「嘘だ……嘘だ……うそだああああ！」

ハリーの新たな姿を見たビシンは叫び声を上げながら、彼に向かって突撃した。

しかしハリーは一瞬にビシンの背後へ回り、ビシンにキックを喰らわせた。

「何という速さ……」

「先までとは違うのです！」

「中々だな。ハリー」

アナザーディケイドがキックを喰らって悶えるビシンと変わるようにハリーの前に現れた。

「ハリー！」

「下がってろ」

エトワール達を自身とアナザーデイケイドから遠ざけると、ハリーは自身の手から新たな武器が出現した。

『ジカンチエーンブレード!』

持ち手の部位にジカンチエーンが装着された大剣型の武器をその手で掴むと、そのチエーンが自動でハリーの腕に巻き付かれ、その剣を持ったハリーが構える。

「せやあああ!」

ハリーがジカンチエーンブレードを振り続け、アナザーデイケイドに攻撃を続けるが、アナザーデイケイドはそれを躲し続ける。

「このお!」

更に背中のジェットで加速し、そのまま特攻で剣を振るう。

しかし、アナザーデイケイドはオーロラのカーテンを作り、ハリーの攻撃を流した。
「くう!」

「アツハツハツハツハ! 無駄だったようだな! やはり、デイケイドの力を持つ俺の方が上のようだな」

アナザーデイケイドがハリーの攻撃は無駄だったと、高々と笑いあげていると…

「ハハハ——ぐうお!? な、何!?? どこから?」

アナザーディケイドは突然、見えない所からいきなり攻撃を受けた。しかし攻撃は、それだけで終わらなかった。

「ぬうおおおお！」

次々とアナザーディケイドに目に見えないような攻撃が次々と決まる。

「えっ？何がどうなってるの？」

「一体何が？」

エールはおろか、アムールにすら何がどうなっているのかわからず、ここに居る誰もが困惑していた。

「あああ……ッ！ハリー……貴様!!何をしたッ!？」

「この剣や」

ハリーはアナザーディケイドにジカンチエーンブレードを見せる。

「この剣はな、俺が切った空気から斬撃を飛ばすんや！」

「何だと!?？」

「つまりは、俺は同じ場所からもう一度お前を攻撃してんや！」

時間鎖光剣・ジカンチエーンブレード…

それは、一度攻撃で空を切った所に斬撃を残し、自分の意思のタイミングで斬撃を飛ばせる力を持っていた。

アナザーデイケイドは攻撃を別の空間に逃すことが出来ても、見えない攻撃からでは対処が出来ないようだ。

「凄い……」

「お前のおかげだで、エトワール」

この力が生まれたのはエトワールのおかげだと、ハリリーがエトワールの方を向いて言う。

「スウォルツ。俺が切った斬撃はまだあるで」

「っ!?？」

その言葉通り、アナザーデイケイドに向けて見えない斬撃が飛んできた。

「ぐうおおお！」

対処が出来ず斬撃を受け続けたアナザーデイケイドは変身解除となり、スウォルツの姿へ戻った。

「くう……この俺が……」

「やるねハリリー君。では、私も」

ウオズはドライバーからギンガミライドウオッチを外す。そして、ウオッチのダイヤルを回す。

『ワクセイ！』

ギンガミライドウォッチの顔が変わり、再びウォッチをドライバーに装填し、レバーを引く。

『水金地火木土天海！宇宙にやこんなにあるんかい！ワクワク！ワクワク！ギンガワクワク！』

ギンガファイナリーのままウォズの複眼が青色の『ワクワク』へと変わった、ギンガワクワクフォームへと変わると、そのままウォズはレバーを引く。

『ファイナリービヨンド ザ タイム！』

仮面ライダーアークの頭上から小宇宙のようなものを出現させ、そこからエネルギー球がいくつも生成されていく。

『水金地火木土天海エクスペーション！』

そのまま、エネルギー球が雨のように降り注ぐ。

「巨大なその体は俊敏に動くことは不可能だ」

エネルギー球を撃ち続けられ、攻撃が止むと仮面ライダーアークはボロボロで膝を折る。

「終わりにしよう」

『タイヨウ！』

ギンガミライドウォッチの顔が変わり、再びウォッチをドライバーに装填したままレ

バーを引く。

『灼熱バーニング！激熱ファイティング！ハイヨー！タイヨウ！ギンガタイヨウ！』

ギンガタイヨウフォームへと変わると、さらにレバーを引く。

『ファイナリービヨンド ザ タイム！バーニングサンエクスプロージョン！』

「はあ……はああああ！」

ウオズの手から巨大な太陽のエネルギー体が放たれ、そのまま仮面ライダーアークに直撃。太陽に飲まれるとアークは消滅し、その場に姿はなくなり、塵すら残らなかった。

「くう……」

「ビシン！後はお前だけや！」

ハリーがビシンの前へと立つ。

「いいよ、ハリー。決着付けようか！」

ビシンはファンングクローを構え、ハリーに一騎討ちを申し出る。

「わかったで……」

ハリーもジカンチェンブレードを構える。

そのまま、両者は構えてタイミングを図るために様子を見て牽制し合う。

（ハリー……）

「はああああ！」

両者動き出し、勝負が開始した。ビシンはクローでハリーへ攻撃を続け、対するハリーはジカンチェーンブレードで応戦、ビシンの攻撃を受け流し続ける。

「せやあああ！」

ビシンが咄嗟にハリーの初撃を躲した。しかし、残った斬撃が放たれビシンに直撃した。

「くうー！」

「ビシンー！」

『フィニッシュタイム！』

ドライバーのウォッチのスイッチを押し、ハリーはドライバーのロックを解除する。

『ヘリテージタイムフィニッシュー！』

ジェットから火が吹きそのままビシンへと突撃し、ライダーパンチの構えに入る。

（だめだ！間に合わない！）

技を出そうにもハリーが早く、ビシンは技を繰り出せなかった為、クローを盾としてビシンは構える。

「ビシンー！」

ハリーはそのままビシンのクローにライダーパンチを放ち、その勢いでクローを砕くとビシンの顔を殴り、そのまま勢いよく吹き飛ばした。

「ぐうう!!? うわああああ!!?」

そのまま吹っ飛ばされ転がったビシンが変身解除となって倒れると、ハリーは着地した。

「はあ、はあ……そんな……」

「ビシン」

ハリーがビシンに迫ろうとする。

その時、『ピタッ!』っとビシンとスウォルツ以外の時間が静止した。

「早く逃げなさい」

時間を止めたのはオーラだった。

「……行くぞ。ここままでだ」

「まだ……まだ、ハリーと……うっ!!?」

ビシンがまだハリーと戦おうとする。しかし、スウォルツがビシンの腹部を殴り気絶させる。

「……スウォルツ……お前……」

「貴様の意見は求めん!」

スウォルツはビシンを担いでその場から去ろうとする。

「ハリー。今回は負けておく。だが、次にやる時はこれが勝つ」

スウォルツはそのまま不適に笑い、カーテンを出現させてビシンとオーラ共に去って行く。

「うわあ!!? あれ?」

「逃げた様だね」

動けるようになって辺りを見ると、既に奴らの姿はなかった。

「ハリー!」

エール達がハリーに詰め寄る。

「それ!めちよつくかつこいいね!」

「その剣の攻撃、とても凄かったです!」

「切ったところからさらに攻撃が出来るとは凄いです!」

ハリーの新フォーム、ギアヘリテージにみんな称賛した。

すると皆の前に灰色のカーテンが現れると、そこからソウゴとゲイツが現れた。

「ソウゴ君!」

「二人共どこに行ってたんですか?」

「すまなかつた」

「俺達、クライアス社の罠にハマって、クライと戦ってたんだ」

「えっ?」

ジオウがクライと戦っていたと言うと、エールは脳裏からプレジデント・クライの事を思い出して、あの時貰ったハンカチの事が気になっていた。

「ハリー？その姿……」

その頃、ジオウはハリーのギアヘリテージフォームに気づいた。

「名付けて、ギアヘリテージフォームや」

「ギアヘリテージ……」

その後、ソウゴとゲイツはハリーからギアヘリテージライドウオッチについて、そのウオッチはミライブレスから分け与えられた力より進化したウオッチで、プリキュアのみんなの力から出来たものであると教えてもらった。

それからしばらくして、会場が落ち着くと大会が再開された。

順調に進み、いよいよほまれの出番へとなった。

「ほまれ！頑張れ！」

「フレフレ！ほまれ！」

客席からソウゴ達がほまれの応援する。

そして、ほまれはスケートリンクの中心へと立ち、ほまれの演技が開始した。

ほまれの演技はいつにもなくキレが良く、見る人の心に火をつけた。

（不思議……凄く集中出来る。

バラバラになってた心が、一つになったみたいに。

ずっと思ってた、片思い……叶わない恋に意味はあるのかなって。でも……！）

「フレ！フレ！ほまれっ！」

ハリーが中央に星の付いた応援旗を広げて振り、声を上げてほまれを応援する。

それは、昨晚ハリーが徹夜して作ってたのは、この応援旗だった。

（きつとあつた。ドキドキした気持ちも、胸がキューっとなって、流した涙も……今、私

の心で輝いてる！フレ！フレ！私！）

彼女はそう心の中で呟いてからジャンプをし、遂に四回転ジャンプを決めた。

「四回転ジャンプ決まった！」

「やった！」

（……ありがとう！）

心の迷いが無くなったほまれの滑りは、会場を魅了させて歓声で湧かせた。

「ブラボーなのです！」

「カッコいいです！」

「素敵ですほまれさん！」

「すごい演技だったぞ！ほまれ！」

「「ほまれー！輝いてるー！」」

「ほまれ、すつごくカッコいい！」

「今まで見た滑りの中で、今が一番輝いてるよ！」

（ありがとう……みんな。ありがとう……ハリー）

ほまれの演技は会場の人達から盛大な拍手が響き渡る。

それは間違いなく今日一番に輝いており、まるで星々が広がり、光を広がるような演技だった。

大会終了後ほまれは、はな達に優勝メダルを見せる。

「おめでとうほまれ」

「うん」

はな達が拍手を送り、アンリが祝福の言葉を送ってから、ほまれを抱き締める。

『おめでとう！』

今度のはな達が抱き締め、祝福の言葉を送る。

「最高の滑りだったよ」

「ありがとう。みんな」

最高の滑りだったとみんなほまれを称賛する。

「良かったね……！良かったねほまれ……！」

「はな……」

「おめでとー！ほまえー！」

「おめでとう」

観客席に座るハリーの足の上で、はぐたんが祝福の言葉を送り、ハリーも送る。

「さあや。頑張つて」

「!?？」

ほまれに小声で言われるとさあやが顔を赤くする。

その時、チラツとソウゴの方へと目がいく。

「では、私から一つほまれ君に祝いの言葉をプレゼントとしよう」

ウオズがほまれの優勝で祝わさせて欲しいと言い、ウオズが声を上げる。

「祝え！幾たびの苦難を乗り越え！今スケート界に星々の様に輝いたスケーター！その名も輝木ほまれ！まさに輝く流星のような演技だった！」

「ウオズ……中タイケてる祝いだね」

「光荣だね。ほまれ君」

ほまれはウオズにお礼を言うのと、今度はハリーに近づく。

「ほまれ……あのな、俺……」

ハリーが何かを言おうとしたその時……

〈チユツ！〉

『!?』

なんと、ほまれがハリーの頬にキスをしたのだ。

「これくらいなら許してくれる……」

「ほまれ……」

対するハリーは驚きのあまり、顔を赤くした。

「ありがとう。今日頑張れたのはハリーのおかげだよ」

ほまれは笑ってハリーにお礼を言った。

「こつちこそ、ええもん見せてもらったで」

ハリーも笑顔でいい演技だったと言う。

（ほまれ……あいつの気持ちに整理がついて答えが出たら、必ず……）

そんなほまれの顔を見ながら、想いのケジメの答えが出たらと、何かを心の中でハリーは呟く。

その日の夜、ソウゴがルーラーを告白した場所へと呼んだ。

「ソウゴ……」

「ルールー……伝えたい事があるんだ」

ルールーに今、覚悟を決めて、どうしても伝えたい事を、今の自分の答えを話すために……

「かくして、輝木ほまれは自分の夢と進み、ハリー君への想いをぶつける事もできた。さらに仮面ライダーハリーもギアヘリテージへと進化した。

この本のページも、いよいよあと僅かです」

次回！Re。HUGつとジオウ！

第59話 2018： 母と娘の思いと、交わる二人の思い

第59話 2018： 母と娘の思いと、交わる二人の想

い

ほまれのスケートの大会が終わり、ハリーが新たな力・ギアヘリテージを手に入れてからしばらくして数日後、さあやの出演する映画の撮影が始まった。

しかも今回は、彼女の目標である母・麗奈との共演となっている。

「薬師寺さあやさん入られまーす！」

「よろしくお願いします！」

お姫様の格好をしたさあやが撮影スタジオに入って来る。端の方では既にソウゴ達が出来ていた。

「映画の撮影って、こんな感じなんだ〜」

はなはスタジオに入り周囲を見回すと、初めて見た映画の撮影風景に目を輝かせる。そんな彼女の姿を見ながら、ほまれとルールーは手に持ったパンフレットにも目を向ける。

「薔薇の騎士と姫の夜明け……」

「中世の騎士団長と姫の物語です」

「さあやさんのお姫様、とっても楽しみなのです」

「しかもお母さんとの親子共演で、話題沸騰だもんね」

「うん。テレビでも話題になってた」

「ああ、人気間違いなしと評判だからな」

「それだけじゃないよ。今日はさあやにとつて目標が叶った瞬間だから」

今日このスタジオで『薔薇の騎士と姫の夜明け』と言う映画の撮影があり、ことりとツクヨミ、ゲイツの言う通り、さあやと麗羅の親子共演も話題になってたようだ。

「監督！」

「遂に麗羅とさあやちゃんの親子共演を撮影する日が来るなんてな」

監督を見掛けたさあやが声を掛け、監督が彼女の方へ歩きながら言う。

「お母さんと一緒にお仕事する事は、私の夢ですから」

「はぎゅー！おひめさまはぐたんもー！」

ハリーが抱き抱えるはぐたんが、自分もお姫様になりたいと駄々をこねる。

「おーおー、これだけ元気ならお芝居も頑張れるね」

「映画初出演、頑張ろなはぐたん」

そんなはぐたんを真木が持ち上げ、ハリーがメロディタンバリンを鳴らしながらはぐたんに向かって言うと、はぐたんの駄々が収まり、笑顔を浮かべる。

「真木先生? どうして?」

「赤ちゃんにもしもの事があつてはいけないからね」

さあやが何故か撮影現場に真木がいた事に疑問を浮かべるが、監督が赤ちゃんにもしもの事があつてはいけないからと理由を話す。

「それに、アンタの演技見てみたくなって」

それと真木がさあやの演技を見たいからと言う理由もあつた模様。

「薬師寺麗羅さん入られます!」

騎士の格好をした麗羅が入ると同時に、スタジオの空気が変わる。

「お母さん……」

「よろしくさあや」

さあやと向かい合つて立ち、挨拶を送る。

「緊張している?」

「うん。けど、私全力で——!」

頑張る、とさあやが言おうとしていた途中で、何者かが何らかの装置を起動させ、ノイズの混じつた異変を生じさせた。

「何や、これは……!?」

「この感じ……この前みたいな事がまた……!?」

そのままソウゴ達はノイズのような感じの空間に呑み込まれ、意識を失ってしまう。

それからしばらくして…

「ううう……」

何かに頬が当たりはなが目を開けると、そこは撮影スタジオでは無かった。

そこはゲームや本とかに出てくる、どこかファンタジーな異世界だった。

更に服装も私服では無く、勇者の格好になった。

「何じゃこりゃ?!? めちよつく……!」

「この世界、まるで台本の……」

はなの傍で倒れてた、撮影時と服装が変わって無いさあやが起き、自分の持つ台本を見て、この話と同じ世界観だと言う。

「映画の中に、入っちゃったって事!?!」

はな達はなんと、『薔薇の騎士と姫の夜明け』の世界へ入り込んでしまったようだ。

「何で映画の世界に?!?…って言うか、勇者はなちゃんだよ!」

「俺は騎士か?」

「魔法使いになってるのです!」

「吟遊詩人、かな?」

「何これ武闘家？」

「私はもしかして乗馬？」

「私は黒猫のルル。ワクワクもんだニヤ〜」

するとはなときあやの前にゲイツが騎士の姿で現れ、えみるは魔法使い、ことりは吟遊詩人、ほまれは武闘家、ツクヨミを馬術の出来る乗馬、ルールーはケット・シーとなっていた。

「おおっ！ファンタジー！はぐたん、また不思議な事した？」

「コラー！何でもはぐたんを疑うな！」

武士の格好のハリーがはぐたんのいる木製の乳母車を引きながら叫ぶ。

「子連れネズミ！」

「ネズミちやうわ！はぐたんは何もしとらん！」

「しとらん！」

「ん？ところでソウゴとウオズは？」

「私はここだよ」

はながあの二人がどこに居るのかと見渡していると、ウオズが茂みから出てきた。

「あれ？ウオズさん変わってないのです」

えみるの言う通り、ウオズの服装がいつもの姿と何も変化がなかった。おそらくウオ

ズ役目は、この話を進めるナレーターのような役目らしい。

「ところで、ソウゴは何処だ？」

「いや、私も今し方気付いて君達を見つけた」

ウオズはそう言ってから周りを見ると、ソウゴだけの姿が見えなかった事に気付く。

「ソウゴ君……」

「……」

さあやがソウゴの事を気にし、不安そうな表情を浮かべたその時、ルールーがさあやの方を向いて何かを思い出していた。

その一方で……

「ううう』…あれ？ここは？」

目を覚ましたソウゴが起き上がると、どこかの大樹の下にいた。

「ここどこだ？……あれ、服が変わっている？」

此処がどこなのかと悩んでいると、自身の服装が変わっていることに気付いた。

ぱっと見たところ、テレビなどでよく見るヨーロッパの中世くらい一般人の服装に

近い様感じた。

「みんな、何処に行ったんだろ？」

辺りを見回してもはな達はいなかったが、ソウゴはとりあえずみんなを探すために歩き出した。

「一体どこなんだろう？」

だが知らない場所である為、土地勘はおろか今居る方向すらわからなかった。

「……ルールー……」

歩いている最中、ソウゴは昨夜、ルールーに告げた事を思い返す。

『ソウゴ……』

『ルールー……伝えたい事があるんだ』

ソウゴはルールーに今、覚悟を決めてどうしても伝えたい事をルールーに言う。

『ごめん！』

するとソウゴはごめんと叫び、ルールーに頭を下げた。

『ルールー……俺は……』

『……わかっていました』

『えっ？』

『ソウゴ。貴方には、私以上な人がいる事を』

『ルールー……』

『私はソウゴの事を片思いでいいので、思うことにします。』

だから、ソウゴ。あなたは自分の気持ちを、その人に正直にぶつけて下さい』

そう言ってくれたが、ソウゴは今でも気にしていた。

何故なら彼女はソウゴの気持ちを知った時、何処か清々しい表情をしていたが、ソウゴはその顔の裏には哀しみが見えた様に感じたからだ。

それ故。あの時は悪気が無かったとはいえ、ルルーの心を傷つけたのかと――

「ソウゴ……!」

はなの声が聞こえて振り向くと、はなの他にゲイツ達がいるのが見えた。そのままはな達と合流すると、ソウゴの格好にみんなは少し驚く。

「ねえ、ソウゴ。何その格好?」

「どう見ても一般人なのです」

「ソウゴさん。だから、王様かと思いました」

「ハッハッ……」

みんなに言われ、苦笑するソウゴ。ソウゴなら王様の姿になるのだと思うのは無理はないのだが、流石に一般人の服装なのは予想外だった。

「とりあえず、ここは何処だ?」

「ニヤるほど……！ほまれの時と同じ、VR空間のようだニヤン」

「ここでルールが、自分達の今いる場所をVR空間と分析する。」

「この前ビシンがハリーを閉じ込めたアレ？」

「と言う事はクライアス社の仕業か？」

「キュアアップ・ラパパ！水晶さんによると、これは一大事なのです！」

何故か魔法界の呪文を唱えたえみるが水晶を使い、お告げを聞く。

「早くここから出ないと大変な事に……！」

「監督さん達は来て無いみたいだね」

「それにこの場所にいるのは、俺達だけのようだな」

「このままじゃ撮影が……」

「そうだそうだ！どうすれば良い!?？ 魔王!?？ ラスボス倒せば良いの!?!」

はながそう言つて剣を抜くと、何故か刀身は『伝説のカチンコ』と書かれたカチンコになつてた。

「伝説のカチンコ!?？」

「あなたが監督のようね」

「えっ!?？ 私!?？」

同じくVR空間に送られていた麗羅がはなに向かって言う。

「さあ、撮影を始めましょう」

「あ、いやちよつと……!」

「私は本気である! セットを超えた非日常、最高の映画を撮ろうぞ!」

「お母さん、役に入り切ってる……」

「ブツ飛んでるけど、アンタのお母さんは本当に女優なんだね」

「真木先生も? あ、はい」

更に僧侶の格好をした真木が現れ、さあやに向かってそう言う。

「ニャーニャーニャーニャー」

「何してるのです?」

するとえみるは、ルールが木の枝にぶら下がってニャーニャー言っている姿を見かけ、何をしているのだと問いかける。

「私の解析では、このVR空間はみんなの気持ちと連動しているニャン。きっと物語が終われば、ここから出られるニャン」

「なるほど……ね」

解析を終えたルールが、このVR空間への脱出方法を教える。

「さあ! 皆の者行こう!」

麗羅が剣を持ち上げたまま、先へ進む。

「もう良く分かんないけど——何でも出来る！監督にでもなれる！」
はなも監督として、このVR空間で撮影をする事となった。

「よーい、アクション！」

そしてはながカチンコを鳴らし、撮影を始める。

「赤子よ……怪我は無いか？」

「いけてるー！」

はぐたんを抱き抱えた麗羅が、目の前にいるさあやにそう尋ねる。

「ありがとうございます。ナイト様。わたくしは、あなたの強さに憧れる」

「姫……」

「広い世界に旅立ち、同じ目線に立った時、この泉のように湧くあなたの強さの源が、わたくしにも分かるのでしょうか」

続いてさあやは目の前にいる騎士の姿をした麗羅にそう伝えていくと、彼女らの演技を見ていた真木が感心しながら見入っていた。

「…演技上手いじゃないか」

「他にもドラマとか出てたから」

「さあや集中してる」

「生で演技するさあやさん、凄く綺麗です」

「うん！良いよ良いよ。このまま——」

ほまれとえみるがそう言っているのを横目に、映画監督となったはなもこのまま順調に事が進む事を願う。

しかし、何事もうまく行かないのが、映画と現実の違いである。

「わたくしも、新たな道を進んで行きたい。夜明けはもうすぐ——」

「薬師寺さあやーっ！」

さあやの台詞の途中で、突如木の棒と鍋の蓋を持った袴姿の一条蘭世が乱入して来た。

「ねぎー！」

「ネギじゃありません。一条蘭世でございます！」

「あの子も来てたんだ」

「誰？」

「さあやの自称ライバルです」

「自称ではありません！」

蘭世の事を知らないことりにルールーがさあやの自称ライバルと答えると、自称では無いと蘭世がツッコむ。

「あなたは姫、ライバルの私は名も無き平民とはこれいかに！」

しかし、私の方が女優としては上！だと分かせて差し上げますわ！はいこれどうぞ」

彼女はそう言うと、さあやに木の棒と鍋の蓋を差し出す。

「チエストーっ！」

蘭世の振り下ろした木の棒を、さあやが受け取った鍋の蓋で受け止める。

「さあやさん！」

「よーし良いよーっ！アクション！」

リアリティのあるモノが出来ると直感で感じたはながカチンコを鳴らしてからすぐ、二人が激しい乱闘を繰り広げる。

「魔王に操られた市民から国を守ります！わたくしの覚悟を見よ！」

「フン！お姫様は結局お姫様ですわね！」

「そんな事……ありませんわ」

「あなた、これで本気なの？」

「……っ！」

「隙あり！」

蘭世は自身が問い質した事で生じた隙を突いて木の棒を振り下ろし、さあやの持つ木の棒を地面に落とす。

「カット！一回止めよう！」

「蘭世ちゃんごめん……！もう一回よろしく……！」

「さあやがそう言つて握手しようと手を差し出すが、蘭世はそれを払う。

「何ですの今の演技は！他の事に気を取られて、芝居の世界に入り込めていない！

握手は、ライバルとするものでしょ！」

彼女はそう告げると、この場を後にした。

すると蘭世と入れ替わる様に、麗羅がさあやの下に近づく。

「さあや、芝居に心が感じられない」

「……！」

「これでは、ただの親子共演として芸能ニュースになるだけよね」

「ごめんなさい……」

「さあや……」

それから、撮影は一旦休憩に入り、みんな食事を摂り始める。

「私は、上手にお芝居出来てると思っただけだな……厳しいね……」

「まあ、芝居のプロだからな。しょうがない」

はながおにぎりを食べながら言うと、ゲイツはプロの世界はそういうもんだと言いな

がら残りのおにぎりを口の中に放り込む。

「ううん、お母さんの言う通り、心を込めないと失礼だもん」

「お芝居って、難しいんだね……」

「何か引つかかっているの？」

ツクヨミは改めてお芝居の厳しさを実感していると、ほまれはいつもよりも演技に覇気を感じることに出来ないさあやに向けて問い、彼女は地面を見ながら口を小さく開く。

「いつも不器用で嫌になる……」

「さあや……?」

「あのね、私——」

さあやが話の続きを言おうとしたその時、地面が揺れた。

「によえええええええつっ！」

「藪を突っついていたら、巨大生物出現だニヤ……計算通りだし……」

巨大生物に追いかけられるえみるとルーラーが、こちらに向かって走って来た。

慌ててはな達も逃げるが、こちらも追いかけてしまう。

「何なの〜!?」

「ほら勇者！行け行け！」

「勇者なんでしょお姉ちゃん!? 私達を守って！」

「いや、ちよつと……！」

「ゲイツ君！君は騎士だろ！行きたまえ！」

「バカを言うな！あんなのタイムマジンでないと勝てるわけないだろ！」

ほまれとことりが勇者のはなに、ウオズが騎士のゲイツに向かって背後にいる巨大生物を征伐しろと依頼するが、今の自分たちでは勝てないと言って逃げ続ける。

それに、さあやは服装の関係もあつて足が遅く、踏み潰されるのも時間の問題だった。

「さあや！」

そしてついに踏み潰されそうになったさあやを、ソウゴが庇おうとその時……

「姫えー！お守り致す！」

「ダイガンさん！」

横からソウゴとは違う服装の村人の衣装のダイガンが走りながら現れ、さあやにそう告げる。

「私が来たからには、五分で——！」

だがあつけなく潰される。しかしそのおかげで巨大生物はそのまま通り過ぎて行った。

「三秒で終わりました。新記録だニヤン」

「部長オオオっ!?」

「大丈夫!?!」

急いで建物の中へソウゴ達が連れていくと、さあやと真木がダイガンの手当てを行
う。

「ほれ、これで良し」

「医師よ、かたじけない……」

手当てを終え、全身に包帯を巻いたダイガンが真木に感謝の言葉を送る。

「ゲームだったら、回復魔法でバーンと治せるんだけどね」

「そう言うおまけは無いみたいですね」

「しかし、五分で心は癒された。あの時と同じだ」

「……?」

「あの時って……?」

ダイガンの言うあの時とは、丁度オーマの日の時の事。

自身がオシマイダーを作りみんなの前へと現れた時、ドクター・トラウムに背後から
攻撃を受けた際に、さあやがダイガンを治療したのだ。

「君は私に、新しい夢をくれた。ありがとう」

ダイガンからお礼を言ってもらうと、彼はそのまま建物内から出ていく。

「さあや、お母さんと共演するの迷ってるのかな？」

「それは無いんじゃない？」

「この日が来るのをずっと頑張っていたと言っていたはずだ」

その頃、建物の外では。近くではなとほまれとゲイツが会話をしており、さあやが自身の母親と共演するのを迷っているのかと思いきや、ほまれとゲイツはそれは無いと回答する。

「うん。お母さんと共演するのが夢って言うのは、さあやの本当の気持ちだと思うんだ」
「夢か……ほまれさん、ワールドジュニアで優勝するって夢を叶えて、どんな気分ですか？」

「一つ夢を叶えたら、また新しい夢が始まる。もっともっと、新しい世界が見たい。そんな感じ」

はながマイクを向けるようにして左手をほまれの口元に近づけて尋ねると、ほまれが答える。

「じゃあ、ゲイツさんはどうですか？何か目標は？」

今度はゲイツの口元にマイクを向けた。

「俺は……未来の救世主なる。そこで、未来の人達の力になりたいんだ。今のソウゴの

ようにな。それが、俺の夢だ」

「救世主か……ゲイツ！ほまれ！頑張つて！私達の未来は無量大。だもんね」

「ああ！」

はなが二人の目標やこれからどうするかを聞いていると、建物の中にいるさあやが真木先生に質問する。

「真木先生」

「ん？」

「先生はずっと、産婦人科のお医者さんになるのが夢だったんですか？」

さあやが真木に、産婦人科の医者になるのが夢だったのか尋ねる。

「ううん。最初は親と同じ外科を目指してたんだよ」

「えっ？」

「そうなんですか？」

だがその次に発せられた真木の言葉に、さあやの隣に座っていたソウゴも驚きながら耳を傾ける。

「研修医の時、内科、外科、色んな所を回って経験を積む内に、出会っちゃったんだよね」

「先生は強いですね。そうやってハッキリ道を決めたら、後悔する事は……」

「あるよ」

「えっ?」

「人生そんなものだよ。どんな道を選んでも、後悔はする。」

だからさ、その時その時、心に正直に生きようって私は思ってる」

「……フレフレ、私……!」

それを聞いたさあやは、真木の言葉を心の奥まで受けてから自分の気持ちを固め、自分イーエルを送った。

そして休憩を終え、撮影が再開された。さあやとはぐたんを抱き抱えた麗羅が向かい合って立つ。

「良い顔、してますわね」

「それじゃ、行こうか!アクション!」

はながカチンコを鳴らし、先程と同じシーンの撮影を再開する。

「赤子よ。怪我はないか?」

「だいじょうぶよ〜」

「ありがとうございます、騎士様。広い世界に旅立ち同じ目線に立った時、わたくしも新たな道を進んでいきたい!夜明けはもうすぐ!」

気持ちを改めて決めたさあやの演技は、先程の演技よりも見違える程上手くなってい

た。

(やつぱり、凄いや。さあや！)

「カット！オッケー！」

そして遂に、はなからOKが出た。

「今のすごく良かった！心震えた……！」

「何か吹っ切れたみたいだね」

「最初から、この芝居をやれっつてんですわ……！」

「良い芝居だったわ。この調子で頑張りなさい」

ウオズがさあやの心に迷いが消えた事を察し、蘭世が「フン！」としながらそう呟いていると、さあやは麗羅が自身の演技を褒めている様子を見据えながら、ある決意を固める。

「私……お母さんに話さなきゃいけない事があるの」

「……？」

「私、この撮影が終わったら女優を辞める」

するとさあやは麗羅に、この撮影が終わったら女優を辞める事を告げた。

「何で?!? 何で?!?」

「蘭世ちゃん……」

これを聞いた蘭世がさあやに詰め寄る。

「どう言う事なんですか!?？」

「これはその……」

「答えて下さいませ！」

蘭世が何故辞めるのかを聞こうとしたとき、その様子を見ている者がいた。

「どれだけ愛しても、人は思う通りに動かぬジレンマよ……」

森の中でやり取りを見ていたリストルがそう呟きながら、彼女達のやり取りを傍観していた。どうやら今回の騒動は、リストルが起こしたものらしい。

「何故女優を辞めるなんて言いますの!?？」

「さあや……!」

はながさあやの元へ駆け寄ろうとするが、ほまれに肩を掴まれて止められる。

「結局あなたにとって、お芝居の世界はお遊びでしたのね!」

「遊びじゃない!だからずっと……迷ってた」

「女優を辞めて……何を目指しますの?」

「お医者さん。それと……」

さあやは女優では無く、医者と言う新たな夢を見つけていた。そしてソウゴの方を見ると、蘭世もさあやが向くソウゴの方を見る。

「両方出来ませんの……？」

「私は器用じゃないから、きつと両方中途半端になつてしまう」

目に涙を溜めた蘭世が両方出来ないか尋ねるが、さあやは両方だときつと中途半端になると答える。

「そんな気持ちで、蘭世ちゃんの前に立てないよ」

「嫌になりますわ……本当に……」

溜息を吐きながら蘭世がそう言うのと、さあやの前に手を伸ばす。

「あなたが自分の夢を叶え、お医者さんになった頃——私は日本——いや、世界を代表する女優になつていると思うけど、せいぜい悔しがりなさい！」

蘭世が言つてる間にさあやが握手する。

「確かに、悔しいつて思うだろうな……」

けど……だからこそ、未来で蘭世ちゃんの前に立った時、なりたい自分になつたつて言えるように頑張る！」

その決意がさあやの衣装を変え、お姫様から真木と同じ僧侶の格好にさせた。

「真木先生と同じ格好だ……！」

「さあやのなりたい自分……」

「さあやの人生は、さあやの物」

「お母さん……」

新たな決意を固めたさあやの下に、麗羅がそう語りながら彼女に近づく。

「好きにしたら良いわ。ただ、撮影は真剣にやり切りなさい」

「はいー！」

彼女はさあやにそう告げ、この場を後にする。

……だが麗羅は崖の辺りで足を止めると、自身のスマホに映る幼い頃のさあやの画像を見つめる。

「さあやは自分の夢を見つけた。それは……嬉しい事」

「流石は名女優。心を隠すのが上手い。」

けれど私の前では、全てをさらけ出して良いのです」

背後に突如現れたりリストルがそう告げると、麗羅からトゲパワワが溢れ出した。

「発注！猛オシマイダーー！」

トゲパワワを作りジカノンロッドを振り回して魔法陣を作りだすと、そのまま麗羅を猛オシマイダーに変貌させた。

そのまま、猛オシマイダーは飛び立っていた。

「オシマイダー〜！」

「猛オシマイダーー！」

猛オシマイダーがソウゴ達の目の前に着地すると、さあやが抱き抱えていたはぐたんを素早く奪って跳び去る。

「はぐたん！」

「みんな！」

ソウゴ達はジクウドライバーを装着するとウオッチを取り出し、はな達はプリハートとミライクリスタルを取り出した。

『ジオウ！グランドジオウ！』

『ゲイツ！ゲイツマジエスティー！』

『ギンガ！』

『ハリー！ギアヘリテージ！』

「変身!!?」

「ミライクリスタル！ハートキラッと！」

ソウゴ達はドライバーを操作し、アーマーを身体に纏って仮面ライダーへと変身。はな達六人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、六人はいつもの手順を取り姿を変える。

『グランドタイム！祝え！仮面ライダー！グ・ラ・ン・ド！ジオウ！』

『マジエスティータイム！仮面ライダー！Ah！ゲイツ！マジエーサー！』

「ティー！」

『投影！ファイナリータイム！ ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファンタジー！ ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！ヘリテージタイム！導け！心に望む未来へ！ハリーギアヘリテージ！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアール！」

全員が変身を完了すると、はぐたんを連れ去ったオシマイダーを追いかけ始める。

「さあや……」

「しゃあやちがう！はぐたんよ！」

猛オシマイダーがはぐたんをさあやと勘違いしてそう言い、はぐたんが違うと告げる。

「そのままあなたの中に閉じ込めてしまいなさい」

リストルがそう告げてからすぐ、はぐたんを自身の中に閉じ込めた。

その直前にエール達が駆け付け、これを目撃する。

そこへ、仮面ライダー・リストル・クラレットフォームへと変身したリストルが現れた。

「これで不思議な赤ん坊はクライアス社の物。社長もお喜びになる」

「リストル！お前それでエエんか!?？」

「…誰だ貴様は？」

「……ッ！」

ハリーがそう告げるが、今のリストルはクライによって記憶操作されてた為、ハリーの記憶が無かった。

「誰だか知らんが、うるさいぞ！」

ジカンロッドを振り上げ攻撃すると、ハリーはジカンチェンセイバーで応戦する。

「リストルは俺が相手する！お前らははぐたんを頼む！」

「わかった！」

「そうはいかん」

ジオウ達のはぐたんを追いかけようとするが、さらにスウォルツまでもが現れた。

『デイケイド……！』

スウォルツはアナザーライドウォッチを取り出し、起動させたウォッチをそのまま自らの体内に埋め込んだ。

アナザーディケイドへと変身し、背後から灰色のカーテンが現れると、そこから二つの影が見え始める。

一人は紅の鎧を纏い、仮面ライダーキバと姿が似ている先代キバ：仮面ライダークキバ。

そしてもう一人、黒い龍騎：仮面ライダーリュウガが、ジオウ達の前に現れた。

「行け！」

アナザーディケイドの命令でダークライダー達がジオウ達に襲いかかる。

「奴らを抑える！お前らはオシマイダーを！」

ゲイツはダークキバに応戦し、ウォズはリュウガに応戦に入る。そして、残るジオウはアナザーディケイドを見つめる。

「スウォルツ……」

「決着付けるか？時見ソウゴ」

アナザーディケイドがジオウに迫って来るのを見て、ジオウはアギトのレリーフを触る。

『アギト！』

アギトの武器・フレイムセイバーを召喚するとそれを手にとり、グラウンドジオウとアナザーデイケイドの戦いの火蓋が切られた。

「はあああああー！」

まず最初にジオウはフレイムセイバーを持ち、そのままアナザーデイケイドへと突っ込んでいく。だがジオウが振り上げたフレイムセイバーを、アナザーデイケイドは腕でそれを受け止める。

「はあああー！」

ジオウはフレイムセイバーが受け止められると、すぐに反撃に出る為に攻撃に移る。しかし、アナザーデイケイドに有効的な一撃が与えられなかった。

「くうー！」

『ウィザード！ビルド！』

フレイムセイバーを投げ捨て、ウィザードとビルドのレリーフを触ると、『2012』『2017』という年号と共に黄金のゲートが現れる。

『チヨイネ！スペシャルサイコー！』

『フルフルマッチブレイク！』

そこから現れたウィザード・ウオータードラゴン、ビルド・タンクタンクフォームがアナザーデイケイドに攻撃し、続いてウィザードの尻尾による攻撃が決まり、ビルドの

フルボトルバスターの一撃がアナザーデイケイドを吹き飛ばす。

「これで……」

ジオウ達三人が集結し、アナザーデイケイドを見るとアナザーデイケイドは軽々と起き上がった。

「その程度で、俺がやれると思ったのか?」

アナザーデイケイドは対して効いている様子はなかった。

「さて……」

またしても、灰色のカーテンを呼び出すと、そこから現れたのは複眼やアーマーの色がレモンイエローで、頭部にヘッドホンを思わせるパーツが装着されたライダー、仮面ライダーデューク。

胸部にコブラの意匠があり、マント・ブーツを纏い、ビルドの敵だったブラッドスターと何処か似たような印象を見せるライダー、仮面ライダーブラッドが現れた。

その二体は一気にジオウが召喚した、ウィザードとビルドをソニックアローとブラッドの光弾により消滅させられた。

「くうー!」

アナザーデイケイドに形成逆転となり、召喚された二体のダークライダーの相手をさせられ、ジオウのが不利な状況にだった。

「プリキュアミライブレス！」

一方で、エールがプリキュアミライブレスを具現化させて光線を飛ばし、猛オシマイダーが両手を広げて防ぐ。

「はぐたーん！」

隙を突いて跳びかかるも反撃を受け、吹き飛ばもすぐさま体勢を整えて着地する。

しかし、次の攻撃でアンジュ以外が猛オシマイダーの攻撃で吹き飛ばされる。

残ったアンジュが猛オシマイダーの目を見ると、そこには産まれて間もない自分と麗羅の姿が映ってたのを見えた。

「お母さん……！」

「えっ?！」

「エール、エトワール、私の背中を押して。お母さんと話して来る！」

「オツケー！」

「フレフレ! さあや！」

アンジュはエールとエトワールに背中を押して欲しいと頼み、二人がこれを聞き入れる。

エールとエトワールがアンジュの手首を掴み、アンジュを猛オシマイダーに向けて投げ飛ばす。

「ふん！」

だがその時、アナザーデイケイドが猛オシマイダーの前に現れ、時間停止を発動させてアンジュの動きを止めた。

「ふっ！」

全身を一回転させてカカト落としを叩き込むと、すぐさま時を動かす。

「きゃああああっ！」

アンジュが勢いよく落下し、地面に叩き付けられた。

「アンジュ！」

「!?？」

「そうは行かん」

「スウォルツ……！」

エールがアナザーデイケイドを睨み付けると、アンジュが立ち上がり、アナザーデイケイドを真剣な眼差しで見つめる。

「そこをどいて！私はお母さんに、話さなきゃいけない事があるの！」

アナザーデイケイドにアンジュは攻撃し、退かせようとする。

しかしアナザーデイケイドは軽々と避け、カウンターパンチでアンジュを吹き飛ばす。

「どうしたキュアアンジュ？ 終わりか？」

「やめろ！」

ジオウがダークライダーを振り切るとアンジュの前へと現れ、アナザーデイケイドの攻撃から腕を構えてアンジュを守る。

「さあや！ 早く！」

「うん！」

ジオウがアナザーデイケイドを抑えているその隙に、アンジュが猛オシマイダーへ飛び込む。

「させるか！」

「ぐわああ！」

ジオウが盾となった事で、アンジュをオシマイダーの下に行かせることに成功した。しかし、ブランドジオウの変身解除となりソウゴの姿へと戻る。

「はあ……はあ……」

「自ら盾になるとは、王とは思えん行動だな」

「人を庇うのに、王がどうこうなんて関係ない！」

アナザーデイケイドが肩で息をしているソウゴを見ながらそう嘲笑うと、ソウゴは必死に立ち上がろうとする。

「俺は……俺は、誰かが救おうとしているなら、一緒になつて必死に救う！それが俺の信じる王の道だから！」

ソウゴが自分の思いを叫んだその時、懐から光を見せた。

そこから取り出すと、そのウオッチはジオウミステリーフレアのブランクウオッチだった。

「えっ?」

ブランクウオッチはそのまま姿を変え、再びライドウオッチへとなろうした。

「これ!?」

そのまま、ジオウミステリーウオッチへと戻り再びウオッチに力が戻った。

「……ウオッチが……俺の思いに！」

ソウゴはジオウミステリーフレアウオッチを構える。

『ジオウ！ジオウミステリー！』

ジオウとジオウミステリーのウオッチを両側のスロットへ差し込み、ソウゴはドライバーのロックを解除し、ドライバーを回す。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

ジオウへ戻ると、前の方から後ろに羽があり、その手に二本剣を持ったアーマーが現

れ、そのままジオウの体に纏われる。

『アーマータイム！歴史の全てを知る王！仮面ライダージオウミステリ〜！フ・レ・ア〜！』

その姿は間違いなく、幾度なくソウゴの思いに応え続けた未知のフォーム…ジオウミステリーフレアフォームだった。

「なんだそれは……」

ジオウミステリーフレアフォームを見て、流星のアナザーデイケイドも少し動揺が見えた。

「行くぞ！スウォルツ！」

「……っ！！？」

並ならぬ覇気を感じたアナザーデイケイドは、ジオウに向けて光弾を放つ。

「ふっ！！？」

その時、放たれた光弾はジオウに当たる直前に消えた。

「何！！？」

此れこそが、ジオウミステリーフレア的能力。攻撃を未来へ飛ばすことで、アナザーデイケイドの攻撃を未来へ飛ばした。そしてジオウの腕に装着されたフレアドラゴンバスターが、アナザーデイケイドに直撃した。

「ぬうおおー！」

予想以上の威力に驚愕しながらアナザーデイケイドは吹き飛ばされる。そして、ジオウは背中を翼を広げ宙へと浮かぶ。

「はあく……はああー！」

そして、デューク、ブラッドを上空からフレアドラゴンバスターを光のエネルギー波を放つて二体にぶつけ、彼らを消滅させる。

その頃、アンジュが猛オシマイダーの中に入ると、いつの間にか変身が解けてたさあやが猛オシマイダーの中を見回す。

そこには自分の様々な記録が一带にあり、その中心で麗羅がはぐたんを見守るようにして見ていた。

周囲の記憶を見たさあやは、思わず目に涙を溜める。

「お母さん……」

「さあや……さあや……」

麗羅は目の前のはぐたんを勘違いしたまま、さあやの名を呼ぶ。

「初めて抱き締めた時の小ささ……この子の為なら何でも出来ると思ってた。愛おしい娘の巣立ち……」

なのに、どうして私、応援出来ないの……？」

そう呟いて涙を流し、はぐたんを抱き締める。

矢張り、麗羅はさあやの夢を言葉では応援していたが、心の中では寂しく思っていたらしい。

「さあやが……お母さんが憧れだと言ってくれた事、嬉しかった……」

「どしたの？ いたいいたい？」

「お母さん……！」

「さあ……や……？」

はぐたんは自身を抱きしめている女性を慰めていると、さあやが麗羅に駆け寄り、目の前で止まってから彼女の目から零れ落ちた涙を拭う。

「私の今までの夢は、お母さんが見ている世界を見たい。だった。その世界に触れる事が出来たから、新しい夢が見つかりました。

私はお医者さんになって、みんなを癒したい。笑顔にしたい。

お母さんが、お芝居で大勢の人を幸せにしているように」

さあやは、目の前で泣いている母親に向かって、自身が医者になりたいと思つた原点オリジンを語る。

「大きく……なつたわね……」

そして、麗羅は目の前に居る本物の娘の思いを聞き、薄っすらと目を開きながらも彼女を強く見据えながら笑みを浮かべる。

「それとね、もう一つあるの」

「……………」

「私の……………大事な人の、支えになりたいの」

さあやはその人の事を頭で思い浮かべる。

「その子は、いつもみんなの為に頑張つて、小さな子の命だつて助ける為に必死になつて、危険を顧みない。」

その人は強くて優しく、みんなから信頼されている人。

そんな彼を、一生守りたい……………」

ずっと支えて、一緒に生きたい」

その事を話すと、麗羅はその人が誰なのかわかったような気がした。

「お母さん……………産んでくれてありがとう……………」

最後にさあやはその場でしゃがみ、麗羅を抱き締めてそう言った。

さあやと麗羅が涙を流した直後、三人を中心に光が広がった。

「みんな！」

「だいじょうぶだよ！」

はぐたんを抱き抱えたアンジュが戻ってきた。

「アンジュ!?」

「お待たせ。ソウゴ君」

ジオウはアンジュとはぐたんが無事に戻ってきた事が嬉しく思いながら、安堵する。

「キュアアンジュ……貴様……」

「あんたの相手は俺だ！」

はぐたんを抱いたアンジュを見て、アナザーデイケイドが襲いかかろうとしたその時、ジオウがアナザーデイケイドに応戦する。

一方のゲイツとウオズは、アナザーデイケイドが呼んだダークライダーと決着を付けようとする。

『ADVENT!』

リュウガが契約モンスター『ドラグブロッカー』を召喚し、ウオズに黒い炎を攻撃する。

ウオズはその攻撃を転びながら避けながら躲し、ドライバーからギンガミライドウォッチを外すと、ウォッチのダイヤルを回す。

『ワクセイ！』

ギンガミライドウォッチの顔が変わり、再びウォッチをドライバーに装填すると、レバーを引く。

『水金地火木土天海！宇宙にやこんなにあるんかい！ワクワク！ワクセイ！ワクセイ！ギンガワクセイ！』

ギンガファイナリーのままウォズの複眼が青色へと変わり、ワクセイフォームへと変わったウォズは、そのままレバーを引く。

『ファイナリービヨンド ザ タイム！』

ドラグブラツカーの頭上から小宇宙のようなものを出現させ、そこからエネルギー球がいくつも生成されていく。

『水金地火木土天海エクスプロージョン！』

そのままエネルギー球が雨のように降り注ぎ、ドラグブラツカーを地面へ倒れる。

『イクサ！ナイト！』

一方のゲイツはイクサの武器・イクサカリバーとナイトのモンスター、ダークウイングを出現させた。

イクサカリバーでダークキバに剣撃を繰り返し、次々と決め吹き飛ばすと、ダークウイングの音波により動きを封じた。

「行くぞウオズ！」

「ああ！」

『フイニツシユタイム！』

『ファイナリービヨンド ザ タイム！』

二人がドライバーを操作し高く飛び上がる。

『エル・サルバトーレタイムバースト！』

『超ギンガエクスプロージョン！』

「はあああああ！」

二人は同時にライダーキックを放ち、ダークキバ、リユウガを倒すことに成功した。

「行くよ！」

「[[[[メモリアルクロック！マザーハート！]]]]」

ミライパッドが緑のハートの加わったメモリアルキュアロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「[[[[ミライパッド！オーブン！]]]]」

右腕を真上のメモリアルキュアロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エネルギー達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「「「「 HUGつとプリキュア！今ここに！」「」」」」

「ワン・フォー・オール！」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」

「プリー、キュアー！」

「明日に！」

「エネルギー！」

マザーを召喚してメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集める。

「「「「ゴー、ファイ！みんなでトウモロロー！」「」」」」

手を掲げ、マザーの力を解放して光線を放つ。『みんなでトウモロロー』を放つ。命中したオシマイダーがハートに包み込まれ、浄化された。

（フレ、フレ、さあや……）

みんなでトウモロローが命中した猛オシマイダーがハートに包み込まれ、浄化されて麗羅に戻った。

「新たな夢の前にも、困難は広がると言うのに……」

ハリーと戦闘を続けてたリストルが距離を取りそう眩くと、瞬間移動して姿を消す。

「リストル……!」

ハリーはその時、リストルは何故こんなにも変わってしまったんだと思い悩む。

『フィニッシュタイム!』

アナザーデイケイドと戦っていたジオウミステリーは二つのウォッチを押し、ドライブを回して必殺技を放とうとしていた。

『ジオウミステリ〜タイムブ레이크!』

「おりやアアアアア!!」

ジオウはミステリアスウィングを広げると、脚に特殊エネルギー『エピタフレア』を凝縮させ、翼から炎を噴射させながらアナザーデイケイドに向かってキックを放つ。

それを見たアナザーデイケイドは咄嗟にオーロラカーテンを使ってガードを行うが、ジオウの攻撃は予想以上に凄まじく、オーロラカーテン越しでもその威力は変わらないまま衝撃波として伝わって来た。

「チッ!ぬうお!」

「スウォルツ!もうあんた達の負けだ」

ジオウは膝をついたアナザーデイケイドに、もう負けだと言うと……

「フツフツ……時見ソウゴ、お前は後悔する。ここで俺を倒さなかった事をな」

「えっ？」

「そして、ライダーの歴史は俺が壊す！その時のお前の姿を楽しみにしてるよ。アツハツハツハツハツハツ！」

大笑いをしてアナザーデイケイドは撤退して行く。それを見てジオウはウオッチを外した。

「あれ？ブランクにならない？」

だがジオウミステリーフレアウオッチは、一度使えばまたブランクに戻るはずが、元のブランクウオッチに戻る様子はなかった。

「ライダーが壊れる……？」

そしてソウゴは、スウォルツの言った最後の言葉が気になって仕方なかった。

そして翌日、改めて撮影が開始された。

「広い世界に旅立ち、同じ目線に立った時——」

「これからも、あなたの前には困難が待ち受けるでしょう」

「台本と違う……？」

「いい。そのままカメラ回せ」

麗羅が台本に無い台詞を言うが、監督はそのままカメラを回すよう告げる。

「けれど、今の気持ちを忘れないで。夢を、明日を、まっすぐ見る瞳があなたの強さなのです。」

「はい。わたくしは、新たな道を進んで行きます。夜明けは今……!」

「カット! 良い芝居だった! 麗羅もさあやちゃんも!」

監督がそう告げると、二人は微笑みを浮かべたのだった。

撮影が終わると、麗羅に撮影場の裏の方へと呼ばれたソウゴが、どうして此処に呼ばれたのかと疑問に思いながらやって来た。

「何ですか? 話って?」

「ソウゴ君。君に聞きたい事があるの」

麗羅はソウゴに聞きたいことがあると問う。

「あなたは、さあやをどう思っているの?」

「えっ?」

いきなり彼女の事をどう思っているのかと聞かれたソウゴは、少し驚く。

「それは……」

そう聞かれた時、ソウゴの頭の中からは、いくつもの言葉が溢れてきた——
クラスメイト……違う。

友達、幼馴染……そうじゃない。

仲間、プリキュア……どれでもない。

俺は……さあやを——

「俺は……さあやに……」

俺の……王妃になって欲しいです」

王妃にしたい。それはつまり、さあやに対して好意を持っていた事の証明。

「それは、さあやでないとダメなの？」

「さあやじゃないとダメなんだ……」

さあやは……俺が諦めた夢を思い出させてくれて、もう一度、自分の叶えたい夢に向かって歩き出させてくれた。だから……」

ソウゴは真剣な眼差しで、さあやでないといけないと主張する。

「君は、さあやを守るの……？」

「……守ります。俺は王様にだから！好きな子は絶対に守る！」

「……ソウゴ君の気持ちは本物のようね」

「麗羅さん……もしかして」

自分の覚悟が本物かどうか試していたのだとソウゴは察すると、麗羅は笑みを浮かべながら口を開く。

「さあやの事、お願いね。ソウゴ君」

「うん」

そして同じ頃、さあやがルーラーに声を掛けられていた。

「さあや、あなたに聞きたいことがあります」

「何？」

「あなたはソウゴが好きなのですか？」

「ツツ!!?」

さあやは突然、ソウゴが好きと聞かれ一気に赤面した。

「私は先日、ソウゴに好きと告白しました」

「……………えっ?」

だが次の言葉に、さあやは赤かった顔を蒼白にしてルーラーを見つめる。

「ですが、私よりもソウゴには大事な人がいるんです。それは、あなたなのかもしれませ
ん」

しかしソウゴが自分の事を大事だとルーラーに言われ、さあやは更に驚いた。

「さあや、あなたにとってソウゴとは何ですか？」

「私にとってのソウゴ君……」

……私にとってソウゴ君とは——

幼馴染……仮面ライダー……魔王……王様……

否、全て違う。私にとってのソウゴ君は——

「私は……ソウゴ君の事が……好き。誰よりも好き……」

「幼馴染だからですか？」

「ううん。私がソウゴ君が好きなのは幼馴染……だから、王様だからじゃない。

彼はいつも優しく、みんなを守る為にいつも必死だった……」

彼はいつも、人を助ける為なら自分が危険を顧みない行動に、オーマジオウの未来を変えようと必死に前に進んでいる。

「だから、そんなソウゴ君を一生支えたい！」

さあやはソウゴを支えたいと強く叫ぶ。その想いにルールは目を閉じた。

「さあやのソウゴへ対する思いは、本物のようですね」

「ルール……」

それからしばらくして、ソウゴときあやがはな達に合流して、ソウゴ達は撮影所を後

にする。

その間、ソウゴとさあやが妙に目を逸らしていた。

「どうした？何を落ち着かないでいる」

「えっ？いや別に？」

「しかし、麗羅さん、カツコええお母さんやったな」

ソウゴがゲイツにそう誤魔化していると、ハリーはさあやのお母さんをカツコいいと褒めていた。

「ありがとう。みんな！」

「麗羅さんの言葉、嬉しかったね！」

「フレフレさあや。私も頑張——」

「いかん！クリスマスセールに、五分遅れてしまう——」

ほまれが言っていた途中でダイガンが遮るようにしてそう言い、慌ててこの場から走り去った。

「そっか、もうすぐクリスマスか」

「クリスマスか……」

「サンタさん、今年も来てくれるかな？」

「サンタさんとは何ですニヤン？」

「えっと、サンタさんと言うのは……」

「良い子にしてた子供にプレゼントを届ける人、だよな？」

ルールーとえみる、ツクヨミがサンタの事を話していた、その時…

「は〜ぎゅ〜！」

はぐたんが突然全身を赤く光らせ、空を指差して叫ぶ。

すると空から、何かが降って来た。

『えええええええつ！！？』

落ちて来たのはなんと、サンタクロースだった。

「サンタさん！！？」

「本物の！！？」

「みんなでクリスマス！イエー！」

サンタクロースが降って来た事に驚くはな達を尻目に、はぐたんがそう言ってウインクした。

「サンタさん！私、今年かなり良い子にしてたので、プレゼントを——！」

「ぶえーつくし！」

はなが早速サンタ近付いてプレゼントをせがむと、サンタが声を上げてくしやみを出した。

「だ、大丈夫でつか？」

「すまぬ……」

「ひよつとして、風邪引いてるんですか？」

ツクヨミが今のサンタの様子を見て、風邪をひいているのかと聞く。

「ああ……このままでは、クリスマスが中止に……」

「中止……!?？」

「めちよつく……!」

「マジで……?？」

「かくして、我が魔王とさあや君が互いを意識し合った矢先、はぐたんによつて連れ出されたサンタから、クリスマスが中止になるかもしれないと聞いた我が魔王達は、只々驚くしか出来なかつたそうな。

……しかし、私はそれよりもスウォルツの言っていた事の方が心配でなりません」

次回! Re. HUGつとジオウ!

第60話 2018 : クリスマスの危機とスウォルツの計画!! 消えるウォッチ

第60話 2018： クリスマスの危機とスウォルツの計画!? 消えるウオツチ

はぐたんの力によって風邪をひいたサンタクロースと遭遇したソウゴ達はそのまま、彼をビューティーハリーへと招いた。

「どうぞ。暖かいミルクです」

ウオズがサンタクロースに暖かいミルクの入ったカップを渡し、ほまれは何故風邪をひいてしまったのか聞いた。

「どんなトラブルですか？」

「トナカイの看病をする内に、儂もトナカイ風邪に……」

「トナカイ風邪ってあるんですね……」

サンタはトナカイが風邪を引き、自分も風邪を拗らせてしまった事を話す。

「このままでは……」

「クリスマス中止……」

「ヤダヤダヤダ！ 私達に出来る事、手伝わせて下さい！」

「俺もだよ！ みんなが楽しみにしているクリスマスを悲しませたくない！ 王様としてみ

んなの為に俺も手伝いたい！」

ソウゴとはながサンタクロースの為に、そしてみんなのクリスマスのために手伝いたいとサンタクロースに頼む。

「しかし、トナカイはまだ寝込んでおるし、僕も……」

「どうしよう……」

しかしプレゼントを運ぶトナカイが寝込んでいると聞き、はなもそれはヤバイと思う。

「そうだ！タイムマジーンだ！」

ソウゴがタイムマジーンは使えないかと閃く。

「なるほど！タイムマジーンなら飛び回っていける！」

はなもソウゴの考えに共感した。だが……

「だが、どうやってプレゼントを渡す。」

操縦中は、姿勢制御の為にレバーをずっと握らなければならないぞ」

「それにプレゼントの量の事も考えると、運ぶ量にも限界があるね」

「そんな広く無いし、二台しかないんや。下手したら、配り切れずに朝を迎える可能性もあるやで……」

「そんな……」

「ゲイツとウォズ、ハリーはタイムマジンでは全部を運び切るのは不可能だと話していた。クリスマス本番まで後2日……」

「では、どうすれば……」

「呼ばれて無いけどジャジャジャジャーン！」

「ルールがそう言ったその時、突如えみるとルールの背後からトラウムがよきつと出て来た。」

「うわっ！」

「トラウム、いつの間に……！」

「これは、ドクター・トラウムの出番じゃないのかね？」

「はたとソウゴが驚いていると、トラウムはルールに睨まれながら自分の出番ではないかと主張をする。」

「呼んで無いので帰って下さい」

「待つて待つて！良い物持つて来たから！」

「……？」

一同が外に出て、トラウムが帽子からスイッチを出す。

「今週の、ビックリドンドンメカ〜！ピコつとね」

スイッチを押すと、トナカイ型のロボットとソリが出て来た。

「メカトナカイ！四人乗り〜！」

「可愛い〜！」

「どこが……!?？」

「さあやさんって、どこかズレてる所ありますよね…」

さあやが目を輝かせてそう言い、ほまれとことりがツッコむ。

「…と言う訳で、サンタ見習いとしてよろしくお願ひします」

いつの間にか緑色のサンタの格好になってたトラウムがサンタに向かってそう言い、頭を下げる。

「うむ。皆で子供達の夢を届けよう」

「頑張ります！」

やけに乗り気なトラウムに、ルールーは疑惑の目を向けた。

「まずは、プレゼントのラッピングだね」

はながミライクリスタル・ローズをミライパッドの上部にセットする。

「ミライパッド、オープン！」

画面から光が放たれ、ドアが開く。

「お仕事スイッチ、オン！」

画家になったはな達がプレゼントのラッピングを行う。

「ほう。大したもんじゃ」

「絵を描くの、好きなんです。頭の中にあるイケてるものが、目の前に広がるのが楽しい！めっちゃイケてる！」

「任せて！俺達が最高のクリスマスを迎えますよ！」

サンタクロースに変わりソウゴ達がクリスマスを盛り上げることになった頃、クライアス社の社長室で花畑の風景を描くクライの元に、ジェロスとオーラが現れる。

「理想のキングダム……I want you to teach me. そこに辿り着けば、私のハートにも安らぎが……」

「君は僕を求めているない」

ジェロスは何処か必死そうな表情でクライにそう語りかけるが、クライはそれだけを告げるとジェロスを無視して絵を描き続ける。

「もう、時間が無い……早く結果を出さなくては……」

時よ止まれ。まだ私に美しさがある内に……！」

「何としても、スウォルツを……」

永遠の美しさを求めるジェロス。

自身を用無しと捨てたスウォルツを見返す為に行動するオーラ。そんな二人の心からは欲望のエネルギーとも言える、闇の様に深いトゲパワワが溢れていた。

はぐくみ市のコンビニで、ジンジンとタクミがクリスマスケーキを売っていた。

「冷えて来たな……」

余りの寒さに、二人が両手に息を吐きかける。

「あの人、きちんと暖かくしてるかな？」

「あの人、冷え性なのに薄着だから……」

二人はクライアス社を抜けても、ジェロスの事を心配していた。

野乃家では、クリスマス用に準備していることりとウールがいた。

「……」

「ウール？どうかしたの？」

「別に……」

何やらボーっとしている様子のウールが気になったことりはどうしたのかと思ひ尋

ねるが、本人は何でもないと返す。

しかし、ことりは何故彼がぼうつとしていたのかを察した。

「もしかして、オーラさん？」

「……」

一度は自分を殺そうとしたオーラではあったが、ことりに凶星を突かれながらもウルは、それでも心の何処かでは彼女のことを気になっていた。

同じ頃、作業中のルールーに、トラウムが欲しいプレゼントがないか尋ねる。

「ルールーちゃん！クリスマスに欲しいプレゼントは無いのかな？」

「ありません」

「いやいやあるでしょ！」

「ありません。あつたとしてもあなたには言いません」

「グサツ……！」

ルールーから無慈悲にそう言われ、トラウムは凹んで俯く。

一方で、ビューティーハリーの裏の外にあるタイムマジーンでは、ソウゴの白いタイムマジーンにソウゴとはな、ツクヨミがクリスマス時のために、タイムマジーンの中を

飾り付けし、外観をクリスマス仕様へとアレンジをしていた。

「いいね。なんか、タイムマジンが生まれ変わったみたい！」

「でしょ！でしょ！」

操縦室の中を飾り付けしながら、二人が楽しそうな雰囲気を出していると、そんな二人にツクヨミが話しかける。

「ねえ、ソウゴ、はな。クリスマスってそんなに大切な日の？」

ツクヨミはクリスマスが何故そんなに楽しみだと尋ねると、ソウゴはその理由を考え始める。

「うくん……まあ、一年に一度しかないからかな？」

「それだけなの？」

イマイチ反応の薄いツクヨミを見て、クリスマスの経験があまりないからなのかと思つた二人は、クリスマスの特別性を語り始める。

「一年に一回しかないから、良いんだよ。」

この日の為に色んな人達が、みんなに喜んで貰える為に準備してたんだと思う」

「その人達のお手伝いができるなんて、めちよつく嬉しいじゃん！」

「みんなが……」

ツクヨミは過去を振り返りながら、スウォルツの言つた事を思い出す。

『俺達はこの世界とは別の世界からやってきた。そして時間を操る力は、我が王家の継承されたのみ引き継がれてきた』

『王家?』

『王家では兄である私が継ぐのがふさわしい。だが・・・次の王に選ばれたのは、妹のお前だった』

このまま皆とクリスマスを迎えても、自分は笑顔でいられるのかと心の中にある不安を抱えながら思い悩んでいると、彼女はある決意を固める。

「ソウゴーはな！お願いがあるの！」

そしてツクヨミは、ソウゴとはなにもお願いがあると頼む。

ビューティーハリーのベランダにいる士が、誰かに連絡を入れていた。

「ああ、これはツクヨミに関わることだ……じゃあ、頼むな」

最後にそれだけ言うのと、士は携帯を閉じて懐に仕舞う。

「どうした?何か用か?」

その後ろに居たソウゴ、はな、ツクヨミの三人にどうしたのだと聞くと、ツクヨミが

士の前に出て来る。

「お願いがあるの。あの場所へ連れて行って！」

「あの場所？」

「私の家に……」

「ツクヨミの家……？」

始めにあの場所と聞き、ソウゴとはなは何処のことなのか最初はわからなかったが、次にツクヨミの家と聞いた二人は驚いた。

「知りたいの。私とスウォルツが本当に兄弟なのか、家の事や、なにより自分の事を……」

「どうしてもか？」

士にどうしても知りたいのかと聞かれるが、それでも彼女の決意は揺らぐ事なく、ツクヨミは頷く。

「みんなが、辛い事から逃げずに向き合っていた……」

オーマジオウの運命を変えようとするソウゴ。

はなは過去の記憶と向き合い、前へ進んだ。

さあや、ほまれ、ゲイツは自分自身と向き合い、なりたい目標が生まれた。

えみるとルールー、ハリーにことり達だって、辛い事から逃げなかった。

ツクヨミはみんながそれぞれ辛い事を向き合っているのを見て、自分も過去と向き合う必要があると感じていた。

「だから、私も自分の過去に向き合いたいの!」

それ故に、ツクヨミは真剣な眼差しで土に向けて叫ぶ。

「わかった……だが、今日は遅い。明日、俺のところへ来い。そこで全てを見せよう。

但し……その気があるならな」

ツクヨミの言葉を聞いた土はそれだけを伝えるところのまま部屋を出て行き、ソウゴ達の前から去る。

「門矢士……」

ツクヨミは歩いて行く門矢士を見つめる。

そして、翌日。

クリスマスが明日に控える為に、ゲイツとウォズはHUGMANでクリスマス用の飾り付け用の道具やクリスマスツリーに必要な飾りなどを買っていた。

「一通り集まったか?」

「ああ。とりあえず、このメモ通りのものは揃った筈だ」

二人はそのままレジへと向かって買い物袋に入れると、HUGMANから出て行く。

「町もクリスマスマスの準備で忙しいようだね」

「…まあ、俺達の場合はサンタクロースの代理だから責任重大だな」

「まあ、君は常に鬼のサンタクロースようだがね」

「なんだと!?」

ウオズが仮面ライダーゲイツの姿はサンタクロースの姿だと茶化すと、ゲイツはウオズに飛びかかり、二人がじゃれあいながら暴れ出す。

その時、彼らの耳にいきなり銃声のような音が聞こえた。

「なんだ?」

ゲイツとウオズはそこから聞こえた方へと走り出した。

「あれは……確か?」

「クローンスマッシュとガーディアンだね……」

聞こえた場所では近くの人達が逃げ惑っており。人々が逃げる方向の逆の方角を見てみると、そこで暴れていたのは仮面ライダービルドの敵であった、人間の手によって作られた怪人・クローンスマッシュと人型のロボットであるガーディアンだった。

「どう言う事だ。あれはビルドの時代の敵……もういない筈」

「わからないが、野放しには出来ない」

ゲイツはビルドライドウオッチの影響で仮面ライダービルドの歴史は無くなった事

を思い出し、では何故目の前にビルドの敵だった筈の怪人が居るのだと疑問に思いながらも、一先ずウォズと共にスマツシュとガーディアンを倒すためにドライバーを取り出す。

「行くぞ!」

ゲイツとウォズはジクウドライバーとビヨンドライバーを腰へ装着した。

『ゲイツ!』

『ウォズ!』

そしてゲイツライドウォッチとウォズミライドウォッチを装填し、ドライバーを引く。

『アクシオン!』

「変身!」

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

『投影! フューチャータイム! スゴイ! ジダイ! ミライ! 仮面ライダーウォズ! ウォズ!』

二人が仮面ライダーへと変身すると、クローンスマツシュとガーディアンに応戦しつつ、近くの人を避難させる。

しかし数が多く、今の状態が長く続かない。

「一気にケリをつけるぞ！」

「ああ！」

『ゲイツリバイブ！剛烈！』

『ギンガ！』

ゲイツリバイブウオッチとギンガウオッチを装填し、ゲイツとウオズはフォームチェンジする。

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ剛烈！剛烈！』

『投影！ファイナリータイム！ ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファンタジー！ ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

ゲイツリバイブ剛烈、ギンガファイナリーへとになると、二人はクローンスマッシュとガーディアンを圧倒する程の強さを見せて次々と破壊して行く。

「はああ！」

ジカンジャクローでガーディアンに向けてに繰りし、ゲイツリバイブの剛烈のパワーが圧倒していた。

『のこ切斬！』

ゲイツはジカンジャクローの鋸を回し、さらに斬撃を飛ばしガーディアンを全て倒した。

「手取り早く行くこう」

ウォズはドライバーからギンガミライドウォッチを外すと、ウォッチのダイヤルを回す。

『タイヨウ!』

ギンガミライドウォッチの顔が変わり、再びウォッチをドライバーに装填しながらレバーを引く。

『灼熱バーニング! 激熱ファイティング! ヘイヨー! タイヨウ! ギンガタイヨウ!』

ウォズの複眼が赤色い『タイヨウ』の文字へと変わった、タイヨウフォームへと変わった。

『ファイナリービヨンド ザ タイム! バーニングサンクスプローション!』

ウォズがクローンスマツシユへ灼熱の火焰を放ち、全て燃えつかせて爆発させて破壊した。

「一体何が起きている……」

「考えるられるとしたら、スウォルツか……」

しかし、アナザーワールドとはあまり関係ないように思えるが……」

二人が口論していたその時、突如として二人の体が重く感じた。

「……これは……重加速だ。まさか……」

その頃、クジゴジ堂でも……

「!?？」

順一郎が台座に装填されている、ソウゴが集めたライダー達のライドウォッチをたまに見ると、彼はそれに驚いた。

「ソウゴ君……」

そこに置かれているライドウォッチの一つ……ビルドウォッチにヒビが入っており、色を無くしていた。だがそれはビルドだけじゃなく、他のライダーのライドウォッチにも同じような現象が起きていた。

その影響なのか、ゲイツとウォズが溢れ出たロイミュードを応戦していたその時、いきなり二人の足元に銃撃のような攻撃が放たれた。

「なんだ？」

ゲイツ達が振り返ると、そこにはバイクのパーツがバラバラにくつついたような、見ようには骸骨のようにもみえる外見をしており、仮面ライダーのような複眼を持ちながらも、右目はバイクのパーツの一部らしき物で隠している人物が現れた。

「またダークライダーか？」

「違う」

ゲイツに仮面ライダーと聞かれると、その人物は直ぐに否定した。

「仮面ライダーと一緒にするな。俺は死神、仮面ライダーなど凌駕する！」

自らを死神と名乗る敵は『ブレイクガンナー』と呼ばれる拳銃を2人に向け、ゲイツとウオズに戦いを挑んだ。

そして少し時が遡り、ゲイツ達の前に敵が現れる前に戻る：

「来たか」

ビューティーハリーから離れた近くの公園に土がおり。そこにソウゴ、はな、ツクヨミの三人が現れた。

「見たくもない真実を知るかもしれないぞ？」

「それでも私達は見なくちゃいけない」

ツクヨミは見なければならぬと意思を述べる。

「うん。一緒に行こうツクヨミ！」

「何も知らずに何かを選ぶ事なんて、できるわけないだろう」

「はな、ソウゴ……」

「いいだろう。ただし、2つだけ心しておけ。1つ、お前達が何かを選べるとは限らない

……2つ、バナナは遠足のおやつには入らない」

「「えっ?」」

最後の方は少し意味がわからなかったが、そんなソウゴ達をスルーすると士がオーロラカーテンを出し、その向こうへ向かおうとする。

「待つて——!」

「ことり?」

だがカーテンを潜ろうとしたその時、いきなりことりが現れ、ソウゴ達と一緒にカーテンへ飛び込んだ。

カーテンを潜り終わると、ソウゴ達はツクヨミのいた世界へとやってきた。

「あいたたたたた……」

「ことりちゃん。なんで……」

「私も、ツクヨミお姉ちゃんの力になりたい……」

ことりはかつてプリキュアになりたい想いを聴いてくれたツクヨミに、今度は自分が力になってあげたいと思った。

だから無理矢理にでも彼女の助けになる為に、こつそりとソウゴ達に追いかけていたと語る。

「(イイ)が……」

「ツクヨミのいた世界……」

「ここは2062年の世界。ツクヨミがまだ幼い頃の世界だ」

再びここへ来ると、ツクヨミの手が震えていた。

「ツクヨミ。行こう」

一緒に行こうとツクヨミの手をはなが握った。

「ありがとう。はな」

そのまま彼らは、あそこへ……ツクヨミが小さい頃に住んでいた、あのお屋敷へ向かうのだった。

2018年、現代。

「はああー！」

「ふうー！」

ゲイツとウオズが必死にロイミュード、スマツシュと戦っていた。しかし、数の多さにそろそろ疲れ見え出し、消耗していた。

『チューン！チェイサーコブラ！』

そこへ、死神がシフトカーのような形のコブラの装飾が付いた銀色のもの『コブラバ イラルコア』をブレイクガンナーに装備し、特殊な液体金属によって作られた、コブラ

を模したムチ・テイルウィツパーをゲイツとウオズに繰り出した。

「うわあああああ!」

怪人達ともに巻き込まれ、避ける暇などなかったゲイツとウオズはその攻撃で変身解除へと追い込まれてしまった。

「くう……」

「終わりだ!」

さらにムチを振り上げ、ゲイツとウオズに襲い掛かる。

「フレ!フレ!ハートフェザー!」

突如としてアンジュが現れ、死神の攻撃からゲイツとウオズを守った。

「何!?」

「スターストラッシュ!」

「マシエリポップ!」

「アムールロックンロール!」

更にエトワール、マシエリ、アムールの三人が現れると、死神に向けて技を放ち、死神からゲイツとウオズを離れた。

「ゲイツ君!ウオズさん!」

「みんな。すまん」

「おかげで助かったよ！」

「二人の帰りが遅いから気になってね」

「無事でなによりです」

二人が起き上がると、死神がゲイツ達の前へ現れて変身を解いた。

「死神から逃げられると思うか？人間」

「君だつて人間じゃないか」

ウオズが目の前にいる人物を見て、明らかに人間じゃないかと指摘するが、それを聞いた死神は鼻で笑つて否定する。

「人間？俺はロイミュード。クリム・スタインベルトに作られた機械生命体だ」

「クリムだと？」

「クリムって確か……」

「ドライブの仲間か……」

それを聞いたゲイツ達は、以前のアナザードライブの事件で会ったベルトさんこと、クリム・スタインベルト。仮面ライダードライブの生みの親である彼の事を思い出す。

「……ならば、知ってるな？泊進之介。仮面ライダードライブ……それと詩島剛。仮面ライダーマツハを！」

ゲイツは泊進之介の名、そしてソウゴから進之介の話聞いた時に出て来た、彼の仲

間違った仮面ライダーマツハ、詩島剛の名を言う。

「そんなもの達は知らん。俺の世界に、仮面ライダーはいない!」

死神は二人の名前は知らないと言ってゲイツに殴りかかると、咄嗟にゲイツがその拳を受け止める。

「矛盾してるぞ」

「矛盾だと?」

「何故俺たちを襲う?」

「お前達が仮面ライダーだからだ!」

「お前は仮面ライダーがいないと言ったな。

なら、いないはずの仮面ライダーが、何故敵になる!??」

「それは……」

ゲイツに自身の事実と理念の矛盾を指された死神が言葉に詰まっていると、ゲイツは更に追求を行う。

「本当のお前は知ってるんだ。仮面ライダーを……友の存在をな!」

「友だと……剛?」

再び剛の名前が出ると、死神は頭を押しえて、いくつもの記憶がフラッシュバックのように脳裏に過ぎった時、自分の名前を叫ぶ一人の男が現れた……

『チエイスー……!!?』

その時自分は、金色のドライブ……ゴールドドライブからその男を身を挺して守っていた。

自分が命に代えてでも守ろうとした、そいつの名は……

「誰だ……お前は……誰なんだ」

だがそれでも、そいつの名前と顔、そして思い出は思い出せず。死神は頭を抑え、必死に何かを掴もうとその場で悶え苦しんでいた。

「どうしたのですか?」

「記憶が戻ろうしている、と言うことか……」

「おそらく、あの方の記憶回路に異常があると思います」

「……」

ルールーが今の彼が苦しんでいる原因を推測している横で、そんな苦しそうな姿を見せる死神に——いや、ドライブ達の仲間である“チエイス”の姿に、ゲイツは何かを感じていた。

2062年。

ツクヨミのいた世界へ訪れたソウゴ達は、ツクヨミが子供の頃に住んでいたお屋敷に
来ていた。

「ここが、ツクヨミの家……」

「大きい〜」

初めて見たソウゴとはなはお屋敷を見て、ツクヨミはお嬢様なのだなと思った。その
ままソウゴ達はお屋敷に入り、階段を駆け上がる。

「また介入者!?!?」

二階に着くとそこには、前回ツクヨミとことりが会った、幼き日のツクヨミがいた。

「ツクヨミ!?!?」

幼き日のツクヨミはソウゴ達に冷たい眼差しを向けていたが、ソウゴは目の前にいる
幼き日のツクヨミと、自身の隣に居る今のツクヨミを比較していた。

「小さい頃からおてんばだったんだね、ツクヨミ」

「そうみたい。ねえ、アルピナ、お願い。話を聞いて」

「あなたは?」

(アルピナ……それがツクヨミの本当の名前……)

はながアルピナと聞き、それがツクヨミの本当の名前なんだと知ると、ツクヨミは若

い頃の自分に近付いて語りかける。

「私はあなた、7年後の。でも、記憶がないの。介入なんてしない。ただ聞きたいことがあるだけ」

「この世界に……何が起こるの?」

「この世界に……?」

ツクヨミとソウゴにこれから世界に起こる現象について問い掛けるが、この質問に対してアルピナは知らない様子だった。

「…教えてあげようか」

『スウォルツ?』

そこに同じく、今より若すぎるような容姿をしたスウォルツが現れた。それを見たツクヨミはフェイスフォンXをスウォルツに向ける。

「この世界はもうすぐ消えてしまうんだ」

だが次にスウォルツの口から言い出した言葉に、ソウゴ達は驚いた。

「でも、僕が救う」

「救う? どうするんだ?」

「他の世界を滅ぼすんだよ、全部ね」

「全部って……」

「どうやって救うのだと言うソウゴの問いに対し、自分の世界以外は全て滅ぼすと宣言したスウォルツに、ソウゴ達はさらに驚愕した。

「この世には、平行世界と呼ばれるものがたくさんある。

「ただ、この世界だけ滅ぶなど理不尽だ。

「ならば、他の世界を全て滅ぼしてやるまで。

「そうすれば、生き残るのはこの世界だ」

「自分たちだけが生き残ればいいなんて、そんなこと許されるわけないでしょ!」

「ツクヨミが銃を放とう思ったその時、スウォルツの体が彼らの見覚えのある姿へと変わった。

「人の道を説くか? 子供に銃を向けるお前が?」

「スウォルツがそう言ったら、ツクヨミの目に映っていた彼の姿が見覚えのある姿から元の子供に戻った。

「今のは……?」

「ひとつ教えてよ。他の世界を全部滅ぼすって、どうするの?」

「困惑するツクヨミの隣で、ソウゴはそもそもどうやって世界を滅ぼすのだと聞くと、スウォルツはなんて事はないと言わんばかりに語り出す。

「簡単だよ。平行世界の柱となる存在……仮面ライダーの歴史を壊し、力を一つに纏め

る」

「仮面ライダーの力を……」

「一つに纏める……」

「歴史を壊す……?」

スウォルトツの口から言い出した仮面ライダーの力を一つに纏めてライダーの歴史を壊すという方法が上がるが、はなとことり、ソウゴにはそれがどう言う事なのか理解出来なかつた。

「ある世界に19人の『仮面ライダー』と呼ばれる者達がいる。

その世界は平行世界の様々な柱となっている。けど、この世界はその柱にはない。

だから、その世界にいる19人の仮面ライダーの力を一つに纏め、纏まったその時ライダー達の歴史を壊し、纏まった力を奪う!

そうすれば、仮面ライダーの存在は無くなり、世界の柱のバランスは崩れ、ライダーの力は僕だけのものだ!

そうなれば、柱に入っていないこの世界だけが生き残る」

ライダー達を一つに纏めて、そのライダーの歴史を破壊し、纏めたライダーの力を奪う。スウォルトツがそんな事を考えていたのだと知り、彼らは驚愕するしか出来なかつた。

「……そのために……」

「意見はいらない。行こう、アルピナ」

スウォルツはアルピナを連れて、ソウゴ達から去ろうとする。

「でも……もし君より、妹のほうが力が強かったらどうする？」

ソウゴのそんなふとした言葉に、スウォルツが足を止めた。

「アルピナが？」

「もし、次の後継者が君じゃなくて妹だったら？」

「君は、この世界を救いたいんだよね。妹が強かったら、助けになるよね？」

兄弟なら助けになるのだと、ソウゴとはなはスウォルツに問う。しかし……

「違う！断じて違う！そんな事になったら、俺は妹の記憶を奪って追放してやる！」

「ツ!?……どうして……?」

「力が強い者が王になる。王になるのは俺だ！」

スウォルツから返った言葉は、王になるのが妹なら追放するという叫び声だった。そ

うして、ソウゴ達を外へ放り出した。

「「うわあああああああ！」」

放り出されたソウゴ達はお屋敷の庭の芝の上で転がる。

「アルピナ、僕に楯突くのは許さない」

スウォルツがソウゴ達を追って現れると、ツクヨミはファイズフォンXをスウォルツへ向ける。

「ダメだ、ツクヨミ！」

「それだけは、ツクヨミがやったらダメ！」

「彼が世界を滅ぼすの。今のうちに彼を倒せば、多くの人が救われる」

ソウゴとはなの制止を聞かず、ツクヨミはスウォルツに向けて銃撃する為にトリガーを弾こうとする。

「……………」

しかし、ツクヨミは子供の姿のスウォルツに引き金を引く事が出来なかった。

「やはり、お前は僕の大事な妹。だが……俺の行く手に立ちはだかるなら、消えてもらうまでだ」

スウォルツは躊躇いもなく、手から作り出したエネルギーの塊をツクヨミに向けて放とうする。

「!?」

だがツクヨミの前に現れたのは、なんと門矢士だった。

「くっ!?」

士はツクヨミの盾となり、エネルギー塊を受け止めようとする。

「ぐわあああああ!」

「門矢さん!?」

しかし受け止めきれず、吹き飛ばされた士にツクヨミが駆け寄る。

「いらぬ邪魔を……」

スウォルツが今度こそ止めを刺そうと迫つてくると、そこへオーロラカーテンが出現した。

「はあ!」

現れたのは海東大樹だった。海東はネオデイエンドライバーでスウォルツに銃撃し、彼から士達を離れた。

「ちっ!?」

潮時だと思いうスウォルツはここから逃げていく。スウォルツがいなくなるのを見ると、海東は倒れている士の方を向く。

「門矢さん!? しっかり!」

「どうして?」

ツクヨミは何故自分を庇ったのかと士に問う。すると士は力を振り絞り、ツクヨミの肩を掴む。

「ツクヨミ……お前を失うわけにはいかない……」

それだけを言い残し、士は腕を下ろし目を閉じた。

「そんな……」

「門矢さん……」

「何で、私を庇ったの……」

何故、自分を助けたのか。ツクヨミがその答えを聞く事をなく、士は息を引き取った。何も答えを言わずに。

そこへ、海東が近寄ってきた。

「本人の口から聞くしかなさそうだね」

「本人って……」

「………お宝をこんな所で使いたくはなかったが……」

海東はポケットから、以前クライアス社に協力したお礼でスウォルツから報酬としてもらったアナザージオウⅡのウォッチを出した。

「それ……」

『ジオウ……Ⅱ！』

アナザーライドウォッチを起動すると、士の体に時計のようなエフェクトが現れ、その時計の針が逆回転を始める。

それと合わせるように、門矢士の体が巻き戻しするように元の状態に戻る。

「……海東」

ウォツチの効力が終わると、士が目を覚ました。

「やあ、士。また一回死んだんだ。せめてナマコは食べられるようになったかい？」

「お前が時間を戻したのか？」

「でも、このお宝には……うっ……副作用があつてね……う、うわあああ……ッ！」

するといきなりウォツチの変身能力が起動し、黒いオーラの様なものが海東の体を覆いながら、アナザージオウⅡに変身してしまった。

『ジオウ……Ⅱ！』

「……最後のお宝をもらうよ。士の命っていうね！」

アナザージオウⅡへと変身した海東は、我を失ったように士に襲い掛かり始める。

「自我までアナザーライダーに飲み込まれたか……俺のウォツチを渡せ！」

アナザージオウⅡの攻撃を避け続けると、士がソウゴに向けて自分が渡したデイケイドのウォツチを渡せと言う。

「えっ、これ？」

ソウゴは言われた通りに士にウォツチを投げ渡し、そのまま士はデイケイドウォツチを起動する。

『デイケイド・デイケイド！』

ウオッチが起動すると、力が失って消えた筈のネオデイクイドライダーが出現した。そのまま士はデイクイドのライダーカードを取り出した。

「変身！」

そしてカードを腰に装着したドライバーに差し込み、デイクイアインサイドハンドルを押し戻した。

『KAMEN RIDER! DECADE!』

出現した影が一人となり数枚のプレートが現れ、その頭部を縦に貫きはめ込まれた黒とマゼンタの仮面ライダー、世界の破壊者・仮面ライダーデイクイドとなった。

「はぁぁー！」

デイクイドへと変身した士はそのままアナザージオウⅡへと応戦し、オーロラカーテンを出現させる。

それにソウゴ達も潜り、元の時代へと戻ってきた。

「……………士、ライダーの力は取られたはずだろ？」

「…そんな事もあるうかと、あらかじめ俺の力の半分だけウオッチに託しておいたのさ！」

デイクイドウオッチに自分の力を半分託し、その残り半分の力を解放して、デイクイドへ再び変身を完了した事を語る。

「……さすが士だ。でも、半分の力じゃ僕には勝てない!」

彼の言う通り、アナザージオウⅡの方がディケイドの力を確かに少し力は上の様子だった。だが、ディケイドに動揺は見られない。

「それはどうかな?」

ディケイドは腰にあるライドブッカーから一枚のカードを取り出した。そのカードはジオウの絵が描かれており、そのままネオディケイドライバーへ差し込む。

『KAMEN RIDER ZI-O! 仮面ライダージオウ!』

背後からジオウへと変身するエフェクトが出現すると共にディケイドの姿が変わり、仮面ライダーディケイドから仮面ライダージオウの初期フォームへ変身した。

「何それ……?」

「ジオウにはジオウの力だ。お前らも来い!」

ディケイドジオウがアナザージオウⅡへと向かうと、ソウゴ、はな、ことりもジクウドライバーとプリハートを取り出した。

『ジオウ・グランドジオウ!』

ドライバーを装着したソウゴはジオウウォッチとグランドジオウウォッチを装填し、ドライバーのロックを解除すると、地中から巨大な黄金の時計台と歴代ライダーの石像が出現。表層が剥がれ、仮面ライダーたちの姿が現れる。

『へポオオーン！パアアアア！』アドベント！COMPLETE！ターンアップ！
へピーイン！』CHANGE BEETLE！ソードフォーム！ウエイクアップ！カメ
ンライド！……』

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

『グラントタイム！祝え！仮面ライダー！グ・ラ・ン・ド！ジオウ！』

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアーラ！」

アナザージオウⅡ相手にディケイドジオウとグラントジオウ、エール、アーラ四人が
かりで挑む。

「はああ！」

「ヤアアア！」

アーラのパンチが決まるとエールがキックで体勢を崩した。

『キバ！』

「うおおおお！」

そこへジオウはザンバットソードを召喚し、斬撃を繰り出してアナザージオウⅡを
吹き飛ばした。

『フォーゼー!』

次にバリズンソードを召喚し、アナザージオウIIにさらに追い討ちを掛ける。

「アーラ!」

「はい!リコーダー・ステッキ!ミライクリスタル!」

ジオウの掛け声でリコーダーステッキを召喚したアーラは、ミライクリスタル・ライムグリーンをセツトした。

「心のトゲトゲ、吹き飛んであげろ!」

ボタンを押して吹くと、無数の緑色の小鳥を生み出していく。

「プリキュア!バードアタック!」

無数の小鳥をアナザージオウIIに向けて放ち、アナザージオウIIを包みハート型を作った。そのまま鳥達が花火のように爆発した。

「うわああああああ!!?」

そのままアナザージオウIIは撃破され、変身解除されると、海東の体内からアナザージオウIIウォッチが摘出され、ウォッチは破壊された。

「僕のお宝が……」

海東のアナザージオウIIウォッチが破壊され少し落ち込んだ様子を見て、デイケイドジオウは元のデイケイドの姿へと戻り、海東に近づく。

「全く、世話を焼かせる。ほら」

デイケイドは手を差し出すが、海東はそれを拒否し自力で起きる。

「士……感謝の言葉は口に出したまえ」

とりあえずはひと段落した思ったが……

「うっ……!!?」

「ソウゴ?」

突如としてジオウの様子が変わり、膝をつくとグランドジオウの変身が強制的に解けてしまった。

「ソウゴさん!!? 大丈夫ですか?」

「俺は大丈夫……でも、なんで……」

ソウゴが自身の心配をすることりに大丈夫だと言ったその時、ジクウドライバーから外れたグランドジオウライドウォッチが綻びはじめた。

「ウォッチが……」

「グランドジオウウォッチが……」

そのままグランドジオウウォッチは綻びを続け、消滅してしまった。

「そんな……」

「ウォッチが消えた……」

突如として、グランドジオウライドウォッチが消えたことにソウゴ達は困惑してしま
う。

この現象こそが、スウォルツの計画が進んでいる……
即ち、ライダーの歴史の破壊が始まった事を意味していた。

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第61話 2068： 光輝く、美しき仮面ライダー！

第61話 2068： 光輝く、美しき仮面ライダー！

ツクヨミとスウォルツの関係を知るべく、ソウゴ、はな、ツクヨミ、こことりの四人は、再びツクヨミが幼い日に暮らしていたお屋敷へ門矢士と共に向かった。

そこでスウォルツの計画を知り、彼の邪な願望がツクヨミに向けられた時、士は盾となり深傷を負う。海東大樹により命は助かったが、彼はアナザージオウⅡへと変貌。力を取り戻したデイケイドとグランドジオウの力で何とか乗り切ったが…

「グランドジオウオウオッチが……消えた……」

アナザージオウⅡを倒した後、ジオウはいきなりグランドジオウから強制変身解除され、ジクウドライバーから外れたグランドジオウオウオッチが消滅したのだ。

「どうして、グランドジオウオウオッチが……」

「おそらく、スウォルツの言うライダーの歴史の破壊がはじまったんだろ……あれが証拠だ」

デイケイドが周りを指でさし、それを見たソウゴ達は目を広げて驚愕した。

そこには、NEWMールイマジン、マスカレードドーパント、屑ヤミー、グール、インベス、バグスターウイルス、スマッシュ、ガーディアン等と、歴代ライダー達が今ま

で倒してきた怪人達が次々と現れたのだ。

「そんな……」

「慌てるな。ふうん！」

「デイケイドがオーロラカーテンを出現させて怪人達の方へと向けてやると、怪人達はそれに飲み込まれ姿を消した。」

「いない？」

「とりあえず、これで時間は稼げるだろ」

「さつて、教えてくれないかな？ 君が今回、この世界で何をしようとしていたのかを」

すると海東は笑みを浮かべながら、デイケイドに今回の狙いを聞こうとする。

「……………はあ〜」

それを聞いたデイケイドは、深くため息を吐く。

「教えてよ。ライダー世界とか世界の柱って何？」

ソウゴもデイケイドに迫り、ライダー世界について聞こうとする。

その一方で、死神チエイサーの下から去ったゲイツ達にも異変が起こった。

「なっ!?？」

ゲイツが持っていたゲイツマジエスティウオッチが突如として光り出すと、そのままグランドジオウオッチのように消滅してしまったのだ。

「ゲイツマジエスティウオッチが……」

「何で消えたの!?」

「理解不能です……こんな事が起こるなんて……」

「あの、ゲイツさんのゲイツマジエスティが消えたのなら……もしかして、時見先輩のグランドジオウも……」

「まさか、スウォルツが……」

「はぎゅ……」

みんなが不安になると、ハリーが抱いているはぐたんも心配する表情を浮かべた。その時、さあやのプリハートに連絡が入る。

「みんな！はなから……門矢さんから話があるから、ビューティーハリーへ来てって……」

「門矢士が……」

ゲイツ達も門矢士の話を聞く為に、ビューティーハリーへと向かう。

その頃、クジゴジ堂に置かれているライドウオッチを順一郎が眺めていた。

台座に置かれているウォッチは全て色を失くし、ヒビが入っていて破壊されている。そんなウォッチを見ていた順一郎は、とても悲しい表情を浮かべていた。

「……よしー」

すると順一郎はそのウォッチを見て、何かを決意した。

ソウゴ達はビューティーハリーに集まり、みんなが集まったのを確認すると士はライダーの世界からその世界の仕組みまで、全てを話そうとした。

「では、話して貰おうかな。ライダー世界についてを……」

ウオズにソウゴ達に話してあげると促されながらも、士はそれをスルーして語り始める。

「……スウォルツも言ったが、この世界とは違う世界……全ての平行世界のバランスを保つ世界……ライダーの世界がある」

「ライダーの世界……」

「そこには様々な歴史を作った仮面ライダーがいる……」

そのライダーの世界に影響して、他の世界にも仮面ライダーが誕生している。

そして、その世界にいるライダーが中心となるライダー世界の柱に乗るきっかけとなっている」

「世界の柱って？」

「まあだいたい、天秤にボールが乗る時、バランスを同じにするようなものだ」

士はビューティーハリーに置いてある天秤台を見せて、わかりやすく説明する。

「ライダー世界は、全ての平行世界のバランスを保つ世界。」

そのバランスを保つ柱に入る為には、その世界にも仮面ライダーが必要だ」

皿にボールを置いてバランスが安定させる。すると士は、乗せたボールを取る。

「だが、スウォルツの世界には仮面ライダーがない。」

ライダーのいない世界にはライダー世界の柱に乗れない。

だから……奴は世界の中心となる世界。ライダー世界を破壊しようとしている」

傾いた天秤台を見せ、ライダーがないが為にスウォルツの世界が安定していない事を表しながら説明を続ける。

「その為に、ライダー世界の18人の仮面ライダーの力を一つに纏める為の逸材をあらゆる平行世界を回り、計画の逸材となる存在を探す為に平行世界を巡り出した。標的は2000年代生まれの子供……」

それ選ばれたのが……お前だ」

士はスウォルツの標的に選んだのはソウゴだと指をさして告げた。

「えっ?」

「えっ？ソウゴが？」

「ソウゴ君が選ばれた……」

ソウゴが選ばれたのかと言われても、真実を知らないはな達にはわからなかった。

その事実はある日、ソウゴが起こした力を目撃したツクヨミと士しか知らないが為に。

「お前の身に起こった、あの2009年の事故……あれは、スウォルツが起こしたものだ」

「ツ!?？」

「あの事故って？それにソウゴさんのお父さんとお母さんの事故って？」

ソウゴの両親と幼い日のソウゴの身に起こった事故について知らないことに、ツクヨミがその時の説明を行う。

「2009年……その時、ソウゴとソウゴ両親はバスで出掛けていたの……その場に現れたのが……」

「スウォルツか……」

「うん」

以前、ゲイツとツクヨミはソウゴと過川飛流との過去を探る際に、ツクヨミがそのバスに乗っていた事を思い出した。

「待つてください。あの事故つて……」

「もしかして、事故が偶然じゃなくて……」

「必然だったのか……」

「ねえ、それが本当なら。スウォルツがバス乗っていたソウゴの両親や他の人達を……」

「……」

ほまれの問いに対して、士は黙つてはいたが、此処にいる皆は口に言わなくてもわかつた。

その事故では、ソウゴと過川飛流しか無事な人はいなかつた。

それをやった実行犯がスウォルツならば、スウォルツは敢えて多くの人の命を奪つた事になる。

「何だよそれ……じゃあ、スウォルツが……俺の父さんと母さんを……俺だけじゃなくて……他の子やその子の両親を……俺を見つける為に……俺の所為……」

バスの事故の真実を聞かされたソウゴの体が震え出し、息が荒く乱れ出した。

「ソウゴ……」

今のソウゴに感じるのは、後悔、憤怒、絶望。

その全ての感情と共に、自分の両親とあのバスに乗っていた人達を、自分の所為で巻き込んでしまったのだと、嫌でも実感してしまった。

「…………ごめん…………俺…………」

彼は黙ったまま一人、ビューティーハリーから出ていった。

「ソウゴ君…………」

「ソウゴ…………」

「ソウギョ…………」

さあやとルルー、はぐたんの三人は、深く思い詰めた表情で出ていくのを心配そうに見つめていた。

「でも、なんですか？なんで、子供の時の時見先輩が…………選ばれたのですか？」

「あの、何で子供を対象にしていたんですか？」

だが今までの話を聞いていたえみるところりは、とある疑問——何故、スウォルツは2000年代生まれの子供を対象にしているのかと士に尋ねる。

「奴が求めていたのは、イメージ力の強い子供…………」

「イメージ…………」

「人は窮地に入ると自分でも知らない力が目覚める。

そう言うのは全てそいつ持つイメージ力が力となっている…………中でも、子供の持つイメージ力は大人よりも強い…………

そして、スウォルツは見つけた奴にセルフイメージのように自分は王様になると、そ

う言う強いイメージ力を持たせるようにした……」

要するに、ずっとソウゴが事故の日から見続けた夢も、スウォルツによるものでソウゴに王様になるとセルフイメージをずっと囁いていた事になる。

「しかし、どうやってライダーの世界を滅ぼすというんだい？」

「スウォルツはライダー世界を滅ぼすため、ライダーの世界とこの世界を融合させようとしている」

「そんなことどうやって？」

「あの魔王がその片棒を担いできたんだぞ」

『え……？』

「スウォルツは魔王のガキに、時空を操る力を……ライダーの世界にいるライダーを、こちらの世界に引き寄せた。

ライダー達を引き寄せたのは奴だ」

「そんな……！」

「そしてお前たちがライダー世界の18人仮面ライダーから、すべてのウオッチを集めた時、世界の融合が加速を始めた」

「私達が戦ってきたのって……スウォルツを手伝っていたようなものってこと？」

「それほど敵の陰謀の根が深かった……というだけだ」

「それで、どうしようというんだ？」

「このまま、融合すれば……二つ世界は崩壊する……」

「そうなれば全ての平行世界の柱であるライダー世界は他の世界にも影響し、バランスが悪くなり滅びが始まる……」

「そうなれば、スウォルツのいた世界だけ残る」

「そんな事はさせない！絶対にスウォルツを止める！ここにいるみんなとなら……何でも出来る！」

「そうだね。やろうはな！」

「うん！お姉ちゃん！私もやる！」

「私達はヒーローなのです！世界だつてなんだつて救うのです！」

「スウォルツを倒せば、もしかしたらどうにかなるかもしれない！」

「私も！このままスウォルツの好きにはさせないよ！」

「俺もだ。例えライダーの力が全て無くなっても、俺も最後まで戦う！」

「俺もやで！」

「はぎゅ〜！」

はなを筆頭に、さあや、ことり、えみる、ルールー、ほまれ、ゲイツ、ハリー、はぐたん。みんなが世界を守る為に戦うことを決めた。

「だから絶対にみんなでクリスマスを迎えよう！」

はなが言うとうみんなが頷いた。その時、さあやはビューティーハリーから出ていたソウゴの事が気になった。

「ソウゴ君……」

場所が変わり、ソウゴは一人はぐくみ市を町の中を一人で歩いていった。

辺りにはクリスマス準備や、家族がクリスマスケーキやプレゼントなど一緒に買っている姿が見えていた。

「パ。パ。ママ……！ありがとう……！」

「良い子だった……褒美だよ」

「さあ、家に帰ってクリスマスパーティーをしよう」

とても楽しそうな笑顔の雰囲気な家族の姿を見かけて、ソウゴはとても羨ましく思った。

『ソウゴ……』

「っ！」

その光景を見た時、ソウゴは幼い日の事を思い出す。

『メリ〜クリスマス〜！』

『ありがとう。パパママ〜！』

家族と過ごしたクリスマスパーティー…

物心がついてからクリスマスを両親と過ごしたのは、この一度切りしかない。

何故なら、あの事故でソウゴは両親を失ったからだ。

「……」

そのままソウゴはクジゴジ堂の道を歩き続け、しばらくしてからクジゴジ堂へと到着した。

「ただいま……」

クジゴジ堂へ戻るが、中には叔父の順一郎の姿がなかった。

「叔父さんは……」

ソウゴが叔父を探していると、テーブルに置き手紙らしきものがあつた。

『クリスマスのご馳走の材料を買いに行きます。by 順一郎』

それを読むとソウゴは階段の方へ向かい、そこに座り込む。

するとソウゴは、懐からジオウウオッチを取り出して見つめる。

『少年。お前は生まれながらの王。お前には王となり、世界を破滅から救う使命がある』
ずつとソウゴを、同じ夢の中で言い続けた男と同じ台詞…

あの時スウォルツが言い放った言葉を思い出したソウゴは、あの時からスウォルツに

ずっと利用されていたのだと、実感させられてしまう。

「俺は……俺を……見つける為に……」

そしてスウォルツの計画の為に、何人者の人達が巻き込まれたのだと思い込む。

「ソウゴ君……」

後悔の沼に放っていたソウゴが顔を上げるとそこには、さあやが立っていた。

顔を上げたソウゴの目からは、涙が溢れていた。

「ソウゴ君……涙が……」

「えっ?……あつ」

ソウゴは自分の目から涙が出ているのに気付いて、彼女から隠すようにとすぐに拭う。

「ソウゴ君……」

「大丈夫だよ……俺、俺……王様だから……泣くわけには……」

こんな所で泣くわけにはいかないと言う。

しかし、さあやはそんなソウゴの表情が、ずっと自分の心の奥底で押し留めていたものが、はじけ出そうとしているかのように見えていた。

「泣いていいよ」

そんな姿を見ていたさあやはソウゴの手を握って、泣いて良いんだよと、目の前で苦

しそくに俯いていた、愛しき彼に向けて告げた。

「さあや……俺……俺……」

「ソウゴ君は一人じゃない。私達がいる」

「ッ！」

その一言でソウゴの目から、次々と涙が溢れ出し始める。

「うっ、ううっ……うわあああ……っっ！」

溜まりに溜まった全ての感情が、まるで心から吹き出るかのように、多くの涙をこぼした。

両親の失った辛さと悔しさ、スウォルツが自分を見つけるまでに、他の人達まで巻き込んでいた。

その全てに懺悔したい気持ちを抱きながら、彼は只々泣き続けた。

それからビューティーハリーを出た士は、はぐくみ市を景色の見える場所で見据えていた。

「どうした……」

士の背後からソウゴが現れた。

「……スウォルツの計画を止めたい。力を貸して……」

士にスウォルツの計画を止める為、力を貸して欲しいと頼む。

「お前は……何故スウォルツを倒す？世界の為か……」

それとも、両親の仇を取るか……」

士の問いに、ソウゴは答えられなかった。

父と母の仇を、スウォルツの計画に多くの人の犠牲者から選ばれたからには、ソウゴにはスウォルツを倒す責任がある。

それは本人が一番わかっているけど、それで答えは出なかった。

「このまま、ただ指をくわえて見ているとスウォルツの計画通り、ライダーの世界とこの世界が融合し、二つの世界は崩壊する」

「そんな事はさせない」

ソウゴは首を横に振り、そんなことはさせないと叫ぶ。

「見つけて見せる。この世界もライダーの世界も、ツクヨミの世界も、両方救える方法があるって！」

「本気か……」

「無理かもしれない……でも、諦めたくない！」

両方の世界を救う。普通に考えれば不可能かもしれない。それでソウゴは諦めなくなかった。世界を救えるなら足掻きたいと。

「……………方法はある……」

「本当!?？」

「だが…………お前のリスクが高い…………それでもやるか？世界の運命を賭けることになるぞ」

「うん…………」

「よし…………なら、作戦を伝える」

士はソウゴにだけ、両方を救えるかもしれない最後の方法を話した。

…………しばらくして、士は最後の方法とも言える作戦をソウゴに話した。

「これが、俺の考えた作戦だ。どうだ？」

「わかった。やってみるよ」

ソウゴは士の作戦を了承した。しかし、この作戦には僅かながら穴がある。

「だが、お前は…………」

「ここに戻れないかもしれない、でしょ？」

この作戦には半分の確率でソウゴが戻れないと警告する。不確定ではあり、危険なりスクがあるからだ。

「ふつ…………いいって。ベルトを受け取った時から覚悟はできてる。いや…………もしかしたら生まれた時から…………」

「お前……」

ソウゴは、なんとなく気付いていたのかもしいない。

あの日、ウオズからジクウドライバーを受け取った日から、以前からこの世界を守る為に、こんな日が来るのではないと。

——そして、今がその時だ。

(……矢張り、コイツもあの魔王と同じ目をしている……これなら、俺の真の作戦も大丈夫だな……)

すると士は、そんなソウゴを見ながら笑みを浮かべる。

クジゴジ堂でソウゴと別れたさあやは、自分の部屋である物を探してた。

「あった!」

探し物を見つけた所に足音が聞こえて振り向くと、麗羅が部屋に入ってきた。

「あれ? 今日撮影でしょ?」

「うん。これからね。だからちよつと早くなっちゃうけど——クリスマスプレゼント」

そう言うと彼女は、クリスマスプレゼントをさあやに差し出す。

ラッピングを外して箱を開けると、ペンが入ってた。

「わあ……………」

「台本に監督からのアドバイスを書き留める時に使ってたの。さあやにあげる」
「ありがとう！嬉しい！」

そのペンは、かつて麗羅が使ってた物だった。

「さあやが女優として登場人物の心を理解しようと思った経験は、きつと医者になった時にも役立つハズよ」

「お母さん……………」

「きつとさあやは、患者さんの心に寄りそえるお医者さんになれる」

「メリークリスマス。ありがとう……………」

麗羅がさあやを抱き締め、さあやも麗羅を抱き締めた。

「それに……………もしかしたら、いい奥さんにもなれるかもね」

「っ!?？ お、お母さん!!?？」

「フフツ……………」

だが最後の一言で、さあやは一気に顔を赤くした。

ビューティーハリーでは。みんないよいよと準備が完了しそうな様子だ。

「ゲイツ。タイムマジーンは両方とも準備出来たわ」

外では、二台のタイムマジーンのパティには『Mer ry Xmas!』とロゴが貼られ、サンタクロースとトナカイの姿も描かれている、クリスマス使用へと改良された。「そうか……大丈夫なのか?」

「えっ?」

「自分の兄貴が世界を滅ぼそうとしているって聞いたし、それにやっぱり複雑かなって……」

スウォルツが兄と言われ、彼のやろうとしている計画も知ってからツクヨミは、何処か様子が変ではないかとゲイツとほまれは気にしていた。

「……大丈夫よ……私、ソウゴの方のタイムマジーンの所に行くね」

ツクヨミはゲイツとほまれから離れた。その様子をウオズがジツと観察していた。

「ウオズさん。ツクヨミがどうかしたの?」

そこへ、はなとことりがやってきた。

「いや、門矢士に言われて彼女を護衛しろってね」

門矢士にスウォルツがツクヨミを狙い、襲いに来るかもしれないと言われ、見とくように言われた為にウオズは彼女を監視していたのである。

「どうして、ツクヨミお姉ちゃんが……」

「いとり?」

「だって、兄弟とか姉妹とか助け合うものでしょ！」

なのに、あのスウォルツって人……どうして自分が次の後継者じゃないからって理由だけで、ツクヨミお姉ちゃんから記憶を奪ったの！わかんないよ……」

ことりはかつて、はながシャインヒル学園にいた頃を思い浮かべ。姉は心に深い傷を負い辛かった時期があった時に、助けてあげる事ができなかつた事に罪悪感を浮かべた。

だから、今はプリキュアとして姉であるはなやみんなの力となる為に戦っている。

「ことり君。確かに兄弟とは助け合うものだ。

しかし……スウォルツのように自分が常に上にいる存在、そう言う自尊心や野心の強い男程、下である存在に超えられるのが我慢ならないのだよ」

「そんなの……わかんないよ」

しばらくして、さあやが赤い球体に付いたプラグを、トナカイロボの鼻先のコンセントに差し込んで赤く光らせる。

「これで、赤鼻のトナカイさん！」

さあやが家で探していたのはこれだった。

「よーしー！準備万端やー！」

「はぐたんサンタさん！」

これで全ての準備が終わった。しかし、はな達と一緒にいたトラウムは周りをそわそわした感じで見渡していた。

「あの……ルルーちゃんは……」

「内緒なのです」

一方ルルーは、野乃家のキッチンでタマネギを切ってた。

「猫の手……猫の手……」

「うん、上手上手」

その傍ではすみれが見守っていた。

「けどどうしたの？突然料理したいなんて」

「ママの復活カレー、食べて欲しい人がいるんです」

「どうやらルルーは、トラウムの為にカレーを作っているようだ。」

そしてビューティーハリイでは。サンタクロースに代わる、トナカイの代わりにトラウムの作ったメカトナカイと、二台のタイムマジーン（クリスマス使用）の準備が完了した。

「よしーこれで完了ー！」

「ほほう、これは、トナカイよりもいいね〜」

サンタクロースは三台のマシンを見て、とても感服した様子だ。

「さあ、後はこれでプレゼントを運ぶよ！」

はなが明日の子供達へのクリスマス마스プレゼントの気合いを入れて意気込む。

すると、はぐくみ市から爆発音が聞こえた。

「な、何？」

「まさか……行くぞー！」

ゲイツ達は他のみんなにも連絡を入れて、はぐくみ市の街中へと向かう。

ソウゴと士、ウオズ、ツクヨミ、はぐたん以外が、合流した。

「町が……」

はぐくみ市では怪人達が溢れ出しており、街の人達を襲っていた。

「くうー！行くぞー！」

「みんな！」

「「「ミライクリスタル！ハートキラッと！」」」

はな達六人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取り姿を変える。

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアラー！」

「「「HUGっと！プリキュア！」」」

エール達が先に変身を完了すると、ゲイツとハリーが周りの人達を怪人達から逃す為
に避難させるとジクウドライバーを装着する。

「ゲイツ、ハリー」

そこへ、スウォルツが思惑通りに進んでいると言わんばかりに、機嫌の良さそうな表情で二人に近づく。

「時見ソウゴはどうした？」

「さあな、俺達が相手になってやる」

「ふん。無謀だな」

スウォルツはアナザーライドウォッチを取り出した。

『アイケイド……！』

起動させたウオッチをそのまま自らの体内に埋め込み、アナザーアイケイドへと変身した。

「貴様の相手は俺達だ」

「お前の計画は俺達が止める」

「ふん。ゲイツ、貴様は白ウオズから託されたゲイツマジエスティの力は今はない」

「お前を倒せば取り戻せるだろ」

「行くで！」

二人はジクウドライバーを装着し、ウオッチをドライバーのスロットへ装填する。

『ゲイツ！ゲイツリバイブ！剛烈！』

『ハリー！ギアジェット！』

「変身！」

『ライダータイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！剛烈！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！ヘリテージタイム！導け！心に望む未来へ

！ハリーギアヘリテージ！』

二人はロックを解除してドライバーを回し、ゲイツリバイブ 剛烈、ハリーギアヘリテージへ変身し、ジカンジャクローとジカンチェーンソードを持ちながらアナザーディ

ケイドへと戦いを挑む。

そして、ツクヨミとウオズ、はぐたんも現場へと駆け付ける。

「みんな！」

「ツクヨミ君は、はぐたんと離れていたまえ！」

ビヨンドライバーを装着しながらウオズはそう言うのと、ギンガのライドウオッチを取り出し、ウオッチのダイヤルを回す。

『ギンガ！』

“ギンガ”と音声聞こえると、ウオズはドライバーに装填してレバーを引く。

『投影！ファイナリータイム！ ギンギンギラギラギラクシー！宇宙の彼方のファンタジー！ ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

ウオズもギンガファイナリーへと変身し、エール達に加勢する。

同じ時間。買い物に出た順一郎の前に、屑ヤミーとマスカレードドーパントが現れ、順一郎の道筋を阻む。

「わあ!?……何なの……?」

怯える順一郎は手に持つ箱を守ろうと後ろへ下がるが、怪人達は何の躊躇もなく順一郎に襲いかかる。

「危ない！」

そこへジオウが現れ、順一郎の窮地を救った。

「え…………？ソウゴ君？」

その時順一郎は、ジオウから発声された声でソウゴではないかと気付いた。

「はああ！」

デイクイドも現れ、ジオウと共に怪人達を攻撃し、デイクイドがライドブツカーから一枚のカードを取り出しドライバーへと差し込む。

『ATTACK RIDE！SLASH！』

ライドブツカーがソードモードへ変わり、刀身にエネルギーを纏わせると分身し、一振りで数太刀の斬撃を浴びせる。

『フィニッシュタイム！ギリギリスラッシュ！』

時計のエフェクトと共にジオウがジカンギレードで怪人達を切り裂き、周りの怪人は一通りに撃破した。

「ソウゴ君…………」

「…………」

ジオウはジクウドライバーからウォッチを外し、変身解除して自ら順一郎に正体を明かした。

「叔父さん……ごめんなさい！」

ソウゴはずっと仮面ライダーであった事を隠していた事を謝る為に頭を下げる。

「叔父さんにはずっと話してなかったんだけど、実は俺、仮面ライダーなんだ」

「……あ………」

「凄い力を手に入れて、悪い奴らと戦ってみんなを守れるんだ」

「そうか……本物の王様みたいだな………」

「だから……俺、行かなくちゃいけないんだ……」

叔父さん一人を……守ってられないんだ」

行かなくちゃいけない。それを聞いた順一郎の脳裏には一瞬最悪の展開が過つたが、直ぐにその考えを捨てると、微笑みながらソウゴに向けて叫ぶ。

「……行きなさい……僕にも、修理しなさいいけない時計がある。それが時計屋の役目だからね。」

ソウゴ君は、ソウゴ君の役目を果さなきゃ！」

「叔父さん……ありがとう」

「ソウゴ君……行ってらしゃい！そして！絶対帰ってきてね！」

「はい！」

ソウゴは絶対にあの家に……クジゴジ堂に帰ると、笑ってそう言う。

そしてソウゴは走り出し、順一郎の前から去る。

「行くか？」

「うん！」

士に行くかと言われたソウゴが頷くと、士は灰色のカーテンを出現させる。

「行くこう。世界を守る為に……」

ソウゴは士が出したオーロラカーテンに向かって走り出した。

カーテンを潜るとそのままソウゴは一人、何処かへ行ってしまった。

カーテンが潜り抜けるとソウゴが到着したのは、2068年のはくぐみ市だった。

「2068年……未来のはくぐみ市」

既に時間が止まっており、そこにいる人はみんな動いていない。そして、ソウゴは目的の場所へ急いで向かう為に、ライドストライカーに乗り込みその場所へと向かう。

そこには、あいつがいる……

「まだ、倒れていなかったか……はああ！」

「「うわあああああ！」」

この時間は、オーマジオウがキュアトウモロー達を倒した時間……

そのまま放たれたエネルギー波が、一緒にいたプリキユア達に向けて放たれた。
「うっ……あつ！みんな！！？」

気がついてゲイツが顔を上げると、周りにはゲイツだけしかいなかった。

「みんなは……トウモロローは……」

「ゲイツ！みんなは？」

「ツクヨミ……俺は……」

そこへ、二人の前にライドストライカーに乗ったソウゴが現れ、この時間のゲイツとツクヨミに接触する。

「大丈夫？」

ソウゴがツクヨミに近づくと、さりげなく彼女の服のポケットに何かを入れた素振りを見せる。

「あなたは……？」

「何故、動ける奴がいる……」

この時間に現れたソウゴはクライアス社の影響を受けていない事を知らないゲイツは、何故目の前にいる男が動いているのかと疑問に思っていた。

「危ないから逃げて！」

ツクヨミは逃げるように促すが、ソウゴは逃げようとはしない。

「君達の方が逃げるんだ……」

『ジクウドライバー！』

『ジオウ！』

彼女に向けて逃げないと言うと、ジクウドライバーを装着してジオウオッチを起動し、ウオッチをドライバーに装填。

ドライバーのロックを解除すると、後ろから時計が出現した。

「変身！」

その掛け声でソウゴはドライバーを回す。

『ライダータイム！仮面ライダー！ジオウ！』

「あれは……」

「ジオウ……！」

ジオウを見たこの時間のゲイツとツクヨミは驚くも、二人はジオウがオーマジオウへと向かっていくのを見て、すぐさまここから離れる。

それを確認するとジオウはジカンギレードを出現させ、オーマジオウへと向かい合わせで立つ。

「………若き日の私よ。お前がこの時代に再び来るなど、私の記憶にはない」

「歴史が変わって当然だ。あんたにとっては過去でも、俺にとっては未来なんだから」

「面白い。だが……無意味だ！」

「そんなの、やってみなきゃ分からない」

ジオウがジカンギレードをジュウモードで銃撃しながら突進していく。しかし、オーマジオウが片手で防ぐ。

「はああー！」

「ふん。はああー！」

「うわあああー！」

ジカンギレードをケンモードへと変えて攻撃に出るが、オーマジオウが受け止め右手をかざすとジオウは吹っ飛ばす。

「行けるか……」

その時、起き上がるジオウはジオウトリニティウオッチを手にする。

一方で、アナザーデイケイドと溢れ出るほどの怪人達がエール達に襲いかかる。

「ヤアアアー！」

エール、アールがゾディアツ、眼魔コマンドに応戦する。

「フラワーシュート！」

「ウイングシャワー！」

二人の技が決まるが、数が多く中々減る様子が見られない。

「くう！早く逃げて下さい！」

アンジュはハートフェザーで一般人を傷つけないよう守り続ける。

「スタースラッシュ！」

エトワールがスタースラッシュを放ち、アンジュのバリアを攻撃し続ける怪人達を吹き飛ばす。

「大丈夫？」

「うん。でも……」

どんなに倒しても数は減らないし、しかも増えてる様にも感じた。

「でも、まだまだ！」

「そうだね！行くよ！」

アンジュとエトワールが怪人達に向かっていく。

アナザーディケイドと戦闘を行っていたゲイツとハリー、であるが……

「はああ！」

「どおりやあ！」

溢れ来るほどの怪人達が現れ、アナザーデイケイドへの攻撃に転じることが出来ず、周りの怪人達に振り回されてばかりである。

『『フィニッシュタイム！』』

二人はドライブバーを回し、武器に力を蓄える。

『のこ切斬！』

『ヘリテージタイムフィニッシュ！』

ジカンジャクローとジカンチェンブレードから放たれた強烈な一撃が周りの怪人達に放たれ、とりあえずは一掃出来た。

「悪あがきだ。この世界は滅びる。お前達ができることは何もない！」

「どうかな？」

「何？」

「俺達は、諦めへんで！この世界を救えるって信じるとからな！」

「何でも出来る……そう信じれば出来ない事はない。俺達は世界を救えるって信じている！」

「……うおおおあーっ！」

突如として憤怒したかの様に叫ぶと、アナザーデイケイドはゲイツとハリーに猛攻を加える。

「そんなものは……ただの幻想だ！ 貴様らの意見は求めん！」

「うわあああッ！」

ゲイツとハリーがアナザーデイケイドの猛攻を受け続け倒れると、アナザーデイケイドが高く飛び上がるようにする。

「明導ゲイツ！ まずは貴様からだ！」

アナザーデイケイドはゲイツを抹殺しようと、デイケイドの必殺キックの『ダイヤモンドキック』を模した黒いエネルギーを纏ったライダーキックを放とうとする。

『ゲイツ！』

突如ゲイツの真上から光の柱が現れ、ゲイツを包むとゲイツが消えた。

「なんだと？」

ゲイツが消えた為に、アナザーデイケイドのライダーキックは空振りに終わった。

「これは……」

「お前の相手は俺がしてやる」

そこへ、ソウゴを未来へと送ったデイケイドが現れた。

「門矢士……」

「ネズミ、お前は周りの雑魚を片付けておけ」

「ネズミちやう！ 言うとするやろ！」

デイケイドにツクヨミを入れると、ハリーは怪人達の方へと向かう。

「うおおお！」

ジカンチェーンブレードで攻撃を繰り返し続ける。

そして、ジカンチェーンブレード能力により、見えない斬撃が飛ばされて怪人達を次々と薙ぎ払っていく。

ゲイツがいなくなったと同じ頃、反対の方で怪人と戦っていたウオズ。

『超ギンガエクスプロージョン！』

ウオズが上空から隕石を怪人達に打ち付けように放ち、怪人達を一掃する。

「!?？」

「ツクヨミ君!はぐたん!」

一掃している間に気を取られてしまい、ツクヨミ達に敵がいるのに気づくのに遅れてしまった。

ツクヨミはファイズフォンXで迎え撃つが、あまり効いている様子ではない。

「うおおお！」

しかし突如として、魔進チエイサーがツクヨミとはぐたんを助けるように現れた。

『チューン!フルブレイク!スパイダー!』

そのまま魔進チエイサーは技を繰り返す。二人に襲い掛かろうとした怪人達を倒し

た。

「!?？」

敵を倒すと魔進チェイサーは苦しみ出し、変身解除してチェイスの姿へ戻る。

「何故だ……何故、俺は人間を助けた？」

「やはり、君はチェイスだね。」

「この本によれば、君も仮面ライダーだった。本来の歴史では……」

「俺が……仮面ライダーだと……？」

仮面ライダーという単語を聞くと、再びチェイスの記憶回路からフラッシュバックするかのように、別の記憶が頭に降り注ぐ。

『変身！』

『シグナルバイク！チェイサー！』

フラッシュバックした記憶から、自ら銀色の姿へと変身した仮面ライダー・仮面ライダーチェイサーへと変身した記憶が、目の前に見えた。

「俺は……うおおおー！」

『ブレイク…アツプ！』

だがその記憶を振り払うかのように、再び魔進チェイサーへ変身する。

「俺は……死神だ！」

チエイサーがウオズに襲い掛かろうとしたその時……
『ウオズ!』

そこへゲイツ同様に光の柱が現れ、ウオズも取り込み。そのままジオウの元へ飛ぶ。

そして未来では。ジオウトリニティウオッチの力でゲイツとウオズが時空を超えて現れ、ゲイツとウオズの腕時計がジオウの体にはめ込まれ、身体の変化と共にジオウの仮面が中央へと移動する。

『トリニティタイム!三つの力、仮面ライダージオウ!ゲイツ!ウオズ!トリーニティー!トリニティ!!?』

時空を超えながらも、ジオウはジオウトリニティへの変身に成功した。

「よし、来てくれた」

「ソウゴ。ここは……」

「ゲイツ君、私達も2068年に来たらしい」

「あれは、オーマジオウ……」

ウオズがインジケーショントリニティアイから見えた視覚情報で2068年に来た事を察すると、ゲイツは目に前にオーマジオウがいることに驚いていた。

「話は後で！とにかく、ここでオーマジオウを足止めする！」

「フツ！」

ジオウトリニティはサイキョージカンギレードを持ち突進すると、オーマジオウに斬りかかり、再びオーマジオウとの戦闘が再開された。

再び戻って現代、2018年。

ディケイドとアナザーディケイドとの戦闘も開始されようとした。

「決着をつけよう。ディケイド同士、互角の勝負だ！」

ディケイドがライドブツカーを手に持ち攻撃すると、アナザーディケイドは腕を出して防ぐ。

「互角だと？お前にはディケイドの力しかない」

アナザーディケイドはライドブツカーを振り払うと、ツクヨミから奪った時間停止能力を使う。

「俺には、一族最強の力がある」

動けないディケイドへ詰め寄ろうとするアナザーディケイドだが：

「うっ……!!？」

突如として、アナザーデイケイドも同様に時を止められた。

「忘れちゃったのかい？その力、僕にも分けてくれたじゃないか」

そこへ、かつてスウォルツから力を分けて貰ったデイエンドが現れ、アナザーデイケイドの時間を止めた。

そしてデイエンドが回り込み、アナザーデイケイドへ一撃を見舞うと、彼に止められたデイケイドが動けるようになった。

「貴様……」

「こっちが優勢になったな」

「行こうか、土」

デイケイドのライドブツカーのソードモードで振る。そして、デイエンドの銃撃でサポートと二人の息のあった連携がアナザーデイケイドを翻弄する。

その一方で、ハリーが主に怪人達を相手をしているが、数が多く一人では対象仕切れずにいた。

「数が多すぎやー！」

「だったら……」

ならばと思ったエール達は、ミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、

エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「ミライパッド！オープン！」

皆がそれぞれ右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「HUGつとプリキュア！今ここに！」

「ワン・フォー・オール！」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」

「プリー、キュアー！」

「明日に！」

「エールを！」

マザーを召喚してメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集める。

「ゴー、ファイ！みんなでトウモロ！」

手を掲げ、マザーの力を解放して光線を放つ“みんなでトウモロ”を放つ。

命中した怪人達はハートに包み込まれ、浄化されて爆発していった。

「みんな!」

ツクヨミがはぐたんを抱いてみんなに駆け寄る。

「待て……」

しかし魔進チエイサーがエール達の前に現れ、ブレイクガンナーを向ける。

2068年。

オーマジオウへ向けられる様に、ジオウトリニテイのサイキョージカングレードから『ジオウサイキョウ』の文字とエネルギー刃が浮かび上がる。

『キングギリギリストラッシュユ!』

サイキョージカングレードがオーマジオウに振りかかるが、オーマジオウはジオウトリニテイの直撃を受け切り、左右へと散らして相殺させられた。

「うおおおおお!」

そこへジオウがオーマジオウに斬りかかるが、オーマジオウは片腕でサイキョージカングレードも受け止める。

「ツ!!?」

「なっ!!?」

だが、ジオウトリニティは上手さばいてオーマジオウの腹部へサイキョージカンギレードを突き立て、ドライバーを回す。

『トリニティタイムブ레이크バーストエクスプロージョン！』

「ぬうおおお！」

至近距離からサイキョージカンギレードで繰り出されたトリニティタイムブ레이크バーストエクスプロージョンを放ち、オーマジオウを吹き飛ばした。

「くう……」

吹き飛ばされると、オーマジオウは壁に打ち付けられ、予想以上の衝撃に思わず膝をついた。

「私が若き頃には、そこまでの力はなかった……」

「俺の力じゃない。仲間の力だ……」

あんたはもしかしたら、未来の俺かもしれないけど、1つだけ違うところがある。俺には仲間がいる！」

自分とオーマジオウの違い……それは『仲間がいた』事だとオーマジオウに告げる。

「なるほど……お前はその仲間のために、自分を犠牲にしようという訳か」

「どういう事だ!?」

「聞いてないぞ、我が魔王」

オーマジオウからの一言でゲイツ、ウオズはソウゴが犠牲になると知り驚愕すると、ジオウにどう言う事だと問い詰める。

するとジオウは変身解除し、ゲイツとウオズを強制送還されるかのように元の時代へ戻した。

そのまま二人はあの時代にソウゴだけを残し、2018年へ戻ってきた。

「ゲイツ・ウオズ！無事やったか……あれ？ソウゴはどなんしたんや？」

ジオウトリニティになったのなら三人戻ってくるはず。なのにソウゴだけ姿がなかった事に、ハリーは仮面の下で眉を寄せる。

「ソウゴ……」

「どういことだ。我が魔王……」

ソウゴが何を目的であんな無茶な事をしているのかゲイツとウオズにはわからなかったが、二人は周りの怪人はいなくなっていた事に気づくと、デイケイドとデイエンドがアナザーデイケイドと戦闘している事に気づく。

一方で、エール達の前に現れた魔進チエイサー。エール達に戦いを挑もうとするが、

彼は抵抗があるのか一度も攻撃しようとしなない。

「ねえ、やめよう。あなたはこんな事をする人じゃないよ」

「俺は……うっ……うわあああ！」

無理矢理にでもいいからとエール達に攻撃しようする。

「やめなさい！あなたには人間の心がある！」

「心などあるか。俺はロイミュードだ！」

魔進チエイサーがエール達に攻撃しようとした。

しかし、またもやフラッシュユバックが起こり、彼の記憶からある言葉が聞こえた。

『人間を……守る……為に……力を貸して欲しい』

そう、誰かが彼に語り駆け、寄り添うような声が聞こえた。

「また……何故だ？」

その囁く声の所為か、魔進チエイサーは攻撃をやめた。

「はああ！」

それを見たアナザーデイケイドは黒いオーラを放ち、デイケイドとデイエンドを振り払いこちらへ向かってくる。

「もういい、チエイサー。後は俺がやる」

「スウォルツ……」

アナザーデイケイドが迫ってくるのを見て、エール達プリキュアが戦闘態勢で構える。

「さらばだ、妹よー！」

アナザーデイケイドが己の妹を亡き者にする為、ツクヨミに近づこうとする。

その時、ツクヨミのポケットから強烈な光が発生した。

「何だ……」

いきなりの光にアナザーデイケイドがツクヨミから離れる。

「えっ?」

ツクヨミが光り出したポケットに手を入れると、中から現れたのはブランクウオッチだった。

「どうして……」

何故、自分がブランクウオッチを持っているのかと戸惑う。

そんな彼女を更に戸惑わせる様にウオッチが光り続けると、その姿を変える。

「これは……」

ツクヨミの持つウオッチは、白い変身用のライドウオッチへと姿を変えた。

「ウオッチー！」

「どうして……」

「っ!???:……ウオズ！ツクヨミにドライバーを！」

何かを察したゲイツが、ウオズにドライバーをツクヨミに渡すように言う。

「そうか！ツクヨミ君！」

ウオズが最後の予備のジクウドライバーをツクヨミに投げ渡すと、ツクヨミはそれを片手でキャッチした。

「行け、ツクヨミ君」

「ツクヨミ！」

『ツクヨミっ！』

エールとみんながツクヨミの名を叫ぶ。

「はぐたん。離れて」

「はぐたん！」

はぐたんをエールに託すと、ツクヨミはジクウドライバーを掲げる。

『ジクウドライバー！』

ジクウドライバーを装着したツクヨミは白いウオッチを回し、そのまま起動させる。

『ツクヨミ！』

“ツクヨミ”と発声されると、ツクヨミはジクウドライバーのスロットに装填し、ドライバーのロックを解除した。

すると、彼女の背後から時計の一種『天文時計』のエフェクトが現れ、彼女は腕を広げてドライバ―を手で囲む。

「変身！」

そう叫ぶと同時に、時計エフェクトの時計の針が二時を指し、ツクヨミの体に金色の時計バンドエフェクトが纏われる。

『ライダータイム！仮面ライダーツクヨミ♪ツ・ク・ヨ・ミ！』

白のベースカラーに金色のラインが入り、中心部分には天使のような神聖な印象を感じ、背中には純白のマントを装着。複眼は三日月をあしらったデザインとなり、そこには金色で『ライダー』と刻まれていた。

今ここに、仮面ライダーツクヨミが誕生した。

次回！Re・HUGつとジオウ！

第62話 2018： 決着！魔王と破壊者の奇跡！

第62話 2018： 決着!魔王と破壊者の奇跡!

ライダー世界とこの世界との融合を止める為に、ソウゴは士に未来へ飛ばして貰い。その時間にいるツクヨミにブランクウオッチを渡した事で、現代のツクヨミを仮面ライダー・ツクヨミへと誕生させる事に成功させた。

「ツクヨミが……」

「かめいくらいあ〜!」

「仮面ライダー……ツクヨミ……」

仮面ライダー・ツクヨミの誕生を見たエール達はみんなは驚いたがしかし、デイケイドは上手くいったと確信した。

「よし。うまく渡せたようだな」

「これが君の狙いかい、士?」

「ふん」

どうやら、デイケイドとソウゴの作戦の内の一つのようにだとデイエンドは読んでいたようだ。その会話を聞いたゲイツもソウゴの狙いに気づく。

「まさか、あいつが未来に行ったのは……」

ソウゴが何も言わずに未来に行ったのは、アナザーデイケイドに気づかせない為。しかも、帰れないかもしれないとわかりながら行ったのだと気付く。しかし…

「ツクヨミ！」

そこへツクヨミを呼ぶ、聞き覚えのある声が聞こえ、みんなが声が発せられた方向へと振り向いた。

「はあ、はあ……よかった……成功した」

そこに現れたのは、オーマジオウと戦っていたはずのソウゴだった。

「ソウゴ君！」

「今までどこに行ってたの……」

ソウゴがいきなり現れた事に全員が驚きながらも安堵すると、ゲイツとウオズが彼の下に駆け寄る。

「お前どうやって、こっちに戻ってきた？」

「……後で話すよ。それより、ツクヨミが……」

詳しい説明は後で行うと言い、ソウゴはツクヨミの居る方を見ようとす。

——だが突如として、ソウゴ達の動きが石の様に固まって静止した。

『……えっ？』

指一本さえ動かせなくなったソウゴ達はアナザーデイケイドに時を止められたかと

最初は思ったが、それは間違いだった。

「ツクヨミ……」

「どうして……?」

「ツクヨミ……お姉ちゃん……」

唯一動かせた視線を頼りに時を止めた者を見ようとしますが、アナザーデイケイドは腕を下げたままで時を止めたモーションを取っておらず、ツクヨミの方は自分達に手を向けて力を入れているのが確認できた。

時間を止めたのはアナザーデイケイドでは無い、紛れもなくツクヨミだった。

そのままツクヨミは、警戒を強めたアナザーデイケイドへと近づいていく。

「何をする気だ……」

「ツクヨミ……まさか……」

「一人でスウォルツと……」

「……」

ゲイツ達はツクヨミがアナザーデイケイドに一人で戦いに挑むのかと思い、デイケイドはそんな彼女の様子を静視していた。

「何のつもりだ?アルピナ」

アナザーデイケイドへと近づくとツクヨミは変身解除し、元の姿へと戻るとアナザー

デイケイドの前で膝をつく。

『ッ!?!』

「兄さん、仮面ライダーの力を手に入れました。

この力、必ず兄さんのお役に立つはず」

ツクヨミから発せられた言葉とその行動に全員が驚愕し、それを聞いていたアナザー
デイケイドも変身解除する。

「俺に協力するとかいうのか?」

「私も王家の一員。我が世界を守るためなら……何でもする」

それを聞いたスウォルツは、思わず邪悪な笑みを浮かべる。

「フハハハ……フハハハハ……! いいぞ。それでこそ我が妹だ! アツハツハツハツハ
!」

自ら消そうとしていたツクヨミが自分にひれ伏したのだと知り、スウォルツは高笑い
をすると、目の前で絶望的な表情でこちらを見るソウゴ達に目を向ける。

「気分がいい、今日はここまでだ。」

「諸君、明日のクリスマススイブにまた会おう……楽しみにしている。フハハハハ……ッ
!」

愉悦に浸るスウォルツはオーロラカーテンを出すと、自身の妹と怪人達と共にこの場

から去っていった。

ツクヨミが皆の前から去るとソウゴ達も動けるようになったが、彼らはまるで未だに時を止められているかの様に、その場から動くことは無く、ツクヨミがクライア社に寝返った光景を信じられずにいた。

「そんな……」

「どうして……」

「ツクヨミお姉ちゃんが……なんで、なんで……」

「アーラ……」

アーラにとつて、ツクヨミはもう一人の姉のような存在だった。それが、クライア社に付くような形となり、シヨツクが大きかったのだとマシエリは感じていた。

「ツクヨミ。なんで……」

「わかんないよ。なんでこんな事に……」

「……これも君の作戦かい? 士?」

海東がアンジュとエトワールがそう呟いている様子を見ながら士に聞くが、彼は無言のまま何も言い返すことはなかった。

そうして、ツクヨミはクライアス社の本社に入り、スウォルツの自室に向かった。

部屋の中には、ジェロスとオーラの二人もいた。スウォルツはツクヨミの方を見ると、ソウゴと士が何を企んでいたのかを聞き出そうとする。

「時見ソウゴと門矢士は、お前をライダーにして何を企んでいたんだ？」

「彼が言うには、私達の世界が消えようとしているのは、ライダーがいらないから……だから、私をライダーにしようしたと思われませう」

「なるほど……それで、お前は俺を王として認めるのか？」

「兄の貴方が王位を継ぐのは自然の摂理です。それを手助けするのが私の使命です」

ツクヨミはそれだけを告げると、再びスウォルツの前に跪く。

その様子を見ていたオーラは、口を押さえて笑いを堪えながら彼女に近づく。

「随分と変わったわね。ジオウとプリキュア達を裏切るなんて」

「これが運命だったのよ。違う世界の私は、みんなとは違う道しか歩めない」

「わお、素晴らしい妹さんね」

もはやツクヨミは、ソウゴ達とは違う道を歩もうとしていた。その事実には、スウォルツは大変満足そうな様子で彼女を見るのだった。

そしてツクヨミがみんなの前から去った後、ソウゴ達はビューティーハリーへと集まり、まずはソウゴと士が未来まで行って何をしようとしていたのかを話す。

「ツクヨミの世界には、仮面ライダーがない。ならば、仮面ライダーを誕生させるしかない。」

「だから、ツクヨミにライダーになるきっかけを与える」

「だからソウゴが未来に行つて、ツクヨミにウオッチを渡したつてわけ?」

「ほまれがそう聞くと、土は頷いて肯定した。」

「ああ、それによりツクヨミの世界はライダー誕生し、新しく創り変わり、その世界もライダーの世界の柱に乗り、世界の崩壊も止まる。それが、俺とこいつで考えた作戦だ」
「ごめん。みんなに黙っていて……」

ツクヨミの世界を救う方法を話し、その為に一人未来へ行つてオーマジオウを足止めしていたのかもわかった。しかし……

「なんで教えてくれなかったの……」

その事を自分達に話さなかった事を知ったはなどゲイツは、激しく激怒していた。

「何故、俺達にも話さなかった!」

「……」

「私達だつて……ツクヨミの世界を助ける為だつたら、なんでもやるよ!」

「はな……ゲイツ……みんな、ごめん……」

ソウゴは皆に黙つて、全部一人でやろうとした事を謝る。

一人でやろうと思ったのは、スウォルツの計画に多くの人を巻き込んだ。だから、自分には責任があると、そう自覚していたからだ。

「しかし、我が魔王と君の思惑通りなら、ツクヨミ君はライダーになった。作戦成功じゃないのかい？」

ウオズが仮面ライダーツクヨミの誕生により、作戦自体は成功ではないかと聞く。

「いや、ライダー世界は崩壊しかけている今、柱に乗ってもバランスが悪い。だから、次の作戦に入る」

「次？」

「スウォルツを倒す。奴が融合を行っているのは、俺の力のおかげだ。奴が力を失くせば全てリセットされ、全ては元に戻る可能性がある」

「そこで、スウォルツと決着を付ける！」

「しかし、我が魔王。敵はスウォルツだけじゃない。ライダー世界から現れる敵に、クリアス社にはツクヨミ君もいる」

「ッ！」

ツクヨミの名前が上がると、ことりは未だにツクヨミが裏切ったことが受け入れられず、なんでこんな事になったのか理解出来なかった。

「ここからは、本当の意味でこの世界の命運が掛かっている。覚悟はいいか？」

士がソウゴ達に世界の命運を掛けることになると問う。

「あの……それってツクヨミお姉ちゃんとも、戦わないといけないんですか?」

「ことり……」

「……………そうなるな…………」

「そうですか…………」

士にそうだと返されたことりは、表情を曇らせながら俯いてそう呟く。

「とりあえず、今日は休もうで。まあ、クリスマスプレゼントの方は…………」

「辞めておこう。配る側がそんな気持ちでは、子供達に失礼だ」

外に止めてあるタイムマジーンには、子供達に配るクリスマスプレゼントが用意されている。しかし、こんな状態ではプレゼントを配りに行く元気はなかった。

一緒に話を聞いていたサンタクローズも、ソウゴ達の気持ちを考慮しながら、今日の所は断念せざる終えないと判断した。

その日の夜、ソウゴ達はビューティーハーリーへと泊まり休むことになる。しかし、みんなツクヨミの事や明日の事で寝れない者ばかりだった。

そんな時、ソウゴは下のリビングで一人、ソファで座っていた。

「ソウゴ」

そこに、はなとことりが降りてきた。

「やっぱり、ツクヨミがいないと落ち着かないな」

「はな……ことりちゃん」

あの時、ソウゴとはなが初めてお互いに変身し、あの日から今日までずっと一緒にいた。

お互いに考えが合わない時は、みんなとは違う道を歩んだ。それでも、目指す未来は同じだったから、また仲間として一緒に戦い。同じ時間を一緒に過ごした。なのに……

「生まれた世界が違うから……」

「ことり……」

生まれた世界が違う……

ツクヨミはこことは違う、別の平行世界で生まれた。だから彼女は、自分の世界の為に、ソウゴ達の下を——

「関係ないよ」

「えっ?」

「平行世界とか、生まれた世界が違うからとか、そんなの関係ないよ。どこの世界で生まれても、俺達がツクヨミを思う気持ちは変わらない!」

「ソウゴさん……」

「ツクヨミと俺達は、ずっと仲間だよ」

「そうだよね。私達とツクヨミはずっと友達だよね!」

「お姉ちゃん」

ソウゴとはなはツクヨミは帰って来ると信じている。それ聞いて、ことりもツクヨミを信じる事に決めた。

「よし〜!ツクヨミに会う為に!フレフレ!わたし!がんばれがんばれ!わたし!オー!」

「おおおお!」

はながエールを唄うと、ソウゴとことりもそれに乗って『オー』と叫ぶ。

「よし〜なんか、行ける気がする!」

ソウゴが立ち上がり、口癖を言うと二人の顔から笑いが見える。

そして、いよいよ決着の日——12月24日となる。

町の方では、ゲイツ、ウオズ、ハリーの三人が待機していた。

「プレゼント来た〜?」

「ううん、来てない〜」

「サンタさんどうしたんだろ?」

子供達は昨日の夜、プレゼントが来なかった事に落ち込んでいたのか、クリスマス・イヴであるにも関わらず暗い空気が漂っていた。

「悪い事したな……」

「ちゃんと決着付けて、渡してやらないとな」

ハリーとゲイツは、これが終わったら必ずクリスマスプレゼントを配ると心に誓う。

同じ頃、今日行われるクリスマスパーティーの会場であるはぐくみホールに、はな達が集まっていた。

「出来たわね。パーティー会場！うーん！いい感じ！バブリーで！」

「ノリノリクリスマスっしょ！」

「五分以上盛り上がる事間違いない！」

控え室ではパッパル達と一緒にはなとはぐたんがおり、えみるとルールもライブの準備の為に音響確認をしているが……

「……えみる」

「……すみません。やっぱり、ツクヨミさんが気になって」

「えみる……」

「えみいる……」

はなとはぐたんはギターの弾きの調子が悪いえみるを見ながら、彼女はこのクリスマスライブをツクヨミと一緒に準備したかったのだと思い、ツクヨミは今頃どうしているのかと心配していると…

「残念だけど、あなた達にそれより凄く残念なお知らせがあるの」

「オーラ!」

「イエス……」

「ジエロス!」

ツインラブのライブ会場の控え室にオーラとジエロスが現れ、はなとルーラーは思わず彼女達の名を叫んだ。

オーラとジエロスが現れた同じ時、同時に町ではスウォルツがライダー世界から呼び寄せた怪人達が大暴れしていた。

「来たか!」

「行こうか? 我が家臣達よ!」

「誰が家臣だ!」

ウオズが家臣と言ったのを、二人がツツコミを入れると三人はドライバーを装着する。

『ゲイツ！リバイブ疾風！』

『ギンガ！』

『ハリー！ギアヘリテージ！』

「「変身!!？」」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！』

リバイ！リバイブ疾風！疾風！』

『投影！ファイナリータイム！ ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファン

タジー！ ウォズギンガファイナリー！ファイナリー！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！ヘリテージタイム！導け！心に望む未来へ

！ハリーギアヘリテージ！』

三人が変身を完了すると、別れて怪人達を応戦する。空中はゲイツとハリーが向かい、地上はウォズが対応する。

視点は戻り、ライブ会場では……

「そこどいてくれない！」

「早くしないとソウゴ君達が……」

はな達は早く町の方で戦っているソウゴ達の助けに行きたいが、オーラとジェロスが

邪魔して行けなかった。

「そうはいかないわ……」

「私達には……時間が無いの……!」

「その為に、アンタ達を倒す」

そう告げると、二人はトゲパワワで作られたクリスタルを注ぎ込み、自らのトゲパワワが溢れ出すと、それが合わさろうとしていた。

「オシマイダー!!!」

二人は互いのトゲパワワにより誕生した、フュージョンオシマイダーへと姿を変貌した。

「プリキュアアアアアツツ!!」

オシマイダーがはな達に攻撃しようとする。

「ウール、トラウムさん。はぐたんをお願い」

はながはぐたんを一緒に会場に来ていたウールとトラウムに預けると、二人は離れる。

「「ミライクリスタル!ハートキラツと!」」

はな達六人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取って姿を変える。

「輝く未来をく抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアラー！」

「「「HUGっと！プリキュア！」」」

エール達が名乗りあげて融合したフュージョンオシマイダーに構えると、フュージョンオシマイダーがパンチを繰り出してきた。

「みんなのクリスマスを守らなきゃ！」

「「うん！」」

「「はい！」」

オシマイダーの繰り出すパンチを避けると、一斉にオシマイダーへ向かって行く。

町の方で戦っているゲイツ達ライダー組は怪人達の数に押されようとしているが、負けじと倒していく。

「はあああー!」

ジカンジャックローと疾風のスピードで空を飛ぶ魔化魍、ミラーモンスターを倒し続けるゲイツは、ジカンジャックローのエネルギーを溜め込みトリガーを引く。

『つめ連斬!』

ゲイツはつめ連斬の無数なエネルギーの雨を繰り出し、それに直撃した怪人達を倒し続ける。

「そらあああああー!」

ハリーもジカンチェインブレードとジカンチェインで攻撃を繰り返し続け、見えない斬撃を飛ばして怪人達を次々と爆散させる。

『ヘリテージタイムフィニッシュ!』

今度は背中のジェットを放ちライダーパンチで突撃し、全員勢いでまた吹き飛ばした。

「ゲイツ君!ハリー君!どきたまえ!」

ウオズの指示でゲイツとハリーは離れる。

『ファイナリービヨンド ザ タイム!超ギンガエクスプロージョン!』

ウオズが上空から隕石を怪人達に打ち付けように放ち空中と地上にいる怪人達に放ち、攻撃が終わると三人が集まった。

——しかし、集まった途端に三人の時間が止まった。

「無駄なあがきはよしなさい。滅びは止められない」

「「ツクヨミ（君）……」」

そこへ、ツクヨミが三人に手をかざして近づいていく。彼女と一緒にアナザーデイクイドも現れた。

「残念だったな。貴様ら三人は、最後まで見届けられないようだな」

アナザーデイクイドが手からエネルギー光弾を作り、三人に放とうとしたその時：

「無駄なんてないよ」

「ソウゴ……」

そこへジクウドライバーを装着したソウゴが現れ、二人の前に向かって歩いてくる。

「ツクヨミ……スウォルツ……」

「ようやく来たか。時見ソウゴ」

「…スウォルツ。ツクヨミが仮面ライダーになったから、もう君達の世界は救えるんだよ。」

なのに、それでもライダーの世界を破壊するの？」

「突然だ。世界など多くある必要はない。最強の一族である我が世界だけあればいい」

「それがアンタの目標の王なの……」

「何……………」

「俺は……………救えるなら全部助ける!それがどんな世界でも……………絶対に!」

『ジオウ!ミステリージオウ!』

ジオウとジオウミステリーのウオッチを両側のスロットへ差し込むと、ソウゴはドライバーのロックを解除し、ドライバーを回す。

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

ジオウへなると前の方から後ろに羽が装着され、その手に二本剣を持ったアーマーが現れ、そのままジオウの体に纏われる。

『アーマータイム!歴史の全てを知る王!仮面ライダージオウミステリ〜〜!フ・レ・ア〜!』

ジオウミステリーフレアフォームへと変身を完了する。

「行くぞ……………スウォルツ」

ジオウがフレアドラゴンバスターで攻撃し、アナザーデイケイドが片腕を前に出して防ぐと戦闘が始まる。

そのままジオウとアナザーデイケイドは戦闘を続けるが、ゲイツ達はツクヨミの手によって止められたままだった。

「くう……」

「忘れたか、お前の敵は俺だけじゃない。ライダーの敵全てだ！」

そう言うとなナザードイケイドはオーロラカーテンを出し、そこから仮面ライダーエボル・フェイズ1、ゲムデウス、サジタリウス・ゾディアーツ、ユートピア・ドーパント、ン・ダグバ・ゼバなど、歴代のライダー達が倒した、最強にして最凶の怪人がジオウに襲いかかる。

「くうー」

アナザードイケイドとゲムデウスが先に仕掛けられ、ジオウの持つフレアドラゴンバスターを落とされる。

そして、今度はサジタリアスゾディアーツ、ユートピアの攻撃に合う。

それを見たジオウは、ミステリーフレアの能力で二体の怪人の攻撃を未来へ飛ばす。

「その手はもう通じない」

その時、背後からン・ダグバ・ゼバ、仮面ライダーエボルによる攻撃を受ける。

「うわあああああー！」

「ソウゴー！」

その後ジオウは、アナザードイケイド達の容赦なく攻撃を受け続ける。

ミステリーフレアの能力で攻撃を未来へ飛ばそうにも攻撃の手数が多く、全てを未来

へ飛ばせなかったジオウは、その為にジオウミステリーフレアから強制変身解除してしまつたソウゴは、頬から血を流しながら倒れる。

「くう……」

それだけじゃなく、変身解除されたジオウミステリーウオツチが元のブランクウオツチへと戻ってしまったのだ。

「これで死ぬ!時見ソウゴ!」

アナザーデイケイドがトドメを刺そうと、ゲイツ達に放とうとした光弾をソウゴに向けて放とうとする。

「ソウゴ!くっ……!ツクヨミ……!」

ゲイツはソウゴに向けて放たれた光弾から助けようとするが、ツクヨミに時を止められない為の助けに行けない。

「ソウゴ(我が魔王!)」

ゲイツ達は動けないまま、アナザーデイケイドがソウゴに向けて攻撃を見てるだけしか出来なかつた。

しかし、放たれた攻撃がソウゴの前で止まっていた。

「ツク!? 門矢士!」

「くう……アアアアア!」

ソウゴに光弾が直撃する瞬間にデイケイドが現れ、ライドブツカーを盾としてそのまま受け流し、ソウゴを守ったデイケイドは疲労と衝撃で変身解除する。

「つたく、世話の焼けるガキだな」

士のおかげで助かったが、今のままではやはりアナザーデイケイドには通用しない。

そう、このままでは…

「ソウゴ君！」

そこへ自分を呼ぶ声が聞こえ、ソウゴは振り向く。

「叔父さん！」

現れたのは叔父の順一郎だった。そしてその手にはアタツシユケースが握られていた。

「ソウゴ君！これ！」

順一郎はそれを投げるとケースがソウゴの元へと届き、ソウゴはそのケースを開ける。

「これって……」

「君達の大事な時計なんですよ？」

ケースの中には、スウォルツの手により破壊された筈のライドウォッチが入っていた。

しかも、デイケイドとジオウのウオッチ以外は全て完璧に修復されている。

「叔父さん……」

「叔父さん、時計屋だから……直せない時計ないからさ！そんな奴に負けないでね！」

こんな危険な所まで、俺達の為に来てくれた叔父さんには感謝では語れない。ソウゴにとって叔父さんから貰った物は、最高のクリスマスプレゼントだった。

「余計な事を……ふぬん！」

憤りを覚えたアナザーデイケイドは順一郎に向けて光弾を放つ。

「っ!?？」

アナザーデイケイドの攻撃に驚愕の表情をあらわにする順一郎とソウゴだったがしかし、順一郎の前には既に誰かが立っていた。

「させないよー！」

間一髪で海東が順一郎を庇い、攻撃を避けた。

「士、魔王君。後は頼んだよ」

海東は順一郎を連れて、安全な所へ連れて行く為にここから離れる。

そのまま復活したウオッチがランドジオウウオッチとなり、ソウゴの手に置かれた。

「おい！ライダーを全員呼べ！」

「えっ?」

すると士が、ソウゴにグランドジオウの力でライダー達を全員呼べという。

「無駄だ。たとえライダー呼んでも意味はない!ライダーなど、俺の前では何も出来ない奴らに過ぎん!」

「違うな……お前は仮面ライダーを知らなすぎた」

それを聞いたアナザーディケイドは、今更ライダーを呼んでも無駄だと言うが、士は彼の言ったことを否定する。

「俺達は……人間の自由の為に戦う存在。その為なら何度でも立ち上がってきた。

例えば存在が消えようとも、その魂は受け継がれ……進化する!

だが、お前はどうかんだ?お前は誰に受け継がれた?

他人から力を奪ってきた貴様に……何がある!」

士の言葉に腰が引けたのか、アナザーディケイドが後ずさる。

「門矢士……貴様は……一体なんなんだあああ?」

だがアナザーディケイドは「自身が目の前の男に怯んだ」と言う事実によつて『王族』としてのプライドが傷付けられ、憤怒の叫びを上げながら門矢士に何者だと問い掛ける。

それを聞いた門矢士は笑みを浮かべ出し、ネオディケイドライバーを装着すると、横

に装備されてるライドブツカーから一枚のカードを向けて名乗る。

「通りすがりの仮面ライダーだ……覚えおけ!変身!」

そして士は手に持ったカードを腰に装着したドライバーに差し込み、ディヴァインサイドハンドルを操作した。

『KAMEN RIDER! DECADE!』

出現した影が一人となり数枚のプレートが現れると、その頭部を縦に貫きはめ込まれ、黒とマゼンタの仮面ライダー…世界の破壊者にして数々の世界を渡り物語を繋ぐ者。

仮面ライダーディケイドへと変身した。

「そうだよね……」

ソウゴもグランドジオウウオツチを掴み、立ち上がる。

「俺達は知っている。俺達が会ってきた仮面ライダーは、みんなが世界を守る為に戦ってきた……」

そしてこのウオツチには、数々の歴史を世界を守り続けた仮面ライダーの魂がある。

その魂を、今は俺が引き継いでいる。

それが無くならない限り、仮面ライダーは消えない。

だから…

「決して壊れない……どんなに歴史が壊されても、俺がいる限り仮面ライダーは壊れないっ！」

『ジオウ！グランドジオウ！』

ジオウウオッチとグランドジオウウオッチを起動させ、そのまま二つのウオッチをスロットへと装填した。

『へポオオーン！パアアアア！～アドベント！COMPLUTE！ターンアップ！
へピーイン！～CHANGE BEE TLE！ソードフォーム！ウエイクアップ！カメ
ンライド！サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！3・2・1！シャバドゥビ
タッチヘンション！ソイヤット！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！
ライダータイム……！』

ドライバーのロックを解除すると、地中から巨大な黄金の時計台が後ろに現れ、更にその周りには歴代ライダーの石像が出現した。だが音声が続けると象の表層が剥がれ、20の仮面ライダーたちの姿が現れる。

「変身!!?」

『グランドタイム！クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド！響鬼・カブト・電王
！キバ・ディケイド！ダブル！オーズ！フォーゼ！ウイザード！鎧武・ドラーイーブ
！ゴースト！エグゼイド！ビル・ドール！』

祝え!仮面ライダー!!?グ・ラ・ン・ド!ジオウ!」

ドライバーを回転させるとライダー達が黄金のフレームに取り込まれ、ジオウの身体に張り付くように装着されてアーマーが形成。

開いたフレームからライダー達が現れるとそれぞれの決めポーズをとって固定され、最後に頭頂部にジオウが固定されると『ライダー』のインジケーションアイがセットされ、グランドジオウへと変身完了した。

グランドジオウとディケイドの二人が並び立ち、アナザーディケイド達に構える。

「フハハハハ!だからなんだ、貴様ら二人で何が出来る?」

たった二人で並ぶ姿を見て、アナザーディケイドは自分が呼び出した怪人達に対して、何が出来るかと高笑いをする。

「それはどうかかな?」

それに対してディケイドが自信満々に言うと、ジオウはディケイドを除く全ライダーのレリーフに触る。

『クウガ!アギト!龍騎!ファイズ!ブレイド!響!カブト!電王!キバ!ダブル!オーズ!フオーゼ!ウイザード!鎧武!ドライブ!ゴースト!エグゼイド!ビルド!』

ジオウの力によりクウガからビルドまでの18人の仮面ライダーが召喚され、アナザーディケイドを囲むような形で現れた。

そしてデイケイドは、デイケイドライバーのバックルの部位を外して右側に装着した後、携帯タッチ型のアイテムを取り出し、一枚のカードを差し込む。

『RISING! SHINING! SURVIVE! BLASTER! KING! ARMED! HYPER! SUPER CLIMAX! EMPEROR! GOLD EX TREME! SUPER TATOBAA! FUSION! INFINITY DRAGON! KIWAMI! SPECIAL! TENKATOU! HYPER MUTEKI! CLOSE BUILT!』

デイケイドがそのパネルをスライドする様にタップ操作すると、18人の仮面ライダーの前に18枚のカードが現れた。

それと同時にデイケイドは、携帯タッチ型アイテム——ケータッチをバックルの真ん中に装着する。

『FINAL KAMEN RIDE! DECADE!』

デイケイドがケータッチを装着すると同時に、彼の姿が変わった。

顔の部位にはそのフォームとなったデイケイドのカードがあり、右肩にはクウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド。左肩にはW、オーズ、フォーゼ、ウイザード、鎧武。

そして、真ん中には響鬼、カブト、電王、キバ、ドライブ、ゴースト、エグゼイド、ビルドにジオウのカードなど。胸部から両肩にかけて全平成ライダーのライダーカー

ドが装着されていた。

そして更に、背中に羽織られたマントには平成1号・2号ライダー、FARのライダーカードまで貼り付いていた。

——その名を、仮面ライダーディケイド・ネオコンプリートフォーム。

そして現れたカードが18人の仮面ライダーに向かい潜り抜けると、18人の仮面ライダーが姿を変え、そこに現れた。

究極の闇を超える力を持つクウガの究極の姿、仮面ライダークウガ・ライジングアルティメット。

太陽の光を受け人々を守る為に進化した、仮面ライダーアギト・シャイニングフォーム。

ライダーバトルを終わらせる為に使う決め、サバイブのカードにより進化した、仮面ライダー龍騎サバイブ。

赤く纏われたその姿は人間を守る為に作られた、仮面ライダーファイズ・ブラスターフォーム。

13枚のアンデットの力を取り込み覚醒した姿、仮面ライダーブレイド・キングフォーム。

音撃增幅剣『装甲声刃』の力によって武装強化した姿、仮面ライダーアームド響鬼。

特殊ゼクター『ハイパーゼクター』により光をも超える速さを持つ、仮面ライダーカブト・ハイパーフォーム。

共に時を超えて戦う特異点と五人のイマジンが同時に憑依し誕生した、仮面ライダー電王・超クライマックスフォーム。

自ら『封印の鎖』を解き放ち、『キバの鎧』本来の力を完全に開放したキバ本来の姿、仮面ライダーキバ・エンペラーフォーム。

町を守る為に戦う彼らの思いに応えるかのように、町に住む人々の願いと流れる風によつて導かれた、仮面ライダーW・サイクロンジョーカーゴールドエクストリーム。

未来のコアメダルにより託された、未来で会う相棒の為に戦う力、仮面ライダーオーズ・スーパータトバコンボ。

二人の仮面ライダーの持つスイッチを使い誕生した、まさに友情のステイツとも言える姿、仮面ライダーフォーゼ・メテオなでしこフュージョンステイツ。

体内に巡るドラゴン『ドラゴンフロントム』と共に融合した、仮面ライダーウィザード・インフィニティドラゴン。

全ロックシードの力を取り込むことで強大な力を手にした、仮面ライダー鎧武・極アームズ。

今と未来を守る親子のドライブが融合した、仮面ライダードライブ・タイプスペシャ

ル。

三人の伝説の武将が魂となっても、この国の為にと手を取り合い作り出した、仮面ライダーゴースト・テンカトウイツ魂。

最強無敵にして究極のゲーマーとなった、仮面ライダーエグゼイド・ハイパームテキ。二人のボトルなら奇跡を起こせる、究極の化学反応によって生まれたベストマッチ、仮面ライダークローズビルド。

「馬鹿な……こんな事が……」

ありえないような現象が起きた事に、アナザーデイケイドと現れた怪人達は驚愕する。

それを見ていたツクヨミは三人の拘束を離し、去っていく。

「動ける……」

「ツクヨミ……」

ツクヨミがなんで三人を動けるようにしたのかと疑問に感じたが、今はスウォルツを止めることを最優先した。

「スウォルツ！ライダーの力を思い知れ！」

20人の仮面ライダーと共に今、アナザーデイケイド達との決戦に入る。

オシマイダーの邪魔が入ってソウゴ達を助けに行けないエール達は、今もなおオシマイダーと戦闘を続けていた。

エールはオシマイダーの攻撃を避けてると、オシマイダーは今度は掌から光線を放つがマシエリとアムールはこれも避ける。

「はああ！」

そのまま二人はダブルキックでオーラのオシマイダーに放ち、バランスを崩させた。

一方で、アンジュとエトワールがミライブレスを具現化させてジエロスのオシマイダーの腕を掴んで動きを止める。

「ウイングシャワー！」

オーラはリコーダーステッキを吹き、無数の羽が発生させる。

「フラワーシユート！」

そこへ更にエールがフラワーシユートを放ち、ジエロスのオシマイダーが後ずさる。

「ぷいきゅあー！」

オシマイダーがエール達の方へ向かう中、トラウムに抱き抱えられたはぐたんの声に反応する。

「ベイビーは嫌い！」

「はぐたん……！！」

ジエロスは二人の方を向いて怒鳴り、驚いたはぐたんが泣き出す。

「泣くな!」

「やめなさいよ!そんなこと言うの!」

「マシエリポップ!」

オーラが怒鳴ったその直後にマシエリがマシエリポップを放ち、オシマイダーを後ずささらせた。

「悲しい……あなたはとても悲しい!」

「何故はぐたんを、未来を否定するのですか!」

「小娘が説教するな!」

「時間よ……生まれっ!」

二人のオシマイダーが掌から光線をマシエリ達に向けて放ち、エールがミライブレスで防ぐ。

「どうして時間が進むのが怖いのか!? 未来はきつと——!」

「アンタ達は知らないのよ……! どれだけ頑張っても、可愛がられるのは若い内つて事を!」

「時間が経てば、築き上げたのものは壊れる!」

ジエロスとオーラが己の心の内を曝け出しながら、さらに右の掌からも光線を放つ

と、エールの傍にアンジュとエトワールが加わり、両腕からの光線を防ぐ。

「歳を取るたび、世界が色褪せて行く……!」

「みんな離れていく。もう、おしまいだ!」

オシマイダーがさらに力を増して、エール達に襲いかかる。

「そんな事ない!」

「あなた達の未来はまだ終わってない!」

「それは、未来はいい事ばかりだけじゃない!でも……」

「諦めない限り、未来への可能性は広がるんだ……!」

エールとアンジュ、エトワール。三人の思いに応えてミライブレスの力が限りフュージョンオシマイダーの攻撃を押し返し、そのままオシマイダーは倒れる。

「プリキュア……!」

「「待つてくれ!」」

「……?」

「ウール……」

その時、ウールとジンジンとタクミが現れ、エール達とオシマイダーの間に入って止まれと言わんばかりに両腕を広げると、ジェロスにジンジンとタクミが、オーラにウールが近づく。

「ウール……あなた……」

「タクミ、ジンジン……今更、何しに来た!」

オシマイダーが三人に向けて光線を放つが、エール達が二人の前に出てこれを防ぐ。

「私には未来が無いと、見限ったクセに……!」

「違います!俺達は、ジェロスさんの足を引っ張ってはいけなと思っています……でも……!」

「シヤラップ!アンタ達は私にくっついて、仕事が欲しかっただけなのよ!」

「違う!」

「俺達は、あなたの笑顔が大好きなんだ!」

タクミが彼女の言葉を否定すると、ジンジンはジェロスの笑顔が好きだと告白する。

「飯なんて、何でも良いんです。三人一緒にいられば!」

「楽しい気持ちは、当社比二倍!」

「爺ちゃん婆ちゃんになっても、ずーっと一緒にいましょ!」

ジンジンとタクミのその言葉に反応すると、フュージョンオシマイダーのジェロスの方は昔の事を思い出し、片目から涙を流す。

「オーラ!君は……」

「うるさい!私は……私は一人でもいい!」

オーラはウールの言葉など聞こうとせず、ウールを攻撃する。そこへアールが庇い、ウールを守る。

「…オーラ。君と僕は同じだ」

「アンタが、私の何を知ってるのよ……」

「僕と君は力を求めていた。誰にも負けない力を……」

「そうよ。私は力が……」

「でも、違ったんだよ……」

ウールは力を失って、この町でことり達と共に暮らして行く中で、本当の力とは何かと気付くようになった。

「力なんかなくなっちゃって、一緒に居てくれる人が居れば、今までの力なんかよりも、凄い力が手に入るんだ！オーラにだって……」

「この力よりも……」

「オーラ！一緒に歩もう。僕達のなりたい未来へ目指そう！」

「ウール……」

ウールの掛けた一言と、ジンジンとタクミがオシマイダーの両腕を抱き締めると、オシマイダーが声を上げて泣いた。

「うっ……！」

だがその時、オシマイダーに突然異変が生じた。

「ううううう……うあああああ……うあああああ……」

オーラの唸り声と共に大量のトゲパワワが放出され、全身を覆う。

「「うわあつ!」」

ウール、ジンジンとタクミが吹き飛び、地面に滑るようして倒れる。

「ウール!」

アールが飛ばされたウールを救うとアムール、マシエリがジンジンとタクミを受け止める。

「大丈夫?」

「うん……でも……」

ウールの目には、トゲパワワの暴走が二人にお襲いかかっている様に見えていた。

「ことり。オーラを助けてあげて!」

「うん!」

「みんな!二人を助けよう!」

「「「メモリアルクロック!マザーハート!」」」

ジェロスとオーラを助ける為、エールが掲げたミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び

出す。

「ミライパッド！オーブン！」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかぎすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「HUGつとプリキュア！今ここに！」

「ワン・フォー・オール！」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」

「プリー、キュアー！」

「明日に！」

「エールを！」

マザーを召喚してメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集める。

「ゴー、ファイ！みんなでトウモロ！」

手を掲げ、マザーの力を解放して光線を放つ。みんなでトウモロを放つ。命中し

たフュージョンオシマイダーはハートに包み込まれ、浄化される。

「そうか……」

「これが……ウールの言う……」

オシマイダーが浄化された事で解放された二人は元の姿へと戻り、地べたに倒れる。

「ジエロスさん」

「ご無事で」

「オーラ」

三人がジエロスとウールを介抱する。

「みなさん。ここに居て下さい!」

エールがはぐたんを抱っこし、ここに居て下さいと言う。

「行こう!」

そのままエール達はジオウ達の元へと急ぐ。

一方で、はぐぐみ市を襲う怪人達は数こそは多いが、次々と倒されている。

「ヤアアアアアアア!」

ウィザードが巨大な魔法陣を作り、それを怪人に向けて放つとそのまま地表に打ち付けられる。

龍騎もドラグランザーに乗り込み、ドラグランザーの口から放たれる火炎攻撃が怪人達を打ち落としていき、キバも飛翔体『エンペラーバット』になつて同じように敵を倒していく。

「うおおおー！」

ハリーはジカンチェーンブレードで攻撃を繰り返し続ける。そして、ジカンチェーンブレードの能力により、見えない斬撃が飛ばされて怪人達を次々と薙ぎ払っていく。

地上ではゲイツ、ウオズ、ゴーストとファイズが電王、ブレイド、ドライブ、響鬼、アギトが戦っている。

「行くぜ！行くぜ！行くぜえええ!!」

「ヤアアアア！」

「はあああ！」

『Spe Spe Special!』

電王とブレイドがデンガツシャーとキングラウザーで攻撃し、ゲイツとドライブがジカンザックスと信号アックスを繰り返して出し、地上にいる怪人を倒していく。

別の方では、ゴーストのガンガンハンド&ガンガンキャッチャー、ファイズの肩部の装備・ブラッディキャノンが打ち続けられる。

「はあああ！」

アギトと響鬼が斬撃を飛ばし、怪人達を一ヶ所に固める。

「ここから私にお任せを!」

『超ギンガエクスプロージョン!』

ウオズが上空から隕石を怪人達に打ち付けように放ち、怪人達を一掃する。

そしてアナザーデイケイドの呼んだ怪人達を、ジオウ、デイケイド、ビルド、クウガ、エグゼイド、W、オーズ、鎧武、フォーゼが圧倒する。

『パインアイアン!イチゴクナイ!バナスピアー!マンゴパニツシャー!キウイ撃輪!影松!』

鎧武の後ろから他のロックシードの武器が宙へと出現すると、鎧武は召喚した武器をユートピアドーパントに向けて放ち、それを喰らったユートピアは後ずさる。

『エクストリーム!マキシマムドライブ!』

そこへWが背中の中の羽を広げてライダーキックを放ち、ユートピア・ドーパントを貫き爆散させる。

ビルド、オーズ、フォーゼはサジタリアス・ゾディアーツと仮面ライダーエボルと戦闘を行っていた。三人の仮面ライダーは連携して攻撃を繰り返し、相手に攻撃を許さないまま圧倒すると、ビルドがフルボトルバスターを出現させる。

『ファイナルマツチブレイク!』

ビルドのフルボトルバスターによる『ファイナルマツチブレイク』で、二体を切り裂く一撃を放つ。

『スキヤニングチャージ!』

『Limit Break!』

「セイヤヤヤ! (オリヤヤヤヤ!)」

そしてオーズとフォーゼによる『スーパータトバキック』と『ライダーアルティメットクラッシュャー』によるライダーキックが二体を貫き、こちらも撃破した。

そして、エグゼイドとクウガはゲームデウス、ン・ダグバ・ゼバの二体を相手をしている。

「ふん!」

圧倒的に誇る究極の力を誇るライジングアルティメットクウガのパンチとキック、無敵の力を秘めているエグゼイドにより、こちらも圧倒的に押ししている。

『キメワザ! ハイパー! クリテイカルスーパーキング!』

エグゼイドのガッシュコンキースラッシュャーによる斬撃が二体を襲い、二体にかなりのダメージを与え、そこにクウガが現れる。

「はああ! オリヤヤヤヤ!」

炎を纏ったパンチでゲームデウスを吹っ飛ばし、最後に右足のキックでン・ダグバ・ゼ

バを吹き飛ばし、こちらも二体とも倒すことが出来た。

そして、最後に残るのはアナザーディケイドと、彼と戦うジオウとディケイドだった。

「はあああ!」

「ヤアアア!」

ジオウのサイキョージカンギレードとライドブツカーによる攻撃で、アナザーディケイドをどンドン追い詰めていく。

「何故だ……!ディケイドの力は俺が持っている筈、今のお前にこれをなせる力は……」

「これは、俺の力だけじゃない。海東の力だ」

「海東だと……」

「奴のディエンドの力と俺の力を合わせて、仮ではあるが本来の力と同等になっている」
「ディケイドがライダー達をここまで強くさせているのは、本来の力に加えてディエンドの持つライダーの力を掛け合わせたものだ」と語る。

「悔つたな、仮面ライダーの力を!」

ジオウが今度はサイキョージカンギレードで押し込む。

するとジオウがディケイドの方に向けて振り向き、何かを同意したディケイドが手をかざしジオウとアナザーディケイドに灰色のオーロラカーテンを出現させると、そのまま二人を飲み込む。

「決着を付けろよ。ガキ魔王」

カーテンに飲まれたジオウとアナザーデイケイドは、どこか荒野に近い空間へと現れていた。

「なんだ……」

「門矢士に用意して貰った。ここで決着をつける為に」

「決着だと……」

ジオウがグランドジオウウオッチを外し、ブランクとなったミステリージオウウオッチを取り出す。

「スウォルツ。お前は俺が止める。そして……全ての世界を救う！」

ジオウがミステリージオウウオッチだったブランクウオッチを握るとウオッチが光り出し、ブランクウオッチは再びライドウオッチへと姿を変える。

『ミステリージオウ！』

ジオウミステリーのウオッチを両側のスロットへ差し込み、ソウゴはドライバーのロックを解除すると、ドライバーを回す。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

ジオウへ戻ると、前の方から後ろに羽、その手に二本剣を持ったアーマーが現れ、そ

のままジオウの体に纏われる。

『アーマータイム!歴史の全てを知る王!仮面ライダージオウミステリ!フ・リクス!』

ジオウミステリーアーマーのカラーがピンクゴールドからオレンジゴールドに変化し、アンダースーツは黒。アーマーの後ろには羽——ミステリアスウイング、その手に新たな砲撃のような形の剣『フリーズドラゴンバスター』を装着。

ジオウは新たななるフォーム、仮面ライダージオウ・ミステリーフリーズフォームへの変身を遂げた。

「ッ!!」

ジオウが空間内でエネルギーの波動を流し、アナザーデイケイドはそれを受けると、脚がすくみだす。

「くう……だが、忘れたのか。俺にはツクヨミから奪った一族最強の力とデイケイドの力が……っ!?」

一度は怯むも、直ぐに気を取り直したアナザーデイケイドは怪人達をこの空間に呼ぼうとする。しかし、怪人達を呼ぶ事が出来ない。

仕方なくジオウの時を止めようとするも、ジオウの時は止まらない。

「な、何故だ……何故……」

「このウオッチが、アンタの力を限定的にさせたんだ」

ミステリーフレアが攻撃を飛ばすのならば、ミステリーフリーズは力を止める能力が秘められている。あの時、流した波動がアナザーディケイドから力を限定的にさせたのだ。

「これで、お前は二人から奪った力は使えない。王として、ここでお前を止める！」

「貴様アアアアア！」

力を封じられたアナザーディケイドが怒りに身を任せて突っ込んでくる。しかしジオウはフリーズドラゴンバスターで防ぎ、そのまま反撃に出る。

「くう……」

「はあああ！」

両者は攻撃を繰り返し続け、お互いに譲らない攻防を繰り返す。

「このおお！」

アナザーディケイドが光弾を放つが、今度はジオウミステリーフレア的能力で攻撃を未来へ飛ばし、無効にさせる。

そのままジオウは背後へ回るとフリーズドラゴンバスターの斬撃が繰り返され、アナザーディケイドは地面へと叩きつけられた。

「これで終わりだ！」

そう言うときジオウは、両方のウオツチを同時に起動させる。

『フィニッシュタイム!』

ジオウが両方のフリーズドラゴンバスターを向けエネルギーを蓄積させると、アナザーディケイドに構える。

『ジオウミステリ〜タイムブ레이크!』

「はあく……はあああああーっツツ!!?」

ジオウの持つ両方のフリーズドラゴンバスターが砲撃となつて放たれ、その放たれたエネルギーはアナザーディケイドに直撃した。

すると灰色のカーテンが出現し、そのまま二人はオーロラカーテンに飲まれて元の場所へと戻る。

「ぐうう……」

アナザーディケイドが膝を折るも、持ち堪えた様子。ジオウは一度地面に着陸する。

「ソウゴ!お前……」

「これは……祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者!その名も仮面ライダージオウ・ミステリーフリーズフォーム!再び、歴史の全てを知る瞬間である!」

ミステリーフリーズフォームを見て、ウオズがいつもの祝えと叫ぶ。アナザーディケ

イドが周囲を確認するがしかし、彼の呼んだ怪人は全て撃破されて誰もいない。

「くう……こうなれば……」

アナザーデイケイドが残る力でオーロラカーテンを作り、その場から逃げようとする。

「っ!? そうはさせない!」

カーテンに潜られる前にジオウが決着を付けようと急ぐ。しかしアナザーデイケイドはカーテンを既に展開している。

「はあああ!」

その時、何か銀の刃のようなものがアナザーデイケイドの腹部を貫いた。

「ツクヨミ!」

彼の背後には、一度はソウゴ達を裏切った筈のツクヨミが立っていた。

アナザーデイケイドが逃げようとしたその一瞬の隙を突き、仮面ライダーツクヨミが手から出現させた銀の刃『ルミナスフラクター』でアナザーデイケイドを刺し貫いたのだ。

「あなたのような王は要らない!」

「貴様、最初から俺の隙を狙って……!」

アナザーデイケイドはツクヨミの真意を察すると、すぐさま彼女の攻撃を振り払い、

ツクヨミに光弾を放とうとする。

「ツク!?」

「「ツクヨミ!」」

そこへエール達も合流し、ツクヨミを助けようとするが距離が遠く間に合わない。
「うおおお!」

そんな危機的状況のツクヨミの前に現れたのは、なんと魔進チエイサーだった。
彼はそのままツクヨミを庇い、アナザーデイケイドの攻撃をなんとか受け止める。

「ぐう……!お前は、人間だろう。それが人間の心か!?」

「何だと?」

「人間の心とは……もつと美しいはずだっ!」

「やはり所詮、お前も仮面ライダーの端くれか!」

チエイサーはそう叫ぶと、そのままアナザーデイケイドの光弾を無防備に受けて変身解除され、そのまま後ろへ倒れそうになる。

だがそこへゲイツが駆けつけ、彼を抑えた。

「おい!しっかりしろ!」

「——皮肉だ(…俺も、仮面ライダーらしい)」

「お前……友がいるぞ。お前を助けようとしている友が……」

「……………俺に…友が……………」

「俺達も……………お前の友だ……………」

「……………いいものだな……………人間とは……………」

微笑みながらチェイスの肉体は粒子へと還り、現れたナンバー0000のコアが姿を変えた。

『チェイサー！』

そしてチェイスの身体から流れ出た粒子がブランクウオッチに流れて行き、仮面ライダーチェイサーのライドウオッチとなった。

そして、倒れるツクヨミにエール達が駆け寄る。

「ツクヨミ。大丈夫？」

「ええ……………ごめんなさい、みんなに迷惑をかけたわね」

「ううん。ツクヨミお姉ちゃんは、やっぱり私達の仲間だって分かって嬉しい」

そう言うとアールがツクヨミに抱きつく。

「ツクヨミ、お帰り」

「今度は一人で何とかせず、ちゃんと協力させてよね」

アンジュとエトワールが手を引つ張り、彼女を起き上がらせる。

「ツクヨミさん！私達のライブの準備お願いします」

「ツクヨミのセッティングは素晴らしいので、お願いします」

マシェリとアムールがツクヨミに近付くと、これから行うライブのセッティングを頼み込む。

「みんな……」

「ツクヨイミ〜!おきやえり〜!」

「はぐたん……」

はぐたんが彼女の胸に目掛けて飛び込んで抱き着くと、仮面の下で見えないが、ツクヨミの目から涙が溢れていた。

「妹よ……やはり……貴様は……」

アナザーデイケイドは腹部を抑えながらも、彼女達に近づこうとする。

しかし、それを塞ぐ様に23人の仮面ライダーが取り囲む。

「みんな!行くよ!」

『ギワギワシュート!』

『SHOOT VENT!』

『BLASTER MODE! EXCEED CHARGE!』

『MAXIMUM! HYPER CYCLONE!』

『フルフルマツチブレイク!』

ゲイツのジカンザックス、龍騎のドラグバイザー、ファイズのファイズブラスター、カブトのパーフェクトゼクター、ビルドのフルボトルバスターから放たれた光弾が四方方向から放たれ、全てアナザーデイクライドに直撃する。

「ぬうおおお！」

「はあああ！」

「デリヤヤヤ！」

そこへ、ブレイドのキングラウザーと電王のデンガツシャアの攻撃を受ける。だが、それだけでは終わらない。

「はあああ！」

さらにキバと鎧武による、ザンバットソードと火縄大橙DJ銃の大剣が、アナザーデイクライドを襲う。

「「「ダアアアア！」」」

そこへ空中からジカンチェンブレイド、ハンドル剣、ガンガンセイバー、ガツシャコンキースラツシヤーによるハリー、ドライブ、ゴースト、エグゼイドの攻撃が決まる。

「はあああ！」

「イヤアアア！」

次に、Wとウィザードが左右による突進攻撃を受ける。

「セイアアアア!」

その背後からはオーズとフォーゼの攻撃を受ける。

「はあ!」

さらに前からアギトと響鬼の炎を纏ったライダーパンチが炸裂。

「オリヤヤヤヤ!」

そして最後にクウガとウオズ、二人のライダーパンチも炸裂する。

「ぬうお!」

21人の仮面ライダーの渾身の攻撃を受け続け、アナザーディケイドが膝を折る。

『FINAL ATTACK RIDE!』

『フィニッシュタイム!』

トドメにディケイドとジオウが、それぞれドライバーを操作し、宙に飛んでキックの構えを取る。

『DE DE DE DECADE!』

『ジオウミステリ〜タイムブ레이크!』

「ヤアアアアア!!?」

キックの文字と目の前に現れたカードを潜り抜け、二人が同時にライダーキックを放つ。

アナザーデイケイドは防御する為、紫色の巨大なカード型のエネルギーを作り出した。

「くう……はあああ！」

二人がさらに力を入れて押し込もうとすると、アナザーデイケイドが展開していたカード型のエネルギーにヒビが入り、そのまま二人はカード型のエネルギーを打ち砕いた。

「バカな！」

「はあああああー！ー！」

二人のライダーキックはアナザーデイケイドの腹部に直撃、そのまま押し続ける。

「ば、ばかな！俺は……俺は王だぞ！仮面ライダーに……時見ソウゴに負けるはず……！」

そのまま吹き飛ばされて壁へと激突すると、アナザーデイケイドは爆散した。

「ぬわああああー！ツツ！」

そしてアナザーデイケイドから強制的にスウォルツへと戻り、アナザーデイケイドウォッチも体外へと摘出された。

「やったッ！」

「アナザーデイケイドを倒したで！」

エール達がアナザーデイケイドの撃破に喜ぶ中、ジオウの周囲から召喚したライダー達の姿が消えると直ぐに爆炎が晴れた所を見たが、そこにはスウォルツはいなかった。だがその代わり、壊れたウォッチらしき残骸が散らばっていた。

その中でデイケイドのみが一瞬、アナザーウォッチの残骸があつた場所から何かのオーラの様なモノが飛び出し、そのまま何処かへと飛んで行った事に気付いていた。

その日の夜…

「それじゃあ、行くよー!」

ソウゴ達はトラウムが作ったメカとタイムマジーンに乗ってビューティーハリーから発進し、一日遅れのクリスマスプレゼントを渡しに飛び立つ。

「遅れちゃてごめんね」

「メリークリスマス」

「はい。プレゼント」

子供達にプレゼントを配り、そこには遅れてごめんとメッセージカードを添えて置きながら、ソウゴ達は子供達へクリスマスプレゼントを配り続ける。

その頃ジェロスは、雪の降る町中をよろけながら歩いてた。

オシマイダーになった事と暴走により、体には相当の負担が残ってたが為に転びそうになるが、横から傘を持ったジンジンが支える。

「ジェロスさん」

「これ、バイト先で貰ったケーキです」

ジンジンがジェロスを立ち上げらせてから、タクミがバイト先で貰ったケーキを差し出す。

「売れ残りでしょ?」

「そんなの関係無いですよ」

「美味いんですから。これ」

「……仕方ないわね。今夜はパーティーよ」

「かしこまり!」

そして次の日。

ソウゴ達は家族や友人、世話になった人達がはぐくみホールに集まり、クリスマスパーティーが行われた。

「みんなでクリスマス——」

「行くのです!」

ツインラブのライブと共に、クリスマスパーティーが開催された。

「こっちだよ」

「早く早く」

「ちよつと、アンタ達……」

ウールとことりに連れられ、オーラも会場へとやってきた。

「私はやつぱり……」

「オーラさん。一緒に楽しみましょう?クリスマス♪」

ことりが笑顔で一緒に楽しもうと言うと、オーラから少し笑顔が浮かび、仕方なく一緒にパーティー会場に入る。

外の方ではソウゴ、はな、さあやがサンタクロースを見送りしている。

「それでは、私はそろそろ帰るとしよう。メリークリスマスー!」

「サンタさん、ありがとう!」

「お大事に!」

ソウゴ達に見送られながら、サンタクロースは自身の家に帰っていく。

「こう言うクリスマスも悪く無いね」

「アンリ……!」

「アンリ君……!」

サンタと入れ替わるようにして、松葉杖を持ったアンリと正人が現れる。

「オシヤレでしょ?」

「めっちゃイケてる」

デコレーションを施した松葉杖をはな達に見せて尋ね、ほまれがめっちゃイケてること返事する。

パーティー会場では、ツクヨミにゲイツとハリーが駆け寄る。

「何故、スウォルツに付くような芝居をした」

ゲイツはあの時、ツクヨミが何であそこでスウォルツに付くような真似をしたのかわからなかった為彼女にそう聞くと、ツクヨミは思い詰めた様な顔で語り出す。

「兄がした事の責任は、私が取らなければならない。だから……」

「一人で抱え込むな」

自身の家族が犯した責任は、同じ家族である自身が償うべきだと言うツクヨミに向けて、ゲイツに一人で考え込むと言う。

「お前のせいじゃないやろ。それにスウォルツの野望は終わったんや」

「お帰り。ツクヨミ」

「ゲイツ……」

ハリーとゲイツにお帰りと言って貰えたツクヨミは笑みを浮かべ、これで終わったの

かと思ったが、まだスウォルツがどうなったか気がかりだった。

さらに微笑みながらパーティを楽しむ人々を見つめるトラウムに、ルールーがカレーを差し出す。

「これは？」

「カレーです。見て分かりませんか？」

「いや、その……」

「ルールーが作ったんですよ」

「えっ？」

何故こんな時にカレーなのだと困惑しているトラウムに、えみるが横からルールーが作ったカレーだと言うと、彼はルールーの顔を見ながら驚く。

「はなから教わりました。暖かいご飯、食卓、みんなで囲めば——家族に、なれる。メリークリスマス。お父さん」

「ありがとう！ありがとうルールーちゃん……！ありがとう……！」

トラウムが声を上げて喜び、お礼を言いながらルールーを抱き締める。

「良かったですね、ルールー」

「はい」

そしてみんなの幸せそうな姿を見ながら、はなとソウゴは笑みを浮かべる。

「私……何かすつごい幸せだ！」

「俺も、凄く幸せだよ」

こんな風にもみんなと楽しいクリスマスを迎えられた。その事で、ソウゴとはなは凄く幸せだった。そのままパーティーは進み、皆で記念撮影を撮ろうとする。

「みんな集まって集まって！じゃあ行くよ！」

会場にいた全員が一ヶ所に集まり、はながカメラのセルフタイマーを押して走り出す。

「HUGっとー！」

「ぶいきゅあー！じおうー！」

しかしはなはみんなの元へ到着する手前で転び、その瞬間でシャッターが押された。

そんな光景を2068年にて、二人の男が見届けていた。

「彼らは遂に変えた……ジオウの運命を……」

青年が感傷深く思っている横で、高齢の男性は無表情のまま椅子に座っていた。そのことに違和感を抱いた青年は、どうしたのだと問いかけようとするが……

「——クライの奴め、面倒なものを作つたな……」

「えっ……?」

一方、クライアス社の社長室では……

「はあ、はあ……ッ。仮面ライダー……次は……ッ!」

「残念だけど、君に次はないのだよ」

息絶え絶えながらも、次こそはライダーを倒す。

そう思っていたスウォルツの元にクライが現れた。

「君の役目は、終わったよ」

クライが自身の手に握られたウオッチを見せると、それはジオウライドウオッチIIと似ている形状のウオッチである事が伺えた。

「社長……私に、もう一度……」

危機感を感じたスウォルツは王族としてのプライドを捨てるとクライに跪き、もう一度チャンスを欲しいと頼む。

すると、クライは完成させた菜の花の絵を見る。

「そうだね……」

不適な笑みと共に、クライはウオッチを握る。

「これにより、私達のクリスマスは守られた。

しかし、これから最後の戦いを迎えようとしているとは、まだ彼らは知らなかった。だが、その前に……」

次回予告！

アナザーデイケイドと決着を付き、久々にのんびり出来る日が出来、ソウゴ達はピクニックを楽しんでいた。

その時……

「プリキュア々の記憶、いただきます！」

謎の敵・ミデンにより子供されたプリキュアに、ジオウとエールは危機を迎える。オールスターズの命運は二人に託された。

果たして、ジオウとエールは全員を助ける事が出来るのか？

特別編4 劇場版・HUGつとジオウ！オールスターメモリーズ！

特別編4 劇場版. HUGっとジオウ!オールスターメモリーズ!

アナザーデイクライドが世界を崩壊させる為にライダー世界の怪人達を呼び寄せたことで、全世界は大混乱へと陥った。

『FINAL ATTACK RIDE! DE DE DE DECADE!』

『フィニッシュタイム!ジオウミステリくくタイムブ레이크!』

「ヤアアアアアア!!?」

しかし、時見ソウゴと門矢士が率いる24人の仮面ライダーが力を結集。アナザーデイクライドであるスウォルトツの野望を打ち砕いた事で、世界のバランスは保たれたのだった。

——しかし、その残照は今もまだ残っている様子。

横浜、ここはプリキュアオールスターズがフュージョンなど数多くの敵を倒した場所である。

この町の海岸の水面から、一体の巨大な怪人が現れた。

『又ウオオオオオ……!』

その怪物は巨大な肉体を持ち、顔に鎧の様なものを纏い、さらに頭上には青い炎がメラメラと燃えていた。

『えっ……カメラ回して』

偶然にも観覧車に乗っていたテレビ局のスタッフがその現場を目撃した。

『た、大変です。海から突然……巨大モンスターが……って、ええええ!!?』

『又ウオオオオオ……!』

再び巨大モンスターへと振り向くと、モンスターは施設を破壊しながら歩んでくる。そこに人達はみんな怯えて逃げ惑う。

その怪物は建物を破壊して立ち上がり、町を破壊しながら移動し、観覧車に向かって手を伸ばした。

誰もが終わりと感じた、その時……

「だああああ!」

「はああああああ!」

「うわああああ!」

そこへ三人の女の子が現れ、巨大モンスターへと突撃し、そのまま攻撃を決めると巨

大モンスターが後ろへ後ずさった。

空から現れたのは、この世界における最初のプリキュア……キュアブラック、キュアホワイト、シャインルミナス。三人のプリキュアだった。

怪物はその場に倒れ、三人はビルの屋上に着地した。

「来ます!」

ルミナスがそう言うと怪物が三人に向けてパンチを繰り出し、三人はそれを空中へと逃げて躲す。

怪物は何度も彼女達に攻撃、三人が観覧車のゴンドラに着地する。

『又ウオオオオ!』

怪物はゴンドラを無理矢理回転させると、高速移動するゴンドラの上を三人は飛びながら躲していた。

しかし一台のゴンドラが回転に耐えれず、空中へ飛んでしまった。

「みなぎる勇氣!」

「溢れる希望!」

「光り輝く絆と共に!」

「エキストリーム!」

「ルミナリオ!」

三人は必殺技エクストリーム・ルミナリオを放ち、怪物を浄化させた。

その様子を、怪物を討ち果たした彼女達の姿を見ていた者がいた。

「眩しい……輝き……欲しい……」

欲しい……欲しい……欲しい……っ

それは何処か分からないが、どこかでその何かは、映像を通じてブラック達の戦闘を見ていた。

ブラック達は飛んでいたゴンドラに乗っていたテレビ局のスタッフとアナウンサーの人を救出し、無事に地上へと返した。

「何だったんだろあの怪物？」

「怪物じゃ無いのは確かね」

「せっかくチョコパフェ食べに行くトコだったのに、盛り上がった気分を蜂に刺されたよ」

「いいじゃない。今から行けば——って、それを言うなら水を差されたじゃない？」

「だって……!」

愚痴るブラックをホワイトが宥める中、ルミナスが奥をジッと見つめる。

「ルミナス?」

「何か、妙な気配が……!」

「?」

ルミナスが何かに気付いたその時、ブラックとホワイトの目の前に、てるてる坊主のような姿をした怪物が現れた。

「よ(っ)せ……」

そう言うのと両手から光弾を放つが、彼女らはそれをどうにか避け、ブラック達が日本丸のマストの上に着地する。

「よ(っ)せ……!」

怪物は体当たりを繰り返してからパンチを繰り返して出し、ブラックとホワイトが防ぎ続けている間にルミナスが両足蹴りを叩き込んで吹き飛ばす。

「このてるてる坊主さん、ザケンナーじゃ無さそうです!」

「みたいだね。怪物でも無さそうだし……!」

「一体何者なの?」

「よ(っ)せ……よ(っ)せ……!」

何かを求めるように両手を伸ばし、ブラック達に向かって飛ぶ。

「何だか知らないけど——!欲しい物があるなら、襲って来たりしないでちゃんと」

葉で言つてよね！」

ブラックとホワイトがその場から跳び避けると、ブラックがそう告げる。すると、怪物はその動きを突然止めた。

「あれ？」

「嘘？・話通じる感じ？」

だが怪物は二人とすれ違つてから足を掴み、そのまま投げ飛ばして地面に叩き付けた。

「よこせ……よこせ……っ！」

怪物が口にエネルギーを溜め、二人に向けて光線を放たれた。

「ルミナス！」

そこへ、ルミナスが二人の前へと立つ。

この横浜が事件が起きている場所から、かなり離れた所へに住んでいる桐ヶ谷晴夜。彼の研究室にある男が現れた。

「よう〜」

「久しぶりだね。桐ヶ谷晴夜君」

「土さん。海東大樹」

晴夜の研究室に仮面ライダーデイケイド、門矢士と仮面ライダーデイエンドの海東大樹が現れた。

「これ、あなたに頼まれた所に行って見つけたものです」

晴夜はボロボロだが手紙のようなものを士に渡し、士はそれを受け取る。

「これも、あのツクヨミって女の子の為？」

士はそのまま手紙を受け取るが、海東の問いかけに対しては何も言わなかった。

とある公園にて、はぐたんがတွေ虫に興味を見せ、手を伸ばす。

「はぐたんーん！ニコってして！ニコって！きゃ〜っ！激カワ〜っ！」

そこにいるはながはぐたんにそう伝え、はぐたんが笑ってからすぐに自分のカメラで写真を撮る。

「今日も可愛過ぎだよ！さっ！はなちゃんにもっと良い笑顔見せてごらん！」

「はな先輩ばかりズルいのです！はぐたんーん、こっちも向くのです」

「はぐたん！こっちも向いて！」

横から割り込んだソウゴとえみるが一眼レフのカメラをはぐたんに向ける。

シャッターチャンスと言わんばかりの花を挿んで笑うはぐたんを撮り、周囲を移動し続けて撮り続けた。

「その表情良いねえ〜！」

そう言うのはなの傍では、シートを広げて座るさあや達がいた。

「お姉ちゃんてば……」

「三人とも張り切っちゃって」

「グラビア撮影かっつての」

「写真撮りたくなるのは分かるけどね」

「まあ、実際はぐたんはフォトジェニックやからな」

ことりが自身の姉に呆れている横でさあやとほまれ、ツクヨミがそんな会話をしていると、ネズミ姿のハリーが両手を腰に当てて自慢のように言う。

「分析の結果、これは親バカと言うのが妥当です」

「シャッターチャンスは一瞬の内なんだよ！」

「はぐたん！こつちこつち！」

スウォルツのアナザーデイケイドとの決戦後、ソウゴ達はしばらくのんびりと過ごしていた。

ここ最近クライアス社からの攻撃もなく、今日はみんなでこの公園でピクニックを楽しんでいる。

「買ってきたぞ」

「諸君。待たせたね」

そこへ、お昼用の買い出しをしてくれたゲイツとウオズが戻ってきた。とりあえずは写真を撮るのは一休みとし、ソウゴ達はシートの上で寛ぐ。

「はいなー、はぐたん。あーん」

はぐたんに離乳食をあげようとハリーがスプーンを近づけたその時、はぐたんがくしゃみを出し、その勢いで離乳食が顔面に当たってしまう。

「はぐたんやっちゃったねー」

「はい。はぐたん」

ソウゴがティッシュを使い、はぐたんに鼻をかませたその時、異臭を感じた。

「トイレはあっちね」

「行くよ」

はなとほまれがはぐたんのオムツを変えに向かい、さあや達は零れた離乳食の処理をする。

「しっかし、みんな手慣れたモンやなー」

はなとほまれがオムツを変え終えてから戻った所で、ハリーがそう言う。

「最初はどうなる事かと思っただけ、はぐたんのお世話もプリキュアも、みんなと一緒にだから頑張れたんだよね」

「うん。みんながいたから何とかになった！そんな気がするし、これからも、なんだっていいける気がする！」

全てははぐたんからのお世話から始まり、ライドウオッチにミライクリスタルを集め、クライアス社からはぐたんを守り続けた。それはここにいるみんなと出来た事であり、多くの思い出を作った。

「そう言えば、皆さんも元々は、はぐたんのような赤ちゃんだったのですよね？」
はぐたんを見ていたルールーがふと、みんなも赤ちゃんだったのと聞く。

「当たり前なのです」

「ああ、そっか。ルールーはアンドロイドだから、赤ちゃんだった時が無いんだ」

「はい」

ルールーはアンドロイドの為、赤ちゃんだった事など無いのでわからなかった。

「じゃあ、赤ちゃんだったらどんな感じだったのかな？」

ソウゴ達はもしルールーが赤ちゃんだったら、どんな姿なのかと想像する。

「ボルト？」

「ボルト……？？」

「元を辿ればそうかもしれないね」

さあやのイメージからボルトと出ると、全員の頭の中から一気にボルトのイメージが

膨らんだ。

「ボルトって、こう言うのだよね？」

「あれか……」

「でも、流石にボルトは……」

はなが手を動かしながらボルトのイメージを作る。

その時、ミライパッドの画面が動き出し、これを見たはぐたんが泣き出した。

「うっうっ……うああ〜〜！」

「えっ？はぐたんどうしたの？」

「よしよし……」

ソウゴとはなの二人がはぐたんを宥めていたその時……

〈ドオオオオ……〉

「うん？」

「「「おわおあああああ！」「」」

ミライパッドの画面から怪物がステンドグラスと共に現れ、人々が逃げ出した。

「な、何あれ!?？」

「てるてる坊主……?？」

「何だコイツは?？」

「つてか、あのグラスなんなの……」

いきなりてるてる坊主の様な怪物が現れ、何がどうなっているのかソウゴ達には状況が掴めなかった。

「ごきげんよう。あなた達の記憶、ゲットだよ！」

突如現れた怪物がそう言うのと全身の色がピンクに変わり、ステンドグラスを中に収容させてから体当たりを繰り返す。

「私達の記憶……？」

「どう言う事……!?？」

「何だか分からないけど、黙ってやられる訳には行かないよね！」

「みんな。行くぞ！」

「はぐたん。ちよつと待てて」

さあや達が目の前の敵に構えている横で、はながはぐたんを下ろすと、ソウゴ達は急いでジクウドライバーとプリハートを取り出す。

『ジクウドライバー！』

『ビヨンドライバー！』

『ジオウ！』

『ゲイツ！』

『ウオズ!』

『ハリー!』

『ツクヨミ!』

五人がライドウオッチをドライバーに装填して構えると。はな達六人はプリハートを取り出す。

『アクション!』

『変身!!?』

『ミライクリスタル!ハートキラッと!』

ソウゴ達がドライバーを操作し、アーマーが体に纏われ。六人が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取り姿を変える。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ライダータイム!仮面ライダーゲイツ!』

『投影!フューチャータイム!スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ

!』

『ライダータイム!仮面ライダーハ・リー!』

『ライダータイム!仮面ライダーツクヨミ♪ツ・ク・ヨ・ミ!』

「輝く未来をく抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアーラ！」

「HUGっと！プリキュア！」

全員が変身を完了し、いつもの名乗り上げも行う。

「ツクヨミは、はぐたんを守って！」

「ええ！任せて！」

ツクヨミがはぐたんを抱っこし、みんなの支援する態勢に入る。

「行くよ！」

ジオウの合図を起点に、全員がでてるてる坊主の怪人へと突撃していく。

「だあああああ！」

エールが怪物のパンチを避け、反撃にキックを繰り出す。怪物にそれを避けられず、まい、次の手の攻撃も避けられてしまう。

「エール！はあ！」

今度はジオウがジカンギレードで攻撃に出る。しかし、ジカンギレードから繰り出される剣撃も軽々と避けられる。

「そんな……」

「全然当たらない……!」

「絶好調ナリ!」

「それ、確か咲の口癖……?」

怪物が色を変えると、キュアブルームの日向咲の口癖を言い、それを聞いたソウゴらは不思議に思う。

すると、ジオウとエールに向けてチョップを繰り返し、アンジュがハート・フェザーを展開させて防ぐ。

「アンジュ!」

「このお!」

ゲイツがジカンザックスで狙撃し、ジオウとエールから離れた。

「はっ!」

その間にエトワールが上に跳んで降り、怪物をさらに遠ざける。

「はああっ!」

「でええっ!」

アムールがマシエリを投げ、そのままカカト落としを叩き込ませる。

「当たった！」

「ウオズ！仕掛けるぞ！」

「はあっ！」

ゲイツとウオズがそれぞれ、ジカンザックスとジカンデスピアを放って命中させる。

だが余り効かず、すぐさま宙に浮かび上がった。

「コイツ……マジで何なの？」

「ルミナス！ハーティエル・アंकクション！」

またしても怪物が色を変え、手を広げて「ハーティエル・アंकクション」と唱えて放つ。

すると、それを受けたジオウ達の動きが急に止まった。

「今の確か、ルミナスの技……!!? 何でこいつが……！」

「ホイップ・デコレーション！」

また色を変え、今度はキュアホイップのホイップ・デコレーションを放つ。

「今度はキュアホイップ……みんな！」

後方からツクヨミが左手を突き出し、時を止めてホイップ・デコレーションを止めた。

そのまま時間経ち、動けるようになると全員が避ける。

「今のプリキュアの技を……!?？」

「何でコイツが……!」

「一体どうなってるの……!?？」

「言ったでしょ? 記憶を貰うって!」

エトワールとジオウが困惑しながらそう呟くと、また色を変えてそう告げる。

「プリキュア! ダイヤモンド・エターナル!」

「はぐたん! ツクヨミ!」

今度はミラクルとマジカルのダイヤモンド・エターナルを放ち、後ろにいたツクヨミ、ハリーが受けて二人が飛ばされる。

「ツクヨミ! ハリー!」

「はぐたん!」

「プリキュア! パッションダイナマイト! オ・レ!」

またしても別の色に変え、次はキュアラブリーのパッションダイナマイトを放つ。

「全員! 散らばるんだ!」

ウオズの指示を聞いて散開し、全員が避ける。

だがその衝撃で、はぐたんを抱きかかえてたツクヨミが吹き飛んでしまう。

「はぐたん!」

「エール!はぐたん!」

ジオウとエールが土塊から土塊へ跳び移り、はぐたんを抱きかかえて着地し、庇う。その隙を逃さなかつた怪物が、口からジオウとエールに向けて光線を放つた。

「二ソウゴ（我が魔王・時見先輩・さん）!エール!二」

三人が目を瞑つた所に、飛ばされたツクヨミとハリーを除く全員が三人を庇うようにして前に出た。

「みんな!」

「大丈夫か?」

戻つてきたツクヨミとハリーの二人がジオウとエールの下へ直ぐに駆け寄る。

「ありがとうみんな」

「あれ……?」

庇つてくれた事にお礼を言うが、アンジュ達の姿が見えなかつた。

「みんな?」

「えっ……!?」

ジオウがゲイツ達は何処に居るのだと見渡していると、エール達はふと下の方を向いて、驚きの表情を見せた。

「ええっ!?」

「そんな……」

何故なら、エール達を庇ったアンジュ達が子供になってたからだ。

「みんなが小さくなっちゃった〜!」

何と、姿形はそのままなのに、アンジュ達の身体が赤ちやんサイズへと変わり。ゲイツとウオズも変身解除され、元の姿なのに現状はアンジュ達と同じだ。

「だれ?」

「えっ?」

「だれだ?お前?」

するとエトワールとゲイツが、誰だとジオウとエールに指を刺して言う。

「私だよ!キュアエール!はなだよ!」

「仮面ライダージオウ!ソウゴ!」

自分の名前をみんなに言うがしかし…

「誰なの……?」

「えっ?」

「そんな……」

小さくされたみんなは、ジオウとエールの事も覚えて無かった。

「おねえ、ちゃん?」

「良かった……！アールは覚えてたんだ……！」

「どうしてそんなにおおきいの？」

「えっ……？」

アールはエールが姉という事は覚えていたが、こちらも同様だった。おそらく、小さかった頃の事は覚えているようだ。

「アンジュ……エトワール……マシエリ……アムール……アール……」

「ゲイツ……ウオズ……？アムール？」

「アムールはどこ？」

二人はアンジュ達がいいた事を確認したが、アムールの姿だけが見えなかった。

「おい！あれ……！」

すると何かを発見したハリーが指差した方を二人が顔を向く。

「ああっ！アムール……！何て姿に……！」

「アムールがボルトになっちゃった……！」

「そんな……アムール……」

そこにはボルトが落ちてて、ジオウとエールはそのボルトをアムールと思い込んだ。新たに五人の記憶確保完了。ついでに二人の記憶も貰い。イケてんじゃない？」

色を変えた怪物が、五つのステンドグラスを見つめて眩き、また色を変える。それを

見てジオウは怪物に振り返る。

「君は……一体なんなの……」

「僕? ミデンだよ。もう残ってるプリキュアはごく僅か。あなたの記憶、貰うのです!」

ミデンと名乗ってからまた色を変え、ジオウとエールに向かって飛ぶ。

「だああああああつ!」

「うわあつ!」

するとその時、空から横浜で戦っていたブラックとホワイトが現れてダブルキックを繰り出し、ミデンを吹き飛ばした。

「ブラック!」

「ホワイト!」

「大丈夫? エール? ソウゴ?」

「私達は大丈夫……でもみんなが……」

そう言つてエールが小さくなったアンジュ達を見ると、彼女達に視線を向けたブラックとホワイトは何かあったのか瞬時に察した。

「わかつてる」

「とにかく今は、この子達を連れて逃げるのが先」

「あの………逃げるって言いました!?」

ホワイトの口から逃げると聞き、飛ばされたミデンがこっちへ向かって向かってきた。

『グランドジオウ！』

それを確認したジオウはグランドジオウウオッチを起動させると、そのままウオッチをスロットへと装填した。

『へポオオン！パアアアア！～アドベント！COMPLUTE！ターンアップ！
へピイン！～CHANGE BEE TLE！ソードフォーム！ウエイクアップ！カメ
ンライド！サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！3・2・1！シャバドゥビ
タツチヘンション！ソイヤツ！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！
ライダータイム……！』

ドライバーのロックを解除すると、地中から巨大な黄金の時計台が後ろに現れ、さらにその周りには歴代ライダーの石像が出現。そして音声が続けると象の表層が剥がれ、20もの数の仮面ライダーたちの姿が現れる。

『グランドタイム！クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド！響鬼・カブト・電王
！キバ・デイクライド！ダブル！オーズ！フォーゼ！ウイザード！鎧武・ドラーイーブ
！ゴースト！エグゼイド！ビル・ドール！』

祝え！仮面ライダー！！？グ・ラ・ン・ド！ジオウ！』

ドライバーを回転させるとライダー達が黄金のフレームに取り込まれ、ソウゴが変化したジオウの身体に張り付くように装着されてアーマーが形成し、開いたフレームからライダー達が現れるとそれぞれの決めポーズをとって固定。最後に頭頂部にジオウが固定されると『ライダー』のインジケーションアイがセットされ、グランドジオウへと変身完了した。

「ソウゴ!」

「大丈夫!早くみんなを!」

少しでも時間を稼ごうと、ジオウは一人でミデンへ向かっていく。

『オーズ!』

ジオウがオーズのレリーフを触り、そこからオーズ・タジャドルコンボが現れた。

『スキヤニングチャージ!』

「セイヤヤヤ!」

ミデンにオーズのライダーキックが炸裂する。

「プリキュア!ファイアストライク!」

「うわああああ!」

キュアルージュの必殺技ファイアストライクが放たれ、突っ込んでくるオーズに向けて放たれオーズに直撃し、オーズが消えた。

「!?? だつたら……」

『ウイザード! 鎧武!』

今度はミデンの頭上からウイザード・インファイニティースタイルと鎧武・ジンバーレモンアムーズが現れた。アックスカリバーをアックスモードとし、鎧武はソニックアローを構える。

『シャイニングストライク!』

『ジンバーレモンスカツシュ!』

「はあああああ!」

「オラアアア!」

圧倒的物量を誇るアックスカリバーの一撃とソニックアローから放たれたエネルギーの一撃がミデンへと振り掛かろうとした。しかし……

「ビートバリア!」

今度はキュアビートのビートバリアがウイザードと鎧武の攻撃を防御する。

「プリキュア! ハートシュート!」

今度はキュアハートの色へと変わり、ハートの必殺技“ハートシュート”が放たれ、無防備のウイザードと鎧武に直撃し、二人共消滅した。

「今だ!」

隙を見せたと思ったジオウはWのレリーフを触る。

「W!」

WのゲートからW・サイクロンジョーカーエクストリームが召喚され、ジオウがサイキョージカンギレードと共に構える。

「はあく……はああああああ!」

ジオウのサイキョージカンギレードとWのプリズムビッカーから放たれた斬撃がミデンへと向かって飛ぶ。

「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ」

しかし、またしても色を変えて今度はプロサツムの技・ピンクフォルテウェイブにより、二人の放った斬撃を相殺されてしまった。

「そんな……ライダーの力が、通用しないなんて……!?!」

グランドジオウの力を引き出し、ライダーを呼んでいるのにライダー達の力がミデンには通用しなかった。

「凄い。凄い。それも輝いてる!それも欲しい!」

一方のミデンはジオウの力を見て凄いと褒めると、それも欲しいと子供のようにしやぎ回る。

「決定!その力も貰う!」

「えっ?」

「プリキュア!ピースサンダー!」

ジオウとWの頭上から雷が落ちてきた。突然放たれたキュアピースの必殺技であるピースサンダーに、ジオウは避ける間もなかった。

「うわああああ!」

ピースサンダーがジオウとWに直撃した影響で、Wは消滅、グラウンドジオウオッチがドライバーのスロットから外れたジオウは強制変身解除してしまい、元のソウゴの姿へと戻ってしまった。

「ソウゴ!」

エールが戻って倒れてしまったソウゴに駆け寄る。

「頂き!」

ミデンは腕を使い地面に落ちたグラウンドジオウオッチを拾うと、それを口へ放り込んで飲み込む。

「グラウンドジオウオッチが……」

「んん……ふはあー!」

ミデンの口からなんと、19枚のステングラスが現れた。

「あれは……ライダーの……」

そのステングラスには、ソウゴが今まで集めたライダー達の姿が描かれていた。

「凄い!凄いな!」

ミデンはグラランドジオウウオッチを取り込み、興奮状態だった。

「みんな!」

そこへ、ツクヨミがソウゴのタイムマジンに乗って現れた。

「早く乗って!」

「ソウゴ。早く」

「うん」

二人はミデンが仮面ライダーの力に喜んでいるその隙に急いでタイムマジンへ行こうとすると、エールが小さくなったルーラー?であるボルトを落としてしまった。

「あ、アムールが……」

ボルトが転がるとそこに誰かがおり、それとぶつかった。

「よかった……アムール……あれ?」

「アムール……」

そこにいたのはアンジュ達の同じように赤ん坊となったアムールだった。

「お前達もよこせ!」

アムールに気を取られてたソウゴとエールに向けて、ミデンが口から光線を放つ。

気付いて逃げるも間に合わず、当たる寸前でブラックが突き飛ばす。

「ブラック……!」

だが今度はホワイトがブラックを突き飛ばした。

「ホワイト?!」

「この子をお願い……なぎさ……!」

「えっ……?!? ほのか……っ?!?」

ホワイトが最後の力を出し、抱き抱えてたアンジュをブラックに預けた直後、ブラックの変身が解けてホワイトが子供にされてしまう。

「みんな!」

ツクヨミがタイムマジーンを動かし、みんなに近づく。

「急いで!」

ハリーがなぎさとアンジュ達を担いで、エールはアムールとソウゴと一緒に急いでタイムマジーンへと飛び込んだ。

全てのメンバーを乗せたタイムマジーンは猛スピードで逃げ去り、この場所から撤退した。

「……ま、いいか。こーんなに沢山ゲット出来たんだもん!」

ミデンが戦利品のステンドグラスを傍に浮かべて喜びを見せる。

「フッフ、これで……」

そう呟いてからミライパッドの画面の中へ入って行った。

その様子を、気になって後をつけた門矢士が、桐ヶ谷晴夜と共にその様子を見ていた。

「何やら、面倒な奴のようだな」

「……」

後ろにいる晴夜は落ち着きのない様子だった。

「手は出すなよ」

「……でも、今回は……」

「ダメだ。これは奴らが、最後の決着を付けられるかどうかを試すためでもある。わかるよな」

「でも……」

「……はあく……」

晴夜の顔を見ていた士は、助けに行きたくてジツとしていられないと顔に書いてあるように思え、あまりのお人好しっぷりに思わずため息を吐いた。

一方で、どうにか逃げ切ったソウゴ達はタイムマジンから休憩所に着き、変身を解

いて休息を取る。

「ソウゴ。大丈夫？」

「うん。でも……」

ソウゴとはなは赤ちゃんされたゲイツやアンジユ達を見る。

「怖いよ……怖いよ……」

「お婆がいるところなんていたくない……」

「おかあさんどこ……？」

「わたしかえりたい……！」

だがウオズ、アムールとアールを除く四人がぐずったりしてた為、休む暇は無かった。

「私がお姉ちゃんだつて事、覚えてて良かった」

「泣かないでマシエリ……！」

はなはアールが自身が姉であることに安堵し、ツクヨミがマシエリを宥める中、何度もパンチやキックをツクヨミの顎に当てる。

「よしよしよし、ほーらほのか。べろべろべろ、ばあくー！」

なぎさが変顔で笑わせようとするも逆効果で、更にはぐたんも泣いてしまう。

「駄目か……」

「はぐたんまで泣かせてどうするんや！アタッ！」

「火に油注がないで!」

ツクヨミがなぎさに怒鳴りつけるハリーに頭を叩いて黙らせる。

「どうしようミポ……ほのかが……」

「ミツプル、元気を出すメポ!」

ベンチの下で泣きそうになった二人の妖精がおり、ミツプルをメツプルが励ます。

その最中、周囲が暗くなり。二人はその方向を向くと、いつの間にか泣き止んでたアンジュとエトワールが目を輝かせてメツプルとミツプルを見ていた。

「かーいいい!」

「どうぶつがしゃべってる〜!」

「もつとやてよ!」

そこへゲイツも現れると、二人と一緒にメツプルとミツプルを掴み、顔や耳を引っ張って遊び出した。

「ミポ! 止めてミポ!」

「離すメポ!」

二人はゲイツ達の手元から離れ、ハートフルコミュニケーションに戻った。

「まってー!」

「なんでにげるのー!」

「でてこーい！」

三人がそう叫んでハートフルコミュニケーションをベンチに叩き付けた。

「「あーっ！」」

「駄目駄目！」

「アンジュー！エトワール！」

「ゲイツ！」

なぎさがハートフルコミュニケーションを持っていた二人から奪い取り、ソウゴとはなが怒る。

「「うわああ〜〜〜！」」

当然ながら三人はまた泣き出し、マシエリ、ほのか、はぐたんまでも貰い泣きし出した。

「しまった……！」

「何でこんな事に……！」

「はあ〜……どうして……！」

なぎさとはながオロオロとしていると横で、ソウゴは何でこんな事になったのかと頭を悩ませてばかりいた。

とりあえずは、みんなを落ち着かせようと奮闘するソウゴ達はその後、ツクヨミはな

ぎさにあのてるてる坊主の怪人・ミデンについて尋ねる。

「なぎささん、さっきのミデンって何なんですか？」

「あたしにも詳しい事は分からないの」

「分かっているのは、プリキュアの記憶を奪って回っている事だけメポ……」

「記憶を奪われたら、小っちゃくなっちゃみたいミポ……」

「そんな……」

「ミデンの持ってたステンドグラス、あれが奪われたみんなの記憶だと思うの」

確かにあの時の、大量に現れたステンドグラスに見覚えがある絵がいくつもあった。

あれは、みんなの記憶から生まれたものだど察する。

「せやからプリキュアの技ぎよーさん使えたんやな」

「ちよ、ちよっと待った!」

「あんな沢山持ってたって事は……!今無事なプリキュアは……!」

あの数のステンドグラスを思い浮かべたソウゴは、今無事なプリキュアは何人いるのかと聞く。

中央に無数のステンドグラスが積み上がった大聖堂の内部のような場所に、ミデンが上機嫌で戻る。

「ただいまー」

「お帰りー！」

「今日もたーくさん記憶をゲットしたよ！」

「私の記憶がこんなに増えたね！ウルトラハッピー！」

「ワクワクもんだあ！」

「絶好調ナリ！」

そこではミデンが一人芝居をしながら、飛び回ってた。

同じ頃、その上の階にある遊戯室では小さくなったプリキュア達が遊んでた。

今の現状をなぎさの口から聞いたソウゴ達は、目を大きくしながら驚く。

「めちよつくー！残ったプリキュアは私となぎささんだけなのー!?」

「面目無い……」

はなのお察し通り、無事なプリキュアはなぎさとはなの二人だけだった。

「しかも、あたしは変身出来ないから……」

「大丈夫」

不安な表情のなぎさにソウゴが大丈夫と声をかける。

「ソウゴ君」

「俺達がいるよ。みんなを元に戻そう」

まだ仮面ライダーがいる、だから心配しないで。ソウゴの励ましをそう受け取り、なごきは頷く。

「せやな。とにかく、アンジュ達を早よ元に戻さな……」

そういえば先まで騒いでいたアンジュ達が凄く静かだなと思い、はな達はハリーと共に振り向く。

「あーっ!」

「いなくなってる……!」

なんと彼らが話してた間に、いつの間にかゲイツ、アンジュとエトワールとほのかが何処かへと消えてしまったのだ。

ソウゴとはなはマシエリとアーラを抱えて、ゲイツ達三人を探す事となった。

「ゲイツ!アンジュ!」

「エトワール!」

二人は声を出して三人を探すが、未だに見つからなかった。

「いないね」

「中々見つからないね……」

見つからないことに二人が頭を悩ませると、はなは自身が背負っていたアーラが徐々

に涙目になって来た事に気付く。

「お姉ちゃん……お母さんとお父さんは……どこなの……」

「あつ!!?」

この頃の記憶となると親が恋しくなる。それを思い出したはなは、非常にまずいと危機感を出し始める。

「うわあああゝゝ!」

アーラが泣きそうになると、先にソウゴが抱いていたマシエリが泣き始めた。

「ま、マシエリ……あつた!!?」

マシエリが靴を手に持ち、それでソウゴの顔を殴った。

「ソウゴ……ことり!お母さんとお父さんには、すぐ会える少し待てて……ね」

「すぐって……いつなの……?」

「そ、それは……」

「う、う、うわあああゝゝ!!?」

いつと言われて言い淀んでいると等々、アーラも泣き始めしまった。

「「めつちよく!」」

三人を見つけるよりも、ソウゴとはなは二人のお世話で手を焼きそうだった。

その頃、なぎさはほのかを見つけるが、当のほのかは犬をジッと見ていた。

「ちゅーたろう」

「似てるだけ! 忠太郎じゃないの!」

ほのかは目の前の犬を、自身の飼い犬である忠太郎と思い込んでいるらしく、その犬に語りかけていた。

「さっ、行こう。アンジュ達探さない」と

ほのかはなぎさの言葉を無視し、犬を撫でた。

「ほのか〜……」

こちらはこちらで、しばらく時間がかかる様子。

同じく、小さくなった仲間達を探していたハリーとツクヨミはと言うと……

「おーい! かくれんぼは終わりやでー!」

「みんな! 出てきて!」

アムールとはぐたんを抱えたハリーとウオズを抱えたツクヨミが、そう告げながら歩く。

そんな中はぐたんは、またもよおした。

「ちゅーちゅー!」

「はあ……。オムツ変えたらんと……。つてアカン！荷物置いて来てしもたー！」
「もう……。…」

ハリーは荷物を置き忘れた事に気付कि、慌ててミデンが現れる前にいた場所へ二人は駆け足で戻った。

川沿いのある道で、テレビ局がソフトクリームの食レボの収録していた。

「あの、たすけてください。わたし、おわれてるんです！」

するとアンジュがレポーターの女性に助けを求め、はなとソウゴを指差す。

「っ！はな！アンジュだよ！」

「ホントだ！」

「あらら……。…」

二人が気付いた所で、アンジュが女性の後ろに隠れる。

「やくしじさあやです！おうちにかえりたいので、おかあさんにでんわしてください！」

「さあや！ほら！おいで！」

食レボの女性にアンジュが電話してとお願いしていると、ソウゴとはなが駆け寄る。

「あの子達はお兄さんとお姉さんじゃないの？」

「しらないひと」

「さあや……」

ソウゴは幼馴染に知らない人と言われて軽くシヨックを受けるが、二人が彼女に会ったのは今のさあやにとつてはずっと先で覚えてもいないも同然な事なので、無理もない事はわかつているが為に余計頭を悩ませていた。

「知ってます知ってます!全然知ってます!」

「おぼけているからかえりたいのに、かえしてくれないんです!」

「はな、マシエリお願い」

ソウゴがはなにマシエリを預けると、アンジュに近づく。

「さあや、みんなが待つてるよ。戻ろう」

そう言つて彼は、アンジュに手を差し向ける。

「帰ろうね」

「……」

その時アンジュはソウゴを見て、何処かで同じような事を言つてくれた人がいたと感じ出し。その感覚を信じた彼女はソウゴの手を取る。

「お騒がせしました〜!」

はながそう告げ、ソウゴ達は一目散に走り去った。

「な、何だったの……?」

女性達は呆然としたまま、走り去る二人を見ていた。

彼らはしばらく走ってから足を止め、一息整える。

「何で……こんなに優しそうなはお姉さんとソウゴお兄さんから逃げて……知らない人に助けを求めるかな……」

「だって、テレビのひとはおかあさんのおしごとひとだもん。みんなおかあさんのおともだちだもん」

「小っちゃい頃の記憶は残ってるんだ」

それを聞いたはなは、小さくされたアンジュ達が子供の頃の記憶が残ってる事に気付いた。

「でも、お兄さんなら信用できるかも……」

だがアンジュはソウゴの事は信用出来ると言い、ソウゴの方に偏る。

「あっ！」

その時はなは、アンジュの記憶が小さい頃のものならばエトワールが今居そうな場所を思い付く。

そして来たのがスケート場で、案の定エトワールがそこにいた。

「君、お父さんかお母さんは？」

「はいはいはいー！私達が保護者のお姉さんとお兄さんでーすー！」

「お邪魔しましたー！」

係員の男性がエトワールに尋ねた直後。はなとソウゴが現れ、はながそう告げてからエトワールを連れて一目散に走り去った。

「いやーはなして！おうちかえるー！」

暴れるエトワールをはなが抱っこし、アンジュはソウゴの服を掴みながら渋々だが付いてきてくれる。

「後はゲイツ……」

「ゲイツ……何処に……」

最後に残るゲイツを探すソウゴとはな。しかし彼らはゲイツの小さい頃のことを知らない為に、捜索は難航していた。

「あつ、あれ……」

「ん？」

ソウゴはアンジュが指を指した方を見ると、そこは遊具が置かれている公園だった。更にその急斜面の坂を登ろうとしている子がいた。

「うっ……」

そう、そこいたのはゲイツだった。

「わあああああ！」
「わあああああ！」

だが登りきれず、そのまま元の場所へと落ちていく。

「ゲイツ！」

ソウゴとはながゲイツに駆け寄る。

「また、おまえ！」

「大丈夫。怪我してるじゃん」

ソウゴが擦りむいた怪我を見ようとするとゲイツは後ろを向く。

「どうして……こんな無茶したの？」

「……つよくなりたい……」

「強く？」

「そうすれば、だれもなかない」

「ゲイツ……」

ゲイツはきつとこの頃から、泣いている人を助けたい。その為に体を鍛えて、泣いている人を守るくらいに強くなりたがっていたのだとソウゴは察する。

「ゲイツは、強くなれるよ」

「なに？」

「だって、泣かないようにする為に頑張っているから、絶対、ゲイツは強くなれる!そんな気がする!」

「……ほんと……?」

「うん」

ソウゴは今のゲイツのように強くなれると言葉をかける。そう言われてゲイツは、ソウゴとはなについて行くことになる。

とある宮殿では、記憶を奪いミデンが喜びながら飛び続けるが、突然動きを止めて表情を変える。

「………つまんない」

そう言うと彼は、ステンドグラスの山を横からの掌底で崩す。

「つまんない!つまんない!つまんない!」

何度も叩きつけ、更に山を崩す。

「何で……?」 僕の世界は、こんなにもキラキラしてるのに!」

記憶を奪つても納得のいかない様子で、その不満から暴れ出したようにも見える。

「そっか。キラつとひらめいた!」

すると何かを思い付き、開き直ると色を変えてホイップの口癖を言った。

ハリーとツクヨミは公園にある木の下ベンチに座り、その傍にウオズ、アムールとはぐたんが座る。

「荷物残つてて助かつたわ……」

「おおはな！ソウゴ！こつちやこつち！」

背後から、アンジュ達を連れたソウゴとはなが現れる。

「三人とも見つかったんやな。ようやったで！」

「あつ！はなちゃん達見ーっけ！」

「なぎささん」

そこへほのかを腕に抱えたなぎさが現れる。

「良かった。見つかったんだ。」

「わたし、おうちかえりたい！やめてー！」

「もう、勘弁してよ……これじゃああたし、攫つて来た人みたいじゃ……」

「つ！また逃げるんか！」

エトワールが逃げようとしてたのをハリーが気付いて声を上げると、彼女はその声に驚いて転んでしまう。

「エトワール！」

立ち上がったのはなのポケットからカメラが落ちる。

アンジュが目には涙を溜め、泣き出しそうになる。

「あーもう泣くなやー！」

更にエトワールが泣き出し、ハリーが駆け寄る。

「これ」

「きみの？」

「ありがとう」

アムールがカメラを拾って差し出しはなが受け取ると、アムールと一緒に駆け寄って来たウオズにお礼を言う。

はながカメラを見ると、カメラにはいつの間にか電源が点いてて、そこにはミデンが現れる前に撮った集合写真が画面に映ってた。

「はな……」

「何で……こんな事になっちゃったのかな……」

ソウゴがカメラの画面を凝視していたはなに近づくと、彼女の目から涙がポロポロと溢れ始めた事に気付く。

「ねえ、ソウゴもあの時、私達がソウゴを忘れた時もこんな気持ちだったの……」

「……………うん……………同じ気がする」

ソウゴは、アナザージオウⅡとの戦いで歴史改変を受けたあの事件にて。一時的であつたが、みんなから忘れられていた事を思い出し、あの時の状況と似ている様に感じた。

「何でみんな忘れちゃつたの……さあや、ほまれ、えみる、ルールー、ことり、ゲイツ、ウオズさん……」

あんなに一杯笑つて……頑張つて……みんなで……」

「みんな……はな……」

「はな……ソウゴ……」

今までの事が、皆と育んできた思い出を全て忘れられてしまった。それは、はなにとつて辛く、二度目の経験であるソウゴにとつても、当時の事を思い出した所為で辛い気持ち再び出始めていた。

ツクヨミもそんな二人から醸し出す雰囲気、思わず暗い表情を浮かべる。

「なんや！プリキュアたるもの、へこたれて場合じゃないやろ！」

「そんな言い方しないで！」

はなを見兼ねたハリーが喝を入れると、彼の言った言葉になぎさが声を上げた。

「プリキュアつて言つたつて、ただの中学生なんだよ。自分でどうする事も出来なかつたから、誰だつてそうなるよ……」

「……」

「なぎささん……」

「私だって……私だって……」

なぎさも涙目になりながら、小さくなったほのかを見つめる。

「はぎゆっ?」

その時、はなの持つカメラから水しぶきのような現象が起こると、はなのカメラからミデンが現れた。

「ミデン……!」

怯えるほのかを、なぎさが抱き締める。

「まだまだ記憶が足りないの!あなた達の記憶もゲットだよ!」

そう言うとき色を変え、なぎさとほのかに向けて体当たりを繰り返す。

「ここにいて」

なぎさは体当たりを避けると、ほのかにここにいるよう伝えて降ろす。

「これ以上、プリキュアの記憶は渡さへん!」

ハリーが人間に変化し、ジクウドライバーをセットする。

「みんなは、私を助けてくれた。

だから……今度は私がみんなを助ける!」

はぐたんをベンチへ座らせたツクヨミもジクウドライバーを装着した。

『ハリー！ギアヘリテージ！』

『ツクヨミ！』

そしてライドウォッチのスイッチを入れた二人がドライバーのスロットにウォッチを装填し、ドライバーのロックを解除して叫ぶ。

「変身！」

二人が叫びドライバーを回す。

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！ヘリテージタイム！導け！心に望む未来へ！ハリーギアヘリテージ！』

『ライダータイム！仮面ライダーツクヨミ♪ツ・ク・ヨ・ミ！』

仮面ライダーハリー・ギアヘリテージ、仮面ライダーツクヨミへと変身を完了した二人は、そのままミデンへ突撃していく。

「ヤアアア！」

「エメラルド！ソーサー！」

ミデンは緑色に光る盾を作り出し、ハリーのジカンチェーンソードを受け止める。

「くう！」

「はああ！」

ハリーの攻撃を受け止められてしまったがそれはフェイク、ツクヨミが今度こそ攻撃を決める為、ミデンの背後を既に取っていたのだ。

『フィニッシュタイム!』

ツクヨミはドライブバーを回すと、右足に光が集まって隙を見せたミデンに向けて放たれようとしていた。

『タイムジャック!』

月のエフェクトと共に、ツクヨミのキックがミデンへと向かっていく。

「よっしゃ!」

ツクヨミの攻撃が決まったと思った次の瞬間……

「サイ!ゴリラ!ゾウ!サゴーズ!」

ミデンの色が灰色へと変わり、ツクヨミのライダーキックをそのままモロに受けた。

「そんな……」

しかし、ツクヨミのキックを受けてもビクともしなかった。

「あれって!オーズの?」

その戦いを見ていたソウゴは、あれは仮面ライダーオーズのサゴーズコンボと似ているのに気づき、更にオーズが変身するコンボの中でも防御力が高いという力も似ていた。

「どうして……っ!?」

ソウゴはあの時、ミデンはグランドジオウオウオッチを取り込み19枚のステンドグラスを出現させた事を思い出す。

逃げるの精一杯でちゃんと見れてなかったけれど、あの19枚ステンドグラスがライダー達の記憶なら……

「ミデンは……プリキュアだけじゃなくて、ライダーの力も……」

今のミデンにはグランドジオウのライダーの力すらも使えることになる。

そう思っている中、ハリーとツクヨミはミデンの繰り出す技と動きに苦戦される。

「プリキュア! シャイニングサークル!」

今度は光のリングがハリーとツクヨミを捕らえる。

「ハリー! ツクヨミ!」

「ルナ! トリガー! トリガーフルバースト!」

今度は左右が青と黄色の色へと変わり、Wのフォームチェンジの姿となると、ミデンの手から無数の光弾が二人に打ち付けられる。

「うっ……」

「なんや……こいつは……」

二人が苦戦してついに変身解除されて倒れているの見て、ソウゴもジクウドライバー

を装着する。

「はな! なぎさ! 離れて!」

二人に離れるように促すとソウゴはジオウオッチIIを取り出す。

『ジオウ! II!』

ジオウオッチIIを分割しドライバーの左右に差し込むと、ソウゴの後ろから二つの時計のエフェクトが現れた。

「変身!」

ドライバーを回し、二つの時計は左右対象に止まって、ソウゴの体を纏う。

『ライダータイム! 仮面ライダー! ライダー! ジオウ・ジオウ・ジオウ! II!』

「はああ!」

ジオウIIへと変身し、ジオウがミデンへ走り向かって行きながらサイキョーギレードで振りかかるが、簡単に避けられる。

「プリキュア! マッチシユート!」

するとミデンから緑のエネルギー塊が作られ、ジオウに向けて放たれる。

ジオウは咄嗟にサイキョーギレードを盾とし防ぐ。

「クロックアップ!」

だがなんと、次に繰り出されたのはカブトの超高速に動く能力『クロックアップ』だっ

た。

「うっ……あっ……わああッ！」

クロックアップでは、今のジオウはそのスピードについていけない。未来予知を発動させる暇も与えられぬまま、ジオウはただミデンに攻撃を受け続け、そのまま転がり倒れる。

「くう……」

「ソウゴ！」

何とか起き上がるも、プリキュアと仮面ライダーの力を使いこなすミデンに圧倒的に押されている。

「だったら……」

『サイキョーフィニッシュタイム！』

ジカンギレードのケンモードとサイキョーギレードを合体させ、『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

『プリキュア！ シューティングスター！』

『キングギリギリストラッシュ！』

『オリヤヤヤヤ！！？』

ミデンが突撃し、ジオウはそれに対抗するためサイキョージカンギレードを振り下ろ

した。

「よし!このまま……!」

結果は相討ちに近いほどに拮抗しているが、ジオウの方が少し優位に立ち始める。

「分身の術!」

「えっ?」

だが目の前の相手が黄色と紫の色に変化して“分身の術”と叫ぶと、ミデンが背後にも現れた。

「チョーイイネ!スペシャル!サイコー!」

分身して現れたミデンは赤く変わり、攻撃中で何もできないジオウに向けて炎の攻撃が放たれた。

「うわああああああ!」

それを受けたジオウはサイキョージカンギレードを落としてしまい。そのままミデンの攻撃を受け続けてしまった。

「あっ……!」

攻撃が終わると、ジオウはそのまま倒れてしまう。

「お兄さん!」

「ソウゴ!」

倒れると強制変身解除となって元の姿へ戻る。そこへはなとなぎさが駆け寄る。

「ソウゴ！大丈夫……」

はながソウゴを支え、起き上がらせる。

「はな……なぎさ……逃げて！」

それでもソウゴは、プリキュアの二人にミデンから逃げてと言う。

「逃げるたって……」

逃げる様に言われたはなだが、彼女は宙へと浮かぶミデンを見上げる。

「みんなの記憶、取り戻さなきゃ！」

どうやら彼女に逃げるつもりはなく、飽くまで戦うつもりだ。

「あつはつはつはつ！私を倒さない限り、記憶は永遠に戻らない！この私は無敵なんだから！」

ミデンが光弾をソウゴ達に向けて放つ。

「みんな！」

近くにいるアンジュ達を守るためはなとソウゴが盾になろうと庇う。

「？」

しかし、アンジュ達には当たらず、ましてやソウゴとはなにも当たらなかった。

「いったあ……」

「なぎささんー!」

なんと、なぎさが前に出てミデンの攻撃を生身で受け止め、ソウゴとはな、アンジユ達を守ったのだ。

「何やってるメポ!」

「なぎさはほのかが一緒じゃないと変身出来ないミポ!」

二人のパートナーの妖精が変身出来ないのに、無茶をするなぎさに言う。

「そうだね……!だから取り返すの!」

あたしには、ほのかがいないと駄目だから……!ほのかの事が好きだから!」

なぎさは諦めずミデンへと向かって叫ぶ。

「あたし、覚えてるから!たまたま同じクラスになって、たまたま二人でプリキュアに変身する事になって……!喧嘩した事……!タコ焼き食べた事……!恋バナした事……!

!ほのかが忘れても、あたしが全部覚えてるから!」

「あらなぎさ、私も覚えているわ」

ミデンの姿が白っぽく変わると、なぎさに向けて覚えていると答える。

「先生の結婚式行った事。」

文化祭でロミオとジュリエットやった事。

合唱コンクールの事、なぎさの靴下がちよつと臭いかもつてこと——」

「でも、あんたはほのかじゃない！」

雪城ほのかは、世界で一人！

アンタに記憶を奪われて戸惑ってる、あの子が雪城ほのかなの！絶対に、諦めないんだから！」

その心から言い放たれた彼女の叫びは、その後ろで泣いているほのかに向けて言った言葉。

それに気づいたのか、後ろの方に居たほのかが泣いていた。

「あーっ！うるさい！」

ミデンが指を鳴らすと同時に、三人の足元から衝撃波が生じ、ソウゴ、はな、なぎさが吹き飛んでほのかの傍に落下する。

「なぎさー！ー！ー！ー！」

涙を流すほのかなぎさの名を叫んだその時、目の前に光が生じて何かを生み出した。

「あれって……」

「ミラクルライト……！」

ほのかがミラクルライトを掴むと同時に、光に包まれ。彼女の周囲にこれまで過ごして来た時の出来事が、鮮烈に映し出された。

そして光が消えると同時に、彼女はその姿を変えた。

水滴が頬に当たると感じたなぎさは、目を開けて正面を向く。

「なぎさ……」

そこにいたほのかは、元の状態に戻っていた。

「ほのか……」

「大丈夫……？すぐ無理するんだから……」

ほのかは倒れていたなぎさを自分の膝枕に乗せてそう言う。

「これでもまだ……マシな方だよ……」

「ありがとう……辛かったよね……」

でも、一緒にひかりさん達を取り戻しましょう」

「うん……」

なぎさは笑顔で返し、二人が起き上がる。

「デュアル・オーロラ・ウェーブ！」

その光は、なぎさとほのかが変身する光だった。二人は光の中に包まれ、姿が変わって現れた。

「光の使者！キュアブラック！」

「光の使者！キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア!」

「プリキュア達から奪った記憶!」

「とつととみんなに返しなさい!」

「プリキュア」と言う伝説を作り上げた原点にして最初のプリキュア…キュアブラックとキュアホワイトが、今此処に復活した。

「う……嘘だ……!記憶が戻るなんて……ッ!」

舞え!花よ!プリキュア!フローラル・トルビヨン!

ミデンは記憶を取り戻したホワイトに驚きながらも色を変え、ブラックとホワイトに向けてフローラル・トルビヨンを放つ。

「ッ!!?」

ブラックが左腕、ホワイトが右腕を同時に上げ、フローラル・トルビヨンを掻き消す。

「はあああああああつ!」

「うあああああああつ!」

反撃に出た二人のダブルパンチがミデンに直撃し、勢いよく吹き飛ばす。

「調子に乗るなあ!」

体勢を整えてから怒鳴り散らすと二人に向かって飛び、激しい戦闘を行う。その姿を見たソウゴとはなは、気づかされた。

(そうだ……忘れてた。あの時だ……)

飛流に、記憶を改竄されてもみんなは、忘れていても俺を信じてくれた。俺が覚えて
いる限り、俺はみんなを信じる。

「はな!」

ソウゴが起き上がり手を差し出すと、その手をはなは掴む。

「うん!」

掴んだ手を取りはなは起き上がる。

「忘れちゃってたのは……私の方だった……」

「えっ?」

「みんなと出会って……ちよつとずつ仲良くなって……どんどん増えた思い出は、ずつ
とここにあったのに……」

「うん。だから……」

互いが同じ事を考えているんだと、何と無くだが察したソウゴとはなはミデンの方
を向き、目の色を変えて決意する。

「俺がなる、最高最善の魔王になる為に!」

「私になりたい、野乃はなになるために!」

「みんなを元に戻す!」

「ソウゴ……」

「はな……」

「二人はみんなをお願い」

二人はジクウドライバーとプリハートを取り出す。

『ジオウ！』

ジオウウオッチを装填し、右腕を上げてソウゴは構える。

「変身！」

「ミライクリスタル！ハートキラツと！」

ジクウドライバーを回し、ソウゴの体にアーマーが纏われ仮面ライダージオウに。

プリハートとミライクリスタルの力で、はなはキュアエールに変身し、二人はブラツクとホワイトの元へ走る。

「はああ！」

「ヤアアア！」

ジオウがジカンギレードで攻撃し、ミデンへ斬撃が直撃してバランスを崩した所でエールのパンチが吹き飛ばした。

ミデンが地面に落下してからすぐに、四人が着地する。

「キラキラ大切な思い出が、みんなが、私を支えてくれてる！」

「だから、何があっても踏ん張れる!踏ん張ってみせる!」

「うるさい!キラキラの記憶なら、お前よりもっと沢山あるんだ!喰らえ!」

ジオウとエールの言葉を聞いたミデンが両手から光弾を放つが、四人は走って避け、一斉に跳ぶ。

「「はああああああつ!」」

そしてまた、四人で攻撃を繰り出した。

「負けるな!」

「がんばって!」

「がんばれ!エール!ジオウ!」

「……!」

「みんな……!」

アンジュ達もエール達を応援する。

『エール!ジオウ!まけるな!』

必死に応援するみんなの声は、四人に勇気をくれるものだった。

「うるさい!俺の必殺技。パート2!プリキュア!ファイアストライク!」

鬱陶しく思ったミデンが色を変えて、電王とキュアルージュの必殺技を応援するみんなに向けて放つ。

「そうはさせない！」

『ミステリージオウ！』

ジオウミステリーのウオッチを両側のスロットへ差し込み、ソウゴはドライバーのロックを解除。

そのままドライバーを回すと、前の方から背部に羽を装着させ、その手に二本剣を持ったアーマーが現れ、そのままジオウの体に纏われる。

『アーマータイム！歴史の全てを知る王々！仮面ライダージオウミステリ々々！フ・リ・ズ！』

ミステリーフリーズフォームへとフォームチェンジしたジオウがみんなの前へと出て、腕に装着されているフリーズドラゴンバスターを向けると、ミステリーフレアの能力を使いミデンの攻撃を消した。

「攻撃が消えた！ありえない！」

「どうして……」

ミステリーウオッチの持つ力の一つである能力は、攻撃を未来へと飛ばし、既に終わらせることが出来る。しかも、今のミステリーウオッチの能力はこれだけではない。

「これ以上、みんなの記憶で好き勝手にさせない！」

ジオウがミデンに向けて飛び立つ。そして、ミデンの頭上へと向かう。

「ハア!」

「ツ!!?」

ジオウがミデンにだけ向けて、波動のようなものを流す。そして、ミデンの頭上にフリーズドラゴンバスターを叩き込む。

「やった!」

「ソウゴ!」

初めてミデンへ大きなダメージを与えて喜ぶ。しかし……

「よくも……」

ミデンはまだまだピンピンとしていた。

「許さない!まずはお前の記憶を貰う!プリキュア!スパイラルハートスプラッシュ!」

ミデンが手を広げて、またしてもプリキュアの技を出そうとする。

……が、手から何も出現しなかった。

「えっ?どうして……」

動揺するミデンにジオウは教える。

「今の君にはプリキュアの技は出せないよ」

「!?」

進化したミステリーウォッチ。新たに加わった能力……それは、相手の力を限定的に

変える能力である。

その影響により、ミデンはもうみんなから奪った記憶から技を放つ事は出来ない。

「はあああああ！」

そこへ、ブラックとホワイトが隙を逃さず攻撃を繰り返す。

「ソウゴ！」

エールがジオウの隣へ並ぶ。

「アンジュ、エトワール、ゲイツ、ウオズさん、マシエリ、アムール、アーラ。

待ってて。私達がみんなの事、元に戻すから！」

エールが自身を鼓舞してからアンジュ達にそう告げ、ジオウと一緒に走り出した。

ブラックとホワイトがミデンの顔を掴んで抑え込む。

「だあつ！はあつ！」

そこへ跳んで来たエールが左右交互から回し蹴りを叩き込む。

「はああ！」

さらにジオウがフリーズドラゴンバスターを至近距離で放ち、ミデンを上空へと上げ

る。

「エール！」

「えええいっ！」

ブラックとホワイトの二人が両手で踏み台を作り、エールを高く飛ばす。

「だあっ!」

そのまま一回転してカカト落としを叩き込む。

その時、アンジュ達にも目の前に光が生じ、その光から五つのミラクルライトが生み出される。

「あれは……!ヤバい!」

「駄目ーっ!」

ミデンがアンジュ達に向かって飛んだ直後、エールのパンチを受けて地面に落下する。

「みんな!それを使って応援して!」

『フレ!フレ!エール!ジオウ!』

ツクヨミが合図してから、アンジュ達がエールを応援する。

「もつとや!」

『フレ!フレ!ジオウ!エール!』

はぐたんを加えて応援すると、ミデンの中にある七枚のスタンドグラスが光り出し、そこから外にいるアンジュ達が光に包まれる。

「あれは……」

ジオウはその光を見て眩き、ミデンは一体何が起っているのかわからなかったがしかし、光が消えると、アンジュ達は元の姿に戻った。

「やったあ！」

「やった……！」

「みんな！」

「行って！」

「ありがとう！」

ブラックとホワイトにミデンを抑え付けてたジオウとエールがアンジュ達の方へ跳び、着地する。

「みんな……行くよ！」

「「「ええ（はい・うん）！」「」」」

エールが言うのとアンジュ達五人は頷く。

「行くよ！ゲイツ！ウオズ！」

「「ああ！」」

『ジオウトリニティ！』

ジオウはジオウトリニティウオツチを起動し、ドライバーへと装填するとウオツチのダイヤルを回すと三人が光に包まれる。

『ジオウ!ゲイツ!ウオズ!』

「変身!」

光に包まれていたゲイツとウオズの体が腕時計のように変わってジオウの体にはめ込まれると、ジオウの身体も変化を始めた。

『トリニティタイム!三つの力、仮面ライダージオウ!ゲイツ!ウオズ!トリーニティー!トリニティ!!?』

オーマの日、運命を変えて奇跡の変身を遂げたジオウの姿…ジオウトリニティへ変身する。

「ひれ伏せ!我こそは仮面ライダージオウトリニティ。大魔王たるジオウとその家臣ゲイツ、ウオズ。三位一体となって未来を創出する時の王者である!」

ウオズは久しぶりにこの口上をし、ポーズを取る。

「まだ、やるのか?それ?」

「いいじゃん!なんか行ける気がする!」

いつものソウゴの口癖を言うと、ジオウトリニティはミデンへと走る。

『ジカンザックス!Oh!No!』

ゲイツのジカンザックスを出現させ、ミデンに叩き込む。

『ジカンデスピア!ヤリスギ!』

更にウオズのジオウデスピアで突きながら攻撃し、次々と決めていく。

『サイキョウファイニッシュタイム!』

ジオウのサイキョージカンギレードが現れ、刃から『ジオウサイキョウ』と浮かび上がる。

『キングギリギリスラッシュ!』

最後にサイキョージカンギレードから放たれたキングギリギリスラッシュによりミデンを地面へと叩き込む。

「行くぞー!」

『おお（うん・はい・ええ）!』

『ファイニッシュタイム!』

ウオツチを起動させ、ドライバーを回転させる。高く飛び上がるアナザーブレイドに三人のライダーキックのエフェクトが敵を取り囲み、ジオウ、ゲイツ、ウオズの幻影が現れた。

『トリニティタイムブレイクバーストエクスペーション!』

その幻影はジオウトリニティに重なり、三人のエフェクトに包まれながらライダーキックを放った。

「「「メモリアルクロック! マザーハート!」」」

エール達が掲げたミライパッドが緑のハートが加わったメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「ミライパッド!オーブン!」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかぎすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザーハートスタイルに変身すると、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「HUGっとプリキュア!今ここに!」

「ワン・フォー・オール!」

「オール・フォー・ワン!」

「ウィー・アー!」

「プリー、キュアー!」

「明日に!」

「エールを!」

マザーを召喚してメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集める。

『ゴー、ファイ!みんなでトゥモロー!』

手を掲げ、マザーの力を解放して光線を放つ。みんなでトウモロウを放ち、そのままジオウトリニテイのライダーキックと共に炸裂し、そのままミデンを吹き飛ばした。「うああああああつー！」

一同の技を受けたミデンが吹き飛び、星になった。

ミデンがいなくなると、ジオウトリニテイから変身解除。三人に戻ると、ソウゴとエールはハリーとツクヨミも駆け寄り、元に戻ったみんなに近づく。

「アンジュ、エトワール、マシエリ、アムール、アーラ……」

「ゲイツ、ウオズ……」

「お帰り」

アンジュ達とゲイツ達の名前を読んでから、二人はみんなにお帰りと言った。

「すまなかつたな。ソウゴ、はな……」

「君達のおかげで助かったよ」

「私達が元に戻ったのは、お姉ちゃんとソウゴさんのお陰だよ」

「ありがとうございます。ううん、適切な言葉が見つかりません」

「ミデンの中で、どうなる事かとハラハラしてたのです」

「でも、エールの真っ直ぐな想いが、私達を元に戻してくれたの！」

「やっぱ、最高にイケてるよ！エール！」

ゲイツとウオズ、アーラ、アムール、マシエリ、アンジユ、エトワールがそれぞれ謝罪と礼を言っていると、エールは首を軽く横に振った。

「違うよ、全然そんな事無い。小っちゃい子が泣いてるんだから、しつかりしなきゃって思ってた」

「だけど、みんなが俺とはなを支えてくれたから——」

「いいの。もういいの」

「アンジユ……」

「でも……」

「じゃあ、私達が最高って事でどう?」

「うん!」

「そうだね!」

エトワールの一言にソウゴとエールはとても嬉しかった。

その様子を見てブラックとホワイトもみんなに近づいてきた。すると……

「ああ……こんな事で二度までも……!」

「あつ!アンタ戻って来たの!?!」

あれだけの技を受けて吹き飛んだミデンが、みんなの下にまた現れる。

「あれだけ喰らって無事だったんか?!?!」

「しづといわね……」

ハリーとツクヨミがミデンが戻ってきたのを見て愚痴っていると、全員が再び戦闘準備の為に構える。

「せっかく集めたキラキラの記憶が……私の記憶が！」

「私の記憶……？」

ミデンが集めた記憶を私の記憶と呟くと、エールはその言葉に顔を顰める。

「違うよ。私達の記憶！私達の思い出だよ！」

「お前のそれは自分の記憶じゃない！みんなの記憶だ！」

プリキュア達の記憶を自分の記憶と言うミデンに、ソウゴとエールはミデンに怒りを感じた。

「元々持つて無い思い出なんて、絶対あなたの物にはならないんだから！」

「僕は……僕だつて……！」

「えっ？僕だつて……」

さつきまで「私」と言っていたのに突然「僕だつて」と言い出し、動揺し始めるミデンにソウゴは何か不審に感じる。

「私、堪忍袋の緒が切れました！」

ミデンが色を変えて右手から光線を放ち、はなのカメラを壊す。

「カメラを……なんで」

その直後に空へ飛び、成層圏に出る。

「よこせ……よこせえーっ!」

するとミデンはその場に停まって光線を乱射し、人々を子供に変える。

更に地面が割れ、周囲からクリスタルが出て来る。エール達の足元も割れ始め、そのまま上がって行く。

「うえ?!?」

「ちよ、ちよつと……」

「何何何何?!?」

「どうなってるんだ!」

エール達が動揺している横で、アムールがこの場所の高度がどんどん上昇しているという事実には驚いていた。

「高度上昇中。標高500メートル……1000メートル……!」

「どこまで上がるの……!?!」

アールが周りを見ながら呟いているのを他所に、崩れた横浜の町を囲むようにして、あちこちにクリスタルが纏わり付いた岩山が出来上がっていった。

同じ頃、ソウゴ達がいる場所から離れた所の横浜にいる士と海東、晴夜は、ミデンから放たれた光線を避け続け、当たらずには済んだ。

「なんか、やばそうだね」

「士さん！やっぱり俺達も……」

「……」

海東は敵が予想以上の手練れである事に驚いていると晴夜が彼らを助けに行こうと言い、士も流星に手助けに行こうかと思つたその時……

「——えっ?」

晴夜の持つロイヤルとシャドウのボトルから光が放たれ、その光は上空へ一直線に向かつて行つた。

突如として上へと登らされたソウゴとエール達が目を覚まし、起き上がって周囲を確かめる。

「いたたた……」

「何だ……?」

「あり得ない!」

みんなの目に映つたのは、色取り取りのクリスタルがある荒野だった。

「雲があるって事は、成層圏の辺りのようだね」

ウオズが今いる場所を特定していると、アンジュは目の前の色取り取りのクリスタルが何なのか察し始める。

「まさかこれ、全て奪った記憶なの？」

「うええ!?!」

「奪った記憶で、こんな場所が作れるなんて……」

「ひよつとしてママもパパも……!?!?」

「あんなに沢山記憶を奪ったって事は、すんごく沢山の人が赤ちゃんにされてるのです！大人がいなくなったら、世界は滅びてしまうのです！」

「それだとチョコパフェも食べられないじゃん！」

「そこなんだ……」

「頭ん中は食べるだけしか無いのか?」

ホワイトとゲイツがアンジュの言葉を聞いてそう叫ぶブラックにツツコミを入れると、辺りを見回していたソウゴは何かを感じる。

(なんだろ……この凄く悲しくて、辛い気持ち……)

ここに來てから、ミデンの事なのか、この場所を凄く悲しい場所だと。そう思っていると、宙からミデンが現れた。

「全ての記憶は私の物……手放してなるものか！」

そう叫ぶと同時に今度は目から光線を乱射し、ソウゴ達は走りながら躲して逃げる。

「ヤバい……！早くミデンを倒して、みんなの記憶を取り返さなきゃ！」

「行こう！」

そんな中、エールが壊れた自分のカメラを見つけて足を止める。

「エール？」

「うん！」

アンジュに声を掛けられたエールはカメラを拾い、乱射する光線の中を潜り抜ける。

エール達の姿が見えなくなったミデンは光線を撃つのを止めて城へと戻っていくと、

みんなが城のどこかで足を止める。

「マシエリ達、どこに行っただろ……」

「ソウゴ達ともはぐれちゃったね……」

ここままでソウゴ達とはぐれてしまい、今ここにいるのはエール・アンジュ・エトワ

ル・ハリー・ツクヨミ・はぐたんの六人だった。

「てかミデンの奴、一体何考えてんだろ？」

「えっ？」

「私てつきり、プリキュアの力を奪って強くなって、何か悪い事しようとしてるのかなっ

て。

でもいきなり、こんなお城の中に引き籠っちやうし」

「確かに。何の為に記憶を奪っているのかな?」

力を手にしたミデンは世界征服なり破壊行為をする訳でも、ましてや人を喰ったり殺戮をするわけでも無く、どういうわけか城に籠り始めた事に。ジオウミステリーフリーズの力で能力を限定された事を考慮したとしても理解出来ず、そんなミデンの行動に違和感を抱き出す。

だがミデンは何故、プリキュアやみんなの記憶を奪っているのか、エトワールとアンジュにはその理由がわからなかった。

「……………ところでさ、何だろこころ?」

エール達は今、メリーゴーランドのように回るアニマルスイーツの上に立ってた。

「これ、よく見たらキラパティのスイーツだよ」

「ホンマやな」

ツクヨミとハリーがそんな会話をしながら、一同がねこマカロンからうさぎショートケーキへ跳び移る。

「あのね、実はちよつと気になってる事があって……」

するとエールがプリハートホルダーから壊れたカメラを出し、アンジュ達に見せる。

「さっきミデンがこれを壊した時——」

エールはその時ミデンが破壊したという、壊れたカメラを見せる。

「上手く言えないけど、何だか、ちよつと悲しそうに見える」

「そう言えば、ミデンに記憶を奪われてた間ね、私達の記憶はミデンの中にあつたの」

「ミデンの中？」

ミデンの中にいたというアンジュの言葉に、エールは小首を傾げる。

「他の沢山のプリキユア達と、思い出が混ざり合つたような感覚で——表はこの場所

みたいに煌びやかなのに、ミデンの中は真つ暗だった」

「真つ暗……」

そんな中はぐたんが、エール達の足元の穴に近づく。

「はぐたん危ない！」

エールの忠告も虚しく、はぐたんはその穴に落ちてしまった。

「めちよつと——」

「俺が行く！ツクヨミ！俺のドライバーを頼む！」

ハリーがネズミの姿となるとジクウドライバーをツクヨミに預け、はぐたんを追つて

穴の中に入る。

「私達も回り道探そう！」

残されたエール達は、回り道を探しに向かった。

一方、ゲイツ、ウオズ、マシエリ、アムール、アーラ、ブラック、ホワイトは何かを追われながら、魔法使いプリキュアの妖精・モフルンが描かれたステンドグラスの道を走り続けてた。

「何これどうなってるの!?!?」

「あれは、確か、ミラクル達と一緒に……」

「あの子、モフルンですよね!?!?」

マシエリ達を追っていたのは、巨大なクマのぬいぐるみ……モフルンだった。

「このお城はミデンから奪った記憶から出来ています。故に、キュアミラクルの強い記憶が反映されている空間。以上証明終了です」

「考察ありがとう!」

「そんな事よりも早く逃げよう!」

「諸君! 私に近づきたまえ!」

アムールの考察を聞いていたホワイトとアーラだったが、ウオズの指示を受けて全員が彼に近づく。

『シノビー!』

シノビミライドウォッチを起動させたウォズはドライバーにウォッチを装填し、レバーを引く。

『アクシオン！ 投影！ フューチャータイム！』

誰じゃ？ 俺じゃ？ 忍者！ フューチャーリングシノビ！ シノビ！』

「ふっ！」

『ドローン！』

フューチャーリングシノビの忍法を使い、全員をドローンさせてモフルンの前から消えた。

それにより、みんなは側面のホウキとホウキの間に隠れ、モフルンをやり過ごす。

「上手くいったようだね」

「……何これ？」

その時ブラックは目の前の冷凍みかんに気付き、手を伸ばす。

「ストーツプ！ 罠かもなのです！」

マシエリが止めようとするもぶつかり、そのまま顎からぶつかる。

〈カチッ！〉

「今、カチッって？」

すると、アーラ達の耳にスイッチが押されたかのような音が聞こえた。

「カチツ……?」

その直後に周囲が揺れ出し、確認の為に出ると、奥から無数の冷凍みかんが転がって来た。

「冷凍みかん!?」

更にモフルンも巻き込まれる形で向かって来た。

「前見て前!」

ブラック達が走り続ける中、ホワイトが前を見るよう告げる。

その先の道は途切れてて、一本のホウキが道代わりとして倒れてた。

マシエリとブラックが足を止めるが、落ちそうになる。

「ブラック!」

「マシエリ!」

アムールがマシエリ、ホワイトがブラックをお姫様抱っこで抱えて跳び、ゲイツ、ウオズ、アールも飛び越えホウキの上に着地する。

「もう、ブラックつたら」

「えへへ、ゴメン」

「持つべき友は冷静なパートナーなのです」

「とりあえずは、これで……」

ウオズ達が危機を脱したと思ひ安堵の表情を浮かべると、ふとゲイツが背後を見る。
「ん？おい……………」

だがそこへモフルンがホウキを揺らし、宙に浮かんでからそのままゲイツ達と共に下へ落ちてしまった。

『うわああああ!!?』

その頃、ソウゴだけ一人、違う所の部屋にいた。

「みんな、何処に？」

ソウゴが辺りを見回すが、辺りは暗く何も無かった。

「ん??」

偶然にも数枚程であるが、何かの額縁に入れられた写真があった。

「会社のビル?それに、箱にカメラが入ったもの…………」

そこには何処かの会社ビルや箱に入ったカメラが写っていたが、ミデンとはあまり関係ないようなものに思えた。

「?これ…………」

しかし偶然にも、その写真からソウゴは何かに気づいた。

「もしかして…………ミデンは…………」

ソウゴはこの写真からミデンの記憶を欲しがる理由も正体も、何となくではあるが、わかったような気がした。

エール達と居る途中で穴へと落ちたハリーとはぐたんは……

「うひやああああああ!!」

「はぎゅ〜」

はぐたんはハリーが先に地面に落ちた為にクツシヨンの代わりとなってくれたので、怪我はなかった。

「どや……我ながらナイスクツシヨンやろ……」

「ハリーー!ハリーー!」

「ん?」

はぐたんに言われハリーが見上げると、彼は自身の目に映ったものに、酷く驚愕していた。

「これは……こいつら全員プリキュアや〜!!?」

ここは何と、ミデンに記憶を奪われて赤ちゃんにされた、他のプリキュア達の部屋だった。

「うん?あーあれ?」

「新しいお友達？」

「ネズミさんもいる」

「プリキュアごっこしよう」

「プリキュアごっこ！」

「プリキュアごっこ！」

「はあー！しよう！」

「はぐたん！あぎゃー！」

ハリーがはぐたんを呼び止めようとするが、プリキュア達にハリーは蹴り飛ばされる。

「いてて……」

取り敢えず軽傷で済んだが、その光景を見たハリーは、中々骨が折れそうな事で、ここから出るのは困難のようだと感じた。

「はぐたんーん！」

回り道を探してたエール・アンジュ・エトワール・ツクヨミが、プリキュア達のステンドグラスが積まれた広間に足を踏み入れる。

「ねえ、何かここ、今までと雰囲気違う？」

「寂しいって言うか……何だか夜のお墓にいるみたいなの……」

「そういえば……確かに……」

「や、ヤダアンジユ……ツクヨミ……!」

「変な事言わないでよ……!」

怖がるエールとエトワールが抱き合いながら、アンジユとツクヨミにそう告げる。

「「「うわああああああ!!?」「」」」

とその時、天井から叫び声が聞こえて見上げると、ゲイツ達が落ちて来た。

エールとブラックが額をぶつけ合った直後に三人も落ち、アムールを天辺にして積み上がり、山が出来上がった。

「何やってんのアンタ達……」

「ご、ごめんなさい……」

「それより、ここはなんだ?」

「ん?」

後からやって来たゲイツ達は辺りを見渡しているそんな中、エールがステンドグラスの山の傍に落ちてた何かを見つけて拾う。

「何だろ、これ?」

そこへブラックとホワイト、ゲイツ達が、彼女の手に持った黒い物を覗き見る。

「それってカメラ？」

「随分古い物のようだけど……」

「見た所、フィルムカメラみたいだな」

それは、フィルムタイプで古い一眼レフカメラだった。

「こ、これは……！」

「知ってるのかいアンジュ？」

「勿論ですよ！これ、幻のミデンFMk-IIですよ！」

ウオズが知っているのかと尋ねられたアンジュが、いきなりカメラを見てミデンと言
い、これを聞いたエール達は驚いた。

「み、ミデンって……」

「このカメラの名前！最近発表されたミデルタD9の元祖とも言えるフィルムカメラな
の！発表後すぐにメーカーが倒産してしまい、市場に出回ったのはごく僅かで——
！」

このカメラの事を知ってたアンジュがエールに説明を早口で行う。それを聞いてい
たブラックは思わず汗をたらしながら困惑する。

「く、詳しいね……」

「あの子、ちよつと色々詳しくめなんで……」

「それよりも、そのカメラの名前がミデン、あのとててる坊主の怪人もミデン」

「偶然にしては、怪しいな」

「もしかして、ミデンの正体って……」

「見たな」

その時、ミデンの声が聞こえると、エールの持つカメラのレンズからまたしても白いものが現れ、それはミデンの姿となってエール達の前に現れた。

「一体このカメラは何なの？」

「この寂しい部屋はなに？」

「くっ……黙れ、だまれええ!!?」

ブラックとホワイトが問いかけるとミデンは叫びを上げながらとエール達をなぎはらい、再びみんなの上空を浮かぶ。

「ぼくは……ぼくは好きでこんな所にいたわけじゃない。

暗い箱に閉じ込められたまま何十年、誰にも使われずたった一人で、ただただ朽ち果ててゆく。

そんな孤独が、お前たちに分かるか！」

それを聞いたアンジュはカメラを拾って開けてみるが、フィルムすらない空っぽのままだった。

「何も無い……」

「つまりミデンは、使われなかったカメラのオバケ」

「だからわたし達の記憶を奪っていたのね」

「本当なら、このレンズに写すはずだった楽しい思い出を……」

「空っぽのまま一生を終えたばかりの絶望、お前たちに分かるまい！」

「空っぽ……思い出が何も無いってこと？だからあの時……」

それを聞いていたアールは、ミデンが言っていた『私の記憶』という言葉の意味を察した。

「わたしはこれから、誰よりも幸せになる。世界中のキラキラな記憶すべてを、私のものにしてやる！」

そんなミデンの叫びを聞いたゲイツ達は、彼の前に出て口を大きく開いて叫び出す

「ふざけるのもいい加減にしろ！そんな事許される訳ないだろ！」

「自分勝手な理由で、他者の大切なものを奪うことは許されません！」

「大体、人のものを横取りしても幸せになんてなれないのです！」

「あなたのやつてることは不幸になる人を増やすだけ」

「ミデンお願い、みんなの記憶を返して」

アールとマシエリ、アールがゲイツに続いてそう言い、ホワイトがミデンに、自分

のやっている行いを止めるように頼んでみるが……

「うるさい、うるさいうるさい!!」

みんなの言葉に激怒したミデンは目からビームを放つが、全員は当たる前に躲した。

「返すつもりはなさそうだね!」

「仕方ない。実力行使しかないね」

「やむ終えん!」

ゲイツとウオズ、ツクヨミはそれぞれ、ゲイツマジエステイウオッチとギンガミライドウオッチ、ツクヨミウオッチを取り出す。

『ゲイツマジエステイ!』

『ギンガ!』

『ツクヨミ!』

三人がドライバーにウオッチを装填し、構える。

「変身!」

同時にドライバーを回し、そのままアーマーが体に纏われる。

『マジエステイタイム! G3・ナイト・カイザ・ギャレン・威吹鬼・ガ・タ・ツ・ク! ゼ
ロノス・イクサ・ディエンド・ア・ク・セ・ル! バース・メーテオ・ビースト・バ
ロン! マツハ・スーペクター・ブレイブ! クーローズ! 仮面ラーイダー!』

A h ~ ! ゲイツ ! マジエー スー ティー ! !」

『 投影 ! フアイナリー タイム ! ギンギンギラギラギャラクシー ! 宇宙の彼方のファンタジー ! ウオズギンガフアイナリー ! フアイナリー ! 』

『 ライダー タイム ! 仮面ライダー ツクヨミ ♪ ツ ・ ク ・ ヨ ・ ミ ! 』

変身を完了すると、アンジュ達と共にミデンへと向かい、ミデンを抑えようと試みる。

「 えい ! ! 」

エトワールが跳びかかって左腕を掴み、そこへマシエリが真上から両足蹴りを叩き込む。

「 たあっ ! ! 」

ミデンは二人を振り払おうと全身を回転させるが、ブラックとホワイトのダブルキックが命中して吹き飛び、柱に叩き付けられる。

「 このっ ! ! 」

柱から離れた所にエトワールとマシエリが降り、アーラとツクヨミが攻撃が決まる。しかし、ミデンも諦めず反撃に出る。

「 はああ ! ! 」

「 ううっ ! ! 」

ウオズがギンガフアイナリーの力でミデンの動きを抑えようとする。

「うおおー!」

ミデンは強引にそれを解き突撃を試みる。

「せあ!」

そこへ、ゲイツがパンチを繰り出しミデンを離す。

そんな中、みんなが必死に戦っている中でエールだけが一人、ずっと立っただけでいた。

「思い出がないって……楽しいこと、うれしいこと、一つもないって言うこと?」

生まれてから……今まで寂しいとか、苦しいとか、そんな気持ちでいっぱいだったということ?」

みんなつらい気持ちだけが、ずっと続いているってこと?」

……ううん、あの時だってわたしにはソウゴがツクヨミ、ハリーもはぐたんもなききさんもいた。

うちに帰れば、パパもママもいる。学校に行けば友達もたくさん……

何もなくて……どんな気持ち?」

『ナイト!』

「はああ!」

エールが考えているとゲイツのウイングランサーの一撃がミデンを吹き飛ばした。

「よし！」

「今よ！」

「ああ！」

「あつ！」

ミデンの戦いに決着を付けようとする為に、ブラックとホワイトがマーブルスクリュー、ゲイツがフィンニッシュタイムでタイムバーストを放とうとする。

「待つて！」

「「えっ？」」

だがエールに待つてと言われ、三人が攻撃を止める。

「ここで決めなきや女が廃る！」

「ゲイツ君！」

しかし、油断した所にミデンは拡散するビームを放った。

「キヤー！」

「ブラック！ホワイト！」

ブラックとホワイトはそれを見て、ゲイツを突き飛ばし攻撃から逃した。

「みんな！」

そこへソウゴがようやくここへ現れた。

「…ん?ん?ん?」

だがソウゴが現れたのと同時に、ブラックとホワイトまでもが先の攻撃で二人までも赤ん坊になってしまった。

「どうしたの? エール」

「なんで止めた!」

「ん……わたし……」

ゲイツはなんで攻撃の手を止めさせたのだと問いたですが、エールは何故、自分でもあそこで攻撃を止めたのかわからなかった。

「残る6人のプリキユア達よ、とつとと記憶をよこしなさい!」

ミデンはエール達へ向かって来る。

「させるか!」

ゲイツとツクヨミが迎え撃とうする。

「どけええええ! エクシードチャージ!」

ミデンがファイズの力を使うと赤い円錐状のエネルギーが現れ、それを見て危機感を感じたゲイツとツクヨミはみんなの盾になろうとする。

「我が魔王! 危ない!」

ウオズはジオウに変身していない今のソウゴでは危ないと察知し、ソウゴをここから

突き離す為に押す。

「うわあああああ！」

「「「「「キヤーーーーー！！？」」」」」

ミデンはそのまま押し込んでゲイツとツクヨミを吹き飛ばし、エール達に強烈な一撃を与えた。辛うじてソウゴはウオズに突き飛ばされた為に無事ではあるが、エールはその衝撃でステンドグラスにぶつかってしまった。

一方で、ハリーとはぐたと赤ちゃんとなったプリキュア達のいる部屋では……

「な………何や?」

ハリーは物音に気付き、ステンドグラスの割れた面を覗く。

「あ………ん? あっ!」

そこには倒れているエール達の姿があった。

「うん?」

「「「「「ふええええん!!?」」」」」

さらに赤ちゃんとされたブラックとホワイトの姿もあった。

「えらいこっちゃ!あの二人を助けたらんと………お?」

急いでみんなを助けに行こうと試み、ステンドグラスの裂け目に入ろうとしたが、途

中で引つかかてしまう。

「と……通れへん、んっ、んっ……こ……今度は抜けへん」

「はぎゅー!」

引つかかかってしまったハリーを、はぐたんが引つ張り出そうとする。

すると小さくなったサンシャインがはぐたんの姿を確認し、ムーライトなどのプリキュア達のはぐたんの下へ集まり出した。

「あつ、あれ?」

「私も手伝う」

「はー……」

そしてはぐたんの後ろに小さくなったプリキュア達が連なり、ハリーを救出しようとする。

『せーの!んんん!』

「いたた……!」

はぐたん達が必死にハリーを引つ張り出そうとする一方で、ゲイツとツクヨミが倒れているみんなの代わりにミデンに迎え撃とうとする。

「プリキュア・マーブルスクリュー!」

「このおお！」

「やらせない！」

ゲイツの持つビートクローザーとツクヨミの光の剣が盾となり、二人がマーブルスクリューを耐えようと試みる。

「くう！わああああ！」

「ああああああ！」

「ゲイツ！ツクヨミ！」

ミデンの技を相殺する事は出来たが、衝撃には耐えきれなかったゲイツとツクヨミはエール達が倒れた所まで落ちてしまう。

「くう……そんな目で僕を見るな——！」

その時、ミデンがみんなの前に現れてエール達を取り込もうとした。

「ん……みんな……？」

気を失っていたソウゴが目を覚まして起き上がると、エールやゲイツ達、みんなの姿がなく、ミデンだけがソウゴの前で佇んでいた。

そして、ミデンの中へと取り込まれたエールは……

「んん……？」

そっか、ここがミデンの心の中……本当に何も無い……

「何もないから、踏ん張れなかつたんだ……1人で落ちていくしかなかったんだね……」

彼女は何も無い、まさに虚無なる闇のような空間で。

「思い出も記憶も、魂も心も無い様な存在——ミデンの中へ、まるでナニカに吸い込まれるかのように、只々落ちて行くように感じていた。」

「ステンドグラスが集まった部屋では、ソウゴとミデンと赤ちゃんへと変化されたブラックとホワイトしかいなかった。」

「ふええええん！」

「クツ……フフフ……アハハ！」

「やった、やったぞ！これですべての記憶は私のもの！」

「世界中の幸せがわたしのものだ！なんでも出来る！なんでもなれる！幸せ満開！ぶつちやけありえなーい！ハーツハツハツ！」

「……本当に幸せなの？」

「プリキュア全員の記憶を奪ってハイテンションだったミデンに、ソウゴは本当に幸せなのと問う。」

「喋り方や口癖も、みんなから奪ったただだよ」

そう言つてそのまま、自身を忌々しく睨み付けてくるミデンに語り続ける。

「……確かに、本当に幸せかどうかとか、その幸福がなんなのかとか、俺にもわからないことはあるよ」

——スウォルツの所為で、早くに家族を失つた俺には、家族の幸せとかよくわからないし。家族の思い出が無い事自体。もしかしたら、それが此処にはいない誰かにとつて、それこそが本当の幸せなのかもしれないから。記憶が、思い出が大事かどうかなんて、わからないことだつてあるよ。

——でも……

「他人から奪つた記憶から生まれる幸せは、本当の幸せじゃない！それだけはわかる！」
自分はみんなと出会つてから、色んな思い出が出来て、辛い事や悲しい事、楽しい事が一杯あつた。

けどその記憶は、一人じゃ出来なかつた幸せ。

自身を支えてくれた周りの人や、これまで苦楽を共にしたみんながいたからこそ出来た幸せ。だから——

「うううう……うるさい！それなら！お前の記憶も貰う！」

するとミデンはソウゴへと向かつていき、彼の記憶をも奪おうとする。

そんな中、ステンドグラスの裂け目に未だにハリーが引つかかっていた。
「んー!」

はぐたんはブロッサムを掴み、そのまま引つ張り出す。

『うわあ!?』

「ぶへっ!」

ようやく、ハリーを引つ張り出す事が出来た。

「きゅ〜」

「やった」

『やった!』

「やったちゃうわー!どないしょ、エール達までやられてしもた!このままやとソウゴも

!」

「はぎゅ」

それを聞いたはぐたんは慌てて、裂け目から様子を見る。

「あつ……ない……エールない……ない……みんなない……」

「あかんでこれは……プリキュア全滅やー!」

ハリーがプリキュア全滅だと言うと、はぐたんも涙目になりそうになる。

「うう……うう……あつ！ぷりきゅあ！ぷりきゅあ、いゆ！」
『うん？うん……』

はぐたんが後ろを指差すところにプリキュアがいると言う。

「……せや、こいつらも元に戻したつたらええねん！」

『ええ？うん？』

元に戻せばソウゴの助けになると思う。しかし…

「……って無理や！未来から来た俺たちには、こいつらを元に戻してやるほどの思い出があらへん！」

もしも、彼女達と親しい者達が居れば、先程ブラックやエール達が行った、彼ら彼女らの記憶を基点としてプリキュア達の年齢を元に戻せたのかもしれない。

だが、ハリーとはぐたんは未来から来た存在。その為二人は、彼女達の記憶をあまり持っていない。

これでは元に戻せないと頭を悩ませるハリーを見て、はぐたんがある一言を言った。

「……エール……フレフレ……エール……」

「はぐたん……」

「フレフレ……アンジュ……」

フレフレ……エトワール……

フレフレ……マシエリ……

フレフレ……アムール!

フレフレ……アアラ!

…はぎゆ?」

「うん?どうした?はぐたん」

「んゝゝゝはぎゆゝ!」

はぐたんは画面を叩くと何かを訴える。

——えっ?なんの画面を叩いているだつて?ミライパッドじゃねーの?

「あう!フレフレ!あうよ!」

「そうか!その手があったか!」

ハリーがはぐたんの行動を見て、何かのヒントを閃いた。

「さすがはぐたんや!」

ハリーは赤ちやんとなったプリキュア達へ振り向く。

——アレ?なんかハリーがこっちの方も向いている様な気がする。

「おーい!ミラクルライトを持つとる君らや!」

みんなはどのプリキュアが好きや?

キュアエールか?キュアアンジュか?他にもたくさんおるで!キュアホイップや

キュアミラクル、キュアフローラやキュアラブリーやプリキュアはたつくさん、たつくさんおる！

1人じゃなくてええ、今まで好きやったプリキュアの名前全部呼んだってくれ！

そしてジオウに、そのエールをみんなに送るんや！きつと！ジオウがみんなを助けてくれるー！」

「フレフレ、プリキュアー！」

はぐたん達はミラクルライトを振り、光を集める。

「その調子やーもつと大きい声でー！」

「フレフレ！プリキュア！フレフレ！プリキュア！フレフレ！プリキュア！」

更にミラクルライトを振り、光を集める。その光はステンドグラスの裂け目からソウゴの元へ集まっていく。

「ぬうわあああー！」

ミデンとソウゴの周りに光が集まり、ミデンがそれを受けてソウゴから離れる。

「これは……！」

ミデンの攻撃を何とかギリギリで避けようと思っていたソウゴが己の周りを見てみると、ミラクルライトの光が自身の周りを囲んでいた事に驚く。

「ソウゴ！それは、みんなのミラクルライトに乗せた応援やー！みんなお前に託すでー！」

「フレフレ! ソウゴー!」

ソウゴの周りも光はさらに集まっていた。

「凄い……これが、ミラクルライトのみんなの応援……!」

その時、ソウゴの頭上から光と闇の力を秘めた白と黒のエネルギーが現れ、それはミラクルライトの光と共にソウゴの持つジオウライドウオッチⅡへと集まっていた。

「ジオウウオッチⅡが……!」

集まった光によってジオウウオッチⅡが変化を続け、ウオッチの灰色にも見える銀色は青が混じった様な銀へ、黒い部分もその色が剥けていき銀色へと姿を変える。

そして、変化を終えるとソウゴの手に置かれた。

「これは……!」

ソウゴはそのウオッチを握って、色んな思いが——ハリーにはぐたん、みんなの願いから生まれた光をその身に感じた。

「……このウオッチ……凄くいける気がする!」

自信に満ちた笑みを浮かべたソウゴは、そのウオッチを起動する。

『ジオウハーモニクス!』

ソウゴが『ジオウハーモニクス』という音を流したウオッチのダイヤルを回し、ジオウの顔が描かれたピクトウインドウが移動すると、そのウオッチを二つに分割してド

ライバーへと装填した。

二つのウオッチをスロットに装填されたドライバーのロックを解除すると、背後から青色へと変わった二つの時計が現れた。

「変身！」

そして掛け声と共にドライバーを回し、時計の針が左右対象へと止まると、銀色の時計バンドの様なエフェクトがソウゴの体へ纏われる。

『ハーモニクスタイム！混沌の闇を射せ、大いなる真理の光！仮面ライダージオウ！ハーモニクス！』

ジオウが変身した姿を見ると、銀は青の混じった銀へ、黒から銀色に変わったジオウⅡのライダースーツに纏われ、背中には光り輝く二つの大きさのリングが現れていた。

「凄い……これが、みんなの応援……」

ジオウハーモニクスへと変身した彼は、その姿に驚いていた。

何故なら、この姿に変身していると、身体からもの凄く強い力が湧いてきたからだ。

「凄い……凄いよーまた、そんな輝くなんて！欲しい……欲しい！」

ミデンはジオウハーモニクスへ変身したジオウを見て、欲しいという欲求を全開にしてジオウに突っ込む。

「!??!」

『ジカンワンダー!』

ジオウが咄嗟に片手をミデンの前に伸ばすと、長めの曲がった杖の武器『ジカンワンダー』が現れた。

「ふっ!」

その杖を握ったジオウは力を入れると、杖の先端辺りから衝撃波が放たれ、ミデンを吹き飛ばした。

「これなら……いける!」

ステンドグラスの上へ飛び上がると、ジカンワンダーを掲げてステンドグラスにジカンワンダーを向ける。

するとステンドグラスが全て光り出し、プリキュアのステンドグラスはハリーとはぐたんのいる場所にいるプリキュア達へ流れ始め、更にジオウの上空に19枚のステンドグラスが宙に浮く。

『はあ!』

そのステンドグラスから『2000』〜『2017』までの各年号が現れるとそこから、クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイドライバーが白いディケイド、W、オーズ、フォーゼ、ウイザード、鎧武、ドライブ、

ゴースト、エグゼイド、桐生戦兔の変身するビルド、19人の仮面ライダーが現れた。
「ふうん！」

ジオウは呼んだ19人と一緒にここから消えた。

さらに赤ちゃんされたプリキュア達は飛び出した光と一斉に外へ出ると、プリキュア達の姿が元に戻っていた。

「あつ……ホワイト」

「ブラック……」

「あつ……」

「ルミナス！」

「皆さん！」

元に戻ったブラックとホワイトは、同じく赤ちゃんから元の年齢に戻ったルミナスの下へ駆け寄る。

更に別の場所でも、ブルームにイーグレット。

ドリームにルージュ、レモネード、ミント、アクア、ミルクイローズ。

ピーチ、ベリー、パイン、パッション。

プロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト。

メロディ、リズム、ビート、ミューズ。

ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビュートイー。

ハート、ダイヤモンド、ロゼッタ、ソード、エース、ジョーカー。

ラブリー、プリンセス、ハニー、フォーチュン。

フローラ、マーメイド、トウインクル、スカーレット。

ミラクル、マジカル、フェリーチェ。

ホイップ、カスタード、ジェラート、マカロン、シヨコラ、パルフェ。

それぞれのプリキュアが、元に戻れた事を喜び合っていた。

「やった!戻ったよ!」

「はい!よかったです!」

全員が元に戻った事に、みんなが再会出来たことに喜んでいると、ジオウが19人のライダーと一緒に瞬間移動のように現れた。

「ソウゴ!お前……」

するとそこへ、ミデンの取り込まれていた筈のゲイツ達が現れ、それを見たジオウは安堵の息を漏らす。

「みんな!よかった!」

「ソウゴ。それは、新しいジオウですか?」

「それで、私達を……」

アムールは目の前にいるのが新しいジオウの姿だと分析し、アーラ達が今のジオウの姿を見て、彼がみんなを助けてくれたのだと気付いた。

そこへ、ウオズが前に出て叫ぶ。

「祝え！混沌の世界に青く優しき光をもたらすライダーの王を！その名も、仮面ライダー・ジオウ・ハーモニクス！まさに、調和と再生をもたらす王の誕生である！」

ジオウハーモニクスを見てウオズがいつもの祝えと叫び、そのまま祝いの言葉を述べた。

それを見ていたキュアハートがその姿を見て、かつて晴夜が変身した『メサイアニツクロードフォーム』と重なって見えた。

（あれは……晴夜の……そうか、ソウゴ君に自分の力を託したんだね）

あのジオウには晴夜の力もあるのだと気付くと、アンジュ達は何時もある筈の人物がない事に違和感を覚えた。

「ソウゴ君、あ……あれ？」

「なんでエールだけいないの？」

「他のプリキュアのところにも混ざったのでしょうか？」

「お姉ちゃんどい？」

「ん……あー！まさか……この下に落ちちゃったとか……おー……」

エトワール達はエールだけ姿がなかった事に疑問符を浮かべ、マシエリが宙に浮かんだ城の下を覗いて背筋を凍らせていると、ジオウはエールの今いる場所に検討が付いていた。

「あ……もしかして……」

ジオウが先までいたミデンの城を見上げると、そのままリングの光を使って城の方へ向かう。

その頃、ステンドグラスが集まっていた部屋ではミデンが胸を抑えて苦しんでいた。

「ああーうう……胸が苦しい……これは！」

ジオウによって彼の体内からゲイツ達が行った中で、ミデンの体内の中では未だにエールがしがみついていた。

「うっ、うう……くっ、くう……まだ出てくもんか……」

「お……お前、わたしの中で何をしている！」

「今わたしが出ていたら、あなたがまた1人になっちゃう」

ミデンがエールに怒鳴り掛けている中、彼女は必死にミデンの中で彼と正面から向き合おうとする。

外では、上空にあるステンドグラスからミデンの中にいるエールの姿が映し出されて

いた。

「…そういうこと。フフツ、エールらしい」

「なんか、わたしがはなと友達になった時のこと思い出すね」

アンジュとエトワールが呟いていると、そこへホイップとマジカル、ミラクルが駆け寄って来た。

「そうだよね。誰の心にもキラキラルが生まれるはず」

「だったら…いえ、だからこそ」

「奇跡、起こしたいよね」

「よし！わたし達も行こう！」

エールを見ていたブラックの一声に頷いたプリキュア達は一斉に走り出す。

そして、ジオウに呼ばれた19人の仮面ライダー達。彼らは異なる時間から呼ばれた為に最初は状況が掴めなかったが、ここでやらなければならぬ事はわかった。

「なるほど、だいたいわかった」

「彼が俺達をここへ呼んだ理由も」

「行こう！あのミデンに笑顔を作るんだ！」

クウガの一声に頷き、ジオウによって呼ばれた仮面ライダー達も一斉に走り出す。

「ミデン……」

苦しみながらも未だに暴れていたミデンの下へ、ジオウが駆け寄る様に現れた。

「やめろ! 私の中で暴れるな! お前達と話すことはない! 出ていけ!」

「いや! 私は話したいの! ちゃんと話してくれるまで出ていかないから!」

「お前達は記憶を渡せばいいのだ! 私の中をかき乱すな!」

すると彼の体から小型のミデンを大量に放出され、そのまま現れた小型のミデンは外へと溢れ出した。

「あれは……」

「小型のミデン!」

小型のミデン達は仮面ライダーとプリキュアに一斉に攻めてきた。

「へえ、ちっちゃいとちよつとかわいいじゃん」

エトワールが小型のミデンを捕まえて言う。

「全然可愛くないのです! 小っちゃくてもナメてはいけません!」

アムールも駆けつけ、マシエリはアムールの腕に乗り、同時攻撃を仕掛ける。

「行くのです!」

「ええ!」

二人の息のあったコンビネーション攻撃により、小型のミデンが次々と浄化されてい

く。

「ツクヨミお姉ちゃん！」

「うん！」

アーラとツクヨミがお互いにジャンプしながら攻撃を一緒に繰り出していると、更にゲイツとウオズに大量の数が襲ってきた。

「ウオズ！」

「ああ、ゲイツ君！」

『タイムバースト！』

『エクस्पロージョン！』

ゲイツとウオズと同時に放ったライダーキックの衝撃波で、彼らの周りにいた小型のミデンは全て消えた。

次にビルドが小型のミデンへと向かっていく。

「さあ、ミデン！実験を始めようか？」

ビルドは自身武器『ドリルクラッシュャー』による高速回転の斬撃を繰り出し、ミデンの小型を攻撃。次々と倒していき、さらに得意の脚力で難なく躲す。

「ミデン！まだまだ、これからだぜ！お前の為の勝利の法則を見つけてやる！」

ビルドと同じくエグゼイドも……

「ミデン！お前の運命を俺が変える！」

エグゼイドはガツシャコンブレイカーをハンマーモードとし、小型のミデンをジャンプをしながら叩いたり飛んだりを繰り返しながらを攻撃していた。

「行くぜ！お前をノーコンテニューでクリアしてやるぜ！」

チョコブロック型の足場を利用しながら翻弄するエグゼイドと同じように、ゴーストも小型のミデンと戦っている。

「ミデン！お前にも心がある！」

小型のミデンの突進をゴーストは浮きながら攻撃を躲し、巨大な竜巻を作り小型のミデンを吹き飛ばす。

「心があれば何だって出来る！だから、お前の可能性を信じる！命燃やすぜ！」

ドライブは小型のミデンに持ち前のスピードで、巧みな攻撃を繰り返していた。

「ミデン！お前のトップギア！俺もついていくぜ！」

『ヒツサーツ！フルスロットル！』

シフトレバーを引くと、トライドロンが現れて勢いよく周囲を囲む。

『スピード！』

トライドロンが囲んだ中へと飛び込むと、ドライブが周りをトライドロンの高速移動をしながら多くの小型ミデンに連続キックを喰らわせる。

「ヤアアアアア！」

最後の一発に放たれたキックが小型のミデン達を貫いた。

「さあ、俺達と一緒に一走り付き合えよう！」

そしてドライブはいつもの仕草を取り、ミデンに語りかける。

鎧武は橙丸と無双セイバーを使い、小型のミデンに攻撃していた。

「ミデン！ここからは俺達のステージだ！」

「はあ！ヤアアア！」

ウィザードのアクロバットの動きで炎を纏った攻撃が小型のミデンへと決まり続け

る。

「ミデン！諦めるな！俺も絶望の淵から魔法使いになった！」

そう言つてウィザードは指に嵌めたリングをドライブに翳す。

『チヨロイイネ！スペシャル！サイコー！』

前方に魔法陣が出現すると、炎を纏った衝撃波を放ち一掃した。

「だから、俺がお前の最後の希望になる！」

「ミデン！お前ともダチだ！」

フォーゼがスイッチを使い攻撃していき、ミサイルやガトリングを放つて小型のミデ

ンを倒していく。

「ミデン！お前の思い、俺達が受け止めてやる！」

フオーゼが胸に手を当てて腕を伸ばしていると、オーズは腕に装着されたトラクローで攻撃し、小型のミデンを切り裂く攻撃を繰り返す。

「この手で掴めるものがあるなら！俺は迷わず掴む！」

最後にバツタの脚力で空中から落ちながらクローを放ち、一掃する。

「だからミデン！俺は君と手を繋ぎたい！」

こちらでは、Wが風を纏いながら強力なキックを連発する。

「はあ！ほおら！」

Wの攻撃にミデンは反撃に出る事はない。

「ミデン！俺達は自分の罪を数えた！」

「今度は君の罪を数える番だよ」

「さあ、お前の罪を数えろ！」

手首を回し、二人の決め台詞を爆発四散したミデンに向けて叫ぶ。

「ミデン！俺も記憶を無くし、多くの世界を周り、沢山の世界から自分の世界を探した」
白いディケイドドライバーを装着したディケイドは、小型ミデンに話しながら攻撃を繰り返して続けた。

「ヤアアア！」

さらにソードモードのライドブッカーの攻撃でこちらも一掃した。

「それで、ある結論が出た。どんな世界でも在り方したいでは、自分の世界に出来る……つてな」

最後にそう言つてライドブッカーを仕舞い込む。

「はああー！」

キバは持ち前の身軽さによる攻撃で小型のミデンで攻撃する。

「君の心から流れる音楽……その音楽を信じて僕は君の為に戦うよ。ミデン！」

さらに、こちらは電王がデンガツシヤーを振り回しながら攻撃する。

「おい！ミデン！記憶が欲しいんなら！よく！お前の胸に刻みやがれ！俺のクライマックスをな！」

そう言つて雑……いや、持ち前の剣技を使い小型のミデンを倒していく。

「行くぜ！行くぜ！行くぜ！」

さらにミデンに突撃していくと、カブトがクロックアップの超スピードで小型のミデンを倒していく。

「ミデン。お前に忘れない事を教えてやる」

後ろ向きで語り出すと、自身に突進して来た小型ミデンに裏拳を織り交ぜたパンチを繰り出す。

「そう。世の中で覚えておかなければならぬ名前がただ一つ……」

天の道を歩き全てを司る男……

そう、この俺の名……天道、総司」

天に向けて指を指すといういつものポージングを取り、カブトは名乗りを上げる。

「トリヤァー！」

響鬼は二つの棍 “音撃棒・烈火” に炎を纏わせて、小型のミデンを倒していく。

「ミデン。君の気持ちはわかった辛いなら、一緒に自分を鍛えよう」

いつもの手首を回し、決めポーズを取ってミデンに向けてそう語り掛ける。

「はああー！」

ブレイドはブレイラウザーから繰り出される剣技によって小型のミデンを倒し続ける。

「ミデン！お前が間違えたのなら！俺達がお前を正しい道へと連れて行くー！」

「はああー！」

ファイズは手首を回し、ラフな戦い方で倒していく。

「ミデン！お前の辛い気持ち。俺も一緒に背負ってやるー！」

「はああー！」

龍騎はドラグセイバーで小型ミデンを攻撃し、寄せ付けない様にする。

「俺達は仮面ライダーだ！ミデン！君だって助ける！」

それが、仮面ライダーだ！」

『ADV E N T ！』

ドラグバイザーに“アドベント”のアドベントカードを装填させるとドラグレッダーが呼ばれ、ドラグバイザーから放たれた火炎攻撃で全て薙ぎ払った。

「しゃー！」

「ほお！タアア！」

アギトは光が纏われたパンチとキックが炸裂し、小型ミデンを吹き飛ばして行く。

「君は帰る場所である。家と人と人の思い出が欲しかった。ならば……」

アギトの腕から伸びる様に作られた光の刃が、更に討ち払っていった。

「ミデン！俺達が君に帰る場所を作る！」

「オリヤヤヤヤ！」

最後に、平成最初の仮面ライダー・クウガが挑んでおり、クウガからパンチとキックが繰り出された。

「俺は、みんなの笑顔を守りたい」

そう叫びながら小型のミデンに次々と決めて行く。

「だから、ミデン！君が笑顔にならないのなら、俺が君を笑顔にする！」

クウガは親指を上げてサムズアップをおこない、ミデンへ向けて笑顔に言う。
だが、ここで頑張って戦っているのは仮面ライダーだけではない。彼女達プリキュアも、仮面ライダーに負けない以上に闘っている。

「ホイップ・ステップ・ジャンプ!ホイップ・デコレーション!」

「カスタード・イリュージョン!」

「ジェラート・シイク!」

「フフツ、かわいいいわね……」

「ふっ!はあっ!」

ホイップとカスタード、ジェラートの三人が小型ミデンを大量にデコレーションしていきながら浄化させ、パルフェもマカロンが小型ミデンを手で掴んでいる付近で倒していく。

「記憶を奪われたら、スイーツの知識もなくなっちゃいます!」

「燃え上がった情熱も!」

「失敗した事もそこから立ち上がった事も!」

「今まで出会った大好きな人たちも、全部私達の大切な思い出!」

「本当のトキメキ、教えてあげる!」

「私達の思いとエールの想いを!」

「「「レツツ・ラ・まぜまぜ!!?」「」」」

カスタード、ジェラート、パルフェ、シヨコラ、マカロン、ホイップの六人が小型ミデン達を倒していると、箒に乗って空を飛んでいるキュアマラクルとキュアマジカルが小型のミデンに追われていた。

「リンクル!ピンクトルマリソ!」

だが地上から放たれたフェリーチェの支援攻撃で難を逃れる。

「キュアアップ・ラパパ!エールの思いが届きますように」

「私達の思いが届きますように」

「ミデンの心が救われますように」

「「キュアアップ・ラパパ!!?」「」」

ミラクルとマジカル、フェリーチェの三人が、いつもの呪文をミデンに向けて唱える。

「プリキュア・ミーティア・ハミング!」

「楽しい思い出が欲しい、それが夢だったのね」

「おんりゃー!待っててミデン。エールが、私達が、あなたの絶望の檻開いてみせる!」

「さあ!」

「「「お覚悟はよろしくて?」「」」」

トウインクルとマーメイド、フローラ、スカーレットの四人が華麗に小型ミデンを倒

しながら、揃っていつもの台詞を掲げていた。

「まだまだ!」

「らく♪」

「ハワイアンアロハロエ〜」

ハニ一の歌を聴いて動きを止めた小型ミデンを、フォーチュンとプリンセスがその隙に肉弾戦とフォームチェンジ技でその数を減らしていく。

そして、大量の小型のミデンがラブリ一の放ったピンク色のビームによって一掃される。

「わたし、世界中のみんなを幸せにしたい!ミデン、もちろん貴方にも、ハピネス注入!」

「「「幸せチャージ!!?」」」

「はあっ!」

そしてソードは手にエネルギーを纏った手刀で切り裂き。

「ヤアアア!」

ジョーカーがミラクルドラゴングレイブから放たれた光を放ち続ける。

「はっ!」

ダイヤモンドが地面に着地すると、氷の衝撃波で打ち消し。

「はあっ!ウフツ」

エースが爆発波のような攻撃で吹き飛ばした。

「くう……」

ロゼッタが小型のミデンを防ぎハートが目の前に迫る小型のミデンを一掃する。

「愛を知らない悲しいカメラさん、あたし達プリキュアが、あなたのドキドキ取り戻してみせる!!」

ハートが手でハートマークを作り、ミデン達に向けて言い放っているその近くで、スマイルプリキュアの5人が小型のミデンに囲まれてもお構い無しに攻撃を行なっていた。

「はあっ!」

「参ります」

「おりゃあ!」

「一気に来ないで!」

「ううっ! 気合いだ!」

流石に大量のミデンに手を焼いていたハッピー達だったが、気合いを入れて放った技で何とか一掃することが出来た。

「どんどん行くよ! 目指せ!」

「」「みんな笑顔でウルトラハッピー!!?」「」

「私にも聞こえる、ミデンの悲しみが」

「ビートソニック!」

「スパークリングシャワー!」

「はあああああーツツ!ここで決めなきや、女が廃る!」

スイートプリキュアの四人は、時にはその場で音楽を奏でながら、ミデン達に立ち向かっていく。

「んんー!ブロッサム!」

「おしりパンチ!」

「ふっ!はあっ!」

「ふっ!ふっ!」

ハートキャッチプリキュアの四人はパンチやキック、向日葵型のバリアを張つてのガード、ヒップアタックを繰り返してミデン達を倒していく。

「砂漠にだって花は咲きます。ミデンの心の花、みんなの力で咲かせましょう!!?」

ブロッサム達も負けず劣らずに立ち向かっていたその頃、フレッシュプリキュアの四人はそれぞれラブリーリーフ・エスポワールリーフ・プレアリーフ・ハピネスリーフと呼ばれるアイテムを取り出す。

「ハピネスリーフ!パイン!」

「プレアアリーフ！ベリー！」

「エスポワールリーフ！ピーチ！」

「ラブリーリーフ！」

キュアパッション、キュアパイン、キュアベリーとリーフをパスし合い、最後にキュアピーチの元に届く。そしてそのリーフで四葉のクローバーを作り、クローバーマークの中心で水晶に小型ミデンを閉じ込め浄化をした。

「出会いは敵同士でもやり直せる！みんなで幸せゲットだよ!!」

プリキュア5の彼女達はフルーレを使い、ミデンへと迎え撃つ。

「私は知ってる、何も持たない自分でも変われるって！だから大丈夫！みんな！」

「[[[[yes !!?]]]」

ドリームの掛け声で全員、小型のミデンに向かって言い放った。

「すべてのものに命は宿る！」

「きつと、ミデンにも！」

「だから手を伸ばしたい！」

「絶対に諦めない!!？」

ブルームとイーグレットも、互いに手を繋ぎながら敵を一掃していた。

最後にブラック、ホワイト、ルミナスの三人が集まり、小型ミデンに向けて構える。

「エキストリーム!」

「ルミノリオ!!」

ブラックとホワイト、そしてルミナスの合体技により、残りの敵を一掃した。

「はあ……っ!見てください」

一息ついた際に何かを見つけたルミナスが指し示し、ブラックとホワイトがその指差した方を見てみると、城にヒビが入っていた事に気付いた。

「ヒビが入ってる、なんで?」

「ミデンの分身を倒したから、その分、ミデンも弱まったのかも」

「ってことは……がんばれソウゴ、エール。最後のひと押しはあなた達にかかってるよ」

ミデンがステンドグラスを集めていた場所から外へと出て、ジオウはそれを追いかけて、苦しみながらも記憶を求めるミデンに近づく事を試みる。

「うっ、ううっ、うっ……もつと……もつとたくさんのまぶしい記憶を!心を満たせばお前など!」

「やめなよミデン、どんなに記憶を奪っても、君の心は満たされないよ!」

「うるさい!うるさい!うるさい!」

ミデンは五月蠅いと叫びを上げながら動き回る。

「ミデン！」

「お前……その光を……よこせ！」

ミデンはジオウの光を奪おうと手を伸ばす。

しかし、ジオウは衝撃波を放ってミデンの手を弾く。

「ミデン！自分の中の声を聞くんだ！」

「どうして！なんで、なんであんなに沢山！記憶があつたのに……」

「それは、ミデン！君が一番よくわかつている筈だよ！」

「!？」

ジオウの一言を受けてミデンは動きを止めた。

「確かに、誰だって思い出は欲しい。でも、それは他人から奪っちゃダメなんだ」

「うつ……」

「思い出は、お互いに分かり合つて、一緒に時間を過ごす……」

そんな中でも思い出は広がるんだ。

そうなれば、思い出は他人と一緒に喜び合えるものになるんだ！」

「僕は……僕は……」

頭を抑えるとミデンが暴れ回り、それを見ていたジオウは彼の前へと出る。

「ミデン！君の間違った心を元に戻す！」

『ハーモニクスファイニッシュタイム!』

二つのウオッチを起動し、ドライバーのロックを解除し、ドライバーを回す。

『ハーモニクスタイムブ레이크!』

ジオウがジカンワンダーを上へと掲げると、背中のリングと共に光がより強く輝き始め、その光は徐々に大きくなっていく。

「ぬうわあああああー!」

その光は周りを呑み込むかのように膨れ上がり、巨大な光が周囲を囲んだ。それを受けてたミデンの体が、徐々に小さくなっていく。

その時、ミデンの体から裂け目のようなものが見えたジオウは、そこへなんの迷いも無く飛び込んだ。

エールは何とか、ミデンの中にある空間に持ちこたえていた。

するとこちらにも空間の一部にヒビが入り、その光に気付いたエールはその中に入った。

「うっ……ん?はっ……んん……」

「あっ!やめろ!」

「ごめん、でも……」

「見るなあああーっ!!?」

奥に踏み込んで行こうとするエールに向け、見るなと叫ぶミデン。

しかしエールは、ミデンに謝罪しながら、彼のこころの奥底へと入っていった。

「……」

「ソウゴ……」

彼女が中に入ると、同じように外から裂け目の入った、ジオウハーモニクスから元のジオウの姿に戻っていたジオウと合流した。

そしてその中にはミデンにそっくりな、てるてる坊主が立っていた。

「……」

「あなたが、本当のミデン?」

「……」

「雨が……冷たくて悲しい雨、何だか、あなたの涙みたい」

エールが辺りを見渡すと、滝の様に延々と振り続ける雨模様が其処に映り。

それはまるで、流しても流しても決して癒えぬ、孤独と悲しみの涙の様に見えた。

「……ずつとこうなんだ」

「ずつと?」

「ぼくはこれしか知らない」

「そっか。ミデンはえらいね、ずつとこんなじゃ冷たくて、凍えて動けなくなっても仕方がないのに、自分で何かを変えようとした。でしょ?」

「う……でも、何も変わらなかった。」

結局、僕は満たされないって……」

するとエールは、哀しげに俯いてそう呟くミデンを優しく抱いた。

「それは違うよ、誰かから奪った思い出じゃ満たされない、そう言ったんだよ」

「同じだよ」

「違うよ」

其処へジオウも彼の下へ近づき、エールの言葉を同じだと否定したミデンに声をかける。

「全然違う、人から奪うんじゃない、ミデン自身が自分で経験した記憶を積み上げていこう。それが本当の思い出になるから」

「僕の本当の思い出?」

「そう、私たちと一緒に……おいしいもの食べたり、買い物行ったり、はぐたんのお世話

したり、ピクニック行ったり、泣いたり、笑ったり、怒ったり、驚いたり、キラツキラのまぶしい思い出、今からたつくさん作ろう」

「その全てが忘れられないくらいなの、たくさんの思い出を作ろう。俺達と一緒に！」
「今から……」

「うん！」

エールが辺り顔で頷くと、中で振り続けていた雨もいつの間にか止んでいた。さらにミデンが泣き崩れると、ジオウもミデンに抱きついて彼の頭を撫でた。

「うう……僕はもう、憎しみの塊なのに……」

「ミデン。君の時間はまだ止まっていない。

憎しみを捨てて、新しい自分を作ろう」

「大丈夫、未来は今から変えられるもん。

何でも出来る、何でもなれる、フレフレ、ミデン」

すると空間にヒビが入り、光が二人を包み込む。

「ううっ……」

ジオウとエールが気付くとミデンと共に倒れていた。

そしてその周りには、他の仮面ライダー達にプリキュア達がいた。

「ソウゴ君。エール」

「みんな」

「何とかなったみたいだな」

「あーあ、無理しちやって、本当ありえない」

「ブラック」

「でも、いい感じに話せたんでしょ？」

「うん」

エトワールの問いに笑顔に頷き、エールはミデンに駆け寄る。

「奪われた記憶を取り戻すため……そして、ミデンが前に進むために。みんな、力を貸して」

するとプリキュア達がそれぞれ光りだすとミラクルライトが出て来て、彼女らはそれぞれに手に持つ。

「ミラクルライト」

「……うん」

『うん!』

そして、ミラクルライトを手を取ったプリキュア達はミデンに向ける。

『プリキュア！レリーズシャイニングメモリー!!?』

ミラクルライトが光り出すと、プリキュア達の思い出が映し出された。

「私達の思い出、失敗ばかりで大好きって気持ちをあきらめかけたり」

ホイップはその時、初めてアニマルスイーツを完成させたことを思い出す。

「大切になればなるほど離れることが怖くなったり」

ミラクルは一度、ナシマホウ界へ帰るときにリコと再会を思い出す。

「絶望しそうになったことも何度もあった」

フローラはホープキングダムで、王子であり最愛の人となったカナタとの別れを思い

出す。

「びつくりしちゃうことの連続だったけど」

ラブリーはクイーン・ミラージュとの戦いを思い出す。

「キュンキュンしたこともいっぱい」

ハートは愛する者と仲間達と共に、ジコチューになったアイちゃんを取り戻したことを

を思い出す。

「毎日、みんなとウルトラハッピーで」

ハッピーは仲間達と一緒に、秘密基地を完成させたことを思い出す。

「楽しかった思い出が、今でも心に響いている」

メロディは多くの壁を乗り越え、四人の絆が深まったことを思い出す。

「それでも泣きたいときだつてありました」

ブロッサムは、父親をデューンに消されて憎しみのままで戦おうとしたゆりを止めたことを思い出す。

「雨がとつても冷たくて心がとつても痛かった」

ピーチは、かつてのキュアパッションとなる前のせつなの姿であるイースと戦ったことを思い出す。

「みんなの心がバラバラにされて苦しかった」

ドリームはナイトメアとの戦いで、仲間達が捕らわれた苦しみを思い出す。

「でも一人じゃないから頑張れた」

ブルームはダークフォールとの決戦で、仲間達と戦ったことを思い出す。

「大好きな人達がいれば、怖くたつて何度だつて立ち上がった」

ブラックは自身の相棒と立ち向かった、ドックゾーンとの最終決戦を思い出す。

プリキュア達がミデンに自分達の思い出を流しているという事でライダー達も手を向けて同じように記憶を流そうとする。

「俺も昔の記憶を忘れて、悩んだ時があった。それでも、色んな人達との出会いが俺に新たな記憶を思い出してくれた」

ビルドは最高な相棒と出会い、色んな敵と戦って彼らと仲間となり、一緒に戦い多くの思い出を作った。

「まだまだドクターとして、未熟な所もある。でも、健康に生きていけるように多くの人の笑顔を取り戻す為に」

エグゼイドはバグスターと呼ばれる怪人達とお互いに分かり合い、一緒に生きていくと決めた記憶を振り返る。

「英雄達の魂を引き継ぎ、人間の未来が無限の可能性があると学んだ」

ゴーストはアイコンの中にある英雄達の志しを学び、人間の無限の可能性を学んだ。

「世の中、真つ直ぐに生きている人達がたくさんいる。そんな人達を守る為に、俺は警官になったんだ」

ドライブは仮面ライダーとして、警察官として、多くの市民を守って行く覚悟を決めた。

「何度も道を迷った時があった。けど、後悔の残らない道を俺は選んできた」

鎧武は、世界の命運の為ならば犠牲は仕方ない。そんな世界の理屈を何度もぶち壊し、世界を救う為のある覚悟を決めた。

「絶望しそうになった時、俺は俺を支えてくれる人達のおかげでずっと前を向けた」

ウィザードは一度、魔法使いの力を無くして絶望した事があった。その時に、彼の周

りの人達のおかげで魔法使いの力を取り戻した。

「ダチと一緒なら、どんなピンチも乗り越えられる。それが、俺達の友情の力」

フォーゼは多くの仲間を作り、色んな苦難を一緒に乗り越えた。

「手を伸ばせ、どんな人でも掴み取れる。だから、俺は人と人が繋いで生きていける世界を」

オーズは彼との出会いから始まり、手にした力で多くの人と手を繋ぐ事が出来た。

「町を泣かせる奴らから、みんなを守る。それを胸に掲げてきた」

「それが、僕達のハードボイルドだよな?」

Wは師匠とも呼べる恩師から学んだ事を大切に刻みながら、これからも二人で町を守り続ける。

「世界を撮れ、世界を撮り続け自分の世界を広げて見せろ」

デイケイドは己の死に場所を探すのが彼の旅路であったが、自分の巡った世界を撮り続ける為に、今も旅を続ける。

「君の中に流れる音楽を信じて。前に進んで」

キバは父から教えられた『人の中に流れる音楽を感じる』という言葉が胸に刻み、その言葉を告げた父との別れを思い出す。

「と」とんまで、ぶつかれ!そんなでもって、てめえの気持ちにつよくぶつける!そうすれ

「ば何とかなるんだと、教えられた」

電王は時をめぐる中で色んな苦難があり、その度に仲間とお互いに気持ちをつつけ合っている。強い信頼が生まれたのだと思い返す。

「おばあちゃんが言っていた。記憶とは儚いものだ……しかし、その一瞬にこそ、意味のあるものだ」と

カブトは自分を引き取ってくれた祖母による教えをずっと守り、多くの人に語り続けている。

「とても、綺麗な夕日を見たことあるんだ。そんなもって、それ見て思ったんだ。この景色を守る為にもいつも鍛えていたってね」

響鬼は少年と見た綺麗な夕日を見たあの日を思い返し、その景色を見るために戦っていた。

「人を愛しているから俺は戦う。それは、使命とか義務とかじゃなくて俺のとなつて何よりも大事なことなんだ」

ブレイドは、初めは職業でライダーをしていた。でもそんなの関係なく、彼には人を守り人を愛しているから戦う。それが給料なんかよりも大事だと。

「戦う事が罪だと。でも、戦う事が罪なら俺は背負うと決めた。だから、一緒に背負って行けるなら、俺は何でも一緒に背負う」

ファイズはかつて、相手にだつて心があるだから敵として戦うのは、いいのかと迷った事があつた。それでも、人を守る為に戦うことが罪なら、それを背負う覚悟が必要なのだとわかつた。

「衝突して、言い合つてたくさん苦難があつた。けど、その度にそいつの事がわかるようなる」

龍騎はライダーバトルと呼ばれる戦いで、彼と出合い。多くの事を知り、よりそいつのことを知り、何とかしてやりたいと思つた。

「君の居場所はこれから出来るんだよ」

記憶を無くしたアギトには、居場所がなかつた。でもある家族との出合いが、彼に居場所を作つた。その場所を守る為に、彼は戦い続けた。

「笑顔でいればどんな時でもなんとかなる」

クウガは初めてベルトを纏つたあの時から、誰かが傷つく姿をさせない為に、みんなの笑顔を守る為にと決めて戦つてきた。

全ての仮面ライダー達とプリキユア達がミデンへと自分達の記憶を流し込みつづける。

「ミデン……今日、貴方と出会つたこともいろいろあつたつらいことも……きつとまた思い出になる。」

未来で私達に勇気をくれる。

そう教えてくれたのはミデン、あなただよ」

「はっ……」

「ミデンがみんなの思い出をつないでくれたからそう信じられる、ありがとう、ミデン」
「フツ……ありがとう……」

ミデンは優しく笑いながらエールにそう言い残し、静かに消えていった。

「約束するよ……ミデン、これと同じくらい……うん……もつともつとたくさん
の思い出を一緒に作ろう……」

そして徐々に消えていくステンドグラスの島。

そこにいるみんなも元の場所へと戻り、ジオウの力によって現れたライダー達も、
ランドジオウオウオツチへと戻っていった。

それから、数日の時が経った。

この前の公園に、はな達は集まっていた。

「はい、はな」

「ありがとう」

あの後、さあやとツクヨミがミデンF m a r k 2を修理していたのか、はなの手に綺

麗になったカメラが置かれた。

「うわあ!ピッカピカ」

「はぎゆ」

「フィルムも入れておいたから」

するとそこへ、えみるとことりが三人の前に歩み寄って来た。

「もうはな先輩、早く行かないと皆さん待ちくたびれてしまうのです」

「お姉ちゃん!早く!」

「そうだね」

はなが顔をあげるとそこには、はな達が来ていた公園に他のプリキュア達が集まっていた。

「パフェ!パフェ!」

「みんな!はい、チーズ!」

はながなぎきとカメラのレンズに写ると、カシヤツつと写真を撮る。

「そうなんですよ」

ゆりと六花と話してるのかを撮ったり。

つぼみとはるかが花を観てるところを撮ったり。

咲達がバドミントンをしてるところを撮ったり。

きららと美樹のモデルコンビと、うららと真琴のアイドルコンビが一緒になるところを撮ったり。

アコと亜久里の小学生コンビが話ししてるところを撮ったり。

リコとのぞみとゆうことラブがバーベキューを楽しんでるところを撮ったり。

めぐみとみゆきが一緒になって撮ったりしていた。

「フフフ……あつ……」

「どう？ 思い出たくさん撮れた？」

「まだまだ……これからもっともっともーつと、パンクするくらい、たくさん撮りまくっちゃうもんね！ ウフフ、君の未来は明るいぞ！」

そして最後はプリキュア全員と女性ライダーとしてツクヨミが加わり、集合写真を撮った。

その様子を離れた休憩所から、ゲイツ、ウオズ、ハリーに来てくれた、上城龍牙、沢田和也、柴崎幻冬の姿もあった。

そんな一方で、ソウゴは……

「晴夜、門矢士」

ソウゴの前に桐ヶ谷晴夜と門矢士がいた。

彼はあの戦いで生まれた『ハーモニクスジオウライドウォッチ』を見せる。

「あれ?」

するとハーモニクスジオウウォッチが光り出し、そのまま粒子の光が晴夜のボトルへ集まって光が消えると元のジオウウォッチⅡとなり、晴夜の持つロイヤルとシャドウのボトルの色が元に戻った。

「えっ?これって?」

「一度だけの力かもな……でも、みんなが今、最高の笑顔なのは、お前のおかげだよ。」

ソウゴ

晴夜がみんなで集合写真を撮るみんなを見て、そう呟く。

「うん。きつとミデンもだよ」

するとソウゴはそう言っではな達の方を見る。

今はなが持つあのカメラには、まだミデンの心がある。

きつと彼も、色んな思い出が出来て嬉しい筈だ。

「ふん」

士はそのまま後ろを向いて歩いていく。

「士さん。ソウゴの事を……」

「まあ、今回は……いいだろう」

「えっ?」

晴夜の問いかけに対して、いいだろうと、それだけを告げて士は去っていく。

「どういうことなの?」

「お前も、仮面ライダーとしての覚悟はあるようだって、意味だよ。多分」

「覚悟……」

「まあ、あの人はマイペースだから……」

一緒にしばらくいた為に士の事が少し理解出来ている晴夜は、あれが門矢士のいつもの事だと言う。

「でも、忘れるなよ。みんなを守る。その覚悟だけは絶対に」

「うん」

みんなを守る覚悟。

それは、この世界を守る仮面ライダーの大事な事だ。それをソウゴは強く思うようにする。

でも、今は――

「ミデン。もつと一杯叶えよう。最高の思い出を!」

ミデンのカメラを見て、ソウゴは思い出を作ろうと語りかけたのだった。

(時見ソウゴ……お前は変えられるかもな。ジオウの運命を……)

そんなソウゴを見て途中でそう告げた士は、首にかけている二眼レフカメラのシャッターをソウゴに合わせてシャッターを切る。

「かくして、オールスターズの命運を促す今回の事件は、時見ソウゴとキュアエールによつて守られた。

しかし、彼らにはまだ知らなかった。

後に起こる……全ての世界の運命を掛ける戦いがあるとは……」

次回! Re. HUGっとジオウ!

第63話 2019: ジオウ敗れる!?! 最凶のライダー、マスタークライ!

HUGつとジオウ！補完計画・その5 「Dの真実／総集編で始まるモノ」

ソウゴ「・・・それでどうする？まだ何話するか決まってるけど」

はな「初っ端からノープラン状態!?何話するか決めておいてよ！」

皆さんこんにちは……いや、おはようかな？……まあ、どうでもいいか。

皆さん、我が魔王の台詞を見てお察しの通り、今回はまだどんな話をするのか全く決まってません。是非もないね！

ウオズ「だがそういうと思って、今回はこの状況を打破できるゲストを呼んでおいたよ我が魔王」

ソウゴ「さっすがウオズ！頼りになる！」

ウオズ「それではこの御二方ですどうぞ！」

士「なるほど、だいたいわかった」

海東「このコーナーのギャラは何が貰えるんだい？」

ゲイツ「おい、これからの展開が一気に不安しか無くなったんだが、大丈夫かこのメ
ンツ」

海東「おいおいゲイツくん、随分酷い言い方するじゃないか。そんなに士が信用ならないのかい？」

ルールー「一番の不安要素は貴方なんですけど？」

さあや「・・・それで、結局何の話をするんですか？」

士「……何の話するかだっけ？そっちで考えてるんじゃないのか？」

ゲイツ「ほらアアアアアアアアアアアアアアアア!!やつぱり不安要素しか無えじゃねえかああアアアアアアアア!!話全く進まねえじゃんかッ!!」

士「うるせえな………だったら総集編でもやつたらどうだ？」

ほまれ「ここでサブタイトル回収するのね」

ウオズ「確かに実際、ニチアサがコロナ禍の影響でゼロワンやヒープリの撮影とか収録が出来なくなった時、おさらいセレクションという名の再放送とか今までの総集編やったりして撮影収録再開するまでの場を繋いだと………おっと失礼、我が魔王達にとつてはこの話は未来の出来事でしたね」

ことり「そういえばこのSS、一応2018年が舞台だったね・・・」

ソウゴ「総集編をするのはいいけど、総集編って基本的にどういう話をするの？今までの話を切り取って掲載する感じにするの？」

えみる「その原理で言ったら、そもそもこのSS自体が『HUGっとジオウ!』の総

集編というか再放送のような物になりますけど……」

士「そこはアレだ、本編中に語りきれなかった裏話とか、おまけ編の元ネタ説明とかやればいいだろ」

ツクヨミ「……なんかこのコーナーやり始めて、久し振りに『補完』要素が出てきたわね……」

ことり「その3辺りからどんどん補完要素が希釈になっていったからね……」

海東「それでは早速、プロローグからどうぞ！」

《プロローグ：20XX》

ウオズ「ハイ、記念すべき『HUGつとジオウ!』の始まりであり、原作：仮面ライダージオウの第1話、冒頭辺りの話から取った話です」

ソウゴ「そういえば、原作ジオウでは白亜紀?に行った後に江戸時代に行ったけど、此処では2017年だけだったね、過去に行ったの」

はな「アレかな? 原作者が『わざわざその展開出さなくても良いんじゃないかね?』って思ったからかな? 尺とかモチベーションの問題とかで」

ウオズ「ちなみにサブタイトルは、ジオウのサブタイと同じく『〜(サブタイ)』○○○○

○○(年号)』にしています」

士「はい次」

《第1話 誕生!元気な少女と最高最善の魔王のライダー!2018》

はな「続きまして、原作ジオウ第1話の後半辺り(ジオウ初変身時まで)とHUGっと!プリキュア第1話(始まり〜プリキュア初変身まで)の話となっております!」

さあや「この話では、原作HUGっとジオウでカットされた、はなが自宅にてはぐたと初めて出会ったシーンが追加されています」

ことり「そういえば、お姉ちゃんが最初に出てきてから地の文や台詞とかに『』っていう記号が無駄に多く入ってたけど、アレ結局何だったんだろう・・・」

ルールー「ちなみにこの話では、ゲイツは一度も登場していません」

ウオズ「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者! その名も仮面ライダージオウ!まさに生誕の瞬間である!」

海東「はい次」

《第2話 未来から来たライダー!継承せよビルドの力!2017》

ソウゴ「第2話では原作ジオウ第2話とハグプリ第1話(エール変身〜終盤のその後)の話となっております」

さあや「でもこの話もそうだし、プロローグとかで晴夜君達が登場した時、『ドキドキ&プリキュア』見てない人は『アレ？誰だよコイツ、なんで戦兔がビルドじゃないんだよ』って思ったんじゃないかな……」

ソウゴ「そういう時は『Re・ドキドキ&サイエンス』をご覧ください」

ほまれ「自作の布教?!」

ルルー「ちなみに横浜の学校に居るはずの晴夜と龍牙がなぜマナ達の学校に居たのかという。なんかあの学校に忘れ物があったことを龍牙が思い出して、彼女たちに会いに行くついでに学校に立ち寄ってその忘れ物を取りに行ったそうですよ」

ウオズ「そして祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え過去と未来をしろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウ・ビルドアーマー。まず一つ、ライダーの力を継承した瞬間である！」

士「はい次」

《第3話 幼馴染が天使に！アナザーライダーの謎 2018》

さあや「この話は原作ジオウ第3話とハグプリ第2話の話となっています」

ツクヨミ「当時、ゲイツと私はまだクジゴジ堂に住み込んで無くて、ビューティーハリーで生活してたわね」

ゲイツ「それ以外はだいたい原作ジオウとハグプリと同じだ」

ほまれ「ところで、ハグプリ原作ではアンジュが変身した後にミライクリスタルのアスパワワを注ぐシーンがあつたはずだけど、なんで此処原作、HUGっとジオウとあつちにはそのシーンが無いの？」

ソウゴ「あの時はアナザーエグゼイドとモノホンのエグゼイドがいて、それぞれろじやなかつたから・・・という設定でお願いします」

ハリー「ちなみにおまけ編の元ネタは『ポプテピピック』で出てきた『星色ガールズドロップ』風の次回予告パロやで！」

ウオズ『次回もハグついていくジオウ』の部分はジオウ公式ツイッターの文章そのままです」

海東「はい次」

《第4話 クリア出来ないゲームをクリア!2016》

はな「原作ジオウ第4話とハグプリ第3話を合わせた話……の筈なんだけど、ジオウサイドのストーリーが印象強すぎてハグプリサイドの話がすごい薄かった気がする・・・」

ソウゴ「俺的には、おまけ編はもうちよつとなんとかならなかったのかなって思っ

る」

ウオズ「取り敢えず祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え、過去と未来をしろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウ・エグゼイドアーマー。また一つ、ライダーの力を継承した瞬間である！」

士「はい次」

《第5話 夢を捨てた少女・・・二つのアナザー 2011》

ほまれ「ジオウサイド第5話の物語と、ハグプリサイド第4話の話だよ」

ウオズ「ちなみに作者は当初、我が魔王とさあや君のカップリングが生まれたように、ゲイツ君とほまれ君のカップリングが出来ると思ってたそうだよ」

ゲイツ「まあ、予感は全く外れたがな」

ウオズ「それでは……祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え過去と未来をしろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウ・フォーゼアーマー！」

海東「はい次」

《第6話 舞え、新たな誕生！二つのレジェンドの意思！2003》

ハリー「ジオウ第6話とハグプリ第5話の話やで」

ソウゴ「そしてこの作品のオリジナル敵キャラ『オシマイライダー』が初登場した話でもあるよ」

ウオズ「作者はこの話で登場した『オシマイフォーゼ』の外見を、『アナザーフォーゼ』の外見にマントを脱ぎ捨てたホロスコープとファイズを足して二で割った感じの姿をイメージしてるそうだ」

ほまれ「いや、余計に分かりにくいんだけど」

士「はい次」

《第7話 王様が仕事体験!??社長は王?2016》

ウオズ「この話では、ジオウ第7話・・・ではなく、第9話と。ハグプリ第6話を足した感じの物語となっているよ」

ツクヨミ「それにしても仮面ライダーオーズとハートキャッチプリキュアのコラボとか、完全に『仮面ライダーオーズ×プリキュアシリーズ』を意識してコラボさせてるわね……」

ソウゴ「まあ、このSSの原作者がああSSのファンらしいからね」

海東「はい次」

《第8話 花が咲く、本当の王の資質！2010》

ツクヨミ「こちらはジオウ第10話と、引き続きハグプリ第6話を足した話になってます」

ソウゴ「オーズ×プリキュアシリーズでは割とプリキュア達を守る事が多かった映司が、この世界ではプリキュアに……しかも初めて出会ったプリキュアの一人であるプロツサムに助けられるって、何となく感慨深いよね」

ゲイツ「イヤ、おまえも作者もオーズ×プリキュアシリーズ見てないだろ」

ソウゴ「いやいや、ハートキャッチプリキュア編の第1話はちゃんと見たよ？それ以降は見えてないだけで」

さあや「後の情報はだいたいpixiv大百科のオーズ×プリキュアシリーズの記事で分かっちゃうからね……」

ルールー「そのことなのですが、あのSSが打ち切りになったせいであの記事はもう無いそうですよ？」

ソウゴ「そうだったの!？」

ウオズ「ハッピーバースデー！からの祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え、過去と未来をしろしめす時の王者、その名も仮面ライダージオウ・オーズアーマー！

また一つ、王たるライダーの力を継承した瞬間である！」

士「はい次」

《第9話 オンパレードと迷い・・・マジック!2013》

さあや「この話はジオウ第11話とハグプリ第7話の物語……に、ジオウ第7話を少々ブレンドしたのになってます」

ソウゴ「いや〜まさかアナザー鎧武編にアナザーウィザードが参戦するとわ思わなかったよね〜」

はな「この話の終盤で出てきたキュアパッションこと東せつなは、鎧武サイドのゲストなのかな?」

ソウゴ「ウィザードサイドのゲスト候補枠である魔法使いプリキュアが出なかったのは、Forever編に出て来るからかな?」

ウオズ「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、過去と未来をしろしめす時の王者、その名も仮面ライダージオウ・鎧武アーマー!また一つ、ライダーの力を継承した瞬間である!」

海東「はい次」

《第10話 武者と魔法と夢 2012》

ほまれ「ジオウ第12話&第8話にハグプリ第8話を組み合わせた話です」

ゲイツ「鎧武とウイザードの話なのに、サブタイがオーズみたいだな」

ソウゴ「そういえばマヨライオンことビーストの出番がなかったけど、ウイザードと晴人が彼の代わりとして登場したのかな？」

ウオズ「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、過去と未来をしろしめす時の王者、その名も仮面ライダージオウ・鎧武アーマー！また一つ、ライダーの力を継承した瞬間である！

・・・大事なことなので、二回言いました」

士「はい次」

《第11話 ピクニックとゴースト・・・謎のライダー 2018》

はな「こちらはジオウ第13話とハグプリ第9話前半戦をベースとした物語です」

ツクヨミ「更にゲスト出演としてスマイルプリキュアの五人が登場します」

ソウゴ「ちなみに原作HUGつとジオウ！では映司もゲスト出演しています」

ウオズ「はな君のクラスメイトが『丘を越えて行こうよ』を演奏し、それに合わせてことり君達が合唱する時、はな君がメロディタンバリンを持って叩きながら歌っている際に、さあや君・ほまれ君と一緒に手拍子をしました。

というか、此処しか登場シーンがありません」

ゲイツ「イヤ、原作者がオーズ×プリキュアシリーズの文章をコピペした時に映司の部分を書き忘れたただけだろ！」

海東「はい次」

《第12話 GO!ゴーストタイムと未知のウォッチ!2015》

さあや「ジオウ第14話とハグプリ第9話後半戦です」

ウオズ「この話の途中で、なおが士に父親が死んだことを告げられた際に浮かべた彼女の表情は、さぞ愉悦部の酒のつまみになっただろうね」

ゲイツ「縁起でもないこと言うなよ！」

ソウゴ「そもそもSSだから表情とかわからないからね？」

ウオズ「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者 その名も仮面ライダージオウ・ディケイドアーマー!」

士「(おまけ編のキュアアンジュについては誰も語らないのか……) はい次」

《第13話 未来の自分、その名を……オーマジオウ 2068》

はな「ジオウ第15話とハグプリ第10話を組み合わせた話となっています」

ツクヨミ「原作のハグプリでは、はぐたんがオシマイダーを浄化したけど、こっちはダイマジンがオシマイダーを瞬殺したのよね確か」

ゲイツ「そのかわり、オーマジオウの攻撃を防いだせいでハグプリ原作通りに衰弱したけどな」

ソウゴ「それよりも、こっちでは2068年だけど、原作HUGつとジオウ！では2062年なんだよね。原作ジオウよりも4つ年下だからとは言え、何で2064年とかじゃなくて2062年なの？」

ウオズ「原作者曰く、2062年の方が語呂とかキリが良かったらしい」

オーマおじさん『ちなみに終盤で若かりし日の私とキュアエールに火炎弾を放った際。寸前の所で消したやるつもりがトウモロウが突然前に出て来てびっくりしたせいで、うっかり消すの忘れちゃったんだぜ☆』

ソウゴ「だとしても十分悪質だよ！ていうか何でアンタが居るんだよ未来に帰れよ!!」

海東「はい次」

《第14話 目指す未来！新たな可能性への挑戦！2018》

ソウゴ「ジオウ第16話とハグプリ第11話の内容となっています。土、次行っ

ちやつて」

ことり「……アレ？14話については何か話さないの？あの半袖シャツの青年の話はしないの？」

ソウゴ「13話のところで尺取っちゃったから削りました」

ウオズ「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来を知ろしめす時の王者。その名も仮面ライダージオウ、まさに再誕の瞬間である」

士「はい次」

《特別編 ジオウ&ビルド スーパースターズ！レジェンドForever!!?》

ウオズ「この本によればこの物語は、『仮面ライダー平成ジェネレーションFOREVER』と『プリキュアスーパースターズ』の話を中心として語られているようだ」

ゲイツ「更にオリジナル敵として、アナザークウガが新たな進化態である『アナザークウガ鬼火』というアナザリアルティメットクウガとは違う姿になっているようだ」

ツクヨミ「更に、原作のジェネレーションForeverでは登場しなかった五代雄介と翔太郎、フィリップが登場します」

アナザーデンライナー「あのく……」

フータロス「俺たちの出番は……」

ソウゴ「(君たちの出番は) ないです」

ア・フ「!?!」

ウオズ「祝え! 全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者! その名も仮面ライダージオウ・ミステリーフレアフォーム! 歴史の全てを知る瞬間である!」

海東「はい次」

《第15話 謎の訪問者とライダー 2018》

はな「ジオウ第17話とハグプリ第12話の物語です」

えみる「この話からは、あの白いウオズが登場するようになっていくのです」

ソウゴ「ちなみにおまけ編の元ネタはニンジャストレイヤーだよ」

ウオズ「それはそうと祝え! 全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者! その名も仮面ライダージオウ・Wアーマー! 二人で一人のライダーの力を継承した瞬間である!」

士「はい次」

《第16話 凄い転校生と忍者! 2022》

ルルー「この話はジオウ第18話とハグプリ第13話の物語です」

ウオズ「この話のおまけ編には、pixivなどで活動する(株)氏製作『仮面ライダージオウぐだぐだ時空』に出てくる、お馴染みの『あの台詞』が出てきます」

海東「はい次」

《第17話 保育バトル?クイズバトル?どっち?2040》

ソウゴ「こちらは、ジオウ第19話とハグプリ第14話前半を中心とした話です」

ゲイツ「おまけ編の元ネタはミルクボーイのネタである『コーンフレーク』だぞ」
土「はい次」

《第18話 本当の思いの結果・・・2040》

はな「ジオウ第20話とハグプリ第14話後半がメインの話です」

ウオズ「此処では二体目のオシマイライダー『オシマイクイズ』が登場します」

ゲイツ「イメージとしては、オシマイダーになったアナザークイズの手足に車輪が付いた様な姿を想像してくれ」

海東「はい次」

《第19話 鏡の世界のライダーと少女 2018》

ルールー「今回の話は、初のジオウ第21話単体の話となっています」

ソウゴ「ゲストとして、この話では『yes!プリキュア5』の劇場版で登場したダークドリームが出てくるよ」

士「はい次」

《第20話 王の凱旋！二つを統べる王 2018》

ソウゴ「今回の話もジオウ第22話単体の話になっているよ」

ウオズ「そして祝え！全ライダーを凌駕し、時空を越え、過去と未来をしろしめす時の王者！その名も仮面ライダージオウII！新たな歴史の幕が開きし瞬間である！」

海東「はい次」

《第21話 出会う日、なにかが始まる 2018》

えみる「今回の話はハグプリ第15話単体の話にして、私とルールーが出会った運命の日でもあるのです！」

ルールー「この話では、ギユインギユインでズドドドドドドドな出会いが私の前に現れたのです」

ソウゴ「何故そこでビルド!？」

士「はい次」

《第22話 裏切りと正体・・・ 2121》

はな「この話はジオウ第23話とハグプリ第16話の話となっております」

ウオズ「仮面ライダーキカイとアンドロイドのルールーというベストマッチな組み合わせとなったこの物語。この二人の組み合わせは、何処と無くゼロワンを連想するね」

ソウゴ「キカイがゼロワンでルールーがイズってか？」

海東「はい次」

《第23話 友情の言葉『WILL BE THE KING』2121》

ルールー「ジオウ第24話とハグプリ第17話の物語となっております」

ソウゴ「この話でルールーがアナザーキカイになる訳だけど。アナザーキカイって有機物に寄生するんだよね？ルールーはアンドロイドだから復活しないはずじゃ無いの？」

ウオズ「その辺の関しては、中盤で彼女が人間の心を手に入れたがために、人間の心がある〓人間〓有機物と認識したんじゃないか？」

ゲイツ「何だそのガバガバ判定」

士「はい次」

《第24話 友情が奏でる音楽 2018》

えみる「ここからは、ジオウ第25話前半あたりとハグプリ第18話のお話となっているのです」

ゲイツ「後半あたりからは、アナザービルドに変身したアナザージオウが登場するぞ」

海東「はい次」

《第26話 二人の誕生が叶うか・・・運命の対決 2018》

ルルー「此処では、ジオウ第26話後半とハグプリ第19話の物語となっています」
えみる「そしてついに！私とルルーが満を持してキュアアムールとキュアマシエリに変身した日となっています」

ウオズ「ついでにゲイツ君もゲイツリバイブに変身した日でもある。

・・・非常に面倒だが祝え！巨悪を駆逐し、新たな未来へ我等を導くイル・サルバトーレ！その名も仮面ライダーゲイツリバイブ！ 真の救世主がこの地に降り立った瞬間である！」

士「はい次」

《第27話 最強コンビ登場!!? 黒ウオズ、一か八かの賭け 2009》

はな「ジオウ第27話とハグプリ第20話の話となっております」

ウオズ「祝え!過去と未来を読み解き、正しき歴史を導く預言者!その名も仮面ライ
ダーウオズ!新たな歴史の1ページである!」

ゲイツ「さつきより生き生きとしているなオイ」

海東「はい次」

《第28話 みんなが目指すゴール!!? 2018》

ソウゴ「ジオウ第28話とハグプリ第21話の話になります」

はな「そしてパップルとアナザージオウ、遂に決着の刻!」

ウオズ「アムールとマシエリ、我が魔王とゲイツ君の友情により、皆の間にまた一つ
距離が縮まったのだった」

ルルー「今の台詞、文字だけ見るとBL&百合的展開みたいですね」

ハリー「いや、そうはならんやろ」

士「はい次」

《特別編2 ライダータイム!!? 王の決まる日 2018》

ほまれ「ジオウ第29話とハグプリ第22話前半、そして『RIDER TIME 仮面ライダー龍騎』の話がミックスされた物語になっています」

さあや「更にyes!プリキュア5gogoの面々とハピネスチャージプリキュアのメンバーがゲスト出演しています」

ゲイツ「四組共、何気にカードがモチーフのメンツになっているな」

海東「はい次」

《特別編2 2018: ライダータイム!!? 王の決まる日》

えみる「ジオウ第30話とハグプリ第23話、『RIDER TIME 仮面ライダー龍騎』の話後半戦なのです」

ゲイツ「確か終盤あたりで、ジョーカーの力を得たアナザーブレイドと仮面ライダーオーティーン、そして猛オシマイダーと融合したアナザー龍騎と戦ったな」

ウオズ「祝え! どうやら3人のライダーの力が結集し! 多分、未来を創出する時の王者。

その名も『仮面ライダージオウトリニティ』! きつと、新たな歴史が創成された瞬間

である」

ソウゴ「だからそれ、本当に祝ってるの？」

士「はい次」

《第29話 2018： ナイトプール!夏休みスタート!》

はな「ハグプリ第24話単体のお話にして、プリキュアの世界では珍しい水着回となってます」

ハリー「ついでに、ここら辺からジオウ又はハグプリ単体の話が続くで」

ウオズ「祝え!ジオウメインライダーとハグプリ原作メンバーが、初めて一斉同時変身した瞬間を!」

海東「はい次」

《第30話 2068： ハリーの秘密・・・呪われし力》

ソウゴ「ハグプリ第25話単体の話となっています」

ハリー「そして遂に!この話からこの俺、ハリハム・ハリーが仮面ライダーに変身するで!」

ウオズ「祝え!呪われし力を解き放ち!新たな力へと変えた戦士の誕生!その名も仮

面ライダーハリー！まさに、奇跡のライダーの誕生の聖誕である！」

士「はい次」

《第31話 2001：ツクヨミの力・・・黄金の戦士の帰還》

ゲイツ「この話は、ジオウ第31話のものになっているぞ」

ほまれ「この話は仮面ライダーアギトメインの話だけど、ゲスト出演としてふたりはプリキュアSplash☆Starのお二人とそのパートナー妖精が登場します」

ウオズ「そしてこの回から、プリキュア達の影に隠れつつあったツクヨミ君の凄まじき戦士っぷりが徐々に明らかになっていくよ」

ツクヨミ「な”ん”か”言”っ”た”た”!?!?」

海東「はい次」

《第32話 2001：アギトの覚醒！受け入れる力》

ツクヨミ「ごほん……この話は、ジオウ第32話の物語となっているわ」

ウオズ「だいたいジオウ本編と同じ感じなので読み飛ばしても良いのですが、作者と原作者的には読み飛ばさないで全て読破して下さい」

士「はい次」

《第33話 2018：女優の覚悟》

さあや「この話は、ハグプリ第26話単体の物語となっております」

はな「そして、さあやとソウゴのメイン回でもあります」

ウオズ「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来を知らしめる時の王者！その名も仮面ライダージオウ・ミステリーフレアフォーム！まさに復活の瞬間である！」

海東「はい次」

《第34話 2018：ビビリタイム！ビビりを克服せよ！》

ゲイツ「この話は、仮面ライダージオウのてれびくん超バトルDVD『仮面ライダービビリのビビルゲイツ』の物語を主体としているぞ」

ソウゴ「そういえば、アナザー響鬼の代わりにアナザーウィザードが登場してたけど、顔が似ているから選抜されたのかな？」

士「はい次」

《第35話 2018：先生の初めての子育て》

さあや「ハグプリ第27話単体の話になってます」

《第36話 2018：希望を運ぶ和菓子》

はな「ハグプリ第29話単体の話になってます」

《第37話 2018：世界ツアーにレッツゴー！》

ことり「この話は、ハグプリ第30話の話になってます」

ソウゴ「それはそうと、第35話と第36話の会話とかは無いの？」

士「話の内容が原作ハグプリと同じな上に、大した盛り上がりも無いし、この辺はテ

キトーでいいだろ」

ハリー「すっごい雑ウウ!?？」

ほまれ「というか、ハグプリ第28話はカットにする感じなの？」

ウオズ「ちなみにおまけ編の元ネタは『銀魂』の無人島パロだよ」

海東「はい次」

《第38話 2068：クライアス社のライダー！目覚める新たな力》

ツクヨミ「此処では、ハグプリ第31話の話をしました」

ハリー「それにしても、リストールとビシンがこの回でライダーに変身するとはな……」
ウオズ「ちなみにこの本によれば、作者は『いじめ』を題材とした話は苦手だから、この回の修正などをしている時は地味に辛かったそうだ」

ソウゴ「いじめ、絶対ダメ!」

士「はい次」

《第39話 2005： 鬼が奏でる音楽の響き》

ウオズ「この本によれば、祝え!ジオウ第33話にして、我が魔王の誕生日である!」
はな「原作ジオウでは4月28日だったけど、この世界では9月28日が誕生日なんだね」

ウオズ「祝え!全ライダーの力を受け継ぎ、過去と未来をしろしめす時の王者、その名も仮面ライダージオウ・クウガアーマー!また一つ、ライダーの力を継承した瞬間である!」

ソウゴ「5ヶ月くらい先になっているんだよね」

ウオズ「祝え!ゲスト出演としてスイートプリキュアが登場した事を——」

ツクヨミ「ウオズ、うるさい!」

海東「はい次」

《第40話 2018： 祝え！受け継がれる鬼の魂！》

ソウゴ「こちらは、ジオウ第34話の物語が題材となった物語です」

ウオズ「祝え！時に意味はないが祝え！」

ゲイツ「もう良いだろ！」

ウオズ「祝え！ハリー君が轟鬼の力を継承したこの瞬間を！」

ハリー「ちなみにこの回ではアナザー響鬼と融合したオシマイダー、猛オシマイ響鬼が出てくるで」

ウオズ「祝え！まさに14年前の今日、我が魔王はこの世に生まれ落ちた！」

花よ！咲き乱れよ。鳥よ！歌え。生きとし生ける全ての者達よ！その全身全霊を

もって祝福するがいい！我が魔王の生誕の日を！」

ことり「何回言ってるのそれ」

士「はい次」

《第41話 2068： 真意・・・切り開く新たなフォーム！》

ほまれ「この回では、ハグプリ32話の話をしました」

ハリー「あ、ウオズ？俺の新フォームが出てくるから祝ってくれへんか？」

ウオズ「まあ、良いだろう………祝え!運命の歯車が回り!導く未来を目指し!新たな世界へと切り開くライダー!その名も仮面ライダーハリー・ギアジェット!まさに新たな1ページが開いた瞬間である!」

海東「はい次」

《第42話 2008 : まさかの初恋!?宇宙からのライダー!》

ソウゴ「此処では、ジオウ第35話の物語が展開されました」

さあや「……」

ほまれ「さあや!?ナズエダマツテイルンデイス!」

さあや「……ソウゴ君の……初恋……」

はな「アカーン!さあやが初恋相手へのジェラシーで嫉妬の魔女と化して来ている!」

ツクヨミ「それなんてリゼロ?」

ウオズ「ちなみに作者はこの話で名護さんが登場した時、かなり歓喜したそうだ」

士「はい次」

《第43話 2018 : 初恋さよなら……ファイナリータイム!》

ツクヨミ「この回ではジオウ第36話の話が出てきました」

ウオズ「この本によれば、キバットボイスのライダーこと仮面ライダーギンガとキ
 バーラボイスのプリキュア、キュアスカレット（プリンセスプリキュアのメンバーの
 一人）が登場したそうさ。そして祝え！宇宙最強、ギンガファイナリー！」

海東「はい次」

《第44話 2018： 闇の勧誘？響く二人の歌に立ち上がる！》

えみる「この話はハグプリ第33話の物語となっております」

ゲイツ「そしてジオウ第36話の後日談的な話でもあり、仮面ライダーキバである紅
 渡が登場したらしい」

ウオズ「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え、過去と未来をしろしめす時
 の王者。その名も仮面ライダージオウ・キバアーマー！まさに王としての風格を継承し
 た瞬間である！」

士「はい次」

《第45話 2018： 秘密の調査開始！クライアス社超アップ!!?》

ことり「この話はハグプリ第34話の話となっていて、私がお姉ちゃんたちがプリ

キュアである証拠を掴もうとしていました」

ウオズ「ちなみにこの辺りから、このSSの作者がイラストやSSの投稿活動を始めたそうだ」

海東「はい次」

《第46話 2006：プリキュアになりたい!》

はな「このSSではジオウ第37話の話が出てきました」

ウオズ「それにしても、今回の話はツクヨミスウォルツ兄妹、門矢兄妹、天道兄妹、地獄兄弟、加賀美兄弟そして野乃姉妹とか、兄弟に関するメンバーが勢ぞろいしているね」

ソウゴ「・・・えっ? 士、妹いたの?」

士「まあな。それよりも早く次行け次」

《第47話 2018：天の道へ・・・六人目、キュアアール誕生!》

ツクヨミ「ジオウ第38話の話にして、ことりちゃんやキュアアールに覚醒した話でもあります」

ソウゴ「キュアアールの“アール”って、確か“翼”って意味だよな? やっぱりカブト回で変身したのって、カブトで登場するOPの羽や妖精のイラスト繋がりでったりす

るのかな？」

ウオズ「あとは、『野力ことり今という蛹から脱皮し、羽を広げてキュアアラ新たな姿へと進化する』という意味もあるんじゃないかな？」

海東「はい次」

《第48話 2007： さあやの夢と最後のウオッチ！》

ルルー「この話は、久し振りにジオウ第39話とハグプリ第34話前半という、ジオウとハグプリ混合回となっています」

ウオズ「祝え！すべてのライダーの力を手に入れ、最強となった時見ソウゴ。

その名も、仮面ライダーグランドジオウ！」

ソウゴ「いや、まだ変身してないから」

ゲイツ「おまけ編には鬼滅の中の人ネタが出てくるぞ」

士「はい次」

《第49話 2018： 揃った力^{!!}?魔王の誕生^{!!}?グランドタイム！》

さあや「ジオウ第40話とハグプリ第34後半の話となっています」

ウオズ「今度こそ祝え！すべてのライダーの力を手に入れ、最強となった時見ソウゴ。

その名も、仮面ライダーグランドジオウ!

海東「はい次」

《特別編3 その1. 2018: 変えられた世界・・・ジオウ対プリキュア!?》

ソウゴ「ジオウ第41話の物語になっているよ」

ゲイツ「此処ではアナザージオウIIが登場して、ソウゴを追い詰めていくぞ」

はな「そして再び、仮面ライダービルドこと桐ヶ谷晴夜が登場します!」

・・・でもこの話、ドキドキ&サイエンスを見てない人からすれば『誰だこいつ』状態だったよね絶対」

士「その辺はもう、ドキドキ&サイエンスを見て来いとしか言えないな。そんなわけではい次」

《特別編3 その2. 2018: 仲間集め!時の止まった瞬間・・・明かされる過去》

ゲイツ「この辺はジオウ第42話とハグプリ第35話の話になっているぞ」

ツクヨミ「それにしてもこの話のサブタイ地味に長いわね・・・いや、その2. つて部分のせいで長くみえるだけかしら」

ソウゴ「というか今思ったけど、特別編3の話ってわざわざ特別編にしなくても良く

ない？特別編2は特に

ウオズ「言ってやらないでくれ我が魔王、原作者的には特別感を出したかったんだよきつと」

海東「はい次」

《特別編3 その3. 2018： 全員集合！今こそ元の世界へ戻れ！》

はな「ジオウ第43話とハグプリ第36話の混合回にして、TV版プリキュアオールスターが登場!!更にグランドジオウの力で擬似的なMOVIE大戦が誕生!」

ウオズ「祝え！我が魔王がプリキュアオールスターと平成ライダー達と共に偽の魔王を打ち倒し、時の王者としての資質を証明する瞬間を!!?」

ソウゴ「この話でアナザージオウIIがトラウムの猛オシマイダーとフュージョンしてオシマイジオウIIになったけど、原作HUGつとジオウ!では『オシマイジオウアナザー』っていう名称だったよね?なんで改名したの?」

ウオズ「作者曰く、オシマイジオウアナザーよりもオシマイジオウIIの方がしっくりと来たからだそうだ」

ゲイツ「いいのか勝手に改名して」

ソウゴ「ダイジョーブ!あっちでも『オシマイジオウアナザー』の他にも『アナザー」

ジオウⅡ』って呼んだりしてたし、何の問題も無し!」

士「はい次」

《第50話 2018： ハロウィン祭り!最凶のライダー!》

えみる「ハグプリ第37話、単体のお話となっているのです」

ハリー「更に前回の話でも出て来たジョージ・クライの変身するライダー、仮面ライダー・クライが出てくるで」

ソウゴ「それにしてもクライの仮面って、バルクスに似ているよね。というか、絶対を意識して描いたよねこの作者」

海東「はい次」

《第51話 2018： 最後に最悪のアナザーライダーの誕生!》

ことり「この物語は、ジオウ第44話の一部分が出てきます」

ウオズ「この回では仮面ライダードライブの泊進ノ介だけではなく、ハートキャッチプリキュアに登場したダークプリキュアが登場するなんて意外だったね」

ソウゴ「あれから他の闇キュアを出す気配がないけど、もしかしてダークプリキュア推しだったのかなごとき氏」

士「はい次」

《第52話 2014： 力を持つ意味・・・Start Your Engine!》
 ゲイツ「此処ではジオウ第45話のアナザードライブ部分を選抜して構成されています」

はな「いやあく〜お姉ちゃん的にはことりが奇跡的に生存したウール君といい感じになっついて大変微笑ましいですな〜」

ハリー「ちなみに原作HUGとジオウ!ではカットされたアナザードライブの
 出番がありますが、固焼き煎餅をクラッシュしようとしたグルメスパイザー並に割とす
 ぐに粉碎されます」

ウオズ「そりゃあ、もう。サイコロステーキ先輩並に早い退場だったよね〜」

ソウゴ「このSSのアナザードライブに関して言えば、ウエルダンステキ先輩
 の方が近いんじゃない?」

海東「はい次」

《第53話 2068： みんなが繋がる!明日への力を!》

はな「ハグプリ第38話の話が出てきました」

ゲイツ「まさかりストルがオシマイライダーの上位互換らしき姿、オシマイガイザーになるとは思わなかったな……」

ソウゴ「このオシマイガイザーってやつ、絶対にラスボスも変身するよね？変身しなかったら『たった一度きりの使い捨て設定かよ』って突っ込まれること間違い無しだよこれ」

ウオズ「そんなこと言ったらキバのドガバキフォームだって一回しか登場してないし、クウガのアルティメットフォームもインパクトを出した代わりに終盤の数分程度の出番だし、最近の仮面ライダーに至っては死にフォームが沢山登場してるから一回だけでも出てきたら御の字だよ」

士「はい次」

《第54話 2018： ルーラーのパパ！愛しき家族の絆》

ハリー「ハグプリ第39話の話となっているで」

ゲイツ「はぐたんがキュアトウモローだったなんて……かなり驚きだったぞ……」

ツクヨミ「一応この話、ルーラーとトラウムのメイン回なのに、トウモローの話で物語の半分持つて行ってるよねこれ」

ちくわ大明神「めのハンカチ」

ソウゴ「それにしても、前回の話でトウモロローから貰ったブランクウオッチ……一体どんな力を秘めているんだ……？」

ことり「待って、今『めのハンカチ』って言ったの誰？」

海東「はい次」

ことり「ねえ待って、なんで誰も突っ込まないの？おかしいの私だけ!？」

《第55話 2018：エターナルタイム！迷えるえみるとゲイツの心》

ルールー「ジオウ第44話の残った部分とハグプリ第40話がメインの話です」

さあや「この話では、エターナル克己だったり、ヘルをシイクして楽しむ人、永遠の人、歌唱罪で逮捕される人で有名な仮面ライダーエターナルが登場します」

ウオズ「祝え！この原作SSが投稿された日はHUGつとジオウ投稿1周年でもあるらしい！」

士「はい次」

《第56話 2018：決めたマシエリとアムールの覚悟！運命を覆す救世主の爆誕

！》

えみる「この話はジオウ第46話とハグプリ第41話のものとなっているのです！」

ウオズ「祝いたくはないが・・・私のプライドにかけて、祝え！闇に苦しむ人々を救い、未来に光を取り戻す真の救世主！その名も仮面ライダーゲイツマジエステイ！まさに生誕の瞬間である！」

海東「本来の時間軸では僕が二号ライダーのライダーカードで作ったんだけどな・・・まあ、いいか。それじゃあ次行っちゃって」

《第57話 2018：響け、エールの応援！奇跡の誕生！》

はな「ハグプリ第42話の話となっています」

ほまれ「原作の様にアンリが交通事故で重傷を負ってスケート大会を棄権する未来は回避出来たけど、足の怪我が酷くて結局、最後のスケートは出来なかったわね・・・」

ゲイツ「現実には漫画や小説の様に上手くいくとは限らんからな・・・」

ウオズ「だがしかし祝え！エール達の応援によって生まれた奇跡のプリキュア・キュアアンフィニが誕生を！」

士「はい次」

《第58話 2018：なりたい未来を掴み取る！》

ほまれ「此処では、ハグプリ第43話の物語が展開されました」

ウオズ「祝え！運命を超え！心に望む世界を導き出す奇跡のライダー！その名も仮面ライダーハリリー・ギアハリテージ！まさに未来を掴み取った瞬間である！」

海東「はい次」

《第59話 2018：母と娘の思いと、交わる二人の想い》

ルルー「この話ではハグプリ第44話の物語が語られました」

ウオズ「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者！その名も仮面ライダージオウ・ミステリーフレアフォーム！三度目に渡り、歴史の全てを知った瞬間である！」

さあや「……王様じゃなくて一般市民の姿になったソウゴ君……何かの伏線かしら……？」

士「はい次」

《第60話 2018：クリスマスの危機とスウォルツの計画……消えるウオツチ》

ソウゴ「ジオウ第47話とハグプリ第45話の前半あたりの話になっています」

ゲイツ「遂にジオウサイドも終盤か……ここまで長かった様な、短かった様な……」

ウオズ「ゲイツ君がどう思おうが、長かったか短かったかどうかは読者が決めること

にするよ」

ことり「他力本願!？」

海東「はい次」

《第61話 2068： 光輝く、美しき仮面ライダー!》

ツクヨミ「此処では、ジオウ第48話の話になっているわ」

ソウゴ「この回でオーマジオウとの対話がありました。詳しい会話は次回のお話です。すのでもう暫くお待ちください」

ウオズ「祝え! 闇夜を照らし、絶望の未来を切り裂く凄まじき時の女王! その名も仮面ライダーツクヨミ、まさに生誕の瞬間である!」

士「はい次」

《第62話 2018： 決着・・・魔王と破壊者の奇跡!》

はな「こちらの話では、ジオウ第49話とハグプリ第45話後半の展開が繰り広げられました」

ゲイツ「この話でデイケイドがまさかのコンプリートフォームになるなんてな・・・しかも律儀にネオデイケイド版だったし・・・」

ソウゴ「展開的には、MOVIE大戦2009が元ネタになっているのかな？」

ツクヨミ「それにしてもネオデイクイド・コンプリートフォームの姿が原作HUGつとジオウ！でも変化してたわね？脚部装甲に張り付いていたカードが胸部装甲に全集中したとか、ライダーカードが付いたマントとか」

士「東映公式でネオコンプリートフォームが出たからな。

ちなみに公式における正式名称は『コンプリートフォーム2』、此処と東映の違いは頭が長いか長く無いか、令和の力を得たか得てないかだ」

ウオズ「最後に祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者！その名も仮面ライダージオウ・ミステリーフリーズフォーム！再び、歴史の全てを知る瞬間である！」

士「・・・よし、大体終わったな。そろそろ時間だから俺はもう帰るぞ」

海東「それじゃあ、ギャラはたっぷり用意しておいてね」

ゲイツ「いや、お前ら殆ど間の手を打っていただけだろ！おい帰るな!!」

ウオズ「それでは皆様、『Re. HUGつとジオウ！』も終盤に近づいてきましたが、どうか最後までご覧ください」

ソウゴ「なお。補完計画はもうちよつとだけ続きますが、あまり期待しないで下さい」

終
わ
り

最終章 『ハグつとなドリーマーとオーマのロード編』

第63話 2019： ジオウ敗れる!?？最凶のライダー、マスタークライ！

ミデンによる事件からしばらく経つと、ソウゴ達は無事に年越しを迎えてそのまま元旦へと進み、時は2019年へと年号が変わった。

そんなある日、はなは夢を見ていた。

「——えっ……?……は……」

ウエディングドレスのような姿で夢の中で立っていた彼女の周りには、色んな額縁を貼られた絵が沢山あった。

「力強い瞳……未来を見つめている」

その中でも彼女は、一つ上に置かれていた絵を見て、まるで“もう一人の自分自身”を見ているかの様な、他人事じやない様な感覚に陥ったはなは、その絵に描かれた女性に魅入られるかの様に、その絵画に惹かれていた。

「ドラクロワ……『民主を導く自由の女神』だよ」

そこへクライまでも現れ、今日の前にある絵の解説を行った。

「女神……」

民衆を導く自由の女神……

1830年にてフランス画家であるウジェーヌ・ドラクロワが描いたとされる、フランス7月革命をテーマとしたロマン主義の代表作と呼ばれる絵画。

中央でフランス国旗を掲げ、フリギア帽という「自由」の概念を体現した三角帽を被った女性の後ろには、何人もの男性や子供が銃などの武器を手にしており、自由の為に立ち向かったであろう人々の遺体の山を超える彼女の姿は、自分達を束縛する理不尽へ勇敢に立ち向かって行くかの様だった。

「改革を求め立ち上がった民を、輝きへと導く凛々しい女神……人が輝く一瞬を切り取った絵画は美しい……」

だが、時を重ねる度に、その輝きは消えていく。

変わっていく人の心……自ら導いた女神の真相すら……」

どうしてクライアス社の社長がここに居るのだという疑問を抱いているはなを横目に、クライは目の前に飾られている絵について語りながら、消えない傷に手を置くかの様に自分の胸を抑える。

「あなたは悲しいの?」

その絵について涙を流しながら語るクライを見て、はなはそう尋ねる。

「今……君は幸せかい？」

「うん」

「そうか……ならば、永遠に……」

「えっ……」

クライがはなにそう告げて彼女の顔をその手で触れた時、そこで彼女の意識は途切れた。

「ううう……夢……」

はなが目を覚まし、ベットから起き上がる。

すると、自身の頬に冷たい水のような物が流れているかのような感触に気付いた。

「……涙？」

その時、彼女の目には涙が出ていた。

一方その頃、クライアス社の社長室でも……

「どうしたの……」

「夢を見ていた……」

ビシンが涙を流したクライに近寄ると、今の状況を端的に報告する。

「トゲパワワに変化が起きてるよ。このままだと時間が動き出す」

「そうか……」

クライはソファから立ち上がると、机に置かれたジオウライドウオッチⅡにそっくりなウオッチを掴む。

「そろそろ、彼にもなってもらおうかな……」

ウオッチを見てそう呟くのを見ていたビシンは、彼に気になっていた事を問い掛ける。

「一つ質問していい? どうしてリストルから心を奪ったの? それに、なんでスウォルツにだってチャンスをおあげるの?」

ビシンはクライが何故リストルの心を奪い、そして前回、好き勝手やっておいてソウゴ達に敗れたスウォルツに何故チャンスをおあげたのか、不満があった。

「それが彼の……命を持つ全てのものにとって一番の幸せからだよ。それに、彼にはまだ仕事があるから残しているだけだよ」

「……」

クライの説明も受けても尚、彼は納得が行かなかった。

しかし今の彼には、目の前で濁いた涙跡を残した顔に笑みを浮かべる男に追求する勇

気も、その権利も無かった。

ソウゴはクジゴジ堂の誰もいないリビングにて、置かれているライドウォッチを見つめていた。

「オーマジオウ……」

ウォッチを見ていたソウゴは、ツクヨミにウォッチを託し、ジオウトリニテイの変身を解いてオーマジオウと二人で対談した時にまで記憶を遡り、その時にオーマジオウと交わした会話を思い出す。

『仲間には聞かせたくなかったか』

『それに、戦うのは無意味だ。』

だって、あんたには俺を倒すつもりがない』

『お前は私だからな』

『……』

それを聞いたソウゴは、以前なら否定したものを、今回は黙って何も返さなかった。

『教えてよ。オーマジオウの力って何？世界の時間を止める事？』

ソウゴは未来からやって来た仲間から、未来から時を奪ったのがオーマジオウと聞かされていた。

そして本当に時を止める力があるのかと、オーマジオウに問う。

『違う』

『えっ?』

だがオーマジオウの口から時を止める力ではないという返答に、少し驚いた。

『オーマジオウの力とは……時空を破壊する力だ』

確かにオーマジオウの力は、*“全世界の時を止める力”*では無かった。だがオーマジオウから返ってきた言葉は、ソウゴが想像していたものとは違って、その力は自身の想像を遥かに超えていた。

『時空を破壊する力……』

じゃあ、なんで未来から時が止まったの?!? どうして……』

オーマジオウが止めたのではないのなら何で、世界から時が止まったのかを聞く。

しかし、目の前にいる男はその問いには答えなかった。

『一つ教えておこう。スウォルツゴときに、世界を滅ぼす力などない。お前に時空を破壊させるつもりだ』

『でも、俺はあんたにはならない』

スウォルツは最初から自分が狙いであるのは知っていた。でも、ソウゴはオーマジオウにはならないと否定する。

『どうかな？お前は私だ。楽しみにしているぞ。』

お前が、どの時空をどう破壊するか……』

そう言うときオーマジオウは以前のように過去に繋がるゲートを作り、ソウゴはそのゲートを潜って元の時代へ送還されたのだった。

そして、親と他の人々の仇であるスウォルツを倒した事で、自分は過去のケリを付けたと感じている。

……しかし、同時にその日からずっと考えていた。

本当に自分は、オーマジオウにならないのかどうかを。

(ウオズの本には……俺がオーマジオウになる道筋が書いてあると言ってた。でも……)

これまでも、みんなとその運命を変えて違う道を歩んできた。

だから、オーマジオウにならない。そう彼は信じる。

そう思い聞かせるかのように、今は兎に角、盲信的に信じるしかない。

(大丈夫。俺は最善最高の魔王になるんだ。オーマジオウには絶対にならない！)

取り敢えずソウゴはウオツチを見続け、そう強く思うようにする。

「ソウゴ」

そこへ、ゲイツ達がやってきた。

「何をしている。行くぞ」

「うん」

今日は元旦。みんなと一緒に正月を過ごそうと計画しており、ソウゴ達は約束の場所へと向かう。

——時は2068年。

ソウゴを元の時代へと送り返したオーマジオウは、“とある記憶”を脳裏に浮かべながら、先程自身がゲートを開いた場所をじっと見ていた。

「——やはり、同じ答えが来たか……まあ、助けてやるとするか」

何もかも、全て予想通り。

そんな事を考えながらオーマジオウは空へ向かって手をかざし、自らの力を放出した。

そして、この時間にいたゲイツとツクヨミは……

「まさか、やつに助けられるとはな」

「若い頃のオーマジオウが、時を超えてきたって言うの？」

2018年から時を超えて来たのかとツクヨミが呟くと、ゲイツは何かを閃く。

「そうか……その手があつたか。俺たちも過去に飛ばさば……！」

若い頃のオーマジオウが来たことにより、ゲイツとツクヨミが『自分たちも時を超えて過去に行き、オーマジオウの誕生を阻止する』という手段を思いついた。

「でも、どうやって……」

「クライアス社からタイムマジーンを奪う。その時、トゥモローも助ける！そして、未来を変える！」

ゲイツが叫ぶと、先ほどのオーマジオウが発した光が降り注ぎ、ツクヨミのポケットの中で何かが光る。

「熱っ！」

ツクヨミは自身が助けられた時に、ソウゴによって懐に入れられたウォッチを取り出す。

「えっ？これは……」

オーマジオウはそのブランクウォッチに何らかの力を宿らせた。それは後に仮面ラ

イダーツクヨミに繋がるとは、この時間軸ではオーマジオウを除き、誰も想像しなかった。

そして、時は2019年にまで遡る。

「きなこ、あんこ、磯辺餅、お正月は素晴らしいです!」

「さとう醤油も素晴らしい!」

ルールーとウオズは嬉しそうに餅を食べ続けている。

『超激辛 Dead or Aliveソース』もあるからね!」

「私も頂戴」

さあやとツクヨミは餅にかなり辛そうなソースをかけて食べていた。

「みんなもどうぞ!」

「いや、それはさあやとツクヨミしか……」

「ええ! 美味しいのに!」

二人がはな達に勧めるが、あっさり断られたのだった。

「はい! たんぽぽ堂特製の『希望館』でき上がり」

その場には、はなとことりの祖母のたんぽぽも来ており、『希望館』を用意してくれた。

「たんまりあるからね。今年は若い衆が来てくれたから」

振り向いた方ではチャラリートとダイガンが餅をついていた。出来た餅は来ている子供達へと渡していく。

「ダイガンさん。ありがとう。私も食べる！」

「五分と言わずゆつくりと食べるのだぞ」

子供達も嬉しいそうに食べていて、みんな嬉しそうにしている。

「なんか、いいな！」

「はな？」

「お正月って最高！でも、さらに楽しいこと一杯だね！」

楽しいことは一杯だねとはなが言うと、ゲイツ達もその通りだと言わんばかりに笑顔になって頷く。

「節分、バレンタインに雛祭り」

「恵方巻き、チョコレート、ひなあられ……とても楽しみです」

これから待っているイベントを待ち遠しくして、仕方がないはな達。

「私達の未来は楽しい事が一杯！みんなの未来！輝いている！」

嬉しそうな表情ではなが叫ぶ。

しばらくして、はなとルールとことりは野乃家へと戻る。そこには、ツクヨミに

ウールやダイガン、チャラリート、パップルがいた。

「いや、私までお邪魔してしまつて」

「私まで……」

更に、トラウムとオーラもここにいた。

「お邪魔するなら、帰つて下さい」

「ルールーちゃん！ そんな事言わないで！ ジャパニーズおせちは久しぶり〜なんだから〜」

最初ルールーに帰つて下さいと言われると、トラウムはショックな顔を浮かべたが、その後は甘えん坊のように彼女を抱きめしめる。

「オーラさんは、おせちは食べたことあるんですか？」

「……その……ない」

オーラは食べたことがないと、恥ずかしそうな表情でことりに応える。

「ええ、かずのこは子孫繁栄。昆布巻きはよろこんぶで縁起がいい！」

「へえ、色んな意味があるんだ」

「へえ……興味深いわね」

おせち料理に出されているものには其々意味があると知り、とても興味深く頷く。

「どうしよう。お醤油切れちゃったよ」

「やだ。夜ご飯お刺身なのよ」

「私買つてくるよ。日生君のコンサート引き換えに行くから……」

オーラと一緒にトラウムの話を聞いていると、森太郎とすみれの話を耳に入れたはなが一人で出かけようとする。

「ウール、あんたも行きなさいよ。ここの居候なんですよ?」

「うっ……わかったよ。僕が……」

「私も行くわ」

「いいよ。ツクヨミとウールはここにいて」

二人も一緒に行くと言うが、はなはお客人であるツクヨミと家の事はいつも手伝ってくれるウールに気を遣わせてあげる。

「でしたら、私も行きましようか?」

「いいって。ソウゴにさあやとほまれ、ゲイツとも待ち合わしてるし」

待ち合わせもあるから大丈夫と言うと、ルーラーに近づく。

「トラウムさんとゆつくり過ごして」

「ありがとう。はな」

はなはそのまま一人で買い物へと出かけると、オーラがウールの側に近寄る。

「後でなんか、お礼しなさいよ」

「……わかったよ」

「オーラさん。ウールのお姉さんみたい」

「ちよつと、ことり!こんなうるさい奴が姉さんなんわけ……ツツ!」

二人の会話を側から見ながら笑みを浮かべて眩くことりにウールが言いかけると、彼の足をオーラが指で抓る。

「あ、ごめん、ついうつかり」

ウールは少量の涙を目元に溜めながらオーラを睨みつけると、彼女はからかうかのように謝って流す。

だが、その時オーラが浮かべた表情は、以前のような不快そうなものではなく、優しい笑顔だった。

外へ出たはなは、さあや達の待ち合わせ場所へ向かっていた。

「あつ!ソウゴ!」

そこへ、偶然にもソウゴを見かけて声を掛ける。

「……あれ?」

いつもなら元気よく返してくれる筈だが、どう言うわけか彼は無言のままだった。

「ソウゴ!」

「えっ？あつ……はな。ごめん……」

彼女が彼の目の前に来て、ソウゴはようやくはなに気づいた。

「どうしたの？ソウゴらしくないよ？」

「……うん。ごめん、このウオッチが気になって……」

何か抱え込んでいる様子のソウゴに向けてそう語り掛けると、ソウゴは彼女に手に持っていたブランクウオッチを見せる。

「そのウオッチって……はぐたんからの……」

「うん」

そのウオッチはかつて、トラウムによって未来へ連れて行かれ、その時の去り際にキュアトウモローから託された物だと思いつく。

「まだ、使えないの？」

「うん……でも、グランドジオウやジオウミステリーだつてあるから、大丈夫だよ！」

ソウゴは自身の心の奥底に宿った、僅かな不安を抑え込むかの様に、トウモローから託されたブランクウオッチを仕舞い込むと、はなと一緒にさあや達の待ち合わせ場所へ一緒に向かう。

待ち合わせ場所のはぐぐみタワーに到着した二人は、空いているエレベーターに駆け

足で乗り込む。

「ああ、すみませ〜ん!」

今にも閉じられようとしていたエレベーターの扉の前に一瞬諦めかけるが、既にエレベーターに乗っていた人影がエレベーターの開ボタンを押してくれた事で、無事に二人は乗り込む事ができた。

「ハア、ハア……ありがとうございま……?」

「やあ」

二人が乗り込んだエレベーターには、なんとクライが乗っていた。

「大丈夫。今はプライベートの時間だ」

「どうして……」

ソウゴが目の前で立っている男を睨みつけるが、クライはそれを無視すると花束を手を持ってはなへと近づいていく。

「クラスペディア。花言葉は『永遠の幸福』」

「永遠の幸福……」

「君への贈り物」

クライはその花束をはなへ手渡そうとする。

「いらない!」

「つ!?」

当然、はなはその花束を弾いて受け取るのを拒否する。

「時を止めるなんて間違ってる。どうして、みんなを苦しめるの!?」

はなは時を止めるのは間違っているとクライに言うと、それには未来の自分が関わっているというソウゴは感じ出した。

「君は何か勘違いをしてるんじゃないか?」

「えっ?」

「僕や未来の彼を、恐怖の魔王か何かだと思っているんだろう」

さっきの一言にもしやと思ひ、ソウゴを振り返ると、彼が少し沈んでいた事に気付く。

「違う……ソウゴは……」

「未来の時を止めたのは、僕でもオーマジオウではない」

「えっ……」

(やっぱり……)

あの時、ツクヨミにウオツチを渡した後のオーマジオウの会話で、ソウゴはオーマジオウが時を止めていない事を察していた。

「時を止めたのは、そこに生きる民衆だ」

「民衆って……どうということなの!」

民衆と聞き、流石のソウゴも何故、時を止めたのがその時代にいた人達なのだと問う。
「文明の進化。だが、その成長に見合うほど人類は尊い生き物ではない……」

人が生み出したトゲパワワが世界に広がり。明日の希望の力・アスパワワは失われて
いった……

そして、世界の時は止まった」

クライはその悲しい瞳を二人に向けて、語り続ける。

こたつで寝転がっているトラウムの下にルーラーとツクヨミ、ことりが現れる。

「一つ聞きたいことがあります」

「うん?」

「クライアス社社長。ジョージ・クライ」

三人はクライアス社の社長である『ジョージ・クライ』とはどんな人物なのかを、近くにいたトラウムなら何かを知っているのかと尋ねる。

「……一言で言うと、何も知らない男なんだよ。クライは……」

「何もしない?」

「どう言うことなんですか?」

「彼はただ、我々を見つめている」

「見つめている……」

トラウムの知る『ジョージ・クライ』は何もしないが、クライアス社の社員達をずっと見つめている男なのだと話す。

エレベーターの中では、クライの未来の話を聞いてソウゴとはなは驚きながらも、口を開く。

「でも、ゲイツや未来のプリキュアをあなたは……それにこの前だって、土さんや晴夜君を……」

クライアス社は今までずっと、未来のプリキュアとゲイツ、ツクヨミをずっと襲い続け、以前にも協力してくれた門矢士から力を奪い、桐ヶ谷晴夜をも傷つけた。

「愚かな人々を救う為にあがく彼女達の苦しみを、取り去ろうしただけだよ」

「苦しみ？」

「そうだ、苦しみだ。桐ヶ谷晴夜君、明導ゲイツ君、門矢士。彼らは彼女達の為に無意味な事をずっとしていた。

だから、やめさせる為には仕方がなかった」

三人の仮面ライダーがしている事は無意味だと言い、やめさせるには自分がした事は仕方がないと語る。

「何度救つても人間がたどる未来は……破滅へと続いている。プリキュアと仮面ライダーの戦いは無意味だ」

そしてクライは、彼らや彼女達の戦いも無意味だと、今まで繋いできた彼ら彼女らの想いは、全て何の価値もないものだと言い放った。

同時刻、既にゲイツとさあや、ほまれの三人はタワーの中で待っていた。

「はな。出ないんだけど」

「ソウゴも連絡ないな」

「食べ過ぎて寝ちゃったのかな?」

「はなの場所ならミライパッドで調べてみる」

ゲイツの言葉で、はながプリハートを持つているならばミライパッドで位置情報が分かる事を思い出し、さあやは直ぐにミライパッドではなの居場所を調べる。

「「…えっ?」」

だがパッドに映っていたはなの現在位置を見て、三人は驚く。

クライは一通り語り終えると、ソウゴとはなにある問いを聞き出す。

「今、君達は幸せなんだね」

「……」

「僕は皆を救いたい。無論、彼もその思いは同じだよ。破滅に向かう前に」

「そんな事は……破滅なんて……」

「人類が生まれ生命を持つ事。それは哀しみ、悪いことなんだ」

「!?？」

その時、ソウゴは彼の言う事を聞いて、
「言われてみれば、確かにそうだ」と、一瞬でも同意しかけてしまった。

そのせいか、彼にはクライの言葉にどう言い返せばいいのかわからなかった。

「違うー！」

「はな」

それに対して、はなは違うと強く叫ぶ。

「人の心にはいつぱい希望がある！アスパワワは無限に生まれるの！」

「でも、君は人間が悪い心を持ってないと言い切れる？」

はなはクライの一言に、転校する前のシャインヒル学園でのあの辛い日々の記憶。

本当ならもう、ずっと思い出したくもない、辛い過去を思い出してしまおう。

だけども……

「行けない……私はプリキュアだもん！みんなの笑顔を守る！」

「はなー！」

そう彼女が叫ぶとエレベーターの扉が開き、気づいたゲイツ達三人はすぐに駆けつける。

「凄い……はなのアスパワワ」

ソウゴの目に映った、強い光を放つそれは、彼女の持つプリハートの力で出したはなのアスパワワだった。

それを見ていたクライは、はたとソウゴから離れる。

「貴様は、クライ！お前……今日こそ！」

ゲイツがクライを見て殴りかかる。しかし彼は、ゲイツのパンチを避けた。

「またね」

「待て！」

ゲイツが追いかけてようとするが、クライの姿はなかった。

「くそ！逃げられたか……」

逃げられたのを見てゲイツが舌打ちをして悔しがる。

「はな……ごめん、俺……」

するとソウゴが、はなは遅しくクライに反抗していたのに、自身は彼に何も言い返せなかったことを謝る。

「ううん。気にしてないよ」

（何も言い返せなかった……）

（ソウゴが……）

普段のソウゴなら間違っている発言なら、絶対にはなと同じで直ぐに自分が正しい
思ったことを言うはず。

だからこそ、彼女ばかりにクライの対応を任せてしまった事を謝罪するソウゴを見た
さあやとゲイツは、信じられない様な顔で彼を見つめていた。

——時は再び2068年。

そこには、そんなソウゴの姿を見ながら溜息を漏らす存在……未来の時見ソウゴが存在
していた。

「……調子悪そうだね、彼。仇であるスウォルツを倒したつてのに」

「……若かりし日の私は今、恐怖しているのだよ。」

悪意という名の現実を経験したことで、自身が信じている未来が、全く違うものにな
る事をな。だからクライなんかの言葉に同意しかけた」

「……なんだか似てるね、やっぱりこうして見ると」

椅子に座って苛立った様子を見せる未来のソウゴに、青年はある人物に似ていると呟

く。

「……似ているだと? 誰にだ」

「野乃はなだよ。彼女もまた、現実という名の悪意に触れ、その心に深い傷を負ってしまっただ」

「……彼女は、不思議な子だ。」

最初はなんて弱く、脆く、妄信的な小娘なんだと、そう思っていた」

「だけど違った。彼女は人の悪意に触れて尚、人への優しさを信じ。例え心を折られても、そのたびに立ち上がり、強くなった。」

——だからこそ、未来の彼女は神になる資格を得ることが出来た」

「……彼女は、本当に愚かだった。人の本質は悪意で構成されていることを、理解できていなかった。」

故に彼女は、人であることを捨てる事を選んだ。実の娘を置いて行ってまで…な。

だがしかし、現実には彼女の予想に反する行動を取り続けた。

そして遂には、人類は滅亡への道へと赴き。クライの奴も狂気に取り憑かれることになった——」

「…スウォルツの問題が解決したからもう大丈夫だと思っていたけれど、もう一悶着ありそうだね、この調子だと……」

「……もし仮に、若かりし日の私がアイツの誘惑に負ける様な腑抜けになつていた時は、その時はまた、時空を破壊すれば良いだけだ……」

そんな一種の「諦めの境地」とも取れる未来の時見ソウゴの呟きに、青年は複雑そうな表情と心情で彼を見つめていた。

それからしばらくし、みんなでビューティーハリ―へと集まり、はなを休ませる為にソファに座らせていた。

「お姉ちゃん大丈夫だった!？」

「はな先輩怖かったですよ」

「何か攻撃されたのですか？」

「ううん。けど、あんな悲しい目をする人もいるんだって……」

はなはクライの目を見て、あんなに悲しい目をする人もいるんだなと言う。

(そういえば、晴夜も……)

『プレジデント・クライには……とても悲しい思いが伝わったんだ。戦つてみてその深さをより感じたんだ』

そういえばと、クライと戦つた事がある晴夜が、クライの事をそう感じたと言つてい

た事をソウゴは思い出した。

「げんぎないの〜?」

「ううん。元気あるある!」

はなが自身を心配するはぐたんを抱っこしてあげる。

「はぐたんという時の暖かさ、友達もいる時の幸せ……私はそう言うものを守りたいの」

はなが見つめて言うと、みんなも笑って応える。

「それは、私達が大人になっても変わらないものでしょ?」

「そうやな……」

「うん。変わらないよ」

彼女の言う事にハリーとツクヨミが同意すると、ほまれが何かを閃いた。

「ねえ! みんなでお泊りしよ!」

「お泊り?!? すごく素敵なのです!」

「はぐたんも一緒!」

「よし! みんな家族に連絡だ!」

みんながビューティーハリーでお泊まりをしようと、家族に連絡を取ろうとする。

クライアス社では、恐るべき最終計画が発動されようとしていた。

「時は満ちた！僕と君！どちらが選ぶ未来に辿り着けるか！審判は今！稟議承認！」

クライはその書類にサインをし、トゲパワワによって作られた自分の分身とも言えるトゲパワワで出来た怪物に飛ばす。

その翌日。みんなが目を覚まし、はなとソウゴが先にビューティーハリーから出る。

「これがお日様が出る前の空なんだ」

まだ日が昇る前の空を見てはながそう呟くと、階段の下にある雪だるまを見て足を止める。

「はな？……クラスペディアの花……もしかして、クライ……」

ソウゴが下を見るとはなは雪だるまの腕となっているクラスペディアの花を見て、昨日のクライを思い出した。

「永遠の幸福……どうしていつも……」

はなはこれまでのクライとの会話で、よく彼は『永遠の幸福』と言っていた事を思い浮かべる。

そして、今にもクライアス社の作戦が始まろうとしていた。

「共に終わらぬ明日を！」

「「クライアス社に栄光！」」

ソウゴ達ははぐみタワーで行われている、ラヴェニール学園の新春コンサートを
にやって来た。

会場には、多くの人が演奏を見にやって来ていた。

「素敵なハーモニーですね！」

「はい！」

「あ、あれ見て！」

ツクヨミが言うと、みんな窓の方を振り向く。

海の上から、新たなる歴史が始まるかの如く、世界を照らしながら太陽が現れよう
としているのが見えた。

「朝日が登る」

「眩しいね」

「まさに、新春に素晴らしい朝日だね」

「ああ！」

「街が色づいている！」

「うん！なんか、いつもの何倍も街が綺麗！」

街に朝日が照らされ、最高の一日を迎えられると、みんなが等しくそう思った。

その時。上空から黒い雲が現れ、朝日の光を掻き消そうとすると、そこから海岸に向けて巨大なビルが現れた。

「何あれ……いや、まさか……」

「クライアス社の……」

「ビル……」

ゲイツとツクヨミにルルー、ウオズの目に映ったそのビルは、忘れてくても忘れられない、因縁のある建物だった。

その中に、トゲパワワを身体から放出しているクライがいた。

「新たな苦しみはここで終わる……もう何も生まない永遠の幸せの始まりだ……」

『又ウオオオオオ……！』

クライの分身から大きな雄叫びがクライアス社のビルの時計にトゲパワワを集まる。そこから放たれた光がはくぐみ市に放たれた。

人々は逃げ惑う人も入れば、何も気づかない人もいる…

そして、そのまま時間は止まった。

動けるのは、ソウゴ達仮面ライダーとプリキュアのみとなった。

「幸せの時を二人で生きよう」

時が止まった景色を眺めながら、クライは二人の男女が写っている写真を見てそう呟く。

一方で、時間が止まったのを見てソウゴ達ははぐぐみタワーから降り、急いで海岸へ向かう。

「みんな止まっている!」

「時間が……みんなの未来が!」

「これじゃ、未来と……」

「うん。全く同じ……あの辛い未来と同じ!」

海岸へと向かっていたソウゴ達はその間、周りを見渡していたが、矢張りどこもかしこも人の動きがない事を確認したさあやとほまれ。それらの光景を皆と一緒に見ているゲイツとツクヨミも、自分達が居た2068年の惨劇と同じだと確認した。

「お兄様……お母様……お父様」

「パパ……ママ……」

「叔父さん……」

ソウゴ達は家族が居るであろう場所を振り返らず、ビルが現れた海岸へ到着した。

「なっ!?」

海岸へと到着し、ビルを見たソウゴ達は驚愕した。

「何を焦っている?」

「クライ!?」

そこに、光の円盤に乗るクライが現れたからだ。

「もう時は止まった君達がどう足掻こうと未来はこない」

警戒するソウゴ達へ向けて、クライは未来はこないと全員に告げる。

「まだ……俺達の時は止まっていない!」

ソウゴ、ゲイツ、ウォズ、ツクヨミ、ハリーの五人はジクウッドライバーを取り出す。

「うん!まだ終わっていない!」

はな、さあや、ほまれ、えみる、ルールー、ことりがプリハートを取り出し、プリハー

トから光の粒子が流れる。

「アスパワワ〜!」

「俺達の瞳は、まだ消えないで!」

全員が変身アイテムを持ち構えると、クライは溜息を吐く。

「確かに君達を説得する必要があるね」

クライが本のページを開くと、そこに描かれている猛オシマイダーが次々と海の中から現れた。

「猛オシマイダーが——」

「いっぱいなのです!」

「行こう!これで最後にする!」

「みんな!」

ソウゴ達はジクウドライバー、ビヨンドライバーを。はな達はプリハートを取り出し、ソウゴ達はドライバーを装着した。

『ジオウ!グランドジオウ!』

『ゲイツ!ゲイツマジエスティ!』

『ギンガ!』

『ハリー!ギアヘリテージ!』

『ツクヨミ!』

「変身!!?」

「ミライクリスタル!ハートキラッと!」

ソウゴ達はドライバーを操作し、仮面ライダーへと変身し。はな達は揃ってプリハートにミライクリスタルをセツトし、いつもの手順を取り姿を変える。

『グランドタイム！祝え！仮面ライダー！グ・ラ・ン・ド！ジオーウ！』

『マジエステイタイム！仮面ライダー！A h h！ゲイツ！マジエーサー
テイー！』

『投影！ファイナリータイム！ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファン
タジー！ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！ヘリテージタイム！導け！心に望む未来へ
！ハリーギアヘリテージ！』

『ライダータイム！仮面ライダーツク・ク・ヨ・ミ・ツ・ク・ヨ・ミ！』

「輝く未来を、抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアール！」

「「「HUGっと！プリキュアー！」」」

全員が変身を完了し、名乗り上げを済ませると、猛オシマイダーへ向かっていく。

『カイザ！ギャレン！』

「行くぞ！」

ゲイツがカイザブレイガン、醒銃ギャレンラウザーを出現させ、マシエリとアムールと共に応戦する。

「はああ！」

ギャレンラウザーを走りながら放ち続け、近づいた所にカイザブレイガンで攻撃し、猛オシマイダーを倒していく。

「マシエリ！アムール！」

「はい！」

残りにはツインラブギターで光線を放ち、三人の周りのオシマイダーを浄化させる。

近くでは、エトワールとアキラが猛オシマイダーを引き付ける。

「スターズラッシュュ！」

「ウイングシャワー！」

猛オシマイダーを一箇所へと集めるとそこへウオズが現れ、二人は離れる。

「二人共！後は任せたまえ！」

ウオズはドライバーからギンガミライドウオツチを外す。そして、ウオツチのダイヤルを回す。

『ワクセイ！』

ギンガミライドウオツチの顔が変わると再びウオツチをドライバーに装填し、レバーを引く。

『ファイナリータイム！水金地火木土天海！宇宙にやこんなにあるんかい！ワクワク！ワクセイ！ギンガワクセイ！』

ギンガファイナリーのままウオズの複眼が青色へと変わった、ギンガワクセイフォームへと変わった。そのままウオズはレバーを引く。

『ファイナリービヨンド ザ タイム！』

猛オシマイダー達の頭上から小宇宙のようなものを出現させ、そこからエネルギー球がいくつも生成されていく。

『水金地火木土天海エクスプロージョン！』

そのまま、エネルギー球が雨を降り注ぎ、猛オシマイダーに直撃させる。

ハリーとツクヨミは…

「デアアアアア！」

空中で、ジカンチエーンブレードで攻撃を繰り返し出し、ツクヨミとはぐたんに猛オシマ

ライダーを近づけさせないように奮闘する。

「ハリー!」

ツクヨミが手を広げ、ハリーに襲いかかる猛オシマイダーの時を止める。

彼女ははぐたんを抱いている為に激しくは動けないので、ハリーをサポートしていた。

「モウ〜オシマイダー!」

こちらへ向かってくる猛オシマイダーの軍団がツクヨミとはぐたんの前へ現れた。

「はぐたん! ツクヨミ!」

アンジユが前に出てバリアを展開し、これを防ぐ。

「はぐたん! ちょっといい?」

ツクヨミがはぐたんを一同地面に座らせる。

『フィンニッシュタイム!』

ドライバーを回したツクヨミの右足に光が集まり、オシマイダーへ向けて必殺技が放たれようとしていた。

「はあああああ!」

『タイムジャック!』

月のエフェクトと共にツクヨミのキックが猛オシマイダーへと向かって放たれ、オシ

マイダーを一掃すると、そのままはぐたんを再び抱っこする。

「……」

「トゲパワワがどんなに増えても、アスパワワは消えない!」

エールがそう叫んだその時、ハリーから預かって持っていたミライパッドが光り出した事にツクヨミは気付いた。

「ミライパッドが……」

「私達は負けない!みんなの未来を取り戻す!」

「……メモリアルクロック!マザーハート!」

ミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「……ミライパッド!オーブン!」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「……HUGっとプリキュア!今ここに!」

「ワン・フォー・オール!」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」

「プリー、キュアー！」

「明日に！」

「エールを！」

エール達はマザーを召喚してメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集める。

「ゴォー、ファイ！みんなでトウモロォー！」

手を掲げ、マザーの力を解放して放たれる光線“みんなでトウモロォー”を放つ。命中したオシマイダーはハートに包み込まれ、浄化される。

「やはり、簡単にはいかないか……」

猛オシマイダーだけでは止められないとわかっていたのか、クライは円盤から降りるとジオウの前へと着地する。

「クライ……」

「まず君には、現実を見せないといけないな」

クライがジオウの前へと降りると、ジクウドライブを装着する。

「見せてあげるよ。永遠の世界を作るライダーの力を……」

『クライ！』

そう言つて彼は、ジオウライドウォッチⅡと形が似ている、金と銀の装飾がなされた、黒と紫のウォッチを取り出し起動スイッチを押した。

「ジオウⅡのウォッチと同じ……」

『マスタークライ！』

二つのウォッチへと分解したクライは、そのウォッチを両側のスロットへ装填する。

そしてドライバーのロックを解除すると、地中から巨大な紫の忌々しい見た目の、ギリシャ時計を連想させる時計台が大量のトゲパワワを放出させながら出現した。

「変……身」

ドライバーから流れる不気味なパイプオルガンをBGMにしながら、クライは掛け声と共にドライバーを回転させると、時計盤から『ライダー』の文字がトゲパワワで形作られて射出。同時に無数の赤黒い帯状のエフェクトがクライを包み、彼の姿を変える。

『パーフェクトタイム！仮面ライダー！ライダー！マスター！ク・ラ・イク！』

強烈な爆風によつて帯状エフェクトが弾け飛んだ事でようやく見えたとその姿は、まるでオーマジオウの様な姿で、アーマーがオーマジオウの如く黒と金で統一されたものとなっているが、アンダースーツのカラーは灰色がかった白。

右肩のシールドには紫がかった黒のマントを羽織っており、金の装飾が成された

白っぽいローブが腰から膝の少し下辺りまで垂れ下がり、顔にある『ライダー』の形をした複眼は赤黒い紫となっていて。更にオーマジオウの仮面にあつたクロノグラフ『パラレルラトラパンテ』の代わりに、王冠のように伸びる5本のブレードアンテナ『カイザーブレードクラウン』が装着されていた。

「これは……新しいクライ」

オーマジオウの様に神々しく、それでいてオーマジオウよりも禍々しいオーラを放つ姿へと変身したクライを見てジオウが驚いていると、クライは仮面の下で不敵な笑みを浮かべた。

「これで、永遠を求める仮面ライダー……マスタークライ」

「マスタークライ……」

『パーフェクトジカンセイバー!』

ドライバーからジカンセイバーショットとは違う、サイキョーギレードと似た武器『パーフェクトジカンセイバー』が出現した。

ジオウはサイキョーギレードを構えるとお互いに睨み合い、踏み込むのを待つ。

「ツ!!」

遂にお互いに地を踏み込むと、サイキョーギレードとパーフェクトジカンセイバーが激突し、パープルピンクの雷光と赤黒い雷光が衝撃波と共に周囲へと放たれた。

「はああー！」

「……」

互いの武器は何度もぶつかり、火花を散らし合った。

「ッ!?」

だがしかし、パーフェクトジカンセイバーによる予想以上の威力にジオウが一度離れ、サイキョーギレードを捨てるとブレイドのレリーフに触る。

『ブレイド!』

ブレイド・キングフォームの武器であるキングラウザーを召喚し、それを手に持ち再びクライへと向かっていく。

「……」

クライはそれを見て、パーフェクトジカンセイバーに付けられた『ライダー』と刻まれているクライの仮面の部位を一度外し、再び装填した。

『ライダースラッシュ!』

「!?」

クライは自身の持つパーフェクトジカンセイバーの刀身に紫色のトゲパワワを纏わせると、こちらに向かってくるジオウへと放った。

「うっ!」

ジオウはキンググラウザーで耐えるも、あまりにも強大なトゲパワワの前にこの剣では長く耐えられない。そう判断するとキンググラウザーを手から離し、間一髪の所でクライの攻撃を躲した。

「だったらー!」

『ビルド!』

クライの横からタンクタンクフオームのビルドが現れると、フルボトルバスターを持ちクライに向けて放った。

「……」

だがクライはパーフェクトジカンセイバーを盾とし光弾を防ぐ。

『ゴースト! エグゼイド!』

さらに、ジオウはゴースト・オレ魂とエグゼイド・マイティアアクションゲーマーが現れ、クライへ向けて二人同時にライダーキックを放つ。

「ふっ……」

それを冷静に見たクライがトゲパワワを使い、周囲の岩を浮かせエグゼイドとゴーストのライダーキックを二人にぶつけて失敗に終わらせる。

「くっ!」

『ドライブ! カブト!』

今度は、ドライブ・タイプフォーミュラ、カプト・ハイパーフォームを召喚し、フォーミュラとハイパークロックアップの超スピードでクライへと向かっていく。

対して、クライはパーフェクトジカンセイバーのフェイスを側面のスイッチ操作で変えると、フェイスの文字が『パーフェクトセイバー』と変わる。

『パーフェクトスラッシュュー!』

ジオウの方だけを見据えたまま、時計の文字盤を模した忌々しい紫色の斬撃を飛ばし、横から突撃して来たドライブを吹き飛ばした。

『ライダーキック!』

その一方で、クライの斬撃を紙一重で躲したカプトはハイパーゼクターのゼクターホーンを押し倒し、カプトゼクターのスイッチとゼクターホーンを操作して『ハイパーライダーキック』を放った。

あと数センチでキックが当たると思ったその刹那、落ち着いた様子で歩み続けるクライが指を鳴らした。

——その瞬間、カプトも、ジオウも、離れた所で猛オシマイダーと戦っていたエール達、ゲイツ達も。マスタークライを除いて、時が止まった世界でも動いていた者達ですら、その時間を止められてしまった。

「ふう……」

今も尚クライはジオウを見据えたまま、カブトにパーフェクトジカンセイバーの斬撃を与える、再び指を鳴らして時を動かした。

ジオウ達の体に再び時の動きが戻った瞬間、 “時を止められた” という事実ですら気が付いていないジオウの目にはカブトが突然爆発したように見えていた。

「そんな……ライダー達の力が、全く歯が立たない?」

ジオウは召喚したライダーによる攻撃を放ち続けたが、グランドジオウ以上の力を持つであろうクライの前には彼らの力は通用すらしなかった。

「これが無意味、という言葉の意味だよ。時見ソウゴ」

『ジカンセイバーショット!』

クライはジオウの方へ静かに歩みながらジカンセイバーショットを出現させ、パーフェクトジカンセイバーをサイキョーギレードと同じように合体させる。

「だったらー!」

ジオウもジカンギレードとサイキョーギレードを合体し、サイキョージカンギレードへと合体させる。

『キングギリギリスラッシュ!』

ジオウがキングギリギリスラッシュを放とうと構える。

『パーフェクトギリギリセイバースラッシュ!』

クライも合体したパーフェクトジカンセイバーショットから技を放とうとすると、その剣からは忌々しい白と黒の竜巻を纏いながら、『パーフェクトセイバー』という文字を浮かべた長大なトゲパワワの刃を構える。

「オリヤヤヤァー！」

二人が同時に放ち、お互いに再びぶつかり合う。

「くう……うううう」

「……」

ぶつかり合う、お互いに放ち合った凄まじきエネルギー。

しかし、現状ではクライの方がジオウを押ししている。

「どうして……」

ジオウがジリジリと技に押されて下がっていく。

「これが、僕と君との違いだよ……」

「そんな事……」

ジオウは負けじと力を入れ、押し返そうとする。

「俺達は、未来を救う！明日を作るために……」

「本当に君の望みかい？」

「えっ？」

それがジオウの——ソウゴの望みなのかと言われ、ジオウは黙り込む。

「君は、王となり世界を良くしたいと言った……」

ならば、みんなが永遠なら世界は良くなるのではないかな?」

「それは……」

もし此処で、ソウゴがクライの言葉をバツサリと切り捨てたのなら、もう少し粘ることが出来たかもしれない。

例え味方でも自分に牙をむこうものならば反撃するどころか躊躇なくぶつ放す等の容赦のなさも備え、勝利という結果を得る為ならば無情な手段をとって過程を顧みない。

そんな一面を持つソウゴではあるが、世界を良くしたいと願い、民を愛するが故に、本当の意味で「超えてはいけない壁」を越えることは無かった。

しかし彼は、目の前の男の甘い誘惑に揺らいでしまった事で、一瞬でも「超えてはいけない壁」を超えそうになってしまった。

そして、ジオウがクライの一言に心が揺れてしまった事で、その隙を突かれてクライの攻撃でジオウの技が完全に掻き消えそうになる。

「ならば……共に来ないか?」

「えっ?」

そのまま、ぶつかり合うお互いの技はクライの攻撃が飲み込んだところで相殺されて、激しい爆風が放たれた。

「くうー！」

その爆風により、サイキョージカンギレードを落としてしまった。そして…

『パーフェクトフィニッシュタイム！』

爆風の中からクライが現れ、ジオウの前へとキックの姿勢を決めたまま迫り来る。

『ユートピアタイムエンド！』

「ふうー！」

クライの強力なトゲパワワを纏ったライダーキックが直撃。ジオウは無防備な装甲にその攻撃を受けてしまった。

「うわああああああー！」

クライの攻撃を受けてグラウンドジオウから強制変身解除となり、ソウゴが倒れる。

「あ……ああつ……！」

攻撃を受け気を失ってしまった装甲を、クライはトゲパワワで浮かせこちらへ連れて来る。

「時見ソウゴ、共に目指そう。永遠の未来を……」

その為の最強の力を、君にあげよう」

「ソウゴ君!」

「ソウゴ!」

アンジュとアムールがソウゴを連れ戻そうとクライに飛び込む。

『又ウオオオオオ!』

だがそこに、クライそっくりのオシマイダーが妨害する。

「キヤー!」

「アンジュ!アムール!」

ゲイツが背後へと回り、吹き飛ばされた二人を受け取る。

「君もだよ」

クライはオシマイダーを操作すると、今度はツクヨミとハリーへと襲いかかり、光線を放つ。

「はぐたん!」

ハリーが庇おうとするが、二人ははぐたんを守るために倒れてしまう。

「ウツ……ツ、ウウ……」

ツクヨミとハリーが立ち上がれないのを確認したクライは、そのままソウゴと同じようにはぐたんをトゲパワワでこっちへ連れ寄せて行く。

「しまった!」

「はぐたーん！ソウゴ！」

クライは二人を連れて、オシマイダーの中へと逃げていった。エールは二人を追おうとするが、弾き返されてしまう。

「エール」

倒れたツクヨミが起き上がりエールに駆け寄り、彼女を起き上がらせる。

「はぐたんを……ソウゴを……助けなきゃ……」

「ソウゴ君……」

「お姉ちゃん、みんな！行こう！」

エールとアンジュはソウゴとはぐたんが連れ去られた場所へ顔を向け、アールが今すぐにも二人を助けに行こうと声を掛ける。

「うん！」

「待ってろ！ソウゴ！トウモロ！」

みんなが皆んな、二人を助けようと突入を試みる。しかし……

「ここは決して通さない」

「今日で終わらせてあげるよ」

上空からリストルとピシンが現れ、全員を妨害しようと仮面ライダーとなって現れた。

果たしてこの戦いで未来はどちらへ傾くのか——
——そして、ソウゴはどうなったのか。

今ここに、クライアス社との最後の決戦が始まる。

次回! Re・HUGつとジオウ!

第64話 2019： 明日を掴む、最後の決戦!

第64話 2019： 明日をかける最後の決戦！

クライアス社の手によりはぐぐみ市の時が止まってしまい、それによって仮面ライダーとプリキュアしか動ける者がいなくなってしまうた。

「うっ……ううう」

「ソウギョー！ソウギョー！」

そんな中、ソウゴは何者かが自分の体を揺すり、名前を呼ぶ声が聞こえ目を開けた。

「はぐたん……ここは……」

起き上がると、傍に寄って来ていたはぐたんと一緒に辺りを見回す。

二人がいた場所は、辺り一面が花で覆われていた。

「目が覚めたようだね」

突如声の聞こえた方を振り向くと、二人の前にクライが立っていた。

「はぐたん！」

それに気付いたソウゴは、咄嗟にはぐたんを守るために前へ出る。

「危ないから、君はこっちだよ」

しかしクライはソウゴに目もくれず、手を上げてこっちに引き寄せるようなモーショ

ンを取る。

「はぎゅー！」

はぐたんの周りにトゲパワワで出来た檻のようなものが作られ、はぐたんを閉じ込めるとクライ自身の方へと引き寄せた。

「やめろー！」

ソウゴがクライに飛びかかり、はぐたんを取り戻そうとする。しかし、クライは余裕そうな表情のまま躲した。

「はぐたんを返せー！」

クライに挑もうともう一度、ジクウドライバーを装着する。

「とりあえずは、話を聞いて欲しいな」

彼の行動を見ていたクライは呆れて溜め息を吐きながら、トゲパワワをソウゴの周りに出現させた。

「なっ……」

必死に振り払おうとするが、トゲパワワは振り払っても増え続け、ソウゴを取り込もうとする。

「うわああああ!!?!」

そしてついに、クライの生み出したトゲパワワはソウゴを飲み込んでしまった。

「ソウギョー！ソウギョー！ソウギョー！」

はぐたんが泣きながらも必死に飲み込まれたソウゴに声をかけて、戻ってきてと願う。

「安心して、何もしないよ」

それを横目にクライは、はぐたんを見て何もしないと答える。

「彼には、未来を見せてあげるんだよ。そして、彼は僕と一緒に永遠の幸せを作る」

トゲパワワに飲み込まれたソウゴは、暗闇の世界の中にいた。

(暗い……何も無い……)

飲み込まれた暗闇の中を、無気力に浮かんでいる。

何者かが身体を掴んで引きずり落とそうとしているかの様な、思わずそう思ってしまった位に深層へと引き込まれていく感覚があった。

「はあッ？？」

だが咄嗟に、暗闇から振り払うかのように水面へ浮上し、意識を取り戻す。

「はあ、はあ……(ハハ)はあ……」

額から流れた汗を拭くと、ソウゴがいた場所はどこかの教室だった。

「うちの学校の教室じゃない……」

辺りを見渡して教室の形が違うと感じたソウゴは、自分が知っている学園の教室でない事をすぐに理解した。

「どこなんだろ……ッ!?」

教室の中を歩きながら、ここがどの学校の教室なのかと考えていたその時、一つの机を目にしたが、彼はその光景に思わず自身の目を疑った。

「なんだよ……これ……」

その机には口では決して言い出せない、悪意に満ちた誹謗中傷の言葉が、見ているだけで目眩がするくらいに書かれていた。更にそこに、一人の女の子が寂しくポツンと立っていた。

その顔を見たソウゴは、彼女が誰なのかもすぐにわかった。

「もしかして、はな……」

立っていたのは、今までとは雰囲気は全く違うはなだった。

そしてこの机に書かれていた言葉は、全て彼女へ対しての言葉。

「どうして……うっ!?」

すると、またしてもソウゴの周りの景色が変わる。

「はあっ!」

今度はスケート場へと変わった。

そこでは表彰式が行われており、ソウゴは会場の客席の入り口にいた。
「うううう……」

だが熱狂に入っている会場とは対称的に、後ろからは泣いているような声が聞こえ、ソウゴは後ろを振り向いた。

「ほまれ……」

そこには、ベンチで一人涙しているほまれの姿があつた。

「輝木ほまれ。あれはもうダメだな」

「……何年も賞が取れないんじゃない」

「ジャンプ失敗続きな上に、演技からも印象が来ない」

「これは、もう引退だな」

困惑していたソウゴの耳に届いたものだけでも分かる、客席に居るマスコミ達のほまれに対する侮辱のような発言は、ほまれに精神的な苦痛を与えていた。

「ツッ……」

またしてもソウゴの周囲を取り巻いていた背景が変わり、今度は何処かのライブ会場のようにだ。

「……は……えみるちゃん！」

そこには、ライブステージで一人で座っているえみるがいた。

「……やっぱり、ルールがないとダメなのです……」

「えっ?」

だが彼女はギターを持っていた手を突然離すと、ルールがないとダメだと呟く。

「私一人では、みんなの心に……何も与えられないのです……」

「そんなこ——」

そう呟くえみるを見て、ソウゴは「そんな事ないよ」と言おうとするとその時、またしても周りの背景が変わった。

「また……」

野乃家のリビングへと移っていた光景には、ことりがノート型パソコンを開いて椅子に座っていた様子が映った。

「ことりちゃん……」

「なんで……私達ばかり……」

どうしたのかと思ったソウゴは声をかけようとするが、ことりが呟いた一言で声を掛けるべきかを憚れてしまった。

「あの時みたいに、みんなで一緒に笑っていられたら……」

みんな、永遠に幸せだったかな……」

永遠に幸せだったかなと、涙を流しながらことりが写真を見て呟く。

そして、『永遠』と言う単語を聞いたソウゴは、クライが自分に向けて言った言葉が脳裏によぎり、片手で頭を抑える。

『皆が永遠の時間、永遠の幸せを過ごす為には明日は必要ない』

『君は、王となり世界を良くしたいと言った……ならば、みんなが永遠なら世界は良くなるのではないかな?』

「違う! 違う……違う……」

自身の脳裏から聞こえるクライの言葉にも翻弄され始め、悲痛な声を漏らしながら、首を横に振り続ける。

「ソウゴ君……」

「っ!!」

顔を上げるとまたしても場所が変わっていた。

「クジゴジ堂……」

ここは、彼にとつて大切な場所であり、帰る場所でもあるクジゴジ堂の中だった。

「さあや……」

更に、目の前にはさあやが椅子に座っていた。

「ねえ、ソウゴ君は魔王になりたいんだよね……」

「それは……」

だが何時もと雰囲気の違い彼女に、ソウゴは思わず後ろへたじろく。

「じゃあ……なつてよ」

「ツッ?」

そう言われてまたしても意識が戻り、トゲパワワに飲み込まれる前の場所へ戻っていた。

「はあ、はあ、ハア……いい、今のは……」

「それが、彼女達の未来だよ」

未だにトゲパワワが泥の様に自身の体へ纏わり付いているのも気にせず、ソウゴはクライの方に視線を向ける。

「み、未来……」

「どんなに彼女達が戦っても、無意味な意味がわかったかい?」

「そ、それは……」

彼らがクライアス社と戦って未来を勝ち取ったとしても、その先には辛い未来が待っているのだとクライは語り、その事実には戸惑うソウゴへ「ようやく気付いたか」と問いかける。

「そんな……お、俺は……」

『助けてよ……ソウゴ……』

「ツ!？」

その時、ソウゴの目の前にはやつれた表情を浮かべるはなの姿が浮かび、くすんだガラス玉の様な目で見つめていた。

『どうして助けてくれないの……?』

どうして私の言葉を聞いてくれないの……?』

もう嫌だ。もう、生きるの疲れた……』

そう言うとはなは椅子を上り、天井から吊るされた縄を手に取り、輪っかに首を掛けようとする――

『サヨナラ』

「ツ!だ、ダメだよはなツツ!」

ソウゴは彼女が何をしようとしているのかを察し、直ぐに止めようとするが、その前に彼女は椅子を蹴り、そのまま首で縄のブランコを漕ぐことになった。

そして次の瞬間、体育座りをしたほまれの姿が映し出された。

しかし今の彼女の姿は、かつての様な華やかな姿ではなく、髪はボサボサに痛み、肌も荒れ果て、目も何処か宙を見ていた。

『やっぱり私はダメなんだ……何をやっても、上手くいかない……昔の様に、空も飛べない……』

あ あ あ あ あツツ

……助けて……ルルー……」

えみるが糸の切れたマリオネットの様に動かなくなると、ソウゴの後ろから、露出の多い服を着ている大人になったことりの姿が現れた。

『どうですか、ソウゴさん……？ みんな、無意味に未来を見続けたせいで、何もかも壊れてしまいました。私のお姉ちゃんも、首を吊つて自殺しました。そのせいで母は塞ぎ込み、父は仕事を辞めて母の介護をしています……』

もしソウゴさんがオーマジオウになっていれば、みんなそんな思いをせずすんだのに……』

「そ、そんな……俺は——」

『もういいです。貴方の戯言は聞き飽きました。それじゃあ私は、お金を稼ぎに行きます……この子の為にも……』

「ツッ! ま、待つてよことりちゃん!!」

お腹をさすり、虚ろな目をしたことりはソウゴに背を見せて立ち去ろうとネオンの街へ消えていき、ソウゴはそんな彼女を止めようと駆け出す。

すると目の前で一人の男性が倒れこみ、ソウゴは思わずそつちの方に視線をむけてしまふ。

「……………えっ……………ゲイツ?…ツク、ヨミ?」

其処に居たのは、血みどろになったゲイツであり、彼が大事そうに抱きかかえているのはツクヨミ——だったものと見えた。

「ちよつと……………なんかの冗談でしょゲイツ……………?何でそんなにボロボロなの……………?何でツクヨミ……………体が無いの……………?」

生首だけとなったツクヨミを見ながら、ソウゴはゲイツにそう問い質すが、ゲイツはそれに血反吐を吐いて返事をした。

「ツ!?大丈夫ゲイツ!す、直ぐに——」

『待て、ソウゴ……………ゴフツ……………聞いてくれ……………』

余りの光景に狼狽するソウゴにゲイツは片手で制止すると、残った力を振り絞って言葉を発する。

『ソウゴ……………お前は、オーマジオウになれ……………! 『時の王者』に……………!』

「……………えっ?」

ゲイツの口からオーマジオウになれと言われたソウゴは、目の前で死にかけているゲイツが、オーマジオウになるのを阻止する為に自分の居る時代に来たゲイツと早速同一人物とは思えない台詞に啞然とする。

『お前ならなれる……………最高最善の…魔王に……………』

「……違うでしょ、ゲイツ……」

そこは、『なるな』って言う所だろ……

俺に、オーマジオウになれって、言わないでくれよ……そうじゃないだろ……！

ゲイツ………やめてくれよ、もう、それ以上言わないでくれ……ッ！

『幸せだったぞ、この時代に来て……ソウゴ……お前の仲間に……友になれて……』

その言葉を最後に、ゲイツは最期までソウゴがオーマジオウになったとしても尚、最高最善の魔王になれると信じ、息絶えた。

「——違う！こんなのは、はな達じゃ無い!!」

ゲイツは、俺がオーマジオウになる事を望んでいない！

俺の友達は、こんなこと言わない！

みんなは、こんな事やらない！………しないんだ………ッ！

「だから言っただろ？これが現実なんだ」

「……違う………こんなの、絶対、何かの間違いだ……」

『ソウゴ君……』

「ッ！」

クライの言葉に頭を抱えながら否定していると、今度はさあやの声が聞こえ、背後を振り返る。

「……………え、あ」

だがそこにいた彼女の姿は全身が血で濡れており、手には血がべつとりと付いた包丁、彼女の下には一人の男性——自分自身が、胸から血を吹き出しながら事切れていた。『…………ソウゴ君が悪いんだよ…………私達から逃げるから、現実から逃げるから、こうなるんだよ…………』

「…………あ、う…………」

『待つててねソウゴ君…………私も、今そつちに行くから』

言葉を失い、足を震わせ、只そこに立っただけしか出来ないソウゴを更に追い詰めるように、さあやは光を宿していない目でそう言っつて、手に持った包丁を胸に当てる。

『ソウゴ君…………』

そして最期に自身の名前を呟くと、彼女は胸に包丁を突き刺し、目から一滴の涙を出して、その場を更に血で濡らしながら倒れこむ。

その光景にソウゴは膝から崩れ落ち、静かに涙を流した。

「…………だが一つだけ、そんな未来を迎えられずに済む方法がある」

そんな彼の姿を見ていたクライが先程ソウゴが見た未来の幻影と、今も自身の頭の中で蝕む幻覚を見なくて済む方法があると提案する。

「僕と一緒に…………みんなに永遠の時間を与えるんだよ」

そう言うとは彼はソウゴに手を差し伸べ、一緒に永遠の時間を与えようと持ちかける。
「……………俺は……………」

その時、ソウゴの体に纏わりついていた泥と一緒に身体から紫の粒子……………トゲパワワが溢れ出し、彼の腰に装着しているジクウドライバーからは何やら赤黒い電流のようなものが流れ出そうとする。

「さあ、共に——！」

「俺は……………俺はあああああああ——————ッ！」

彼が後4つ程歳があり、精神が成熟していたのならば、クライの提案を折っていたかもしれないが、絶望しか感じられぬ光景を見続けたせいで精神的に衰弱していた。

更に彼は元々、某王道少年漫画の主人公の様にバツサリと拒否出来るほど熱血漢でなければ、某クソなろう小説の主人公の様に毒を吐く位に捻くれを拗らせていなかった。

よって、ただ単純にみんなの幸せを願う、未熟な“普通の中学生”であるソウゴは苦悩の叫び声を挙げながら、頭を抑える。

ソウゴから流れるトゲパワワと共に、ジクウドライバーから強烈な光が放たれた。

クライに連れ去られたソウゴとはぐたんを助けるべく、クライアス社本社へ向かおう

とする一同だったが、ビシンとリストルがエール達の前へと現れた。

「凄いでしょ！社長も考えたよね！今時を止めて仕舞えば、未来もなくなる！アツハツハツハツハツハ！」

クライアス社の勝利とビシンは高々と笑う。しかし…

「ソウゴ……はぐたん……みんなの未来を……取り戻さない」と！

エールが立ち上がって二人を救うと叫び、その事にアンジュ達も頷き、まだ諦めていない顔で前を向いた。

「んな、ポロポロの体じゃ……何も出来ない！」

ビシンのギアフアングフォームのフアングクローがエールに向けて放たれた。

「うっ！！？」

間一髪、エトワールがエールの前に出てビシンの攻撃からエールを守った。

「またお前か！」

「ビシン！」

『バロン！』

バロンのライドウオッチを起動したゲイツはソニックアローを召喚、ビシンへと構えエネルギーの矢を放ち、ビシンを放す。

「お前もしつこいんだよ！負け犬！」

今度はゲイツを標的とし、ゲイツとビシンの戦闘が開始された。

ゲイツはソニックアローを放ちながらビシンを狙うが、ビシンはファングクロウを盾とし接近、ゲイツに攻撃を繰り返す。

「くうー！」

ゲイツはビシンの攻撃を避けるが、ギアファングの力だけで無く、今までにない程に本気を出しているビシンの力が傷を多く刻み、ゲイツを苦戦させていた。

「ゲイツ！うわあー！」

「お姉ちゃんー！」

ツクヨミはゲイツに気を取られてしまい、エネルギー弾を不意打ちを受けてしまった。放ったのはリストルだった。

「お前達の前向きな心は危険だ！」

「させません！」

リストルがこちらへ攻めてきたマシエリとアムールがツインラブギターで応戦する。

しかしリストルはジカンロッドを回し、ツインラブギターから放たれたエネルギー弾を跳ね返す。

『フィニッシュタイム！タイムインパクト！』

「せあああああ！」

ジカンロッドによって放たれたタイムインパクトにより、マシエリとアムールを吹き飛ばした。

「はああ!」

今度は、アンジュがリストールに挑む。しかし、リストールに繰り出した攻撃はことごとく受け流される。

「ヤアアア!」

今度はツクヨミが光の刃でアンジュに加勢すると、リストールはジカンロッドで応戦、両者は鏖迫り合いとなる。

「マシエリ!アムール!」

倒れた二人をアールが介抱し、起き上がるのを手伝う。

「リストールの戦闘力が上がっています」

「今までは、手加減していたという事ですか?」

「しかし、あの二人をなんとかしなければ……」

ウオズが攻略の糸口を模索していたその時、突如として赤黒い光の柱が発生した。

「リストール!」

その光を発生させていたのはリストールだった。

「俺はもう考えない。全ての苦しみから解放された存在……発注!猛オシマイダー!」

彼はジカンロッドを振り回してトゲパワワから生成された魔法陣を作り、その中から猛オシマイダーを呼び出した。

そして、さらに小さいな魔法陣のようなものを大量に作り出し、そこから小型ではあるが大量のオシマイダーを生み出した。

「なんて数……」

「行け！ 猛オシマイダー！」

『猛！ オシマイダー！』

リストルの命により大量のオシマイダーは一斉に襲い掛かってきた。

「フレ！ フレ！ ハート・フェザー！」

アンジュがハートフェザーを発動させ、そのバリアによりオシマイダー達の進行を食い止めようする。

「……!?」

しかし、大量の数のオシマイダーの押し寄せにハートフェザーは破壊されてしまった。

「俺はもう悩まない。明日の希望など……いらない」

最初に生み出したオシマイダーの肩に乗ってそう呟く彼は、この戦いはクライアス社の勝利で終わったのだと確信した。

「おしまいじゃないわ!」

だがその時、いきなり発生した突風がオシマイダー達を上空へと吹き飛ばし、エール達全員のピンチを救った。

「まだまだこれから!フウ〜!」

「パップルさん!」

彼女らの前に現れたのは、パップル、チャラリート、ダイガンの三人だった。

「助太刀いたすつて奴です」

「ありがとうございます」

「礼を言うのは、私達の方だ。君達プリキュアが、私達に再び夢をくれた。私が出れば五分で終わる!」

「……一度失敗した人間に、何が出来る」

リストルはたった三人。しかも、会社に利益を残せなかった役立たずの裏切者達に何が出来るとかと思うかのような口ぶりで、オシマイダー達に襲わせる。

「二人ともお仕事の時間よ!」

パップルが扇子を地面に向けて、地表からエネルギーを放出し、オシマイダー達を吹き飛ばすとチャラリートとダイガンは分かれてオシマイダーに応戦する。

「どおりやあ!」

ダイガンがオシマイダー達を投げ飛ばす。だがそこへ、更に数を増やして攻めてきた。

「はああー！」

そこへウオズが参戦し、ギンガファイナリーの重力操作でオシマイダーの動きを止めた。

「五分で終わらせるのではなかったのかい？」

「うるさい！まだ五分経ってないぞ！」

「ふん。では五分では終わるよう、私が手を貸そう」

ウオズはダイガンのサポートしながら、オシマイダーを倒して行く。

その近くでパップルの元へビシンが現れ、彼女にフアングクローを喰らわせようとする。

「させるか！」

生身ではパップルが危険と察知したゲイツが腕で防ぎ、彼女を救う。

「ビシンは、俺に任せろ！お前らはオシマイダーを！」

「そうね。流星にライダーにはライダーよね。お願いするわ」

「お前……」

『アクセル！』

エッジブレードを召喚したゲイツはそれを手に持ってピシンに攻撃し、彼を自分から離す。

さらに上空では、エトワールが出現させた星型のエネルギー体にツクヨミと共に乗り込んで、飛んでいるオシマイダーに向かって飛来する。

「ツクヨミ！」

「はあく……はああ！」

エトワールが乗っていた星とツクヨミが乗っていた星。その二つがツクヨミの手に収まると、さらに大きな星となつて放たれた。それにより多くのオシマイダーが消滅して行く。

取りこぼしはアンジュが放った光のロープにより拘束され、地上へ落とされる。

「「ふっ……」」

マシエリとアムールのツインラブギターとアアラのリコーダーステッキを使った攻撃により、巨大なハートマークが作られ、海沿いに並んでいるオシマイダーを浄化させた。

「ヤアアア！」

エールはチャラリートの背後を襲おうとしたオシマイダーを吹き飛ばし、彼を援護していた。

「サンキューー！ちゃんはこのフレフレとソウゴツチが俺に言ってくれた言葉は、オレちゃんの心に残ってる……！」

かつてオシマイダーへと変貌させられたその時、二人にかけてもらった言葉を今も胸に刻みながら、エールに向かって先程援護してもらったのも加えてお礼の言葉を叫ぶ。

「それにオレちゃんには、25人の登録者がついてるんだからなー！」

チャラリートはエールと共にオシマイダーへと突撃していく。

「何度も膝をつけて立ち上がるわ！大人だって、なんでもなれるんだからー！」

「……ふっ」

そんな彼らの姿を見ていたゲイツは、嘗ては未来を止めようとしていたこいつらもエール達の言葉で前を向く力を手にし、あの時ソウゴが言っていたように人は変われるのだと言う言葉が、嘘偽りのない事実なのだ感じていた。

「だっさー！いい年した大人が何か夢見てんだよー！」

ビシンが再び挑もうと向かってくるのをゲイツが見て構えると、いきなり二人の間にかが轟音と共に落ちてきた。

「あれれ、知らないの？大人も夢を見るんだよ」

「ドクタートラウム……」

仮面の下で眉間に皺を作っているビシンの前に現れたのは、ドクタートラウムが用意

した戦闘ロボットであった。

「呼ばれてないけどジャジャジャーン！みんなのドクタートラウム登場！あと、来ているのは私だけじゃないよ！」

更に、トラウムのロボットの背後から二台のタイムマジンが現れた。

「あれって……」

「ソウゴとゲイツのタイムマジン！誰が操縦しているの？」

現れた二台のタイムマジンが戦闘モードへと変わり、オシマイダーへと向かっていく様子を見ていたツクヨミは、いったい誰が操作しているのだと疑問視していると……

「はぁ〜い！無事？ツクヨミ！アール！」

「オール！」

ゲイツのタイムマジンから聞こえた声を聞き、タイムマジンを操縦しているのがオールである事に気付いた。そして、ソウゴのタイムマジンを操縦しているのは……「これで！昨日の手伝いはチャラだね！」

「ウール！」

声を聞いたアールは、ウールがソウゴのタイムマジンを操縦していた事に驚いていた。二人はタイムマジンで次々とオシマイダーを倒し、みんなを有利な状況へと導こう

と挑む。

「タイムジャツカーチーム……お前らも……」

ビシンが不機嫌そうに呟くと、トラウムの乗るロボットから通信が入った。

「やめて下さい。恥ずかしい」

案の定、先程の口上にアムールは不満があったようで、やめてほしいと父に向かって通信をした。

「あ〜ん！ルールーちゃん！……ここは褒めて褒めて〜！」

あの口上からしてアムールに褒めて貰いたかったようで、トラウムは彼女に褒めて欲しいとややおふぎけ気味に志願してきた。

「ドクター……」

「……久しぶりだね。ビシン」

「ふぎけるなアアローツ！」

ビシンはオシマイダーの方に乗り込むと、オシマイダーでトラウムのロボットに攻撃し、腕を動かして受け止める。

「なんで、今更あんたが明日を夢見るんだよ！」

「愛に気づいたからだ」

そう語るトラウムが乗るロボットのコクピットには、今と比べると若く見える彼自身

と金髪の少女——今は亡き娘との写真、その隣にこの間ルーラーと撮った写真が貼られていた。

「そんなもの幻想だ！」

「そうだ。だからこそ、信じなければ愛は見えない！」

「愛……」

トラウムが愛と叫んだその時、リストルは自分の胸に手を当てた。

「二度、闇を知った人間が愛……意味わかんないんだよ！」

ビシンが猛オシマイダーがトラウムの乗るロボットを破壊しようとするがしかし、トラウムはオシマイダーを抱きしめ自爆させた。

トラウムは自爆の瞬間に何とか脱出し、危機を察したアムールが彼を助けた。

「くっ……い！」

我に返ったリストルは胸から手を離すと、ジカンロッドからエネルギーの弾をウールとオーラの乗るタイムマジーンに目掛けて放った。

「うわああああ!?!」

直撃してタイムマジーンを打ち落とされてしまった二人は、不時着する為に地上へと降りる。

「ウール！」

「オーラ！」

二人が不時着したタイムマジーンに駆け寄る。

「みんな！」

一度全員が1ヶ所に固まって集まる。

「彼らの戦闘力はあなた達を遥かに上回っています」

「素晴らしい分析だルーラー」

「けど、だからこそ立ち向かうのだ」

アムールは言外に「此処は危険だから早く逃げてください」と警告するが、トラウム達は今の自分たちがクライアス社はおろか、エール達より力が劣っているのを知りながらも、ここにいるプリキュア、仮面ライダーと共に立ち向かう覚悟を決めていた。

「最後になるかもしれないからこれだけは言っておこう。ダイガン……お前には本当に申し訳なかった」

これから起こる最悪の展開を想像したトラウムはダイガンに、オーマの日に背後から攻撃した事を謝罪した。

「ああ……あれは流石に堪えたぞ」

それに対してダイガンはかなり痛かったと文句を言うが、逆に文句を言うだけで済んでいるあたり、彼はあの時の事を気にしている様子は無かった。

「消えろー!」

ビシンは自身の手から作られた赤黒いエネルギー玉をエール達に向けて放つが、トラウムは腕に装着された機械を前に出してバリアを作り受け止めようとする。

「だが、同じ志を持つあなたを、私は受け入れる」

ダイガンも共に前に出てトラウムと受け止めようとする。しかし、一緒なのはダイガンだけではない。

「私も今まで沢山、酷いことを時間をめちやくちやしてきた」

「タイムジャッカーとして、罪はこれから償っていく!」

「そうだ。生きてさえいれば!」

「何度だって、やり直せる!」

「っ!?」

それはクライアス社——いや、元クライアス社の社員達だった彼らがエネルギー弾を必死に受け止めようと、今まで自分達が犯して来た罪を償う為、自身の欲の為に時を止めようとしていた自分達を変えてくれたエール達を守ろうと全力で受け止めようとした彼らは、ビシンの放ったエネルギーを相殺させた。

「ウール! オーラさん!」

アーラが膝をついたトラウム達に駆け寄り、ウールとオーラに駆け寄る。

「だ、大丈夫……こんなの、僕達やってきたことに比べたら……」
アーラに支えられながらウールが起き上がると、オーラが顔を下に向けながら口を開く。

「ウール……最後かもしれないから、一度だけ言うわ……ごめん」

あの時、追い詰められていたとはいえ、自身の保身の為に……自分達を捨てたスウォールツに仕返しをする為に、嘗ての力を取り戻そうとウールに手をかけてしまった事を謝る。

「もういいよ……」

しかしウールはあの時同時に、力を失って改めて知った。

本当の力は、人を支配する為にあるんじゃない。

確かに人が生きる上で力は必要かもしれないが、他者をねじ伏せるだけの力は、本当の力とは言わない。

本当の力というのは、自分が『本当に守りたい物』を守る為に使われる、ちつぽけな手段のひとつに過ぎないのだと、その事をエール達から教わった。

「強がるな」

「結局！弱い奴が群れたって、弱いままなんだ！」

リストルとビシンは二人同時にトラウム達に飛びかかり、パンチを繰り返す。

〈ドオンー!〉

「ッ!?」

「ハリー!」

するとなんと、ハリーが仮面ライダーから自ら変身解除し、生身でビシんとリストルの二人の攻撃を受け止めたのだ。

「ハリー……どうして……」

「あつ……」

「なんや、お前ら……こんな気合の入っていない拳……きかんで!」

ハリーが叫ぶと彼の覇気に押された二人は離れ、ハリーは人間の姿からネズミの妖精の姿になる。

「!?」

「危ないのです!」

「ハ、ハリー……」

エール達が心配しているのを他所に、ハリーは首に繋がれたチェーンに触り、同時にハリーライドウォッチを見つめる。

「約束……守れんですまん」

「っ!?」 ハリー……お前」

『ハリー！』

彼はジクウドライダーも装着しないまま、ハリーライドウオッチを起動し、首に繋がれたチエーンを解くと、ハリーの体に変貌を始めた。

「ぬうおおおお！」

「ハリーさん……これ」

「どうして……」

ハリーの姿は今までライドウオッチとチエーンにより封印されていたはずの、トゲパワワにより変貌した暴走した姿へと変身した。

「理解不能……何故」

「止めない……」

アンジュ達が止めようとするが、エトワールが腕を出してアンジュを止める。

「ビシン……リストール……もうやめようや……」

ハリーは暴走する力を抑えながら、リストールとビシンにやめようと伝える。

「俺の体はもう元に戻らへん。」

……けど、俺は自分を受け入れて未来へ行く……

リストール。もう自分を責めるのはやめよう」

リストールにもう自分を責めなくていいと、ハリーは懸命に告げる。

「やめろ……もう考えたくない……お前の言葉は聞きたくないッ！」

リストルはハリーからの言葉を拒絶し、ハリーの下へと飛び込み、彼の腹部に向けてパンチを放つ。

「俺は……俺は、もう心など……」

苦悩の呟きを吐き出すリストルを見たハリーは、受けた部位に痛みながらもリストルを抱きしめた。

「あんたは俺らの兄貴やろ！仲間が、家族が、心無くして苦しんでる時に……ほっとけるか！」

「仲間……」

仲間……

その言葉からリストルは、次々と脳に過ぎる、ハリー達と一緒に暮らしたハリハリ地区での生活を振り返る。

そして、リストルは自らウオッチを外し変身解除した。

「一緒なら、やり直せる。俺達の未来を作ろう！」

「うつつ……うわああああ」

変身解除したリストルの目から涙が溢れ、枯れた泉から再び水が湧き出すかの如く涙を流し始める。

それを見てハリーも自らブランクにしたウオッチを取って自身の力を再びウオッチに戻して元の姿へ戻ると、チャラリートにキヤッチされる。

「先のアント……カッコ良かったんじゃないの！」

「カッコええのはいつものことや……」

ゲイツ達がハリーを見てホツとした様子を見せる。しかし……

「そんなの全然……納得出来ないんだよ……」

ビシンが自らジクウドライバーを外し変身解除すると、リストルと同じように赤黒いエネルギーを纏う。そこから、強烈な突風が吹き荒れる。

「一体何が……」

どうなっているのだとマシエリが呟きかけると、そこからオシマイダーとなったビシンが現れた。

「リストルのウソつき……ずっと一緒にいてくれるって言ったじゃないか！」

ビシンは裏切ったリストルを手で強く掴み、そう叫びながら暴れ始める。

「未来なんか！大嫌いだ！ゴホッ！ゴホッ！」

「ビシン！」

「やめろ！」

だが身体に負担がかかっているのか、咳込み出したビシンを見てハリーとゲイツがや

めるように言うが、暴走している彼はそんな一言では止まらない。

「ハリー！負け犬！見ろよ！これが僕達が辿り着いた未来だ……未来を夢見るなんて間違ってたんだ！認めろよ！今なら許してやる！」

ビシンが暴走しながらも心の内から叫ぶが、ハリーは何も言わずじつとビシンを見つめる。

「何だよ……何なんだよ。その目は！」

……うわああああ！裏切者！命ごとくでもしてみろよ！」

何も言い返さずハリーの目に威圧されたビシンは我を忘れてリストルを握りつぶそうとし、自身の手の中で苦痛の表情を浮かべる彼に命乞いをしろと叫ぶ。

「……そんな事はしない」

しかし、リストルはビシンに命乞いはしないと答える。

「なんでだよ！」

「俺は、お前達を愛しているからだ！」

「嘘だ……嘘だ」

「不甲斐ない兄貴ですまなかつた……お前の寂しさに、俺は寄り添う事が出来なかつた。

ビシン……俺はお前の心を受け止める」

「ウウウ……ウウ……」

その謝罪と言葉を聞いて、今まで彼の中で溜まりに溜まっていた不安・孤独・哀しみ、それらを抑える為に作っていた心のダムが遂に決壊したのか、リストルを離して泣き崩れるビシンに、エトワールが優しく寄り添う。

「お前なんか……嫌いなんだよ！」

「私は、あんたのこと嫌いじゃないよ」

「泣くなビシン……いや、泣いていい……」

拒絶の言葉を投げ掛けられながらも、嫌いじゃないと語るエトワールと、今まで彼の寂しさを癒してやれなかった事を後悔しながらも、もう我慢しなくて良いと言って寄り添うリストルにより、ビシンは涙をしばらく流し続けた。

「……プリキュア」

「うん」

そんなビシンの姿を見て静かに、それでいて言葉には現れることのないハリーの願い……『ビシンの心を助けて欲しい』と言う願いを感じたエールは、その願いを優しく受け入れた。

「……メモリアルクロック！ マザーハート！ ……」

ミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「ミライパッド！オープン！」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「HUGっとプリキュア！今ここに！」

「ワン・フォー・オール！」

「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」

「プリ、キュア！」

「明日に！」

「エールを！」

マザーを召喚してメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集める。

「ゴー、ファイ！みんなでトウモロ！」

手を掲げ、マザーの力を解放して光線を放つ。みんなでトウモロを放つ。命中したオシマイダーとなったビシンはハートに包み込まれ、浄化されると、ビシンの姿へと

戻った。

それを静かに見届けたリストルが、海岸のクライアス社の本社を見つめる。

「未来が何かあるかわからない。距離が離れる時もあるかもしれない……」

「だが……俺達の心はいつも一緒や」

ハリーの言葉にエール達も頷く。

「離れても心は一つ」

「はい。私もです」

この先、一緒に居られない時だってあるし、いつ何時も助け合えるとも限らない、ひよっとしたら永遠に会う機会がなくなってしまう事もあるかもしれない。それでも、心はいつも一緒だと、きっとそれはソウゴとはぐたんも同じなのだ、皆は頭ではなく心で理解した。

「諸君、そろそろ……」

クライアス社ビルに向かおうとウオズが言いかけると、またしても大量のオシマイダーが現れた。

「また、オシマイダー！」

「しっ！い！」

「っ!?…待って！なんか、オシマイダー達が集まってるよ！」

ツクヨミとゲイツはそれを見て構えるが、アーラの言う通りオシマイダー達はそれぞれ集まり、何かに変化しようとしていた。

「あれは……」

オシマイダーがその姿から怪人の姿へと変貌していくと、ン・ガミオ・ゼダ、バッファローロード、タウルス・バリスタ、オルタナティブ、ドラゴンオルフェノク、アークオルフェノク、パラドキサアンデット、フォーティーン、牛鬼(魔化魍)、カッシスワーム、デスイマジン、バッドファンガイア、スーパードロガイスト、アルティメットD、テラードーパント、ガラ・怪物態、サジタリアス・ノヴァ、ワイズマン(ファントム)、グレムリン(ファントム)、フリーズロイミュード・超進化態、ZZZメガヘクスと、歴戦のライダー達が倒してきた怪人達へと姿を変えた。

「なんやー！ 一体！」

「社長だ……おそらく、マスタークライの力だ」

リストルはジョージ・クライがマスタークライの力により、オシマイダーをライダー怪人の姿と似せて変貌させたのだと推測すると、変貌したオシマイダー達は一齐にゲイツ達へ襲いかかる。

「くうー！ これは……」

「姿だけじゃなく、力も同じと言う事か……」

直ぐに前へ出て怪人達の攻撃を押しえたゲイツとウォズは、怪人達の力は本物と比較にならないほどに同じだという事実には気が付き、警戒を強める。

「リストル！ビシン！」

『ハリー！ギアハリテージ！』

『クラレット！』

『ギアフアング！』

ハリー達三人はウォッチから鳴り出した音声と共に、それをジクウドライバーのスコットに装填し、二人の周囲にはアーマーのようなものが浮かび上がると、それを見てドライバーを回す。

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！ハリテージタイム！導け！心に望む未来へ

！ハリーギアハリテージ！』

『ライダータイム！仮面ライダーリストル！クラレットタイム！唯我独尊！絶対の力を

！リストル・・・クラレット！』

『ライダータイム！仮面ライダービ・シン！フアングタイム！導け！完全なる力を我が

手に！ビシン！ギアフアング！』

ハリー、リストル、ビシンは再びライダーへと変身し、ゲイツ達と共に怪人と融合していないオシマイダーへ応戦する。

「ヤアアアア！」

「スターストラッシュユ！」

エール達はオシマイダーと怪人達へ攻撃を繰り出して浄化しながら倒していくが、その数は一向に減る事が無かった。

「っ!?？」

何かを察したゲイツが振り向くと、マシエリとアーラの背後に怪人達が襲いかかろうとしているのを目撃した。

「マシエリ！アラー！」

ゲイツが急いで走ってマシエリとアーラの元へ向かうと――

「あああ!?？」

二人の盾となる為、背中で受け止めた。

「ゲイツさん！」

「うっ……」

『ガタツク！』

ゲイツは直ぐにガタツクの武器・ガタツクダブルカリバーを召喚するとブーメランとして放ち、怪人を吹き飛ばした。

「ゲイツさん！」

「大丈夫ですか？」

「ああ……」

心配する二人に大丈夫だと答え、ゲイツが起き上がろうと力を入れる。

その時ゲイツは、自分の体から一瞬であるが、何か激痛のような感覚が走った。

「ゲイツ！」

バランスを崩したエトワールが寄り添う。

「どうかした？」

「いや、なんでもない！そんな事よりも早くソウゴとトウモローを助けに行くぞ！」

「ゲイツ……うん！」

ゲイツは自身の体に起こった違和感はみんなに黙っておき、大丈夫な素振りを見せる。

（なんだ……今のは……）

痛みは消えたが、ゲイツの体には違和感が未だに残っていた。

しかし、このまま振り回されながら戦っているのでは、いつまで経ってもクライアス社に連れ去られたソウゴとはぐたんを助けに行けない。

「猛オシマイダーは俺達がなんとかする！」

「私も残る！みんなは早く！」

「ソウゴとはぐたんを助けるんや!」

「早くあの人の元へ」

ツクヨミとハリー、リストル達がオシマイダーや怪人達をなんとかすると言うが、肝心のクライアス社への移動方法はというと……

「でも、クライアス社は海の向こうなのです」

「タイムマジンも巨大ロボも壊れてしまいましたし」

「はう!そこまで冷たい目が出るんだね!ルルルちゃんかちんかちんかちん」

「親子漫才やってる場合じゃないでしょ!」

「どうすれば……」

エトワールがトラウムに突っ込みながらも、アンジュ達は向こうまで行く手段がなく頭を悩ませる。

「No. Don't feel! 悩んでいる時間はないわよ!」

「攻撃なんて、関係ねえ!」

「お急ぎ下さい!」

そこへ、水上バイクに乗ってジェロス、タクミ、ジンジンが現れた。

そのままエール達は後ろに乗り、ゲイツ、ウオズ、アンジュ達はボートを取り付け引つ張って貰う。

「あんたが言っていた未来。きちんと見せてよ！」

ジェロスにそう言われたエールは首を縦に振る。

「うん。ソウゴとはぐたんを……私達の未来を取り戻す！」

『うん！』

「……」

「ゲイツ君……」

ウオズはゲイツから感じる違和感に一抹の不安を感じながらも、エール達はクライのいるクライアス社の向かう。

必ず、ソウゴとはぐたんを救出し、未来を取り戻す為に。

——遂に、クライとの決戦が始まる。

次回！ Re・HUGつとジオウ！

第65話 2019：二人の友情アーマータイム！

第65話 2019： 二人の友情アーマータイム！

——俺は、夢の中でその声を何度か聞いた。

だけど、俺が目覚めるとその声の内容を忘れてしまう。

——私は、いつも夢見ていたんだ。

しかし、それがどんな言葉だったのかは、今までずっと気にしたことなかった。

——しかし、今の私では決して叶えられぬ夢なんだ。

でも今日に限って、その言葉が俺の心を蝕んでいる様に感じた。

——だから私は、過去の私であるお前に、その夢を託すことにした。

——だけど、もうそんなの関係無い。

——若かりし日の私よ…私の夢は…

俺は、みんなの為に、みんなの未来の為に——

——私の夢は、誰もが自由に笑っていられる、平和な世界を作る事なんだ…

俺たちの未来を、破壊する。

リストルとビシンによる妨害を受け、クライアス社に進めなかったエール達。

しかし、トラウムら元クライアス社のみんなの協力と、ハリーによる説得のおかげでリストルとビシンは彼女らと共に戦ってくれる事となった。

そして、エール達はジェロスの水上バイクで遂に、クライアス社の入り口へ辿り着いた。

「あれが……」

「クライアス社の……」

「はい」

「諸君。ここからは覚悟が必要だ」

ウオズが不安そうな表情を浮かべるアーラとマシエリと、顔を硬ばらせるアムールを見て、覚悟はいいかと尋ねる。

「わかつてる！」

「クライアス社を止める！ここで、未来の俺達の戦いにもケリをつける！」

「そして、ソウゴとはぐたんの二人を助ける！」

それに対しエール達はクライアス社を見つめ、それぞれの覚悟を叫ぶ。

（待ってて、ソウゴ君！今行くから、はぐたんと無事で居て！）

「Are you OK？」

ジエロスが尋ねると、エール達は首を縦に振る。

エール達は水上バイクとボートから飛び上がり、クライアス社内部へ突入した。

『うわあああああ!』

内部に突入すると、エールは広い部屋へと到着した。

「イタタタ……ここは?」

「ここが、クライアス社の中?」

アンジュ達が部屋の中を見回すが、薄暗く何も無い空間だった。

「あつ!お姉ちゃん!みんな!」

アーラがみんなに声をかけると、彼女が指をさした方に魔法陣のようなエネルギー体を確認した。

「あれを潜れば、おそらくソウゴとはぐたんの元へ行けます」

「待つてください。畏の可能性もあります!」

「確かにアレもクライアス社の作ったもの、用心した方がいい」

「よろこそ。プリキュア諸君にゲイツ、ウオズ」

ウオズがマシエリの言葉に同意して警戒を強めると、そこへ聞き覚えのある声が聞こ

え、エール達は声の聞こえた方へ向けて振り向いた。

「よく、ここまで来たな」

『スウォルツ！』

出現していた魔法陣から現れたのは、ソウゴと門矢士によって倒されたスウォルツだった。

「クリスマス以来だな。アルピナはどうした？」

「ここには、いない！」

「そうか……なら、お前達を消した後で俺が葬ってやる」

スウォルツは懐からウォッチを取り出した。それは、クリスマスの時に破壊された筈のアナザーデイケイドのライドウォッチであった。

『デイケイド……！』

「デイケイドの力……何故だ！お前のウォッチはあの時、破壊された筈だ！」

「貴様の意見など求めん」

スウォルツは驚愕するゲイツにそう返しながら、今自分が持っているウォッチを不機嫌そうに見つめる。

このアナザーデイケイドウォッチが最初に破壊された時、デイケイドの力はクライの持つライドウォッチ『マスタークライウォッチ』に移った。

クライ曰くあのウォッチは、自身が今までに呼んだ怪人、ダークライダーがソウゴ達に倒された際に放出した力が、あのウォッチに集まって完成したものだと言っていた。

（奴が俺を利用していたのは……全く持って許せん！）

クライアス社を利用していたのを逆に利用されていたのだと忌々しく思い返すと、起動させたウォッチをそのまま自らの体内に埋め込んだ。

『ディケイド……！』

クライによつて再び創造されたアナザーウォッチを使ったスウォルツは、アナザーディケイドへと変身した。

「アナザーディケイド……」

アナザーディケイドへ変身したスウォルツに驚き、エール達は構える。しかし、アナザーディケイドは動こうとせず、自分の掌を見つめる。

（やはり、ディケイドの力とアルピナから奪った力は社長の手か……まあいい。奴も後で始末すればいい。あの力を手に入れてな……）

今、クライが持っているマスタークライの力が、色んな果実を掻き集めて作られた『お手製の上級ミックスジュース』だとして、元々あったアナザーディケイドの力が『最高級品の特産オレンジ』だとする。

だが、今のアナザーディケイドは『果汁を搾り出して絞りカスしか残っていないオレ

ンジだったモノ』といったお粗末なものである。

アナザーディケイドへと変身したスウォルトは今のアナザーディケイドに今までのような力が使えないと知ると、内心でクライの始末とあの力を狙おうと企む。

「見せよう。俺の新たな力を」

今のアナザーディケイドは元々あつた力の絞りカスでしかない、ならばその絞りカスを上等なモノにするにはどうするべきか？

答えは簡単。その絞りカスに一手間を加えて一流の料理にすれば良いだけだ。

そう思い立ったアナザーディケイドは、懐から小瓶のようなものを取り出した。

「!? それは……」

「トゲパワワか……」

アムールやウオズ達は、その小瓶によって集められたトゲパワワを見て、警戒を更に強めた。するとアナザーディケイドは、それを自らの体に振り掛けるかのように浴びせた。

「うっ……うおおお！これだ！この力だ！」

アナザーディケイドはトゲパワワを自ら振りかけると体の姿が次々と変化していく。

マゼンタカラーだった全体が黒く塗り代わり、顔と体のプレートがさらに前へと進み、瞳は紫へ変わった。

「アツハツハツハツハー！これが、俺の求めていたオシマイライダーの究極の姿！『オシマイクラッシャー』だッ！」

トゲパワワを取り込んだ事により、今までのスウォルトツの持つ自尊心の心がより強くなったのを感じる。

「究極の姿……ふざけないで！」

「何……？」

「その姿は、門矢士さんから力を奪ったからじゃない！」

あなたが自分で強くなった力は一つもない！

それだけじゃない！ツクヨミお姉ちゃんが後継者だからって家族や力を奪った！あなたはまだの泥棒よ！」

それを黙って聞いていたアーラは、さも自分の力だと語るオシマイクラッシャーに「あなたはただの泥棒」だと叫ぶ。

「泥棒……貴様の意見は求めん！」

彼女の言葉で癪に触ったオシマイクラッシャーは手を上げ、波動のようなものをアールに向け放つ。

『ナイト！』

ゲイツはナイトの契約モンスター『ダークウイング』を召喚し、ダークウイングが音

波を放ちオシマイアナザーの攻撃をかき消した。

「ゲイツさん」

「ここは俺がなんとかする」

ゲイツがここで一人残り、エール達に行けと告げる。

「ゲイツ君……」

「奴との決着は俺が付けたいんだ」

そう言つて、オシマイクラツシャーになったスウォルツをきつく見据える。

これまで起こった悲劇の全てが、ソウゴヤツクヨミ、そして多くの人達が過ごす筈だった人生を、目の前にいるこの男の身勝手な計画の為に弄ばれたのだ。

彼は、それを許せなかった。

「君一人でいい格好はさせないよ」

「ウオズさん！」

するとウオズもゲイツと共にここに残り、オシマイクラツシャーと戦うと宣言する。

「あの男が、我が魔王を弄んだのなら、家臣のトップである私が奴に制裁を与える必要がある」

「ウオズ……お前」

「それに、君とは未来で一時は道を違えたとはいえ、ここまで共に戦った仲間だからね」

「ふん。一つだけ言っておくぞ……俺はソウゴの家臣じゃない……友達だ!」

「ゲイツ君らしい、台詞だね」

ゲイツらしいとウオズが言うのと、オシマイクラッシャーがゲイツ達に近づく。

「話は終わったか」

「ああ! スウォルツ! お前を倒すのは俺達仮面ライダーだ!」

ゲイツがオシマイクラッシャーに、自分とウオズの二人でお前を倒すと宣言する。

「[[ゲイツ (君)]]」

「[[ウオズ (さん)]]」

「エール君! アンジュ君! エトワール君! マシエリ君! アムール君! アーラ君!」

「ソウゴとトウモロの下へは、お前達プリキュアが行け!」

『はい!』

二人の喝を聞いた6人は一斉に走り出し、遠回りである魔法陣の中へと飛び込む。

エール達が飛び込むと姿が消え、ソウゴとはぐたんの下へ飛んだようだ。

「さって、行こうか? ゲイツ君!」

「……ああ!」

「待て、貴様らの相手は俺だけではない!」

そう言つて二人を静止したオシマイクラッシャーが指を鳴らすと、ゲイツとウオズの

周りから五つの黒い光の柱が現れた。

「これは……」

「……まさか、この姿は……」

光が消えると、そこから現れたのは五人のプリキュアであった。だが、外見がフリル付きの長袖の服とタイツで構成された黒いコスチュームとなっているその姿は、かつて共に戦ったスマイルプリキュアの五人と瓜二つだった。

「バットエンドプリキュア」

「バットエンド……」

「プリキュア……」

突如として現れたプリキュアを、バットエンドプリキュアとオシマイクラッシュヤーは名乗り、それを見たウオズは皮肉げに笑う。

「バットエンド……終わりのプリキュア。クライアス社らしいプリキュアだね」

「だが、俺達は負けない！」

「そうだね。ゲイツ君」

ゲイツとウオズはバットエンドプリキュアが現れても動じずに構えると、オシマイクラッシュヤーはそんな二人を鼻で笑いながら、配下として呼び出した小娘五人に命ずるべく腕を前へ向ける。

「さあ、やれー!」

「はあああああ!」

二人は共に走り出し、オシマイクラッシュヤーとバットエンドプリキュアの五人に向かって走って行く。

海岸へ残ったツクヨミにハリー達は。マスタークライの能力により猛オシマイダーを結集させ変化させた、かつて仮面ライダー達によって倒れされた怪人、オシマイダーを抑えようと必死に戦っていた。

「オリヤヤヤヤヤ!」

空中ではハリーがギアヘリテージでジカンチエーンソードを振り、オシマイダーへ斬撃を飛ばして次々と浄化しながら倒していく。

「っ!? うわあ!」

だがそんな中ハリーは、それぞれコウロギとバッタをモチーフとした姿をした黒の擬似ライダーと灰色の怪人オーオルタナティブ、アークオルフェノクにより打ち落とされ、地面へ着地する。

「ハリー!」

ツクヨミがハリーに駆け寄ろうとすると今度は、スーパーアポロガイスト、アルティメットDが二人に向けて砲撃を放つ。

「はああー！」

ツクヨミは時間停止で砲撃を止め、ハリーを抱き抱えながら直ぐに回避を行った。

「強い上にこの数……」

オシマイダーだけでなく、一人一人の強さが高い怪人達が無数にいるこの戦況は、かなり状況が酷いとしか言いようが無い。

「タアアー！」

「うおおー！」

『クラレットタイムインパクト！』

『フアングタイムデストロイ！』

その一方で、怪人達へと技を繰り出し続けるビシンとリストルだったが、そこへカブトガニの様な姿をした紫色の怪人、カッシスワームが彼らの前に現れ、二人の技を受けた。

「タイムインパクト！タイムデストロイ！」

するとカッシスワームは二人の技を吸収し、彼らが放った技を真似た技を返し、リストルとビシンを吹き飛ばす。

「ビシシー！リストルー！」

四人の仮面ライダーとトラウムら元クライアス社が奮闘するも、この数はやはり限界がある。

それに加え、ツクヨミとハリーに関しては戦い続き、体力の限界が近づいていた。

そこへ、疲弊しているトラウムやパプルたちにフォーティーン、牛鬼、フリーズロイミュード超進化態、ZZZメガヘクスが襲いかかる。

「!?？」

ツクヨミが時間を止めようにも、距離が開きすぎてもう間に合わない。

トラウム達ももうダメだと思ったその時、一瞬にして鋭い斬撃のようなものがトラウム達を囲むように現れた。

『オシマイダ〜！』

それにより周りのオシマイダーや怪人が一気に爆散し、全て浄化された。

「な、なんや……」

「一体何が……」

一瞬の事で何が起こったのかを理解出来ず、混乱する。

するとトラウム達の前に誰かが現れた。

「お前……」

「君は……」

クライアス社の内部、ゲイツとウオズは：

『ブレイブ！マツハ！』

ブレイブのガツシャコンソードとマツハのゼンリンシユーターを召喚し、それを手に持ったゲイツがオシマイクラツシャー達へと挑んでいた。

「ふうー！」

するとバッドマーチはマーチシユートのような黒いエネルギーの弾を形成し、ゲイツに向けて蹴り放たれた。

「たあー！」

ゲイツはゼンリンシユーターでそれを撃ち落とす。そこへ、バッドビューティーが氷の剣でゲイツに突撃。

「くうー！」

「はああー！」

咄嗟にゲイツはガツシャコンソードを構え、攻撃を受け流す。

『コ・チーン！』

Aボタンで操作でガッシュヤコンソードのモードを変えると氷の礫を飛ばし、バッドビューティーを自分から離れた。

(あつ……………また……………)

その時、またしてもゲイツの体にあの痛みが走る。

「ぬうおおおお！」

「なっ！」

痛みを気を取られて油断してしまったゲイツは武器を盾として防ぐも、オシマイクラッシュヤーの凄まじい攻撃によって武器をその手から飛ばされてしまう。

一方で、ウオズはバッドハッピー、サニー、ピースの三人に応戦していた。

「アツハツハ！あなた達を倒せば私はウルトラハッピー！」

バッドハッピーがウオズに攻撃し、ウオズはバッドハッピーの攻撃を躲し続ける。

「流石に、手強いね。なら……………」

ウオズはドライバーからギンガミライドウオッチを外すと、ウオッチのダイヤルを回す。

『タイヨウ！』

ギンガミライドウオッチの顔が変わり、再びウオッチをドライバーに装填して、レバーを引く。

『ファイナリータイム！灼熱バーニング！激熱ファイティング！ハイヨー！タイヨウ！ギンガタイヨウ！』

ウオズの複眼が炎の様な赤色へ、額のクレストが太陽のマークと変わったギンガタイヨウフォームへと変わる。

「そおらああああ！アンタを焼き尽くすでえ！」

タイヨウフォームへと変わったウオズに向け、バッドサニーが足からジェット状の炎を出して突撃する。

『ファイナリービヨンド ザ タイム！バーニングサンエクスプロージョン！』

ウオズは反撃の為に、三つの太陽のエネルギーで作り出したエネルギー弾を飛ばし、突撃したバッドサニーと後ろにいるバッドハッピー、バッドピースへと放ち見事に直撃した。

「どんな攻撃も、太陽のエネルギーには及ばない」

ウオズがそう言って、元のギンガファイナリーへと戻ると、攻撃を受けたバッドピースが泣き始める。

「ううう……痛い……痛いよ」

泣き始めたバッドピースを見てウオズが近づく。

「はい。お返し！」

バッドピースがウオズに向けて電撃を放った。しかしウオズは盾を作り、放った電撃を流した。

「……少し、演劇が下手くそだったね」

「あら、そんな事言うのひどい……はあ！」

またしても電撃をウオズへと放つが、次は躲した。

「これ以上は、君達の相手をしてる場合ではないのだけどね」

ウオズは早々に決着をつけようと思う一方……

「はあ、はあ……」

バッドマーチ、バッドビューティー、オシマイクラッシャーの三人を同時に相手をしているゲイツの息が乱れ始める。

「アツハツハ！ 明導ゲイツ！ もう終わりか？」

「くう……なめるな！」

『ジカンザックス！ You！ Me！』

ゲイツはジカンザックスを召喚し、ウオッチを取り出す。

『フィンニツシユタイム！』

ゲイツはジカンザックスにクローズライドウオッチを装填し、ジカンザックスの弦を弾きエネルギーを蓄積し、オシマイクラッシャーへ構える。

『クローズ！ギワギワシユ——』

——ピキツ——

「あつ……」

ジカンザックスを放とうとしたその時、ゲイツが弓の弦を咄嗟に手から離し、膝を折つて手で背中を抑えた。

「バッドエンドシユート！」

「バッドエンドブリザード！」

「っ!?……しまった！」

その隙を好機と判断したバッドマーチとバッドビューティーの二人が放った攻撃をゲイツは躲す事が出来ず、腕を出して防ぎ続ける。

「はああー！」

オシマイクラッシャーは防御の構えで動けないゲイツに攻撃。ゲイツは反撃を出来ず攻撃を受け続ける。そして、最後にオシマイクラッシャーが動けなくなつたゲイツを蹴り飛ばした。

「ゲイツ君！」

「アツハツハ……明導ゲイツ！どうした！」

倒れたゲイツはオシマイアナザーに受けた部位よりも、背中から走る激痛がゲイツを

苦しめていた。

「くっ……（どうして……っ!? あの時か……）」

確かあの時、怪人達からマシエリとアールを守る為に、背中で攻撃を受け止めた。

その時に背骨にヒビが入り、更に脊髄に損傷が生じた事で、背中を痛めたのだとゲイツは察した。

これは未来でクライアス社の戦いにて発生した怪我人の応急処置などをする為に医学の本を読み漁った時に知った事だが、確か人の背中には、身体を動かすのに重要な神経が通っていた筈。それを打撲などの衝撃で神経が損傷されると、呼吸障害や手足の麻痺が残ると書いてあった。

「……くっ……」

ゲイツは背骨が骨折していない事を願いながら、なんとか背中を抑えて起き上がった。

しかし、片手で背中を抑えている為にバランスが取れず、加えて痛みで体に力が入らずフラフラの状態だった。

「はあ、はあ……」

『スペクター!』

スペクターのウォッチを触って『ガンガンハンド』を召喚し、掴み取り構えようとす

る。

「あああ！」

またしても背中から痛みがぶり返し、それにより構えることが出来なかった。

「ふん。そうか……はあ！」

ゲイツの異変を察したオシマイクラツシャーは飛び上がり、デイケイドの必殺キック『デイメンションキック』を模した黒いエネルギーを纏ったライダーキックを放ち、ゲイツを吹き飛ばした。

「あ……あああ……」

飛ばされて倒れたゲイツは強制変身解除となり、ゲイツは背中を抑えながら立ち上ろうとするも、背中から走る激痛に起き上がることが出来なかった。

「背中を痛めたようだな……そんな、体で俺に挑もうとなあ」

「くう……くそ……」

「さって……そろそろ仕上げと行こうとするか……」

オシマイクラツシャーが手からトゲパワワを纏ったエネルギー光弾を作り放とうとする。

「く、くそおお……」

今のゲイツには避けようにも、痛みで動く事すら困難。この攻撃が避けられるはずはな

い。

「消えろ！明導ゲイツ！」

ゲイツに向けて、トゲパワワに纏われたエネルギーの玉が放たれた。

「ゲイツ君！」

エネルギーの玉が放たれたその時、ゲイツは目を瞑り、数々の後悔が走馬灯の様に脳裏を過った。

(なんで……いつも……)

——その時に彼の頭に浮かんだ顔は、トウモローとソウゴだった。

彼女はこの時代と未来で一緒に戦っていた仲間達で、彼はこの時代で出会い友達となった男。

だがいつも、自分が無力だったから助けてあげられなかった。

それに後悔ばかりする自分も又、許せなかった。

「くそ！俺は……またかよ！」

無力な自分を戒める様に地面に何度も手を打ちつけ、エネルギー玉が放たれ直撃しそうになるとゲイツは目を瞑った。

「うっうっ……!?」

しかし、ゲイツには当たらなかった。

——いや、エネルギーの玉を、誰かが受け止めようとしていた。

「ウオズ……」

上を見上げると目の前にウオズが立っていた。

「はあああああ！」

何とウオズは、全力でゲイツを守ろうとしていたのだ。

『ファイナリービヨンド　ザ　タイム！超ギンガエクスプロージョン！』

「うおおおおお！」

ゲイツはギンガファイナリーの力でエネルギーの盾を作り出し、オシマイクラッシュャーの放ったエネルギーの玉をゲイツの代わりに受け止めようとする。

「くう……あああああ！」

ウオズは叫びを上げて力を振り絞り、エネルギーの玉を相殺させ爆散すると、エネルギーの塊は周囲に飛び散った。

その影響で飛び散ったエネルギーがバットエンドプリキュアに向けられ、その全てが彼女らに直撃し、全員が浄化された。

「ウオズ……なんで……」

それを見たゲイツは、いつも自分といがみ合っていたあのウオズが何故、あんなに必死になって自分を助けてくれたのかわからなかった。

「ゲイ……ツ……君……」

するとウオズがゲイツの名を呟き、ゲイツの前で強制変身解除となって倒れた。

「ウオズ……ウオズ……!!？」

ウオズの名を強く叫ぶが、彼に反応がなかった。

「……ふざけるな……起きろよ……ウオズ……おい！」

「うっ……ううう……」

「ウオズ！」

幸運にも、彼が張ったエネルギー盾によって威力を殺してダメージを最小限に抑えた為、ウオズは何とか意識を取り戻し、ゲイツはすぐに駆け寄る。

「ウオズ！お前……」

「ゲイツ……君……これで君達は、私を許すかい……」

「お前……」

それを聞いたゲイツはもしかかしてと思い、彼の顔を見つめると、彼の心情を察したウオズは無言のまま笑みを浮かべた。

それによってゲイツは悟った、ウオズは未来でゲイツ達を裏切った事に詫びろとするために、自分を守ってくれたのだと。

「ウオズ。貴様にそんな思いやりがあつたとは……正直、くだらない事をしたな」

だがそれを見たオシマイクラッシャーは、そんなウオズの行動をくだらない事だと嘲笑った。

「——くだらない、だと……」

それを耳で捉えたゲイツはオシマイクラッシャーに対し、既に沸点まで到達していた筈の怒りすら、とうに超えるぐらいに怒った。

「スウォルツウウウウーッッッッッ!!？」

『ゲイツ!』

許せなかったゲイツはゲイツウオッチを起動し、ジクウドライバーに差し込み走り出す。

「変身!」

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

ゲイツは仮面ライダーゲイツへと変身し、オシマイクラッシャーへと向かっていく。

「ゲイツ君……」

ウオズも一緒に戦おうと立ち上がるが、身体から走る痛みに起き上がることが出来ず、またしても気を失ってしまう。

再びライダーに変身したゲイツは、背中の痛みを感じながらもオシマイクラッシャーに立ち向かう。

「うおおおー！」

「ふんー！」

「があー！」

何度も攻撃を繰り出すも躲され、反撃を受け続ける。そして、次のオシマイクラツシャーの攻撃にゲイツが倒れる。

「くそ……ああー！」

オシマイクラツシャーがゲイツの胸部を足で踏みつける。

「所詮！貴様は何も出来ないのだ！力のないお前に仲間を救う事もな！」

「ぐうう……だまれ……」

「貴様の意見は……求めん！」

「があー！」

オシマイクラツシャーはゲイツの胸部を思い切り蹴り飛ばし、彼をウォズの倒れてい
る元まで飛ばされる。

「ふん。これで貴様らも終わりだ」

オシマイアナザーが倒れる二人の元へ近づく。

その時、ゲイツは倒れながら今までのこの時代に來ての事を思い返す。

——自分はソウゴを倒し、オーマジオウの存在しない未来を作るためにこの時代へ

とツクヨミと共に来た。

しかし、俺達の知るソウゴとは違った。

更にはな、さあや、ほまれ、えみる、ルールー、ことりに出会い。クライアス社の連中もソウゴやはな達と戦い分かり合った。

(人は変わる事が出来る……何でも出来る。何でもなれる……だから俺は……)

「これで終わりだ！ 明導ゲイツ！」

オシマイクラツシャーが腕を振り上げ、ゲイツに攻撃しようとしたその時……

「ッ!?？」

ゲイツは力を振り絞って起き上がり、オシマイクラツシャーの腕を掴んで攻撃を止めた。

「だから俺は……救世主になる！」

そして反対の腕でオシマイクラツシャーの腹部を殴り飛ばし、自分から離す。

「はあ、はあ……ッ」

ゲイツは痛みと疲労に耐えながら、倒れているウオズの手握られている、ウオズミライドウオッチを掴む。

「スウォルツ……お前は、絶対に許せない事がある……」

ウオッチを強く握りしめるゲイツには、オシマイクラツシャー……否、スウォルツを

絶対に許せなかった事があった。

「自分の自尊心のために、ツクヨミの両親とツクヨミの記憶を奪い……

俺の親友のような悲しむ人を、多く作り……

ライダー達の歴史を、壊そうとした……」

自分の周りにいる人間が、全てこの男によつて起こった悲劇で、彼ら彼女らが本来過ごす筈だった当たり前の幸せを意図も簡単に壊した。

彼は、それが何よりも許せなかった。

しかし、それよりも許せなかった事があった――

「けどな……今、許せないのは……俺の……」

幾度なくぶつかり、お互いの食い違ふところもあった。

――だが、一緒に戦った仲間である。

ゲイツはウオズを振り返って、その事を思い出す。

「俺と一緒に戦ってきた仲間を、傷つけた事だあああああーツツツツ!!?」

ウオズのウオッチを掲げながらゲイツは構える。

「行くぞ。ウオズ!一緒に戦うぞ!」

『ウオズ!』

ミライドウオッチを起動すると、光と共にウオズミライドウオッチがいつもゲイツ達

が利用しているライドウオッチの形に変化し、そのウオッチ——『ウオズライドウオッチ』がジクウドライバーのスロットへ装填される。

そしてドライバーのロックを解除し、ゲイツの前にアーマーが現れると、ドライバーを回す。

『アーマータイム！仮面ライダーウオオオズ！』

現れたアーマーは一斉に飛び散り、ゲイツに纏われて行く。

複眼の色は通常の黄色からウオズと同じ青に変化、ひらがなで『うおず』と描かれ。肩部には仮面ライダーウオズの状態のビヨンドライバーが装着されている他、ゲイツで赤色だった部分が黄緑に変わり、ウオズの特徴でもあったマフラーも首周りに装着されていた。

「なんだ……そのアーマーは……」

「これは、ただのアーマータイムじゃない……俺とウオズのだ！」

ゲイツのから放たれた右ストレートが、オシマイクラッシャーを吹き飛ばした。

「貴様ア！よくもッ！」

オシマイクラッシャーはゲイツに光弾を放つ。

「はあ！」

ゲイツは首に装着されたマフラーを上へと上げると、自らを包み込み姿を消した。

「な、なに……どこだ!」

それに驚いたオシマイクラツシャーは、姿を消したゲイツはどこだと辺りを見回す。

「はああ!」

するとゲイツはオシマイクラツシャーの前へと再び現れ、ジカンデスピアを持ちそのまま至近距離で振り上げる。

「ぬわああああ!」

飛ばされたオシマイクラツシャーにゲイツは再びマフラーを使い、一瞬にして背後へと回る。

「ヤアアア!」

ゲイツがオシマイクラツシャーにキックを喰らわせ地面へと叩きつける。

そして、ゲイツは地面へ着地する。

「な、何故だ……何故……」

何故、ただのアーマータイムにここまで手も足も出ないと、オシマイクラツシャーは疑問に溢れていた。

「——んっ……あれは……」

祝え!過去と未来をしろしめす時の救世主と預言者による新たなる姿……

その名も仮面ライダーゲイツ・ウオズアーマー!

素晴らしい……まさに我々二人の……友情のアーマータイムだ！」

すると何かを察知して目を覚ましたウオズが、ゲイツが今装着しているアーマーを見て。痛みなど気にしなまいと言わんばかりに立ち上がると直ぐ様、ウオズアーマーと祝いの言葉を述べ、最後にゲイツと自身による友情のアーマータイムと叫ぶ。

「友情のアーマータイムだと……ふざけるな！」

オシマイクラツシャーはゲイツへと突撃し、ゲイツも飛び込んで応戦する。

「お前のような……未来から逃げたような奴に……俺が負けるかア！」

ゲイツはオシマイクラツシャーの攻撃を躲し続け、カウンターを放ちオシマイクラツシャーを吹き飛ばす。

「ああ……だが、俺はもう逃がないッ！」

今度はゲイツがオシマイクラツシャーへと突撃し、オシマイクラツシャーの言葉を肯定しながらも、もう二度と逃げない事を誓いながら右腕から放たれた強烈なパンチを繰り出した。

「ぬうおー！」

ゲイツのパンチが腹部へと決まり、オシマイクラツシャーは膝を折って腹を抑える。

「貴様のような者が……王である俺に……ッ！」

「王だと……？ お前は王じゃない！」

「何……」

「本当の王つてのは、自分自身の力や人々へ対する思いやり、人の声に耳を傾け力を尽くす奴……」

その全てを成し遂げた上でみんなに認められて、初めて王になれるんだ！」

——時見ソウゴは、まさにそれを体現していた。誰かの人のためにいつも全力で、人の意見にも声を向けて、信じた奴には全力で信じ助ける。

それができるソウゴは……まさに王だ。

「だが、お前は違う！」

お前は、他人の意思を無視し。世界を、歴史を壊し。他人の力を盗み。本当の力を何も持たない！」

ただの卑怯な子供と同じように、自分一人喜んでいる、ただの汚い泥棒の王だ！」

『カマシスギー！フィニッシュタイム！』

ゲイツはそう言つて、ジカンデスピアのパネル全体をスワイプする。

『一撃カマーン！』

「はああ！」

ジカンデスピアにエネルギーを纏つたゲイツの一撃を繰り返され、吹き飛ばす。

「き、貴様……貴様如きがあ……意見をするなア！」

あれだけ受けても尚、オシマイクラツシャーは起き上がる。

「許さん……絶対に許さんぞおおお！」

ゲイツへの言葉による怒りで、オシマイクラツシャーは憤怒のオーラを纏う。

「ああ、俺もだ」

『フィニッシュタイム！ウオズ！』

それに対し、自分も同じ意見だと返したゲイツはドライバーのロックを解除してドライバーを回すと、飛び上がってライダーキックの態勢に入る。

『エクスペローションタイムバースト！』

オシマイクラツシャーもオーラを纏いながら飛び上がり、両者が放ったライダーキックがぶつかり合う。

「うおおおおお！」

ゲイツとオシマイクラツシャーのライダーキックはお互いに力の差は五分五分、ぶつかり合う二つのライダーキックは、どちらも勝利を譲らなかつた。

だがその時、ゲイツの背後から仮面ライダーウオズの幻影が現れた。

「何？？」

「ハア……はあああああアツツ！」

飛び蹴りの体勢になっていたウオズの幻影は、ゲイツと共にライダーキックを押し込

もうとする。

「はあああああああ!」

ゲイツとウオズのライダーキックが、突如現れた幻影に驚いて動きが鈍ったオシマイクラツシヤーのキックに競り勝った。

「うおおおおおおー!!?」

そのままオシマイクラツシヤーに直撃すると、そのまましばらく放ち続けそのまま奥まで吹っ飛ばされた。

その時、オシマイクラツシヤーの体内からアナザーライドウオッチが摘出されて、スウォルトの姿へと戻るとウオッチはゲイツの元へと転がる。

「こんなもの……!」

ゲイツはそれを足で踏み潰し、ウオッチは今度こそ跡形もなく壊された。

しかし、肝心のスウォルトは逃げ去ったのか、もう既に其処にはいなかった。

「はあ、はあ……」

ゲイツはウオッチを外し変身を解除すると、ウオズに近寄る。

「うっ、うう……ゲイツ君」

ゲイツは無言のまま、通常のライドウオッチから元に戻ったウオズのミライドウオッチを投げ渡し返した。

「行くぞ」

「ああ……」

ゲイツとウオズのお互いに肩を担いで起き上がると、共にエール達を追いかけるために先へ進み、ソウゴとはぐたんを助けるべく前へ向かって歩み始めた。

先に進んでいたエール達は魔法陣を潜ると、先の場所より明るく色んな物が浮かんでいるような場所に辿り着いた。

「はぐたんー」

そこで彼女達はトゲパワワの檻に閉じ込められているはぐたんを見つけ、はぐたんに近づこうとする。

「っ……」

しかしエール達が助けようとしたその時、はぐたんの前に誰かが現れた。

「ソウゴー」

現れたのは、はぐたんと一緒に捕まっていた筈のソウゴだった。

「ソウゴ君ー」

アンジュがソウゴが近づこうとする。

「ダメええー！ー」

『えっ?』

その刹那、はぐたんがソウゴにダメと叫び、それを聞いたエール達は驚く。

「ソウゴ君……」

何事だと疑問に思ったアンジユがソウゴを見ると、先と様子が違うことに気づく。

更に彼女らは、彼が腰に装着しているものを見て驚愕した。

「……ちよつと、ソウゴ! あんた、そのドライバー……ッ!」

今ソウゴの巻いているのは、何時も彼が装着しているジクウドライバーではない。

ソウゴが巻いているドライバーは……

「まさか……」

「えっ? な、何……」

「何なのですか……あのドライバーは……」

アムールには見覚えがあり、アールとマシエリは初めて見た物なので何なのかわからなかった。

「あれは……あの時使っていた……」

「あのドライバーは……そんな……」

「ソウゴ君……まさか……」

しかし、エールとアンジユ、エトワールは一度だけそのドライバーを見たことがある。

そのドライバーは全体が金色に輝き、ジクウドライバーではライドウォッチを装填していた箇所には紅い真珠の様な球がポツンと付いた金色の装飾が施されたドライバー……『オーマジオウドライバー』がソウゴの腰に装着されていた。

「……………うおおおおオオオ——ツッ！」

雄叫びと共に、赤い瞳へと変わったソウゴの背後の地面に巨大で赤黒く燃え盛る時計が、その地を裂きながら出現した。

「——変身……………ッ！」

ソウゴの哀しみと覚悟を含んだ掛け声と共にドライバーの両端を押しこむと、背後の時計から生成された『ライダー』の文字が溶岩で満たされ射出され、無数の赤黒い帯状のエフェクトが彼を包んだ。

『祝福の刻！ 最高！ 最善！ 最大！ 最強王！ 逢魔時王！』
オーマジオウ

無数の時計バンドのエフェクトが弾け飛んだその時、エール達の目に映ったその姿は、肩から黄金のベルトをかけ、背中には二本の時計の針がマントの様に装着。顔にはGショック時計の様に3つのクロノグラフがついてあり、ジオウと同じく『ライダー』と書かれた紅く燃える複眼、黒い仮面をよく見ると小さい『王』の文字が無数に並んでいた。

時見ソウゴは、ゲイツ達が過ごしていた未来で“最低最悪の魔王”と呼ばれているラ

イダー……

『仮面ライダーオーマジオウ』への変身を、今此処で完了した。

次回! Re. HUGつとジオウ!

第66話 2068： 本当に望んでいる自分

第66話 2019： 本望に望んでいる自分

この話は……そう。アナザーデイケイドの戦いが終わり、大晦日まで後もう少しと
いった所の日の会話だった。

当時私たちは、『大晦日は家族で過ごしたい人の為に、今日のうちにみんなでおおうぜ
！』的なノリで、一度ビューティーハリーに集まることになっていた。

「いや〜もう、すごいよねこの漫画……最近の漫画ってこんな感じなのかな……？」
「主人公もそうだけど、他のキャラもすごい魅力的だよ〜」

「私は少し苦手なのです……人が沢山死んでるから、あまり見たくないのです……」

「ネットによれば来年の2月あたりにアニメ化が決定してるみたいよ？」

「凄いな最近の漫画は……その内映画化されたらあり得ないくらいに大ヒットするん
じゃないか？」

「いやいや、流石にそこまではいかないでしょ〜？」

ソウゴ君達は漫画雑誌を手にとって、今流行りの漫画を読んでいた。

なんでもその漫画の舞台は近代ヨーロッパで、ヨーロッパに蔓延る吸血鬼によって家
族を殺された主人公が、吸血鬼になって唯一生き残った妹を元の人間に戻すために、プ

口のデビルハンターに特殊な呼吸法を教わり、吸血鬼の親玉とその配下達を滅していく物語らしい。

ツクヨミの話を聞いたゲイツ君はその内映画化されるんじゃないかと言ってるけど、はなは流石にそこまでは行かないと思ってるらしい。

「……………さあや、少し良いですか？」

「……………いいけど」

すると突然ルーラーに呼ばれ、そのまま席を外した私はベランダの方に出てルーラーと横に並ぶ。

それにしても何だろう？なんか改まった顔をしているけど…

「……………今日は星が綺麗ですね」

「??……………うん、そうだね」

うん、まったく彼女の考えが読めない…!

初めて会った時よりはずっと分かりやすくなったと思っていたけど、今の彼女はまるで昔のルーラーになったみたいで考えが読めない…!

どう考えても、星を見るために此処に呼んだとは思えないし…

「ソウゴにはいつ告白するつもりですか？」

「急ウ!？」

いきなりド直球に質問してきたあ!?!いきなりすぎて変な声出ちやつたよ! 本当に訳が分からないよ!

「……………今はまだ」

「そうですか……………」

「……………」

「……………」

……………いや、なんか言つてルール!?!変に気まずい空気が漂っているからあ!

「……………さあやは一体、何を迷つていると言うのですか? ソウゴが私に言つた時の事を考えても、彼がああなたの事を好ましく思つているのは明確……………彼にフラれる事を警戒しているのなら、それは勘違いです。

さつきと告りなさい。というか告れ」

「突然の命令形!?!」

「安心してください。もし仮に玉砕した場合は、眺めの良い崖の上で貴女の墓を建ててあげます」

「やめて!! 私の不安な思いを煽らないで!?!フラれても私自殺とかしないから!

……………つていうか、何でフラれること前提で話が進んでいるの!?!」

なんかいつもよりもルールーが辛辣で地味に辛い。

「……だったら、なんで彼に想いを告げないのですか？」

「……やっぱり、不安だからかな……」

「だから、ソウゴは貴女の事が——」

「そういう事じゃ無いの。私が彼に相応しい女じゃ無いつて思うからなの」

「………どういふことですか？」

「……私がそう思い始めたのは、アナザーキバの事件からだ……」

——ソウゴ君の口から初恋の人についての話が出てきた時、私の心の中にはドロツとした真つ黒い感情……嫉妬心が溢れ出ていた。ルールーがソウゴ君と仲良くしている時、もそんな感情が出ていたけど、あの時程ドロドロしてはいなかった。

何で私が初恋じゃないんだろうって、私にはあんな感情を出して貰った事なんて無いの……って思った。

そして初恋の人と再会した時、いつも一緒にいた彼が、私の傍から居なくなるって考えた時、呼吸も上手くできるかどうかも分からなくなっちゃった。

——だからかな……

「ソウゴ君の初恋の人——ユウコさんが死んだとき、私すごくほっとしたんだ……」

そんな告白をして、自虐的な笑みを浮かべる私を見ても、ルールーは黙って私の話を聞いていた。

「…最低だよね、私……」

目の前で人が死んでいるのに、あんなにソウゴ君が悲しんでいるのに、そんな感情が生まれてるんだよ……？

だから私、ソウゴ君に何も出来なかった……励ましてあげること、一緒に居てあげること、出来なかった……」

「……………」

「それなのに、貴女の口から、ソウゴ君が私の事が好きかもって聞いた時……あんなに嬉しかったのに、私はソウゴ君が考えている程いい子じやないのにつて思つて……考えれば考える程、あんな事考えていた自分が嫌になつちやつて……ズズツ……それで嬉しさよりも、申し訳なさが出てきて……っ！」

自分の情けなさに思わず涙を流していると、目元に布の感触を感じとり、視線を上げるとルールーがハンカチで私の涙を拭っていた。

「うぐっ……ルールー？」

「……さあや、貴女はあの人に嫉妬していた事を、死んでほつとしていた事を最低と称しなしたが……私はそんな事ないと思います」

「……………でも」

「そうやって色々思い悩むのは、貴女の悪い癖です。」

そんな事言ったら、ソウゴを好きだつて自覚した時から、彼の幼馴染である貴女を疎ましく思っていた私も同じです。

それどころか、貴女の消極的な性格を利用して出し抜こうと無意識に考えていた程です」

……そうだったの!?

「ですから、貴女はもつと誇るべきです。彼に好かれていることを」

「……………ルールー」

「それに私は、彼に想いを告げることが出来ただけで満足です。

もし想いを告げる時が来たら、貴女は自分の事と、彼の事だけを考えてください。

女の子は、少し我儘な位がちょうど良い……と、この間パツプルが言っていました」

「……………うん……………ありがとう。ごめんね、ルールー……………っー」

そう言うって目から沢山涙を流していると、ルールーが自分の肩を貸してくれた。

そして私は、気が済むまで泣いた。自分の情けなさや罪悪感と一緒に、それでいてウコさんへの後悔だけは心の中に残しながら。

ゲイツは自身とウオズ、二人の友情のアーマータイムにより誕生したウオズアーマー

へととなり、スウォルツが変身したオシマイクラツシャーを撃破。取り込まれたアナザー
デイクイドウオツチも破壊した一方で、先へと進んでいたエール達は……

「そ、ソウゴ……」

「嘘でしょ……」

彼女達は今、目の前にいるジオウが本当にソウゴなのかと、疑いたい気持ちで一杯一杯だった。

「そこにいるのは、本物の時見ソウゴだよ」

そこへ、はぐたんの拘束している場所の隣へクライが現れると、現実を受け入れられない彼女らに向けて無慈悲にそう告げる。

「さあ、時見ソウゴ。共に永遠の世界の為に手に入れたその力を……オーマジオウの力を！」

「……」

オーマジオウはクライの指示でエール達へと近づき腕を上げ、手を広げると、強烈な波動を発生させる。

『きゃあああああーっ！』

エール達はなんとか、彼の攻撃に吹き飛ばされないように耐える。

しかし、その力はグラウンドジオウ、ミステリージオウとは比較にはならない強さを持

っ。

まさに、最強にして最悪の魔王……オーマジオウそのものだった。

「あなたですね！ソウゴをオーマジオウとしたのは！」

「時見先輩を洗脳しているのですか！」

クライがソウゴを操り、オーマジオウにさせたのだと睨んだアムールとマシエリの二人が、怒りでその身を包みながら叫ぶ。

「違うよ……」

だが、オーマジオウの口から語られたのは『違う』と言う、静かな否定の一言だった。それを聞いた彼女達は、彼の言葉を信じる事が出来ず。遂には、その声が本当にソウゴのものだったのかと、自身の耳を疑い始めた。

「みんな……俺は望んでなかったんだよ」

しかし、オーマジオウ——いや、時見ソウゴは、自ら望んでオーマジオウの道を選んだのだと、続けて無慈悲に答えた。

「望んだ……？」

……ソウゴさん、何を言ってるの？わかんないよ……」

「言葉通りだよ。俺はみんなの未来を守る為になつたんだよ……オーマジオウに」

アーラの問いに対して彼は、未来を守る為にオーマジオウになつたのだと言い。それ

でもエール達は、みんなの為に戦ってきたあのソウゴがこの道を選んだと言う事実を、未だに信じられずにいた。

——だが彼の答えは、みんなと戦って来たからこそ辿り着いた、皆を幸せに出来る、
conclusion たった一つの結論だと言う事を、彼女達はまだ知らなかった。

「私の未来を守る為……」

「それがそいつと一緒に、時を止める理由……？」

「そうだよ」

「ソウゴ君……」

「俺はみんながより良い未来を過ごせるように、永遠に守ってあげる。クライと一緒にね」

皆が本気で言っているのかと言う目で彼を訴えかけるが、あくまでもオーマジオウはクライと共に永遠の世界を作り、みんなを守ると気持ちを変えらるつもりはないらしい。

「どうして!」

「アンジュ」

アンジュがみんなの前に出て、オーマジオウに近づこうとする。

「さあや……」

だがオーマジオウは彼女を見て躊躇いながらも、またしても衝撃波のようなものを発

生させ、アンジユを吹き飛ばした。

「アンジユー！」

「大丈夫ですか？」

エトワールとアーラの二人が駆け寄ってアンジユを支えて、アンジユが吹き飛ばされるのを受け止める。

「うッ…ケホッ！……ッ、ソウゴ君！どうして!?!オーマジオウにならないって、新しい未来を作ろうって！」

彼女はオーマジオウから受けたダメージで咳込みながらも、二人で誓ったあの約束を忘れたのかと訴えかける。

するとクライは、今の現実を受け入れようとしないう彼女に呆れながら、彼の身に起きた真実を告げ始めた。

「それは、彼が絶望の未来を知らなかったからだよ」

「絶望の未来……」

「彼に、この先の未来を見せたんだよ」

それは、ここへエール達が入る数刻前。

ソウゴは叫び声を上げ、トゲパワワが体から溢れ出し、ジクウドライバーからは赤黒

い電流を発生させていた。

「うわああああああ……うっ!!??」

そのまま叫び上げ続けた結果……ジクウドライバーは赤黒い電流とトゲパワワを注がれ、ベルトが変貌した。

「はあ、はあ……」

ソウゴは自分の身に駆け巡っていた苦しみが収まると、腰に巻いていたジクウドライバーがオーマジオウドライバーへと変貌していた事に驚愕する。

「やはり、君の運命はその姿になることを選んだね」

クライの声が聞こえたソウゴが慌てて見上げると、彼は笑みを浮かべていた。

それは、ソウゴがオーマジオウを選ぶのを見透かしていたようだった。

「時見ソウゴ、人は運命から逃れられない。」

だからこそ、君が僕と共に永遠の世界を作るのも運命だったのだよ」

「運……命……」

これが運命なのだと述べると、クライはソウゴに近づき、手を差し伸べる。

「共に行こう。みんなにより良い未来を作ってあげよう」

——その時は、ソウゴはその手を取ればいいのか、それとも握ってはならないかわからなかった。

取つてはいけない事は頭ではわかつていたが、彼の心と体はその手を握ろうとしていた。

(……俺とクライの力……あんな未来を……見ないで済む……)

——通常、人が最も残酷になるのは、どんな時であろうか。

愉悦と快楽の為に、殺戮を繰り返す時か？

自身の利益のために、何も知らない他者を利用する時か？

目的の為ならばと、どんなに卑劣な手を使つても勝利をしようとする時か？

勿論、それもあるかもしれない。

だが人が本当の意味で残酷になるのは、自身のやっている事が正しい事だと思ひ込

み、悪い事だと認識していない時、だとも言える。

今のソウゴは、正にそれを体現していた。

彼は、誰よりも民の事を想ひ、誰よりも仲間の幸せを願っていた。

それ故に、彼はその心の隙を、クライに付け入れられてしまっていた。

そしてクライの差し伸べる手を、残酷な運命に立ち向かう「勇氣」を失つて盲目にな

り、信義を見ることが出来なくなった彼は、その手で悪魔の手を掴もうとした——

そして今の現状に戻り、ソウゴはオーマジオウへと変身し、エール達の前へと立ち

だった。

「彼は答えを出し、彼はみんなに永遠の世界を僕と共に創る同士として、オーマジオウになる事を決意した」

「そんな……そんなの嘘！ソウゴ君は、そんな事は思わない！」

「その通りです！ソウゴは時を奪おうなんて事を……」

「アンジユ、アムール……」

しかし彼女達は、どんなにクライが残酷な真実を言ったとしても、ソウゴは絶対に、時を奪って永遠の時間を作ろうなんて思わないと信じていた。

「……仕方ない。時見ソウゴ」

「………わかった……」

そんな叫びを聞いたクライが眉間に皺を寄せながらページを開くと、オーマジオウも頷く。

その時、エールの頭上にトゲパワワのエネルギーが集まった。

「……？」

トゲパワワのエネルギーはエールの周囲を囲み、鳥籠のような檻を作って彼女を捕らえた。

「エール！」

「お姉ちゃん！」

アアラがエールを助けようと飛び込むも、その檻の持つトゲパワワに簡単に弾き返された。

そしてオーマジオウが掌を広げると、エールの捕らえられた檻を自分の後ろへ移動させる。

「っ!!? ソウゴ……」

「……」

「彼は僕の頼みを聞いてくれたただだよ」

「えっ?」

「僕は、君を救いたただけだよ」

「私を……?」

クライはエールを救いたいと願っているのか、その為にオーマジオウは自分の後ろへ移動させたのだと話す。

「時見ソウゴ。彼女達を」

「うん……」

オーマジオウは残るアンジュ達にジリジリ近づいていく。

「みんな！」

「君はそこで見ていなさい。理想から程遠い現実を…」

クライがそうエールに言うが、アンジュ達は目に見えてオーマジオウと戦うことに戸惑いを見せていた。

「……やるしかないの……」

「ですが……」

オーマジオウとはいえ……ソウゴは自分達の仲間であり友。彼女達はその友達と戦うことなんてできず、エトワールとマシエリも思わず躊躇してしまう。

「ソウゴさん……」

「ソウゴ……」

「……ソウゴ君……私は……」

「ソウゴ……やめて……」

アーラもアムールもアンジュも、檻に閉じ込められているエールも、ここにいる者達はクライを除き、オーマジオウ——ソウゴと戦うのに躊躇いがあった。

だがそんなの関係ないと言わんばかりにオーマジオウは手を広げると、そこから大量の蝙蝠の群れが現れた。

その蝙蝠はアンジュ達へ放たれる。

「リコーダー・ステツキ！ミライクリスタル！」

リコーダーステッキを召喚したアーラは、すぐ様ミライクリスタル・ライムグリーンをセツトした。

「心のトゲトゲ、吹き飛んであげろ！」

ボタンを押して吹くと無数の緑色の小鳥を生み出していく。

「プリキュア！バードアタック！」

アーラが生み出した小鳥がオーマジオウの放った蝙蝠へ向かって行った。

「ツ!!そんな!!?」

しかしアーラの生み出した小鳥は、オーマジオウが放った蝙蝠達に喰い殺されるかのように、簡単に消されてしまった。

「いやああああ!!」

「ことり!!」

蝙蝠達はアーラを襲い、彼女への攻撃が終わるとアーラは倒れてしまう。

「お、お姉……ちゃん」

「ソウゴ!!」

今度はエトワールがオーマジオウに立ち向かい、パンチを繰り出そうと腕を伸ばす。

「っ!!?」

しかし、エトワールのパンチはオーマジオウには当たらず、見えない壁のようなもの

に遮られた。

「はあ！」

彼に触れる事すら出来ぬエトワールに、オーマジオウの力を込めた右腕から放たれたパンチを打ちかます。

「うわあああああああ！」

「ほまれ！」

エトワールがやられると、今度は上からマシエリとアムールがツインラブギターを構えていた。

「時見先輩！」

「ソウゴ！もうやめてください！」

二人がツインラブギターからハート型のエネルギーを放つ。

「ふう！」

だが、オーマジオウはそんな“豆鉄砲”を難なく片腕で跳ね返す。

「そんな!?？」

「やはり……ダメですか……」

アムールはオーマジオウの力をわかっていたが、まだいつものソウゴならもしかしたらと思いつつ放つ。そして結果は大外れ。

オーマジオウは反撃に出る為に、マシエリとアムールに向けて金色エネルギーの球体を飛ばし、二人に放つ。

「マシエリ！アムール！」

「えみる……ルール……」

捉えているエールは、自分は見ている事しかできないのかと責めた。その上、友達がみんなを傷つけている姿を、その目に焼き付ける事しか出来ない事実が一番耐えられなかった。

「ソウゴ君！やめて！こんなのソウゴ君……じゃない！」

アンジユはいつものソウゴに戻って欲しいと呼びかける。

「俺は……みんなを……助ける……だから時を止める……俺は……みんなを……」

しかし今のオーマジオウは、まるで自身に暗示でも掛けているかの様に、同じ言葉を呟き続けており。アンジユの声など、まるで聞こえはしなかった。

「……」

アンジユはオーマジオウにメロディソードを向け、それを見たエトワールとアムールは思わず声を上げた。

「アンジユ！」

「アンジユ……」

「フェザー——」

『さあや!』

『絶対に……壊させない……』

「ここは、アンジュの……さあやの思い出が詰まった大切な場所だから!』

「……!」

アンジュがフェザーブラストを放とうするが、彼女はその時、ソウゴと一緒にいた幼い時からの思い出が頭に浮かぶ。それにより、彼に攻撃することに戸惑いが生まれた。

——だがそもそも、オーマジオウがたった一人の少女が放つて有ろう。『貧弱な技』を受けて、その装甲に傷をつける事は出来るので有ろうか?

答えは——否。

黒と金の素材で構成された、呪術的な力であらゆるダメージを萎縮させる機能を持つ絶対防御の装甲を身に付けているオーマジオウの前では、いくら0.1程の攻撃を与えたとしても、結局はゼロでしかないのだから。

(………できない……!)

それを抜きにしたとしても、アンジュは大切な人を傷付ける事など出来ず、メロディソードを下ろしてしまう。

だがオーマジオウはそんな苦悩を抱く、幼馴染のアンジュにすら容赦なく衝撃波を放

ち、彼女を吹き飛ばした。

「さあやー！」

オーマジオウによりアンジュ、エトワール、マシエリ、アムール、アーラの五人は倒れてしまった。

「っ、強い……」

「これがソウゴ……」

「私達の……力が……」

「何一つ……通用しません」

「ソウゴ、君……」

オーマジオウの力を前に、プリキュア五人の力は何一つ通用しなかった。

いや、この力の前には、自分達の覚悟なんてものは、何も意味のないものだと思わせていた。

それは、まさしく天災。

止まらぬ侵害。

類稀に見ない規格外。

甚大なる被害は避けられぬ自然災害の如く、圧倒的な力の差を持つ“理不尽”を前にした人々は、どれだけの恐怖を抱き、いつ来るか解らない人災に怯え、頭を垂れて平伏

して来たのだろうか。

そしてアンジュ達もまた心の奥底で恐怖心を抱き、その心と体に傷を刻み付けていた。

「未来……ここで止め……永遠の幸せな未来を創る……」

オーマジオウがまたしても同じような衝撃波を放とうとする。

その時……

「アツハツハツハツハ！ 待っていたぞ！ この時を！」

「スウォルツ……ッ」

そこへ、ゲイツに敗れても尚しぶとく生き残り、変身解除された時にドサクサに紛れてあの魔法陣に潜り、ここまで追いついてきたスウォルツが現れた。

「これでいい。ふうん！」

スウォルツは手から光弾を作り出し、その魔法陣を破壊した。

「これで、あの二人はここへは来られない！」

ゲイツとウオズが追いかけるられないように魔法陣を破壊した彼は、オーマジオウの方を振り向く。

「この時を……時見ソウゴ！」

スウォルツにとってもこの姿へジオウになったのは、長年待っていた姿である。

「お前がオーマジオウとなる、瞬間を……お前を見つけたあの日から！」

あのバスでソウゴを見つけ、試練を与え合格した。あの時から、今日までに何度も何度も追いつめて、遂にオーマジオウへと変身した。

「今こそオーマジオウの力をもらおうぞ!!？」

スウォルツは手を伸ばすと、自分とオーマジオウとの間にエネルギーを流すパスのラインを作り出し、自身にその力を流し込む。

「素晴らしい力だ！……この力さえあれば、俺は妹を凌駕できる！真の王位を継承する事ができる！」

オーマジオウの力が自分の体に流れていくのを感じ、力が満ちていくのに興奮していき、これで自分の計画が完成したと痛感した。

しかし――

「うっ……ぐわっ……い！」

スウォルツがオーマジオウを繋げていたエネルギーの吸収ラインがオーバーヒートを起こし、空気の過剰注入によって風船が破裂したかのように破壊された。

「な、何故……！」

それどころか、オーマジオウの力を吸収した筈のスウォルツにまでダメージがあった。

「スウォルツ。君如きが彼の力を奪えるわけない」

「なっ……」

クライ曰く、彼が自身の体に受け取るには、オーマジオウの力は余りにも強大過ぎた。だからスウォルツは、その力を自分の体では処理出来なかつたのだ。

「それと、ここに君にクライアス社、社長として宣言しよう。

スウォルツ……君はクビだ」

スウォルツはクライの口から聞こえた……もうお前は用済みだという一言に、彼の罅だらけのプライドが再び大きく傷つけられた。

「……く、クライイイイイ……ツツツ！お前ええええええー！」

自身を見下すクライに怒りのまま攻め込もうとするが、オーマジオウがスウォルツの前へと現れた。

「っ……？」

オーマジオウはスウォルツを自らの力で、無理矢理宙へと上げる。

「お前如きが……俺の力を受け止めきれないだろ！俺の力は、全てのライダーの力だ……ッ！」

そう語るオーマジオウの周りに集めたライドウオッチだけじゃなく、他のライダーのライドウオッチまでもが現れ、その全てがオーマジオウは体へ注がれた。

「全ての……ライダーの力だと……あう！」

いきなりスウォルトツの体が、大きな拳で握られているかのように強く締め付けられた。

「お前のような……お前のような奴に……！」

オーマジオウはドスの効いた声で、スウォルトツに対する怒りを開放していくかのよう
に増大させ、彼の体を徐々に締め付けていく。

「あああ……あぐっ！」

「ソウゴ君……いや……やめて」

このまま締め付けると流石のスウォルトツも限界、下手をすれば命すら危いと察知した
アンジュがやめる様に言うが、彼の耳にはまるで届いていなかった。

「やめろ……やめてくれて……」

わかった……お前の両親を殺した事は……謝罪する……だから……」

自身の体から響き渡る骨の軋む音と内臓を絞る様な音を聞き、自分の命が危ういと察
知し、プライドを捨てて命乞いをするスウォルトツにオーマジオウは……

「……何言ってるんだ」

「……っ？」

「お前は……これまでにそんな風に泣いた人達の気持ちを、そんな事も知らずに、何人も

の人生を弄んだ……」

「……あ……あああ……あああ……」

驚異的な殺意に塗れたオーマジオウの言葉で、スウォルツは体から流れる恐怖の感情に、一度ズタズタに引き裂かれたプライド諸共、押しつぶされそうになった。

「お前の言葉を借りるならば……お前の意見は求めん！」

さらに手を強く握り、スウォルツの体を締め付ける。

「うわあああああ——！や、や、やめてくれえええ——！！？」

スウォルツはやめてくれと叫び、涙を流しオーマジオウに必死に頼むが、オーマジオウは止めるような素振りを見せようとはしない。

そんな姿にプリキュア達は、深海の様に深い所に沈んでいた筈の恐怖心が浮き出し、心の奥底から滲み出す怯えを見せた。

「これが……」

「時見先輩なのですか……」

「……ソウゴ……そのはず……」

「ですが……これでは、オーマジオウ……」

「ソウゴ君……もう、やめて……」

アーラとマシエリ、エトワール、アムールがあまりの事に目を離せないでいる横で、ア

ンジュは感じていた。オーマジオウが——ソウゴがスウォルツに向けている憤怒と憎悪は、まるで両親を奪った彼に復讐をするかのような、そんな憤りしか感じられぬ想いをぶつけているかの様に。

「あああ……あ……あ……」

スウォルツは長く締め付けられ気を失う。

それと同刻、オーマジオウの腕に光弾のようなものが放たれ、彼はそれを防ぐ為に拘束していたスウォルツを解放した。

「そのくらいにしておけ。そいつには、始末する価値などない」

するとそこへ、オーマジオウ達の前に灰色のカーテンが現れた。

「……お前は……」

「門矢士……海東大樹」

そこに現れたのはネオディエンドライバーを構えている海東大樹。その後ろには、マゼンタカラーの二眼レフカメラを首にかける門矢士がいた。

「ゲイツ！」

「ウオズさん！」

彼の後ろには、数十分前までスウォルツを抑えていたゲイツとウオズの姿もあった。

「大丈夫ですか？」

「ああ……あの入り口が消えた時に、門矢士と海東大樹が俺達を……」

入り口をスウォルツに消された時に、門矢士と海東大樹が二人を見つけたらしく、ここまで連れてきたのだ。

「……海東」

「わかつてるよ士。こいつは僕が処理しておくよ」

オーマジオウに解放されたスウォルツを海東が回収する。

「そいつをどうするんだ？」

ゲイツはスウォルツを何処へ連れて行こうとしているのかを尋ねる。

「こいつには、一生罪を背負わせないといけないからね。その為にふさわしい場所へ連れて行くだけよ」

海東は笑ってそう答えると再びオーロラカーテンを作り、スウォルツを連れ去って行く。

「さって……」

海東とスウォルツがいなくなったのを確認し、士はオーマジオウとその頭上にいるクライを見つめる。

「ソウゴ……お前……」

「……我が魔王」

ゲイツとウオズはソウゴの姿に言葉が出なかった。いや、何故その姿になったのだと言わんとばかりに見つめる。

「門矢士。君と海東大樹がここにいるということとは、外の方に現れたのは彼かい？」

「外……」

「ハリーさんやツクヨミお姉ちゃんの方を……」

「彼って誰なのですか？」

クライが言う、外にはハリー達と一緒に誰がいるのかとエトワール達は疑問視する。

その頃、外で戦っていたハリー達の前に現れた人物は……

「はああー！」

強烈な剣技でオシマイダーや融合した怪人達を次々と浄化させている。

「なんですか……」

「一体誰が……」

チャラリートもダイガン、一体誰がこれだけの数を浄化しているのかわからなかった。

「なんや……うわあー！」

「ハリーー！」

油断したところにオルタナティブとアークオルフェノクがハリーを吹き飛ばした。

ツクヨミ、リストル、ビシンは駆け寄るとそこへ、ン・ガミオ・ゼダ、バッファロード、タウルス・バリスタ、オルタナティブ、ドラゴンオルフェノク、アークオルフェノク、パラドキサアンデット、フォーティーン、牛鬼が同時に襲いかかる。

だがまたしても、彼らを切り裂いたかのように剣技が放たれた。

「「オシマイダ〜！オシマイダ〜！」

それにより、怪人達が一瞬にして浄化された。

「大丈夫……？」

怪人達が消えるとそこに、人の影のような姿が見えた。

その姿はボディは全体的に灰色で、右の複眼は蝙蝠の羽をモチーフ、左の複眼は鳥の羽をモチーフとなっており。さらに腰に巻いている、歯車とレバーの付いた黒いベルトに気づく。

「あなたは……」

「桐ヶ谷晴夜……」

「間に合ったみたいだね」

彼は門矢士と海東大樹と同じようにクライアス社を探り、プリキュアを陰から守っていたもう一人の仮面ライダービルド……桐ヶ谷晴夜である。

そして、今のビルドは晴夜の持つ最強のビルドの姿……光と闇の二つの力を持つ、ビルド・マジエステイロードフォーム。

「リストル、ビシン……」

ビルドは仲間となっているリストルとビシンを見る。

その時、後ろからサジタリアス・ノヴァ、ワイズマンがリストルとビシンの背後に現れたのが見えた。

「どけー！」

『ロイヤル！フルボトルスラッシュユー！』

光のロイヤルボトルのエネルギーを纏うフルボトルブレードの力でフルボトルブレードを振り込み、サジタリアス・ノヴァとワイズマンを浄化させる。

「君……」

「さあ、行くよ」

ビルドは一人先に飛び立ち、再び怪人達へ向かう。

すると、今度は巨大怪人のフォータインが攻撃を開始。

「はああー！」

フルボトルブレードを握り締め、フォータインの攻撃からみんなを守る。

その様子をクライアス社内部にて、クライが外の映像で晴夜が巨大な怪人達から必死にみんなを守ろうとしているのを見た。

「桐ヶ谷晴夜……まだ彼は無意味な事をしているのか」

無意味な行動だと、クライが呆れてるかのように呟く。

「おい」

「……」

「一つ教えておく。俺とあいつがやってる事に、無意味な事はない」

士は自分と今外で戦っている晴夜、そして自分達がしてきた事に無意味は無いと告げる。

「……ソウゴ……」

「……我が魔王……!?？」

「——ウオズ……祝え」

「……は？」

オーマジオウはゲイツと一緒に居たウオズに祝えと命令し、命令された本人は素っ頓狂な声を出して驚く。

「祝えと言っている……!」

未だ戸惑うウオズに向け、もう一度祝えと促すと、ウオズはゲイツの肩から降りて本

を取り出し構える。

「……祝え！時空を超え、過去と未来をしろしめす究極の時の王者！その名もオーマジ
オウ！歴史の最終章へたどり着いた瞬間である……が！」

祝辞の最後にそう言ったウオズは本を仕舞い込み、代わりに取り出したビヨンドライ
バーを装着する。

「……正直、残念だ。」

君なら、私の知らない未来を作ると思っただけだね、我が魔王。このような形で君
をあまり祝いたくない！」

なんと彼は、オーマジオウとなったソウゴに忠誠を誓うことなく。それどころか反逆
の意思を見せ、自身の本音を——今のソウゴには祝いの言葉を述べたく無いと語り出
す。

「ウオズ」

「あのウオズが祝いたくないなんて……」

「初めてなのです」

ゲイツはそんなウオズに口元を緩わせ、エトワールとマシエリは祝いたくないと言う
ウオズに驚いた。

「……ソウゴ！何故、オーマジオウを選んだ！」

「……それが、みんなの為だと」

「……なら、俺がお前を意地でも……」

「待て」

ゲイツはかつてソウゴと交わした約束を守らんと足を動かすが、土が待てと制止してゲイツ達を止める。

「魔王は俺が始末する。お前らは、あそこの社長をなんとかしろ」

「なんだと……」

クライとの交戦を促しながらネオデイケイドライダーを装着し、デイケイドのライダーカードを取り出した。

「変身！」

そう叫ぶとカードを腰に装着したドライバーに差し込み、デイヴァインサイドハンドルの部分を操作する。

『KAMEN RIDER! DECADE!』

出現した影が一人となり数枚のプレートが現れると、その頭部を縦に貫きはめ込まれ、黒とマゼンタの仮面ライダーにして、世界の破壊者……仮面ライダーデイケイドとなった。

「いいや！俺が！」

『ゲイツ！ゲイツマジエステイ！』

『ギンガ！』

ゲイツとウオズはドライバーにウオッチを装填し、ドライバーを操作する。

『マジエステイタイム！仮面ライダー！Ah〜！ゲイツ！マジエースー
テイー！』

『投影！ファイナリータイム！ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファン
タジー！ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

二人はゲイツマジエステイ、ギンガファイナリーへと変身し、オーマジオウへと向
かって行く。

「ふん！」

「うわああああ！」

だがしかし、ゲイツとウオズはオーマジオウによって簡単に吹き飛ばされてしまっ
た。

「ヤアアア！」

今度は、ディケイドがライドブツカーで攻撃に出るが、簡単に受け止められる。

「門矢士。今の君の力では無駄だよ」

スウォルツに奪われたもう半分の力は、今はクライの持つマスタークライウオッチに

ある。そう言わんばかりに、デイケイドに自身のマスタークライウオツチを見せつけるが、本人は然程動揺した様子を見せなかった。

「ふん。ハンデには丁度いい！」

「士さん！」

「……コイツらは今、手が空いてないみたいだからな……」

HUGつとプリキュア、お前らが社長を何とかしろ！」

「は、はい！」

「門矢さん……ソウゴ君の事、お願いします！」

デイケイド達にオーマジオウを任せ、アンジュ達はまずは閉じ込められたエールを救う為にクライヘと向かう。

「門矢士！」

「我が魔王は、私達の家臣の定番だ」

ゲイツとウオズもまた、オーマジオウを元のソウゴに戻す為、もう一度戦いに挑む。

その頃、外の方では……

「はああ！」

『ゴリラ！ダイヤモンド！』

今も尚オシマイダーと交戦していたビルド、今度はゴリラボトルとダイヤモンドボトルを差し込む。

『ベストマツチスマツシユ！』

ブレードを横に切るように振ると、そのブレードの一撃はゴリラボトルの力でフォートイーンを切り裂く。そして無数のダイヤモンドが猛オシマイダーへ放つ。

「そらああああああ！」

ハリーもジカンチェンブレードとジカンチェンで攻撃を繰り返して見えない斬撃を飛ばしたり、チェーンを鞭の様に叩きつけたりしながら怪人達を次々と爆散させる。

『ヘリテージタイムフィニッシュ！』

今度は背中のジェットから火を吹かせながらライダーパンチで突撃し、全員勢いで吹き飛ばす。

「はああ！」

怪人とオシマイダー達が起き上がろうとすると、ツクヨミが奴らの背後を既に取っていた。

『フィニッシュタイム！』

ドライバーを回すと、ツクヨミの右足に光が集まって一撃必殺の技が放たれようとし

ていた。

『タイムジャック!』

月のエフェクトと共にツクヨミのキックが放たれ、オシマイダー全員を浄化させる。先まで押されていたが、少しずつではあるがオシマイダーや怪人の数が減ってきた。

(この調子なら……行ける)

このままならこつちが有利なると考えたビルドだったが、その時……

『又ウオオオオオ……!』

『!??!』

海に浮かぶクライソつくりのオシマイダーが雄叫びを上げる。

すると頭上から稲妻が発生し、戦っていた彼らに降り注がれた。

オーマジオウの周りには、多くの武器が破損して散らばっていた。

「はあ、はあ……ゲイツマジエステイの全武器が、通じない……」

散らばっていた武器は、ゲイツがゲイツマジエステイの力で呼び出した武器。

だがその全てを出しても、オーマジオウには何一つ通用しなかった。

「くう……これは間違いなく、オーマジオウの力……」

「ちっ、面倒な事してくれたな……」

ウオズとデイケイドの二人も、オーマジオウの力に何度も返り討ちにされていた。

「ゲイツ……ウオズさん……門矢さん」

その光景を黙って見ている事しか出来ないエールはこれ以上、ソウゴが仲間を傷つける姿を見たくなかった。

するとそんな彼女の心情を察知したのか、クライが本のページを開く。

「希望を持つことは残酷。」

望まぬ未来に、人は歩みを止めてしまう」

クライがそう語りながら、周りに未来へ怯えて絶望した人の姿を見せる。

「負けない！」

アンジュとエトワールはクライへ飛び込む。

「バリアが……」

だが二人の攻撃はクライが作り出したバリアに阻まれた。

「かわいそうに……君達の戦いは無駄なんだよ」

「そんなことない！」

アンジュとエトワールが自身達を哀れな目で見つめているクライから離れ、着地す

る。

「これが、君達の守ろうとしている人間の姿だ」

クライはトゲパワワで触手のようなものを生み出した。

『ツッ？』

「アンジュ！エトワール！マシエリ！アムール！アーラー！」

それでアンジュ達を捕えると、その触手にトゲパワワを溢れさせ、木へと変化させた。

「なにっ…」

「そんな……」

クライに捕らわれたアンジュ達を見てゲイツが驚き、まさかこんな事も出来るのかとウオズが眉間に皺を寄せていると…

「みんなを離して！」

「僕は君が救おうとしている姿を見せているだけだ」

エールがクライにみんなを離してと叫ぶ。だがその木から強力な電流が発生し、アンジュ達に強烈な痺れと痛み、電荷熱が襲った。

『ア” あああああーツ!!』

「やめてー！」

「貴様！」

「やめないか！」

ゲイツとウオズがこれら操作しているであろうクライを止めようと飛び込む。

「させない……」

「なっ!?? うわああああ!」

それを阻止する為、オーマジオウの放つ衝撃波がゲイツとウオズを吹き飛ばした。

「君がわかったと言うまで続ける。

君達は、僕と彼には勝てない」

その選択は、余りにも非道だった。

只の女子中学生にとつて、希望を微塵も感じる事の出来ない究極の選択。

時を止める様に言えば仲間は苦しむ事は無くなり、彼曰く世界中の人々は幸福の時を永遠に過ごせる。

そしてそれを拒否すれば仲間はあまりの苦痛で最悪、その場で死に晒す事になってしまう。

二択の道があるように見せかけて、実質的にはたった一択しか無い悪魔の選択肢。

仮に奇跡が起きて仲間達は助かり、後述の選択を選んだとしても、オーマジオウとクライ……この二人がいる限りは絶対に勝てないと、その時エールは絶望感を頭だけでなく、体の端から端まで隔々によぎらせた。

「何故なら、僕はこの世界の結末を知っている」

なかなか決断を下さないエールを見たクライが、今の外の様子を見せる。

「!?」

彼女が外を見ると、其処には何人も倒れている姿が映し出された。

『くう……』

立っているのも晴夜だけで、他のみんなはクライのオシマイダーから放たれた一撃が直撃した事で地に伏せられ、五人の仮面ライダーも変身が強制変身解除となっていた。

「これが現実だ」

「そんな……あ、ああああ……」

これが現実……?

どんなに希望を見致したとしても、最後は理不尽を前に膝をつき絶望。

どれだけ夢を求めても、膨大すぎる悪意に吞まれて挫折。

自分達よりも強いであろう者達ですら瀕死状態のこの状況が、現実?

そう、これが現実。

曲げられぬ運命。

神の愉悦の為の遊戯。

そんな光景を目に焼き付けた心優しい少女は、必ずこう思うであろう。

——もう見たくない……これ以上、誰かが傷つく姿は見たくない……と。

「まだわからないなら仕方ない。ならば、無限の苦しみを続けよう」

鼻で溜め息を着いたクライが本のページをまた開く。

『アアアアーッ！』

またしてもアンジュ達に電流を流し、苦しめる。

「やめてー！」

エールが悲痛の静止を求めると、電流が流れるのが止まる。

「もう、やめて……」

「僕は、全ての苦しみから皆を救おうとしているんだよ」

「時を止めれば……」

「そうだ。君の悲しみは終わる」

……そうだ、最初から私が領けば良かったんだ。

そうすれば、これ以上誰も苦しまないで済むのだと。

彼女は絶望感で、正常な判断が出来なかった。

…いや、今の彼女にとって、これが最高最善の判断だった。

「これ以上、みんなを苦しめたくない……だから……時を……」

そう言いかけたエールから、トゲパワワが少し現れ出した。

「何言ってるの！プリキュアは諦めない！」

「……っ!?？」

「小さな花は大輪にも負けない強い花にだってなる！」

三人は躲し続け、遂にクライの前へ着いて攻撃に出る。

しかし、クライの前にはあのバリアが立ちはだかる。

「やめて！」

「ウツ……」

「!?？」

アンジュとエトワールがエールが捕らえられた檻をこじ開けようとする。

「わたしにできないことがあなたにはできます。

あなたにできないことがわたしにはできます。

力を合わせれば、素晴らしいことがきつと……」

「さあや……」

「はなの目指してきた野乃はなから逃げちゃダメ！はなの目指してきた野乃はなから逃げちゃダメ！」

アンジュとエトワールが、エールに諦めないで、逃げちゃダメだと叫ぶ。

「奇跡……逃げちゃダメ……」

奇跡と逃げない、二つの言葉にオーマジオウの心が揺れ動き出した。

「おい！」

そこへデイケイドが前に現れ、彼へ呼び掛けた。

「お前……これがより良い……未来だと……？」

お前はその未来とやらに怯えたから、オーマジオウになったのか？」

「……」

「俺はこれまで、多くの仮面ライダーに会ってきた。

その中には、何度も怯え悩んだ奴も沢山いた。

けど、奴らは未来がどうこうよりも今、この瞬間に生きている奴らの自由の為に守っていた。

それが未来へ繋がると信じているからだ！」

そして同時刻、外では晴夜も力を振り絞り再びボトルを取る。

「くう……」

「うう……」

「はあ、はあ……」

ハリーやツクヨミを筆頭とした仮面ライダーは変身解除し、トラウムら元クライアス社のメンバーも全員倒れていたが、晴夜はフルボトルブレードを支えとして起き上がる。

「まだ……」

「桐ヶ谷晴夜……君は……」

晴夜は諦めず立ち上がるのを見て、リストルは何故そこまでボロボロになっても動けるのだと思った。

「俺には、かけがえのない仲間や大切な人がいる！」

どうして戦うのか？

それは一緒に戦っている仲間、友達、家族……そして、彼が何よりも守りたい存在がいるからだ。

「だから、戦うんだ！ 守り続ける為に！」

「せやな……俺も守りたいものがあるんや！」

「私も……」

それにくるように、ハリーとツクヨミも共に起き上がる。

「私の事をみんなは守ってくれた。」

だから、今度は私がここにみんなを守る！」

三人の守りたいと言う強い思いが、再び地獄の底から這い上がる力となった。

「「変身！」」

彼ら彼女らは仮面ライダービルド・ラビットロイヤル、仮面ライダーハリー・ギアへ

リテージ、仮面ライダーツクヨミへと変身し、再びオシマイダーへと挑んでいく。

「だから、教えてやる！」

仮面ライダーの歴史に、無意味なもの一つもない！」

デイクイドは負けじと更に押し込もうとする。

「…門矢士。君は何者なんだい？」

少し眉を顰めたクライは、目の前でオーマジオウと戦っている彼が何者なのか問う。

——彼が何者か？そんなの、決まっている。門矢士が何者かなんて。

彼は、全ての世界を巡り、物語を繋ぐ存在——

「——通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

デイクイドの持つライドブッカーの剣が少しずつではあるが、押し始めた。

そこへウオズが上空へと飛び上がり、ジカンデスピアを構えていた。

「我が魔王！」

「っ！」

多少驚きながらも、ウオズが投げつけたジカンデスピアを、デイクイドを片手で対処しながら、もう一方の片手で宙で浮かせ止めた。

「どけ！門矢士！」

そこへ既に、ゲイツがデイケイドの背後からジカンザックスを構えていた。

「目を覚ませ！ ソウゴオオオオ！」

『ギワギワシユート！』

ゲイツのジカンザックスから矢が放たれるも、オーマジオウは自分の周りをエネルギーの盾を展開して防ぐ。

「なっ!?？」

しかし、ゲイツが放った一撃は、オーマジオウの展開したバリアを貫いた。

デイケイドとジカンデスピアの対応で両腕を塞がれたオーマジオウに守る術はなく、ゲイツのジカンザックスによって放たれたエネルギーが顔面へと直撃し、オーマジオウはバランスを崩した。

「ヤアアアア！」

隙が出来たのを見て、デイケイドのライドブツカーから放たれた一撃がオーマジオウの顔面に直撃。

数々の乱闘を生き抜き、あらゆる世界で培った戦闘経験を持ち、不死身のアンデットをも撃破したデイケイドの攻撃により、オーマジオウのマスクが右側の上の一部を残し破壊された。

「……プリキュアは……諦めない！……」

同時に、五人のプリキュアのミライブレスからの光が周囲を照らし、クライを守るバリアを破壊した。

「ツッ!?」

驚いたクライは一瞬にして消え、ここから去った。

「はあ、あつ……あああ……」

一方で、マスクが破壊されたオーマジオウが膝を折る。

「ソウゴ君!」

アンジュがオーマジオウの前へと飛び込み、顔を近づける為に膝を折る。

「あ……あああ」

破壊された仮面から出る彼の顔には黒い影があり、血の様に赤く濡れた目には光が一切映らず、とても苦しい表情だった。

それを見たアンジュは……

「んっ……」

「ツッ!?」

「」「」「えっ!?」「」「」

「なっ!?」「」

(またか……)

その時、アンジュの行動を見たエール達は突然の事に啞然として一瞬だけ頭が真っ白になり、仮面の下で口をあんどりと開けるゲイツとウオズの横でデイケイドは、以前にも似たような光景があつたなと思ひ。同時に何故、この世界のライダーはプリキュアとこうなるんだと、若干死んだ目で呆れながら見つめていた。

そう……アンジュは仮面が壊れ、素顔で口が見えている彼にキスをしたのだ。

「……さあや……」

しばらくして、アンジュが離れてオーマジオウの素顔から苦しむ表情が消えると、そのまま彼に『ギユツ』と抱きつく。

「ソウゴ君！私は……ソウゴ君が好き！」

そして彼女はみんなが見ている前で思い切り、オーマジオウ……いや、ソウゴへ告白をした。

「ソウゴ君！負けないで！未来を信じて！」

「未来……」

「未来は無限な可能性がある！」

それでも、絶望の未来が待っていても、ソウゴ君や私達はどんな未来だって輝ける！

自分を信じて！自分の中にある明日への信じる心を、思い出して！」

「……………っ！」

——無限な可能性……それを俺は、みんなと沢山見てきた。

これまでの戦いで、ダメかと思つた時もあった。

それでも諦めなかつたのは、未来の可能性を信じていたから。

(そうだ……俺達の未来は……まだ、決まつてなんかいない……)

クライに見せられた絶望の未来……あれが俺達の進む未来。

でも、まだあの未来が来たわけじゃない。

そうだ。まだ、未来は……運命は決まつていない。

(俺は……俺は……)

ソウゴの体を纏つていたオーマジオウの鎧は、絶望で創られた呪縛の枷から解き放つたの様に体から外れ、変身前の姿へと戻した。

「ソウゴ君！」

変身解除し、倒れるソウゴをアンジユが支える。

「ん……さ……あや……」

「ソウゴ君……ううん。おかえりなさい！ソウゴ！」

初めて聞いた、今まで君づけでしか呼ばなかつたアンジユの、初めての呼び方だった。

「ごめん……俺……」

約束を破ってみんなに手を上げてしまった事に罪悪感を感じていると、そこへボロボロのゲイツも駆け寄ってきた。

「つたく、世話をやかせやがって……ソウゴ！」

ソウゴの肩を担ぎ起き上がらせた。その時、ソウゴ達の周りにトゲパワワで作られた円が現れた。

「ソウゴ！」

危機感を察知したゲイツは、クライが作り出したであろうトゲパワワの円から、ソウゴをエールのところまで押し放った。

「ゲイツ……」

エールの下へ飛ばされたソウゴは、穴となったところへ急いでみんなを救おうと手を伸ばす。

「さあや！ゲイツ！」

「ソウゴ！」

それに対してゲイツは自分のジクウドライバーを投げると、ソウゴはそのドライバーを受け取る。

「ゲイツ！」

「ソウゴ！ やって見せろ！ お前が望む未来をつ！」

「我が魔王！君が目指す王の道を！君らしく戦うんだっ！」

「ゲイツ……ウオズ」

ゲイツとウオズ——ソウゴの謝罪には一切耳を貸さず、自分の本当になりたい未来を
目指せと叫ぶ。

「何でもなれる……」

「何でも出来る……」

「輝く未来を……」

「抱きしめて……」

「負けないで……ソウゴとはなの二人なら、きつと……」

マシエリ、アムール、エトワール、アーラ、アンジュ——その事を教えてくれたから、
きつとはななら、みんなの未来を取り戻してくれる。そう信じながら、二人を応援した。

「みんな……」

すると穴が消えてしまい、みんなの姿も見えなくなってしまった。

「やっつと、僕達だけになったね」

クライが指を鳴らすと、周りが先までとは違ってソウゴが最初に捕らえられた花畑へ
となった。

「クライ……」

立ち上がったソウゴは、腰に装着されたオーマジオウドライバーを外し、後ろへ投げ捨てる。

「……何故、棄てるんだい」

「あれは、俺が望んだ力じゃない！」

何故捨てるのか？何故ならあの力は、自分が本当に目指す未来への力ではないからだ。

「……俺は世界を……みんなの進むべき明日を守る！」

皆は未来への恐怖心で忘れていた、自分に最も大切な事を、思い出させてくれた。

それは自分がどうしても守りたいもの、みんなとこれからも一緒に歩いていく未来を守る、その志を。

「それは、自分が王としてか？」

「違う！王としてじゃない！」

俺は……一人の仮面ライダー……

仮面ライダージオウ！時見ソウゴとして戦う！」

今ここで彼と戦う理由は、王でもなければ、オーマジオウとしてでもない。一人の仮面ライダーとしてクライと戦う。

その為に、もう自分はその力を使わない。

ただ暴力しか振るうことのできない力など、一生いらぬ。

『ジクウドライダー!!』

ソウゴはゲイツから託されたジクウドライダーを腰へと装着。

『ジオウ! グランドジオウ!』

ジオウウオッチとグランドジオウウオッチを起動させると、そのまま二つのウオッチをスロットへと装填した。

『へポオオーン! パアアアア!』アドベント! COMPLETE! ターンアップ!
 へ! イーン! CHANGGE BEE TLE! ソードフォーム! ウェイクアップ! カメ
 ンライド! サイクロン! ジョーカー! タカ・トラ・バッタ! 3・2・1! シャバドウビ
 タッチヘンシーン! ソイヤッ! ドライブ! カイガン! レベルアップ! ベストマッチ!
 ライダータイム……!』

ドライバーのロックを解除すると、地中から巨大な黄金の時計台が後ろに現れ、その周りには歴代ライダーの石像が出現した。

だが音声が続けると象の表層が剥がれ、20の仮面ライダーたちの姿が現れる。

「変身!!?」

『グランドタイム! クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド! 響鬼・カブト・電王
 ! キバ・デイクエイド! ダブル! オーズ! フォーゼ! ウィザード! 鎧武・ドラーイーブ

！ゴースト！エグゼイド！ビ・ル・ドー！

祝え！仮面ライダー!!？グ・ラ・ン・ド！ジオウ！」

ドライバーを回転させるとライダー達が黄金のフレームに取り込まれ、ジオウの身体に張り付くように装着されてアーマーが形成。開いたフレームからライダー達が現れるとそれぞれの決めポーズをとって固定され、最後に頭頂部にジオウが固定されると『ライダー』のインジケーションアイがセットされ、グランドジオウへと変身完了した。

「行こう。エール」

「うん！」

エールはジオウの手を取ってお互いに立ち上がり、マスタークライとの決戦を始めようとしていた。

次回！Re・HUGつとジオウ！

第67話 2019： トウモロータイム！約束した未来へ！

第67話 2068： トウモロータイム！約束した未来へ！

オーマジオウとなったソウゴはクライと共に世界から時を止めようとし、怒りに身を任せスウォルツの命を奪おうとしたが、門矢士とゲイツ、アンジュにより、ソウゴはオーマジオウから元の自分を取り戻す。

しかし、その為にアンジュ達はクライによつて捕らえられてしまった。

「……………」

今は一面が花畑に囲まれた場所へと変わり、ここにいるのはゲイツから託されたジクウドライバーでグランドジオウへと再び変身したジオウ、キュアエール、クライ、捕らえられたはぐたんの四人だけだった。

「もう一度聞こう。世界は時を止め、民主を守った君達の仲間はどういない」

既に、この中の下には力尽きたアンジュ達やゲイツ、ウオズ、デイケイドがトゲパワワの空間に捕らえられ。外では晴夜、ツクヨミ、ハリーの三人はまだ何とか起き上がっているが、同じようにクライアス社元社員達が力尽きて倒れている。

「それでも、まだ君達は明日を信じると言うのか？」

「諦めない」

クライが怪訝そうな様子で尋ねると、エールが諦めないと答え、それにジオウも頷いて便乗する。

「ママ……ソウギョ……」

「みんなと約束した明日を取り戻す!」

心配そうに見つめるはぐたんを安心させようと、エールとジオウは諦めないとクライに告げる。

「そうか……なら仕方ない」

『マスター、クライ!』

クライは二つに分解したウォッチを両側のスロットへ装填すると、ドライバーのロツクを解除、地中から巨大な紫の忌々しい見た目の時計台が大量のトゲパワワを放出させながら出現する。

「変……身」

ドライバーを回転させると『ライダー』の文字がトゲパワワで形作られて射出、無数の赤黒い帯状のエフェクトがクライを包みながら、その姿を変える。

『パーフェクトタイム!仮面ライダー!ライダー!マスター!ク・ラ・イク!』

マスター、クライへと変身を完了し、向こうも戦う意思を示した。

「ソウゴ」

「うん。行こう！」

二人は頷き、お互いに走り出した。

「ハアアア！」

二人は同時にパンチを繰り出し、クライはそれを腕を構えて防御した。

今、未来を掛けた最後の戦いの開始が宣言された。

「ヤアアア！」

「何故分らない」

エールが先に仕掛けるが、トゲパワワの強固な守りに防がれる。

『ライドハイセイバー！』

ジオウがライドハイセイバーを待ち構えると、時計の針『ハンドセレクター』を回す。

『ハイ！クウガ！』

クウガと音声が鳴ると、ジオウは更にクウガウォッチを取り出して装着させた。

『クウガ！クウガ！スクランブルタイムブ레이크！』

音声が鳴ったのを確認すると、ライドハイセイバーからクウガの紋章を放つ。

だがクライは落ち着いた様子を見せたまま、トゲパワワによって作られたエネルギーの塊を飛ばして紋章にぶつけ、紋章を破壊するとそのまま勢いを殺さぬままジオウへと

放たれる。

「っ!? うわぁ!」

そのエネルギー塊を受けたジオウは、思わずライドヘイセイバーを手から落とされてしまう。

「はぁぁ!」

振り返らずジオウはパンチをクライに繰り出す。クライは腕を前に出してジオウのパンチをガードする。

「ヤアアア!」

ジオウがクライから離れるとエールと入れ替わり、エールのキックがクライのバランスを崩した。

『オーズ!』

それを見たジオウはオーズのレリーフに触り、オーズ・ダジャルコンボを召喚する。

『スキヤニングチャージ!』

「セイヤヤヤ!」

「……!」

オーズのダジャルコンボによるライダーキック『プロミネンスドロップ』が、不意打ちで食らったクライを吹き飛ばす。

『W! ファイズ!』

今度は上空と地上からW・サイクロンジョーカーエクストリーム、ファイズ・ブラスターフォームが現れた。

「タアア!」

「オラアアアアア!」

ファイズブラスタールとプリズムソードによる斬撃がクライに直撃した。

『キバ! 龍騎!』

「ハアアア!」

最後にザンバットソード、ドラグセイバーによる剣撃を繰り出す。

〈パアン!〉

「!?」

ジオウが繰り出そうとしたその時、クライがパーフェクトジカンセイバーで斬撃を受け止めていた為、ジオウは直ぐにクライから離れる。

「はあ、はあ……」

これだけ攻めているが、クライは疲れた様子も見せない。

それどころか、ジオウが召喚したライダー達や武器からの攻撃が効いている様子もない。

「やっぱり、ライダーの力が通じない……」

やはり、マスタークライとなったクライの前には、グランドジオウによって召喚された程度のライダーの力では通じない。

「君には、もう一度与える必要があるね」

クライは持っていた本のページを開くと、そこからトゲパワワが現れて人型のモノを形作る。

現れたのは、仮面ライダーネガ電王、仮面ライダーエクストリーマー、ゲムデウスクロノス、仮面ライダーエピオンと四人のダークライダーだった。

「……ハアアア!」

ジオウは呼び出されたライダー達に怯まず、召喚したライダー達共に立ち向かう。

「人は欲望は尽きない!」

クライの召喚したライダーは一斉にジオウ達に向けて技を放つ。

「うわああああ!」

「ぐわああああ!」

「あつ!?」

クライが召喚したダークライダーは、ジオウの呼び出したライダー達を簡単に倒して消滅させてしまう。

「どれだけ理想を掲げても！」

「そんな事は！」

『ミステリージオウ！』

グランドジオウウオッチからジオウミステリーのウオッチを差し替えたジオウは、ロックを解除したドライバーを回す。

すると前の方から、背部には機械仕掛けの羽が装備され、その手に二本剣を持ったアーマーが出現、そのままジオウの体に纏われる。

『アーマータイム！歴史の全てを知る王々！仮面ライダー！ジオウミステリ々々！フ・リ・ズ！』

ミステリーフリーズフォームへとフォームチェンジすると、ダークライダーを振り切ってフリーズドラゴンバスターで攻撃に出る。

「世界からトゲパワワが消えることはない！」

クライはパーフェクトジカンセイバーで対抗し、お互いにぶつけ合いながら火花を散らし続ける。

「何故分らない！」

「!?？」

紫の斬撃を飛ばしたクライに、ジオウはミステリーフレア的能力で攻撃を未来へ飛ば

して攻撃を無効化させる。

「だけどー!アスパワワで消えることはない!」

そこから反撃に出たジオウが、攻撃を繰り返そうとした。

『ハアアアアーツ!!』

「うわああああああ!」

しかし、ダークライダー達がジオウに一斉に怒涛の攻撃を繰り返す。

「あああ……」

ほぼ不意打ちに近い状態で攻撃を受けたジオウは強制変身解除となり、ソウゴが倒れる。

「ソウギョー!」

「ソウゴー!」

何とかここまで喰らい付いてきたが、グランドジオウとミステリージオウ……彼らの持つ二つのジオウの最大戦力すらマスタークライの力には通用せず。それどころか戦いが成立しているのかどうかさえ怪しくなり、ソウゴの脳裏には不安しか過ぎらなかった。

「ソウゴ。大丈夫?」

エールが倒れるソウゴに駆け寄る。

「うん……大丈夫」

何とか、ソウゴはエールに介抱され起き上がろうと試みたが、立つのは困難な状態だった。

「ソウゴの言う通りだよ。アスパワワだって無くならない！そして！」

エールがクライにパンチを繰り出し、クライの持つ本を手から放させる。

「!?？」

「それに、私は一人じゃない！」

エールが一人でクライに立ち向かう。

「はな！」

グランドジオウの力でさえ敵わなかったのに、今のエールでは直ぐにやられてしまう。本能的に察知したソウゴはもう一度グランドジオウへと変身しようと試みるが、ダークライダー達が彼を囲み、エールの加勢に行かせないように妨害する。

エールは一人でクライに攻撃を繰り出し続けるが、クライは簡単に躲し続ける。

「甘いな！」

クライはエールのパンチを掴み、背後に回る。

「民主を守るために戦い続けられ！君は傷つき！汚れていく！」

クライはエールを抱きしめると、まるでこれからのエールの未来を案じているかの様

にそう告げた。

「二人で生きよう。傷つける者のいない世界で、終わらぬ永遠で!」

「永遠なんていらぬ!」

エールはすぐに振り解き、クライから離れる。

「何故分らない!」

クライの手から落ちた本からトゲパワワのエネルギーが現れると、追尾弾の様に向かって行き、エールに直撃した。

「はな!」

「この世界の抱える残酷さを!」

クライはパーフェクトジカンセイバーのフェイスを再び変えると、フェイス文字が『パーフェクトセイバー』と変わる。

『パーフェクトスラッシュ!』

剣から浮かび出した時計の文字盤を模した忌々しい紫色の斬撃をエールに向けて飛ばす。

「夢を見るのは結構!だが、叶わぬ夢は綺麗事だ」

「そんな事は……」

ソウゴは綺麗事ではないと言おうとするが、しかし…

「はつきり言うよ。オーマジオウの力を使わない限り、君は僕に勝てない」
「うっ……（オーマジオウの『…力』）」

クライに言われソウゴは顔を歪めながら、後ろに投げ捨てたオーマジオウドライバーに振り向く。

もう一度、オーマジオウになればクライに…

「綺麗事でもいい……それでも、みんなと明日を信じれば奇跡が……」
「どれだけ願っても！」

そんなソウゴの煩惱を遮る様にエールが言いかけると、クライは声を張り上げながら頭上から雷を放ち、エールに直撃させた。

「世界は変わらない！ただ異端として排除されるだけだ！」

クライに攻撃により、エールも変身解除となって倒れてしまう。

「はな！」

（いや……ダメだ！今の俺じゃあ……先みたい……）」

今のままでは、オーマジオウの力を使いこなせないかもしれない。

「……フレ……フレ……ソウギョ……」

「はぐたん……」

「フレフレ！ソウギョ！フレフレ！ソウギョ！」

「はぐたん……うっ、うっ……」

はぐたんの応援を背負いながら力を振り絞り、起き上がろうとした。

『君はどうしたい……』

「えっ?」

その時。どこからか男の人のような声が聞こえた。

「えっ?えっ?どこから?」

周りを見回すが、ここにいるのは自分以外だとはなとはぐたん、クライの三人だけの筈で、他には誰もいない。

「俺……耳がどうかしたのかな?……あれ?」

こんな時に幻聴が聞こえたというか事実には、思わず自分の耳を疑いながら顔を上げると、風景が一瞬にして変わる。

「ここは……」

そこは、暗くて何も無い空間だった。

「もう一度聞くよ?君はどうしたい?」

声の聞こえた方を振り返ると、そこだけ明かりが強くて顔は見えないが、誰か立っている事だけは分かった。

「誰なの?」

「君は、どうしたいんだい？」

ソウゴは目の前の人物が誰なのか問うが、その人物はソウゴの質問には一切答えず、逆に自身が何をどうしたいのかと、繰り返して問いかけていた。

「どうしたいって……？」

「どんな未来を描いているんだ。どんな姿になりたいんだ」

「どんな未来……」

「どんな未来——？」

俺の望む未来は、学園、クジゴジ堂、ビューティハリ……

みんなと一緒に話して、笑って、食べたり過ごした、何でもないあの日常。

「俺がなりたいたい未来……」

色々考えていると、ソウゴは思い浮かべた。

俺のなりたいたい未来……目標である王様になる夢も変わらない。

でも、それ以上に今一番なりたいたい未来とは——

「みんなと一緒に歩んでいく未来！」

この一年の中で大切なものが一杯出来て、みんなと色々なものを見て、一緒に歩んできた。

これから、みんなと一緒に歩んでいきたい。

「そのために今、俺がなりたいたい姿は……約束した未来を掴める姿!」

そう叫び、ソウゴは一つのブランクウォッチを取り出した。

そのウォッチは、あの時キュアトゥモローから授かったウォッチだった。

「そうだよ」

「えっ?」

するとその人物は、ソウゴが自身の頭と心に纏わりついていた「運命に囚われた答え」を振り払い、彼が辿り着いた「本当の答え」に満足したのか、何処と無く嬉しそうに話しかける。

「未来を決めるのは、運命なんかじゃない。」

——その未来を作りたい、その強い思いが必要なんだ」

……嗚呼、そうだ。

それは、ずっと自分が言っていたことだ。

未来に、運命なんてものはない。

なんでかって?だって未来は、誰にもわからないから。

「うん……そうだね」

ソウゴは目を瞑る。

この人のおかげで、忘れていた事を、自分の原点オリジンを思い出した。

ずっと敵だけでなく仲間からも、オーマジオウになって時を止めたのは自分じゃないと聞きかされ、不安で迷ったりして、本当の自分を見失っていた。

「あり……あれ？」

ありがとうとお礼を言おうとすると、既に元の場所へと戻っており、声をかけてくれた人もいなくなっていた。

「……」

手に握られていたウオッチを見つめると、ソウゴは立ち上がる。

「クライ……あんたが、俺に見せたみんなの未来……」

クライはそう語りかけると、ソウゴの前に、はな、ほまれ、えみる、ことりにそして、さあや……あの絶望で悲劇しかない光景だった未来を見せられた。

「あの未来が来るのかもしれない」

「そう。あれが君達の未来だ」

「でも……そうじゃない未来だってあるかもしれない」

「何……？」

「未来は一つだけじゃない」

未来は、一つとは限らない。

門矢士や晴夜が言う無数の平行世界があるように、未来だって無数にあるはず。

「それはいい未来とは限らない、悲しい未来だってある。

それでも、どんな未来だって前を進んで行けば、きっと未来も輝ける!人には運命
だつて変える力がある!」

「……そんな未来は出来ない……決してね」

クライはソウゴの考えを否定する。

それでも、今のソウゴは揺るがない。

もうここには、彼の絶望と誘惑に塗れた言葉に振り回されていた、
「普通の中学生」
は居ない。

「何でも出来る!何でもなれる!……でしょ?はな」

「ソウゴ……うん!」

ソウゴがいつもの優しい笑顔からはなの口癖を言い、はなが笑つて返すとはぐたんか
らも笑顔が戻る。

「だから、俺は……未来を信じる!」

ソウゴはブランクウオツチを掲げる。

「ソウギョ〜!」

「行くよ!はぐたん!」

「はぎゅ〜!」

ソウゴがブランクウオッチをはぐたんに見せ、はぐたんが『はぎゆく』と叫ぶと、はぐたんの体が光り出し。彼女の光に共鳴するかのようにならぶブランクウオッチが光を放ち、その形を変える。

「!?」

光が消えるとソウゴの手には、はぐたん——キュアトウモロローから受け取ったブランクウオッチが変化しており、歯車を模した銀の彫刻が施されている青いウエイクベセルの中に新たなジオウの顔が刻まれたウオッチがあった。

『アーサーセイバー!』

ウオッチのウエイクベセルを回転させて起動スイッチを押すと、『アーサーセイバー』と発声された音声と共にドライバーへ装填し、ドライバーのロックを解除。普段構えるポーズを取ると、ソウゴの背後から女神らしき幻……マザーが現れた。

「変身!」

『トウモロロータイム!』

ドライバーを回すとジオウへと変身し、マザーの手はジオウをハグする様に包み込み、そのままマザーの強烈な光がジオウの姿を変える。

そして、光が収まると“それ”が現れた。

『祝福せよ!約束された勝利を求めて!仮面ライダーくくジオウ!ア〜サ〜!』

現れたジオウの姿は、今までの姿とはまるで違っていた。

仮面はグラウンドジオウを模している物になっていて、肩と胸部のアーマーは、これからの明るい未来を表している様な白銀になっていて。

胸部アーマーには、全ての絶望を燃やし尽くしてくれそうな黄金の炎のデザインがなされた装飾があつた。

更にアンダースーツは銀色、頭部にはこれまでのジオウには無かつた王冠が、まるで本当の意味で王である事が認められたかの様に装備してあり。

背中と腰にはそれぞれ、澄んだ青空の様に青いマントとローブを装着していた。

「ジオウ……アーサー……」

「アーサー……」

『ジオウアーサー』と名付けられたジオウ……

その姿は、先程までのグラウンドジオウ、ミステリージオウ、オーマジオウとも違う。

その姿は、まるでいくつもの神話や伝説と言つた中に現れる、王の姿を纏うような感じとなったのでは?と思わせるかのような印象があつた。

「……………これが…………」

ジオウは自分の姿に少し驚くが、すぐにダークライダーへと意識を戻す。

「……………行くんだ」

クライの命令でネガ電王が走り出し、ジオウに仕掛ける。

「ッ……!」

すると、ジオウの周りに黄金の風のようなものが現れ、その風は防御壁のようにジオウを守る。

「!?」

「ハア!」

その風はジオウの下から離れると、一瞬でネガ電王の全体を包む。

「オシマイだ〜!」

風に包まれるとネガ電王が風を鎌鼬の様に受け続け、浄化されていった。

それを見て、今度はエクストリーマーがジオウの背後から現れた。

その時、ジオウの仮面の針が光り、ジオウの頭にいくつもの未来が見えた。

攻撃を避けて、次の行動を更にどう避けて、どう次に有効な一打を放つのか。

そんな「何千、何万通りの未来」の選択肢が、瞬時に流れ込んだ。

「っ!?」

ジオウはその中で見た未来から冷静に、自身にとって「最高最適の選択」を選ぶと光の粒子となり、一瞬のうちにエクストリーマーの背後へ回る。

「ハアア!」

彼の背後へと躲したジオウはサイキョーギレードを一振りして、エクストリーマーを真っ二つに切り裂き、エクストリーマーはオシマイダーへと戻ると浄化された。

『ポーズ!』

エクストリーマーが浄化され、動きが止まったのを見て今度はゲムデウスクロノスがベルトの能力を使い、時間を止める。

クロノスは止まったジオウに近づき、動けないのを見て剣を振り上げる。

〈ガシッ!〉

「ッ!?」

だかなんと、自身の「ポーズ」で動けない筈のジオウは片手でジオウは、振り返る事なくゲムデウスクロノスの剣を受け止めた。

「いや、自身の剣を受け止めた事実よりも、どうして止まった時の中を動けたのだ。

『ライダー斬り!』

そんなクロノスの疑問は解けることはなく、ジオウの持つサイキョーギレードの刀身に黄金色の光が纏われるとゲムデウスクロノスを切り裂き、そのまま浄化される。

「うっ!」

次にはエピオンがブラットソードをジオウに炸裂させ、ジオウは無防備に受け続ける。

「ソウゴ（ソウギョ）！」

さらにエピオンの一撃が繰り出され、ジオウが吹き飛ばされる。

「わかったかい。やはり……!?？」

しかし、攻撃を受け続けたジオウは何事もなかったかのように起き上がった。しかも、エピオンから受けた攻撃の跡は、霧の様に掻き消えていた。

「これは……」

『ジオウサイキョウ！』

サイキョーギレードのジオウのフェイスの文字が “ジオウサイキョウ” へ変わる。

『霸王斬り！』

そのまま振り切る “霸王斬り” は、以前とは比較にならない一撃だった。巨大な斬撃となつて放たれた霸王斬りはエピオンを切り裂く。

「オシマイダ〜！」

エピオンも浄化され、クライによつて呼び出されたダーククライダーは全て一掃された。

「凄い……」

「スゴイ〜！ソウギョ〜！」

「これが、このウオッチの……でも、この感じ……なんだろう」

まるで、体を優しく抱きめしめて貰えているような温もりを、この姿になつてから強く感じていた。

「ひよつとして、マザー?」

もしかしてと、この感じはキュアトゥモロー……いや、はぐたんが持つマザーの力ではかと思ひ始める。

「その通りだよ」

クライはジオウの前へと現れた。

「まさか、君がマザーの力を受け継ぐとは……」

「これがマザー……」

「全く持って不愉快だ」

クライは不機嫌そうにジオウがマザーの力を受け継いだのだと知ると、パーフェクトジカンセイバーを繰り出し、ジオウはジカンギレードで受け止める。

「くっ……」

ジオウが払い除けると黄金の風を放ち、対するクライはトゲパワワのエネルギーを放つ。しかし、ジオウの風はトゲパワワを簡単に浄化させる。

「その力を捨てるんだ。それは君を不幸にする」

「不幸……?」

「そうだ」

ジオウがジカンギレードとサイキョーギレードを合体し、サイキョージカンギレードにさせると、お互いの剣が火花を散らし、強大な雷光と衝撃波を発生させながらぶつけ合う。

「言つたはずだ！仮面ライダーとプリキュアの戦いは無意味だ！

いくら戦つても、民衆は君達の事など何一つ考えず、すぐに自ら愚かに破滅する！」
クライがトゲパワワのエネルギー弾を放つが、ジオウはまた風を生み出し防ぐ。

「それでいいのか！」

クライがパーフェクトジカンセイバーを振るい、ジオウはサイキョージカンギレードでそれを受け止める。

「そんな無意味な世界で、君は王となるのかい？」

君がなる王は、世界から時を止め、永遠の幸せを作り、無意味な戦いからライダーやプリキュアを解放する事だ」

クライが腕と剣に宿るトゲパワワを右肩のマントの機能で増幅させると、ジオウを押し込もうとする。

「それは違う！」

彼に対抗する様にジオウが押し返そうと、クライの言葉を根本から否定する様に叫

ぶ。

「お前の理屈だけで！無意味とか言うな！」

反対に今度はジオウが押し始める。

「俺も！はなや！ゲイツにさあや！ほまれ、えみるちゃんにルーラー！ことりちゃんとウオズ！他のライダーや他のプリキユアのみんな！守りたいもの為に必死に戦つていた！それを無意味なんて言うな！」

クライにそう叫び、彼の攻撃を押し返した。

「ハアアア！」

押し返されバランスを崩したクライにサイキョージカンギレードによる攻撃でクライを吹き飛ばし、お互いに距離を取る。

「何故……」

「えっ？」

「何故だい……？僕が描いた世界の結末が正しかった」

「未来に正しいなんてないよ」

クライはそれ以上ジオウの声を聞きたくないのか、マスタークライの力の真髄である背中の懐中時計『エンド・オブ・マスタープレジデント』を操作して、自身の周りの時を、この世界の時を止める。

それにより、世界は灰色に染まり、はなも、はぐたんも、光も、風や空気も、全ての動きが等しく停止した。

「未来はわからないし、どんな自分なってるかなんてわからない。でも……」

——それでも、ジオウの語りは止まらない。

「未来が絶望だつて決めるの早いよー」

仮面の下で忌々しく顔を歪ませたクライは、これ以上の時間停止はエネルギーの無駄だと判断し、時間停止を解除。

今度は時を『ジオウがジオウアーサーの力を手にする前の時間』までに巻き戻そうとする。

しかし、クライが時を巻き戻している最中にジオウの音速を超える攻撃を受け、時間を逆行を中断させられる。

「それは、これから辛いことだつて一杯あるかもしれない。」

けど、乗り越えれば俺達の未来はきつと輝ける！」

ならばと思つたクライは、自分以外の時の流れを遅くさせ、逆に自分の時の流れを早くさせてジオウに斬りかかった。

だが、ジオウはそんなの関係ないと言わんばかりに、時計の針を輝かせながらカウンターを食らわせ、時間減速と時間加速を解除させた。

「うぐう!……不可能だ……そんな未来は……」

「ううん!なんか……すげえいける気がする!」

「私も……諦めない」

「……君はもう、プリキュアではない」

それを聞いたクライは苦し紛れにそう言うが、それでもはなの語りは止まらない。

「私には何も無いと思っていた…… “なんでプリキュアになれたんだろう” って……でも違った」

更に顔の歪みを強くさせたクライが、時間を “彼女の決意とその言葉” 諸共消し飛ばそうとする。

だがジオウは『話はちゃんと聞け』と言わんばかりに斬りかかり、彼が発動させた時間飛ばしを瞬時に解除させる。

「超イケてるお姉さん……私のなりたい、私……」

それは誰でもない。自分で決めることだったなって」

自身がプリキュアになれた理由を察したことで、フラフラではあるが、はなも起き上がった。

「はぐたんが来てくれて、ソウゴと出会って、みんなと出会って、大勢の人と出会えた……みんなすごい人だなくって。でも……」

それは、それぞれ違った人生と生き方を過ごしたみんな、ゲイツもさあや、ほまれ、えみる、ルールー、ツクヨミ、ハリー、ことりや会ってきた人達はみんな迷いながら生きていた。

「そうだ。生きている限り苦しみは続く」

「そうかもしれない」

「ソウゴ」

「生きるのは苦しい……人生は思い通りに進まない事だつてある」

「めちよつくな事、一杯あるかもしれない……」

「でも、だから、私は応援したい。フレフレ！その気持ちを一人じゃないって抱きしめたい」

「綺麗事だ！」

クライがはなにまたしても、同じようなトゲパワワのエネルギーを飛ばす。

「くう！！？」

ジオウが黄金の風をはなの周りに作り出し、はなを守る。

「まっすぐに理想を語る君のことを冷笑する！嘲笑う！バカにする！」

「それでも、例えバカにされたって、私は何度でも立ち上がる！」

はなは強い意志と共に立ち上がった。

「立ち上がったって、みんなを応援する!フレフレ私!

これが……これが……私のなりたい野乃は nada ああ あくツ!!」

はなの体が光りだすと、再びプリキュアへと姿を変える。

「輝く未来を抱きしめて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「エール!」

「ぶいきゅあ〜!」

ジオウがエールの隣に並び立つ。

「……どうして……何故分らないーッ!」

『ジカンセイバーシヨット!』

怒りを感じているかのようにも思える叫び声を上げるクライはジカンセイバーシヨットを出現させると、パーフェクトジカンセイバーをジオウのサイキョーギレードと同じように合体させてパーフェクトジカンセイバーシヨットにする。

『パーフェクトギリギリセイバースラッシュユ!』

白と黒の竜巻を纏いながら『パーフェクトセイバー』という文字を浮かべ、ジオウとエールに向けて斬撃が放たれた。

『アーサーフィンッシュタイム!』

それを見たジオウはサイキョージカンギレードのジオウフェイス『ギレードキャリ

バー』を取り外すと、ウオツチの起動スイッチを押し、ジクウドライバーのロックを解除する。

そしてドライバーを回すと、直ぐ様アーサーセイバードライドウオツチをドライバークから外し、サイキョージカングレードに装填させる。

『アーサーセイバー!』

ウオツチを装填させたサイキョージカングレードを天へと掲げると、サイキョージカングレードの剣がかつてないほどに黄金の輝きを放ち、天にまで届く様な光の竜巻が生まれ、

「ハアアアアアアア!」

『フューチャーギリギリスラッシュユ!』

ジオウの繰り出されたサイキョージカングレードによる攻撃と、クライのパーフェクトジカンセイバーショットによる攻撃がぶつかり合う。

「ハアアア!」

「……っ!」

すると、クライの放った技がジオウの光により掻き消える。そのまま一直線にクライに放たれた。

「ッ!? うおお……」

クライは紙一重で躲すとそこへ、エールがミライブレスを召喚して現れた。

それと連動するように、捕えられたアンジュ達のミライブレスも光り、エールに集まる。

「ハアアア!」

ミライブレスが放たれたエネルギーはクライの持つ本を吹き飛ばし破壊した。

「ママ〜!」

トゲパワワに捕らえられたはぐたんが解放された。

「はぐたん!」

エールは自分の胸に目掛けて飛んで来たはぐたんを優しく抱きしめる。

「ママ!ソウギョ!」

「お帰り。はぐたん」

はぐたんを無事に取り戻すと、ジオウとエールはお互いに手を上げてハイタッチする。

すると、三人から巨大なアスパワワが溢れ出した。

そのアスパワワは徐々に広がり、はくぐみ市を包み、最後には地球上全てをアスパワワで包む。

「めっちゃイケてる!」

「はぎゅー！」

「うん！」

その影響はいい方向へと現れた。はくぐみ市の人達は時間を取り戻し、元に戻っている。

「そんな……」

クライアス社内部から外のアスパワワを見ていたクライは愕然と膝を折る。

「みんなの未来！」

「「「私達を守る！」」」」

そこへ、捕まっていたアンジュ達が現れ、後ろにはゲイツ、ウオズ、デイケイドも現れた。

「「「輝く未来を、抱き締めて！」」」」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「「みんな大好き！愛のプリキュア！」」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアラー！」

「「「HUGっとープリキュア!」」」

エール達がいつもの名乗り上げをすると、ゲイツ達はジオウの新たな姿に驚く。

「ソウゴ……」

「それが、お前の答えで選んだ姿か?」

ディケイドの問いにジオウは頷く。これが自分なりたいもの答えだと言わんばかりに。

一方のウオズは、遂にソウゴが「自分が心の奥底から祝いたいと思える姿」に成ったのだと知り、ザワザワとしていた。

「祝え!束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流、新たなる明日を掴む時の王者!その名も、仮面ライダージオウ・アースフォーム!未来を守護する少女の力を継承した瞬間である!」

そして遂に、ウオズがいつもの祝いの言葉を述べる。

すると、ジオウはみんなに近づく。

「みんな……ごめんなさい!」

ジオウは一度、みんなを裏切り傷つけたことに謝罪する為に頭を下げる。

だがアンジュ達は「ミリも気にした様子を見せず、それどころか「自分達は当然の事をしたまでだ」と言わんばかりに笑みを浮かべる。

「ソウゴさん。気にしないでください！」

「誰だって間違えることだってあります」

「ソウゴが間違ったのなら、私達がソウゴを正しい道に戻す」

「あなたが私にしてくれたように」

「みんな……」

「ソウゴ……」

ジオウはアーラとマシエリ、エトワール、アムールの言葉に仮面の下で目を潤せていると、アンジュがジオウに近づこうと試みる。

「どうしても僕と君達は、わかり合えない運命のようだな」

だがしかし、その空気を壊す様にクライから声が聞こえ、全員がそつちに振り向く。

「クライ……俺、あんたが未来を怖がってるように思うんだけど」

「……」

「笑っていても、いつもあなたは泣いているみたい」

ジオウとエールはクライから感じるものを言うと、クライはジクウドライバーを外して変身を解く。

「ハッハッハッ………僕の間はもう動かない」

クライが自ら強大なトゲパワーを作り出す。

「やめて!」

エールは直ぐに止めようとするが、時すでに遅く。クライは自らにそのトゲパワワを生み出し、姿を変貌させる。

「……ああ」

その姿には、エールも思わず言葉を失いそうだった。

「急げ!早くここを出て止めなければ!」

ウオズの指示で全員外へ出ようとする。

「ソウゴ?」

だがエールは、ソウゴが一人ジオウアースーから変身解除して立ちすくんでいた事に気付く。そして、ソウゴはエールに振り返る。

「エール。これ」

「それ……」

ソウゴがエールに渡そうとしたのは、オーマジオウドライバーだった。

「オーマジオウのベルト」

「エールが持つてて」

何とソウゴはエールに、このベルトを預けようとしていた。

「えっ?」

「エール……うん。はななら、これを正しく使える。そんな気がする」

このベルトには、もしかしたら最高最善の力を持つ、本当の力が残っている気がしていた。

だが今の自分では、その力は引き出せていなかった。

でも、はなにならばと思ったソウゴは、彼女にベルトを渡す。

「……うん」

エールは決意し、そのベルトを受け取ったのだった。

「あと、みんなに言っというて……」

必ず……帰ってくる」

「うん。絶対だよ」

「うん」

ソウゴとエール、はぐたんは手を上げてハイタッチすると、外へと走る。

すると、ソウゴの前に一つの時のゲートが現れた。

「よし……」

ソウゴはゲートを迷わず潜り抜けた。

そのゲートを潜るとそこは荒野で何も無い……いや、一つだけあった。

「時見ソウゴ初変身の像……」

そこにはビルドからクウガと18人の仮面ライダーの像に囲まれて、自分の変身するポーズの像が立っている。初めて未来に来た時に来た場所だった。

「来たか……」

そこにポツンと置かれた御簾……未来の自分と初めて対談した、あの時と似ている光景だった。

「俺を呼んだわけは？」

そう、ここにいるのは未来の自分……オーマジオウとなった未来だった。

「お前が私の知りえなかった姿となった。それを確かめるため」

ジオウアースラーの事だと思い、ソウゴはそのウオッチを見せる。

「……ねえ、聞かせて。本当に君は未来の俺なの？」

それと同時に、彼はずっと疑問に思っていたことを目の前の男に問い質す。

ここにいるオーマジオウは、本当に未来の自分なのかと……

次回! Re. HUGつとジオウ!

第68話 2068： 最強のマザー降臨!最後の対決、魔王VS魔王!

第68話 2068：最強のマザー降臨！最後の対決、魔王VS魔王！

マスタークライとの戦いの中、ソウゴはトウモロローから授かったウオッチを使いマザーの力を受け継いだ姿。ジオウ・アースーフォームへと覚醒した。

そして彼はエールにオーマジオウドライバーを預け、未来へと繋がるゲートを潜り、オーマジオウと再び対面した。

「ねえ、聞かせて。本当に君は未来の俺なの？」

ソウゴはずっと、疑問に思っていた。ここにいるオーマジオウは、本当に未来の自分なのかと……

そしてそれを聞いたオーマジオウたる男は、眉を顰めながら睨みつける。

「……何故そう思う？」

「なんとなくだけど……あんたと俺は同じようで、同じじゃない……そんな気がする」

この違和感は、自分が龍騎ウオッチとブレイドウオッチを手に入れて、海東大樹によつて祝電として自分達に顔合わせした時から感じていた。

始めて出会ったときは間違いなく自分だと感じていたが、再度会った時は心の奥で違

和感が発生していた。

「だけど俺は、この時の違和感を気のせいだと切り捨てていた。」

しかし、グランドジオウの力を始めて手にしてから会った時、オーマジオウの力がどういうものなのかを問いかけていた時、その時の違和感が何度も襲った。

それ故に、少なくとも初めて顔合わせした時以外のオーマジオウは別人なんじゃないかと、そんな気がしていた。

『——オーマジオウは、本当に俺なの?』

そう思ったからこそ、俺はかつてトラウムに『オーマジオウが本当に自分なのか』と問いかけた。

そして彼の答えは、『分からない』。

つまり、2068年——此処に居るオーマジオウが必ず自分であるとは限らないという事がわかった。

——だけどこの人と俺は、たぶん同じようにライダーの力を集めてきたはず。

民を幸せにする為に、最高最善の魔王になる為に。

それは俺は違わない、全く同じだ。

——でも、この人と俺は似てるようで違う。

だからこそ、違和感を感じた。

「だから、俺とあんたは違う」

「……」

御簾の奥で顔を隠している男に、自分とは違うと言い放つ。

すると御簾の中にいる男が立ち上がり、腰に装着している黄金のドライバーを見せてける。

「……その答えを知りたければ、私を倒してみろ」

「……」

ソウゴが左足を少し下げて構えると同時に、御簾から背後の地面に巨大で赤黒く燃え盛る時計が大地を裂きながら出現した。

「……変身……」

『祝福の刻！ 最高！最善！最大！最強王！ 逢魔時王！』

オーマジオウ

掛け声と共にドライバーの両端を押しこむと『ライダー』の文字が溶岩で満たされ射出、無数の赤黒い帯状を包み込んで御簾を破壊すると、爆炎から“それ”は現れた。

最高最善の力を持つ、最強にして無敵と呼べる魔王のライダー・オーマジオウが。

『ジクウドライバー！』

ソウゴはジクウドライバーを装着し、ジオウウオッチとアーサーセイバーウオッチを取り出して回転させ、スイッチを押す。

『ジオウ！アーサーセイバー！』

ウオッチをそれぞれ左右の差し込み口に入れ、ドライバーのロックを押しして後ろから現れた時計の前で構える。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

ジオウへと変身を完了すると、背後にマザーが現れてジオウを包み込み、彼を包んでいた光が弾けると共に、その中から新たなるジオウの姿が現れた。

『トウモロロータイム！祝福せよ！約束された勝利を求めて！仮面ライダー〜ジオウ！ア〜サ〜！』

アーマーは白銀で黄金の炎のデザインが施され、アンダースーツは銀色、青いマントとローブを装着したその姿は、未来を守るために未来の守護者から託された、マザーの力を受け継ぎその姿……仮面ライダージオウ・アーサーフォーム。

「……」

両者が変身を完了し、互いに睨み合うかのような牽制し合う。

「……オーマジオウ」

あの姿が、つい先までみんなを傷つけて、その力に振り回されていたオーマジオウなのだったと思えばすジオウ。

その姿が、時を止めて全てを救済しようとする。『独り善がりの理想郷の王』との戦いで手にした、未来を守護する騎士王の姿なのだと感じ取ったオーマジオウ。

それぞれ違った思想を繰り広げる中、その均衡を崩さんとばかりにオーマジオウが口を開く。

「それが、お前の選んだ姿か？」

オーマジオウがアーサーフォームが選んだ姿だと聞くと、ジオウは首を縦に振る。

「私には、その姿に変身したことはない……」

お前の言う通り、私とお前とは違うのかもしれない……」

その姿には変身したことは無いと語るオーマジオウは、最初にソウゴが言ったように二人は違う人間なのかもしれないと言いつつ出す。

「確かに、俺とあんたは違う。」

「……でも、俺もあんたも仮面ライダーだと言うのは同じだよ」

「ふん。そうだな。では……来い！」

「はああああああ！」

お互いに走り出し、二人の繰り出したパンチがぶつかり合うと、その衝撃は周り全てを吹き飛ばし、近くに人がいたら間違いなく怪我では済まない程の威力を誇っていた。

ジオウアーサーとオーマジオウ。

魔王 対 魔王による対決が、始まろうとする。

——果たして二人の歩み進んできた王道は、一体どちらが正しかったかは、それは決して誰にもわからない。

その頃、現在の時間では……

『又ウオオオオオ!』

クライはトゲパワワを大量に体に注ぎ込み、外に現れた巨大なオシマイダーと融合したのだった。

「何が起ったの……」

「まさか、クライが……」

オシマイダーの異変に気付いた晴夜達も見上げるが、何が起こり始めているのかわからなかった。

「デビル……悪魔だわ。まるで」

「違うわ。あの人は一人の男よ」

「ならば、まだ……」

ジェロスが啞然として呟く横でパップルがクライの訂正をし、クライのオシマイダー

をトラウムを筆頭にした全員が見上げているとそこへ光が現れ、はぐたんを抱えたエール達が戻ってきた。

「プリキュアー！」

「みんな！」

ハリーとツクヨミはみんなに駆け寄る。

「あれ？ソウゴは？」

「えっ？あれ？」

アンジュ達は急いで脱出した為に気づかなかつたが、ツクヨミに言われて初めてソウゴがいないことに気づいた。

「まさか……土さん！」

「……」

デイケイドはオーロラカーテンを作ると、晴夜と共にそのカーテンに潜ろうとする。

「おい！何処へ行く！」

ゲイツが何処へ行くのかと聞こうとするが、既に二人の姿はなかった。

「大丈夫だよ」

不安そうな表情を浮かべるゲイツ達に、エールがみんなに大丈夫と告げる。

「ソウゴは約束を守るよ。絶対に帰ってくる！」

「はぎゅー！」

エールとはぐたんがソウゴは必ず帰ってくると説明し、ソウゴは自分のやらないといけないことの為に行つたのだと感じていた。

そのソウゴが戦っている未来の世界では、ジオウ・アーサーフォームとオーマジオウによる、魔王 対 魔王の、究極にも等しい戦いが繰り広げられている。

「ハアアアー！」

足を踏み込んで地面を砕きながら、ジオウがオーマジオウに金色のエネルギーを纏つたパンチを繰り出す。

「ハアー！」

オーマジオウはそれを躲し距離を取ると、濃緑色の竜巻を発生させジオウに向けて放つ。

「フウー！」

ジオウも対抗する為に黄金の風を作り出し、オーマジオウの竜巻にぶつける。

辺りは『ポオオオオオオオ！』という轟音を響かせ、二つの風による衝突は均衡しており、二つの風はお互いに長く競うと風はたちまち勢いを無くし相殺された。

「……」

——その時、オーマジオウはジオウが今までとは違い、強くなったと感じていた。最初の頃、怒りに身を任せてただ諸突猛進に後先を考えず突っ込むだけだった。

二度目は、まだライダーの力を全て集めていないというのに自分の力に過信し、その慢心を抱いたまま愚かにも戦いを挑んだ。

そして三度目、力不足ながらも仲間と力を合わせる事でようやく自身に膝をつかせることは出来たものの、未だに何処か青臭さが残っていた。

(…だが、今は違う。

今は、皆との約束を果たす為、明日を取り戻す。

多くの者たちの願いを背負い戦う。

そしてそれを背負うに値する、大きな器を持っている)

『ハイ！ドライブ！』

思考に沈んでいたオーマジオウは、ジオウアースーがライドハイセイバーを構えていた事に気づく。

『デュアルタイムブ레이크！』

三種類の黄金のタイヤがオーマジオウに向けて放たれる。

『ドライブ！』

オーマジオウはドライブウォッチを起動させ、同じようにタイヤのエネルギー体を作

り放つとジオウが放ったタイヤを撃ち落とす。

「なっ!!?」

しかし、撃ち落とすのに気が向いていたら、ジオウが既にオーマジオウの懐へ入り込んでいた。

『ジオウサイキョウ!』

サイキョーギレードのジオウのフェイスの文字が“ジオウサイキョウ”へ変わる。

『霸王斬り!』

「ぬわああああ!!?」

至近距離で『霸王斬り』を放ちオーマジオウを吹き飛ばす。オーマジオウは膝を折って座っているが、持ち堪えていた。

「やっぱり、強いな……」

互角に戦っているけど、やはりオーマジオウの力はまだまだこんなものではない。ジオウは本能的にそう感じていた。

「なるほど……今までとは違うな。」

若い日の私が、今の私とここまで戦えるとはな

あの攻撃を至近距離で受けたものの、軽々とオーマジオウは起き上がる。

だが彼もジオウアースラーの力を認め、素直に賞賛する。

「お前の力……あのキュアトウモロローから受け継いだものか？」

オーマジオウもジオウアーサーの力はマザーによるものだと言ったと直ぐに察知し、その力を持っていたのはキュアトウモロローだったと記憶の中から持ってくる。

「そうだよ。この力はトウモロロー……はぐたんが、俺に託してくれた力だ」

このウオッチから受け取ったマザーの力は今の尚、自分の体を優しく抱きしめて貰っているような温もりを感じている。

その温もりは、スウォルツによって奪われ、今の今まで忘れていた、母親に抱き着いて貰っていた時の記憶を呼び覚まさせていた。

「でも、ここまで来れたのは、俺だけの力じゃない」

——はな、さあや、ほまれ、えみるちゃん、ルールー、ことりちゃん。なぎさやほのかにプリキュア達。

ゲイツ、ウオズ、ハリー、ツクヨミ、門矢士、晴夜。

俺に力をくれた戦兎、永夢、タケル、泊さんや仮面ライダー達。
他にも出会ってきた人達。

みんなのおかげで、今自分は此処に立っている。

「みんなと一緒に歩む明日の為に！今ここにいるんだ！」

そう叫んだジオウは自分の周囲に黄金の風を纏う。

「仲間か……なら」

「!?」

オーマジオウが消えたと思うと、いつの間にか自分の前と立っていた。不意を突かれて体が固まったジオウを視界に入れながらそのままオーマジオウは腕を振り上げ、手刀をジオウへ放つ。

「あっ!」

その攻撃がジオウの腹部に決まり、吐き気を催しながらも直ぐにオーマジオウから離れる。

「うっ、うっ……」

腹部を抑えると、ジオウアーサーの治癒効果を発揮させ、受けた攻撃から回復した。「ならば、その仲間の力を見せてみる」

今の力を見せろと言うオーマジオウに、ジオウはその言葉に応えるためにサイキョーギレードを構える。

現代では、巨大なオシマイダーへと変貌したクライを征伐しようとゲイツ達が動き出そうとしていた。

「ツクヨミー!俺にドライバーを!」

「わ、わかった……」

ツクヨミは自分のジクウドライバーをゲイツへと渡す。

『ジクウドライバー!』

ゲイツはそのドライバ―を腰へと装着し、ゲイツウォッチとゲイツマジエステイウォッチを起動させる。

『ゲイツ!ゲイツマジエステイ!』

「変身!」

ウォッチを装填してロックを解除すると、ドライバ―を回す。

『マジエステイタイム!仮―面―ラーイダー!Ah!ゲイツ!マジエ―ス―テイ―!』

「行くぞ!ウォズ!」

「ああ!」

ゲイツとウォズは暴走するクライを止める為に向かう。

『!?』

クライは二人が接近するのに気付くと、トゲパワワのエネルギーからあるものを作り出す。

そこから目玉が大量に生えている孔雀を模した翼を付けたエクストリーマー・飛行形

態、剣の様な胴体と龍の様な腕を持つ超ゲムデウス、赤い蛇の様な体と肩に泊まっている謎の生命体が特徴的な姿で黒く巨大な腕を回すエボルト・究極態の三体が現れた。

「何!? うわあ!」

「ゲイツ君!があ!」

気が遠くなるくらいの量のトゲパワワを使って作られた為か、はたまたオシマイクラッシュヤーとオーマジオウとの連戦で疲労が溜まった影響か、突如現れた三体の前に流石のゲイツとウオズも、手も足も出ない様子だった。

それを見たエールは、ソウゴから託されたオーマジオウドライバーを掴む。

「……」

このドライバーを使い、みんなの未来の明日を掴めるかもしれない。

でも、もしソウゴが暴走したようなことになれば……

「ツ……!」

エールがオーマジオウドライバーを持っている手を震えさせていると、アンジュ、エトワール、マシエリ、アムール、アーラが彼女と共にオーマジオウドライバーを掴む。

「みんな」

「大丈夫! 私達がいる!」

「みんなと一緒になら行ける!」

「私達に不可能はないのです！」

「私達はエールと共に、どこまでも輝けます！」

「何故なら、私達はプリキュアだから！」

「……うん！なんでも出来る！なんでもなれる！フレフレ！フレフレ！私！」

エールから先までの震えが消えた。

だが同時に、オーマジオウドライバーは強く光り出し、その光がエール達を包む。

「うろう……ここは？」

それは、真つ暗で何も無い世界だった。

そこからプリキュア達に語りかける声が聞こえた。

「覚悟はあるの？」

「えっ？」

エールが振り向くと、ソウゴがジオウアーサーへ変身した時のようにそこだけ光があり、人の顔を隠していた。

そこには女性ののような声が聞こえていたが、更にもう一人男ののような声が聞こえてきた。

「オーマジオウの力を手にする事は、力を得る代わりに何かを捨てるという事と同じだ」

「貴女達に、それ相当の覚悟はあるの?」

二人組の男女から、この世の全ての時空を制する力を秘めたオーマジオウの力を手にする為に、何かを捨てる覚悟は出来ているのかと問われたエール達だったが……

「私達は、何も捨てないよ!みんなでなら、何処までもいける気がするから!」

エールは迷わず答えてみんなの顔を見回すと、みんなもエールの答えに一寸の時間差も無く頷く。

「私達はプリキュア!何でも出来る!何でもなれる!」

だから、何も捨てなくても私達の未来は耀ける!

勿論、あなた達も一緒に!」

エールは二人に手を差し伸べると、その二人は一瞬の驚いた様な表情を浮かべた様に感じたが、直ぐに湧き出てきた笑いを堪えながら自分達の顔を見据えてきた。

「ふふっ……そうか。だったら信じて、輝く未来を」

「決して忘れるな、その思いを!」

エール達の答えに期待感を感じた二人はエール達に向けて手をかざし、オーマジオウドライブはさらなる光を輝かせる。

「……決して、私達のようにならないで」

最後に女性がプリキュア達——特にエールへ向けて忠告事を伝えると、二人の声はそ

こで途切れた。

「……えっ? あれ?」

エール達が気付くと、元の場所へ戻っていた。

「先の二人は?」

「どこなのですか?」

エトワールとマシエリは辺り見回すが、二人の姿はなかった。

「あつ!? ドライバーが……」

エールが手元を見ると、先まで持っていたオーマジオウドライバーを無くなっていった。

だが代わりに、その手には黄金のミライクリスタルが握られていた。

「新しいクリスタル?」

「ですが、ミライクリスタルは全て集めたはず?」

「でも、このクリスタル……」

アールとアムールはどうしてミライクリスタルがあるのか疑問に思っている横で、アングジュがエールの手元を見てみると、この黄金のクリスタルは、何処かオーマジオウドライバーの色に似ている事に気付く。

そのクリスタルの名は、『ミライクリスタル・オーマハート』。
黒と金のカラーリングに時計の歯車を模した彫刻が施されたそれは、自身の力が解放される時を待ちわびているかの如く、黄金の宝石の中心にあるハートが赤く輝いていた。

「——行くよー!」

『うん!』

エールはミライパッドにミライクリスタル・オーマハートを翳す。

「『ミライクリスタル!オーマハート!』」

ミライパッドにミライクリスタル・オーマハートを装填すると、そこから放つ黄金の強烈な光がエール達六人を包む。

「みんな!」

ツクヨミがその光に近づこうとすると、そこに一人の人間の姿が現れ、はぐたんを抱いて現れた。

その姿は、黄金カラーを取り入れたかの様なコスチュームとボンネット状のヘッドトレストリボンが付いたヴェールは白の混じった金色を纏い。髪型はピンクにそれぞれ水色・黄色・パープル・金髪の本メッシュが入っており、右手首にプリキュア・ミライブレスレットを装着しているのは変わらないが、背中にオーマジオウの様な時計の針型の

マントが付いてあり、先端あたりにはピンクのハートの刺繍があった。

「もしかして……はな？」

「ツクヨミ、はぐたんをお願い」

「えっ？」

ツクヨミにはぐたんを預けるとエールはオシマイダーを見据え、背中のマントを揺らし上空へ高く飛び立つ。

「あれが、オーマジオウの力なの？」

ツクヨミが立ち去っていくエールを見つめる一方で、既に戦っているゲイツとウオズ、さらに加勢に入ったハリーが一体ずつ相手をしているが、あまりの敵の強さに三人は押されていた。

「くうー！」

エボルトに圧倒されるゲイツに、エボルトの攻撃が迫って来ていた。

〈ガシッ！〉

だがゲイツの前にオーマジオウの力によって現れたエールがエボルトの腕を掴み、ゲイツを守った。

「…エールか？」

ゲイツがエールかと聞くと、彼女は笑顔で頷きながらメロディソードを出現させる。

「ヤアアアア!」

エールのメロディソードから放たれた一撃が、回避させる暇を与えぬままエボルトを一瞬にして浄化させた。

「エール……お前……」

その光景を目にしたゲイツは、この力は正しくオーマジオウの力と同じだとすぐに察知した。

「タアアアア!」

ゲイツに微笑みかけたエールは一瞬にして、ウオズとハリーが相手をしていたエクストリーマー・飛行形態と超ゲムデウスの前へ現れた。

「エール君!」

「あ……」

突然現れたエールにウオズとハリーは驚いていると、彼女は二体の怪人にツインラブギターを向ける。

「行くよ!」

ツインラブギターの弦を弾き、それから奏でられるアスパワワに満ちた音色が二体の怪人を優しく包まれると、怪人達はオシマイダーへと戻って幸せそうに浄化された。

「エール……どなんしたんや? その姿……」

「まさか……エール君」

「キュアエール！オールグランドマザー！」

エールは二人に振り向くと、自らを『キュアエール・オールグランドマザー』と名乗る新たな姿を見せ付ける。

それを見たウオズはいつものスイッチが入り、直ぐ様本を掲げながら声を高々と上げる。

「祝え！全プリキュアの想いと大魔王の力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす究極の時の女神！その名もキュアエール・オールグランドマザースタイル！夢と希望に満ちた未来へ辿り着いた瞬間である！」

「ウオズさん。ありがとう♪」

ウオズによる、いつもの祝いの言葉を述べてくれてありがとうとお礼を言うと、エールはクライに元へ向かう。

すると何かが近づいてきたことに気付いたクライは、足元から更に大量のトゲパワワを発生させる。

そこから白い体に蝙蝠と鳥の翼と昆虫の腹という複数の生物が合わさった姿をもつ怪物、蛇の頭部と背骨の様な黄銅色の胴体を持つ怪物、ワインレッドの大きな角を三本持つ黒い四足動物の様な怪物——ギガンデスヘブン、ギガンデスハデス、ギガンデスヘ

ル。

その三種の巨大怪物が複数体現れた。

『『ウオオオオオオオオ!!』』

その怪物達は目の前で飛んでいる小娘を睨みつけると、獣の如く咆哮をあげて攻撃を仕掛ける。

「っー!」

それを見たエールは、ギガンデスヘブンの尾から放たれたエネルギー状の針とギガンデスハデスの口から放たれた火炎弾を避けるために低空飛行を行う。

そこへ待ってましたと言わんばかりに、二体のギガンデスヘルがエールの左右に現れて彼女を圧殺、或いはその角で刺し殺そうと突撃してくる。

「ハァー!」

だがエールは自身の周りにバリアを張って二体の怪物の攻撃を軽々と受け止め、アスパワワの波動を放って一瞬で浄化させる。

だが背後から更なる数のギガンデスヘルが突進してくると、エールは高く飛びあがり、下にいるギガンデスヘルと周りで自身を凝視するギガンデスヘブン・ハデスを視界に入れた。

「——フッ!」

彼女に向けてギガンデス達からエネルギー針、火炎弾が放たれるが、エールは慌てることなく手を「パンツ！」と叩いて合掌のポーズを取ると、手首の飾り装飾がポンポンに変わった。

「フレ！フレ！ハート・フォーユ〜！」

それと同時に彼女の前に巨大なハートの塊が浮かぶと、エールは両手でポンポンを振ると更にハートは肥大化し、彼女が右腕を天高く伸ばすとそのハートはエールの頭上に移動。

そしてハートの塊が光ったと思った瞬間、そのハートを中心に無数のピンクの光線が放たれ、奴らの放った攻撃はいとも簡単に打ち消され、広範囲にいたギガンデス達を一体の取りこぼしを出さぬまま浄化させた。

『明日など要らぬ！未来など！』

一方、暴走するクライは巨大な手を広げ、町を飲み込もうとする。

「はあー！」

しかし其処へギガンデス達を一体残らず浄化させたエールが現れ、クライの手の動きをアスパワワで防ぐ。

『何故守る！自分を身を傷つけまでえええー！』

クライは咆哮の叫びを辺りに撒き散らしながら、エールの放つアスパワワのバリアを

破壊しようとする。

「ぐうう!」

だが、エールは負けじと力を込め続ける。

『何故戦う!何故戦う!プリキュアアアア!』

「赤ちゃんのみんなで育てるの!一人じゃ未来は育めない!」

「心にトゲパワワに満ちる時もある!もう頑張れない時もある!けど……」

「そんな時は……」

「いつだって……」

「私達が……」

「そばに……」

「います!」

そこへ、エールと融合したアンジュ達の幻影が現れ、エールの支えとなる。

『私達のアスパワワは輝いている!みんなの未来に!』

六人の体からアスパワワはより輝き、より周りを強く輝かせ、より大きくなる。

対するオシマイダーはそのアスパワワに攻撃を繰り返し、エール達はそれを防ぎ続ける。

「フレフレ!フレフレ!プリキュア!」

「フレフレ〜！ぷいきゅあ〜！」

ゲイツ達はエール達を必死に応援する。

「どんなに小さな声だって！」

「集まればエールになる！」

「みんなの思いが合わせれば……」

「未来は……」

「きつと！」

「変わる！」

『はあああああー！』

アンジュ、エトワール、マシエリ、アムール、アーラ、エール。彼女達の放ったアスパワワの光は、オシマイダーを押し返した。

「フレフレ！フレフレ！プリキュア！」

「フレフレ！フレフレ！プリキュア！」

「フレフレ！フレフレ！プリキュア！」

そして、その姿を見てはぐくみ市にいる人々はアスパワワを輝かせプリキュア達を応援する。人々が流れるアスパワワは集まり、一つの巨大なアスパワワを作り出す。

「みんなの応援が——」

「集まっている——」

「みんなの応援が集まり——」

「巨大なアスパワワを生み出す——」

「ふれふれ——」

ハリー、ツクヨミ、ゲイツ、ウオズが空を見上げていると、その集まったアスパワワの中には、オーマガランドマザーズスタイルから元に戻ったエール達六人がいた。

「みんな！ありがとう！ありがとうっ！

みんなの心にはプリキュアがいる！

みんな！みんな！プリキュアなんだ！

フレフレ！フレフレ！みんな！」

エールは光のポンポンを作ってそこからアスパワワを発生させると、アスパワワははぐくみ市を包み込んだ。

——その時、不思議な事が起こった。

彼女達が放ったアスパワワによって、はぐくみ市にいる人々の姿がプリキュアとなったのだ。

はなの両親も、クラスメイトの純菜と亜希に、キュアアンフィニへと再び変身したアソリ。プリキュアとなったえみるの兄の正人。

さらに砂浜にいるクライアス社のメンバーも、プリキユアへと姿を変える。

『フレフレ！フレフレ！みんなー！フレフレ！フレフレ！私！』

ゲイツ、ウオズ、ハリー、ツクヨミ、リストル、ビシン以外のはぐくみ市にいる人々が、みんなプリキユアへと変身した。

それは、正しく奇跡。

終わらぬ希望。

尽きぬ夢物語。

彼女達がいる限り、自分達はなんでもできる。

未来へ向けて歩み続ける限り、自分達はなんでもなれる。

この世界に愛と平和がある限り、みんなはずっと未来を抱きしめていられる。

そんな人々の想いが、夢を見る事の出来なくなつた者、希望を抱けなくなつた者、愛を知らない者、友を必要としない者、運命の奴隷で居続けた者。

そんな人達をも含めた、世界中全ての人々が不幸の鎖を解き放ち、新たなる姿へと進化させる。

「みんな行くよー！」

「「「「メモリアルクロック！マザーハート！」」」」

ミライパッドが緑のハートが加わつたメモリアルキユアクロックに変化し、エール達

とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「ミライパッド! オープン!」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーが降り注ぎ、エール達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「HUGっとプリキュア! 今ここに!」

「ワン・フォー・オール!」

「オール・フォー・ワン!」

「ウィー・アー!」

「プリー、キュア!」

「明日に!」

「エールを!」

マザーを召喚してメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集める。

『ゴ、ファイ! みんなでトウモロ!』

はぐくみ市にいる全員が放った“みんなでトウモロ”は、巨大になったクライのオ

シマイダーを包み込む。

そして、その光はオシマイダーの体内の中にある、一つのゲートへ送り込まれた。

ジオウ・アーサーフォームとオーマジオウは地上から上空へと場所を移し、そこで戦鬪を激しく加速させる。

「ヤアアア！」

「ハアアア！」

ジオウのサイキョージカンギレードとオーマジオウのエネルギーを纏われた手刀がぶつかり合い、互いに譲らない。

「くう……うう……ハア！」

鏝迫り合いとなった二人はお互いに振り払い両者は距離を取る。

「ツ!!」

「!?」

突如、ジオウの前でオーマジオウは姿を消した。

「ど……うわぁ！」

いきなり攻撃を受けたジオウは『クロックブレードA』を輝かせて未来予知を行おう

とするが、オーマジオウはジオウアーサーの未来予知を超えるスピードで、ジオウに攻撃を決め続ける。

「くうー！」

ジオウは無防備にオーマジオウの攻撃を受け続けるも、オーマジオウがカブトの「クロックアップ」の要領で高速移動していると察する。

「まだ……まだ！」

するとジオウは、自分の周りに風を作り出してオーマジオウの攻撃の盾とした。

そして同時に、その風はオーマジオウの位置を捉えた。

「!?？」

「そこだー！」

『アーサーセイバー！』

ジオウはオーマジオウの攻撃を受ける前に、直ぐ様アーサーセイバーウオッチを装填させてサイキョージカンギレードを天へと掲げると、サイキョージカンギレードの剣に黄金の輝きを放たせる。

「ハアアアアアアア！」

『フューチャー！ギリギリスラッシュ！』

ジオウの繰り出されたサイキョージカンギレードがオーマジオウに直撃した。

「ヌウオオオオ！」

オーマジオウは自らの周りにシールドを作りジオウの技を耐え、ジオウの技の効力が終わるとオーマジオウはシールドを解く。

「やるではないか、若き日の私よ」

「あんたもだよ」

そのまま、二人はお互いに一度地上へと降りる。

「はあ、はあ……」

ジオウは息を乱し始め、体力は限界に近づいていた。

「はあ……ここまで出来るまで成長していたのは、正直に驚いた」

対するオーマジオウは息こそ少し乱れているが、余力を残して未だに余裕がある様子も見えた。

「やっぱり強いね……あんた」

「お前もだ。しかし……それでも、お前は私に勝てない」

「っ……」

互角に戦っているように見えてもオーマジオウは、ジオウは勝てないと宣告する。

すると、またしてもオーマジオウは一瞬にして消え、今度はジオウの前へと現れて手刀を放つ。ジオウも即座に対応するためサイキョージカンギレードで応戦。

「うっ!?」

「何故、おまえは私に勝てないか、わかるか?」

押され始めたジオウは、オーマジオウに自身が勝てない理由を告げる。

「それは……何かを捨てる事だ」

「捨てる……?」

「そうだ。王になる力を手にする為には、何かを捨て必要がある」

そう、この世界には、ただ何かを得るだけという現象は、この世では一切起きない。

買い物をするにあたって、何かを買うにはお金が必要だし。遠くに行く時には、車に使われるガソリンにしたって歩く時に消費されるカロリーにしたって、どんな手段を使おうが必ずその分のエネルギーを消費する。いい事をすれば、後々その分いい事が起きるし。悪い事をすれば、その分大きなしっぺ返しを食らう。

——等価交換、この世界で全ての生物に課せられる質量保存の法則。

何かを得るためには、何かそれ相当の対価を支払う。

それが出来なければ、それを得る容量を増やす為に何かを捨てる必要がある。

オーマジオウはそれと同じ様に、ジオウへ向けて何かを捨てる必要があると話す。

それがオーマジオウにあり、ジオウにはない要素である事も。

「私は王となる為に、多くのものを捨てた。友を……時間を……」

オーマジオウはジオウにそう語ると、その時の事を振り返る――

『オーマジオウになれ……時の王者に……』

『みんなのいない世界で、俺一人王様になったって仕方ない……』

――が、直ぐにジオウへ集中する。

「余計な物を捨ててこそ！力は手にする事が出来るんだ！」

そのまま、オーマジオウはジオウのサイキョージカンギレードを吹き飛ばし、黄金の光玉を作りジオウへと放った。

「うわあああああ！」

吹き飛ばされたジオウはそのまま地面を転がり倒れる。

「くう……ああああ……」

何とか耐えたジオウは、再び起き上がろうと試みる。

そして何とか起き上がったが、体は目に見えて限界を向かえフラフラだった。

「お前も何かを捨てない限り、私には絶対に勝てない」

オーマジオウは手から先ほどよりも大きな黄金の光玉のエネルギーを作り出し、ジオウへと放つ。

「ツ……」

そのエネルギーは勢いを増し、ジオウへと向かってくる。

「捨てる……」

確かにオーマジオウの言う通り、彼も何かを捨てなければならぬのと思い始める。

(みんな……)

その時、彼の頭には、みんなの事が浮かぶ。

はな、さあや、ゲイツ、ほまれ、ツクヨミ、ウオズ、ハリー、えみるちゃん、ルールー、

ことりちゃん。

そして、この力を託してくれたはぐたん。

「(みんなと一緒に、約束した明日に行く……未来の明日を取り戻し、はぐたんを守る

……)

——俺は、捨てない!捨てられない!」

みんなとの約束。はぐたんを守る抜くと約束。

ジオウは捨てられない思いを叫び、周囲に再び黄金の風をより強く発生させ、オーマジオウの光玉を相殺した。

「何?」

「うわあああああああ!」

オーマジオウの光玉を相殺したジオウに驚くが、ジオウはそのまま突っ込んでいきオーマジオウの顔を殴った。

「くう……はあ！」

オーマジオウは反撃の為に同じような光玉のエネルギーを数発放った。

「やあああああ！」

ジオウの両腕に黄金の風が纏われ、オーマジオウのエネルギーの光玉にパンチを繰り出し全て相殺させる。

「何だ、これは!?？」

先までとはまるで違うジオウの力にオーマジオウは驚かされ、そのままジオウはオーマジオウの前へと到達する。

「ヤァー！タァァー！」

ジオウは右足のキックで右腕を蹴り、最後に左足でオーマジオウの腹部を蹴り飛ばした。

「ぐうう……」

流石のオーマジオウも、今の攻撃は体に相当のダメージが響いていた。

「はあ、はあ……ッ、捨てない……」

みんなとの約束！俺の夢も！人の想いも！友達を！

絶対に、俺は捨てない!」

オーマジオウの言う、力を手に入れる為には何かを捨てなければならないという持論に対し、ジオウは捨てないと宣言する。

「何かを得る為には、何かを捨てないといけない。」

それは、正しい事かもしれない!でも、俺は捨てない!」

「…それでは、王になれんぞ」

「そんな王様になるくらいなら……俺は……王様にはならない!」

「っ!」

何かを捨てなければ王になれないと言うオーマジオウの忠告をジオウは振り払い。

それどころか、何かを捨てないと王の慣れないと言うのなら、そもそも王にはならないと叫ぶ。

「フツ……そうか」

声が溢れるとオーマジオウは起き上がろうとする。その時…

「ツ!」

ジオウの頭上から出現したアスパワワの巨大な光が、ジオウに直撃。

「うおおおおお!」

その中でジオウはアスパワワに呑み込まれると、姿を変え始めた。

「ツ!?? な、何……」

そこ現れたのは、フェイスはオレンジがかった金色となつて、額にはジオウライドウオツチが設置。背部にはオーマジオウ同様に大時計『アポカリプス・オブ・キングダム』がマントのように付けられ、肩部には時計バンド『メリディアンサツシュ』が一周するように配置、黒のインナースーツに金色のアーマーとなつていた。

それはまさに、オーマジオウそのものを継承した姿。

名付けるならば、『仮面ライダージオウ・オーマフォーム』。

「その姿は……」

ジオウは何も捨てず、何も失わずにオーマフォーム——オーマジオウの力すらも受け継いだのだと感じたオーマジオウは、内心で彼の姿を見ながら関心する。

「オーマジオウ……俺は……俺達は……未来を掴む!」

『キングフィニッシュタイム!』

ウオツチのスイツチを押し、ドライバーを回すとジオウは高く飛び上がる。

「よかろう!これが最後だ!」

『終焉の刻!』

オーマジオウもドライバーの左右を押しして必殺技を起動させると、後に続いて高く飛び上がる。

その時、二人の背中の大時計『アポカリプス・オブ・キングダム』が大きく広がり、二人はライダーキックの態勢へ入ると、右足に力が蓄えられた。

『キングタイムブ레이크!』

『逢魔時王必殺撃!』

「はあああああああー!!」

ジオウ・オーマフォームとオーマジオウ。

二人の放つライダーキックが、この戦いの決着を付ける最後の一撃。

「ぐうううう……ッ」

二人のライダーキックは互角。

その影響は、周りのものを簡単に吹き飛ばす程の威力を生み出し。二人はライダーキックを放ち続けながら互いに譲らない攻防を繰り広げた。

「——最後に一つ聞こう!」

何故! 貴様は明日の来ない、永遠の世界を否定した!」

あの時ジオウは、クライと一度は同じ道を歩もうとした。

それを、何故途中から否定したのだと、オーマジオウは問い掛ける。

「俺は……みんなと一緒に未来を……歩きたい!」

クライに見せられた未来の幻影。あれを見た時、未来なんて来ない方がいいと思っ

た。

でも、未来の運命はまだ決まっていない。

「時計の針は戻す事も、止める事も、先に動かす事だつて出来る！でも……人の時間は止まらない！」

「ッ！」

「人は生きていく中で、色々と迷ったり、苦しかったりする時だつてある！」

そうだ、これまでに会ってきた人達は、みんなそうだ。

ライダーやプリキュアはみんな、悩んだり苦しかったりしても、恐れず前に進んでいった。

「それでも、前に進んでいくんだ！」

そうすれば！俺達の未来は輝くんだッ！」

オーマフォームによるライダーキックが、オーマジオウのキックを跳ね除ける力を上昇させる。

「うおおおおおおおー……！」

「ッ!?、こ、これは……！」

そして遂に、ジオウのライダーキックがオーマジオウのライダーキックに打ち勝ち、そのままオーマジオウにオーマフォームによるライダーキックが直撃しようとした。

「……あつー!」

しかし、直撃する直前にジオウ・オーマフォームから元のソウゴの姿に戻ってしまう。結局ライダーキックは失敗に終わり、互いに地面へと降り立つ。

「はあ、はあ……ああ……」

力を使いすぎた影響なのかももう限界のソウゴは倒れそうになり、遂に後ろへと倒れる。

その時、誰かがソウゴを支えた。

「あつ……門矢……士」

ソウゴを支えたのは士だった。その後ろから晴夜も現れた。

「……おい。肩を貸してやれ」

自分の身長とでは合わないからか、士は晴夜にソウゴを担げという。

「はい。ソウゴ、大丈夫か?」

晴夜はソウゴを肩を自分の肩へと乗せる。

「あり、がとう……」

晴夜がソウゴの様子を見るに、かなり限界の様子だった。

それもその筈、あれだけの力をほんのわずかといえ、使ったら体への負担は大きかったはず。

「クライアス社の社長なら安心しろ。キュアエール達とはくぐみ市全員が止めた。お前の託した力でな」

「そうか、よかった……」

はななら、オーマジオウの力を使いこなせたんだと確信していた。だから、クライを絶対に止められると信じていた。

「……………クライは、終わったか……」

クライが敗れたのかとオーマジオウは頭上の方に顔を見上げる。

「お前もそろそろ、芝居をやめたらどうだ？」

突然、土がオーマジオウに芝居をやめたらと突然言い出す。

「えっ？芝居？」

「ソウゴ、実は……」

「こいつをずっと試していたんだろ」

「……」

「ねえ、何なの芝居とか？試していたって？」

何がどうなっているのかソウゴには話が付いていけず、頭が混乱しそうだった。

「全てはお前が……君が良き王になる為だ」

「えっ？」

すると、オーマジオウの声が先までと違った、いきなり声が若返ったのよう感じた。
そのまま、オーマジオウは自ら変身解除する。

「嘘……これがオーマジオウの正体……」

その姿を見てソウゴは驚愕——いや、想像していた姿と大きく違っていたことに驚く。

「やはり、お前だったか常磐ソウゴ」

「常磐……ソウゴ?」

「そうだよ。時見ソウゴ……いや、もう一人の俺」

オーマジオウの正体は、茶髪で半袖シャツを着た、ソウゴよりいくつか年上の青年……

彼の名前は『常磐ソウゴ』。

此処ではない、仮面ライダージオウの世界全く別の世界で最高最善の魔王を目指した、もう一人の仮面ライダー

ジオウだった。

次回! Re. HUGつとジオウ!

最終回 2019： 目指すは最高最善の未来!

最終回 2019： 目指すは最高最善の未来！

ジオウ・アーサーフォーム、オーマジオウ。二つの魔王の力を持つライダーの激突は、どちらも凄まじき激戦を繰り広げた戦いであった。

その中でジオウは、はくぐみ市のみんなのアスパワワによりオーマフォームへと一瞬の覚醒を果たしたが、決着は引き分けという形で終わった。

「常磐……ソウゴ……？」

そして戦いが終結したその時に判明した、オーマジオウの正体……

それは自分の想像とはかけ離れた姿、常磐ソウゴと名乗る青年だった。

「こいつは、簡単に言えば。お前とは違う世界の仮面ライダージオウ」

「違う世界？それって、前に言っていた。並行世界って所から？」

「まあ、そういう事だ」

士と晴夜曰く、常磐ソウゴの正体は並行世界からこの世界に訪れた、ソウゴとは違う仮面ライダージオウらしい。

「晴夜。もう大丈夫だから」

ソウゴは晴夜の肩から降りると、常磐ソウゴへと近づく。

「ねえ……あんたたって本当に、俺とは違う仮面ライダージオウなの?」

「うん。俺は君とは違う世界の仮面ライダージオウだよ」

ソウゴの質問に常磐ソウゴは、同じ仮面ライダージオウでも二人は違う存在だと素直に答える。

「じゃあ、なんでこの世界にいるの?それに全て俺の為って?あれは何?」

同じジオウである事を聞いて取り敢えず納得はしたソウゴだったが、先程常磐ソウゴが告げた言葉の意味、あれはどういう事なのかと問いかける。

「言葉通りだよ。君を良き王に導けるようにするために、ね。」

それが、未来の君から頼まれたことなんだ」

「えっ?未来の俺?」

未来の自分から頼まれたと聞き驚く。

「そう。未来の君からだ」

常磐ソウゴはその時の事を思い返ししながら、彼に未来の時見ソウゴと交わした約束について語り始める……

——時は2068年。

事の発端は、キュアトウモローやゲイツ達がクライアス社との全面抗争を繰り広げる数ヶ月前の出来事からだった。

「——ッ!?? (´・`・)は……」

その時、一人の青年——常磐ソウゴは、気づくと暗いビルの中に立っていた。

「確か……俺は……」

常磐ソウゴ……彼はオーマジオウへ変身し、世界を救う為に世界を滅ぼうとした。全ての元凶を打破して世界の時間を作り直し、融合した世界を再び元の世界へと戻す為に。

そして、自分も自分がいたい世界へ行き、全てをやり直そうとした。

だがその時、彼はどういうわけか気づいた時には既にこの部屋にいたのだ。

「……来たか」

「?」

常磐ソウゴが振り向くと、そこに椅子に座る初老の男性がいた。

「あんたは?」

「私の名は時見ソウゴ。君とは違う存在の仮面ライダージオウだ」

「ジオウ?」

「常磐ソウゴ、頼みがある。私に力を貸して欲しい」

「……詳しく教えて」

それから未来の時見ソウゴは、常磐ソウゴにこの世界の事情を話した。

この世界に存在する組織・クライアス社は、時間を止めて永遠の世界を作れることを計画しており、それを止めようとこの世界のプリキュアと一人の仮面ライダーの少年が戦っている。

かくいう自分は、社長であるクライに協力するように誘われているわけだが。

「プリキュアに、クライアス社……よくわかんないけど、俺にそのプリキュア達を守れってこと?」

「いや、君には過去の私を導いて欲しい」

「過去のあんたを?」

「ああ、一番可能性を秘めている頃の私だ……」

未来のソウゴはその頃の自分を思い出しながら、当時の事を赤裸々に語る。

あの頃の自分はいつも前を向いて人の気持ちを知らうとし、王になる道を決して諦めなかったという事。

同時にその頃の自分は、この世界の全ての理不尽と悪意を受け止めるには、あまりにも幼かったという事も。

「その頃の私がもしジオウになれば、もしかすると……未来を信じる力をずっと持つて

と思うのだ。

……しかしそれを導く時、試練を与える存在が必要だ」

「それが俺？」

「ああ。君に私の影武者になってももらいたい」

未来の時見ソウゴの計画。それは、一番可能性を秘めている時代にいる自分を仮面ライダーへなるように導き、見守り。時に試練や覚悟を試すための存在が必要だった。

「でも、見守るのなら、俺じゃなくてもあんたが……」

わざわざ別の世界からこっちへ呼び出す必要はないと思つた常盤ソウゴは、どうして態々自分呼び出したのだと聞き出しながら、時見ソウゴ本人じゃ駄目なのかと暗に聞き出す。

「……私ではダメだ」

「ダメ？」

本人ではダメな理由……

それは、自分では可能性のある若き自分に、
“ある姿”へとなれるきつかけを作れないから。

そして……

「ゴホオ！ゴホオ！」

「!?」

未来の時見ソウゴが咳き込むと、口を抑えた手から血反吐が漏れ出したのが見え、彼が喀血しているのに気づいた。

「……ご覧の通り、私の体は既にボロボロだ。これも時空を何度も作り直した影響だ」
彼はオーマジオウの力で、自分が望む未来を作るために何度も時間をやり直した。

しかし、何度も何度もやっても自分が望む未来は訪れなかった。そして、その影響により体は勿論の事、精神は既にボロボロで限界だった。

「私では導けない……だから、一番可能性のある私に全てを託したい！そして、明日という時の流れを良いものになりたい！」

衰弱している体にムチを打って椅子から起き上がり、常磐ソウゴの服を掴んで必死に頼み込む。

「わかった。協力するよ」

常磐ソウゴは彼の手を優しく握ると、時見ソウゴの計画に協力する事を了承した。

「それになんか、俺も見てみたくなかった。違う未来を作る可能性を持つ若い時のあんたに」

こうして、常磐ソウゴはこの時代の時見ソウゴの影武者と演じた。その為に彼は自分が未来の時見ソウゴだと思わせる為、ずっと未来の彼になりすましていた。

そうして、今の現状へと至る――

「俺が、可能性……」

「けど君は、俺達の想像を遥かに超えた未来を歩んでいた」

その中でも驚かされたのは、自分も知らない未知の覚悟へと進化した事だった。

独自の進化を遂げたミステリーフォーム、

ミラクルライトによって誕生したハーモニクスフォーム、

そして……この世界の明日を願う力により誕生したアーサーフォーム。

「それに君ならきつと、オーマフォームだって完成できるはずだよ」

「オーマフォーム？」

オーマフォームとは？と思ったソウゴに、士がそのフォームについての説明を常盤ソウゴの代わりに語る。

「オーマジオウの力を受け継いだ姿。さつきお前は一瞬だけだが、そのフォームになっていた」

「えっ？」

あのものすごい力がそのオーマフォームだと聞き、まさかオーマジオウの力に振り回

されていた自分がそんな巨大な力を使用していたとは、流石に気づかなかった。

「この時代の君が言っていた通り、本当に君には無限の可能性がある」

常磐ソウゴは別世界の自分の肩に手を置いて言う、ソウゴはさつきから気になっていた事を口にする。

「……ねえ、なんで違う世界のあんたが協力してしたの？」

そう問いかけられた常磐ソウゴは、無言のまま腰に巻いているオーマジオウドライブバーを外した。

「……見てみたかった……オーマジオウの未来じゃない、新しい未来を歩むジオウの姿を」

オーマジオウドライブバーを見て、これになる結末を変えられる未来があるなら、その可能性を持つジオウを見てみたいと思ひ。この時代の彼に協力した事を語る。

「これからあなたはこうするんですか？」

ソウゴに正体を明かし、彼の力も認め、今、これからどうするのかと晴夜は尋ねた。「俺は元の世界に戻るよ。そこでもう一度、仲間と目指す。」

最高最善の未来を作れる魔王になるために」

「そうか。なら、俺達も戻るか？」

士はオーロラオーロラカーテンを作り出し、ソウゴへ帰る様に促した。

「もう一人の俺」

すると常磐ソウゴは何かを投げ渡し、ソウゴはそれをキャッチする。

「ジクウドライバー……」

それは、常磐ソウゴが持つジクウドライバーだった。

「君に託したいんだ。新しい未来を作れる君ならきつと……」

きつと彼なら誰にも想像が出来ない未来を作れる。そんな気がする。だから彼に自分の全てを託したい。

そう思った常磐ソウゴは期待の念を込めながら、ソウゴ達から離れる。

「もう一人の俺！」

するとソウゴは常磐ソウゴを呼び止める。

「俺！絶対になるよ！みんなを導けられるような、最高最善の未来を作れる王に！あんたも最高最善の未来を作って！」

「うん」

ソウゴは大きく手を振り上げて、土が作り出した灰色のオーロラカーテンを潜り抜ける。

彼が先に入った後、土と暗夜もしばらくしてからカーテンを潜る。

「頑張つて、もう一人の俺……」

そう呟き、常磐ソウゴはもう一人の同じ存在かもしれない時見ソウゴを見送った。

「もう俺達が導かなくても、歩んで行けるよね」

振り返るとそこに御簾が再び現れ、そこから杖を携えた一人の男性が現れた。

「ああ、これで新しい未来を歩ませる事が出来る」

少し衰弱している様子を見せてはいるが、この人が未来の時見ソウゴである。

「やはり、あの時の私とプリキュアが共に歩み成長すれば、行ける気がしていた」

プリキュアと共に成長……それが、未来のソウゴが組み立てた本当の計画でもあった。

王の道は孤独の恐れもある。だから、プリキュアと出会おうようにさせたのも、彼が自分とは違う道を歩めるようにしたかったという、そんな願いがあった。

「じゃあ、俺はこれで……」

すると、常磐ソウゴの体が粒子のように光り出した。

「もう一人の俺が可能性のある道を歩んだ。」

だから俺も、仲間と一緒に可能性のある未来を歩むように頑張るよ。だから……」

——あんたもまだ未来の可能性を信じて、前に進んで。

そう言い残し手を振ると、常磐ソウゴは自分のいるべき世界へと戻って行った。

「……」

常磐ソウゴを見送った未来の時見ソウゴは、ビルドからクウガまで居る18人の仮面ライダーの像に囲まれていた、自分の変身するポーズの像を見つめる。

「若き日の私よ。お前が手にした明日の中で決して良い未来とは限らないが、これからも自分の意思と友を……愛すべき者を守り通せ……」

過去の自分へのメッセージの意味を込めて語りながら、彼は過去の自分へエールを送った。

その頃現代では。クライのオシマイダーは消滅し、クライアス社もただのビルへ戻った。

「ハア、ハア、ハア……」

そんな中。エールは一人、クライアス社の中に入ってビルの中を走っていた。

「あつー！」

そこへ、エールは一人の男性を見つけて近づく。

「……ぼくの負けだ。君達の勝ちだ」

そこにいたのはオシマイダーから元に戻ったクライだった。

クライは綻び始めたマスタークライウオッチを持ち、エールに自分の負けと告げる。

「夢を見ていたのは、僕の方だったのかもしれないな」

自分がやろうとしていたのは、夢を見ていたのと同じだったのかもしれないと呟くと、エールはそんなクライの隣に背中越しに座り込む。

「一緒に行こう」

「どこへ？」

「未来へ」

「無理だよ。僕は未来を信じていない」

「ウソ」

クライが立ち上がりどこかへ行こうとすると、エールは彼の手を握る。そして彼女は、クライを優しく抱きしめた。

「本当に未来を信じていないなら。どうしていつも私に『またね』って言うの？」

もしかしたら、エールはとっくに気づいていたのかもしれない。

クライには、本当は未来を信じようとする心があったのかもしれない事を。

「ハハ……ハハハハ……」

クライは涙を流す顔を隠しながら笑う。

するとクライはエールから離れ、それと同時にマスタークライウオツチも、まるで穢れた魂が浄化し、天国へ飛び立っていくかのように消滅したのだった。

「……またね。僕も、もう一度」

花びらが巻き散る中、クライは光の中へと消えていった。

エールはただ一人、そんなクライの姿を静かに見送った。

彼の居た所には、たった一つのジクウドライバーだけが残されていた。

そのままクライアス社のビルは崩壊し、そこからジクウドライバーを手に持ったエールが現れた。

「みんな！」

「[[[[エール！]]]]」

エールが地面に降り立つとアンジュ達が彼女の下へと訪れるが、さらに目の前に灰色のカーテンが出現すると、そこから土と晴夜の二人が先に出てきた。

「みんな！」

「[[[[ソウゴ（さん・時見先輩）！]]]]」

最後にソウゴが現れると、みんなは駆け足でソウゴとエールに駆け寄る。

「ソウゴ！エール！」

アンジュがソウゴを抱きしめ、エールを見る。

「さあや。苦しいよ」

ソウゴはそう言うが、しばらくアンジュはソウゴに抱きついたままだった。

「この野郎〜！心配させやがって〜！」

次にゲイツがソウゴの頭を掴み、嬉し涙を流した。そして、次にエールを抱いてはぐたんに顔を向ける。

「お帰り！ソウゴ！」

「おきゃ〜り！ソウギョ〜！」

「ただいま！」

別れる前に行ったハイタッチを再び三人でやると、ソウゴは笑顔でみんなを見て答える。

「そして……みんな。ありがとう！」

ここには帰る場所がある。そう思わせてくれるみんながいる。このかけがえのない時間を共に過ごせる、仲間がいる。

それが、ソウゴにとって何よりも好きな場所。

そして、彼らは温かい光が周りを照らし出した事に気付き、海岸に顔を向ける。

それはまるで、新しい未来が確立した事を知ろしめし、今この瞬間を祝福しているかのように光り輝く、美しい朝日だった。

「新しい明日……」

「俺達にとつて新しい一日のスタートだ」

朝日がはぐくみ市に登るこの瞬間を、ソウゴ達は最後まで眺め続けた。

——そうしてみんなは、今日と言う一日を過ごす。

えみるとルールーは、パップル達が急遽用意してくれた『ツインラブ』の特別ライブを始めていた。

「ダイスキがあふれる♪ミライを描こう♪大切な夢と一緒に♪」

えみるとルールーの歌声が、聞いているみんなに元気を与えている。

「愛おしい想いを音に乗せ刻む♪かき鳴らせいつだって♪シンキング♪トウギャーザー！」

そのまま二人の緊急ライブは盛り上がりを見せ、みんなを喜ばせていると、ルールーがえみるに語りかけてきた。

「えみる！」

「何ですか？」

「私達は、どんなに離れても『ツインラブ』です！」

「ルールー……はいなのです！」

二人の別れ時は近いかもしれない。

けれど、二人の心はどんなに離れていてもずっと一緒。

だって彼女達はどこだってツインラブ、愛に溢れたコンビだから。

「慈しむココロは♪透明な温度で誰にでも優しく宿る♪途切れてしまっても♪また始めればいい♪奏でよう♪何度でも♪愛々アイラビュ♪」

二人の歌はそのまま奏で続けられ、アスパワワが溢れ出し続けるライブを続けた。

別の場所では、ハリーがビューティーハリーで一人。レジの前で座りながら周りを見回す。

「色々あったな……」

クライアス社も無くなり、マザーの力もソウゴが受け継いで守られた。後はゲイツ達と一緒に未来へと戻るだけ。しかし……

「……」

心の中で、まだここにいたいのかと思う気持ちがあった。けど、自身には約束がある。未来でトウモロウを、はぐたんを守ると言う約束が。

「どっちなんやろな？俺の気持ちは……」

ハリーは目を瞑り、自分の気持ちを考え込む。

「ハリー」

「えっ?」

目を開くとそこは、意識の世界……なのかどうかはわからないが、そこに立っていたのはぐたん……いや、キュアトウモロローだった。

「トウモロロー、聞いてくれ。俺は……」

この世界でライダー力を手に入れた。だから、未来に帰ってもお前をいつでも守れることが出来る。そして、トウモロローを——

彼がそう言い掛けると……

「ハリー。それは本気なの?」

「えっ?」

言わなくてもハリーの気持ちは伝わっていたのか、トウモロローは彼の言葉を遮り、彼自身の本音を聞き出そうとする。

「あなたが私を想うのは、私があなただけを助けたから。」

その恩返しのために、今まで私を守ってくれた」

ハリーは自身の身を顧みず、ずっとトウモロローを守り続けていた。

だがそれは、彼女が自分を助けてくれた恩返しである。

だからこそ、今度は自分の気持ちに正直になって欲しいと話す。

「ハリー。今度はハリーの望む未来に進んで」

ハリリーの本当の想いに気づいていたのか、彼女は優しく微笑んだ。

「トウモロロー!」

気がつくくとトウモロローはおらず、元のビューティーハリーへと戻っていた。

(俺の本当の気持ち……)

「ハリー」

そこへビューティーハリーに訪れたほまれが、ハリーに話し掛けた。

「ほまれ」

「あのさ、ハリー……ここ、残してくれない?」

「えっ?」

「ここハリーが帰ると無くなっちゃうだよね。」

だから、ここだけは残して欲しいの。

みんなとの思い出の場所だし、お店だったら私が……みんなとでやるから……」

「…その必要はないで」

ここを残したい理由を語っていると、ハリーは必要無いと言い出す。

「お前に伝えたいことがあるんや」

伝えたいことがあると言われ、ほまれが少し困惑する。

「……俺……未来に帰らへん!」

「えっ?」

するとハリリーの口から未来に帰らないと言う言葉が出て、更に彼女の困惑と驚きは深まった。

「帰らないって……なんで!ハリハリ地区のみんなはいいの!?! キュアトウモローを守るじゃなかったの!」

ハリリーには未来で多くの家族が待っている。それに、キュアトウモローであるはぐたんを守らなければならぬ。それにハリリーはトウモローの事が……

彼女がその事を伝えていると……

「……もう、俺が守らなくても、トウモローもハリハリ地区のみんな未来に進んで行ける。」

だから、俺も今度は自分の道を進むんや」

「ハリリー……」

「それに、ソウゴを見守り続ける未来人の奴が近くいた方がええやろ。それと……」

ハリリーは途中まで言いかけると、ほまれの頭に手を置く。

「今度は、お前の応援を見守らせてくれや」

今度はハリリーがほまれを応援し、見守りたいと話す。

するとほまれの目に涙が溜まり、ハリリーの体にしがみつく。

「ネズミのくせに……」

「はあく、何回言わせるんや！俺はハリハム・ハリーや！」

何度このやり取りをやるんやとハリーは思うがしかし、ほまればハリーがここに残ると聞いて嬉しく感じていた。

ツクヨミとことりは、はぐくみ市の公園で桐ヶ谷晴夜がツクヨミに用があると話しかける。

「これ」

「えっ?」

晴夜は手紙のようなものをツクヨミに渡すと、ことりは誰が書いた手紙なのかと思った。

「何ですか?この手紙は?」

「これはね。ツクヨミの世界の君の家にあった、君の両親の手紙なんだ」

「えっ?」

これは晴夜が、土に繋げて貰ったツクヨミの世界で見つけたものらしい。

見つけたのはクリスマスの時、スウォルツが行った世界の融合の最中であった。

「その手紙は、君があの世界で消息を経った時に書かれたものらしい。内容を読むどう

かは君が選ぶだ」

「……ううん。今はいいわ」

「いいの？ ツクヨミお姉ちゃんのパパとママからだよ」

「うん。読むのは、私になりたい未来を見つけてからにする。それまでは……」

「そうか」

ツクヨミは自分のなりたい未来を見つけた時にこの手紙を読むと言うと、晴夜はそれを受け入れた。

「それで、スウォルツ……兄はどうなるの？」

「さあな、ただ、スウォルツの罪はかなり重いからな……」

あの後、スウォルツは海東大樹によってある場所に連れられた。

そこは、時間の犯罪者を取り締まる場所……『時間警察』と呼ばれる、時間の中に存在する組織にスウォルツは拘束されているらしい。

「海東さんから連絡が来たけど、スウォルツは時空の混乱に介入もし、そこで多くの人の命を弄んだ。」

「そう簡単に出してもらえないよ」

「そう」

「ツクヨミお姉ちゃん！大丈夫だよ！」

いつか、お兄さんとだってちゃんとお話しして、お互いに兄弟としてやっていけるよ！それに、お姉ちゃんには私がいる！でしょ！」

「ことりちゃん。うん！そうね！」

スウォルツの罪は、妹である彼女にとっても罪なのかもしれない。

けれど、彼女には世界の壁を超えて繋がった友達がいる。それが彼女の心の支えだった。

一方で、クジゴジ堂にてウオズが、ライドウオツチの台座に置かれた平成ライダー達のウオツチを見つめていた。

「……」

「ウオズ？何をしている？」

そこへゲイツが現れると、物思いに耽っている様子を見せるウオズに話しかける。

「……いや、今まで私はこの本の通りに我が魔王を導いた筈が、私の想像とは違う未来に向かっていていると思ってるね」

「そうだな。だが、未来と言うものはわからない。

いくら俺達が先の未来を知っていても、その通りに未来は進まない」

家臣であるウオズはもちろんのこと、最初は敵対していたゲイツも、ソウゴはずっと

オーマジオウになると思っていたし、未来はその通りに進むものだと思っていた。

だがこの時代に来て、そうじゃなかった事を思い知らされた。

同時に未来とは一つじゃない、たくさんの可能性があるんだと知った。

「俺達も未来を信じれば、きつと輝けるものになる」

いつか未来へと帰る時。この時代での日々を忘れない限り、未来だつて輝けるとゲイツは信じていた。

「それを俺はソウゴ達と出会って知った。お前もそうだろう？」

同じ時間を共に過ごし、戦ってきたウオズにならわかるだろうと、ゲイツは目の前で笑みを浮かべている男に問う。

「……………そうだね。実に未来とは難しいものだね。」

それでいて面白い」

窓の外を眺めながら、色んなことを思い出しながらウオズは呟く。

一方で、ソウゴとはな、はぐたんが、野乃家でお互いにアーサーセイバーライドウオツチとミライクリスタル・オーマハートを見せ合っていた。

「これが、オーマジオウの力で誕生したミライクリスタル」

オーマハートを見て、オーマジオウドライバーからこのミライクリスタルへと変化し

たと聞きながら、ソウゴはクリスタルを見つめる。

「それで、未来のオーマジオウとは決着は着いたの？」

「ああ……実はね」

もう一人のジオウである常磐ソウゴが、あの時代におけるオーマジオウの正体である事は、晴夜と土に黙っておくようにと言われたので、存在は隠すことにした。

とりあえず、未来の自分が今の俺に新しい未来を作るため、自分を試していたのだと説明する。

「じゃあ、未来のソウゴがクライアス社にいたのは全部、今のソウゴに自分とは違う道を歩ませる為だったんだね」

「うん」

未来の俺もきつと、オーマジオウじゃない未来を、誰かと一緒に歩んでいける未来を作りかったはず。

だからこそ彼は、この時空が誕生するまでずっと、諦めずに何度も時空を作り直して来たのだと思う。

「でも、俺が今違う未来を歩めるきっかけ作っただのは、はなとはぐたんだよ」

「えっ？」

「はぎゅ〜？」

全ては二人が初めて、仮面ライダージオウとキュアエールに変身した事をきっかけに生まれた。

時見ソウゴ、野乃はな、はぐたん。この三人の出会いが、きつと絶望の歯車に囚われた未来から解放され、運命を変えてくれたきっかけだったかもしれない。

それから大きな変化が生まれ、自分の周りには多くの人との繋がりが生まれた。

「ありがとう。はな！はぐたん！」

「ソウゴ……うん！私もありがとう！」

「はぎゅ〜♪」

お互い、嬉しそうに笑い合う三人。

きつとこの出会いがあったから、みんなの未来が望む道へ歩める原点となったのかもしれない。少なくとも、ソウゴはそう感じていた。

しばらくしてソウゴは野乃家を出ると、もう一人会う約束の相手がいた事を頭に浮かべ、足をとある場所へ向けて動かす。

——そこは、はぐくみ市にある湖。

そこには一人の女の子がいた。

「さいあや」

「ソウゴ君」

待っていた相手は、自身の幼馴染である少女、薬寺院さあやだった。

「……さあや。なんで、また君付けしてるの?」

「あの……ソウゴ君……その……」

あの時、トゲパワワの過剰摂取によって暴走していたソウゴを止めるためとはいえ、みんなの見てる前で彼にキスをした事を思い出し、我に返ったさあやは恥ずかしさの余りソウゴと顔を合わせづらくなっていた。

その影響で呼び捨てで呼んでいたモノが、君付けに戻ってしまった。

「さあや。ありがとう♪」

「えっ?」

あの時、クライに幻惑を見せられ、それを信じてオーマジオウへと変身し、暴走から自分を元に戻してくれたのは、さあやのおかげだった。ソウゴはその事を伝えると……

「それで、あの返事だけど……」

「??」

あの時のさあやから受け取った返事を答えると言い出し、それを聞いたさあやの顔が真つ赤となつて何を言われるのかと落ち着かない様子を見せる。

「俺は、さあやの事が好きだよ」

ソウゴはさあやに返事を返し、その答えにさあやは驚いた。

「それに、さあやが俺の初恋の人だったんだ」

「私が?？」

「うん。覚えてないかな? 神社で青い晴着を着てた事……」

「……あつ?？」

神社で青い晴着を着ていたと聞き、顔を傾けながら思い出そうと記憶を探っていると、その時の記憶が見つかった瞬間に思い出した。

当時、母が着物を出してくれた時、試しに自分に着せてくれた。それをソウゴに見てもらおうと彼がいる神社へと向かったけど、ソウゴは現れず着物を見てもらえなかった事を。

「ごめん。あの時、気づいてあげられなくて」

あの時、ハッキリと顔を見ていれば後で気付いたかも知れないが、結局両者の間にすれ違いが起きてしまい、後ろ姿だけで気づいてあげられなかったつてもあるかもしれない。

しかし、あれがさあやだと知ったのはグランドジオウへと初めて変身したあの時代――2013年だった。

「それで、わかったんだ。俺は、さあやの事をずっと好きだったんだって」

「……………ソウゴ……………」

その言葉を聞けるとは思わなかった為に、さあやの目からは涙が溢れ出そうだった。

「だから…これからも、俺のそばにいてくれないかな?」

ソウゴは右腕を上げて、歓喜のあまり震えるさあやに手を差し出す。

「うん!私もソウゴと一緒にいたい!」

さあやは両手でソウゴの手を握り、ソウゴは残った左手で彼女の涙を拭く。

「じゃあ、改めてよろしくさあや!」

「こちらこそ、よろしく……………ソウゴ」

そのまま二人はしばらく、お互いの手を初々しく握り続ける。

それからしばらくして、ソウゴとさあやは二人でビューティーハリーへとやってきた。

「みんな!あれ?」

すると、ソウゴの目にはなとツクヨミ、ことり達の姿が映った。

「あ!ソウゴ!さあや!」

「これで全員揃ったわね」

「二人共遅いです!」

「みんな、なんで？」

ビューティーハリーには、既にソウゴときあや以外のみんなが集まっていた。

「みんな。どうして？」

どうして此処にみんなが居るのだと聞くと、近くにいたルールーとえみるがその理由を話し始める。

「なんだか、みんなの顔が見たくて」

「ここに来れば、みんながいるからです！」

「ここは、私達とって最高の場所だから」

「俺達にとつての帰る場所でもある。だろ！」

続いてほまれとゲイツがそう話すと、ソウゴは笑みを浮かべながらみんなの顔を見渡す。

「……うん！」

そう——ここは、みんなと過ごしてきたかけがえない場所。ここに来れば、みんなに会える。

だって、それが何よりも好きな時間だから。

「みんな！」

そう思うとソウゴは腕を出すと、他のメンバーも円となって腕を出しては、お互いに

手を重ね合わせる。

「このメンバーで共にいられるのは、あと僅かかもしれない」

ウオズは「これから起こるであろう未来」を思い浮かべ、彼らと過ごせる時間があと僅かしか無い事を胸に刻む。

「でも、私達の思いは」

「離れていても」

「ずっと一緒や!」

それでもことりやツクヨミ、ハリー達には、皆と過ごした思い出がある。

「どんな未来があっても」

「例えそれが困難でも」

「自分達の未来を信じる!」

だからこそ、えみるやルー、ほまれ達はどんな困難があつたとしても、これからの未来を信じる事が出来る。

「それに私達なら」

「どんな未来でも乗り越えられる!」

何故ならさあやとゲイツ達には、共に困難を共にした友が、仲間達がいるから。

「何でもなれる!なんでもできる!」

「輝く俺達の未来を信じて！」

最後にはなとソウゴ達を筆頭に、みんながそれぞれの顔を見合わせながら、はぐたと共に手を上へ目掛けて掲げる。

『フレフレ！フレフレ！俺（私）！フレフレ！フレフレ！オー——！』

「フレフレ！フレフレ！みんなな〜！」

——このメンバーが別れ、それぞれの道を歩むのはそんなに遠くの未来では無い。

けれど、時空と世界の壁を越えて繋がった彼らの絆は、例え離れていてもずっと一緒なのだ、彼らは信じていた。

終わり

次回予告！

クライアス社との戦いが終わり、ソウゴ達はいつもの平和な日常へと戻る。

しかし、同時にゲイツ達の別れも近くなる。ドクター・トラウムらは未来へ帰る準備をしていた。そんなある日……

はな「ここが？」

ソウゴ「クリムの別荘？」

クリーム・スタインベルトからの緊急の連絡を受けて、ソウゴ達はクリームの別荘へとやってきた。

「やあ、ここが仮面ライダードライブの生みの親の場所か？」

「させるか！Let's 変身！」

仮面ライダーマツハと共にジクウドライバーによって変身した謎のライダーを応戦。

そして、仮面ライダードライブの消滅を止めるべく最後のタイムスリップへと向かう。

ソウゴ「さあ、行こう！1575年！」

最後のタイムスリップの先で、戦国の魔王と呼ばれた織田信長と出会う。そこで待つ戦いが、仮面ライダードライブの歴史を守る。

しかし……

「俺達はクオーツァー！歴史の管理者だ！」

現代へと戻ると、そこにはクオーツァーと名乗る敵がソウゴの前へ現れる。

そして、そこにはウオズの姿があった。

真の最後の戦いは、今ここで始まる。

ゲイツ「結局お前は敵だったか」

ハリー「やるしかないんなやな」

『ゲイツ！ゲイツリバイブ疾風！』

『ハリー！ギアヘリテージ！』

ゲ・ハ「変身！」

『ワクセイ！』

ウオズ「変身！」

ゲイツ、ハリーはウオズの勝負が始まる。

そして、ソウゴ達は……

ソウゴ「俺がみんなからライダーの力を奪った……」

今までの戦いも継承も全てはクオーツアアの筋書き通りと聞かされたソウゴ……

それでも――

「俺が平成という道を、きれいに舗装し直してやろうってこと」

ソウゴ「……そんな事はさせない！」

『バールクス！』

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダー・バールクス！』

『ジオウ！アーサーセイバー！』

ソウゴ「変身！」

ソウゴはジオウ・アーサーフォームへと変身し、エール達と共にクオーツアールと戦う決意を決める。

ウオズ「祝え！時見ソウゴが真の魔王として誕生した瞬間を！」

そして、魔王の力とマザーの力が一つになり、新たな一ページが開かれた。

特別編5 劇場版 HUGつとジオウ！Over Quartzer！

「——これが、私がお伝えできる。この本に描かれたラストページです」

特別編5 劇場版 HUGつとジオウ! Over Qu
artzer! 前編

「ぐにゅ……あ、夢か……ふわぁ……」

奇妙な夢から舞い戻ってきた少年——時見ソウゴの目が覚めると、彼はベットから降りて部屋にかけてある制服に手を伸ばし、パジャマを脱ぎ捨てる。

あの日……クライアス社との最後の戦いからしばらく経ち。あれから彼らは、各それぞれ元の日常へと戻っていった。

ソウゴはそんな激動の日々を振り返ってみると、案外それはそれで寂しいと感じていた。

正月が過ぎ、冬休みも直ぐに終わった中で、そんなことを思い返しながら制服へと着替えを終えた彼は、階段を降りて一階のリビングへと到着する。

「おはよう〜」

「おはよう! ソウゴ!」

「相変わらず、朝に弱いな」

其処には既に、リビングには朝ごはんを用意してくれた叔父の時見順一郎と、自身と

此処…クジゴジ堂にて一緒に暮らしている少年と少女——明導ゲイツとツクヨミの姿があった。

「ごめん。変な夢を見て…あれ?ウオズは?」

「今日は仕事で早く出て行つたよ」

それともう一人。ここで暮している同居人であり、家臣——いや、仲間のウオズの姿があるはずなのだが…仕事なのかいつもの彼の姿が此処にはなかった。

「それより、変な夢って?」

「えっ?ああ…なんか新しいライダーが始まるって夢」

ツクヨミに話しかけられたソウゴは、一先ずウオズの事は置いておき、さつき見た夢について語る始める。

「新しいライダー?」

「新しいライダーって…また、新しい未来の可能性かしら?」

新しいライダーってどういう奴だ?と試行しているゲイツの隣にるツクヨミが口にした、新しい未来の可能性…

それはクライアス社と交わった、最後の戦い。

あの戦いにて、自分達の未来には無限の可能性があると知ったソウゴ達は、新しい未来を作ろうと前に進もうと決意していた。

「でも、楽しみだよ。俺達に以外に知らない仮面ライダーに会えるかもしれないって思うとー！」

夢で見たあの新しいライダーとの出会いに、ソウゴはワクワクが止まらない様子を見せ、ツクヨミは「ソウゴらしいね」と呟いていた。

「その新しいライダーに早く会えるといいな」

話し合いながらソウゴ達は朝食を食べ済ませると、そのまま学校へ行く支度を整える。

「おはようー！ソウゴー！」

そんな中クジゴジ堂に現れたのは、ソウゴの幼馴染である薬師寺さあやだった。

「さあや！お待たせ！」

鞆を持ってソウゴが降りてくると、其処には既にゲイツとツクヨミの姿もあった。

「叔父さん！行つてきますー！」

ソウゴは順一郎に手を振りクジゴジ堂を出ると、四人は学園へと向かつて歩き出す。
「……ソウゴ君、本当に変わったね」

それに対し手を振って応える順一郎は、今のソウゴを見て変わったなと感じていた。

昔まではいつも一人でいる事が多かったソウゴが、今ではさあやだけでなく、多くの友達が彼の周りにいるという事実をかみしめながら。

「…兄さん、義姉さん。ソウゴ君はみんなと出会って、嬉しい形に変わったよ」
クジゴジ堂の中に戻ると、幼いソウゴと一緒に写っている両親の写真に向けて、順一郎は笑みを浮かべながら呟く。

一方でソウゴ達が学園の通路を歩き続けている頃、ソウゴとさあやがかなり近い距離で歩いている様子を、その後ろでゲイツとツクヨミが見ていた。

「……ねえ、さあや。この前の戦いからソウゴとの距離が縮まったと思わない?」
「まあ、ソウゴを元に戻すのに”あれ”までしたからな」

この前の戦いで、クライによりソウゴはオーマジオウへと一時的に変身して暴走していた時、彼はプリキュア達の諦めない姿を見せられ、更にゲイツ達の攻撃でオーマジオウの仮面が破壊された。

そしてトドメと言わんばかりに、アンジュによるソウゴへの想いが彼を元の最高最善の魔王へと歩む道に戻したことを思い返していた。

「まあ、ソウゴへの告白だったな……」

あの時の事を思い返したゲイツは、それ以来からソウゴとさあやはお互いに一緒にいる時間が増えたなと思った。

「ソウゴ! さあや! ゲイツ! ツクヨミ!」

「おはようございます！」

そんな事を思っているとはな、ことり、ルールーが現れた。

「ツクヨミお姉ちゃん！」

「ことりちゃん。おはよう！」

はなの妹であることりはツクヨミの隣に行くと、少し離れた所からほまれとえみるの姿が垣間見えた。

「みんな！」

「おはようなのです！」

「えみる。おはようございます」

「ルールー！今日も頑張るのです！」

「はい！」

ほまれとえみるもソウゴ達と合流し、これでいつものメンバーが全員が集まった。

「これでみんな揃ったね」

『うん！』

全員揃った所でソウゴ達はいつものようにみんなと話しながら学園へと向かう。その光景をソウゴはずっと見つめながら歩いていった。

「ソウゴ君？どうしたの？」

「ううん。なんでもない!」

「そうだ!みんな!今度デートしよ!」

さあやの問いにそう答えていると、はながいつものようにみんなと出かけようと提案する。

当然、みんなの答えは…

『賛成——!』

これが、みんなと一緒に未来に向かつて歩んで行きたい彼の未来。どんな未来が待っているかわからないけど、この時間をみんなと過ごせる未来を歩み続けていた。

翌日、ソウゴ達はいつものシヨツピングセンター『HUGMAN』へと赴きみんな商品を見たり、フードコートで食べたりなど楽しみながら一日を過ごしていた。

「ふう〜」

ソウゴが近くの椅子に座り一息吐く。

「ソウゴ!」

「はな。はぐたん」

すると、はなと彼女が抱いているはぐたんがソウゴの隣に座る。

「——なんか、信じられないかなって……」

「えっ?」

「ついにこの前まで、あんなに戦っていたなんて……」

「うん。そうだね」

二人が初めて仮面ライダーとプリキュアに変身した運命の日からもうすぐ一年となり、そこからみんなとクライアス社と戦い、その戦いの中で敵や味方に関係なくお互いに分かり合う事が出来た。

「さつて……じゃあ——『えっ?』?ことりちゃん?」

いきなりことりが叫び声を上げ、何事かと思ったソウゴ達はことりの元へ急ぐ。

「どうしたの?ことり?」

ことりとえみるがテレビの前で驚いた表情で立っていた。

「皆さん!これを見て下さい!」

「これ……」

二人に言われ、そのテレビに映るニュースをソウゴ達も見る。

『——ご覧下さい。徳川美術館に展示されている、長篠合戦の屏風絵に不思議なロボットと武者が映し出されました!』

そのニュースを見て屏風絵の中に写るロボットの絵に見覚えがあり、ソウゴ達は「ああ!」と声に出して驚く。そのロボットの片方はクライアス社が使っていたのと同

じだが、もう一つのロボットはゲイツの赤いタイムマジンだった。

『さらに武者の横に映る所に『芸津殿』と書かれております』

『——えっ?』

『芸津殿』と聞き、ソウゴ達は頭に「!?」を出して驚いているゲイツの方を見る。

「…えっ? いや!俺は知らんぞ!」

ゲイツは知らないと言うが、この絵にあるのは間違いなくゲイツの変身した姿とタイムマジンである。

「だいたい!その長篠の合戦?何とかって?」

「長篠の合戦はね。織田信長と徳川の連合軍が武田軍との戦いを題材にした屏風絵の事だよ」

「それっていつの話?」

「えつくと、1575年」

「本当にソウゴって歴史に詳しいね」

「私もソウゴさんが、こんな歴史について詳しいなんて驚いた……」

すらすらと長篠の合戦を説明したソウゴに、みんなは素直に賞賛した。

「……けど、なんでそれにゲイツが?」

「過去にその時代に介入したことが?」

「いや、行つたことはないはずだ」

小首を傾げるほまれの横でルーラーが行つたことがあるのかという問いに対し、行つた記憶が無いと語るゲイツを信じた場合、その出現した謎の屏風絵は一体何なのだろうか。事実上、一同は頭を悩ませる。

「ん？」

突如として、ゲイツの腕のライドウォッチホルダーにあるドライブのライドウォッチが光り出した。

「ドライブウォッチが光っているのです！」

光り出したドライブウォッチを見て驚くと、急にソウゴ達の見ていたテレビ画面にも異変が起こり出した。

『——ウゴ……ソウゴ……ソウゴ。私だ…』

するとテレビから聞こえる声が、ソウゴの名を呼んでいた。

「？この声……」

聞き覚えのある声にソウゴはテレビの画面を見続ける。

するとそこから、一人の男性の姿が映し出されようとしていた。

『ソウゴ！私だ！ソウゴ！クリームⅡスタインベルトだ！』

「!? クリーム！」

姿を見て一瞬誰だと思っても、名を聞いて声の主によく気付いたソウゴ達。

この声の正体は仮面ライダードライブの生みの親である科学者、クリムIIスタインベルトだった。

『よかった。気付いてくれて。久しぶりだね、ソウゴ』

「クリム。どうしたの？」

『実は……君達に頼みがある』

「頼み？」

ソウゴとはながテレビに顔を近づいて話を聞いていると、彼の口から頼み事があると
言われる。

『ああ、ここで話すより私の別荘で聞いてくれ。位置は君達に送る』

クリムがそう言うと同時に、ドライブウオッチの光がミライパッドへと移る。

「みんな!?? 見て!」

さあやの持ったミライパッドを見るとマップに座標が点滅された。

おそらくそこがクリムの屋敷の場所で、さっきの光がその屋敷の位置情報をミライパッドへ転送したのだとわかる。

『すまないが、ソウゴ。よろしく頼む』

それだけを言い残したクリムはテレビから去り、画面も元に戻った。

「……何や？ 一体何が起こったんや？」

「わかんないけど、クリムが危ないのは確かだよ」

ハリーは一体何が起こっているのか飲み込めなかったが、何かを焦っている事だけは確認出来た。

「先程の会話からして、何やら焦っている確率は86%です」

「じゃあ、早く助けに行かないと！」

「みんな！ 行こう！」

「……うん！」「……」

はたとソウゴの呼びかけで一同はHUGMANを出ると、急いでミライパッドが指し示すクリムⅡスタインベルトの別荘へと急ぐ。

同じ頃、ソウゴ達の目指す場所にバイクで向かう者がいた。

「待っている！ クリム！ 今すぐマツハ向かうぜ！」

男性が乗り込む白いバイクはスピードを上げてクリムの名を呟きながらソウゴ達と同じ場所へと急ぐ。

ソウゴ達は一足早くに、ミライパッドが指し示したクリムの別荘へと到着した。

「あつー!ここだよー!」

「あれ?別荘なんて無いよ?」

さあやが持っているパッドを頼りに来た一同だったが、はなの言う通り到着した場所には屋敷なんてものは建ってなかった。

しかし、かつて何かが建てられていたような跡は見られている。

「とにかく、辺りを探すぞ」

「そうだね」

ゲイツの言葉にほまれが頷くと、ソウゴ達はとりあえず辺りを見回し、何かクリムに繋がるものは無いかと探し回る。

「うーん」

「中々、見つからないのです」

辺りを隈なく探すソウゴ達だったが、倒壊した跡しかなくクリムに繋がるものは何も無いように思えた。

「はぎゆー!はぎゆー!」

「ん?どなんしたはぐたん?」

はぐたんが瓦礫の中から何かを察知し、何かあるのかと思ったソウゴ達はその瓦礫を退かす。

「これは……」

瓦礫の中から扉の形をしたものが見つかり、次に取っ手の部分に目を向ける。

「開けるぞ」

ゲイツが扉を開けると、そこには地下へ続く階段があった。

「地下室ですか？」

「地下室に何かあるのですか？」

ルールーとえみるは地下室の下に、クリムと繋がりのあるモノがあるのかと睨む。

「とりあえず、行ってみよう」

全員は地下室へと向かって行き、携帯のライトを照らしながらソウゴ達は地下への階段を降りる。

「……何も無いね？」

「地下やから何かあると思うぞ？」

地下室が暗いから全て把握出来ないと言うのもあるかもしれないが、ことりの言う通り何も無いと思い始める一同。

しかしハリリーの言うように、地下室である以上何かがあると言う考えもあった。

「ん？」

「ソウゴ君？」

するとソウゴが何か気付き、さあやもその後を追う。

「金庫?」

見つけたのは、少し古い型をした金庫だった。

ソウゴが力を入れて金庫の扉を引こうとすると、金庫には鍵はしておらず、何とか開いた。

「何かあった?」

「……十字架だ」

ほまれとゲイツが覗くと、中にあったのはケースの中で大事に保管されている十字架だった。

「? なんか……いい匂い」

「そういえば……確かに……」

金庫に置かれている十字架は一体何なのだと思いつながら見ていると、ソウゴとはなが十字架からいい匂いがすると眩き、ソウゴがその十字架を掴もうとする。

「その十字架に触るな!」

するといきなり触るなどという声が聞こえ、驚いたソウゴは触るのをやめると声の聞こえた方へと振り向く。

そこに居た人は急いで階段を降り、ソウゴ達の前へと現れた。

現れたのは、白いパーカージャケットを羽織った歳上の男性で、何やらソウゴ達を敵視するような目で見ていた。

「あの……」

「お前らが悪党か！」

「えっ？ いや、私達は……『まさか、こんな子供が……』違います！」

はなが誤解を解こうとするが、男性は此処へ勝手に入ったソウゴ達を完全に敵だと思いい込んでいた。

ゲイツとソウゴは前へ出て、その場に緊張感を漂わせる。

「何者だ？ お前は？」

「詩島剛だ」

「詩島剛……あつ？？」

「お前が……」

その名を聞いたゲイツとソウゴは、その名前には聞き覚えがあった。

以前、アナザードライブの時に出会った仮面ライダーダードライブ・泊進之介の義弟だと思聞かされた仲間の名前。

それがこの『詩島剛』という男性だった。

「クリムは俺が守る！」

「待って！俺達は敵じゃないよ！」

ソウゴ達がドライブの仲間である男性である事を思い出すと、剛に敵じゃないと告げる。

「何？」

敵じゃないと言うと、剛も止まった。

「あんた。泊さんの仲間で義弟の人でしょ？」

「お前。もしかして、進兄さんの言っていた……」

話程度だが、剛もソウゴの事は進之介から聞いていた。

「剛。彼らは敵じゃない」

そこへ、——ホログラムの立体映像ではあるが——クリームⅡスタインベルトの体が映し出された。

「剛。彼らと一緒に力を合わせて欲しい」

「クリーム……」

剛がクリームに言われ納得すると、ソウゴはクリームに近づく。

「クリーム。もしかして、前に言ってた？」

ソウゴはあの時、『近々、私を狙っているもの達がいる。そのためにまだ、ドライブの力は残しておきたいのだよ』とクリームが言ったことが関係しているかと思っていた。

『ああ。奴らが動き出しのかもしれない』

「わかった」

ソウゴ達がクリムの頼みを引き受けたその後、彼らは一度、地下室を出て地上へと戻る。

「悪かったな。さつきは……」

「全然大丈夫だよ」

「寧ろ、私達の味方がいて嬉しいですよ」

お互いに誤解があつたが、何とか解決したのでとりあえずは収まつた。

「へえ〜……」

『っ!!??』

すると聞き慣れない声が聞こえ、一同は声の聞こえた方へ振り返る。

「先手を打つて加勢を呼んだんだ……」

そこへ、前髪を七三分けて後ろ髪はウルフヘアに近い、若い男性がソウゴ達の前へ現れた。しかし、口調からして味方には見えなかつた。

「流石、クリムⅡスタインベルト……仮面ライダードライブの生みの親」

そう呟くと表情がこちらに敵意を向けるかのように悟り、男性はあるものを見せる。

『ザモナス!』

「ライドウォッチ!?」

男性が持っていたのは初めて見るタイプのD，3ライドウォッチ。そのウォッチを既に腰へと巻いているジクウドライバーへと装填し、ロックを解除する。そして背後に現れた左右が赤と青となっている時計には、黄銅色の尖りとヒレのような物が付いていた。

「変身!」

そのままドライバーを回すと、男性の体が激しい爆炎に包まれる。

『ライダータイム!仮面ライダーザモナス!』

そこに現れた姿は、背びれのような頭部と青い装甲の右半身と赤い左半身装甲を持ち、鱗状のアンダースーツという全体的に魚類のようなデザインをしており、胸には革の時計バンド、肩装甲は金色の歯車の意匠となっており、右肩からは翼のような形状のマントを纏ったライダーとなっていた。

「仮面ライダー……」

「ツクヨミとハリーは、はぐたんを連れて離れて」

「うん」

「わかった」

ソウゴに離れる様に言われ、ツクヨミとハリーはソウゴ達から離れる。

ソウゴとゲイツはジクウドライバーを、剛はマツハドライバー炎を腰へと装着し、はな達はプリハートとミライクリスタルを出し構える。

『シクナルバイク！ライダー！』

『ジオウ！』

『ゲイツ！』

「Let's 変身！」

「変身！」

「「「「ミライクリスタル！ハート、キラっと！」」」」

一同はそれぞれ変身アイテムをジクウドライバー、マツハドライバー炎、ミライクリスタルに装填し、彼らの姿が変わる。

『マツハ！』

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

「輝く未来を、抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」

「みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」

「「みんな大好き！愛のプリキュア！」」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

「みんな舞い上がれ!希望のプリキュア!キュアアラー!」

「[[[HUGっと!プリキュア!]]]]」

「追跡!撲滅!いずれもマッハ!仮面ライダー〜:ツ!マッハ!!」

いつものようにプリキュアが名乗り上げるのは当然の事だが、仮面ライダーが名乗り上げるといふ珍しい光景にエールとジオウらは驚く。

「行くぜ!」

マッハが先陣切って謎の仮面ライダー…ザモナスに一人で向かって走って行った。

「よし!俺達も!」

ジオウ達もマッハの後に続いて仮面ライダーザモナスに向かって走って行く。

「はあ!」

ジオウが先制パンチを繰り出す…が、簡単に避けられる。

「早い!」

「タアアア!」

エールがその素早さに驚いていると、アンジュとエトワールが同時にキックを繰り出すが、これも後ろへとバク転して躲す。

「ねえねえ、そんなもの？」

「「まだまだ！」」

ザモナスの煽りに乗る様にアムール、マシエリ、アーラの三人が飛び込む。しかし、ザモナスは地面へと伏せると回転しながら足技を繰り出し、三人を寄せ付けられないようにする。

「ツ!??!」

「はああー！」

今度はゲイツとマツハが応戦するが、ザモナスは二人の攻撃でも余裕で躲す。

ザモナスは自身の身軽い動きでジオウ達を翻弄させると、黄色いライダー文字の複眼で相手を見渡すと、「さって……じゃあ今度はこつちね」と言いながら今度はザモナスが仕掛けてきた。

「うわあー！」

身軽い動きでゲイツとマツハの頭上に飛びそのまま空中で足技を繰り出し、二人を倒れさせた。

「ゲイツー！」

「はあー！」

ゲイツが倒れた事で気を取られて隙が生まれたジオウに、ザモナスはボウガンのよう

な武器を持ってエネルギー矢を放った。

「うわあ!」

「ソウゴ!」

直撃したジオウにアンジユが直ぐに駆け寄ると、ザモナスはジオウが落とした十字架を拾う。

「ふう〜…やつぱりね〜」

十字架に目が行っている際にエールがパンチを繰り返したが、ザモナスは片腕でそれを悠々と掴む。

「ツ!…何がやつぱりなの?」

「…この時代にも用は無いよ」

エールは顔を近づけながらザモナスの呟いた言葉について聞き出す。ザモナスはエールの質問に答える事なく彼女の拳を振り払う。

「マツハ。お前のドライブも消える。ふうん!」

「っ!? 待て!」

マツハが追撃しようとするがザモナスは一瞬にして姿を消してしまった。

「ドライブとマツハが消える…」

不穏な動きを見せる仮面ライダーザモナスに、ジオウ達は手も足も出なかった。

みんなは変身を解除し、お互いに情報を交換しようとする。

「ねえ、あの十字架って……」

剛にザモナスが奪った十字架について聞こうとする。

「スタインベルト家に伝わる家宝だ」

そこへ、再びクリムのホログラム映像が現れた。

「クリム」

「……」

「どうしたのですか？ ルールー？」

「先程現れた時より映像にバグが生じています」

「えっ？」

ルールーの言う通り、先と比べるとホログラムの立体映像に乱れが生じていた。

「クリム、どうした？」

「私のデータが乱れている……私は既に死んだ……肉体……だが、それが系図データごとと消えかけている」

「系図のデータ？」

系図が消えかけていると聞いたソウゴ達は、クリムのスタインベルト家に何か大きな影響が働いてのだと気づく。

「16世紀に……」

「16世紀がなんだって?」

「すまない剛……気付くのが遅すぎた……」

16世紀と言いつつ残りクリムのホログラムは途切れてしまった。

「ツ!? お屋敷が!」

クリムが消えると同時に、先までの倒壊した屋敷跡が突如として消滅を始めたのだ。

「まさか……」

クリムに関わるものが消滅するのに気付くと、閉まっている変身用シグナルバイクも消滅の兆候が現れた。

「一体何が起きてんだ……」

今の剛には一体何が起きようとしているのか全く理解できずにいたが、ソウゴ達は何が起き始めているのか察し始めていた。

「クリムって奴の存在した歴史が消えかけている。あの敵は過去に遡り、クリムの祖先を消そうとしている」

「えっ?」

ゲイツの推測を聞いた剛は一瞬思考が停止しかけるが、その前にほまれとはなが額から汗を垂らして焦りを見せていた。

「それってやばいじゃん！」

「クリムさんの先祖がいなくなるって事は……」

「おそらく、ドライブとマツハの歴史も消える」

「ああ。それが敵の狙いかもしれない」

さあやとゲイツの言う通り、クリムの先祖を消すことが敵の思惑だと予想される。

「どうすればいいんだよ！ 未来から来た悪党なら戦った事はあるが、過去に遡る敵じゃあ追跡が出来ねえ！」

これでは打つ手がないと頭を抱える剛に、ソウゴはある可能性を話す。

「それでも無いよ。俺達は時を超えられる」

「えっ？ 過去に行けるのか？」

「うん！」

ソウゴは笑って答えた。彼らには時を渡る力を持つマシン……タイムマシンがある。

「だったら……頼む！」

時を渡ると聞き、剛はソウゴ達に頭を下げる。

「クリムを守ってくれ。俺は死んだダチを……」

「仮面ライダーチェイサー」

「っ！」

ツクヨミが呟いた人名を聞き、ソウゴ達は剛の事情——死んだ仲間のロイミュード『チエイズ』を甦らせようとしている事を知っていると察した。

「ああ。あいつはクリムがいなかったから、この世にいなかった奴なんだ。だから……」
「わかった。俺達に任せて」

ソウゴは剛の頼みを引き受け、クリムを守ることを決めた。

剛と一度別れたソウゴ達は一度ビューティーハリーへと戻り、そこでウオズとも合流し出発の準備を始めた。

「ツクヨミ、タイムマージーンは？」

「大丈夫、行けるわ」

扉からツクヨミと、先日の戦いの後に修理を行って問題は無いか確認をしていたトラウムが入って来た。

「けど、エネルギーが往復分しかないから気をつけるんだよ」

「うん。ありがとう」

タイムマージーンの時を超える力は往復分しかないと言われたが、行く分には問題無いようだ。

「せやけど、あのザモナスってライダー。なんで、クリムの祖先が狙いなんや？」

その中でハリーは何故、クリムの祖先を狙うのかその意図が読めなかった。

もうクライアス社も無いし、タイムジャッカーだつて解散している。

それなのに相手は、どう言う意図を持ってライダーの歴史に介入するのか：

「でも、放つては置けないよ！」

「うん！あのライダーを止めないとクリムさんが！」

「私も！詩島剛の助けたい人の力になりたい！」

「……うん！……」

だがソウゴは相手の考えや企みなぞ関係無いと言い、はなとツクヨミも彼らの助けに
なりたいと語る。

当然の様に全員は、クリムの祖先の居る16世紀へと向かおうと決意する。

そんな彼らの決意を横目に、ウオズがソウゴの近くに寄つて先程テレビで見た事と彼
らの話から推測したのは…

「今回の敵を追つた君達が何らかの形で長篠の合戦に絡んだ。それがあの屏風絵に影響
したんだろうね」

おそらくこれから向かう場所で、あの屏風絵に影響を及ぼすきっかけになるだろうと
話す。

「ウオズも来る？」

「勿論だよ、我が魔王。私は君の家臣だからね」

ウオズも行くことになり、ソウゴ達はタイムマシーンへと向かう。

ソウゴの乗るタイムマシーンには、操縦するソウゴにはな、さあや、ほまれ、ツクヨミが乗り込む。

「クリムの先祖って外国人じゃないの？」

「戦国時代の日本とどう繋がるんだろ？」

「でも、行かないと何もわからないよ」

「うん。行けばきつと何かわかるはずだよ」

「それにもしかしたら、信長に会えるかもくしれないなんてくめつちや楽しみ！」

ツクヨミとほまれ、はなにさあやが会話しながら準備する中、ソウゴは織田信長に会えるのかもくしれないと言う期待に胸を躍らせていた。

一方で、ゲイツの乗るタイムマシーンはウオズ、ハリー、はぐたん、えみる、ルーラー、ことりが乗り込んでいた。

「魔王の異名を持つ信長と我が魔王がお見えとは……」

ウオズも信長と会える事に胸を躍らせていた。

「信長とは、それ程偉大なのですか？」

「えっ？えつとく……えみるちゃん」

「あ、あの、私も……」

ルーラーの問いに対し、小学生の二人には信長と言われてもあまり説明出来なかった。

「まあ、簡単に言えば天下統一に近かった男だった、って事だ」

ゲイツが代わりにぎつくりと解説をしながら、タイムマジーンに戦国時代へと時代をセツトした。

「さあ、行こう！1575年へ！」

二機のタイムマジーンは宙へと浮かぶと、そのまま二機のタイムマジーンはタイムトンネルの中へと入り、1575年へと向かう。

その様子を、未来へと帰る準備をしているトラウム、リストル、ピシンの三人が見上げて見送った。

そのままタイムトンネルを潜り終え、1575年へと到着したソウゴ達。タイムマジーンを人が見られないような茂みに隠して、街へと出ていた。

「……ねえ、私達目立ってない？」

「…私もそれも思った」

そこでふと、ツクヨミは自分たちの姿が今の時代に合っていないことに気付き、ほま

れもそう言えばそうだったと呟く。

そこでソウゴ達は怪しまれない様、一先ずこの時代に馴染む服へと着替える事になった。

「十分この時代に馴染めている筈さ」

着替えを終えた一同が集まると、ソウゴとハリーは街の住人に近い服装、ゲイツは以前コスプレで使った侍の衣装を着ていた。

「これ、お祭りとかの踊り子の格好じゃん」

「なんか、違うと思うけど……」

「ルールー！とても似合ってるのです！」

「えみるも可愛いです！」

ほまれの黄色いよさこい衣装に疑問を抱いているツクヨミは白く薄い布を垂れ下げている市女笠を被ってピンクの壺装束を身に着けており、えみるとルールーの二人は羽織を纏った旅人——すなわち旅装束姿なっていた。

「さあやとことりも、凄くかわいい〜！」

「お姉ちゃん。褒めすぎ」

「ありがとう」

残るはなとさあや、ことりの三人はそれぞれピンク、青、緑といった色の少々高い着

物を着ていた。

「……」

「?……ソウゴどうしたの?」

「えっ? いや……人が多いなって……(さあやの着物の姿に目が入ってた……)」

さあやの着物の姿を見ていたソウゴは、つい幼い頃に惚れた時に目にしたさあやの姿と重ねていたが、正直に言うのは流石に気恥ずかしいのでそう誤魔化した。

「ねえ、ウオズなんで着替えないの?」

「私までコスプレをしたら、見ている人が驚くからね」

ハロウインの時もそうだったが、ウオズは訳の分からない理由を付けては、何故いつもの服装から変える気がないのかとはな達は首をかしげる。

「とにかく、手がかりはあの屏風絵だけだ。武田軍か織田軍どちらかに敵が介入してくる筈だ」

気を取り直したゲイツは、あのザモナスと名乗ったライダーがどちらかの軍に接触するだろうと話す。

「よし。じゃあ、織田軍と武田軍からコンタクトを取るために二手に分かれようか」

ソウゴ達は織田軍と武田軍へと分かれて行動を開始する。

二手に分かれたソウゴ達は、武田軍とコンタクトを取ろうと村から離れるが、此処で

ツクヨミがとある事実を思い出した。

「武田軍ってどこにいるの?」

「さあ……」

何処に行けば武田軍に会えるのかと言うツクヨミの問いに対し、歴史については未だに詳しい説明をなされていないことが眉間に皺を作る。

「そもそも、ここは信長の住む村なので武田軍は村の外なのでは?」

「じゃあ、外に行くの?」

「いや、その必要ないよ」

ルーラーの話を聞いて外に行けばいいのかとことが聞くと、ウオズがわざわざ此処を出る必要はないと言う。

「さつきから我々を付けているのもが居てね。はあ!」

ウオズがマフラーを伸ばし、背後の木へ向かって放つ。

するとそこから人影のようなものが見え、そこから一人の人物が降りて来た。

「忍者なのです!」

えみるの言うように、ウオズのマフラーを避けて現れたのは忍者だった。

「はあ!」

忍者が襲い掛かって来るとツクヨミ達は攻撃を避け、ツクヨミがファイズフォンXで

応戦する。

そこへウオズがマフラーを伸ばし忍者を捕らえた。

「南蛮に捕らえられた……お主が信長か！」

「武田の忍者君。君の話の話を聞こうかな？」

ウオズがマフラーを引つ張り、更に締め付けて尋問する。

「くう……信長に……大同している南蛮の娘を葬れば、報酬が貰えると……」

忍者がみんなに襲ったわけを話すと、重要な手掛かりになる情報を得た。

「信長と外国人の女性が？」

一方で、信長軍とコンタクトを取ろうとしたソウゴ達は……

「信長軍ってどこにいるの？」

「ここは信長の領地だから、いると思うけど……」

「でも、それでどうやってクリムの先祖に会うの？」

ミライパッドを使い、はな達が信長軍のいる拠点の場所を探そうとしていた。しかしほまれの言う通り、クリムの先祖がどういった人物なのか分からないので探しようが無かった。

しばらくして、別行動をしているツクヨミ達から忍者から得た情報が入る。

「外国人の女性！わかった！」

ツクヨミから連絡を受けたソウゴ達は信長と外国人の女性がいると知り、信長軍の拠点へ向かう為に村の門を潜る。

「タアアアア！」

突如として、頭上から声が聞こえるとソウゴ達はそこを離れる。

何者かが着地すると、ゲイツは腰に掛けていた刀を構える。

「武田のものか？ここから先は通さんでござる！」

現れた織田軍らしき人物は小刀を構え、ソウゴ達を武田軍の刺客だと疑い始めていた。

「ハリー。お前ははぐたんとここから離れろ」

「おお！」

「ゲイチユ〜！フレフレ〜！」

ハリーがはぐたんに怪我をさせない為にソウゴ達から離れる。

ソウゴ達が離れようとしたのを見た男性は小刀を構えたまま、懐から何かを何枚か取り出し始める。

「はあ！」

『つ？？？』

いきなり手裏剣を放った事に驚いたソウゴ達は一瞬体が硬直するが、ハリーとはぐた

んに投げられた3割の手裏剣が迫っている事に気付くとすぐさま我に返った。

「ハリー！はぐたん！」

ほまれが飛び込みハリーとはぐたんを躲したが、その影響でハリーが妖精に戻ってしまった。

「さあや！」

「めつちよく！」

「タアア！」

ソウゴはさあやとはなに手裏剣が当たらない様に二人の前に出るが、残った手裏剣はゲイツが刀で撃ち落とし、誰も怪我することは無かった。

「敵ながらお見事……ほーれーたーでーごーざーるー！」

手裏剣を全て難なくと躲したソウゴ達に、男性は先まで暗い雰囲気から一気に様子が変わった。

「ハリー。大丈夫？」

「おお……はぐたんも無事やで」

ほまれが大丈夫かと聞くが、はぐたんはハリーが下敷きとなつて無事だった。とりあえずはぐたんをはなが抱っこする。

「敵じゃない……敵じゃないよ！」

「私達は信長に会いに来たんだ」

「ストレートに言う奴があるか」

信長に会いたいと語るソウゴとはなに、そう簡単に行かないだとゲイツは言うが：

「この牛蔵が連れて行ってあげるでござる！」

『——えっ?』

「早う〜！」

簡単に会えるわけがないと思っていたが、ひよんなことから信長と会えるようになったソウゴ達。

そのまま牛蔵と名乗った男性に案内された一同は、信長の拠点へと到着した。

『信長様の〜御成〜!』

その時、一人の兵士が信長が来ると発言し、ソウゴ達は信長の座る前に膝をついて構える。

「いよいよ。信長に会える——!」

「めっちゃ!楽しみ!」

「二人共。そろそろ」

「来たで!」

ほまれとハリーが信長らしき人が現れたのを見て、ソウゴとはなの二人は再び黙り膝

をつく。

「ん？」

すると、ソウゴの鼻に信長から何か良い匂いのする香りが漂っている事に気づく。

「——牛蔵の言う連中とは、貴様か？」

「は、はい」

ソウゴ達の姿を見ながら、そのまま信長は床几に腰をかける。

その姿は、魔王と比喩されても何ら違和感の無い程の器の大きな存在だと、肌から感じとれるモノだった。

「……その者」

信長はソウゴ達を一見すると、ゲイツに向かって指を指す。

「腕が立つと聞いた。ここへかけて見ろ」

「はあ……？あつ！はつ！」

無礼な口を言ってしまったゲイツは直ぐに訂正し、信長が腰をかけている場所へ座る。

「うおー！」

「これがこうで。これがこうじゃ！」

「……おお。良きかな。良きかな」

「……………」

信長は自分が纏っていた鎧をゲイツへと装備させる。その光景に、ソウゴは疑問符を浮かべる。

「そして、最後に」

最後に自分の被っていた兜をゲイツに被らせ、自分の装備を全て装着させた。

「いいね〜！いいね〜！どう見ても！信長じゃん〜！」

「……………えっ？」

確かにゲイツの格好はどう見ても信長そのものと言つて良いほどだったが、信長の行動や態度にソウゴは違和感を抱き始めていた。

「じゃあー！」

「……………えっ？ちよつとー！」

「の、信長殿ー！」

逃げるように去っていく信長を見て、牛蔵は信長の後を追いかけ捕まえる。

「ちよつと待ってくださいー！」

「なんだよ！牛蔵のケチー！」

信長はまるでわがままな子供のような態度で、牛蔵の腕を振り解く。

「ケチではござらんー！」

追いかけてその様子を見たソウゴは、驚きのあまり言葉が直ぐに出なかった。

「これが、織田信長……全然イメージと違う」

聞いている歴史とは違うのに戸惑っていると、はなが信長と一緒にいる女性に気づく。

「その人は？」

「クララちゃんだよ」

「イツクベンクララ・スタインベルト」

女性の名前の最後にスタインベルトと聞こえ、一同はもしかしたらと思いはじめ。

「スタインベルトって……」

「じゃあ、あの人がクリムの先祖で、敵の狙いもあの人なんだ」

さあやとほまれがクリムの先祖の名前を呟くと、牛蔵が彼女達の方に振り向きクララ・スタインベルトについて話し始める。

「クララ殿はオランダ商人の娘でござる。女子一人で危ないと信長殿が保護したのでござる」

「へえ〜信長！良い人じゃん！しかもなんか良い匂いしてるし〜」

「しかし、武田との戦いの近いのに、信長殿はすぐクララ殿と……」

「？……あの信長さんは？」

ソウゴにそう愚痴を言っていると、さあやは信長を引き留めなくて大丈夫なのかと問う。

「えっ?……ああああッ!」

説明しているのに気を取られている間に、牛蔵は信長とクララがいなくなっていた事に気付いてシャウトする。

「あつ!牛蔵さん!」

「あああ!」

「何やと!」

はながゲイツの背中を指さしながら見ると、そこには『影武者よろしく。どろん!』と描かれた紙が貼られていた。

「このままでは織田軍は勝てんぞ!歴史はどうなる……!」

「こうなったら……我々だけやるしかないでござる!信長殿!」

牛蔵が頭を抱えるゲイツの肩を掴み、彼を信長だと叫ぶ。

「——えっ?」

「「えっ?」」

「……俺?」

「「マジ?」」

ほまれとハリーが唾然する中、ゲイツが信長の影武者となる羽目になってしまった。そして元の服へと着替え終えたソウゴ達は、一度ツクヨミ達と合流することになった。

『はあああああーっ!?』

「ゲイツが信長の影武者!」

ツクヨミが大声で影武者となったことを叫ぶと、村の人達の目がこっちに向けられた。

「ああああーっ! はっはっはっはっ!」

今此処で信長の影武者の件がバレると色々面倒な事になるのは間違いないが為に、ソウゴは苦笑して何とか誤魔化そうと努力する。

「何がどうなってそのような事に?」

「なんか、成り行きって言うか?」

正しい歴史では、信長が長篠の戦いで勝つ事でしょ。だから、守らなきゃって……
ルーラーの疑問に対し、ソウゴはゲイツが影武者となった理由を話すと、ウオズはゲイツの苦労をしているであろう表情を頭中に出しながら笑みを浮かべる。

「ゲイツ君らしい生真面目ぶりだね」

「さあやさん達は?」

えみるの言う通り、こっちへ戻ってきたのはソウゴとはなと、はぐたんの三人だけで、さあやとほまれとハリーがいなかった。

「ゲイツと一緒。何かあったらフォロー出来るようにね」

はな曰く、三人はゲイツの側に残っているらしく、もしもの事を考えてフォロー出来るようにする様だ。

「それで、肝心のクララさんと信長さんは？」

「ん……手掛かりは、匂いかな？」

『…匂い?』

どうやって信長ろクララを探すのだと聞くことに、ソウゴが匂いが手掛かりだと言うが、はな達はと言う事なのかわからなかった。

その頃、逃げ出した信長はクララと一緒に、誰もいない近くの川でおむすびを食べていた。

「…信長。大事な戦があるんじゃない？」

「戦よりクララちゃんの方が大事だって！」

「……ありがとう。信長」

信長は戦よりもクララの身の安全が優先していた。

そんな中、信長は隣に居るクララが震えているのを見て寒がっていると思ひ、何か焚き付けをしようとう火を起こし、懐から何か取り出した。

そこへ、匂いを辿りに信長を追つて来たソウゴ達が現れた。

「!? あれは!」

ウオズは信長を発見すると彼の持つものに目を惹かれ、急いで信長に駆け寄つてそれが燃える前に止めると、手に取つて翳す。

「やはり! 蘭奢待!」

ウオズは信長が持っていた枯れ木の切れ端を、蘭奢待であると気づく。

「らんじゃ?」

「何ですか? その蘭奢待って?」

「国宝級の芳香だよ。信長が持っていたって聞いたことがあるんだ」

「それで香りを追つていたのですね」

はなとことりの問いに対し、ソウゴは蘭奢待についての説明を行う。

蘭奢待——それは正倉院宝物の代表的な品の一つであり、『天下第一の名香』と謳われるそれは“沈香”という香木のことを指している。ちなみに、別名で黄熟香おうじゅくこうとも呼ばれているらしい。

原木は中心部がノミで削られて中空になっているが、これまで“足利義政”や“明治

天皇”などがその一部を切り取ったと言い伝えられている。そして、織田信長もまたそれを切り取った一人であるとも言われている。

それを聞いたルールーは、匂いが手掛かりだと語った理由を理解した。

「その者なら！この信長を邪魔をするか！」

「ヒィー！」

「ごめん」

信長の一言にことりとえみるが怯えてしまう。邪魔をしたのかと信長にソウゴが謝る。

「だって〜！クララちゃん寒がつてるじゃん！」

「あれ？」

さっきの覇気が無くなったのか、ことりは一気に拍子抜けの気分になった。

「焼き付け頂戴！」

「えっ？」

「もう良いよ！…これでいいや！これよく燃えそう！」

「えっ？」

焼き付けを近くにいたルールーにねだるが、首を傾げるだけの彼女に苛立ちながら視線を逸らした信長はウオズが巻いているマフラーを掴み、再び火を起こそうとする。

それを見て、ソウゴ達は後ろを向いて話し合う。

「ちよつと。あれが信長つて人!! ソウゴが憧れてた…」

「聞いていた姿と違うような……」

「とても、我々の知る信長とは違います」

「むしろ、私は優しい人だと思うのです!」

授業で聞いた先生の話やインターネット等の文献では、信長は自身に敵対する者を数多く殺害し、必要以上の残虐行為を行ったとされ。今では戦国の魔王——『第六天魔王』と言われている信長のイメージ。

しかし、今ここに居る信長は従来言い伝えられている姿と違う事にツクヨミ達も戸惑う。

「うくん。ちよつとイメージと違うけど、でも面白くない?」

この信長の姿もソウゴからしたら、これもまた信長の面白い一面なのだと思います。

「おおおおお!」

『ああああ?!』

振り向くと信長がウオズのマフラーを燃やし出し、それに驚いたソウゴ達は急いでマフラーを消化しようと試みた。

その頃、信長の影武者となったゲイツ達はと言うと……

『だああああー！！！』

信長軍と武田軍との合戦が始まり、火花を散らし合わせる。

「行くよ〜武田軍のみんな〜！信長と一緒にいる南蛮の女を殺したら好きなもの。なんでも〜買ってあげる〜！」

『うおおおー！！』

武田軍の中にはなんとザモナスの姿があり、ザモナスの指示が武田軍の兵士達の士気を上げる。

そのまま武田軍はザモナスを先頭に、織田軍を盛り返す勢いで押し始める。

「あいつは……やむ終えん！」

『ゲイツ！』

ザモナスの姿を見たゲイツはやむなくゲイツウオッチを起動させ、ジクウドライバーを装着する。

「ちよつと！ゲイツ！」

「皆さん！離れてください！」

それを見て、兵士達はさあやに言われた通りにゲイツから離れる。

ゲイツはウオッチをドライバーにセットして握り拳でロックを解除しボタンを押し、タイムマーが現れると交差した両手で抱え込む。

「変身！」

叫ぶと同時にドライバーを持ち、腕を広げながら回転させる。

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

仮面ライダーゲイツへと変身し、戦場の中へと入ってザモナスに立ち向かう。

「はああー！」

「くうー！」

ゲイツが飛び込みザモナスを抑え、ザモナスの攻撃を止めた。

「怯むな！進め！」

ゲイツはそう言って織田の家紋の旗を挙げる。その影響で織田軍の兵士の士気も上がり、武田軍への反撃を開始する。

「惚れ惚れする武将ぶり！これは屏風画になるぞ！」

そんな中、ゲイツの戦う姿を見ていた牛蔵が筆で彼の戦う姿を書き留めようとしていた。

信長を見つけたソウゴ達は、クララが安全にいられる場所を探すために移動してい

た。

「良い天気だね〜」

「そうだね」

信長とクララが会話をしている近くでソウゴ達は辺りを警戒していたが、今のところ敵が襲ってくるような様子はなかった。

しかし、後ろから彼らをつける黒い影は彼らに悟られないよう後ろから付けていた。

「なんか、疲れたね」

「信長。静かに……?」

「ソウゴ?」

急に足を止めたソウゴを見て、はな達はどうしたのだと疑問符を頭に浮かべる。

それと同時に黒い影は丸っぽいや物体に付いた紐に火をつけ、ソウゴ達に向けてそれを投げ始めた。

『うわああああ!』

すると彼らの周りに向けて爆発物のようなものが飛んで来て、ソウゴの前で爆破した。

「みんな!」

「大丈夫!」

「は、はい！」

「問題無いのです！」

爆破によつて視界が悪くなったのを見たソウゴとはなは仲間たちに呼びかけ、それにルールー達はしつかりと応じた。

しばらく煙が続いたが、全員に怪我はなかつた事を確認したソウゴ達。しかしそんな中、ことりは煙の中に人影があることに気付く。

「!?？ みんな！」

煙が晴れるとソウゴ達の前に、武田軍の忍者が立ちはだかつた。

「スタインベルト……俺が殺す」

そして忍者の群れの中から一人、現代に近い場違いな服装で現れた男性がいた。クラを殺すと言う口調から、ソウゴ達はザモナスの仲間ではないかと疑う。

「アンタもクララを狙っているわけか？」

「そんなことさせない！」

ソウゴとはな達が警戒しながら男性に構える。

「ジオウとプリキュアか……俺が潰す！」

『ゾンジス！』

男性は二人を睨みつけると、緑色のライドウォッチを起動させた。

「変身!!?」

そしてウオッチを腰のドライバーに装填すると、背後に緑の生き物の皮膚の様なモノが全体に装飾された時計エフェクトが現れ、男性は右手親指と人差し指でアルファベットの『J』を作る動作を行い、ドライバーを回す。

『ライダータイム!仮面ライダーゾンジスー!』

変身を完了するとバッタを思わせる生物的なデザインが特徴した顔と身体、足の葉脈と両肩から突起物が伸び、金色の歯車の意匠が、上半身は非常に長い黒マントで覆われていた。

「ぬううう……ふんッ!」

それを見たソウゴ達は戦う構えに入る。

「ツクヨミ!はぐたんを!」

「ツクヨミは二人を守って!」

「わかった。こつち!」

はたとソウゴにそう言われ、はぐたんを抱いたツクヨミは二人を連れて木の陰へと隠れる。

それを見てソウゴ達はドライバーとプリハート、ミライクリスタルを取り出し構える。

『ジオウ！』

『ウオズ！』

「変身！」

「「ミライクリスタル！ハートキラツと！はぎゅ〜！」」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ

！』

「輝く未来を、抱き締めて！みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」

「みんな大好き！愛のプリキュア！」

「キュアマシエリ！」

「キュアアムール！」

「みんな舞い上がれ！希望のプリキュア！キュアアール！」

「こちらも変身を完了し、ゾンジスが率いる忍者軍団に戦いを挑む。

「すげえ！」

変身したソウゴ達を見て、信長は感心する。

「ふう！はあ！」

「ヤアアア！」

忍者達を抜け、ジオウとエールがゾンジスに立ち向かう。

「ヤア!」

「ぐう……うらあ!」

「ソウゴ!ハアア!」

ジオウの攻撃は直ぐに振り払われたが、次にエールが懐に入ってゾンジスに攻撃を繰り出す。

しかし、ゾンジスにはこれといったダメージが入っている様には見えず。それどころかエールの手は僅かに赤く滲んでおり、まるで生身の状態で鉄を殴った様な感触を直に味わっていた。

「うっ!」

「こいつ、硬い……!」

二人の攻撃はゾンジスの強固な守りで防がれ続けた。

ジオウとエールがゾンジスを引きつけている間、ウオズ達は忍者軍団と戦闘を行っていた。

「忍には、シノビで行こうじゃないか?」

『シノビ!』

シノビミライドウォッチを起動させると、ウオズはドライバーのウオズミライド

ウオッチと切り替えた。

『アクシヨン！投影！フューチャータイム！誰じゃ？俺じゃ？忍者！フューチャーリングシノビ！シノビ！』

「ハアア！」

フューチャーリングシノビとなつたウオズは巧みに忍法を使い、出たり消えたりを繰り返し攪乱する。

「忍びの皆さんに！」

「私達の歌を届けます！」

「あなた達の心を綺麗に響かせる！」

忍者達が混乱しているのを好機と見たマシエリとアムールはツインラブリギターを構え、アーラはリコーダーステツキを召喚していた。

「リコーダーステツキ！ミライクリスタル！」

リコーダーステツキを構えたアーラはミライクリスタル・ライムグリーンをセットした。

「心のトゲトゲ、吹き飛んであげろ！」

ボタンを押して吹くと、先の方から無数の緑色の小鳥を生み出していく。

「プリキュア！バードアタック！」

忍者達にリコーダーステッキ向けて放ち、小鳥達が忍者達を包み込む。

「ツインラブギター！ミライクリスタル！」

ツインラブギターにルージュとバイオレットのミライクリスタルをセットする。

「アーユーレディ！」

「行くのです！」

ツインラブギターを使い、二人が弦を弾き演奏を始める。

「届け！私達の愛の歌！」

「心のトゲトゲ！」

「ズッキュン撃ち抜く！」

「ツインラブ・ロックビート！」

マシエリとアムールがツインラブギターを持ち替え、赤と紫のハート型エネルギーを放つツインラブ・ロックビートを放つ。

『モウ〜ヤメマス〜！』

目がハートマークとなり満足した様子を見せると、忍者軍団が全員倒れた。

その頃、織田軍と武田軍との合戦場では……

「「うわあああああー！」」

「ハツハツハ……」

ザモナスがタイムマージンを呼び出し、クライアス社が使用していたモノと同じ形態のキヤツスルドラゴン型のタイムマージンが戦場に割り込んできた。

「卑怯だぞー！」

ゲイツもタイムマージンでザモナスのタイムマージンに応戦する。

「くうー！」

ザモナスに押されるゲイツにさあやとほまれは顔を合わせる。

「さあやー！」

「うんー！」

「行くでー！」

苦戦するゲイツにさあやとほまれはプリハートを取り出し、ハリーもジクウドライバーを装着する。

『ハリーー！』

「変身ー！」

「ミライクリスタル！ハートキラツとー！」

ハリーはウォッチを装填してドライバーを回し。二人はクリスタルをセットすると、二人の体が光に包まれた。

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

『ライダータイム!仮面ライダーハ・リ・ー!』

三人も変身を完了し、ゲイツの元へと向かう。

「おお!これはまた素晴らしい姿でござる!」

アンジュとエトワール、ハリーの加勢に、織田軍はさらに盛り上がる。

「ハアア!」

「ちっ!」

アンジュとエトワールのダブルキックがザモナスのタイムマージンのバランスを崩させた。

「邪魔を!」

ザモナスはアンジュとエトワールに攻撃をしようと試みる。

『ジカンチェーン!』

だがそれを邪魔するように、タイムマージンの腕をハリーのジカンチェーンが拘束した。

「ゲイツ!」

「ああ!喰らえ!」

三人が動きを止めている隙にゲイツのタイムマジーンは反撃に転じ、強烈なキックを繰り出してザモナスのタイムマジーンを破壊した。

『やったあああああ！』

タイムマジーンを倒したのを見た織田軍は喜びの雄たけびを上げていた。

「はあー！」

しかし、ザモナスがタイムマジーンが破壊される直前に脱出していた。

するとそこへ、武田軍の兵士がザモナスに話しかける。

「スタインベルトは見つかったか……よし行くぞー！」

ザモナスはクララの居場所を知ると、直ぐに合戦の戦場から去る。

所変わって、ゾンジスと戦っていたジオウとエールは……

「ハアアア！」

「タアアア！」

ジオウのジカンギレードとエールのパンチがゾンジスの胴体に当たり、ダメージはそんなに無いものの衝撃自体は殺しきれぬモノではなく、ノックバックを受けたゾンジスは僅かにバランスを崩した。

抜群のコンビーネーションで彼を追い詰めていた二人は、そのまま畳みかけようとする

る。

「ハアアア！」

「っ!?」

だがそこへザモナスがゾンジスの加勢に現れ、ジオウとエールが不意打ちを受ける。

「エール！」

「大丈夫！」

攻撃を受けた二人は起き上がる。

「所詮、お前らは敵じゃないんだよ」

その後、ザモナスとゾンジスのコンビネーションに苦戦させられた。

「うらあ！」

「うわあ！」

ジオウとエールがゾンジスのパンチに吹き飛ばされ倒れる。

「じゃあね！」

ザモナスのボウガンがジオウとエールに放たれた。

「フレフレ！ハート！フェザー！」

そこへアンジュが現れ、ハートフェザーで矢を防ぐ。

「スターストラッシュ！」

「!?？」

アンジユの次にエトワールのスタースラッシュとジカンザックスが飛んできた。それによりザモナスとゾンジスは二人から離れ、それと同時にゲイツが二人に駆け寄ってきた。

「ソウゴ! エール!」

「お待たせ!」

「みんな!」

「とりあえず、こいつらをここから追い出そう!」

「うん!」

「私も忘れないで欲しいな」

「俺もやで!」

忍者軍団を片付けたウオズ達とハリーが現れると、ジオウ達はウオッチを取り出し起動する。

『ジオウ! II!』

『ゲイツリバイブ! 剛烈!』

『ワクセイ!』

『ギアヘリテージ!』

ウオッチをドライバーへと装填し、ドライバーを回すと四人がフォームチェンジする。

『ライダータイム!仮面ライダー!ライダー!ジオウ!ジオウ!ジオウ!ジオウ!II!』

『ライダータイム!リ・バ・イ・ブ 剛烈! 剛烈!』

『水金地火木土天海!宇宙にゃこんなにあるんかい!ワクワク!ワクワク!ギンガワクワク!』

『ヘリテージタイム!導け!心に望む未来へ!ハリーギアヘリテージ!』

『『フィニッシュタイム!』』

『ファイナリービヨンド ザ タイム!』

フォームチェンジが完了すると、ゲイツとウオズ、ハリーはドライバーを回して高く飛び上がった。

『一撃タイムバースト!』

『水金地火木土天海エクスプロージョン!』

『ヘリテージタイムフィニッシュ!』

三人はライダーキックを繰り出し、ザモナスとゾンジスの動きを止める。

『みんな!』

『行くぞ!』

エールがみんなに呼び掛けると同時に、ジオウがジカンギレードとサイキョーギレードを手に持つ。

『サイキョウファイニッシュタイム!』

そして、ジカンギレードのケンモードとサイキョーギレードを合体させ、剣から『ジオウサイキョウ』の文字が浮かび上がる。

「今だ!」

「ミライクリスタル!」

「エールタクト!」

「アンジュハープ!」

「エトワールフルート!」

三人がメロディーソードのボタンを押して演奏し、虹色のエネルギーを作り出す。

『キングギリギリスラッシュユ!』

「オリヤヤヤヤヤ!!?」

「心のトゲトゲ、飛んで行け!プリキュア!トリニティ・コンサート!」

ジオウ達四人が技を放つと同時にゲイツ達三人が其処から離れると、そこへジオウ達の攻撃がザモナスとゾンジスに直撃。

「うわあああ!」

直撃した時にザモナスとゾンジスは吹き飛ばされ、直ぐに姿が無くなっていった。

「ふう〜!」

「ソウゴ!」

「えっ?」

「少しは被りを気にして欲しいね」

どうやらさっきのジオウのサイキョージカンギレードによる攻撃の際、三人共頭にギリギリ当たる直前だったらしく、ゲイツとハリー、ウオズは苦事を溢していた。

「アツハツハ……ごめん」

苦笑しながらジオウが謝る。

「皆さん!」

「ゲイツ!無事だったのね!」

ツクヨミ達が信長を連れて合流し、全員が変身を解除する。

「信長!戻るぞ!」

「はあ?」

「お前がいなければ、織田軍は勝てん!」

本来の歴史にする為にゲイツは信長に軍に戻るように言うが、ソウゴはゲイツの肩を叩いて制止させる。

「ゲイツ。信長にしたいようにさせたらいと思う」

『えっ?』

「でも、それじゃあ歴史が変わっちゃう!」

「ここで信長の好きにさせたら、後の歴史に影響を及ぼすのではないかとほまれ達は心配するが、ソウゴはそんな心配を一切していなかった。

「そうかな?俺達の知っている歴史って、現在の俺達が勝手にイメージしたものじゃない?」

「何が言いたいんだ?我が魔王?」

後世に伝えられてきた歴史は、後の時代の者達が勝手に想像した姿なのかもしれない。

要するにそう語るソウゴに、ウオズはよく理解出来なかった。

「例えば、ゲイツやツクヨミ、ハリーにルールは、俺がオーマジオウになると疑わなかった。

「……でも、今はどうなの?」

「「「「……」」」」

それを聞いた四人は、確かに自分達は信長やオーマジオウの過去やその人物像を、残酷で非道な道を辿ってきた、残酷で同情のしようのない人物だと思っていた。

そして全て歴史も、その諸説通りに進むものだとも思っていた。

しかし、実際に会ってみた信長は御覧の通り、外人の女性に現を抜かしており、とても魔王と呼ばれるような人物には見えなかった。

——そもそも、戦国時代において武将による人殺しは当時からすれば、生きる為には当たり前の行動。

もしかしたら信長よりも残酷な武将が居たかもしれないし、もしこの信長が後になって残酷な行動をしたとすれば、彼はこの時代を生きる為に仕方なくやってただけかもしれない。

そして、確かにソウゴは一度オーマジオウになったが、クライとの戦いの中で新たな進化を遂げた。

それ故に、今のソウゴには歴史通りに事を進めることが正しい事だと、そんな事は思えなかった。

「ゲイツ達にとっては未来でも、俺にとっては今なんだ！信長にだって！」

ソウゴは信長にも、今の時間を自分の望むように進むべきだと語る。

「信長も歴史じゃなくて、今も生きてる！」

さあやが言うとうオズが急に表情を暗くし、自分の持つ『逢魔降臨暦』の本を見つめる。

「ねえ！信長。あんたが今したい事はなに？」

ソウゴは信長に、今は何をしたいのかと問う。

「クララちゃんを……送り届けたいんだ」

「わかった！行こう！」

信長の願いを受け入れたソウゴ達は、一緒にクララを送り届けることに協力する。

信長の意思を受け入れた一同がクララの行きたい場所へと連れて行くと、着いたのは山に近い所にある一軒家だった。

「ピエトロー！」

「えっ?」

そこから現れた神父姿をした外人の男性に、クララは走り出して抱きつく。

「マジ！あれ誰?」

信長はその外人に誰だと尋ねると、彼の名はピエトロ。彼はクララが愛している男性のようだ。

「私は神に仕える身。だが、君への身を断ち切れず神の罰を得た」

ピエトロは首にかけてある十字架を見せると、よく見てみると横の方が壊れていた。

「私の十字架は壊れた。神は大怒りだ！それでこんな辺境な地で修行していたのだが

……」

十字架が壊れた事をきっかけに此処で修行をしていると話し、クララを愛した事で神の怒りを受けたのだと語っていた。

「ええい！面倒くさい奴！」

ピエトロの身の上話を黙って聞いていた信長は長話に痺れを切らし、彼から奪い取った壊れた十字架に蘭奢待を差し込んだ。

「おっ！蘭奢待！」

「…つて、あれクリムさんの所にあつた十字架だよね！」

ウオズが勿体ないと言わんとばかりに声を漏らすと、ソウゴ達はピエトロにかけてある十字架にクリムの金庫のものと同じだと気づく。

「奇跡だ！」

「奇跡ね！」

十字架が直つたのを見て、奇跡だと二人は喜びながら叫ぶ。

「つまりさ。お前の神はお前じゃなくて、俺とクララちゃんを引き合わせたかつたじゃないの！だから、クララちゃんは……」

「神は許したのだ！クララ！」

「ピエトロ！」

「聞けよおおおーっ!!」

頭を掻きながら信長は二人に色々話していたが、彼の言葉など今の二人には聞こえはしなかった。

「ありがとう。信長！お礼に私の家から鉄砲を送ります。3000丁程」

ピエトロとの恋が叶った感謝に、クララは信長軍に鉄砲を送ると話した。

——もしかすると、これが”鉄砲伝来”の時かもしれない。

その後、クララのおかげで織田軍に鉄砲が運ばれた。

「これ、歴史に立ち合っていないかな？」

「私もそんな気がしてきましたのです」

今、日本の歴史の一部に立ち合っていないかなと話し合っていたことりとえみるは、鉄砲を見て喜んでいる牛蔵を横目に惚けていた。

「鉄砲3000丁が手に入れば勝ったも同然！」

「戦そつちのけでクララに世話焼いていたのはこの為か！」

「そうとは思えません？」

そこまで考えていたのかと信長に感心していたゲイツだったが、ルーラーはそこまでは考えてないだろと突っ込みを入れていた。

そして肝心の信長はクララにアプローチをかけるが、やはり彼女はピエトロが一番の

ようだ。

そんな泣き崩れる信長の姿は、やはり歴史上で言い伝えられてきた人物像とは全然違う。

「ねえ、信長って本当に魔王だった將軍だったの?」

「うん。なんか……」

「でも、いいんじゃない?信長面白いじゃん!」

思い描いていた信長の姿のギャップに頭を悩ませるほまれとさあやだったが、ソウゴはこんな信長でもいいんじゃないかと笑って言う。

「面白いで片付けるとは、流石は我が魔王」

「魔王でござるか?それは使えるでござる!」

ウオズが魔王と口にする、牛蔵が何かに書き留める。

「何ですか?それは?」

「なんか、俺の伝記を作ってるんだってさ!」

さあやの問いに信長曰く、牛蔵が書いていたのは、後の世に書き残す自身の伝記だった。

「信長公は、勇ましく!恐ろしく!——そう、魔王でござる!後の歴史にそう伝えるでござる!」

牛蔵は信長に自分の理想図を言うが、当の本人はクララに振られた心の痛みの方が大きかったのか、彼の話をほとんど聞き流していた。

しかしそれを聞いたソウゴ達は、信長が魔王だったと言うのは後に構成されたものと気づいた。

「私達の知ってた歴史って全て創作物だったの？」

「後世から見た歴史など、真実とは限らんかもしれないな……」

「なんでもいいじゃん！信長が信長の思うように生きられば！」

「まあでも、これで一件落着だね！」

信長の人物像は本来の歴史とは違ったが、優しい人だと知り、クリムの先祖であるクララを守り抜いた。

大丈夫だと思つたソウゴ達はタイムマジンへと戻る。

「じゃあね！信長！」

二台のタイムマジンはタイムトンネルに入り元の時代へと向かう。

それを見ていたクララ、ピエトロ、信長ソウゴ達が乗るタイムマジンに手を振る。

信長はクララのクララを見て彼女の思いを諦めよう振り向くと、目の前に落ちてあるものに気づく。

「牛蔵……？」

それは『信長様。途中に御免。ドロン』と書かれた置き手紙と信長の伝記を記した物を残した、牛蔵の私物だった。

そして現代へと戻ったソウゴ達は、一度クジゴジ堂へと帰った。

「ただいま!……あれ?」

クジゴジ堂へ入ると、叔父の順一郎が椅子とテーブルで身を守って縮こまっていた。

「どうしたんですか?」

「そ、ソウゴ君達にお客さん。一応、お茶出しといたから!」

「えっ?誰?」

はなが順一郎にどうしたのだと聞くと自分達にお客が来ていると言われ、一体誰が来ているのだと考えていたソウゴ達だったが、順一郎はその答えを直ぐに返した。

「ゆ、幽霊の人!」

『幽霊っ!』

幽霊と聞いたゲイツとほまれは動揺し出し、さあやとツクヨミは興味津々の表情を浮かべる。

取り合えず、幽霊の正体を確かめるためにソウゴ達はリビングへと向かう。

「クリーム！」

「剛さんも！」

そこには、お茶を飲んでいる詩島剛と、立体映像ではあるがクリーム・スタインベルトがいた。

どうやら過去でクララを救った事で、クリームも無事に元に戻ったようだ。

「礼を言う、歴史は守られた。君達のおかげだ」

クリームが礼を言うと、剛と一緒に立ち上がる。

「ソウゴ。君に約束の物を渡そう」

そう言って二人は、懐から赤と黒のアイテムと白と黒のアイテムを取り出した。

「それ……」

「ライドウオツチ」

以前、アナザードライブの時に進ノ介から貰う予定だったが、クリームの頼みで預かる事が出来なかった物。

そして今、クリームと剛はドライブウオツチとマツハウオツチ、二つのウオツチをソウゴへと渡した。

「お前達が持つていてくれ。きつと、進兄さんも同じことをしたはずだ」

そのままソウゴは二人のウオツチを掴む。

「……ありがとう」

ウオツチをくれた事にお礼を言っていると、ソウゴはライドウオツチを保管するダイザーへと向かう。

「フツ……」

ドライブウオツチを見てウオズが笑みを浮かべると、ソウゴ達の前から離れてクジゴジ堂から去っていく。

「ウオズさん?」

急にいなくなったウオズに気づいたえみるは少し不審に思ったが、ソウゴはそのまま最後のウオツチをダイザーへとセットする。

「遂に揃ったね」

「これで全部だね」

「ライドウオツチ!」

「うん!」

いままで起きた数々の苦難を、みんなと乗り越えた上でここまで集まったことに喜びを共有しながら、ソウゴは遂に全てのライドウオツチが揃った事に歓喜する。

すると、其々のウオツチが互いに反応するかのように全て光り出した。

『——えっ?』

突如、急に辺りが暗くなったことにソウゴ達は驚くも、直ぐにまた明るくなったことに安堵しつつ、どうして急に周りが暗くなったのかを考えようとした。

その時、はなとさあやはこの部屋で起こった違和感に真っ先に気付いた。

「クリムさん!」

「いない!」

「剛さんも!」

「どうしたんですか!?!」

明るくなったらクリムが消えており、彼のホログラムが居た場所の隣では剛が項垂れており、ことりとルールーが彼を介抱する。

「一体何が……?」

「大丈夫ですか?」

ゲイツが状況の把握をしつつ、ツクヨミが二人と一緒に剛の介保を行おうとすると、さあやが再び何かが消えた事に気付き、その顔を再び焦りを含んだ表情で染めた。

「ソウゴ君、ウオッチが!?!」

「えっ? ない!」

「何だと!?!」

どうやら消えたのはクリムだけでなく、ウオッチまでもが消えていた模様。

ソウゴとゲイツらは直ぐに辺りを探すが、ウオッチはダイザーごと全て消えていた。すると、剛の口から空気が漏れたのを耳に入れたソウゴ達は安堵しつつ、起き上がった彼の顔を見る。

「——ここは、何処だ? お前ら誰だ?」

だが、ソウゴ達の顔を見た剛から初対面にするような対応を施され、先までの記憶が無くなっていった事にはな達は目を大きくして驚いた。

しかし、彼の姿を見たソウゴはある言葉を思い出す。

『君がウオッチを受け継ぐと言う事は、彼らの記憶を受け継ぐと言う事だ』

それは、ウオズがソウゴがライドウオッチを使おうとした時に告げた言葉だった。

その頃ウオズは……

「ウオッチが遂に全て揃った! 平成を駆け抜けたライダーの力は時見ソウゴが全て奪った!」

ライドウオッチのダイザーの前でウオズが語ると、その周囲からものすごい地響きが鳴り出す。

その衝撃は、クジゴジ堂にいるソウゴ達まで響いた。

「うわあ!」

「地震!」

「いや、それにしても震度が——」

はなが転びそうになった妹を押さえている横でほまれは地震かと思ったが、ゲイツの言う様に揺れているというより、何が地中から出て来るような音が聞こえた。

「…ッ！」

「ソウゴ！」

「待って！」

何かを察したのか、急にクジゴジ堂から出て行くソウゴをはな達は追いかける。

「っ！」

ソウゴ達が外に出ると、はくぐみ市の山岳辺りから何かが現れたのが見え、多くの人達が集まっていた事にも気付いた。

「何だあれは？」

「行こう」

ゲイツがさつきまで無かった光景に目を疑っていると、ソウゴ達はそこへ急いで走って向かう。

しばらくしてから現場に到着すると、そこには古墳のような形をした遺跡のような建築物が出現していた。

「ウオズ……」

そこには、ウオズが一人立っていた。

「祝え!」

ウオズが叫ぶと周りから炎を吹き上げ、そこから旗を持って掲げるカッツーンの姿があった。

「過去と未来をしろしめす時の王者。時見ソウゴが真の大魔王となった瞬間である!」

ウオズが時見ソウゴだと叫ぶと、はくぐみ市の住民は一斉にソウゴに注目する。

「えっ?」

「いざ!時見ソウゴ!玉座へ!」

ウオズの背後には玉座の椅子、その隣には全てのウオッチがデザイナーに収められている状態で置かれていた。

へドン!ドン!ドン!ドーン!ドーン!ドーン!ドーン!ドーン!

『ソウゴ!ソウゴ!ソウゴ!ソウゴ!ソウゴ!』

太鼓の音に合わせて住民がソウゴの名を叫ぶ。

それにつられてソウゴ達はウオズが用意した玉座へと向かう。

「玉座なんて……考えた事なかった」

「ずっと、王様になりたいと言っていたのはお前だろ」

「ソウゴ!遂に夢が叶ったね!」

「さあや……うん！」

小さい頃から王様になるのが夢で、今日まで王様になると言い続けたソウゴの夢が遂に叶った。

そして、最低最悪の魔王になる事を危惧しつつも王様になる夢自体は認めていたゲイツも、それを小さい頃からずっと見守っていたさあやも、自分の事であるかの様に喜んだ。

「よし！何か行ける気がする！」

ソウゴはみんなに大きく手を振りながら玉座へと向かい、そのまま玉座のある階段を登り終える。

「よし……えっ？」

ソウゴ達が玉座へと着くと、一同はその光景に自身の目を疑った。

「誰？」

「何……？」

虎の毛皮のカバーが敷かれた玉座には既に一人の男性が座っており、その男の周りにはウオズのような服装をした集団がいた。

「あつーあそこを見て下さい！」

「何で、あいつらもいるんや！」

更にえみるとハリリーの視界には、ザモナスとゾンジスに変身した二人の姿もあった。

「……いい面構えになったな。とても影武者とは思えないぞ」

「はい。我が魔王」

「…ウオズ？」

「影武者って？」

「王の前だ！ 跪け！」

はながウオズにどういう事か聞こうとするが、その前に赤い衣服で身を包んでいる男と一緒にいた男性が近づくと、いきなりソウゴの頭を掴んで強引に跪かせようとする。

「ちよつと！」

「何をする！」

「わけわかんない！」

「何ですか!?!?」

止めようとするゲイツ達の前へ、同じ仲間の一人がソウゴを玉座の前から放り投げる。

「うわあああ！」

放り投げられたソウゴが地面に転がり倒れると、アーサーセイバーウオツチとミステリーフリーズウオツチが懐から零れ落ちる。

「うっ！」

ソウゴは咄嗟にアーサーセイバーウオッチを掴むと、残るウオッチを掴もうとする。しかし…

「これは返してもらおう。元は俺のものだからな」

玉座へ座っていた男性に、ミステリーフリーズウオッチを取られてしまった。

「くう……返せ」

ミステリーウオッチを返せと手を伸ばすると、男性はソウゴの肩に足を乗せる。

「あんたは……誰だ……」

「時見SOUGOだ！」

「えっ？」

「時見、SOUGO……？」

なんと、男性は自ら『時見SOUGO』だと名乗り、時見ソウゴと同じ名前にソウゴ達だけでなく、その場に居合わせた住民も驚く。

「これまで替え玉をよく務めてくれて、ご苦労だったな！」

『ツ……？』

「替え玉」とソウゴへ告げられた言葉で全員がさらに困惑する中、そこにいるウオズだけが平然としていた。

「うらあー!」

「うわあああああ!」

『ソウゴ（さん・時見先輩）!』

蹴り飛ばされたソウゴはそのまま転がる。

しかしその時、彼の脳裏にある記憶が映し出された。

——それは、スウォルツによって送られた未来の世界にて、ダイマジンが街を破壊する光景。そこには、まだ5歳のソウゴの姿があった。

逃げ惑う人々の中に、玉座へ座っていた時見SOUGOがいた。

『っ!?』

『はあ!』

そこへダイマジンに襲われそうになったソウゴを、SOUGOが念力の様なモノを放ってダイマジンから守った。

その光景を見たあの男——スウォルツがソウゴの目の前に現れた。

『少年よ。お前は生まれながらの王』

しかし、そう告げた彼すらも知らなかった。今の力は、この子の力じゃないという事実に…

「——はあ、はあ……そうだ……あれは……」

「思い出したようだな」

「ハアー……ハアー……ッ！」

「俺達が2000年代生まれの子供から、お前を選んだ」

まるで利用する為選ばれたのだと、意識が朦朧とする中で告げられた真実に、ソウゴはただ黙って聞くことしか出来なかった。

「俺達はクオーツァー！歴史の管理者だ……」

「はあ……あつ……」

意識を失う直前、全て利用されていた自分の存在も、自身が望んだ夢も、彼等に全部都合良く利用されていたのだという事実には絶望、啞然、混乱し。それらの感情に揉みくちやにされながら、目の前を真っ黒に染めた。

「これが、平成ライダーの歴史の最後のページです。

時見S.O.U.G.Oは全ての平成ライダーの力を集め……王として永遠に世界に君臨し続けたのでした。

めでたし……めでたし」

特別編5
次回

劇場版

HUGっとジオウ!Over
Quartzer!
後編

特別編5 劇場版 HUGつとジオウ! Over Qu

artzer! 後編

全てのライドウオッチを手に入れたソウゴから玉座を奪い、彼を替え玉と称した歴史の管理者・クオーツアーのリーダーは自らを『時見S O U G O』を名乗った。

その言葉に動揺しながらも、はな達はクオーツアーの魔の手から何とか逃れ、ビューティーハリーへと戻っていた。

そんな中、皆は沈んだ表情を浮かべながら淀んだ空気を発していた。

「ソウゴ……」

「さあや……」

ソウゴはクオーツアーに捕らえられ、さあやはあの時助けられなかった事を悔やんでいた。

「あれは誰なの？ソウゴの代わりに玉座に着いたあの男は一体……」

そしてツクヨミは、自らを時見S O U G Oと名乗った男が、ソウゴは自分の替え玉だと言っていた事を気掛かりに思っていた。

「代わりじゃないかもしれない……」

「えっ?」

「代わりじゃないって?」

ゲイツの口から代わりじゃないと呟かれ、ことりは啞然とし、ほまれはどういう事だと問い出す。

「つまり、俺達の未来のジオウが全て創作物だとしたら……」

「どう言うことですか?」

ことりの問いに対しゲイツが思い出すは、言い伝えられていた信長のイメージと実際の信長の姿。

信長は沢山の人間を無慈悲に殺し、最後は部下に裏切られて死んだ……俗に言う『魔王』の様な男であると思っていた。

しかし、実際の信長の姿は未来から伝わったものとはまるで違っていた。

もしもジオウ……オーマジオウが織り成した最低最悪な歴史すら、未来の人達の創作物だとすると……

「——だから、普通の中学生の時見ソウゴと、大魔王となる時見SOUGOが、両方用意されていた」

その仮定が合っているならば、自分達のソウゴは大魔王となる時見SOUGOに利用され都合良く動かされていた事になる。

それを聞いたはな達は、余りにも驚愕的な事実に一瞬息をすることを忘れてしまった。

「…でも、なんで両方必要なのですか？」

「それは、ライダーの力を集める為だよ」

ことりがそう言うと、全員がドアの方から聞こえてきた声の方へと振り向く。

「桐ヶ谷晴夜……」

そこにいたのは、サイズが大きいトレンチコートを着ており、ソウゴが最初にウオツチを託した少年。

以前は門矢士と一緒に行動していた仮面ライダー、桐ヶ谷晴夜が立っていた。

「ライダーの力を集める為とは……？」

ルーラーの口からライダーの力を集めるとはどう言う事だと聞き、晴夜はその事を話す。

「……士さんから、この世界の時空が乱れていたと言っていたんだ」

「時空が……？」

「その原因が、ソウゴにある事も」

「ソウゴに!？」

時空の乱れの原因だがソウゴだと聞き、全員は驚きを隠せなかった。

「最初は、俺も土も、ソウゴには幼い頃にスウォルツに与えられた、ライダーを引き寄せ
る力が原因だと思っていた……」

だが、それだけでソウゴ一人でこれ程時空を乱れを起こす事は出来ない。

それに、本人は無自覚でそんな力があるなんて知らない。なら必ず裏があると……

「そして、その過程が合っていれば……全ての時空の混乱も、全ては大魔王となる時見S
OUGOが元凶だった」

つまり、時空を乱れさせる事でこの世界にライダーを連れて来させる。ソウゴにライ
ダー達の力を集めさせ、全てを揃った所で彼が集めた力を取り上げて魔王となる時見S
OUGOが、全てを自分の物にする。それが奴らクオーツァーの狙い……

「全てがその筋書き通りに進んでいたのか……」

「許せないのです！時見先輩が可哀想なのです！」

「そうだよ！そんなの自分に出来ないから、人に押し付けたようなもんじゃん！」

ライダー達が自分達の力のライドウォッチをソウゴに預けたのはソウゴを認めたか
ら。

それを強引に奪ったクオーツァーに、えみるやほまれ達は怒りを強く感じていた。

「……じゃあ」

「えっ？晴夜さん！一緒に戦うじゃ……」

晴夜も一緒に戦ってくれるのではないかと思っていたが、当の本人はその場を立ち去ろうとし、ことが待つてと晴夜を止める。

「だからこそ、早く行かないと行けないだろ」

晴夜は一足先にクオーツアーに乗り込もうと向かう為、ビューティーハリートを後とする。

しかし、彼には問題があつた。

晴夜の持つビルドのフルボトルが全て成分が消えているのだ。おそらく、クオーツアーにビルドウォッチを奪われたのが原因。

「待ってー!」

「……早くしないとソウゴは……」

はなとさあやも晴夜を追いかけて向かおうとする。

その時……

「よくわからんが、このままではソウゴ殿は処刑されてしまうでござるな」

何故か聞き覚えがある声が聞こえたと思い、ゲイツ達が階段の方へ顔を向ける。

「ちよ、ちよつとー!」

「何でここにいますか?」

ほまれやえみる達の目に映っていた姿はなんと、そこにいたのは戦国時代で信長の伝

記を書いていた牛蔵だった。

「タイムマジンに密航して来たのか?」

「マジか!」

ゲイツの推理でタイムマジンで帰る際に付いて来たのだと知り、ハリー達は驚く。

「ゲイツ殿に惚れたでござる!」

「……………はあ?」

「ゲイツ殿の伝記を描くでござるよ!」

牛蔵はゲイツの事が惚れたようでここまで付いて来たようだ。

クオーツアーに捕らえられたソウゴは牢の中へと閉じ込められており、その向こうにはウオズの姿もあった。

「ウオズ……………君もクオーツアーなんだね……………」

「そもそも、平成ライダーいけないんだ」

「平成……………ライダー……………」

平成ライダー……………

それは『仮面ライダークウガ』から誕生し、そこから数多ものライダーが次々と誕生し、『平成』という名の時代を駆け抜けた仮面ライダー達。

ソウゴ達が集めたライドウオッチは、彼らが出会った仮面ライダー達の力の結晶……即ち、平成ライダーの歴史そのものなのである。

「設定も世界観もバラバラ過ぎだ……という声が多くてね」

するとウオズは、平成ライダーに色々と問題があるのだと語り始める。

「そこで私達は新たな時代を迎えるに辺り、平成ライダーを一つの記念のライダーにしようとしてスツキリ纏めるようにした」

彼の話を聞いているだけでも、ソウゴはクオーツア—の意図——ライドウオッチを欲していた理由を理解し始めていた。

「数多くの子供から、人目の良さそうな君を選んだのは正解だったよ。みんな、素直にライダーの力を渡してくれた」

ソウゴの人当たりの良さのおかげでウオッチが全て集まったと聞くと、その人当たりの良い本人は拳を強く握りしめる。

「おかげで平成ライダーの歴史を、ジオウ一人に収斂させることが出来た……」

まあ、プリキュア達と関わってしまったのは少々誤算だったけど」

「戦兎、永夢、タケル、翔太郎、五代さんやみんな……喜んでウオッチを渡してくれたのに……ふざけるな！」

ソウゴは鉄格子を強く掴み、ウオズに怒りをぶつけかのように叫ぶ。

「それじゃあ、俺が……みんなからライダーの力を奪ったって事じゃないか!」

「今更何を言っているんだい? 前から何度も言ってたじゃないか。『数々のライダーの力を奪って来た』……とね」

ウオズの反論にぐうの音も出せなかったソウゴは、顔を歪ませながら鉄格子を額に擦り付ける。

自分がウオッチが集めて来た事がこんな奴らの都合の為に利用され、その所為でみんなから力を奪ってしまった。

その事が、クオーツアーだけでなく自分にも怒りを抱かせる要因になっていた。

「この本の計画書通りに、私が君を導いたまでだ……」

「はあ……くうう……ッ」

その本『逢魔降臨暦』の通りに全てが進んでいたのだと知り、ソウゴの心には悔しさと後悔だけが残った。

「傷ついたのならすまない。ごく普通の中学生に過ぎなかった君にずっと、生まれながらの王……と言うセルフイメージを勝手にすり込んで来たからね」

そんな彼の姿を見ながら、騙して悪かったとウオズは偽りの主に謝罪をする。

「だが、私は嫌いじゃなかったよ。君を我が魔王と呼ぶのを……」

しかし嫌いじゃ無かった、最後にそう言って去っていくウオズを目にしたソウゴはそ

のまま力尽きたかのように、また気を失い倒れた。

その頃、玉座へと集まった、ウオズを除くクオーツァー達は……

「ふうー！」

S O U G Oが腕を上げて構えると、クオーツァー達も後に続いて腕を上げ構える。

すると、はぐくみ市の地中から何か——以前にも未来から現れたダイヤモンドが出現した。

その数は前回よりも多く現れ、ダイヤモンド達は上空へ高く登り、何やら七角形の穴のようなもの——タイムゲートを作り出していた。

街の人達はこれから何が起こるのかわからなければ、その現実離れた光景に自分達の目を疑う事しか出来ていない。

「平成の世に生まれた者たちよ！その命、この王に返上するがいい！」

S O U G Oの言葉に反応すると、ダイヤモンド達が動き出した。

「えっ……っ？」

「ああああああ——！！！」

「た、助けて……ッ！」

ダイヤモンドが動き出すと人々は次々と宙へ浮かび上がり、タイムトンネルの中へと

吸い込まれていった。

「不味い!急がないと!」

そこへ晴夜が現れ、タイムトンネルへと飛んでしまいそうな人達を救出する為に手を掴む。

「大丈夫か?」

そこへ剛も同じく此処へ現れた。

「どうなってる?平成生まれだけ選んで吸い上げてる……」

助けながら気づいたが、吸われているのが若い人達や子供といったもので、平成生まれだと思われるモノだけを吸い込んでいる。

すると、次に剛まで吸い込まれようとしていた。

「!??! 危ない!」

気づいた晴夜が剛の腕を掴む。

すると、もう一つの手が剛の腕を掴んだ。

「拙者!生まれは永禄元年!ハツチャラでござるよ!」

そこいたのは、牛蔵だった。

一方、牢の中で自分が見えなくなったソウゴは一人、牢の中で倒れていた。

「俺は……俺は……っ」

そして自分が何のためにライダーとして戦って来たのか、後悔と絶望に悩まされていた。

「ぶっ飛ばすぞお〜！」

「えっ？誰？」

その時、隣の牢から声が聞こえ、その声が聞こえた方へと振り向き誰なのかと問いかけた。

「平成の時代。悪と戦った改造人間さ……」

彼の前にあった鉄格子の間から現れた、黒い革ジャンと赤いスカーフを身に着けた男性は、自身の素性をそう表した。

「仮面ライダー……」

「いや、俺は仮面ライダーに認められなかった……だから、ずっとここにいます」

しかし仮面ライダーなのかと聞かれると、その男性は顔を下に向けてそう回答した。

「俺と同じ……」

「お前と一緒にするな！」

それを聞いたソウゴは自分と同じだと呟くと、男性は怒りに満ちた顔で全く違うと叫ぶ。

「でも、俺はたまたま選ばれた普通の中学生で……」

自分はライダーを集める為の利用される存在で、あのS O U G Oに替え玉としてライダーとなった。ただの中学生に過ぎないと説明するが……

「それでも、選ばれた……仮面ライダーに選ばれたんだ！お前は……！」

その男はそれでも、ソウゴはライダーに選ばれたと話し、ライダーになった事自体を気落ちするなど喝を入れる。

「それをお前は、たまたま選ばれただど!？」

選ばれなかった……選ばれなかった奴は、ごつちやまんという！」

それを聞き。今思えば、俺以外の人だつてライダーになりたかつただろうし、同じ仮面ライダーである桐ヶ谷晴夜は自分を「偽りのヒーロー」であると評した事を思い出した。

「選ばれた者には、その責任があるんじゃないのか！」

今、平成という歴史のライダーを背負っているのは……お前だろツ！」

男性が自身を指を刺し、ソウゴは一瞬だけ目を逸らす。

——きつと晴夜も、自分がライダーである事を恥、苦悩した時期があつた筈だ。

だけど彼は今も尚、ライダーで居続けている。

それはきつと、彼が「選ばれた者」としての責任を果たしているからだ、そう感じ

た。

——そうだ。人は運命を、与えられた運命からは逃れることは出来ない。

たとえそれがどんなに残酷な運命だとしても、俺たちは結局逃れることは出来ない。

それでも俺たちは、時にはその運命を受け入れなければならぬし、時には抗わなければならぬ。

大事なのは、与えられた運命に絶望する事じゃない。

大事なのは、その与えられた運命の中で、どう抗い、どう自身の意志を貫くかどうかなんだ。

そんな事を思いながら、ソウゴは顔を上げた。

「えっ?」

だが再び男性を見ようとするが、何故か男性はいなくなっていた。

「はあ!」

そこへ、何者かが見張りのカッシーンを殴り飛ばすのが見えた。

「みんな!」

其処には、はな達の姿があった。

だが助けに来たのははな達だけでない、はぐたんを抱える晴夜と剛の姿もあった。

「ソウゴ!」

「オリヤ!」

さあやがソウゴの下へ駆け寄ると、剛がカッシーンの武器を使って牢の入り口を破壊する。

「大丈夫!」

「はぎゅ〜!」

「さあや!はな!はぐたん!みんな!」

「よう!」

ソウゴが牢から出ると、剛の背中に牛蔵もいた事に気付いた。

「よかった!」

無事だった事にさあやが一安心する。その後、ソウゴは晴夜と剛に頭を下げる。

「詩島剛。晴夜も。俺王様になると思い込んで、みんなからライダーの力を……」

二人からライダーの力を奪ってしまった事に謝罪しようとする、二人は頭を下げるなど叫ぶ。

「ソウゴ!俺がウオッチを渡したのは王様だからじゃない……お前だからだ」

「そうだよ。戦兔さんに、タケルさんに、他のライダーの人達も……お前になら力を託しても良いと思えたからだよ」

二人がソウゴにウオッチを託したのは、彼の戦う覚悟やみんなを守りたいと言う強い

気持ちを知れたから。

決して、王様であるソウゴにウオッチを託したのでは無いのだと語った。

「……ありがとう」

ソウゴ達は牢を出て外へと出る。

「またなのです！」

そこへ、カツションが再び現れた。すると、晴夜と剛がソウゴ達の前に出てカツションタチの進路を邪魔する。

「ここは、任せて！早く、行け！」

「行け！ソウゴ！お前のやるべき事をしろ！」

晴夜と剛がカツションを足止めしようとする。

「みんな！」

『うん！』

ソウゴ達はあの玉座へと座る時見S O U G Oの元へ向かう。

「はぎゅ？」

晴夜がカツションを振り払うと、背中に居たはぐたんが何かを見つけ、晴夜に取っもろうようせがむ。

「ペン？」

拾ったのは白い大きなペンで、上にはハート型の飾りがあった。

「……はぐたん。持ってた」

何で此処にペンがあるのだという疑問はさておき、戦いに集中する為に晴夜ははぐたんにそのペンを預ける。

「ゲイツ殿、ハリー殿。教えた通りに出来ているでござろうか?」

牛蔵はゲイツとハリーにある事を教えたようだが、それがちゃんと出来てるか不安そうな表情を浮かべていた。

一方、玉座では…

「もう一度、平成と言う名を作り直す!今度の主役はこいつらだ」

ダイマジンが街や人を吸い込む姿を見て、S O U G O が平成を作り直すと叫ぶ。

そこへ、二人のクオーツァーが現れた。

「替え玉の時見ソウゴが脱走した!」

二人はソウゴが脱走したと伝達を行う。

「息の根。俺たちが止めてくる」

ザモナスとゾンジスの変身者二人が向かい、入れ替わるように二人が玉座へと向かう。

二人が玉座へと着くとライドウォッチの置かれたダイザーに目を置き、近づこうとする。

「待て！」

それに気付いたS O U G Oは、ライドウォッチの方へと向かおうとしたクォーツアアの二人に声をかける。

「貴様ら、誰だ？」

ウォッチの方へと向かおうとした二人に不審を抱いたS O U G Oだったが、対する二人も深く溜め息を吐く。

「織田流忍法もここまでやなー！」

二人はクォーツアアの証である服を脱ぎ捨てた。

「ゲイツ君。ハリー君」

その正体は、変装していたゲイツとハリーだった。

二人は牛蔵から教えられた織田流忍法でここまで侵入したのだとウォズは察すると、そのまま二人はクォーツアアからの反撃を躲しながらウォッチの置かれたダイザーへと向かう。

「はああ！」

「オリヤァ！」

ゲイツとハリーの攻撃にクオーツァーが怯んだ隙に、二人は彼らからウォッチを奪い返した。

「行くぞー!」

「よっしゃー!」

「……私にお任せを、我が魔王」

二人がウォッチを奪い返し逃げると、ウォズは二人の後を追いかける。

「はっはっ、はあ……」

「はっはっはあ……!」

二人はそのまま森林の中を全速力で走り、ウォズを出来るだけクオーツァーから離そうと試みる。

「……ハア、もう良いかな」

「ところがぎつちよん、まだ良くない」

しかし、二人の前にウォズが先回りをして立ちはだかる。

「決着を付けようか。ゲイツ君、ハリー君」

決着を付けようと言うウォズの言葉に、ゲイツとハリーも覚悟を決める。

「結局お前は敵だったか」

「やるしかないんなやな……」

二人はジクウドライバーを装着した。対するウオズもビヨンドライバーを構え、腰へ装着する。

『ゲイツ！ゲイツリバイブ！疾風！』

『ハリー！ギアヘリテージ！』

「変身！」

『ワクセイ！』

「変身！」

二人はドライバーをウオッチへと装填し、構えるとドライバーとウオッチの力によってその姿を変える。

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！疾風！疾風！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リー！ヘリテージタイム！導け！心に望む未来へ！ハリーギアヘリテージ！』

『水金地火木土天海！宇宙にやこんなにあるんかい！ワクワク！ワクセイ！ギンガワクセイ！』

軽装甲となった青いボディのスピード重視のフォームである、ゲイツリバイブ疾風。

ギアジェットウオッチをアスパワワにより進化させたフォーム、ギアヘリテージ

フォーム。

宇宙の力を秘めた仮面ライダーギンガから誕生したギンガミライドウオッチの力の一部である、ワクセイフォームへと、それぞれ三人は変身を完了した。

「……………」

「……………」

三人は変身を完了し、ゲイツとハリーが武器を出現させながら構えると、お互い牽制し合うかのように睨み合う。

「…ッ!」

両者一斉に動き、地面が爆ぜると同時に戦闘が開始された。

「はああ!」

「ッ……………」

ジカンチェーンソードから繰り出されるハリーの攻撃を躲すウオズ。

「フッ!」

「のわあ!」

反撃に出るために出したウオズの星のエネルギーを纏ったパンチを、ハリーはジカンチェーンソードで防ぐ。

「タアア!」

「っ！」

そこへ疾風のスピードで攻めるゲイツが現れ、ウオズは不意を突かれながらも咄嗟に躲す。

そのまま、今度はゲイツがジカンジャクローでウオズを仕掛ける。

「やるね……ここまで強くなるんて！」

正直、ウオズはゲイツとハリーがここまで自分を追い詰めるかもしれない存在になるとは知らなかった。二人の繰り出す技に、ウオズも中々反撃に出れないようだ。

「はぁー！」

「くううー！」

流星に2対1は分が悪いため、ウオズが衝撃波のようなものを出してゲイツを自分から離す。

「ふうく……ぐわぁー！」

取り合えずは対等になったことに一安心したウオズに、いきなり攻撃が飛んできた。
「!?？」 油断したよ……まさか、既に撒き散らしたとは……」

ウオズは攻撃を受けながらも、先程のからくりを咄嗟に理解した。あの攻撃はハリーのジカンチェーンソードから繰り出す、空間から放たれた目に見えない斬撃であると。

「ウオズ、ここにでお前を倒す」

「覚悟せな!」

二人が揃うと、ドライバーを操作するためにウォッチを触る。

『『フィニッシュタイム!』』

『百烈タイムバースト!』

『ヘリテージタイムフィニッシュ!』

二人が技を放つためにウォズに突っ込む。

『ファイナリービヨンド ザ タイム!』

しかしウォズは冷静に、彼らの頭上から小宇宙のようなものを出現させ、そこからエネルギー球がいくつも生成されていく。

『水金地火木土天海エクスプローション!』

「うわああああ!」

エネルギー球が雨を降り注ぎ、二人はそれを躲そうとしたが何発か命中。ゲイツとハリーは吹き飛ばされ、二人は変身解除となった。更に、ハリーは先の衝撃で人間から元のハリハリ族へと戻ってしまった。

「結局。私と君達とでは根本が違うんだ」

ウォズは変身を解除すると、ウォッチの元へ向かう。

だが、ゲイツとハリーは立ち上がりウォズの前に立ちはだかる。

「……ちがうやと……」

「笑わせるな！」

ゲイツとハリーは、ウオズと自分達は違うと言う言葉を否定する。それを聞いたウオズは眉を顰め、どういう事だと呟く。

「ジオウとクライアス社を倒す為に、俺達はこの時代に来た……」

「せやけど、ソウゴはたちまち俺達に自分を認めさせ、仲間としたんや！それはお前もや！」

「……」

そう語るゲイツは、ハリーとウオズを見ながら今までの事を思い返した。

——確かに最初は、オーマジオウとなる彼を阻止する為にこの時代に来た。

だけど、ソウゴという人間を近くで見続け、一緒に暮らし戦う中で、あいつは自分の存在を認めさせ、俺たちを仲間にしていった。

だから……

「お前も気付いているはずだ。あいつは……ソウゴはお前達の枠におさまる男じゃないとな！」

「ッ!?？」

「俺達は似たもの同士だ。ソウゴやみんなと一緒に戦い過ごす中で……いつの間にか、

あいつに惹かれたんだ!」

「うるさい!」

ウオズはゲイツが掴んだ手を振り払い、彼の言葉を否定する。

「ゲイツ!ウオズ……」

「私は……私は君達は違う!私は君達古い人間とは違う!世界を新たな時代へと導く存在だ!」

そう言いながらも、ウオズはゲイツとハリーを見逃し、ウオッチを取らず去っていった。

「私は……私は……」

そしてウオズは、自分の持つ『逢魔降臨曆』を見つめながら、自分の心の迷いの中で戸惑う。

一牢から脱出したソウゴ達は再び、クオーツアアの居る玉座へと向かう。

「ソウゴ!」

はなが顔を向けた方に視線を向けると、町はダイマジンが次々と人を飲み込んでいく光景が映っていた。それを止めるべく、ソウゴは一人全速力で走り、クオーツアアのSOUGOの元へ急ぐ。

「はあ、はあ、はあ……っ」

そして玉座への階段を登り、ついにあの男の前へと辿り着く。

「よう」

其処には意気揚々と玉座へ足を乗せながら座り、街や人をダイヤモンドが飲み込んで
いる光景を愉悅そうに見つめる時見S O U G Oがいた。

そしてソウゴの後ろからはな達も集まると、みんなの周りをクオーツアー達が囲む。

「見ろよ。人も街も、全て消えて行く。平成全体のリセットつてやつだ……」

「あのダイヤモンドが作り上げたタイムトンネルの行き先は、平成元年」

「——つまり、平成が誕生した時代」

「平成ライダーの歴史を消して、平成を一からやり直す」

「やり直す……?」

「そんな……」

平成をやり直す……

それは即ち、これまでの思い出も、出会いも、全てがなかった事にされるのと同義
である。

それを察したはな達の胸には、心を詰めつけるような痛みと共に、炎の様に燃える怒
りが走った。

「なんで、そんな事を……」

「——お前達の平成って、醜くないか?」

「醜い……?」

どうしてそんな事をするのだと言うソウゴの言葉を遮る様に、玉座に座るSOUGOが不愉快そうに平成は醜いと言い出し、玉座から降りる。

「俺が平成という道を綺麗に舗装し、直してやるって言ってるんだ」

そう言いながら、SOUGOは懐から黒と金のライドウォッチを取り出す。

『パールクス!』

SOUGOがドライバーにウォッチを装填すると、背後にバツタの脚と翅を模した装飾が付いた時計が出現。天高く掲げた右掌を回転させ、手の甲を外に向けた状態でゆっくりと顔の近くまで腕を持っていく。

「変身!」

そしてドライバーを回転させると同時にSOUGOの身体が光で覆われ、その姿を変えていった。

『ライダータイム!仮面ライダー・パールクス!』

光が収まり、ソウゴ達の前に現れたその姿は、頭部は金色の懐中時計を模しており、複眼はカタカナで『ライダー』と刻まれ、深緑の胸部アーマーには革バンドを模したパー

ツが2つ巻かれていた。また、全身には金色の歯車のような意匠があり、どこことなくオーマジオウ——いや、その頭部は仮面ライダーダークライに似ていた。

「みんな、下がって……」

みんなは後ろに下り、ソウゴは一人バールクスを引きつけようと相手をする。

「はあー！」

「っ！」

ソウゴはバールクスの攻撃を何とか躲す。

そのまま何度も躲し続けるが、等々バールクスに掴まれてしまう。

「替え玉如きが……王に刃向かうとはな……」

バールクスはソウゴの首を掴み続ける。

「くう……凸凹の道で……何が悪い！」

「ふうん！」

「うお!? ああつ……!」

「ソウゴ！」

投げ飛ばされたソウゴはそのまま転がり込む。そこへ、はな達が直ぐに駆け寄る。

「ソウゴ！大丈夫ですか？」

「う、うん……」

「無理しないで」

ほまれに支えられ再び起き上がると、ソウゴとはな達は迫り来るパールクスに構える。

「ソウゴ!」

そこへウオズからウオツチを守り抜いたゲイツとハリーが現れると、ゲイツはソウゴに二つのウオツチを投げつける。

「ッ!」

ソウゴが掴んだのは、これまでの戦いで使い続けたジオウウオツチ、

もう一つは、全ライダーの力を受け継ぎ手にした力を結集した黄金のウオツチ、グラウンドジオウウオツチ。

「みんな……力を貸して……」

グラウンドジオウウオツチの中にいるライダー達の力を貸してと頼むソウゴ。ウオツチを強く握り、みんなと共に構える。

『ジオウ!グラウンドジオウ!』

『ゲイツ!ゲイツマジエスティ!』

『ハリー!ギアハリテージ!』

『ツクヨミ!』

ウオッチを起動しドライバ―へと装填すると、地中から巨大な黄金の時計台と歴代ライダーの石像が出現。

表層が剥がれると仮面ライダーたちの姿が現れ、更に周りから19個のライドウォッチが現れたのと同時に、彼らは己の姿を変える言葉を叫ぶ。

「変身!!?」

「ミライクリスタル!ハートキラッと!」

ソウゴ達はドライバ―を操作してアーマーを纏い、仮面ライダーへと変身。はな達が揃ってプリハートにミライクリスタルをセットし、いつもの手順を取って姿を変える。

『グランドタイム!クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド!響鬼・カブト・電王!キバ・ディケイド!ダブル!オーズ!フォーゼ!ウイザード!鎧武・ドラーイーブ!ゴースト!エグゼイド!ビル・ドール!』

祝え!仮面ライダー!!?グ・ラ・ン・ド!ジオウ!』

『マジエスティタイム!G3・ナイト・カイザ・ギャレン・威吹鬼・ガ・タ・ツ・ク!ゼロノス・イクサ・ディエンド・ア・ク・セ・ル!バース・メーテオ・ビースト・パロン!マツハ・スーペクター・ブレイブ!クローズ!』

仮面ライダー!Ah!ゲイツ!マジエーステイ!』

『ライダータイム!仮面ライダー・ハ・リ・ー!ヘリテージタイム!導け!心に望む未来』

へーハリーギアヘリテージー!」

『ライダータイム!仮面ライダーツクヨミ♪ツ・ク・ヨ・ミ!』

「輝く未来を、抱き締めて!みんなを応援!元気のプリキュア!キュアエール!」

「みんなを癒す!知恵のプリキュア!キュアアンジュ!」

「みんな輝け!力のプリキュア!キュアエトワール!」

「みんな大好き!愛のプリキュア!」

「キュアマシエリ!」

「キュアアムール!」

「みんな舞い上がれ!希望のプリキュア!キュアアラー!」

「[[[[HUGっと!プリキュア!]]]]」

全員が変身を完了し、名乗り上げを済ませるとバールクスの背後からザモナスとゾンジスが現れ、周りを数体のカッシーンで囲まれた。

「行こう!」

ジオウとエールの合図で、彼らはクォーツアールへと向かっていく。

「はあああ!」

先陣を切ったのはツクヨミとアール。

「リコーダーステッキ!」

二人はカツシーンの集団に向かっていく。

ツクヨミの格闘技とアーラの上空からのリコーダーステッキの攻撃でカツシーンの動きを鈍らせ、その隙にツクヨミが攻撃する。

「はあ……っ!」

「数が多い……」

しかし、未来で知ってる故にカツシーンは強く。例え鈍らせて破壊しても時間が掛かる上に、まだこれだけの数が健在していた。

「はあ!」

「へっ!」

カイザブレイガンを持ったゲイツとザモナスと戦闘を開始された。

ゲイツのブレードが先制攻撃だったが、ザモナスに避けられボウガンで反撃を受ける。

だがゲイツもブレイガンで反撃し、お互いの肩に直撃。

「はああ!」

「っ!?」

更に、ザモナスの後ろからマシエリとアムールがダブルパンチで仕掛ける。

「排除!」

だが、そこで護衛へと現れたカッシーンに阻まれ、二人はゲイツの方へ下がる。

「さあく……もつと楽しもうか〜」

「くう……」

「ゲイツ。彼らはこれまでの相手とは違います」

「……はい。とても強いのです」

「ああ。だが、負けるつもりはない!」

今度は仮面ライダーナイトのウイングランサーを持ったゲイツとマシエリ、アムールはザモナス達に立ち向かう。

一方で、ハリーとエトワールはゾンジスと戦闘を繰り広げていた。

「行けええ!」

『ジカンチェーン!』

ハリーの金色の鎖『ジカンチェーン』が放たれ、ゾンジスの腕を捉える。

「よっしやあ!エトワール!」

「うん!」

捉えた隙にエトワールがメロディソードを構える。

「スターストラッ——」

「ヌウオオオ!」

「なっ!」

エトワールがスタースラッシュを放とうとするが、何とゾンジスはハリーのチェーンを掴み、そのまま強引に引つ張つてハリーを宙へ上げる。

「!? ハリー!」

エトワールはメロディソードの技を中断し、ハリーを受け止めて一度地上へと降りる。

「……ふん!」

ハリーが降りたのを見て、ゾンジスはチェーンを腕から強引に壊して外す。

「こんなもの……効かん!」

「……凄い怪力」

「安心しろ」

地面に散らばったチェーンの破片を視界に入れたエトワールがゾンジスのパワーに警戒しながら呟くと、ハリーが立ち上がって彼女の頭に手を乗せる。

「お前は、俺が守ってやる」

「っ!?……」

そう言葉を掛けられたエトワールは頬を赤く染め、顔からは笑みが見えた。

「……余計なお世話。私も戦う!」

「……せやな!」

今度はジカンチェーンソードを構え、ハリーとエトワールは再びゾンジスへと挑む。その頃、ジオウとエール、アンジュの方は。

「はあああああ!」

「ヤアアア!」

「タアア!」

サイキョージカングレードとメロディソードでカッシーンと応戦していた。

「えあああああ!」

ジオウは回転切りで剣を振り回し、周りのカッシーンを全て爆破させた。カッシーンから爆炎が吹き上がると……

「うらあ!」

「うわあ!」

「ソウゴ!」

爆炎から赤いオーラを纏ったバールクスのキックがジオウに直撃した。

「うっ……」

ジオウが起き上がると、身体に刻まれたライダーレリーフに触る。

『ファイズ!W!電王!鎧武!ドライブ!』

ジオウの前から五つの年号が出現し、そこから五人のライダー……ファイズ、W、電王、鎧武、ドライブが現れた。

「「「はああー!」」」

ジオウによって召喚されたライダー達は一斉に走り出し、バールクスへと向かって行き攻撃を仕掛ける。

しかし、バールクスはライダー達の攻撃を見事に受け流し、寄せ付けない様にする。

『バールクスタイムブ레이크!』

そしてバールクスはジクウドライバーを回し、足に紅いエネルギーを纏い回し蹴りを放ってライダー達をまとめて撃破した。

「そんなー!一撃で!」

「っ!?」

ジオウは再びレリーフを触り、もう一度ライダー達を召喚する。

『クウガ!響鬼!ウイザード!ゴースト!フォーゼ!』

再び五人のライダーを召喚したジオウはバールクスへと攻撃を仕掛け、対するバールクスはドライバーから鏢に風車の意匠がある専用武器『リボルケイン』で応戦。

「はああー!」

バールクスはリボルケインを用いて、五人のライダーを簡単に消滅させた。

「そんな！ライダーの力が効かない！」

ジオウが呼んだライダー達の力がバールクスには通用しなかった。

「平成ライダー自体に意味がないからな！」

バールクスの前には、ジオウの持つ平成ライダーの力は通用しないと見せつけられる。

それでも…

「まだだよ！」

ライダーの力が通用しないと知っても尚、まだ諦めていないジオウは、腕に装着されたウオッチを取り出す。

「……はぐたん」

歯車の様な彫刻が施された青いウエイクベゼルにジオウの顔が刻まれたアーサーセイバーウオッチを見て、この力をくれたはぐたんを思う。

同じ頃、晴夜と一緒にいるはぐたんも何かを察知した。

「ソウギョー！」

「はぐたん？」

カッシーンからはぐたんを守る晴夜も、はぐたんの様子の変化に何か気づく。

「フレフレ！ソウギョー！」

振り返るとはぐたんが戦っているソウゴにエールを送る。

「はぐたん……」

はぐたんの声が聞こえたジオウは、まるではぐたんも一緒に戦ってくれるのだと背中を押してくれている様に感じた。

「——はぐたん！行くよ！」

このウオツチを使うたびに感じる勇気を受け取りながら、ジオウはアーサーセイバーウオツチを構える。

『アーサーセイバー！』

ウオツチを右側の差し込み口に入れてドライバーの真ん中を押すと、後ろから時計エフェクトが現れ、ジオウが構える。

「変身！」

ドライバーを反時計回りで回したその時、音声 flowed。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

グランドジオウから通常のジオウのフォームに戻ると背後からマザーが現れ、ジオウを抱き着くように覆うと光に包まれる。そして光の中から現れた。

『トウモロロータイム!祝福せよ!約束された勝利を求めて!仮面ライダー〜ジオウ!ア
〜サ〜!』

アーマーは白銀となり、アンダースーツは銀色へと、背中と腰には青いマントとロー
ブが装着されていた。

トウモロローから未来を守る為に託された、マザーの力を受け継ぎ姿…仮面ライダージ
オウ・アーサーフォームへの変身を完了する。

「ほ〜う、それがウオズの報告にあつた力か……」

バールクスはウオズからジオウアーサーフォームの事を知っている様子だ。

「ここからは、俺達の反撃だ!」

ジオウは腕を上げて掌を広げると黄金の風を生み出し、それをみんなへと放って包み
込む。

その時、ゲイツ達の身体から疲労が消え、逆に力が漲るのを感じた。

「……………これは」

「ソウゴの……」

「ジオウアーサーの力……」

それを感じ取ったエトワールやツクヨミは、これはジオウのアーサーフォームの力で
あると察した。

何故ならジオウの生み出した風は、マザーの力を宿した希望の力。

その能力によりみんなの傷を治癒させ、力を向上させる効力を発揮させているのだ。

「行くぞー！」

「!?」

急激な力に変化に、ザモナスはゲイツの攻撃に対応が遅れた。

「このおー！」

ザモナスの反撃をゲイツは直様上へと跳んで躲す。

「はあああー！」

ザモナスの視線が上へと向いたその時、マシエリとアムールのダブルパンチが炸裂。

「はあー！」

そこへバランスを崩したザモナスに、ゲイツはジカンザックスを繰り出し、ザモナスを追い詰める。

「うらあー！うらあー！」

「はあー！」

こちらはゾンジスのパンチや腕を使った攻撃をエトワールが余裕に躲し続ける。

いくら攻撃力が優れていたとしても、避けられてしまえば意味を成さない。

その所為で、ゾンジスは焦り気味の様子を見せ始めていた。

「はあ、はあ……ッ!」

「そんなに私ばかり見てるってことは忘れてるね」

「なに!?」

「だっしやあ!」

背後からハリーがジカンチエーンギレードを構えながら現れ、攻撃が当たらぬことに苛立ちを覚えていたゾンジスへと剣を振り抜く。

「かあ!」

ゾンジスに避ける暇など無きに等しく、そのまま直撃するかと思われた。しかし……
「くうう……」

ゾンジスは真剣白刃取りでハリーの剣を止めていた。

「その程度では、俺は倒せん……!」

「それは……どうかな?」

「!?? なんだ……」

ゾンジスが止めている剣を、ハリーは力づくで押し込もうとする。ゲイツ達はさつき程のジオウのアスパワワの力で強化されたのだ。

そして、ジオウとバルクスは……

「はあ!」

「ちっ！」

エールとアンジュにカッシーンを任せ、ジオウは一人バールクスに戦いを挑んでいた。

ジオウは金色の風を攻守に分けて発動し、バールクスを着実に攻め続ける。

「このおー！」

バールクスがりボルケインで反撃に出た瞬間、アースーの能力により最適な未来への選択のビジョンが見えた。

「見えたー！」

選択を終えると、ジオウはりボルケインが当たる直前に粒子となって消える。

「!?？」

「こっちだー！」

『ジオウサイキョウ！』

驚いたバールクスの背後から現れると、サイキョーギレードのジオウのフェイスの文字が『ジオウサイキョウ』へ変わる。

『霸王斬り！』

黄金の刀身となったサイキョーギレードの一撃がバールクスを吹き飛ばし、倒れさせる事ができた。

「よしー!」

オーマジオウと渡り合うことが出来たジオウアーサーの力ならばバールクスに勝てると思ひ込む。

「成る程……」

バールクスは起き上がると、体についた塵を払う。

「流石はマザーを宿した力だ……が、所詮は無駄な足掻きに終わる」

そう語りながらウオッチを見せると、そのウオッチを見たジオウが見覚えがある事に気付く。

「それは……」

それは、ジオウの心に同調するかのように気まぐれに発動し、アナザーデイケイドの戦いで進化させた『ミステリーライドウオッチ』だった。

「見せてやるよ。これが、このウオッチの真の力だ」

そう言つて、バールクスはウオッチに自らの力を注ぎ込む。

すると真ん中のジオウの顔がバールクスに変わり、ウオッチの色もバールクスのウオッチと近いモノに変わる。

『ミステリーゲネシス!』

「ミステリーゲネシスッ!」

ミステリーウオッチが別のウオッチと変えられると、バールクスはそのウオッチをスロットへ装填し、ドライバーを回す。

するとバールクスが黒い炎と闇の様なオーラで纏われ、強烈な光と共にバールクスが新たな姿へととなって現した。

『ミステリータイム！燃えろ太陽の魂！黄泉の月の歴史！ミステリ〜〜ゲネシス！』

バールクスがジオウ達へ再び姿を現すと、黒かったアーマーが銀色に変わり、頭部にはマスタークライの様なブレードクラウンが聳え立っていた。

そして、右肩アーマー『ミステリークロニクルシオルダー・フレア』、左肩アーマー『ミステリークロニクルシオルダー・フリーズ』にはそれぞれオレンジの宝石と緑の宝石が嵌め込められており、後方には日食の様なリングが背光の如く輝いていた。

「そんな……」

「さって……はぁ！」

バールクスが左肩を上げると、波動のようなものがジオウに向けて放たれた。
「っ、なんだ………!!」

今のところ何の問題もなかった為、ジオウは直ぐに風を作り出そうとする。

しかし、彼は風を作り出せなかった。

「無駄」

「くうー！」

風を作れないならばと思ったジオウは、未来を読もうとする。

「み、見えない……」

だが未来を読み、最適の未来を選び出す能力すらも失われていた。

「無駄。この左腕の能力で、お前の力を限定させた」

「それって……」

力を限定させたと聞き、ジオウはバールクスの左腕にミステリーフリーズの能力が——ミステリーフリーズによる相手の力を限定させる能力が搭載されている事に気付いた。

「さあ、お返しだー！」

バールクスがいきなりジオウに攻撃を仕掛ける。

サイキョーギレードで受け身に入るが、黄金の風と時を読む力を失ったジオウは劣勢に陥った。

「はああー！」

「うらあー！」

だがジオウはサイキョーギレードで応戦し続け、バールクスのリボルケインに負けじと喰らい付く。

「マシエリ！アムール！」

「エトワール！」

「アーラ！」

ジオウからアーサーの強化のアスパワワが無くなったと気づき、ゲイツ達はエトワール達にジオウの元へ向かうように指示する。

「うわあ！」

ジオウはバールクスに対抗しているがパワーに押され、吹き飛ばされる。

「終わりだ！」

バールクスはリボルケインをジオウに突き付けようとする。

「ッ！」

もう間に合わないとジオウが感じたその時……

〈グサツ！〉

「!? さあや！」

何とアンジュがジオウの前に出てリボルケインを受け止め、そのせいでアンジュは右肩を貫かれてしまった。

「アンジュ！」

「ちっ！」

「ああ!?」

直ぐにエールが現れてパールクスはリボルケインを抜き、エールは彼を二人から引き離そうとする。

「さあや!待ってて!」

血で濡れた肩を押さえるアンジュを支えると、ジオウは直ぐにアンジュの肩の治癒を始める。

「何で……」

何であんな無茶をしたのだとアンジュに言おうとすると…

「……ソウゴが……いつも助けてくれるから」

「さあや……」

アンジュは自身の肩の傷が治ると、彼女はジオウの手を握りながらそう語り出す。

「初めて、ソウゴと会ったあの日からずっと……」

初めて出会ったのは、幼稚園の時にソウゴは母親が女優だからと冷やかされた時に泣きそうな彼女を助けた。

「初めて会ったのに直ぐ助けてくれた……それから、いつも一緒にいてくれた……」

ジオウはアンジュの手を離し起き上がる。

「俺の方こそ、さあやのおかげで今の俺があるんだ」

仮面越しで見えないかもしれないが、ソウゴの目は涙を流していた。

——さあやと出会ってなかったから、きつと人との繋がりを知らずに、ただ一人で孤独な気持ちでいたかもしれないから。

「……ありがとう」

アンジュにお礼を言うと、ジオウは再びバールクスに向かつていく。

「ソウゴ君」

アンジュも起き上がると胸に手を当てて笑って彼を見つめる。

一方で、エールが一人バールクスに立ち向かう。

「ヤアアア！」

エールがパンチを繰り返すが、バールクスはエールの拳を掴む。

「くう！！？」

「……プリキュアの小娘共。お前達にも心底うんざりしているんだ」

「えっ？」

エールが何とかバールクスから離れようとしていると、いきなりエール達プリキュアにもうんざりだと言い出す。

「お前達プリキュアも、平成ライダーと同じで、何かもバラバラで凸凹過ぎる。しかも、一人じゃ何も出来ない小娘ばかり……」

リボルケインを振り上げ、エールに放とうする。

しかしバールクスのリボルケインを、ジオウがサイキョージカンギレードで受け止める。

「ソウゴ!」

「二人じゃ何も出来なくて、突然だよ!」

そう叫びながらジオウがリボルケインを弾き返すと、アンジュ達も現れて合流する。
「俺達が一人で出来る事なんて、ちよつとしかないよ!」

人間が一人で出来る事なんて、ほんの僅か。オーマジオウの運命を変える事も、みんながいたからこそ出来た。

「私達一人じゃ弱いかもしれない!」

アールは姉を助ける為にプリキュアになりたいと願った。けど、それは一人では実現出来なかつた奇跡だった。

「人はそこまで万能じゃないかもしれない……」

「けれど、足りないものを補える人がいれば……」

アムールとマシエリの二人が奏でるメロディは、お互い支え合うかのように調和したハーモニーを作り出した。

「みんなと一緒にやれば……」

過去のトラウマに囚われたエトワールはもう飛べないと思っていたけど、みんながいたからもう一度飛ぶ勇気を持てた。

「二人では出来ないことが出来る！」

「それが私達！プリキュアと仮面ライダー！」

アンジュとエールがそう己の心の内を語るが、バルクスはそんな彼女の話を鼻で笑いながら見下す。

「ふん！いくらほざいても、貴様らは俺には勝てない」

「それでも、私（俺）達は負けない！」

そう叫んだエールはミライパッドを取り出すと、ジオウもジオウアーサーウオッチをサイキョージカンギレードに装填。

『アーサーフィニッシュタイム！』

「「「メモリアルクロック！マザーハート！」」」

ミライパッドがメモリアルキュアクロックに変化し、エール達とはぐたんからそれぞれのパーソナルカラーのハートが飛び出す。

「「「ミライパッド！オーブン！」」」

右腕を真上のメモリアルキュアクロックにかざすと同時に、画面のハートの型にはまる。

『アーサーセイバー!』

サイキョージカンギレードを天へと掲げると、剣から黄金に輝く竜巻が発生する。

扉が開くと同時に中から無数のハート型エネルギーギアが降り注ぎ、エネルギー達がマザーハートスタイルに変身し、右手首にプリキュアミライブレスが着けられる。

「[[[[HUGっとプリキュア!今ここに!]]]]」

「ワン・フォー・オール!」

「オール・フォー・ワン!」

「ウィー・アー!」

「プリー、キュアー!」

「明日に!」

「エネルギー!」

マザーを召喚したエネルギー達はメモリアルキュアクロックを囲む形で手を翳し、エネルギーを集める。

『フューチャーギリギリスラッシュ!』

「[[[[ゴー、ファイ!みんなでトウモロ!]]]]」

手を掲げ、マザーの力を解放された二つのエネルギーを放つ。

二つの巨大なエネルギーはバールクスへと向かっていく。

「ふうん！無駄だ」

それを冷静に見ながらバールクスは右腕を上げて力を込めると、二つのエネルギーが消滅した。

『ツッ？』

この現象を見て、ミステリーウオッチのもう一つの能力である相手の攻撃を未来へと飛ばす能力だと気づき、バールクスの右腕にはその能力があるのだと察した。

「さうばだ、ジオウ！替え玉の王よ!!」

そこへ、バールクスが消滅したエネルギーから現れた。

これを見たジオウは直ぐに前に出てみんなを守ろうとする。

『うわああああー！ツ!!』

バールクスのリボルケインの一撃はジオウだけでなく、エール達を巻き込みながら吹き飛ばされてしまった。

吹き飛ばされたその場で転がり倒れる。

『タイムブ레이크!』

『排除!』

「うわああああー！ツ!!」

ゲイツ達もザモナスとゾンジスの攻撃により変身解除へ、ツクヨミはカッシーン達の

総攻撃により変身解除へと追い込まれた。

「ここまでか……」

そして、ジオウもジオウアースーから変身解除し、ただのソウゴに戻ってしまった。

「ふうん」

バールクスは倒れたソウゴを掴む。

『ソウゴ（さん・時見先輩）！』

「あああ……くう……」

刃向かおうにも、ソウゴには反抗する力すら残っていなかった。

「じゃあなー」

バールクスはソウゴをダイマジンが人を吸い込んでいるワームホールへと投げ飛ばす。

「ああああ——」

飛ばされて目を瞑るソウゴは、ただ吸い込まれていくだけだった。

——その時、彼は不思議な体験をした。

「(ト)は……」

気がつくくと宙にいたはずのソウゴが芝生の上で倒れていたのだ。

そして、その光景に彼は驚きを隠せなかった。

「父さん……母さん」

そこには、スウォルツにより殺された自分の両親がいた。そして、その前にいるもう一人……

「俺……」

それは、幼い日に親と一緒に遊んだ数少ない思い出の一つ。

物心ついた頃に遊んでもらった時の記憶で、彼にとつては一番印象に残ったものだった。

『ソウゴは大きくなったら何なるの?』

『僕ね。王様になる!絶対!』

「!」

王様になる。幼い日のソウゴが発した言葉に、今のソウゴの心は強く響いた。

「そうだ……」

「——思い出したか?若き日の私……」

その時、さらに聞き覚えのある声が耳に届いた。

同時に周りの背景が真つ暗になり、違う背景と変わる。

「(ハハ)は……」

ビルドからクウガまである18人の仮面ライダーの像に囲まれ、更に自分の変身するポーズの像が立っているこの場所。

初めて未来へ来た時に訪れた場所にて、一人の男が立っていた。

「未来の俺……」

この少し老いた顔と少し衰弱している姿を見て、かつて会ったもう一人のジオウである常磐ソウゴではない事を瞬時に察した。

正真正銘、未来の俺の時見ソウゴだと直ぐに気づいた。

「お前は……私も、生まれながらの王ではない……」

「……」

「しかし、王になりたいと願ったのは、お前の意思だ」

そう言つて後ろの像が剥がれると共に、未来のソウゴがオーマジオウへと変身する。

「お前は、何のために王になりたかったのだ？他の者に認められるためか？それとも、自分が特別であるためか？」

「違う……違う！」

そう叫ぶと、ソウゴと未来のソウゴの周りの風景が、二人と19体の像を除いて瞬時に変化した。

その光景は赤い空が広がる荒地だったものから一変し、遠くに城の様な大樹が聳え立

つ、青い空が広がる草原へと成っていた。

ソウゴが目を覚ますと元の場所へと戻っており、彼は一人宙を浮かびながらタワーの跡を見つけ、そこへ向かって足をつく。

「他の人や平成ライダーなんて関係ない！」

未来の自分との対話によってようやく気付いた、自分が何故王様になりたいのだと至った理由。それは…

「俺が王になりたかったのは、世界を良くするためだ!!」

王様になる自体が重要ではなく、世界を良くする為に王になる。

それが幼き頃から抱いてきた、彼の夢。

その叫びと共にソウゴの手から金色の光の粒子が集まり、それがウォッチとなって彼の手に置かれた。

「……ありがとう。未来の俺」

このウォッチをくれたのは未来の自分だと思い、ウォッチを回す。

『オーマジオウ!』

金と黒のウォッチ——『オーマジオウライドウォッチ』を起動してドライバーのスロットへ装填するとドライバーのロックを解除し、ソウゴはいつもの変身の構えを取

る。

「変身!!」

背後から巨大なオーマジオウの像が現れ、そこから仮面の『ライダー』の文字が光りだし、ソウゴの体が三つの円状の時計バンドエフェクトで包まれ、その姿を変える。

『キングタイム!仮面ライダージオウ!オーマール!』

フェイスは金色となり、背部にはオーマジオウ同様、大時計『アポカリプス・オブ・キングダム』がマントのように付けられ、カラーリングは黒のインナースーツに金色のオーマールとなった。

まさにオーマジオウの姿…『仮面ライダージオウ・オーマフォーム』へと変身した。

「ソウゴ……」

「えっ?」

エールの眩きを聞いたアンジュ達がオーマジオウの像を見る為に顔を見上げると、黄金の流星がこっちへ向かってくるのが見えた。

「みんな!」

「ママ〜!」

そこへ、晴夜がはぐたんを連れて現れ、彼女の下へと求められたはぐたんをエールに託す。

「はぐたん。これ……」

するとはぐたんは金色のミライクリスタル『ミライクリスタル・オーマハート』をエールに渡す。

「みんな！」

『うん！』

そしてアンジュ達がエールの声に應えると、ミライパッドにミライクリスタル・オーマハートを翳す。

「」「ミライクリスタル！オーマハート！」「」

ミライパッドにミライクリスタルオーマハートを装填すると、そこから放つ黄金の強烈な光がエール達六人を包む。

彼女達は、黄金カラーを取り入れたかの様なコスチュームとボンネット状のヘッドトレスとリボンが付いたヴェールは白の混じった金色を纏い。髪型はピンクにそれぞれ水色・黄色・パープル・金髪のメッシュが入り、右手首にプリキュアミライブレスレットを装着、背中には先端にピンクのハートの刺繍がある時計の針型のマントを付けた姿。キュアエール・オールグランドマザースタイルとなって現れた。

そして…

「君は……」

「「「ツツ!?」」」

エールの隣にいる少女を見て四人は誰なのか直ぐにわかった。

金色の長い髪に白とピンク色でコスチュームされた服を着ており、頭の上にはハート型の髪飾りを付けている少女：キュアトウモロローだった。

「はぐたん。行こう」

「……うん」

二人はお互いにジオウの着地する場所へと向かう。

「トウモロロー……」

トウモロローを見てゲイツとツクヨミは笑みを浮かべる。どうやら、あのオーマハートの力に宿るアスパワワが、はぐたんをキュアトウモロローへと戻したようだ。

その頃、ジオウが降りる場所に一人、ずっと待ち焦がれているものがいた。

「祝えー!」

そう、そこにいたのはウオズだった。

ウオズはいつものように祝えと強く叫ぶ。

「大魔王の力を受け継ぎ、全ての時代をしろしめす最終王者と。全プリキュアの想いと大魔王の力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす二人の女神の再誕を!」

「うおおおおおおおー!!」

そこへ、強い衝撃と共に爆風の中から三つの人影が見えた。

「その名も仮面ライダー・ジオウ・オーマフォーム！」

キュアエール・オールグランドマザースタイル！

キュアトウモロロー！

新たな歴史が誕生した瞬間である！」

そう叫ぶウオズの顔は、これまでになくとも嬉しそうな表情だった。

現れた三人はそのまま歩き出すとカッシーンが向かって来たが、彼らはエネルギーを溜めた片手のみでカッシーン達を吹き飛ばす。

「ウオズ！カッシーンとして誇りを忘れたのか？」

「私はもうクオーツアーじゃない！」

自分ももうクオーツアーじゃないと言い放ち、自らをマフラーで包み込むと一瞬にして移動する。

「私とて、平成ライダーの歴史の一部なのだ」

自分も仮面ライダーの歴史の一部であり、同じようにこの時代を駆け抜けた存在。

そう言ってる間に、ジオウ達はカッシーンを最も簡単に薙ぎ払う。

「仮面ライダーを私達の思う枠に収めることなど、不可能なのだ……」

今まで御閲覧ありがとうございます、ご案内できるのはここまでとなります。

我が魔王は、信長に『思うように生きろ』と言いました……

私も思う通りに生きさせてもらおう!」

自分の持つ本の『逢魔降臨曆』のページを開き、左右のページに両手で持つ。

「ぬうつ!」

するとページを全てちぎり、全てのページが上空へと散らばる。

クオーツアアのライダー達はそれに驚く中、散らばったページはダイヤモンドへと向かっていく。

それにより機械が異常を起こし全機地上へと落下、ワームホールは消滅した。

しかし、影響はそれだけじゃなかった。

「はあ、はあ……!」

カッシーンを生身で戦い続けた剛に、変化が起こったのだ。

そのことに気づくと、彼の手に消滅した筈のシグナルバイクが現れた。

「おっ!行けるぜ!」

シグナルバイクが戻ったのを見て、剛はマツハドライバを装着する。

『シグナルバイク!ライダー!』

「let's 変身!」

『マツハ!』

「うおおおおお！」

背負っている牛蔵を降り外すと仮面ライダーマツハへと変身し、カツシーンに襲われた人達を救出する。

「もう大丈夫だ！」

当然、その影響はマツハだけではない。

「よし！戻った！」

晴夜は自身の持つフルボトルも元に戻った事を確認すると、ラビットボトルを振りラビットボトルを金色へと変える。

そしてロイヤルボトルを取り出し、振り出すと背後から白で書かれた数式が現れる。

『ラビット！ロイヤル！ベストマツチ！』

ゴールドラビットボトルとロイヤルボトルを差し込み、レバーを回すと前後から白と金のスナップライドビルダーが現れた。

『Are you ready?』

「変身！」

『光輝くスピーデイウオリアー！ロイヤルラビット！イエーイ！』

「さあ、実験を始めようか？」

白いラビットラビットの複眼とボディはラビットラビットのボディに黄金のライン

が刻まれ、後ろに白いマントを纏った姿、ビルド・ロイヤルラビットフォームとなって、フルボトルブレードを持ちカッシーンへと向かっていく。

「はあ!」

「ヤアアアア!」

「タアアア!」

ジオウとトウモロローがカッシーンを一箇所に集め、エールがメロディソードでカッシーンを破壊する。

「ちっ……おのれえ〜!」

バールクスが向かおうとする。だがそこへ……

「だああああっ!」

パンチとキックを繰り返す二つの影が見え、その影が放った攻撃が命中。バールクスは勢いよく吹き飛んで地面に叩き付けられた。

「光の使者!キュアブラック!」

「光の使者!キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!」

「闇の力のしもべ達よ!」

「とつととお家に帰りなさい!」

「ブラック！ホワイト！」

「私達だけじゃないよ！」

「えっ？」

エールが喜んでいるとブラックはそう言い、ジオウが周りを見ると上から何人者人の気配を感じる。

この場へと現れたのは、ルミナスからプリキュア☆アラモードまでのプリキュアオールスターズ。そしてクウガからビルドの平成ライダー達だった。

「みんな……よし！行こう！」

ジオウが行こうと叫ぶと全員が頷き、全員が散らばりそれぞれ向かっていく。

現れたライダーとプリキュアは一斉に別れてカッシーンへと向かっていく。

「だあっ！」

ブラックとホワイトがカッシーンにアッパーを叩き込んで体勢を崩させる。

「オリヤァー！」

そこへクウガがエネルギーを纏ったライダーパンチを繰り出し、吹っ飛ばした。

「「「はあああああっ！」「」」

ジェラートとマーメイドとダイヤモンドとマリリン、アクアが氷や水を使った技を放ち、カッシーン達を凍らせる。

「ウエエー！」

「はあー!ヤアー！」

ブレイドがブレイラウザー、鎧武が無双セイバーと橙々丸を振るい、カッシーンを寄せ付けないようにする。

「オリヤヤー！」

「「はあああああー！」」

フオーゼはロケットスイッチの火力で、ラブリーとプリンセスは翼で空を飛び、カッシーンを壁に打ち付けていると、ビルドとエグゼイド、ゴースト、ドライブが工場の中にいるカッシーンに応戦。

「オリヤヤー！」

「はあー！」

「タアアアー！」

エグゼイドとビルドの脚力で躲しながら攻撃し、ゴーストは宙に浮かびながら攻撃する。

そして、カッシーンが一箇所に集まると…

「はああー！」

「ファイアストライクー！」

「サニーファイア！」

「マーチシュート！」

ドライブがライダーキックを放つと同時に、ルージュとサニー、マーチがエネルギーの弾道を放つてカッシーンを破壊する。

「セイ！」

「オラア！」

「はああ！」

こちらでオーズの腕に装備してあるトラクロード、Wとブルームとイーグレットが格闘技でカッシーンを攻撃を繰り返す。

「危ない！」

「させません！」

ロゼッタ、サンシャイン、ミント、ルミナスがバリアを展開して街の人への攻撃を防ぐ。

「ふうん！」

「タア！」

カブトとファイズのラフな戦い方とスムーズな戦い方により、カッシーンを次々に掃していく。

「ホイップ・デコレーション!」

ホイップがホイップ・デコレーションで動きを封じこめた。

「シューティングスター!」

「ハッピーシャワー!」

拘束している隙に、ドリームとハッピーが突撃しカッシーンを破壊。

「はああ!はああ!」

「オリヤヤ!」

キバが身軽い動きの格闘技と龍騎のドラグセイバーでカッシーンを攻撃し、カッシーンを一箇所に集める。

「フロール!トルビオン!」

「ピンクフォルテウェイブ!」

其処にフロールとブロッサムフロール・トルビオンとピンクフォルテウェイブが命中し、破壊された。

「ふうん!」

こちらでは、白いデイケイドドライバーを装着したデイケイドのキックの攻撃と、響鬼の棍で繰り出された攻撃がカッシーンにダメージを与える。

「デヤアアア!」

響鬼も手に持った棍に炎を纏い、カッシーンを破壊する。

その時、カッシーンが響鬼の背後に現れ、背後から攻撃する。

「ビートバリア！」

「はああ！」

だがビートがバリアで響鬼を守ると、リズムとミューズが襲ったカッシーンに攻撃する。

「はああ！」

ウィザードがウィザードガンを用いアクロバットな動きで攻撃し、剣と銃を使い分けカッシーンを破壊する。

「はあ！たああ！」

隣ではアギトが格闘技を駆使してカッシーンを寄せ付けず、金色に纏う手刀を放ってカッシーンを真つ二つにする。

仮面ライダーとプリキュアにより、クオーツアーの率いるカッシーンが次々と撃破されていった。

「見るがいい！平成ライダーだけでなく、プリキュアが溢れ出している！枷など通用しない！彼らや彼女らこそ、思う通りに生きる者たちなのだ！」

だが、現れたのはこれだけではなかった。

街の人々が逃げ惑う中、人々を襲うカッシーンを何者かが腹を貫く。

「ライダー……！毒手……！」

現れたのは、緑と黒と銀のカラーに黒いマントを羽織り、毒手を使いカッシーンを溶かしていくライダー……

仮面ライダーブレン。

少し離れた場所では、講演劇場で逃げる人々を救うライダーがいた。

「はあああ！」

すると其処へ、鎧武のカチドキアムーズが緑のメロンの様な緑色の姿になった、仮面ライダー斬月・カチドキアムーズが、柱に貼っていた一枚のポスターから出陣。

斬月はカチドキの旗を使い、カッシーンを吹き飛ばす。

更に男性の持つパッドから光が放たれ、そこから五つの光が見えた。

「アカライダー……！」

「アオライダー……！」

「キラライダー……！」

「ミドリライダー……！」

「モモライダー……！」

「……我ら五人揃って！ゴライダー……！」

5色の戦隊風のライダー達『仮面戦隊ゴライダー』が現れ、連携攻撃でカッシーンを倒していく。

ベルトにワインのボトルを装填している、黒の装甲と赤のラインがあり、胸に赤で『G』と刻まれたライダー……仮面ライダーGの姿があつた。

「はあー！」

仮面ライダーGはビルにGの文字を刻み、カッシーンを破壊する。

「うわあああああああー！」

逃げ走る人達の道端に落ちている、『仮面ライダークウガ』と書かれた漫画が光り出した。

『見てて下さい。一条さん』

『俺の』

『戦い！』

それと同時に、台詞の文字がカッシーンを襲う。カッシーンが振り返ると白黒のコンテの絵から、トライチエイサーに乗る白黒のクウガが現れた。

『オリヤヤヤヤ！』へズツ！

漫画版クウガによるマイティキックが炸裂し、カッシーンが破壊される。

そして子供達がカッシーンに怯えながら後ろへ下がると、家電製品店に置いてあるテ

レビが光り出し、そこから二頭身の子供の様な仮面ライダーが現れた。

「うくん、まさに……オラの出番が来た!」

電王の姿をしたそのライダーは、胸に豚のような絵柄があり、仮面はハートマークを模したものになっていた。

「オラー!しん王!」

電王と同じポーズを取った子供は自らをしん王と名乗り、ライダーパスの様なモノを取り出すとそれを腰にかざす。

『FULL CHARGE!』

「必殺……ぶりぶりアタック!」

お尻をカッシーンへと向けて放ち、カッシーン達を吹き飛ばす。

「また……つまらぬものを踏み潰してしまだゾ……」

街の方は突如として現れたライダー達によって救われていた。

「何だ!あのライダー達は!」

ザモナスとゾンジスは現れたライダー達に困惑して、何がなんだかわからなかった。

「祝え!一冊の本などではまとめ切れないほど平成ライダーの……いや、『平成』という歴史は全て豊潤なのだ!」

そう叫ぶウオズは、ほぼ残骸と化した逢魔降臨曆を、まるでゴミの様に道端に投げ捨

てた。

「ウオズ！」

そこへゲイツ達が出てくる。

「やあ、諸君。どうやら、私は君達と同じようだ」

「だから、言つたろ」

「俺達の仲間や！」

「ウオズはソウゴにとって最高の家臣よ！」

「行くぞ！」

「「「ああ（おお・うん）！」「」」」

四人はそれぞれジクウドライバーとビョンドライバーを装着し、ウオッチを起動する。

『ゲイツ！』

『ウオズ！』

『ハリー！』

『ツクヨミ！』

「「「変身！」「」」」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

『ライダータイム！仮面ライダーハ・リ・ー！』

『ライダータイム！仮面ライダーツク・ヨ・ミ・ク・ヨ・ミ！』

ゲイツ達も再びライダーへと変身して戦場に参戦すると、バールクスとゾンジスが立ちはだかる。

「はああ！」

ツクヨミが二人に応戦すると、ハリーがチェーンを彼らへ向けて放つたのを察知して距離を取り、反応が遅れた二人を拘束する。

「はああ！」

ゲイツとウオズのジカンザックスとジカンデスピアによる攻撃でゾンジスを吹き飛ばす。

「リボルケイン！」

それを見たバールクスがリボルケインを出現させるとゲイツとウオズに襲いかかり、二人は応戦する。

「はああ！」

だがエールとトウモロローのダブルパンチが炸裂し、そこへジオウのサイキョージカン

ギレードによる攻撃でザモナスを吹き飛ばす。

「!!」

更に追撃しようとするジオウだったが、そこへダイヤモンドが妨害して来た。

「!? トウモロー!」

一体のダイヤモンドがバランスを崩したトウモローに攻撃しようとする。

「っ!?」

トウモローがそれに気付いたその時、彼女の前にピンク色の星のバリアが貼られた。

ダイヤモンドの攻撃が無事に防がれた事を察したトウモローは、自分の目の間に一人の少女が立っていた事に気付く。

「…えっ?」

「大丈夫?」

「トウモロー!」

エールが駆けつけると、攻撃を弾かれたダイヤモンドがもう一度攻撃を仕掛ける。

だがトウモローを守った少女はダイヤモンドの前に向けて跳ぶと、その巨体を連続パUNCHで吹き飛ばした。

「あなたは?」

「私の名前は……宇宙に輝くキラキラ星! キュアスター!」

ピンク色のコスチュームを纏い、それぞれ二又に分けた巨大なツインテールの先端を巨大なシニヨンにまとめ、それに輪をかけて土星のように見せるアクセサリーを付けた少女——キュアスターが二人の前に現れた。

「キュアスター……」

「キュアスター……めっちゃイケてるプリキュアだね！」

「ありがとう！キュアスター！」

お互いにお礼を言うと、トウモロローの安全を確認したジオウはダイヤモンドへと向かっていく。

「はああー！」

背中のマント『アポカリプス・オブ・キングダム』が大きく広がり、針が回る。

すると、ダイヤモンドの大群が劣化し始め、機能停止に追い込まれる。

『キングギリギリストラッシュュー！』

ジオウがショートワープのように瞬間移動しながら、次々にダイヤモンドを切り伏せ撃破していく。

「皆のもの！我が魔王に続け！」

そしてウオズが叫ぶと同時にウィザードドラゴン、ドラグレッツダー、キャツスルドラゴン、デンライナー、ライドブースターが出現し、更に空中を得意とするプリキュア達

もジオウに続いてダイヤモンドを破壊していく。

それを見てライダー、プリキュアはそれぞれ最強の姿へと変える。

『インフィニティ!』

『LINER FORM!』

『極アムーズ!』

『コズミック!オン!』

『ドライブ!タイプトライドロ!』

『EXTREME!』

『パカーン!ム・テ・キ!』

『HYPER!CAST OFF!』

『プテラ!トリケラ!テイラノ!プ・ト・テイラーノ・ザウルス!!』

『グレイト!オールイエイ!ジーニアス!』

『へプウゥン!』

『へトウゥン!』

『無限進化!』

『5・5・5!Awakening!』

『SURVIVE!』

『EVOLUTION KING!』

『FINAL KAMEN RIDE!』

更に、スーパープリキュア、ブライト、ウインディ、キュアエンジェル、無限シルエツト、クレツシエンドプリキュア、ウルトラプリキュア、パルテノンモード、フォーエバーラブリィ、グランプリセス、アレキサンドライトスタイル、アラモードスタイルプリキュア達も光に包まれ姿を変える。

全員が最強のフォームへと姿を変えた。

「今こそ！我が魔王に勝利を——」

祝辞の言葉を言いかけたその時、ウオズの腹部を何か貫いていた。

貫いたのは、パールクスのリボルケインだった。

「あっ……ああ……ッ」

急所を突かれたウオズは強制変身解除となる。

「偽の王を祭り上げる狂言はもう沢山だ！」

パールクスが怒り心頭のままにリボルケインを振り上げ、ウオズに振りかかる。

「はああ！」

そこへ、ゲイツとハリーが立ちはだかつてウオズを守り、更にツクヨミのキックがパールクスを離す。

「何も分かっていない！」

「あいつは偽物なんかじゃない！」

「ソウゴが……あいつこそが！俺達の王だ！」

「ツクヨミ君……ハリー君……ゲイツ君……」

ゲイツとハリーがウオズの肩を担ぎ、起き上がらせる。

「はあああ！」

ジオウとエールの二人がサイキョージカンギレードとメロデイソードを突き刺してダイマジーンを破壊すると、他のみんなの攻撃で次々と破壊していく。

「みんな行くぞ！ジオウに……俺達の王に続くんだ！」

『うおおおおおお！！』

ゲイツが叫ぶと街のみんなにも伝わったかの、街のみんなも勇気を持ってカツシーンに反抗し向かっていく。

「はあ……はあ……」

その光景を意識を朦朧とする中、ウオズは嬉しそうに見つめていた。

まるで、この瞬間をずっと待ち望んでいたのような表情で。

「はああー！」

「タアアアー！」

「はあ!」

「オリヤヤ!」

「それえ!」

「オラアアアア!」

ピーチとゲイツ、ブロッサム、鎧武、ホイップ、エグゼイドも、それぞれの武器を繰り出してザモナスとゾンジスの二人を追い込む。

「「「はああああ!」」」

「「「グアああアアツ!」」」

ライダーとプリキュアによる斬撃がゾンジスとザモナスに向けて放たれ、全員の攻撃によりゾンジスとザモナスを倒す。

二人が撃破されたのを見たバールクスは、ゾンジスが落としたライドウオッチを拾う。

「やむ終えん…」

バールクスは腕にある青いライドウオッチを起動させる。

『バイオライダー!』

「「「はああ!」」」

バールクスにブレイド、メロディ、ハッピーが攻撃を仕掛けるが、バールクスは体を

液状化させて三人の攻撃を躲し、彼らの背後を取る。

『J!』

「ぬうおおおおお！」

続いてゾンジスの落としたライドウォッチを使用したバールクスが叫び出すと、液体状の体でいきなり巨大化したのだ。

「わあ、大きくなった！」

スターが目を輝かせながら驚いていると、巨大化したバールクスは大きく腕を振り上げてジオウ達に攻撃してきた。

『わあああああッ!』

数人が吹き飛ばされたものの、それを回避したライダーにプリキュアはバールクスに攻撃する。

「ふうん！」

しかし液状化したバールクスの体には、全員の攻撃など擦り抜けて通用しなかった。「お前らのおかげで、平成の歴史がめちやくちやだ！」

バールクスは雄叫びと共にゲイツ達へ攻撃し、みんな次々と倒れていく。

「せつかく！綺麗に纏めようとしたのに！」

「勝手に纏めるなよ！」

パールクスの耳に声が聞こえ振り返ると、ジオウとエールが屋根の上へと現れた。

「何ッ!?」

「俺も、ゲイツも、はなも、ライダーのみんなも、プリキュアのみんなも、瞬間瞬間を必死に生きてるんだ!」

出会って来たみんなはこの時代を必死に生きみんなを守るために戦い続け、この時代を駆け抜けて来た。

「みんなバラバラで当たり前だ!!それをムチャクチャとか言うなツツ!!」

この世を生きる全ての人の自由、愛、正義。

その全てを守る為に彼は、その小さい背中に背負い、それを黄金の如く光り輝く高貴な魂という名のデカイ柱で支えながら、ジオウはアーサーセイバーウオッチを取り出す。

『アーサーセイバー!!』

ジオウは反対のロットトへと装填し、ドライバーのロックを解除する。

「変身!」

するとジオウの背後からマザーが現れ、大きな手でジオウの体を包み込むとそこから輝いた黄金の光の中から現れた。

『キングタイム!仮面ライダージオウ!オーマー!』

トウモロロータイム！祝福せよ！約束された勝利を求めて！仮面ライダー〜〜ジオウ！ア
〜サ〜！」

其処に現れたジオウの姿は、オーマフォームの黒いアーマー部分が白銀に変わり、頭部にはセイバーフォーム時に装着していた王冠が付けられていた。

——今この時を持って、『仮面ライダー』と『プリキュア』の世界を制する、究極の王が誕生した。

「虚仮威しだー！」

バールクスはそう叫ぶと、ミステリーゲネシスの能力で新しい姿へと変身したジオウの力を制限しようとする。

「!?…なんだ、このパワーは…力を、制限しきれない…ッ!??!」

しかしジオウの凄まじい力を抑えきれず、シオルダーに付いている緑の宝石がキャパオーバーで木っ端微塵に爆破した。

「お前ごときに…俺たちの力を、平成ライダーとはぐたんの力を抑えきれると思っていたのか…?」

肩を押さえ、驚愕するバールクスの様子を見たジオウはそう言い放つと、その姿を見たウオズは力を振り絞って立ち上がり、高々と叫ぶ。

「祝えー…いや、こんな言葉さえ生温い!!」

今ここに、神をも超えた最高最善の王の誕生を……

仮面ライダージオウ・オーマアサーフォームの誕生を！この瞬間を味わうがいい！

そう叫んだ後力尽きたように目を閉じ、ジオウはドライバーの左右のウオッチを起動する。

『キングトウモロファイニッシュタイム！』

すると彼の背中に、黒と金の翼と白と銀の翼状のエネルギーが左右三枚ずつ、計六枚の翼が出現した。

「させるかああああアアアアア!!」

だがバールクスは彼らの攻撃を阻止しようと、肩装甲に埋め込まれているオレンジの宝石を光らせながらジオウの攻撃を未来へと飛ばして無効にしようとする。

「——フッ！」

「ッ!？」

その時、何者かが高速でオレンジの宝石を回し蹴りで破壊し、未来へと攻撃を飛ばす能力を無力化させた。

その人物はバールクスの背後——ジオウ達の死角となっっている所で佇み、平成という時代を作り直すとする不屈き者に向けて静かに語る。

「——この時代を生きる少年少女が、未来を育もうとしているのだ……

あの子と我が友の無念と共に、大人しくあの世へ逝け」

「なっ!!……ま、まさか、貴様は——」

「はあ!」

バールクスが動揺している際にジオウとエールが飛び上がると、ゲイツ達も後に続いて飛び上がる。

そして、各々の作品のタイトルロゴのエフェクトを纏った平成ライダー達とプリキュア達がキックを構える。

『はあああああああ——!!』

突然してくる全員を見て、バールクスが液化化した長方形の盾を作って抑えようとする。

そして彼ら彼女らのキックを必死に押し込もうとすると、バールクスは己の疑問を眩き始める。

「——何故だ!お前の力は、お前らのその力は、所詮平成ライダーと只の小娘の力の筈だ……!」

それなのに……お前らの何処に、これだけの力が出ているんだアアア——ツツ!」
片や己には一切通用しない筈の平成の力。

片や一人では何もできない無力な小娘の力。

どう考えても己の敵になる事が無い力が、どうしてこうも自分を追い詰めているのか、バールクスには一切理解できなかった。

しかしジオウとエールは、そんなバールクスを見ながら笑みを浮かべる。

何故なら彼に理解できない事が、自分たちには理解できているから。

だからこそ二人は、目の前にいる王に向けて反旗を翻す為に謳う事が出来るのだ。

「悔つたな、ライダーの歴史とはぐたんの想いを……ッ！」

「この力は、私とソウゴだけの力じゃない！」

自己中で傲慢な王族も、独り善がりな理想郷の王も、それが理解できなかったが故に、彼らに負けた。

そして目の前に居る男も、彼らの力の真理を理解できなかったが故に、彼らに敗北を喫しようとしていた。

王の資格はあった、王になれるだけの力があった、もう既に王としての地位を持つていた。

しかし、彼らは王になる事は無かった。

王としての一步を、歩む事が出来なかった。

「俺達の力は——」

「私達の力は——」

だが目の前に居る少年は、王の資格など無かった筈の少年が、王としての第一歩を一步ずつ歩んでいた。

それは何故かって？何故なら彼らの持っている力は——

「全てのライダーとプリキュアの力と……今まで出会ってきた、皆の力だツツ!!」
ジオウとエールが叫ぶと同時に、みんなの変身アイテムが光り出す。

『平成魂——キック——』

全員がそう叫び、ジオウ達はバールクスの作り出した盾を貫くとバールクスに直撃していき、地面へと着地する。

そして彼ら、彼女らが貫いた液状化の盾には、巨大な『平成』の文字を刻み込まれていた。

「馬鹿な……ぐうお！うおおお！」

手に持った盾に刻まれた文字とライダー、プリキュア達を見据えたバールクスは、呻き声を上げて爆発した。

気が付いた時には、その巨体で存在感を表していたバールクスの姿が消えていた。

「みんな！」

そこへウオズを担いだハリーとツクヨミが合流し駆け寄ると、ジオウはウオッチを外

し変身を解除。オーマハートの効力の消えたエールも元の六人に戻る。

「トウモロ……」

ソウゴがトウモロに近づくとジオウアーサーウオツチを見せ、エールとトウモロはそのウオツチに手を置く。

「——ありがとう。約束を守ってくれて……」

彼女は笑顔で、未来と今を守ってくれてありがとうとお礼を言うと、体が光り出し、小さくなっていく。

「はぎゅ〜」

そして、元のはぐたんへ戻ってしまった。

「はぐたんも、ありがとう」

エールははぐたんを抱いてありがとうと笑みを浮かべた。

ソウゴは一緒に戦ってくれたみんなに近づくと

「みんな……ありがとう!!」

そのまま自分を信じて力を託して貰った、一緒に戦ってくれた、ライダー達やプリキュアにお礼を述べたのだった。

「……………うう……………んんっ……………?」

「起きたか、ウオズよ」

「!!」

とあるビルの屋上で、コンクリートの上で眠っていたウオズが目を覚ました。

彼は寝転がりながら辺りを見渡すと、隣には黄金の装甲で身を包んだ男——オーマジオウが立っていた。

「わ、我が魔王……何故ここに……?」

「なぜ私がここに居るのだという疑問なぞ、今はそんなことはどうでも良い。」

それよりもウオズよ、腹部の傷は癒えているか?」

「……ッ!?!」

オーマジオウにそう言われたウオズは咄嗟に腹部を押さえると、痛みはまだ多少あるが、あの時バールクスに貫かれた筈の腹部には傷は無かった。

(どういう事だ……?あの時の傷は、一日も経たずに治るような傷ではない……)

だとすれば、誰かが私の傷を治したという事になる。いったい誰が……!」

まさかと思ったウオズは、直ぐにオーマジオウの顔を見る。しかし、直ぐにそれは無いと考えた。

何故なら自分は、オーマジオウたる時見ソウゴを裏切った、クオーツアーの一員なの

だ。そんな不屈き者を、彼は許すはずが無い。

だが今の状況で自身の傷を治せるのは、アーサーフォームの治癒能力を使える時見ソウゴとオーマジオウのみである。

「どうしたウオズよ。私の家臣なら、礼の一つや二つ言ったらどうだ？」

「どういう事だと困惑していたウオズだったが、オーマジオウの言葉を聞き、更に困惑が深まった。

まさか、彼が私の傷を治したのか？裏切り者の私を？…いったい何の目的で？

「どうして傷を治したのだと、疑問に思っているようだな…何故か気になるか？」

「……ええ」

「理由か簡単だ。

……お前が、私の家臣だから。ただそれだけだ」

「……それ、だけですか？」

「それだけだ。何度も言わせるな」

……この人は何と言った？私が家臣？裏切り者であるこの私を？

「……何故ですか、オーマジオウよ。」

私は、貴方を、時見ソウゴを裏切っていたのですよ。今日まであなた達を、騙してきたのですよ？

私は、クオーツアーの一員——」

「そんな事、とつくの昔から……オーマジオウになってから、ずっと知っていた」

…それじゃあ、この人はずっと、わかっててこの私を下に置いてくれていたのか？

「それでは、何故貴方は、私を家臣だと言ってくれたのですか？」

「お前が、私の家臣になったからだ。家臣を信じるのは、当然のことだろう？」

そうオーマジオウは、我が魔王は、何でもないかのように、さも当然の様に語った。

気のせいか、私の頬に冷たい滴が伝ったように感じた。

「……………我が、魔王——」

「だがお前は今日からクビだ、これからは若かりし日の私に従え」

だが同時に、しれっと解雇通知を言い渡された。

少しだけ嬉しかったが、頬に感じた潤いも、少しだけ乾いた気がした。

オーマジオウは最後の言葉に満足したのか、光の粒子になって消えていった。

その数刻後、ハリーとツクヨミがウオズを担ぎに来たことは、皆の招致の事実の出来事。

戦いを終えたソウゴ達は、それぞれ帰る場所へと去っていった彼ら彼女らに別れを告げ。みんなで帰るべき場所であるクジゴジ堂へと一緒に向かう。

「ゲイツ殿……無事で何よりでござる！」

「抱きつくな」

牛蔵がゲイツの無事が嬉しいのか、ずっとゲイツに抱きついていた。

「そういえば、ひかるに何をあげたの？」

ソウゴは見てなかったから知らなかった為、はぐたんがひかるに何をあげたのかとはなに聞く。

それを聞かれたはなは、その時の事——数分前の事を思い返した。

『はいどうぞ！』

はぐたんは晴夜という際に拾った白いペン型のアイテムをひかるに渡した。

『ありがとう探してたんだ！』

ひかるがペンを取ろうとしたその時、ペンの上のハートマークが光り出し、ハートマークの絵柄がはぐたんに変わった。

『はぐたんに変わった！』

『キラやば！はぐたんペン！』

はぐたんペンへ変わると、ひかるは目を輝かせながらそれを受け取る。

すると今度は河童らしきものを見つけたようで、彼女はそのまま走り去ってしまったらしい。

「キュアスターか……何かまた会える気がする〜！」

キュアスターとまた会える気がするのと眩きながら、ソウゴ達は歩き続ける。すると……

「あんだ達……」
足を止めたソウゴ達の目の前には、クオーツアアの残党がいた。

「お前ら……」

「まだやるの……」

ゲイツ達が構えると、ソウゴは一人クオーツアー達に接触しようとする。

「ソウゴ」

「……」

クオーツアーの前に出ると、そのメンバーの内の一人が語り出す。

「お前、平成をやり直したいと思わないか?」

「未来だってもっと美しくなると思うんだけどな」

あのままクオーツアーの計画を行えば、平成をより良い美しい未来になれたのではないかと問う。

しかし、彼の答えは……

「確かに、過去と未来も今も美しくないかもしれない」

「じゃあ、何でやり直さない」

「俺には……みんながいたからここまで来て……今の俺があつて未来がある」

後ろを振り返りながら、ソウゴは思った。

はな、さあや、ゲイツ、ほまれ、はぐたん、ツクヨミ、ウオズ、ハリー、えみるちゃん、ルールー、ことりちゃん。これまでに出会った人達のおかげで、今があり未来がある。

「その未来をみんなで一緒に行きたい」

けど、それは俺だけで実現できた夢じゃない。

みんながいたからこそ、実現できた夢なのだ。

「さあ！今日はカレーだよ！みんなを食べていきなさい！」

『はい！』

みんなカレーを食べる為にリビングへと向かう。

「——かくして、元・普通の中学生。時見ソウゴと仲間達は新たな未来へと歩み始め、新たなページを書き写すことになりました。めでたし、めでたし！」

そして最期に、ウオズが幕を閉めようとするが……

「おい！お前、怪我したんじゃないか？」

ゲイツが何事も無かったかのように現れたウオズに難儀を示す。

「もう直ってるの？」

「それより、ウオズさんはクォーターの人達と行かなかったですか？」

「……私は、我が魔王の家臣だよ」

ことりとえみるの問いにそう答えるが、皆は目を細めながら彼の方を見詰めていた。

「一度は裏切りましたよね」

「家臣が裏切っているんですか？」

「……………ほんー！」

ルルーときあやに問い詰められたウオズは、わざとらしく咳き込み誤魔化そうとする。

「まさに現実とは小説と非なり、だ……」

「話を逸らして！あんた（お前）がそれを言うな！」

ウオズの顔をほまれが引つ張り、ゲイツがのしかかった。

「…ソウゴわかる？」

「わきやる？」

ギヤーギヤーと騒ぎ立てられる光景を見ながら、はなとはぐたんはソウゴにウオズの言った事が分かるかと尋ねる。

「これだけはわかるよ。未来は誰にもわからない……」

瞬間、瞬間を生きていかなきゃダメなんだ」

——人は人生を、生まれる場所を選ぶことは出来ない。

これから彼らには、楽しい思い出が育まれていくし、余りにも過酷な運命が纏わり付くだろう。

だけど彼らは、それでも必死に生きている。

今、この瞬間瞬間を生き続ける。

だから、その命が止まるまではソウゴ達の物語はまだ続き、これからも彼らは友と仲間と共に歩いていく。

誰もが自由に笑っていられる、平和な世界を作る、その日まで。

——彼の本にない物語は、今も始まったばかり……

おわり

「はあ、はあ……令和は、俺が作る……」

その頃。あれだけの攻撃を受けたゾンジスが、まだ生きていた。

彼は残った数少ないカッシーンを連れ、クオーツアアの計画を続けようとしていた。

『JUMP!』

「『プリキュア!オペレーション!』」

「!?」

だがゾンジスの耳に聞き慣れない音声と声が聞こえ振り返ると、頭上を飛び越える四

つの影が見えた。

『飛び上がライズ！ライジングホッパー！』

” A jump to the sky turns to a rider kick. ” 『』

「誰だ！」

四人はゾンジスの前へと着地し現れた。

「うげえ!!——あぶねえ…頭からダイビングしそうだったぜ……」

「ちよつ、或夏君、足大丈夫？」

「あ”あ、でも足が……あ、意外と大丈夫だ。大丈夫だからあつちに集中していいよ」

…のだが、蛍光イエローのライダーは勢い余つて足を挫き掛けていた。

三人の少女もライダーを心配していたが、気を取り直してそのまま名乗りを上げる。

「重なる二つの花！キュアグレース！『ラビ！』』

「交わる二つの流れ！キュアフォンテーヌ！『ペエ！』』

「溶け合う二つの光！キュアスパークル！『ニヤ！』』

「二地球をお手当て！ヒーリングつどプリキュア！」

「新しいプリキュアだと！貴様は……ッ！」

ヒーリングつどプリキュアが名乗りを終えると、ゾンジスは蛍光イエローのライダー

に誰だと問い掛ける。

「俺の名はゼロワン！令和初の仮面ライダーだ！」

それに対して蛍光イエローのライダーは令和初の仮面ライダーであると叫び、自らをゼロワンと名乗った。

「その歴史を俺が終わらせる」

ゾンジスが連れてきたカッシーンが向かってくる。

「行くよー！」

グレース達はヒーリングステッキと持ち前の高い身体能力で、カッシーンの攻撃を躲し続ける。

「はあー！」

フオンテーンヌとスパークルが肉球型のバリアを作り、カッシーンの攻撃を止める。

そこへ、グレースはステッキの肉球を3回タッチする。

「プリキュア！ヒーリング・フラワー！」

すると三体のカッシーンに螺旋状のエネルギーをピンポイントに命中させ、その部位に穴を開ける。

「お大事に♪」

グレースの決め台詞を最後に、核を損傷されたカッシーンが爆発して破壊された。

「このお！」

『ロボライダー！』

ロボライダーと発音したウォッチを起動すると、ゾンジスが観音開きになった胸から大量のミサイルを放つ。

「あんたの相手は俺だよ！」

『WING！』

ゼロワンは長方形型の機械のアイテム『プログライズキー』を起動させ、自らのドライバーに掲げると、後ろから巨大な機械な鳥を召喚する。

「行くぜ！鳥ちゃん！」

『Fly to the sky！フライングファルコン！Spread your wings and prepare for a force.』

ゼロワンのアーマーが変形・移動すると、マスクが左右に分割して側頭部に装着され、隼のようなマゼンタカラーのパーツがつき、胸と肩には翼みたいな形状されたものが、足には鳥の爪みたいな部分が装着された。

「行くぜ！」

ファルコンの力を使って空中に飛んでゾンジスの放ったミサイルを避け続け、隙を見てゾンジスを捕らえると宙へと上げる。

「んじゃー!決めちゃうよー!」

背中に翼を生やして飛びかかり、ゾンジスに組み付いて回転し投げ飛ばす。

『フライングインパクト!』

そのまま飛行して追撃し、超高速の跳び蹴りでゾンジスにトドメを刺し吹き飛ばしたゼロワンは、元のライジングホッパーに戻る。

「それと俺達の歴史は終わらないよ……なんたって、ここから始まるからだよッ!」

ゼロワンが着地するとヒーリングつどプリキュアのメンバーが彼に駆け寄る。

「流石ね」

「やるね。あるツチー!」

「すごいね。或夏君」

三人のプリキュアがゼロワンを或夏と呼ぶと、ゼロワンはドライバーからプログライズキーを外し、変身解除する。

その姿は、ソウゴと晴夜の二人と同一年の少年だった。

「貴様は……」

「俺の名前は……中学生社長見習い、飛電或夏だ!」

——新たな時代を迎えるライダーとプリキュアの物語は、もうすぐそこまで来ていた。

HUGつとジオウ！補完計画。その6 「終焉」

ソウゴ「読者の皆さん、今日までこのSSを見てくれてありがとうございます」

はな「この後も『Re・HUGつとジオウ！』は続きますが、本編が一通り終わりを迎えましたので、今此処で皆様に祝辞を語った今日この頃」

ウオズ「12月の5日から始まり、今日をもって一旦連載を完結させ。次にFINAL TIME編とNEXT TIME編の連載も終えましたら、次のユート氏作品である『ヒーリングONE』が完結するまで、このハーメルンでの活動を自粛させていただきます」

はぐたん「はぎゅ〜！」

皆さんこんにちは、或いはおはようございます。今回、ソウゴとはな、ウオズ、はぐたんの四人は正装で身を包み、皆様の前でこうしてこれまでの感謝を伝えている次第です。

ソウゴ「いや、それにしても本編の『HUGつとジオウ！』や『ドキドキ&サイエンス』が此処まで続くとは思わなかったよね〜」

ウオズ「これも全て、読者の皆さんが原作者のユート氏を今日まで支持してくれた結

果なんだろうね」

はな「それにしても、本当にもうこれで自粛しちゃうの? 『ヒーリングONE』の連載終了までかなり時間あるよ? その間になんか別のSSを作ろうって考えは無いの?」

はぐたん「はぎゅ」

ウオズ「そうは言っても、此処の作者は基本的に他力本願だからね……」

イラストは兎も角、こう言った持続系の作品はモチベーションやネタとかの問題が出てくるし、最悪エタったり打ち切りになったりしたら目も当てられないからね。まるで八丸君みたい」

ソウゴ「特に学生や社会人になったりしたら、なろうやハーメルンとかで1日1話の間隔で投稿する暇が無くなっちゃうからね。改めて考えると、SSを毎日投稿して完結させた作者って、ホント凄いやね。話の内容や文章の技量とかはともかく」

ウオズ「そりゃあ、毎週投稿もしくは毎月投稿とは言え、プロの漫画家とかと比べたら、小説家になろうとかで素人が書いたSSなんてそこらの石ころと同じだからね。その中から宝石を掘り出すのも出版社の仕事なだけども」

ソウゴ「それに比べて此処の作者は、面倒くさがりで、ガサツで、気まぐれで、前に搜索掲示板でうっかり自作の宣伝したせいで『投稿の削除』というある種の公開処刑食らう様なボッチ野郎だしね……」

おい馬鹿やめろ、人の黒歴史公開するんじゃないよ。自分で書いといて何言ってるだ。

はな「それじゃあやつぱり、ハーメルンでの活動を自粛する感じにするのかなあ？」

ソウゴ「うーん、やつぱりそうなるよね」

ウオズ「まあ、今回はこれといった補完をやる訳じゃないし、私たちがやるべき事はもうやったし、これでこの話はお終い——」

？「——にするとおもっているのかあ？」

はな「えっ？今の誰——」

ブロリー「イエイ!!」

その時、『ドガアアアン!!』という爆音と破壊音と共に、ソウゴ達が居る舞台のセットが突然現れた伝説のサイヤ人にぶっ壊された！

ソ・は『急急急急急急急急!!?なんでそこでサイヤ人ンンンツツ!!』

パラガス「どうも良い子の読者のみんな、パラガスで御座います」

ブロリー「息子のブロリーです…」

はな「イヤイヤイヤイヤイヤ、なんで『ドラゴンボール』のキャラが出て来るの!?

このSS、一応仮面ライダーとプリキュアのクロスオーバー作品だから！多重クロス

SSじゃないから!」

パラガス「ところがどっこい、この話は『ごく普通の番外編の皮を羽織ったカオス回』なのだあ!ふあーはっはははははは!

初めの番外編で味わった『出番があると思ったら、別にそんな事は無かったぜ』という屈辱を返すために、手始めにこの話を支配し、今此処で俺たちの悲願を達成させるのです!」

はぐたん「ひーぎゃん?」

ウオズ「それはどういう事だい?」

パラガス「腐☆腐、よくぞ聴いてくれたあ。俺たちは今この場で、俺とプロリーが主役の新しいSSを連載させる事を宣言するのです!」

プロリー「フフフ!このプロリーのカツコイイ!名場面が盛り沢山の物語を、貴様らに見せてやる……!」

ソウゴ「それって、具体的にどういう話なの?」

パラガス「そりゃあ勿論、なるう系の世界に転生して、そこで大人のおねえさんを侍らせてハーレムを作るのが、俺の本来の計画——!」

プロリー「はあ?何言っちゃてるんだお前。俺が原作主人公を押し退けて、敵を血祭りにあげたりする無双物語にするんじゃないやあ無かったのかあ?」

パラガス「などと、その様なことを考えてる筈がございません」

ブロリー「そう来なくちゃ面白い……！」

はな（……なんか早速仲間割れし始めてない？）

ソウゴ「でも此処の作者、基本的になろう系原作小説読んでないけどどうするの？」

ブロリー「あつ、ああ……そうだった。どうしよう……」

パラガス「それならば、このSSの作者が完結まで読んだなろう系小説を推薦すれば良いだけだ」

ブロリー「流石親父と褒めてやりたいところだあ……！」

はな「……で、此処の作者が最後まで読んだなろう小説ってなんなの？」

パラガス「……」

ウオズ「……知らない様だね」

ブロリー「ふざけんなおっさん！」

パラガス「フアツ!? や、やめろブロリー! 落ち着けえええ!!」

ブロリー「煩い! 原作を読まないで書いたSSほど地雷に溢れたSSは無いというのに、親父は此処の作者に二次制作の小説の知識だけでSSを書けと言うのかあ!」

パラガス「偏見ンンンツツツ!!」

ソウゴ「だったら、直接本人に聞けば良いんじゃないかな? 幸いにも、この話はカオ

スなギャグ回だし」

ブロリー「…フフフ！流石仮面ライダージオウと褒めてやりたいところだあ！」

ウオズ「それで？作者はどんななろう小説を読んだんだい？」

…えーと、タイトルはうろ覚えだけど。なんか女主人公が悪役令嬢に転生して、国外追放やらキルされるといふ破滅ルートを回避する為にあれこれするうちに男女平等ハーレムを築いたりするSSとか、乙女ゲームの世界に似た世界に来た主人公がなんかライバルキャラの女子に惚れたりしたSSだとか、そんな奴を最後まで読んだ気がする。あと、転スラの序盤あたりを読んだ。

ブロリー「殆ど戦闘チート生かせねえ奴ばつかじやねえかアアアアアア!!!」

パラガス「待て待て待て！落ち着けブロリー！転スラは戦闘チートを生かせる世界だから、そっち方面に転生すればワンチャン無双できるゾオ！」

ブロリー「序盤あたりの知識だけでSSを書けると思っているのかあ!!」

？「随分と荒れてんなあお前ら」

ソウゴ「えっ？」

はな「今度は誰？」

オルガ「邪魔するぜ〜」

その時、パラガスが何者かに無理やり押し退けられて「ぐお!!？」という声を出した

と共に現れたのは、背中に華の様なマークが刺繍された緑のジャケットとブルーメランの様に鋭い前髪が特徴的な銀髪男性と、同じく緑のジャケットを着た黒髪の少年だった。

「ブロリー」「誰だ貴様らはあ……」

オルガ「俺は…鉄華団団長……オルガ・イツカだぞお……!」

ミカ「三日月・オーガス……です」

ソ・は（今度は『鉄血のオルフェンズ』来たあああああ!?!）

パラガス「なんだこの餓鬼共、どっから現れた!?!」

ミカ「その穴から入って来た」

そう言つて黒髪の少年こと三日月・オーガスが指差したのは、先程ブロリーが舞台を突き破つて出来た穴だった。

ブロリー「マジですか」

オルガ「マジだぜ。それよりも、次のSSの主役は俺たち鉄華団が補うぜ!」

パラガス「な〜く〜い〜? 貴様らの様な餓鬼共が、この作者に貴様らが主役のSSを作ってもらえるなど、そのような事が有ろう筈がございません」

オルガ「ところがどっこい、俺たちはお前達と違つて色んな異世界で色んな修羅場を潜り抜けてるんだ。バトル系漫画でしか活躍できねえ様な奴にはギャグ漫画の世界がお似合いだぜ!」

ブロリー「ブーメランソックス!刺さりすぎです……!」

はな「でも、この人達(オルガ達)の出演してるMAD動画ってバトル系のアニメ以外にもほのぼの系のアニメにも対応してたね…」

ブロリー「俺もほのぼの系のアニメである『きんモザ』や『ごちうさ』の世界に行ったことあるから、ほのぼの系アニメのMAD動画にも対応できますヨ」

はな「あつ、そうなんだ」

オルガ「だが問題があつて、今まで色んなやつらに異世界転生させられた所為で、最早何処に転生すればいいのかがわかんねえんだよ……」

ブロリー「フフフ!オルガ、無様だなあ!」

ソウゴ「それじゃあ、君は何処に行きたいと思つてるの?」

ミカ「俺はオルガの行くところなら、何処にでも行くよ。でも……」

オルガ「……?」

ミカ「ぶつちやけ俺たちもう流行りの時期過ぎてるから、今やつても何番煎じネタつて感じに思われるよ?」

オルガ「……ハアツ!」

その時、彼は思い出した!嘗ては5〜6桁並みにあつたニコ動再生数が星の様にあつたのに対し、今や5桁再生数の動画は月に1〜2本程度しか無いという状況を!!

ソウゴ(何の落とし前!?)

パラガス「うっ!・・・ぐうう・・・ッ!!」

オルガ「それじゃあ、早く土下座しろよ」

パラガス「・・・ッ!ハアーーーーッ!ハアーーーーッ!ハアアーーーーッ!!・・・ッ
!!?!!?」

オルガ「やれえええー!つ!!パラガスウウーーーーッ!!」

ソウゴ「・・・これ、完全に『半沢直樹』だよ」

はな「あつ、ソウゴもそう思う?」

ウオズ「火星に向かわれそうだね(小並感)」

ミカ「オリガミキングのオリ王とブンボー軍団を擬人化させたキャラを異世界で活躍させるSSとか出ないかな?」

ブロリー「サムライ8の二次創作少なすぎです・・・別に好きってわけじゃ無いけど、もっと沢山作るべきです・・・」

オルガがパラガスに土下座を強要し、その他のメンバーが好き勝手に話していると

……

?「醜い争いはやめろおろろッ!!」

ソウゴ「っ! 今度は誰!」

すると再び舞台の一部が爆発し、そこから一人の少女が飛び出して来た。ウオズ「うわっ、また爆破した」

はな「あ、貴女は一体……?」

吉良ココア「——私の名前は『吉良吉影』……年齢『15歳』……」

私は常に『心の平穏』を願っている。『勝ち負け』にこだわったり、頭を抱える様な『トラブル』とか、夜も眠れないといった『敵』を作らない……というのが、私の社会に對する姿勢であり、それが自分の幸福だという事を知っている……もつとも、戦ったとしても私は誰にも——」

ソウゴ（なんかあの子、聞かれてもいないことをベラベラ喋ってる——ツ!?）

はな（ていうかこの子、何処からあのイケボイス出してるの——っ!?）

ブロリー「おい貴様!何ごちやごちや言っているんだあ?」

吉良ココア「落ち着きたまえ君達、このメンバーの中で最も色んな作品に登場しているのは誰だ?」

ブロリー「? そりゃあ勿論、俺たちに決まっているだろお?」

オルガ「オイオイ、勘違いするな。この中で一番色んな作品に出ているのは俺たちダロオ!」

ブロリー「ハア?何言っちゃっているんだお前は!どう考えても俺たち——」

吉良ココア「キラークイーン、第1の爆弾・・・起動」へカチッ!

「ぎやああああああああアアアア!!」

その瞬間、ブロリーとオルガが爆発四散した。

ブ・オ「……だからよ、止まるんじやねえぞ・・・」

そして二人仲良く、希望の華を咲かせた。

吉良ココア「その通り・・・この中で最も色々な作品に出ているのは君達だ・・・

だからもう、君達が主役のSSやMAD動画は十分楽しんだら?そして今度は、私

が主役のSSやMAD動画を普及させるのだ・・・」

パラガス「いや、その理屈はおかしい」

吉良ココア「と、言うわけで作者。私がリゼロの世界に転生出来るように原作リゼロ

をバッチリ読破してくれ」

はな「そして案の定他力本願……ッ!」

ミカ「:いや、なんでリゼロ?」

吉良ココア「そんなの、レムの手を頼ずりする為に決まってるじゃないか?」

ソウゴ「さも当然のように変態願望言われても困るんだけど……」

???「おーーーい!!お前たち!いい加減にして下さい!」

するとそこへ、ボドボドになったセットの裏側から銀髪青年が飛んで現れた。

??? 「君達は一体、このSSの作者の許可無しに、何好き勝手に語っているんだ！君達
がどうのこうの願望を言ったところで、此処の作者が『よし書こう！』って思う訳ない
だろ!!」

はな「？」

ソウゴ「…あんた誰？」

??? 「俺が誰だって!?何て世間知らずなんだ・・・ッ！ゆとり世代でも知っておる事だ
ぞ！

いいか！俺は全宇宙最強のスーパーエリートにして、将来有望の超イケメン伝説の超
サイヤ人、トラ」

ミカ「うるせえ・・・なあ!!」

へドギイヤアツツ!!」

??? 「アーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

銀髪の青年は、ミカのバルバトスが振るったメイスの餌食になり、星になった。つい
てにブロリーとオルガが復活した。

ウオズ「・・・よし、静かになった所でそろそろこの話を締めくくる事にしよう」
はな「すぐく強引だね!!」

ウオズ「それじゃあ皆さん、ご唱和下さい！君達の願いを!!」

ソウゴ(俺たちの願い?)

ブロリー(そんなの、決まっている)

オルガ(どんなに志が違っていても、此処だけは皆んな同じだ)

吉良ココア(だって私達は、同じ人間だから!)

ソウゴ「世界一の王様になりたあああい!!」

ウオズ「ル●エド氏イイイイイ!いつになったら『サムライ8の化身が●殺隊で無双していいスか?』の続きを投稿してくれるんだあああああい!」

ブロリー「鬼舞辻無惨を血祭りに上げさせロツトオオオオオ!!」

パラガス「●んむすのゆうしやちゃんを調教させて下サイヤ!」

オルガ『『ニセコイ』とかの異世界オルガ動画orSSを出したいと思ってる人オオオオオオ!どうか俺のヒロインは『小野寺小咲』あたりにしてくれえええええ!!』

ミカ「あんぱん食べたい」

吉良ココア「チノ!チノ!チノ!チノ!チノ!チノ!おおおおわああああああああああああああああああ!!! ああああああ……ああ……あつあつー! ああああああ

ああ!!! チノちやんンンンああわああああ!!! ああクンカクンカ! クンカクンカ! スーハースーハー! スーハースーハー! いい匂いだなあ……くんくん。んはあっ! チノたんのちったいお手手をクンカクンカしたいお! クンカクンカ! あああ!! 間違えた! モフモフしたいお! モフモフ! モフモフ! テツピテツピモフモフ! カリカリモフモフ……きゅんきゅんきゅい!! チノたんかわいかったよう!! あああああ……ああ……あつあああああ!! ふあああああんっ!! アニメ3期始まって良かったねチノたん! ああああああ! かわいい! チノたん! かわいい! あつあああああ! 吉良ココアもACT3始まる嬉しい……いやああああああ!!! にやあああああああん!! ぎやあああああああ!! ぐああああああああああ!!! コミックなんて現実じゃない!!! アニメもよく考えたら……。チノちやんは現実じやない? にやあああああああああ!! うあああああああああ!!」

はな「めっちゃばらつばらあああああああ!!そして最後の人荒ぶりスギイイイイイ!!!」

この始末☆ はてさて、この先俺たちはどうなってしまうのでしょうか?
はぐたん「しえりましえん」

終演!